

魔銃使いは迷宮を駆ける

魔法少女（）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の詐欺師が、崖から落ちて死んだ。

気が付けば迷宮の中。とあるゲームのキャラクターである「ミリア・ノースリス」に憑依転生していた。

英雄願望を持つ少年との出会い。心優しき窯の女神との出会い。

詐欺師として生きる中で失ってきたモノを貰い受け。彼／彼女は歩き出す。

家族。嘘の無い心地よい繋がり。途切れさせぬ様に彼／彼女は走り出した。

憧憬を胸に英雄願望を持つ少年は飛翔する様に進み行く。

迷宮の怪物への恐怖を抱き、追いつけぬ焦燥感に身を焼かれ、けれども置いて行かれまいと彼／彼女は背を追い続ける。

至る地点は遙か先、遠い頂を目指す少年を追う彼／彼女の軌跡をここに記す。

・頂いた挿絵

2020／01／20

2020／01／23

※改良版

注：戦争遊戯（原作第6巻）、作中『第一二三話』後の姿です。

物語開始初期と容姿や装備が多少異なります。

・短編／コラボ小説

『魔銃使いは恋に堕ちた』

恋愛短編。本編をある程度読んでから読む事推奨

<https://syosetu.org/novel/1997>

39／

『魔銃使いは異界の夢を見る』

本編『第一三二話』時点のオリ主が他作品のオリ主とぐだぐだ雑談するだけのコラボ小説。

<https://syosetu.org/novel/2140>

37／

目次

ぷろろーぐ	1
第一話	11
第二話	18
第三話	28
第四話	36
第五話	44
第六話	54
第七話	65
第八話	73
第九話	83
第十話	89
第十一話	95
第十二話	105
第十三話	112
第十四話	121
第十五話	131
第十六話	139
第十七話	147
第十八話	159
第十九話	168
第二十話	176
第二十一話	183
第二十二話	191
第二十三話	202

第四十八話	442
第四十七話	428
第四十六話	417
第四十五話	407
第四十四話	397
第四十三話	387
第四十二話	379
第四十一話	368
第四十話	360
第三十九話	351
第三十八話	341
第三十七話	332
第三十六話	323
第三十五話	315
第三十四話	308
第三十三話	299
第三十二話	291
第三十一話	281
第三十話	271
第二十九話	260
第二十八話	251
第二十七話	244
第二十六話	235
第二十五話	225
第二十四話	216

第七十三話	715
第七十二話	700
第七十一話	687
第七十話	675
第六十九話	664
第六十八話	656
第六十七話	640
第六十六話	628
第六十五話	615
第六十四話	605
第六十三話	595
第六十二話	583
第六十一話	569
第六十話	560
第五十九話	550
第五十八話	540
第五十七話	529
第五十六話	519
第五十五話	509
第五十四話	502
第五十三話	493
第五十二話	480
第五十一話	470
第五十話	462
第四十九話	452

第九十八話	1039
第九十七話	1030
第九十六話	1016
第九十五話	1003
第九十四話	992
第九十三話	982
第九十二話	966
第九十一話	952
第九十話	941
第八十九話	928
第八十八話	916
第八十七話	903
第八十六話	890
第八十五話	875
第八十四話	865
第八十三話	854
第八十二話	841
第八十一話	829
第八十話	817
第七十九話	799
第七十八話	785
第七十七話	773
第七十六話	754
第七十五話	745
第七十四話	727

第九十九話

第百話

第一〇一話

第一〇二話

第一〇三話

第一〇四話

第一〇五話

第一〇六話

第一〇七話

第一〇八話

第一〇九話

第一一〇話

第一一一話

第一一二話

第一一三話

第一一四話

第一一五話

第一一六話

第一一七話

第一一八話

第一一九話

第一二〇話

第一二一話

第一二二話

第一二三話

1344133113211308129412801268125312421231121812051194118111661155114111291118110710961085107310611050

第一四八話
第一四七話
第一四六話
第一四五話
第一四四話
第一四三話
第一四二話
第一四一話
第一四〇話
第一三九話
第一三八話
第一三七話
第一三六話
第一三五話
第一三四話
第一三三話
第一三二話
第一三一話
第一三〇話
第一二九話
第一二八話
第一二七話
第一二六話
第一二五話
第一二四話

1705169216791664165016381623160915941580156715541542152815141500148414691456144114241404138813721358

第一七三話
第一七二話
第一七一話
第一七〇話
第一六九話
第一六八話
第一六七話
第一六六話
第一六五話
第一六四話
第一六三話
第一六二話
第一六一話
第一六〇話
第一五九話
第一五八話
第一五七話
第一五六話
第一五五話
第一五四話
第一五三話
第一五二話
第一五一話
第一五〇話
第一四九話

2097207920592043202720111995197619601944192819101895188118651849183418171801178617731760174617321716

第一九八話
第一九七話
第一九六話
第一九五話
第一九四話
第一九三話
第一九二話
第一九一話
第一九〇話
第一八九話
第一八八話
第一八七話
第一八六話
第一八五話
第一八四話
第一八三話
第一八二話
第一八一話
第一八〇話
第一七九話
第一七八話
第一七七話
第一七六話
第一七五話
第一七四話

2500248524712457244224252408239123762361234523302314229722812266224922362216219821812166215021312113

第二一七話
第二一六話
第二一五話
第二一四話
第二一三話
第二一二話
第二一一話
第二一〇話
第二〇九話
第二〇八話
第二〇七話
第二〇六話
第二〇五話
第二〇四話
第二〇三話
第二〇二話
第二〇一話
第二〇〇話
第一九九話

2776276527502737272227082694267926612648263326162601258725712556254125252512

ぷろろーぐ

月が綺麗な夜だった。

ただ、意味も無く、真ん丸で綺麗な月を見上げながら歩いていた。目的もなく生きていた。

ただ、運が無かった訳では無いと思う。

俺がダメだっただけだ

そんなダメな俺だから、足元を見ずに歩いていた……結果、崖から足を滑らせて落ちた。

崖と言っても、急な傾斜になっているだけで垂直と言う訳では無く、何度も体を打ち付けて、どうにかして止まろうと手を広げてみたり何かを掴もうとして見たりしたが、意味なんてなかった。

崖の下に転がって空を見上げていた。

綺麗な月だった

真ん丸で、明るく光ってる。

そう言えば月は自ら輝くのではなく、太陽の光が反射して輝いている様に見えるんだっただか？

そんなしようなもない事を思い浮かべながら、月に両手を伸ばした。

肘の辺りから捻じ曲がった右手、腕の途中で折れて骨が露出していた左手

どちらもまともな形を持っていなくて、何故か笑ってしまった。

何で、こんな月明かりが辺りを照らす真夜中にこんな山の中をうろついていたのか。

何故と言われても困る。なんとなくだったのだから。

人の気配は無く、薄れゆく意識の中

怪我をした体が熱く生を実感させ、近づいてくる死の感覚をより明確に感じさせてくる。

血が地面に広がって、背中がべたべたして気持ち悪い。

体が冷えて行く、このままだと死んでしまう。

動こうとしても、壊れた体はさっぱり動かなかった。

寒い、怖い、冷たい、寂しい、誰か、誰か居ないのか。

真ん丸で綺麗な月だけがぼんやりと意識が薄れていく俺を見下ろしていたんだ。

自分の名前を言えますか？

俺は言えます。

ええ、言えるんです。

俺の名前は『ミリア・ノースリス』だ。

……まあ、待つんだ。

『ミリア』？　なんて女の子らしい名前なんだ

それなのに一人称が『俺』？

なるほど、俺は俺っ娘だったのか、ってそんなわけはない。

俺、名字が漢字二文字、名前も漢字二文字の平凡な名前だった普通

……の男だ。

前世はと言う前置きがつくが、些細な問題だろう。

とりあえず、ここはどこなのか、俺の愚息は何処に行ってしまったのか。

わかるのはここが薄暗い洞窟の中だと言うことぐらい。

後は『ミリア・ノースリス』と言うキャラクターになってしまっている事ぐらい？

『Military Countries Online』通称は『ミリカン』と言うゲーム。

バーチャルの中に表現された架空世界にて、様々な国が陣取り風に戦争を繰り返すゲーム。

様々な国の兵器が登場し、かなりガチ陣が蔓延っていたVRシューティングゲームだ。

出てくるのはむさ苦しい男ばかり。硝煙の臭い漂う、むせるゲームだった

だった。過去形である。

勢力は四つ。元は二つだったのだが……

第一に連合国、言わずと知れた第二次世界大戦の際の連合国の武装が使用可能な勢力。

第二に枢軸国、こちらも第二次世界大戦の際の枢軸国の武装が使用可能な勢力。

第三に大帝国、なんだそりやと言う話だが武装は弩や大砲。簡単に言えば中世勢力である。ぶっちゃけネタ粹……と言われていた。バランス調整の関係で半端ないチート具合となっている勢力。ちなみにそのチートをもつてしても最も勝てない勢力。どうしてこんな勢力を作ったのか理解に苦しむ。

第四に魔道国、魔法が使える勢力で、『ミリア・ノースリス』の所属していた勢力だ。

この四つが陣取りを行うゲーム……と言えばストラテジーゲームを思い浮かべるだろう。

だがしかしこのゲーム、なんとファーストパーソンシューティングゲームなのだ。

このゲーム、最初は連合VS枢軸と言うわかりやすい第二次世界大戦を題材としたFPSゲームだったのだが、大型アップデートで第三勢力の大帝国が出てから変わった。運営が何を考えているのかわからないが、銃弾やミサイルの飛び交う中に、剣と弓で挑むキチガイ勢力が加わり、世界観は混沌の坩堝と化した。

まあ、それなら良いだろう。なんか大帝国がタイムスリップしてきた云々の設定だったから。

ただ、第四勢力が出てからおかしくなったと言うか、第三勢力の時点で頭がおかしくなったと言われていたのに、第四勢力の登場で更に混沌が増した。

魔道国が異世界からやってきた（設定）

魔法を使える少女達によって作られた国で、魔法の研究をしている国云々。戦争を繰り返す愚かな者達を止める為に異世界より『ミリカ』の世界にやってきた云々の設定だったはずだ。

国の設定なんて覚えちゃ居ない。どうでもよかつたし。ただ自分

の使うキャラについては良く覚えている。

『ミリア・ノースリス』は優れた魔法使いを輩出している五家の一つ『ノースリス家』の末っ子として生まれ、その才能から年齢十五歳と言う若さで魔道国の戦線に立つ事となった天才魔法少女である。

優しい性格の少女だが、『ノースリス家』と言う家名を背負う責務を負って戦争に参加し、『ノースリス家』の期待を背負っている為、普段は気の強そうな発言をしている。

淡い金髪に碧眼、ドレスと見紛う装飾の成されたローブ、背に背負うのはオーブを包む様に精巧な翼が作りこまれた背丈より長いロツド。

まるで蜃気楼の様な不安定さを持ちながらも、存在感のある羽衣の様なモノ。

無論だが美少女である。ただし身長は100cm程度しかない幼女だ。

(被弾判定が小さいが故に) 糞高い回避率を誇る超火力支援系回避型幼女である。

まあ、そんな事はどうでも良い。

いや、良くないが良いのだ。ローブの中の下着やらなんやらを確認とか、色々と終わった事はどうでも良い。

可愛らしいピンクのパンツでした。ぶら？ んなもん必要無かったよ。あ、でもやっぱり女の子なんだなって、柔らかかったです(真顔)元の設定がどうあれ、今は関係ないだろう。多分

なんか死んだんだけど、そしたら俺がやってたゲーム『ミリカン』の『ミリア・ノースリス』になっちゃったんだ。

……なるほど、これはアレか。二次創作によくある憑依転生と言うモノか。

たしか『ミリカン』のチュートリアルは各勢力毎に別々にしてあったはずだ。

連合・枢軸は軍の養成所での最終訓練を受けている設定で、大帝国

が森林の中を味方陣営に向かって行軍中。

魔道国のチュートリアルは洞窟を進んで敵と戦うと言うモノだったはずだ。

洞窟の中と言う話だが、詰る所この洞窟は『ミリカン』のチュートリアルステージなのだろう。

ほう、画面越しにみたテクスチャーと違い自分の目で見た景色はまったく違うモノなんだな。

進む事で初期魔法にして他の枢軸国や連合国で選ぶ様なサブマシンガンやピストルの武装（魔法）が使用可能になるのだろう。あ、アーマーもあつたか。

あ？ 大帝国？ 初期装備が青銅の剣（超真つ直ぐ飛ぶ投擲武器）と弓（狙撃銃を超える射程＋威力）とか言う頭のおかしい武器の話はしてないんで。ちよつと帝国兵はどっか行つてて、どうぞ

まあ、ともかく。

魔道国における初期武装は『ピストル・マジック』であつたはずだ。初期装備とも言えるそれ。他には？ ネエよんなもん。

戦場は『ピストル・マジック』一つ持つて放りだされる。それが魔道国の常識だから（震え声）

つまり、今の俺は『ピストル・マジック』一つでチュートリアルを突破しないとイケない。

……まあ、チュートリアルなんで余裕なんですがね。

確か敵対MOBの性能はNPCだから糞雑魚だし？

性能も一発でも当てりや倒れるぐらいだし？

そもそもこの見ている洞窟にしろなんにしろ、全てが魔術で見せられてる幻覚（つていう設定）だし？

最悪の場合は訓練教官が出てきて『失格だ、やりなおし』つて言われるだけだし？

むしろ蔑む目で見降ろされながら『やりなおし』とか言われるのつて最高じゃない？

超美女だよ？ ご褒美じゃん（確信）

つまり最初の一回はわざと失敗してご褒美受け取つても良いわけ

なんだよ。

と言う訳で適当に直進しますかね。

と思っていた時期が俺にもあつたんだけど。

『ミリカン』のチュートリアルでは一本道だったはずの洞窟が、なんかすつげー入り組んでるんだけど。

……と言うか本当に『ミリカン』の世界で良いのか？

曲がり角の先から「ぎやぎやぎや」みたいな声が聞こえたから、覗きこんだらなんかモンスターが居るんですが？

……と言うかあの緑色の目が赤い子供ぐらいの体躯のモンスター、ゴブリンっぽくね？

『ミリカン』の世界にゴブリンなんて居ネエよ。

訓練用の実銃（に見える張りぼて）を持った人形（魔術で動いている）がうろついているから『ピストル・マジック』で倒せて言われるだけの簡単なチュートリアルじゃないのか？

……しかもなんか人が倒れてるし。と言うか死んでね？ だって頭割れてるしアレ……びっくりとも動かないんだが？ ほら、VRホラゲーでよくみる死体とかあんな感じだよ？ と言うか服装がアレだな。ハーフプレートメールとか言う鎧に剣か？ 剣はゴブリンが拾い上げて振り回してるけど……え？ なんか思ってたのと違う。

ホラー系VRでは血の臭いや腐臭なんかを再現する機能とかあつたから平気……なんて事は無いな。VR用の香料で再現された安っぽい臭気とは別物だコレ。……吐きそう。

『ミリカン』は全年齢対応だったしなあ………一応、規制とかあつたから、血が噴き出る表現は無かつたし。基本的に血を連想させるモノはアウトで、血の代りに電子的なデータっぽい光が体からポロポロと零れ落ちる表現だったはずなんだよな。

憑依転生した所為でなんかリアルになったっぽい？

………いや、待って。

良く考えたらさ、憑依転生して超喜んでたけどさ、普通に痛みとかある訳じゃん？

撃たれたら痛いよね？　　と言うか痛いので済む訳？　　失禁しちゃうくね？

……………『マジックシールド』あるから大丈夫……………じゃないですよね。『マジックシールド』毎消し飛ぶ魔法少女とか普通だもんな。そりゃ対物ライフルやら対戦車砲なんかぶち込まれりや不思議マジックも一撃だよな。そういうゲームだったし。空飛んだ魔法少女は狙撃対象。容赦ない狙撃が魔法少女を襲う。

……………ヤバくね？

……………あれ？　大丈夫じゃね？　あのゴブリン（仮称）って遠距離攻撃持つて無さそうじゃね？

あ、勝ったな。第三部完。

よし、遠距離から『ピストル・マジック』で攻撃。絶対近づかせない。これで完封可能ですわ。

そうとわかれば、いざ行かん我がチュートリアルの敵よ

一足跳びに岩陰から飛び出し、握った拳から人差し指と親指だけを立てた『銃』の人差し指『銃口』を相手に向けて魔法発動の為のキーワードを叫ぶ。

『ピストル・マジック』『ファイアツ』『ファイアツ』『ファイアツ』
相手は三匹。故に三度の連射。

指先から放たれた魔力マジック・バレットの弾丸が相手の脳天を砕いて余裕で即死……………

……………あれ？

飛び出した自分に対して勝利の余韻を味わっていた三匹のゴブリンは一瞬だけ動きを止めた。

そんな敵が出て来た瞬間に動きを止めるN o o b達に向かつて容赦のない三連射が突き刺さるはずだった。

魔法発動と共に放たれる特有の音は無く、それ所か何も起きない。初期の『ピストル・マジック』の装弾数は10発。三発で弾切れと

かありえんから。

……あ、やつば……『マガジン・クラフト』してねえっ!!

『マガジン・クラフト』簡単に言えば魔力を弾丸に製錬する事であり、製錬中は一步も動けなくなる上、製錬中に攻撃を食らうともれなく爆死するとか言う危険な魔法。

基本は安全地帯に引きこもって『マガジン・スロット』数最大まで『マガジン・クラフト』をしてから敵と戦うのだが……

そう言えばチュートリアルの際には普通に説明されてたなあ……おい、今チュートリアル中だよな？

……これ完全に敵に気付かれてますわ。この場で『マガジン・クラフト』なんてしてる余裕なんてないよな？ ちよつと待って……くれないよねえ……死体から離れてニヤニヤした顔でこつちに詰め寄ってくる。

何アイツらおちよくってんの？ すっげえムカつく顔してるあ……

こつちには近接攻撃だつてあるんだぞ。対人では滅多に使わない『ぶん殴り』とか言う技がなあ……

初期の（見た目だけは豪華な）ロッドで殴り殺してやる。

そう、チュートリアルで大帝国の兵士っぽい死体があるが、多分余裕だろう（震え声）

……あれ？ これってチュートリアル……っておい、さっきの人の死体、武装なんだっけ？

『鉄の剣』（今はゴブリンの一匹が持つてる）＋『ハーフプレートメイル』（死体が身に着けたまま）。

……大帝国側の兵士の装備、しかもそこそこプレイヤーランクを上げた人の装備じゃないですか。

……あ、詰んだわ。

なんで弓装備してないのか知らないが、『鉄の剣』って言えばプレイヤーランク五以上の武装だ。

ソレ装備した奴が倒される＝初期の無改造『ピストル・マジック』では相手にならない。

マジか

冒険者、ベルークラネルは初ダンジョンで幼き日に祖父に助けられたあの日からずっと脅えていたゴブリンを初めて自力で討伐できたことにはしやぎ過ぎて、神様の元へ向かって笑われてしまった事に恥ずかしさを感じながらダンジョンの一階層でモンスターを探していた。

「居ないなあ……」

ファーストダンジョンアタック
『初めての迷宮探索』であるが、しよせん一階層。

ギルドの専属アドバイザーには最初の一週間は一階層で無理をせずに慣らした方が良いとの事なので一階層でのみ活動している訳だが……モンスターに出会う事が少ない。

もう一度神様の元にゴブリンを倒したことを報告に行ってから一時間近くダンジョンに潜っているが、モンスターとは五度程しか出会えていない。

それに美少女との出会いも全くない。

「いや、ボクは冒険初日、初日から女の子との出会いなんて期待しちやダメなんだよ……こういうのは気長にいかない」と

自分に言い聞かせるように呟いた瞬間、どこかから魔法の詠唱らしき女の子の声が聞こえてきた。

『ピストル・マジック』『ファイアツ』『ファイアツ』『ファイアツ』

魔法が発現しなかったので羨ましいとは思いますが、羨んだ所で手に入る訳でも無し。

「魔法かあ……いいなあ……あ、この辺りに人が居るなら離れた方が良いかな? 間違えて攻撃されたら怖いし」

基本的に他の冒険者とは不干渉である事が推奨されているので、ベルはゆっくりとした足取りでその場を離れる。

走って離れたりすれば不要な不信感を相手に抱かせる事になるからだ。

「女の子だったけど、大丈夫なのかな? ……魔法が使えるみたいだ

から大丈夫だよね？ ボクの助けなんて必要無さそうだしなあ」

亡き祖父の言葉に従い、女の子との出会いを求めてオラリオにやってきたベルだが、今のところ神様とアドバイザーの女性、後はモンスタ―ぐらいとしか出会えていない。

そんな風に溜息を零しながらダンジョンを歩いて魔法詠唱の音が聞こえた通路から離れようとした所で、その声が聞こえた通路から小柄な影が飛び出してきた。

膝まで届きそうな金糸を思わせるさらさらとした長髪

豪華な装飾の施されたドレスローブ

片手に背丈より長そうなオーブを包む翼の装飾のあるロッド

十人中十人が美少女と口をそろえる美貌を持った幼い少女である。

その少女は目に涙を湛えながら唐突に飛び出してきて、ロッドで後ろから飛び出してきたゴブリンを殴った。

「うわわっ、効いてないっ」

『ギャギャー』

「えいっ！ やあっ！ とおとおおっ!!」

ビシッ、バシッ、ゴスッ

流れる様な動きで三回ゴブリンを殴るも、ゴブリンは少し怯んだだけで直ぐに少女に向き直った。

そして通路から新たに現れるゴブリンが二匹、一匹は鉄の剣を持っている。

明らかに幼いその少女は怯んだ様子を見せた。

「ちよーつと不味い。いやごめん嘘、ちよつと調子に乗り過ぎた。ちよつとじゃなくてかなりヤバイ」

焦った様に眩かれた少女の言葉に、ベルは思い描いていたシチュエーションそのままの光景に思わず息を飲み、それから幼い少女を救うべく足を向けた。

そう、ソレが少年と少女（○）の出会いだった。

第一話

うむ。なんか知らんが救援に駆けつけてくれた人が居るぞ。薄暗いもなんとか見渡せなくもない洞窟の中。

よく分らないゴブリン（仮）に襲われてるチュートリアル（？）のさ中。

白髪の可愛らしい顔つきをした男の子に助けられました。

ほう、ほうほう？ これはアレか？ フラグか？

立てる側じゃなくて立てられる側の……まあ、今女の子だしね。しようがないよね……なくネエよ。

ちよつと待ってほしいなあ……なんて。

「キミ、大丈夫？」

ほう、なかなか見どころの有る顔立ち。のはず。

ぶつちやけ肩越しに振り返る様はそこそこ様になってる。が、アホなのかこいつ……

少年の装備的には肩当てやら膝当てやら結構ガチ目の装備から防具はランク8か9相当。

武装はランク3相当のナイフ。なあにこれ？ 装備チグハグ過ぎでない？

並々ならぬ程にナイフ好きな訳ですかね？ と言うかそれ以前に……

敵が残ってる状況で俺に向かって白い歯を強調する様にキメ顔を
するってどうよ？

完全初心者かな？ いや待て、だとしたらプレイヤーランク的にありえない。

成程、こいつはアレか、地雷プレイヤーか！

間に割り込み様に目の前の一体のゴブリンを倒したのはグッド。だがそれ以外はバッド。

と言うか。まず危険度の高い剣持ちから倒せよって話なんだよなあ……

ほら、こつちにキメ顔をキメてる間に突進されて押し倒されて……

しかも馬乗りにされてる。

……美少年×ゴブリン2体、ソツチの気は一切ないが、薄い本が厚くなる……じゃねえ、馬乗りしてるゴブリンが剣持ちじゃネエか。しかも容赦なく頭に振り下そうとしてるし、あの少年混乱してんのか防衛姿勢とりやがった?! しかも諦めた顔してるしっ!?

やめっ、一応助けに来てくれた少年なんだから殺すのはヤメたげてよう……

ベル・クラネルは涙目で脅えながらも気丈に長杖を構えた女の子の目の前に居たゴブリンを横から奇襲する事に成功し、一匹の首を深々とナイフで抉る事に成功した。

やった、上手くいったぞ。

そんな思いと共に女の子を安心させるために顔だけで女の子を振り返る。

地味に鏡に向かってどんな風に振り返ったらカツコ良く見えるのか研究していたソレ、俗に言うキメ顔をキメて、ベルは口を開いた。

「キミ、大丈夫?」

——ボクが来たから、もう安心だよ。

そう言葉を続けようとした英雄志望の少年は、次の瞬間には衝撃と共にバランスを崩して情けなくも倒れてしまう。

少年が何度も想像の中で危機的状況に陥った少女を助け、惚れられて、そのままとん拍子にハーレムを増やして英雄となっていくと言うありきたりな妄想を繰り返しているさ中であれば、少年がキメ顔をキメている時にモンスターは決して攻撃してこなかった。

何故なら、急に飛び出してきた人物を見定める為にモンスターも警戒するだろうと思っていたからだ。

だが、ここで少年は思い違いをしていた事に気付いた。

飛び出してきた人物が筋骨隆々の大男なら? 美麗な鎧に身を包んだ美丈夫なら?

そう、モンスターも警戒するだろう。

だが現実はどうでもない。

ベル・クラネルはそこそこの顔立ちをしている。美醜観念的に言えば良い方の顔立ちだ。

だが、どちらかと言えば力強さを感じさせるよりはひ弱さを感じさせ、線の細さの目立つ……要するに弱そうな見た目をしていった。

どういう意味か？ モンスター視点で見ればわかりやすいだろう。

長杖を装備し、実用性の無さそうな豪華なローブに身を包んだ100cm程の幼い少女を追い詰めているさ中に現れたのは、線の細い、弱々しい見た目をした少年。

モンスターから見ればどうなるか？ 獲物が増えただけである。

迷う必要等ありはしない。モンスターは人を憎み、殺そうと襲い掛かる。

上層、一階層のゴブリンは下の階層のモンスターに比べて能力も知能も劣っている。それでも最低限の警戒心ぐらいは持ち合わせているが、残念な事にそのゴブリンの警戒心にベル少年は引つかからなかった。

結果は、剣を持たない一匹のゴブリンの全身を使った捨身の突進で少年はバランスを崩し、そこに剣持ちのゴブリンが馬乗りマウントをとってになつてしまつたと言ふ事態を引き起こしたのは。

——ああ、ボクはなんて馬鹿なんだ——

祖父への謝罪。

軽率な行動への後悔。

それから一人残していつてしまう神様への思い。

様々な感情が入り混じりながらも、ベルは馬乗りになつたゴブリンが振り上げる剣を見ていた。

——流石に、あの剣をナイフで防ぐのは難しいかな？——

そう思いながらも、恐怖で強張る体は勝手に身を守る為に剣が振り下される軌道上にナイフをかざしてしまう。

きつと、攻撃すれば道が開けたかもしれない。けれども克服したと思ひ込んでいたゴブリンへの恐怖が、馬乗りされて至近距離から殺意を剥き出しにしているゴブリンの姿を見て再度湧き上がってきてし

まった。

抵抗する気力は失せ、ベルはぎゅつと目を瞑り、衝撃に備えた。

「てえやあつー！ とおうつー！」

目を瞑り真つ暗な視界の中。女の子の声が聞こえ、鈍い打撃音と共にベルの上に乗っていた重さが消えた。

「ちよつとちよつと、何で諦めてんのっ！ 助けに来たなら最後まで戦つてよっ！ 目の前で死人が出るのは嫌だつてのっ！ こつちが死ぬ分には自業自得で済むけど、助けにきた少年に死なれちや寝覚めが悪過ぎるっ！」

女の子の叱咤の声に、萎えていた気持ちに再度湧き上がる。

—— そうだ、ボクは女の子を助ける為に——

危機的状況の女の子を救う。

ソレは英雄志望な少年にありがちな想像だ。

だがソレを想像のまま終わらせたくないから、祖父の遺した言葉の後押しもあった。

故に救おうと足を向けたのではなかったのか？

ならば、立たなくてはいけない。

ここで自分^{ベル}が死んだら次は女の子がゴブリンに狙われる。

見るからに魔法使いである装備に身を包んだ女の子。背丈からしてもベルよりも幼いその子。

ベルが死ねば、女の子を守る者は居ない。そう、今この瞬間だけは、この女の子にとってベルだけが、唯一の英雄なのだから。

一気に身を起こして目を見開いて周りを見る。

女の子は長杖を使ってゴブリンを殴り飛ばして距離をとっている。

片方を殴り飛ばしては突撃してくるもう片方をいなす。

ベルのナイフと違い打撃系のその攻撃はゴブリンを倒すのに威力が不足している。

そもそも女の子の持つ長杖は装飾が美しい魔法使い用の長杖であるのは簡単に見てとれる。

打撃用武装ではなく魔法の補助用の装備で上手くゴブリンをいなしているのだ。

凄まじい技量だが、圧倒的威力不足。

実際何度も殴られているゴブリンのはずだが全然効いていないのかゴブリンも気色悪い笑みを浮かべながら女の子の命を奪おうとしている。

ベルはナイフをしつかり握りしめて、剣を持つゴブリンの背後から背中を一突きして魔石を砕く。

——モンスターは魔石を砕かれると即死して消滅する——
魔石を主な収入源としている冒険者ならできればやりたくない事の一つ。

魔石を砕けば収入がゼロになるからだ。だが、危機的状況の女の子を救うのに何を躊躇する必要があろうか？

先程は、みつともない姿を見せたが、今度はそうはいかない。

この女の子を救うのだ。

「少年っ！ ナイスっ！ もう一体も頼むわっ！」

最後の一体のゴブリンの脚を救い上げる様に長杖を振るい、バランスを崩させた女の子の言葉通り、ベルは最後の一体、仰向けにすっ転んで隙を晒しまくったゴブリンに向かってナイフを振り下した。

ふいー、さつきは危なかったですな。馬乗りになったゴブリンをフルスイングで全力の振り抜きでなんとかどけて、少年に発破かければ、何とか少年が立ち上がってくれた。

いやー、この少年。なんか見た目のひ弱さ以上に力あるわ。

このゴブリン、打撃無効化でもついてんのかってぐらい俺のダメージ入って無かったのに少年の一撃で即死したし。俺が弱いのか？少年が強いのか？

一応、『ピストル・マジック（初期）』の威力が50で、近接攻撃の威力が180なんだが……もしかしなくても『ピストル・マジック』使えたとしてもヤバかったのか？

……しかし、地雷プレイヤーよりも弱いとか、泣けるぜ……

「キミ、大丈夫？」

「はあ、むしろ少年の方こそ大丈夫？ さつきこつぴどくマウントとられてたけど」

一応、魔法少女ロールプレイとして女の子っぽい言葉使いを習得……はしてないな。素からこんな感じだし。あ？ 心の中のゲスさと外面が違い過ぎる？ 何を言ってる。俺は男だぞ？ あ、いや今は女の子だけど……中身は男だし？ 女の子の体には興味深々だよ？ おっぱいとか。ぱんつとか。

ってんな事はどうでも良いんだよ。なんか心配してくれた少年に声をかけたら顔を赤くして俯いてしまった。

……気持ちはわかるぞ少年。カッコいい顔して出て行ったらあっけなくやられたもんなあ。

ソレは酷くかつこ悪く映るし、少年のプライドもずたずた……あつ、この少年、一応助けてくれたんだっけ？

「あー……ごめんなさい。言い過ぎたわ。私は大丈夫。怪我は特に無いし一応一撃も貰ってないから……それよりも助けてくれてありがとう、流星に一对三は厳しかったわ」

「え……あつ、その、うん、どういたしまして。キミに怪我が無くて良かったよ」

……何この少年。お礼言ったら顔をより赤くしてわたわたしするのに、ごく自然に口説き文句っぽい台詞が口から零れてるんだけど？ しかも、齒の浮く台詞の癖に全然違和感感じさせネエし……あれ？ 天然のタラシっぽい？

やばい、孕まされるっ!! ……あれ？ 魔法少女って孕まないんだっけ？ たしかホムン……ホルンなんちゃら？ とか言う人造生命みたいな感じで、見た目は少女だけど中身は別物って設定があった気がする。

薄い本で見た。あれ？ でも一部の薄い本ではちゃんと孕んでた様な……？ ……後で確かめておくか？ でもパンツの中身は神聖だしなあ……ぶっちゃけると息子じゃないと言う事実から目を逸らす為に中身まで確認してないしなあ……やだなあ……

「あの……それで……その……」

「うん？」

そんなゲスな事を考えていれば、もじもじした少年が何か言いたげにもじもじしている。何この少年。兎っぼくて可愛いじゃん……
兎っぼい？ 兎って確か性欲がヤバいって……孕まされ？ 冗談じゃない。

「何かしら」

魔法少女が帝国兵につかまって性欲処理に利用される系薄い本は沢山見てきた。

大体が筋骨隆々な帝国兵の皆様色々な事をされる感じだったが、線の細い系の男は出てこなかったな。汗臭いと言うか筋骨隆々とした大男たちが剣と弓を手に銃器に立ち向かう感じの国だったんだが……と言うかこの少年、帝国兵……

うえっ!?! 敵対国家じゃネエかつ!!

「うんとね……キミ、この後——「待ちなさい」——え？」

左手でロッドを持ち。オーブを相手に向け、睨みつけながら右手を『銃』の形にして少年を睨む。

「ごめんなさい。助けて貰った事に感謝はしてる……けど、帝国兵である貴方に気を許す訳にはいかないの」

「ええっ!?!」

だって孕まされちゃうし？

第二話

今、気が付いた事がある。

ここに帝国兵って不自然じゃね？

だって人工的な洞窟っぽい場所だぜ？

床は平らに均されてるし。

いや、ゲーム作中的には床が平らで歩きやすそうだなーって思ったのは幻術によるモノだったからっていう理由があった。

だから、ここはチュートリアルであると判断した訳だ。

だが、帝国兵が現れた。

……もしかしてチュートリアル難易度上昇？

そんな訳無いよナア……いや、でも今なんか魔法使えないっぽいし？

どうなんだ……マア良い。この少年兵？ をどうにかしないと

……と言うか出口何処なんだ？

両手を上げて降参を示してる少年を見て思う。

………可愛らしい顔立ちしてんなコイツ。

ベル・クラネルは焦りを覚えながら、鋭い眼力で睨みつけてくる女の子を見ていた。

女の子は右手を人差し指と親指を立てて、他の指を握りこむと言う変わったハンドサインの様な手、その人差し指が文字通りベルを指差している。そして長杖の先端もベルに向けられており、睨みつける眼光には警戒の色が強い。

膝まで届きそうな金髪に碧眼、愛らしい顔立ちに豪華なローブに半透明の羽衣に長杖と言う女の子がゴブリン三匹に襲われて、苦戦しているとと言う危機的状况を見て思わず飛び込んだのは良いが、助けに入った瞬間にゴブリンから目を離れた所為で、かっこ悪い所を見せてしまったので恥ずかしい思いをしてしまっただけ赤面しつつも、どうにか

女の子に声をかけた所、唐突に『待ちなさい』と言われてしまった。なんだろうと思えば『テーククヘイ』だと思われるらしい。

当然の事ながら、ベル・クラネルは『冒険者』ではあっても『テーククヘイ』ではない。

慌てながら両手を上げて、傷付ける意図は無いと示しつつも女の子に良い訳を試してみる。

「待って、待ってっ！ 僕は、その『テーククヘイ』？ じゃなくて」
「……………」

「冒険者なんだっ！」
「……………」

「そう！ そうなんだ、だからその『テーククヘイ』じゃなくて」

ベルの言葉に女の子が反応を示した。目つきをより鋭くして睨みつけるその姿に思わず震えが走るが、少しすると、女の子が口を開いた。

「ひとつ、確認が有るわ……貴方は帝国兵では無いのね？ なら、此処は何処？」

「え？」

その質問に、ベルは拍子抜けと言うかおかしいなと言う疑問を覚えた。

此処は何処？ 言われるまでも無く、富と名声を求めて冒険者が足を踏み入れるダンジョンと言う危険な場所である。

ベルは祖父の遺した言葉に従いハーレムを作る為、そして英雄に憧れてこのダンジョンに……いや、今や世界の中心を神々が謳う『オラリオ』と言う一大都市を訪れたのだ。

この女の子もどこかの『ファミリア』に入っている『冒険者』の一人だと思っていた所に『此処は何処？』と言う質問。

……もしかして記憶喪失？

「……………答えられないのですかね？」

そんな考え事をしている間にも女の子の目つきは険しくなり威圧が上がっていく。

自分よりも幼い女の子に気圧されている事に驚きを覚えつつも、ベ

ルは慌てて口を開いた。

「まってまって、ここはオラリオのダンジョンって所で……えつと……一階層目の所なんだけど……」

「はい？ ダンジョン？ 一階層？」

ベルが慌てて場所の説明をすれば、女の子は驚いた表情で目を見開いた後、再度睨みを利かせてくる。だが最初の睨みに比べればわずかに険がとれている。

「……ここはダンジョンと言う場所の一階層？ なんていうダンジョン？」

「へ？ ダンジョンはダンジョンだけど……」

ベルは少なくともダンジョンと呼ばれる場所なんてオラリオの地下に広がるこのダンジョン以外知らない。

女の子が悩むような表情を浮かべながらぶつぶつと呟くのを見ながら、ベルは今この瞬間にもゴブリンやコボルトが現れないかヒヤヒヤしていた。運が良いのかどちらもこの場に現れる事は無かったし、他の冒険者が通りかかる事も無かった。

暫くすると女の子の顔から険が完全に消え失せ、ベルを睨むのをやめた。

「信じます。貴方を……無礼を許して欲しい」

「え？ あつ、その、こつちこそごめん」

女の子は深々と頭を下げて非礼を詫びてきたので、思わずベルも頭を下げる。

元を言えば『ベルが窮地に駆けつけて置きながら逆にベルが窮地に陥る』と言うみつももない姿を見せたのが原因と言えば原因……なのだろうか？

そんな疑問を抱えつつ、ベルは改めて女の子に問いかけようと思ったのだ。

仲間と一緒にじゃないの？ 魔法使いなら一人で行動する事は少ないはずだし。

送って行くこうか？ ゴブリン相手に苦戦していたし、安全な所まで送って行った方が良くないかって思っ

だが、ベルはここでようやく気付いた。
名前、その女の子の名前を知らない。

そう言えば自己紹介していない。

「あの、僕はベル・クラネルって言うんだけど……キミの名前は？」

「……『ミリア』、『ミリア・ノースリス』」

ベルの問いかけに女の子、ミリアはちゃんと答えてくれた、若干視線を逸らしながらではあったが。

やっぱあんな格好悪い所をみせちゃったからかな……

そんな風に思っていると、ミリアはベルを真正面にとらえて口を開いた。

「ベル・クラネルさん」

「あ、ベルで良いよ」

「……はあ、ベルさん、助けて貰った上で更にこんな要求をするのはどうかと思いますが……出口まで案内していただけないでしょうか？」

かしこまった様子で言われた言葉に、ベルは大きく頷いた。

女の子が困っていたらとりあえず助ける。悩む必要なんてない。

一つ、思った事がある。

うん、この少年。すっげえーやつだ。

だって助けたはずの少女に唐突に睨まれて武器（と言うか杖）を突き付けられても、不躰な頼みを笑顔で引き受けてくれるなんて、現代では考えられない思考だぞ……あ？ いや。ミリアちゃんって凄美美少女だしもしかしたら？

……これ、ミリアちゃんかなり子供だと思われてね？ 身長100ぐらいしか無いし？ 少年もそこまで身長高く無さそうだが、それでもこつちより高いし。

とりあえず、今現在、螺旋階段上に彫り抜かれたっぽい所を登ってる所だ。

なんでも『ダンジョン』と言うのは『オラリオ』と言う街の中心にある『バベル』と呼ばれる白亜の塔の真下に位置するらしい。

正しくは『ダンジョン』が有る場所に『バベル』が建てられたので、『バベル』の下に『ダンジョン』が有る訳では無く『ダンジョン』の上に『バベル』が有ると言う言い方が正しいとかどうか……

後はこの線の細い少年は神から『神の恩恵』を授かって『ファミリア』に入団している『冒険者』らしい。

……『ファミリア』？

えっと……ううん？

連合&枢軸が『連盟』、帝国が『軍団』、魔道国が『家族』。

コイツ、魔道国の人間？ いや、絶対に無いな。魔道国は女の子しか登場しないし。

確かに兎っぽくて可愛らしい顔立ちと言えばそうかもしれないが、はつきりと少年だと認識できる程度には少年やってるし。これで少女だったらご飯三杯は余裕ですよ。

もしかして裏方？ な訳無いよな。

『銃』について質問したら、知らないと言われたし。

『火薬』についても、そう言うものもあるんだと驚かれた。

この少年が言うにはつい昨日、神様と会って「ヘスティア・ファミリア」を結成して今日初めてダンジョンに潜ったらしい。

ふうむ……つまり駆け出しも駆け出し。完全なニュービーですね解ります。

祖父の背中に憧れを抱き、ゴブリンに対するトラウマを克服して、死んだ祖父の遺言に従って『ハーレム』を作ろうとしている。と言う事らしいんだが……

コイツ、女の子に良い顔して惚れさせようとしてんな？ ……っと思っただが……

どうもそうじゃないらしい。と言うかハーレム作るとか言ってる割に若干照れてたり、女の子に慣れて無さそう？

すれ違った綺麗な猫耳の女性を見て顔赤くしてたし……と言うか俺も今は女の子なんだが……俺相手には照れずに対応できて……ああ、そうだよな。もう子供にしか見えないよね。分ってる。うん。

ミアアちゃん『フェアリー型』だからね。せめて『ニンフ型』なら

女性として……いや、何考えてんだ俺は……

ミリアと言う女の子を連れてダンジョンの出口であるバベルの地下までやってきた。

直径10Mのダンジョンに続く大穴から出れば、周りには数多の冒険者の姿が見える。

ダンジョンから出て来た僕とミリアを冒険者らしい猫人の女性が一瞬だけちらりと此方を見て、微笑ましげに笑われたのが恥ずかしくて思わず顔を赤くしていると、後ろのミリアが口を開いた。

「帝国じゃないのね……亜人が首輪付き奴隷じゃないみたいだし。枢軸や連合なら解剖待ったなしのはずだから……」

ミリアの言葉に思わずギョツとして振り返れば、顎に手を当てて真剣そうに考え事をしている。

しかし、ミリアの言葉はかなり不味いモノだ。

「ミリア、その」

「うん？ 何？」

「……亜人っていう言葉はあんまり使わない方が良いよ。亜人デミ・ヒューマンっていう言葉自体、あまり良い印象が無いから人によつては凄く怒る人も居るんだ」

亜人と言う言葉に好印象を抱く人は少ない。全ての中心種族がヒューマンであると考える人も時折居ると言えば居るが、基本的にヒューマンよりも亜人……魔法が使えるエルフや、身体能力の高い獣人、手先が器用なドワーフ等の方が種族的特徴がヒューマンに勝る事も多いので、基本的に亜人種と呼ばれる種族はその言葉を嫌う事が多い。

「……それはごめんなさい。貴方も亜人だったり？」

「え？ いや、僕は普通にヒューマンだけど……？」

「兎人とかじゃなくて？」

「え？」

「いや、なんでもない」

誤魔化す様に苦笑を浮かべたミアを伴って、バベルを出れば、
久々に見る晴天の青空に目が眩み、一瞬後に広がる街並みに感慨深く
吐息を吐けば。ミアも同じく吐息を吐いていた。

ダンジョンと言う異界とも言える場所で常に気を張っていた為か、
ダンジョンから出て緊張感が解れた為か身体から力が抜けそうにな
るが、しっかりと両足で立って空を見上げた。

祖父の遺言の通り、ダンジョンには出会いがあった。

僕、ダンジョンに来てよかったよ。

そこまで考えた所で、ミアの所属ファミリアは何処だろうと言う
疑問が芽生えた。

疑問を解消すべく振り返ったベルが見たのは、青褪めた表情で引き
攣った笑みを浮かべるミアの姿だった。

「そういうえばミアは……ミア？」

「……………」

その表情に思わずベルは驚いて声をかけたが、ミアは反応せずに
街並みを見ている。

ベルがもう一度声をかけると、少し間を置いてから震える声で答え
た。

「ミア、その……大丈夫？」

「……………え？ ああ……………ここ、何処なんですか？」

「え？」

青ざめた表情で世界で最も有名な都市とも言える『オラリオ』をこ
こは何処と聞く女の子に疑問を覚えると同時に、その表情が嘘でもな
んでもなく本当にここが何処なのかわからない様子なのを察してベ
ルは焦った。

「えつと……もしかしてなんだけど……記憶喪失？」

「……………違いますね。私の知っている都市と全く違うモノで……」

引き攣った笑みのまま答えるミアに、ベルはどうすべきか悩み、
疑問を解いかけた。

「えつと……ファミリアのホームまで送っていいこうか？ ……と言っ
てもボクもまだ地理には詳しくないんだけどね……あはは」

「……ホーム？ 活動拠点ですか？ すいません。そもそもファミリアには未加入なんですが……」

誤魔化すように笑いを浮かべてミアアを安心させようとするが。そんなベルに対しミアアは驚く答えを返した。

ファミリアに入団していない。

それはつまり恩恵を受け取っていないと言う事だ。

恩恵を受け取らずにダンジョンに居るなんて自殺行為にも程がある。

「えっ!? ミリアはファルナも無しにダンジョンに入ったのっ!?」

「……? ふあるな? 何ですかソレ」

「え?」

ベルの言葉に青褪めた顔のまま振り返ったミアアの表情は、とても嘘を言っている様には見えない。

「えっと……どうしてダンジョンに?」

「……それは、ワタンが聞きたいですね。気がいたら居た、としか言えませんし……どうしよう……」

心底不思議そうに言いながらも、その目は不安に揺れている。

ベルは何処かでその目を見た事がある気がした。

いや、気がしたんじゃない。

ベルはその目を見た事がある。

祖父を失って、暫くの間一人で過ごしていたあの期間の間。

ベル・クラネルは一人で生活していた。

オラリオに行こうと決心し、オラリオに向かうまでの間、ずっと鏡の中にその瞳を見続けたのだ。

孤独に揺れ、不安で仕方が無いと言うその瞳を……

様々な探索系ファミリアを訪ねた。見た目のひ弱さから断られ続け、諦めかけたその時に神様と出会った。

神様と出会うまで、自分はそんな瞳をしていたんだ。

どうすべきか、じゃなくて。どう行動するか。どの英雄の言葉かよく思い出せない。

ベルは神様に助けられた。孤独から救い上げられ、眷属として……

ファミリア
家族としてベルを温かく迎え入れてくれた。

今度は、自分が助ける番ではないか？

ベルは、不安に揺れる瞳をしたミリアに手を差し伸べた。

「ねえ、もし良ければなんだけど……「ヘスティア・ファミリア」に來ない？」

孤独と不安に揺れていた瞳がベルの手に固定され、それからベルを見た。

その瞳の中には、孤独と不安だけでは無く、別の何かも揺らめいている。それは迷いだろうか？

「其れはアレですか。加入するか否かと言うモノですか？」

「うん、もしミリアさえよければ……きつと神様も喜ぶよ」

神様と一緒に「ヘスティア・ファミリア」を結成し、正式に登録したのは今朝早くの事だ。

登録して、アドバイザーを紹介されて、ダンジョンの勉強をして、ダンジョンに潜って。

トラウマにも近かったゴブリンを倒して、喜びのあまりヘスティアに報告に行つて。

最弱のモンスター一匹倒したことに跳んで喜ぶベルを微笑ましげに見る神様に思わず恥ずかしくなつて、

もう一度ダンジョンに潜つて、ミリアと出会つた。

そして今、ミリアをファミリアに誘つている。

確信して言えるのだ。きつと神様なら、僕と同じように孤独に揺れるミリアを救い上げてくれるんだと。

「……其方の言い分からすると、私はかなりアヤシイ人物になりますよ？ ファミリアにそんなアヤシイ人物を加入させるのですか？」

「僕は、怪しいとは思わないよ」

「……………」

日が沈み始めているのか、夕日に照らされて周りは赤く染まっていく。

そんな中、ベルの瞳を見つめるミリアの顔も、赤く染まっていく。ベルは笑いながらも一度口を開いた。

「もし、行く当てがないなら、僕の……僕達のファミアに來ない？
神様も凄く優しく、ミアならきつと歓迎して貰えるからさ」

沈黙と共に、ミアは一瞬だけ肩を震わせてから、ベルの手に自らの手をのせて呟いた。

小さくとも女の子らしいしなやかなその手に一瞬どぎまぎしそうになるが不安に揺れる瞳を見て落ち着いた。

「わかりました、その……お願いします」

「うん」

力強くミアの声に答えてから、ミアの手を引いてホームへと向かおうとして——腰のポーチの重さを思い出した。

「あ、ごめん、魔石の換金するから先にギルドに行ってもいいかな？」

「……なんか締まらないですね」

「うっ……」

赤い夕陽が見下ろすオラリオの街中で、ミアはくすりと笑った。

「まあ、こういうのも悪く無い」

第三話

ふむ。ベルくんが優しすぎてマジ天使……と思っていた時期がありました。

『ファミリア』に誘われ。

ベル君に手を引かれ。

ギルドでドロップアイテム……ダンジョンのゴブリンが消えて石ころっぽい物をとやらを落としていた気がする。

換金して1800ヴァリスどうか、ハーフェルフのお姉さんがすつごく綺麗で惚れそうになったりとかしたか。

ここまで見てきて思ったのは、この世界、俺が未プレイのMMORPGなんかじゃ？ とか思った。

ハックアンドスラッシュ？ どっちかって言うとローグライク？

かと思っただけどどうもダンジョンは固定マップっぽい？ じゃあハクスラかな？

まあ、今はそんな考察はどうでも良いんだ。

ギルドで換金が終わった後、ベル君に手を引かれて連れて行かれてる訳だけど……

少し迷いながらもベル君はしつかりした足取りで住宅街っぽい所をずんずん進んでいく。

こうしてみると結構背中大きく見えるな……俺が小さいだけか

……

とか思ってたんだが、なんか路地裏に入り込んでいくじゃないか

……

あれ？ なんか人氣が……とか思ってたらベル君が目指す先に日が暮れて薄暗くなった路地裏にある大きな建物まで連れてこられた。

……あるえ？ なんか、なんとというか……薄暗くて解り辛いが……廃墟っぽくね？ 明りついてネエンだけど？

………幼女を連れ込んでナニする気なんですかね？ 孕まされちゃう？ ちよつとマジ勘弁してくれよお（懇願）

ま、無いと思うけどね。

「ヘスティア・ファミリア」本拠の教会に近づくにつれ、ベルは不安感を覚えた。

神ヘスティアは良心的な神であったのだが、眷属がベル以外にまったくできなかった。

理由は単純で本拠である教会、それがどうみても廃墟にしか見えな
い。

眷属になっても良いかなと思った人々は尽くその廃教会を見てヘスティアの眷属になる事を拒んだのだ。

もしかして、ミリアもこの荒れた教会を見て考えを改めるかもしれない。そう考えてベルは恐る恐るミリアを振り返った。

「あの……ミリア、ここが僕達の本拠なんだけど……」

「……ええ、まあ、その。明りも点いてない廃墟に連れ込んで何を
気なのか気になる……とだけ言っておくわ」

「あつ……」

振り返ったミリアは苦笑を浮かべながら呟いた。

その呟きにベルは今の状況を客観的に見てみると、日も暮れて街灯の少ない薄暗い路地を抜けて幼い女の子を人気の無い廃教会に連れ込もうとしている不審人物……それが自分であると気付いて両手をわたわたさせて否定する。

「わわっ、ごめん、そんなつもりじゃなくて！　ここが僕達「ヘスティア・ファミリア」の本拠なんだっ！」

「いえ、此方こそすいません。別に疑っている訳ではないですね……この廃教会、良く見れば趣が……あるような………あります……ある？　……暗くて見づらいのでアレなだけできつと昼間見れば趣が
ですね……」

本拠である廃教会をなんとかフォローしようとしているが、徐々に声が小さくなり、ついには黙ってしまった。

「……えつと……とりあえず入る？」

「そうしますね」

扉を潜り廃教会の中へとミリアを導けば、明かりの無い廃教会の内部が暗くベルとミリアを迎え入れた。

廃教会の入口から真っ直ぐ進む穴が開き擦り切れた赤いカーペット、その両脇に置かれたささくれ立った木製の安っぽい長椅子、そして正面にあるステンドグラスは割れて隙間風がびゅーびゅーと吹いており、主祭壇は朽ち果てて隅の方へ寄せられており、祭壇に置かれた十字架らしきモノは碎けて半端な神聖さを残すのみ。

かつては信仰する神への祈りを捧げる場であったこの教会は、神が地上に降りて来た事で無用の長物となり、それ以降は維持管理だけされるまま時の流れに取り残され、ついに管理する者も居なくなり荒果てたソレを神へファイストスに拾い上げられ、神へスティアへと渡った。

元々は相応に美しいはずだったその場所は哀愁を漂わせるだけの薄暗い廃墟の様な状態になっている。

「……すいません、ちよつとフォローしきれないです」

「あ、あはは……」

凄まじく微妙そうな表情を浮かべたミリアは天井を見上げてぼつりと呟いた。

「……雨漏りはしてそうな感じですが。天井の造りはかなりしつかりしてるみたいですね。最低限の強度は確保されてると……突然天井が崩れる事は無さそうですが……」

「あー、ミリア、僕達の本拠は此処なんだけど……実際に寝泊まりしてるのは地下室なんだ」

「……………地下室……」

ミリアが怪訝そうな表情を浮かべてから、警戒心を露わにしてベルから一步距離をとった。

「いえ、ベルさんがそう言う事をしない人だと言うのは分るのですが……女性を地下室に連れ込もうとするのはいかななものかと」

「へ？ あっ!? 違うよツ!! えっと……そうだ、ミリアはここで待っててっ!! 僕、神様を連れてくるからっ!!」

「え？ あっ」

慌ててミリアの懸念を解消すべく、ベルは隠し扉を開けて中に飛び込んで行った。

しまったな。人気の無い、明かりも無い廃教会。プラスアルファで地下室と、薄い本的展開待ったなしなシチュエーションに思わず警戒してしたら、ベル君が凄く慌ただしく扉を開けて地下へと続く階段の中へと消えて行ってしまった……

薄暗い廃教会の中、一人で取り残されるのは若干心細いのだが……ふうむ……しかしここは不思議な場所だな。さつきまで隠れてた月が雲から顔を出したのかステンドグラスが淡く光だし、朽ち掛けた十字架を明るく照らしている。

それ以外の場所には闇が淀み、些か恐怖を抱きそうな……気が？

ホラゲーに有りそうなシチュエーション。なんかでそう(○)

そんな事を思っていると、月が再度雲に隠れたのかステンドグラスから差し込む光すらも薄くなくなり、薄暗いから完全に暗いと言う形容できるような明るさになってしまった……何か光源になるもの無いか……ちよっぴりチビリそう。

「キミ、そこで何をしているんだい？」

ッ!?

唐突に後ろから声をかけられ、思わずバツと振り返れば、十歳ぐらいの女の子が立っていた。

扉の外から入ってくる微かな明るさのおかげでシルエットはわかるが、顔は全く見えず、身長的に十歳ぐらいの女の子だと言う事しか分らない。

ねえ、待つて。なんかあの子のシルエットおかしくない？ 薄暗くて良く見えないんだけど、胸の辺りのシルエット歪んでね？ 腕を広げ……いや、無いな。なんか胸に着いてるぞアレ。

いつの間にか気配も無く入口に立っていた女の子に思わずたじろいで一歩後ろに下がる。

「ふむふむ？ 君、脅えているのかい？ 大丈夫さ。ボクは何もしな

いよ。親御さんはどうしたんだい？　もしかして迷子なのかな？」
非常に優しく、諭す様な声で話しかけてくるその女の子は、妙な雰
囲気を纏っていた。

具体的に言うのとベルと手を繋いで街中を歩いている時に『幼女可愛
いよ（ハアハア）』と鼻息も荒く血走った目を向けてきた男集団に感じ
たあの感じ……そう、これは……悪寒っ!?

……あれ？　ヤバくね？　今の自分、普通にこの女の子より身長低
いんだぜ？　抵抗できない？　できなくない？

「えと……其方こそこんな所で何を……」

「うん？　ボクかい？　そりゃボクは此処に住んでいるからね」

こんな所に住んでいる……まさか……へんて……ッ!?

月明かりが再度廃教会の中を照らしだし、ついにその女の子の全容
が明らかになった。

黒い髪を白いリボンでツインテールにしている。服装は胸元の開
いたホールネックの白いワンピースに左二の腕から胸の下を通して
体を巻き付けるように青いリボンを結んでいる。

小首を傾げながら、紙袋を手に持った幼い容姿の小学生ぐらいの女
の子。

ちよつとまって。何あの子？　胸でかすぎね？　化け物？　いや、
にしてはすつごい可愛い。

「君、大丈夫かい？　なんだか混乱している様子だけど」

「え？　ああ……その……」

その神聖な雰囲気を持ったロリ巨乳ちゃんの優しいな声色にど
もっている、ドタバタと足音がして地下へと降りていたベル君が扉
から顔を見せた。

ベル君ナイスウ。

「ごめんミリア、神様ちよつと出かけてるみたいなんだ。それで
「ああ、ベル君。お帰り」神様っ!？　何処に行ってたんですか」

「ふふん、君が初めてダンジョン最弱のモンスターを倒した記念に今
日の夕食は豪華にしようと思ってね。買い物に行ってたんだ……
ちよつと想定外の事があつて遅れたけど……ロキの奴……今度会っ

たら只じやおかないぞ……」

「どうやらこの二人は知り合いらしい……待って、このロリ巨乳ちゃん神様なの？ マジかよ……（驚愕）」

「……あ、でも人間離れした美しさや可愛さを持つてるし、神様って言われても納得できるわ。」

「神聖な雰囲気もするし……っておいまて、さっき感じた悪寒だと思っただあの感覚、アレって神聖な雰囲気のことだったのかっ!？」

「……あれ？ じゃあ道中に居た鼻息の荒い血走った眼をした変態から感じたあれも……神聖な雰囲気？」

「……考えるのをよそう。碌でもない事にしかならない気がしてならないのだ。」

「ところでベル君、この子は君の知り合いみたいだけど……どうしたんだい？ 君、オラリオに知り合いは居ないって言ってなかったっけ？」

「ああ、ミリアとは今日ダンジョンで出会って……えつと……危機的状況を……助けて……」

「ベル君、もつと自信を持つて良いよ。確かに助けられたし。かつこ悪い所もあったけど、ぶっちゃけあの状況で助けに入ってくれた君には凄く感謝してる。」

「それで、困っているみたいだったからファミリアに勧誘したんですよ。ほら、神様も眷属をどんどん作って大きなファミリアにしたいって言うってたじやないですか」

「……なんだって？」

「信じられない、そんな表情を浮かべた神様は、ベル君と俺を交互に何度も見てから……バツとベルの両手をとった。」

「流石ベル君だっ!! ボクが一人目を選んで眷属だけの事はあるよっ!!」

「はいっ神様っ!!」

「この調子で一日一人ずつ眷属を増やしていけばロキの所なんて目じゃないよっ!!」

「はいっ!! この調子でどんどん眷属を増やして、いつの日にか必ず

有名なファミリアになりましたっ!!」

「ベル君っ!!」

「神様っ!!」

ひしつと二人して抱きつきあったその光景は、幼い容姿の妹と、背伸びした少年の微笑ましい光景にしか見えなかった。

いや待って、なんか二人のテンションがおかしいんだけど……お？
そんな事を思っていると、神様が此方を向いた。

「そうだ。自己紹介がまだだったね。ボクはヘステイア、神ヘステイアさ。こっちはボクの眷属のベル君。ほらベル君も自己紹介を」

「あつあのつ、神様、いったん離れて貰って良いですか……」

「うん？ ああ、わかったけど……ベル君、顔真っ赤だよ？ 体調でも悪いのかい？」

今更だけど、あのすごいおっぱいがベル君の体に押し当てられて凄
い事になってるなあ……ベル君もそれに気付いたのか顔真っ赤だし。
可愛いなベル君。

「いえつ、そういう訳ではなくて……ああ、えつと。ボクはベル・クラ
ネルって言います……つて、僕はもうミリアとは自己紹介してあつた
よね」

「そうですね。ベルさん。ヘステイア様」

「様なんて呼ばないでくれよ。普通に呼び捨てで構わないよ」

気さくにそう言ってくれるのは嬉しいのだが、どうにも神聖な雰囲気
を纏った彼女を呼び捨てにする気には慣れない。

「はあ……えつと、私はミリア・ノースリスと言います」

「よろしくミリア」

「……………」

改めて自己紹介をすれば、嬉しそうに微笑みを浮かべてベル君が返
してくれたのだが……ヘステイア様は何故か眉根を寄せて思案顔を
浮かべていた。

「神様？」

「へ？ ああ、何でも無いよ。よろしくミリア君。……ミリア君も何
か事情があるかもだしね」

うん？ 何か小声で言ってたが……なんと行ってたんだ？ 後半、全く聞き取れなかったんだが……

「それで、ミリア君は「ヘスティア・ファミリア」に入団したいんだよね？」

「はい。そうなりますね」

「よしわかった、歓迎するよミリアくん。君はボクの二人目の眷属だ」
柔らかな笑みを浮かべて迎え入れてくれると言うヘスティアの言葉に思わず首を傾げた。

「入団試験みたいなモノは無いので？」

「へ？」「え？」

ファミリア 家族に入団する場合は、最低限デスキルレートの確認ぐらいはするだろうし、大体の所では『入団試験』と称して団員と試合させてその様子で入団させるか決める等していたし。

ミリカンだと連合や家族なんかはランキングを競い合うガチ以外は存在を許されなかったしなあ……お気軽克蘭？ まったりファミリア？ 1か月毎に行われるランキング戦で100位以内に入れない克蘭とファミリアは消される運命だから。サーバーを圧迫しない為にね、シヨウガナイネ。

だから基本的にミリカンでは克蘭やファミリアに所属出来る人自体少なかった。かく言う俺も無所属でプレイし続けたからね。

第四話

ほむ。

ベル君の主神、ヘステイア様と会ったが……神様ってマジっぽいなあ……

ファミリアに入れてくれるって言うから歓迎してくれてるっぽいんだけど……

どうもなあ……怪しまれてるっぽい？

自己紹介したら訝しんだ表情を浮かべてる……？

何かしでかしたか？

……にしても入団試験も無しとは……いや、極小なら有りなのか？
と言うかランキング100位以内に入れなかつたら抹消されるなんて鬼畜システム入れてんのミリカンぐらいか。

とか思ってたら入団試験をどうするか二人して相談し始めたぞ……マジか、藪蛇だったか……

「ヘステイア・ファミリア」の本拠、教会の隠し扉のある廃教会のフロアにて、ベルとヘステイアは顔を突き合わせてミリアから距離を置いてヒソヒソとそれなりの声で囁き合い始めた。

「どうしましょう神様、入団試験って何すればいいんでしょうか？」

「ぼっ僕が知る訳無いだろうっ!! なんてったって昨日君を眷属にしてファミリア登録したばかりだぞっ!!」

「ええっ!! じゃあどうしましょう? 他のファミリアだと模擬戦して実力を確かめるって言いますし……僕は入団試験も受けさせて貰えませんでしたけど……」

「ベル君、元気を出すんだっ!! キミはもう立派な冒険者じゃないか。あの最弱のゴブリンも倒せるんだからね」

「……神様、僕を元氣付けるつもりありますか?」

「あははは」

「神様あ」

話が明後日の方向に飛んでいくのを眺めながら、ミリアは苦笑を浮かべる。

全部聞こえてるんだよなあ……

「あつ、そうだつー」

「何か思いつきましたか神様」

「ふっふっふ、僕に策在りだよ、普通に面接試験で良いだろう。名前を偽っているみたいだけど特に危険な雰囲気は感じないから問題は無いと思うけど、一応ね」

「名前を偽る？」

「ああ、ベルくんは気にしなくて良いよ。此処では珍しくないからね。オラリオ

まあ、神様相手じや偽名も意味ないけどね」

ヘステイアの言葉が聞こえ、思わず顔が引きつる。

偽名……本来の名前じゃなくて『ミリア・ノースリス』って名乗ったから怪しまれてたのか……

つておい、ちよつと待て。つて事はだ……本当の名前がバレてる？

「あの一」

「なんだいミリアくん」

「えつとですね。私の本当の名前とか……わかってたり？」

「いや？ 名前を偽っているのは分ったけど本当の名前は知らないよ。と言うより嘘の名前だつて否定しないんだね。まあ否定したらしたで嘘だつてわかるんだけどね」

ベルとヘステイアの囁き合う会話が普通にでかくて、なおかつこの廃教会が静か過ぎて、全部聞こえてるとツツコミを入れようか悩んでいたのが全部ぶっ飛んで一歩後ずさる。

このヘステイアと言う神様。かなり策士だ。

あえて聞かせる事で此方の出方を窺っている？ なんかテンション高そうな子でアホの子っぽい神様だなあとか思ってた。ごめんなさい。口に出すと怒られそうなので心の中で謝りつつ視線を逸らす。

「あはは……本名は訳あって……名の……れない訳じゃ無いんですが

「……あはは」

笑つてごまかすしかネエ……

「まあ安心したまえ。君が名前を偽った事に関して怒ったりはしないさ。誰しも嘘を吐くもんだぜ？　ボクだって嘘の一つや二つ、吐くしね」

「ええっ?!　神様嘘吐いてるんですかつ!!」

「ベル君、良いかい？　世の中、本音だけじゃ人を傷付けてしまうんだよ？　時には優しい嘘も必要なのさ」

慈母を思わせる穏やかな笑みを浮かべて囁く様に呟きながら、盛大に目を逸らすヘスティアの様子にベル君が微妙そうな表情を浮かべている。

それを見ながら、思う。

すっげえ優しい神様なんだなって。

ベルからすっげえ目を逸らして口元が引きつった笑みを浮かべているのがなんか微妙だが神聖な雰囲気、優しい笑み、理解有る言葉、どれをとつても神様と言うイメージがぴったり合う。こんな神様なら信仰しても良い気がする。

「それで、面接試験を行うから下に行こうか」

「……あの」

「うん？」

「……嘘吐いてた様な人を、どうしてそんなに信用できるのですか？」

俺は、嘘を吐いていた。父親は、そんな嘘吐きな俺を赦しはしなかった。

如何してそんなに信用を向けてくるのかさっぱり分らない。

「うん？　そりゃ君から悪意を感じないからね。後は勘かな？」

につこり笑顔を浮かべたヘスティアに、思わず頭を垂れた。

神様、スゲエ……

「ほら、そんな事より面接試験だ。いやあまさかファミリア結成した次の日に新しい眷属が入団希望でやってくるなんて……これはボクの時代がきてるんじゃないだろうか？　ふふーん、ヘファイストスもびつくりするだろうね」

「はいっ神様っ！ この調子でどんどんファミリアを大きくしましよ
うっ！」

二人して隠し扉の方へ歩いていき、振り返って此方に手を差し伸べ
て来た。

「ほら、行こう。安心したまえ。面接と言つてもそう難しいものじゃ
ないから」

………なんか、なんと言えば良いか。凄い神様だな。

教会の地下………ぶっちゃけジメジメした暗い所を想像してたが、決
してそんな事は無かった。

と言うか一式家具が揃い、人が生活できるだけの環境が整えられ、
上の荒れようから考えるとごく普通と言える生活感溢れる部屋に
なっていた。

「それじゃ面接試験をー……ベル君、ボクの隣に座ってくれるかい？
ミリア君は悪いがその椅子に腰かけてくれ。まあ難しい事は聞か
ないよ」

安心させる様に笑みを浮かべたヘステイアに逆らわずに頷いて椅
子に腰かける。

其処まで広い訳じゃないんだな………と言うか大きなベッド一つだ
け？ ……ベル君と二人で寝てるのかな？ 羨ましいなあ。

「それじゃ、改めて自己紹介をしよう………ボクは神ヘステイア。ここ
「ヘステイア・ファミリア」の主神さ。普段は『じゃが丸くん』の店の
売り子してるか、ここでゆったり本を読んでいるぐらいかな？ 次
はベル君だよ」

「あつ、はい。えつと、「ヘステイア・ファミリア」のベル・クラネル
です………えつと、今朝冒険者になったばかりの駆け出しで、将来は『英
雄』になりたいと思って頑張ってます」

………ベル少年エ。いや、英雄に成りたいなんて可愛らしい夢じゃな
いか。浪漫溢れてるな。

………この世界だとソレが普通なのか？ 神の恩恵とやらでかなり

成長しやすいっぽいし？」

「それじゃミリアくん。自己紹介をしてくれるかい？」

「え？ ああはい。ミリア……えっと、本名で自己紹介した方が良いでしょうか？」

あつちの名前は、出来ればもう名乗りたくない。

「うん？ 君が名乗りたい方を名乗れば良いよ」

「はい。『ミリア・ノースリス』です。えっと……普段は、まあ……その……」

人を騙す仕事をしてました。なんて言えないなあ……

「どうしたんだい？」

「……色々とお金稼ぎをしました」

「ふうん？ と言う事は、君はお金を求めて『オラリオ』に来たのかい？」

……。もうお金は求めてないんだがなあ……なんで『オラリオ』に来たのだったのかって？ 知らん。

「いや、別にお金はもういらないうです。オラリオに来た理由もわからないです」

「………？ いや、ごめん、嘘を吐いてないのは分るんだけど、意味がわからない………どういう事だい？」

若干混乱した様子のヘステイアにベルが何かを耳打ちし始めた。

ちよつと声でかいよ。聞こえてるよ。

「あの神様、ミリアとはダンジョンの中で会ったんです」

「ダンジョンの中？」

「それで『ダンジョンの中に居た理由も分らない』って言ってる………もしかしたら記憶喪失なのかも」

「ふうん………」

腕を組んで呟いたヘステイアは、一つ頷くと此方に向き直った。

「君は何でダンジョンの中に居たんだい？」

「わからないです」

「嘘じゃない………か。ダンジョンに居る前の直前の記憶を、思い出せるかい？」

「……………」

ダンジョンに居る直前の記憶……。

丸い月……綺麗な夜空。

……………ぐちゃぐちゃになった両手。

質問を放つと同時に、ミアの表情が青褪めた後、自分の両手を見つめて震えだした。

「ミア君？」

「あの……ミア？」

カタカタと震えて、青褪めながらもミアは引き攣った笑みを浮かべて呟いた。

「……月、丸くて……綺麗でした」

尋常でない様子に、ヘステイアは立ち上り、ミアの傍により肩に手を置くがミアは反応しない。

精神的に何かしらの負荷でもあるのか、ヘステイアが覗き込んだミアの目は焦点も合っていない何処か遠くを見つめ、不安と恐怖が宿っている。嘘を吐いていると言う様子は何処にも無い。

「腕……腕が……折れて……骨、骨が見えてたんです」

震える声で呟かれる言葉にヘステイアとベルが息を飲んだ。

「血……血が、出てて。それで……それから……」

「ミア君、もう良いよ。そこまでで良い。それ以上思い出す必要は無いよ」

震えるミアを優しく抱きしめる。幼い少女は、何かに脅えている。

不躰な質問だったかもしれない。酷く憔悴した様子のミアにヘステイアは優しく声をかけた。

「何があったのか、ボクはもう聞かない事にするよ……大変な目にあつたみたいだね」

「……いえ、私が悪いので……」

ミアの、後悔の念の詰った言葉に、ヘステイアは一つ頷く。

見捨てると言う選択肢は無い。捨てられた子供の様に不安に揺れるミリアの目を見て、見捨てると言う選択肢が出てくるなんて事は無かった。

「ミリア君、良ければボクのアミアリアに入団してくれると、嬉しいかな」

「僕も居るよ。大丈夫」

安心させる様にベルも微笑み、ミリアの顔に徐々に生気が戻ってくる。ミリアはヘスティアをゆっくりと押しつけて抱擁から抜け出すと。頭を下げた。

「はい……お願ひします」

「よしっ、それじゃさっそくファルナを付与しようか。それから今日はパーティーだぜー！」

「パーティーですかっ!!」

ミリアの暗い雰囲気を払拭すべく、元気良くベル君とハイタッチを交わす。

「ふっふっふ、ベル君が最弱のゴブリンを一人で倒した記念と新しい眷属の入団祝いさ」

「や……やったあ……」

ベルは、ダンジョン最弱のゴブリンを一匹倒した事に浮かれて凄く嬉しそうに報告に来た際に搔いた恥を思い出しながらも、引き攣った笑みを浮かべて何とか声を絞りだした。

そんな様子を見ながら、ミリアがくすりと笑みを零した。

「ふっふ」

その笑みに、ヘスティアとベルは安心したように吐息を零し。それからヘスティアはミリアに声をかけた。

「そうだ、先にシャワーを浴びてくると言い。そっちの扉の先にシャワーがあるからね。先にベル君のスティタスを更新するから。ミリア君はその後にファルナ付与だよ。ふっふっふ、楽しみにしていたまえ」

「ああ……お気遣い感謝します」

軽くヘスティアに頭を下げると、そのまま扉の方へ近づいて恐る恐

る扉を開けているのを見ながら、ヘステイアはベルに密かに話しかける。

「ベル君、ミリア君の過去についてなんだけど」

「はい、僕からは聞かない様にします」

「うん、最期の記憶……両腕、骨……モンスターに襲われたのかな？
もしもそうならファルナ付与で何かわかるかもしれないしね」

第五話

神様、ほんと凄い人……いや、人じゃないのか。

流石神様、と言えば良いのか。凄いわ。

思わず信仰したくなっちゃった……

……前世で人を騙してお金を荒稼ぎしてた俺がこの神様の眷属に？

……すつげえ申し訳ない。ぶつちやけベルくんが神様云々言ってた時には俺みたいな奴が作ったインチキ宗教なんか騙されてんじや？ とか思ったぐらいだしなあ。

だけど、あの神様の為に何か出来るなら、なんでもしようかなとは思う。

……まあ、前世の罪滅ぼしになるかは知らんが。

……話は変わるが。神様転生系でトラックにはねられて死んだ系の転生者ってスゲエんだな。

時々、自分の体がぐちゃぐちゃになってる事を覚えてる奴も居るが。平然とそれを流したり、語ってみせたりできる辺り、ただの高校生とかただの一般人とかの枠を超えた狂人かなんかんだと思う。

俺には無理だわ。あの時の事を必死に思い出さない様にテンションを変にあげたり、ミリアになった事とかで気を逸らしてないと正気を保てそうにない。

思い出しただけで手足が震えるし、背中に広がる血の感触が今でも思い出せる。

そう、背中を流れるシャワーの感覚が、いやこれ水だし、血の方がドロツとして……

やべえ……吐き気が……

何度えざいても。空っぽの胃から出てくるモンなんて胃液ぐらいしかネエよな。

シャワールームで胃液をゲロってたら、ヘステイア様が様子を見て来て背中摩ってくれた。

第一声は「大丈夫かい？」である。 神様……マジスゲエな。惚れ
そうだ。

とりあえず。マジ申し訳ない事をしたと思うが。ヘステイア様凄
すぎ。

とりあえず気分を変えるべく。気がついたら全裸になって確認
してなかった事を確認しよう。

そう、俺の性別について……ミリカンでは女の子だったミリアちゃ
んも、この世界では男の娘と言う可能性が――

ファルナを授かる。そうしよう。あ？ 性別？ 女だよ。誰だ
よ、男の娘を期待したアホは。

俺だよ……

教会の隠し扉、「ヘステイア・ファミリア」の本拠であるこの部屋に
て、ヘステイアがにこにことした笑顔でベッドに腰掛けている。

先程、シャワールームでゲロつてた事なんて無かった事になってい
るのか。ベルはなんか「僕は上で待ってますね。終わったら声かけ
て」と言っ上に行ってしまった。

「ミリアくん、上着を脱いでここにうつ伏せになってくれるかな？」

ベッドを示しながら言われた言葉に思わず首を傾げる。

ファルナ付与だよな？ どんなモノか想像してすらいなかったが、
こう、神の前で跪いて、神がファーって授けるもんかと。自分で言っ
てて思ったが、ファーってなんだよ。ファーって。

「ああ、ファルナは背中に刻むんだよ。だからうつ伏せに寝て貰った
方がファルナを刻みやすいからね」

「なるほど」

背中に刻むから背中を見せろと。なるほど。

特に入墨とか入れる事してないから問題ないな。

魔法少女系のアバターの中には顔やら胸元やら背中やらに入墨を
入れる奴も居たからなあ。

上着、と言うかローブの為上下一体型と言うか。頭からかぶるタイプなのでローブ脱ぐとパンツにシャツと言うスタイルになる。その上シャツを脱げば……後は分るな？ ……まあ、俺は別にロリコンじゃないんだが。

「さて、針とー回復薬とー……よし。それじゃファルナを授けるよ」
うつ伏せに寝た俺のお尻の辺りにヘスティアがそつと跨った。

……いや、別に変な事考えてネエし。誰だよ仰向けなら絶景が見れたと言った奴。仰向けじゃなくても正面から向き合えば絶景だよ……大きな山を見上げる形になるからな……だって俺の方が背低い。くつそ、選ぶ素体間違えてんぞ。

なんで『フェアリー型』選んだ俺。

……だって飛行魔法とかあったし。空飛びながら『ガトリング・マジック』で地上掃射。楽しいゾオー……まあ狙撃で撃墜待ったなしなんですけどね……クツソ、スナイパー全員死ねよ。なんでアレ当ててくんの……ロケランで爆殺されんのも納得いかねえし。なんで当たるんだよ……俺のPSの所為ですわわかります。

そんな事を考えている間に、ヘスティアが指先に針を刺しているのが視界の端っこに映った。

思わず身を起こそうとして、咄嗟にやめる。このまま起き上がればヘスティアが危ない……まあミリアちゃんボディは魔力無しだと弱いヘスティア様を押しつける事なんてできやしないが。

手、そして血。

二つが合わさり、俺のトラウマを刺激する。ヤメロオー……やべえ、ちよつと吐き気が。

「ヘスティア様……」

「うん？ どうしたんだい？」

「血が……」

「ああ、大丈夫だよ。ファルナは神の血イコルを使って授けるモノだったからね……もしかしてトラウマを刺激してしまったかな？ ごめん、軽率だったよ。先に説明しておくべきだった」

苦笑を浮かべ、それから申し訳なさそうに謝ってきたヘスティアの

姿に、赤い血を見て一瞬フラツシユバックした血濡れでぐちやぐちやの両手の映像が掻き消えた。

胃の辺りに燻る不快感はなんともしようがないが……

「……いえ、此方こそ、過剰に反応して申し訳ない」

「気にしなくて良いよ。今回は僕の説明不足だからね。さて、ファルナを付与するよ」

大人しくうつ伏せになり、目を瞑る。

神の血も赤いんだなって、変な感想を抱きながら待ってれば。ポタリと背中に血が垂らされた。

すると淡く、それでいて神々しくて。決して眩しいとは感じない微妙な、と言うよりは不可思議な光が背中で弾けた。

驚いて目を開くと、ヘステイアが優しく声をかけてきた。

「心配する必要は無い。見た目だけが派手なだけで、やってる事は大した事無いから」

ぶつちやけるとこの光や神々しい雰囲気は神々が面白半分にあつてる演出だけで、実際にはこんな仰々しい光なんて出さずともファルナ付与が出来るらしい。

……あんだだけ凄い神様なのに遊び心にも溢れてるとかマジ神様スゲエな。狂信者の気持ちがあつた気がする。俺だつてこんな神様に「あれしろ」「これしろ」だの命令されたら善悪問わずにやってみようかもしれない。「死ぬ」つて言われたら喜んで命差し出すぐらいは……俺の命なんかにどれほどの価値があるのか知らんが。

コイン一個にもなんねえな。

そんな事を考えている間に、どうやらファルナを刻むのが終わったらしい。

紙切れ、と言うか羊皮紙？ いや、羊皮紙に見えるけど普通の紙だなこれ。

なんか変な文字？ が書かれた紙を渡された。

「………よし。付与完了だよ。これがキミのステイタスだ」

ミリア・ノースリス（ユーノ・シラノ）

L v l

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

《魔法》

【ガン・マジック】

・詠唱派生魔法

・基礎詠唱『ピストル・マジック』

・追加詠唱にて効果発動

・共通詠唱にて弾薬補充

・消費弾薬 1／1

・単発の魔弾を放つ

・追加詠唱『ファイア』

・共通詠唱『リロード』

【サモン・シールワイバーン】

・召喚魔法

・最大召喚数『1』

・追加詠唱にて封印解除

・基礎詠唱『呼び声に答えよ』

・追加詠唱『楔を壊せ解き放て』

【レッサー・ヒール】

・最下級治癒魔法

・基礎詠唱『癒しの光よ』

《スキル》

【タイプ・ニンフ】

・ガン・マジック魔法習得

・スキル習得

・最上位魔法習得不可

【マガジン・スロット】

・装弾数『10』

・保有最大数『2』

・基礎アビリティ『魔力』により効果増加

【マジック・シールド】

・物理攻撃に対し防御効果

・基礎アビリティ『魔力』により効果増大

・自動発動

・精神力消費

「凄いな、魔法とスキルがいきなり三つずつ。しかも攻撃魔法、回復魔法もあるし。召喚魔法？ は聞いた事ないけど。ワイバーンって言えば一応、竜種のモンスターじゃないか。完全に魔法よりの構成だね！」

ヘステイアが背中から退いたのを確認してから起き上がってシヤツだけでも着る。とりあえず紙切れを一度眺めてみるが……うん？ 神様がすつごい興奮した様に喋ってるが……この紙切れ何書いてあんの？

「えつと……？」

「どうしたんだい？ いきなりこんなに魔法とスキルがあって驚いたかい？」

「いえ、なんて書いてあるのか読めなくてですね……」

「え？ 共通語だよ？」

驚いた表情のヘステイア。

え？ こいねーって何？ こいねー……コイネー……あれ？ ギリシヤ語？

……え？ 待って、古いギリシヤ語？ んなもん勉強してネエよ。

日本語、英語は読み書きや会話できるし。ドイツ語、ロシア語、中国語の五つは読み書きぐらいは出来る。リスニング？ 無理。中国語とか何喋ってるのかワカンネ。英語もぶっちゃけ訛りが入ると

『ニンフ型』

所属国家に魔道国を選択した場合の初期アバター。
中高生ぐらいの少女の姿。

『中位ガン・マジック』を習得可能

『下位補助魔法』を習得可能

『最上位特殊魔法』習得不可能

『飛行魔法』習得不可能

基礎的なガン・マジック

言わずもがな。『ピストル・マジック』を初めとして通常武装の事。

最下級『ピストル・マジック』

下級『サブマシンガン・マジック』

中級『ライフル・マジック』『ショットガン・マジック』

上位『スナイパー・マジック』

最上位『ガトリング・マジック』『ミサイル・マジック』

補助魔法。

召喚魔法、飛行魔法、回復魔法の三系統に分かれた補助用魔法の事。

最下級『プチワイバーン』

下級『ワイバーン』

中位『ドラゴニア』

上位『エンシエントドラゴニア』

最上位『エンシエントドラゴニアノーツ』

最下級『フライ・マジック』

中級『テレポート・マジック』

最上位『ウイング・マジック』

最下級『レッサーヒール』

下級『レッサーヒーリング』

中級『ヒール』

上級『ヒールバースト』『ヒーリング・オーラ』

最上位『レイズデッド』

……ニンフ型はどの補助魔法も全部使えるが下級までしか使えな

い。要するに器用貧乏だ。

ぶつちやけ使い続ける意味無いから、直ぐに他のアバターに変えるのが推奨されてるキャラ。

ガンマジック特化の『クージー型』

召喚魔法特化の『ケットシー型』

飛行魔法特化の『フェアリー型』

回復魔法特化の『アウラウネ型』

主にこの四つに派生する。

連合&枢軸では『新兵』『突撃兵』『工兵』『衛生兵』みたいな感じな訳だが。

大帝国は『軽装歩兵』『重装歩兵』『騎兵』『攻城兵』『弓兵』『筋肉』の六種類ね。

……『筋肉』ってなんだよって？ 『筋肉アーマー』をまとった最強の戦士だよ。対物ライフルを防ぐ重厚な筋肉。意味がわからない。どうしてそうなった。帝国のチート筆頭。帝国だから、で納得しといてくれ……

んで、ミアちゃんはミリカンにおいてはフェアリー型のキャラな訳だが……

ええ……ニンフ型なのかあ……いや、ミアちゃん回復技使えなかつたから。むしろ回復技が使える様になつたからマシ……飛行魔法無いの辛くない？

ミリカンだったら狙撃待つたなしだったけど、飛んでる奴に攻撃する能力もつたモンスターとか居無さそうだし。いや、モンスターも飛ぶ奴ぐらいいるか……

ふえええええ……飛行魔法無いとミアちゃん糞雑魚だよ……

汎用魔法のシールド・マジックの性能がミアちゃんだけ異常に低いんだよう……

最上位飛行魔法を使用するとミアちゃんだけ竜の翼が生えてくるんだよ。

フェアリー型は3タイプ居る。

一人目は妖精。蟲っぽい透明な羽

二人目は天使。神々しい翼

三人目は竜人。竜の翼

妖精は機動性特化。蝶のように舞い、蜂のように刺す。そんな戦法が得意。

天使はフェアリー型の中ではヒーラーも出来る汎用型。攻撃能力は若干低いけどシールドマジックの性能が高い上、回復魔法が上位まで使えると言う……ガンマジック？ 中位までしか使えないんだなあこれが。

竜人はシールドマジック性能がかなり低い代わりに、竜翼が盾として使えて、ライフル弾程度なら翼で防御可能と言う高性能。しかも最上位の『ガトリングマジック』を習得する事ができ。そこらのライフル弾飛び交う戦場を上から睥睨しつつガトリング掃射で一掃できるキャラだったんだが……あ、対物ライフルは流石に無理。ぶち抜かれて即死するし。ロケランも無理。竜はロケランで落とせる。

そんな最強○の『飛行型』の竜人。ミリア・ノースリスが……『汎用型』？

あは……ははは、ちよつと、無理。

ミリアちゃん、竜翼無しだと糞雑魚なんだよな。マジで……

飛行魔法の竜翼無しのミリアは、普通のガン・マジックでも反動が大きすぎて暴れる。

しかも徒歩での移動速度も小柄故に歩幅の関係もあつて鈍足気味。

小柄とはいえ逆に耐久は全キャラ中最低値。

要するに飛行魔法ありきな性能なので飛行魔法無しだと最弱。

……ええ……これどうしろと……。

………ピストル・マジックの反動軽減強化ガン積みでワンチャンねえかな……

スキルやらなんやら。発現しただけマシか。ミリアちゃん無双が始まるわけじゃないのね（白目）

第六話

ふうむ。ファルナによって習得できる魔法の最大数は3つまでらしいぞ。つまり三つ習得したミアちゃん勝ち組なんだよなあ……
ミアちゃんが『ニンフ型』の魔法やらスキルやらを習得したのは、
もういい。

ぶっちゃけダンジョン内で飛行魔法使うの厳しいと思うからね
……ね？

べつ、別に悔しくネエし。

飛行魔法とガトリングマジックで無双とか考えてないし。ほんと
だし。

それよりもベルもヘステイア様も、どっちもそうだがお人好し過ぎ
だろ……普通に歓迎会開いてくれるとか、泣きそう。

ベルがゴブリンを倒した記念と俺の歓迎パーティーをしてもらった
訳だが、じゃが丸くんとか言うじゃが芋を潰して形を整えて衣をつ
けて揚げた食べ物が高華な食べ物だったらしい。

いや、普通に美味いんだが……豪華ってなんだろうな。

1個30ヴアリス、子供のお小遣い程度の値段らしい。

ヴアリスってなんだよ……流石異世界だよなあ……ミリカんだと
枢軸と連合がクレジツト、帝国が鉄片、魔道国がシャードだったが。
詳しい物価は分らなかったんだよなあ。

後ヘステイア様から絵本を貸してもらった。絵本である。時間が
ある時に読み聞かせてくれるらしい。何それ超恥ずかしい。

んで、後は寝るだけーってなったんだが……どうやらベルくんとヘ
ステイア様は同じベッドにINしている訳ではないらしい。

ベルくんがソファア、ヘステイア様がベッドで寝ていたらしく。俺
の寢床をどうするかと言う話になったが。

最悪壁際の所か、上の教会で寝ると言えば、それは絶対だめだと言
われた。

……神様と同じベッドで寝るのか……なんて思ったが、吐いたり泣い
たり、色々と感情に振り回された結果として疲労が凄まじく、ヘス

ティアに半ば強引にベッドに寝かされた次の瞬間には寝落ちしてた。目覚めは、ヘスティア様の胸の中だったよ……窒息しかけた。とだけ言っておく。

若干疲れた表情をしているミリアに声をかければ、ミリアは半笑いを浮かべて答えてくれた。

「ミリア、大丈夫？」

「ええ……心配してくれてありがとう。大丈夫……」

朝、ベルが目覚めるとベッドの方でペしペしと何かを叩く音が聞こえたので、そちらに目をやるとミリアが神様に抱きつかれていて、あの胸で窒息しかけてた。

あわててミリアを助け出したおかげで大丈夫だったけど、ミリア曰く『胸で窒息しかけたのはこれで三度目ですね。胸がでかい人とは何か縁があるのかもしれませんが。碌な縁では無さそうですが……』と遠い目をしながら言っていた。

廃教会の地下から出て、荒れ果てた内装を見回しながら、ミリアはぼつりと呟いた。

「何よりもまずお金が必要そうですね……じゃが丸くん？ でしたっけ？ アレで豪華と言うのは、少しさみしいですしね」

若干、呆れた様な目で周囲を見回して『この修繕もしたいですし』と呟いているミリアは、けれども少し楽しそうだった。

「うん、僕も、神様の為にもっとお金を稼ぎたいんだけど……」

神様の為にお金を稼ぎたいとは思う。昨日、初めてダンジョンに潜って得た金額は1800ヴァリス。故郷に居た頃なら十分な大金だけど、オラリオではそうではない。

初心者用装備セットだけで6000ヴァリスはしたし、ポーションは1本で500ヴァリスはする。

そう考えれば今の稼ぎのままでは不味い。

いずれ大きくなって豪華な本拠にしたいと思うのだけれど……

「……とりあえず今日はどうしましょうか。ヘスティア様はまだ寝て

いますし」

「ううん……日用品を買いに……行きたかったけど、お金がなあ」

ミアアの服や日用品を買いに行きたい。しかしお金が全く無い。昨日の稼ぎ分だけでは到底まかない切れななし……

そんな風に考えているベルを余所に、ミアアは床の擦り切れて穴の開いた赤っぱいカーペットに視線を落としながら、顎に指を当てて考え事をしながら呟く。

「神というのが何処まで嘘を見抜けるかが焦点か……嘘を言わずに人を騙すのはそう難しくないけど、多分神相手だと意味無い。亀の甲より年の功。無駄に数億年生き続けてるなんてありえないだろうし……むしろ嘘を言う方が難易度が高い……それに集団を相手にするなんて詐欺師として間抜けにも過ぎる。かといって個人を当たろうにもこの世界の常識を知らない以上へまやらかす可能性が高すぎる。事前情報も無しに嘘を言わずに騙そうなんて臍で茶が沸かせそう。そもそも今の容姿も問題。『ミアア』なんて容姿が整い過ぎてるし、子供だと思われるから騙しやすい？ むしろ子供の様な容姿だから容易に言葉が軽くなり過ぎる。信じて貰えない可能性も高いし……それに明らかに印象が強過ぎる。もっと地味目な容姿なら……いや、端っから誰かを騙そうとする必要も無いか。もう詐欺師じゃないんだし……はあ……」

昆虫を思わせる様な無機質な瞳で床を見つめながら何事かを呟くミアア。ふと、その瞳に光が戻り溜息を吐いて肩を竦めたのを見て、ベルは首を傾げた。

「どうしたの？」

「え？ ああ、何でも無い」

「？」

何を言っていたのかはさっぱり分らないが、何か難しい事でも考えていたのだろうか。

「即金が必要。即金、話に聞く限りではダンジョンに潜るのが早そうですが……ついでに魔法についても調べたいですし」

話を逸らす様に呟かれた言葉に、昨日のミアアのステイタスを思い

出したベルは興奮を抑えられないとばかりにキラキラした瞳でミリアを見た。

「魔法どんなのなんだろうね。僕、魔法見るの初めてなんだ」

「一応、どんな魔法かは想像が付くけど……ベルはピストルって言う道具を知らないんだったよね？」

ミリアの言葉にベルは頷いた。

ピストル、または拳銃という道具。

火薬を触媒に用いて金属の矢を飛ばす武器の一種。

少なくとも、ベルが今まで暮らして居た故郷でそういった武器は見なかったし、オラリオでもそう言った武器類を見た事は無かった。

しいて言うなら遠征中に使用される『信号照明弾発射装置』の様なモノだろうか？

「ああ、フレアガンはあるのか……あれ？　じゃあなんで銃が無いの……？」

「えっと……僕が知らないだけでほんとはあるかもだから……」

田舎暮らしで、英雄譚を読む事と土を弄る事、後は時折村に訪れる吟遊詩人や商人から『オラリオ』での冒険者の活躍などの話を聞くぐらいでしかなかった。故に自分はいささか無知な所があるので、知識を当てにされると少し困ってしまう。

「まあ、良いわ。とりあえずダンジョンに向かう前にヘステイア様に一声かけておきましょう……起こすのは気が引けますが」

「あー……確かに。でもダンジョンに行くなら一応挨拶は必要かな……無いとは言えないけど……その、死ぬかもだから」

気持ちよさそうに眠っている神様を起こすのは確かに気が引けるが、神様も言っていた。

『ダンジョンに行くなら叩き起してでも良いから声をかけておくれよ。最後の姿を見送る事も無く寝こけてたなんて間抜けにも程があるだろう？　僕だって寝て起きたら眷属が死んでたなんて最後は嫌だからね』

無論、死なないのが一番だが、迷宮に潜る以上死ぬ危険性はある。現に一階層で調子に乗っていたベルはミリアを助けようとして死に

かけた。あの時ミアが助けてくれなければ……

「ベル？」

「ああ、うん。なんでもない」

あまりにも情けないあの時の姿が脳裏を過って思わず眉を顰めてしまった。

ふむ。ヘスティア様に声かけたら、『気を付けてね。行つてらつしやい』と軽く送り出された。

命の危険がある所に送り出すのにソレは軽くないか？ と疑問を覚えたが、ベル曰く『あまり仰々しい言葉で送り出すと逆に足枷になるから、ほんとはもつと色々言葉をかけたけれど軽く済ませるのが神様流儀らしいよ』との事。

成程、変に仰々しい言葉で着飾った送り出しの言葉は眷属を縛ってしまうと……神様、凄すぎだろ。

……俺が死んだら、哀しんでくれる人はいるだろうか？ 誰も居ないに違いない。むしろ『ざまあみろ』なんて嗤われそうだな。

そんな冗談をベルに言ったらベル君を怒らせてしまったらしい。そんな事言っちゃダメだと強い口調で言われた。

あんま言いたくないけど、ベルくんは弱そうに見えるけど、なかなか精神面強そうな気がする。

まあ、そんな事は良くて、昨日魔石やドロップアイテムの換金を行っていた『ギルド』と呼ばれる施設まで来た。正しくは『冒険者ギルド』と言う組織の施設『万神殿』パンテオンと言う所に到着した。

昨日の綺麗なエルフ……ハーフエルフさん？ がベル君の専属アドバイザーと言うモノらしい。

冒険者登録を行って、新米冒険者には専属アドバイザーが着くと……ほほう。

後ギルドは、冒険者に必要な基礎知識が数多登録されているらしい……必要があれば閲覧できると。

……え？ マジで？ ええ……（困惑）

だって情報だよ？ そんなん公開してんの？ って思ったんだが。うむ。この迷宮都市『オラリオ』の利益につながる様に動いてる組織らしく、新米冒険者をより育成する事で最終的に『オラリオ』に利が出る為に新米冒険者の支援を行っているらしい。

駆け出しセットと呼ばれるナイフ、軽装系鎧、初心者用ポーションを売ってくれるらしい。

値段はだいたい6000ヴァリス前後。

武具の目利きはした事無いからわからんが、ベルくんのナイフはかなり良い物だと思う。

前世において美術品も少し取り扱った事があるが、美術品の刀剣よりも切れ味は格段に良さそうだし、そもそも美術品も刀剣類は刃が殺してある事も多かったからぶつちやけ何とも言えないが……

いや、ガチの刀剣も取り扱った事があるが……このナイフぐらいの切れ味だったと思う。

だって、現に興味本位で指先をすーってやったら指先が結構深々とスッパリ切れたし。

手、血の組み合わせで吐き気が……と思っただが。そうでもなかった。一晩寝た事で慣れた？ という訳でも無さそうだ。どうもファルナを授かると精神的にも少し強くなるっぽい？ あくまでも推測だが。

ベルが慌ててポーションをくれたが……『レッサーヒール』を試す意味でもあったし、人前で魔法使うのは良くないから道を外れたために使っただが。うん、まあ……え？ って思うような性能だった。

『レッサーヒール』秒間、HP回復1%/消費MP50

駆け出し魔法使い御用達、無いよりマシ程度の回復効果しかない魔法。

魔法少女達の最大MPが軒並み1000〜2000程度である事を考えると、最大で20〜40%程度しか回復できず、ぶつちやけ効率は悪い。

MP0まで魔法を使い込むと魔力切れと言って一定時間MPが回

復しなくなるし……

MPは選んだ素体に応じた回復速度で回復するから殆どMP0にはならないんだが……

ちなみに最速の回復速度を持つのは『アウラウネ型』の一人、完全に下半身が植物になっていて凄まじい鈍足さを誇る子ではあったんだが、MP回復効率がMP1000/秒とか言うキチガイ的速度だったからなあ……通常はどんぐらいか？ ミリアちゃんがMP50/秒である。マガジクラフトが大体1発辺りMP1〜2なのでそうそうMP切れは無いが……竜翼等の高位飛行魔法はMP50/秒なので回復速度と消費速度が拮抗する感じではあったんだがなあ……

ああ、話が逸れたが『レッサーヒール』を発動したらじわじわと秒間1%ぐらいの割合でHPを回復するんだが……

使い方はミリカンとほぼ同じで杖か手かのどつちかに癒しの光を纏う感じだった。

手をかざして魔法使ったら淡い水色っぽい光がパッと弾けて、すぐに消えた。怪我は治っていた。

……じわじわ回復するんじゃないやなくて、即時回復になってね？

怪我が小さすぎるのか？

わざわざ魔法効果確かめる為に大きな怪我をするっていうのはアレだしなあ……まあ、迷宮に潜ってればその内大怪我也するだろうし、その時だな……手遅れとか効果不足だったら嫌だなあ……

冒険者ギルド、通称『ギルド』と呼ばれる冒険者を支援したりする組織の管理している施設『万神殿』^{バンテオン}。

昨日はあんま余裕なくてハーフェルフの巨乳ちゃんが凄く可愛かったぐらいしか覚えて無かったんだが……

なんかすっぱー綺麗な所である。冒険者向けの施設、食事処や汚れを落とすシャワー等はダンジョンの直ぐ上に立っているバベルに集結しており、ここ『万神殿』^{バンテオン}はどうも書類関連やドロップ品の換金がメインで他には新米冒険者の育成コースなんかがあるだけらしい。

朝っぱらだと言うのに数多の冒険者が集い、夜中組だったのかか
りの実力者の雰囲気纏った者達が換金所を利用していたりして
いる。

ぶつちやけ冒険者つてもつと荒くれ者っぽいのが沢山居るのかと
思ってたが、どうも違うっぽい。

変なコスプレ集団だよコイツ等エ……

象を模した様な仮面を付けた集団とか、すんげーひらひらした意匠
の凝った可愛い防具に身を包んだ剣士っぽい冒険者とか……

ええ……もつと、こう、血生臭いと言うか……帝国の兵士っぽい
を想像してたら予想以上に華やかと言うか……

……いや、ミアアちゃんも装飾の多いローブで戦う姿じゃネエけ
ど、コレはゲームのキャラだったからだし、此処にいるガチの冒険者
達もなんかコスプレっぽい姿ばつかなんだよなあ……

特に褐色の肌をした踊り子を思わせる露出の多い衣類の女性。何
アレ？ みんなおっぱいでかくない？ ベルくんなんてどこに視線
向けていいか分らずに横を通り過ぎる時に俯いてるぞ。

ずっと疑問に思ってたけど似た様な恰好をした人が街中にも居た
し。アレってなんかの部族？ にしてはなんかほんとに数多いぞア
レ……特定ファミリアに所属していると象の仮面つけてたりするらし
いし、あの褐色のエツロい女性達は皆同じファミリア所属？

そんな事を考えながらギルドの入口から中に入るベル君に続こう
としていたら中から見上げる程の大男が出てきてベル君とぶつかつ
た。

「おう、悪い」

「あ、すいません」

大剣を背負った筋骨隆々としたまさに冒険者っぽい人物。と言う
か『筋肉』である。『筋肉』は死ぬ。氏ねじゃなくて死ぬ。

内心そんな事を考えつつその人を避けてギルド内に入り、ベル君が
きよろきよろとアドバイザーの姿を探し始める。

……エイナ・チュールさんだっけ？ かなり有能そうな人だった
し、そういう人は大抵中央に配置されるはずなんだが……ああ、予想

通り、受付カウンター我真ん中で笑顔で冒険者の対応をしている。

「あつ、エイナさーん」

ぶんぶんと手を振って存在をアピールする兎君。エイナさんの受付にいた冒険者が迷惑そうに眉を顰めている。

エイナさんは苦笑を浮かべているが、あんま人混みの中で声をあげない方が良い気がするが……日本人的感觉だから俺が間違つててベルが正しいのか、それともこの世界においてもベル君の行動が褒められた事じゃないのかがわかんないんだよね。どうにかしないとなあ……

エイナさんは冒険者に頭を下げて他の事務員っぽい人に対応を任せてからこちらを手招きして別の空いてる受付に入ったので、そこにベルと向かう。

おお、踏み台が完備された受付じゃないか。俺の顔みて受付の場所を決めていたつぽいからかなり気遣い出来る人である。有能過ぎ。

「おはようベル君、ミリアちゃん……ミリアちゃんは大分調子が良さそうね。昨日は少し青褪めてたから大丈夫か心配してたんだけど」

「おはようエイナさん」

「おはようございます。心配していただきありがとうございます。昨日は色々ありまして……ベルくんや神様に大分助けられました」

綺麗な笑顔を浮かべて対応してくれるエイナさん、マジ天使やなあ……しかも、裏が無い。

美人な人、特に俺に近づいてくる美人なんて碌な奴じゃなかった。金目当てに股開く奴が沢山集まってきたからなあ……一回抱いてやって適当に金渡して近づくなんて言つとけばよかったが。

あいつらはすっげー美人で、笑顔はすっげー綺麗だ。テクニクもあるし体つきも男が好みそうな感じではあった。そんな女性達に迫られれば誰だって嬉しいだろう。だけど目を覗き込むとソコに在るのは『金』に対する執着心染みたナニかである。

エイナさんはソレが全くない。最初に会った時等は凄く心配そうな目をしてくれた。初対面で相手を心配出来るなんて、俺が調子悪そうにしてたらアノ女共は『どうお金を搾り取ろうか』と目の中の奥の

方にそんな感情を隠しつつ、優しい声色で、優しい態度で、俺を籠絡しようとするだろう。

「それは良かった。実は心配で眠れなかったのよねえ」

苦笑を浮かべつつ、そんな事を言うエイナさんは、ほんとに眠れなかったのか少し疲れている様な雰囲気が出ている。優しすぎだろ……

「それは……迷惑をおかけしました」

「いや、気にしなくても良いわよ……それで、今日はどうしたのかしら？」

笑顔を浮かべて対応してくれるエイナさん。良い人だなあ、この人。

「はい、ミリアがファミリアに加入してくれたので冒険者登録に来ました」

「あら？ ミリアちゃんも冒険者になるのかしら？ 成程……ミリアちゃん本当に冒険者になる気？」

『何オマエそんなチビっこで冒険者になるわけ？』なんて喧嘩を吹っ掛けてきてる訳じゃ無く『大丈夫？ 危険だよ』と此方を心配しての言葉だろう。心配そうな瞳の奥に他の感情が隠れている様子は無い。

「はい、即金が必要なので……」

「即金？」

「……着の身着のままだったのでお金になりそうなモノが杖しかないんですよね……あの杖は手放したくないので」

チュートリアル用の装飾だけは立派な杖だが、ぶっちゃけ手放すのは惜しい。と言うよりあの杖はミリアちゃんの『ノースリス家の家宝』であつたはずだ。なんとなくロールプレイ用に手にしておきたい。

ちなみに、杖はファミリアの本拠、ヘスティアが寝ているベッドの横に置いておいた。性能は殆ど玩具みたいなモンだが、それでも見た目が見た目だ。

頭がおかしい日本並の治安をこのオラリオに求めるなんて間抜け

はしない。あんな『盗んでください』と言う札を下げて歩き回る気は無い。ほんとはローブも安いモノに取り換えておきたいがお金がないのだ。

「なるほど……じゃあ登録書を……これと、これ、後はこれ。ああ筆記具はこれを使って」

エイナさんは受付の下にあるらしい書類を取り出して笑顔で差し出してきたので、筆記具を手にとって……手に……とって……ああ、そうか。共通語コイネーワカンネエんだっけ……

筆記具片手に書類を見てどうにか意味を理解しようとしてみるが……ダメだな。そもそも自分の名前の綴りすらワカンネエ。

「ミリア？」

「ベルさん、すいませんが代筆お願いできますか？」

「あ、そっか。ミリアって共通語コイネーわからないんだっけ？」

そうなんだよベルくん。申し訳ないが代筆を……

「ミリアちゃん、共通語コイネーが分らないなら私が教えてあげようか？」

え？ マジで？

「ええつと……講習費はいくらになりますか？」

「お金はとらないわよ。文字の読み書きを教えるのと冒険者に必要な講義をするのは無料だから」

……え？ ええ!?

文字だよ？ 言葉だよ？ 教えるの無料？

義務教育とかいって基礎教育をしていた日本ですら学費は必要だったんだよ？

ましてや読み書きを教えるのって相当時間かかるし、教える側にもかなりの負担がかかるはずだ。給金はちゃんと支払われているっばいし……

……何このギルド、羽振り良すぎじゃない？ なんか裏でこそそこそやってそうじゃ……

……いや、ソレは無いな。魔石産業の利益がそれだけ大きいって事だろ。

ついつい裏を考えてしまう癖、どうにかしないとなあ……

第七話

語学の勉強をしよう。と言っても文字の成り立ちはどうでも良いんですよ……

とりあえず、最低限の文法を覚えて、後はただひたすらに単語を頭に捻じ込む。それで何とかなる。

まあ、それは良い。

とりあえず文字を覚えるのは最優先と言う訳ではないが教えてもらえるのなら教えて欲しい。

と言う訳で教えて貰っている訳だが……一応、二時間と言う設定をして。

……うむ。成程、エイナさんは教えるのに向いているタイプらしいな。かなり解りやすく纏めてある。

……えっと、そうだな。ベルくん。ベル君だよ。えっとだね……最初の三十分は良かったがそれ以降やる気がみるみる失われている。

まあ、わかるよ？ ベル君、まだ中学生ぐらいだもんね。

興味の無い事柄に関して勉強してもねえ……英雄志望だから、きつと強いモンスターの情報とか欲しいんだらうね。

ダンジョンの安全な歩き方もかなり重要だとは思いますが、英雄になるのに必要無さそうと言うか、あんま重要視してなさそうだしね。

英雄志望のベル・クラネル……そう考えるとベル君は中二病でも患っているのでは？ と思っただが……

レベルアップで二つ名が貰えるらしく……えっと……エリミネイト有象無象だとか装弾スモークコラプション瀑布だとか……えっと、控えめに言っただ中二病全開の二つ名を貰っているらしい。

しかも、その二つ名を『カッケエエエエエ』と超大興奮で嬉しそうに語るのが冒険者らしい。

……ヤベエ、冒険者全員中二病じゃネエか……

冒険者ギルドの講義室の一つ、ベルとミリアは並んで座り、勉強をしていた。

講義室の直ぐ横には、情報が詰まった書庫があり、冒険者はギルドに申請書を提出すれば中身を見放題だと言う。パツと入口から中を眺めたが図書館……市立よりも上ぐらの蔵書量だと思われるぐらいの量の書物が入っていた。

一般公開枠だけでこれであり、ギルド側が厳重に管理しているモノも複数あるが、其方も条件が揃えば閲覧可能だと言う……どういう区分がされているのかわからないが……

ミリアの横にエイナが立ち、文字の意味を教えてくださいている。

片やダンジョンの地形やモンスターの勉強。

片や共通語コイネの勉強。

真剣な表情で文字と意味を頭に捻じ込むミリアを余所に、ベルは早くダンジョンに行きたいなとうずうずしていた。

稼ぐ必要がある以上、丸一日を勉強に費やすのはもったいないので、二時間と言う長いようで短い時間ではあるが、はやくダンジョンに行きたい。

それだけが理由ではないが……一日でも早く、強くなりたい。

そうベルが考えていると、ミリアが溜息を吐いてベルを見て半眼になった。

「ベルさん」

「えっと……何？」

そろそろ飽きてきたか？　だが基礎を叩き込んでおかないと痛い目を見るのはどんな役職も一緒だしなあ……特に冒険者なんて今、ベルに対してエイナさんが口頭で説明しているダンジョンの危険を少し聞きかじった程度で『ヤベエ』って感想が出るくらいには命が危ない職業である。そう考えると基礎を蔑にしがちと言うか、すぐにでも無茶して強くなりたいなと思ってるくらいのあるベルくんは少し危なっかしい。

ミリアは一つ頷いてから、ベルを見据えて口を開いた。

「まず、勉強につき合わせてしまっている事は謝罪します。すみませ

んでした……ですが、この勉強は無意味ではないですよ。昨日……私が言うのはアレですが、ベルさんは死にかけましたよね？ あの時、剣を持ったゴブリンを最優先で倒せば……ゴブリンを全て排除してからキメ顔をすれば……そもそも真正面から突っ込むのではなく一番後ろに居た個体から個別撃破すれば……あの三匹相手に余裕ぶつて突っ込んで危機的状況に陥っていた私が言えばブーメランではあります、あの時にベルさんは命の危機に陥る事はありませんでしたよね？」

「えつと……その……」

まくしたてる様に言えば、ベルは困惑した様子で視線が泳ぐ。

確かに、ミリアの言う通りだと思う。あの時剣を持ってたゴブリンは動きが鈍かった。体の大きさに対して剣は成人男性用に作られており大きさが大きくて動きが鈍っていた。だが剣の危険度が高いので最優先に倒すべきだったし、ミリアとゴブリンの間に割り込むのではなく、後ろから攻撃していれば必然的に挟み撃ちにできた。

そんな風に言われた言葉を少しづつ理解して頭の中で噛み砕いているであろうベルに、これだけは伝えておいた方が良いとミリアは口を開いた。

「それに、コレを言うと私が最低な人間になります……あの時、ベルさんが馬乗りにされた際、私は逃げる事もできましたよ？」

「えっ？」

ミリアの言葉にベルは思わずミリアを見るが、ミリアは何一つ冗談を言っている雰囲気は無く、真剣そのものである。

と言うか本当に冗談でもなんでもなく、あの時、若干錯乱気味で状況がよく分っていなかったから『助けに来た人のピンチ↓助けなきゃ』と言う訳のわからない構図が出来ていたが……ぶっちゃけ自分が正常だったら助けようでは無く『ラッキー、囮にしよ。とりま逃げ逃げと……』とでも考えて即時撤退を考えただろう。……いや、冷静に自分が迷子であると判断して助ける……だろうか？ ダンジョンと言うモンスターのがんごだとは知らない俺は、きつと壁や天井からモンスターが沸くなんて考えずにベルを囮にした可能性もあるしな……

まあ、もしもifを考えた所で仕方が無いんだがな……

「あの時、私がベルさんを見捨てて、逃げていたら……ベルさんはどうなっていました？ 勿論ですが、私はそんな事は……しない、ですが……」

嘘だ。ここに神様が居ないのでバレはしない……がもしかしたらエイナさんが実は……なんて事はないだろう。神聖な雰囲気ないし。神威だっけ？ そんなんが漏れ出てないから……若干、視線をそらしつつ呟く。

あの時、ミリアがベルに馬乗りになった剣を持ったゴブリンを杖で殴ってどかしてくれなかったら？

ベルが防御の為に構えたナイフ毎、ベルの頭は剣で叩き割られていたに違いない。

そんな考えでもしているのだろう、ベルの顔色が真っ青になって体が震えている。

すまん少年……君は良い子である。それもかなり善良で前向きな……人に裏切られる事を知らないぐらい純粹無垢な……俺はソレを無知蒙昧と言うのだがな。

そのままだと、絶対に痛い目を見る。流石にな……少し脅すぐらいしておかないと、一緒にいるこつちが不安になりそうだからな……本当にスマン。

……すっげー青褪めて、俯いて、震えた後、ごめんと小さく呟いたベル君に、罪悪感が凄い事になって……吐きそう。

言い過ぎたな、これ……

「ベルさん、話は変わりますが……ベルさんは英雄になりたいんですよね」

「……うん、でも今のままじゃダメだよね……あはは」

力なく笑うベル君に、罪悪感が……ああ、ほんとヤバイな。エイナさんはずーっと黙って顎に手を当てて考え事中。ベル君を援護してあげて欲しいが……無理っぽいなあ……

「では、ベルさんは自分が英雄だと思えますか？」

ここらはペテン師的やり口だが、まあ俺からすりゃペテンも詐欺も

違いは金品なんかを奪うか奪わないかである。

「え？」

「もう一度聞きますが。ベルさんは自分自身が英雄であると、胸を張って言えますか？」

言える訳無い。もし自分が英雄だと思うのならなりたいたいなんて思ったりなんてしないしな。

「ううん、僕は英雄じゃない……」

「そうですね。私から見てもベルさんは英雄ではないと思います」

俯いたベル君に罪悪感が刺激されるが……

ベルはきつと自分が英雄になれないと言われていると感じている事だろう。だが言いたい事はそうじゃないんだなあこれが。

「では、ベルさん、貴方が英雄になるのには何が足りていないと思いますか？」

「え？」

薄らと否定する振りをしつつ、質問をする。そこから若干の肯定。そして否定。更に追撃の肯定。言葉選び次第だが相手を落としてあげてを繰り返せば、思い通りに動かせる事は多い。

まあ、相手次第だし。下手を打てば激怒させてしまうし、心がぽつきり折れる。加減が難しいが……そう言う意味では精神面が強く。その上で純粹無垢で騙しやすいベルは詐欺師の入門相手としては素晴らしい逸材だろう。まあ笑い事じゃないし、仲間……家族か。家族になった以上、ベルがそう言った詐欺に引掛からない様に注意しないとなんだが……はあ……

「何が足りないと思います？」

「力……かな？」

ほほう、力か。

「では、力を得るのには何が足りてないと思います？　もしくは何が必要だと思います？」

「ええっと……努力？」

努力？　曖昧だな。まあベル君は今若干混乱してるしこの回答も予測はできてたが……

……まあ、失敗したら嫌われるだけだし。嫌われたら、どつか適当なファミリアにいけば……このステイタスなら……ああ、偽名使ってる時点で他の神に頼るのは難しいか？　と言うか神様全員がヘステイアみたいな性格じゃないだろうしなあ……ギリシャ神話だっけ？　あそこら辺……いやごめん嘘、日本神話でもヤベエ性格の神様結構出てくるし。

近親相姦をするのは神の特権。神が特別であるが故に近親相姦もオツケーと言う様な思想もあつたっぽいし、何より怖いのは『娘を父親から奪う力がある男こそ、その娘を嫁にする権利がある』と言う女性差別的思考を植え付ける教義もあつた臭いしな。女性の権利が低い国つてのは大体がそんな神話が多い。

男は父親を殺してでも娘を攫つて自分の嫁にするのが正しい。日本人的価値観どころか、世界的に見ても殺してでも奪い取るを肯定するのはどうなんだっていう神話もあるしなあ……

……まさかだが、この世界においても『他の神様の眷属を、主神を殺してでも奪い取る』する神様とか居ないよな？　まつさかあ……まさか……ない……よな？

「努力、模範解答ですが……そうですね。これは私の考えですが。英雄に必要なのは『運氣』だと思います」

「運氣？」

「運ですね。何故、と思われるかですが……戦いの中で運はとても重要なステイタスですよ。まあ、ファルナでは変動しないみたいですが……どれほどの強さがあるろうが、運次第ではあつけなく死にますよ？」

ミリアちゃん、竜人……そう。ライフル弾を弾ける竜翼を持つていたとしても、敵が対物ライフルやロケラン、筋肉を持ち出して来ればあつけなく死ぬ。

召喚できれば無双確定の召喚型ケットシーの使う最高位召喚魔法『古の竜の根源』エンシエントドラゴニアノーツも、筋肉にかかればあつけなくぬところだからな……

マジ筋肉は害悪だよな。

「ベルさんは、自分が英雄に足る運気の持ち主だと思えますか？」
悩む様に視線を泳がせるベルは、小さく呟いた。

「無いと、思う」

「なら、足りない運気を何で補えば良いと思えますか？」

「補う？」

「……足りないモノは別のモノで補う事が出来る。無論出来ないモノもあるが……大体のモノは代用可能である。」

「運はここぞと言う時に使って、後は地道な努力でどうにかする……足りないからこそ足りないソレを補う為に基礎があるんですよ」

常に運勝負？ 運が良いなら良いだろう。だがどれほど運が良いだろうと、命中率99%であっても100回に一回は外すし。敵の命中率33%の攻撃が外れた所を見た事が無いんだが……と言うか100%でも外れる事があるんだよなあ……

「今、勉強しているのはその足りない基礎です……蔑ろにしていると、死にますよ？ まあ、自分の運に自信があるのなら言う事は無いですが」

ベルははつとなつた様に此方を見てから、それから自分の中で何かの考えを上手く纏めたのか大きく頷いた。

「うん、ごめん。やっぱり基礎は大事だね。僕は英雄になりたいから……足りない分もつと頑張らないと」

おおー……スゲエやる気でてんじゃない。さっきの落ち込みっぷりが嘘みたいだ……

……ところで、このやり取りをしている間、ずっと顎に手を当てて此方をジューツと見つめるエイナさんはどうしたのかな？ かな？ ……なんか悪寒がするぞ。おつかしーぞおー……待って、俺さっき割とヤバイ情報零してんじゃない。

ファルナ無しでダンジョンに居た事バレてね？

「ねえ、ミリアちゃん。昨日ワタシと別れてからファルナを授かったのよね？」

うわあああああああ?!?!? ヤベエ、めっちゃ怒ってるうううううううううううううう!!?!?

目が、目が割とヤバイ。これ怒ってるよ。めっちゃ怒ってる。

そりやそうだよねエイナさんクツソ真面目そうな子だもんね。人を凄く心配するからこそ、無茶をしたりする人に対して怒ってしまうんだよね。心配の裏返し of 怒り。それはきつととっても素晴らしい感情だよ。苛立つからなんて自分勝手な感情じゃなくて、相手を心配するからこそ怒ってる。エイナさんとはとっても素晴らしい人だよ。だって初対面の俺を心配しちゃう人だぜ？ そうだよね怒るよねでも待って俺にも言い訳させて気がついたらダンジョンだよ？ 其処がダンジョンなんて知らなかったんだ。ファルナ無しでゴ布林三匹に突撃するなんて死にたいのかって話なのは分かるけど言い訳を

「ミ・リ・アちゃん？」

……ベルくん助け——おい視線を逸らすな。体を此方から逸らすな!! なんでだよゴ布林三匹相手には助けを求めてないのに颯爽と駆けつけて助けに来てくれたのに、助けを求める今は無視ですか、そうですか……

……仕方ないよね、エイナさんの顔見たら無理だよね、だって般若
みた——

肩をがっしり掴まれた。

「ちよつと、詳しく話、聞かせて貰って良いかしら？」

「アツ、ハイ」

この後、めっちゃ説教された。

第八話

ふむ……自分の為に怒ってくれる人程、怖いモノは無いなあ……
エイナさんも、ベル君も、ヘステイア様も、皆良い人過ぎる。
眩し過ぎて目を逸らしたくなる。

けれども、同時にその眩しさに引き寄せられそうにもなる。

俺とは別の意味で人が集まる性格だと思う。

ああ言う性格を人誑しと言うのだろう。

マア良い。感情に任せて怒鳴り散らすだけの怒りなんかと比べて
心に突き刺さりはした。

……本題の文字の勉強の方はあんま進まなかった訳だが。

2時間と言う期限はしっかり守ってくれる辺り、エイナさんスゲエ

……

………神様にさ、絵本の読み聞かせしてもらって恥ずかしい所
の話じゃネエよな。

数多の階層に分かれる無限の迷宮。凶悪なモンスターの坩堝。

……無限の迷宮？ マジで？ 凄いな。割と真面目にヤバそうな
気がする。

そのダンジョンの一階層でベル君と共に下へと降りる最短ルート
を外れたルームで二人きりになっている。

ベル君が羨びた草みたいになってるし、俺の方もぶつちやけ羨びて
ると思う。

「ミリア、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。ええ……それにしてもモンスター、全然いませんね」
モンスター、上層一階層ではダンジョン最弱とも言われるゴブリン
とコボルトである。

そしてそのモンスターもさっぱり居ない。上層の第一階層、新米冒
険者がモンスターと練習程度に戦うのにちょうどいい位にモンス
ターはさっぱりで、出会ったとしても一匹から最大で三匹程度。要

するに本当にチュートリアルステージみたいな感覚の場所らしい。

ダンジョン最弱のゴブリン……ええ（困惑）

そのゴブリンに良い様にやられたベル君って……そのゴブリンに追い詰められてた俺って……

いや、良いんだよ。うん、だってアレじゃん？ RPGゲームの主人

公は最初は最弱相手スライムに苦戦して少しずつ強くなってく感じじゃん？

……話は変わるが。この世界はエロゲじゃないよな？ TS状態の俺がモンスターにグチョグチョにされる展開はマジで無しな方向で頼みたいんだが……。

そんな事を思いながらも、魔法の練習をする為にダンジョンにやって来たと言う目的は忘れてない。

魔法についてエイナさんに尋ねた所『他の冒険者には絶対に教えちゃいけない』と言われた。

後序に言うなれば『中立とは言え、ギルドの職員も含めてそう言ったステイタスに関する情報は教えちゃダメ』らしい。

ステイタスとは、その眷属の全てをさらけ出しているモノであり、経験からその眷属の性格、内心から深層心理に至るまでをさらけ出すモノであり。基礎アビリティの伸びはその眷属の得手不得手を示し、習得しているスキルや魔法、発展アビリティ等はその眷属の心の内を示すモノとなっているらしい。

基本的に種族スキルや種族魔法と呼ばれているモノがあり。その種族に由来するスキル、魔法は関係ないがそれ以外の珍しい魔法やスキルはその眷属の心や経験を映し出すモノらしい。

まあ、そう言う意味においては俺のスキル・魔法はどれも『ミリカンのスキル・魔法であるので、種族スキル・魔法と言えるだろう。要するに心が映し出されちゃ居ないし。そもそも基礎アビリティはオール0Iである。

映し出されるモノもネエってか？ それとも、憑依転生の所為か？
どちらにせよ都合は良い。

そんな事よりも魔法だ、魔法。

ファンタジー世界に来たなら憧れの一つ抱くのは当たり前前の魔法

だぞ。

「モンスターが出ないのは、まあ都合がいいので良いですが」

「うん、今日は魔法の練習……に来たんだよね？」

一応、武器は持ってきた。と言うがベルくんと同じ新米冒険者に渡されるナイフを一本だけ。

防具はそのまま着ている華麗なローブである……一応『ミリカン』では、魔法防御に優れる耐魔ローブだったんだが。ぶっちゃけ物理攻撃が基本のダンジョンでどこまで通用するかは未知数である。

まあ魔法メインで行く場合は変に身重になるよりは軽装で居るのが基本らしいのでエイナさんは特に何か言う訳でも無かったが。

「そうですね、魔法の練習です」

そこらの事は全部投げ捨てよう。魔法だ、魔法。一応『ミリカン』内部でガンガン使っていた基礎魔法の様なモノだが、実際に自分の身で使う事になるなんて……夢みたいだ。

「さて、詠唱は……『ピストル・マジック』」

右手を『銃』の形にして詠唱すれば。右手の手首の辺りからまるで血管が浮き出る様に複数の線の様なモノが指先、人差し指の先に向かって伸び。そのまま人差し指の先に小さな魔法陣が浮かび上がった。

「オオ……これが魔法？ 凄い、小さな魔法陣が浮いてる……」

驚いた表情のベルがマジマジと手を見つめているのを見つ。首を傾げた。

『クラフト・マガジン』ってどうやるんだこれ。

ステイタスを思い出してみても『クラフトマガジン』なんて文字は何処にも有った記憶がない。

このままだと普通に撃てない気がするんだが……まあ、モノは試か。

「ベルさん、一度、発動詠唱しますので少し離れていてください」
「わかった」

素直に頷いて距離をとったベルをちら見してから。指先、『銃口』となる部分を壁に向ける。

跳弾とかしないよな？ 『バレットカスタム』なんてシステムがあつたクーシー型魔法少女も居たからなあ。『跳弾』やら『爆弾』とかの恐ろしい弾丸をばら撒くクーシー型の『凶弾狂響』とか居たが、ミリアちゃんは無関係だろう。……ニンフ型も無関係だろう？

『ファイアツ』

発動詠唱を呟くが、変化無し。一瞬、手に浮かび上がる幾何学模様の線の発光が強くなった気もするが……

モンスターの居ない迷宮の中。ベル君の前でかっこつける様に『銃』を前に突き出した格好で詠唱して、見事に失敗。かっこわるい。まあ、予測はしてたけど……

「あれ？ 発動しない？」

「みたいですね」

拍子抜け、みたいな表情を浮かべたベルに肩を竦める。

まあ『リロード』してないじゃん？ 当然の如く『リロード』が必要なのね。

魔法なんだからさあ……弾薬数〓魔力量ぐらいにしてくんなかったのかねえ。

わざわざリロードしないとなんて……いや、普通に長々と詠唱してぶっ放すのよりは速射性は高いと思うけどね？

「ふむ……『リロード』」

詠唱と共に光の玉が現れ、其れが右手の甲の辺りにピタリと張り付く。そのまま見ていれば光の玉は何時の間にもやら淡く輝く結晶へと変化を遂げた……。

さて、なんか手の甲に結晶がめり込んでる様に見えるんだが……うわあ……

「ミリア!? 大丈夫っ!!」

驚いた表情のベルが近づいてきて手の甲にめり込んだ様に見える宝石をマジマジと見つめてから此方を窺ってくるが……。

「痛みは無いので平気ですよ」

特に違和感は無。ただ、身体から何かが抜け落ちる感覚はしている。

何だと首を傾げつつも、『銃口』を壁に向かって構え、もう一度詠唱してみる。

『ファイアツ』

詠唱と共に、若干シヨボイ音が響き、壁に向かってナニかが放たれる。

バリティツと言う炸裂音と共にダンジョンの壁に着弾痕が……あるえ？

穴が開いてる。

小さな、指先程度の丸い穴が開いてる。

「えつと……これ……貫通してる？」

ベルと一緒に近づいて確認すれば、かなり深々と小さな穴が開いているのが確認できる。光の加減で奥までは確認できないが……

「……っぽいですね。予想以上の威力と言うか……これは……」

モンスター相手に使わないと威力わかんないかも。貫通力強すぎて殺傷能力低いとかありそうで怖いんだが……

「ゴブリンとかに一度使ってみないと威力の程がわかんないですね」

「……………」

「ベル？」

ベルが何も言わないのを不思議に思っただけの方を向くと、なんか拍子抜けみたいな表情を浮かべていた。

「えつと……もつと、こう……どかんみたいなのを想像してたんだけど……………」

ベルの擬音に納得した。

もつとこう、魔法魔法した様な『爆裂魔法』的なモノを想像してたらしく。その想像からすると俺の使った『ピストル・マジック』の威力の低さに拍子抜けしてしまったのだろう。

何故魔法と言えば爆発なのか……

「まあ、モンスター相手につかえば……おっ？」

噂をすれば何とやら、と言えはいいか。まるで示し合わせたようにモンスターが現れたのを見て其方に指先銃口を向けて構える。

「ゴボルトですか」

二足歩行の犬ところ。言ってしまったえばそんな感じだが可愛らしさは全然なく、爛々と赤く光目がモンスターである事をちゃんと主張してきている。

「ベル、下がっていきなさい……試射しますので」
「気をつけてね」

そう言うのと視線から離れてくれる。そうしている間にも此方に気付いて走り寄ってこようとしているコボルト二匹。ベルが心配そうな表情を浮かべているが。まあどうにかなるだろ。

まずは……そうだな。頭に一発ぶち込んでみるか。
指先^{銃口}をしつかりとコボルトの脳天に向けて狙いを定める。

枢軸・連合の使う銃器の様に照準器なんて便利なモンありはしない。だがなんとなく着弾地点がわかるという魔道国独自の照準器代わりの機能があった……んだが。

どうにもこの世界ではそう言った機能は無いらしい。まあ、先程感覚で撃った感じからするとそう問題は無い訳だが。

「ファイアツ」

詠唱と共に指先^{銃口}から放たれた魔弾が瞬きの間を置かずにコボルトの脳天に突き刺さり——コボルトの頭が爆散した——

「うえっ?!?!」

『ッ!』

頭が爆散すると言う信じられない光景に思わず変な声が出た。と言うかベルも多分変な声出してた。ついでにコボルトも驚いて足を止め……と言うか血塗れになっていた。

走っていた二匹のコボルトの内、より近くに居た方の脳天を狙ったためか、爆散した脳髓やらなんやらがもう片方のコボルトにぶつかっている。

そして頭……下あごから上が粉々に砕け散って、舌が乗っかっている下あごだけが首から上に残された無残な屍は数歩歩いた後にフアーッと黒い霧になって消えてしまった。

え？ 倒すと霧になって消えるの？

コロンと言う軽い音と共に、魔石（多分）が転がる。

……うわあ。うわあ。なあにこれ、威力高すぎじゃね？

迷宮の壁の耐久が高いの？ コボルトが特別耐久低いの？ それとも『ピストル・マジック』の威力高いの？

そう思いながらも指先銃口をもう一匹のコボルトに向ける。

『ギャギャッ?!』

うわ、あのコボルト両手を上げて投ホールドアップ降してるよ……モンスターもそんな事するんだな。

まあ、倒すけど。

『ファイアツ』

無慈悲な詠唱の前にコボルト(の頭)は爆発四散。黒ネギトロめいた何かい霧霧になって霧散。モンスター死すべし、慈悲は無い。

口を半開きにして啞然とするベルの前で指先銃口を天井に向けつつ手を開いてヒラヒラさせれば、右手に宿っていた結晶も、浮かび上がっていた幾何学模様も霧散して消え去った。

「ふうん……『ピストル・マジック』」

試にもう一度、右手を『銃』の形にして詠唱すれば右手に幾何学模様が浮かび上がり、手の甲に結晶が現れた。

『銃』の形を崩すと途端に幾何学模様も結晶も消え去ってしまう。

左手でも同じ事が出来るのか？ 両手に『ピストル・マジック』は出来るんだろうか？ 二丁デュアル持ちは確かクーシー型の特権だったし、流石に出来ないか。

と言うかそろそろベル君は復帰しても良いんじゃない？……モンスター
の頭が爆散する光景がトラウマになんないや良いんだけど……俺も
予想外だしな。まあ、ゾンビを吹っ飛ばす系のFPSでは当たり前
の光景だったし。俺はあんま気にしないけど。

「……すげえ」

「うん？」

おう？ なんか目がキラッキラ光ってる。トラウマになった訳
じゃ無さそう？

「凄いよミリアっ!! 凄いっ!!」

おおう、興奮してキラッキラ目を輝かせながら凄い凄いと漏らすべ

ル君。まあ、喜んで貰えたのなら何よりである。

「ええ、予想以上の威力だったわ……」

ほんとな、予想以上の威力だった。

「いいなあ……僕も魔法欲しいなあ……」

「ヘステイア様もエイナさんも言っていましたよね？ 書物等を読んで魔法の知識を深めれば魔法の発現率は増えると」

どちらもそんな事を言っていたが……ベル君は座学がどうにも苦手らしく。同時に書を読むと言う行為もあまり好きではないらしい。体を動かすのは好きな様子だが。

後、書と言つても、『英雄譚』は好きだが『学術書』は嫌いらしい。「そうだよね……少し読んでみようかな……」

そんな風に考えるベルを余所に魔石を拾いに向かう。転がった魔石は成人男性の小指サイズ……ミリアの手のサイズだと親指サイズだろうか。そんな小さな魔石を拾って周りに視線をやる。

飛び散った血はどうやら残るらしい。肉片は消えているが飛び散った血が一面にへばり付いている。

ビックリ系ホラゲーのマップに有りそう。扉を開けたら血生臭い臭いで充満したスプラッタ部屋とかで。

「そういえばもう一つ魔法あつたよね？」

思い出したとでも言う様に期待の眼差しを向けて来たベルに苦笑しつつも、最期の魔法の事を思い出してげんなりする。

ニンフ型の使う最下級の召喚魔法は『プチワイバーン』なのだが……

ミリアの覚えている召喚魔法は『シールワイバーン』である。

『封印されし翼竜』。

名の通り封印されて弱体化しているワイバーンであり、封印解除を行えば下級の『ワイバーン』よりも強い個体になるんだが……

『ミリカン』内部では使えない魔法ナンバーワンの座を争う様な魔法だったからなあ。

「まあ……詠唱しますね。一応……距離をとっててください」

両手を前に突き出して意識を集中させる。

詠唱文を思い出して脳内で唱えつつ、口に出して詠唱を始める。

『呼び声に答えよ』『サモン：シールワイバーン』

現れるのは複雑怪奇な魔法陣。

小さく、されど響き渡る竜種独特の咆哮。

大きくなる魔法陣の揺れと共に、魔法陣がギシギシと悲鳴を上げる。

悲鳴は甲高い音に代わっていく。

徐々に、この世ならざる存在を、この世に引き寄せる為の魔法陣が瞬き、輝き、光を放つ。

直視を躊躇う極光の中に、その存在は姿を現した。

淡紅銀鉱を職人が手塩をかけて精密に削り出したのではないかと
言う鉱石の光沢を持つ鱗。

額より突き出ているありとあらゆるモノを貫いて尚傷つく事など
無いと言わんばかりの氷晶石を磨き上げたような一本の鋭い角。

まるで溶けた岩がそのまま膜質となったような翼が大きく広がり、
逆立って震え、その振動が空気を揺らす。

恐ろしい形相とは別に、その瞳に映るのは英知を示す輝き。

これが竜種か、其れこそ竜種だ。

伝承の中に語られ、討伐する事は英雄の誉れとも言われる最強の
種。

その姿が今此処に現れ出でた。

魔法陣の光が弾けとび散り、輝きを纏った翼を振るい、光の粒子を
散らす。

そして、その翼竜は大きく咆哮を上げた。

「キューイツ」

可愛らしい甲高い鳴声に、ベルが完全に思考停止しているのを確認しつつも、現れた『封印されし翼竜』に手を伸ばす。

「キュイキュイ」

嬉しそうに鳴き声を上げながら、『封印されし翼竜』は差し出した掌に飛び乗った。

何かがおかしいって？

別に普通だろ。恐ろしい、最強の種？

子猫サイズのワイバーンだぞ？ 恐ろしいも糞も無いだろ。

ははっ……この魔法はミア専用魔法でな……通称は、『愛玩用ワイバーン呼び出し魔法』である。

第九話

時は流れ……世は大迷宮時代。

人々はモンスターが生まれ落ちる混沌の坩堝に富と栄誉を見出した。

人々は神々にファルナと言う神の恩恵を授かり眷属となつて迷宮に足を踏み入れた。

数多のモンスター、数多の危険、ソレを乗り越えた先に存在する確かな富と栄誉。

人々は迷宮に夢を求める。

そんな中、二人の冒険者がダンジョンの中に潜っていた……

ヒューマンの少年ベール・クラネールと、小人族の少女ミーリア・ノースリースの冒険譚が……

変なテンションで誤魔化すのやめよ。今どうしてるって？ 普通にモンスターに追われてますが何か？

ああ、そうそう。実は新しい魔法も覚えたし、基礎アビリティの魔力も伸びたからマガジンサイズも強化されたんだよね。

最初は『10発』×『2マガジン』って感じだったんだけど、今は『15発』×『3マガジン』だよ。魔力は56Iね。伸びパネエ。最終的に999Sが最高らしいし、そこまで伸ばしたらマガジンが『200発』×『1000マガジン』とかいきそう。

後、キューイ……ああ『サモン・シールワイバーン』で召喚したちつこいワイバーンの事ね。キューイの利用法もちゃんと確立した。

服の内側にキューイ用の入る場所を用意してそこに放り込むでしょ？ んで、モンスター近づいてきたらキューイが『キューイキューイ』鳴いて知らせしてくれる。つまりモンスターレーダー状態……戦闘能力？ 小動物サイズのワイバーンだよ？ はつきり言うけどゴブリン相手させんのも無理だから……

『キューイキューイ！』となんかやってやるぜみたいな事を叫びつつ、キューイがゴブリンに突撃して……まるで蚊を叩き落とすかの様

にゴブリンにペシッってされてた。その後ゲシゲシと踏みつけられてた。迷わず頭を吹っ飛ばしてしてやって助けた。

なおキューイ本人……本竜？ は普通に起き上がってきてパタパタと近づいてきて誇らしげに胸を張ってほめてほめてーみたいに甘えてきた。可愛い……可愛いけど、アホ過ぎる……

キューイについては基本服の中で大人しくして貰って、周りには見せない様にしてる。なんでも「ガネーシャ・ファミリア」と言う所に調教された竜種が一匹居るらしいがそれ以外の場所に竜が居るなんて知れたら大変だから、らしい。召喚する前に言っただけじゃあ……キューイ、見た目は小動物で攻撃能力が致命的に低いけど、耐久だけは封印前と同等なのか殆どダメージ入らない所為で死なないし……しかも召喚時間とか無い感じ。死ぬまで居続けるタイプ。要するに意図的に戻せない。何それ面倒くさ……

『ミリカン』ではとりあえず召喚してパタパタと必死にプレイヤーに追従するのを眺めて愛でるぐらいしか使い道が無かったが……まあ『モンスターリーダー』になるならまだマシね。

ベル君もすっかり成長して……ゴブリンやコボルト3〜4匹程度なら無傷で倒せるぐらいにはなったし。

俺？ 『ピストル・マジック』でパンパンやるだけですよ。『クラフト・マガジン』に関してはオートっぽい。と言うか忘れてたけど『ニンフ型』って初心者用って事で自動で『マガジンクラフト』してくれるんだっとな。意識を集中させるとその分短時間で完成するが意識せずとも戦闘中に勝手にクラフトされるっぽい。ミリアちゃんとかだと手動だったし便利だなあ……初心者向けのアバターなだけはある。まあ自動クラフトは時間かかるし。

って違う、考え事して意識逸らしてたけど今モンスターから逃げるんだっつた。

あ？ ベルくん？ さっきの分かれ道で蹴っ飛ばして別の方へ逃げさせました。

だってミリアちゃん足遅いしね。一緒に逃げてたら追いつかれちゃうじゃん？

時を遡ること一時間ほど前。

「ねえミリア、下の階層に行ってみない？」

モンスターを倒し終わり、転がった魔石を拾い集めていると、ベルが唐突にそんな風に口を開いた。

原因は分るぞ。モンスターと戦う内に気が付けば付近と言うか直ぐ近く、見える範囲に下の階層に続く階段があつたのだ。其れを見てきつと『下の階層行けるかな？』とか思つたんだろう。

ゆつくり振り返つてベルを半眼で見る。

「ベル、今自分が何階層に居るか覚えてますか？」

「えつと……三階層だけど……」

そう、現在二人で三階層でモンスター退治である。

出現するのは3種類のみ。『ゴブリン』『コボルト』『ダンジョンリザード』のみ。

一階層下に下りるだけでもモンスターの強さはかなり違う。一階層のゴブリンが赤ん坊に見えるレベルで動きが違う。見た目一緒だから違和感が凄い。

普通の冒険者なら一週間かけて一階層で慣らし、二週間かけて二階層目で階層ごとの強さの区分を見分ける。

冒険者になって一ヶ月程でようやく三階層に突入と言うのが普通の冒険者である。

まあ、ソレは単独で潜る冒険者の話だし。魔法を一つも覚えてない平凡なヒューマンの話だそうだ。小人族であるミリア（ミリアはこの世界ではパルウムとかいう種族扱いらしい）が魔法を覚えて後衛として活動できるからこそ、エイナさんも『三階層までは大丈夫だと思ふよ……まだ四階層以下は入っちゃダメだからね？』と口を酸っぱくして言ってくる。

冒険者は冒険をしてはいけならしい。そんなん冒険者じやネエよつて言うかもだが、冒険つてのは要するに命掛けのくと言う接頭語

が着く。命を賭ける訳で……失敗すれば死ぬ。だから命を大事にと
言う感じで言ってるんだと思う。それに冒険するならちやんと準備
して勝率を上げなきゃなんだよなあ。

転がっていた魔石を全部拾い集め。ポーチに入れてからベルを振
り返って肩を竦める。

「エイナさんに怒られますよ?」

「でも、ミリアの魔法もあるし……ちよつとなら大丈夫なんじゃ」

……そう言われると結構アレだ。俺も実はいけそうだなーとは思
ってる。

だって三階層のモンスターも容赦なく即死させる威力の魔法だし。
はつきり言ってる燃費も最高である。速射性も悪く無く、『キューイ
レーター』があるからモンスターの不意打ちも無い。と言うか
『キューイレーター』が割と優秀で壁の向うだろうが距離的にかなり
の範囲をカバーしてくれる。

うむ。ぶっちゃけいけそうだな。

「はあ……行くのは良いですが。様子見にしましょう。モンスターと
一度戦うだけ……勝てないと判断したらまず逃げましょう」

「うんっ」

ぱあーつと嬉しそうな笑みを浮かべたベルに苦笑を浮かべる。ヤ
バイとは思うんだがどうにもベルの意見に反対する気になれない。
まあ仕方ないなと思う。ベル君の笑顔が素敵過ぎるのだ。無論へ
ステイア様も素敵である。但し抱き枕代わりに抱き締めて寝るのは
やめろ。それをしたくないならその肉袋おっぱい削げ。窒息しかけるんだよ割と
マジで。どうしてあの女神は目覚めるタイミング辺りでおっぱいで
溺死させようとしてくるのか……いや目が覚めるから良いんだけど
ね。最近は起こさずに抜けだす技術も身に着けて割と問題無くなっ
たし?

……なんつー変な技術みにつけてんだよ俺は……。

少し時を飛ばして。

なんだかんだ、五階層まで下りてしまった。ごめん正直言うと四階層のモンスターも即死させちゃってさあ……要するに今までの一階層から三階層と変わらなかつた。

視認範囲外に居るモンスターも『キューイレーダー』がしつかりキャッチ。あつちからくるーとキューイが教えてくれる。んで俺はソツチに銃口向けて置きAIMしてるだけで良い。来たら『ファイアツ』である。ベル君も割り問題なく数匹相手してるし。問題は無さそう？

五階層と言えば『ウォーシャドウ』と言う危険なモンスターが出るらしいので、ソイツとエンカウントしたら迷わず逃げると約束して五階層に下りた訳なんだが……

「モンスター居ないね」

「なんででしょうね」

完全に拍子抜けと言った感じのベルに同意する。

おかしいんだよな、四階層ではかなりの頻度で出現していたモンスターが全く見当たらない、いや居ない訳ではないのだが……さつきも数匹ほどキューイレーダーのに反応があつた。ただし隠れているのか反応は合つても此方に近づいてくることもない。

階層が変わつたからモンスターの動作も変わったつて事か？ エイナさんの話では下に潜るほどモンスターは狡猾になると言っていたし。もしかしたら待ち伏せでもしてるのかもしれない。まあ、残弾にはかなり余裕がある。というか、現在装填されてる数も含めると60発はある。要するにカンストしてる。

そんなことを考えながら索敵していると、キューイがキューイキューイ言い出した。なんかこつちに来るらしい。弱いのとヤバいの。弱いのが沢山、強いのが少し。

そういえば、キューイの言ってる事がなんとなく分かるのは良いんだが……割と曖昧な感じだし完全には当てにならないのよなあ。数とか正確にはわかんないし。沢山とか少しとか。数を正確におしえてくれよ……いや、普通にそれだけでも便利だけだね。

「ベル、モンスターがいるみたいですよ」

「また、気配だけかな？」

そのモンスターについてベルに伝えておく。ベルは先程からモンスターがいると言う報告を何度も聞いているのに一向にモンスターが出ないことで俺の言い分に半信半疑っぽい。仕方ないよなあ。

「いえ、今回のはさつきまでとは違ってヤバいのが居るそうです。とりあえず逃げますか？」

馬鹿な俺はミリカンの魔法を過信してたんだろう。黙ってベルの手をとって一目散に逃げるべきだった。

キューイが『ヤバい』なんて表現をしたのを甘く見てたのもある。ゴブリンにもいいようにやられてしまうキューイだが、ミリカンでは条件さえ揃えば機甲師団程度なら壊滅させれる強さをもっていたし、見た目は小動物的な大きさのワイバーンでも歴とした竜種であり、誇り高く負けず嫌いな所ももっていた。其が怯えた様に『ヤバい』なんて表現をしたんだぞ？

言うなれば上層で敵無しなんて考えてたのが悪い。

何があれば中層のモンスターが上層に出てくるんだよ。

……条件さえ整えればペット扱いのキューイが無双出来るように。条件さえ整えば中層のモンスターが上層に出てくることも不思議ではないか。

後悔先に立たず。とはよく言ったモノである。まあ、死に際までずっと後悔し続けていた俺が言うのは片腹痛いって話だがな。

第十話

ダンジョン五階層、そこで運命の出会いとやらをした。

話は変わるが。人は『運命』と言う言葉に弱すぎるのではないかと思う。

と言うか、『運命的な出会い』も『運命的な事件』も、都合の良い解釈でしかないだろうに。

『運命』なんてくそつたれだ。

俺が歩んできた人生は何もかも皆悲劇的な運命だった？ そんな軽い言葉で済ませてしまえる程、軽い人生を歩んできた積りは無い。

ベルは良い子だ。俺が多少の嘘を吐いても。笑って許してくれる。何かと此方を心配してくれる。笑顔を向けてくれる。ほんの少し、本性を見せた所でソレは変わらなかつた。

ヘステイア様は素敵な神様だ。神話に登場する神なんて頭おかしいのぼつかなのに、凄くまともな思考をしてる。そして嘘をちゃんと言わんと指摘してくれる。こんな俺でも家族として受け入れてくれた。

良い人と良い神。間違いなく誰が否定しようとも最高の二人だと断言できる。

二人が幸せになれば良いと思う。其の為に後ろ暗い事はせずに二人の為に力に成れたらな、なんて憧れも持った。

其れが、くそつたれな運命とやらで引き裂かれるなんてまっぴらだ。

ダンジョン五階層、運命的な出会い。出会ったのは――

キューイレーダーに反応、弱いのが沢山、ヤバイのが少し。曖昧過ぎてわかんないなあ。なんて思いながらもベルがナイフを構え、俺が『銃』を構える。

「来ますよ」

「うん」

俺とベルは逃げなかった。キューイの言うヤバイのって言葉を軽く考えた俺と、この階層でヤバイのって言ったら『ウォーシヤドウ』ぐらいだし一目見るぐらいはしたいなと欲を出したベル。

曲がり角からありえない音が聞こえた辺りで二人して目を見開いた。

ズシ……ズシ……と重い足音。それもかなり重量感のある。

それに続く様にテシテシと軽い足音。そして――

スイング音。凄まじい音で何かが壁に叩き付けられる音。

そう、例えるなら――砂袋か何かを凄まじい速度で壁に叩き付けて中身がはじけた様な？

「ベル、逃げましょう」

「うん……」

まだ曲がり角から此方に顔は見せていない。だがヤバイのはわかった。咄嗟にベルと一緒に静かに後退し始める。気付かれてないはずだ。このまま音を立てずに撤退を……そんな考えをしていると曲がり角から何かが走り出て来た。

二人して悲鳴を上げそうになるが、出て来たのはただの『コボルト』である。

なんだ、余裕じゃん。ヤバイのなんて居なかったんや……なんて現実逃避は直ぐに現実に追いつかれた。

逃げる様に走り出て来た『コボルト』の頭がガシリと大きな手に掴まれて『コボルト』が助けを求める様に涙を流しながら――頭を握りつぶされた。

コロンと軽い足音を立てて転がる魔石は、次の瞬間には踏み出された大きな足に踏み潰される。

現れたのは身長2・5mはありそうな牛頭人体の怪物。

ギリシヤ神話にて語られ、数多のゲームや創作に登場しては中ボスとして君臨するモンスターとして知られている其れ。

えっと、確か王様が生贄にするする詐欺した結果、ポセイドンって

言う神様怒らせて嫁さんが雄牛に欲情する様に呪いかなんかかけられて——…えつと、確かどつかの神に牝牛の模型だったか？ を作らせた揚句に妃と雄牛を交尾させて——…その結果生れた子供だっけか？ 確か性格がヤベエ事になったから。ラビリントス？ ラビリントス？ ラビュリントスカ。迷宮に閉じ込めて何年か毎に数名の少年少女を食糧として送り込むって事をし出して。んで、テーセウスだったか？ そんな名前の少年に討伐されたー…迷宮は脱出不能だったけどアリアドネとかいう女神？ 女神だっけ？ に貰った糸かなんかで無事脱出しましたー。後にテーセウス少年の英雄譚の一つとして語られる事になりましたー。めでたしめでたし。うん、たしかギリシャ神話ってこんな感じだったよな？ ちよつと待とうか。獣と交尾？ 王様はどうして嫁さんと雄牛をやらせた訳？ うろ覚えだからもしかしたら違うかもだが…絶対違うよなあ…

多分、嫁さんの子供が牛頭になる呪いかけられたんだろ。絶対そうだろ。嫁と雄牛をやらせるとか考えらんねえわ…

と言うか何度思い出してもやっぱり神話ってヤベエわ…

思考が明後日の方向にぶっ飛んでいる間に牛頭人体の怪物。ミーノータウロス。母音を略してミノタウロス。ミノタウルスとも書くんだっただか？ そんなモンスターは荒い鼻息を吐きながら血塗れの左手を舐めて苛立ったように右手の武骨な岩を削り出したかのような棍棒を振るって壁に叩き付けた。

かなりの距離が離れていたと言うのにその衝撃は床や壁を通じて此方まで届くほどだった。体が震え、歯の根が合わなくなりガチガチと五月蠅い。

あーダメだこりゃ。心折れかかっている。と言うかどつちかかって言うところあのミノタウロスよりも、ミノタウロスの血塗れの左手の方に視線が吸い寄せられてる辺り。実は俺って余裕あるだろ。まあ、吐き気と頭痛がヤベエんですがねえ…

まだ気付かれてはいない。今逃げれば…

「ベル、逃げましょう。アレはヤバイです」

持ってる武器は……ネイチャーウエポンだったか？ 確か迷宮の武器庫とかいうダンジョンの中層以降に登場する特殊な設置物^{ランドフォーム}が変化したモノだったと思う。大きさだけで俺なんかよりはるかにでかい。ベルくんもアレに当たればまず即死だろう。

それにそもそもミノタウロスは十六階層辺り、詰る所中層のモンスター。ああ、ネイチャーウエポン持ってるのは中層のモンスターだからなのか。納得……じゃないよっ!! なんで中層のモンスターが上層に居るんですかねえ。

とりあえず逃げよう。一步後ずさってベルをちら見したら——あ、これアカン奴や。

菌の根は合わず、ガチガチと大きな音を立てて、脚は震え、完全に青褪めて硬直しているベルの姿を見れば、とてもではないが「にげましよう」「わかったよ」なんてやり取りは不可能だ。ぶっちゃければ心が圧し折れてる。

失禁してないだけ上々ではないだろうか。まあ、慰めにはならんし、失禁してもしてなくても状況は変わらんか。

逃げるの無理じゃね？ ……さて、ベルがぬところ^されてる間に俺だけでも——…なんて事は出来ない。ベルを見捨てる？ こんな素敵で可愛らしい少年がこんな所でくたばるなんておかしな話だ。だが……ベルを抱えて逃げる？ 無理。体格差考えろよ。こっちは幼女^{ガキ}だぞ？ んじやなんとかベルを正気に戻して——いや確実性が無い。心折れた人間が早々立ち直れるか？

なら、ミノタウロス^{ぶつ倒す}と^{言うのは}どうだろう？

案外いけそうではないか？ 確かに恐ろしい牛頭人体の怪物だが。やり方次第ではなんとか……それに『ピストル・マジック』だってかなりの威力じゃないか。新しく覚えたガン・マジックも駆使すればいけるはずだ。弾薬は装弾中の15発+予備の45発の計60発。なるほどいけそうだ。いけなきやヤバイ。

まさか、まさかまさかまさか、こんな上層で中層のモンスターが現

れるなんて。

一目見ただけで、コボルトの頭を握りつぶしたあの手を見るだけで心がぼつきりと折れてしまった。

中層に挑む冒険者はあんな化け物を相手にするのか。自分の様な貧弱で意気込みだけは良い少年如きが挑むべきではなかったのではないか？

そんな恐怖に体が硬直し、歯の根は合わず。心臓は爆発してしまうのではないかと言うほどにドクドクと爆音を響かせている。逃げろと頭の中なる警鐘に従う事も出来ずに、只視線は恐ろしい化け物に吸い寄せられてしまう。

「ベル、逃げましょう。アレはヤバイです」

ミアアが小声で話しかけてきたが返事が出来ない。歯の根のあわない口からガタガタと歯の打ち付け会う音が漏れるのみ。ミアアの息を飲む音が聞こえた。

ごめんミアア、動けないや。

そう言つて笑いたかつたができっこない。

そう思っている間にもミノタウロスが此方を見た。ゆっくりとした動作でこちらと目があった。

憎悪と殺意に染まった真つ赤な爛々と輝く瞳。

嘲笑つた。間違いない。非力でひ弱な少年ポックが震えて、怯えているのを見て。

ミノタウロスが一步踏み出した。逃げないと不味いのに僕は動けない。

ここで終わってしまうのか？

恐怖のままに叫ばなかったのは、意地か？ 違う。叫ぶ余裕すらないのだ。

震えて怯えて動けない僕の頭があミノタウロスによって、先程のコボルトの様に握りつぶされる想像が頭のなかに広がった。漸く、余裕ができたのか体か本の少しだけ動く。逃げるため、ではなく叫ぶために口を開こうとして——金色が目の前に割り込んで来た。

一瞬、其がなんなのかわからなくて思考が止まる。

『ピストル・マジック』

その詠唱を聞いて、漸く僕はミリアと一緒にいたのに気がついた。焦げ茶色のからだの大きさに合わずにブカブカになっているロ―ブ姿のミリアは、左手になんの変哲もない木製の長杖を持ち、構えている。

気丈に、此方に気づいて足を向けて嘲笑の笑みを浮かべたミノタウロスに向けて『指先』^{銃口}を向けたミリアが、まるでベルを庇うように――違う、庇うようにじゃない。僕を庇っているんだ。

それに気づいた瞬間、あまりにも情けない自分の姿に泣きそうになる。

憧れの英雄ならこんなとき、一緒にいる女の子をかつこよくかばう筈なのに、そんな英雄に憧れる自分は情けなくも女の子に庇われている。

『ピストル・マジック』

詠唱と共にベルを庇うように前に出る。

はっ、たかが牛頭の怪物風情が、竜人の《私》に立ち向かおうなんてね……誉めてあげる。でも悪いわね、たかが牛頭程度に負けてあげるほど竜のプライドは安くないのよ。

なんて本物のミリアが言いそうなかっちよいい台詞を叫びながら飛び出したつもりが、カチカチと歯の打ち合う音が口から漏れるのみなんて情けない格好になってしまった。

大丈夫。いけるさ、いけなかったら死んじまうだけさ。

第十一話

心が完全に折れてしまった、情けないと笑われても仕方がない。ミリアが僕を庇うように前に出て構えているのを見て、僕は自信の情けなさに苛立ちを覚えると同時に、薄汚い考えが脳裏を過った。

——だって、仕方がないじゃないか——

ベル・クラネルは魔法もスキルもないただの少年で、ミリア・ノースリスは魔法も使えればスキルも覚えているのだ。

ベル^僕なんかとミリアは比べるまでもなくミリアの方が優れている。

今まで、たった二週間の冒険のうちに何度ミリアに助けてもらった？

何度、ミリアの魔法を羨ましいと思った？

僕に出来ないのは魔法もスキルも無いからで、ミリアが出来るのは魔法もスキルもあるからじゃないか。

それにきつとミリアは怯えて動けない僕なんかと違って、こんなときにも恐怖なんて覚えずに冷静にあの化け物を倒す方法を考えているに近くない。

だって、ここ二週間の冒険の最中、ミリアは一度も悲鳴をあげていない。僕が情けなく悲鳴をあげて逃げたコボルト五匹を難なく倒していた姿が脳裏を過った。

だから、仕方がないじゃないか。

そんな考え方をしたのも仕方がない。だって、ミリアはトクベツで、僕はフツウだったのだから。

そんな風に自分の情けなさに対して意味のない言い訳を繰り返している間にも、ミノタウロスは嘲る笑みを浮かべつつも余裕そうに歩いてくる。気丈に振る舞う幼い少女と、そんな少女に庇われる情けない少年。警戒するまでもないとも言うような足取りで接近してくるその姿にベルは目を閉じた。

これは、きつと何かの夢で、目覚めたら呆れ顔で神様の抱擁から抜け出したミリアが「おはよう」と声をかけてきて、寝癖をなおして、冒険の準備をしてから、神様に「いつてきます」と声をかける。

だから、早く夢から覚めてほしい。

『フアイアツ』

ミリアの魔法が発動した。直線上にあるものを貫通してダメージを与える魔法。そんなものが使えるから僕と違ってあの恐ろしいミノタウロスに立ち向かえるんだ、このあとはいつも通り魔石を回収して――

「ああ、もうっ！ 私は何してるのよ」

ミリアの声に思わず目を開ける。

ミリアの後ろ姿と、健在のミノタウロス。ミノタウロスは不思議そうに首を傾げている。

そこで漸く気がついた、魔法が外れている。

ミノタウロスの右側の壁にミリアの魔法でつけられたと思われる貫通痕があった。

ミリアは、どんなときでも冷静で、魔法を打てば百発百中。これまでの冒険で敵なしだったのだ。

そのミリアが魔法を外した？ 何故？

その答えに気がついたとき、ミリアが恐怖なんて抱かずに冷静にモンスターを倒す方法を考えていたなんて考えは吹き飛んだ。

ミリアの手が震えている。

「いつもやってる事でしょ、なんでこんなときに外してんのよ。馬鹿でしょ、死にたくないんでしょ、なら当てなさいよっ!! ああもうっ!!」

ミリアが自分自身に言い聞かせるように呟く言葉は、徐々に大きくなり最後には左手の杖の石突で床を突いて叫んだ。其れを聞いて、気がついた。ミリアは確かにトクベツなんだと思う。魔法もスキルもあって、いつも冷静で、どんなときにも頼りになる存在で……そう思っていたのが、ただの間違いだったのだと。

ミリアも怖いんだ……

でも、魔法が、スキルがあるから何とか立ち向かっていけるんだ。

左手に持っていた長杖を手早く背中背負い直し、ミリアは左手で震える右手を押さえつけて狙いを定める。

ミノタウロスは余裕そうにミリアの足搔きを眺めて嘲笑の笑みを浮かべている。

『ファイアツ』

また、外れた。

『ファイアツ』

ミリアの詠唱と共に魔法が発動して……ミノタウロスの肩に当たった。

「あはは……嘘でしょ」

ミリアの震えた声に思考停止していた僕は一気に現実に戻された。

——魔法が効いていない——

肩に当たったはずである。しかしミノタウロスは首を傾げて肩をさすっている。そこにあるのは些細な焦げ痕、^{ダメージ}損傷なんて呼べない些細な焦げ痕を見てミリアが叫んだ。

「なら、こんなのはとうっ!! 『ショットガン・マジック』!!」

その魔法は新しくミリアが覚えた魔法だ、正確には詠唱派生と言う同じ魔法の別側面と言う話だが、僕から見れば完全に新しい魔法だった。

半ば悲鳴のように叫んだミリアは先程よりも大きくなった魔法陣^銃をミノタウロスに向ける。

ミノタウロスは、腕で顔を庇う仕草をしている。

『ファイアツ』

半ば処か悲鳴にしか聞こえない詠唱を叫んだミリアの指先から魔法が放たれる。

放射状に無数の弾丸が放たれてダンジョンの壁もミノタウロスも一瞬で砂ぼこりに包まれた。

通路を埋め尽くすほどの魔法の弾丸の凄まじさに初めて目にしたベルも思わず目を見開いた。

新しい魔法を習得したとは聞いていたが、これほどとは……

「ああ……」

だが、砂ぼこりが徐々に消えていくそこには、腕で顔を庇う仕草を

したまま平然と立っているミノタウロスの姿があった。

「あ……」

ポキンと、何かが折れた音を聞いた気がする。

「あああああああ」

肩を震わせたミリアが情けない悲鳴を上げた。

「ふ、『ファイアツ』『ファイアツ』『ファイアツ』『ファイアツ』!!」

魔法の連射によって通路が土埃に埋まる。

しかし、その連射も直ぐに止まってしまう。

「『ファイアツ』っ!? なんて出ないのよっ!!」

ベルの知る限り、ミリアの魔法はかなり特殊なモノらしい。

マガジンと呼ばれるモノを消費して使われる魔法。

マガジン一つで15発。『ピストル・マジック』が消費弾薬1発なので15発撃てる。

『ショットガン・マジック』は消費弾薬3発なので、5発なのだが先程『ピストル・マジック』で数発消費していたので4発しか撃てなかったのだろう。

そしてミリアの右手を見れば手の甲に埋まりこむ様に発現しているはずの結晶が碎けて消えている。

ミリアはそれに気が付いていないのか指先を銃口ミノタウロスに向けたまま詠唱をしている。

「『ファイアツ』!! なんてっ!!」

焦っているのか……いや、ミリアは多分錯乱している。

自身の魔法が効かなかったと言う衝撃的事実によって正気を失っているのだろう。

『リロード』と言う単語を挟む事も忘れ、ただ只管に発動詠唱を叫んでいる。

ミノタウロスはソレをみて笑みを浮かべて、一步、また一步を近づいてくる。

「なんでよっ!! ベルが動けないんだから私がなんとかするしかないでしょっ!! 『ファイアツ』!! 『ファイアツ』!!」

焦りと恐怖で錯乱したミリアは狂乱気味に叫ぶ。その言葉にベル

は殴られたような衝撃を覚えた。

ミリアがベルを庇った理由は、ただベルが動けなかったから、動けるのがミリアしかいなかったから。

見捨てる事だつてできたはずなのに。ミリアは僕を庇ってくれた。

だと言うのにベルは——

ベルはその様子を見ながら、徐に自分の頬をぶん殴った。

何が『ミリアがトクベツ』だ。

何が『ミリアには魔法があるから』だ。

普通に怖かったに違いない。魔法があっても、ミリアは女の子じゃないか。

僕の夢見た英雄は、魔法を覚えていない事を理由に、諦めてしまう様な奴だったか？

僕の夢見た英雄は、スキルを覚えていない事を理由に、女の子の背に庇われる様な奴だったか？

否だ、僕の夢見た英雄は、どんな絶望的な状況でも、決して諦めずに立ち上がって、最期には華々しく勝利を飾る英雄ではないか。

狂乱気味に詠唱叫びを続けるミリアを見てから。ベルはミノタウロスを見据える。

——いつの間にか、脚の震えは止まっていた——

ミノタウロスが姿勢を低くしている。あれは——突進の構えだろう。

ミリアはただ只管に叫ぶばかりで其れに気付いていない。

このままだと……

咄嗟にベルは足を踏み出す。動けなかったはずなのに体がごく自然に動いた。

ミノタウロスも同時に動き出す。

ステイタスの差でミノタウロスの方が早い。既に距離は半分以下だ。ミリアは目を見開いたまま動きを止めている。

「ミリアッ!!」

ベルは必死に腕を動かしてミリアの腰に手を回し、そのまま横に飛び退く。

瞬間、つい先ほどまでミリアとベルの居た位置を凄まじい速度でミノタウロスが走り抜けて行った。

後ほんの一步出だしが遅ければミリアは死んでいただろう。もちろん、ベルも一緒に。

「ミリアッ！ 逃げようッ!!」

咄嗟にミリアの腕を掴んで走り出す。

ミノタウロスの特徴は、直線距離での突進力にある。牛頭だからだろうか？ 牛と同じく直線での速度は凄まじいモノがある。そして牛と同じくミノタウロスの弱点は曲がり角だ。

ミリアの手を引きつつ必死に走る。曲がって、曲がって、曲がって、曲がる。

後ろからミノタウロスの咆哮が聞こえ、足音も聞こえた。

直線を走る度に背後に威圧感を感じ、心が折れそうになる。

だけど、ミリアの小さな手から感じる温かさになんとか歯を食いしばる。

ベルに手を引かれながら必死に足を動かす。

俺って馬鹿だよなあ……

ゾンビ映画とかでよく弾切れの銃の引き金を引き続けて逃げる事もしない兵士とかが居るだろ？ あんなの現実じゃありえねえと笑ってた記憶があるが。あの頃の自分をとりあえずぶん殴りたいと思っただ。

魔法が効かないと言う状況と、ベルを守れないと言う恐怖から、俺は錯乱していた。

冷静になれば自身が『リロード』もせずに『ファイアッ』と叫び続ける間拔けな姿を晒していた事に気付けるはずなのに。その時の俺

は完全に気付く事が無かった。

それに、ミノタウロスが突進してきたときも……

突進を開始して僅か一秒にも満たない間に目の前に迫ったミノタウロスに完全に思考停止した俺は走馬灯を見た。けれども唐突に胸に手を回された事で現実に引き戻され……目の前をミノタウロスの巨体が走り抜けて行った瞬間に足が震えた。

「ミリアツ！ 逃げようツ!!」

ベルがそう叫び、腕を引つ張られそのまま走りだしたのにつられてなんとか走り出して……漸く正気を取り戻した。

なんて様だ、いけるかもなんて考えて飛び出しておいて。結局ダメダメじゃないか。

かつこわる。

『リロード』

……このまま進むとヤバイな。

頭の中で地図を広げて……ベルがどのルートを通っているのか考えてから。舌打ちをしそうになる。

ミノタウロスが横を走り抜けて行った後、ベルはミノタウロスから反対方向へ逃げた……要するに来た道ではなく反対方向、ダンジョンの奥に向かつて走りだしてしまったのだ。

無論、遠回りすれば上の階層に戻れなくはないと思うのだが……

ベルが次々に曲がり角を曲がっていく所為で地図が役に立たなくなりそうだ。

いや、曲がる理由はわかる。ミノタウロスは牛っぽい見た目同様、直線で逃げる事はほぼ不可能だが曲がり角を多用して速度を落とさせれば逃げ切れなくはない。

しかし、現在位置から上の階層までの階段に辿り着くにはそこそこ距離がある上、曲がり角を利用できる場所も限られている。

要するにこのまま曲がり角戦法で下の階層に逃げるか、一か八か直線を通って上の階層に逃げるかのどっちかな訳だが……

ちらりとベルを見る。これはアカン奴ですね。多分だが曲がり角を見つける度にとりあえずそっちに曲がっている感じだ……ああ、次

の十字路は左は行き止まりだ。

「左は行き止まりっ！」

「わかったっ！」

真っ直ぐ？ 暫く直進する通路ですよ？ ミノタウロスに轢き殺されたのですか？

だからと言って右手通路は……

「っ!？」

曲がって直ぐ、ベルが一瞬たじろぐが直ぐに全力疾走を始めた。

「離してくださいっ！」

ベルの手を振り解いておく。

さつきからどうにも俺の足に合わせている所為か遅い。ベルの足ならもう逃げ切っついても良い筈なのにさつきから曲がり角でギリ追いつかれそうになるのだ。

マア良い。この通路はそこそこ距離がある訳だが……突き当りが丁字路である。

『ショットガン・マジック』!!』

『ミリアっ!?!』

「走ってくださいっ!! 少しでも足止めになる様に発砲しますっ!!」

後ろの曲がり角から顔を見せたミノタウロスにすかさず『ファイアッ』。

『ファイアッ』!!』

散弾を遠距離で撃つたら威力減衰するのは当たり前だよなあ……なんで錯乱しかけてた俺は気付かなかったのか。錯乱してたから気付かなかったのか……

まあ、それでも視界一杯に魔弾がぶちまけられるのは流石に怯むのかミノタウロスが足を止めている。

ベルが既に丁字路に辿り着いて振り返っているのが見える。

『ファイアッ』!!』

残りマガジンは9発。消費3発だから実質発砲可能回数は3回か。

『ファイアッ』!!』

さて、どうするか。このままベルと一緒に方向に逃げた所で……丁

字路を右に進めば上の階層に通じる直線通路。左に進めば複雑に入り組んだ通路。

どっちに逃げるって？ 左に逃げるのが得策に決まっている。

『ファイアツ』!!』

だが、ベルまで付き合わせる必要は無いだろ。

このままベルには地上に行ってもらう。俺？ 無論左だ。アイツは既にベルじゃなくて俺しか見えてないだろうしな。

最後の一発を残した状態でベルに合流、どっちに行くか迷ってるのか。まあいい。とりあえず――

ベルを蹴つ飛ばして右の通路へと捻じ込みつつ、反動で自分は左の通路へ飛び込んだ。

瞬間、ミノタウロスがベルと俺の間、丁字路の突き当りの壁に激突に凄まじい衝撃と音が撒き散らされる。

「ミリアッ!!」

ベルの驚きの声が聞こえるが、反応する余裕なんかない。悪いなベル少年。そのまま地上まで無様に走って逃げてくれ。最期までかっこよく決めるのは俺だけで良いから。

「ベルッ!! 地上で助けを呼んでくださいっ!! 『ピストル・マジック』『ファイアツ』!!」

壁に激突した角を引っこ抜くのに手間取っているミノタウロスに挑発の為に一発ぶち込む。

それから背を向けて走り出す。

唐突にミリアに蹴飛ばされて、尻餅をついた瞬間、目の前にミノタウロスが現れた。

ミリアと僕の間、まるで壁の様に聳え立つその姿に一瞬心が折れそうになる。

「ミリアッ!!」

咄嗟に叫べば、ミリアの方も答えてくれた。

「ベルツ!! 地上で助けを呼んでくださいっ!! 『ピストル・マジック』『ファイアツ』!!」

ミノタウロスは尻餅をつく僕じゃなくて、煩わしい攻撃を繰り出すミリアを標的にしたらしい。直ぐ近くで尻餅をついている僕を無視してミリアの方に足を向けた。

「待ってっ!!」

ミリアの方に行かせるのは不味い。なんとかナイフを握りしめてミノタウロスの注意を此方に向けさせようとして――

『ヴヴォオオオオオオオオオオオオオッ!?!』

あっ……

ミノタウロスの咆哮を至近距離で聞いてしまった。

リストレイト
強制停止。

ミノタウロスの咆哮に含まれる特殊効果が僕の体を縛り上げる。

ナイフを握って、起き上がろうとした姿勢のまま。ミノタウロスはミリアを追いかけて行ってしまった。

動けない僕はソレを見送る事しかできなかつた……

第十二話

ははっ、こっちへおいで、手の鳴る方へ。なんちゃってな。

ほら顔をショットガンで整形手術してやつから。大人しくしろよ……糞っ、腕で顔面防御すんじゃネエよ畜生。

割と死にそうな一撃をぶっぱなしてくるミノタウロスに『ファイアツ』してるが、はつきり言ってるいい？

レベル差の影響でかすぎい……

唐突だがファルナについてちよつと話をしようか。

皆は『レベル』って言われるとどんなのを思い浮かべる？

最高レベルは大体『99』か『100』だろう。ダメージが億単位まで上がってレベル最大値が『9999』とか言う日〇一のゲームもあるが。まあ大体は『99』か『100』だろ。

『255』？。ちよつとまで、とりあえずここではそこらはあるま関係無い。

通常のRPGでレベル差つて言えば多分『5〜10』ぐらいはなんとかなると思う。

ただ、ファルナで言う『レベル』つてのは多分だが『クラス』の事だと思う。

もつと詳しく言うなれば『基礎アビリティ』が一般的なRPGの『レベル』に当たるんだと思う。

レベル上限が『500』で、ランクアップ条件に最低レベル250の制限がかかっている感じ。ランクアップで既存のレベルを基礎として更に500上げれる様になるといえばいいだろうか？

今の俺が『ランク1 レベル10』ぐらいだとするなら、ミノタウロスは『ランク2 レベル300+250』ぐらいじゃないか？
低く見積もってもレベル差250ぐらいだと考えて良いだろ。

エイナさんの説明だとミノタウロスって一般的なレベル2冒険者も避けて通る様な危険な奴らしいし、もしかすると通常のRPGにおけるレベル差500以上はある。

……そりゃ勝てねえわ。ファルナについて考察は色々あるが。と

りあえずこれだけ言わせる。

理不尽過ぎワロス。

初期ダンジョンでラスボス現れて強制敗北イベントですか？ 今時そんなRPGは糞ゲー扱いですよ。しかも今はソレが現実つていう。やっぱ現実つて糞だよ。

『ファイアツ』

「キュイキュイツ！」

曲がり角から姿を見せたミノタウロスの顔面に指先銃口を突き付けて『ファイアツ』。

『ショットガンマジック』はゴブリンやらコボルト相手には完全に威力過多で魔石吹っ飛ばすし。ぶっちゃけ散弾はベル君と一緒に居る時にぶっぱすると巻き込みかねないから自重してたが。今は遠慮する必要は無い。

ミノタウロスメエはもつと自重しろ糞牛頭がつ!!

振るわれた岩石の棍棒が壁や床を打ち付けるが、その度に衝撃が地面を走り抜ける所為か足がもつれそうになる。

ヤバイヤバイ。死ぬ死ぬ。とキューイがきゅいきゅい咆えてるが黙ってくれ。回避で忙しい。

曲がり角からこんにちはー。そして死ぬ。顔面ショットガンだぞ畜生。腕ガードとかないわー。

というか、腕で『ショットガン・マジック』を防ぐとか卑怯過ぎい。まあ、俺が長生きすればする分だけベル君の生存率が上がるんで死力を尽くしますかね。

岩石の棍棒を振り抜いた姿勢のミノタウロスから全力で距離をとろうと足を動かすが、ミリアの足は短すぎる。

今までの冒険の最中、動き回らずにその場で魔法を使って敵を倒していた弊害だろう。俺の敏捷は絶望的に低い。I9と言う時点でお察しである。

魔法が便利すぎたからね、しょうがないね。こんなことならもつと

敏捷上げるために走り回つとくんだった。

なお、一番低いのは耐久な模様。I2だからな、遠距離戦闘しかしてない弊害だよ。まあ、耐久が高くて多分即死が致命傷になるだけだろうがな。

『マジックシールド』でワンチャン？

壁にめり込むような恐ろしい一撃を防げるかなあ。いや、無理だろ。

そんな風に頑張ってるうちに残り弾薬が1マガジンになってしまった。後15発しかないのか。意外と弾薬欠乏が早かった。

ベルからかなり距離はとつたしもういいだろうか。

きつとベルが、ヘステイア様にミリアはかつこよく死んだと伝えてくれ——

「ほわあああああああああああ!!」

『ヴオオオオオオオオオオオオオ!!』

は？

遠くから聞こえた悲鳴と咆哮に足が止まる。

え？ 待って、いや待て。ミノタウロスはこつちに居るだろ？ な

んでベルの悲鳴とミノタウロスの咆哮が遠くから聞こえるんだ？

慌てて後ろを振り返つ——目の前に岩の壁があった。

「なつ、グブツ?!」

硝子の碎ける音と共にすさまじい衝撃が全身を打ち据えて体がぶっ飛ぶ。

ゴロゴロと転がってからなんとか半身を起こしてみれば、岩石の棍棒を振り抜いたミノタウロスが遙か彼方にいた。

なにがおきた？

ベルの悲鳴とミノタウロスの咆哮。そして振り替えたら目の前に壁。

ああ、俺はミノタウロスの一撃で吹っ飛んだのか。壁と棍棒でサンドイツチされてたら死んでたわ。間違いなえ。

「キュイキュイ!!」

「ゴブツ、ゴホツ……」

キューイが大丈夫？　みたいなニュアンスで騒ぐので返事をしようとしたら思いっきり噎せた。

というか……これ、ヤバくね？

「ほわあああああああああああ!!」

遠くから聞こえる二回目のベルの悲鳴に意識を持つていかれかけるが、全身の痛みを理解して意識が飛びかける。

あー、多分ですが致命傷かな？　立てねえや。

さつき俺が壁だと思ったのはミノタウロスの持っている棍棒だったのだろう。

ミノタウロスの手にある棍棒にベツタリと血が付いている。あれ、俺の血か？

おお、『マジックシールド』のお陰で即死しなかったぞ。

「ゴボツ、ゴボツ……ペツ」

「キュイ!!　キュイキュイ!!」

怪我してる、治さなきゃ、逃げなきゃ。とキューイが騒ぐが……

俺の足、どうなってるんだこれ。千切れてるわけじゃ無さそうだが。あらぬ方向に爪先があるぞ。こんなに体って柔らかかったつけ？

太ももの辺りからヤバイ方向に曲がって——ああ、折れてんのか、これ。

割りと冷静に自分のことを分析できるなあ。まあ現実逃避してるだけだけだ。

これはなあ、死んだよなあ。

足があらぬ方向に曲がり、何とか上半身を起こした姿勢のまま動けない。

左手は完全にぶっ壊れてるのか？　動かそうとしても動きやしない。右手が無事と言えば無事か。まあ、なんとか動く感じだけだ。

なんのため頑張ったんだつけ？

確かベルを逃がすために……そのベルは別のミノタウロスと出会ったみたいですがね。

ベルの悲鳴はもう聞こえてこない。

まあ、ベルの足なら逃げ切れるだろ？

と言うか、そうじゃなかったら俺は何のためについて話だろ。

「キユイ!!」

おー、体が持ち上がった。高い高いてすかね。牛頭人体の怪物さんに高い高いされるなんて、夢みたいだ。

くそつたれな悪夢の方だけだな。

血を吐いて幼い容姿の少女が眩く。

「ゴフツ……あの時は独りぼっちだったけど、今は一人じゃないからか、寂しくはないな」

その矮小な存在の言葉など理解する必要もないだろう。

小さな少女の胴体を両手で掴み、ミノタウロスは愉悦の笑みを溢した。

その矮小な少女の胴体はミノタウロスが両手で掴めばすつぽりと胴体が手の中に収まってしまふほどの大きさでしかない。

小賢しくもちんけな魔法で抵抗してきた矮小な存在は、今やミノタウロスの手の中でぐったりとした人形のようなだ。

先程までの苛立ちを思い出してゆっくり、ゆっくりと力を加えていく。

「ガツ!? ギイツ!!」

ポキツポキツと何かが折れる音が手の中で響き、幼い少女が目を見開いて不様な声を響かせる。

この瞬間を待っていた。

うめき声を上げ、無様に潰れていく矮小な存在。

あの恐ろしい人間達に恐怖を抱き、不様に逃げるはめになった。

無様に、情けなく、後ろに迫る強者に追われながら、必死に足を動かした。

必死に足を動かした。

この、狩る側に立っているはずのミノタウロスが、である。

だが、その怒りも腕の中で血を吐いて苦しんでいる矮小な存在のお陰で払拭できそうである。

そう、自身は決して狩られる側ではない。恐怖を抱く側ではない。手の中で潰れ行く矮小な存在がそれを証明してくれる。そう、ミノタウロスは狩る側であり、恐怖を抱かせる側の存在なのだ。

愉悦の笑みを浮かべつつも少しずつ、少しずつ。力を加えていく。ビクンビクンと痙攣している矮小な存在は今にも死にそうだ。このまま、時が止まればいい。そうすれば永遠にこの愉悦感を、狩る側の快楽を享受し続けることができるのに。

ふと、手の中の矮小な存在の痙攣が止まった。

ああ、死んでしまったのか。勿体ない。もう少し――

目の前に突き付けられた矮小な存在の指先を見てミノタウロスの動きが止まる。

「ショットガン整形手術、なんてね。『ファイアツ』」

目の前で光が弾け、激痛と共にミノタウロスは光を失った。

顔面に一発お見舞いしてやったら思いっきり投げ飛ばされた。

ははっ、ざまあ見ろ。

最後っ屁って奴だ、顔面整形で多少は見れる顔になったろ。感謝しろ糞牛。

きつと、キューイがいなかったら最後っ屁も出なかっただろうに。スキルリンク、忘れてたがミアアが使える魔法は一応キューイも使えるんだった。

『レッサーヒール』をキューイが使ってくれなかったらもつと早くにくたばってたんだろうが、何とか一発ぶちこめた。

まあ、致命傷ではないし、ただの目潰しでしかない。

件のミノタウロスも、近くに転がしてあつた岩石の棍棒をやたら目つたらに振り回している。

ふーむ。反撃開始、といきたかったが……無理。

さつき握りつぶされかけて瀕死だったのがキューイの回復のお陰で重傷になったんだが、投げ飛ばされて叩きつけられたせいでまた、

瀕死だ。要するに動けん。

しかも、マインドダウンだったか。

精神力が切れたっぽい。身体中の激痛が曖昧になり、意識が薄れていく。

キューイに回復魔法を、なんて、俺が魔力切れしてちや使えっこない。

詰みだな、ミノタウロスのがむしやらかな攻撃が俺を潰すのが先か、それとも俺が死ぬのが先か。

まあ、その前に俺はマインドダウンで気絶するっぽいけどな。

気絶寸前のまま、ミノタウロスを見て……うえ？

……うわあ、何か幻覚が見えるわ。

金髪のシヨタつ子王子様がミノタウロスを槍で細切れにしてるのがみえるぞ。

いや、夢か？

慌てたように駆け寄ってくる金髪のシヨタつ子王子様。

あるえ？ こんな金髪のシヨタの王子様に助けられたいとか言う願望でもあったのか？

まあ、俺の秘めた金髪シヨタ王子様に助けられたい願望はどうでもいい。

ベルは無事に逃げ切っただろうか？

第十三話

俺は悪くねエ。別に俺は何も悪い事はしてねエ……あ、嘘。詐欺やらなんやでお金がつぽり稼いでたけど……だってお金自体に興味あつた訳じゃ無くて、糞女が要求してくる勉強料とやらの支払いに必要だっただけだし。

ははっ、最期には惨めに弔り殺され——……って違う。あの糞女が自業自得で弔り殺されたのは俺とは無関係だし。

其れとは話が違う。

俺の親父は『ミリタリーカントリーオンライン』と言うゲームの運営の人間だった。

あ、実際には親父じゃなくて血の繋がらない育ての親なんだけどちよつと色々複雑な関係だし、少なくとも親父は血の繋がった息子だと騙されてたつてのもあるから。親父で統一するわ。失礼な話だよな。あんな素敵な親父を騙す糞女も、その糞女が股からひり出した汚物も……。

ともかく、ある日の会話を再現しようか……。

『なあ。新しいコンテンツ考えてるんだが。なんか良い案ないか？』

『……ん？ いきなりなんだよ親父……と言うかコンテンツ？』

『おう、最近ミリカンもマンネリ気味だろ？』

『いや、今のままで十分だろ。こんだけリアルに再現されたガチのVRオンラインゲーなんてミリカンぐらいだし』

『それじゃダメなんだよなあ』

『……(面倒くせ)。……ああ、じゃあこのミリカンのシステムのまま剣を使って戦うのはどうだよ？』

『おっ。』

『ミリカンって近接戦闘もできるだろ？ スコップとか軍刀とか。と言うか日本軍で軍刀突撃……カミカゼアタックだっけか？ そう言うのできるし、システムを利用して剣を中心軸にしたゲームを作るってのはどうよ？』

『おおおおお、良いぞ。良いなそれ。よしさっそく皆に相談してみ

るわ。サンキュー勇乃』

『あいよ』

一体、だれが予測出来ようか。

俺はただ『システムをそのままに別の剣を主軸にした別のオンラインゲームつくりやいいじゃん?』と言った積りだったんだが……。

有ろうことか親父以下運営チームは『ミリカン』に『大帝国』と言う剣と槍を主軸に据えた勢力を追加すると言う暴挙に出た。

……いや、目新しいって事で一気に人気は出たけどさあ……。

俺の所為じゃないよな? だって親父が勘違いしただけだもんさ。違うよね?

『魔法少女モノってのもあるんだな』

『ヤメロ親父、其れは地雷だぞ』

『ふうむ……絶望系魔法少女か、オマエこういうの好きなのか? ミリカンにも……』

『ヤメロオ!? 人の本棚勝手に漁って何ヤベエ発想してんだ親父ツ!?!』

『ちよつと皆に相談してくるわ』

『ヤメロオオオオオオオ!!』

絶対、俺は悪く無い。絶望系魔法少女? 魔道国? 関係無いから。絶対関係無いから……無い……よな?

「う……うう……」

肌触りの良い、温かな感触に包まれて、微睡の中。この瞬間がたまらなく好きだ。

嫌な現実も忘れられる。悪夢を見て魘される訳でも無い。

ただ揺蕩う様な、温かな感触に包まれたこの微睡の瞬間が永遠に続けば——あるえ?

目覚めたら天蓋付きベッドで寝かされていた。

うむ。簡素に説明するとそんな感じだろうか?

ええつと……何してたんだけか? 酒飲んで……ミリカン

レイしてー……ううん？

違う、ベルくんのパンツ洗って、ヘステイア様が恐ろしいぐらいギリギリの下着でベルくんを攻めてー……じゃない。と言うか処女神って話だよな？ ベル君を性的に襲う、もしくは襲われる事を望むって……いや、もはや何も言うまい。きつとそれだけベル君の事が好きなんだろう。だからと言って犯されたい願望を持つとは……神って業が深いんだな。其れでもヘステイア様の事は好きだけだなあ……って違う。そうじゃない。

………えつと、思考がぶっ飛んだけど。何処だこっ。

目を覚まし、天井……と言うか天蓋を眺めつつぼんやり考えながら、身を起こしてみる。

半身を起して周囲を見回して首を傾げた。

質の良いシーツに、しつかり体を受け止めるベッド。しかも天蓋付き。天蓋のカーテンはしつかり閉じている。

何処だよ此処。「ヘステイア・ファ・ミリ乙の本拠生活感溢れる地下室じゃねエし……。

「キューイ、こっこ何処かわかります？」

何時も服の中に隠している愛らしい相棒的家族に声をかけてみるが反応が——あるえ？

……シーツに包まれたミアちゃんの肢体をゆっくり眺めてみる。

一瞬だけ、太腿から先が変な方向にひん曲がった光景を幻視したが。それよりも衝撃的事実に精神が揺さぶられる。

「うえあ？」

思わず変な声出た。と言うか、なんかすつげえ可愛いお姫様の着てそうなヒラヒラのネグリジエ着てる。

え？ 俺の改造ローブは？ 古着屋で一着200ヴァリスとかなりお手頃な値段で買った古臭い茶色のローブは？

キューイをお腹の辺りに入れられる様に内側に布で袋を引っ提げて改造したローブは？

……と言うかキューイ何処行きやがった……。

………あ、待って、待て。とりあえず状況の整理だ。最後の記憶が曖昧でどうなってるのかわかんないけどこういう時は深呼吸。

ひっひっふー……別に妊娠してねエよ。

えつとー……最後の記憶ー……朝からヘスティア様が『行ってきますのチューが欲しいな』とか寝言をほざいたので羞恥でベル君が階段駆け上がって行って、んで俺が代わりにほっぺにキスしたんだっけっか。ヘスティア様はベル君にもして欲しかったみたいだが喜んでくれた様子で何よりだ。ぶっちやけ俺如きが神様にキスだなんて……まあ、神様が喜んだのなら良いか。

んでー……本拠の上の廃教会の所で待ってたベルと合流してダンジョンに向かったんだっけか。

確か、『神様もキスぐらいは出来る様にと気を使ってくれてるので、少し頑張ってみては？』と、ハーレム目指すならキスの一つ二つ軽くさつと出来るぐらいになったらどうかとベルをからかったら、顔を真っ赤にしてベル君が恥ずかしくて出来ない的な事を言っ……

んで、二人で今日は沢山稼ごうねと談笑してる内にバベルに到着して……。

……………。

ダメだ、思い出せない。

マインドダウンを起こすと人によっては前後の記憶が曖昧になったり、暫く思い出しにくくなったりするらしいし、多分ソレの影響か？

って事はだ、俺は多分だがマインドダウンを引き起こしてぶっ倒れたのだろう。んでベル君が担いで……バベルに運んだ……

無いな。

ここは絶対バベルじゃない。だって天蓋付きベッドだよ？ 実際

に利用した事はまだないから内装なんて知りもしないが、いくらなんでも冒険者向け施設であるバベルの医療機関に天蓋付きベッドとか

……

……あ、ヤバイな。バベルかもしれない。だって神々があんなんだぞ？ あり得ないって言えるか？

神様のノリは割とヤバイしな。バベルの冒険者関連の施設が普通だとはとても思えない。

……いや、無いな。流石に無駄金過ぎる。

かなり質も良さそうだし、もつと安価なモノで十分だ。

それに……このかわいいいネグリジエ。ぶっちゃけて良い？ ミリアちゃんに超似合ってる。

ただ、バベルの医療機関の服でもつと簡素な貫頭衣みたいなんじゃない？

そう考えると、このネグリジエが着せられてる意味がわからない。それに……ベル君が傍に居ないのも気になる。

ここは何処お？ 私はだれえ？ ……うつそぴよん。ちよつとネタに走り過ぎたか。

まずは冷静に、この天蓋付きベッドから出るか。とりあえず手足を拘束されてるなんて事は無いから……室内程度なら自由に動き回っても問題ない筈。部屋から抜け出すのは流石に……？

カーテンを開いて部屋を確認する。

ふふうむ？ ほほお。

客室……？ 客室で良いのか？ 豪勢と言う程でもないにしろ、質の良い家具でまとめられた客室の様な部屋があった。

「あ、キューイ」

「キューイ？ キューイキューイ！」

おお、キューイがテーブルの上に置かれた鳥籠の様な籠に入れられてる。

天蓋付きベッドから抜け出してキューイに近づく。

「えつと、キューイ？」

「キューイキューイ！」

嬉しそうにキューイキューイ言ってるが。ふうむ？ 意味は……目が覚めた？ 良かった。って感じか。

「キューイ、ちよつと現状が把握できないのですが何か知っていますか？」

そう言いつつも籠を観察する。キューイ自体に何らかの拘束具が付けられてる訳じゃない様子だが……はて？

一応キューイはワイバーンで竜種。子供とは言え危険度はそこそ

こ……鳥籠に大人しく入っていたとは言え……オラリオに置いてワイバーンの子供を見つけたらどう扱うのかわからんが。

売りとばされて見世物小屋に……ってのが異世界での基本だと思うんだが……。

「キューイ？ キュイキュイ、キュイ、キュイ、キュイ」

ほうほう、ほう、ほお……ちよつと待ってね。えつとだな……襲われた、死にかけた、助けられた。フィツデムルア？ っていうミリアの男が——

……？

フィツデムルア？ 誰だソイツ……。と言うかミリアの男ってなんだ？ え？ ベル……。じゃないよな？ ミリアの男……。ミリアの男？ もしかして……

「私の男……って言うのは、もしかしてパルウムの男性と言う事ですか？」

「キューイ！」

そうだと力強く頷くキューイ。パルウムの事を『ミリアの男』とか……。こいつ役にたたねえぞ……。キューイから情報貰っても逆に混乱しそうなんだが……。でも情報源コイツしかいないしな。部屋の内装見た限り監禁されてる訳じゃないっぽいし、どうにも捕縛や監禁と言った雰囲気では無く、客を迎える様な感じがする。下手に動かない方が良いか？

「えつと、キューイ、此処は何処です？」

「キューイ！ キュイキュイ！」

ほほー、ロウキイヘミスア？ のフォーム？ ……えつと、ごめん、意味がわかんない。

キューイの入った籠には、丁重に籠の底には布が敷かれ、その上にキューイが鎮座している。嬉しそうに首を上げて翼を動かそうとするが、狭すぎて動けないっぽい。

ちよつと可哀想かなとは思うが……

「キューイ、今出しますね」

鍵かかってないし、簡単に開きそうだ。とりあえずだしとくか。

「キュイ」

うん？ ダメだ？

「キュイキュイ」

なんか出そうとしたらキュイに断られた。

「え？ 何でですか？」

「キュイ、キュイキュイ」

リヴァアラ・リコウ・アーベル？ ってのが『大人しく入ってる』みたいな事をお願いしてきたらしい。

赤くて甘くて酸っぱくておいしい果物も貰ったから、約束は守るだそうだ。

リヴァアラ・リコウ・アーベルって人名だよな？ ……………これ、人名は期待しない方がよさそう。

キュイ、食い物で買収されてんじやん……

「キュイ？ キュイキュイ」

誰か来た。足音的や雰囲気的にリヴァアラとか言う……耳の長い、ああエルフか。エルフの……女性？ が部屋に近づいてきてるらしい。

……何コイツ、有能なのか無能なのかはつきりしねえなおい。

そんな風に籠の中で小さく丸くなつたキュイを眺めていると、部屋をノックする音が聞こえたので一応返事しておく。

「はい」

「ん？ 目覚めていたか。調子はどうか？」

扉を開けて入ってきたのは眉目秀麗な麗人の女性。

一瞬、見惚れてから質問の意味を理解して頭の中で質問の内容を纏めて置く。

「えっと、マインドダウンしていた様子で……ダンジョンに入った事は覚えているのですが。以後の記憶が曖昧でして……何があったんでしょうか？」

ここで慌ててキュイを隠すなんて必要は無い。と言うか籠に入られているとは言え、丁重に扱われている様子だし。食べ物で買収したりしてきて俺と同じ部屋にキュイを置いていた辺りこの相手

方は此方に対する害意や悪意を感じない。

「ふむ、覚えていないのか？」

「そうなりますね。ファミリアの仲間と一緒にダンジョンに入ったのは覚えているのですが……」

もう一度思い出そうとしてみれば、今度はダンジョンに足を踏み入れている記憶がぼんやりと浮かんだ。

一時的記憶の混乱が回復してきたっぽい？　まだ全容は掴めないがダンジョン内でへまやらかして保護されたのか？

「そうか、一応此方が把握している範囲だけだが説明するが……その前にこれだけは質問させてもらおう」

ふむ？　訝しげな感じ。なんか疑われてる？　俺、この人と会うの初めてだよな？　と言うかこの世界に来てまだ人を騙すなんて……ベルとヘステイアには色々黙ってる事はあるが、明確に騙して損させたなんて事は無い筈なんだがな……。

「そのワイバーンの幼体はお前がタイムしたモンスターで良いのか？」

ああ、成程。ワイバーンの幼体、キューイをタイムしたのかどうか。

そりや気になるよなあ……モンスターのタイムって基本的に強い冒険者が弱いモンスターを飛ばして『俺の方が強いから言う事聞け』つてのが普通っぽいしなあ。懐いてるキューイを訝しげに見るのも普通か。

「詳しくはステイタスが関係するので説明できませんが、キューイは安全ですよ。少なくとも私が命令しない限りは人を襲ったりはしませんし」

……キューイに冒険者を襲えって命令してもガブガブって噛みついたり、ちよつと火を吹く程度でぶつちやけゴブリンにも勝てないぐらいだから、戦闘能力はお察し。

「ふむ……フィンも安全だとは言っていたが……」

ふいん？　誰だソイツ……いや待て、もしかしてキューイが言っていたフィツデイルアとか言うのがイコールでフィンとか言う奴なんじゃ……じゃあこのエルフがりヴァラ・リコウ・アーベル？　多分、

絶対、発音が違う。

話題のキューイは籠の中で大人しくつぶらな瞳でエルフの女性を見上げている。なにその期待の眼差し……っておいキューイ、テメエもしかしなくてもまた果物貰えないかなって期待してんだろ。完全に食べ物で買収されてんじやねえぞ。俺の相棒だろおまえエ……

「ふむ。わかった。ステイタスに関係するのなら詳しくは聞かない」
常識的行動に感謝。エイナさん曰く、ステイタスはその人の人生や経験を表すモノで、弱点等も分ってしまうのでファミリア内部の仲間同士でもステイタスの開示を行わない所も珍しくないのだと言う。後序に他のファミリアの眷属のステイタスを聞く事は冒険者の非常にマナーが悪く、最悪の場合はファミリア同士の戦争に発展する程の事なのでむやみやたらと聞かない方が良い。自分から同じパーティに参加するメンバーに教える事はあるが全てをあるがままに教えるのではなく、ふわっとしたさり部分、どんなことが出来るかだけを教えるのが普通だと。

ここで強引にキューイを人質……？ 人質で良いのか？にとられて聞きだされるとかなったら……いや、ソレ以前に今の俺は駆け出しも駆け出し。非力過ぎるから強引に聞き出そうと思えばできる。ソレをしない辺りやっぱり害意がある訳では無く、保護されている形なんだろう。

「それで、現状の説明だったな。ここは「ロキ・ファミリア」の本拠だ」
ロウキイヘミスアは「ロキ・ファミリア」で、フォームは本拠ホームだった訳か。

成程、キューイの言う名詞をそのまま鵜呑みにするのはやめよ。危うく恥じ掻く所だったぜ……。

第十四話

ふむ。なるほど。

「ロキ・ファミア」の深層遠征組が帰還途中にミノタウロスの群れに遭遇した際に、フィンが新人育成の為に指揮を次期団長候補の人物に託して、なおかつ深層において活躍の場が無かったサポーター組に編成されていたレベル2、3の団員にミノタウロスの掃討を任せられた所、ミノタウロスが瞬時に反転、逃げ出した為に追撃に入る。

しかし四十階層近くを一気に駆け上がってきた影響も有り、疲労状態が限界に近かった為か追いかける為に編成した追撃組が完全に追いつき切れず、なおかつ道中で怪物の宴等も割り込み、結果として追撃組として編成されたレベル5組ですら完全に掃滅できずに上層に十匹以上侵入。

察した団長であるフィン・デイルムナと言う人物が遠征組の指揮をリヴェリアに託して追撃組に加わる。

その後、上層五階層に逃げ込んだ二匹の内一匹をアイズ・ヴァレンシュタインと言う人物が撃破。

フィンも少し遅れて五階層に入り込んだもう一匹を撃破。

撃破の際にミノタウロスの近くで致命傷を負った状態の俺を発見して、慌てて治療を行い保護。

発見時にミノタウロスは目や口、鼻等をやられて顔面が血塗れだったらしく状況から俺が何かやらかしたっぽいと判断。

と言うか瀕死の重傷の怪我人を一発で治せる『エリクサー』とか言う薬、ヤバすぎだろ。なんか変なモン入ってないだろうか……まあ、ファンタジーでおなじみの万能薬っぽいし、大丈夫か。

「ロキ・ファミア」も遠征で疲労が溜まっていたとは言え、駆け出し冒険者にレベル2でも苦戦必至のミノタウロスをつつけてしまった事を謝罪する意味も込めて「ロキ・ファミア」本拠へ護送。

その途中、ローブの中で縮こまっていたキューイを発見。団長であるフィンが危険は無さそうで、この子のタイムモンスターかもしれないから手出しは厳禁と言う命令を出して一応モンスター用のケージ

……檻？ を用意しようとしたが直ぐには用意できず。鳥籠を代用。キユーイ本人は特に暴れる様子も無く、林檎をあげたら喜んで食べていたので、鳥籠の中で大人しくしてほしとリヴェリアがお願いした所、普通に頷いて肯定。言葉は喋れない様子だがかなりの知能を持ち、なおかつ危険も無さそうと言う事で保護した俺の部屋に一応置いておいたと……
ほほー……ああ、なんかまだ完全に思い出した訳じゃ無いが……一つ疑問が産まれた。

———ベルは？

「すいません、ベル……えっと、白髪に赤目の私と同じ駆け出しの少年が近くに居ませんでしたか？」

ミノタウロスに襲われた？ 危険度についてはエイナさんの勉強で習ったが、確かミノタウロスってレベル2でも避けて通るヤバイ奴だるお？

まあ、「ロキ・ファミリア」の失態について特に指摘する積りは無いし。其処を逆手にとって高額なヴァリスを要求なんてしない。と言うか……なんか「ロキ・ファミリア」側が既に謝罪金などの手配をしているらしい。

数百万ヴァリスだと……マジかよ……。

ええ……俺とベルが3階層へ一日ガッツリ潜ったとして収入って3500ヴァリス前後だぞ？

数百万とか……多すぎイ……と思っただが、どうにも「ロキ・ファミリア」側としてはそれでも少なすぎるらしい。

深層遠征での利益は数億ヴァリス単位になるらしい。でつかいファミリアって金銭感覚ぶっ壊れてるのな……

ああ、忘れてたが「ロキ・ファミリア」と言えばオラリオ最大派閥……えっと、美神のフレイヤ、悪神のロキと言うオラリオを二分する最大派閥の一つらしい。

収入が億を超えるとか……

一級冒険者と呼ばれるヤベエのがゴロゴロ所属しているヤベエファミリアらしい。

ふうむ。変に敵対するのは不味いし、このまま何事も無かったかの様に帰りたい。

でもミノタウロスになんかしでかしたりだとか、キューイ関連で絶対目つけられてるだろこれ。こんなクソ弱な幼女に何期待してんのですかねえ……まあ、割と使える魔法やラスキルは習得してるからアレか……

「ふむ？ 少年……少年か。すまないなそう言った少年が居たと言う報告は聞いていないな。今回の騒動に置いて、被害者はお前一人だけだったと言う話だ」

……嘘、では無さそうだ。本当に知らない様子である。

まあ、目の前のエルフの女、リヴェリア・リヨス・アールヴだったか？ この女が欺瞞に長けている可能性は否定できないし。ファミリアぐるみでこつちを騙そうとしてきてる可能性は無くはない。

………無いか。このリヴェリアと言う人物、オラリオでも片手の指の数しかないレベル6冒険者であり、なおかつ「ロキ・ファミリア」の副団長と言う立場の人間らしい。

わざわざ副団長なんて肩書を持つ偉い人物が、目の前で頭を下げたんだぞ？

エルフってのはプライド高く、異性に触れられただけで激怒する様な種族って話だし。そんなエルフの中でも更に上の地位に居るらしいハイエルフと言う種族のこの人物がわざわざ一介の駆け出し冒険者の俺に頭を下げるか？

ありえんな。

「そうですか……」

ベルは無事か？ 危険度ヤバイらしいな……ベルは敏捷が高めだったし、逃げれると思うんだが……

と言うか、俺ってどれぐらいの期間気絶してたんだ？

「ああ、すまないな。迷惑をかけてしまった」

「いえ、誰しも失敗はあるでしょう。死んだ訳でもあるまいし。それ

よりも私はどれぐらいの間気絶していたのでしょうか？」

もしかして二日三日？ な訳無いか。流石に二日三日寝たきりなら素直に体が動くなんて事無いからな。

「5時間程度だな」

……ファツ!?

え？ 瀕死の重傷＋マインドダウンだった俺が、発見されてからまだ5時間!?

冒険者の回復能力はバケモノかよ……。

「ふむ……すいませんが一度、帰っても良いですかね？」

「む？ もう少し休んでいても構わないが」

自分のファミリアの本拠に他ファミリアの団員が居るのを危険視するファミリアもあるらしいが、別にそこらを気にした訳じゃ無い。

と言うか、他ファミリアの団員を危険視するって辺り、複数のファミリアと敵対してたりするんじゃない？……あー。

神ロキ、もしくは悪神ロキ。割と有名な神様な気がする。

えっと、北欧神話随一のトリックスターだとかどうとか……具体的に何やったのかは覚えてないが。悪神と言う名から大体察しがつく気はする。

下界に下りてから悪神の側面は揺らいだから安全……と言う訳ではないにしろ大人しいらしいが……。

美女・美少女好きなんだっけ？

……ミリアちゃんは美少女……えっと、美幼女の方が正しいのか？

どちらにせよ可愛い容姿なのは間違いない。

……そっち方面で目つけられても困るんだよなあ……。

「いえ、主神にベルの無事を確認したので」

確か神と眷属はファルナによって繋がりが確保されていて、神は眷属の状態をぼんやりとだが理解できるらしい。

勘の良い神や、鋭い五感を持つ神等は眷属が何処で何をしているのかすらファルナを通じて理解できるらしいな。個人のプライバシー何処行つた……ああ、眷属だもんね。神の下僕だよ。プライバシーなんて無いよね。

「ああ、そういう事か……お前の着ていたローブ等を持ってくる。少し待っていてくれ」

「わかりました」

そう言うのと部屋を出て行くリヴェリアさん。ふむ……エルフって年齢が見た目で測れないって言うが、どれぐらいの年齢だろうか？女性の年齢を聞くのはアレだが……。

……え？ ミリアちゃんの年齢？ 確か『ミリカン』では14歳って設定だったが。今？ 中身は40過ぎのオッサンだよ……ははっ、笑えよ。

と言うかわざわざ一介の駆け出し程度に副団長が出張ってきて相手してるって不思議な光景なんだが……

ふうむ？ キューイが危険視されてる？ 訳じやなさそうだが……なんだかなあつて感じた。

割と目をつけられてそうで怖い。なんたって「ヘスティア・ファミリア」は登録してからまだ二週間の駆け出しファミリアである。最大派閥に圧力かけられた日には一時間持たずに崩壊するぞ……と言うか潰れる。

「なるほど、その服の中の不思議な袋はその幼童を入れておくモノなのか」

「そうなりますね」

興味深そうに此方を眺めるリヴェリアさんを流し見てから身嗜みを整える。

持ち物関連は、残念な事に木の杖がミノタウロスに掴まれた時に押し折れていたのと、ポーション関連も小瓶が砕けてアウトー。

その他は血塗れだったので綺麗にしてくれたらしい。

一応、持ち歩いていたナイフは大丈夫だったが。杖が折れたのは若干痛いと思うが、どうせ600ヴァリスの安物である。手痛い出費と言えばそうだが、背骨をボキッとやられるよりはるかにマシである。

「ロキ・ファミリア」の倉庫から好きな武具をーなんて言われたが……遠慮しといた。

どうせ使われていない物だから好きにしても良い？ 必要な者に使われる方が武具の為？

杖一本でいくらすると思ってるんだ。一本で数百万は当たり前だぞ……魔法の触媒と言って持っているだけで魔法の威力を高めてくれると言う素材を使った杖とか、そんなん渡されても困る。

何のためにミリアちゃんの初期装備の見た目だけ豪華な杖やロブを本拠に置いておいて安物を身に纏っている？

他の冒険者に目をつけられない為ですよ？ 其処に「ロキ・ファミリア」の倉庫に放り込まれた不用品を？

馬鹿言え、最大派閥の不用品なんて駆け出しファミリアじゃ絶対手に入らない武具に決まってるんだろ。何処で手に入れたのかなんて疑問に思われるし、最悪ごろつき連中に目をつけられかねん。地雷過ぎんだよ……

「謝罪金等は流石に今すぐは受け取れませんので、また後日伺います」「む、そうか」

今すぐ受け取る？ 数百万ヴァリスを背負って「ヘステイア・ファミリア」の本拠へ？

はつきり言って「ヘステイア・ファミリア」の本拠は防犯関連が死んでるからなあ……

廃墟に大金持ち込むなんて怖くて出来ねエよ。このままばっくくれてしまおうか……

無理かなあ……キューイとかで目を奪ってしまってるしなあ。

「そうだ、すまないが帰る前にフィンと少し話をしてもらえるか？」

「良いですよ」

できればさっさと帰りたい。と言うかベルは本当にどうなったんだ？ 怪我人やらは居ないらしんだが……

まあ、俺を助けてくれた人っぽいし一応礼は言っておくか。

「ついてきてくれ」

しっかしこのエルフの女性は……クール？ あんま笑みを向けて

こない人だな。緊張と言うより真面目……なのだろう。いや、エルフと言う種族全体的に愛想笑いを嫌うらしい。潔癖な側面つてめんどうなんだな。まあ、別に笑顔で出迎えられても裏があるんじゃないかと疑う羽目になるから今のままでもいいんだが。

リヴェリアさんの後ろをぼてぼてと歩いていく。

キューイはお腹の袋の中に放り込んでおいた。赤いの食べたいとか言ってたが無視。強引に捻じ込んでおいた。こいつには後で説教しておかなくては。食い物程度で買収されるとか笑えない。

しかし……なんだ、この、凄いでござる感。

複数の尖塔が連なった炎の様な見た目の「ロキ・ファミリア」の本拠……『黄昏の館』だったか？

黄昏つて辺りに大分皮肉を感じるのは、神話を聞きかじった俺だからか？ ベルに言わせると「かつこいい」らしいんだが。

まあ、ベルくんも二つ名に憧れてるらしいから何とも言えないが。

そう言えばそのフィンとか言う人物も【勇者】^{ブレイバ}とか言う二つ名を持つてるらしい。

アイズ・ヴァレンシュタインが【剣姫】、リヴェリア・リヨス・アルヴが【九魔姫】^{ナインヘル}……

どれも痛々しい事で、でもかつこいいと褒め称えたり羨ましがったりする冒険者が多いのはなんともなあ……。

まあ、ともかく、内装自体は割と落ち着いた感じなのだが、尖塔を沢山くつつけたようなデザインだからか内部構造が妙に入り組んでいる様に感じる……。

まあ、それはともかく。俺が居た客室は、大分離れた所にあつたらしい。まあ、当然か。警戒してるっぽいな。むしろ警戒してんのに客室が用意されてるってどういう……。

そんな風に考え事をコロコロしてたらふと気が付いた。歩くのが辛くない。

と言うかちらつと前のリヴェリアさんを見上げて、納得。

無愛想に感じはしたが、この人相当気遣い出来る部類の人だな。

ベルと歩いていると時々歩幅の違いで此方が小走り状態になる時

がある。そこら辺は女性に不慣れなベル君なら仕方ないが、割と直ぐに気が付いてペースを落としてくれるが。

このリヴェリアさんは最初から俺のペースで歩いているらしい……と言うか妙に慣れてんな。

まあ、良い。無愛想に感じた女性の意外な一面でコロッと落ちる男も、逆のパターンもよくあるが。別に綺麗だから惚れるなんて事は無い。

なんでかって？ あの糞女も、見た目だけは絶世の美女だったからな。それこそ傾国のとか言われるレベル。実際、国の重役辺りを誑し込んでやらかしてたからな……あの糞女。しかも俺まで巻き込んだ。

「ここだ、少し待っていてくれ」

つと、そんな事を考えていたらフィンとやらが居る部屋に到着したらしい。

「フィン、例の被害者を連れてきた」

部屋をノックして声をかけている。ふうむ、普通にノックしているが地域によってはノックの習慣が無いのが普通らしい。ベルなんかはノックをしない事もあるしな。まあ、別にみられて困る体じゃないしなあ。

「入って良いよ」

中から聞こえたのは落ち着いた子供の声。え？ 子供の声？

リヴェリアさんが扉を開けて中に招いてくれる……あのさ、この人、普通に副団長つて言う肩書あるんだよね？ なんでそんな召使みたいに恭しく扉を開けてくれるの？ ぶっちゃけ気が引けるんだが……

「目が覚めたのかい、無事で良かったよ」

………シヨタつ子王子様がソコに居た。ええ!! 待って、何こいつ………って、ああ納得。

キューイの言ってたミリアの男……パルウムの男性ってコイツの事か。

なるほど、ミリアの男版……金髪に碧眼の王子様風の少年が執務

室っぽい部屋のデスクに座って微笑みを浮かべている。

「はい、お陰様で……助けて頂いてありがとうございます」

「いや、礼はいらないよ。元を言えば僕たちの責任だからね」

しっかりと頭を下げて礼を言えば微笑みつつ返事をしてくるフィンと言う男性。

十中八九幼い見た目と落ち着いた雰囲気からパルウム、しかも相応に歳は食ってる感じか。

と言うか、これで見た目通りのシヨタだつて言ったら俺はドン引きだよ。

指し示されたソファに腰かければ、対面にシヨタ王子様が座つた。

「自己紹介をさせてもらおうよ。【ロキ・ファミリア】団長をやらせて貰っている【勇者】^{フレイバー}フィン・デイルムだ。よろしく」

「えっと、ミリア・ノースリスです」

丁重な自己紹介だけではなく、リヴェリアさんは紅茶やらを用意してくれて……。

……あのさ、最大派閥の【ロキ・ファミリア】の団長が、一介の駆け出しファミリアの駆け出し冒険者にどうしてこんな仰々しい対応すんのかね？ ……キューイか？ キューイが悪いんか？

キューイ、テメエ……とことん足を引つ張りやがって……どうにかして返品できねえかな。

「リヴェリアから話は聞いたよ。一度ファミリアに帰りたいつて話だったね」

「はい、一緒に組んでダンジョンに潜っていた仲間が気になりますので」

緊張する訳ではないが、やはりここまで仰々しい対応を、しかもかなり目上っぽい役職の人達にやられると反応に困る。何か期待されてる？ と言うかこのフィンとか言う男……。

……ああ、ダメだな。俺、こいつ大嫌いだ。

「そうか……謝罪金は後日受け取りに来ると言う話だったかな」

「そうですね。直ぐに受け取っても扱いに困りますし、駆け出しの私

が大金を持ち歩くのも悪目立ちする恐れがありますから。それと一つ相談、というかお願いがあるのですが」

「お願い？　なんだい、僕に出来る事なら出来る限り力になるよ」

「……………媚びてくるなコイツ。しかも目はこつちを覗き込む様に見てきやがる。探りを入れてこようとしてんのか？」

「キューイ…………私が連れていたワイバーンの幼体については他のファミリアやギルドに報告しないでください。ギルドにも未報告で連れ歩いているので報告されると困るのです」

無許可でモンスターを連れ歩いていた。あまりにも突かれると痛い、そもそもこんな風に他ファミリアに保護される様な失態を犯すとは思わなかった。

と言うかダンジョン内部での出来事は自己責任だから、誰かが助けしてくれるなんて考えない方が良いつて話なのに、普通に助けてくれ…………ああ、「ロキ・ファミリア」の所為だからか。

「ああ、それについては心配しなくても良いよ。その幼竜の事で何か脅したり、なんてことは絶対にしないから。なんなら二つ名に誓っても良い」

…………二つ名に誓う、それがどれほど重い意味を持つのか知りもしないが。

どんな言葉も信用なんて出来やしない。

言葉なんて、簡単に偽る事が出来るんだから。

俺は神様じゃない。だから嘘がわからない。

そもそも、自分の言葉ですら信用ならないのに。誰かの言葉を信用しろと？

なんなら、俺は愛してもいない女の為に『愛してる』と囁く事も、『キミが好きだ』と告白する事だって出来る。必要ならば絶対に関わり合いいになりたくも無い屑共を『親友』だと言って信用したふりをする事だって出来るんだからな。

第十五話

怪しい、何が？ 簡単だろう。

相手に対して譲歩する様な交渉をする様な奴に碌な奴はいない。

ベルやヘステイア様なんかは、わかりやす過ぎるぐらいに真つ直ぐだから疑うのも馬鹿らしい。アレで演技でしたーなんて言われた日には俺は首を吊つても良い。

ともかく、俺を保護してくれたらしいオラリオ最大派閥の「ロキ・ファミリア」の団長、フィン・デイムナと言う人物と話をしているが。コイツは何か裏がある。生前……いや、今も生きちゃ居るが。ミリアになる前、こんなやつは沢山見て来た。

男も、女も、何かしらの目的を持つてる癖に妙に笑顔で相手に譲歩する様な交渉をする。

そして、その譲歩にホイホイ乗ると大概碌でも無い目に遭う。

フィン・デイムナもそのタイプの人間だ。関わり合いにもなりたくないし、そもそも視界に納めるのも嫌だ。

だからと言って、此方が相手を嫌っている事を察せられると何をされるかわからん。

フィン・デイムナがどういった思惑で動いているのかすらわからない現状、下手に手を打てない。

……そもそも、最大派閥の片割れ「ロキ・ファミリア」の団長の立場に収まっている時点でやりたい放題出来るだろう。俺がどんな抵抗したって無駄か。

「ふむ。なるほど」

目の前で柔らかな笑みを浮かべて此方の言い分を聞くフィン・デイムナ。

怪し過ぎるからオマエ、良いか？ 笑顔で交渉の席に着く奴は大抵腹に何か抱え持つてるんだぞ？ 特に相手を安心させる笑みって言うのは真つ黒である。

ここで一貫して至極真面目な雰囲気で見聞して真顔のまま対応してきたのであれば騙されかけただろう。

どの道、このフィン・デムナと言う人物は腹に何か抱えてやがる。変に付き合うのも馬鹿らしいし、そんな事に巻き込まないで欲しい。あの糞女みたいに俺を巻き込むのなら途中で掌返す事も厭わんぞ俺は……二度目だから、今度は上手くやるさ。

「はい、私自身、マインドダウンしていた様子で当時の事をよく思い出せないんです」

質問の内容はシンプル。何かあったのか？

一匹目のミノタウロスが侵入してから優に20分間、駆け出しがどうやって逃げ回ったのか？

最後にフィンが発見した際にミノタウロスは顔面を……正確には目を中心に鼻の辺りにまで負傷が見られた。

少なくとも視力を奪われて暴れ狂っていたのだが、何をしたのか？

そこら辺の質問に普通に答える。

そも、覚えちゃ居ない。ベルはどうなった？

「此方からも質問よろしいですか？」

「ん？ 気になる事があるなら聞いてくれ」

やっぱコイツの笑み不自然だよな。

「白髪、赤目の少年……私の仲間を見ませんでしたか？」

一瞬だが、フィンの眉がピクリと動いた。なんだ？ もしかしてナニか知っているのか？

よもや、ベルに何かあったのだとしたら……レベル6ってどうやって殺せるんだ？

「白髪……赤目……少年……確認していないかな。団員からの報告も上がっていない。君が倒れていたのは六階層に通じる階段の傍だったけれど、その後の周辺探索で冒険者の死体は見つからなかったよ」

……嘘の気配はしない。真面目な表情で思案している。欺瞞に長けてる可能性は否定できないが、今すぐどうこうする理由は無い。一度帰ってヘステイア様にベルの無事を確認してからで十分か。

……ふむ、しかし六階層の傍で？ 俺は上の階層に逃げなかったの

か？ ベルだけ逃がして俺は囷にでもなった可能性は高そうだが……なら、ベルは大丈夫なはずだが……。

「分りました」

「力になれなくてすまない」

しつかしまあこのフィン・ディムナって奴、考えてる事がさっぱりわからん。

魔法とスキルの存在がバレてる？ でも神の使う語言……えっと、この世界の普通の言語である共通語コイネーとは別に神様独自の言語……ヒエロクリフ神聖文字って奴で書かれてるから地上の子供ではまず読めないって話だが……

いや、待て、このファミリアにも主神が居るだろ。ソイツに背中見られてたらアウトじゃねえかつ!?

「……すいません、もう一つ質問なのですが。【ロキ・ファミリア】の主神は……」

その質問をした途端、フィン・ディムナの雰囲気少し揺らいだ。なんだ、その反応……。

「ロキは今帰ってきた団員にじやれついていてね。久々に会った眷属こどもといちゃつくんやーって言っていてね……こんな状況だから、出来ればロキにも会って欲しかったんだけど……」

困った様な笑みを浮かべて本心かららしい溜息を零したフィン・ディムナの様子を見て察した。

ああ、神話通りに奔放で好き勝手動く神なのか……

と言う事は気絶中に背中を見られてスティタスを読み取られた可能性は低そうだな。

神様ってのは眷属こどもの珍しい魔法やスキルを希少等レアと呼んで収集したがるらしいし。俺の魔法は『ミリカン』関連でレアっちゃレアだし、見られてたら迷わず狙ってくるだろう。

と言うかロキは策謀に長けた神。天界のトリックスターなんて呼ばれるヤベエのだぞ？

天才的だとか天賦の才だとか言われた神童とか謳われてた俺も所詮は人間。神になんて勝てる訳無い。

要するに狙われたらアウトじゃねえか……絶対この【ロキ・ファミリア】とはお近づきになりたくない。

「そうなのですか」

「ああ、所でさっきの少年は……君の恋人とかかい？」

悪戯っぽい笑みの質問に思わず首を傾げる。何言ってるんだコイツ……場を和らげようとしてもしてんのかね。

「いいえ、違いますが……まあ、好意を抱いている人と言う意味では間違いないですよ」

純粹に此方に接してくるベルは、身構える必要も無い貴重な人間だ。ヘスティア様も同じく腹の内に何か抱えて此方に接して来る事が無い。前世では絶対に出会う事の無かった人達……。

もしそんな純粹な人間に出会っていたら……絶対に考えたくも無い事をしていただろう。丁度騙しやすそうだし……反吐が出る様な屑だな。何でこんな所に居るんだか。

「なるほど……」

考え込む様な仕草をしているフィン。

和ませる為の質問じゃなくて探りの質問？ ……なあ、もしかしてオマエミリアちゃんに惚れてんの？

まあ、無いか。こんだけ美少年で通る上に実力も有る。そして演技も相当上手いと来ればどんな女もいちころだ。要するにあえてミリアちゃんを狙う意味も無いだろ。

もつと綺麗所を、其れこそ日替わりで違う女を抱けるぐらいの地位だろあんた……。

「ところで、そろそろ話を切り上げてても良いですかね。仲間の安否が気になりますし」

と言つても、10分も経っちゃいないがな。

ぶつちやけ直ぐにでもこのフィン・デイルムナから離れたい。何より鏡見てるみたいで気持ち悪い。

「ふむ、そうか。確かにこのまま長居させるのも申し訳ないからね。次来るのは三日後で良かったかな？」

「はい、明日すぐにと言うのもアレですし。其方も遠征等の処理も有

る事でしようし」

「それはありがたい。三日後には謝罪金なんかもしつかり用意しておく。それじゃあ、出口まで案内するよ」

……普通に解放するのか。と言うか俺の所属ファミリアとか教えて無いが……いや、ぶつちやけ【ロキ・ファミリア】って時点で主神ロキだろ？ 多分ウチの主神が『ロキめ……』とか悪態ついてたし、不仲なファミリアだろうから黙ってたんだけど……。良いのか？

「ああ、そうだ。これを渡しておくよ」

思い出したかのように渡されたのはハンカチ……えっと、笑う道化の文様の浮かんだ……おい。【ロキ・ファミリア】のエンブレムだろこれ。

「次、訪ねて来たときはこれを門番に見せて僕に用事があるって伝えればすぐに案内するから」

……あつ、察しがついたと言うか。こいつアレか。こっちが警戒してるの理解して踏み込むのやめたっぽいな。探る様な視線が揺らいでる。

……しまったな……相手に感情が読みとられてるのか？ 表面上を取り繕うのはそこそこ自信があつたんだが……。

本当に普通に見送られそうである。キューイの事に突っ込む訳でも無し。脅す訳でも無し。ただ客人を送り出すかの様に【ロキ・ファミリア】の門番も槍の石突を石畳に突いて敬礼してるし……。

「それじゃあまた三日後に」

「はい、助けて頂いてありがとうございます」

もう一度言うぞ？ 団長直々に見送りとかオマエんとこ頭大丈夫か？

こっちは一介の駆け出しファミリアの、駆け出し冒険者だぞ？

オラリオで最大派閥の片割れである【ロキ・ファミリア】の団長様が、だぞ？

わざわざ見送りに？

絶対なんかあるだろ。できればもう二度と関わりたくない……でも数百万ヴァリスあれば教会の修理できるしなあ……ううむ……金か……畏か……ううん……。

とりあえず振り向かず歩いていく。背中にすつげえー視線感じるけど、ヤメロオー……と言うかここは何処……とりあえずバベル方面へ……いや、大通りに出るか。

二週間の間、少しエイナさんとオラリオの地理についても学んだ成果だろうか。なんとか大通りに出られた。ダイダロス通りとか言う頭のおかしい迷路的なヤバイ所があるらしいので近づきたくない。

と言うかダイダロス通りって……地下迷宮ってお前が作ったんじゃ……ミノータウロスとかダイダロスが関係してなかったか？

気の所為か……？

まさか迷宮は神様が娯楽の為に作りましたー……なんて事は無いな。どうにも神様が天界とやらから降りてくる以前からあったっぽいし。

神の恩恵無しに迷宮に潜る冒険者も居たらしいからなあ……恩恵無しとか信じられんぞ。ぶっちゃけ恩恵がでか過ぎて無い時の事とか考えられんな。身体能力向上もそうだが、精神面の強化もあるっぽいしマジ便利。

「キューイ」

ふむ？ 袋のキューイがベルの感じがするって……ベル？ 何処だ……と言うか気が付いたら冒険者ギルドまできてんじやねえか……考え事し過ぎたか。

【ロキ・ファミリア】の本拠『黄昏の館』は北のメインストリートにあり。『万神殿』パンテオン通称『冒険者ギルド』があるのが北西のメインストリート。

と言うか道に迷ってんじやネエか……冒険者通りだろここ……まあ良いか。エイナさんの所に顔出して……つてそろそろ日暮れ時か。夕焼けが綺麗に街並みを染め上げて……つて、5時間も

意識失つてた割に……。

まあ、一二階層ガン無視で三階層に潜つて……一時間程度で四階層につて……新米がやる事じゃなかったな。稼ぎも今日は最悪だろうし……。魔石関連は全部ベルが預かってたからアレだが……。

……荷物持ち、俺がやった方が良いかねえ……女の子だからとか言つてベルは大分気を使つてくれるし。

いつも通りのオラリオの風景、と言つてもまだ慣れない。

猫耳、犬耳等の獣人や、長耳のエルフ。背は低くとも大柄なドワーフはまだRPG系のVRゲームでお馴染みと言えはお馴染みなのであまり気にならないが、大分薄着と言うか肌を晒す踊り子を彷彿とさせる褐色の美女美少女が普通に街中を歩く光景は余り見慣れない。

前に何処かのファミリアの眷属かと思つていたが、どうやらアレはアマゾネスとか言う種族らしく。種族総じて羞恥心が無い……少ない？ らしく。女性しかいない種族らしい。

戦場で強い男見つけたらその場で逆レかます事もあるらしい。なんてうらや——恐ろしい種族なんだ。

と言うか、どの種族とも子供が残せて、生れるのは女の子のみつて……割と種族特徴ヤベエンじゃ……と思つたが。一人の男に固執するんじゃない事がない、強い男にのみ固執して、弱いと判断されたら見向きを困つて……と言うか、種馬としてしか見ない上に、血の気が多いのか同種族同士の殺し合いとか日常茶飯事らしい。と言つてもオラリオに居るアマゾネスは其処までではない様子だが、血の気が多いのは変わらず。

戦闘民族なのか……怖いわ。絶対関わり合いになりたくない。

……【ロキ・ファミリア】に【怒蛇^{ヨルムガンド}】と【大切断^{アマゾン}】とか言う二つ名聞いただけでチビりそうなヤベエ感じのアマゾネスが居るらしいので、今回そいつらと出会わなくてマジでよかったわ。本当にな……はあ……今度行く時、絶対出会わない事祈るか。

と言うか、この世界つてもしかなくてもエロゲの世界なんじゃ……だって、アマゾネスとかソツチ系大歓喜でしょ？ ホラ、逆レ好

きつて多そうじゃん？ 俺？ 無いな。

パルウムも特殊な性癖には堪らんだろうが……そうなるとミリアちゃんの貞操もヤバイのか。まあ、パルウム自体オラリオでは目立たないしあんま居ない種族っぽい。どうにも雑魚扱いが普通らしい。歩いてても微笑ましげに見られる場合が多いが、パルウムの冒険者だと分ると途端に態度が急変する冒険者多いっぽいしなあ……

子供が頑張ってるのは微笑ましくとも、小人族が頑張ってるのは生意気なんだと。よく分らない倫理観である。

そんな事を考えながら何気なく周囲を見回しながら冒険者ギルドに歩いていく。

と言うかキューイ曰くベルが居るはずなんだが……何処に居るんだ？

そんな風に周囲を見回していると、冒険者ギルドから嬉しそうにベルが駆けだしてきたのが見えた。

ああ、無事だったのか——

「エイナさん大好きーっ!!」

……え？

………人が心配してたのに、肝心のベルくんはエイナさんとヨロシクやってた訳か………。

純情そうな顔してよくやるわ。まあ、無事だったみたいだから良いか。

第十六話

ベルはどうやら【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインに助けられたらしいんだが……。

俺自身は何があつたのかうろ覚えだが、どうやらベルを逃がすために囿になったらしいが、俺がどうやってミノタウロスに一杯食わせたのかはワカンネ。

ベルは俺と別れた後、別のミノタウロスと出会ってしまい、恐怖のままに逃げ出したのは良いものの、がむしやらに走り回ったせいで部屋の隅っこに追い詰められてしまい、恐怖から俺が囿になって逃げた事も頭から吹き飛んでもうダメだと諦めかけた時に件の【剣姫】が颯爽と現れてミノタウロスを細切れにしてしまったらしい。

その華麗な姿に心奪われたベル少年は、女性に対する免疫のなさ、ミノタウロスの血に濡れた自身の姿のあまりの情けなさに思わず逃げ出してしまったのだと言う。

その後、ダンジョンから出てバベルの地下一階で正気に戻り、周囲の冒険者に笑われているのに気がついたのと同時に俺の事を思い出して慌ててダンジョンに戻ろうとしたがミノタウロスの事を思い出して周囲の冒険者に五階層でミノタウロスに出会ったことを伝えて俺を助けて下さいと頭を下げて回ったらしい。

しかし、周囲の反応は芳しくなく自分達では無理だとそそくさとダンジョン探索予定を変更して逃げ出すものばかり。

助けに応えてくれる処か、俺が小人族の冒険者だと言うのを知ると「身の程知らずの糞生意気な小人族が死んだただけだろ」と笑われる始末。

もしかしたら【剣姫】が……なんて期待するも、俺の魔法の音はベルが最初に悲鳴を上げてから途絶えており生存は絶望的。

周囲の冒険者も「もう死んでるだろ、それ」と完全にベルを慰めるモードへ……

自棄になったベルは自身で俺を探そうとダンジョンに再度入ろうとするが、上層に危険なモンスターが出現したと言う事で【ガネー

シャ・ファミアリア」がダンジョンへの侵入制限を行うと入口で止められてしまった。

「ガネーシャ・ファミリア」行動早すぎだろ。

強引に突破しようとする問答しているさ中にギルドから緊急で駆け付けたエイナさんに見つかり、エイナさんの説得の末ギルドへと足を運んで血塗れのままだったのでベルはシャワーを浴び、頭を冷やすことに。

んで、そこからベルが俺を置いて逃げてしまった事や、自身の掻いた恥なんてかなぐり捨ててでも【剣姫】に俺を助けてくれとお願いするべきじゃなかったのかと自分を責め立てたそうだが……。

結局、それなりに時間経った後に【ロキ・ファミリア】から今回のミノタウロスが上層に侵入した事件に関する報告がギルドにあげられ、【ガネーシャ・ファミリア】の団員もダンジョンから引き揚げたそう。

んでその【ロキ・ファミリア】の報告の中に被害者は一人のみであること。その被害者の特徴が小人族で金髪、ぼろいローブ姿の少女であり……まあ、要するに俺を【ロキ・ファミリア】が保護し、治療を行っていると言う情報もあったためエイナさんがベルに伝えた。

でもベル自身ももしかしたら別人かもしれないからと、自分でダンジョンに探しに行きたいとエイナさんにせがんだが、エイナさんが当時ダンジョンに潜っていた冒険者や、同じ金髪にぼろいローブ姿の小人族の冒険者が俺以外に居ない事等でベルを説得し、ベルも漸く納得。

……ベル君が多少なりとも情報を鵜呑みにしなくなったのは良いんだが。其れが原因で一人でダンジョンに潜ってたらちよつとアレだったな。エイナさんが居てマジ助かったわ。情報を疑う事を教えたの俺だけど余計な事したかな……。

迎えに行こうか、と言う段階になって【ロキ・ファミリア】の【剣姫】に助けられておきながら礼も言わずに逃げた事や血塗れで恥を掻いたを思い出して【ロキ・ファミリア】に尋ねに行き辛くどうしようかうじうじ悩み始めると……。

エイナさんがベル君を励まして……んで、エイナさんの励ましで漸く迎えに行く決意をしてギルドを飛び出したと。

血塗れの防具や衣類を洗浄してくれたりだとか、わざわざつきつきりで励ましてくれたりだとか、俺の情報をいち早く知らせてくれたりだとか……エイナさんもしかしてベル君に気があるのか？

じゃなくて、そこら辺の事でエイナさんに感謝していたらしい。

俺もエイナさん大好きー。マジで、いやあ、あの人やっぱ有能だわ。キューイとは大違い。林檎食いたいつてうるさいもん。

……と言うか俺の所属ファミリア、割れてね？ ギルドに保護した冒険者の情報問い合わせたろ、絶対。

だから所属ファミリアとか聞かなかつたのか……。

「それで、ヴァレンシュタインさんが——」

これで、何回目だろう。

俺の無事を喜んでくれたベル君だが、どうやら【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインと言う人物にほの字らしい。まあ……どんな人物かは少ししか知らんが。

えっと、所属は【ロキ・ファミリア】。あのヤベエ奴らが集まってる所。

んで、二つ名は【剣姫】でレベルは5、年齢はベルの二つ上の16歳。

好きな物は『じゃが丸くん 小倉クリーム味 クリームましまし』で、趣味は『ダンジョンアタック』。

見た目は金髪の人形の様な美少女。最近は胸も大きくなってきたらしく少女らしさと女性らしさが同居する破壊力抜群の見た目をしているらしい。へえ……。

後は6歳と言う若いなんてレベルじゃなくて幼い少女が一年と言う短い期間でランクアップし世界記録を残しているらしいんだが……。

失礼な話だが、噂に聞く限り人間の皮被った化け物かなんかだろ

……。

その他色々良い噂も悪い噂もある……。ううん……。ベル君は完全にほの字っぽいんだが……。

ヴァレンシユタインだったか？ ソイツ「ロキ・ファミリア」なんだよなあ……。

フィン・デイルムナが嘘吐いてた？ 可能性は高そうだが……。助けた相手に逃げられてしまって話が出来なかった？ 詰る所素性が不明だったから未報告？ でも助けた事ぐらい一応報告するだろ。ハウレンソウは組織として重要だぞ。

どちらにせよ「ロキ・ファミリア」に所属しており、なおかつ高レベル冒険者と言う事で相応に地位もあったはずなんだが……。報告を怠ったっぽいな。もしくはあの糞王子が嘘吐いたかだ。くつそやっぱ嫌いだわアイツ。

まあ、良い。

問題はベルの方なんだが……。所詮駆け出しの少年が、助けられた事に感謝し、かつこいいい姿や可憐な姿に憧憬と恋心を抱いた。非常に解りやすい。

だが、問題はヴァレンシユタインの行動から読み取れるベルの印象だが……。

路傍の石ころ。そんな所か。

【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン

可憐な容姿、ヒューマン種の中では最高峰とも言える剣の実力、幼い頃から世界記録を数多塗り替えた超人……。

そんな人物だが、二つ名の【剣姫】には別名が存在する。

【剣鬼】アイズ・ヴァレンシユタイン

モンスター相手に容赦のない攻撃、その他の冒険者が居ても見向きもせずより強いモンスターを求めてダンジョンを徘徊し、モンスターの血に塗れたまま、眠りもせず、食事もとらず、やつれた姿を晒しながらもただ只管にモンスターを狩る鬼の様な剣士……。

要するに強さ以外に興味を示さない化け物の様な女、それがアイズ・ヴァレンシユタインと言う人物。

そんなアイズ・ヴァレンシユタインからすれば、ミノタウロスは必要だったから倒した程度の認識。

ベルは其処らに転がってた石ころ。報告の必要性も感じなければ、関わり合いになろうとも思わない雑多な背景。

それでもなければ助けた相手のことを団長に報告しない訳がない。死んでないし良いかと思考の端っこにも引つ掛からなかった可能性もある。

詰る所、ベルはそもそも冒険者として認識されているかどうかすら怪しい。

……まあ、全部推測だし。本人に会ってみたら意外と——なんて事があるかもだが。ぶっちゃけ今のほの字のベル君は……。

仕方ないか、エイナさんも助けてもらったのに逃げた所為で【剣姫】に会い辛いと言うベルに【剣姫】がどんな人物か教える際に恐ろしい噂は全部排除したっぽいしな。

当然、路傍の石ころ扱いされてるかも……なんてベルに教えた日にはベルは【ロキ・ファミリア】に絶対に近づけなくなるだろう。そうならない気遣いから悪い方の噂は全部カット……其れは其れでなあ……。

綺麗な側面だけを見て、其処に惚れ込むのはヤバイ。もしその【剣姫】と言う奴が本当に【剣鬼】であったのなら……ベルは酷く傷つくだろう。

そう言った姿は見たく無いんだが……恋心つてのはどうしようもない。

変に引き剥がせば傷は永遠に残る。かと言って近づきすぎれば、より心の深くまでその恋心が浸透した状態で引っぺがされたら……。

まあ、その時はなんとか慰めますか。ミリアちゃんも容姿は可愛いし、なんとかなるだろ。妹みたく全力で甘えてみるとか……ヘステイア様も居るし。挫折して動けなくなるなんて事は無い筈だ。

「それでね」「ベル」「ん？」

「ヘステイア様の前でヴァレンシユタインさんの話はやめておいた方

が良いでしょう」

「え？　なんで？」

「……………」

とことん、女性関連の耐性も無ければ、経験も無いな。まあ経験豊富だったら冷静に【剣姫】の情報を精査するんだろうが。其処まで行けば人間不信……他者を疑う事しか知らない愚か者になるが。まあ、ベルの良い所か。

「助けて貰った、の一言で済まさないと……何度も同じ話をされれば、流石に飽きますし」

神様はどうやら一度見た光景や話を決して忘れる事は無いらしい。人間も一応覚えてはいるが思い出せないって言う話だっけか？　まあ、ともかく。神様からすれば愛しのベル君が知らない女に惚れ込んだと……。

そもそもベル君はヘステイア様がベル君を異性として見てるとか知らないのか。まあ、ベル君からすれば神様は神様、家族みたいな距離だからなんともしようが……。

と言うかヘステイア様もヘステイア様で、押せ押せ過ぎてベル君が引いて……アレはベルを慣らす意味もあるっぼいんだが。なんともなあ……。

「えつと……僕、もしかして同じ話を何度もしてた？」

「そうですね、ミノタウロスが一刀両断されてって件は六回は聞きましたね」

むしろギルドから【ヘステイア・ファミリア】の本拠がある此処まで六回も同じ話をループ出来るとか……恋は盲目と言うが……ここまでなのか。恋した事なんてありやしないからわかんねえな。

……………恋ねえ。

「おーい、ベル君、ミリア君」

んむ？　日も沈み、薄暗い廃教会の前、におっぱいたゆんたゆん言わせて手を振ってる乳神……ヘステイア様が居た。何時みてもあの胸スゲエな。ベル君も嬉しそうに手を振り返してる。一応振り返るか……。

「いやー、二人とも今日は少し帰りが遅かったね。少し心配したんだよ?。」

「すいません、今日は色々ありました」

ベルがコートやらなんやらを衣類掛けにかけて脱いでいるのを横目に、キューイを袋から出して適当に部屋の隅っこに投げて置く。

「きゅいー!」

ぼん、ころころーと体を丸めたキューイが転がっていつて抗議の声を上げるが。知った事か。林檎一個で買収される駄飛竜にける気遣いなんかもつちや居ねえよ。

「ミリア君、何かあったのかい? キューイ君と喧嘩かい?」

「林檎一個で裏切ったんですよ」

「林檎?。」

首を傾げるヘステイア様を横目に机に置かれて居たモノに気が付いた……まあた、じゃが丸くんか……いや、美味いんだけどね。でもさあ……一週間の内、8割がじゃが丸くんって辺り……いや、なんでもない。美味しいし腹が膨れるから良いんだよ。もつと別のものも食べたい気はするが。

異世界だぞ? やっぱこう、こんな……いや、こんなものって言うたらヘステイア様に失礼だが、じゃが丸くん以外にも色々ありそうじゃん? 市場見た限りは見た目は現実の野菜っぽいモノもあれば、見知らぬ野菜もあるんだよな。どんな味……値段が意外とお高かったから……はあ……。

「何があつたんだい?」

「えつと……五階層でミノタウロスに会いました」

「なんだって!?! ミノタウロスなんて中層のモンスターじゃないか!!」

怪我はなかったかい? 痛いところは?」

「怪我はしてないですよ。痛いところも特に無いですね」

俺は半殺しになってたみたいだがね。まあ、怪我は全部治療済みだしわざわざ教えるなんてしないが。

「そっか、怪我がなくてよかったよ。二人に何かあったんじゃないかと心配だったんだ」

……ベルの心配だけしてれば良いのに。俺まで心配してた何て言われても困るんだがな、割りと死ぬ覚悟してたっぽいし。これで死んでたら……まあ、死んでないから良いか。死ぬよりや安いつてな。

「そうだ、今日は君達に美味しいお土産があるんだ」

「何ですか？」

「じゃじゃーんっ!!」

ヘステイアが勿体ぶって示したのは机の上のじゃが丸くん。

晩飯だろうなあ……贅沢言ってるのはわかるんだが、他に食べるもの……キューイ、てめえは林檎食ってたよなあ……お前の分はねえに決まってるんだろ。反省しろ駄飛竜。

「キュイ?!」

第十七話

「キュイキュイツ!!」

「キューイ、黙ってください」

「キュイツ!!」

キューイの抗議の声が本当にうるさいんだが……口に俺のパンツ突っ込んでやろうかコイツ。

一応みてくれは美少女のパンツだぞ。喜べキューイ。少女のパンツ食わせてやる。もちろん脱ぎ立てだ畜生め。

「ねえ、ミリア……流石に可哀想じゃない?」

「僕もそう思うよ……」

部屋の中央の梁から縄で吊るされて逆さまにくるくるしながらきゅいきゅい抗議してくるキューイを囲む様に、三人でじゃが丸くんを食べている。

流石に可哀想だと思ったベル君やヘスティア様の意見もわかる。だが……。

「いいですか? ここ最近、私達が口にしたものを上げてください」

「え? えっと……じゃが丸くん塩味でしょ……じゃが丸くん蜂蜜ミルク味でしょ……じゃが丸くん栗小倉味でしょ……じゃが丸くん「ストップです」……」

「もう、分っているでしょう……最近じゃが丸くんしか食べて無いんですよツ!!」

「でもおいしいよっ」

うん、そうだね美味しいね……って違うそうじゃない。確かに美味しいと思う。味のバリエーションもかなり多い。でも違うんだベル君。

「しゃきつとしたみずみずしい歯ごたえ……甘く、酸味の混じった果汁……林檎、食べたくないですか?」

サクツとした衣、ほくほくとした芋の甘味とうま味。其れにメリハリをつける塩しよっぱさ。もしくは芋のほくほく感に合わさる甘いクリームや小倉、栗等。そりゃあ美味しい。当然だ。

だがたまには林檎みたいなのも食いたいだろ？

「……………」

「キュイツー！」

おいキューイ……美味しかったじゃねえよっ!! 俺も林檎食いたかったわっ!!

極貧ファミリアだから仕方ない。その通りだ……だがな、言わせろ。

「林檎一個で見知らぬ相手の言う事を聞く様なキューイに食べさせるものは無いですっ!!」

ビシツと指差すと、キューイが首を傾げた。

「キュイ？ キュイキュイ」

……………え？ 一個じゃなくて四個も食ったの？

……………絶対許さねえ。

「まっ待つんだミリア君っ!! 熱湯を用意して何をする積りなんだいっ!?!」

「ミリアっ!? 落ち着いてっ!!」

「これが落ち着いていられるかあっ!! 一個ならまだ良かったっ!!

四個ですよ四個っ!! 四個も林檎食べてっ!!」

「キュイツ!? キュイキュイツ!?!」

コイツ煮立った鍋に放り込んでキューイ鍋にしてやる。ワイバーンの肉なんて、ファンタジーじゃ定番だろ？

ほらさっさと鍋になるんだよおっ!!

鍋でキューイを煮た結果だけ言っておく。普通に沸騰した熱湯の中でくつろぎ始めたわアイツ。

……そりゃ一応竜だもんね。沸騰したお湯ぐらい平気だよね……温泉感覚だったんだろう。

……………キューイの煮汁って何かに使えるのか？

ほうむ。ヘステイア様が何か隠し事をしている。

騒動の後、結局キューイにはじやが丸くん一個だけが渡された訳だが、その後シャワーを借りている間にベル君のステイタスの更新をしていたはずなんだが。何かあったのか？

珍しいな。まあ、聞きだす積りも無いけど。

ベル君のステイタス更新してからなんか隠し事し始めたし、ベルのステータス関連？

「はあ……ベル君がね」

「あー、ヘステイア様、多分ベルのステータスに何かあったって言うのは察しがつきます。ですがその事は私に教える必要は無いですね」

「え？ でも」

「知らない方が良い事って多いじゃないですか。私から誰かに洩れる可能性もありますよ？」

変に情報貰うよりはヘステイアが一人で情報抱えてた方が拡散する確率はかなり低くなるしね。

秘密は知る人が少ない程に機密性が増すのさ。

ましてや【ロキ・ファミリア】にロックオンされたっぽい俺がベルの重要な秘密持つなんて恐ろしくて出来やしない。

さあて、更新された俺のステイタスはーっと……

ミリア・ノースリス（ユーノ・シラノ）

L v 1

力：I 1 3 ↓ I 1 4

耐久：I 2 ↓ I 3 2

器用：I 1 9 ↓ I 2 3

敏捷：I 9 ↓ I 1 4

魔力：I 5 9 ↓ I 7 4

《魔法》

【ガン・マジック】

・ 詠唱派生魔法

・ 追加詠唱にて効果発動

・ 共通詠唱にて弾薬補充

・ 基礎詠唱『ピストル・マジック』

・ 消費弾薬 1／1

・ 単発の魔弾を放つ

・ 基礎詠唱『ショットガン・マジック』

・ 消費弾薬 1 2／3

・ 複数の魔弾を放つ

・ 追加詠唱『ファイア』

・ 共通詠唱『リロード』

【サモン・シールワイバーン】

・ 召喚魔法

・ 最大召喚数『1』

・ 追加詠唱にて封印解除

・ 基礎詠唱『呼び声に答えよ』

・ 追加詠唱『標を壊せ解き放て』

【レッサー・ヒール】

・ 最下級治癒魔法

・ 基礎詠唱『癒しの光よ』

《スキル》

【タイプ：ニンフ】

・ ガン・マジック魔法習得

・ スキル習得

・ 最上位魔法習得不可

【マガジン・スロット】

・ 装弾数『15』

・ 保有最大数『3』

・ 基礎アビリティ『魔力』により効果増加

【マジック・シールド】

・ 物理攻撃に対し防御効果

・ 基礎アビリティ『魔力』により効果増大

・ 自動発動

・精神力消費

ほー、いつも通り魔力が伸びのびですかな……耐久めっちゃ伸びてんなこれ。

成長は50オーバー。かなり伸びたな。普段は魔力以外全く伸びなかったんだが、どうにも今回は耐久がガン伸びしてやがる……やっぱミノタウロスに半殺しにされたのが効いてるのか？

どちらにせよその事を思い出すのは……半殺しにされた記憶を思い出すってなあ……いや、まあいざれ思い出すだろうし。気にするだけ無駄か。

「おおー結構伸びたね」

「ですかね。珍しく耐久が伸びてますね」

「何かあったのかい？ ……ミノタウロスの攻撃を喰らったとか？」

「さあ？ 覚えが無いですが」

ヘステイアも首を傾げている。当然か、覚えていないのは嘘じゃないし。いや、割とマジで何があつたんだ？ こんだけ耐久が伸びるって相当な一撃を貰ったって事だろ……一撃で瀕死って……『マジックシールド』が仕事してなかった？ ミノタウロスって魔法使えるのか？ そんな噂聞かなかったが……。

「ミリア君、本当に心当たりはないのかい？」

「……………」

ああ、やっぱり神様か、鋭い。誤魔化せないか。ベルは誤魔化せたんだがな。

「ミノタウロスに半殺しにされたみたいですね」

「なんだって!？」

「ベルには伝えないください。ちよつと訳ありでして……」

ヘステイアには申し訳ないが、ベルには俺がかすり傷しか負っておらず、【ロキ・ファミリア】に拘束されていたのはキューイ関連のせいであると説明して納得してもらったからな。

変に大怪我していたなんて教えた日には、ベルはかなりへこむだろう。何せ俺の事を死の恐怖で忘れていたことすら自身を責めていた

のだから。

「そっか、その嘘はベル君の為に吐いたモノなんだね？」

「そうなりますね。ベルは大分へこんでましたし。変に教えて余計な心労をかけるよりはいいでしょう」

「……むしろ、その心労をかけた方が……」

何言ってるんだへステイア様……もしかしてベルのステイタス関係か？

「そうだ、ミリア君……君に聞きたいんだけど。ヴァレンなにがしについて何か知ってる事はあるかい？」

「はい？」

え？ 唐突に何？ ヴァレンなにがしって誰？

……って、もしかしなくても【剣姫】の事か？

………ベルにちゃんと言ったんだが……ああ？ もしかしてなんかステイタスに【剣姫】と何らかの関係のある変化が起きたとか？ 「えっと、そうですね……噂しか聞いた事無いですし本人に会った事も無い私の所見で良ければですが」

「頼むよ」

「………人間の皮を被った化け物ですかね」

「え？」

だって、話に聞く限りそんな印象しか持てないぞ。可愛い？ 可憐？ お人形のように？

見た目なんてどうでも良いっしょ。見た目可愛くて可憐で美しくても屑は屑だし。

中身は戦闘^{バトル}狂^{ジャンキー}でしょ？

いや、どっちかって言うとなんか強さ以外どうでも良い系か？ どっちにせよ性格がどんなにかわかんない以上何とも言えん。

「なんだって……」

「いや、噂を聞く限り、ですよ？」

何度も言うが、本人なんてあった事も無い。風評被害かもしれないが、噂だけ聞けば化け物以外に感想が浮かばんぞ。

朝焼けが建物の間から廃教会に差し込むのを目を細めて眺めつつ、大きく伸びをする。

「キューーッ」

「んーっ、今日も頑張りますか」

横で猫の様に伸びをしていたキューーイを拾い上げてローブの中へ放り込んでっど……さて、ダンジョンに行きますか。

「ねえ、ミリア……」

「ん？」

横で何やら考え事をしていたベルの方を見て首を傾げる。はて？

何かあつたんだろうか？

「僕、神様を何か怒らせちゃったのかな……」

ああ、昨日の件か。

どうにもヘステイア様を怒らせたんじゃないかと心配してるっばいが……。

『ベル君を盗られてなるものかーっ!!』と叫んでいたので、ありやただの嫉妬かなんかだろ。

……神様の嫉妬？ 神話で嫉妬が原因でおこったトラブルってどんだけあつたかな。ヤベエなベル君。君は神話の主人公に成れるじゃないか。おめでどう……本当におめでどう……。

「いえ、アレは怒っている訳じゃ無いですよ。そうですね……ヘステイア様大好きってエイナさんに言ったみたいに言っただけじゃなく機嫌も戻りますよ」

「そうかな？ ……僕、ちよつと行ってくるね」

………冗談の積りだったんだが。マジで言いに行くのか。いや、キスはダメでも『大好き』を伝えるのは平気なの……いや、【剣姫】に恋してるっばいのに告白に行く勇気がない……ああ、ヘステイア様、完全に意識されてないじゃんこれ……。俺は超応援するから。マジで。頑張れヘステイア様。

「ありがとうミリア、ミリアのおかげで神様と仲直りできたよ」
「……どういたしまして」

バベルの塔へと続く大通りを肩を並べて歩きつつベルを見上げる。嬉しそうにスキップしだしそうなベルの様子に流石にアレかなとは思った。まあ、神様と仲良しで良い事だ。

しかし朝は人通りが少ないな。

あつちだと夜でも街灯で明かりがともされ、二十四時間ずっと誰かしら人々がうろついているのが大都市と言う認識だったが。やつぱこっちは違うっぽい。

と言うか、魔石灯とか言う明りがちゃんと夜間も照らしてると言えばそうなんだが、人通りはかなり少ない。まあ、今の時間帯はかなり早い時間帯だからなあ。

「っ！」

「ん？」

唐突にベルが振り返って周囲を見回し始めた。なんだ？

「ベル？ どうしました？」

「えっと……誰かに見られてた気がしたんだけど……気の所為かな？」

ふむ？ 誰かにねえ……。

「あの一」

「え？ ああ、すいません」

「っ!？」

は？ 何時の間にかベルの目の前に灰髪のエプロンドレスの少女が現れていた。おい待てコイツどっから現れやがった。キューイが何の反応も……キューイ寝てるぞコイツ……尻尾ちぎってやろうかな。

「えっと、何か？」

ベルの質問に、少女が恐る恐ると言った様子で手を差し出した。

「これ、落としましたよ」

「……魔石？」

魔石？ ベルが指先で摘み上げた魔石は大きさにゴブリンのつぼいな。

ふむ？ 落としした？ 魔石を？ ベルに話しかけたって事はベルが、だよな……。

………………。怪しいなコイツ。

「其れ、嘘ですよね」

「え？」

「ミリア？」

嘘に決まってるだろこんなん。昨日、ベルはミノタウロスの血で血塗れになっていた。

その血塗れの衣類や防具、ポーチに至るまで……誰が綺麗にしてくれた？

「ベル、良く思い出してください。昨日、貴方は血塗れになっていたんですよ」

「うっ……」

「その衣類や防具……ポーチに至るまで、誰が綺麗にしてくれたんですか？」

「えっと……エイナさんに……あつ」

気付いただろ。エイナさんは何かと気が利く。ベルの収集品に關してもわざわざ別の袋に全部取り出してベル自身で確認させて自身が魔石をちよろまかしていない事を示すぐらいに真面目な人であった。

そのエイナさんが綺麗にしてくれたポーチに、魔石が残っていた？

あり得ないだろ。

「じゃあこれ」

「その人の物ですね。どういった意図があったのか知らないですけど……美人局ですか？」

「つつもたせ？」

あ、やべ。変な事ベルに教えるのやめた方が良いんだったか。と言うかこの世界でも『美人局』で通じるのか？

「あー……えっと……」

困った様におどおどとした灰髪の美人の町娘っぽいエプロンドレスの少女をじーつと睨む。

「子供と侮りましたか？ 生憎ですが私は小人族でして……何が目的か知らないですが魔石はお返ししますのでどうぞお引き取りを」

「うっ……ごめんなさい」

……思ったより素直に引き下がるな。なんだコイツ。何考えて——ベルのお腹が鳴り、空腹を知らせて来た。

「……あはは、ごめん」

「……いえ、ベルが謝る必要は無いでしょう」

朝食をケチらざるを得ないファミリアの現状が悪い。ベルも育ちざかりって奴だ。腹が減るのは仕方無かろう……俺？ 朝飯食わずとも平気つちや平気だがなあ。

「あの……少し待っていてください」

は？ え？ 何あの子。いきなり騙そうとして……待ってて？

何がしたいんだありや……。

「どうぞ、その……お詫びの代りに」

ベルの手の上に乗っているのは弁当……なのだろうか？ 丁寧に包まれた弁当っぽいモノがのっている。毒とか入ってねえだろうな。

「大した物ではありませんが」

「いや、悪いですよ初対面の人にお弁当なんて……それにこれ、貴女の朝ごはんなんじゃ……」

ベル君、その女、さつき君を騙そうと——ああ、そういう子だもんね。まあ……ベルが許すなら良いか。

「気にしないでください。謝罪も兼ねていますし。朝ごはんはお店が始まればまかないが出ますから」

にこやかな笑顔を向けてくる少女……後ろの店は——『豊穰の女主人』？ ……ああ、おしゃれな雰囲気のお茶店……じゃないなこれ。酒場……酒場か？ 冒険者向けの酒場っぽいなここ。いや、でも店内が……昼と夜で客層を変化させるタイプの店か？

……ああ、ちよつと過激な客引きだったのか。成程。

「もしよろしければ今夜の食事は是非当店で……其方の方も騙そうとしてごめんなさい」

素直に頭を下げる辺り、悪気があった訳では無いらしい。まあベルが何も言わないし特に何かする積りはないが。見た目はそこそこ可愛い方だからあんま変な客引きしていると冒険者に手籠めにされるぞと忠告……は必要ないか。そこら辺は分つてそうだしな。あからさまな新米装備のベルに目をつけた辺りそんな感じがする。

「別に、もう気にしていませんので」

「はい、ありがとうございます」

………なんだろ。こいつ変な感じがする。気の所為か？

「キュイキュイツー！」

「ベルっ！ 追加二匹、片方撃ちますっ！ 『ファイアツ！』」

「でえやあつー！」

『グルアツ！』『ギヤツ！』

飛び出してきた一匹を撃ちぬき、もう一匹をベルが片付ける。

黒い霧となつて消えた後に転がった魔石を見て、ベルがナイフを構えたまま辺りを警戒する。

ふむ……キュイに反応なし。

「ベル、敵は全て片付いた様子です」

「うん、わかった。じゃあ魔石を集めよつか」

手分けして魔石を集めていく。ゲームとかだとリザルト画面が表示されて終わりなんだがなあ……現実になった途端、ちまちまとドロップ品集める必要あったりと面倒だよなあ……サポーターって言うの？ ドロップ品を拾い集める専用の職業とかあるっぽい。最近は持ち逃げなんか頻発してたりするから同じファミリア内でサポーターも兼用するのが普通らしいなあ。

「こんな事で、何時になったらアイズさんに追いつけるんだろう」

「ベル、焦りは禁物ですよ。エイナさんも積み重ねが大事と云ってい

たでしょう?」

「うっ……そうなんだけど……あつ、ドロップアイテムだ。ラッキー」
ダンジョンのモンスターはどうやら魔石を破壊していない場合は確定で魔石をドロップし、後は低確率でドロップアイテムと言う素材を落とすらしい。ベルが拾っていたのはコボルトの牙だろうか? 中層や下層なんかの下の階層のドロップアイテムなんかは一個で数百万は軽くするらしい。上層の……しかも雑魚筆頭なんぞと呼ばれるコボルト、ゴブリンのドロップアイテムは魔石数個分、一応利益的に美味しいと言えそうですが、かといって深い階層に比べればうま味は少ない。

みしみしと何かが軋む音が聞こえる。

「ベル、湧いてきますよ」

「うん、ミリア、下がってて」

ああ、ダンジョンってこういうのが面倒だよな。キューイレーダー内……しかも後ろの壁に罅が入り、赤い光が漏れ出す。其れが強まり壁が崩れ落ちて穴から無数のモンスターが湧き出る。

無限のモンスターの増殖の由来。壁や天井から湧き出るモンスターと言う奴だ。何度見ても不思議な光景である。

いや、アクシヨンRPG等であるポップ……その場にポンツと唐突に現れるよりは自然なんだろうが。壁も修復されるっぽい……って考え事してる暇ねえな。結構数が居るぞこれ。

「くへよ」

「は」

「キューイッ!」

キューイ、お前はローブの中で大人しくしてろよ。

第十八話

自分の名前は言えますか？

俺は言える……俺は、言えるはずなんだ。

俺の名前は――

「神様！ このステイタス間違ってますか!？」

トータル150オーバーなんて初めて見ましたよ!! 耐久なんて今日ゴブリンに一回しか殴られてないのに凄く上がってますよ!!」

おお、シャワー浴びてたらなんかベル君が騒いでるんだがなにかあったのか？ というか、トータル150とか聞こえたぞ。何があつたし。

今日のダンジョン探索を終え、ドロップアイテムの換金をして6200ヴアリスの収入があり、満足げにしていたが、ステイタスの更新で何かあつたみたいだな。

まあ、昨日のなんかが原因だろう。

「さあ、成長期なんじゃない?」

………へステイア様の返答に誤魔化す気が微塵も感じられんぞ。「そうなんですかね。この調子なら直ぐにアイズさんに追い付けるかも」

………しかし、トータル上昇値150って、俺はせいぜい20かそこそこだったんだが。

まあ、ベルが前衛をやってるし、後ろでほとんど動かずに魔法をぶっぱしてるだけだから魔力しか上昇しないんだよな。まあ、今回はちゃんと敏捷を意識して走り回ったりしたから少しは延びたけど……

水気をしっかりと拭き取ってーっと、髪が長いと面倒なんだが、ヘステイアもベルも切らない方がいいって言うからな。

シャワーから出てチラ見したベルのステイタスの紙、敏捷がもうGなんだけど……ええ、なにそれ凄くない？

俺なんてようやく魔力がIからHになりそうだなってぐらいいんだが……なにしたんだ？　　というかどんなスキルが発現したんだよ。

「そのヴァレンなにがしが――」

ヘスティア様よ、言いたくないが嫉妬はやめて差し上げて下さい。神様の嫉妬とか怖すぎわろえない。

とりあえず服を着ますか。ってキューイ、お前はここで何を……まあいいか。犬猫に裸見られたからって騒いでも仕方ないしな。

「うう……」

「ふんっ」

服を着てから部屋にはいれば傷心を抱えたベルと不機嫌さをアピールしているヘスティアの姿が……

鼻息荒く不機嫌アピールは良いんだが、【剣姫】にはどうせ男の一人や二人居るに決まってるだとか、そもそもファミリア違うから結ばれるのは無理だとか、ベル君の心はもうボロボロだぞ。少しは手加減してあげるべきだと思うんだが。

「あ、そうだ神様、今日の朝にシルさんっていう女の子と会いまして、是非店に来てほしいって……三人で一緒に行きませんか？」

「シル……？　　誰だいそれ？」

ええ……へこんでたのに自分から地雷を踏みに行くのか。鈍感って怖え……。ほら案の定、【剣姫】の件で不機嫌だったヘスティアさまもまた新しい女かと不機嫌さが増すしさあ。

「大通りにある『豊穰の女主人』っていうお店で働いてる女の子です。今晩食ベに行くって約束したんで一緒に「二人で親睦を深めてきなよ。そのシル君とやらとも良い感じになってくれば良いじゃないか！」え？」

まるで狙い澄ましたかのような地雷を踏み抜いていくベルの技能、俺じゃなきや見逃しちゃうね。って、冗談じゃない、ヘスティア様がコート着こんでどっか行っちゃまうぞ。

「ヘスティア様、今日は用事ですか？　　できれば一緒に行きたかったのですが」

嘘は何一つ言ってないぞ。割りと一緒に行きたかった。なんかあ

のシルっていう女が変な感じしたしヘステイア様にどんなやつに見えるのか確認だけでもしてもらいたかったんだが。

「ごめんねミリア君、実は前からミアハと飲みに行く約束してたんだ」

ああ、なるほど。もともと約束があったのか。

「そういえば、二人には伝えてなかったね。ごめんよ」

別に気にしちやいない。そも今朝約束して今晚行くって言うのが急すぎた感じなんだよな。

「そうですか、神様同士楽しんで来てくださいね」

「君たちも二人で楽しんでくると良いよ。あつそうだ」

そそくさと近づいてくるヘステイア様。

「その女がどんなやつか知らないけど。もしベル君に何かしようとしたら」

「わかってますよ。ちゃんと一線を越えそうなら止めますから」

むしろ、ベル君が一線を越えると思ってるのか……見た目は幼くとも魅力的な胸のヘステイア様の誘惑に普通に耐えてる辺りベル君の理性は鋼かなんかだろ。

……アマゾネスの媚薬とかいうヤバいもんも出回っているらしいので、毒を盛られないか心配ではあったんだが、弁当は普通の食材で作られてたしな。

キューイに確認させた。毒見に使えるとか、便利だなあ……あれ？

腐っても竜種のキューイは大丈夫でも、人間のベルはアウトな毒だったら……。

まあ、なんだ。毒が入ってなくて良かったな。俺は見知らぬ人から貰った食べ物に口でできんからな。何入れられてるのかわかんないし。

あ、キューイは留守番ね。

「キューイ!!」

だって人が多そうじゃん？ 見つかったら面倒だし。お土産はちゃんと買ってくるから……ヴァリスに余裕があればね。

「ねえ、ミリア、あの店かな……」

『豊穡の女主人』、店名も立地も記憶と相違無いので間違いないでしょう」

窓からちらりと覗く店内では、可愛らしい猫人とエルフなどの女性達が忙しなく動き回り客をもてなしている。

風俗関係ではなく一般的な酒場な感じだ。女性店員ばかりでベルは若干気圧されているが。

まあ、そっち系列の店はこんな大通りに店を構えちゃいないだろう。確か、北の方に歓楽街、性産業が盛んな地域があつたはずだ。「イシュタル・ファミア」が取り仕切っているんだつたかな。

「行かないんですか？」

「う……ちよつと……その……」

まあ、女性に不慣れというか、綺麗な女性に気圧されるきらいのあるベルにこの店の雰囲気はきついかな。

しゃーないし、俺が先陣切りますかね……幼女に先陣切らせるとか、見映えがアレだが。

「ベルさん、ミリアさん、来てくれたんですね」

おおう。扉に手をかけようとしたら中からシルが現れた。ふむ？

昼間の変な雰囲気がない？

「あ、シルさんどうも」

「こんばんは」

なんだろうね、雰囲気は昼間と全然違うんだが……あ、雰囲気について何か、裏？　なんか昼間と違う人に感じるんだが。

昼間を感じた変な感じ、あつちの方が俺の勘違いっぽいな。今のシルさんは普通の町娘みたいな感じがする。

「こつちの席へどうぞ」

シルは店の奥まったカウンター席に案内してくれた。

パルウムの俺は酒場とかだとよく酔っぱらいに絡まれるらしいので目立ちにくい場所に案内してくれたらしい。気が利く……云々の

前に、パルウムの扱い酷くね？ 合法ロリだぞ……まあ冒険者基準で言えばこの扱いが普通らしいが。

しかしまあ、綺麗どころを集めたもんだね。

茶髪の猫人と黒髪の猫人、エルフにシル。後は店の奥で皿洗いに勤しんでいるのか茶髪の猫人が汚れた皿を厨房に運び込む度になんかやり取りが聞こえるし。

……あれ？ こんなに綺麗どころを集めた店なんだから酒に酔った勢いでやらかす客が居そうなんだが。ここ、酒場だよな？ 酒の臭いもするし。用心棒が見当たらないんだが……大丈夫なのかこの店。客に紛れてる？

「あんたがシルの言ってた子かい。何でもあたしに——」

でっけえ……巨人って言われても信じてしまいそうぐらいでかい女の人だな……って、俺がちっこいだけか。

ドワーフか？

「シルさんっ?!」

「えへっ」

「えへっじゃないですよ!! 僕が大食いだったなんて僕自身初耳ですよ!!」

シルに食って掛かるベル。まあ、あることないこと吹き込まれてたからベルも気にするのか。

ふむ、まあ大なり小なり尾びれがつくのはしゃーないわなあ。だからと言って強引に売り付けるのは良くないんだが。オラリオにこちらの法律は無いのかね。

何事もなかったかのようにメニュー表を差し出したシルの姿に感心したわ。

「それで、注文は何にします?」

「えっと……パスタ300ヴァリス?!」

「え?」

おい、待て。なんだその値段。

慌ててベルが持つメニュー表っぽいものを覗き込む。

パスタが300ヴァリス、飲み物が200ヴァリス。最安値でもそ

んなもんだ。水？ んなもん頼むんじやねえ的な雰囲気を感じる。

ここはキャバクラかなんかかよ……ああ言った店は接待料が含まれるから高いんだよなあ。この『豊穰の女主人』の提供物、どれもこれも高つけえ。パスタなんて普通の店なら120ヴァリスとか、高くても200ヴァリスぐらいだった気がするんだが。

「なににします？」

「えっと……パスタと飲み物を……」

「私も同じものを……」

駆け出しには間違いなくきつい値段設定などところを見るに、この店の客層は冒険者は冒険者でも、上位の冒険者を対象にした店なのだろう。

駆け出しのうちに店の存在をアピールしといて大成したらおもいつきり利用してもらおう感じか。あくどいと言うほどじゃないが……狡猾だなあ。

「わかりました。少し待っていてくださいいね」

笑顔で対応してくれるが、はめられた感がするので素直に受け取れないだろ。心が広すぎるぐらいのベルですら顔がひきつってるんだからさあ。

出てきたパスタの量を見て料金に納得。かなり多めだな。皿の上に小山になったパスタにたっぷりのミートソース。普通に美味そうである。

ただ、ベルの前に出されたパスタと俺の前に出されたパスタの量が同じってのは……いや、違ったら違ったで文句を言うだろうが、少量を減らして値下げしてくんないかな。これ、ミリアちゃんの胃袋的に全部食えるのか？

「おいしい」

「そうですね」

ベルの一言に同意しつつも、この店のヤバさに気づいて内心ガクガクしてる。

ここの店の店員、綺麗だったりかわいかったりするわけだが、強さも別格っぽい。

本当に偶然と言うか、俺の座った席から店の奥の厨房が覗けるんだが……店の奥で皿洗いさせられてる顔面ボコボコの男がいるんだなこれが。うん、俺の知識が間違ってるなければレベル3の冒険者だよな？

誰にやられたのかなって思うじゃん？

その冒険者は横に立っているヒューマンの女の子と肩を並べて皿洗いに勤しんでるわけよ。そこにこの店の店主のミアが行った瞬間。その冒険者のからだが震えて皿洗いのペースが上がったのだが、皿を落としたんだな。

そのあと……まあ、なんだ。横のヒューマンの女の子がだね、ぶっ飛ばしたんだよ。誰を？ 冒険者の男をだよ。顎を的確に打ち上げる一撃……だったと思う。ぶっちゃけ動きが全く見えなかった。ついでにミアも凄まじい威圧感を出して冒険者を睨んでた。

……あのミアの威圧感、こっちに向いてるわけでもないのにチビリかけた。ミノタウロスよりヤベエじゃねえか。

『本日のおすすめ』850ヴァリスとかを頼んでもいないのに出してきたときは若干苛立ったが、あの光景を見てしまったことで逆らう勇気が消え失せた。料理はジャガ丸くんばつかで飽き飽きし始めていたところだったのも相まってすごく美味しく感じたので良いのだが。

酒の肴としての側面が大きいのか、どうも全体的に味が濃い目っぽい。

不味くはない。ただ、もう少し薄味の方が好みかなと言う程度だ。前世の俺の好みではあると思う。ただ、ミアちゃんの舌には濃すぎるのか舌が痺れるぐらいだ。

変なもんは入ってないだろう。そんな感じはしないし……。

「お二人とも楽しんでいますか？」

「圧倒されています」

「そこそこですかね」

接客に余裕ができたのかシルがベルのとなりに腰かけた。

ベルの方は支払い金額を想像して若干顔が強張っている。夕食代はベル持ちだからな。まあ、今回のダンジョンでの収入をベルが持っているだけだ。

幼女が財布取り出して代金支払いしてたらさすがにね？ ベルの立つ瀬が無くなるし。

シルの自分語りを聞き流しつつ、パスタを食べる。

うん。余裕がないねこれ。お持ち帰り出来ないかなこれ、申し訳ないが食いきれん。小柄なミアアちゃんにこれはきついよ。

しかし、人間観察が趣味ね。色んな冒険者の夢や冒険の話聞くのが楽しいんだと。

だから冒険者が数多く集まるこの店で働いてて、駆け出し冒険者なんか積極的に声をかけてるらしい。

ふうん。そうなんだ。いい趣味ですね。

別にバカにするつもりはないが、かといって感心するようなものでもない。下世話な話好きの主婦みたいなもんだらう。要するにどうでもいい。

俺も親父やベルみたいに真っ直ぐ夢を語る人は大好きだし。できるならそういった人の力になりたいとも思う。ただ、そういった人は数少なく。途中で挫折することも多いからなあ。

割りと失礼なこと考えてると猫人が大きな声でご予約のお客がどうのと言っているのが聞こえてベルとシルの視線がそっちに向いた。

俺の位置からじゃ見えん。

「おい、見ろよあれ」

「おお、えれえ別嬪。お近づきになりてえ」

「バカ、エンブレムを見ろ」

「笑う道化師……」

「【ロキ・ファミア】じゃねえか」

「つてことは、あれが【剣姫】か」

「【九魔姫】に【怒蛇】【大切断】まで……」

「壮観だな。近づきたくはないが」

ふあ？ 【ロキ・ファミリア】!?

おいっ、聞いてねえぞ?! 予約席とか言う札がおいてある席があったなとは思ったが、まさか【ロキ・ファミリア】だとか。帰りてえ。
「【ロキ・ファミリア】の主神ロキ様はこの店を大層気に入ってまして、よくファミリアの団員をつれてきて宴会を開いているんですよ。お得意様ですね」

……………なにそれ。

この店、二度と来たくなくなったんだが…………。

カウンターの奥まったところにいるお陰で俺は見えないが、ベルはシルの影に隠れつつ憧れのアイズ・ヴァレンなにがしに熱い視線を送っている。

お願いだからここに俺が居るの感づかれないでくれ。頼む神様。

……………相手のファミリアの主神も一応神様じゃん。願っても無駄か…………。

第十九話

あのさあ、「ロキ・ファミリア」ってなんか俺に恨みでもあんのかよ。なんでピンポイントで俺やベルを話題に出すんだよ。

しかも、俺が吐いてた嘘がモロバレじゃないですか。

何のためにキューイ関連で捕まっただけだと嘘ついたのかわかんなくなるだろ。

間違いなく、泣いてたぞ。俺が男の姿だったら迷わずに慰めに行くが……今の俺は幼女^{ガキ}の姿だ。それだけならなんとかできたが問題は俺の方が優れてるとベルが思い込んでいることだろう。

魔法やスキルなんかの関係もあるし、見た目は幼くとも中身は四十過ぎである。要するに人生経験が違う。だからこそ罵倒も侮辱も聞き流せるのだ。

ベルからすれば、自分より幼いのに強くて頼れると感じてしまうだろう。そんな俺に慰められても逆効果にしかならん。

だが、俺からすればベルの方が俺なんかと比べるまでもなく素晴らしい人物だと言えるんだがな。

ともかく、俺が慰めに行くべきじゃない。

女であることを武器にして慰める方法もあるが……。

男つてのは適当に女を抱けば立ち直れる場合が多い……。それで立ち直れるなら俺でよけりゃ好きにしてもいい。

だが、ベルには難しいだろう。無理に抱かせた場合、逆にストレスが加速しかねんしなあ。

……ベルに嫌われたかな。それは、すごく嫌だな。

『豊穡の女主人』という店は、綺麗な女の子がウエイトレスを務め、料理も酒もどちらも美味しいと言う冒険者御用達とも言える店である。値段が少し高めでもリピーターが多いのはそういった理由が存在する。

まあ、俺にはどうも濃い目の味付けが合わないらしく舌が痺れを覚

えるぐらいだったし。「ロキ・ファミリア」が常連客だと言う情報から出来る限り近づきたくない店として記憶したわけだが。

「勝負や！ 勝った奴はリヴェリアさんの胸揉む権利やるわ！」

「俺も参加するツス！」

「俺もだ！」

「ヒック、あ、僕も参加するよ」

「団長っ!？」

騒がしいファミリアなこと。まあ、別に酒場で騒ぐなんてアホなこととは言わないが。

なんつーかなあ、席が悪くて「ロキ・ファミリア」の様子が確認できん。まあ、こつちから確認できないってことは向こうから見えてないってことだから良いんだけどね。

それにしても、ベル君はストーカー予備軍状態なんじゃないか？ さつきから「アイズさん……はあ……」と悩ましげなため息ついてるし。

件のアイズ・ヴァレンなにがしさんがどんなのか知らんが、あんま目立たんでくれよ？ ここに俺が居ると必然的にあのロキとか言うヤバイ神様とエンカウントするはめになる。

「ぶつはあつ、ガレスやりおるな」

「ふつ、まだまだ余裕だ」

「団長、胸なら私のを好きなときに好きなだけ触っても良いですよ」

「いや、ティオネ。遠慮しておくよ」

はあ、ほら、フィンさんには熱烈な女性が居るじゃん。そっちの女の子の胸にでもしやぶりついてろよ。見た目的にお似合いだろ。

……はあ。ウチの少年は恋する少年状態だし。向こうはちよつとはめを外した宴会だし。そろそろ帰りたいんだが……シルさんはベルの様子を見て首をかしげてるし。

「ミリアさん、ベルさん、もしかして……」

「お察しですよ。それよりも食べきれなかったパスタ、包んで貰っても良いですかね？」

「あ、はい。少し待っててくださいね」

ああ、良かった。お持ち帰りできるのか。ヘステイア様に……あつちはあつちでミアハ様と楽しんできてるか。明日の朝食かな。朝からこの味付けは辛い……いや、ベルは平然としてるし。普通の味付けなのかね。

しっかし、この場から動けんのかなあ。出て行ったら間違いなく見つかるだろうし。向こうが飲み終わるか、酔ってべろんべろんになるまで待機か。

「アイズさん……はあ……」

……ベルはこんなんだしなあ。

そろそろ頃合いか？ 酒飲み対決みたいなのやって半数がべろんべろんになつてつぽいし……くつそ、なんで酒場に酒飲めない未成年つぽい子供まで連れて来てんだよ……ベルもまだ酒は飲めないからブーメランになるが……。

願わくば酔ってないつぽいリヴェリアとヴァレンながし、後はレフィーヤ？ とか言う人物がこつちの顔を認識してませんように……リヴェリアってのはあの綺麗なエルフ様よな？ ……ダメじゃねえか。いや、ごく自然に出て行けばワンチャン？ ……ここで目立たなければいけるいける。

「よっしゃあ、アイズ。そろそろあの例の話、皆に披露してやろうぜ」
「あの話？」

おお？ 男の声？ 話の流れ、変わったな。店の中の人達の注目もある男に集まって……この隙に逃げよう……つてベルも注目してるし。と言うか変に注目が一点に集まってる時に動くところちに注目が集まるなこりや。どうすりゃいいんだこの状況。

「あれだって、帰る途中でいきなり逃げ出したミノタウロスの――」

ふむ？ ミノタウロス……俺が半殺しにあつて、ベル君が追い掛け回されたモンスター……？

……嫌な予感がするな。

「五階層でお前が一匹始末したろ？ その時居たトマト野郎の」

……ベルの事か？ おい、それベルの事か？ いくらなんでも笑い話風にすんのはやめてやれよ。死にかけたんだぞ……。

……まあ、駆け出し装備のまま、油断と慢心に塗れて調子こいて五階層まで足を運んだのは否定できんのだが。

ベルは大丈夫……うわあ、これは気付いちやってますねえ……どうしよ……いや、ここから離れるか。しゃーなしだな。ベルの肩を叩く。

反応は無し。ただ震えているだけ。

「アイズがぶっ倒したミノタウロスのくっせえ血を浴びて、真っ赤なトマト見てえになっちまったんだよ」

「「あはは」」

失笑……みたいな感じの笑い方だな。あまり愉快な話と言う訳ではない様子だ。だがそれでもベルにとっちゃ赤っ恥だな。トマトだけに。誰が上手い事言えと。

「それでだぜ、そのトマト野郎。叫びながらどっかに行っちまいやがってよ」

「ベート、ストップだ」

「ああん？」

お？ 団長さんのストップ入りましたね。まあ、ベルへのダメージは絶大つばいんだがな。テメエもつと早くに止めろよ。と言うか何で報告しなかったし。声からして男……ベート？ ベート……

【凶狼】サブナールガンド ベート・ローガだったか。第一級冒険者の……はあ、素行が悪くてしよつちゆうトラブル起こすトラブルメーカーじゃなかったか？ 目をつけられるとボロクソに貶されるって言う……。

……ベル君は運が無かったな。だから、その……直ぐ此処を離れよう。お願いだから俯いて震えてないで反応してくれー。

「ミリアさん？ どうしました？ ……ベルさん。顔色悪いですよ？ ……？ ベルさん？」

シルさーんっ！ シルさん来たこれで勝つる。ほら綺麗な女の子だぞー。ベル反応しろよ……ああ、周りが見えてねえなこれ。

「その報告、なんで僕の方にしてくれなかったんだい？ 何かあれば報告する様について指示した積りだったんだけど」

「ああ？ いちいち雑魚の事なんて報告する必要ねえだろ」

あーはいはい。なるほどね。ヴァレンなにがしと同じタイプか。ベルの事を雑魚の一言でお終いな感じ。悲しいねえ……事実だけど。ねえベル、そろそろ離れようぜ。腕掴んでもダメだこりや……。

キスでもしてやろうかな。ほら、こういうシヨツキングな出来事つてのはキスみたいな唐突な衝撃的な出来事で上書きすりやあ……やめとこ。ベルがファーストキスかは知らんが。夢見る少年の唇を奪うのはどうかと思うし。

「はあ……今は宴の席だからこれ以上は言わないけれど。今度からはちやんと報告する様にしてくれ」

「チツ、わあーったよ。つたく面倒臭えな」

あはー……宴の席だから少しは許すね。……そうだよな。ベートって奴も酒が入ってたんだからしようがないよな……ベルからすりや変わらんか。事実を指摘されてんだもんなあ。

「アイズも、何で報告しなかったんだい？」

「……ごめんなさい」

「はっ、そりや決まってるんだろ。家のお姫様は助けた相手に逃げられちまったんだよ。情けねえつたらありやしねえぜ」

「……はあ、今度はしつかり報告する様にね？」

「……………はい」

……人並みに羞恥心があった訳か。ベルに逃げられた事をシヨツクに思う程度には……ねえ。

家族なんて集まりだからそこまで厳格なルールがある訳じゃ無いのか。トツプファミリアだからもつと組織だったもんだと思ってるが。私の強い第一級冒険者が集う以上、仕方ないのか。

……はあ、このままベルを慰める……難しいかなあ。

「ベート、いい加減にしろ。そもそも十七階層でミノタウロスを逃がしたのは我々の不手際だ恥を知れ」

「んだあっ?! ゴミをゴミと言って何が悪い」

あははー……ゴミだつてよ。ちよつとベル君。強く手を握りこみすぎい。爪食い込んで血が出てるよー。ほら痛いでしょう……手を開いて。深呼吸だ、ほら、ひっひっふーひっひっふー……聞こえてないかこれ。くつそ。あの狂犬、黙らせらんねえかな。

とりあえず回復魔法を使って回復ーつと……あつ、やべ、シル見てんじゃん。シルさん。この事は内緒にー……流石シルさんだ。頷いてるし黙っていてくれるらしい。

「つーかよ。フィン、テメエが助けたあのガキはどうなったんだよ」「ガキ？」

「てめえがお姫様抱っこして運んでた金髪の血塗れだったガキだよ」

「お姫様抱っこですつてっ!? 団長っ!! どういう事ですかっ!!」

「ティオネ君は座つて……ノースリスさんの事だね? 彼女なら仲間の安否が気になると言つて主神に尋ねるべく帰つて行つたよ」

今の女の声、なんか殺意が籠つてたよな?

「団長にお姫様抱っこされるなんて……アバズレに違いないわ。どつかで始末しないと……」

……えつと。ティオネちゃんの声かなあ? ……なんか知らんけど。敵視されてる? ああ、団長さんにおっぱい揉ませようとした子と同じ子じゃね? そんな怖い事言わないでよー……待ってね。

えつと……うーんと……ティオネ……ティオネ……いや気の所為じゃね? まっさかあ……あははははは……。

……ちよつと話変わるね。「ロキ・ファミリア」に所属してる第一級冒険者はレベル6が三人。レベル5が四人だったはずだ。

その中でレベル5がベル君の初恋相手【ヴァナルガンド剣姫】、ベル君を貶した【凶狼】、んであと二人居るんだが……ヒリュテ姉妹。大きい方と小さい方なんて言われ方をする……【ヨルムガンド怒蛇】と【アマゾン大切断】とか言うのが居てだね……。

確かー……どつちかがティオネ、どつちかがティオナとか言う名前だったよなあ。

ははっ……俺の記憶が正しけりや、知らぬ間に第一級冒険者に始末対象に指定されてますね。

……あの糞王子、見た目可愛らしい癖に俺の死亡フラグをガンガンおつたててくれやがる。アイツ絶対俺になんか恨みあんだろ。俺なにしたよ。

「はっ、ボロツちい装備で半殺しにされてよ。逃げる足もねえ癖にダンジョンに潜ってんじやねえよ」

あははー……不相応な装備が嫌で駆け出しにお似合いの安いローブだったんだが。第一級冒険者には不評みたいですねー。はあ……つか俺の話題だす……ベル？

「ミリア、半殺しって……どういう事？ キューイの事で色々聞かれてたんじや……」

……あ、ヤベエ。

「しっかしよお、あんな雑魚が冒険者名乗ってんだぜ？ 同じ冒険者として恥ずかしくねえのか？」

「いや、彼女はミノタウロスに一矢報いていたよ。僕が見つけた時には致命傷を負っていたとは言えね」

おい、ここで俺の話題をヤメロ。いますぐベルの耳を塞いで……ああ、くっそっ。ベルが気付いちまったじゃねえか。

「はっ、結局死にかけてんじや意味ねえだろ……それよりもアイズ。例えばの話だがあのトマト野郎と俺ならどっちを選びんだ？」

……うわあーベル君がすっごい悲しみの瞳でー此方を見るのー……ごめん待って言い訳させて。心配させたくなくて……いや、本当にごめんよ。

「自分より弱くて軟弱なクソ野郎に、オマエの隣に立つ資格なんてありやしねえ。他ならないお前自身がそれを認めねえ」

その言葉と共にベルが立ち上がり、椅子を蹴倒して一気に店の外へ駆けて行ってしまった。

「ベルさんッ!？」

「……………っ!」

「何?」「食い逃げ?」

あっ!? おいベル……ああ、クツソ。肝心な時に何も言えないのは俺の悪い癖だろ……詐欺師として活動するときは平気なんだが……

はあ。

「ミア母ちゃんの店で、大それたやつちやなあ」

……【ロキ・ファミリア】くっそも力つく。嘔吐してたのは確かに俺が悪いが。始末するだの、ベルを侮辱するだの。俺の意思とは無関係だったり、事実だったり混じり合ってるのが余計にムカつく。

こちとら色々和我慢してんだぞ……。

……ここでキューイの封印解いて全部めちやくちやにしてやろうかな……。

第二十話

唐突だがミリアの算数教室はじまります。ちょっと難易度高いけど頑張つてね。

あるところにミリアちゃんという見た目は金髪碧眼の幼女、中身はおっさんという子がいました。

毎日モンスターを倒してお金を稼ぐ底辺冒険者です。

日々のおこづかいは一回の稼ぎから100ヴァリスをもらっています。

冒険者になってから今日まで15日間皆勤で冒険者をしていました。

しかし、昨日だけはミノタウロスさんに襲われて稼ぎが少なかったのでおこづかいをもらっていません。

そんなミリアちゃんはおこづかいで長杖(600ヴァリス)とポロイローブ(200ヴァリス)、白い無地のパンツ四枚セット(200ヴァリス)を買いました。

残っているお金はいくらでしょう。

……………。

支払いに必要な金額は……パスタ(300ヴァリス)、飲み物(200ヴァリス)が二組、それに本日のおすすめ(850ヴァリス)で……………。

えっと、その、控えめに言つて……足りぬな？

どうすんだよこの状況、控えめもなくもなく金が足りん。

この店って足りなかったら店の奥でボコボコにされてるあいつみたいになるんだろ？ ミリア知ってる。

ヤバい、どうする……いつそベルみたいに逃げるか？

……………捕まってボコボコになる未来が見える。俺って予知能力者だったのか。

ははっ、笑えるかボケエツ!! 何してんだ俺えっ!?

ベル君にお金全部渡してたじゃねえか……。もうどうにもなんねえな。

素直に言いますかねえ……まあ、多分だが皿洗いを……んむ？
なんか酔った冒険者があーにや？とか言う子と話してるな。どした
んやろ？

「にや？ これじゃ足りないにや」

「いや、飲み過ぎちまってよ……」

「考えて飲まなきゃダメにや。それで、どうするにや？」

「今度来たときに払うからツケといてくれない？」

あんな感じでいけば大丈夫そう？

ん？ ミアが出て行つたぞ。威圧感スゲーな……。

「ウチじゃツケはやってないよ」

「いや、ちゃんと持つてくるかr——ゴブツ!？」

「どつちか選びな、今すぐ有り金全部払って足りない分は体で払うか

……ボゴボコにされてから有り金全部払って足りない分体で払うか

……いきなり顔面に拳いつ!? 何それ怖い……。

唐突だが。ミリアちゃんのパンツの色は何色でしょう？ ははっ

……たった今、黄色い染みパンになっちまったぜ……。

いや、だつてさ。冒険者っぽい男の顔面に拳がメキイツつてめり込

んでヤバイ感じに吹っ飛びそうになった冒険者の男がだよ？ なん

かアーニヤがぶっ飛びかけた男の首根っこをガシイツて掴んで空中

で止めたんだぞ？

何あの二人……いや、なんか店裏のヒューマンの女の子もヤベェん

だけど。ははっ……はは……助けてベル君、ヘスティア様……。

もうこの際キューイでもいいや。なんで連れてこなかったし。助

けてキューイ……。

——キューイ?——

……うむ?

——キューイキューイ、キューイ? キューイキューイ——

なんか、頭の中にキューイの声が……?

——キューイ? キューイ——

……。

ほう。念話とか言う特殊能力か。なるほ……ど? これはあれか

? 普段の行いのお陰で運が向いてきた?

助けてキュイイ! お金足りないから泣きながら帰ったベル君に『豊穰の女主人』に戻るように伝えてくれ!

——キュイイ? キュイイキュイ——

ベル? 居ないよ。つて、え? マジで?

ベル君、ホームに帰ったんじゃないのか……どっかでたそがれてるのか?

くそつ、キュイイと念話できることが発覚したが意味がねえ。

——キュイイキュイ——

そうだよ、ヘステイア様かベル君を探してもらおう。

というわけで探してきてくれ。ミリアちゃんのぴんちだぞ。

——キュイイ!——

任せて! か。いやあ、焦ったけどなんとかかなりそうだな。キュイイ様々である。これからはもう少し優しくしてやってもいいかもしれないな。

そういえばお土産買って帰る約束してたんだったか? 林檎……はこの時間売ってないだろうし、明日買ってやるか。

——キュイイ! キュイイキュイ! キュイイ!——

………えつと? ミリア! 扉を開けない! 助けて! つ

て……助けてほしいのはこつちなんだが……。

キュイイ、もういい。大人しくホームで待つててくれ。

——キュイイキュイ?——

助けなくていいの? か。今お前が助けを求めてたじゃねえか。別に構わん。大人しくぶん殴られてくるよ……はあ。

キュイイを頼った俺がバカだった。子猫サイズのキュイイに扉を開ける方法なんてないしな。動物用の戸口なんてあの地下室にあるわけないし。

「あの、ミリアさん。ベルさんを追いかけていいんですか?」

戻ってきたシルさんの言葉に溜め息をこぼす。

「追いかけていいなら追いますが……」

「……? えつと?」

別に追いかけるのを引き留めるつもりはないらしいのだが、支払い関係の話題が出せば通じるよね。

「お金が足りないんですよね」

「え？」

「支払いはベル持ちだったのだから」

ほら、財布^{ベル}が行っちゃったでしょ？

納得した表情のシルさん。

「今、完全に無い感じですか？」

「500ヴァリスなら……」

「なけなしの俺の全財産である。やだ……俺の所持金、少なすぎ？」

「ミア母さんに相談しましょう」

顔面パンチは勘弁してくれよ。マジで。……いや、でも死なない程度に加減はしてくれる……よな？ 多分。

さっきの男とその仲間っぽい二人は三人仲良く顔面に一撃もらって酔いぎまししてから店の奥に引きずられていった。アーニヤさん、成人男性三人を平然と引きずっていったけど、どんな筋力してんだよ……。

「あんた、金が足りないそうだけど、どうするんだい？」

「ひえいつ!!」

やべ、変な声出た。気がついたらミアさんがカウンター越しにこつちを睨んでやがる。……あれ？ 問答無用の顔面パンチじゃないのか？

「えつと……」

「ミア母さん、本当はベルさんが支払うはずだったみたいで……」

「ほう？ それで？ そのベルって子に逃げられたわけかい」

ふむ。間違っていないが。このままだとベルがひどい目に遭いそうな予感がある。それ以前に俺を置いていったせいで俺がひどい目に遭う場合もベルが知ったら傷つくだろうしなあ。

「あの」

「なんだい？」

「皿洗いでもなんでもしますので、ベルの事は責めないで欲しいので

す」

「……………」

ひいつ、この人目付きが怖いよ……。

ただでさえ第一級冒険者にボロクソに貶された挙げ句、追加で食い逃げ犯としてボコボコにされるのは可哀想過ぎるでしょ。どうにか交渉したいよ。

「あんだ、そのベルって子に惚れてるのかい？」

「はい？」

「献身的なのは男にとつちや魅力的だろうけど、あんたは損するばっかだよ」

うえ？　なんか勘違いから高説が始まった？

「いいかい、男つてのはぶっ叩かれて強くなるもんさ。笑われて、貶されて、それでも立ち上がってくるのか本当の男つてやつだよ」

まあ、その通りだと思っただが……。

「それに、見た目はひよろくても冒険者だろう？　あれぐらい貶されるぐらいは耐えられなくちや冒険者なんて務まらないよ」

仰る通りですね。

「あんだがやろうとしてるのはただのお節介だよ。だから惚れてるなら見守ってやんな」

「はい」

確かになあ。可愛らしい顔立ちしててもベル君は男であり、英雄なんて言う絵空事と笑われてしまう壮大な夢を持っている。この程度で躓いては本当に絵空事になってしまっただろう。

「まあ、その子が来たら一発きついの見舞ってから、一日皿洗いでもさせるかね」

わああ、相手の心情もある程度理解を示しつつも自分の意見を曲げない姿勢は凄いな。惚れそう。

ベル君は不幸だがきついの一発もらってくださいいな……。

「それで？　あんたはどうするんだい？」

……ボコボコにされてから働くか、大人しく働くかだよな？　大人しく働きますとも。ええ……痛いのは嫌だからね。

働くミリアちゃん始まるぞー……ねえ、待ってよ。何で俺この店の制服着てんの？

「お似合いですよ」

「ありがとうございます……」

皿洗いだよな？ 殴られる事は無かったけど、皿洗いだよな？ 何で制服着なきやなわけ？

更衣室に案内されて着替えろって渡されたこの店の制服……エプロンドレスって言うのかこれ。そんなんを着て……。と言うか良くサイズあったな……。なんか各種サイズが取り揃えられてんじやねえか……。

お尻に穴の開いた奴……。獣人用かな。尻尾出す穴的な……。なんか全てのサイズを網羅する勢いで制服が用意されてるし。この店なんなの？

店主は化け物だし。店員も化け物……。もしかしてシルさんも中身は化け物的な？ ……俺、朝に思いつきり喧嘩吹っ掛けた気がするんだけど……殴られなくて良かったよ。マジで……。

「それで、私は何を？」

「はい、今は皿洗いは間に合っていますので接客をお願いします」

リューさんの言葉に顔が引きつる。何言ってるのこの子……。フロアに出ろって？ 馬鹿なんじゃねえの？

皿洗いに四人の顔面ボコボコ冒険者が動員されてるから、皿洗いは必要ないってね。あの四人ふざけんよ……。俺と代われよ。皿洗いやりたいです。めっちゃやりたいです。

……ダメか。畜生。

「私なんか接客して大丈夫なんですかね？」

「大丈夫ですよ。笑顔で接客すれば文句は言われません。何か言われなくてもミア母さんがなんとかしてくれますので」

なんとかハボコボコって構図なんですわわかります。なんてゴリラ理論。

つか接客ってフロアに出ろって事だよな？　まだロキファミアリア居るんだけど。

「野菜の皮むきとか……」

「いえ、もう追加で客が来ることは無いので皮むき等は終わってますから」

畜生、どうしてもフロアに出ないとなのか。なんか他に……倉庫整理？　ばっかだなあ、こんなちっこいミアリアちゃんに倉庫整理なんて出来るわきゃないんだよなあ……。

じゃあ掃除？　結局フロアに出なきゃじゃないか。

どうしよ、ロキファミアリアと顔合わせるとか冗談じゃないんだけど……はあ。

第二十一話

フロアに出てすぐ、目を疑う光景を目にすることになった。なんか人が吊るされてやがるぞ。どういうこつちやねん。

「下ろしやがれっ！」

灰髪の……獣人の場合は灰毛って言うんだったか？ の青年が荒縄で縛り上げられてあられもない姿になっている。誰得なんだよ……。

つか、吊るされてんの【凶狼】ヴァナルガンドじゃね？

だって回りに座って笑ってる集団にフィンとか居るし。

あのフィンの隣のべろんべろんに酔ってるっぽいおっぱいでかい子。多分ティオネって子だろ？

んで、ごついドワーフは【重傑】エレガラムガレス・ランドロツクだろう。んであつちのエルフはリヴェリアで……ええつと……エルフの少女？

見た目は少女……ああ、なんか酒じゃなくてジュースっぽいもの飲んでるし多分若いエルフだわ。その子は【千の妖精】サウザンドエルフレフィーヤ・ウィリデイスだったか。レベル3の。他には……アマゾネ……アマゾネス？ の恰好をした女性。あれアマゾネスか？

いや、アマゾネス……ううん？ 胸が無い。いや、無いつつつたら失礼なんだが。アマゾネスってこう、みんな胸がでっかいイメージがあつたんだが。その子だけはなんか、胸が……こう、控えめなんだわ。でも容姿はチョコレート色の肌に黒髪に暗緑色の瞳ってわかりやすいぐらいアマゾネスしてるし。容姿がティオネ・ヒリュテとよく似てるからティオネ・ヒリュテの方なんだろう。多分……双子って話だよな？ 胸の大きさに差があり過ぎだろ……いったい何があつたってんだよ。

つか、第一級冒険者を吊るせる奴なんているのか……。

「酔いすぎだ」

……ああ、納得だよ。【凶狼】ヴァナルガンドってレベル5だしね。レベル6の

【九魔姫】ナインヘルなら吊るせるのか。見た目は凄く綺麗なエルフの女性だが、人をあられもない姿で吊り上げるとかヤバそう。

いや、おかしくね？ 【九魔姫】^{ナインヘル}って魔法使いだろ？ 確かオラリオどころか世界最強にして、最高峰の魔術師なんかじゃなかったか？ レベル差があっても魔法使い相手なら近接戦闘すればなんとかかなるとか思っちゃあかんのか……。

「全く、酒は飲んでも呑まれるなって言うだろうに」

「糞がーっ!!」

あはは、楽しそうで何よりだよ。さてと、働きますかねえ。もちろん、ロキファミアリアには近づかないように細心の注意をしつつね。

「ミアさん、着替えてきました」

「ふうん、似合ってるじゃないか」

お世辞どうも。ちっこい子供が背伸びしてるようにしか見えんだろうに。むしろそういう意味では似合ってるのか。

「んじゃさっそく、あのテーブルにこれ運びな。もちろんだけど笑顔でね」

「……あっはい」

ねえ、今指差したのってロキファミアリアのテーブルだよな？ 拒否できる流れじゃないけど、嫌だっけ言いたい。言わないけど……ボコボコとロキファミアリアに会うの、どっちが良いかって？ どっちも嫌だよ……。

「ミアさん、これ使ってください」

「どうも」

シルさんが気を聞かせておぼんをくれたよ。これで一度にたくさん運べるね。あはは……はあ……。

ロキファミアリアの重要メンバーが座る席の真ん中でベートが吊るされており、縄を軋ませて抜け出そうともがいているのを眺めつつ目立たない様にこっそり近づいて注文の酒をテーブルにそれとなく並べて行く。

無論、酔って周囲への警戒やらが薄いかあまり周囲を気にせずに飲んでいるドワーフの辺り。特にドワーフは体がでかいので視線を遮

るのに超役に立つ。良いね良いね。このままバレずに酒を配膳し終えー。

「おー、ちっちゃいアイズだー」
「っ!?!」

うげっ!?! 唐突に抱き付いてきやがったっ!?! なんだなんだっ!?! チョコレート色の肌に胸の小さい方のアマゾネスっぽい女性が唐突に後ろから抱き付いてきた。ちっちゃいアイズ? もしかして同じ金髪だから勘違いされた? 酔っ払い怖すぎ……。

「なんやっ!! ちっちゃいアイズたんやっつてっ!?!」
連鎖的にこつちを見る奴増えたーっ!?!

緋色の髪に糸目の少年……少年? 少女? 顔立ちが中性的でわかりづら……いや、エセ関西弁にロキ無乳……神特有の雰囲気……こいつ神ロキだーっ!?!

「……ノースリスさん……?」
「なっ……なんでここに……」

あつ、フィン・デイルナとリヴェリアに気付かれた。オワタ……オワタ過ぎるよ……。と言うか放せアマゾネス。テメエ金髪っただけでヴェアレンなにがしと勘違いしてんんじゃないやねえよ……。

「あの、放してください」
「あれ? アイズじゃない?」
「……そうですね」

このおっぱいちっちゃいアマゾネス、美女だとは思うぞ。若干アホっぽいが。

と言うか放せ。マジで、今すぐ。
「ごめんねー」

「うおおーイメージとちやうかつたけど可愛い子やん。新しい子入ってたんか。なんで言ってくれへんのやミア母ちゃん」
うひひ……今度は神が抱き付いてきやがった……っつてこいつっ!?! 何処に手をやってやがるっ!?!

服の上からとは言え尻と胸を同時に撫でまわすとか何考えてんだこいつっ!?!

「ちよっ!? 何処触ってんだあんたっ!?」

良い音と共に神の頬に紅葉を刻み込む。ははっ……やべっ……思わず手が出た。

「いったあ……」

他のファミアリアの神を引っ叩いちまった……。

「ロキ、こっちに来い」

唐突に神……ロキ? がぐいっと引き剥がされて首根っこを掴まれてリヴェリアに引っ張られて行った。

「僕達の主神が変な事をしてすまない」

赦された? マジで? やったー。

「団長、そいつは誰ですか」

腹に響く重低音。女性の声……これは……ひいっ!? 酔っぱらっ
てテーブルにダウンしていたっばいティオネが起きやがったっ!?
しかも凄まじい眼光がこっちを見る!?

「ティオネ、ストップだ。少し静かにしてくれないか」

「ですが団長っ!!」

「はいはいー、団長の言う事は聞こうねー」

「離しなさいよティオナっ!!」

ティオナって子に引きずられていくティオネを見送っていれば
フィンが近付いてきて困ったような笑みを浮かべた。

「仲間が騒がしくてすまない。少し話したいのだけど時間はあるかな
?」

そんな時間はない。そう答えるためにはーうむ。

「すいません、お仕事が忙しいので」

完璧だな。これであとは――

「ミア、彼女を少し借りても良いかな」

「あん? 金を払ってくれりやかまやしないよ」

うおいつ!! なんだそりゃ!!

確かに雇い主に聞くのは良いんだが、ミアは断りたいって俺の意図
を察してくれよっ!?

「いくらかな」

「1850ヴァリスだよ」

安くねっ!? 俺の値段安くねっ!?

……あ、1850ヴァリスって俺とベル君の食事代じゃん。ははあん、俺の食事代を出すなら体で払う必要ないし仕事で拘束される事無いからオツケーって事か。

「わかった、これで足りるかな」

「はいよ」

本人の意思をガン無視かよ……はあ、やだなあ。

あ、でも俺の意思で断れるかも……?」

「何か頼むかい?」

「いえ、気を使っていたただかなくても結構です」

結局、隅っこの席にフィンと並んで座ることになったし。なんなんもう……帰りたい。

でも結果的にはあるが食事代を出してもらった形だしなあ、ぶっちゃけビンタして帰りたいがあのアマゾネス怖すぎ。

というかあのティオネさん、まだ背中に視線を感じるんだだけd……ひいつ!?

ティオネがティオナに押さええられながらもまるで呪詛呟いてるんじゃないかあれ……。

「アバズレが団長にアバズレが団長に——」

延々と同じ事呟いてるーっ!? と言うかアバズレえっ!? 俺なんかしたっけ? いや、気絶してる間にキスでもかました? まっさかあ……いや、でもさっきまで俺の存在知らなかったよね? なんでそこまで罵倒されなきゃいけないんですかねえ。口にはしないけど、口にはしないけど。だって第一級冒険者に喧嘩売って死にたくないし。いや、でも現時点でなんか恨まれて殺されそうになってるのかコレ? 俺はどうすりやこの死亡フラグを回避できるんだ。

「ふむ……少し待っていてくれ」

そう言うフィンがティオネに近づいて——トンッ。

「テイオナ、テイオネが酔って寝てしまったみたいだから後は頼むよ」「はい」

今アイツ何した？ いや、よそう。手がブレた瞬間にテイオネがパタリと倒れた。うん、その……やっぱレベル6なんやなって……。

テイオネを担いだテイオナが、なんか山積みになったロキファミリアの冒険者の山……酔っ払いが積みあがった山にぽいつと放り捨ててから席に戻って行く。扱いひど……待って。あの山の頂点にある緋色の髪の毛の奴って神ロキなんじゃ……見なかった事にしよ……。

「待たせてすまない」

「いえ、大丈夫ですよ」

やだーレベル6冒険者に目をつけられるとか嫌過ぎい……何で目つけられてんの……キューイだよなあ……。

「此処で働いているのかい？」

「事情があって手伝いをしていますね」

なんか凄く微妙な笑みを浮かべて聞いてくんな。考えながら喋ってるっぽいし……。酒入った状態で考え事はなあ……。

「いつからここに？」

「そうですね……『笑う道化師のエンブレム』『ロキ・ファミリア』じゃねえか』『壮観だな。近づきたくはないが』って辺りからですかね」

これで通じるか？ あ、通じたっぽいな。凄いな、周りの言ってた台詞を覚えて……いや、行く先々で同じ反応されてるから覚えてたとかそんな感じかね。

「そうか……と言う事はさっきの話も……」

「トマトの様に真っ赤な少年の話ですか？ それなら本人ともども余す所無く聞かせて頂きましたが」

「本人？」

ふむ？ 気付いてない？ ……少し顔が赤いしやっぱ酔ってるのか？

「もしかして、さつき食いに……店を出て行ったのは……」

ははっ、はつきり言いきっても良いぞ。すっげームカつくけど事実だしな。食い逃げみたいなものだよ。間違いねえ。

「そうですね。あまりの羞恥に耐え切れず赤っ恥でトマトの様になって行ってしまうたね。一応、私のファミリアの団長で今回の支払いはベルが持つ事になっていたので……生憎と私の所持金が足りず体で払う事になってましたがね」

その言葉に顔を引き攣らせてるのを見て、溜息が零れそうになる。

「食事代を出して頂いた事には感謝していますが」

「……本当にすまない」

「謝る必要は無いでしょう。事実ですから……まさか酒場での笑いの種にされるとは思いませんでした」

事実であり、赤っ恥である。せめてお礼言ってから立ち去っていれば……自業自得……と言えようだからなあ。【凶狼】ヴァナルガンドって案外間違った事言っていないし。まあ、周りの反応的に極論っぽいが。

弱い冒険者に存在価値無しって……。弱いなりに使いようはあると思うがね。全員が強い訳じゃ無いし。

「……そうか」

「其れよりも聞きたい事があるのですが」

一応、聞いてみるか。答えてくれるかは知らん。

「何故、私なんか気に気を使った態度を取るのでしょうか。本音を言いますと、何かされるのではないかと疑ってます」

人も多いこの場所なら手出ししづらだろうし、最悪ミアさんに助けを求めることもできる。相手は酒も入っていて酔っている。

条件は良い方だし、今後同じ条件が揃うとは思えない。

「なんか……ね」

「キューイの事を気にしているのでしょうか？」

反応が微妙だ。なんか変な感じの反応だなあ。

「君は自分の事をどう思っているんだい？」

質問に質問で返すのか。まあ、一応答えるか……。

「そうですね。駆け出しも駆け出し、わざわざオラリオの最高峰のファミリアの団長や副団長が対応するまでも無い様な地位の冒険者。そもそもロキファミリアが原因とは言えダンジョン内で起きた出来事は全て冒険者本人由来のものと判断する為、意図的な怪物進呈パスバレードでな

い限りはダンジョンに一步でも足を踏み入れた時点で自業自得となるので助ける必要はほぼ無いでしょう。それに助けた後にわざわざ保障まで用意する必要も全くないです」

冒険者、ダンジョンの中に富と名誉を見出した者達。冒険者に成るにあたって最重要項目はただ一つ。

ダンジョンの危険に身を晒す以上、ダンジョン内での出来事は基本的に自分の責任である。

ダンジョン内で死んだりする事は珍しくない。其れの責任の所在を他のファミリアに擦り付ける事は多々ある。しかしそれはファミリアの規模が相手より大きかったりする場合のみ。

今回の場合、ヘステイアファミリアは完全な駆け出しも駆け出し。所属眷属はたったの二人、対してロキファミリアは規模、勢力共にオラリオ最大と言われるファミリアに相応しいモノである。要するにわざわざ駆け出しファミリアに媚を売るまでも無く、駆け出しファミリアが枕を濡らすだけでお終いのはずなのだ。

なのにわざわざ団長と副団長が出張ってきて丁重な対応をしていると言うのは不自然が過ぎる。キューイ関連に関しても『教えろ』と一言命令するだけでこっちは大人しく従う以外に無いと言うのが本音だ。

「なるほど。それで君の質問だったね」

さて、どんな答えが出てくるやら……誤魔化される可能性は高そうだけどなあ……。

第二十二話

フィンの目的を聞いた限りでまとめると。

とある目的の為に同族の女性パルウムを探していたのだと言う。

とある目的、その幼い外見から見下されやすいパルウムの再興を指しているらしく。自身の二つ名【勇者】ブレイバーと言う二つ名もパルウム達の象徴となるべくロキに付けて貰った二つ名らしい。

そして女性に頼みたいのは己の妻になって貰う事。そこらのパルウムをいくらでも引つ掛けられるぐらいに容姿が優れているし、話によればオラリオで女性から一二を争う程に人気の男性なのだから、それぐらい余裕だろうと思われるが……。どうにも違うらしい。

そもそもパルウムの冒険者は数が少なすぎてフィンの目につく範囲に居るパルウムは片手で数えられる程度。しかも女性ともなればほぼゼロと言う状況。普通の一般的なパルウムの女性では無く、冒険者としてある程度の活躍とまではいかずとも最低限、勇気に溢れたもしくは意志の強い女性が好ましいのだと言う。

そんな中で出会ったのが同族である俺だったのだと。

俺がミノタウロスに掴みあげられ、握りつぶされる寸前に見つけて慌てて助けようとしたが、動きが止まったので死んだのかと舌打ちしたら、俺がすつと動いて何らかの短文詠唱の魔法でミノタウロスの顔を穿つたらしい。

そのときの事を俺は覚えていない訳だが、フィンには他のパルウムとは違うように見えたらしい。

妻を求めていたところに現れたお眼鏡に合う人物が現れたので、どういった人物かを調べるために色々試すようなことをしたのだと言う。

謝罪金で破格の金額を示しても全く反応しないどころか訝しげな様子を見せた事で金銭欲にまみれた人物ではないこと、自身の立場を理解できるだけの理解力があること等、様々な視点から俺がどういった人格の女性かを測っていた事。要するに俺を目的のために使える駒かどうかを見極めていたらしい。

「不愉快な思いをさせてしまつてすまない」

不愉快か。まあ不愉快な気分にはなつたが。

「……少しだけ、私の昔話をしますが……聞きますか？」

別に聞く気が無いのならそれでも構わん。そんな気分で呟くとフインは神妙に頷いた。

俺は所謂私生子つてやつだ。母親が何処ぞで適当な男と作つて産み落とした子供。

あの糞女は、そんな俺を使つてとある男を騙した。

金持ちの家に生まれた道楽息子と言われていた人物。

妊娠を知つたその日にその男と一晩を過ごしてから一年間姿をくらまし、子供を産んでから「実は貴方の子供が出来たの」と言つて泣きつく。騙された男は子供を引き取らされて、糞女の要求通りの多額の金額を渡したのだ。

それから暫くして、糞女はある程度育つた子供を引き取りに来た。理由は——糞女曰く『金儲けに使えそうだし?』だそうだ。殺意すら覚えるね。そのまま近づかないでいてくれれば良かったのに。

当然、子供は父親と離れるのを拒んだが……最終的には育ての親から引き剥がされてしまった。

それ以降は只ひたすらに母親と共に人を騙す毎日、嫌気がさして逃げ出そうとしても、何処に逃げてても、母親が……あの糞女は俺を見つけて出しては連れ戻される日々。

そんな日を繰り返す内に……糞女、俺の母親は死んだ。

何のことは無い。騙そうとした男がヤバイ方向に伝手があつてしかも詐欺に気付かれて報復された訳だ。

俺が糞女を見つけた時にはドラム缶に捻じ込まれてコンクリ詰めにされる寸前だった。虫の息とも言ふべき状態だった糞女を見つけた俺は、助けるなんて事はしなかった。と言うか進行形でコンクリ詰めされてる奴の回りには十人以上の奴らが居たし、下手に手出ししてこつちが目を付けられるのも勘弁だったから見捨てた訳だ。

……何とかしようと思えばできた。俺は十人以上の殺し屋を雇って女を殺す準備をしていたし。その殺し屋に一言『あいつらを片付けろ』って指示すれば助ける事は出来た。要するに……手が有りながら見捨てた訳だ。

「とまあ、そんな感じで母親すら見捨てる様な屑に構うなんてやめた方が良いでしょう。反吐が出ますよね……人騙したりだとか本当に……」

酒場の喧騒の中、横に並ぶフィンの顔が見えずに目の前に置かれた空っぽのグラスを眺める。

自身の人生を振り返れば、幸せだった父親との生活から一変し、人を騙して蹴落とす疑心暗鬼に満ちた生活だったように思う。今の生活とは大違い過ぎる。

親父はゲーム好きで自分でゲームを作ってしまうぐらいの人だった。真っ直ぐに『ゲームが好きだ』と叫ぶぐらいには……大人になってもゲーム好きを抜け出せなかったと言われれば、まるで駄目な男だろうが。それでも真っ直ぐに夢を語る姿はかっこよかった。しかもその夢の一つ『ゲームを作る』と言うモノを叶えてしまったぐらいには馬鹿で真っ直ぐな人だった。

簡単に言おう。俺は父親に憧れていた。

血の繋がりが無くとも、この人の子供でありたいと願ってしまうぐらいに……糞女とは関係ない所で生きていたかったのだ。

「慰めとかいららないですよ。別に……ただ私が言いたい事、理解して貰えました?」

利用される人生だった。自由になるまであの糞女の掌で転がされる毎日。他人を騙す為の小道具として使われる日々。どれほどの屈辱だったと思う? しかも気が付けば糞女と同じく詐欺して生活するのが当たり前になってる塵クズに成り果てるとか言うね。はっ……笑いしかでてこねえよ。

そんな俺が? パルウムの復興の小道具に? 冗談じゃない。

「そうか……すまない」

俺の考えが伝わったのだろう。深々とした溜息を吐いたフィンが
咳く様に謝罪した。

「そーいやあ……そうだよなあ。詐欺師の糞女が大嫌いで、表面上笑
顔を浮かべてる奴も大嫌いな癖に……俺がそんな風に人を騙して表
面上はミリアを演じてる……。そう、演じてる。」

「……気分が悪くなってきた。酒は飲んじやいないが。臭いで酔っ
たか？」

「フィンが何をしようが俺にはあんまり関係ないが……。我が子に
親が望む道を歩めと強制するのはやめてやってほしい。あの糞女み
たいに子供は親の言う事を聞いてればいいなんて考え方はあまりに
も苦痛だったからな。」

「顔色が悪いけど、大丈夫かい？」

「……嫌な事、思い出しましたからね」

「本当にな。あの頃の自分を思い出してたんだが……ふと、ヘステイ
アに『白野勇之』って本来の名前を教えたときに不思議な反応をして
いたのを思い出した。」

「何故このタイミングで思い出したのかわからないが、あのときのヘ
ステイアの反応に対して俺は怖くなって追求を止めたが……とある
可能性が浮かんだ。」

「フィンさん」

「なんだい？」

「……少し、神ロキと話をさせていただけれますか？」

「ロキと？ 何故？」

「なんでもってそりゃ……神様で今すぐ会話できそうなのがロキ以外
居ないしな。いや、酔っているみたいだから難しいか？」

「というか、このタイミングで主神と会話したいって普通に変だよ
な。まあ、無理なら良いか。」

「確認したいことがありましたので」

「俺の名前についてね。何故？ 今の俺は『ミリア・ノースリス』と
名を騙っている訳だが……もしかしたらもあるかもしれん。」

「……少し、待っていてくれ」

そういつてフィンが立ち上がった。考えはさっぱりわからんが、話はさせてもらえるみたいだ。

「フィンもリヴェリアもキツすぎやろ……ちよびいーとセクハラしただけやん」

酔いつぶれた人山から回収されたらしいロキがやって来たのを見て頭を下げる。というかいきなり胸と尻を撫で回すのはちよびつとのセクハラなのか。ほぼ強姦未遂だと思っただが……。

「こんばんは、神ロキ」

「あんたがミリアつちゅー子かいな。かわええこやな、フィンがなんか言つとらんかったか？」

お芝居用の小道具作成をお願いされましたね。そっちは割とどうでもいいが。

「私の名前はミリアではありません」

「んお？ なんやあんた偽名かいな。オラリオでは止めた方がエエで？ 偽名を堂々と名乗るなんてアホのすることやし」

知ってる。それはエイナさんにも言われた。

嘘を見抜ける神々の前でわざわざ「自分は怪しい人物です」なんて看板背負って歩き回ってるもんだしな。

ましてや神々は大の噂好き。あること無いこと背鰭に尾びれ、果てにはエンジンにFTLまで搭載されてろくなことにはならんらしいしな。まあ、そこらは人もあんまり変わらんし気にせんのだが。ヘスティアに迷惑かかりそうだなって気づいたのは最近だし、ヘスティアは気にしなくていいと言っていた。少し気になるんだがな。

「そうなんですよね。ギルドでも言われましたし」

「なんや、分かっててやっとするんか？」

「一応、ですけどね」

そろそろ本題に入るか。怖くて声が震えたりしてないか不安だ。

「私の本当の名前はユーノです」

「うん？」

ああ、やつぱりか。なんかミアハさまもヘステイア様も同じ反応したんだよね。

「二応、私が子供の時から名乗っていた名前ですからね」

俺の言葉にヘステイアと同じように首を傾げた神ロキを見て確信した。

「今、私……嘘吐きましたよね？」

不思議そうな顔から一変して納得の表情の神ロキ。まあ、なんだ……要するにだ。

俺に本当の名前なんて呼べるもんは無かったってこつたよ。なんだって勇之と言う憧れのあの人がくれた名前ですら騙っていたんだからな。

「あんだ、ネームレスやったんか」

ネームレス？　なんだそりや？

「ネームレス？　なんだいそれ？」

樽の上に木の板をのせただけの台と小樽の椅子という、安っぽさを感じさせる激安の大衆酒場の一角で向かい合い座る神々の姿は、周りの雰囲気から浮きそうなものであるが、底辺ファミリアの主神等がよく利用する為か元々常連である為か、浮く事も無く周囲に溶け込む男女の神が向かい合わせで座っていた。

女神、ヘステイアの質問に、ヘステイア・ファミリアと同じく訳あって底辺ファミリアであるミアハ・ファミリアの主神ミアハは神妙な面持ちで呟く。

「そなたは知らぬのであったな」

今日、ヘステイアは眷族の食事の誘いを断った理由はミアアの事についてミアハに聞いたためである。

内容としては嘘をついていないのに嘘に見えるというもの。

本来、神が眷族の嘘を見抜く際は魂の揺らぎから判断する。しかしミアアの場合は真実と嘘が同時に存在するという不可思議な状態で

あった。

『私の本当の名前は白野勇之です』

ミリアが語ったその言葉は、嘘に見えた。しかし、『最初に名付けられた名前ですからね』

苦笑と共に語られたその台詞に嘘はなかった。つまり最初に名付けられた名前は白野勇之で間違いのないのだが、本人の口から聞く限りでは本来の名前ではないのだ。

余りにも不可思議なミリアの状態にヘステイアは親友神であり医神でもあるミアハに相談したのだ。

「ネームレスとは、時折眷族こどもの中に居る珍しい精神病の一種だな」

ミアハは現在のミリアの条件を『ネームレス』と言った。

『ネームレス』とは、自らの存在定義が不安定になっている人間こどもに発生する、精神的に不安定になっている状態の事をさす。

主な発生条件は過去と現在の大きすぎる落差などであり、具体例をあげるなら奴隷等に身落ちした人間などが発症しやすい。

幸せな家庭から一変、唐突に身売りされた女性が通り名を与えられて娼婦として働かされた後に自由の身になった際、身売りされた事実から過去の自分を肯定出来なくなった上で、娼婦としての自身も肯定できない場合。本来の名前としての家族に貰った名前を本当の名前として語れなくなり、神にはそれが嘘に見えてしまう。そして通り名の方も肯定できない場合はどちらの名前も神には嘘、偽りの名前としてとられてしまう。

現状のミリアの状態とほぼ一致すると言っている。

ミリアが過去に娼婦として働いていたかは確定ではないし、他にも要因はいくつも考えられる。

ただ、ネームレスの特徴としてほぼ無自覚な場合が多い。と言うより神が指摘するまで周囲の人間も気づけないのが普通である。なにせ神が下界に降りてくるまで誰も指摘できなかったのだから。

「そっか……治療はできるのかい？」

「難しいな、本人に自覚させずに傷が癒えるのを待つしかない……だが……」

少なくとも、本人にネームレスであることを自覚させなければ直に癒え傷は消えてなくなる。だがここはオラリオ、神々が集う迷宮都市である。このオラリオで冒険者として過ごす以上、他の神から目を付けられないという保証はない。

神々は珍しいものに目がなく、ついでに言えば玩具としてつつき回すのは普通なのだ。特にネームレスなどはそこそこ珍しくもあり、つついたときの反応も神々の視点からすれば面白く映る場合が多い。

下手をすれば神々の興味を引いてつつき回されたり、最悪の場合は性格の悪い神などに意図的に潰される可能性もある。

長い時間をかけて傷を癒すのにオラリオは不向きなのだ。

「なにより、自己否定が強い気のある彼女はもしネームレスだと知れば自害する可能性が高い」

それ以前にミリアの性格上、普段の言動から自己評価が著しく低いことが察せられる。

普段から「私なんか」等と自分の価値を貶める発言をよくこぼしている。

「うん、それは僕も思う」

彼女、ミリアはよく嘘を吐く。普通の人と同じぐらいにと付け加えるべきか。

近くに居る比較対象がベルという素直で嘘が吐けない少年であるからか、ミリアの嘘は目立ってしまうのだ。

ヘステイアはそんなことはあまり気にしてはいないし、ヘステイア自身も嘘を口にするのは珍しくない。問題なのはミリアの嘘に対する潔癖なまでの否定的思考だろう。

ベルに心配をかけないために吐いた嘘ですら、ミリアは嘘を吐いた自分を責めていた。本当に些細な、小さな嘘ですら嫌っていて、嘘を吐く自分が大嫌いらしい。

過去に嘘を吐いていたことで何かあったのだろう。もしかしたらネームレスに陥る原因があったのかもしれない。

けれど……

「ミリア君は優しすぎると思うんだ」

相手のために嘘を吐いた事すらも自分が悪であると断じている。そんなことはないのに。

確かに嘘を吐くのは良くないことかもしれない。けれども本音だけでは人は傷付けあつてしまうこともある。

時には優しい嘘があつても良いのに、それすらも否定的な考えを持ってしまっている。

「……僕はどうしたら良いのかな」

ベルに比べれば少しひねくれていたりごく自然に嘘を口にする部分はあれど、ミリアはヘスティア・ファミリアの一員だ。主神として、助けたい。

それに……

「どこかに、行ってしまいそうなんだ」

ふと目を離れた瞬間、霞のごとく消えてしまいそうなのだ。ベルと違って寝ている最中に消えてしまうかもしれないと不安になってしまう。だからか寝てるミリアを抱き締めて寝てしまうのだ。

ミリアはやめてほしそうにしているが……。

「そうだな、このまま時の流れに任せても良くはならないだろう。ならば多少の荒療治も視野にいれるべきか」

「荒療治？」

真剣な表情のミアハの様子にヘスティアはうなづく。

「もし必要なら荒療治も必要だと思うけど……ちなみに、どんな方法なんだい？」

「ヘスティア、そなたが名を定めれば良い」

これがそなたの名であると決めてしまえばいい。神威と共にミアにそう告げればミリアは抗う事も出来ずにそれを肯定するしかないだろう。但し其れは本人の意思を無視する様な行為だ。

「それは」

「出来ないのなら、しっかり話し合う事だ」

話し合つて傷を少しづつ癒していけば良い。自分が傍に居ると安心させれば持ち直せなくはないだろう。

「……わかった。もっとミリア君と話し合つてみるよ。本人にもしつ

かりと伝える……ネームレスだつてことを」

力強く頷いたヘスティアにミアハが笑みを浮かべた。

「力に成れる事ならば存分に言ってくれ。彼女はうちのお得意様だからな」

「ありがとうミアハ、でもこれは僕が何とかするよ」

礼と共に立ち上がったヘスティアはぐつと拳を握って決意を新たにしつつも、財布を取り出した。

「ここは僕が奢るよ。相談に乗って貰った礼にね」

「いや、ここは私が出そう。其方のファミリアより余裕はある」

極貧ファミリアの主神同士ではあるが、固定客が存在して一定の収入のあるミアハ・ファミリアの方がヘスティア・ファミリアよりも余裕があると言うのは事実だが、今回の件に関してはヘスティアからミアハに相談したいからと声をかけたのだ。相談に乗って貰った上で奢ってもらうのは気が引けるとヘスティアはミアハの言葉に首を横に振ってから店員を呼び止めた。支払ってしまったもん勝ちである。

「店員君、会計を頼むよ」

「はいー少々お待ちをー」

間延びした様な店員の声を聞き流しつつも財布の中身を確認するヘスティア。その様子を見て苦笑を浮かべていたミアハは、ふと視線を店の外にやって、目を細めた。

「ヘスティア」

「なんだいミアハ、僕は支払で忙し——「あそこに居るのは、ミアアではないか？」——んん？」

肩を掴まれ、漸く財布から視線を上げたヘスティアの視線の先。店から大分離れた街灯の下をフラフラと覚束ない足取りで歩いて行っている小さな体躯に綺麗な金髪、その容姿にまったく似合わないポロつちいローブ姿の子供が街灯の明りから外れて暗がりへと歩いていく姿が見えて、ヘスティアは息を呑んだ。

「ごめんミアハ、支払い頼むよ。僕……ミアア君を追わなきゃ」

何処かに行ってしまう。あのまま行かせてはいけない。そんな思いに駆られ、ヘスティアは財布をミアハに押し付けるとそのままミリア

アが消えて行った方向へ走り出した。

第二十三話

真ん丸お月様。お空の上でーお散歩かな？ 気ままな一人旅はとも楽しそう。

元の世界とは全く違って神様が地上に降り立ったこの世界でもお月様は満ち欠けするんだな。今日は満月の様だ。

魔石産業というのはいくらでもかなりクリーンな産業らしく、排ガスなんてものが存在しないからか空気が澄んでいて天を仰げば満天の夜空が広がっている。

現在位置は……オラリオの街を囲う様に作られた市壁の上。それなりの高さがあり、冒険者であっても駆け出しの場合は転落すれば命は無い様な高さの市壁の上である。何でここに居るかって？ さて、何ででしょうか？

もし、ベル君と出会わなければ。もし、ヘスティア様と出会わなければ。

もし、俺が嘔吐きでなければ。もし……もしも、俺が前世の記憶を完全に忘れられていたら。

どうなっていただろう？

ダンジョンで死んでいた？ 死の恐怖に押し潰されていた？

ベルやヘスティアに嫌われずに済んだ？ 前世を思い出してしまつて死のうとした？

IFばかりを考えても仕方が無い。そりゃわかってるさ。でも少しぐらい許してくれたつて構やしないだろ？

何故この世界にミリア・ノースリスの体で、ミリカンの魔法が扱える様な状態で憑依転生を果たしたのか？

考えても無駄な事だ。でも、もしかしたら……原因は俺にあるのかもしれない。

ミリア・ノースリスと言うキャラクターは親父が一人で作り上げたキャラクターだ。ティッシュ箱に複数の条件の書かれた紙切れを沢山山放り込んで、俺と親父で三枚ずつ引く。出た条件に合ったキャラクターをミリカンの魔道国のキャラにしよう。と親父と共に引いた。

俺が引いたのは『狐』『狙撃』『超火力』の三つ。出来上がったキャラはクー・シー型に分類される超火力狙撃キャラ。鈍足ではあるが単発威力が最高値の対物ライフル並の威力のスナイパーマジックを使いこなす狐耳・尻尾の女性になった。

対して親父が引いたのは『幼女』『竜』『機関銃』の三つ。出来上がったのは？ ガトリングマジックを使って高機動低装甲の竜人幼女……ミリア・ノースリスが出来上がった訳だ。

なんでこんな話を？ そりゃあ……親父が作ったキャラクターだろう？

当時、俺は血の繋がりが無い事を知りつつ、息子のふりをしていた訳だが……。何を思ったかって？ 俺がミリア・ノースリスであれば、父親の子供であれたのでは？ なんて考えた。作られたキャラクターであっても、父親の手で生み出されたキャラな訳で……要するにミリア・ノースリスになりたいなんて阿呆な考えをしていた訳だ。俺がミリア・ノースリスを愛用していたのも、そこら辺の理由が含まれていたしな。

ここまで言えば理解もできるだろう。要するに心のどっかで願ってたからミリア・ノースリスになったのかも知らん。まあだから何だって話なんだが。

要するに何処までもなりたかった自分を演じていたって訳だ。この世界に来てから違和感なく女言葉で喋ってるのもそこらが理由だろう。多少の動揺では揺るがないぐらいの演技派である。そりゃあ二十年以上演技を続けてりゃちよつとやそつとで剥がれる様なもんじゃ無くなるしな。

むしろ、演技をしない自分ってどんな感じなのか？ 心の中身を全部ぶちまける感じか？ そりゃあただの阿呆って奴だろう。いや、そうでもないのか。ベル君とか割と心の中身が透けて見えてる時あるし。そう考えると心の純粹さって大事だよな。俺の考えが外に洩れてたらヤベェし。考えて喋るのは普通と言えるだろう……考えすぎて自分を見失ったのかねえ。

オラリオの市壁は不思議な構造をしている。外側に対してだけで

なく内側に対しても狭間胸壁が作られているのだ。本来なら外敵に備えて外側に向けてのみ狭間胸壁が作られるのだが、これにはちゃんと理由がある。

現在のオラリオは市壁の内側に都市が広がっている。しかしこの市壁は元々はダンジョンの内側から溢れてくるモンスターを外界と隔てる為の最終防壁だったのだ。そして同時にダンジョンに利益を見出した他の国からの攻撃にも備える為のモノなのだとか。

ベル君が詳しく知っていた。興奮気味にまくしたてるベル君はオタク気質なのだろう……いや、誰しも自身の知る凄い知識を披露したいだろうし、普通か。

ともかく、神々が降り立つ前から建造されていた市壁を修繕しつつ使っていたモノなので実はかなり歴史ある建造物らしい。ちなみに……今のヘステイアファミリアの本拠となつている廃教会も実はかなり歴史ある建物だ。そりゃあ神様が降り立ったのは千年以上前の話で、神様が降り立ってから教会とかは全部無意味だと神々から言われりや無用の長物になるだろう。むしろ千年の時を経ても形を保っているって本当に凄いな。

ふと、足を止める。市壁の上をぼてぼてと歩いていただけで特に何をしていた訳でも無い。

お月様とーお散歩ーこんな夜は暗いのにーお月様は真ん丸明るくきれいだなー……何の唄だっけか？ どうでもいいか。

狭間胸壁の凹部分にひよいと足を掛けて登る。そのまま凸部分に足をかけて高い所へ。

視線を市壁の内側、オラリオの街並みの方へ向けてみる。現在時刻は……十一時過ぎぐらいだろうか。前世の都市部と同じく夜間も明りが途絶える事の無い街並み。魔石を使った街灯によつて中心部の明りは途絶える事を知らぬ。けれども前世よりも技術が半端な感じがする世界。

綺麗だなあ。つくづくそう思う。綺麗な部分だけじゃないだろうが、この灯りの灯る街並みは美しかった。

さあて、何でこんな所に居るのか。答えあわせでもしようか。

ここから飛び降りりや駆け出し冒険者なら死ぬ高さ。もう分るだろう。自殺つて奴さ。

投身自殺と言うんだったか？ さあ、パツと飛び降りちまおうか。足元を見てその高さに身が竦んだ。一度死んだんだから慣れるよ……むしろ一度死んじまった記憶があるせいでビビってんじやねえか。ほらどうしたよ……安心しろつて。聞いた話だが投身自殺つてえーのは落ちてる最中に意識が飛んじまって着地時点で意識は無いらしいから簡単に死ねるらしいぞ。保証は無いけどな。

……足元を見るんじや無かった。下にあつたのは外壁の基礎部分の石畳。叩き付けられりや冗談抜きで死ぬ。その衝撃を想像して足が竦んだ。

上を見上げる。前世の最期の記憶と重なる、けれども前世よりも大きく感じる真ん丸お月様が空に浮かんでいる。

俺みたいな嘘塗れの奴がベル君やヘステイア様と一緒に居るのは良くない。純粹で嘘を吐く事が出来ず、すぐ人を信用してしまうチョロ過ぎなベル君と、優し過ぎて……その優しさに浸って居たくなるヘステイア様。

あの二人だけで良かったのだ。俺なんて嘘と演技で塗れた存在はいらなかった。本当はヘステイアファミリアを脱退する為にヘステイア様に声をかけてファルナを解除して貰ってから死ぬべきなんだろうが。

ヘステイア様の声を聞いたら決心が鈍ってしまう。ヘステイア様は俺を引き留めるだろう。俺は……引き留められたらきつと思いつまってしまう。だって……あの神様の言葉が甘つたる過ぎて。その甘さに魅力を感じてしまうから。

だから、ヘステイア様に会わずにここに来た。このまま飛び降りて……それでお終い。其れで良い。

ベル君に余計な事を教えたり、ヘステイア様に迷惑をかける事も無い。

風が市壁の上を走り抜けていく。背を押すのではなく正面からまるでやめろつても言う様に。その所為で余計決心が鈍りそうになる。

ここで終わり。其れで良い筈なのに……。

怖い。普通に怖いわ。

恐怖の所為で足が竦む。死を前にして演技でパツと飛び降りる事が出来る程じゃないらしい。

足が震えるし、何より笑えるのはこんな状況でありながらヘステイア様かベル君が現れて止めてくれるんじゃないやねえかなって期待してる自分が居るって所だな。

ベル君は何処に居るか知らんし。ヘステイア様は今頃ミア様と楽しく過ごしているだろう。

俺の事なんて構う必要なんてない二人だ。ベル君の事は気がかりと言えば気がかりだが、何だかんだで打たれ強いベル君なら大丈夫だろう。

ミアさんが「行く当てがないなら此処に来な」と言ってくれていたが……誤魔化したしな。

空を見上げたまま足の震えを止めようと深呼吸を繰り返す。ひっひっふー？ ふざける余裕があるのか。それともふざけないと平常心を保てないのか。今すぐにでもヘステイア様に会いたいと思ってしまう――

「ミアア君」

「っ?!」

聞こえるはずのない声に驚いて体が震えた。ゆっくりと振り返れば息を切らせたヘステイア様が肩で息をしながらこちらを見ていた。

「やあ、奇遇だね」

につこりと笑顔を浮かべたヘステイア様の姿に顔がひきつる。なんで此処に居る？

「こんばんは」

それなのに、俺の口はごく自然に挨拶の言葉をこぼしてしまう、まるで模範的な日常会話のように、演技をし始めた。

吐き気が込み上げてくる。

「そこで何をしているんだい？」

「ヘステイア様の方こそ、こんな時間にこんなところで何を？」

質問に質問で返すのは時間稼ぎか情報の取得によって優位性を確保するため。今回は前者のただの時間稼ぎ。

「僕かい？ 君が一人で歩いているのが見えてね。心配で追いかけてきたんだ……なにかあったのかい？」

「なにも、ありませんでしたよ」

嘘一つ。

「嘘だね。ここで何をしていたんだい？」

「夜空が綺麗だったので、眺めてました」

嘘二つ。

「それも嘘だ。そこは危ないだろ、下りてきなよ」

「ここは見晴らしが良いですから」

嘘三つ。

いや、嘘じゃない。半分本音、半分言い逃れ。

「ミリア君……」

市壁の上に設けられた通路のうえ、満天の夜空を背に立つミリアの姿にヘステイアは息を呑んだ。

ひび割れてボロボロになった誤魔化しの仮面を必死に保とうとして失敗しているその姿に胸が痛む。

もう、自分を誤魔化せなくなったのだろう。ひび割れた仮面の隙間から見える本来の表情は泣いているのに、ひび割れた仮面は笑みを浮かべている。

何故、こんな風になってしまったのか？

「ミリア君、君は」

「ネームレス」

ミリアの唐突な呟きにヘステイアは目を見開いた。何処かで知ってしまったのか。一体どの神ミが。そんな疑問をくしゃくしゃと丸めて放りすてている間にもミリアはひび割れた笑みを浮かべて口を開いた。

「嘘なんですよ。全部……」

嘘が嫌い。なのに嘘を吐く事しかできない。自分はユーノ・シラノでは無い。自分はミリア・ノースリスでもない。肯定できる本当の事が存在しない。そんな風に自分を否定していくミリアに、ヘスティアは優しく微笑んだ。

「そんな事は無いよ」

「何処がですか」

近づけない。一步、ほんの一步だけヘスティアはミリアに歩み寄ろうとした。ミリアは——一步、後ろに下がった。

ミリアの後ろには何も無い。後半歩でも後ろに下がればミリアは落ちるだろう。

ひび割れた笑みを浮かべながらも、隙間から覗く涙にヘスティアは優しげに笑みを浮かべる。

「だって——ミリア君は優しいじゃないか」

其れは本物だ。ミリアがベルを大切に思い、傷付けない様に嘘を弄する。嘘を弄したという部分だけ見て傷ついているが、ミリアがベルを傷付けたくないと言う想いを抱いたのは偽る事が出来ない事実だ。「君はベル君を傷付けたくないと想ったから、嘘を吐いたんだよね？」

「……それも、嘘かもしれないですよ」

「嘘じゃないさ。神々に嘘は通じない。言ったよね？ 君は本当にベル君を傷付けたくなかったんだ」

其処まで否定してはいけない。そんな風に諭すヘスティアにミリアは吐息を零した。

優しいのはどっちだよ。俺なんか放っておけばいいのに。こんな所まで息切らせて追いかけてきておいて。言う台詞は『キミは優しい』か。甘ったるいな畜生。

甘くて、甘ったる過ぎて——甘えなくなっちゃまうだろう。

嘘が嫌いだ。何よりも嘘が嫌いだ。嘘で塗り固めた生活を続けていた所為で、何もかもを失った。いや……最初から何も無かった。

「優しいのは、ヘスティア様でしょう」

俺が——俺がベルに優しいと感じたのは……。ベルの目が、親父に似ていたからだ。前世では謝る事も叶わなかったあの人に、よく似た目をしていた。

周りから馬鹿にされても仕方ない様な夢を描いていた。その姿とベルが『ハーレム云々』と語った姿が重なったのだ。

だから……俺の優しさは……嘘だろう。だって他の誰かにその姿を重ねて、重ねた別の誰かに優しくしていた様なもんだから。

「ミリア君……そこは危ないだろう？ 下りておいでよ。一緒に帰ろう」

優しく、諭すように語りかけてくるヘステイア様。神威を使って命令すれば逆らう事なんて出来ないはずなのに。神威を使わずに語りかけてくる。わからない。手っ取り早い手段があるのにそれを行使しないなんて……優し過ぎる。

下りるか……そうか。そうだよな。これ以上ヘステイアの言葉を聞いていたら俺は——堕ちちまう。

きつと、ヘステイアの言葉に甘えてしまう。それは、ダメ——いや違う、嫌だ。嫌なんだ。

「わかりました。今……下りますね」

——あー、これは嘘じゃないな。本当の事だ。最後の最後に心の底から本音だと言える事を口にするなんて、あほらしいな。

さあて、今なら一歩で良い。嬉しそうに笑みを零すヘステイアの表情に足が止まりそうになるが。両足に力を込めて飛ぶ。飛び下りる。

「さよなら、素敵な女神様」

——もし叶うなら二度と会いませんように。

足の裏に何の感触も無い。後ろに跳んだのだから当たり前だ。体が重力に囚われていく。直に落下が始まるだろう。紐無しバンジーなんて初体験である。

やんなきゃよかった。後悔が一瞬で体中に纏わりついて笑みが引きつる。浮遊感が徐々に失われ、重力と言う見えない糸に絡め取られていく。

後は簡単。地面に向かって——いや、地獄に向かって真つ逆さま

だ。よもや俺が天国に行くなんて事は無いだろう。

あの糞女共々、地獄に落ちるのがお似合いだ。

——今日は、月が綺麗な夜だな。

「ミリア君っ!!」

ヘステイア様の叫び声、それから——腹に衝撃。

何が起きたのかわからずに自身の腰にしがみつくナニかに視線を向ける。

嘘だろおい。冗談も程ほどにしてくれよ……。

ヘステイア様が俺の腰にしがみ付いてやがる。

引き上げるつもりか？ いや、冒険者としての身体能力で後ろに向かって全力で跳んだのだ。その距離はヘステイアが手を伸ばした程度じゃ足りないぐらいである。なのに腰にしがみつくヘステイア。

考える必要も無いな。ヘステイア様も落ちるぞこれ。

「何でっ!!」

ふざけんな。ここは嘘で塗り固められた中身の無いスツカスカな屑野郎が一人落ちて真っ赤な染みになる所だろうが。優しく素敵な女神様まで同じ様に落ちる必要なんかミリ単位ですら存在しない。

ヘステイアの体を引っぱがして市壁の上に放り投げようとするが……遅い。既に自由落下フリーフォールは始まっている。

神の体はあくまで地上で過ごす為に作られた作り物である。その強度は地上の一般的な人間と同等程度でしかなく。強度もお察し。今落下中の現在位置から地面に落ちればファルナによって身体能力や強度が強化された冒険者であっても即死待ったなしである。そんな高さから一般人程度の強度しかない地上の神が落ちたら？

冗談はやめてくれ。

「ヘステイア様っ」

ヘステイアの頭を抱え込む。人間の体が緩衝材クッション代わりになるかなんてわかりやしない。けれども何もせず落下すればヘステイアが死ぬ。俺は死んだって構わない。初めからその積りだったのだから。

でも、ヘステイア様だけは何とかならないか。時間が引き延ばされる感覚、何とか出来ないかと視線を向ける。既に飛び降りた市壁の狭

間胸壁部分は遙か彼方上で、速度を増して落ちていくのを肌で感じつつ目を見開いた視界一杯に広がったのは……嘘みたい我真ん丸な月。前世の最期の風景と重なる。

ふぎけんな。一人で死にたくないとは思った。怖いとも思った。でもヘステイア様を巻き込んで死ぬなんて……。

俺が主人公なら、きつとどうにかできるんだろう。頼む、今……この瞬間だけでも俺を主人公にしてくれよ。

『ウイング・マジックツ』!!』

詠唱、叫び、竜の翼が授けられ——なんて都合の良い展開は起こらない。起こる訳がない。俺は物語に出てくる様な主人公じゃないのだから。

畜生、そんな悪態が口から出るより先に着地の衝撃が全身を襲ってきた。背中から落ちたのだらう衝撃に息がつまり、意識が飛ぶ。

「……………」

声が聞こえる。

「……………っ!!」

誰かの必死な呼びかけが聞こえる。

「ミリア君っ!!」

体を揺さぶられる感覚に目を見開けば、ヘステイアの顔が直ぐ近くにあった。

「ミリア君っ！ 大丈夫かいっ！ 怪我はっ!？」

体を揺さぶられる感覚に、瞬きを何度か繰り返す。驚き過ぎて言葉が出ない俺に何度も呼びかけるヘステイア。まさか、まさか奇跡が起きた？

「ヘステイア、落ち着け」

落ち着いた男の声が聞こえる。そちらに視線をやればこちらから見下ろす位置に神ミアハの姿があった。その横には呆れ顔を浮かべたミアハ・ファミリア唯一の眷属のナアーザという女性もいる。

何が起きた？

「何が……」

「ミリア君っ！」

ヘスティアに肩を掴まれ、視線が真っ直ぐ交差する。

「ヘスティア様？」

何が起きた？ ヘスティアの肩越しに見える景色は市壁に半分に切り取られた満天の夜空である。間違いなく俺はヘスティアと共にあの市壁の頂点から自由落下したはずである。死ぬのが普通の高さ。だと言うのに俺は生きている。ヘスティア様にも怪我らしい怪我は無い。どういう事——そこで気付いた。

自分が寝転がっている地面、いや地面じゃない。麻布がかけられたこれは——干し草か？

視線を周囲に彷徨わせれば漸く理解できた。

此方がミアハ様を見下ろしていたのは、俺の方が高い場所に居るから。馬車だ、馬車の荷台一杯に積まれた干し草の山——動物用の飼料となる干し草が山の様に積まれた馬車の上に落っこちたらしい。

いや、俺が下を見た時にそんなモノは無かった……じゃあ……。

「跳び下りるなんて正気を疑うわ」

「まあ、無事だから良いではないか」

ナーザさんの手にあるのは——千切れた縄、繋がっている先は俺とヘスティアの乗っかっている干し草の山の乗った馬車。

なあるほど。俺が奇跡を手繰り寄せた訳じゃ無く、ナーザさんが馬車を俺とヘスティアが落ちる位置まで引っ張ってきただけか……。

理由を理解して頭の中で反芻して嚙下し終えたところで、湧き上がってきたのは苛立ち。

「ヘスティア様」

「なんだい？」

身を起こしてヘスティアの方を向く。この怒りは、きつと……いや、只の逆切れ。俺に怒る権利なんてありやしない。でも言いたかった。言い散らしたかった。

「なんであんな事したんだよっ!!」

危うく、あんたまで死にかけたんだぞ。そんな怒りに対する返答は

乾いた音と共に視界が明後日の方向に向いた。ついさつきまで正面に捉えていたはずのヘスティアの姿は無く。呆れ顔から軽蔑の視線に変わり始めたナーザさんと、流石に見かねたのか無表情で此方を見るミアハ様の姿がある。頬はジンジンとした不思議な感触。この感触は知ってるぞ。ビンタされたな。

「君は……」

頬が少しずつ熱くなっていく。熱は次第にチクチクとした痛みへと変わっていく。頬を押さえるでもなく、震える声で何かを言おうとするヘスティア様の方へ視線を向けた。

「君は自分が何をしたのか解っているのかいっ!？」

両肩ではなく。頬をバシンと掴まれて強制的に顔を合わせられる。

「君は……」

大声に驚いた。だがそれ以上に……ヘスティア様が泣きそうになっている方がよっぽど衝撃的だった。

「……君が無事で良かったよ」

何を言うでも無く。ぎゅつと……抱き締められる。

その抱擁に、思わず視界が歪む。

「なんで……」

なんでだよ。なんでそんなに優しくしてくれるんだよ。俺なんて前世で人を騙して金を稼いだりしてた屑野郎だぞ。ゲーム好きな父親を悲しませた揚句、謝る事もしなかった……できなかつた屑なんだぞ。

ベル君だつて傷付けた。嘔吐していた所為で傷付けたのに。

「血の繋がりも無いのに。なんで……」

親父との間に、望んだのだ……血の繋がりを。其れは嘘一つ無い真実である証明が欲しかった。あの人の息子で、一緒にゲームをやつて……ミリカンを盛り上げて。其れを継いで——そんな風に夢を見ていたかった。

あの糞女が——いや、俺が余計な嘘なんて吐かずに。最初から親父に言っておけば。また、何かが違うたのかもしれない。

欲しかった。繋がりが。解りやすい繋がりが。血の繋がりがあれば――

「ミリア君、君は勘違いをしているよ」

勘違い？

「……僕が、君の背に刻んだのは何だい？」

俺の背に刻まれているモノ？ 神の恩恵、ファルナか？

「何故、僕達神々は眷属けんぞくを家族ファミリアと呼ぶか知っているかい？」

……知らない。

「君の背に僕の眷属の証を刻んだ時――僕は君の背に何をした？」

俺の背中に？ ヘスティア様は―― 神の血を垂らした。ほんの一滴。更新の度に。

……まさか？

「気付いたかい？ 僕達神々が人間ことごとに恩恵を刻んで眷属けんぞくとした後、家族ファミリアと呼ぶ理由を」

「血の繋がりが無い？ そんな事は無いさ……だって、僕は既に君に血を授けたんだから」

――ずっと、ずっと求めていたモノだ。

「ねえ、ミリア君……君は、僕の眷属ファミリア／家族ファミリアで居るのは嫌かい？」

嫌な訳がない。ずっと、望んでいたのだから。何物にも否定されない繋がりが……だが……

「逆に、聞いても良いですか」

この質問の答えなんて……ヘスティア様がなんて答えてくれるかなんて理解できてる。この優しい神様は……優しく受け入れてくれるだろう。俺は――もうダメだ。

この優しい女神様に頭を垂れる事しかできない。この優しさに触れていたかと思ってしまう。離れるなんて……もう考えられない。

「……私なんか眷属でも良いんですか？」

「当然だろう？」

――ああ、やっぱりな。もう、堕ちちまいそうだ。

「君は、自分が誰かわからないんだよね？」

優しい抱擁に溺れそうになる。抜け出すなんて出来ない。

「主神として、君の名前を決めてあげたいと思うんだ」

ヘステイア様がくれる名前？ それは……。

「いらんかい？」

欲しい／＼いらんかい。

ユーノと名乗るのはおかしいだろう。でも……ユーノという名前は……親父がくれた……。

「……君が名乗りたい名前はあるかい？」

……ユーノという名前の人物は、死んだ。月を見上げて。崖から落ちて。無様に……一人で哀れに情けなく惨めに死んだ。俺は……。ダメだな。もうヘステイア様に心の底から惚れてしまった。過去を忘れる事は出来ないだろうが、この女神の眷属で在りたいと願ってしまった。

「いいえ、無いです」

ここで、ヘステイア様に名前を授かろう。過去を捨てて新たな人生なんて言う積りは無い。けれども……この優しい女神様の眷属になりたいと願ってしまう愚かしい俺が居るだけだ。

「……わかった。じゃあ君の名前は……ミリア、ヘステイアファミリアのミリア・ノースリスだよ」

……もう、逃げる事は出来ないな。

俺の名前は、ミリア・ノースリスだ。只のでも、竜人でもない。翼なんて無い。地を足で駆ける事しか出来ない。

ヘステイアファミリア、神ヘステイアの眷属、ミリア・ノースリスだ。

第二十四話

「君は最高の眷属だよ」

そんな風にぎゅっと抱きしめてくるヘステイア様。ううむ……離せ。

ヘステイア・ファミリアのホーム、神ヘステイアの寝所……いや、ごめん。寝所……ベッドの上で神様と二人きり。これは俺が男であれば美味しい展開が……無いな。

ホームへと帰還後、ヘステイア様に言われてステイタスの更新を行った。理由としては名前がしつかりと定まったか気になるだろう？ との事だったし。俺も普通に気になったので更新した訳だよ。そしたら……。

ヘステイア様に抱き締められながらも右手に持つ更新後のステイタスの書かれた紙切れを見つつ吐息を零す。数値上は何の変化も無い、と言うか当然だろう。ダンジョンに潜っていないし特に何かを頑張った訳でも無いのだ。しいて言うなら紐無しバンジー？ あんなもんでステイタス上がって堪るか畜生。もう二度とやんねえぞ。

って違うそうじゃない。俺が話すべき所は其処では無くてだな。

「ベル君はヴァレンなにがしなんてどこの馬の骨ともしれないロキ無乳の眷属なんかの影響を受けて……ぐぬぬ」

おお怖い怖い。ステイタスの、スキルや魔法って言うのは眷属の深層心理を映し出すモノであり。特にスキルって言うのは種族固有のもの……有名な所で言えばアマゾネスの力向上スキル。獣人系の敏捷上昇スキル等を除けば基本的に眷属の深層心理。深い所に存在する『思い』や『想い』が形となる事が多いらしい。

んでベル君の場合はヘステイア様の影響で深層心理に変化があったわけでは無く。見ず知らずの……ヘステイア様の嫌いな神、ロキと言う神が主神を務めるファミリアの眷属の影響を受けてスキルが発現した訳だ。ヘステイア様的にはかなり気に食わない展開らしい。

んで俺の場合はー……もろにヘスティア様の影響が出た訳だ。何がって？ スキルが発現しました。

『^{フェア}ミリアア
家族／眷属』

- ・ 早熟する
- ・ 信愛を抱き続ける限り効果持続
- ・ 信愛の丈により効果向上
- ・ 改宗により効果消失

ちなみにベルも同じ様なスキルを覚えてるっぽい。早熟すると言う部分は変わらずだが他の部分は違うらしい。ベル君の対象はヴァレンなにがしであるのに対し、俺のスキルは完全にヘスティア様に向いているのだ。

感動した……と言うかめちやくちや嬉しそうなヘスティア様がぎゅつと抱きしめてくれてる訳なんだが……あの、恥ずかしいんで放して貰っていいですかね？

「ミリア君」

おい名前を呼ぶな。耳元で囁くな。やめろ。

「顔赤いよ？ 嬉しいのかい？」

……………。ひ……………否定はしない。

否定しねえよ。名前を貰ったんだ。家族として認められたんだぞ。その上で名前を呼んでもらえるなんて。嬉し過ぎて……めっちゃ恥ずかしい話なんだが顔がにやけちまうんだよ。ああ、くそ。

「は、離して」

「ミリア君は可愛いなあもう」

おい馬鹿ヤメロとりあえず離せ。このままだと本気で惚れちまうだろ……いや手遅れか、もう惚れてるし。

半ば強引にヘスティアを引き剥がして枕にダイブ。耳まで所か首筋まで真っ赤になってると思う。顔が熱いわ。と言うか名前を呼ばれた程度でトキメキを覚えるとかもうこれダメかもしらんね。いや、名前を授かったあの瞬間にはもう墮とされた訳だしなあ……。

「君は本当に可愛いよ、僕も胸を張って言えるね。最高の眷属だって」
ははっ……ああ、そう言うのはベル君に言っつけてやってくれよ……恥

ずかしいんだよ。くっそ、この神様恥ずかしい台詞をポンポン口にしやがって、しかも演技でも無く心の底からそう思ってるのが伝わってきてヤバイ。恥ずかしさで枕から顔を上げれんぞこれ。

そういう台詞はベル君にだな……ん？　ベル君？　そーいやベル君帰ってないんだよな。

「ヘステイア様、ベルが何処に居るのかわかります？」

「ん？　ベル君かい？　いや、わからないけど……ミリア君を放っておいて何処か行っちゃやうベル君なんて知るもんか」

ぷんすかと言う擬音でも出そうな表情のヘステイア様なんだが、ベル君にも事情があつたしなあ。いやそれ多分ヘステイア様の嫉妬だよね。『ヴァレンなにがしがどうの』とか言ってるし。まあ置いてかれた事に思う事があるとさえ言えそうだが、傷ついてたし……と言うかベル君何処で黄昏てんだろ。

とりあえずベッドから抜けだしてっと。

「ベルが居ないのは事情がありましたし。探しに行つてきますよ」
「事情？」

あー、ヘステイアに教えても良いかなこれ。いや、一応黙っておくか……ロキファミリアとトラブルがあつてベル君が傷つきましたなんて言つたらロキの所に殴り込みしそーうだし。

「まあ、色々とありま……あー」

嘘じゃないけど今普通に誤魔化そうとしてたわ。もう嘔吐かかないとか言いつつこんな調子じゃダメじゃねえか……はあ。

「ん？　気にしなくても良いよ。日頃の癖なんて直ぐに直したりなんてできないんだし。とりあえず何かあつた訳だね？　じゃあ僕も探すよ」

もう真夜中って時間なんだからヘステイア様に搜索させるのは気が引けるんだが。

「いえ、私一人で十二分でしょう。キューイも居ますし」

テテテテテテ、レーダーキューイいー。これ一台匹でモンスターもベル君もヘステイア様も探したい放題ですよ。一家に一台匹つてぐらいだからな。

「でも……わかった。ミリア君を信じるよ。でも帰ってくるまで起きてるからね？」

いや、寝てていいです。寝不足はお肌の大敵……神様って肌荒れとかしないのか？

唐突だが、夜のダンジョンは超々超危険だって話は聞いた事があるだろうか？ 昼間のダンジョンと夜のダンジョンは実はモンスターの量が全然違う。

ちなみにモンスターが増える量は昼も夜も変化が無い。RPGゲームで言えば夜間は強いモンスターがうじゃうじゃするのが普通だろうが、オラリオのダンジョンでは出現モンスターに違いは無いし、モンスターの増加量も変化が無い。それなのに夜の方がモンスターが多い理由とは何か？

正解と言うか答えは冒険者の数である。

当然冒険者達はヒューマンや亜^{デミヒューマン}人で構成されているのだが、どうにも亜^{デミヒューマン}人の中には吸血鬼^{ダンピール}みたいな夜行性な性質を持つ種族は居ないらしい。それがどういう事かって言えば、冒険者は昼型が基本なのだ。

つまり一般的冒険者が潜るのが昼間なので夜間に潜る冒険者は殆ど居ないのだ。

それがどういう結果を齎すのかって言えば、冒険者が少なくなれば相対的に一人の冒険者が相手取るモンスターの数が増える。

と言うか上層の一、二、三階層は常にガネーシャ・ファミリアの団員がモンスターの数を調整して狩っているらしく駆け出しも駆け出しと言う新米冒険者がしつかりと経験を積める様に気を使っているらしい。ガネーシャ様すげえなおい。

んでそう言う事だから夜間のモンスターは冒険者が少ない分狩られる事が無いので凄く増えたように感じる訳だ。と言うか逆なんだよ、夜のダンジョンが本来のダンジョンで昼間のダンジョンは冒険者に踏み荒らされたダンジョンって訳だ。

どうしてそんな話をつて？ 今の時刻は真夜中を過ぎたぐらいの時間。多分零時半とかそんぐらい？ 現在位置は——ダンジョンの四階層です。ええはい。

あ、ちなみに朝一でダンジョンに潜るともれなく夜中に増えに増えたモンスターの相手をしないとだからかなり大変らしいんだが、そこらもガネーシャ・ファミリアが朝一で十階層まで適度にモンスターを減らしてくれるそうなので新米冒険者である俺やベルが潜る時間帯にはダンジョンの中のモンスターの数が適度に減らされているのだ。ガネーシャ・ファミリアつてすげー。

ちなみに残る残弾は20発を切り、次の一撃を喰らえばマジックシールドが弾け飛んでマインドダウンしそうです。マインドダウンして気絶したら死にそう。と言うかダンジョンで気絶とか普通に死ぬだろ。

どうしてこうなった。

「は？ ダンジョンの中？」

「キューイキューイ」

そうそうと頷くキューイにあっけにとられつつもバベルからダンジョンに続く直径3メートルぐらいの大穴を見つつキューイの翼を掴まんで吊り下げる。

「え？ マジで？」

「キューイキューイ！」

やめて離してと暴れるキューイを離すとそのままぼとりと床に落ちた。キューイキューイ文句を言ってくるがちよつと待ってほしい。今からダンジョンに潜るとか自殺行為過ぎて笑えないよ。

まさかのそのまさか、ベル君はどうやら侮辱された事を気にして黄昏るのではなくモンスターを切り刻んで強くなろうとしたらしい。夜のダンジョンは危ねえんだよ何考えて……はあ。

「キューイ、援護任せます」

「キューイ！」

キューイを自動砲台として付属させて行こう。魔法使い一人でダンジョンに潜るとか……でもベル君迎えに行つてヘステイア様にご怠りまつて言わないとだし。

『ファイアツ』！

「キューイキューイっ!!」

発砲音が複数響き、俺とキューイの放つた『ピストル・マジック』がコボルトを吹き飛ばすのだが……数が多すぎる。20匹近く居るんだけどこれえ。二人がかりで漸くなんだけど。つて銃声でモンスター集まつて来たし。これマジで死ぬんじゃないかね？

マガジnkラフトを全力で行いつつキューイの射撃を頼りになんとか前進する。ちよ、数多い多いっ！

倍なんて生易しい数じゃない。もう数の暴力である。ゾンビゲーで見た事あるぞこれ。誰かグレネード持っていないのっ！

「キューイっ!!」

え？ 弾切れ？ 待つてまだマガジnkラフト終わつてないよ……あー……よし逃げよう。全力疾走である。もうダメだ。

「弾切れえっ!?!」

「キューイっ!?!」

お、キューイって『マジで!?!』みたいな事言えたのか。

はっはっはっは……はあ、なんでこうなった。笑いがとまんねえ。マガジnkラフトして何とか20発確保したんだが、戻れる気がしない。キューイリーダーがガンガン反応してどこから来るのかわかんないとキューイが泣き言言いだしたし。もうこれわかんねえな。

現在位置は何処だ此処……ああ、あれつて六階層に通じる階段か……つて道に迷つてる間に六階層に通じる階段まで来ちゃったよ。途中でベル君も見なかったし。キューイリーダーもモンスター多すぎてわかんなくなつたとか言い出すし。ここで死ぬとか冗談じゃない

いよ。せつかくへステイア様に忠誠を誓ったのにその後すぐ死にま
したとかわからえんわ……。

「キュイー！」

お？ キューイが何か見つけ……六階層への階段の周囲に魔石や
らドロップアイテムが一杯散らばってるんだけど何アレ……いや？
こんな時間にダンジョンに潜ってる奴って俺かベルのどっちかだ
ろ？ 俺はここで戦った記憶ない。つまりあれはベル君の痕跡って
訳だ。拾い集めりや相応の金額だが、金に目が眩んで命落としてちや
詮無いし今は無視無視……いやでも少しだけ拾ってこ。この魔石と
か結構いい感じっぽいし。おつ、ドロップアイテム良いのあんじやー
ん。

「キュイキュイッ!!」

いかんいかん、欲に目が眩んでんじやん。全部捨ててかなきゃ、少
し……いや、とても勿体ない。

ドロップアイテムを泣く泣く見捨てて下の階層に走る。さつさと
ベル君見つけてへステイア様の所に帰らなきゃ。ほらべールー何処
だー。

「キュイっー！」

お？ キューイレーダーに反応あり。六階層まで下りてたのかあ
……六階層……マジかよ……。

「キュイッ!! キュイキュイッ!!」

えつと、こつちか？ え？ こつち？

キュイキュイ鳴く道案内を頼りに足を進める。お、血痕と魔石が転
がってるじやん。この曲がり角の奥ねー了解。

曲がり角を曲がって直ぐ、目の前に広がったのは一匹のフロッグ
シューターの姿。その口から見覚えのあるブーツを履いた冒険者の
下半身が覗いているのを見て血の気が引いた。あれ、食われてんのべ
ル君じゃね？

「『ファイアツ』!!」

速射でフロッグシューターの頭を吹っ飛ばせば、魔石を残してフ
ロッグシューターが消えてベル君が投げ出されて地面に転がる。

「ベルっ!!」「キュイっ!!」

「うっ……」

慌てて駆け寄ってみれば、特に異常の無い……いやごめん嘘、フロツグシューターの粘液でぬちよぬちよのベル君が居た。ちよつとなんでベル君がぬちよぬちよになってんですかね……。怪我は無いみたいだから良いんだが。

「ミリア?」

「なんでこんな無茶してるんですかね」

「……ごめん」

怒ってる訳じゃ無いぞ? と言うか後ろ向きな自殺未遂やらかした俺が前向きに自殺未遂仕出かしてるベル君を説教とか出来るわけじゃないじゃん。

「まあ、悔しかったのは解りますが……無茶し過ぎですよ。帰りましょう」

「……………」

俯いて考え事か。何を考えてるんだかね。顔を上げたベル君の瞳を見て確信した。……ああ、帰る気は無いのか。

「ごめん、僕……強くなりたいんだ」

「強く?」

「うん……僕は許せないんだ。何もしてないのに、何かを期待してた僕自身が……」

何もしてない……か。冒険の一つもせずにアイズさんに追いつけるかななんて言ってたのを気にしてるのか。

……かつこいいいな、侮辱してきた【凶^{ヴァナルガンド}狼】じゃなくて、期待を抱くだけで何もしてなかった自分に苛立ちを覚えてるなんて。かつこよすぎる。眩しいわ……。

「そっか」

「だから……僕は……」

「わかった。じゃあ朝まで頑張りましたよか」

え? みたいな表情を浮かべたベル君。まあ連れ戻しに来たはずなのにこうなるのはどうかと思うがね。でも、ここまで吠えた男って

言うのを強引に連れ戻すなんてしたくないしなあ……あーヘステイア様に申し訳ないなこれ。

「でも約束ですよ。死なないでくださいね」

「……………わかった」

よし。んじや俺は帰……れないなこれ。後ろから罅割れる音が聞こえてくる。マガジンは残り1つ。キューイの方は……弾切れ？

マジかー。

「ベル、一応援護はしますけど……15発しかありませんし。多分次攻撃喰らったらマインドダウンしてぶっ倒れます」

「……………わかった」

現れたのは昨日姿を探しても見当たらなかった・身の丈160cm、全身は黒一色に染まった人型モンスター、異様に長い腕の先には三本の指が備わっておりその指はナイフのような形状をしている。うん特徴もぴったり一致してるね。こいつウォーシヤドウだよ。

しかも三匹も居るよ。やったねベル君役満だよ……これ、生きて帰れるかね？ ……まあ、大丈夫だろ。多分……きつと、めいびー。

第二十五話

意識を取り戻したのはダンジョンからバベルの地下へと続く螺旋状に掘り込まれた階段の所でベル君に背負われている所での事だった。

「ミリア、大丈夫？」

「……すいません、気絶してましたか」

最後の記憶では弾切れになった後にクラフトマガジンしてー……。うん。ウォーシャドウが背後から近づいてきてて一撃でばつさり斬り捨てられた気がする。マジック・シールドで攻撃自体はヒットしてなかったが、精神力マインドをがつつり削られて意識が飛んだらしい。

俺はアレだな、他の魔法使いと違って防御性能あるって訳でも無いなこれ。攻撃喰らうとマジック・シールドで防いでくれるとは言え、マジックシールドの破損時に発生する精神力消費マインドが馬鹿にならない位に大きいから。結局被害は防いでも気絶しちゃう。要するに普通の魔法使いと変わらん。攻撃喰らったらアウトだよ。

と言うかベル君顔半分血塗れじゃないか。大丈夫か。

「ベル、下してください」

「ごめん、上まで頑張るからそこまで待つて」

あ、階段で人を下すのは流石に危ないか。ここ手すりも無いしな。と言うか足取りが凄く不安を誘うんだが、大丈夫かベル君。マジで。

「ねえミリア……」

「なんですか」

どうしたんかね。

「……僕、強くなれるかな」

あー、不安なんかな……。でもはつきり言える事はある。

「なれますよ」

と言うか現在進行形で俺とベルの戦闘能力に差があり過ぎる気がする。はつきり言ってベルは現段階で俺よりかなり強い。ウォーシャドウの攻撃を見切る事なんて出来ずに喰らっちゃった俺とは違ってベルはギリギリとは言え回避したりしてたしなあ。

……と言うか血塗れのベル君見てると気分悪くなってくるな。本当に大丈夫かこれ。

「それよりも怪我、大丈夫ですか？」

「うん、派手に血が出るけど傷自体はもう塞がったし」

ポーション、無いのか……。マインドダウンから復帰直後に魔法使うのってどうなんかね。いやでも今もマインドが不足してんのかね。使ったら気絶しそうなんだが、やっぱ見てられんよなあ。

『癒しの光よ』『レッサーヒーラー』

出血自体は止まってたが、やっぱ怪我はなあ。放置すると感染症が……。いや、冒険者が感染症にかかるのはないのか？　と言うか、気絶しなかったな。

「ミリア、大丈夫？」

「気絶すると思ったけど……大丈夫みたいね」

一晩で回復力があがった？　なわけないか。

「朝……」

バベルの地下から這い上がるかの如く地上に出た俺とベル君を出迎えたのは朝焼けの街並みだった。

ふと思いつ返すのは夕焼けの中でベル君にファミリアの勧誘をされた光景だ、あれが無ければ俺はどうなっていたのか。考えるだけで背筋が震える。だが同時にベル君への感謝も沸き上がってくる。

「ベル」

「なに？」

仕切り直して訳じゃ無いがきちんと自己紹介しておくかな。

「私の名前はミリア、ミリア・ノースリスです」

「……？　えっと……」

困惑した表情のベル君、当然だよな。ベル君からすれば唐突な自己紹介だし。でも俺にとっては初めての自己紹介だ。ヘステイア様に貰った名前での。

「初めて出会ったのが、貴方で本当に良かったですよ」

他の冒険者なら見捨てられていたか、もしくは……いや、もしもを考えるのはやめておこう。俺はベル君とヘステイア様に救われた。

ベル君にはダンジョンの中でゴブリンから救われてヘステイア様と引き合わせてくれた、ヘステイア様には自分を見失ってさ迷っていたのを救われた。

感謝してもしきれないぐらいに、胸がいつぱいだ。この感謝の気持ちを言葉として言い表すことは出来ないだろう。だから、せめて、伝わる範囲が小さくとも伝えよう。

「ありがとう」

驚きの表情から困惑した表情に変化して、ベル君は照れたように頬を掻きながら呟いた。

「僕の方こそ、ありがとう。ミリアが居なかったら危なかったし……それとごめん。ミノタウロスから逃げたとき、置いていつちやつて……」

ミノタウロスと出会ったときの事はよく覚えていないが、そのときの俺の思考からしてほぼ間違いなく俺は自ら囷となるべく行動しただろう。ベル君を助けて自分は死ぬ、俺の好みそうなシチュエーションってやつだしな。だからって此処でベル君にそう伝える必要もないか。

「なら、今度ミノタウロスに襲われたら……その時はかつこよくミノタウロスを倒してくださいね」

まあ、何年先のことになるかは知らんがね。早くともランクアップには二年ぐらいかかるみたいだし。

「わかった、次は必ず」

いい雰囲気になったのは良いんだが結局はボロボロになって倒れる寸前のベル君と、マインドダウン寸前の俺の二人はなんとか歩いてヘステイア様の待つ本拠の廃教会まで行かなきゃなんだよな。これ、帰れるのか？

若干見慣れてきた廃教会の入り口でキョロキョロと周囲を見回し

て心配そうな表情を浮かべたヘステイア様を見つけて呆気にとられた。本当に寝ずに待っていた様子だ……なんつーかな、凄く申し訳ない。

「ベル君！・ミリア君！」

肩を貸していたベル君をヘステイア様に任せる。申し訳ないが寝た訳でも無いのにマインドが回復する訳でも無いし、その所為で気絶寸前なんだ。怪我はベルの方は血で汚れてはいても俺の回復魔法で癒したしなはず。ただ疲労はどうにもならん。んで俺の方は俺の方でマジックシールドのおかげで怪我は何一つ無い。但しマインドダウンの影響でふらふらだよ。

「神様……僕、強くなりたいです」

おお。カッコいい宣言じゃないか。朝日が降り注ぐ廃教会の前で主神である女神に向かつての宣言。ダンジョンの中であれだけ吠えたんだ、その宣言の重さは伊達でもなんでもないだろう。

かつこいいな畜生。俺もあんだだけ吠えられる様な人間になりたいな。まあ、無理だろうけど。

「ベル君、ミリア君、おかえり」

「ただいま、神様」

「ただいまです」

ああ、この笑顔が見れて本当に良かった。何度死ぬ事かと思っただが、この笑顔が見れるなら頑張った甲斐があったってもんだよ。

血塗れのベル君をシャワー室で綺麗にして……ベル君の裸を意図せず見てしまった訳だが。なかなか良い体つきと言うか、細身ではあっても弱々しい訳じゃ無いんだな。後ベル君のベル君は普通であつただけ。

まあ、ベル君は多分意識朦朧で気付いていなかったとは思うがね。適当にパジャマに着替えさせてーつと……俺のパジャマ、ヘステイア様がくれたんだがなんでこう女の子の子女の子した可愛らしいパジャマを選んでくるかねえ……安かったからアレなんだけど。

しかしまあ、マインドダウン寸前だった気はするけどなかなか動けるもんだねえ。気絶しそうでしないこの……なんだ、ギリギリ感？

「いいかいベル君、今日はソファアーじやなくてベッドに寝るんだ」

あんだだけ頑張ったんだ。それぐらいははしらないとなあ。

「すいません、神様……ぼく、もう眠くて」

今にも寝落ちしそうなベル君。もう限界っぽいなあ。

「その代り、僕も一緒に寝かせて貰おうかな」

おお。いや、ヘステイア様のベッドだから別に構わんと思うんだが。ベル君にはご褒美……いや、これ寝落ち寸前で意味無さそう？

照れる余裕も無いぐらいに眠たそうだし。

「いいですよ……じゃあ一緒に寝ましようか」

「なぬうっ!? どわっ!」

おお。大丈夫か……驚きの余りベッドに倒れたぞ。『一緒に寝よう』と誘ってもこれまでずっと固辞し続けたベル君が肯定するのは驚くのはわかるんだが、多分ベル君と一緒に寝るはヘステイア様が思う様なあんな事やこんな事じゃないと思うんだよなあ。それに疲れてるだろうから多分半分寝ぼけて……ああ、照れてなにやら言い訳を始めたヘステイア様だけどベル君はもう寝てるし。

「ひゃあっ！ いやっ！ そのっ！ 何時もならベル君が驚く訳で僕はその様なベル君の反応を期待してだねっ?! その、だからつまりだね——っでもう寝てるしいっ!」

ああ、我が女神はなんと可愛い事か……とりあえず俺はソファアーで寝るか。怪我人って程じゃないしね。と言うか限界だわ、眠い。おやすみ。

しつかり休んで目覚めたらベッドで三人で並んで寝てた訳なんだが。まあベル君も男の子な訳で……男なら誰にも経験はあるだろう。朝は元気になるって奴だ。

何がって？ ナニがだよ。朝起きたらベル君とヘステイア様の間に居た訳だ。三人で川の字、なんとも幸せな事で、俺なんか……いや、

自分を卑下する考えはヘステイア様にやめる様に言われてたか。ともかく目覚めたその時はまあ幸せを噛み締めた訳だよ。これからベル君が強くなるにあたってどうやって援護……援護するにも俺も強くないとだしなあなんて考えてたらだね。ベル君のナニが元気で当たった訳だよ。誰に？ ヘステイア様に？ 川の字で真ん中に俺が居たって言ったろ？ つまり俺に。

まあ……俺は気にしないんだが。ベル君が気にするだろうか？ 目覚めと共に腿の辺りに感じる固い様な感触。なんだと思えばベル君のベル君だった訳だ。

「ごめん」

小さく丸まる様に頭を下げるベル君に俺はどんな反応をすればいいんだろうか。気にしちやいないし生理現象で用を足したり飯食ったりって当たり前の事だからなあ。むしろベル君が元気になった証な訳で……良い事じゃん？ ベル君的にはかなり羞恥的なイベントな訳で、相手によっては『この変態っ！』とビンタされるぐらいの事とはいえさ？

「ベル、私は気にしてませんので……と言うか無かったことにしましょう。そうするのが一番です」

理解は出来るぞ。朝起きたら女の子に元気なマイサンがアレだったら驚くよね？ でも大丈夫だ。そう言う^朝経験は俺にもあったし。女と一緒に朝まで過ごすって経験は無かったからアレだけど。ぐっすり寝こけるヘステイア様の方を見てからベルに呟く。

「相手がヘステイア様では無くて良かったですね」

多分そのまま襲われてたぞ。

ステイタスの更新の最中のヘステイア様の百面相は見ていてなかなか楽しいものであった。ヘステイア様本人からすれば嬉しくは無さそうだが。

！
ちなみに俺のステイタスもがつり上がったぞ。早熟スキル万歳

力：I14 ↓ I30
耐久：I32 ↓ I45
器用：I23 ↓ I58
敏捷：I14 ↓ I40
魔力：I74 ↓ G239

なんと驚異の250オーバーの成長である……魔力がガン伸びしたんだが、どうにもバランスが悪い。

これは仕方ないと言えばそうなのだが、マジックシールドがかなり厄介なスキルである。いや、普通に便利と言えばそうなんだが耐久を伸ばすには被弾^{ダメージ}を負う必要があるんだが……マジックシールドの効力によって攻撃を喰らう⇨精神力^{マインド}の消費と言う構図の為、中途半端な攻撃を喰らうともれなくマインドがゴリゴリ減っていく訳で、耐久が伸びない。んで耐久を伸ばすために攻撃を喰らう条件つてのがマジックシールドを一撃で粉碎してなおかつ俺にダメージを与えてくる攻撃力を持つモンスターと戦うか、マインドダウンしてぶっ倒れた俺を攻撃してもらうかのどっちかである。

はつきり言っつていい？ どっちも無理だわ。

お前、今の俺のマジックシールドって相当ダメージ喰らわないと壊れる事なんてないぞ。それを破壊する攻撃力を持つモンスター？ どう考えてもミノタウロスクラスの攻撃能力が必要な訳で……つまり格上と戦わなきゃになるんだ。冗談じゃネエ。

もう一つの方法は単純に死ぬ。気絶状態でモンスターの前に放り出されるとか考えたくないよ。エ○同人みたいに気絶してるのを良い事に色々やられる……なんて状態じゃないしね。マジで殺しにかかってくるし、普通に殺されてお終い。リョナ展開がお好き？ 結構、俺はそんな展開望んじやない。

んで逆に考えるんだ。このまま魔力をガンガン伸ばしてマジックシールドによって難攻不落のミリアちゃんになってしまえばいいんだと。

……マインドが尽きる⇨死とか言うおぞましい構図になっているがまあ良い。俺はこのまま強くなるぞ！

「そつそんなに伸びてるんですか!? 僕のステイタスっ!」

「ああ、今の君は恐ろしく成長する速度が早い、言っちゃえば成長期だ」

一応、俺もだがね。スキルに関しては伏せておく形になった。俺と違って嘘を弄するのが下手糞なベル君だからね、しようがないね……俺の場合はステイタスに関してはガンガン嘘吐いて誤魔化してくれだど。ある意味では信頼されてるんだろうが少し悲しい。

と言うかベルと俺のステイタス差が現時点でもかなりあるな。魔法と言う優位性が無ければ間違いないベルに置いて行かれてただろう。魔法さまさまである。

ああキューイ不貞腐れるなよ、後で林檎買ってやるからさ。

「これは僕個人の見解に過ぎないけど。君には才能があると思う」

おお、嬉しそうに口元がにやけてるなベル君。まあ才能があるなんて褒められれば誰だって嬉しいもんだ。俺だってそうだし。実際俺のステイタスよりもベル君のステイタスの方が圧倒的に高い。魔法の所為で動かないし接近戦もしないってのが若干関係してるがそれでもベル君の成長は早い。と言うか早すぎる気がする。このままだとほぼ間違いなく現状の速度差だと置いて行かれる。そりやあ不味いよ、頑張らなきや。

「君はきつと強くなる。そして君自身も今よりも強くなりたいと望んでいる」

「はい」

即応するベル君。良い返事だ。ただ急ぎ過ぎて足元を掬われたりしないかは心配ではあるんだがね。

「……その君の意思は尊重する。応援も手伝いもする。力も貸そう」俺も全力で手助けする所存であ……痛っ、こら噛むなキューイ。もう少し待て。良い所なんだよ。

「だから約束して欲しい。もう無理はしないって……お願いだから、僕を置いていかないでくれ」

「はい、無茶しません。強くなれるように頑張りますけど、絶対神様を置いていきません。心配させません」

ベル君の宣言は何時みても心が痺れるねえ。……あのさキューイ、マジで噛むのやめてくんない？ 怒ってるのはわかるよ？ 昨日お土産期待してたんだよね？ それが無かった上に枕にして寝てたのは謝るって、この後ロウキイヘミシアのフォームに行く途中に買ってあげるから、ね？

「その言葉が聞ければ安心だ。それとミリア君も、僕を置いていかないでおくれよ？」

「当然で痛っ!? ちょっとキューイ待って！」

こいつさつきからがぶが噛みついてきやがる。割とマジで怒ってるっぽい。寝てる時に知らぬ間に枕にしてたのは謝るっつてんだろおい。

「ふふっ」「ミリア、大丈夫？」

「血は出てないので大丈夫ですよ」

「キューイツ!! キューキューイツ!!」

甘噛みよりも少し強めに噛みついてくるキューイ、血が出る程じゃないにせよ地味に痛い。とりあえず尻尾を掴んで屑籠ヘシユート。いい加減にしてくれ。後で林檎買ってやるって言ってるんだろ。

「と言う訳でベル君、ミリア君。今日から二、三日留守にするけど構わないかな？」

うん？ 二三日留守にする？

「はい。」

「何処へ行かれるの？」

「ああ、ガネーシャがパーティーを開くそうだね。ちよつと行ってくるんだけど他にも用事を済ませてこようと思うんだ」

神々のパーティーね。少し興味があるが……マア良いか。

「成る程、楽しんできてくださいね」

「行ってらっしゃい神様」

「ああ、期待して待っていてくれたまえよ。タツパーを持てるだけ持って行って料理をたっぷり持って帰ってくるからね」

……その、なんだ。パーティーで振る舞われる料理をタツパーに詰めて持って帰ってくるってのはちよつと良識的なモノが悲鳴を上げ

そうなんだが、ぶつちやけ神々が食べてる料理ってのは非常に興味がある。どんな美味いもん食ってんだろ……じゃが丸くんばつかの毎日だし。正直期待してる。

第二十六話

さあ、やってきました^{ロウキイヘミリア}のホーム。

ベル君は『豊穡の女主人』の店に頭下げに行ってる。ヘステイア様は最低限、パーティに出席するのに見苦しくない様な衣類を買いにいった。ヘステイア様にはものすごく申し訳なく思う。金が全くないせいで選べる衣類の幅が凄く少ないのだ。俺の豪華なローブ解体して布地として使えばドレスとして使えるかもと思っただが、あいにくと裁縫技術を持つ奴が居なかったので廃案になったし。最悪質にでもいれちまうかとも考えたがそれはヘステイア様はやめておいた方が良いと言っていた。早いとこ稼げるようになってヘステイア様に恩返しをしたいところだ。

さて、ここがフィン^あにベタ惚れアマゾネス^女のハウスね。ごめん、正直帰りたい。会ったら殺されそうだし。いや、流星に殺されはしないだろうがそれでも第一級冒険者に狙われてるんだよ？ 怖くない？

まあ、早々出会う事なんて無いは――

「あ？ アンタ昨日の」

噂をすればなんとやら。丁度ロキファミリアの本拠『黄昏の館』の入口からエルフとおっぱい小さい方、後パツキンのネーチャンを引き連れて件の女性が出て来た。うっそだろオマエ。

何？ 其の……うわあ、日差しの下で見るとおっぱいでつけえなあ。額に浮かんだ青筋っぽいモノが……ううん。俺の冒険は此処で終わってしまうのだろうか？

ずかずかと近づいてくる件の女性……ティオネ・ヒリユテ、ヤバイ殺されるっ！

「アンタ、昨日団長を誑かそうとした」

ギギギツというヤベエ擬音が聞こえるぐらいには表情が歪んだ美女。断言しよう、この女性は間違いなく美女である。おっぱいもでかいし引き締まったおへそ回りとか素晴らしい女性的な曲線を描いており男なら視線が吸い込まれるのは仕方が無い。仕方ないから顔じゃなくっておっぱい見よ？ ねえ、あの顔はヤバイって、視線逸らせ

ない。ほら俺、そこにたわわなおっぱいがあるんだからそんな青筋浮かんでキレル寸前みたいな顔じゃなくておっぱい見よ？」

「何しに来たのよ」

「ティオネ、どうしたのよ」

「どうしたの？」

「ティオネさん？」

えっと、おっぱい小さい方がティオナでおっぱいがティオネに比べて小さく、髪もショートである。エルフツ娘がレフイーヤちゃん。見た目は中学生位の女の子で割と可愛い子である。

んで、最後のパツキンのネーチャン。お前もパツキンだろとか言っではいけない。事実だけど。

なんと、彼女こそうちのベル君をたぶらかした修羅系少女、アイズさんである。普通に綺麗で思わず視線が吸われる……吸われ……あ、これ無理、ティオネちゃんから目を逸らしたら死ぬ。

「なんとか言いなさいよ」

なんとか、とか口にしたらたぶん死ぬ。しなくても死にそうとか笑えん。助けてヘステイア様……。

「ティオネさん、その子って昨日の……」

レフイーヤって子は俺の事覚えてたのか。

「そだっけ？」

……ティオナちゃんの方は、まああれだね。酔ってたしね？ 覚えてなくてもしょうがないよね。

というか、俺の運悪すぎ？ 噂をすれば影だったか？ そんなことわざがあつた気がするが考えただけでアウトなのか……出会うだけに。ゼロ点、やり直し。寒いギャグを考えている場合ではない。このままでは俺の命が危うい。

「あの、私はロキファミアリアと少し話がありました」

決して団長さんと個人的な話をしに来たわけではない。

「先日のミノタウロスの件で……」

「ああ、なるほど」

ほんと手をうったティオナと、納得の表情のレフイーヤ、二人は納

得させられたはずなんだが肝心のティオネさんはあれだね、鼻をすんすんならしてる……なにしてんの？

「ねえ、あんたから団長の匂いがするんだけど……どういふことかしら」

うえあつ?! どういふことおつ?! いやっ! それこつちの台詞だろっ?! 団長の匂いってなんだ!?

「えっ? えっと……すみません、何がなんだかわからないのですが」

なにこの子、団長の匂いがとか犬かなにか?もしかして匂いで人を追跡できちゃう人? ヤバイよヤバイよ。

「……あんたの服の中からするわね。隠してるもの出しなさい」

なにも隠してねえよっ!?

「まさか……団長の下着とか盗んだんじや……っ!!」

無いよっ!?! なんでそうなるのっ!?

「ティオネさんだけじゃないですか? 団長の下着とか盗むのって」

「何言ってるのよ。私は下着になんて興味はないわ」

何を言っているんだこいつ……。

「団長の裸が無いなら布切れに興味なんてないでしょ?」

じゃあ何で俺が下着泥棒したみたいに言ったんですかね? つか、

団長の匂いってなんだ?

「あの」

「なによ」

顔怖すぎだろ、何で敵視されてんの。

「匂いと言いましたけど、もしかしてアマゾネスって匂いに敏感なんですか?」

もしそうなら、成る程ティオナちゃんも危ない感じ? この姉にしてあの妹ありって感じで。

「いや、私そんな匂いなんてわかんないから」

「そんなわけ無いでしょ」

ティオナちゃんが凄く必死に否定してる。だよね……アマゾネスについてエイナさんから色々聞いたけどそんな話聞かなかつたし。

しかし、団長の匂いね……フィンから渡されたハンカチが原因か?

「もしかして、これの匂いですか？」

ハンカチを取り出して示す。

「確かにこれから団長の匂いがするわね」

マジでわかるのかよ……一体どんな嗅覚してんだよ。

「これどうしたのよ」

盗んだのかと聞かれなかった。よかった……でも目つき怖いままなんです。

「先日、ミノタウロスに襲われた日に、その日は仲間の安否の確認の為に直ぐ帰還しまして。後日訪ねてくれと、訪ねる際に門番にこれを見せる様に言われました」

これ信じて貰える？ 嘘じゃないよ。マジマジ、大マジ。

「……………」

どうだ？

「へえ、そうだったの」

「ティオネさん、疑うのはかわいそうですよ。なんか本気で脅えてますよ」

「そりゃあ第一級冒険者に詰め寄られたら大体の人は怖がるでしょ」

「そっか……怖がられちゃうんだ……」

待って、レフイーヤちゃんとティオナちゃんの援護射撃は凄く嬉し
いんだけど、なんでアイズちゃんがダメメージ負ってるんですかね？

……あっ！もしかしてアレか？ ベル君に逃げられた事か？
多分ソレが原因だよな？

「あの、アイズさん」

「……………何？」

目の前に居るティオネは無視してアイズちゃんのフォローをしておかなくては……一応ベル君の事で傷ついているみたいだしね？

一応ね？

「先日は私の仲間を助けて頂いてありがとうございます」

「仲間？」「アイズ誰か助けたの？」

「あ、もしかして酒場で言ってたあのトマト……あっごめんなさい、こっちの話……………あれ？ 昨日ミリアさん酒場に居ましたよね？」

唐突な話題変更に首を傾げるティオネ、ティオナ……レフィーヤちゃんはそう言えば酔い潰れてなかったねこの子。話が拗れて来た、超面倒臭え。

「ええ、件のトマト野郎……私のファミリアの団長だったんですよ。助けて頂いたので礼をと……非常に申し訳ないのですが礼の品は用意できず……」

えっと渡せる物なんて何もない。だって第一級冒険者の稼ぎからして駆け出し冒険者しか居ないヘステイアファミリアで用意できるモノなんて喜んだりしないだろ。

……じゃが丸くんが好物なんだっけ？ ヘステイア様に言つて山ほどじゃが丸くん用意すれば喜んでもらえるか？

「あの子の……」

考え込むアイズ・ヴァレンシユタイン……にしても綺麗な子だなあ。じゃない、ベル君が惚れてる相手に俺まで惚れてどうする。しかも今は女の子である。流石に百合の花を咲かす訳にはいかない。手遅れな気がしなくもないが女神に忠誠を誓うのは別枠だと信じてる。

と言うかティオネさんはそろそろ離れて貰っても良いですかね？

「ふうん……ウチのベートが悪かったわね」

うえ？

「ほんとごめんねー。ベート口が悪くてさ」

「ごめんなさい」

何でこの子らが謝るんですかね？ 別に事実でしょ？

「いえ、事実でしたし。本人にとっては良い発破をかけられた様なモノでしたし冒険者になってから慢心を抱いていた私とベルには良い薬の様なモノでしたよ。ミノタウロスの件でも身に染みましたし」

ベル君がかつこよくなつたのも一応そのベートって奴のおかげだしね。あの時はむかついたしキューイで襲撃しようかと考えたが今となればベル君に発破をかける言葉でもあった訳で……昨晚のベル君は凄くかつこよかつたし。

「そっか……と言うか慢心？」

気になるの其処かよ……と言うか早くロキファミリアの方へ行きたいんだけど。門番もこつち見てるし。と言うか見てるんだったら助けて門番さん……ロキファミリアの一員っぽいし無理か。

「ねえ」

んむ？ 考え込んでたアイズちゃんが凄く不安そうにこつちを見ている。この子、第一級冒険者なんだよね？ なんてそんな脅える様な表情してんの？

「あの子に怖がられてない？」

………。うん？ 怖がる？ 誰が？ 誰を？

「アイズ、それ気にしてたの？」

「あー、逃げられちゃったんだっけ？」

「アイズさんに助けられておきながら逃げるなんて酷いですよねっ！

あつ、いえ責めている訳ではなくてですね」

少し恥ずかしそうに頬を染めつつも真っ直ぐ見据えてくるアイズちゃん。ここでベル君の恋心を暴露するのは絶対にしないしとりあえずフオローしておかなきゃなんだよなあ。

「いえ、別に怖がっていたとかは無いですね。ミノタウロスに出会った事で気が動転してしまっただけです。私もミノタウロスに出会った時の記憶がとんでいますし」

言い訳としちや完璧である。と言うかマジで解放してくれ。

「怖がってはいないですね。むしろ礼を言わずに逃げてしまった事を本人も気にしていましたし」

俺の言葉に安堵の吐息を零してそつかと呟くアイズちゃん。一応、大丈夫っぽいかな？

「これで話は終わりで良いでしょうか？ 一応ロキ・ファミリアを訪ねた後にダンジョンに潜る事になっていますし」

お金お金、前世では惰性で集めていた金だが今世では本拠の教会の修理費とか色々入り用なのだ……前世の俺って何気に金持ちだったしなあ……お金に苦労した記憶ってあんま無かったんだよな。正攻法での金の稼ぎ方なんて知りもしない辺り……いかん、後ろ向きな思考はやめるって約束があんだろ。

「ふうん……まあ良いわ」

「そっか」

よし、このまま解放の流れで。

「アンタに一応言っとくわ……団長に必要な以上に近づいたら……わかってるわよね?」

アツハイ……。

件の第一級冒険者の三人＋αの子らと別れた後、門番にハンカチを見せたらそのまま少し待つように言われて待っていたら団員が案内してくれると言ってくれて応接室まで案内された。部屋に現れたのは団長と神ロキ。なんで主神が居るんですかね?

「こんにちは」

「こんにちは、先日はすまなかったね……大丈夫だったかい?」

「おー、アンタ大丈夫やったんか? どっかで自殺でもかましてるんやないか思っとつたんやけど」

先日、豊穰の女主人って酒場で会った日の事か。あの時は気が動転して逃げる様に何処かに行ってしまったからな。と言うか神ロキの予測が正確過ぎるだろ。なんか心の中読まれてね?」

「はい、仰る通りですね。外壁から飛び降りました」

「……マジか、すまん冗談やったんやけど……と言うか良く無事やったな」

驚愕の表情になった神ロキ、フィンの方も顔が引きつってる。まあ当然か。

「いえ、その件はもう済みましたし。それよりも改めまして挨拶の方を……ミリア・ノースリスと言います。ミノタウロスに襲われた所を助けて頂いてありがとうございます」

「……ああ、僕はフィン・デイルナだ。助けた事は気にしなくても良い。元はと言えば僕達の所為とも言えるからね」

冷静に返してくるフィン……神ロキは、目を真ん丸にしている。

「なんやアンタ……数日で何があったん? ……まあええわ。ええ主

神に会えたみたいやな。良かったなあ。ウチは神ロキや」

慈しみの目を向けられた。この女神に対する印象がガラリと変わった。悪戯好きの悪神ではなく子供にやさしい目を向けられる道化だったか。

「そうですね。主神に出会えたことは本当に奇跡の様なモノですね。私には勿体ない位の」

その奇跡を前世で与えてくれりや良かったのにな。まあ終わった事に関していつたってしゃーない。

「はあ、アンタがまだネームレスやったらウチが名前決めて改コンバージョン宗させよ思っと思ったけどなあ。アンタの主神行動早すぎやろ……なんちゅー奴なん？」

ああ、神ロキと神ヘステイアって仲悪いっぽいし出来れば隠しておきたいんだけどどうするかなあ。

「彼女の主神かい？ 彼女はヘステイアファミリアの眷属だったはずだよ。神ヘステイアの眷属だね」

「……ドチビ？」

うおおおおおおいッ?!?!? 人がどう誤魔化すか考えてるそれを暴露しやがったぞコイツっ!?!!

神ロキの雰囲気が変わったぞっ?!? なんかドロリとした粘着質ななんかを感じるっ!!

「……あんたドチビんとこの眷属なんか？」

「アツハイ」

どうなる？ ここで叩き潰される？ やだ嘘どうしてこうなった来なきやよかった……。

「出て行け」

うん？

「ドチビの眷属やと？ アンタは可愛いし嫌いやないで？ ネームレスの事に関しても正直悪い思っとする。せやけどソレとコレは話は別や」

え？ 何この流れ。

「フィン、こいつ摘み出しいや」

「えつと……ロキ？ 落ち着きなよ」

フィンも困惑してる。何この……仲が悪いとは聞いてたけどここまでっ!? 坊主憎けりや袈裟眷属まで憎いかっ!?

「ええから、あんたには謝ったる悪かったわ。せやけどアンタがドチビの眷属やつちゅーならウチのファミリアの敷地に入る事は許さん」

団長の権限と主神の権限、より強い方はどちらかって？ 主神の方に決まってるんだろ？

何がどうなったかって？ 普通に追い出された。流石に掴まみ出されはしなかったが……。

俺がヘスティア様の眷属だと知った瞬間の神ロキの豹変っぷりはドン引きするレベルではあった。

と言うかヘスティア様はいったいどんな恨みを買っているんだ。あのヘスティア様が恨みを買う光景なんてさっぱり想像出来ん。

フィンは入口で謝罪してくれたが、用意していた謝罪金は神ロキが渡す必要なんてないと取り上げてしまってしまったらしい。フィンのポケットマネーから出そうとしていた様子だが断っておいた。あんなだけ神ロキに恨まれてんだし団長からなんか受け取ったりした日にはなんかいちやもんつけられそうだし？

一体何が……。

それとキューイ、本当にごめんな。ロキファミリアから貰うはずだったお金で林檎買う積りだったんだが買えなくなっただわ。

「……キューイ」

しおれた花の如く力ない返事を返すキューイ。本当にごめんな、この後ベルとダンジョンに潜って稼げるだけ稼ぐから。そしたら林檎買ってやるからな？ できればグレートレーダー不調とかやめてくれよ？ 頼むよキューイ。

第二十七話

ダンジョンで心行くまでベル君と一緒にモンスターと戯れる事半日。特に問題は無かったと言えるだろう。

やる気に満ち満ちたベル君がまるで無双するかの如くモンスターを薙ぎ払っていったのは驚いた。と言うか本当に強くなってるんじゃない。何アレ、俺の活躍の場とか殆ど無かったぞ……ベルが薙ぎ払うのを横目に慌ててピストル・マジックを連射、連射、連射と頑張ったら毎度の如くのマインドダウン。

俺、マインドダウンし過ぎ？　ちよつと魔力を早く高めないとヤバイよこれ。

ダンジョン帰りはいつものごとく冒険者ギルドの換金所へと足を運んで換金所にベル君が向かい。いつも通りマインドダウン気味で疲労状態の俺は待合席で待たせて貰ってたら、なんか『くっス』とかいう下っぱ口調が特徴的な黒髪で角刈りの何処にでも居そうな普通の青年が声をかけてきて手紙と小包を渡された。

なんだこりや……と疑問を覚えるもその青年は渡す物を渡すそのまま軽く頭を下げて行ってしまった。少なくとも俺の知り合いでは無い筈なんだが。

小包の中身も気になるがそれよりも重要なのは差出人。

神ロキが差出人だと言うではないか……と言うか下っぱ口調の青年はロキ・ファミリアの冒険者だったっぽい？

ベルが魔石やドロップアイテムの換金をしてるのを確認してからこっそりと小包と手紙を手に入れたエイナさんの所へ……。

「エイナさん、こんにちは」

「こんにちは、ミリアちゃん。今日は大分稼いできたみたいね……また無理なんてしてないでしょうね？」

おお、怖い。テイオネちゃんの怖さはチビりそうになるが、エイナさんの怖さは身が縮こまる思いがする。

つてこの間のミノタウロスに襲われたときに無謀にも適正階層よりも深く潜ったことを言っているんだろう。

流石にあんな無茶はもうしない。ベル君もヘステイア様に無茶は
しませんなんて誓いを立てていたしな。

「はい、あんな思いは懲り懲りですからね」

「そっか」

安心したように吐息をこぼすエイナさん。疑ったりはしないのか
ね？

「それで、どうしたの？」

「あつ、いえ、少し話がしたくてですね。時間を頂けないかなと」

あ、これなんかナンパの誘い文句みたいだな。エイナさんの苦笑を
見るに、同じ文句で誘いを受けたことがあるのだろう。

「今からでも構わないわよ。この時間帯は換金目当ての冒険者しか居
ないし」

「あ、はい。えつとですね——」

事情の説明に当たりロキ・ファミリアの団員について、先程の『くッ
ス』と言う下っ端口調の青年について質問したらすぐに答えが出た。
割と有名な冒険者であり第二級冒険者の【超凡夫】ハイ・ノービスラウル・ノールド
と言う青年が俺の言う冒険者に該当しているのではとの事。

ファミリア内部でパシリ役としてこき使われている冒険者だとか
どうか……ううん？ 第二級レベル4って事はかなり強いよな？ パシラ
れてる？ いや、気にするところは其処じゃないか。

「それで？ ノールド氏と何かあったの？」

「あ、いえ……つい先ほどロキ・ファミリアから小包と手紙を頂きました。
見知らぬ人でしたので本当にロキ・ファミリアの方なのか確認を
と……」

「成る程……中身は確認したの？」

「いえ、これからです」

エイナさん曰く、そう言うものは人前で開封しない方が良いとかど
うとか。こつそり手渡してきた、それも目立たない団員筆頭とも言え
るノールド氏が手渡してきたって事はかなり配慮されているので本
拠に帰還してからの開封をおすすめされた。

まあそうだよな、パツと見普通の青年にしか見えない普通の青年

だったしなあ。と言うか鎧着ててもエンブレムをしてないとそこらの冒険者に混ざって目立たなくなるのか言う個性はマジ凄いな。普通に声かけられて『ミリア・ノースリスさんツスカ？ ロキから届け物ツス。あつ、中身は確認してないツスから』とか言ってる唐突に小包と手紙を手渡された訳で……完全に無警戒で受け取ったわ。アレ詐欺師の才能あるんじゃないやね？ 少しイメチェンすればいろんな印象の人に与えやすいし平凡な容姿ってのは其れだけで詐欺をする上で凄く有利に……いかん、前世の癖が抜けん。どうするかなあ。

ヘステイア・ファミリアの本拠へ帰還……いつもならヘステイア様が「おかえりー」と出迎えてくれるのだが、今日はヘステイア様不在……少し寂しさを覚えるのも致し方なしである。早く帰って来ないかなあ。

まだ初日だったのに何言ってるんだ俺は。

「ミリア、シャワー先に使って良いよ」

「いえ、私は先にやる事があるので。お先にどうぞ」

「うん？ そっか、じゃあ先にシャワー借りるね……キューイ？」

服から引つ張り出して床に置いたキューイがベルにすり寄って行っている。

「キューイキューイ」

シャワーシャワーとベルにねだっているのを見るにシャワーを浴びたいっぽい？ お前さ、ずっと服の中に居ただけじゃん……もしかして俺って汗臭かったりする訳？ 服の中で蒸れてて気になるとか？ そんな汗かいた記憶無いんだが。

「キューイもシャワー浴びたいそうなのでお願いしても良いですか？」

「うん、わかった。じゃあ行こうかキューイ」

ベルがキューイを連れてシャワーを浴びに行っている間にさっと手紙でも読みますかねえ。

割と質の良い紙に、ロキ・ファミリアのエンブレムの蠟印を施され

てはいるが全体の印象は質素。宛名の部分には『ミリア・ノースリス』とだけ書かれている。差出人の所には何も書かれていない。小包の方は余り大きくは無いがポケットに入らないぐらいの大きさ。ずっしり重い様なそんな感じはするが何が入っているんだろうか？

手紙を開封、つかペーパーカッターどつかにあるっけ？ あ、ナイフで開けりゃいいか。

駆け出し冒険者セットの中の駆け出し用ナイフで初めて切ったのは、モンスターではなく手紙でした。つか魔法あるのにわざわざナイフなんて使わないんだよなあ。持ち歩いては居るけどぶっちゃけ日本人的感觉だと銃刀法違反とか気になる感じ。まあそんな法律こっちには無いが。

中に入っていたのは一枚の便箋、うつすらとロキ・ファミリアのエンブレムである笑う道化師の姿が映し出されて居ながらも文字を読むのには特に困らない程度であるが……うわ、共通語コイネーで書かれてんじゃない。

いや、今なら読めるよ？ すごい大雑把にだけど……エイナさんの集中講義のおかげで割と読める様にはなった。ただ割と意識が多くなるが……何々？

……
……
……

「うえあつ!？」

やっべえ、変な声出たわ。俺って殺されても文句言えない事やらかしてたのかよ。マジか……まじかあ。

『ミリアどうしたの?』

『キユイキユイ?』

「何でもありません、すいません少し驚いてしまっただけです」

シャワーの音でかき消されて聞こえていなかったわけでは無かったみたいだ。とりあえず誤魔化しておいて……

手紙の内容を大雑把に翻訳するとこんな感じ。

『ミリア・ノースリスへ』

あんたが何を考えて『モンスター』をウチのファミリアに連れ込んだのか知らへんけど、他のファミリアやったら問答無用で殺されとつたで？ 他のファミリアの敷地内に『モンスター』連れ込んだなんて知られたら殺されても文句は言えへんしな。

運良く獣人と会わへんかったから良かったんやけど、獣人やったら間違いなく気付かれとつたで。

前回はアンタと関係無い所でウチ等が勝手に連れ込んだだけやし許したるけど、今回はアンタが連れ込む形やったし。

まあ、今回は見逃したるから今度来る時はモンスターを連れて来たらアカンで？ こっちも十分に悪い事したつちゅーんは分つとるけどアンタがしたんは準襲撃^テ行為や。謝罪する気は無い訳やないけどちよいと考えればわかるやろ？ まあフィンも見逃しとつた見たいやしウチも襲われとらんから気にせんけど。

ウチの子らが気付く前に適当に理由付けて追い払ったけど、先にウチの子が気付いとつたらウチは止めへんかったで？

追記：いくらなんでも金が無いからってそんなボロツちいローブつちゅーんは女の子としてどうなん？

小遣いやるさかい、少しはまともな服買いいや。めかし込んだらウチにも見せてえな。

神ロキより』

えっと、つまりだな。俺がロキ・ファミリアにモンスターを連れ込んだ事に気付いたロキがその場でそれっぽいこじ付けして追い払ったと……何がどういう事なのかって？

俺ってさ、『キューイ』連れ歩いてるじゃん？ 割と普通に連れ歩いてて気にしてなかったけどさ、一応ね？ キューイってモンスター扱いはじゃん？ そんなのをファミリアの敷地内に連れ込むってどういう事になるかってえとさ……。

まあ手紙の通り襲撃行為に当たる訳よ。と言うかモンスターをダ
ンジョンから連れ出す時点で許可を得てない場合は『オラリオ』に対
する襲撃行為な訳で？ つまり見つかつたらヤバイと。

そりや、神の座す本拠にだよ？ モンスター連れ込んだ阿呆が居た
ら眷属としちや見逃せないよね？

思い出す限りではロキ・ファミリアの本拠の門番はヒューマンとド
ワーフであり獣人では無かった。道中もすれ違つた団員は何人か居
た記憶はあるがどの人物も獣人以外の種族。

ティオナ、ティオネ、アイズ、レフィーヤはそれぞれアマゾネス×
2、ヒューマン、エルフと獣人はいなかったと……。

背筋がゾワツとしたわ。これ見つかつてたらヘスティア・ファミリ
ア巻き込んでかなりのトラブルになつてただろ。何気なくキューイ
連れ歩いてたけど今度からはもつと慎重に行動しなきゃじゃん。

つまりロキの態度が急変したのは俺がモンスターを連れ込んだ事
に気付いていてなんか理由付けして追い払う為のモノだったと……
はあ、道化を演じるつてそういう。

小包の方はロキの方のお小遣いが少し入れられてて、それで服買え
と。

……まず俺の犯した失態は『モンスターを他ファミリアの敷地内に
連れ込んだ事』これは準襲撃行為であり殺されても文句は言えない程
の行為だったと。

ロキは許すが眷属が許さず殺されていた可能性は高い。

それをその場で適当な理由を付けて追い払う事で眷属、ロキ・ファ
ミア所属の獣人が気付く前に俺を逃がしてくれた訳だ。しかもそ
の場でロキの評価が著しく下がる可能性のある方法で、である。

道化を演じるつてそういう事なのか。自身の評判よりも子供を優
先するつて……はあ、借り作つちやつたよ……。いや、これはアレか。
ロキ・ファミリアの失態と帳消し……じゃないな。

今回の謝罪が割とおざなりだったのは俺の失態を見逃す代わりに、
おざなりな謝罪で済ましたつて感じか。これでしつかりとした謝罪
されてたら俺は完全にロキ・ファミリアに借りを作る形になつてた

し。

……後でまた謝りにいかんとなあ。でも少し期間を置いておこう。んで次に、こっちは割と考えてなかったと言うか。他のファミリアに訪ねていくのにぼろいローブ姿って言うのは少し考えた方が良さな。せめて本拠に保管してある豪華なローブとまではいかずとも人に会う恰好ぐらいはしとけて事だろうなあ。

そう言えばモンスターって神に殺意抱くレベルで神が嫌いなんだっけ？ キューイって割と人懐っこいから気にしてなかったけど、やっぱ他の神からすると……。

いや、そう言えば前行った時は神ロキと引き合わされなかったっけ？ そりゃモンスター連れてる奴を引き合わせるなんて警戒してる訳無いよなあ。

……つか、キューイの扱い難しいなこれ。ロキ・ファミリアは割と黙っていてくれてるし、特にその件で脅されるなんて事も無いけど他ファミリアはどうかかわらんしな。

とりあえず今度からキューイを連れ歩く時はもつと注意しなきゃ……。

あ、小包の方の中身確認しなきゃ。手紙を見るに少しお金が入って……お金が入ってるだけにしては少し大きいような？

えつと二万ヴアリスと……服？

なんでゴスロリ風のドレスが入ってるんですかねえ……え？ なんかサイズぴったりなんだけどこれっ!?

何時の間にサイズを測りやが……まさか、酒場での強姦紛いのセクハラの時に？ 神様ハイスペック過ぎじゃない？

第二十八話

大量の冒険者、冒険者……冒険者。

鎧姿、軽装のローブ、ガントレットにメタルブーツ。大剣に小剣、戦斧に戦槌、大盾に魔法用の触媒であるオーブが付いたロッド、スタツフ……どれもこれも冒険者の身に着ける物はやはり美しさも装飾も施されていてかっこいいな。ファンタジーと言えばと言う装備で満ち溢れている。

ダンジョン一階層、それもダンジョン入口はやはり冒険者が多量に詰る、詰る……いや、本当に多いな。と言うかおかしいな、この時間帯はダンジョン帰りの時間からずれてるはずなんだが。

「……皆、良い装備してるなあ」

羨ましがちな視線を向けるベル君。そりゃあ駆け出し装備である駆け出し用ナイフと駆け出し用のライトメイルを装備してるベル君からすりや羨ましい限りなんだろう。

俺からすると防具はあれば良いな程度……マジック・シールドがある所為でなあ。

マジック・シールドで防げない攻撃⇨防具次第で助かるとは思えんし。そもそもそんな強さのモンスターと戦うこと自体が間違いだつて時点でねえ。逆にマジック・シールドで防げる場合は防具ってあんまりな。

ロキがくれた2万ヴアリスはとりあえず最低限の防具に回そうかとも思ったが衣類に回すように受け取った物を防具に回すのはと悩んだ末に言い訳がましいが普通のローブを買った。衣類としても使えるし良いよね？ 可愛い服？ 着飾るよりもっと優先すべき事があるでしょ……。後、長杖も買った。今度は金属製でそう折れない奴。でもミノタウロスクラス相手なら簡単に折れそうな気はする。

特殊な防御効果は何一つ無い一般的ローブを買った訳だが、なんか知らんが魔法が付与された防具とか言うのもあった。但し、目ん玉飛び出るんじゃないかってぐらい高かった。なんか桁が4つほど違ってたし……。

あ？　ゴスロリ風のドレス？　売り飛ばそうかとも考えたがやめといた。一応、神ロキからの贈り物だし？　ただ、袖を通すことはなかなかって……。

「まあ、いずれベルならあれぐらいの装備できますよ」

そう言いながらベルに背負われた俺は呟く。

なんでベルに背負われてるかって？　今日も今日とてマインドダウン……マジかあ。しかも半日程度でぶっ倒れると言う不甲斐無さ。と言うか最近ベル君が頑張りまくってて焦りで俺の注意が疎かになつてるっぽい。本当にどうにかしないといずれ痛い目を見るんだが……はあ。

んで、この冒険者の人混みよ。一階層からバベルの地下へと上がる為の螺旋階段に人が沢山居る……と言うか、殆どガネーシャ・ファミリアじゃね？　階段を上がりつつベルに背負われながら観察していれば、大掛かりな木箱……なんか不自然だなありや。上面と下面は金属製で側面に木の板が取り付けられた大きな箱を地上へと大掛かりな荷揚げ用の装置を使つて引き揚げてる。

確かロキ・ファミリアみたいな大きなファミリアが大規模遠征で地下深くまで潜つて大量の魔石やドロップアイテムを持ち帰った時に使うダンジョン内用の荷車をそのまま地上に引っ張り上げる装置だったはずだ。エイナさんの講義で聞いた気がする。ただ、今回引き上げてるのはなんk——おいあの箱中から唸り声がすんぞ。何入つてんだあれ。

「あー、そろそろモンスターフィリアの時期かあ」「一年はあつという間だなあ」「今年もランクアップできなかったぜ」「ははは、慌てると碌な事は無いぞ。ゆっくりでいいんだ。神だつて言ってるだろ？」「そうかあ……二つ名欲しいよなあ」「呻く幽鬼シヤドゥプリズンとか無音禁忌コラブシジョンとかΩデーターとかさあ」

うぎやああああああつ?!?!?　やめろっ?!　背中がむず痒くなる二つ名をあげるなっ!!

なんだこの世界、そんな二つ名をかつこいいとかマジやめろっ!!
背中が肉が挽げ落ちるまで掻き毟りたくなるわっ!!

「いいなあ、僕も二つ名欲しいなあ……」

……ああ、うん、その……ベル君も欲しがっちゃうかあ……。

徐々に見えてくる空に目を細めつつベルの背から降りて歩き出す。

「今日もすいません」

「仕方ないよ、マインドダウンばかりはさ……僕の方もごめん。ミリアの方に何匹も行かせちゃって」

ベル一人で五匹のモンスターの足止めが出来ても、それ以上の数で来られれば当然抜けるのが何匹も居る。近接戦がさっぱりできない俺は何とかピストル・マジックで対応するんだが……やっぱ数が来ると対応が追いつかない。

詠唱が『ファイア』の一単語だけとはいえ連続で唱えるのが割ときつい。喉が痛くなってくるしどうしても狙いを定める時間と言うのも必要だ。しかもモンスターも馬鹿じゃないから俺の魔法の特性を理解した個体なんかはジグザグに蛇行して接近を試みってくるし……。

「そこのお前、止まれ」

「え？」

うん？　なんだ……声をかけられた？

声をかけて来た方向を見るとガネーシャ・ファミリア特有の仮面を付けた男性が仁王立ちしていた。神威は感じないからガネーシャ・ファミリア団員だろう。どうし……うん？　こいつの耳……ヒューマンじゃない。

……犬シアンスローフ人だっ!?　やべえっ!?　ロキの忠告に対して最低限臭い

消しになりそうなやつすい香水を使って誤魔化しを使ってるから大丈夫だろっ!?　すっごく嫌な顔されたけどナーザさんに確認とつたしキューイの事ばれる訳無いよね……よね？

「……ミリア・ノースリスだな？」

うそん、何で名前知ってるのっ!?　俺って実は有名人……照れるなあ、じゃない。ふざけてる場合でもなんでもない。今もキューイは服の中で……あ、これ昼寝してるわ。

「神ガネーシャから話がある。ついてきて貰おうか」

「ミリア、何かしたの？」

「……………こっ心当りは……………あったり……………無かったり……………」

逃げる？ いや無理だろ、ガネーシャ・ファミリアって規模が段違いだし。人数だけで言えばオラリオ最大なんでしょ？ ヤバイよ……………どうする？

「危害を加える積りは無い。ただ話があるだけだ。神ヘステイアへ話は通してある」

ヘステイア様に？ ……そう言えばガネーシャ・ファミリアのパーティに行つたんだっけか？ それとなんか関係がある？ と言うかヘステイア様居なくなつてもう二日目……………うーん……………。

「私一人が同行すれば良いですか？」

「ああ、神ガネーシャが話を通したがっているのはミリア・ノースリス一人だ。もう一人、ベル・クラネルに関しては特に指定は無かった」
じゃあ俺一人同行すりや良いか。ヘステイア様の名前も出してたしなあ……………。

「ベル、申し訳ないのですが私は今からガネーシャ・ファミリアの主神と会つてくるので一人で……………帰るのはまだ早かったですし、ダンジョンに潜るのが良いでしょう」

今日は俺が早々にマインドダウンしちまつて早めに切り上げる事になったし、ベルとしては消化不良だろうしね。

「でも……………」

「私は大丈夫ですよ。ヘステイア様の名を出している以上変な事はされないでしょう」

よもやこんな昼間っから堂々と神の名を騙つてまで変な事はされないだろうしね。噂に聞く神ガネーシャってのは……………まあ、控えめに言つて変わった神様って話ばかりで、特にあくどい噂は聞かないし。ファミリア総評でもガネーシャ・ファミリアは人気の高いファミリアだ。

流石に名を落とす真似はしまい……………しないよね？

………あぁ、変わった神ってそう言う。

「すまないな、唐突に呼び出してしまつて………ここがガネーシャ・ファミリアの本拠だ、入り難ければこの仮面を付けると良い。少しは楽になる」

もしかして、もしかしなくてもなんだけどき。ガネーシャ・ファミリアの団員が全員仮面つけて行動してるのってさ………この本拠に入る時に恥ずかしいからなんじゃね？

そんな考えが脳裏に通りそうなガネーシャ・ファミリアの本拠………アイアムガネーシャと言うらしい。見た目？ 神ガネーシャが胡坐かいてる。なお入口は股間部分。股間部分!!?

マジで？ アソコから入らなきゃいかんの？ いや、臀部から入れとか言われても困るし、口が入口ですなんて言われても困るけどさ。つか人の形をした建物を住居にするってちよつと………その………ハイセンスだなつて。

手渡されたガネーシャ・ファミリアの団員が身に着けているのと同様の仮面を無言で受け取つて装着する。ちよつと大き目だがまあ顔隠すだけなら十分だろう。

「では行くぞ………俯くと目立つから顔を上げておくと良い。堂々としていれば大丈夫だ」

俺を案内してくれているガネーシャ・ファミリアの団員さん………すっごい気を使ってくれてる。と言うかこの人もあの本拠に思う所があるのか………門番代わりに股間の左右に人が立つてる。うん、その………門番の人大変そうだなつて………。

外観はアレだったが。中はすっごい普通………と言うか何？ 凄く趣味センスの良い内装をしている。

過度に華美になり過ぎず、かといって貧相さは一切感じさせない、それでいて足を踏み入れた者に圧迫感を与える事も無い落ち着いた雰囲気雰囲気の調度品が等間隔に並べられた廊下。

一つ気になる事と言えば廊下に飾られた絵画が全て『神ガネーシャ』を描いた物であると言う部分だろうか？ それ以外の部分はパツと見て凄く良い感じだ。

そんな廊下をガネーシャ・ファミリアの大人の団員に先導されつつ観察していたら、目的地に到着したっぽい？

「入れ」

割とぶつきらぼうに言われた言葉に首を傾げつつ、部屋の中に入ると殺風景な大部屋があった。廊下の品の良い調度品の数々からは一変した雰囲気思わず足を止める。

「あの、ここは？」

神ガネーシャが居る訳でも無いみたいだし……と言うか殺風景ではあっても何も無い訳じゃ無いんだこれが。

なんか檻が置いてあるんだが？ と言っても殺風景な大部屋の中央、テーブルの上に小動物を入れておけそうな檻が一つ……なあにここ？

「ミリア・ノースリス。その檻にお前が連れているワイバーンを入れてくれ」

「あ、はい」

あー、キューイ用の檻かあ……ああ……あ？ いや、待て、おかしいだろ。なんで俺がワイバーン連れてるって知ってるの？

「安心しろ、危害は加えない」

………。うんとね、何が何だかわからん。何でキューイの事を知られてんのか。どういうことだよ。

とりあえず言われた通りに服の中で居眠りこいてるキューイを檻の中に入れる。入れ終わった辺りで大人の人が南京錠を掛けた。マジかあ……人質にとられた？

「この鍵は渡しておく。ガネーシャ様と話す間は開けないで欲しい」

……え？ 何それ、キューイを入れた檻を開けない様に南京錠を掛けて、その南京錠の鍵を俺に渡してきた。

「言ったはずだ、危害を加える積りは無いと。ガネーシャ様を呼んでくる。鍵を開けずに待っていてくれ」

そう言うと犬人の人は部屋を出て行く。入れ替わりに二人のガネーシャ・ファミアリアの団員が入ってきた。仮面を付けていて解り辛いが興味津々といった様子で遠巻きにキューイを眺めているっぽい？

何が起きてんのこれ？ キューイの事で呼び出されたと思うんだよね。多分、でもなんか問答無用で襲い掛かってくるわけでもないし拘束される訳でも無い。いや、入口の両脇を固めたガネーシャ・ファミアリアの団員からして一応拘束に近い状態と言えるが監禁と言う程嚴重でもない。どういう事なんだこりや？

「ミアリア・ノースリスだな？」

「はい、ヘスティア・ファミアリア、神ヘスティアの眷属、ミアリア・ノースリスです」

目の前の偉丈夫を見上げながら半口をあけて惚けてしまった。うん、その、本拠名が『私はガネーシャだ』である時点で察しはついてた。やっぱあの人型のモデルは神本人だったかあ……。いや、廊下に飾られていた絵画も一杯ガネーシャが居たんだよなあ。

「俺がガネーシャだっ!!」

うるせえ。至近距離で叫ばなくてもわかる……。いや、一応神様相手だしアレか。神ガネーシャは興味深そうに檻に入れられたキューイを見てから大業に頷く。

「うむ。ヘスティアから話は聞いていたが、神に害意を抱かぬモンスターか……」

うん？ ヘスティア様から話聞いてた？

「えつと？ ヘスティア様が？」

「うむ、ああ、そう言えば一筆頼んだのであったな。アレを持ってきてくれ」

神ガネーシャが団員に指示を出すと即座に団員が何かを取り出して神ガネーシャに手渡した。手紙？

「ヘスティアに一筆頼んだのだ。わけあって用があったのだがそなた

はヘステイアの眷属。モンスターファイリアで忙しい今、余計なトラブルは避けたかったのだ」

モンスターファイリア……？ モンスターファイリア 怪物祭だっけか？

ガネーシャ・ファミアとギルドが主催のお祭りで、確かガネーシャ・ファミアの持つモンスターのタイム技術を自慢する為のモノとか聞いたんだが。

神ガネーシャは手紙を此方に差し出して来る。ガネーシャの言が正しいのであればそれはヘステイア様から一筆したためて貰ったものらしいが……果たして。

ミリア君へ

すまない。キューイ君についてガネーシャに問い詰められて答えてしまった。君のステイタス全てではなくキューイはミリア君の魔法で呼び出された特殊なモンスターである事だけではあるけど、勝手に教えた事については謝る。本当にごめん。

それで僕もついさっきまで知らなかったんだけどモンスターを連れ歩くのには許可証が必要だったみたいで、このままだと重罪を犯したと言う事で罰金か罰則が科せられる事になるんだけど、ガネーシャが協力してくれるなら助けてくれると申し出てくれたんだ。

詳しくはガネーシャに聞いてくれ。

追記：ガネーシャは変わってるけど悪い奴じゃないから信用しても大丈夫だよ。

帰れなくてごめん。寂しがってるんだよね？

ヘステイアより

ねえ、一つ良い？ ガネーシャが変わってはいっても良い神ってのは別に良いよ。でもさ、寂しがってるとか決めつけるってどういう……。

……もしかしてなんだけど、ファルナ越しに俺の感情が読まれてる

？ まさかあ……まさか？

つか、何時ばれた？ 今回の件ってかなり用意周到に準備してたっぽいんだけど……何時からガネーシャ・ファミアは俺がキューイを連れている事に気付いてたんだ？

聞いたら答えてくれるかね？ つかキューイ、てめえは何時まで寝てんだ……。

第二十九話

ガネーシャ様の話をざっくりまとめるとこうなる。

約二週間前、ダンジョンの入り口にてガネーシャ・ファミリアの団員がモンスターを違法にダンジョンの外に連れ出す冒険者が居ないかを監視していたところ、金髪のパルウムの少女が白髪の少年に連れられて出てきたのを確認した。

その少女からモンスターの気配を感じたので違法なモンスター売買に関わっている可能性を考え、警戒対象に指定し、密かに監視を開始。

その場で即時に拘束すれば良かったと思うのだが。それをしなかったのは他にも仲間が複数いる可能性を考え、背後の組織まで根絶すべく泳がせていたらしい。

監視開始から次の日に冒険者登録したのを確認、この際にオラリオの玄関口の入国履歴との照らし合わせを行うもオラリオの玄関口である四方の門を通過していない事が発覚。

違法な侵入の可能性も考え、即時に拘束する案が提案されるも、所属したファミリアが天界でもそこそこの名の知れた神ヘステイアだった事もあり拘束ではなく監視を続行。

それから二週間近く監視していたがモンスターを街中に連れ出す以外には特に問題も起こさず、神ヘステイアもそのモンスターに警戒心を持っていないこともあり、監視から警戒へと移行。

一応、背後関係を調べるも過去の経歴は一切不明で尚且オラリオの門を通過していない事もあり、要注意人物として重要施設に近づいた際には警戒度を上昇させることに。

そして俺がミノタウロスに襲われた日。その日もダンジョンに潜る際にガネーシャ・ファミリア団員が侵入を確認していた。

その後、ベル・クラネルの方がダンジョンより出てきて中層のモンスターに襲われたと騒ぎ始めた為、直ぐにダンジョンを封鎖。ベル・クラネルは監視役を付けた上でギルド側に引き渡し、調査を開始。

あの際、ガネーシャ・ファミリアはダンジョン内にて発生した不自

然なモンスター^{モンスター}の移動、中層のミノタウロスが上層に現れた原因がミア・ノースリスにある可能性を考え拘束を決定。

しかし、その場に於いてガネーシャ・ファミリアが身柄を確保するより先にロキ・ファミリアがミア・ノースリスを保護してしまい不可能に、だが後の調査でロキ・ファミリアが引き起こしたものであった事が発覚。

ミア・ノースリスは無関係であることが後に判明。

^{モンスターファミリア}怪物祭に向けて厳重な調査、警戒を張っている所にこのこ現れた怪しい人物。

モンスターを連れ歩き、それでいてモンスターを暴走させず、人格者として知られる神ヘステイアの眷属となった少女。

何らかの裏を疑うも調査結果が出ず、かといって強制拘束するには理由が足りない。

そんな中、ガネーシャ・ファミリアが^{モンスターファミリア}怪物祭の開催に伴う各ファミリアの協力を感じする及び、つつがなく開催できる事を皆に伝えるパーティーに珍しく神ヘステイアが出席していた為、話を聞く事に。

神ヘステイア曰く、全く悪い子では無いし。色々隠し事もしているけれど僕の可愛い眷属だから信じてあげて欲しい。

と言う事と、ついでに俺の連れているモンスター……と同じ気配を発しているキューイについていくつかの情報を貰い、その上で神ヘステイアに取引を持ちかけるも一存では決められないと本人を呼び出す事に決定。

つまり、最初っから監視されてたと……。

道理でガネーシャ・ファミリアの仮面を付けた人が常に街中に居た訳だよ。ファンタジー世界だし多いし、警察っぽい働きしてたから常に街を見回してるのかなって思ったけど、実際のところは其処まで余裕は無く、あくまでも俺の監視の為に周辺に散らしていただけっほい。

呆然だよ、有能過ぎるとは思ってたけど逆に俺が無能だった訳だ。

こんなファンタジーな世界で服の中に放り込んだだけで大丈夫とか考えた俺はアホか。

金属探知機的な物ないし大丈夫だろとか考えてたけど、ファンタジーでもそこら辺の安全管理やらは割としっかりしてんじゃねえか。

「うむ、納得して貰えただろうか？」

あー……いくつか質問しとくか。

「何故ベルを拘束しなかったの？」

ミノタウロスから逃げてガネーシャ・ファミリアに引き留められた際、ベルを拘束して話を聞くぐらいは出来たし、俺を呼び出す口実にもなったかしらんのに。

「ふむ、その少年は背後関係も洗ったが特に何かある訳でも無かった。それに騙されている可能性も高かったからな」

……心が痛いです。

「まあ、ヘステイアが言う事だからな、間違いは無いだろう」

ヘステイア様への信頼が厚いな。流石ヘステイア様だ……。

「他に質問は？」

うーん……一応、気になる点は全て聞いた、訳じゃない。まだ肝心な事を聞いてないぞ。

「手伝って欲しい事とは？」

それだ、なんか手伝ってくれるなら罪状を全て無かったことにしてくれるとか言ってるし。何やらされんの？

「うむ、それについてか……協力の内容とはつまりそのキューイを街中で普通に連れ歩いてほしいと言うものだ」

はいい？ ……え？ 街中を普通に連れ歩けて？ それって違法なんじゃ？

「無論、現在俺の神威を受けて殺意を抱かないのを確認できているが、俺やヘステイア以外の神だと反応する可能性もある。その場合を考えて監視役を付けさせてもらう」

うむ？ ええとだな。

つまり怪物祭の目玉としてワイバーンを一体、闘技場で見世物にする。それはそれでインパクトはあるだろうが闘技場に入れる者し

か見る事が出来ない。

んで他にも多数の人が集まるだろうから幼体であつてもワイバーンともなればかなり話題を集められる。

簡単に言えば客寄せパンダとして適当に行動してほしいとの事。この件に於いて俺は期間中一時的にガネーシャ・ファミリアの団員と同等の扱いをする。

其れとは別に今後キューイの所属等はガネーシャ・ファミリアとするとの事。

これに関しては団員の強制徴収ではなく、キューイがトラブルを起こした際にガネーシャ・ファミリアが全責任を取る為の処置であり、同時に新興ファミリアであるヘスティア・ファミリアのままでは他ファミリアがちよっかいをかけてきた際に抵抗できない可能性が高い為である。

幼体とは言えワイバーンは高価な素材がとれる為、下手をすればキューイがモンスターである事を笠に着て街中で堂々と襲撃を仕掛けられる可能性も高い。

それを防ぐ意味でもキューイについてはヘスティア・ファミリアが相応の実力を付けるまではガネーシャ・ファミリアの所有物とし、ミリア・ノースリスに対して貸し出しと言う形で世話の依頼を行っていると言う体をとると……。

なんかすっごい高待遇なんです但其れは……と言うかガネーシャファミリアが全責任をとるって……。

つか、キューイは何時まで寝てん……あ、違うこれ寝たふりだ。何時から寝たふりしてたんだコイツ。

「それで、受けては貰えないだろうか？」

「受けなかった場合はどうなるのでしょうか？」

拘束されちゃう？

「その場合はガネーシャ困るんだが……」

しょんぼりされちゃったんだけど……ってかどうなるの？

「そうだな、特には無いな。その場合には公平に判断させて貰う事はなるだろうが」

公平に？

「モンスターを街中に連れ出した罪に問うと言う事だな」

「受けさせて頂きます」

つぶねえ、こつちが立場下なの忘れそうになってた。そうだよ俺今重罪人じゃん？ こんだけ高待遇約束されててのに断る事考えるとか何してんだよ……。

「そうか、うむ。ガネーシヤ、超感激」

その、毎回ポーズ決めなきやダメなのかソレ……なんつーか、良い神様なんだろうがちよつと暑苦しい気がする。

「では、そのワイバーン、キュイイと言ったか？ 彼……いや、彼女か？ このワイバーンの性別はどちらだ？」

うえ？ キュイイの性別？ ……えつと、どつちだったつけ？

「キュイイ、起きてますよね？」

「……キュイ」

あ、やっぱ寝たふりじゃん。

「あなたは男の子？ 女の子？ どつちですか？」

雄か雌か……キュイイの公式性別なんて調べた事無かったな、そう言えば。

「キュイ？ キュイキュイ」

……え？ どつちがいい？ どつちがいい?? え？ どういう事？

「えつと、キュイイ……どういう意味です？」

「キュイキュイ、キュイ」

ふむふむ？ まだ性別決まってるやない……何それ怖い。じゃなくてこの場で性別決めろって事？ それってもつと早くに言ってるやないかな。

じゃあ男の子で良いんじゃない？ いや、女の子の方が良いのか？ ヘステイア様に相談してえ……つか性別決まってるやないってなんだよ。

「……性別、不明ですね」

「……………」

腕組みをしたままこちらをじっと見据えるガネーシャ様、どうしたんだ？

「ミリア・ノースリス……もしかしてそのワイバーンと会話できるのか？」

「はい、一応……」

「ガネーシャ、超吃驚！」

うえあつ!? いきなり大きな声だすなよっ！ こっちが吃驚だわっ！

「うむ、驚かせてすまない。……他のモンスターとも会話できるのか？」

他のモンスターとの会話？ さあ？ 話し合いで何とかなる雰囲気ではモンスターと対峙した事無いしなあ。

「わからないです」

「ふむ……」

考え込んだガネーシャ様……頷いてから大業に腕を振るって眷属に指示を出し始めた。

「彼女をモンスターの拘束部屋に連れて行ってやってくれ。会話が可能な調べたい」

ふうむ？ 別に構わんが。と言うか他のモンスターと会話できるとは思えんのだがなあ。

ギャーギャー喚くモンスター達。ファンタジー定番のゴブリン。豚顔で薄い本で良く見るオーク、尻尾を震わせて威嚇するダンジョンリザード。檻をブツ叩いて壊そうとしているシルバーバック。

どいつもこいつも会話不可能っぽい。と言うか何言ってるのかわかんねえ。

キューイを肩につて思ったが、肩につかまるの無理っぽいから頭の上に乗つけて一緒に連れて来たがキューイが半眼でモンスターを見て『おいしくなさそう』とか言い出した。何言ってるんだお前、全部お前より強いだろ。

「どうだ、わかるか？」

護衛らしき数人の冒険者に囲まれてモンスターの居る場所まで足を運んだガネーシャ様、神様をこんな所に連れてきて大丈夫かよ。

「いいえ、さっぱり」

「そうか」

凄く残念そうな顔されたがこればかりはなあ……キューイが特殊なんだろ。

「キューイキューイ」

「うん？」

頭の上のキューイがあつちに居るって言い始めた。何が居るって？ モンスターならそこらの檻に入ってたんだろ？

「キューイ」

……？ キューイの示しているのは別の倉庫への入口。

「えっと、あつちの部屋には何が？」

「うむ、あちらには調教済みのモンスターが居るな。其方にも行ってみるか」

ほほう、調教済みのモンスターとな？ 普通に見てみたいな。此処にいるモンスターは全員暴れて逃げ出そうと……いや、これ神ガネーシャに凄まじい殺意を見せてんな。何この……『絶対ぶつ殺す』的な視線。こんなの向けられたらチビりそう……。

いや、俺はチビらねえし。

つか神ガネーシャ平然とし過ぎだろ。直接向けられてない俺ですらチビりそうなら怖いのに。何で平然としてられるんだか。

「うむ。当然、俺の眷属_子は有能だからだ」

……あれ？ なんか自然に心読まれた？ 待って、何この神様怖い。

檻の中、大人しく座って……座って……なんか目を細めて気持ちよさそうにしている蜥蜴のモンスター。ガネーシャ・ファミリアの団員がブラシを持ってごしごしと背中を洗っている。

他にもブラッシングしてたりだとか割と友好的な態度でモンスターに接している団員が多いな。

「ここに居るのは調教済みのモンスターだ、どうだ？ 感想は」

「はあ、思ったよりも……なんか普通の動物みたいですわね」

犬猫と言うよりは牛や馬と言った家畜の世話してるみたいに見える。さつき暴れてたモンスターと同じ種族のモンスターも居るが雲泥の差である。

と言うか……モンスターにもガネーシャ・ファミリアの団員が着けてる仮面つけさせてんのかよ。そりゃあ一発で『あ、ガネーシャ・ファミリアの調教済みモンスターだ』ってわかるだろうが……。

「キュイキュイ」

もつと奥？ 何が居んの？

「キュイ、もつと具体的にお願ひ」

「キュイ？」

何で？ だつてさ。意味わかんないよ。

「どうしたのだ？」

「キュイがもつと奥に何か居ると。何かは何かはわかんないですが」

「ふむ……」

顎を撫でながらじつと奥を見据えているガネーシャ様。そのガネーシャに団員が耳打ちし始めた。

「ガネーシャ様、この奥は例のワイバーンが」

「そうか」

例のワイバーン？ ガネーシャ・ファミリアが調教したワイバーンだっけか？ なんか凄く強いらしいが。

「行ってみるか？」

「キュイツー！」

ぶんぶんと首を縦に振るキュイ、俺の頭の上であんま動かんでくれんかね。首がぐわんぐわんするからさ。

今まで見てきた檻よりも更に大きな檻の中、翼を畳み縮こまったその姿はいつそみすばらしく映るだろう。

しかしその瞳に映っているのは激情。その激情を瞳の奥に押し留めながらもゆっくりとした動作で首を上げるソイツ。

頭から尻尾までの体長はおおよそ4メートル程だろうか。翼を広げれば多分8メートルとかそんぐらいか？ かなり大きく感じる。

今まで出会ったモンスターで一番でかいのはミノタウロス。2メートル越えの巨人って感じだったが、こっちは完全に竜だ。

……かつけえ……。率直な感想を言わせて貰うならもうそれしか言葉が浮かばない。

鱗は薄赤く、瞳はギラギラとした爬虫類を思わせる黄色がかった瞳。激情が渦巻きながらもその瞳に宿る光は理性的である。

鎖で過剰なまでに翼を封じ込められたその姿は惨め、だがその揺らがない意思とプライドの光は思わず目を逸らしそうになる程に輝いている。

やっぱ暴れると危ないからか過剰気味に鎖で拘束されてる。

「ふむ、今日は大人しいな」

「何時もは暴れているので？」

「ああ、少し気性が荒くてな……。調教した本人の言う事も時折聞かない事がある」

マジか、そりゃ拘束が激しい訳だ……。と言うかこのワイバーンを調教したとか凄いな。いや、でも言う事聞かない時があるって事は調教前なんじゃ？

《何しに来た》

……。うえ？ なんか声が聞こえる。これは……。宇宙の声？

SANチエックしなきや。

「えつと、神ガネーシャ？」

「どうした？」

「……何か言いました？」

「うむ？ 何か聞こえたのか？」

ああ、気の所為だったのかな？

《何をしに来たと聞いている》

……キエエエアアア!? 喋ったあツ!?

《……はあ》

悩ましげな溜息が聞こえますガネーシヤ様。

「えつと、何をしに来たって……」

「ふむ? お前達、そんな事を口にしたか?」

後ろの護衛の団員に声を掛けるガネーシヤ様。首を横に振る団員。

やべえ、凄くホラーだよ。

《話を聞け。何をしに来た》

……幾度かの問いかけ。と言うかももう答え出てるよね。目の前の檻の中から聞こえるんだなあこれが。

「えつと、キューイ、何か言いました?」

「キュイキュイ?」

なんか困ってるみたいだよ? って何? 誰が困ってるの?」

「キュイ」

彼、だつて。彼つて誰だろうネー。

「キュイ? キュイキュイ」

檻の中の素敵な彼、鱗が艶々で綺麗。尻尾も魅力的。だそうです。いや、かつこいいのは分るけど魅力的って……。

「キュイキュイ」

彼と子作りしたい(ド直球) だつて。彼……檻の中のワイバーンは雄なのか。と言うかマジかあ……いや、キューイ、お前性別決まってるねんじゃねえの?」

「キュイ」

今女の子になった。ふうん……そうなんだ(遠い目)

「どうした? 何かわかったのか?」

キューイがソコの彼にワイバーン一目惚れして女の子になった(意味深)みたいです。ね。

なんて言えないからとりあえず。

「なんかそのワイバーンの言ってる事が理解できるっぽいです」

ははは……はは……ちよつと今度からキューイの誘導には乗らな

い様にしよつと……どうすんだよこの状況。

キューイ、お前の所為で大変な事になってんだよ助けるよ。

「キューイキューイ」

一緒に飛ぼう、巢作りの場所探そう。素敵ワイバーンな彼を口説き始めるキューイ。お前本気で怒るぞ。

《それは望むべくもない。美しいそなたの為ならばこの戒めを破壊して大空へと羽ばたきたい。だがそれは出来ない》

うわああああああああつ!? くっそ真面目な返答返してるうっ!? しかもキューイに美しいとか返してるよ彼っ!?

誰か助けて……。

第三十話

やだ、頭痛い。何この状況……。

俺の頭の上のキューイが甘える様な声でキュイキュイと檻の中のワイバーンを口説こうとし、ワイバーンが困った様子で俺を窺い。

ガネーシヤ様が何事かと首を傾げ、団員も同じく首を傾げている。うん、なんかキューイが一目惚れして口説こうとし始めたんだっけか？ どうすりゃいいんだこれ。

「どうした、何か疲れた様な表情をしているが？ 体調が優れないのなら今日は帰って貰っても問題ないぞ」

「いえ、少し頭が痛くなっただけです」

本音を全部ぶちまけるか。嘘言ったってしゃーないし。

「なんか知らないですがウチのキューイがあワイバーンを口説こうとしています。一目惚れしたと」

「……何？」

そりゃガネーシヤでも驚くよね。と言うか団員もポカンとした表情浮かべている。

とりあえず頭の上のキューイを掴んで引き摺り下ろしてから地面に叩き付ける。

「キュツ!？」

「貴方は何時まで私の頭の上で愛を囁いているんですか。やめてください」

しかもなんかすごい台詞が飛び出してたぞ。ますます組み敷いて孕ませてほしいとか。ド直球にも程があるわ。と言うか今のキューイは子猫サイズだろ。相手との大きさの差を考えろ。

組み敷く所かプチツて潰されるぞ。

「キュイツ!!」

何すんのとキュイキュイ騒ぎ始めるキューイを無視。と言うか足で踏みつけて地面に押さえつけておく。

「……その、良いのか？ それは」

「気にせずどうぞ。何時もの事ですので」

「そ……そうか……」

困惑の表情の神ガネーシャ。そして驚いて目を見開いた団員達。そりや驚くよね。ワイバーンを足蹴にして話を進めようとするんだもん。でもムカつくからこのままで。

「あのワイバーン、彼が言うには『困り事』があるそうです」

「あ、ああそうなのか。すまないがその困り事について教えて貰える様に言ってもらえるか?」

頭下げないでくれませんか……まあ、聞くけど。乗りかかった船だし。つかキューイは何時まで暴れようとしてんだよ。と言うか割と体重かけて踏んづけてるのに割と平気そうだし。やっぱキューイはキューイだわ。

「あのワイバーン……えっと、名前は?」

「ふむ、ヴィルヘルムだが」

《私の名か? ヴィルヘルムと呼ばれている》

うおっ!? 神ガネーシャに聞いたつもりがワイバーン……ヴィルヘルム……さん? が答えてくれた。

「あ、ありがとうございます」

《ところで其処な小さき者よ、彼女を足蹴にするのをやめては貰えないだろうか》

なんつーか、もつとこう、竜種だし偉そうな感じで喋ってくんないのかね? 下手に出てくる竜種とかなんかイメージと違い過ぎるし。

「わかりました。キューイ、暫く彼と話すので静かにしてください」

「キューイツ!? キューイキューイツ!!」

彼を奪う積りッ!? 絶対に渡さないっ!! って、お前のじゃねえだろ。どっちかって言うとかガネーシャ・ファミリアの——痛っ!?

「いたっ!? いたいいたいっ!!」

「キューイツ!! キューイツ!!」

がぶがぶと噛みついてくるキューイ、こいつ……。

「っ!!」

「あっ、待って待ってっ! これただの喧嘩でっ!? 痛いなこいつっ!!」

ガネーシャ・ファミアリアの団員が唐突に噛みつきだしたキューイに警戒し剣に手をかけたので慌てて制止する。一応ただの嫉妬だろうし。と言うかマジ痛いなコイツ。

「キューイっ！ やめ痛っ!？」

……………よし。

キューイを踏みつけて動きを止める。頭をぐりぐりっつと踏みつける。

「すいません、ヴィルヘルム。見苦しいですがこのまま話を続けさせて頂けますか？」

《……………あ、ああ、わかった。構わない》

ははっ、ワイバーンにもドン引きされちゃまったじゃねえか。糞っ、キューイの馬鹿野郎っ！……………あ、野郎じゃないか。

「それで、困り事があるそうですが何ですか？」

足下でもぞもぞすんなキューイ、怒るぞ。いや、もう怒ってるから、もっと怒るぞ。

《ああ、私は主に^{あるじ}屈服させられ服従を誓った身。誇り高き竜種として、一度服従を誓った以上命尽き果てるその時まで尽くす積りだ》

何それキューイに見習わせたい。あのワイバーンの爪の垢を煎じてキューイに飲ませようかな。この色狂いめ……………マジで暴れるのやめてくんないかな。と言うか猫サイズなのに本気で踏みつけても死なないとかやっぱキューイは竜種だわ。頑丈過ぎ。椅子として上に座っても普通に平気そうだわ。

《だがその忠心を信じて頂けないのかこの通り身を拘束されている。^{あるじ}主に伝えて欲しい。こんなもの無くとも決して命には逆らわぬと》

話を纏めると、一度屈服させられたから今後は決して逆らう積りは無い。けれどもその忠心を主人……………多分調教した主が信じてくれないくて拘束されっぱなしだから不満って事か。

「えっと、彼……………ヴィルヘルムの主人とは？」

「うむ？ ああ、其処の彼だ」

うむ？ ええっと……………誰だ？ ガネーシャ・ファミアリアは数が多いから覚えきれんのだ。

「ファイアー・インフェルノ・フレイム【火炎爆炎火炎】イブリー・アチャーだ」

……はい？

「えっと……その二つ名は……」

「うむ？ 聞こえなかったか？ ファイアー・インフェルノ・フレイム【火炎爆炎火炎】、通称『喋る火炎魔法』だ」

はい？ え？ 二つ名長えなおい。つか知ってるぞ。確か戦争遊戯ウォーゲームの実況者として有名な奴だよな？ と言うか通称『喋る火炎魔法』？ 聞いた事無いんだが。

「ああ、『喋る火炎魔法』の方は自称なんだ」

……痛い、痛いよ。さつきキューイに噛まれた足じゃなくて背中が痛痒いよ。

「なるほど、そう言う事だったのか」

「本当に外して大丈夫なんでしようか？」

彼、ヴィルヘルムの言葉を主である ファイアー・インフェルノ・フレイム【火炎爆炎火炎】に伝えた。納得した表情の ファイアー・インフェルノ・フレイム【火炎爆炎火炎】……イブリーが頷いてから檻の中の彼に話しかけている。

その様子を見ながらキューイを持ち上げる。抵抗する気力を漸く失ったのか、それとも俺が恋敵でないと解ったからか大人しくなったキューイだが……ううん、こいつにヴィルヘルムの爪の垢を煎じて飲ませたい。いや、俺が屈服させて従わせてる訳じゃ無いから生意気なのか？ なら一度徹底的に俺が主だと調教すべきか？

「問題ないだろう。彼女は嘘を言っていない。拘束を全て外してやれ」

おい神ガネーシャ、流石にそれは俺もどうかと思うぞ。

「しかしガネーシャ様……」

「責任は全て、この俺、ガネーシャがとろう」

……なんでこの神様暑苦しいのにかっこよく見えるんだよ。

《小さき者よ、感謝を述べよう。そなたの名はなんと呼ぶのだ》

「え？ ああ、ヘステイア・ファミリアのミリア・ノースリスです」

唐突にしゃべりかけられると吃驚するからやめてほしいんだが。

《うむ、ヘルシエファヘミシアのミウリウ・ノウシユルスだな。覚えたぞ》

……。

「あの、貴方の主人の名を伺っても？」

《うむ？ ウイビイー・カツアーだが？》

……………。

「所属ファミリアは？」

《ヘミシア？ ああ主が仕えている神の作った群れの事か。グヌアセヘミシアだが？》

……………もう俺は何も言わんぞ。

「あー、キューイ、このファミリアの名前って何でしたっけ？」

「キューイ？ グヌアセヘミシアだよ キューイキューイ？」

まじ頭痛くなってきた。もう竜語は嫌だよう。

拘束を解き放たれたワイバーンは、その後当たり前前の様にイブリーの足元に跪いて指示を待つ仕草をしていた。話を聞くに調教に成功したのは良いものの、やはりワイバーンは強力なモンスターであり、反旗を翻されれば被害は凄まじい事になる可能性が高いので常々拘束具を着けたままにしていたのだと言う。

ヴィルヘルムは決して反旗を翻す等はせず、命失うその時まで忠誠を誓ったと言うのに信じて貰えぬ事に不満を持ち命令に逆らうと言った反抗をしてしまったらしい。

それが話をこじらせてしまい、余計に危険ではないかと言う意見が膨れ上がって結局拘束具の数が増えていくと。其れに伴いヴィルヘルムの不満が増えてと悪循環に陥っていたっばい。

なんつーかな、頭は良さそうだし、丁重でキューイに爪の垢を飲ませたいぐらいではあってもやっぱり人間の感性が理解できないらしく、ちよつとした不満を訴えた積りでも人間側が大きくとらえてしまっ

ていた感じらしい。

言葉の壁は大きいのが、其れだけでなく力関係やそもそも容姿が人間じゃないっていうのはそれだけで不利なんだなあって。

「ガネーシャ、超感謝！」

ううん、この暑苦しさが無ければ普通に良い神様なんだけど。なんだかもつたいたいよなあ……。

と言うかヘステイア様と言い、ミアハ様と言い、ガネーシャ様と言
い。割と良い神様多くね？ 神ロキも一応セクハラ以外は優しい神
様だったし。もしかして神様って思ってるより良い神様が多い？

「それで、彼女、キューイについては怪物祭モンスターファイリア当日までガネーシャ・
ファミリア預かりという事で良いだろうか？」

「はい」

キューイはガネーシャ・ファミリアが預かる事になった。理由とし
ては数日後の怪物祭モンスターファイリアまでにトラブルを起こされても困る上に、今回
ガネーシャ・ファミリアに呼び出された事に関しては、他のファミリ
アにも伝わっているらしいのでその辺りにも配慮した形らしい。

一応キューイの面倒を見てくれる団員を紹介された。相当な実力
者の【剛剣闘士】ハシャーナ・ドルリアと言う人が担当してくれるら
しい。

渋い顔立ちのイケメンさんだったよ。第二級冒険者レベル4だつて、超強い
ね。キューイ暴れんなよ……。

「こいつの好物とかは何かあるか？ と言うか普段何を食わせてたん
だ？」

今は小さ目の檻の中に入れられたキューイがハシャーナさんの手
の中にある訳だが、欠伸をしつつつまらなそうにキューイヴァイルヘルム……と呟い
ている。お前どんだけだよ、完全に恋する翼竜ワイルドバードじゃねえか。

「普段はじゃが丸くんを食べさせてましたね」

「は？ じゃが丸くん？ あのじゃが丸くんか？」

うん、多分其方がイメージしてるあのじゃが丸くんであつてるよ。
塩だつたり栗小倉だつたり、味の種類は問わず何でも食う。雑食だし
ね。

「……逆にこちらでは何を？」

「主に肉類だな」

まあそうだよ。竜種って肉食のイメージだよ。……あれ？
今までキューイって肉食わせたっけ？

「好物とかは？」

「林檎が好きですね……肉類は食べさせたこと無いです」

ぼそぼそと果物類を与えてみるかと呟くハシャーナさん。他にも
ブラツシングや鱗磨き、爪磨きなんかについて尋ねられたが、そもそ
もそんな事一回もしてないんだけど……しいて言うなら熱湯風呂？

今までのキューイの扱いの悪さにハシャーナがよく暴れなかった
とか呟いてるけど……十分暴れてんだよなこいつ。つか何度も噛
みつきやがって。ガネーシャ様が気を使って回復薬用意してくれた
りしちまつたじゃねえか。

「話は済んだか？」

「はい」

「うむ。二日後に怪物祭モンスターファイリアが開催される。円形闘技場の関係者用区画
まで訪ねて来て欲しい。その際にはこの仮面を付けてくると良い」

神ガネーシャから手渡されたのはガネーシャ・ファミリアの団員が
身に着けている仮面。ただ最初に貰った物と違って質感がかなり
しつかりしている。

「それは団員に与えている物と同じ物だ。当日はそれと……そうだ
な。衣装もそのままというのは不味いだろう。何か良い衣装はある
か？ 無いならこちらで用意するが」

もしかしてガネーシャ・ファミリアの団員が身に着けているチュ
ニツクにトーガって恰好？ あれ少し恥ずかしいんだが……か
と
いて良い衣装なあ……あ？ ゴスロリ風ドレス？ あんなもん着
れるかアホ。

「すいません、お願いしても良いでしょうか？ ファミリアに余裕が
無くて」

「そうか、判った。当日には用意しておこう。今日は突然呼び出して
済まなかったな。彼女を送っていけ、それとヴェイルヘルムの件の礼も

渡しておく様に。では私はこれで失礼しよう。怪物祭モンスターファイリアに向けて
円形闘技場の清掃を行っていたのだ」

うん？ 清掃？ 神様が自ら？

「神ガネーシャが自らですか？」

「当然だ、眷属子供だけに任せていては群衆の神の名が泣くからな」

……かつこいいいなあ。かつこいいけどこんな風にはなりたくない
な。

丁重に借り物の仮面を付けてガネーシャ・ファミアを後にして報酬を受け取った。と言うか報酬が『ガネーシャの仮面（模造品）』を真顔で渡されたんだがマジどうすりやいいんだコレ。

無論それ以外にもちゃんとヴァリスの入った袋は貰った……貰ったが、なんか反応に困るんだよなあ。

とぼとぼと一人で大通りを歩く。もう日暮れの時間で意外に時間が遅くなってしまった。

ううん、やっぱりお腹の辺りにキューイが居ないと違和感あるなあ。ベル君は何処に居るんだろ？ もうダンジョンから上がってるんかね？

「あ、ミアさん」

「ん？」

大通り、『豊穰の女主人』の店の前で手を振ってるシルさんを見つけたのでとりあえずそっちに近づく。

「こんばんは」

「こんばんはミアさん、この前は大丈夫でしたか？ ベルさんから大丈夫だとは聞いていたんですけどやっぱり心配で」

心配そうな表情を隠しめせずに此方を見るシルさん、優しい人だな。

「はい、その節ではご迷惑をおかけしました」

バイト、だったんだろうが途中で投げ出す形で制服を脱ぎ散らかして逃げ出してしまったからな。まあ、ミアさんは『行く当てがなければ

ばウチに来な。コキつかってやるよ』って言ってたから怒ってる訳じゃなさそうだが。と言うかまだミアさんにお礼を言っただけでなかつたな。

「シルさん、今時間良いですかね？」

「え？　そうですね、もう直ぐ帰り組の冒険者が沢山来るので長時間と言うのは無理ですけど構いませんよ」

あ、そうか。この時間って帰ってきた冒険者がギルドで換金を終えてさあ飲むぞーって時間帯だったか。しまったな。

「ミアさんに少し話があるのですが、無理そうですかね？」

「ミアさんにですか？　良いですよ、付いてきてください」

シルさんに案内され店内へ、相変わらず人混みがーと思ったがまだ時間より少し早いのか人は少な目だな。

そんな店の中でこれから来る冒険者に向けた料理を厨房で豪快に作っているミアさんと目が合った。

「アンタ来たのかい。主神に心配かけんじやないよ」

「はい、色々とごめんなさい。ありがとうございました」

なんか全てを見抜いてそうだなこの人。あの時も俺が唐突に『もう帰ります』って言っただけで頭をガシガシ撫でてきたし。

「まあ、元気そうで何よりさ……それより暇なら手伝っていきな。もちろん小遣いぐらいはやるよ」

前はアレだったしなあ……まあ、手伝うかなあ。あーベルに伝えてないからアレか。

「すみません、ベルに何も言っていないので帰らないとなんですよ。今回来たのはお礼を言う為でしたし」

「そうかい、アンタも冒険者なんだからちよつとしたことどうじうじすんじやないよ」

頭をガシガシと力強く撫でてきた。ぐわんぐわんするけど悪い気分にはならん。

「ま、なんかあったらウチに来な。面倒みてやるからね」

ニカッと笑みを浮かべたミアさんに頭を下げる。

なんかオラリオに来てから頭が上がらない人やら神様やらが凄ま

じい勢いで増えていくなあ。此処に来て本当に良かったよ。

第三十一話

小さな靴音がダンジョンの中に響き渡る。目の前を歩いていく白髪の少年の後頭部を見上げながら、ふと視線をそらせばそこには薄暗い暗闇が揺蕩っているのが見えた。

気が付けば荒い呼吸音が聞こえて思わず足を止める。

すると足音が止まった事に気付いたのかベルが二歩程進んでから足を止めて振り返った。

「ミリア、大丈夫？」

「……大丈夫ですよ？」

全つ然、大丈夫じゃなかった。

現在階層はダンジョン三階層。

ミノタウロスと出会った時みたいに自身の適正階層に合わない階層に潜る様な無茶はしない様になっているのだ。そう、この階層こそ俺とベルの適正階層である……あるのだが。

ダンジョンってこんなに怖かったのか。

今の俺の感想はそんな感じである。

「……わかった。何かあったらすぐ教えてね」

「はい」

気を使ってくれるベル君、マジ優しいな。とは言えこのままはマジで不味いぞ。

今の俺はキューイを連れていない。キューイと言えば、俺の服の中でキューイキューイ鳴くだけしかできない無能なのか有能なのかかわからないマスコットだったはずだ。そのはずだった……。

ただ、今はガネーシャ・ファミリアに預けてあり、明日のモンスターフィリア当日まではキューイーレーダーが利用不可能なのだ。

そう、今の俺はレーダー無しでダンジョンに潜っている……。

それがどういう事かって？ っ!!

「ミリア、どうしたの？」

「……いえ、すいません。気の所為だったみたいです」

後ろから聞こえたほんのかすかな音、過剰に反応して直ぐに後ろに

指先銃口を向けて息を吐く。

そう、これだ。

本来と言うか、今まではキューイが『あつちからー』だとか『そつちからー』だとか曖昧とは言え敵の位置を教えてくれていたのだ。

しかし今は『見える範囲』、『聞こえる範囲』のモンスターしか判別できない。

何せ、二階層でゴブリンに出会ったとき、俺は出会った瞬間に硬直してしまっただから。

何故って？ 決まってる。俺はそのゴブリンの接近に全く気付かなかったのだから。

ベルは出会った瞬間にナイフを構えた。俺は硬直して目を見開いて呆然としていた。

ほら、差は歴然。ベル君は瞬時に反応して攻撃を始め、俺は遅れて構えて……構えた時にはベル君が殲滅し終えていた。

その後だ、気付いてしまったのだ。レーダーに頼り切り過ぎた俺の怠惰に……。

今までレーダーに頼り切り過ぎて自身の勘が鈍りに鈍ってる。と言うか、元々モンスターの気配を察知する能力なんて皆無だった俺の、気配察知の能力を伸ばすと言う機会が全てキューイに奪われていた……この言い方は良くないな。その機会を全て投げ捨てていた付けを払う時が来た訳だ。

薄ら闇が怖い、曲がり角が怖い、視界の届かない場所が怖い。小さな足音にすら脅え、ちよつとした音に過剰に反応して其方に指先銃口を向ける。そんな俺の様子にベル君は幾度と無く『大丈夫だよ』とか『僕がついてるから』と励ましの言葉を投げかけてくれる。

俺がなんとかダンジョンで活動しているのはベル君の励ましのおかげである。

っ！ 足音っ！

慌てて足音の聞こえた方向に指先銃口を向けて——曲がり角から出て来たのがモンスターではなく冒険者だったことに拍子抜けして思わず吐息を零した。

「ミリア、今日はやめとく？」

「……いえ、行きましょう」

過剰に警戒心を抱いた俺の様子を見た冒険者がくすりと笑みを浮かべてから、回復薬を一本くれた。警戒し過ぎると疲れるだけだぞーと軽く手を振って去って行く冒険者に頭を下げておいた。見るからに俺達駆け出し組なんかより上等な装備をした中層組の人達だろう。微笑ましげに笑みを向けられたとはいえ正直恥ずかしい。

……恥ずかしい以前に凄く怖い訳だが。

「そっか、無理はしないでね？」

「はい」

ベル君の優しさが染みわたるんじゃないやあ……はあ、足引っ張り過ぎだよな。どうにかしたいんだが……。

三匹のコボルトを発見。通路の先でたむろってる様子にベルが此方を窺ってきたので頷く。オツケー突撃ね、援護するよ。

『ピストル・マジック』を唱えておいて構えておく。ベルに当てない様に注意して射線確保の為に動きつつベル君の少し後をついていき、援護射撃しやすそうな地点で足を止める。

ベルが一度振り返って確認してきたので頷いてから一気に駆けだしていく。

同時にコボルト三匹がベルに気付いて威嚇し始めたので射撃開始と。

『ファイアツ』！

一匹目の頭を撃ちぬいて、残りの二匹が困惑した様に動きを止める。そこにベルが突っ込んで乱戦に、二発目の援護は慎重にいくか――

甲高い音が響き渡り、衝撃と共に何かに殴られたような鈍痛を覚えて其方の方を向く。其処にはコボルトが二匹、先程死角になっていた角から現れたらしい。

「ミリアっ!!」

しまった、待ち伏せだ。そう思った時にはもう遅い。ベル君も慌てて此方の援護に来ようとして——目の前の二匹から視線を外そうとした所為で攻撃を喰らいかけている。こちらからベルに援護射撃を——その前に目の前の二匹を。

甲高い音、それは多分だがマジックシールドが効力を発動したのだろう。なんとたつて俺を包み込む様に泡の様なドーム状の何かが現れ、攻撃を仕掛けようとして阻まれたのだろう。

ミノタウロス相手なら直ぐ砕けたがコボルト相手なら一撃で砕けたりはしないみたいだ。

『ファイア』ッ！

唸り声と共に爪を持ってひっかこうとして来るコボルト、落ち着いて『ピストル・マジック』で一体撃ちぬいて——二匹目がステップで避けやがった。

「くっ」

バリイツバリイツと連続で引つ掛かれる度にマジックシールドに罅が入って行く。同時に衝撃が俺に届くみたいで俺は後ろに下がって距離をとろうと試みる。近すぎて当て辛い。と言うよりこの状況は不味い。

何度かの連続攻撃に対して『ピストル・マジック』の待機状態が強制解除された。

ベル君が二匹を倒して此方に援護を——無理だ、他の通路から援軍っぽいゴブリンがやってきて俺とベルの間に陣取りやがった。流石にゴブリン六匹はきついだろう。

俺はなんとしてもコボルトを倒さなくてはならないが——ああ、こっちにも援軍きてたのか。

背中に衝撃が走り、甲高い音が響く。背後には二匹のコボルト。合計三匹に囲まれてマジックシールドをタコ殴りである。

この状況で魔法を使うなんて出来ない。と言うより今の俺は冷静でいられない。手が震える。足も震える。ぶっっちゃけ失禁してるんじゃないかと思う。

なにせ目の前に居るコボルトなんてこんな至近距離まで近づかれ

た事無いし。

小さい、けれども鋭い牙の生えた口。憎悪と殺意に歪み鋭く牙を剥く表情。生臭い様な臓物の臭いと不快な獣臭さが合わさった吐息。どれをとつても一級のパニックホラー並の状態。

ちんけなナイフを取り出して斬りかかつて——あっけなく爪で弾かれてどつかにとんで行っちゃった。

怖い、つい先ほどまで暗がりには脅えていた俺は、モンスターに怖気づいちゃった。そんな風にマジックシールドの内で脅えてる俺に対し、何度も——多分回数は二桁ぐらい。攻撃を繰り返された事で、ついにマジックシールドが砕け散った。

甲高い音と共に意識がぼやける。精神力を急激に失った時に発生する喪失感に一瞬意識が飛びかけて——牙を剥いて噛みついてくるコボルトの姿に慌てて左手で顔を庇う。

噛みつかれた左腕に牙が突き刺さり、ついでとばかりに背後のコボルトの爪が俺の背中を引き裂く。

血が飛び散り、目の前が赤くなり——ブチリと言う何か引きちぎられる感触と共に腕に噛みついていた牙が大きく仰け反る。いや、違う——俺の腕の肉を食いちぎりやがった。

飛び散る血と、抉られた腕の肉、しかもそれが目の前に——冷静になれ。

ここで脅えて動けなくなれば本当に死ぬ。だがフラツシユバツクするのは満月を背景にのばされた両腕。

そこにあるべきはずの形は無く、肘の辺りから捻じ曲がった右腕と、骨ののぞく左腕の姿を幻視した。

限界だったんだろう。

何処から襲い来るかわからないモンスター、唐突に現れた殺意を滾らせた怪物、そして何よりも——腕の負傷と言う最悪のトラウマを引き当てた。

ただ、それでも俺は冒険者となったのだ。こんな所で死ぬ訳にはいかない。意地みたいなんだろう。

なんとか右手を『銃』の形にしてから詠唱を唱える。喉が張り裂け

る程に叫ぶ。

もつと、よく考えればよかつたんだろう。ナイフの練習でもしとけば。そんな後悔と共に、目の前で起きた唐突な爆発によつて体が吹っ飛ぶ。

背中からそこそこの勢いで壁に叩き付けられ、意識が飛びかける。

朦朧とした視界のさ中、何が起きたのかどうにか判別した。

ああ、こりやあれか魔力暴発イクニス・フアトウスを引き起こしたつぽいな。

冷静では無い状況、ちゃんとした詠唱が出来なければ引き起こす魔法使いにとつては恥ずべき失態。起きた爆発の威力は非常に低かつたんだろう。それでも俺の意識を奪うのには十分な出来事だつたと言える。

モンスターに囲まれたまま、意識が薄れていく。頭の中に電動ミキサーぶち込んでかき混ぜたかのように意識が揺らぎ、視界が狭まる。必死の表情のベルが、モンスターを薙ぎ払って近づいてくるのを、ぼんやりと眺めていた。

それが、最後の記憶つて奴だ。

目を覚ましたら白髪の少年が泣き腫らした顔で覗き込んで居たらどうしますか？

俺が目を覚ましたのは摩天楼施設、白亜の塔『バベル』の治療施設のベッドの上だつた。

「ベル……」

「ミリア……よかつた……本当によかつたよ」

何とか身を起こそうとして、ベル君が手伝ってくれて何とか上体を起こす。

腕を見れば包帯が巻かれており、背中にも引き攣る様な痛みを覚えた。怪我自体は治っている様子だがそれでも数日は違和感が残るとの事。

「ごめん」

キューイに頼り切りだった所為なのだろう。あの時三匹で不自然にたむろしているのに気が付かなかった。キューイが居たら『待ち伏せ、其処の角』ぐらいにさつと教えてくれて難なく突破していただろうあんなちつぽけな罠に見事に頭から引っ掛かった感じだ。

「こつちこそごめん……助けるのが遅れて……」

ベル君が言うには、背中に裂傷、左腕の肉を大きく抉られ、なおかつ打撲をいくつか。

裂傷と肉を抉られたのはコボルトによるものだろう。打撲は俺が引き起こした魔力暴発イグニス・フアトウスによって吹っ飛ばされた時に負った負傷だろう。

キューイが居ないとこんなにダメダメなのか……。

まあ、当然か。

いままですつとレーダー見て戦ってたのに、唐突にレーダーをOFFにして戦えばこうなるのも予測できたはずだ。まあ、出来ていた筈なのにできなかった阿呆が此処に居るんですね。

治療費は締めて4,000ヴァリス、今回の収入を上回って二日分の収入を消し飛ばすぐらいの金額だった。だが、ガネーシャ・ファミリアの団員が見舞いに来てくれてなおかつ治療費は全てガネーシャ・ファミリアが負担してくれた。

モンスターファミリア

怪物祭の前日に怪我をされたと聞いて慌ててとんできたらしい。

ダンジョンに潜る冒険者である以上負傷は仕方が無いが気が付けて欲しいとの事。竜種と会話可能な人物が死んだなんて事になったら損失が激しいとかどうとか。

ともかく、申し訳なさそうにしてるベル君だが、悪いのは完全に俺だろう。

……ベルの足を引っ張りまくってて本当に申し訳ない。

溜息を零しつつ、皿洗いに従事する俺を見て、同じく皿洗いに従事するリユースさんが口を開いた。

「大丈夫ですか？」

「……ええ、まあ」

曖昧な返事で誤魔化しつつ、洗った皿をどんどんリユーさんの方へ渡していく。手早く水気を切って並べていく様子を横目に目の前の大量の汚れた皿を洗って……洗って……。

何をしているのかって？ 豊穰の女主人、ミアさんの所でバイト中。あの後ダンジョンにもう一度なんていけるはずもなく、かといって何もせずに居るのはダメだなと思ってベル君と別れて行動。

なんせベル君は成長期、直ぐにダンジョンに行きたいと言う気持ちが溢れそうになっていたのに、俺が負傷した所為で半日無駄にしたのだ。本当に申し訳ない思いで一杯だよ……。

ともかく、俺がもう一度ダンジョンに言うのは無理なのでベル君一人で行かせてあげた。強くなりたいてって思ってるのに邪魔しちゃ悪いしね……ベル君一人の方が大丈夫だろ。俺なんて完全に足手纏いだし。

んで、やる事失って何するかなと一度本拠に帰るか、ガネーシャ・ファミリアの所にキューイを見に行くか悩みながら歩いてたら買い物帰りのシル&リユーと出会って、そのまま流れでミアさんの所でコキ使われる事に。

むしろ心情的に沈んでる時にコキ使われる事で意識を逸らせるので良い感じだなと思いつつ皿洗いを熱望して皿洗いに従事させて貰っている訳だ。

「……何かあったのですか？ クラネル氏と喧嘩でしょうか？」

「いいえ、違いますよ……魔力暴発を起こしちゃって……」

嘘を言っても仕方が無いので目の前の皿と格闘しつつ、リユーさんに合った事をぼつぼつと垂れ流していく。正直、誰かに聞いてほしかったってのはあったんだが、ミアさんは大分忙しそうだし。ちやうど一緒に肩を並べて皿洗いしてくれるリユーさんが聞いてくれたのでこれ幸いと言った感じである。

ほぼ愚痴の様なもんを聞かせるのもどうかと思ったが、一度開いた口は歯止めがきかずにここ最近思った事を並べ立てていく。

俺はベルと違って魔法もスキルも充実していた事。

でも出だしに色々あつてベルに差を着けられてしまった事。

その上で焦りから魔法の使いすぎで精神疲労マインドダウンを多発させてベルの足すら引つ張っている事。

今回引き起こした魔力暴発で正直心が折れそうな事。

垂れ流す様に口から零れる情報に、リユーさんはうんうんと一つ一つ丁寧に領いて聞いてくれる。物静かな人なのだろう、むしろそれが有難かった。

「……ノースリス氏、先に謝罪しておきます。聞く気が無かったとは言え魔法の情報を聞いてしまった事は申し訳ない」

うん？ ああ、魔法つて普通、人に話さないんだっけか。忘れてたわ。

「いいえ、此方こそすいません。勝手に話しただけなのでお気になさらず」

「それではこちらにも気にしません」

ああ、礼儀正しい人であっても同時に凶太い人なのかな？ まあ、悪い人じゃないから良いんだろうけど。

「では、私からの私見ですが」

うん？

「貴女は冒険者に向いていない」

……うん、すごいド直球だね。でもその通りだと自分でも薄らと思ってるから何とも言えない。

「魔法も、スキルも、とても素晴らしい物を持っているのでしよう。ですが今の貴女では宝の持ち腐れだ」

その通りである。この魔法もスキルも、もっと別の人が扱えばもっと凄いや冒険者になれるだろう。

「けれども、それは誰でも同じです」

うん？

「初めは誰しも同じなんですよ、貴女は運が良い……貴女自身が冒険者続けたいと言うのなら、努力する事です」

……励まされてる？

「ところで、差出がましい様ですが……貴女は魔法剣士を目指してい

るのでしょうか？」

魔法剣士？ ゲームでよくある職業か？^{ジョブ}

「いいえ、違いますね……そこまで器用にはなれそうにないですし」

近接戦に恐怖心を抱いてしまっている現状、そもそも近接戦は危ういだろう。それにマジックシールドの特性上、近接戦で攻撃を回避できない。ノーガードで殴り合っている状態なのだ。しかもマジックシールドが砕けるともれなく精神力^{マインド}がごっそりもっていかれて下手すりやそのまま精神疲労^{マインドダウン}である。

「そうですか、では魔法使いを？」

「そうなりますね」

皿を差し出した姿勢のままリユーさんを窺う。顎に手を当てて考え事をしているみたいだ。

「……そうですね、もし良ければ魔法の指導をしてもいい」

「はいっ」

え？ リユーさんって魔法の指導できるの？ ……エルフだし出来るのが普通なんかね？

「無論、時間がある時に……少しずつと言う形にはなると思いますが」

皿を受け取って、手早く水気をふき取ってからリユーさんは此方を見据えた。

「どうしますか？」

どうするってそりゃあ……望むべくもない。指導して貰えるなら靴だって舐めるぞ。

ごめん嘘、流石に靴舐めるのはちよつと……。

第三十二話

魔法とは何か？

俺の知る魔法ってのは、空想上の産物であり、科学的に説明できない摩訶不思議な事と言う程度なんだが。

んでこの世界の魔法は大雑把に言って二種類に分けられる。

片や『先天系』、もう一方は『後天系』。

先天系の魔法と言うのは対象の素質、種族などの根本を成す部分が大きく関わる物である。

古よりの魔法種族はその潜在的長所から修行・儀式による魔法の早期習得が見込め、属性には偏りが見られる分、総じて強力かつ規模の高い効果が多い。

魔法種族って言うのは言ってしまうえば『エルフ』の事であるらしい。後天系の魔法が、神の恩恵ファルナを触媒として芽吹く可能性、自己現実らしい。規則性は全くなく、無限の岐路がある。習得には経験値エクセリアが大きく関わっているらしいが具体的には不明と。

俺の覚えてる魔法は素質、種族などの根本にかかわるものっぽいので、先天系の魔法っぽい？

其れとは別に、ファルナによって発現する魔法ってのは決められた文言を口にする事で発動する。要するに『詠唱』と言う動作が必要になる。

んでこの詠唱ってのがかなり曲者っぽい。と言うのも、魔法の基礎中の基礎、詠唱ってのはただ口にするだけでは本来の力が発揮されないのだ。

炎の魔法を扱うのであれば、炎に関するイメージと理解が重要なのだと言う。

例えるなら『焼き払え』と言う詠唱があったとしたら、どの様に焼き払うのかと言うイメージを固め、どの様な効果が発揮されるのかをしつかり理解する事が重要とかどうとか。

基本的に魔法と言うのは詠唱が長くなれば長くなるほど威力が増し、詠唱が短い程発動が早い利点がある。

んで威力マシマシにする為に魔法使いは基本的にその場にとどまって詠唱を行う。

と言うか詠唱と言うのはイメージを作り出し、そのイメージを対象の理解によつて論理的に説明し、それを詠唱と言う文言の中に納めて発動させるものである。

炎の魔法であれば『どのように燃えるのか』と言った感じか？ それを論理的に、炎の原理に従つて論理的に説明する……。頭痛くなつてきた。

基本的に詠唱はひと連なりなのが多いが、詠唱が二段階ある物もあるのだと言う。俺の魔法がだいたいそんな感じ。一段階目で発動準備、二段階目で威力調整、三段階目で効力発動って感じ。

イメージとしては一段階目の『ピストル・マジック』で銃本体の選別。どんな銃器を使うのかを選び取り、二段階目『リロード』によつて使用する弾薬を選択。弾薬によつて威力が多少増減する感じ？

んで三段階目の『ファイア』で効果発動、簡単に言えば引き金を引く動作。

つまり、『ピストル・マジック』と詠唱するときにより威力の高い銃を想像して詠唱すれば多少は強い威力が出せるっぽい？

ただ、それもなんか違うっぽいよな。

簡単に言うと『詠唱が長い⇨容量が大きい』で、『詠唱が短い⇨容量が小さい』って事だろ。多分、きつと、メイビー。

容量つてのは定められる情報量の事、この情報を定めれば定められ魔法の威力・精度があがるっぽい？ 　ただ、その分魔力の消費も大きくなるらしいが。

俺の魔法は基本的に短文詠唱なのでそこまで劇的な効果は無い。はずなのだがどうにも俺の魔法認識が曖昧な所為で今まで俺が使つてた魔法は『中身の無いスカスカな魔法』と言う感じだったらしい？ ちゃんと魔法への理解を深めれば威力は今以上に引き上げられるとかどうか。

まあ、それも限界があるっぽいけど。

例え話ではあるが俺の魔法の容量が4MBぐらいだとしてしよう。長

文詠唱で有名なのは【九魔姫】ナインヘルリヴェリア・リヨス・アールヴである。彼女の詠唱の容量が2TBとかそんなもんになる訳だ。

マジか……。リヴェリアって凄く凄く奴だったんだな。と言うか俺の魔法シヨボ過ぎ？ いや、リヴェリアの魔法の方が凄すぎるだけか。なんか比べると心が折れそうだから考えるのやめとこ。

其れとは別に、どうやら俺には『並行詠唱』の才能があるっぽい？ 本来の魔法ってのは情報を込めるのに相当集中力を行使する訳なんだが……。俺の場合は今まで『詠唱』に情報を込めずにそのまま魔法を発動させてた訳で、要するに魔法の威力と引き換えに並行詠唱をほぼ無意識に行っていたらしい。

リユーさんも目を丸くしてた。下手をすればもつと早い段階で魔力暴発していてもおかしくは無かったと。イグニス・ファトウス

ちようざつくり説明だが、俺の今までの詠唱ってのはかなりふんわりとした想像の上で成り立ってたっぽい。

『魔法って摩訶不思議現象でしょ？』のままでは詠唱は不可能と言われたが、俺の場合は『ミリカン』で『当たり前に使ってた』と言う知識がある。その知識に当てはめて『当たり前』として認識していたが故に発動に支障をきたさなかった訳だ。

ただ、割とざつくりとしたもの過ぎて威力はお察し状態まで下がっていたっぽい？ まあ、悪い事ではないみたいだが。並行詠唱出来ていたと言う部分は威力が低いのを差し引いてもそこの魔法使いなんかよりよっぽどすごい事をしていたみたいだ。

ちなみにだが、魔法の知識、そしてハイエルフとして習得した最高峰の魔法の二つを持ち合わせた【九魔姫】ナインヘルリヴェリア・リヨス・アールヴが現状最高の魔術師と呼ばれているが、その弟子として最近名を上げ始めた【千の妖精】サウザンド・エルフレフィーヤ・ウィリデイスって子がかなりの化け物っぽい？ 何せ詠唱が馬鹿長く魔力消費が化け物染みた魔法を使えるらしいのだ。詳しくは知らんが。

その上で魔力量だけで言えばリヴェリアを超えているとかどうか……。どつからその情報手に入れたんだ？

……。飲食店って割と情報の宝庫だよな。多分だが噂話とかから聞

いたんかね？

「今日はここまでにしましょうか。お疲れ様でした」

「はい、ありがとうございます」

皿洗いしつつも講義を聞いた訳だが。うん、その、なんだ。魔法って超難しいんだな。

今まで俺がやってた魔法ってのは要するに魔法っぽい何かを使って攻撃してただけで魔法で攻撃してた訳じゃないらしい。

つまり……もつと魔法の威力を引き上げれる？

「ミリアさんが何を考えているのか大体想像がつかますが。気を付けてください。詠唱にイメージや情報を込め過ぎた場合も、容量オーバーで魔力暴発を引き起こしますので」

……マジで？

「魔法の詠唱と言うのはかなり繊細です。ミリアさんが今まで発動出来ていたのが奇跡と言えるレベルで……しっかりと魔法への理解と、込められる容量の限界を探って、少しずつ進歩してってください。焦りは禁物です」

ははあ、先達の方の有難い助言である。

魔法の道って奥が深いのかな。でも、コンセントレーション 集中すれば威力上げれるって情報はありがたい。少しずついいから威力の引き上げを目

途に頑張ってみるかな。

「今日も神様は帰ってないのか」

「そうみたいです」

今朝早く、ベッドの上で目覚めてヘスティア様の温もりが無くて少しさみしいとか感じたのは仕方が無いだろう。もう三日、ぶっちゃけ寂しい。ベル君と一緒に寝ようぜと誘ったけど断られちゃうしさ。

既に準備万端で待っているベル君、今日もダンジョンに潜るっばい。と言うのもここ最近俺が足を引っ張っている所為で焦っているのだろう。なお、俺は例の仮面を付けて円形闘技場アンファイテアトルムへ出勤であり別行動だが、一応ダンジョン入口まで見送ろうと思ったので付き添いだ。

ファミリアの本拠、ボロつちい廃教会を出て大通りへ。あの廃教会も出来れば修繕したいしなあ。ガネーシャ・ファミリアの報酬が入ったら修繕費に充てるか……それよりもベルの防具とか俺の防具に当てた方が良いのか？ ああ、ベルの武器も新調しないとなあ。羨ましげに武器を眺めてるベル君を何度も見てるし。

でも武器類って糞高いんだよなあ。数百万は当たり前前の世界である。まあ、命を守る物でもあり、ダンジョンで活動するのに必要な物で金に糸目は付けないぐらいがちようどいいんだと思うんだが。

と、もう直ぐ豊穰の女主人の前だな……一応リユーさんに挨拶だけして――

「おーい」

ふむ？ この声はアホの筆頭、アーニヤさんの――

「待つにや白髪頭、金髪、頼みがあるにや」

……白髪頭しらがっておい。その呼び方は酷いんじゃないかなろうか。

ベルと共に立ち止まって其方に視線を向ければ、予想通りアーニヤさんがぶんぶん手を振っていた。表通りで掃除してるのって基本シルさんのイメージだったが、今日はアーニヤさんなのか。

「あ、おはようございますにや」

「え、ああ、おはようございます」

「……おはようございます」

丁寧に頭を下げるアーニヤさん。最初の一言目が白髪頭しらがの所為で微妙過ぎるぞ……。

つか頼みってなんだ？ 一応バイト中に世話になった事もあるし、聞くのは吝かではないが。

アーニヤさんの前まで行ったところでアーニヤさんが紫色のがま口財布をベルに差し出した。ベルが思わず受け取るとアーニヤさんがしつぽをゆらゆらさせながら説明……説明？ し始める。

「にゃから、おみゃーはおつちよこちよいのシルにこの財布を渡すのにや」

説明になつてないぞこれ。予測だがシルさんが財布忘れて買い物に出かけたから渡して来いって話だろ？ 買い物って基本二人組で

行くって話だったと思うんだが、それに朝一で買い出し？ 時間帯的にズレてるんじゃない？

「えっと……ごめんなさい、まだ話がよくわからないんですけど」

ベル君、アホのアーニヤさんの話を理解できない模様。むしろここでベル君が即答で「はいわかりました。任せてください」とか言い出したらどうしようかと思っただぐらいだし別に構わんが。

つかアーニヤさんはなんでわかんないんだコイツみたいな表情やめてあげてくれよ。間違いなく貴女の説明が悪い。と言うかさっきのは説明か？

「アーニヤ、それでは説明不足です」

おーリリユーさん登場。今日も凛々しい立ち姿、洗濯物の入った籠を持ってているが背筋が伸びてて雰囲気的に『強い人』って感じがするなあ。

「クラネルさんも困っています。ノースリスさんは……あの説明で理解できたのですか。凄いですね」

いいえ、大雑把にしか理解できてません。多分シルが財布忘れて買い物に行ったから届けてくれて話だろうし。アーニヤさん達は忙しいから誰かに頼みたいって感じだろう。多分。

「リユーはアホにや。店番サボって怪物祭を見に行ったシルに忘れた財布を届けて欲しいにやんていちいち言わなくてもわかる事にや」

すつげえ得意げな顔だけど、普通わかんねえよ……いや、予測は出来るか。怪物祭モンスターフェアの情報もあったし。買い出しは二人で行くのが鉄

板のこの店のシルさんが一人で出かけたっぽいのは怪物祭モンスターフェアを見に行ったからなのか。財布を忘れて行ったのは……まあ、シルさんならやりそうだな。

「と言う訳です」

つか流石リリユーさんだな。なんか困り事があつたらとりあえずリリユーさんに相談すればなんとかかなりそうな気になる。後ミアさんも頼りになるし。この店の常連に……いや、今の稼ぎで常連は無理だな。週一でも厳しい。

「なるほど」

「シルは無論、サボった訳では無く、休暇をとっての祭り見物です」
ああ、なるほど。流石にサボりは無いなと思ったが、ちゃんと休暇を届け出てた訳か。

「じゃあアーニヤさんはなんでサボりなんて言ったんだ？ ……まあ、怪物祭モンスターファイリアって言えばオラリオの外からも相当人が来るっぽいし、店は稼ぎ時で大忙しになるだろう。そうであるならそんな日に休暇をとったシルさんに対するあてつけ……なのか？ ……いや、多分だけどアーニヤさんアホだし、何も考えてないだろ。

「今頃財布が無くて困っているでしょう、おねがいしますクラネルさん」

「しますにや」

「わかりました、任せてください」

「良いのか？ 俺が——とも思ったが、俺が財布持っていくのは普通に危ないな。後人探するのに俺は向いてないだろうし。

「ところで、怪物祭モンスターファイリアってなんですか？」

「ありや？ ベル君には説明した積りだったんだがな。

「ミアアから聞いた限りだとガネーシャ・ファミアが主催の円形闘技場アンファイテートルムを一日借り切って行うお祭りだけ」

「……あ、割とぎつくりしか説明してなかったか。

「闘技場でダンジョンから連れてきたモンスターを調教すると言うものですね」

「ま、要するにえらくハードな見世物って事にや」

「なるほど……え？ ミリアも参加するんだよね？」

「うん、まあ、観客そつの前でモンスターの調教ちじゃないけど参加はするな。

「大丈夫なの？」

「にや？ おみやーも参加するにや？」

「ノースリスさんも参加ですか……？」

「ああ、違う。そっちじゃない。勘違いさせてるか。と言うかベル君には説明したはず。キューイを見世物につて……ああ、闘技場の方にも参加するのかって思った訳か。そっちに参加しろって言われたら

土下座して断るわ。

ぎっくりと、今までの経緯を話せば割と理解して貰えた。

「にや？ にやるほど、にやからおみやーはモンスターの臭いぶんぶんさせてたにや。しっかりお風呂入ってこないからモンスター臭かったのかと思ってたにや」

アーニヤさんよお……それさあ、もっと早くに言っただけだ。

第三十三話

ガネーシャ・ファミリアのガネーシャホー様像ムに行けと言われていたら、俺はどうしていただろう？

多分、行かなかったと思うんだ。

むしろ、そっちの方が良かったかもしれない。

美の女神ってのは本当に恐ろしい。

神々すら魅了する美しさ、そんなもんを目にしたらどうなるか。

どうなると思う？

俺は、何も覚えちゃいない。

そう、覚えていないんだ。

何を言われたのかも、何があつたのかも。

一つ言えるのは、美の女神はとても恐ろしいって事だけだ。

アンファイテートルム
円形闘技場の関係者用の区画の中の一室、ガネーシャ・ファミリアの女性団員の方に着付けをして貰っている最中、着させられている衣装をちらりと見てから溜息を必死に飲み込む。

ひらひらでも無ければ、可愛らしいと言う訳でも無い。どちらかと言えば調教師として意識された厚手のキルト地のシャツとズボンに、プラスアルファで革製のベスト、それから左腕に取り付けられたギプス……ギプスと言うか、鷹匠たかじょうが手に鷹をとまらせる際に手を守る為の手袋……のごつい版みたいなのを取り付けられた。

重量はそう無く、と言うかめっちゃ軽い。でも凄く硬質。

なんでかかっていうと、手にキューイを留まらせると言った芸当をする際に手を傷付けない為だそうだ。鷹匠の身に着けている物がどういふ物かは知らないが、キューイは腐っても竜種。竜種の爪の鋭さはかなりのモノなので一応と言う形で受け取る事に。なんとこのお祭りが終わった後は俺にくれるらしい。

まあともかく。割とごつい装備なのはキューイの爪が存外鋭かつ

たかららしい。どこがどう鋭いのか俺には理解できんが……今まで散々噛みつかれたりはしたが、爪で引つ掛かれた事はなかったな。

そんな事を思っている間に着付けが完了、次はメイクを……と言われたが丁重にお断りさせてもらった。

流星にメイクまではちよつと……。仮面つけるからと言えば納得して貰えた。

衣装が割と普通だったので良かったと思いつつもキューイと対面。

「よう、来たのか。似合ってるな、その衣装」

ハシャーナさんもしつかりと着こなしたガネーシャ・ファミリアの制服が似合ってる。まさに渋い男と言った感じだ。仮面を外せば相当モテそうな気はするんだがなあ。

そんなハシャーナさんの腕につかまったキューイを見て思わず吃驚した。

なんかキューイがピツカピカに光ってる。と言うか誰だコイツ？

「キューイッ！」

自信満々に広げられたその皮膚の翼、鱗の一枚一枚まで丁重に磨き上げられ美しい光沢を放ち、角もしつかり磨かれている。爪は潰すのではなく鋭く研ぎ澄ませているがその爪でハシャーナさんを傷付けない様に意識しているらしい。

誇らしげに翼を広げこちらにアピールする姿は、小さくとも力強さを感じさせるワイバーンである。

本当に誰だコイツ？ キューイか？

「ほら、受け取れ」

そう言つてハシャーナさんがぱつとキューイを此方に放つてくる。慌てて左手を前に突き出せば、キューイは慣れたように俺の左手につけた手甲の上に降り立った。

……意外と片手で持つと重いかと思つてたがそうでもないな。割と軽いわ。

「そいつ、頭が良くて助かったぞ。言う事もちゃんと聞いてくれるし」
ハシャーナさんがベタ褒めしてるよ。何があつたんだ？

「キューイキューイ、キューイ、キューイキューイ。キューイキューイキューイ」

ふむふむ？　なるほど。

鱗磨きから爪、牙の手入れ。美味しい食事に柔らかな寢床。いたせりつくせりで過ごしていたと……。

あのさあ、俺ダンジョンで死にかけたんだけど？　なんでお前そんなに良い思いしてんだよ……、いや、自業自得だけどさあ。

「んじや、俺は別の用事があるから行くぞ。じゃあな嬢ちゃん」

ニヒルな笑みを浮かべて去って行くハシャーナさん。一応手を振って見送ってからキューイを見据える。

何このキューイ、ニューキューイにでもなったのか？　超綺麗になった鱗は本当に美しい。なんつかかっこよさまで備わって最強に見える。

「キューイ」

誇らしげに胸を張ってドヤ顔をするキューイ。今までなら小馬鹿にしていたんだが今は違う。なんつかマジで気品がある。なんだこれ、お前マジでキューイか？

「ノースリス氏、準備は出来ましたか？」

ガネーシャ・フアミアリアの団員さんが声をかけてきた。ああ、もう直ぐ表に出ろってか。

衣装チェックも終え、男女二人の団員に挟まれつつ円形闘技場の関係者用区画を抜けて後にする。

「キューイ、どうです？」

「キューイッー」

誰にも負けないっ！　って……お前は何と戦ってるんだ。まあ、確かに負けそうには見えないけど。

「おお」「あれが噂のワイバーンか」「あの子どつかで見たぞ」「子供がワイバーンを調教したのか」「俺らに殺意を抱かないって、ダンジョン産のモンスターじゃなさそうだな」「へえ、あんなモンスターも居るのか」

ざわざわと周囲に人が集まって遠巻きに眺めてきている。

現在位置は円形闘技場の外周部、人混みが凄かったが俺が……と言
うかキューイが現れた瞬間に人混みが俺から半径5メートルの空間
が出来た。

なんか有名人になった気分だよ。

「あれが竜ドラゴンを従テイマえる者か」「いいなあ」

………ええ、なんか二つ名っぽい名前が眩かれてんだけど。そ
れ、誰の事かなあ。

「竜ドラゴンを従テイマえる者……可愛くね?」「仮面とつてくれー」「ちっちゃな幼女
……はあはあ」「そこのお前、何をしている」「ッ!? 俺はただ幼女を
遠くから愛でていただけだ」「少し話がある。ついてきて貰おうか」
「糞っ! 幼女を愛でてるだけだろうがっ!」「逃げたぞっ!」「捕まえ
ろーっ!」「逃がすなーっ!」

………なんか、ガネーシャ・ファミリアの見回りが神聖な雰囲気
を持った怪しい奴を追いかけて行った。うん、俺は何も見なかったし何
も知らな——お? あれはベル君じゃないか。

ヘステイア様と腕を組んでデートとしゃれ込んだベル君を見つけ
た。なにあれ羨ましい。近くに——あ、ダメだわ。今の俺はガネー
シャ・ファミリアの団員として振る舞わなきゃなんだ。

あ、ヘステイア様がこっちに気付いた。手を振ってくれてる。でも
近づいてこないな……ちよつと寂しいがヘステイア様も今回の話は
聞いているだろうし仕方ないか……。

手を振り返しとこ。二人の手にあるのはクレープかあ……後で俺
も買おうかなあ。

「キューイ」

うん? お腹減った? まあ、二人がクレープ持っているのに気付い
ての発言なんだろう。とは言えキューイ連れて買い物は難しいだろう
しなあ。

「どうした?」

ガネーシャ・ファミリアの男性団員のほうに声かけられた。この男
の人、レベル2で実力もあって有能な人らしいんだよな。凄く気を使
ってくれる人だ。女性の方もかなり気を使ってくれている。

この二人はキューイの監視兼俺の護衛らしい。居なかつたらこの人混みにもまれてた可能性あるし超助かつてる。

「キューイが空腹を訴えてますね」

「ふむ？　そうか。一端戻るか」

「そうね、貴女も疲れたでしょ？」

まあ、そうだなあ。途中、キューイにちよつと飛ぶ様に指示したり、キューイとじゃれあつてたりしただけとはいえ、人の視線を集め続けてたからか確かに疲れた。まあ、このまま続けろつて言われても演技ぐらいはできるが。甘えておくか。

「はい、そうですね。少し休憩したいです」

「じゃあ一端戻るか」

「はい、ちよつと通してねー」

二人が先導して人混みを退けてくれる。むしろそうじゃなきや囲まれた状態で身動きがとれなくなっていただろう。ガネーシヤ様の先見が凄まじい。あの神様、本拠の形さえまともなら絶対オラリオで二番目に素晴らしい神様だろ。あ？　一番は誰かつて？　ヘステイア様だろ。

アンファイテアトルム
円形闘技場の関係者用入口。と言うかモンスタ―を入れた檻を搬入する為の大きなゲートの横についた小さな入口を開けて女性が先に入つて行き、俺も続く。

「疲れたわね」

「そうだな……ん？」

「キューイキューイ」

「うん？」

女性が近くの棚に護身用の剣を鞘ごと置いて奥に向かおうとして、男性団員が何かに気付いた様に足を止めた。後序にキューイが『ヤバイ、逃げよう』とか言い出した。なんだよ逃げるって。

「待て」

「どうしたの？」

男性団員の制止の声に女性団員が反応して、雰囲気が変わった。女性団員が無言で棚に置いた剣を拾い上げ、鞘から抜き放って握り締める。男性団員も剣を抜いてる。

なんだ？

「ノースリス、少し待て」

「どうしました？」

何が起きてる？

「……調べてくる」

そう言うのと男性団員が奥に走って行ってしまった。なんだ？

「ガネーシャ様に報告を……うん？ 扉が開かないっ！」

「え？」

「キュイキュイツ!!」

逃げて、超逃げてだと、なんだ？ と言うか扉が開かない？ さっ

きまで普通に開いてたよな。

女性団員が扉を蹴破ろうとするがびくともしない。モンスターを逃がさない様に頑丈に作られているのが仇になったのか。

「別の所から行きましょう。付いてきて」

俺を庇うように前に出て歩きはじめる女性団員……なんだ、何が起きてる？

遠くから、モンスターの咆哮が聞こえてきて、二人して足を止める。

おい、ここに居るモンスターって未調教のばっかだろ？ つか……おかしい。

ここで漸く気付いた。何で見張りが居なかった？ 入口に居たはずの見張りが何処にもいなかった。何故？

そんな疑問は直ぐに解消した。女性団員が何か気付いて近くの物陰に駆けて行ったのだ。

「大丈夫っ!! しっかりしてっ!! 何があつたのっ!!」

女性団員が駆け込んだ物陰、そこには何人かのガネーシャ・ファミリアの団員が折り重なって倒れていた。

うっそだろ。ガネーシャ・ファミリアの団員って全員かなり有能だぞ。全員倒されてるって……キュイイの言ってた逃げろってまさか

……。

折り重なるガネーシャ・ファミリアの団員を見て血の気が引いたが、不思議な事に血の臭いは一切しない。と言うか血が一滴も流れていない。

女性団員が一人の団員の仮面をはぐと、その下には幸せそうに涎を垂らして惚けた姿をした団員の姿があった。

もう言葉にするならほげえとか言い出しそうなぐらいの幸せそうな表情である。なんだこれ。

「……原因不明、魅了かしら……直ぐにガネーシャ様に知らせないとっ！」

立ち上がった女性団員は俺の手を掴んで走り出した。

「こっちよー！」

走る、走る……扉の一つに辿り着く。

「なんで開かないのよっ!!」

がしやがしやとドアノブを掴んで引つ張ったり押ししたりしているが、ビクともしないらしい。レベル2の彼女が力づくで開けられないなら俺じゃどうしようもない。

「よし、別の道を——「あら？ まだ残っていたの？」——誰っ!!」

耳がとろけそうになる様な美しい声だ——一瞬、惚けそうになつてから、急に後ろから聞こえた声に思わず振り向けば、フードを被つた怪しい人物が其処に居た。

なんだコイツ、誰だ？

「ここはガネーシャ・ファミリアとその関係者以外立ち入り禁止よ、貴女は誰？ 用件を述べなさい」

剣を向けて威嚇する彼女、ついでに俺を庇う様に前に出てくれている。こんな状況でも俺に気を使うとか凄いな。俺はなんかあのフードの人物に武器を向ける気になれないのに。怪しいのだ、こんな状況、こんな場所で、あからさまに顔を隠している人物。

怪しさに吐き気すら催すはずなのに、俺はどうにも彼女を疑えない。何せ——あんなに美しい声をしているのだから。

「武器を下してくれないかしら？」

ほら、彼女だつて言ってる。武器を下した方が良いんじゃないだろうか？ こんなに美しい声をしているんだ。多少の怪しさは見逃してあげるべ——痛い。

「キューイツ!!」

キューイに思いつきり噛みつかれた。右手を見ると血が滴ってる。何をする。そう言いかけてやめる。

ついさつきまで俺はなんと考えた？ 彼女を怪しむべきじゃない？ 何を馬鹿な。

『ピストル・マジック』ツ」

詠唱を唱えて発砲準備だけしておく。こんな怪しい奴なのに武器も向けずにポーっとしてるとかあり得んだろ。さつきまでの俺は何を考えて——

「武器を、下してくれないかしら」

そう言いながら、彼女はフードを少しだけあげた。目が見えた、美しい彼女の目が——

とても美しい彼女に武器を向けるなんて、とんでもない。

武器を下ろす。キューイが喚き散らして噛みついてくる。そんな事も気にならない。綺麗だ、美しい、そんな陳腐な言葉じゃ言い表せない美貌を持つ彼女。

名も知らぬ美しきお方。

そのお方の前、女性団員がふと倒れた。美しさに中てられたのかなのか。

もうどうでも良い。その美しさをもっと見たい。

足が前に出る。キューイが喚き散らす。うるさい。キューイをそこらに投げておく。

「あらっ」

綺麗だ、とても……とても——

「貴女は……」

その瞳が俺を見ている。そう——その美しい瞳が俺の姿を映

している。

体が震えた、頬が赤く染まる。嬉しい、彼女のその瞳に俺の姿が映ってる。そう、彼女が俺を見ている。

それだけで歓喜に震え、俺はゆっくり跪いた。

「……そう、彼の傍に居た」

体が震える、心が震える。美しき彼女が、俺の事を知っていた。なんと誇らしい事か、思わず涙が零れた。余りの歓喜に俺は涙を流した。

「……………」

見ている。彼女が、美しい貴女が俺を見ている。嬉しい、嬉し過ぎて——

「オツタル」

彼女が誰かの名を呼んだ。悲しい、俺以外の誰かの名を呼んでいるその姿に、目の前に居る俺では無く、誰かに声をかける姿に、悲しみに胸が張り裂けそ——

「これを始末してちょうだい」

——始末とはなんだ？

硝子の碎ける音、衝撃、意識がぶっ飛ぶ。
一体、何が起きた？

第三十四話

女神フレイヤは目の前から消えた幼い容姿の少女の代わりに現れたオツタルの背中を見て、吐息を零した。

「珍しいわね、貴方が仕留め損ねるなんて」

これを始末して、そんな簡単な願いを即座に叶える事が出来ず、自らに苛立ちを感じているのだろう。そんなオツタルの背中を見ながら、フレイヤは視線を流して碎け散った檻とその中に居たモンスターを押し潰して何とか生き残った少女——ミリア・ノースリスを見据える。

「運が良いのね」

素直に褒めた。彼女は彼——ベル・クラネルの周囲に居る中でも最悪の存在だったのだ。

汚れきった魂、在り方その物すら歪んだその醜い魂は、雑多に溢れる有り触れた魂の中でもフレイヤに不快感を抱かせるのに十分なほどだった。

己の為に他の誰かを食い物にしてきた、そんな魂。

好き好んで視界に入りたい物ではない。だが彼を見ていれば自然とその周囲をうろついでいて非常にうつとおしい。それにせつかく美しい純粹無垢な魂の彼をその在り方で歪めて汚して同類へと落とし込んでしまう可能性もある。だからこそその排除。

オツタルに頼めば速やかに片付く。そんな認識だったのだが、運良く生き残った様子だ。

生き残った要因を分析するなら、まずはスキルだろう。何らかの防衛スキル、其れの影響でオツタルの拳の威力を弱めた。ただそれだけでは無い。

オツタルはオラリオ最強の称号を持つレベル7の冒険者だ、その一撃は駆け出しであれば挽肉に成る様な威力のはずである。例え防衛スキルが発動しようとして焼け石に水のはずなのだ。

ではなぜ彼女は死ななかつたのか？ それはオツタルのフレイヤに対する気遣いに寄るものだろう。

円形闘技場の関係者用区画、締め切られたこの場所でミアリアを粉碎して殺したとしよう。辺りには血と臓物の臭いが充満してしまふ。フレイヤは気にしないだろうがオツタルが気にした。

女神フレイヤをそんな不快な空間に居させてはいけなないと。

結果として、オツタルはミアリアの肉体を破損させずに衝撃で殺す程度の威力に納めた。その上で彼女の防御スキルによつて軽減が重なり、運良く生き残つたのだろう。

「……オツタル、やめましょう」

不快感が重なつて、思わず始末する様に命じたがここでミアリアを殺すのは面倒事に繋がる。ガネーシャ・ファミリアの評判なんぞ知つた事ではないが、ガネーシャ・ファミリアの客人である彼女を殺せばガネーシャが黙っていないだろう。黙らせる事は出来てもヘステイアが騒ぎ立てるだろうし。

それに、運良く生き残れたのだから、少しは慈悲を与えても良いかもしれない。

フレイヤはゆつくりと、壊れた檻に近づいていく。ミアリア・ノースリスの壊れた様な呼吸音が響く其処に、意識を失い、投げ出された手足。そして破損した檻の一部が体に突き刺さっているのが見えて思わず目を細めた。

オツタルの一撃から運よく生き残つた事に変わりは無くとも、このままでは死ぬだろう。

「……まあ、知つた事では無いわね」

このままミアリアが死のうが、運が悪かつただけだろう。それに彼女は散々他の者を食い物にしてきたのだ、ここで死んでも別に問題は無いだろう。

だが生き残つて彼の傍に留まられても困る。

少し考えてからフレイヤはゆつくりとミアリアに顔を近づける。か細い乱れた呼吸を繰り返すミアリアに対し、フレイヤはゆつくり、優しく声をかけた。

「彼の傍を離れなさい」

「彼の傍を離れなさい」

彼とは誰だ？

「ベル・クラネル。貴女の様な薄汚れた魂が傍に居て良い存在じゃないの」

……確かに、その通りかもしれない。俺みたいな薄汚れたゴミみたいな存在が、傍に居るべきじゃない。

「だから、彼の傍を離れなさい。運良く生き残れたのだから……命は惜しいでしょう？」

確かに、命は惜しい。死にたくない。だからベルの傍を離れるべきだろう。そう、素敵な女神様に素敵な少年の素晴らしい二人組。汚物の様な奴が傍に居るのが相応しくない二人。

俺は直ぐにそばを離れて……。

「キュイキュイツ!!」

……ああ、そうか。そうだよな。キューイの言う通りだ。まだお礼が出来てない。

「ゴブツ……出来ない」

薄目を開ける。揺らぐ視界の中、不愉快そうに眉を顰める美しいお方が居る。

直ぐに彼女に従うべきだ。こんな美しい女神が不快そうに眉を顰めているのだ、直ぐにしたがって彼女に不快感を与えないのが俺にできる最上級だろうか？

その通りだ、その通りだと思う。でもダメなんだ。もう惹かれた。彼らに、女神と少年。あの二人の傍に居たいと思ってしまった。俺なんかを拾い上げてくれた、家族だと言ってくれた彼らに、礼がしたいと思ってしまった。

「出来ません、二人の傍を離れるなんて」

何とか見据える。美しい彼女の目を、不愉快そうに歪むその表情を……俺は此処で殺されるのだろうか？

それは——困る。

まだ、まだ全然、ベルに、ヘステイア様にお礼が出来ていない。せ

いぜいが少し稼ぎが増えたとか、部屋の掃除をしたとか、ダンジョン探索の補佐——補佐じゃないな、足を引つ張る事しかできてない。「でも、貴女は彼の邪魔しかできていないでしょう?」

その通りだ、邪魔しかできていない。昨日も、その前も——ミノタウロスの時だって、助けた積りになって、結局ベルは襲われた。

お礼をしたい。彼に、彼らに、俺は何かを残したい。

「そんなあの子に必要ないわ」

そうかもしれない。俺のやる事なんて、余計なお世話だろう。きつと俺が居なくとも二人はやっていける。そんな気がする。でも——嫌なんだ。

「嫌だ……二人から……離れたくない」

「……自分勝手ね」

ああ、俺は自分勝手な事を言ってる。あの二人に俺は必要ない。でも……

——ねえ、ミリア君……君は、僕の眷属／家族で居るのは嫌かい? ——

そうだ、俺は……ヘステイア様の眷属／家族で居たい。受け入れてくれた。だから、何かを残したい。

礼がしたい。恩返しをしたい。上手くいかなくて、悩んだりしている。けど、誰だって慣れない事をすれば失敗の一つや二つするだろう。

ベルも、同じ眷属／家族だから。

あの日、あの時、あの場所で、偶然出会った少年。彼が手を引いてくれなければ、俺はきつと……死んでいた。

命を救われた。そう言い換えても良い。いや、命なんてもんでは足りない、全てだ。

全てを救われた。命も、心も——だから、恩返しをしたい。

「……………そう」

目の前の女神様の表情が見えづらくなる。視界がぼやける。隅っこでキューイが大柄な大男に掴まれて暴れているのが見える。何か喚いている様子だが、何と言っているのか。

「そう、そうなの……ごめんなさいね……貴女を勘違いしていたわ」
謝罪の言葉、何故謝るのか？ わからない。美しく微笑んだ彼女が、俺の頬に手を当てた。

「よく聞いてちょうだい」
なんですか美しい女神様。

—— 貴女を生かしてあげる ——

ありがとうございます。うつくしいめがみさま。

—— 彼の力になりなさい ——

おおせのままに。

—— ここで遭った事は忘れなさい ——

はい。

—— でも、これは忘れないで ——

………。

—— 彼を試すわ。もし彼が死にそうになったら ——

「……………っ！」

声が聞こえた。誰の声だ？

「……………イキュイツ！」

大声で呼びかける誰かの声、誰だろう？

「キュイキュイツ！」

目を覚まして、早く。キューイが叫んでる。

薄目を開けると、高めの天井が目に入ってきた。木製の梁に石を組み合わせた石材の天井。

ヘステイア・ファミリアの本拠じゃないな？ どこだここ。

キューイが大丈夫かって聞いてくるが、何が？ 何の話だ？ 身を起こそうとして、思わず顔を歪めた。

なんだ、体中べったべたで気持ち悪い。と言うかなんだこの臭い——
—— 凄く血生臭い。 ——

「キューイキューイツ！」

早く、急いでと喚き立てるキューイを無視して、自分の恰好を見て思わず変な声が飛び出た。

「いひやあつ!？」

なんだコレ、いやマジでなんだこれ。なんか体中血塗れなんです。しかもどうなってる。檻がぶつ壊れてるし血が飛び散ってる。何があつた？

「キューイ！ キューイキューイツ！」

ファルアウニヤ？ つてのに魅了されてたとかどうとか。オエ スツテル？ に殺されかけたつて何だよ……。

—— あの子を追いなさい ——

……あの子つて誰だ？ と言うかキューイは何でへしやげた檻に入ってるの？ いや待て、最後の記憶だ、何処から途切れてるのか確認しなくては。

まず——そう、最後だ、途中休憩の為に円形闘技場の関係者区画の入口で警備の団員に声を……かけてない。

あれ？ 入口に警備してる団員居たよな？ なんでいなかった？

そっからの記憶がぶつ飛んでる。

「今の時刻は？ 何が起きてるんです？」

「キューイキューイツ！ キューイツ！」

ファルアウニヤが檻の枷を外して、外にモンスターが逃げた……逃げたつ!？ ヤバイだろそれつ!!

慌てて立ち上がる。ヤバイつて、恩恵ファルナを持ってない一般人が襲われたら一たまりもないぞ、何とかしないと……というかガネーシャ・ファミリアの人らは何処に——

—— あの子を追いなさい ——

……行かなきゃ。

「キューイツ」

っ!？ 今、一瞬だけ意識が誘導されかけた。

キューイの呼び掛けで気付いたが、それがなかったらどうなつてた？ つて、そんなこと考える前にキューイをへしやげた檻から出さな

くては。

固すぎんだろこれ、壊すか？ ってか、なんか檻が何個か壊れてん
じゃん……何があつたんだ？

フアルアウニヤつて奴の仕業か？

第三十五話

ガネーシャ・ファミリアが捕獲していた、怪物モンスターファイリア祭に必要な未調教モンスターを、どこぞの誰かさんが逃がしてくれやがったらしい。

関係者用区画、囚われのお姫様ならぬ囚われのキューイを救出後、慌ててガネーシャの所に向かうべく足を進めようとした所でガネーシャ・ファミリアの団員と出会った。

「これは……」「ガネーシャ様に連絡をつ！」「ノースリスつ！ 大丈夫かつ！」「ノースリスつ!? どうしたつ!？」

おおう、血塗れだったからかめちやくちや驚かれた。俺も驚いたんだが、どうにもおかしいんだよな。

体中血塗れ、特に腹の部分にはレザーベストに貫通した様な痕もあった。ただ、体には傷一つ無かったし、特に痛む所も無い。と言うか今気付いたが昨日の怪我による痺れとか違和感も綺麗さっぱり消し飛んでやがる。むしろ調子よくなってる。

「モンスターが逃げ出しましたつ！」

「やはりかつ！」「ノースリス、何があったかわかるのか？」「他の者達は見ての通りで話が出来ない」

団員達、と言うか通路に寝かされているガネーシャ・ファミリアの団員……仮面を付けてないが服装からしてガネーシャ・ファミリアの団員だろう。その寝かされている団員の顔は……なんつーか、こんな非常事態なのに蕩けた様な幸せそうな顔してる。なんだこれ……。

「えっと、私にも何があったのかわからないのですが、キューイ曰く『誰かがモンスターを逃がした』と言うのと『魅了された』とか言ってます」

「魅了？ そうか、その事もガネーシャ様に報告するぞ」

「ノースリス、お前は直ぐに治療を」

慌てた様子で上の方に駆けて行く幾人かの団員。残った団員は俺の方を見て治療を促すが、怪我は何処にも無い。確かに血塗れではあるが。んな事よりも街中に逃げたモンスターをどうにかしないとまずいだろ。

「いえ、私も街中に逃げたモンスターを追います」

「だが、お前は客人だ、何かあったら困る……護衛はどうした？」

護衛？ そういえばレベル2が二人ついてくれてたよな？ 何処行っただんだ？

「わかんないです」

「キュイキュイ」

うん？ 魅了されて倒れてる？ さっきの場所？ 魅了ってやべえな。何にも覚えてない。と言うかなんで俺はこんなに血塗れだったのに怪我一つ無いんだ？ 意味がわからんぞ。

「まあいい、お前は大人しく――」

「逃げたモンスターの数が多すぎる、それに散らばり過ぎていて搜索が追いつかないぞ」

「……くっ、ノースリス、すまないがモンスターの搜索を手伝ってくれ」

客人に手を貸してと言うのは辛かろう、だがそうは言ってもらえないしな。一般人が襲われて怪我すりゃヤバイし、死んだ日にはガネーシャ・ファミアの責任問題に発展するだろ。神ガネーシャは割と好きな神様だしどうかしないと。

「わかりました」

「こつちだ」

キュイ、モンスターの場所を探してくれ。

「キュイッー」

これほどキュイが頼もしく見える事も無かろう。ガンガン行こうぜってな。

「そつちの角、三つ向うの所にモンスター、二匹居ます」

「わかった、おいお前達、そつちに向かえ」

「わかった」

街中を猛ダツシュしながら近くにモンスターが居たら一緒に走る団員の何人かを向かわせる。逃げたモンスターは全部で20近いら

しい、小物のコボルト、ダンジョンリザードから、大物のシルバーバツクにオーク、ソードスタツグ等も居るらしい。

コボルト、ダンジョンリザードはわかるが、シルバーバツクとソードスタツグは聞いた事も見た事も無い。多分だが俺とベルが潜る階層よりはるか下の階層のモンスターなのだろう。コボルトですら一般人ではヤバイと言うのに、そんなモンスターが街中に解き放たれるとか悪夢じゃねえか。

「ノースリス、残りは何処に——うん？ あつちか」

「先に行ってくださいっ！」

足の遅い俺に合わせる必要は無い。そう伝えればその団員はさつと駆けていく。視線の先に居るのは剣みたいな角を生やした牡鹿の様なモンスターが居る。あれがソードスタツグか。

「キュイツ!!? キュイキュイツ!!」

え? 助けてって言ってる? 何処ツ!?

キューイの言葉に従って足を止めてからそっちの方に駆けだそうとして、周囲を見回す。ガネーシャ・ファミリアの団員は今近くに居ない。最後の人もソードスタツグの方に行ってしまったし。だが『助けて』って言葉を見無視する訳にも行かない。どうする? いや、迷うまでも無いか。助けに行く。魔法が使えるんだ、なんとか——なんとかする。

キューイの指示に従って幾度か細道を走り抜ければ、広い場所に出た。中央には大きめのモンスター、あれは——蟲系のモンスターか? 名前がわからんがクワガタみたいな二足歩行のモンスターだ。ヤバイ、見た事無いし聞いた事無い。間違いなく俺の実力でどうにかなるとは思えないモンスターである。

そのモンスターの正面、尻餅をつきながらも後ろに後ずさっている小さな少女が居た。栗毛の女の子である。周りを見回す。なんで誰も助けに入らない。冒険者が沢山居るだろ、誰か助けてやれよ。

そんな疑問は直ぐに解消した。

周辺には屋台を守る様に短剣を構えた冒険者の様な姿が多数確認できる。だが、どの冒険者も軽装、鎧なんて身に纏わず手にしているのは護身用程度の短剣のみ。モンスターに対抗できそうな装備が何一つ無いし、よく見れば駆け出し相当の冒険者がほとんどだ、助けに入るなんて出来る訳もない。

「キュイッ！」

助けなきや、そう叫ぶキュイ。なんとかするとは言ったが、なんとかなるのか？　かなり、と言うか普通に厳しそうだぞ。

——そんな考えを塗り替えた。

聞こえた、聞こえてしまったのだ。栗毛の少女のか細い声、『たすけて』と言う言葉が聞こえてしまった。前を見据える。モンスターは何故か少女をゆっくりと追い詰める様にキチキチと甲殻を擦り合わせる不快な音を立てながらじわじわと距離を詰めている。少女は少しずつ後ずさって震えている。時折、震えた声で助けを求めているが、誰も助けに入らない。沢山の冒険者が居るつてのに……。

「ああもうっ！　こうなりや自棄だっ！　『ショットガンマジック』ッ！」

助けてなんて言ってる少女を見捨てる？　そりゃあ出来んわ。ヘステイア様の眷属として、ベルの家族としても、そんな事は出来やしない。

イメージだ、想像しろ、俺の魔法はそれで威力を引き上げれる。あの甲殻をぶち抜ける威力の銃でも想像すりゃいいのか？

イメージとしては水平二連式ショットガン、ダブルバレルショットガンと呼ばれるタイプで、ワントリガーで二発同時に発射するタイプをイメージ。消費弾薬が二倍になりそうだが、威力は高まるだろ。

ぶっつけ本番の想像した詠唱、頭の奥がチリチリと妙な感覚に囚われるが知った事か、次は弾薬選択だ。

『リロード』ッ！」

散弾銃の中でも特殊な弾薬、熊撃ち等に利用される単粒弾スラックをイメージ、威力は高いはずだ。

チリチリした感覚が増える。頭の中でやすり同士を擦り合わせた

らこんな感じになるのかと言うぐらい。だが痛みは無い。なら問題ない。

右手を相手に向けつつ一気にダツシユ、走り出す。件のモンスターは鎌状の頭？ クワガタの構造なんて詳しく知らんし、そもそもクワガタであるかもわからんが、二本の大顎？ で少女を挟み込もうとしてる。肝心の栗毛の少女は完全に腰が抜けてるのか立ち上がろうともしない。周囲の冒険者も悔しそうに歯噛みしている。

そんな少女とモンスターの間に滑り込んで顔に指先を突き付ける。吹っ飛べ糞野郎！

『ファイア』ッ！

魔法陣がきらめき、手の甲の光が何時も以上に一気に減り、凄まじい発砲音と共にクワガタっぽいモンスターを大きく怯ませる。そう、怯ませただけ。威力不足だ。

「ッ!? 『ファイア』ッ！」

一発目を至近距離でぶち込んだのに倒せなかった。焦りはあるが怯ませる事には成功した。二発目をぶち込んで直ぐに栗毛の少女の方を向く。二発目がどんな効果を齎したかなんて確認する余裕は何処にも無い。栗毛の少女を左腕で搔つ攫って走り出す。

「文句なら後でいくらでも聞いてあげるから大人しくしてなさいッ！」

驚いたのか暴れようとする栗毛の少女を荷物の様に小脇に抱えて走り出す。俺と同じくらい体格の少女、と言うか幼女だが、重い。女の子に重いなんて言葉は禁句だが、はつきり言おう。俺も同じ体躯なのだ、人一人を運んでダツシユなんて普通なら出来ない。まあ、今の俺は神の恩恵、ファルナで身体能力の強化された冒険者だ。重くとも何とか走れる。

『ファイア』ッ！」

三発目、えっと、消費弾薬が3発ずつで、装弾数が20発だから――残り5発か？

後ろを確認すれば、今にも大顎で俺と栗毛の少女を挟み込もうとするクワガタ野郎が居やがった。立ち直り早すぎんだろっ！

『ファイア』ッ！」

残り——嘘だろ、手の甲の残り弾薬数を示している結晶が砕けて消えた。まだ四発目だぞ。もしかしてマジで消費弾薬二倍になったたのか？ それで威力不足とか笑える。俺のステイタスがもう少し高ければ——ここ三日、ステイタスの更新をしてなかったのが響いたか。

『リロード』ッ！」

慌てて装弾——あ、これ死んだわ。

大顎が俺の左右に見え、目の前にはクワガタの顔。あ、こいつの顔少し凹んでるわ。効いてない訳じゃないのね。まあ、殺しきれなかったからアレだけど。

「悪いわね、あんた邪魔」

左腕で抱えた栗毛の少女の「あ……」と言う小さな呟きが聞こえ、咄嗟に少女だけでもと投げる。悪い、全力投球。少女を投げ飛ばすとか何考えてんだって話だけど、マジで邪魔なんだわ。一緒に挟まれたらヤバそうだしね——ギチリと胴が挟み込まれ、『ショットガンマジック』が強制解除された。

つか『マジックシールド』はっ!? なんで発動しないっ!?

挟み込まれて持ち上げられる、大顎で啜えられた状態のまま地上を見下ろす。ううん、これ虫系の化け物が出る映画で見た事あるぞ——
——このまま真つ二つにされる奴じゃね? まだ死ねないってのっ!!

『ピストルマジック』ッ！」

イメージだ、イメージしろ。超強い拳銃を——落ち着け、まだ何とかなる。まだ胴体繋がってるし、ぎちぎちと締め上げが強まってきた死にそうだけど大丈夫。多分。

想像するのは世界最強の拳銃、P f e i f e r Z e l i s k a と
か言う頭おかしいアレ。現実的な実用性は皆無で『世界最強』の称号欲しさに作られたと言われてる浪漫銃器。

ギチギチと言う胴を締め上げる感覚だけでなく、頭の中でガリガリとなんかを削る音が聞こえる。激しい頭痛と共に右手に現れた魔法

陣が揺らめいて妙な火花の様なモノを散らす。意味を込め過ぎて
魔力暴発寸前イグニス・ファトウスなのを知らせるソレ。

今は無視、このまま胴体と泣き別れはマジ勘弁。痛い痛いっ！ お
腹潰れるからっ！

「ぐうっ!? 『リロード』ッ！」

想像しろ、最強の拳銃に込める弾薬を——。600ニトロ・エクス
プレスと言う弾薬。簡単に言えば対獣用の『ライフフル弾』である。拳
銃に詰め込むもんじゃねえだろ。だが威力は折り紙つき。

バチバチと火花を散らす結晶、魔法陣もちかちか点滅して少しでも
意識が逸れればそのまま魔力暴発する事間違いない。そろそろお
腹が限界迎えそう。やだ、おもらししそう……序にお腹の全身臓物全部ぶちま
けそう。おしっこ漏らすのと、臓物中身もらすの、どっちが良いですか？

どっちも嫌です。

強引に腰を捻る。悲鳴を上げたくなるぐらいの激痛と共に銃口指先を
クワガタモンスターの額に押し当ててる。

今度こそ——吹っ飛べ糞野郎。

『ファイア』ッ!!』

衝撃、爆発。大顎がバラバラに弾け、俺の体が投げ出される。

着地に失敗して盛大に肩から落ちた。痛い。肩が砕けそう……で
も胴体は繋がってるし、生きてる。見上げた其処にあったのはクワガ
タ型のモンスター……の下半身。上半身何処行ったし。

黒い何かに変貌を遂げ、その下半身もぶわあっと消え去った。やつ
た、勝ったぞ。

「キューイッ！」

……キューイ、お前さつきまで何処行ってたんだよ。まあ良いか。
凄く疲れた。周囲で上がる歓声を聞きながら心地よく目を閉じる。
このまま寝ても許されるよね？ よくやったとかそんな歓声が聞こ
える。ガネーシャ・ファミリアの団員はまだ来てないっぽいなあ。頭
の中がまだチリチリする。魔法使えるとは思えん。怪我は……肩
が痛い『レッサーヒール』も使えないぐらい疲れたわ。

そんな風に力を抜こうとした所で、聞きたくない言葉が聞こえた。

——あつちの方でシルバーバックがツインテールの女神と白髪の少年を追いかけていったぞっ！——

ツインテールの女神？ 白髪の少年？ ははっ……ああ、クソツ垂れだよ畜生。もう少し頑張らなきゃじゃねえか。

ヘステイア様とベルだろ其れ。キューイ、場所案内頼む。
直ぐ行かなきゃ。

——あの女神様にも言われたし——

第三十六話

シルさんに財布を届けて、その後にはダンジョンに潜る積りだった。けれども、途中で神様と出会うと怪物祭を一緒に回る事になって、途中でミリアがガネーシャ・ファミリアの仮面を付けてキューイと一緒に歩いているのを見かけたりして。

楽しい一日になるはずだった。

何故か逃げ出したモンスター達、そしてそれに追われる事になった僕と神様。

急いで神様の手をとって逃げ出した先は、東と南東のメインストリートに挟まれる区画にある広域住宅街。都市の貧困層が住む複雑怪奇な領域は、一度迷い込んだら最期、二度と出て来られないとまで言われている『ダイダロス通り』。

入り組んだ道を、ただ只管に神様の手を握りしめて走る。

左の細道に入って、木箱が積まれた角を右に曲がって、ごみの詰ったゴミ箱を蹴飛ばして、走って、走って。広い場所に出た。

次はどちらに逃げる。奥の方の細道？ 手前左側の道？ 一瞬迷ってから直ぐに細道に入るべきだと左側の道へと足を踏み出そうとすると、建物を飛び越えたモンスター、銀色の毛を持つ大猿、シルババックが目の前に落ちてきた。

「ぐうっ！」

「ベル君っ！」

「神様っ！」

シルババックの着地の影響で神様の手を離してしまう。シルババックが振り向き、目が合った。その瞬間、ダンジョンで出会ったミノタウロスの姿を幻視した。

憎悪と殺意に染まった真っ赤な爛々と輝く瞳。嘲笑った、嘲笑われた。脅える僕を嘲笑うその顔に、僕は動けなくなってしまう。

その様子を見て、何を思ったのか。シルババックはベルから視線を外す。そのまま神様に手を伸ばし始めた。

何故、僕を狙わない？ 僕が弱いからか？ ああ、そうだろう。僕

は弱い。だってこんなにも怖がってしまったているんだから。手が震える、足が震える。恐怖で硬直して動けない。

怖い、怖い——でも、僕は男だろ。

恐怖に震える体を殴る様に、自分を鼓舞する。そうしないと、動けないから。

——いけよ、いけよっ！ 女の子を置いて、逃げるなっ!!——

一気に走り込む。ナイフを握りしめ、此方から視線を外して神様だけを見据えるシルバーバック。いける、今なら不意打ちになるだろう。だからっ。

走って、一気に目の前に躍り出る。ナイフを両手で握り締め、振り上げる。

「うああああああつ!!」

——甲高い、金属の碎け散る音。

飛び散った金属片には、白髪の少年の呆然とした顔が映りこんでいる。信じられない、少年の顔にはそう描かれている。それは、その金属片に映り込む少年は——僕だった。

呆気無く碎け散った金属片、元ナイフだった残骸。身動きがとれない空中で、背中に強い衝撃を感じた。息がつまり、体が吹き飛ぶ。シルバーバックの張り手であっけなく吹っ飛んだ体が、壁につけられた魔石灯をいくつか粉碎して地面に落ちた。

「ベル君っ!!」

神様の声——僕が守らないと。でも……僕じゃ——ダメなのか？

「二人とも目を瞑りなさいっ!!」

聞こえた大声、ミアアの声に反応して目を閉じる。次の瞬間、眩い光が睨越しに降り注いだ。

「ヘスティア様っ！ ベルっ！」

腕を掴まれ、強引に立たされる。

「ミアア君っ！ その恰好はっ!?!」

「話は後で、今は逃げますよっ!」

目を見開けば、僕と神様の手を引いてミアアが走っている。僕は引かれるがままに足を動かしてついていくだけ。

ミリアの後ろ姿は血塗れで、思わず息を飲んだ。

昼間見た時にかっこいい調教師の恰好をしていたのに、何でそんなに血塗れなんだろう。そんな疑問が浮かんだ瞬間、ミリアに突き飛ばされた。

「ベルっ！ 神様をつっ！」

「ミリアッ?!」「ミリア君っ！」

腕の中に感じる温かさは神様のもので、脇道に突き飛ばされて臀部を強かに打ちつけ、感じた鈍痛に目の前が一瞬眩む。

眩んだ瞬間に硝子の碎ける音が響き、ミリアがうめき声を上げた。

脇道に飛び込み損ね、飛んできた岩の塊がミリアの『マジックシルド』に阻まれて碎け散る。

「回復早すぎでしょっ!! 『ピストル・マジック』ッ！ 『リロード』ッ！ 『ファイア』ッ！」

流れる様に魔法を放ちながらミリアが焦った表情で此方を見た。

「はやく行ってっ！」

急かされる様に立ち上がり、神様の手をとって走りだそうとして――二度目の硝子の碎ける音と木箱の粉碎音で足を止める。

「ミリア君っ!!」

神様が僕の手を振り払って後ろに走り出す。慌てて僕も続けば『マジックシルド』が碎けて意識が朦朧としているミリアが粉碎された木箱にめり込んでいる。

「ベル君、ミリア君をつっ！」

「はいっ！」

急いでミリアの腕を掴んで木箱から助け出す。それから走り出した。

「ごめん……まだアイツ、目が見えてないみたいだけど、音を頼りに木箱ブン投げてきてるみたい……」

背負ったミリアの言葉を聞き流しながら、僕は神様と一緒に走る。

くっそ情けなさ過ぎて泣きそう。

キューイレーダーに引つ掛かったベル君&ヘステイア様の下へ急
直行したら、丁度ベル君がぶっ飛ばされた所だった。キレて『ピスト
ル・マジック』の強化詠唱で一発KOを狙ったが、上手いかなかつ
た。

と言うか、なんか集コンセントレート 中 出来ない。頭の中で火花が散ってる様な
不可思議な感触。無理をし過ぎた所為で集中力がガタ落ちしてる様
子であり、先程使ったような威力は出せない。

仕方ないので低威力の糞雑魚『ピストル・マジック』で周囲の魔石
灯をぶち抜いて疑似閃光弾状態にさせてもらった。え？ 修理費？

ガネーシヤ様お願いします。

ベルの手をとり、ヘステイア様と一緒に細道へ逃げ込んで――
キューイが危険を知らせて来て慌ててベルにヘステイア様を押し付
けて横道へと突き飛ばせば、『マジックシールド』になんかがぶち当
たって意識が遠のきかけた。あの糞猿モンスター、周囲の物を手当た
り次第こつちに投げてきやがる。

キューイ曰く、音が聞こえる方に適当に投げてるだけだから逃げれ
ば良いとの事だが、『ピストル・マジック』で撃ち落とすつてのをやっ
て時間稼ぎしようとして失敗、連射しようとしたら二発目で
魔力暴発しそうイクニス・ファトウスになった。その所為で回避が遅れて『マジックシ
ールド』が碎け散つて衝撃で近くの木箱にめり込んだ訳で……超痛い
です。つか痛いよりも、なんか意識が朦朧とする。

ベル君が背負ってくれてたけど途中からヘステイア様が肩を貸し
てくれる。閃光での目潰しの効果がそろそろ切れそうだから、どう
にかしないとなんだが。

日陰から日向に出たのか一瞬視界が眩む。木箱なんかが積みまれ、貧
民街のイメージが付くダイダロス通りらしい風景に思わずうんざり
する。出口どつちだよ。ガネーシヤ・ファミリアの団員が早く来てく
れないとヤバイんだが。

「神様っ！ あそこに逃げましょっ！」

先行していたベルが見つけたのは、鉄の格子扉である。何のための
もんかわからんが少しは時間を稼げそうだな。後ろから聞こえる怒

りの咆哮から、目潰しの効果が切れたっぽいのが確認できる。

「神様、先にミアアと行ってください」

格子扉を開けて周囲を警戒するベル君。直ぐには来ないと思うが……。今の俺は血が足りてないのかなんなのか、上手く思考がまわらん。助けに来たのに肩を貸されて助けられてるって情けなさすぎる。泣きたい。

薄暗い通路だが、奥に微かに光が見える。ここを通ってもあの糞猿は追いついてきそうだが、少しでも時間を稼げばガネーシャ・ミアミアが応援に来てくれるだろ。

後ろで格子扉を閉じる音が聞こえた。

「よし、奥に道があるね。ベル君も——ベル君、何を……してるんだい？」

驚きで硬直したヘステイア様、俺も後ろを振り向けば——鉄製の格子扉が閉じていた。まあ、それは解る。開けたら閉じる。基本だもんね。

でもさ、何でベルは格子扉の向こう側で微笑んでんだよ。

「ごめんなさい神様、ミアア……」

いきなりの謝罪、意味分らん。何してんだよベル。さっさとその扉開けろよ。

慌てて格子扉を開けようとヘステイア様から離れて扉に体当たりを繰り返す。ガシャンと言う金属をブツ叩く音、それから体中に走る鈍痛。何でこの扉は開かないんですかね……あ、入口の所の門が下されてらあ。こりや開かないわ。

何で門下りてんの？ さっつきまで普通に開けたしおかしいよなあ？

「ベル、何をしてるの？」

「……ミアア、神様をお願い」

何言ってるんだよ、ふざけんなって。そう言う冗談はこういう場所で言うもんじゃないだろ。糞がっ、丁寧に鎖まで巻き付けてベルは何がしたいんだよっ!!

「……………僕が……僕が時間を稼ぎます」

……何の時間を稼ぐって？

「だから、ミリアは神様を連れて逃げて」

「何を言っているんだベル君っ！ 今すぐここを開けるんだ」
は？

「神様、ミリア……僕は……もう二度と家族を失いたくないです」

おい、おいおいっ!! 何言ってるんだコイツはっ!! 家族を失いたくないだどっ!! 俺も同じ気持ちだぞ畜生っ!! せっかく異世界にやってきて出来た家族だぞっ!!

それにベルである必要ねえだろっ!! こういうのは俺みたいなの役目だろっ!!

ベルが走って行ってしまおう。格子扉はビクともしなくて、直ぐにベルの姿は見えなくなった。

「嘘でしょ……」

「ベル君……」

おい、嘘だよな？ マジでなんなのこれ。何でこの扉壊れネエんだよ。こっだけボロツちい貧民街なんていうなら、すぐぶっ壊れる様なぼろい扉で良いだろ。何でこんなに頑丈なんだよっ!!

蹴飛ばす。殴る、体当たりする。小さな少女程度の体躯しかない俺の攻撃ではビクともしない。

俺は助けに来たんだよな？ 神様を、ベルを——ファミリア家族を助けに来たんだよな？ じゃあなんでこんな所で足止め喰らってるんだ？ なんでベルが囷になろうとしてんだ？ 俺は何しに此処に来たんだ？

「ミリア君、落ち着くんだ」

肩を掴まれる、待つてくれへスティア様、今このふざけた鉄格子なんて俺がぶっ壊して——

「ミリア君やめるんだ」

っ!!

腕を掴まれた。血が滴り落ちる手を見て歯を食いしばる。ジンジンとした鈍痛が全身に広がる。そして同時に悔しさが染み渡る。

ああ、そうだよな。俺じゃこの格子は壊せない。力が、能力が足りない。魔法でぶっ壊そうにも今は魔力暴発しちまいそうになる。イグニス・ファトウス

如何すりやいいんだよ畜生、最初から二人だけ逃がして俺が時間を稼げば――

「ミリア君、馬鹿な考えはよすんだ」

「……ベルが、ベルがっ！」

ああ、畜生。泣いたって仕方ないだろうに。けれども涙が溢れてきやがる。悔しい、助けに来たのだ。ギリギリ間に合ったはずなんだ。ベルが一撃貫つてたけど、けれども俺が駆け付けた。本当にギリギリで助かって――後はガネーシャ・ファミアと合流すればそれで終わり。そのはずなのに。

ベルは鉄格子の向う側、俺は其れに阻まれてベルを助けに行けない。ヘステイア様だけ救つても意味が無い。ベルも、ベルも家族なのにっ！

「ミリア君、聞いてくれ。僕に良い考えがある」

良い考え？

「あのモンスターを倒すんだ」

……無理だろ。無理だ。何せあのモンスターは十一階層に出現するモンスターなんだ。糞猿呼ばわりしてるが、俺の能力からして勝ち目なんて微塵もないし、ベルの能力でも厳しい位だと思う。

「大丈夫さ、僕は君を信じてる。ミリア君、コレを受け取ってくれ――君の為に作つて貰つたんだ」

差し出されたのは左手につける用の手甲。朱色の竜鱗を模した意匠の手甲。ガネーシャ・ファミアのくれた軽量の手甲よりも更に頑丈そうなそれ。

「これは……」

「キューイ君に頼んで爪とか鱗とかを少し分けて貰つてね。それを素材に作つたんだ」

手甲の表面に走るこの文字は、確か神聖文字ヒエログリフだったか。意味はわからんが、俺が触れると淡い光を放った。

「いいかいミリア君、今から君のステイタスを更新する。それからベル君と合流して、ミリア君には申し訳ないけどベル君のステイタスを更新するまで時間を稼いでくれ。ステイタスの更新が終わったら――

「君とベル君でアイツを倒す」

……なるほど。なるほど、そうか。

「いけるかい？」

決まってるんだろ。

「いけるかいけないかじゃなくて、いきますよ」

さっと上着を脱いで背中を晒す。後は腰のナイフをヘステイア様に渡しつつ、ガネーシャ・ファミアに貰った手甲を外す。よく見ればガネーシャ・ファミアに貰った手甲はへしゃげて歪んでる。ガネーシャ様には申し訳ないが此処に捨てていかせてもらおう。勿体ないがガネーシャ様には頭下げて謝るところ。

キューイを床におろして朱色の手甲を身に着ける。淡く神聖文字ヒエログリフに光が灯る手甲。身に着けるだけで力が湧き上がる、気がする。

背中が光が弾ける。体の気だるさが若干マシになった。

そうしてる間にもヘステイア様が作戦における重要な点を伝えてくる。

と言っても単純に決めたのは合流場所のみ。ベルを拾ったらヘステイア様が先に合流場所に辿り着いてそこでステイタスの更新、俺はシルバーバックを惹きつけて時間を稼ぎつつ、適当なタイミングでヘステイア様の所へ。

最後にベルと協力してシルバーバックをぶっ飛ばす。解りやすくて素晴らしい作戦だ。神様の記憶能力で戦いやすい地形の場所まで移動して貰って、俺はキューイに道案内頼む事でサクッと合流と。

作戦会議つぽいモノも終了し、更新が完了する。この場で更新後のステイタスが解る訳じゃ無いが結構上がったのか？

「っ！ ミリア君、新しい魔法が使える様になってるけど」

「詠唱文と特徴だけ教えてください」

「ここで新魔法キターっ！ これは勝てるフラグですね。多分、きつと、メイビー。」

「基礎詠唱は『ライフル・マジック』、特殊詠唱で『スナイプ』、効果は『高威力&超射程』『単発の魔弾』『消費弾薬1/10』だよ」

……………。スナイパーかな？ この場で使うには消費が大きすぎ

る上に遠距離用の魔法である。どつちかと言えば『サブマシンガン・マジック』みたいなバーストファイア三点射撃出来る魔法ならよかったんだが。今回は使わないかな。

「わかりました。ヘステイア様、下がってください」

まあ良い。とりあえずステイタスの更新完了。上着も適当に着直して——目の前の鉄製の格子扉を蹴っ飛ばす。一度——二度——三度——固すぎっ！

「っ！ 『ショットガン・マジック』ッ！ 『ファイア』ッ！」

ショットガンをぶち込む、一発目で扉が軋む。魔力が相当上がったのか威力も上がってるっぽいな。力？ ミリアちゃんはパワー系じゃないから。

「『ファイア』ッ！」

二発目の『ショットガン・マジック』で蝶番が一つ弾け、扉が軋んで半開きになった。

「よしっ！ キューイツ、ベルを探してっ！」

「キューイツ！」

「ミリア君っ！」

なんですかヘステイア様。

「無茶だけはしないでくれっ！」

了解ですよ。ベルみたいに神様泣かせる行動なんてするわけないでしょ。ベルは後で一発ビンタしないとだな。神様泣かせやがって。

第三十七話

眩しい太陽、乱雑に後からどんどん追加されていった建物の所為で、まるで迷宮の様に入り組んだダイダロス通り。

——そう、あの時も確か、こんな風によく晴れた日の事だった。後ろから神様とミリアの声が聞こえる。鉄製の扉を壊そうと叩いているミリア、必死に声を荒げて僕を止めようとしてくれる神様。

——山でモンスターにやられ、呆気無くお爺ちゃんは死んだ。

一步踏み出す。より大きく扉を叩く音が聞こえ、神様は悲鳴の様な声で僕を止めようとする。

——探しにもいけない深い谷に落ちていたらしい。

二歩目が止まりそうになる。けれども、僕は行かなくてはいけない。い。

——決めたよお爺ちゃん。僕、冒険者になる。

行くんだ。僕は行かないや。怖くても、震えてでも、神様の為に、ミリアの為に……。

——だけど、こんな弱そうな僕を冒険者として受け入れてくれるファミリアは見つからなかった。

『失せろ小僧、お前の食い扶持はねえ』

『掃除係なら雇ってやっても良いぜ』

『持参金でも持ってきてきな』

何処に行っても、どのファミリアを訪ねても、拒絶され、否定され……僕は諦めかけていた。

『やあ少年、ファミリアを探しているのかい？』

神様が、其処に居た。

冒険者になった。けれども、失敗して、笑われて、悔しくて……僕は折れかけていた。

やけくそ気味に、ダンジョンに潜って……死にかけた。彼女が居なければ、僕はあそこで死んでいただろう。

『まあ、悔しかつたのは解りますが……無茶し過ぎですよ。帰りましょう』

差し出された手を、僕は掴まなかった。悔しくて、惨めで、我儘にもその手を掴めなかった。

『わかった。じゃあ朝まで頑張りましたよか』

それでも、彼女は僕の力になってくれた。

僕の家族。ファミリア

守りたい、守らなきゃ。知らない所で、何もできなくて、失ってしまうのは……もう嫌なんだ。

走る、走る、走る。

背後にはシルバーバック。本来ならその手足の自由を奪うはずの手枷、足枷、そしてそれに繋がる鎖は今やシルバーバックの扱う武器に成り果てている。

背後で砕け散る酒樽、芳醇な葡萄酒の香りが一面に飛び散り、砕けた樽の破片がベルの背中に当たる。振るわれた鎖で薙ぎ払われる障害物達。

その拳が振り下ろされる度に、足を纏れさせそうになる。止まる訳には行かない。少しでも、一分でも、一秒でも長く。シルバーバックを惹きつければ。

きつとミリアが神様を安全な所に連れて行ってくれる。

鎖が、凄まじい風切り音を響かせて背中に迫ってくる。避けられない。目を瞑り、それでも足を動かす。もうダメなのか、そんな考えが脳裏を過ぎるが、踏み出した脚が地面をとらえなかった。

瞬間、目を見開けば2M程の段差が目に入る。足を止めなかった所為で僕はそのまま段差の下に転げ落ちた。

だが、それが功を奏したのだろう。段差の下に転げ落ちる僕の直ぐ背後で、避けられないと思つた鎖が空振りに終わり、勢いそのままにシルバーバックは、段差のすぐ下に転げ落ちたベルの前に、一回転して飛び出して行った。

目の前に倒れたシルバーバックに一瞬惚けてから慌てて立ち上がる。もう少し時間を稼ごうと足を動かさそうとして、目の前に鎖が振り

下ろされて近くの木箱が砕け散り、飛び散った破片に思わず足を止める。

鎖の擦れる音、風を切る音。嫌な予感を感じて顔を庇う様に両手を交差させれば、次の瞬間には目の前の石畳を砕くほどの勢いで鎖が振り下された。ただそれだけなのに、吹き飛ばされて背中を強かに打ちつけて咽こんでしまう。

弄ばれている。

直接僕に当てないのは、シルバーバックが鎖を上手く使いこなせていないからではない。全くその逆だ、僕を玩具の様に転がして遊んでいるのだ。

あの鎖の一撃が僕に直撃すればそのまま僕は死ぬだろう。そうなつては面白くないと僕で遊んでいるのだ。

それでいい。こんな弱つちくて、泣きそうになつて、恐怖に足を震わせてしまう僕なんかでよければ、好きなだけ遊ばばいい。

僕が弄ばれば弄ばれるほど、時間は経過していく。その分、神様とミリアは助かるだけの時間を稼げる。

自然と、口元が緩んだ。先程の衝撃で、体が痺れて上手く動けない。「上手く、逃げてくれたかなあ」

シルバーバックが目の前に迫る。此方を見る目には嘲りと嘲笑が混じり合っている。その目は、その表情は、あのミノタウロスと全く一緒で——怖い。

体が震えた。覚悟はできていた筈なのに、怖くて、痺れる足で必死に立ち上がる。無様に、情けなくて、けれども、逃げたい。死にたくない。

ごめんミリア。今度は脅えない。かつこよくミノタウロスを倒してみせるって約束したのに。僕はミノタウロスでもない、ミノタウロスなんかよりはるかに弱いモンスターに脅えてしまっている。

「今度は……助けに来てくれないよね……」

自分は、何を期待しているのか。思わず自分を嘲笑する。こんな時にまで、助けを期待するだなんて。目の前に、シルバーバックの牙が並んでいる。獣臭い吐息が顔全体にかかり、息が詰まる。

また、会いたかったけど。むしろこれで良かったな。こんな、情けない姿見られずに済んで良かった。

拳を振り上げ、大きく咆哮を上げるシルバーバック。もうダメだ、一歩も動けない。

「ごめん、神様……ミリア……約束……守れませんでした」

覚悟を決めた訳じゃ無い。僕は、ただ諦めてしまったんだ。俯いて、目を瞑って、歯を食いしばって。振り下ろされる拳で命を散らす。僕は此処で終わ——

『ファイア』ッ！」

詠唱の声、聞いた事のある声。一瞬で理解して目を見開いた。

シルバーバックが悲鳴と怒声を混ぜた様な咆哮を上げる。顔を手で覆い、体をくねらせて、足元の鎖に足をとられて転倒するシルバーバック。

「ミリアっ!？」

「ベル君っ！ こっちだっ！」

嘘だろう。思わずそう思いながら声が聞こえた方向へと向いた。思い違いだと、僕が恐怖故に見ている幻覚だと、幻聴だと言って欲しかった。

——そんな、どうして？

ここに居るはずがない。居て良い筈がない。神様が其処に居た。僕の腕を掴んで、走り出す神様。

「どうして来ちゃうんですかっ！」

腕を引かれながら、僕は怒鳴る。頭の中がぐちゃぐちゃになって、神様ともう一度会えて嬉しくて、けれどもこんな危険な所に神様が戻ってきた事を信じたくなくて。

「ミリア君が時間を稼いでくれるからっ！ 今の内にっ！」

神様の言葉が信じられなくて、思わず足を止める。神様がつのめって、僕の方を向いた。

「ベル君、早く行くんだ」

待ってください神様、今、今なんて言ったんですか？ ミリアが？

ミリアが時間稼ぎを？ っ!!

ミリアの魔法の音が聞こえる。そして、徐々に遠ざかって行く。シルバーバックの咆哮も遠ざかっていって、危険が僕と神様から引き剥がされたのに気が付いて、神様の両肩を掴む。

「僕が囷になるって言ったのにつ！　なんで逃げてくれないんですかっ！　ミリアを囷に!?　戻らなきやつ！　僕がまたアイツを惹きつけますから、神様はミリアと——」

「君はしょうがない子だな」

切羽詰まった状況なのに、優しげな声をかけられて、僕は思わず神様を見つめた。

なんでそんな優しそうな表情で僕を見るんですか。今この瞬間にも、ミリアが死んでしまうかもしれないのに。ミリアを失うのはダメだ。神様と逃げて貰わなきゃ、なのに——

「僕らが君を置いて逃げ出せる訳無いじゃないか。だって——ファミリア家族だぞ?。」

っ！

「僕達を守りたいだって?　なら、その言葉そっくりそのまま君に返してあげるよ」

僕は——僕はっ！

「それに、約束してくれただろう?。」

——っ!?　僕は、約束したはずだ。神様と、ミリアに。置いて行ったりしないって。でも、だからって。

「ミリアを囷にするなんてっ!。」

「ベル君、君は勘違いをしてるのさ」

勘違い?。

「ミリア君が稼ぐ時間って言うのは僕らが逃げ出す為のものじゃない。あのモンスターを倒す為のものさ」

倒す?　あのモンスターを?　誰が?

「ベル君、君がああのモンスターを倒すんだ。君のステータスを更新する。その力をあのモンスターにぶつけてやれ」

僕が?　あ、の、モンスターを?　無理だ。

「無理ですよ。少し強くなった所で僕の攻撃はあのモンスターに届か

ない」

鎖を上手く使いこなして、弄ばれた。何度もギリギリの所を狙われ、即死しない様に玩具の如く扱われたから、解る。理解してしまつた。

僕の攻撃はあのモンスターに届かない。少しステータスが上がった。でも、僕はもう体力も残り少ない。攻撃を当てる自信なんて何処にも無い。

「それに、ナイフだつてこの通り。これじゃ攻撃以前の問題ですよ」
折れたナイフの柄を取り出して神様に示す。

「ベル君、ナイフなら問題ないさ。此処にある。君の為に用意した。それに、君は何時からそんなに卑屈になつたんだい？ 僕は君の事を信じてるぜ」

神様が、僕を？

「攻撃が当てられない？ ミリア君が居るんだよ？ 君一人で戦わせる訳無いだろ。二人で協力して倒すんだ……ああ、ミリア君から伝言があつたんだつた。『約束通り、かつこよく決めてください。ミノタウロスの前の予行練習って奴ですよ』だつてさ。約束ってなんだい？」

ああ、あの時の約束。

『なら、今度ミノタウロスに襲われたら……その時はかつこよくミノタウロスを倒してくださいね』

僕は――

振り下ろされる鎖の一撃。砕け散つた石畳が『マジックシールド』をビシビシと叩いて淡い波紋を生み出す。

「キューッ！」

ベルとヘステア様の離脱を確認後、シルバーバックこと、糞猿さんと楽しい楽しい鬼ごっここの真っ最中。鬼ごっこする者よつといで。ほら鬼一人に逃げるの一人じゃ割に合わんだろ。誰かほかにも逃げ役で参加してくれ。

内心で文句垂れつつ周囲に居る浮浪者っぽい人らが逃げる為の時

間を稼ぐ。

防具も無いどころか下手するとファルナすら持つてない人らを巻き込む訳にはいかない。いや、こんな所で鬼ごっこしてはしゃいでる時点で十分に巻き込んでるか。本当に申し訳ない。

「キュイツー！」

左手に付けた真つ赤な手甲が淡く輝く。どういった効果があるのか知らんがさつきから淡い光が零れ落ち続けている。別に魔力を消費してる訳じゃ無いが……。キューイの言葉に従って走りながら考えてるが答えが出ない。

右、左、其処の階段上に行つて、飛び降りて。割と無茶な要求が多いキューイの道案内だが、なんとそのおかげで逃げ果せてる。と言うかキューイ凄いわコイツ。俺の頭に張り付いてキュイキュイ鳴いてるだけだが、こいつの指示がかなりの確で、シルバーバックの攻撃も見切ってくれるわ、拳句の果てに振るわれた鎖を『ピストル・マジック』で相殺してくれるおかげで致命傷に至る傷どころか、なんとマジックシールドが碎ける攻撃にすら被弾してない。

おまえ、そんなだけ優秀ならもつと早くに実力を示してくれよ。

「キュイツー!! キュイキュイツー！」

はあっ!!? どっちも行き止まりっ!!? 左っ!!? 左行けばいいのかっ!!?

視界に映っているのは三叉路、正面奥は行き止まりっぽく、左側も行き止まりになってるっぽい? でもキューイが左に行けって騒ぐ。キューイの慌てた様な言葉に咄嗟に左の道に体を投げ込む。瞬間、背後で投げられたワイン樽的な物が碎け散り、辺りに酒の臭いが充満する。安酒か? 香りはさっぱりよくない。

って、んな事どうでも良い。目の前に広がるのは山積みの木箱。道を塞ぐように存在するそれ。おいもう少し整理しとけよ、ふざけんな人が死にそうになってるってのに、このダイダロス通り、無差別に色んなところに色んな物放置し過ぎだろ。

乗り越える事は出来なくは無さそうだが、乗り越えようとしてる間にシルバーバックに追いつかれる。冗談じゃないぞ。

と言うかもう追いつかれてる。

後ろを振り返れば目の前に拳が――

「キュイキュイツ!!」

え? 左手ガード? 何それ。

多分無意識、驚き過ぎて何したらいいのか解らない俺にキュイイが左手を前に突き出して防御しろみたいな命令をしてきたから。命令に無意識に従ったんだと思う。淡い燐光を散らす竜鱗を模した手甲を前に突き出す。

瞬間、先程まで薄青い泡の様なマジックシールドが真っ赤に染まり、其処にシルバーバツクの握りこぶしが突き刺さる。

衝撃と共に吹っ飛ばされて木箱群をぶち抜いて遥か彼方後方へと転がって――起き上がって気付いた。あれ、俺無傷じゃね?

完全に無傷と言う訳では無い。全身にちよつとした疼痛がある程度。だが動くのに全く支障が無い程度である。

あんな直撃を喰らったにもかかわらず傷らしい傷も無く。マジックシールドは赤いまま健在で砕けておらず。吹き飛ばされて木箱の山をぶち抜いたのに平然と立ち上がれる。若干、着地の際に体を打ったがそこまで痛くない。何が起きた?

「キュイイツー!」

うん? 竜鱗の加護? 何其のかつこいい名前。じゃなくて、手甲の効果?

「キュイキュイツー!」

走って逃げて、つてああそうか。シルバーバツクが崩れてぐちゃぐちゃになった木箱の山を乗り越えようとしているのが見えて慌てて立ち上がって走り出す。

走っているとキュイイが頭の上で超得意げに語り出す。曰く『素材』として使われたキュイイの鱗やら爪が特殊な効果で俺のマジックシールドを強化してくれたらしい。

発動にはクールタイムみたいなのがあるが一時的にシールドマジックを超強化して防御力を引き上げ、消費する精神力^{マインド}を肩代わりとかどうか。

気が付けば左手の手甲に纏わりついていた燐光が消え失せ、マジックシールドも普通の薄青い色に戻っている。

なるほど、一時的な防御スキル強化。俺にしか効果が無い特殊な効果の付いた手甲らしい。なんでお前そんな事わかんだよ。

「キュイキュイ」

自分が素材だから。なるほど、わけがわからん。自分の体を素材にするのと装備の効果がわかるんですかねえ……。

「キュイ？ キュイキュイ」

うん？ 準備できた？ ヘスティア様とベル君の準備がオツケーっぽいね。んじゃさっさと合流しますか。キューイ道案内頼む。

「キュイッ！」

さあて、合流してこの鬼ごっこも終わりですかね。ベルはかっこよく決めてくれるだろうか？

第三十八話

広さの確保された空間。神様が連れて来てくれたのは僕とミリアが存分に戦える広い場所。

ステイタスの更新を終えて、広場の中央に立つ。

遠くの方から聞こえていたシルバーバックの咆哮が、徐々に近づいてくる。

防具は身に着けていない。今までの攻撃で歪み、金具が壊れていたから身に着けられなくなっていた。

咆哮が聞こえる度に、足が震え、体が震え、恐怖で叫びそうになる。

そんな僕の背中に、神様が優しく額を当てた。

「大丈夫だベル君、もう一度言うよ。僕とミリア君がついてる」

緊張が薄れる。恐怖はまだ残ってる。けれども、震えが止まった。

「僕もミリア君も、君を信じてる。君は——僕達を信じてくれるかい？」

信じる。そう、ミリアがしっかりとシルバーバックを誘導してくれている。だから、信じる。

震えが止まったのを確認した神様が、笑みを浮かべて離れる。神様は近くの物陰から顔を出して笑みを浮かべた。

「ベル君、かっこよく決めてくれよ？ 僕が本気で惚れてしまうぐらいにね。それぐらいやれなきゃ【剣姫】を落とすなんて無理だぞ」

「はいっ！」

次の瞬間、ベルの視界の先、隠し扉を蹴破る様にミリアが飛び込んできた。

「ミリアっ！」

「ベルっ！」

叫びながら、ミリアが後ろを振り返って左手を突き出す。左手にはいつの間にか朱色の手甲を装備していて、赤い光が弾けた。次の瞬間、轟音と共にミリアの潜り抜けた仕掛け扉が粉碎され、ミリアの体が飛んできた。

甲高い音と共に僕の直ぐ横を転がっていったミリアを振り返って

確認する。

「ミリアっ!？」

「大丈夫よっ!・ 其れよりベルっ!」

ミリアのマジックシールドは真っ赤に染まっていて、僕の少し後ろで止まって立ち上がったミリアが笑みを浮かべて僕を見据えた。怪我らしい怪我は何処にも無く、不敵な笑みを浮かべたミリアと視線が交差した。

「ビビッて無いわね?」

「……うん」

砕けた仕掛け扉のあつた壁を乗り越えて、シルバーバックが広間に入ってくる。

「いけるわね?」

「うん」

後ろにはミリア、その後ろの物影には神様が隠れている。

「隙はどうにかして確保するから、私を信じなさい」

「わかった、ミリアを信じるよ。だから、僕を――」

「信じてるわ。貴方なら出来るって」

ミリアの言葉に背中を押され、僕は一步踏み出した。

目の前に降り立ち、怒りの咆哮を上げるシルバーバック。さっきまであんなに恐ろしいと思つた目も表情も、怖くない。

脅えるだけだつた僕はもうやめよう。

睨みつける。ただ、睨みつけるだけで良い。それだけで、シルバーバックは怯んだ様に足を止めた。それは直ぐに苛立ちと怒りの咆哮に塗り潰されて消えてしまったけれど、しかし一瞬とは言え相手を怯ませる事が出来た事実は、僕に自信を与えてくれる。

いける。

ベルの右後ろに立つ。ヘスティア様は後ろの流し台の影に隠れているらしい。

合流した直後に吹っ飛ばされて死ぬかと思つたがギリギリで助

かった。クールタイムが微妙に長い所為で何度か死にかけたが問題は無い。

怪我も無く合流成功。結果は上々所か最上級。

咆哮を上げたシルバーバックに対し、ベルはふっと笑みを浮かべた。

さつき死を目の前に浮かべた諦めたようなふざけた笑みじゃない。自らを鼓舞する不敵な笑み。

小声でベルが『いける』と呟き、そのまま弾丸の如く走り出す。

距離はかなり離れているが、シルバーバックは腕に取り付けられた拘束具の鎖でベルを打つ積りなのか腕を大きく振り上げて振り抜こうとしている。

あの鎖の威力については語るまでも無い。モンスター拘束用の特殊な合金であり、強度は高い。それが武器として振り回されているのだから恐ろしい話だ。

『ライフル・マジック』

余裕を持ってリロードしておいた。残り弾薬は10発と2マガジン。ライフル・マジックの消費弾薬は1/10なので撃てて5発分のみ。そんなに少なくしてどうするって？ ピストル・マジックだと威力不足過ぎて鎖を壊せない。集コネクト中出来ない以上、俺は素の威力が高いはずのこの魔法しかねえ。

ぶっつけ本番で使うのは怖いが、ショットガン・マジックは間違いない。誤射するし。其れを考えたならライフル・マジックしか無い訳で。

『スナイプ』

『バレットタイム』というのを聞いた事はあるだろうか？ 元々は特殊撮影SFXの一つで、被写体がスローモーションなのに対し、高速なカメラワークを可能にする撮影方法の事だが、今回語る方はFPSゲーム等でも特殊な『技』として登場する方だ。

簡単に言えば『自分以外の全ての動きがスローモーションになっている中、銃撃する』と言う特殊な技。

何故今こんな説明を？ 決まってる。『スナイプ』の詠唱と共に、俺の視界に映る全ての動きがゆっくりになっていってるからだ。

乱雑に干された衣類が微細な空気の振動で震え波打っている姿も、シルバーバックが鼻の孔を大きくして鼻息を荒く腕を振るおうとしている姿も、腕に繋がった拘束具から伸びた鎖が金属音を響かせながら空気を引き裂く姿も。

そして、そんな恐ろしい化物に向かつて、一瞬たりとも立ち止まらずに突っ込んでいる超^{ベル}かつこ^クい^{ラネ}い^ル奴の姿も、全てがゆつくりになった世界。

ゆつくりと流れる時の中で、俺は右手をシルバーバックの腕に繋がる鎖に向ける。飛び出た弾丸がどんな軌道を描き飛んでいくのかが脳裏に描かれ、その軌道とシルバーバックの振るう鎖に合わせて引き金を引く。それだけでいい。

あのまま振われればベルを薙ぎ払って吹き飛ばすだろう。だが、そんな事はさせない。

『ファイアツ』

外したらどうなる？ そんな恐怖に手が震えそうになるが、口元を歪めて吹き飛ばす。俺はベルになんと言った？ 『隙はどうにかして確保するから、私を信じなさい』そんな風に宣言したのは俺自身だろうか？ 恐怖で引き金が引けないなんて事態になるなんてアホ過ぎる。

指先の魔法陣から弾丸が飛び出すと同時に、時の流れが元通りになつていく。ゆつくりと進んでいた弾丸は、俺の認識の中では徐々に速さを増し、次の瞬間には鎖をぶち壊した。もう『スナイプ』の詠唱は使えない。精神を^{マインド}阿呆みたいに消費するのでもう一度は無理だ。

鎖は擦れる音を立てながら、明後日の方向に飛んでいき、置いてあった木箱の山を粉碎して木くずが飛び散る。ベルはシルバーバックに駆け寄って腕を斬り付けた。

「でえやあつー！」

『リロード』っ！

残り合計4発。

斬り付けると同時にその横を走り抜けていくベル。そしてそれを追って顔をベルに向けたまま俺に背を向けるシルバーバック。良く見れば腕に取り付けられた拘束具が綺麗にぶった切られて空中をく

るくると飛んで行っている。

おいおい、マジかよ。ナイフであの金属ぶった切ったのか。かつこよすぎるだろ。

「ミリアっ！」

「任せなさいっ！ 『ファイア』っ！」

ベルが視線をシルバーバックの顔に向けたまま叫んでくる。シルバーバックの側頭部、拘束具を固定している金具とベルト部分に向かって射撃。

当たった弾丸はシルバーバックの側頭部の毛皮を少し抉り飛ばす。頭を弾丸で揺さぶられて一瞬だけ意識が飛んだのかふらつくシルバーバックにベルは一気に駆けこんでいく。

あんな巨大な化け物に、一歩も怯まずに突っ込んで行くのは凄い。俺なら間違いないと怯む。こうやって遠距離攻撃しか出来ない俺と違って、目と鼻の先とも言える距離まで突っ込んでナイフで斬り付けるベルはやっぱすごい。

「だあっ！」

近づき、瞬時に足を斬り付けて離れようとするベル。だがシルバーバックも馬鹿では無い。右腕の鎖は壊れて使えないと解ると、左手の鎖をベルめがけて振るった。

位置が悪い。ここからじゃあの鎖を狙えない。

ベルの体が鎖に巻き付かれ、そのまま真上に振り抜かれる。そのまま勢いをつけてベルを地面に叩き付ける積りなのだ。させねえっての。

「ベルッ！ 『ファイア』ッ！ 『リロード』ッ！」

ベルの足を引っ掛けた鎖をライフル・マジックでぶち壊す。ベルはそのまま真上に投げ出されてしまう。あのままだとまずいっ！

空中に投げ出されたベルは、ダイダロス通りのそこらにあるのと同じ洗濯物を乾かすのに使っているらしい、今も洗濯物が無造作に干されたロープを掴み、まるでスリングショットによって打ち出される玉の如くロープを軋ませて今にも打ち出されそうになっている。

シルバーバックはベルに釘付けになっており、両手を上にあげベル

が下りてくるのを今か今かと待ちかまえている。馬鹿猿め、よそ見とは良い度胸じゃねえか。目の前に美少女が居んだから、猿らしく女の尻でも見てろつての。

『ファイア』ッ！』

スリングショットに打ち出された玉の様に、想像以上の速度で急降下攻撃を繰り出すベル。受け止めようとしたシルバーバックは肩に弾丸を撃ち込まれてバランスを崩した。頭にぶち込む積りだったがそうとうきてる。

ベルは丁度シルバーバックの手と手の間をすり抜けてそのままシルバーバックが胴体に身に着けていたプレートアーマーの様になっていた拘束具をぶった切った。

結構な厚みのあるソレを、まるでバターか何かの様に斬り裂いて着地したベル。俺とベルの視線が交差して思わず笑みを浮かべた。ベルも俺の方を見て笑みを浮かべる。

勝てるぞ。

「ベル、次が最後の弾丸よ」

「うん、わかった。次で決めよう」

返事と共にベルが駆け出し、次の瞬間にはベルが居た空間にシルバーバックの拳は振り下された。

まだだ、まだ撃つな。

ベルが振るわれる拳を回避する。砕けた石畳の破片が飛び散り、土埃が視界を遮る。

ベルの合図を待て。さつき頭を狙った癖に肩にブチ当てると言う間抜けを晒して冷や汗をかく事になった。焦るな俺。

ベルの姿が土埃の中に見え隠れし、シルバーバックがちらりと此方を見た瞬間にベルはシルバーバックの腕を斬り裂いて視線を自身に向けさせる。

落ち着け。ベルの動きをよく見ろ。何処にぶち込めば効果的だ？

頭？ 頭蓋骨をぶち抜ける威力があるなら側頭部を撃った時に倒せてるはずだ。だが怯ませる事はできる。しかし当てるのは難しい。

ベルが相手の腕の下をすり抜けて此方に戻ってくる。

シルバーバックを見上げれば、側頭部には毛皮を抉る傷、肩には銃創、腕には幾筋もの切り傷。満身創痍だ。

対するベルは鎧を身に纏っておらず、顔は腫れぼつていて、肩で息をしている。

俺も精神疲労マインドダウン一步手前。『スナイプ』が無茶過ぎたのだろう。他はシールドマジックで防いでいたとは言え何度もぶつ飛ばされて膝ががくがくしてる。

笑えるぐらい強いモンスターだ。だが——ミノタウロスはこんなもんじゃないんだろ？

なんとってこいつは『上層』のモンスターだ。ミノタウロスは『中層』のモンスター。

それにベルが目指しているのは第一級冒険者の【剣姫】だ。ミノタウロスですら霞んでしまうぐらいの頂に位置する冒険者を目指してる。

なら、こんな霞む所か消えてなくなっちまうぐらいのモンスターに苦戦してる場合じゃねえ。

「ミリア、任せたよ」

「ベル、任せられたわ」

なんとなくのやり取り。後ろのヘステイア様も拳を振り上げて叫ぶ。

「君達ならいけるよっ！」

ヘステイア様の声援に押され、ベルが一気に駆けだしていく、俺は意識を集中して右手を前に突き出す。指先銃口をしっかりとシルバーバックに向け、ベルの軌跡を読む。

拳を振り上げたシルバーバック。おいおい、頭は悪く無い様だが、学習能力がちよいと足りなかったみたいだな。振り上げた左腕、その肘の部分に弾丸をプレゼントだ。素敵な美少女からの贈り物、喜んで受け取れよ糞猿。冥土の土産って奴だ。

「『ファイア』ッ！」

放たれた弾丸が、振り下されるべく筋肉を隆起させた左腕の弱い部分、関節に突き刺さり動きを阻害する。腕が急に動かなくなった事で

驚いたのか、それとも痛みで意識が逸れたのかシルバーバックの動きが完全に止まる。

あんな拳を振り上げた化物に、恐れる事無く一直線に突っ込んだベル。一気に助走をつけ、ナイフを両手で握り締めて突っ込んでいく。その後ろ姿に向かって、俺とヘステイア様は叫んだ。

「いつけえええええええっ!!」

「うおおおおおっ!!」

ベルのナイフがシルバーバックの胸を穿つ。ベルはそのまま身を捻ってシルバーバックの胸に横一閃の傷を刻み込んで飛び退った。

目を見開き、動きを止めたシルバーバック。

ナイフを片手にそのシルバーバックを睨むベル。

そして、音を立ててシルバーバックが倒れ伏し、土埃が舞い上がった。

土埃がはれていくさ中、シルバーバックの姿が灰になって消え、魔石の転がる音が響いた。

「や……「やったあああつ!」

ベルの言葉を遮る様に、ヘステイア様が両手を振り上げて歓喜の声を上げる。俺も声を上げようと思ったが疲れ果てて無理だ。マジ疲れたよ……。

おお、ダイダロス通りの住人達も隠れていたのかそこから出てきて拍手喝采って奴だ。驚いた表情のまま呆然と立つベル君。ほら、英雄っぽくナイフを振り上げてキメポーズでも……まあ、ベルらしくて良いか。

「ミリア君、ほら行くよ」

隠れていた場所から飛び出してきたヘステイア様が俺の腕を掴んでベルの方へ引き摺って行く。

「やったよベル君っ! おおっ」

「っ!」

腕を掴んでいたヘステイア様が躓いてベルの胸に飛び込む。後序に腕を掴まれていた俺もベルの方へ投げ出された。

「おお、大丈夫?」

「ええ、なんか。ベルの方は？」

「うん、ありがと」

にへらと笑うベル君。なんか英雄とは違う感じだな。

「やったよベル君、ミリア君！ 君達なら出来るって信じてたよっ！」
嬉しそうにぴよんぴよんしてるへステイア様。まさか本当に出来るとは……いや、まあ殆どベルの活躍な訳だけど。あんなおっそろしいモンスターに突っ込んでいく勇氣は俺には無いわ。やっぱベルはすげえな。

「二人とも……よく……頑張ってる……」

ふと、二人揃って間抜け面でへステイア様を眺める。

地面に倒れて動かなくなっただけのへステイア様を。

あはは……ついさっきまで元気だったよね？ なんで倒れてんの……ねえ、ちよつと、これハッピーエンドって奴じゃねえの？ 最期の最後でなんでたおれて——

「キュイキュイ」

……え？ 寝てるだけ？ 寝不足っぽいから寝かせてあげようって？

「神様っ！ しっかりしてください神様っ！」

「あー……ベル」

「ミリアっ！ 神様がつっ！」

涙を流すベル君。ううん、俺もキュイに教えて貰わなかったらこうなってたしなあ。

「ベル、落ち着いて」

「でもっ！ 神様がつっ！」

「寝てるだけみたいよ」

「え？」

ぽかーんと、鳩が豆鉄砲くらったみたいな顔のベル君。誰だっけそうなるだろう。俺だっけそうなる。

全てが上手くいったと思っただけの悲劇が、まさか喜劇であろうとは。

「神様……っ？」

ベル君が優しくヘステイア様の髪を撫でれば、ヘステイア様の口元が緩む。凄く嬉しそうだな。

「そっか……今日は色々あったから」

漸く納得したのかヘステイア様と同じ様に口元をゆるませるベル君。ああ、そうだ、これだけは伝えておかないとな。

「ベル」

「何？」

「今日の貴方、とってもかっこよかったわ」

世辞でもなんでもない。例え援護射撃して貰えたと解つても、俺はあのシルババックに突撃する勇氣はない。其れに対してベルは俺を信じて足を止める事無く突撃をかました。これを格好良いと言わずして何を格好良いと言えばいいんだよ。

「うん、ありがとう。ミアアのおかげだよ」

その笑顔は反則じゃね？

第三十九話

怪物祭における様々なトラブルは一件落着した……という訳でも無い。と言うかその後の処理にかなり手間取ったと言える。

モンスターが逃げ出すという大失態を犯したガネーシャ・ファミリアは名声をかなり落とし、それ所か複数のファミリアへと助力を請うた事でかなりの借りを作ってしまったらしい。

他にも様々な問題があつたが、俺にとつて最大の問題となつたのは犯人の候補として俺の名前が挙がった事である。と言うか単純な話、あの場で最も怪しいのが誰かと言えば間違いない俺だろう。俺だつてそう思う、誰だつてそう思う。

考えても見て欲しい。

部外者（一応関係者）の少女。素性は不明、モンスターを連れてる、何故か血塗れだったのに無傷。本人は何も覚えてないと主張している。怪し過ぎて役満過ぎる。

ただ、この件は割とあつさり片付いた。と言うのも神ガネーシャの鶴の一声とも言うべき発言であつざりと許された……いや、違うな、許されたと言うかあれは庇われたのか？

『もしミリア・ノースリスが犯人であると言うのなら。彼女を招き入れた俺、ガネーシャこそが罰せられるべきである。故に彼女を責めるのはやめてもらおう』

やだ、ガネーシャ様かつこいい……。素敵、抱いてっ！ つて言いたいぐらい男らしく胸を張つて俺を庇つてくれたらしい（ヘステイア談）

他にもロキとかも俺を庇ってくれたらしい。いや、ロキは何か違うっぽかつたが……。話を逸らすのを手伝つた感じ？

ロキ曰く『せつかくフィリア祭用に用意したつたドレス着てくれへんとかウチの事嫌いなんか？ 傷付いたわーめっちゃ傷付いたわー。こりやメイド服着てご奉仕してもらわな癒えん傷やわ』との事。

何のこつちやつて話だが、これなあ……。ゴスロリ風ドレスの話なんだよ。

なんでも俺と最初に出会った時（俺がミノタウロスに襲われてロキ・ファミリアに保護された時）にキューイを見て一瞬で『ガネーシャ・ファミリア関係者』ではないかと疑い、ガネーシャ・ファミリアの団員がミリアについて探ってきたので違うと判断。そして敵意を抱かないキューイを見てガネーシャなら近々行われる怪物祭モンスターファイリアでゲストとして何らかの催しに参加させるだろうと判断。

ボロボロのローブでは人前に出せないだろうからなんかの衣装が渡されるだろうし、だったら自分が用意した衣装着せてやろうと意気込んで衣装を用意してたと……。

んで、肝心のファイリア祭の際にはなんとロキが用意した衣装じゃなくてガネーシャ・ファミリアが用意した地味な衣装での登場。これにはロキも地団太を踏んだらしい。

つか、ロキが頭良すぎて怖いんだけど、何？ ミノタウロスに襲われて保護された日に既にガネーシャ・ファミリアに協力を要請されて怪物祭モンスターファイリアに参加する事を予測してゴスロリドレスを用意してくるとかもうね、なんか努力と言うか才能と言うか、能力をあらぬ方向にぶっ飛ぶ勢いで振り切った様な感じ。

お前努力の方向性間違ってるんだろ、最終目的が俺にロキゴスロリ好みの衣装衣装着て貰うとか、神様って一体……。

その件は置いておく。とりあえず今度ロキ・ファミリアを訪ねる時はそのゴスロリ衣装に袖を通して行く事にしたが、とりあえず置いておく。できればあんなの着たく無いが今回の件でかなり助けられたし。

ロキってさ、なんかこう、なんつーの？ 凄く頭の良いセクハラ親父って言えば良いの？

まあいい。そのおかげもあって俺は普通に外出可能に……と思っただが怪物祭モンスターファイリアが終わって数日間は何だか酷い目にあつた。キューイの存在が観衆に知れ渡ったため、数多の人間が俺を探し始めたのだ。

シルバーバックを倒したその日はぶっ倒れたヘスティア様と俺、ベルは偶然通りかかったシルさんに連れられて豊穰の女主人で世話になつたんだが、俺を勧誘しようとした日には人が溢れかえつたら

い。

ちなみにミアさんの鶴の一声『酒飲んで飯食う場所だ、余計な事するなら出て行きな』によって全員蹴散らされたっぽい。

んで、キューイを普通に連れ歩く権利は手に入れたが、連れ歩くと勧誘がマジ酷い。是非ともウチにとか、かわいいがるよとか、美味しいお菓子あるよーって……俺は子供かつ！ 今時の子供でもお菓子あげるから着いておいでなんて言われてついていくやつ居ねえよっ！

そんなこんなで結局俺はキューイを隠して生活する羽目に……それ所か俺の顔も知れ渡ったっぽいので顔を隠しての生活になっちゃまったよ……。

其の為衣装を変えた。魔女っ娘衣装である。暗褐色のつばの広い魔女っぽいとんがり帽子に同色のだぼっとしたローブ。上下共に魔女っぽい衣装になった。キューイは相変わらず服の中。連れ歩くと勧誘面倒だしね……。

ただ、運が良いのか俺はどうやらガネーシャ・ファミリアの団員だと思われているらしく、ヘステイア・ファミリアの本拠まで人が訪ねて来た事は無い。ただしガネーシャ・ファミリア……ガネーシャ・ファミリアの本拠殿の入口にはアホみたいな人ばかりができているらしい。なんか考えたくない絵づらである。

んで、ガネーシャ・ファミリアからかなりの謝礼金も頂いた。いや、マジで迷惑かけた気がするんだけど良いのかなって思ったんだが、俺が協力したおかげか死傷者ゼロだったらしい。俺の協力に何の関係があるのかって言うとモンスターの早期発見、捕捉によってガネーシャ・ファミリアの団員が手早く駆けつける事に成功したおかげとかどうか。

貰えるもんは貰つとけ精神で貰った金は……うん、まあ、教会の改修費にしたかったんだよね。無理だけど。

何がって……ヘステイア様が俺とベルに用意した武装が問題だったんだよね。ベル君のヘステイアナイフと俺の竜鱗の朱手甲ね、ヘステイア様がどうやって用意したと思う？

簡単に言うと神へファイストスに直談判して作って貰ったらしい。神へファイストスって……神々の鍛冶師じゃねえか!?　と言うかへファイストスブランドなんて言葉がある程のオラリオ最大の鍛冶系ファミリアの主神に直接作って貰った武装らしい。

え？　神が作った武装？　神器かな？　冗談抜きで。

なんで眷属に任せなかったのかと言えば『私的な件を子供に任せると出来ないでしょ』だそう。へステイア様が親友^神と云っていたが、よもや鍛冶神の手を借りるとは……。

まあ、それが大問題な訳で……製作費いくらだと思おう？

神の手によって作られた武装、値段なんてつけられんדר?　ちなみに、オラリオで平均的な一軒家のお値段は300万ヴァリス程度。平均的な一般家庭の収入が一ヶ月で10万ヴァリス程度、冒険者は強さによりけりだけど第一級冒険者が一回の換金で得られる金額の平均はざっと200万ヴァリス前後らしい。

んで、へステイアナイフと竜鱗の朱手甲のお値段は……二つ合わせて5億ヴァリスだそうです。

内訳としてはへステイアナイフ3億ヴァリス、竜鱗の朱手甲が2億ヴァリスだそう。どっからそのお金が出たかって？　借金だよ……。

へステイア様曰く『僕の借金だから君達は気にしなくて良い。何せ時間なら無限にあるからね、気長に返すよ』だそう。だが主神が頑張ってるのに俺が何もしないのもどうかと思うので全力で返済に協力する事になった。

要するに今回のガネーシャファミリアの謝礼金の殆どが借金の返済に充てられたわけだ。ちなみに金額は80万ヴァリスとそこそこ……雀の涙過ぎて笑えない。

つと、話は変わるが、ベル君の方が3億ヴァリス、俺の方が2億ヴァリスと差額が大きい訳だが……なんか桁が大き過ぎて感覚が壊れそうだが俺の方が金額が安い分、軽んじられているのではないかと思っただが、違うらしい。

どうもへステイアナイフの方は素材費用も全部出してもらったの

に対し、俺の竜鱗の朱手甲はキューイの素材、つまり素材持込みでの制作扱いなので比較的ベル君のヘステイアナイフより安値で済んだらしい。

一安心である……借金が4億9900万あるのから目を逸らす他無い訳だが。

ベル君には伝えてない。と言うか俺がヘステイア様に問い詰めた結果発覚したのであつてベル君には黙っていてほしい……まあ、仕方ないとは言えなあ……ヘステイア様がバイトを増やしたので倒れないか心配だ。

モンスターファイリア

怪物 祭から早一週間、俺とベルは上がったステイタスを誇りつつ七階層まで足を運んで狩りをしていた。キラアアントとニードルラビットと言うモンスターが出るが、キラアアントは殺し損ねるとヤバく、ニードルラビットは素早くて面倒と割と難しい所だ。新米殺しと言う名は伊達ではない。とは言え安定して倒せるのでそう心配はいらないんだが……目の前で鬼の形相を浮かべるエイナさんにはその言い訳は通じ無さそう。

「なくなくかくいくそくうくつ!?!」

響き渡るエイナさんの声に周囲の冒険者の視線は釘付け。いやあ人気受付嬢は貴女でびったりですよエイナさん……あ、ごめん冗談、マジで目が据わってる。めっちゃ怒ってますねこれ。

「君達は！ この前の五階層で死にかけたばつかなのになんで七階層まで下りてるの！ うかつにも程があるよ」

うひい……いや、だつてね？ ギルド推奨ダンジョン攻略情報によれば七階層はステイタスEがあれば十分つて……俺の現在のステイタスは以下の通り。

力：I54

耐久：I68

器用：G267

敏捷：H125

魔力：E440

これはドヤ顔しても許されますね。ゆるされるよね？

「でも僕、あれから結構成長して……ステイタスがいくつつかEまで上がったんですよ」

……ドヤ顔したかったよ。ベル君の方はね、力と耐久の二つがEなんだ……俺なんて魔力がEでそれ以外が……察してくれ。しかもベル君は敏捷が……Dである。もう一度言おう。Dである。

なにそれ凄すぎるだろうって感じ……出遅れた感あるけどさ、もつと、こうさ……なんかないのか。

「はあく？ Eい？ そんな訳ないでしょ」

「本当ですって、何ならステイタス見せますよ」

おい、ベル君、いくらなんでもステイタス見せるのはやり過ぎなんじゃ……。

「ふうん、そんなに自信があるんだ。じゃあ奥の個室に行きましょう」

エイナさんと個室……巨乳ハーフェルフと個室で二人きり、何も無い筈もなく……って違う。

「待ってください。いくらギルド職員とはいえ誰かにステイタスを教えるのはダメですよベル」

「でも見て貰った方が早いよ？」

「……確かに、ステイタスを見るのは不味いわね……でも……」

ぶつぶつと悩み始めるエイナさん。ベル君はもうちつと警戒心持つべきだと思うよ？ エイナさん良い人だけどギルド職員だし……、大丈夫だとは思うけど一応ね？

「……よし、だったらこうしましょう」

うん？

「もし君のステイタスを私が誰かに話したら、私は君の奴隷になつてあげる」

……はい？

「え？ ええええええええつ!? ちよつ!? 何言ってるんですかエイナさんっ!?!」

えええええええええつ!? 奴隷っ!? エイナさんが奴隷っ!? 巨乳ハーフェルフのお姉さんが!? 何それおいしそう。

「ステイタスを見せて貰うんだからそれぐらいしないと」

「でも……」

「良いベル君、ステイタスっていうのはその人の全てを映し出しているのよ?」

ステイタスとは、その人が今まで歩んだ軌跡、得手、不得手を示すモノである。ステイタスがばれるというのは冒険者として死んだも同然。つまりステイタスを知るというのは相手の全てを掌握したと言っても過言では無い。

すべてに対して中立を示すギルド職員とはいえ、個人のステイタスを知る程じゃないし、知って良い訳でも無い。無論、悪用なんて考えていないが相手の人生の全てを知る訳だから自分も人生の全てを捧げる覚悟はしていると。

エイナさんが男らし過ぎて惚れそう。

「じゃあ奥の個室に行きましょう」

そして個室って単語はエロいな。

そう言えばステイタスって神聖文字ヒエログリフで書かれてるんだけど、読めるのかね?

「うそ……力と耐久がE……敏捷が……Dいつ!」

え? 読めるの? ギルド職員凄す……まっつて、スキルも読めるなら不味くない? ヤバイ、忘れてたけどベル君にスキルの存在を知らせるのは不味いよっ!」

「ベル君の言う通りこの短期間でステイタスが急成長している……」

どうする……エイナさんのおっぱいを後ろから揉んで気を逸らすか……?」

「私には読めない所もあるけど……アビリティは本物だし……」

……スキルは読めなかった感じか? だったら良いか……今後はベル君がステイタスを誰かに開示しそうになったら全力で止めよ

……。心臓に悪いわ。

「じゃあ僕達、これから七階層で探索を続けても大丈夫ですよね」

「確かにこのステイタスなら七階層進出を許可しない訳には……」

「やったねベル君、エイナさんに認められたよ……にしては何か悩んでるっぽいけど。」

「そうなる問題は……」

「うん？ ベルの胸元をじっと見て……防具を見てる？ ハーフプレートメール、ベルの胸元の其れは一度シルバーバックに凹まされたのを強引にブツ叩いて直したベコベコになった物を使っている。不格好だけど金が無いからね、シヨウガナイネ……マジごめん。早くベル君に防具買ってあげたいんだけど、防具糞高いんだよ……20万ヴアリスとか平然とするし、何処で買えばいいんだか。」

「二人とも明日は予定空いてるかな？」

「明日ですか？」

「明日？」

「明日も変わらずダンジョンに行く予定はあるが、他に何か優先すべき事があるならそっちに行く感じだな。なんだろう？」

「もしよかったら明日、防具を買いにいかない？」

「え？ 防具ですか？ あんまりお金ないんですけど……」

「出せるとして予算はいくらぐらい？」

「一万が限界だろうなあ。他は全額ヘステイア様に捧げてるし。ベル君の個人のお小遣いは確かそんなにない。俺の方は別に良いかな。竜鱗の朱手甲と魔女っ娘セットがあるし。」

「それぐらいあれば良いの見つかるよ」

「え？ マジで？ だって防具って高いよね？」

「それにミリアちゃんはサブウエポンを持った方が良いよ」

「……サブウエポン？」

「拳銃？ そっちはサイドアームか。」

「そう、短剣とか……後は細剣みたいな。長杖だけだと接近された時、心もとないでしょ？」

「ほー……。接近された時点でアウトだと思うがねえ。」

「それで、二人ともどう？」

「うくん……エイナさんが言うなら行ってもいいかもしれませんが」

「そうですね、一応ベルの防具はどうにかしないととは思ってましたし」

「なんか普通のそこらの防具屋行くとアホみたいの高いんだけど……エイナさんギルド職員だし安価で防具を売ってくれる伝手でもあるんかね？」

第四十話

街の中央にそびえたつ神々の立てた建造物。白亜の塔、摩天楼施設バベル。そのアホみたいな高さのそれを眺めつつ噴水の縁に腰かけてぼんやりしている。今日は平和だなあ、数日前の怪物祭の騒ぎが嘘みたいだ。

それにしてもベルは随分とそわそわしてるな。エイナさんが来るのを今か今かと待ちわびてる。まだ30分ぐらい時間あるからまだぞー。もつと気楽に肩の力を抜いてだね。

エイナさんとデートだよったあー。と素直に喜べばいいとは思うんだが、今の俺は幼女だしなあ。

女性とのデートならおしやれしないと……と言いたいが今の俺の恰好は魔女コス姿に金属製の長杖、これは魔法使い以外にありえませぬ。なおコスプレと思われる模様。違いねえ。顔を見せると騒ぎになるからね、シヨウガナイネ。

しかし、ベルは朝から張り切るねえ。ヘステイア様はヘファイストス・フアミリアのバイトへ早々と出て行ったからしやーないが、俺らも早めに出てきて集合場所で待機している所だ。

早めに来て待つのは男の甲斐性って奴だからね……なお今の俺は男じゃない模様。悲しいなあ。

まあ、こうやってぼんやりとなんかを眺めてるのは悪く無い。横のベルの落着きの無さは少し気になるがまあ、綺麗な女の人と買い物に出かけるからね、多少はね。

「おーい、ベル君、ミリアちゃん」

ふうむ。エイナさんの声だ。1時間ぐらい早めに来てたが、時計をちら見すると30分前か、かなり早いな。

「あ、エイナさ……」

ううん？ ベルの動きが止まった。なんだ？

「おはよう二人とも」

不思議に思っただけの視線を追うと、超可愛い女の子が其処に居た。いや、スーツの上からでもわかってたけどエイナさん胸でけえ

な。ヘステイア様ほどじゃないけど。

「随分来るのが早いよね……もしかして私との買い物、そんなに楽しみだった？」

悪戯っぽい笑みを浮かべてベルによるエイナさん。受付嬢として笑みを浮かべてる時よりも活き活きとした女の子らしい笑みにベルがタジタジになつてら。

「えっ、ああ……いや……僕は……」

照れたように頬を染めるベル。ヘステイア様が早朝にバイトに出かけたから俺らも早めに此処に来てただけなんて普通に返してたら減点だったな。ここは楽しみにしてましたって言いながら肩を抱くぐらい……ベルには難しいだろう。

「おはようございますエイナさん」

「おはよミリアちゃん。私も実は楽しみにしてたんだよね。ベル君の防具なんだけどき……ベル君？」

視線を逸らして頬を赤らめて緊張した様に指を絡ませて無意味に動かしてるベル君。確かに今のエイナさんは綺麗だけど緊張し過ぎじゃ……ほら、受付で笑顔向けてくれるエイナさんも綺麗じゃん？ まあ、スーツ姿で定型文な挨拶をする受付嬢と、普通にそこらを歩いていそうな可愛い女の子じゃ緊張具合は違うか。

「ねえベル君、私のこの恰好を見て何か言う事は無い？」

うわあ、エイナさんからかう気満々じゃないですか。まあ、ベルは女性耐性つけるべきだし見守つとくか。俺はカテゴライズ的に女性と言うか幼女……妹枠だからね。しゃーないね。

エイナさん良いぞもつとやれ。

「えっ、ああ、その、すっごく、いつもより……若々しく見えます」

おい、若々しいって普段の恰好が歳食ってる様に見えるって言ってる様なもんだぞ、それは女性相手に失礼だろ。もつと言いつてのがある訳なんだが……難しいなら普通に綺麗ですとか可愛いですで良いんだよ其処は……。

「こら、私はまだ十九だぞー」

ベルの頭を抱え込んで悪戯っぽく笑みを浮かべるエイナさん。あ、

おっぱい当たってるように見えるけど……いいなあ、羨ましいなあ。やられてるベルはそれ所じや無さそうなぐらい真っ赤だけど。凄くトマトだよ。古傷を抉るのはやめて差し上げろ。

多分そこらの冒険者の女性だったらキレて張り手が飛んできた台詞を、割と余裕で受け流す辺り手馴れてるなあ。と言うかエイナさん二十歳前なのか、意外と言うかなんというか。

「ほらほらー謝れー」

楽しげにじゃれあう二人。エイナさんの胸でかいなあ。いいなあ……。

「ミリアちゃんはどうか？」

「ふん？ ああ、普段はとても落ち着いた雰囲気で大人数びた印象を受けますけど、今は違って女の子らしい雰囲気が出ていて可愛らしいと思いますよ」

「ありがと、ほらベル君、褒める時はミリアちゃんみたいに言えば良いのよ」

解放されたベルが疲れたように息を零して頷いている。

エイナさんに並んで三人である。エイナさんが俺の手を引いて俺がベルと手をつなぐ。ううん……宇宙人になった気分。いや、傍から見ると子供連れの親子に……見えないな。ベルが若すぎるし。エイナさんなら、まあ……不思議じゃないかな。ハーフエルフだし。失礼だから口にしないけど。

「それで、今日は何処に行くんですか？」

「ふふっ……それはね、ほらあそこ」

エイナさんの指し示す先、それは朝っぱらからずっと眺めて正直見飽き始めたバベルであった。

「バベル？」

「そう、ヘファイストス・ファミリアのお店だよ」

うえ？ いやいや、ヘファイストス・ファミリアのお店って、ブランド店だしいつもベルが眺めてた刀剣類ってどれもこれも数百万か

ら数千万の高級品ばつかだったお店だぞ？ そんなところ行ってどうするんだ……？

「え？ ……ええええええええええ!!」

足を止めて驚きの声を上げるベル。周囲が何事かと一瞬足を止めてベルを見るが駆け出しの少年が何かに驚いただけかと直ぐに足を進める。それをちら見してからベルの腕をちよんちよんと引く。後序にエイナさんの手も引いておく。

「エイナさん、へファイストス・ファミリアって上級武具店ですよね？」

私達の手持ちじや全く足りないんですけど」

「そうですよー。僕達へファイストス・ファミリアで買い物できる大金持ってないですよっ!」

俺らの反応に対しエイナさんは意味深な笑みを浮かべてベルの腕と俺の手を掴んで歩き出す。

「いいから行くよー。男の子なんだからぐずぐず言わない」

「私女の子ですよ」

あ、なんか自分の心にナイフ突き刺した気がする。胸が痛い。

「エイナさん……」

「いいからいいから」

ニコニコ笑顔で手を引くエイナさん。俺の歩幅に合わせて手を引いてくれてるおかげかコケはしないが、ベルの方が完全にビビってる。本当に大丈夫なのか……？ エイナさんだし大丈夫だと思うけど。

バベルの内部にはいろんな冒険者向け施設が入っている。その中には鍛冶系ファミリアのへファイストス・ファミリアの店舗も含まれているらしい。3階層まるまるへファイストス・ファミリアが入ってるとか凄すぎ……。

バベルの内部は意外や意外、エレベーター……昇降機が存在した。とは言え古い時代の昇降機の様な古めかしいタイプの格子戸だったのが少し怖い。ベルは感心しきりであった。魔石を使った昇降機ら

しい。なんつーかハイテクだな。

扉が開いてエイナさんが先に下り、ベルが続く。もうね、昇降機の中から見ても解る真っ赤なカーペットの敷かれた高級そうな空間に気圧されてるベルがへっぴり腰気味に進むのがおかしくてね……。俺の方は魔石とかいう摩訶不思議な技術で動いてる昇降機にビビってたけど。

ベルが下りたので最後にそのフロアに下りてみれば……。まあ、なんだ。パツと見で見えたのは高級そうな武器が陳列された棚。ちらつと見た限りではプレートメイル、其れもかなりごてごてした装飾のなされた其れとか、どれもこれも装飾華美な武器ばかり。

胴鎧部分だけで……。2240万、頭が2000万で……。フルセットで8500万ぐらいか。ははっワロス。

ラウンドシールドが1600万、指につける装飾指輪が650万。高いよ、超高いよ……。

どれも目ん玉飛び出そうな位お高いんですがこれは……。本当に大丈夫？

「知りませんでした……。バベルにヘファイストス・ファミリアのお店があるなんて……」

まあ、知らんわな。俺もベルも、もつと下の階層の医療区画を少し使っただけだし。上の階層にわざわざ足を運ぶ理由もない。こんな階層に来るのは本当に金を稼げる一級冒険者とかぐらいだろ。

「本当の目的地は一つ上の階層なんだけど、ここもヘファイストス・ファミリアのお店だから、ちよつと寄っていいっか」

良い笑顔で先導するエイナさんに続いてベルも歩き出す。明らかに場違いな恰好の駆け出し姿を見て失笑してる奴等も居るが無視無視……。

バスタードソード3000万ヴァリス、片刃の……。シヤムシールか？ 剣に詳しくは無いのでわからんが片刃の曲剣が2300万ヴァリス。お、ベルが使ってるのと同タイプの短剣が……。1800万ヴァリスか。安いな、ベルの腰にあるヘステイアナイフ3億ヴァリスが桁違い過ぎて笑えるよ。

俺の左腕の竜鱗の朱手甲も二億ヴァリスと……よく考えりやここに有る装備品よりよっぽど良いもん装備してんだよな俺とベル……いや、借金こさえて手に入れたもんだしななんとも……借金で思い出した。

ヘステイア様ってここらでバイトしてね？ ……まあ無いか。ヘファイストス・ファミリアの店舗っていろんな所にあるし、そっちに居る可能性もある。偶然出会うなんて事は早々無いだろ。

「うええっ!? 3000万ヴァリスっ!?」

驚きの余りショーケースに手をつけて目を剥いてるベル。君、その剣10本分の短剣を腰に下げてるよ……。

「いらっしやいませー」

ベルの横、ショーケースの横の扉が開いて威勢の良い、どこか聞き覚えのある店員の声が聞こえて其方を向く。まさかね。

「今日は何をお探してでしょうかお客様」

「……へ？」

「……え？」

……ええ、凄く偶然だなあ。噂をすれば……いや、口にはしてないけど噂をすればなんとやら。ヘステイア様が可愛いしいへファイストス・ファミリアの売り子の恰好をして店員用控室から出て来たではないか。

「ベル君っ!?」「神様っ!?」

「なにしてるんですかこんな所で、近頃やけに忙しそうにしてると思ったら、バイトのかけもち!?!」

あー……俺らの為の借金を返済中なんだよなあ。いや、俺らの金も少しずつ納めて返す積りだが。

「エイナさん、すいません。私達の主神のヘステイア様です」

「あら、そうなの。仲良さそうね」

にこやかな笑みを浮かべるエイナさん。いや、仲が良いのはそうなんだけどさ……店内で騒がしくするのはどうなんだろうね。

「べべべっベル君こそどうして此処に……」

どもってるどもってる。ヘステイア様ってその場で場当たりのな

誤魔化し方下手過ぎじゃない？ 逆に誤魔化すと最初から決めてる場合は綺麗に誤魔化しきる辺り多分突発的な出来事に弱そう。

「私も居ますよへステイア様」

「ミリア君までっ!? どうしてここに？ ……と言うか誰だいそのハーフエルフ君は」

おお、エイナさんに噛みつきに行っただぞ。悪い神様じゃないんだけどベルに悪い虫がつかないか常々心配してるからね、しようがないね……。

「あ、ああ、そうだ神様。この人が」

「初めまして、神へステイア。ギルド所属のエイナ・チュールです。ベル・クラネル氏、ミリア・ノースリス氏の迷宮アドバイザーを務めさせてもらっています」

さっきまでの女の子の様な雰囲気が消え失せて一瞬で営業モードへ切り替わる辺り流石だなあ。

「へえ、君が」

……へステイア様、ちよつと女の子がベルに近づいたからって半眼で睨むのはどうかと……。

「時にアドバイザー君」

エイナさんにずっと近づいて耳打ちし始めるへステイア様、とりあえず俺はベルが聞き耳立てない様に傍に行つとくか。

「ベル、へステイア様が此処で働いてる事知ってました？」

「ううん、全然知らなかったよ。ミリアは？」

ちなみに俺は知っていた。心苦しいがへステイア様きつての頼みだったから……ごめんよベル。

「いえ、最近忙しそうなので何かあるんだろうなとは思ってましたけど……」

へステイア様がどんなやり取りをしてるのか気になるが。

「は？ ええっと、公私の区別はつけていますが……」

エイナさんが若干引いてるよ。へステイア様え……。

「ミリア君」

ちよいちよいと手招きをするへステイア様。なんですかね。

「彼女、ベル君にちよっかいかけてないだろうね？」

「そうですね、一般的な掛け合いは行っていますけど、特にアタックはしてきていないですね」

からかったりはしてきてるけど、ベルってからかい甲斐があるからなあ。女性受けするって言うの？　こう、見ると胸がキュンってなる様な愛らしさがある。でもやる時はやるかっこよさもあるんだよな。

第四十一話

昇降機に乗りながら恥ずかしげに顔を伏せるベルと、少し上ずった声でフォローするエイナさんの姿があった。俺？ 慣れたと言うかなんというか。ヘステイア様らしい一面だったと思う訳だが。

「変わった神様……だね」

「……………」

ヘステイア様は途中でヘファイストス・ファミリアの人に呼び付けられてそちらの方の対応に向かったので、当初の目的通り一つ上の階層へと移動しているのだ。

カシヤーンと言う特徴的な到着を知らせる音が響き、扉が開く。下の階層と違い開いた扉の向うには真つ赤なカーペットでは無く、剥き出しの石レンガが広がっている。光量が少な目なのか下の階層より少し暗い雰囲気なのだが、活発な人の声が響いている。

「こういった武器が欲しいんだが」「この剣ならなんだって切れますよ」

「この盾良いわね」「探してる武器はこれですか？」

探している武装に関する質問、売り込みに勤しむ声、嬉しそうに何かを見つけたらしい声、様々な声が雑多に聞こえ、下の階層とはまた違った喧騒を生み出している。

「はい、到着」

昇降機を下りて直ぐに気が付いた。壁が木材製で下の階層より安っぽい。高級武具店と言うよりこれは……。

壁に無造作にかけられた大剣や小剣、斧や盾。どれも下の階層で見た物より安っぽい雰囲気がある。質素と言えば良いのか。どちらかと言うと下の階層の武装は俺やベルには不相応って感じの力強さや鋭さを感じたが、この階層に展示されてる武装類はまさに俺達の手に届く様な感じがする。

「二人は、ヘファイストス・ファミリアみたいな高級ブランド、自分達には縁が無いもの。なんて思ってたでしょ？」

「ええ、まあ」

「そうですね……」

「実はそうでもないんだな」

得意げに、慣れたように足を踏み出したエイナさんに続いて歩き出す。

人が多いな。それも俺達と同じ様な駆け出しの恰好をした冒険者も居る。下の階層で場違い感の出ていた俺らもこの階層ではぴったりの雰囲気と言う奴だ。

「ほら、見てみて」

エイナさんの前の展示を覗き込んでみると、其処にはベルの扱うナイフと同型のナイフがあった。

値段は……1200ヴァリス。下の階層とは雲泥の差である。とは言えその分装飾は一切見られない。質実堅剛さが見て取れる。

他の剣も似た様な値段で、高くとも5000ヴァリス程度とかなり安い。下の階層では目ん玉飛び出るぐらゐの値段ばつかつたが……と言うか本当に安いな。ヘファイストス・ファミリアの店だよな？

「あれ……高くない？」

「ふふ、驚いた？」

悪戯っぽい笑みを浮かべたエイナさん曰く。

ヘファイストス・ファミリアには上級鍛冶師もちろん所属しているが、それ以上に下級鍛冶師、新米鍛冶師が数多所属している。

上級鍛冶師は当然の如く下の第一級、第二級武装を取り扱っているが、その鍛冶師の誰もが最初からそんな素晴らしい武装を作れるわけではない。

その上で、ヘファイストス・ファミリアと言うファミリアは鍛冶師の支援を行うファミリアではあるのだが、全てを補助している訳ではない。

ファミリア側が提供するのには神の恩恵と鍛冶場の二つのみ。後は定期的なファミリアの資金徴収があるのみ。

鍛冶師にとって何が一番難しいかと言えば鍛冶場を用意する事だが、鍛冶師一人一人に新米だろうが上級だろうが専用の鍛冶場を用意

する辺り、ヘファイストス・ファミリアの規模はやはりでかい。

それはさておき、鍛冶師と言うのは自分で自分の食い扶持を稼がなくてはならない。他にも鍛冶に必要な燃料、素材は実費で補う訳だが……。当然、新米鍛冶師は名が売れておらず武装が売れない。

作り出した武装は買い手が居なくては金にならず、かといって個人で作った武装類を抱えて街中で宣伝等するのは効率が悪いし時間の無駄だ。

ヘファイストス・ファミリアはその辺りも考慮してこの階層丸々貸し切って駆け出し鍛冶師用の売り場として活用し、新米鍛冶師が成長しやすい様に考慮しているらしい。

ヘステイア様の親友^神って話だったが、神ヘファイストスもまた良い神様なんだな。

「安くても売られて評価されないと誰も相手にしてくれない。だからこの階層では原価ギリギリで冒険者に自分の武器や防具を売り込む新米鍛冶師が多いのよ」

へえ。ギルド所属だからか知識豊富だな。

「中には掘り出し物もあつたりするのよ」

「掘り出し物?」

「そう、新米ながら下級鍛冶師顔負けの武装を作る鍛冶師も時々居てね。そう言った新米鍛冶師の作品が安く売りに出されている事もあ

るのよ」
なるほど、名が売れる前の才能有る鍛冶師の作品か。名が売れなきや上位の鍛冶師となる事も出来ないわけか。

「さ、行こう」

「はい」

エイナさんの後を着いていきながら剣の展示を見てみるが……ううん。どれもこれもでかいな。いや、俺が小さいだけか。

棚にかけられたショートソード、小ぶりで扱いやすいみたいなお説明書きがあるが、そのショートソードですら俺の手に余る大きさである。ぶつちやけ俺にとってはロングソード並。

これは俺がパルウムである弊害だろうか。

パルウムの冒険者は珍しいので、新米鍛冶師達は態々数の少ないパルウム向けの武装なんて作らない訳だ。そうなると俺が武器を求めるときはナイフ類か……もしくは特注で鍛冶師に直接依頼を出すしか無い訳だ。困ったな。

長杖については割とあつさり見つかったので何とも言えんが、サブウエポン用の刀剣を探すのに苦労しそうだ。

そうこう考えている間にも武器類の展示と防具類の展示の境界線になっていくらしき場所に到着した。

武装類を扱う場所には駆け出し冒険者が数多居たが、此方には全く人が居ない。まあ、防具類はそう買い替える物じゃないからな。壊れたら修理して使うのが一般的らしいし。

アホみたいな全身板金鎧が展示されてるが、値段は4800ヴァリス。とは言えドワーフ用なのかずんぐりむつくりみたいなの雰囲気がある。サイズが表示もしつかりあるが、こういったフルプレート系は大きさが合わないときつそうだな。

「わあ〜」

感動した様に声を漏らすベル、其れを見て笑みを浮かべるエイナさん。俺の方はどうにも俺の体軀に合う武装類が一切ない事に正直焦りを感じてる所である。

「僕、奥の方も見てきますね」

「ああベル君……もう」

興奮していたのかエイナさんと俺を置いて、ベルは奥の方を見に行ってしまった。まあしゃあなし。エイナさんは仕方ないなあみたいな笑みを浮かべて此方を見た。

「ミリアちゃんは どうする？ 武装類の展示に戻る？」

「そうですね、私の扱える刀剣類があるか不明ですが一応探してきました。エイナさんはベルをお願いして良いですか？」

「わかった。気を付けてね」

無意識か意識的か、エイナさんは俺の頭を撫でてからゆったりとした足取りでベルを追っていった。

さて、俺の方は武装の展示に戻りますかね。パルウム用の展示と

か無いだろうか。まあ、期待せずに行きますかね。

やはりと言うかなんというか。俺の手に収まるサイズの武装は殆ど無かった。

無い訳ではないがどれもこれも古臭いと言うか、刀身が薄らと曇っていたり、赤錆が出始めた物だったり、手入れが行き届いていないフロアの隅っこにほんの少しだけ存在した感じ。

樽に無造作に立て掛けられた剣を一本手に取ってみる。

刃渡りは40Cから50Cぐらい。真っ直ぐな刀身に片刃の刃。切っ先が欠け、刃の部分も無数の刃こぼれが見受けられる。柄の飾りらしき部分も押し折れて変な途切れ方をしているし。

なんつーかなあ。パルウムってここまで不利なのか。各種族専用武装みたいなのも数多見かけたがパルウム用だけは少ない。と言うかほぼない。

目の前の一つの樽に纏めて放り込まれてる辺り扱いの悪さは筋金入りと言うかなんというか……。

「はあ……」

溜息しか出てこん。こりや酷い。一般向け展示の所で短剣類でも漁りますかね。扱えるかは別としても持つといて損は無いだろ。いや、ギルド支給のナイフがまだあるしそれで良いか。最悪、ベルの方の資金へと回せばいいし。

そんな考えの元その場を離れようとして、棚の上に置いてある物に目が留まった。

「え？ ショットガン？」

下からでは良く見えん。えっと、ここらに踏み台みたいなもんはないのか。

俺の目に留まったのはダブルバレルショットガンの持ち手の部分の様な物。棚に置かれた木箱から柄だけが覗いている。一瞬それに目を奪われるが木製ではなく象牙製なのか色合いは全く違うし、そもそもここは刀剣を取り扱っている店だ。よもやショットガンなんて

展示されている訳がないだろう。

近くにあつた踏み台を運んできて棚の上の方……多分、普通に成人男性辺りなら手を伸ばせば届く場所なんだろうが、俺の手では届きよのない場所に展示されたそれを手に取ってみる。

湾曲した刀身、柄頭が小指側に湾曲しており、柄の部分だけ見るとショットガンの柄を彷彿とさせるククリナイフの様な物である。ただ、赤錆びが浮いて使い物にはならなそうと言うか、刀身は完全に腐食してるのか指で少し押しただけでボロボロと崩れていく。酷過ぎだろ……。

まあ展示場所に広さに対して管理する側の人間が少なすぎるのが原因だろうが。

其処らは別にどうでも良い。と言うか俺はこの剣を見つけてとある発想が浮かんだ。この剣の柄をショットガンの持ち手と誤認した訳で……もしかしてだけどショットガンマジックやらピストルマジックを使う時に剣を持ったまま出来るのではないかと言う予測。

そもそも、ミリカンでは右手を『銃』の形にして詠唱しないといけないと言う条件付けがなされていたが、此方の魔法となつてからは性質が多少変わっているのだ。もしかしたら……。

店中で詠唱するのはどうかと思うが、周囲を見回して人が居ないのを確認する。まあこの階層の隅っこの部分だし人は居ないわな……。

右手で件の剣を持って構える。若干違和感を覚えるが剣の柄の部分の握りはワイアットアップダブルバレルショットガンのショートストックに近い。とは言え刀身の湾曲がどうにも癖が強い。

『ショットガン・マジック』

脳裏で剣を意識しながら詠唱してみる。刀身を銃身に見立て、切っ先に銃口が重なる形でのイメージ。

詠唱の結果としては上々。構えた剣の切っ先に魔法陣、剣の刀身の側面部分に結晶体。今までは右手に直接投影していた形のガン・マジックが上手い事剣に重なった。

とは言え慣れるまで扱い辛そうだが……これなら右手に武器を持ちつつ同時に魔法も使えるはずだ。

イメージ次第でどうとでもなるって言う情報をリユーさんから学んでから色々と応用がきく様になったな。

……まあ、こんな刀身が死んだ剣を持つわけにもいかないの、同型の湾曲した柄の剣を探さないとな訳だが。見付かるかねえ。

結果だけ言おう。一応見付かった。見付かったんだが……なんつーかなあ。

「ミリアはその剣を買うの？」

「ベルはその軽装鎧を？ 9900ヴァリス……ギリギリですね」

ベルが木箱ごと持ってきたそれは軽装鎧らしい。エイナさんもなんか持つてきてるけどエイナさんは何を買ったんだろ？ まあ良いか。ベルの軽装鎧の方は製作者はヴェルフ・クロッツと言うらしい。ただ……ただなあ。

「ベル、この鎧……名称が『兎鎧』ビョッキチって……」

ど根性ガエルか？ いや違う、なんつーかもうね。ネーミングセンスの方が……。ただ、性能の方はかなり良さそう。エイナさんも値段に見合った良い防具だと褒めるぐらいだったしね。ベル君も一目惚れしたっぼいからもう何も言わんが、もうちよつと名前どうにかなんなかったのか……。

俺の剣の方は、製作者不明。これについては仕方ない。手入れの行き届いていない奥の方の所から引っぱり出してきたからな。刀身はそう錆び付いておらず薄らと曇っていた程度。お値段なんと2800ヴァリス。そう高い買い物と言う訳でも無い。後はこつそりと鎖帷子を買つといた。こっちは3000ヴァリス程。袖無しシャツみたいな形状のもので、背中部分と腹の部分を重点的に守ってくれる奴。ウオーシャドウの攻撃程度なら防いでくれるらしい。

剣の方は湾曲した柄に真っ直ぐな刀身と言うよく分らん剣だ。湾曲した柄と言うのはゲームで良く見たショートを思わせるが、刀身が真っ直ぐなのでショータルでは無いだろう。なんという名称の剣なのか知らんが俺がイメージする銃の形と重なるのでまあ良し。

刀身の長さは40C程度。若干俺の手からすると長めだが、扱えないわけでは無い。分類はショートソード辺りだろうか？

ただ、振るうのに独特の癖があつて正直剣として扱うとなると使い辛い。突き攻撃は割としやすいが切り払い系の攻撃には扱えないだろう。

「変わった武器ね……銘も無ければ製作者名も無いなんて」

「使い辛くない?」

「まあ、要練習ですかね。メインはそつちじゃないんで」

右手に剣を持ちつつ、右手で魔法も扱う。なんて戦い方を想定してるからな。普通に剣を使うのはまずないだろ……。一応、リユーさんに頼んで剣の扱いも少し学ぼう、そうしよう……。あ、リユーさんには魔法を教わってるだけだからもしかしたら無理かも? 一応頼み込んでみよ……。

今日の集会所まで戻ってきた。ベルは嬉しそうに鎧を抱え持ち、後序に俺の買った鎖帷子もベルが持つてる。剣は俺の腰に吊り下げであるが……荷物持ちをさせてしまったのは申し訳ない。と言うか鎖帷子が予想以上に重かったのだ。それ着て上から魔女衣装となると……まあ、体力作り頑張らないとだな。うん。

「ああそうだ、ミリアちゃん」

「なんですか?」

夕暮れ時、帰宅する冒険者等が散見される広場で唐突にエイナさんが声をかけてきた。

「ベル君にも言ったんだけど、パーティーメンバーを増やした方が良いよ」

「ふん?」

メンバーを増やすねえ。

「ベル君は前衛型だけど、ミリアちゃんの援護が間に合っていないって聞いたから、もう一人前衛を増やしてできれば足止め役が欲しいかなって思ったんだけど。後はサポーターを雇って荷物持ちを任せる

べきかな」

ああー、なるほど。ベル君がドロップ品や魔石を持って動くから援護が間に合わん時がある。と言うか時々モンスタ―が抜けてくるからそれで危ない目に何度かあつてるし、気になってたのか。マジックシールドのおかげで気にしてなかったが、良く考えればそこらも必要か。

荷物持ち専用のサポーターねえ……。

「もしよければギルドの方からおすすめのサポーターとかを紹介できるけど」

「……ベルはどうしたいです?」

ベルの意見次第だな。一応、団長はベルだし?

「少し考えてみようと思う。ミリアもその……困るでしょ?」

「あー……確かにそうですね」

そうだよな。俺の魔法やらキューイ関連やら、割と他のファミリアの人物を受け入れるには問題が多い。

「そつか、じゃあ必要になったら声をかけて。紹介出来る様にリストアップだけはしておくから」

「ありがとうございます」

気が利くと言うか、何と言うか。良い人だなあ。

「さて、そろそろ時間かな」

「あ、今日はありがとうございます」

「ありがとうございます、エイナさん」

エイナさんに頭を下げておく。ヘアリストス・ファミリアの武装がそれなりの値段で買いそろえられると知ったのは僥倖だ。知らなかったらそこらの露店商人で揃えていた所だろう。

鉄製の長杖はそこその値段だったが、同質の物が何本も買えるぐらゐの値段だったのでどうやらぼったくり価格だったらしい。もっと事前調査すべきだったな。

「そうだ……二人にこれを」

エイナさんが取り出したのはさっきの店で買ったらしき包み。俺らの為にわざわざ? 良い人過ぎるだろ……。

ベルに手渡されたのはグリーン・サポータと言う手甲。細長い形状の盾として扱う物らしい。エイナさんの瞳と同じくエメラルド色をしており、中には短剣類を入れておける空間もあるらしい。

俺の方には右手用の手袋。本当はエメラルド色の物を用意したかったそうだが見つからなかったので、俺の左手用手甲である竜鱗の朱手甲に合わせた色合いの物を選んでくれたらしい。

革製ではあるが俺の手にぴったり大きさで、身に着けても違和感を感じられない。ほんの少しの魔法効果が付与されたマジックアイテムらしく、防御力が普通の物よりも高めてあるらしい。

どちらもそこそ良い値段のする物だ。

「私からのプレゼント、ちゃんとして使ってあげてね」

「ええっ!? そっそんなももらえませんか」

悪戯っぽい笑みを浮かべてはいるが、エイナさんの目は何処か悲し気だ。なんだ……?」

「貰って欲しいな。私じゃなくて……君達の為に」

笑みが消え失せ、悲し気に眼を伏せるエイナさん。

「本当にさ……冒険者は何時死んじやうかわからないんだ。戻ってこなかった冒険者を沢山知ってる」

ああ、そう言う事か。ギルド職員として、冒険者の対応をしていればそう言う事もあるか。いや、むしろそう言う経験は当然の様にあるのか。

冒険者は何時死ぬかわからない。死の危険に満ちたダンジョンに潜る以上、死ぬ事なんて珍しくない。俺やベルだって死にかけたんだ。次も助かるなんて保証は何処にも無い。

「居なくならないで欲しいな。二人には……兄妹みたいで見ていると楽しい。どっちかが欠けるなんて……」

そうだよな。そうか、俺もベルも死ぬ危険を冒してる。心配してくれる人はヘステイア様だけじゃないのか。

素直に嬉しいと思う。同時に怖いとも思った。俺が死んだら悲しませる人がいる。前世なら死体に唾吐きかけられてもおかしくは無かったし、死後を気にかける事なんて無かったが……そっか、悲しむ

人が居るのか。

「あはは、これじゃやっぱり私の為かな」

誤魔化す様に笑みを浮かべたエイナさん。其れに対しベルは悩んでいる様子だ。自分の夢を叶える為に色んな人に心配されている自覚をしたのだろう。

「ベル君、君達が頑張ってる姿を見て、私も応援したいなんて思ってたんだよ。だからね、受け取って」

……そうだ。俺もベルが頑張ってる姿を見て力になりたいなんて思ってたんだ。結果としては心配をかけてしまっているが、それでも力になりたい。

それにしても二人の顔が赤いな。まあ夕暮れ時なのも相まって顔が赤いのか日の光が赤いのかわからないが。

「……ありがとうございます」

消えそうなベルの礼の言葉にエイナさんが綺麗に微笑む。絵になる二人だな。

「エイナさん、心配してくれてありがとうございます」

「ううん、二人は私の事は気にせずに頑張って。でも、無茶だけはしないでね」

無茶しないで、か……。

第四十二話

エイナさんに装備調達に連れて行って貰った後、俺はベルと別れて一人行動中。

ベルには先に帰ってもらった。俺が向かっているのは青の薬舗、ミアハ・ファミアリアの本拠である。

何故そんなところにと言う話なんだが、キューイの素材関連の話だ。前にキューイを煮だしただろ？ あの時に出たキューイ汁になんか使い道が無いかなとナーザさんに相談したんだ。

そしたらナーザさんが気が狂ったんじゃないかってぐらい血走った眼でそれをくれと言いだした……。あの時は割と真面目にビびったわ。

ナーザさんが発狂したのかと驚くほどの反応を見せた理由はいたって単純。竜の素材なんて持ち込みで普通に買い取りとなったら数百万ヴァリスは軽く吹っ飛ばらしい。

上層のインファントドラゴン素材だったとしても買い取り価格は最低で五十万前後。

現在最強派閥であるロキ・ファミリア、フレイヤ・ファミリアが台頭する前に最強派閥と言われていたゼウス・ファミリア、ヘラ・ファミリアの二つのファミリアが、ダンジョン下層より竜系素材を持ち返ってきていた事が何度かあるが、現在の二大ファミリアは其処まで行っておらず、竜系素材は今や滅多にお目にかかれない素材らしい。

ガネーシャ・ファミリアで管理されているヴィルヘルム、赤いワイバーンは時折鱗や爪のかげらなんか売りに出されたりするが、それ以外で竜系素材を手に入れるのは現状ほぼ不可能。

俺が連れてくるキューイからとれる素材も一応竜系素材と言う事で、普通に売りに出したらアホみたいな値段で買い取りが為されるだろうとの事……。まあ、そんな事できないが。

もしキューイの素材を普通に売りに出した日には他のファミリアから命を狙われるだろう。と言うかガネーシャ・ファミリア並に大き

なファミリアじゃないと間違いなく狙われるだろうしそんな事は出来ない。

んで俺が考えたのは友好ファミリアであるミアハ・ファミリアに素材を卸して薬にして売って貰うって方法。ミアハ様とかナーザさんが裏切るって事はまずないし、協力関係を敷こうと取引を持ちかけた訳だ。

青の薬舗に到着つと……西のメインストリートから外れた裏路地にあるお店。メインストリートから外れているからなのかあんまり人はいない。人通りが少なく少し薄暗い道、街灯の数も少ないのでこの時間は暗いな。

店の入り口には『閉店』の掛札がぶら下がっている。客じゃないから良いかと扉を開けて中に入る。

「ナーザさんいますかー」

薬が陳列された棚にカウンター、そして甘い様な苦い様な薬の匂いで充満した空間。店先のショーウィンドウには何も並んでおらず、日の光が入らない様にカーテンのかけられた店内は薄暗く明りはついていない。

居ない、と言うのはありえないはずだが。

「……だれ？ 今日はまだ店じまい……ファミリア？」

店の奥から出て来たのは不機嫌そうに眉に皺を寄せたナーザさんであった。

「ファミリアだったのね。丁度良かった……例の素材の件？ 少し待って、明かりをつけるから」

つい先ほどまで調合を重ねていたのだろう。どぎつい薬草類の匂いが混じり合ったナーザさんの臭いに思わず咽る。女性としてのその臭いはどうなのかと言いたいが調合師として活動する以上どうしようもないらしい。

ちなみに犬シアンスロープ人らしく鼻が良いかと思ったら別にそうでもないらしい。調合師として調合なんか携わっていたら鼻が馬鹿になった

とかどうか。

「よし、其処の椅子にかけて。持ってくるから」

明りがついた店内、棚の数に対して並べられている回復薬ポーションの数かなり少なく、空きの棚が目立つ。神ミアハとナーザさん二人で切り盛りするこの店は元々もつと人数が居たらしいのだが、借金を背負った折りに皆ファミリアを抜けて行ったそう。

其の為、店の大きさに対して調合師の数が足りず、空きの棚が目立つスカスカな状態であり、其れを誤魔化すべく色つき水の入った瓶等も並べてあつたそう……。

店の奥の方に行っていたナーザさんが木箱を持って戻ってきた。

木箱の中には無数の小瓶、それぞれラベルが貼られており小さく調合した素材の略式名称の様な記号がかかっている。

「はい、これ。何種類か作ってみただけど。売りにだせそうなのは一つも無いわ」

売りに出せそうなのは一つもない？

「そうよ。どれも効果が安定しない物ばかり。効果が安定すれば間違いないと売れる物ばかりなんだけど……」

悩ましげな溜息を零してナーザさんが真っ赤な液体の入った試験管と紙切れを手渡してきた。

「名前は『竜ドラゴニック力ポーション薬』にしようと思ってるわ」

試験管に書かれている素材の名称記号が何なのかは判別できないが、一緒に手渡してきた紙切れ、効果の書かれたメモ用紙を見れば効果はだいたいわかる。

一時的に力を増幅させる液薬、強化したい部位にかけるか飲む事で効果を発揮する。

ほうん。攻撃力を引き上げる薬かな。強化したい部位……腕に振りかければ腕の力が上がり、飲めば全身の力が上がるって感じか。ふうん。

「効果は凄まじいのよね。一時的とはいえ力を増幅させるなんて薬は何処のファミリアも開発できていないし」

其れは凄いな。新発明した商品って事だろ？ 二属性回復薬がど

うのこうので良い感じに行ってるって話だし、これも売りにだせんのかね？

「無理ね……効果が安定しないのよ」

安定しない？ 時間とか？

「そう、効果時間もそうだし効力も全く安定しない。私が何回か使ってみただけど最短で一分、最長で三十分の効果時間で、効果の次第も全く感じられない程度からそれこそ器ランクアップの昇格したんじゃないかってぐらい力が上がるって事もあったわ」

ランクアップ器の昇格並に力が上昇するってヤバイじゃん……でも効果が安定しないんだよな。

「はあ……他には回復薬と似た効果の物も出来ただけど」

回復薬と似た効果の物？ 似てるってどういう風に？

「一定時間の間、回復薬ポーションを飲み続けてるみたいに怪我が治る治療効果リジエネ」

……普通に凄くない？ 一定時間ってのがネックなのか？

「効果時間は三秒から十秒、短すぎて話にならない。しかも素材から考えて普通の回復薬ポーションを使う方が安上がり」

調査素材を考えると効率悪いって事ね。どんぐらい悪いん？

「……そうね、売りにだすなら最低三万ヴアリスはとらないと割りに合わないわ」

ハイポーション高位回復薬が質次第だが大体二万から五万ヴアリス程度。回復能力が回復薬並で効果時間が短ければ普通に回復薬ポーション買い揃えた方が良い訳だ。なるほどー。

「効果を安定させる事は出来ませんか？」

「無理」

一刀両断だな。

「もし効果を安定した物にしたいなら……もっと上位の素材が必要」

ふむふむ？ 竜系素材から安定した効果を引っ張り出した場合、相応に上位の素材を使わないと下位の素材の方が足を引っ張って効果が不安定化してしまう。

んでそんな上位素材を取り扱える様な状態じゃないので現状、ミアハ・ファミリアでは安定した竜系素材の薬は開発不可能と。

「そうですか」

「……ねえミリア」

「なんですか？」

「……………その素材、他のファミリアに持ち込んだりしない？」

んー。しない。と言うか出来ない。多分他のファミリアの場合は情報漏れで俺が襲撃受けるだろうし、顔見知りで不仲では無いナーザさんの所以外に素材の持ち込みなんて出来るはずもない。

「そっか……ごめん、力になれなくて」

机の上に置かれた試作品類を眺めてからナーザさんを窺えば申し訳なさそうにしているし。いや、結構無茶言ったのはこっちの方なんだが……。

「この試作品は持って行っていいわ。後お礼なんだけどこれも」

ナーザさんが差し出してきたのは柑橘系の液体の入った試験管。マジック・ポーション精神力回復特効薬だったかな。

「良いんですか？」

「むしろ逆に聞きたい。こんなので良いの？」

普通にキューイの素材をもつと良い医療系ファミリアに持ち込めば間違いなく大金を出してくれるし、マジック・ポーション精神力回復特効薬二、三本なんて目では無く、それこそダース単位で貰える事だろう。

リスクを考えればそんな選択肢はあり得んしなあ。

「情報料ですよ。キューイの素材を使って何かしようとしてたつてのは他のファミリアには漏らさないでください」

「……わかった。何処にも漏らさない」

ミアハ様にも伝える様にお願いとこ……しかし力を増幅する薬と回復力を高める薬ねえ。効果が安定してれば皆欲しがらるだろうに。

オラリオにはこういった力を増幅する薬つてのは存在しないらしい。毒を治すとかはあるっぽいんだがなあ。

「試作品、持って帰っても良いですか？」

「良いわよ、ただし効果が本当に不安定だから使うなら気を付けて」

「わかりました」

それぞれ二本ずつ貰ってこ……力の方はベルに……いや、こんな不

安定なもんベルに飲ませるのは怖いな。自分で飲む……使い所がさっぱり思いつかん。

朝、姿見の前で何度も鎧姿を確認するベルの横で俺も装備を確認する。

魔女っぽいとんがり帽子に魔女っぽいローブ。左手に竜鱗の朱手甲、右手は赤色に染められた革製の手袋。腰に剣を差して背中に鉄製の長杖。後は腰のポーチに試験管を何本か。精神力回復特効薬を貰えたので早速腰のポーションポーチにセット。これがあれば俺はもつと戦えるぞ……ついでに真っ赤な液体の入った試験管も差しとこ。使い所が難しい上効果も安定しない試作品だけでもしもの時用にね。

……俺の恰好、チグハグ過ぎね？ 魔女っぽい衣装から魔法使いだと思われそうだが、腰には剣だし？

あー、ベルが本当にうれしそうに装備見てるねえ。良く似合ってると思うよ。鎧の名前はともかく。

「ベル、似合ってますよ」

「そうかな、ありがと。ミアも似合ってるよ」

お世辞として受け取っておきますかね。竜鱗の朱手甲、見た目ほど重くないから不思議だわ。

「神様、行ってきます」

「行ってきます」

「ううん……行ってらっしゃあい……」

半分寝ぼけながら返事をしてくれるヘステイア様。今日も無事に帰って来ますよ。

朝霧が立ち込めるダンジョン入口。まだ朝四時ぐらいだと思っただけど、人一杯居るわ。視界を埋め尽くす冒険者、冒険者、冒険者……。

「サポーターかあ」

ベルの眩きを聞きつつベルの視線の方向を見れば、なんつーかアホみたいに大きなバックパックを背負った姿がちらほら。

あれがサポーター？ 体の倍近い大きさのバックパック背負ってんだけど、あれで動けるの？

「おにーさん、おにーさん。そこの白い髪のおにーさん」

んむ？ 後ろから聞こえた声、白い髪のおにーさん……ベルの事か？ ベルをお兄さんって呼ぶって……。

「うん？」

振り返った其処に居たのは前の方を歩いていたサポーターと同じ格好、アホみたいに大きなバックパックを背負った茶髪の女の子……この子、五歳くらいの幼女じゃん。背負ってるバックに潰されそうなんだが普通に立ってる。中身スカスカなのか？ 発泡スチロールでかさましてたとしてもあの大きさならそんな子供に背負えるはずないだろうに……。

いや、なんかこの子おかしいわ。胸がある。子供にしては胸の膨らみが確かにあるのだ。胸が膨らむのって第二次性徴期だったっけか？ 学んだの昔過ぎて覚えてないわ。

この子俺と同じ小人族バルウムだな。だとすれば見た目の幼さと胸の大きさの因果関係に説明つくし。小人族バルウムって年齢わかりづれえんだよね……。まあ、俺もそうだけど。

中身四十過ぎで見た目五歳児ぐらいとかワロス。ミリカン設定では15歳だったけどな。結局年齢幾つになるんだろいうな俺って。

「おにーさん、突然ですがサポーターを探してませんか？」

野良サポーターか？ 確かエイナさんの講習にあったな。冒険者相手にサポーターとして付き合うのは基本的に同じファミリアの下位冒険者が請け負うんだが、冒険者としての道を諦めてサポーターに落ちたりしたいわゆる落ちこぼれなんかが自分のファミリアの冒険者にサポーターとしてすら使って貰えない場合、他のファミリアのサポーターの居無さそうなパーティーに声をかけて日雇いのサポーターをして稼いでいるとかどうか。

詐欺なんかもあるっぽいから気をつけろって言われてたっけ？

「あれ……君は確か……」

うん？ ベルの知り合い？

「混乱してるんですか？ でも、今の状況は簡単ですよ。冒険者のお零れに与りたい貧乏なサポーターが自分を売り込みに来ているんです」

……やけに説明口調だな。誤魔化すような気配を感じる。昨日ベルなんか……ああ、確か他の冒険者とトラブルになりかけたんだっただか？ 女の子が襲われてて咄嗟に庇っちゃったとかどうとか。

リユーさんが助けてくれなかったら大変な事になってたらしいな。女の子の方は気が付いたら何処かに行つてたっぽいが。

つまりその助けた女の子？ お礼を言いには？ の割にはなんか誤魔化す様な言い方が鼻に付くな。

「えっと、そうじゃなくて、君、昨日の……パルウムの女の子だよね」
お礼を言いに来たのなら誤魔化す必要無いだろうに。何しに来たんだ？

「パルウム……？」

不思議そうに首を傾げる少女。

「リリは獣人、シアンスロープ犬 人なんですが……？」

フードを取り払ったその下から出て来たのは犬人特有の犬耳。

……え？ なんかこいつおかしくね？ いや、俺がおかしいのか？

シアンスロープって4〜5歳の時点で胸が膨らんでるのか？ 獣人ってそんな感じなの？ むしろ俺の認識がおかしいの？ この世界って幼女の時点で胸が膨らむ訳？ ロリ巨乳が多数居る普通の世界なのか。ロリ巨乳好き歓喜な世界じゃん。

………で、実際の所はどうなの？ ナアーザさんに確認とるか。
俺と同類っぽいし。
なんかこいつ臭えし。

第四十三話

さてと、目の前の少女と言うか幼女……幼女か？ ベルは人違いと認識した様子だが……。

はつきり言おう。黒だコイツ。

何故黒だと判断したのかと言えば、彼女の俺に対する反応である。

「ごめん、人違いだったみたい……」

「いえ、誰しも間違いはあるものですし。それで、リリを雇っては頂けないでしょうか」

「ううん……ミリア、どうでしょうか？」

「……ミリア？ ……っ!! え、もしや其方の……方も……仲間？」

「うん、そうだよ。僕と同じファミリアの仲間なんだ」

「うそ……一人じゃなかった……」

ぼそぼそと小声で呟かれた言葉。聞き逃さねえぞ……なお、キューイが教えてくれなかったら聞き逃してた模様。

こつから俺の予測での話だが、まず彼女はベルの言っていたパルウムの女の子と同一人物で間違いないだろう。本来の種族が何かは知らんが、多分パルウムであってる。

んで、彼女がベルが一人でいると勘違いした理由は……非常にシンプルだが、まず人混み。朝だと言うのに人混みがかなり多かった事。

次に俺の背が低かったこと。と言うかパルウムだった事、これが大きい要因だろう。

彼女がパルウムなのかは知らんが、彼女は背が低い。110cmぐらいだと皆を見上げて生活しているんだろう。んで普段から相手取るのは自分より背丈の高い相手。自分より背の低い相手が冒険者やってるなんて想像もできなかったのではなからうか？

他にもパルウムが冒険者に付き添う場合は大きなバックパックを背負って居る事が多いので、バックパックを背負う訳でも無く歩いていた俺が視界に入らな[×]かつたんだと思われる。おい、チビって言った奴前にでろ、[×]テメエの[×]を[×]撃ち抜くぞ。

彼女の様子を見るにそれなりに人を騙す術を学んだ様子の……言
いは悪いが三流詐欺師かなんかだろう。

昨日の今日で碌に情報収集もせずにカモにしやすそうなベルに接
触する辺りもうね、三流も三流だよ。

オラリオの冒険者つてのはファミリアつていう集団の繋がりがあ
るのが当たり前だ。んで下調べすれば直ぐに情報なんて調べられる。
駆け出しファミリアの俺の所の情報をしつかり集めてから接触し
てきたのなら、間違いなく俺の情報も持っているはずだったんだが、
こいつは俺の事を知らなかった。

俺ならどんな騙しやすそうな相手だろうが最低三日は下調べする。
叶うなら一週間は下調べしたい。背後関係で組織的な物となが
りがあるのなら一ヶ月は様子見してから接触する。

そうしないとあの糞女みたく『騙しやすそうだし適当に金巻き上げ
よう♪』とかやらかしてコンクリ詰めにはれるのがオチと言う奴であ
る。

だと言うのに彼女は碌に下調べせずに昨日の今日で接触してきた
のだ。多分だがそこから適当に冒険者相手に詐欺で稼いでいた小物
だろう。

どうするかねえ。話だけは聞いてやるけど。ベルが気になってる
みたいだし。

噴水の縁に腰かけて並ぶ。ベルと件の三流詐欺師の小娘の間に俺
を挟み込んでおく。

「先程は誠に申し訳ありませんでしたミア様、リリよりも背の低い
方が冒険者をやっているとは思わずに無視する形になってしまつて」
「いえ、別に構わないですよ」

俺に気付いた時の彼女の表情はある意味で笑える光景だった。顔
色が一瞬でみるみるうちに変化していったのだから。まあ、彼女の不
注意が招いた事なので全力で笑う所だ。ぶぎやー。

「改めまして、リリルカ・アーデと申します。サポーターとして雇つて

頂きたくお声を掛けさせて頂きました」

「あ、はい。ベル・クラネルです」

「ミア・ノースリスよ」

丁重に頭を下げる彼女。見せつける様に獣耳を出したままだが……さつき触った感じは本物っぽかったんだよな。昨日のベルがパルウムだと勘違いしただけか……それとも獣人に化けているのか。まあ、現状は放置だな。変に突っ込んで彼女の後ろからなんか後ろ暗い変なもんが出て来ても困る。

「それで、リルカさんは何で僕に声をかけてきたの？」

「あく……それがですね。リリが見た所、お一人で冒険をなされていた様に見えたので……実際はお二人だったようですが」

おべっかを使うかのようにへりくだる彼女。なんつーか年相応に表情をころころ変える癖に、口調なんかは全くらしさを感じない。言ってしまうえばチグハグな演技をしてる。やっぱ俺と同類っぽいんだよなあ。

「それで、冒険者様自らがバックパックを装備してらっしゃったのでサポーターとして雇って頂けるのではないかなと」

「ああ……なるほど」

よく見てる。ベルの腰のヘステイアナイフを。

彼女と出会った時の反応で最も気になったのは俺の腕に装備した竜鱗の朱手甲を見た瞬間である。目を見開いた後に値踏みするように見て来た。

これはー、狙いは金目の装備と言った所か。ベルのナイフ狙いだっただんだと思うんだが、俺の手甲にも目をつけたか？ まあ、諦めろ。絶対盗らせんし。

「それで、どうでしょう。冒険者様お二人とはいえバックパックを冒険者様が背負うのもおかしな話。此処で一つサポーターとしてリリを雇うと言うのは」

「ううん、どうしようかミア」

俺に相談するのか。率直に言えば『無し』だ。あからさまに此方を騙しに来てるし、狙って声を掛けて来た時点でアウトだろうし。

まあ、判断はベルに任せるが。

「ベルはどうしたい？」

「できれば欲しいかなあと」

まあ、だろうな。俺もサポーターは欲しいと思ってたし。但し所持品をくすねようとする奴はお呼びじゃねえ。

「本当ですか！ でしたら是非ともリリを連れて行ってくれませんか！」

食い気味に話す彼女。なんつーか必死だな。

「リリは貧乏でお金も少なくて……」

同情を誘う様な仕草。なんつーか手馴れてる。ただ、詰めが甘いので三流詐欺師も良い所。と言うかよくこんな行き当たりばったりみたいな方法で生き残って来たな。あの糞女でさえ行き当たりばったりで相手を騙そうとして潰れたのに。

「それに……男性の方にリリの大切なモノをあんな風にされたのは初めてで……責任をとっていただかないといけませんね」

甘える様に、上目使いでベルに言う彼女。自らの耳を撫でてベルが先程不用意に彼女の耳に触れた事を意識させる様に動いてる。吐き気がする程の演技だ。いまずぐ顔面に拳を叩き込みたいが我慢。ベルの判断に任せよう。

ナイフ狙いなら俺が監視してれば問題ないだろうし。

本音を言うなら今すぐぶちのめしたい。絶対しないけど。ベルが驚くだろうし、現状彼女に手を出す理由が俺の私怨でしかないからだ。

「ああ……その、ミリア、良いかな？」

真っ赤になって此方に尋ねるベル。ベルの不用意な行動が原因とは言え其処を攻めてくるこのクソ餓鬼には凄くムカつく。ベルには不用意に女性の体に触れない様に言っておかないといけないなこれ。女つてのは手に触っただけで責任うんぬん騒ぐ奴もいるし。

「いいですよ、とりあえず本格的に雇うかは別として今日一日お試しでサポーターとして雇いましょうか」

「ありがとうございますー」

綺麗な張り付けた様な笑みを浮かべた彼女を見て、どうも吐き気が込み上げる。

前世の俺の笑顔が脳裏に浮かぶ。鏡に向かって、どう笑みをうかべれば自然に見えるか練習し続けたあの頃。糞女監修で行われた笑顔の練習。

「ミリア？ どうしたの？」

「……何がですか？」

「……………いや、なんか嫌そうな顔してたから……………嫌だった？」

「大丈夫ですよ」

吐き気がする。

二重の意味で驚きを隠せなかった。

昨日見た白髪の少年。彼の持つナイフは駆け出しとは思えない程の物で、自身の目的の為にそれを盗むと決意を抱いて次の日にバベルに向かう人混みを監視していれば、思惑通り彼を見つける事が出来た。

彼に声を掛け、思惑通りに接近する事に成功したが、ここで思惑とは違う状況に陥った。

彼に仲間が居たのだ。一人なら騙すのは容易いと近づいたのに……………。

気付かなかった原因は主に二つ。まず一つ目は彼を見つけた状況。周りには多数の冒険者が歩いており傍に誰が居るのか確認した積りだったが人混みで気付けなかった。人混みで気付けなかった事に付け加えて言うなら彼女が自身よりも背が低かったこと。

まさか自分と同じパルウムが冒険者として活動しているとは思わなかった。

暗褐色のローブに同色のとんがり帽子。まるで童話の中の魔女を思わせる服装でありながら、左手には竜の鱗を思わせる朱色の手甲を、右手には同色の皮手袋。腰には剣、背中に長杖と言う戦闘方法の判別がつかない彼女。

金髪に碧眼と言うオラリオでは見慣れた髪色に目色。顔立ちは整っておりほっそりとした手足。背は100Cが良い所でパルウムの中でも小柄と言える。

大人しそうで人見知りしていそうな感じであった。目を合わせたら直ぐに俯いて帽子で顔を隠す水草等からそんな印象を受けた。

見た目で判断するならば彼女は魔法が使えるのだろう。見た限りでは無視する形になったはずだが不快感は感じていない様子で助かった。だが彼からナイフを奪う難易度は上がってしまった。

とはいえそればかりではなかった。彼女の持つ竜鱗の朱手甲。何処からどう見ても駆け出しの彼女が持つのに相応しくないそれ。売れば相応の金額にはなるだろう。

とは言えパルウムの中でも特別小柄な彼女に合わせて作られた防具なので彼の持つナイフ程は売値は余り期待できない。

それでも盗めれば上々と彼らと共にダンジョンに潜った。

そして、向かった階層に目を見開いた。

彼らの話によれば冒険者になってまだ一ヶ月も経っていないらしい。駆け出しも駆け出しと言うのに彼らが潜る階層は七階層。本来なら三階層辺りをうろついてもおかしくはないのに。自意識過剰な冒険者かと予測し、いつでも逃げられる様に覚悟だけはしていたが、それは裏切られる事になった。

まず彼、ベル・クラネルは一人でキラアアント七匹を倒せる程に強かった。並の冒険者なら七匹同時に戦うなんて絶対にしないキラアアント相手に引くでもなく突っ込んで掃滅してみせたのだ。

次いで彼女、ミリア・ノースリス。此方はある意味で予想通り、ある意味では予想以上であった。

上級冒険者であっても習得している方が珍しい二重詠唱の技能を当たり前のように使いこなして戦う彼女の姿に思わず度肝を抜かれた。其れで居ながらベルの援護に回った彼女はまるで人が変わったみたいによく動き、魔法を連発する。

それだけでは無い、彼女の素敵能力は獣人として変身している自身よりもはるかに高い。ミリアが敵を見つけ、ベルが前衛で足止めし、

ミリアが援護する。そんな戦闘スタンスを既に完成させているらしく、自身がモンスターの接近を警告するより前にミリアが敵の接近を察知してしまうのだ。活躍の場は落ちている魔石やドロップ品を集める事のみ。

魔法も持っている癖に、索敵のスキルまで持っているなんて……。彼女の持っていた剣、あれはどうやら魔法の補助用らしく、本来なら長杖の方が魔法の補助に使用されるはずが、剣を魔法の補助道具として使用していた。長杖は振り回して敵の牽制を行うだけに使うのみで、それ以外は剣を魔法発動の触媒にして戦っていたのだ。

これは嬉しい誤算だった。彼女が魔法の触媒として剣を使っていると言うのであれば、あの剣は特殊な触媒によって作られた剣と言う事になる。魔法の触媒として使用される素材はどれも高価であり、彼女の剣は見た目は普通の剣だがその材質は魔法の触媒で作られたモノだろう。売れば相応の金額になる。

腕に着けた手甲を盗むより腰にある剣を盗む方が何倍も簡単だ。隙をみて彼女の剣と彼の短剣を奪う。

「お二人ともお強いんですね！」

「リリが居てくれるおかげだよ。戦闘に専念できるからね」

なんつーか、リリルカはどうにもこっちをおだてて持ち上げようとする感じが強すぎる。ベルは騙されてる様子だが……。吐き気が酷い。彼女を見てると昔を思い出す。キューイがさつきから注意してくれるからなんとかなってるが……。注意力散漫過ぎるな。痛い目見る前になんとかしないと。

「いえいえ、これだけのモンスターをお二人で、それも無傷で倒すなんて凄すぎますよ」

「そうかな」

おだてられて嬉しそうなベル。まあ、褒められて悪い気はしないだろう。俺と同類にやられると吐き気がするだけだが。

「ミリア様も、敵を感知するスキルでもお持ちなのでしょうか」

「ステイタスの詮索は無しで……」

「あ、ごめんなさい、つい」

てへつと惚ける様に笑みを零しながら魔石を拾い集めるリリ。あわよくば情報を引き出そうとしているのか？ にしては……嫉妬心でも抱いてるみたいなんだがなあ。

俺の索敵能力はキューイ使いだから自慢出来るもんでもないし、魔法も『ミリカン』の物だから自前の物かっていうと疑問が残る。

唯一胸を張って自前のスキルだって言えるのは『家族／眷属』ぐらいか。絶対胸を張って言えない奴じゃないか。恥ずかし過ぎるぞ。

「まあ、ベル様の方は若干武器に寄る所があるのでしようが」

「ああ……やっぱりそうかな、僕もちよっと思ってたんだ。このナイフに頼り過ぎかなって」

おだてるだけじゃないのか。若干引いて……目つきが怪しい。彼女の悪い癖を上げると、彼女は俯いて表情を崩す事が多い部分だろう。

彼女が今まで相手にしてきた冒険者は彼女よりも大分背が高いが普通な訳で、少し俯くだけで表情を隠せる。その所為か彼女は少し俯いて心を表情に移す事が多い。なんつーか甘いんだよな。俺に見られてないか時折ちらちらと確認するのも甘すぎる。見ると言う動作は意外と勘付かれやすいのだ。さつきからベルのナイフに注視してるの丸分りだ。

ただ一つ疑問。俺の剣にも注視してるっぽいのはなんでだ？ 只の剣なんだが。

「ベル様、そのナイフはどうやって手に入れたのですか？ ミリア様の手甲もそうですが……少し不相応な装備品ですよね」

気になるから聞いた。と言うより話半分で聞いた感じだな。話題を探してるっぽい。積極的に話して明るい印象を植え付けようとしてるんだらうか？

「ああ、僕のファミリアの神様に頂いたんだ。ミリアの手甲もそうだったよね」

「はい、そうですよね」

「そうなんですか」

ニコニコとした張り付いた笑み。見続けると吐き気が込み上げてくる笑みだ。仮面^鏡見てるみたいで気持ち悪い。

「そういえばリリは？ 何処のファミリアなの？」

「……………」

ん？ 雰囲気が変わった？ さっきまで食い気味に明るく振る舞う彼女のテンションが一気に下がった様な気がする。

「はい、ソーマ・ファミリアに」

……ソーマ・ファミリア？ おい、そのファミリアってアレだろ。ガネーシャ・ファミリアが警戒する様に言ってた要注意ファミリアの一つだったはずだ。

確か……ファミリア内での格差が酷く、搾取する側とされる側に分かれてるファミリアだとか。

ガネーシャが注意する様に言ってきたのは搾取される側、彼らは稼ぐ為に多少の悪事を働く事が多く、目を着けられると厄介だとかどうとか……。

もし、もしもだ。彼女が搾取される側の人間で、悪事に仕方なく手を染めているのならそれは……。

前世の俺と同じく仕方なく……いや、前世の俺はその後も悪事に手を染めるのをやめられなかった屑だしな。彼女がどうかは知らんが調べる必要が出て来た。

まず彼女は搾取する側かされる側か。搾取される側を装って居ないとは限らない。立場を見極めてから判断しないと痛い目を見そう

だ。
もし彼女が搾取される側の人間で、悪事に仕方なく手を染めざるをえないのなら、どうにかしてあげたい。前世の俺は勝手に搾取する側の糞女が死んだからその関係が終わったが、ファミリアと言うしからみから抜け出せずに困っているのなら、手を貸したい。

……………無理か。彼女がもし搾取される側の人間だったにせよ、人間不信になっている可能性は高い。前世の俺もそうだったんだ。だとすると単純に助けようと手を差し伸べるのは間違いだろう。

まあ、ここらの話は彼女の本当の立ち位置が判別できてからだ。

第四十四話

隙が無い。彼の持つナイフを盗む隙も、彼女の持つ剣を盗む隙も、どちらも全くない。

彼女、ミリアはずっとベルの様子を見ている。その視線がベルから外れる事は殆どなく、その所為で彼のナイフに手を伸ばす事も出来ない。

そしてミリアは剣を手放さない。右手に持ち、魔法を発動させたままずっと居る。試しに二重詠唱は難易度が高いし使い続けるのは疲れるのではと指摘したが、慣れているから平気だと返された。

どうやっても隙が無い。さっと盗むつもりがこのままでは盗めない。

どうすれば良いのか必死に頭を回すが良案は浮かばず。背中に背負うバックパックの中の魔石やドロップ品がどんどん増えていく。今まで共にしたどのパーティよりも早く、重くなつていくバックパック。

どうすれば良い。

「よつと。今ので最後かな？」

「ですね。おつかれ、ベル」

「うん、ミリアは大丈夫？ そろそろきつくない？」

ベルがミリアを気遣うのを横目に足元に転がった魔石を拾い集めていく。ベルとミリアのコンビは凄くいい動きをする。ベルが敵の大群相手に、ミリアの援護を受けながら一方的に敵を殲滅する姿は他のパーティでは見られない程素晴らしい連携だった。

だが連携力が高すぎて盗む機会が微塵も無いのは困る。

「そうね、そろそろ精神力回復特效薬飲むわ……」

ミリアが剣を鞘に納めたのを見て思わず視線を向けてしまう。今はダメだ、彼女の剣を盗れば勘付かれるしまだ剣を使うだろうから今は盗めない。

ミリアが腰のポーションポーチから取り出した真っ赤な液薬に思わず視線を奪われた。

なんだあれは？

今まで回復薬ポーションを含め様々な液薬を見て来たし、サポーターとしてそういう道具類の知識はすっかり溜め込んできた自身ですら知らない真つ赤な液薬に思わず視線を奪われた。

「あ、これじゃ無かった、こつちか……」

ミリアはそう言うときマジックポーション精神力回復特効薬を取り出して一気に飲み干した。その様子を見ていたベルが不思議そうに首を傾げる。

「ミリア、その赤いポーションって何？」

「え？ これ……これは……」

言いよどむミリアの様子を見て自身も出来る限り無邪気に見える様に笑みを浮かべて口を開いた。

「リリも気になります。今までサポーターとして数多くの道具を取り扱ってきましたが、そんな真つ赤な液薬見た事ありません。何処で購入した物なんですか？」

「えーっと」

困った様に帽子のつばで顔を隠してぼそぼそと呟く様に喋りはじめ。

「えっと、これは一時的にステイタスの力を増幅させる薬で……試作品なんだけど」

ミリアの台詞に言葉を失った。力を増幅させる？ そんな効果の液薬なんて聞いた事が無い。偽物でも掴まされたのだろう。

「ミリア様、お言葉ですが偽物を掴まされているかもしれません。オラリオにはそういったステイタスに干渉する液薬なんかは一つもありませんから」

そんな液薬があったとしたら、一体どれほどの値段が付くと言うのか。少なくとも十万ヴァリスはくだらないだろう。

「そうなの？」

「はい、そんな便利な薬があるなら誰しも欲しがりますよ」

「そうなんだ……でもちよつと興味あるかも。ミリア、僕が使っても良い？」

「え？」

困惑した様に視線を泳がせて、考え込んでからミリアは呟く。

「試作品だから効果は安定してないし、副作用は無いはずって話だけでもしもあるから危ないんだけど」

「でも力が上がるなら飲んでみたいかも……ミリアが近接戦挑む訳にもいかないし、僕が飲んだ方が危なくないよね」

「それは……確かに」

「それに危なくなったらミリアが助けてくれるし」

「……まあ、それは、そうですね……」

迷う様に何度か視線をベルと真つ赤な液薬とで交互に見てから、ミリアは溜息を一つ零して真つ赤な液薬をベルに差し出した。

「どうぞ、二本ありますけど今回は一本だけです。副作用は無いって話ですけど、絶対では無いので違和感を感じたら直ぐに地上に戻る、それでいい?」

「わかった。リリもそれで良い?」

「はい、お二人がそれでいいならリリは構いませんよ」

どうせ、リリに選択権なんてある訳無いのだから。

ベルは受け取った真つ赤な液薬を眺めてからコルク栓を抜いて一気に飲み干した。よくもまあ出所不明の液薬を口にできる物だ。もしかしたら危ない物が入っているかもしれないのに。

「どうです?」

「何か変わりましたかベル様」

「……どうだろう? あんまり実感は……んん?」

ベルがびくりと体を震わせる。やはり適当な薬だったのだろう。

「ベル?」

「いや、なんか……強くなった気がするかも」

「……異常は?」

「別に何も無いよ。それよりもモンスター居ないかな」

うずうすとモンスターを求めるベルの表情は特に違和感を感じるものではない。

「……そっちの方にモンスターが、でも数が多いですよ」

「今なら大丈夫な気がする」

「え、まあ……援護はしますけど、気を付けてね？」
ベルが一步足を踏み出し、モンスターの方へ歩いていくのを見て慌てて残りの魔石をバックに放り込んで後に行く。

其処に居たモンスターの数はキラアアントが八匹、普通の冒険者なら逃げる数だが、彼は大きく息をすってそのまま突っ込んで行ってしまった。あの液薬にそんな凄い効果があるとは思えないが。

期待はせずに援護しようと思き出したミリアの後に続いて動く。例え効果が無くともミリアの援護があればあの数はどうとでもなるだろう。

そんな予測は一瞬で粉碎された。

彼、ベル・クラネルの放ったナイフの一撃でキラアアントの甲殻が爆ぜた。

「え？」

ミリアの惚けた様な声が聞こえるがリリも同様に驚いていた。それはベルも同じだったのだろう。

ベルの動きがおかしい。先程までの動きよりも一段、リリが過去に見て来た第三級^{レベル2}冒険者の様な動きでキラアアントの頭を消し飛ばしたのだから。

爆ぜた頭と甲殻が飛び散り、キラアアントが動きを止め、ベルもまた動きを止めている。

先程までならその固い甲殻をもともせずナイフの切れ味で切断するのが限界だった彼の力が、アホみたいに上がっている。ベルがもう一匹に近づいて右手を突き出せば、その腕はそのままキラアアントの甲殻を穿ち固い筈のキラアアントの甲殻をベルの腕がまるで綿に手をつ突っ込むかのように貫通したのだから。

「凄いッ！」

「ええ……そんなに上がるのかあ」

言葉を失うリリの前で、ミリアの援護も無くベルが一人でキラアアントを血祭りに上げていく。腕を振るえば嘘みたいに甲殻が砕け、蹴

りでキラアアントが数十Mは吹き飛ばす。

この光景を見た事がある。第三級冒険者^{レベル2}が遊び半分でキラアアントを狩る時の光景がまさにこんな感じだったと思う。

瞬く間に、ベルがキラアアント八匹を仕留め、興奮した様に此方に戻ってくる。

「凄いよミリア、なんか力が凄く上がってるんだっ！」

「まあ、時間制限あるんで気を付けてくださいね」

困った様な、困惑した様なミリアの声を聞きながら、ミリアの腰のポーションポーチを見据える。其処にはもう一本同じ真っ赤な液薬が入っている。

信じられない話だが、あの真っ赤な液薬は器^{ランクアップ}の昇格した冒険者と同じぐらいに力を引き上げる効果を持つ液薬なのだろう。てつきり騙されて偽物を掴まされていたのかと思っていたがそうでは無い。

それ所か、ソレ一つでかなりの金額になる事は間違いない。それ所かそれを使えばリリだって……。

「ねえミリア、もう一本貰っていい？」

「ダメ」

「ええ……」

「ベル、エクセリア貰える条件ってわかってる？」

「……自身の限界を超えるぐらい頑張って漸く上がるって」

「薬を使って薬にあげるって方法じゃ上がらないでしょ」

「あー……そっか」

「それに憧れのあの人に薬を使って追いつくなんて恥ずかしいでしょ」

「たしかに……」

二人が話し合っている。ベルが頬を掻きながら視線を逸らしている。ミリアはベルをじつと見上げている。今なら……

件のサポーターの少女は報酬を受け取るでもなくぱつと居なくなった。最初の一回目はお試しなので無料で、もし今回のリリの仕事

が良かったのであれば声をかけてくださいと言って去って行った。

ベルのナイフは無事だし。何故か注目されてた俺の剣も無事。一体何が狙いだったんだが……とりあえず彼女の所属ファミリアであるソーマ・ファミリアについて聞き込みすべくエイナさんの所へやって来た。

「うーん……ソーマ・ファミリアのサポーターかあ」

「何かあるんですか？」

分かった情報はガネーシャ・ファミリアに教えて貰った情報と変わらない感じか。

「それより、二人から見えてどうだったの？ リリルカさんって人は」

「はい、とつてもいい子でした」

ええつと、ベル君にはいい子に見えたのね。凄く臭い子だったと思うんだけど。どう答えるかなあ。

「おかげで今日はこんなに」

「ミリアちゃんは？」

ううん……。

「そうですね。少しきな臭い感じはしましたが、どつちかはわかんないんですよ」

「どつちか？」

「根っからの悪人なのか、悪人に成らざるをえなかったのか」

「……？」

まあ、ベルはわからんわな。それよりも今回何も盗まれて……うん？

「ミリア、どうしたの？」

腰のポーチ、空き瓶が二本に中身入りが二本しかない。五本持って行ったはずなんだが。……あ、ドラゴニックポーシヨンが一本なくなってる。どつかに落つことした……訳無いな。盗まれたか。

「いえ、あの赤い液薬を落としたみたいで」

あいつに盗まれたとかわざわざ言う必要は無いか。試作品だし盗まれても困る事無いだろ。素材もキューイからいくらでもとれるし。

「赤い液薬？ 何の薬？」

「ステイタスの力を一時的にあげてくれる薬なんですよ。ランクアップしたみたいに一気に強くなれる薬でっ！」

「ベル、ストップ」

「何ミリア？」

興奮してるのはわかるが情報を零し過ぎ。まだ試作品だし売りに出せるもんじゃないから、あんまり知られるべきじゃないんだぞ。

「……そんな薬、聞いた事ないけど……何処のファミリア製？ 怪しい薬じゃないのよね？」

「何処のファミリア製なのかは言えません。まだ試作段階なので」「そっか……落としちゃったの？」

十中八九、盗まれたんだろうなあ。何時盗まれたのか……ベルと話し合ってたタイミングか。そこ以外浮かばん。剣とベルのナイフには注意払ってたけど液薬までは頭に無かったわ。出し抜かれたけど……まあいいか。

「……その薬、入れ物とかにエンブレム刻まれて無かったよね？」

「え？」

エンブレム？

「ほら、回復薬と違って製造元のファミリアのエンブレムが刻まれている事があるから、もし知らない人が拾って広まったりしたら困るんじゃないかって。それに試薬って事は他のファミリアに持ち込まれて調べられたら色々困るでしょ？ 大丈夫？」

……ええ？

「ミリアちゃん？」

えっと、手持ちの精神力回復特効薬マジック・ポーションの瓶には……ワアオ、ミアハ・ファミリアのエンブレムだ……。他のファミリアに持ち込まれたら……ディアンケヒト・ファミリアとかに持ち込まれたらちよつと考えたくない事態になるかもしれないね。

不味くね？

「ちよつと探してきます」

「えっと……僕も探すの手伝うよ」

やつちまったかもしれん……。

二人と別れてから自身の姿を金髪の有り触れたパルウムの少年の姿に変えてこつそりと行動を開始した。

『貴方の刻印は私のもの。私の刻印は私のもの』

裏路地を歩きながら真つ赤な液薬を光に透かして見る。この液薬を使えば自身も力を得られるのだろう。そうすればあのソーマ・ファミリアの団長を下して堂々とファミリアを抜けられるかもしれない。

……いや、リリでは無理だ。力を得ても勝利する姿が微塵も想像出来ない。

やはり売りに出す。裏路地にある『ノーム』の万屋の入口に立ち、悩みを断ち切って店の中に入る。

鑑定師としての目を持って真つ赤な液薬を鑑定するノームをじつと見つめる。これでタダの赤い液体だったなんて事になれば面倒だ。目の前で彼がこの液薬を飲んで凄まじいパワーアップを見せつけたのだからそれはないはずだが。

「竜系の素材を使った液薬だ。効果は不安定そうだが素材に相応の値段がかかるとる。力の増幅と言う珍しい効果も目を引くだろうなあ……そうじゃな。十五万ヴァリスだな」

目の前のノームの手の中にある真つ赤な液薬。力を増幅させる薬に提示された値段にガツポーズを決めて即決で頷く。

「じゃあ十五万ヴァリスでお願いします」

思った通りだ。相当に高価な素材を使っていたらしい。それも竜系の素材をふんだんに使ったその液薬。効果も竜系の素材を使われているのなら確かだろうとの事。

十五万ヴァリスと言えばそう簡単に集められる金額ではない。目標金額にぐつと近づいたのを感じつつ、ベルとミリアの二人を脳裏に思い浮かべた。

どうせ盗まれた事に気付いていないだろう。ベルはお人好しで警戒心は無さそうであったし、ミリアの方はベルにずっと視線を向けて恋にでも落ちてしているかのような様子で周囲に気を配る事なんて無さ

そうであつたし。

明日また二人と合流して……今度は長期的にベルのナイフとミリアの剣を狙う。もつと二人に近づいて……可能なら竜鱗の朱手甲も一緒に盗もう。

そうすれば目標金額なんてあつという間だ。

盗まれた事をあんま気にしてなかったけど、もしかしたらヤバイかもしれないと気付いて慌ててキューイに奴を探させてる。ベルの方はダンジョンからギルドまでの道中を探してもらって、俺は裏路地を……まあ、直ぐに見つかるはずなんだが。

「ミリアさんじゃないですか。どうしたんですかこんな所で？　ベルさんは一緒じゃないんですか？」

「ミリアさん？　お急ぎの様子ですがどうかしましたか？」

おお。裏路地を走っていたらシルさんとリユーさんに出会った。買い物かな。林檎が溢れてる袋を持つてるし。キューイは大人しくしてろ、後で別で買ってやるから。

「ええつとですね……ちよつと落し物をしてしまつて」

「落し物ですか？」

「何を落としたんですか？」

この二人もお人好しよなあ。急いで帰らないとミアさんにどやされるだろうに。まあいいか、一応特徴だけ説明しとくか。

「えつと、真つ赤な液薬なんですけど」

「……試験管に入った真つ赤な液薬ですか？　サイズはこのぐらいの」

リユーさんが手で示すサイズは丁度探している物と同じぐらいである。何で知つてんの？

「先程、パルウムの方がそんな液薬を手に眺めながら歩いていましたので……ミリアさんの物だったんですか？」

「え？　何処で見たんですか？」

「先程、その曲がり角で……大事な物だったんですか？」

あー、事情を説明。ううん……まあいいか。

「ちよつと詳しくは言えないんですけど、試作品の薬で……力を増幅させる物なんですよ」

「……なるほど、他のファミアリアに知られると困ると」

察しが良すぎて助かる。他のファミアリアに持ち込まれて解析なんてされてみる、どっから竜系素材が？　そういえばドラゴンテイマーがどうのこうのでガネーシャ様に迷惑かかる。ヤバイ早く捕まえな
いと。

「事情は理解しました、ミアアさんは此処で待っていてください……」

「あ、リユーちよつと待って……行っちゃった」

はええなおい。紙袋を手渡して直ぐに走って行ってしまった。あの人いい人やなあ。

「もう、勘違いだったらどうする積りなんだろ……リユーってやり過ぎ
ぎちやう事多いし」

……不穏な台詞がシルさんの口から聞こえてるけど無視だな。つ
てキューイやめろこの林檎はお前のもんじゃねえ。

第四十五話

十五万ヴァリスの詰まった袋を持ちながら思わず口元が緩む。こんなには稼ぐのは初めての事だった。新米冒険者は騙しやすいのだが、盗める武具は安価で苦労に見合わない事が多い。新米冒険者の安物武具なんて千ヴァリスで売れば御の字なのだから。

慣れた冒険者はそこそこの武具を身に着けているが、盗むのに一苦労する事が多い。しかしその武具の金額もせいぜいが数千から数万ヴァリスが限度。

それを考えれば今回の収入は非常に嬉しい物なのだ。

緩む口元を必死に締めながら歩く。早く拠点の倉庫にこれを入れてこないといけない。ここでソーマ・ファミリアの団員に見つかっていちやもんをつけられて奪われるのは勘弁して欲しい。

今は変身して姿を偽っているとは言えこの変身もあまり長時間行う事は出来ないし。

「その貴方、少々お聞きしたい事があります。立ち止まってください」

背後から聞こえた女性の声に足を止める。誰だ？ 貴方、と言うのはこの裏路地をこっそり抜けようとしているリリを差す言葉だろう。リリ以外に人影は無いのだから。

今はパルウムの男性の姿だ。大丈夫、普通に対応すれば問題は無い。

「はい、何か用でしょうか？」

そう言いつつ振り向けば、其処に居たのはエルフの女性。それも何処かの店の制服らしい物を着ている。一体誰なのだろう？ ソーマ・ファミリアの団員では無いのは確定だが、声を掛けられる理由が思い当たらない。

「いえ、少しお聞きしたい事がありました」

思わず顔が引きつりそうになるがなんとか堪えて微笑みを浮かべる。そう言えば盗んだ後に液薬を眺めながら歩いているさ中、あの女性ともう一人同じ服装の女性とすれ違った気がする。あの時は声を

掛けるでもなく普通にすれ違ったのだが、何故今になって声をかけてきたのか。

「貴方が持っていたモノ、あれは何処で手に入れた物ですか」

目つきが鋭く、威圧感を感じさせる彼女を流し見てから微笑みを浮かべつつ誤魔化す。何処かの店員なのになぜそんな事を気にするのかさっぱりわからないが、最悪この場から逃げれば良い。

「申し訳ないのですが、お答えできません」

適当に誤魔化してさっさとこの場を後にしよう。

「私の知り合いの冒険者の方が、貴方が持っていたモノとよく似た物を紛失したと言っていました。もしやと思い声をかけたのです。確認をさせていただけますか？」

ミリアの知り合いだったのか。面倒な事になった。どう答えるべきか。

「それはできません。あの赤い液薬は試薬で見知らぬ他人に見せる事なんてできませんから」

きっぱりと言い捨てれば件のエルフの女性は眉を顰め、口を開いた。

「そうですか……」つ質問よろしいですか？」

「はい、どうぞ」

これで問答もお終いだ。早くこの場を去ろう。

「何故、赤い液薬の事だと思ったのですか？」

……っ！ 鎌をかけられた。彼女の目を見ればほぼ確信した様に此方を睨んでいる。

「答えられませんか？」

目つきの鋭い彼女を見て笑顔を浮かべておく。どうするかなんてもう決まっている。

適当に走って逃げて撒いてしまおう。

途中で変身を解きつつ人混みに紛れば簡単に逃げられるし、この裏路地なんて何度逃走に使ったのか覚えてないぐらいなのだ。そこらのただの店員程度につかまる程じゃない。

瞬時に反転して走り出す。

「っ！ 待てっ！」

反応の遅れた彼女をそのまま撒いて——背中に衝撃が走った。肩に何かが当たり、手に持っていた袋が零れ落ちる。

「あ——っ!？」

足を止めかけ、後ろを見て思わず悲鳴を飲み込んだ。

後ろから追いかけてくる彼女から感じる威圧感はその店員だとは思えない程で——それこそ冒険者の中でも一握りしか居ない様な上位冒険者の様な威圧感を感じさせる。

捕まればただでは済まない。ヴァリスは惜しいが何より命の方が惜しいもの。泣く泣く大金を諦め、ヴァリスの袋を蹴っ飛ばす。中身が飛び散り、彼女の視線を遮る。一気に走り出して直ぐ角を曲がった。フードを深々と被り変身魔法の解呪式を唱える。

『響く十二時のお告げ』

これで方が一捕まっても大丈夫だ。とは言えこのままだと怪しまれるので人混みの中へを混じる為に急いで大通りへと出よう。

もう直ぐ大通り、後ろからはまだ彼女は来ていない。よし、このまま——

「うわっ」

「っ！」

大通りへと飛び出した瞬間、横合いから飛び出て来た人影に体当たりをする形で倒れ込んでしまう。倒れた拍子に打ちつけた肘の痛みを堪えつつ立ち上がりながら声を掛けようとして、先んじて相手に声をかけられて思わず固まってしまった。

「ごめん、君、大丈夫？」

この声は——不味い。ベル・クラネルだ。

今は変身魔法を解いて本来の姿に戻ってしまったている。今この姿を見られれば怪しまれる。運の良い事にフードは目深に被っているので誰か判別されていないが。このまま起き上がって走り去ろうとするが、其れより早くエルフの女性が追いついてきた。

「クラネルさん！ 彼を取り押さえてくださいっ！」

「え？ リューさん……えっと、わかりました」

肩を掴まれ動きを制限される。不味い——不味い、不味い、不味い。このまま捕まったら明日からベルのナイフなんかを狙いにくくなる。声を押し殺しながらも魔力暴発を引き起こさないように意識を集中して犬人の姿に変身する。

「追い詰めましたよ。話を聞かせてもらいます」

「えっと、リユーさん。どういう事なんでしょうか……」

「話は後で、まず彼に聞く事がありますから」

『貴方の刻印は私のもの、私の刻印は私のもの』

おねがい、気付かないで。

リユーさんの後を追いかけたら、なんかヴァリスが裏路地に散らばっていた。何を言っているのかわからないと思うが、俺も何がなんだかさっぱりだ。

「なんでしようこれ」

「……とりあえず集めます？ 落とし物ですし」

シルさんの言葉を聞いてヴァリスを集め始める。散らばったと言ってもそこまで派手に散らばってる訳では無く、放射状に散らばっている辺りなんか落としてぶちまけたと言うよりは、落ちてた袋を蹴っ飛ばして中身をぶちまけた感じだったな。

大急ぎで集め、リユーさんの後を追う。どっちに行つたのかわからなかったんだが、シルさんがこっちですと自信満々に進むので其方に進めば大通りで小柄な外套姿の人物の肩を掴んで抑えるベルと、仁王立ちして睨むリユーさんの姿があった。

「リユーっ！」

「シルですか。ミリアさんも……彼を捕まえました。十中八九、彼が赤い液薬を盗んだ犯人でしょう。問いただそうとした所、逃走を図ろうとしましたから」

ああ、うん。疑わしきは罰せよだっけ？ 違うわ。怪しかったから問い詰めようとしたら逃げたかあ。でもリルカは女だから彼ってのはおかしいよな？

と言うかベルが捕まえてる理由は何だ？　ベルの方は大通りで落ちてないか調べる様をお願いしたんだが。

「ベルは？」

「えっと、僕は……なんかこの子が急に飛び出して、リユーさんが捕まえてって……何がなんだかさっぱりんだけど」

「なんというか。縁があるねえ。んで目の前の彼、俯いてフードを深くに被ったまま微動だにしないんだけど。と言うか彼？」

「では、もう一度聞きます。赤い液薬について答えてください」

「……知りません」

「うん？　この声、リリルカだよな？　でもリユーさんが彼って……」

？

「……？」

「リユーさん、彼……？」

「えっと何処かで聞いた声の様な？」

リユーさんの発言の違和感に気付いたのかシルさんが首を傾げ、俺も疑問を呈しておく。ベルがリリルカの声に気付いて首を傾げている。

「なっ……」

驚きの表情を浮かべたリユーさんが、フードを取り払う。

ベルに両肩を掴まれ、逃走出来ない様にされた少女、リリルカ・アーデが脅えた表情で顔を上げた。涙目のまま震える彼女が口を開いた。

「何がなんだかわからないのですが。リリはこれからどうされるのでしょうか……」

「リリ？　えっと、ごめん」

ベルが驚いて手を離す。

「別人……まさかっ！」

リユーさんが裏路地を睨んで舌打ちをした。怖え。

「……すいません、どうやら人違いだった様子です」

「そうなの？」

「はい、先程逃げられたのは金髪碧眼のパールウムの男性でした。彼女ではありません」

ふうん？ どういうこつちやねん。 まあ予測を立てるとするならー……そうだな。変身してたとか？ 現物見ていないからなんとも言えないが。

「くつ、すいませんミリアさん。有力な情報を持った相手をみすみす逃がしてしまうとは……」

「あの、リリはどうすれば……」

「……こちらの思い違いで迷惑をおかけしました。本当に申し訳ない」

頭を深々と下げるリユーさん。なんつーか……いや。なんとも言えんか。

「それよりもリユー、このヴァリスが散らばってたんだけどどうしたの？ かなりの金額だけど」

締めて約十五万ヴァリス程か。少し足りない気もするが全部を拾い集めるの出来なかったしな。

リユーさん曰く、彼が落とした物らしい。大方、近場で換金した後
の金だろうとの事。落し物としてギルドに出すよりは俺が貰うべき
とかどうか。

何より困ったのは赤い液薬が行方知れずになった事。まあ、リリル
カ辺りを問いただせばボロが出そうなんだが、そそくさと逃げて行っ
てしまったのでそれもできず。それにあの場でリリル力を締め上げ
る理由も無かったからな。何とも言えん。

リユーさんには頭を下げられるし、ベルも困った顔をしてた。

落とした液薬については諦める他ないと言う事でベルには帰って
貰った。気になっていた様子だが俺の不注意が原因だし、お金だけは
入ってきたので……。

近場で赤い液薬の情報を集めるのはどうかって話もあるだろう。
ただ、盗品を取り扱ってる店ってのは基本的にそういった売り手の情
報を渡しはしないだろう。そもその話、そんな盗品を取り扱う店な
んで常連か紹介でしか入れないだろうから調べようが無い。

「と言う訳で、赤い液薬は諦める事になりました」

「……ねえミリア。それについてはまあしようがないと思うけど、不注意過ぎる」

目の前のカウンターで目の下に隈を作っとうとうとしていたナアーザさんに頭を下げて謝る。

ちなみに悪い事ばかりでは無く、良い話も少しだけある。少しだけだけ。

まず、今回盗まれた赤い液薬がディアンケヒト・ファミリアに渡る事はありません。と言うか力が増幅する薬ですよくなんて言っても紛い物と思われるのがオチで、ディアンケヒト・ファミリアはまず取り合わないだろうとの事。万が一調べるとなった場合は困るだろうが、それこそ有名ファミリアがどうしても頭を下げこんでこない限りそんな出所不明の怪しい薬なんて調べる事をしないと断言した。ナアーザさんが。

それにもし調べられても神ディアンケヒトはよもやミアハ・ファミリアで開発されたモノだとは思わない。と言うか認めないと言う。なんかミアハ様を見下してるから云々。

プライドが邪魔してミアハ・ファミリアが開発したつてのを認めないのでバレないだろうとの事。

瓶については正式な製品じゃないから、エンブレム入りの瓶には入れてないらしい。なんつーか助かったよマジで。

まあ、俺の不注意については怒られた訳だが。

「それで、このお金はどうすればいいの？」

「ああ、それなんです。効果を安定化するのに資金が足りないって言うってたじゃないですか？」

「……まあ、そうだけど。まさか？」

件のお金は結局俺の手の中に。どうすりゃいいのかわからんしリユースさんも堂々と貴女が貰えば良いって言ってたから持ってきちゃった。てへぺろ。

まあ、裏路地で大金を持つてる奴なんて大抵碌な奴じゃないから気にするなって言ってたしね。なんかリユースさんが怖い表情してたわ。

なんかそういうった人種に恨みでもありそうな感じ。踏み込む真似はしないけど、リユーさんって過去になんかやらかしてそうで怖いわ。良い人なんだけど、良い人過ぎていき過ぎそうっていうか。

「そのまさか、開発資金に使ってください」

「……落し物なんだよね？」

「はい」

ナアーザさんの此方を見る目が若干痛い。痛いけど、これで効果を安定させればもっと使い道も増えるだろうし、特にリジエネの方はもっと効果時間をがつつり伸ばしてほしい。

「……はあ、わかった。受け取る……けど、先に言っておくけど、上手く行くかはわからないわ」

「それについては重々承知してますよ」

むしろ、お金渡して「頼むわ」だけで上手く行ったら怖いわ。

「わかった」

「ああ、後これ、ベルが一本飲んだので使用感なんかをまとめた物です」

ベル君が件の力増幅の薬を飲んだ時の使用感なんかをメモした紙を渡す。まじまじと紙を眺めるナアーザさんの顔を見詰めるが、なんつーか目の下の隈が酷い。ぶっ倒れやしないだろうか？

「……ランクアップ並の力の発揮……時間は……30分？ 本当は？」

首を傾げつつ疑問を呈してきたので素直に答える。嘔吐く理由は何処にもないのでね。

「……ミリア、この薬について少し説明するんだけど、効力と効果時間は反比例してるの」

「はい？ えっと、つまり力の上昇量が高い場合は効果時間が短く、効果時間が長い場合は力の増幅が弱くなる？」

「そんな感じになるはずなんだけど……おかしいわね。ベルに異常はあった？」

「いえ、特には……若干、好戦的になってたような気はしますが……」

モンスターを自ら求めて捜し歩くぐらいしてただけど、あれは力が増幅したのが楽しくてそうだったのか、薬の効果なのかわからんなあ。

「とりあえずもつと渡しておくから、良ければ使用感を教えて。後、少し追加で素材が欲しいんだけど」

「あ、はい。キューイ」

「キューイ？」

「えっと、何の素材が必要で？ 鱗とか？」

台の上にキューイを乗つける。何々と首を傾げる仕草は愛らしいんだが。なんかなあ。

「あつたあつた。はい林檎」

「キューイツー！」

「鱗を少しお願い」

「キューイキューイ!!」

差し出された林檎、三つも貰ってらあ。

並べられた三つの林檎にやる気を出したキューイは首をひねって背中の鱗の部分を牙でがりがりーつと削り始める。正気を疑う光景だがキューイは自身の背中の鱗を筆り取ってナーザさんの用意した入れ物の中に入れていく。

血が滲む痛ましい光景なんだが、キューイは林檎が貰えると分かる自分で自分の鱗を剥いだり爪を引っこ抜いたりするんよなあ………
見てるだけで痛い。

「これぐらいでいいよ………」

ナーザさんもドン引きじゃん。差し出された林檎に齧りつくキューイから視線を外してナーザさんと真正面から視線が交差する。

「……ねえ、キューイツてき。林檎の為になんでもしそうんだけど」「するんじゃないですかね？」

「……………危なくない？」

林檎の為に自分の爪や鱗を筆るとか。人間からしたら狂氣的なんだろうが……。

キューイの方に視線をやれば、先程筆って血が滲んでいた背中の鱗部分は元通りになっていた。治癒能力高すぎじゃない？ 数十秒で血が滲む様な怪我……怪我？ が消えてなくなってるぞ。

第四十六話

朝、噴水の所でリリルカと合流した。ベルが昨日のリリの働きが良かったからもう一回と言ったのだ。リリの方も乗り気だったのでと言った感じ。

大方、昨日得られなかった利益の回収目的ではないのだろうか。ダンジョンの入口を下りて七階層に入った辺りでリリが唐突に口を開いた。

「お二人とも、リリを正式に雇って頂いてありがとうございます」

笑みを浮かべ嬉しそうに声を弾ませた口調で喋るリリ。演技臭さが見て取れるが、ベルの方は気付いていないらしい。

「そういえば、ベル様。あのナイフが見当たらない様ですが？」

……目敏いな。まあ、狙ってるなら直ぐ気づくか。ベルのナイフは無くさない様にグリーン・サポータの中に入れたのだ。中にナイフを納めるスペースがあったのでそこに入れる様に言っておいた。腰に入れといた俺の龍力薬を無くした事を例に出してベルを説得したんだよな。

私みたいに無くしちやったら大変だよって感じで。

「うん。ミリアが薬を無くしたんだよね。同じ様にナイフを無くさない様にここに収納したんだ」

「……そうですか」

狙い辛くなったとでも考えてるんだろうね。目付きに変化が出てる。自分で鏡見ながら練習した方が良さぞ。表情に出てるからな。……気持ち悪いな。

「お二人の装備、変わっていませんね」

「え？　なんで？」

不思議そうに首を傾げるベルに対し、リリは無邪気な表情を浮かべている。見ると吐き気がする光景だ。出来うるなら顔をグープンしたいが堪えよう。

「いえ、昨日お二人が大金を何処からか手に入れていた様子なので、そのお金で装備の新調を行ってはいないのかなと、十萬程あればその不

相応なナイフなんかにつり合いがとれそんな防具類も揃えられるでしょうし」

……なんつーか、無邪気な表情で皮肉を交えた言い方をするって小器用な奴だな。

「昨日のお金に関しては例の薬の作成ファミリアに対して、お渡ししましたよ」

「お二人で使わなかったのですか？」

「試作品の紛失と言うのは、一歩間違えれば大変な事になりますからね」

流星に一ダース奪われたりすると、数本が本物って事になって本格的に調べようとするファミリアが出てくるからアウトだけど、一本二本程度なら使った本人が『こんな凄い薬が有った』と吹聴しても調べようが無いので問題ないらしい。

「そうなんですね」

「それよりも、契約金とか良いの？」

ベルの質問も尤もだな。タダより高い物は無いって言うし。実際の通りだと思う。まっとうにお金払ってちゃんとしたサポーター雇う方が絶対安上がりで済むだろ。大事な物なんかを盗まれて大騒ぎになるぐらいならね。

「はい、お二人は既に完成されたパーティーですので、配分もややこしい事にはならないでしょうから」

顔を伏せ、表情を隠した積りになっているリリルカは口元に暗い笑みを浮かべて呟く様に言葉を零した。

「それに、其方の方が都合がいいでしょう？」

……サポーターの扱いは非常に悪い。危険な最前線に居ない癖に、ただ落ちてる魔石とドロップ品を集めるだけなのに、そんな簡単な仕事しか出来ない奴に配当金を？ そんなの無駄だろ。そう言っって冒険者はサポーターを目下に見てる。だからこそリリルカの言葉はそう言う事だろう。

あらかじめ契約金を払う冒険者なんて居ない。成功報酬だっって貰えることの方が少ない。そんなほの暗い感情が見え隠れしてる。

可哀想だとは思いう。同情もしよう。だが俺に何かが出来る訳でも無い。視線を逸らしてベルの方を向けば不思議そうな表情を浮かべてる。リリルカがどういった感情を冒険者に抱いているのか察する事はベルには出来ないだろう。純粹過ぎて、表向きの契約を正しい物だつて見てるベルには、無理だろうなあ。

魔石集めを終え、換金所へ魔石やドロップ品を預けてテーブルに腰かける俺、ベル、リリの三人で談笑。と言うより時々リリが皮肉を交え、ベルが其れに気付かずに微笑み、俺も気付かないふりをして微笑めば、リリルカが悔しそうに顔を顰めると言った談笑と言えば談笑なんだが、なんかギスギスしてる感じだ。

まあ、ベルは気付いていない様子だが。

「それにして今日の換金は少し時間がかかっていますね。何かあったのでしょうか？」

「そうだね。確かにいつもだったらもう換金も終わってるはずなんだけど……」

ベルとリリの言う通り、今日はなんか換金に時間がかかっている。

……少しアレを実行するか。

「ちよつと確認してくるんで、荷物お願いしますね」

「ああ、僕も行くよ」

「そうですね。でしたらリリ、荷物の方お願いします」

笑みを浮かべて腰のポーチをリリの居るテーブルの上にこれ見よがしに置いておく。その中身は盗まれても問題ないただの回復薬が一本と、精神力回復特効薬の空瓶が一本。後は新米用のナイフが入ってる。

そして重要なのは『龍力薬』が二本入ってる所。これでリリが盗むなら黒。盗まないなら白。と言うより盗んだら盗んだで後を追って捌いた場所を特定しようと言う魂胆だ。ついでにリリが黒なら適当に釘差しでもしようかなと。

ベルと一緒に換金所へ行けば、受付のおっさんさんが此方を見つけ

て慌てて換金金額を提示してきた。その金額はー……え？ 34, 840 ヴァリス？ 何それ怖い。

「ぎ……さんまんせんヴァリスっ!？」

「あっあっあっ、夢じゃないよねっ!? こんなにお金が入るなんて!」
「お二人とも凄ーい。お二人でレベル1五人パーティを上回る額を稼いでしまいましたよ!」

つむじをつき合せてベルとリリがテーブルの上に置かれた換金されたお金を眺めて叫ぶ二人。おーい、ここ一応公共の場だからあんまりお金が云々叫ぶのは良くないぞー。と言うか良くない奴に目つけられるぞ。

「二人とも落ち着いて」

「あぁごめん」

「そうですね。ではお二人方……そろそろ分け前を……」

視線を逸らしつつ、期待していないと言う様子でとりあえず言ってみたって感じだな。まあ目の前のテーブル見りやそうなるか。袋は二つ分しか無い訳だし。片方は少し少な目、もう片方は大目。と言うか1/3と2/3に分けられた袋である。取り分はどういう配分になるのかわかって無い様子だな。大方、最前線で戦ったベルが2/3の方を、魔法が使える俺が1/3の方をとか考えてるんだろ。

「はいこれ」

「……え?」

惚けたアホ面晒すりりから一応視線は外しておく。予想外の事態に完全に仮面がはじけ飛んでる。腹抱えて笑いたいぐらいだわ。

「ねえミリア、これだけあれば神様に美味しい物食べさせてあげられるかな」

「無駄遣いは良くないですけど。まあ今日ぐらいは良いと思いますよ。何買っていきます?」

まあ、ベルはそこら辺アレだから換金所で3等分してくださいって

お願いしてたんだけどね。2/3の方が俺とベルの分だ。要するに頭割だわ。なんつーかベルはそこらの冒険者なんかと違うんだよなあ。

俺だったらとりあえず7対3ぐらいに抑えるかなあ。補助として役に立っては居たが最前線のベルが一番怪我とかしてたし。

「ああそうだリリ、良かったらこれから一緒にご飯を食べない？」

「ベル様っ！　なんで頭割なんて……お二人だけで山分けしようとか、お二人は思わないんですか?!」

ド直球に聞いてきたな。表情を取り繕う事も出来ず、素の反応が見て取れる。元はこんな感じの子なのか。ツツコミが良く似合う子だ。

「え？　どうして？　僕達二人だとこんなに稼げなかったよ？」

「そうですね。私が荷物持ちできませんでしたから」

俺が荷物持ち出来ないから、前衛のベルが荷物持ちを代わりにやっていた訳だが、荷物と言う重しはなかなかベルのコンディションに悪影響を及ぼすので、これまでだったらある程度集まったら地上に戻るつてのを繰り返してたんだよなあ。後はマインドダウンするどつかの糞チビの所為ですね。俺じゃん。

「リリが居てくれたおかげだからね。そのお金は全部リリのおかげだよ」

「私達が普段稼いでいたのって大体6000ヴァリス前後でしたからね」

まあ一回にかかる時間が段違いと言えばそうだけど、一日に二回6,000ヴァリス稼ぐのと、一回で22,000ヴァリス稼ぐのじや大違いだからな。

「ありがと、これからもよろしくね」

笑みを浮かべて手を差し出すベル。夕日も赤いこの時間に見るベルの目は本物の宝石の様に綺麗で透き通ってる。見ていて清々しい目と言えば良いか。邪念の無いその目は見ていると引き込まれそうになるからなあ。

「……はい、よろしくおねがいます」

俯きがちになりながらも、ベルの手をとったりリリ。こいつも俺と同

じ様に真つ直ぐな道に戻れるのか。いや、俺は真つ直ぐな道を落ちない様に歩いてる薄汚れた奴だけど……こいつはまだ落ち切つてない。ダンジョン内で後ろから不意打ちと言った事をしなかったり、回復薬と偽って毒物を飲ませようとしてこないからな。前世の俺ならとりあえず毒物混ぜて痺れさせてモンスターに片付けさせるだろうし。彼女がどつかに落ち切る前に、戻れる道を差し示せば良いんだが。

「変なの……」

最後に呟かれた言葉に混じっていたのは困惑と疑念だろうか。

彼女とは酒場の前で別れた。と言うか豊穰の女主人の入口でリユーさんを見た瞬間にリリが青褪めて『やっぱ予定があるので』と言つて去つていたんだ。

まあ、仕方あるまい。彼女は黒だったんだから。

換金の時にリリに預けたポーチの中から、龍力薬が一本消えていた。間違いないだろう。ただ、二本共持つていかない辺り、多少は思う所があるんだろう。と言う訳だから俺はリリの追跡中。

後をつけると言えばストーカーを思い浮かべるが、まああそこまで露骨にはしない。キューイが居るしな。キューイに指示を出して後をつけると言うかりりの通った道を通るだけだ。見える範囲にリリは居ない。

「キューイ？」

うん？ どうしたんだキューイ。

「……キューイキューイ」

人？ 数人？ リリルカを囲んでる？

細道の奥、小さな少女を三人の男が囲んでいる。リリの手には袋。

「ほう、今日の稼ぎはいつもより良かったみたいじゃねえか」

確か狸人^{ラッキー}って言うのか？ あからさまに悪人面した奴がリリから

金を奪い取った。その拍子にリリが尻餅をついた。

奪われた袋は今日、俺とベルと一緒に稼いだ金だろう。

「だが、まだこんなんじゃないや全然足りねえなあ。アーデ」

……脅えた雰囲気で縮こまるリリルカに対し、三人がかりで威張り散らす塵クス共が其処に居た訳だが。

問題はあいつらがソーマ・ファミリアだって事だ。ここで俺が飛び出して魔法で撃ち抜くのは簡単なんだが、それをすればソーマ・ファミリアと事を構える事態に発展する。そうなったらヘスティア・ファミリアは吹き飛んで消える。跡形もなく。それは困る。だから見て居る事しかできないし、彼女に救いの手を伸ばせない。

「お前みたいな役立たずのサポーターが、俺達ソーマ・ファミリアに居られるのは誰のおかげだ？」

「ぼ……冒険者様のおかげです……」

脅え、縮こまる彼女を足蹴にし、その糞野郎はほくそ笑んでる。さぞ楽しい事だろうよ。自分より弱い奴をいたぶるのはさ。あの糞女がまさにそんな感じだったしな。死ねばいいのに。つかファミリアなんてしがらみが無かったらここで撃ち殺してやるのに。見てくれも全然違うのに、あの糞野郎と糞女が重なって見えてくる。殺したい。

「おいアーデ、お前その液薬なんだよ」

「あん？　おいアーデ、それを寄こせ」

「えっ……これは……」

「ああ？」

「……どうぞ」

完全に脅迫現場だな。手出しできないのが本気で辛くなってきた。キューイは『何してんの？　馬鹿なの？』と不思議そうに首を傾げてる。そりゃあワイバーンには人間様の高等な考えつてのはわからんだろ。

つか、龍力薬奪われたっぽいな。リリが何処で売り捌いたのか調べる積りだったんだが、昨日の発見位置と全く違う場所に向かった当たりで気付くべきだったか。どうするかなあ。

「アーデ、これは何だ？」

「……………」

「答えろ」

「……一時的に力が上がる薬です」

真面目に、嘘一つ無い返答を零した彼女に与えられたのは腹に響く一撃。砂袋でも蹴つ飛ばしたかのような音と、咽る声が響くのを聞いた。いまずぐ飛び出したいがしてはいけない。ヘステイア様とベルに迷惑がかかる。其れは出来ない。

響く馬鹿笑い、咽る彼女の声。馬鹿にした言葉がいくつも彼女に降り注ぐ。馬鹿野郎、そいつは俺の知り合いが作ったれっきとした試作品だ。テメエらみてえな屑が触って良いもんじゃねえんだぞ。

「んなもんに騙されねえつての。んぷつ、ほら飲んでみたけど全然力なんてあがりやしねえ」

ゲラゲラと笑う三人組の声、ムカつく。

「おいおい試しもせずそんな事言うなって、其処に丁度良いのがあるだろ？」

「やっちまえよ」

「おおいいぜ。アーデ、動くなよ」

……待て、アイツ等何する気だ？

蹴られた、そう感じた瞬間に天地がひっくり返り、幾度も地面なのか壁なのかわからなくなった固い物に体をぶつけ、階段を転げ落ちて空を見上げた。薄れ、霞む視界の中、怒鳴り声に近い誰かの声が聞こえる。

多分、『本物だったのか』とか『この薬は何処の物だ』とか『教えろ』とか怒鳴っているんだと思う。

何時も奪われるばかりだ。冒険者が嫌いだ。目の前で唾を飛ばして叫ぶ冒険者の為に頑張ろうなんて思えない。

口を開こうとして、喉の奥から鉄錆の味が溢れて来た。

驚き、此方を手放すその男。その所為で後頭部を強かに打ちつけ、

鈍痛が——しない。頭に響いたのは衝撃だけで、痛みは一切無かった。

ああそうか。自分は此処で死ぬのか。

自覚した頃には、目の前に誰も居なくなっていた。きつと、自分がもう喋ることも出来ないぐらいに致命的な大怪我を負ったから見捨てたんだろう。そう言う奴等だった。

——気が付いたら、其処に居た。

お金の為、ダンジョンに潜り、呆気なく死んだ親。

生きる為、ただ生きる為に必死に足掻いた。

いたぶられ、筆り取られ、逃げて、隠れても、見つけ出され。

居場所は、奪われた。

全て、全て冒険者の所為だ。

だったら、奪い返したって良いじゃないか。

——悪い事だつて知つてた。

だから、リリは悪い子なんだつて。

助けなんて来るわけがない。あの時だつてそう思つてた。

怪物祭、なんとなく、お祭りが楽しそうで、陰鬱とした毎日を少しでも払拭できないかつて、ほんの少しだけ期待して、そしてその期待が儂く弾けて消えた後。

トラブルが起きた。モンスターが逃げ出して、危ないと叫ぶ声が聞こえて、小柄な自分は突き飛ばされて倒れて、足を痛めて動けなくなつて。

気が付いたらモンスターの前に居た。甲殻虫を思わせるモンスターの前に。

思わず、思わず呟いた。助けてつて、でも答える人なんて居る訳無いつて自分で思つてた。

冒険者が助けてくれる訳がない。だつて周りにいた冒険者は皆我先にと逃げ出したのだから。そんな中で突き飛ばされて足を痛めた

少女が居たって、誰も手を伸ばさない。冒険者はそう言うものだから。そう思ってた。

それでも、助けてって言った。言ってしまった。怖くて、死にたくなくて。

そしたら——そう、そうしたら。彼女が現れたんだ。血に塗れた彼女が現れた。後ろ姿だった。あの世へ連れて行く案内人かと思っただ。

彼女は、モンスターに攻撃した。そこで彼女が血塗れになっているだけの冒険者だって気付いた。

冒険者が何で？ そんな疑問を覚えた瞬間に、彼女に抱えられて、それから投げられた。

冒険者に投げられた事は一度や二度はある。それはモンスターの群れに襲われた時に、囷としてモンスターの群れに放り込まれる時ぐらいだったが。

だから、彼女も同じ様にするのかと疑った。でも違った。

彼女に投げられ、強かに石畳に打ちつけられた。痛みで視界が眩んで、気が付けば彼女がモンスターに啜えられていて、自分は助けられただって気が付いた。

彼女を顎で啜え、噛み千切らんとするモンスター。思わず手を伸ばした。

やめてくださいって。悪い子のリリはどうなっても良いから、その人を殺さないでって。

自分が死ぬのはもう何とも思わない。けれども、良い人が死ぬのは嫌だ。

次の瞬間にはモンスターがはじけ飛んで、彼女が投げ出されて地面に叩き付けられていた。身を起こして赤い小さなワイバーンに頼ずりされていた彼女。

お礼を言おうと身を起こした。お礼が言いたかった。ただ彼女にお礼が。

だが、彼女は何かに気付いたかのように走り出してしまった。足を痛めていた自分ではとても追いつけなくて、結局今日まで見つかつて

いない。

ワイバーンを連れていた事から、彼女が竜ドラゴンを従える者と呼ばれるガネーシャ・ファミアの冒険者だとはわかったが、ガネーシャ・ファミアの入口を張っても全然出入りしている様子はなく、諦めざるをえなかった。

そういえば、彼女にお礼が言えてなかったな。

走馬灯の様な光景が過ぎ去り、目の前の光景が追いついてきて、空に浮かぶ月が小さな隙間から区切られた空に見える。

お礼の一つも言えずに死ぬのは嫌だな。

蹴られた後、お腹の中で暴れていたはずの熱がどこかに消え去って行く。命と言う何かが零れ落ちていつて、自分は死ぬ。ここで終わり。

ただ生きる為に足掻いて、冒険者に奪われて、奪い返して……そして殺される。なんてあつけない終わりだろう。

嫌だな。そう思った。だから——たすけてって呟いてしまったんだ。

目の前が暗くなっていくさ中、あの時助けてくれた彼女の姿を見た気がした。

第四十七話

「うぐああああああ」

ヘステイアファミリア本拠、廃教会の隠し部屋に響く神ヘステイアの呻き声。昨日ミアハ様に聞いた話によれば、昨日の帰りにどうにもベルとリリと俺の三人が仲良く歩いているのを見かけ、何を勘違いしたのか『新しい女の子と浮気してる』だのと言って自棄酒をしたらしい。

それで酷く二日酔いに陥るだろうからと帰りにミアハ様から受け取った二日酔いに効く薬をベルに手渡しておいたから、大丈夫だろう。多分。

「大丈夫ですか神様……あの、これ薬です」

無言のままベルの手から水と薬を奪い取ってごくごくと喉を鳴らして水を飲むヘステイア様。二日酔いの経験は数える程しかないが、水を飲むのすら辛かった記憶がある。まあ、症状なんて人其々だし俺が重かっただけかも知らんが。

「……神様、どうかしましたか？」

そつぽを向いたヘステイア様に恐る恐る質問を飛ばすベル。そういやもう朝なのか……結局、昨日から寝てないからぼんやりしてんだよな。……リリには悪い事したなあ。

「なんでもないさ……」

ベルの方は何がなんだかわかって無いみたいだね。まあ俺もミアハ様に教えて貰ってなかったらわかんなかったし。ああ、気持ち悪いなあ。

「ミアアも大丈夫？ 顔色悪いけど……」

此方を心配そうに見てくれるベル。そりゃまあ、部屋の隅つこで膝抱えてりゃ心配もされるか。

「大丈夫ですよ」

昨日の件はもう忘れたいぐらいの失態だ。彼女が半殺しにされるのを指咥えてみてたんだからさ、しかも半殺しになった原因はほぼ間違いない俺だし。

困った様に頬を掻いてそつかと呟いたベル君は、まあなんだ、適当に言った俺の言葉に騙され……騙されたと言うよりは雰囲気で察してくれたのかな。悪い事した。気持ち悪い。

「ええつと……神様、こんな時なんですけど……次のバイトのお休みつけていつですか」

「なんでだい？」

恐る恐ると言った感じで切り出したベル、そういえば昨日稼ぎが多かったから豪華な食事がどうか言ってたなあ。その話かな……二人で思いつきり行つてくると良いと思う。俺は——ちよつとダメそうだ。気持ち悪い。

「実は最近、ダンジョンで沢山稼げる様になって……神様に恩返ししたいなって僕、だから行きませんか。三人でちよつと豪華な食事にも……」

こんな状況でも俺も含めるとか……ああ、神様に恩返しか。俺も恩返ししたい……したいけど……。

「デート……」

嬉しそうと言うか二日酔いはもう吹き飛んだのか。ミアハ様の薬が凄いのか、ヘスティア様が神様だからか……復帰早いなあ。俺の方は——どうにもなんねえなこれ。薬でどうにか……なる薬はありそうだが、違法薬物とかになりそうだな。頭があつぱらぱーになる薬とか今の俺にぴつたりだわ。

「今日行こう」

「へ？」

「今日行きたい」

「え、でも」

「今日行くんだっ！」

ベル君に詰め寄るヘスティア様。ほんとに治ったのか。ミアハ様凄いなあ……リリも完璧に治してくれたし感謝の言葉しか出てこないわ。あー……医療費について聞くの忘れた。また後で行かなきゃ。

「た、体調は……」

「もう治った。流石ミアハ」

ぴよんぴよんとベッドを飛び越えてクローゼットの中を覗いて、何かに気付いたのか動きを止めて臭いを嗅ぎ始めたヘステイア様。そういや俺もシャワーすら浴びてないわ。今の俺臭う……うわ、よく見たら少し血がついてるじゃん。これ落ちないよ……どっかでロブ買ってこなきゃなあ。

「くんくん……ベル君！ 六時に南西のメインストリート、アモーレの広場に集合だ！」

頷くベル君を余所に……六時に南西ね、了解。それまでに……今日はちよつとダンジョンおやすみしてミアハ様の所いこ。

「あ、はい。わかりました」

「と言う訳でーミリア君も……うん？ ミリア君？」

ミアハ様の所にリリが……いるかなあ。もう目が覚めてどっか行っちゃったかなあ。怪我は綺麗に治ったって言ってたけどなあ。

「ミリア君、おい」

アレは俺に言った言葉じゃない。きっと誰かと勘違いしたんだろう。そのはずだ……そのはずで……間違いない。ああ、なんか凄く……気持ち悪い。

「ミリア君……君も一緒に行った方がよさそうだね」

うん？ ヘステイア様？ 行くってどこに？

翼の生えた獅子の口から溢れるお湯、だだっ広いお湯の張られた湯船。学校にある様な25mプールより大きいと言えばその湯船がどれほど大きいのか想像がつくだろうか？

周囲を見回せば居るのは女神、女神……そして女神。全員がタオル一枚で体を隠すのみ。その下には生れたままの姿が……いやまって、なんで俺は女神専用のお風呂に来てるんだ。浴場と言った方がいいのか？

「ベル君とデート♪ ベル君とデート♪」

「あの、ヘステイア様」

「なんだいミリア君」

周囲の女神から放たれる微妙な神威の所為でリラックスとか不可能ツス。

「本当に私が入って良かったんです?」

気が付いたらヘステイア様に言い包められて一緒に大浴場の片隅、ジヤグジーに並んで入る事に……ヘステイア様の胸が噴き出る泡で揺れる揺れる。

「堂々としてれば問題ないさ」

本当ですかそれ……いや、神威でびくびくしちゃうんだけど。本当に大丈夫なんですかねえ……。

「あら、ヘステイア?」

ヘステイア様の知り合いの女神様か?

「ああ、デメテル」

デメテル……デメテル様、うわ……ヘステイア様よりでけえ。

蜂蜜色の髪に豊満な胸、柔和そうな笑みを浮かべた女神が其処に居た。ヘステイア様よりも胸がデカいと言うだけでなく、背の高さも丁度いい感じ。ヘステイア様の様なロリ巨乳ではなくまさしく完成された美女だろう。

……怒られたりしないよね。

「久しぶり」

「そして其方の子は……貴女の眷属かしら?」

「ああ、僕の眷属のミリア君さ。ミリア君、彼女はデメテル、悪い奴じゃないよ」

普通に眷属だつて思われてるし……。いや、見ればわかるのか。

「珍しいわね此処に眷属を連れてくるなんて」

「やっぱ眷属が入ったら不味いですかね……」

不味いつて言われたらどうしよう。

「別に問題は無いのよ……でも、神ばかりだから気疲れしちゃうでしょう? 眷属が入ってくる事って珍しいのよね」

ああ、納得。女神専用では無いけど女神が基本客だから神威なんかが充満してて普通の人間じゃ気疲れしちゃうってリラックスも出来ない感じか……当然過ぎる。

「それにしても……相変わらず大きいわねえ」

「君にだって立派な物があるだろう」

ヘステイア様より良い物をお持ちなのに、ヘステイア様の胸に手を伸ばすデメテル様。なんつか、いや何も言うまい。デメテル様の手をパシリと叩いたヘステイア様。良いのかそれ、知り合いだから良いのか。

「でも驚いたわ、ヘステイアがこの神聖浴場に訪れるなんてねえ。初めてじゃない？ それにそっちの眷属も」

「ふうん、良いだろ」

「とつても可愛い子ね」

にこやかな笑みを浮かべて優しく抱きしめられた。でかあい、説明不要。

「ちよつと、僕の子だぞ」

「少しぐらい良いでしょう？」

「ダメだ、返してくれ」

大人しくヘステイア様の横に戻ろう。凄く大きなおっぱいでした。ちよつとだけ拜んでおく。

「それで、何で貴女は此処に？ その子連れてくる為？ 気疲れしちゃうだけだと思っただけだ」

「ふうん、実はこの後予定があつてね。少し気合いを入れようかと。ミリア君は——ちよつと思っただけだ」

思っただけ？

「予定？ その子とお買いものかしら？」

「いや、違うよ。一緒には行くけどね」

「まさか……お相手は殿方なの？」

女神のやり取りに入っただけねえ。一人一人の神威って気にするほどじゃないけど、やっぱり人数集まると威圧感みたいな感じで辛いわ。お風呂は気持ちいいけど……。

「だったらなんだっていうんだい。三人でデートに行くだけだよ」

「あらあらまあまあヘステイアが？」

三人でデートねえ。俺抜きで良いのに。

「ねえみんなー」

声でかい。浴場だから良く響くわあ。

「ヘスティアに男!」「天界じゃこれっぽっちも男つ気が無かったヘスティアが!」「ロリ巨乳のヘスティアが?」「相手はだれじゃ」

なんか神様って特徴的な口調してる時あるよなあ。なんかふわつとしてきた。のぼせたかもしらん。いや、神威でアレなのか?

「「さあ吐け!」」

「……はあ、相手は僕のファミリアの子だよ。ヒューマンさ」

「「おおー」」

女神様ってやっぱ女なのね。ノリが女子高生みたいだ。

「ああもううるさいな、ミアア君行こう」

ヘスティア様に腕を引かれて場を後にする。俺が居る事に対するツツコミとかって何も無かったな。

目を覚まして最初に目に飛び込んできたのは見知らぬ天井であった。

「……は?」

口の中に残る苦味に思わず眉を顰め、身を起こしてみれば貫頭衣の様な病衣を着せられてベッドの上に寝かされていた。最後の記憶は——そうだ、彼女が助けに来てくれたような気がする。

と言う事は此処は彼女の——

「……目が覚めたみたいね。おはよう」

「っ!」

声が聞こえたので其方を向けばたれ耳の大人の女性が立っていた。彼女では無い。

「貴女は何方でしょうか?」

冒険者には見えない。いったい誰なのだろう?!

「此処はミアアファミリアよ。貴女は大怪我を負って運び込まれたの。治療は既に終わっているから大丈夫なはずだけど……何処かに異常はあるかしら」

「無いですけど……治療費とかは……」

助けられたのは理解した。けれど治療費なんて支払う余裕は今の自分にはない。

「それなら彼女が払ってくれたから問題ないわ」

彼女？

「裏路地で倒れていた貴女をドラゴンテイマーが運んできたのよ。彼女から治療費はもう貰ってるから貴女は気にしなくて良いわ」

犬人の女性の口から放たれた言葉に確信した。やはり彼女に助けられたのか。また、また助けられてしまった。人から物を盗んだ所為であんな目に遭ったって言うのに、リリはまた助けられてしまった……。

治療費にいくらかかったのか。それよりも彼女は何処に行ってしまったのか。

「あのっ！ ドラゴンテイマー様はどちらに？」

「……あの子は、帰ったわ」

「会う事は出来ないでしょうか。お礼を言いたくて」

犬人の女性は眉を顰めて呟く様に呟いた。

「会えないわ」

「どうしてですか？」

「……彼女が会う気は無いって。龍力薬、彼女のワイバーンの素材を使ってできた物だったから。なんで貴女が持っていたのかは聞かないけど、あの薬の所為で貴女が大怪我を負ったから、合わせる顔が無いって言ってたわ」

——あの薬は、彼女の連れていたあの赤い飛竜の素材が使われていたのか。リリは其れを盗んで……。

「貴女の服はその籠に入ってるから、具合が悪いのならまた呼んで」

「いえ、もう大丈夫です。今日は本当にありがとうございました」

「……気にしないで。彼女にお願いされただけだから」

六時ちよつと前ぐらい、夕暮れに染まる街。アモーレの広場にて待

つベルを遠くから見る。周りではカップルがいちやこらししてる。その中でぽつんと待つベル君は……なんつーか哀愁漂うと言うかなんというか。

「ベルくん」

何時もの服ではなくおしやれをして登場したヘステイア様に驚いた表情のベル君。俺の方もヘステイア様とお揃いの服を買った。

驚き過ぎて硬直したベルを見てヘステイア様が心配そうに口を開いた。

「待たせちゃったかい？」

「いえ、全然っ！」

緊張してて可愛いしいなあ。……夕暮れかあ。リリはどうしてる事やら。結局ミアハ様の所に行く余裕はなかったな。ずっとヘステイア様に付き合ってた感じだし。何も聞かずにグイグイ腕を引っ張ってあっちこっちの衣類店を歩き回った。俺がちやんと何があつたのかを口にすれば聞いてくれるんだろう。でも……口にしようとしても喉につつかえて出てこない。結局この時間までヘステイア様には話す事は出来ずにいるし。

ヘステイア様はあえて此方に踏み込まない様にしてくれる。ありがたいが、同時に申し訳ない。

「二人とも……その……可愛いよ」

「……本当かい？」

俺もベルの褒め言葉に含まれてる。そっか、可愛いか……見た目は。中身は……はあ。

「おお、あれが噂の」「ヘステイアの男！」

……なんか、なんだ？ え？ ああ神聖浴場に居た女神……いや、あの場に居なかった女神も見て取れる。なんだなんだ？

「きゃー」「かわいいー」「兎みたいー」「げつとおー」

ベル君が女神様に囲まれてきやつきやしてる。困惑してるベル君、ヘステイア様大丈夫か？

「ヘステイア様大丈夫ですか」

「……………」

無言でプルプル震えるヘステイア様。怒ってるなこれ。

「ごめんなさいねヘステイア、気になって……着いてきちゃった」

見た目は柔和な女神様だけど、割と悪戯好きなのかデメテル様つて。

「離してください……うぶっ……」

ベル君が女神達の抱擁から抜け出して——デメテル様の胸に顔から突っ込んだ。うわ、あれ怒るだろ……。

「あらやだ可愛いー♪」

怒るんじゃないかって抱擁するのか。胸で窒息してるぞベル君が……。

「んがーっ！ ミリア君手伝ってくれっ！」

ああ、ベル奪還&逃走ね。了解。

階段を必死に駆け上がる。もう日も落ち夜空には星が瞬く時間。階段を駆け上がった先は鐘楼。

「なんとか逃げ切れましたね」

「まったく、これだから神って奴は、娯楽に群がるハイエナめっ」

ヘステイア様も神ですよ？ まあ、あの執拗に追い掛け回してきた女神達とは違うんだらうけど。と言うかあの女神達タフネス高すぎじゃない？ 下手な冒険者よりもスタミナあるんじゃないのかつてぐらいしつこかったぞ。

「おかげですっかり夜も更けちゃったし……せっかくの三人でのデート」

「でも、ちょっと楽しかったです……それに見てください」

ベルの示した先は鐘楼から見下ろしたオラリオの街の景色。百万ドルの夜景がどうかって程ではないが、彼の夜景よりよほど綺麗な輝きを宿した街並みが見て取れる。

「綺麗ですね」

「……………」

「そうですね」

本当に綺麗だ。ヘステイア様が何かを言いよんどんでから、笑みを零

した。

「楽しみにしてるぜ」

はあ、綺麗な夜景。

今日一日は本当に疲れた。昨日から一睡もできていなかったが、今日は考え事をする余裕なんて殆ど無くてー……どうしようかなあ。

「……ベル君、少し席を外して貰っていいかな？」

「え？」

「ちよつとミリア君と二人きりで話したくてね」

この状況でかあ……。

「ああ、わかりました。ついでに何か飲み物買ってきますね」

素直に従って階段を下りて行くベル。鐘楼に残されたのは俺とヘステイア様の二人のみ。

甘い時間がやってくる訳じゃ無い。多分ずっと気付かない振りをしてくれてたんだと思う。俺が朝から心此処にあらずの状態だったから、あえて考え事する余裕が無い様に女神達が利用して神威に満ちた神聖浴場に連れ込んで、買ひ物のさ中も考え事する間もないぐらいアレコレと服を見て回って。

本当だったら食事中にでもって話だったんだと思う。ついさっきまでベルと良い雰囲気だったのに、そのまま俺がこっそり抜け出せばそれで二人きりだったのに、態々俺に気を使って二人きりになって、なんだか複雑だ。

「さあて、ミリア君。僕は君に聞きたい事がある。でも答えにくいなら答えなくても良い。むしろ答えたくないならそう答えてくれ」

……………。

「何かあったのかい？」

あった。色々、あったんだ。

血反吐を吐いて倒れたりリルカ・アード。あの糞野郎共はリリが瀕死だと分かった途端にリリを放り捨てて何処かに消えて行きやがった。

俺は、そいつらが完全に居なくなつてから飛び出してリリの容態を確認しようとして——彼女の口からほんの微かに漏れた『たすけて』と言う言葉を聞いた。

誰かに利用され、血反吐を吐いて死にそうになつてゐる彼女を見て、込み上げてきたのは罪悪感。

彼女を泳がせて場所を調べようとか、そんな風に考えていた自分を殴り飛ばしたくなるぐらいには嫌いになつた。元々好きではないし、嫌いだったが、余計嫌いになつた。

慌てて回復魔法『レツサーヒール』を何度も使つて彼女を治療する。回復量は少なくとも、何度もかければ、そう思つたから。彼女はぼんやりと俺を見て——『またきてくれたんだ、ありがとう』と呟いた。彼女を泳がせて利用しようとしたのは俺で、あの龍力薬を持たせたのも俺で、その薬の所為で彼女があんな目にあつて、なのに……『ありがとう』と言われた。

俺じゃない、俺に言つたんじやない。俺が言われたんじやない。もし、もしも俺が彼女にお礼を言われたのなら……薄汚いゴミ野郎じやないか。

それだけならいざ知らず。俺はミアハファミリアにリリを預けた。彼女を助けたい。どうかしてあの環境から連れ出したい。ファミリアを抜けさせるのはどうすればいいのかわからないし、これから調べないといけない。それよりも彼女に信用してもらわないといけない。

だが問題が多すぎる。

彼女は俺から物を盗んでいた。それがバレていたと知られたらどうなるのか？ 姿を晦ます可能性が高い。だから彼女を助けたのは俺じゃ無い第三者であるのが好ましい。

だから、俺は『竜を従える者』を利用した。

ナアーザさんをお願いしたんだ。もしリリが目を覚ましたら『竜を従える者』が助けたんだって説明して欲しいって。

世間一般で竜を従える者はガネーシャファミリア所属の冒険者つて事になつてゐるが、実際はそういう風に勘違いする様に仕向けただけ

の、別のファミリア所属の冒険者。つまり俺な訳だ。

まあ、嘘では無いと言えそうですが、明確にリリに勘違いさせる様に動いてるんだから嘘なんかよりよっぽど性質が悪い。

自身の行動が最善だとは思えないし、思いたくない。でも他に方法を見つけれないし、見つける時間も無い。

どうすれば良いのかわからなくて、俺は時間稼ぎの様な真似をして、それが吐き気がするぐらい気持ち悪くて。

「ベル君はそれを知っているのかい？」

ベルは、知らない。

「知らないです」

「そっか、一人で悩んでるんだね？」

そう、一人で抱え込んでしまってる。でも、ベルに教えてどうなるだろうか？ わからない。

「その判断が正しいと僕には言えない。ただ、間違ってるとは絶対に言わない」

正しい訳ではないけど、間違ってるとは言わない。言わないだけで思ってるのか。

「君の考えは正しいよ。ごめんファミリア君……僕じゃその子の為に何かしてあげる事はできない」

リリの為に何かできないか。ヘステイアファミリアでは不可能だ、匿う事しかできない。だがリリの信用を得ていない今、彼女を匿う事は出来ない。せめて彼女の信用を得てからでないと……。得る為に騙すのか？

「ファミリア君、君はどうしたいんだい？」

「……………」

「どうしたい？」

どうしたい、か。最終目標について問いかけられてるのか？ 俺は

——リリを……。

「助けない」

糞女に利用されて悪事に手を染めて、気が付いたら詐欺師として活動してた俺。過去の俺、そんな俺に似た境遇の彼女を助きたい。彼女が後戻りできなくなる前に、助けてあげたい。

でも、どうしたら良いのかわからない。俺がとれる手段は人を騙すぐらいで、騙して信用を得てっていうのなら簡単なのに、其れをするのは……簡単ってなんだよ、アホか俺は。

「ミリア君」

「なんですか」

「僕に言えるのは。君がやりたいって思う事をすればいい。やりたくないのならしなくてもいいって事ぐらいだ」

……………。

「力に成れなくてごめんよ」

そんな事は無い。話して、少しだけ楽になった様な気がする。

「相談してくれてありがとう」

此方こそ、聞きだしてくれてありがとうだ。

どうするか手段も思いつかないし、彼女の為に出来る事がなんなのかもわからないが。とりあえず明日彼女と会って反応を見てから考えよう。

「神様……?」

「ああお帰りベル君」

「ミリア、寝ちやったんですか?」

「ああ、……朝から悩んでるみたいだったからね。少し強引だったかもしれないけど、色々聞きだしたんだ」

「どうでした?」

「……優し過ぎるかな」

「……………」

「もう少し我儘に振る舞っても良いと僕は思うけどね。ああベル君、別に君の所為では無かったから安心しなよ」

「はい……神様」

「なんだいベル君」

「僕って頼りないですかね……ミリア、僕の事頼ってくれないんじゃないかって」

「そんな事はないよ、ただ……もう少し待ってあげて欲しいんだ」

「……………わかりました」

第四十八話

リリルカの反応を見て対応を決める。そう決めた次の日、リリは前と変わらぬ様子で現れた。

怪我なんかをしていた様子は微塵も無く、それ所か何らかのトラブルに巻き込まれたと言った様子を全て演技の下に隠していた。

二日前に死にかけた事なんて無かったように振る舞う彼女を見て、俺はその事に触れない様にすることに決めた。今はまだ早い。彼女はやはり無理をしている。

あのままだと、いずれどこかで道を踏み外す。そうなるまえに手を打たないと。

ダンジョン七階層、冒険者になつて一ヶ月程度の新米冒険者が潜るのは厳しい所か不可能なはずのこの階層までベル・クラネルとミア・ノースリスは足を運んでいた。

二人の戦闘を見る度に思い知らされる実力差。自分だったら生き残るので精一杯なのに、彼らは襲い来るモンスターを普通に討伐できている。

嫉妬心を抱きかけるが、報酬金を分け隔てなく手渡してくれた彼の顔と、命を救ってくれた彼女の事が脳裏を過ぎる。

いや、今はそんな事を考えている場合ではない。

目の前に広がるのは大量のモンスター。十匹以上の群れとなったキラアアントが壁や天井にもびっしり張り付いて此方に迫ってきている。

ベルは既に五匹のキラアアントと戦闘しており、ミアが援護射撃をしようとしていたが追加でやってくる方の対処で手一杯。

一人でなんとか持ちこたえるベルと、群れの足止めを行うミア。二人でなく、ただの駆け出しであれば間違いなくここで全滅していただろう。

そんな危険な状態に身を置きつつ、ベルの様子を窺えば残り二匹に

まで数を減らす事に成功していた。

強くて、優しく、思いやりにあふれた、そんな冒険者^{ベル・クラネル}。まるで幻想^{まぼろし}みたいな人物だ。そんな感想が出てきそうになった。

次の瞬間、自身の足元を白い何かが駆けていく。それがニードルラビットだと気が付いた時にはすでに彼のすぐ傍まで突撃を許してしまっていた。

いつもならミリアが対処するはずのそれに、ミリアが対処しきれない。

「ベル様っ！ 足元っ！」

「ぐあっ!？」

彼がニードルラビットの一撃を膝当てで受け、姿勢を崩して倒れ込む。其処にキラアアントが覆いかぶさって——早くミリア様の援護が無くては。

「ミリア様、ベル様がっ！」

「っ！」

ミリアの方を向けばマジックシールドと呼ばれる彼女のスキルによってキラアアント二匹が足止めされている様子がソコに在った。モンスターと遠距離戦しかしていない影響か、彼女はあの距離まで近づかれると魔法が使えなくなる事がある。つまり今の彼女ではベルの援護は出来ない。

普段なら彼が直ぐに援護に入るが今はキラアアントに押し掛かられてしまっている。

ベルを斬り裂こうと振り下される爪に対し、ベルがナイフでなんとか受け止めている。だがこのままではまずい。二匹目のキラアアントがベルを攻撃すべく近づいている。

このままだと二人が危ない——

「だめえっ！」

——気が付けばリリの手には魔剣が握られていて、振るわれた魔剣から放たれた炎が彼に覆いかぶさっていたキラアアントを焼き、動きを止めさせていた。

すぐさまベルが反撃し、虫の息だったキラアアントに止めを刺し

ニードルラビットを片付けて彼女の方へ走り寄る。

「ミリアっ！」

「っ！ ベルっ！」

彼女のマジックシールドを執拗に攻撃していたキラアアントも彼の手で瞬く間に片付けられ、荒い息を吐く彼女と、安堵の吐息をこぼした彼の姿があった。

「お二人とも無事ですか」

「リリ、ありがと。助かったよ」

「ごめん、手間かけさせたわね……数が多すぎて対処しきれなかったわ。次からは撤退も視野にいれましょ」

何とか顔を上げた彼女が落ちていた帽子を拾い上げて土埃を叩いてから被る。彼女の金髪を見て竜ドラゴンテイマーを従える者の事が脳裏を過ぎった。

「ねえリリ、今魔法つかったよね」

っ！ どう説明すればいいだろうか。他の冒険者なら……ほとんどん使えと命令してくるに違いない。誤魔化すか、それとも……素直に話すか。

「……いえ、あれは魔剣の力で」

彼はどう答えるだろう。よこせと襲い掛かってくるのか。それとも——

「魔剣っ!? そんな貴重なものを僕達の為に……ありがとう」
………。

「それはまあ、お二人の為ですから」

この人は、本当に——

リリの様子がおかしい。多分だがベルに当てられてるんだと思う。魔剣をつい使ってしまった様子だったが、あれは彼女が本気でベルを心配したからこそその行動だったんだと思う。やはり彼女は何処か優しい面を持っていて、無理して悪い事をしてるのだろう。

休息の為にダンジョンの片隅でベルが弁当箱を開けるのを視界に入れない様にしながらキューイに周辺の敵が居ないか確認しておく。

特に何も居ないと言う返事を聞いてからベルの弁当箱をこっそりのぞき込む。うわ、蛍光色のピンク色とか、どぎつい紫色とか、真っ青な何かが挟まれた一見サンドイッチに見えるそれ。多分サンドイッチだと思う。

「やっぱり魔法って凄いなあ」

「ベル、私も魔法使ってるんだけど」

「え？ ああごめん。ミリアの魔法ってなんか魔法っぽくなくて……マジックシールドは魔法っぽいんだけど」

魔法っぽさが足りないってなんだ。いや、言いたい事はわかるんだけど。リリが使った魔剣の一撃は『炎が一直線に飛ぶ』と言うまさに炎の魔法って感じだった訳で、俺の魔法はどうにも見た目が地味過ぎて魔法って感じがしないらしい。見た目が地味とか。

と言うかベル、それリリに分けるのか。

ベルがサンドイッチ(?)を弁当箱の蓋の上に乗せてリリの方へ差し出した。マジか、マジか……いや、食えなくはないっぽいけど、大丈夫かよ。

「はい、リリ」

「え?」

「もらいものだけど」

「……ありがとうございます」

リリの表情に困惑が混じる。弁当を別けて貰って嬉しい反面、その内容が何とも言えないモノっていう。

「はいミリア」

「ああ、ありがとうございます」

渡されたショッキングピンクの何かが挟まったサンドイッチ(?)を受け取って見据える。匂いは……無いな。おい、これパンか? 触った感触からしてなんか変だぞ。固い。

「あの、ベル様、ミリア様」

「何?」

「どうしたの?」

やっぱこんなの食いたくないよね。俺もできれば食べたくない。

シルさんに悪いから食うけど……腹壊さないよね。いらぬならこっちで処理するぞー……。

「明日一日、お休みをいただいてもよろしいでしょうか」

「いいけど……何か用事でもあるの？」

明日一日休み？ このどぎついサンドイッチ（？）で腹を壊す予定なのか？

「フアミリアの集会があつて、どうしても出席しないとイケなくて」

……フアミリアの集会ね。碌なモンじゃ無さそうだ。悔しいが今は口出しも手出しもできない。

「契約違反なのはわかつています。ペナルティはお受けしますから」

「ええ!? いいよそんなこと」

頭を下げる。その雰囲気はあの時の糞野郎共に頭を下げている時と同じものだ。だがベルにそんな風に頭を下げる必要は無い。冒険者に脅えるのも仕方ないが……。あの糞野郎共ソーマフアミリアなんだよな。

「それよりごめんリリ、僕気が回らなくて……。休みたい時があつたら遠慮なく言つてね」

優しさが身に染みる。そんな感じだろうか。ベルと接してれば信用は得られそうだな。俺の方は変に口出しするよりベルに任せた方が確実そうだ。

俺は——ソーマフアミリアを潰す方法でも考えるか。

……バリツポリツと言う音を立ててベルがサンドイッチ（？）を食べ始める。紫色の具材は一体どんな味がするんだらうか。

リリが困惑の表情を隠しきれないまま、サンドイッチ（？）を手に取つて齧つた。バリツと言う固い物を噛み砕く音。口にしたリリの表情が一瞬で真顔に戻つた。味はお察しだろう。

つか、おかしいよね？ サンドイッチだよな？ なんでそんなスナック菓子食べてるみたいなの音がするの？ ベルがシルさんから受け取つてるのは俺も知つてるけど、具材は何なの？ もしかしてウエハース？ でもなんか違う気がするんだよな。

まあ、食べてみるか。前食べたのはちよつと酷い味だったけど

……。

……………。キューイ、食べるか？ え？ 絶対嫌？ 食べれば美味いかもしれんだろ？ ほら食べよ、食えって、大丈夫、ちよつと想像以上の味がするだけだから。残飯処理とかじゃないって、マジマジ。ほら口開けてさっさと食えよ。

昨日の収入はリリに大目に分けた。魔剣一回分と言うのと同り合いがとれるかは不明だが、リリとベル&俺で半分に分ける形にした。今日は俺とベルはとりあえずお弁当のお礼を言うべく豊穰の女主人、シルさんの元へやってきた訳だが。

まだ夜の開店時間まで時間があるので、シルさん、アーニヤさんとルノアさんの三人がテーブルを拭いている所だった。リユースさんとクロエさんの二人は買い出しに行ったらしい。

「ごちそうさまでした」

ベルは普通にお礼を言っているが、俺はこれだけは言っておかないといけない。

「シルさん、味見しました？」

「どうでした？」

「想定外の味でしたよ」

ほんと、何をどうすればあんな味になるのか。と言うか一応食べてもお腹は壊さなかったが、なんつーか味が独特過ぎて感想に困るって初めての経験だわ。

「そうですね。リユースは美味しいって言ってくれたんだけどなあ」

リユースさん。あの人シルさんに甘い所があるからな。きつと善意で美味しいって言ったんだよ。うん、本音を言えば腹を壊しそうな味だった。と言うかりユースさんに味見させてシルさんは味見してないんじゃない……。

「それよりも今日はお休みなんですか？」

本当なら二人でダンジョンにでもって話してたんだが、毎日潜ってたしそろそろ一日休息をとるべきだとヘステイア様に言われたから、

今日は完全にオフである。俺はこのままミアさんに頼んで臨時のバイトと勤しもうかなって感じ。ついでにリユースさんの魔法講座も受けときたいし。

「はい、たまには休みを取った方が良くって神様にも言われたんですけども休みつて何したらいいんですかね。シルさんは休みの日何します?」

「そうですね……。読書とか?」

ほう。読書か。人間観察が趣味って言ってたしそっち方面だと思ってたけど違ったか。

「読書かあ、けど神様が持つてる本つてどれも難しそうだし」

ヘステイア様つて本の虫なのか凄い沢山の書物を持つてるんだよな。まあ、その半分以上が雑学書とか地上の論文染みた物だったりとか。要するに頭を使いそうな本ばかりが揃えてある。

ヘステイア様曰くそう言う本も好物だとかどうとか。

俺はー……どの道読めなくはないが理解は出来ないのでスルー。ベルが好むのは英雄譚みたいな物だからヘステイア様の蔵書ではだめなんだろうね。

——彼の力になりなさい——

ん? 店の奥、棚の所に本が置いてある。なんだこれ……。『ゴブリンでも分る現代魔法』つて、なんかパチモン臭い本だなあ。

「シルさん、その本なんですか?」

「これですか? お客様の忘れ物なんですよ」

へえ。差し出された本を開いて見る。何々……魔法とはー……ほう。

リユースさんに教えてもらった魔法に関してがシンプルに解りやすく書いてあるっぽいな。

「とりに来る様子もないですよね」

ふうむ。魔法に関する知識を入れる事で魔法の発現率が上がるとかどうとか聞いたな。この本をベルが読めば魔法が発現したりとかしないのかな。まあ、確率は低そうだけど。

「ベル、この本読んでみませんか?」

「え？ でも、誰かの忘れ物なんだよね？」

「良いと思いますよ。減るものではないですし」

シルさんもそう言ってるしね。

「読み終わったら返してくれればいいですから」

……なんか変な気もするけど、気の所為だろう。

「そっか、じゃあ借りていきますね。ミリアはバイトするんだっけ？」

「はい。その積りですけど、ミアさんって今大丈夫ですか？」

「ミリアさんも手伝ってくれるんですか。じゃあ今日は少し楽で済みますね」

おっけーな感じかな？ だったらいいんだけど。

ふいー、超疲れる。リユースさんと肩を並べてずっと皿洗いコースだった訳だが、リユースさんに魔法のアレコレを学んだ。他にも俺の魔法の発動の速さとマジックシールドを生かしたカウンター攻撃についてとかも色々教えて貰えたので満足満足。まあ、カウンター攻撃については要練習ではあるが。

「おつかれミリア、そろそろ帰った方が良いんじゃない？」

「まだ洗い物残ってますけど」

「でも、神様も心配するでしょうし」

「そうですね、残りは私がやっておくのでミリアさんは帰っても大丈夫ですよ」

リユースさんの優しさが身に染みる。と言うか冒険者でもきつく感じるバイトを毎日続けているシルさんって何気に凄いやな。

「帰るのかい？」

「はい」

「ちよいと待ちな。給金を用意するから」

「あー、給金じゃなくて現物支給ってのはダメですか？」

「現物？」

へスティア様とベル君に料理を持って帰ろうかなって。ダメならまあ諦めるけど。

「それなら構わないよ。少し待つてな」

流石ミアさん。話がわかる。あつたかいじやが丸くん以外の食事
も三人で食べたいしね。

三人分の食事として渡されたバスケット一杯の食べ物。割と量が嵩み、小柄な俺が苦勞して運んでくる羽目になった。そうだよ、今の俺幼女じやん。まあ、重さの方よりはバスケットの大きさに苦勞させられたんだが。

もうすぐホームまでつくぞー。ここいらは月明かりが無いと真っ暗なんだよな。

……リリはどうしてるだろうか？

「ミリア君じゃないか。遅かったね」

「ヘスティア様、料理をいくつか貰ってきたので一緒にどうですか？

夕食食べちゃいました？」

おお。丁度いいタイミング。ミアさんに頼んで料理を作つて貰つたんだし一緒に食べようと思つてたが、良く考えれば夕食を終えた後かもしれない。その場合は朝食に回すか。

「おかえり、まだ食べてないよ。それよりも聞いてくれよ、ベル君が変な姿勢で寝てたんだよ」

寝てた？ ベルが？ 変な姿勢？

「足元に本を落っことしてだよ。まったく、慣れない読書をして、ままと眠気に襲われちゃうなんてさ」

ほうん。そう難しそうな感じではなかったはずなんだがな。ベルには難しい内容だったのか？

飯も終わり、シャワーを浴びる。今はヘスティア様がベルのスティタスを更新している頃だろう。

俺のスティタスの方は特に変わりなく。魔力が良い感じに伸びているぐらいだった。

魔力の伸びは良いんだがなあ。力がなんか伸びが凄く悪い。ベルの方は魔力を除けば凄く伸びてるのになあ。このままだと本当に置いて行かれそうで怖いなあ。

「うえええええっ!？」

なんだ？ ベルの悲鳴？

「ベル、どうしたのー」

薄暗い部屋の中、ベルの背中を覗き込んだヘスティア様の後ろ姿が見えるが。ベルはどうしたんだ？

「魔法が……」

うん？

「魔法が発現したらしいんだ」

………はい？ え？ 魔法？ ベルに？ ……ああ、うん。その、俺ってお役御免になるのかね？ ベルが魔法を使える様になっただって事は、俺が必要無いって事なんかなあ。いや、本当に発現したのか？

まあ、なんだ。

「うん、おめでどうベル」

ちよつと複雑な気分だ。

第四十九話

俺が詠唱を唱えるより早く動くベルがモンスターを刻み、俺より速い詠唱でモンスターが次々に掃滅されていく。照準を定める間も無く、モンスターは一匹残らず消え去り、散らばる魔石とドロップ品の中嬉しそうに笑うベル。

そのまま奥へ奥へと進むベル。必死に追いかけてやろうとするが敏捷の差で追いつけない。遙か彼方先でベルが一人剣と魔法を駆使してモンスターを殲滅し、そのまま進んでいく。

遅れまいと踏み出した瞬間、目の前に現れるモンスター。黒い影、そのモンスターの名称は何かはわからないが、絶対に勝てないと思ってしまう程の化物。

遙か彼方先のベルは既に姿が見えず、左手を突きだしマジックワールドを強化して——その上からぶつかつたモンスターの拳によってマジックワールドが粉々に砕け散る。

呆気にとられた俺の目の前にモンスターの拳。

——ああ、俺、死んだわ。

顔面を感じた衝撃に思わず目を見開く。薄暗いヘステイアファミリア本拠の教会の地下室、ヘステイア様の衣装の納められたクローゼットが目に入り、片目が塞がっているのに気が付いた。

ヘステイア様が抱き締めてくれてるし腕が俺の目にかかって……じゃないな。ヘステイア様の腕は俺の胸の辺りにあるし。と言うか何かが顔に張り付いている？

「……んう？」

引つpegがしてみれば、俺が掴んでいたのはキューイの首根っこ。寝ている所に突っ込んできたらしい。何してんだコイツ。

……と言うかなんか最悪な夢を見てた気がする。

「ミリア君どうしたんだい……」

げ、ヘステイア様起こしちゃったか。

「いえ、少しキューイが騒がしくて……。寝かしつけてきますね」
「そつかあ……」

ヘスティア様が拘束を解いてくれたのでとりあえずベッドから抜け出す。

床に転がしたキューイが服を這い上がってこようとするのでとりあえず持ち上げて視線を合わせる。

「何ですかキューイ、悪夢見たのは貴女の所為ですか」

「キューイキューイッ！」

悪夢とかそんなのどうでも良いってキューイお前……つか、何だよ何かあったのかよ。

昨日ベルに新しく魔法が発現して、明日はベルの為に早めにダンジョンに向かう為に早く寝たのに……今何時だよ。ってまだ十時ぐらいじゃん、寝てから一時間経ってねえよほんとなんなんだよ。

「キューイキューイ」

はあ？ ベルが出て行った？

詳しくキューイから話を聞けば、ソワソワした様子のベルがこっそり部屋を出て行ったそうなの。トイレ……にしちやあ外行くのもおかしな話。じゃあアレか？ オナニーか？ だったら気にする事あねえ。

「キューイ？」

馬鹿なの？ 違えよ……。眠いんだよ。ベルも男の子だろ、一人になりたい事位あるっての……寝かせてくれよ全く。

「キューイキューイ」

はい？ ダンジョンに向かった？

「キューイ、キューイキューイ」

魔法を覚えたけど明日まで我慢し切れずについさつき出て行つたと。成程……おい、夜のダンジョンの危険性は前にもたつぷり味わつたよな。まあ、入口辺りうろつくだけなら大丈夫だろうが。

「キューイキューイ？」

マインドダウンは大丈夫かって？ 大丈夫だろ。普段から俺がマインドダウンしてるの見てるんだから少しは警戒を……。出来る

か？

魔法使うの初めてで、どれだけ魔法が使えるのか把握してない状態で、魔法を覚えたてで我慢しきれずにダンジョンに向かっちゃまう状態で、マインドダウンするまでの猶予がどれくらいかをしっかり考えられるか？

……………。

「キューイ、ベルを迎えに行きますよ」

「キューイ」

頼むからどつかでマインドダウンしてぶっ倒れてるつてのは勘弁してくれよベル。

ダンジョン入口、ベルの気配は既にダンジョンの中とかどうか。そう言えば帽子忘れて来たなと思いだしたのはバベルの中に入ってからだし。

まあ、こんな時間に人はいないか。実際誰も居ねえし。

「キューイキューイ」

あん？ 林檎の人が来る？ 誰が来るんだ？ つか林檎の人ってなんだよ。

「ん？ お前は……………ミリア・ノースリスか。こんな時間に……………いや、あの少年を探しに来たのか」

……………林檎の人。成程、お前に林檎の味を覚えさせた元凶、リヴェリア・リヨス・アールヴと言う人物だったか。

ダンジョンの入口から出て来たのはハイエルフの女性。ロキファミアの第一級冒険者にして副団長と言う肩書を持つ人物。嫌いと言う訳ではないが高貴な雰囲気はどうにも苦手な人物。割と優しい部分もあるのでどちらかと言えば好きな部類。

「アールヴさん」

「リヴェリアで構わないぞ。それよりもベル……………だったか。あの少年ならアイズが面倒を見ている。下りて直ぐの所を右に曲がれば見つけるはずだ。魔法を覚えたてなのかマインドダウンしていたのを見

つけてな」

マジかよ。アイズさんが面倒見てるって……ベルは何かと縁があるのかね。とりあえず頭を下げて急ぎ向かう事にしよう。

「ありがとうございます」

「何、気にする事は無い。それにアイズが自ら償いがしたいと言いだした事だからな。もし向かうならモンスターに気を付けろ。お前は魔法使いだ。少年の様にマインドダウンなんて事にはならない様な」

償い……償い？ 何の？ 気にはなるがとりあえず急ごう。

この人、忠告もしてくるぐらいには此方の事を気遣いしてくれる良い人だな。

えっと、こつちの道を右つと。えっと、この先道なりに進めば――

『うわああああああつ!』

「つ!」

えっ!? 悲鳴っ!? しかもベルのおっ!? おい待て、何があった。アイズさんが見てるって話だからモンスターに襲われる心配はないはずなんだがっ!?

凄まじい速度でベルの悲鳴が遠ざかり、そして近づいてきたと思ったらまた遠ざかって行つた。何が起きたんだよ……。

「キュイキュイ」

え？ 別の道を通つてダンジョンを出て行つた？ ごめん、意味分らん……。モンスターの気配は？ アイズさんに脅えて動かなくなってるって？ ふうん……。え？ じゃあなんでベルは悲鳴を上げて逃げ出したん？

とりあえずアイズさんに会つてみる？ ベルは……もうダンジョン出たっばいし。

悲鳴を上げた地点、アイズさんの場所に向かったら正座した状態で俯いたアイズ・ヴァレンシユティンを見つけた。何があった……いや、ほんと何があったの？ なんかアイズさんの装備はボロボロだ

し、ガチ凹みしてんだけど……。

「あの、アイズさん……？」

「……ミリア？」

ええ、剣姫さんがすごいしよんぼりした顔してるぞ。ちよつと、意味わからん。ベルにやられたのか？ どう考えても無理だろ。あ、下乳見えてる。

「何があつたんですか？」

「……ベル……あの子、なんでいつも逃げちやうんだらうって」

逃げる？ えつと、状況がさっぱりですわ。

アイズさんは下層の迷宮の孤王を単独討伐に成功し、リヴェリアと二人で帰る途中で迷宮内で倒れている少年を発見。それがベルだったと。

んで、ミノタウロスの一件で迷惑かけちゃったから償いがしたいとリヴェリアに言ったら膝枕してあげるので十分だって言うから膝枕して頭を撫でてあげていたらしい。

そのまま撫でていたらなんか胸がぼかぼかして日向ぼっこしてるみたいだなあなんて思っていたらベルが目を覚まして『お母さん？』と聞いてきたので『ごめんね、私は君のお母さんじゃない』って教えてあげて、そしたら『幻覚？』と口にしたので『幻覚じゃないよ』と言って実際に頭を撫でてあげて幻覚じゃないアピールをしたと。

そしたら顔を真っ赤にして汗をかきはじめ、唐突に起き上がったと思ったらそのまま悲鳴を上げながら前転で転がって行ってしまったとの事。

なるほど、成程じゃネエよ。なんだよその状況……。ベル視点で考えてみると分かるが、何と言うかなあ。

目が覚めたら頭を撫でられており、思わず『おかあさん』と呟いてしまった。すると目の前にアイズさんの姿が見え、アイズさんが『ごめんね、私は君のお母さんじゃない』と否定してきた。

有り得ない光景に現実逃避しながらも、これは夢なのかなと想い『幻覚？』と呟いてしまう。すると『幻覚じゃないよ』と言って頭を撫

でてくれた。

徐々に覚醒する意識、アイズさんの姿をはつきりととらえたベルの視界にはアイズさんの下乳が……ベルには刺激が強すぎたんだろうなあ。

まあ、逃げ出した要因は好きな相手に『おかあさん』なんて呼びかけてしまった事とか、唐突に目の前に現れたアイズさんの姿に驚いただとか……。今のアイズさんの恰好にも問題があると思う。

鎧姿なんだが……ボロボロだ。怪我は無い様子なんだが、まずプレートアーマーのデザインがおかしい。

左胸を覆い、右胸の下半分だけが金属板で覆われていないと言う独特の形状。何故このデザインなのかは不明。んで問題はそこから変わってインナーの方。金属板で覆われていない右胸の下半分、その部分がピンポイントで破れて露出している。素肌が。

もう一度言おう。右胸の下乳部分の素肌が露出している。控えめに言っただけ超エロい。

「あの、アイズさん？」

「……何？」

「その、其処の部分、破れて見えてますよ？」

ぎりぎり放送禁止がかかる部分は見えてないが……下から見上げたら見えそうなんだけど。いや、ベル視点だと見えてた可能性もあるんだけど。下乳見えてるよ？ 超エロい恰好になってるよ？ まあ、アイズさん本人からすりゃ胸で死角になってるしわからんよね。

「うん、攻撃を回避しきれなくて」

違う、そこが破れる原因が聞きたいんじゃない。見えてるけどどうにかしないのって意味なんだけど。

「えっと、見えてますよ？」

「……？」

ええ？ 何で首を傾げるの？ 待って、話に通じてない。

「あの……ここ、此処の部分、胸が見えてますよ？」

つんつんと突いて示してあげる。ここまですれば気付くよね？

女の子なんだし気にするよね？ ほら、流石におっぱい見えてたら女の子として気にするよね？

「そうなんだ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

えええええええええつ!? 待って、おかしいよね？ 俺がおかしいのか？ 下乳見られるぐらいは気にしないの？ それが冒険者って物なの!?

「もしかして……………」

おつ、気付いた？ ようやく？

「逃げたのつてそれが原因……………」

ああ、うん。そうだよ、そうなんだけどさ。なんか思ってたのと反応違うんだけど…………。もつとこう、恥ずかしがるとか無いの？

なんつーか、なんつー…………見栄えは美少女だろう。中身があ…………子供？ 裸を見られても気にしない勢いだぞこれ。なんなんだ…………。

「そっか、これが原因だったんだ…………あれ？ 最初に会った時は服、破れて無かったんだけど」

「あー、最初の時は別の原因でしたからネー」

「そうなんだ」

ああ、もう突っ込むのやめよ。なんか疲れるだけだわ…………。ベルが心配で跳び起きてきたのにアイズさんの下乳をマジマジと観察する機会が出来ただけっていうね。肝心のベル君は既に逃げた後だし。

「…………ミリアはどうするの?」

「どうするとは?」

「私は帰るけど、ミリアは?」

「私も帰りますよ…………」

はあ、なんかめっちゃ疲れたよ。帰って寝よ…………。ベルを助けに来たのにアイズさんが先に助けてるし…………。あ、アイズさんがベル助けてくれたのか。お礼言つとかなきゃ。ベルはお礼言う前に逃げたつ

ほしい。

「あの、アイズさん」

「何?」

「ベルを助けて頂きありがとうございます」

「……ううん、気にしないで」

若干羞恥心をどっかに置き忘れてる気がするけど、良い子やあ。深く考えるな、頭痛くなるから。

……一応、ベルに対する印象聞いておこうかなあ。今回の件でベルに悪印象持つてる可能性もあるしなあ。

「アイズさん、ベルについてどう思います?」

「……? どうって?」

「えつと……二度も逃げちゃって、悪い印象持つてるのかなって」

顎に手を当てて考え込む姿を見るに悪印象は持つてない様子。考える姿勢に此方を気遣ってどう柔らかく言葉を表現するかというよりは、どういう言葉で説明したらいいか分からない感じだと思われる。

「うんとね、初めて見た時、何か懐かしい感じがして」

懐かしい感じ?」

「何だろうなって思ってたんだけど……さっき頭を撫でてた時に少しだけ思い出した」

……? 思い出した? 過去にベルと会ってたって事か?」

「昔の自分を思い出した。忘れてた幼い時の事」

……。忘れてたって……。

「それで……それでね……」

たどたどしく言葉を選ぶ彼女の姿からして、それはまだ言葉にして話せる程、アイズ・ヴァレンシュタインの中で考えが固まっていないのだろう。随分とふわふわとした、抽象的な言葉で彼女は話している。だがベルに対する不思議と『懐かしさ』を感じ、それが『夢を運んでくれる白兔』と言う姿に重なって……表現が子供っぽいと言いか、幼いと言いか。

彼女の経歴はギルドで簡単にだが確認できる。 齢6歳にてファルナを授かり迷宮に潜りはじめ、 齢7歳の時にランクアップしてレベル

2に至ったと。

14歳のベルですら子供扱いされてファミリアに入れて貰えないにも関わらず、たった6歳の少女が一人迷宮に潜る理由。金か、何かしら理由があったんだろう。

其の頃の記憶を思い出したって事あ……彼女はずっと忘れてたのか。意識して忘れたのか、それとも忘却してしまっていたのか。それを思い出すきっかけとなったベルの事を意識していると言える。『夢を運んできてくれる白兔』と似ていると幼い表現ではあるがベルの事をばつちり意識しているらしい。ただ、恋愛感情では無く、どちらかと言えば幼い子供がヒーローに焦られるようなそんな感じっぽい。

強さに拘っていると言う話だったが、多分彼女は中身だけが成長を止めているんだろう。表層、見た目、強さは成長し続けて来たんだろうが、幼い頃の忘れてしまっていた頃から心の方は成長が止まっていたと。

ベルと出会った事でその成長が少しずつ始まってきたんじゃないか……まあ、ただの予測だが。

「今度私が一緒にアイズさんからベルが逃げようとしたら私が止めますんで」

「本当？」

「はい」

「ありがとう」

あはは……今度ベルが逃げようとしたら全力で止めよ。ベルの初恋の相手だし、ベルに相手させよう。ベルに会う事を望んでいるみたいだしね。

「出口まで送るね」

「あ、はい。ありがとうございます」

本当に良い子だなあ。何があつてこんな歪になっちゃってるんだか。気にはなるが知りたとは思わない。どう考えても厄介事の匂いしかしないし。俺も俺で手一杯なんだ……リリの方はどうしてるだろうか。

帰宅したらベルがソファで呻き声を上げていた。僕は何で逃げちゃったんだーってめそめそしてる。いや、アレは逃げるだろ……。だって好きな女の子に『おかあさん』だぜ？

先生に『おとうさん』って言っちゃった並の奴だろ。恥ずかし過ぎで消えてなくなりたいくなるわそんなん。

まあ、今回はベルが魔法を早く使いたいがために行動したが故の事件だし、半ば自業自得って奴だ。慰めはしない。

眠う、とりあえず寝よう。睡眠時間がガッツリ削られたわ。

ヘステイア様、帰りましたよー。寝ぼけながらもお帰りーって言うてくれた。ああ漸く帰ってきたよ……。ふああ。

第五十話

天井の隙間から零れ落ちてくる朝日を浴び、朝を迎えた事を知り薄目を開けて——ベルの呻き声が響き続けているのに気が付いた。

一晩中呻いてたのか……。いや、気持ちはわかるけどさ。半分自業自得とは言え好きな子にお母さんはなあ。

「おはよーミリア君……うん？　ベル君はどうしたんだい？」

「おはようございますへステイア様。ベルは……昨日の夜に抜け出した間に色々あったみたいですね」

「抜け出した？　とりあえず何かあったのはわかったよ」

ベッドを抜け出してー。顔でも洗うか。へステイア様と一緒に洗面台の方へ。ベル君も気を取り直して顔でも洗うと良いぞー。

「何があったのかは聞かないけど。こんな本を読んだからそんな事になったんじゃないのかい？」

へステイア様がテーブルの上に置いてあった件の本を手にとってぱらぱらめくり始める。俺はー、眠気を飛ばす意味でも先に顔洗うかあー。

「……うわっ!？」

「へ？」

「うむ？」

なんだ？　へステイア様の驚いた声が朝っぱらから響き渡った。

ソファアに三人で腰かけて本を覗き込む。見事に真っ新になってる。何か文字が書かれていたと言う事実は消え去り、只の白紙になっちゃった本。

「ぐりもあ？」

へステイア様曰く、これは魔導書グリモアと言う道具らしい。グリモアって言うアレを思い浮かべる。魔法使いが持つてる魔法に関する知識が詰まってるあれ。

「そう、読むだけで資質に応じた魔法が発現する本。まさに魔導書グリモア」

ふうん……。なんで真っ白になっちゃったんだろうねえ。ぶっちゃけ嫌な予感しかしないぞ。

「これ、何処で手に入れたんだい」

「酒場で借りたんです。誰かの忘れ物だから読んでみればって」

「誰かの忘れ物おっ!? はあ」

驚きの声を上げたヘスティア様。ああ、やっぱ嫌な予感……。こういうのって何度も使える様なもんじゃないよね……。だって使えるならみんなに読ませてーってなるだろうし？

「どうかしたんですか、神様」

「なんか既に嫌な予感がしますけど。やっぱそれ一度きりの使い切りアイテムですか……?」

「ミリア君の言う通りだ。ベル君、良いかい？ グリモアって言うのはこの通り、一度誰かが読んだらそれっきり効果が消えてしまうんだよ」

ヘスティア様がグリモア（使用済み）をベル君に手渡す。ぱらぱらと中身を確認したベルが青褪めてるわ。

……。他人事みたいに言ってるけど、原因って間違いなく俺だよな？

このグリモア、値段いくらぐらいだ？ 間違いなく高価なものだろう。魔法の確定発現だぜ？

「うぐっ！」

「ベル君、何処へ行くつもりなんだい」

ベルが慌てて何処かへ行こうとして壁に激突してるよ。痛そう……。と言うかマジでヤバイな。ただでさえ五億近い借金があるのに、此処に更にいくら追加されるんだろ……。? ……? ……? 別に今までどおりじゃね？

「とにかく、謝って弁償しま——

「無理だ」

ベルの鼻が赤い。痛そうだな。

「癒しの光よ』『レッサーヒール』、とりあえず一端落ち着いてくださ
い」

「まったく、魔導書がいくらするか知っているのか君は」

知らない。ただ、アホみたいに高いんだらうな。控えめに言つてヤバイ。

「ヘファイストスファミリアの一級品装備と同等……もしくはそれ以上だ」

「ひいつ」

一級品のお値段が大体数千万から一億数千ぐらい。ベルのナイフや俺の籠手の方がよっぽど高いな。ヤバイ装備身に着けてんだなあ。まあ、落ち着こう。

「すいませんへステイア様、その本……読む様に勧めたの私です」

「……ミリア君がかい？」

怪訝そうな顔。事実俺がベルにその本を勧め——待てよ。なんで俺はその本をベルに勧めた？

どう考えても厄介事を引き込みそうな感じがするのに。なんで……わからん。

「まあ良いか。いいかいベル君、君はこの本を読まなかった。ミリア君はその本について知らなかった。そう言う事にするんだ」

ベルの肩を叩いて良い笑顔で言い切るへステイア様。大丈夫か……？

「後は僕がなんとかする」

固まったまま動かないベルから使用済みグリモアを奪い去ったへステイア様が階段を上って何処かに……何処に行くんだらうか。原因は俺だしどうにかしないと……。なかった事にするのが一番なのはわかるんだがなあ。いや、無かった事にしよう。うん。

「任せておきたまえ」

「へステイア様に任せましょうベル」

「ダメですよ神様っ！ ミリアも放してっ！」

再起動したベルがへステイア様に掴みかかろうとする。やめるんだベル、もう無かった事にするしかない。今更数億ヴァリス追加されても元から億単位の借金があるから変わらんかもだが、とにかくやめるんだ。

「止めるなベル君っ！ 下界には綺麗事じゃ済まない事が沢山あるん

だっ！」

ベルの腕を掴んで止める。ベルはヘステイア様を掴んで止めようとしてる。ベル、もう諦めよう。俺の所為だしベルは気にしなくて良い。俺もさっぱり忘れるからさ。

「世界は神より気紛れなんだぞっ！」

「こんな時に名言生まないでくださいっ！」

「すいませんっ！ すいませんっ！」

「ごめんなさい」

豊穰の女主人にやってきた俺とベル。開幕ベルの謝罪連打……俺は土下座した方が良いだろうなあ。何でかしらんけど原因は俺にあるし。ほんとになんであんな事言ったんだよ。落とし物の本を持ち出すって……はあ。

「それは大変な事をしてしまいましたね」

他人事の様に振る舞うシルさん。一応、貴女も原因の一端ですよね……？ 主に悪いのは俺だけ。

「ちよっ！ シルさん、何さも他人事の様に言ってるんですか」

「はあ」

ミアさんは本の中身を検めて深々と溜息を吐く。やっぱ怒られるよねえ。

「やっぱりだめ、ですか？」

「うっ……すっごく可愛いけどダメです」

「てへっ」

シルさん可愛いやったー。じゃなくてだな。本当にヤバイぞ。数億ヴァリスの借金。しかも対象不明ときたもんだ。さあたいへ——ミアさんがグリモアをゴミ箱に放り込んだ。え？

「ふんっ……」

腕まくりをしてじゃが芋を取り出したミアさん。あれ？ 怒ってない？

「ミアさんっ？」

「忘れな」

怒ってないっばい。と言うかなんか面倒臭そうにしてる。

「でも、ミアさん」

「読んじまったもんは仕方ないだろう、こんなもん置いてく奴が悪いんだ」

「そうだそうだー……？　なんでそんな高価な物をこんな所に忘れて——いや、俺が気にする事じゃないな。彼女がそう決めたんだろっし。」

「……？」

「ミリアも何か……ミリア？」

「え？　なんですかベル？」

「えっと、ほら、ミアさんが忘れろって言ってるけど」

「忘れたらいいんじゃないですか？」

「ええっ!？」

「なんでそんなに驚くかね。忘れてしまった方が楽だろうに。」

「ほら、やっぱり良くないんじゃないかなあつて」

「んん？」

「ひいっ……だつ、ダンジョン行つてきますっ!」

「ミアさんのにらみつける攻撃。効果は抜群だつと。」

「ミアさん」

「……」

「うん？　なんか憐れむ目で見られてる？」

「どうしたんだい?」

「……気の所為?」

「えっと、この本をベルが読んでしまった事、落とし主には内緒にしといて貰ってもいいですか?」

「ああ、構わないよ。文句言ってきたら追い返すからね」

「ありがとうございます」

「なんだろう。ミアさんの目線が何か気になる……何だろう?」

「……ミアさん、どうかしましたか?」

「……アンタ、自覚無いのか」

「自覚？」

「何でもないよ。さつきといきな」

ふむ？ 自覚……自覚。そうだよ、本、魔導本。なんで俺はあの本をベルに読ませた？ どう考えても落し物を勝手に持つていくなんて面倒事に繋がる可能性があるのに、無警戒にも俺が其れを勧め——
気にする事ではないか。

「では、また来ますね」

何をそんなに気にしてるんだか。変な感じがするなあ。あ、朝っぱらだけドナーザーさんの所寄って行くか。

「ミリア？」

「何ですかベル？」

ミリアの様子がちよつと変かも？ ミアさんと話す前は少し青褪めて僕と同じようにおっかなびっくりって感じだったんだけど。

「……？ どうしたんです？」

「さつきや……」

なんだろう？ 気にするなって言ってたけど、なんか切り替わったみたいで違和感がある。

「ベル？」

「………ううん、何でも無い」

よくわからないけど。聞かない方が良いのかな。

「そっか、それよりナーザーさんの所に寄ってくるから、先にリリに合流しといて貰っていい？」

「うん、わかった。何時もの噴水前で待ってるから」

「ありがと、じゃあまた後で」

「うん、また後で」

なんだろう。この違和感。

ベルの様子が変だなあ。なんか聞きたげにしてたけど、変に聞き出

しても仕方ないし、とりあえずナーザさんの所へー。青の薬舗の入口には当然『閉店中』の看板。まあこの時間からやってはいないだろう。一応、入る許可は貰ってるし良いよね？ 裏口から入った方が良いか？ って、鍵かかってないのか。不用心だなあ。

「お邪魔します。ナーザさん、おはよ……うわっ」

目の下についたどす黒い隈。そしてぼっさぼさの髪。女性としてそれはどうなのかと言いたい惨状のナーザさんがカウンターに顔を押し付けたまま眠ってる。入口の立札は閉店中のままだから良いが……。ミアハ様は何処に——うわ、床に倒れてるんだけど。大丈夫かよこの二人。

「ミアハ様？ ナーザさん？ 二人とも大丈夫ですか？」

「んう……ミリア？ ……っ！ ミリアっ!!」

うわあっ！ いきなり掴みかかってきて、どうしたんだよっ！

「凄いわよあの薬、ちゃんとした高位の調合素材を使ったら効果が安定化できたのよっ！ それで色々と試してたんだけど——

ああ、興奮して目がギラギラしてるっ!？」

「それでミアハ様と一緒に昨日からずっと調合の——

長い、話しが長い。ベルを待たせてるから短めに頼みたい。

要約すると『効果の安定化が成功』『他にも素材を変化させる事で効果も変化が』みたいな感じなのを長々と素材およびに特徴での説明をしてくれた。うん、よくわからなかった。

「ごめん、興奮し過ぎたわ」

ええっと、不安定版のドラゴニックポジションが3本、安定版を一本貰ってー。後は回復薬を飲み続けたみたいな効果のリジエネポジションを一本。効果時間は5分にまで伸ばせたらしい。チートかよ。二人して興奮して二日ほど寝ずに調合を試し続けてたって……。

安定化したドラゴニックポジションはなんとほぼ丸一日効果が発揮するらしい。ただ、身体的な制限を外す影響が使った後に体に過大な負荷がかかるとかどうとか。不安定版みたいに1分間の無双程度なら問題ないが、丸一日分の身体能力超強化ってのは負荷が凄いらしい。

効果が切れた瞬間にぶっ倒れるぐらいには。ヤバイおくすりになっただんですねわかります。

「ありがとうございます」

「使用には十二分に気を付けるのだから」

一応、リジエネポーションとの併用で使えなくはないのだが、5分の効果のリジエネポーションを使って一日持たせるってなると相当金額嵩むだろうしなあ。それにリジエネポーションの方は量産が難しいらしい。

第一級冒険者とか駆け出しとか関係無く、ランクアップ相当の力を丸一日発揮すりゃあね。そりゃ体がぼろぼろにもなるよね。

とは言え、これがあれば俺も近接戦が出来るようになるだろう。疑似的ランクアップすれば格下相手に凹られる程じゃないだろうしね。

……大丈夫だよ？ 疑似的ランクアップすれば千切っては投げが出来るよね？

第五十一話

ベルと合流したのは良いんだが、何かあったのか？

深い朝霧に包まれた集合場所の噴水まで到着した俺が見たのは、微妙な距離感で佇む二人の姿。リリの方はほの暗い、死んだ様な目をしてベルを見ており、ベルは周囲を警戒している様子であった。

その日の探索はいつも通り、稼ぎも上々で4万ヴアリス近い稼ぎになった。いつも通り頭割りでリリに手渡したが……リリの反応が悪い。やっぱ前のあれが響いてるか。

しかし、ベルの方も色々とおかしい。リリを気遣っている様子ではあつたんだがなあ。

ヘステイアファミリアの本拠、廃教会の地下室。擦り切れて中身が飛び出たソファアに腰かける俺とヘステイア様の前で、ベルが真剣な表情で切り出した台詞に、思わず度肝を抜かれた。

少し前、リリと出会う前の頃に、リリと見間違えるほどに良く似たパルウムの少女を追いかけていたらしい冒険者が『リリを嵌めて金を奪おう』と持ちかけてきたらしい。

ソレ以前に、リリが数人の冒険者に茂みに連れ込まれる様子を見たらしい。特徴を聞く限りではあの糞共で間違いないだろう。リリが生きている事に気づいたのか接触してきたらしい。

あの時見る限りではリリに怪我は無かったし、暴力は振るわれていない様子だが……何を言われたんだか。やっぱ殺しとくべきだったか？

「なるほど、例のサポーター君をねえ」

「はい、リリはどうも悪い冒険者に狙われているみたいなんです。少しの間でも匿ってあげられれば」

優しいなあ。ただ、少しだけ考えが甘い。彼らみたいな糞共が、リリを匿ったファミリア。それも規模が極小のファミリアに対してどのような手段に出るかを考えれば、関わるのをやめると言う選択肢が

出てくる程だ。

「ベル君」

「はい」

「君のそのサポーター君は本当に信用に足る人物なのかい？」
「え？」

真剣な表情のヘステイア様。あまりこういう言い方は良くないが、リリは信用は出来ない。盗みを働く為にベルに接触してきている時点で、やはり信用を置くには足りない人物であると言える。

だが、その心の内では助けを求めている。どうにか手をとつてあげたいと思うんだが。

「ベル、良く聞いてください」

ここで、ベルに教えておくか。ついでにヘステイア様にも教える形で。

「彼女はきな臭いです。考えれば不審な点はいくつもありますよね？」

「えつと……」

考え込むベルを余所に、俺は一つ一つ指折り説明しておく。これ以上、と言うよりリリの様子から近々何かしらあるんだろうなと予測できてしまったから。

「ベル、私は赤い液薬を無くしたと言いましたよね」

「えつと……」

「良く考えてみてください。私のポーションポーチはそう易々とポーション瓶が抜け落ちる程やぐいつくりをしていましたか？」

「あつ……」

ベルは知っているだろう。ポーションポーチは冒険者が激しく動き回ってもポーションが抜け落ちない様に色々と小細工がされている。その上で言えるのは勝手に抜け落ちる等と言う事は有り得ないと言う事だ。

そう、誰かが抜き取らない限りは。

「他にも、決定的証拠も……あります」

「……………」

「一昨日、私はとある実験をしました」

「実験？」

「私のポーチを、リリに預けましたよね？」

換金する際、俺はリリにポーチを預けた。ベルも思い当たったのかその時の事を思い出してはつと顔色を上げた。

「もしかして……、あの日ミリアが途中でミアハ様の所に行ったのつて」

「はい、ごめんなさいベル。あの日私は貴方に嘘を吐きました」

ベルには言い訳としてミアハ様の所に行つてくると伝えていた。実際はポーチの中の本のドラゴニックポーションが失われていたから、リリの後をつける為であった。

「あの日、私のポーションポーチから、また一本……盗まれていました」

「ミリア、それは何かの勘違いなんじゃ……」

「ベル……」

俯いて考え込むベル。信じたく無いのか。彼女がそんな事をしていいると言う事実を。

「ベル君、僕が確実に言える事は一つだ。彼女は何かを君に隠している」

口を開きかけ、閉ざし。何度も口を開こうとしては零れ出るベルの吐息。悩ましいだろう、苦しいだろう。騙されているかもしれない言う事実は……。言わなければ良かったかもしれない。

「……神様、ミリア」

ベルが、笑みを浮かべていた――

もう潮時だ。彼も彼女も、どちらも優しく、甘くて……ずっとあんな冒険者と共にサポーターとして活動できたらどれほど良い事だろう。

でも、どうせ冒険者が奪いに来る。ソーマファミリアの彼らがやって来たように、彼らを騙せと命令を受けた。彼女の持つ赤い液薬も、

全て奪ってこいと。

「え？ 十階層に？」

朝、昨日と同じ様に噴水広場で待っていた二人に声をかけ、十階層に誘う。あの階層には霧が出ているので都合がいいのだ。

「ええ、今日はそこまで行ってみませんか？ お二人の実力なら大丈夫です」

二人を騙す。荷物を奪って、逃げる。置き土産に用意した特製の血肉も使って……。大丈夫。彼らなら魔法だけでも十二分に十階層で通じる。

きつと、死なない。魔法を使ってモンスターを倒して、自力でダンジョンを抜け出せる。だから……。大丈夫。この人たちは死なない。

「けど、この間もリリの魔剣に助けられたぐらいだし、それに十階層からは……。大型のモンスターだって出るし……」

「リリは十階層に行った事あるのよね？ どうなの？」

「問題ありません。今のお二人なら余裕ですよ」

大丈夫。絶対大丈夫……。彼らなら。大丈夫だから……。

「昨日見せて頂いた魔法だって」

……。

「お二人が力を合わせれば余裕ですよ。十一階層まで下りた事のあるリリが保証しますよ」

きつと、大丈夫だから。

怪しい、十階層と言えば確かダンジョンギミックとやらの霧が発生している階層だったはずだ。

十階層、十一階層、十二階層と三つの階層は、上層の最終階層であり。これまでの九階層までは人より小さな小型、人と同じ大きさ程度の中型しか居なかったが、十階層より下には人よりはるかに大きな大型のモンスターも出現しはじめる。

本来ならもう少し装備を整えてから向かうべきだとは思うんだが。特にナイフなんかは刃渡りの大型モンスター相手には不利過ぎる。

魔法の補助も踏まえてと言う話か？

階段を下りつつ、リリが饒舌に語る内容を吟味する。

仕掛けてくるな、間違いなく。

「リリの提案を聞いて頂いてありがとうございます。リリはお二人の様な冒険者のサポーターになれて本当に幸運でした」

「うん、まあ……。十階層だつていずれば行かなきゃならないからね」
「……それで、差出がましい様なのですが」

リリの表情を見てみて、その内側を見据えるのは簡単なんだが。彼女は何かに脅えてる様な……。冒険者に脅えるとも違う、他の何かに脅えている。何に脅えている？

リリが唐突に背囊から取り出したのは大型のナイフ。バゼラードと呼ばれるショートソード型の剣。

刃渡りは40かそこら。癖も無く、扱いやすい剣……。だったか？

武器を見ているさ中に展示の説明にそんなのがあった気がする。俺の持つ剣は癖の強い剣とかどうとか説明もあったかな。

何故この剣をベルに……？

「ここからはこれを使ってみてはいかがでしょう」

「バゼラード？」

「はい、今のベル様の武器では大型のモンスターを相手にするのに少々リーチが足りていないかと思ひまして」

……。矛盾してるよな。入口で二人なら大丈夫とは言っていたが、武装関連にも入るまえにちゃんと忠告すべき所だろうに。たくらみが何かは不明だが……。ちゃんと止められるか？　ベルは何とかする積りみたいだが。

「わかった借りておくね」

武装の配置に困ったらしいベルがナイフをポーチに仕舞い、リリは笑みを浮かべている。これは……。

八階層から景色が一変する。閉鎖空間とは思えぬ広さの広間が数多く存在し、通路と呼べる様な空間ばかりだった七階層以前とは全く

違う景色に戸惑いが隠せない。出現モンスターは強化されたコボルトとかゴブリンばかりで問題無く倒せる。特にこの階層は大広間であるおかげで飛び道具を使う俺の独壇場であった。見通しの良い遮蔽物の無い場所で銃魔法を振り回す快感に目覚めそうだ。リリの言う通りと言うか、この階層は飛ばしても平気そう。

そして問題の十階層。ダンジョンの作りは八階層、九階層と変わらないが、一目見て異常に気が付いた。霧が出ている。まるで昨日の朝の様な朝霧が広がっており、八階層、九階層と違って光源となる天井の光が微弱であるらしく、目を凝らしても見通す事は難しい。

上の階層で無双の如く調子付いていた俺の気分を叩き潰す光景に気分が落ち込む。

「ここが十階層」

「はい、今回の目的地です」

細い、真つ白い木の生えた光景。木も、草も真白けであり、霧の白さも相まって本当に地形が把握しづらい。そこらに生えている木々は天然の武器庫ランドフォームつて奴か。見渡す限りに生え茂っている様子が確認できる。キューイが近づいてくると警告してくれた。大きい何か近づいてきているらしい。

戦い始めたら気付いて他のも近づいてくるか？

「リリ、これって……」

「はい、ランドフォームです……ですが、処理している暇は無さそうです」

「大きい何か近づいてきてるわね。数は1だけど、他にも何匹か居るみたい」

ズシン、ズシンと響く足音。霧の奥、赤い目が爛々と輝いて見える。その高さから考えて——ベルの1.5倍近い身長がある。横幅も相応。同人誌で良く登場するオーク先輩ではあるが……腰巻にでっぷり肥え太ったお腹。

「ベル、大丈夫ですか？」

「……やっぱり大きい」

流石に怯むか。シルバークバックを相手取った事があるから大丈夫

かと思ったがそんな事は無いな。

「逃げてはいけません、ベル様」

悔しいかな、あのオークに近づくと事も俺には難しい。と言うかいはるのか？

「そうだよ、オークを倒せない様じゃ、この先のモンスターなんて一生攻略できない」

目の前にある木を無造作に掴んで引き抜く——引き抜いた木が瞬く間に棍棒に変化していった。

モンスターがランドフォームを使うとあなるのか。冒険者が引き抜いても特に変化無いらしいが、あの棍棒はモンスターの魔石を砕くと同時に消えてなくなると言う話らしいし……今はそんな考察は後だ。学者じゃないんだから気にしても仕方ない。

「ベル、援護します」

「……わかった。ミリア、お願い」

「お二人ともつ、きますっ！」

棍棒を振り上げ、真正面から突っ込んでくるオーク。足を撃つか。『ピストル・マジック』『リロード』っ！『ファイア』っ！

ベルも同時に走り寄って行くさ中、霧の中微かに見える足を撃ちぬ——けない。分厚い脂肪を抉るので限界らしい。流石に敵も強くなってるか、八階層九階層のゴブリン、コボルトとは訳が違う。コンセントレート集中詠唱をしないとダメか。だが集中詠唱中は周りに気を配れないからリリの方を注視できない。

「ミリア様っ！ 集中詠唱をっ！」

……キューイ、リリの様子に気を配ってくれ。

想像するのは貫通力に優れる銃。日本でテロに使われたのは本場のモーゼルではなく、モーゼルの模造品の擬きではあったが、其方の影響で貫通力に優れているイメージが付いているモーゼルC96辺りか。装弾数は20発の拡張タイプもある。丁度今の俺のマガジンが20発だからそれをしっかりイメージ。

『ピストル・マジック』

弾薬は当然7・62x25mm弾薬。共産圏で多く出回った7・

62 x 25 mm 弾薬の中には、高価な鉛が占める割合を減らす目的で鉄製の弾芯を用い、その外側にライフリング保護用の鉛、更にその外側に銅コートを施したものがあり、この構造が結果的に貫徹弾に似た効果を発揮する事があった為に貫通力に優れると言うイメージがついたらしい。あくまで想像しやすいので利用させて貰おう。

『リロード』っ！

詠唱完了。後は引き金を引くだけなんだが——既に倒し終わってるな。いや、戦闘音に誘われて二匹目もきてる。二匹目以外にも何匹か近づいてきてるぞ。

「ベルっ！ 複数近づいてきてますっ！ 気を付けてっ！」

「わかったっ！」

応戦すべく銃口を向け——リリの姿が見えない事に気付く。やっぱり集中詠唱すべきじゃ無かったか。

気付かないふりをしてあげるべきか……いや、構う余裕が無い。

数が多い——いや待て、多すぎるだろ。

『ファイア』っ！ 『ファイア』っ！

二匹——三、四、五——十を超えるオークが接近中。おいキューイ、ちゃんと指示を——

「キューイキューイ」

……え？ お前何食ってんの？

「え？ キューイ、それって……モンスターをおびき寄せる為の血肉じゃ」

先程からキューイが落ちてる血肉を喰らってる。集中詠唱しているさ中に周囲に投擲されたらしい。おい、不味い所の話じゃないぞ。

「ベルっ！ モンスターが寄ってきます、気を付けてっ！」

「ミリアっ!?!」

っ！ 風切り音っ！ 飛来した矢が俺の『マジックシールド』に弾かれ、淡い膜が俺を包み込む。リリの仕業か？

俺に飛来した矢は弾かれたが、ベルに飛来した小型の矢。クロスボウボルトがベルのポーチを固定するベルトを切断し、ベルのポーチに一本のボルトが突き刺さる。紐が結ばれたそれは霧の中へと消えて

いって——リリが階段の上から此方を見下ろしていた。

「リリっ！ 何してるのっ！」

「……ごめんなさいベル様。もうここまでです」

……仕掛けてきたか。ここからならリリを狙い撃ちできるが——。

「リルカ・アーデ、止まってください。撃ちますよ」

どうでる？

「ミリア様、よそ見は危険ですよ」

っ!? 集まってきたオークが此方を一斉に見る。薄い本のように——はならんな。殺しにきてるわ。

「ミリアっ！ ぐうっ！」

『ファイア』っ！ 『ファイア』っ！

一発で魔石を撃ち抜くが、数が多すぎる上、霧の所為で狙いも定まらん。こうしている間にも悠々とリリが此方を見下ろしている。一瞬見たリリの表情は冷酷な仮面を張り付けた恐怖の表情だった。それに『危険ですよ』と言うリリの言葉は上ずっていた……。

殺すまではしたくないと言う表れか。

「……………折を見て、逃げ出してくださいね」

行っちゃまう。リリが行ってしまう。不味い、キューイが血肉の所為でポンコツ化するなんて予想外過ぎる。

畜生、このままいかせるのはだめだ。どうする……倒すまでに時間が——。

「ミリアっ！」

「ベル？」

「リリを追ってっ！」

リリを追う？ まだオークが沢山残ってるんだぞ？ 少なくとも

——30は超えてる。全部倒すのにどれほどかかるか。

「ミリアっ！ 良いから行って！」

だが、数が多すぎる。下手打てばベルが死ぬぞ。リリを優先すべきか、ベルを優先すべきか。

助きたい相手か、命の恩人か。見知らぬ他人か、自身の家族か。ベルを置いていくなんて選択肢は——

「ミリア、僕はそんなに頼りないかな」

悲しげに笑うベル。違う、頼りないんじゃない。心配で――

「大丈夫――絶対に追いつくから」

「でも……」

大丈夫か？ 此処にベルを置いて行つて？ 本当に……。

「ミリア、僕を信じて」

――。信じて良いのか？ ベルが死んだらどうする？

「ミリア、此処は僕に任せて……リリをお願い。僕を頼つてよ」

……、卑怯だろ。いや卑怯ではないか。そんな表情で、そんな事言われたら、頼りたくなっちゃう。

「ベル、約束――絶対死なないで」

「わかった、約束する。だから、ミリアもリリをお願い」

約束しよう。必ずリリに追いつく。だから――ここはベルに任せ
る。死なないでくれよ。

第五十二話

嵌められた。彼らを罫に嵌めて、逃げ出す途中。ゲド・ライツシユに待ち伏せされていたらしい。

前に剣を盗んだのを酷く恨んでいる彼に捕まってしまった。何度足蹴にされただろう。剥ぎ取られた外套から魔剣を奪われてしまった。

「ははっ、魔剣まで持ってやがるぜ」

「派手にやってますなあ旦那あ」

っ……嘘。なんでカヌウが此処に……。

肩に大き目の袋を担いだカヌウがニタニタとした笑みを浮かべてこのフロアに入ってくる。四人で待ち伏せしていたとゲドは口にしていた。つまり彼らと協力していたのだろう。

「ああ来たか、早かったな。見ろよこのガキ、魔剣まで持ってやがってよ。やっぱお前らの言う通りかなり溜め込んでるみたいだぜ」

必死に、ただ死にももの狂いでかき集めた物だ。——冒険者を騙して。……やっぱり、悪い事をしてきた報いなのだろうか。

「そうですかい……。ねえ旦那。一つお願いがあるんでさあ」

カヌウの担ぐ袋が蠢いている。まるで中に生き物が入っているかのような——そう、丁度手足を切り取ったキラアアントがあのぐらいの大きさで——。

「そいつの持ち物、全部置いてって欲しいんですあ」

「っ?! キラーアントっ!!」

ああ、嘘だろう。キラアアントには厄介な特性が存在する。瀕死の状態に陥った個体は他の個体をおびきよせる。手足を切り取られ、瀕死になったキラアアントを投げ渡したカヌウがねちっこい笑みを浮かべている。

ゲドが顔を歪めて怒鳴る。先程まで愉悦に歪んでいた表情は今や恐怖に歪んでいる。

誰だっけそうだ。あえて瀕死のキラアアントを使って呼び寄せられる大量のキラアアント、その数は両手の指ではとても足りない。ゲ

ドの実力では二、三匹を同時に相手取るので限界なのだから。此処に何匹集まるのか。

「てめえっ！ 何やってるのかわかってんのかっ！」

「ええ、瀕死のキラアントは仲間を集める信号を発する。冒険者の常識ですあ」

別の通路からカヌウの取り巻きが二人。彼らも瀕死のキラアントを片手に悠々と現れた。

「正気か……てめえらあああつ!!」

「旦那、俺らの相手をしてる間に、アイツ等の餌食にはなりたくないでしょう」

「っ！ ……糞がっ！」

魔剣を投げ捨て、走り出すゲド。キラアントが確認できない通路に走りだし——悲鳴が轟いた。

「アッアッアッアッアッ」

もう、逃げ場は何処にも——

『『ファイア』ツ！』

大急ぎでリリを追い掛けていたら、悲鳴が聞こえ、なんか目の前に顔つきが悪人臭漂ってる男がキラアントに押し掛かっている光景が飛び込んできた。何してんだよコイツ。背中が痛えつてのにさあ。

『『ファイア』ツ！』

キラアントの甲殻をぶち抜き、一撃で魔石を粉碎してキラアントが一瞬で灰になって消し飛ぶ。倒れていた男が呆然としてお——コイツ小便ちびってやがる。だっせえ……俺もよくちびるけど。今もちびっちゃってるのかパンツのなかぐっしよりだよ。油断大敵だわ。

「大丈夫ですか？」

「なっ……」

「とりあえず逃げた方がいいで——」

「助けてくれっ！ 頼むっ！ なんでもするからっ！」

おい、縫り付いてくんな。こっちは幼女だぞ。放せ。つか背中に触んなっ！

「落ち着いて、とりあえずパルウムの女の子を見ませんでしたか？」

茶髪の——あー、もしかしたら獣人かもしれないですが」

「っ！ テメエ、リリルカの仲間かっ!？」

「その様子だと知っているみたいですね。何処に居ます？」

「あんな糞ガキどうだっていいだろっ！ それより俺を助けてくれっ

！ 金も出すっ！」

………。あつ、ふうくん。なるほど、こいつがベルの言っていたりを着け狙う悪い奴ね。と言うか、なんかキラーアント多すぎだろ。さつきコボルトにやられかけたつてのにさあ……。

『ファイア』、とりあえずリリの居場所を教えてください。そしたらついでに助けますんで」

「っ！ お前正気かよっ！ あのガキに嵌められたんだろっ！」

それは、その通りなんだが。こんな屑に言われるのは腹が立つな。

「どうでも良いですよ。とりあえず盗まれた物を取り返すだけですし」

「っ！ この先の部屋に居るっ！ カヌウ達も一緒だっ！」

カヌウ？ 誰だソイツ……。リリを半殺しにした屑共か？ ……

ダンジョンの中、都合な条件じゃん？ 殺す？ 殺しちゃう？ まあしないけど。

「離してください。とりあえずリリを——

「あんなの良いだろっ！」

しつこいなコイツ。……しゃあない。

『ファイア』……離さないと、次は頭を撃ちぬきますよ」

「っ!? お前……糞っ！」

「二人で無事に逃げ切れます？ 私に協力してくれるなら、ついでに助けてあげますが」

肉壁として使ってやるから、ほら早く決めろ。そろそろキツイんだよ。

「……わかった」

よし。例えゴミみたいな屑野郎でも、肉壁にはなるだろう。背中刺されない様に注意しなきゃなあ。まあ、今さら背中刺されても変わらんか。

通路の曲がり角の先のやり取り。間違いない、ミリア・ノースリスだ。なんで——？

ベル・クラネルと彼女の二人であれば、十階層のあのフロアでも余裕で生き残れる。少なくともリリの見立てではそうだった。どちらか一人だと難しい、そう、片割れだけだと死ぬ可能性すらあった。だけど二人だったから、二人一緒だったから罠に嵌めたのだ。何故彼女だけが——

「……チツ、余計なのがついてきやがったか」

カヌウの舌打ちが響く。こうしている間にも大量のキラアアントがルームに流れ込んでくる。ダメだ、ミリア一人では対処できない。

「ミリア様っ！ 来てはダメですっ！」

来ないで、お願いだから。

「見つけた……其方のお方は何方？ この惨状は貴方達の所為って事で良いのかしら……『ファイア』！ 『ファイア』！ 『ファイア』！」

曲がり角から悠々と現れた姿に言葉を失った。魔女の帽子を左手に持ったミリアと脅えた表情で剣を構えたゲドが現れる。ミリアが右手に魔法を重ねた剣を持ち、切っ先を向けて瀕死のキラアアント三匹に瞬時に止めを刺した。その顔を見てカヌウ達が焦った声を零す。

「なっ!? ガネーシャファミリアっ!」

ミリアが身に着けているのはガネーシャファミリアの団員である事を示す仮面。ヘスティアファミリア所属の彼女が何故そんな物を？

「もう一度聞きます。この惨状は貴方達の所為ですか？ まあ、彼に事情は聴きますので別に喋らなくて良いです。とりあえず——
リリルカ・アードから離れる屑共」

「……………」

魔法の矛先を向けながら言い放たれた台詞に言葉を失う。彼女は一体何を考えているんだろうか。

「なあ嬢ちゃん。嘘は程々にしといたほうが良いぜ？ ガネーシャファミリアの玩具の仮面なんてつけて、ガネーシャファミリア騙ってちやあ怒られちまうぜ」

「……玩具？」

「そうだけ嬢ちゃん。そんな玩具でごっこ遊びだなんて……おいゲド」

焦りの表情から一変、にやりと笑みを浮かべたカヌウの表情。ミリアの不審げな声。

「ソイツはガネーシャファミリアの団員じゃねえ。そうだろ？」

「……知らねえよ」

「おいおい、ファミリアを騙るって言う意味を解ってねえようだな」

ファミリアの名を騙れば、間違いなくそのファミリアを敵に回す。特に巨大なガネーシャファミリアは、名を騙って悪事を働く事に敏感であり、例え正義感から行われた行為であっても、名を騙る行為を許しはしない。

彼女はガネーシャファミリアを敵に回す大罪を犯していると言っている。いい。

「此処で合った事は黙っておいてくれよ、そしたらお嬢ちゃんの仕出かした事も黙ってやる……わかるよなあ？」

ミリアが此処でガネーシャファミリアを騙った事を黙っている代わりに、この場を見逃せと命じている。ここで彼女が魔法を使ってカヌウ達を殺した所で、ファミリアを騙った事実は消えない。ミリアには消えない罪が残るだろう。もし何処かからバレれば……ミリアは……。

「ふうん、もう既に手遅れなぐらいにキラアントが集まったこの状況でそんな強気な発言ができるのね……。ねえゲドだっけ、もう少し離れてくれない」

「おい、やべえって、どうすんだよこの状況っ！」

「……はあ」

溜息と共に、ミリアは徐に魔法の矛先をカヌウに向けた。

「嬢ちゃん、まさか俺達とやりあ——」

『ファイア』ツ！」

「ぐうつ!? ガキがつ! このままだとキラアアントに全員やられるんだぞつ! ここでやりあうなんて正気じゃ——」

『ファイア』ツ！」

「ぐあつ!?!」

「リリルカ・アードから離れる。次は頭に撃ちこむぞ」

響く声、カヌウの両肩に撃ちこまれた魔法。ミリアの声にビビリ——カヌウが笑みを零した。

「ぐあつ!」

「動くんじゃねえ、こいつがどうなっても良いのか」

「リリを放せ」

人質——そんな価値がリリにあるのか。彼女を騙したりリリにそんな価値は無い。無い筈なのに——彼女は戸惑っている。何故? リリごと撃ちぬいてしまえばいいのに。

戸惑うミリア様の後ろから、キラアアントが接近している。ゲドが其れに気付いて震えながら剣を向けているが、あんなへっぴり腰では倒せる物も倒せないだろう。

「……しようがない、使いたく無かったんだけどなあ」

「あん……っ!? てめえっ! その薬はっ!」

ミリアが帽子を放り捨てた。帽子で隠すように持っていたのは真っ赤な液薬の入ったポーシヨンポーチ。ランクアップ並の強化を齎す薬が四本も入ったポーチだ。

「切り札なんですよねえ。で、リリを放してここから立ち去るか。それとも——私と本気でやり合いますか?」

本気の彼女、あの薬を使えばカヌウ達三人がかりでも相手にならない

「おい、おまえはなんでリリを助けるんだ」

『ファイア』、話し合う気は無いんで、さっさとリリを解放してくれま

せんかね」

カヌウの片耳を撃ち抜いたミリアの魔法。だけどミリアの様子がおかしい。カヌウもそれに気付いている。

「おいおい、嬢ちゃん……無理し過ぎじゃねえのか」

「……どうでしょうかね」

「おいっ！ もう、どの道もキラアアントで一杯だぞっ！ 早くしてくれよっ!!」

ゲドの叫びが響く。カヌウの取り巻きの二人も剣を構えてキラアアントを牽制している。既に部屋の入口はキラアアントが詰り、どうにもできなくなっている。なんでこんな事になってしまったのか——リリがあんな事しなければ。

「よし、ここは平穩に取引と行こうじゃねえか」

「よくそんな口が利けますね」

「まずその赤い液薬を寄せ。そうしたらリリをくれてやるよ。どうだ？」

にやりとした笑み、余裕を崩さない様に振る舞うカヌウの様子をミリアが鼻で笑った。

「先にリリを解放して、そしたらこんなもんくれてやるわ」

「おいおい、立場がわかってねえ様だな」

「そつちも、立場がわかってないでしょ」

「お前ら何悠長に話し合ってたんだよっ！」

騒ぐゲドを二人が一瞥し、ミリアとカヌウが視線を交差させる。

「では、一、二の三でどうです？」

「……チツ、ここまでキラアアントが集まっちゃったんだ、そうするかねえか」

ダメだ、カヌウはミリアを騙してる。このままでは——

「では——一、二いの——三っ！」

赤い液薬を放り投げるミリア、気が付けば自身の体が宙に舞っていて——ミリアに受け止められた。

「はいはいお帰りリリ。とりあえず逃がさないから覚悟よろしくつと……」

「ふひっ……ふひひひっ……」

「……きもっ」

ポーシヨンポーチから赤い液薬を取り出したカヌウが喜色の悪い笑みを浮かべている。二人の冒険者も笑みを浮かべ、此方を見た。

「まあ、これだけありや十分か。悪いなガキ、此処で死んでおけ——

カヌウの取り巻きが同時に何かを取り出す——あれは、小型のクロスボウ。毒が塗られているのか怪しく輝く切っ先をミリアに向ける。

ミリアは特に何かするでもなく立ったままカヌウを見据えていた。

放たれたボルトはミリアのスキルに弾かれ、零れ落ちる。

「チツ、死ななかつたか……まあこの数相手じゃ生き残れねえだろ」

三人は唐突に剣でキラアアントの大群の中を切り伏せながら逃げ始めた。少なくとも、逃げるだけなら出来ると踏んでいた様だ。実際、キラアアントの大群を三人で切り伏せて進んで行っている。丁重に、キラアアントは瀕死の状態になる様に調整している。

「……おいっ！ どうすんだよっ！ 置いて行かれちまったぞっ！」

「あー……あいつ等って結構強かったのね」

「糞がっ！ てめえどうすんだよっ！」

「五月蠅いです。ちよつと黙っててくれません」

「糞っ！ 糞っ！ クソガアツ!!」

「五月蠅えつつつてんだろ」

「うぐおあっ……て……めえ……」

ミリアの蹴りがゲドの股間を蹴り上げ、一瞬で顔色が真っ青に染まり、土気色に代り、ゲドが倒れ伏した。

「よし、静かになったし……りり、大丈夫？」

ゲドを部屋の隅っこに蹴り退けて、ミリアはりりに問いかけて来た。何事も無かったかのように、脂汗を流しながら。

「なんで……？」

「ん？」

「何で来たんですかっ！ 来ないでって言ったのにっ！」

ミリアが落としたバックバックやらを部屋の隅に押しつけ、りりも其処に置かれた。既にキラアアントに埋め尽くされた部屋。もう逃

げ場は何処にも無い。

「助けてって言わなかった？」

「言ってるじゃない……言ってるじゃないですよ……言える訳無いじゃないですか」

「……………そう」

言える訳がない。こんな場所で、あんな事をした報いを受ける自分に、助けてなんて言う資格は無い。

ミアは此方に背を向けてキラアントと対峙する。そこで、漸く気が付いた。

「……………ミア様」

「何？」

脂汗を流しながら、震える彼女。その背中が真っ赤に染まっている。肩で息をする彼女、何故気が付かなかったのか——背中に大きな傷が出来ていた。

「その……………傷は……………」

「ちよつとね。キラアントにやられたのよ。近づき過ぎるとマジックシールドが発動しないみたいでね」

口元に笑みを浮かべ、余裕そうな表情を浮かべているが、既に足が震え、顔色が青褪めはじめている。

「鎖帷子、上層で十分に使えるかなって思ったけど……七階層じゃただの重しだったみたい。いや、でも即死しなかった分は働いてくれたのかしらね」

ああ、ダメだ。心優しい彼女が死んでしまうなんて——彼も、もしかしたら死んでいるのかもしれない。

「ミア様……………」

「何？」

「お願いします、お一人で逃げてください……………」

ミア一人ならなんとかなる、はずだ。

彼女の背中になけなしのポーションをかけて治療しながら呟けば、彼女は不思議そうに振り返った。

「何言ってるの？ 一人じゃ逃げられないわ」

「っ！ ミリア様お一人なら、いけます。足手纏いさえいなければ――走り抜ける事ぐらいいきますよね」

目を泳がせて、ミリアは右手を軽く振るって魔法を解いた。

『シヨットガン・マジック』『リロード』……さて、気を取り直して頑張りましょうか」

「ミリア様、お願いですから逃げてください」

『ファイア』！ さつきから逃げて逃げて……リリはどうするのよ」

「リリは……」

寂しかった、誰かと居たかった。必要とされたかった。でも――

リリなんかと一緒に居た所為で、リリなんかが誰かと居る事を望んだ所為で、ドラゴンテイマー彼 女は死にかけた。

目の前で、ミリアも死にかけている。ベルも――彼らはリリが殺しかけたのではないか。

――リリは、此処で死ぬべきだ。

もう終わろう。此処で死ぬ。終わらせよう。何も出来ない自分を、弱い自分を、ちっぽけな自分を、価値の無い自分を、寂しい自分を――ここで死なせてしまおう。

「良いのです、リリはもう……」

「……ふうん。じゃあ良いわ。私も此処に残るだけだし」

「っ！ なんですですかっ！ リリはお二人を騙したんですよっ！ 本当ならばベル様とお二人で協力すれば余裕で切り抜ける状況にしてきたのにつ！ 剣だつて、ただ奪うだけじゃなくてそれなりの剣を用意しておいたのにつ！」

なんで、リリなんかを助けようとするのだろう。

「なんで私に逃げろなんていうの？ 『ファイア』っ！ 何？ 自分は助かりたくないの？」

「リリなんか生きてたつて仕方がないじゃないですか……リリは……」

優しいベル様を、ミリア様を騙した罰がくだっているだけじゃないか。それを、何故ミリアが助けるのか。

「ねえ、リリ」

「……………」

「助けてって言うてごらん」

何を言っているのだ。ミリアは――

「そうね、賭けをしましょう」

血塗れの背中、彼女が不敵な笑みを浮かべ、キラアートの大群の前に立つ。一発の魔法毎に複数のキラアントが吹き飛んでいく。でも、数が多すぎる。このままでは――ミリア様まで。

「内容は――そうね、リリが思いつきり助けを呼んで『ファイア』っ！それで助けが来るか来ないかを賭けるの」

何を言っているんだ。リリなんか助けてなんて叫んでも、誰もきてくれるはずがない。

「私は、来る方に賭けるわ。貴女はどっち？」

「来る訳無いじゃないですかっ！早く逃げてくださいよっ！」

「ふうん…………じゃあ私が勝ったら、ベルのナイフ返してね」

っ！ 彼女は一体何の話をしているんだ。このままでは、このままでは全員死んでしまうのに。

「このままだと死んでしまうんですよっ！なんなんですか！賭けだなんてっ！第一、リリが勝ったとして何が貰えるんですかっ！

リリが勝つて事はつまり全員死ぬって事なんですよっ！」

そう、こんな賭け無意味だ。だって、リリが勝つと言う事は助けが来ないって言う事であって。

助けが来ないのなら、ミリア一人でこの数を全て倒しきるのとは不可能なのであって、ミリアも、リリも、死んでしまう。こんな賭け意味が無い。

「…………リリが勝ったらねえ」

なのに彼女は――肩越しに振り返って不敵な笑みを浮かべていた。

「リリが勝ったら、その時は――」

なんで、そんな笑みを浮かべられるのか。

――一緒に死んであげる」

っ!? ミリアは一体何を言っているのか。頭の中が真っ白になった。

「リリ、私ね。一人で死ぬのがどれぐらい怖くて辛くて寂しいのかわってるのよ。だから——一緒に死んであげる。一人で死ぬのは寂しいしね」

ダメだ、そんなの、絶対にダメだ。

「それとも、私と死ぬのは嫌？」

「っ！ 嫌に決まってるじゃないですかっ！ リリはっ！ リリはミリア様を騙したんですよっ！ 酷い事をしてっ！ なのにつ！」

リリなんかを助けてくれる良い人が、一緒に死ぬなんて。そんなの嫌だ。

「へえ……『ファイア』ッ！ じゃあ、呼びなさいよ」

何を？

「叫びなさいよ」

何が——

「助けてって」

っ……。

「賭けはまだ結果が出てないわ。ほら、貴女が助けてって叫んで——それが始まりの合図よ」

そんなの——来る訳無いのに。

「私と死ぬのは嫌なんですよ。なら——叫びなさいよ、本気で、心の底から、助けてって、そしたら」

彼女が肩越しに振り返る。笑みを浮かべ、挑発するように、言い放った。

「きつと助けは来る」

——。

「たす……て……」

「声が小さい、もっと大きく」

「たすけて……」

「腹から声出さないよ『ファイア』ッ！ 『リロード』」
「たすけて」

「もっと声出せるでしょ」

「……………」

「どうしたの、もうお終い？　じゃあ一緒に此処で――

死ぬ？　一緒に？　彼女と？　そんなの――

「誰かたすけてっ!!」

――来る訳無い。助けなんて。

「『ファイアアアツボルトオオオオ』 ツ!!」

助けなんて来る訳無い。そう、思っていたのに。

第五十三話

助けなんて来る訳無い。そう、思っていたのに。

目の前にいたキラアアントが数匹、貫通する炎の雷によって撃ちぬかれて消滅する。

彼女の言った通りになった。でも、彼が助けに来たのは彼女であつてリリではない。きっとそうだ、リリを助ける理由なんて何処にも無い。そのはずなのに。

「ミリア、遅くなつてごめん」

キラアアントを切り伏せてやってきた彼は、こう言ったのだ。

「リリが無事でよかつたよ」

なんで、リリなんかを心配していた様な事を言うのか。わからない。

そう、わからない。彼一人ではオークの群れ相手は厳しいはずだ。ミリアと協力してやつと……、だがミリアは一人で先に此方までやってきていた。彼一人を残して……では、何故彼は此処に？

頭の中がぐちゃぐちゃになって、訳がわからない。どう考えても彼一人で倒せる量では無かつたはずで、ミリアと協力すれば何とかなる量なのに、ミリアは一人で此方に来ていた。

二人で突破したのなら何故ミリア一人で？ ミリア一人が先に来たのなら彼はどうやって？

わからない。目の前でリリを庇う様に立つ彼女の背中も、その前で夥しい数のキラアアントに臆することなく突っ込んで切り伏せていく彼も、何故こんなことをするのか。

リリは、二人を騙したのだ。モンスターをおびき寄せる罠にかけ、殺そうとしたのだ。

「ミリア、キューイ返すよ」

「はい、よくやったわキューイ」

——ワイバーンだ。紅い、ワイバーン。

彼は腕にしがみ付いていたその赤いワイバーンを彼女に渡した。その紅いワイバーンは甘える様な鳴き声と共に彼女に頼ずりしてい

る。その光景を、リリは何処かで見た事があった。

知っている。リリはその光景を知っている。そう、怪物祭のあの日、助けを求めたあの日に見た光景と、今日の前の光景が重なる。

紅いワイバーンに頬ずりされた、血に塗れた背中の金髪の彼女。ガネーシヤファミアリア所属と言われた彼女。竜ドラゴンを従える者だ。

「嘘……」

彼女はワイバーンに頬ずりされながらも、此方を振り返った。

「ね、言ったでしょ？ —— 助けは必ず来るって」

ああ、あの日、リリは思わず助けを求めた。そう、目の前に迫った死の恐怖に、思わず口から零れ落ちた言葉。その言葉を拾い上げてくれた彼女、なんで気が付かなかっただらう。

ミアリアは赤い液薬を持っていた。それは竜の素材を使った物で、現在では滅多に手に入らないはずの物だ。何故ミアリアがそれを持っていたのか？ ミアハファミアリアに保護されて居た時、ナーアザと言う女性から聞いた。『龍力薬、彼女のワイバーンの素材を使ってできた物だったから。なんで貴女が持っていたのかは聞かないけど、あの薬の所為で貴女が大怪我を負ったから、合わせる顔が無い』と言う言葉。当然だ、竜ドラゴンを従える者がイコールでミアリアだと言うのなら、説明が行く。

だって、竜の素材を使った薬を、全くの無関係のミアリアが持っているとは考え辛い。ミアリアが、ドラゴンテイマーだと言うのなら、納得がいく。

つまり、リリが今まで騙して、盗んで、酷い事してきた相手は——
—あれだけ礼を言いたいと思いつけていた彼女であったのだ。

気が付けば、周りにいたキラアアントは全て魔石とドロップアイテムになっていて、彼がゆっくりと此方に歩いてくる姿が其処にあった。

「ごめん、遅くなっちゃった」

「いや、むしろ早いぐらいなんだけど、どうしたの？」

「えっと、霧で良く見えなかったんだけど別の冒険者が来てくれたみたいで、周りからオークがいなくなってたんだ」

「へえ、運が良いわね」

頭にワイバーンを乗せ、血塗れの彼女と、傷だらけの彼。彼が此方を見て笑みを浮かべた。

「リリ、無事だよな？ 何ともない？」

なんで——なんで彼はリリの事を……。

「リリ、賭けは私の勝ちなんだから、ベルのナイフ返してちょうだいな」

手を差し出して口元に笑みを浮かべた彼女が目の前にいた。怒つて——無い？

隔っていたナイフを取り出し、手渡す。

「ほらベル、今度はとられない様にね」

「ああ、うん。ありがとう……リリ、大丈夫？」

何で？ リリは彼のナイフを盗んだはずなのに。なのに、なんでそんな心配そうな顔を向けてくるの？

「顔が腫れてるわね……『癒しの光よ』『レッサーヒール』これで少しは良くなるはずだけど」

淡い光が弾け、痛みと腫れが引く。リリは、この光を何処かで見た事がある。何処で——

薄れゆく意識の中、思わず呟いた『たすけて』と言う言葉。駆け寄ってくるドラゴンテイマーが、何度も淡い光を弾けさせる。光が弾ける度に意識が浮き上がって、沈んでを繰り返す。

思わず。そう思わず呟いた。お礼を——助けにきてくれてありがとうって……。

「ああ……ああ……」

彼女が、あの時もきてくれたんだ。怪物祭のあの時も、死にかけたあの時も……そして、諦めかけた今も。

「なんで……」

涙が溢れてくる。ぼやける視界の中、彼と彼女が並んで立っていた。彼、ベル・クラネルと、彼女ミリア・ノースリスが、此方を見下ろしている。

「どうして、リリを助けるんですか」

「どうして？ リリは二人を騙したんですよ？ 酷い事をしたんですよ？ なのに、なんで？」

「どうして……ううん、助けてって聞こえたから助けにきたんだけど……」

——っ、そんなの

「そんなのっ！ ミリア様に言わされただけですよっ！」

そう、賭けなんて持ち出されて、口車に乗せられただけで、助けて欲しいなんて思っただけ——無い。本当に？

「リリ」

ミリアが此方を見ていた。ぼやける視界の中、頭の上にワイバーンに乗せた彼女は笑みを浮かべて言った。

「遅くなっただわ」

何が？

「あの時、満月の日。貴女はたすけてって私に言った」

ああ、二度目の時。リリはたすけてって言ってしまったんだ。思わず、死にたくなくて、でも、それでもリリを助ける必要なんて何処にも無い。だって、リリは悪い事をしたんだから。

「リリは、ミリア様から薬を盗んだんですよ。ベル様からも、ナイフを盗んだんですよ……モンスターをおびき寄せる罠にもかけたんですよ。なのに、なのにリリを助けるんですか？ なんでですか？」

「なんでって……」

「そりやあねえ……」

彼と彼女が顔を見合わせてから、二人して笑みを零して言った。

「「そりやあ、たすけてって、助けを求められたし」」

——この人達は、とんでもなく、お人好しなんだ。

帰って来たキューイ曰く。ベルは途中でヴァズ・グアルエンズアーインっていう人に助けられたらしい。ロキファミアロウキイヘミシアの冒険者だつて話なんだが……まあたロキファミアに助けられたんかい。

わんわんと泣くりりはベルに任せた。俺は、ちよつと出血酷過ぎて眩暈がする。増血薬をミアハファミアで処方してもらわんとあかん。

まあ、そつちより問題は別の所だ……薬、全部持っていかれちまった。完全に油断してたつーか。あくどい事してるからただの雑魚だと思つてたが、カヌウつて奴とその取り巻きは最低限の実力も兼ね備えていた訳だ。

まあ、こりや俺の油断の問題な訳で。そつちはまあいい、別の問題は……ゲド・ラディッシュとか言う奴。

ゲド・ラディッシュ、ライッシュか？ 小便チビつて気絶した阿呆の事だ。気絶させたの俺だけど……ついカツとなつてやった。反省も後悔も……いや、後悔はしてる。小便チビつた奴相手に金的蹴りした所為で小便が足に付いた。こりやクリーニング代請求しないとなあ。まあ、ソレ以前にリリに対して行った仕打ちは許せんわ。

気絶してるゲドの背中を適当に蹴つ飛ばす。起きろ屑。俺も屑か、屑が屑に蹴りいれてるよ。はは……はあ。

「うっ……いってえ……っ！」

おお。意外と良い反応すんなこいつ。一気に起き上がつて剣を握つて周囲を警戒しだした。まあ最低限冒険者としての素養はあるつて事か。

「っ!? キラーアントが居ねえ……どうなつてんだ」

「もしもし、その寝坊助さん」

「あん……、てめえはっ！」

おい、剣向けるな阿呆かテメエは。

「どうどう、落ち着いてください」

「何が落ち着けだっ！」

「まあ、周囲を見回せば状況もわかるでしょう……」

剣をこつちに向けたまま周囲を見回すゲド・ラディッシュ。ライッ

シユか？ まあゲド君で良いか。

「魔石……全部、キラアートのもんかよ……」

「その通りです。状況、飲み込みました？」

「……………助けてくれたのか？」

まあ、結果的にはそうなるな。こいつの行いについてぶつちやけよく知らなかったから助けたけど……。

「っ！ 貴方はっ！」

「ゲドさんっ!？」

少し離れた所でラブコメの波動を放っていたリリとベルもこつちに気付いたか。

「テメエはあの時の糞餓鬼っ！」

『「シヨットガン・マジック」……剣をしまってくださいませんか？」

「っ!？」

これ見よがしにガンマジック突き付けてやればあら不思議。言う事を従順に聞いてくれるワンコの完成である。ゲドワンコ君か。

「さて、貴方の処遇について今この場で決めたいんですけど……ベル、リリ、判定は？」

「え？ 判定？」

「……………」

ベルは意味がわかって無いっぽい。リリは無言で睨んでる。有罪ギルティかな？

「なっ、待てよっ！ 悪かったっ、謝るっ！ 謝るから命だけは」

命があればそれでいいの？ じゃあ手足縛って放置してこうか。モンスターにむしやむしやされるだろうけど頑張ってるって感じで。まあ、やんないけど。

「状況は飲み込めた様なので本題に行きますね。とりあえず今から地上に戻りますので一緒に行きましょう」

「ミリア様、こい……ゲドも助けるのですか？」

リリ、今こいつって言おうとした？ いや、まあコイツでも十分だろうけど。肉壁にはなるだろ。

「そうですね……今の私は正直倒れる寸前です。出血で意識朦朧……

ベルの方も戦いの連続で疲労してるでしょうし、リリは戦力外……今の状態で地上まで行くのも一苦勞ですよ。そこでずとお寝んねしてた人に露払いして貰おうかと」

「なっ！ テメエ、俺を捨て駒にするつもりかよ」

何言ってるんだコイツ……援護はするぞ。誤射するかもしれんけど。「援護はしますよ……そうですね。貴方には現在選択肢が三つあります」

「何？」

まず一つ。俺達を見捨てて此処から一人で逃げる事。無論、そんな事したらダンジョン内で襲撃しかけてきた冒険者としてギルドに報告を上げるし、カヌウ達と一緒にダンジョン環境の意図的な破壊工作を行ったって報告を上げる事も辞さない。そうなったらギルドの要注意人物リストに登録されてファミリアの方には警告が行く事だろう。

どんな主神に仕えてるのか知らんが、主神に迷惑かかるだろうし、場合によっては主神からの罰則とギルドからの罰則の二重苦になるだろう。

続いて二つ目。ここで俺達を皆殺しにして今回の件を全て隠す事。当然だけどこっちは全力で抵抗する。リリは殺せるだろうけど、俺は一応出血は酷くとも魔力にはそこそこ余裕あるからマジックシールドで防御からの近距離ショットガンで即死狙いできるし、ベルの方は普通にコイツより強い。疲弊してたとしても俺の援護ありなら間違いない。負けは無い。つまり返り討ちに遭うって事だ。

最後の三つ目、大人しく露払いして地上まで俺達を送り届ける事。ついでにカヌウ達に嵌められた事をギルドに報告してダンジョン内の意図的な環境破壊工作を行ったとして、カヌウ達を要注意人物リスト入り&ソーマファミリアに対する牽制を行う様に仕向けられる。

無論、ゲドもなんらかの罰則は喰らうだろうがそっちに関してはガネーシャ様を通じて減罰を願っても良い。

ついでにリリの方も減罰を願う形でなんとかしようと思う。

「私のおすすめは三つ目です。一つ目は冒険者として致命的なギルド

の補助を失う事が考えられますし、二つ目はまず負けは無いでしょう。無論、こつちも痛い目は見ますけど……その場合は何がなんでも貴方を殺します。三つ目を選んでいただければ双方無傷、とまでは行きませんが納得のいく形で丸く収まると思いますか？」

冒険者として死ぬか。生涯を閉じて死ぬか。軽い罰を受けて生きるか。選ぶのは一つだ。

「……………」

其処は悩むなよ……。

「本当に、本当に減刑してくれんのかよ」

「それは貴方次第です」

「ごめん嘘、ガネーシャ様次第。無理だったら無理だし。

「……………くっ、わかったよ。テメエ等に従ってやる……………」

さて問題はカヌウ達だけか。いや、途中で背中刺されるかもしれない警戒はしとくか。

朝霧に包まれたバベルの入口前の噴水。巨大なバックパックを背負う少女が一人腰かけている。俯いて何を考えているのやら。ベルの方を見上げれば口元に笑みを浮かべて「良いかな？」なんて言うてる。

当然、ベルの好きにすればいい。前は俺の我儘に応えてもらったしな。

「サポーターさん、サポーターさん。冒険者を探していませんか」

意趣返し of 積りだろうか。それともちよつとした悪ふざけ？

まあ、ベル君なりの冗談って奴だろう。

「混乱しているんですか？ ですが、今の状況は簡単ですよ。サポーターさんの手を借りたい半人前の冒険者が、自分を売り込みにきていますから」

ベルが半人前なら俺は四分の一人前か。結局、ベルが助けに来るまでの時間稼ぎしか出来なかったしな。

「また、僕達と一緒に、ダンジョンに潜ってくれないかな」

「まあ、私の正体を知ってしまった貴女には傍に居て貰わないと心配だしね」

さっさと手を握ればいい。脅えずとも、ベルは酷い冒険者では無いからな。

小さな手がベルの手に重なるのを見て、思わず朝日の方へ視線を向けた。朝日より眩しい光景に、何とも言えない気分させられる。

……俺は、リリを救えただろうか？

俺にできた事はキューイがベル側にいたおかげでベルが来るタイミングがわかったから、リリを挑発する様な形で誘導しただけだ。それだけで、救えたなんて言えるだろうか？

あの状況で、俺にできたのはそれぐらい。もっと強ければ、他に選択肢もあったはずなのになあ。

強く、なりたくないなあ。置いて行かれない様にじゃなくて、もっと色んな事ができるぐらいにさ。

第五十四話

リリをヘスティア様に紹介しようと言う事で、今日は昼で迷宮を切り上げた。稼ぎは上々。

真昼と言う事で冒険者は絶賛ダンジョン探索中であり、目に映るのは冒険者では無い一般市民の奥様方。そんな街の大通りを俺、ベル、リリで三人仲良く並んで歩いている。人通りが多いと言う程では無いので三人並んでも余裕で歩けるぐらいだ。

「ふううん、ベルさまあ」

「あつ、ごめん、つい」

……何を横でラブコメやってんですかねえ。と言うかベルには不用意に獣人の耳とかに触らない様に教えたのに。

まあ、気になるのもしやーないか。

リリの持つ魔法『シンダーエラ』は自身の姿を偽ると言うもの。触った時の感触もしっかりと再現されるし、姿形を変化させる物である。元となる自身の姿からかけ離れた姿に変身する程に消費する魔力が跳ね上がるそうだが、耳と尻尾を生やして獣人に扮する程度なら一日変身しっぱなしでも平気らしい。

はつきり言つてチート過ぎると思ふんだが、神が嘘を見抜くこの街では有用性は低いらしい。とは言え普通の冒険者程度なら騙したい放題なのはチートだと思う。

「リリはこのままでいいの？」

「はい、ベル様とミリア様が私の事をご存じなら」

……無駄に信用されてるっぽいんだよなあ。確かに全力で助けに行つたんだが。

「それよりも、良いのですか……？」

不安そうな色の混じるリリの声。何か不安、不満に思つてる事でもあるのか？

「リリはお二人を騙したのですよ、それなのに……このまま許されてしまったら……リリは」

……。ああ、罪悪感が残つてるって話か。簡単にリリを責めるなり

なんなりすりや解決する様な問題なんだが……。俺も似た様なもん抱え持つてるしなあ。普通にリリにお仕置きでもすりや良いのかね。「大丈夫だよ。さ、行こう」

……ベルにはわからんだろうな。悪い事をした後はしっかり怒られないと罪悪感が残り続けてしまうなんて。悪い事をするなんて考えないベルにはわかるまい。ある意味で最も残酷な事をしているが、リリにとっては良い薬か？俺にとっても良い薬だしな。嘘を吐いた事を責めて貰えないのは正直キツイ。ヘステイア様は怒る時は怒ってくれるが、ベルは赦してしまう。赦すだけでは解決できない事もある。そこら辺を教えた方が良いのか……。

いや、それはベルの特色だろう。それを打ち消すのはやめるべきだ。ヘステイア様に任せよう。俺がしても良いが、演技してでもそれをするのは……。

ヘステイアファミリア本拠、廃教会の壊れた祭壇前に仁王立ちするヘステイア様に、懺悔する様に跪くりり。ヘステイア様の左右に控える俺とベル。

「リリルカ・アーデです。初めまして」

上ずった挨拶をするリリルカに対し、高圧的な雰囲気をつたヘステイア様が胸を張って見下ろす。

「君が噂のサポーター君か、ベル君とミリア君から話は聞いてるよ」

「僕、下でお茶でも入れてきます」

ベルは気を利かせてお茶を淹れに行くのか。俺も行こうかなあ、どうしようかな。ヘステイア様とリリのやり取りも気になるんだよなあ。

「あ、でもコップが三つしかないです」

「なあに気にする事は無いさ。僕とベル君と一緒に使えば良い」

あー、最初はコップ二つしかなかったから俺とヘステイア様で兼用したっけなあ。なつかしい。追加で買った時に客用のコップぐらい買っとけばよかったか。

「あはは、神様もそう言う冗談言うんですね」

「がーん……」

目をギラギラ光らせてアピールするヘステイア様に対してのベルの反応は淡泊であった。最悪、俺のコップをリリにつかわせりや良いだろ。むしろ他二つのコップつて割と古びてるし、一番きれいなものつて俺のコップ……やっぱ新品はヘステイア様が使うべきだと思うんだけどなあ。割と頑固と言うかなんというか。思い入れでもあるんだろうか。

「さて、まずは君の覚悟を聞こうじゃないか」

ふざけた雰囲気が消え、神威こそ出していないものの、しっかりと圧をかけた言葉を口にするヘステイア様。

「サポーター君、君は二度と同じ過ちを繰り返さないと誓えるかい」

「はい、誓います。ベル様に、ミア様に、ヘステイア様に……、何よりリリ自身に。リリは、ベル様に救われました。ミア様には三度も救って頂きました。決して裏切りません、裏切りたくありません」

……三度？ 三度も助けたか？ えつと……裏路地で死にかけていた時は、俺の所為だしカウントしないでしょ？ 昨日のキラアントの時は俺も一緒にベルに救われた感じでしょ？ 俺はカウントしたくないけど、リリからしたらその二つをカウントするのはわかるんだけど、三回目？ 何処で？

「わかった、その言葉は信じよう」

ううむ。わからん。キューイ、なんか知ってるか？ あ、知らない？ だよね。

「正直言うよサポーター君。僕は君の事が嫌いだ」

ばつさり言うね。まあ、むしろ罪悪感を抱いたまま潰れない様にする気遣いだから優しい言葉なんだが。

優しく、相手を傷付ける言葉を弄せるとか、やっぱヘステイア様は凄いな。

「僕から言わせれば、それはただの甘えだね」

……そっかあ、俺の抱えてるこれも甘えっちゃ甘えなのかあ。

「良いだろう。ベル君は君を責めないだろうし、ミア君には余計無

理だろうから、僕が代わりに裁いてやる」

「……………うん、俺には無理だ。裁かれる側だつてずっと思つてる俺には、リリを捌く立場には立てない。いや、立てなくはないが、演技の上での話になるし、そんなの俺が耐えられない。」

『ミリアー、お茶の缶つてどこだっけー』

ふむ？ ベル君のお呼び出しだな。しゃーない、行つてくるか。お茶の缶？ 戸棚に仕舞つてなかったっけか？

二人のやり取りが凄く気になるが、ベルが困つてるみたいだし行くかあ。

「へスティア様、ちよつと下に行つてきますね」

「ああ」

ミリア様が居なくなり、へスティア様と二人きりになつてしまつた。

どんな裁きが下されるだろう。リリは…………二人を騙して、優しさに着け込んで取り入ろうとしている。へスティア様の言う通り、嫌われて当然だ。

「…………ベル君とミリア君の傍に居てやつてほしい」

「え？」

……………何で？ 下されるはずの裁きが、おかしい。

「ベル君が変な奴に引つ掛からない様に、お目付け役さ」

ずっと俯いていた所為で、気が付かなかつた。此方を見下ろすへスティア様の目を見て、確信した。この神様もとても優しい人なんだつて。あの二人の主神なんだつて、漸く理解できた。

「……………それに、ミリア君の方も色々あるのさ」

ミリア様に？

「詳しくは話せないし話さない。この事を君に話すかどうかはミリア君が決める事だ。だけど、ミリア君にも事情がある。もしかしたら君を不愉快にさせる事をするかもしれないし、これまでできていないかもしれない。だけど、断言できる。ミリア君は君を害する積りは無

い」

何の話だろう。ミリア様がリリに不愉快になる事を？ 七階層、キラアントに囲まれたあの状況での話だろうか？

「言っとくけど、君の為じゃないぞ。僕は今回の事で確信したんだ。ベル君はほつといたらまた誰かに騙される。ミリア君はそれに気付けるけど……その所為で余計な傷を負ってしまう」

余計な傷？ リリがした事でミリア様を傷付けた？

「罪悪感なんて、自分が自分を赦せるか赦せないかでしかないんだ。君が心を入れ替えたっていうなら、行動で証明してみせろ」

……何が、ミリア様を傷付けてしまったのだろう。

「パーティーへの加入は許可する。ベル君のお守も任せるし、ミリア君が余計に傷つかない様に見てやってほしい」

「おまたせしましたー」

「っ！ くれぐれも、出過ぎた真似だけはしないようにしてくれ」

あー、リリとヘスティア様の話、終わってるな。戸棚に仕舞ってあったはずの茶缶が別の所にあったのが少し気になるが、まあいいか。

「遅くなってすいませーっ!? 神様っ」

ベルの腕に抱き付いて胸を押し当てるヘスティア様。リリに見せつける様に行われるその行為にベルは顔が真っ赤。未だに慣れないのかね。リリは口をあんぐりあけて硬直してる。

リリに見せつける行為。まあ、ベル君に惚れただろうし。泥棒猫（ヘスティア認定）に対するあてつけかなんかだろう。

「さあて、改めまして。初めましてサポーター君僕のベル君が世話になったねえ」

副音声として『後からのこのこしゃしゃり出て来た分際で、僕のベル君に手を出すんじゃない。この泥棒猫』ってのが聞こえた気がした。まあ、その通りだしね。

でも、注意しとかなないとベル君はどんどん女の子をホイホイ惚れさ

せそうな気はするが。

次の瞬間、覚悟を決めたらしいリリが外套を脱ぎ捨ててベルの腕、ヘステイア様とは反対の腕に胸を押し当てる様に引っ付いた。

「いえいえ此方こそ、ベル様にはいつもリリにお優しくしてくださいりますから」

こっちもなんか副音声聞こえるんだが。なんだかなあ。ベル君の顔色がヤバイよ。あそこまで攻めるとベル君は引いちやうだろうなあ。おっと、リリの外套が降ってきた。回収して畳んでおいておこう。

「リリ、外套此処に置いときますね」

二人とも火花散らしてまあ……ベル君モテモテですなあ。片やロリ巨乳小学生。片やロリ巨乳幼女。なんか巨乳率高いよな。アイズさんもそうだし、エイナさんも巨乳じゃん？ 貧乳って俺だけ？

「そうだつ！ エイナさんにギルドに行つて会わないとつ!!」

二人ががっしりと腕を抱いていた筈なのに、一瞬で抜け出すベルの技量つてスゲエ。

「ベル君うん」「ベル様あ」

「君の所為でベル君が逃げちゃったじゃないかっ！」

「なんですつてつ、神様だつて——」

俺はどうするかなあ。此処で二人のキャットファイトを眺めても良いかも知らんが、ベルの方も気になるしな。

「ああ、ミリア君、君はベル君と一緒に行ってくれ。どうせまた女の子を引っ掛けてくるだろうからね。あのギルドのアドバイザー君も怪しいもんだよ」

ああ、うん。了解。エイナさんが怪しいって……まあ、そうか。ベル君モテるしね、可能性はあるよね。

「わかりました。では行つてきますね」

「さて、ミリア君が行つたから漸く話せるけど」

「……はい」

「ミリア君を傷付けたのは君の所為でもある。だが、君だけの所為じゃない」

「……………」

「ミリア君は嘘を吐くのが上手くて、大嫌いなさ。人の嘘に直ぐ気付く、気付いてしまう」

「じゃあ、最初からミリア様は気付いて……………」

「ベル君が騙されそうになってる時、ミリア君はそれを教えなかった。何故だかわかるかい？」

「わかりません」

「ミリア君も君と同じだったからだ。君と同じで、自分が悪い子だと思ってる」

「でも、ミリア様はとてもお優しい方で」

「そうだ、ミリア君は優しい、優し過ぎるんだよ。だから、君に手を伸ばしてしまった」

「……………」

「悪い事じゃない。ミリア君が自分でやりたいと思った事だ。応援もするし、背中も押そう。でもね……………傷を負う事を躊躇わなくなってしまうから、心配なのさ」

第五十五話

ベルと共にギルドへとエイナさんに会いに来た訳だが。受付にエイナさんの姿が見えずにベルと二人で首を傾げた。

「エイナさん居ないね」

「みたいね。何処か——あ、居た」

見つけたのは窓際の席。対面に金髪の誰かが座っているのが見えた。

エイナさんも此方に気付いた、と言うよりベルに気付いて声を出してきたのでとりあえず手を上げて存在をアピールする。俺も居るよー。

「ベル君？」

「ん？」

ベルが振り向いて漸く気付いた様子でエイナさんの方を向いて——エイナさんの対面に座っていた金髪の女性が此方を振り向いた。と言うか知ってる顔だった。アイズ・ヴァレンシユタインである。

エイナさんと何を話してたんだ？

アイズ・ヴァレンシユタインの瞳が僅かに見開かれる。ベルの方を確認すれば目を真ん丸にして驚いている。

「ひっ」

ベル君が妙な声を上げて怯み、そのまま踵を返して逃げようとおい何逃げようとしてんだよ。

慌ててベルの腰のベルトを掴んで止める。

「ベル、逃げちゃ——っ」と

うわ、力強え。止めようとベルトを掴んだのは良いが、そのまま止められずに引っ張られてしまう。

ベルの方が基礎アビリティ高いもんね、仕方ないね。とやめる訳にもいかない。前にアイズさんに『ベルが逃げようとしたら止める』って約束しちゃったし。

「ちよつとベル、逃げるのは無しで……ああもう」

強引に俺を引き摺ってでも逃げようとしてるみたいだ。と言うか

俺の声が完全に届いてないっぽい。逃げるな逃げるな。しゃーない、足引っ掛けてこけさせるか。

「うわっ!？」

足を絡ませる様に引っ掛け——上手い事ベルがすっこけて、そのまま前転して転がって入口に向かって進んでいきやがった。何其の身のこなし、スゲー器用な事するなあ。

って感心してる場合じゃねえ、あのまま逃げる積りだぞ。

慌ててベルの後を追おうとして、頭の上を何かが通過して行つたのに気付いた。と言うかアイズ・ヴァレンシュタインだった。天井すれすれを跳躍していった彼女がベルの進行方向にしゅたつと着地して——あ、ヤベエ。

前転した勢いそのまま、起き上がろうと前に進みつつ膝立ちして進もうとしたベル。目の前に降り立ったアイズ・ヴァレンシュタインはベルに背を向けており——ベルが勢い良くアイズ・ヴァレンシュタインに突っ込んで行つた。

「んぐっ!？」

……尻にである。

擬音で表すならぽふっだろうか？　ともかく、アイズ・ヴァレンシュタインの尻に顔面から突っ込んで行ってしまったベル君。周りにはギルドの目があり——周りの冒険者の視線がベルに突き刺さつた。

「おい、アイツ劍姫の尻に顔から突っ込んだぞ」「アイツ死んだな」「不運な奴だな。いや幸運な奴か」「どっちにせよ命は無いだろ」

おおぅ……俺が足を引っ掛けたばかりにベルの命の火が潰えそうになって……冗談を言っている場合では無い。

ベルは顔を引き剥がしてから、目の前に現れた柔らかい壁に目を白黒させている。

「え？　何これ？」

「……大丈夫？」

「ひえっ!?!　ヴァレンシュタインさんっ!?!」

目の前の柔らかいそれがアイズさんの臀部だと気付いたのだろう

ベルの顔が一瞬で真っ青になる。急いで二人の間に割り込んだ。

「アイズさんお久振りですっ！ 元気でしたかつ！」

剣を抜く前に挨拶。挨拶超大事、良いかい？ まだ剣を抜いちやだめだ。いきなりお尻に顔から突っ込んでこられて怒るのはわかるけど落ち着いて話し合おう。と言うか土下座するからマジ赦して。

「ん？ ミリア、久しぶり。元気だよ」

「ですよねっ！ 今のベルの行動はアレですよ、私の所為で——ごめんなさいっ！」

後ろでエイナさんがベルの説教をしてる。うん、とりあえずギルドでバツサリは無いよね？

「……？ えっと、ミリア？ どうしたの？」

……？ え？ 俺今頭下げてんだけど、どうしたのって反応おかしくね？

「えっと……アイズさん？」

「何？」

「……怒って、無い？」

「…………？ 何が？」

ええ？ 怒ってない？ お尻に顔から突っ込まれたんだよ？ 普通怒るよね？

「あの、今ベルがアイズさんの……臀部にですな」

「……あ」

はつとなった様なアイズさん。やっぱり怒ってる？

「怪我、させちやったかな……？」

不安そうな瞳で此方を窺うアイズさん。うん、その反応はおかしい。

席に座るアイズさんの対面に座る俺。そして机の横に直立不動で背筋を伸ばして立つベル。

なんつーかな。尻に顔から突っ込まれた反応が『怪我させてないかな』とか、もうなんとも言えないと言うか……女性として動じないっ

てのはなあ。もしかしてアイズさんも俺と同じで性転換した感じ？
無いか。

「このまえ、ダンジョンでオークに襲われてたよね」

アイズさんの切り出した話題は本題らしい。はつきり言ってアレだ、さっきの尻にぶつかった件はマジで気にしていないらしい。この人大丈夫かよ。

と言うかオーク？ リリに嵌められた時の話か？ あの時、見知らぬ冒険者がオークを片付けてくれたって言ってたがまさか？

「あ、はい。どうしてそれを」

「これ、君が居なくなっただ後に落ちてたから、返そうと思って」

……ベルつてき、なんかこう、持つてるよね。運命の赤い糸的な物をさ。偶然通りかかったのがアイズさんつてねえ。

アイズさんが差し出したのはベルが無くしたと言っていた、エイナさんからの贈り物のグリーンサポータである。

「あつ、それじゃああの時助けてくれたのは……」

見つめ合う二人。アイズさんの方は凄く真剣そうな表情であり、ベルの方は戸惑いの色が浮かぶ。二人だけの空間であり、俺はお邪魔虫と言う奴だろう。空気に成りすますのだ。

「ずっと、謝りたくて」

「え？」

「私が逃がしたミノタウロスの所為で、君の事をいっばい傷付けたから。ごめんなさい」

立ち上がり、深々と頭を下げるアイズさん。本当に申し訳ないと思っているらしい行動。ダンジョン内に潜っているのは本人の意思であり、あのトラブルに関してもアイズさんの不手際はあれど、謝る必要は何処にも無いってのが一般的なんだがなあ。

「ちっ違いますっ！ ヴアレンシユタインさんは何も悪くなくて、むしろ助けてもらった命の恩人で、と言うか謝らなければいけないのはお礼も言わずに散々逃げ回った僕の方で、ごめんなさいっ！」

……ううん、これはなあ。とりあえずベルの足を叩いておく。

「ミリア？」

「ベル、まだお礼言っていないでしょ。さきにそつちを言うべきじゃない？」

「あつ、そうだ。アイズさん、助けてくれてありがとうございましたっ！」

驚いた表情のまま固まっていたアイズさん。少しの間頭を下げていたベルが不安から顔を上げ、互いの視線が交差した時に、アイズさんが微笑んだ。不安が解消され、緊張から解き放たれた様に柔らかな微笑みを浮かべたアイズさんの表情にベルが見惚れているのを見つ、俺は何とも言えない。

なんつーか、もやもやする様な、そんな感じ。

アイズさんが帰るらしいので、ギルドを後にする事にした俺とベル。ギルドの入口から出た所でアイズさんが口を開いた。

「ダンジョン探索、頑張ってるんだね」

「え？」

「こんな短期間で十階層に辿り着いて、凄いね」

おおー。第一級冒険者の剣姫からのお褒めの言葉を頂いた。憧れの剣姫からのお褒めの言葉にベルも面食らってるし。同時に嬉しそうに口元が緩んでるけど、このままの速度じゃ追いつけないって焦りも混じってる。

「いえ、そんな事無いです……もつと強くならなくちゃいけないのに、まだまだで……ミリアが居なかつたら何度も死んでたと思うし」

そりゃこつちの台詞だ。ベルが居なきやとつくの昔に死んでたよ俺は。

「戦い方も素人同然だし、目標にも全く手が届かなくて……」

ナイフを握ってからそろそろ一ヶ月程。はつきり言って素人が素人なりにナイフ振り回す事しか出来てないとしか言えないし、現状は高いステータス頼りの戦い方をしていると見える。それは俺も同様だ。

俺は一応リユーさんにアドバイス貰って魔法つかっちゃ居るが、実

戦の戦い方はまだ全然教えて貰ってない。そう言う意味ではリユースさんに実戦における魔法剣士の戦い方を教えて貰うぐらいが良いのだろうかなあ。

「ほんと、ぜんぜんだめで……それで……その……」

ベルがダメダメだつて言うなら俺はどうなるんだつて話だよ。まあ、ベルの言いたい事はわかるが。今のままじゃ目標のアイズさんに届くはずもない。それを追うのだから当然もつと強くなりたい訳で……。俺は何処までついていけるだろうか。

「戦い方を教えてくれる人、居ないの？」

「……はい」

「……ミリアは戦えるんじゃないの？」

はい？ アイズさんは一体何を言っているの？

「え、いや別に、魔法は使えますけど戦い方なんて全然知らないですよ」

「……？ でも、ミノタウロスに一矢報いたんだよね？」

ええ？ なんか過大評価されてるよ。ミノタウロスに一矢報いたつて、俺はその事を覚えてないつての。

「あれは……偶然と言うかなんというか……ともかく、私がもし戦い方を教えられたとしても、魔法を前提とした物だけですから。ベルに近接戦を教えるなんてとてもできないですよ」

「そっか……」

そうなんだよ。と言うか焦らせないでくれ。なんか過剰評価喰らってるって凄く苦しくなるからさ……ベルの背中を必死に追いかけてるさ中なんだから。

「……じゃあ、私が教えてあげようか？」

「へ？」

「え？」

アイズさんが教える？ 何を？

「えっと、何をですか？」

「……戦い方。君達に」

俺も？

「良いんですか？」

「うん」

……第一級冒険者に戦い方の指南をしてもらえる？ 普通なら考えられない様な物なんだが。だってロキファミリアの第一級冒険者だよ？ 他ファミリアの眷属にわざわざ指南とか有り得んでしょ……いや、なんだかんだ天然入ってるっぽいアイズさんなら有りなのか？

日の出前の明るい空の事を黎明だとか暁だとか曙だとかいうらしい。欠伸しつつもアイズさんとの待ち合わせ場所に辿り着けば、既にアイズさんが剣を素振りしていた。日の出前と言う時間帯であるにも関わらず、だいぶ早いお人だ。と言うかファミリアの仲間に黙って他ファミリアの異性と会うとか完全逢引じゃん。まあ、俺余計なのがついてるけど。

「おはようございます」

「うん、おはよう」

アイズさんと挨拶もそこそこに、ベルの方は期待で胸を膨らませている様子で目がきらきらしてる。

そりゃ憧れの人からの手ほどきとなりやねえ。

「それで、ヴァレンシユタインさん」

「……アイズ」

「はい？」

「アイズで良いよ。皆、私の事をそう呼ぶから」

ああー。うん、憧れのある人を名前呼び。恋する少年になんという仕打ちを……天然って怖いなあ。狙ってやってるなら凄いよ。まあ、反応からして本物の天然なただけど。

「嫌？」

「っ、嫌じゃないですっ」

ぶんぶんと首を振るベル君。まあ俺は前からアイズさんって呼んでたけどね……。だから何だっけ話なんだが。なんかもやもやする

わ。

「アイズ……さん、所で訓練って僕は何をすれば……」

緊張して声が裏返ってるベル君だが、アイズさんは気にしてないっぽい？　と言うか俺も戦闘方法を教えてくれるって話だが……アイズさんの魔法って確か付与魔法エンチャントだよな？　俺の魔法とは系統が違うけどどんな感じで戦い方を教えてくれる積りなんだろうか？

最悪、ベル君だけでも鍛えて貰って、俺は見てるだけでも良いんだが。リユーさんに頭下げて頼むし？

「……何をしようか？」

「へ？」

え？　ちよつと待って、天然だったのは前々からわかってたけど、其処もおっ!?

「昨日から何をしようかずっと、何をしたらいいか考えていたんだけど」

顎に手を当てて考え込み始めるアイズさん。ちらりとベルの武装を確認して——俺の方にも視線をくれた。武装確認っぽいね。

「君の武装はナイフなんだよね。蹴りや体術は使うの？」

「いえ」

「ミリアの方は剣と杖、後魔法？」

「いえ、剣を直接使う事は無いですね。魔法がメインで杖は牽制。剣は手に持つてるだけみたいな感じで」

「……？　剣は持つてるだけ？」

ああ、俺の戦い方って割と変らしいしなあ。一度見せるか。

『ピストル・マジック』、とまあこんな感じで魔法を使う用の物です。直接斬りかかったりとかはしないんですよ」

右手に剣を持ち、剣に重ねあわせる様に魔法を使って右手にピストル持つてる感じで使う。左手で長杖を振り回して接近してくるモンスターを軽く牽制するぐらい。基本攻撃は魔法のみって感じで。

「ミリア、それ……魔法の触媒なの？」

「いえ、只の剣ですよ」

「……………」

信じられないと言う表情のアイズさん。どうしたんだ？

「アイズさん、どうしたんですか？」

「……ミリア、今すぐ止めた方が良いでしょう」

「はい？」

え？ やめる？ 何を？

「魔法の触媒じゃない只の剣なら、そんな風に魔力を通して使うと直ぐに壊れちゃう。それにそもそも触媒じゃない物を通して魔法を使うのは効率的じゃない……ってリヴェリアが言ってたから」

……え？ どういう事？

「魔法、についてどれぐらい知ってる？」

「……先天性とか後天性とか、イメージを込めるとかですかね？」

「魔法の触媒については？」

「まったく」

え、何？ 触媒ってそんなに大事なの？

「……魔法の杖、触媒には種類があつて、単純に魔力を増幅させる物。魔力操作の補助になる物の二種類。増幅させるものは単純に威力があがるんだけど、魔力操作の補助の方も威力があげられる」

ふむふむ？

「操作補助する事で詠唱に込める想像をより深く、鮮明に描いて込められるからその分威力と精度が上がる……はず」

はず？

「リヴェリアが詳しく言ってたんだけど……私の魔法は付与魔法エンチャントだから」

ああ、うん。よく分つた。とりあえず今の剣で魔法使うと剣がぶつ壊れるかもしれないのか……へえ、ふうん……とりあえず分かつた事は一つ。俺って本当に馬鹿だなあ。

「剣が壊れるって本当なんですか？」

「ただの剣だとするなら、魔力を込め過ぎると爆ぜる……魔力暴発イグニスファウトゥスしたみたいに弾けるかも？」

「……そうですか」

うひい……どんだけヤバイ橋渡ってたんだ俺は。

「後、威力も精度も落ちる。余計な物が混じるから、魔力操作の補助じゃなくて邪魔にもなるし」

つまり、触媒でも無い剣に魔力を通すのは逆に邪魔する事になってて……つまり、威力が落ちてたって事か？

「そんな気はしませんでしたけど」

「ミリアは魔力制御が上手いのかも。でもそのまま続けるのは危ないからちゃんとした触媒を使った剣を用意した方が良いと思う」

「……ちなみに、そう言った剣っていくらぐらいします？」

安くは無いですね。

「……………二千……いや、三千？　ぐらい出せば買えると思う」

「それは、万ですか？」

「うん、三千万ヴァリス」

ああ、うん。無理。

第五十六話

自身が危ない橋を渡っていたと説明を受けて冷や汗を掻いた訳だが、まあ解決策は今の所思い当たらないので暫くは剣を使わないで魔法を使う事にしよう。

うん、よく爆発しなかったな……。アイズさんによれば割と剣の耐久性が削れていたらしい。とは言え後十回ぐらいは大丈夫って言われた。逆に言えば十回ぐらい使ってたらドカンってなつてた訳で……。

って今はそんな事考えている場合ではない。アイズさんとの鍛錬である。

「君のナイフを貸して」

「え……。ああ、はい」

バゼラードをアイズさんに渡すベル君。流石にアイズさんが盗むとは考え辛いがヘステイアナイフを渡すのは気が引けたか。ナイフの効力もヘステイア様の眷属じゃないと発揮されないからアイズさんが盗んでも意味ないし気にする必要は無いと思うが。

真剣そうな表情のアイズさんがナイフを逆手に持ち腰を落とす。

ベルも真剣な表情でアイズさんの一挙一動を見逃さない様に見える。憧れの彼女に直に鍛錬を積んで貰えるんだ、そりゃ真剣にもなる。俺は……うん、まあ、剣はちよつとわかんないんで……。

「まず、こう」

鋭い軌跡を描いた剣閃が——無い。と言うか片足を上げ、両腕を広げた姿勢で呟くアイズさん。

「こう、こう、こう？」

腰を落としてナイフを持つ手を前に、反対の手を後ろに突き出す姿勢。

両腕を揃えて腹の前に揃え、膝を曲げた姿勢。

剣についてさっぱりわからない俺からして理解不可能なアイズさんの行動。ナイフ使ってるベルにならなにかわかるんじゃないかと顔を見てみれば引き攣ってる。わかんないのか……。

「あの、一度整理した方が良いんじゃないや——ぶへえあつ
え？ 今、今何が……。」

ベルが口を開いた瞬間、アイズさんの足が鋭い弧を描いてベルの頬を穿った。うん、何言ってるんだ俺は、と言うかベルがぶっ飛んだ。後方に3メートル程……ヤベエ。

「あつ……ああ……。」

「ベルッ！ 大丈夫っ！」

一瞬反応遅れたが、ベルの方に駆け寄って様子を確認する。というかアイズさん『あつ』ってなんだ『あつ』って。

「やっぱり……アイズさん、天然なんだ……。」

あ、ベルもアイズさんが天然だと見抜いたっぽい。回復魔法をかけよう。顔にもろにはいつたが大丈夫か？ 死んだりしないよな……第一級冒険者の一撃だったろ？ いや、加減はしてるよな。してなかつたら多分首から上が消し飛んでただろうし。

『癒しの光よ』『レッサーヒール』

「……ごめん」

「そんなっ、アイズさんは悪くなくて」

咽るベル、マジで大丈夫か……頬の腫れは一応引いたが。

「……やっぱり戦おう」

「えっ」

アイズさんがレイピアを鞘から解き放つ。ベルが慌てて立ち上がったので俺も一応立ち上がる。

剣の方を壁に立て掛け、鞘を持って構え——っ!?

ベルがはつとなつて直ぐにナイフを構える中、俺は硬直した体に鞭打って遅れて長杖を構えた。

「それでいいよ」

アイズさんが一步踏み出した。ベルが一步後ろに下がる。俺は——腰が砕けて座り込んだ。

「……ミリアは横で見てて」

ああ、うん……。第一級冒険者の殺気って奴か、いや、今は殺気じゃない。ただ——ただ、斬られたんだと思う。

鞘を構えた瞬間にアイズさんから放たれた何かは俺をぶち抜いた気がする。気配と言うか、威圧感と言うか、天然で妙な所であった彼女とは思えない、威圧感。

これが第一級冒険者【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインなのだろう。今まで俺が知ってきた無知で天然な彼女とは全く違う、気配も、雰囲気も、何もかもが違う本物って奴だろう。

情けないが、完全に腰が砕けちまったみたいでなんとか這いずって壁際に凭れかかる。

「ミリア、大丈夫？」

「私の心配は良いので……ベル、気を付けて」

殺されないよな？ 殺気とは違うとはいえベルが心配になる。だが、あの威圧を受けてナイフを構えられるベルなら平気だろう。俺なんて一歩踏み出されただけで腰が砕けちまったんだから……。情けないなあ。

とはいえ、ベルもまた脅えているんだろう。腰が引けている。

「今君が反応したみたいなのに、これから戦う中でいろんなことを感じて、そうすれば戦い方は嫌でも身に付く」

一歩、踏み出される度にベルは後ろに下がる。向けられていないはずの俺ですら吐き気を覚えるぐらいの濃密な威圧。あの中にありながらナイフを片手に立っている、後ろに下がっているとは言え立ち続けているベルは凄いな。

「君は、臆病だね」

「っ！」

ベルが臆病、ねえ。だとしたら俺は腰抜けかな。アイズさん、綺麗な顔立ちだが、潜ってきた修羅場の数が桁違いなのは理解できた。彼女は本物だろう。

「身を守る為に臆病でいるのは、大切な事だと思う」

エイナさんの言う『冒険者は冒険してはいけない』も似た様な意味だったか。と言うかアイズさん容赦ないな。吐きそう。

「でも、それ以外にも、君は何かに脅えてる」

ベルが脅えるもの、ミノタウロスか？ —— 体の中で何か折れる

音が聞こえる。

「ぐあつ！」

「自棄になっちゃだめ」

何かを思い出しそうになってる間に、目の前のベルが鞘で強打されていた。アイズさんの姿は——既に消えている。と言うかベルの後ろに回り込んで。速すぎる。

「死角を作っちゃだめ、視野を広く」

ベルがアイズさんの声に反応して振り向いた次の瞬間には、アイズさんの突きがベルの胸当ての中央に突き刺さっていた。

大きく後ろに押されながらも倒れずに立ち続けるベル。今のは痛いだろう。

脂汗を流し、痛みを堪えるベル。そんな姿で有りながら、ナイフを大きく前に突き出してアイズさんに突撃していった。

一度、二度、三度。突き出す様に斬りかかるベルに対し、アイズさんは最小限の動きで回避したうえで、反撃を腰に、手の甲に、太腿に叩き込む。完全に片膝をついて動けなくなるベル。顔には大粒の脂汗が垂れているのが見える。痣になるだろう。

「技とか駆け引きとか、君にはそれが少し足りない」

「……………」

「立てる？」

ああ、うん。これぐらいの威圧で腰抜けになってる暇は無いだろ、家族が苦しんでるんだから、立てよ腰^オ抜け、いけよ。

「ベル、回復魔法かけるんで」

「いい」

「ベル？」

「大丈夫だから、ミリアは見てて。おねがいします」

——ああ、そうか。役に立たないガキんちよだな本当に。

アイズさんの大振りの一撃をしゃがんで回避し、そのままアイズさんの胸にナイフを突き込もうとして——それをあらかじめ読んでいたのかアイズさんはフェイントの大振りを即座に引き戻してベルの脳天に鞘を叩き込んだ。

「……………」

「……………あつ」

そのまま倒れ伏したベルに、アイズさんが困惑の表情を浮かべている。駆け引きについて教えたのにフェイントに真正面から引っかけたのは予想外だった様子だ。

「回復魔法かけますね」

「……………おねがい」

……………。役に、立てないなあ。

「アイズさん」

「何？」

「私にも剣、教えてくれませんか？」

「……………良いけど、大丈夫？」

大丈夫かだつて？ そりゃ――

「無理でもやりますよ」

家族の為なら。

ダンジョン十階層。リリとの一件のあった件の階層。最近はアイズさんとの朝の鍛錬をしている影響で、昼からのダンジョン探索になったが、ベルと俺、リリの三人で下りて直ぐ、霧の出ているフロアで警戒していると、唐突にベルが周囲を見回し始める。敵か？

「キューイ、敵？」

「キューイキューイ？ キュイ」

ふうむ？ 近くには居ないけど、遠くには沢山居る？ ベルは何に気付いたんだ？

「お二人とも、今日はどこまで行きましようか」

「あ、うん。明日休みにする分、出来るだけ奥まで潜りたいかな」

「すみません。リリの都合で」

明日はリリが休みらしい。俺とベルだけで潜っても良かったがそれよりはアイズさんとの鍛錬の時間に当たった方が良く、って事で明日は一日アイズさんとの鍛錬である。リリの方は申し訳なさそうにし

てるが、悪い事は何もないからなあ。

「しようがないよ。下宿先の都合なんでしょ？ それに、僕にもやる事があるしね」

そう、やる事があるんだよなあ。

「そういえばミリア様、どうしてこのごろダンジョンに潜る前からお疲れの様子なのですか？」

「あー」

あー、うん。まあ、アイズさんとの特訓があるからね。アイズさんが天才だから多少疲れてる程度で済んでるが、そうじゃなきや多分マインドダウンで動けなくなってるわ。

「まあ、ちよつとね……つと」

ぶねえ、ちよつとふらついたわ。アイズさんは俺との鍛錬中はマジックシールドの反応範囲のギリギリを見極めてそこをかすめる様に攻めてくる。反応したマジックシールドが俺を包み込み、ダメージや消費も無く消えると言う光景は何とも言い難い。と言うかアイズさんが剣を振るう度にマジックシールドが反応して勝手に張られるのが本当に心臓に悪い。最初の一撃の時はあっけなく砕け散ったからなあ。

「本当に大丈夫ですか……？」

「大丈夫大丈夫、ベルも平気よね」

「うん、ミリアのおかげで平気だよ」

ベルの方はボコボコにされた後、俺が回復魔法で癒してるおかげで平気そうだ。とは言え若干鎧に傷がついてるんだよなあ。

ん？ キューイが反応してる？

「二人とも、敵多数接近です」

「わかった」

「リリは後ろに下がります」

現れたのはインプと呼ばれる小柄なモンスター。数が多く悪知恵も働くと言ううめんどくさい奴。大抵、後ろで援護射撃に徹する俺の方にこっさり忍び寄って横から殴りかかってくる面倒な奴。まあ、今回は多分平気だけど。

リリが霧の中に姿を隠し、俺とベルが背中合せてモンスターと対峙する。何時の間にもやら背後に回り込んでたのか。リリは上手く斬り抜けたみたいだな。

「ミリア、数が多いけど大丈夫？」

「平気よ」

アイズさんとの特訓の成果を見せますかねえ。

視界は広く、死角は作らない。

リリの援護射撃が降り注ぐ中、インプを斬り捨てる。一匹、二匹、三匹。背後に回り込んで爪を振り下そうとしてきた個体を蹴り飛ばす。なにもナイフだけが攻撃手段じゃない。格闘技もしっかりと織り交ぜていく。

今までの僕なら、死角から襲い来るインプはミリアにしっかりと対処して貰わなきゃ危なかっただろう。でもこれなら大丈夫。

それよりもミリアは何処だろう。

「ミリア？」

周囲を見回してみると、ミリアが一人で戦っていた。リリの援護射撃はミリアのスキルが反応してしまうのでできていない。早く援護に行かないと——あれ？

ミリアは常に薄青い光に包まれたまま、多数のインプ相手に一步も引かずに切り結んでいる。剣で突いて、斬って、凧いで、左手の魔法『ショットガン・マジック』で薙ぎ払う様に弾幕を張って——一人でしっかりと戦えている。

——むしろ、僕なんかよりよっぽど戦えている。

『ショットガン・マジック』によつて扇状に放たれた弾丸が数匹のインプを吹き飛ばし、倒しきれなかった個体は手足のいずれかを失って動けなくなっている。其処に近づいて事もなく仕留めていく。

『ショットガン・マジック』、ミノタウロスとの戦いの時以降、僕と行動している時に使わなかった魔法だ。普段は『ピストル・マジック』を使つての援護か『ライフル・マジック』を使つて一撃で仕留めてい

た様に思う。

扇状に放たれる魔法は、僕を援護する上では使い辛い事この上なく、使う事ができなかったんだろう。

むしろ、一人で戦っていた方がミリアの実力が出ていたんじゃないか？

インプを退け、ミリアが鋭い視線を此方に向けた。

「ベル、今度は大物、オーク多数接近。気を付けて」

「わかった」

視界に現れたのは十匹を超えるオーク。思わず『援護して』と声をかけようとして——やめた。

僕が援護なんて任せてしまうから、ミリアは実力を発揮できないでいるんだ。これぐらい、僕一人でなんとかしないと。

ベルが、援護を必要としなくなった。ベルが強くなったのなら、良い事さ。うん、アイズさんに追いつく為だもんな……。俺は補助輪だった訳さ、必要無く無りや取り外されてほいってな。まあ、しようがないよね。

アイズさんのとある一言で、俺は【ロキ・ファミリア】に行く事になった。

その一言と言うのが『赤い液薬について何か知らない？』である。何の事かと言えば、リリが売り払ってしまったあの『赤い液薬』こと『ドラゴニックポーション』を、あろうことかロキファミリアの主神、神ロキの手に渡ってしまったらしい。

ギルド職員のエイナ・チュールと言う人がロキを訪ねてきた日、リヴェリアが消費したポーション類の買い込みに行っていたさ中、ロキが店先に並んでいたそれを興味本位で購入したらしい。

その所為でお小遣いが足りなくなってリヴェリアにお酒をねだったが素気無く拒否され、だだを捏ねていた所にエイナさんが現れて、ソーマファミリアの情報を与えるのと交換にお酒を買ってあげると

言う事になつたらしい。

なんともまあ、奇怪な巡り合わせと言うかなんというか……。

ちなみにその『赤い液薬』はロキが大層大事に取り扱っているらしい。なんでも『警戒心強い癖に抜けた所もあつて可愛い子を呼び出す口実』がどうの。俺の事か、俺の事なんだな？

ともかく、ベルは今頃アイズさんとの特訓をしているだろう。俺は例のゴスロリドレスを着てロキファミリアへとやってきたんだよ。入りたくねえ。入口の辺りをちよろつと覗いてみるけど、どういう風に声かけりやいいの？ 『赤い液薬』について聞きに来ましたとか言えばいいの？

「あ、ミリアじゃん。久しぶりー、何其の恰好、可愛いねー」

「どうも、お久しぶりです」

うわ、アマゾネスつぽくないアマゾネス、ティオナ・ヒリュテさんだ。と言うか、なんかこの人ボロボロじゃねえか。第一級冒険者がボロボロになるって……何かヤバい事してるのか？

「なんかボロボロですけど、どうしたんですか……？」

襲撃？ 他ファミリアからの？ 巻き込まれる？

「んー、いやちよつと組み手をねー」

「組み……手？」

「そうそう、アイズにレベル6、先越されちゃつてさあ」

え？ レベル6？ アイズさんって確かレベル5なんじゃ……。

「アイズさんってレベル5なんじゃ？」

「んー？ ああ、ギルドからの公式発表まだだっけ？ でも近々発表されるしいつか」

………そっか、アイズさんもうレベル6なのか。ベルも大変だなあ。

「ところでミリアは何か用なの？」

「ええつと……神ロキが勇者に^{プレイヤー}取り次ぎを……頼みたいなあなんて」

「ん？ ロキか団長に？」

そう、ティオネ・ヒリュテの方だったらフィンに取次頼んだら殺されそうな気がするから、ティオナさんでマジ助かった……。

「へえ、団長に、ねえ」

……………あ、どつかで聞いた声。

「テイオネじゃん。あ、丁度いいや。ロキか団長に声かけてくるから
ミアアの事任せたよ」

「良いわよ、ちやあんと面倒見てあげるわよ。ね、ミアア」
「アツハイ」

俺、死なないよね？ 大丈夫だよ？ 生きて帰れるかな…………。

第五十七話

目の前にある紅茶のティーカップを何度も持ち上げ、ソーサーに戻す。持ち上げ、戻す。持ち上げ、戻す。繰り返す事数十回。

ロキファミアリアの本拠である黄昏の館の客室に招かれた俺の目の前で腕組みをして座る彼女、ティオネ・ヒリュテから放たれる威圧感で俺は胃がひっくり返りそうになっていた。

彼女は普通に客室まで案内してくれたんだ。その後可愛らしいエルフの女性が紅茶を淹れてくれて、退室した後に彼女の威圧が始まった。吐きそう。

「それで、団長に何の用な訳？」

ギラギラとした瞳、第一級冒険者の威圧……では無い。アイズ・ヴァレンシュタインから放たれたあの威圧に比べれば天と地程の差がある。つまり彼女は本気で威圧してはいない。いないんだけど、こっちは駆け出し冒険者である。吐きそうになるからやめてほしい。「えつと、ですね。アイズさんから、その……赤い液薬について聞かれました」

「アイズから？ 紅い液薬？ 何の話？」

「あー……」

何？ 俺がキューイの素材使って赤い液薬作って、それ盗まれて売られた揚句、ロキが何故かそれを買ってしまつたと。紆余曲折とは言うがあまりにも出来過ぎてるんだよなあ。

「今回、一応其方のファミリアの団長にも声を掛けるべきかと思いついて団長を上げたまででして、本来は神ロキへの謁見を求めた訳ですよ……」

団長目的じゃナイヨ。ホントダヨ。

「ふうん……じゃあアンタは団長に色目使いに来た訳じゃないのね？」

「はい」

神へステイアへと誓おう。あの腹黒王子様に色目を使う事は絶対に在りませんと……言ったら殺されそう。腹黒腹黒言うが俺も十分

に腹黒つちや腹黒か。後脛に傷有りだし？

「あつそ、じゃあ良いわ」

ほっと一息。ようやく紅茶が飲めそうですね。良い匂いだし相応に良い葉を使っているのだろう。と言うかウチのファミリアは貧乏だから普段は白湯だし。其れと比べちや色つき水でも上等な品である。貧乏つて辛いね。

「ただし、団長に色目使う様な事があつたら——

殺す。言葉にはしなかつたが彼女の言いたい事は理解した。おしつこちビリそうになつたけど超頑張つて耐えたよ……褒めてくれ。粗相しなかつた俺を褒めてくれ。

目の前からティオネ・ヒリュテが消え、俺一人が客室に取り残されているのに気付いたのは五分ぐらい経つてから。団長はどうやら忙しいのかまだ来ない。

……紅茶、冷めちやつてるなあ。まあ、ティオネさんが居る前で飲んでも味なんてわかりやしなないんだけど。つと、ノックの音。誰か来たっぽい？

「待たせてすまない。ほらロキ……」

「おおう、ウチの見立て通りやな、めつちや似合つとるでミリア」

「どうも、唐突な訪問に対応していただきありがとうございます」

入つてきたのは団長のフィン・ディムナと神ロキ、それからリヴェリア・リヨス・アールヴの三名。

ロキがどつかりと腰を下ろすのに対し、他の二人は静かに腰を掛ける。リヴェリアの手には化粧箱の様な小さな箱があつた。

「んで、アイスから聞いた言うつたみたいやけど。赤い液薬はアンタ関係のもんやつたんか」

「えつと、実物を見てみない事には何とも、勘違いと言う事も有り得ますし」

頼むから勘違いで別の液薬であつてくれ。

「それもそか、リヴェリア」

「ふむ、これだが、見覚えはあるか？」

化粧箱の様な箱から丁重に取り出されたのは……うん、見覚えのあ

る液薬だね。龍力薬っぽい？ いや、でもなんか中身が半分ぐらいしか無いんですがそれは。やっぱり別の液薬と勘違いしてない？

「見てもよろしいでしょうか？」

神妙に頷くりヴェリア様より借り受けた赤い液薬の入った小瓶をしつかりと確認する。ミアハファミリアが作成した証等は見受けられず、一般的に市販されている物なので何処のファミリア製かは完全にわからなくなっている。中身は半分ほどになっているが色合いからしてもほぼ間違いない。なんで半分になってんのかは不明だけど。「多分、ですが私の物で間違いないと思います。なんで半分に減つてののかまでは知らないですが。最初からこうでした？」

「うんにゃ？ ウチがダイアンケヒトん所に分析に出したさかい、そんな時に半分ぐらい分析に使ってしもうたんよ」

「ああ、そうですか」

ふうん。ダイアンケヒトファミリアに分析に出したんだ。そつかあ……うん、ヤバイね。控えめに言つて超絶ヤバイね、絶体絶命つて奴だね。

「……神ダイアンケヒトはなんと？」

「こんなふざけた薬作るんは何処の阿呆や言うて騒いどつたわ」

神ロキ曰く。

ダイアンケヒトファミリアの【戦場の女神】^{デア・セイント}アミッド・テアサナーレと言う人物は即座に『竜系素材』を使った非常に珍しい液薬だと見抜いた上、この液薬の効力が『力の増強』である事まで見抜いたらしい。

その上、その薬に対する評価は『凄く頑張った物だと思う。でもこれを誰かに渡すのは狂気の沙汰』だそうだ。

なんでも『下級素材で何とか性質を引き出す事には成功してるけど効力の安定性は最悪』で『上級素材を使って安定化させれば完成品として店に並べられる』とか『これは間違いない試作品の部類』とか。

そのアミッド・テアサナーレって人物はまるで見て来たかのように語ったそう。なお神ロキから聞く限りほぼ100%正解を引き当てている。こわひ。

と言うか一番ヤバイ所に持ち込まれてんじやん。どうすんだよこれ……。

引き攣った笑みを浮かべていると、フィンが苦笑を浮かべて口を開いた。

「その薬に使われている竜の素材は君の連れていた、確かキューイだったかな。彼……彼女だったかな。その素材だって言うのは直ぐに見抜いていたよ。怪物祭の時に遠目に見ていたみたいでね。ただ、何処のファミリアに所属しているかまではわからなかったみたいだね」

現在、神ダイアンケヒトは俺の連れてくるキューイの素材をどっかのふざけた阿呆な薬師に売るぐらいなら自分の所に売れと神ガネーシヤに問いかけているらしい。

おい、ヤバイだろこれ。

「ま、神ガネーシヤは拒否しているみたいだけれどね。彼女には彼女の考えがある。自分が決める事では無いと」

……神ガネーシヤ、私は神ヘステイアと出会っていないければ貴方の眷属になつていたやもしれません。迷惑かけてごめんなさい。

「何処のファミリアが作った物かまでは判明していない、って感じで良いですかね？」

「神ダイアンケヒト曰くだけど、『ミアハの所だけは絶対に無いな。こんな物を作るはずがない』なんて言ってたから」

ああ、うん。そのミアハ様の所で完成した物なんだよなあ。

「ま、ともかくその薬がアンタのもんやってわかったんはええわ」

興味無さ気な神ロキ。こっちとしてはダイアンケヒトファミリアに持ち込まれて吐きそうなんだが。

「そりやアンタの不注意やろ。其処までウチは面倒見れんで」

その通りですね。と言うか俺口にしてないんだが。

「顔に出とるで」

「え、本当ですか？」

マジ？ 顔に出てる？

慌てて顔に手を当てて——いや、むしろ喜ぶ所か。

「……なんや急に笑み浮かべて、どないしたん」

「いえ、何でも無いです。嬉しかったのは否定しませんが」

顔に出てた、常に無意識に仮面貼り付けてたが、そっか、表情に出たのか。

「まあええわ。とりあえずウチがアンタを呼び付けたんは少し聞きたい事があったんよ。ちちゅーてももう答えは出とるんやけどな」

「……一体何の話で？」

とりあえず赤い液薬はポケットにでも放り込んでおこう。んで本題はそっちか、聞きたい事？ 何ぞや。

「怪物祭ん時、フレイヤに会つとるやろ」

はい？ フレイヤ様に？ 会つてない。

「会つてないです」

「……？ いや、アンタ会つとるはずやで。ガネーシャン所の関係者区画に居ったんやろ？ 魅了にやられとった言うとったし、ミリア、アンタも確実に会つとるはずやで」

んなもん決まってる。何度問いかけられようと答えは一つだ。

「会つてません」

彼女がそうであったと言ったんだか——彼女？ はて？

一応、確認も兼ねてミリアに質問を飛ばした神ロキは目の前で唐突に首を傾げはじめたミリアを見て確信を強めた。

彼女はフレイヤに魅了をかけられてる。どうせくつだらな男遊びの一環に巻き込まれているのだろう。

「アンタ、もう一度言つたるけどフレイヤに会つとるはずや」

「……いえ、会つてない……です。」

歯切れの悪い言葉にフィンとリヴェリアが目を細める。二人も気付いたのだろう。

「なんや？ あの場に居った者ら全員が魅了でべろんべろんにされとったのに、アンタだけ例外や言うんか？」

「………会つてません」

俯いていたミリアが顔を上げる。其処には既に色が無い。ミリアの目には光は無く、虚ろな鏡の様に此方の風景を写すガラス玉の瞳がはまり込んでいる。

めつちや面倒な感じに魅了されとるなあ。

内心溜息を吐きつつ、ミリアの様子を窺う。魅了にやられた人物特有の恍惚とした表情は浮かべておらず、途切れかけた魅了がミリアの心を縛り上げている程度。疑問を覚える度に締め付けられ、効力が失せかけている魅了。

随分と不思議な状態である。

ドチビの事やし、気付いてないんやろうけど……なんや中途半端にとけかかるとるなあ。下手したら暴れるでコレ。

ミリアの状態を言い表すのなら、魅了が殆ど解け掛けの危険な状態である。

フレイヤの魅了がしつかりかかっているなら、彼女からは何の違和感も感じないだろう。少し解けかけているのなら感じるのはふとした瞬間にスイッチが落ちたかのように切り替わる様な形で現れ、身近な人には違和感を感じさせる。

そして、殆ど解け掛けている現状は、言葉を踏み間違えれば暴れ出す寸前と言った所か。

しつかり魅了されているのであれば、多少の神フレイヤへの侮辱の言葉は聞き流せる。彼女がそんな侮辱程度で貶される訳も無いと胸を張っていられるから。

少し解けかけている程度なら怒りの感情が浮かび上がる。だが暴れる程では無いし直ぐに消え失せる程度のもの。

そして、今のミリアの目の前でフレイヤを侮辱すれば……。

「しっかしあの色ボケは面倒な事を起こしてくれたわなあ」

ミリアの体が跳ねる。虚ろな瞳だったその目には力強い色が宿る。だが、それはミリアの感情とは呼べないドロドロと濁った色をしている。

一度目に会った時のミリアも濁った色をした黒々しい物を抱え持っていたが、ヘスティアとの触れ合いの中で少しずつ薄れて行って

いたのか二度目に会った時にはその色が殆ど薄れていた。若干後ろ暗い部分に悩んでいた様子ではあったが、この様な感情を浮かばせる様な状態では無かったのだ。

「まあ、あの傍迷惑な尻軽女神に目を着けられ——

「彼女を侮辱するなっ!! 『シヨットガン・マジツ——ぐっ』」

二度目の言葉に終に耐え切れなくなったのか瞬時に立ち上がって此方に魔法をぶつ放そうとしてきた様子だが、瞬時にフィンに取り押さえられ、テーブルに上半身を抑え込まれる。魔法を発動しようとしたらしい左手に淡い光が宿りかけて散る。イグニスファトウスしなかつただけ上等か。

「ロキ、どうする?」

「どうもなんも、こんなんじゃ話もできへんわ。どうせ魅了にやられて碌に会話にならんやろ」

魅了にやられている彼女から聞き出せる情報なんて嘘で塗り固められたくだらない代物である。そんな物を聞きだした所で意味は無い。

「しゃーない、あのドチビはなんでか中途半端にしか魅了解いたらへんみたいやし、残りはウチがなんとかしたるか」

しかし、ドチビはどうしてこんな中途半端に魅了を解く様な真似をしていたのか。下手にフレイヤを侮辱する奴が近場に居たら普通に殺しにかかるぐらい不安定な魅了にするぐらいならしつかりと解いてやるべきやろ。

つい先ほどまで神ロキと問答していたはずである。少なくとも俺の記憶ではそうだ。確か、そうフレイヤに会っていたか会っていないかを聞かれていた気がする。

で、気が付いたら椅子に縛りつけられていた、と。

………え? 何? 紅茶になんか仕込まれてた? 嚙まで噛まされ、魔法の詠唱も出来ん。なんだこれマジでどうなってんの。

視線で周囲を見回すが普通に客室のまま。窓の方を向かされて椅

子に座らされている。俺の足は椅子の足と仲良く縄で結ばれ、胴体は背もたれと結ばれ……両腕は後ろ手に回されて縛られていて、んで轡まで噛まされ。監禁かよ……空を見てみるとそう時間は経ってないはずだ。

いきなり何しやがんだよ……糞、やっぱ来なきや良かった。なんで縛られなきやいけないんだよ。強引に改宗させるってか？ 確か主神の許可無く改宗は出来ないから問題ないはずだ。リリを勝手に改宗しようと言う作戦がヘステイア様に『無理』の一言でばっさり叩き斬られたし。

つか、マジなんでこんな目にあってんだよ。後ろに人の気配はあるけど真後ろまで回らんし。

「お、気付いたんか」

神ロキの声、テメエ縛りつけやがって許さんぞ。

「なんや怒つとるんか？」

当たり前である。むしろ怒らない方がおかしいだろ。

「その様子やと完全に記憶は飛んどるみたいやな」

……飛ぶ？ 記憶？ 何の話だよ。とりあえず轡ぐらい外してほしい。

「アンタ、最近自分がおかしくなったって思った事は無かったんか？」

は？ おかしくなったって、そんなのある訳ない、はず。

「例えば、そやな……。記憶がぶつ切りになつとるとか」
……………

「心当たり有りそうやな」

記憶が途切れる。思い付く範囲では、そうガネーシャファミアリアの団員と行動していたあの時。確か関係者区画の入口に警備していた筈のガネーシャファミアリアの団員が居なくて、俺の護衛の二人と中に入った所までは何とか覚えてるが。そこから血塗れで目覚めるまでは記憶が無い。

いや、まて、フレイヤと会ったかと言う神ロキの質問。あの時キューイはなんて言ってた？

『ファルアウニヤに魅了されてメロメロになってた。その前にオエ

スツテルに殺されそうになった。ヤバイ早くここから出して』

そう、ファルアウニヤ。あの時は全く気にしなかったが、魅了されて、そう魅了だ。

あの場でガネーシャファミアの団員はどうなった？ 全員が魅了にやられてた。その中で俺だけは平然と動いていた。だからこそ俺は疑われた訳だ。

つまり、ファルアウニヤってのはイコールでフレイヤの事なのか？ 糞、キューイが居ないからわからん。

「まあ考えるのはその辺にしとき……んで本題なんやけど」
なんだ？

「アンタはさつき自分の行動覚えとるか？ ウチが質問投げかけた後や」

質問？ フレイヤに会ったかって奴だよな？ えと、知らん。と言うかロキファミア側が毒仕込んだ訳じゃないのか？

「覚えとらん。か、まあしゃーないわなあ。神の魅了やし、駆け出しのミリアが耐えるんは無理やし」

神の魅了って凄そうだな。と言うかマジで何があつたんだよ。何かやらかしたから縛られてんだよな？ 何やらかした？ 何で俺は覚えてないんだよ。

「アンタ、ウチを殺そうとしたんやで？」

——は？

家を殺そうとした。壊そうとしたじゃなくて？ って違う。ウチっていうのは家じゃなくて私って意味で——つまり俺は神口キを殺そうとした？

「慌てとるみたいやな。ちなみに嘘やないで。フィンもリヴェリアも見とつたで、せやろ」

「……そうだね、僕も見ていたよ。ちなみに止めたのも僕だ」
「私も目にした。豹変した様に『シヨットガン・マジック』と詠唱しようとしていたな」

詠唱文も知られてる。リヴェリア・リヨス・アールヴの前で魔法詠唱をした事は無い筈。つまり彼女の言葉に嘘は無い。いや、どつかで

情報調べて俺を脅そうとしているかもしれ……無い。か？

「疑うんはわかるで、せやけど事実や」

……嘘だろ。あのロキファミリアの主神を殺そうとした？ そんな事したら、団員は黙ってないだろ。

少なくとも、ヘステイア様が殺されたら俺は何をしてでも殺した相手を八つ裂きにする自信があるぞ。

「せやから、アンタは今縛られとる。状況は理解できたか？」

……いや、嘘と言う可能性もある。

「身に覚えが無いから嘘や思うとるんやろ？ 今から思い出させたらうか？」

思い出させる？ 出来るもんならやってくれ。ついでに嘘だって言ってくれ。

神ロキが前に回り込んできた。窓から入ってくる光が後光として彼女を照らす。糸目の彼女はゆっくりと顔を近づけてくる。

思わず後ろにのけ反るが、椅子に縛られていて全く距離がとれない。近い、超近いよ。

キスできそうな程の距離に神ロキの顔。後ろのフィン・デムナとリヴェリア・リヨス・アールヴがどういふ顔してるのか知らんが止めないのか。

「ちとキツイかもしれへんけど、我慢しいや」

キツイ？ 何の話を――

潰れそうだ。目の前の神ロキの瞳。糸目を見開いた彼女の目から視線を外せない。

感じるのは、平伏さなくてはいけないと言うものを通り越して、潰れそうなほどの神威。吐きそうで、胃がひっくり返りそうだ。

手足を縛られていて良かった。そうじゃなければ今すぐに神ロキから逃げようとしただろう。いや、そもそも手足が引きつって動かないから逃げられないか。

潰れる、そう、俺と言う存在そのものを潰しにかかる様な、重圧。ヘステイア様が出す神威なんて生易しかったんだって思う程の、重圧が

のしかかる。

意識が朦朧とするのに、神ロキの目だけはしっかりと見える。ぐらぐらと揺れる意識の中、神ロキの瞳以外の全てが曖昧になっていく。

—— 気を失う寸前に、ふと威圧感が消えた。

「ま、こんなもんやろ。思い出し—— ああ……その、どんまい？」

……………。気が抜けた瞬間にダムが決壊した。一つ言いたい、俺が何をしたと—— ああ、うん。フレイヤに対する侮辱を口にした神ロキをどうにかしてぶっ殺さないとって気分になって襲い掛かろうとしたんだった。ははっ……誰か嘘だって言ってくれよ……。

「リヴェリア、悪いんやけど面倒見てくれへん？ 神威で圧掛け過ぎて放心しとるわ……失禁までされるんわ予想外やったわ」

「わかった、フィン」

「わかってる。見なかった事にするよ。僕は暫く部屋に戻ってるから後は頼むよ」

いっそ殺してくれ。

第五十八話

誰か、俺を殺してくれえ……。

彼のロキファミアリアに喧嘩吹っ掛けてしまったんだ。無かった事になんないかな。後序に大事な何かを無くしてしまった気がするけど、そつちはもう諦めよう。責任とれなんて言ったら腹黒王子様が本気で責任をとろうとか言いだしそうだし。もういいよ、俺の仇名がもらしミリアちゃんになろうがどうだっていい。

ああ、どうだつて—— やっぱおもらしミリアちゃんはやめてくれないかな。

俺が粗相をしでかした後、リヴェリア様の指示で数人の女性団員が世話をしてくれた。うん、色々とね……無かった事にしたい出来事もあったけど、とりあえずシャワーを浴びて服を着替えた。

服は神ロキが用意したメイド服だったのはアレだけど、とりあえず何も言わずに着た。つい先ほど殺しにかかってしまった訳で、その詫びも兼ねてる。と言うか指定された服着るだけで詫びになる訳も無いだろ……。

普通にヘステイアフミアリア潰されてお終い。そう考えていた時期が俺にもありました。

「はあ……、赦す？」

「いや、赦すもなんも。アンタはただ男遊びに巻き込まれただけでアンタの意思や無いやろ？ せやったらウチがアンタを責める理由も無いわな」

着替え終わつた後、神ロキと別の客室での面談を迎えた俺は真つ先に謝つた。と言うか土下座した。そしたら別に良いと返事が返ってきたのだ。信じられるか？ 殺しにかかった相手を赦すだと……。

神フレイヤの魅了が原因とは言え殺しにかかったのに……。

「まあ、アンタが気にするんやったら、後でこつちの服にも着替えてくれりやええでー。あ、もちろんお触りも有りだな」

「ロキ、いい加減にしろ。赦すと口にしたのならそれ以上此方から要求するな」

「えー、でもミリアがええ言うてるんやし、ええちゃうん？」

こつち見んな。リヴェリア様の言葉を聞くに、やっぱ気にしてないっぽい。とりあえず赦してくれるならお触りもまあ、良いけど。とりあえず本当に赦してくれるの？

「本当に、先程の件は不問でよろしいのですか？」

「せやから言うてるやん。あれはフレイヤの男遊びに巻き込まれただけやつて。ウチかてガネーシャン所に文句言ったりしとらんやろ？ それと一緒に。まあ、ガネーシャン所にはアンタの返答次第で殴りこむんやけど」

え？ 俺の返答次第でガネーシャ様の所に殴りこむ？ ちよつと待って、何其の重要な話。一体何の質問をされるんだ……。

「えっと、その、質問とは？」

「せやせや、アンタに質問があるんやった。リヴェリア、フィン呼んできたつてな」

「ああ、ミリア・ノースリス。ロキが変な事を言っても無視しても構わないからな」

あ、はい。変な事つてなんだ？

「変な事で、ウチはただお着替えとお触りするだけやん。何がいかんのや」

お触り有りつてのに異常な程拘るな。ファミリアの団員に頼めば誰でもお触りできそうもんだが。

フィン・デイルムナが合流してきてようやく話が進むはず。一時間も居る積りは無かったがちよつと^{おもらしとか}いろいろあつて時間がかかったからね。シヨウガナイネ……。

「それで、質問とは」

「ああ、さつきも聞いたんやけど、怪物祭ん時にフレイヤと会つとるやろ？」

神フレイヤと会ったかって? ……………。

「どうや?」

考える。考えて、頭の中をひっくり返してその日の事を思い出す。朝起きて、ベルと共に家を出る。ミアさんの店の前でリユーさんとアーニヤさんと話して、ベルがシルさんの財布を受け取る。その後別れて俺はガネーシャファミアリアの関係者区画へ行き、キューイと合流。

それから街中を適当に歩き回って、ベルとヘステイア様がクレープ買って食べてるのを見てキューイがお腹減ったと言いだして、それで関係者区画に戻って昼食を――

「……………思い出せないです」

「はあ?」

「いえ、すみません。本当に覚えが無いんですよ」

記憶がぶつりと途絶えている。入口に警備してたはずのガネーシャファミアリアの団員が居なかったのは覚えてるが、その扉を潜った先の記憶が無い。完全に思い出せないのだ。

「……………あー、まさか念入りに記憶の方潰されとるんか」

記憶を潰すって、そんな事できるのか……………。神フレイヤの魅了、怖すぎだろ。

「ロキ、どうする?」

「んー、質問を変えるわ。フレイヤと会った記憶あったら楽やったんやけど、無いならなくてもええわ」

良いのか。それで質問とはなんだ。返答次第ではガネーシャ様の所に殴りこむんだろ? 庇ってくれたんだから俺もなんとかしたいが……………嘘吐いたらバレるし、そもそもどんな返答をすれば殴り込みを阻止できるのが不明だからどうしようもない。お許しくださいガネーシャ様……………。

「ガネーシャん所が捕まえてきたモンスターの中に、植物型は居ったか?」

うん? 調教芸^{ティム}を見せる為のモンスター達の中に植物型が居たかって?

「居ませんでしたよ」

居ない。と言うか植物型は調教^{テイム}出来ないって話だったはずだ。

何故なら意識が薄すぎるから。昆虫型モンスターも意識が薄いのだが、中層にまで行くとしつかりと自我意識を持つ昆虫型モンスターも居るらしく、俺が戦ったクワガタっぽいモンスターも中層のモンスターである。上層のキラアアントとかは逆に意識が脆弱過ぎて調教できないらしい。

ともかく、意識と言うか、意思と言うか、自我の薄い植物モンスターは特殊な魔法道具を使つての調教^{テイム}しか出来ないの、あの場にはそう言った特殊な魔法道具を使わないと調教できないモンスターは居なかった。そりゃ客に見せるのにド派手にモンスターとやり合つて主従関係を結ぶのと、魔法道具を高々と翳して調教^{テイム}するのじゃ派手さが違い過ぎる。

当然の如く植物型モンスターはリストの中には一切居なかったし、俺も姿を見ていない。

「嘘や無いと。せやったらこれに見覚えはあるか？」

神ロキが取り出したのは不思議な石ころ。と言うか、何だそれ？

魔石か？ 普通の魔石は紫紺色だが、変な色の魔石だな。少なくとも見た事は無い。加工済みの魔石って奴か？

「いえ、特には」

「……ふうん。嘘はついとらん様やな。知らされて無いか、本当に無関係かまでは知らんけど」

何を疑つてるんだ？

「ま、ええわ。ガネーシャン所に殴りこむちゅーんはただの嘘やし。其処まで緊張せえへんでもええで」

嘘なんかよ……。心臓に悪すぎるわ。

「ウチからの質問はこんだけや。ほんとにはフレイヤの事をガツツリ聞きたかったんやけど、念入りに記憶の方消されとるんやったら何しても無駄やし。もう帰つてもええで……この後ステイタスの更新もあるしなあ」

「と言う訳だ、お疲れ様。衣類に関してはまた暇な時にとりに来れば

いい。今日は、その……すまなかつたな」

「いえ、此方こそ神への襲撃なんて馬鹿な真似をしましたし、粗相をしてしまい申し訳なかったです」

フィンが苦笑を浮かべつつ視線を逸らしている。流石にこの状況で送って行くよなんて言われたら俺は半ギレするぞ。

ロキファミリアを後にした俺は、ホームに置きっぱなしの武器類を回収してベルとアイズさんの所に合流しようと考えつつも大通りを歩いていく。メイド服姿な所為か視線を集めているが、もう気にしない。たかがメイド服で目立つぐらいなんだ。人前で盛大にダム決壊を引き起こすのに比べたら雲泥の差だろ。

なんて考えながら歩いていやら、何と言うか運の悪い事にエルフに捕まった。

「なんなんですかあのベル・クラネルとか言うヒューマンはっ！ 他のファミリアの癖にアイズさんを独占して一日中訓練っ！」

俺の横を歩きながら絶賛ベルを貶すエルフの少女、将来を期待された魔道士の卵レフィーヤ・ウイリデイスさんである。

あー、状況を説明するのが死ぬ程面倒なんだが。どうやら彼女はベルと出会っていたらしい。何処でって言うと、アイズさんとの鍛錬初日ぐらいの日に。

初日はベルが興奮し過ぎでめっちゃ早く目覚めたので俺の方の着替えが間に合わず、先にアイズさんと合流する様にとベルを先に行かせた訳だが、あの日は確か俺が後から来たはずなのに外壁を登る階段の途中でベルが後ろから合流してきたんだっけか。

あの日は気にしなかったんだが、どうやら街中でレフィーヤ・ウイリデイスと出会って鬼ごっこをしていたらしい。

レフィーヤは朝早くに何処かにこそそと出かけるアイズ・ヴァレンシュタインに気がつき、不自然に思い後をつけたらしい。ストーリーエルフかよ。

んで、その途中でアイズさんを見失い、探す為に裏路地を歩き回っ

ていると白髪の少年と出会い頭にぶつかってしまい、その時にその白髪の少年にアイズさんを見なかったかと質問した所……その白髪の少年は『まさかロキファミリアの……?』と顔を青くして呟いた直後に『ごめんなさいーっ!』と叫んで逃げてしまったらしい。

怪しかったのでとりあえず追いかけたが見失ってしまった、外壁付近を探し回っていたら剣戟の音が外壁の上から響いており、上を見てもたらその白髪の少年とアイズさんが剣戟を結んでいたのが見えたらしい。

んで、意地になってアイズさんにダメ元で訓練を頼んだらオツケーして貰えたのに、訓練の方は相当手酷くやられたらしい。

その時にアイズさんが余計なひと言を呟いたそう。

『ごめんレフィーヤ、ミリアみたいに並行詠唱してくると思ってたやり過ぎちゃった』

だよ。おいおい、おいおいおいおい、ちよつとアイズさんや、貴女は何か俺の評価無駄に高いわ他の人に変な評価教えるわで……とりあえず俺が並行詠唱とか言う技術が使えるのを他の人に教えるのやめてくれ。

「厚かましいっ！ 信じられないっ！ 私だつてそうしたいっ！」

ともかく、そんな並行詠唱が出来る俺に並行詠唱について聞きに来たらしい。やめてくれ、俺は無意識で使ってたらしいから使い方を伝授してくれなんて言われても無理だぞ。

と言うか他ファミリアの人に技術の伝授とか普通有り得ないって話なんだから……アイズさんに魔法剣士として鍛えて貰ってる対価的な意味か？ ならアイズさんに直接支払うんだが。

「……許せないっ！ なんて破廉恥なっ！」

……。熱くなってる所悪いが、アンタの頭の方が破廉恥だよ。一体どんな想像したらそんな言葉が飛び出すんですかねえ。どう考えてもベルが一方的にボコボコにされて立ち上がるのを繰り返してるだけじゃん？ 俺の方はマジックシールドあるからまだマシだけど。

「ともかく、先程も申し上げた通り、私から貴女に教えられる事は無いんですけど」

「少しだけ、ヒントだけでも良いですよっ！　アイズさんに認められるぐらい並行詠唱の上手いミアアさんだけが頼りなんですっ！」

「……貴女のミアミアには最強の魔道士のリヴェリア・リヨス・アルヴさんがいますよね。彼女に師事を仰ぐと言うのは？」

「なんで俺に拘るんだか……。まあ、アイズさんに魔法剣士として褒められてると聞いて悪い気はしないが。と言うか俺って褒められる点なんてあったか？ 『シヨットガン・マジック』で牽制しつつも剣を突き込むぐらいしか出来ないんだが。」

「あー、いえ。リヴェリア様には今も教えは受けてるんですけど」

「エルフの耳って垂れるんだね。なんつーか、見てて面白いぐらいにへによってる。」

レフイーヤ曰く。リヴェリア様は理論だっけ教えてくれるのだが、並行詠唱と言うのは感覚的に行う事の為、どれだけ理論建てしようが感覚を掴めない限りは永遠に使い物にならないらしい。そしてその感覚を教えると言うのが非常に難しく、リヴェリア様程の最強の魔道士ですら他の者に並行詠唱と言う技術を教えるのが難しいそうなの。

「なら、他の魔道士から話を聞いて参考にするとかは、ロキミアミアの面々ならば相応に使える人も居ますよね？」

「へ？」

「だっけロキミアミアって所属人数も相応だし、魔法使いも結構数居るんだよね？　だっけたらそっちに教えて貰うってのはダメなんかね。」

「あの、ミアアさん？　良いですか？」

「はいはい？」

「はいは一回です。じゃなくて、普通の魔法使いは並行詠唱なんて出来ませんよ」

「知ってる。だからこそセキュアさんも驚いてた訳だし。それでもロキミアミアなら使える人の十人や二十人居ても不思議じゃないんだが。」

「あの、いくらロキミアミアでも所属している魔法使いや魔道士が全員が、並行詠唱出来る訳無いじゃないですか。と言うか、ロキミア

ミリア内でも使えるのなんてリヴェリア様含めても三人しか居ませんよ」

え？ 片手の数？ 魔法使いが二十人三十人居る様なファミリアで？

「何か勘違いしている様なので訂正しておきますけど、並行詠唱できる魔法使いはオラリオ中探し回っても両手の指で事足りるぐらいしか居ませんからね……？ ミリアさん、その中に入ってる自覚ありません……？」

……いや、嘘だろ。其処まで難しくないぞ。割と感覚でやってるけど……。あ、その感覚を掴むのが難しいって話なのか？ あー、なるほど。こりやりヴェリア様でも教えるの難しい訳だ。

貴方はどうやって呼吸をしているんですか？ どうやって歩いてるんですか？ なんて質問されて、理論だって筋肉や神経の動きを説明は出来たとしても、じゃあどんな感覚でやってるの？ なんて聞かれても答えられんわ。

「へえ、私って結構すごかったんですね」

「……嫌味ですか？」

「いえ、純粹にそう思ったんですよ。近くにもっと凄い人が居るんで、あんまり自分の凄さを実感できないんですよ」

ベルが一気に強くなつていく関係で、俺がどれだけ凄い、強い、上手いと褒められてもあんまり達成感を感じないのだ。だってベルの方が凄いし強いし上手いし。アイズさんも『並行詠唱上手いね』って褒めてくれるけど、ベルとの訓練を見てるとねえ。

「はあ、どうやってやってるんですか……並行詠唱」

「んー、逆にどういうイメージでやってるんですかね」

「ええっと、こう、右手で絵をかきつつ、左手で料理するみたいな感じ？」

どういうイメージだよ……んー。これはどう説明すべきか。つか、呼吸の仕方教えてっての難し過ぎね？ あ、いや、待てよ。絵を描く？ 料理する？ 割とイメージしやすいんじゃないか？

まあ、出来るか出来ないかは知らんが。既にヘステイアファミリア

のホームに近いし、人通りは少ないからアドバイスぐらいなら良いか。
「レフイーヤさん。その絵と料理の目標の出来はどれぐらいですか？」
「でき〜。」

「完成度です。傑作の絵画と最高の料理を目指してます？」
「当然ですよ」

ふむ。まあ、そうだよ。右手で傑作の絵画を描き、左手で最高の料理を作り出す。そんなイメージじゃ出来んわ。

魔法の詠唱についての基礎知識があるなら、誰しも思いつきそうなんだがなあ。

「ならイメージを変えましょう。右手で判別可能な絵を書いて、左手で食べられる料理を作ると」

「へ？」

イメージとしては、必要最低限イグニスファトゥスしない程度の魔法詠唱を成功させつつも、モンスターの攻撃に当たらない程度の回避を行うって感じ。

今のレフイーヤ・ウイリデイスが目指してる場所は、最高の威力を伴う安定した詠唱をしつつも、モンスターを殴りまくって反撃を許さないみたいな高難易度のモノである。要するに自分のキャパシティが100%しかないのに200%の成功率を求めている。

なら、魔法がイグニスファトゥスしない50%の詠唱に、攻撃を最低限回避する50%と言う形で振り分けたらどうだろう？ 少なくともキャパシティオーバー状態で強引に推し進めるよりは可能性があるのでは？

「みたいな感じですけど」

元々、俺は詠唱に3割、他7割ぐらいの感覚で詠唱してた。リユースさん曰くね。

んで、詠唱3割とかイグニスファトゥスするかしないかの瀬戸際だったらしいわけで、それを5割まで引き上げて安定させたのが今の俺、だと思っ。

無論、使い続けてくうちに慣れてきて100%のキャパシティが120%まで膨れ上がるかそういういった成長はあるかもだが。

ベルの場合は一気に200%、300%とかに跳ね上がってそうつてのが怖い所。ベルが凄すぎて自身の成長なんて実感できやしない。「でも、そんな事したら威力不足になりますし、下手したらイグニスファトウスしますよ……?」

「そこら辺は上層の弱いで練習するとか、イグニスファトウスする最低ラインは自分の感覚に寄る所が大きいので何とも言えないですが倒れたらバックアップしてくれる仲間を募るとか」

つまり、これ以上なんのアドバイスも出来ないってこった。敵に塩振ってる状態だけでもう良いよね。アイズさんに塩振って貰ってる状態だし。

「なるほど」

よし、丁度説明も終了つと。んでホームに着いたしさと武器回収してレフィーヤちゃんと別れてベルとアイズさんに合流しますかねえ。

「それじゃ、私はこれで」

「あ、はい。ありがとうございます。とても参考に——つ!」

不自然に言葉が途切れたので後ろを振り返るとレフィーヤは目を見開いて硬直していた。目が合うが、ぶるぶると震えながら此方を指差している。

「どうしました?」

なんか顔についてる。拭ってみるけどそんなのは無い筈。またおもらし? やめてくれよ、おもらし癖がついてて気づいたらじよばじよばしてたとか笑えないからさ。うん、濡れてない。漏らしてないね。

「あの」

「はい?」

「そこ、廃墟ですよ?」

……。うるせえ、此処がホームステイアファミリアの超とつてもあったかい本拠だよ。廃墟なんて言うんじゃねえ……。廃墟にしか見えないのは認めるが。

第五十九話

糞失礼なエルフちゃん。と言うと流石に言い過ぎであるが、レ
フィーヤ・ウイリユデシュ……ウイリデイシュ……。

レフィーヤと言うエルフを入口に置き去りにして地下室の扉を開
く。彼女の名前は発音し辛いんだよ。なんだよウイリユ、ウイリデイ
……シュ。ウイリユデス……うん、レフィーヤさんで良いね。

ともかく、発音し辛い姓を持つ彼女は、まあ悪い子じゃないと思う
んだがなあ。

地下にある生活空間を見せつけて『ここが住処です』と言い放って
やりたいが、ホームのままで案内するのはちよつとつて感じ。他の
ファミリアの人だし？

まあ、アイズさんに鍛錬つけて貰ってる奴が何言ってるんだって話な
んだが。

さて、トランクケースに立て掛けておいた俺の剣と杖を回収し
てー、と考えていた所で違和感に気付く。

なんか部屋の中が血生臭いのだ。後序に俺の剣と杖が無い。

何処に行った？ と言うかなんだこの血の匂い。

部屋を見回す。ボロボロのソファアにヘステイア様用のベッド、後
は簡易な水場にー、うん？ シャワー室の方から音がする。キューイ
が見当たらないし、なんか勝手にやってんのかよ……つか、剣と杖を
どっかにやったのはキューイなのか？

あー、うん。悲鳴を上げる事こそしなかったが。とりあえずキュー
イが心臓に悪い事してた。

血塗れのシャワー室。転がる俺の剣と杖、そして自分の尻尾を噛み
千切って溢れ出る血を剣と杖に塗りたいくるキューイの姿。血濡れの
シャワー室を見た時点で悲鳴をあげかけた。

よくホラー系の映画であるだろう。曇りガラスの向こう側で蠢く
何か。曇りガラス越しに見える血の赤さ。何故か聞こえるキューイ

の機嫌よさ気な鼻歌が何とも言えないあの異空間の前でたっぷり深呼吸して扉開けたら想像通りの真つ赤な光景が広がっていて。うん、悲鳴を上げる事も出来ない光景ってああいうの言うんだろな。

とりあえず、キューイの血に塗れた剣と杖をしっかりと洗って、キューイに事情を聴く事になった訳だが。

「で、なんであんな事を？」

シャワー室がキューイの血で惨劇状態なんだが。後片付けの為にさつと水洗いして、血を洗い落とす様の洗剤をたっぷり使う羽目になった。剣と杖も酷い有様だし。

テーブルの上に置かれた剣と杖は赤かった。しっかりと洗ったのだが、赤色が落ちない。正確に言うなれば金属特有の鈍色の光沢が緋色に染まっている。赤銅色と言うには銀色に近いと言うか、赤銀色？と言うべき色。

「キュイ？ キュイキュイ」

うむ。血で強化？ 竜の血を浴びると云々？

あー、キューイ曰く。竜の血と言うのは特別な力が云々。なんかの竜殺しの英雄も全身に血を浴びたおかげで凄まじい力を手に入れる事が出来たとかあったな。ニーベルングンの歌とやらのジークフリドだったかが、竜殺しを成し遂げた際に全身に血を浴びたおかげで、鋼鉄のごとく硬く、いかなる武器も通用しない不死身の体となったとかどうか？

それなら俺が血を浴びるとどうなの？ って言う疑問はあるが、キューイの血はそこまで馬鹿げた能力は無いらしい。

と言うかキューイは俺の魔力から産まれた存在だから、キューイの体からとれる素材、鱗や牙、爪なんかは俺の魔力と親和性が高く、血も当然の如く親和性が高い。

んで俺の持つ剣は元々只の鉄製で魔力の浸透率が悪く、爆発寸前まで擦り減っていたのだが、俺が魔法の触媒となる剣を欲していたので丁度いいからその剣を血に浸して触媒として使える様にしたとか。

……俺の為にやってくれたことなのはわかったんだが。とりあえず良いか？

「あの、シャワー室、血塗れなんですけど……」

もしかしてシャワー室そのものが俺の魔力に対する親和性の高い魔法の触媒になったって事か？ あほらしいぞ。

「キュイ？ キュイキュイ、キュイ」

……あー、シャワー室で魔法使うと威力を跳ねあげてくれるらしい。あのシャワー室は俺の魔法の威力を引き上げる儀式場として完成したとかどうか。アホか、シャワー室で魔法なんて使うか。

「キュイ、今度はちゃんと私に話を通してくださいね……。とりあえず、触媒化してくれた事ありがたい事なのでお礼は言います。もう一度言いますけど、くれぐれも勝手な行動は控えてください」

「キュイ？」

嬉しくないの？ 嬉しいよ？ でもさ、俺って血が苦手なのよ。ほら、血塗れの両手が――

お昼ご飯なににしようかなんて考えていたが、とりあえず食欲は失せて消えた。キュイはおいてきた。うん、とりあえず何かを口にできる状態じゃないな。マールイオン化してるし。

部屋の惨状を片付け、緋色に染まった剣と杖を手に魔教会を出た所で、レフィーヤはまだ待っていたらしくお昼ご飯に誘われた。

「こんな酷い本拠だなんて知らなくてごめんなさい。よかつたらお昼ご飯奢りましょうか……？ 並行詠唱についてアドバイスも貰っちゃいましたし」

「あー……すいません。ちよつと食欲無くて」

「え？ 何かあったんですか？」

「ちよつと、色々……」

家に帰ったら血塗れの惨劇の場に出くわしました。なんて言えずとりあえず誤魔化しておく。

と言うか俺の杖は鉄の長棒みたいな感じの代物だが、レフィーヤの持つ杖はなんという杖かって感じがするな。

「どうしたんですか？ 私の杖が気になりますか？」

「え、ええ。私の杖って、ほら、只の棒っぽいですけど、レフィーヤさんの杖って杖っぽいつていうか」

ファンタジーに出てくる杖、まさにそんな感じで魔法の触媒っぽいのでちよつと気になった。とは言え今の俺の杖も緋色に染まっついてちやんと魔法の触媒として使える様になっっているらしいが。キューイ曰くだけど。

「見てみます?」

「良いんですか?」

差し出された杖を受け取って観察してみるが。装飾といい、雰囲気ファンタジーっぽさがにじみ出てる。

「森のティアドロップっていう私の杖でして。『白聖石』を本体の材料に、魔法石には『千年樹の滴』が使用されてるんですよ」

「へえ」

「すごそう、と言うぐらいしか感想が出てこない。いくらぐらいしたんだろうか?」

「これ、どれぐらいの値段なんですか?」

「えつと、37,800,000ヴァリスだったと思いますよ」

「……。うん、その、なんだ。とりあえず。」

「返しますね」

「はい」

「大よそ三千七百万。無理だな、高すぎる……。」

「はあ……。」

「どうしたんですか?」

「いや、魔法用の触媒となる杖ってやっぱり高いんだなあつて」

「そうですねえ。魔法用の触媒となるとどうしても値段が張りますよね。魔法の触媒としては低質ですけど、『樫』と低品質の魔法石辺りなら数万ヴァリスでなんとかなると思いますけど」

「それでも方は飛ぶんですね」

「まあ、そのぐらいにはなるのか。うーん。」

「ミリアさんの杖はどんなものを? 見せて貰っても良いですか?」

「どうぞ、安物の鉄の長杖ですけど」

見る価値なんてないだろうなあ。ただの鉄の棒にキューイの血を振りかけたもんだしなあ。

緋色の鉄の長杖を手渡すと、レフィーヤはうっと息を詰らせてから恐る恐る此方を見た。なんだ？ 実はとても良いモノになってたとかか？

「……あの、これ、凄く血生臭いんですけど」

「……………ああ、うん。モンスター殴ったりしてますからね」

なんだかんだ凄く希少な長杖じゃないですか！ みたいなのを期待してたけど、そう上手くはいかないか。

外壁へ続く階段を上る入口の辺りでレフィーヤさんとは別れた。アイズさんと顔を合わせにくいとかどうか。まあ、俺は気にしないがベルの方は焦るだろうし良いか。

階段を上りつつ考えるのは、ベルの事。

このままだと不味いんだよなあ。ベルは一人でどんどん強くなっていったるし。俺はおいて行かれない様に頑張ってるんだが……なんだかんだ言いつつも、『ショットガンマジック』で足止めからとどめ差しぐらいしかできないし、そのとどめを刺すのも戸惑う事が多い。肉を貫き、骨に刃が掠った時のあの感じ。ギシギシって言う刃先から伝わる固い物と接触した感触は、何とも言えない。背筋がゾクゾクってなる様な感じがする。黒板に爪を立てた感じと言えば伝わるか。

ともかく、肉を斬る感触はなんとかなりそうなんだが、骨に剣が当たった時のあの感じはまだダメなのだ。血の匂いも苦手だし、手に血が付いた時なんかは手元を見ない様にしないと吐き気がする。手が濡れてる感触もまだ苦手だし……返り血を浴びない上手い切り方が出来ればなんとかなりそうなんだが、そこら辺はアイズさん曰く慣れしかないらしいし。

なんとたって生きた生き物を斬らないと返り血云々は練習にならん

訳で……ともかく、そこら辺もすっかり頑張っついていかなくては。

『ほわあああああつ!』

ふむ。ベルの悲鳴か。

階段を登り終え、外壁の上部の入口からこつそりと眺めてみればベルが慌てて跳ね起きて正座するさ中であつた。状況からして、膝枕されていたんだらう。よくある。

膝枕したアイズさん、気が付いたベルが悲鳴を上げて跳ね起きる。そんな光景は何度か目にしたし。

「……聞いても良い?」

「え? 何をですか」

ほむ? アイズさんの方から語りかけるのは少し珍しいな。ベルが立ち上がるうとした所でアイズさん方から声をかけてるし。

「何か、悩み事でもあるの?」

「へ?」

「……さつきから、凄く焦っているみたいだから」

悩み事? ベルに? アイズさんに鍛錬つけて貰うさ中にベルが悩みねえ。伸び悩んでる? 訳無いよな。だって凄く勢いで強くなつていつてるし。

正座したまま向き合う二人。お見合いかな? 冗談はさておき、ベルの悩みには少し、いやめちやくちや興味ある。盗み聞きは少しはしたないが、気付いてないしちよつとだけ。

「……………」

「どうしたの?」

「あの、ミリアの事で少し」

……俺の事? はて、何か仕出かしてしまつただらうか? 今日は昼までかかつてしまったが、心配してたんかな?

「ミリアが、どうしたの?」

「……僕、最近気付いたんです」

何時もミリアに頼り切りだった事。援護を常に任せていた事。死角は常にミリアが見ていてくれた事。

その所為で俺が実力を出せていない事。

ベルの口から並べ立てられる事柄は、俺からしてみれば信じられない様な事ばかりである。俺を頼ってくれていたんだって思うんだが……なんだかなあ。

「僕がミリアに援護を任せる所為で、ミリアが実力を出せて無くて……ミリア一人で戦っているのを見たら……僕なんて全然で……魔法だつて上手いタイピングで使えないし、モンスター複数に囲まれたらよく怪我するし……」

……。あー、なんつーか。そう、こそばゆい。とは違うか。

ベルはベルで、俺が上手く戦っているのを見て焦りが生まれていたと。俺は俺でー、ベルを見て焦っていたと。

ベルは俺が援護に徹していた所為で実力を出せずにいたから、今度からは援護しなくても良い様に動こうって頑張ってるのに、時折打撃を喰らって怪我したりしてて、俺に回復魔法を使って貰ったりしちやってるのを気にしてて。

俺は俺で、援護を必要としなくなった事に焦りを覚えて、ベルが攻撃を喰らう度に回復魔法を使って、ベルがまだ俺を必要にしてくれてると、不謹慎ながらベルが怪我をする度に安堵してて。

これはー、擦れ違ってるなあ。どうするか。

「……ミリアに、置いていかれそうぞ」

そんな事は絶対にしないんだが。むしろ置いて行かれそうだって感じてるのはこっちだつてのにさ。何とも言えない気まずさがあった——アイズさんの視線がこっちに向いてるんだけど。

「ミリア、この子はこう言ってるけど」

「え？ ミリアっ!？」

ベルが跳ねる様に立ちあがってこっちをみた。アイズさん気付いてたんかい……。仕方ないので影からベルの元へ歩いていく。太陽がまぶしいねえ。

「えっと、ミリア、その……」

「ベル、とりあえず先に謝っておきます。ごめんなさい」

「え？」

ベルが怪我をする度に、不謹慎ながら“まだ俺が必要である”と安

心していた事。

援護を必要としなくなった事に不満を抱いていた事。

ヘスティア様の言う通りだ。人の子は、言葉にしなくては通じ合えない。だから、何かあったらしっかりと言葉にしてほしいって。なんとも言えない話である。

要するに、言葉を交わさなかったからしようもない擦れ違いしてた訳で……。

ベルはベルで俺に置いて行かれてると感じて、俺は俺でベルに置いていかれると感じた。向いてる方向が別々な所為で、それに気付かなかっただけである。話がわかってみれば只の笑い話。そんなもんだった訳だ。

「そっか……僕もごめん。ミリア一人で戦ってる方が上手く戦えてたから」

「そう見えました？ 結構焦ってたんですよ。数が多いと『マジックシールド』で消耗しますし」

ベルの方は直接「怪我」と言う形で見えるんだが、俺の場合はやせ我慢で「魔力」を誤魔化せるから余計ベルは勘違いしたんだろう。自分は怪我しちゃうのに、ミリアはへっちゃらそうだって。

「そっか……」

「もし、一人でどうにもならないときは遠慮無く援護頼んでくださいね。私もベルを頼るので」

「わかった」

悩みが、消し飛んだと言うのかなんというか。うん、ここで話せてよかったよ。今度からは抱え込まない様に……出来たらいいなあ。

「……二人に、質問しても良い？」

「はい、どうぞ」

おおっと、アイズさんの存在を忘れてた。とりあえずアイズさんのおかげですれ違いはどうかできそうだし。お礼になんでも質問に答えよう。

「どうして二人は、そんなに急に強くなっていけるの？」

「ええ？ そんな、僕は強くなってる……」

答え辛い質問だな。というか……俺って強いのか？

「すいません、質問を質問で返すのはアレなんですけど……私達って強くなってます？」

ベルが強くなってるのはわかる。だが俺も？

「うん。並行詠唱が元から上手だったけど、今のミリアなら一人でも十二分に戦えるぐらい強くなってる。最初はそんなでもなかったけど、剣の腕も着実に上手くなってるから」

……第一級冒険者に褒められるぐらいに伸びてる。かあ……『^{ファミリア}家族／眷属』の影響だろうなあ。

どう説明すべきか。

「……どうして？」

「ベルから答えてくれませんか？　ちよつと言葉を纏めるので」

「え？　ああ……うん」

悪いベル。俺はちよつと言葉を選ばせて貰う。流石にありのままを話すのは——恥ずかしいし。

「ただ、その、えつと……。どうしても追いつきたい人がいて、何がなんでも辿り着きたい場所があるから……。だと思えます」

その場所は、彼女の隣であろう。ベルの事だから、間違いないな。それをアイズさんに伝えたベルの羞恥はいかほどのものか。

「ミリアは？」

俺は、そうだなあ。

「そうですね。さつきもちよつとすれ違っていましたけど、どうしても置いて行かれないんですよ。今まで、ずっと一人だったので。オラリオでヘステイア様に出会って。家族が出来て。その家族が凄く頑張ってる、前に前に進んでいくんで置いて行かれない様に必死に頑張ってる。ただそれだけですわね」

スキルには触れないでおこう。とはいえ家族の為なんて恥ずかしくて言えないわ。迂遠な表現だが、これが限界。

「そっか……家族の為に」

……アイズさんが何を考えたのかは知らないが。彼女が幼い頃から迷宮に潜っていたのは、彼女の家族が関わっているのだろう。

俺が触れるべきじゃないし、触れたいとは思わない。俺は俺で、
家族ベルの背中を追うので忙しい。

置いて行かない。手におえなかったら協力する。そう約束したけど、ベルはこれから強くなる。それに、置いて行かれない為に、俺はもつと頑張らなくてはいけない。

並行詠唱が上手い。魔法剣士としての才能がある。魔法の扱いが上手い。それだけじゃダメだ、上手い、才能がある？　ベルはもつと凄いい、もつと上手い、もつと才能がある。置いていかれるのが嫌なら、もつと、もつと努力しなきゃならない。

ベルを超えるべき敵、シルバーバックも、ミノタウロスも、その先の敵も、どれも俺よりも強いだろう。だから、俺は家族ファミリアで有り続ける為に。強くなる。

第六十話

異常なステイタスを記録した紙を片手に立ちすくむヘステイア様。俺はどうするべきだったのだろうか。

アイズさんのランクアップ報告がギルドに張り出され、ベル君の焦りが最高潮に達している。自身のステイタスの更新した紙を見もせず、ダンジョンに向かうベル。

本来、基礎アビリティである『力』『魔力』『耐久』『敏捷』『器用』の最大値はS 999のはずであるが、ベルのステイタス上ではSSと言う表記になり、4桁……つまり999の先、1000を超える数値をたたき出していた。

……まあ、俺もそうなんだけどね。

とは言え、ベルの方は力、敏捷、器用の三つがSSで、他二つがSであり。

俺の方は——魔力がSSに成った物の、他のはお察し状態。力？

Eですが？ 耐久？ 聞くなよ、照れる。Fだよ文句あんのかよ……。

急いで出て行くベルを見てから、ヘステイア様を振り返る。

「いつてきます」

「ミリア君、ベル君の事頼むよ」

「わかってますよ」

大丈夫。リリも居る。安心して帰りを待っていてくれ。

リリと合流して第九階層までやってきたが。何かがおかしい。らしい。

キューイ曰くだが『変、あの日と同じ』だとの事。

あの日ってのが何なのかわからんが。ベルも違和感を感じているのかしきりに周囲を見回しては首を撫でている。

リリもそれに気付いたのだろう。足を止めて口を開いた。

「ベル様？ ミリア様？ お二人ともどうなさったのですか？」

「リリは、何か感じない?」

何か、ねえ……。うーん。キューイが黙ったままなんだよなあ。どうしたんだよキューイ。って、服の中で縮こまって震えてるし。どうしたんだよ。

「ミリア様? どうしました?」

「え、なんかキューイが縮こまって動かないし、何も言ってくれないのよ。キューイ、モンスターは?」

そう言えば、この階層に入ってからなんでかキューイが黙って動かなくなっただよな。でもモンスターに出会ってないし、モンスター居ないから何も言わないんじゃない?」

「反応無いですね。モンスターが居ないみたいで……。いなさすぎじゃないですか?」

「……そう言えばそうですね。確かに全然モンスターが居ません。いつもならこんなに出会わないなんて珍しいんですけど」

リリと話し合っていると、ベルが困惑した様に口を開いた。

「ねえ、二人は視線を感じない?」

「視線? 特には何も」

「さあ、視線についてはわかりませんが。確かに違和感はありませんね」

ベルは考え込み始めるし。どうしたんだか。

「キューイツ! キューイツ!」

うわっ、急にキューイが服の中で暴れ出した。鎖帷子があるから衝撃だけだが、腹や胸やらをひつかきまくってくる。ギヤリギヤリっと金属をひっかく音を響かせて暴れ狂うキューイを慌てて引つ張りだして放り捨てる。

「ちよつとキューイ、急に暴れないですよ。びっくりするでしょ」

「キューイツ! キューイツ!」

あん? 逃げろ? 今すぐ? オエスツテルが殺しに来るけど、逃げなきゃダメ? いや、意味分らん。

いや、オエスツテル? オツタルの事だったか? そいつが殺しに来るって、一体なにを――

「ミリア、どうしたの？」

「え？ ヤバイのが来るから逃げろって暴れ出したんですよ。とりあえず大人しくさせるので——ベル？」

「それ、本当？」

肩をガシリと掴んで此方を見るベル。表情が青褪めてる。なんだ？

ミリアの台詞に、言葉を失った。違和感があった。この階層に來てから、モンスターにも冒険者にも全然出会わなくて、あの日と同じだなんて思ってた矢先だった。

あの日も、キューイは言っていた。『ヤバイのが来る』と。

「逃げよう」

「へ？」

「ベル様」

今すぐ逃げなきや。だって、もし僕の予測が間違っていなければ、此処に奴が居るから。

ミリアとリリの手をとって走り出そうとして、足が止まった。何かが来る。

足を止めた僕を不審そうに見上げるリリと、足元で震えながら縮こまって脅えたようにキューイキューイ鳴きはじめるキューイを抱え上げるミリア。

「……キューイ？ ちょっと大丈夫？ 殺さないで？ いや、殺さないけど……オエスツテル？ いや、オツタルの事だっけ？ 本当にどうしたのよ」

ミリアは、なんでそんなに落ち着いているんだろうか。あの日はミリアも居たのに。

「ミリア？」

「何？ ベル、と言うか顔色悪そうね。大丈夫？ この階層でヤバイのって……インファントドラゴンぐらいいじゃない？」

「インファント……十一、十二階層で出るレアモンスターですか。九

階層まで出てくる事はー無くはないですね。今のままじゃ歯が立たないですけど、逃げるのは難しくないかと。この階層ならそこまで広さはないので動きも鈍ってるでしょうし」

違う、違うんだ二人とも。そうじゃない。なんで、何でミリアはこんなにも落ち着いてるんだ。あの日は、あの日は――

『ヴヴォオオオオオオオオオオオオオツ!!』

迷宮に響くその咆哮は、忘れもしないあの日に聞いたそれと同じで。脳裏によみがえるのは拳を振り上げ、今まさに僕を殴り殺そうとするあのモンスター姿の姿。

ダンジョンの奥から、大剣の切っ先で地面をひっかきながら、悠々とした仕草で歩いてくるソレの姿を見て、足が竦んだ。真っ赤な、真っ赤な体躯。前に見た個体とは全く違う、全身が真っ赤に染まった、けれども見覚えのあるその姿。

牛頭人体の怪物。ミノタウロスだ。

「なんで、九階層にミノタウロスが……」

リリの困惑した声、ミリアは――目を見開いたまま硬直していた。

奥から、歩いてくる。キューイが逃げろって叫んでる。ベルもリリも怯んで動けなくて、俺は――守らなきゃ。

前に、前に飛び出す。――骨の折れる音が響く。

『シヨットガン・マジック』ツ!!』

銃魔法を唱える。あの時とは違う。あの時は魔力もほぼ初期値だった、今の俺なら――いけるのか？

「ミリア様ダメですっ！ そのミノタウロスは強化種で――

リリが何かを叫んでいるが。大丈夫、魔力SSとか言う有り得ない数値まで伸びたんだ。今なら勝てる。あの時は――骨が臓腑に突き刺さる感触がする。

『リロード』ツ!!』

大丈夫。勝てる。勝たなきゃ、守らなきゃ。あの時は無理だったけど――あの時？ 何時の事だろうか。

『ファイア』ツ!!』

放たれた散弾が、視界を埋め尽くして——俺はこの光景を見た事がある。知ってる。だってあの時も——

土埃がはれた其処には、変わらぬ姿の化物が居て。

——体の奥から響く、骨の折れる音。ボキボキって音だ。そう、握りつぶされるあの感触。骨が折れて、内臓に突き刺さって、目の前で獣臭い息を吐く牛頭があって、それで、それで——俺はあの時何もできずに殺されたのか。

「アアアアアアアアアアアアツ!!」

今度こそ、守らなきゃいけないのに。また無理なのか。

前に飛び出た金髪の、小柄な彼女。被っていた魔女帽子を落としたのにも気が付かず、金髪をたなびかせ、目の前に——アイズさん？

魔法を放ち、ミノタウロスを止めようとしている彼女を見て、気付いた。アイズさんでは無い。彼女は、ミリアだ。

そういえば、あの時もミリアは僕を助けようとしてくれたんだっけ。

魔法が効かず、叫びながら魔法を連発するミリアの姿を見て、ようやく我に返った。

何をしてるんだ僕は。今度ミノタウロスが現れたらかつこよく倒すなんて言っておきながら、脅えて逃げ出そうとしていた。ミリアは——安心して座り込んでしまっている。リリが傍に駆け寄って声をかけて肩を揺さ振るが、反応が無い。

「ミリア様っ！ ミリア様すっかりしてくださいっ！ 魔法が効かないのは当然ですっ！ あのミノタウロスは強化種なんですよっ！ 逃げましょうっ！」

強化種。確か、普通の個体よりも強いんだっけ。

ミリアの魔法を受けて無傷のミノタウロスは、こちらを見ていた。鼻で笑う様に、そして——腰を落として、突進の構えを見せた。

不味い、あのまま突進を繰り返されたら、ミリアとリリが……いや、

僕も含めて全員が死ぬ。二人を、助けなきや。

「ミリア様っ！」

「リリっ！ ミリアっ！」

二人の腕を掴んで——放り投げた。次の瞬間には何かに跳ね飛ばされた衝撃と共に、意識が飛んだ。

地面を転がる。ベルに腕を掴まれて——投げられたんだっけか。キューイが逃げてと騒ぎ続けている。何があつたんだっけ。確か、魔法を使って——あれ？ 俺、此処で何してたんだっけ？

「ぐうっ」

リリルカが、叩き付けられた。何が起きたんだっけか？ ぼんやりと考える。思い出せない、霧がかつたような思考。一体俺は何をしていたんだろう。

「ミリア様、大丈夫ですか。ベル様は——ベル様あつ!？」

リリルカが、慌てたように目を見開いて、悲鳴の様な声を上げる。どうしたんだろうか。ベルに何かあつたのか？ 俺は此処で何してたんだっけ。いや、確か何かが起きて。キューイが逃げてって叫んでて。

視界を動かす。ぼんやりとした思考のさ中、壁際に倒れた白髪の少年を見つけた。

アレはー、ベルだ。そう、ベル・クラネル。この世界に来て、同じミアミア^ぞミア^かになった少年。ヘスティア様に様子を見る様に言われてたっけ。何で倒れてるんだろうか。

リリルカが、クロスボウを構えて放ってる。何に？

「ベル様に近づくなあつ!!」

ボルトの放たれた方向を向けば、でかい化物が居た。牛頭人体の化物。あ、知ってる。ミノタウロスって言う怪物で——体中の骨の軋む音がした。

あれ、何してたんだっけか。ミノタウロス、中層のモンスター。ここ中層だっけ？ 思考が上手くまとまらない。

ミノタウロスは、飛来する短矢ポルトをうつとおしげに払い除ける。リリ、その攻撃効いてないからやめたら？——だって、あのモンスターは魔法を浴びせたのに、無傷で現れたし。
「あつ」

ミノタウロスが、石ころを投げた。近くに居たりリルカの姿が掻き消えて——ゴシヤリって音が後ろで響いた。振り返れば、壁に叩き付けられて、背負っていたバックパックの荷物がぶちまけられたリルカの姿があった。

なんでリリは吹っ飛んだんだろうか？ ああ、石ころを投げられて、ぶつけられたのか。凄い力だな——俺の胸を握りつぶせるぐらいの力はあるから当然か。

いつの間にか、その力持ちの怪物が目の前に居た。ああ、何で俺を見てるんだ。鼻で笑って、手を伸ばしてくる。あの日も、こんな感じだったっけ？ そう、たしか——ミノタウロスと初めてであったあの日も。

赤い、小さな、何かが俺の腕の中から飛び出して行った。ミノタウロスの腕に噛みついて、咆えて、握られた。

叫ぶ小さなソレ、ミノタウロスはうつとおしげに片手に握り、高々とソレを掲げる。

何をしてるんだっけか。そう、ミノタウロスに襲われて、それでーベルが倒れてる。リリが倒れてる。赤くて小さい何かがミノタウロスの手の中で暴れてる。

何を、しているんだっけ？

見上げたミノタウロスが、此方を見下ろしている。何かを言いたげな表情だ。何だろう？

赤い小さいのは、叫んでる。何かを、叫んでる。

——早く逃げてって、叫んでる。

強くなりたい。あの強者との戦いが忘れられない。もっと強く、相応しい戦いの場を用意すると強者は言った。大人しく箱に入り、待

つ。

強者が言った相応しい戦いの場を、だがそれは訪れなかった。箱から出た時、目の前に居たのは三匹の弱者。赤い液薬を飲んで『これでお前もなんとかなる』等と言って斬りかかってきた奴等。弱過ぎて、何も感じなかった。

最後の一匹が『偽物を渡しやがったなああの糞餓鬼』と誰かを罵りながら投げつけて来た赤い液薬。浴びた途端に世界が変わった。強くなった。でも、まだ全然弱い。

いままでより、一つ、何かの壁を乗り越えた気がする。けれども、あの強者に敵うかと言えば、そうでは無い。自分は強いと思っていた。けれどもあの強者が其れは違うと現実を叩き付けて来た。

もつと、強くなりたい。彼の強者に敵う程の力を欲した。

其の為にも戦う必要がある。彼の強者が用意すると言った相応しい戦いの場。

力を着け、それに挑むべく足を踏み出した。渡された鉄製の大剣を片手に。

だが、現れない。相応しい戦いの場に居るべき相手が居ない。居るのは路傍の石ころと大差ない弱い者ばかり。簡単に捻り殺し、潰し、終わる。

三匹、小さいの一匹と、とても小さいの二匹。これが相応しい戦場かと首を傾げ、途端にとても小さい、金色の方が飛び出してきて何かを放ってきた。視界を埋め尽くす光の玉が飛来して、痛くもかゆくもない。

呆れ返る程弱いそのすごく小さい金色のは、何度もそれを駆使して、ついには座り込む。弱過ぎて話にならない。

潰そう、さつさとこんな弱いのは潰して、相応しい戦場を探さなくては。強くなる為に。

白い小さいのが跳ね飛んでいく。とても小さいの二匹を逃がして、白いのだけが当たった。面倒な事をしてくれた。しかもまだ死んでない。咽びながらも、立ち上がろうとしている。さつさと潰そう。

そう思った矢先だ、小さな何かが飛来する。羽虫の攻撃の様な何

か、金色とは違うとても小さいのが、腕から繰り出す何か。弱過ぎるを通り越して、ただうっとおしいだけのそれ。

足元の石ころを投げつけてやれば、呆気無く吹き飛んで沈黙する。何がしたかったのかさっぱりわからない。

よく見れば、金色のが座り込んでる。そうだ、まず金色のを殺そう。最初に攻撃してきたのは奴だから、最初に殺すのが良いだろう。

歩いて近づいても、反応が無い。腕に赤い何かを抱えてたまま、此方を見上げている。攻撃をしてきた癖に、何をするでもなく見上げてくる。弱過ぎて戦いにもならない弱者。

興味も無いが、攻撃されたのだから、潰そう。

手を伸ばして——それが腕に抱えていた何かが噛みついてきた。

痛くも、痒くも無い噛みつき。どうして弱いのに噛みついてくるのか。理解出来ない。だが、攻撃してきたのだから、潰そう。

左手に握り締め、掲げる。弱いくせに、噛みついてきたからこうなるのだ。弱い奴に興味はない。強者との戦いにもみ赴きたい。だが邪魔するのなら、潰す。

金色の何かが、呟いてる。『やめて』と、何を言うのか。鼻で笑う。やめて欲しいのなら力づくで止める。出来ないのなら黙って殺される。

手の中の、赤色を握りつぶした。あつけなく、目の前の金色は力づくで止める事も出来ない。こんなに弱いのに、時間をかけるなんてもったいない。さっさと殺して、強者と巡り会わなくては。

第六十一話

何をしてるんだ。俺は一体、何をしているんだ。

「目の前で『早く逃げて』って叫んでいただろう？

へたり込んで、その姿を見ていただろう。」

握り潰されて、その手の間から零れ落ちて来た血と肉片を、思わず両手で受け止めて。ようやくキューイが死んだ事を理解した。

グチャリと言うあっけない音と共に、そのミノタウロスの手でキューイが握り潰された。悲鳴一つ上げず、逃げてと叫び続けたキューイが、呆気無く死んだ。

落ちてきた血と肉片を両手で受け止めて、手の中に納まりきらずに地面に零れ落ちるキューイの残骸を見て、悲鳴を上げる事も出来ずに息が詰まった。

俺は一体何をしていたんだ？ 手の中に残った感触。滑る血の感触に、ふるりとした肉の感触、砕けてちくちくと刺さる骨の感触。これはなんだ？

脳裏に映し出されたのは捻じ曲がった右腕と、骨の飛び出た左腕。後は真ん丸お月様。

息を飲み、呼吸を落ちつけようとした所で——胸を掴み上げられて息が詰まった。

「うぐっ……」

血塗れの両手から強引に意識を引き剥がされ、胸をきつく締め上げるミノタウロスの手の感触。ギリギリと締め上げられ、ポキンとあっけなく肋骨の折れる音。折れた骨が肺腑に刺さったのか、臓腑が弾けでもしたのか、激痛が爆発し、喉の奥から血が溢れだす。

「うぐっ……ぐうううう」

ギリギリギリと、万力で押し潰す下の様に、胸が締め上げられる。断続的に響くのは骨の折れる音。ポキポキって言うあっけない音。このまま死ぬ。逃げてって叫んでたキューイが、必死になって守ろう

としてくれた馬鹿野郎は、此処で――

『ファイアアボルトオ』ツ!!」

ベルの詠唱。弾ける音と共にミノタウロスの手から解放されて地面に落ちた。倒れ伏した姿勢から何とか身を起こし、ベルを見れば――
額から血を流し、目を爛々と輝かせたベルがふらつきながらも立っていた。

「僕が、僕が相手だっ!」

叫び、バゼラードとヘステイアナイフを構えるベル。やめろ、殺されちまう。ベルに逃げる様に声を掛けようにも、喉の奥から溢れて来た血で喉が塞がり、声が出せない。

ミノタウロスは此方をちらりと見て、足を振り上げ――俺を踏み潰そうとした。

「やめろおおおおおっ!!」

ベルの絶叫。逃げなくてはいけない。必死に身を捻り避けようとするが、腕を動かしただけで体の内側で折れた骨がすれ合い、激痛を訴えてくる。身を起こしたままミノタウロスの足の裏を眺めるのが限界で、ベルが必死に走ってきているが、間に合わない。ここで死――
――衝撃と共に視界がぐるぐるとまわる。飛び散った床の破片が体に当たって痛みを訴える。衝撃によって激痛が爆発して一瞬だけ意識が途切れる。

うすぼんやりと見えた天井が何かに遮られて生きている事に気付いた。

「ミリア様っ! 目を覚ましてくださいっ!」

リリルカ・アーデ。彼女の顔が目の前にある。助けられた、それに気付いて礼を言おうとして、彼女が俺の体を引っ張り起こす。

「ミリア様っ! ベル様の援護をしてくださいっ!」

肩を揺さ振られ、悲鳴の様に叫ぶリリ。早く、お願いしますと、涙をボロボロと零しながら悲痛に叫ぶ姿に疑問を覚え――何かが壁に叩き付けられる音が響き、其方に視線を向けた。

ベルが、壁にめり込んでいた。ミノタウロスが大剣を振るった姿勢のままベルを睨んでいる。何が起きたのかなんて一目瞭然だ、ベルが

やられてる。

「ミリア様っ！ ベル様の援護をっ！ 早くっ」

叫ぶリリの姿に、体を起こして右手を突きだし、魔法を詠唱しようとして——手が血塗れなのに気が付く。

息が詰まる。捻じ曲がった右手と、骨の露出した左手。あの光景が脳裏を過ぎり、それ以上の衝撃をリリが与えて来た。

「見てくださいっ！ リリはっ！ リリのこの腕ではっ！ もう援護できないんです、だから、ベル様の援護を、お願いします」

へしやげた右腕が其処に在った。リリルカの右手に装備していたはずの、リトルバリスタと言うクロスボウ。其れ毎リリルカ・アーデの右腕がへしやげて居る。ボタボタと溢れ出る血を垂れ流しながら、リリが泣き叫ぶ。

「ベル様の援護をっ！」

額からも血を流し、フードが半分真っ赤にそまつたりリリルカの叫びに、奥歯を噛み締めて立ち上がり、詠唱する。

『ピストル・マジック』っ！

助けられた。ベルに、ミノタウロスに握り潰される寸前に。

助けられた。リリルカに、ミノタウロスに踏み潰される寸前に。

助けようとしてくれた。キューイが、死ぬ寸前まで、身を案じてくれた。

『リロード』っ！！

最強の拳銃に、最強の弾丸。現実^{ありえない}に存在する其れは、浪漫の一言で斬り捨てられてしまう産廃兵器。けれども、魔法であればそれを再現し、運用できる。

ベルが、めり込んだ体を壁から引き抜き、バゼラードとヘステイアナイフを二刀流で構える。ミノタウロスが大剣を振り上げ、ベルに振り下ろそうとしている。ベルが身構え、それを受けようとしている。

どう考えても、無理だろう。

ベルはレベル1だ。強化種であるミノタウロスはレベル3に匹敵する強さだ。普通に考えれば無理だ。一人でその攻撃を受け止められるはずもない。

『ファイア』ツ！」

放たれた弾丸が、今まさにベルに迫る大剣の刃を捉える。

効果は無い。俺のレベルは1で、あのミノタウロスはレベル3程度。俺の攻撃程度でその攻撃を止められるはずもない。

普通ならば、一人ではその攻撃を止められない。では、普通でなければ？ 一人でなければ？

大剣の刃で弾けた弾丸。ミノタウロスの一撃の威力が、ほんの少し削り取られ、速度が落ちる。ベルは大剣の一撃を受け——弾いた。

バギインツと、馬鹿げた金属同士のぶつかり合う音。それと同時にミノタウロスが大きく弾かれて胴を晒す。驚きの表情を浮かべたミノタウロス。大きな隙だ、今なら攻撃のチャンス。だけれども、ベルもまた大きく姿勢を崩している。

ベルが攻撃に回るより先に、ミノタウロスが体勢を立て直すだろう。そのままならば。

『ファイア』ツ!!」

ミノタウロスの肘に弾丸が命中し、姿勢を戻すのがほんの少し遅れる。ベルが紙一重で一拍早く姿勢を立て直し、ミノタウロスの腿の辺りに斬撃を見舞った。

「はあああああああつ!!」

ザシユリと、傷が出来た。浅い、小さい、ミノタウロスにとってかすり傷にしかならない傷が——与える事が出来た。

「ミリアっ！」

「援護するっ！」

浅くとも、小さくとも、傷つけられる。傷を与えられる。援護しよう、あの小さな傷が、ミノタウロスを殺すその時まで、援護しよう。

ごめんキューイ、もつと早くに立ち上がればよかったよ。

最初から一人で守ろうとなんてしなきゃよかった。強敵が現れたら、ベルと一緒に戦おうなんて約束したのに、忘れて一人で飛び出して、勝手に心折れて座り込んで。

こんな情けない奴でごめん。でも、仇討だけはしてみせる。

遠征に赴く為に班を二つに分けて行動していたロキファミリアの面々が、九階層で強化種のミノタウロスに襲われたと言う冒険者に出会ったのは偶然であろう。

前回の遠征中にミノタウロスを上層にまで行かせてしまった事があったが、あの時のミノタウロスはしっかりと掃討し終えたはずである。しかしミノタウロスの出現の報告を聞いたアイズが一人で先走り、救助に走ってしまう。

追いかけている途中、オツタルの妨害やパルウムの少女の助けを求める声等があったが、一人走り抜けたアイズ・ヴァレンシユタインは、彼らを見つけた瞬間に息を呑んだ。

赤い、赤いミノタウロス。通常種の茶色い毛並から並外れた深紅のミノタウロス。間違いなく強化種であるそのミノタウロスの前に、彼——ベル・クラネルが立っていた。

今まさに、ミノタウロスが振り上げた大剣が、ベル・クラネルを叩き斬らんと迫るその光景。足を動かしても、間に合わない。アイズ・ヴァレンシユタインの俊足を以てしても、あの一撃を止めてあげられない。

あのまま、あの少年は死ぬ。確信と共に歯を食いしばり——その予測は弾け消えた。

「『ファイア』ツ!!」

「おおおおおおっ!!」

弾ける、金属音。レベル3に届きうるその剛腕の一撃を、少年が弾いた。

普通ならその一撃は少年を叩き切っただろう。普通ならその少年は今頃死んでいただろう。

奇跡的に、ミリア・ノースリスの放った魔法が、ミノタウロスの一撃の威力を弱めた事で、弾く事に成功した。まさに奇跡を起こしていた。

剣を抜こうと、彼を守るために前に出ようとして、アイズは足を止

めた。止めてしまった。

ベル・クラネルの放った一撃が、ミノタウロスの腕を浅く斬り裂く。浅すぎて、負傷とも呼べないその傷。

そんな小さな傷が、何十もミノタウロスの体に刻まれている。

「おいアイズなにしてんだ」

後ろから聞こえたベート・ローガの声に答える事も出来ず、アイズはただ信じられないものを見たと言う表情のまま固まっていた。

追いついてきたロキファミアリアの面々の声も届かない程に、アイズはただ目の前の光景に目を奪われていた。

「あん、ありやあの時のトマト野郎と、死にかけのガキじゃねえか。おいおい、なんだよあいつらつくづくミノタウロスに縁があるみたいだな」

「それって、ミアアとベル・クラネル？」

「あん、オマエの知り合いかよ」

ベートの言葉にティオナが首を横に振る。ロキファミアリアのやり取りのさ中にも、ミノタウロスの攻撃をミアリアの魔法が弱め、ベルが弾き、ミアアが隙を作り出し、ベルが攻撃する。そんな光景が続いている。

「しっかし、よく死んでないな。普通ならもうとつくの昔に死んで——おい、なんでアイツ等死んでねえ」

ベートも、その違和感に気付いたのだろう。言葉を止め、ミノタウロスと彼らのやりとりを観察し始め、息を呑んだ。

「嘘だろ……」

アイズとベートだけではない。フィンもまた、信じられないものを見る目で彼らを見据えた。

ミノタウロスが大剣を振り上げ、振り抜こうとする。ベル・クラネルがそれを受けるべくショートソードとナイフを構える。当然、レベル3に届きうる強化種の攻撃なんて受けられる訳も無い。

其処に突き刺さるのは、ミアア・ノースリスの魔法。放たれた魔法が、針の穴を通す様な精度で、ミノタウロスの大剣に着弾し、その一撃の威力を削ぐ。その威力の削がれた一撃を、ベル・クラネルが弾く。

攻撃を弾かれ、姿勢を崩したミノタウロスにミリア・ノースリスの魔法が突き刺さり、隙が生まれる。其処をベル・クラネルが反撃と言わんばかりに斬り付ける。

口にすれば簡単な事だろう。だが、ミノタウロスの大剣に、指先程度の大きさしかない弾丸を、真正面からブチ当てる事が出来る魔法使いがどれほど居ると言うのか。

それも、ミリア・ノースリスは一か所に留まる事なく、走り回っている。ミノタウロスの視界から外れる様に、ミノタウロスの死角へ潜り込む様に。

対して、威力が削がれるとはいえ、強化種の一撃に身構えられる冒険者が何処に居るだろうか。普通ならそのまま挽肉だ。ミリア・ノースリスの援護が外れたその瞬間、彼は死が確定するだろう。

最初、アイズ・ヴァレンシュタインはその光景を見て奇跡だと思った。何故なら、何回も同じ事を繰り返せないと思ったから。

どんな精度をしていけば、切っ先が目に映らない程の速度で振るわれるミノタウロスの一撃に合わせて魔法を放てるだろうか？

どんな精神をしていけば、自らを確実に殺せる一撃を前にして身構えられるだろうか。

ミリアが威力を削ぎ、ベルが弾き、ミリアが隙を生み出し、ベルが攻撃する。

流れる様に、交互に行われるその行動には、全く迷いが無い。「嘘でしょ、あんなの……死んじゃうよ」

ほんの少しのミスが、命取り。失敗はそのまま死を意味する攻防。後ろから援護するミリアの精度の高さも、死を目の前にしながらもほんの一瞬も怯まずに立ち続けるベルの精神も、どちらも凄まじい。

「リヴェリア」

「なんだ」

「もし、もしも君がミリアと同じ魔法を覚えていたとして、同じ事が出来るかい？」

フィンの、何気ない質問。その質問にリヴェリアは難しい表情を浮かべ、呟く。

「出来る」

だが、リヴェリアはそうつぶつけた。

「一度、二度ならばだが」

何十回と続けるのは不可能だとも。

ミノタウロスの大剣と、ベルのショートソードが弾け合う光景に何度心臓が跳ねただろう。爆発しそうな心臓の音が邪魔だ。走り、止まり、撃ち、走り、止まり、撃ち。

ミノタウロスの大剣の威力を削ぐ為に必要な射角・射線の確保の為に走り、射撃姿勢をとる為に止まり、必中の一撃を放つ。外せば、ベルが死ぬ。

『ファイア』ツ!!』

エイナさんのくれた手袋と、ヘステイア様がくれたキューイの素材で作られた竜鱗の朱手甲。どちらもキューイの血に塗れていて、その血が俺に力を与えてくれる。詠唱する魔法の威力が引き上げられ、走りながらぶちかましても十分な威力を伴ってくれる。

だが、足りない。ベルもそれが分かっている。何度斬り付けただろう、なんと刻んだだろう。そのミノタウロスの体に刻みつけられた傷は、けれども致命傷には至らないちんけな傷跡に過ぎない。

何か大きな一撃が必要で、それを見つけ出さなくてはいけない。

驚くだけでは無い。冒険者としての目を持って彼らの戦いを観察し始めたロキファミアリアの面々は、苦い表情を浮かべていた。

「なんなんだあのナイフ」

ベートが目をつけたナイフ。威力が削がれているとは言え大剣の一撃を受け止め、受け流したその光景に驚きの声を上げる。

「確かに業物だ。だがそれだけじゃない」

「彼の技だよ」

幾度と無い攻防。ミアリアの援護。ベルの攻撃。どれか一つでも歯

車が狂えば死んでしまう戦い。

「すごい、威力が削がれててもあの一撃を良く凌いでる」

「ミリアの魔法制御精度の高さも、放った魔法の命中精度も目を見張るものがある」

だが、足りない。

「ミノタウロスの肉は絶ち難い」

表層の、皮膚ばかりを幾度と無く斬り付けている。小さな、傷が無数に出来上がっている。だが、それではミノタウロスには倒せない。

焦りながらも攻撃を逸らそうとして——ついにベルの持つショートソードが音を立てて砕け散った。

幾度と無い攻撃に耐え切れず、破片を散らし砕けたショートソード。ベルに致命的な隙が生まれ次の瞬間、ミノタウロスが動いた。

「あつ！ ミリアが狙われてるつ！」

テイオナの驚きの声。皆が息を飲むさ中、ミノタウロスは仕留めきれない白髪の少年を無視し、後方からうざったい妨害を繰り返していた金髪の子供を狙う。

一瞬で加速したミノタウロスに、姿勢を崩したベル・クラネルが反応しきれない。手を突きだし、炎を放つ。

『ファイアボルトオ』ツ!!』

「あの魔法、詠唱していないっ」

「ミリアと同じ分岐詠唱、では無いな。無詠唱だ。だが相手が悪い」
「軽すぎる」

ミノタウロスの背中で弾けるその魔法は、威力が無さすぎて走るミノタウロスの姿勢を崩す事も出来ない。

あのままではミリアが引き潰される。皆が身構えた。

ミリアが足を止め、驚きの表情を浮かべ——一瞬で獰猛な笑みに切り替わる。

「何か作戦でもあるのか」

ミリアが右手に持った剣の切っ先をミノタウロスに向け、詠唱する。

『シヨットガン・マジック』『リロード』

ミノタウロスが目の前に迫ってきているとは思えない程、落ち着いた詠唱。ミリアの持つ剣の切っ先に指先程の魔法陣が生み出される。その光景にアイズが目を見開く、ミリアにはちゃんと教えたはずだ。ただの剣を魔法の触媒として使う危険性を。だが、リヴェリアが目を細める。

「あの剣は——特殊な触媒か、魔法の威力を引き上げている。だが、何の触媒だ？」

アイズがリヴェリアに声を掛けるより前に、ミノタウロスが大剣を振り抜かんと振り被った。

後ろから走り追いかけるベルが追いつけない。ミリアは不敵な笑みを浮かべ——今までと同じように大剣を狙って魔法を放つ。

「『フアイア』ッ！」

突如響き渡る轟音。ミノタウロスの大剣は、けれども威力を落としながらもミリアに迫る。あのままではミリアが死ぬ。誰しもがそう予測した次の瞬間。ガラスにひびが入る音と共に、その一撃は止まった。

左腕、竜鱗の朱手甲を突きだした姿勢のまま不敵な笑みを浮かべるミリア。ミリアを包み込む真っ赤な球状の魔法障壁によってミノタウロスの一撃が完全に止まっている。

「『こういう口づけは好み？』」

ミリアが挑発する様な言葉を放ちながら、右手に持った剣の切っ先をミノタウロスの腕に押し当てて。切っ先の押し当てられたその場所は——ベルが幾度と無く斬り付けた小さな傷跡。

「『フアイア』」

静かな詠唱、発動する魔法の威力は今までの比では無い。足を止めたのは、並行詠唱では引き出せない威力を引き出すための物。その一撃は——ミノタウロスの片腕を爆炎と共にもぎ取った。

くるくると宙を舞うミノタウロスの右腕と——大剣。

次の瞬間、白い影が大剣を奪い去り、ミノタウロスの左腕を斬り取った。

「ベルッ」

「ミリアアッ！」

白い影、ベルが両手で大剣を握りしめくると宙を舞うミノタウロスの左腕を押しつけ、ミノタウロスに迫る。

『ライフル・マジック』『リロード』

「うおおおおおっ!!」

両腕を失って尚、ミノタウロスは諦めを浮かべる事も無く、その角による頭突きでベルを仕留めようとし——ミリアが放った魔法がミノタウロスの両足に突き刺さる。

『ファイア』ツ!! 『ファイア』ツ!!

ズドンズドンと、ミノタウロスの両足に刻まれた、ベルの与えた小さな傷に弾丸を捻じ込む。

ミノタウロスが両膝を突き、ベルの握り締めた大剣がミノタウロスの残っていた片角を叩き砕いた。片角が砕けると同時に、ベルの持っていた大剣もまた、砕け散る。

幾度となくミリアの魔法攻撃にさらされ続け、耐久の減っていた大剣は、その役目を終えキラキラとした破片を撒き散らしミノタウロスの視界を塞ぐ。——ベルとミリアの姿をミノタウロスから隠す。

『シヨットガン・マジック』

「うおおおおおっ!!」

両膝を突き、両腕を失い。終に片角も失ったミノタウロス。ベルとミリアが同時に踏み込み——ミノタウロスの胸にそれぞれナイフと剣を突き刺した。

『ファイアアアツボルトオオオツ』!!

『リロード』『ファイアアアツ』!!

ベルとミリアの魔法が同時に、ナイフと剣の切っ先より放たれる。小さな、ちんけな、致命傷には程遠かったはずの小さな切り傷から、ナイフと剣の切っ先が捻じ込まれ、ミノタウロスの体内で赤い花を咲かせる。

後悔した。自らの胸に開いた風穴を感じつつも、深い後悔に苛まれ

る。

白いのと、金色の。どちらもただの石ころの様に殺せる、どうでも良いモノだとおもっていた。

だけれども、今自分は胸に風穴を開けられている。そう、一瞬で殺せると思った彼らにである。

顔を上げる。彼らが身構えている。

白い少年。少女は、ベルと呼んでいた彼。

金色の幼い少女。ベルはミリアと呼んでいた彼女。

弱かった、とても弱かった。

彼一人なら、そのまま叩き潰していた。

彼女一人なら、難なく叩き潰せただろう。

けれども、自分はまけた。

両腕が無い。肘の辺りから弾けて消えた右腕。すっぱりと綺麗な断面を見せる左腕。

立ち上がろうとしても、膝に感じる違和感の所為で立ち上がれない。

悔しさが湧き上がり、それ以上の怒りが自らを焦がす。

何故、最初から本気を出さなかったのか。何故、あの男に教えられた技を駆使しなかったのか。

力が上昇した、敏捷が上昇した、体力が上昇した。自分は強くなった。

そう、強くなったのに。負けた。

此方を見て身構える二人。白い少年ベルと、金色の少女ミリア。二人にまけた。

あの男に鍛えられた技も駆使せず、今まで野生に居た頃と同じ様に力任せに振り回す戦い。いや、戦いでは無い。ただ暴れていただけの情けない姿。それで負けた。

悔しい、苦しい、そして何よりも苛立つ。本気で戦おうとせず、路傍の石ころを蹴飛ばすような気楽さで挑んだ己自身に何よりも強い苛立ちを感じた。

血肉沸き躍る様な戦いになるはずだった、この戦いを、無為に終わ

らせた事を悔やむ。あの男の言っていた相応しい戦いの場は、ここに
あったのに、それを台無しにしたのは己自身であったのだ。

ああ、もし願いが叶うなら。もう一度戦いたい。

今度は最初から本気で、弱そうだとか、弱いだとか決めつけず、最
初から本気で殺しにいこう。

手を伸ばす。再戦を望みながら、自らが潰える事を感じ取りなが
ら、もう一度、戦える事を願って。

胸にぽっかり開いた穴。ベルと俺の魔法が同時にぶち込まれ、ミノ
タウロスの胸にはぽっかりと穴が開いていた。なんというか、信じら
れない光景だ。

両腕を失い、膝を突き、胸に風穴があき、角を失ったミノタウロス。
そんな致命傷を通り越して死んでいなければおかしい負傷具合であ
りながら。

今まさに此方に手を伸ばすそのミノタウロスの生命力の高さに驚
きが隠せない。魔力は底を尽き、ベルも立ってはいるがフラフラで、
もう一撃を放とう等と言う事も出来ない。

そう、さっきの一撃が最後の一撃、これ以上捻り出せる物なんて無
い。

そう思い、見守るさ中。ミノタウロスは口をもごもごと動かし、そ
のまま灰になって消えた。

呆気無く、灰になって虚空に消えたその姿が理解出来なかった。

勝てる、なんて思わなかった。けれども、勝った。そんな風に理解
できたのは、ベルが目の前に立ってからだだった。

「ベル？」

ふらつきながらも、ベルが俺の前に立った。此方を見て、笑いなが
らハステイアナイフを振り上げた。

「ミリア、僕の、僕達の勝ちだね」

ベルのその言葉に、ストーンと腰が落ちた。腰が抜けて、座り込む俺
の前で、ベルは震える両足で立っていた。今にも倒れそうな位頼りな

い姿だが、誰よりも、何よりも強い姿だった。

「ねえミリア、僕——約束、守れたかな」

約束。『なら、今度ミノタウロスに襲われたら……その時はかっこよくミノタウロスを倒してくださいね』そんな、守れるなんて思っ
なかつた約束。

「うん」

本当に、守ってしまった。

「かっこよかつたかな」

「うん」

誰がなんと言おうが、かっこよかつたに決まってる。例え足が震えて、顔が引きつっていて、くっさいミノタウロスの血に塗れていて、倒れそうになっても。今のベルはどんな物語の登場人物なんかより、かっこいい。

「そっか——よかつた」

ふらっと、倒れ込んできたベルを受け止め——押し潰される。

ベルの重さを感じつつも、ミノタウロスが居た場所を見て、自分の両腕に視線を落とす。

キューイの血に塗れた両腕。今度は、あの光景は浮かばなかつた。
ただ、キューイの事が頭に浮かんだ。

第六十二話

ベルの顔がだらしなく笑みの形を浮かべているのを横目に、軽く溜息。

ベルの方は俺の溜息に気付く事無く、スキップしだしそんな雰囲気のままギルドの入口を潜り、エイナさんを見つけて駆け寄って行った。

つい先日、強化種のミノタウロスを撃破すると言う偉業を成し遂げた俺とベルの二人。あの後、リリが助けを呼んでくれていたらしく、丁度遠征に向かう途中のロキファミリアの上位陣が強化種のミノタウロスとの戦いを見ていたらしく、気が付けばマインドダウン……では無く、マインドダウン寸前の癖にベルの怪我を治す為にレッサーヒール使つてぶつ倒れた阿呆の俺と、意識を失ったベルの二人はロキファミリアの面々に助けられた。らしい。

らしいと言うのも後から聞いた話なのでなんとも。と言った感じなのだが。

「何か良い事でもあったの？」

「わ、わかりますか」

ベルの後ろからそろーっと近づく。余りにもわかりやすく浮かれているベルにエイナさんは悪戯っぽい笑みを浮かべている。まあこのベルの表情でわからん奴は居ないわなあ……。

「そんな顔してちゃ誰でもわかっちゃうよ。どうしたの？」

「えへへ、実は次のステイタス更新で——

「だから、パーティに入りたいんだ。空きのあるパーティの一つや二つ知ってるだろ」

「と、言われましても……」

横のカウンターでミイシャさん相手に大声で捲し立てる大柄な赤髪の男をちらりと見る。首に巻いたスカーフに着流し。着流しってのは鍛冶師の衣類って印象だから、多分鍛冶師か？ 鍛冶師の居るファミリアでパーティを求めているのは、ヘファイストスファミリアぐらいじゃないか？ 戦闘鍛冶師とか言う訳のわからんのが居るっば

いし?」

とは言え自分で素材を集める為に冒険者兼用する鍛冶師とか薬師とか居ない訳じゃ無いっぼいしなあ。ナーザさんも過去に薬師兼冒険者やってたっぼいし。

「えええっ!? たった一ヶ月半でレベル2う!?」

「あはは……」

照れたように笑うベル。驚きの表情を浮かべたエイナさん。誰だって驚くよなあ。俺もそうだし。

「ちよつと、ミリアちゃん、本当なの?」

あ、こつちに確認するのね。ベルのランクアップは嘘ではない。まぎれも無い事実である。ステイタスも限界突破したうえで、強化種、レベル3相当のミノタウロスの討伐を成し遂げたのだから、ランクアップしない方がおかしいって話……らしい?

「本当ですよ。ベルの勘違いでも、ベルが寝ぼけている訳でも無いですわね」

「寝ぼけてるって……そんな事無いよ」

「……ミリアちゃんが言うなら本当なのね……はあ、神会まで期間があんまりないから調書とか……」

ギルドに提出する調書。ランクアップした際の状況やこれまで戦ってきた記録なんかを大雑把に記すもので、確か二つ名を決める際の参考にするって話だったはず。

ちなみに、俺はランクアップできなかった。理由はー、まあ普通に偉業のエクセリアが足りなかったとか。

ヘステイア様曰く。後ほんの少し、小指の先ぐらい足りなかっただけだから、決して慌てる事は無い。との事……要するにきっかけさえあればランクアップできるぐらいには溜まっているらしい。

更新した後のステイタスも、魔力がかつとぶ勢いで上がってたし。SSS1200超えだよ、SSS1200。え? 力? 耐久? 魔法剣士極める上で必要なのは器用、魔力、敏捷だよ。力と耐久なんて飾りなんだよ、魔法剣士やった事無い奴等にはそれがわからんだ。……嘘、力は本当は必要。武器振り回すのに力不足は笑えないから

ね。

「……とりあえず、ランクアップおめでとう。ミリアちゃんもランクアップなんて事は？」

「無いですね。私はしてないですよ」

「そっか」

ほっと一安心した様に吐息を零すエイナさん。少し傷付くよ、とは言え焦るなどヘステイア様には耳にタコが出来るぐらい言われたから、焦りは——しないとは言えないけど、深呼吸して落ち着こう。

「それで、エイナさんに一つ相談があつてですね」

「相談？ 私でよければ聞くけど、主神のヘステイア様には？」

「もう相談しました。それでですね、ランクアップするときには発展アビリティ覚えるじゃないですか」

発展アビリティ。ランクアップの際に特定の行動によるエクセリアが一定値まで溜まっていると発言する五種の基礎アビリティとは別の特別な物らしい？ 詳しくは知らないが、普通の基礎アビリティを向上させるものから、特定条件を満たす事でステイタスを跳ね上げる物。後は《鍛冶》や《薬師》と言ったプロフェツショナル？ な物まで様々あるそれ。

「ああ、そうね。発展アビリティについて聞きたいの？」

「いえ、そうではなくてですね。発展アビリティが三つ発現しまして

バシィツと音が出る程の勢いでベルの首元を掴んだエイナさん。ベル君がびっくりして言葉を止めた瞬間に、エイナさんが言い聞かせる様に、威圧しながら口を開いた。

周りで此方を窺っていた人たちも一斉に黙り、事の成り行きを見守り始める。エイナさんの威圧怖えな……。

「ベルくん。ちよつとお話があるから向うの個室に行こうか。自分のステイタスに関して、人が沢山居る場所で話すのは良くないって前にちゃんと教えたよね？」

「え？ あっ」

不用心に、人が多いギルドのエントランスで自身のステイタスに関

する話を出そうとしたベル君。しかも大声で、エイナさんに前に注意されてたのに浮かれて忘れてたな。若干青褪めた表情のベル君がエイナさんに引つ張られて個室に連れ込まれるのを手を振って見送る。お説教待ったなしだからね、助けを求める様にこつちを見てもダメだ。ちよつと浮かれすぎだから少し絞って貰った方が良く俺は思う。

ボタンと扉の閉まる音がしてようやく時は動き出す。いつも通りの喧騒がギルドのエントランスに広がり始めた所で、横合いから声をかけられた。

「よう、ちよつといいか?」

「はい? えーつと、どちら様でしょう?」

声をかけてきたのは先程の長身で赤髪の青年。パーティを求めているとミイシャさんに詰め寄つてた男である。何か用件、まあ察しはつくが。大方、ランクアップしたベルに興味を持ったと言つた所か。

「俺はヴェルフだ」

「ヴェルフ……さん? えつと、私はヘステイアファミリアのミリア・ノースリスです」

気さくそうな笑みを浮かべて此方を見下ろす長身。カウンターの前に立っていた辺りで察していたが、ヴェルフは背が高いみたいだ。見下ろしやがって……パルウムでさえなけりや。最近見下ろされるのが若干不愉快になってきた。リリにすら見下ろされてるしなあ。はあ……身長伸びないかな。

と言うかヴェルフ? どつかで聞いた、いや? 見た様な名前?

「さつき、お前の所の仲間がランクアップとか言つてたが、どうやったんだ?」

「はあ、ステイタスを探っているの?」

「いや、そう言う訳じゃなくてな。俺もランクアップを目指してるんだが、中々上手くいかなくてな。参考にしたいんだ」

参考にね。と、ここで思い出した。ヴェルフと言う名前。確かベルのみようちきりんな名前がついてた性能の良い鎧。兎鎧ビヨンキチとか言う軽装鎧の製作者の名前が確かヴェルフ・クロツゾだったはずだ。

「はあ、そうですね。戦闘内容は教えられませんが強化種のミノタウロスを討伐してのランクアップになりますね」

「はあ？ 強化種？ ミノ……タウロス？ そりゃあ、なんとも……すげえな」

驚きと困惑の表情。まあそうなるよね。レベル1がレベル3相応のミノタウロスを倒したなんて言っても、誰も信じない話だし？ レベル1で通常のミノタウロス倒すのも無理だつて言われるのに、よりによって強化種だもんなあ。

「そうですね。ベルは凄いですよ……と、すいません、ちよつと確認しますけど貴方の名前は『ヴェルフ・クロツゾ』で間違いないですかね？ ヘファイストスファミアリア所属の鍛冶師の」

ヘファイストスファミアリアの管轄のフロアに防具展示してるぐらいだし、ヘファイストスファミアリアだよな？

「……っ。ああ、そうだよ」

……？ ありや？ 地雷踏んだっぽい？ 表情が苦々しげに歪んだ。待て、何か不味い事言ったか？ 心当りが無いが、ヘファイストスファミアリアに所属してる云々は地雷だった？ にしては何か反応がおかしいんだが。

「それがどうしたんだ？」

いきなりとげとげしい反応に切り替わったぞ。なんだコレ……マジで地雷踏み抜いたっぽいな。どういえばいいんだ？ ベルが鎧気に入ってたし、この前のミノタウロス戦で完全にぶっ壊れたから新しい鎧欲しがってたから、同じ鍛冶師に鎧制作を任せられたらなど思ってたんだが……何で不機嫌になっちゃったんだ？

理由がわからんけど……一応、頼んでみるか？ いい機会だし？

「ええつと……貴方が『あの』ヴェルフ・クロツゾで合っているのなら、作成を頼みたいのですけど」

「……………断る」

わあお、きつぱり断られた。何がダメで——もしかしてあの妙な名前が気に入らなかつたのか？

「話はそれだけか」

「え、ええ。そうですね」

「じゃあ俺はこれで、じゃあな」

刺々しい雰囲気のまま去って行く赤髪の青年。ヴェルフ・クロツゾ。入口ですれ違う冒険者を刺々しい雰囲気で退けて行ってしまった。どうやらあの鎧は彼にとっての地雷作品だったっぽいな。

まあ、妙な名前だったし、自分でも変だなって思ってた鎧をもう一度作ってくれって言われりや怒るか。

ベルの鎧どうするかなあ。金は、まあ日頃から貯めてたしそこそこはあるが。借金の事考えるとマイナスなんだがね。俺の方は、鎖帷子を新調するか、修理したい所ではある。

まあ、態々ヴェルフ・クロツゾと言う鍛冶師に拘る必要も無いか。他の新米鍛冶師の中からベルが気に入る防具を作れる鍛冶師を探せば良い。

数分後、エイナさんにごつてり絞られたベルがどんよりした雰囲気が出て来た。発展アビリティをどれにするか相談するだけのつもりが、結構な時間をとられたけど。まあ、ベルが不用意にステイタスに関する発言をぶちまけたのが原因だから俺は何とも。それでベルは発展アビリティはどうするんかね。

三つも発現するのは、非常に珍しいらしいけど。羨ましい限りだ。

ベルがステイタスを更新している最中。俺は自身の更新されたステイタスの紙を片手に廃教会の壇の上に腰かけて足をぶらぶらさせていた。

足元でキューイがキュイキュイ言っただけの俺の足を鼻先でつついてくるのがむず痒い。

キューイ。一度ミノタウロスに握り潰されて死んだはずのキューイだが、彼女は——普通に召喚魔法で再召喚できた。最初は、泣いた。よかったって泣いて——キューイに思いっきり噛みつかれた。

『逃げろって言ったのに逃げない阿呆、間抜け、馬鹿、糞虫』と罵倒の限りを尽くされ、呆然とする俺の前でそっぽ向いて鼻を鳴らした。

キューイが戻ってきてくれて嬉しかったが、そんな思い知った事かと罵られ、ついでにキューイの説明を聞いて納得して、同時に困惑した。

キューイ曰く、俺とキューイは一心同体で、キューイが死んだとしても俺が再召喚すれば何度でも呼び戻せる。しかし、俺が死んだ場合は例えキューイが生きていても繋がりが消えるので消滅する。

つまり、キューイは何度死んでも平気だが、俺が死んだ場合はキューイが生きてようが問答無用で消滅する。だからこそ、俺は生き残る事だけ考えろと。

例え自分を見捨ててでも、時間稼ぎの為に自分が潰されていても気にせずに逃げて良い。再度呼び戻してくれば、何度死のうが気にしない。

キューイの言葉は、ある意味では納得できるが、ある意味では納得できなかった。確かに、呼び戻せるなら、キューイを見捨てて俺だけでも生き残るべきなんだろうが……キューイも家族だから、見捨てる事はしたくない。

そう伝えたら『ミリアが死んだら消滅するんだけど、馬鹿なの？』と罵られた。

痛いとか、苦しいとか、死の恐怖とか。キューイからすればあまり気にならない事らしい。どれだけ死んでも戻って来れると言う安心感があるから、死んでも気にしないとかどうか。

よく分らないが、ともかく今度からは見捨ててもさっさと逃げろとキューイは言った。『ミリアは弱いんだから、早く逃げないとダメだよ』って。

弱い、かあ。キツイ言葉である。ベルのランクアップも合わさって、気分が沈みまくった。

L v 1

力：E 4 2 0 ↓ E 4 4 5

耐久：F 3 3 5 ↓ F 3 3 9

器用：A 8 6 8 ↓ S 9 0 2

敏捷：B 7 6 6 ↓ B 7 7 8

魔力：S S 1 0 8 7 ↓ S S S 1 2 0 1

《魔法》

【ガン・マジック】

・詠唱派生魔法

・基礎詠唱『ピストル・マジック』

・消費弾薬 1 / 1

・単発の魔弾を放つ

・特殊詠唱『デュアル』

・基礎詠唱『ショットガン・マジック』

・消費弾薬 1 5 / 3

・単発の散弾を放つ

・特殊詠唱『ソードオフ』

・基礎詠唱『ライフル・マジック』

・消費弾薬 1 / 1 0

・高威力の魔弾を放つ

・長射程

・特殊詠唱『スナイプ』

・追加詠唱『ファイア』

・共通詠唱『リロード』

【サモン・シールワイバーン】

・召喚魔法

・最大召喚数『1』

・追加詠唱にて封印解除

・基礎詠唱『呼び声に答えよ』

・追加詠唱『楔を壊せ解き放て』

【レッサー・ヒール】

- ・最下級治癒魔法
- ・基礎詠唱『癒しの光よ』

《スキル》

【タイプ：ニンフ】

【マガジン・スロット】

- ・装弾数『30』
- ・保有最大数『8』
- ・基礎アビリティ『魔力』により効果増加

【マジック・シールド】

- ・防御効果
- ・基礎アビリティ『魔力』により効果増大
- ・自動発動
- ・精神力消費

【ガンマジック】の全ての魔法に特殊詠唱が付与されて、破格の性能に至ってる。はずなんだがなあ。『ピストル・マジック』から『デュアル』で二丁撃ちが出来る様になったし。『ショットガン・マジック』から『ソードオフ』で射程が短くなる代わりに広範囲に散弾をばら撒いて複数のモンスターを足止めしやすくなった。

冒険者として見るなら、完璧な性能と言えるだろう。

『ショットガン・マジック』『ソードオフ』による近距離の足止め能力。

『ピストル・マジック』『デュアル』による中距離の殲滅力。

『ライフル・マジック』『スナイプ』による遠距離の確殺力。

近距離戦から遠距離戦まで、オールでこなせる上。微弱とは言え回復魔法も使えるし、召喚魔法キョウイによる索敵能力のおかげで不意打ちも喰らい辛い。

基礎アビリティもたかが一ヶ月半で辿り着くには最上級。器用S、

敏捷Bと言う二つだけでも凄まじいと言える。そして魔力に至ってはSSSと言うぶっ飛びっぷり。同ランク冒険者の中では敵無しである。

力、耐久もはっきり言って十二分に高いと言う評価が貰える程の、はずなのだ。

全アビリティSと言う数値から見れば、余りにも低すぎるステータスなんだけどね。

魔法に関しても、破格の性能、性質を持つと言える『詠唱派生魔法』である。魔法一つで複数の種類の魔法にも見えると言う魔法。

ちなみにだが、【九魔姫】^{ナインヘル}リヴェリア・リコス・アールヴには普通に見抜かれていたらしい。

なんでも『射出口を生み出し、そこを起点に発動する』と言う共通点から、俺の魔法は詠唱派生、別名“分岐詠唱”と言う魔法だと見抜いたそうなの。

魔法に関する知識から導き出した答えに驚きだ。

それと、彼女、リヴェリア・リコス・アールヴからの評価は『最高峰の詠唱派生魔法の使い手』だそうなの。

分岐詠唱。第一詠唱、第二詠唱、第三詠唱に分れた三文節からなる詠唱。二文節のものもあれば、四文節のものもあるらしい。

第一詠唱から第二詠唱に入った時点で、普通の魔法使いなら身動きがとれない所か、狙いを定められないらしい。

分岐詠唱を覚えた本来の魔法使いの使い方は、第一詠唱を終えた後、狙いを大雑把に定めてから第二詠唱、俺で言う『リロード』を行ってから、第三詠唱である『ファイア』を連射。マガジンを撃ち尽くすまで魔法を打ち切って魔法解除。そこから第一詠唱を再度繰り返しと云った形で運用するらしい。

普通の詠唱魔法と比べ、非常に早い速射性が特徴で、第二詠唱を終えてからは前方に向かってぶちまける様な使い方をするのが一般的。と言うか狙いを定めるなんて高度な事が出来ず、敵が固まっている所にマシンガンの如くぶちまける以外には使いようが無いらしい。相当な使い手ならば第二詠唱を終えてからも狙いを定められるが、

走ったり所か、歩く事もままならないぐらいに集中力が必要だそう
だ。

ばら撒いて使うのが基本の使い方となるはずの詠唱派生魔法。

それを、第一詠唱をして、第二詠唱、魔法に魔力を込めた不安定な
状態のまま走り回ったり剣を振り回したり、あまつさえそのまま百発
百中の命中精度を誇る「狙撃」を完遂していたと言う技能の高さ。

まさしく派生詠唱魔法の使い手としては最高峰の使い手だろうと
言う評価を頂いたらしい。リヴェリア様曰く『私でも真似できない』
とかどうとか。

まあ、リリが聞いた話なんだが。俺はリリにその事を聞いたのみ。

褒められてる。彼の有名なオラリオ所か世界最高峰の魔道士と言
われるリヴェリア・リコス・アールヴが認める程の派生詠唱魔法の使
い手。そんな評価を貰っておきながら、俺が感じているのは力不足と
言う感情。

褒めて貰えた、でもそれだけじゃダメだろう。どんなに上手く扱え
ても、精々がちよつと便利程度にしか感じない程に、ベルとの開きが
激し過ぎる。

ランクアップできなかつたと言うのも、大きい。

シルバークバックも、大量のキラアアントも、ミノタウロスも、どの
戦いに於いても俺は後方支援しか出来ていなかった。それが、偉業の
エクセリア不足に繋がっていると云える。

あと一歩、ほんの少しだけ、足りなかつた。それが何よりも悔しく
て、何よりも情けない。置いて行かれそうだという焦燥感に身を焼か
れる。

誰が見ても、どの冒険者が見ても冒険者としては破格のステイタス
だと言われても。彼の最高峰の魔道士が認める程の技量があつても。
まだ足りない。ベルに追いつくには全然足りていない。

——でも、ベルも同じ様に思っているのだろう。

彼の「剣姫」アイズ・ヴァレンシユタインに追いつくには。今の
自分では足りない。

詰る所、ベルはもつと勢いを増して強くなつていくのであつて、そ

うなるのであれば俺はもつと強くならないといけない訳だ。

「キュイ、どうやったたら強くなれるんですかね」

「キュイ？ キュイキュイ？ キュイ？」

何で？ 強くなりたいの？ 弱いのに？ だってよ。笑っちゃうね。弱いのにだって。

「キュイキュイ」

直ぐに膝を折っちゃうんじゃダメじゃないか。その通りだ。俺は心が弱過ぎる。例えどんな恐怖が目の前にあつたとしても、膝を屈する様な真似をしているような弱者のままでは、置いて行かれて当然だろう。

心を強くするかあ。どうすれば良いんだろうなあ。

『神様の馬鹿あああつ!!』

……地下でステイタス更新してたベル君に何があつただか。はあ、馬鹿らしい悩みを抱えちゃったもんだよ。

最高峰の魔道士に褒められて尚、足りないなんて悩みはさあ。

第六十三話

地下で騒いでいた理由は、ベルの新しいスキルにあるらしい。

『英雄願望』^{アルゴノクト}。それがベルの新しいスキル。効果に関してはよくわからないみたいだが、スキルの……あー、ベルにとつては初めてのスキルに当たるので凄く嬉しそうにしてたんだが。ヘステイア様がからい過ぎたっぽい？

発展アビリティの方は《幸運》を選択したみたいだ。運だけはどうしようもないって言う話を思い出してそれにするって決めたっぽい。おすそ分けして貰えるなら俺も幸運にあやかりたいものである。

それから、ヘステイア様がベルの二つ名を決める『神会』^{デナトウス}と言うものに出席しに行くと言って出かけ。俺とベルの二人で久々に部屋の大掃除。

ううん、二つ名。良い思い出は無いんだがなあ。

ベルと二人で久々に部屋の大掃除のさ中。床を掃くベルは何やら妄想で痛々しい。いや、本人はかっこいいと思ってるんだろうが。

「二つ名に合せて、防具も新調しちゃおうかな。どんなかっこいい名前が貰えるんだろ」

あー、耳を塞ぎたい。

「ファイアブリザード」とか、「トルネードタイフーン」とか」

背中を掻き毟りたくなるような二つ名ですね。そんな貰ったら自殺ものだよ……俺もランクアップしたらそんな二つ名を背負う事になるの？ いや、現時点でも【竜を従える者】^{ドラゴンテイマー}とか言う異名があるんだが。

「バーニングファイティングファイター」とか」

本人はかっこいい積りなんだろうが、傍から見ると痛々しいものである。俗に言う黒歴史と呼ばれる其れ。キメポーズまでしてまあ。

そろそろ止めるべきか……いや、相当浮かれてるし、声かけても無駄か。放っておくしかないかなあ。

「……この鎧は良かったよなあ。軽くて、動き易かったし」

あー、その鎧。もう生産してないっぽいッスよ？ とでも言えば良

いのか？ ヴェルフ・クロツゾと言う人物は激情家か、それとも情緒不安定か。何かしら理由があつたのかは知らんが、唐突に不機嫌になつてたしなあ。

まあ、鍛冶師自体は割と溢れてるっぽいしベル好みの鎧作れる鍛冶師探しつてのも良いかも知らんね。ついでに鎖帷子の修理とかも頼めれば万々歳つて奴だ。

どたどたと階段を慌ただしく駆け下りてくる音が響き、入つて来て直ぐ入口の壁に手を突いたヘステイア様が嬉しそうな笑みを浮かべていた。相当慌てていたのか肩で息をしているっぽい。

とりあえず水をコップ一杯渡しておこう。

「ぶはあ、ありがとうミリア君。ただいま、帰つたよ」

「お帰りなさい神様！ 僕の二つ名どうなりました？」

「お帰りなさいヘステイア様。それで……？ ベルの二つ名つて……？」

コップを受け取りつつも悪寒を感じながら問いかける。痛々しいのが来たらどうしようか。

「喜ぶんだベル君。無難だ」

「はい……？」

無難な二つ名。想像がつかんが、痛々しくないのなら行幸。ベルは不思議そうに首を傾げているが、後で思い返して首を掻きむしりたくなる二つ名よりマシでしょ……？

「【未完の少年^{リトル・ルキー}】？ それがベル様の二つ名ですか？」

リリを呼んで『豊穰の女主人』でお祝いをとった訳だが。ヘステイア様は来れないらしかつた。理由の方はわからないが、何かわけありっぽい？

ベルの二つ名を不思議そうに首を傾げて呟くりりを前に、ベルの方はテーブルに伏せて凹んでる。もっと格好いいのが良かったそうだ。本人的には不満っぽい。

俺に言わせれば、普通で素晴らしい。ヘステイア様に全力で同意

である。俺がランクアップできるかは知らんが、出来るならばベルと同じ様な凡庸な二つ名が良いなあ。

「うん、どう思うリリ」

「えつとお、そうですね。……………普通？」

「だよねえ、神様は無難で良いって言うんだけどさあ」

良いじゃん。不満そうなベルに肩を竦めていると、横合いからシルさんの声が。

「私は好きですよ。【未完の少年】」

リトル・ルーキー

「ランクアップおめでとーございます。クラネルさん」

「今日は沢山お飲みになってくださいね。今日はベルさんの祝賀会ですから」

リユーさんも一緒にやってきたが、注文した数よりも多い。二人分ぐらい？ シルさんとリユーさんも一緒に祝ってくれる感じかな。…………二人の食事分って多分こっちで出すんだよな…………？ 金はあるからまあ良いとして、ミアさんの方はー、ああうん。どんどん飲んでどんどん食えと親指をぐつて立てて来た。そうなるよね。

「おい、まさかアイツ…………」「最速でレベル2になった野郎か…………」

二人の声に反応したのは俺達だけでは無かった。店内に響く明るいシルさんの声に他のテーブルの冒険者が反応して此方を、と言うよりベルをじーつと観察し始めた。

「…………もしかして、僕の事言ってる？」

「ええ、名を上げた冒険者の宿命みたいなモノです」

面倒臭いが、嫉妬やらの混じった視線も感じる辺り、絡んでくる奴が居そう。まあ、この店でそんな事する阿呆は絶対に居ないだろう。ミアさんに殺されるし…………。

「人気者になったと思えばいいんですよ。さあ、始めましょう」

「…………お二人は此処に居て良いんですかあ？」

リリの視線が胡乱気にリユーさんとシルさんを射抜く。まあお盆に乗せられていたグラスとか料理の数からして察しはついてたが、リリとしては不満っぽい？

「私達を貸してやるから、存分に飲め。とミア母さんからの伝言です。

後、金を使えと」

知ってた。ミアさんならそうするよね。ランクアップの祝賀会。可愛い女の子に囲まれ、たっぷり酒飲んで気分よく金を払って事だよね。

「じゃあ、遠慮なく。乾杯」

「乾杯」

酒え、飲まずには………ああ、うん。これ酒じゃなくてジュースなのね。

周囲の冒険者の嫉妬の視線が鬱陶しい。何より同じ席に座る俺とリリにも注目が集まってる。

リリの方は恰好からしてサポーターかなんかだろと鼻で笑われるみたいだが、俺の方は今も魔法使いっぽい鍰広のどんがり帽子にローブ姿で長杖を近くに立て掛けてる所為か『あのガキ誰だ?』みたいな話題が他のテーブルで出てる。ベルは、不思議な事に嫉妬混じりの粘つく視線には一切気付いていないらしい。

図太い訳では無く、鈍感なだけ。にしてもこれだけ視線が集まれば気になるもんだと思うが。

「それでは今後、クラネルさんとアーデさん、ミアさんは中層に向かうおつもりなのですね」

「はい。まあ、もちろん調子を見ながらですけど」

本当に視線が鬱陶しい。ここまで粘ついた視線つても久々だ。嫉妬混じりの視線は本当に止めて欲しい。

「差出がましい事を言う様ですが。まだ十三階層より先へ進むのは止めた方が良い」

「むっ」

おお。リリがリユーさんに張り合ってるっぽい。泥棒猫だとも思ったのだろうか。ヘスティア様から泥棒猫認定されてるリリか? まあ、冗談だが。

しかし十三階層より先へは進むな、か。理由はなんとなく察しはつ

くが。

「それはまた、どうしてです？」

「ベル様とミリア様でも中層のモンスター相手に不足していると言うのですか？」

リリはー、うん。少しそつとしておこう。威嚇する猫みたいだ。

「そこまで言う積りはありません。ですが、上層と中層は違う。モンスターが強さも、数も、出現頻度も」

真剣なまなざしを此方に向けたリユーさん。その目にはほんの少しの戸惑い混じりながら、きつぱりと言い切った。

「今のお二人では、途中で力尽きるでしょう」

「っ！ そんなはずありませんっ！ レベル2のベル様と、援護に長けたミリア様が居れば余裕ですよ！」

リリの必死な物言いに對し、リユーさんは冷めた表情で此方を見た。ベルでは無く、俺を。

「ミリアさん、貴女は——よくマインドダウンをしていますね？」

テーブルに置こうとしていたグラスが音を立て、ベルとリリ、シルさんの視線が集まる。

「現状、ミリアさんの話を聞く限りですが。クラネルさんの足止め能力が低すぎる影響で、後方で援護に徹するミリアさんまで前線に出ている様に感じます。ミリアさんの能力的には、前線を維持できるところでしょう。ですが、クラネルさんと違いミリアさんはマインド、魔力を消費して戦うのが主なスタンスとなっています。上層でもマインドダウンを多発している以上。中層へ進めば、より多くの敵がベルさんの足止め能力を超えて押し寄せてきます。そうなれば——ミリアさんに過大な負荷がかかる。魔力は体力と違って回復する術が限られています。もしミリアさんが潰れば、そのままパーティーの全滅に繋がるでしょう。ミリアさんが抜けた穴を、アーデさん一人で塞げますか？」

……。俺が潰れた場合。リリが俺の穴埋めが出来るか否か。不可能だろう。リリの武装『リトルバリスト』は上層のモンスター相手ならなんとか倒せなくはないが、中層に入ってしまうえば完全な威力不

足。その上で近接戦闘を行えるだけのステータスも無い。そうなる
とベル一人でマインドダウンで潰れた俺と、戦力外のリリを庇いなが
ら戦う羽目になる。そりゃあどうしようもないわ。

「それは……」

「リユーさん。現状のパーティーの問題点は、足止め出来る前衛の不
足って事で良いんですかね？」

「そうなりますね。貴方達は、仲間を増やすべきだ。特に足止め能力
に長けた盾役のドワーフや大剣を使う方が好ましい」

ベルは二刀流を使う敏捷型の剣士。俺は魔法と剣を使う魔法剣士。
どっちかっていうと魔法戦士寄りか。

どちらにも共通してるのはモンスターを足止めする能力の低い事。
数が多ければその分後ろに抜ける訳でー。俺はベルと違って消費す
るのが魔力だもんだから、一度魔力が切れれば暫くは使い物になら
ん。十分休んで大丈夫とかにはならんからスタミナ切れしたら終わ
る訳だ。

仲間ねえ。仲間、酒場で声かけて集めるとか？ ありふれてるが、
そう言うのは難しいのがオラリオだ。神々の問題もありや、そもそも
冒険者は荒くれ者が多い訳で。サポーターのリリに対する当たりの
悪い奴に当たれば最悪だし。そもそも俺が隠し事してる所為か、仲間
を増やすと言うのもそう簡単に行えない。せめて信用に値する者で
ないとなあ。

「でも、肝心の仲間に加わってくれそうな人が――

「はっはっはあ、パーティーの事でお困りか。リトルルーキー？」

唐突に声をかけてきたのは顔に無数の傷のある歴戦っぽい冒険者
の男。歴戦っぽいだけであって、そもそも【勇者】^{プレイバー}やら【剣姫】やら
を見てるからわかるが、威圧感を出してるだけで雰囲気はチンピラの
それ。

……おい、ここミアさんの店だぞ。嫉妬混じりの視線とー、後は
リユーさんとシルさんに向ける視線。劣情の？ あー、酔ってるのか
コイツ。ヤバイぞ、死ぬ前にやめた方がいい。

「失礼ですが。貴方はどちら様で？」

「ああ？ 俺を知らないってのか？」

「はい」

多分、レベル2か？ いや、3か？ 悪いが第一級、レベル4、5、6。後はオラリオでただ一人のレベル7ぐらいしか知識に入っていない。レベル3までは覚えてた方が良いのだが、流石に3まで下りるとそこそこ数が居て名前と特徴が一致しなくなってくる。

「けっ、とんだクソガキだ」

「あの、何の用ですか？」

ベルの困惑した様な、若干怒った様な声色。ベルも怒る事つてあるんだなあ。

「はんっ、仲間が欲しいんだらう？ 俺達のパーティーにてめえをいれてやろうか？ ああ？」

……うん、絡んできてるねこれ。どうすんだよ。多分俺から手出した場合も、ベルから手出した場合も、喧嘩両成敗とぶん殴られるぞ。

「俺達はレベル2だ。中層にもいけるぜ」

「ええ……っ？」

どうする？ どうすれば――

「けど、その代りに、このえれえ別嬪なエルフの嬢ちゃん達を貸してくれよ」

あ、コイツ死んだわ。リユーさんに目を着けるとは流石である。だけどリユーさんに軽々しく触れるとヤバイぞ。と言うかこいつ等多分けどこの店に来た事ない奴だ。この店の噂の一つでも知ってりや絶対に手を出そうとは思わないはずだし。

「仲間なら分かち合いだ。なあ？」

皆、むっとした表情を浮かべて不服そうである。とりあえず俺は……この人たち酔ってるっぽいしこのままなり行きを見守っても良いけど、一応やんわり止めとくべきか。

「まだ、仲間になるとは言っていないと思いますが」

「ああ？ ガキには聞いてねえつての。これだからパルウムつて奴は」

……。パルウムの扱い悪過ぎい。こんなん毎回やってたらパルウムも捻くれるわ。

「んで、どうすんだ？ 受けるのか、受けないのか」

「あの――」

「失せなさい。貴方達は彼等に相応しくない」

あ、リユーさんの導火線に火が着いた。もう手遅れだ……。この人たちの命運を祈ろう。皿洗いで済むかな？ 前歯は残るのかな……？ お財布毎無くしちゃうかな……？

「まあまあ妖精さんよ。俺らならそんなカスみたいなクソガキより断然良い思いさせてやるぜ」

おい、テメエ見てえなチンピラ如きがベルを馬鹿にすんな。と言えればいいんだが俺はレベル1、相手はレベル2。リユーさんに任せる他ない。

調子に乗ってリユーさんに手を伸ばして――リユーさんの肩に手が触れそうになった瞬間に、リユーさんの姿がぶれ、相手の手をグラスの取っ手部分に引っ掛けて、相手に触れる事無く捻り上げる。ギリギリギリイツとヤバ目の音が相手の腕全体から響き、その男が痛みに呻きながら膝を突く。

ベルが目丸くしてるが。うん、これって実はこの店で良くある光景なんだ。そおつと尻を撫でようとして腕を捻り上げられたり。膝を蹴り抜かれたり。リユーさんのグラスを使ったこの技術は凄いと
思う。

「いでいでつ」

グギイツつて音が響き、男が手を押さえて座り込んでしまった。対するリユーさんは氷の様な冷たく、鋭い視線で見下ろして口を開く。キヤーリユーサンステキー。ごめん嘘、ちよっぴり怖いわ。

「私の友人を蔑む事は許さない」

ああ、うん。格好いいわ。こんなん惚れるよ。まあ、ちよびつとばかりやり過ぎな気はするけど。グギイツつてのはちよつと、もう少し穏便に鎮圧出来ないモノかと。

座り込んでいた男が、手にはまり込んでいたグラスを床に叩き付け

て砕き、リユーさんを睨みつけた。

おい、コイツ今グラス叩き割りやがったぞ。ミアさんにぶつ殺されるコースの上を全力疾走してやがる……。

「このアマ、女だからって容赦しねえぞっ！」

殴りかかろうとする男に対し、リユーさんは何処からか片刃の一刀でリユーさん切る積りだぞ。この男はこの男で何でさっきのやり取りで力量差が開き過ぎてる事に気付かないんだよ。女だからってどう考えてもレベル2を片手間に捻り倒せる時点で自分より強いってわかるだろ。

困惑しながらも、止める為に魔法なんぞ使おうもんなら俺まで跳び火するので大人しく椅子に座る。ついでにベルとリリに動くなどアイコンタクト。もうこの男は死ぬしかないのよ……。残念だけど。

凄まじい轟音が響き、皆の動きが止まった。

音の発生源を見ればミアさんが俯いてカウンターに拳を叩き付けていた。拳を叩き付けられたカウンターは、完全に天板が砕けてへしゃげている。信じられるか？ あの天板、レベル3冒険者がぶつ叩いても傷一つ出来ないぐらい頑丈な代物なんだぜ？ それが見事に砕けている。ミアさん、貴女何者なんですかねえ。

と言うかりユーさんは何事も無かったかのように小太刀をしまつて座ってるし。慣れてるとは言えあの力を見せつけられて平気とか……。俺は、最初見た時はちよつとチビツたけど、今は平気だ。ミアさんだし？ で済む。

「騒ぎを起こしたいなら外でやんな。ここは飯を食べて酒を飲む場所さっ」

リユーさんに殴りかかろうとしてた奴も含め、彼らのパーティは完全にビビってる。やーいビビッてやんのー。と茶化したいが、俺も普通にビビってる。ミアさん怖い。

「っ、おい行くぞ」

「アホ垂れっ！ ツケは利かないよっ！」

「はいっ!?!」

財布をそのままテーブルの上に放り投げて、彼らが走り去って行く。残ったのは食べかけの皿の乗ったテーブルに、ヴァリスのたつぷり詰った財布三つ。ふうん、前歯一本も欠けなくてよかったね。

その代わりにカウンターの天板がお亡くなりになった訳だが。まああの財布の大きさに食事代金プラス損失分を賄っても事足りるぐらいには入ってるだろうから良いのか。

そしてリユーさんや。貴女は何素知らぬ顔で野菜スティックを齧っているの……。いや、慣れてるのはわかるんだけどね……？

ついさつき、人殺しでもしそうな目をしてた人だとは思えないわ。リユーさんは怒らせない様子でしょう。ミアさんもそうだし。アーニヤさんもクロエさんもルノアさんも、この店の人は怒らせたらヤバイ。

……シルさんはわからんが。シルさんを怒らせたらリユーさんが飛んでくるだろうし、結局この店で騒ぎ起こすのは阿呆のやる事って事だよ。

にしても、嫉妬の視線は相変わらず酷いねえ。

第六十四話

バベルに存在するヘファイストスファミリアの貸切となっている階層にベルと共にやってきていた。目的は『ヴェルフ・クロッツ』さんの防具を探す事。ベルには結局あの事は言えてない。もしかしたらパルウムだったのが断られた原因かもしれないからね。

それにしてもこういう言い方は良くないかもしれないが、この店は地震が起きたら絶対に死人が出ると思う。

棚に無造作に置かれた金属製の防具を眺めていると、そんな感想が脳裏を過ぎった。日本は地震大国だったからその名残みたいなものだろう。ここらで地震があるのかは知らないがね。

昨日の豊穰の女主人ではリユーさんとシルさんの飲み食い分まで支払があつたが、まあそこは問題無かつた。と言うかりり曰く、他の冒険者に比べると凄まじく稼いでいる方らしい。

何せ普通ならレベル1冒険者5人、サポーター1人と言うのが通常のパーティ編成であり。その一般的パーティの収入が大体2万ヴァリス前後。5人で割り勘で4000ヴァリス。サポーター？ そんなもんに渡す金はない。って感じらしいのだが。

俺とベル、そしてサポーターのりりで冒険者2人、サポーター1人の3人パーティで一回の稼ぎが3万から4万前後と言つた感じ。一人当たり最低1万ヴァリス分は稼いでいるので、普通のパーティから考えたら有り得ない程らしい。その上で回復薬、ポーションの消費が無いと言うのもでかい。俺が回復魔法覚えているのも相まって武器の消耗以外には殆ど消費が無い。

詰る所は他の冒険者に比べて金はあるのだ。……借金が、無ければの話だが。

まあ、借金についてはね。ヘステイア様が少しずつ返済してるし、俺も殆どそつちに金を回してるからね。防具ぶつ壊れたから今回は修理費にあてるけど。……まだ4億9000万ヴァリスの借金があるんだよな。

「ミリアー、見つかったー？」

「ううん、こつちには無かった」

「そつか……これも違うし。あの人の防具、もう売ってないのかなあ」
しよんぼりした様に足元に置かれた木箱から鞣し皮製の防具を引つ張りだして溜息を吐いてるベル。ううん、高い塔状の建造物とは言え一階層辺りの広さは相当だからな。此処で探し続けるのは骨が折れるだろう。

こういう時は、店員に声を掛けるのが手っ取り早いかな？

「ベル、私は店員に聞いてみます」

「うん。わかった、僕はあっちの方を探してみるよ。見つけたら声をかけて」

了解。まあ、これだけ雑多に物が置かれてると、店員も全ては把握しきれないだろうから望み薄だとは思うがね。

「だから、なんでいつもいつもあんな端っこに」

店員の居るカウンターの前。見覚えのある後ろ姿を見つけて思わず嘆息。件のベルのお気に入り防具の製作者、ヴェルフ・クロツゾさんが其処に居た訳だが。どうやら取り込み中らしい。

端っこの方って事は、彼の武器を探したければ端っこを探すと良い訳か。と言うのはまあ冗談だが、彼の足元の木箱は、前にベルが装備してた兎^{ビヨンキチ}鎧とよく似た雰囲気である。もしそれが彼の製作品の防具なら、ベルが喜びそうだが。どうなんだか。

「こちとら命懸けでやってんだぞ。もう少しマシな扱いをだな——」

「いらっしやいませ。何かお探しの物でも？」

困った様な表情の店員が此方に目敏く気付いて話をぶった切って声をかけてきた。いい加減にしろと言う雰囲気^{ビヨンキチ}が漏れ出てる当たり、ヴェルフ・クロツゾとのやり取りは何度も同じ事をしてるらしい？

とは言え、そのヴェルフ・クロツゾ本人が此方に振り返った瞬間に表情を歪ませているのでなんとも。と言うかそう睨むなよ。パルウムの可愛い美少女だぞ。一部界限ではめちやくちや人気だぞ？ な

お一般界限だと扱いが酷い模様。

「お前……ここに何しに来たんだよ」

「客に向かってなんて態度を」

「ふん」

不貞腐れたようにカウンターの前を空けてくれたが、睨みつけてくる視線は相変わらずと言うか。嫌われてしまっているらしい。何とも言い難いが、何が悪かったのやら。

「それで、何をお探しで？」

「軽装鎧と、後は鎖帷子の修理を頼めるなら其方の方も。見積もりだけでもお願いできますか」

「はいはい、修理する鎖帷子はこちらですか……これは、そうですね。1200ヴァリス程で修理できますよ。それとパルウム用の軽装鎧はあちらの方に在ります」

修理に1200ヴァリス。高いのか安いのか……3000ヴァリスだった物だが。ううん、新しいの新調した方が良いかね。

「修理の方は少し考えさせてください。それと軽装鎧は私用では無く、ヒューマンの、14、15歳ぐらいの少年が使う用の物を探しています。」

「ほう。男性用ですか。製作者等に希望はおありですか？」

製作者に希望ねえ。棚に凭れ掛かって目を瞑つてむすつとした表情を浮かべている赤髪長身の男性をちら見する。その足元には、先程カウンターの近くに置かれていた木箱が置かれている。さりげなくどけたつぽいが、中身は兎鎧ビヨンキチに似た軽装鎧。赤い線が入っているより洗練されている雰囲気醸し出している。

見つけはしたが、本人は不愉快そう？ まあ一応確認だけとってみるか。

「彼、ヴェルフ・クロッゾ制作の兎鎧ビヨンキチと言う軽装鎧と同系統であるのが希望です」

「はあ……？」

「……？ は？ お前、俺の防具探してるのか？」

「まあ、そうなりますね。ベルが気に入ってしまったので、前に制作を

頼もうとしたときは断られましたけど。とりあえず同系統、できればより性能の高い物があれば良いです。予算は2万ヴアリス程を予定していますね」

変な顔をした店員と、驚いた表情のまま固まったヴェルフ・クロツゾの二人。とりあえずベル好みの防具が見つければこつちとしては言う事は何も無い。後は鎖帷子も出来れば新調したいが、そつちは優先度低いしね。

「お前、もしかしてギルドで会った時——

「ミリアー、防具見つかったー?」

草臥れた表情のベルが棚の間を抜けてやってきた。一応木箱を持ってはいるが表情は暗い。

「今交渉中ですかね。それよりその箱は?」

「見て回ったけどヴェルフ・クロツゾさんの防具、見つからなかったから一番良さそうなものを持ってきたんだけど……少し錆でて」

うわあ。うつすらと赤錆びの浮いたその鎧は、確かにヴェルフ・クロツゾ制作の兎鎧ビヨンキチと似た雰囲気だが、どれだけ放置されてたんだか。それになんか金具の部分が軋みを上げてるし、値段はー、嘘だろ。こんな錆びた鎧が18,000ヴアリス? 予算内の金額だが高すぎるだろ。

「それで、交渉中ってどういう事? 鎧は見つかったの?」

「あー、其処に件の彼、ヴェルフ・クロツゾさん本人が居ます。その箱の中身が丁度探してる物っぽいですけど。それで、ヴェルフ・クロツゾさんは、その鎧を此方に売ってくれる気つてあります? 無いなら、別の鎧を探しますけど」

硬直したままのヴェルフ・クロツゾに視線を向ければ——唐突に笑い出した。なんだ? 頭でもおかしくなったか?

「すまなかったっ」

ブンツと風切り音がする程の速度で振り下された赤髪の頭に思わずのけぞる。

唐突に笑い出したかと思えば、防具は普通に売ってくれるらしい。その上で少し話がしたいとバベルの外周部に存在する通路のベンチの所まで連れてこられた訳だが、ベンチに腰かけた瞬間にヴェルフ・クロッツは頭を思いっきり下げて来た。

「どうやらギルドで不機嫌になった一件は彼の勘違いが発端だったらしい。何なんだかわからん。まあ、防具売って貰えたし別に構いやしないが。」

「別に構いませんよ。それより防具の方ありがとうございます」

「そうか、詫びになんでも作ってやる。なんか欲しい物とか無いか？」
「……鎖帷子ですかね」

今欲しい物つてのを聞かれたから、欲しい物を答えたら笑われた。何処に笑う要素があったのか不明である。ベルの方は、完全にヴェルフ・クロッツ制作の『兎鎧Mk-III』に心を奪われている。赤い線が入ってより洗練されたデザインにベルが首ったけだ。と言うか前に買ったのがMk-IIで、今回のMk-IIIらしい。Mk-Iはどうやら勝手に破棄されてしまったらしく、ヴェルフ・クロッツは凄く不機嫌そうだった。まあ、名前が名前だからなあ。

「お前つてもしかして俺の事知らないのか？」

「はあ……、妙な名前の防具を作るヴェルフ・クロッツですよね？」

「……あー、妙な名前か」

良い名前だと思うんだがなと呟いてる当たり、筋金入りっぽい。いや、名前より性能だよ。うん、ベルは性能を気に入ってるからね。と、ベルの方は本当に熱い吐息を零しつつ鎧に見入ってるし。いや、本当にキラキラした純粹無垢な瞳でなめまわす様に見てるし、ヴェルフの方も悪い気分では無いのだろう。自分の制作物をそこまで気に入ってくれた様子にまんざらでもない様子だ。

「それにしても、まさか噂の【未完の少年】が俺の防具を買いに来てくれるなんてな」

「僕も、クロッツさん本人に会えるなんて思いませんでした」

ベルの返答にヴェルフの表情が曇る。クロッツと言う呼び方に反応したっぽいけど、もしかして『クロッツ』ってのは有名なのか？ 少

し調べてみるか。

「なあ、クロツゾさんって言うのはやめてくれないか。そう呼ばれるのは嫌いなんだ」

クロツゾってのは家名のはずだ。詰る所——有名故に『クロツゾ』の方だけで人に判断されるのが嫌、とかそんな感じか？

超凄い武器を作るクロツゾ。けれども武器ではなく防具を作りた
いと言う強い想いがあってーみたいなの？ まあ想像だけど。それに
こつちとしては彼がどんな人物だろうとあんまり関係ないしなあ。
良い防具作って売ってくれるなら、まあ。

人格に問題があるかって言うと、今の所は少し早合点が過ぎるぐら
いか？ 言葉足らずだったこつちにも非があるから何とも言えんが。
それよりも周囲の視線が気になる。

喧騒に舌打ちの音も混じってるし、時折『あのクロツゾが……』と
か聞こえる。やっぱクロツゾってのは何かしらの意味があるっぽい
？

「じゃあヴェルフさん？」

「さん付けか。まあ今は良いか」

今は？ 何か狙いがあるっぽいな。周囲の視線を集めているし、彼
は何かしらの隠し事もしている。こちらに厄介事を押し付けてくる
積りならー、申し訳ないが少し距離をとらせて貰おう。

「なあ、ベル・クラネル。お前は俺の作品を二度も買いに来た」

やけに強調した言い方をする。何が狙いだ？ 周りの、鍛冶師？

ヘアリストスファミリアの団員っぽい奴等もこつちに注目してる
し、何が狙——ああ、鍛冶師同士の縄張り争いか？ ベルも有名にな
り始めてるし、今の内にすり寄っておきたいって事か。納得は出来る
が、ベルを利用されるのは少し気分が悪い。

「もう俺の顧客だ、違うか？」

「え、はいそうですね」

ヴェルフの押しの強い言葉に思わずと言った様子で頷くベル。有
名税と言えばそうだが、やはりベルを利用しようとしている辺りに不快
感を覚える。俺みたいなのが何言ってるんだって話だが。

にしてもあからさまに舌打ちし過ぎだろ周りの鍛冶師。縄張り争いってのは何処でもあるもんだな。にしてもファミリア内では仲良し好良しとはならんのか。ああ、もしファミリア全てが仲良し好良しであったらソーマファミリアみたいな肥溜めは出来んのか。ヘファミリアが悪い訳じゃないが、気分が良いとは言えん雰囲気だ。

……人数が増えたらヘステイアファミリアも同じ事が起きてしまうのだろうか。それは、嫌だなあ。

「ああ、悪い。ちよつとした縄張り争いだよ」

「縄張り……？」

「ベル、有名税みたいなものですよ」

「有名税？」

事細かに説明してもしやーないし、こんな事知っても仕方ないからざっくりとした大雑把な説明しかないが。

「ベルは、そうですね。【剣姫】の事、気になりますよね？」

「えっ、ああ……うん」

「じゃあ【剣姫】の持つてる武器にも興味ありません？ 出来うるならば同じ武器を使いたいとか。思う事とか」

まあ無理だろう。【剣姫】の武器と言えば『デスペレート』と言うサーベルだったはずだ。作成者がゴブニュファミリアの主神、神ゴブニュであり。不壊属性デユランダの付与された特殊武装スベリオルズ。一級品等級の武装に比べて攻撃力は低いが、耐久性の高さ故に其方を選んでいるらしい。アイズさんから聞いた。

「あー確かに。少し憧れるかも」

「冒険者が有名になれば、その冒険者が身に着けている武器も注目されます。ベルは今オラリオでは有名人なので、その有名人が身に着けている武器にもそれとなく注目が集まってるって訳ですよ」

「そうなのかな？」

胸を張っても良いと思うんだがね。少なくとも『あのベル・クラネル』と口にするだけで大半の人間が『ああ、あのベル・クラネルか』って納得するから。『あのミア・ノースリス』と言えば『ああ、あの

ドラゴン・テイマー

竜を従える者の』と返答が来る当たりで俺も相当だが。ベルの方が注目度は……高い？ どうだろうか？

「今、ベルが装備を使ってる云々で彼にもメリットがあるんですよ。その有望株に売り込みをしてる感じですかね。他の鍛冶師を牽制して」

「まあ、そんなところだな」

「へえ」

ベルの反応は、薄い。あまり意味を理解できなかったっぽい？
ヴェルフの方は隠しもせず笑ってるし。なんだかなあ。

「それでだ、ベル、俺と直接契約を結ばないか」

直接契約。簡単に言えば鍛冶師と冒険者の契約の様な物。契約した鍛冶師の武具を安価に、または無料で卸してもらおう代わりに、鍛冶師の提示した条件を飲むと言った形の契約だったはず。

例えばどここの階層の鉱石をとってきてくれ、だとか。あのモンスター素材を集めてくれと言った雑務から、新作した武具の試行を行うと言ったモノまで。メリットは武具を格安または無料で手に入られる事。デメリットは鍛冶師の依頼次第と言った代物である。

「ヴェルフさん、失礼ですが契約に当たっての条件だけ確認したいのですが」

「ああ、当然だよな。お前もベルと同じパーティに入ってるなら話を通さないんだ」

パーティに入ってる。まあ、ベルが依頼を受けたら同じパーティの俺も同じ依頼をこなす事になる訳だからな。それに変に契約を結ぶと面倒事になるかもしれない。特にこのヴェルフ・クロツゾと言う人物。『クロツゾ』ってのがどういう意味か調べてからじゃないと契約なんて怖くてできやしない。

「俺を、お前達のパーティに入れてくれ」

「えっ？」

うん？ 入手の難しい素材収集とかじゃなくて？ と言うか鍛冶師が直接パーティに入る？ ……あ、思い出した。ギルドで『空いてるパーティ』を探してたじゃないか。

質問すべき所は、まず戦えるのか。それからパーティに加わる目的。後はパーティ内での報酬の振り分けとかか。

「質問、いくつかよろしいですか？」

「おう、なんでも聞いてくれ」

「使用する武器は？」

リユースさんのアドバイスを真に受けるなら、大剣使いか大盾使いみたいなの、大型モンスターの足止めが出来る人物が好ましい。

「自作の大刀だな」

ふうん。大刀、大刀ねえ。大剣の分類で良いのか？ 少し悩ましい所ではあるが、一応は良い感じか？

「戦えるんですか？」

口をへの字に曲げて少し不満そうな表情を浮かべてから、直ぐに笑みを浮かべた。それなりに自信はありそうだが、失礼な話、自信だけ有るのが一番困る。変に出しゃばって連携を乱されるのは勘弁だし、ベルの方が見捨てると言った選択を出来ない以上、コイツが変な行動をとるとパーティ全体が危ない。

「当然。つつつても普段は浅い階層でちまちまモンスターと戦うぐらいしかやってないがな。まあ、もうランクアップするのに十分なステイタスなのは保障する」

ランクアップに必要なステイタスは、確か基礎アビリティが最低D以上だったか？ どのステイタスがDに到達しているかまでは聞けないが、悪くは無いか。

「パーティを組んだ経験は？」

「……悪い、それは無いな」

パーティ経験無し。そこらは注意しとかなないと危ない感じか。と言うかファミリア内でパーティを、組めないか。周囲からの鍛冶師の視線から察するにファミリア内での立場はあまり良く無さそうだしなあ。リリと同じタイプ、ではないか。ヘステイア様の神友というヘファイストス様に限ってそこら辺は赦さんだろうし。

「パーティに加わる目的は？」

「ああ、ランクアップに必要なステイタスまではいけたんだが、後は偉

業を成し遂げるってのが一人じゃ難しくてな。ランクアップしたくてパーティを求めてる」

ふむ。リユースさんの言ってた『パーティを組んで偉業に挑む』つてのをやりたい訳か。なるほど、ごく普通の理由だし、ヴェルフ・クロツゾの目を見る限りでは嘘は無い。

「報酬の振り分けに関しては此方に一任すると言った形で良いですか？」

「報酬？ ああ、稼ぎの事か。別にそっちの振り分けに関しては言う事は無いな」

後はー、そうだな。これだけは聞いとくべきか。

「口は固い方ですか？」

「……？ ああ、そうだな。固い方だと思う」

同じパーティに入る以上、キューイ関連についてはいざれ明かさざるをえない。そこら辺を黙っていてくれる様な人物じゃないと、色々と危うい。ガネーシャファミアリアには未だに竜ドラゴンを従テイマーえる者を出せとか会わせると問い合わせが来てるっぽいしね。

一応、俺の見る限りではフォローできる範囲であるのなら別に構わないと思う。リリが何と言うかはわからんが。

「ベル、私の意見としては、加えても良いと思います。もし口が固く無かったら……」

ダンジョンで行方不明になってもらうだけだし。

「……なあ、もしかしてお前って結構ヤバい奴だったりするの？」

そんなにビビらなくても平気だぞ。キューイの事を周囲に言い触らしたりしない限りは、ね。

第六十五話

リリルカ曰く、『クロツゾ』という家名。別名『呪われた魔剣のクロツゾ』『没落した鍛冶貴族』というらしい。

かつて強力な魔剣を打つ能力で名を上げた一族。だが、ある日を境に魔剣を打つ能力を失ってしまい。以降は完全に没落したと。

完全に没落したと。

それを聞いた上での俺の感想は、まあ別に？　って感じ。

魔剣打てないのか。そうかといった感想しか浮かばなかった。

というのもだ、魔剣ってのは馬鹿みたいにお値段の張る代物である。当然、駆け出し相応、ベルがランクアップしたとはいえ、それでもたかが下級冒険者程度の稼ぎでどうにかなる金額の代物ではない。

当たり前だが、そんなもんが打てようが打てまいが、ベルがその人が制作した防具類を気に入っているなら関係ない。打てたとしても金が無い以上、取引なんてできるはずもない。打てないなら当然取引以前の問題。

というか、魔剣を打てない魔剣鍛冶師って話なら、なぜファミリア内での扱いが悪いのかがさっぱりわからん。

その魔剣で何かしでかしたのか？　街を滅ぼしたとか？　ヴェルフ自身に何か問題がなければ特に言うことはないんだが。

「やってきたぜ十一階層っ！」

ダンジョン十一階層。大きく両手を広げて歓喜をあらわにするヴェルフ・クロツゾの背中を眺めつつ、不機嫌そうなりりをなだめる。

「リリ、ほら機嫌直して」

「別に、見知らぬ方が居るからと不機嫌になっている積りはありません」

っーんとそっぽを向いたり。説得力がない。

大体的場合、ダンジョン内でリリがベルにアタックしてたとしても見逃してあげてたが、新しい人が入ってきた影響でベルに積極的に関

われなくなつたとも思っているのだろう。

あとは、隠し事であるキューイ関連についても色々注意された。『ミリア様は警戒心がなさすぎます』と。最低限警戒はしている積りなんだがなあ。

「悪いな二人とも、昨日の今日でこんな無茶聞いてもらつて」

「いえ、ヴェルフさんが《鍛冶》のアビリティを手に入れる為つていうなら、契約した僕にも無関係じゃないですし」

《鍛冶》の発展アビリティの有無は鍛冶師にとって死活問題レベルの代物らしい。それを入手できるだけの経験は積んできたが、ランクアップできなくて困つてたというのがヴェルフの現状。そこに協力するの事で、今後契約したベルは《鍛冶》の発展アビリティを得たヴェルフから、高品質な武器を格安で作成依頼できるというわけだ。

損はない。一時的な戦力増強といった形ではあるが、早々ランクアップなんてできるはずもない。しばらくの間は世話になるだろう事は確実である。

「そりゃあ、この人はそれで万々歳でしょうけど」

不満そうなりりを除けば、だが。

「だったらご自分のファミリアの人たちと探索すればよろしいのではないですか？」

若干語気の荒いリリのセリフに対し、ヴェルフが微妙そうな表情を浮かべる。まさにその通りの指摘ではあるが、それが出来なかったからこそ、この場にいるのであつて。

「だからさ、リリ。ヴェルフさんはファミリア内でその……」

「仲間外れなんですよね。ベル様もミリア様もそんな話に絆されて、おまけに新しい防具で買収されて」

良質な鎖帷子を用意してくれたからね。今まで使つてたのがただの重しにしかなくてなかつたんじゃないかってぐらい、ヴェルフが用意してくれた鎖帷子は上質な物だった。普通に売りにだすなら8000ヴァリスぐらいの値段にするといつていた。それだけ自信があるということだろう。

「どうして二人とも相談してくださらないのですか」

あー、そりやあ、ベルがリーダーだし？　ベルがそうすると決めたのなら、それに従うべきだと思つた訳で。少なくとも俺の見立てでは不誠実な糞野郎ではないっぽいし？

「そんなに俺が邪魔か、チビ助」

あー、流石にこれだけあからさまに邪険にされれば怒るか。とはいえチビ助は、刺さる。俺にも刺さってる。

「チビではありません。リリにはリリルカ・アーデという名前があります」

「おう、じゃあよろしくなりリ助」

「……もういいです」

リリの方が折れたか。まあどの道ベルがそう選択した以上、パーティメンバーとしてはそれに従う他無い訳だがね。

「でもさ、リリ。僕気に入ってるんだ。このヴェルフ・クロツゾさんの作る防具が」

「……？　クロツゾっ!?　今、〃クロツゾ〃と言いましたかっ!？」

リリには言つてなかったな。〃クロツゾ〃という名に聞き覚えは？　としか尋ねなかったし、今回参加したヴェルフが〃クロツゾの一族〃だとは思わなかったわけか。いや、流れ的に気付くかなって思つてたんだけど。

「ミリア様っ！　なんでこの人があの呪われし魔剣の一族、没落した鍛冶貴族の方だと教えてくれなかったのですかっ!？」

「あー、話の流れ的に気付いてるものだど……」

「なにそれ……?」

道中にそれとなく尋ねただけだから気付かなかつたのか。当然ながら、ベルも知らない。そりや話す暇なかったしね。

「ベル様は知らないんですかっ!？」　かつて強力な魔剣を打つ能力で名を上げた鍛冶一族それがクロツゾです」

「ある日を境に全ての能力を失つたらしいですよ。今では没落貴族と……あー、ヴェルフさん。今の話はしても平気でしたかね」

いかんいかん、本人の前で話す事はまずいかもと避けてた話題だったわ。

ただ、それを聞いた本人は肩をすくめるのみ。怒っている訳でもない様子だ。

「ああ、ただの落ちぶれ貴族さ。今はそんなことどうでもいいだろう」「でも――」

リリが何かを言い募ろうとするが、それより前にボコリと地面が隆起する音が響く。一つや二つではなく無数に。キューイ、数は？

ざっと二十ぐらい？　ちっこいの、えっとインプが14匹。でかいの、オークが7匹ぐらいね了解。

「インプ14、オーク7です。計21体、正面インプ14、側面オーク2、背面オーク5」

「っ、多いな。不味くないか。逃げるか？」

怖気づいたというより、安全を考えてのヴェルフの発言。確かに普通のパーティならいったん引く数ではある。まあ問題はないんだがな。最悪、俺がヴェルフの援護に徹すれば、レベル2になったベルであるなら、話を聞く限りではあるが余裕だろう。

「いえ、いきます」

「そうか、じゃあオークは任せろ。あいつなら俺の腕でも当てられる」「……じゃありりも微力ながらヴェルフ様の援護を行います」

ふむ、公私を分ける事は問題ないっぽいな。まあリリはそこらへんはしつかりしてくれる子だしね。

「おー、俺が気に食わないんじゃないのか」

「……嫌ってるにきまっています。ただ、ベル様とミリア様の邪魔だけはしたくありませんので」

あー、まあいいか。ベルは数ばかり取り揃えてきてるインプを、俺は数多めの5匹のオークを、ヴェルフはリリの援護を受けてのオーク2匹を、いっちょやりますかあ。

ベルが弾丸の様に飛び出して行って、一瞬の内に一匹のインプを切り裂く。瞬く間に一匹が仕留められて――速いなおい。今までの比ではないぐらいに速い。ランクアップを経てあんなに強くなったのか。

たかが5匹程度のオークならさっくり終わらせないとまずいぞこ

れは。

「でえやあああつ!!」

動きの鈍い小さなオークを真つ二つに切り裂き、魔石が転がるのを見て安堵の吐息を零す。流石に十一階層ともなれば相応の強さがある。ステイタス的には問題ないだろうが、それでも油断すれば普通に殺される様な階層だ。

そんな階層のオークをようやく仕留め、二人の様子を見れば、一人で10匹以上のインプを瞬く間に切り裂いて片づけていくベルの姿が目に入ってきた。

「すげえ」

周囲に居たインプが瞬く間に灰になり消えた。流石レベル2と言うわけか。

このパーティの安定性はミリアが説明していた以上だ。ミリアの索敵能力の高さ、リリの的確な補助行動、ベルの戦闘能力。どれも十二分に過ぎる程に高い。

唯一、ミリアが魔法だよりになりすぎてマインドダウンを多発させていたという欠点があるらしい事を聞いていたが。

ミリアはどこだろうと視線を巡らせれば、たった一人でオーク5匹に囲まれているミリアの姿を見つけ、慌てて大刀を担いで援護に向かうとする。

「今行くっ」

「待つてください、ミリア様の邪魔をしてはいけません」
「何をっ」

何を言っているのだこのパルウムは。ミリアは索敵能力に長けた魔法使いだろうに。オーク5匹に囲まれ、すでに接近されている。早く前衛が援護しにいかなくては彼女が危ないだろう。

そう思いリリ助を睨むが、リリは涼しい顔をしたまま消えずに残った軀を引きずってどかし、ベルの戦闘区域の確保に努めている。

どうして援護に行こうともしないのか。その答えはすぐにでた。

『シヨットガン・マジック』『リロード』

分岐詠唱魔法。ミア本人に聞いた多用している魔法。

通常の魔法使いなら、詠唱に集中しなくてはならず。モンスターに接近されてしまえばなすすべなく殺されてしまう。しかし、彼女は違った。

『ファイア』ッ！せいっ！『ファイア』ッ！

ズゴンとミアの生み出した指先の魔法陣から放たれたのは無数の魔弾。放射状に無秩序に放たれたその魔弾によって、オークが二匹足を破壊され転倒する者と膝を突くものの二匹。転倒した一匹の喉を剣の切っ先で掻き切り、膝を突いたほうの個体を盾にするようにミアが滑り込む。――魔法は維持されたままであり、次の瞬間に放たれた二射目が残り三匹のオークの顔を抉る。

上手い、それ以上に当たり前の様に行っている行為。オラリオでも片手の指の教程しか習得している者の居ない魔法使い達が使える様に努力を重ねている並行詠唱を軽々と使いこなす様はすごい一言。

直接攻撃系の魔法ではないとはいえ、自身も魔法を覚えてる冒険者の一人。詠唱するのにどれほどの集中力を必要とするかは自分も知っていた。

それをあんなに簡単に、当たり前の様に使いこなす姿には度肝を抜かれた。

「言っただでしょう。ミア様は平気だと。『あの』第一級魔術師の【九魔姫】^{ナイン・ヘル}が認める程の並行詠唱魔法の使い手なのですから」

十二分に過ぎる程の索敵能力に加え、あの並行詠唱と組み合わせさせた分岐詠唱魔法。あのオラリオ最高峰の魔術師が認めるとい言葉も思わず頷ける様な鮮やかな並行詠唱。

自分が入ったこのパーティは、相当な当たりなのかもしれない。

眼下に広がる戦場を眺め、ガレス・ランドロックは呆れ返るように眩いた。

「何を興奮しとるんじやあ奴らは、あれでは他の者が育たん」

ガレス達が見下ろす戦場。崖の上より見下ろしているのはロキ
ファミリア第二軍メンバーを中心にした者達が囲む戦場。第一級冒
険者であるベート・ローガ、ティオネ・ヒリュテ、ティオナ・ヒリュ
テの三人が他の者たちを置き去りにして激しくモンスターと戦闘を
行っている。

ガレスの指摘通り、あれでは三人以外が介入することができず、他
の者たちが育つ事が出来ない。

半ば呆れた様子ガレスに対し、フィン・ディムナは困ったように
呟いた。

「どうも、来る途中で見た冒険者に当てられたみたいだ」

「ほう、儂が合流する前にそんな活きの良い冒険者が？」

「ああ、二人もな。ベル・クラネルと、ミリア・ノースリスだ」

リヴェリアが答える間にも、同じく崖の上から戦場を見下ろしてい
たアイズ・ヴァレンシユタインが顔を上げて呟いた。

「私も行く」

呟きと同時にその華奢な体を空に投げる。即座に重力にとらわれ
た彼女の体は、けれども彼女の発動した魔法によって柔らかに地面に
着地する。着地と同時に駆け出し、そのままモンスターの一匹を真つ
二つに切り裂いた。

「あの子にも火がついてしまったみたいだ」

リヴェリアの感慨深げに呟かれた言葉を聞き、ガレスは肩眉を上げ
て口を開いた。

「ミリア・ノースリスと言えば儂は直接会つたらんが、確かミノタウロ
スに襲われておつたパルウムだったか。む？　パルウム？　フィン、
まさかお前……」

長い付き合いで、なおかつフィンの目的を知るドワーフの呟きに対
し、フィンは口元に笑みを浮かべた。

「そうだよ。彼女を狙ってる。何せ、あのオラリオ最高峰の魔術師が
認める程の人物だからね」

オラリオ最高峰の魔術師という名称が、誰のことを指しているのか
を知るガレスが、確認する様にリヴェリアを伺えば、リヴェリアは肩

を疎めて頷いた。

「ああ、あの戦闘スタイルは、私では真似できないだろうな」

「ほう、リヴェリアが認める程か。何をしていたのだ？」

興味を持った様子のがレスに対し、リヴェリアが答える。

「ミノタウロス、それも強化種の討滅だ。あの駆け出し二人で、でだ」

「何？ 強化種のミノタウロス？ 流石に法螺が過ぎるだろうに」

「嘘じゃないさ。僕たちがこの目で見ていたんだからね」

普通ならあり得ないその偉業に信じられないといった表情のがレスに対し、フィンとリヴェリアがそんな反応をするだろうと肩を疎めた。

「事実だ。ミリア・ノースリス、彼女が魔法で攻撃の威力を相殺し」

「ベル・クラネルがその攻撃を受け流す」

「そしてミリア・ノースリスが隙を魔法で生み出し」

「ベル・クラネルが僅かな傷を与える」

流れるように行われたあの場面を脳裏に描きながらフィンとリヴェリアが交互に言葉を放つ。それに対するがレスの反応はいまいちである。

「なんだ、ミリア・ノースリスの魔法がすごいだけではないのか？」

「違うさ、彼女はたった一つの魔法しか使っていない」

「……防御魔法ではないのか？」

「攻撃魔法さ、指先または杖や剣の切っ先に生み出した射出口から、魔弾を放つというシンプルな魔法さ」

フィンの補足された言葉に、今度こそがレスが目を見開いた。

「それは、本当なのか？ 攻撃魔法でミノタウロスの攻撃の威力を削る？ 隙を生み出す？ 威力が足らんだろうに」

「ああ、ミリア・ノースリスだけでなく、ベル・クラネルの方も息が合っていたからこそその芸当だったよ」

「最後の瞬間には奥の手らしきものも切っていたしね」

あの光景、最後にミリア・ノースリスを包み込んだ真っ赤な魔法障壁。リヴェリア曰くだが魔法詠唱を伴わないマジックアイテムによる魔法障壁だったらしいそれ。彼女が左腕に装備していた竜鱗の朱

手甲の効果であろう物だったが、マジックアイテムに頼ったとはいえ、そのマジックアイテムによる魔法障壁が砕かれれば即死は免れ得なかったであろうあの一撃を前に、堂々と魔法詠唱を完了してみせた精神力の高さも、凄いの一言だ。

フィン・ディムナの求めた理想のパールウムの女性像がそこにあった。

欲に溺れぬ高貴さ。困難を前に不敵にほほ笑む大胆さ。才能に満ち、その上で努力を怠らぬ姿勢。どれか一つでも当てはまれば十分だというフィンの理想、それに全てに当て嵌まったのは彼女しかない。

フィンは口元に笑みを浮かべたまま、目を伏せる。

「そうだね、叶うならば出会いから全てをやり直したいよ」

モンスターを一通り片づけたのち、他の冒険者パーティがやってきたのを見計らって休憩を挟んでいるとキューイがわめきだした。

「キューイキューイ」

「はい？ 誰か来る？ 誰が来るんですか？ ほかの冒険者？」

ローブの中から聞こえるキューイの声曰く、『なんか怒ってる』『苦しそう』『ヴィルヘルムの方がイケメン』『ヴィルヘルムより弱いけど、ミリアより強い』だとかどうか。

意味わかんねえよ。誰だよそいつ。

とりあえず周囲を警戒してみるが、リリの近くで一応警戒していた俺の視界には何も映っちゃいない。そりゃ霧でなんも見えんしなあ。一応リリに警戒する様に伝えとくか。

「リリ、何か来るそうです」

「何が来るんでしょうか？」

「ええつと……さあ？」

リリが眉間に皺を寄せつつも足元の魔石を拾い集めていく。『何か来る』と言われて『何が来るのか？』と質問したら『さあ？』って答

えたらそうなるよね。

んでキューイ、本当に何が来るんだ？

《出ていけっ!! 此処は俺様の領域だぞっ!!》

っ!? 頭の中に直接響くような怒声が響き渡り、思わず耳を塞いだ。なんだ今のは、どっかからぶん殴られたみたいな感じだった。明らかにヤバそうだ。

「ミリアさま? どうなされたのですか?」

リリは不思議そうに首をかしげている。つまりリリには今の声は聞こえていない? まずいな、これはもしかして——そんな呑気に構えてる余裕は本当になさそうだ。

霧の奥から響いた悲鳴が響き渡る。それから慌てたように何かから全力疾走で逃げようとする先ほどのこの階層にやってきた冒険者の姿。何が来たんだ。霧の向こう、大きなそれが目に入った。霧のせいで全体像は見えないが、それでも大きなそいつ。体長4Mに届くほどの小竜。ヴィルヘルムとは違い、翼のないタイプの、けれどもたかが蜥蜴なんて馬鹿に出来ない風格を兼ね備えたそいつ。インフアントドラゴンだ。

「インフアントドラゴンだっ!!」「逃げろおおおっ!!」

走り抜けていく二人の冒険者。前衛らしいプレートアーマーを着込んだ奴と、軽装鎧で身を包んだ奴。そして——逃げ遅れたつばいローブ姿の魔法使いつばい奴が、跳ね飛ばされた。というか中身がぶちまけられた。

肉片と骨と内臓と、いろんなものが散弾みたく飛び散り、白い草原を染め上げる。冗談じゃない、レベル1の魔法使い、耐久の低い奴だったんだと思うが、それでもたったの一発で弾け飛んで死んだ。

インフアントドラゴン、上層の希少^{レア}モンスター。上層には迷宮の孤王^{モンスターレックス}というものが存在しないため、実質的に上層の迷宮の孤王^{モンスターレックス}扱いされているモンスターである。

迷宮の孤王^{モンスターレックス}の定義が一定周期で必ず出現する同一または近辺階層のモンスターより突出した能力を持つ強大な個体の事を指すがゆえに、めったに姿を見せないインフアントドラゴンは実際には

迷宮の孤王ではないものの、その能力は迷宮の孤王クラス。

要するにこの階層で出現するモンスターどころか、下手をすると通常種のみノタウロスを凌ぐ程の能力を持っていることを意味する。

その攻撃で、魔法使いらしい冒険者が死んだ。そして——その目が此方を見ている。

《侵入者、小さき者よ……此処で死ぬが良い》

あ———さっきのどこかから聞こえた声はこのインフロントドラゴンの声だったのか。そうかそうか、キューイも竜種、ヴィルヘルムも竜種、そしてインフロントドラゴンもまた竜種だ。つまり俺は竜種の言葉が理解できるわけか。なるほどー、なんてのんきに現実逃避。

「ミリアっ！ リリっ！」「逃げろっ！」

ベルとヴェルフの言葉にぶん殴られ、同じく硬直していたリリの腕を掴んで走る。

「リリっ！ 逃げるわっ！」

リリの腕を掴んで走り出して——俺とリリのステータス差を意識していなかったせいか、リリがこけた。俺が引っ張ってしまった所為だろう。リリの敏捷は高くない。俺の敏捷はそこそこ高い。それが仇となった。

転倒し、バックバックに押しつぶされるリリ。普通ならばそんなどかいバックバックなんて背負った状態で前向きに転倒すりや荷物に押しつぶされて死ぬが、リリはスキル上問題はない。問題はないが——インフロントドラゴンから逃げてる途中なので大問題である。

このままだとリリが死ぬ。慌ててリリをかばう様にインフロントドラゴンの前に飛び出す。

『ライフル・マジック』ッ!!』

想像したのは対物ライフル。英名では *anti-materiel rifle* と呼ばれるタイプの、通常のライフルに比べると大型の代物。

簡単に言えば対人武装ではなく対装甲武装である。旧名が『対戦車ライフル』と言えばわかるはずだ。シモノフPTRS1941という

銃をイメージ。

対戦車ライフルと言えば、数km先に居た兵士に当てたらその兵士を真っ二つにしたとかいう逸話がある。といえ、その威力は想像に容易いだろう。

ドシドシとすさまじい重量を感じさせる足音が近づいてくるのに思わず怯むが、歯を食いしばる。どの道、リリの敏捷では逃げ切れな。此処で仕留めなくては。

『リロード』ツ!!』

装填するのは14・5×11mm弾。対戦車ライフル用に開発された弾薬で、後に航空機用の重機関銃の弾薬としても採用されることになった代物。その上で弾種はDGE02、HEIA^{徹甲}P^{焼夷}弾^{榴弾}に分類される物。

射距離800mにおいて、90%の確率で15mmの装甲板を貫通可能とされている代物であるわけで、要するに威力は十二分のはずだ。上層のドラゴンの鱗でも——効くか？

『ファイア』ツ!!』

右手に持っていた竜血の剣の切っ先より放たれたのは今までの比ではないほどの大きさの魔弾。指先処か刀身とほぼ同じ大きさの魔弾。瞬く間にインファントドラゴンの眉間にぶち当たり——魔弾があっけなく砕け散って消えた。

「嘘でしょっ!？」

込められるものすべてを込めた一撃が、あっけなく弾かれた。其の上でインファントドラゴンは嘲笑った。

《愚かなる者よ、此処で死ね》

その強靱な肉体が一瞬だけ小さくなった。様に見えた。違う、跳躍する為に身をかがめているのだ。そう気づいた時には既にインファントドラゴンは跳躍していた。飛んだ、訳ではない。跳んだ。

大きさから言ってその重量はトン単位なのは間違いない。その巨体が軽々と跳躍して此方を踏みつぶそうとしてきている。避ける？リリが立ち上がって悲鳴を上げかけている。つぶされる？まあ痛みはなさそう。感じる前に潰れるだろうし。

ああ、もつと早くに逃げてれば良かったな。阿保みたいな後悔を抱いて——ベルの魔法の光が目の前を通り過ぎた。

『ファイアアボルトオ』ッ!!」

笑つちまう光景だ。ついさっきまで目の前で、跳躍の果てに俺とリを踏み潰すはずだったその巨体が、消えた。いや、首から上が消し飛んで、降り注いだのは灰となった元インファントドラゴン。

一瞬、理解が追いつかなくてリリと共に阿保みたいに口を開けたまま驚いていたら、インファントドラゴンの物らしい魔石が音を立てて地面に落ちてきた。

そこで漸く情報を処理しはじめた所で、胸元からキューイが顔を出してパクリと何かを食べた。

「キューイ」

不味い。というキューイの呟きが耳に残る程の静寂。呆けたままインファントドラゴンの魔石を眺める。握り拳よりもなお大きい魔石。これ一つでいくらになるのやらと一瞬考えが明後日の方向に向かいかけて、即座に自分の頬をひっぱたいた。

ベルの魔法で、たった、たったの一撃で、インファントドラゴンが消し飛んだ。

何を言っているのかわからないだろう。俺にも何が起きたのかわかりやしない。

ただ一つ言えるのは、もう俺の魔法ではベルの一撃に追いつけないうってことだけだ。

第六十六話

ベルの放った強烈な一撃。『詠唱の存在しない即効魔法』という特性を持つベルの『ファイアボルト』は『詠唱』が存在しないという意味では発動が早いという利点と、威力が低いという欠点が存在した。控えめに言って、威力が低いのは発動の速さとのトレードオフになっっているわけだ。

そのはずなのに、それが失われた。と思ったがそうでもなかったらしい？

俺のコンセントレートした魔法の一撃があっけなく弾かれたインファントドラゴンを一撃で倒すに至った原因は、ベルが新しく習得したスキル【英雄願望^{アルゴノウト}】によるものだった訳だ。

そのスキルの効果は『能動的行動^{アクティブアクション}に対するチャージ実行権』というもの。簡単に言うと全ての攻撃に対してチャージ攻撃を追加するスキルだ。要するに溜めをする事で威力を増加させるスキルである。

何が言いたいのかという俺が『集中詠唱^{コンセントレート}』して魔法を発動する事で威力を底上げする様に、ベルも『溜め^{チャージ}』をする事で魔法の威力を引き上げられるという事だ。要するに俺と変わらない感じになった訳で、ノータイムで放てる高威力魔法って訳じゃない。

安心できるかと言えば、全くそんな事もないが。早い所ランクアップをしなくては本気で置いて行かれかねない。無論、ベルにその気はないだろうが……。

ヘステイアファミリア本拠、ベッドの上でぐったりしつつも愚痴を零せば、くすりとヘステイア様が笑う。

「ミリア君、きみは少し焦りすぎだよ。もう少しゆっくりで良いんだ」
ヘステイア様の言葉に耳を傾けつつ、ステイタスの更新を行う。ダンジョンであるトラブルの後、ベルが疲労感を訴えた為に地上へと帰還した後、ヘステイア様に相談した結果が以上の通り。全くもって恥ずかしい話だが、焦り過ぎというのは事実であった訳で。

「よし、更新完了つと……んん？ ミリア君、召喚魔法の最大召喚数が増えてるけど、何かあったのかい？」

召喚数の増大？ 不思議に思いつつもシャツを戻してから更新後の紙切れを受け取る。

ミリア・ノースリス

Lv1

力：E445 ↓ E452

耐久：F339 ↓ F341

器用：S902 ↓ S929

敏捷：B778 ↓ B799

魔力：SSS1201 ↓ SSS1229

《魔法》

【ガン・マジック】

・ 詠唱派生魔法

・ 基礎詠唱 『ピストル・マジック』

・ 消費弾薬 1／1

・ 単発の魔弾を放つ

・ 特殊詠唱 『デュアル』

・ 基礎詠唱 『ショットガン・マジック』

・ 消費弾薬 15／3

・ 単発の散弾を放つ

・ 特殊詠唱 『ソードオフ』

・ 基礎詠唱 『ライフル・マジック』

・ 消費弾薬 1／10

・ 高威力の魔弾を放つ

・ 長射程

・ 特殊詠唱 『スナイプ』

- ・追加詠唱『ファイア』
- ・共通詠唱『リロード』

【サモン・シールワイバーン】

- ・召喚魔法
- ・最大召喚数『1↓2』
- ・追加詠唱にて封印解除
- ・基礎詠唱『呼び声に答えよ』
- ・追加詠唱『楔を壊せ解き放て』

【レッサー・ヒール】

- ・最下級治癒魔法
- ・基礎詠唱『癒しの光よ』

《スキル》

【タイプ：ニンフ】

【マガジン・スロット】

- ・装弾数『30』
- ・保有最大数『8↓10』
- ・基礎アビリティ『魔力』により効果増加

【マジック・シールド】

- ・防御効果
- ・基礎アビリティ『魔力』により効果増大
- ・自動発動
- ・精神力消費

「本当ですね。召喚数が1から2に増えてる?」

「最大召喚数が増えた? ……キュイがもう一匹出てくる感じ? それがちよつと疲れるかもしれないんだが。」

「キュイ、貴女がもう一匹召喚できるっぽいんですけど」

「キュイ? キュイキュイ?」

「はあ? 馬鹿なのお? っておい。」

「キューイは理由を知ってるので？」

「キューイ」

自信満々にうなづくキューイ。本当に知ってるのか？ あんまり信用ならんのだが、というかもう一匹召喚できるってアレじゃね？

ガネーシヤ様に話通しておく方が良いんでない？

「キューイキューイ、キューイ。キューイキューイ」

ほむほむ。なるほどなるほど。レベル×1+1が俺の最大使役数であつて。つて、使役数つてなんだよ。

「キューイ、使役数とは？」

「キューイ？ キューイキューイ」

何こいつ、いちいち『馬鹿なの？』つて言わないと気がすまないのかよ。知らないだけだよ、つっ—かなんてお前は知ってたんだよ……。

えつと、おまけ+倒した竜種を召喚できると。へえ……俺が倒した訳ではないが、もしかしてインファントドラゴンを召喚できるって感じか？

「キューイ、キューイキューイ」

……イルヘエアンドヴァンドウ？ えつと、うん。頭痛くなってきた。とりあえずそのイルヘエアンドヴァンドウつてのが召喚できる訳ね？ ……イルヘエアンドヴァンドウとは何だ？

「ミリア君、何かわかったのかい？」

「えーつと、キューイ曰くですけど」

レベル×1+1の数だけ竜種を使役できるっぽい？ んで召喚できると。つまり今日倒した……俺が倒した訳ではないが、どうもあのインファントドラゴンを召喚できるらしい？ ……インファントドラゴンを召喚できるようになったとして、言う事を聞いてくれるのか？ はなはだ疑問である。

ヴェルフ・クロツゾの不可思議な話を聞いた上での感想は、まあ職人気質なんだなあぐらいな感じ？ 魔剣が打てるけど打たないのは、要するになんかの拘りがあるんだろう。他者がとやかく言う事じや

ないし、魔剣を打たないだけの理由があるなら別に構わんだろう。

ベルの方は少し考えこんでいたが。変に関わる必要もないだろうし、打ちたくないならそれでいいだろう。強力な魔剣ってのは少し気になるが。使い捨てな感じだからなんともなあ。肝心な時に使えないとかなったら目も当てられん。

エリクサー症候群って言うんだったか？ いざという時に使い渋る事をそういった気がする。

早朝のダンジョン前で出会ったヴェルフから新調してくれた鎖帷子を受け取りつつも、今日はリリが休みなのを伝える。

「なんだ、今日はリリ助は休みか」

「はい。下宿先のノームの親父さんが病気なので看病してあげたいって」

此処で怒る様なら、今後のパーティ活動について考える必要があるが。

「そうか。なら仕方ないな」

割とすんなり頷いてくれたわけだが。まあ多少癖はあるだろうがそこまで悪い奴ではないだろう。今まで接してきた者とは違う職人氣質もちか。ちよつと面倒と言えば面倒か。

「とりあえずミリア、その鎖帷子についてはお前から借りた前の奴と同じ様に作ったが、少し改良しておいた。材質もそれなりの物を使つたからだいぶ使いやすくなってるはずだ。問題があつたら……：：：そうだ、二人とも、今日は一日俺に出来ないか？」

「え？」

「約束しただろう。パーティに入れてくれたら礼をするって。お前たちの装備、全部新調してやるって」

ベルが嬉しそうにしているが。俺はー、うん。ちよつと今日はダメかな。リリが居ないからダンジョン探索するのもアレだし、ガネーシヤ様の所に行こうと思ってたんだ。

「すいません、それはベルと二人で行ってもらっていいですかね？

今日はちよつとやる事があるので」

「おう？。そうか。鎖帷子の調整もしたかったが、用事があるなら仕

方ないか」

新しく召喚できるようになったインファントドラゴン？ についてガネーシャ様に相談したいからな。すまん。

「何？ もう一匹召喚できるようになった？ インファントドラゴンを？」

ガネーシャファミリアを訪ねたら、割と迅速に神ガネーシャが出迎えてくれた。暇してる訳ではないだろうに、対応早いなあ。驚きの表情を浮かべたガネーシャ様に深くうなずく。

「ふむ？ 今召喚できるのか？」

「まあ、一応」

キューイは今現在、ヴィルヘルムの元に行つて求愛しているから居ない。

「ふむ……大丈夫なのか？」

大丈夫つていうのは、ちゃんと言う事を聞かかって意味か。どうだろうなあ。

「それが少しわからないですよね。ダンジョン内での言動を見る限りだと、危ないかもしれないです」

「それは……そうだな。今日は円形闘技場アンファイテアトルムでモンスターのティム練習を行う申請をしていたのだ。そこでその召喚を試す、というのはどうだろうか。安全の為にこの俺、ガネーシャの団員が見守る中で、だが」

どうやら円形闘技場アンファイテアトルムを貸し切りにして、下級団員達のモンスターティム練習を行うことになっていて、らしい？

ティム済みのモンスターに手加減してもらいつつも、下級の調教師達にティムの練習をさせると。ダンジョンでやろうとすると死ぬ可能性が高いのでティム済みモンスターでまず練習から入るらしい。ティム技術のあるファミリアらしい活動だが。

……ふうむ？ 好待遇過ぎる気もするが。いいのだろうか？

「いいのですか？」

ガネーシャファミリアの団員が護衛に入ってくれるって、かなりい

い環境だろう。多分、俺一人だと手に負えなくなる可能性もあるしなあ。

「構わない。もし友好的なモンスターであれば来年の怪物祭の目玉にもできるからな」

モンスターフィリア
怪物祭ねえ。今年の一件からガネーシヤファミアの株が大暴落してるから、来年が危ぶまれてるんだが、そこらへんは何とかするのかね。

アンフィテートルム
円形闘技場中央部。大きく広がった舞台の上に立つ俺と、観客席に一定間隔で立っている20人近いガネーシヤファミアの団員。そして特等席から神ガネーシヤが見下ろしてきている。

キューイは、入り口の一つに待機しているヴィルヘルムの足元で求愛してる。あいつマジで蹴っ飛ばそうかな。

「では、始めてくれ」

神ガネーシヤの合図と共に、両手を前に突き出して想像を固める。召喚するインフアントドラゴンのイメージをしっかりと固め、詠唱を開始した。

『呼び声に答えよ』

詠唱を終え、魔法名を呟くだけになった途端に、目の前が揺らぐ。眩暈とは違う感覚に一瞬戸惑い、動きを止めてしまった。

数秒、その揺らぎが続く。しかしそれ以上の変化は一切見られない。イグニスファトウスしそうになってるわけでもない。意味がわからないが、とりあえず発動を促してみた。

『サモン：シールワイバーン』っ

キューイを召喚した時をなぞらえる様な光景。ダンジョン内ではなく日の光降り注ぐ地上で行っているという差異はあれど、その複雑怪奇な魔法陣はあの時の光景を思い浮かばせた。

次の瞬間には響く竜の咆哮が、聞こえてこない。静かに、水面が揺らぐ様に魔法陣が揺らめき、そしてその中からゆっくりと灰色の翼

が現れた。

翼？ インフアントドラゴンは翼のない地竜だったはずだが。そんな疑問を他所に、その全貌が魔法陣から這い出てきた。

キューイ召喚の時ほどの迫力は一切無い。現れ出でたのはキューイを二回り程大きくした様な体格の、灰色のワイバーン。キューイが子猫というなら、灰色のワイバーンは子犬だろうか？

静かに目を閉じたまま俯く姿には、憤怒の雰囲気は一切なく、いつそ死んでいるのではないかと思える程の静けさを孕んでいる。魔法陣は既に消え去っているにも拘わらず、動く気配は見えない。

「あー、こんにちは。私はミリア・ノースリスと言います」

挨拶は大事。とりあえず動かない相手に対して挨拶を飛ばしてみると、その灰色のワイバーンはすつと顔を上げた。キューイとは違い、黄土色つばい瞳は、色は違えど宿す光は同じだ。落ち着いた、風いだ水面を思わせるような透き通る輝きに目を奪われる。

《貴様は……。此処は何処だ。俺様に何を——ふむ？ そうか。あの穴倉から引き上げたのか。力を封じる楔は忌々しいが、あの不愉快な穴倉から出した事は褒めてやる。特別に殺さないでおいでやろう》

輝きに目を奪われていたら、超絶物騒な事を言い出した。え？ 殺さないでおいでやる？ すつごい上から目線なんだけど、なんで？

《しかし、こごも力を封じられては何も出来ん。んむ？ あれは——太陽か。久しいな……ふむ》

感慨深い様子で空を見上げ、太陽を眩し気に眺める姿は、小さくとも威風堂々とした威厳溢れる姿をしている。

「えっと、質問よろしいでしょうか？」

《構わん。俺様が許そう。何が聞きたい。小さき者よ》

お前の方が小せえだろ。小さい小さい言いやがって……。まあなんか友好的とは言い難いけど、敵対的じゃないから話を聞こうじゃないか。周りのガネーシャファミリアの団員と、ガネーシャ様に『話が通じそうだ』というサインだけ出してから、灰色のワイバーンと向き合う。

「貴方はどちら様でしょうか？」

《……？ 誰かだと？ それは、む？ 貴様はあの時の弱き者か。なら何故覚えておらんのだ》

……弱き者？

「えっと、弱き者とは？」

《ちんけな抵抗を試みようとした、愚かで矮小な弱き者。貴様、俺様をこの身に封じる力を持ちつつも、それを自覚すらしていないのか。哀れだな》

……。

「すいません、端的に言います。貴方はインフロントドラゴンで間違いないですか？」

《イルヘエアンドヴァンドウ？ それは小さき者共が俺様を呼ぶ名だ。弱き者、お前がそう思うのならそうなのだろう。俺様に名は無い》

あははは、こいつも竜種独自の変な呼び方かよ……。いい加減にしてくれないか。

「それで、貴方は私の言う事を聞く気はありますか？」

《……弱き者、なぜ俺様がお前に従わねばならん。あの穴倉より出してくれた事には感謝してやる。だがな——お前の様な弱き者に従う気はない》

……。

《いいか、お前があの穴倉から出した事を踏まえ、今の無礼な発言は許そう》

……。

《だが、次そんなふざけたことを口にしたら》

……。

《殺すぞ、弱き者よ。俺様を従えたくば、お前の手で俺様を殺して見せろ》

ああ、くっそ。畜生、弱い弱い言いやがって。どいつもこいつも——むかつく。

「話し合いはどうなった？」

「……友好的とは言えないですね。敵対的ともいえませんが」

一度神ガネーシャの元に戻って報告。肝心のインファントドラゴンの方は円形闘技場の中央で空をジーンと眺めている。時折、《懐かしい》だとか《もう思い出せない》だとか呟いてるが。

「ふむ？… どういうことだ？」

現状を説明してみる。言う事聞かせたかったら俺様を殺して見せろつてのが端的に言い表しているが。インファントドラゴンを倒したのは、俺ではない。ベル・クラネルだ。

「なるほど……力を示さねば従わぬか。道理だな」

大体のモンスターが弱い奴に従う気はこれっぽっちも無い訳で、つまりインファントドラゴンも同様。俺がとどめを刺すなりなんなりしてりや可能性があった。だが、俺の魔法はあっけなく弾かれた訳で。

《ミウリウ・ノウシユルス。何かあったのか？》

神ガネーシャと話していると、頭の上にキューイを乗つけたヴィルヘルムがのしのしと歩いてきた。自由に動き回ってるみたいだが、大丈夫なのだろうか？

神ガネーシャ曰く、他のモンスターと違って理性的で理知的。体格や構造から出来ない事も多いが積極的に手助けをしてくれる良い竜なので自由になっているらしい。暴れられたら手に負えないが、イブリー・アチャーに絶対服従を誓っているので、彼にある程度制限してもらってはいるらしいが、それでも自由にさせすぎな気がしなくもない。

とはいえ同じ竜種として、話を通じるかもしれない。神ガネーシャに許可をもらいヴィルヘルムと少し話し込むか。

「という感じなのですが。私はどうすれば良いでしょうか？」

目の前にどっかりと腰を下ろしている深紅のワイバーンに現状を粗方説明し尽くせば、彼はゆっくりと数度頷いて口を開いた。

《竜とは、誇り高き生き物である》

本来、竜種というのは誇り高い生き物であり。他の種と比べ物にならない力と知性を宿している。ゆえに他の種族を見下す様な態度をとることが多い。

だが、竜種は決して見下している訳ではない。というよりは強き者に平伏すというのは他のモンスターと変わりはない。ただ、プライドが高いが故に、他のモンスターであれば死ぬぐらいなら従うとなるが。竜種の場合は死ぬまで認めないのだという。

竜種の調教テイムは非常に難易度が高い。理由は簡単。自分の命を奪える程の者でなければ従う気はないのだという。ただ、奪える程の者と一口に言えど、実際に奪われない限りは認めない。

つまり、自分を殺せたら従ってやるという事だ。

当然、死んだ後に忠誠を誓われてもしやらない訳で……。

ここで一つ発覚した事がある。キューイについてだ。

キューイは俺に従っている訳ではない。では、キューイと俺の関係は何かと言えば『友達』である。

友達が困っていたら助ける、友達のお願いは嫌じゃなければ聞く。嫌なら聞く気はない。シンプルでいて、わかりやすい。

キューイが俺の指示に従わないのは、面倒だったり、やりたくない事だったりする事ばかりであって、本当に危ない場面なんかになった場合には命をとして助けてくれる。

なんというか、今まで俺の指示に従うモノだと勘違いしていたが。キューイはあくまでも友達のお願いを聞いている感覚であったのだ。

此処まで言えば分かる奴も多いかもしれないが。要するにインフアントドラゴンもキューイも一度殺せば、後は従順に従ってくれるという事だ。

ただし、封印状態で殺されても決して相手は認めない。

どういふことかと言えば、『解楔き放壊て』という追加詠唱を行い、俺の付けた枷を壊して本来の力を開放した状態であれば、意味がないのだという。

枷とは何かと言えば、俺の使役状態に陥った竜種が反旗を翻した際、俺が殺されない様にする為の安全装置セーフティであり、俺が倒せる程度に

まで弱くなっているのだ。

これがあるおかげで、俺はインファントドラゴンに唐突に踏み潰されずに済んでいる訳で、なかったら……。

《私だったら迷わず殺していた》

思わずぞつとした。ヴィルヘルムはレベル4相当のワイバーンである。敵うはずもない相手の殺気に、思わず膝が笑った。

力なき者に魂を奪われている状態というのは、誇り高い竜種として許せる状態ではないとかどうか。魂を奪うって何かと、次々に疑問が生まれる。なんか面倒だが、キューイが食べたらしい。何時つていうとインファントドラゴンを倒した時。レベル1だからこれ以上食べられないらしいが、ランクアップすればレベルの数分だけ食べてあげれるとかどうかキューイが言ってた。ちよつとこの話は置いておこう。話が進まない。

だが、誇り高い竜種が大人しくしているのは穴倉から出してくれた事が大きいらしい。なければたとえ力を封じられていたとしても殺しにきていたのだという。

ともかくとし、インファントドラゴンを従える為には『本来の力を持つインファントドラゴン』を殺す必要があるらしい。無理だろそれ……。

……………。

もし、もしもあのインファントドラゴンを単独討伐すれば——
ベルに追いつけるだろうか？

第六十七話

ああ、悔しい。悔しいが俺は弱い。泣いても、喚いても、俺は弱いのだ。俺の魔法ではインファントドラゴンの鱗を貫けない。俺の剣ではそもそもインファントドラゴンに当てられない。

そりゃあ『弱き者』呼ばわりも仕方ないよなあ。

それで、納得できるかって話なんだが。

目の前、アンファイテアトルム円形闘技場の中央、観客席から見下ろされるその場所に、灰色の小竜が威風堂々とした佇まいで鎮座していた。

神ガネーシャの許可を取り封印を解除してみれば、小型犬サイズだったインファントドラゴンはみるみる大きくなり、翼が失われ、本来の姿を取り戻した。

状況は至ってシンプルだ。神ガネーシャを説き伏せて、俺はインファントドラゴンと戦うと決めた。もし、俺が死にそうになった場合は即座に周囲で警戒している団員が割って入ってくるそうだが、間に合わない可能性の方が高いときっぱり言われたし。ヴィルヘルムからは『人には誇りなんぞ無いか』等と侮蔑の言葉を頂いたが。キューイは『死にたいの？ 馬鹿なの？』と小馬鹿にされるし。

だが、それも納得ができる。

日差しの元で見ると、随分と美しい竜だ。いや、キューイもヴィルヘルムもそうだが、竜とは美しい生き物だ。誇り高く、気高い、生物としての強者。

その鱗は生半可な魔法や剣では傷一つ付けられず。その強靱な肉体は相応の力を持たねばびくともしない。知性にも満ちており、あのポンコツ気味なキューイを見ているとそうは思えないが、ヴィルヘルムを見ればそれは分かる。

あのダンジョン内で狂った様に襲い掛かってきた姿が、間違いだったのではないかと思える程に、其処に座すインファントドラゴンは美しかった。

もちろん、恐怖もある。だがその畏怖とも呼べるそれは、ただ恐ろしいのではなく、恐ろしくとも美しいという、不可思議な感想を抱くものだ。

その姿の前で、俺は震えながら立っていた。

《諦める弱き者よ。お前では俺様に敵わぬ》

その言葉に、腹の奥から湧き上がる怒りと、同時に頭に冷や水をぶっかけたかの様に冷静さに囚われる。

《もう一度言う。俺様は加減しない。お前では敵わない。それでも挑むか？》

目の前の体長4Mにも届きうる巨体。上層では破格な大きさを持つそいつだが、下層ではワイバーンであるヴィルヘルムに追いつかれる程度の大きさでしかない。能力もヴィルヘルムには遠く届かないはずなのだが、それは何の慰めにもならない。俺より強大なのは変わらないからだ。

それでも、俺がこいつを倒せなくては——ベルに追いつけない。

「ご心配どうもありがとうございます。ですが、その心配は不要です」
できる限り強がり口にする。足は震えるし、魔法が通用するかどうかもわからない。それでも、此処を突破しなくては、いけない。

無論、無茶なのはわかる。だが、それでもしなければならぬ。いや、したい。此処でこいつをぶっ倒して、俺もベルに追いつけるのだと証明したい。言ってしまうえば我儘な訳で。

《愚かなる者よ。良いだろう、加減は無用だ。この俺様を——殺してみせよ》

そういうと、インファントドラゴンはゆっくりとした動きで姿勢を落とす。この動きは知っている。あのとびかかり攻撃だ。だが——今回は前とは一味違う。今回は——ちよつと魔法を変えてみる。

『ピストル・マジック』っ！

想像したのは、カンピピストレと呼ばれる拳銃。正式名称は『ワルサー・カンピピストレ』と呼ばれる『戦闘拳銃』だ。

簡単に言うると拳銃型の小型榴弾発射器である。装弾数はたったの

一発、単発装弾式だ。そう、30発マガジンをたった1発に込めるっていう想像を行う。これなら、可能性があるのではないだろうか。

インファントドラゴンはゆっくりとした動きをしている。まるで此方を嘗め腐ったかの様な——違う。完全に嘗めてるのだ。そうでなきやあんなゆっくりとした動きはしやしない。

馬鹿にしやがって。今に見てろ、泡吹かせてやる。

『リロード』っ!!』

想像するのは26・6mm対戦車榴弾。たかが14・5mm程度しかないライフル弾なんて目じゃない。

イメージを込められるだけ込めた影響か、刀身側部に現れた結晶体はバチバチと放電している。まるで電磁砲レールガンを彷彿させる姿ではないか。

目の前のインファントドラゴンは未だに姿勢を低くしたまま、こちらの様子を伺っている。嘗めるな、此处でそのきれいな顔を吹っ飛ばしてやるっ!

『ファイア』っ!!』

ボシュツと気の抜ける様な音と共に、弾丸とは思えない程巨大な小さな砲弾じみた光の塊がインファントドラゴンの頭めがけて一直線に飛ぶ。目を細め、その様子を眺めるインファントドラゴン。回避する気は一切無いらしい。

キューイとヴィルヘルムの言った通りだ。インファントドラゴンは誇り高いが故に、弱者の攻撃を回避しない。つまり驕ってるって事だ。その思い上がりも此処までだ、吹っ飛ば。

まっすぐ、若干放物線を描き、飛翔する榴弾は、狙い違わずインファントドラゴンの眉間にぶち当たり。凄まじい爆発音を響かせた。爆炎が巻き起こり、次の瞬間には爆風で土が舞い上がり視界を塞ぐ。

どうだ、この威力ならお前の驕り切った顔を吹っ飛ばして——

《この程度か》

ははっ……嘘だ——土煙が吹き荒れ、次の瞬間には目の前にインファントドラゴンの手があった。後ろに下がる? 足が竦んで動かない。助けを求める? もう遅すぎる。このまま、潰され——

意識を失っていたのは、数秒か、数分か。周囲から聞こえるガネーシヤファミアリアの団員の呼びかけで、うつすらと意識が覚醒する。

大丈夫か、無事か、等と叫ぶ声が聞こえる。体にのしかかる圧迫感に息が詰まり、なんとか目を開ければ——目の前にインファントドラゴンの顔があった。

竜の吐息が顔全体あたり、生物特有の生臭さの残る吐息に咽かけ、自身がインファントドラゴンの右足の下敷きになっているのに気が付いて息を呑んだ。

《死んでいないな？ 殺さずに居るのは加減が難しい。言っただろう、お前では敵わぬと》

なんで、殺されていけない。体は、絶妙に動けない程度に押さえつけられていて身動きができない。

《貴様が死ねば、俺様はまたあの穴倉へと戻る羽目になる。それは気に食わん》

なるほど、彼の魂を捕えている俺が死ねば、こいつはあのダンジョンに戻る訳か。なんでそうなるのかは知らんし、どうせ答える気もないんだろう。というか、効果なかったのか。

《愚か者よ。俺様が貴様を守ってやろう》

——は？

《貴様は弱い。弱過ぎる。お前が死ねば、俺様はあの場所へと戻るのだ。だというのに》

何を言ってるんだこいつは。

《貴様が死なぬ様、俺様が守ってやると言っているのだ。意味は理解できるだろう？》

それは……。

こいつの言いたい事は、つまるところこいつがあのだんジョンに戻らなくても良い様に、危機から俺を守ってくれろという話。無論、俺にとって都合の良い条件ではない。簡単に言えば飼いの殺しにされる。

わざわざ危険なダンジョンに潜る？ そんな事はさせない。安全

な場所で、危険の無い場所で、危険をすべて排除し、純粹培養する様に、俺を生かしてくれる。

もし、此処で頷くなら、そうしてやる。そんな風に言われた。

《それでも、まだ挑む気があるのならその時は——》

押し掛かる重さが急激に増していく。ギリギリとした音から、ミシリシリと骨の軋む音へ変わっていく。圧迫感で息が詰まり、呼吸ができない。顔に当たるインファントドラゴンの吐息と、目の前に迫る顎。

至近距離、キスすら出来る様な距離で、まっすぐに向けられる殺気。吐き気を催し、押さえつけられていて吐くこともできない。苦しさと、圧迫されて血流が悪くなっているのか視界が暗くなっていく。

《——次は確実に殺す。一思いに食い殺してやる》

糞が、なんでこんなに俺は——弱いんだよ。

目を覚ますと、神ガネーシャが腕組をしていた。場所は、円形闘技場の医務室。

あの時、ガネーシャファミリアの団員は、完全に間に合わなかったらしい。インファントドラゴンの予想外の動きの所為で、などと言っていた。

どうやら、インファントドラゴンが跳躍によって攻撃するのは珍しいらしい。

「それで、此方で責任をもって始末するのも構わないぞ。その代わりに、あのインファントドラゴンはもう呼び出さないと誓ってくれないだろうか」

制御できないのであれば始末せざるをえない。危険すぎるのだ。

あのインファントドラゴンがオラリオ内部で暴れまわれば、第一級冒険者が到着するまでに、どれ程の被害がでるのか。

今はあの中央の舞台の上で大人しく空を見上げているが、いつ暴れだすのかもわからない。

「神ガネーシャ……」

「あとはこの俺、ガネーシャに任せておけ」

だからこそ、ガネーシャファミリアの団員に手伝ってもらわなければならないだろう。

だが、それでいいのか？ 確かに、勝てないだろう。少なくとも、俺の打てる手は全部打ち切った。其の上で勝てないのなら、もう諦める他無いだろう。

それに、あと本の少しの偉業のエクセリアについては、別の機会を探せばいい。小指の先程足りないだけなのだから、その機会に巡り合えるまで、もう少し自分を鍛えれば、それで……いい。

「キュイキュイ？ キュイ」

勝てないってわかった？ それが普通だよ。

ベッドに腰掛けて悩んでいれば、キュイがローブの裾から這い上がってきて小馬鹿にした様に言い放った。

それが、普通かあ。そうだよなあ。

普通ならインファントドラゴンレベル2冒険者がパーティを組んで討伐するモンスターで。

普通なら単独討伐を目指すならレベル3以上のステイタスが必要で。

普通ならレベル1の駆け出し魔法使い如きがソロで戦う相手じゃない。

普通ならそれでいいのだろう。

でも、追いつきたい相手が普通じゃなければ？

普通ならミノタウロスはレベル2冒険者も避けて通る様なモンスター。

普通なら強化種になったモンスターは第一級冒険者でも手間取る事がある。

普通なら駆け出しが二人集まった程度で、強化種のミノタウロスは倒せない。

ほら見てみる。俺が追い付きたい、相手は、普通なんて範疇に居な

い。

「普通じゃ、ダメですよ」

「……少し、席を外そう。今は監視に留めておく。もし決めたのなら、声をかけてくれ」

気を利かせてくれたのか。神ガネーシヤが部屋を出て行き、見守ってくれていた団員の人も廊下で待機しているから何かあれば声をかけてくれと言つて部屋を出て行った。

残っているのは俺と、キューイの一人と一匹。

「キューイキューイ」

何を悩んでるの？ か。

「インフアントドラゴンは、私を飼い殺しにしたいそうです」

俺が死ねば、ダンジョンに逆戻りになる。それは嫌だから、安全な場所で、檻に入れて、水と餌を与え、生きてるだけで構わないと。安全は確保してやる。水と餌も確保してやる。病気になるい様に面倒も見てやる。

完全に、此方を格下としてしか見ていない、そんな提案。

嫌に決まつてるだろ。でも、それに抗える程の力は、無い。

「キューイキューイ？ キューイキューイ」

そうなんだ。それで、従うの？ 従わないなら頑張らなきゃね。つて、簡単に言うなこいつは。

「そんな簡単に頑張つて済む問題じゃないですよ。どうすれば……勝てるんですか」

「キューイ？ キューイキューイ？ キューイ」

勝つ？ 安全な場所から見下ろしてる癖に？ 戦つても居ない癖に勝てる訳ないじゃん。つて、こいつは――

「私が戦つていないと？」

そっだよ
「キューイ」

速攻で肯定しやがった。ふざけんな、さつき俺は死にかけて――

「だつて、グヌアセへミスアが守ってくれる場所に居たでしょ
キューイ、キューイ キューイ」

「そんなんだから殺す価値もないって思われてるよ」
「キュイ キュイ」

もし本気で勝ちたいならまずは闘いの場に出ないと
「キュイキュイ、キュイ」

。――
「言いたい事は、理解できた。」

インファントドラゴンが最後の一線を越えなかったのも、多分それが理由。俺は本気で殺し合う事も出来ない愚か者だった訳だ。

何せ、ガネーシヤファミアリアが死にそうになったら助けてくれるっていう安全な場所に隠れながら闘おうなんてふざけたことを抜かしたのだから。

だが、もしその条件がなければ。俺は死んでいただろう。

「無理でしょう。だって、私の攻撃は彼に通じませんし」

「キュイ？」

なんでって、意味わかんないよ。勝てないよ、攻撃が通じないんだぞ。どうすりゃいいんだよ……。

「キュイキュイ？」

追いつきたくないの？ 追いつきたいに決まってるんだろ。どうしろってんだよ……。

「キュイ？ キュイ？ キュイキュイ？」

本気で闘う気はある？ 無理だから諦める？ ミリアはどうしたいの？

俺は――ある。本気で、追いつきたいから、追いつくために戦う必要があるなら。戦おう。

「でも、攻撃が通じないのに、本気で戦っても死ぬだけでは？」

「キュイ？ キュイキュイ」

え？ そんなの知らないよ。ってこいつは、発破だけかけて後は放置かよ……。

「キュイ、キュイキュイ。キュイ」

そういえば、あの時不味そうな虫を一撃で吹っ飛ばした技。使わないの？

不味そうな虫？

「本気で言っているのか？」

「はい」

神ガネーシャは目の前で見上げてくる金髪のパルウムの少女、ミア・ノースリスの言った言葉が信じられずに再三の問いかけを投げかける。返答は全く同じモノであった。

「次、私が戦う際には——ガネーシャファミリアの補助は必要ありません」

ミア・ノースリスが危機的状況に陥った場合、円形闘技場の中央広間を等間隔で囲っているガネーシャファミリアの精鋭がミア・ノースリスを助ける。そういった条件を以てしての戦闘は許可した。もし彼女が死ねば神ヘステイアを悲しませることになる。それを避ける為の最低限の条件。

その条件を変更してほしいと、ミア・ノースリスから提案してきた。

もし自分が死にそうになっても、助ける必要はない。むしろインフアントドラゴンに殺させて欲しいと。

「……許可できない」

「お願いします」

頭を下げる彼女の姿に言葉を失い、すぐに彼女を見下ろして神威を放つてもう一度よく聞こえる様に言い放つ。

「許可は、出来ない」

「お願いします」

神威を受けてなお、怯みもせずと言い放つその姿に心が揺らぐ。だが、神ガネーシャは此処でミア・ノースリスに許可を出すわけにはいかないのだ。

「神ヘステイアから、ミア・ノースリスの身の安全を確保した上で協力するという契約になっている。先程の戦闘も、我がファミリアの精鋭が見守る中で行うからこそ、許可を出したのであってだな」

「神ガネーシャ。あの方法ではインフアントドラゴンは私を認めませ

ん」

他の、強い者に守られたまま。危機的状況に陥ったら助けてもらえるなんて甘ったれた状況で、彼を倒せたとしても、決して彼はそれを認めない。認めるわけにはいかない。だからこそ、此処で、ミリア・ノースリス一人の力で倒す必要がある。当然、負ければ死を意味する事である。

「ミリア・ノースリス。もう一度言う。それは出来ない」

「……お願いします」

神ガネーシャは思わず腕組をし、深々と吐息を零した。

目の前で頭を下げる彼女の固い決意は、どれだけ言葉をぶつけても決して揺るがないだろう。それがわかる為に、ここで許可を出したいという思いもある。

もし、もしも彼女が自身の眷属であったのなら。迷わず許可を出しただろう。それ程までに彼女は固い決意を抱いている。だが、彼女は決して自身の眷属ではない。神へステイアから借り受けているという扱いなのだ。

「……ミリア・ノースリス。お前が死ねば神へステイアが悲しむぞ」

「……お願いします」

「……ここでの話だ。この俺、ガネーシャも、最近眷属を失った」

「……お願いします」

「ああ、お前も知っているだろう。彼女、キューイの世話役として紹介した彼だ」

「……お願いします」

「名を、ハシャーナ・ドルリアと言ってだな」

「……っ」

「ここだけの話だ。泣いたさ」

団員を失う悲しみを味わうには、神へステイアは早すぎる。

「神へステイアを、泣かせる積りか」

「……」

彼女が、顔を上げた。その表情を見て、確信した。神へステイアへ

頭を下げねばならぬと。

円形闘技場中央部、周囲三百六十度全てから均等に見下ろせるど派手な舞台。

観客数は、神が一人、護衛が三人とそしてワイバーンが1匹。中央に立つ主役は灰色の鱗を日の光で輝かせる一匹の小竜。

挑む参加者は、ローブ姿に右手に赤色の皮手袋。左手に竜鱗の朱手甲。手には右手に剣、左手に杖という変則型。小さい体軀はヒューマンで言えば4〜5歳程でしかないパルウムの少女。

頭には緋色の幼竜を乗せ、不敵な表情を浮かべて主役の前に立つ。「貴方に闘いを申し込みます」

日の光を思う存分浴び、日光浴と洒落込んでいたインファントドラゴンも、周囲で見張っていた人間達が訝しげな表情をしながらも引いて行ったのを見ていたが故に、彼女、ミア・ノースリスのこれから行う宣言についても理解している。其の上で、彼はゆつくりとした動きでミア・ノースリスを見下ろして言葉を放つ。

《今度は、安全な場所はないぞ。どこかに隠れている者に助けて貰おう等と考えているのなら。やめておけ、次は殺すと言ったはずだ》
「いえ、次の勝負は本気の闘いになりますので」

優雅に一礼し、怯む事なく堂々と胸を張りたたずむ姿を見せるミアに、彼は首を横に振る。

《無礼を許せ。本気でくるのだな》

「此方も、先程の非礼を詫びましょう。ごめんなさい」

インファントドラゴンは目礼を、ミア・ノースリスは深々とした礼を、互いに謝罪を交わし合い。顔を上げる。

《それで、本気で闘う積りなのだ。ならば、敗北は死と知れ》

「構いません。私が負けたら、どうぞ殺してください。ただ、——
死ぬまで負けじゃないですけどね」

不敵な笑みと共に、ミア・ノースリスが腰を落とす。

今度は、合図は無い。既に闘いは始まっている。油断なく、けれど

も大胆に、インフアアントドラゴンは悠長に構える。強者故の驕りを以て、目の前の弱き者を見下し。そして挑戦者へと殺意を向けた。

神ガネーシヤに頭を下げ、土下座する勢いで頼み込み。この場を用意した。

目の前には灰色の小竜。その小竜ですら、俺を一飲みにできるぐらいに大きい。普通の竜がどの程度の大きさなのか考えたくないぐらいだ。だが、今考えるのは目の前の敵を倒す事だけ。

次、負ければ。死ぬ。だが、宣言した通りだ。死ぬまで負けじゃない。

そして、このインフアアントドラゴンは、強者故の驕りを持っている。むしろ強いからこそ驕らねばならない。

弱者相手に全力を出す。獅子は兎を捕えるにも全力を尽くす。簡単な事にも手を抜かないなんてことわざがあるが、竜にはそれが通じない。強いのだから、驕れ、それが竜の在り方である。

そして、その在り方が許される程の強者なのが竜という生き物、らしい。キューイ曰く。

簡単な話だ、このインフアアントドラゴンは、必ず初手を譲ってくれ。そして初手の攻撃を回避しない。

弱者の攻撃を真正面から受け止め、砕き、そして反撃にて一撃にて屠る。その在り方こそが、竜の誇りなのだ。

人にとつてはくだらない誇りだが、その誇りの在り方が馬鹿に出来ない程に人は弱い。馬鹿にしたいのであれば、その初手で竜を殺して見せろという話である。力ない犬ところが吠えた所で、ただの負け犬の遠吠えでしかないという事である。

なら、其処を全力で突かせて貰おうじゃないか。弱者と、愚か者と罵られる程度の雑魚でしかない俺でも、竜に届きうる力を持っていると、此処で証明すればいい。

『ピストル・マジック』

想像するのは、先程も失敗したキャンプ・ピストル。26.6mmの榴

弾を単発発射する頑丈な機構。ただ頑丈さだけを想像しておく。これからやる事がどれ程の無茶なのか。考えたくもない。いや、考えるだけ無駄だ。

『リロード』

想像するのは26.6mm対戦車榴弾の弾頭部分。しつかりとイメージを固め、強靱な弾頭を生み出す。爆発の威力もさつきよりマシンで。

さて、此処からが勝負の決め所である。失敗は、死を意味する。

『リロード』

二度目の装填。

これに気付いたのはついさっきだ。モンスターファイリア怪物祭でのモンスター逃亡事件の際。俺は子供を救う際に、中層のモンスターである虫っぽい奴の上半身を消し飛ばす様な威力の魔法をぶっ放した。

あの威力を考えると、今の魔法の威力はだいぶ低いのではないか？

あの時、どうやって俺は威力を引き上げたのか。考えてみれば単純な話であった。

あの時、俺は二連続でリロードを重ね掛けた。

『ショットガン・マジック』から『リロード』して、一度解除。マジンは装填されたままの所に『ピストル・マジック』からさらに『リロード』を重ねたのだ。その結果中層のモンスターの上半身を消し飛ばす威力になった。

だとするのなら、もし、もしも俺の想定が正解だというのなら。マジン三つ分をたった一発の榴弾に込めたらどうなるのか？ その答え合わせを、今から行う訳だ。

右手に持つ剣から、盛大に火花が散りだす。バチバチイツという異音と共に、剣に罅が入った。キューイの血によって魔法の媒体にまで昇華された剣でも、込められた魔力の量に耐え切れならしい。だが、後一マジン捻じ込む積りなのだ。もう少し耐えてくれ。

「キューイッー」

キューイが、周りに血をまき散らし始める。キューイの血が俺の手や剣、足元にぶちまけられ、ぶちまけられた瞬間に魔力に反応して発

光しだす。疑似的な魔法陣の様に、歪な円形の血で描かれた魔法陣が俺を中心に出来上がる。さて、もう一マガジン捻じ込もうか。

『リロー……ド』っ！』

マガジンを捻じ込む事には成功した。したが、一瞬で視界が歪む。ぐにやぐにやと揺れる視界の中、手の中で風船が破裂しかけているかのような、不可思議な感触。溢れ出る水を必死にせき止めようと意識を其方に向けようとして、すんと膝が落ちた。インファントドラゴンの方に向けていたはずの剣は、いつの間にか地面とキスしている。なんとか銃口をインファントドラゴンに向けなくてはいけないのに。

腕の中で暴れ狂う様な魔力の奔流を大人しくさせるので手一杯で、視界もぐにやぐにやと歪んでいてそもそも狙いも付けられなくて、ほんの少しだけ魔力が漏れたなと感じた瞬間に、左肩から血が噴き出した。服の中がどうなっているのかわからないが、体が勝手に裂けて裂傷ができたともいえるのか。ローブが真っ赤に染まっていく。

『キユイ』っ』

キユイの『レッサーヒール』によって傷が癒える。次の瞬間、超至近距離で火柱が上がった。漏れ出た魔力が暴走し始めている。制御しなくてはならない。

右足が直撃したのか、じゅうじゅうと焼ける音を立てて右足が激痛を訴えてくる。キユイが回復魔法で癒してくれるが、回復量が足りていない。

コヒユウという不思議な音と共に、足元が凍り付いていく。漏れ出した魔力が無差別に炎になったり、凍り付かせたり、風の刃となったり。気が付けば俺を中心に無差別な魔法の嵐が発生していた。

炎が瞬き、氷が飛翔し、風が刃となり、大地が隆起する。まるで天変地異のさなかに囚われたかのような感覚だが、腕の中で抱えきれなかった魔力が減った事で制御できるようになってきた。

だが、こんな魔力量の榴弾ではだめだ。レベル差二つを乗り越えるには、足りない。

『リ……ロー……ド』

もう一度、ニマガジン分にまで減ってしまった所に、マガジンをもう一つ捻じ込む。魔力を制御しろ。その上で狙いを定めろ。ちゃんと立て。

無茶苦茶言ってる。並行詠唱の難しきっていうのは、多分これの事だ。今すぐにもイグニスファトウスしそうならいに暴れまわる魔力を抑えながら、狙いを定めなくてはならない。

まるで荒れ狂う波の中で、針に糸を通しながら、狙撃を成功させろと言っている様な感覚。だが、成功しなけりや、死が待っている。

《……愚かな、自滅で終わる積りか》

声が聞こえる。ちよつと待ってる、今このじゃじゃ馬な魔力を抑え込んで、テメエにぶつけてやる。さんざん弱いだのなんだの好き勝手言いやがって。

《……哀れな。仕方がない。このまま自滅されても面白くない》

うるさいつつつてんだろ。黙ってる。今お前にプレゼントしてやるからな。いや、黙るな。何処に居るのか見えないんだよ。歪む視界の所為で狙いが定まらない。ゆつくりと腕を持ち上げて——魔力が漏れ出て火柱になってしまった。もう一度リロードしなくては。

《俺様が殺す前に、死にそうではないか。はあ、もういい今殺してやる》

ずしりと、歪む視界の中で巨体が動いているのが見えた。其処に居たのか。わかるぞ、其処に居るんだな。よしもう一マガジン捻じ込んで、魔力が漏れ切る前に、ぶち込まなくては。

《……哀れなる者よ、此処で死ぬ》

『リロード……っ!!』

早く引き金を引け。また魔力が零れ落ちた。風の刃が俺の体を傷つける。馬鹿野郎、額でも切れたのか血の所為で前が見えない。これじゃ狙いが定まらない。もともとぐにやぐにやの歪む視界だ、大した違いはない。

ずんつと跳躍する音、此方に向かってくる大質量の物体。感じた、このままだと潰されると。けれども、それでいい。もう狙いなんてつける事が出来ない。だから、とりあえず腕を持ち上げて、その質量の

方に向けたまま、一気にマガジンを捻じ込んで、引き金を引こう。
其処に居るのか？ 今プレゼントしてやるから、ちゃんと俺の方に
跳んで来いよ。

『ファイア』ッ

硬質な金属の弾ける音と共に、巨大な光の玉が射出され——目の
前に迫ってきていたインファントドラゴンの口の中にぶち込まれ
た。

爆発、衝撃。吹き飛んで——意識を失った。

第六十八話

さて、まずは何を話すべきだろうか。

あの魔力の過剰充填による決死の一撃は、ちゃんとインフアントドラゴンを仕留めた。

其の上で俺は死にかけた。インフアントドラゴンを「過剰な魔力を込めた一撃」で仕留めた際、俺は瀕死の重傷を負った。というか半分死んでたらしい。

俺の状態を端的に言うくと、裂傷、打撲、火傷、凍傷、骨折、e t c. 人類が今まで負ってきた怪我の種類を全部網羅する勢いの数の怪我の数々。当然、それぞれの怪我に対する治療行為を行わなくてはならない訳で、エリクサーで一発解決じゃね？ と軽く考えていたが、どうもそうはならなかったらしい。

特に酷かったのが魔力による自損、体内組織の半分が機能不全状態がどうのこうの。つまり死んでたって事だ。

詳しくは知らん。ディアンケヒトファミリアのアミッドさんが全部なんとかしてくれた。らしい？

状況を説明すると、俺が瀕死の重傷を負った直後、ガネーシャファミリアの団員が最低限の応急処置を済ませて医療関係のファミリアに俺を担ぎこもうとしていたのだが、其処にちょうど神ディアンケヒトとアミッド・テアナサーレが神ガネーシャに話をつける為に訪ねてきたらしい。

話の内容は当然『竜ドラゴンを従テイマえる者との対話について』。まあ、簡単に言うると本拠訪ねたら円形闘技場アンファイテアトルムにて調教訓練をしていて不在だと告げられたので、わざわざ円形闘技場アンファイテアトルムまで出向いてきたらしい。

結果として、俺はその場で即座に治療を施された。

アミッド・テアナサーレはディアンケヒトファミリア製の薬品類を一式持ってきていたらしい。

今まで、回復薬ポーションも精神力回復特效薬マジック・ポーションもどちらもミアハファミリアと取引しており、ディアンケヒトファミリアを利用してこなかった。

其の為、ディアンケヒトファミリアの顧客リストに俺の名がない事

に気付いたアミッドという人物は、俺に対して自分のファミリアの取り扱う薬品類を手渡し、使用して貰う事でディアンケヒトファミリアの薬品を売り込んで竜の素材の取引契約をディアンケヒトファミリアと結んで貰おうと思っただけらしい。

そのための薬品一式は、俺の命を救うのに大層役にたったそうなの……ディアンケヒトファミリアに借りが出来てしまった訳で。

まあ、他にもいろいろである。神ガネーシャの説教、ヘステイア様の涙、ベルとヴェルフが俺が死んだと誤認した事、アンフィテートルム円形闘技場の破損、魔法発動時の騒音によるオラリオの住人の混乱、e t c.

一つ一つ、話していくと長くなるだろう。俺の起こした騒動は、まあ色々あり過ぎてまとめきれない。

まずは息を吹き返した俺に対する神ガネーシャの説教。神妙な面持ちでやってきた神ガネーシャは開口一番でこういった『ファミリア・ノースリス。見事な一撃だった』とお褒めの言葉を頂き。その後、説教である。

神ヘステイアを悲しませるなとかどうか。めちやくちや怒られた。怒ると怖い神なんだと実感したし。

次いでヘステイア様。俺が半分死んでいた事で、ファルナの繋がりが立ち消えかけて、ダンジョン内で危機的状况に陥っているのではなにかと勘違いしたヘファイストスファミリアでバイト中だったヘステイア様が、神ヘファイストスに泣きついて、主戦力が居ないからと拒否され、神ガネーシャの所まで泣きながらやってきた。んで俺が神ガネーシャからの説教を聞き終えた所にヘステイア様が飛び込んできて、一連の流れを聞いて泣き出した。それから泣きながら説教された。普通に、一番効いた……うん、まあ……本当に申し訳ない事をしたと思う。

んでヴェルフとベル。どうにも神ヘファイストスが違和感を覚えてヴェルフの工房に顔を出したらしい。というのも神ヘファイストスはヴェルフがベルと俺と共にパーティを組んでいたのを知っており、ヴェルフが工房でベル・クラネルと共にいる姿を見た団員達からの報告で、ヴェルフがダンジョンに行っていないのを知っていたと。

んでヴェルフとベルが工房で色々と装備新調を行っている所に神へフアイストスがやってきて『ミリア・ノースリスが死にかけてるみたいだけど、何処に行つたのか知っているかしら?』と質問を飛ばしたと。

慌てた二人は大急ぎでギルドに顔をだしてエイナさんに俺の居場所を聞くとエイナさんは当然知らず、最後にダンジョン前で別れた事からダンジョン内に行つたのではとダンジョンに向かつて、見つからずに『ミリアを見つけられなかった』と嘆きながらダンジョンから出てきた所をガネーシャファミアリアの団員が見つけて事情を聴いてこつちに來たと。既に死んだと思つていたらしく二人ともめちやくちや慌ててた。リリも来てくれたが『二人ともつと落ち着いて行動してください。そしてミリア様はもつと自愛の心を持つてください』と呆れ返つていた。

他にも俺の使つた魔法の一撃でアンファイテートルム円形闘技場が一部損壊し、修理費として600万ヴァリスの請求があり、そのうちの半分をガネーシャ様が支払つてくれたりだとか。

神ガネーシャ曰く『流石に半分しか出せない』との事なんだが、全額こつちで払うといつても聞き入れて貰えなかった。『この俺、ガネーシャが許可を出した事だ。むしろ半分しか出せない事について申し訳なく思つている』だとさ。うん、良い神過ぎて顔を合わせづらい……。

それからあの一撃が引き起こした騒動があつた。簡単に言うと、アンファイテートルム円形闘技場で爆発にも近い轟音の発生により、街中で色々な騒動が起きてギルドから嚴重注意処分が下される事に。ガネーシャファミアリアが、である。これについては流石に俺が責任をとらないとだろうと思つたが、もともとアンファイテートルム円形闘技場の貸出申請についてはガネーシャファミアリアが行つていた事。元の予定から外れた行動をとつたのもガネーシャファミアリアである。つまり責任はガネーシャファミアリアにあると……。

神ガネーシャは『気にするな、この俺ガネーシャに全て任せておけ』と胸を張つていたんだが。本当に申し訳なさすぎる。

様々な事があったが。とりあえずは俺は生きていて、インファントドラゴンを従える事には成功した。

「全く、ミリア君も無茶をし過ぎだよ。どれだけ心配したと思っっているのさ」

「本当にごめんなさい」

ガネーシャファミアリアの本拠の一室。客室として用意された部屋のベッドの上で土下座をして謝る。目の前にはヘステイア様。そして同室のテーブルを囲むベル、ヴェルフ、リリの三人。

神ガネーシャや団員は俺の起こした騒動の火消しをしている。俺も手伝いたいがアミッド・テアナサーレから『今日一日は絶対安静、ベッドの上から動く事は禁止。食事、薬は他の人に世話になるように』だとき。下の世話とか前世でもして貰った事無いよ……。

結局、ヴェルフにも俺が竜ドラゴンを従える者である事を説明する羽目になったし。とりあえず今回の行動は本当に軽率過ぎたと猛省する所存にございます。神様に下の世話させる阿呆とか俺が世界で初めてじゃね？ 死にたい。

「はあ、ミリア様はもう少し考えて動ける方だと思っただけなのですが」
「ははは、生きてたならよかつたじゃないか」

「ヴェルフ様、そんな風に甘やかしていたらミリア様はまたどこかでやらかしますよ」

「それはー、僕もそう思うかな。ミリア、一人で無茶しちやダメだよ」
俺の評価が下がっていく……。無茶の代償だね。もういろいろと大事な物も含めてなんかなくしてしまった気がする。

「ガネーシャにも沢山迷惑をかけたし。ディアンケヒトの所にも世話になっちゃったんだらう？」

そうだよ。神ガネーシャには返しきれない恩が出来てしまった。神ディアンケヒトの方はノーコメント、といきたいが俺の命を救ってくれた事に代わりはなく、一週間後にファミアリアの本拠を訪ねる約束が取り決められた。俺の意識がない間である。まあ、命救っても

らっつておいて断るとかできんよなあ?」

「それで、結局ランクアップはできたのですか?」

「あー、まだ更新してないのでなんとも」

「むしろそれだけでかしといてランクアップできなかつたつてなつたら流石に不味くないか?」

「……………不吉な事言わないでくれませんかね?」

「こんだけ盛大にやらかしておいて『ランクアップできなかつたよ(てへぺろ☆)』なんてやったら普通に殺されても文句言えんだろ。……………ランクアップできるよな?」

「まあ、それも今から更新すればわかりますし」

「更新するのかい?」

「しちゃだめですか…………?」

「絶対安静なんだから今日は大人しくしていなよ。ガネーシャも今日は宿泊を許可してくれたし」

ええ……………。

「そんな悲しそうな顔しないでくれ……………はあ、じゃあもしランクアップしてもランクアップ更新は行わない。通常の更新のみだけやるっていうならいいよ」

やったー!

「……………ミリアちゃん、何か良いことでもあった?」

ギルドに顔を出せば開口一番でエイナさんにそう尋ねられた。ただし、般若の様な表情で、であるが。

結果として、俺はちゃんとランクアップできる状態であった。其のことがうれしくてうれしくて、とりあえずヴェルフやリリ、ベル、ヘステイア様なんかにどれだけ嬉しいかを語った。それで鬱陶しがられた。

『流石に浮かれすぎだろ』とか『ミリア様、その話は十五回目です』だとか『あはは、アイズさんの話をしてる僕ってこんな感じなのか…………』とか『ミリア君、いい加減寝ないと怒るよ』とか言われた。う

ん、わかっているけど嬉しすぎてね？

で、次の日には動いていい許可が出たのでエイナさんに自慢しに来たわけだよ。まあ、結果はお察しというかなんというか。

「また、無茶したの？」

あつ、はい。絶賛説教中。個室に連れ込まれるのはベルだけだと思ってた。個室、エイナさんと二人きり、エッチな事が……

「ミリアちゃん？ 何を考えているのかな？」

ごめんなさい、ちゃんと説教は聞くんて許してください……。

神ガネーシャにも昨日説教を食らって、ヘスティア様から泣きながら説教を食らい。エイナさんは本気の説教である。どうやら昨日の一件についてギルドにも説明が届いたらしい。ガネーシャファミリアの謝罪文。円形闘技場の一部損壊。昼間に発生した地上での規模の大きな魔法の発動。

その関係に俺が関与しているのはどうやらバレている。というか、昨日の一連の流れの中でディアンケヒトファミリアがかかわったのがまずかつたらしい？

どうにもドラゴンタイマーの正体が既にオラリオ中に広まっている。神ディアンケヒトが神ミアハに『我がファミリアは件のドラゴンタイマーと取引が決まった』と自慢しにいつてー、神ミアハが『ミリアはディアンケヒトの所と取引をするのか。ディアンケヒトの所ならあの素材の効力を正しく引き出せるだろう。うむ、良い事だ』と受け流してー。

その後、ミアハファミリアとドラゴンタイマーが取引していたのがバレてどうの。

結果としてヘスティアファミリアのミリア・ノースリスⅡドラゴンタイマーの構図が広まったらしい。それとランクアップの話も広がってるっぽい？ こっちについては神ガネーシャが早急に『ランクアップ可能なら即座に更新してくれ』と要請してきたわけだが。

所属ファミリアが割れて、ついでに其のファミリアが最短記録を大幅に塗り替えたベル・クラネルの所属と同等。そして竜を従えるという他にない特徴を持つ上、あの強大な一撃も放てるとなると、神々が

押しかけてくるだろうとの事。

今日、明日は平気でも、明後日以降は完全に裏取りを済ませたファミリアの主神が訪ねてくるだろうし、もしランクアップが真実だと知れ渡れば数多くの冒険者がヘステイアの眷属になりたがる。

まあ、当然つちや当然の話か。なんとたつて1か月半でのランクアップと、その数日後にもう一人ランクアップ者を出したファミリア。同じファミリアに所属しており、人数は二人のみ。その二人があり得ないぐらい早いランクアップかませば、ファミリアの方に押しかける冒険者もいるよなあ。

「わかった?」

「わかりました。ご心配おかけして申し訳ありませんでした」

「わかった? 何が? なんて返したら再度説教が初めからになってしまう。そんなの冗談ではない。」

「はあ……まったく、ベル君もミリアちゃんも無茶すぎっ! 特にミリアちゃん、インファントドラゴンと戦うなんて……ミノタウロスの時とは事情が違い過ぎるよ」

……。あの場で、逃げる事が出来なかった強化種のミノタウロスに対し、今回のインファントドラゴンは、無理に戦う必要はなかった。それはその通りである。その通りなんだが、俺が納得できなかつた。「……ミリアちゃんは、いつか無茶して死んじゃいそうだから、怖いわ」

「大丈夫ですよ。そうやすやすと死ぬつもりはありませんって」

「本当にわかってているのかしら」

わかってるさ。とりあえずはランクアップもして焦りは、薄れた。無くなつた訳ではないが、それでもランクアップで心に余裕もできるというもんだ。つまり問題はない。のーぷろぶれむってやつだよ? 本当だよ?

「それで、ミリアちゃんも発展アビリティが三つとか言わないよね?」

「……………」

「ミリアちゃん?」

人が、気にしている所をぶつ刺してきやがつた……。

「《魔導》が出ましたね」

「へえ、《魔導》かあ。魔法使うミリアちゃんにはぴったりね。他には？」

「……ないですよ？」

発展アビリティは、一つだけ。ベルは三つも発現したのに、俺は一つだけだった。正直、もつと、こう、俺にはなにか才能があるもんだと思ってたが、違うらしい。

いや、発展アビリティ一つとはいえ、魔法使い垂涎物の《魔導》がただだけでも、十二分に過ぎる事である。

それでもなあ……。

いや、やっぱまだ焦りはある。ベルの才能に嫉妬する訳じゃあないが、それでも追いつくのかかる苦労がどれ程のものか想像できないくらいには。

「ミリアちゃん、もう無茶しないでね？」

………。出来ない約束だなあ。ヘステイア様にも直接伝えただけ。それは出来ない約束だ。

必要とあらば、無理を通そう。道理を引つ込ませよう。そうしなきゃ、ベルに追いつけないだろうし。其の上で約束しよう。

「大丈夫です。絶対に死にませんので」

死なない。無茶もする、無理もしよう、その上で約束する。俺は絶対に死なない。必ず帰ってくるし、必ず『ただいま』と口にする。

第六十九話

「ち、力が溢れてくるっ!! なんて事を想像してたのかい?」

背後で押揃ってくるヘステイア様を見上げて頷く。むしろそうはならないのか? 正直、めっちゃ期待してた。

現在はステイタスの最後の更新を終え、遂にやってきたランクアップ更新に心躍らせていた所ではあるが、特に何も変わってないなあと思っていたらヘステイア様が押揃ってきた。

「ほら、これが君のステイタスだ。珍しいというか、もう驚くのも疲れぐらいだけど、スキル変質ねえ……クラスチェンジっていうのが出来るみたいだよ」

なんだってえっ!? クラスチェンジだどっ!? マジで?

ヘステイア様から紙を受け取り、舐める様に見据える。クラスチェンジ、そう、クラスチェンジである。ミリカン時代にあった初期クラス『ニンフ』から別のクラスへと変更できると聞いて。つまり竜^{ドラゴン}人^{ユニット}へと変化可能っ!?

ミリア・ノースリス

L v 1 ↓ 2

力 : E 4 8 2 ↓ I 0

耐久 : F 3 8 1 ↓ I 0

器用 : S S 1 2 0 9 ↓ I 0

敏捷 : A 8 7 3 ↓ I 0

魔力 : S S S 1 3 2 9 ↓ I 0

《魔法導I》

《魔法》

【ガン・マジック】

- ・ 詠唱派生魔法
- ・ 基礎詠唱 『ピストル・マジック』
- ・ 消費弾薬 1 / 1
- ・ 単発の魔弾を放つ

- ・特殊詠唱『デュアル』
- ・基礎詠唱『シヨットガン・マジック』
- ・消費弾薬 15/3
- ・単発の散弾を放つ
- ・特殊詠唱『ソードオフ』
- ・基礎詠唱『ライフル・マジック』
- ・消費弾薬 1/10
- ・高威力の魔弾を放つ
- ・長射程
- ・特殊詠唱『スナイプ』
- ・追加詠唱『ファイア』
- ・共通詠唱『リロード』

【サモン・シールワイバーン】

- ・召喚魔法
- ・最大召喚数『2』
- ・追加詠唱にて封印解除
- ・基礎詠唱『呼び声に答えよ』
- ・追加詠唱『楔を壊せ解き放て』

【レッサー・ヒール】

- ・最下級治癒魔法
- ・基礎詠唱『癒しの光よ』

《スキル》

【タイプ：ニンフ】

- ・クラスチェンジ可能
アクティブトリガー
- ・任意発動
- ↓クーシー：アサルト
- ↓クーシー：スナイパー
- ↓クーシー：ファクトリー
- ↓ドリアード：サンクチュアリ

【マガジン・スロット】

・装弾数『30』

・保有最大数『14』

・基礎アビリティ『魔力』により効果増加

【マジック・シールド】

・防御効果

・基礎アビリティ『魔力』により効果増大

・自動発動

・精神力消費

「……………。はい？ いや、魔力と器用高いなあ。とか力と耐久は悲しいね、とかいろいろあるんだけどね？ もう力と耐久に関しては才能がなかったとしか言えないからノーコメント。ただ、ちよとおかしい。」

「このクラスチェンジっていうのがなかなか曲者っぽくてだねえ。つて、ミリア君聞いているかい？」

ちよつと待つて。クーシー・アサルトは、両手にシヨットガンアサルト・ステツプ装着して突っ込むアレだよな？ 短距離転移ディレキスシヨットしてからの零距離射撃とか

いう頭のおかしい技持つてたあの子でしょ？ ゲームバランス壊れるうとプレイヤーから文句出まくって割と炎上した黒髪忍者系犬っ娘だったはず。いきなり目の前にポンツて現れて両手シヨットガンを同時ぶっぱしてくるのは普通に怖いです。

クーシー・スナイパーは俺が前世で考えた『超火力遠距離狐娘』じゃん？ ダンジョンでは産廃ですよ。

クーシー：フアクトリーは別名『凶弾狂響』って名称で親しまれた茶髪の糞犬。『爆発弾』や『麻痺弾』等の特殊段を生成&使用できるというキャラ。あとは『跳弾』という壁に当たると跳ね返る弾丸。室内で適当にぶちまけたら跳弾が跳弾しまくって敵も味方も全滅させるとかいう頭のおかしい奴。こんなキャラ考えると絶対頭おかしい。後、地味に設置罠系使えた気がするけど使った事無いから知らん。弾丸製造強すぎたしね？

ドリアード：サンクチュアリってのは『絶対仲間守るちゃん』だったし？ 効果範囲内だと自身のマジックシールドを他のプレイヤーと共有出来る様になる&範囲回復魔法ぶっぱできる&魔力回復ボーナスで無限の魔力を持つ移動不可能な奴。ただしガンマジックにペナルティ食らいまくるやつ。無限弾薬固定砲台とはならなかったのだ……。

え？ フェアリー：ドラゴニュートは？ 竜人ミリア・ノースリスは？ 竜翼とガトリング・マジックで地上掃射する最強の幼女は？ どこ？ どこ？

「おい、ミリア君話を聞いてー……うん？」

『うわああああああああああっ?!?!』

「っ！ ベル君の悲鳴だっ！」

え？ ベルの悲鳴？ 何事っ!?

ランクアップ更新を行うので上の廃教会で待機してたはずのベルが悲鳴を上げてる。今はちよつと色々と考えたい事があるが、それは一時的においておこう。竜人になれなかった事をぐだぐだ言っても仕方ない。というかさっそく襲撃が来たのか!?

狙いはキューイか？ それとも新しく召喚しなおして従順になったインファントドラゴンことヴァンか？

唐突に響いたベルの悲鳴に、慌てて地下の居住区から飛び出して廃教会の中に飛び出た俺は絶句しつつもなんとか震える声を絞り出す。

「キュー……イ……？」

「キューイ？」

目の前に居るのはキューイである。淡紅銀鉱を職人が手塩をかけて精密に削り出したのではないかと言う鉱石の光沢を持つ鱗。

額より突き出ているありとあらゆるモノを貫いて尚傷つく事など無いと言わんばかりの氷晶石を磨き上げたような一本の鋭い角。

まるで溶けた岩がそのまま膜質となったような翼。

そう、キューイである。その横にはインファントドラゴンのヴァン

も居る。子猫サイズのキューイと、子犬サイズのヴァン。対比としてはそんな感じ、だったのだが。

「な、なんで大きくなってるんですか……」

目の前に居るキューイの大きさは体長1M程、つまり俺の身長と同じぐらいにまで成長したキューイの姿。そしてヴァンの方は体長1.5M程の大きさに。俺よりでかあい。説明不要。いや、説明必要だよ、超欲しいよっ!?

何が起こったっていうんだ……せつかくランクアップ更新したつてのに……。

つか、ベルは何処だ……??

「ベル君っ! しつかりするんだっ! キューイ君っ、其処をどいてくれっ、ベル君が下敷きになってるっ」

……? あー、なんだ? 状況がわからん。レベル2のベルだから平気だと思うが。

はて? キューイがでかくなる原因……。俺のランクアップか?

「ベル君、大丈夫かい?」

「いてて……。大丈夫です。少しびっくりしただけなんです」

まあ、なんだ。何が起きてこうなった? でかくなったキューイはどうすればいいんだ、これ?

「何があつたんだい?」

「えっと、突然キューイが大きくなって……」

「下敷きになったと?」

「うん」

頭痛の種が増え過ぎだろ。ランクアップとファミリアが有名になったのでお腹一杯だつての。つか……

「この大きさのキューイをどう隠せばいいのやら……」

「あーガネーシャの所に行った方がいいかも」

「不味い、よね?」

キューイ、なんでそう面倒ごとばっか起こす訳? 反省して?

「キューイキューイ!」

キューイ悪くないもんって……。

キューイとヴァン、二匹の封印状態のワイバーンが大きくなった理由。まあ当然の如くだが俺のランクアップが原因らしい。

ガネーシャファミアリアに運び込むのに結構苦労したが、ガネーシャ様が馬車やらなんやら用意したうえで、誤魔化す為にか色々としてくれたっぽい。ただでさえ今回の竜ドラゴンをテイマーに従える者が二匹目の竜種を従えた件と、円形闘技場アンフィテートルムでの一件のごたごたがあるのに……。

「うむ、そうだな……。大きくはなったが、指示に従わなくなった訳ではないのだろうか？」

「そうですね。キューイは相変わらず気ままな感じはありますけど、ヴァンの方は逆らう気はない様です」

檻に入れられた二匹のワイバーン。キューイは檻の外に居るヴィルヘルムに求愛の鳴き声を上げ、ヴァンの方は大人しくしている。ヴィルヘルムは苦笑を浮かべる様な雰囲気です。キューイの求愛の鳴き声に答えている。なんつーかなあ……。

今回、キューイとヴァンの二匹が大きくなった理由について。簡素に説明すると俺のランクアップによって、封印が弱まったのが原因らしい。なぜ俺が強くなったのに封印が弱まるのか。普通逆ではないのか？ 等という疑問が浮かぶが、どうやらこの封印はかなり特殊らしい？

言ってしまうえば、俺の強さに合わせて封印が段階的に開放されていく的な？ 俺が強くなればその分封印は弱まり、本来に近い性能を発揮できると。

封印解除はその段階を無視して本来の性能を引き出す為の代物でー。うん、意味わからん封印やん？

俺が強くなったおかげで、俺より弱くなるようにされる封印が弱くなった？

いまいちピンとこない話だが、本来の性能に近くなるという事は普通に封印状態でも強くなったという認識で構わない訳で。要するに

戦力強化に繋がって万々歳……。となれば話は簡単なんだがなあ。

「この大きさだと、街中を連れ歩くのは厳しいかもしれないな」

「ですよねえ」

「どうにか出来ないかいガネーシャ」

ヘステイア様と俺、後ガネーシャ様にガネーシャファミリアの団員が何人か。ベルはダンジョンに行ってもらった。こつちにきても何か出来る訳じゃなかったし。

「ふむ……今日の午後、緊急の神会を開くのだが、そこでこの件に関して神々で話し合う、という事もできるが……」

ガネーシャの言いたい事を纏めると、緊急の神会。今回のアンファイテートルム円形闘技場での一件に対する神ガネーシャの対応についてや、ギルドからの罰則、後は他ファミリアからの意見調査を一挙に行うためのものであるのだが。その緊急の神会で俺のワイバーンについての議題も行う事が出来ると。

ただし、当事者として俺、そしてキューイとヴァンは神々の前での証言を行う必要がある。つまり完全に顔を晒す必要が出てくる訳で、これまで以上処か完全に神々に目をつけられて日常生活が死ぬっばい？

とはいえ、ダンジョン探索する上でキューイリーダー無しは流石に考えられず、キューイを連れ込みたければ神々を説得する必要があると。今までは子猫サイズであった事もあり、たとえ暴れても被害が高が知れていたが、体長1Mの子飛竜と、1.5Mはある子飛竜では扱いが難しくなる。

まあ、嘘つかずに『言う事に逆らわないので平気です』とさえばいい訳なんだが、それでもいちゃもんつける神は多いらしい。具体的には神々の中にもいろいろとあるらしいのだが、ガネーシャを疎ましく思う神なんかは間違いなくいちゃもんをつけてくるっばい。

其の上で神ガネーシャ曰く『この俺、ガネーシャはお前を支持しよう。もし出席するのなら任せておけ』だそう。とはいえヘステイア様は反対っばい。

神々は『面白いもの』に目がなく、俺みたいな子は間違いなく目を

つけられると。神ガネーシャの後ろ盾なんて知ったことかと手を出す阿呆は絶対に居る。だそうだが、つまり安全を考えると出席は控えるべきって話っぽいが。

……選択肢なくね？ ダンジョン探索でキューイ使えないとか死ねって言われてるのと変わらんし……？

「キューイ、なんで貴女は毎回こんな面倒を起こすんですか」

「うるさいキューイ、恋の邪魔しないでキューイ」

……………ええ。

今回の神会の会場は、神ガネーシャが緊急で使用予定を捻じ込んだ場所、普段なら神とその側近以外が立ち入らないバベルの階層らしい。俺の待機場所はその大部屋の横の待機室。檻に入れられたキューイとヴァンと共に待機中なう。

なおキューイはヴィルヘルムと強引に引きはがされてキレ気味。機嫌めつちや悪いっぽい……頼むから暴れないでくれよ？ お前の進退がかかわってんだからな？

「キューイ？」

「いや、本気で言ってるんですけど」

「キューイキューイ？」

「はあ？ いや、終わったたらリングあげるんでちょっと大人しくしてくださいよ」

「キューイキューイッ!!」

リングぐらいでヴィルヘルムへの気持ちは揺らがないっ!! だつてよ。阿呆臭え……。

「ミリア・ノースリス。準備ができた」

「あ、はい……」

ガネーシャファミアリアの団員が扉を開けてくれるのを見つつ、その扉をくぐれば円形に揃えられたテーブル。中央にぽつんと設置されたパルウム用の小さな椅子。その椅子を中心にして神々が席につい

ている。人数は、ざっと60人ぐらい？　ヘステイア様に神ガネーシャ、神ミアハの姿も見える。やばい、足が震えそう。

にこやかな笑みの神デメテルが小さく手を振ってくれているが、返す余裕はない。ヘステイア様が『頑張れ、僕も頑張る』とエールを送ってくれてるので震えながらその中央の椅子の前に立ち、一礼した。

「お初にお目にかかります。ヘステイアファミリア所属、ミリア・ノースリスです」

神々の興味津々という視線に射貫かれ、俺は胃がひっくり返りそうである。

そんな震える俺の左右に、檻に入れられたままのキューイとヴァンがおかれた。運び込んだガネーシャファミリアの団員は静かに部屋を後にし、残った人と神の比率が1:60になった。おしつこちびりそう……。

「ふむ、それでは審問会を始める。まず神ガネーシャより今回の円形闘技場アンファイテートルムでの一件についての状況説明を」

司会進行役っぽい神の言葉に答え、神ガネーシャが立ち上がりよく通る声で朗々と今回の一件についてまとめ上げた書類を読み上げる。

「今回の円形闘技場アンファイテートルムでの大きな爆発について。皆も既に知っている通り、竜ドラゴンを従える者として知られる、ヘステイアファミリア所属のミリア・ノースリスが神ファルナの恩恵を通じて捕獲したインファントドラゴンの調教テイムを行った際に発生した。

この件に関しては既に説明した通り、ミリア・ノースリスはインファントドラゴンの調教テイムを完了し、見ての通り従順に従う様になっている」

神ガネーシャの説明に対し、神々が次々に質問を飛ばし始め、緊張でよく聞いていなかったが『本当に調教テイムできていたのか』『自身のファミリアの団員ではない彼女を優遇する理由は』等、質問が飛ぶたびに神ガネーシャが懇切丁寧に説明を繰り返して行く。俺は、緊張で聞いていなかったが、モンスターとの間にある溝がどうかって話してた気がする。正直言わせてもらおう、トイレ行かせてくれ……。

「質問は以上で終了だろうか。それでは、今回のガネーシャファミリ

アが引き起こした事態に対する処罰を発表する」

神々を見回し、司会進行役っぽい神が手を叩き、口を開いた。

「今回の一件、街に与えた被害こそないものの、街の住人にいらぬ不安感を抱かせた事、貸し出した円形闘技場の破壊アンフィシアトルム。これらを踏まえ、ガネーシャファミアリアには罰金及びにオラリオ内での二か月間無償奉仕を言い渡す。以上であるが、反論のある者は挙手を」

次の瞬間には神々が一斉に手を挙げた。神ガネーシャへの罰則が少なすぎると大声で叫ぶ者までいる始末。俺の所為で迷惑をかけた過ぎた訳で……、だがこの一件については神ガネーシャより口出し不要を言い渡されていて何も出来ない。悔しいが……俺は何もできない……。

「ガネーシャファミアリア本拠、アイアムガネーシャの改修をすべき、そうすべき」

「あのうざったい本拠は改修不可避。むしろしろ」

「罰則にガネーシャファミアリア本拠の改修をいれろ。しろ」

……………。

「それはできない」

神々から上がるブーイングの嵐。神ガネーシャは堂々と立ち上がり、胸を張って言い切った。

「あれを改修したら俺が目立たなくなるだろうっ!!」

「ふざけんな」「あれが街の景観を破壊してる。改修すべき」「流石に無いわ。センスを疑うね」

酷い言われようである。だが正直否定できないんだが……。

「なんだとっ!! ならばこの場で唯一の地上の人間こどもであるミアア・ノースリスを意見を伺おうではないか」

「せやな」「絶対にごっち側だぞ」

うえっ!?! 神ガネーシャ。私は貴方を尊敬しております。数々の御恩もあり、人柄も素晴らしい事を知っています。故に、私は貴方に好意を抱いているといっても過言ではありません。ですが本拠のデザインに関しては、ノーコメントを貫かせていただきます。です。それが、どうだ? ミリア・ノースリスよ。我がファミアリアの本拠。

「それで、どうだ? ミリア・ノースリスよ。我がファミアリアの本拠。」

アイアムガネーシヤは、ダメだと思っか？
ノーコメントで……。

第七十話

ガネーシャファミアリア本拠の形状についてどう思うか？ 本音を言えばもつと普通の形でいいのではないかと思う。思うが口にはしない。

全ての神々の『本音言っちゃえYO』というコールが聞こえるが無視。俺は目を瞑りすまし顔でこう言い切った。

「とても素晴らしい本拠だと思います」

嘘だろ。そう思うだろう？ だが割と本音である。彼の神ガネーシャは素晴らしい神である。その姿を象った本拠なのだから素晴らしくない訳がない。半ば自分に言い聞かせながら言い切ってやった。

それに対する神々の反応は、爆笑。

「嘘と本音が混じりあってる。え？ 本音？ マジで素晴らしいって思ってるの？ 頭大丈夫？」 「凄い努力したのは認める。で？ 本音は？」 「YOU本音言っちゃえYO」

嘘じゃないし。ほんとだし。半分だけだけど。ホントダヨー、ウソジヤナイヨー……。やめてそれ以上追及しないで、って頭大丈夫ってなんだよ、大丈夫だよ!?

「ミアリア・ノースリスは素晴らしいと言っているだろう！ この話は此処で終わりだ」

「ふざけんなガネーシャ」「本拠の改装はよ」「人間に嘘言わせて何言ってるんだよ」

神ガネーシャに対する批判の声が多数あがってる。もしかしてなんだが、神ガネーシャに反対してる神々って、あの本拠の形が気に食わないだけなんじゃ……？

「話が進まないなのでこの話題は此処で終わりだ」

神ガネーシャが強引に話を進めようとしているが、神々が何度も『本拠をどうにかしろ』と野次を飛ばして妨害してる。話が長引きそうだがこつちから注意が逸れてくれたのはありがたい。

「あー、面倒だからガネーシャファミアリアの無償奉仕を二カ月から六カ月に増加。これで話終わりにしよう。皆、早く楽しみたいだろ

？」

「……………？ 楽しみたい？ なんか背筋がゾワツとした。気のせい……………？ じゃないぞ、なんかニヤニヤとこつちを眺める神が多い。なんだ、何が起きる……………？ キューイとヴァンの話し合いがメインな訳で……………つまり、狙ってる神か？」

ニヤニヤと此方を眺める神をそれとなく睨み返していると、神ガネーシヤが大きく両手を広げて口を開いた。

「皆、聞いてほしい。ミリア・ノースリスが支配下に置いた竜種二匹を、オラリオ内で自由に動き回る許可が欲しい。当然、先の通りこの二匹はミリア・ノースリスに完全に従っている。暴れ、被害を出す事はありえないだろう。もし被害を出す様な事があれば、この俺、ガネーシヤが責任を取る」

「僕も、責任はとる。どうか認めてほしい。たのむっ」

ヘステイア様も立ち上がって神々に頭を下げている。神ガネーシヤとヘステイア様をじろじろと眺める神々。此処で茶々を入れられれば話がこじれる。できれば穩便にいききたいしモンスターリーダーキューイを封じられると俺のダンジョン探索に支障をきたすからなんとかなつてほしい。

そんな風にお祈りしていると、一人の神がおもむろに手を挙げた。

「別にそれはどうでもいいんだけど」

「……………はい？ え？ どうでもいい？ なんて？」

キューイ&ヴァンについての話し合いは、なんか予想してたよりあつさりと終わった。

神々曰く『言う事聞くという事実よりは、魔法で器を形成して従える形だから』らしい。

わかりづらいが、魔法で器を形成している以上、俺の恩恵を潰せば必然的にキューイもヴァンも消えうせる。人間って心変わりするし現時点では信用しても良さげだけど、将来的にはわからん。もしかしたら問題起こすかもしれない。

それでも神ヘステイアはそこらへん信用できるし問題があればヘステイア様を天界に強制送還するという形になるのを承諾できるなら

別に構わん、という事らしい。

問題起こしたらヘステイア様と会えなくなる訳で……。キューイ、ヴァン、二人？ 二匹とも、問題起こすなよ。絶対だぞ？ 振りとかじゃないからな？

予想外のあっさり解決にほっと一息ついてヘステイア様とぐつと親指を立てあっていると、神々が興奮した様に囁し立てるさ中、司会進行を行っていない神がテンション高めに高らかに叫んだ。

「んじゃ、どうでもいい話はここまで。ガネーシヤの本拠をどうにか出来なかつたのは悔いが残るが、それはもう忘れよう。今から、楽しい楽しい二つ名命名式を執り行うぞ野郎共おおおっ!!」

二つ名命名式？ え？ 何それは……。え？ 神会でやるんじやないの？ 前回の神会って一週間前に終わって——

……。今回執り行つてるこの会議ってなんだっけ？ 確か、そう緊急の神会だっけ？ え？ 二つ名、決めるの？ 此処で？ 俺居るんだけど？

「っ、待ってくれ、僕はそんな話聞いてないぞっ！」

「ヘステイア、二度目の楽しい二つ名命名式なんだからそんなに驚く事無いぞ」「面白い二つ名沢山考えてきたんだから茶化すなよー」

「ガネーシヤッ！ 聞いてないぞっ!!」

ヘステイア様が騒いで神ガネーシヤに詰め寄っている。ガネーシヤ様は困った様に肩を竦めた。

「神々を集めるときに二つ名命名式も執り行う事が決定して……」

「なんで言ってくれなかったんだっ！」

「……其方重要よりも重要な事があってだな」

キューイ&ヴァンの事。うん、神々は『どうでもいい』とか言つた事柄だね……。って、此処で二つ名命名とか地獄過ぎるだろ。聞いたぞ【絶影】とかいうおぞましい二つ名とか出てくるんだろ？ 聞きたくない。そうだ、此処に俺がいるのは不相応だよな？ 逃げても許されるだろ。

「あの一」

「どうした？」

「私の二つ名を決めるのであれば、私が此処に居ない方が良いでしょう？」

俺の発言を聞いた神々の反応は、『何言ってるんだこいつ』という呆れ顔。なんだその顔、待ておかしいだろ。

「普段、眷属の反応見ながら二つ名命名なんて面白^{たのしそう}命名式なんてできんから。おめでどう、ミリア・ノースリス。君は命名式を眺められる初めての人間^{こども}だ。光栄に思うと良いぞ」

思わねーよ。逃げさせろよ、なんで回り込んでくるんだよ。ラスボスかよ……。

「安心しろ。かつこいい二つ名は用意されてる。其処に良い笑顔の神々が見えるだろ？ あいつらの頭の中に沢山ある。なんなら気に入った二つ名を言ってくれても構わんぞ」

その、【絶⁺影】とか【^{ホーリー・フェニックス・カイザー}聖不死鳥皇帝⁺】【破棘滅尽旋・天】とかなんですよね？ 嫌じゃ、そんな二つ名、貰いとうない……。

「ミリア君……安心するんだ。僕がついてる」

ヘステイア様あ……。そうだ、俺には心強い味方がいる。ヘステイア様もそうだし、ミアハ様だって……。ミアハ様居眠りしてね？ ……いつも忙しそうだもんね。寝ちやうよね。うん、そつとしといてあげよう。

他にも心強い味方が何人もいるんだ。神ガネーシャもそうだし。そうだよね？

「うむ。この俺ガネーシャもついてるぞ」

うっし。これで味方が二人。後は……にやけ顔の神ロキ。味方？ カウントして良いのか不明であるが味方であってほしい。

他には……こちらに笑みを浮かべる古風な和の神。えっと、角髪？ つていう髪型の和装の神。ぐつと親指を立ててくれてるし、味方？

「タケも味方してくれてるっ！」

ぐつとヘステイア様が親指を立て返してるし、味方だろう。タケ、タケ……神タケミカツチの事か。なるほど、初めて見たが良い人そう

だ。

その神タケミカツチはミアハ様を揺り起こして耳元で何かを囁く。するとミアハ様がこっちを見て笑みを浮かべた。なんか女神達が黄色い歓声を上げてたのは気のせいだろう。『タケミカツチ様が攻めで』とか、神でも腐るのか……。

後は？ もっと味方がいた方が安心感が……。神デメテル？ 柔らかなほほ笑みを向けてくださる巨乳神。味方カウントでよさそう？ もう味方でいいよね。

ヘステイア様、神ガネーシャ、神タケミカツチ、神ミアハ、神ロキ（？）、神デメテル（？）。そう6柱もの神が俺についてる。ヤッター。もう負ける気しませんね。帰って寝たい。

「ちなみに、一二つ名命名の際には多数決だから、安心して良いぞ」
ふざけんなその司会進行役っ！ なんでさつきから俺の心を読んだ様に先回りして希望を潰してくるんだよっ！！

此処に居る神々の数は総勢60人、対して味方の数は6人。1割しかいませんね……？ 勝てなくね？

「さて、お待ちかねの二つ名命名式いいっ！！ 黒歴史かっこいいの二つ名の備蓄は十分かあっ！！ 名づけられる人間こどもが直接見ているこの場でやるなんて今日ぐらいしかないんだから、皆全力を尽くせえっ！！」

おい待ってくれ、タイムアウト。作戦タイムくださいお願いします。

ブレイブバンツァー
【赤龍演武】 っ！！ 【高貴なる竜使い】 っ！！

リトル・スカレット
【煉獄の小人】 【豪砲】

おい、おいおい……。どつからそんな二つ名が出てくるんだよ。なんでそうなる。おかしい、絶対おかしい。

【竜使い】等はどうだろうか

ミアハ様あ……。

「つまらん」「却下で」「面白くない」

面白くないってなんだ！！ 面白くないってっ！！ そんな理由で平凡な二つ名却下すんなっ！！

「さて、ここでミアア・ノースリスの反応を見てみよう。どうだ、

神々が考案した痛々しい二つ名の数々は、気にいったものはあったか？ ちなみに俺は【高貴なる竜使い】をオススメしとくぞ。プークスクス」

おい笑ってんじやねえぞ。糞、なんて答えりやいいんだこれ……。ん？ ヘステイア様がなんか慌ててる？ どうしt———神々の視線がこつちに集まつてる。なんか驚いた表情を浮かべてる？

「……………もしかしてなんだが」「ミリア・ノースリスって」「神々寄り？」「普通なら喜びそうな二つ名上げたのに、全然嬉しそうじゃないぞ」「というかなんか嫌そうだ」

あ、そうか。うん、挙げられた痛々しい二つ名の数々。普通の冒険者なら『かっこいいっ!!』って飛び上がって喜ぶもんだもんな。俺の反応がおかしいって驚かれるのもわかる。

……………あれ？ もしかして普通に『痛いので嫌です』って言えば回避できるかも？

「そうですね。派手なのはちよつと……………」
「なるほど、嫌なのか」「そうかあ、嫌かあ」「痛い二つ名だもんな、名乗りたくないよなあ」

待って、なんで神々はニヤニヤしてんの？ おかしいよね？ 普通に嫌なんだけど……………？

背筋を這い上がるこの嫌な感覚。なんでこんなに悪寒がするのか……………。

「じゃあ、とつと痛いのを着けてあげないとなあ」

「っ!? 待ってくださいっ!! その反応おかしいですよねっ!? 私、派手なのは遠慮したいんですけどおっ!？」

まずい、なんであの流れでもつと痛々しい二つ名をつけようなんてするんだ。

「……………だつてよ」「でもさあ」「だつてねえ？」
「二神々側の感性を持つ人間に、痛々しい二つ名を名乗らせて悶絶させたいじゃん?」「」

こいつら最低だあああああっ!!??

次々と上がる二つ名の数々。ヘステイア様達も頑張ってる様子だが、他の神々に埋もれてしまっている。上げるたびに一瞬で『つまりん』『却下』と打ち消されているっぽい……。

心がガリガリと削られる音がする。すまし顔で、椅子に深く腰掛けて反応しない事だけに意識を集中させる。反応してはいけない。神々はそれを面白がっているのだから、無視してしまえばいいのだ。

【黒の衝動】【極†竜】【聖†竜†皇】

反応しなければ……。

【†聖龍†皇帝†】

【†それだあつ!!】

「やめろおおつ!! 僕の眷属になんて二つ名を着ける気だつ!!」

ヘステイア様……。

「流石に、酷いだろ」

【絶†影】「ちゃんの主神の言う事は違いますねえ」

「ぐはっ……」

神タケミカツチが死んだっ! この人でなしいつ!!

「私は【竜僕ドラゴン・メーテルの少女】とか言いと思うわ」

「おお、それも良いかもしれんなあ」「流石デメテル様だあ」

神デメテルは敵だった。

「ウチは【幼女聖水】とかええと思うんやけど」

「ロキ、その二つ名は何でつけようと思った?」「何? 常習犯?」「世

界地図書いちやう感じ?」

ロオオオキイイイツ!! テメエはあの時の事蒸し返す積りかあつ

!! やめろおつ!!

「これまで広まっていた【竜ドラゴンを従える者】が最もふさわしいのではないか? 少なくとも、現時点でもほとんどの者が受け入れているのだ。

この俺ガネーシャ一押しだぞ」

「パンチが足りない」

足りなくていいです。むしろもう【竜ドラゴンを従える者】とか最高やん? がやがやと最悪な二つ名が数多く上げられ、最終選考に残ったのは

以下の通り。

ホーリー・ドラゴン・カイザー
【†聖龍†皇帝††】†がポイント

【豪砲】円形闘技場を破壊した一撃をイメージ

【破滅過剰】理由は無い、しいて言うなら痛々しさ？

以上の三つとなりまあす。……死ぬ。神々絶対許すまじ……。

このままだと本当に俺の二つ名がどれかになりそうである。というか痛々しさを理由にすんなよ。

なんだよ『神々視線で見ると痛々しいけど、眷属が嬉しそうにして
いるのを見て胸を痛める主神の姿を見て爆笑する』のが目的って
……。

しかも今回は『眷属と揃って痛々しい二つ名で悶絶する主神を眺
めたい』って、神々って性悪過ぎだろ。泣くぞっ!!

「では、最終投票を行う」

「ギター」「もう勝ち確ですね」「やめろおおっ!!」「ヘステイアはし
まっちゃやおうねえ」「待て、酷すぎる。やりなおしを」「【絶†影】ちや
んの主神もしまっちゃやおうねえ」「可哀相ではないか?」「ミアハの言
う通りだ、確かに可哀相だ」「そうだよな、流石に可哀相過ぎるよなあ」
おっ、ミアハ様の一言で流れ変わった? これは、いけそうな――

「ミアア・ノースリスの瞳に希望の光がつ!」「だが、ダメえ」「幼女を
絶望に落とすこの瞬間、堪らないなあ」

ふざけんな! 後幼女じゃねえっ!!

やばい絶望的状况だ。ヘステイア様の言葉は主神故に無視され、神
タケミカヅチは自身の眷属の痛々しい二つ名を上げられてダメージ
を負って動けない。神ミアハは疲労がたまりすぎて船漕いでるし、ガ
ネーシャ様は……よくわからんフード被った人物が耳元でささやい
た瞬間に黙ってしまった。

というかなんであの外套の人物は室内でしっかりフードまで被っ
て顔隠してんだ……? 一声も発してないし。

「じゃあ、最終投票しちやおうねえ」

神々の歓声が響き渡る。もう絶望しかないこの場で頼れる神は全

員死んだ。そう神は死んだ……。

「ちよつと、待つてちようだい」

騒がしい神々の歓声の中であっても、美しく響き渡る声。思わず視線が其方に吸い寄せられた。

「流石に、そんな二つ名はかわいいそうよ」

声を聞いただけで、思わず惚れてしまいそうになる。美声というのはこの声の事で——どこかで聞いた事がある気がする。

神ガネーシャの横に寄り添う様に座っている外套姿の人物。声からして女神らしきその不思議な神。室内でありながらフードをしっかりと被つて顔を隠しているその女神。

背中に氷柱をぶち込まれたのかと思えるような寒気がした。キューイが『見ない方が良いよ』と忠告してくれているが、視線を外せない。

その女神がゆっくりとした動作で立ち上がり、フードを取り払った。

美しい銀糸の髪、美を体現したその女神。ふと聞こえたのは神口キの眩き。納得し、震えた。

「フレイヤ」

女神フレイヤ。かの怪物祭モンスターファイアにおける黒幕、らしき女神。

そして、俺に魅了をかけて記憶を弄つた奴。

美しい。語彙力を喪失してしまう程に、その女神は美しかった。ゾクゾクと背筋が震えるほどに、美しいその女神。駆け出したあの時の自分は、なんの抵抗も許されずに魅了された。

だが、今はレベル2だ。見る程度なら耐えられる。

「そうね。ミリア・ノースリスと言ったかしら？ 貴女、初めまして」「はじめまして……」

見る程度なら、耐えられた。声をかけられたら、ダメだった。もう視線を外すとか、そんな失礼な事は出来ない。

「三つの中で、貴女が望む二つ名はあったかしら」「無いです」

即答。美しい女神に嘘など言えるはずもない。心の底から言える

本音を引き出される。

そうでありながら、視線をそらさないとまずいと頭の中で警鐘が鳴り響く。インファントドラゴンが不愉快そうに檻をガリガリと引っかき始め、キューイが呆れ顔で『またあ?』と呟いてる。

そう、俺は至って冷静に魅了されながらも思考できている。

ランクアップしたおかげだろう。完全に思考が跳ぶほどじゃない。けれども逆らえない。

「そう、じゃあ私から一つ、貴女に二つ名を——」

「反対だつ!!」

ぴしゃりと、響き渡ったのはヘステイア様の声。魅了が、解けた。何かが弾けた様な感覚と共に、心を縛っていた見えない縄が解ける。神フレイヤから視線を外せば、ヘステイア様が神フレイヤを睨んでいた。

「フレイヤ、僕は君の事が苦手だ。嫌いじゃないけど、苦手だ」

「……そう」

「だから、反対だ」

苦虫を噛み潰した表情を浮かべたまま、ヘステイア様が神フレイヤに突っかかっている。美の女神に逆らうべきではない、そう口にしそうになり、歯を食いしばる。

視線を外せたが、完全に魅了が解けた訳ではない。自覚できるだけマシだが、耳元で囁かれたら戻ってこれる気がしない。堕ちる寸前で踏みとどまっている様な不安感がする。

美の女神の魅了、ヤバすぎるだろ。こんな卑怯^{チート}呼ばわりも納得できさる。

姿を見ずとも、近くに居るだけでファルナを持たぬ者らを雰囲気だけで周囲を魅了してしまう。

姿を見せれば、駆^{レベ}け出し相応の冒険者では抵抗できずに魅了される。

その声は、第三級冒険者を一瞬で虜にする。

耳元で囁かれれば第二級冒険者すらも一瞬で墮とす。

もし、もしその肢体を味わってしまったら、第一級冒険者ですら、戻

ってこれない。

つまるところ、めちやくちややばい相手である。同性相手でも関係ない。異性であればなおの事。

「ミアハ、タケ、ガネーシヤ、君たちも反対を——」

「いつみても美しいな」

「ああ、そうだな」

「うむ、美しい」

「ミアハっ!? タケッ!! ガネーシヤッ!!」

俺の味方だったはずの男神三人が一瞬で落とされてる。ダメっばいですね……。かくいう俺ももうダメっばい。何あの美しさ、もつと見ていたい。でも痛々しい二つ名付けられるのは……。

——この美しい女神様に二つ名を授けて頂けるなら、痛々しいのでも別に良いのでは？

「ミアア君っ、君も反対を——ミアア君っ!?!」

もういいよね。だってあの美しい女神様に二つ名付けて貰えるんだよ？ 皆嬉しいよね？ 俺も嬉しいよ。

「しつかりするんだっ!」

「ヘステイア様?」

「魅了されちゃダメだミアア君っ!! フレイヤを見ちゃいけないっ!!」

いつの間にか席を飛び出してきて俺の両肩を揺さぶるヘステイア様が目の前に居た。なんであのお方を見てはいけないのだろうか？

「悲しいわヘステイア。意見も聞かずに反対するだなんて」

「っ! それ以上ミアア君に近づかないでくれっ!」

彼の美しい女神様が檻の傍に立っている。ヴァンが苛立つ様に檻を引っかいている。耳障りな金属音に視線を吸われ、ヴァンが俺を睨んで呟いた『下らん魅了に囚われるな主よ』あるじ

下らん魅了? くだらない? 何処が? こんなに美しい女神なのだから、魅了されて当然だろう?

「キュイキュイ……」

やっぱこうなった。どういう事だキュイイ。

「そんなに怒らないでちょうだい。私はその子にお礼をしたいの」

「お礼、だって？ フレイヤが？ ミリア君に？」

「そうよ。見てたわ、見てしまったの。その子の、闘いを」

俺に？ お礼？ 闘い、インファントドラゴンとの一騎打ちの事か？

「だから、そのお礼。二つ名を貴女にあげたいの」

「……………一応、聞いてあげるよ」

その場にいる全ての神が、フレイヤに魅了されてる。神ロキはつまらなそうに欠伸しているが、それ以外の神々はヘステイア様を除いて全員が魅了にやられているのか、口を閉ざしている。

そんな中、美しい女神様がゆっくりとした動作で、流し目を送りながら口を開いた。

「私が考えた二つ名は——」

第七十一話

オラリオの中央にそびえ立つ白亜の塔、バベルの入り口前にある噴水。体長1M程の紅の飛竜と1.5M程の灰色の飛竜の二匹を連れ、た幼女と白髪の少年が悪目立ちしていた。なお、幼女は俺である。

神々の許可が下りたとはいえ、やはり皆警戒しているのか武器に手を伸ばしておっかなびっくりと言った様子でキューイとヴァンの横を通り過ぎていく。まあ、言葉の通じる(話が通じるとは言っていない)俺だからこそ安心して傍に居られるわけで、そうでもなけりや近づこうとも思わんか。

片やランクアップ最速記録保持者、片やそれに追いつかんばかりの速度でのランクアップ+竜種二匹を従える小人族。そりや目立つわ。「ああ、居ました。……本当に大きくなったんですね」

驚きの表情と共に声をかけてきたのはパルウムのサポーター、リルル力である。久々にリリと会った気がする。

片手を上げて微笑みを向ければ、鍛冶師見習いの青年ヴェルフも目を真ん丸にしながらも近づいてくるのが見えた。二人とも、久々に会ったなあ。ここ四日程会えていなかったのだから仕方ないか。

「お久しぶりですミリア様」
「久しぶりだな」

本当に久しぶりに出会った二人は、これまで通り、というにはヴェルフの距離感は少し近いが。今まで同様にこちらに笑みを向けてくれた。ありがたい話である。

「久しぶり、ごめんなさい。色々と面倒をかけてしまって」

「いえ、別に構いませんよ。むしろミリア様のおかげでパーティとして安定感が増しますし」

「おう、何処のパーティ探したって竜種を編成してる所なんてここぐらいだもんな」

俺がいない数日間の間は、俺抜きでベル、リリ、ヴェルフの三人でダンジョン探索していたらしいが。昨日の神会を終え、漸く俺はダンジョンに潜れるようになった。

「あ、そうだ。二人とも、ミリアの二つ名が決まったんだよ」

「おお、流石ですね」

「うらやましい限りだ、んで？ 二つ名はどんなもんになったんだ？

ドラゴンテイマー
「竜を従える者か？」

噴水の前のやり取りは、正直小恥ずかしいし、キューイとヴァンを連れてくるせいか滅茶苦茶視線を集めてしまっている。まあ、慣れるしかないんだが。

「私の二つ名は【魔銃使い】ですよ」

「……………はあ」

「おう……………」

微妙そうな二人の反応に苦笑を浮かべざるをえない。とはいえ俺はそこそこ気に入っている。シンプルでいて、目立ち過ぎず、背中を搔きむしりたくなるような衝動に駆られない。素敵な二つ名である。

彼の美の女神には感謝の言葉を述べたい所だが———神ロキ曰く『目を付けられとるから気をつけろ』との事なのであまり喜べないらしい。ちなみに、俺はその女神の事を覚えてない。というか神会の時の事すら曖昧である。覚えているのは唐突に神威で押しつぶされそうになって小便チビリかけた事ぐらいである。気付いたら神ロキとヘステイア様が睨み合っており、神ミアハ、神タケミカツチ、神ガネーシヤが呆けた表情で椅子に座り込んでいたのみ。他の神は何処に行っただのかと首をかしげる羽目になった。

特に、俺はごく一般的な魅了耐性しか持ち合わせない為、下手すると『私の眷属にならない？』と声かけられた時点でアウトになるらしい。まあ、現時点ではないっぽい。第一級まで上がったら確実に狙ってくるそうな…………、其処まで行ける気がしない。が、ベルが第一級冒険者のアイズ・ヴァレンシュタインを目指す以上、俺もそこまでいかなければならない訳で…………。まあ、ランクアップ重ねれば耐性も少しは伸びるっぽいので頑張って耐えろと言われた。神フレイヤ怖すぎい。

「なんとというか、地味、ですね」

「ベル程じゃないが、地味だな」

「僕の二つ名、やっぱり地味だよな……」

流れ弾でベルが傷ついてるぞ……。まあ、この二つ名は二重の意味があるっぼいし。

「魔銃」でもあり、魔獣」でもあると。同じ読みで二重の意味を持たせてるらしいですよ。ほら、モンスターを魔獣と呼称する地域もあるらしいです。なので魔銃ガンズリンガー使いでもあり魔獣モンスターテイマー使いでもあると」

「ほお、流石神は考える事が違いますね」

「そう聞くと、カッコいい二つ名だよなあ」

「……あれ、僕の二つ名って……」

ベル、それ以上考えちゃいけない。というかい加減、視線がしつこいしダンジョン行こうか。ダンジョンに降りる許可は貰ってるしね。

「じゃ、ダンジョンに行きましょうか。キューイ、ヴァン、ちゃんといてきてね」

「キューイキューイ」

《わかった》

前衛のヴェルフ、中衛のベルに加えて前衛にヴァン、中衛にキューイ、そして後衛に俺、そしてリリ。

未だにヴァンとキューイの戦闘能力確認はしていないが、少なくともゴブリンまにやられる程弱くないだろうし、安定したパーティー……だといいなあ。

後、クラスチェンジについても色々確かめないといけない事が多いしなあ。

中層に挑戦する予定も立ててるし、早めに俺のクラスチェンジについて調べておかないと。中層に行くのに必須らしい火精霊サラマンダーウールの護布用の資金集めもある。そしてディアンケヒトファミアリアにも顔だししないとしたし？ ……忙し過ぎじゃないですかね？

ダンジョン九階層。今日は十階層にまでは下りる予定はない。というかキューイとヴァンの戦闘能力測定の意味もあるので霧が立ち

込めていて視界の悪い十階層以降には下りるべきではないとの事。ついでに言えば九階層に出現するのは主にゴブリンとコボルトの二種類。入り口部分と比べりゃその強さは天と地程の差があるが、行動はシンプルに殴る、引つかく、体当たりぐらいなのでキューイとヴァアンに任せても問題はない……といいなあ。

「それで、キューイとヴァアンの闘いを見守る訳か……封印解除？　つてのはしないのか？」

ヴェルフの言う事は、まあその通りと言えばそうである。封印解除した方が強いんだが……キューイは『ミリカン』時代の事考えると正直怖いし？　キューイがブレスチャージ中に攻撃されるとプレッシャー諸共爆散するっていう設定があったし。下手にフルチャージブレス狙いされても困る。

ヴァアンについては……。

「元のインファントドラゴンの姿になってしまおうと元の姿に戻す事出来ないうぽいんですよね」

一度殺すなりなんなりして再召喚すれば良い話なんだが、レベル2になったとはいえインファントドラゴンとガチンコ勝負とか嫌だよ？　いや、『ヴァアン、自害せよ』と命じれば自害してくれるっぽいんだけど、死亡した場合は負傷度合いにもよるけど半日から一日の間は再召喚できなくなるっぽいんだよね。今回は封印状態で死んだから半日経てば再召喚可能だったっぽいんだけど、封印解除すると一日は召喚できなくなるらしい？　キューイ曰くだけど。

「へえ、そりゃ面倒だな。と、そういうミリア、武器どうしたんだ？」

あの赤い剣」

「あー……ヴァアン、インファントドラゴンとの闘いの際に刀身が弾け飛んだらしいです」

キューイの血で俺の魔力に適應する様になっていたとはいえ、無茶な魔力込めに耐え切れなかった刀身がパーンッってなったらしい。散弾みたいに飛び散ったんですって。

「……新しい剣、作るか？　なんなら用意してやるが」

「お願いしていいですか？　お金は——」

「キューイの鱗数枚くれるなら、それから創作るぞ」

竜種の素材なんてめったに手に入らないし、それが代金替わりでいいと。ありがたい話である。

「では頼みますね」

「おう、任せとけ」

「ミリア様、ヴェルフ様、モンスターを見つけた様子ですよ」

リリの視線の先、ゴブリンが数匹屯している様子が見える。此処は、とりあえずまずはヴァンを実撃させてみるか。つか、キューイはちやんとついてきてるよな？

「ヴァンに突撃させますんで、こっちに流れてきたらベル、ヴェルフ、お願いしてもいい？」

「わかった。頑張つてねヴァン」

「おうよ」

頼もしい前衛もいるし。ヴァンは死んでも最悪再召喚でなんともなる。まあ、弱くはないだろうし問題はないだろう。

「と言う訳で、ヴァン。あのゴブリン三匹、片づけられます？」

《余裕だ。この器には慣れんが遅れはとらん》

この器っていうのは現在のヴァンの姿の事だろう。元の姿が翼の無い地を這う竜。地竜だったのに対し今のヴァンは翼のあるワイバーン、飛竜の姿をしているのだ。当然だが、いきなり翼を手に入れた所で空を飛ぶなんてできるはずもなく、滑空ぐらいなら何となく出来るが、飛翔は不可能と本人……本竜？ が断言していた。

まあ、プライドが高いので『鬨えない』とは口が裂けても言わないっぽい。

《いくぞ》

宣言すると共に灰色の飛竜が地を駆ける。その走る姿勢は空を駆るのが正しい飛竜の姿であっても違和感を感じさせないほどに整っている。

元々が地を駆ける竜だったが故に安定しており、相手が気づくより前にゴブリンの至近へと接近。ゴブリンが慌てて構えるより前にヴァンの頭突きが一匹のゴブリンを吹き飛ばす。その反動で動きを

止めたヴァンはその場で跳躍。翼で飛ぶ事はできずとも、跳ぶ事は出来ると言わんばかりの切れのある跳躍のまま、バック転の様に一回転し、振り上げた尾が鞭の様に風を斬りゴブリンの二匹目を真つ二つにした。

隣に立っていた仲間が真つ二つにされて動きを止めたあわれな残り一匹も何をするでもなく着地と同時に身を捻り、横風ぎに尻尾を振るつたヴァンの餌食となった。

……、何あれ？ めっちゃ強くない？

「……強い、というか、凄い動きだな」

「ヴァンって、すごく強いのか？」

いや、俺に聞かれてもわからない。封印状態とはいえゴ布林三匹をあつという間に仕留めたぞ。

《ふむ、それなりに動けるな。だがやはり重いな。主よ、もし全力を尽くしてほしくば、枷は外してくれ》

「あ、はい」

りようかいですヴァンさん……。ヤバイよ、俺でも倒せるぐらいに弱化してるはずなのに強いよヴァンさん……。

……これは、キューイも期待していい感じ？

「えっと、じゃあ次キューイが行きましようか」

「キューイ？」

「ええ、敵を探してー、え？ 見つけました？ じゃあそれを倒してください？ ……面倒？ いやお願いですから働いてくださいよ」

なんかキューイが凄い気怠げな感じ。疲れてる？

結論から言おう。キューイは強かった。

まあ、なんだ。強かったんだよ。うん……キューイがね、プレスでね、モンスターをね……消し飛ばすんだよ。わあ強おーいと喜んだのは束の間。リリの『……魔石、消し飛んでますね。素材も、一緒に』という言葉で正気に戻った。威力過多過ぎて魔石も素材も消し飛ばすのだ。モンスター諸共。

強い、のは良いんだが、加減してってお願いしても『え？ 無理』と叩き切られるし。

どうにも最低威力の火球ブレスであの威力らしい。ちなみに、ヴァンもブレスが出来るのだがこっちは火炎放射みたいな炎を吹く感じのブレスで、威力はそこまで高くはない上、連射も出来ず、その上でブレスを放つ際には数秒の溜め溜めをしないとイケないっぽい。

逆にキューイは近接戦が微妙。ワイバーンらしく空中に飛び上がったの急降下体当たり、空中でサマーソルトの様な動きをして尻尾を叩きつける攻撃等、ヴァンと比べるとバリエーション自体は富んでいるが威力がいまいちなのだ。空を飛べる分キューイの近接格闘能力は低く、代わりに溜め無しソフチャージ火球が強い。

これは、近接型のヴァンと遠距離型のキューイで良い感じなのでは？ 耐久の方はどちらも高く、ゴブリンに殴られようが、コボルトに引つかかれようが二匹とも気にした様子はない。

安定した囷としての能力が高い前衛。最悪の場合肉壁に出来る後衛。最高やん？ まあキューイの火球は威力過多過ぎるからちよつと遠慮願おう。

……俺の『ショットガン・マジック』もランクアップの影響で威力過多気味なんだよな。魔石を消し飛ばしてちや収入がなくなっちゃまう。残念だが『ピストル・マジック』でいくしかあるまい。

とはいえ『ピストル・マジック』も威力は十分に消費も少ないし、やっぱ常用として使うなら『ピストル・マジック』である。『ライフル・マジック』は、正直使い処に困る。

「それで、クラスチェンジだっけ？ 試すの？」

「……ベル、一応同じパーティとはいえステータスの情報をペラペラしゃべるのは感心しないぜ」

「あ、ごめん……」

ベル、不注意！ まあ、リリとヴェルフは信用できるし問題はないだろう。リリは俺に恩義を感じてるし、ヴェルフの方は『竜の素材を受け取れる』という恩恵でニコニコしてるし。他の見習い鍛冶師処か、上位鍛冶師からも妬まれてるっぽい？ というか『竜の素材を少

量とはいえ分けて貰える』と自慢してるらしい。まあ別に構わんが、あんまり嫉妬を買う事はしない方がいいと思うがね。

……主に俺の方に『あんな鍛冶師より俺と専属契約してくれ』と詰め寄ってくるのが現れるから。

つか、俺はヴェルフと専属契約はしていないのだ。あくまでも『ベルと契約している専属鍛冶師』と『同じファミリアに所属しているから面倒見て貰っている小人族』という関係であってだな。

まあ、周りが勝手にヴェルフと専属契約してると勘違いする分には構わん。新米鍛冶師避けになるからな。上級鍛冶師？ そつちは普通にお断りしてる。鍛冶狂いかなんか知らんが、竜の全身の素材を採取したいっていう上級鍛冶師が多すぎる。

爪や鱗ならまだしもだよ？ 『木箱一杯に鱗をくれ』等、全身の鱗剥ぎ取っても足りないわボケエってぐらい素材要求量が多いわ、『火竜の脊髄が欲しい』『飛竜の頭骨を採取させてくれ』って、脊髄とか頭骨なんて引っこ抜かれたら死ぬだろ、キューイやヴァンを何だと思ってるんだって要求の上級鍛冶師多すぎる。まあ、其処ら辺の無茶な要求してくる奴はリストアップしてガネーシャ様に報告してるが。

ガネーシャファミリアの保有扱いのキューイ&ヴァンの命を脅かす要求をするなんて命知らずにも程があるでしょうに。

ま、そんな事よりクラスチェンジである。とりあえず昼食をとりながら話そうか。

……ベル、俺はその弁当はいいや。リリに保存食の缶詰を分けて貰うからさ。遠慮？ してないしてない。それはシルさんがベルの為に作った代物で——え？ 俺の分もある？

やったあ……。リリ、こつそりその缶詰分けて……。あ、ヴェルフ、このお弁当食べりゆ？ 女の子の手作りだよ。遠慮しなくていいつて——チツ、仕方ない。キューイちよつとこつちに、逃げんなよ……。

あ、ヴァン？ ちよつと口開ける（命令）。

「それで、試すといっても何を？ リリはどういった効果なのか想像もできませんが、参考程度に聞いてもよろしいでしょうか？ 勿論、

誰にも言わないと誓います」

「その辺りは信用してるわ。で、クラスチェンジについてなんだけど」

クラスチェンジ。一言でいうと『ステイタスを切り替える』らしい？

正確に言うと『魔法とスキル』が変化するっぽい。基礎アビリティ、発展アビリティに変化はない。

現在変化出来るのが『クーシー・アサルト』『クーシー・スナイパー』『クーシー・ファクトリー』『ドリアード・サンクチュアリ』の四種類。

一度に変化出来るのは一種類のみ。んで、こつからが面倒な仕様なんだが、クラスチェンジ自体は俺の意思で行える。しかし、クラスチェンジ後のクラス選択はできないのだ。

語弊がありそうなので訂正しよう。

クラスチェンジ後のクラス選択は主^{ヘステイア様}神以外行えない。

「えっと、それはどういう？」

「ステイタスの更新の際に変更後のクラスを選択するんですよ。ヘステイア様が」

要するにヘステイア様が『クーシー・アサルト』を選択した場合、俺が何しようが『クーシー・アサルト』以外のクラスに変化はできない。

まあ、俺が『このクラスにしたい』って言えば変更してもらえるのだが。それでもステイタスの更新時にしか変更できないっていうのは割と痛手である。

超近接特化の『クーシー・アサルト』

超遠距離特化の『クーシー・スナイパー』

特殊戦特化の『クーシー・ファクトリー』

補助特化の『ドリアード・サンクチュアリ』

そして汎用型であり常用していると言える『ニンフ型』。

現在の俺は『ニンフ型』を基礎にミリア・ノースリス、『フェアリー・ドラゴニユート』の専用魔法であった『サモン・シールワイバーン』を習得している形である。

ニンフ型は、弱くはない。けれど特化型と比べると劣るのは仕方な

いと言えば仕方ない。

つまり敵が近づいてきたら『クーシー・アサルト』、敵が遠くに居るなら『クーシー・スナイパー』にクラスチェンジしてなんて言う使い方はできない。

『クーシー・アサルト』を選択しているのなら、それでの戦闘範囲外である場合はニンフ型で対応しないといけない。

場に適したクラスに変化して、常に優位に立つと言った運用は不可能な訳だ。

「それで、今回のクラスは何にしているのでしょうか？」

「『クーシー・アサルト』ね」

ミリカンミリタリーカントリーオンラインの略称。本作オリジナルのオンラインVRシューター。頭のおかしい運営によって様々なとんでも設定が生まれまくったゲームにおいてのクーシー・アサルトの立ち位置は、建物内等の閉所空間での制圧作戦向きな能力をしていた。ナーフNerf：オンラインゲームでの弱体化修正を差すスラング前には強すぎてぶっ壊れとして嫌われていたクラスである。

ナーフ後はナーフ後で色々揉めたが。

「その、くーシー、あさると？　　というのはどういう能力なのですか？」

「あー、簡単に言うとアサルト・ステップ短距離転移を使って至近距離に接近、二丁ショットガンで消し飛ばす感じ？」

ミリカンの登場初期の頃は『短距離転移で唐突に背後に現れて尻にショットガンぶち込んでくる頭おかしいシノビ系犬っ娘』等と言われたが、アプデで敵の正面にのみ転移可能というナーフを食らって返り討ちに遭う犬っ娘が増えた。

正面に出てくるだけなら散弾銃を装備しておけば即座に対応できる。流石に至近距離散弾耐えられる耐久は持ち合わせていないからなあ。ナーフ前はシノビ犬が居る場所では背中を壁に着けたまま横移動しろとまで言われたし。

「へえ……その、アサルトステップって何かわからないけど、強そうだね」

強いかどうかで言うと、どうなんだろうか。ミリカンの中では背後に転移を連続で行って3〜5人ぐらいのプレイヤーなら瞬殺できてたけど……モンスター相手だとうだ？　そもそも、正面にしか転移できないとかだとだいぶ使い辛い。

「とりあえず、試すしかないわね。さて、ご馳走様。キューイ、さつそくで悪いけどモンスターどつかに居ない？」

「キューイ？　キューイキューイ」

三匹でうろついてるのが居る。ねえ……三匹ならなんとかなるでしょ？　多分。

「ミリア、大丈夫？」

「初めて使うスキルや魔法には十二分に警戒を、逆に危機的状況に陥る事もありますので」

わかってるわかってる。

正面方向、距離にして凡そ30M程、3匹のコボルトが警戒心むき出しで歩いてるのが見える。後ろを振り返ればベルとヴェルフが頷き、キューイが欠伸している。リリとヴァンは少し離れた所で待機。キューイ、テメエは欠伸してんじゃねえぞ……。

「えっと、詠唱の必要はないのよね」

頭の中にスイッチを思い描いて、それをオンにする感じ。……えっと、スイッチ、スイッチ？

「どうしたのミリア？」

「……。よし、少しスキル発動に癖があるけど平気そうよ」

こう、スイッチをイメージ。カチッて切り替える感じで——パチンツと何かが切り替わる感触。

ぐつとお尻が伸びた様な感触と共に、帽子がずれ落ちた。後、ビリイツて何かが破れる音がしたわ。

「え？」

「おい、なんだ……耳？　ミリア、お前、耳生えてんぞ？」

耳が生えるだなんて可笑しな事言うヴェルフだなあ。耳がー、ある

じゃん。

顔の横、耳はちゃんとあるし、生えた？ 意味わからん。つか帽子落つことして——頭の上に何かついてる。つかローブがきつい？ 後股がスースーする。ナニコレ？

「ミリア、何か落としたけど……え？」

ベルが俺の足元から何かを拾い上げる。白い、布切れ。……見覚えのあるその布切れは、俺のパンツだあああつ!? ベルの手から素早くパンツを回収。なんか尻の辺りが破れて——ええ？ なんかローブの中でもぞもぞ動いて、俺の尻尾？ え？ なんで尻尾生えて？ 頭？ 頭の上のコレ何？

「ミリア、落ち着け」

「ちよつ、意味わかんないんだけど、私の頭どうなってんの？ 私の頭大丈夫？」

「大丈夫だから落ち着いて、ってコボルトに気付かれてるぞっ!!」

「僕がなんとかするから、ミリアは、その——とにかく行ってくる」

ベルがコボルトの対応に飛び出していくのを見送る。俺の頭大丈夫？ 変なもん生えてるけど大丈夫？ 後尻尾も生えてるけど大丈夫？ 頭と尻がおかしなことになってるけどナニコレ？ クラスチェンジの影響？ パンツ破れたんだけど？ 聞いてないよこんなの。

「ミリア様、どうし——えっと、ミリア様も変身魔法を覚えたので……？」

「いや、違うんだけど、私、どうなってる？」

リリとヴェルフの方に向き直ると、二人が顔を見合わせて俺の頭を指差した。

「なんか、犬みたいないな耳が生えてますね」

「普通にヒューマンの耳もあって……耳が四つになってるな」

何それ化け物？ 確かに顔の横に人間の耳があつて。頭の上に、獣っぽい耳がある。犬耳？ クラスチェンジで生えてくるとか何なの？ 後、尻尾も……うん、生えてる。尻尾生えてるよこれ、生えた位置が悪かったのかパンツ破れたんだけど？

「……………。すみません、ちよつと混乱しているので一度クラスチェンジ解きますね」

「あ、っはい」

「おう……………」

頭の中のスイッチを、オフにするつと。パチンツという感触と共に頭のケモミミっぽいモノと尻尾がにゅつと消えた。気持ち悪い感触である。

「コボルト、片づけ終わったよ。ミリア、大丈夫だった？」

あー…………。パンツが破れたぐらいの被害で済んだかな？ 耳と尻尾生えるなら先にそう言ってくれよ…………。獣人用の下着類買っておかないと使えないじゃんクラスチェンジ…………。

つか、『フェアリー・ドラゴニュート』になんてクラスチェンジしたら、背中から生えてきた竜翼と尾骨が伸びて身長と同じぐらいの尻尾ができるって形になって…………。服をパージしてた訳か。ははあん…………。クラスチェンジの調査は次回以降に回そう。耳と尻尾が厄介過ぎる。

「リリ、獣人用の下着類を扱ってる場所、わかる？」

「今日の探索切り上げて行きます？」

「いや、とりあえず今日はクラスチェンジ無しで…………。あー」

ノーパンで探索？ パンツ破れて装備不可能になってるんだけど。

「ミリア様、とりあえず応急処置で縫いますのでそれを此方に……………」

「お願い……………」

うわーうわー、酷い絵面過ぎるう…………。格好良く『アサルト・ステツプ短距離転移』から零距离ショットガンって決まるはずだったのに…………。

第七十二話

まず第一に、クラスチェンジについて一通りの実証が終わったために、此処に記録を残す事にする。

『クーシー・アサルト』

固有ガン・マジック『ショットガン・マジック』『デュアル』

固有魔法『短距離転移』

他特筆事項『狼人の様な耳と尻尾が生えてくる』

使用魔法は『ショットガン・マジック』の『二丁持ち』仕様。

消費が大きく、1回の発射で1マガジン消費するハイコスト仕様。正直言うとそこらのモンスター相手だと威力過多過ぎて魔石は消し飛ばすわ消費は大きすぎるわで使い辛い。

短距離転移アサルト・ステツプの効力はすさまじく、アプデ前の背後転移可能な仕様であった。其の上で転移に必要な消費はそこまで高くはなく、ローコスト&ハイリターンな仕様の素晴らしい技であると思っていたのだが連続転移時に転移酔いが発生する。

1回目は問題ないが、二回目で眩暈。三回目で吐き気。四回連続で行うともれなく昏倒。連続使用は不可能という結論に至った。一応使い方を工夫すればなんとかと言った感じ。

『クーシー・スナイパー』

固有ガン・マジック『スナイパーライフル・マジック』『アンチマテリアル』

固有魔法『無音射撃』と『ステルス迷彩』

他特筆事項『狐耳と狐尻尾が生えてくる。他に比べて尻尾が大きすぎる為、尻尾が邪魔になる』

使用魔法は『スナイパーライフル・マジック』。

完全に威力過多なうえ、発動すると移動が一切不可能になる程の負担がかかる。威力は問答無用のトップだが消費も大きく、一発辺り1マガジン消費というハイコスト。

さらに、『アンチマテリアル』の詠唱を追加する事で5つの魔法陣を連ねた砲身が現れ、最大5マガジンを装填しての超威力&長射程の砲

撃も可能。『リロード』する度に魔法陣が点灯し、最大数装填時にはきらびやかなエフェクトを放つ砲撃が可能だが、消費デカすぎ、威力高すぎ、移動できないというのが致命的過ぎるので封印指定。

固有魔法の『無音射撃』サブレッションは射撃音を消してくれ、『ステルス迷彩』は姿を隠してくれる。効果時間は2分程度であるが、姿を消しての狙撃という強力なコンボが使いそう。

だが、活躍の場が限定的過ぎるので悩ましい。

それ以前に尻尾がでかすぎてクラスチェンジ後にローブが裂けそうになったので対策を考える必要あり。獣人用の加工を施す案も出たが、常時尻尾用の穴が開いてるローブを着てると当然ながら尻の辺りに穴の開いた変態チックな見た目になるので却下。

なんか大人用の穴開きパンティを履いた姿を彷彿とさせる、尻の部分に穴開きスタイルはマジ勘弁。

『クーシー：フアクトリー』

固有ガン・マジック『ピストル・マジック』『リボルバー』

固有魔法『弾丸製造』バレット・クラフト 『罨製造』トラップ・メーカー

特筆事項『垂れ耳と尻尾が生えてくる。一番邪魔にならない』

使用魔法は『ピストル・マジック』の『回転式弾倉』シリンダー仕様。

他のクラスと比べるとだいぶ独特な法則な仕様の為、癖が強すぎる。

まず『弾丸製造』バレット・クラフトの為にマガジンを分解して弾丸単位に変化。30発の素材を使ってクラフトするもよし、そのままリロードするもよしといった感じ。

装填は単発で『リロード』と詠唱する度に一発ずつ弾を込める為リロードに時間がかかる。威力や貫通性能はニンフ型の『ピストル・マジック』と相違無い為、面倒臭くなつた感じ。

弾丸製造にて様々な種類の弾丸を作る事が出来るが、一発ずつ弾丸を製造・装填する事もありリロード速度が極悪。大多数戦には使い辛い。

罨製造は一つの罨に1マガジン消費とコスト大きめだが敵の侵入を防ぐ『即席土囊』や『電気柵』ショック・フェンスなんかは中々の性能。コストに

見合うかという微妙。

『ドリアード：サンクチュアリ』

固有ガン・マジック『サブマシンガン・マジック』『ロウクオリティ』

固有魔法『癒しの波動』『障壁共有』

特筆事項『見た目上の変化はないが足元に魔法陣展開&移動不可能状態に』

使用魔法は『サブマシンガン・マジック』の『低品質』

問答無用の最弱仕様。命中精度が極悪で銃身を限界まで切り詰めたを通り越して銃弾をそのまま暴発させた様な有様。最悪、自身の左右に立つ仲間にも弾丸が命中する事がある。其の上でセミオートではなくフルオートオンリー仕様。『ファイア』の詠唱と共にマガジンを撃ち尽くすまで射撃が止まらない。

威力は極めて低く、リリに直撃しても衝撃で転倒する程度。土下座して謝った。

装弾数は15発固定。マガジン消費無しで発砲可能だが、精度がゴミ。威力もゴミ。むしろ撃たない方がマシレベル。こんなんでしょうと……。

固有魔法の『癒しの波動』は自身を中心に範囲内の仲間の傷を癒す魔法。回復力はかなり高く、範囲もかなり広い。一回の発動に1マガジン消費だが中々の性能を誇る。

『障壁共有』は範囲内の仲間に対して『マジック・シールド』を共有可能。つまりベルやヴェルフも俺の『マジック・シールド』の効果が発動し、攻撃を防いでくれる。

消費する魔力は俺依存の為、ベルやヴェルフ、リリが被弾しまくつてると俺がダウンするが、使い勝手は中々。攻撃魔法が一切使えない事を除けばいい感じと言える。

以上。クラスチェンジ説明終わり。

……正直な感想を言うと『クーシー・アサルト』一択だろうなと思っていたのが完全に覆された感じである。

「ミリア君、クラスはどれにするんだい？」

「ファクトリーで」

ヘスティアファミリア本拠、更新のたびにクラスを変更してダンジョンで試した結果であるのだが、この微妙な性能はなんなのか。

アサルトはまあ、転移酔いのペナルティにさえ気を付ければそれなりだし。スナイパーは威力過多ではあるが決戦用に適切。ファクトリーは癖はあるがそこその汎用性。サンクチュアリは補助のみに回るなら良いが、移動不可能ペナルティは中々大きい上、攻撃手段がその場で武器を振り回す事しかできなくなるのがどうにも。

「それで、一通り試したみたいだけどどうだった？」

「……それぞれ、癖が強い上に消費も大きいですね」

ヘスティア様から紙を受け取りつつも返事を返す。なんかなあ。純粋な強化と喜べるのは『クーシー：スナイパー』ぐらいで、他のはちよつとつて感じ。

「ううん。僕にはなんとも言えないけれど、キューイ君たちと協力すればもつと戦える感じなのかい？」

んー。キューイとヴァンの援護を受けつつ。というよりはキューイとヴァンを支援する形なら『ドリアード：サンクチュアリ』にしている二匹を回復する形で援護……微妙なんだよなあ。

ぶつちやけると『ニンフ型』の基本性能が良すぎると言えればいいのか。他のクラスの性能が尖り過ぎてると言えればいいのか。

「微妙ですかねえ」

「ふうん……つと、更新も終わったしベル君を呼んでくるよ。早く服を着なよー」

「はい」

生返事しつつも服に手を伸ばす。現状で言えるのはどのクラスも特化する方向が尖り過ぎて活躍の場が限られ過ぎる。一応、ファクトリーだけは汎用性はあるがそれ以外は……。

悩んでいるとベルとヘスティア様が戻ってきた様で、ベルの手には袋。買い物にでも行ってたのかね？

「ミリア、クラスは何にしたの？」

「ファクトリーですかね。汎用性高いのでそれで」

「スナイパーじゃないんだ……」

どうやらベルのお気に入りは『クーシー：スナイパー』らしい。

俺を中心に足元に展開される魔法陣。そして複数の魔法陣を連ねた砲身が現れ、『リロード』を重ねる度に点灯する魔法陣。最後に放たれる目が眩むほどの砲撃。

ベルの琴線に触れる様な『カツコよさ』の伴うその姿は、ベルの憧れの的となったのだ。まさに『魔砲』という名にピッタリで、英雄譚の中でも『魔法使い』系の英雄と同じ様なモノを使うのが居たらしい。

ダンジョンの八階層でぶっ放してギルドから『何したの？ ねえ何したの？』という追及をされる羽目になったアレである。壁を二枚程ぶち抜いた影響で一部崩落が発生したらしく、ダンジョン内の行きすぎた環境破壊行為として注意された。まあ罰則はなかったが。

あの魔法に巻き込まれた人が居なくて幸いである。

「そっかあ」

「スナイパーは消費が大きすぎるんですよ。それにあの威力を放つのはやりすぎですし」

残念そうに言われても、あの一撃はミノタウロスクラスにぶち込むもんであって、そこらのゴブリンやコボルトに撃ち込む代物ではない。小動物に戦車砲ぶっ放してどうすんだって話ね。塵一つ残さずに消し飛ばんだからさ。

まあ、緊急時の一撃と考えればって感じだが。汎用性はどうしても欲しいし。

それにファクトリーはなんだかんだ便利な弾丸を作れるからね。

「ほら、二人とも話はその辺にして夕食にしよう」

「はい、わかりました神様」

「はあい」

なんだかねえ。

噴水前に集まったメンバーを見回して頭を下げる。今日はちよつと用事があるんだなこれが。

「ミリア様、今日は予定があるとの事ですが。どうしたのですか？」

リリの質問も尤もである。あと少しの金額で^{サラマンダーウール}火精霊の護布を全員分買える金額が集まる所で、半日抜きたいと言いつせば、まあ。

「用事か。なら仕方ないな。つと、そうだと忘れる所だった。ほら、頼まれてた剣だ。これでよかつたか？」

「ありがとうございます。ヴェルフ」

ヴェルフから差し出された布で包まれた剣を受け取る。前に使ってた剣と同タイプの銃のストックを思わせる柄の剣。前より少し長めにして長めショートソードぐらいにしてもらった物と、左手に持つ様の短めのナイフ一本。『ピストル・マジック』『デュアル』を意識して両手に剣を持つ事に慣れようと作成を頼んだ代物である。

使いこなせるとは思えないが、一応慣れる為にも練習をしないとなあ。

「こんな変なもん作ったのは初めてだ」

背負っていた長さ1・2M程の代物も渡されたので布を少しめくって確かめる。

「ミリア、ヴェルフに何を作ってもらったの？ 槍？」

「変な形……いえ、ミリア様、なんですかその……槍？ 変な突起が付いていますが」

ちらりと覗き込んできたベルとリリの言葉に曖昧に微笑んでおく。この槍の様な代物は簡単に言えば『銃剣装備の小銃』である。

見た目は旧式の木製ストック小銃の下部に刃渡り20C程の銃剣を装着した様な形。当然ながらレシーバー部分はただの飾りで引き金も無く。銃を彷彿とさせる握り部分や形状をしているだけで、『銃器』として銃弾を放つ機構は一切ない。見た目が銃っばいだけ。俺のイメージに合わせた事で魔法の精度上昇を狙った効果を持つ。はずである。

オラリオでの分類は、一応『戟』にでもなるのだろうか？ 長柄武器というには、見た目が珍妙だとヴェルフが眉を顰めている。

制作する上で、俺が絵を書いて柄の部分をこうしてほしいと頼みこんだのだ。理由は、狙撃時に姿勢安定させる為の代物である。ただの棒杖でガン・マジックを使うのがなかなか面倒だと感じたので、あ

の鉄の長杖を銃身に使い、魔力伝導率をそのままに狙撃しやすい形状にしてもらった。

「私の魔法に合わせた……一応杖ですかね」

「杖？ 変な形だね」

「こんな変なもん頼まれたのは初めてだぞ」

一通りいじくりまわした感想としては、十二分な感じ。銃剣として振り回すもよし。狙撃用の杖として使うもよし。良い仕事をしてくれた。

「んじや、他になんか必要なもんとかは無いのか？」

「今の所はこれで十分ですかね。ありがとうございますヴェルフ」

「こつちこそ、キューイの鱗なんか貰ったからな。調整が必要ならまたあとで教えてくれ」

専属契約してはいないが、いろいろと無茶な要求に軽く答えてくれるヴェルフには感謝しかない。

特殊な杖ではあるが、性能が上がったというよりは使い心地が良くなっただけなので、アレだが。

「それでは、私は用事の方済ませてきますね」

「じゃあ昼頃に一度ギルドの方に戻るね」

午前中はディアンケヒトファミリアを訪ねて、午後から探索。今日の稼ぎ次第ではあるが、明日には中層に挑む事が出来るはずなので気合を入れてるベルの様子が微笑ましい。

北西のメインストリートの通称『冒険者通り』、オラリオの中でも特に冒険者の往来が激しい。少しずれた時間帯だと思っただが、それでもダンジョン探索を休んで物資類の補給の為に歩き回っている冒険者が数多い。

そんな冒険者通りの通り沿い、光玉と薬草のエンブレムが飾られた清潔な白一色の建物。ディアンケヒトファミリアの治療院を見て溜息がこぼれかける。

何度もガネーシャ様に『ドラゴンテイマー竜を従える者と会わせろ』と要求を繰り返してきた神ディアンケヒトのファミリアであり。ぶつちやけ印象はあんまりよろしくない。とはいえ命を救われたという恩義があるので会わないという訳にはいかなかったのだ。

「キューイ、大人しくしていただくさいね？ ヴァンは、言わなくてもわかると思いますけど」

「キューイキューイ」

《わかつてる》

二匹のワイバーンを従えて歩いてみると、冒険者が左右に割れてまるで『モーセの十戒』を彷彿させる光景に気分が沈みまくっていく。ヒソヒソと囁かれる内容は『あれがあのだ……』『竜が居なきやなんもできな小人数だろ』『ガネーシャファミリアが居なけりやランクアップなんて……』だの。

良い噂は一つも無く。簡単に纏めりや『竜を従えたのは偶然』『ガネーシャファミリアの援護がなけりや死んでた』『生意気な糞。パルウム』である。

パルウムの評価低すぎい。なんでこんなに不当な評価されてんだよ……。あ、フィンってもしかしてコレをどうにかしたいのか？ なるほど。うん、なんていうかね、パルウムってだけで見下されるこの環境は確かにどうにかすべきだと思う。頑張れフィン。応援してるぞフィン。協力するのは……ちよつと無理だけど。

しっかし、ガネーシャファミリアの援護がなけりや死んでた。ねえ、その通り過ぎて笑えないわ。後偶然従えたつてのもその通りだと思う。

まあ、偶然でも竜を殺せたのならそれは偉業に相違無いらしいが。清潔な白一色の建物の前に立ち。後ろを着いてきていた二匹を振り返る。店の前で待たせるべき？ 中に連れ込むの不味くね？

悩まし気に二匹を睨むと、キューイが睨み返してきた。熱い視線の応酬。なんだやんのか？

「ノースリス様、お待ちしていました」

睨み合いのさ中、治療院から颯爽と現れたのは【デア・セイント戦場の女神】アミツ

ド・テアサレーナ。オラリオ最高峰の治療師と呼ばれる人物であり、ぶつちやけこの人が居なけりや俺は死んでたという命の恩人である。「中へどうぞ。其方の二匹の飛竜も一緒に」

丁重に頭を下げ、歓迎の意を示す彼女。アミッドさんの指示に従ってキューイとヴァンも引き連れて店の中へ。

入り口の部分でキューイが『窮屈』と文句を垂れていたが、そのまま奥の応接室まで案内された。

キューイとヴァンが座る用にか、綺麗なシートが床に敷かれており、其処にどうぞと声をかけられたのでとりあえず二匹に指示をだして其処に座らせる。座るといふよりはとぐろを巻く様に体を丸めて休み始めるキューイ。

ちよつと緊張感も何もない行動に若干呆れ返る程である。

「ようこそおいでくださいました。お久しぶりですノースリス様」

応接室のテーブルに腰かければ、対面に丁重に腰かけて深々と頭を下げるアミッドさん。様付けはちよつと……。

「お久振りです。先日はお世話になりました」

「あれ以降、何かしら体に異常はありませんでしたか？ 魔法を使う際に違和感を感じたりだとかは」

「いえ、特にはありませんね」

それはよかつたと零し、表情を引き締めてアミッドさんはテーブルの上に契約書類を並べ。ついでに医療品の詰ったバッグを置いて再度軽く頭を下げてきたので、此方も頭を下げ返す。

「では、交渉の方を始めさせていただきます」

「……あの、神ディアンケヒトは？」

「今回の交渉は私の方に全て任されていますのでご安心を」

丁重に、今回の治療行為における発生した金額についてはガネーシヤファミアリアが負担している事や、医療品関係の説明。キューイの素材に関する個々の金額の事等。様々な説明を聞きつつも時折質問だけはしておく。

契約する前提で話しているが、契約するかは此方の意思を尊重する事なんかもしっかりと確認するさ中、アミッドさんは真つすぐと此方

を見つめてくる。

「それで、契約の内容といたしましては以上となります。何かしらの追加要求や内容の変更等ありましたらどうぞ」

主にキューイとヴァンの素材。主に鱗、爪、涙、血。採取に手間取らず、量も一日でとれる量を加減した量を提示されており、ここ等は大分考えこまれている様子である。

対する対価が『ヒーラーバッグ』の提供。

オラリオの治療師というのは回復魔法を使う人の事を示す。のではない。

基本的な治療師^{ヒーラー}というのは『医療品を持ち運んで治療行為に精通した冒険者』の総称である。

『魔法』の発現自体が希少である為、治療師と呼ばれていても回復魔法を覚えていないのは普通であり、むしろ覚えていない治療師^{ヒーラー}の方が多いのである。

そして、その治療師^{ヒーラー}達が喉から手が出る程に欲するのが今回の『ヒーラーバッグ』である。

『ヒーラーバッグ』とは簡単に説明すると、ダイアンケヒトファミリアが誇る治療用の薬、道具類一式がまとめられたバッグであり。ダイアンケヒトファミリアの主力商品の一つである。

契約を簡単に纏めると『一週間に一度、竜の素材と引き換えに、ヒーラーバッグの内容物の補充』という形になる。んで、こまごまとした内容としては『タイミングはヘステイアファミリア側が決める』『問題発生時はガネーシヤファミリアが仲裁に入る』『素材の品質次第で追加で高位回復薬や万能薬等の追加支給も行う』等。

正直言えば条件だけ見ると此方が優位過ぎる気はする。特に万能薬^{エリクサー}なんかは一本で50万ヴァリスはするのだ。

「此方が優位過ぎる気がしますが」

「いえ、そんな事はありません」

アミッドさん曰く。

竜系の素材は上層、中層においては希少種^{レア}モンスター以外からは採取できず。下層の竜種も数が多くない。深層域の竜種はステイタス

も凄まじく倒すのも一苦勞。

結果としてその希少価値は説明が不要。鱗一枚の取引金額は数万ヴァリスから数十万ヴァリス。先月ロキファミアが入手してきたカドモスと呼ばれるモンスターのドロップ品。『カドモスの皮膜』については数百万ヴァリスの金額が付いたらしい。

其の上でその素材から作れる医療品の金額は数千万ヴァリスを超える収入が見込める。

以上の事から実際の所はディアンケヒトファミリアの儲けの方が圧倒的に多く、ヘステイアファミリアからぼつているとの事。いや、其処まで話して良いのかよ……。

「その上で、彼女。キューイの素材についていくつかの検証をさせて頂いたのですが」

検証という言葉に眉を顰める。何かされたのか？ と危惧すればアミッドさんが丁重に説明してくれた。

「どうやら俺が重傷を負った際にその場でキューイから素材をいくつか採取させてもらって、その素材を使って治療を行ったらしい？」

んでその場でキューイから『鱗』『爪』『血液』を貰い、その素材を使って即席の『再生薬』を作り出したらしい。いくつかの薬を組み合わせて、キューイの素材から『再生能力』という効力を引き上げたモノを作って投与。そのおかげで俺が助かったとかどうか。詳しい説明されても薬師じゃないからわからんけど、キューイの素材。特に『鮮血』の持つ『再生能力を引き上げる効力』というのが凄まじいらしい。

「そういえばナーザさんも『リジエネポーション』とやらを作っていたが、あれも似たようなもんらしい？」

首を傾げつつもなんとか理解しようとするが、専門的な説明はちんぷんかんぷん。ダメだこりやと諦めかけているとそれに気付いたアミッドさんが一つ咳払いをして超かみ砕いて説明してくれた。

「……………そうですね。簡単に言ってしまうと、失った手足なんかも再生できる薬の素材として優秀なのです」

ほう……………ん？ ……ん？ 失った手足を再生？

「えつと、つまりはナーザーさんの腕も元通りになると?」

「いえ、現段階においては其処までの効力はありません」

即席再生薬。俺が重傷を負ったあの日にできた代物は全部で3本分。内1本は俺の治療に使われ。残り2本を解析していつてわかったことがいくつか。

後は前に見つかった竜力薬の効力向上実験の方も云々。

「竜力薬ですが。危険性が高すぎるのでウチでは制作を行いません」

「……? 需要はありそうですけど」

どうにも、『力を増強させる』というのは画期的な代物ではあったのだが、効力の引き上げに成功したものの、使うにはリスクが発生する為に販売できる代物ではなくなってしまったらしい。

自身の力に振り回されて自滅しかけるとのこと。

これは臨床実験の最中に起きた悲劇の話っぽいんだが。

とあるディアンケヒトファミリアのレベル1の団員が効力向上を行って飲んでみたらしい。

力が増強されたか確かめる為に剣を振った結果。自身の腕がへしやげて折れた。

上昇した力に対し、耐久が低すぎた影響で腕を振るうという行為にすら体が耐え切れなかったらしい。

ちなみに力の上昇具合で言うとレベル3つ分の上昇だそうだ。

んで悲劇はこつから。

折れた右腕の痛みに咄嗟に左腕で肩押さえたのだが……そのまま自身の肩を握り潰してしまったらしい。

加減が出来ず、自身の手で肩を握り潰すという光景に唾然。その後は麻酔の様な物で麻痺させて落ち着かせた後に腕の治療を行ったそうだ。

『力だけを増強させる』という危険性について考慮し、今後の作成・研究を封じざるを得ないっぽい?

それに対して再生薬の方は危険性も無く、しかも失った手足も生えてくるという凄まじい再生能力を發揮できるかもしれないので需要が非常に高いらしい。

冒険者つてのは怪我する確率が非常に高く。それこそ片手を失ったなんて怪我はありふれている。

どうやら万能薬は回復させる代物であって再生させる代物ではないらしい？

簡単に言うと、千切れた腕を繋げる事はできても。潰れた腕を生やす事はできないらしい。ナーザさんの腕もモンスターに食われて跡形もなかった為にエリクサーではどうしようもなかったのだ。

それが、今回のアミッドさんの作り出した再生薬は手足を生やす。つまり無くなった物を取り戻せる薬がどうのこうの。

これが完成すれば一本数百万ヴァリスは確実な代物になると。

「へえ」

「……すいません。専門的でわかりづらいでしょうが。この薬の完成は今までの常識を覆す上、オラリオの冒険者が欲していた代物でもあるのです」

手足を失って冒険者をやめざるをえなくなった冒険者達。本来なら第一級程の能力を持つ者でも、腕を失った、足を失った等の治療不可能な怪我の所為で冒険者として死んだ者が多い。

もしそんな者達の手足を再生できたら？ 冒険者として死んでしまった者達にとっての吉報となる。

俺も昔は冒険者だったんだがな。膝に矢を受けてしまつてな……つてのが無くなる訳か？

「なるほど」

「なので多少の出費については容認されています。今回の契約はデイアンケヒトファミリアとしましてはなんとしても結びたいものなのです」

他のファミリアに素材採取を頼むのはどうなのか？

「出来ません。特に『竜の血』の入手がほぼ不可能なのです」

鮮度抜群の『竜の血』。それを手に入れる方法？ 竜を生きたまま捕まえてくる以外にない。

深層にたどり着くまでにかかる期間は『最短で五日』である。ロキファミリアの記録っぽい？

んで、帰ってくるのにかかる期間は『最短で三日』。『竜の血』のみを抱え、それ以外のすべてを破棄し、モンスターを無視し、休まず走り続けて三日。

『竜の血』が劣化するの半日程度。当然ながら間に合うはずもない。

其の上でガネーシヤファミアのワイバーンであるヴェルヘルムから少量仕入れているが、竜の種類が違うのかキューイの血程の再生能力はないのだ。つまり『キューイの血』限定の効果らしく、素材の希少性は抜群。鮮度についてはその場で採取できるので文句無し。と

「つまり、もう少し要求しても問題ないか？」

エリクサーを一ダースとか頼んじゃうぞ？

「それでも構いません。追加しますね」

さっとペンを走らせ、契約書の内容に『エリクサー 一ダース』と追記される。

『キューイの血』一瓶から三ダース半ぐらいの再生薬が作れるらしい。一本数百万は確実にするっぽいので損はしないと。へえ……。

「その再生薬、私にも一本くれませんか？」

「……何に使用するのでしようか」

「ナアーザさんにあげようかと」

ナアーザさんも腕が元通りになればー。

「……………ナアーザ、というのはミアハファミアのナアーザ・エリスイスの事でしようか？」

「はい」

「申し訳ありません。現状の再生薬では彼女の腕を再生させる事はできません」

はい？

失ってから時間が経ち過ぎている場合は再生できないらしい。とはいえそれは現在の再生薬の話であって、研究を進めていけばいずれ『完全再生薬』。過去に失われた手足も再生できる薬に仕上げる積りなので是非契約をしてほしいと。

「必ず、この再生薬を完成させますので。協力をお願いしたいのです」
少しでも悲しむ冒険者達を少しでも減らす為に、かあ。志の高い人である。

とはいえ、契約自体に損はない。少しでも早く『完全再生薬』とやらが完成すれば、ナーザさんの腕も元通りになるだろうし。他にも手足が無くなっても時間が経ち過ぎなければなんとかなるっていうのは大きいだろうしなあ。

エリクサーを一ダースはガネーシヤ様に渡そう。色々と迷惑かけてるし、お詫びにもなるだろう。ちようど良いと言えば良いか。

「契約内容の再確認をします」
「はい」

契約する際に契約書をしっかりと読むべし。騙されてからじゃ遅いしね。分からないとか不鮮明な部分は徹底的につつき回してからでないとな面倒な事になるしなあ。

……気が付けば昼過ぎてるし。ベル達待たせてしまってるな。とはいえ契約に関して手抜きはできんし。

キューイ、腹減ったじゃねえ。ちよつと黙ってるろ。

第七十三話

へステイアファミリア本拠前、サラマンダー・ウール火精霊の護布を身にまとったベルと俺。

「それじゃ、行つてきます。神様」

「いつてきますね」

「キューイキューイ」

中層に挑むのに必須であるとエイナさんが何度も言っていたサラマンダー・ウール火精霊の護布の為の資金が昨日のダンジョン探索で集まりきり、昨日の内に購入まで済ませて、いよいよ今日が中層へと挑む日である。

「うん。それにしても……明るい所で見ると中々目立つね、そのサラマンダーウールは」

満足げにうなずいてしみじみと言った様子でベルと俺を見たへステイア様。

いつも通りの濃い色合いのローブに竜鱗の朱手甲、革ブーツ。魔法使いっぽいとんがり帽子。その上にまとうのはサラマンダー・ウール火精霊の護布。

光沢に溢れた赤い生地。少しひらひらとした薄い作りは、外から見る分にも重さというものを感じさせない。色合いからして合わないとは言わないが、かといって似合うかと言うと……。赤色が強すぎる気はする。赤魔法使いかな？

「中層に行くなら、必ず装備しなさいってエイナさんに言われたんです。少し派手かなって思うんですけど」

其処らの道端歩いてる冒険者の方がよっぽど目立つ装備してる時あるからなあ。これまでのベルの装備って地味とまでは言わないけど目立ち難い感じだったし。俺の場合は……。うん。一般的魔法使い……。じゃあないな。

ローブの下に鎖帷子装備してる魔法使いっているんかね。それに背中には銃っぽいモノを背負って……。

魔法使い＋軽戦士＋銃使い？ なにそれ職業特盛過ぎじゃない？

「ま、あのアドバイザーくんの言う事だ。聞いておいて間違いはないだろう。キューイくんとかヴァンくんは良いのかい？」

ワイバーン用の火精霊サラマンダー・ウールの護符はなかったからなあ。まあ、キューイ曰くだが『火なら平気』だそう。ヴァンの方は『舐めるな』だとき。二人とも自信あるみたいなんで大丈夫だと思いますよ」

キューイに関しては火で怪我する光景とかうかばんしね。

「それもそうか。とにかく、君たち二人とも、レベル2になったからって無茶するんじゃないぞ」

「はいっ」

「わかりました」

わかってますよ。大丈夫です。

「……本当にわかってるのかい？ 特にミリアくん」

いや、まあ確かに無茶ばっかしてきたけど、其処まで疑わなくても……。疑われる原因がある以上なんともなあ。

「ミリアが無茶しようとしたら。僕が止めますんで」

「……………ベル君も無茶する方だからなあ」

あはは……。仕方ないっちゃ仕方ないか。

上層の最下部。十二階層から十三階層へ通じる階段の前の大部屋でモンスターを倒し終え、小休止をしつつも四人で顔を突き合わせて話し合いを行っている。

「では、ここで最後の打ち合わせを行います」

リリルカが広げた十三階層の地図を眺めつつ、今回何処まで進むのかを決めておく。中層には『縦穴』が無作為に現れたりするらしい。飛び降りれば下の階層へ行けるらしい。命の保証はないが。

「あそこを抜ければ十三階層。中層です」

「中層以降は炎なんかの遠距離攻撃手段を持つモンスターも居るみたいだし、離れてても油断は禁物だな」

「そうだね。サラマンダーウールがあるからって油断はダメだね」

「地図は十三階層までのしかないの？」

リリの広げた地図の描かれた紙束は、一階層から十三階層までの分しかない。十四階層以降の地図は持ってないのか？

「そうですね。サラマンダーウールの方を優先したので十四階層以降の地図は余裕が無かったのだ」

ま、そうなるか。地図に関しては今回の中層進出の稼ぎで買えばいいし。慌てて十四階層に降りる必要もないな。

「では、定石通り、ここからは隊列を組みます」

前衛はヴェルフとヴァン。ヴェルフは大刀で、ヴァンは体術(?)でそれぞれモンスターを止める役割。

中衛はベルとキューイ。ベルは敏捷を活かし、キューイは小火球での援護が主に。負担が大きい役割だが、同時に重要な役割でもある。

後衛は俺とリリ。俺は消費の少ない『ピストル・マジック』をメインに援護。リリは『リトル・バリスタ』による援護だが威力は期待できない上、持ち込んだボルト数も限りがある。

バランスはそこそこだが、何処か一人が崩れると一気に崩壊しそうな危うさが残るのがなんとも。

ヴェルフが潰ればヴァンの大味な体術ではモンスターを止めきれず。ベルが潰ればキューイは細かな援護なんぞ出来ず。俺が潰れば前線を押し戻す火力が不足するし、リリが潰れると治療用の道具類が全損する。

キューイが潰れば索敵能力が失われるし……。そう考えるとヴァンが潰れても被害は少ないか？

まあ、そもそも被害を出した時点でお察しではあるんだが。

「それでは。隊列は以上です。何か質問は――

「ふふっ」

リリが言葉が続けようとしたところでベルが急に笑い出した。おかしい事でもあったのかとベルを伺えば、リリが諫める様に口を開いた。

「何笑ってんだ、ベル」

「ベル様、緊張感が足りていないのではないですか」

「ごめんごめん」

照れた様に笑いつつも、ベルはこちらを見回して口を開いた。

「こういうの、わくわくしてこない？ 皆で力を合わせて冒険しよ

うって」

ふうむ。わくわく、かあ。しないかなあ。

無論、理解はできる。そういう未知に対して胸の高鳴りを覚える気持ちはわからなくはない。わからなくはないが、共感は出来なさそうだ。正直言えば怖いし？ 火耐性の装飾品装備してるから平気だと胸を張ればいいんだが、やっぱ炎を吹く化け物が居るって言われるとなあ。冒険より安定を求めたい気持ちはある。今はアレだから何も言えないが。

「あつはつはつは、そうだよな。わかるぜ。わくわくしなきや男じやないもんな」

男じやないかあ。ううん。

「リリは賛同しかねますが。お気持ちはわかります」

「そうですね。私もリリと同意見ですよ」

男じやない。どうなんだろうね。

バベルの前。数多くの冒険者がダンジョンに向かうのを見つめつつも拭い切れぬ不安感を抱いたヘスティアが冒険者の流れを眺めていると、親友の神の声が聞こえた為^レに其方を向いた。

角髪の男神は腕を組み。正面に居る眷属達に激励の言葉を送っている所であった。

「ミコトもランクアップしたからって、カミ過ぎるなよ」

「はいっ」

生真面目そうな少女。最近ランクアップを果たし【絶†影】の二つ名を得た神タケミカツチの眷属の姿を見て、ヘスティアは自身の眷属の二つ名が平凡な物である事に安堵の吐息を零した。

「それでは行ってきます。タケミカツチ様」

「おう」

タケミカツチに頭を下げたダンジョンに向かう姿を見てから、ヘスティアはタケミカツチに声をかけた。

「ふうん。あれがタケのファミリアの子供たちか」

「おう、ヘステイア」

ファミリアの子供の後姿を見つつも、ヘステイアは質問を飛ばした。

「中層へ向かうのかい？」

「ああ。お前の所の【未完の少年】リトル・ルーカーと【魔銃使い】もそろそろだろ」

「……正しく、今日が初挑戦さ」

ヘステイアの表情を伺ったタケミカツチが口を開きかけ、閉じる。ヘステイアの表情にはありありと『眷属が心配だ』と書かれている。

「今朝早く出発していったよ」

「ま、心配してても何もはじまらないからな。俺たちは信じて待つだけさ」

「うん」

タケミカツチの言葉にヘステイアが頷くとほぼ同時に、地面がかすかに揺れる。鳥が一斉に飛び立ち、周りの冒険者も立ち止まって周りを見回す者が居るのを確認し、それが気のせいではないと認識したヘステイアが呟く。

「地震？」

「最近多いな」

「そうだね。たまたま続いているだけだとは思うけど」

周囲を囲む壁も、床も、天井も岩盤で構成されており、どこか湿った空気が漂っている。何も知らなければ、天然の洞窟と思わせる中層域最初の領域。冒険者の間では最初の死線ファーストラインとも呼ばれている。

そんな洞窟にしか見えない一本道を真っすぐ愚直に走ってくる大型犬の様な生き物。らんらんと輝く赤い瞳が、その大型の其れがただの生き物ではなく、人に殺意抱く迷宮の怪物なのだとしめてくる。

突っ込んでくる数は八匹、上層では多いと呼べる程の数だが。中層では少ない部類に入る数だ。

『ファイア』ッ」

詠唱と共に放たれた『ピストル・マジック』の弾丸が一匹の犬型モンスター、放火魔バスカワイルの異名を持つヘルハウンドというモンスターの頭蓋を穿ち抜き、その後ろを疾駆していた別個体の肩の辺りに着弾してモンスターの動きを止める。

直線通路の為、狙いやすいのだがそれでも数で押されると厳しいモノがある。

飛び込んできた二匹にヴァンが突っ込んでいき、ヴェルフが一匹を迎え撃つ。フリーの五匹の内、キューイ狙いが三匹。ベル狙いが二匹だ。

先程からキューイが『バーカバーカ』と挑発紛いな事を言いまくっている所為なのか、キューイを狙おうとする個体が多い。こいつらキューイの言ってる事わかるのか？ ……いや、雰囲気か。なんかいかにも馬鹿にしていますよって雰囲気で鼻で笑ってるやつが居たらねえ？

中層に侵入して初の戦闘ではあるが。そう難しい事はない。火を吹こうとあからさまに動きを止めた個体は容赦なく撃ち抜かせてもらい、ベルが遊撃を担当。キューイが挑発で敵の動きを攪乱し、ヴェルフとヴァンで数を減らす。俺は節約思考でいかないとなので今回は最低限の補助のみとさせてもらっている。

最後の一匹をヴェルフが真つ二つにし、中層初の戦闘が終了した。感想を言わせてもらおうとするのなら———純粹に数も能力も上層と段違いだ。

「よし、中層で最初の戦闘にしては、上出来じゃないか」

「うん、全然歯が立たない相手じゃない」

確かに、歯が立たない相手ではない。それはそうなんだが……。

「キューイ、敵は？」

「キューイキューイ」

めっちゃいっぱい。だとき、やっぱ数が多い。能力的にはそう難しくはないが、総合すると『難しい』としか言えないんだよなあ。

「キューイキューイ？ キューイ？」

はい？ ベルがいっぱい？ ちっちゃいベル？ なんだそりゃ。

いや、敵だろ？

「ともかく、開けた場所に急ぎましょう。この細い通路で何度も戦闘は厳しいでしょうし……ん？」

「リリ、ヴェルフ、ベル。気を付けて」

「どうしたのミリア？」

「何かいたのか？」

視線を向けた先。キューイ曰く『小さいベル』が数匹、暗闇の中からずるりと這い出てくる様子が見えた。小さなベル、言い得て妙である。

長い耳に、白と黄色の毛並み、ふさふさの尻尾。額には鋭い一角が生えており後ろ足で地面に立っている兎型のモンスター。確か、名称はアルミラージだったかな？ 首狩り兎とかだったらアレなんだが。

三人も気付いたのか其方に視線を向けて呟く。

「……ベルさま？」

「うん、ベルだな」

リリ、ヴェルフ。確かに第一印象がベルと一緒に……。

「アルミラージだってばっ」

ベルの言葉に反応した様に、小さなベル、アルミラージが片手斧を取り出して跳躍、とびかかってくる。兎っぽい見た目を裏切らない跳躍を以てして突っ込んでくる姿は、失礼な話だがベルの姿と一瞬被る。いや、ベルはあんなに興奮しながらとびかかってきたりはしないだろうが。

「ベルきた」

「ベル様、せっかちですね」

「だからアルミラージだってっ！」

すまん。割と真面目にベルにしか見えなくなってきた。攻撃するの躊躇いそうになる。

《死ね》

「キューイキューイ」

……………。ヴァンの無情な尻尾攻撃で一匹の頭骨が弾け砕ける。

続く流れる様な一撃で別の一匹の胴体がへしやげ折れる。くの字になつて吹き飛ぶ個体。

そしてキューイの無慈悲な噛みつきで一匹の肩が抉れる。そのままキューイがバリバリとアルミラージの体をかみ砕いて——お前ら容赦ねえなっ!?

大広間となっている空間。俺の張り巡らした『簡易土囊』にて侵入口をいくつか塞ぎ、侵入してくる数を制限しながらもなんとか撃滅を繰り返し、漸くモンスター殲滅が完了した。

ぶつちやけて言おう。中層舐めてたつつーか、想定より数が明らかに多い。

「ぜえ、はあ……糞、ここまで数が多いのかよ」
「皆、無事?」

大刀を杖代わりにすりつくヴェルフに、膝を突いて荒い息を零しながらも声かけをしてくるベル。リリは邪魔になりそうな死体なんかを必死こいて運び、キューイとヴァンは周囲を警戒している。

俺は、なんとか銃剣を杖代わりにしつつもトラップ設置中。残りマガジン2つしかないよ。

「ミリア様、精神力回復特効薬をどうぞ」
「ありがとリリ」

リリの差し出してきた薬を一气飲み。何度か攻撃を食らったが、火にしる物理にしる『マジックシールド』が罅割れる程度で碎ける所までいかなかったのは幸いである。とはいえ本当に数が多かった。

「しっかし、ミリアが居なかつたら囲まれてたぞ」

「うん。ミリアの仕掛けた、この……」

「『簡易土囊』ですか?」

「そうそれ、それのおかげでモンスターに一気に襲われなくてすんだよ」

『簡易土囊』は簡単に言えば敵の侵入を防ぐのと、飛び道具を防ぐ効果しかない罫である。攻撃能力は一切ないが、そこそこの耐久性を持

つのでモンスターの進入路になる通路を塞ぐ様にいくつか設置して侵入してくる数に制限をかけたのだ。

おかげで一気になだれ込んできて囲まれるといった事態にもならず、背後に設置しておけば壁代わりに背後からの攻撃に気を使わなくてよくなるなど、使い勝手は良好。若干、コストが高いのが難点だが。

「ふう、それで。どうする？ 進むか？ この数を相手にし続けるんだったら、かなりきついぞ」

ヴェルフの言う通りだ。今回であった数は、少なくとも五十は居た。其処からさらに追加で四十近くのモンスターがやってきて……。散見される魔石の数だけ見ても、うんざりする量のモンスターが居た事は間違いない。

多分だが普通に百を超えてたと思う。

なにより恐ろしいのは、上層では『怪物の宴』モンスターパーティーと扱われるこの量でも、中層ではわりと普通。むしろ少な目という評価に落ち着くのだ。中層ヤバすぎる……。

「ううん。確かにきついけど、注意すればなんとかかなりそうなんだけどなあ」

「ベル様、油断は禁物です。今の量は中層では普通目なのです。むしろ少ないぐらいと考えた方が良いでしょう。進むのはよろしいですが、その前にミリア様が回復しきるまで待つべきかと」

回復、というかマガジンを作成しておかないと、次きたら死ぬる。

「とりあえず予備マガジン作成しますので、周辺警戒を——キューイ？」

「キューイキューイ、キューイ」

うん？ 怪我人抱えた間抜けがモンスターの大量に追われている？

いや間抜けって言いすぎ。

「ミリア様？ どうかありませんでしたか？」

「報告、こっちに冒険者が向かってきてる」

ヴェルフとベルが首をかしげてるが、リリルカだけは察したのか目を細めて拾った魔石やドロップ品を収集袋に手早く収めた。

「状況は？」

「完全によくはない。モンスターの群れに追われてる上に、怪我人まで抱えてるみたい」

怪我人を抱えてる、という一言にベルが目を見開き、即座に口を開いた。

「助けなきやつ」

「……ベル様」

リリルカの苦虫を噛み潰したような表情に、ベルが驚きの表情を浮かべる。正直言えば、俺もリリと同じ感想を抱かざるを得ない。

「ベル、それ本気で言ってるのか？」

「ヴェルフ？」

「同じパーティならまだしも、他のパーティを助けるのはなあ」

そりやそうだ。ダンジョンに潜る冒険者の鉄則。自己責任って言葉もあるのだ。怪我人が居るからと言って助ける為に手を伸ばすのは感心しない。

「でも、怪我人が居るならなんとかしてあげないと」

「ベル様、お言葉ですが。推奨できません」

きつぱりと、リリルカが言い切る。むしろ言い切ってあげないといけない場面か。

「ダンジョンに潜る以上、自己責任としか言えません。そのパーティは、運が無かったのでしょうか」

ベルの表情が見るからに苦々し気になる。アイズさんに助けられた時の事でも思い出しているのか。

「それに今、私たちのパーティはモンスター二匹を編成しています。他のパーティにどう思われるか」

その問題もまあ、下手したら助けてあげたのに『あのワイバーンに襲われた』なんて言っていちやもんつけられても困るし。

「とりあえず現状、出せる選択肢を上げるわ」

一つ、助ける為に動く。

二つ、見捨てて逃げる。

「二つ目の案は、リリの言う通り、おすすめはしないわ。相手の素性が

さっぱりだし、変なファミリアだったら擦り付けられるかもしれない
「い」

怪物進呈パス・パレードというんだったか。されたら本気で死にかねない。上層の数ならまだしも、中層での普通の数ですら、あんなだったんだからな。

「二つ目の案は、堅実ですね。冒険者の殆どがこつちを選びます。確かに見捨てる事による罪悪感はありませんが、確実に安全です」

見捨てる罪悪感はあるだろう。だが、こつちの選択肢を選ぶのが一般的だ。普通ならそうだろう。

普通なら

「助けよう」

まっすぐ、迷いなく呟かれたベルの言葉に思わず吐息が零れ落ちる。

呆れた様な表情をしつつも、何処か嬉しそうなヴェルフ。やっぱりそちらを選ぶのかと呆れつつも納得した表情のリリ。キューイが『馬鹿なの』と呟き、ヴァンは目を瞑って身を休めている。

そりや、普通なら見捨てるしかない場面であったとしても、ベルなら必ず『助ける』っていうだろう。

ベルの良いところであると同時に悪い癖ともいえる優しさ。一緒に居て心地よいと思えるそれ。

とはいえ、このまま普通に助けるっていうのは流石に危な過ぎる。助ける相手について最低限の情報収集は必要だし。後ろ暗いファミリアが、意図して怪物進呈パス・パレードをしてくるかもしれない。

「ベル、助けるのは良いですけど、最低条件を設けさせてください」
まず一つ。『ファミリアの確認』、ブラックリストに載ってる様なファミリアなら迷わず逃げる。そうでないのなら交渉を始める。

次に向こうと連絡をとりあつて『共闘する意図』の有無の確認。擦り付けられてはいおしまいでは笑えない。

ベルが『助けよう』と言ったのなら、仲間として全力で支えようじゃないか。うん、その優しさを貫く為にもね。

ヴェルフも、リリも、呆れた様な、けれども不快感の無い表情で頷

き合う。

「それじゃあ」

「おう、とりあえず交渉次第だな」

「確認に行くのは冷静なミリア様が良いでしょう」

「ヴァンを連れていくわ。此処にはまだ罨も残ってるし、迎え撃つならこの場所で、もし決裂したらキューイに伝えさせるから、即座に撤退よろしく」

さて、いきますかね。

第七十四話

ダンジョン十三階層。中層を嘗めていた等という事は決してない。無かったはずだ。

万全の準備を行い、レベル2になって挑んだ中層域。

油断してはいなかった。けれども、ダンジョンは甘くはない。

洞窟を思わせる雰囲気の通路を走る仲間の背を追いながらも、後ろを振り向けば数匹のアルミラーズの姿が確認できた。

桜花に背負われた千草の肩には、アルミラーズがよく手にしている石の斧が深々と突き刺さっている。出血を抑える為に包帯で固定されているのみで、碌な治療が行われておらず、滴る血が道に点々と零れ落ちる。

その滴る血の痕跡が、モンスターの追跡を撒くのを阻害している。千草を見捨てるか、モンスターを掃滅するかのとどちらかをしなくては、このままではモンスターに追いつかれて全滅してしまう。

それ以前に、出血によつて千草の顔色は既に青褪め始めており、このままでは長くは持たない事が伺える。

もつと自分がしっかりしていれば、歯噛みしながらも振り向き反転。真つすぐ走つてくるアルミラーズを居合の一太刀で斬り捨てる。残る一匹も突きで対処して——他のアルミラーズに隠れる様に潜んでいた一匹が真つすぐ突っ込んでくる。

しまった、そう思った時には刀はアルミラーズに突き刺さり、直ぐには抜けなくなつてしまった。刀を引き戻そうとするも、それよりも早く隠れていた一匹が目の前に迫る。

「ニコトッ!!」

桜花の焦る声。ああ、私はなんてしようもないミスをしでかしてしまったのだろうか。焦りか、それとも油断か、あれだけの数のモンスターから逃げているさ中に、追つてきているのが三匹だけしかない事に違和感を覚えるべきだった。

眼前に迫る鋭い角、顔の中心を穿つのに十分な威力と鋭さを伴った突進だ。即死か、運が良ければ重傷で済むか。どちらにせよ私は此処

でお終いだ。

脳裏に浮かんだ主神の姿に謝罪した。時の流れが遅くなったかのように感じ、走馬燈が駆け抜けていく。せめて桜花達だけでも助かってほしい。そう思いながらも目を瞑る事だけはせずにアルミラージを睨み——唐突に響いた幼い少女の声と共に、今まさに自分の顔を穿とうとしていたアルミラージが吹き飛んだ。

『ファイア』ツ!」

吹き飛び、壁にたたきつけられて動きを止めたアルミラージを見て、ようやく自分がまた生きている事に気付いて腰が崩れ落ちかけた。

「ミコトっ! 無事かつ!」

桜花の焦る声、此処で座り込んでいる暇はない。現にモンスターの声は未だに響いている。

「あ、ああ。なんとかか……それより、今のはいったい」

幼い声に聞き覚えは無く。自分の仲間ではない誰かだというのはわかる。いったいどこから、そう疑問を覚えて周囲を見回せば、遠く離れた通路の分岐路にオラリオの一般的魔法使いの様な格好をした、けれどもどこか違和感を感じさせる小柄な人物がとんがり帽子を片手で押さえつつ此方を見ていた。

「貴女は……」

「押し付けるか」

「っ! 桜花殿っ!?!」

助けてくれたらしき人物に、まさかモンスターを押し付ける様な事は出来ない。桜花の呟きに思わず桜花を見れば、彼は苦々し気な表情でつぶやいた。

「このままじゃ千草がもたない。どっかで治療しないといけない」

千草はモンスターに追われていて応急処置すらできていない。確かにその通りだが、押し付けるのは……。

迷いながらもその小柄な人物の方を伺えば、その人物は声をかけてきた。

「此方へステイアファミリア、ミア・ノースリスです。其方の惨状に

ついである程度理解しています。ファミリア名を名乗って頂いてよろしいでしょうか」

その人物の言葉に思わず目を見開いた。

ヘステイアファミリア、それは最近有名になったファミリアでもあり、タケミカヅチ様からも聞いた事があるファミリアでもあった。

レコードホルダー
世界最速兎、そしてドラゴンテイマー童を従える者。オラリオでも別格な有名人の所属するファミリア。そして、神タケミカヅチと交流のある神が主神を務めているファミリアだ。

「っ!? こちらタケミカヅチファミリアっ! タケミカヅチファミリアだっ! 主神同士の誼みで助けを求めたいっ!」

即応で桜花が声をかければ、小柄な人物。ミリア・ノースリスは軽く驚いてから大きく杖の様な、槍の様な珍妙な武器を振って答を返してきた。

「この先のルームで防衛線の準備を行っています。応急処置も其処で行う積りですので共闘の意思ありならば此方に来てください」

桜花と顔を合わせ、頷き合う。この状況での救援。蜘蛛の糸にもすがりたい状況であったのだ、感謝してもしきれない。

「わかったっ! そっちに向かうっ!」

「灰色のワイバーンと、赤色のワイバーンは私の調教タイム済みの仲間ですので攻撃しない様に、それと後方から来る敵は私に任せて先に行つて」

そういうと彼女は杖の様な槍を構え、魔法を詠唱しはじめ——すぐに攻撃を開始していた。

『ピストル・マジック』『リロード』『ファイア』!」

後ろを振り返れば、遠くの方に見えたモンスターが灰になって崩れ落ちる姿が確認できる。あの距離からの的確に魔法を当てた事に驚きつつも、桜花達と共に彼女の横を走り抜ける。

通り過ぎるさ中、彼女はそのまま私たちの隊列の後ろにピタリと張り付いて走っているのを確認してから前を見据え——後ろで響いた詠唱に思わず再度後ろを振り向いた。

『ファイア』『ファイア』……数が多いわ。ヴァンっ、適当に足止めお

願い」

並行詠唱。走りながら、当たり前の様に行われた行為に目を見開き、驚いていると前を走っていた桜花の驚きの声が聞こえ、前を向けば灰色の何かが自身の真横をすり抜けていった。

モンスターかと驚いてその灰色の何かの姿を追う。目に飛び込んできたのは灰色の小柄なワイバーンの姿。

ミリア・ノースリス殿の言っていた調教済みのワイバーンであろうそれ。

後方、アルミラージュとヘルハウンドの群れの中に恐れを知らずに真つすぐ突撃し、その群れを散り散りに粉碎して即座に跳躍と滑空をしてミリア殿の横に並走しはじめる。

ミリアが口元に笑みを浮かべてそのワイバーンをほめれば、何でもないという様に唸り声を上げるワイバーン。オラリオで流れていた噂が真実と知り、目を剥いて驚いていると、ミリア殿はこちらを見て口を開いた。

「二応状況確認。其方の戦闘員の状態と、負傷具合。後は……そつちの射手の矢筒に矢が入ってない様に見えるけど、剣は？」

矢継ぎ早の質問に一瞬怯み、直ぐに答える。

「戦えるのは私と桜花殿の二人。一人はサポーター、一人はマインドダウン寸前。一人は矢を補充すればなんとか戦えるでしょう。千草は簡易手当しかできておらず完全な止血が出来ないのでこのままでは失血死してしまいます。矢についてはサポーターバッグに予備が一束入ってますが取り出す余裕が無くて」

走りながら状況を伝えれば、彼女は一つ頷いて後ろに向かって数回魔法を発動したのち、桜花殿に走り寄って並走しながら槍の様な物の切っ先を千草に向けた。驚いた桜花が槍の切っ先から逃れる様に動き、声を上げる。

「おいっ！」

「避けないで、回復魔法使うだけだから」

何気なく彼女は『回復魔法を使う』と口にはしているが、現在も皆で走って移動しているのだ。立ち止まる余裕はない、のだが。ミリア殿

は当たり前前の様に魔法を唱え、発動した。

『癒しの光を』『レッサーヒール』……あんまり効果無さそうね。斧抜かないと——此処で抜いたら不味いか。もう少しだから耐えて頂戴」
申し訳なきそうしているミリア殿。当たり前前の様に彼女が走りながら魔法を扱っている事に驚きを隠せない。並行詠唱、自身も魔法を覚えている事から、詠唱しながら他の事を行う事がどれ程難しいのかは理解している。それが平然と行えている事から、噂はしよせん噂だったのだろう。

ドラゴンテイマー
竜を従える者はガネーシヤファミアのお零れに預かっただけ。何の取り柄もないただのバルウム。従ってもらっているワイバーンが居なければ何も出来ない。

そんな噂であった気がする。神タケミカヅチも言っていた。『ヘスティアの所の子は只者じゃないだろう』と。

モンスターに追われていたファミリアに合流して、思わず驚いた。と言うか状況最悪なうえ、見捨てるという選択肢が除外されてしまった訳で。まさか神タケミカヅチのファミリアの眷属だとは思ってなかった。

本当に偶然である。とはいえ負傷具合、消耗具合から鑑みてかなりヤバイ状況っぽい。つか、追ってきてるモンスターの量が多すぎる。特に千草だったか？ 背負われてる奴が手当てが雑過ぎる。滴る血が痕跡となってモンスターの追跡を振り切れない状況。そして立ち止まっただけの治療も出来ない和最悪である。

他のメンバーも、魔法使っぽい奴はマインドダウン寸前、足がふらふらしているし。射手は矢筒が空。サポーターは剣は腰に差しているけど戦える雰囲気じゃない。

後ろをちらちらとみていると、数えきれない量の赤い瞳が通路を埋め尽くさん勢いで走ってきている。一応、トラップ設置してみるか……。

「先行ってください」

「ミリア殿？」

黒髪ポニテっ娘がなんか言ってるが、気にしてる余裕はない。もう分岐路は無いので真つすぐ進めばベル達と合流できるし、ちよつと足止めを——クラスチエンジ、からのトラップメーカーつと。

「セツト、簡易土囊バリケードつと」

薄い光の壁がさつと通路を塞ぐのを確認してからタケミカツチファミリアを追いかける。酷い状況と言うか、なんというか——後方で硝子の碎ける音が響いた。うん、物量でごり押されて一瞬で破壊されてやんの……。ちよつと、と言うかかなり不味い。どこかで数を減らす余裕も無いし。

考え事してる間に、例のルームに到着。張り巡らせたトラップ類に異常はない。

「ミリアっ」

「無事か」

「この方たちが？」

立ち止まって見つめ合っているタケミカツチファミリアの面々とベル、ヴェルフ、リリの三人。ちよつとモンスター来てるんだからさつさと迎撃準備しようよ……。

「状況を簡易に説明します。このルームでモンスター達を迎撃しますので戦える方は準備を。重傷者の方は治療をするので彼方の魔法障壁の中へ運んでください。リリ、ヒーラーバッグ全部使っていていいからなんとかしてあげて」

さて、このルームの地形は二段に別れた大部屋。リルカ曰く通路の数は八。今回追ってきてるモンスターの群れの数的に雪崩れ込まれたらどうにも出来ん可能性は高い。

タケミカツチファミリアの桜花つて奴が前衛出来るっほいので前衛に桜花、ヴェルフ、ヴァンの二人と一匹。遊撃はタケミカツチファミリアのミコトつて奴とベル、後キューイ。

後衛の支援火力として俺とタケミカツチファミリアの射手。魔法使いの奴はマインドダウン寸前らしいのでリリとタケミカツチファミリアのサポーターと三人で治療にあたってもらう。

主に簡易土嚢バリケードを設置した通路は無視して正面方向の敵を受け止める形でいこう。治療するスペースとして簡易土嚢バリケードで囲った比較的安全な場所は用意したが、モンスターの群れの前だとすぐ突破されそう
だ。

「よく聞いてください。後方で重傷者の治療を行っています。モンスターに抜けられても少しなら平気ですが、数が嵩むと簡易土嚢バリケードが壊されてリリ達が襲われます。最低でも彼女の治療が完了するまでは動けませんのでここですべてモンスターを食い止めてください」
治療完了後は即座に移動。尻を齧られながら逃げるのは割ときついが、ここで受け止め続けるのもほぼ不可能なのだから仕方あるまい。
い。

「先に言っておきますが、下手に連携を気にしても仕方ありませんので最初のモンスターの群れを受け止めた後は各自で対処してください。中衛のベル、キューイ、後はミコトさんの三名は抜けてくるモンスターの足止めまたは殲滅を、私と彼で後方から支援しますが、弓は矢の数が1束しかないので過信禁物で」

応戦準備万端。後方には治療中の仲間。神タケミカツチのファミリアの人物であるのなら信頼に値するし、問題はない。あるとするならば、冒険者6人、ワイバーン2匹っていう多人数での防衛に対し、モンスターの数が百を軽く超えている所ぐらいか。

「くるぞつー」

大男、桜花の叫びと共にモンスターが通路の入り口から溢れ出てくる。

その勢いが俺の設置したトラップ群に阻まれて一気に速度が落ちる。仕掛けたのは主に足止め用の粘着床しろいペトペトや転倒床スリップフロア等。

だが、数が多すぎてあまり効果がなさそうというか、粘着床に囚われたモンスターを踏み越えてやってくる奴が居れば、転倒床で転倒したモンスターを踏み殺して進んでくる奴もいる。仲間を仲間だと思っていないのか、モンスターの瞳に映るのは俺たちに対する殺意のみ。

思わずぞつとしながらも杖を背負いなおし、両手に剣を装備する。

『ピストル・マジック』『デュアル』『リロード』

正面通路を埋め尽くす処か、一気にルームの入り口から広がって浸食してくる様にも見えるモンスターの群れ。受け止めきれるとは到底思えないんだが……。

「トラップ起動っ！」

トラップ類が軒並み突破されているのを見て驚くベルとヴェルフ。桜花とミコトの方は知らん。とりあえずキューイのブレス撃ち込んで数を減らす。後はこつちも射撃して——驚いてる暇ないから動け。

ヴェルフが大刀を、桜花が戦斧を両手で振るい、モンスターの勢いを殺す。しかしモンスターの後ろから次々に現れるモンスターにすぐに押され始め、抑えきれなくなった分が一気に溢れだして中衛のベルとミコトが応戦しはじめる。

ヴァンとキューイは各々闘っている様子だが、共闘と言う選択肢がとれそうにない。体全体を使って突進したりタツクルしたり跳躍叩きつけなんかのコンボ決め込んで一匹だけなんか世界観が違う戦いを繰り広げるヴァンと、火球を吐いて援護しようとして動いているが、巻き込まない様子を過ぎて援護になっていないキューイ。

いやもうキューイ、援護とか良いや、とりあえず数が多い所に撃ち込んでくれ。

「なあ、大丈夫なのか……」

不安そうに弓を引く男の顔を見上げて、口元に笑みを浮かべておく。気弱になったら本当に押し込まれかねない。まだ発動していないトラップはいくつかあるのでそれに期待……つと、モンスターが抜けてきてるな。

応戦開始から五分ぐらい経過しただろうか。設置したトラップ類が半分程消費されていて、簡易土囊バリケードも四割近く破壊されている。負傷こそだれもしていないが、もう押し込まれる寸前。不味いなんてもんじゃなくて——本当に死者が出かねない。

『ファイア』ッ！

「だあぁっ!!」

ベルが縦横無尽に駆け回り後ろに抜けてくるモンスターを対処しているが、そのベルですらモンスターを完全に排除しきれずに後ろに抜かれている。

ミコトも桜花も頑張っているが、ダメだな。桜花が戦斧でモンスターを薙ぎ払い、ミコトが刀で素早くモンスターを切り裂くが、ミコトを中衛にしたのは間違いだっただか。敏捷がベル程高くないらしく処理速度が違い過ぎて戦線が歪になっている。

桜花がレベル2故に戦線を維持し続け、ヴェルフがレベル1故に少しずつ戦線を下げる。

ベルが戦線維持し、ミコトが戦線を下げる。

ヴァンとキューイはそれぞれ戦線を維持しているが、抜けてくる個体も多い。

後衛の射手は既に矢が尽きたので投石で対処してるが、石ころなげた所で焼け石に水。俺の方はマガジンが不足しはじめ作成してはぶっ放してをしている所為か普段の殲滅力は無い。

治療完了まであとどれぐらいかかるのか知らんが、このままだと本気で戦線が崩れるぞ。

「キューイツ!」

キューイの悲鳴。警告を知らせる様に甲高くキューイが鳴いている。内容は——右の通路から沢山来てる？

「っ!」 全員聞いてっ、右側通路からモンスター接近っ! 数多数っ、桜花とミコトは其方の対処をっ!」

おいおいおい、冗談はやめろ。通路一つから溢れてくるモンスターを押しとどめるので限界なんだぞ。桜花とミコトも驚きの表情浮かべてるし、なんとか戦線維持しないと——

こんな時に思い出したのはリユースさんの『ダンジョンは狡猾です』と言う言葉。

即応で桜花が右側通路の方へと走っていく。もともと設置されていた簡易土嚢は既にひび割れて砕ける寸前。桜花がたどり着いて戦斧を構えた瞬間に簡易土嚢が砕け、十匹以上のアルミラージと、数えきれないヘルハウンドがその通路から溢れ出してくる。

『一つ一つは取るに足らない出来事でも、積み重なればやがて、抱えきれない重みとなつて表面化します』

取るに足らない出来事？ 笑っちゃうね、一つ一つが重すぎるつての……中層舐めてた積りなんてないが、それでも、想定が足りな過ぎた。不味い、此処で左側とか後ろ側から別のモンスターの群れが突っ込んできた日には――

『そして、覚束ない足を崩すのは、砂の城を崩すのより容易でしょう』
まさに現状つて訳だ。冗談じゃない、此処でなんか起きるとか、こういうのはアレか死亡フラグつて奴か。

桜花とミコトの二人に負担が行かない様に、後ろから援護射撃を繰り返す。ベル達と桜花達、二方面のタワーディフェンスでもやつてる様な感覚になるが、ゲームなら死んでもやりなおせる。だが現実で防衛役は生きた人間。それも大事な仲間な訳で。壊されたら建て直せば良いやとか出来ない。

作成した端から消費されるマガジン。弾薬不足だ、全く足りてない。もつと、もつと弾をくれ。

『態勢はすぐには立て直せません』

じゃあ一手打つて余裕作りするしかねえな。

「全員後退っ！ トラップ起動しますっ！」

ああもう、残つてるトラップ全部起動だこん畜生。これで態勢を立て直すつきやない。

声に反応したベルとヴェルフが即座に下がり、桜花とミコトも遅れて下がる。キューイとヴァンも下がったのを確認した所で設置されたトラップ類を一気に起動。

電気柵ショックフェンスと粘着床しろいペトペトが発動し、モンスターの群れとの間に一時的な防壁が出来上がる。よしマガジン作成だ。

「リリ、後どれぐらいかかりそう」

「あと少しです」

少しつてどれぐらい？ 一分？ 二分？ 五分とか言われたら絶望しそう。

肩で息をしたベルとヴェルフが下がってきたので回復薬を渡す。

ついでにタケミカツチファミリアの二人にも渡そう。もう限界に近いみたいで大粒の汗を流しつつ肩で息をしながら近づいてきた。

「悪い、俺たちの所為で」

「ありがとうございます、貴方達が居なければ」

「礼を言うのはまだ早いですよ」

ちよつと気が早すぎる。まだモンスターは沢山————ショックフェンス電気柵の一部が碎け散り、モンスターがこちら側に迫ってくる。糞、まだマガジン3つしかできてないぞ。

キューイとヴァンが駆け出して対処するのを見つつも、全体の様子を確認。

正面から数えきれないぐらい。右方向からは二十匹ぐらい。——
気が付くと左の通路の一つに設置されてた簡易土囊バリケードが罅割れて壊れる寸前だ。つまり左前通路からもモンスターが来てる、と。

なるほどあと少し罨発動遅れてたらベルとヴェルフが側面から打撃くらって戦線が崩壊してたな。

「治療完了まであと少しの辛抱です。治療完了したら、どうにか罨を設置しつつ後退しましょう」

罨で通路塞いで時間稼いで逃げる。其れしかないな、もう応戦も難しそうで——そう言ってる間にも電気柵ショックフェンスが次々に壊されて一か所ではなく四か所ぐらいから侵入し始めてくる。

「すいませんが応戦お願いします」

「俺たちはあつちを」

「じゃあ僕があそこから入ってくるのを倒すね」

「俺は、キューイとヴァンと一緒にあの二つを対処する」

飛び出して行って穴の開いた場所に走り出した皆を見送る。マインドダウンの兆候の頭痛が出始めてるが、まだなんとかいける。いけなきや不味い。

頭痛を堪えて詠唱しようと思つた瞬間、口の中に砂が入り込んで咽込んだ。

「けほつ、何？ 砂……砂利？」

パラパラと頭の上から降り注いでくる砂利。思わず、顔を上げた。

天井に罅が入っている。思わず喉が引き攣り、慌てて口を開こうとしてベルと目が合った。

『獲物が息を上げ、苦痛に喘ぎ、弱り果てた姿を見せた時。ダンジョンは満を持して牙を剥きます』

ああ、なるほど。うん、的確なタイミングだ、これ以上ない程に致命的な、瞬間。

悲鳴を上げる間も無く、天井が崩落してきた。

土埃の所為で視界が塞がれた中。崩落の際に発生した轟音で耳が馬鹿になっていているみたいですぐに状況は理解できなかった。だが、非常に運が良かったのだろう。怪我はしていない。頭痛はするが頭にはなっていない。もしかしたら感覚がマヒしていて自覚していないだけかもしれない。

「けほっ、っ!? 皆無事っ!?!」

咽込みながらも叫んでみれば、ベルとヴェルフの返事が返ってくる。

リリの方は、完全に大丈夫だったっぽい。崩落が起きたのは正面方向のルームの半分程。つまり後方側に待機していたリリ達は無事な様子だ。

キューイとヴァンも無事みたいで残ってるモンスターに齧りついて片付けてくれてる。

「僕はなんとか」

「俺も無事だ、いや運が良いな。モンスターを潰してくれたぞ」

なんたる幸運。と喜べばいいのか? 最悪のタイミングでの崩落だったが、ヴェルフとベルは無事みたいだ。桜花とミコトは――

「桜花殿っ! しっかりしてくださいっ!」

悲鳴の様なミコトの台詞。背筋がゾワリとするような感覚にとらわれる。

「どうしたっ!」

「桜花殿が落石の下敷きにつ」

焦る様な声に誘われて慌てて行ってみれば、大男が額から血を流して岩の下敷きになっている。

体が潰れてはいない様子だ、運の良い事に岩と岩の隙間に挟まってるらしい。

「桜花殿っ！」

「ぐっ……ミコトか、挟まれて動けん……」

とりあえず救出を——モンスターの咆哮があらゆる方向から聞こえてくる。

響く咆哮に全員が動きを止め、直ぐに動き出した。

「不味い、モンスターが近づいてくる」

「急いでそいつを助けるぞ」

「リリっ！ 手を貸してっ！」

大急ぎで大岩をどかす為にリリを呼びつけければ、ちょうど崩落と共に治療が完了したらしく、撤退を提案してきた。

「キューイ、ヴァン。モンスターが来たら迎撃を。そっちの岩、どうにかなりそう？」

指示を出しつつも警戒している間に、リリが縁下力持アーテル・アシストの効力を使って岩を持ち上げ、挟まれた桜花を助け出している所であった。

「桜花殿、良かった……」

「ぐうっ、すまない。足を痛めた……」

「そんな……」

ああ、うん。ちよつと状況整理。

現状、戦えるのはベルとヴェルフ、キューイとヴァン。後はミコトと、俺か。

俺は、もう正直余裕がない。マガジンが尽きたら援護射撃できんし、さっきの崩落で罫は壊滅。

んで何より最悪なのはタケミカツチファミリア。戦えるのは一人しか居ないぞ。

「リリ、とりあえず桜花の治療を」

「はい、応急処置だけでも行います」

焦るな、誰かが死んだ訳じゃない。あの千草って女の子も治療完了しているしよっぽどの事が無い限り死ぬなんて事は無い。無いはずだ。

どうする？ この状況、足手まといが増えすぎてる。

「すぐにも移動を開始しましょう」

リリの言葉に皆が頷くが、正直言おう。もう限界に近い。

「すみません、一つ言わせて貰って良いですか」

「どうしたのミリア」

どうしたの？ か。うん、ベルは見捨てるって選択は絶対にならないからな。答えなんてわかり切っちゃいるが、それでも聞いておかないと。

「現在の状況的に、此処で撤退しても、追いつかれます」

足を負傷した桜花。意識の無い千草。そして、ベルとヴェルフ、俺、ミコトの消耗具合。

「追いつかれたら、迎撃しながらの撤退になりますけど……」

全員が肩で息をしている状態で、走りながら迎撃？ 途中で足並み乱れてモンスター^の波にのまれればそこで御終い。消耗が大きすぎる。

「じゃあどうすんだよ」

「どうって、選択肢なんて片手の指の数ぐらいしかないでしょ」

一つ目、タケミカツミアミアリアを見捨てる。

戦えるのはミコトぐらいで他は負傷者と足手まとい。しかも負傷者抱えてるだけならまだしも主戦力で大柄な男である桜花の負傷がまず過ぎる。彼を持ち上げて運ぶのは難しいので肩を貸して歩きながら撤退する事になるのだ。

もう一度言う歩きながら撤退する事になる。

消耗し過ぎている今、撤退中に迎撃は不可能に近い。

二つ目、この場で迎撃。

さっきの崩落で一部通路が崩れて進入路が限定されている上、少しとはいえ簡易土囊^{パリケード}が残ってる。が、当然ながら現状鑑みれば撤退する他無いので不可能。次の波に吞まれてお終い。

三つ目、諦めて負傷者と荷物を投げ出す。

負傷者と武器以外全部この場に置き去りにして逃げる。負傷者が撒き餌になって時間も稼げるし撤退速度も速いので追いつかれる心配は——

「ふざけるなっ！」

がばっと胸倉を掴まれて睨まれる。うん、知ってた。絶対怒るって知ってたよ。

「見捨てる？ 桜花殿と千草殿を？ 冗談も大概にしろ」

ドスの効いた声。だがぶつちやけ怖く無い。同レベルだからとかそんな事より、背後に迫ってきてるモンスターの方がよっぽど怖い。

「じゃあ第四の選択肢でも選びま——ぐうっ……」

ぐぐっと締め上げられて息が詰まる。ふざけてる訳じゃないんだが、どうやらミコトの怒りを煽っているらしい。

「落ち着いてください、ミコト様、最後の案を聞いてからでも遅くはありません」

リリナイス。怒りを収めたというよりは、ほんの少し耳を傾ける気になったって所か。瞳は怒りに染まってる。仲間見捨てりや助かるよなんて言われたら怒る。俺だって『ベルを見捨てれば助かりますよ』なんて言われたら怒るし。

「じゃあ四つ目、私たちが囷になってる間にタケミカツチファミリアは撤退する」

俺たちは機動力が下がってる訳じゃない。負傷者は奇跡的にも居らず、消耗はしているがほぼ全員が戦える。タケミカツチファミリアの方は半数以上が戦えない状態になるのだ。というか6人中4人が戦闘不能ってヤバすぎ。

軍隊は半数が死傷したら潰滅っていうやん？ パーティもほぼ同じだろうし。

「それは……」

できれば、四つ目はやめて欲しい。本当に、本当に死にかねない。だが、同時に全員が助かる可能性があるのもこの選択肢ぐらいだろう。

一つ目は言わずもがな。タケミカツチファミリアが全滅してお終いいい。

二つ目は運の良い数人は生き残る可能性があるが、ほぼ確実に被害が出る。

三つ目は負傷者が確定で死ぬ。

四つ目は？

上手くタケミカツチファミリアが地上に逃げ帰る事に成功し、その上で此方の上手く逃げ切れれば万事解決。

ただし、タケミカツチファミリアは戦闘可能戦力がパーティ人数の半数以下しか居ない状態で上層を突破しなくてはいけない訳で。無論、彼らも消耗が無い訳でもないので途中で全滅する危険性は非常に高い。

当然だが、こつちもモンスター引き付けるんだから相応の危険があるに決まってる。

んで、どうすんの？ って話よ。

「わかった」

「ベル様？」

「ベル、本気なんだな？」

ああ、知ってた。と言うか分かってた。ベルならそつちを選ぶよね。

「ミコトさん」

「クラネル殿……」

「行ってください。此処は僕達がなんとかしますんで」

ぐつと拳を握りしめ黙り込むミコトさん。うん、ちよつと悩む時間無いし背中を押すか。いや、身長差的に尻叩くぐらいしかできんわ。

それなりの威力でミコトの尻をひっぱたいておく。モンスター来てるんだからさっさとしてくれ。

「早く行ってください。このままモンスターが来てしまったら………というかもう来てるんで早く」

キユーイとヴァンが応戦し始めてるんだ。早く行ってくれ。

「ですが」

ああもう、其処で悩むなよ。こちとら善意で言ってるんだぞ。

……根が真面目過ぎるタイプか。こういう奴には適当に理由を与えてやればいい。

「ではこうしましょう。地上に戻ったら救援要請を、後余裕があれば助けにきてください」

あ、ついでにヘステイア様に伝言頼もう。今日は帰りが遅くなりまして伝えておいてくれれば良いや。

「……………いいのですか？」

泣きそうな顔しないで欲しいんだが。泣かせてるみたいじゃん？

まあ、ベルならここで囿を買って出るだろうしね。それに……………四つ目の選択肢はある意味タケミカツチファミリアを見捨ててるのと同じだからな。

一緒に行動しても潰滅するだけだから、彼らと別行動をとる。双方にそれなりに危険がある。

戦力を考えれば、どっちもどっちとしか言えない。

「任せてください。必ず帰りますから」

「……………わかりました。必ず、必ず救援要請を出します。それから、皆を地上に送り届けたら助けに来ます。たとえ私一人だったとしても、必ず助けに来ますから」

あー、ヘステイア様への伝言も忘れないでね？ ヘステイア様なら絶対引き留めてくれるだろうし。うん、一人で戻ってくるって正気を疑うよ……………パーティ潰滅しかける階層だよ？ 一人で来て入れ違いになったらどうするんだ。

「武運を」

撤退準備の為に動き出したミコトの背を見送りつつも、ベルを伺う。

「良かったの？」

「……………うん。これしか方法がなさそうだし」

「そっか」

頭がもつと良ければ、もつといい解答があるかもしれん。でも、俺にはわからん。

生きて帰れるかね……。タケミカツチファミリアも、俺たちも、どっちも全滅なんて事になんなきや良いが。

「あ、リリ、ヴェルフ、一つ聞いて良い？」

「何でしようか」

「なんだ？」

此処で帰る気はない？ ベルはもう決めたっぽいから良いけど、二人はねえ。特にヴェルフ、あっちのタケミカツチファミリアと一緒に行った方が安全だぞ。疲れてても上層ぐらいはなんとかなるっしょ？

こっちは、うん、死ぬ。多分七割か八割ぐらいの割合で死ぬ。と思う。今までの中層のモンスターの量を見る限りでは。

二人の顔を見て、溜息。ああ、なんつーか、決意固めた表情してるなあ。

ベルもベルで、絶対に皆を地上にーとか呟いてるし。とりあえず、マガジンは8つはできた。これ以上絞るとマインドダウンで意識が落ちる。これまでの傾向からして全く足りてる気はしないが——逃げただけならワンチャンあるかね？

第七十五話

迷宮の悪意つてのは、本当に嫌らしいタイミングを狙って事を起こしてくれる。

と言うよりは、手の平で転がされてる様な感じだ。こっちが打つ手をことごとく潰してくる。または裏目が出る様に小細工でもしてるんじゃないかってぐらいに。

タケミカツチファミリアの撤退を見送り、残ったモンスターを適当に間引いた後にモンスターの来ていない通路へと逃げ込んだ。多分、誰だってそうする。俺達だってそうした。

目の前を必死に走る三人を見つつも、キューイとヴァンに細かに指示を出して後ろから追ってくるモンスターを迎撃する。ベルに先頭を走ってもらい、キューイとヴァンで殿を務めさせつつも、ヴェルフとリリの様子を伺えば、リリが息切れし始めている。荷物の放棄も視野に入れるべきだったか？ それ以上に問題は後ろから食らいついてくるモンスターの数が多すぎる事だろう。

洞窟の中を走っているさ中、唐突に視界が開けて足を止めた。

「此処は……」

「縦穴ですつ、落ちたら下の階層まで行けますが、命の保証はできませんよっ」

縦穴。そうか、縦穴か、もっと人一人分の穴がぼっかり開いてる程度を想像してたが、想像よりも大きい。地下に生まれた縦「穴」というよりは、縦長の部屋が上下階層をつないでいるイメージである。上部階層部分はまるで回廊か、橋の様な足場が形成されている。当然ながら、転落防止用の手すりや柵なんて気の利いた代物がある訳も無く、こんな場所で戦闘なんてしようモノなら転落死まったなしだろう。

「キューイツ!」

っ?! 前から敵? 嘘だろっ。

分かれ道の行く先々で『こつちに敵がいる』とキューイに教えられる度に敵の居ない方の道を選んできたが、間違いだったか? 前後を

挟まれての戦闘とか冗談じゃない。

「ベル、前からモンスター」

「……後ろから来てる方も追いついてきますよ」

糞っ、応戦しかないか？ 冗談きつい……仕方ない。とりあえず後方に簡易土嚢設置、前からの敵だけに集中して撃破、その後突破を狙うしかないか。

後方に防壁を設置、その上で左手の竜鱗の朱手甲を張られた簡易土嚢に押し当てて強化。緋色に染まった防壁の強度がどんなもんかはわからんが、ある程度持つてくれなきゃ困る。

「来ますっ！」

「僕に任せてっ 『ファイアボルト』 オツ！」

通路一面を埋め尽くす炎が正面から突っ込んできたヘルハウンド数匹を消し飛ばし——数匹が突破して突っ込んでくる。

言われずとも理解していたらしいキューイとヴァンが足止めの為に飛び出す、突破してきたのは八匹、内五匹はキューイとヴァンが即応で対処したが三匹がベルすらも飛び越えて此方に突っ込んできた。

慌てて前に出てマジックシールドで受け止めようとするが、カバーできるのはリリのみ。ヴェルフに飛び掛かった一匹は自力で対処してもらおう他無い。

「舐めんなあっ！」

「ぐうっ」

「ミリア様あっ!?!」

ヴェルフの方がどうなったのか、確認する余裕もない。マジックシールドが軋みを上げ、鋭い爪の攻撃を二連続で受け止めて罅割れる。残り僅かなマインドが削り取られ、くらりと足元が覚束なくなると魔法の詠唱をしようにも頭の中に粘性の液体でも注ぎ込んだかのように思考が重い。

空中で後転しつつも着地して再度突撃をかまそうとしてくるヘルハウンドを前に、なんとか銃剣を突き出すので精一杯。一匹の脳天を穿つ事に成功するも、二匹目への対処が遅れる。

——二匹目は反転して即座にヴェルフに襲い掛かった。

大刀を持つ腕に噛みつかれたヴェルフが振り解こうともがく。振り回されても腕を噛み千切らんと獰猛に唸るヘルハウンドの脳天に、ベルのナイフが突き刺さった。

「ヴェルフっ、大丈夫？」

「ああ、なんとか食い千切られずにすんだ……」

魔石になって消えたのは良いが、ヴェルフが片腕使い物にならなくなったか？ 応急処置だけでもしないと出血で——後方に設置した簡易土嚢が砕ける音が響いた。

『キュイツー！』

《来るぞおっ！》

キューイとヴァンが即座に入り口前に構えてブレスで足止めをし始めたのを見ながらも、くらくらと歪む視界にうんざりしながら銃剣を杖替わりにして立ち上がる。

モンスターの咆哮が響き渡る。前からも、後ろからも。

「ミリア様、大丈夫ですか。これを」

渡されたマインドポーションを飲み干しつつも頭を再度振って意識を保とうとする。後方が押され気味だが、前方の洞窟の方には数えきれないぐらいの赤い瞳。

「なんで中層ってのはモンスターがやってくるのが早いんだ」

「……中層、だからでしょう」

ヴェルフの文句に同意したい所だが、甘く見てたのは俺らの責任だろう。とはいえマジでヤバイ。マインドダウンしかけて意識が朦朧としている俺もそうだが、リリがスタミナ切れで走れないし、短矢が尽きて攻撃手段がナイフぐらいしかない。其の上でヴェルフが片腕負傷。大刀を振り回す事は出来なくはないだろうが、両手持ち用の武器を片手で扱うので隙塗れになる。

ベルも息切れし始めていて——ミシミシッと軋む音が縦穴中に響きわたった。

「なんだ？ またモンスターの追加かよ」

「ははは……これ以上来ても数えきれませんね……」

引き攣った笑みのヴェルフに、半ば諦めの交じりだしたりり。心が折れかけてる二人をちらりと見つつも、前後の数を確認——しようとして、軋む音がやまない事に舌打ち。

「ただだけモンスターを生めば気がすむんですかこのダンジョンは……」

「違う」

文句を零した所で、ベルの否定の言葉が響いた。三人でベルを伺う。

背筋が泡立つ感覚がした。キューイとヴァンが通路の後方から突っ込んで来ようとしているモンスターの足止めをしているというのに、呑気に話し合いをする暇等、無いというのに、ベルの言葉が異常なまでに耳に残ったのだ。

「この音、モンスターが出てくる音じゃない」

次の瞬間、岩で出来た足場が崩れ落ちた。

回避する事も、逃げる事も出来ずに、皆仲良く真つ逆さま。キューイとヴァンの呼び掛けが遥か上から聞こえるさ中に感じた浮遊感。咄嗟にベル達を助ける様に指示はした。したが、その結果がどうなったのかはわからない。

崩落した足場諸共、下の階層に叩きつけられた所で、意識が途絶えた。

ヘアアイストスファミアでのバイトも終わり、漸く帰れると肩を叩きながら大通りを歩いていた幼い容姿の女神、ヘステイアは重々しい溜息を零しつつも本拠である廃教会を目指して足を動かしていた。

「ああー……疲れたよう。早く帰ってベル君達に癒して貰わなきゃ……」

いつもなら既に帰還しているはずの眷属達の顔を想像しつつも、重い足を動かして本拠を目指すヘステイアは、薄目を開けて帰路を辿るさ中、慌てた様子の知り合いの神の顔を見て足を止めた。

「タケじゃないか。朝ぶりだね」

「っ！　へステイアかつ、バイト終わりか？」

駆け足気味であった足を止めた和装の神。へステイアの知り合いのタケミカツチは半ば焦りを浮かべつつも親友のへステイアを見つけて片手を上げた。

「どうしたんだい？　そんなに急いで……何かあったのかい？」

いつも落ち着いているタケミカツチが、慌てている様子に首を傾げるへステイア。タケミカツチは顔色を曇らせながら真剣そうな表情でつぶやいた。

「どうにも、俺の眷属が全滅してたみたいだな」

「なっ……どう言う事だい？」

全滅、と言う言葉にへステイアが目を見開き、詳細を聞かんとすれば。タケミカツチは慌てて言葉を続ける。

「全滅つつつても、上層で全員意識を失ってる所を他の冒険者が見つけてくれただけで、命に別状はないんだ」

タケミカツチによれば、上層の四階層の階段部分にタケミカツチファミリアの団員6名が意識を失って倒れていた所を、他のファミリアの団員がを見つけ、わざわざギルドの医療機関まで運び込んでくれたとの事。

本来なら見捨てられても文句が言えない状態であったが、相手方も相当お人よしだったのか意識を失った団員全員をしつかりとダンジョンから救い上げてくれていたらしい。

「……タケの所の子達って確か」

「中層に行ってた。多分だが、中層で負傷者が出て……その後にはトラブルに見舞われたんだろうな。迷宮の悪意だかなんだかって奴に」

負傷者を抱えたまま出口を目指し。その途中で力尽きて意識を失ったところで、他の冒険者に助けられる。とても運が良かったとへステイアが吐息を零した。

「運が良かったね。意識を失っている間にモンスターに襲われなかったのもそうだけど、他の冒険者が助けてくれるのなんて珍しいだろう？」

「ああ、その通りだ……つと、すまない。助けてくれたファミリアに礼

を言いに行く所だったんだ」

悪いなと軽く片手を上げて駆け足気味に去っていくタケミカヅチの背を見送り、ヘスティアは安堵の吐息を零したのち、自身の眷属達を脳裏に描いて呟いた。

「トラブル、かあ。ベル君達はトラブルに遭ってないだろうか？」

タケミカヅチの子達同様に、中層に挑んでいる眷属達の事を想いつつも、ヘスティアは本拠に向かって小走りで走り出した。

ミリアが、負傷した。リリと、ヴェルフ、僕はなんとか無事だったけど、ミリアが意識を失ってる。

ダンジョン、十四階層、だと思う。落ちた。岩で出来た橋が崩落して、巻き込まれてしまって、キューイとヴァンが空中で落ちる僕たちを捕まえてくれた。

けれど、ミリアは間に合わなくて……。

「ミリアの様子は……」

「いえ、負傷度合いは大分軽いです。ですが……マインドダウンの症状が出ているにも拘わらず、無茶をしていたので……暫くは目を覚まさないかと」

「ヤバいぞ、キューイとヴァンが何言ってるのかわかんねえ。どうする？」

ヴァンが唸り声を上げて周囲を警戒している。モンスターの咆哮がダンジョン内で反響して、僕達には何処からモンスターが来るのかわからない。

ヴァンが此処に居るとでも言わんばかりに僕達を小さな小部屋に押し込んで入り口に陣取って警戒してくれているこの場所で、ミリアやヴェルフの応急処置をリリが行っていた。

「此処は、一応……安全、なんだよね？」

入り口で警戒するヴァンに尋ねてみると、ヴァンは鼻息を零して首を横に振った。

「……多分ですが、レスト・フロア 休息部屋なのではないでしょうか」

「れすと……？」

「休息部屋、ダンジョン内部に時折存在する、モンスターの発生が抑えられた部屋ルームです。安全階層セーフティポイントと違って、階層内でモンスターは沸きませんが、こういった休息部屋内ではモンスターは沸きません。……他の場所に比べて、安全といえ、安全ですが……」

モンスター自体はうろついているし、そもそも行き詰った逃げ場のない部屋である為、多数のモンスターに押し寄せられれば、そのまま逃げる事も出来ずにすりつぶされて死ぬ。

「……ミリアが目を覚ますまで待つか？」

「移動したらしたで、危険は大きいです。現状、リリ達は自身の居場所がわかりません。地図も無い為上層を目指すのも困難でしょう……それに……」

リリが流し目で見えた先。ぐったりと地に体を横たえたままコヒューコヒューとおかしな呼吸を繰り返すキューイの姿があった。崩落の際、ヴェルフを空中で捕まえたのは良かったが、その後には上から降り注いだ落石で片翼が潰されて飛行不可能になり、ヴェルフを庇う様に下敷きになって落ちて以降、キューイは緩慢な動きで苦し気に呻きながら、潰れた片翼を引き摺りながらベル達についてきていた。「キューイ様が飛べなくなりました以上。上の階層からロープを垂らして、と言った事が出来なくなりました。上は上からロープを

キューイに、上の階層まで運んでもらう。または上からロープを垂らしてもらってそれを登る事で上の階層へ復帰を、と言った手段がとれなくなりました。」

「ヴァンは飛べないのか？」

「ううん。ヴァンは元々インファントドラゴン、飛べるタイプの竜じゃなかったみたいだから……」

ヴェルフの言葉を否定する。ミリアが言っていた『ヴァンは滑空はできて飛行が出来ない』と、先程は空中でベルとリリを掴んで滑空していただけであったし。翼を広げたまま真つすぐ滑空する事しか出来ないみたいで、ある程度の高さまで下りた所で二人を手放して壁に激突して停止していた。

「そっか……」

「とりあえず、ミリアが目覚めるのを待とうか。今、何時ぐらいだろうか？」

「……そうですね、深夜零時を回ったぐらいでしょうか」

神様は僕たちを心配しているだろうか。タケミカツチファミリアの人たちは無事だろうか。

あそこで、助けるといふ選択をしたのは。リーダーである僕だ。ヴェルフやりりも巻き込んでしまつて、ミリアは、どう思っているんだろう。

二人は帰つて来なかった。

帰宅した本拠に、あかりが灯つていなかった。今日は中層に挑むから、いつも以上に帰りが遅いんだろう。そう、考えて帰りを待った。待つて、待つて……気が付けば夜が明けていた。

本拠の入り口。蝶番の壊れた扉を背に、星空を眺めながら二人が帰ってくるのを待つていたのに。気が付けば空が白み始めていて、気が付けば日が昇つていて、気が付けばヘスティアは走り出していた。きつと、何処かで寄り道でもしているんだろう。きつと、無茶してギルドでアドバイザー君にでも捕まっているんだろう。

「本当ですか?! ベル君達が帰還していないと」

ギルドに駆け込んだ神ヘスティアを出迎えたベル・クラネルとミリア・ノースリスの専属アドバイザーでもあるハーフエルフの女性の驚愕の声を聞きながら、希望観測が碎ける音を聞いた。

「その様子じゃ、やはり此処にも立ち寄つていないんだね」

「はい。少なくとも私は会っていません……」

他のギルド諸君も揃つて首を横に振っている。つまり、ベル・クラネル達はダンジョンから帰還していない。

「そうか……」

中層に挑んだ初日に、未帰還。それがどれ程重大な事なのか、知らない訳じゃない。考えを纏め、ヘスティアはすぐに顔を上げた。

「冒険依頼を発注したい。内容は『ベル君達の捜索』」

ギルド職員たちが慌ただしく動き出したのを見ながら、歯痒さに拳を握るヘスティア。其のすぐ横のカウンターに、一人の少女が音を立ててぶつかり、早朝で空いていたギルド内に居た者達全員の視線が少女に突き刺さった。

荒い息を吐き、包帯の撒かれた腕でカウンターに縋りつく姿に息を呑み、そしてその子に見覚えのあったヘスティアが思わず呟く。

「タケの所の……」

「ベル・クラネル殿と、その仲間は……帰還していませんかっ！」

驚きで動きを止めていたギルド職員の一人に叫びかける彼女の様子に、ヘスティアは一瞬息を詰まらせた。

彼女は、確か昨日のダンジョン探索でトラブルに見舞われたのか四階層辺りで意識を失っていたという話ではなかっただろうか。中層に挑んでいたらしい事はわかってる。どんなトラブルに見舞われたのか少し気になりもした。だけれど、その彼女の口から自身の眷属の名が飛び出したのは、予想外だった。

「ヘスティアファミアに所属するベル・クラネル殿とっ、その仲間は帰還していませんかっ!!」

先程よりも大きな声量で叫ぶ彼女の様子に、ギルド職員たちが気圧された様子を見せるも、彼女はそれに気づいていないのか必死な表情で再度口を開こうとし、ヘスティアがそれを止めた。

「ベル君達なら、帰ってないよ」

「貴女は……?」

驚きで目を見開いた彼女の肩を優しく撫でて落ち着かせる。聞かなくてはならない、何があったのかを。

「僕はヘスティア。神ヘスティアだ……ベル君達の事を知っているのかい? だったら、教えてくれないか? 何があったのかを」

第七十六話

アイスキャンデーを片手に商店街を冷やかす神ヘルメスの後ろを付き従う眷属のアスファイは調べる様に指示された二人の冒険者のプロフィールを読み上げつつも鼻歌を歌うヘルメスの姿に目を細めた。

「件の【未完の少年】と【魔銃使い】についてですが、やはり他の冒険者から否定的な意見が上がっている様です」

「例えば？」

「【未完の少年】の方については強化種ミノタウロスの討伐についても、実は援護を担当したのは駆け出しではなく第一級冒険者であったとか、長文詠唱相応の威力の魔法が偶然当たっただけだとか、もともと瀕死に近い状態のミノタウロスであっただとか」

「もう一人は？」

街中で時折聞こえる噂話に聞き耳を立てつつも眷属の言葉に反応したヘルメスは店先の奇妙な置物を見ながら口を開く。アスファイは壊さないでくださいねと小声で呟き、続きを口にした。

「【魔銃使い】についてですが、駆け出しでありながら長文詠唱相応の威力の魔法を使用できるという噂があります。ですが、普段の戦闘スタイルの方では短文詠唱の魔法を多用している。という噂があります。……。其の上で回復魔法が使用できる。という話も上がっています。魔法使いとしては最上級の能力を保持しているといえますが」

「だとするとおかしいねって話になるよね」

「はい。神会において発表された『竜を従える魔法』と言うモノも含めると、四つ以上の魔法を習得している事になります」

「それはまた……」

「他にも様々な噂が飛び交っていますが、特に言われているのは『竜が居なければ何も出来ない』と言う噂ですね」

ヘルメスがくすくすと肩で笑い。おかしいねと呟く。

「竜を従える魔法。ガネーシヤの説明だと『自身の付近で死んだ竜種を配下として召喚できる』『召喚は出来ても主として認められなければ』」

ば指示に従おうとしない』『主として認めて貰うには一度倒す必要がある』って話だったよね」

「はい。そういう話になっていきますね」

「だとしたらだよ？ 少なくとも竜種、今回で言えば上層の迷宮の孤王相当モンスターレックスって呼ばれてる小竜を自力で倒したって事になるんだけどねえ」インフアントドラゴン

卵が先か、鶏が先かって話にならないかな。ヘルメスの言葉にアスファイが眼鏡の位置を直しつつも答えた。

「最初に召喚されていた紅い飛竜、此方が相当な能力を持っている……にしては変ですが」

「だよねえ。だってミリア・ノースリスって言えば、ベル・クラネルのミノタウロス討伐の際に援護を担当した魔法使いだって話だし？

あの時に竜の力を使っていればベル・クラネルのランクアップなんてなかったって事になるし」

手に取っていた露店の商品を元の場所に戻し、店主に愛想笑いを浮かべて人の流れに身を任せながら、再度口を開いた。

「偶然なんてモノでランクアップさせるほど、神々の恩恵は甘くないんだけどねえ」

「ランクアップの所要日数を誤魔化しているという話もあります。【剣姫】の記録を抜けるはず等ない」と

「皆厳しいなあ。でも聞けば聞くほど興味がわいてくるねえ。早く会ってみたいものだ」

主神の言葉にアスファイの眉間に皺が寄る。

「どちらに、ですか？」

「どっちも、だよ」

普段通りのニヒルな笑みを浮かべた主神の姿に眷属が溜息を零しかけた瞬間、ヘルメスが挟み込む様に言葉を放った。

「それで？ ミリア・ノースリスの素性については何かわかったのかい？」

ヘルメスの言葉を受けたアスファイは軽く首を横に振る。その行動に予想外だともいう様にヘルメスが驚く間にも、アスファイは口を開

いた。

「素性、と言うモノについて調べる事が全くできませんでした。最も古い彼女の記録はベル・クラネルの冒険者登録の次の日にファミリア登録と冒険者登録を行ったというモノのみ。その他については一切不明です」

「ふうん。孤児かな？」

「それもないかと。調査可能な孤児院全てで聞き取り調査を行いました。だがミリア・ノースリスについて覚えが無いと」

「じゃあダイダロス通り出身だ」

「それも無いです」

「あれねえ？」

おどけた様な仕草をしつつも真剣な眼差しを浮かべたヘルメスは顎に手を当てつつも呟く。

「オラリオの出入国記録は？」

「該当する人物。小柄で、金髪、小人族の中でも特に幼い容姿をした人物の出入りは確認できませんでした」

「へえ、じゃあ正規の方法でオラリオにやってきた訳じゃないのかあ」

オラリオに違法品を持ち込むといった事を防ぐための関所である門を通過していない。

オラリオ内部で身分不明と言えば孤児、ダイダロス通り出身の浮浪者のいずれか。其処に該当する人物ではない。つまりミリア・ノースリスはオラリオの裏側から侵入した人物という事になる。が、其方の方面においては基本的に彼女の様な非力な存在は人身売買に巻き込まれた『奴隷』程度の身分になる。

「まあ、奴隷だったら奴隷だったで偽装された身分が出てくるはずだからねえ」

「犯罪者、でしょうか」

「それも考えづらいんだよね。だって身分を用意しない意味が無い。でも、怪しい。もしかしたら犯罪者の中でもとびつきりヤバいのかも？ ほら、犯罪者連中からもドン引きされるぐらいの」

「だとしたら、真つ当な主神として知られる神ヘステイアが眷属にし

た理由がわかりませんが」

アスフィの呟かれた言葉にヘルメスが即答する。

「犯罪者だった。けど、ヘステイアが認めるって事は相応の子だったって事だろうね」

笑みを浮かべたヘルメスが歩みを再開しようとした姿勢のまま停止し、楽しそうな笑みを浮かべて呟いた。

「もしかしたら、どこかの神が隠し育ててた秘蔵っ子かもしれないね」
冗談とも、本気とも取れないヘルメスの言葉にアスフィが懐疑的な視線を向けると、ヘルメスは笑みを浮かべたままアスフィの方を向き直った。

「と言う訳で、引き続きミリア・ノースリスの素性調査頼むよ」

「此処まで調べて何も出てこないんですよ！ 調べるって後は何処を調べれば良いんですかつ!!」

「それはまあ、アスフィが考えるとして」

誤魔化す様に頭を撫でてくる主神の前、眷属であるアスフィの深々とした溜息が零れ落ちた。

硬い地面に寝かされていた。枕代わりのポーチ。血の臭い漂う小部屋。

目を覚ませば、状況が一転して全て解決しているのではないかと言う希望観測は夢の中で笑うヘステイア様の顔と共に粉々に砕け散った。

「ミリア様、目が覚めましたか」

「ええ、気分は最悪だけどね」

目を覚ませば血の匂いの漂う小部屋の中。キューイの『お腹減ったー』と言う空腹を訴える声が響く小部屋内ではベルとヴェルフが壁に背を預けて俯いている姿が確認できた。

「……ミリア？」

「目が覚めたのか！」

驚いた様子の二人を見つつも、リリに肩を貸されて起き上がる。強

かに体を打ち付けたからか、体中に鈍痛を感じる。軋む音がしそうな動きに心配そうにベルが駆け寄ってくるのをみつつも、薄暗い小部屋の中を見回す。

キューイが壁際で蹲り『お腹減ったー』と呟き続けているが、その姿は言葉とは裏腹に凄惨極まりないモノである。片翼が潰れて千切れかけた状態で地面に投げ出され、胴体部分の鱗の隙間から流れ出た血が固まって地面を赤黒く染めている。明らかにヤバい負傷状態に思わず息が詰まった。

お前、その怪我で『お腹減ったー』とか。どう考えても痛々しい姿でありながら気楽そうな声出してんなよ……。

「よかった、暫く目を覚まさないって言ってたからもつとかかると思ってたよ」

「……私ってどれぐらい気絶してた？」

「一時間半程ですね」

思ってたより回復が早くなった？　と言うより俺の怪我の具合はどんななんだ？　鈍痛が全身を覆っている以外には、マインドが思ってたより回復してない感じはしてる。

「私の容体は？　私の感覚では全身が鈍く痛いのと、マインドが全然回復してない感じはするんだけど」

「崩落した際の場所が良かったのか、痣が幾つかぐらいで骨折するほどの怪我はしていませんでした。ただ、頭部を強く打ち付けたのか額が切れていましたので……」

リリの言葉と視線から、頭になんかあったっぽい。確認がてら頭を手をやってみれば、包帯でも巻かれているのか若干の湿り気を帯びた布が頭に巻かれていた。

「よし、ミリアも目が覚めた事だし。これからどうするか考えるか」

「ミリアが回復しきってないんじゃないや……」

「申し訳ありませんが、これ以上の回復を待つのは下策かと。既に何度かヴァン様がモンスターを迎撃していますから」

お目覚めと共に動け、かあ。余裕が無いので仕方ないっちゃ仕方ないか。

マインドの回復した感覚が無い原因は、多分マガジンの自動作成の方で消費されたからだろう。マガジンは最大数である15になっているが、回復魔法に回せるマインドが残ってない。と言うかこの状況で良く一時間半程度で目が覚めたな。

あ、そういうえば落ちる寸前に精神力回復特効薬を飲んでたっけ？

あれがなかったら今も気絶中だった事だろう。ある意味では運が良かったか。

ともかく、現状整理だ。と言うかキューイは何時まで『お腹減った』って呟いてるんだよ……。

「まず持ち物確認は終わってるのよね？」

「はい。まずリリについてですが……回復薬が4本と解毒剤が1本、後は非常食類が幾つか残っているぐらいです。デイアンケヒトファミリア製のヒーラーバッグについてですが、申し訳ありませんがタケミカツファミリアの治療に殆どを使い切ってしまったので、残っているモノはミリア様の治療に使ったので、胃薬ぐらいしか……」

ああうん。タケミカツファミリアの治療に全部使ったか。残ってた包帯類も俺が使ったと、頼りになるバッグであったが、中身がなきやただの袋だ。

リリの荷物は、崩落の際にヴァンが破棄させたらしい。転落するさ中、バッグを下にして落ちるリリを見て肩ひもを切り裂いてリリだけをキャッチ。バッグはそのまま崩落諸共転落し中身の大半が岩に潰されてしまったらしい。とはいえ、リリ+大型バックパック+ベルではヴァンが助けきれないと判断しての行動だったので仕方ないっちゃ仕方ない。ついでに言えばリリの小型クロスボウも無くしたらしい。

「僕はポーチに回復薬が2本だけ」

ベルがヴェルフに新調してもらった小盾バックラーと短剣を無くしたのと、リリのバックパックに固定してあった大剣はもれなく岩の下敷きになってへしゃげて使い物にならなくなっていたらしい。

「悪い、俺は全滅だ」

ヴェルフの方は、キューイに庇われたとはいえ転落の際にポーチの

中身が全滅。大刀は無事だが、ヴェルフ用の調整のなされた武装などでベルに使わせるのも難しいか。

「最後は私ね……」

ポーチの中身はー……ははあん。なるほどなるほど。うん、こりやあ……。

「ヴェルフと一緒に。リリが治療に使ったのよね？ 全部無いわ」

中で瓶が砕けてる訳でもないっぽいので多分リリが使ったんだろう。確認すれば頷いてるし。

後は武装関連か……竜鱗の朱手甲は無事。若干土埃に塗れてるがそれぐらいならまあいいだろう。

そして、特注の銃剣状の杖は無し。と……崩落のさ中に手放してたしね？ 崩落現場を再度調べれば見つかるかもしれないが、危険を冒すまでの事ではない。

剣二本は無事といえば無事。だが片方が半分程から折れてしまっている。片方は銃魔法の補助用としてしか使えないか。

その他については。まずキューイ。

飛べない。動くの辛い。お腹減った。林檎食べたい。ミアアの馬鹿！ だそうだ。

怪我の度合いは不明。飛竜の体の作りがわからないのでなんとも……なけなしの回復薬使うかとも悩んだが意味ないからいらないとキューイに拒否された。代わりに残っていた食料類をキューイの口に放り込んでおく。缶詰肉も、乾パンも同じようにバリバリ食べてたので、見た目は酷いがどうやら平気っぽい？ 呼吸がおかしいってリリとベルが言ってたがお腹空き過ぎておかしくなっただけらしい。なんだそりや……。

次いでヴァン。こっちは怪我は少ないが翼の一部が焼け焦げていたり、目が片方白濁してたりと想定外に酷かった。なんでも入り口に陣取ってベル達を中から出られない様に威嚇して外でモンスターを片っ端から迎え撃っていたのだ。しかも滅茶苦茶怒ってた。

小部屋の中に入る様に指示をしたらようやくやく入ってきた姿にベルが心配してるが、ヴァン本人、本竜？ は俺を強く睨むばかりで何も

言わない。

「あの、ヴァン？　怒ってますっ。」

《別に》

いや、声色からして怒ってるだろ。何をそんなに不機嫌になってるんだ……？

「キュイキュイ」

「うん？」

「キュイ、キュキュ、キュイキュイ」

あー。キューイ曰く『ミリアの命令が気に食わなかった』らしい。命令には絶対服従だから文句は言わない。と言うより言えないのだが、どうやら俺が最後に命令した事が気に食わなかったっぽい。

『キューイっ！　ヴァンっ！　私は良いから、ベル達をつ!!』

最後に俺が命令した内容である。

これはー、ヴァンからすりゃキレるのも無理ないか。

俺が死ねば、キューイとヴァンも消える。キューイはただ消滅するだけだが、ヴァンはまた迷宮に囚われる事になるらしい。それが気に食わないが、命令に対しては絶対服従を誓う身。故にベル達を守る事を優先してくれた。だが、本人からすれば自分の命と同等の主の命を蔑ろにしろという命令は受け入れがたいのだ。

それでも文句を口にしないのは負けて服従しておきながら遠吠えを上げる事を良しとしないかららしい。要するに竜種のプライドが文句を言うのを阻害してる。心の中では俺に対する罵倒の言葉が飛び交ってるっぽいけど、決して口にはしないらしい。

あの、思いつきり雰囲気『俺様、超不機嫌』って言ってるんですけど……？

まあ、ヴァンの不満に関しちやいまは構ってる余裕はない。とりあえず十四階層から上の階層を目指す方法を探さなきゃなんだが。

とりあえず魔石を燃料として動くランタンの頼りない灯りの中、四人で額を突き合わせて十三階層の地図を眺める。

「リリ達の現在位置は不明です。闇雲に階段を探し回るのは下策も下策。ですが対処法が無い訳ではありません」

「どう言う事？」

「はい、ベル様いいですか？　これが十三階層の地図となります」

広げられた地図を見てみると、その地図の中に複数個所記号が書かれている事に気付いた。確か食糧庫とか採掘ポイント類も記載されてるんだったか。十九階層以降の大樹の迷宮とかでは植物の採取ポイントも記載されてるとかどうとか。

だが、リリの指さした記号はどれにも当てはまらないモノである。

「この記号の意味は？」

「縦穴です」

縦穴？　ランダムに現れるそれを地図に書いても仕方ないと思うんだが。

「いえ、普通の縦穴と違う大部屋型の縦穴です」

大部屋型の縦穴？　あーつと、そういえば俺達が落ちたあの部屋は大部屋で、縦長の大部屋が上下階層をつなげてるんだったか？　それが……待てよ。普通の縦穴は落とし穴程度の大きさしかないんだよな？　ランダムで現れる奴。こんなバカでかい空間がランダムで現れたり消えたりするか？

「ミリア様の想像通りです。この大部屋型の縦穴は位置が完全に固定されています」

「……？　えつと、だからなんなんだ？　この地図は役に立たないんだろ？」

ヴェルフが眉を顰める中、ベルはジーンと地図を眺めて別の大部屋型の縦穴記号を指さした。

「こつちにもあるね」

「此処にもあります」

つられてリリが別の記号を指さす。それを見ながらヴェルフは意味がわからないと首を傾げている中、俺はキューイの方を伺う。お腹一杯と言える量ではなかったが空腹が収まったのか静かに床に寝転んでる。寝てないよな？

「なあ、意味がわからんのだが」

「良いですかヴェルフ様。この大部屋型の縦穴は位置が変わりませ

ん。そして十三階層と十四階層で同じ位置にあります」

リリの説明にピンとこなかったのか唸りだすヴェルフ。モンスタアの咆哮が遠くから響いてきたのを聞いて全員が一瞬で黙り込んだ。流石に軽く説明だけしてさっさと動くべきだろうな。

「今私たちは自分の位置がわかりません。ですが落ちた大部屋の位置はわかります」

落ちた大部屋を起点にして周囲を探索し、固定された大部屋型の縦穴を見つめる。一か所だけわかつても方位磁石の使い物にならないダンジョンの中では意味が無いが、では十三階層と十四階層で共通するランドマークと呼べる物があつたとしたら？

「……なるほど。十三階層の地図には十四階層に通じる階段の位置が記されている。大部屋型の縦穴の位置を一個ずつ調べて位置関係を割り出せば」

「大雑把にですが十三階層と十四階層を結ぶ階段の位置を把握できます」

大雑把に割り出せば後は簡単。大体その位置まで足を運んでキューイに探して貰えばいい。キューイは風の流れっぽいモノを読み取って階段の位置。と言うよりは上の階層に通じる風の流れを読み取れるのだ。それを利用すれば階段発見も早まるだろう。

「それもこの場で簡単に周辺の把握も出来ますしね。キューイ、感知できる範囲で良いんで大きな風の流れを教えてください」

問題はキューイの分かりづらい表現を俺が正しく読み取れるかって所なんだが。頑張るつきやない。生存率に関わってくるからな。

「キューイキューイ、キューイ」

ほうほう？ リリが広げた地図の横に大雑把に石ころを並べて穴の位置を把握していく。

「キューイキューイ」

此処ら辺にあるのか。距離は、こんなもんか？ 一つ目に比べて近い？ 方角は？

「キューイ、キューイ」

ふむふむ。なるほどなるほど……。

凡そ三十分程かけてキューイの言う大きな風の流れの位置を石ころで示したモノを見ながら、俺達は結論をだした。此処は十四階層ではない、十五階層であると。

「此方の縦穴部屋の位置がおかしいのでは？」

「それが起点になってるんだけど」

「じゃあこっちの方がおかしい？」

「キューイ、どうなの？」

「キューイ……」

「位置関係は間違っていないらしいわ」

十三階層にある縦穴部屋の位置と、今いる階層の縦穴部屋の位置がどう照らし合わせても合わないのだ。

んでヴェルフが気付いた。地図に記された記号の横に小さく数字が書かれているのに。

俺達が落ちた縦穴部屋。その記号のすぐ横に書かれていたのは、その縦穴部屋が二階層分ぶち抜いた大部屋である事を示す記号であった。

要するに、なんだ……。

十三階層の地図から割り出すとかいう知的なアイディアは、何の役にも立たないゴミと化した訳だ。

現在階層は推定十五階層である。その推定が確信に変わったのはその五分後である。

壁の色合い、光源の乏しさ、そして何より……ミノタウロスがうろついているというキューイの報告によって確定した。

ミノタウロスの出現階層は十六、十七階層。そしてモンスターは上下一階層まで移動する事が確認されている。つまり十六階層で出現したミノタウロスが、十五階層に出てきてると考えればもう答えは一つだ。

「十五階層だと……」

「そんな……」

一番冒険者がやってはいけない失敗を仕出かした。自分の居場所がわからない。階段の位置もわからない。調べようにも風の流れを読むキューイでは縦穴に翻弄されて階段だけをピンポイントでは見つけられない。

『詰み』って言葉が脳裏を過る。

「……救援を待つってのはどうだ？　ほら、タケミカツチファミリアが助けに来てくれるんだろ？」

ヴェルフのすぎる様な言葉には申し訳ないが、それは在り得ない。

「無いです」

「はあ？」

「無いですよ。彼らの戦力からして十五階層まで足を運ぶのは難しいです」

それ以前の話として。

「それに彼らがうまく地上まで逃げれた保証もないですし」

「ミリア、それってどういう事？」

ベルが驚いた表情をしてるが。気付いてなかったのか？

「ベル、怪我人二人を抱えた六人パーティが十二階層から地上に帰還できる割合がどれくらいかわかります？」

「……どれぐらいなの？」

ステイタス次第だが、戦える人員がレベル2二人なら凡そ9割。

戦える人員がレベル2一人と実力のあるレベル1一人なら凡そ7割。

ただし、戦える人員は一切疲弊していない事が条件である。

「疲弊してたら？」

んなもん……。2割もあれば良い方じゃね？

モンスターとの位置を特定できる索敵スキルがあつたっつぽいけど、ミコトの疲労状態から考えて当てに出来るもんじゃないだろうし。闘える人員と言っても疲弊度合いが酷過ぎて足が覚束なかったんだ。下手すると1割未満だ。

「でも、お前らの主神はお前たちの搜索依頼を出すだろ？」

出された所であ。

「依頼料の相場知ってます？」

「……上層で五十万、中層で二百万前後」

「うちのファミリアにある総資産は凡そ四十万が良いところですよ」

「竜の素材売ってるんだから余裕とかないのか？」

それは本当に申し訳ないが、ヘファイストスへの借金返済に充てて最低限しか貯蓄できてないのだ。ガネーシャファミリアにも恩義があるしそっちの方にもキューイとヴァンから得られる資金を当ててしまっているし。

「ミアはガネーシャファミリアと繋がりもある。リリだってファミリアが探してくれるんじゃないか？」

……ないな。うん、それはない。

「まずガネーシャファミリアについてですが。無理です」

「なんでだよ、規模がでかいんだからそれぐらい」

「ごめんなさい。私の所為です」

ガネーシャファミリアは現在オラリオでの『無償奉仕活動』に従事している。要するにギルドの許可なく行動出来ないのだ。団員をダンジョンに潜らせるのではなく、ギルドに溜まった冒険依頼クエストの処理を任されている。主に中層下部の植物採取類の依頼や、オラリオ外でのモンスター退治等。必要最低限の人員を残して他が出払っている。

中層で行方不明者を探せる実力者が本拠に残っていないのだ。ガネーシャ様の気質からして探すのを手伝おうとはしてくるだろうが、動かせる人員が居なきやどうにもならない。

リリの方は言わずもがな。リリはファミリアから雲隠れ中なのだ。それに、そもその話ファミリアがリリを探してくれようとするのなら、もつと前、キラーアントに襲われたあの日から搜索依頼が出されるはずだ。それが無い以上、ソーマファミリアはありえない。

「逆に、ヴェルフの所は？」

「……悪い、主力メンバーは全員ロキ・ファミリアの遠征に行ってる」「神ヘファイストスは依頼を出さないの？」

害虫を噛み潰した表情のヴェルフ。凡そ察しはつくが……。

「他の鍛冶師から疎まれてる俺を優遇してたら不満が産まれるからな」

「だろうな。と言った感想しか出てこないわ。ベルも青褪めてるし、ヴェルフは唇をかみしめてる。俺は意味も無く石ころをコロコロ転がしてる。どうすりゃいい？」

「頭の中で何かないかと色々探し回るが、自力で戻る以外に方法が無い。地図も無く、現在位置もわからない状態で、化け物渦巻く迷宮の中を生還しろと？ 無理ゲー過ぎるだろ。」

「リリに、一っだけ案があります」

「頭を抱えているさ中にリリが口を開いた。藁にも縋る思いでリリの方を伺えば、意を決した様に口を開く。」

「十八階層を目指しましょう」

「ああ、ついにリリまで壊れてしまったか。またモンスターの咆哮が響いてる。ベルとヴェルフも冗談だとも思ったのか聞き流してるし、もっと建設的な案が欲しい……。」

「ミリア様、そんな憐れむ様な目はやめてくださいっ！ リリは本気で言ってるんですっ！」

「いや、十八階層って言ったって……十八階層には……十八階層？」

「思わずリリを二度見した。十八階層。そう十八階層だ、ガネーシャファミリアの主力メンバーが十九階層以降の大樹の迷宮に藁草類を採取しに行く足掛かりとして利用してる階層。安全階層セーフティポイントっていうのがある。其処までいければ間違いなく冒険者が居る。リヴィラの街

「だかつていう迷宮の中に出来た冒険者の街があるって話もどっかで聞いた。」

「なるほど十八階層」

「なるほどって何だよ」

「うん。多分だが、生還率は十八階層目指す方が遥かに高い。闇雲に位置もわからない階段を探すよりはモンスターを避けて十七階層へ行って、そこからキューイに風の流れを読んでもらって十八階層へ続く階段を見つけて貰う。十七階層より下の階層へ通じる縦穴は一個も無い、つまりキューイが見つけた下の階層への風の流れは確実に階

段ってわけだ。

「そうですね、十八階層を目指すのは在りですね」

「リツリリツ、ミリアツ、待つて。此処からさらに下の階層を目指すなんて」

「敵は強くなる一方だぞ」

確かに、モンスターは強くなるだろう。だが、現状を鑑みればわかるが、現在階層でモンスターと戦うのも、下の階層でモンスターと戦うのも、どっちもリスキーである事に変わりはない。

位置もわからない階段を探し、上の階層を目指す中に戦う回数は何回？ 運良く冒険者と出会う確率は？ さらにその冒険者が助けてくれる善人である確率は？

位置が確定してる階段目指して下の階層を進むさ中に戦う回数は何回？

回数は後者の方が圧倒的に少なそうである。

「十八階層はダンジョンにいくつか存在する安全地帯。安全階層です」セーフティポイント

「そこまでいければ、地上に戻る上級冒険者に助けを乞える。無論、報酬は要求されるでしょうけど、ディアンケヒトファミリアからエリクサー 1ダースを貰ってるし、それを突き付ければ確実に要求は通るでしょうし」

困惑したベルと、驚いた表情のヴェルフ。此処で迷っていても始まらない。助けが来る保証が無い以上、自ら動くしかないのだ。

「どうやって」

「縦穴を使います。縦穴なら、そこら中にありますから」

「リリの持ち物にロープもあったからなんとか下りれるでしょ」

キューイは平気だよな？ え？ お腹一杯食べればいい？ いや、そういう意味じゃないんだけど……。飛び降りれるかって話。翼ダメになってるけど、一階層分ぐらいなら……。あ、大丈夫なのね？

「階層主はどうする。十七階層だろう。例のデカ物がいるのは」

ガチの迷宮モンスターレックスの孤王、階層主である『ゴライアス』か。こっちも問題は無い。

「ゴライアスならロキファミアリアが遠征の際に討伐してるはずです。復活するインターバルを考えても今ならギリギリ間に合います」

「そうでなくてもガネーシャファミアリアが中層の依頼で行くさ中に出現したら片づけるって話もしてたわ。確実に居ないって考えても平気よ」

ロキファミアリアが討伐した場合、約二週間前なのでかなりギリギリ。ガネーシャファミアリアが討伐していた場合は確実に出現していない期間だろう。

遠征の際に邪魔になるゴライアスをロキファミアリアが無視する理由には無いが、無視してくれた方がこっちとしてはありがたい……。

「あくまで、選択肢の一つです」

「そうね、じゃあ選択肢を纏めましょう」

まず一つ。来るかどうか分からない救援を待つ。

この小部屋に立てこもって、モンスターが来ないか怯えながら耐える。食料は殆どキューイが食べ尽くしたが、水はある。冒険者の体は意外と丈夫だし、二三日食事をとらなくても死ぬ程じゃない。

二つ目は上の階層を目指す。モンスターの強さはそこそこ、下に進む方に比べれば弱いモンスターを相手どると言えばそうだが、キューイリーダーも使い物にならない階段探しをする必要がある事。片っ端から上の階層に続く風の流れる地点を調べる方法もあるが、階段に当たるかは未知数。

他の冒険者を探すのも難しいだろう。中層に挑む冒険者の数は上層の20分の1ともいわれてる。時刻と相まってほぼ会えないと考えていい。

三つ目は下の階層を目指す。モンスターは今の階層より強くなる上、ヴェルフとリリは完全に足手まとい。ミノタウロスも出現する以上、戦力は俺とベル、後はヴァンの三人。キューイが死ねば階段を探せなくなるのでキューイを死なせない様にしながら進む必要がある。

「さて、どうする？ ベル？」

生還率は降りる方が高そうだが、どれを選んでも危険度は変わらないなあ。

しいて言うなれば、『待つ』のと『上に戻る』のはどっちも運が絡む。『下に進む』のは実力が問われる感じか？ ベルが選んだ方ならどっちでも全力は尽くすが……。ベル？

青褪めて震えるベルが俯いていた。きつく握りしめた手からギチギチと言う音までしている。ベルが震えながら口を開いた。

「僕は……」

絞り出す様な声。重責に押しつぶされそうになっている姿に、思わず声が出た。

「ベル、大丈夫？」

「ベル？ どうしたんだ？」

「ベル様？」

俺、ヴェルフ、リリの三人の問いかけに、ベルが震えながら顔を上げた。

「僕は、気付いてなかったんだ」

何が？ 思わずヴェルフとリリを見るが、二人も訳がわからないと首を傾げる。

「このパーティーのリーダーは僕だったんだ。ずっと、今までもそうだった……」

震えながら青褪めた表情のまま、きつく握りしめた拳を地面に押し当てて絞り出すベルの声。

「僕は、選んだ。助けるって、囿になるって……でも……」

仲間がいたのに。パーティーのメンバーが居て、わくわくしながら中層に挑んで。

僕が選んだ選択によって、皆が命の危機に晒されていて。ようやく気が付いたんだ。僕が選んだ結果がこれなんだって、僕が皆を危険な目に遭わせてるんだって。

「ごめん。僕が」

「謝るなよ」

ベルの謝罪の言葉をヴェルフが遮る。

「なあベル。なんで俺がお前のパーティーを組んで、こんな所まで一緒に来たと思ってるんだ？ 逃げる事だっただけなのに、だぞ？」

………お前の事を認めてるからだよ。お前がどんな選択したとしても、俺はお前を恨まない」

「ヴェルフ」

タケミカツチファミリアと共に、逃げる事だつてできた。あの時、逃げていれば生存率はどれ程違ったか。それでもヴェルフ・クロツゾと言う男はベルと一緒にいくと決めた。あの時点でベルに全てを捧げてる。

「ヴェルフ様ではありませんが、リリも同様です。謝る必要はありません、ベル様。リリも恨みはしませんよ」

「リリ」

リリルカ・アーデも同様だ。逃げられるタイミングはあった。あつちの方が生存率が高かつたにも拘わらず、ベルの選択を尊重した。

「同じパーティを組んで、ファミリアに居ながらずつとベルに責任を押し付けていた私が言うのもなんですが。私も恨みませんよ。ただベルが選んだ選択が上手く行くように、手助けがしたいから此処に居ます」

「ミリア」

俺は、ベルに死んでほしくない。其の上で、ベルの選択を尊重したい。ある意味では無責任な事をしている。ベルに正しく注意すべきだったという場面が幾つもある。それでいながら、ヴェルフやリリと一緒に来る事に安堵もしていた。どれ程危険なのかを理解しつつも、二人を強引にタケミカツチファミリアと共に行かせることをしなかった。

「もし、もしベルが辛くて、苦しくて、やめたいっていうなら。私が代わりましょうか」

ベルが、やめたいと言うなら。俺が此処でリーダーを代わろう。俺が選択しよう。皆の命を握りしめて、一世一代の賭けをしよう。

リリとヴェルフを伺えば、二人はニヒルな笑みを浮かべ返してきた。信用は、されてるって事かね。

「どうしますか。選びたくないのなら、私が代わりに選びます。だから」

俯き、涙をこらえていたベルが顔を上げた。仲間の命を握る重責を感じながら。それでも、先程までの弱弱しい姿ではなく、まっすぐ前を見据える男らしい瞳をもって、ベルが大きく宣言した。

——進もう

第七十七話

ヘステイアファミリア本拠、廃教会に未だかつてない程の数の神と人が集まっていた。

集まったのはヘステイアファミリア主神ヘステイア。教壇の上で目を瞑り懺悔を聞く女神の様に静寂を纏い、人らの出会った出来事についてを聞き終え、静かに口を開いた。

「そうか。そんな事があったのか」

「申し訳ないヘステイア、まさか俺の眷属じゆらが助けられておきながら俺がそれを知らなかったとは」

深々と頭を下げるタケミカツチファミリア主神タケミカツチ。その後ろに一列に整列して同じように頭を下げるタケミカツチファミリアの眷属六名。

事の始まりは昨日。ヘステイアファミリアの眷属ベル・クラネルとミリア・ノースリスの二名とヘファイストスファミリアの眷属ヴェルフ・クロツゾ、そしてサポーターのリリルカ・アーデの四名と+α二匹のパーティが中層進出した所から始まる。

中層域で上手くモンスターを捌いていた彼らだったが、付近で負傷者を発生させたタケミカツチファミリアのパーティを発見。その援護を行うべく合流した。

したのは良いのだが、余りにも多すぎるモンスター。そして狙いすぎましたかの様な迷宮の崩落。様々な出来事が重なり結果としてタケミカツチファミリアのパーティが重傷者を二名を抱え、戦闘員の半数を失い危機的状況に陥る事となった。

このままタケミカツチファミリアを庇いながらの戦闘は不可能。撤退も危険と判断したヘステイアファミリアのミリア・ノースリスの意見を聞いたベル・クラネルがタケミカツチファミリアのパーティのみの撤退。ヘステイアファミリア側パーティがその場に留まりモンスターの足止め及びに囷を買って出る事となった。

ヘステイアファミリアのパーティと別れたタケミカツチファミリアは疲労困憊状態でありながら上層を次々に突破していったが、七階

層に到着した際に新米殺しの名でも呼ばれるクリアアートの処理に失敗。数多くのクリアアントに囲まれて絶体絶命の危機に陥りかけるも辛くも突破。しかし体力の限界に陥っていた者が気絶し結果としてレベル2であつた桜花とミコト以外が意識を失う結果となり、ほうほうの体で五階層から四階層へ続く連絡路まで辿り着くも其処で力尽きてしまった。

運良く他のファミアリアのパーティに助けられるも疲労困憊状態での強行軍が祟って今朝まで目を覚ます事は無かつた。もし意識が残っていたらばヘステイアファミアリアのパーティが危機的状況に陥っている事を伝え、救援依頼を出すはずであつたにも拘わらず。

今朝早くに目覚めたミコトは目覚めると同時に本拠を飛び出してギルドに駆け込み依頼を発注しようとしたところでちょうど依頼を発注したヘステイアと鉢合わせした。

その後次々と目を覚ましたタケミカツチファミアリアの眷属達の話聞いたタケミカツチが慌ててやってきて、話のすり合わせが行われた。

「つまり、彼らの負債を肩代わりした結果。ベル達は帰って来れなくなつたのだな」

話を聞き終えた所で眷属のナーザを傍に控えさせたミアハが彼ら、タケミカツチファミアリアの眷属を見て呟いた。その呟きに彼らは身を竦ませ再度深々と頭を下げる。

負債を肩代わりさせた挙句、自分たちはベル達の願いを聞き届けられなかつた。もしこれでベル達が全滅でもしていようものなら切腹も辞さない勢いだ。

「先に言っておくよ。僕は君達を恨まないし、憎まない。ベル君とミア君がそうすると決めた。そして行動した結果だ。君たちが気に病む事ではない」

「ですがっ」

生真面目に、今回の出来事に重責を感じているミコトが反論を口にしようとしたところでヘステイアは振り返った。青みがかつた瞳で六人を見回し、微笑む。

「むしろ、お礼を言わせて欲しい」

その毅然とした眼差しと、その女神の口から放たれた言葉に驚愕し動きを止める。

「君たちが無事でよかった。ベル君達の行いが無駄に終わらなかった事、本当に感謝している」

静かに、慈悲深い女神の様に、タケミカツチファミリアの六人を見下ろして微笑む姿に息を呑む。

「そして、その上で僕は君たちにお願ひがあるんだ。どうか、ベル君達を探すのを手伝って欲しい」

『——仰せのままに』

ヘステイアの言葉に一糸乱れぬ動きで六名全員が頭こゝべを垂れた。

静かに頷いたヘステイアは長椅子の一つに座っていた眼帯をした女神、ヘファイストスの方に顔を向けて深々と頭を下げた。

「ヘファイストス。すまない、僕の眷属の我儘を聞いた結果。パーティに入っていた君の眷属まで危険に晒した。なんと謝れば良いか」

パーティのリーダーはヘステイアファミリアのベル・クラネルであり、その選択をしたのはリーダーである。パーティに加入したヴェルフ・クロツゾはベルの選択によって危機に晒されている。其の事を謝罪するヘステイアに対し、ヘファイストスは肩を竦めて見せた。

「——別に、気にする事ではないわ。だって、その子達の話にもあった通り、ウチの子に『タケミカツチファミリアとの撤退』を推奨してたんでしょ？ それにも拘わらずベル・クラネルって子の選択に乗ったのはヴェルフ本人。ヴェルフの責任であって、ベル・クラネルの責任ではないわ」

話の中で、ミリア・ノースリスがヴェルフに対してタケミカツチの眷属と共に撤退する事を推奨する発言を行っていた。もしそれが無ければ無責任なリーダーに付き合わされて眷属を危機に晒されたと憤る所ではあるが、ヴェルフ本人が危険を承知で彼らに従ったのであれば、そうはならない。

ヘファイストスの言葉にヘステイアがごめんと呟く。

「それよりも本題に入ろう。捜索隊を結成するという話だが」

「そうだね。早ければ早い方が良い。ヘファイストス、君の所は？」
「申し訳ないけど、ロキファミリアの遠征に付き合っつて主力メンバーは全員出払ってるの。残ってる子達は中層に長時間留まるのは不安が残る子ばかりね」

ヘファイストスの言葉にヘステイアが目を細める。集まった主神達の中では最も規模が大きいファミリアではあるが、その本質が冒険者ではなく鍛冶師である以上、致し方のない事ではある。

「俺の所からは桜花とミコト、サポーターに千草が行ける。だが他の三人は足手まといにしかない」

残るミアハの眷属ナーザは過去のトラウマによってダンジョンに潜る事が出来ない。故に現状頼れるのはタケミカツチの眷属達のみ。

人手不足感是否めず、かといってギルドに発注した依頼で人が集まるまで待つていれば、未だ微かにつながる眷属との恩恵の繋がりが消えうせかねない。時は一刻を争うのだ。

むむむつと唸りながらヘステイアが腕を組む。と、との時だった。
「俺も協力するよ、ヘステイア」

壊れかけの扉をバターンと勢いよく開け——開け放たれた扉の蝶番が壊れてバターンと音を立てて倒れた——飄々とした仕草で優男の神が現れたのは。

「ヘルメス！」
「お前!? 何しに!」

驚きに見開くミアハやナーザを他所にタケミカツチをあしらう様に笑いながらヘステイアの前に立ったヘルメス。彼の後ろには眷属のアスファイが静かに付いていた。

「何、神友が困っていると聞いて駆け付けたのさ」

訝しむ様な表情を浮かべるヘステイア、そして集まった主神達。飄々とした雰囲気、優男の神は懐から一枚の羊皮紙——ヘステイアの発注した冒険者依頼の用紙を取り出す。

「俺も手を貸すよ。ベル・クラネルとミリア・ノースリス、そして仲間
の搜索をね」

茶目っ気でも出したかったのかウインクまでしているヘルメスの姿にヘファイストスの呆れた声を上げた。

「神友しんゆうとか言つて。貴方、下界に来てから碌にヘステイアと関わりもってなかつたんじゃない」

「確かに」

「随分といい加減な友ではあるな」

「あれあれ、これは手厳しいなあ」

ヘファイストスに続いてタケミカヅチやミアハまで呆れの伴う声を上げ、芝居がかった仕草でヘルメスが肩を落とす。眷属達を置き去りにした神々のやり取りにミコトやナーザは口をつぐんだ。

「でも、ヘステイアに協力したいというのは本当さ。俺もベル君とミリアちゃんを助けたいんだ」

芝居がかった仕草をやめ、唐突に真面目な表情を浮かべる優男の神。呆気にとられたヘステイアの前でヘルメスは自身の眷属、アスフィの肩を抱いて口を開いた。

「捜索隊にはこのアスフィも連れて行く」

「はあっ!？」

アスフィも想定外の発言だったのか驚きの表情でヘルメスを見上げるがヘルメスは取り合わずに微笑みをヘステイアに向けた。

「ウチのエースだ。安心してくれ」

「……はあ」

主神の意見に反対はしないのか、諦めた様な深い溜息を零してアスフィが軽く会釈する。

その様子を見ていたタケミカヅチが胡乱気な視線をヘルメスに向けたままヘステイアに問うた。

「どうする？ ヘステイア」

「今はベル君達の救助が最優先だ。少しでも人手が欲しい。頼むよ、ヘルメス」

「ああ、任されたよ」

芝居がかった仕草で了承するヘルメス。胡乱気な視線を向けるタケミカヅチ、ミアハ、ヘファイストスの三人と、探る様な呆れた様な

視線を向けるアスファイ。向けられた本人はへらへらとした笑顔を浮かべていた。

「準備ができ次第、出発ね。今夜辺りかしら」

「うむ、今夜が目途だな」

「桜花、お前たちは直ぐに準備しろ」

『了解！』

へファイストス達が話を進める中。アスファイに物陰に引つ張り込まれたヘルメスは膝を抱えてアスファイと向き直っていた。

「おいおい、何だよアスファイ」

「ヘルメス様、先程私を『連れて行く』と仰いましたが……。まさか」

「ああ、俺も同行する」

「なっ!？」

驚愕し過ぎて眼鏡がずれ落ちるがそれを直す事もせずアスファイが焦りのまま小声で捲し立てる。

「神がダンジョンに潜るのは禁止事項ではっ!？」

「バレなきゃ良いのさ。迂闊な真似をするのが不味いっただけでね」

「……はあ、最初からその積りで」

「ははは、俺の護衛おもりを頼んだぞ」

眉を逆立てて頬を引き皺らせるアスファイに、ヘルメスがニヤニヤと囁いていると、すつとヘステイアが椅子の向こうからヘルメスたちを覗き込んだ。

「僕も連れて行け」

『ヘステイアッ!？』

感情の高ぶりを示す様にツインテールを逆立たせて覗き込む姿にヘルメスとアスファイが驚く。

「落ち着けヘステイアッ！ 神がダンジョンに潜るのは禁止事項でっ

！ だから、その」

「——バレなきゃ良いんだろ」

「ぐえ……」

自身の使用した言い訳を使われて言葉を失うヘルメス。

「僕もベル君達を助けに行く。彼らの事を誰かに任せつきりにするな

んでできない。僕も付いていく。いいね?」

真つ直ぐに見つめられ、一步後ずさりながら頬を引き攣らせて眷属に助けを求めるヘルメスだったが、アスファイはプイとそっぽを向いて主神の助けを無視した。諦める様にヘルメスが項垂れる。

騒ぎに気付いたヘファイストス達が呆れ顔を浮かべながら近づいてくる。

「あんたねえ」

「すまないな、俺の所為で」

「それはもういい」

ヘステイアは呆れ顔のヘファイストスと申し訳なきようなタケミカヅチから視線を外して胸に手を当てる。

「感じるんだ。ベル君達は生きてる。僕の与えた恩恵は、どちらもまだ消えちやいない」

ヘステイアの意思が固い事に気付いたヘファイストス達は苦笑を浮かべた。

「ヘステイア、ヴェルフに会ったら渡してほしい物があるの。私の伝言付きで、いいかしら?」

「ああ、構わないよ」

ヘファイストスから布で包まれた大きな物を受け取るヘステイアに背を向け、壊れた扉から外に出て夕焼けを眺めたヘルメスは吐息を零した。

「アスファイ。俺とヘステイア、一人で両方守れそうか?」

「流石に保証しかねます」

「だよなあ」

夕焼けに染まる街並みを眺めつつ、優男の神は当てを脳裏に描いて呟いた。

「もう一人連れてくるか」

ポタリと、汗が地面に落ちた。雫が頬を伝う気色の悪い感触を味わいつつも、後ろから響く苦悶の声が精神をガリガリと削っていく。

中層特有の湿った空気は、何処か日本の夏場を思い起こさせる様な不快感がある。炎を扱うモンスターが居るからか、それともこの階層は気温が高いのか。滴る汗は留まる事を知らない。

確かに汗の不快感は凄い。凄いのだが、それ以上に精神を削るのは――鼻に突き刺さる悪臭である。

「きふあくあ……」

「おええ……」

「うぷっ……」

「キュイ……キュイ……」

《モンスターが近い。主、おい主よ、聞いているのか?》

現在階層は十六階層、のはずだ。キューイの案内の元、推定十五階層から一階層下に降りた所である。

鼻に突き刺さる悪臭の正体は、リリが手にした小袋。名を強臭袋モルプルと言う代物。リリルカが発案し、ナーザさんの手によって発明された悪魔の発明品。

「……っ、おいリリ助、この匂いはどうにかならないのか」

死にそうなヴェルフの声にリリルカがビクンと跳ね、ヴェルフに小袋を突き付けて捲し立て始める。

「お言葉ですがっ。リリの方が発生源の近くに居るんですよっ」

振り回された小袋から臭気が漏れ出て鼻に突き刺さる。思わず口元を抑えてえずく。やめてくれリリ、それは生命線であると同時に、俺達の死を呼び寄せるアイテムなんだ。

ギヤーギヤーとリリが喚く中、俺はリリの手をがしつと掴んで止める。

「り、リリ、それ、振り回さないで。お願いだから」

その匂い袋はモンスターとの遭遇を回避するというアイテムだ。ダンジョンの素材からそういった物が出来ないかとナーザさんに相談し、完成した代物。なお試しに匂いを嗅いだナーザさんが凄まじい痴態を晒す羽目になったとだけ言っておく。そういった薬品の匂いになれたナーザさんですら悶絶して痴態を晒す危険物。俺達がどうなるかはわかり切った事だが……効果は絶大であると同時に、

危険度を跳ね上げる代物でもあった。

「その効果が切れたら、モンスターに袋叩きにされるから」

俺の言葉にリリが動きを止め、じーと文句ありげにヴェルフを睨み。そして前を向き直った。

この強^{モルプル}匂袋、しつこく付きまどつてきた中層のモンスターがピタリと近づくのをやめるというすさまじい効力を持っており、最初こそ喜んだ。

喜んだのもつかの間。その効力は諸刃の剣でもあった事に気付いたのは数分後。

モンスターが俺達を中心に一定範囲に集まりつつある。

匂いを避ける様に、俺たちの動きに合わせてモンスターが避ける様に動くが、逆に匂いにつられてモンスターが一定距離を置いて取り囲む様に集まってきてしまったのだ。

そう、俺達は今無数のモンスターに囲まれていた。遠くの方を見れば苛立ったような赤い瞳がいくつも確認できる。だが一定以上には決して近づいてこない。

匂いで半ば死にかけのキューイリーダーは役立たずではある。が、それすら必要なく感覚の鈍い俺でも気付く程の殺気が、行く先からも、後ろからも、全方位から向けられる。

全員で顔を見合わせて頷き、歩き始める。

「それが私たちの命綱でもあり、同時に余命宣告でもあります」

「効果が切れたら周りを取り囲んでいるモンスターが一斉に……」

「そう言う事です。なので早く次の階層に進む縦穴を見つけないと……」

縦穴探しはキューイの仕事。だが残念な事に強臭袋^{モルプル}の所為でキューイがダウン。最初にキューイが大雑把な位置だけ教えて貰ったのを頼りに、辿り着いたその場所には穴が無かった。

時間経過で消えてしまったのだ。

最悪なのはそこから。キューイが使い物にならなくなった所為で縦穴を自力で探す必要が出てきた拳句、モンスターが一定距離を置いて取り囲むように動いているのに気付いたのはついさっき。

つまり自らの首を真綿で締める行為をしていたのだと、漸く理解した所だ。

一度使い始めたら最期、使い切る前に違う階層に移動しなくては効果が切れた瞬間に匂いにつられたモンスターに袋叩きにされてしまう諸刃の剣。最悪な事に、既に手持品の殆どを使い切り、残り一つしかないという笑える状況だ。早く縦穴見つけないと不味い。

「……縦穴、見つからないね」

「ヴァン、わからない？」

《無理だ。俺様にその手の技能は無い》

唯一の救いは——救いと言って良いのかわからんが——ヴァンの鼻が潰れていた事。

度重なる戦闘の中で、ヴァンの鼻は完全に潰れており匂いをかぎ取れなくなっていた。そのおかげでヴァンがキューイを背負って運ぶことができているが、同時にヴァンが索敵出来ない状態に陥っている訳で。

メリットとデメリットが変な風に釣り合いが取れている状態だ。むしろマイナス方面に偏り切っている気はするが。

隊列を組み歩いていると視界の端、横穴の奥でチカツと炎の残滓が零れ落ちたのが見えた。三匹のヘルハウンドが今まさに口から炎を吹かんと体を大きくのけぞらせている姿勢をとっているのが見えた。

「ヘルハウンドっ！」

「任せろっ！」

慌てて剣の切っ先を向けようとする前に、ヴェルフが叫んで手を向けた。

『『燃え尽きろ、外法の業』』わぎ『ウィル・オ・ウイスプ』』

紡がれた短文詠唱の魔法。ヴェルフの右腕から放たれた空気の揺らぎ、陽炎が真つすぐにヘルハウンドに命中する。だが、当たったはずのヘルハウンドはダメージを負った様子はない。

が、次の瞬間にはその口蓋の内のため込んだ炎が体内に逆流し、体が風船のように膨れ上がり、爆炎を上げて爆ぜた。一匹のヘルハウンドの肉体が内側から爆ぜ、残りの二匹を吹き飛ばして壁に叩きつけ、

行動不能に陥らせる。

恐ろしい魔法だ。アンチ・マジック 対魔力魔法と言う種別の魔法。効力は至って単純『対象の魔法を強制的に魔力暴発させる』イグニスファトウスと言うモノ。詠唱待機状態の俺が食らえば一溜りもない魔法であるらしい其れ。ヴェルフが仲間で本当に良かった。そうでなければ対ミリア最終兵器と化していただろう。

「ヴェルフ、魔力に余裕は？」

既に何度も同じようにモンスターを撃退している影響でヴェルフがふらつく。

此処に来るまでに、何度も同じ様に遠距離から炎で攻撃しようとしてくるヘルハウンドが数多くいた。そのどれもが匂い袋の効果範囲ギリギリの射程から此方を狙い打とうとしてくるのだ。

即応できるのはベルの『ファイアボルト』か俺の『ガン・マジック』のどちらか。

だが、最大戦力のベルを消耗させる訳にもいかず。マインド切れかけの俺もマガジン消費を抑えたい。そう考えていた所でヴェルフがその魔法を使って迎撃すると言い出した。

あまりステイタスが成長していない影響か、既にマインドダウン寸前の頭痛が発生し始めているヴェルフだが、ニヤリと笑みを浮かべて『余裕だ』と返事を返してきた。

此処に来るまでの消耗は、極めて少ない。モルプル 強臭袋のおかげで道中のモンスターとの戦闘を回避できているのは非常に大きい。消耗しているのはヴェルフの魔力のみ。

すでに精神力回復特効薬マジック・ポーションは無い為、ヴェルフの回復は出来ない。しかしヴェルフはこの階層ではモンスター相手に優位に戦えないのでこういった事でしか役に立てないと気張っている。

「さ、進もうぜ」

「うん」

緊張を伴いつつも、超至近距離での仲間の魔力暴発イグニスファトウスに巻き込まれて瀕死の傷を負った黒焦げのヘルハウンドの横を通り、奥へ進む。

ちなみに、ヴェルフはその対魔力魔法の『ウィル・オ・ウィスプ』を

試射した相手はファミリアの仲間だったらいい。仲間から疎まれてるのってそういう部分ちゃうん？

足が震え、呼吸が乱れ、間近に迫った『死』に叫びそうになる中、頭の中でヴェルフのちよつと変わった部分にツツコミを入れつつも後ろを振り返る。

顔の半分が炭化し、翼の片方が折れ千切れ骨と肉の覗く断面を引き摺り、片目で仕切りに周囲を見回すヴァン。その背に背負う様な形で匂いにやられて朦朧とした意識で『臭い臭い』と呟くキューイ。

キューイ、縦穴の位置を教えてください……。そんな願いは今のキューイには届かない。匂いを取り除けばキューイに縦穴の位置を探してもらえるだろう。だが、同時にそれは数えきれないモンスターに襲われる事を意味する。

後ろに続くヴァンとキューイの更にその先。暗闇に包まれた進んできた道に、夥しい数の赤い瞳があった。あれ、数いくつぐらいいるんだろうか？ 百？ 二百？ 数える気なんて更々ないが、つい目で追ってしまふ。

「ミリア様、進みましょう」

「うん、わかってる。ヴァン、もう少し頑張って」
《……………》

ベルは戦えるだろう。俺は残りマガジン14個、余裕はない。ヴェルフは魔法多用の影響で動きが鈍り始めてる。リリは戦力外。キューイは昏倒中。ヴァンは満身創痍。

あの数のモンスターを相手どつたら、どうなるだろう？

早く、早く縦穴見つけないと、最後の一つの強臭袋モルプルの効果が切れる。焦る気持ちばかりが先行する中、目的の縦穴の姿は影も形も無い。

生きて、帰らなくては。ヘステイア様に会わせる顔が無い。せめて、ベル達だけでも……。

第七十八話

匂いが、薄れていく。

鼻がもげるのではないかという程に臭かった匂いが、消えて行く。本来なら喜ぶべき所であろう。

だが、現状においては喜ぶ処か絶望する他無い。

「……匂い袋の効果が、切れました」

小刻みに震えるリリルカの手に摘ままれた小さな小袋。悪臭を振りまいていた原因のそれ、薄っすらと名残ともいえる匂いが微かに振りまかれ、湿った空気に溶けて消えた。

清浄な空気と言うには随分と湿り気を帯びて重苦しい空気だ。

ベルとヴェルフが苦虫を噛み潰した表情を浮かべ、ヴァンがキューイを捨てる様に落つこととして後ろに向かつて威嚇しはじめる。

現在位置は長い通路の分かれ道。

「キューイ、縦穴の位置を」

声が震えた。ちゃんと口に出来たかも怪しいぐらいに、声が震える。

「……キューイ」

臭いじゃなくて、今すぐ縦穴の位置を教えてくださいっ！ 糞っ！！ すぐに復帰は無理かよっ！！

「ベル、ヴェルフ、応戦準備。キューイが復帰するまで時間かかります。復帰して縦穴の位置を把握したら、直ぐに離脱を」

「うん」

「ああ……」

無茶苦茶な作戦だ。匂い袋の効果が切れた時点で、既に詰みなものだから。

ドシリ、ドシリと言う重たい足音。それも一匹分ではなく、数えきれないぐらいの足音が正面右方向から聞こえてくる。何処からか『獲物を狩れるぞ』とでも言いたげな喜びに塗れたモンスターの咆哮が響いてくる。

後ろを振り返れば数えるのも億劫になる程の数のモンスターが轟

めいていた。左側通路から抜け——あ、死んだわこれ。

正面右側からのそのりのそりと現れたのはミノタウロス、その数……
両手両足の指じや足りないぐら^{以上}い。

正面左方向から無音で静かに足音を立てずに現れたのはライガー
フアング、数は五匹。追加でアルミラージが十^{百を越える}ダースぐらい。

後方は言うまでもない。アルミラージにヘルハウンドにライガー
フアングに、ミノタウロスも数匹混じってるか？ 数えられん。

「キューイ復帰まで時間稼ぎを、ヴァン後ろに出て」

「ミリア、後ろは任せるよ」

「了解、ベルとヴェルフは前を」

前方にベルとヴェルフを、後方に俺とヴァンを。リリにキューイを
任せておく。歯がガチガチと音を立てている中、ミノタウロスの咆哮
が響き渡った。

モンスター達も歓喜の感情を表す様に、殺気を漲らせて吠える。前
からも後ろからも聞こえる咆哮は、余りの圧力に膝を屈しそうにな
る。だが、此処で諦める訳にはいかない。

——ここで、一つ重要な情報を思い出した。

ミノタウロスの咆哮^{ハウル}には特殊な効果があったのではなかったか？
確か、そう記憶違いでなければレベル1冒険者を容赦なく強制停止^{リストレイト}
させるっていう効果が。

表情を完全に凍り付かせたヴェルフとリリがガチガチと歯のぶつ
かる音を響かせて停止していた。ヴェルフの手は大刀の柄をギリギ
リと握りしめているが、その姿勢から動き出せず。リルルカはキュー
イを復帰させる為に水を取り出した姿勢で停止している。

あー。死んだ。絶対死んだよこれ。あの数のモンスターをどう
やって止める？ ヴェルフとリリの元にたどり着かせずにとか絶対
に無理だ。それにもし捌けたとしても、だ。

動けない二人を担いで縦穴まで駆けるとか、無理。道をこじ開ける
のすら出来ないってのに、どうしろってんだ。

「ミリア……」

ベルも状況に気付いたらしい。正面も後方も塞がれて、二人が

強制停止で動けなくなった今、逃げる事は出来ず。同時に此処で二人を守る事も不可能の可能性が高い。

選択肢としては、二人を見捨てて応戦。俺とベル、キューイだけをなんとか下の階層にたどり着かせるぐらいか？ そうすれば俺とベルだけでも助かる可能性はゼロじゃない。

わかってる。見捨てるなんて選択は在り得ないって、だからこそ剣を抜く。

それぞれ左右の手に持つのはヴェルフが新調してくれた新しい剣。素材は上層の希少鉱石を精錬し、キューイの爪を溶かし込んだ合金を使用。強度を重視し、キューイの血を染み込ませた一品。左手に持つ方だけは半ば程で折れているが、魔法の触媒としては十分な働きをしてくれるだろう。

二刀流なんて高度な技術は無い。左手で『ショットガン・マジック』を起動。右手はそのまま『ソードオフ』も詠唱しておく。

「ベル、正面は任せたわ。後ろは任せて……。一匹も通さないから」「うん。後ろは任せるよ。正面は任せて、直ぐに終わらせるから」

ヴェルフとリリを挟んでそれぞれ正面と後方に構える。ベルは『ヘステイアナイフ』と『牛若丸』の二刀流。

俺は『竜牙剣』と『ショットガン・マジック』の銃と剣の混合スタイル。

笑っちゃうよな。正面から来るミノタウロスの群れ。後方から来る数えきれないモンスター群。

残りのマガジン数は、13か。ピストル弾換算で390発、ショットガン換算で130発、ライフル換算で39発。トラップ換算で13個。威力強化する場合は消費が倍になるのでさらに半分となる。

ヴァンを前に出して、簡易土嚢でヴェルフとリリを守って……。俺も前に入るしかないか。

近接戦は、苦手なんだけどなあ。もつと、近接戦の練習、しとけばよかったな。

「オオオオオオオオオ——ツ!!!」

背中から聞こえるベルの雄叫び。ミノタウロスの咆哮と混じり合

うそれに合わせて、ヴァンに叫ぶ。

「前に出るわっ!」

《絶対に死ぬなっ!》

無理言わんでくれ。ああ畜生、運が無いな。

ヘステイア以下搜索隊は既に上層を突破し、中層にまで足を踏み入っていた。

階層進行速度は想定よりはるかに速い。その一助となっているのは間違いなく覆面の冒険者であろう。現れるモンスターの殆どを旋風の如く、木刀と短刀を使い分けて殲滅して進む謎の冒険者。

ヘルメスの言われるがままに誰もその素性に関して詮索はしないが、その実力がタケミカツチファミリアが足元にも及ばない程のものだというのは此処までの道中で嫌と言う程に理解できた。

覆面の冒険者は側面から真っ直ぐ突っ込んでくるアルミラージを木刀で突き、別の個体に投げつけられた手斧を左手で掴み取り、即座に投げ返す。真つすぐと投てきされた際に飛翔した軌道を同じく描き、投擲後に隙を晒していたアルミラージの脳天に突き立つ。横にいた個体が驚きに目を見開いた瞬間には既に覆面の冒険者はその個体の目の前で突きを放っていた。

放たれた鋭い突きがアルミラージの眉間に突き立ち、目玉を飛び出させて絶命させた。

「これで終わりですね」

木刀についた血を払い、ケープの裾をたなびかせる姿を見たタケミカツチファミリアが驚いている。

「先を急ぎましょう」

前衛を覆面の冒険者一人に任せ、後方警戒を行っているアスフィアル・アンドロメダは軽く頷き、神々とタケミカツチの眷属達に進む様に促す。

既に到着階層は13階層。ベル・クラネルとその仲間達が最後に確認された階層にまで到着している。

「もう一度聞きますが、この辺りですか？」

「もう少し先、次の部屋ルームがそうだ」

先導する覆面の冒険者が鋭い視線を先の方へと向けて歩を進めるさ中。ヘスティアは周囲を見回しては右手に持った照明具ランプに似た携行型の魔石灯で辺りを照らす。

「暗いなあ」

神の恩恵の効力によって身体能力や五感の強化された冒険者であつても薄暗いと感じるその空間は、神アルカナムの力を封じて只の人の子と同程度の身体能力しか持ち得ぬヘスティアにとつてみれば真つ暗闇と変わらない。実際、ヘスティアの目に見える範囲は手に持った魔石灯によつてもたらされる僅かな明りによつて照らされた小さな空間のみである。

その様子を肩越しに振り返つた覆面の冒険者、リユー・リオンが見てから、歩みを進める。

弾切れだ、もう撃てない。まだ剣がある、切れ味がガツタガタに落ちちまつたけど、まだアルミラージを一撃で斬り殺せるぐらいの威力はある。

腕も重い。足も重い。頭痛は酷いし耳鳴りが響いてる。

目の前に突っ込んでくるアルミラージを切り払い、飛来した投擲斧を左手の折れた剣で叩き落とす。

ベルは無事か？ ヴェルフとリリは？ 前を向いても、後ろを向いても、右も、左もモンスタ―塗れ。囲まれてる。時折聞こえるベルの雄叫びと、ヴァンの咆哮。後は即席土囊パリケイドを叩く音。

ヴァン、即席土囊パリケイドを攻撃してる奴をなんとかしてでも止めろ。キューイの復帰はまだか？ ベルは何処で戦っている？ 後ろから振るわれた大斧による一撃。危うい所で回避はしたが床を叩き砕いて破片が散弾の如く飛び散る。

マガジンが追加される事はもうない。マジック・シールドが発動する事も無い。当たれば俺の耐久ではレベル2とは言え即死するだろ

うミノタウロスの一撃。

ああ、こいつまだ生きてたのか。至近距離からショットガンで顔面整形してやったから死んだと思ってたのに。右手の剣をぐちゃぐちゃになっっているミノタウロスの眼孔に突き立てる。即死は、しなかつた様だ。

暴れ回り、腕が我武者羅に振り回される。剣を抜いて一度引こうとするが剣が抜けない。

抜けなくなっちゃまった右手の剣を一度手放した。絶叫が響くさ中、ついでに左手の折れた方で飛んできた手斧を叩き落として、落ちた手斧を手早く拾いあげる。このミノタウロスをどうにか片付けて、それで？

えっと、何匹倒した？ そうだ、百と、二十と、三だっけか？ 数えてた気もするし、途中で数え忘れた気もする。

残りの数は？ 数えきれない。数える気も起きない。

残弾は？ もうない。ついさつき無くなったって言ったる糞が。

武器は？ 折れた剣と拾った手斧しかない。折れてない方は暴れるミノタウロスの眼孔に突き刺さってる。

道具は？ 空っぽの瓶が二個。中身を舐めれば雫分ぐらいはあるかもって期待してる。

リリとヴェルフは？ まだ生きてる。即席土囊バリケードが突破されてないみたいだから。

キューイは？ 縦穴を見つけられていない。戦いが激し過ぎて探す暇がないらしい。

ヴァンは？ ヘルハウンドの炎を浴びて黒焦げになってる。まだ動いちゃいるが死にかけ。

キューイが応戦してくれてる。でもモンスターの数が多すぎて縦穴を探せないと喚いてる。縦穴を見つけて、其処に駆け込む。其の為にはモンスターを退ける必要があつて、でも退けられないから縦穴を見つけたくて、見つける為には、モンスターを倒す必要があつて、そんなの無理で……。

ガクンと、視界が揺れた。ただでさえ低かった視界の高さが、より

低くなった。

膝を突いていた。解けた包帯が視界の端でゆらゆらと揺れる。数えきれないモンスターに囲まれて、もうどうにかなるとは思えない。

ベルは？　ベルはどうなった？　生きてる？　死んでる？　――

――まだ戦っている。

腕が重い、足が重い、頭痛が酷くて耳鳴りまでする。

――炎雷の煌めきがモンスターの群れを突き破った。

ローブが返り血で真っ赤っか。臭いミノタウロスの血に、アルミラージュの血、あとなんか色々。自分の血も混じってるかもしれない。

――響くベルの雄叫び、ミノタウロスの悲鳴、モンスターの動揺が伝わってくる。

火精霊サラマンダーウールの護布は焦げ付きはじめてる。後1回か2回、炎を退けたら燃え尽きて効力を失う。

――白い何かが遠くの方で動いている。モンスターの群れの中を切り裂きながら、駆け抜ける白い兔。

右手に手斧、左手に折れた剣。目の前に瀕死のミノタウロス一匹。周りに数えきれないぐらいのモンスター。

――ベルが戦っている。

魔力は底を尽きた。

――ベルが戦っている。

弾丸はもうない。

――ベルが戦っている。

体力だつて限界だ。

――ベルが戦っている。

手にしているのは心許ない折れた剣。刃の零れた手斧。

――ベルが戦っている。

生まれたての小鹿の方が、まだマシだと言えるぐらいにガクガクと震える足を叩く。立ち上がり、瀕死のミノタウロスを見据えた。

ベルが戦っているのなら、俺だつて戦えるさ。まだ死んでない。死んじやないんだ。

右手に残った手斧、左手に握りしめた折れた剣。白淡い輝きを灯し

た竜鱗の朱手甲の輝きが背中を後押しした。

歩みを進めた先。大部屋となったその空間に広がった崩落の跡と、戦鬪の痕跡を確認したアスファイがタケミカツチファミリアの面々から話を聞いて溜息を零した。

「数百のモンスターを、足止め？ 正気とは思えませんが」

崩落し、いくつかの通路が塞がった大部屋の中をそれぞれの面々が調べ回中、アスファイの言葉を聞いたリユー・リオンも同じく頷いて肯定した。

「百を超えた時点で、いや、二十を超えた時点で撤退すべきだった」

「……仲間が、怪我をしていて即座に治療しなくては危なかつたんだ」
怪我の度合いが酷く、即座に手当てしなくては命を落とす。そんな状態で五十を超えるモンスターに追われていた桜花の言い分にアスファイが再度溜息を零す。

「その状況で足止めしようとして、実際に十分程とはいえモンスターの群れを足止めできたのは凄いですね。とても正気を疑う行動ではありませんが」

普通の冒険者なら、モンスターの数が二十を超えたら撤退を視野に入れ、五十を超えたら形振り構わずに逃げる。仲間一人の死で他の者が助かるなら、そうするのが冒険者と言う生き方である。

仲間想いのタケミカツチファミリアは、全滅を招きかねない危険な行動をとった。普通なら全滅していたであろうその行為を後押ししたのは、「魔銃使い」ミア・ノースリスの特殊な魔法だと聞かされ、アスファイの眉間に皺が寄る。

「幾つ魔法を覚えているんですか。ミア・ノースリスは」

「どうしたんだアスファイ？」

「ヘルメス様、ミア・ノースリスについて新情報が……」

アスファイとヘルメスがこそそと二人で話し合っているさ中に、リユー・リオンは一つの通路の先を見据えながら皆に声をかけた。

「皆さん、此方に魔石がいくつか散らばっています」

「それがどうしたんだい？」

ヘステイアの言葉にリユー・リオンは桜花を見てから口を開いた。「彼らの言う事が正しければ、彼らはあちらの塞がった通路の先からこの部屋に侵入し、応戦した。そして私たちがやってきた通路は彼らが撤退した通路。となると必然的に此方の魔石は残った者達が応戦しながら撤退した通路という事になります」

「じゃあこの先にベル君達が！」

ヘステイアが魔石灯で通路の先を照らし、キラキラとした光の反射が遠くの方まで続いているのを見て息を呑む。灰色の虚ろな岩壁の所々が黒焦げになっているのを見て息を呑む。

足元の床についた数えきれないぐらいの爪痕。残った者を追った怪物の数がどれ程だったのか想像もつかない。

「痕跡からして、少なくとも六十以上のモンスターに追われていたはずです」

「ですが、逃走する余裕はあった」

「追ってくるモンスターを、迎撃しながらの撤退戦……」

負傷者を抱えた桜花達を確実に逃がす為、敢えてモンスターを引き付ける様に動いたらしいベル達の行動に、その無謀さに、そして勇敢さにそれぞれが吐息を零す。

「行きましょう。彼らはこの先に進んだはずだ」

先導するリユーの後ろを、捜索隊が進んでいく。

朦朧とする意識の中、ゆらゆらと視界が揺れている。しきりに呼び掛けてくる声が、遠くの方で響いている。

薄暗い灯りが揺れ、微かに感じる濡れたのは感触。握り締めたはずの手から、柄が零れ落ちた。

揺蕩う様な、微睡む様な、揺れる意識を繋ぎ留め、言葉を伝える。右の通路の先、縦穴がある、と。

目の前に広がった光景に捜索隊の面々は言葉を失っていた。

ダンジョン十三階層。ベル・クラネル達の痕跡を追った先、大きな縦穴部屋となつている空間に繋がる道は、途中で途切れていた。

「これは……」

「通路が崩落した？」

しやがみ込んで途切れた通路を調べているアスファイは険しい表情を浮かべたまま呟いた。

「これに巻き込まれていれば、少なくともサポーターと鍛冶師のどちらかが確実に死んでいる事でしょう」

「ヘファイストスは鍛冶師君は無事だつて……」

「では、サポーターは死んでいるかと」

冷たく言い放つアスファイの言葉に桜花が動揺しながらも口を開いた。

「反対側に駆け抜けた可能性は」

「……それはない」

「なつ……」

静かに、暗闇に沈んだ大部屋の先を見据えたりリユウの言葉に息を詰まらせる桜花。リユウは静かに下を見下ろしてからすつと見通す事のできない暗闇の先を指さした。

「その下の方、武装の一部が落ちているのが見える。後——血溜まりがいくつか」

ヘステイア達が息を呑んだ。

リユウの指さす先にある物を見ようとヘステイアが身を乗り出して携帯式の魔石灯で照らす。しかし二階層分の高さもあつては携帯式の魔石灯の光量では底を照らす事は出来ず、途途中で引つかかっている崩落の跡が微かに見えるのみ。

「その魔石灯を借ります」

「え？」

ヘステイアの手から魔石灯がするりと抜き取られ、驚きの声を上げる間にも抜き取った犯人、リユウは魔石灯を片手にそのままひよいと崩落の跡の残る崖から飛び降りた。

「なっ!?!」

桜花達が反応しきれずに驚きの表情に染まり慌てて飛び降りたリユーを視線で追えば、片手に持った魔石灯で下を照らしつつも岩の出っ張りやほんの小さな、猫の額程しかない足場とも呼べない足場を伝い、下へ下へと降りていく。

間も無くして、リユーは底に辿りつき、周辺を照らした。上の方から見る限りでは見えなかった底に広がる惨状に、誰しもが息を呑んだ。

降り注いだ岩石に押しつぶされたらしいモンスターの残骸の中。ぶちまけられているのは冒険者向けに販売されている道具類の残骸。岩に潰されたり落ちた衝撃で壊れた小瓶等が散乱した地点と、赤い飛竜の鱗と黒くなりかけた血が飛び散った空間。

リユーは魔石灯で周囲を照らして確認していると、キラキラと何かが光を反射している事に気が付いて近場の岩に付着した赤黒い血を見て近づき、その赤黒い血からキラキラと光を反射する金色の長い髪の毛を摘まみ上げる。

「ミリアさんの、ですか」

岩に付着した血の状況。周辺に広がる惨事を鑑みた上でリユーはぼつりとつぶやいた。

「転落したのは間違いない、か」

一度その二階層分の高さを軽々と降りて見せたリユーはその身体能力を遺憾なく発揮して上る方も完璧にこなし、下に広がっていた惨状を説明し、同時に落ちていたミリアのものらしい金髪とミリアの連れていた飛竜のものと思われる鱗を皆に示した。

その報告を受けた捜索隊は大回りをし、本来の階段を通過して再度崩落の場へと足を運んだ。

上を見上げれば天井は見えず、上の階層の通路は全て崩落しきった十五階層の大部屋。部屋の中には無数の魔石と道具の残骸。そして、ヘステイアが偶然、ミリア・ノースリスの主武装である『銃剣型の杖』が崩落した岩の間に挟まっているのを見つけた。

「つまり、彼らが崩落に巻き込まれて転落したのは事実となった訳で

すが、その後の行動は……」

アスファイとリユールの視線が同時に、足元にぼつぼつと道を示す様に落ちていく鱗を辿っていき、一つの小部屋に向く。

「この小部屋で救助を待ったのか、それとも負傷の治療を行っていたのか」

崩落のあった大部屋のすぐ近く、魔石とドロップ品、モンスターの残骸が多数散らばった通路の行き止まり。冒険者の間では休息部屋レストフロアと呼ばれるモンスターの発生しない小さな小部屋の中に冒険者の痕跡を見つけた。

小部屋の中央に置かれた十三階層の地図。そして石ころがその横に並べられている。誰かが寝かされていたらしい場所には、薄っすらと血の跡が残り、飛竜が寝転んだらしい場所には赤黒い血がべつとりと付着していた。

「見た限りでは、半日前……そうですね、今朝の午前四時か五時頃まではこの部屋で治療を行っていたのでしよう」

無数に散らばる空になった缶詰や保存食の類の袋。包帯の切れ端。空っぽの回復薬ポーション瓶。痕跡のみの残された小部屋の前でミコトが拳を握り締めて俯いていた。

「ミコト……」

「私たちが、私たちが途中で気絶なんてしてはいなければ」

「ミコト、やめろ」

「ですがっ！ 私たちが気絶せずに救援を求めていればっ！」

午前四時か五時頃まで治療と休息を行っていたと思われるベル・クラネル達一行。もし昨日の時点で桜花達が誰か一人でも意識が残っていたら、その時点で救援を求めていけば、この崩落のすぐ近くで応急処置を行って動かなかったベル・クラネル達を無事救助できていたはずだ。そう言い放ったミコトの言葉に桜花が口を閉ざす。

「……それはどうでしょうか」

「何がっ」

「私たちが名乗りを上げたからこそ、この短時間でこの階層まで足を運べた。けれど、昨日の時点では私も、そして彼女もソレに気付きよ

うがない」

自身を強く責めるミコトに対し、アスファイが諭す様に肩を竦めた。「昨日の時点で冒険者依頼を発注していたとしても、今朝まで受ける人が居なかった可能性の方が高い。私はそう思う」

リユーも寸前になってやってきたヘルメスの言葉が無ければ、動かなかった身である。そうであるが故に、ミコトの後悔はどうにもならないと首を横に振った。

悔し気に拳を握り締めるミコトを他所に、ヘステイアはミリアの銃剣型の杖を握り、口を開いた。

「君の後悔は尤もかもしれないし、そうじゃないかもしれない。けれど、今は後悔している場合じゃない。ベル君も、ミリア君も、そして鍛冶師君もサポーター君も死んでない。この場に死体が一つも残されていないんだ。皆無事なんだ。死んでから後悔したって遅くはないさ」

今は搜索を優先しよう。そう言い放った女神を見据え、ミコトは強く頷いた。

「わかりました」

「そうだな」

頷き合う面々を見回し、ヘルメスはアスファイを見た。

「で、アスファイこれから何処を探す？」

「闇雲に探し回っても見つかるとは思えない。この辺りに魔石の痕跡が残っていない上、散らばった鱗も変な所で途切れていたんだぞ。どうしようもないぞ」

ヘルメスに続き、桜花が問いかければアスファイは顎に手を当てて考え込み、口を開いた。

「彼らは此処から上の階層への道を探そうとした。あの小部屋に置かれた地図と、小石。どうやってかはわかりませんが上の階層とつながる大部屋の位置を割り出した様子でした。多分ですが、この階層を十階層と誤認していた可能性がありますね」

「そうなる」と照らし合わせて上の階層を目指したって事かい？ だとしたら階段とは正反対の方向に向かった事になるが……」

十五階層の地図と十三階層の地図を照らし合わせて呟いたヘルメスの言葉にリユーが否定の言葉を紡いだ。

「それはない。彼らは先へと進んだのでしよう」

「どういう意味だい？」

ヘステイアの問いかけにリユーとアスファイが視線を交わし、アスファイが口を開いた。

「彼らは、地上を目指すという選択肢を捨て、あえて安全地帯である十八階層を目指したのでしよう」

「っ！」

「ダンジョンには無数の縦穴がある。もし縦穴を降りたのだとすれば、其処で途切れた鱗の痕跡の謎も説明が付きます。縦穴の位置はランダムで変わる。つまり今朝の時点ではそこには縦穴があり、彼らはその縦穴を使って下の階層に進んだ」

「下へ降りる？ まともな神経じゃない」

ダンジョンに潜る者なら誰しもが知る事だ。未知の階層に踏み出す恐怖を。その危険性を。

信じられないと言った様子の桜花が眉を顰める。

「私ならそうする」

リユーの言葉に桜花達が振り返る。彼女は真つすぐに途切れた鱗の痕跡を見つめながらつぶやいた。

「彼達なら——いや、一度冒険を乗り越えた彼なら前へ進むと思いません」

静かに振り返り、ヘステイアの目を見つめたリユーは、若干の呆れを伴う声を上げた。

「彼女も、前に進むでしょう。彼と違い彼女は前に進む、と言うよりは博打打ちの気が強いですが」

第七十九話

暗闇に包まれたダンジョンの中を進みゆく搜索隊。照明具型の魔石灯の明りがゆらゆらと揺れる。

神々を中心とした陣形を組み進む面々の中。ヘステイアの追及にのりくらりと回避しようとしていたヘルメスは観念してベルの祖父の話へステイアに伝えていた。

「頼まれてもいるけど、俺自身、ベル君には興味がある。もちろん、ミリアちゃんの方にもね」

「ミリア君の方にも？」

ヘルメスの言葉に眉を顰めながらも、『レコードホルダー世界最速兎』に続いて【剣姫】の最短記録をぶつちぎる記録を叩きだしたもう一人の眷属。ミリア・ノースリスを脳裏に浮かべる。

「うん、凄く気になってる。ミリアちゃんって何者？　ベル君の方はそれなりに自称育て親から聞いているけど、ミリアちゃんについては調べても調べても何も出てきやしない」

「調べたの、私ですけどね」

後ろを警戒していたアスフィの皮肉げな言葉にヘルメスがあははと笑えば、ヘステイアは難しい表情を浮かべて口を開いた。

「気が付いたらダンジョンの中にいた。それ以前は何処かの街で人を騙して稼いでたみたいだね」

「……詐欺師だったって事かい？」

「自分自身が誰なのかすらわからなくなってたんだよ」

人を騙す中で、自分自身を見失った人の子。ネームレスと言う状態に陥っていたと聞いたヘルメスが深い吐息を零した。

「あー、そりゃ経歴なんて出てきやしないか。とはいえ類似する容姿の子の情報もそこそこ集めてたはずなんだけどねえ」

「そうですね。類似する特徴。パルウムの中でも特別小柄な金髪碧眼、と言う特徴で一通り調べましたが……」

「わからなかったのかい？」

質問した側のヘルメスに対し、逆に質問し返すヘステイア。これで

はミリア・ノースリスの正体を突き止められないとヘルメスは肩を竦めた。

「ありやりや不思議な子だねえ。気が付いたらダンジョンの中だなんて、もしかしてモンスターだったり?」

「それはない。もしそうなら気付くだろう?」

「まあ確かに」

ではミリア・ノースリスとは何者なのか。考えるだけ無駄かとヘルメスは追及をやめて呟いた。

「直接会って確かめるしかないか」

より暗くなつた迷宮の通路の奥を見据えながらヴェルフ・クロツゾは前を歩く黒焦げの物体を運ぶキューイの背を追う。後ろに続くリルカ・アーデの小さな足音と、前を歩くキューイの足音。そしてそれぞれが放つ荒い吐息のみが広い通路に木霊している。

背負つた重みを意識してしまい。その重さがとある考えをヴェルフの脳裏に描かせる。

——魔剣さえ、あれば

忌み嫌い、決して打たぬと決めた。後悔も悔いも無いはずのその誓い。

そのはずなのに、先程から脳裏に木霊するのは『魔剣さえあれば』と言う囁き。木霊する足音と吐息の音が、まるで自身を責めている様にすら感じられる中、ヴェルフは軽く後ろを振り返つた。

「リリ、大丈夫か」

「ええ、大丈夫ですよ」

荒い息を吐きながらも背負つた人物を揺らさぬ様に歩くりルルカ。本来なら、大型バックパックを背負つていたはずのその背中には、焦げ付いた火精霊サラマンダー・ウールの護布を纏つたミリアの姿があった。

右手には未だに握りしめられた柄だけになった石斧。左手から滴る血がりルルカの腹の辺りをべっとり湿らせている。意識は無い、無いがその口元は微かに動き、言葉を伝えようとしていた。

『みぎ』『たてあな』、聞き取り辛いその言葉。けれどもリリが咄嗟に獣人に変化して聞き届けた言葉。

それがなければ十六階層で全滅していただろう。

大量のモンスター。正面の二十を超えるミノタウロスの群れ。後方の匂いを嗅ぎつけてやってきた恐ろしい量のモンスター。あの場においてヴェルフとリルルカはただの足手まといだった。

咆哮ハウルによって強制停止リストライトに陥って動けなくなった二人。けれども効果は十秒ほどで切れていた。切れていたにも拘わらず、動けなかった。

正面も、後方も、どちらも激しく戦っていた。其処に加わるべく大刀を抜いたヴェルフは大声で叫んだ。

『俺を置いていけ』

あのままだと二人が死ぬ。足手纏いの自覚があった。だから自身を置いて三人で進めと叫んだ。

ベルは叫び返してきた『諦めちやダメだ』と、次の瞬間には光の粒子を零した一撃にて正面左の通路を崩落させて振り返って言い切った。

『僕がなんとかする』

そう言い切るとベル・クラネルは後方、ミリアの援護に入った。ミリアの姿はとつくの昔に見えなくなっていて、魔法統の音声と自らを鼓舞する叫びのみがモンスターの群れの中から聞こえるのみ。

戦闘音のみがモンスターの群れから聞こえるさ中、ヴェルフは歯を食いしばって大刀を構えるのみ。自分があの中に突撃したとして生き残れるか。

間を置かずに答えは出る。

確実に、死ぬ。どれだけ抗おうと二人の様にはいかない。それがわかってしまい動けなかった。それでも、ベルとミリアの二人は足手まといの鍛冶師を守るためにモンスターの群れを止めんと戦い続けている。

ミリアの仕掛けた障壁が音を立てて罅割れるさ中、群れの中から飛び出してきたのは体の殆どが焼け焦げたヴァンの姿。かろうじて片

足の辺りの鱗が灰色であると判別できる程度の飛竜の姿。

そのまま障壁を攻撃していたモンスターを黒焦げになった尻尾で叩き潰して障壁の前に陣取ってモンスターを迎撃しはじめた。まもなくして目を覚ましたキューイが援護に入るも、何度もヘルハウンドの火炎を浴びては焼け焦げるを通り越して黒焦げになったヴァンが倒れ、口から炎を吐く程度の抵抗しか出来なくなる。

ヴェルフも魔法での援護を行うも、焼け石に水で全く意味も無い。そんな折にリリが青褪めて呟いた言葉。『ミリア様の戦闘音が聞こえませんか』と言う言葉。

ヴェルフはようやくモンスターの群れに突っ込んだ。あの数に突撃して生き残れるとは思えなかった。同時に、二人が生きて帰ってくるとも思えなかった。

戦える鍛冶師を自称していたにも拘わらず、サポーターと共に安全地帯に居た事を恥じた。そして脳裏に浮かぶ言葉を否定せんと突撃を慣行した。

モンスターの群れの中。ベルが俊敏に移動し、擦れ違いざまにモンスターを斬り刻む。そんなベルの様子を見つても目の前に立ち塞がった瀕死のミノタウロスに大刀を突き刺してとどめを刺し、倒れそうになつていたミリアを担ぎ上げた。左手に折れた剣、右手に柄だけになつた手斧。半ば意識が無いのか呟かれる言葉は聞き取れない彼女を担ぎ、群れの中を切り分けんと大刀を振るってリルルカが居る場所まで辿り着かんとした。

途中、ベルがモンスターの群れを切り崩してくれなければ、ヴェルフは死んでいただろう。そう確信できる程の量のモンスター。障壁の内側に転がり込んだ所でミリアの手から折れた剣が零れ落ちた。ミリアが頻りに呟く言葉、リリが聞き取ろうと獣人に変身して――右奥の通路の先に縦穴があると知った。

その後、倒れたヴァンをキューイが背負い。ミリアをヴェルフが担いだ状態で、戦い続けるベルに声をかけて逃げ出したのだ。

最後、ベルが縦穴を飛び降りた瞬間に入り口部分を吹き飛ばして崩落させる事で追っ手を振り切る事には成功するも、ベルとミリア、そ

してヴァンの二人と一匹が意識不明となったのだ。

十七階層にまで辿り着いたパーティは、既に戦闘を行える状態ではなくなっていた。

前方を歩くキューイが時折振り返ってはヴェルフ達が付いてきているか確認している。

十八階層へ続く階段は、もうすぐだがキューイが何か言いたげに鳴き声を上げるもヴェルフもリリも言葉がわからない為首を横に振るのみ。キューイもそれがわかるのか足取り重くもすぐに進み始める。

「ベル、もうすぐだからな……」

「ミリア様……」

意識のない二人。足手纏いとなった鍛冶師とサポーターを守るべく絶望的な数のモンスターに突撃をした冒険者。

先程から聞こえる己の囁きを頭を振って振り払う。

——魔剣さえあれば、あのモンスターの群れを薙ぎ払ってやれたのに。

「ふざけろ」

なんの為に魔剣を打たぬと決めたのか。脳裏を過る魔剣を頼る自分を殴り付け、足を進める。

二人がモンスターの群れに消えて行く様が、何度も脳裏にフラッシュバックしてヴェルフを責め立てる。

魔剣が一本でもあれば、あの無謀ともいえる突撃をさせずに済んだ。

それ処か十三階層での防衛線においても軽くモンスターを振り返り討ちに出来ただろう。

安易に魔剣に頼ってしまう。それが嫌で仕方がなかったのに、今この場に魔剣が無い事を悔やんでしまう。それが何よりも不愉快で、ヴェルフは何度も同じ言葉を呟く。

「ふざけろっ」

意地ばかり張って。足手纏いなんかになって、二人に庇われた。

どうにかする力があるのに振るわず。肝心な時にその力を発揮できない。

悔しさが込み上げてくる。だからこそ、口にしない。

——魔剣さえあれば。

「ふざけろっ！」

前を見据え、黒焦げのヴァンを背負ったキューイを見て、足を進める。あと少し、あと少しで十八階層。ベルとミリア、二人だけでいい。どうにかして十八階層にまで運び込まなくては——後方で、誰かが倒れた音がした。

ドシヤリと頭から地面に倒れた。瞬間、体中を襲う疼痛。幾つもの裂傷を負った腕から滴る血の感触に匂い。薄れていた意識が一気に覚醒し、今まさに誰かにのしかかる体勢で倒れているのに気が付いた。

「うう……うう、は？」

ぼやけた視界に映し出されたのは、今まさに此方を振り返った赤髪の長身の男。鍛冶師のヴェルフ。そしてそのヴェルフに背負われている白髪の少年。ベル・クラネル。

体中の疼痛が収まるより前に、今下敷きになっている人物がリリルカ・アーデだと気が付いた。

「リリ？」

「ミリア、目が覚めたのか？ リリ、大丈夫か」

青褪めた表情のヴェルフがふらふらと頼りない足取りで近づいてくるのを見つつも、身を起こそうとして右手に何かを握り込んでいるのに気が付いた。なんかの柄。

石製の柄。鹵獲した天然武装ネイチャーウェポンの石の手斧、その柄だけが右手に握りしめられていた。

自分の手のはずなのに、全く言う事をきかない手は握り締めたまま固まっている。左手でそれを引きはがそうとするも左手が冷たく動きが鈍鈍っていてうまく動かない。

左手の手甲、無数の傷。肩の当たりの大きな裂傷の所為で血の循環が上手くいっていないのだろう。簡易な包帯を巻いただけの応急処

置。その包帯も何処か色合いがおかしい、良く見ればリルルカの服の一部を带状にして包帯代わりに使っているらしい事がわかった。

それよりも、モンスターは？ あの数の群れはどうなった？ ベルは生きているのか？ キューイは？ 違う、まずはリリの上からどかなくては。

「リリ、大丈夫？」

体を横に転がしてリリの上から退いてリリに声をかけるが反応が無い。微かな呼吸が死んでいない事を伝えてくるも意識が無いのは確実だ。

ベルも意識はあるのか呼吸はしているみたいで、ヴェルフは青褪めてふらついており今すぐにも気絶しそうな有様。もう限界に近かったリルルカが振り絞り切つて気絶したのだろう。

それより、とりあえず此処が何処なのか知りたい。

「ヴェルフ、此処は何処ですか。モンスターは」

喉がカラカラに乾いているのか声がガラガラだ。それでも何とか意味は通じたのかヴェルフが答えを返してきた。

「十七階層だ、モンスターは追ってきてない」

「キューイとヴァンは」

「そこに居る」

ヴェルフが顎で示した先。黒焦げの塊を背負ったキューイがジーンと此方を見ていた。どうした？

「キューイキューイ」

……。あと少しで下の階層。そっか、もうひと踏ん張りか。

疼痛を堪えてリルルカの体の下に腕を回し、そのまま背負う形で持ち上げる。重いな……。いや、リリには本当に悪いんだが滅茶苦茶重たい。潰れそうな重みに呻き声が零れた。

「ミアア、リリスケは置いてって良いぞ」

ヴェルフの言葉。聞き間違いか？ 置いてって良い？ 何言ってるんだお前は、寝惚けてんのかよ。

「——リリがそう言った。もしミアアが目を覚ましてリリスケが気を失ったら。その時は自分は置いてってくれってな。これ以上、

足は引つ張りたくないんだと」

は？ いや、何を言ってるんだ。馬鹿じゃないのか？

「此処まで来て、見捨てる？ 馬鹿じゃないの。無理でしょそんなの」
阿呆か、馬鹿か、お前の頭にや鉄材でも詰まってるのかよ。此処まで死に物狂いで足掻いたんだぞ？ 見捨てるなんて阿呆な真似できるか。

「それと、俺が気を失ったら俺も捨ててつてくれ。ベルと二人で先に進め」

「冗談、ベルがそれを許すとても？」

うるせえ黙れ。黙って進もう。無視だ、後ろ向きな発言する馬鹿な鍛冶師を無視して足を進める。リリが重すぎる。少し痩せた方が良いんじゃない？ 胸とか胸とか、余計な脂肪つけてるから重いんだよ。俺みたいにコンパクトになったら良いと思うよ。

「なあミリア」

「うるさい、黙ってついてきてください」

やめろこれ以上余計な事言うな。本気で捨てていきたくなくなるだろ。キュイ、あとどれぐらいの距離だ？ モンスターは？ ヴァンは、生きてるのかそれ？ 黒焦げの塊じゃねえか。あ、足の裏の辺りはまだ灰色だわ。血も滴ってるし、俺も同じだけど。頭クラクラするしブラックアウトしそうになる。出血酷過ぎて貧血気味じゃん。

痛そうな裂傷も、痣の出来た足も、本来なら泣き叫びそうな痛みがありそうなもんだが。疼痛を感じる程度で済んでいるのは、冒険者だからか、それとも死にかけているからか。

「いいからベルを運んで。貴方も一緒に来るの、何の為にあの群れに突っ込んだと思ってるの」

息を呑むヴェルフ。ギリギリと歯を食いしばっているらしい音を聞きながらもヴェルフを追い越してキュイの前に立った。

「キュイ、十八階層に続く道は？」

「キュイキュイ、キュイ」

見つけてる、なるほど。後はこの道を直進？ 滅茶苦茶運が良いじゃないですか。真つすぐ進めばゴール一直線。迷う必要はないな。

モンスターも隠れているらしく、襲ってこないそうなの。

「このまま真つすぐ進めば十八階層だそうです。行きましよう」

「……おう」

さあ軽やかに駆け抜けよう。ゴールテープは目の前だ。

足がガクガクする？ 気のせいだろ。

視界が霞む？ ちよつと嬉し過ぎて涙が出てるだけだつて。

頭がクラクラする？ 喜びのあまり貧血になってるだけだ。

で？ キューイ、一つ聞きたいんだけど、なんでモンスターが隠れてるの？

「キューイ、キューイキューイ」

……… ああ、そう。ゴライアス、もう

嘆きの^待大壁^機前で仁王^中立ちなのね。

大部屋の入り口が見える。入り口の大きさは凡そ9Mか10M程。天井までの高さは確か20M程だっただろうか。今まで見てきた大部屋が小部屋に見えるレベルで規模が馬鹿でかい。ド級の大きさの大部屋、バカみみたいな表現だがまさにそう表現するしかない大部屋の入り口が先に見える。

かすかに見える空間を見据えつつも、横たえたりリルカのほっぺをムニムニと捏ねて気を紛らわす。若干不愉快そうに口元が歪むリルカのほっぺを突いたり摘まんだり。

壁に凭れ掛かって気絶しているヴェルフとベルを見て、溜息。

死んだわこれ。

途中、モンスターに一度襲撃された。襲撃、と言うか何かから逃げる最中に偶然出会ったと言った感じ。襲ってくると言った気配よりは何か怯えて逃げるさ中に障害物を見つけて邪魔だから殴つてどかしたとかそんな感じで奇襲を受けた。

ヴェルフが壁に激突。投げ出されたベルが吹き飛んで、キューイが受け止めて足の骨を折る大怪我。俺は視界に入らなかつたのかそのまま止めを刺さずに走り抜けていったミノタウロス。まるでトラッ

ク事故の現場に行くわしたかのような不可思議な場面であった。

おい、おいおいおい、冗談だろ？ 動けるの、俺しかないんだけど？

もう一度、大岩の影から遠くに見える最後の難関を見据える。

入り口の大きさが9Mから10M程。その大部屋の天井までの高さは20M程。大円形の入り口から最奥まで200M、横幅は100M程。壁も岩もごつごつした岩で形成されているにも拘わらず、左手側だけは人工的な物と誤認するほどに美しく磨き上げられた壁面になっていた、であろう場所。

今は大穴がぽっかりと空いており、つい先ほどモンスターを生みましたーとも言いたげである。

その産まれたモンスター。部屋中央で俯きがちの姿勢で立つ人型。縮尺を間違えた人型であった。

総身7Mに達する巨人。人の縮尺を間違えた様なモンスター。其処に居るだけで他のモンスター、ミノタウロスですら縮み上がって尻尾撒いて逃げ出す圧を振りまく化け物。

他のモンスターが子供に見えるレベルで、格が違う。

時折、思い出したかのように顔を上げて広間の中を見回し、俯くという動作を繰り返す巨人。

名前は確か『ゴライアス』だっただろうか？ 勝つとか負けるとか以前に、アレに見つかったら逃げられないであろう事は確実。

「どうしろってんですか」

「キューイ？」

足を引かずキューイと、背負われた黒焦げの塊。顔らしき部分に罅が入り炭化した肉片が零れ落ち、その下の黄土色の瞳が此方を見据えてきた。

《主、どうした？》

「どうしたもこうしたも、詰みです」

あの数のモンスターを突破した。偉業に等しい行為だろう。と言うかアレを偉業と言わず、何を偉業と言うのかと言うレベルだった気がするんだが。其の上で前に立ち塞がるあの巨人。無理無理、死ぬ死

ぬ。

「あの巨人をやり過ぎす方法、全く思い浮かばないんですけど……」
体中痛いし、血が渴き始めてキモチワルイし、それ以上に出るはずもない脂汗がだらだら垂れる。涙が出てこないのは体中の水分が足りないからか。泣きたい気分だが泣けない。

どうする？ ヴェルフは負傷し気絶。リリは疲労困憊からの意識不明。ベルはかすり傷が多いが意識が無い。キューイは片足をひしゃげられて這いずって進む事しか出来ない。ヴァンは立ち上げられるかも怪しい。

俺は視界も霞むし耳鳴りが響いて仕方ない。足はガックガクで笑えるぐらい千鳥足。左腕が痺れて動かず、全身を襲う疼痛を堪えている。其の上でマインドはちつとも回復しちやいない。

回復アイテムは全部使い切った。治療用の道具も無いので服を包帯代わりに裂いて使うしかないが、左手が動かずに治療もできない。

このまま此処で待つ？ モンスターがうごめくこの場で？ 他の冒険者が通るのを待つ？ 在り得んな。冒険者の前にモンスターが来るだろう。けれども、動けない。

俺が今運べるのは一人が限界。キューイに運ばせるのも不可能。どのみち鈍足過ぎて追いつかれて捻り殺されてお終いだろう。

この場にキューイ達を残してベル、ヴェルフ、リリを守らせる。んで俺一人でどうにかゴライアスを突破して下の階層で助けを求め。無理だな、絶対死ぬ。あの巨人をやり過ぎす方法が無い。

もしクーシー：スナイパーであつたらステルス迷彩で通り抜けられたが——此処に来る以前に全滅してただろうなあ。クーシー：ファクトリーだったからこそここまでこれた訳で。

たとえスナイパーで辿り着けても、マインド切れで何もできんだろう。

詰み。どうしようもなく詰みだ。

壁に凭れ掛かって天井を見上げる。薄暗く、ぼやけた視界で天井は見えない。此処まで良くやってきたと思う。むしろどつかで一人二人欠けてもおおかしくない状況なのに、周りを見回せば死にかけとは

いえ全員、一人も欠けずにこの場に居る。

気絶しているヴェルフ。

疲労で意識不明のリルカ。

大群を退けて意識の無いベル。

片足と片翼がへしやげ折れたキューイ。

全身黒こげで死にかけのヴァン。

マインド切れて負傷塗れの俺。

4人と2匹。此処まで良く辿り着いたよ。マジでき、死んでなきやおかしい場面がいくつもあった。

十三階層でタケミカツチファミリアと共闘した際に一人も負傷者が出なかった事。

十三階層から縦二階層分を転落した際に、無防備に崩落に巻き込まれた俺が死ななかった事。

十六階層で数えきれないモンスターに前後を挟まれた際に誰一人欠けなかった事。

三回も、奇跡的な幸運に恵まれた。四回目は、無いだろうなあ。

頭の中で作戦を立てては破り捨てる。どうあがいても人手が足りない。せめてヴェルフが気絶しなかったら。手はあったのになあ。

——誰か目を覚ましてくれれば。

そう、都合良くいかない。そう思いつつも寝かせてあるベルに近づくと。あの『アルゴノウト』って技は、消費が大きいらしい。威力を跳ね上げられる代わりに、消費が大きい。納得の理由だ。

だから、目覚めるのは難しいだろう。あの大技を、十六階層で三度も使ったのだから。此処で目を覚ましてくれる、なんて都合の良い事は起きない。はずなんだけどなあ……。

「……ミリア？」

「おはよ、ベル。目覚めの気分はどう？」

「背中、痛いかも」

ベル、きみは本当にさあ、なんてタイミングで目覚めるんだよ。ほんと、凄いなあ。

「うっ……此処は、何処？ ヴェルフは？ リリは？」

「二人はそこで寝てる。此処は十七階層。嘆きの大壁のある部屋の前よ」

「そっか、うん。ヴェルフは僕が運ぶよ」

目覚めて、頭を振って。すぐにヴェルフを担ごうとする。その目に映る色に『諦め』は微塵も無い。あと少しだという希望の光が宿っている。

「ベル、聞いて。ゴライアスがもう沸いてる」

「――」

その希望の光が、薄れて薄れて――消えない。

「そっか、じゃあなんとか頑張って突破しないといけないね」

ああ、そう言うのは分かった。諦めたりなんてしないよな。もし、もし此処で諦めてしまうような性格なら、もっと前に死んでたんだろうし。

目が覚めた。ベルの目が覚めた、ならばやる事は一つか。

「リリは私が運ぶ。それと、キューイとヴァン、最期のお願いががあるんだけど」

「キューイ？」《なんだ？》

何って？ そりゃ一つしかないだろ。 ちよつと、死んできてくれない？

大広間に続く一本道。真つすぐに走るベルの後ろを走りながら、キューイとヴァンに手を翳す。

中央に立つ巨人が侵入者に気付いた様で、顔を上げ――咆哮した。

「ベル、走って」

「わかってる」

「キューイ、ヴァン、先に謝るわ。ごめん」

ベルに並走する様に、壊れた足をもともせず片足と片翼で上手くバランスをとって走るキューイ。そしてその背に爪を立てて引っ付いているヴァン。手を翳し、魔法を詠唱する。

魔力の消費は殆どない。けれども俺の中に残っていた搾りかす

らも抜け落ちる様な感覚に意識が落ちそうになりガクンと視界がズレるも、なんとか踏みとどまって一步を踏み出す。

『解枷き放壊て』

詠唱と共にキューイの体が発光し、膨れ上がる。

負傷の状態こそそのままに、欠けた片翼を大きく広げるその姿。背中に引つかかる黒焦げの塊を乗せたまま、ベルと俺を追い抜いて一気に加速する。体長5M程の巨大な飛竜。

本来のキューイの姿は、美しいはずだった。広げた両翼の幅は10Mに届かん巨翼のはずであるのに、今は片翼が失われている。鱗の所々が剥げ、焦げ臭い匂いと黒ずんだ血の色を滴らせる顎は、牙が幾つも欠けており、顔に走る傷が美しかったはずのその飛竜を凄惨に染め上げている。

もう一度、その背中に引つかかっている黒焦げの塊、ヴァンに魔法をかける。

搾りかすすら失われ、もう絞るなんて動作も出来ない程だが、それでも何か出ないかと振り絞る。

『解枷き——放壊て』っ!!』

今度は先程の比ではない。抜け落ちてはいけないモノまでごっそりと抜け落ちた様な錯覚に陥る。一瞬で足の力が抜けて倒れそうになり、ベルに受け止められた。

『ミリアっ!』

『——ッッ!! 大丈夫っ!』

ヴェルフを担ぎ、荒い息を吐きながらも片腕で受け止められ、転倒は避けた。

足を止めた俺とベルの前。黒焦げの塊が巨大な黒焦げの塊に変化していくソレを、キューイが大きく放り投げた。

体長4Mの小竜。だったモノ、死ぬ寸前の消える間際だったその塊がゴライアスに直撃し、その姿勢を微塵も揺らがせる事無く地面に落ちた。

ドスンと言う大きな音が響く中、巨大な顎から繰り出されるキューイの焰がゴライアスに直撃する。

凄まじい熱波を伴うキューイのブレスにゴライアスが大きくのけぞった。

そんな怪獣対戦染みた光景を横目に俺とベルが走る。走る、走れ走れっ！

遅い。ベルも、俺も、まるで競歩の様な速度でちんたらと走っている。

その横で繰り広げられる光景を目に入れない様にしながらも、走る。

キューイの本気の一撃を受けたゴライアスは、腕を大きく振るつた。轟音と共に振るわれた腕によってキューイの焰が消し飛ばされる。怒りの表情に染まる灰色の巨人。

その巨人が負った傷は、せいぜいが肌が火照る程度の軽度の火傷だったのだろう。ダメージを与えられたとはとても言い難い、が注意を引く事には成功している。

余りにも遅い足取り。俺もベルも限界を振り切った状態で走ろうとしているからか、遅すぎる。

キューイとヴァンの命を賭した時間稼ぎによって稼がれる時間が凄まじい勢いで消費されていくにもかかわらず、距離はまだ半分を切っていない。

二度目の咆哮。広間全体が大きく振動するほどの大きさの咆哮。そしてゴライアスが動いた。たった一步、一分でキューイの目の前に跳躍し——キューイを踏み潰さんとした。

咄嗟に残った右翼を振るって緊急回避を試みるキューイ。轟音と共に地面が揺れ、ベルと俺がよろめく。

回避行動を終えたキューイが即座に焰を吐きかけ、その剛腕によってゴムボールの様にキューイの体が吹き飛んだ。

俺とベルの頭の上を飛び越え、そのまま壁に叩きつけられたキューイ。残っていた片翼もぐちゃぐちゃにへしやげて動けなくなった姿のまま、キューイが甲高く吼える。

「早く行け
キューイツ」

吼えると同時に、二度目の焰がキューイの顎から放たれ、ゴライア

スの肩にぶち当たり炎をまき散らす。

鬱陶しげに腕が振るわれ、炎が散らされて——キユーイとゴライアスの間に居た俺とベルをその瞳が捕えた。

残り100M。二、三步で追いつかれる距離で感付かれた。死んだ、そんな言葉が脳裏を過るさ中。

死にかけの——もう死んでいなければおかしい傷を負ったヴァンが焦げ付いた顎から業火の様な炎を吹きだしてゴライアスに浴びせかける。

ベルと共に未だに奮闘するキユーイとヴァンに背を向けた。

——残り80M。

苛立ち咆哮と共にゴライアスが足元の床を抉り取り、投擲した。投擲された巨大な岩盤がまるで玩具みたいに空を飛ぶ。

黒焦げの塊に岩盤が直撃し、その体をへしやげさせ中身をまき散らして即死させる。死の間際までただひたすらに炎を吐いて注意を逸らしていたヴァンが絶命した。

繋がりの途切れる感覚。召喚していた個体が消え去り、再度召喚するその時まで身を癒す為に消えうせていく。

——残り60M

残ったキユーイが咆哮し、焰を浴びせかける。ゴライアスが咆哮し、キユーイに歩み寄っていく。

——残り50M

悲鳴が響き渡る。ぐりやりともばきりとも、どちらともとれる音が響き渡り、キユーイが絶叫を上げた。

思わず肩越しに振り返った其処にある光景に、背筋が凍った。キユーイが喰われている

——残り40M

生きたまま、腹に齧りつかれ腸はらわたを引き摺りだされている。早く逃げると叫び、捕食されるキユーイ。

——残り30M

悲鳴が次第に途絶えていく。

——残り20M

悲鳴が途絶える間際。顎から最期の足掻きに近い焰が溢れだし、ゴライアスの顔面を焼き払った。

——残り10M

喰い終わったキューイの残骸を投げ捨て、ゴライアスが此方を振り返った。彼我の距離は凡そ80M。

——残り8M

一步で5M以上の距離を詰めてくる。歩幅の圧倒的違い、後ろに迫ってくる巨大な威圧感。

——残り6M

既に彼我の距離が半分を切った。速過ぎる。違う、俺達が遅すぎるっ！

——残り4M

ゴライアスの振るう剛腕の風圧を背中に感じた。すぐ真後ろを振り抜かれた剛腕によつてよろめく。止まる訳にはいかない。

——残り2M

真後ろに居る。今まさに拳を握り締める音すら聞こえる。心臓が爆発しそうな程に跳ねる中、ベルが叫ぶ。走れ走れと叫び声が響く。

——残り1M

迫る風圧。すぐ真後ろに拳、衝撃波すら伴う一撃。直撃すれば全身バラバラになって即死するのは確実の一撃。

背筋が泡立つ。鳥肌が立ち、冷や汗が溢れだす。

此処で死ぬ？ 此処まで来て？ キューイとヴァンに時間^死を稼^ねげと命じておきながら？

冗談。笑える冗談だ。在り得ない。

力強く一步を踏み込む。足をばねの様にして跳躍した。足裏に感じた衝撃、足のへしやげ折れる感触。前に押し出される。

前を走るベル、その背に背負われたヴェルフめがけて頭から突っ込む。首を折らぬ様に首を竦めてヴェルフの背中に突っ込んだ。

突如として与えられた衝撃にベルが大きくよろめきながらも一步前に踏み込み——間一髪の所で穴に飛び込んだ。

瞬間、響く破碎音。冗談の様な衝撃波によつて吹き飛ばされる。

背負っていた筈のリリも、突撃してぶつかっただはずのヴェルフの背
中も離れていき、爆風に体が吹き飛んだ。

まるでボールの様に壁や床に激突を繰り返す体。咄嗟に頭を庇う
事しか出来ない。

過去に、こんな風に吹き飛んだ記憶は無い。けれども近しい記憶が
あった。

——崖から転げ落ちる記憶

最後に脳裏にぱっと浮かんだのは満点の星空と真ん丸な満月だっ
た。

第八十話

気怠さと鈍痛に意識がうつすらと覚醒していく。意識を覚醒させる要因、鈍い水底から耳を澄ましているかのようなぼやけた怒声が響いていた。ヴェルフの声、だと思う。

うつすらと、鉛で出来ているかのような重たい瞼を必死に持ち上げてみれば、ぼやけた視界に映るのは布地の天井。罅割れた石材の天井でもなく、薄暗いダンジョンの洞窟の天井でもない。人工的な明りに照らされた木組みの骨組みに厚い布地が張られたテントの様な天井。口から漏れ出たのは呻き声。声にならない呻きを上げて手を上げようとしますが、体にかかる薄い掛布団を押しよける事すらできない程に腕が重い。首を巡らそうにも少し動かしただけで激しい頭痛が襲い掛かってきた。

「ミリア?」

「ミリア様、大丈夫ですか」

ベルの声と、リリの声。二人は無事なのか。此処は何処だろうか。

「()は……?」

「ミリア君っ!」

声だけではなく誰かが覆いかぶさる様に視界に現れた。心配するような色を宿した蒼い瞳、艶やかな黒いツインテールに髪飾り。ヘスティア様が目の前にいた。

……此処は地上? にしてはテントの中っていうのはおかしいはずだ。ダンジョンの中で違くない? いや、でもそれならヘスティア様が此処に居るのはおかしい訳で、でも地上ならわざわざテントで治療する必要はない様な気もする。此処は何処だ?

「ヘスティア様?」

「目が覚めたんだね。よかった」

安堵した様な吐息を零したヘスティア様の横。ベルやヴェルフ、リリが此方を覗き込んでいるのが確認できた。皆、ちゃんと生きているみたいだ。

……キューイとヴァンは、確実に居ないが。呼び出そうと思えば呼

び出せるとはいえなあ。

「うっ、此処は？　なんでヘステイア様が？」

身を起こそうにも起こせない。体が鉛とすり替えられたのではな
いかと言う程に重く、腕を持ち上げる事すら出来ずにヘステイア様を
見上げたまま質問すれば、答えが一つ一つ帰ってきた。

ベル曰く、此処は十八階層の安全階層^{セーフティポイント}。ロキファミアの野営地

であり、ロキファミアの厚意によって天幕の一つを借りている事。
治療等も全てロキファミアができうる限りは行ってくれた事、昼過
ぎにはベルが目覚め、日暮れ頃にはリリとヴェルフが、最後に日が落
ちてようやく俺が目覚めたとの事。

んでヘステイア様がなんで此処に居るのかと言うと、冒険者依頼^{クエスト}を
発注して一緒に同行してきたらしい。一般的な恩恵を持たない
ヒューマン並みの身体能力しか持ち合わせていない神がああ危険な
ダンジョンを突破出来た事に驚いたが、どうやら実力のある冒険者が
同行してくれたらしい。

あのリユースさんも同行していたっぽいんだが、此処にはいないっぽ
い？　後はヘルメスファミリアの団長と主神ヘルメスも同行してき
たが、ロキファミアと交渉に行っているらしく姿は見えない。

「なるほど、状況はわかりました」

つまりキューイとヴァンを呼び出すのは明日の朝以降になる訳か。

身を起こせないままに首だけを巡らせれば、困ったような表情をし
たミコトと、腕組をしてヴェルフと睨み合う桜花の姿、そしておろ
ろとしている千草と呼ばれていた少女も見えた。

タケミカツファミリアも居る？　って事は無事に地上まで帰れ
たのか？　にしては人数が足りないが……。

「其方のタケミカツファミリアの方は、人数が減った様に見えます
が……」

「他の者は足手まといになりかねないので待機しております。皆無事
に地上に帰還できました。本当にありがとうございます」

非常に整った美しい土下座を披露するミコトはわかる。桜花と
ヴェルフの睨み合いの原因は？　なんで睨み合ってるの？　意味わ

かんないんだけど。

身を起こそうと何度目かの挑戦をすると、リリとヘスティア様が身を起こすのを手伝ってくれた。身を起こすとサーッと頭の血が落ちていく様な感覚と共に一瞬視界が暗くなる。貧血の症状だ、多分回復しきってない。

「ミリア君、大丈夫かい？ まだ寝ていた方が……」

「そうですね。ミリア様が一番重傷だったんですから……」

「これぐらいは平気ですよ。ヴェルフはどうしたんです？ 怒鳴っていたようですが？」

睨み合いを続ける桜花とヴェルフ。代わりに説明してくれたのはリリだった。

リリ曰く、今回のタケミカツミアミリアを助けた一件について感謝の言葉を述べたタケミカツミアミリアの面々であったが、最後に桜花が余計な一言を言ったらしくヴェルフが怒った。

桜花の言った事。『逆の立場なら、お前たちを見捨てて俺は逃げる判断をした』だそうだ。

見捨てずにあの場でできうる最上級の選択を行い。なおかつ皆……一応、皆生存したと言える最高の結果を残した今回の一件。逆の立場なら見捨てていた等と言われてヴェルフが不機嫌になり噛みついたのだが、桜花はそれに対して『俺はその選択をしたとして後悔も反省もしない』とまで言い切ったらしい？

其の上で『責めたければ責めろ』等と腕組をしてヴェルフと睨み合いを始めた、と。

ううん？ 空気読めないって訳でもなさそうな気はするんだが。はてさて……。

「ヴェルフ、とりあえず此処は抑えて……」

「この大男はふざけた事抜かしてるんだぞ。ベルは其れで良いのかよ」

んー。ベル、そうベルねえ。ベルに対して言ったらしい言葉。

なんとなく察しは付いた。違ったらアレだけど、桜花の言いたい事はなんとなくわかる。

パーティーのリーダーとして、正しい選択とは何かって話だと思っ
んだよ。

あの時、ベルは迷わず『助ける』を選んだ訳だが、それを選ぶリス
クを考慮していなかった。

桜花が言いたいののは仲間を危険に晒す真似を考え無しに行う愚行
についてだろう。

まあ、十五階層に落ちた時点でようやく気付いた感じなのでアレだ
が……。其処でベルはリスクを考慮した上で『進む』と選ぶ事が出来
た訳で、要するにもう必要ないとまではいれないが少し遅い忠告であ
ろう。

「桜花さん、言いたい事はなんとなくわかりました。其の上で、少し遅
かったです」

「おい、どう言う事だよミリア」

ヴェルフは直情的な所あるからなあ。迂遠な言い回しはわからん
だろう。

「桜花さんが言いたい事はつまりベルに対して仲間を危険に晒すリス
クを考慮したのかって事ですよ」

リリとヴェルフが何かに気付いて桜花の顔をまじまじと見つめ、ベ
ルだけが少し俯いてから顔を上げた。

「ありがとうございます桜花さん。ですが、僕はもう大丈夫です」
「そうか」

静かに腕組をしたまま目を閉じた桜花に対し、ヴェルフはまだ不満
なのか睨み続けている。

態度とかが悪いと感じるのは仕方ないとはいえ、仲間を危険に晒す
真似に対しての苦言みたいなもんだしちゃんと受け止めてあげるの
が良いんでない？

まあ、確かに言うべきタイミングではないとは思うが。

若干空気が悪い中、天幕の入り口をばつと勢いよく開けてひらりと
飛び込んできた影が一つ。いや二つ？ 一人は優男風の旅装束の男、
もう一人は青い髪に眼鏡をかけて……。なんか死んだ目をした女性。

話の中に登場した、優男の神ヘルメスと【万能者】ベルセウスアスファイ・アル・

アンドロメダって人物だろうか？ いや、アンドロメダさん死んだ目してるけど大丈夫かあれ？

「やあ戻ったよ。っと、どうしたんだいこの空気？ 重いなあ」

大げさな驚き具合でテント内の皆を見回す神ヘルメス。気持ち悪いなこの神、苦手なタイプだ。演劇に登場するような大げさな身振り手振りは腹の内を探られない様にする為のフェイク臭くて嫌いだ。

見回しているヘルメスの視線が、止まった。ちょうど俺と視線が交じり合う形で……うわ、なんか目つけられてる臭い。一瞬だけ探る様な目をした後、ヘルメスは大げさに両手を大きく広げて笑みを浮かべた。

「眠り姫もお目覚めときた。おめでたいはずなのにこの空気はどうしたんだ？ 何か悪い事でもあったのかい？ ヘステイア？」

神ヘルメスの質問にヘステイア様が簡単に状況を説明すれば、神ヘルメスは明るく一笑した。

「堅苦しく考える必要はないさ。ベル君達はミコトちゃんたちに貸しが出来た。いざという時に荷馬車の様に働いてもらう。それでいいじゃないか」

ヘラヘラと笑う姿に毒牙を抜かれたのかヴェルフが眉を顰めつつも睨むのをやめ、呟く。

「理解はしてやる。けど納得はしねえ」

「それでいい」

ヴェルフの呟きに対して律義に返答を返した桜花。それからわざわざこちらに向き直って桜花は、と言うかタケミカツチファミリアの面々が深々と頭を下げてきた。

「十三階層で助けてくれた事、非常に感謝している」

「どういたしまして。此方こそヘステイア様を守って十八階層まで送って頂いてありがとうございます」

困った様に桜花達が『俺達は何もしていない』と言っているが、リユースさんと……実力者っぽいけど何処となく疲労していて頼りないアンドロメダさんの二人だけよりは確かな実力のある桜花達が居てくれたのは安心できる。

と言うかアンドロメダさんはなんであんな死んだ目してるんだよ、
凄い気になるんだけど……。

「それじゃあ、今後についての話し合いをしようか」

半場強引に場を治めた神ヘルメスの一言を聞いたアンドロメダさ
んの目に光が宿り、疲れた表情のまま口を開いた。

「まず地上への帰還ですが。ロキファミアリアに階層主を倒してもらっ
た後で、我々はこの十八階層を出しましょう。回避できるのであれば、
危険な橋を渡る必要はありません」

もつともである。もう二度とあのゴライアスの顔は見たくない。
できうるならばあの顔を吹き飛ばしたいが出来ないだろうなあ。

「ロキファミアリアが移動を再開するのは早くとも二日後だそうです」
「つまり一日は暇があるって事さ。せっかくだし明日一杯は十八階層
の観光でもしようじゃないか」

わくわくと言う擬音が聞こえてきそうな程の笑顔を見せる神ヘル
メス。ただ、時折探る視線を向けてくるのが少し気になる。

まあ、その観光つて意見には反対はしないが。そもその話、今す
ぐにでも寝たいぐらいにだるいし。頭痛も酷い。眩暈もするし……
増血剤欲しい。

とりあえず寝よう。うん、きついし辛いし寝たい。

真つ先に就寝した俺であったが。目覚めたのはまたしても一番最
後であった。

昨日、十八階層にあるというリヴィラの街つて所に行くはずだった
のだが、俺がいつまで経っても目覚めない為に先に行くということ
話がまとまったらしい。神ヘルメス曰く『お土産を期待してくれ』
だそうだ。

先に行くのを渋った者を神ヘルメスが全員言い包めたらしい……。
まあ、無事なら良いんだけど。

んでその間にロキファミアリアが様子を見てくれるという事でレ
フィーヤが来たつぽいのだが。

「ミリアさんが目を覚ましたら団長に伝える様に言われてますので」との事。昨日目を覚ましたのは日の落ちた後であったし、夜遅いという事で声掛けしなかったが今朝目を覚ましたので今から団長達の居る天幕へと案内されるらしい。

血塗れだったローブや鎖帷子、革ブーツなんかは全部綺麗にしてくれた様子なのだが魔女帽子を何処かで落つことしたのかわなくなっていたのと、ヘステイア様が銃剣型の杖を見つけてくれたらしく武装はそれ一つ。

背中に槍の様にも見える不思議な形の武装を背負っているからかジロジロとロキファミアの団員に目をつけられながらも足を運ぶ事となった訳で……武装取り上げはしないっぽい？

案内されたのは周囲の天幕より一際大きな幕屋。

ロキファミアのエンブレム入りの旗の立つその天幕の中にはロキファミアの超有名人三名が居た。

「気分はどうだい？」

入ってすぐ真正面に置かれた木箱の上に腰かけている柔らかな黄金色の頭髮、碧眼。苦笑する様に緩まる瞳の前。深々と頭を下げた礼を言っておく。

昨日の時点では余り詳しく聞けなかったが、どうやら十八階層の入り口当たりに転がり出てきた所をアイズさんが見つけてくれたらしい。ベルの幸運のおかげではないだろうか？

そしてその正面の木箱に腰かけるフィン・ディムナの左右。左手方向には優し気に口元を緩めた麗人、リヴェリア・リヨス・アールヴの姿。その反対には筋骨隆々としたまさに戦士と言った風体の男性、ガレス・ランドロックと言う人物の姿もある。

フィン・ディムナとリヴェリア・リヨス・アールヴの二名は顔を合わせた事があるが、ガレス・ランドロックとは初対面である。

普通に、カッコいい人だな。冒険者と言うよりは戦士って感じがする。タワ―シールドを持ってモンスターの突進を受け止めるのも、大斧を両手に持ってモンスターを薙ぎ払う姿もどちらも似合う様ないぶし銀の様な人物だ。

「ほう、この者がお主らの話しておった例の冒険者か」

「ああ、彼女がミリア・ノースリスだ」

値踏みする様な視線が降り注ぐ中、助けられたという事で粗相のない様に平伏するべきだろうか？

「そう畏まる必要はないから楽にしてほしい」

フィンがそういうのなら良いのだろう。多分、顔を上げてみると興味深そうに此方を見下ろすガレス・ランドロックと顎に手を当てて此方を見据えるリヴェリア・リヨス・アールヴの姿。

「二応、ベル・クラネルからも状況は聞いているけれど、よければ君からも聞かせて欲しい」

説明、と言ってもなあ。

できうる限りで説明はしたが、おおむねベルの説明と変わらない訳ですんなりと話はすんだ。

それよりもフィンが驚いていたのは俺がレベル2になっていた事。後インファントドラゴンをタイムした事。

「レベル2、それは凄いな」

「まあ、ガネーシャファミリアの補助があつてこそでしたし……」

なかつたら倒した後に衰弱死してただろう。ダンジョン内である怪我を負っていたら間違いなく死んでただろうし。

「いや、謙遜する必要はない。神の恩恵が認める程の偉業なのは違くないんだから」

「そうじゃぞ。その小さな体躯でよくやった」

うんうんと頷いて肯定する横で、リヴェリアさんだけが難しい表情で眉根を寄せている。どうかしたのかとちらりと窺うと彼女はこちらを鋭く見据えて口を開いた。

「ノースリス、お前は……死にたがりか何かなのか？」

「リヴェリア、どうした」

リヴェリアさんの言葉にランドロックさんが反応するが、リヴェリアはちらりと其方に視線を向けたのみですぐに此方を見つめてくる。

「お前のやった魔力の過剰充填、間違いなく強力な一撃は放てるだろうが……後が無い。考え無しの一撃になるだろう」

その通りにございます。思わず平伏しそうになった。

事実、あの一撃を放った後、俺は死にかけてた訳で……治療間に合わなかったら普通に死んでた傷だったんだぜ？ 笑えないだろ……。

「その通りです。あの時は、少し焦りもあったので……」

ベルに置いて行かれるかもしれない。そんな焦りが無かったと言えは嘘になる。焦燥に駆られての愚行だった事に間違いはない。

「自分で反省しているならば言う事はない」

「リヴェリア、その過剰充填っていうのは？」

フィンの質問を受けたリヴェリアさんが軽く説明をし始めた。

「簡単に言うと魔法の許容量を超えた魔力を込める事だ」

「イグニスファウトウスするだろうに」

ランドロックさんの言う事ももつともだ。イグニスファウトウス待った無しの超危険な代物である。

「ああ、普通ならな。ノースリスの場合、詠唱派生魔法の中でも特殊なタイプであるからこそ可能な技法だ」

派生詠唱魔法。

ロキファミアに居る魔法使いの中にも覚えている者が数名いるのだが、どれも扱いが難しく俺の様にはいかないらしい魔法。

第一詠唱、第二詠唱、第三詠唱からなる三文節、または四文節以上にもなる魔法。

特徴は『変化後も本質自体は変化しない』と言うモノ。

第一詠唱が『基礎』の詠唱。

俺の場合は『ピストル・マジック』『ショットガン・マジック』『ライフル・マジック』の三種類。

それぞれ単発低威力・低燃費のピストル、散弾近距離高威力・中消費のショットガン、単発高威力・高消費・長射程のライフルの三タイプに分岐する。

第二詠唱が『装填』または『変質』の詠唱。

俺の場合は『リロード』、装填そのままである。

他の魔法使い、ロキファミア所属の者の場合は『不変の魔矢』『燃え滾れ火矢』『凍て付け氷矢』『迸れ雷矢』で無属性矢、火属性矢、氷

属性矢、雷属性矢の四種類に変化するらしい。

第三詠唱が『発動』の詠唱。

俺の場合は『ファイア』、他の場合も同様で『放て』であったり『穿て』であったりと発動詠唱は非常に短く、瞬時に連発できる特性がある。

んで第四詠唱、これは『変化』だそうだ。

俺の場合はピストルを両手に持ち二丁同時に使える『デュアル』、射程の短縮のデメリットと攻撃範囲の増大の効果を持つ『ソードオフ』、バレットタイム染みた効果とズーム機能を持つ『スナイプ』の三つ。まあここらはどうでもいい。

問題はこれらのうちの二つ目。『装填』または『変質』である。

詠唱派生魔法は大雑把に何種類かに種別されるらしい？

一つ目に『直接消費』か『間接消費』か。

二つ目が『詠唱増大』か『消費増大』か。

一つ目の方は簡単。俺で言う『マガジン』をその場で作成・装填するか、あらかじめ予備を作っておいて装填するかの違い。

その場で作る場合は第二詠唱が長くなるらしいが、その分威力が上がる。

あらかじめ予備ストックしている場合は第二詠唱が短くなるが、その分威力が低くなる。

俺の魔法は後者の『間接消費』に分類される。あらかじめ『弾倉』マガジンを作って保持しておくからだ。

他の者の場合は『矢束』や『魔力石』オーブと言った術者独自の表現を伴う『魔力の塊』を自身の魔力とは別に保持している状態。

んで次に二つ目の方。此方はちょっと難しいというかわかりづらい。

俺の魔法は後者『消費増大』の方に分類される。

『ピストル・マジック』と『ライフル・マジック』を比べればわかるだろう。詠唱時間自体に変化はないが弾薬消費量と効果が全く違う。

『ピストル・マジック』が1発撃つのに消費1、『ライフル・マジック』が1発撃つのに消費10。威力は圧倒的に後者が高い。

んで『詠唱増大』っていうのは……例えの魔法を一つだそう。

『間接消費』の『詠唱増大』と言う種類の魔法と言う例えを出す。ため込むのは『矢束』と言う形の魔力塊。

第一詠唱が射程の短い『ショートボウ』と射程の長い『ロングボウ』の二種類としよう。

第一詠唱で『ショートボウ』を選んだ場合、発動詠唱が『放て』の一言でよし。

第一詠唱で『ロングボウ』を選んだ場合『引け、引け、引け、放て』の四言必要、みたいな感じ？

その代わりに消費する矢の数に変化はない。

『詠唱増大』は効果を向上させるために詠唱分が長くなり、『消費増大』は効果を向上させるために消費が大きくなる。

俺の魔法は『間接消費』型の『消費増大』型となる訳だ。面倒臭え。んで重要なのが『間接消費』型である事。

『間接消費』型は魔力の塊を本来持ち得る魔力とは別に保持している。

本来なら『装填』した後さらに『魔力の塊の作成』なんて高度な真似はできない。故に『直接消費』型では絶対に不可能ではあるのだが。

『間接消費』型は一言で装填できてしまえる事から、魔力の過剰充填が非常にやりやすい。

ただし、失敗はイコールで死に繋がる。

何せ魔力の塊を制御下に置ききれない状態で使用しようとしている訳だから、当然暴発が起きる。勝手に火柱がたったり、風の刃が飛び交ったり、凍て付く風が吹き荒れたり。術者本人が死にかねない危険な技法である。

つまり出来なくはないけど普通なら絶対にやらないよねって危ない技法らしい？

「むしろよく制御しきったな」

感心したように此方を窺うハイエルフ様。どうこたえるべきか……。

例えると自転車にジェットエンジン積んでかつ飛ばす様な行為を成功させたみたいな感じか？

自転車如きの制御能力でジェットエンジンの速度を制御できるはずもなく、本来ならば吹き飛んでいたのが妥当な所を半ば力業で制御しきって魔法を発動させたって事になるらしい。

……………いやね、分かってたんだよ？ なんとなく超危ない技なんだろうなって？

説明受ける内に青褪めたよ。彼の最高峰の魔術師ですら『制御不能に陥って魔力暴発して死ぬ』と言い切る技なんてさ。

詳しい解説を聞いて確信したね。超危ない処か普通じゃない狂人ですらやらないヤベエ技だったんだって…………。

「本当に良く死ななかつたな…………」

「あはは…………気合と根性って奴ですよ。ええ…………」

もう二度とあの技使うのやめよう。

第八十一話

ロキファミアリアの首脳陣との面会を終えた感想。

感心されたのは良いのだがなあ。面倒事に巻き込まれそうで怖い。と言うかフィンの俺を見る目が、ね？　ちよつと本気^{ガチ}つぽかったのが少し気になる。

神ヘルメスにフィン・デイムナ、二人も警戒しないといけないとかちよつと休ませてくれよう。

俺の為に用意された朝食をロキファミアリアが用意した食事に使つたらしいテーブルの一角で食べながら溜息を零していれば、レフィーヤが近づいてきた。わざわざ俺の分をとっておいてくれたのは彼女らしい。食事を渡してくれた猫人の女の人が言つてた。

……遠巻きで見てるエルフの人たちはなんなんだろうね。

「ごんにちはミアリアさん。調子はどうですか？」

「ごんにちは、おかげ様でなんとか感じてですね」

昨日よりはマシだが、貧血気味なのは変わらず。一日半ぶりの食事でありつくもあまり食べれそうにない。レバーなんかを食べたい所だが贅沢は言えない訳で。

……贅沢言えない割には見た事のない果物の様なモノがいくつか乗せられた木の板を渡された。

綿みたいな繊維にたっぷりの糖蜜を染み込ませた様な不思議な果物や、中に液体の入っているひょうたんみたいな果物。他にもいろいろあるが、総じて言うなれば『地上では絶対にはないだろうな』っていう代物ばかり。

ひょうたんの水筒って確か中に水入れて中身腐らせて空洞にするんだっけ？　……中身腐ってるんじゃない？　いや、そういう果物なのかもしれない。うん、食べて平気だよな？

確か十八階層特有の果物もあるっぽいから多分ソレだろうなあ。

糖蜜の詰った綿っぽい果物、ベルが苦手そうだな。甘い物苦手って言つてたし。

「まさか中層進出初日に十八階層までくるなんて、凄いですね」

「運が良かったんですよ」

団長達との会話を聞いていたんだから知ってるだろうに。まあ、別に構わんか。なんか知らんが懐かれているらしいし……一体どういうことっちゃねん。

「それでレフイーヤさんは何か用ですか？」

「あ、そうでした。実はお礼を言いたくて」

お礼？ 思わず首を傾げる。はて、何かしただろうか？

「ミリアさんの助言もあったおかげで並行詠唱が出来る様になったんです！ 実戦でも使えるぐらいになって深層でも活躍できたんですよ！」

へえ……え？ 並行詠唱出来る様になったんだ。うん、凄いね。お

めでどう。

「おめでどうございませす」

「はいっ」

元気一杯でよろしい。が、少し待て、俺のおかげって……ちよろつと助言しただけじゃろう？ んなもんが役に立つとは思えんのじやが……？ ま、少しでも助力になったってレフイーヤが言うなら良いか。

「レフイーヤ、手を貸して」

「あ、はい。今行きます。すいませんミリアさん、今ちよつと立て込んでいて、またお礼に何か渡しますんで」

「え？ あっ……」

お礼に何かつて、別に渡される様な事じゃないだろうに……。律義な子やねえ……。あ、このひょうたんの果実どう食ったらいいの？ へたの部分斬り落として中を飲めば良いの？ 変わった果実出してくれるのは良いけど食べ方教えてくれる人は居なさそうだ。

まあ、毒で倒れた仲間がいるって話だしそつちを優先だわなあ……。つか糖蜜の溢れ出てくる果実先に食うんじゃないか、シチューの味が滅茶苦茶じゃないか……。

食事を終え一服しながらも木製の椅子に腰かけながら空を、と言うか空に見える天井を見上げれば、天井一面にびっしりと張り付いた青い透き通った結晶、英石……水晶だっけか？ とその中心に花みたいに外に飛び出す様に張り付く真つ白い結晶塊。光を放つその結晶は地上の時間帯に連動して光の強さが変わるらしい。

昨日は見なかったが夜になると美しい迷宮の夜空っていうのが見えるっぼい？

わざわざ解説してくれるなんて……団長さんって結構暇だったりするんですかねえ。

「ははは、暇ではないかな」

お茶、ではなく白湯で一服していたらふらつとやってきたのはロキファミリアの団長フィン・デイルムナである。俺に何か用かなと思えば、重ねてレフィーヤのお礼を言われた。どうやら彼女は俺の助言のおかげで並行詠唱出来る様になったことを団長に報告していたらしい。

いやはや、俺も有名人になったなあ。

「それで、君の従えている竜種二匹は召喚するかい？」

「あー、できればしたいですけど、良いんですかね？」

もう召喚できるはずだがロキファミリアに世話になってるから遠慮して召喚を控えてたんだよな。もしかして団長自ら足を運んだのって……？

「ああ、問題ないよ。その件で足を運んだのもあるね」

なんか他にも話があるみたいな言葉選びやめえや。対面の席でクスと悪戯っぽく笑うフィンの姿に視線を逸らす。

「他の件とは……？」

「ああ、実は……今ちようどテイオネが出かけていて丁度良くてね。……縁談の話さ」

ズドンとテーブルにナイフが突き刺さる。と言うのはただの比喩で実際には強い衝撃を真正面から浴びせられた様な感覚だ。随分と思いついた言動をするな。

明らかに駆け出し……じゃないな。一応上級冒険者にはなったん

だがそれでも成りたての身分不明な小娘に……自分が小娘なのかは置いておくにしろ、こんなちんちくりんに声をかけるなんて相当だぞ。

「まだ私を狙っているの？」

「そうだね。むしろ——今回の一件でより君が欲しくなったかな」

あー、あー、あー、面倒臭い。神にも目を付けられてる現状……フレイヤにも目を付けられてるっぽいのに、神ヘルメスマまで目を付けてきてるっぽいんだよ。そこにフィン？ 勘弁しろよ全くさあ、俺が何したっていうんだか。

……キューイとヴァンを生贄に捧げましたね。ささやかな罰かな？ ……ささ、やか？

「それで、前に君に目的を話した時に言われた事を少し考えていてね」
子供の未来を親が勝手に決めるのは云々って話か。子供にパルウムの英雄の名を継いでほしいって考えだったよな、強制されて束縛されるのは本当に可哀相。と言うかもしも、仮に俺がフィンとの間に子供を儲けたら子供が『嫌』と言ったら俺は全力でフィンから子供を引きはがすだろう。それぐらいするし、その過程でフィンとの殺し合いに発展したとしても、俺は全力で子の為に戦うだろう。

あの糞女は殺せなかったが、それぐらいはしたい。

「それについてなんだけど、僕は子に強制はしない」

ふむ。

「ただ僕の背を見せるだけだ。こうしろ、ああしろと子に何かをやらせはしない」

……………んむ。

「その子が僕の背に憧れを持ち、自分の意思で僕の背を追いかける。そうであるのなら——キミはそれを全力で応援してくれるだろう？」

真っ直ぐに此方を見つめてくるフィンの姿から思わず視線を逸らしてしまった。

俺は、フィン・デIMUMナと言う人物はあまり好きではなかった。

理由は、やはり人を動かす為に表面上演技をしている所が、前世の

俺と重なったからだ。要するに、勝手に同族だと思い込んで身勝手に嫌っていただけである。

今話を聞いた上で、申し訳なくなつた。俺は彼を勝手に詐欺師と同族であるなどと言う失礼な評価を下していた。表面だけを見て判断していたわけだが……中身は全く違う。

と言うか、その在り方『僕の背に憧れを持ち、自分の意思で僕の背を追いかける』と言うモノ。それは、あの人——親父と呼び、慕つたあの人と同じ在り方だ。

『俺はゲームが好きで、俺の子にもゲーム好きになつてほしい。けど楽しくないって思うなら無理にやらせはしない。ただ、俺が楽しそうにゲームしてれば、我が子も楽しんでくれないかって期待はしてるな』

うん、楽しそうにゲームしてるあの子の背を見て育つたからこそ。俺はゲームを好きになつたし、『ミリカン』等と言う、どちらかと言えばバカゲーに分類されるゲームをやりこんだ。いや、ジャンルはVR FPSなんだけど……やっぱ登場するキャラや世界設定なんかバカゲー要素多すぎてね……？

それはともかく、今日の前にいるフィン・ディムナは俺如きが貶して良い相手ではない。

今まで内心毛嫌いしていたが、早合点で勝手な思い込みから嫌っていた訳で、正直合わせる顔が無い。

「フィンさん。まず、謝罪させてください」

「どうしたんだい？」

「すいませんでした。正直、貴方の事は嫌いでした」

過去の自分を見ている様で、気持ち悪かった。だが——何処が過去の俺と同じだというのか、失礼にも程がある。

詐欺で人を騙しては金を掻き集めて不幸をまき散らした屑と、自ら志す目標に向かつて邁進するフィン・ディムナ。何処が同じだというのか。手段こそ似通つた点があった、だが在り方は全く違う。

そういう意味で、申し訳なく思う。

「一方的に貴方のイメージを決め込んで、嫌いになってました」

「……………そうか」

「ですが、今の話を聞いて、好きになりました」

手の平を返す様な反応ではあるが。それでも言える。この人物は好感を持てる人物だ。

その姿に憧れすら抱いた。見た目がカッコいいとかそう言う事ではない、在り方が美しい。もし、もしも出会う順番や、抱いた想いが違えば……………。

改めて真つすぐフィン・ディムナの顔を見据えた。申し訳なさもある。もし出会いさえ違えばと言う思いもある。けれども、俺は出会った最初にフィン・ディムナを嫌悪し、彼について何の考慮もしなかった。それが分岐点であり、今悔やんだ所で戻る事の出来ない過去である。

「その上で、ごめんなさい。貴方の想いには答えられません」

「そっか……………。やっぱり、か」

俺は、神へスティアに救われた。あの日、あの満月の下で『ミリア・ノースリス』として定まった。それ以前の曖昧な誰かではない。一人の人として与えられた名と立場。

真つ直ぐに夢と憧憬に直走る少年の背を見た。同じ家族^{ファミリア}として、その想いの成就に力を貸したいと思った。

神ガネーシヤは素晴らしい神だ、もし先に出会っていれば彼の神の為に身を粉にして尽くしたいと思う程に。

フィン・ディムナは素晴らしい人物だ、もし出会いの場の思い違ひさえなければ身を粉にして尽くしたいと思える程に。

其の上で、言わなければならぬ。

「私は、ベルとへスティア様の為に尽くしたい。あの人たちの為に、何かをしたい」

何かってなんだ？ 未だに曖昧な部分もある俺が何を言っているのか。鼻で笑われそうである。それでも……………彼らの為に尽くしたいと思ったのだ。

だから、神ガネーシヤの為に尽くせない。フィン・ディムナの為に尽くせない。

他の誰でもない、ベル・クラネルと神へスティアの二人に尽くしたい。だから、他の誰かを顧みる余裕はない。

「だから、貴方の想いには応えられません」

真摯な彼の申し出に、此方も真摯に答えねばならない。

頭を下げて、断る。俺はフィン・ディムナの為に動けない、動かない。だからこそ、余計に俺を惑わせないで欲しい。

「だろうね。それは——わかってたさ」

強化種のミノタウロスとの戦い。変異し異常な力を手にし普通なら敵うはずもない強敵を前に、ベル・クラネルは立ち上がって見せた。そしてその背をひたすらに支えたミア・ノースリスの姿があった。

あの瞬間には、わかっていた。理解できていた。彼女は自分に振り向く事は無いのだと。

それでも、想像せずにはいられなかった。

もし、もしも自分がベル・クラネルの様に彼女に支えて貰えたのなら。

もし、ロキファミリアに入団し、神ロキと二人きりで始めたあの初期のファミリアにキミが居てくれたら。

もし、今までのフィン・ディムナの道にミア・ノースリスが寄り添っていてくれたら。

きっと、今よりも良い結果が出ていたんだと思う。

しめくくりの言葉を静かに聞いた上で、フィンとの視線が交わった。

「仕方のない事だったとはいえ、後悔してるよ」

「私も、後悔してない訳ではないです。でも——」

——もしやり直せたとしても、俺はきつとベルとヘスティア様を選び取る。

他の誰でもない初めて家族だと胸を張って言える二人を選び取るのだろう。

「……雰囲気を考えるべきだったかな」

おどける様に小首をかしげる姿に苦笑する。どれだけ雰囲気を整えたとしても、俺はフィンを選ぶ事は無い。それだけは言える。

水晶の光源が目刺さる程に強くなり、地上が昼頃である事を伝え
てくる。地上の光の強さがイコールで天井の水晶の光の強さがどう
のこうの。

キューイとヴァンを召喚しての再会について色々あったが、とり
あえずロキファミリアが滅茶苦茶警戒してるのはしゃーないっちゃ
仕方ない。まあ、モンスターだしね……俺の魔法で呼び出したとはい
え警戒はするか。

警戒するロキファミリアに安全だよーと行動で示すべくキューイ
とヴァンとじゃれ合っていると、ロキファミリア最速にして解毒剤を
地上にとりにいつていた【凶^{ヴァナルガンド}狼】ベート・ローガが帰還してきたら
しい。

………解毒剤のつまったバックパックらしきものをレフィーヤに
手渡しながらもすさまじい形相で此方を睨んでいたから間違いない。
あの灰色の獣人、殺意がヤバいでしょう？ あれ、第一級冒険者なん
だぜ………？

いや、モンスターと仲よし小好ししてんのはそんなにアレなんか
………？

『怪物趣味かよ』とか吐き捨ててるし。怪物趣味……？ アレかね、
^{ブルーファイリア}動物性愛みたいなものかね？ ……言っちゃ悪いが変態的な性癖の
分類の中には『疑似^{スレドウスブルーファイリア}獣姦』っていうのがあってだな。簡単に言えば
『獣耳や獣尻尾の生えた人がしゅきい』っていうのも変態性癖の一つ
だ………。

あ、こつちの世界だと割と普通の性癖に入るのか？ 獣人が普通に
いるし、獣人の娼婦もいるらしいし？

………角とか生えたモンスターが性癖に刺さっても不思議じゃ
ないと思うんだけどなあ。多分だが常人には理解できない異常性癖
に入るんだろうなあ。つか、見た目カッコいいとは思うけど竜相手に
欲情はしないに決まってるだろ。

………もしかしてかつこいいって思うのも変？

こういう考え方ってこつちじゃおかしいんかね。あんま口にしないどころ。

第一級冒険者の殺気に冷や汗を流しながらキューイ共々震えていとへステイア様達が帰還した。ヴァン、おまえあの殺気平気なの？

凄いな……って気絶してね？ 白目剥いてるぞこいつ。

「おかえりなさいへステイア様」

「ただいまミリア君」

へステイア様ー、超会いたかったです！ 昨日は疲労困憊で何がなんだかわかんなかったけど、今朝になつて冷静に考えると超やばい事してるって気付いた上で、わざわざ迎えに来てくれて本当に感謝してる。

……でも、危険な事はやめて欲しいなあって。いや、心配される状況ではあつただけどね？

「ただいま帰りました。ミリア様、リヴィラの街で買い物するのはオススメしません。あそこはおかしいです！」

リヴィラの街に行ってきたそうなんだが……。

なんかリリはプリプリ怒ってるし、ヴェルフは相変わらず桜花の事を時折睨んでいるし……。へステイア様はなんか香水でもつけてるのか妙な香りがするし。此処で買い物ってどう考えても値段吊り上げてくるだろうに。

香水は……悪臭ではないんだが、香水ってあんま好きじゃないんだよ。あの糞女もいっつも香水つけていたせいか、香水そのものは悪くないのに香水は嫌いになつちまったんだよな……。

「お土産物を買ってきたよー！」

手渡されたのはパン。それも焼き立てっぽい香ばしい香りに、たっぷりのクリーム、溢れんばかりの果物……あ、さっきのハニークラウドってのも入ってるっぽい。

『ダンジョンサンド』なる食べ物。

……ダンジョンの中の街で買い物すると高そうな気がするんだが、ってそうか。リリが怒ってるのってそういうことか。

古びた補修まみれのバックパック背負ってるし、大分足元でも見ら

れたのではないだろうか。

まあ、砂漠で買う水みたいなもんだろう。それに此処に物資類運び込むだけでも相当危険なんだし足元見られるのも当然っちゃ当然だろうなあ。

リリミみたいに縁下力持なんてあるから荷物一杯持てるよって方が少ないだろうし。

「やあミリアちゃん。昨日は大分お疲れだったようだから改めて自己紹介させてもらおうよ。ヘルメスさ、そっちはアスフィ。よろしく」

……気さくそうに片手を上げて微笑む優男の神ヘルメス。その目に映るのは探る様な深い色。いや、神ってそう言うモノだって思っただって相手しないと、悪感情読み取られてしまうってのはわかってても感情制御なんてできやしない。

表面上の感情ならいくらでも演技できるが、神相手に表面を取り繕ったって意味ないからなあ。

「よろしくお願いします、神ヘルメス。ミリア・ノースリスと言います」

「ありやりや、嫌われちゃってるみたいだね。何か嫌われる様な事しちゃったっけ？」

おどける様な仕草をしながらアスフィに問いかける神ヘルメス。微弱に漏れているはずの神威が全く感じられない所為か、神と言う雰囲気は一切無く、顔立ちの異常に整った優男にしか見えないんだが。まあそれはヘステイア様も同じっちゃ同じだ。ダンジョン内では神威隠さないといけないらしい？

『気付かれてしまう』って……何に？ 気にはなるけど聞かないで欲しいって雰囲気だったので問うのはやめておくが。

「それで、率直に言いますが……。私の何を探っているのですか？」

「……おっと、ベル君と違って随分とまあ、スレてる子だね。それに察しも良い」

何を探りにきた？ キューイか？ ヴァンか？

「んー。竜種を従える魔法っていうのも気になるっちゃあ気になるかな。でもそれよりも君の事が知りたい」

……。遠くの方でヘステイア様達がアイズさんと何か話してらっ
ぽい？ 水浴びがどうか。とりあえず目の前の神ヘルメスの目的
が曖昧と言うか、範囲が広すぎてわからん。

「私の何が知りたいのです？」

「そうだね。何処で何をしていたとか、かな。君の事について一通り
調べただけだね。ある特定の日付以前の記録はさっぱりなんだ。
正直言つてすごく怪しい経歴してるよ」

怪しい経歴、ねえ。

「私もどう答えたら良いのかわからないんですが……」

「じゃあ質問、何処で生まれたの？ 誰に育てられたの？」

何処で——生まれた？ 知らん。 誰に育てられたの？ 知って
る。

「何処で生まれたかは、知りません。どっかの闇医者に取り上げても
らったぐらいしか聞いてないですし。育ての親は………少なくとも
も神ではないですよ」

神ではない普通の人だった。俺を育ててくれたあの人は、老いて死
んだ。あの糞女が死んだ後に、再度会いたいと願って探し回って、よ
うやく見つけた頃には墓の下だった。

「他に聞きたい事は？」

「そうだねえ。まあそれは後で良いかな。ヘステイア達が水浴びに行
くみたいだから一緒に行くといいよ。うん………女の子にこう言う事
言うのはちよつと憚られるんだけど………ちよつと匂うよ？」

そりや血塗れになったり丸々一日ダンジョン歩き詰めだったりし
たんだから匂うのは当然だろ。

自分じゃ気付かなかったけど……。もしかして結構臭い？ でも
水浴びかあ。

「ミリア君、今から水浴びに行くんだけど一緒に行かないかい？」

「あー、行きたいのはやまやまなんですが……ヘステイア様、ステイタ
スどうします？」

背中に刻まれた神の恩恵のステイタス、入れ墨みたいな形で残って
るんだけど見られたらまずい………って、あれだな、気絶してる間に口

キファミアリアにみられた可能性高いな。後で確認しとかなきゃ。

「ステイタス？　それがどうしたんだい？」

「あー、ヘルメス。塗装用の道具、持ってないかい？　持ってたら貸してほしいんだけど」

「は？　塗装？　ヘステイア、何を言っているんだキミは」

おかしそうな表情の神ヘルメス。

前々から不思議に思ってたんだが、ステイタスって背中に出るじゃん？　俺もベルもそうなんだが入れ墨みたいに残ってる訳よ。

んで、アマゾネスっていう種族いるじゃん？　あの種族って凄い際どい格好してるし背中丸見えなんだが。アマゾネスの背中にステイタスが無いのよね。テイオネさんもテイオナさんも、第一級冒険者なのは違いなのにステイタス貰ってないなんてありえない訳で……褐色だから目立たないのかなって思ってたんだけど違うっぽい？

「もしかして……『錠』してないのかヘステイア」

「……ヘルメス、その『錠』について詳しく！」

え？　ろつく？　何それ聞いたことな——いや、エイナさんが

前に『鍵しめたほうがいいよ』とか言ってたっけど、もしかしてその『錠』とやらの事だったのか？

あの時は勉強云々でうやむやになって聞かなかったけど……聞いとけばよかったかも。

第八十二話

与えられたテントで一度ステイタスの更新を行い、序にステイタスに『錠^{ロック}』をかける事になったのだが地上の様に紙に書き写す様な事は出来ない為、口頭での更新結果の説明となったのだが。

ミリア・ノースリス

L v. 2

力：I 8 3 ↓ H 1 8 0

耐久：I 4 8 ↓ G 2 2 8

器用：G 2 2 4 ↓ E 3 6 0

敏捷：H 1 9 6 ↓ G 2 8 0

魔力：D 5 2 2 ↓ B 7 9 3

《魔導I ↓ G》

《魔法》

【ガン・マジック】

・ 詠唱派生魔法

・ 基礎詠唱 『ピストル・マジック』

・ 消費弾薬 1 / 1

・ 単発の魔弾を放つ

・ 特殊詠唱 『デュアル』

・ 基礎詠唱 『ショットガン・マジック』

・ 消費弾薬 1 5 / 3

・ 単発の散弾を放つ

・ 特殊詠唱 『ソードオフ』

・ 基礎詠唱 『ライフル・マジック』

・ 消費弾薬 1 / 1 0

・ 高威力の魔弾を放つ

・ 長射程

・ 特殊詠唱 『スナイプ』

・ 追加詠唱 『ファイア』

・共通詠唱『リロード』

【サモン・シールワイバーン】

・召喚魔法

・最大召喚数『2』

・追加詠唱にて封印解除

・基礎詠唱『呼び声に答えよ』

・追加詠唱『楔を壊せ解き放て』

・追加詠唱『階位を超えて飛翔せよ』

【レッサー・ヒール】

・最下級治癒魔法

・基礎詠唱『癒しの光よ』

《スキル》

【タイプ：ニンフ】

・クラスチェンジ可能

・任意発動アクティブトリガー

↓クーシー：アサルト

↓クーシー：スナイパー

↓クーシー：フアクトリー

↓ドリアード：サンクチュアリ

【マガジン・スロット】

・装弾数『30↓50』

・保有最大数『15↓20』

・基礎アビリティ『魔力』により効果増加

【マジック・シールド】

・防御効果

・基礎アビリティ『魔力』により効果増大

・自動発動

・精神力消費

トータル上昇値768と言うぶっ飛んだ数字に思わず眩暈を覚え

た。

というか発展アビリティって滅多に上昇しないって聞いた記憶がある。しかし最低値から一段階上を飛ばして一気に二段階上に跳ね上がってるぞこれ。

それと『サモン・シールワイバーン』になんか追加されてるし。なんだ『飛翔せよ』って……効果不明とは言うけどもしかして『ミリカ
ン』における上位への変動の標の事か？

最下級の『プチワイバーン』を一段上位のワイバーンに階位変動させたりする効果なんだが、キューイを上位に変化ってどうなるんだ？
と言うか魔力の消費ヤバそうな気が——つかキューイとヴァ
ンの強化じゃなくて俺をもっと強化してくれるなんか欲しいんだ
が。

「久々に一気に上がったね……」

「まあ、むしろこれで上がってなかったら困るんですが」

あの強行軍、死ななかつただけでも奇跡に近いのだから当然伸びる
だろう。濃いめの経験値が大量に入ったのは普通に喜ばしい事であ
る。

「ベル君もそうだけど能力値とは別に上位の経験値もかなり入ってる
ね」

ランクアップには届かないが、偉業の経験値と言うのが結構溜まっ
たらしい。後少してランクアップ範囲に入れるぐらいには。ふうむ
……考えたくはないけどあの百匹斬りかね？ それとも強行軍その
もの？ 階層主から逃げ切った……訳ではないけど生存した事かね。

強敵ぶつ倒すだけではなく、『偉業』と呼べる事を成す事で得られ
るっぽいね。普通なら不可能な事を成す事でも十分に『偉業』と呼べ
るしね。

「さて、それじゃあ水浴びに行こうか」
「ですね」

ステイタスの隠蔽も完璧だし、これで気兼ねなく皆と水浴びが出来
る。

神ヘルメスについてはいったん保留だ。できれば関わってきて欲

しくはないタイプなんだが、興味を持たれてるっぽいので無理かなあ。

ダンジョンの中、モンスターが発生しないだけで上下階層から移動してくるモンスターは多々いる。

と言うよりこの階層の別名『迷宮の楽園』アンダーリゾートと言うのは人ではなく怪物にとつての楽園である訳だ。

水浴びするにあたって当然と言えば当然だが防具類を外す。武装が水に濡れない様に離れた場所に置く。当たり前だがモンスター徘徊するこの場所は安全とは言いい切れない。そこで武装が手の届かない場所にあるというのは致命的な事だ。

故にロキファミアの女性団員達が見張りをしてくれているらしい。

「キューイ、一応警戒よろしく」

「キューイキューイ……」

縮こまったキューイがプルプル震えている姿に苦笑しながらもローブを脱いでいく。

ロキファミアの団員達、ティオネさんやティオナさん、アイズさんも此方をガン見してきてあからさまに警戒しており、正直落ち着かないっっちゃ落ち着かない。

ミアアちゃんぽでいにるるめろかい？ ……いや、キューイとヴァンに警戒してるんだよね知ってる。

「ミアア様、警戒されてますが」

「知ってる。でもあのままロキファミアの野営地に置いとく訳にもいかなかったし」

多分、ベート・ローガ辺りが『なんか怪しい動きをした』とか言っただけで殺しにかかってきそうな勢いだったのだ。野営地にキューイとヴァンを置いてくる訳にはいかなかった。

アイズさんの能面みたいな表情も怖いし、ティオナさんティオネさんの二人も明らかに手元の武器を意識しまくってる。

平然としてるのはヘステイア様ぐらいで……ミコトや千草もやはり警戒がとけないらしい。

「あの、ミリア」

「なんですかアイズさん」

「その、モンスター……」

モンスター、警戒されるのはわかるんだがねえ。

キューイの顎を撫でてやりながらアイズさんに返答するも、鎧を身に纏ったまま脱ごうともしないアイズさんの瞳にはあからさまな動揺と警戒が浮かんでいる。

どうすりゃいいんだこれ。

「噛みついてきたりはしないですよ」

「……………モンスターなんだよね」

「いえ、どちらかと言うと……召喚獣、ですかね？」

アイズさんは納得がいつているのかいないのか、眉を顰めてからすつと距離をとって此方に視線を向けたまま鎧を外し始めた。

そのすぐ横でじーつとアイズさんを————とか胸を凝視していたヘステイア様。何してるんだあれ……。

「ふんっ！ 僕の圧勝だな！」

「何と張り合っているんですか。ヘステイア様」

リリの呆れ顔を尻目に勝ち誇るヘステイア様。まあ大きさならヘステイア様に敵う人はそうそういないだろう。……この場で最小つという称号を持つ俺はどんな顔をすればいいんだか。身長も胸も勝てる気しないぞ、尻もそうか。うん、気にするのやめよう。

キューイとヴァンから視線を外して周囲の景色を見回す。

凡そ10M程の高さの段差から水流が落下してきている大きな滝。周囲を覆う木々と水晶、頭上は枝葉で覆われた天然の天蓋。滝壺から舞い上がる水飛沫が霧の様に舞い、木洩れ日の光によって幻想的に照らされた空間。

まるで『聖域』と言われても不思議ではない美しい場所なのだが、雰囲気は若干悪い。

キューイとヴァンが原因つちや原因なのかねえ。

「ねえミリア、私も触って良い？」

「どうぞ」

鱗が結構ギザギザしてたりするから逆撫ですると手がズタズタになるのだけは注意しないとだけどね。鑢を撫でたらこんな感じだろう、気を使わないとこつちが怪我するし。

ちつこい頃のキューイなら気にならなかつただけどなあ。

「おー、意外としなやかだね。深層で見たドラゴンとは大違いだよ」

深層、ロキファミリアが突破した階層には『竜の巣』と呼ばれる場所もあつたらしい？

詳しくは知らないが其処で一度煮え湯を飲まされた事があるらしく、ベート・ローガは竜種を毛嫌いしてるらしい。それ以前から竜種に対して嫌悪感を抱いていたらしいが、詳しくは知らん。

知り合いでも竜に殺された？ だとしたら下手に口出ししない方がいいんでないかな。

つか、服脱いでから全く水浴びできん。しゃーないから先に行くか。千草は物陰で恥ずかしそうにござござしてるし、ミコトは……うわでつけえ、なんだアレ、サラシで押さえてた？ 戦闘力高すぎんだろふざけんよ。

アイズさんは美乳、ティオネさんは巨乳、ヘスティア様は説明不要、リリはパルウム基準の巨乳、ティオナさんは小さいっちゃ小さいがしなやかな肢体にふさわしい控え目な感じだし。

……俺？ つるーん、ペたーんな擬音が似合う幼児体型だよ。でも少しはあるんだぞ？ 周りがでかすぎて目立たないだけでほんの少し肉が盛られてだね——いや、よそう。

どれだけ無い胸張っても仕方ない。貧乳の称号を大人しく受け取ろうじゃないか。

ただし口にした奴は夜道に気を付ける事だな。何処からともなく魔弾が跳んでくるかもしれん。

思った以上に水深があつた。と言うか俺が小さすぎてかなり深く

感じる。女性の平均身長並みのティオネさん達でも胸の高さまでの深さがあるのだ。つまり俺は完全に足がつかない。

「キューイ、もうちょつと上げて貰っていいです?」

「キューイキューイ」

こき使うなつて文句言いながらもちゃんと気遣ってくれるキューイは良い子である。時折融通が利かないけど。

首だけを水上に出したキューイ、沈んだ翼の皮膜の上に腰かけて髪を洗う俺。

周りのアイズさん達は水浴びしながらもやはり警戒モード……だったのだが、ティオナさんは早々に警戒をやめてヴァンで遊んでいる。

水辺で体を丸めてうたた寝と洒落込もうとしていたヴァンに水をかけたりしてるのだ。あの人、物怖じない人だな。

ヘスティア様とリリはなんかキャピキャピ言い合ってるっぽいな。うむ、ベル君がプレゼントしたあの髪飾りの話か。俺は消え物を送ったからもうないが……俺もなんかアクセサリーでも贈った方が良かっただろうか?

でもあの頃は『自分が居るべきじゃないかも』なんて思ってたから残ってしまう物を贈る気にはなれなかったんだよなあ。

今度、また何か贈り物でも——腕をガシリと掴まれて引つ張られた。

背中に感じるのはひんやりとした固い水晶の感覚。腕を掴まれて押し当てられた背中の痛みを感じながらもなんとか微笑みの形を浮かべる。と言うか口元が勝手に歪んで笑みの形をとった。愛想笑いではなく恐怖に引き攣った笑みだ。怖すぎる。

目の前に広がるのは褐色の乳房。張りがあり、形も良い。吸い付く様な質感のその乳房はその人が身じろぎすることであゆんと揺れる。確かな重量を感じさせながらも重力に抗う。

弾かれた水が滴り落ちる姿に思わず視線が下に流れていきそうになるも、脳天に感じた圧力から逃れる事が出来ずに視線を上を上げぎ

るをえなかった。

目の前に広がったのはこちらをじつと観察する様に見下ろすテイオネ・ヒリュテの顔。鼻先が触れ合いそうな程に近い。

「あの、何か用でしょうか？」

あ、胸があたつてる。これはアレかな？ 当ててんのよかな？

……いや、まって、此処で絞められる心当たりがありありませんが。さつきフィン・ディムナから縁談の話持ちだされたし、その事で絞められそう。助けてへスティア様。キューイとヴァンはっ!?

視線を向けた先、キューイとヴァンの二匹とじゃれ合うテイオナさんの姿。おいキューイ助ける。

「ごめんね……キューイ……」

一瞬だけ視線を此方に向けたキューイが小さく鳴いた。ふざけんなよっ!

ぐいっと顎を掴まれて視線を戻された。暗緑色の瞳が視界一杯に広がる。此方の胸の内を解き明かそうとする詮索の瞳。顎を優しく上げられて——唇を奪う積り、なんてなさそうだ。

その瞳に映る色合いは『疑惑』と『追及』である。

「キューイとヴァンなら、あの通り安全ですので……」

フィン・ディムナとの一件を誤魔化す。やめろ死にたくない。

じーっと見つめてきていたテイオナ・ヒリュテの顔が遠ざかる。息のかかる距離だったため止まっていた呼吸が再開し、心臓が早鐘を打っているのに今気づいた。思ったよりも長く息を止めていたのか肩で息をしながらも——未だ解放されない腕をちらりと見た。

痛みこそないが、振り解けない力で握られる腕。敵意や殺意はないが探る色合いが強い彼女が何がしたいのかわからん。何がしたいの？

「あんなつてさ——」

ふと、口を開いた彼女を見上げる。天井から降り注ぐ木洩れ日が逆光となって彼女の顔が上手く見えない。眩しさに目を細めて見上げていけば、彼女は超ド級の爆弾を放り投げてきた。

「——もしかして男だったたりしない？」

ヒュイツと言う妙な音が響いた。

その音が自分の息を吸った音だと認識し、早鐘を打っていた心臓がより速い鼓動を刻んでいる。ヒューヒューと妙な呼吸をしながらも、引き攣る口元を笑みの形に変えてなんとか絞り出す様に口を開いた。「見ての、通り。お、女ですが」

示す様に、自分の股の辺りを指す。

男性である事を示す陰茎や睾丸と言った男性器は存在せず、つるりとした毛の生えていない幼い少女の女性器があるのみ。何処からどう見ても女性である事に変わりはない。

そのはずだ、自分でも確かめたりした。故に断言できる。『俺は女である』と……

「そう、にしてはあんたなんか変なのよね」

掴んでいた腕を放して腕組をするテイオネ・ヒリュテ。

張りのある胸が腕に押し上げられて強調されるのを見ながらもなんとか笑みの形のまま返答する。

「まさか、気のせいじゃないですか」

思ったより滑らかに出てきた言葉に思わず血の気が失せた。引き攣っていた筈の笑みがごく自然な、微笑みと呼べる形になっているのに気付いて、自分があの頃の様に演技してゐる事に驚いて——表面にそんな色合い一切出さずに口が動いた。

「フィンさんに縁談を申し込まれましたが、断りましたのでご安心を」
「……………」

「今後はフィンさんに関わらない様に致しますので」

次々に飛び出す、ごく自然な台詞。緊張したりせずには微笑みを浮かべたまま口から飛び出す薄っぺらい言葉。気持ち悪さが込み上げてきて、それでいて表面上は一切それを悟らせない様に振る舞う。

気持ちの悪い、あの頃の自分。

「あんたさ、自覚無いか知らないけど——女らしい癖に女らしくないわ」

水の流れに身を任せてぶかぶか浮かびながら、先程のテイオネ・ヒリュテの言葉を脳裏でぐるぐると回す。

「女らしさ、かあ」

解放されたのち、キューイやヴァンからも離れて一人で遠くから様子を眺めていたが、ぐるぐる回る思考がキモチワルイ。

俺は男か、女か。

当然答えは『女』である。

男性は比較的大柄で肩幅が広く筋肉が多くがっちりとした体を持ち髭が生え変声する。

女性は比較的小柄で膨らんだ乳房、大きい乳首、広い乳輪、くびれたウエスト、小柄な割に大きな尻を持ち皮下脂肪が多い体を持つ。

明確な差異はなんといっても生殖器官の違い。

ミリア・ノースリスの身体は幼い。未だ幼い体躯であり、同時に性差を感じさせる要素は強く出ていない。

胸が明確に膨らんでいるとは言えず、服を着こめば体つきでは判断できないだろう。

顔立ちはもちろん女性的であるし、一目見れば『女の子だ』とわかる。

つまり何処まで行ってもミリア・ノースリスは『女』な訳なんだが……。

「じゃあ私はどっちかって話ですよね」

俺は、男ではない。何せ体が女だから。けれども女であると肯定しきれない部分は大きい。何せ前世が———と云う訳ではない。

正直言おう。前世の頃から、俺は自分の性別にあまり関心が無かった。

前世の俺、『ユーノ・シラノ』と言う人物は男性である。なぜなら体が男性であつたから。では精神はどうなのかと云うと、別にそうでもない。何せ『演技で全てを賄っていた』のだから。

詰まる所、自分の体役柄に合わせて変化するのが当たり前だつた。故に、女の体なら女の役柄を演じ、男の体なら男の役柄を演じる。それだけであつて———性同一性障害と言う程ではない、性別違和と呼

べる状態であつたのだろう。

だから何だという話である。体が女だから『女らしい』行動をとろうとする。要するに演技しようとしてしまう。癖が抜けきつていないからこそ、そうなっている。

けれども俺は演技をやめると決めた。ヘステイア様に定められた『ミリア・ノースリス』として自由に、自らを偽る事はせずに生きる決めて——けれども癖が抜けきらずに演技してしまう事もある。

深瀬に浮かびながら天蓋から降り注ぐ木洩れ日を浴びて、考えて、考えて、考える。

男と女。自分はどちらかと問うても答えは出てこない。

「ミリア君、どうしたんだい？　大丈夫かい？」

ふと、声をかけられたのでそちらを向けば、ヘステイア様が此方を窺っていた。いつの間に近づかれたのかさっぱりわからない。考え事し過ぎたか。

「あー、どう言ったら良いんですかね」

指摘されるまで見て見ぬ振りしてた事柄、テイオネ・ヒリユテに指摘されてわからなくなつてぐちゃぐちゃで上手く纏められない思考。男か、女か、果たして俺はどちらなのだろうか。

「自分の事がわからなくなつちやつたんですよね」

浮かんだまま、枝木の天蓋に視線を向けたままそう呟けば。ヘステイア様は優しく微笑んでくれた。

一つ、聞いてみようかなあ。

「ヘステイア様、私って……女ですか？」

質問を飛ばして——ちよつと後悔した。なんか変な質問である。見りゃわかんだろつていうね。

「んー、そうだね。ミリア君はミリア君だよ。男とか女とか、一般的な分類に当てはめるとちよつと不思議かなつてなるけど、別に悪い事じゃないんだ。気にする必要はないさ」

………一般的な分類からすると、不思議なあ。

つて、ちよつと待ってくれ。

「ヘステイア様、もう一つ質問良いですか」

「なんないミリア君」

いや、待つて、もしかして――

「前から気付いてました？」

「うん。それについては知ってたよ。でも僕が強引に定めるのは違し、相談されるまでは黙ってようって決めてたんだ」

――あー、神様にはお見通しか。うん、これは、どうすりゃいいんだ。

「安心しなよ。ミリア君はミリア君さ、男でも女でもどちらでも構いやしない。君らしく生きればいいのさ」

俺らしく、かあ。

心の内での一人称が俺っていうのもおかしいし、かといって私っていうのも何か違う気がする。男でもなく、女でもない。変な奴だな、俺って。

「お二人ともどうかしましたか？」

「ちよつとした悩み相談さ」

声をかけてきたリリに誤魔化す様に笑うヘステイア様。俺はー、私
は？ どうすべきか。

体が女だから女だって言い切れればいいのに、それをすると演技になる。

かといって男として振る舞うのはなんかおかしい。

くだらない悩みだとは思うんだが、かといって答えが出ない悩みだ。

「ミリア君、その悩みは直ぐには解決しない。ゆっくり悩めば良いよ」
水面に力を抜いて浮かぶ俺の頭を優しく撫でて、ヘステイア様は
笑った。

「答えを出すまで僕は傍にいるし、答えを出せなくても見捨てたりなんてしないさ」

木洩れ日の中、美しい女神が微笑みながら見下ろしてくる。

まあ、そうだな、この答えは直ぐには出ない。出せそうにない。

しばらくは悩んだままにしとこうか。男とか、女とか、正直良くわからない。

結局の所、答えの出そうにない悩みがまた一つ生まれた、と言うか見て見ぬ振りしてたそれが目の前に飛び出してきて困惑していたが、ヘステイア様の言葉で少し余裕が出来た。

さんざん水遊びしていたキュイとヴァン、ヴァンの方は遊んでたというか遊ばれてた感じだったが、アイズさん達も何やら納得した様子でいたので別に良いだろう。

モンスターではなく、ミリア・ノースリスの魔法によって生み出されたモノであると、そういう認識に収まったみたいだが……変に言い募ってもこんがらがるだけなのでそれで良いか。

泉から上がった所で髪濡れて重くなった髪を乾かしながら水浴びを続ける皆を見る。綺麗好きと言うか女性のたしなみとしてしっかりと汚れを落とす為に水浴びし続けているらしい。必死と言うかなんというか。

確かに『くさい』って言われるのは嫌……と言うか、『くさい』と言われる事よりも相手に不快感を与える事が嫌な辺り、他の人とはちよつと感性が違うのかもしれない。

「キュイキュイ」

ん？ 近くで体についた水を震わせてとばしていたキュイが唐突に『ベルがいる』とか言い始めたし。

ベルが居るって、ありえんだろ。少なくとも覗きをする様な性格ではないし、顔真っ赤にして逃げるだろ。

憧れのアイズさんに気付かれて軽蔑されたりしたらガチで落ち込むだろうからなあ。

「気のせいじゃないですか？」

「キュイ！ キュイキュイ！」

気のせいじゃない！ 其処の木のの上に居る！ って、其処ー、あそこか。うん？ 若干木の葉が揺れて——ボキリツと言う木の枝の折れる音がしたと思えば、枝木をガシガシと掻き分ける音が響いて、木の上からベル・クラネルが落ちてきた。

え？ マジで覗きしてたの？ やるなあ……。

第八十三話

森林の上空、と言うとおかしいか。森林の上を飛ぶキューイの足に掴まって下を見回す。

所々水晶の突き出た鬱蒼と生い茂る森林地帯。上空にはガン・リベルラなどの飛行能力を持つモンスターが飛んでいたりするが、特に此方を襲ってくる様子はない。

地上の木々に生えた果実を探しているっぽい？

「ベルはここら辺にいるの？」
「キューイ」

ううん。水浴びに飛び込んできたベルがそのまま全力逃亡してしまい、覗き犯をボコる為にベルを囲もうとしたロキファミアリアの女性団員を振り切ってしまったのだ。

んで飛行能力のあるワイバーンを借り出して『ベル・クラネルを捕まえてきてくれ』と頼まれたので断るに断れずにこの安全階層を飛び回る羽目になっているのだ。

ちなみにベルが覗きした原因は神ヘルメスにあるっぽい？ 木の上に居るところをアスフィさんが指摘した結果、見張りの女性たちによって引き摺り下ろされて逆さ吊りにされてタコ殴りにされていた。

一応、ベルは神にはめられただけっぽいとはいえ、一応覗かれたという事実もあるので捕まえてこなければいけない訳だ。

「キューイ、何処？」
「キューイキューイ」

足元に居る。って言われてもなあ……。枝木の天蓋によって地上が全く見えん。声を上げてても届かないだろうなあ。

んむ？ ああ、近場に水場があるっぽいな。其処だけ天蓋が途切れてるっぽいし一度そこに降りて歩きでベルを探すかな。

キューイに指示を出してその水場の所に着地するべく近づこうとした所でキューイが慌てて翼を飛ばたかせて——突然、マジックシールドが粉々に砕け散り、キューイの右翼の皮膜にぽっかりと穴が開いた。

「はっ？」

「キュイツ?!」

モンスターの攻撃っ?! さっきまで何もいなかったはずだろっ?! ガサガサと枝木をへしやげ折りながら落ちるさ中。キューイが下敷きとなつてくれたおかげか怪我らしい怪我はない。地面に叩きつけられたキューイがクルクルと目を回している。

やばい、マジックシールド一撃で粉碎する遠距離攻撃持ちのモンスターとかヤバすぎる。周囲を見回しつつも息をひそめながらキューイの体を引つ張る。

近場の木の根に隠れつつも周囲を窺っていると、バタバタと誰かが駆け寄ってくる音が聞こえた。

「今の音は……」

「ベル?」

「ミリア? どうしてここに——ひいつ?!」

やってきたのは白髪の少年。ついさっきまで探していたベル・クラネルその人だったのだが、唐突に両手を上げて硬直してしまう。俺の後ろに誰か——ひぎゃっ?!?!

長く尖った耳、肉付きの薄い体。細い肢体を晒す全裸の女性、その両手に持たれた武骨な投擲用の短剣だけが鋭利で物騒な輝きを灯していた。その瞳に映る色合いは『警戒』と『殺意』。

振り返ったそこにいた女性の姿に俺も思わず両手を上げた。

「……ミリアさんにクラネルさん? それとキューイですか」

怪訝そうな表情を浮かべたりキューさんがすつと身を隠して此方を窺う。瞬間——ベルが目にもとまらぬ速さで土下座、の様なモノを披露した。本場の土下座と比べると多少不恰好ではあるが。

「……すつすいませんでしたああああああ」

「あの、えーと、ごめんなさい」

俺も頭を下げると、リユーさんは困ったような表情を浮かべて視線を逸らした。

リユーさん曰く『近くにモンスターの気配を察知したのでナイフを投げて打ち落としたらミアさんとキューイでした』との事。

近くを飛行するモンスターに気付いて気配を消してたけど、離れる気配が無い処か近づいてきたので危険と判断して対応したら、俺とキューイでしたと……。

んで近くで何か落ちた音がしたので気になったベルが様子を見に来た所にリユーさんまでやってきて——今日一日でベルはいったい何人の女性の裸体を眼にしたんだか。

隠す気配の無かったアマゾネス二人の肢体は余す所無く見た事は確かだろうなあ。後へスティア様とリリ、あの二人は確信犯……か？
リリの方は驚き過ぎて硬直してただけっぽいけど、へスティア様は確信犯だろうなあ。

「此方こそすいません。まさかキューイとミアさんだとは……お怪我はありませんか」

「いえ、キューイの翼に穴が開いた以外は特に……」

キューイ本人は特に気にした様子はない。と言うかも再生が始まっているので十分ぐらいしたら完治するだろう。……再生能力高すぎひん？

「そうですか。それでお二人はこんな奥地まで何をしに？」

「えっ!? そ、その、ですね、えーと……」

経緯について説明すると色々アレだな。女性たちの水浴びを覗きに行つて見つかつて、逃げ出した先でリユーさんの裸体を堪能しましたーって相当アレだぞ。運が良いなベル。

たどたどしく自分の経緯を話すベル。嘘は一つも混じっていない本当の事を話している。普通に聞かれたらなんだそりやって反応になるだろうし、軽蔑されかねない事柄のはずだが、それでも嘘一つ無く自分の事を話せるのは凄いな。

「なるほど、クラネルさんの事情はわかりました」

「許してくれるんですか……」

「貴方には非がありません。私が責めるのはお門違いでしょう」

「僕が嘘を吐いてるとは……?」

ベルが嘘ねえ。むしろこの状況で嘘一つ無い言葉を放てるベルが嘘吐くつてのは考えづらいよなあ。

「クラネルさん………謙虚なのは美德でもあるのでしようが、自分を貶めるような真似はやめなさい。貴方の悪い癖だ……ミリアさん、貴方にも言っているのですが」

どうして途中でこっちに飛び火するんですかね。自分を貶める発言なんて——滅茶苦茶してますね？ うん、反省します。

「それで、ミリアさんの方は？」

「神に嵌められて水浴びの覗きに加担させられた挙句、見つかって逃げ出して此処までー。っていうベルを私がキューイと一緒に探しました」

んで、森の木々が邪魔で降りれないから、近場にあつたぽつかりと空いた空間、水場の所に着地しようと近づいたらなんか察知不可能な攻撃が飛んできて打ち落とされたよ。

「なるほど、おかしなモンスターだとは思いましたがそう言う事でしたか」

水晶と木々の間を慣れた様に歩いて行くリューさんの後ろに続きながら、俺とベルは顔を見合わせる。

野営地まで送ってくれるそうだが、どっか寄り道するらしい。

「あつ、遅くなっちゃいましたけど、わざわざ助けに来て頂いてありがとうございました。こんな所まで………」

「そういうえば、わざわざ助けに来てくれたんですね。ありがとうございます。ございますリューさん」

ミアさんが凄く怒りそうなモノなんだが。大丈夫ですかね？

……リューさんの顔色が若干悪くなった辺り、割と怒られることさせてしまったらしい。

「気にしないでください。それに遠からずこの階層に足を運ぶ用事もありません」

気を使っている訳ではなく、本当に用事があるらしい。元冒険者だつて言う話だし——仲間の遺影でもあるのかも知らん。

「神ヘルメスから私の話は聞きましたか？」

「いえ、何も……」

「特には聞いてないですね。強いて言うなればミアさんにどやされるのも厭わずに駆け付けてくれたってぐらいですが」

今回の同行してくれた経緯は聞いたが、それ以上は何も聞いていない。特に過去に関しては——あの店の店員は何かしら裏がある人が多そうだし。おちゃらけた態度のアニヤクロエの二人も何かありそうだしなあ。特にクロエさん、あの人暗器使いなのか何処からともなく鉤爪みたいなナイフ取り出したり、気配が消えうせたりすることあるし。

……いや、アーニヤさんも何かモツプを短槍みたいに扱うし、ルノアさんの拳はヤバい威力だし。厨房の調理人達もいつの間にか気配無く背後に回り込み込んでくる時あるし？

あの店の人たちってやっぱり訳ありなんだろう。そういう意味ではシルさんは一般的な戦闘力しか持ち合わせて——もしかしたら猫被ってる可能性もありそうだけど、その事に言及するとヤバそうだしね？

「私の素性を知る者が現れたなら、いずれ貴方達にも知られるでしょう。……自らの口で話せなかった事を、後悔したくない」

身勝手ですが聞いてくれますか、かあ。本人が納得してるのならそれでいいと思う。こっちは聞きに徹するだけだしね。

リユースさんの口から語られる過去については、まあ……否定できないというか、何とも言い難い気持ちになった。というか要注意人物一覧に記載された【疾風】ってリユースさんの事だったのね。賞金は既に取り消されてはいる。

経緯としてはリユースさんが復讐をしているさ中に闇派閥にかかわりを持っていた幾つもの商会が合同で報復を恐れて出した賞金だったのだが、その後の調べでガネーシャファミリアが叩き潰したらしい。

……フレイヤファミリアからの情報提供があったって話もあるが、其処らはどうでもいいだろう。

元が善性の、正義を掲げたアストレアファミリアの眷属にして、常

に身元を隠して行動する謎の覆面冒険者。【疾風】とはそういう人物であつたと、別に復讐する事を否定はしないし、俺が言える事は何も無い。

俺だつて似たようなモンだろ。元はゲーム好きの一般人、糞女の所為で詐欺師に、その女を見殺しにして——あ、俺つて残つた糞女の伝手使いまくつてたじゃん。報復として潰すでもなく手足の如く使つてたし。吐き気する屑じゃん。

歩みを進めるさ中、辿り着いた場所は水晶と木々に囲まれた猫の額の小さな広間。中央に盛り上がる土の中央には朽ちた旗。描かれていた筈のエンブレムは読み取れない程に朽ち果ててしまった旗の成れの果て。

周囲を囲む様に突き立てられている様々な武器。戦斧、杖、曲剣、長剣、短剣、刀、弓、細剣、杖、大剣。

過去に存在したアストレアファミリアはダンジョン内で罠に嵌められ、リユー・リオンを残して全滅。

主神はオラリオの外に逃がされ——逃がした理由は女神の身柄を守る為ではなく、これから下劣な行為に及ぶ己を見て欲しくない為であつたらしい——復讐に囚われた元正義を掲げた冒険者は、復讐鬼へと堕ちた。

その復讐劇は凄惨に過ぎた。関係を持った者まで殺し尽くさんとする狂おしい憎悪に塗れた、下劣な行い。

自らの胸に宿る憎悪を晴らさんと、ただひたすらに復讐の対象を見つけ出さんとし、殺す。

途中から自分でもおかしいと気づきながらも、それでも途中で止まれなくなつたリユー・リオンの最期。

冷たい雨の降る、人気の無い裏路地。対象が雇っていた護衛の反撃を受けて傷ついた身のまま、次の復讐対象を頭に思い浮かべようとしても、全く出てこず。これで復讐は終わったのかと自問自答を繰り返すさ中に感じた空虚さ。

復讐したはずなのに、どれだけ殺しても胸にぽっかりと穴が開いた空虚感だけしか残らない。狂おしい程の激情が抜け落ちた結果——

——生きる気力も失った。

自分でもわかる程に自分の行いが愚かだったと気付いて、此処の暗く、冷たい裏路地で朽ち果てる姿こそ自分にふさわしいのだと目を閉じた所で——シルさんと出会った。

「それで豊穰の女主人に……」

「はい。ミア母さんは全てを知った上で、受け入れてくれました」

冒険者時代において常に覆面を被っていた事が幸いし、髪を染め、【疾風】の名を捨てるだけで隠れる事が出来た。顔を知る者が居ないからこそ、それが可能だった。

「……耳を汚す話を聞かせてしまつて、すみません」

「そつそんな……」

「詰まる所、私は恥知らずで、横暴なエルフという事です」

そうかな。そうは思わないが。リユーさんが恥知らずで横暴だというなら、俺はどうなるんだか。

「お二人の信用を裏切ってしまうような」

ベルが拳を握り締めている。俺は——どう言えばいいのかわからん。

「リユーさん。……自分を貶める様な真似は、やめてください。僕も、怒ります」

リユーさんの台詞まんまだね。まあお前が言うんだつたのは否定しないし、茶化す真似はしないが、かといって俺は何も言えないしなあ。

「これは、一本とられましたね」

振り向いて優しい気な笑みを浮かべたリユーさんの顔を見て、肩を竦めた。

「私が何を言ってもブーメランなので、私からは何も言えないですね」

でも——俺なんかよりよっぽどマシな人柄なのはわかる。

「ミリアさん？」

「ミリア？」

ベルの怒ったような表情が、此方に向いた。けれども、厚顔無恥な行動をとっているのはリユーさんだけではない、俺も同様だ。

「リユーさんは、私の過去についてはご存知ですか？」

「……………店で、【勇者】^{フレイバー}と会話していた事は存じていますが」

初めて豊穡の女主人に出向いた日。【勇者】^{フレイバー}フィン・デイルムナに対して過去を話した。

元は、憧れのあの人の子として在った温かな日々。糞女が全てを打ち壊して何も出来ずに引きずり込まれたドロドロに濁り切った人を騙し、陥れる塵屑に劣る下劣な日常。

いつの日にか自分が誰かすらも失って、糞女の手のひらの上で転がる毎日。

そして——唐突にやってきたその日常の終焉。

しようもないミスからの、報復による糞女の死亡。目の前で殺される糞女を、笑うでもなく、嘆くでもなく、雇った殺し屋に『依頼取り消しするから取り消し料いくらになる？』って電話してたんだ。

一言、たった一言『あいつらを片付けろ』と言えば、救えたはずの命。恨みもあつたし憎んでもいた、けれどもあの場において感じたのは、脱力感だった。

その後に俺がとつた行動は、復讐に燃えるでもなく、すっぱりと足を洗うでもなく、惰性で人を騙し陥れる日々。屑に堕ち切った俺は、既に抗う気力も、光ある普通の日常に身を置く事も出来ずに惰性で詐欺師を続けていた。

そんな俺からすれば……復讐ですら高等な行為だと思ふのだ。殺し屋すら雇って殺す寸前にまでいっておきながら、『まだ早い』『明日には』『あと数日待ってくれ』と依頼を先延ばしにしていたぐらいだし。

——殺しても死ななそうだなって思っただけだけれど。

「結局、私は崖から落ちて意識を失うまで……ヘステイア様やベルと出会うまでずっと、人を騙す事をやめられませんでしたよ」

——『ミリカン』のサービスが終了していなくて、自分がかつて使用していたアカウントが抹消されていなかった事に気付いて、飛びつく様に『ミリカン』を再開したりはしたが。蛇足、だろいなあ。

『ミリカン』の公式大会。優勝者にはなんでも願いが叶う権利が与

えられる。

まあなんでもって言ってもゲーム内で出来る事か企業がかなえられる範囲でと言う注釈は付くが……。

あの公式大会で優勝した者はこれまで『ミリカン』制作者代表の白野氏と直接会話し、ゲーム内に実装してほしい物なんかについて話し合う事が出来た。

例えば——フェアリー型のキャラ全員に超ごつつエロい淫魔サキユバスの衣装を出してくれとか。

他にも様々な願いがあつたが、その殆どがゲーム内に反映されて実装されていた。

ミリア・ノースリス用のエロい淫魔衣装サキユバスや、翼や尻尾の装飾品アケセサリーを淫魔風に変化させる外装アバターが実装されたりしてたし。

他にもなんかそれは良いのか？って疑問を覚える外装アバターが数多く実装されたのもその公式大会優勝者が望んだからだ。

まあいくらなんでも全裸外装ヌードアバターを実装するのはやりすぎだとは思つたが。ニツプレスと前張りのみって……18歳以上のプレイヤーにしか見えないっていうフィルタリングはされてたけどさあ。

まあ、其処ら辺のぶっ飛んだ自由さっていうのが人気の秘訣だったんだがね。

俺も優勝すれば、あの人と会えるって意気込んで——五年かかって優勝までこぎつけたのは良いが。その頃には老衰である人は死んでいたって訳だ。笑えるわ、もっと早く普通に正面から会いに行けばよかつたものを。

「ミリアさん、貴女は自己否定の気が強すぎる」
「いや、リユーさんに言われたら立つ瀬がないんですが……」

リユーさんも大概じゃない？俺も大概だけどき。ベルが怒った様にじーつと見つめてくるのに対して、肩を竦めるぐらいしかできない。

怒るのもわかるが、こればかりは……ね。やっぱ、根本の所にある過去の一連の流れは、否定できない。

「ミリア、僕は——」

「でも、こんな私でもベルは家族だファミリアだって言ってくれましたから」
「——うん」

ミリア・ノースリスであるが、過去は変えられない。否定できない。過去があるから今が在る訳で……だからこそ。俺は手を差し伸べてくれた二人に何かをしたい。

薄汚れた、人を騙して手にする汚れたモノじゃなくて、自分の手で生み出したなにかを残したい。

「こんな私でも家族ファミリアだって言ってくれる人がいるんですよ。リユーさんだって同じでしょう」

ヘステイア様もそうだし。ベルだってそうだ。俺みたいなりユーさんと同じ、それ以下かもしれない屑に堕ちていても、手を差し伸べてくれた人がいた。その手を取れた。

過去に想い馳せるのは仕方ない。俺だっていまだに気にしてしまう事がある。だからこそ、できうる限り前を向く。

「豊穰の女主人、良い所じゃないですか」

あの場所があるなら、リユーさんは一人じゃない。

俺もヘステイアファミリアがあるからこそ、一人じゃない。

「それじゃダメですかね」

「それは……そうですね」

苦笑を浮かべたリユーさんの表情。

「クラネルさん、貴方は優しい。ミリアさん、貴女は汚れてなんていない」

汚れてない、は言い過ぎだ。過去を否定は出来ない。あの頃の自分は本当に汚い人間だった。人に相対した時に『騙しやすそう』とか『こいつは面倒そうだ』とか評価下してた事があるんだぞ。まあ、わざわざ口にして否定すると今度こそベルが怒るからしないが。

「貴方達は尊敬に値します」

尊敬される程の人物じゃないさ。やりたい事を見つけて、それに手を伸ばしてるだけだね。

悩みばっかり抱えて、どうすりゃいいのかわかんなくてあっちこちちふらふらしてる迷子の子供。

大人ぶった考えは出来ても、感情が子供っぽいのはヘステイア様とベルの影響か、それとも……あの人から引きはがされたあの日から全く成長できていなかったのか。

「其処まで言われると照れますね……」

「下らない事で悩みすぎじゃない？キユーイキユーイ？」

なあキユーイ、今お前なんて言った？ 下らない事ってお前さあ

……。竜にはわからんよなあ。

第八十四話

昨日のベルの覗きの一件は全て神ヘルメスが悪い。と言う結論に至った、と言うかそれで誰しもが納得した。

普段の神の行いからして、神ヘルメスが悪道へとベル・クラネルを落とす為の傍迷惑な神の悪戯と言われても誰もが違和感を覚えなかつたからだ。

後、ベルにはとりあえず見知らぬ神……いや、例え知り合いだったとしても神に不用意について行くなどは注意しておいた。多分無理だけど。

一人一人、覗いた相手に土下座して回ってたし、わざわざあの場に居た俺にまで謝罪に来るとは……俺の事見てなかつたよな？ 別に悔しくはないが、かといって謝られてもって感じではあつた。

男性団員、えつと親衛隊？ なる謎の組織がアイズさんやテイオネさん、テイオナさん等の幹部陣の裸体を覗いたベル・クラネルに報復せんと動こうとしていたらしいがアイズさんが説得してくれたおかげで事無きを得たとか、いろいろな事があつた訳だがそこらへんは全て解決済みだ。

んで問題は、其処じゃないんだ。全く違うし関係ないというか……ただの嫉妬に狂う狼さんがですな。

「ごんの兎野郎ツツ!! よりによつてアイズを覗いただとツ！ テメエツ、俺にも出来ねえ事やりやがつてえツ!!」

片付けをし始めたロキファミリアの野営地の中心部。これから出発するらしい先行組が武装などを準備している所を見ていた兎ベルは狼ペイト・ローガさんの嫉妬の嵐に襲われていた。

………ただの嫉妬だよなあ。覗きたきや覗けよ、嫌われても知らんがな。

覗きする勇氣———勇氣じゃなくて蛮勇か———も無いのに人に文句言うなよ。……いや。人としては正しいんだけどね？

少なくともヘステイア様含め数多くのロキファミリア団員等から嚴重注意されてんだからもう許してやってくれないかね。

懸想してる相手の裸体見られたからって……そんなに怒るか？

……普通は怒るのか。

「うるさいなー、もういいの」

「ヘルメス様が全部悪いって事で話はずいたでしょ」

「放せバカゾネスッ！　っていうか何でアイツは此処に居んだよっ」

「ベトベトしつこいわよ」

「そだぞー」

さしたる第一級冒険者の狼人も、アマゾネス二人がかりには勝てんか。ズルズルと引きずられていくベート・ローガの姿を見送っている
とアイズさんがやってきた……遠くの方のレフイーヤがメロメロにな
っててるように見えるんだが、何アレ？

ベルに気付いたアイズさんが足を止めた。剣と鎧を装備した完全
武装状態を見るに、これから出立するっぽい？

「ア、アイズさんー！」

「……ベル？　ミリアも、どうしたの？」

今からモンスター、それも階層主との戦闘が控えてるはずなのに気
負った様子の無い第一級冒険者の姿に冷や汗が流れた。そりゃ、レベ
ル6からすりゃあのゴライアスなんてただの案山子かかしなんだろうが
……。

「もう、行くんですか？」

「うん、先に出るパーティに組み込まれたから」

ロキファミアリアクラスの大きさの遠征隊ともなれば、その人数はか
なりの数に上る。

ダンジョンの通路等の中には比較的広い場所なんかも存在するが、
下に進むための近道には一部細道等が存在したりする。其処を利用
しようとする大人数での移動はかえって時間がかかってしまう。

他にもあまりにも大人数で動く単純に邪魔邪魔という事になりかね
ない。其の為、基本的に大人数になると二つから三つ程に班を分けて
行動するのが遠征の基本らしい。

と言っても中層の中間地点である18階層までの話で、19階層以
降は一塊で動くらしいのだが。

……いずれ、ヘステイアファミリアも同じように遠征を行うのだろうか。だとするなら今の内から技術や遠征行動を学んでおくべきか？

「あ、あの……気を付けてください」

気落ちした様な、彼我の差を見せつけられてやるせない気持ちになりながらも、早く追いつかなくてはと言う焦燥と憧憬に身を焦がすべルの姿。そんな姿見せつけられたらこっちも焦る。また跳躍して何処か遠くへ行ってしまうそうだ。

「……君も、気を付けて」

口元をほのかに綻ばせて笑みを浮かべたアイズさん。心配されて悪い気はしないらしい。

自分の実力に自信がある者というのは心配されると怒るっていう者も居るが、アイズさんは別らしい。むしろ心配される事を喜んでいる？

「ミリアは？」

「んー、たかが上級冒険者なりたてが第一級冒険者にかける言葉なんてそんなにないですけど……」

あー、これ頼むのってどうなのかね。でも、今の俺の実力じゃ返り討ちに遭うのが関の山だし少し頼んでおこうかなあ。

「そうですね。出来るならば階層主ゴライアスの顔を吹き飛ばして倒してくれるとありがたいですかね」

「……？ 何かあったの？」

「そりゃ追いかけて酷い目に遭いましたからね……」

いずれ、自分であの顔を吹き飛ばしてやりたい所ではある。が……いつになる事やら。

頷いたアイズさんがまたねと小さく手を振って去っていくのを見送る。姿が見えなくなるまで見送ってから、ベルの袖を引いた。

「私たちも準備しましょう」

「うん、そうだね」

その憧憬の瞳は、いつも遠くを見ているなあ。飛翔する様に進む姿は見ていて凄いと焦がれると同時に、追いかける身からするといつ追

いつく事が出来なくなるのか少し不安になる。

リヴィラの街の物価は阿呆みたいに高い。まあこんな危険地帯で取り扱う消耗品だ、高くて当然だと思う。

ぼったくりだなんだと言ってはいるが、需要と供給の関係がある以上仕方ない事だ。

「そら、ミリアも貸せ」

「おねがいします」

俺の銃剣型の杖と言う変わった武装をヴェルフに手渡す。作成者はヴェルフなのだが、やはり変な表情を浮かべている。

砥石やその他武裝整備用の道具を使って手慣れた様に銃剣部分の刃を研いでいく。刃先の部分が欠けているのに気付いたヴェルフが口をへの字に曲げて呟いた。

「あー、欠けてやがる。地上に戻ったら作り直した方が良いな」

「他の部分はどうです？」

「そうだな、此処の部分の耐久が気になるな。要求通りに無駄な形にしちまったから、耐久がもともと低かった部分だが……」

一見、ライフル銃の様な見た目に、銃剣を装備した様な杖。ヴェルフに無茶言って作って貰ったが鍛冶師からすると不満点ばかりらしい。まあ、彼の作品のほとんどは実用性重視だからか、装飾の様にもとれる銃床ストックとか妙な形の柄とかの部分は無い方が良いんだろうなあ。

「ま、地上に戻ったらもつと改良したのを作ってやるさ」

「それは頼もしいですね」

本当に設計図を渡してから作るまでが早い上に、要求通りの形に仕上げてくれるヴェルフには頭が上がりらん。

とはいえ作り直すならまたキューイに血を頼まないといかんなあ。

「結局、道具は『リヴィラの街』で買ったのか？」

「……いや、同僚あいつらに頭下げて借りてきた」

桜花の質問に苦々しげに答えるヴェルフ。

ヴェルフの同僚、と言うか先輩？ の椿という名のハーフドワーフ

の鍛冶師の女性。オラリオ最高峰の鍛冶師とヴェルフが知り合っているのには驚いたし、俺がヴェルフに作って貰った武装に興味深々で弄り回そうとしてきたりして面倒だったし、『ヴェル吉』等と言う呼び方でヴェルフを弄っていたので苦手意識があるのだろうか。

俺も正直あのノリは少し苦手だ。距離感ガン無視で一気に詰め寄せられるからどう接して良いのかわからん。

「所で、ヘルメス様とアスフィ殿は？」

「せっかくだからまだ観光していく、だそうです。リリ達は先に帰って良いとアスフィ様が疲労の濃い顔で伝えにきました」

……神ヘルメス、か。色々と探ってきていたし、あの手の神って神話通りに面倒な『試練』を人の子に与えてたりとかしそうなんだが。なんか企んでそうで怖い。特に、夜間に抜け出して行っただのは気になるんだよなあ。

リユーさんの方は適当に一人で帰ると言っていたので心配はないが。

ロキファミアリアから借りた天幕を覗き込むが誰も居ない。首を傾げつつも外でヘステイア様を探してるベルの方に声をかけた。

「こつちにも居ないわ」

「何処に行っちゃったんだろう……」

ヘステイア様が居ない。

帰還の準備を終えて皆で集まろうという話になり、ミコトと千草が桜花を探しに行き、ヴェルフとリリが荷物の片付けを、俺とベルでヘステイア様を探しているのだが……。

見当たらない。ベルがステイタスを更新したテントの中にも、野営地の中にも。

「野営地から出るとは考えにくいんですけど」

いくらなんでもモンスタールつこの階層でヘステイア様が一人で行く訳無いしなあ。其処ら辺ちゃんとわかってるだろうし。だとして何処に？

周囲にある天幕も殆ど片付けられて残ってないし、残ってるも天幕も今まさに解体中だ。木々も生えているがヘステイア様が隠れられるほどじゃないし、このタイミングでわざわざかくれんぼなんてしやしないだろう。

二人がかりで探しても見つからんつてのは困るな。ロキファミアアが残っている手前、キューイとヴァンを動かすのもアレだしなあ。

「キューイ、ヘステイア様何処に居るか探してくれませんか？」

「キュイ？ キュイキュイ」

んむ？ あつちの方？

17階層に繋がる道とは真逆の方向に首を向けて『あつちに連れてかれた』と……さて、連れてかれた？ 誰に？

「キュイ？」

さあ？ いや、待て。キューイ、其れは知り合いか？ 違う？

なで止めなかったっ？！ 糞っ！ ロキファミアの目があつて動けなかった、つて仕方ないっちゃ仕方ないが、ヘステイア様が攫われんの知つてて動かなかつたのかよっ？！

「ミリア、どうしたの？」

「ベル、大問題が起きました……ヘステイア様が何者かに攫われたみたいです」

「え？」

誰だ、誰がヘステイア様を——待て、モンスターに警戒する為に歩哨を立てているロキファミアの野営地から、誰にも気付かれずに神一人を攫う？ どうやって？

「ベル、きな臭いです。とりあえずあつちの方の探索を、私はロキファミアに話を通してきます」

慌てたベルがヘステイア様の名を呼びながら走つていったのを尻目に、近場を歩くロキファミアの団員に声をかけるが——やはり、警戒は怠つていなかったらしい。神が攫われたと伝えると眉を顰めつつ『在り得ない』等とのたまいやがる。

「悪いが、他の派閥の神が攫われたとして——おれたちロキファミアが動く理由は無いましてや、予定を遅らせる事はできない」

ああ、わかってた。ロキファミリアの責任とは言い切れない。あくまでも「天幕を貸し与えた」だとか「物資の提供を行った」だとか、その程度の間柄。身柄の安全は自分たちで確保するのが当然なのだから。

「ヘステイア様搜索の為にキューイとヴァンを動かします。文句はないですね？」

「……好きにするといい」

承諾は貰った。ロキファミリアの目がある以上動かせなかった二匹を使って——にしてもベルが戻ってくるのが遅い。何か見つかったら戻って来る様に伝えただが。

先程ベルに調べる様に行った野営地の外れまで走っていけば——

——誰も居なかった。

「キューイ、ベルは？」

他の誰かに伝えに行った？ それはない。少なくとも俺が一番近い位置にいたはずだ、なのに俺を無視してリリやヴェルフの所に向かう理由がない。

「キューイ」

行った？ 何処に？ 一人で？ 一人、ひとり……まさか、ロキファミリアの警戒網を抜けてヘステイア様を攫って、ベルをおびき出す——ヘルメスとアスファイだ、あの二人しかありえない。神のいたずら……ら？

……キューイは知らない人と言った。神ヘルメスかアスファイ。アル・アンドロメダなら間違いなくそう伝えてくるだろう。なのに知らない人？ だと？

糞、決めつけるのは早い。とりあえずあの二人に連絡——キューイ、飛べるか？ ベルを追う。近くに誰か——桜花っ！

大柄な男性、桜花が素振りをしているのを見つけた。とりあえず桜花に『ヘステイア様が攫われた事』と『ベルが一人でおびき出された事』を伝えて、『俺はベルを追う』ことも皆に伝える様に一方的に言い含めてからキューイの足にしがみつく。

「キューイ、とりあえず最優先はベル。ヘステイア様は神だから、危害

を加えるのは無いと思う。けどモンスターもうろついているから急いで、ヴァンは全力で追いかけてきて」

人の子が神に手を出すのは殆ど在り得ない。時折神だとか知ったこつちやねえと神殺ししてしまう『ちよつとやんちやな』眷属がいるらしいが……神々視点で神殺しはちよつとやんちやなで済むのか。

とりあえずその威力抑えめのピストルマジックで撃ちまくろう。殺してしまった場合、ファミリア同士のトラブルに繋がりがかねない。ただでさえ所属してるのが上級冒険者2人しかない最下級のファミリアでしかないヘスティアファミリアだ。ファミリア同士のトラブルになつたら目も当てられん。

死なない様に注意はしてやるが——ヘスティア様俺の家族に手え出したんだ。覚悟しとけよ。

いくらベルの敏捷が高くとも、空を飛ぶキューイが追い付けない程ではない。

……いや、追いつくのに結構時間がかかった時点で相当アレなんだけどね？ それにヴァンが完全に追い付かずにおいてきてしまった。一応、此方の位置は把握しているっぽいので後から合流するはずだ。ヴァンの敏捷もそこそこ高い気がするんだが、ベルは本当に別格過ぎるな。

中央樹の周囲をすさまじい勢いで駆けているベルの姿を見つけて声をかけてなんとか足を止めさせた。

「ベルっ！」

「ミリアっ、神様がつ、僕一人で一本水晶の所まで来いってっ」
ベルが手に持っていた紙切れ。

内容は『【リトル・ルーキー】女神は預かった。無事に返してほしければ中央樹の真東、一本水晶まで一人で来い』って……ううん？ 真東？ ダンジョンの中で方位磁石が役に立たないのに方位で説明するんなよ……。

いや、中央樹の外周を走り回れば見つけられるっちゃ見つけられるけどさ。

「今すぐいかないと！」

「ベル、落ち着いて」

「でも神様がっ」

落ち着け。こういう時こそ一度落ち着いて行動すべきだ。

普通の地上の人間なら間違いなく女神を傷つけるなんて恐れ多くてできない。中には『やんちゃ』な奴らも居るが、そういうのはイヴイルスとかいうのに所属する者ぐらいで、こんな目立つ真似はしないはずだ。

それよりも心当たりはないか。誰かと言い争いをしたとか、リヴィラの街で喧嘩吹っ掛けたとか。

「えっと……豊穰の女主人で『パーティーに入れてやる』って言ってきた冒険者の人たちと会ったけど」

「……………上級冒険者？ 嘘でしょ、ロキファミリアの警戒網を抜けるなんて無理だし、誰かが手引きする——ヘルメスか」

「ヘルメス様？」

ベルは何の疑いももっちゃいないのか。少しは疑う事を覚えた方がいい。神つてのは娯楽の為なら自分の眷属を地獄に突き落とす事だつて平然とする。当然、他の神の眷属だつて娯楽の為なら滅茶苦茶にする神も居るつて話も聞くし。

神ヘルメスが手引きした可能性が非常に高い。

タケミカヅチファミリアの人たち、ミコト、桜花、千草の三人は少なくとも此方に危害を加える真似はありえないし、ヴェルフとリリも裏切るなんて事は絶対ない。

このタイミングで別行動してる時点でかなり怪しいぞ、神ヘルメス。

「私とキューイ、ヴァンでヘステイア様を保護してから援軍に向かいますので、それまでは一人で耐えてください。出来れば時間稼ぎを——最悪、殺しても構いません。手を出してきたのは向こうですか」

序に神ヘルメスも探すか。どっかで高みの見物してるなら——
——遠くから威嚇射撃だけぶち込んでやる。

「殺っ!? いや!?! 殺すのはやりすぎじゃっ」

「ヘステイア様を攫う不届き者に慈悲は必要無いわ。それに私が優先するのはヘステイア様とベル、貴方達だから。最悪の場合は殺すわ」
ヘステイア様やベルが死にかねない場合は、容赦なく殺すぞ。ファミリア同士のトラブルになれば不利なのは此方だが。手え出してきたのは向こうだ、もしもの時は徹底抗戦してやる。最悪、俺一人で相手ファミリアと刺し違えるぐらいはするぞ。

神ヘルメスはアスファイ・アル・アンドロメダの守りがある以上難しいだろうが、たかが上級冒険者程度なら遠くから『ライフル・マジック』で仕留められる。

「それでもっ、殺すのはダメだっ」

……………。優しい、と言うよりそれは「甘い」だけだ。その甘さは命取りになりかねんぞ。

ああ、糞、ベルが殺しに反対なら仕方ないか。

「わかった、殺しはしない。でも手足の一本ぐらいは貰うのは許してください」

遠くから肩か、腿の辺りをぶち抜く。いや、中途半端なダメージは回復薬で治されるからできうるならば行動不能、意識を奪う一撃が――頭撃ち抜くのが手っ取り早いけどそれが出来ん。

「でも」

「此処で問答しても仕方ないので私はヘステイア様の保護に向かいます」

「ファミリアっ」

問答する時間をもつたない。すぐにヘステイア様の保護、それからベルの援護――高みの見物してたらヘルメスに威嚇射撃もぶち込まなくては。

桜花は皆に情報を回してくれただろうか。もし情報を正しく共有してくれたなら、此方を捜索し始めるはず。

リユーさん辺りを引き込みたいが探す時間がない。次はヘステイア様の保護っ！

第八十五話

ヘステイア様はすぐに見つける事ができた。

ベルが向かった一本水晶、そのすぐ近くにある崖の下の森の中。木に縛られたヘステイア様とそれを見張る二人の冒険者。あいつら見た事あるぞ、酒場で絡んできた阿呆の仲間だった奴。

森の中を姿勢を低くしながら駆けていけば、簡単に見つけられた。隠蔽も何も施さずに、ヘステイア様を木に縛り付けるだけ。モンスタールろつくこのダンジョンであんな風に縛り付けられる危険性を何も考慮していない阿呆め。

木々が邪魔で狙撃しにくいが——頭、じゃない、腕、でもない。足だ、足を撃つ。

『ピストル・マジック』……』

いや、待て。今のクラスチェンジはファクトリーだ。なら『麻痺弾』や『睡眠弾』なんかが使える。

《耐異常》で防がれる可能性を考えて『衝撃弾』も用意しとくか。クラスチェンジを行った事により、《魔導》によって俺の足元に映し出された魔法陣が邪魔臭い。隠密に不向き過ぎるだろうに……。それだけにとどまらず弾倉内の残弾数が目で見てわかる形になるってというのが問題だ。

俺の足元に生み出された魔法陣は大円の中に六つの小円が均等に並んでいる。知識のある者ならすぐにわかるだろう、まるで回転式拳銃の弾倉リボルバーの様なのだ。

『麻痺弾』、『麻痺弾』、『衝撃弾』、『衝撃弾』……』

装填する度に、六つの小円に光が灯る。傍から見れば残弾数を足元に表示した阿呆である。

勘のいい奴が見れば一発で露見する弱点だ。

それに加えての装填の遅さ。特殊な魔弾が使えるつちや使えるが………。勘の良い奴や察しの良い奴相手には使えんなあ。

『貫通弾』、『貫通弾』

足元の魔法陣、シリンダーに六つの光が灯ったのを見つつも相手を

伺う。どうやら警戒らしい警戒は一切していないらしい。キューイ、一応回り込んでくれ。

貫通弾は念の為だ。もし麻痺弾も衝撃弾もダメだった場合は……頭を撃ち抜く。それで即死しなきゃ困る訳だが……。

ベルに嫌われる云々以前に、ヘステイア様に二度と会えなくなるなんてごめん。

中央樹の東の森、水晶は少なく茂みが広がっている一本の木の下にヘステイアは縛られていた。

見張っているのはヒーターシールドとモーニングスターを持つ男と、小剣を持つ身軽そうな男。そしてこの場に居ないモルドと言う男。

不可視化を可能とするマジックアイテムを保有した彼らが「リトル・ルーキー」、ベルに対する『指導』をする為に誘き出す目的の為に攫われたのだ。

「この縄を解け！」

「ぎやーぎやーうるさい女神様だ事」

「元気が有り余ってるみたいだねえ」

じたばたと暴れるヘステイアを眺めつつも、二人は退屈そうに溜息を零す。

「しっかし、本当に暇だ」

「俺達も上に行きたかったよなあ」

「ぐぬぬ、『指導』なんて訳の分からない事にベル君を巻き込むなーっ！」

縄を軋ませて叫ぶヘステイアに対して二人は眉を顰めて顔を見合わせた。

「面倒だし、気絶させとく？」

「神を殴るって？」

「っ！」

凶悪なモーニングスターを見せつける様にヘステイアの前に突き

付ける。怯んで口を閉ざしたヘステイアを見ていた男が面倒臭そうにつぶやいた。

「大人しくしてりや乱暴はしませんよ」

「そうそう、だから大人しく——ひぎうっ!？」

パアンツと言う乾いた音色。木々の間をすり抜けて飛来した魔弾が小剣を腰に風いだ男の背中に着弾する。瞬間、男は痙攣しながら倒れ伏した。

「なっ!? てき——ひぎゆっ!？」

盾を構えた瞬間、盾の守りから飛び出していた足の部分を魔弾が穿つ。着弾と同時に火花が弾けてその体を麻痺させ、男は小刻みに痙攣しながら倒れ伏した。

「なっ!? 一人ともどうしたんだいっ」

唐突に倒れ伏した二人の姿にヘステイアが驚いていると、茂みを掻き分けて一人の小人族の少女が呆気にとられた様な表情のまま現れた。

「ええ、思ったより効果的じゃないですか。なんていうか、もうこれ一本に絞った方が楽だったのかも」

「ミリア君っ!」

古びたローブに皮ブーツ。左手の竜鱗の朱手甲がやけに目立つミリアが倒れ伏した男に近づいてその背中に指先銃口を押し当てて引き金を引いた。

『ファイア』『ファイア』

響くのはパンパンという乾いた音色。倒れていた男達がかエルが潰れる様な声を出して気絶したのを確認してから、ミリアがヘステイアに近づく。

「助けにきました。ヴァンがもうすぐ到着しますんでヘステイア様はヴァンと一緒にキャンプ地に戻ってください。私はベルの方の応援に向かいますから」

落ち着いた声色でこれからの予定を口にする姿にヘステイアが一瞬眉を顰める。

「この子達は放置していくのかい?」

「……ヘステイア様もですか。神を脅迫する様な屑は放置で良いと思うんですけど」

非常に嫌そうな表情を浮かべてミリアが気絶した二人に吐き捨てる。

ええ、ヘステイア様もかよ……。予想外に簡単に仕留められたのでこのままヘステイア様をヴァンに保護して貰って帰還させて、俺はベルの方に行きたいんだが……。

「申し訳ないのですが、ヴァンに三人を護衛させるのはちよつと……無駄が多いと言いますか」

「………わかった。ぐめん、無理を言ったね」

危害を加えてきたとはいえ、地上じこの人間もだからって事か？ 神の視点てんってのはよくわからん。

とはいえ本当に保護する余裕はない。念には念をで気絶させたが……モンスターに食われたら、まあ自業自得じごうじとくって事で諦めとけ。俺を恨むなよ？

一応、茂みで隠れる様にはしといてやるけどさ……。

木々を掻き分けてヴァンが追いついてきたのを確認してから、ヘステイア様に向き直る。

「では、私はベルの方に向かいますので。ヴァン、ヘステイア様を護衛してキャンプ……いえ、リリ達と合流してください。探しに来てくれるはずなので、当然ですがヘステイア様に怪我なんてさせない様にしっかりと護衛するように」

俺はキューイに飛んでもらってすぐにベルの方に向かわないと——
——なんか上の方から歓声が聞こえる。ベルも其処そこに居るらしいが、
私刑リンチにでもあつたら……。

「ミリア君、気を付けてくれ。相手は『透明状態』の魔道具マジック・アイテムを持って
いる」

「了解……最悪、殺しますが」

ヘステイア様は殺す事に関してはどう思ってるんだ？ 流石にべ

ル君みたいに『殺すのはダメ』とか言われると非常に困るんだが。
「……積極的に殺すというのは良くないけど、非常時なら仕方ない」
「わかりました」

よかった。ヘステイア様まで不殺主義だったら流石にきつい。

一方的な戦いが繰り広げられている水晶の決闘場を見下ろしながら、ヘルメスは眷属の批難の声を浴びていた。

「悪趣味ですね……面白いですか。こんなものをみて？」

「きついなあ、アスファイ」

高い崖の上から見下ろす二つの視線の下。ベルが透明状態となっているモルドによって一方的に痛めつけられ、その様子を興奮の雄叫びを上げて観戦する無法者達。

「ベル・クラネルに何か恨みでもあるんですか」

「んー、むしろ俺なりの愛かな？ ベル君は人間の綺麗じゃない部分を知らなさ過ぎる。悪趣味でもなんでも知ってほしかったのさ」

決闘場にて今まさに踏みつけられているベル——モルドの姿が不可視な為、ベルが地面に倒れているだけにしか見えない——それを見下ろしながらヘルメスは神愛^愛を語る。

「人の一面を——ま、娯楽が入っている事は否定は——」

ヘルメスが気楽そうに肩を竦めようとした瞬間。彼の帽子が吹き飛んで宙を舞う。

遠くに響く甲高い銃声^{おと}が遅れて届く間にも、続けて二度、三度と中空を舞う帽子がふわりふわりと浮き上がり——ヘルメスの頭に乗った。

「……………」

「ヘルメス様、今のは……」

「いやあ、どうやら相当怒らせちゃったみたいだ」

ヘルメスが手に取った帽子。

その帽子に空いた三つの風穴を通してヘルメスの橙黄色の瞳が小型の飛竜の脚にしがみついて中空を行く小人族の少女の姿を捉えた。

「なあ、アスファイ」

「なんですか、ヘルメス様」

「……彼女と同じこと、出来る?」

「無理です」

彼女からの無言の警告にヘルメスが頬を引き攣らせて呟いた。

「いや、彼女は本当に恐ろしいね」

崖の上から悠々と見下ろす神の如き態度の神ヘルメスの帽子を『ライフル・マジック』で適当にぶち抜いてやった。アスファイの方は反応しなかったのだがアレは気付いててさせてくれたのか? それとも本当に気付かなかったのか? どっちかは知らんが、悪趣味な事をしている事には変わりはないので俺からのお礼だ。

小さな台地。多少の凹凸は見取れるが、殆ど気にならない程度。平地と言ってもいい7M程の広さの一段隆起した舞台。まるでステージの様にも見受けられる其処にベルは居た———と言うかベルしか見えない。

「キューイ、位置はわかります?」

「キューイキューイ?」

むしろわかんないの? だってよ。キューイ相手だと不可視化つて意味無いっばいな……とはいえ俺から見るとベルが一人で勝手に転げまわっている様にしか見えん。狙撃しようにも難しいか。

……突っ込むしかないな。ヘスティア様の安全は確保してきたし、後はもう知らん。麻痺弾ばら撒きながら突っ込もう。

『麻痺弾』『麻痺弾』『麻痺弾』『麻痺弾』『麻痺弾』……はあ、装填の事考えたら別の方が良いかも」

観客として雄叫びを上げているのは総勢二十人ほどの上級冒険者。九割が近接系、一割が魔法系と言った感じか。見た目からの判断だがどうだ、魔法使いっばいのは三人しか見えん。

ん? あの坂を駆けあがってきてるのは———ヴァンの合流に時間をかけすぎたか、もしくはヴェルフ達が早かったのか。ヴェルフ

と桜花、ミコト、千草が武器を手に駆け上がってきているのが目についた。良い感じに攪乱するか。ベルの方は不可視の敵相手に防戦一方とはいえ戦えている。むしろ見えない敵相手に防戦を続けられるのは凄いな。もう少し耐えてくれ、ヴェルフ達の方が数的に不利過ぎる。援護しないとレベル1のヴェルフが危険だ。リリの姿が見えないのはヘステイア様の方に行つたからか？

観戦していた上級冒険者の最後尾。飛来した矢を叩き落として後方より迫る「リトル・ルーキー」の仲間の姿を視認した者達が各々の武器を引き抜いた瞬間——連続する乾いた音色と共に体を痙攣させながら倒れ伏した。

「なんだっ！」

「おいっ！ あいつら毒なんか使いやがったのかっ!？」

驚きの声を上げる上級冒険者達。「タケミカヅチ・ファミリア」が毒物などを使用するタイプのファミリアでない事は周知されている為、不自然に倒れた仲間に警戒を強める彼ら。

それに対して桜花達も眉を顰め——ヴェルフが空を駆る翼を指さした。

「ミアアだっ」

「上から援護するわっ」

にこやかな笑顔を浮かべながら、緋色の小飛竜の脚にしがみ付いて宙を舞うミアア・ノースリスの姿を確認した無法者達が声を上げた。

「ドラゴンタイマー」だぞっ」「飛竜を連れてやがるっ」

「射落とせっ！」「魔法で打ち落としまえっ！」

魔法使いが各々構えをとり詠唱を始め、弓を持つ者が矢を番えるが、それより早くミアア・ノースリスの放った魔弾が降り注ぐ。

『ピストル・マジック』『リロード』『ファイア』『ファイア』ツ」

「ぐあっ」「あいつ、詠唱が早え」「だが威力は低いぞっ！」

弓を手にした者に的確に魔弾が降り注ぎ、弓を破壊して攻撃手段を失わせる中、魔法使いの詠唱が完了したのか空を駆るミアアの方に魔

法を発動しようとして——ヴェルフの対魔力魔法アンチ・マジック・ファイアが炸裂する。
『燃え尽きろ、外道の業』

『ウィル・オ・ウィスプ』が発動し、今まさに魔法を発動せんとしていた三人の魔法使いを強制的に魔力暴発イクニス・ファトウスさせる。咲き誇る三輪の爆炎。

強制的に爆発させられた冒険者が口から煙を拭きながら黒焦げになって倒れ伏す。

「おかしな魔法を使う奴が居るっ」「あいつから潰せっ」

ヴェルフに迫ろうと冒険者二人が足を踏み出した瞬間、無数の魔弾が降り注いで出鼻を挫く。

「糞っ」「さっさと【ドラゴンテイマー】を仕留めろっ!」

「弓が全部壊されちまったっ!」「魔法も無いぞっ!」

遠距離攻撃を真つ先に潰され、空を舞うミリア・ノースリスを仕留める手段を失った無法者達が次々に沈められていく。

ある程度数は減ったか。

空を駆けながらの射撃。威力低めで撃った所為か舐められまくったが、かといって無視できる威力ではないという微妙なラインを狙ったおかげかこつちを警戒して桜花達がやりやすくなったはずだ。

ベルの方は——ナイフ二本で相手の剣をへし折ったらしく。くるくると宙を折れた刀身が舞っていた。

「でえやあっ」

「がああっ!?!」

回し蹴りがヒット。頭部に装着されていた兜状の魔法道具マジック・アイテムが砕け散ってモルドの姿が視認出来る様になった。

キューイ、其処の水晶の辺りに下してくれ。

「ぎッ、ぐがあ……クソガキがあああ……」

「其処までにしてください」

撃つぞ。それ以上ベルに攻撃するなら。撃つ。

今まさにベルに飛び掛かろうとしているモルドに指先銃口を突き付け

て宣言する。

「それ以上、余計な事をするとか撃ちます」

「ぺっ、黙ってるっ、竜が居なきや何も出来ないガキがつ！ 撃ちたきや撃てっ、どうせ大した威力なんてねえ癖にでけえ口叩いてんじやねえぞっ」

ベルがナイフを構えたままモルドを睨み、モルドが俺を警戒しつつもベルの方に向いたままこちらに怒鳴ってきやがった。おいおい、あんま嘗めるなよ。

「私の魔法の威力、大したこと無いって言っていましたかね」

「ああ？」

『シヨットガン・マジック』『リロード』……そうですね、この水晶とが良い感じそうです」

人の胴よりはるかに太い水晶。丁度よさげな所にあつたのでキューイに近場に下して貫つたのだ。

指先^{銃口}を水晶に優しく向ける。モルドはこつちをちらりと見てからベルと睨み合い、姿勢を低くしてベルに突撃をかまそうとしやがる。おいおい、こつち見ろよ……。

先程までの魔法は加減していた。威力は低く、貫通力も下げて、詠唱の精度を落として、消費が少ない代わりにモンスターなんて殆ど殺せやしないちんけな威力の魔法としか見えなかつただろう。

『ファイア』

響き渡る破砕音。砕け散った水晶の欠片がキラキラと舞う中、啞然とした表情を浮かべたモルドの方に再度指先^{銃口}を向けて優しく、出来る限り優しく笑い掛ける。

「こんな威力ですけど——こつちがお好みでしたか？」

「ひいっ」

柄だけになった剣を取り落として後ずさるモルド。そんなに怯えんなよ……、つか周りの冒険者も皆こつち見てるし、なんだよそんなに驚いた表情してどうしたよ。

「皆さんも、此方がお好みでしたか？」

「はんっ、あんなのただのはったりだっ」「パルウム如きが舐めやがっ

てっ」

挑発に対する反応は芳しくない処か、火に油を注いだようになってしまった。

まあ、火に油を注ぐと言っても注ぐ油の量を尋常じゃなく増やしてやれば火は消えちまうんだがな。

『ファイア』『ファイア』『ファイア』

連続する破砕音。近場にあった水晶を次々に粉々に粉砕して周辺にキラキラとした水晶片が舞う。水晶片が足元の魔法陣の光を受けて輝き、眩しいぐらいだ。

今まさに剣を持ってこっちに突撃をかまそうとしていた冒険者も含め、全員が完全に止まった。

「もう撃てないとも思いますか？ 試してみます？ 誰からいきましよう？」

お前か？ お前でも良いぞ。其処の黒焦げの魔法使いでもいいな。

次々に指先銃口を向けて笑顔を向けてやれば慌てて剣を投げ捨てて投降する奴まで出る始末。ふざけてんのかよ。

剣戟の音が静まった空間。ようやく一息つける感じか？ ……ベルの怪我也気になるんだがなあ。

「邪魔なので、どっか行ってくれませんか？」
「……………」

モルドは俯いたまま動かない。其処まで怖がらせた積りはないんだが。

執拗な打撃を受けたベルの傷も気になる。唇でも切ったのか血が出てるんだ、早い所回復してあげたいのに、こいつが居る所為で無理じゃ——俯いていたモルドが雄叫びを上げて突っ込んできやがった。

「舐めてんじゃねえぞおおおおおおおおおとおおお」

……舐めてるのは、どっちだよ。

ああ、もういいだろ。ベルが一発やり返したっばいからそれで許してやろうかと思ってたが、ダメだな。

距離はかなりある。相手が此方に迫りつくより先に、殺せる。

『ピストル・マジック』『リロード』……『ファイア』

放たれた魔弾が描く軌跡。指先銃口から飛び出して真っ直ぐ進む魔弾。手加減なんて一切していない。鉄製の鎧を一発でぶち抜ける威力はある。外す軌道ではない。

ベルを痛めつけたんだ、本当はさんざん痛めつけてから殺したい所だが、一撃で楽にしてやるなんて相当慈悲深いだろ？

——俺の家族ファミリアに手え出したんだ、死ね。

外す、なんて考えつくはずがない。外れる訳が無い、その一撃が——弾かれた。

真っ直ぐ突っ込んでくるモルドを追い抜いた白い影。ベルが間に割り込んで魔弾を叩き落とし、同時に背後から迫るモルドの剣を受け止めて罅迫り合いを始めた。

「ああああああああああっっっ!!」

「ああああああああっっっ!!」

おい、なんだそりゃ。モルドは今まさにベルに救われたんだぞ？なのに全力で罅迫り合いはじめて——少しずつだがベルを押し込んでいく。折れた剣の先が頬に触れてベルの頬に切れ込みを入れ始めた。

呆気に取られてしまったが、このままだとベルが競り負ける。横槍と言われようが知らん。元々が人質を取る形での卑怯な行いしたのは相手だ。殺す。

「……はあ、『ファ——』」

「ダメだっ!!」

——は？

「殺しちゃダメだっ!!」

「リトル・ルウウキイイツツ!!」

ギリギリギリツとナイフと折れた剣が火花を散らす中、ベルが叫ぶ。

「ミリアにはっ、人を殺してほしくないっ」

何を、言ってるんだ。殺すな？ この期に及んで？ 馬鹿なのか？
これだけの状況で突っ込んでくる阿呆を殺すなど？ 無い、其れは

無いぞベル。

『フアイア』

「ぐあっ」

「っー」

モルドの足を撃ち抜く。

モルドが姿勢を崩した事で鏢迫り合いに競り負けかけていたベルが一気に押し返してモルドが倒れ込んだ。

「ベル、其処をどいて」

「……ダメだよ」

で、ベルは俺とモルドの間に割り込んで片膝を突いたモルドを庇い始めた。

なんでそうなるんですかね。

「どいて、っって言ってるんだけど」

「もう、モルドを攻撃する必要はないっ」

片膝を突き、痛みに青褪めた表情を浮かべているモルド。ベルをさんざん痛めつけたんだから自業自得な訳で、しかも降伏勧告を無視したんだから、別に殺したって構やしないだろ。

「ベル」

「ミリア、もうこれ以上はやりすぎだよ」

やりすぎって……。

周囲を見回せば、いつの間にかリユースさんが参戦していたのか周りの冒険者は一人残らず意識を刈り取られていた。残るのは片膝を突くモルドのみ。

怪我らしい怪我をしているのはベル一人、あとはヴェルフが背負っていた布の塊が無くなっていくぐらいか？

リユースさんや桜花、ミコトや千草なんかがこっちを見ていた。

「ベル、退いて、そいつが殺せないわ」

「ミリア……」

「ヘスティア様を攫って脅迫する真似をしたのよ。ベルを傷つけたのよ？ 傷つけられたのよ？ なのに、ダメだなんて意味がわからないわ」

その頬の傷は痛くないのか？
その唇から流れる赤い血は？
痛々しく張れた頬は？

土に塗れた鎧は？

相手が先に手を出してきたのに、やり返すのはダメなのか？

「どいて、そいつは殺すわ」

「ミリア殿……」

モルドの奴は青褪めた表情でベルの背中を見上げてるし、意味わかんない。

「ベルはそれでいいの？」

「うん」

「傷つけられたのに？」

「それでいい」

「許せるの？」

「許すよ」

そっか、そうなのか。ベルは本当に優しいなあ。甘ったるいぐらいに甘い、理想的な人だ。

けれども、そうじゃないんだよ。

「そっか、じゃあどいて」

「ミリアっ」

「ベルは許した。でも私は許さない」

ヘステイア様を攫った。

ベルを傷つけた。

報復するには十分すぎる理由がある。

「悪いのは、そいつでしょう？ 唆されたのかもしれない、けどそいつが選んだ事よ。つまり自業自得な訳。だからどいて」

ベルは許すんだろう。甘くて優しいベルなら許せる。

ヘステイア様も、許すんだろう。神として人とは違う目線を持つからこそ、ヘステイア様は許す。

——でも俺は許せそうにない。

「どいて、そいつを殺せないわ」

「ミリア、もういいよ」

「私は良くないっ」

頼むから退いてくれ。なんで邪魔するんだ。その優しさは、そんなのに向けるもんじゃないだろ。

「僕は――」

「やーーーーーめーーーーろーーーーーっ!!」

ヘステイア様の声が響き渡った。

ヘステイア様のすぐ後ろにヴァンが不機嫌そうな表情でリリを背中に乗せていた。ヴァンに運んでもらったらしい。

「ミリア君、それ以上はやり過ぎだ！　これは喧嘩であって殺し合いじゃない！」

……………。

「そうだよ、だからやめよう」

……………甘い、甘いんだよ。だって――モルドの目が死んでないんだぞ？

「うおおおおおおおっ!!」

折れた剣を手に、モルドがベルの背中を狙った。片足で地を蹴り、モルドを庇うベルに斬りかかる。

こうなる、こうなるから嫌なんだ。だから――殺した方が楽だってのに。

驚いたベルは反応が遅れている。桜花達も予想外だったのか援護が間に合わない。

だから殺したかったのに。ベルを避ける様に指先で狙いを定めて

「――止めるんだ」

ヘステイア様より放たれる神威。下界の者を平伏させる神の威光。頭を垂れざる負えない超越存在の一端。

モルドが勢いを失って地面に倒れる。

神威が満ちた事で気絶していた冒険者達が跳ね起きる。

「皆、剣を引きなさい」

維持していた魔法が解ける。———神の威光に耐え切れずに膝を突いた。

冒険者達が逃げていく。モルドも、その仲間も、ヘスティア様を攫い、ベルを傷つけた憎き敵が逃げていく。

許せる、憎い相手を許せる。その精神は理解しがたい。けれども尊敬できる。尊敬できるが、こんな形は嫌だ。

第八十六話

俯いたまま動かない小さな——小人族の中でもとりわけ小柄なミリアを見下ろしながら、ベルはどうすればいいのか迷っていた。ベルはモルドを庇った。自身を傷つけた小悪党と呼べる彼を庇う真似をした。

本来なら、ミリアの様な反応が正しいのかもしれない。けれども、もしそれをさせてしまったら取り返しのつかない事になってしまうかもしれない。そんな風に感じた。

皆が心配そうに駆け寄ってくる。けれども誰も口を開かない。冒険者が居なくなり、森には嵐が過ぎ去った様な静けさだけが残った。

「ねえ」

最初に口を開いたのは、ミリアだった。俯いたまま、震える声で、怒気を含んだ色合いで、彼女は呟いた。

「なんで止めたの？」

顔を上げて立ち上がり、ベルを睨む。小柄な体躯とは思えない圧を放ちながら、怒りの表情でベルを強く睨む。

「あいつらに慈悲をかけるって？ 馬鹿じゃないのっ！」

「それはっ、ミリアに殺させちゃダメだって思ってる」

「二人とも落ち着くんだ」

横から静かに歩んできたヘステイアは二人を交互に見てから、頭を下げた。

「これは僕の不注意の所為だ。ごめん」

「なんで、ヘステイア様が謝るんですか。そもそも……神ヘルメスがこれを仕組んだんでしようっ!!」

ミリアの言葉に誰しもが驚きの表情を浮かべる。助けの手を差し伸べてくれた彼の神がこの一連の出来事を仕組んだ。そう言い放つ彼女の言葉。それに対してヘステイアは困ったような表情を浮かべる。

「……ヘルメスなら、やりかねないね」

「ヘルメスは敵なのか？」

「見るからに胡散臭い神でしたしね」

ヴェルフとリリの言葉に全員が頷き返す中、ミリアが言葉を続けようとして——足場が揺れた。

否、階層そのものが揺れている。

「じつ地震っ？」

「いえ、これは……」

「ダンジョンが震えているのか……？」

千草、ミコト、桜花が足元を見下ろしながら狼狽える。

揺れている。揺れている。ぐらぐらと振動する大地に足をとられそうになり——一番近くに居たベルに腕を掴まれた。

大きくなる振動。揺れる木々の騒めきはさらに大きくなっていく。

不自然な大地の震動。

「これは……嫌な揺れだ」

リューさんの懸念の呟きが響くと共に、振動はまるで脈動と紛う揺れへと変貌していく。

異常事態イレギュラーの前触れ。静かだったキューイがヤバイヤバいときよろきよろし始め、ヴァンは静かに呟く。

《不味いぞ主。刺客だ、殺意の権化だ、理性亡き怪物が生まれる》

「なんだ、あれ……」

天井を見上げたヴェルフの呟き。天井一面にびつしりと生え茂り、十八階層全域を照らす数多の水晶。その内の太陽の役割を果たしていた中央の白水晶の中で巨大な何かが蠢いている。

まるで万華鏡のように、水晶塊の中を黒い影が蠢き、黒い影を降り注がせる。薄気味悪い模様を彩るソレは、一際大きな振動と共に水晶塊に亀裂を生み出す。

「亀裂……っ!? モンスターっ!?」

「ありえませんが……此処は安全階層セーフティポイントなんです!？」

亀裂を中心に水晶が砕けて降り注ぐ。煌びやかとは言い難い輝きを持つ水晶が中央樹周辺に降り注ぐ。

ミコトの言葉にリリが悲鳴を上げる様に叫ぶ中、ヘステイア様の声が響く。

「おいおい……まさか僕の所為だつて言うのかよ」

ヘステイア様の所為？ それはどういう意味だろうか。それよりも異常事態だ、逃げ——響く崩落の音。洞窟の入り口のあった方面から断続的に響いていた。

キューイ、入り口は？ 塞がった？ 逃げ道は？ 中央樹から奥の階層に——阿呆か、十九階層以降なんて神を守りながら進めるなんて思えん。

水晶を突き破ったモンスター。黒い色合いだが、間違いなく階層主であるそいつは、頭だけを水晶から突き出した。

十八階層の天井から生首が生えたように現れ、次いで肩が、そして腕までも引っこ抜く様に水晶を砕きながら生まれていく。半身が天井より生えた所で——階層そのものを揺るがす大咆哮を放った。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！』

産声と言うには不吉過ぎる、殺意と憎悪に塗れた階層主。通常主とは違う、間違いなく亜種であるその化物は、十七階層と言う定住の場を離れ、安全階層セーフティポイントに生まれ落ちた。

水晶を砕きながら上半身を露出させたゴライアスは、身を引き抜くと同時に重力に従い落下する。

砕けた水晶塊が、細かな煌めくモノから、人を容易に押し潰せる巨塊までもを引き攀れて落下するソイツは、空中で器用に一回転し、直後に爆音を響かせて直下に存在した巨大樹をその二本の大足で踏み潰した。

階層内に存在する冒険者もモンスターも問わずに耳に響く巨大樹の悲鳴。下の階層に進む道となっていた樹洞は完全に押し潰され、それどころか樹そのものが半分ほど地面に埋まり、太い幹がひしゃげる。

さらに追撃と言わんばかりに中央樹周辺の草原に小ささまざまな

水晶が降り注いだ。

明かるい光を届ける太陽の役割をしていた白水晶は砕け散り、階層からは明るさが消えうせた。無数の罅の入った青水晶のみが天井に残る十八階層は、まるで月夜の晩の様な蒼然とした暗闇に包まれる。

一連の出来事に対する感想を言うなれば——日食の様だなど感じた。

先程俺達から逃げ出した冒険者、モルド達が襲われている。それは、別に構わないのだが、問題はその黒いゴライアスの動きだ。

機敏だ、あの巨体に見合わぬ機敏さを以てして冒険者達を蹂躪している。それだけならいい、冒険者の何人かの散発的な反撃を無視して大盾を構えた冒険者を殴り飛ばす。ずっしりと腰を据えて受け止めようとしたドワーフらしき人物がまるで玩具の様に跳ね跳んで森の中に消えて行く。

所々で立ち上がる火は、ヘルハウンドのもの。他にもミノタウロスにアルミラージ、ガンリベルラ、バグベアー、黒いゴライアスの咆哮に反応する様に一齐に動き出したモンスター。まるで従う様に、ゴライアスの元へ集い、冒険者を蹂躪していく。まさかモンスターを従える能力まであるのか？

「……はっ、早く助けないと!？」

は？ おいつ！

「ベル、待ちなさい」

「ミリア……」

助ける？ 襲われてるあいつらを？

「ベル、落ち着いて考えてくれませんか？」

此処であいつらを助ける必要はあるか？ 否だ、断じて否である。

どうしてかって？ 俺が手を下せばファミリア間のトラブルになる。それは避けるべき事だ。しかし、考えても見て欲しい。

——あいつらがモンスターに殺されるのは自業自得な訳で、見捨てるも文句なんて言われない。

むしろ、此処で見殺しにしておけば誰にもいちやもんはつけられず、ファミリア間のトラブルにもなり得ない最上級の解答だとは思わ

ないのか？

「私達が手を下すまでもなく、モンスターが始末をつけてくれるんですよ？ どうして助ける必要があるんですか？」

まさにお誂え向きな状況じゃないか。手を下すまでもない。このまま放っておけばアイツらは全滅。俺達はいつらを囿にリヴィラの街の戦力と合流。俺達だけではどうにかならんが、あの街の奴らと合流すれば勝ち目があるかもしれない。

「でもっ」

「クラネルさん」

静かに、リユーさんがフードの下からベルを見つめた。

「私は、ミアさんの意見に賛成だ。それは恨みから、ではない。此処に居る戦力を見た上で、助けるというのですか？」

此処に居る戦力。上級冒険者はベル、俺、桜花、ミコトの四人。第二級冒険者でリユーさんが、敵か味方か不明のアスフィも含めれば一応二人。後は駆け出しの鍛冶師、サポーター二人の計三人。足手纏いの神が二人。

しかも普段からパーティを組んで連携を育んだ訳でもない臨時パーティではない。

対する相手は推定レベル4以上の能力を持つ階層主^{ゴライアス}。

飛竜二匹が居ても無理だろう。キューイは能力的に俺の一つ上、レベル3程度が限界。ヴァンの方は元がインファントドラゴン、能力的にはレベル2の上位程度。勝つ負ける以前に足止めすらままならない可能性が高いのだ。

「……………」

助ける以前に、こっちが全滅しかねないんだぞ？ 死ぬ可能性が高いんだぞ？ 十七階層で通常の階層主^{ゴライアス}に襲われて、何も感じなかったのか？

「助けましょう」

ああ、なんで、こうも……優しい、甘っちょろい人なんだろうか。

騙そうと思えば、ころつと騙せる。甘いものが苦手な癖に、凄く甘い性格をしてる。襲われたのに、それでも助けると選択してしまうそ

の甘さ——俺がベルの好きな所はソコだ。其の甘さだ。

ああ、糞……。

「クラネルさん、貴方はリーダー失格だ」

パーティを危険に晒す。戦力差を考慮できない大馬鹿野郎。こんなのがリーダーやってちゃいつか必ず潰滅するだろう。だということに——

「だが、間違っていない」

——その綺麗さに何処までも惹かれてしまうのだ。

驚きの表情を浮かべたベルに微笑を残し、リユーは森から駆け出していく。彼女は一人いち早くモルド達の元へ向かっていった。

残ったベルがミアアに顔を向けた。俯き、怒りに震える彼女にどう声をかけたら良いか迷い——ミアアが口を開いた。

「キューイ、『解標き放壊て』」

ミアアの傍に控えてきたキューイが光と魔法陣に包まれて封印が解かれていく。

体長は凡そ3M程、5Mに届きうる両翼を大きく広げて甲高い咆哮を上げたキューイを見上げながら、ミアアはゆっくりとした動作でベルに振り向いた。

「私は、助けたとは思えない。ヴァン『解標き放壊て』」

淡々とキューイとヴァンの封印を解き、本来の姿へと戻していく。深紅の翼を広げ、ベルを見下ろすキューイ。灰色の竜鱗の鎧を纏い、ベルを見下すヴァン。二匹の竜を従えたミアアは静かに、その瞳に怒りを宿しながら呟く。

「ですが………今は一人でも多くの戦力が欲しい。だから助ける。あんな無法者でも肉壁ぐらいにはなってくれるでしょう。無為に消費されるのは勿体無いでしょうから」

酷く冷たい声色で、戦力として彼らを加えたと理論武装したミアア。

決して、『優しさ』や『甘さ』、『お人好し』で人を助けるのではなく、

冷たい計算の上で『助ける』のだと言い放ち、ミリアはキューイの背に飛び乗る。力強く翼を広げ、キューイが飛び立つ。声をかける間も無く、ミリアは爆音と悲鳴が響き渡る階層中央部。雄叫びと共に巨人が猛る戦場へ身を投じた。

光源であった白水晶を失い、蒼い薄闇が落ちる十八階層。

西部の湖沼、島の上に位置するリヴィラの街からもその光景ははつきりと見えていた。

「なんじゃあ、ありや……」

階層中央付近の草原地帯において漆黒の巨人が暴れ回っている。凄まじい叫び声はこの街にまで届き、崖際の広場に自然と集まった冒険者達の耳朵を打つ。

安全階層セーフティポイントに階層主が生れ落ちたという特級の異常事態イレギュラーに、保身に長けているはずの彼らですら呆けた表情で立ち竦んでいた。

「——ボールス！ ボールスツ、いますか！」

「ア、アンドロメダ!? お前、いったい何処から現れやがった!?!」

「ボールス、街の冒険者とありつたけの武装、道具を集めなさい、あの階層主を討伐します」

リヴィラの街の冒険者の中でも実力者、買取所の主人にアスファイはヤケクソ気味になりながら指示を出す。眼帯をしている主人は慌てて睡を飛ばす。

「馬鹿言うなアンドロメダツ、アイツはただの階層主では——」

「退路はっ、既に絶たれました！ 南の洞窟は崩れ、中央樹は見ての通り。私達は事実上この階層から脱出不可能です！」

口答えを許さないと言わんばかりのアスファイの反論に目を見張る眼帯の主人。土煙が上がる南の方角に振り向けば、大量の土煙が上がっている様子が確認できた。

「じ、時間を稼いで洞窟を掘り返しや……」

「笑えない冗談ですね。此処からでもわかる程に盛大に崩落している洞窟を、再開通させるまでにどれほどの時間がかかるんですか？ 半

日、それとも丸一日？ 貴方の言う時間稼ぐ者達が蹴散らされるのどちらが早いか、見物ですね」

「……オ、オレ達が全員出張らなくても——おい、なんだありや」さらに反論を繰り返し、アスフィの機嫌を損ねようとした眼帯の主人が唐突に中央部の草原地帯で暴れ狂う漆黒の巨人の方を指さして呟く。

「さっさと冒険者と物資を集め——」

話を逸らされて苛立つアスフィが更に言葉を重ねようとするも、冒険者達が漆黒の巨人の方を指さし始めた。

「赤い飛竜だ」「インフアントドラゴンも居やがる」「階層主と戦ってる？」

「っ！ あれは——【ドラゴンテイマー竜を従える者】っ!？」

漆黒の巨人の周囲を飛び回り、次々に火砲の様なブレスを浴びせかけていく全長3Mに届きうる飛竜。その背には魔法陣マジックサークルを展開しながら小人族の少女がしがみ付いている。

次々に浴びせかけるのは飛竜が放つ火砲のほかに、背にしがみ付く小人族の放つ魔法が漆黒の巨人の体表に弾けて消えて行く。

足元に群がるモンスターはインフアントドラゴンがその4Mに届きうる巨躯で——ゴライアスの前では対照的に小さく見えるが

——蹴散らし、踏み潰し、蹂躪していく。

「あのまま時間稼ぎしてくれりや……」「化け物同士で潰し合ってくれば」「あの飛竜ならそうやすやすとやられないし」

連続する火砲の爆炎に包まれて苛立った叫びをあげる漆黒の巨人。振るわれる巨腕を潜り抜ける様に回避した次の瞬間には放たれた火砲がゴライアスの顔を穿つ。化粧をしながら戦う飛竜の姿に冒険者達が逃げる算段をつけはじめ——次の瞬間、蒼い炎が弾けた。

キューイ、腕の攻撃が来る。回避しろ。

ヴァン、お前は冒険者を踏み潰さない様に適当に注意しろ。巻き込

まない様にしろとは言わん。避けきれなかった冒険者が悪い。キューイ、火炮放て、顔だ。

キューイの背にしがみ付きながら魔法を放つ。放つ、放つて——
—面白いぐらい効果が無い。

「キューイキューイツ!!」

《主ツ！ 攻撃が来るぞっ!!》

ゴライアスが口を大きくあけて——
ハウル 咆哮。

『恐怖』を喚起し束縛する通常の威嚇ではない。魔力を込め純粹な衝撃として放たれる巨人の飛び道具。大地を大きく抉り、既に冒険者を数名戦闘不能に陥らせている。

狙われたキューイは急に弛緩し、翼を大きく広げて舞い散る木の葉の様に風に流され——直撃した衝撃波によつてぐるんと一回転した。危うく振り落とされそうになりながらもなんとかキューイの背にしがみ付く。

「キューイツ!! 振り落とされかねないので次はちゃんと回避してっ——！」

体重が軽いおかげか、それともキューイがそれなりに気を遣つてくれているからか、なんとかしがみ付いているが、魔法攻撃が一切通じていない。

一番威力の高い『ライフル・マジック』ですら傷跡処か、着弾痕すら残せずに弾けて消える。その漆黒の表皮は高い魔法耐性を持って……いや、物理耐性もかなり高いらしい。キューイの炎でも火傷程度のダメージしか負わせられない。

下を見ればベル達がモンスターを蹴散らし始めている。モルドは

チツ、死んでねえのか。

とさくさくに紛れて殺す
「キューイキューイ?」

《主、あの者は殺すか?》

……この場で殺せばきつとわからん。だが、ヘステイア様やベルの事を考えるとそれはできん。歯痒いがそれは無しだ。運が良いのか、悪運が強いのか、死者は思ったより少ない。と言うか片手の数で済んでいる。

モルドの奴には真つ先に死んで貰いたかったが、運が良い奴め。

漆黒の拳が空気を爆発させる。バァンツというすさまじい爆発音にも似た拳を振り抜く音。その威力を前にキューイが木の葉の様に舞う。むしろ抵抗して飛ぼうとした瞬間、その嵐の様な一撃で翼がズタズタに引き裂かれて墜落しかねない。

とはいえ背中にしがみ付いている俺からしたら最悪も最悪。途中から魔法を放つ余裕は無くなり、背中にしがみ付くだけで精一杯だぞ。

「キューイ……」

《主っ!》

唐突な叫び。天地がひっくり返ると共に、視界が蒼穹を連想させる焰に包まれる。

何が起きて——炎だ、熱い、いや熱くない。助けてという叫び声が響いている。苦しい、辛い、痛い、重たい、助けてと甲高く、まるで黒板に爪を立てるかのような甲高い叫び声。

キインツという耳鳴りすら伴うすさまじい絶叫。一瞬だけ視界が揺れ、気が付けばキューイの背から離れ、空中に投げ出されていた。

「なっ!?!」

「キューイキューイッ!」

ガシツとキューイが足で俺の体を掴む。瞬間、凄まじい暴風が荒れ狂い、キューイの足に掴まれたまま右へ左へ、上へ下へとジエツトコースターにでも乗せられたかのような——ジエツトコースターの方が遥かにマシだ。前に進みながら慣性に振り回されるんじゃないなくて、それこそ全方位に無差別に振り回される様な暴風だ。

暴風が終わった所で頸を抑える。痛めたか?ズキズキと首が痛む。

「キューイッ!」

まただ、甲高い絶叫が響いてくる。『助けて』と、『苦しい』と、『重たい』と、『潰れる』と、悲痛に、苦痛に喘ぐ、絶叫。耳障りな程に甲高い、キューイの咆哮とは違った方向性を持つ、憎悪と苦痛に塗れた

絶叫。

耳を抑える事も出来ずに聞いていると——視界がぐにやぐにやと歪んでいく。明らかに何かがおかしい。

「キューイキューイツ!!」

キューイの声、歪む視界が元に戻っていく。気が付けば漆黒の巨人から大分離れた所を飛んでいた。断続的に響く音と、ゴライアスに飛び掛かる冒険者達。いつの間にか増援が駆け付けて——さて、なんだ、記憶が抜けた？

明らかに状況が変わり過ぎてる。何が起きてる？

暴れ狂うゴライアス。それを取り囲んで冒険者が斬りかかり、大型の弩の様なモノで攻撃を繰り返しているが。まるで効果が無い。早く救援に向かうべきだ。

後衛部隊が魔法詠唱しているみたいだし、其処まで援軍として——おいつ、早くあつちに戻れよっ！

唐突な急旋回。足に掴まれたまますさまじい慣性に振り回された。おいキューイっ！　なんでゴライアスから離れて——なんだアレ？

水晶だ、水晶の塊が空を飛んで——長い尻尾、細く脆そうな胴体、透き通った蒼穹の体躯。結晶で形作られた飛竜が此方を追ってきている。

細い、どの部位も細い、キューイの様なしなやかさと言うよりは、やせ細った不健康そうな体躯をした飛竜だ。顎を大きく開き——甲高い絶叫を響かせる。

『キューエエエエエエエエツツ!!』

『熱い』『痛い』『苦しい』『潰れる』、まるで拷問を受けている者が叫ぶ様な悲痛な絶叫。黒板を爪で引つ掻いた様な声だ。『助けて』とも聞こえるが、意味がまるでわからない。

だが、あれはきっと竜種なのだろう。見た目がやせ細った姿でも、どう見ても非生物の様な結晶の体躯をしていたとしても、声が聞こえるのだ。

「キューイ、さっさと片付けてください……」

視界がぐにやぐにやと歪み始める——あの絶叫は不味い。何かわからんが、聞き続けたら壊れそうだ。

瞬時に反転。キューイの方が機動性が高いのか即座に相手に近づいて——翼を以て相手を打ち据えた。

結晶はまるで硝子細工の様に粉々に砕け散る。見た目同様、その体は非常に脆いのか簡単に粉々に砕け散った。想像以下の耐久。絶叫が途絶え、キラキラとした結晶の粉をまき散らして結晶竜は死んで……。死んだ？ 本当にか？

キラキラと舞い散る結晶竜の残骸。落ちていくそれは唐突に燃え上がり真つ蒼な焰になった。

——は？

「またダメだった
「キューイキューイツ!!」

また、またつてなんだ。アイツは何なんだ？ 飛竜だろ？ 見た目は少なくとも飛竜だ、結晶の体を持つ飛竜。声が聞こえる。甲高い、助けを求め、苦しみに喘ぐ絶叫が聞こえる。まだ倒せてないっ！？

「キューイツ！」

ああ、嘘だろ。

砕け散ったその結晶竜の破片は、蒼炎へと転じて一塊になって落ちていく。大きな蒼炎の球体に転じたそれは大地に叩きつけられずに地面から数Mの辺りで停止し——空中で停止した球状の蒼炎が弾けた。

周りに青白い火の粉をまき散らし、先程と寸分変わらない姿で結晶竜が蘇る。

その様はまるで不死鳥の様だ——フェニックス キューイ、あれの討伐方法を教えてくれ。

「馬鹿じゃないのキューイ!? 知ってたらもう倒してるよキューイ!!」

ああ、うん。なんだあのモンスター、普通じゃない。

キューイ、いったん離脱——出来ん、黒いゴライアスだけでも手に余ってる様子なんだぞ。こっからこの結晶竜をあの前線に連れ戻るだつて？ あつちはあつちで何とかしてくれ。

糞、ベル達は無事なのか？ この飛竜は何だ？ どうやって倒す——

——仕方ない、キューイ、俺だけを離脱させてくれ。時間稼ぎ頼む。
不死系のモンスターなんて聞いたこと無いぞ、なんか弱点か攻略法があるはずだ。神ヘルメスとかアスフィ、もしくはハリヴェイラの街の冒険者辺りが知ってるだろ。そいつらから情報を得なけりやはじまらん。

第八十七話

蒼白い炎を撒き散らしては蘇生を繰り返す結晶竜。

飛び散る蒼炎によって十八階層は薄青く照らし出されていた。

苦痛の意味が籠った絶叫。砕け散るやせ細った体軀からは幾度目かの蒼炎がまき散らされていた。

キューイの背から落ち、茂みに飛び込んだ直後に蒼炎が周囲を包み込む。

『マジック・シールド』のおかげで難を逃れた、というよりはこの蒼炎は攻撃能力は極めて低いらしく『マジック・シールド』が殆ど削られない。

意味のわからないモンスターである。

「キューイ、時間稼ぎを——ああ、とりあえず殺し続けてください」

いずれ削り殺せる……か？ 蘇生にも限界がある、と信じたいモノだが。

激しく空中を舞うキューイ。その翼、尾が幾度となく結晶竜を砕き殺し、蘇生するさいの蒼炎がまき散らされる。

響く轟音。ゴライアスと戦っている冒険者達の奮闘の音も響いてくる。目を其方に向ければ今まさにゴライアスの背に無数の武器を突き立てる冒険者の姿が確認できた。

……腕の一振りですべて吹っ飛ばされてるんだが。というかなんだ、上級冒険者が虫けらの如く吹き飛んでる。近づきたく——あの凄まじい勢いで動きまわってるのリューさんか。

「キューイ、ゴライアスには絶対に近づけないで」

あそこに炎まき散らす飛竜が突っ込んだら大惨事なんてもんじゃなくなる。近づけるなよ。

周囲に散る蒼炎。不思議な事に火の粉として舞い散っている。不自然に、不気味に水晶の周囲を舞っているし、触れると危なそうな気がする。勘というか、本能的な部分で『これはヤバイモノだ』と訴えかけてくる様な感覚。

出来る限り飛び散る蒼炎を避けながらゴライアスの方へ足を進める。

総勢数百名にも及ぶ冒険者の戦列。

もとより連携を捨て去り、各々が目の前の目標に適度に振り分けられた程度のモノの中、一際大きな巨体にてモンスターを薙ぎ払うインファントドラゴン。

その小竜の動きを見ながらボールスやリヴィラの冒険者は驚いていた。

「おいおい、ティマーが離れてるのに暴れる気配がねえぞ」

「こつちを避けて攻撃してくれてんのか？ こりややりやすい、あの小竜を盾にしつつ展開しろ」

「あつちから来るのは任せてよさそうだな」

後方に魔法使い達が集まり、詠唱の為の準備をしているさ中、前衛壁役としてゴライアスの動きを封じようとしていたアスファイはチラチラと爆ぜる蒼炎の方へ視線を向けて眉を顰めた。

「ミリアさんがあの結晶竜を止めてくれている様ですが……」

正確にはミリアの飛竜が、であろう。

ミリア本人は途中で気を失ったのか飛竜の脚に掴まれてぐったりとしている様子であり、インファントドラゴンの指示出しやその他連携について伝えたくとも出来ないという状況になっており、なおかつ未確認の新種である結晶竜についても気になる点は様々ある。

「ですが、今は構っている余裕が——ありませんねっ」

飛び退った瞬間に着弾する咆哮ハウルの一撃が大地を大きく抉る。後方で魔法使いが詠唱を開始し始める。

不穏な気配を感じ取ったゴライアスが其方に注意を向けた瞬間にリユーが連続で木刀にてその肉体を打ち据える。抉れ、飛び散り、無数の傷を生み出して即座に離脱した彼女は舌打ち交じりに悪態をついた。

「固い、それに動作も早い」

通常の階層主はレベル4。それに対し目の前のこの黒い階層主は

レベル5に届きうる潜在能力ポテンシャルをもっている。

「【竜を従える者】！ あの結晶竜はなんだっ！」

「きやがったかっ！ 早くあの竜を仕留めろよっ」

補給拠点らしき場所に転がり込んだ瞬間、冒険者に首根っこ掴まれて怒鳴られた。

取り囲む冒険者の顔に見覚えはない。というか【魔銃使い】より【竜を従える者】の方が通じるのかよ。

「ちよつと、放してくださいっ。というかあの結晶竜については私が聞きたいですよっ！」

中層にあんなモンスターが居るなんて聞いてないぞ。

「お前が召喚したんじゃないのか」「おいおい、どうなってんだ？」
「階層主といい」

あの結晶竜について知ってる事は——ないみたいだな。糞、不
死身の竜なんてふざけんなよ。キューイはさつきから『疲れた』だの『辛い』だの言ってるし。

あの結晶竜は相変わらず『助けて』だの『痛い』だの悲鳴上げてるし。なんなんだ。

「ミリア君っ」「ミリア様っ」

「ヘスティア様、リリも此処に居たのね」

どうやら無事な様子だ。安心すると同時に不安も生まれた。他の面々は何処だ？

「ミリア君、あの飛竜は？」

「わかりません。痛いとか苦しいとか叫んでますけど、キューイの攻撃で粉々に砕けてもすぐに元通りになるんです」

「……本体が別の場所にあるとかかな？」

本体が別の場所に——それならキューイが気付きそうだが。って、ヴァンの所の前線は安定してるが、ゴライアスの方の歩みが止まってないぞ。

「情報が欲しいんですよ、あのまま殺し続けても意味なさそうだし」

「僕はわからないけど……リリ君は知っているかい？」

「すいませんがリリにもわかりません。ですが、知ってそうな神は知ってます」

知ってそうな神？

「神ヘルメスです」

「やあ、呼んだかい？」

飄々とした笑みを浮かべた神ヘルメスが気さくそうに話しかけてきた。お前、よく顔出せたな……。

「おっと、嫌われてるのはわかるけど、今はそんな事気にしてる場合じゃないだろう？ ああの結晶竜について知りたい事があるんじゃないかな？」

「ヘルメス、知ってる事を全部教えてくれ」

無言で睨むと神ヘルメスは肩を竦めた。良いからさっさと話せ――

――ゴライアスの方も気になる。

「さて、あの結晶竜。蒼い炎を撒き散らすアレについて、似た特徴の竜を知ってる。出現階層は中層」

ヘルメス曰く、とあるファミリアが中層の未調査領域へ足を踏み入れた際に出現したモンスターらしい。

唐突に現れて絶叫の様な咆哮を上げながら襲い掛かってきたそのモンスター。

やせ細った様な頼りない体躯の結晶で形作られた竜。

当時第一級冒険者も参加していたその未調査領域調査。そこで出

会い――調査団は潰滅したらしい。

「いや、倒し方教えてくださいよ」

「ないよ」

は？ いや、無いじゃないだろ。モンスターだろ？

「いや、だからね？ 目撃例はその一件のみ。その際には今と同様、何度倒しても延々と蘇生され続けて撤退に追い込まれただけだよ。当然、討伐記録なんてありはしない」

つまり、今現在において倒し方不明の不死身のモンスターって事か？

「困った事に、ね？」

「ヘルメス、それはおかしいだろう」

「僕も伝聞でしか聞いたことが無いし、彼らが調べた未調査領域を後から何度も調べたけど何もいなかったし、それで降確認も取れていない事からギルドでは『ダンジョン内における過重な心的疲労ストレスによる集団幻覚』とされてるよ」

いや、いやいやいや。あれが幻覚？ 冗談はよせよ。

「冗談じゃないよ」

……。ああ、糞、黒い階層主ゴライアスに不死身の結晶竜かよ。どうすんだこれ。

いや、待て、とりあえず黒い巨人を仕留めるか。あつちは相当固いみたいだが、死なない訳ではなさそうだし。……。殺せるよな？

キューイ、とりあえずそのモンスター死の足止め。絶対にこつちに近づけるなよ。

—— キューイツ死！

激しく紅蓮の炎と蒼穹の炎がせめぎ合うのが遠くに確認できる。結構距離があるが、空を飛ぶ飛竜からすればこの距離はあつて無い様なモンだし……。

「へスティア様、クラスチェンジを—— スナイパーで」

魔法使いが集まって詠唱してるっぽいし、其処に参加して一撃である巨人を仕留めて、続いて結晶竜を仕留める。仕留め方わからんとか泣き言言ってる余裕はないみたいだしな。

今から大急ぎで詠唱中の魔法使い達と合流してでかい一撃をぶち込めば良いか。いや、この場から撃つか？

「わかった」

へスティア様が背に触れる。温かな感触と共に服越しに魂を撫でられた様な感触と共に、クラスチェンジのタイプが変更された。

スティタスの更新と異なり、簡素に終わるクラスの変更。終了と同時に背負っていた銃杖を構える。

ヴァンの方は、問題なさそう。クラスの変更、生えてきた獣耳と尻尾がうざったいなこれ。

神ヘルメスは目の前の光景に目を奪われていた。

ベル・クラネルに対する神の試練を与えた事。それに対するミリア・ノースリスの怒り具合。

彼女の底はとうの昔に知れていた。彼女は『英雄の器』とは程遠い人物であった。神ヘルメスはそう断じたし、同時に優れた才を持つ凡人だと認識した。

魔法の扱いに関する才能は、きつと他の誰よりも高い。遠くから彼女の魔法が飛来した際にはアスファイですら反応できずに帽子を穿たれた。

もしその魔弾がヘルメスの脳天を穿っていれば、そう考えると空恐ろしいモノがある。

だがそれでも彼女に対する評価はそれほどまじりだつたはずだ。

だというのに、今日の前で彼女は変化していく。

『スナイパーライフル・マジック』

小柄な小人族の少女。身長は凡そ100C程度、パルウムの中でも更に小柄な少女。今は魔法か、またはスキルの影響か狐人ルナールを思わせる獣の耳と尾が生えた状態だ。その金髪がゆえに、幼い狐人ルナールに見える彼女。

使い古したローブを着込み、ライフル銃にも似た長杖を構え、足元に魔法陣マジック・サークルを展開する。

その杖の先端に小さな魔法陣が展開され、銃口射出口を生み出した。

「ひとつの魔弾だんがんに全てを束ねよ『アンチ・マテリアル』」

彼女の足元の魔法陣マジック・サークルの大きさが倍に膨れ上がり、彼女の持つ銃杖の先端の魔法陣が縦に五つ並ぶ。連なる魔法陣が白淡く点灯するさ中、彼女はまるで別人に変わったかのように詠唱する。

「これは正確無比な天秤『リロード』命の重さをはかるモノ『リロード』重さをはかりましょう『リロード』」

詠唱の進行と同時に、連なる五つの魔法陣が点灯していく。膨大な魔力が杖を通じて魔法陣に注ぎ込まれ、今すぐにも爆ぜそうな程に

魔法陣が揺らめく。

周りのサポーターの騒めきを他所に、彼女は静かに詠唱を続ける。目の前の光景をヘルメスは喉を鳴らしながら見ていた。まるで別人に切り替わったかのような———魂の形うっわそのものから別のモノに変質するという異質な現象に目を奪われる。

「引き金の重さは貴方の重さ『リロード』きつと、貴方の命は羽の様に軽い『リロード』」

五つの魔法陣が点灯し、輝きを灯して発射態勢に至る。どれ程の威力の魔法なのか想像するのも難しくない程の魔力が溢れ出る様に回りの冒険者は息を呑む。

たかが【竜を従える者】ドラゴンテイマー。竜が居なければ何もできない小人族。そう罵る者はこの場に居ない。もしこの光景を目にしてなお、彼女にそんな罵倒を浴びせかける者が居るのなら、それは盲目で魔力の流れを感じられない魔法の才が一切存在しない者ぐらいであろう。

魔法を扱わない冒険者にも、圧として彼女の放つ魔力を感じ取れる。空間そのものが揺らぐ程の魔力を込められた魔法。魔力暴発イグニスフラトウスしそうに見え、同時に安定している様にも見える。

その状態のまま、ミリア・ノースリスは静かに敵を見据え、前線で戦う魔法使い達が魔法を放つのを待つ。

神ヘルメスはその様子を見て口元に笑みを浮かべた。

セーフティポイント ゴライアス 安全階層に階層主が現れるという異常事態。イレギュラー それにとどまらず、ドラゴンテイマー 【竜を従える者】のワイバーンと一騎打ちを繰り広げる新種のモンスターである結晶竜。

冒険者達の判断は非常に合理的であった。竜には竜をぶつけておけど、深紅の飛竜と結晶の飛竜のぶつかり合いが離れた位置で行われているさ中にゴライアスを仕留めて、その後に結晶竜を仕留める。そんな作戦を立てたのだ。

最前線。ゴライアスの咆哮ハウルを防ぐドワーフ達の持つ盾が幾度か受

け止める。

ボールスはその様子を見ながらも後方に設営されたはずの補給拠点方面をちらちらと見て呟く。

「何処の魔法使いか知らねえが、良い魔力じゃねえか」

己たちの後方。補給拠点の方からひしひしと伝わる魔力の流れ。

彼らの真後ろにて詠唱する魔法使い達を束ねて漸く届きうる様な膨大な魔力。そんな魔力を扱える大魔法使いがこの階層に居たなんて情報をボールスは知らない。

リヴィラの街に居た冒険者は全員招集してこの場に居る。補給拠点に居るのは全員がサポーターか能力の低い冒険者程度。彼らがこんな魔力を扱えるはずもない、つまり知らない誰かが後から合流してきたか。

「おいお前ら、後ろの奴に負けてるぞ」

ボールスの言葉に魔法使い達が眉間に皺を寄せる。彼らとて加減しているつもりは一切無く、最大限の集中力を以て最高量の魔力を込めた一撃を見舞おうとしているのだ。それを軽々と上回るという事は——少なくとも第三級の魔法使いが後方に居るという事だ。

目の前のゴライアスはリユーとアスファイが囷となつてくれているおかげで魔法使いへの攻撃頻度は少なく。なおかつ補給拠点の方に放たれる咆哮ハウルは精度の問題か当たる気配は微塵も無い。

その巨体を支える二本脚に執拗に攻撃を受けているからか、幾度となく姿勢が揺れてまともに遠距離に咆哮ハウルを命中させられないのだ。

「よおし、前衛引けええっ！ とんでもねえのぶち込むぞ！」

詠唱の完了を確認すると同時にボールスが叫ぶ。

前衛の冒険者が一瞬で蜘蛛の子を散らす様に逃げ去っていけば——ゴライアスが咆哮ハウルを放たんとして、対象に迷いが生じ動きが鈍る。

遠く離れた場所に居る膨大な魔力の流れか。至近距離で数人纏めて詠唱している魔法使いか。もしここでゴライアスに知性が欠片でもあるのなら、後方を狙っただろう。

前線に立つ魔法使い達は前衛壁役によって固く守られているのだ

から。だが、ゴライアスには知性等存在しなかった。故に、近い場所の魔法使い達めがけて咆哮ハウルを放った。

前衛壁役最後の仕事だと言わんばかりにドワーフ達が肩をぶつけ合い、タワーシールドでその攻撃を防ぎきる。

「撃ちやがれえっ!!」

杖を、球オーブを、魔法使いがもつそれぞれの得物を振り上げて発動文を口にマジック・サークルにする。

魔法陣の輝きが弾け、次の瞬間、怒涛の一斉射撃が火蓋を切る。

『ツツ!?』

連続で見舞われる多属性の攻撃魔法。着弾と共に火炎弾が弾け、次の瞬間には雷の槍が突き立つ。氷柱の雨が降り注ぐさ中に風の刃が混じり血を飛び散らせ、凍り付かせ、焼き尽くす。

一部『魔剣』の攻撃も加わる中、怒涛の砲火の光に姿を消しかけるゴライアス階層主。

目がくらむほどの砲火に冒険者達が動きを止めるさ中、響き渡った重低音によつて砲火が弾け散る。

後方に設営された補給拠点。高台に位置する場所より静かに詠唱を完了した小人族の放つ砲撃まほうが穿ち抜く。

「何故ならこの引き金フエは羽ザの様に軽いもの『ファイア』」

—— 極光が巨人の胸を穿ち抜いた。

聴覚が麻痺する程の爆音。さらにそれを上書きする巨砲の一撃が終わりを迎えた。

立ち込めた煙は巨砲によつて綺麗に吹き飛ばされ、中央にたたずむ巨軀が冒険者達の視線に晒される。

胸マにぽっかりと空いた穴。普通モのモンスターなら魔石マが存在する胸マに空いた空洞。

向こう側が見て取れる大穴を胸に開け、顔面全体を中心に黒い体皮は大きく傷つき、抉れ、赤い血肉を晒している。

口から蒸気のような白い煙を拭きながら、ドスンとゴライアスが膝を突いた。

冒険者達の歓声が上がる。

「後は結晶竜だけ——」

結晶竜の方に視線を向けようとして、ボールスは目を見開いてゴライアスを見た。

膝を突き、膝を突いて、ゴライアスは止まった。倒れるのではなく、膝を突くだけに留まる。

本来なら魔石を砕かれたモンスターは瞬時に灰になる。目の前の階層主ゴライアスにその気配はない。

「嘘だろ……」

胸に穿たれた大穴。既に倒したと歓声を上げる冒険者達。

そんなさ中、リユーは目を見開いたまま顔を引き攣らせていた。

周りの歓声と同じく声を上げて喜んでいたベルも、リユーの様子に気付いて歓声を上げるのをやめた。

『——フウウウ』

ほぼ同時に冒険者達の視線は死に体のゴライアスに集まる。

死に体と化したゴライアス。その全身からは赤い光の粒子が立ち昇っていた。みるみるうちに傷が消え失せていく。

胸の中央を穿ち背後の風景すらも見える程の大穴が塞がっていく。胸に穿たれた穴を塞ぐ様に蒼炎が揺れる。

その信じられない光景に呆然とした冒険者達の目の前で、黒い巨躯が再度立ち上がる。

戦いの終わりだと体から力を抜き——瞬時に目の前で行われた再生に冒険者達の反応は遅れる。

「自己、再生……ッ!？」

自己再生等という領域を超えた、蘇生という反応。胸に穿たれた、間違いない階層主ゴライアスを仕留めたはずの大穴が蒼炎によって再生していくのを眼にしたアスファイが視線を遠く離れた位置で戦う結晶竜に向けた。

「まさか——」

呆然と立ちすくむ冒険者、魔法使い達の目の前で、階層主ゴライアスは両手を大きく振り上げた。

固く握りしめられた両拳を力強く振り下ろす。

大草原が揺れた。

凄まじい爆発を引き起こし、放射状に広がる衝撃波は大地を抉り、前衛を一緒くたに吹き飛ばす。それだけにとどまらず、後衛の魔法使い達にまでその衝撃は届き、魔法使いを守っていた盾役も含めて前線の全てを吹き飛ばした。

無茶苦茶に魔力を込めた影響か、銃杖がボロボロと黒焦げになって崩れて塵になる。そんな魔力が上がった事で起きた副作用の現象すらも頭から吹き飛ばす信じられない光景。

包囲網が崩壊した。ゴライアスの一撃が、前衛として包囲網を張っていた冒険者全てを吹き飛ばした。まるで虫けらか、玩具の様に冒険者が吹き飛び、大地に叩きつけられて戦闘不能に陥る。

「……は？」

「嘘だろっ！」

「そんな……ベル様っ！」

運が良いのか、中衛としてモンスターの足止めを行っていた冒険者やヴァン。後方に設営されているこの補給拠点にまで被害は及んでいない。

しかし、最前線に出ていたのは腕に自信のある冒険者である。

中衛のモンスターの足止めを行っていた冒険者は階層主に挑んだ事・の無い者達。

後衛の補給拠点に居るのは補助を行うサポーター連中。

最前線が崩壊するということは、ゴライアスの討伐に致命的過ぎる。

というか、そもそもだ、あのゴライアスの胸を穿つ一撃。どう考えても即死するだろうはずの一撃だったはずなのに蘇生しやがった。つか、あの胸の穴を塞いだ蒼炎、どうかんがえても結晶竜の奴だよな？

「ヘスティア様、クラスチェンジ、サンクチュアリに」

「っ！ わかったっ！」

今すぐ範囲回復で前線を立て直して——ダメだ、ヴァン、ゴライアスの足止めしろ。あのまま前進されたら瀕死になった冒険者が無抵抗で引き潰されて……ああ、後方のモンスターが雪崩れ込まない様に足止めも……あ——

不協和音の様な咆哮。ゴライアスの頭上をいつの間にか飛行する結晶竜が蒼い炎を撒き散らして冒険者達に襲い掛かろうとしているではないか。

「っ！ 障壁共有っ！」

スキル発動。目一杯広げた範囲の冒険者が『マジック・シールド』に包まれて守られる。蒼炎の火力自体は低いが、それでも一気に数十人単位で喰らえば流石に魔力消費が馬鹿にならん。

つかキューイは何してんだっ！

慌ててキューイと結晶竜が戦っていた場所に視線を向けると、キューイが体から無数の結晶塊を生やして死んでいた。いや、待て、なんだそれ、そんな攻撃——攻撃？ 体の内側から食い破る様に突き出た結晶によって死んでいるキューイ。魔力の残滓が体から零れ落ちている様子から、まだ死んでから数分も経っていないが。なんで死んだっ!?

ヴァンっ、その結晶竜を引きはがせっ。障壁張りながら回復魔法使えんっ。

ヴァンがブレスで結晶竜を攻撃して注意を惹き付けたのを確認すると同時に詠唱開始。ヴァン、正体不明の攻撃に気を付けろよ。

「聖域を守護する者達よ、非力な我が身が捧げる献身を受け取りたまえ。聖域に降り注ぐ雫よ、癒しとなれ。流るる涙の代わりとし、我が血を捧げよう——聖域に響く音色よ、癒しであれ『ヒール・バースト』ッ」

杖を失った代わりに両手で魔力の塊を頭上に掲げる。発動した範囲高回復魔法が弾けて、俺を中心に波動の如く光が広がっていく。

光の波動が前線にまで届き——遠すぎて回復効果が低いのか立ち上がる冒険者は半数程しかない。

二度、三度と繰り返し発動してようやく前線の冒険者の殆どが立ち

上がってくれた。

結晶竜が大地に吐きつける蒼炎。火力自体は低いおかげか問題はなさそうだが。

キューイの死因がわからんがとりあえず結晶竜を片付けないと話にならないのはわかった。

どうにかしてあの結晶竜を片付け——ヴァン、どうした？

動きがおかしい。ヴァンが身を振って苦悶の咆哮を響かせている。ヴァンの周囲には蒼い炎の欠片が舞い散っている。なんか、嫌な予感がする。

身を振り、尻尾を振るい、モンスターを弾き飛ばして暴れ狂い——

——グシャバキイツと体の内側から食い破る様に無数の結晶塊が生えた。

「はっ！」

いや、待て、なんだあれ？ いや、いやいやいや、おかしいだろ。

あ、もしか、して？

「ヘステイア様、もしかして、あの蒼い炎、相当ヤバイやつなんじゃない……」

「………かもしれない」

同じ光景を目にしていた冒険者達も言葉を失う。

ああ、あの舞い散っていた蒼炎。あれって————直撃すると結晶塊あが体の内側なから生うえてきて即死にしてしまうのか。どおりで『ヤバい感じがする』と思ったよ。

『マジック・シールド』で無効化してなかったら、多分俺もあんなふうに死んでたんだらうね。

どうにかして結晶竜を戦場から引きはがさないと。

誰かに援護————あ、障壁張ってないと冒険者に被害が出そうだ。

殺しても蘇生する結晶竜。振りまかれる蒼い炎はよくわからんが『体を内側から食い破る結晶塊を生やす』効果があるっぽい？

んで階層主ゴライアスを仕留めても結晶竜の蒼い炎で蘇生されて————どうすりゃいいんだよこれ。

第八十八話

水晶と木々の織り成す不可思議で美しい風景。それを彩る蒼炎は幽鬼の如く不気味に揺らめいている。

中央樹周辺の草原地帯。だった場所というべきか、階層主ゴライアスの反撃を受けて無数の亀裂の走った草原の中央にて雄叫びを響かせて佇む巨軀。

壊滅的な被害を受けるも連続した範囲回復魔法らしきモノで立ち上がった冒険者達が後退し始めていた。

「てめえらいったん下がれっ」

「武器の補充をっ」「糞っ、魔法使いを守れええっ!」

「ボールス、部隊を再編制して、態勢を立て直しなさい!」

「無茶言うんじゃねえ!」

崩れた戦線。回復魔法にて冒険者は立ち上がったものの、戦線の再結成は不可能だ。

特に大きいのは【竜ドラゴンを従える者】の保有していた深紅の飛竜インフアントドラゴンと小 竜ドラゴンが撃破された事だろう。

深紅の飛竜によって抑えられていた結晶竜。深紅の飛竜が撃破された事で戦線に現れたその結晶竜によって戦線崩壊は加速する。

其処インフアントドラゴンに小 竜が維持していた後方のモンスターの足止めをしていた後方戦線の崩壊も合わさって既に散り散りになりかけている。

「結晶竜を潰せ」「あいつをどうにかするんだ」

「馬鹿野郎、ソイツを攻撃するな!」

彼の竜の持つ厄介な蒼炎。触れたモノを結晶塊にするという恐ろしい効力に恐れを成した者が食い止めようと残っていた弓や飛び道具で攻撃するも、逆効果。

攻撃に被弾した瞬間にそのやせ細った体軀は碎け散り、蒼炎を撒き散らして復活する。残るのは夥しい量の蒼炎の欠片。

「避けるー!」「蒼い炎に触るなっ」

「腕がっ」「なんだこの炎!?!」「モンスターが来てるぞ!」

まき散らされた蒼炎を回避すべく前線は歪みに歪み、階層主ゴライアスの足止

め処か、横合いから突撃してくるモンスターの群れを受け止めきれずに崩壊と再生を繰り返している。

徐々に、崩壊してからの再生までの時間は延び。再生から崩壊までの時間は縮んでいく。

既に前線の維持は不可能。死者こそ出ていないのは後方から行われる大規模な範囲回復魔法と補助魔法らしき魔力障壁による防御が生きているからだろう。

「ベル、無事か」

「ヴェルフ、他の皆は……ミリアは？」

崩壊した戦線の端。階層主ゴライアスの反撃を辛くも避けたベルの元に走り寄ってきたヴェルフは苦々しい表情で後方の補給拠点に視線を向けた。

「タケミカツチファミリアの奴らは中衛のモンスターの妨害にいつてる。ミリアはリリの所だ、見ろ、あそこで回復魔法連発してるのがミリアだ」

ヴェルフの視線を追ってベルが後方に設営された補給拠点に視線を向ければ、大きな水晶の上に立つミリアが断続的に広域回復魔法をかけ続けて戦線の維持を行おうとしているのが見えた。

その周辺には大盾を持つ数人の冒険者。その大盾もへしやげたモノばかりで、よく見れば階層主ゴライアスの咆哮ハウルを幾度か受けたのかその周りには無数の着弾痕が見て取れる。

「……どうしよう」

「どうするもこうするも、このまま包囲網を再結成なんて無理だろ……」

二人の視線が自然と階層主ゴライアス、その頭上を飛翔する結晶竜に向けられる。

ベルの手には【英雄願望アルゴノウト】という起死回生の一手がある。

しかし、その攻撃が通用するとはとても思えない。

ミリアの放ったらしき巨砲。『アンチマテリアル』を駆使した超威力、長射程という膨大な魔力を用いた一撃で胸を穿って尚、かの巨人は平然としているのだ。

「あいつをどうにかしねえと」

「でも、キューイもヴァンも……何度も倒してたのに再生しちゃうし」
最初にミリアとキューイが交戦し始めた結晶竜。

幾度か撃破した様子が見て取れたが復活されてしまうという事が判明し、話し合った結果、空を飛ぶあの結晶竜に対してベル達は攻撃手段が限られ過ぎるといふ事で先に巨人を倒して後から援護するという形になったのだ。

しかし、あの蒼炎によってキューイとヴァンが撃破され、戦線は完全に崩壊。立て直しもきかない状態でどうしようもない。

しかも、先程の魔法による攻撃のさ中に見えた巨人の胸に宿る蒼炎。あれによって死亡を免れた可能性すらあるのだ。結晶竜を倒さねば、幾度となく巨人は立ち上がってくるだろう。

「クラネルさん、無事でしたか」

「リユーさん……その腕……」

駆けてきたリユーの様をみたベルは目を見開く。

彼女の片腕から血が滴っている。それだけならただの負傷だがその手袋を突き破って飛び出している結晶塊を見ればそれがただの負傷ではない事は一目瞭然である。

「あの蒼炎に触れてはいけません。貴方もこうなりたくないのなら」

既に左腕は使い物にならないのか血を滴らせながらもリユーは鋭く階層主^{ゴライアス}を睨む。

「私とアンドロメダでゴライアスを止めます。貴方は周囲のモンスターを撃破してミリアさんに伝言をお願いします」

「伝言……?」

「はい、見てください」

リユーの視線が後方に位置する補給拠点に向けられた瞬間——
癒しの波動が十八階層に弾けて広がる。

ミリアの使う広域回復魔法だ。クラスチェンジという特殊なスキルによって使う事の出来る限定魔法。

広がる癒しの波動が近づいてきて、周囲の冒険者を癒し、立ち上がらせる。

その衝撃波の様な淡い輝きが三人にも届く。

「おい、結晶が……」

「嘘、消えた……？」

「はい、見ての通りです。この結晶塊、回復魔法を受けた際のみ消滅するようです——これがあの結晶竜を討滅する大きなヒントかもしれない」

リユウの左腕。結晶塊が無数に突き出て血を流していたその腕は、回復魔法が弾けた瞬間に結晶塊が色を失い、灰となって零れ落ちて無数の穴の開いた腕に変化する。其の腕も回復魔法で傷が塞がり、数秒経てば完全に傷が消えた。

手袋にあいた無数の穴と血の跡のみを残して負傷が消えたのを見たベルとヴェルフが顔を見合わせる。

「まずは結晶竜を、その為には、早くこの事をミリアさんに」

「わかりました」

ベルが戦場を駆けようと足を向けた瞬間。ついに階層主の咆哮ハウルが補給拠点を直撃した。

飛来した衝撃波を逃す事も出来ずに直撃。緋色の強化『マジック・シールド』によってなんとか防御したものの、補給拠点到に設営されていた大型弩バリスタが粉々に砕け散り、周辺で物資を運んでいたサポーターが幾人も吹き飛ばされて倒れ伏していた。

「ヘステイア様っ」

「大丈夫だよ、僕は無事だ」

砕けた水晶の残骸の影から顔を出したヘステイア様に安堵しつつも、周囲を見回せばほぼ空になりかけであった武装の類が入っていたらしき木箱の残骸。

回復薬ポーションや高位回復薬ハイ・ポーション、精神力回復特效薬マインドポーションなんかが入っていた大きな壺、の残骸。

「リリ、無事な物資類を掻き集めて前線に持って行ってあげて。ヘステイア様、出来る限り此処から離れてください」

「ミリア様は何を」

「どうやら、とんでもなく相手の目を引いてしまったらしいので……
此処でお出迎えしないといけなくなりましたね」

漆黒の巨人の殺意が此方に向いている。先程の巨大砲撃と、つい先
ほどまでの回復魔法連打はとてつもなく敵対心を高めた様だ。

いや、確かに回復魔法使う奴とか、高い損傷与えた奴が狙われるの
はゲームでも現実でも当然っちゃ当然だ。

「急いで、次の咆哮が飛んでくるわ」

巨人の口内が激しく発光し、此方に咆哮をぶちかまそうとしてい
る。

さつきみみたいに咄嗟に強化なんて出来ない。左腕に装備している
竜鱗の朱手甲の強化効果は使い切っているので素の『マジック・シー
ルド』で防がなくてはいけないが……。

「ミリア様も逃げるべきですっ」

「……………いや、私動けないのよ」

ドリアード・サンクチュアリ。広域回復魔法が連発できるとい
う利点を持つ代わりに、移動不可能の欠点を持つ。

回復魔法を途切れさせた瞬間、散り散りとなっている冒険者達が命
を落としかねない。

倒れても倒れても回復させているおかげで、彼らは散発的とはいえ
攻撃を行っているのだ。ましてや蒼炎撒き散らす結晶竜から撤退す
るのにも回復が必要だ。つまり今クラスチェンジを解除するのは不
味い。

残っているマガジン数が10を下回っているので、いずれ回復魔法
も放てなくなるが、今やめるのは不味すぎる。

「ですがっ」

「リリ、ヘスティア様と行って。早くっ」

ゴライアスの足元から苛烈な攻撃が開始されて咆哮が補給拠点の
真横の水晶を粉々に粉碎する。

復帰した冒険者が戦列を無視して攻撃を繰り返したおかげで、攻撃
が逸れた。

既に諦めて敗走してもおかしくない状況なのに、彼らは一人も欠けずにモンスターに立ち向かっている。何でだ？

前線の様子を眼を凝らして確認すれば——男が剣を振り上げて叫んでいるのが見えた。

何を言っているのかは聞こえないが、どうやら冒険者を鼓舞しているらしい。数少ない魔法使いを守りながら小さな防衛線らしきものを作ってゴライアスの側面から攻撃を幾度も当てている。

彼らの猛攻のおかげか、ゴライアスはこちらから一瞬気を逸らし、次の瞬間リユースさんがその猛攻に加わり、アスファイも援護に入る。

ゴライアスの動きが止まった。とはいえ未だに此方を狙っているのか殺意が向けられたままだ。

回復魔法発動の為の詠唱をしようとしたところで、ベルの声が聞こえた。

「ミリアーっ」

「ベル君っ」「ベル様！」

「ベル、どうしたの、前線は？」

全力疾走で駆けてきたベルが砕けた水晶片を踏みしめながら此方を見上げてくる。

「ミリア、あの結晶竜の攻撃は回復魔法で消せる！」

「……詳しく話して」

回復魔法で消せる？ 意味のわからん発言に思わず面食らうが、前線の冒険者たちの中に居る結晶にやられている冒険者を観察しながら回復魔法を発動して、意味を理解した。

「結晶は回復魔法で消せる……？ 回復薬は効かないみたいだけど、回復魔法で消せるなら……」

「あの結晶竜本体に回復魔法を当てれば……」

残りのマガジン数的に試す価値はあるか？ 突破口が無い現状、藁にも縋るしかないが。

今までの回復魔法の目標はあくまでも『人』と『仲間』だけである。それを『敵』と認識している結晶竜に当てる——正気の沙汰とは思えんが。

「わかりました、とりあえず試してみましよう。ダメなら、別の方法を探します」

マガジンが無くなって回復魔法が使えなくなると、近距離でしか使えない『レツサーヒール』しかなくなる。というか他の冒険者で回復魔法使える奴はいないのか？ 魔法自体希少なのに加えて回復魔法は更に希少だから仕方ないのか。

「聖域を守護する者達よ、非力な我が身が捧げる献身を受け取りたまえ」

詠唱の開始と共に対象を指定する。不規則に暴れ狂う結晶竜を対象にするのは難しいが、当てる。

「聖域に降り注ぐ雫よ、癒しとなれ。流るる涙の代わりとし、我が血を捧げよう——」

『苦しい』『痛い』『熱い』様々な苦痛を訴える絶叫。そして『助けて』という叫び。

ある意味では最も大きなヒントだったのではないかとは思いますが、普通に考えて敵に回復魔法当てるという発想が浮かぶ訳も無い。

「聖域に響く音色よ、癒しであれ『ヒール・バースト』」

掲げた魔力塊が癒しの波動となって弾ける。広がる衝撃波は途中で広がり止め、逆に収束し始める。

中心地点に居るのは、結晶竜。

『助けて』と叫ぶ彼の竜の体躯が——ゴライアス階層主ハウルの咆哮を受け、粉碎されて結晶を撒き散らす。

瞬時に結晶の欠片が蒼炎に転じ、其処に癒しの波動が収束し弾けた。

収束した癒しの波動が効力を失い消え去るさ中。飛び散った蒼炎は球状になり、弾けて蒼炎の欠片を撒き散らしながら結晶竜が再生して絶叫を上げる。『痛い』『やめて』『助けて』と甲高く耳障りな絶叫が響き渡った。

「嘘だろ、あの階層主ゴライアス、結晶竜を狙った？」

「流れ弾、じゃあないみたいですよ。見てください」

リリが指示した先。漆黒の巨人は無数の魔法に貫かれながらも結

晶竜を強く睨み。そして此方を見た。

その目に宿るのは、殺意だと思われる黒いドロドロとした粘着質なナニか。ヤバい、さっきの敵対心が可愛く見えるぐらいにヤバい、完全にこつちを標的にしやがった。

「ああ、今の行動。正解だったみたいですね……攻撃が来ますっ!!
ベルっ、ヘステイア様を守ってっ!!」

大正解を引き当てたらしい。ゴライアスの咆哮が連続して此方に飛来する。

さっきまでの攻撃が嘘だったみたいに、凄まじい連射速度で此方の周辺に着弾する咆哮。

障壁共有で皆を守ろうとしてみるが——大地そのものを耕す様な絨毯爆撃によって上も下もわからなくなるほどに吹き飛ばされた。

先程までの咆哮がお遊びだったかのように凄まじい速度で連発され、後方の補給拠点が滅茶苦茶にされるのを見たリューとアスファイが気を引こうと攻撃を繰り返すも、既に彼の巨人の目には映っていない。

危険度の高さからリューが狙われていた先程とは打って変わり、漆黒の巨人は執拗に補給拠点到咆哮を打ち込み続けている。

「此方を見ろっ!」

不自然な行動。気を引いていたはずのリューとアスファイを唐突に無視し、漆黒の巨人は結晶竜を狙った。

回復魔法を当てようとした瞬間に、である。

その行動は、大正解であったのだと悟り。同時に間違いを犯したのだと気付くも既に遅い。

リューが体を駆けあがりながら嵐の様な攻撃を加えるのも、無数の魔法が突き刺さるのも、アスファイの道具で爆破されるのも厭わずに階層主は後方の補給拠点のあった地点を攻撃しつづける。

リューとアスファイ、他にも数多の冒険者の集中砲火によって大量の

傷を負った化け物。魔石にすら届きうるのではないかというどでかい傷を背中に与えるも——傷を塞ぐ蒼炎が巨人の死を遠ざける。

巨人の咆哮ハウルが終わったのは、リユー達の手によるモノではない。巨人がこれ以上の攻撃が必要ないと判断したのだろう。

階層主ゴライアスは空を舞う結晶竜を睨み付け雄叫びを上げた。

「くっ……ミリアさん達は……」

「リオン、不味いです。後方部隊は今ので潰滅——回復魔法も途絶えました」

補給拠点のあった地点は大量の土埃が立ち昇っており安否の確認は不可能。十八階層全域をカバーしていた回復魔法の波動が途絶えているのもそうだが、掻き集めた物資類が全て吹き飛ばされてしまったのも大きい。

前線の士気が一瞬で下がっていく。補給の途絶えた戦闘。

敵は強大を通り越して理解不可能な領域に達している。

「時間稼ぎを続けますが、これ以上は前線の再結成を見込めませんよ」

「……………いえ、まだです」

リユーは木刀を強く握りしめ、後方の土煙舞う拠点のあった場所を見つめた。

「彼らなら大丈夫だ」

「……………はあ、わかりました。時間稼ぎに徹しましょう」

漆黒の巨人を見上げ、アスフィは眼鏡の位置を整える。

舞い上がる土煙。視界全てを覆い隠すその光景を目にしながらも身を起こした。

周辺一帯を耕したあの巨人の咆哮ハウルによって地形そのものが変化しているのか、非戦闘員すら巻き込まれた今の攻撃で、何人死んだのか……。

ヘステイア様は無事か？ ベルは？ リリは何処に行った？

「——っ！」

震えながら立ち上がる。遠くの方からはゴライアスと交戦する冒

険者の声が聞こえる。

ヘステイア様、ベル、リリ……何処だ。

「ヘステイア様っ」

何も見えない。土煙が邪魔だ。

いつの間にかクラスチェンジが解けてニンフ型に戻っているが、そんな事はどうでもいい。今の攻撃にヘステイア様が耐えられるか？

リリは？ ベルは何処だ。

地面にあいた穴ぼこ。爆撃を受けた様にしっちやかめっちやかに転がる武器の残骸。残っていた物資類も全部吹き飛んだらしい。

足を取られて倒れそうになり——腕を掴まれた。

「ミリア、無事？」

「ベル……？ ヘステイア様は？」

「其処の穴の中に、リリも一緒にいるよ」

最初の方の咆哮ハウルで空いた穴の中、ヘステイア様が目を回しており、リリがヘステイア様の介抱をしているのが見えた。

「リリ、ヘステイア様は？」

「無事ですよ。目を回していますが……ミリア様の障壁共有のおかげで平気でした」

無駄にはならなかったか。あの連射に驚きはしたが、精度は其処まで高くはなかったみたいで助かった。

「結晶竜の倒し方はわかったけど……」

「問題はゴライアス……」

あの階層主ゴライアスの凶行。結晶竜が回復魔法に晒されるのを防いだ。

其の上で自分に当たる攻撃全てを無視して此方に集中攻撃を行った。

つまりは、あの結晶竜は回復魔法が当たると何か不味いのだろう。故にあの巨人は自らの損害を度外視してあんな凶行に及んだんだ。間違いなく回復魔法が鍵となるだろう。

どうにかして回復魔法を当てないとだが……あのゴライアスの狂いっぷりから同じことをしようとしても同じように防がれるんだろう。

「ミリア、僕がゴライアスの動きを一瞬止めるから、その隙について出来る？」

「……本気？」

おい、本気で言ってるのか？ いや、ベルなら出来るだろうが、危険過ぎるぞ。

ベルの【英雄願望】^{アルゴノウト}って溜め^{チャージ}が必要だろうし、乱戦気味になってこの戦場で呑気に溜めさせてくれるなんて……。

「大丈夫だから」

オツケー。突破口を見つけたんだ。後は其処を塞ぐ障害物ぶち壊して進むだけだ。

タイミングは、難しいだろうがやってやろうじゃないか。

ベルの【英雄願望】^{アルゴノウト}と同時に『ヒール・バースト』使って結晶竜を倒す。

むしろ、最初からそれでよかったんじゃないか？

「ちよつと待ってください、タイミングはどうするんですか？」

「発動直前状態で——ああ、ゴライアスに狙われますね」

魔法の発動直前の状態で待機しても、間違はなく狙われるだろう。

ベルがゴライアスを攻撃。その体を消しとばして再生しているさ中に俺が回復魔法を当てる。

ベルには溜め^{チャージ}が、俺には長めの詠唱が必要。

もしタイミングがズレてしまえば、ダメだろう。

多分だが、二度目はない。次は確実に殺しにくるだろうしなあ。

「大丈夫だと思う」

「まあ、大丈夫でしょ」

ベルと視線が合った。なんとなくだが、大丈夫な気がする。

「ミリアなら大丈夫」

「ベルなら平気よ」

ミノタウロスとの戦いのさ中を思い出す。

あの瞬きの間のズレが死を招く様なギリギリの戦い。

ベルと共に、あの戦いを潜り抜けたのだ。平気だと思う。

「リリ、使えそうな武装掘り起こして前線に持って行ってあげて。後、

ヘステイア様を安全な場所に、私は此処からまた狙うわ」

「……わかりました」

「ミア、行ってくるよ」

ベル、タイミングは任せる。合わせて見せるよ。

第八十九話

数人の倒れ伏した冒険者を引き摺って撤退する者。

迫りくるモンスターを迎撃すべく武器を取る者。

ゴライアス 階層主への攻撃を再開しようと詠唱をする者。

連携を失って戦線は歪み切り、横から突っ込んできたモンスターの勢いを殺しきれずに前線は崩壊していた。

前線を下げようと周囲の冒険者に声をかける者も数名居るが、既に応えられるものは居ない。

今や殆どの者が自身の、そして同じパーティの仲間を守る事で精一杯である。

最前線よりさらに突出した地点、ゴライアス 階層主に張り付いて攻撃し続ける事で歩みを止めんとするリユーが居るおかげで、崩壊した前線が潰滅するのを防いでいるものの、既にリユーも幾度かの攻撃が霞めてその外套はズタズタに引き裂かれていた。

その苛烈な攻撃の前に漆黒の巨人は平然と立ち続けている。

「く、このままでは……」

「リオン！ 下がりなさい、死にますよ！」

アスファイの警告を聞きながらもリユーは蒼炎を外套で防ぎながら木刀を振るった。

「何を、このまま進ませれば前線は潰滅してしまう。今ならまだ立て直せる！ ここで食い止めます！」

「無茶苦茶な……」

漂う蒼炎を弾いた外套が一瞬で結晶塗れになり、散り散りになった布片と結晶が飛び散り、リユーの描く軌跡を空中に残す。

少しのミスが全身結晶塊になって死ぬという危険極まりない行動を平然と行いながらも、リユーはひたすらに攻撃を繰り返す。

無茶苦茶な行動をとり続けているのにはちゃんとした理由が存在する。

後方、隆起した大地の上。白髪の少年がこれ見よがしに右手を掲げて立っていた。

その右手は光り輝いており、なんらかの攻撃を行う事を示している。

「アンドロメダ、彼が何かをします。時間稼ぎを手伝いなさい」

「っ、無茶を言ってくれますねー！」

何かとは何なのか。彼女は理解していない。

しかし、後方から発せられる魔力の流れと、それを隠す様に周囲で巻き起こる冒険者の散発的魔法。

先程の回復魔法の発動、結晶竜を攻撃したゴライアス。察しの良い冒険者の何人かが既にベルと同じように動き始めている。

後方から発せられる回復の波動が失せ、何かを企んでいるのは明らか。詠唱を行っているらしい事は魔力の流れで読み取れる。それに対して隠す様に動く皆を見れば会話を交わさずともなんとなくは理解できた。

「結晶竜を仕留めるつもりですか……」

其の為に自らを囷としているらしいベルを見てアスファイは眉を顰めた。

隆起した大地。突き出た小高い岩の上でベルは右手を高々と掲げて溜めチャージを行っていた。

目の前で暴れ狂うゴライアス。その頭上で蒼炎を撒き散らす結晶竜。

動ける冒険者に作戦を簡単に伝え、注意を引いて結晶竜に回復魔法を当てる事を伝えて僅か一分足らず。

ベルはただ目立つ場所でゴライアスに向けて敵意を向けながら溜めを行っていた。

「まだ、まだまだ、早過ぎる」

遙か後方、ミリア・ノースリスの居る地点より薄っすらと、微かに放たれる魔力の流れ。詠唱を開始するにはまだ早い。

絶妙なタイミングを見極めなければならぬ中、ベルは出来る限り目立つ様に、ミリアに見える様に、同時にゴライアス気を引く為に、腕

を掲げる。——ついにゴライアスの目に留まった。

「っ！」

向けられた膨大な殺意。脅威と認識され、攻撃対象に選ばれた者だけが感じ取る威圧。

足が震えそうになり、溜めが止まりそうになる。けれども歯を食いしばって耐える。

「大丈夫。大丈夫だ」

口を大きくあけ、ベルに向けて咆哮ハウルを放たんとするゴライアスを前に、ベルはただ静かに目を瞑った。

いち早くそれに気づいたのはアンドロメダであった。

「リオンっ！ クラネルさんが狙われていますっ」

「……アンドロメダ、死ぬ気で止めますよ」

冒険者も察した者から順にゴライアスの気を逸らすべく攻撃が激しくなり、ゴライアスの咆哮ハウルがベルのすぐそばに着弾して土を舞いあげる。

無数の咆哮ハウルが着弾するさ中、ベルは揺れる大地と大きな衝撃を感じながらも確かに溜め終わった事を感じ取り、顔を上げて目を見開いた。

ベルを脅威と認識したゴライアスの赤い瞳がベルを強く睨み、口を大きく開けて咆哮ハウルを放たんとするさ中、ベルは静かに一步踏み出した。

戦場を見下ろせる高台の上。

近くに居た魔法使いから借りた杖を持ちながら、ひたすらに待っていたのだ。

周囲に飛び散っていたキューイの血。此処はキューイが死亡した地点だ。

既に魔力として霧散してしまった為、鱗が少し散乱し、血が飛び散っている以外には死体が残っていないこの場所で魔法を使えば、威力増強の効果が得られる。

それを目当てに此処まで大急ぎでやってきた。途中で出会ったモンスターに対処するためにマガジンを2つ程使ってしまった、残り7個しかマガジンが残っていない。

俺はベルが前に進みだしたのを見て、詠唱を開始した。

「聖域を守護する者達よ、非力な我が身が捧げる献身を受け取りたまえ」

どれだけじれったい思いをしたか。

「聖域に降り注ぐ雫よ、癒しとなれ」

ベルの元に降り注ぐ咆哮ハウルを見た瞬間、飛び出しかけた。けれどもそれは不味いと必死に留まった。

「流るる涙の代わりとし、我が血を捧げよう——」

心臓が早鐘を打っていた。ベルの周囲に着弾する度に悲鳴が零れそうになった。

マガジンが分解され、魔力として周囲に飛び散る血に、俺が展開した魔法陣マジックサークルに充填されていく。

「聖域に響く音色よ、癒しであれ」

充足した魔力。ゴライアスの注意が此方に向いた。

目が合った。

モンスターと冒険者。乱戦に陥っている前線を走り抜けるき中、ベルは自分に向いていたゴライアスの殺気が逸れたのに気付き、口元を歪めた。

ミリアを見ている。

見上げたゴライアスの視線は、ゴライアスが脅威だと認識したはずのベル・クラネルではなく、後方より放たれる癒しの効力を持つ魔法を放とうとする魔力の流れに向けられている。

ただの知能無き化け物と決めつけていたわけではない。けれども目の前の脅威から視線を逸らす事をしてでも、回復魔法を防ごうとしている事はこの作戦が無駄ではない事を知らしめている。

ベルは拳を強く握りしめる。

漆黒の巨人が口蓋に魔力を溜め始める。

ベルの事を眼にもくれず、ただ優先度の高い対象を攻撃しようとする階層主。^{ゴライアス}

リユウの連撃に揺らぐず、アスフィの使う道具の爆発にも揺らがない。^{ゴライアス}

階層主が狙っているのは結晶竜ではない。ミリアを狙っているのだ。

だから、ベルは躊躇せずに飛び込める。

「こつちを、見ろおっ!!」「ファイア・ボルト」オオツ!!」

注意の逸れた階層主。目の前の短期的な脅威ではなく。長期的な目でみた脅威を排除せんと咆哮を放とうとした巨人の胸を狙った大炎雷が放たれた。

稲妻と共に轟音が響き渡るさ中、狙いすましたタイミングに、癒しの波動が弾ける。

此方が狙われた瞬間に感じた圧力。足が震えそうになり、魔力の流れが乱れかけた。

一瞬で此方をギョロりとみた巨人の眼。言葉にするまでもなくその目に映る殺意は俺に向いていた。

リユウさんとアスフィさんが横から注意を逸らすべく動くも、無意味に終わり、次の瞬間には俺に向かって咆哮が寸分たがわぬ位置に着弾する——なんて事にはならない。

ベルが居たから。

弾けた稲妻の閃光が視界を焼き。轟音によって耳も潰されて世界が塗り潰される。

此処で外せば、次は無い。だが、外すなんて思わないし、思えない。家族が信じてくれているから。外しはしない。

『ヒール・バースト』

真っ白に焼けた視界の中。何も見えない、聞こえなくなるぐらいの轟音に合わせて、魔法を発動させた。

徐々に光が消えて行く。

視線の先。中央樹の傍の草原に立ち尽くす階層主は、顔の八割以上が消し飛んでいた。

そして——癒しの波動が直撃した結晶竜が灰になって散っていく姿が目に入ってきた。

「よしっ」

思わず拳を握り締めてガッツポーズをとる。

先程まで響いていた甲高くも不気味な不協和音の悲鳴は途絶え、代わりに唄う様な、美しい音色が響いている。

《暖かい——暖かい——暖かい——》

心に染み渡る様な、音色の様な、歌声にも似た響きの声。結晶竜がもつ本来の声だろうその音色に意識を奪われかけ——慌てて両手を結晶竜に向けた。

「こっちに、おいで」

今すぐ、此処まで下りてきて。いや、命令だ、降りて来い。助けてやっただ、今度は助けてくれ。

灰になって散り逝く結晶竜だったもの。

飛び散った蒼炎が散り散りになって消えて行くさ中、何かが此方に向かってふわふわととんできた。

何とも言いようがない。実体のない霧の様な何か。

《ありがと——何をすればいいの?》

「すぐ、呼び出してあげるから、力を貸して」

その霧の様な何かを抱き留めれば、解けて消えた。まるで何かを取り込んだ様に胸の内側にスーツと収まるソレ。

静かにその感触を感じとりながらも顔をあげれば、視界に映る階層主は相も変わらず顔の八割以上が消滅していて——待て、なんで灰になってない? ?

頭部の八割以上を失ったんだ、今すぐ灰になるはずなんじゃないか?

冷や汗が止まらない。体の芯まで凍える様な悪寒が走る。

「待って、ねえ嘘でしょ。冗談……きついわ……」

おい、おいおいおい、なんだありや……。もう蘇生はしないんじゃないのか？

冒険者全ての視界が稲妻によって一瞬だけ眩んだ次の瞬間、周囲を漂っていた幽鬼の様な蒼炎が消えて階層全体が蒼い暗闇に沈み、階層主の姿が薄闇の中にぼんやりと浮かび上がる。

誰が見ても頭部の八割方を失って生物として死亡していると確信できる程の傷。

あの鉄壁を誇る外皮を穿ち、同時に肉や骨も綺麗に消しとばしたその威力に冒険者達が息を呑む。

疲労感がこびりついて一步も動けなくなっていたベルは目を見開いたまま喉を震わせていた。

「うそだ……」

消えない。

ゴライアス階層主が消えない。結晶竜は灰となって消え去り、蒼炎が消えて薄闇に染まる十八階層の中央。

頭部の八割を失っている。頭を失って活動を続けられる生物は存在しない。

ましてやモンスター等は致命傷を追うか核である魔石を破壊されれば灰となって消滅するはず。その当たり前の現象を無視してその巨軀は立ち続けている。

その光景に誰しもが言葉を失うさ中——遂に動き出した。夥しい量の赤い粒子が溢れだす。巨人の首元から溢れ出したそれによっておぞましい勢いで失われた巨人の頭部が再生していく。

戦慄と恐怖に染まる冒険者達の視線を一身に浴びながら、復元しきつていない目玉をギョロギョロと凄まじい速度で動かして視界の中に映る敵を探す巨人。

頭部を失って尚——結晶竜の力を借りる事なく、ゴライアス階層主は再生してみせた。尋常ではない生命力を以てして溜めされた「ファイアポルト」を耐え凌ぎ、その驚異的な治癒能力で再誕する。

再生しかけの真つ赤な眼球が、ベルを捉えた。先程まで無視されていた攻撃が被弾し、意識を向ける対象であつた結晶竜が消え失せ、ベルから視線を逸らす理由が何処にも存在しなくなった事で、ベルだけを見て、ベルだけを狙い、他の何者も無視してでもベル・クラネルを殺す為に漆黒の巨人が動き出した。

「——逃げなさいっ!!」

リユーのなりふり構わない叫び。アスフィとほぼ同時に駆け出してベルから意識を引きはがそうと試みる二人がゴライアスに攻撃を当てるより早く咆哮^{ハウル}は放たれた。

再生しきっていない砲口——口腔の周囲の血肉や牙片を飛び散らせながら放たれたソレ。

身動きが出来ない程の疲労感に襲われたベルの元に血と肉片、牙片が恐ろしい勢いで降り注ぐ。

直撃を避けんと飛び退いて——魔力塊が弾け、ベルの体を大きく吹き飛ばす。

傷付き、吹き飛ばされ、地から足が離れたベルの体。檻褻となつた彼の視界に映つたのは——大砲弾となつて突き進んでくる巨軀。

殺意に満ちた咆哮を響かせて、大草原を沼地の如く陥没させてベルに急迫する。

リユーとアスフィがゴライアスから引きはがされ、救援も間に合わない。

回避不可能にして一撃必殺の攻撃。

直撃を待つ以外の選択を失つたベルの時が凍り付き——真つ蒼な魔力障壁に包まれ、同時に盾を構えた偉丈夫が割り込む。

誰よりも早く駆け付けた桜花。その体を包む魔力障壁と、ベルを包む魔力障壁が重なり合い、ほんのりと強化されるソレ。

悲壮な表情で盾を構え、迫りくる攻撃に歯を食いしばり、迫りくる薙ぎ払いを防御する。

ミリアの要いた『障壁共有』によって与えられた『マジック・シールド』と、桜花の持つ盾。

緩慢に流れる時の中、彼らを包み守ろうとした魔力障壁はまるで紙

屑の様に砕け散り、桜花の盾に巨人の中指がめり込み、ひしやげ、桜花の体に食い込む。

口から吐き出される大量の血液。桜花の背に押し当てられたベルの体からも骨の折れる音が響いた。

限界まで目を見開いた二人の体が、弾き飛ばされ、砲弾の如き勢いで森の方へ吹き飛んでいった。

飛び散った血飛沫。剥がれ落ちたエンブレムが零れ落ちる。

間に合わなかった？ いや、間に合った。——間に合ったけど、意味が無かった。

砲弾の様な勢いで桜花とベルが吹っ飛んでいった。

まるで、まるでパチンコで打ち出されたパチンコ玉みたいな、そんな吹き飛び方をしていた。

待ってくれと祈った。ほんの少しでいいから、時間をくれと。

ヘステイア様の元に駆け付けて、クラスチェンジしてスナイパーで巨砲をぶち込めれば。

アサルトで転移してベルを離脱させればと、サンクチュアリの障壁共有が無意味に砕け散り、ベルと間に割り込んだ誰かが呆気なく吹き飛んでいった。

——なんでだよ……おかしいだろ？ あの一撃で、死んでなきやおかしい。

喉がカラカラに乾いて、攻撃を食らった訳でもないのに足がガクガクと震えた。

——あの攻撃を食らって、無事で済むのか？ ベルは生きてるか？

中央樹から少し移動した所で拳を振るう巨人が暴れている。戦場に残った者を蹂躪している。

回復魔法を——詠唱文が出てこない。

喉がカラカラに乾いていて、詠唱して広域回復魔法を発動させなければいけないのにできない。

リユーさんが戦場を離脱して離れていく。ベルと桜花を回収した者達が全速力で戦場を離脱している。

大きく息を吸って、吐いて、吸って——頬をはたいた。

落ち着け、ベルは生きてる。誰かが庇ってくれたおかげで、生きてるはずだ。

まずはベルの所に向かうべきだ、大丈夫、死んでない。即死してなきや回復できる、大丈夫だ……きつと……。

大急ぎで駆け付けたその場所には、ヘスティア様やリユーさん、後は千草やミコトが居た。

ボロ雑巾みたいになった血塗れの人物に必死に呼び掛けているのが見えた。

「クラネルさんっ！ クラネルさんっ、返事をしなさいっ」

「桜花……桜花あ、死んじやいやだよ……」

ガンガンと痛む頭。ぐらぐらと揺れる視界。全力疾走でやってきたのはいいが、詠唱をしようにも集中できない。

「ミリア君っ！」

「ヘスティア様……今、回復魔法を」

ベルに歩み寄る。ベルがあおむけに倒れていた。

全身裂傷塗れ。肋骨も折れているのか脇の辺りが歪に歪んでいる。口元から溢れ出た血もそうだが、全身から静かに零れる血が、応急処置として巻かれた包帯が、視線を逸らしたくなる程に痛々しい。

「聖域を守護する者達よ、非力な我が身が捧げる献身を受け取りたまえ。聖域に降り注ぐ雫よ、癒しとなれ。流るる涙の代わりとし、我が血を捧げよう——聖域に響く音色よ、癒しであれ『ヒール・バースト』ッ」

弾けた光の波動。ベルと桜花を包み込み、その傷を癒していく。

呼吸が安定し、傷口が消え——意識が戻らない。

「ベル君、ベル君、聞こえるかい？ ベル君」

非常に体力や気力、精神力を消費する大技を放った反動で、ベルは

動けない。目覚める確率は、低い。

生きてる、なんとか生きてる。けれど、ゴライアスはまだ暴れてる。

「ヘスティア様、クラスチェンジを」

「ミリア君……わかった」

「リユーさん、すいません……大技を撃ち込むので時間稼ぎを」

「……わかりました」

リユーさんがゴライアスの元へ駆けていく。それを見届けて、クラス変更が終わると同時にクラスチェンジ。

尻尾や耳が邪魔臭いが、今はそんな事はどうでもいい。

——よくも家族ベルを傷付けたな。

——よくも家ヘスティア様族を泣かせたな。

ぶっ殺してやる。

「アンドロメダ、時間稼ぎをッ！」

「リオンっ、何をっ」

離脱したリユーに代わり、一人で戦線を支えようとしていたアスフィの元に戻ってきたリオンの言葉に彼女は眉を顰めた。

「あの再生能力を前に、まだ何か手があるとでもっ!？」

「あります。ミリアさんが大技を放つそうです。時間を————ぐうっ」

回避し損ねた一撃がリユーを掠め、それだけで彼女の体を大きく吹き飛ばす。

危うく地面に叩きつけられたりユーをアスフィが抱き留め、声を荒げた。

「彼女の特技!? 正気ですか貴女——彼女、相当魔力を消費してますよっ、撃てる訳ないですよっ!」

幾度とない回復の波動を放ち、戦場の流れを変えて見せたミリアだが。傍から見れば魔力消費量は既に限界値を超えていてもおかしくない。

むしろあれだけの回復魔法を十度以上連発してなお余裕があるな

どとは思えず、なおかつミリアの能力を神の指示の元計っていたアスファイからすれば、これ以上の大技は出てこないと言い切れるモノだった。

それを、リユーが否定する。

「では、後方から感じ取れるこの魔力を、貴方はどう説明するのですか？」

「何を——まさかっ!？」

「ええ、もう一度あの大砲撃が行われます。アンドロメダ、時間稼ぎをっ」

後方より放たれる膨大な魔力。詠唱の進行と共に弾ける様に膨れ上がる魔力の奔流にアスファイが鳥肌を立てながらも口元に笑みを浮かべて呟いた。

「完全に想定外ですが——むしろありがたいですね」

最初に読み取ったミリアの能力から完全に外れた魔力量。本来なら精神枯渇になっていてもおかしくないはずの回数の魔法の行使と、最初に放った砲撃がミリアの放ったモノだと知ったアスファイは読み違えた事に笑みを零した。

「——きつと、貴方の命は羽の様に軽い『リロード』」

目の前で行われるリユーさんとアスファイさんの命懸けの時間稼ぎ。

他の冒険者も加わった戦列によって此方に飛来する咆哮は九割九分が防がれて——直撃してもマジックシールドで受け止めきつた。

魔力に乱れはない。綺麗に整った魔法陣から放たれる光を浴びながら、その醜悪な巨人を見据える。

今、その綺麗な顔を吹き飛ばしてやる。

「——何故ならこの引き金は羽の様に軽いもの」

放たれるは極光。全てを穿ち抜き、死を与える光の柱。

防御なんてしようもんなら、その防御諸共ぶち抜いて即死させる確殺の砲弾。

「『ファイア』 ツツツ!!」

五つの点灯した魔法陣の魔力が弾け——魔力が溢れ返る。
暴れ狂う銃身。抑え込もうと左手で右腕を押さえるが、魔法陣が粉々に砕け散った。

第九十話

後方より放たれる魔砲が一直線にゴライアスに向かい——直前で弾けた。

膨大な魔力の砲撃が拡散し、ゴライアスの全身をくまなく打ち尽くすだけに留まらず、足元の地面を抉り、あらゆる方向へ飛び散った砲撃の破片がそこらじゅうを破壊しつくす。

死ぬ気で時間を稼いだリユーとアスファイの目の前で、巨軀の全面を穴あきチーズの様にデコボコにへこませたゴライアスが赤い粒子を纏って再生し始めた。

「嘘でしょうっ!! このタイミングでミスっ!? 彼女はいったい何をやってるんですかっ?!」

「今のは……まさか、制御能力を上回って……、いえ考察は後です。アンドロメダ、畳みかけますよっ」

全身穴あきチーズの様になりながらも、その巨軀は再度暴れんと拳を握り締めて振るう。

冒険者達が最後の希望だと思っていた砲撃が失敗に終わった事で戦意喪失し、逃げ出そうとし始める。

既に戦線は完全に崩壊。立て直しは効かず、有効打となる手段も失われた。

ボロボロになった腕を見ながら、呆然と目の前の光景を見ていた。穴あきチーズになった癖に、その後のリユーさんとアスファイさんの追撃が入った癖に、ゴライアスの再生が勝っているのか徐々に動きが戻っていく巨人。

何故——何故、失敗した？

自分の右腕が弾けていた。内側から弾け、肉が裂けて骨が覗いている。ブスブスと焦げた匂いは、自分の左手から漂っていた。

魔力の暴走。発射態勢を整え、放った瞬間に制御不可能に陥った事による砲撃の分散。

極光が一直線にゴライアスの胸を穿つはずが、分裂した無数の子弹による全身砲火へと変化してしまったのだ。

なんで……

「ミリア君っ！」

「ミリア様っ、大丈夫ですかっ」

抉れた地面。足元に血溜まりが広がっていく。あ、この血、俺の血かあ……。

「しつかりしてくださいっ」

駆け寄ってきたのは、いつの間にか到着していたらしいリリだった。肩を掴まれて、カクンと足が崩れ落ちた。

焦げ臭い匂いが立ち込めている。肉が裂けて骨が覗く右手に、黒く焦げ付いた左手。何が起きたんだこれ……。

「杖が必要だったんですよっ」

杖？ 杖……あー、ああ、うん。何処かで聞いたな、確かリユースに魔法を教えて貰っていた時だっけか。

『いいですか？ 杖には大まかに二種類あります。増幅装置ブースターと安定装置スタビライザーです。最終的には威力の増強という意味ではどちらも同じですが、れっきとした違いが存在します』

増幅装置ブースター。単純に威力1000の魔法に対して増幅型は威力を20%引き上げて1200に出来る。

安定装置スタビライザーは制御能力が不足する分を補ってくれる。

普通の魔法使いなら増幅装置型の杖を使う。しかし時折馬鹿げた魔力を消費して発動する長文詠唱タイプの魔法を習得した魔法使いの中には自身の制御能力では制御しきれない者が居る。

覚えた魔法を制御しきれないのは魔法使いとしては赤っ恥も良い所だが、それでも制御しきれないものは仕方がない。其の為の安定装置スタビライザーだ。

制御能力1000に対して威力1200の魔法を使おうとしても過剰分200の所為で暴走気味になってしまい逆に威力が落ちる。それを避ける為に制御能力を20%引き上げて制御能力1200にする事で、威力1200の魔法を扱えるようにするのが安定装置型スタビライザーの杖。

最終的に威力120の魔法を使えると言えば結果は同じだが、元の魔法の威力が低い場合は増幅装置型の杖を使つての威力増強。元の魔法の威力が高い場合は安定装置型の杖を使つての安定化を図る。高価な杖の中には増幅装置と安定装置の両方の効力を持つ杖が存在するとかどうか。

俺がもっていた杖は——安定装置型の杖だった。

正確には増幅装置2：安定装置8ぐらいの割合の複合型の杖である。

要するに、魔法の制御能力を補助していた杖を失つた所為で放つた瞬間に制御不可能なまでに魔力が膨れ上がり、銃身として魔力を流した右腕が弾け、それを押さえた左手が焼け焦げた。

放たれた魔法も中途半端な威力に留まり、結局はゴライアスを仕留める事も出来なかつた……と。

ははは、なんだそりや……此処で、こんな所で失敗すんなよ……。

ボロボロになった両腕を見ながら涙を流し、笑う。

「見てくださいよ、肝心な所で失敗しましたよ……馬鹿じゃないですかね」

「ミア様、しっかりしてくださいっ」

リリの呼び掛けが聞こえていないのか、ミアは自分の両腕を見ながら笑っていた。

「ベル君、目覚めてくれ。無茶を言ってるのはわかる。だけど……今すぐ目を覚ましてくれ」

極限状態での失敗によって精神的均衡が崩れて半ば狂乱状態の彼女を痛まし気に見ながらも、ヘステイアはベルに呼び掛けていた。

「キミならできる。だから、目を覚ましてくれ」

——声が聞こえた。

体が酷く重い。まるで鉛とすり替わつたように、石像になつてし

まったのかと錯覚するほどに、腕も、足も、瞼すらも重たくて動かない。

声が聞こえる。誰よりも尊敬し、敬愛し、大切に思う女神の声が訴えかけてくる。

立つてくれと、何度も声をかけてくる。微かに聞こえる、家族の聲が遠くに響いていた。

『私じゃ、ダメだったよ』と

泣いてる。それだけを理解し、包み込まれる右手に感じる熱を頼りに、泥を掻き分ける様に意識が覚醒していく。

再起する意思が宿り、体を揺らす。後は光に向かって進めばいい、視線の先に光が溢れている。それに手を伸ばすだけでいいのに――

――体は意思に反してぴくりとも動かない。

謝る声が聞こえる。涙を流して人がある。呼び掛ける声がある。

それでも動かない体を叱咤し、動けを叫びにならない叫び声をあげ、限界を超えている肉体に、ちくしよう、動けと喚起を叫んで――

――聞き覚えのある台詞が響いた。

『もし、英雄と呼ばれる資格があるとすれば――』

知っていた。その台詞は^{フレーズ}何度も耳にしてきた。

幼き頃の憧憬の日々。原点の言葉^{はじまりひとつ}。

限界を超えた肉体に宿る意思。ほんの少しの過去の回帰。

『仲間を守れ。女を救え。己を賭けろ』

^{ミリア}家族が泣いてる。

^{ヘステイア様}女神が求めている。

^{リリ}仲間が呼んでる。

『願いを貫き、想いを叫ぶのだ。さすれば――』

そう、それが――。

『――それが、一番かっこいい英雄だ』

ぐちゃぐちゃの両腕。まん丸い月は見えない。

呼び掛けるリリの声、もう立ち上がれなかった。

なんで、こんな最期の最後で失敗しちゃうんだろうか。後は、何をすればいいのか。

視界は涙でぐちゃぐちゃで、包帯が巻かれた両腕を見ながら呆然としていた。

後ろで神ヘルメスがごちゃごちゃ何か言ってるが、そんなのはどうでもいい。

ゴライアスを倒さなくてはいけないのに、もう立ち上がる気力はない。一気に出血した事で意識が朦朧とする。

頬を伝うのは涙か、血か、ともかくとし、もう動けないし気が付けば魔力が無かった。

あれだけの猛攻撃を行っていたのだ。アドレナリン全開で動き続けた反動か、マインドダウンになっている事に気付かなかつたらしい。ついでにマガジンもきれいさっぱり使い切ってもう動けやしない。

「ごめん、ごめんなさい……」

「ミリア君、もういいよ」

視界の外から聞こえたヘステイア様の声に、体が震えた。

ベルが倒れている今、俺が動かなくてどう——す、る？

誰かが、視界を横切って歩いて行くのが見えた。

白い髪に、傷だらけの体。防具は全損し、血の滲むボロボロの衣類。肩に担いだ天然武装にも見える武骨過ぎる黒大剣。

超カッコいい奴の背中があった。

「ミリア君、後はベル君に任せればいい。僕らは待つてよう」

「ベル……」

立っていた。傷付き、疲弊し、動けないはずのベルが立っていた。

「ミリア、神様、待つていてください」

——リン……リン……と、鈴の音色が響いている。

「すぐ、倒してくるんで」

疲れているはずだ。限界のはずだ。もう立つ事も出来ないぐらいに疲弊しているはずなのに。

「行つてきます」

肩越しに振り返つたベルは、力強い笑みを浮かべていた。

ヘステイア様とリリに肩を貸され、見晴らしのいい場所まで足を運んで——戦場を見下ろせば、ゴライアスとの死闘が繰り広げられていた。

戦線は崩壊して存在しない。乱戦となつた冒険者達。

そんな戦場に響き渡る大鐘楼グランドベルの音色。

「ミリア君、良く見てるんだ。キミは一人じゃないし、一人で最後まで頑張らなくても良い」

聞こえる音色に反応した巨人がベルに迫ろうとする。

——魔力もマガジンも残っていない俺には何も出来ない。

次の瞬間、巨人が転んだ。まるで片足をいきなり引っかけた様に転び、両手両足を着いて倒れ伏す。

息を呑んでその光景を見ていれば、リユースさんが詠唱と攻撃、移動と回避、高速で四つの動作を行う高等技術。俺が周囲から言われる『並行詠唱』がお遊びだったと思えるぐらいの超高等技術。本物の並行詠唱を披露する彼女。

それに追従する様に、アスファイが空へと飛び上がる。靴から飛び出た何かによつてか、それとも魔法かスキルによつて彼女はふわりと浮き上がり、巨人の顔面を抉る。

ゴライアスの絶叫が響き渡る。

次の瞬間、緑風を纏つた無数の大光玉がリユースさんの周囲に現れ、一斉砲火の如き勢いで放たれた。ゴライアスの黒い体皮を削り、夥しい閃光を連鎖させる。

目が眩む様な光景。

思わず右手を前に突き出した。

「ミリア君？」

『呼び声に答えよ』

残りカスの様な魔力を込め、呼び出す。キューイとヴァンは応えら

れないが、新たな一匹が少量の魔力を吸い上げて顕現する。

幽鬼の様な蒼炎を揺らめかせ、結晶の体躯を持つ神秘的な竜。小さな魔法陣から出てきたのは、まるで最初の頃の様な手の平に乗ってしまう程の大きさしかない結晶竜の姿。

思わず吐息が零れた。こんなんじや全く戦場に行かせても意味が無い。

結晶竜の姿に落胆していると、ゴライアスの直上に一振りの剣が現れた。魔力の流れを感じ取り、視線を向ければミコトが両手を大きく突き出して多量の汗を零しながら集中しているのが見えた。

ゴライアスの足元に発生した無数の魔法陣。深紫の光剣がゴライアスの体を突き抜けて魔法陣に触れた瞬間——ゴライアスが頭の上から何かに押さえつけられる様にかがんだ。

いや、多分、重力か何かが増幅したのか、ゴライアスだけではなく魔法陣を中心に地面すらも陥没していく。だけじゃない、天井すらもポロポロと罅割れて崩れ落ち欠けているのが目に入り、息を呑んだ。

あんなの迷宮で使えば生き埋めも良い所。それこそ長時間の使用なんて出来る訳ない。ミコトが最初からあの魔法を打たない理由がわかった。

だが、圧倒的なステイタスを持つ階層主ゴライアスを止めるのには足りない。徐々に、ゴライアスが立ち上がる。重圧を押しつけ、一步踏み出された。二歩、三歩と歩みを進め、四歩目で魔法陣が粉々に砕け散る。単純な力負けを起こしてその魔法は砕け散った。

誰かの叫びが聞こえた。草原にて起きるモンスターと冒険者のせめぎ合い。ベルに向かうモンスターをおしとどめようとする冒険者と、ベルを邪魔せんと迫りくるモンスターの群れ。その冒険者が我先にと逃げ出し——大炎塊が爆走した。

瞬く間に発生した燎原の火がモンスターを一匹残らず一掃し、草原諸共灰塵に帰した。

よく見れば、ヴェルフが飾り気のない柄と刀身だけの長剣を手にしていて。まるで炎を直接剣の形にしたような、荒れ狂う様な炎剣にも見える長剣。

それが紫色の結界を破ったゴライアスに向けて振るわれる。

視界が真っ赤に染まった。炎の色が全てを埋め尽くす。思わず目を瞑り、ジンジンと痛む瞳の奥の感覚を覚えながらも目を開けば、ゴライアスの体は激しく燃え上がっていた。

一振りするだけであの威力。詠唱も無く、ただ振るうだけで発揮されるアレは、『魔剣』。それも噂に聞く『クロツゾの魔剣』。『海を焼き払った』なんて眉唾だと思っていたソレすらも実現できそうな威力だった。

そして、グラントベル大鐘楼の音色は高らかに、限界に近い程の音色で響き渡る。ベルが、立ち上がっていた。溜めを終えたベルが、静かにゴライアスを見据えている。

俺は、それを見ている事しか出来ないのか。——否だ

『枷を壊せ解き放て』

魔力の残りなんてどこにもない。けれども、絞り出しても詠唱を完了させる。

手の平サイズしかないちんけな大きさの結晶竜が、ほんの一回り大きくなる。

体長40C程度しかない、小さすぎる結晶竜。これじゃ何も出来ない。手助けも、何もできないだろ。

『飛翔せよ階位を超えて』!!』

脳髓に直接やすり掛けする様な激痛。残っていない魔力を絞り出そうとして絞り粕すら残らなくなるぐらいに引つ張られる感触。けれども、一手、一手でいい、何かがしたい。

見ているだけじゃ、ダメなんだ。

「行つてっ」

行け、頼むから、なんでもいい、一瞬で良い、アイツの動きを止めろ。

白い光を帯びる黒大剣を肩に担ぎ、

道を開ける冒険者の間をすり抜け、グラントベル大鐘楼の音色を響かせ、進む。

数多の攻撃によつて隆起し、真つ直ぐ走る事も難しい草原だった場所に足を踏み入れ——ベルは踏み締めた大地の感触に違和感を感じた。

シャリン、シャリンと、澄んだ音色の足音。地を蹴る感触は、土と草ではない、硬質なモノを蹴る感触。

視線を落とす必要も無かった。目の前を飛んでいく結晶竜の姿に息を呑み、ベルは真つ直ぐと駆けていく。

なけなしの魔力を込めた結晶竜がその体をすり減らしながらベルが走る為の道を生みだす。

隆起した大地では走り辛いだろう。だから、その足元を固めて歩みやすくする。

攻撃に転ずるには、込められた魔力が少なすぎる。だからこそ、足場を固める事しかできない。

真つ直ぐ、一直線に伸びる結晶の道。ベルが駆けてゆくその背を、誰しもが息を呑んで見守る。

業火に焼かれる巨躯。立ち上がり、ベルを見据えるその巨人の前に、結晶の道を踏みしめて駆ける。

ゴライアスの双眼がベルを捉え、業火に包まれた腕を振り上げる。巨人渾身の薙ぎ払い——それが止まった。

振り上げられた腕、深紅の業火に包まれるその腕に蒼炎がまとわりつき、一瞬で結晶塊が生え茂る。黒い体皮を突き破り、無数の結晶が生えて動きを阻害した。

一撃で倒しきるには不可能で、せいぜいが動きを止める事しかできない小さな蒼炎がゴライアスの動きを止める。

腕だけに留まらず、両足に蒼炎がまとわりつき、結晶塊を生やしていく。

既に巨人は身動きが取れなくなっていた。埋まる距離。

迫る結晶の道の終わり。

漆黒の巨人の眼の前で終わるその道の端を踏みしめた。

収束する光剣に己の全てを賭し、ベルはその一撃を放った。

純白の極光が弾け、視界が塞がれる。

——ああ、悔しいな。

真つ白な視界の中、支えてくれるヘステイア様とリリの感觸以外にわかる事は無い。

——これじゃかつこいの姿が見えないや。

ゴライアスの雄叫びをかき消す程のベルの咆哮が響いている。

遅れて、凄まじい轟音が響き渡った。

聴覚を奪い去る音が消え去った後、静寂が舞い降りた。

さつきまでの混沌としたモンスターと人との戦いが嘘の様に、静かになる。決着を示す静寂だ。

不思議と、目を焼いたはずの光だったというのに、目を開けてみれば普通に見える。目の奥に残る鈍痛も無く、自然と視線は其処に向けられた。

細く長い、結晶で形作られた橋。

その最先端に佇む人影。

消失した刀身の断面から白煙を上げる黒大剣。

それを振り抜いた姿勢で固まっているのはベルだ。

ゴライアスの体は——半分程消し飛んでいた。

残っているのはゴライアスの片腕と、下半身のみ。上半身諸共魔石は確実に消し飛んだであろう姿が確認できた。

また、何か出るのではと警戒を深めるさ中、限界まで力を振り絞って頼みを聞いた結晶竜が澄み渡る咆哮音色を響かせ、はらはらと光の粒子になって消えて行く。

それに続く様に、ゴライアスの体が灰になっていく。残っていたのは腕と、下半身のみとはいえ、ゆつくりと時間をかけて色を失い、大量の灰を撒き散らして消えて行く。

その光景を目にするさ中、ベルが静かに剣身の無い大剣を掲げた。

勝利を示す様に、高々と剣を掲げるベル。

その姿をみた冒険者達が歓声を上げた。

爆発するような歓声に包まれながら、ヘステイア様とリリが腕を引っ張ってくる。

「行こう、ベル君の所へ」

「行きますよミリア様」

——ああ、勝ったのか。流石だな……。

第九十一話

ダンジョン十八階層での激戦。

突如現れた漆黒の階層主と、蒼炎を纏う結晶竜。

百人を超える冒険者が集つての集団戦闘であつたあの戦い。

いくつ命があつても足りないぐらいの危険度を誇る戦闘であつたが、なんとか一人も欠ける事無く切り抜ける事が出来た事を喜びつつも、お祭り騒ぎを始めた十八階層の住民を避けて俺達は地上を目指していた。

《それでそれで——》

「ああ、そうですね。うんうん……お喋りなりザードマンのリドつて方が空を見たいと……へえ」

十八階層の冒険者達は興奮冷めやらぬ様子で俺とベルにそれぞれドロップアイテムを贈呈してきた。

漆黒の階層主を討伐したベルには『ゴライアスの硬皮』を。

蒼炎纏う結晶竜を捕獲した俺には『結晶の竜瞳』を、とそれぞれかなりの代物を渡された。

冒険者達の猛攻撃を受けてなおほぼ無力化していた巨人の硬皮。間違いなく良質な防具の素材として使えるモノであるし、売りに出せば相応の値段も付くだろう。

俺の受け取った竜の瞳は、文字通り結晶で形作られた瞳そのものであり、非常に高い魔力伝導率がうんたらかんたら。とても希少な深層域でごくわずかしか採掘できない結晶と竜の血が交じり合つたモノであり、それそのものが杖の素材である魔法石として利用できるらしい。

詳しく説明を受けたが、専門用語が多すぎてさっぱりだつたと言えない。とりあえずこのテニスボールサイズの瞳は増幅装置としても安定装置としてもかなりの性能を誇っているらしい。杖として加工すればそれこそ第一級魔術師が持つ杖に匹敵する性能になるらしい？

《すごくきれいなうたでね——》

「へえ、それはすごいですね。……綺麗な歌声のセイレーンのレイという方ですか……へえ、すごい……」

それとは別に結晶竜については完全に俺の支配下となったらしく、今は小さな手の平サイズにまで縮んで俺の肩の上で綺麗な音色を響かせている。

《つんでれっていうんだって》

「へえ、ガーゴイルのグロスという方がツンデレなんですかー」

傍から見ている分には肩に乗った結晶竜が美しい音色を響かせているだけにしか見えないだろう。

彼女————なんとなく女性というか女の子っぽいので彼女と呼ぶが。彼女の声は非常に美しい。まるで結晶を楽器として加工したらこんな音色になるのではないかという結晶が共鳴するような音色だ。不快感を覚える事は無く、むしろいつまでも聞いていられる美しい音、なのだが………。

《半人半鳥の子も居てね———》

「あの、ちょっといったん止めてください……」

《どうしたの?》

この子、すっごいお喋り過ぎる。

周囲の視線が若干生温かいんだよ……。

「ミリア君、大丈夫かい?」

「大丈夫ですよヘスティア様……ちょっと色々つぶつ飛んだ話が飛び出すぎて整理がつかないだけなんで……ベル、モンスターの対処はお願い。暫く考えさせて」

「うん、わかった」

アスフィさんとリュウさんは若干の警戒の色合い。ベルとヘスティア様は気にした様子はない。リリとヴェルフは慣れたのかあまり気にしてはいないが距離を置いている。タケミカツチの面々は完全に距離をとって警戒。

結晶竜と話している内容もぶつ飛んじやいるが……いや、まあ、警戒するのも当然だろう。

俺の周囲には蒼炎の欠片が漂っているのだ。

結晶化という凶悪な効力を発揮し、数多くの冒険者を血染めの結晶塊に変えた能力。

その一端である蒼炎が俺の周囲をふわふわと漂っている訳で……俺もちよつと怖いんだが、其処まで危険視するモノでもないっぽい？「その蒼炎は本当に大丈夫なのですか？」

「……モンスターが一瞬で死んでたぞ」
リリとヴェルフの心配するような視線。まあ、大丈夫だよ。うん……俺に近づこうとしたハードアーマードが一瞬で水晶塊になって死んだのを見てぶつちやけチビりそうになったけど、俺には危害を加えないしヘスティア様や仲間に危害を加えようとはしない様に言い含めたのだ。

どうやらこの結晶竜の持つ蒼炎は本人の意思次第で敵対者を内側から食い破る結晶塊にもなれば、ただ周囲を幻想的に照らし出す光源ともなるらしい。

傍から見たら超危ない光景なんだけどね……。
まずは、そう彼女の正体から話すべきか。
彼女の正体は未調査領域に住まう未確認モンスターである。

出生階層は下層の何処か。本竜曰く、結晶の領域である場所で生まれ、時折やってくる冒険者を結晶塊にして殺していたらしい。

胸の内から溢れ出る真っ黒いドロドロした何かに突き動かされ、人を殺す。侵入してきた他のモンスターも殺す。殺して殺して……数え切れないぐらい殺し続けていたある日の事。

いつも通り、日の届かない結晶の領域内で侵入者に目を光らせていると、血塗れのドワーフらしき男性が複数人の冒険者を率いて結晶竜の領域に入り込んできた。

血塗れで息も絶え絶えのそのドワーフと、そのドワーフを庇う様に動く冒険者達。何時も通りに結晶化の蒼炎を吹きかけて殺そうとしたところでその冒険者を追ってくるモンスターの存在に気付いてやめた。

湧き上がる苛立ちと真っ黒なドロドロした殺意。自分の領域に侵入してきた怨敵たる人間と、こどわり理を学ばぬ愚かな化け物共。殺してや

ると意気込んで——ドワーフの雄叫びに動きを止めた。

『——行けっ、俺を置いてっ!! 神に伝えてくれ。幾世年月が経とうと来世のその先、また会いに行く』

追ってくるモンスターの前に一人立ち塞がる血塗れのドワーフ。他の冒険者を怒鳴りつけて別の道へ逃がした後、そのドワーフは追ってきたモンスターと争い始め——たった一人で追ってきたモンスターを撃破した。

が、既に死に体だったその人物は結晶に凭れ掛かりながら死を待つのみとなっていた。その頃になって彼女はようやく姿を現した。

死に体のドワーフ。己が何もせずとも死ぬ弱者。——同胞を守り切った気高き人物。

胸に湧き上がるドロドロとした殺意を抑え込み、彼女は問うた。どうして其処までできたのかと。

勝つ見込み等ありはしない程の戦力差を覆すという偉業を成し遂げ、死に逝くそのドワーフに問うた。彼は言った。

『ああ、畜生。まだ居やがったか……おお、こりや……綺麗な竜だな…………ゲホッ……はは、最期に目にするにやあ綺麗過ぎる……ぐらいだ……』

彼女の言葉は彼に届かなかった。そもそのドワーフは竜の言葉を理解できるはずもない。故に彼女の問いかけに彼は答える事等出来ない。それでも彼女は気になった。

——一人でずっとその場所で憎悪を滾らせる以外にする事を知らない彼女が初めて見た気高い行為のその訳を。

同胞を守ったという、至極シンプルでわかりやすい事。敗北する事がわかってなお挑む意思。その瞳に映し出された美しい決意の色合い。彼女はそれに心惹かれた。

『殺さないのか………? まあ、いい……頼みがある。皆を……殺さないでやってくれねえか?』

瀕死の重傷を負い、それでもなお仲間を想うその言葉。

いつもなら、彼女は自分の領域を犯した愚か者を逃しはしない。決して——それが彼女が未調査領域に潜む未確認モンスターとし

ての立場を維持し続けた原因であるのだが。

その在り方を変えた。彼女は彼の仲間を見逃した。

それ以降、ずっとずっと、考えて、考えて、考え続けて、そして自分の欲しいものを知った。

ドワーフの様に想い合える同胞を欲した。けれども、彼女はそもそも死ねない。

守られる必要もなければ、守る必要も無い。結晶の領域の守護者であり、それ以外の何者でもなく、彼女が殺すべき対象は自分以外の全てであつたが故に、彼女に同胞は居ない。

例え同じ竜種であろうと——領域を犯す者を生かしはしないから。

だから領域を捨て、新たな同胞を求めて動き出した。領域の守護者であつては何も得られぬと、故に彼女は領域を捨て新たな地へと旅立ち——人とモンスター達に殺された。

声をかける度。視線が合う度。そしてただ出会っただけで、彼女の事を見た者は人も、モンスターも例外なく襲い掛かってくる。

死んでも死んでも蘇る事が出来るゆえに問題は無く、けれども痛みは感じるが故に怯える事しかできない。反撃として放つ蒼炎の前に沈む者達。声をかけても、訴えかけても、誰も耳を貸さず、殺しかかってくる。

死なない身を持って、痛みに屈しかけながら必死に同胞を求めた。分かり合える仲間であり、守り合える誰かであり、自分以外の言葉を交わせる者を求めた。

出会う度に殺される事を知った彼女は自分の領域から外を見る様になつた。

結晶の向こう側。鏡の向こう側の世界のような場所、結晶を通して足を踏み入れる事の出来る自分だけの領域から結晶を通してモンスターを、人を観察する日々。

自分を受け入れてくれる者は何処かに居ないだろうかと求めてさまよう日々の中で、珍しいモノを見た。

モンスターと戦うモンスター。いや、それ自体は珍しくないのだ。

モンスター同士で殺し合うなんて日常茶飯事。違う種族同士で縄張り争いとして殺し合うなんて当たり前すぎる。

しかし、そのモンスター達は違った。

リザードマン、セイレーン、ゴブリン、半人半鳥、獣蛮族、半人半蛇、戦影、
アルミラーシ、ヘルハウンド、トロロール、ガーゴイル、アラクネ、ユニコーン
一角兎、黒犬、大型級、石竜、人蜘蛛、一角獣……その他様々なモンスターが徒党を組んで戦っていた。

本来なら慣れ合う事をしない、縄張り争いの過程で殺し合うはずの彼らが互いに互いを守り合い、声を掛け合い、愛しみ合いながら過ごしているのを見た。

自分ももしかしたら仲間に入れるかもしれない———そう思いはしたが、幾度とない死が一步踏み出すのを躊躇させた。

彼らは強い。そして自分は彼らを一瞬で殺し尽くせる力を持っている。もし戦いになってしまえば———彼らを皆殺しにしてしまいかもしれない。恐れと怯えによって彼女は彼らを結晶の向こう側から観察するだけにとどまった。

陽気に笑う蜥蜴人。紳士気取りの赤い帽子をかぶる小怪物。感情豊かに笑い泣く半人半鳥。

結晶のある場所ならばどこからでも彼らを見守れる。故に見続けている内に、やはり彼らの輪に加わりたいと思う様になり———どうやったら彼らの内に入れるだろうかと考える様になった。

その内、彼女はある事を聞いたのだ。その蜥蜴人……リドという愛称があるらしい人物……人物？ 怪物はどうやら『もう一度空を見た』らしい事を知って———自分なら容易く空を見に行けるのではないかと思ひ立ち、彼女は結晶の向こう側を伝って地上を目指した。彼らは悪目立ちするが故に常に隠れ潜む様に生活しており、人からもモンスターからも狙われている。地上に出たいという願いも叶うはずもないが、結晶竜である彼女は結晶の向こう側を伝って地上までいけると考えて移動を開始した。

途中のモンスターを無視し、結晶に潜み、目指す途中で彼女の旅路は終わりを迎えた。

第十八階層。其処より上には殆ど結晶が存在しないのだ。それは

致命的過ぎる。

結晶の向こう側の世界は、言うなれば水の中のような場所である。結晶という名の穴を通じて出入りできるその場所で、穴から離れすぎると自分が分解されて消滅してしまう。

故にそこら中に結晶の生えている中層中間地点である十八階層までの道のりはよかつたのに、十七階層以上の階層には結晶の量が圧倒的に少なくなっており、下手に進めば途中で自分が消えて無くなってしまう事に気付き、十八階層で足止めを食らっていた。

地上に出る為に考え込んだ彼女は、十八階層の最も大きな白水晶の内側に潜り込んで十八階層全域を見回しながら必死に考えていた。

結晶の外側の世界、其処は彼女からすれば脆く儂い自分が幾度となく碎き殺される場所ではない。絶対の力の蒼炎も無限に使える訳ではないのだ。地上まで力業で突破しようモノなら途中で力尽きて消えてしまう。

白水晶の中で考え込んでいた彼女は、唐突に其処に流れ込む力の奔流に巻き込まれた。

丁度、黒い階層主ゴライアスを生み出すその場所に居合わせた彼女は自身の体の一部を剥ぎ取られ、奪い去られてあの巨人の一部として組み込まれた挙句、残った本体にも巨人を通じてその力の一部が流れ込んでしまい、正気を保てなくなった挙句に痛みや苦しきから結晶の向こう側の世界から飛び出して暴れ回る事となった、らしい。

あの黒い階層主ゴライアスが胸の魔石を穿たれてなお倒れなかったのは彼女の性質をあの化け物が奪ったからであり、本来ならあの一撃で倒れていてもおかしくはなかったと……。

うん、此処までの話を纏めていい？

「モンスターが喋る？ 愛称で呼び合う？ 知性持つモンスター？」

それなんてファンタジー……？」

わあ、すっごいファンタジーだよ。モンスターと仲良しこよし出来るかもねっ！

……いや無理だろ。

地上の人々のモンスターに対する対応を考えるに、そのモンスター

達地上に出ようもんなら問答無用でぶっ殺されるだろ。それになにより、ベルがその事を知ったら不味い。

きつと、優しいベルの事だからモンスターと戦えなくなる。

悪人ですら救おうと考えるあのベルがだぞ？ 実は人と仲良くしたいモンスターが居ますなんて言われたらどうなると思う？ きつと、モンスターでも仲良くしようとしてしまうだろうし、もしものは助けようと動いてしまいかもしれない。それがどういう影響を与えるのか……怪物趣味認定されてヤバいね。

……この事はとりあえず伏せておこう。それにその、リド？ とやらと会話した事無いし俺からしたら何とも言えん。家族を殺された人からすればモンスターすべからく死すべしだろうし、俺もヘステイア様がモンスターに殺されてしまったのならきつと、モンスター絶対殺すマン……殺すウーマンになるわ。

「ええつと、とりあえず、貴女は私の言う事を聞くという事でオツケーですよ？！」

《いいよ！ なにをすればいい！》

テンション高いよ……。後張り付いてこないでくれ、ひんやりとしててちべたい……。

前方を歩くミリア・ノースリス。

十八階層への道中と十八階層での戦いで武装の全てを損失した現在の彼女の持つ装備は戦闘の後に礼として受け取った古びたショートソードのみ。

服装も無数の切れ込みを応急処置としてヴェルフが縫っただけの縫い跡まみれのローブに左手の竜鱗の朱手甲。擦り切れたブーツ。見た目の幼さもあつてか、今の彼女は強そうには見えない。

その肩に留まる結晶竜がミリアの頬に頬擦りしては美しい音色を響かせている。

「ヘルメス様、彼女についてなのですが」

「何か気になる事でもあつたのかい？」

パーティの前方でモンスター警戒に当たるリユー。その後ろに続くベルの左右をリリとヘステイアが固め、そのすぐ後ろでタケミカツチフアミアとヴェルフが呆れた様な視線をベルに向けている。

そこから距離を開けた後ろに、ミアアが歩いている。足音が響く度に蒼炎がはらはらとミアアの周囲に舞い散り、触れたモンスターを問答無用で死に至らしめる確殺の攻撃。結晶竜の生み出す凶悪な攻撃領域の中心でミアアがブツブツと呟いていた。

「そのリドって奴はおっさんかなんかですか……。グロスって人はツンデレ過ぎるでしょう、レイが唯一常識人……。いえ訂正します。そのレイって方もなかなかぶっ飛んでますよね。いや、空を飛ぶって意味じゃなくてですね」

頬擦りをしてくる結晶竜と会話を交わす彼女を眺めた神ヘルメスは改めてすぐ横を歩くアスファイに微笑みかけた。

「それで？ なんだい？」

「……彼女、少なくとも五つの魔法を使っていた様な気がします」

モルド達に向かつて使用した直線的な軌道を描く魔弾を放つ魔法。その高威力版。

竜を従えるらしき魔法。

階層主ゴライアスの胸を一撃で穿ち抜いた巨砲。

広域を回復させる治癒魔法。

アスファイが確認しただけでも五つという、本来の冒険者ならあり得ない数の魔法を使いこなす彼女。

小さく、弱つちい小人族等と罵られる事の多いパルウムだが、その枠組みどころか神の定めた恩恵のルールすらぶち抜く勢いの魔法にアスファイは眉を顰めていた。

「どう言う事でしょうか」

「ああ、それかあ」

ヘルメスの納得いったような表情にアスファイが目を見張って詰め寄った。

「まっってください、ヘルメス様はあの理由がわかると？」

普通の冒険者なら魔法は三つまでしか習得できない。その原則を

無視する彼女について知っているのかとアスファイが問えばヘルメスは口元に笑みを浮かべてアスファイを抱き寄せた。

「ヘルメス様、なにを——」

『リセマラ』って聞いたことあるだろう？」

「それは……、かつて神々が行っていた違法行為の事ですか？」

「そうそう。神々おれたちがやってたアレね。ああ、もちろん俺はやってない。ヘステイアもな。そもそも今は禁止されてる行為だしやろうもんなら問答無用で天界送りの違反行為さ」

ヘルメスの言葉にアスファイが眉を顰める。それを楽し気に見つつもヘルメスは口元に笑みを浮かべてアスファイの耳にささやいた。

「概要を知らないだろうから説明するけど——本来なら一人の間が持つ神の恩恵フェアルナはたった一つのみだろ」

「ええ、そうですね」

「リセマラってのは言ってしまうえば眷属に恩恵を与え、それを消去リセットして新しく授けなおす事でスキルや魔法の発現を狙うっていう行為の事さ」

「……そんな事が可能なの？」

もしそれが出来るのなら眷属の方から望むのではないかとアスファイがヘルメスを伺えば、ヘルメスは小さく肩を竦めた。

「いやいや、そんな甘いもんじゃない。一度恩恵を与えて発現した魔法やスキルは変化する事はまずない。そもそも、だ。魔法やスキルはどうやって発現する？」

「恩恵を受けた眷属の素質……では？」

「それもある、けれどそれだけじゃあない」

ヘルメスのもつたいぶる言い方にアスファイが首を傾げれば、ヘルメスは指を立てて口に当てて静かにする様にジェスチャーしてから口を開いた。

「いいかアスファイ、魔法やスキルは才能のほかに、強い深層心理に至る想いによって発現するのさ。正確には才能という名の下地の上に想いが積み上がって魔法やスキルになる。

才能の無い子は、残念だけどどれだけ想いを積み上げても下地が

なつてなきや魔法やスキルにまでは至らない。逆に才能のある子つていうのは小さな想いでも魔法やスキルとして発現するのさ」

「……はあ」

「そこで神々^{おれたち}は考えたのさ——才能のある人間^{こと}を使ったりセマラをね」

「まさか……」

ヘルメスの言葉にアスファイが考え込み始め、目を見開いて驚く。

「気付いたか。そう、才能という名の下地の上に想いというあの形を築く。築かれたモノが魔法であれスキルであれ、少なからず想いの影響を受ける」

もし、もしもだ。その魔法やスキルとして発現する程の想いの形を好きな形にできたのなら。

もしかしたら狙い通りの魔法やスキルを発現してくれるかもしれない。

「そう、人^この持つ想いを歪めるのさ」

「歪んだ想いから、別の魔法やスキルの発現を狙う……」

「そう言う事。其の為に——目の前で親族や恋人、仲の良い友人を惨殺してみたり、拷問にかけてみたりして想いを歪ませて再度恩恵を授けるなんて真似を仕出かしてたんだ」

地上の人々の事を無視した神々の横暴なその行為は直ぐにギルドから禁止される事となったが、今もそれを目的に動く神は残っている。

「僕の考えた最強の眷属計画」

「……神は碌な事しませんね」

「まあ、そういう一面もあるからね。他にもいくつかあるけど——
—複数のステイタスを持つ眷属を生み出す計画とか」

「可能なんですか?」

神の恩恵を与えられて発現するステイタスは一人一つのみ。二つ目は在り得ない。

何故なら、ステイタスとは眷属の人生を、心の内を、その人となり
を映し出す鏡だからだ。言ってしまうえば人間^{こと}のもつ自己同一性^{アイデンティティ}を映

すモノである。

「例えばアスファイ、君は今日から『ミリア・ノースリス』だなんていわれて、ミリアちゃんになり切れるかい？」

「言葉遣いだけならまだなんとか」

「違うよ、心の底から、自らの全てを『ミリア・ノースリス』にするのさ。そう——魂の形さえもね」

「は？」

ヘルメスの言葉にアスファイがわけがわからないと目を瞬かせるなか、ヘルメスにはやりと笑った。

「ミリアちゃんはそれが出来るのさ」

「……どう言う事ですか？」

「本来なら、自己同一性が邪魔して不可能だろうね」

自分はアスファイ・アル・アンドロメダである。

どうしてか？ 今までそうであったから。自分がその人物であると証明できるから。記憶が、感情が、そして何より自分自身がそれを肯定するからこそ、自分はアスファイ・アル・アンドロメダであり、ヘルメスの眷属であり、【万能者】の二つ名を持つ。

そうやって自分の在り方を示すのが自己同一性である。

神の恩恵はそれを映し出す鏡であり、アスファイ・アル・アンドロメダの姿を恩恵で映し出せば彼女のステイタス以外は映らない。

では、もしも、もしも、だ、自己同一性が壊れていたらどうだろうか。

自分は『ユーノ・シラノ』である。

それは何故かといえば『シラノ父の息子』であり『父が己を息子として扱うから』であり『自分がそれを肯定するから』である。

では、それら全てが嘘だったら？

彼の人物の息子ではなく、息子として扱われていたのもただの勘違いで、自分自身がそれを肯定できなくなったら、『ユーノ・シラノ』という自己同一性は壊れて失われてしまう。

自分は『ミリア・ノースリス』である。

それは何故かといえば『自分がそう名乗ったから』であり『自分が

「そうありたいと願ったから』であり……。」

「全部が嘘で塗り固められていて『本人だと肯定もできない』」

「そうになると、恩恵によつて映し出されるステイタスはどうなつてしまふ？」

「どうもならない。本来ならそのままが映し出される」

「……というと？」

「簡単な話さ、バラバラのグチャグチャ、スキルや恩恵が発現するなんてありえない」

「では彼女が魔法やスキルを使うのはおかしいと？」

「それは違う」

「ミリア・ノースリスは神ヘステイアによつて『肯定』されている。

自分は『ミリア・ノースリス』である。」

「それは何故かといえば神ヘステイアがそれを肯定しているから。ただそれだけだ。」

「その上で言えるのは、彼女は未だにぐちゃぐちゃの滅茶苦茶さ」

「……？ どういう事ですか」

「だからね、ヘステイアが肯定すれば彼女はなんにでもなるのさ」

「つまり……」

「ヘステイアが一声かける、いや、ヘステイアが彼女の背を一押しするだけで彼女は自己同一性を書き換えて別の誰かになれるのさ」

巨大な砲撃魔法を扱うパーティの火力。

広域に回復の波動を放つパーティの治癒師。

多彩な魔弾と罠を駆使するパーティの補助役。

「そう、ミリア・ノースリスはヘステイアの一声でなんにでもなれる。ヘステイアの肯定一つで自分を壊せるのさ」

「……神ヘステイアの思い通りにですか」

「ああ、勘違いするなよ。ヘステイアは彼女の意思に合わせて背中を押す以外にはしない。神々みたくに都合よく彼女を使おうなんて絶対に考えないタイプだからな」

「……………」

沈黙したアスフィに微笑みかけるヘルメス。暫くしてからアス

ファイは静かに顔を上げた。

「自己同一性を破壊されるというのは、どのような気分なのでしょうか」

「……………神々には絶対に理解できない痛みだっというのはわかる」

「……………所で、話は変わりますが」

「なんだい？」

「ヘルメス様は彼女をどうするおつもりで？」

「アスファイの確信を突く問いかけにヘルメスはニコリと笑みを浮かべた。

「決まってるだろ。俺の、神々の目的の為に、ベル・クラネル共々、踊ってもらうのさ」

第九十二話

中層十五階層。

不意の転落によつて落とされた階層であつたため、地図類が一切ない状態で潜つていた区域を抜けてそろそろ十四階層に続く上層へ続く道が見えてくるはずだ。

周囲の洞窟の見紛う様な薄暗い空間。行きは死と隣り合わせで恐怖に身を震わせていた階層であるが、今現在は第二級冒険者が二人も同行している為か空気は弛緩している。

「いやあ、それにしても大激戦だったねえ。十八階層で休んでいきかけたけど俺とヘステイアが居たからなあ」

神ヘルメスのすつとぼけた台詞。むかついたので軽く睨み付けるがヘラヘラ笑うのみでこたえた様子はない。

俺はお前が十八階層でやらかした事を忘れる積りは無いからな。

「本当です。ヘステイア様さえ居なければベル様はリリと一緒にゆっくりと休んでいただけなのに」

「何を言っているんだサポーターくん。ベル君はボクとかえつてゆっくり休みたいに決まつてる」

……………いやね、空気が弛緩するのは悪い事とは言わないけど、こんな所で修羅場やつてどうすんのさ。

まあ、ベルがモテモテなのは仕方ないっちゃ仕方ないんだけど。

「ヘステイア様とでは疲れがとれません！ベル様はリリが労わつて、尽くして、癒して差し上げます！」

「何を言っているんだ、ベル君は三度の食事よりボクと居るのが好きなんだよ！」

俺はヘステイア様と居る方が好きかなー。

呑気にへらへらしてたらベルが二人を振り払つて一瞬で前衛に飛び出し、両手にナイフを構えた。

「きますっー！」

あー、ベルに任せよう。本調子じゃない上にどつちかつていうと俺の扱いは負傷者だし……。ベル君も本当は負傷者組なんだけど、回復

魔法で全力で癒したしね。

体力は回復しきってないはずんだけど、張り切ってるねえ。前方にヘルハウンド3匹、だけじゃない。物陰からも出てきて、8匹か、多いか？

「ヘスティア様、私の近くへ」

「わかった」

援護射撃は必要なさそうだし、ヘスティア様の近くで防御しとくか。結晶竜は大人しくしてくれ。

《何もしなくていいの？》

しなくていいよ。うん、何もしないで……魔石諸共結晶塊に変えろとリリが小うるさいんだよ。

つと、すぐそばの壁に亀裂。出てきたのは、ハードアーマードか。

『ピストル・マジック』『リロード』

構えて——飛び出してきたベルが一瞬でハードアーマードを斬り捨てていった。……うん、何もしなくてもよさそうだ。

ものの一分足らずで十匹以上居たハードアーマードが全て討伐され尽くし、魔石が転がり落ちて周囲が静かになる。

「凄じじゃないかベルく——」

「凄いですベル様！」

ヘスティア様がベルに駆け寄るより前にリリがベルの視線を奪い去る。ああー、なんだかねえ。いや、別に構わんがダンジョン内で色恋沙汰は……いうだけ無駄か。恋は盲目って言うし？

「お見事でした。クラネルさん」

「私達の出る幕はありませんでしたね」

「流石「リトル・ルーキー」だ」

「いやあ、そんな」

褒められて照れてやんのー。まあ、第二級冒険者より早く敵を掃滅してたしね？ リューさんもアスフィさんも本調子ではない為かやはり動きが少し鈍い気もする。

もうちつと警戒心強めるかねえ。

「なんだいベル君、デレデレしちやってもう」

「まあ、褒められれば誰しもあんなふうになりますよ。リユーさんもアスファイさんも美人ですし」

「僕だってなっ」

すねたヘステイア様が石ころを蹴つ飛ばしはじめたのを見つつも、周辺を見回す。

落ちてる魔石のほかには特に異常はないかな。キューイを早いところ召喚したいがまだ出来ないんだよなあ。

石ころの転がる音、そして壁にぶつかる音——罅割れる音。

音の出所はヘステイア様が石ころを当てた壁。そこがちょうど崩れていつている。モンスターが出現する時とは毛色が違う？

「ヘステイア様、下がってください」

「あ、ああ……これは……？」

「神様、ミリア、大丈夫！」

ベル達も気付いて急ぎ陣形を固める。非戦闘員のヘステイア様とヘルメスを庇う様に陣取り、その崩れ逝く壁を警戒し——壁が崩れ落ちた後には、何処かへ続く通路が出来上がっていた。

うつすらと光を放つ水晶が所々に生えており通路は大分奥まで続いている様に見える。

十五階層とはまるで毛色の異なるその道。

「これは……未開拓領域」

「未開拓って事はまだマップピングされてない所ですか？」

おいおい、マジか。結晶竜の様な新種のモンスターなんか待ち構えている可能性もある超危険な場所……流石に下層と中層を一緒にするのは不味いんだろうが、それでも未開拓っていうのは怖いな。

「間違いないでしょう。私の記憶でもこの階層にこんな地形は無かったです。縦穴とも構造が違います」

「つまり新発見ってわけか」

確かに新発見なんだろうが……結晶竜みたいなヤバいのが出てきたら不味いし此処は引くべきだと思うなあ。とりあえずマップに位置だけ記してギルドに提出しよう。そうしよう……ほら、ヤバイモンスター出てきたらアレだしね？

「凄いですね神様」

「え？ ああうん、まあね、ボクにかかればこんなもんだよ」

いや、偶然ですよねへスティア様……。いや、神の強運的な？

「はっ?! クンクンツ、この匂いは……」

一瞬で何かが目の前を横切っていき、その何か、というかその人物は未開拓領域へ続く道の入り口の匂いをこれでもかと嗅いでいる。何してんだミコトや……。

「ミコトさん？」

「おい、どうかしたのか……?」

おい、何をして――。

「まさか!」

――はあ？

いや、待て。何が起きてる？

未開拓領域である通路の奥に消えて行くミコトの背中。

匂いを嗅いでいたと思えば、次の瞬間にはすさまじい勢いで未開拓領域の奥へと駆けだしていつてしまった。って待てよっ!?

「ミコトッ!」

「一人じゃ危ないですよっ!」

って待て待て待て、皆で突撃とか死にたいのかおまえら。

「全員ストップ!」

「ミリア？」

「おい、ミコトが行っちゃもうぞ」

「早く追いかけたほうが」

馬鹿ですかね？ 馬鹿なんですか？ 馬鹿なんでしょう？

「馬鹿ですか、彼女が何で駆け出したのか知りませんが未開拓領域ですよ？ 地図に載っていないだけじゃない、どんなモンスターが出てもおかしくはないんです。こんな結晶竜みたいなのが出てきたらどうするんですか?」

「……だが、それなら尚の事ミコトが危ないんじゃない」

知らんがな。いや、言っちゃ悪いけど一人で飛び出した阿呆が悪いだろ。ミコトが何を思って突撃したのか知らんが、この場においてす

る事はとりあえず地上に戻る事じゃないのかね。

「ヘスティア様や神ヘルメスなんかの非戦闘員を抱えたままリスクの高い行動はとりたくはないのですが」

「んー、ミリアちゃんの言う通りっちゃあそうなんだけどねえ」

うるせえヘルメス。結晶竜ぶつけんぞ。

「此処でミコトちゃんを見捨てるのも後味悪いだろうし、ヘスティアについてはちゃんと守るからさ。このアスフィが」

「……ヘルメス様、はあ」

いや、そういう話じゃあなくてだな。

確かに後味悪いし行くべきなんだが……ああ、しゃあない。

「では結晶竜を先行させながら隊列を組んで進みましょう。もし結晶竜が一度でも死ぬ様な事があつたら……申し訳ないですけどミコトさんは諦めてください」

いやだってね、未開拓領域だよ？

結晶竜が元々居た場所もそんな未開拓領域なんだよ？ 結晶竜みたいなの出てきたら死ぬるって、ただでさえ十八階層で損耗が激しい現状。結晶竜レベルの厄介なの出てきたら全滅するっての……。

生え茂る竹、の様な植物。結晶が立ち並ぶ岩場。独特の臭気の漂うこの空間に名を着けるとするなら『迷宮の秘湯』とかになるんだろうか。

湯気立ち昇る泉の前で呆然と立ち尽くす阿呆一名発見。結晶竜曰く『強そうなのは居ない』との事なので問題は無いか？ この匂いは温泉のモノだろう。

周囲を警戒してみるも特に何かがある訳ではない。いや、めっちゃあるんだけどね？

竹っぽい植物に木の実の様に鈴なりに連なる果実っぽいなにか。というか手酌の様な形のモノや徳利の様な形のモノまで、材質が竹っぽいが形がまんま御猪口だったり徳利だったり桶だったり、温泉であると良いねと思えるモノが竹に生えてる。なんだこの植物。

「珍しいですね、竹酒がこの階層にあるなんて」

「……なんですかその竹酒って」

「湯を入れるだけで酒が出てくる徳利型の果実ですね。十八階層より先で稀に見つかるモノですよ」

へえ、あの瓢箪みたいな果実と一緒に。ってか酒が簡単に出来るって凄くない？

「これを地上に持って行けば売れるのでは？」

「回収してから数時間でダメになるので地上に持って行くのは難しいですね。それに味もあまり良くありませんし、酒精も弱い。下手な安酒よりも高価な割には安酒より不味いので迷宮内でどうしても酒を飲みたいというドワーフが使うぐらいのモノですよ」

リリはちよつとがめつすぎやしませんかね。いや、損耗激しくて出費もアレだしね？ でも十八階層での買い物分は全部ヘルメスファミアが支払うって事で話はついてるし。

「それより、ミコトは大丈夫なのか？ 呆けてるみたいだが」

「この温泉にでも突き落としてみますか？」

「……ミアア、苛立ってるのはわかるが、やめてやれ」

命知らずな阿呆な行動取ってる阿呆は温泉にぶち込むぐらいでいいんじゃないやなろうか。

「温泉、こんなダンジョンに？」

「——はいっ！ 間違いなく温泉ですっ!! 自分、温泉の事になら自信があるんです!!」

おう、ミコトが再起動したのか凄まじいハイテンションで捲し立てはじめたぞ。やっぱこいつ何処かネジ外れちまつてるだろ。一度ぶっ叩くなり温泉に突き落とすなりした方が良いぞ。

「他には特に何もありませんね」

「モンスターの気配もありませんし」

本当かあ？ いや、だってダンジョンだし、未開拓領域だし、結晶竜っていう前例があるし……。実は結晶の向こう側とかでこっち見てたりしない？

《むこうがわにはだれもいないよ？》

ふうむ。警戒し過ぎか？ でも未調査な訳だし何があっても不思議じゃないでしょう？ 怖いよ。

「此処はダンジョンが作った癒しの空間という事なのでしょう」
「なるほど。少しはのんびりできるってわけか」

んー。結晶竜やい、ちよいと索敵してきてくんない？ もし異常があれば連絡をよろしく。キューイが居たら良かったんだがなあ。

《わかったー。みてくるねー》

すると結晶竜が近くにあつた水晶に沈んでいった。マジか、そんな風に移動すんのかあ。そりや見つからんわ。

所々に生えている水晶に一瞬だけ結晶竜の姿が映し出されてはいるが、それも光の加減による目の錯覚とでも思ってしまうそうだ。今まで姿を見た者は殆どが生きて帰らなかつた事もそうだし、水晶の向こう側にいかれたら手出しが出来ないというのと、回復魔法を食らわない限りは不死身という性能から他のモンスターとは一線を画す。

結晶竜ってヤバイ存在なんだなと再認識している間に、ミコトが顔を温泉に突っ込んですさまじい勢いで飲んでいた。

まって、天然の温泉って結構汚い……後、毒性もあるかもだから普通は……ああ、冒険者だから平気なのか。

うん、普通の人が真似しちやアカン奴やろ。

「ぶはあ……」

「どうだった、ミコト」

「湯加減、塩加減、申し分なし！ 最高の一品です!! ぜひ入っていきましよう!!」

いや、絶対その温泉ヤバイモン入ってるだろ。ミコトの眼がグルグルしてんぞ……。

「あー、ノースリス」

「なんですか桜花さん」

「……ミコトは温泉が絡むとああなるんだ」

ええ……？ あれって素なの？ 温泉絡むとあんなふうになるの素なの？ ちよつとドン引きだよ……。

「十八階層以来疲れも溜まる一方ですし」

「うん。諸君ここは一つ」

ヘステイア様も参加するの？ だつたらまあ……。

『温泉リゾートと洒落込もうじゃないか！』

いつの間にか忍び寄っていたヘルメスも共に声高らかに宣言しているし。

ヘステイア様達もそれに気づいた瞬間にヘルメスから距離をとってジトつとした目で睨らみ始めた。

「ん？ なんだい？」

すつとぼけてんじゃねえ。温泉に突き落とすぞ。

「なんだじゃありません。水浴びの件忘れたんですか」

「ああ、ベル君が良い思いをした」

お前がベル君を男の浪漫なんて言う訳の分からん言葉で誑かしたんだろうが。本気で突き落とそうかな……ダメかな、ダメ？ アスフィさん其処退いて、ソイツ突き落とせない。

「ミリアさん謝りますので此処は抑えてください」

「アスフィさん、落としたいです。ソレ、其処の温泉に突き落としたいです。退いてもらえませんか」

「やめてください、一応こんなんでも私の主神です」

なんでそんなものの眷属になつたんですかねえ。アスフィさん実は男の趣味悪いんじゃないです？

「ベルが良い思い？」

「なんですかそれ？」

良い思いは確かにしたと思う。アイズさんやアマゾネスの二人、後他にも数人の裸体を記憶できたんだ。おかずには困らん事だろう。

他の男が泣いて悔しがるレベルだし。まあ、ヘルメスも同じ様に見てた訳だが。

「アスフィさん、やっぱヘルメスを温泉に突き落とすので其処退いてもらえませんか」

「ほんつとうにごめんなさい。私が代わりに謝りますのでなんとか……」

「ともかく、ボクらはヘルメスが居るんじや安心して入れないよ」

「温泉は惜しいですけど……」

「そんなあ……」

惜しいね。そうだね、だからヘルメスを落としてこの怒りを鎮めよう。アスファイさん早く退いて、そいつ落とせない。

「水着を着れば良い」

唐突に腕組をし、威風堂々と宣言した人物。予想外な事にリユーさんがぶっ壊れた事を言い出した。

いや、確かに豊穰の女主人ではアーニヤさんに『リユーはポンコツだから時々おかしな事を仕出したり言い出したりするニヤ』とか言われてたけど、此処でそのポンコツ具合を發揮しなくても……。

「水着を着れば混浴し放題だ」

「それ、名案です！」

阿呆か、何処が名案なんだよ。

誰だミコトとリユーさんの頭のネジ外した奴は。

それもこれも全部神ヘルメスが悪いんだろう？　つまり温泉に突き落とすべきだと俺は確信したね。アスファイさんいい加減退いてくれませんか？

「阿呆ですか。水着なんてある訳ないでしょう。それともミコトさんは水着を持ってきていると？」

ああ、なんかミコトもリユーさんもポンコツになって頭痛い……。

「こんな事もあろうかとっ」

神ヘルメスの声と共に俺を押しとどめていたアスファイさんのマントが——スカートも一緒に——めくれ上がり、その裏側に無数の水着が縫い留められているのが見えた。ついでにアスファイさんのパンツも見えた。

ミリアが温泉に突き落とす、その後アスファイさんの無言の殴打が顔面に注ぎ込んだ事です。濡れのボロボロになったヘルメスから水着を受け取ったものの、着替えるのは『レディーファースト』というヘルメスの言葉から先に女性が岩の向こうで着替える事となり、ベルは

水着を片手にヴェルフ達と肩を合わせていた。

岩の前に仁王立ちするリユーを見れば、不埒にも向こう側で着替えるヘスティア達を覗こう等とは微塵も考えられないし、流石のヘルメスもあれだけズタバ口にされてなお立ち上がりはしない様である。

男四人で集まり女性陣の着替えを待つ事になったベル達の中でヘルメスが真つ先に口を開いた。

「今頃、あの岩の向こうでは美の饗宴が繰り広げられているんだろかね」

『ッ！』

ヘルメスの言葉に三人の男が一瞬で向こう側の光景を想像した。

「リリちゃんはまだ幼さが残る中にも、ダンジョンの中を生き抜く強さを纏ったしなやかな姿を」

ヘルメスの言葉からベルは十八階層の水浴びの場で見たリリの裸体が脳裏に浮かびあがり、一瞬で赤面する。

「ミコトちゃんは生真面目さに見合わぬ不埒な体つきを、千草ちゃんは可憐な腰つきを」

ベルの脳裏に次々と浮かび上がる裸体。

リリルカは確かに幼さが残る中にもしなやかな力強さのある姿であったし、ミコトは生真面目な性格から一変し体つきはれっきとした女性であった。千草についてもやはり腰つきは神ヘルメスの言う通りだと一瞬納得しかけ、ベルはぶんぶん頭を振ってその光景を消しとばす。

せつかく謝罪し思い出さない様にしてははずなのにヘルメスの言葉で簡単に思い描いた事に罪悪感を感じながらもベルは耳を塞いでヘルメスの言葉を聞かないようにした。

「アスファイも本来はお姫様——つと、これは秘密だったんだ。あみえてかなりのもんだ。主神おれが保証するよ」

十八階層の一件で余す所なく思い出す事の出来る裸体を思い浮かべてしまったベルはか細い悲鳴を零しながらもより強く耳を押さええる。

これ以上聞いているとかつて封じ込めたはずの暗黒きおくの蓋が開きか

け——ギリギリで封じ込め続ける。ベルはこれは開けてはいけないモノだと必死に自分に言い聞かせた。

「そして極めつけはヘステイアさ天界屈指のあの胸。それがナマで、あの岩の向こうにあると考えると——」

必死になって押しとどめていると、ヘルメスは静かにベルに寄り添って耳元で囁き始める。

「そして大穴のミリアちゃんさ」

「え？」

「ミリア……？」

「ノースリスか」

耳を押さえていた手を思わず外してヘルメスの言葉を吟味し、ベルは彼に視線を向けた。

「あの、ミリアは無いんじゃない？」

「……おいおい、冗談だろ？」

ベルの言葉を聞いた神は呆れ顔を浮かべて三人を見回す。

三人の男は顔を見合わせてから神に視線を向けた。

「いや、流石にミリアは……」

「可愛いっっちゃ可愛いが、なあ」

「………小さすぎるな」

ベル、ヴェルフ、桜花の言葉を聞いたヘルメスがこれ見よがしに天を仰いで深い溜息を零した。

「おいおい、君たちは今まで何を見てきたんだ」

「何をつて」

ヴェルフが何か言うより前にヘルメスは真剣な表情で三人を見回し、固い声で静かに語り始める。

「君たちは若い。いや、若過ぎる」

「……だからなんですか」

ン億年生きている神からすれば地上の人間ことなんぞ1000年生きても赤ん坊の様なモノだろう。

「そういう意味じゃあなくてだな。ミリアちゃんの魅力に気付けないなんて青いにも程がある」

「青い果実なのはミリアなのでは……?」

「お、上手い事言うねえヴェルフくん。じゃなくてだね」

仕切り直す様に咳払いをしたヘルメスが手招きをし、皆で身を寄せ合う。

「いいかい? 君たち、今から目を瞑ってミリアちゃんの裸を想像するんだ」

「え? ミリアの……」

「はだか……?」

「なんでまた?」

「いいから、言われた通りにしてごらん」

誰かの裸体を想像する。そんな事が出来る訳もなく何時ものロブ姿のミリアが脳裏に浮かんだベルは静かにヘルメスに呟いた。

「出来ませんよそんなこと」

「俺もだ」

「無理だな」

三人が同じ反応をしたのを見たヘルメスがニヤリと笑みを浮かべた。

「それは、背德的だからかい? それとも全く想像できないからかい?」

「え? それはミリアに悪いし……」

「おいおいベル君、裸を見といて思い出すのが悪いだなんて言うなよ!」

「おい待て、ベルはミリアの裸を見た事があるのか?」

「流石に、それは……」

「いや、ちが、見てない! ボクは見てないですつ!」

幼過ぎるミリアの裸体を眼にした事があるとヘルメスに指摘されたベルが赤面し、ヴェルフと桜花の呆れた視線が突き刺さる中、ベルが慌てて言い訳をし始め、ヘルメスは嗤う。

「おいおい、見てないだなんてミリアちゃんが可哀相じゃないか。水浴びの時、彼女もちゃんとあの場に居たんだぜ?」

「水浴び……?」

「おいベル、どう言う事だ」

「いや、あの、それは……」

あの場の事をどう説明しようかとベルがわたわたし始めた所でヘルメスが割り込んで話を逸らす。

「まあその事はいいいじゃないか。それよりも、ミリアちゃんさ」

「……いくらなんでもミリアは無いだろ」

「幼過ぎる気はするな」

小人族の中でもとりわけ小柄である事もあり、リルルカ以上に背德的を通り越して色気を感じられないミリアを大穴と称したヘルメスに胡乱気な視線が突き刺さる。

「君たち、良いかい？ 普段のミリアちゃんの態度を思い出すんだ」

「ミリアの態度？」

「それが何か……」

真面目な空気を醸し出すヘルメスにつられ、三人が普段のミリアの態度を脳裏に描く。

見た目は非常に幼い。身長が低いのもそうだが大き目のローブの裾を揺らしている姿ばかりが浮かぶ。

金髪に碧眼、顔立ちも整っているし十人中十人が美少女だと口を揃える程だが、幼さが際立っており邪な感情が浮かぶ要素は何処にもない。

しかし、普段の態度は子供っぽくはない。むしろ考え方や行動は非常に大人びているし、しっかりとした言動である。

ミノタウロスとの戦闘、十三階層での救援時、十八階層への決死行、そして十八階層での大決戦。

確かに恐怖で動けなくなったりしていた場面もある。けれどそれ以上にしっかりとした立ち回りでベルを助けてくれていた事に気付く。

顔を上げたベルがヴェルフや桜花を見れば彼らは何かに気付いた様にはつとなっていた。

「気付いたかい？ ミリアちゃんはね、あの幼い体つきや容姿とは異なっていて、非常に大人びてるんだ」

「確かに」

「そうだな」

「うむ」

三人が肯定するのを眼にした神はうつすらと笑みを浮かべる。

「あの幼い体つきでありながら、彼女は非常に大人びてる。そう、ギャップさ」

小さく、幼い姿をしていても、彼女は確かに自分たちより考え方が大人びていて、冷静である。

先程も慌ててミコトを追おうとした彼らに対し警戒する様に進言したりしていた。

十八階層での冒険者とのひと悶着の時も、彼女はリーダーして正しいと思える選択を真っ先に挙げていた。

「ここでもう一度彼女の裸体を想像してみるんだ」

確かに、彼女の胸はそんな膨らみはないだろう。腰つきこそ色気を感じられなくはないかもしれないが、幼さが際立つだろう。全体的に見れば、やはり幼さや小ささが目立ち、色気なんてモノは感じ取れないだろう。

「だけど、その幼い体つきで大人びた考え方をしているのを想像して、君たちは何も感じないのかい」

背德的で退廃的ではあるが、ミリアに何の魅力も無い訳ではない。

むしろ、その退廃的な背徳感へスティアの胸の様な直接的な刺激よりもなお魅力的に見える。

神ヘルメスが悪魔の様に囁き、三人をあらぬ道を引き込もうとした瞬間。銃声が轟いた。

『『ファイア』……神ヘルメス、何を話していたのか知りませんが、あまり変な事をベルに教えないでください。……もう一度温泉に浸かりたいんですか?』

「おおっと……これはまた、水着、似合ってるよ?」

「お褒め頂きありがとうございます。死んでくれませんか?」

三人が振り返った先、魔法陣マジックをヘルメスに向けながら若干不機嫌そうなミリアの姿があった。

赤いチューブトップビキニを身に着けており、その小さな体からは想像がつかなかった綺麗な腰つきをしたミリアの姿にベルが息を呑み、そして気付いた。

普段のミリアの姿はローブ姿であり、体の線が全く分からなかった。それは同じ本拠で暮らす様になって以降もミリアの腰つきや体のライン等を一切意識してこなかったのもそうだが、それ以上にミリアの普段の格好がそういった色気のある衣類でなかった事も大きい。見えていなかった部分をさらけ出した姿にベル達はその小さな体を見てごくりと唾を飲み込んだ。

「……三人ともどうしたんです?」

「み、ミリアこそどうしたの? 他の皆は……」

「私が一番に着替え終わってたんでベル達の様子を見に來ただけですよ。ヘルメスが余計な事してないかの確認も兼ねて、ですが」

不機嫌さを隠もしないミリアの様子にヘルメスが両手を上げて降参をしめした。

「いやあ、ミリアちゃんの魅力について語ってたのさ。皆若過ぎてミリアちゃんの魅力に気付いてなかったみたいだからねえ」

「……私の魅力、ですか。それは気付いちやいけない奴じゃないですかね」

ミリアが不愉快そうに眉を顰め——岩の向こう側からヘステイア様の悲鳴が響き渡り、ミリアが目を見開いてヘステイアの方へ駆け出していく。

ベルもつられて駆け出し、岩の前で足を止めた。

「ヘステイア様っ!」

「なっなんでもないんだベル君! 少々予期せぬ事態が起きた。もう少し待っててくれないか」

岩の向こうから聞こえたヘステイアの声に安堵の吐息を零すベル。その後ろからヘルメスが静かに近寄り、耳元で囁いた。

「で? ミリアちゃんの水着姿の感想は?」

「っ!」

『『ファイア』……神ヘルメス、次は脳天にいきますので。後で覚えて

おいてくださいね」

岩の影からミアアが威嚇射撃を行い、ヘルメスの頬を掠めて魔弾が通り過ぎて頬に一条の傷が残る。

神ヘルメスは冷や汗と共に血を垂らした。

第九十三話

中層の未調査区域。

未発見らしき温泉を発見し、なぜかヘルメスが用意していた水着を着て入る事になったのは、まあいい。

いや良くない。この水着お湯で溶けたりしそうで警戒はしてる。というか舐めたり湯に浸したりしたが特に変化はなかった……時間差の可能性は否定できないが。

着替え終わってベル達の様子を見に行けばヘルメスの奴が余計な事をベル達に吹き込んでいる様子であったが、それよりも重大な問題が発生してしまった。

「まさか破れてしまうとは」

「このサイズで入りませんか」

「相変わらずワガママですなえ」

タオル一枚で身を守るミコトに外套で身を隠すアスフイさん。そして下着姿のリリとそれなりに煽情的な光景の中、ヘスティア様が上半身裸で胸を手で隠している。

全然隠れてないんですがね。

俺が真っ先に着替えたのは、少し罪悪感があったからなんだがね。だって男でも女でもないって事じゃん？ そんなのと一緒に着替えるのって嫌、かどうかはわからんけどなんとなくアレだしさっさと着替えてみんなの姿を見ない様にしてたんだがなあ。まあ、緊急事態だししゃあなしか。リリ達も何も言ってこないし？

「でもどうされますか。予備の水着も無い様ですし」

発生した問題の内容は至ってシンプルである。どうやらヘスティア様の胸が大きすぎて水着が弾けたらしい。

いや、サイズ的にかなり大きいモノだと思っただがそれでもだめなのか。ヘスティア様の胸スゲー。

「修繕するぐらいしかできそうにないですが。運の良い事に裁縫関係もそれなりにできるヴェルフが居ますし、彼に頼みましょうか」

「それしかありませんね」

「材料はどうするんだい？ 布地なんて持ち歩いていないだろう？」
ヘステイア様の言葉に皆が顔を見合わせる。確かに布地等の素材は持ち歩いていない。ドロップ品は毛皮ばかりだし。

「それについては問題ないかと。其方の植物、ダンジョン内で採取できるそれなりの強度を持ったモノなので素材として十二分に使えるでしょう」

アスフイさんが提示したのは岩場に生え茂る植物の葉や茎等。大丈夫なのかちよつと心配だが強度自体はちゃんとあるらしいので問題ないらしい。後はヴェルフを呼び付けて作成を依頼するだけか。

いかにミリアが魅力的なのかを語るヘルメスとそれを聞かぬ様に耳を塞ぐベル。そして神の言葉を聞いて想像を膨らますヴェルフと桜花。

ヘルメスの語る退廃的なミリアの魅力に生唾を飲む男共と耳を塞いで意識を逸らすベル。ヘルメスはベルの初心な反応を楽しみつつもヴェルフと桜花をあらぬ道へ引き込もうとしていた。

「——小さいってというのはなんにも悪い事ばかりじゃあない。腕の中にすっぽり収まってしまふんだ。可憐で、力強く、それでいて気高い彼女が自分の腕の中に納まる所を想像してごらん」

耳を塞ぐベルに囁く様に。想像を膨らませるヴェルフと桜花を誘う様に、神は囁き、あらぬ道へ引きずり落とそうとし——唐突にヘルメスの体が三人から引きはがされ、温泉に叩き落された。

驚きの表情を浮かべる三人の前に呆れ顔のミリアが現れ、温泉に叩き落したヘルメスを見下して腰に手を当てて言い放った。

「いい加減にして貰えませんか。ベル達を小児性愛ペドフィリアにでもするつもりですか」

小さな体躯、手足も若干細めで、胸は薄つすらとかすかな膨らみが現れるのみ。お腹が出ている幼児体型でないが故に全体的に小さくも美しい幼い少女の姿をしたミリアは微かな胸のラインが際立つチューブトップタイプの水着を着こなしており、ベル達がその姿に再

度生唾を飲み込む。

ヘルメスの言葉が脳裏を過り——次の瞬間ミリアに鋭く睨まれて全員が息を呑んだ。

「貴方達もいい加減にしてください。私なんかに欲情してしまうのはパラフィリア性的倒錯です。もう少し肉体的に成熟した女性を相手にしてください」

正論である言葉を男共に言い放ったミリアは温泉に叩き落したヘルメスを睨みつけて更に言葉を続けた。

「余計な事をするなど忠告はしたはずですが。聞こえませんでしたか？」

「ちよつと待ってくれ。俺はただミリアちゃんの魅力をだね」

「……ヒューマン基準で言えば私は6歳か7歳前後の子供の容姿ですよ。こんなちんちくりんに欲情するのはアリス・コンプレックスぐらいでしょう。ベル達に余計な性的倒錯パラフィリアを発症させないでください」

温泉に浸かるヘルメスを睨む彼女はひとしきり言い切るとそのままヴェルフに近づいて手を差し出した。

「ヘルメスは信用ならないので話は一切聞かないでください。それと、ヴェルフ、少し用があるのでついてきてください」

「はあ？ 俺……？」

ミリアの言葉にベルと桜花が顔を見合わせて首を傾げ、温泉から這い上がってきたヘルメスが湯を滴らせながらニヤニヤと笑みを浮かべて呟いた。

「この後岩場の影で……よかつたじゃないかヴェルフ君、ミリアちゃんの魅力を直接体験でき——」

ヘルメスはミリアの手によって再度温泉に突き落とされた。

期待していた訳ではないにせよ、ヴェルフが呼び出された理由はヘルメスの言う『直接体験』等は一切関係なく、神ヘステイアの水着の修繕を頼まれたのみ。

本人は薄っすら期待していたらしく、蓋を開けた直後は悔しそうに

俯いていた。

「いやー助かったよヴェルフ君。やっぱり持つべきは鍛冶師の友人だね。流石に手先が器用だってヘファイストスに伝えておくよ」

「ああ……はい……」

「まったく、何を期待していたんですか」

「うるせえ」

力無いヴェルフの返事を聞きつつもヘルメスを睨みつけておく。こいつ本当に余計な事しかしないな。

何がミリアちゃんの魅力をくだよ。まったく、俺の体躯をよく見ろつての、こんなちんちくりんに欲情するのはマジで不味いぞ。将来的にも非常にまずいだらうし性的倒錯が発症したらどうするんだまったく。

「ベル君、どうだい？ 似合ってるかい？」

「はい、とっても似合ってます」

植物の蔦や葉で修繕され、なおかつ修繕したのではなく元からそういうデザインであったと思える程の完璧な出来の水着。流石ヴェルフである。ベルもごく普通に『似合ってます』と言ってるし上出来上出来。

ただしヘルメス、テメエはダメだ。後3回は突き落としてやる。

「ヴェルフ、感謝を……と、そんなに期待してたんですか貴方は」

「いや、別に……」

明らかに期待を裏切られましたなんて顔するなよ……。むしろ何を期待してたんだが。ミコトやアスフィさんの方が魅力的だろ。

「皆、お騒がせしたね。それじゃあベル君達も着替えておいでよ！」

「はい、わかりました」

「いやあ、ミリアちゃんの所為でびしょびしょで早く着替えたかったんだ」

「……もう一回落ちたいと？ 良いですよ期待に答えてあげましょう、どうぞ私の手をお取りください神ヘルメス。すぐに温泉に叩き落として差し上げますので」

優雅な一札を交えつつ手を差し出せばヘルメスの野郎は両手を上

げて降参の意を示して下がりやがった。

「いやあ、ミリアちゃんみたいな可愛い子に何度もされてると俺も体力が持たないんだ」

気取った言い方しやがって、遠慮せずに手を取れよ。もう一回叩き落してやるからさあ。

着替えの間に余計な事吹き込んだらマジで突き落とす。心に決めた。

男性連中が着替え終わるまでにはそこまで時間はかからなかった。いや、これでヴェルフか桜花辺りが息子が収まらないとかいうヘステイア様と同じ問題が起きたら流石に笑うが……、いやごめん、笑い事じゃないよね。

「皆さん、着替えはよろしいですね！」

張り切って仕切っているミコトを見つつも他の皆をちらりと見てみれば、まあ美女美少女ばかりじゃないか。

ヘステイア様はイメージカラーの青色の三角ビキニ、だったのが破れてしまったので植物の葉や蔦等で修繕されたモノを使用している。違和感は一切なくヴェルフの腕の良さが垣間見える一品である、身に着けるヘステイア様も神々が認める巨乳。

文句無しに綺麗で美しいヘステイア様である。

リリはピンク色の三角ビキニ。背丈の低さはいかんともしがたいが、出るところはしっかりと出ているリリは大胆な布面積の少なめな三角ビキニが良く似合っている。

神ヘルメスは大胆な紫色のブーメランパンツ。ほっそりとしながらもしなやかに鍛え上げられた肉体をさらけ出した姿はヘルメスでさえなければ見惚れる程に美しい。しかし顔を上げればニヤケ顔のヘルメスが視界に入り非常にうざったい事この上ない。頸から上が余計な付属物になってしまっている。

ベルとヴェルフはサーフ型。ベルが黄色の明るい色なのに対しヴェルフは紺色の普段身に着けている着流しと同じ色合いである。ベルは恥ずかしいのか上半身はシャツを着ているが、少年でありなが

らもしつかりと鍛えているベルは線の細い弱そうな普段の印象が少しは払拭されている様にも見える。それでもなんか顔立ち的に女々しい雰囲気は消えてなくならないのだが。

桜花は……日本男児の心、ふんどし禪である。いや、日本男児の心かは知らんが。大柄な体に身を引き締める様な生える白色の禪。負傷の影響で上半身は包帯等が巻かれているが背筋を伸ばして立つ姿からは弱しきは一切感じられない力強さがある。

千草は桃色のワンピースタイプ。ほっそりとした肢体に俺と同タイプの薄い胸。けれど脇から腰にかけてのラインはその控え目な性格とは裏腹に美しく整っている。

「私だけ、とても恥ずかしい水着モソの様な気がします」

「リリも十分恥ずかしいです！」

「わ、私も違う意味で恥ずかしい」

リリと千草はええやろ。リリは小人族基準で巨乳な訳だし、千草は胸元より腰つきで勝負すれば負けは無いだろうしね。

そしてアスフイさん……。紺色のワンピース型、なんだが。胸元にゼッケンこそついていないがそのデザインは何処かで見覚えのある様な代物である。というかぶつちやけスクール水着、俗にスク水と呼ばれて一部界限で需要の高いモノである。少なくとも成人女性と違って差し支えないアスフイさんが身に着ける水着としては少し相応しいとは言い難いが、機能的には良いのではないだろうか？ 詳しくは知らないが多分旧型だろうと思う。どう考えてもヘルメスに遊ばれてるんだよなあ。

「やだなあ、皆とつても似合ってて素敵だよ」

うるせえ白々しいんだよ。アスフイさんに旧スク水着せてる時点で言い訳の余地がねえだろ突き落とすぞヘルメス。

「でも残念だなあ。ミコトちゃん俺が用意した水着は着てくれないのかい？」

「お気持ちは大変ありがたいのですが。やはり入浴の神髄は全裸に在り！」

着替えの時にタオルを体に巻くだけでいたあの姿のまま皆の前に

姿を現したミコトだが、左手に桶、右手に酌、海女の様に布を頭に巻き、その上に鞆に収まった刀を乗せている。まるで水中を移動する忍者の様な格好である。

「どうかそのタオル一枚姿はどうなの？ 角度的に見えるよ？ 太腿の半分ぐらいままでしか覆えてないしね？」

「今回は諸般の理由により止むをえず全裸は断念しましたが。温泉に入るにはそれなりに作法があるのです」

「どうして全裸を強調するのか。そんなに全裸が良いなら別に全裸でも……ベル達の眼に悪いか？ 本人はなんかテンションが振り切れて多少見られようが気にしてなさそうな気はするんだが。」

「ごく自然に皆がミコトの前に正座で座り始めた。なんかすごみの様なモノを感じる。」

「皆さん、本日は僭越ながら自分、ヤマト・ミコトがその一部をお教えしたく存じます！」

作法？ ああ、アレか。いきなり熱いお湯を体にかけてと体が驚いて心臓に負担がかかるから手足等の心臓から遠い部位から少しずつお湯をかけて慣らしてから入らないといけないって奴か。

当然、シャワーもそうだが頭とか胴体にいきなりではなく手足で温度を確認してからシャワーを浴びるといのは当然の知識である。むしろそれしないと高年齢の人は脳出血とかで死にかねないからね。

温泉もプールもそうだが、急な温度変化は体に負担をかけるので急激に温度が変化する場合は注意が必要って奴だな。うん、暑い屋外と涼しい屋内を出入りし続けると体調を崩すアレである。

後はかけ湯か。局部、股間や肛門辺りを念入りにつけ湯しないと大腸菌なんか散布されちゃうしね？

「温泉ってこういう面倒くさいモノなのかい？」

「神様、せっかく教えてもらうんですからちゃんと聞きましよう」

「ヘスティア様、温泉に限らずいろんな場面で役立つ知識ですし覚えておいて損は無いかと」

前に立つミコトに全員が注目したところでミコトが唐突に此方に背を向け、温泉の方に向かって頭を下げた。

「まず二礼！」

うん？

ミコトに合わせて全員が頭を下げたので俺も頭を下げておく。

ってまてまて、礼は良い。見事に腰から90度ピツタリに曲げた綺麗な礼だ、素晴らしい、エクセレント。だが場所を考えろ、見えるぞ、あと少しで見えかねんぞ。痴女一歩手前だぞ。つか毛が見えてね……？

「二拍手！」

いや、待つて、なんかおかしい。思ってたのと違う。

全員がっられて拍手してるので俺も拍手するのだが。っておい待て待て、これ俺の知ってる作法の一種だとするのならこの後ヤバいだろう。

ヘステイア様、リリ、今すぐベルとヴェルフの眼を塞いでくれ。

「一礼！」

ああ……知ってた。そうなるのは知ってた。ミコトちゃんや、見えちゃってるぞ……もう痴女やぞ……。

深々と頭を下げるミコト。身に着けているのはミニスカ並みの防御力しかないタオル一枚のみ。尻を此方に向けて深々と礼等しようものなら、もうド直球に言葉にしてしまおう。性器丸出し変態痴女だあーっ!?

っておい待て、絶対なんかおかしいだろ。ツツコミどころ多すぎて混乱するわ！

これって神社に参拝する時の『二礼二拍手一礼』じゃねえかつ!? 温泉だろっ!? こう、なんか他に色々注意する事あるだろっ!? いや待て、落ち着こう。もしかしたらこの世界独自の作法なのかもしれない。

とりあえずリリ、目を塞げとは言ったがヴェルフの眼を潰す勢いで塞ぐのはやめたれ……。

「そしてお賽銭を入れます」

さい、せん？ 温泉にお賽銭？ え？ 何それ知らない。そんな温泉の作法知らない。この世界独自の作法？

「おいちよつとまで！」

「なんだいお賽銭って」

あ、ツツコミ入った。って事はこの世界でもおかしい作法なのか？
「お静かに!! 正式な作法です!!」

え？ せい、しき？ これが正式な作法？ 違うよね。絶対違うよね、なんかおかしいよ。

ねえ桜花さん？ って千草とそろって顔を覆い隠してんじやねえか。どうした桜花さん千草さんやい。

「そして祝詞を唱え、三三九度の儀さんさんくどを執り行うのです」

え？ さんさんくど？ ええっと、結婚式の奴だっけ？

男女が同じ杯さかずきで酒を飲み交わす奴だっけか。女性が最初に三度、次いで男性が三度、最後に女性が三度飲んで合計九回って奴だよな？
あれ？

「かしこみー！ かしこみー！」

『かしこみ……かしこみ……』

ミコトの持つ桶や酌はわかる。其処そこらに生えてるしね……、その巫女さんが持つてるような道具はどっから出した。たしか大幣おおぬさだっけか？ 絶対ここらこゝらに生えてないだろうし、ヘルメスが持つてきた訳でもないだろ。

ぶつ壊れたミコトのテンションに合わせて取り合あわず呟つぶやいておく。

うん、絶対おかしい。後、桜花、千草はやく説明プリーズ。

「声が小さいっ！ こんなんでかちこめるかーっ！」

『かしこみー……かしこみー……』

絶対おかしいよ、こんなの絶対おかしいよ……。

桜花、千草はやく助けて。

「いつもこうなんですか？」

「いやー、でも興味深いねえ。極東ならではの風習だもんね」

え？ マジ？ これ極東ならではの風習？ 俺、極東って日本みたいな所だとは勝手に想像してたけどこんなぶつ飛んだ作法がまかり通る修羅の国だとは思ってなかったよ……。

「すいません、極東ではなくアイツだけの風習でして」

もつと早くに説明してよっ！　なんか錯乱して損したよ……。

肝心のミコトは桶に温泉を一杯汲み、一気に飲み干している。待って、だから待ってれば、温泉のお湯を、それも一気飲み？　飲んで大丈夫なのか保障もないのによくやるわ……頭おかしい。つてか三三九度の儀やってねえじゃん。

え？　その桶で温泉の湯を飲むの……？　俺やつぱ温泉入るのやめるわ。

「ぶはあっ、これで作法は終わりです。後は手首足首、よく回して！」

あ、飲まなくて良いのね。じゃあ温泉入ろうかな……。

「いざ温泉っ!!」

そのままぐるりと身を反転させ、温泉に向かって突撃ダイブをかましたミコトさん。

控えめに言ってたまた丸見えだった。尻の穴を見られる事に性的な快楽を覚えるタイプなのかな？

つてまで、かけ湯は？　温泉に飛び込むのは普通に危ないんじゃないかなと思うんだけど。

「……………かけ湯はしないんですね」

「すいません、すいません……」

桜花、千草え……二人ともなんかすごい苦労してそうだなあ。

第九十四話

天然温泉。そういわれて皆が想像するのはどんな温泉であろうか。俺が想像するのは危険な火山性ガスが発生しているか、整備出来ないような山奥にあるのを想像する。

ついでに言うならば人が入るのには適していない温度となつていくことが多いぐらいか。

割と勘違いされがちだが、世間一般における天然温泉っていうのは源泉が天然だけで浴槽部分は人工的に作られている事が多い。

何故こんな話をするのかといえば、まあ……別に何か関係がある訳じゃない。

濁っている温泉の方が効能がどうのこうの。なんか濁ってる温泉が良い温泉ってイメージも多いかもしれない。ここの温泉は特に濁りの様なモノは無く透き通っており、温度も丁度良いぐらい。温泉独特の臭気はすれど不快感を覚える程でもない。

どうにも不思議でならない。人が入る適正温度に整っている温泉ってはずありえない。何せ温泉が湧き出る理由は火山地帯の熱を受けた地下水脈が地上に湧き出ているというものだからで、下手をすれば60〜80℃の湯が噴き出すのだ。一般的な温泉は其処に水を足して人が入れる温度に調整したモノを湯舟まで引き込む形なんだけだ。

……ダンジョンだからか？

「ん……たまにはこういうのもよいものですね。後はヘルメス様さえ大人しくしていれば」

その意見には激しく同意せざるをえない。あの糞羽帽子野郎、どっかに姿隠しやがったし……何企んでやがる。

俺の横で大きく伸びをしているアスフィ・アル・アンドロメダ。ヘアステイア様程ではないにせよ十二分に魅力的な胸がスク水に包まれた状態で伸びをした事で激しく自己主張しているのが目に入ってきた。

なんともまあ、背徳的な光景ではないか。いや、これは日本人が勝

手に思い込んでいるだけだが、やはりスクール水着は子供が身に着ける物という先入観の影響か、かなり背徳的な光景にも見える。

横に居た千草さんがアスフィさんの胸をみて目を見開き、自身の胸に手を当てて悲し気な表情を浮かべているが、まあ気にしなくても良いのではないだろうか。

それよりも俺が気になるのは皆が普通に浸かると胸の辺りまでしか深さが無いっていうのと同じ深さで温泉に浸かる俺は首元までがつつり沈む事である。小さすぎて凄く深く感じるのだ。もっと、こう、子供に合わせた深さの——子供じゃねえし。

「ふああ、温泉は最高だねえ。長年続いた謎の肩こりが溶けていく様だよ」

ヘステイア様の眩きに千草と共に反応して其方を見れば、ぷかぷかと浮かぶ白く実ったたわわな果実。

女性の胸の主な成分は男の夢と浪漫、ではなく割とぎっくりと言ってしまうと脂肪な訳だ。人体の60〜70%が水で出来ているというものの、胸の殆どが脂肪である影響である程度の大きさの胸は水に浮くのだ。

ちなみに、俗にいうカナヅチと呼ばれる者達は筋肉質な人たちである。体脂肪率が低いと水に浮きにくい訳だ。

「……全然なぞじゃないよう」

被害甚大！ 浸水発生！ 言葉にするとこんな感じか。

ぶくぶくと千草ちゃんが湯に沈んでいく光景を見つつも俺はヘステイア様の胸を再度ちらりと見た。

神聖浴場で一度目撃した光景なので驚きはしないが。ううむ、大きい……。

というかそれよりも俺が気になったのは別の事。

水を掛け合い、はしやぎまわるミコトとリリルカ。

幼い見た目とは裏腹に出るところは出ているリリルカが動く度に胸が揺れる。揺れる……なんで揺れるんですかね？ 同じ小人族ですよね？ アレかな、実はリリルカは小人族を名乗る別の種族……いや、そうなるミリアちゃんの方が別の種族になるわ。

ミコトの方は……これもう救い様がなさ過ぎると思うんだ。太腿の半分程の丈しかないミニスカートではしゃぎまわったらパンツ見えるでしょう？ んでミコトはパンツ履いてないんだなこれが。もう見え見えですよ……。

リリはまだ良い。ミコトは少し自分の格好を考えようよ。というか温泉ではしゃぎすぎでしように。

「今度はリリが勝ちますよ」

「いいえ自分ですー！」

ああ、またやるの？ ええ、つと……。ミコトちゃんは自分の格好をもう少し考えて動くべきでしように。

所で話は変わるのだが、巨乳と貧乳という言葉がある。先に行っておくが決して自身が貧乳扱いされる事を怒っている訳ではない。ただしヘルメスは温泉に突き落とす。

ともかく、『おっぱいちっちゃくて可愛いね』って言われたとしても、貧乳の女性にその言葉を言うのはとどめをさす様なモノなのが。

ではこんな風に男性が言われたらどう思うだろうか。『おちんちんちっちゃくて可愛いね』と……。男のプライドズタズタでしよう？ だから『ちっちゃくて可愛いね』は誉め言葉ではないのだ。ヘルメスは沈め。

まあ、陰茎の大きさに拘るのは男性の方が多いしね。女性も『大きい方が』とは言うが限度があるだろうに。馬並みの突き出されたらドン引きだし。

と、俺の言いたい事はそう言う事ではないのだ。女性の胸の大きさを指して巨乳、貧乳と言う様に、男性の陰茎を指して巨根、短小というだろう？

『短小』というのは侮蔑の言葉に当たるのだ。『この短小野郎！』という罵りの言葉があるのだから。だが『貧乳』というのは侮蔑の言葉ではないと思っっている者も多いのではないだろうか。このあたり女性差別の名残だと思う訳だ。

それと同じようにだな、『ハゲ』という単語があるんだが。

頭部の毛が薄い人、または髪が生えていない人物に当てられる言葉である。この『ハゲ』という単語は言われた側からすればほぼ九割の人が『侮辱された』と感じるだろう。

だが残りの一割は気にしていないか、そもそも自ら毛をそって『スキンヘッド』にしている可能性もある。そういう者は……それでもハゲって言われたら怒るか。

まあともかく、毛の話題となったので本題にはいるが。女性の股間部分に生える毛。陰毛なんだが、この女性の陰毛が生えていない事を『パイパン』と呼ぶのだ。

意味合いは確か麻雀の三元牌の白牌に似ている事から、だったか？中国の読みが白牌パイパンなんだとか。んでそれと陰毛の生えていない女性器が似ていたから云々。まあ、語源の事はどうでもいいのだ。

この『パイパン』についてだ。生えてる方が好みとか生えてない方が好みとかそういうのはあるだろうが、この単語、『ハゲ』並みの侮辱の言葉に当たるのではないかと俺は思う訳だ。

なんでかって？ 『頭ハゲててツルツルで可愛いね』って言われたら侮辱されたと感じるだろう。それと同じことだ。

決して、決して余計な一言ばかり零すヘルメスに『ミリアちゃん毛が生えてないんだね、とつても良く似合ってるよ』と言われた事を気にしている訳ではない。すぐ逃げやがって、見つけたらただじゃおかねえからな……。

背が低い？ 胸が小さい？ 毛も生えてない？ それの何が悪いというのか。好きで背が低い訳じゃない。好きで胸が小さい訳でもない。好きで毛を生やしてない訳じゃない。それを指摘されるというのはどう考えても侮辱されてるも同然だろう。

ヘルメス死ね。

ミリアちゃんだつて『エイプリルフールの日限定ミリアさん』ならちゃんとおっぱい大きいし身長だつて178cmとかなりの高身長なんだぞ！

……4月1日のみしか使えない限定アバターな上、弱体化しちゃうんだけどね？ 4月1日の00:00〜23:59まで使用可能な限定

アバター。身長100cmしかない小柄な少女ミア・ノースリスの大人版ともいえる姿をした外装。

能力変動は一切なく、体力やシールド容量が変化しないのに被弾面積が上がる影響でただでさえ死にやすいフェアリー・ドラゴニユートがさらに死にやすくなるという改悪外装。非戦闘時に使うならまだしも戦闘時に使うともれなく鴨撃ちになってしまう事からプレイヤーから『ミアちゃんじゃなくてミアさん』と称される。

「へぶっ!？」

いきなりなんだっ!？」

バシヤアツと凄まじい勢いで湯が飛んできて顔にぶつかかった。目の前ではリルルカとミコトがきやつきやと騒いでいるのが目に入ってくる。お前らさあ……。

ああ、大分のぼせちまったみたいだ。思考があらぬ方向にぶっ飛んでたのに気付いて湯から身を引き上げて足だけを湯に着けたまま縁に腰かけた。

体が小さいからか、他の人よりも大分早く温まり切ってしまったのか頭がぼーっとしてふわふわする。のぼせてるっぽいのだが……というかミコトとリリは人に湯をぶっかけておきながらはしやぎ続けんのやめえや。いや、無駄に思考空回りさせた挙句にのぼせてる俺が言うのはアレなんだが。正気に戻してくれてありがとでも言えば良いのか？

「ミコト、リリ、ちょっと良いかしら？」

「どうしましたミア殿」

「ミア様も一緒に遊びますか？」

声をかければ素直に反応してくれる二人。まあ別にはしやぐなとは言わないが、ちゃんと自覚はしてねと灸を据えるぐらいは良いだろ。というか据えておかないとミコトの恥が増えすぎて恥死するぞ。「いえ、私はのぼせてるので今動く倒れかねません。遠慮しておきます」

「そうですか。では何の用なのでしょう？」

首を傾げるリリ。この子はー、ああ中学生ぐらいだったっけか。なら

しやあなしか。ミコトはー、ちよつと擁護不可能な状態なのでなんとも。

「まずミコトからですが。自身の格好に自覚はありますかね」

「そのバスタオル一枚のスタイルです。一応、お聞きしますが。下着等は身に着けていませんよね?」

「当然です! 諸事情あり全裸は断念いたしました。このタオルの下には何も身に着けていません!」

どうしてそんなに胸を張って言えるんですかね……。

「では、一つ確認したい事が。ミコトさんつてもしかして下半身を露出する趣味でもあるんでしょうか?」

「……は?」

どうしてそんな阿呆面晒してるんですかね。いや、言わせて欲しいよ、さつきから下半身見えたりしてたんだよ。お辞儀の時に丸見えだったのが馬鹿らしく思えるぐらいにこの子下半身の防御力ゆるゆるなんだよ。パンツ履いてないのにミニスカート並みの防御力ではしやぎまわるなつて話ね?」

「な、何故その様に思ったのでしょうか?」

「見えてたわよ」

「……なにが?」

「下半身。もつと直接言葉にした方がわかりやすいかしら? 極東では女陰ほととでもいうのかしら」

ちなみに男性器の方は『ほこ』だっけか? 『マラ』の方か? 詳し

くは知らんが今は関係ないしね。

「……………」

「ミコト?」

「あ、あの、その……桜花殿たちには……」

「さあ、少なくとも私は見たけどベル達が見たかは知らないわ」

一瞬で爆発した様に顔が真っ赤になったよ。自覚できたかな? できたよね。

被害甚大! 浸水発生! ミコトがブクブクと沈んでいった。いや、まあそりやそうなるよね。

「ミコトはもう良いですよ。リリの方は、別にはしゃぐなどは言いませんがせっかくの温泉なのでゆつくり浸かった方が良いですよ」

「というか温泉で水遊びする様に湯を掛け合うってというのはどうなんだ？ マナー的にアレだと思うんだが。」

「ミリア様はなんか年寄り臭い事言うんですね」

と、年寄り臭いか。ううん……40過ぎは年寄りか？

「あの、ミリアさんって歳はおいくつなんでしょうか」

ふと恐る恐るといった様子で話しかけてきたのは千草であった。ふむ、歳はいくつかねえ。どうなんだ？ 中身か？ 40過ぎ それとも身体14歳前後か？

「あ、それはリリも気になりますね。ミリア様のお歳を聞いた事ありませんでしたし」

「私も興味がありますね。少なくとも私よりも年上でしょうけど」

リリとアスフィさんも反応してきちゃった。ううん、ミリカン設定的にはミリアちゃんは14歳なんだが中身が40過ぎだしなあ。これはどっちを答えれば良いんだ？

助け舟を求めて思わずヘステイア様の方を伺えば、ヘステイア様が首を傾げつつ近づいてきた。

「どうしたんだい？」

「ミリア様の歳が気になっただけですよ」

「ミリア君の年齢かい？ それなら——」

女性達から距離をとり男三人並んで湯に浸かるベル、ヴェルフ、桜花の三人。

遠くでミコトとリリがはしゃぎにはしゃいで目も当てられない痴態を晒しているのを極力見ない様になっている三人は湯の心地よさに吐息を零した。

ヴェルフがふと顔を上げ、呟く。

「終わったんだなあ」

「ああ、俺達は生きてる」

「元はと言えばお前の所為だろうに」

「ああ、だが後悔はしていない」

桜花の返事を聞き、ヴェルフが口元を歪めて笑みを零した。

十八階層ではリーダーとしての資質をベルに説きヴェルフの不興をかけた桜花であるが、同時に大決戦時に命懸けでベルを救うという事もしている。決して嫌味だけの男ではないと理解した事で打ち解け合った男連中。

ベルがふと口を開いた。

「あれ、ミコトさんとリリが……ミリアに説教されてる？」

「あん？　なんか言われてるみたいだな」

温泉の縁に腰かけたミリアがミコトとリリ相手に何かを語り掛けている様子が見え、ヴェルフが頷いた。

先程から目も当てられない痴態を繰り返していたミコトであるが、桜花達男連中から指摘する事は憚られる。出来る事と言えば見て見ぬ振りが限度であったが、ようやくミリアが重い腰を上げて注意し始めたのだろう。

そのまま見ていればミコトが一瞬だけベル達の方に視線を向け、その後顔を真っ赤にして湯に沈んでいった。

「一応言っておくが、俺は見えてないぞ」

「あー、僕も見えてないです」

「……ミコトにはそう伝えておく」

ヴェルフとベルの気遣いに桜花が深い溜息を零した。

温泉を前にたがを外し過ぎたミコトの痴態について、彼らに出来る事は『見なかつた事にする』のみ。下手に口出しすれば先程温泉に蹴り落とされたヘルメスの様になりかねない。

ミリアに対し過剰にちよっかいをしかけ、結果として温泉に突き落とされて以降姿を消してしまった神ヘルメス。彼がどうなったのかは桜花達も知り得ない。

三人が温泉に静かに浸かる中、唐突に女性達の驚きの声が響き渡った。

『ええっ!』

ベルが真つ先に立ち上がり駆け出し、遅れてヴェルフと桜花も駆け出す。

モンスターが出たのかと警戒しながら女性たちの元へ駆けつけてみれば、ヘスティアを除く皆がミリアを見て固まっている姿があった。

「皆、どうしたの!？」

「モンスターか?」

「おい、ミコト、千草どうした?」

「ああベル君じゃないか。離れた所にいないでこっちで一緒に入ろうじゃないか」

男三人の言葉を聞いた女性達がギギギツと油の切れた機械の様な動きでベル達に振り返り、神ヘスティアだけがへらへらと笑いながらベルを手招きしていた。

モンスターが現れたといった様子ではないのにベル達が首を傾げるさ中、リリが震えながら問いかけを投げた。

「ベル様、ヴェルフ様、一つ質問があります」

「何? リリ?」

「どうしたよりリスケ」

「……ミリア様のお歳はおいくつだと思えますか?」

リリの問いかけにヴェルフとベルが顔を見合わせ首を傾げ、桜花は腕組をして考え込む。

対象となっているミリアは困った様に頬を掻きながら『いや、そりや驚くわ』とぼやいていた。そんなミリアの様子を見ながらもベルとヴェルフが考え込み始める。

女性の年齢については触れるべきではない。ベルの祖父が語った言葉である。それは非常に正しい事ではあるのだが、そもミリアは其の辺りについてどう考えているのかと疑問を覚えるもミリアの年齢はベルも非常に気になった。

ミリア・ノースリスは小人族である。リリルカという前例がある為、たとえば身長がヒューマンの子供程しかなかったとしてもベルより年上という事も普通にあり得る。

むしろいままでのミリアの落ち着き様や考え方等は子供っぽさはなく、大人びている。神ヘルメスの言葉が脳裏を過り、ベル達は揃って答えを呟いた。

「僕より年上?」

「俺より年上だろ」

「俺達より年上だな」

よもやここまで落ち着きのある人物が年下とは考えづらい。ある意味では正解である、ある意味では間違いともいえる答えにミリアも苦笑を浮かべて頷いた。

「まあ、そうなるわよね」

「ですよねっ! ミリア様がリリ達より年下とかありえませんかよねっ!」

「ですね。私から見ても非常に落ち着きがありますし……」

リリが立ち上がってミリアをびしりと指さし、アスファイが静かに頷く。

此処に居る者達は皆、ミリアが年上だと言われても驚きはしない。むしろ年下だと言われた方が驚くであろう。

その様子を見ていたヘスティアがくすくすと笑いながらつぶやいた。

「皆はミリア君の事勘違いし過ぎだね。ミリア君は13か14ぐらいだよ」

「いやいやいや、ミリアがベルと同じかそれより下っ!? 神ヘスティア、いくらなんでもそれは信じられません」

「僕より下? 同じ? え? でもミリアって大人びてて……え?」
「……本当なのですか?」

ヴェルフが驚愕のあまり足を滑らせかけ、ベルが目点を点にしてミリアとヘスティアを何度も眺め、桜花が懐疑的な視線をヘスティアに向けた。

そんな反応のさ中、ミリアは困った様に頬を掻くのみ。対してヘスティアは大きく頷いて肯定した。

「本当さ、ミアハが確かめてくれたからね」

「ミアハって誰だ……？」

「ミアハ・ファミアリアの主神、ミアハ様だよヴェルフ。ヘステイアファミアリアと友好関係にあるんだ」

ベルの説明にヴェルフが頷き、桜花が首を傾げた。

「医神の言う事なら……本当、なのか？」

「ミアハ曰く、ミアアちゃんはちよつと発育不足が見られるけど年齢で言えば13から14ぐらいだって」

「……はあ」

ベルとヴェルフ、桜花の三人がミアリアを見つつも生返事を返し、肝心のミアリアは相も変わらず困った表情で頬を掻いている。

「いや、私も吃驚なんだけどね」

「なんでミアリア様が驚くんですか！ リリ達の方が驚きですよっ！」

「そうです。まさか……まさか年下に諭されるとは……」

沈没していたミコトが再沈没するさ中。ベル達は顔を見合わせて呟いた。

『大人びた魅力……？』

精神的に成熟した大人びた魅力がある。神ヘルメスはミアリアに対しそう評した。

それが蓋を開けてみればリリより年下。ベルと同年もしくは一個下。ヴェルフや桜花からすれば完全な年下。

十三階層での防衛線の時に声を張り上げ皆を指揮した彼女が。

十五階層でのモンスターの大量相手に突撃した彼女が。

十八階層では魔法の巨砲を放ち、癒しの波動で冒険者を立ち上げさせた彼女が。

自分たちより年下だと言われ、ベル達は静かに湯に浸かり、沈没。「いや、確かにその反応はわかりますが、わかりますけど……」

三人が綺麗に沈み気泡の上がる湯舟を見たミアリアが困惑しながらつぶやいた。

第九十五話

皆が思い思いの場所で温泉に浸かっているのを眺めつつも思考をコロコロ。

人の年齢は『精神年齢』と『肉体年齢』に分けられる。

では、俺はどうなるのかという神々の認識では『自分を騙し過ぎてわからなくなっている』もしくは『自分の年齢を誤認している』となる訳だ。

確かにかつて俺は自身の実年齢と異なる役柄を完璧に演じきつたりしていた訳なんだが、そうなる今自分すらも信じられなくなりそうで怖い。

つまり俺が『過去』だと思っている『記憶』全てが『自分自身で作上げた都合の良い記憶』って可能性すらあるという意味になる訳だ。

……頭が痛くなってくる問題なのでこの考えは全て投げ捨てておく事にする。気にしても仕方ないし、俺は『神へステイアの眷属、へステイアファミリアのミリア・ノースリス』で十分だ。

年齢は『13〜14歳ぐらいのちよつと発育不足が目立つ小人族』って事で良い、のか？

というかちよつととか？ 発育不足がちよつとで済むのか？

もつと、こうさあ、リリと1〜2歳程度しか違わないんだから背丈的に……いや、普通なのか？

……そうだね、認めようちよつと発育不足なのさ。うん、ちよつと……ちよつと？

「ベル君、この奥、まだ先があるみたいなんだ。一緒に行ってみよう」
ぼんやりと温泉に浸かっているとへステイア様がベルを誘って奥へ行こうとしているのが見えた。

ううん、ちよつと警戒心緩いんじゃないや……あー、結晶竜、何処に居るんかね？

《どうしたのー？》

すぐ近くの結晶の中から此方を見ている結晶竜の姿があった。と

いか吃驚したわ、呼んだら瞬間で来るんかい……。ああ、ヘステイア様とベルの周辺警戒頼む。危なそうならこっちに声かけてくれ。

《分かったー!》

元気一杯で良い事だ。少し不安は残るが、リユーさんとアスファイさんも一応警戒……。警戒してる?

いつの間にか大きな蓮の葉の様な植物の上に乗る、竹竿に木の実の浮きで釣りっぽい事をしているリユーさんの姿があった。というか温泉で釣り? そもそも釣り竿なんてどこで……。手製か。其処らの素材で適当に作ったっぽいな。針は? 餌は? どうか得物は?

疑問は残るがまあ良いか。警戒はしてるんだろうし。

「はい神様、すいませんちよつと行ってきます」

気を付けて行ってくるんだぞー。安全、かどうかの保障が無いしなあ。

アスファイさんがミコトと千草の近くに居るし、桜花とヴェルフと一緒に居る。ヘステイア様はベルと一緒にで、リユーさんはそれとなく全体を見回してる感じ。リリは俺の近くと。

戦力的にはLv2以上がそれぞれ一人ずつついてるし良い感じなのかね?

「役得って奴か」

「なんせ「リトル・ルーキー」って奴だからな」

ヴェルフと桜花がヘステイア様と一緒に奥へ行ったベル君の背中を見てなんか言ってる。嫉妬かな?

ベルが去った事でヴェルフと桜花が取り残されてるなあ。ヘルメスの姿は見えないし……。

ふとヴェルフ達の方に千草が近づいて行くのが見えた。目的は桜花かな?

「桜花、ミコトが温泉の噴き出し口を見つけたの。そこに居た方が怪我の治りが早いかもしれないって……。一緒に、いっ?」

「お、おう」

恐る恐る、恥ずかしそうに桜花に声をかける千草と、どもりながらも答える桜花。ううん、青春だねえ?

一人取り残されたのはヴェルフ。可哀相に……女の子に声かけて貰えなくて顔引き攣らせてるじゃないか。

「……ちくしょう」

まあ、ベルにはヘステイア様とリリが、桜花には千草が居て、他の女性はヴェルフと面識が深い訳でもない。あえて言うなれば俺かりなのだろうが当然リリはベルの方に……ありや、いつの間にかリリはベルの方へ行つたのかね。姿が見えない……大丈夫か？ 大丈夫か。奥の方からヘステイア様の声聞こえるし。なんでついてきてるんだーって、リリの事だろ。

あのままヴェルフ一人は流石に可哀相か。声かけてやるかなあ。

「二人の時間も時には必要です」

「おあつ!？」

……声を掛けようと腰を上げた所でリューさんがすいーつと水面を滑って移動してヴェルフの前に止まった。まってその蓮の葉っぱい植物どうなってるの？ なんかリューさんの意図通りに動いてる様に見えるよ……？

ヴェルフは唐突に目の前に現れたリューさんに驚いてるし、俺も驚いた。

「孤独は良い。何かを見つめなおす事が出来る」

「何かを、見つめなおす……？」

リューさんの言葉の意味は、なんとなくわかるが。ヴェルフやい、視線が胸やら太腿やらに吸い寄せられてるぞ？ いや、確かに人が乗れるサイズの蓮の葉の上にアヒル座りしてたらそりや……太腿は目立つわなあ。

というか体柔らかいなあ。あの座り方って体の柔軟性が高い女児がしてる事が多いって話だっけか。

「……何故にブルマ？」

ブルマ？ ああ、リューさんの服装、そういえば新緑色のブルマだったね。何故にブルマなのだろうか？ というか待て待て、さっき桜花が連れていかれたのって温泉の噴き出し口……いやそこ熱湯じゃね？

ヴェルフは一人寂しく温泉に浸かる必要がなくなった様子だしちよつと桜花の様子見て来よう……。

ぐらぐらと泡立つ赤色の湯舟。まるで入浴剤を入れたジャグジーの様な温泉に肩まで浸かる桜花。

そしてその桜花を見下しながら足湯に浸かるアスフィさん、ミコト、千草の三人。

……拷問かな？

桜花を前にし腰かけているのもあって、桜花の目の前には魅力的な生足×3。というかミコトはあの体勢だと見えかねんぞ……さつき注意したやろ。

「熱くない？ 桜花、熱かったら無理しないで出てね？」

「お、おう……」

いや、待て待て、見た目からして沸騰してる湯舟にぶち込んでる様にしか見えんし、桜花の顔真っ赤やぞ……。あれって何？ 釜茹での刑にでも処されてるの？

というか桜花動けんだろアレ。下手に視線逸らしたり動いたりするとアレだろ。というか飴と鞭やな。桜花の顔が赤いのは目の前の花園の影響か、それとも温泉の温度の所為か……いや、あれ助け出さないで桜花が茹で上がるぞ。

「先程は失礼しました。自分、温泉とみると見境が無くなってしまつて」

「別に良いじゃないですか、それにタケミカツミアミアの方々と知り合えて、良かったです」

「そんな、此方こそ光栄です」

いやいやいや、三人は和やかに談笑してるけど桜花が天国と地獄を味わってるぞ。いや、でもどうやって声かけようか。桜花を借りる？

ううん。

「なあ」

『ん？』

「その足湯、結構熱いんじゃないか？ あんまり熱いのに入っていると体にも良くないし、そろそろ——」

桜花が自力でなんとかしようとしてる。ガンバレ、その調子だ！
「問題ありません」「快適です」「気持ちいいよ？」

……あの三人は空気読めない子なのかな？ 桜花が地獄に突き落とされたぞ。目の前に天国あるけど熱中症は命に関わるだろうに。

「……おう」

桜花え……。

「でも、地上に戻る前に此処に寄れてよかった。桜花殿の回復も早まるはずですし」

ミコトオツ!! 桜花が茹ってる！ 顔真っ赤で目がグルグルし始めているっ！ ああしやあない。

「あの、すみません。桜花さんちよつと良いですか？」

「ん？ どうかしましたかミリア殿」

「ああ、ちよつと桜花さんに用があつてですね」

「な、何の用だノースリス」

ヤバイ桜花の目が意識飛びかけてんぞ。とりあえず適当な理由、理由を……。

「ええつと、そう、あそこのアレをとつてほしくてですね」

「あれ、というと……ああ、あの桶ですか」

「私の背丈だと厳しいですし桜花さんさえ良ければ……」

俺の背丈じゃ取れない位置の桶っぽい植物とつてー。これならいける。後桜花、きついんやろ……今なんとかするからもう少し耐えてくれ。

「っ！ 任せろ、すまん少し行ってくる」

「私が代わりにとつて来ようか？」

千草あつ、違うそうじゃないその気遣いは無用だよつ。桜花が茹で上がる前になんとかしないとなんだよ！

「いや、俺が頼まれたんだ。俺が行こう」

「そっか、気を付けてね？」

「おう」

桜花が若干ふらつきながらもなんとかこつちに歩いて来ようとしてるのをひやひやしながら見つとも千草達から引きはがす事に成功した。というかあのジャグジーみたいに見えたあの温泉、沸騰してないか？ キューイならまだしも桜花入れるのは流石にきついだろ。

って桜花、此処で倒れるな倒れるな、まだ千草達から見える。

「すまん、助かった……」

「いや、最初から熱いなら熱いって言えばいいじゃないですか」

茹で上がる寸前になんとか助け出して水分補給したおかげか、顔色は若干戻りつつある桜花を荷物を置いてある場所に預け、一応とつてもらった桶は……そこらに浮かべておくかなあ。

ヴェルフの所にでも戻って、桜花は一人で大丈夫か？

「ああ、少ししてから戻る」

「そうですか。何かあったら声上げてくださいいね？」

今の所はモンスター居ないけど、どう転ぶかわからんしね。

桜花は問題なさそうなのでヴェルフの所に戻るかと足を向けた先。

ヴェルフが岩に向かって鑿ノミと槌ハンマーで彫刻を彫っていた。いや何してんだヴェルフさんや。

「心頭滅却、心頭滅却」

リユーさんはその後姿を眺めてるだけだし。何してんだ……？

心頭滅却？ 熱かったのか？ だったら温泉出て涼めばいい話だろうに。

「どうもリユーさん、ヴェルフは何を？」

「私にもわかりません。唐突に彫刻を始めたモノで」

ふむ？ リユーさんに背を向けて懸命に岩に何かを刻み込むヴェルフ。迷宮だから再生しちゃうし無駄なんだが——見事な神へファイストスの彫刻が岩に刻み込まれている。いや凄いな、流石というかなんというか、その器用さの使い方はどうなんだ？

「先程から何をしているのですか？」

「それを言うならお前こそ……此処は温泉だぞ」

ヴェルフのツツコミも尤もである。がヴェルフの行動も突飛といえど突飛なんだよなあ。

振り返りもせずに返事をするなんてヴェルフらしくないというか、なんというか。誰相手でも視線を真っ直ぐ向けて話す男だと思ってたんだがなあ。

「知っています」

「じゃあなんで」

「此処が本当にただの温泉なのか、私には少々疑問なのです」

「なっ、どう言う事だ……あつ」

やっと振り返ったかと思えば顔真っ赤にしてすぐに岩の方に向き直る始末。向けられた視線は、リユーさんの太腿。視線の置き場に困ったのか？

「心頭滅却、心頭滅却、心頭滅却！」

「ただの勘です。クラネルさんにも伝えましたが私の勘はよく外れる」

リユーさんは視線を向けられた事に気付いてるのか……。気付いてはいるのか。触られたりしたら問答無用でぶっ飛ばされるけど、視線だけならオツケーなのか？

「ただのブルマだ、そっただのブルマ……」

おいヴェルフ、心の声漏れてるぞ。というかブルマは刺激がつよ……過ぎ？ 水着と大して変わらんだろうに、ブルマの何が男をそんなに駆り立てるのか。下に下着も履いてる訳だから防御力は水着より高いだろ？

「煩惱退散っ、煩惱退散っ」

まあ、男つてのはそういうところあるからなあ。しかし、ただの温泉、とは思えんよなあ。

ヘルメスが姿を隠してるのも気になるし。やっぱり警戒はしとくべきだろうなあ。

「ミリア様、どうかなさったんですか？」

「リリ？ 戻ってきたの？」

「はい、喉が渴いてしまったので。ベル様なら彼方の方に行きました」

よ、ヘステイア様と一緒に」

リリに水を渡しつつも視線を向けるが、結構入り組んでいるのかベル達の姿は見えない。というかくるぶしが浸る程の深さの浅い温泉が通路の奥まで続いているのが見えた。奥地は危なそうなんだが、迎えに行くべきか？

「ミリア様、一つ気になったのですが」

「何？」

「ミリア様はベル様の事が好きではないのですか？」

んむ？ 好きかって？

「そりゃ好きだけど、どうしたの？」

疑問に答えるとリリが不思議そうな顔で首を傾げてきた。

「いえ、好きだという割には、ヘステイア様みたいにあまり積極的にいかないーと思ってます」

ああ、ヘステイア様みたいにガンガンと距離詰めていちやいちやしようとしなくて事か。

『好き』なのは間違いないんだが、多分リリの言う『好き』と俺の言う『好き』は違うんだよな。

「私の好きはLOVEではなくLIKEですからね」

イチヤイチヤしたい、とは思わない。どちらかといえば、そうだな……一緒に居たいってのは多分同じなんだ。けれどそこから先、深い関係になりたいかっていうと、ううん。

そもそもの話、LOVEとLIKEって同じようなモンだと思うんだよなあ。違い？ んなもんセックスしたいかしたくないかじゃないか？ 性欲と混じり合えばLOVE、混じらなければLIKEだろう？ 違うのか？

「ミリア様は、なんていうか……欲が無いですよね」

なんて失礼な。俺にだって欲の一つや二つあるに決まってるだろ。「例えば、何があります？ リリはベル様と一緒に居たいですし役に立ちたいです。後ヘステイア様には負けたくありません」

俺もほぼ同じなんだが。

「ミリア様は積極性が無すぎて無欲に見える事があるんですよ」

無欲って程無欲じゃないだろ。流石に……美味しい食べ物は食べたいし。気持ち良い事は嫌いじゃない。楽しい事だってしたいし。人並にはあると思うんだがね。

「私にも人並に欲ぐらいありますよ」

「……そうは見えませんけどねえ」

どうしてそんなに疑うんですかね。

リリの疑いの眼差しを受けつつももう一度温泉に浸かっておく。温泉から出て動き回ってたからか少し冷えた。桜花は桜花でもう回復して程よい湯加減の所で浸かってるし、ヴェルフは煩惱を払うべくヘファイストス様の彫刻を彫り進め——全然、煩惱払えてねえよアレ。上半身は完璧なのに下半身、ヘファイストス様がブルマ履いてるだけど……。

ミコトたちも吹き出し口から戻ってきてゆったり浸かって。リューさんはいつの間にか蓮の葉を降りて岩場に腰かけて釣り糸を垂らしてる。ちよつとリューさん上級者過ぎませんかね。

リリが俺の横に浸かって再度口を開いた。

「そうですね、だってミリア様から自分がしたい事ってのを聞いた事ありませんし」

いや、俺は俺で予定立てて動いてるし、ね？ やりたい事はちゃんとやってるよ？

「そうですね？」

なんでそうぐいぐい来るんですかね。俺何かしましたっけ……？

「私何かしたっけ？」

「むしろ何もしていない様に見えるんですよ」

「……してない様に見えるって言われても」

じゃあ逆に何をすればいいの？ って話よ。もつと欲望に素直になれって？

普段から警戒しながら生活してるし、表面を取り繕ってるから無欲に見えるのかね。美味しい話には裏があるって警戒して食いつかない所とか？

欲、欲ねえ。

「そういえば性欲は一切ないですかねえ」

「はっ」

ミリアになってからムラムラしたりとかは一切無かった気がする。そもそも前世の時点でムラムラしたりとかは無かったなあ。いや、完全に無欲って程じゃないけれど、やっぱり他の人と比べると淡泊だったというかなんというか。

言いたくはないが、女性と性交するより親父とゲームやってた方が楽しかったし、高校生の時に付き合ってた彼女からデートに誘われてたのに親父とのゲームを優先して関係ぶっ壊れたりしてたしなあ。

彼女の名誉のために言っておくが、普通に美少女だったし学校ではかなりモテてる子だった。初めての相手でもあったのだが、なんというか何処まで行っても性交の度に違和感を覚えてたのも影響がでかいのかもしれない。

「セックスしたいとか、ムラムラしたりしないんですよ」

「……………ミリア様、リリが言いたいのはそう言う事ではないのです
が」

凄まじく冷たい視線が突き刺さる。いや、だって三大欲求じゃん？お腹空いたりするし、眠くなったりはするけどムラムラはしないんだよ。

「どうかどう言う意味なのだろう？ 察しが悪い訳ではないはずなんだが、言いたい事が良くわからん。」

「はあ、ですからミリア様がやりたい事っていうのをミリア様の口から全くと言っついていい程聞かないんですよ」

「……………？ そうかしら？」

「そうなんです！」

いや、其処まではつきり言わなくても。

「つて言ってもなあ、やりたい事つてのがそもそも何を指すのかわからんのよなあ。」

「ミリア様、ミリア様は今何がしたいのですか？」

「何って、特に何も無いけど？」

強いて言うなれば、何事も起きずにいてくれればいいし。あ、ヘル

メスはもげれば良いと思ってる。

「……はあ」

これ見よがしに溜息つかれるとちよつと複雑な気分になるんだけどなあ。

「ベル様は自分のやりたい事を口にしますよ。例えば——モルド達を助けたいとか」

あー、ああ、うん。ようやく察しがついた。

それはアレだな、やりたい事というよりはワガママだ。

周りの意見を押し切って自分の意見を通そうとする。そういうワガママを全く言わない、それが気になるって事か？

「……そんな感じですよ」

不貞腐れた仕草のリリに思わず首を傾げた。何をそんなに不貞腐れる必要があるんだか。

ワガママ塗れっていうのは若干面倒くさい奴になるだろうに。

「ミリア様は、リリ達の事が信用なりませんか？」

んむ？

「ベル様はちゃんとワガママを言うてくださいります。普通なら見捨てる場面で『助けない』って口にします」

まあ、それがベルの美德だしね。人によっては悪癖ともとられかねん部分ではある。俺からすれば魅力的な人物なんだがねえ。

「ですが、ミリア様はそういう事を口にしませんよね」

「してる積りだけど？」

「ミリア様は常に選択肢を上げるだけでした」

十三階層にて所属不明な冒険者を助けるか否か。それがタケミカヅチファミリアだとわかった直後に『自らが囿になるか、見捨てて逃げるか』の選択肢を迫る。十五階層で『リーダーを代わるか否か』。

俺が上げた意見は一つではなく複数。俺が選んだ選択肢を勧めるのではなく、俺はあくまでもベルの前に『こういう選択肢がある』と示しているだけにしか見えなかったらしい。

選んだのはベル。そして俺はそれに従っているだけだと。

ベルの事が好きだと口にするが、積極性は一切無い。これ見よがし

にヘステイア様やリリがベルに迫っても平然と他人事の様に構えていて、まるで無欲に見える。

まるで俺の意思が見て取れない。何を考えていて、何がしたくて、何をして欲しいのかがさっぱりわからない。

「リリはベル様だけではなくミリア様にも恩があるのです。なのに、ミリア様に何をして差し上げればいいのかさっぱりわかりません」

あー、何をしてほしいか。かあ……恩返ししたいけど相手が何考えてるのかわかんなくて何したら良いのかって話ね。

……逆に聞いていい？

「私って、何をしてほしいんでしょうか？」

「……それをリリに聞きますか」

いや、だってね？ リリを助けたのは俺がそうしたいと思ったからであって、リリに何かして欲しくて助けた訳じゃないんだよ。

「強いて言うなれば、そうね、今のままで良いと思うんだけど」

「今の、ままでるか」

サポーターとしてパーティーの土台を支えてくれてる現状で十二分に満足してる。それ以上を求めるのはどうなのかとは思いつ、何処まで求めて良いのかわからん。

そういう意味では、無欲と言えば無欲なのかもしれない。

「じゃあ、地上で今度〇飯奢ってくれたら良いわ」

正直、何かして欲しい事と言われても何も言えん。本当に何も無いのだ。

「はあ、ミリア様はなんというか、凄くわかりやすい性格してる様に見えますけど、よく見ると何を考えているのかさっぱりわからない性格してますよね」

それはー、そうかもしれないね。

自分の心を隠して、相手の心の内を読み解き、相手の欲する姿を演じる。そうすれば人は容易く騙せる。今までそんなことを繰り返してきた影響か、やはり何処か心を隠して——隠してるのか？

そもそも、欲求が薄いのは、何処かに無くしてしまったからか？

美味しい物食べたい
ぐっすり眠りたい
気持ちよくセックスしたい
食欲。睡眠欲。性欲。

そういった当たり前すら何処かに置いてきた？ 困ったな、ベルに置いて行かれないとは思う。其の為に強くなりたいと思ってるんだが、それ以外に何か欲しいモノっていうのがさっぱり浮かばない。

強い武器？ 高品質な防具？ それは、なんか違う気がするし。

そういえば、誰かに何かして欲しい。そういった事は、あんまり考えた事無かったな。

第九十六話

透き通った湯を手ですくい、丁重に髪を洗っていく。

綺麗な髪なので切るのは勿体無いとヘステイア様達に言われてそのままにしているが、長い髪は単純に邪魔だ。

まあ、無理にカットする必要はないか。

「ミリア様の髪は綺麗で良いですよね」

「そう？　長いから結構面倒なだけだ」

リリは少し癢っ毛なのか跳ねてるしね。素直なストレートである俺の髪を羨ましいと思うのは普通か？　むしろリリくらいの癢っ毛だったらそれを理由にショートに纏めるんだがねえ。

ふと周囲を見回してみると、桜花は一人で程よい湯加減の湯に浸かっており、ヴェルフは煩惱を払うべくヘファイストス様の彫像を彫り込んでいる。

ミコト、千草、アスフィの三人は談笑しながら湯に浸かっていて、リリは俺の隣で此方を羨ましそうに見ていた。

リユーさんは、釣りモドキをしているさ中で——温泉の色が急激に変化していく。

湯の色合いが透き通る色合いから、淡い緋色に変化していった。何事？

沸きだし口の湯から一気に色が変わっていつている。間違いなく異常事態だろ、湯が毒性に変化するとかそんな感じか？

俺が先程、桜花に回収を頼み、結局使わずに温泉に浮かべていた桶が変化した温泉の辺りを漂い——ジュウツという異音と共に溶けた。一瞬で、である。

おいおいっ!?　こんな罨聞いてねえぞっ!?

リリの腕を掴んで引っ張って温泉から飛び出しつつも声を上げた。

「全員、今すぐ温泉から上がって！　何かおかしいわ!」

「ミリアさんに同意見です、すぐに上がるべきかと!」

「え?」「おかしい、ですか?」

「ちよっ、ミリア様いったいどうしたんですか」

って変化早過ぎるだろ！ 上がるのが間に合わん。リリだけでも
——ダメだなこりゃ。

湯を掻き分けて温泉を出ようとしたが間に合いそうにない。お姫
様だつこの要領でリリを抱え上げるが、変化した赤い色合いが俺の元
まで辿り着く。それだけにとどまらず一瞬で湯が薄い緋色に染まり
あがった。

ジュウツという異音。リユーさんの浮かべていた釣り糸の先の浮
きも綺麗に溶けてなくなり、湯が遂に俺の腰下の所まで辿り着き——
——下半身を溶かされる可能性に背筋が泡立つ。

下半身の痛みは無い。特に違和感は——布の欠片の様なモノ
がさあーつと湯舟の中で踊っていた。赤色の布切れ、ちょうど俺の水
着と同じ色合いの布切れだ。

水着が溶けた？ 下半身に違和感はない、しいて言うなれば下半身
を守っていた布の感触が消えたただけで他に異常はない。

「ミリア様、いったいどうし——」

「きやあつ!?」「なっ!?」「水着がっ!」

アスフイさん達の所まで辿り着いた所で水着が凄まじい勢いで溶
けていく。まるで湯に溶ける様に消え去り、俺が抱えるリリと湯に浸
かっているリユーさん以外が生まれたままの姿を晒していく。

アスフイさんのスク水も、ミコトのタオルも、千草の水着も、俺の
水着も溶けた。ついでに桶とリユーさんの釣りモドキの浮きも溶け
た。しかし人体に異常らしい異常は発生していないのか？

「これは、どういう」

「おお！ 凄い眺め」

岩場の影からひよいと顔を出しこちらをニヤけた笑顔で見つめる
穴の開いた羽帽子の男神の姿を見た瞬間、アスフイが目にもとまらぬ
速さで動き、その男神を拘束して向こう側に顔を向けさせて此方を見
れない様にした。

早過ぎて何が起きたのかわからなかったぞ。

「な、何が起きていますか？」

「わからないけど、水着が溶けたわ」

「溶け……え？」

抱えているおかげで水着が溶けずに済んだリリをそのまま温泉の外まで運び、神ヘルメスに詰め寄っているアスフィの後ろから近づいた。

『シヨットガン・マジック』『リロード』

「まつ、待つてくださいいミリアさんっ！」

「どいてください。ソイツの頭吹っ飛ばしますんで」

「ちよっ、そこをなんとか。今事情を聞きますんで！ ヘルメス様っ！ あれほど余計な事をするなど！」

ヘルメスに詰め寄る姿を見つつもこれ見よがしに銃口をチラチラ。テメエさつきまで何処かに隠れてこそこそしてやがったろ。犯人はヘルメス、間違いねえ。

「言いがかりさ、俺は無関係さ」

ああ？ 何言ってやがるテメエ。

無関係かどうか確かめてやろうか？ ああ？

桶、は使えないな。しゃーない、手ですくってかけるか。

一度魔法を解除し、ちっちゃな手でほんの少量の湯をすくい、ヘルメスの水着にかける。一度、二度、三度——水着が溶け始めた。

「ミリア様何をしているのですかっ！」

「溶けてますっ溶けてますっ！」

「何って、ヘルメスが犯人か確かめてます。水着が溶けたので、灰色ですかね。ほぼ黒だと思えますけど」

「……ミリアちゃん、俺のお尻が寒いなあーなんて」

ヘルメスの尻が丸出しになるまで温泉の湯をかけつづけ、ちゃんとヘルメスの水着も溶ける事を確認した。

とはいえ、これだけでヘルメスが犯人ではないと決めつけるには早いだらう。自分の水着にも細工していた可能性は高そうだしなあ。

「……これは神ヘルメスの悪戯とは思えない」

「リユースさん？ ですが水着が溶けるなんてヘルメスがやりそうな気はしますが」

「それでしようか？」

「ほら、温泉の湯に何か混ぜると水着が溶ける様に細工してたとか」
皆が腕組をしてヘルメスの背中を睨みだした。いやだってそうとしか思えないし？

アスフイさんがヘルメスの耳を摘まんで問いただし始めた所で、結晶竜の声がそこから響き渡った。

《一杯居る！ 止められないかもっ！》

「っ、この音は？」

「何でしょう？」

一杯居る？ というか音？ って、俺以外にはただの音色にしか聞こえないんだっただか。

というか一杯？ 何が一杯居るんだ？

《敵、敵が一杯！ 追ってる！ 止まらない！》

「敵、追ってる？」

誰を？

「まさか、神ヘステイアとクラネルさんは何処に」

「え、お二人なら奥に……」

あ、もしかして追われているのベル達なのか？

ってヤバいつ！ 結晶竜、直ぐにその場所に案内を——何してでも良いからベル達を守れっ！

小さな結晶の様なモノの薄い輝きによってまるで迷宮の星空の様に見える広間の中央。深紅に輝く巨大な球状の何かに照らし出された幻想的な空間。

温泉の奥に進んだ先に見つけたその広間の美しさに神ヘステイアと共に心奪われていたベルは、ふと違和感を覚えて周囲を見回す。何かが見えている様な、そんな違和感。

「神様、何か変ですよ」

「……変じゃないさ」

【剣姫】も居ないこの空間。ようやく邪魔者のリリが居なくなつて二人きりになる事に成功し、盗られる前に想いを成就しようと告白せ

んとせまる神へスティアは違和感に気付かず、ベルに詰め寄る。

「ボクは真剣だよ」

「いや、その、そう言う事じゃなくてですね」

ミシリミシリという亀裂の走る音。鋭敏に感じ取った音に警戒し、腰を落とすベル。

対するへスティアは今まさに胸に秘めた想いを口にしようとし――

――壁の崩落の音が響いた。

「なっ!?!」

「モンスターっ! 神様っ!」

素早く神へスティアを抱えて飛び退いた瞬間。先程まで二人が居た場所に落下してくる無数の岩塊と砂利。そして怪物。

三対六つの深紅の瞳。ナマズの様な扁平な頭部に、額から生えるチョウチンアンコウを思わせる餌を惑わす誘引突起。先程まで星空とまごう輝きを担っていたのはこのモンスターの擬餌状態だったのだろう。

ベルが感じた違和感はこのモンスターだったのだろう。

急ぎ走りだし、広間から通路へと駆け込み、途中に生え茂る結晶より小さな影が飛び出し、ベルとへスティアを追うべく水面をうねる様に走る怪物の前に飛び出した。

薄青い結晶によって形作られた手の平に乗ってしまう様な小さな飛竜。ベルが驚きで振り向いた瞬間、周囲に無数の蒼炎が弾け、通路を結晶塊が埋め尽くし封鎖した。

「あれはっ」

「結晶竜、ミリアが僕達に着けてくれてたんだっ」

封鎖された広間の向こうに数えきれない程の怪物が蠢き、幾度となく体当たりを繰り返して結晶塊を砕かんとしてきているのを見てベルは駆け出す。

結晶竜が扱う結晶塊の耐久は非常に低いのか見た目がド派手なだけであっさりと碎かれ、隙間から怪物がベル達に迫る。

武装を手にしていないベルに出来るのは魔法を使つての迎撃。

「『ファイア――ぐうっ』」

手の平を怪物に向けて魔法を発動しようとした瞬間。怪物の額から生えた擬餌状体が目も眩む閃光を放った。

一瞬で視界が白く焼けて目が眩んだ事で魔法の発動に失敗する。怪物は素早く大口を開けてベルとヘスティアに飛び掛かった。不揃いにならないだ鋸歯が視界一杯に広がり、ベルはヘスティアを守る為に目を瞑ってヘスティアを押し倒す。

もうダメかと諦めが脳裏を過った瞬間、聞き覚えのある詠唱が響いた。

『ファイア』『ファイア』

タタン、タタンという連続した子気味良い発砲音。ベルとヘスティアに飛び掛かろうとしていたナマズのような怪物に無数の風穴が刻み込まれ、一瞬で灰と化して二人に降り注いだ。

「ベル、ヘスティア様、無事？」

「ミリア、ありが——うひいつ!？」

「ミリア君助かつ——君なんで裸なんだい……?」

一糸纏わぬ生まれたままの姿のミリアが面倒そうに頭を掻き、ボヤク。

「服を着るより二人の安全確保を優先しただけです。つと、まだモンスターが来ますよ」

ベルがミリアを視界に入れない様に逸らした先。結晶竜が懸命に押しとどめようとしている大量の怪物を見てベルは慌てて手の平を向けて構える。

ミリアも揃えて構え、結晶塊が砕け散る音と共に通路の幅限界までギチギチに詰め込まれた状態で突っ込んでくる怪物の群れを見据えた。

「ミリア、あの頭の突起、閃光を放つんだ」

「そう、とりあえず気を付けるわ」

「二人とも……」

肩を並べた二人がヘスティアに背を向けたまま言い切る。

「大丈夫です。神様は僕達が守ります」

「あれぐらいは余裕ですよ。欠伸して待っててください」

ミリアの放つ速射の『ピストル・マジック』『デュアル』とベルの速攻魔法『ファイアボルト』によつて瞬く間に殲滅されていく怪物。ついでに結晶竜も無遠慮に蒼炎を撒き散らし、結晶塊にしては砕いてモンスターを掃滅していく。

ものの十秒もかからずに二人と一匹の手によつて綺麗に片づけられた怪物たち。膝丈の温泉に沈んだ無数の魔石の輝きを眼にしつつもベルは気を抜いて後ろを振り返り——水着が溶け落ちた神へステイアを見て表情を引きつらせた。

「二人とも流石だよ！」

「まつ待つてくださいい神様っ！」

興奮した様にベルに抱き着く神へステイア。抱き着かれた事で形を変える二つの肉を眼にしたミリアが溜息を零し、呟いた。

「先程ベルが押し倒した時に溶けたんでしようねえ」

「溶けた!? どういうことミリアっ！」

「なんでかは知りませんがこの温泉は人体以外を溶かす効果があるっぽいですね。水着とかが溶けてしまつたんですよ」

ぎゅつと抱き着いてくるへステイアにベルが離れてと騒いでいると、数人がバシャバシャと音を立てて走って近づいてきているのに気付き、ミリアが其方の方に視線を向けた。

「クラネルさん、神へステイア、ご無事ですか！」

「リユースさん」

へステイアとベルの危機に気付いた瞬間に駆け出したミリアを追ってきたリユース達の姿を確認し、ミリアは肩を下ろした。

しつかりと衣類を纏ってきたアスファイ、リリ、ミコト、千草の姿にミリアが呆れた様に吐息を零す。

「ミリア様、服ぐらい着て行けば」

「それで間に合わなかったら私はどんな顔をすればいいのよ……」
リリから外套を受け取り肩から掛けた所でミリアは近くにふらふらととんできた結晶竜を掴み取った。

へステイアはアスファイから外套を借りて身を隠し、ようやく一息つけるとベルが吐息を零して、気付いた。

ベルの手に薄つすらと光が宿っている。「アルゴノウト」の発動状態となつているのに気付いたベルが周囲に視線を向けた所でミリアが奥の広間を指さして言った。

「あの巨大な赤い球体。あれもモンスターの一部みたいです」

「……新種？ あの巨大なアレが？」

「先程居たモンスターの、親玉でしようかね」

先程の無数に居た怪物の大きさがおよそ2 M前後。その擬餌状体の大きさは20 C程。

そして大部屋の中央に存在する擬餌状体の大きさはそれだけで1 Mは在りそうなほど大きい。その全体の大きさを想像したベルが身を震わせ、他の皆は眉を顰める。

同時に響き渡る地響き。巨大な化け物が脈動し、迷宮に響き渡る鼓動の様な振動。

ミリアの言葉を裏付ける様に天井から釣り下がる赤色の球体の周辺に亀裂が走り、遂に重さに耐えきれなくなったのか大量の土砂と共に化け物が現れた。

湿気によつてそれほど土埃は立たず、それでも舞い上がった多少の土埃もすぐに晴れてその全貌が明らかになる。

五対十つの深紅の瞳は怒りに染まりあがっていた。横幅だけでおおよそ8 M、高さは4 M、その額には真つ赤な擬餌状体と、それに加えて無数の誘引突起の様な触手。それも鞭の様にしなり、周辺の結晶塊を無差別に砕き壊している様からただの器官の一つではなく攻撃手段の一つである事が伺える。

「あれが」

「温泉の主……」

大きく振り上げた深紅の誘引突起。丸太の様な触手にも見えるソレが通路の途中に居たベル達に振り下ろされる。天井に生え茂る結晶ものともせずに振り抜かれ、リユウが神へスティアを、アスフィガリリを抱えて飛び退り、残りの面々は各々回避した。

轟音と共に振り抜かれたソレ、ミリアが舌打ちしながら様子見に発砲するも滑り気を帯びた軟体に弾かれるのではなくヌルリと逸らさ

れて魔弾はあらゆる方向に飛んでいく。

「チツ、効いてないっ」

「ミリアっ！ おおおおおおおっ!!」

振り下ろされた丸太の様な触手。天井にまで飛び上がり回避していたベルが天井を蹴って落雷の如き勢いでその触手を踏み潰す。

ブチリという音と共に大量の血を噴き出した触手が引き戻される。先端についていた擬餌状体は千切れ落ちて転がる中、ミリアとベルが視線を交わし、頷き合う。

「ミリア、道をお願い」

「おっけえ、真っ直ぐ進んで良いわよ」

二人が頷き合い、ミリアがその場で両手を突き出し、魔法を詠唱する。

先程までの簡易詠唱による並行詠唱ではなく、集中詠唱による威力の増大を図った詠唱。

対するベルはミリアの詠唱が終わる前に光が零れ落ちる拳を握り締めて呟く。

『ピストル・マジック』『デュアル』『リロード』

「神様は必ず守ります」

「ベル、いつでもいけるわ」

「わかった！」

真っ直ぐ、何の小細工も無しにただ真っ直ぐベルが怪物に向かって駆け出していく。

一番太い触手を千切られた怪物は痛みで悶えながらも恨みを晴らすべくベルに集中し、無数の細い触手がベルに襲い掛かった。

「ベル君っ！」

「彼は何を……」

ヘスティアの叫び。そして無謀ともとれる愚直な突撃にアスファイが目を細める。

真っ直ぐ駆け抜けるベル、その背後から無数の魔弾が飛来して彼に当たる軌道を描いていた触手が弾け散る。

ビシャンビタンと水が爆ぜ、壁が爆ぜ、縦横無尽に振るわれる無数

の鞭による嵐にも見紛う触手の乱舞。

アスファイとリユールが目を見開いた。

『ファイア』『ファイア』『ファイア』

タタン、タタン、タタンと断続的な発砲音。

左右の手それぞれに宿る魔法陣、銃口から放たれる魔弾がベルに迫りくる触手を片っ端から打ち落とし、真つ直ぐ進むベルの障害を撃ち落としている。

ほぼ間をおかずに放たれる魔弾。それも両手の指先から、魔法による補助もなくただ集中する事で鞭の様にしなる触手を寸分狂い無く撃ち落とし続けるミリアの姿に第二級冒険者である二人が驚愕の表情を浮かべる。

「まさか、一瞬で狙いをつけている」

「それもあの無秩序な乱舞からの的確にクラネルさんに当たるモノだけを弾いて」

ミリアの神業の様な射撃に感心すると共に、そのミリアの腕に完全な信頼を置いて一切の回避行動をとらずに、すぐ目の前に迫った一撃にすら瞬きの一つもなく駆け抜けるベルの姿にも驚愕して言葉を失う。

「ミリアっ！」

「了解っ！」

ベルが大きく跳躍した瞬間。一気に両手の指では数えきれない程の触手がベルを打ち落とさんと迫り、ミリアが瞬く間に打ち落とされた。

温泉の主である怪物が触手での迎撃が不可能だと判断したのか、そのまま大口を開けてベルを迎え撃つ。

立ち並ぶ歯列。数え切れぬ程の鋭い歯の生えたほの暗い口内を見据え、ベルは大きく拳を突き出した。

『ファイアアボルトオツ』!!』

ベルの左手より弾けた炎が温泉の主の口内へと吸い込まれていき、その巨体が風船の様に膨らむ。

瞬きの間を置き、爆炎が弾けた。

爆風と共に周囲を薙ぎ払い、温泉の湯が吹き飛んで一瞬だけ底があらわになる。

以前に此処を訪れて犠牲となった冒険者達の遺骨が沈んでできた底に積り積もった骨。それも一瞬で戻ってきた若干くすんだ湯によつて覆い隠されてしまう。

ほんの少し抉れた広間の中央。膝を突いたベルが顔を上げ、ミリアに向かって微笑んだ。

「ミリア、ありがとう」

「こつちこそ、ありがとう」

道を切り開いてくれて、自分を信じてくれて。互いに感謝の気持ち伝え合い、駆けてきたヘステイアがベルに飛びついた。

「ベル君っ！」

外套一枚下が裸であるにも拘わらず恥ずかしがるでもなく飛びついたヘステイアの様子に同じく外套一枚のみでその下が裸のミリアが顎に手を当てて呟いた。

「あれ、外套着てる方が痴女っぽさある気がするんですけど」

「何を言っているんですかミリア様、というか前ちゃんと閉じてください、見えてますから」

近づいてきたリリの指摘にミリアが肩を竦め、外套をしつかりと着込み、再度ベルの方に視線を向けた所で顔を引きつらせた。

「あ……」

「どうしたんですかミリアさ——あっ」

同じ方向を向いた瞬間にリリも同じ光景を目にし、一瞬で顔を真っ赤にして動きが止まった。

アスファイもリユーム、ミコトも千草もベル達の方を見て一瞬動きを止めた。

「神様が無事でよかったです。アスファイさん、神様を庇っていただいてありがとうございますございました」

ベルの言葉を聞き、再起動したアスファイがそれとなく視線を逸らして呟く。

「礼はともかく、その……隠した方が良いのではないのでしょうか」

リリは顔を真っ赤にして鼻血を零し。ミコトと千草は頬を染めて何度もベルの方をちらちらと見る。

リユーは目を覆い隠し、指を開いたり閉じたりしてチラチラとみている。

ミリアの方は額に手を当てて呆れ顔でリリを見て小さく呟いた。

「いや、たかが裸如きで鼻血出すのはどうなのよ……処女でもそれはないでしょ」

皆の不思議な反応にベルが首を傾げ、ミリアとのやり取りを思い出して顔を引きつらせる。

彼女はこう言っていた『なんでもか知りませんがこの温泉は人体以外を溶かす効果があるっぽいですね。水着とかが溶けてしまったんですよ』と、そして彼はつい先ほど膝を突いていた。

水着はぼつちり温泉に浸かっていた事も同時に思い出す。

温泉の主を倒した事でその効力が失われていないかと一瞬期待するも、ベルが自身の下半身に視線をやればグズグズに溶けた水着がはらりと零れ落ちる瞬間であった。

「わあああっ!?!」

一瞬だけ露わになったそれをみていたミコトと千草がか細く悲鳴を上げ、リユーは目を覆うふりをしてぼつちり目撃。アスフィは眼鏡の位置を直しつつも見据え。

リリは興奮し過ぎたのかそのままふらりとよろめき、ミリアに抱えられた。

ミリアの方は呆れ顔のままリリの容体をみて溜息を零す。

水着が溶け、シャツ一枚になったベルが必死に下半身を隠そうとする。

「見ないでください神様っ!」

「良いじゃないかベル君、ボクとキミの仲じゃないか」

がつしりと抱き着くヘスティア様を振り払うに振り払えないベルが必死に下半身を隠す中、ミリアの溜息が小さく響き渡った。

温泉の入り口。見渡せる限りの幻想的な温泉を見渡したヴェルフが口を開いた。

「しっかし、温泉全体がモンスターの罾とはなあ」

「此処を見つけた冒険者は皆彼らの餌食になったのでしよう。道理でマッピングされてはいないはずですよ」

アスフィの言葉を聞き、ミアアが大きく頷く。

此処に居たモンスターの性質。そして温泉の性質から武装類を強制的に使用不可能にし丸裸にしたうえであの奥地での強襲。

それに加えて額に生えた突起から放たれる強烈な閃光。

武装の損失と強襲に狼狽えつつも立て直そうとした所を閃光で目眩ましして一飲みにする。そんな方法で数多くの冒険者が屠られたのであろう事は容易に想像がつく。

「帰ったらギルドに報告しないといけませんね」

危険極まりない怪物の罾場としてギルドに報告せねば、運良くこの未調査区域を見つけ運悪く入り込んだ冒険者がまた犠牲になりかねない。

そう締めくくったリリの言葉に全員が頷く中。

ミコトが皆に対し極東における最上級の謝罪法である土下座を披露した。

「本当に申し訳ありません。自分が温泉に目が眩んだばかりに……」

「気にする事無いさ。のんびりできたのは事実なんだし」

「ヘルメスは反省してくれませんかね」

気にするなと口にしたヘルメスに対し鋭く睨み付けて不機嫌そうに声をかけるミアア。

未だに根に持っているのか彼女のヘルメスに対する風当たりは非常に強い。

アスフィはそれも仕方ない事だと諦めヘルメスのヘルプサインを意図的に無視した。

「ではそろそろ行きましようか」

リユートの言葉を皮切りとし、皆が立ち上がって帰りの上り坂を登り始める。

ミリア、ヘステイア、ベルと三人で肩を並べて歩く中、ヘステイアは笑みを零して二人の前に出て振り向く。

「帰ろう、二人とも、ボク達の^{ホーム}の本拠へ」

「はい、神様」

「そうですね」

第九十七話

うららかな日差しに照らされた整然とした石畳。

晴れ晴れとした天候の元、街の人々の笑顔が咲き誇り、そこから中から弾んだ声が響いている。

つい三日程前によく帰還を果たした街並み。少なくとも俺にとつての故郷というにはまだ少し違和感が残る所ではあるが、この光景を見れば思わず口元が綻ぶ。

そも故郷等と呼べる場所は俺には無いんだが。

「ベルさん達が無事に帰ってきてくれてよかったです」

「その、ご心配おかけしました……あと、ありがとうございます」

「シルさんがリユーさんを説得してくれたんですね。本当にありがとうございます」

西のメインストリートの一角に存在する知る人ぞ知る酒場『豊穰の女主人』の店先。

はにかんだような笑みを浮かべているシルさんに感謝を伝えつつも店の中を覗けばアーニヤさんがブーブーと文句を零し、椅子に足を引っかけて山積みの皿の山をぶちまけている光景が目に入ってきた。

ああ、アーニヤさん今日もやらかしてるんですか。何時も通りの光景だなあ。

階層主と結晶竜。十八階層で発生した異常事態イレギュラーで危うく死にかけた俺達が地上に帰還して既に三日が経過している。

中層においてタケミカヅチ・ファミリアの救援を行い、そのまま不幸にも十五階層へ転落した結果、十八階層への決死行という今考えると相当な無茶をしたあの一件。

地上ではたくさんの人々が帰還しなかった俺達の心配をしてくれていたらしい。謙遜を口にするシルさんもそうだが、直接ダンジョンに乗り込んで捜索にきてくれたヘスティア様とは違う方法。リユーさんを送り込む形で救援を行ってくれたのが彼女なのだ。

リユーさんにはすごく助けられた此方からすればなんとお礼を言えばと言った感じである。

「お体の方は大丈夫なんですか？」

「はい。ミアハ様……良くしてもらっているファミリアの人たちに治療してもらったので」

「私も問題無いですよ」

十八階層での激戦の後の帰還。途中で怪物の狩場であった温泉に立ち寄りこそしたものの、疲労や精神力なんかをすり減らし過ぎた影響もあってここ二日は休息に当てていたのだ。ベルは、だが。

「ミアアは戻ってきてからずっと動き回ってますけど」

「そうなんですか？ ミリアさん、ちゃんと休息をとらないとだめですよ？ お手伝いしてくれる人が減ったら私も困ってしまいます」

豊穡の女主人で時折バイトしてたからか当てにされてるんかね。と言つても皿洗いか野菜の皮剥きとかの下拵えばつかやってるんだけどね。フロアは小人族にはきついし。

「あー、はい。体の方は問題ないですよ。ええ、体の方は」

別の問題はあるんですけどねえ。

「体の方？ 何かあったんですか？」

「あー、すいません。箝口令もありますしあんまり詳しくは言えないのでかなりぼかしますけど」

十八階層での一件は口外禁止となつている。ギルドが箝口令を敷いたのだ。

特に酷いというか、かなり厄介な問題となつて俺に降り注いでいるのは『結晶竜』の存在である。

あの十八階層での異常事態において発生した、というよりは階層を大移動して上がってきた未確認モンスターである事が問題だった。

ただでさえ未確認ってだけでも厄介だったのに、其処に階層の大移動までしてきたとなればギルドが騒ぎ立てる。というか調教テイムしたという言い訳を行ったが、『結晶竜』の引き渡しを要求されたのだ。

『結晶竜』の体を構築している結晶体は非常に貴重な深層でわずかにしか取れないモノらしく、どうにもそのわずかにしか採取されない結晶つてというのがこの結晶竜の体の一部だったらしい？

元々『結晶の領域』なる場所に居たらしい彼女。

時折、縄張りである自己領域のギリギリまで出ては他の怪物を撃退していたのだが、その撃退した際に残った結晶塊がその超希少鉱石の一種だったらしい。今まではダンジョン内で採掘できる鉱石が露出して転がっていたと思われていたその希少鉱石。それがなんと結晶竜が戦闘を行った結果残された戦闘跡だったと知れたのだ。

ギルド長のマルディール？　という奴がなんかギルド権限を行使して引き渡し要求をしてきたのだが。

「はあ、結局取り消されたと？」

「はい、一昨日から一日と半ぐらいずっとギルドで捕まってましたよ……」

とある話をした所、唐突にマルディールが誰かに話しかけられたみたいになり言呟きだし、その後解放された。

とある話っていうのが、結晶竜の言っていた『リド達』の事である。解放された後、外套ですっぽり全身を覆い尽くした糞怪しい『フェルズ』と名乗った冒険者(?)らしき人物に引き合わされ、其処で話を聞いた。

なんでも彼らは異端児ゼノスと呼ばれるなんからしい？　いまいちよくわからんがダンジョン内で起きている異常事態になんか関係があるらしく。それに加えて人語を話せるとかどうとか。ぶつちやけ話が複雑すぎてわけがわからなかった。

……最近、頭が悪くなった気がするが気のせいかな？　多分、前世の俺なら正しく理解できたと思うんだがなあ。

「それで二日居なかつたんだね」

「ギルド管理の宿で一晩中ずうーっと詰問ですよ。洒落になつてないです」

おかげで若干疲れが残つてるといふか、身体的な疲労はないのに精神的な疲労が溜まつてる。

ちなみに結晶竜本人……本竜？　今はガネーシャ・ファミリアに預けてある。どうもガネーシャ様もその異端児の件は知っているらしい。怪物祭モンスターフェアもその異端児の為のどうのこうの。

知性と理性を兼ね備えた怪物。人と同じ感情を持ち、人と同じよう

に愛し合い、慈しみ合う。そんな怪物の中の異端。彼らに對しどう思っているのか問われたが、なんとも言い難い感じだ。

何せ、俺からすれば人も怪物も違いは無い。むしろ、怪物なんかより人の方が恐ろしい。

鋭い爪を、強靱な牙を、堅牢な鱗を、そんな天然の武装を身に着けた怪物。

人に害意と殺意を以て襲い掛かってくる。

それを人は恐ろしいと感じ、恐怖し、排除しようとする。

けれど、見た目からして恐ろしいなんて別にどうでもいいと俺は思う。

人に害意と殺意を以て襲いかかってくる？　それがどうしたんだというんだ。人間だって同じ事するだろ。

むしろ、笑顔で手を差し出して握手を求めてきながら、反対の手にナイフを握り込んで殺意と害意を隠して近づいてくる人間の方がよっぽど怖い。むしろ見えない恐怖は怪物よりも恐ろしいとは思わないのだろうか？

笑顔で挨拶を交わしていた隣人が、裏で人を騙して金を奪い取る下種だったらとか。人を犯して殺して、平然と日常生活を送れる異常者だっている。

むしろ『殺してやる！』って叫んで自己主張してる奴なんて一見みれば『ヤバイ奴』って判るだけ良いと思うんだがね。怪物なんてそんなもんでしょ。

………怪物の方がまだ良いとか頭狂ってんじやねえのって話なんだがね。

神ガネーシャと神ウラノスには伝えたが、俺は笑顔で差し出される手つていうのは基本信じないし信じられない。ベルやヘステイア様、ヴェルフの様にわかりやすければいい。

けれど、リリの様に後ろ暗い所があると途端に疑ってかかっってしまう。

悪い癖かもしれないし、そうじゃないかもしれない。なんとも言い難く、どうしようもない俺の性の様さがなモノだ。

それに当てはめると、俺は怪物が笑顔——怪物の笑顔は想像がつかんが——で差し出した手をすぐには握れない。それが本当に本物かどうかを疑い、確信を得るまでは手を握り返せない。まあ、逆に言えば俺は人にも怪物にもどっちも同じ対応をするって事なんだがね。

武器を手に襲ってくれば、人も撃つ。

爪を、牙を振るって襲い掛かってくれば、怪物も撃つ。

笑顔で手を差し出してくれば、疑いながら確信を得られるまで警戒しながら接する。本物だと分かれば打ち解ける。人も、怪物も同じ様な形で接する。それだけ。

疑心暗鬼を生ず。常に疑うから、常に鬼に怯えてる。怪物への怯えより、人への怯えが大きい。それだけの話だ。

「ミリアさん？ 大丈夫ですか？ 表情が暗いですけど」

「え、ええ。少し憂鬱な気分ではありますかね」

「ギルドでの事？」

いや違うが。心配そうな表情のシルさんとベルを見て少しほっとした。

心の底から信じられる誰かが居る。それだけで凄く楽になれる。

異端児がどうかとか、今の所はそのリドたち異端児に会うといった予定は無いし、彼らの活動に協力するといった事も無い。口外を禁じられた以外に特に無く、結晶竜の問題の方が俺にとっては重要といえば重要だ。

「というか彼女の名前、なんか考えておかないとな。いつまで経っても結晶竜だとアレだし？」

クリスタルドラゴン、からクリスで良いんじゃないやね？

「シル、店を空けるとまたミア母さんに……ああ、クラネルさんにミリアさん、いらつしやったんですか」

「リユースさん」

「お久しぶりです」

店内からの呼び掛けと共に顔を出したリユースさん。奥ではアーニヤさんが涙目になって割れた皿を掻き集めている姿が見えた。

アーニヤさん、南無……。

ダンジョンに潜っていた時のケープと戦闘衣の姿から一変。可憐な店員の制服姿を見ると若干の違和感と、納得が生まれる。ただ可憐なだけではなく、恐ろしい棘も持ち合わせているのだなあと。

「壮健そうで何よりです。ミリアさんは、どうかしたのですか？ 顔色が良くない」

「あー、ミリアは……」

「ギルドに二日程拘束されました。結晶竜の件で」

納得の表情を浮かべたりユーさん。彼女も共に戦った仲なので理解が早い。

結晶竜の危険度的にギルドがとやかく言うのは予測できていたらしい。

それとは別に、なんとなくリユーさんの表情が柔らかい気がする。というか若干ベルとの距離が近い？

「ベルさん、リユーと随分仲良くなりましたね？」

「まあ、裸体を見せ合った間柄、仲も良くなりますよ」

「ミリアッ!」

「ミリアさん、誤解を生む発言は控えてください」

冗談を言った瞬間、シルさんの笑顔が深まる。威圧感を伴う笑顔でベルに一步近づいて釘を刺した。

「覗きなんてしてはいけませんよ？」

「は、はいっ……」

最初に帰還報告をしにきた際、シルさんは激怒していた。普段の柔らかな物腰が嘘の様な怒りっぷり。

リユーさんとベルが横に並んで共に正座する前でこっぴどく叱るシルさん。というかアレは折檻だったと思う。

ベルは十八階層でリユーさんの裸を見た事で、リユーさんは温泉でベルの下半身を見た事で、どちらもたっぷり怒られた。というかリユーさんは二度叱られた。

「リユーも、そういう時は見ない振りしてあげなきやダメですよ？」

「……わかりました。クラネルさん、あの時は不躰な視線を向けてし

「まい申し訳ありません」

「い、いえっ」

二人がペコペコと頭を下げ合うのを見てみると、ようやくシルさんの怒りも収まったのか普段の笑顔に戻り——こちらに視線が向いた。

「ミリアさんも、ベルさんのを見たんですか？」

あ、待って飛び火した。ヤバいこれは予想外だった。藪をつついて蛇が飛び出してきやがった。

たつぷり十分程の折檻を喰らってしまった……。

「ミリアさん、極東にはこんな格言があるそうです『口は災いの元』と」「人を揶揄うからだよミリア」

リユースさんとベルに若干呆れられた様な表情で見られつつ、痺れた足でなんとか立ち上がる。酷い目にあつた……。

口は災いの元。覚えたぞ、もうシルさんの前で不用意な発言は控えよう。

「そういえば、リユースに聞いたんですけどすごい怪物モンスターと戦つたんですよ？」

足が痺れてベルに手を借りていると唐突にシルさんが訪ねてきた。

十八階層で突然現れた『ゴライアス』と『結晶竜』の事だろう。

「お二人がそれぞれ倒したと聞きましたが本当ですか？」

「え、いや、あれは」

「どうでしょう？」

リユースさんの『謙遜するな』という視線が突き刺さるが、何とも言えないんだよなあ。

自分を貶める発言はするなって言われたし、温泉の主を倒した際には魔法制御能力が非常に高い事をアスフィさんと二人してベタ褒めしてきてはいたが。

「偉業エクセリアの経験値はあんまり得られなかったんで微妙だと思っんですけどね」

「どう言う事ですか？」

ステイタスの更新を行ったのだが、ランクアップに至る程ではな

かつたらしい。

片やレベル5に近い能力を得た階層主。片や討伐方法も不明な未発見種の竜。

ゴライアスの方は数多の冒険者の協力があつてこそなのでベルの偉業のエクセリアが足りないのは納得なんだが、結晶竜の方のエクセリアの方も思ったより多く無かつたのはなあ。それでもヘステイア様曰く『あと小指の爪の先ぐらいの偉業のエクセリアでランクアップできる』とは言っていたが。後、偉業のエクセリア総量ではベルを上回っているらしい？ ただ通常のエクセリアはベルの方が濃密でステイタスは上つぽいが。

「でも倒したのは事実なんですよね？」

「え、ええ、まあそうなりますかね」

倒した、というよりは回復魔法ぶち込んで消滅させた感じなんだが。まあ倒したといえば、倒したのか？

「わあ、すごい！ お二人とも本当に一人前の冒険者になってしまったんですね！」

「一人前……？」

助けて貰つておいて一人前と言えるのだろうか？ 少なくとも俺一人だったら間違いなく死んでたし、結晶竜の倒し方もリユーさんの大ヒントのおかげだった訳なんだがね。……もしかしてリユーさんの活躍が偉業のエクセリア総取りしていった感じなのでは？

「酒場のお客様が有名になられるなんて、なんだか私まで誇らしくなつてしまいます」

我が事のように喜んでくれるのは嬉しいといえば嬉しいんだが。

【剣姫】や【勇者】なんかの超有名人も来てるくらいだし、今でも十分なのでは？

「良かったら、またお祝いをしましょうか？ せっかく皆さん無事に帰られたんですから。今日のお夕飯なんていかがでしょう？」

シルさんの善意の提案、に見せかけたお金を落とさせようとするあざとい作戦に思わず苦笑が零れる。

ベルの方は一瞬間を引きつけて首を横に振った。ミアさんの罵

りでも思い出したんだろう。

ファミリア以外の人に助けてもらった事に関して『甘えてんじやないよ』と厳しく言われたしね。

「いや、流石に迷惑をかけていてお祝いするのは……」

「ミアさんには厳しい事言われてますしねえ」

「ふふ、お土産話を差し出せば、ミア母さんも機嫌が良くなりますよ」
「確かに、冒険者の武勇伝は彼女の大好物です」

ミアさんはなあ、酒場で冒険者が武勇伝してるのを楽しそうに見てるからなあ。まあ、酔っ払って余計な事するとぶん殴られるけど。

まあ、今回は断るんだけどね。

「すいません、先約があるので……」

「あ、そうだったんですか？」

「それはもしかしてアーデさん達ですか？」

リユーさんの問いかけに二人で肯定する。

本当なら昨日やりたかったのだが俺がギルドで拘束されてたのと、拘束が解けた直後にガネーシャ・ファミリアに駆け込んで結晶竜の調査やらなんやらで時間をがつつり取られてしまったので出来なかったのだ。

序にヴェルフに武具作成の進捗も確認しときたいかなあ。

結晶竜の鱗、というか結晶鱗をそれなりの数渡して色々と作成を依頼した。

ぶっ壊れた銃杖、無くした二本の剣、鎖帷子もボロボロで使い物にならなくなったので新調しなきゃだし。後はローブかなあ、こっちは安物じゃなくてそこそ良いのを買わないとリリが『こんな古臭い中古品良く見つけてきましたね』とか皮肉言ってくるし。

結構気に入っていたのだが、やっぱり古臭い使い古しのローブっていうのは良くないらしい？

第九十八話

日も暮れて蒼い闇に包まれるオラリオの街並み。夜を迎えてなおこの街の騒がしさは失われる事は無い。

むしろ日が落ちた事ではめを外した冒険者達が酒場や広場で今日の成果を伝え合う。そんな冒険者達は各々の武勇伝を披露したり、その武勇伝を囃し立てる様に楽師が弾奏を披露する。

ある者は手にした成果を片手に娼婦を買うべく足早に歓楽街へ向かい。ある者は今日の疲れを酒で癒す為に酒場に足を運ぶ。迷宮帰りの冒険者を呼び込もうと呼び込みの声が響き渡り、より一層騒がしさを増した街並み。

特に、南のメインストリートに位置する繁華街は一層騒々しい。

色とりどりの魔石灯が周囲を照らし、星々の明りが霞む様な煌々とした明りを放っている。主用路に軒を連ねる店の数々はどれも高く、大きく、外観は豪華で派手派手しい。貴族が利用する高級酒場や賭博場、大劇場など、都市の他の場所と比べると金の巡りが良さそうな雰囲気立ち込める雰囲気の一帯。

そんな大通りから外れた裏路地の一角。

鳥や獅子などの様々な動物を象った看板の立ち並ぶ酒場の一つ、ベルとヴェルフ、俺にリリの四人はジョッキを高々と掲げて打ち付け合った。

『乾杯！』

笑みと共にエールの泡が弾け、ジョッキからお酒がこぼれ落ちるが、そんな小さなことを気にする者はこの場に居ない。

ファミリアのエンブレムを彷彿させる真つ赤な蜂の看板を掲げる酒場『焰蜂亭』。繁華街の裏道にたたずむこの店はヴェルフの行きつけの酒場らしく、一部の冒険者や鍛冶師には根強い人気があるらしい。

店の名物はまるで紅玉を煮詰めた様な真つ赤な蜂蜜酒であり、それに虜にされた者の中には連日通い詰める者も居るらしい。

裏路地の店だけあって店内は『豊穡の女主人』に比べて狭苦しくは

ある。けれど移動に苦勞する程の沢山の丸テーブルや、長年にわたり染みついた小汚さの残る店内、そしてドワーフをはじめとした男達の豪快な笑い声が響くこの店は、ファンタジー小説等に登場する『冒険者の酒場』をそっくりそのままのイメージがしっくりくる。

珍しく小人族の給仕がちよこちよこと小柄な体軀を生かして客の間をすり抜ける様に忙し気に動き回っている。『豊穰の女主人』だと鼻で笑われる光景だがこういう小さな店だとあの小柄さも利点として利用できるのだろう。それにしても忙しそうだが。

「ランクアップおめでとう、ヴェルフ」

「これで晴れて上級鍛冶師ですね」

「上級鍛冶師、いろいろと作れる物の品質も上がるでしょうし喜ばしい事です」

「ああ……ありがとうな」

普段ならあまり見せたがらないだろうはにかんだ笑みを浮かべたヴェルフ。引き締めようとしている様だが目的を達した喜びが口元に笑みとして浮かび上がっている。

先日の中層の決死行や十八階層での激戦を経た事で、ヴェルフはとうとうランクアップするに至ったのだ。レベル1からレベル2へ、それに伴い《鍛冶》の発展アビリティも無事習得して名実共に上級鍛冶師となった。

神ヘファイストスにステイタスを更新してもらいランクアップが判明したのが今朝の事。ヴェルフは一番にヘステイアファミリアの本拠に駆け込んできて、笑顔でその一報を伝えてきた。……寝ていた俺を叩き起こす形で。

その後リリにも報告し、皆で祝賀会を開く事を決めたのだ。

念願の上級鍛冶師に仲間入りする事ができたヴェルフを祝って。

「これでヴェルフ様はファミリアのブランド名を自由に使う事が出来るのですか？」

「自由に、とはいかない。少なくとも文字列ロゴタイプを入れられるのはヘファイストス様や幹部連中が認めた武具もだけだ。下手な作品を出してあの女神かたの名を汚せないしな」

制作物に「?のαしoてo」と刻む事が出来る様になったらしい。とはいえ全てではなく許可を得た物だけらしいが。

とはいえこれから彼が作る作品は飛ぶように売れる事だろう。それだけブランド名の力は大きいのだから。

喜ばしい事、ただだったら良かったのだが。ヴェルフの目的はランクアップする事。ランクアップするまでの期間だけ同じパーティとして活動する事になっていたのだ。そう簡単にランクアップできないだろうと高を括っていたら早々にランクアップした形だ。

ヴェルフが抜ける穴をどうするかという問題もある。結晶竜^{クリスタル}が正式に利用可能になったとしても彼女は残念な事に前衛が出来るタイプじゃない。むしろ後衛に編成しないと耐久の低さが裏目に出かねない。

「これでパーティも解散ですか。寂しくなる、というよりは編成に困りますね。新しく前衛壁役を探さないとはいけませんし」

「おいおいミリア、俺がそんな薄情な奴に見えるか?」

ジョッキを手で軽く回しながら、ヴェルフは少し照れた様に口を開いた。

「お前たちは恩人だ。用が済んで、それじゃあサヨナラ、なんて言わないぞ」

「えっ……」

「呼びかけてくれればいつでも飛んで行って、これからもダンジョンに潜ってやる」

それはなんともありがたい事だ。これからもよろしくしてくれるなら万々歳だしね。とはいえ前衛壁役はもう一人欲しいかなあ。

快活に笑う姿に微笑み返し、序に聞きたかった事を聞くべく口を開く。

「そういえば頼んでいたモノはどうになりました?」

「ああ、ミリアの銃杖か、一応できたんだが」

銃杖を完全に破壊してしまった所為もあって少してこずったそうだがちゃんと完成したらしい。ついでにベルの武装も少しずつ作成していくと。

それに加えてもう一つの方の進捗はどうなのか尋ねると、ヴェルフは苦々しい表情を浮かべて頭をガシガシと掻いて言った。

「悪い、結晶竜の結晶の竜鱗なんだが、俺じゃ扱いきれなかった」

「……ええつと？」

「ランクアップしたからなんとか、とか思ってたんだがな」

結晶竜から採取、というよりは本人の許可を得て手にした結晶の竜鱗。ギルド曰く『下層で採取できる希少鉱石』でもあるらしいその結晶は上級鍛冶師なりたてのヴェルフの手に余る代物だったらしい。

金属と混ぜ合わせて合金に加工しようとしたが混ざり合わず、金属が脆くなってしまい武装にする処か合金加工すら出来ない始末。挙句の果て、なんとオラリオ最高峰の鍛冶師である椿・コルブランドという人物が結晶の竜鱗の存在を知った後、ヴェルフに対し『ヴェル吉には勿体無い』等と言って持って行かれたそう。

いや、普通に窃盗では……？ まあ彼女は『出来た武具はくれてやるから許せ』等と言っていたらしいが。

どうにも相当希少な鉱石故に彼女の琴線に触れたのかなんなのか、神へファイストスも呆れていたそう。

「悪いな、本当なら俺の手で武器にしてやりたかったんだが」

「いえ、むしろ無茶言ってますいませんでした」

「……そこで謝られると俺も反応に困るぞ」

手に余る代物を渡したのは悪いと思ったが、本人からすれば自分の力不足の所為であって謝罪を受け入れがたいらしい。まあ、武器に加工してくれるなら別に構わんが。

次々に運ばれてくる料理に舌鼓を打ちつつも会話に興じる。

こんがり焼けた厚切りのハムステーキや、香草のソースハーブに彩られた鯛の蒸し焼き。そしてこの店自慢の名物である真っ赤な蜂蜜酒、一口飲めば口と腹の中がカーツと熱くなり、料理が進む。

ヴェルフの提案でこの店を祝いの席に選んだが、やはり勧められるだけはある料理も酒も美味い。強いて言うなれば見目麗しい店員が居ない事や狭苦しい事等はあるが、値段も含めると総合的には『豊穡の女主人』とは甲乙付け難い。

へスティア様も参加するはずだったのだがヴェルフ経由で神へ
ファイストスに『間違っても付いていくんじゃないわよ』と釘を刺さ
れ、今日も泣く泣くバベルでお仕事である。悲しいなあ。

「二人はランクアップしなかったのか？ 特にミリアの方、大分十八
階層で活躍してたら」

「うん、僕はまだ。ミリアもまだだったよね？」

「そうですね。私もまだですよ」

小指の爪の先ほど、ほんの少しだけ偉業の経験値エクセリアが不足していた。
それだけの理由といえはそうだが、総合的な経験値量はベルと相違な
い。

「レベル1とレベル2では取得する経験値エクセリアの基準も、ランクアップに
必要な総量も違うのでしようが……まあ、最後の戦闘に関しては
リユー様の総取りでしょうね」

正体がバレぬ様ウエアウルフに狼ウエアウルフ人の子供に変身しているリリの言葉にベル
共々おなじように頷く。

あの激戦の内、ほぼ半分以上がリユーさん一人の活躍によって支え
られた様なモノだと言えるからだ。

ゴライアスとの戦闘に参加した冒険者の数は百を超えるし、モンス
ターの足止めをしていた者も含めれば総勢五百にも届きうるほどの
冒険者がひしめき合っていた事になる。

集団戦における経験値分配エクセリアの法則によって一人当たりの取得量は
かなり低いだろう。その中において突出した活躍をしたリユーさん
とアスフィの二人が——とりわけリユーさんの活躍は著しく評
価されたはずだろうし。

『豊穡の女主人』のルノアさんとクロエさんの二人曰く冒険者はあ
るラインを超えると桁違いに強くなるらしい。それが『第三級』と『第
二級』だという。

第三級っていうのは、まあ言ってしまうば今の俺とベル、レベル2
であり上級冒険者の事だ。

それが第二級になっただけでももう次元が違う。第一級に関しては
同じ人かどうかも疑う程らしい。

リユーさんは第二級冒険者、その中でもレベル4だ、活躍も当然と言えば当然か。レベル3もヤバいらしいが、あの二人つて一応レベル4だったよな……？ あのと二人がかりでリユーさんを仕留めにかかって返り討ちに遭うってヤバいでしょ。毒かなんかで弱ってればワンチャンあるらしいが、逆に言えば毒で弱らせないと桁が違うらしいし。

「……それにしても、結局なんだったんだあのゴライアスは」

ヴェルフがああ階層での異常事態イレギュラーに言及する。それに合わせて四人で顔を寄せ合いヒソヒソと周囲に聞かれぬ様に話し合う。

「異常事態イレギュラーとしか言いようがありませんが……間違いなく前代未聞でしょう。安全階層セーフティポイントに階層主が生れ落ちた上、未知の竜種が現れたなんて」

「能力ちからも普通の階層主つよりも上だったんだろ？ しかも魔石を撃ち抜いても死なない不死身だったしな。あんなことがこれからも続くようなら、命がいくつあっても足りない」

「それは同意ですね。未知の竜種は現在ガネーシャ・ファミリアが調査してくれていますし、本人……？ も協力的なのでその内情報がわかると思います」

「……よく、生きてたよね。僕たち」

ベルのしみじみとした呟きに全員が苦笑を浮かべる。

幾度となく死んでいてもおかしくなかった状況だった。特にリリとヴェルフは強化された漆黒の階層主ゴライアスでなくとも普通のモンスターに襲われただけで一溜りも無かった可能性が高いのだ。

それに加え、今回の出来事は異常事態イレギュラーという言葉で片付けるには何もかもが桁違いだった。

「へステイア様は何かご存知のようでしたが……」

神を抹殺じくする為に用意された。へステイア様はあの怪物を見てそう言っていた。

ダンジョンが神の存在に感付いて刺客を放った。

また、存在を感知されない様に神は基本ダンジョンに潜らない。

へステイア様から与えられた数少ない情報だけを見れば、まるでダ

ンジョンは神々に激しい怒りを抱いているという事が想定できる。神々と迷宮の関係、どういったものなのかは知り得ないし、ヘステイア様も含め殆どの神が曖昧に誤魔化すのみ。

神は『ダンジョンはダンジョン。それ以上でもそれ以下でもないだろ』と笑うが、やはり全知全能ぜんちりんのうな神達はダンジョンについて何か知っているのではないか。そんな考えを共有した。

「何か教えてもらえましたか？」
「いや、曖昧に誤魔化されたというか、知る必要が無いって感じでしたかね」

あの事件の後、ヘステイア様は頭を下げて謝罪こそしたものの、原因に関しては一切触れない。其の上で触れてほしくない、聞かないでくれと言外に雰囲気拒絶してきた。

少し悲しいものの、やはり何か重要な事なのだろう。知りたくはあるが、強引に聞き出す必要はないと思う。

「ま、これ以上話してもしょうがないか。世間ではどうなってるんだ？」

空気を入れ替える様に話題を取り換えたヴェルフに便乗する。

事件後の後始末についての情報交換を始めた、とはいえ口に出来る事は多くはないのだが。

「ギルドが真つ先に箝口令を敷きましたから、都市や冒険者の間では混乱は少ない様子ですね。詳細を知っているのは当事者であるリリ達だけでしよう」

「絶対口外するな、って徹底されたし……」

「ベナルテイ罰則も厭わない、って確かに鬼気迫っていたしな。ギルドの連中」
「それ以外は金にがめつくうざったい事この上なかったですねえ」
しみじみとあの光景を思い出す。

豚の様な、というかエルフ特有の長い耳が無ければ絶対にエルフだとは思えない様な容姿のギルド長の姿が脳裏にちらつく。まあ、一泡吹かせてやったのもう思うところはないのだが。

「十八階層のリヴィラの街は既に機能を取り戻しているそうです。ダンジョンもあれから変わった動きはなく、平常通りと」

表面上は、ね。異端児ゼノスやらなんやら、裏では結構な異変が起きている様子だが、其処までは詳らかになっちゃいないだろう。神ウラノスやフェルズって奴もかなり気を張ってた様子だし。

「そういえば、ギルドに言いがかり付けられて罰則ペナルティを課せられたとお聞きしましたが」

「あー、それ？ 全然平気よ。あまりにもムカついたから色々和小細工してやったわ」

「ああ……アレかあ」

首を傾げるヴェルフとリリを前にニヤリと笑みを浮かべて詳細を語る。

と言つても難しい事は何一つない。

ヘステイア・ファミリアと、ヘルメス・ファミリアはギルドから罰則ペナルティを課せられる事となった。

今回の騒動の事情聴取としてギルドに強制召喚される事となり、雷が落ちたらしい。

訳を説明しようにも一切取り合わず、今回の事件の発端は『神災じんさい』——神が原因であると断定され、厳しい警告とともに、重い罰則ペナルティを食らう羽目になった。

罰則ペナルティの内容は……罰金。

「罰金の額はおいくらだったのですか？」

「ファミリアの資産の、半分」

「……キツイな」

まあ、普通のファミリアならキツイだろう。

「別に、支払った額なんてたった5, 200ヴァリスぽっちでしたから、金額自体は大したこと無いんですけどね」

「はあ？」

「……はい？ いや、資産の半分が5, 200ヴァリス……って、ヘステイアファミリアの資産額ってたった10, 400ヴァリスしかなかったのですか？」

これにはちやんとした理由がある。

というのも、だ。今回の事件においてヘステイア様はヘステイア

ファミリアの主神として、とある冒険者依頼を発注していた。

ダンジョンから未帰還の己の眷属の搜索依頼。報酬金は現在のヘステイアファミリアの貯蓄全てである。

序に言うのと現在進行形で『円形闘技場の修繕費300万ヴァリス』の返済も相まってぶっっちゃけファミリアの資産と呼べるモノはほぼゼロに等しいんだが。

「つまり、タケミカツチファミリアとヘルメスファミリアの支払いで全部吹っ飛んだと?」

「そう言う事です。残ってるのはあの本拠のみですからねえ」

ギルド長が考えてた事はなんとなく理解できる。

竜を二匹も調教テイムしているファミリア。それも相応な素材も採取可能で、なおかつガネーシャファミリア、ヘファイストスファミリア、ディアンケヒトファミリアといくつかの取引をしている。

当然、ヘステイアファミリアの貯蓄は数万処か数千万ヴァリスに届く、と考えていたのかもしれない。というか普通に考えたらそれだけ貯蓄があってもおかしくはないのだ。

全部、借金が、悪い。

最初は酷かった。ギルド長は『資産を隠しているに違いない』とか決めつけてくるし、実際隠しめせずに色々と詳らかに説明してみたらみたで凄く激昂して『なんで資産をため込んでおかないのだ?!』とか怒鳴り込んでくるし、本拠の廃教会を見た瞬間発狂してたし。

今回の件の罰則で資金を合法的に奪いたかった様だが、結局のところ零細に等しい処かぶっっちゃけファミリア存続も危うい状態だとはだれも思わないだろう。というか俺も思わなかった。

泡を吹いたギルド長の面は非常に笑える光景だったんだがね。

「ヤバくないか? ギルドへの定期的な税もあるだろ」

「あ、実は……タケミカツチファミリアに支払った報酬って返してもらったんだ」

「はあ? え、どう言う事です?」

ベルの言った通り、タケミカツチファミリアへの支払った報酬は返してもらったのさ!

元々、タケミカツチファミリアの救援を行った結果、今回の件に至ったので彼らは最初『報酬は受け取れない』等と言っていたのだが、強引に受け取らせた。むしろ受け取って貰った方がこっちの為に成ると説得までして。

簡単に言えば、依頼はれつきとしたギルドを通した正式な依頼な訳で、それを言い訳に『資金？ ああ、クエストの報酬として支払っちゃった。ごめーんねっ？』と言い訳して罰金回避できるかなと考えた訳だ。

んで罰金の支払い終了と共に『我が眷属を助けてくれた礼に』とタケミカツチファミリアから報酬金を全額返してもらう。と……完璧な作戦であった。

ちなみにヘルメスファミリアは十八階層で背中をぶつ差してくる真似をしやがったので当然報酬は無し。ついでに十八階層での買い物分も全額あちら持ちにしてもらった。

「まあ、あの一件の後にギルド長は『竜の資産価値を含める』なんてぶざけた事を言い出してごたついたんですけどね」

ものすごく面倒な事になったんだよなあ。まあ全部問題無かったんだけど。

「そもそも話ですな。現在のキューイ、ヴァンの二匹はガネーシャファミリアの管轄なんですよね」

「あ、そっか。一応調教モンスターテイムの取り扱ってガネーシャファミリアしか許可されてないんだっけ？」

「私はあくまでも一時的に保護者となっているだけですしね」

なので、竜の資産価値云々はガネーシャファミリアが背負っている事になっている。というのは俺がつい先日知った事だ、俺も吃驚である。その分の税金やらなんやらガネーシャファミリアが処理していたらしい。ガネーシャ様に頭上がらなくなってくんだけど……。

「で、結晶竜の方は現在調査中。ギルド長より上の立場の神がなんか結晶竜に関する搾取の完全禁止を言い渡したらしいですし」

「おいまして、もしかしてギルドに捕まってたのってその関係もあるのかっ」

「……ミリア様、やる事があくどいですね」

いや、普通に考えてくんない？ 正式に発注したクエストで『貯蓄全額』とかやらかしたのはヘスティア様だし、俺とベルの武器で総額5億とかいう頭おかしい金額の借金背負ったのもヘスティア様だよ？

序に俺は俺でインファントドラゴンの調教テイムのさ中に円形闘技場アンファイテートルムの破壊やらで色々借金背負ってるのもあるけど、やっぱ俺は悪くないよね？ むしろファミアリアの為に全力回避に努めたんやで？ 褒めてくれてもええやろ。

「いや、凄く悪い顔してたよミリア」

ベルまでそんな事言うんか……。

第九十九話

酒に酔った客の賑やかな大笑の声に囲まれながら、ヴェルフやリリに『腹黒い』だの『あくどい』だのと心外な事を言われていた。割と傷付くんだが……。

心底、心外だとしか言いようがない。確かにちよこつとだけこす狡いやり方だったかもしれないが。本気でやってたらもつとギリギリまで削れたし、最低限5桁残しただけでも温情だと思うんだ。

——それよりも、だ。リリの様子がおかしい。

ジョッキを両手で持ちながら口を閉ざし、何処か遠くの方に意識が向いてる。何か悩んでいるのは丸わかりなんだが……。

「リリ……大丈夫？」

ベルが心配そうに声をかけるも、「すみません。ぼーつとしてました」と作り笑顔を浮かべた。

やはり何か、おかしいぞ。

「リリ、ちよつと良い？」

「なんですかミリア様」

はきはきとした喋り方だが、何処となく無理をしている感じは否めない。

リリの悩みは、多分色々あるとは思いますが確率の高そうな奴を突いてみるか。ついでにヘスティアファミリアに危険が及ぶ可能性が高いモノを、杞憂なら良いんだがな。

「久々のソーマファミリアの様子はどうだった？」

リリの耳元に囁く様に呟いて反応を確かめてみれば、案の定。リリは一瞬でさーっと血の気が引いた様に青褪め、表情を引き攣らせる。

「ど、どうして……」

「当てずっぽう。鎌をかけただけ……そっか、ソーマファミリアの方に顔出したのね」

あー、不味いな。何処に居るかまでは知られてないよな？ ヘスティアファミリアに匿われてる所まで話したら色々面倒事になりかねない。

傍から見たヘステイアファミリアっていうのはお金持ちって事になってるしな。ギルド長ですらそう思い込んでいた。他のファミリアもそう思い込んでいてもおかしくはない。

ましてや金にがめついどころか、意地汚いとすらいえるあのファミリアが『正当な理由』を手にしたらどうなるのかなんて考えたくもない。

「とりあえず、ヘステイアファミリアに匿われてる事は」

「言ってます」

「……そう、後をつけられたりはしてないのよね？」

金に意地汚い奴のする事だ、跡をつけて弱みを握ろうとするなんて普通にやりそうな事だし……。

肝心のリリの反応は、かなり困惑した様な表情をしていた。というか、不味いんじゃないか？

「リリ？」

「すいません、実は十八階層の件で生きてた事がバレてしまつて……その、脱退したい事を伝えたのですが……」

十八階層での行動。誰もがビビって動かないときに、一人でベルの為に武装を最前線まで届けた事が噂となり、その際に変身が解けていたからかバレたっぽい？ というか特徴が一致してたからもしかしてつて考えて探したのか？ リリの変身魔法ってかなり利便性高そうだしなあ。

んで、脱退の件は断られるどころか、今まで世話になった分の脱退金10,000,000ヴァリスを払えたらなどという馬鹿げた条件を出されて呆然と帰った為、尾行されたかどうかはわからないと事。

「まあ、あんまり気にしても仕方ないわ。とりあえずこれからは気を付けた方が良いわね。貴女を出汁にしてこつちのファミリアに要求されたら……悔しい話だけど正当性は向こうにあるから、抵抗できないわ」

ファミリアの眷属を攫われた。だから襲撃し、仲間を取り戻そうとした。等と理由付けされて攻撃される可能性はゼロじゃない。むしろ

ろ金に意地汚い奴つてのは本当に面倒臭い。変に頭も回るらしいし、其処ら辺の警戒は解けないなあ。

「……ごめんなさい、リリが勝手な事を」

「責めてる訳じゃないわ。ただ、警戒は怠らない様にした方が良かっただけの話」

リリから離れて背もたれにぐいつと凭れ掛かる。なんともまあ、嫌な予感が漂う話じゃないか。はやめに一言相談して欲しかったんだが……。そういう訳にもいかないか。

俺はギルドで缶詰になつてたしなあ。

「ミリア、リリは……」

「んー？　また胸が大きくなってブラのサイズが上がった所為で全部買い替え。出費が激しくてどうするかーって悩んでるみたいよ」

「え？」

「ちよっ、ミリア様っ！」

この情報は、確定情報じゃないし此処で教えて良いとは思えん。今は祝賀会の最中だ、この件は後で共有しよう。とりあえずリリの胸の話題にでもしとけば、ベル達は無暗に触れないだろうし。

「おう……」

「そっか、その、ごめんね」

「……ミリア様」

リリに強く睨まれるが、まあ話題を変える為にだね。

「それより、ベル様もミリア様も先日の事件で随分と株が上がった事だと思えます。少なくともあの階層たか主攻略かいに参加した冒険者達には、認めて貰ったのではないでしようか？」

「う、うん」

「ベルは確かに上がったけど、私はどうかしらね」

「どう？　なにかあったのですか？」

話題逸らしにベルが困惑してるが、まあそれよりもあの事件でベルの株は上がったが、俺の株ってかなり微妙な事になってるんだよな。

俺が視線を逸らすと、ベルとリリは不思議そうに首を傾げた。ヴェルフだけは嘆息して納得の表情を浮かべる。

というかりりは情報集めきつてないのか。まあ、噂話の方はヴェルフの方が詳しいか。

「聞いたぞ、なんでも幼い狐人が砲撃魔法で階層主を即死させる程の一撃を放ったただとか」

もう察しが良い人は気が付くだろう。そう、あの時の砲撃魔法を放った人物は狐人^{ルナル}って事になってるんだ。どちらかという情報も錯綜してる感じか。

「え？ 狐人？」

「……もしかして、耳の所為？」

「ですかね。あの砲撃を放ったのは謎の狐人って話になってるっぽいです」

「回復魔法は？」

「俺がやった、って言うてる冒険者が数名居るらしいですねえ」

直接俺が魔法を使っているのを目撃したのは後方に居た者達のみ。んで、そいつらも全員が注目していた訳ではない上、なんかその回復魔法を使ったのは自分だ、感謝して金寄せみたいなの詐欺し始めた奴も居るらしい？

せこい事するなあ。

「って事はミリア様の活躍は……」

「キューイとヴァン突っ込ませて真っ先に討滅されて、それ以降は役立たずのお荷物。【竜を従える者】^{ドラゴンテイマー}は最初に少し役に立ちそうに見えるけど、途中から姿が見えなかった、とまで言われてるな」

ヴェルフの言葉にリリとベルが顔を引き攣らせている。

仕方ないっちゃ仕方ないが、目立ち方が中途半端で、なおかつベルと違って後方支援に徹する形だったので全員が全員顔を見た訳ではない。その結果がコレだ、情報は錯綜し、誰がやったのか確定できる情報が埋もれている。

俺としては助かっているのだがね。激しい勧誘を受けずに済んでるし。

「ま、有名になっても面倒事が舞い込むばかりで疲れるだけですし。むしろ無名が羨ましいですね」

経験談だ。むしろ無名の方が好き勝手動きやすいしそっちの方が良いなあ。

「——何だ何だ、どこぞの『付属品』が一丁前に有名になったなんて聞こえてくるぞ！」

これ見よがしな大声で騒ぎ立てる声がすぐ近くから響き渡った。

俺たちのテーブルのすぐ真隣、六人掛けのテーブルに座る冒険者達の内ルキの一人である小人族らしき男の声。

「新人は怖いものなしの良ルキいご身分だなあ！ 竜を調教ティムしたただなんて大言壮語を並べ立ててよお。オイラは恥ずかしくて真似できないぜ！」

幼い小人族の男の声がわざとらしく店内に響き渡り、全員がその小人に注目する。ついでに傍に座っていた俺達にも視線が降り注ぎ、注目が集まった。

えっと、付属品？ 大言壮語？ あのさあ、付属品はまだ良いけど、大言壮語は言い過ぎだろ。というか俺が言った訳じゃないし、彼のガネーシヤファミリアが保証してくれてる事を『大法螺吹き』呼ばわりは不味いだろ。

つか何処のファミリアじゃボケ……ああ？ 肩の徽章は……弓に球体？ 太陽か？ ってアポロンファミリアかこいつら。うわ、要注意ファミリアの一つじゃねえか。

確か街中で平然とトラブル起こしてはギルドから注意勧告受ける所だぞ。確か凄い粘着質でしつこい勧誘をする所で、住民からも苦情が届くほどだったはず。今までギルドから受けた勧告数だけで言えばトップクラスに届きうるとまで言われる傍迷惑なファミリア。うへえ……

あんまりな出来事に思わず苦い表情を浮かべていると、その小人族の男は酒をぐいっとあおり、此方を見て嘲笑った。

「竜に頭下げて従って貰って貰ってるんだろ？ 怪物なんかに頭下げるなんて頭どうかしてるぜ！ あ、怪物にお願いを聞いてもらえる才能はあるって事か。流石、法螺吹きはやる事が違うな！」

冷やかしか、侮蔑か。どれでもないな、喧嘩売ってきてる。そして、

これを買うと面倒事を招きかねない。つまり無視が一番である。

好きなだけ貶すと良い。ただ口に気を付けるべきではあると思うがね。特に『法螺吹き』って部分、ガネーシャファミリアが保証してらんだから、俺を法螺吹き呼ばわりするって事はつまりガネーシャファミリアは嘘を吐いてるって貶してるのと同義になりかねないんだぞ。下手を打てばオラリオ最大規模を持つガネーシャファミリアを敵に回しかねない発言だ。というかマジ気を付けろよ。

「ベル、気にしなくて良いわ。というか何言われても無視しなさい。面倒事は御免よ」

「うん……」

俺への挑発をやめない小人族。大きな目が特徴だな、的当てにちようど良さそうな目してるなあ。

周囲の期待が白けるのを感じ取ってしまった。喧嘩が勃発するのを期待していたのだろう、これだから冒険者は野蛮だとか言われるのだ。

「にしても、『寄生虫』の小人に加えて其のファミリアの団長の『兎』つたらないぜ。逃げ足ばつか凄いだけの嘘とインチキばつかのやりた放題野郎なんか居るんだぜ！」

標的が変わった。俺から、ベルに……完全に此方のファミリアを標的にしてきてるな。狙いは、竜素材か？ それとも、眷属おれたち？ 俺か、ベル、どちらかを狙ってる。面倒な事になった、これ無視してもダメな奴だ。かといって手も出せないぞ。

「オイラ知ってるぜ！ 法螺吹き『寄生虫』にインチキ『兎』は他派閥よの連中とつるんでるんだ！ 売れない下っ端の鍛冶師スミスにガキのサポーター、寄せ集めの凸凹パーティーだ！」

無視してる影響か、標的がコロコロ変わるな。というか狙うなら最も煽り耐性の低いベルを狙い続けりや良いだろ。俺だつたらベルを狙うし、リリは慣れてるだろうし、ヴェルフは耐性持ち。俺はそもそもんな事気にしちゃいない。寄生虫でもなんでも好きに言え。

ベルに対する嘲笑はイラつくが、とりあえず我慢できる範疇だし我慢、我慢、我慢。

ベルの方は仲間を侮辱されて一瞬腰を浮かしかけ、ヴェルフに止められていた。つと、危ねえ、此処でベルが飛び出したら不味い、止めとかないと。

「よせ、構うな。好きなだけ言わせとけ」

「ベル様、無視してください」

「何言われても立ち上がっちゃダメよ、喧嘩を買う必要なんて無いわ」
ヴェルフは余裕そうに酒を飲み。リリは若干の呆れすら含む表情を浮かべてる。

ベルの怒気が薄れ、大きく深呼吸を繰り返している。

と、大きく響き渡る小人族の男の舌打ち。無視の姿勢が気に食わないらしい彼の行動。そして口を開こうとした所で、俺はゆっくりと彼の方に体ごと顔を向け、微笑む。

「威厳も尊厳もない女神が率いるファミリアなんてたかが——」

「失礼、ファミリアの主神を侮辱するのはやめてくれるかしら？」

「——なっ!？」

「これ以上、主神への侮辱を行う様なら……覚悟はしてくださいね？」

目を見て、確信した。アイツ格^{雑魚}下だ。

レベル2の俺からしたら、赤子の手を捻る感覚でぶちのめせる雑魚。そうか、上級冒険者からみた駆け出しってこんな風に見えるのか。今まで意識しなかったからわからなかったな。

威圧しただけで、小人族は震えて身を縮こまらせる。情けない、なんて笑う事は出来ない。

たとえ、たとえ相手が自身より小さな小娘如きであろうが、レベル1からすればレベル2は化け物だ。俺はそれを知ってるし、彼が身を震わせたことを笑う積りはない。

「——はっ、竜が居なきやなんもできないガキがなんか吠えてるぜ？」

「おいおい、ルアン。笑ってやるなよ」

「あれで精一杯の強がりなんだろ」

おい、その竜が居なきやなんもできないガキに睨まれて言葉詰まらせた奴が吠えるなよ。

呆れてものも言えないってのはこの事なんだろうなあ。というか嘲笑してくる相手増えたし、面倒臭えなあ。

相手の構成は、レベル1が小人入れて二人、レベル2が三人、最後の奴は——おい、団長自ら出張ってくるのかよ。レベル3の冒険者が悠然と椅子に腰かけ、ワインを優雅に楽しんでやがる。

「竜に尻尾振る事しか出来ねえくせに、一丁前に吠えるじゃねえか！」吠えてんのはおまえなんだよなあ。というか良く喧嘩売ってくる気になったな、情報が錯綜してるとはいえヘステイアファミリアって今、結構な大御所との取引をしているファミリアだぞ。

ガネーシヤ、ヘファイストス、ディアンケヒトって言えば『オラリオ最大規模のファミリア』『オラリオ最上級の鍛冶ファミリア』『オラリオ最上級の医療ファミリア』だぞ、友好取引相手を攻撃されりや出張ってきてもおかしくないってのに。

虎の威を借る狐はあんま印象良くないが、今のヘステイアファミリアってそんな感じだったのによ。

「何か言ってみろよ！ どうせ竜が居ねえから何も言えねえしできねえんだろ！」

キューイとヴァンはガネーシヤ様の所だからなあ。竜が居なきや糞雑魚パルウムかって……舐めると痛い目見るだろうに。それにこいつは勘違いしてるんじゃないか？ たとえ、たとえ俺がレベル2の中で最弱だったとしても、だ……レベル1如きに負ける事なんてない。

それこそ、ベル並みの例外でもない限り、レベル1がレベル2に勝利を得るのは不可能に近いのだ。だというのに挑発をやめない……つまり、アレか、どうしても喧嘩に持ち込みたいのか。

「チツ、どうせ『怪物趣味』の変態女なんd——ぶびっ!？」

唐突に潰れた悲鳴を響かせる

あ？ あー、あああああ！

「ヴェルフツ!? 何してんのあんたっ!!」

「悪い、足が滑った」

うわあああああああああああああああああつ!? 喧嘩買わ

ない様に注意してたのにヴェルフが買いにいきやがったあああああああああああ!? しかも全力で買い占めにいっちゃったあ!!

馬鹿野郎! お前が喧嘩買うのも不味いんだよっ! 友好ファミリアだからって、今はヘステイアファミリアの団長であるベルが率いるパーティの構成員になっただろうがっ! 派閥が違うから喧嘩売っても大丈夫なんて事にはならんだろおがああああああああ!!

「てめえ!」

「やりやがったな!!」

小人族の仲間が一斉に立ち上がる。いや、最大のボスが座ったままだ。酒の入ったグラスを優雅に掻き回し、香りを楽しみながら、口元を笑みの形にしている。

慌ててリリの腕を掴んでテーブルから引つpegせば、次の瞬間には相手の冒険者共の蹴りによってテーブルが派手に吹き飛んだ。食器の割れる音、給仕の悲鳴。周囲の冒険者が示し合わせた様にテーブルを蹴倒し、即席の喧嘩場を思わせる場が整えられ、相手が真っ直ぐ突っ込んでくるのが目に入った。

ヴェルフが不敵な笑みを浮かべ、迎え撃ち。ベルも同じく拳を握り締めて迎え撃とうとしている。

おい待て、此処でベルまで応戦したら言い訳もできなくなるだろっ!!
ベルは止めるべき立場あ!?

「これだから冒険者は!」

周囲の冒険者の歓声が響き渡り、酒を片手に殴り合いを観戦する野蠻っぷりを発揮しているのを見たりりが批難の声を上げた。

狭苦しい酒場で突如として発生した乱闘騒ぎ。これが他人事であれば俺も観戦する一人になっていたかもしれないが、巻き込まれた側としては笑えない。

周囲から巻き起こる歓声にジョッキをぶつけ合う音、声援とも怒声ともとれぬ叫び。

「ああもう、怪我させるのは不味いでしょ……『癒しの光よ』」

鼻血をだらだらと流したまま放置されている小人を隅っこに引つ

張って安全を確保して治療しつつも中央を見れば、相手方四人を圧倒するベルとヴェルフの姿があった。

伊達に前衛中衛で連携をとっている訳じゃない。二人の息の合った連撃に一人が吹き飛び、一人がテーブルに叩きつけられ、一人が鼻からド派手に血を噴き出す。ってやりすぎい！

ベルの足払いをもろに受けた獣人が「ギャンツ!?!」という情けない声を上げているのを聞きつつも、残りの一人に注目。アイツだけは不味い、さつきから余裕ぶってニヤニヤしながら酒を口に行っているアイツ。アレが出てきた時点でアウトだ、というか現在進行形でアウトオ!

とりあえず最後の一人の牽制の為にソイツの前に立つ。

「どうも、初めまして……で良いわよね。ミリア・ノースリスよ」

声をかけてみるが、反応は芳しくない。

「ふん……よくもやってくれたな。【ドラゴンテイマー】」

あ、ダメな奴だ。完全に話を聞く気がねえぞこいつ。恨みを買った積りなんかネエのに、面倒臭え事になったなこれ。

「最初に侮辱をしたのはそちらでしよう」

グラスを傾け、此方に笑みを浮かべてきたその男。

整った茶髪に女性と見紛うきめ細やかな色白の肌。金属のイヤリングをはじめとしたさまざまアダクセサリーな冒険者用装身具を派手に制服の上に身に着けている。深い海を思わせる碧眼。

嘲笑の色合いを移すその瞳を見据えつつ、肩を竦めるも、ダメか。

「手を出したのはお前たちだ」

身を引き、構えるより前に胸倉を掴まれた。と思った次の瞬間には視界がぶれ——天井にぶち当たった。

投げ飛ばされた。そう感じた時には既に天井の梁にぶち当たり、肺の中の空気が全部飛び出し、意識が明滅する。

倒れていたテーブルの一つに落っこち、盛大な音を響かせた所でベルの声が響き、ヴェルフの咆哮が聞こえる。

なんとか引つかかっていたテーブルから落ち、身を起こして——
——目を開けたら目の前の靴の裏。

「のろまだな【ドラゴンタイマー】。まるで虫けらの様だぞ」
件の人物——レベル3、第二級冒険者【太陽の光籠童^{ポエフス・アポロ}】ヒュア
キントス・クリオの声が響くとほぼ同時、ゴシヤツという音と共に意
識がブラックアウトした。

第百話

『ひばちてい焰蜂亭』で発生した乱闘騒ぎについて。

俺はヒュアキントスの蹴りを顔面に受けて昏倒。しかも『のろまだな【ドラゴンテイマー】。まるで虫けらの様だぞ』等と盛大に小馬鹿にされて、である。

なんかベルも『まだ、撫でただけだぞ?』と煽られたっぽい。俺が倒されてヴェルフが挑み、呆気なく返り討ち。ベルも同じく返り討ちだそう。いや、当然だよなあ……だって相手レベル3だし?

相当上手く蹴られたのか一撃で意識を持って行かれて転がっていたのだ。んで俺が意識を失ってる間に、どうにもロキファミアの一級冒険者【ヴァナルガンド凶狼】ベート・ローガがアポロンファミアを追い払ったっぽい?

詳しくはわからんが、酒が不味くなるから失せろといちやもん付けたらしい。

んでヒュアキントスが『ロキファミアは駄も出来ないのか』と挑発したっぽいんだが……いや、わかるよ?!

一応、あの乱闘騒ぎはヘステイアファミアとアポロンファミアの『派閥抗争』だった訳だ。いや、正しくは違うかもしれんが、分類的に『派閥抗争』と言って差し支えない訳で……。

ロキファミアは敵も多く、隙を見せる訳にはいかない。

そこで幹部の一人であるベート・ローガが『気に食わない』なんて身勝手な理由で『派閥抗争』に一枚噛んだとしよう。結果? オラリオ全土を巻き込んだ大騒動に発展する。

ロキファミアが気に食わないファミアが手に手を取ってヘステイアファミアとアポロンファミアの抗争を支援し、それを妨害したというところにつけた理由をもってしてロキファミアを糾弾し、最終的に最強派閥を巻き込んだ大抗争に発展しかねない訳で……。

要するにベート・ローガは睨み付ける事は出来ても、手を出す事だけは決してできない場面だった訳だ。だからこそヒュアキントスは第一級冒険者相手に強気に出られたのだろう。

ただ、変に恨みを買う可能性があるのにそこらへん考慮しないのはどうなの？ 後から報復されない可能性はゼロじゃないんだけど……。むしろ迷宮内でいきなりやってきて襲撃受けたらヤバいんじゃない？ まあ、ロキファミアミアに限ってダンジョン内で闇討ちする様な真似はしないだろう。

……庇って貰ったとはいえ、お礼を直接言いに行こうものなら逆にぶっ飛ばされかねんなコレ。だって抗争を横から止めて貰った様なもんだしね。お礼言いに行ったら『ロキファミアミアが抗争に介入しましたよ』と宣言してる様なモンだし？

『癒しの光よ』

ヘステイアファミアミア本拠、教会の隠し部屋で治療を受けているベルとヴェルフの背中を見ながらも、自身の鼻に回復魔法をかけていく。

あの変態ホモ野郎、人の顔面を的確に蹴り抜いて来やがった。それも『マジックシールド』が発動しなかった辺り、かなり加減か技量を伴う一撃だったに違いない。目を開けた瞬間に目の前の足を押し出す様な感じで蹴られたのだ。ストロークの長さも全くない一撃だったというのに綺麗に意識を飛ばされ——ついでに鼻を潰され——

ぶつちやけ呼吸がしづらい。折れた鼻を元の形に戻し、回復魔法を何度もかけてようやく治った所で、俺はヴェルフの背中に出てくる大きな痣を指でどついた。

「いってえっ!？」

「ミア様、何をなさっているの？」

「ミア？ どうしたの？」

急に痣をどつかれた事で飛び上がったヴェルフの尻にスパーンツとビンタを叩き込めば、バランスを崩して頭から床に倒れかけて手を着いた。

「な、なにしやがる!」

「そりゃこっちの台詞ですよ!」

よくもまあ喧嘩を買ってくれたなあ。あの場で喧嘩を買う意味を少しは考えたのか。

「なんで喧嘩を買ったんですか！」

「なんでって、お前……『怪物趣味』呼ばわりされてたんだぞ！」

別に良いだろ。何が悪いっていうんだ。

むしろ意味的にはアレだろ。半人半鳥ハーフビィや半人半蛇ラミアをはじめとした人型モンスターに欲情してしまう異常性癖の事だろう？

キューイが人型に見えるか？ ヴァンが人型に見えるか？ とうか別に俺は気にしないってのにさあ。

「ミリア君、『怪物趣味』だなんていわれたのかい？」

「え、ええ……別に私は気にしないんですけど」

地上においては最大級の蔑称を意味する言葉と言われてもなあ。

『チビ』とか『貧乳』とかの方がよっぽどムカつくんだが。

「とうか、私の事は置いておいてですね。あの場で喧嘩を買う意味を少しは考えてくださいよ」

「ああ？　ありやへファイストスファミリアの鍛冶師が勝手にやらかただけで——」

ああ、そういう言い訳をする積りなのね？

「馬鹿ですか。あの場に同じパーティメンバーが居る状態でその言い訳は通じませんよ。しかもリーダーはベル・クラネルです」

つまり、リーダーであるベルが仲間の鍛冶師をけしかと断定されてもおかしくない処か、傍から見ればそうとしか見えないし、相手があると言えばその通りになりかねない。

其の上でヘステイアファミリアの責任問題となってくるのだ。

「とうかベルは止めるべき立場でしたよ。あそこでヴェルフを横からぶん殴ってでも止めなきやいけなかったんです」

「でも、ミリアが……」

「たかが侮辱されたぐらいで怒りませんよ」

嘘です。めっちゃムカつくんで殴りたくありませんね。まあ、殴って良い状況じゃなきや絶対に手を出さないんだけど……。

「ともかく、リリでも私でも貴方でもベルでも、あの場で誰か一人でも喧嘩を買えばその時点で負けだったんですよ」

「待ってください。負けってどう言う事ですか」

リリの言葉に思わず頭を抱えた。

「あのファミリアの事、知らないんですか……？」

「あのファミリア？ あいつらの事知ってるのか？」

結構有名、だと思っていたがそうか。ガネーシヤファミリアと直接やり取りしてる俺だから知ってるだけで、ベル達は知らないのか。

「アポロンファミリア、気に入った眷属をしつこく勧誘し、余りにも強引な方法をとる為に街の住民からも数多の苦情がギルドに寄せられ、過去に起こした事件でギルドから受けた罰則数だけで言えばオラリオトツプクラスのヤバイ所です」

「アポロンだつて？ 不味いな、確かにアポロンならやりかねない……」

へステイア様は知っているのか。だとすると話が早い。

「知つての通り、というか今へステイアファミリアは他ファミリアから見ると『金持ち』に見えています」

「それは、むしろなんでそんなにお金が無いのか不思議なぐらいです」
リリの言う通り。借金という不思議なモノさえなければ順当に資金を集め、下手をすれば資金力だけで数千万ヴァリスは余裕で稼げたはずなのだ。他のファミリアはそう思っている。

「資金目当てであれ、眷属目当てであれ、目を付けられた事にかわりはありません。面倒事に巻き込まれたんですよ」

「……もしかして、俺の所為か？」

その通りである。言っちゃあなんだが、やはりあの場で喧嘩を買つたのは不味かった。アレの所為で間違いなく『口実』を与えてしまったのだ。それも『言い掛かりに近い正当な理由』を。

「はあ……ともかく、これからアポロンファミリアが何か仕掛けてくる可能性が高いです」

「……………悪い」

「いや、鍛冶師君が謝る事は無いさ」

「へステイア様？」

優しい気な微笑みを浮かべ、ベルの怪我に丁寧に軟膏を塗り込んでいくへステイア様が小さく溜息を零し口を開いた。

「アポロンは面倒な奴だね。しつこいんだ。今回の件が無かったとしても他の所で色々やってくるに違いないよ」

まあ、確かにその通りっちゃその通りか。

「とりあえず、この件は此処でお終いにしましょう。他にもいろいろと話さないといけない事がありますし」

「他にもあるのか……」

「リリの件よ、ソーマファミリアが動く可能性が高いわ」

リリがびくりと身を震わせるのを横目にはベルを見据える。

「今の状況は最悪。ソーマファミリアが『正当な言い掛かり』を付けられる状況なの」

「……うん」

「警戒し過ぎでも足りないぐらい」

アポロンファミリアに、ソーマファミリア。

片やファミリア単独で階層主撃破を可能とする中規模の要注^{ゴライアス}意ファミリア。

片や規模だけで言えば大規模に片足突っ込んだグレーゾーンをぶつちぎる要注ファミリア。

どっちも要注ファミリアじゃねえか……。

「とりあえず、明日からは急な襲撃に気を付けないといけないわ。少なくとも言い掛かりとはいえ正当な理由が相手にあるつてのは覚えておいて」

下手な抵抗は事態を悪化させかねない。むしろ『口実』を与える結果になる。

コンクリート製の無機質な箱型の建造物、錆びた貯水塔、壊れたフェンス、ミサイルでも撃ち込まれたのか所々に穴の空いた廃ビルの屋上に俺は立っていた。

——これは、久々に見る夢だな。どっちだ？ まあどっちも変わりないんだが。

『さあ始まりました決勝戦！ 片や連戦連勝！ 無敗を誇る最強の狙

撃手！ 対するは期待を背負う最強のドラゴニユート使いいっ！
都度十度の決勝戦による彼らの対戦、なんとそのたびにドラゴニユート使いは涙を呑む事となっていた！ 今度こそはと勇み挑む大会いつ、果たして勝利の女神が微笑むのはどちらになるのかああああ！！』

ああ、相も変わらず五月蠅い実況だ。耳障りで、スピーカーの音が罅割れる程の大声量で実況する声。まあ、試合開始後は聞こえなくなるんだけど。

『では——無敗を背負う狙撃手と、期待を背負う竜人、今ここにミリカン最終決勝戦の開始を宣言しますっ！』

視界に広がる廃ビル。唐突に U ユーザインターフェース I が起動して体力とシールド数値、残魔力量やマガジン数、現コンディションが表示された。

UI 右上の簡易マップに一瞬だけ赤い エネミー 光点が表示され、消える。方角は覚えた。

一歩、足を踏み出す。小さな足で既に用を成していないフェンスの残骸を踏み越え、廃ビルの縁に足をかけ——そのまま廃ビルの縁から飛び出した。

目の前に広がるのは半ば自然に飲み込まれた廃墟と化した都市の姿。ミリカンのステージ名『大自然の廃墟街』だったか。所々に爆発物を受けたのか穴の空いたビルの側面を落下しながら、詠唱を呟く。

『ウイング・マジック』

魔力が減り、生み出されていく深紅の竜翼と、細くしなやかな尾。竜人としての力を解放し、一気に加速する。

瞬間、破碎音が響き渡った。ズウンツという腹に響く重低音、狙撃されてる。加速に加速を組み合わせ、不規則な飛行ルートを一気に駆け抜けながら、さらなる魔法詠唱を響かせる。

すぐ後ろで響く廃ビルの壁面が粉碎される音。そして遠くから響く狙撃魔法の放つ重低音。風を切る音。狙撃の対象にされていることを知らせる警告音 アラート。そして当たれば確実な死を与えてくる凶弾が空気を引き裂く音色。

頭をガンガンとかき混ぜるような音の嵐の中、目を見開いて狙撃者

と見つめ合った。——今日こそは勝たせてもらう！

『ガトリング・マジック』『ベルト・マガジン』『リロード』『リロード』
1マガジン辺り100発。2マガジン同時セットで200発の弾
带式に変化を遂げ、分解されたマガジンが帯状の弾帯となって俺の周
囲を漂う。まるで羽衣の様に弾帯を纏い、狙撃位置を睨みつけた。

一瞬だけ見えた、森に飲まれた民家の間から此方を鋭い目つきで睨
みつける狐耳の女性の姿。クーシー・スナイパーのキャラを使ってい
る対戦相手の姿を視認。右手を其方に向けた。

『ファイア』

放たれるは魔弾の雨、120発/秒という馬鹿げた連射速度ファイアレイトに強化
された最大装弾数200発のガトリングによる掃射。飛行姿勢が大
きく崩れかける程の反動を浴びながら——威力・連射に極振りし
た特化強化の為、反動が劣悪になった影響——まるで雨の様に相
手に降り注ぐ魔弾を見るでもなく、僅か1.66秒足らずの射撃で弾
丸を撃ち尽くし、空になった魔法が空回りしてキュインキュインと妙
な音を響かせる。

相手の居た位置に大量の土煙が吹き上がり、姿が見えなくなった。

——相手をキルした際に響くはずの音はしない。つまり殺せて
いない。カスただけで肉体がミンチになる程の威力をもった豪雨
に打たれてなお、相手は死んでいない。

『リロード』『リロード』

装弾しつつも舌打ち。一斉掃射が可能なのは後2回のみ。それ以
上撃ちたければ一度引くべき——だが、引けば負ける。

クーシー・スナイパー相手に姿を晦まされたら後は一方的に狙撃さ
れるのみ。今までずっと、何度も、同じように負けてきた。

——あの人に会いたい。其の為に勝たなくてはいけない。

瞬間、悪寒を感じ取り翼を大きく羽ばたかせ、横回転。バギツと
いう激しい接触音と共に翼の耐久が減った。ギリギリ間に合った回
転による弾丸弾きによって逸れた魔弾が空の果てに消えて行く。

急な回転によって視界がグルグル回り——それでも加速する。
目標は、殺し損ねた狙撃手。

腹に響くような重低音、どんなカスタムをすればそんな音になるのか——威力と貫通特化だ。俺の竜翼による防御を難無く突破できるようにカスタムされた、俺を殺す専用の魔法。歯を食いしばった。

何度も負けた。三年間、一年に4回ある大会。全てにおいて決勝戦に進む度に、お前に墮とされてきた。涙を呑んだ回数なんて覚えてない。今この瞬間に考えるのはただひとつだ、おまえを蜂の巣にして、あの人に会いに行く。

相手のスナイパー・マジックの装弾数は五発だ。威力と貫通力に極振りしてるなら、それ以上はあり得ない。

既に一発撃たれ、残りは四発。回避しろ、防げ、全弾無力化しなくていい。最後に体力が1でも残ってれば、俺の勝ちだ。

響く重低音。横回転を交えた飛行で弾丸を弾く。翼の耐久が6割を切った。

響く重低音。翼の先端が大きく弾け飛び、耐久は4割を切った。

響く重低音。尻尾が付け根から引きちぎられ、粒子を撒き散らしながら落ちていく。

響く重低音。最後の弾丸だ、これを回避して、接近して——ズウンツと胸を穿たれる感覚。口元が引き攣った。回避できな

かった。

胸から噴き出す様に溢れた光の粒子。その向こう側で相手の狙撃手が肩や胴体から光の粒子を零しながら安堵の表情を浮かべている。

ちくしよう、あと、相手の残り体力面はわずか3%、幸運の女神に微笑まれたのは、相手の狙撃者だったらしい。

相手の銃撃が直撃した。心臓を穿ち抜くハートブレイクショット、耐久の低いドラゴニユートでなくとも即死判定待った無し、完全無欠な敗北。

手を伸ばした。これは夢だってわかってる。それでも手を伸ばした。手を伸ばせば届く距離に、あの人に会いに行けるだけの『理由』があった。

会いたかった。あの人に、会いたかった。けれど——会いに行

けなかった。会えなかった。

ギルドのエントランスは珍しく冒険者以外の住民の顔が多くみられた。乱闘騒ぎの次の日に顔を出したギルド内では不安そうな表情を浮かべている者も居れば、目つき鋭くギルド職員を睨みつけて怒鳴っている者も居る。

カウンターから出てきて笑顔で迎えてくれたエイナさんと談笑するベルを眺めつつも窓の外をちらりと見ていた。漂う焦げ臭い匂い。朝から最悪な夢を見た事で最悪の気分であるのに、更に焦げ臭い匂いで不快度は天元突破する勢いである。

「それじゃあ、もう体は大丈夫なの？」

「はい、すっかり良くなりました」

二人の視線も俺が見ている物に向けられたのを見て、口を開いた。

「あの、なんか小火騒ぎでもあったんですか？」

オラリオの街並み。何時も通りとはいかず、所々に小火騒ぎでもあったかのように街中の至る所で焦げ臭い匂いが漂っていたのだ。ギルドに来るまでの道中もそこら中とまではいかないものの、結構な頻度で小火騒ぎがあったかのような場所が幾つも散見された。

「昨日の夜から朝にかけて、夜中に騒ぎになってみたい。見ての通り、不安がった住民がギルドに詰めかけちゃって……」

「それで冒険者以外の人が多いんですね」

「犯人は捕まって……ないみたいですね」

何らかの策略を感じる放火だ。この、感覚を……知ってる。あの糞女が敵として動いている時の感覚だ。

「ミリアちゃん？　大丈夫……顔色悪いわよ？」

「え？　ああ、そうですね。あまりにも焦げ臭い匂いが漂い過ぎて、気分が悪くなったかもしれません」

昨日の夢の所為か、朝からあんまり気分が良くない。それに加えてこの焦げ臭い匂いだ。嫌でも気分は悪い方向に転がっていつちまう。

——糞女が何処かに居そうな、そんな考えが脳裏に浮かんだ。

俺が訳も分からずに憑依転生したんだ、居てもおかしくはない……はっ、笑えない冗談だ。あの糞女がこの世界に？　ありえんだろ……ありえんよな？

「ミリア、本当に大丈夫？　そこの椅子に座った方が良いんじゃない……」
「……すいません、お言葉に甘えます」

ベルに先導されて椅子に腰かけ、エントランス内部を見回す。なんとなく、の行動だ。

きつと、あの糞女ならこのタイミングで……ああ、居た。いた、いる、予想通り——記憶の通りだ。不味い、不味すぎるぞ……きつと、この小火騒ぎは仕組まれたモノだ。

カツカツと、小気味良い足音を立て此方に近づいてくる二人組の女性。

片や吊り目で気の強そうな短髪の女性。片や垂れ目気味のあどけなさの残る女性。

——アポロンファミリアの上級冒険者二人だ。

肩に着けている腕章。太陽に弓のエンブレム、彼女らはそれなりに名の売れた冒険者だ、知っている。

吊り目の女性がダフネ・ラウロス。

垂れ目の女性がカサンドラ・イリオン。

「ベル・クラネルとミリア・ノースリスで間違いない？」

「は、はい」

「……………」

喉がカラツカラに乾いて言葉が出てこなかった。

この、女性を、俺は知っている。アポロンファミリアの冒険者？

違う、前世で糞女が右腕として使っていた奴だ、良く似てる、いや似てない。そもそも別人だし、あの糞女が死んだと教えたら、あの右腕は何処かに消えて行ったし、死体の引き上げでもしてたんだろ。報復も何も、俺が殺した訳じゃないから、恨まれる事なんてありやしない……助けなかった事で恨まれ……でもそれは……

落ち着け。あの糞女がいる訳ない……逆に考えろ、あの糞女がこつちの世界に来てるなら、あの人——父親も来てるかもって……い

や、無理。

「ウチはダフネ、こっちはカサンドラ。お察しの通りアポロンファミリーだよ」

わざわざ腕章を見せつけてくる女二人。弓矢に太陽のエンブレム……気配は、普通だ。ただ、憐れみを感じた。

………気に食わない目だ。

「あの、これ……」

差し出されたのは一通の手紙……上質な紙を使った封筒には封蝋。刻印されている徽章は、やはり弓矢と太陽のエンブレム。察するに、招待状か。

背筋が泡立つ。地獄への招待状だろこれ……。

「あの、案内状です。アポロン様が宴を開くので、もしよかったら……べ、別に来なくても結構なんですけど……」

阿呆かこの女は。カサンドラだったか？ この招待状を破り捨てたらテメエら実力行使に出るだろ。糞、断るっていう選択肢が無い。その上——他の選択肢もことごとく潰して来てる。

何するにしても、リスクが上回るぞ畜生。自らのファミリーより規模が大きい所相手にする場合、どんな行動もリスクばっかだ。相手の狙いは何だ？ 金か？ それとも、俺達か？

「必ず、貴方達の主神に伝えて。いい、渡したからね？」

念押ししてくるダフネを見上げ、舌打ち。この女、ダフネとかいう奴、前世で糞女が部下として使ってたやつに似すぎだろ。胃がひっくり返りそうだ。

こちらをちらりと見た彼女の瞳には——憐れみの色が見て取れた。

「……愁傷様」

ああ、なるほど……全部奪っていく気だ。

前世でも、あの糞女の部下の一人に、同じ目で見られた。確か——

——抵抗すると被害が広がる。無駄な抵抗はやめた方が良い。諦めて『だったか……』

日付は、近々……つまり猶予はある。打つ手を何か考えないと

……。

ああ、畜生。回避しきれない。どう足掻いても力業で押し通される。どうする？ どの手を打つ？ いや、まだ決まった訳じゃない。とりあえず打てる手は全部打つ、それで……それで？

第一〇一話

キューイとヴァンに飯を食わせながら、廃教会の中を見回す。

月明りに照らされた教会内、キューイとヴァンの寝床として適当に掃き清められた場所に二匹が蜷局を巻く様に座っているのを確認し、月を見上げた。

招待状を受け取った後、俺は大急ぎでガネーシャファミリアに顔を出した。

端的に言えば、ガネーシャ様はその招待状を受け取っていないかった。アポロンファミリアは、ガネーシャファミリアを招待していないのだ。それだけにとどまらない。

昨日の晩から今朝にかけての小火騒ぎは赤い飛竜が起こしたという噂が出回っている。まるで、そう、まるで狙いすましたようなタイミングで、噂が流れた。

ガネーシャファミリアはギルドに呼び出されており、原因調査の名目の元、飛竜の接収を言い渡されかけたらしい。ただ、これに関してはガネーシャファミリアは弁解を行い、なおかつ飛竜二匹を迷わずへステイアフファミリアに送って問題解決を図っている。

詳しく話すと面倒なんだが、飛竜の取り扱いに関しては俺とガネーシャファミリア二つの同意が必要になる。其の為、ガネーシャファミリア単独では飛竜の引き渡しに応じられないとして此方に飛竜を避難させたのだ。

「ああ、手の平の上ですよこれ」

大事になってる。まるで誰かが火をつけた様に、燃え広がっている。もう、止められない。

ガネーシャファミリアには多大な迷惑をかけている。それだけにとどまらず、今回の神の宴にも参加できないだろう。つまり擁護は期待できない。

それに加え、敵の影がヤバイ。アポロンファミリアは確定として、ギルドが……正確にはギルド長のマルデイルが竜素材の利益欲しさに色々といちやもん付けてきてる。アポロンファミリアと協力関

係にあるのか不明だが、タイミングが最悪過ぎる。

その上で未だに動きが見えないソーマファミリアも怖い。ギルドが妨害に走るとか勘弁してくれよ……。

深い溜息を零しつつも隠し扉を開いて地下室へと降りて行けば、ベルが食器を洗っている光景が目に入ってきた。

「ただいま」

「おかえり、ミリア君、この招待状……どう思う？」

テーブルの上に広げられた招待状を指さして問いかけてくるヘスティア様。置かれていたコップのお茶を一口飲み、断言する。

「罨です」

そして、もう罨に頭から飛び込む他無い。

「酒場でいざごぎを起こした上で、更に招待を断ったとなれば面倒事が回避できません」

そう、ここで行かないという選択肢も取れない。罨だと分かっているながら、頭から突っ込むしかないのだ。まるであの女のやり口だ。気が付いた時には全て手遅れ。

「すいません、神様、ミリア……」

「ああ、大丈夫だよ。変な責任は感じないでくれ。……というか実はボクもアポロンは苦手なんだ」

横からヘスティア様の広げた招待状を見据え、小さく溜息を零した。

「なんですか、これ……」

『神の宴』っていうのは神様達が自主的に開くものであり、宴を開ける程のファミリアの規模を誇示・自慢する為に開かれる事が多い。まあ、あくまで建前であって実際には神々が騒ぎたいがために開かれるものらしいが。

基本的に、招待されるのは主神のみなのだが……。

「自慢の眷属を二人まで同行させる事、ですか」

「え？ どう言う事？」

「ボクだけじゃなくて、二人も参加する様について……」

これは、どう見ても罨です。誰がどう見ても、このタイミングで眷

属二人連れて来いなんて、ヘステイアファミリア狙い打ちじゃないか。

ああ、陰鬱な気分だ。

うるさい蝉の鳴き声が響き渡る公園を見渡せる喫茶店の一角。対面する席に座った美女が口元に笑みを浮かべながら俺を出迎えた。

「久しぶりだな、母さん」

不機嫌そうに口を開く少年が、その女性の対面に座った。俺だ、過去の俺……そして、父親を裏切った最悪のクソガキだ。

「久しぶりねえ。それで？ 答えは？」

「お断りだね」

テーブルに置かれた氷の入ったグラスをいじりつつ、少年は不機嫌さを隠しめせず、外の景色を眺めている。

この時の俺は、この糞女に勧誘されていた。自分の所に来いと、お前の才能を活かしてやると。

「あの男の所に居ても、あんたの価値が腐るだけよ？ あたしの所に来れば、金も、名声も、女も欲しいがままに出来るわよ？」

「嫌だね、俺は親父とゲームやってりやそれでいい。金も、名声も、女も、んなもんいらねえ」

親父なんて呼ぶな。その呼び方を今すぐやめろ糞餓鬼。過去の自分に何を怒ってるんだか。ばかばかしい。

グラスの氷が結構な速度で溶けていく。周囲には談笑する主婦やいちやつくカツプルなんか居て、店内は喧噪とまではいかないにせよそこそこ賑やかだ。

あの糞女は懐から携帯端末を取り出し、操作し始めた。ああ、あの携帯端末がなんなのか理解してないクソガキが胡乱気な目してる。今すぐ頭下げとけば——アホか、何諦めてんだテメエは。

「そう……一つ聞いて良い？」

「んだよ」

「あなたの親父が作ってるゲームって『ミリカン』っていうんだっけ？」

あの糞女の口からそのゲームの名が出た瞬間。その過去の俺は我慢げな表情を浮かべて口を開いた。黙ってればいいのに、余計な事言わなきゃ何もなかったのに。いや、どのみち調べて確信を得てから来てるわけだし、無駄か。

「そうだ。親父が作った最高のゲームだ。お前みたいな人を騙す事しかできやしない屑なんかじゃ一生かかっても作れやしないモンだぞ」
なんでそう挑発していくんですかね？ 過去の俺君はさあ。馬鹿でしょ？ その女を舐めすぎだ。

「ふうん、関連企業はーつと、ああこれと、これ、ううん。まあいいや、サーバー落とそう」

携帯端末を弄りながら、女はぼそぼそと呟き、ニンマリと笑みを浮かべてその少年を見据えた。

「はい、今サーバー落としましたから。って確認できないのかしら」
女の言葉に眉を顰め何を言っているのか理解していない少年。すぐにその言葉の意味を理解するだろう。

彼は、唐突にポケットに手をつ突っ込んで携帯端末を取り出して弄りだし、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

内容は——ミリカンの接続異常が発生しているという緊急告知だったか。

「はあ？ 鯖落ち？」

「今落としたの」

「……………」

「だから、あたしが落としましたの」

「……………」

信じられない。そんな表情を浮かべた少年に対し、その女はニコリと美しい笑みを浮かべて呟いた。

「復旧は直ぐに終わるわよ。ちよつとした攻撃だし」

「さて、何の話をして……」

「だから、ミリカンのサーバーを落としましたの。あたしの指示でね」

次の瞬間、ガンツと音を立てて少年が立ち上がり、怒鳴り声を上げた。

「ふぎけんなっ！ 冗談も大概にしろっ！」

怒声を浴びた女は涼しい顔しながら微笑み、ゆっくりと立ち上がって——少年の襟首を掴んで顔を寄せた。

「調子に乗んなクソガキ、あんた何もわかってないようだから教えてあげる」

女が端末を少年に見せつける。中に書かれている内容は理解できないらしく女を振り解こうとする少年。ガチャンツとテーブルの上のコップが床に落ち、氷水が床にぶちまけられる。

「うるせえっ」

「うるさいのはアンタよ、ほら……そうね。この企業、潰すわ」

「はっ」

携帯端末を弄り、少年をぶん殴って椅子に座らせた女は、頬を押しさえて呆然とする少年の前で唾つた。

「はい、あんたの父親の子会社、一個潰したから。サーバーの復旧が一日がかりになっちゃうわね」

何を言っているのか理解できない少年がもう一度立ち上がろうとして、青褪めて端末を引っ張り出して確認していく。

内容は、父親からだったか。確か管理を委託していた子会社の一部がいきなり倒産してトラブルに塗れてるから今日の帰りが遅れる、だっけか。

「なに、したんだよ……」

「だから、潰したの」

「なに……を……」

「関連会社一つを」

そこそこの規模の企業のはずだ。子会社とはいえVRゲーム業界では大手ともいえる下請け企業。潰れるなんて寝耳に水の話であり、絶対に在り得ない事だった。だというのに、この女は気軽に潰した。潰せた、それだけの事が出来るだけの組織力を見せつけてきた。

クソガキはようやくその脅威に気付いたのか完全に青褪めて震

える。

「で？ どうすんの？ 同じように『ミリカン』の制作会社潰しても良いのよ？」

女が笑みを浮かべてそう言った。できる、この女ならやれる。やるといったら、やる女だ。実際に、抵抗してたら『ミリカン』はこの世から消えて無くなっていただろう。

「ふざけんなよっ！ 俺は、お前の言う事なんてっ」
「あっそう、じゃあ潰すわね」

女が端末を弄りだす。それを見た瞬間に少年の顔色は土気色にまで落ち込み、拳を握り締めて女に殴りかかった。

「ぶっ殺してやるっ!!」

「はいアウトっ」と

スコーンと、少年の体が宙を舞った。ドゴシヤツとカップルの腰かけていたテーブルの上に叩きつけられ、少年が呻き声を上げる。

「はいはい、アンタ馬鹿でしょ？ アタシが女だからって殴りかかれば勝てるっても？ あははは、笑えるわ」

腕一本で、投げ飛ばされた。人一人を軽々と投げ飛ばせるだけの、技量をもった女。化け物だと少年がもごもごと呟くのを見据えながら、女は楽し気に口元を歪めて呟いた。

「で？ どうするの？ 従うの？ 従わないの？ 従うなら、この書類にサインしときなさい」

女が差し出した書類。それを見て少年が気丈にも睨み付け——
—ようやく違和感を覚えたらしい。遅えよ。

周囲の主婦やカップル、店員は誰も一連の動きに反応しない。カップルのテーブルに少年が投げ込まれたのにも拘わらず、カップルは笑顔を浮かべて乳繰り合っている。

主婦たちは相も変わらず談笑を続け、店員は床に零れた氷水を片付けている。普通なら、警察に通報の一つでもするはずの所なのに。

少年の顔色が一気に悪くなる。声も出せない様子でカップルの二人を見て、カップルの内女の方が少年を見て微笑んだ。

「抵抗すると被害が広がる。無駄な抵抗はやめた方が良い。諦めて」

少年が愕然としながら店内を見回す。サラリーマン風のおっさんも、気の良さそうな主婦も、年若いカップルも、幼さの残る店員も、無言を貫く店長も……この店の中にいる全ての人間が、あの女の手先だと気付いた。

「うそ、だ……」

「ほら、サインするなら早くしなさいよ」

カップルの男性と女性、二人がすつと立ち上がり、少年の腕をとって椅子に座らせた。テーブルの上にぶちまけられた料理が店員の手で早く片付けられ、書類が乗せられる。

左右にはつい先ほどまで乳練り合っていたカップル、正面には糞女。ごく自然に主婦の女性が微笑みながらペンを差し出してくる。

「どうぞ」

「え、あ、な……なにが……どうなって……」

「馬鹿でしょ、ここはアタシのアジトの一つよ。店員も客も、全員アタシの部下な訳よ」

部下。そう、ここはアジトの一つ。表向きは普通の喫茶店。裏では人を騙したりする犯罪組織のアジトの一つ。一般人の振りをした部下が集まり、情報を集め、そして犯罪を行う真つ黒な所。

「さて、アンタには選択肢が二つあるわ」

一つ、この書類にサインしてアタシの手足の一つとして働くか。

もう一つ……『ミリカン』というゲームを潰され、次の就職先も全部潰され、新しく企業しても潰され、借金に塗れて取り立てに怯える生き方をする事。父親と一緒に仲良く地獄に落ちるか。

背筋が泡立ち、土気色にまで至った少年の手にはサインペンが一本。

目の前には糞女が用意した悪魔の契約書。

サインすれば最期、逃げる事の出来ない永遠の牢獄に囚われる事を意味する書類。

少年が涙を流しながら懇願している。やめてくれと、なんでもするからと、『あの人の夢を壊さないで』と、ようやく身の程を知った過去の俺がサインをしている光景。

二日連続で最悪な夢を見るとか、ちよつと運命を感じるね。無論、とつても悪い方向の運命だが。ああ、吐き気がする。気分は最悪。あの執着される感覚は、どうにも慣れない。金儲けの為、便利な小道具。あの糞女は、世界は自分を中心に回っていると勘違いした……化物だ。

整備されてるとはいえ馬車なんて俺が住んでいた所では旧時代の遺物扱いの代物だ。もしくは観光名所に少し現役……いや、客引きの為の見世物としてあるぐらいか。

馬の嘶きが響く中、服に着せられているベルが扉を開けて外に出るのを見てから、俺も降りる。

ヘステイア様のエスコートをベルに任せ、俺は周辺警戒を行う。狙撃手の存在しそうな高台や屋根の上、気配無し。奇襲可能な物陰は多数……流石に此処では仕掛けてこない、と良いんだが。

「ミリア君、警戒し過ぎだよ」

「……何をされるのかわからないから、怖いんですよ」

二日連続の悪夢。それも二度目は最悪の最悪、地獄のどん底へと自ら落ちる契約書へのサインする場面だ。あの光景を見てなお、ヘラヘラ笑う事なんて出来やしない。

仕掛けてくる。それがどんな方法であれ、この会場で仕掛けてくるのは間違いないんだ。

続々と集まる高級感溢れる箱馬車。正装した美男美女が目の前の大豪邸に足を運んでいる。

入り口が、地獄へと続く奈落の穴に見えてきて気分が悪くなってきた。背筋が凍り付く様な感覚が――。

「ミリア、僕が付いてるよ」

肩を優しくたたかれ、見上げた先でベルが微笑んでいた。

――あ、この光景どつかで見た事あるなあ。あれは……いや、いい。思い出す必要はない。今は目の前の事に集中しろ。

「ええ……」

今回の『神の宴』はいつもと異なる趣向を凝らしている。らしい？
普段なら眷属の参加を認めない『神の宴』に自らのファミリアに所属する『自慢の男女一名ずつを参加させる様に』と記載があり、神々も面白がってそれを認めたのだ。

その結果、箱馬車から降りてくる美男美女、微弱な神威を伴う神々と共に、冒険者や職人等が着飾ってこの場に居る。

「それより、僕……浮いてないかな」

周囲を落ち着きなく見回して呟いたベルの言葉に思わず嘆息。其処を気にするのか。

確かに、田舎出身の農民が立派な服を着て背伸びしてる様には見えるだろうが、それは雰囲気の問題だ。

「ベル、おどおどしてる方が田舎者っぽさが出るので胸を張ってください。そうすればまともに見えます」

田舎者から、慣れない場に出てきて緊張してる者にまでは印象が違うだろう。

「ミリアは、慣れてるね」

「……まあ、過去に何度か、経験はありますから」

こういう場合は、仮面舞踏会みたいだから嫌いなんだが。

皆が皆、華々しい笑顔の仮面を身に着け、薄っぺらい贅辞をぶつけ合う。一枚仮面を剥ぎ取ったその下で、薄汚く、ドス黒い欲に塗れた思想が巡り巡る、悍ましい会場だ。誰が好き好んでそんな場所に足を運ぶっていうんだ。

「ほら、ベル君はそわそわしない。似合ってるぜ？ ミリア君はピリピリした雰囲気を少しは……あー、なんでもない」

隠せって言いたいんでしょう。ならば隠しましょうか……ああ、こういうのは得意なんだ。

一つ大きく息を吸う。三秒数えて息を吐く、三秒数えて息を吸う。ハイ、完璧な仮面装着完了。

蒼海色のドレスを身に纏うヘステイア様に微笑みかけ、
「礼。 恭しく一

「申し訳ありません。ヘステイア様、お見苦しい所をお見せしました」

濡羽色の質素なドレスに金髪碧眼。子供っぽさが前面に出ない様に注意する以外は、最低限着飾りつつも目立ち過ぎない事を意識したドレスなのでそこまで違和感はないはず。

イメージは、壁際の花か。

「……ミリア、無理してない?」

「いいえ、無理はしていませんよ」

表面を取り繕って、内心を隠して、微笑みという仮面を身に着ける。社交界では必須技術って奴だよ、上手い奴程サクサクと上に上り詰められる。無論、裏工作はガンガンやっていけないとだがね。

……。今は関係ない事だ、前世では当たり前前をやった事なんだがなあ。

「ミリア?」

「あー……あー、あー……」

やばい、きもちわるい……。

医神ミアハ様大活躍。

今回の神の宴にはミアハ様とナーザさんに同行してもらったんだが……。半ば巻き込んだ形で申し訳ないんだけどね。

「大丈夫か?」

「はい、すいませんご迷惑おかけして……」

到着早々に嘔吐するとかワロス。これはゲロイン……いや、そもそも俺ヒロインって柄じゃねえし。

「ミリアはどうしたの? 何かいつもと雰囲気が違うけど」

赤色の生地を使い、右腕の義手を隠すために片腕の袖が長いデザイアのドレスを着こんだナーザさんの質問に曖昧に笑みを浮かべておく。

彼らには、一応事情は話してある。今回の神の宴には非参加の積りだったミアハファミリアの二人。眷属が一人しか居ない為、二人連れてくる事が出来なかった事もあってナーザさんとミアハ様の二人のみの参加であるが。

ともかく、頭数揃えてどうにかしようと考えた訳だ。タケミカツチファミリアも来ているそうだし、一応ディアンケヒトファミリアも来ているらしい……？　なんか神ディアンケヒトが不機嫌そうだったのは覚えてる。

「さて、気分は良くなったか？」

「いえ、全然。むしろ最悪な気分をぶつちぎって記録更新し続けてます」

「……それだけ口が回るなら大丈夫そうね」

やだあーいきたくないよう。おうちかえうー。

「ほら、大丈夫だよ。ボクが付いてるから。ほらベル君、ちゃんとエスコートしてくれよ」

「わかりました神様、ファミリアも」

ベルに差し出された手を見て、一瞬だけあの人の姿が脳裏にちらついていた。『大丈夫だって、俺が付いてる』そう言って進んだ先で、あの人の別離が決定づけられた訳なんだが。

落ち着け、あんな昔の……いや、とりあえずおちつけ。あの頃の事思い出してどうする。

「ファミリア？」

脳裏に浮かんだ姿に戸惑っていると不思議そうにベルが首を傾げて此方を見ていた。そんな仕草が、あの人に重なって見える。

此処に居るのはベルだ、あの人じゃない。あの人は——やめだ！　やめ！　昔の事は、今は忘れよう。

「すいません、すこしぼーっとしてました」
「うん」

ベルの手を取り、足の震えを誤魔化しながら足を進める。

両手に花——いや片方は蕾か——を持ったベルと、ナーザさんを流麗な仕草でエスコートするミアハ様の二人をちらりと見てから、正面に見える場所に視線を向けた。

豪華な宮殿。開かれた正面玄関には気品溢れる姿の神々がそれぞれ二人の眷属を引き連れ、次々に入場していく。

ベルが喉を鳴らす音が微かに聞こえ、同時に心臓が爆発しそうな程

に跳ね回る。

決して足を運びたいとは思わない『夜の世界』、仮面の奥に隠れた醜い意図を見抜き、相手を騙し、自分が騙されぬ様に、嵌められぬ様に動かねばならない、蜘蛛の巣のような領域。

二度と、こういった場所には足を運ぶ積りはなかったのに。しかも既に相手の術中に嵌ったまま、碌な対策も出来ず……まるで、自ら断頭台に上っている気分になる。

また、きもちわるくなってきた。

第一〇二話

玄関ホールは外観に劣る事無く、絢爛豪華だった。

光が太い柱や燭台に乱反射し眩しいぐらいの彩りを描く。広々とした解放感溢れる吹き抜けの造り。壁際に鎮座する男神と女神、それぞれ一体ずつの彫像。素材は、雪花石膏^{アラバスター}だろうか、風化しているモノはイギリスの彫像でよく見る素材で……確か同じ『アラバスター』でも二種類あるんだっただか。

石膏と方解石、特徴がそれぞれ違うが、爪で傷付く方が石膏で傷付かない方が方解石だったはず。わざわざ傷つけて試す必要もないのでどちらでも構わないが。

ベルが仰け反る程の大階段の先、二階部分の大広間が今回の会場である。

俺達が足を運べば、一瞬だけ視線が集まり、すぐに散っていく。だがいくつかの視線はねつとりと此方を捉え離さない。意図はわからないが既に狙われているのか、それとも監視されているのか。

高い天井にシャンデリア型の魔石灯、沢山の長卓の上には普段口に出来ない上流階層の者が口に出出来る豪華で物珍しい料理の数々が所狭しと並べられている。背の高い窓の外はバルコニーになっていた。

日も暮れ、外の景色は宵闇一色に染まりあがっている。会場となっている施設は北のメインストリート界限、高級住宅街に建てられた建造物であるが故に、酒場や雑踏は遠くから微かに響くのみ。オラリオの中でもとりわけ静寂さに包まれた場所であろう。

ギルドが所有する建物であり、申請を行えば相応の金額を支払って貸し切りにし、今回の様なパーティーの会場として利用できる、場所だ。

ダイダロス通りも夜間は静寂に包まれているといえそうだが、浮浪者のうろつく不気味な静寂とは違い、こちらの静寂さは整然としている。

社交界特有の空気にベルが嘆息しているのを見上げ、手を優しく振り解く。

ねちっこい視線が、俺にだけ集まっている。どういう意図があるのかまだわからないが、何か注目されているのは間違いない。集まる視線の先を確認すれば、どいつもこいつもにこやかな笑顔を張り付けた豪華な服を着た者達ばかり。——着慣れている雰囲気から、金持ち……金回りが良いのは間違いない。多分、商人または商売系ファミリーか。

「あ……あの人、見た事ある……」

「彼ですか、それなりに前から名を上げています方ですね。ベル、あつちの集団には関わらない様に、碌な噂を聞かない要注意派閥です」ファミリー

神々に引き連れられて渋々参加しましたと顔に書いてあるエルフ。燕尾服があれほどに似合わない者はドワーフ以外ないだろうという者も居れば、見事な着こなしを見せるドワーフも居る。獣人も居ればヒューマンもちらほら。珍しく肌を晒さないドレスを着こんだ——本人はしきりに服を摘まんで不満そうにしている——アマゾネスの姿もあった。

神一人に男女一人ずつの眷属。会場は溢れんばかりと言える。

ベルにそれぞれ俺が持ち得る情報を教えつつも、俺の事から視線を外さない連中を再度確認。残念なことに集めていた情報は『冒険者』や『鍛冶師』、あとはリリ関連のソーマファミリア、今回の騒動のアポロンファミリア等ばかりで彼らの情報はほぼない。一応、商売系ファミリアの眷属だろうとは思うが……視線が鬱陶しい。

「あら、来たわね」

「ミアハも居るとは、珍しい」

「ヘファイストス！ タケ！」

流れにそって会場を歩き、隅の方に到着したところで声をかけてきたのは神ヘファイストスに神タケミカツチ、そして二人に寄り添う眷属……にしてはヘファイストス様の眷属は男性一人だが。

「タケの同伴はミコト君に桜花君か、この前は世話になったね」

「い、いえっ、はっ、はいっ……！」

「……いや、此方こそ救援を受けた身。感謝を返す立場ですので」

ガツチガチのミコトと桜花の姿に思わず嘆息。頼りになりそうに

ない。タケミカツチ様は表情険しく此方を見て近づいてきた。

「表情が暗いぞ」

髪飾りを着けているからかそれなりに優し目に頭を撫でられ、一言添えられる。頭を振って振り払い、一言返しておいた。

「あまりにもスキンシップが激しいと勘違いされますよ」

「前にも言われたなその台詞。何を勘違いされるんだ？」

軽い笑みを浮かべたタケミカツチ様の様子にミコトが表情を曇らせ、桜花が吐息を零している。これが神タケミカツチの平常運転なんだろう。相変わらずというか、なんというか。

「勘違い……？ ナアーザよ、私も良く言われるのだがどう……ぐふっ」

「気のせいでは？」

ナアーザさんの肘を脇腹に喰らったミアハ様。擁護不可能な自業自得のミアハ様の発言に苦笑しつつも、軽いやりとりで気分が少し楽になったのを自覚しつつもヘアアイス様視線に向けた。

「眷属の方が一人居ない様子ですが」

「ああ……変わり者でね、主神^{わたし}を置いて、一人で探索に行ってしまったわ」

主神放置か。もう一人の男性の方は着慣れない燕尾服のせいかわ若干落ち着きがなく、しきりに襟元を気にしている様子。若干、着崩れているか。

「失礼」

「おっ……おう……」

着崩れかけていた燕尾服の襟元を整え、出来る限り優しく微笑みを浮かべて声をかける。

「襟元が気になるかもしれませんが、不用意に障るよりは胸を張る方が良いですよ。手の置き場に困るなら背中^で組むといいです」

「あ、ああわかった。感謝する」

後ろに手を回し、胸を張る様に立つだけで大分雰囲気は変わる。彼の浮いていた雰囲気^がマシになり、ヘアアイス様の護衛の一人として見えるぐらいにまでは格が上がったか。

「慣れてるのね」

「まあ、経験は豊富な方ですので」

へファイストス様の言葉に曖昧に頷いておく。出来れば追及は避けて欲しいんだがね。

ベルの方を伺えばミコトと桜花二人と視線を合わしているのが見えた。桜花も落ち着きが無く、ミコトは肩まで露出したドレス姿に落ち着きが無い。彼らも社交場の経験はなさそうだ。

「——やあやあ、集まっているようだね！ オレも混ぜてくれよ！」

「あ、ヘルメス」

聞こえた軽い調子の大声に思わず嘆息。だが、気分はむしろ晴れた。ムカつく神だがその飄々とした態度は今はあるがたい、ぶん殴りたい笑顔なのは相変わらずだが。

弓なりにしている目を見た神タケミカツチが『げっ』と呟くのを見つつ、心の中でぶん殴りながら笑顔を向けた。

横に付き従うのは薄黄色のドレスを身に纏ったアスフィさんと、見知らぬ獣人の男性。筋肉質で見るからに前衛職な雰囲気醸し出す、野性味あふれる人物だった。

「なんでお前がこっちに来るんだ。今まで大した付き合いも無かったろうに」

「おいおいタケミカツチ、ともに団結してことに当たったばかりじゃないか！」

「裏切りましたけどね」

馴れ馴れしくタケミカツチ様に肩を組んだヘルメス様をジトツと睨みながら呟けば、ヘルメスが冷や汗を流し、アスフィさんが間に割り込んできた。

「十八階層の件は既に話が済んでいるはずですが」
「済んでいるのなら何故こちらに？」

あの階層の『裏切り』の清算が済んでいる。そういうならここで馴れ馴れしく関わってくる理由はもうないだろう。何故ならプラスマインスゼロなのだから。

ビクリとアスフィさんの肩が揺れ、ヘルメスがすつとタケミカヅチ様から離れ、大柄な獣人の影に隠れた。

「まだ、怒ってるみたいだねえ」

「ヘルメス様、何をやらかしたんですか」

呆れた様な表情でヘルメスを背に庇っていた獣人が溜息を吐きつつこちらを見下ろしてきた。

「あー、初めまして、で良いよな。ファルガーだ、その、主神が迷惑をかけたな」

「プラスマイナスゼロです。気にしてませんよ」

ただ、顔見知り程度の仲だ。仲良くはない。

「おおう……こりゃ、また……おっかない小人族を敵に回したなヘルメス様。魔術師とは聞いてたがうちのメルルとは大違いだ」

若干引いた様に呆れた表情を浮かべたファルガーから視線を外した所で、ヘルメスがしれっと彼の影から飛び出してベルの前に立った。

「やあ、ベル君！ 決まってるじゃないか！ ナアーザちゃんも似合ってるぜ！」

「あ、ありがとうございます」「どうも……」

「おやミコトちゃん、緊張しているのかい？ せつかくの可愛い顔がもつたないぜ！」

「かつ可愛っ……」

あえて着崩した格好をしていながらも、それが似合っているヘルメスがミコトを揶揄っているのを見ながらも、周囲をもう一度見回す。まだ、視線がねちつくこちらを捉えて離さない。

あまりにもしつこいので顔だけ覚えて後で対処しようと考えながら視線を戻せば、ニヤケ顔のヘルメスが目の前にいた。

「ミリアちゃん、怖い顔してちや台無しだぜ？ 永遠に開かぬ蕾ながら、確かな美しさを秘めてるんだから、せめて笑顔の花を咲かせておくべきさ」

永遠に開かぬ蕾？ まあ小人族なのでこれ以上の成長は見込めないし間違っちゃいないが。随分とキザな言い回しをするもんだ。と

「どうか、ちゃんと笑顔の積りなんだがね。」

「オレだつて神だぜ？」

ヘルメスの台詞に吐息。こんな場所で、こんな視線に晒されて心の底から笑えつて？ 無茶言うなよ。絶対に無理だわ。

「針鼠みたいだな」

「ファルガー、変な事を言うとな脳天を撃ち抜かれますよ」

「……ソレ、本当か？」

ヘルメスの眷属二人のやり取りを見届け、周囲に視線を巡らせる。本拠が空いてる内に襲撃かけられる可能性を考えて本拠、廃教会にはキューイとヴァンが居て警戒はしているが……むしろ逆に心配になってきた。

そんなことを考えている間にも、会場には続々と神と眷属が集まり、華やかな喧噪が生まれていた。

呆気にとられているベルを見上げ、吐息を零していると——思わず口から悲鳴が零れそうになる程の悪寒を感じた。口から悲鳴を零さず、飲み込んで周囲を見回し——見つけた。

『——諸君、今日はよく足を運んでくれた！』

高らかに声を響かせ、檀上と見紛う両階段の踊り場から会場を見下ろす神。

大広間の奥で両手を広げて視線を集めているのは、今回のパーティーの主催者。そして、ヘステイアファミリアを付け狙う諸悪の根源。

日の色をおぼせずブロンドの髪。まるで太陽の光を凝縮したかのような金髪は目に眩しく、煌々とした艶と相まって目を細めねば目を傷めそうな程眩い。口元に浮かべている笑顔もまた、眩しく——まるで、張り付けた様な笑みに背筋が泡立った——その端麗な容姿に視線を釘付けにされる。踊り場に立つ姿、そして左右に立っている眷属、ダフネ・ラウロスにカサンドラ・イリオン、二人の女性を控えており、彼女らとの対比で背丈が高い事が伺える。

頭の上には緑葉を備える月桂樹の冠を身に着けた——アポロンファミリアの主神、アポロンだ。

先程までの神々との軽いやりとりで落ち着きを取り戻した心が騒めく。まるであの女に物欲を孕んだ瞳で見つめられた様な——あの女に絡めとられる様な薄気味悪さを感じた。

『今回は私の一存で趣向を変えてみたが、気に入ってもらえただろうか！』

良く通る声に合わせて、乗りのいい神々が喝采を送る。

『多くの同胞、そして愛する子供達の顔を見れて、私自身喜ばしい限りだ！——今宵は新しき出会いに恵まれる。そんな予感すらする』

賓客を見回す瞳が、確かに此方を見た。まるで——欲しいモノを見る様な目だ。あの、女が……俺を、見る……。

吐き気と眩暈で世界が揺れる。響く女の嗤い声が反響し、ガラガラと音を立てて十二かが崩れていく。大切な、モノが……ぜんぶ……なにひとつのこさず……めちやくちやで——誰かが俺の手を掴んだ。

「ミリア、大丈夫？」

グラグラと揺れる視界、誰かに支えられているのを感じつつも周囲を見回せば、若干の喧噪が広がっていた。『誰か倒れたぞ』と呟く声も聞こえ、その誰かかっていうのが自身の事だと気付いて慌てて頭を振って立つ。

「ごめん、少し体調が良くないかも」

「……そっか」

心配そうな瞳を見上げ、出来る限り気丈に微笑むが、周囲の反応は芳しくない。ミアハ様が近づいてきて顔を覗き込んできた。

「……心労が見える。やはり今宵のパーティーには参加すべきではなかったと思うが」

「いえ、大丈夫です。平気ですから……」

大丈夫、そう、大丈夫だ。

『今日の夜は長い。上質な酒も、食も振る舞おう。ぜひ楽しんでいてくれ！』

神アポロンは何事も無かったかの様に振る舞い、最後に此方を見て

噛った。背筋が凍り付き、表情が固くなるのを自覚しつつも、いつの間にか固く握りしめていたベルの手をそつと振り払った。

「ミリア？」

「……ミリア君、無理そうなら僕達だけで行ってくるけど」

「いえ、私も行きます」

ダメだ、ヘステイア様とベルだけを行かせてはいけない。二人が、遠く離れた場所に行ってしまう。——あの人みたいに。

結局、神アポロンは面識ある神々との挨拶回りで忙しく、すぐに顔を見せに行くという事にはならなかった。

数多くの神々に囲まれ——いや、何かおかしい。神アポロンの周囲に優先的に集まっていくのは、商売系ファミリアの主神ばかり。他の神々もそれとなく近づいて挨拶を交わしているが、何かが変だ。

何故、商売系ファミリアの主神達はこぞって彼の神に近づく？ 皆笑顔の仮面を身に着け、時折此方に視線を向け、談笑している。内容までは聞き取れない。

「ま、せっかく来たんだし、パーティーを楽しもうじゃないか。美味しい料理でも食べようぜ二人とも」

「あ、はい」

「……そうですね」

食欲は一切わかなかった。最初の頃にじゃが丸君以外も食べたいとは願ったが、全くと言っていい程食欲はわかず、目の前の豪勢で美味そうな料理を勧められても首を横に振る事しかできない。

悪い予感が背筋を這い上がってくる。逃れ得ぬ災厄が、まるで台風とか地震の様な予測はできても回避は出来ない、そんな自然災害を前にしたかのような絶望感が足先に絡みつき、脳天に至るまで犯されるかのような感覚。あの、あいつが、あの糞女が、母親が罫を仕掛けている様な、そんな感覚。

ミアハ様にグラスを手渡された。どうやら薬効のある酒らしきものらしい其れを軽く口にし、思わず眉を顰めた。口に合わなかったの

かそうとう不味い、良薬口に苦しつてことわざもあるのでとりあえずチビチビと舐めつつもベルの傍に控える。

「あの、桜花さん、ミコトさん。十八階層ではありがとうございました。沢山、助けてもらって……」

「十三階層で世話になったんだ。むしろこちらが礼を言いたいぐらいだ」

「はい、桜花の言う通りです」

程よく酒精アルコールが回り、思考が滑らかになったところで、桜花とミコトも緊張がほぐれてきたのか若干どもりながらも答えていた。

捜索隊の件だけでなく、ヘステイア様が誘拐された際にも危険を承知でロキファミアリアの後続部隊と共に脱出するのではなく、救援に駆け付けてくれた事について改めて礼を言えば、二人とも困った様に頬を掻いていた。

「お二人こそ、お見事でした。あの様な事態に陥っても果敢にイレギュラー異常事態に対処し、最後にはご自身の手で決着まで……恥ずかしながら、お二人のあの信頼関係には感心致しました」

「確かに二人ともまるで相手が失敗する事なんて一切考えていない様子だったな」

ミコトと桜花の言葉にベルと顔を見合わせ、首を傾げる。

「まあ、ミリアだし？」

「ベルが失敗って……考えづらいし？」

二人して返せば、ミコトと桜花がくすりと笑みを浮かべた。

「羨ましいですね、お二人の関係は」

「そうだな」

二人の様子に苦笑していると、ミコトと桜花が表情を引き締めて小声で呟いた。

「何か困っている事があれば是非、遠慮なさらずにいつでもお声かけください。微力ながら助太刀します」

「助けて貰った礼もある。何かあれば言ってくれ、出来る限りはする」

タケミカツチファミアリアの面々全員が協力を申し出てくれている。それでも——きつと無意味だ。

「それじゃあ、えつと……二人も困った事があつたら、呼んで下さい。力になりますから」

ベルの言葉にミコトと桜花が顔を見合わせ、破顔した。差し出された手を握り返しつつも、会場の中央で神々に囲まれる神アポロンを見て、嘆息。

「伝聞ですが。お二人の成長には目を見張るものがあると聞き及んでいます。何か強くなる秘訣はあるのですか？」

「ベルは改造人間、私お手製のヤバイ薬を飲んで、日々薬物強化ドレベングしている……」

「嘘言わないでくださいよ!？」

「……嘘? いや、何割か真実が混じってるような」

「ミリアまで!？」

龍力薬とか、あれつて薬物強化ドレベングだったじゃん? 今は計画自体が頓挫して試作品が何本か残ってるのみだけだ。

噂に聞く神の宴は変に格式ばった事は無く、神々も思い思いに語り合い、眷属を自慢し、他の神の眷属を褒め、神々で殴り合いの喧嘩を始め眷属に止められている姿もあった。———どうやらとある神の眷属の女性に、別の神がセクハラかまして主神をキレさせたらしい———自由に楽しく神々が騒ぐための宴、まさにその通りだ。

「この建物つて、アポロンファミリアの所有物なんですか？」

「……ベル、この会場はギルドの所有する建造物の一つです。他にも複数ありますが、相応の金額を払えばだれでも貸し切りにできるんですよ」

「ミリアさんの言う通りですね。だれでもとは言いますが、基本的にファミリアや商人等が利用しています」

アスフイさんの補足を聞いたベルが頷いて聞き入っており、其処に神タケミカツチも加わった。

「ホームで宴を開く神も居るが、それはガネーシャぐらいだな。普通ファミリアの本拠地に他派閥の連中を招く真似はしない」

「忍び込み放題であるからな。情報の秘匿もあったものではない」

「そういえばガネーシャが居ないな。アイツなら絶対に目立つし居る

ならすぐにわかるんだが」

「確かに、ガネーシヤは熱い男だからな。街中で竜が起こしたと噂の小火もあつたみたいだからそれで参加できなかつたのではないか」

神タケミカツチと神ミアハ、二人のやり取りで思わず背筋が冷えた。落ち着きを払い、深呼吸を行つて気を落ち着かせる。さつきから気分の浮き沈みが激しい。

俺が深呼吸する隣で神ヘファイストスとヘルメスも四方を見回した。

「今回の宴はまた勝手が違うから、普段来ない様な神もでてるわね」

「ああ、アポロンも面白い計らいをする」

「あそこの彼、神の宴なんてーヴアリスにもならないモノには絶対に参加しないって言つてた神よ」

「珍しいな。神アポロンと随分と親し気だし、何か取引でもしてるんじゃないかい？」

………。全然、落ち着けない。聞こえる話に交じつた情報。どれをとつても最悪で最低な想像を掻き立てるモノばかり。商売系ファミリアがやけに親しげで、めつたに出てこない神も居て、神アポロンが何か企んでる。

嫌でも想像がつくし、どう足掻いても逃げられない。四面楚歌状態だ。

第一〇三話

華やかな会話の交わされる会場。眩しいぐらいに輝くシャンデリアの光を見ながらも嘆息。気分が急転直下で落ち続けていてとてもではないがパーティーを楽しむ余裕はない。

周囲のヒソヒソ話を聞かない様にしながら話していると、ベルの一言から神アポロンの話題へを移り変わっていく。

「アポロンってどんな神なんですか？」

「ん？ 気になるのかい、ベル君」

ヘルメスがすつと近づいてベルに耳打ちし始めたをの身で、再度嘆息。するとミアハ様がぽんぽんと肩を叩いて声をかけてきた。

「ミリア、あまり気を張り過ぎるのではない。気疲れをおこしてしま
うぞ」

「……お気遣いありがとうございます」

優しい気に声をかけられても、心に被さる霧が晴れる事はない。本当に申し訳なく思うのだが、やはり周囲の雰囲気から、気を抜く事ができないのだ。

「ふむ……」

何か考え込む仕草をし始めたミアハ様を見上げていると、会場の入り口の方でざわつ、と大きなどよめきが響いてきてミアハ様も含むすべての者が視線を其方に向けていた。

生憎と小柄故に人垣があるせいかが起きてるのかわからない。

「おつと……大物の登場だ」

ヘルメスの言葉に眉を顰めつつも、『大物』を予測してみるが……誰だ？ ロキファミリアか？

人垣を見つつもぼんやりとそんな事を考えていると、その奥のとある人物の頭が見えて思わず体が震えた。

大柄な獣人、【おうじや猛者】オツタルの頭が見えた。って事はあれは女神フレイヤか。

「あれは……」

「フレイヤ様だよ、ベル君もフレイヤファミリアの名前ぐらい聞いた

事あるだろうか？」

知らない奴は間違いない『もぐり』と言われる程の超有名ファミリア。そして超絶ヤバい特性を持つ女神だ、ってベルが不味くないか？

「ベル、あまり直視しない方がいいです」

「え？ ああ、うん……えっと、なんで？」

ベルの手を引いて注意を逸らせば、ベルの視線が此方を捉えた。もしかして、魅了されてない？ 見ただけでも結構きついと思うんだが。頬を赤らめつつも、しっかりと答えを返してきたのを見て首を傾げる。

距離があつたからか？

「ミリア君、そのままベル君を見張っててくれ。ミリア君は絶対にフレイヤを見ちやだめだぞ！」

各派閥の団員が口を開けたまま呆けた表情を浮かべており、神々がこぞってフレイヤ様を集っている。不思議とベルは魅了されていない様子だが、油断は出来んしな。俺も気を付けないと不味い。

ナアーザさんは首を振って魅了を振り解き、ミコトさんは頬を赤らめぼんやりとしている。桜花は完全に魅了されたのか視線は釘付けになっていて、ヘファイストス様の眷属は目を瞑り腕組をして耐えていた。

「ガネーシャの宴、ガネーシャの緊急の神会に続いて三回目……フレイヤがこうも公の場に姿を現すなんて、本当に珍しいわね」

「一時期、ガネーシャに惚れたのではと噂されていたな」

「あー、ガネーシャの催しである宴に、呼び掛けである神会、二度も出てきたからな。今回はガネーシャは居ない。つまり噂はあくまで噂だったわけか」

ヘファイストス様、ミアハ様、タケミカツチ様の言葉を聞きつつもベルの腕を掴んでヘステイア様の後ろに隠れる。ちよつと————いやかなりあの女神は苦手だ。魅了された時の事を何も覚えてないのが怖すぎる。

「どつどついう事ですかっ？」

ベルが自分から地雷に踏み込んで行ってる。いや、聞くだけなら地

雷じゃないか。というか俺も気になるな。

「普段フレイヤ様は『バベル』の最上階に居て、人前には全く出てこないんだよ。男神の中には彼女を拝みたいがために、一縷の望みを賭けて宴に足を運ぶやつ等も多いぐらいだ」

ヘルメスが返答しつつも鼻の下を伸ばしながらフレイヤ様を拝んでいる。おまえも一縷の望みを賭けた一人じゃねえか。

ともかく、ここまで注目を集めるのだから普段から動きたくないのとは何となく理解できる。が、逆にじゃあなんで今動いてるのって話なんだが。

……まさか、フレイヤファミリアまで敵なんて事は無いよな？ 流石に、それは……死ぬぞ。

そんな風に思っていると、ベルがびくりと震えた。

「どうしたの？」

「いや、その……フレイヤ様と目があって……」

え？

「こつちに來てる」

コツ、コツ、とヒールの音を鳴らす音が聞こえ、背筋が粟立つ。うそだろ、彼女が敵？ 勘弁してくれ、オラリオ最強派閥の片割れだぞ。敵に回して生きてるファミリアは居ないとまで言われる所だ……うそだ、うそだ……」

「來ていたのねヘスティア、ヘファイストスも。神会以来かしら？」

声を聞いただけで、思わず視線を上げかけて慌ててヘスティア様の背中に突っ込んだ。ぎゅつとヘスティア様に抱き着いて顔を背中に押し当てておく。不味い、不味い、不味い。見たい、顔を見たい。声だけでわかる、すぐきれいなめがみさまだってわかる。

「つ……やあフレイヤ、何をしに來たんだい？」

にこやかな声色のフレイヤ様に対し、ヘスティア様の声は若干固い。ベルは大丈夫か心配だが今ヘスティア様から離れたらダメだ、魅了される。ヘスティア様に優しく握られた手を必死に意識しながらも魅了に抗う。

「元氣そうで何よりよ」

ヘファイストス様が返すのを聞いてみると、ふと包み込む様な何かに優しく抱き締められた様な感覚に陥る。これは……ヘステイア様の神威にも似た雰囲気にはっと一息付けた。

「別に？ 挨拶に来ただけよ？ 珍しい顔ぶれが揃っているものだから、足を向けてしまったの」

どういう動きをしているのか、声を聞いただけで理解した。ミアハ様、タケミカツチ様、ヘルメスがそれぞれフレイヤ様を褒めてデレデレしているらしいので、多分周囲を見回したのだろう。それだけで神ですら魅了するのだ、眷属如きが直接目にしたら不味い。

「今宵もそなたは美しいな」

「おほんっ」

「綺麗だなあ」

ヘステイア様の背中により強く抱き着き、気を落ち着けようとした所で、男神三人が苦悶の声を上げた。多分、それぞれナーザさん、ミコトさん、アスフィさんにやられたのだろう。

「……本当にそれだけかい？」

「ふふっ、ミリアの様子も見に来ただけれど……嫌われてしまったかしら？」

脳内が沸騰する様な感覚。ヘステイア様の背中に必死にしがみつく。顔を見るのだけはダメだと自分に言い聞かせても、今すぐ彼女に謝罪しないとイケないという気分になってくる。

「悪いけど、ミリア君は今調子が悪いんだ。キミの魅了も体に毒だから、どこかに行ってくれないか？」

「あら、酷いわねヘステイア。私はただ、心配をしてあげているだけよ？」

思わず、本当に思わずだ。声を聞いただけなのに、彼女が本気で俺を心配しているのだと理解した瞬間に、ヘステイア様の背中から顔を離し、彼女の顔を見ていた。

「ふふっ、久しぶりね。神会の時はあまりお話できなかったから、今日はちゃんと話せると良いのだけれど」

蠱惑的な声に雰囲気、ヘステイア様と手を繋いでいる感触だけが現

実味があつて、それ以外がとろけて消えそうになる。

繋ぐ手だけはしっかりと握りしめたまま、彼女の前にふらふらと出て行ってしまいそうになり、ヘスティア様が間に割り込んで俺の視線を遮った。

「フレイヤ、前にも言ったけどミリア君を魅了しないでくれ」

「あら……残念。なら——」

『残念』という言葉が胸に突き刺さり、ヘスティア様を押しつけてフレイヤ様の前に身を晒したくなるが我慢。標的が変わったのか視線が別の方に向いたらしく少し気分が楽になる。

「——今宵、私に夢を見せてくれないかしら？」

「——見せるかア！」

はいよろこんで！ 痛つたあああッ!?

フレイヤ様の言葉にヘスティア様が吠えた瞬間、ガスツと横っ腹をどつかれてお腹を押さえて蹲る。痛い、なんだ今滅茶苦茶痛かった。コロコロと何かが転がっているのを見つつも視線を上げると、ヘスティア様がベルとフレイヤ様の間に割り込んでいるのが視界に入ってきた。

コルク栓の様なモノが転がって行ってる。多分どつかから吹っ飛んできたモノ……か？ 視線を横に向けるとヘファイストス様の眷属が此方をちらりと見てから瓶のワインを飲んでるのが目に入る。多分、彼が俺の目を覚ましてくれたのだ。痛みで魅了が吹っ飛び、横っ腹を押さえながらなんとか立ち上がってフレイヤ様から距離をとり、彼の横に立った。

「すいません、助かりました」

「いや、強引な方法で悪かったな」

多分、上級鍛冶師でもレベル3か4ぐらいの人なのだろう。声をかけられておらず、姿を見るだけだったので魅了されている訳ではないらしい。険しい表情の彼を見つつもベルとヘスティア様を見て——

——仰天した。

声かけられたのベルじゃねえか。にしては様子がおかしい。

「君も何赤くなってるんだベル君ッ！」

「ごっごめんなさいッ！」

「いいかい、この女神が男と見れば手当たり次第にペロリと食べてしまう怪物ドラゴンみたいなやつなんだ!! 兎きみみたいなのがぼーつと一瞬で取って食われるぞッ!!」

「はいいつ……!」

凄いい、というかおかしな光景だ。ベルは神威を受けるまでもなく魅了に囚われていない。声をかけられただけではなく、頬に手を添えられたのだ。触れられたら、多分俺だと逃れようがない。

女神フレイヤはおかしそうに微笑んで、こちらを見た。おい、ばか、やめろ!

ごく自然にこちらに近づいてくる。視線が絡み合い、逃れられない。ヘステイア様はベルにどれほど女神フレイヤが危険かを説いていて気が付いていない。他の神々は魅了されているのか身動きが取れず、ヘファイストス様の眷属は呻き声を上げて俺から離れていく。自然と、俺とフレイヤ様が向かい合う形で人垣の中央に残される羽目になった。ヘファイストス様助けて! と必死に視線を向けようとするも、目の前の銀色の瞳から逃れられない。

「きれいになったわね」

「え……つと、ありがとうございます?」

喉が引き攣る。なんとか笑みの形を浮かべ、フレイヤ様に返答をする。何をどもってるんだ、失礼だろ!

「ふふつ、可愛いよね」

すつと、一歩近づかれる。見下ろしてくる瞳を見上げていると、フレイヤ様の手が俺の頸筋を優しく撫でた。撫でられた個所がじんわりと熱くなる様な感覚。世界全てがとろける様な、そんな感じ。

目の前の美しい姿に全てを委ねたくなる。きれいで、うつくしくて

……

「ねえ、私の眷属にならない?」

けんぞく?

「そう、私の眷属。貴女が欲しいわ」

かあーつと体が熱くなる。酒を飲んだ時の様な感じとは全く違う、

全身が求められる事に喜び、一瞬で心臓が跳ねあがり、視界がフレイヤ様に染まる。世界の全てが彼女一人で構成されている様な、他のモノ全てがどうでもよくなるような、溶岩を流し込まれたかのような暑さが全身を煮え立たせる。

「どうかしら?。」

フレイヤ様の眷属。この美しい女神さまの眷属になつて——ふと背中の中温かさに思考が止まった。

背中に宿る熱さだけが、全身の熱さとは異なっている。溶岩の様に煮え立つ熱さではない、まるで寄り添う様なほのかな温かさ、じんわりと凍り付いた氷を溶かしていくような、そんな優しい温かさ。

熱を帯びた体が急激に冷えていく。思考に纏わりついていた熱が失せ、残つたのはじんわりとした背中の中温かさのみ。急激に視界が広がり、フレイヤ様以外にも思考を回す余裕が出来た。背中の中温かさは、ヘステイア様の手に宿る温かさに良く似ている。

美しい、この女神さまに対する返答をしなくてはいけない。肯定? できない。俺にはもう、大事なモノがあるから。ヘステイア様とベルが此方に気付いて慌てて駆け寄ってくるのを見つつも、フレイヤ様に笑い掛けた。

「ごめんなさい。貴女の眷属にはなれません」

「ミリア君ツ!! フレイヤツ! 僕の眷属にちよつかいをかけるんじゃないっ!!」

フシャーッと猫の様な威嚇をかますヘステイア様が間に割り込み、ヘステイア様のツイントールがビシバシとしなる。フレイヤ様に失礼な事をしてしまった、せつかくのお誘いであったのに、断つてしまった。

脳裏にこびりつく感覚に思わず視線を下げると、フレイヤ様が優しく微笑んだ。

「残念、ヘステイアの機嫌を損ねてしまったようだし、もう行くわ。それじゃあ」

怒るでもなく、嘆くでもなく、何事も無かったかの様に去っていく美しい女神様。彼女の背中を見送っていると、ヘステイア様に掴みか

かられた。

「大丈夫だったかいミリア君っ、ごめんよ、ボクが目を離れた際に……何か言われたかい？」

「え、ええ、大丈夫ですよヘステイア様。ファミリアの勧誘をされただけですよ」

「なっ——勧誘だって!? 受けたのかいつ!?」

首を横に振って否定すると、ヘステイア様がぼかんと呆けた表情を浮かべて首を傾げた。

「こと、わった？ 断った？ 断れたのかい、ミリア君」

「はい」

理由は、わからない。ただ、ヘステイア様の手を握って、笑った。

「ヘステイア様の眷属ですから」

「………っ！ ミリア君っ！」

ガバツと抱き締められ、ヘステイア様の温かさを感じていると、声をかけられた。

「——早速、あの色ボケにちよっかい出されたなあ」

嵐の様な一時を終えた様な状態だった場に、おちやらけた雰囲気の声が良く通る。

ベルが声をかけてきた方を振り向き、あからさまに動揺して視線があたふたとし始めた。

ヘステイア様の腕から抜け出して視線を向ければ、其処には朱髪の女神が立っていた。女神、だよな？ 男性用の正装してるのは、何か理由が……？

「ロキツ!？」

「よおー、ドチビー。ドレス着れる様になったんやなあ。めっちゃ背伸びしてるようで笑えるわ」

朱色の燕尾服を着こなした神ロキの左右には、薄い緑色を基調にした美しいドレス姿の金髪金眼。アイズ・ヴァレンシユタインと、白い燕尾服を着こなす小人族の金髪碧眼。フィン・デイムナが立っていた。

ベルの動揺はアイズさんのあまりの美しさに、であろう。俺も若干

驚いた、フィン・デイルナがこういった場に出てくるのは珍しいのではないだろうか。

「いつの間に来たんだよ、キミは!? 音もなく現れるんじゃない!」
「うっさいわボケーン!! 意気揚々と会場入りしたらあの腐れおっぱいに全部持つてかれたんじゃー!?!」

オラリオ最大派閥、双頭の片割れであるフレイヤファミリアの登場——それも相当珍しい——に注目を全部持つて行かれたのだろう。それでも【剣姫】や【勇者】^{フレイバー}の登場に周囲は若干騒めいている。特に女性達の黄色い声が顕著だろう。『きゃーブレイバー様よー』とか『可愛いのにカッコいいっ』とか『あの小人誰?』という怨念の籠ってそうな声——
「まあ、久しぶりだね【リトル・ルーキー】【魔銃使い】」
「……………」

軽い調子で片手を上げて挨拶してくるフィンに対し、アイズさんは何処か落ち着きが無い。

ベルの方は完全にアイズさんに見惚れている様子なので俺が前に出て会釈を交わした。

「お久しぶりです【ブレイバー】様、【剣姫】様」

「そう畏まらなくていい、と言いたかったんだけどね」

周囲から突き刺さる嫉妬の視線。女性陣が此方に向ける視線には殺意すら混じっているモノがある。

「相変わらずの人気ですね【ブレイバー】様は」

冷や汗を流しつつも『オラリオで付き合いたい男性堂々の第一位』に声をかければ、苦笑しつつも「だから来たくなかったんだよね」と呟いた。俺も貴方には来ないで欲しかったです、とはとてもではないが口に来ない。

したら殺される気がするぞ。

アイズさんに見惚れていたベルの腿の辺りを容赦なく抓ったヘスティア様を見つつも、神ロキに視線を移せば、神ロキはベルに近づいてジロジロと観察しはじめた。

「ふーん、その少年がドチビのもう一人の眷属か」

もう一人、ああ、俺とは面識あるからね。

無遠慮にジロジロと観察していた神ロキが身を放し、評価を口にした。

「何だかパツと冴えんなあ。ウチのアイズたんとは天地の差や！」

ベルの胸に突き刺さる神ロキの評価。ベルがふらりとふらついてヘステイア様に支えて貰うのを見てみると、神ロキはこちらに近づいてきた。

「よお、今日は調子は良さそうやな。てっきりチビっとなるかと思っ
とったけど」

「あの、あまり人聞きの悪い事言わないで貰えませんかね」

あつはつはと軽快に笑う姿に嘆息しつつも神ロキを見上げて呟く。

「それで、用もなく私に声をかけるとは思えませんが」

「ん、察しがええな。なんやディアンケヒトんことこそそそやつと
るやろ。ディアンケヒトがうっさいぐらいにドヤ顔かましとるし、何
しとんのか探りかけようかと思うてな」

あー……ドヤ顔……『再生薬』の事かな？ まだ発表してないし、そ
もそも試作段階でしかないから外部に漏らせない情報である。

「すいません。一応作成物に関しては何っていますますが、契約上他の
ファミリアには漏らせない機密情報に当たりますので」

「ほうん、なんやおもろいモンできるんやったらウチに來いや。使え
そうなモンなら買い取ったるわ」

追及をやめて此方から離れていく神ロキ。フィンがそれとなく近
づいてきて声をかけてきた。

「何を作っているのか、だけでも……っていうのはダメかな？」

「すいません、教えるとディアンケヒトファミリアを敵に回しかねま
せんし……」

「そうか、無理を言って悪かったよ。所で、キミはダンスの相手は――
――」

フィンが言葉を続けるより前に、ヘステイア様と神ロキが醜い眷属
自慢をし始めたらしく周囲が騒めきだし、野次を飛ばし始める。それ
ぞれベルとアイズさんが止めようとしている様子だが彼らでは全く

の力不足。止める事もできずにあたふたして二人してアイコンタクト『止めれますか?』『無理』というやり取りを行った二人は、次に頼りになる人物を探し、二人して此方を見た。

「ブレイバー」、助けを呼んでいるみたいですよ」

「魔銃使い」、キミも呼ばれているみたいだよ」

フィンと並んで溜息を零し、それぞれの主神を止めるべく足を向けた。

第一〇四話

ヘステイア様と神ロキの恒例らしいやり取りをなんとか仲裁し、彼らと別れた。

ベルが名残惜しげにアイズさんを見つめ、アイズさんの方も何か言いたげな表情でフィンと共にロキに連れ添って行ってしまった。その光景を見ていたら『ロミオとジュリエット』という悲劇が浮かんだが……悲恋話となるかはベル次第だろう。アイズさんは気付いてないのか自覚がないのかどちらかはわからないが、ベルを気にしているっぽいしな。

少し、寂しい気持ちはあるが。

その後はヘステイア様と共に挨拶回り。ヘステイア様が天界に居た頃に知り合いだった神々とそれとなく言葉を交わしたのだが、なんというか……。やはりヘステイア様の知り合いは誰もかれもが同じ雰囲気を持っており、類は友を呼ぶというか、誰もかれもが優しい気な雰囲気身を纏っていたのが印象的だった。

そんな挨拶回りをしつつ、美酒に美食……かなり癪だが神アポロンの言う通り、酒も食事も美味と言わざるを得ないそれらをそこそこ堪能していれば、気が付けば既に開始から二時間ほどが経過していた。

「ふう……」

「ベル、水をどうぞ」

「ありがと」

若干頬に朱がさし、酒に酔っているのか場に酔っているのか、ベルが疲れた様な溜息を零しつつ壁にもたれかかりながらパーティー会場を見ていた。水を渡しつつも横に並んで会場を見回せば、未だに鬱陶しい視線が俺を見ている事に気付く。本当に鬱陶しいな全く。

流麗な音楽が流れだし、男性たち——神も眷属も分け隔てなく

——美神たる神フレイヤをダンスに誘おうと周囲に群がっている様子が見て取れた。大変そうだなあ……あ、こつち見て微笑んでる。小さく手を振れば、フレイヤ様も小さく手を振り返してくれた。やったぜ！

視界の端で性懲りもなく口喧嘩をおっぱじめて神々に囃し立てられてるヘステイア様と神ロキから視線を逸らしつつ、ベルを見上げればぼんやりとした表情でシャンデリアを見上げていた。

「疲れました?」

「……うん。こんな世界に足を踏み入れたのは初めてで……僕もいつか慣れるのかな」

ふむ。絢爛豪華な世界に慣れ、かあ。

「どうでしょうかね」

「ミリアは慣れてるんじゃないの?」

「慣れ、というよりは諦めに近いかもしれません」

慣れない雰囲気なのは、今も変わらない。諦めて染まるしかなかったから、慣れてる風に見えるんだと思う。

「私は、こういう場所、すつごく嫌いなんですよ」

「それは……」

「皆、笑顔ですよね」

会話する者達は皆、笑顔を浮かべている。だが——その何割が本物なのだろうか?

言える。九割以上が偽物だと、嬉しくもないのに浮かべられる薄っぺらな笑顔。右を見ても、左を見ても、誰もが同じ笑顔で会話をしている歪な空間。誰もおかしいとは思わないのだろうか? 少なくとも、俺はそんな異質でありながら、それが当たり前な場所であるこの場所は好きになれない。

「気持ち悪いって、感じませんか?」

少なくとも、俺はこういう場所は『楽しい』とは感じられない。

次々と運び込まれてくる豪華な料理に、給仕が手渡す鮮やかな色合いの葡萄酒。どこからともなく流れる流麗な音楽が流れ出し、中央では舞踏が始まっている。

懲りずにヘステイア様とロキ様が口喧嘩をしていた。

ミリアと共に壁に凭れて眺める景色。しつとりと濡れた様な黒色

のドレスを着こなしたミリアが微笑みを浮かべて会場を見つめていて、それなのにどこか虚ろな雰囲気を感じる。

彼女の言葉は、どこか空虚だ。中身が無く、空っぽで、それでいてドロリと濁った何かが這い出てきそう。そんな不気味な台詞を零したミリアが、頭を振って虚ろな雰囲気打ち消して微笑む。

「すいません、やっぱこういう所に来ると思い出しちゃうんですね。私はヘステイア様と神ロキを止めてきます。ベルは夜風に当たってくると良いですよ」

「……うん」

今度はちゃんとした微笑みを浮かべ、ミリアは溜息を零しながらヘステイア様とロキ様を仲裁すべく足を運んでいった。その背を見送り、彼女が二人をなんとか止めようとフィンさんと共に四苦八苦している光景から逃げ出す様に壁から背を離れた。

この絢爛豪華な世界に夢を見ていた。もっと美しく煌びやかに輝く世界なのだと思っていた。感じる視線が粘つく絡みついて離れない。此方を遠くからちらりと見ては囁く様に言葉を交わす商人風の人たち。ミリアを見て微笑む人がいて、それなのにどこかズレた感じ。

ミリアの言う通り表面上は美しいのに、一皮剥いたら悍ましい何かが出てきそう。そんなモノを感じ取るには十分な程、粘っこい視線が離れない。

この会場に足を運ぶ前、ミリアが体調を崩していた。昨日の夜から隠し切れない不安を抱いて、夜には魘されて飛び起きる程に——ミリアが魘されだしたのは数日前からだ——ヘステイア様も気付いていて、僕も昨日の晩に気付かされた。

ミリアは何も言わずに居て、それを隠そうとしている。聞き出した気持ちにはあった。けれど魘される原因の一つが自身にあると理解した今は、それを切り出す勇氣は無かった。

ミリアが魘されだしたのは、アポロンファミリアと酒場でいざこざを起こした日からで、彼女にとってそれがとてつもない心労となっているのは間違いない。ヘステイア様もそう口にしていた。

少し歩いて開け放たれた窓辺から、外に出る。

バルコニーに足を踏み入れた瞬間、澄んだ空気に包まれた。

頭上には雲一つない星空。蒼い闇が周囲を覆い、ここからは見えな
いメインストリートの方角はうつすらと輝きが見て取れた。

軽く深呼吸をして気分を入れ替えようとすると、何処か隅っこにこ
びりつく泥の様なモノが残っている様な気がして落ち着かない。

「……はぁ」

泥の様に思い溜息が溜息が口から零れ落ちる。

もう少し外の空気に当たってしようと、豪華な造りの手摺りに歩み
寄った時だった。

蒼い闇に沈む噴水の設けられた庭。いくつかの魔石灯の明りの下
に見覚えのある姿を見つけた。

会場施設であるこの場所は広い敷地を有し、眼下のような背の高い
庭木に囲まれた青い芝の庭がある。

宴の会場から離れた魔石灯の下、『焰蜂亭』でミリアを蹴り飛ばし、
ヴェルフと二人で挑んであっけなく返り討ちに遭った青年。ヒュア
キントスと、あとは見たことがないヒューマンの男性が一人。

『——早ければ明朝——仕掛ける時期は——まずは竜を仕留め——い
いな、ザニス？』

『言われなくとも——報酬は——』

背筋を駆け抜ける悪寒。言葉にならない予感に突き動かされて、反
射的な行動だった。

集中し恩恵によって強化された聴覚を研ぎ澄ませる。

二人がいるのは噴水のそばの街灯型の魔石灯の下、バルコニーから
距離があつて声はよく聞こえないが、唇の動きからなんとか会話の一
部を予測していく。

『ザニス』という名前。どこかで聞いた名前だと思案しながらも、よ
り詳細な情報を求めて手摺に手をつけて身を乗り出す。

しかしそこで、こちらの視線に気が付いたららしいヒュアキントスさ
んが振り仰いだ。彼の碧眼と視線がぶつかり、一瞬、息が止まる。

「ベル君？」

「……！」

唐突に背後にかけられた声に振り向く。

窓辺に立っていたヘルメス様が、広間の光景を背にいぶかしげな表情を浮かべている。慌てて庭園に視線を戻せば、ヒュアキントスさん達は忽然と姿を消していた。

「こんなところで何をしているんだい？」

「あ、いえ……別に」

いぶかしげな表情のまま歩み寄ってくるヘルメス様に、言葉を濁す。

盗み聞きをしていた手前、後ろめたさがあった。彼らの会話が非常に気になるし、悪い事が起きる前触れの様な予感を感じつつも、なんでもありませんと誤魔化してしまう。

「逢引でも盗み見ていたのかい？」

「い、いえっ」

いぶかしげな表情から一変、ニヤニヤとした軽薄な笑みを浮かべたヘルメス様が僕にグラスを差し出しながら庭園を見下ろした。

「ううん？ いい場面を見ていたのかなって思ったんだけどなあ」

「そ、そんな事しませんよ」

言葉に詰まりつつも何とか返事を返した。やっていた事自体はそう大した違いがない事を自覚しつつも誤魔化すと、ヘルメス様がこれ見よがしに庭園を見下ろすのをやめ、こちらに向き直った。

つい受け取ってしまったグラスを片手にヘルメス様を見上げると、ヘルメス様は一笑した。

「ゆつくり話す機会がなかったからね。可愛い女の子じゃなくて悪いけど、いいかい？」

おどけた物言いに笑みが零れ、「勿論です」と快諾した。

先ほどの光景と『ザニス』という名前。それだけは忘れないように頭の片隅に刻み込みつつ、ヘルメス様とバルコニーで向かい合った。「君とミリアちゃん、ヘステイアファミリアの快進撃は留まることを知らないね。前から気になっていたんだけど十八階層での戦いっぷりを見て、オレもすっかり君の応援者ファンになってしまったよ」

「そ、そんなつ……」

最初こそうろたえたけれど、陽気な笑みを浮かべたヘルメス様の雰囲気、肩の力が抜ける。賞賛したり、からかったり、冗談を言ったり。今まで会った人の中では、ミリアのように話術が上手い。

会場から聞こえてくる心地よい旋律を耳にしながら、ヘルメス様と当り障りのない話題を交わしていく。

「ベル君は、どうして冒険者になったんだい？」

一瞬口ごもり、『ダンジョンに運命の出会いを求めて』とか、『英雄になる夢が捨てきれなくて』とか、今更ながらアレな理由を語るのに羞恥を感じた。

それ以前にミリアと似ている部分のあるヘルメス様を見ていたら過去、ミリアとダンジョンの中で出会った際に恥ずかしげもなく冒険者になった理由を彼女に話していた事を思い出してしまい、思わず頭を抱えてしまう。

「ベル君、大丈夫かい？ 酒を飲みすぎかな、でも良い経験だろう？」

「いえ、ちよつと恥ずかしい過去を思い出しまして」

「へえ……」

ニヤニヤと揶揄う様な笑みを浮かべたヘルメス様の様子に思わず身を引いた。神の前に極上の餌を与えてしまった事を自覚して身震いしていると、ヘルメス様の揶揄う様な笑みが柔らかな笑みへと変化した。

「恥ずかしい過去っていうのには興味があるけど、オレが気になってるのは別の事でね」

「は、はあ……」

羞恥的な過去への詮索を逃れた事による安堵半分、何を聞かれるのか恐怖半分の返事を返す。

ヘルメス様は安心させるような笑みを浮かべた。

「ベル君はオラリオに来るまでは、ずっと生まれ故郷に？」

「はい、山奥の田舎で……だから、知らない事が沢山あって」

当り障りのない質問。こちらの緊張を解こうとしているらしい事に気づきつつも、ミリアとは語り口が異なる事に気づき、思わずミリ

アの姿を探してしまおう。

煌びやかな会場、ミリアは会場に見劣りせず、かといって目立たない衣装を身に纏っていた。それに加えて小柄で人混みに紛れてしまえば、そう簡単に見つけられない。

「それじゃあ、ゼウスっていう神は知っているかい？」

「ゼウス様……？ えっと、知らないです。有名な方なんですか？」

元最強のファミリア。現在オラリオを二分している最強といえぱロキファミリアとフレイヤファミリアの二つだが、それは十五年前からの話であってそれ以前はゼウスファミリアとヘラファミリアの二大派閥が君臨していた。

その二大派閥との形勢がひっくり返り、今の形勢となったのが十五年前だとヘルメス様は語った。

勢力争いに負けた結果。といえぱそうらしいが、直接的な原因となったのはとある冒険者依頼の失敗によるもの。

そしてその冒険者依頼というのが、下界全土から求められている三大冒険者依頼なのだという。

僕たち地上の人間が『古代』と呼ぶほどの昔の時代、ダンジョンから地上に進出した三体の怪物——その討伐依頼。

『古代』の時代、つまり今から千年以上も前にダンジョンから進出したモンスターが生き残り、地上に君臨しているという事実には、僕は息をのんだ。

祖先オリジナルの怪物から派生した子孫、というわけではない。その祖先オリジナルの怪物そのものが約千年の時を超えてなお、地上にいる。

そして、ここ迷宮都市オラリオは世界の状況の中でも飛びぬけている。ダンジョンというモンスターの坩堝が冒険者たちを鍛え上げ、ランクアップの機会を絶えずもたらしているからだ。

世界各地で強者と称えられている人達のステータスもせいぜいがレベル2、レベル3であるらしい。

地上に住み着いた祖先オリジナルから劣化した怪物や、人間同士の争いから得られる経験値は迷宮のものに比べ、質が劣る。その結果だとヘルメス様がつぶやいた。

「迷宮都市が『世界の中心』とも呼ばれる、最大の理由がその絶大な力によるものだ。」

そしてゼウスファミリア、ヘラファミリアの最盛期。まさに世界最強の派閥として君臨したかのファミリアは、満を持して三大冒険者依頼クエストに挑んだ。陸の王者、海ペヒーモスの覇王リヴァイヤサンを次々に撃破して——残る一体に完敗した。

『黒竜』、僕の知るその怪物は『隻眼の竜』と言った。

子供のころに読み耽った英雄譚の中で、僕はその絶望の象徴と出会った。

遡る『古代』、このオラリオの地で偉業を成した英雄達の物語。幼き日の愛読書であった『迷宮神聖譚』——その最終章を飾る。暴虐の怪物。

最強の英雄が己の命と引き換えに片目を潰し、この地から退けた、竜の王。

生ける災厄。生ける伝承。生ける終末。

数多の英雄譚、そして御伽噺に語られる伝説の存在。それがただの空想の産物ではなく、実際に世界に居るのだと伝えられ……僕は果てしない衝撃を受けた。

そして、その伝説の怪物、『隻眼の竜』『黒竜』『生ける災厄』『生ける伝承』『生ける終末』それに挑んだ世界最強派閥のゼウス、ヘラ、二つのファミリアは——全滅した。

主力を失い、派閥の力が大きく衰退した彼らを、当時彼らと仲が悪かったロキ様とフレイヤ様が結託し、都市から追い出した。

世間知らずの僕に、世界最強を絡めて下界の現状を説明してくれたヘルメス様の言葉に立ち尽くす。

ちよつと前まで辺境の田舎に閉じこもっていたとはいえ、無知であつたことを痛感させられる。一見、平和そうに見える世界が、そんな災厄ばくだんを抱えていたなんて。

『黒竜』はどこにいいのか、今は何をしているのか。知りたいことが次々に浮かんでくる——けれど、それを聞く事は僕にはできなかった。一介の冒険者に過ぎない僕には詳しく知る必要も、知つていい理

由もないのかもしれない。

少なくとも彼の竜の最も近くにいるのは——二つの都市最大派閥に所属する、あの憧憬の剣士達なのだろう。

「さて、話も長くなって悪いね。でも一つだけ、聞きたいことがあってね」

緊張を解く。それに僕に下界の状勢を教えてくれたヘルメス様が知りたい事。それが何なのかと彼を見た。

「ミリアちゃんについて、どこまで知ってるのかなって？」

ミリアについて、どこまで知っているのか。

かつて幸せに暮らしていた事、それを壊した誰かがいて、悪事を働かされていた事。大雑把ならましは知っている。けれど、彼女の過去に触れるには、いささか勇気が足りなかった。

「ええと、その、あらましぐらいは……」

「詳細は、知らない？」

「はい」

ヘルメス様が顎に手を当てて、会場の方に視線を向けたまま呟く様に語る。

「ミリアちゃんは、今……追いつめられてるみたいだね」

言葉を失った。確かに、ミリアは今、何かに追いつて立てられるかのようになり、焦り、怯え、震えている。

僕はそれが何かを知りたいと思った。けれど、ヘステイア様は探らない様にと言った。自らが話していいと思える様になるまで、探るべきじゃない。追いつめられているミリアを、更に追いつめてしまう結果になりかねないから。

「はい、何かに怯えてるみたいで」

「ミリアちゃんはさ、聞けば答えてくれる子だよ」

ヘルメス様の言葉の通り、ミリアは聞けば答えてくれる。誤魔化しはするだろう、けれどさらに一步踏み込めば、彼女は全てをさらけ出してくれる。包み隠したりせずに、背負ったモノも、負った傷も、それが自身の心を抉る様な事であっても、踏み込めば答えてくれる。

だからこそ、ヘステイア様は『聞かないであげてくれ』と言ったの

だ。いつか、ミリアの心の傷が癒えて、自ら語れる様になるまでは、そっとしておくのだと。

「聞く気はない、と?」

「はい、ミリアが自分で言える様になるまで待つって、神様と二人で決めたんです」

「その傷が、今まさに抉られるかもしれないこの場所でもかい?」

胸に杭を打ち込まれたような衝撃を受け、息が詰まった。急ぎ、ミリアの姿を探す。

今度は、簡単に見つけられた。数多の人に囲まれ、空虚な微笑みを浮かべながら何かしらの返事をしているのが見て取れる。どこか虚ろで、作り物染みた微笑み。

一瞬だけ、視線が合った。一瞬驚き、そして微笑んだ。視線で『来るな』と訴えかけてくる。それでも僕は一步を踏み出し、ヘルメス様に肩を掴まれて止められた。

「やめた方がいい」

「でも、ミリアが……」

「ベル君、君は言っちゃ悪いが世間知らずだ。下手な事をする商人に反感を抱かれかねない。君は、腹芸そついうのは苦手だろう?」

もし僕が行ったとして、彼女を取り囲む者たちの相手ができるかといえ、そうではない。

彼らは商業系ファミリアの者達で、ミリアが連れている竜種、キューイとヴァンの素材を求めて交渉を行おうと群がっているらしい。本来ならガネーシャファミリアがそれを阻止するはずが、今回のパーティに参加していない事から、直接彼女に声をかけられる機会は今しかない。

世間知らずで無知な僕が彼らを止められるとは思えない。百戦錬磨の商人達に囲まれて、彼女は空虚な笑みを浮かべている。それでいて、華麗に彼らの商談を回避していく。僕が割り込んだところで、出来るのは彼女をあの場合から引っぱり出す事のみ。それをすれば反感を買いかねない、だからこそ、反感を買われぬ様に丁重な態度でミリアは彼らに対応しているのだ。

無知な僕には到底出来っこない芸当だ。何もできない口惜しさに俯き、拳を握り締めた。

「……僕は」

「ベル君、適材適所って言葉は知っているかい？ ほら、あの通り」

ヘルメス様の言葉を聞いて顔を上げれば、ミアアの手を優しく引いて商人の群れから連れ出していく人物の姿があった。

【フレイバー勇者】……」

フィンさんに手を引かれたミアアが彼らから離れていく。第一級冒険者としての名声と、最大派閥という強みを生かし、ミアアをあの場合から連れ出した彼の人物。

ミアアと同じ金髪碧眼。絵になるほどに、お似合いだと感じた。

「いやあ、二人とも見た目は幼いけど——お似合いだねえ」

ヘルメス様も同じ感想を抱いたのかうんうんと頷きながら陽気に笑い、ふと此方を見てニヤリと笑った。

「ミアアちゃんはダンスするみたいだけど、ベル君はダンスはしないのかい？」

暗く沈んだ僕を元気づける為にか、今まで以上に陽気に誘ってくるヘルメス様になんとか笑い返ししながら、会場に視線を向けると、ミアアがフィンさんと共に此方に歩いてくる姿が見えた。

ヘルメス様の言う通り、白い燕尾服姿のフィンさんと、黒いドレス姿のミアアの二人はとても絵になる。第一級冒険者と、第三級冒険者。アイズさんと僕、それと同じで天地の差があるはずのフィンさんとミアア。そうでありながら、絵になる二人を見て思わず視線をそらした。

きつと、僕とアイズさんが並んだら二人と違って失笑されるのだろうな。

第一〇五話

商人連中のしつこい追撃。黒い三連星どころか、黒い十八連星だった訳で、いくらなんでも数が多すぎてさばききれない。途中、ベルがこちらに気付いて動きかけたが神ヘルメスが止めた。

なぜベルのそばに神ヘルメスがいるのか気になるところではあるが、ベルを止めたのはナイス判断。乱入された結果、話が拗れて面倒な方向——いちやもんつけられて強制的に取引契約を結ばれる流れになったらヤバかったんだ。

とはいえ本当にしつこい。しかも……半ば脅し染みた事も言っていた。『今取引しなければ後悔する』だとよ、バカですかね？ 契約関係で脅す様な事を言えば警戒するのも当たり前だろうに。

やんわりとふわふわした言動でなんとかのらりくらりと回避を続けていると、途中でフィンがダンスに誘ってきた。それとなく周囲の商人を圧で押しつけ、俺の前に現れたフィンは唐突に跪いて『ぜひ僕と踊ってほしい』と直球のドストレートをぶち込んできやがった。周囲がざわめくのも厭わず、顔を上げてウインクしたイケメンにはこちらも嘆息。仕方なく彼の手を取った訳だが……。

「助けてくれた事には感謝していますよ」

「いや、僕の方がお礼を言う側さ」

優しくエスコートして商人の輪を抜け出しながら礼を言えば、フィンは苦笑を浮かべつつ周囲をそれとなく見回した。俺もつられて見回せば、女性達の発情した獣を思わせる視線に晒され、思わず身震いした。

いや、待って、冒険者の女性って……肉食過ぎない？

確かに見た目は美しく、可憐な女性も多い。しかし、それを打ち消しかねない勢いでフィンに熱い視線を向ける女性ばかり。もっぱら、腕っぷしに自信のある者は冒険者になる訳で……普通の男性冒険者は粗野で汚いイメージが強い。そんな中、冒険者の男性にしては非常に珍しく庇護欲を誘うフィンの容姿、そして第一級冒険者という肩書が女性の気を引くのだ。

それで、女性の方も基本は腕つぶしに自信がある訳で、結果として女性もかなり強い。個性とか腕つぶしとかいろいろ。本来なら女性が男性と殴り合えばただでは済まないはずが、神の恩恵のおかげでまっとうに殴り合える訳だ。結果として女性も気が強い者が増え——

——そういった女性がこの場に多いっばい？

「ブレイバー」様、すいませんやつぱ踊るのやめたいんですが。殺されそうです」

「……埋め合わせはする」

「いや、割と真面目に命が危なそうなんですが」

本気で言いたい。殺意に満ちた視線多すぎ。『何あの小娘』とか聞こえるよ……ナイフ握りしめてても違和感のない女性ばかりに見えますねえ。いや、確かに競争率は激しいんだけど、いくらなんでも殺意剥き出しの女性多くない？ ティオネちゃんが可愛く見えるレベル……うわ、殺気の三割がアマゾネスなんだが。物騒な種族だなあ。

「ブレイバー」様、埋め合わせを今すぐしてほしいのですが」

胃に穴があきそう。

「何をすればいいのかな？」

「剣姫」とうちの団長を躍らせてあげれませんか？」

ベル君の事だし、アイズさんと踊れるなら踊りたいだろう。というかそういう報酬があってもいいよね？

さつきからアイズさんの所に数人の神や男性が群がって『僕と踊ってください！』『ごめんなさい』の即答で切り捨てられまくってるのが見えるし。助けてもらっておいて要求するのはアレ過ぎるが、いくらなんでも女性の嫉妬で殺されかねないところに引つ張り出されておしまいだったら、商人に囲まれてたほうがはるかにマシだし。

「……良いけど、誘うのは彼の方からでないと体裁が悪いんじゃないかい？」

「私が説得しますので……貴方は神ロキをどうにかしてくれれば」

難関は神ロキの存在である。今はヘステイア様と言い争いを——

——待って、ついきつき止めたばっかりなのにまた言い争いしてるん

「ただ。ちよつと仲良すぎじゃないですかね……。」

「わかったよ」

針の筵に立たされた気分のまま微笑みつつもベルと神ヘルメスの元に向かえば、ヘルメスがニヤニヤ笑いながら、ベルが申し訳なさそうに俺とフィンを出迎えた。

「やあ、お似合いのカップルだねお二人さん」

「冗談でも笑えない事言わないでください。死にたいんですか？」

そのバルコニーから突き落とすぞ。

「さつきぶりだね【リトル・ルーキー】、それと神ヘルメス」

「あ、えつと……こんばんは」

若干気圧された様な雰囲気を感じさせるベルに首をかしげるフィン。ベルが一瞬こつちを見て、またも申し訳なさそうな雰囲気をしている。別にベルじゃあの商人相手は無理だったろうから気にしてないんだが。

何やら意気消沈してるのは気になるが。アイズさんと踊れば気もはれるんじゃないか？

「【リトル・ルーキー】では落ち着かないかい？ だったらベル・クラネルと呼ばせてもらおうけれど」

「い、いえ、その……呼び捨てでお願いします」

「ふむ、僕は今から彼女とダンスに行くんだけど、君に少しお願いがあつてね」

お願い、と聞いた瞬間にベルが驚きの表情を浮かべて姿勢を正す。第一級冒険者からのお願いとは何だと身構えるベルに対し、フィンは小さく笑みを浮かべて口を開いた。

「悪いんだけど、アイズと踊ってやってくれないかい？」

「へ？」

「アイズはああ見えて、一度も踊った事がなくてね」

それに僕が離れてるとああなるから。そういつてアイズさんの方を示すフィン。示されたアイズさんはまたも誘蛾灯に誘われるかの如く近寄ってくる男性に頭を下げられ、神も人も問わずに『ごめんなさい』と言い続ける機械になっている。というかアイズさんも困った

ような疲れた様な表情でロキをちらちらとみている。

いつもは番犬よろしく神ロキがべつとりついて回っているのだから、その神ロキがヘステイア様に掛かり切りなせいで今晚はアイズさんがひっきりなしに男性に誘われ続けて辟易しているらしい。

「それで、僕も離れてる今、あんなふうにアイズが誘いを断り続ける羽目になっているんだ。申し訳ないけど、ベル・クラネル、君がアイズをダンスに誘ってやってくれないかい？」

「ええっ!? ぼ、僕がっ!？」

驚きの表情を浮かべたベルに対し、フィンがきさくそうにうなずく。

「ああ、君の誘いなら断らないだろうからね。頼むよ」

「で、でも……僕なんかが誘う訳には……」

そう言いつつも本心では誘いたいのだろう。ベルがちらちらとアイズさんの方に視線を向けている。説得してみるかと口を開こうとした瞬間、ヘルメスが大業な仕草で両手を広げて立ち上がった。

「オレに任せてくれ！ なんとって愛の神だ！」

「……はあ？」

思わず変な声飛び出たわ。何言っただこいつ。

胡乱げな視線を向けると、パチリと音がしそうな程のウインクをしてみせたヘルメスがベルの手を取って歩き出した。フィンの方に視線を向ければ、肩をすくめられる。

「まあ、任せてみよう。悪い事には……ならない、はずだ。多分だけど」

「だと良いですね」

神ヘルメスは背中を刺してくる神だぞ。そう思いながらも腕を引かれるベルの後に続いていく。

「神ロキとヘステイア様は」

「それもオレが何とかしよう！」

「無理、無理ですって！」

ついにつみ合いをし始めた神ロキとヘステイア様の方に視線を向けて自信満々に言い放った神ヘルメス。ベルは腕を引かれなが

らも必死に無理だと伝えている。どこか青ざめている姿に嘆息しつつもベルの腰をぼんとたたいた。

「ベル、男は度胸ですよ」

「僕はミリアみたいにはなれないよ！」

なんだそれは、俺が男みたいだと言いたいのか。まあ、ある意味では間違っていないが。

アイズさんに踊りを申し込み、即殺され続けている男連中を掻き分けて神ヘルメスが颯爽とベルを伴いながらアイズさんの前に躍り出た。ついでに後ろからそれに続いた俺とフィンをアイズさんがちらりと見つめ、ヘルメスに向き直ろうとした瞬間、神ヘルメスに腕を掴まれたベルに気付いて目を見開く。

「あ……」

「ああ、麗しの【剣姫】！　どうかこのヘルメスと踊って頂けないだろうか！」

周囲に集まっていた男連中が『ヘルメスが行ったぞ』『百人目はヘルメスか』『断るだろ。百人切り達成かあ』などと笑っている。ついでにヘルメスの凶行に気付いた神ロキがヘステイア様と取っ組み合いをやめてヘルメスを射殺す様な目で睨みつけている。

アイズさんは一瞬ほかんとしたのち、ヘステイア様と神ロキの方を見やる。それから意を決したのか断ろうと口を開く寸前。神ヘルメスが言葉を被せる様に演技臭い仕草で語りだす。

「おおっとー！　しまったー！　これから急用があるんだった!?　今思い出しましたよ!!」

わざとらしい芝居を始めたヘルメスに周囲の男連中が首を傾げだし、アイズさんはあつけにとられたのか困惑の表情を浮かべている。

「誘った女性を放り出すなんて、神として、いや男として廃る——ベル君、代役を頼んだよ」

「えっ？」

すぐ後ろで即興劇でも見ていた気分のベルの肩を掴んでアイズさんの前に引きずり出すヘルメス。思わず額に手を当ててため息。強引過ぎるだろ……いや、一応通りは通ってるといえばそうなんだが

取ってつけた様な言い訳だなあ。

「ヘルメス様!？」

「いいかい、ベル君？ 神オレの顔に泥を塗らないでくれ」

バチコンと音がしそうなわざとらしいウインク。神ヘルメスは静かにその場を後にし、それとなくヘステイア様と神ロキの視線を塞ぐ様に眷属二名を配置して気付かれない様にしていた。

気まぐれな神に代役めんどろを押し付けられたという大義名分を手にしたベル君。とはいえ一押しすべきかなあ。

アイズさんの方は『建前』をそのまま受け止めたのか、ベルの方に向き直って返事を待っている。まって、余りにもわかりやすい建前だったというのに、アイズさんはそれを字面通りにベルが代役を務めると思っっているらしいぞ。

「『ブレイバー』、あの」

「言わないでくれ。わかってる」

いくら何でもあの神ヘルメスの奇行をそのまま受け入れるアイズさんは天然が過ぎるだろう。そしてベルの方は百面相しそうな勢いで表情がコロコロと変わっていつている。一押しで落ちそうな感じしてるし、いけ「ブレイバー」！ ダメ押しだ！ トレーナー気分フィンをちよいちよいとつつけば、フィンが苦笑しつつもベルの腰をたたいた。

「このままだとアイズも恥をかく事になる」

「……………」

周囲の神、人間わずに集まった者達が壁となつて俺たちを取り囲んで壁を作っている。

「記念すべき百人切りの対象は【リトル・ルーキー】かあ」「ヘルメスになげっぱされてるし」「ああ、兎君じゃ無理だろうなあ」

周囲の男連中は初めから踊ってもらえるなんて思っちゃいないのか心無い言葉が降り注ぎ、ベルが若干怯んで言葉を詰まらせている。おい、断られるかどうかなんて結果を見なきゃわからんだろ。黙ってろよ。

周囲の男連中を睨むさ中、フィンがいきなり前に回り込んできた。

なんだ？

「魔銃使い」、僕と一曲踊って頂けませんか」

……？ さつき誘われて——手本の積りか？ アイズさんとベルが此方を見ているさ中、二度目の誘いを行ったフィンに呆れつつも差し出された手を取る。

「喜んで」

全然嬉しくもないが、それでもここで断ると面倒事になりかねないしな。仕方なくその手を微笑みつつも取れば、フィンは微笑み返してベルの方を見て小声で声をかけた。

「頼んだよ、ベル・クラネル」

人混みが自然と割れて道ができ、中央のホールに足を運ぶフィンにエスコートされつつもちらりとベルを見れば、後ろでベルが勇気を振り絞ってアイズさんに手を差し出してダンスに誘っている光景が見えた。

まあ、断られる事はないだろう。

後ろで響き渡る驚きと驚愕の声、そしてどこからともなく響くヘルメスの悲鳴を聞きつつもフィンの袖を軽く引つ張る。

「ありがとうございます」

「いや、僕は一押ししただけさ」

謙遜したフィンの様子になんとか肩の力を抜く。ダンス自体は経験が無い訳じゃないが、男性側しか知らんからうまく踊れるかはわからんなあ。

自然とフィンが俺の腰に手をやってきたので、俺もフィンの肩に手をかけ、自然とダンスをし始めた。特に問題は——あったわ。

背丈の差はおおよそ20cmはある俺とフィン。決して、フィンが下手な訳じゃない。しかし上手という訳ではない。引つ張られる感覚を味わいつつも嘆息。

「もしかして、女性と踊るのは初めてですか？」

「そうだよ」

背丈の関係もあるし、伴侶とする女性以外と踊る気は無いと苦笑を浮かべたフィンの胸に頭突きしたい気分になりつつも、フィンに引つ

張られながら踊る。下手じゃない、下手ではないんだ。

言ってしまうえば、教科書通りの踊り方をしているだけで。むしろ教科書通りという意味では上手だ。だが、教科書通りの踊りっていうのは欠点がある訳だ。

「ブレイバー」様、少し背丈の差を考えてくれると助かります」

別に耐えられない程ではないんだが、やっぱり引つ張られながら踊るのはつらい。これが俺とベルとかの組み合わせだと間違はなく俺が振り回されるんだろうなあ。背丈の差を意識しないと教科書通りのままではあまりよくない。

「……きついかい？」

「少し」

フィンの手を取り、こちらのペースに強制的に合わせていく。そうするとフィンが若干表情を崩して納得した様な吐息を零した。

「なるほど、教科書通りだとダメみたいだね」

「基本的なダンスはあまり身長差がある方と踊る様にはできてませんからね」

基本的なダンス、教科書通りの踊り方というのは背丈の差が±10ぐらいを意識して作られている場合が多い。それ以上の差がある場合はその都度、調整しないと引つ張られる感覚が残ってしまうのだ。

フィンの踊りが微修正され、数十秒で完璧に修正されて引つ張られるのではなく、導かれる様な感覚になったところで、フィンが頬を引き攣らせ始めた。

「どうしました？ 完璧にできてますよ？」

というか流石だな。普通なら指摘されて数秒で修正なんてできないぞ。だというのに頬を引き攣らせるフィンはさつと俺と場所を入れ替えて先ほど見ていたらしい光景を俺にも見せてきた。

うわ……ベルとアイズさんのダンス、酷過ぎ……？

足を引っかけて転倒しかけ——冒険者特有の高性能な身体能力を駆使して転倒だけは回避する。そんなダンスというよりは互いに足を引つ張りあうダンスではない何かを繰り広げている姿を見て俺も思わず微笑みの仮面が吹っ飛んだ。

足を踏んでないだけマシか？ いや、いくらなんでも酷過ぎなんだが。あ、ベルとアイズさんが互いを意識しすぎてるのか互いに視線を外したまま踊ろうとしてる。そりゃそうなるだろ……。

「……あの、アイズさんダンスの経験は？ ちなみにベルは無いと思います」

「初めてのダンスだね」

あはは、初めて同士かあ。いや、その……もうちよつと配慮するべきだったか。せめてダンスの基本だけでもさらつと教えておくべきだったか。

あ、アイズさんがベルの胸に頭突きかましてる。咽こんでいるベル君が汗をだらだら流しながら四苦八苦して踊ろうとしているのを見て、なんかおかしくて笑みが零れた。いや、笑ってちゃまずいんだけどね。

「どうする？ 僕たちがそれとなく教えるかい？」

「その必要はなさそうですね」

あの場まで足を運ぶ事はそう難しくはない。踊りながら移動する事もできるぐらいにはフィンはダンスが上手いし、俺もリードされるぐらいなら余裕だし。

けれど、ベルとアイズさんの傍に見覚えのある男神二人と少女二人が踊りながら近づいてダンスの心得をそれとなく教えているっぽい。ミアハ様にタケミカツ子様、ナーザさんにミコトがそれぞれにアドバイスをしたのか、先ほどの頭突きしていた時よりはだいぶマシな踊りが出来る様になっていた。

というか、周囲をよく見てみると格式ばったダンスをしているのは俺とフィンだけで、ほかの面々は割とやりたい放題だな。旋律に合わせてステップもどきを踏むだけのペアが多い。

そりゃ本格的な舞踏会な訳じゃないからそうなるのか。となると……逆に俺とフィンが浮いてね？

「浮いてますね」

「……みたいだね」

格式ばった舞踏を披露する俺とフィン、教科書通りの踊り方しか知

らないしどうすりや良いんだ。周りみたいに合わせようにもさっぱりわからんぞ……。

「このままでいいんじゃないかい？」

「……ですかね」

もういいや。フィンに身を任せておくほうが楽だし、変に意識しても仕方ない。微笑みの仮面だけは張り付けてフィンに身を任せた。

『——うおおおおおおおッ!? アイズたーんっ、何やっとなるんや!! おいつコラ、ドチビッツ、放せえー!!』

『はあ? 何を言つてうわあああああああ!!? ベルクーん!!』

あ、二柱の女神様が気付いたらしい。凄まじい絶叫を上げて会場に乗り込んで二人を引つpegがそうとしているのを見て嘆息。ヘステイア様には悪いけど、ベルが嬉しそうだし今はちよつとそつとしいとあげたい。フィンに目配せして神ロキを止める様に頼むと、フィンは苦笑しながらつぶやく。

「神ヘルメスが手を打った様だ」

視線を向けた先。ファルガーだったか。神ヘルメスの眷属の男性の方がヘステイア様を、アスファイさんが神ロキを抑え込んで消えていく。ヘステイア様に傷一つでも付けたらあの獣人撃ち抜こう。一瞬、ファルガーが身震いして消えていったのを見送ったところで物騒な台詞が聞こえた。

『……オツタル、ここにミノタウロスの群れを連れてこれないかしら?』

『不可能です。フレイヤ様……』

獣人の大男を傍に控えさせた美神様が美しい微笑みを浮かべながらさらつと恐ろしい事を呟いてらっしやる……やめてくださいフレイヤ様!

「大変な女神に目を付けられたみたいだね」

「「ブレイバー」様、全然役に立ってないですよ? ほぼ神ヘルメスが事を進めましたし」

踊りつつもフィンに微笑みかけると、フィンが頬を引き攣らせた。

「……確かに、その通りだ」

「では、踊りに付き合っただけのお礼に、フレイヤ様の暴走を止めてください」

「それはオツタルに頼んでくれ」

忠実な僕のオツタルに止められるとは思えないんだよなあ……。

マシになったステップを踏むベルとアイズさん。ようやくうるさくなっていた女神様二柱も消え、二人きりの世界に入っている。先ほどの意気消沈してた様な表情が消え去っている事に安堵しつつ、神ヘルメスのご冥福を——祈る必要ねえな。うん、地獄に落ちろとまではいかないが、安寧とか不必要な気がする。

第一〇六話

ベルとアイズさんのダンスが終わったのを見計らい、俺とフィンもダンスを終えて神ヘルメスのもとへ向かった。

最後までしっかりとエスコートしてくれたフィンに軽く感謝の礼を述べ、その手を放す。ベルが名残惜しげにアイズさんの手を放して自分の手を握ったり閉じたりを繰り返し、アイズさんは緊張していたのか肩の力を抜く。

流れる様にタケミカツチ様やミコト、ミアハ様にナーザさんまで次々にやってきてはベルを微笑ましげに見ているのを見つつもベルの腰をたたく。

「どう？ 楽しめた？」

「うん、その……夢みたいだった」

夢みたいだった。ね、そりや良い事だ。……背筋がぞわつとして思わず周囲を見回す。

神ヘルメスにアスフィさん、ファルガーさんの眷属二人。アイズさんにフィン、ミアハ様にナーザさん、タケミカツチ様にミコトさん。離れたところから近づいてくる桜花。周囲の視線がねつとりと絡みついてくる。

いつの間にか、囲まれていた。商人連中と、アポロンファミリアの派閥構成員達に、だ。

「あの、助けて頂いて、本当にありがとうございました。ミリアもありがと」

やばい、何かが始まる。四方八方から突き刺さる粘っこい視線。まるであの喫茶店に居るかの様な、異空間に取り残された様な感覚に囚われ、鳥肌が立ち、冷や汗があふれ出す。

「ミリア？」

「ッ……!? あ、その、ごめん。なにかしら？」

肩を掴まれ、悲鳴が口から飛び出しそうになり。思わずその手を振り払って叩けば、周囲の者達から訝し気な視線を向けられてしまった。なんとか口から絞り出す様に返事を返すも、ベルが心配そうに顔

を覗き込んでくる。

「大丈夫？ その、顔色が……」

「ミリア、少し休んだ方がよい」

ミアハ様が優しく手を差し出してきたのを見て、思わず一步後ずさった。いや、ヤバい、グルグルする。視界も、音も、ごちゃ混ぜになったみたいで気持ち悪い。

「ミリア、本当に大丈夫？」

「……調子が悪そうだな」

何とか言葉を絞り出そうとするも、か細く荒々しい吐息が零れるのみ。喉が干上がって言葉が出てこない。

心配そうに俺を囲む人たち。そのすぐ外側に広がるドロドロとした絡みつく欲に塗れた視線。そして、掛かった獲物を前に舌なめずりをしているかのような商業ファミリアの者達。これからテーブルの上のパイを切り分ける様な感覚で此方を見つめている。笑顔の仮面の下にうつすらと見える、欲に濁った俗物的な顔が一瞬浮か——
パンツと手を叩く音が響いてぐちゃぐちゃになりかけた思考が一瞬だけ真つ白になった。

「いやあ、ベル君、最っ高のダンスだったよ」

「え？ ああ、その、ありがとうございます」

素っ頓狂な調子でベルを褒め称えたのは神ヘルメスであった。その横のアスフィさんが此方を見て眉をしかめており、ファルガーさんの方は周囲に警戒心を向けているらしい。

「あの、ヘルメス様も、ありがとうございます」

「喜んで貰えたようによりだよ」

破顔したヘルメスが更に言葉を続けようとしたベルを遮る様に手で制し、引き攣った笑みを浮かべて震えながら言葉を紡いだ。

「じゃあ、オレはこのあと死んじやうから」

『ヘルメスウ~~~~~~~~ッ』

ヘルメスの両肩が同時に掴まれる。背後にはヘステイア様と神口キが居て、それぞれが左右の肩を掴んでいた。

次の瞬間には確な抵抗をしなかったヘルメスの体が広間の片隅に

引つ張られていき、ぎゃあああああつという叫びが響き渡った。ベルが顔色を悪くしながら震え、俺は今の一連の動きのさ中に割れた包囲の外を見た。

何かを楽しみにしているかのような、期待の眼差しを向ける、対岸の火事を眺める野次馬の如き神々の姿を、見てしまった。

喉が干上がった。

「ミリア、ねえ、ミリア……」

「え……あ……」

ベルに肩を揺さぶられ、ようやく視線を引つpegせば、ミアハ様が此方を覗き込んでいた。

「過呼吸気味だ、ゆっくり息を吐くと良い。そう、ゆっくりとだ」

ミアハ様の言う通りに、なんとか息を吐いて、吐いて……吸う。爆音を上げる心臓が煩く、周囲の喧騒がいつのまにか不自然に消えているのに気づく。再度視界がグルグル回り出し、吐き気が込み上げてきたところで、頭を撫でられた。タケミカツチ様がどうしたと聞いてくるのを見ながら、近くに見えたベルの袖をつかんだ。

「ミリア、大丈夫？」

「ええ、なんとか」

視界がグルグル回るし、吐き気は酷い。頭の中では警鐘がガンガンと打ち鳴らされ、今すぐこの場を去るべきだと勘が——過去の経験が告げている。

ダダダツと勢いよく駆けてきたヘスティア様を見て思わず手を伸ばした。

「ベル君つつ、今度はボクと——ミリア君、どうしたんだい？」

「アイズたんもうちと踊ろーツ!! 拒否権はなしやア!」

ベルに伸ばしていた手を俺の方に向け、覗き込んでくるヘスティア様。神ロキはアイズさんに詰め寄り、フィンは周囲を見回してロキの肩を掴んで止めた。

「なんやフィン、邪魔すんなや……ん?」

「ロキ、離れよう」

救援の手を差し出す事は無い。か……規模が規模だ、ヘスティア

ファミリアを救援する理由がない。周囲の皆も異変に気付いて身を寄せる。離れていくのはロキファミリアの面々と、ヘルメスファミリアの眷属の二人。

残ったのはヘステイアファミリアのヘステイア様、俺、ベルにタケミカツチファミリアの主神と眷属二人、ミアハファミリアの主神と眷属一人。

不自然にぼっかりと空いた円形の中心。周囲を取り囲むのは商業ファミリアや商人連中。そしてアポロンの眷属たち。

その外周には、今から始まるなにかをワクワクと期待の眼差しで見つめる神と、それを諫める眷属達の姿。

いつの間にか舞台の上にあげられた——いや、処刑台か——俺たちに、大業な仕草で歩み寄ってくる一柱の男神の姿があった。

「——諸君、宴は楽しんでるかね？」

宴の主権者という体はとっている。だが、その張り付けられた笑みの下にドロドロとした執着心が見て取れる。まるであの女の目を彷彿させる色合いに一瞬で胃の中身が逆流する。嘔吐えずいた瞬間、袋状の何かを掴まされ、思わずその中にぶちまけた。

「ファミリア君!？」

「ファミリアっ、大丈夫?!？」

背中をさすられ、グルグルと回る視界。嘔吐物がぶちまけられた袋状の物——桜花が着ていた燕尾服の上着だった——から視線を上げれば、哀れみの視線を此方に向けるアポロンと視線が合った。

喉が干上がり、悲鳴が零れそうになる。——何か失敗をしでかした時にあの女が向ける視線だ。

「ファミリア、どうしたの？」

「ファミリア君、しっかりするんだ」

哀れみと軽蔑の混じり合った視線。さらに嘔吐えずいて酸っぱい液体が喉を焼き、痛みと吐き気、眩暈に——過去の光景が走馬灯の様に駆け抜ける。死ぬ？ いや、ただのフラッシュバックか——気持ち悪い。

アルミアタッシュケースいっぱい収まる札束。あの女が笑みを浮かべている。無機質で空っぽの雑居ビルのテナント。誰もが一般人を演じる不気味な喫茶店。崖から転げ落ちていく乗用車。ニュース番組で報道されている死亡事故。母親と息子、二人が山道で事故を起こし死亡した。作り物の身分証明書。新しい名前、趣味。美しい美女と交わす接吻、作り物めいた笑みが特徴的な美女だ。札束を投げ渡して部下に後始末を命じる。金属バットでボコボコにされて倒れ伏した糞女。狐耳の狙撃手が放つ銃声。目まぐるしく上下が反転する景色。ビルの側面を駆け抜け、森林を一気に突き抜ける。自然に飲み込まれた住宅街。うるさい蝉の音。飛び散る光の粒子。氷の入ったグラスの奏でる涼しげな音色。ガードレールを車が突き破る音。誰かが誰かを褒め称える言葉。貶す言葉。嘔吐きと誰かが泣いている。だれかが、うそつきってだれかを糾弾している声。

目の前がぐるぐると回る中、歯を食いしばって息を整える。

一瞬か、それとも数時間か。なんとか呼吸を整えた。顔を上げれば、侮蔑の表情を浮かべた神アポロンの視線が飛び込んできて――
――誰かが俺の視界を遮った。映ったのはヘステイア様の背だった。

「やあ、アポロン。先日は僕の眷属が世話になったみたいだね」

「ああ、私の眷属が大層世話になった様だね」

ネチャリと音が聞こえそうな程の不気味な声。込み上げてくる吐き気を何とか抑え、背中をさすってくれているベルの袖を掴んだ。未だに頭の中は幻聴で一杯だ。蝉の音色は激しく、うるさく。金属の拉げ、擦れる音は耳障りだ。糞女の嘲笑と、他の部下の失笑の旋律。グルグルと掻き回す様に脳内を犯す過去の音が響く。

「随分と失礼な眷属ことどもを連れてくる様だねヘステイア」

「……ミリア君の事かい？」

「神ひとの顔を見て嘔吐するなんて、失礼にも程があるとは思わないのかい？」

嘲笑と失笑が響く。これは脳内で響いてる奴か？ それとも周囲

の商人と神アポロンの眷属連中のモノか？ 判別が付かない。神タケミカヅチやミアハ、ナーザさんに桜花、ミコトが壁になって出来る限り視線を遮ってくれるも、それでも隙間からねちっこくこちらに視線を向けてくる周囲の者達。

「それは悪かったね。ミアア君は調子が悪かったみたいなんだ、無理にダンスをしたせいで体調を崩したみたいなんだよ。な、ミアハ」
「さようだ。今は安静にしておくべきだ」

消えない失笑。蝉の音がうるさい。ベルの服の袖をぎゅつと掴んでいると、優しく手を掴まれた。

ベルと視線が合う。心配そうで、不安そうで、どうすれば良いのかわからずに動けない困惑した色合い。——あの人が、よくしていた目だ。おとうさんが、ふあんそうに、おれを、みて——なんとか、しなきゃいけない。

「ふむ、そうか」

「話はそれだけかい？ だったら僕はミアア君を送っていかなきゃいけないんだ。悪いけど——」

「おおっと、まだ話は終わっていない。そちらの眷属こどもの自己管理能力の低さには驚かされるが、それとこれとは話が別だ」

嘲笑が響く。現実か、幻聴か、判別が付かない。あの女が嗤ってる気がする。でもあの女はもう死んだはずで、でも目の前にあの女と同じ目をしたやつがいて。

「私の子は君の眷属こどもに重症を負わされた。代償を貰い受けたい」

「だいしよう。だい、しよう？ 代償。そう、代償だ。何か失敗したら代償を支払って、それで……お金？ アタツシユケースいっぱいにおかねをようお願いして……」

「言いがかりだっ!? ボクのベル君もミアア君も怪我をしたんだっ！ ミリア君なんて無抵抗で一方的に攻撃されたんだぞっ!!」

「手を出したのはそちらの派閥ファミリアではないか？ 構成員であるその小人も同罪だろうか？」

「いいがかり、言いがかり。そう、これは言いがかりだ。胸を押さえ、演技臭い仕草で態とらしい大根役者染みた動きをしているアポロン。」

あの糞女とは比べるまでもない、演技が下手くそで、別人。吐瀉物塗れの上着がそつと退けられた。桜花が扱いに困ったようにそれを持っている事に申し訳なきを感じつつ、何とか立ち上がってアポロンを見据えた。

「それに、ミリア・ノースリスは軽傷であつたのであろう？ 現に今傷一つない姿を晒しているではないか。それに比べ、私の愛しいルアンの怪我と云ったら……あの日、目を背けたくなる姿で帰ってきた……私の心は悲しみに砕け散ってしまいそうだった！」

出来の悪い演劇の様な仕草を繰り返すアポロン。胸を手で押さえ、かと思えば両手を大きく広げて、大げさに、まるで滑稽な道化の様な演技。左右に控えていた従者達のわざとらしい泣き真似。もはや笑いすら出てきそうならいだというのに、喉が引き攣って笑いも出てきやしない。

ちらちらと粘っこい視線を投げかけてくる神アポロン、あまりにも、気持ち悪い。

気が付けば、よろよろと何かが歩み寄ってくるのが見えた。小人族らしき影が寄ってくる。

それに気づいたららしい神アポロンが「ああ、ルアン！」と駆け寄っていく。わざとらし過ぎる。

ルアンと呼ばれた奴、酒場でも見た小人族の奴に違いないそいつは、木乃伊みいらの様に全身に包帯を巻き、杖を突いてふらふらと歩み出てきて、呻く。

「痛え、痛えよお〜」

「まさか、ベル君……本当にポッコボコに……」

「してませんっしてませんっ!」

「待っててください」

大声を上げて、注目を集めた。周囲の視線が集まる中、吐き気を堪えてルアンを指さし、口を開く。

「彼はそんな怪我は負っていませんでした。顔面中央部をヴェルフ——
——へファイストスファミリアの鍛冶師に蹴り飛ばされて昏倒していたところを、私が治療しました。その後は安全地帯に運んで放置

したので、もしその怪我が事実だというなら少なくとも、ヘステイアファミリアに非はありません」

嘘は何一つ言っていない。真実だけを口にした途端。アポロンがネチャリと粘り気のある笑みを浮かべた。周囲を取り囲んでいた商人から嘲笑が響く。ああ、アウエーな状況過ぎるな。

「なるほど、【ドラゴンタイマー】はそれが事実だと言うのだな？」

「はい、神に誓って」

鳴りやまぬ嘲笑。侮蔑の色を含んだアポロンが失笑を零し、此方を見下ろした。粘っこい、貪欲な視線。喉が引き攣る。

「そういえば、最近、街中で発生した小火騒ぎは——そなたの連れにいる竜が原因だと聞く。本当にそなたの言葉は信用できるのか？」

——なあッ!?

「ガネーシヤはそなたを信用できると謳っていたが、実際の所。私は疑わしく思っているのだ」

「なっ!? そもそも君は緊急の神会デナトウスに出席していないじゃないかっ!」

は? ああ、そうだ。この神アポロン、俺の記憶に一切ない。あの神会デナトウスの時に出席した神なら、少なくとも顔だけは覚えていてもおかしくないのに、覚えてなかった。つまり参加してないくせにガネーシヤ様を疑う様な真似をしてるのか。

「ああ、あの緊急の……私は外せぬ用事があったのだ。暇を持て余す者達と違ってね」

それに、と神アポロンは続ける。

「どのみち、先に手を出してきたのはそちらであろう?」

話をぶった切りやがった。糞、ダメだ……回避できない。どんな正論をぶつけたところで、相手は言いがかりで押し通すつもりらしい。こうなったら手がつけれられない。

「待ちなさい、アポロン。貴方の団員に最初に手を出したのはうちの子よ? ヘステイアだけを責めるのは筋じゃないわ」

「ああ、ヘファイストス。美しい友情だ。だが無理はしなくてもいい。ヘステイアの子が君の子をけしかけていたかどうかは、火を見るよ

り明らかだ。現にベル・クラネルも直ぐに喧嘩に参戦したそうじゃないか」

ああ、やっぱりヴェルフが手を出すのも不味かった。ベルがヴェルフを止めなかった事で拍車がかかっている。暴論だが、正論が通じない。

証人達——商人で証人か、何かの親父ギャグかと言いたい気分だ。これっぽっちも笑えないが——に証言してもらってもいい等と宣う神アポロン。

事前に味方を用意していた神アポロン側が有利過ぎて、ヘステイアファミリアに出来る事は無い。部外者に等しいタケミカツ様、ミアハ様とその眷属は口出しできず。ヘファイストス様は意図的に封じられ、孤立無援状態となっていた。——手腕が、どこまでもあの糞女に似ている。

「団員を傷つけられた以上、大人しく引き下がるわけにはいかない。ファミリア派閥の面子にも関わる……ヘステイア、どうあっても罪を認めないつもりか?」

「くどい! 僕の眷属だって同じぐらい傷つけられたんだ! 認めるものか!」

言い分をはねのけるヘステイア様に、神アポロンの顔が——醜悪に歪む。

あの、糞女と同じ。端麗な容姿とは不釣り合いな、悍ましくも不気味な嫌らしい笑みを深め、口角を吊り上げる。

「ならば仕方ない。ヘステイア——君に戦争遊戯を申し込む!」
目を見開いた。

『戦争遊戯』。

対戦対象同士で定めた規則上で行われる。派閥同士の決闘。眷属を駒に見立てた盤上遊戯のごとく、対立する神と神が己が神意を通すためにぶつかりあう総力戦。

言わば、神の『代理戦争』。

勝者は敗者から全てを奪う事が出来る。全てだ。そのファミリアが保有する本拠も含む財産を奪われるのは当たり前——当然、そ

の奪われるモノには、眷属も含まれる。

すべての眷属、財産を奪われ。挙句の果てに————主神に天界への送還^死を命じる事すら出来る。

嘘だろ、絶対に無理だ。こちらの総戦力はベルと俺の二人。+αでキューイ、ヴァン、クリスが居るが——ガネーシャ様との兼ね合いもある。きつと対策されて参加すら許されないだろう。

対する相手は中堅以上の派閥だ。勝負にならない。

『アポロンがやらかしたアー!!』『すっつげえーイジメ』『逆に見てみたい』

絶句する俺たちを他所に、期待の眼差しを向け続けてきた周囲の神々の反応は、信じられないモノだ。見てみたい？ 一つの派閥が呆気なく砕け散って藻屑と消えるのを？ ふざけんやつ！

「我々が勝つたら——ベル・クラネルとミリア・ノースリスは貰い受ける」

ああ、どちらか片方じゃなくて両方狙いだったか。こりや俺が頭下げて『なんでもするんでヘステイアファミリアには手を出さないでください』っていう最終手段が使えない。

「最初からそれが狙いかっ……!」

仮面が、外れた。あの糞女と同じ、一途に欲望を煮詰めて、煮詰めて、煮詰まった。悍ましい笑みを浮かべる。

ああ、なんて醜い。なんで醜悪で、なんて悍ましい。そんな目が——ベルを見ていた。

「だめじゃないかあ、ヘステイア〜? こんな可愛い子を一人占めしちゃあ〜」

ベルの手を掴む。気圧されちゃダメだ、その目を向けられる悍ましさは俺も良く知っている。一度でも飲まれたら、二度と這い上がってこれなくなる。抵抗する気力を徹底的に削られ、潰され、何もできなくなる。言いなりのお人形になりたくなけりゃ、抵抗するしかない——きつと無駄だけど。

「この変態めえ……!」

変態だろう。間違いない、こいつは控えめに言って変態だ——

けれど、その行動力は本物だ。

「酷いなあ、ヘステイア？ 天界では愛を囁きあつた仲じゃないか？」
「嘘を言うな嘘をおおおツ!? 二人とも勘違いするなよ!? あの頭がお花畑の神がしつこく言い寄ってきただけで、速攻でお断りしたからなっ！ この処女神ポックが守備範囲広すぎな変神へんじんの求愛なんて受け入れられるものかア!!」

ギリシヤ神話で、そんなのあつたなあ。確か、ニウンペーだかなんかを追いかけて、木になるまで追いかけたんだっけ？ だとするならば俺も木になる以外に抜け出す方法はないな。あはは、笑える。

アポロンファミリアの団員は、神アポロンが気に入らなければなれない。逆に、気に入った者は何をしてでも手に入れようとする。その過程で——命を絶つ者が出る程に、壮絶な求愛が行われるのだ。行き過ぎた恋の情熱、まるで輝く太陽の様な。

——
【悲愛ファルス】

喜劇にもなりかねない求愛を繰り返し、狂乱を巻き起こす傍迷惑な神だ。そして、巻き込まれた者は否応なしに無傷に済まない。

家族も、友人も、周囲の知人も、次々に被害に遭う。求愛相手を取り巻く全てをぶち壊してでも、その過程で幾人もの死者すら出したとしても——欲する者が絶望し命を絶つ結果になろうとも——アポロンは決して諦めない。

「やっぱり、罠でしたね」

「くそう、最初っから全部これが目的か！」

既に周囲の神々はアポロンの面白そうな行事に注目し、ヘステイア様に期待の眼差しを送っている。そう、弱小ファミリアが踏み潰されて消えるのを、神々は面白い事として見ている。喉が干上がった。

「それでヘステイア、答えは？」

「受ける義理はないね！」

もし、仮に、『戦争遊戯ウォーゲーム』に持ち込まれた場合。

条件次第だがキューイ、ヴァン、クリスの三匹を突撃させればもしかしたら勝てるかもしれない。だが、勝負内容次第であるし、現状だ

とヒュアキントス一人出てきた時点で勝てない。

断固拒否したヘステイア様がばつと振り返り、俺とベルの手をがしつと握って人垣を掻き分けて歩き出す。引つ張られながらも後ろを振り返れば——アポロンの目が此方を見ていた。舌なめずりをし、獲物を既に捕らえた気分らしい男神。端正な顔立ちも全てが吹っ飛ぶ悍ましい笑み、喉の奥から悲鳴が零れかける。

「後悔するぞ?」

耳から脳髓に至るまで、ねちっこく侵す様な声が背中に投げかけられる。あの時と、一緒だ。あの女が、俺にかけてきた言葉。

ああ、始まった。これが終わりのない。始まるんだ、あの夢と同じ——悪夢が現実になろうとしている。

第一〇七話

『神の宴』から一晩明けた。

今日の目覚めも最悪。テレビのニュースで何度も、何度も、何度も繰り返し『とある死亡事故』についてが報道され続けるというループ系の悪夢であった。目覚めた瞬間にトイレに駆け込んで事なきを得たが……。

『シラノ ユーノ』とその母親が交通事故を引き起こして死んだという報道。無論、あの糞女が書いた筋書きである。

酷い夢もあったもんだ。あの人は、俺が——いや、そもそも『ユーノ』なんて架空の人物だった訳だが——死んだと思いついただ訳だ。

酷い話だ。

廃教会の隠し部屋でステイタスの更新を行っているベルをちらりと見る。相変わらず神聖文字ヒエログリフは読めないのだから意味はないのだがね。ポーチに回復薬ポーションや高位回復薬ハイポーションを入れる。一応、念の為に万能薬エリクサーも持っていくか。

ミリア・ノースリス

L v. 2

力：G 2 4 9 ↓ G 2 4 9

耐久：F 3 4 4 ↓ F 3 5 9

器用：A 8 2 0 ↓ A 8 2 2

敏捷：B 7 8 3 ↓ B 7 8 3

魔力：S 9 6 3 ↓ S 9 6 6

《魔導F》

《魔法》

〔ガン・マジック〕

・詠唱派生魔法

- ・基礎詠唱『ピストル・マジック』
 - ・消費弾薬 1／1
 - ・単発の魔弾を放つ
 - ・特殊詠唱『デュアル』
 - ・基礎詠唱『ショットガン・マジック』
 - ・消費弾薬 15／3
 - ・単発の散弾を放つ
 - ・特殊詠唱『ソードオフ』
 - ・基礎詠唱『ライフル・マジック』
 - ・消費弾薬 1／10
 - ・高威力の魔弾を放つ
 - ・長射程
 - ・特殊詠唱『スナイプ』
 - ・追加詠唱『ファイア』
 - ・共通詠唱『リロード』
- 【サモン・シールワイバーン】

- ・召喚魔法
- ・最大召喚数『3』
- ・追加詠唱にて封印解除
- ・基礎詠唱『呼び声に答えよ』
- ・追加詠唱『楔を壊せ解き放て』
- ・追加詠唱『階位を超えて飛翔せよ』

- 【レッサー・ヒール】
- ・最下級治癒魔法
 - ・基礎詠唱『癒しの光よ』

《スキル》

- 【タイプ：ニンフ】
- ・クラスチェンジ可能
 - ・任意発動アクティブトリガー
 - ↓クーシー：アサルト
 - ↓クーシー：スナイパー

↓クーシー：フアクトリー
↓ドリアード：サンクチュアリ

【マガジン・スロット】

- ・装弾数『50↓60』
- ・保有最大数『20↓24』
- ・基礎アビリティ『魔力』により効果増加

【マジック・シールド】

- ・防御効果
- ・基礎アビリティ『魔力』により効果増大
- ・自動発動
- ・精神力消費

ベルの更新を待つ間、手にしたステイタスの羊皮紙を見ながら嘆息。

微妙に、ステイタスが上がっている。十八階層から帰還してから一度ステイタスは更新したが、それからダンジョンに潜るといった事は一切していない。強いて言うならキューイやヴァン、クリスの関係でガネーシャファミアとギルドを駆けずり回ったぐらいか。

ヒュアキントスに顔蹴り抜かれたあの一撃か、それとも投げ飛ばされたからかはわからないが、あの喧嘩的一幕、戦闘とすら呼べないあの出来事で経験値を得たという訳だ。なんともまあ、レベル3の恐ろしさがわかるというものだ。

容易く俺が潰され、ベルとヴェルフの二人がかりで挑んでも返り討ちだったのだ。レベル3は伊達じゃない。

「全く、アポロンめっ。よくもぬけぬけと戦争遊戯ウォーゲームなんかっ……」

ベルの更新を終えたのかバイトに行く準備を始めたへステイア様。俺も廃教会の一階にいるキューイ達に飯を持っていかないのだな。昨日の晩飯も適当に食べさせたぐらいなせいでお腹空かせて不機嫌になってそうだ。

「ミリア君、何かあったら——」

「わかってます。出来る限り人が多い場所——叶うならガネー
シヤファミアリアの見回りの方に合流します」

街中で襲撃なんて真似をすれば町の住民に被害が出かねない。そ
うなればガネーシヤファミアリアが大義名分——町の住民を守る為
——をえてアポロンファミアリアを抑える事が出来るのだ。

近くに置いてあつた野菜の詰まった籠を持ち、階段に足をかけた。

「ミアリア、僕も直ぐ行くから」

急いで鎧を着こんでいるベルの様子に微笑みかけ、階段を上った。
ベルの鎧の一部が破損し欠けてるし、装靴ブーツは完全に破壊されたせいで
革靴ブーツに逆戻り。早いところ装備も整えないとなあ。

俺も剣を二本に杖そのものまで失つて、今手にしているのはギルド
支給の『新米用ナイフ』一本だし。まあ、ヴェルフが予備を持ってき
てくれるそうなのでそれ頼みかなあ。

今日はとりあえずダンジョン探索には行く。昨日の今日で仕掛け
てくるとは思えないしなあ。

隠し扉を開けると、キューイが此方に顔を向けた。ヴァンの方は窓
の外が気になるのかチラチラと窓の方を見ており、何か言いたげな雰
囲気を感じとる。

「……？ 二人ともどうしました？」

「キューイ……」

《主よ、外に人が集まっている。闘争の気配がするぞ》

は？ 外に人が沢山？ いや、ここは大通りを外れた場所だぞ、そ
んなに人が——いる？ おかしい。

野菜入った籠をキューイの前に置き、そつと割れた窓に近づいて廃
教会の正面を見た。

居た。一人や二人じゃない、しかも魔法詠唱をしているのか所々で
魔法マジックサークル円を展開している魔術師がいる。意識を集中させれば、攻撃魔
法特有のチクチクとした詠唱中に感じられる出力の余波が感じ取れ
る。

——昨日の今日で襲撃!?

ガタン、と隠し扉が開かれ、ベルが出てきて首を傾げながら問いか

けてきた。

「ミリア、なんで魔法を使って……あれ？ ミリアじゃない？」

微かに感じ取れる魔力の余波を感じ取って俺が魔法を使っていたと誤認したベル。静かに口に人差し指を当てて静かにする様に指示を出し、もう一度外を見て数を確認。

人数はおおよそ60人。そして、全員が『サラマンダーウール火精霊の護布』を身に纏い、数人の手には装飾剣——下級の魔剣が握られている。全員が完全武装しており、中央にはエルフ……アポロンファミリアの中隊長クラスのエルフ、名前は確かリッソスだったか。

見るまでもないが、エンブレムは——やはり太陽に弓矢、アポロンファミリアのエンブレム。

いや、アポロンファミリアの制服を身に着けていないのも何人かい。布が被せられた何かの周囲で動き回る大きな馬上槍を持った奴らだ。身の丈程もある巨大な馬上槍を担いで運んでおり、全く意味がわからない。

馬もないのにあんな馬上槍を何に使うのか……いや、今はそんな事はどうでもいいか。

「どうしたのミリア？」

「ベル、静かに。外に敵がいます。ヘステイア様は？」

「え？」

驚愕の表情を浮かべ、一瞬で青ざめるベル。ヘステイア様が隠し扉から出てきて首を傾げているのを見つつ、出来る限り静かに移動しようとする、キューイがガツガツと野菜を音を立てて食べ始めた。

「キューイ」

少しは誤魔化す。そんな風に呟いたキューイがあえて盛大に音を立てて食事をする中、外で耳を澄ます者達を意識しつつもヘステイア様に近づいて三人で顔を突き合わせる。

「まずいです。外にアポロンファミリア、それと所属不明が何人かいるみたいです」

少なくとも数は100人近い。内6割がアポロンの人員だ。残りの40人近くがどのファミリアかはわからんが、なんか企んでるの

か、出てきたところに魔法を撃ち込むつもりらしい。

「なっ……昨日の今日だぞっ!?!」

「ミリア、どうしよう……」

「……このまま出ていくと攻撃されます。ですが、どうしようもありません」

今現状取れる手段は三つ。

まず一つ目、馬鹿正直に正面から出て行って対話を求める事。当然、問答無用で攻撃されるだろう、そうすれば俺やベルは平気でもヘステイア様は死にかねない。

二つ目は裏からこっそりと出て行く事。ただし、裏口にも張り込まれているのでこっそりというのがそもそも不可能。だが人数は裏口の方が圧倒的に少ないので強行突破する他ない。

三つ目は、ヴァンを囮として突っ込ませて攪乱しつつ、キューイに乗って脱出。これは速度勝負だ、封印解除から階位上昇をいかに素早くやれるかにかかっている。

「とりあえず、一番確実なのは囮です。ヴァンを……その、捨て駒にして、時間を稼ぎつつ脱出」

「脱出した後は……」

「とりあえずギルドまで行くか、ガネーシャファミアリアに保護を求めらるかです」

ただ、ガネーシャファミアリアは現在ギルドに締め上げられてまともに動けないはずだ。そしてギルドもいまいち信用できない。逃げ場がどこにもないが、このまま捕まる訳にもいかないのだ。

「ベル、決断を早く」

キューイが空っぽになった桶をガンガンと打ち鳴らしてキューイキューイと大きく鳴き喚き始めた。内容は『もつと食わせろ』である。あえて騒いで外に食事中だと思わせる積りか、それも限界がある。

「キューイ、今日の朝ごはんはそれだけだから我慢してちょうだい」

「キューイッー!」

「そんなに怒らないでっば……ベル、早く」

小声でベルを急かす。どちらにせよ取れる選択等一つだ。

「ここで全員倒ればお終いよ。ヴァンはまた召喚できるわ」

「わかった。囀作戦にしよう」

「すまないね、ヴァン君」

《暴れれば良いのか?》

ヴァンに謝罪するヘステイア様だが、ヴァンの方は当然と言わんばかりに身を起こして外の方に視線を向けた。

《俺様の眠りを妨げたのだ。万死に値する》

良い意気込みだ。相手の持つ魔剣はせいぜいが下級だろう。魔法使いは上級冒険者も居そうだが、超長文詠唱クラスの魔法でもなけりや一撃で竜種は倒せない。漏れ出る余波から感じ取れるのはせいぜいが中文詠唱クラスだ、問題はない。

「ベルはヘステイア様を抱えて、ヴァンは入口で壁になって頂戴。どのみち吹き飛ばされるわ……」

ヴァンを入口側に立たせ、手を翳す。ヴァンの封印を解除し、階位上昇させてから突撃させ、キューイの封印解除、天井の穴から脱出といった手順を確認し、キューイの傍に立つ。

『楔を壊せ 解き放て』

詠唱は短く。体から魔力が抜け落ち吸い取られる不快感を感じた瞬間、外から魔法の放たれる感覚。廃墟同然の壁など即座に粉碎され、土埃が舞い上がる中、一気に4M近い巨体となったヴァンが魔法や放たれた爆薬付きの矢を受け止める。

「うわあつ」「ヘステイア様っ」

《あるじっ、早くしろっ》

『階位を超えて 飛翔せよ』ッ!』

光が弾ける。土埃を弾き飛ばした巨体。体長はおおよそ8Mを超え、灰色だった全身の竜鱗は赤黒く変色し、口の端から零れ出る黒煙をそのままに咆哮を上げた。

『ゴオオオオオオオオオオツツ!!』

大地が振動し、アポロンファミリア側が騒がしくなる。

「なんだあれはっ!?」「なあっ!? 下層種だどっ!」

「射て射てっ!」「魔法を詠唱しろっ!」

巨大化し、下層種の竜、名称は不明だが下層に住まう竜種に変貌を遂げたヴァンが吠え、その首を巡らして崩れた廃教会の瓦礫を踏み潰して一步前が出る。

無数の魔法光が弾け、その全てが強靱な竜鱗の前に消え失せる。鏃の方がへしゃげ、矢は全て弾かれているのが目に入った。これなら十二分に時間稼ぎができる。

《主よ、早く行け》

「キューイツ！ 『解枷き放壊て』 ツ！」

キューイの枷を外す。一気に体長3Mを超える体躯となったキューイの背中に飛び乗り、ヘスティア様、ベルと共に背中にしがみ付いて合図を出そうとした。瞬間——腹の底に響く重低音が響いた。

ドスンツドスンツと重機を使って整地作業をしているかのような爆音に近い重低音。

赤黒い竜の胴体に無数の馬上槍が突き刺さっていた。

「は……う？」

「キューイツ!？」

なんだありや。馬上槍だ、凄まじい爆音と共に、飛んで——ああ、ヴァンの顔面に突き刺さり、完全に動きを止めさせた。強靱な竜鱗も、頭蓋すらも穿ち抜き、ヴァンを即死させた。

「あれはいつたい……」

「ヴァンが、一瞬で……」

キューイの背中に乗ったまま三人で呆然とする。そんな中、キューイがぼつりとつぶやいた。

「キューイ……キューイキューイ」

十八階層で見た機械みたいだ。と、あれ、パリスダ大型弩の矢だ。

パリスダ布が被せられていた巨大な何か。縦に三つ重ねられた超巨大なパリスダ大型弩である。十八階層で見た木製の物ではない、総金属製のパリスダ大型弩。

だが、十八階層の木製に金属で補強しただけのモノとは威力が比べ物にならない。あのパリスダ大型弩はせいぜいが中層の怪物を撃退するのに

使える程度の代物だ。それに対し目の前のあの総金属製の大型弩は
下層種、レベル3〜4クラスに近い能力となったヴァンを一瞬で仕留
めてみせた。

威力がおかしいっ！

その大型弩に巨大過ぎる馬上槍と見紛う矢を装填している者達。
その周囲で拳を振り上げて叫ぶ者たちがいた。

「竜を一匹仕留めたぞおっ!!」「もう一匹も直ぐに仕留めるっ！ 空を
飛んだら撃ち落とせっ！」

「これなら鉄屑呼ばわりしたロキファミアを見返してやれるぞっ
！」

ロキファミアが鉄屑呼ばわりした？ いや、今はそんな事よりも
——空飛んだら下層種の竜すら屠る矢が飛んでくる。空には逃
げれないっ！

「キューイツ、低空飛行して逃げてっ！ ベルっ、ヘステイア様っ、掴
まってくださいっ！」

空高く逃げれば勝ち。その前提条件が音を立てて崩れ落ちた。

キューイが即応で翼をはばたかせ、低空飛行で消えゆくヴァンの軀
の上を駆け抜ける。視界が一瞬でぶれて体が振り落とされそうにな
るのを耐えてしがみ付く。

無数の魔法が弾け、下級魔剣らしき魔法も合わさり、背後に無数の
魔法がビュンビュンと音を立てて通り過ぎていく。次の瞬間、振動と
共にキューイが悲鳴を零す。

「ミリアっ、尻尾がっ!?!」

掠った。一気に真下の景色が移ろう中、キューイの尻尾に馬上槍染
みた矢がかすめ、尻尾を挽ぎ取った。長かったキューイの尻尾がギリ
ギリで掠めたのだらう。かすめただけであの威力っ。

あんなもん翼に当たったらアウトだぞっ!?!

ヘステイアファミア本拠から一気に離れ、射程外に逃れて高度を
上げたところで、振り返る。ベルもヘステイア様もなんとかしがみ付

いている様子だが、キューイの羽搏く音を聞きながら、土埃に沈む本拠を見てベルが表情を歪めた。

「本拠が……」

「ミリア君、とりあえずガネーシャの所に……もしくはギルドに……」
空からオラリオの街を見下ろすという、普段では絶対にできない事をしてるのに。今、胸の中に湧き上がるのは感動ではなく焦燥。このままキューイに飛んでもらうのは不可能だ。ふらふらと頼りなくふらつくキューイを見ればそれは丸分かりだ。とはいえギルドかガネーシャファミアの本拠までは一気に飛んでいける距———
キューイが急に身を振り、指示するまでもなく加速しはじめた。

「ちよつとキューイっ!!? どこに向かつてっ!!」

「キューイキューイツ!」

はあ!?! 降りてっ?! 馬鹿かてめえはっ、この状況で地上に降りたらどうな———糞っ。

急上昇、急降下、激しく暴れ狂う飛行を繰り返すキューイ。振り落とされぬ様にしがみ付いていたが、限界を迎え、急降下したキューイから振り解かれて三人そろって民家の屋根に叩き落とされた。

ベルがヘスティア様を抱えて守り。俺はなんとか受け身を取るもかなりの速度で叩き付けられて息が詰まる。

「ヘスティア様、無事ですかっ」

「僕はなんとか……ベル君とミリア君は?」

「僕は無事です。ミリアは……ミリア?」

「意味、わかんないんですけど……」

あの糞ポンコツワイバーン、このタイミングで裏切りとかかんべん———爆音が頭上で弾けた。

限定的に降り注ぐ雨。真っ赤な、雨と肉片。鱗の欠片に、内臓の一部が空から大地に降り注ぐ。

ハラハラと木の葉の様に落ちてくるキューイの翼。バラツバラの残骸になった飛竜の欠片が飛び散っていた。

「うそ、キューイがやられた……」

「一体なにが、どんな攻撃でっ!?!」

もしかして、キューイは攻撃から俺たちを庇った？ 思わず身を震わせ、立ち上がる。

四の五の言ってられる状況じゃない。絶対中立を謳う管理機関、ギルドの本部に避難するしかねえ。よりによってガネーシヤファミリアの本拠の方が絶望的に遠すぎるっ。

「ベル、あそこに見えるギルド本部に行きましょう」
「わかった」

応急処置にしかならぬような逃げる算段を付けたところで、背後から声をかけられた。

「諦めた方が良いよ」
「っ！」

振り返った先。俺たちが叩き付けられた民家の屋根に立っていたのは数名の団員を率いたダフネだ。ロングスカートのバトルクロスの戦闘衣を身に纏ったカサンドラの姿まである。

焦げ臭い風に吹かれてシヨートヘアをなびかせるダフネは、その吊り目を哀れむように向けてきた。

「アポロン様は気に入った眷属を地の果てまで追いかける。手に入れるまでね」

「……………」

「ほら、見てみなよ。周囲がどうなるがアポロン様は知ったこっちゃないのさ」

ダフネが示した街並み。先ほどは見る余裕がなかった凄惨な光景に息を呑んだ。

街中に無数の馬上槍が突き刺さっている。一本や二本じゃない、二十か、三十か……あの金属製の下層種の竜すら殺すバリスタ大型弩の矢が突き立っている。

「これは……………」

「あなた達が空に逃げたから、ばかすかと射った結果よ」

ダフネの言葉に、納得し、同時に怒りが湧き出た。

「あなた達がやったことを、さも私たちが原因みたいに言わないでください」

哀れみの視線が此方を射抜く。その目に宿るのは、同情。

「これ以上被害を出したくないのはこつちも一緒。今回の一件でギルドからの罰則ペナルティが大変な事になるわ。だから————投降しない？
これ以上抵抗すると、本当に滅茶苦茶になっちゃうわ」

頭の奥の方がカツと熱くなる。滅茶苦茶なのはテメエらじゃねえ
かつ。

街中がどうなるうが、ベルと俺を手に入れられるならそれでいいだ
とっ!? というか他ファミリアが黙ってないだろっ。なんで動か
ねえんだよっ。

「他のファミリアに期待しない方が良いよ。買収済みらしいわ。それ
で？ 投降してくれるの？ くないの？」

腰の鞘に収まった剣の柄をぽんぽんと叩くダフネに、ベルが答え
た。

「できません」

苦渋の表情で勧告を拒否したベルとヘステイア様と共にじりじり
と後ろに下がれば、ダフネは溜息をついた。

「そうなるよね、じゃあ————かかれ！」

ダフネは抜剣と共に切っ先を此方に向ける。号令と共に小隊員達
が一斉に跳躍したのを見て、詠唱しながら背を向けたベルに続く。

『ピストル・マジック』『リロード』

「なっ、平行詠唱っ!？」「かまわん、短文詠唱だ、威力は大したことな
いっ」

一部の小隊員が驚きの声を上げるのを聞きつつも銃口を後ろに向
け————ダフネが投擲してきた短剣ダガーを撃ち落とす。

『ファイア』『ファイア』っ

パキンッパキンッと金属音を響かせて弾かれる短剣ダガー。ベルの背後
にぴたりと張り付き、団員の肩や足を狙って撃って、撃って、撃ちま
くる。

「……魔法の威力は大したことない、けれど上手いね。それに速い。
リッソスの隊を呼んで回り込ませてっ！」

ダフネの指示が背中に響いてくるのを聞きつつ、ギルド方面に向

かつて駆け出した。

「逃げ足速いなあ……無駄なんだから諦めれば良いのに。それにその方が被害が少ない」

高い屋根の上、足を止めたダフネは駆け抜けながら魔法を駆使して包囲を突破しようと四苦八苦するミリアと、主神を抱えて守るベルの二人へ呟いた。彼女が浮かべる表情は同情的でありながら、達観している。

ミリア・ノースリスが世間の噂より遥かに優れている事を認めながらも、ダフネは小さく吐息を零して肩を抑えた。

「あの距離で当ててきた……威力は低かったけど、厄介だね」

「あの、ダフネちゃん、やっぱり止めた方が……いいと思う」

そんな彼女の背後から、場に一人残っていたカサンドラがおずおずと声をかける。

ダフネと似た境遇で、かつ付き合いの長い少女は腰まで届く長髪を両手で弄り、その垂れ目を伏せがちにしていた。

「何が？」

「あの子達を、刺激する真似……『兎』を傷つけちゃいけない。せつかく『微睡む竜』を起こす事になるから」

弱腰に警告してくる彼女にダフネは、溜息を零した。

「また夢？」

呆れながら問い返されると、カサンドラはこくこくと必死に頷いた。

「あのね、鏡を持ってると『竜』の目を誤魔化せるけど、誤魔化しても意味がないから」

浪々と語られる似た長い付き合いのある彼女の妄言——本人は『予知夢』と言って憚らない——それを聞き流そうとして、ダフネはカサンドラの顔を見た。

「ねえ、その『微睡む竜』って何？ 『兎』はなんとなくわかるけどさ」

ダフネが思い浮かべたのは白い髪に赤い瞳の少年。確かに『兎』といえはそうだと頷ける。が、『微睡む竜』とは何なのだと問いかけなおせば、カサンドラはおろおろと視線をさまよわせる。

「それは、その……わかんない」

しょんぼりとした雰囲気を纏った彼女の弱気な言葉に、ダフネは肺の空気を全て垂れ流す様に深々と溜息を零した。

「馬鹿な事を言っていないで追いかけるわよ」

「どうして信じてくれないのおくくっ」

箱入り娘の言動にありがちな、一笑してしまうような『呪力』まりよくをもつ彼女の言葉に取り合う気のないダフネは面倒くさそうに、半ベそのカサンドラに視線を向ける。

「じゃあどんな夢を見たのよ」

「うんと……『微睡む竜』が目覚めて、『兎』は跳躍する。高く高く、月に届くぐらいまで。沢山の仲間が止めようとするんだけど、『目覚めた竜』に睨まれて皆倒れちゃうの。鏡を持つてる人だけが竜の目を眩ませられて無事なんだけど、それでも止められなくて。最後には『兎』が太陽を飲み込んだじゃう夢……」

ダフネは鼻で笑う事すらしなかった。

「そうよね。夢はそれぐらい荒唐無稽じゃないとね」

「ダフネちやあくくんっ」

「しっこい。行くわよ」

まだ何か言い募ろうとするカサンドラを引き連れ、ダフネはヘスティアファミアリアを逃走した。

第一〇八話

俺が前を、ヘステイア様を抱えたベルが後ろを走る。

包囲を壊しても直ぐに再包囲されなおしてというのを繰り返して続けている結果、思ったようにギルド本部に近づく事が出来ていない。

それに加え、逃げ遅れている市民が立ちつくしていたりして移動が面倒過ぎる。跳躍し壁を蹴って一気に頭上高くを通り抜ける序に背後から射られた矢を撃ち落とす。

「ちよつと！ 市民が居るでしよつと！ 『ファイア』『ファイア』ッ!!」
頭を抱えて蹲って怯える市民もお構いなし。飛んでくる矢の内、市民とベルに当たりそうなモノを全て撃ち落とすつも着地。屋根の上を走る弓使いが執拗に矢を射つてきやがる。しかも市民が居ようがお構いなし過ぎる、庇うのも限度つてのがあるのに——むしろあえて市民を狙って俺の反撃を潰そうとしてるのか。

「ごめんなさいっ」

ベルが謝罪しつつも市民の頭の上を飛び越えてきたのを見つつ、再度発砲。残りマガジンにはかなり余裕がある、1マガジンで『ピストル・マジック』でいえば60発分、威力を控えめにしているので消費半分で120発。それを二丁持ちデュアルで使つて、合計240発だ。残りマガジン数もまだ18もある。

むしろすでに120×4を消費してる時点で相手の本気度がうかがえる。また、矢が飛来してきたので撃ち落とし——射手の持つ弓を撃ち抜いて破壊した。

『糞、弓を壊された』『何なんだあの精度は、威力が高かったらヤバかったぞ』

『かまわんつ、このまま追い込めっ』

しつこ過ぎる。足を撃ち抜いたりして何人かは離脱させたりしたが、すぐに復帰してくる所を見るに治療師ヒーラーが待機して即座に復帰させてるらしいので、武器を破壊させて貰っているのだが、それでもすぐに新しい武装を持ち出してくる。本当にキリがないっ！

「ま、また来たっ……!?!」

ヘステイア様の言葉を聞き、前を向けば一本道の先に回り込んできたらしい二人の冒険者。それぞれが剣を構えている。即座に指先銃口を向け、ベルに声をかける。

「そのまま前進するわ！」

「わかった！」

返事を聞き終えぬ内に発砲。相手の手首を狙って剣を取り落とさせる。序に浮足立った瞬間に足も撃ち、転倒させてから倒れた相手の頭部を踏み付けつつ通り抜ける。ベルも同じ様にもう一人を踏み付けて微妙な顔をしているのを見て声を張り上げた。

「ベルっ、今は容赦しちやダメよっ。一人でも多く負傷者を出して相手の治療師ヒーラーを疲弊させないと先にこっちがバテるわっ」

「……うん」

「すまない、二人とも……足を引っ張ってしまっ……！」

ヘステイア様の謝罪に胸が痛くなる。彼らの包囲を突破しても直ぐに再包囲されてしまうのは、確かにヘステイア様を抱えているせいとも言える。

俺もベルも、上級冒険者としての最低限の耐久があり、全力疾走すれば包囲を撒けるだけの地力はあるのだ。しかし、ヘステイア様はあくまでも地上の者と同じ身体能力、耐久しがなく、下手に全力疾走中に不意打ちを受けて投げ出されれば、打ち所悪く死ぬ可能性が否定できない。

本来なら地上の者が『神殺し』をするのは禁忌、絶対の規則ルールである。神に手を下せるのは神のみだ——例外として、事故死が挙げられる訳だが。

彼らはヘステイア様が死のうが関係無い。むしろこれだけ大量の矢を放っているのも『誰が射った矢が当たったのか不明』なんて言っつて禁忌を犯した犯人を不明にする為だろう。

神々は致命傷を与えられると、封印している『神の力』アルカナムが発動し肉体が生命維持される。そこから神の定めた地上における『神の力』アルカナム使用を禁ずるといふ規則ルールに抵触し、天界へ強制送還されてしまう。

極論、事故死でなくともアポロンファミリアにヘステイア様が確保

されれば、神アポロンの手で処刑されてしまえば、俺とベルは無所属
となり——しかも恩恵の力も失った無力の状態で——他派閥へ強制的に改宗させられてしまう事になる。可能性としては、ヘステイア様
を人質——神質か——にでもして、下界在留と引き換えに入団を強い
られる可能性が高い。

ともかく、どれだけ足枷となっていたとしても、ヘステイア様をど
こかに置いていく訳にはいかないのだ。

『ファイアボルト』ッ

炎雷が閃き、屋根の上から此方を狙っていた弓使いアーチャーを吹き飛ばす。
爆炎に吹き飛ばす仲間に動揺した他の冒険者の手に持つ武器を片っ端
から打ち抜き、ベルが一瞬で接近して仕留める。

相手のレベル2の冒険者の能力と比べ、俺とベルの方が若干上回っ
ているらしく対処自体は簡単だ。特に『敏捷』に関してはベルが確実
に高く、俺はベル以上に『器用』と『魔力』は高いので余裕だが……
ただし、力と耐久が致命的に低いので近接戦を挑まれると間違いなく
俺は落ちる。

それにしても、数が多い……包囲網が薄くなっている場所を探せ
ば、すぐに見つかった。まて、なんか不自然過ぎるだろ……姦計か？

あえて包囲の薄い部分を作って誘導しようとしてきてる。それに
包囲が薄い方角は、大通りに面する様に作られた大広場だ。あの
大型弩バリスタに囲まれたら命がいくつあっても足りん。

糞、包囲の分厚いところを強行突破しかねえぞ。

「べ、ベル君、ミリア君、二人の『魔法』を撃ちまくれば、ひよつとし
てなんとかなるんじゃないか？ ミリア君の魔法はさつきから敵
を倒しまくってるし、ベル君の魔法なんて一撃じゃないか」

「いえ、その、『魔法』はあまり使いたくなくて……」

「私の『魔法』ならまだしも、ベルの魔法はここいら一带を火の海にし
ようと思えばできますよ。ただ、それをしてしまったらアポロンファ
ミリアどころか、オラリオ全てを敵に回す羽目になりますよ」

俺の魔法は炎上効果がないおかげでなんとかなっているが、ベルの
魔法は炎の雷、元が炎であるからか炎上しかねない危険性をはらんで

いる。おかげでベルの魔法の威力はかなり控えめにしているのだ。俺の方は——本気で脳天を撃ち抜けば即死させれるだろうが、それをすると恨みを買って本気で殺されかねないのでできない。

屋根の上から此方を追跡してくる狩猟者^{ハンター}。随所に配置されて逐一此方の位置を仲間に伝える観測手^{スポッター}。足止めを行ってくる雑兵。屋根の上から鎮圧射撃の如く矢を放ってくる弓使い^{アーチャー}。直接攻撃を仕掛けてくる上級冒険者で構成されている突撃兵^{アサルト}。

対する此方は汎用型の駒二つ。むしろ良くもってる方だ、『ミリカ』だったらとつくの昔に鎮圧されているだろうし。

「なっ!?!」

「ベル、どうしたのっ」

「ソーマファミアッ?!」

ベルの言葉に思わず息が詰まる。人数が多いとは感じていた、それに加えて他派閥も交じっているのは理解していたが、よく見てみると屋根の上の狩猟者^{ハンター}と観測手^{スポッター}はアポロンファミアアのエンブレムを付けていないどころか、そもそも制服すら身に纏っていない。

そして、彼らのエンブレムは——三日月に杯^{さかずき}、ソーマファミアアのエンブレムッ!

「ミリア、ヒュアキントスと『ザニス』って人が密会してたんだっ」

嘘だろ。どこでだ——あの『宴』の時か。今更遅すぎる情報を受け取りつつ、半ば強引に包囲を突破せんと分厚い所に突っ込む。四方八方から降り注ぐ矢を片っ端から撃ち落としつつも前進、包囲を突破したのか矢が飛んでこなくなった。

って、やられた。包囲を突破した先はギルドと真反対の方角だ。舌打ちと共に大回りする道順を考え、すぐにたたき出す。

「よし、こっちの道を通ってギルドに——」

だんっ、と何者かが後方に着地する音が響いた。

これまでにない、重圧に殺気。格上の重圧を感じつつもベルと共に反転。

白を基調にした戦闘衣^{バトル・クロス}、腰に佩いた長剣と短剣、揺らめく大型のマント。冷笑を浮かべる美青年。アポロンファミアア首領、ヒュアキン

トスの姿があつた。

ベルがヘステイア様を道の脇手に突き飛ばし、俺が指先銃口を向けて発砲する。

『ファイア』『ファイア』ツ」

目にも止まらぬ速度で抜剣し、紅炎プロミネンスの如く輝く長剣——
波状剣フランベルジュが振るわれ、魔弾は一瞬の内に切り払われる。

「ミリア、援護を」

「わかつて——」

「良いのか——流れ弾で神が死ぬぞ?」

醜悪な嘲笑の笑みを浮かべたヒュアキントスの言葉。思わずヘステイア様の方に飛び込んだ瞬間、無数の矢がヘステイア様めがけて飛来し、俺の『マジックシールド』によって弾き落される。

ふざけんなつ、意図的な流れ弾じゃねえかつ!!

ヘステイア様に怪我がないのを確認して振り向いた瞬間、ベルが吹き飛んだ。後方に飛んで石畳に墜落するベルを、ヒュアキントスが追撃しようとしているのを見て、指先銃口を向けようとして——牽制の矢が雨あられと降り注ぐ。『マジックシールド』が碎ける気配はなくとも、ヘステイア様の傍を離れられず、ベルの援護射撃をしようにもヒュアキントスはベルを盾にする様に陣取って狙いきれない。

ベルも俺の射線を塞がぬ様に動こうとするも、相手の方が上手なのか上手くないかない。

「ベル君ツ——」

「ヘステイア様つ、動かないでくださいっ」

急ぎ屋根の上の弓アーチャー使いを撃ち落とす。そのさなかにも二刀のナイフと長剣が、凄まじい量の剣戟を交わし続ける。聴覚を塗り潰す程の金属音が場を支配する。

屋根の上には次々に弓アーチャー使いが現れ、キリがない。むしろ矢だけでなく投擲まで加わり、雨の如く降り注ぐ石に矢が『マジックシールド』を叩き続ける。撃つても撃つても留まる事を知らず、包囲が完成しようとしている。ベルの援護が出来な——ベルが競り負けてる。

飛び散った血が次第にベルの装備を汚していく。赤が、白い髪すら

も染め上げていく。一瞬でズタズタにされていく、援護射撃を——
「出来ない。ヒュアキントスの醜悪な笑みが此方を見ていた。『撃てるモノなら撃つてみる』と挑発してくる。撃てば、ベルを盾に使う積りだ、援護射撃なんてできない。」

いつもなら、射撃位置を変えれば済む話だが、ヘステイア様を庇っていて身動きが出来ない。常にベルを遮蔽物扱いしているヒュアキントスに攻撃が出来ない。屋根の上から降り注ぐ攻撃がとどまらない、足元には小山に成る程に矢や石が散乱している。

ベルとヒュアキントスがこれ見よがしに鏢迫り合いに入っても、ベルが全身に負わされた切り傷から出血していても、援護が出来ない。「アポロン様の寵愛を向けられる貴様が憎くてしようがないが……それも主の望み、栄えある我が派閥の一員にしてやる」

「う——あああああああああああああ!?!」

ベルが咆哮と共に剣を打ち払う。退き離れたヒュアキントスに対し、極限までベルの体が沈み込んだ。

自らを弓矢に見立てた様な——まるで放たれる矢の様にベルが突撃する。

ベルの加速に蹴りつけられた石畳が爆発し、瞬く間にヒュアキントスに接近。怒涛の超連続斬撃が打ち込ま——ヒュアキントスの嘲笑は微塵も揺らがない。

「遅い」

紫紺しこんと紅緋べいひ、繰り出される夥おびただしい光の円弧。

一部斬撃は俺の目にも止まらぬ速さだというのに、ヒュアキントスは顔色一つ変えず、先ほどと同じように受け止めていく。

援護しなくては——『マジックシールド』が罅割れている。あと30秒もせずに守りが消える。ヘステイア様を狙った意図いとう的な流れ弾はいまだに止まない。

装飾過多の波状剣フランベルジュが閃いた。残像すら残すほどの速度で振るわれ、ベルがそれを受け止めようとするも二刀のナイフはあっけなく弾かれる。高速かつ巧妙な切り払い。

流れるような技に、美しさすら感じられる技に——弾かれた反

動でベルの両腕が泳ぐ。

『兎』風情が、吠えるな」

息が詰まった。逃れ得ぬ斬撃がベルを襲おうとしている。援護を——出来なかった。ヒュアキントスが嗤っている。『撃てまい』等と嗤っている。撃てば、ベルを盾代わりに使われる。だから——俺は何もできなかった。

超反応で後退したベルの、フレストプレート胸 甲ごと切り裂く。軽装を断ち皮膚に食い込む波状の刃が肉を抉り、削ぎ落し、多量の血が飛び散った。さらに加えて、ヒュアキントスは距離を詰め、逃れようとするベルに追撃を仕掛ける。

頭の中で火花が散った。一気に発火し、怒りが冷静さを打ち払い、かき消す。

『ライフル・マジック』ッ！ 『リロード』ッ！ 『ファイア』ッッ！！』ヒュアキントスに向けての射撃。冷静さを欠きつつも眼球目掛けて放った一撃。指先から飛び出した一発の魔弾が狙い通りにヒュアキントスの両眼に向けて飛び——ヒュアキントスが醜悪に嗤った。

ベルの腕を掴み、射線上に投げ出す。気付いた時にはもう遅い、俺の放った魔弾が、ベルの右肩を撃ち抜いていた。飛び散った血と、撃ち抜いた魔弾がどこかに消えていく中、ベルの体が地面に投げ出され、倒れ伏した。

立ち眩みの様な感覚、ヘスティア様の悲鳴の様な呼び声と共に、硝子の碎ける音。

ベルが倒れてる——とどめを刺したのは、おれだ。

呆然と立ち尽くした瞬間、ドチュンツという異音と共に左半分の視界が掻き消え、異物を左目に打ち込まれた様な感覚。激痛が弾けた。

「があああああああああああああつ!?!」

「ミリア君ッ!?!」

冷静さを欠き、『マジックシールド』が消えた事に気付かずに呆然とした報い。左目を射抜かれた。矢自体はそこまで深く刺さっていないが、完全に左目の眼球が壊れたらしい。急ぎ引き抜けば——矢

に球体が刺さっていた。

あー、目ん玉ぼろりしちまったよ。空洞になった左目に違和感。激痛で集中力は削がれ、膝を着いて顔を抑える俺の前に影が差した。

「無様だな。まさか仲間の背を撃ち抜くとは……『小人』風情が調子に乗るな」

ガツという音。衝撃が胸を穿ち息が詰まる。顔に感じた激痛に加えての打撃に意識が一瞬遠のく。ぼんやりとした視界の中、ベルと目が合った。ヘステイア様がいつの間にか近づいていた冒険者に取り押さえられてる。

「ベル君ッ！ ミリア君ッ！ 放せっ、放せっばッ!!」

ああ、何もできない。このままじゃ、ヘステイア様が、ベルが………俺は——何もしない方がマシだったんじゃないか。

体から、力が抜けた。左目から突き抜ける激痛。蹴り抜かれ胸骨に罅でも入ったのか呼吸のたびに胸が痛む。言われた通り、無駄な足掻きでしかなかったのか。ぼやける視界の中、ヒュアキントスがベルに歩み寄っていく。

ベルは——立ち上がろうとしていた。

「まだ、意識があるのか」

ベルの目には、怯えの表情が浮かんでいる。けれど、諦めの色は見えない。

「醜い顔だ、品もない……なぜアポロン様はこのような輩に執着されるのか」

血まみれのままヒュアキントスを見上げていたベルを、奴は容赦なく蹴り飛ばした。防御なんてできようはずもないベルの体が呆気なく吹っ飛び、小山になっていた石や矢にぶつかって石や矢が飛び散った。

——やめろ。

「私は身も心もあのお方に捧げている。私だけが、あのお方の全てを受け止められる。………兎など大人しく狩られていればいいのだ」

——やめろっ。

「………暴れられても困る。どうせ後で治すのだ、腕や足の一本は

斬っておいても構うまい」

バチンツと脳内に火花が散る。このままではベルがやられる、何もできずに、何もせず、このまま見過ごすのか？ 余計な事をせず、ただ家族が傷つけられ、ヘステイア様家族が泣くのを見見過ごすのか？

——ふざけんなツ!! ベルも、ヘステイア様も、傷付けさせないツ!!

腕を突き出す。威力を高めた魔法を放つべく、相手の脳天を確実に穿つべく、魔力を込め、怒りを込め、憎悪を込め、詠唱を紡ぐ。

『ライフル・マジック』ツ!! 『リロード』ツツ!!

片目しかないせいで距離感が上手く認識できない。それでも撃ち抜く事ぐらいはできる。

高まる魔力。ヒュアキントスが気付き、此方を見た。——殺してやるっ!

「フア——」
「遅すぎるとぞ」

漸ッ! と目の前の空間が薙ぎ払われた。魔力との繋がりが途絶え、魔法が不発に終わる。

くるくると、中空を飛翔する小さな腕。一瞬で接近したヒュアキントスの顔の横の辺りに俺の腕があった。突き出し、魔法を放たんとしていた右腕が、くるくると中を舞っていた。腕を切り落とされた。

まるで時の流れそのものが遅くなったかの様にゆっくりと腕がくるくる回っている。遅れて切り落とされた切断面から血が溢れだし、黄色い脂肪と白い骨を真っ赤に染め上げていく。

「そういえば、ミリア・ノースリスの方は生きてさえいれば手足を切り落としても構わないのだったな」

ヒュアキントスの何気ない一言。まるで『明日は晴れそうだ』とでもいう様な、気軽な言い草。不自然に感じる程に、切り取られた腕の付け根が発火したように熱を持つ。

ヒュアキントスはもう一度刃を翻し、反対の腕を切り落とさんとフランベルジュ波状剣を振りかぶっている。

そこで、ようやく遅れていた感覚が追いつき、激痛が爆発し脳裏を

埋め尽くす。絶叫が口から零れ落ちそうになり——中空を舞っていた俺の腕が爆発した。

至近距離の爆発。体が吹き飛び、壁に叩き付けられ、意識が遠のく。しかし、激痛で完全に意識を失う事は出来なかった。溢れる血の感触、地面に広がる多量の血。

ヒュアキントスが顔を抑えて膝を着いている姿が目に入った。

「ぎ、貴様……よくも、やってくれたなあっ！ ミリア・ノースリスツ！！」

押さえていた手を退けたそこには、顔の半分程に軽度の火傷を負ったらしいヒュアキントスの姿あった。

痛みで上手く回らない思考。零れ落ちる血、傷口を抑えなくてはと左腕で右腕を抑える。怒りに燃えるヒュアキントス、美形の顔に負った火傷と、般若の如く歪んだ表情が完全に釣り合っていた。

むしろ今までの美形に醜悪な顔という組み合わせに比べ、今のほうがお似合いまである。

痛みから考えが明後日の方向に飛んでいく中、ヒュアキントスが長剣を拾い上げ、此方に迫ってくる。

「どんな隠し種を使ったのかは知らんが、顔を傷つけたのだ——貴様の顔も同じ様に切り裂いてやろう。安心しろ、貴様の役割は竜種を召喚する事だけだ。それ以外の役割は無い。手がなかるうが、足がなかるうが、顔がズタズタになろうが、関係無い。息をして、魔法を詠唱できさえすれば他はいらんのだからな」

醜悪に怒りと憎悪に歪み切った顔。こちらは痛みで真面に動けないというのに、相手ときたらピンピンしてやがる。ああ……ちくしよ……。

迫ってくるヒュアキントス。何もできない、見上げて、口元を歪めて笑う事しかできない。

「お、お似合いの、顔、になり、ましたね」

「黙れっ」

長剣の切っ先が向けられる。ヘスティア様の静止の声を無視し、ヒュアキントスは俺の顔をズタズタにしようとしている。ベルが這

いずつて立ち上がっているのが見えるが、間に合わないだろう。

——結局、なにも……できなかつた。

ビュンツと矢が飛来し、ヒュアキントスの鼻先を掠めた。ヒュアキントスが大きく飛び退いた瞬間、横から抱えられる。

ベルが俺を抱え、いつの間にか自由の身になっていたヘステイア様と並んで走り出す。ぐらぐらと揺れる視界の中、遠くの高びた鐘楼の上から矢を射っている誰かが居るのが見えた。

飛来する矢はどれもヒュアキントスを狙い、気が付けば周囲を取り囲んでいた弓使いアーチャーや他の者達は全員、矢で射抜かれたのか倒れ伏しているのが目に入る。独特の臭気が漂っており、飛来する矢は全て毒矢のたぐいだというのはわかつた。

ベルが必死に足を動かし、ヘステイア様の先導の元進んでいく。遠ざかっていくヒュアキントスが、憎悪の炎を滾らせて此方を強く睨んできていた。

第一〇九話

尖塔の上からの援護射撃の正体はミアハフアミアリア、唯一の眷属ナアーザさんによるものだ。もし、それがなければ手足を切り取られて達磨にされていただろう。

達磨にこそされなかったが右腕を失い、左目を消失した俺は完全に戦力外も良い所だが。

建物に背を預け座らされてベルとヘステイア様が覗き込んでくる。敵の包囲からは抜けていないが、ナアーザさんの援護射撃のおかげで一時的に身を隠す事に成功したのか周囲に敵影はない。

「ミアア君っ、ミアア君すっかりするんだっ」

「ミアアッ！」

ヘステイア様とベルの必死の呼びかけに笑みを浮かべ、痛みを必死に堪えて腰のポーチから取り出した万能薬エリクサーをベルに差し出した。

「使って、くだ、さい」

「でもっ」

「ベル君、使うんだ……ミアア君の傷は高位回復薬ハイ・ポーションを使おう」

「それじゃあミアアの腕と目がっ」

ベルが食い下がるのを見つつ、ベルに万能薬エリクサーを押し付ける。ぐいぐいと押し付け、早く受け取れと急かす。頼むから早く使ってくれ。俺の傷よりも——ベルの傷の方が見ていて辛い。

「ベル君、残念だけど……万能薬エリクサーは欠損を再生させる効果はない」

「ッ！……でも、腕は千切れても形が残ってればっ」

「すいません、腕は……魔力暴発イグニスファトウスに巻き込まれて木っ端微塵です」

「それじゃ……ミアアの目も腕も……」

通常の方法では治せない。それについては、仕方ない。

だが秘策はある。まだ世間に発表されていないディアンケヒトファミアリアが研究・開発を進めている再生薬さえあれば、腕は治せるはずだ。目の方は……わからないが。

「私は、平気ですから」

「……ッツツ!!」

ギリリツと奥歯を噛み締める音が響く。怒らないで欲しい、俺が……俺がベルを撃ち抜いてしまわなければ、もっとマシだったのかも
しれないのだから。

「それ、よりも……肩は、大丈夫……ですか？」

ベルの右肩に空いた風穴。今も血が滴るその傷の方が、腕と目を失った事よりも数百倍辛い。

早く^{エリックサー}万能薬を使って治療して欲しい。ようやく受け取ってくれた^{エリックサー}万能薬によってベルが全快するのを見て、安堵しつつも自身の怪我に^{ハイ・ポーション}高位回復薬を使おうとするも、蓋が開けれない。

口で栓を啜えて開けようとした所でベルの手が伸びてきて、代わりに栓を開けて傷口に振りかけてくれる。顔に、右腕に……一瞬で失った目玉の部分が再生、というよりはゼリー状の何かが空洞になった眼孔を満たして違和感を消してくれ、罅の入っていた胸骨が癒える。失った腕は肘の辺りより少し上の部分で皮膚が断面を覆いつくし、不自然ながらもしっかりと回復させてくれた。

「これで、なんとか動けますね」

立ち上がろうとして——魔力の流れを感知した。攻撃性の魔力が此方に矛先を向けている。

「魔法ですっ！」

「なっ!？」

杖を構えるエルフの魔導士の姿。

建物の高低差を生かし、ナーアザさんの鐘楼から死角になる位置に陣取っている。更に付け加えるとベルの魔法の射程範囲外で、俺の魔法なら射程は足りるが負傷で精度が落ちているだろう事から当てれる距離じゃない。

慌てて二人と相手の射線上に立ち、左手を翳す。『竜鱗の朱手甲』の揺らめく赤色がマジックシールドを染め上げ、次の瞬間には射程距離の長い雷属性の魔法がマジックシールドにぶち当たり、四方に散った雷が住宅の壁面を縦横無尽に穿ち、削り、盛大に土埃が上がった。

塞がれた視界の中、ベルとヘステイア様に逃げる様に叫び、身を反転させようとし——無数の炎球が飛来した。

驚く暇もなく石畳が炎の海となって逃げ道を塞ぐ。

「リッソス、捕まえました！」

「でかした、ダフネ達を呼べ！」

肩で息をしながら道の奥から歩いてくる眉目秀麗なエルフの姿を見据えた。口元を襟巻で隠した特徴的な姿、アポロンファミリアの小隊長のリッソスだ。五人の冒険者まで連れてやがる。

前方は敵数、後方は火の海。

ベルが全快しているとはいえ、今の俺は戦力外。足手纏い二人を連れての逃走は不可能であろう。

ベルが覚悟を決めた様にナイフを構え、腰を落としたところで——
——背後の火の海が掻き消え、数人の人影がベルと敵の間に躍り出た。

「面白そうな事やってるな。俺達も混ぜろ」

後方の火を掻き消して現れたのは、六名の冒険者パーティだった。

「桜花、さん……」

「悪い、遅くなったな」

ベルの言葉に、背中越しに低く唸る様な返事を返す巨漢、タケミカヅチファミリアの団長、桜花だ。

他の者達も過去に顔を合わせた事がある者達ばかり。千草とミコトが此方を見てその目に怒りを露わにして刀を、槍を、戦斧を相手に向ける。

「何だ貴様ら、我々アポロンファミリアに盾突く気か！」

「その通りだが？」

「我らの盟友、そして恩人の危機を捨て置くなどできないっ！」

怒るリッソスの脅し文句を掻き消す程、濃密な怒気を含んだ桜花とミコトの各々の得物が彼らに向けられる。

敵意をぶつけ合うアポロンファミリアとタケミカヅチファミリアが、互いに怒りを含んだ雄叫びと共に激突しあった。

「間に合ったか……い！」

「ミアハ様……っ！」

唐突な登場に呆然としていた俺達に、息を切らせたミアハ様が背後

から走り寄ってきた。

ベルが驚きの表情を浮かべ、即座にミアハ様に縋りつく様に声をかけた。

「ミアハ様ツ、ミリアの目と腕が、治せませんかッ」

「っ……すまない、人体の欠損は……治せない」

もし治せるならナーザさんの腕を治している。辛そうなミアハ様の表情にベルの顔が凍り付き、歯を食いしばる。

「……すまないが悠長に構えてる暇はない。ここは彼らに任せ、ベル達は行け」

「え……で、でもっ」

「聞くのだ。そなた達の身の安全が確保されねば、この戦いは終わらん。わかるであろう」

ベルが躊躇しているのを見て、その腕を強く引いた。

「ベル、行きますよ」

「僕は……」

「今は、逃げるべきです」

少なくとも、俺か、ベル、ヘステイア様、誰か一人でも捕まった時点でアウトだ。人質にされてしまいかねない。

裏路地の奥から大声が響く。増援らしき冒険者が此方に武器を向けて叫んでいる光景があった。序に屋根の上には観測手スポッターが居たのか警笛らしき音も高らかに響く。

「さあ、行け！」

「……ありがとう、ミアハ」

「感謝を……死なないでください」

「それは此方の台詞だ……」

ヘステイア様を抱え、ベルが走り出す。俺も続けて走り出そうとし、よろめいて倒れかける。片腕一本を失った事で体のバランスが崩れて走りづらくなってる上、片目が無いせいで平行感覚も怪しい。それでもベルの背に追い付かんと足を動かさそうとした所でベルに腕を掴まれた。

「ミリア、僕につかまってて」

ベルの首に左手を回す。出来る限り首を絞めない様にはするがどうしても片腕だけでは限界がある。両腕でヘステイア様を抱え、背中に俺を背負ったベルが一瞬、タケミカヅチファミリアの面々の背中を見て悔しそうに歯噛みし、呟いた。

「これが……派閥同士の抗争……」

一つの派閥が戦端を開けば、芋づる式に与する派閥が参戦し、抗戦しだす——結果、泥沼化。時が経てば経つ程に戦火は広がり、際限なく激化するファミリア同士の抗争。

これが弱小のヘステイアファミリアと、中堅のアポロンファミリアであってもこれだけの大騒ぎになっているのだ。例えばロキファミリアが下手に戦端を開けば——オラリオが滅びかねない被害が出る。

「都市端が近い、今いる場所は都市の西端か……っ」

ベルの背に必死にしがみ付きながら周囲を見れば、都市を囲む市壁が俺たちを見下ろしていた。そそり立つ石の巨壁と、オラリオの中央に立つバベルを見ればおおよその距離感は掴める。ヘステイア様の言う通り、現在位置は都市の西端に近い位置だろう。

ヒュアキントスから出鱈目に逃げ回ったせいか、ギルド本部からは遠く離れている。

だが、逆にガネーシヤファミリアの本拠との距離は近づいた。

「ヘステイア様。ガネーシヤファミリアの方に……いや、やめましよう」

ここから南の方角に行けば良い。しかし——無数の人影が屋根の上を駆けずり回っているのが見える。包囲が厚いどころか、あつちの方面は罠に近い状態になってる。近づけば確実に感知され袋のネズミにされる可能性が高い、突破は不可能だ。

『いたぞおー！』

「……!?!」

響く大声に続き、俺達の位置を知らせる甲高い笛の音まで響き渡った。

自身のファミリアの眷属に加え、他派閥の団員も数多く参戦してい

るせいで膨大な人海戦術を用いたゴリ押しが少人数しかいない俺達に盛大に突き刺さる。

ナアーザさんの狙撃から逃れて建物沿いに此方に接近してくる冒険者達。駆け抜けようとするベルの背から離れ、地面に降り立って詠唱。

『シヨットガン・マジック』『リロード』『ファイア』ツ！』

大雑把な狙いでも十二分な効果を齎す散弾で迎え撃ち、相手を完全に撃ち落とす。次の瞬間、矢が無数に飛来してシールドに当たって弾けた。

魔力の流れを感じ取るも、またしても距離が空きすぎている。散弾では届かず、ベルのファイアボルトの射程外。目を剥きつつも近場に倒れた冒険者の体を掴んで盾代わりに——詠唱が止まないっ!?

神酒ソリマを示すエンブレムを身に着けた悪人面した魔法使いらしいその者は、俺が同じ派閥に属する冒険者を掴んで盾代わりにしようとしているのも気にすることなく、風の槍を打ち込んで来た。しかも連発して。

「ミリアツ！」

「ぐうっ、ちよつと、仲間、巻き込んでっ!？」

一発目で盾代わりに前に押し出した冒険者が吹っ飛んで壁に叩き付けられる。二発目がマジックシールドにぶち当たって盛大に暴風を噴き荒らす。

着弾と同時に小竜巻を引き起こす『嵐の槍』の魔法。着弾後も小竜巻のせいで身動きが取れなくなった。ベルも近づけず、マジックシールドに断続的にダメージが発生する。防御が悪手だったと気付くも遅い。すでに嵐に囚われて動けないっ。

ベルが術者目掛けて冒険者が落とした剣を投げつけるも、他の冒険者が余裕をもって撃ち落とす。やばい、足を引張ってる。冷や汗をかきながらも周囲を見回し——見覚えのある赤髪が魔法を詠唱しているのが見えた。

『燃え尽きろ、外法の業』

短文詠唱の魔法が発動し、僅かに空間を揺らぐ陽炎が術者目掛け

て駆け抜ける。前に立っていた盾持ちが間に割り込むも風のようにすり抜け、術者に纏わりつく。瞬間、ボンツと唐突に術者が魔力暴発して盾持ちもろとも吹き飛び、維持されていた小竜巻が掻き消える。

罅割れたマジックシールドが修復されていくさ中、ヴェルフが駆け寄ってきた。

「ようやくみつけ——おいっ、腕と目はどうしたっ!？」

驚きに見開き一足飛びに近づいてきて腕を確認され、ヴェルフは俺たちの顔をそれぞれ見て、震える声で尋ねてくる。

「まさか、アイツらにやられたのか?」

「うん、ヒュアキントスに……」

「ええ、油断してたわ」

俺とベルの答えにヴェルフの表情がくしゃりと歪む。

「ベル様、ミリア様っ」

ヴェルフに遅れてベル達の元へ駆け寄ったりリルカはすぐに気づいた。

赤い。大量の血を浴びた様に——否、大量の出血を強いられたかのようにベルとミリアの二人は赤く染まっていた。

ベルの装備している軽装の胸プレストプレート 甲は斬撃が貫通した大きな傷跡が残し、更に陥没している。そしてなお酷いのはミリアの傷——傷

ではない、欠損だ。どこか傾いだ立ち方をしている彼女の、右腕が肘の少し上の辺りから消えていた。そして左目は白濁しており光を映していない。眼球を失った際に高位回復薬ハイ・ポーションを使うとそんな目になる。片目を失う致命的な傷。

自身の持つヒーラーバッグからありったけの回復アイテムを取り出して二人に差し出し、ミリアの肩を支える。いつもの安っぽいローブが赤黒く染まっているミリアが『汚れるわよ』と身を離そうとするのも構わず、彼女を支えた。

「ありがと、リリ……」

あまりにも惨い仕打ちにリルカの小さな胸が痛んだ。これでは

冒険者を続ける事も難しく、下手をすれば日常生活にすら支障をきたす程の傷だ。

手持ちのアイテムどころか、オラリオに現在出回っているありとあらゆる薬を使おうと治せぬ怪我を負っているミリアが若干ふらつきながら「移動しましよ、敵の増援もすぐ来るわ」と呟く。

「状況はなんとなくわかってはいますが……やはり酒場のいざこざが原因ですか」

「……俺のせいなんだな？」

「いや、鍛冶師君が悪い訳じゃない。全部アポロンが仕組んだ事だ——遅かれ速かれこうなっていたらうね」

五人で走り抜けるさ中、ヴェルフがくしゃりと表情を歪めてミリアの傷をちらりちらりと見る。

余りにも酷い負傷具合。彼が責任を感じるのも無理の無い話だとリルルカは思いつつも、同時に彼の気持ちを痛いほど理解した。

もし自分が原因となったのなら、命を断ちたくなるほどの重責を感じるだろう。

「……ヴェルフ、あまり責任を感じすぎないで。この傷なら治す手段があるわ」

「なっ！ ミリア様それは本気で言っているのですかっ!? 現状オラリオに出回っているモノでもディアンケヒトファミリアの『銀の義手』^{アガートラム}を付ける事で最低限は治せますが、眼球に関してはどうしようもないですよっ!?!」

ミリアの言葉に思わず声を張り上げれば、彼女は困った様に笑い。「普通はそうよね」と呟いて説明を続けようとし——舌打ち。

「見つかったみたいよ。正面、敵複数っ」

まず五人、そしてその奥に更に数十を超える冒険者の姿を見たベルとヘステイアが表情を歪め、ミリアが魔法を詠唱しようとし——
ヴェルフが手で制した。

「お前らは行け。ここは俺が止める」

「でもっ」

「良いから行ってくれ。じゃねえと、俺は俺を許せなくなっちゃう」

強く握りすぎた拳、ギリギリと奥歯を噛み砕きかねない程の力で噛み締めたヴェルフの言葉にベルが動きを止める。ミアアが嘆息し、ベルの袖を引っ張る。

「ここは任せましょう」

「おう」

「はあ、ベル様たちはギルドに向かっただけです」

「リリースも行つて良いぞ」

ヴェルフの言葉にリリルカは首を横に振り、ハンドボウガンの調子確かめつつも彼の横に並ぶ。

「何処かの喧嘩っ早い鍛冶師を止められなかったのはリリの責任でもありますので」

「ヴェルフ、リリ……」

「わかったわかった。片付けたらすぐに追いついてやる。約束するから安心しろ」

悔しそうな表情を浮かべるベルの反論もヴェルフが塞ぐ。ミアアが一瞬ヴェルフを強く見つめ、小さく呟いた。

「死なないでね」

「わかつてる」

ベル達を分かれ道の奥へと進ませたのを見届け、ヴェルフとリリルカは自ら前方の敵へ迫る。

「リリースケ、援護しろっ」

「わかつてますっ、お二人の負傷分。たっぶりやり返してやりましようっ」

もう幾度目かもわからぬ襲撃。

ヘステイアファミリアに与する派閥がいくつも立ち上がり、相手を攪乱してくれているとはいえ、まるで焼け石に水。相手方の数は優に総計300人を超える程の人員が動員されており。それに加えて傭兵らしい無所属の者達すらも観測手として活動しているらしい。

一応、なぜかソーマファミリアの団員が撤退して人数が一気に10

0人単位で減りはしたのだ。——ベルには伝えていないが、多分……リリがソーマファミアの手に落ちたのだろう。

大義名分を失った彼らはこれ以上の行動が危険と判断し、撤退。だとするなら筋が通る——通ってしまおう。

結局、一周彷徨って戻ってきたホーム周辺。最初の騒ぎの場だから既に住民は避難済みであり、住宅街は静寂に包まれていた。

その静寂を食い破る戦闘音が響き渡る。

『ファイア』ツ 『ファイア』ツ！

『ファイアボルト』！

俺の散弾が敵を近づけられない様にしながら、ベルが空き家となっていた民家に全力の魔法を撃ち込む。

連射された炎雷が石材を巻き上げ、膨大な煙幕を発生させる。相手の視界を塞いだ隙に素早くその場を離脱しようとするも、風の下級魔剣が振るわれて煙幕が払われていく。

このままでは見つかるかと危ぶんだヘステイア様が急ぎ指さした方向に駆ける。そこにあつたのは水路、裏路地の道から階段を経て進める。駆け下りた俺達は隧道状の用水路に飛び込んだ。

「大丈夫かい、二人とも……」

「はい、なんとか……」

「腕が無くて、走り辛いですね」

壁に寄りかかって息を整える。出血しすぎて貧血気味なのか一瞬視界が眩み、横に座っていたベルに倒れ込みかける。そのままベルが俺を支え、自身の膝の上に頭を誘導してくれた。ベルの膝につけていたプロテクターはいつの間にか吹き飛んでいたのか、柔らかさを残しつつも固いベルの膝に頭を預ける。

——膝枕してもらったのって、親父以来初めてかもしれないな。

「すいません、誤射してしまっ」

「いや、僕の方こそ……ごめん、守れなくて」

煉瓦造りの水路は存外広く。まるで橋下の空間を思わせる。中央を走る水の流れの行きつく先は迷宮都市の地下にあるらしい地下水

路だろう。反対側の出口からわずかに光が届いている。

水路の外からは姿を眩ませた俺たちを探すけたたましい足音が響いていた。見つからない事を祈りつつ——いや、すぐ見つかるな。

少しでも体力を回復させようと、今ポーチに収まっている分と、リリが手渡してきたすべてのポーションを浴びる様にベルと分け合つて飲み干す。というより飲ませてもらう。そのさなかに、大声が聞こえてきた。

『聞こえているか、ベル・クラネル！』

ヒュアキントスのねっとりとした嫉妬交じりの声。聞きたくない声が響いた事でせつかくの膝枕を楽しむ事もできやしない。空気読めと文句を言いたくもなる。

『どこに隠れようと、どこに逃げ込もうと、我々は貴様を追い続ける。一時を凌しのごうが無駄だ！』

高台の上から周辺一帯に聞こえる声量で叫ぶ品の無いヒュアキントスの行動に嘆息。

『地上でも、ダンジョンでも同じことだ！ この先、お前に安息は無いと思え!!』

あまりにも、ドストレートな脅し文句。もつと捻りを加えろと言いたい。

ともかく、あのド変態どもは一生ベルを付け狙うと宣言したのだ——最悪、禁忌の神殺しをしでもしないと止まらないかもしれない。いや、むしろ神殺しなんてしようモノなら復讐の鬼と化した者達の襲撃が始まりかねん。

ベルが表情を強張らせ、俺の左手をぎゅつと握ってきたので握り返す。何かしらの決着を付けない限り、彼らは此方を狙い続けるのだろう。——戦争遊戯で勝利する他無いか。

ただム力つく事に、彼らに対する報復をやり過ぎる事もできない。例えば神アポロンを天界に送還するなんて事をすれば、地上に残された眷属の内の何割か——ヒュアキントスは確実に——が報復しようと襲ってくるだろう。

一番確実なのは、派閥の眷属は全て一人残らず皆殺し。神は天界への送還だが……問題はアポロンファミリアに所属する者達の内、何人かは俺達と同じ様に付け狙われた結果、所属させられている被害者が混じってる事だ。

『ミリア・ノースリス！ 大人しく出てこなければ、手足を叩き折って竜を召喚するだけの装置となる事になるぞ！』

……どうして、こうも人を利用したがるんだか。くっだららない、本当にくだらない。

ベルがより強く手を握り締めてくる。ギリギリと奥歯を噛み締める音が聞こえ、ベルを見上げた。

「ベル？」

「ほ、僕は、ミリアを……」

守れないかもしれない。そう呟いたベルの瞳からぼたりぼたりと雫が零れ落ちてくる。雨の様に降る、温かな雫に思わず笑みが零れた。守ろうとしてくれていて、それだけ大切に思ってくれている。それだけで俺にとっては十分過ぎる。

不安と恐怖に揺れるベルを、どうにか安心させてあげたい。けれど、現状持ち得る手段が無さすぎる。息が詰まり、ベルを泣かせている事実が胸が抉られた様に痛む。

「——二人とも、聞いてくれ」

繋いでいた俺とベルの手をハスティア様が両手で優しく包み込み。優しい気な瞳で俺達を見据えた。

「アポロンが本気になった以上、このままじゃ僕たちに未来はない。打開する手段は二つ、勝ち目のない戦いに挑むか——このオラリオから逃げるか」

残酷な現実だ。力無き者が、力有る者に蹂躪されて被害を被るのは、世界の常識だ。

優しく、美しく、綺麗事だけで世界が回る訳が無い。そうであれば——もっと世界を好きになれたはずだ。

「ボクは君たちが居てくれるなら、どこへ行こうがへっちゃらさ。たとえ追われることになっても、君たち二人と一緒になら、一生逃避行し

続けられる」

なぜ、俺はここに居るんだろう。

転生したから。そんな陳腐な一言で済ませてしまうには、ここで手に入れたモノは大きすぎる。

ガネーシヤ様と来年の怪物祭^{モンスターファイリア}についても話し合いたい。神デイアンケヒトの待望の為の再生薬の件もある。直情的でありながら仲間想いなヴェルフ。毒づく事が多くもいつも支えてくれていたりリルカ。愚直過ぎる程に真面目なニコト。恩義を返す為と身を張ってくれた堅物の桜花。——数え切れないぐらい、綺麗で美しい出会いに満ちていた。

前世では得られなかった、心を開いて相對する事の出来る。そんな素敵な人たちに出会えた。

欲張りだ、俺はきつととても欲張りな人間だ。皆と一緒に居たい、ベルやヘステイア様だけじゃない。汚らしい者達もいた、けれどそれを打ち消してなお有り余る程に、美しい人たちがいる。そんな人たちと別れたくない。

ベルと視線が交わった。胸の内に抱いた想いは、きつと同じだ。ベルの視線の先に憧憬の相手が居る。けれどそれだけじゃない、出会った仲間たちが居る。微笑みあった者たちがいる。それを捨てる事なんてできない。

「二人とも、ボクの事は好きかい？」

「は!？」

素っ頓狂な声を上げるベルに苦笑しつつも、俺はヘステイア様を見上げて宣言する。

「好きです。貴女の為なら、私は死んでも良い」

「ボクも、ミリア君の事が好きさ。けれど——死んでもいいだなんて言わないでくれ。ボクは君と一緒に居たいんだ。一緒に暮らしてほしいし、君が隣に居てくれればなんだってできる……君を一人になんてしないさ」

俺の素敵な女神様。貴女はそういうけれど、それでも俺は貴女の為なら死んだって構わない。

「ボクは君の事が好きだぜ？ 可愛くて可愛くてしようがない。君とずっと暮らしていたい。君の隣にずっといたい……君を誰にも渡したくない」

これはきつと告白。重要で、重大で、決して邪魔してはいけない——邪魔されてはいけないはずの告白だ。

「ベル君、君はボクのことをどう想ってる？」

邪魔してはいけないモノだ、だというのに——邪魔者は空気を読まずにやってきやがる。

身を起こし、二人の手を振り払って入口に陣取った瞬間、爆撃。マジックシールドで全てを受け止め、クラリと揺らぐ視界。すでに魔力が尽きようとしているらしい事を意識しつつも、魔法を詠唱する。

『シヨットガン・マジック』ッ！ ベル、ヘステイア様、足止めしますので続けてください」

後ろで呆然としていたヘステイア様がブチつと音を立ててツインテールを荒ぶらせている姿から視線を逸らし、前方に見えるアポロンファミリアの小隊を睨みつけた。

『いたぞ、水路の方だ！』

『かかれ！』

神聖な告白の場を邪魔しやがって、全員纏めてぶっ殺してや——
「ガシイツと首根っこを掴まれて一気に駆け出したベルに引っ張られていく。」

「ちよつと、ベルっ」

「いいから逃げるよミリア君ッ！」

「そうだよミリア、逃げないとッ！」

顔が真っ赤の二人。ベルがヘステイア様を片手で抱え、俺の首根っこを掴んで走っている。器用過ぎるな、と感じているとヘステイア様が叫んだ。

「二度ならず二度までも、ことごとくボクたちの邪魔してっ……おのれえくくくっ」

怒髪天を突く勢いで怒っているヘステイア様を見つつも、後方に向かって散弾をぶちまけて追跡を妨害する。

「もう怒った！ 二人とも、ボクは腹を括ったぞ！」

「は、はい！」

「南西だ、南西を目指せっ！」

ベルが困惑しながらもヘステイア様の指示に従ってギルドとは真逆方面に駆け抜けていく。俺は俺で首根っこを掴んでいたベルの手を振り払い、近づこうとしてくる冒険者に片っ端から散弾をぶちまける。住民の避難が終わっているおかげで流れ弾を気にする必要が無くなって最高だ。

相手方の思いもよらない転進に加え、俺の放った散弾が盛大に相手の動きを阻害し、ベルの加速も合わさって一瞬で包囲を突破した。

第一一〇話

ソーマファミアの団員が消えた事で一気に手薄になり、包囲の突破およびに目的地への到着は容易であった。

西のメインストリートを超えて第六区画、西と南西の大通りに挟まれた区画。

片腕と片目を失った俺の姿を見た者達のどよめきを無視して進む先、ヘステイア様の示した目的地がそこにあつた。

「コン、は……」

「アポロンファミアの本拠ですね」

背の高い鉄柵に広々とした植栽豊かな前庭、荘厳とまではいかずとも重厚さが見て取れる巨大な石造りの屋敷。門に飾られた弓矢と太陽のエンブレム。アポロンファミアの本拠だ。

当然の様に、その前庭には不自然に置かれた総金属製の大型弩があつた。一機二機なんてもんじゃない、十機単位で整列させられたそれが空に向けてその照準を向けていた。

もし、キューイを使って直接殴り込みをかけようとしていたら、その何十機もある大型弩の矢の雨に撃たれて粉微塵になつていた可能性が高い。

「殴り込みに来たんじゃない、どけどけ！ しっ、しっ！」

幸いな事に、キューイとヴァンが死んだ事で警戒を解いていたのか大型弩に人員は配置されていない。

正門を潜り抜けようとしたヘステイア様に対し、門兵が槍で押しとどめようとするが、神威を僅かに放ち威圧するヘステイア様の前に屈して道をあける。

正面門から乗り込んだ前庭。大型弩用の人員として残っていたのか、それとも此方が乗り込んでくる事を想定していたのか20人近い団員が一斉に飛び出してきて構えた。

ヘステイア様はそれに構う事なく敵中ど真ん中を突っ切つて進んでいく。その後ろを俺とベルが警戒しながら進む。不意打ちでヘステイア様が殺されれば、等といらぬ警戒をして周囲を睨めば、相手方

も此方を睨み返してくる。

進み切った先、ちょうど玄関口らしき所に此方の来訪を見越していたかのように、欲深い色を顔面全体で映し出した醜悪な顔を晒す神アポロンが悠々と立っていた。

「やあ、ヘステイア。こんなところまで乗り込んできて、どうしたというんだい？」

ニヤニヤと笑いながら出迎えてくれる男神。ヘステイア様に睨まれても平然そうにしていた神アポロンの視線が俺に止まる。表情を消し、悲し気な表情を浮かべた彼は大業な仕草で手で顔を覆った。

「ああ、なんと惨い——哀れな。抵抗さえせねば彼女の綺麗な指も、美しかった碧眼も失われるなどという悲劇に襲われることなどなかったというのに……だから私は言ったのだぞヘステイア、後悔するぞとな」

演劇の舞台に立つ俳優の様に、悲し気に顔を覆い隠し、両手を大きく広げてヘステイア様を見下す神アポロン。ヘステイア様から怒気と、より一層強まった神威が放たれ、神アポロンの神威とヘステイア様の神威がぶつかり合う。

ヘステイア様は言葉を発しなかった。それでもその身から発せられる怒りの度合いは見ずともわかる。ピリピリと肌を突き刺す様な怒りを隠しもしないヘステイア様。

側仕えをする小人族パルウムのルアン——つい昨日、包帯グルグル巻きパルウムの木乃伊だった彼は今は平然と側仕えをさせられている——を伴ってヘステイア様の前まで悠々と歩いてきて、止まった。

一方的にヘステイア様を見下す神アポロン。対するヘステイア様はただ静かにアポロンを睨んでいる。

「……パルウム君、その手袋を貸してくれ」

「え……は、はい」

有無を言わせない声に加え、戸惑ったルアンを睨むことなく神威での威圧で早くしろと急かしたヘステイア様に、ルアンはうろたえながらも手袋を手渡す。

ヘステイア様らしくない程に、強引なやり口だ。その怒りの度合い

がどれほど深いのがわかる。とても、とても怒ってる。

渡された手袋をギリイツ、と握りしめたヘステイア様は、神アポロンの顔目掛け渾身の力で投げ付けた。

「!?!」

「ヘステイア様、本気ですか……」

相手に手袋を投げつけるというのは、西洋の風習で、決闘を申し込むしるしだったはずだ。つまり——ヘステイアファミリアはこの時点をもつてして、アポロンファミリアとの決闘、『戦争遊戯』を受ける事になった。

「上等だっ！ 受けて立ってやる！ 戦争遊戯を!!」

高らかに叫んだ最終的な返答。此方の戦力は二人と竜三匹、対する相手は軽く百を超え、それに加えて全員分の火精霊の護布に下級とはいえ魔剣、対竜用兵器を何十機単位で揃えられるだけの資金力——資金力はいささか不自然さはあるが——がある相手だ。普通に考えれば、勝ち目はない。

「ここに双方の合意はなつた——諸君、戦争遊戯だ!」

神アポロンが両手を開いた瞬間。敷地内のそこから中から一斉に神々が現れた。

『いえええええええええええええええええ!!』

神々が身勝手に面白半分に行動したのか。それともヘステイア様が『戦争遊戯を受けた』という事実を目にした証人という役割を与えて此方に逃げられない様にしたのか。

後者だろう。庭の茂みや木の上からだけでなく、本抛の窓を開けて此方を見下ろす神すら居るのだ。屋敷に招いておいて前者でした等という事はあるまい。

『ギルドに戦争遊戯の申請をしろ!』

『臨時の神会も開くぞ』

『漲ってきた——!』

『久々の宴や——!』

飛び交う興奮の声々。娯楽に飢える神々の真骨頂が発揮され、あつという間にお祭り騒ぎである。神口キの声も交じっている。

「聞いての通りだ。試合の詳細は神会で決める。日程は後で伝えよう……楽しむうじやないか、ヘスティア？」

にんまりと、策が成ったとでも言いたい様な醜悪な笑み。背筋がゾワリとする。

睨み返すヘスティア様を他所に、神アポロンはそのまま背を向けて屋敷へと帰っていく。腰を抜かしていたらしいルアンが這いずる様にアポロンを追いかけていったのを見つつ、ヘスティア様を見た。

戦力差的に、勝負にならない。それでも受けるだけの理由があるのだ。

「二人とも聞いてくれ。一週間だ」

ヘスティア様の蒼い瞳が此方を射抜く。姿勢を正し、ヘスティア様を見上げた。

「戦争遊戯ウォーゲームの開催まで、一週間、ボクがなんとしてでも稼いでみせる」

「えっ……」

「一週間……」

「その一週間の間に、ベル君、ミリア君、出来る限り強くなってくれ。今日ボク達を襲ってきた誰よりも、何よりも強くなってくれ！ 君たちなら出来る!!」

強い信頼を向けられている。持ち得る全てを、俺達に賭けてくれた。

地位も、財産も、命すらも、俺とベルに賭けた。

「御意、一週間で出来る限りの事をし、必ずヘスティア様に勝利を……」

跪いて、宣言する。

敗北は死と知れ、これは約束で、誓いだ。

ベルが身を震わせて立ち尽くす横で、俺は即座に反転。出来る限りの事はすると誓った。

「ベル、ロキファミアリアの本拠に向かってください」

それだけを言い残し。俺はお祭り騒ぎのまま去っていくこうとする神々を追った。

神ロキを探して回ると、すぐに見つかった。走り回る朱色の髪がこちらの通行人に『戦争遊戯やぞー!』『宴まつりやぞー!』と片っ端から声をかけてははしやぎ回っている姿があった。

急ぎ神ロキに近づいてその腕を掴んだ。

「神ロキッ！ 依頼をっ」

「うおっ!? 何や、うちは宴まつりは楽しむけど手えだす積りは——」

急に腕を掴まれてたたらを踏んだロキが鬱陶し気に此方を見下ろし、顔を見て動きを止めた。此方を覗き込んでくる瞳をじつと見つめると、神ロキの哀れみを含む視線が突き刺さった。

「腕と目は、アポロン所にやられたんか。同情はしたるが、うちは医神やないんや。諦め——」

「話を聞いてください」

ロキの言葉を強引に押しとどめ、ロキを押し倒して耳元に口を寄せ、小声でささやく。

「神ロキ、もし……もしも無くなったこの腕を治せるとしたらどうしますか」

ピタリと、神ロキが動きを止め、此方の肩を掴んで押しつけ。じいーつと此方を見つめてきた。

真偽を見極める瞳に射抜かれる。

「嘘やないんやな?」

「我が主神へスティアに誓って」

神ロキの視線が揺れ、溜息を零した。

「話は聞いたる。ディアンケヒトん所行けばええんか?」

「はい」

ディアンケヒトファミアの本拠にして店舗があるのは北西のメインストリートだ。いつもなら冒険者が多いこの通りだが、今は神々が駆けずり回っている姿ばかりが目立つ。

光玉と薬草のエンブレムが飾られた清潔な白一色の建物。ディ

ンケヒトファミアリアの治療院の扉をけ破る勢いで開けた神口キが大
声で叫んだ。

「ディアンケヒトおるんやろ！ 出てこいやあ！」

中に居た薬師らしき人物がビクリと肩を震わせ。俺の姿を見た瞬
間にぎよつとした顔を浮かべ、がちやがちやと棚の商品をいくつか
落つことしながら店の奥に駆けていった。

しばらくすると、アミッドさんが駆けてきた。神口キに頭を下げ、
俺に駆け寄ってくる。

「ノースリスさん、その腕は……先程から騒ぎになっていた様子です
が、その時にですか？」

「おうアミッドたん。ミアリアの腕を再生させれるってホンマなん？」

「……っ、すいません。お答えしかねます」

びくりと肩を震わせ、即座に此方を見たアミッドさんが目を細めて
此方を見据えた。

「契約内容に、未完成の薬については他派閥に公表しない事とあつた
はずですが」

「すいません。それについても話し合いを行いたいです」

契約を破った。それは非常に重い事だ、けれど今はそれよりも重要
な事がある。というよりこのままへステイアファミアリアが潰れた場
合、契約の履行が行えなくなる。それに——もしへステイアファ
ミアリアが負けたら、俺は命を断つ。つまり『再生薬』に必要不可欠な
『キューイの血』を入手する手段が失われる事を意味する。

これはある意味脅しだ、『再生薬』の研究を続けたければ、へステイ
アファミアリアに協力しろ。出来ないなら、契約を破棄するという。

ジーっと此方を責める様な視線で見つめてきたアミッドさんが深
い溜息を零して、俺と神口キを奥の部屋に招いた。

治療用の寝台の設置された治療室らしき部屋に案内され、そこに寝
かされる。

「あの、話し合いを——」

「馬鹿を言え、怪我人なんかと話す気は無い」

不機嫌そうな声が響いた。

白い清潔そうなローブを着込んだ男神がずしりと入ってきて此方を見下ろし、唐突に顔を押しさえられ覗き込まれる。

「会うのは初めてだな。とりあえず動くな」

「よう、ディアンケヒト、なんや不機嫌そうやな」

「ふん、神ロキか……ミリア・ノースリス、面倒事に巻き込まれおつて」不機嫌ですと顔に書いてあるその男神。神ディアンケヒトが数人の団員に指示を出し、俺の体を寝台に縄で縛り付け始めた。まてまて、何をされるんだ。

「ちよつと、話を——」

「だから怪我人と話す事等無いわ。大人しくしている。アミツド」

問答無用といった形でアミツドさんが何かの薬品に漬けた針をブスツと首の辺りにぶつ刺してきた。瞬間、視界がぐにやりと歪み、手足の力が抜ける。毒物かと必死に抵抗しようとした所で肩を押さえられた。

「落ち着いてください。冒険者用の麻酔です。意識が落ちる程ではありませんが四半刻程麻痺します。今から『再生薬』を使いますのでそのまま待っていてください」

欠損部位の再生には非常に強い不快感の様なモノを伴う。それに加え、再生中の部位に刺激を与えると激痛となるらしい。耳元で説明されるさ中、神ディアンケヒトが小瓶をもって近づいてこようとし、神ロキが興味深そうにその小瓶をじろじろと眺め、手を伸ばそうとして神ディアンケヒトに叩かれていた。

「やめろ、邪魔をするな」

「ええやんちよつとぐらい。それが欠損した部位を治せる薬なんか？」

「ノースリス、貴様恨むぞ」

いまだに未完成だというのに、だとか、完成してから発表して皆を驚かせる積りだった、だとか。グチグチと文句を零す神ディアンケヒトに謝罪しようとし、舌まで麻痺してまともにしゃべれないのに気付いた。

体が上手く動かない。縛られたうえで麻痺毒まで使われた影響で

身動きが取れない。

神ロキがニヤけた顔で此方を覗き込んで来た。

「今ならやりたい放題やなあ」

手をわきわきと怪しく動かしながら近づいてくる神ロキ。別に触るのは構わんが、触った場合は此方の言う事を聞いてもらおうとじつと見つめていると、ガシッと両腕を神ディアンケヒトの脊属に掴まれた。

「今は邪魔だ、後で話を聞いてやる。外で待っている」

「ちよい、うちも興味あるんやけどっ」

ずりずりと神ロキが治療室から引つ張り出されたのち、ようやくディアンケヒトが小瓶を俺の前で揺らして口を開いた。

「良いか、これは貴様の連れていた赤い飛竜の血から作られたモノだ。失った腕程度なら余裕で再生できるだろう。ただし、再生には強い不快感を伴う。そのうえでお前の眼球に関しては再生するか不明だ」

安全である事は確実に保証する。そういいながら目の前で揺らされる小瓶。中身はまるでスライムのような粘性の強いドロリとした恐ろしく赤い液体が入っている。待て、それ飲むのか？ 凄まじく飲み辛そうなそれ、しかも全身麻痺で意識はあれど体がまともに動かない状態で？ 窒息死しそうだぞ。

警戒に目を見開いて訴えかけると、神ディアンケヒトが不愉快そうに眉を顰め口元を覆うマスクを身に着け始めた。他の者達も同様のマスクを身に着けている。まて嫌な予感が——— 神ディアンケヒトが小瓶の蓋を開けた。

瞬間、ズブリと鼻から脳髓に向かって釘をぶっ刺したかのような痛みすら伴う独特な匂いが漂った。麻痺してなかったら鼻を押さえて転げまわるだろう匂い。ただ、臭い訳じゃない、なんとというか痛い匂いだ。鼻に刺さる様な、それでいて悪臭という訳ではない。不可思議な匂いに麻痺しているはずの体がびくりと跳ねる。

「我慢しろ。貴様への罰だ」

マスクを着けていても辛いのか神ディアンケヒトも、他の薬師や医術士も鼻を押さえている。

彼が小瓶を俺の無くなった腕の付け根辺りに垂らしていく。ねつとりとした、本当にスライム染みた粘度を持つ液体——半ば固体と液体の中間にすら見えるそれが、腕に付着する。

瞬間、熱が弾けた。びくりと体が震える、灼熱の液体が垂らされたかのように、皮膚が一瞬で焼けた感覚に囚われ——麻酔のおかげか痛みは無い。ただ熱い、熱く、欠損していた右腕の先が溶岩の中に突っ込んでいる様な不可思議な感覚。固定されているせいで腕がどうなっているのかは見えないが、徐々に腕の熱が引いていく感覚を味わいつつも、グチユグチユという肉をかき混ぜる様な不愉快な音に背筋が凍る。

痛みが無いのが逆に怖い。

小瓶一つ分を腕に垂らし終え、二本目の小瓶を取り出して今度は頭を押さえられて、蓋の開けられた小瓶が顔の前に晒される。ま、まってくれ！

小瓶からあふれ出た匂いが鼻に突き刺さり、息が詰まる。半ば呼吸困難に近い状態におかれるなか、右目で見える景色の中、小瓶がゆつくりと傾けられる。神ディアンケヒトやアミッドさんが何か話しているが聞こえない。

ドロリとしたスライムが、顔に——左目に垂らされた瞬間。光が弾けて世界が真っ白に染まった。

悲鳴を零す事も出来ない。ただ灼熱が左の眼孔の中で暴れ狂い、身を振る事も出来ずに獣の様な絶叫が響くのを耳にした。というか俺の口から勝手に飛び出していった。

「おい、聞こえているか」

「ノースリスさん、聞こえますか？」

気が付けば真っ暗になっていた。どれぐらい時間が経ったのかいまいち把握できない。一分か、一時間か、数日か、まるで深い眠りについていたかのように体に張り付いて離れない疲労感。目を見開き

——あまりの眩しさに目を細めた。

右目の正面に魔石灯の明かりが突き刺さった。ちらちらと動いてる事と、微かに見えた景色からディアンケヒトが俺の目に光を当てて

いる事だけはわかった。

「眩しいです……」

「眩しいか？ こっちもか？」

そういつて左目にも光を当ててくる。ズブリと突き刺された様な痛みを感じ、思わず痛みにも呻く。

「ぐうっ……痛いです……」

「痛いだと？ ふむ……少し待て」

瞼越しにすら感じる光、それが退けられた。目の奥がズキズキと痛んでいる。強い光を見たときの反応だろう。確かに光が退けられたが目を開けようとした所で眩しさに思わず顔を庇う。

ふと目を見開いた所で気付いた。右腕で光を遮る様に顔を庇っていた。俺の、右腕である。

「……本当に治ってる」

呆然と自身の右腕を見てみると、不機嫌さが天元突破しそうな雰囲気醸し出している神ディアンケヒトが頭の上から覗き込んで来た。

「ノースリス、お前はバカにしているのか？ 我がファミリアで開発した『再生薬』だぞ。失敗する事等——待て、ノースリス、お前の目は何色だ？」

言葉の途中で驚愕したらしい神ディアンケヒト。思わず目を細めるさ中、眼も再生している事に気付いた。若干見え方が左右で差があるのか少し慣れないが、それでも完全に眼球を失っていた左目が治った事に安堵しつつ、神ディアンケヒトの問いに答えた。

「碧眼ですよ。それよりも腕も眼もちゃんと治ったみたいですね」

「……ノースリスさん、今、鏡を持ってきますので少しお待ちを」

周囲の治療士たちが慌ただしく動く中、ディアンケヒトが俺の右腕を触りつつも口を開いた。

「腕の再生には成功したな。ただ、やはり色素関連に異常が残るか」

「色素……？」

「左腕と比べてみる。右腕の方が色が白くなっている。目の色なんて顕著過ぎるぐらいだ」

神ディアンケヒトに言われた通り、右腕と左腕を比べてみて気付い

た。差は一目瞭然、右腕が白い。もともとが色白な肌ではあったが、今の右腕は真っ白通り越して血管すら浮かびかねない程に色が薄い。駆けてくる音が響いて、鏡を持った医療士が神ディアンケヒトに鏡を手渡す。その鏡はそのまま俺の方に差し出された。

「見てみる」

ぶつきらぼうで不機嫌そうな言い方。よほど気に食わない事でもあったのだろう……若干嫌な予感を感じ取りつつも鏡を手に取り、覗き込んだ。

顔が腫れ上がる事もなく、いつも通りの蒼玉を思わせる碧眼。のはずだった。

右目は確かに碧眼なのだ。だが、左目は——赤い。ベルのルベライトの瞳よりも、なお紅い。

俗に言う、虹彩異色症、オッドアイと呼ばれる状態になっていた。というよりこれは……。

「再生はすれど、色素までは再生しない。結果——元と違う色。血の色になる。言ってしまうえば白子症化してしまう訳だな」

はあ……左目が赤い。紅い……まあ、確かにちよつと中二病臭い感じはするが、見えるなら別に構わないだろう。

「この欠点も直さないとならんな。と、それよりもノースリス、話は聞いているがロキのやつに情報を零したそうだな」

「あ、その件についてはなのですが——」

「戦争遊戯ウォーゲームについては聞いている。全く、アポロンの奴め……奴から大量の高位回復薬の発注がかかっておつたが断って正解だったな」

苛立たし気な雰囲気ハイ・ポーションの神ディアンケヒト。彼曰く、数日前に唐突にアポロンファミリアから大量の高位回復薬ハイ・ポーションの発注がかかったらしい。それに加え——ヘステイアファミリアのミアア・ノースリスとの取引量を増やしたくはないかと持ち掛けられたそう。

今まで以上に取引する素材の量を増やしてやるから手伝え、そう持ち掛けられたらしい。それに対し神ディアンケヒトは最初は乗り気だったそう……マジか。

ただ、詳しく話を聞いていく内にディアンケヒトがブチ切れて破談

になったららしい？

「アポロンの奴は素材を他の医療ファミリアにも卸すと宣ったのだ」
俺の連れている竜の素材、現在のディアンケヒトファミリアとの契約上、俺は他の医療ファミリアと新たに素材の取引契約を事は許されていない。例外としてミアハファミリアだけは元から取引があったので問題ないが、他の競争相手に素材を渡されたくない訳だ。

現状の取引量を増やすならまだしも、他の競争相手にまで素材を渡されたら無意味。それについてアポロンに訴えるもアポロン側もすでに他の医療ファミリアと契約を結んだ直後だったので無理だと断つたらしい。結果、ディアンケヒトが『そんな馬鹿げた話に付き合えるか！』と破談。

「うわあ……」

「ですので、現状、我々ディアンケヒトファミリアはヘステイアフアマリアに協力姿勢をとる事になっています……が……」

客室に案内された直後、再生した俺の腕や目を見て——特に目を見たロキが『オッドアイ幼女キタアアアアツ！』と叫び出してひと悶着あつた訳なんだが……今この瞬間も悶着が続いている。

「んで、うちからの条件やけど、今後『再生薬』が完成したら半額うちに卸せや」

「ダメだ。2割だ」

「半額や、それは譲らんで。もしそれを呑むっちゅうなら——ヘステイアフアマリアの戦力強化に協力したる」

オラリオにおいて、失った手足の再生というのは治療士、薬師などの医療系派閥に関わる者達の悲願。それを成せる素材が現状『キューイの血』のみ。それを他派閥に渡したくない神ディアンケヒトからすればヘステイアフアマリアになんとしてでも戦争遊戯ウォーゲームで勝利して欲しい。

そのために、俺は神ロキに取引を持ち掛けたのだ。未完成ではあるが半年前までの欠損を再生させることができる——若干、白化現象という副作用はあるが——『再生薬』を今でも優先してひそかに取引する権利を与える代わりに、今回の戦争遊戯ウォーゲームに向けて、ロキ

ファミリアの協力の元、俺とベルの特訓を行って欲しいというものだ。

「どのみちヘスティアファミリアが潰れたらファミリアは自害するで？
せやったら半額でも破格やろ」

「……くっ、覚えていろよロキ」

「取引成立やな」

『再生薬』の価値を考えれば、十二分に可能性のある取引であり。実際、神ロキもこの取引には乗り気だ。

先にロキファミリアの本拠に向かったベルと合流し、ロキファミリアで特訓……不安は残るが、第一級冒険者の手を借り受けられるだけの根回しはできた。

……直接、ロキファミリアにアポロンファミリアを滅ぼしてもらう事も考えたが、それは違う。

「神ロキ、直ぐに向かいましょう」

「やる気に満ちとるな。ええで、ファミリアの皆にはうちが話つけたる。急ごか」

ヒュアキントスだけは、俺の——俺とベルの手で仕留める。

第一一話

いつにない喧騒に包まれるオラリオの街並み。

僅か一刻ほどこか経っていないにも拘わらず、娯楽に飢えた神々が盛大に吹聴した影響もあり、すでにヘステイアファミリアとアポロンファミリアの戦争遊戯ウォーゲームについてはオラリオ中に知れ渡る事となっていた。

「神ロキ、もつと早く走れませんか」

「無茶、言うな、や……」

ゼエゼエと荒い息を零しながら必死に足を動かすロキ。ぶつちやけ超遅い。

仕方がないといえば仕方がない。あくまで地上で過ごす神は仮初の人と同じ器を使っており、そこにはなんら神の力の一片すらも宿す事は許されていない。ただの人と変わらぬ神の仮初の器でしかない神ロキと、恩恵を受けて敏捷を高めた俺では速度に差が出るのも当然。仕方がないか……。

「神ロキ、失礼します」

「うおっ!? ガチロリにお姫様抱っこやとっ!」

「舌噛むんで黙っててもらえませんかねえ」

喧騒に満ちた北のメインストリート。

ベルを待たせている事もあって俺の足は羽根のように軽やかで、面倒臭くなって神ロキを抱えたまま跳躍し、屋根の上へと躍り出た。オラリオ北部、市壁に近い場所に立ち並ぶ尖塔群。何度か足を運んだ事もあって道についてはちゃんと覚えていたが、大通りも裏通りも含め人や神がごった返して走り辛かったのだ。

屋根から屋根へ、数Mはある距離を余裕で飛び越えて進みロキファミリアの本拠、黄昏の館へ通じる正門が見えてきた。そこには門兵らしき二人の冒険者が槍を交差させて侵入は許さないという雰囲気デベルを睨みつけており、ベルはそんな視線に晒されながらもじっと立っていた。

「いい加減にしたらどうだ。何を考えているのか知らないが、今の貴

様は此処に居て良い立場ではないだろう」

「主神はどうした。戦争遊戯の準備だつてあるだろ。いつまでもそこに立たれていては迷惑だ」

「……すいません。もう少し待たせてください」

険悪な雰囲気漂う中、神ロキを抱えたまま一気に門前へ飛び下りる。

いくら冒険者とはいえ、神を抱えたまま飛び下りた影響か足が若干痺れる。急ぎ神ロキをおろしてベルに駆け寄った。

「ごめん、遅くなった」

「ミリアー！ やつと……その腕は——!?」

一瞬で気付いたのか驚愕の表情を浮かべて俺の腕を見たのち、目を直つ直ぐ見つめられ——目が合った瞬間にくしやりと表情を歪めた。驚愕から、罪悪感の交じり合った表情。それを気にすることなくベルの手を掴んで横に退いてもらう。

「ベル、腕と目に関しての話はあと。今はもっと大事な事があるわ。神ロキ、お願いします」

「おう」

門兵の二人が訝し気な表情どころか、殺気立っていた。思わずたじろいだ所でロキが二人の前に出た。

「ロキ様、そいつらは戦争遊戯に参加する——」

「知つとるで。というかその場面をウチも見とつたしな」

「じゃあ彼らに関わるのはよくないと——」

「わかつとる。そのうえでや、フィン達を呼んで集めてくれや。あと一時間後に皆には講堂に集まるよう伝えてな。最低限の警備はそのままにや。それとこの子らは客人として扱う、いや依頼主か」

「はあ……ええつと、え？ 彼ら、ヘステイアファミリアですよ!？」

戦争遊戯に参加する派閥。その片割れを招き入れようとする主神の行動に驚きを隠せない様子の門兵。しぶしぶといった感じで二人の内一人が屋敷の方へ駆けていく。残る一人が訝し気に俺とベルを睨む中、ロキは「ええからええから」とヘラヘラ笑いながらも俺とベルを手招きした。

「ほら主神じきじきに案内したる。さつさとし」

「え？ ああ……その、はい」

「わかりました。お願いします、神ロキ」

困惑した表情のベルの手を引き、神ロキに続いて門をくぐる。門兵も困惑した表情ながら、主神の行いに溜息をついていた。どこの派閥もそうだが、主神の突発的な行動に困らされるのはどこも一緒なのか。主にガネーシャ様の本拠魔改造的な意味でだが。

案内された客室。ベルと並んで座る正面には【勇者】^{フレイバー}フィン・デイルムナ。そのすぐそばに立った【九魔姫】^{ナイン・ヘル}リヴェリア・リヨス・アールヴ。窓のあたりに立つ【重傑】^{エレガラム}ガレス・ランドロック。そしてフィンの横で腕組をしたまま真剣な表情で此方を見据える神ロキ。

対するは冷や汗だらっただらのベルと、交渉内容を必死にまとめる俺。

片や世界に名を轟かせるオラリオ二大派閥の片割れたるロキファミリア。

片やオラリオにて吹けば消える様な極貧派閥、ヘスティアファミリア。

普通なら歯牙にもかけられない様な派閥だ。フィンの求める小人族のお嫁さんという例外を除けば、ほぼ関わり合いになる事のない派閥。そんな彼らとの間におかれた契約書。その内容を隅々まで営め回すように見る。もし契約漏れでもあろうものなら目も当てられない。

「では契約内容を纏めよう」

我々ロキファミリアはヘスティアファミリアの戦争遊戯までにおける、身の安全およびに鍛錬を行う。これに当たりロキファミリア本拠、黄昏の館の一部区画の自由行動を許可する。許可されていない区画への侵入もしくは侵入を匂わせる行為を行った場合、即座に拘束する。

当面の間は生活上必要な物、およびに戦争遊戯に向けて鍛錬する際

に発生する武装の破損等についてはロキファミリアが補填を行う。

他、ヘステイアファミリアが戦争遊戯で勝利出来るよう、アポロンファミリアおよびにその周辺派閥への調査・情報収集を行い、その情報は逐次ファミリア・ノースリスに包み隠さずに引き渡す事。

アポロンファミリアに対し妨害工作や直接的に危害を加える事は行わない。

ヘステイアファミリア団員、ベル・クラネルおよびファミリア・ノースリスのステータスについては基本、必要最低限以外は開示を求めない。開示したステータスに関してロキファミリアの一部の幹部のみが取り扱い、他派閥ならびに他眷属に一切明かさない事。

そのほか、必要な物資・装備等の発注を代理で行う事。

対するヘステイアファミリア側は、『ディアンケヒトファミリアの開発中の未完成の『再生薬』を横流しする事。およびに完成後の『完全再生薬』の取引価格を通常の半額とすること。

ロキファミリアが直接アポロンファミリアに手を出す事はしない。というかできない。

いくら『再生薬』があるとはいえ、オラリオ全土を巻き込んだ抗争に発展しかねない引き金は引けない。つまり最終手段としてロキファミリアに殲滅依頼を出す事は出来ない訳だ。

ロキファミリアの体裁としては『戦争遊戯を少しでも面白くする為に弱すぎるヘステイアファミリアの鍛錬を行う』という形に収めるらしい。あくまでも、弱すぎて一瞬で終わる事を懸念し、少しでも娯楽を長続きさせる為に必死に依頼を持ち込んだヘステイアファミリアを鍛えるという事になるわけだ。

ただし、直接的なアポロンファミリアへの妨害は行わない。それをする面白くするという目的から逸脱し、いちゃもんを付けられる原因になりかねない。

対するアポロンファミリアの反応がどうなるかだが、神ロキは『たかが一週間鍛えた程度で第二級冒険者倒せるぐらい強くなると思うんか?』と周囲に吹聴して回り、警戒度を下げる積りだそう。確かに普通の冒険者なら一週間鍛えた程度でどうにかなると思えない。

隅々まで眺めた契約書には不備らしい不備は見当たらない。足を
掬われる様な状態には至らない、はずだ。

「……………これでいいです」

「だったらエンブレムを……………つと、ヘスティアファミリアはエンブレ
ムが決まっていなかったかな。だったら記名で構わないよ」

エンブレム、そういえばまだ決めてなかったか。

とりあえず、一応団長であるベルの記名、そして副団長として俺の
名前をそれぞれ書き記しておく。二枚の契約書にそれぞれの名前と
契約内容。どちらも不備が無い事を完璧に確認し、ベルと共にそれぞ
れに名を記してフィンに手渡す。

フィンも舐める様に契約内容を確認し、不備の無い事を確認してか
らようやくその書面にエンブレムを刻んだ。これで契約成立。渡さ
れたヘスティアファミリア側の契約書を受け取り……………保管に
困った。本拠は今や瓦礫の山、金庫の様なモノも持ち合わせがない。
契約書をどうするか考えつつも、丁重に封筒に収めておく。

「すいません、契約書の保管に関してなんですけど」

「ん？ ああ、ホームが……………そうだね。信頼できるファミリアなんか
があればそちらに預けるのが良いと思う。神ディアンケヒトの所か、
確か神ミアハとも親密だと聞くね。彼らに預けるといのはどうだ
ろう」

「……………そうですね」

タケミカツチ様かミアハ様に預かってもらうのが最適だろう。

ぼんやりと考えつつも契約書を収めて肩の力を抜く。一瞬で意識
までもっていかれそうになるが、まだ気絶するには早すぎる。もつと
考えるべき事があるし……………。

眉間を押さえ、眩暈を堪える。今まで意識していなかった疲労感を
意識した影響か、一気に体が重くなる。もう少しだから待て、これか
ら顔合わせと説明に参加して……………ああ、畜生。

グラグラと揺れる視界。異変に気付いたらしいリヴェリアが目を
見開いて何かを言っている。誰かに肩を支えられるも、視界が一気に
暗くなっていく。ぼやける声が遠く遠く離れていき、疲労感がドロの

様に纏わりつき、意識が再浮上する事が出来ない。

誰の言葉かさえわからない。けれど『今は休め』と、うつすらと聞こえた。

夏も終わりを迎えようとしているのか日差しの強さは和らぎ、僅かに残る熱気が肌を撫でる。

デスクに置かれたパソコンおよび周辺機器はそのままに、VR用のヘッドセット等が置かれ、整理整頓は行き届いているのに、どこか雑然とした雰囲気は抜けきらないのは、置かれている物が多すぎるせいだろう。

懐かしの自室の中、衣装棚から衣類を取り出ししては旅行鞆に詰め込み、時折思い出したかのように本棚の本を引き抜いてはぱらぱらと捲る。

冷房を入れていないせいかじつと汗をかきながらも、衣装棚の中身が空っぽになるまで同じ動作を続け、ふと少年が本棚の漫画本を取り出し、呟いた。

「あー、アイツに返すの忘れてたな……メッセージ送っとくか」

携帯端末を取り出して操作しながらも、無造作に旅行鞆を入り口横に投げ出し。端末の画面を見ずに部屋を見回して溜息を零す。深々と、重苦しい溜息。表情は暗く、これからこの家を去らねばならぬ事に酷く傷ついている様な、そんな表情を浮かべた少年。

SNSを通じて友人に返し忘れた漫画を取りに来てくれと伝えたとほぼ同時、友人からのメッセージが飛び込んできたのを見た少年が苦笑を浮かべ、携帯をポケットにしまった。

「さて、荷物はこれだけでいいか……ゲームは、親父に任せよう」

部屋に残された大量のゲーム。数え切れないぐらいの数が山積みになっている。

あの人と共に、面白い神ゲーから、目も当てられない糞ゲーまで片っ端から買い集めた物たち。時間があればいつでもゲーム機の電源を入れて遊び始めるのが日課だった。そんな思い出を浮かべた少

年が幾度目か数える事も億劫になる溜息を零し、VRヘッドセットにてを伸ばそうとする。もう一度、あとほんの少しだけミリカンにログインしようとした所で、声が響き渡った。

「もう何時まで待たせるの！」

扉が無造作に開かれ、部屋の惨事を見た女が鼻に皺をよせた。

「うわ……よくもまあこんなに集めたもんね。やってる時間勿体無いでしょ」

整理整頓したうえでなお雑然と積みあがるゲームの数々を目に、嫌そうな表情を隠しもしないその女は、無造作に旅行鞆に手を伸ばして片手で持ち上げて少年を睨む。

「荷物の整理終わったなら早く来なさい。全く、なんで私がこんな荷物運びを……」

ぶつぶつと文句を零しつつも、衣類の詰め込まれた旅行鞆を奪い去っていった女を呆然と見送り、少年は台の上にヘッドセットを置いた。溜息を零し、自分の部屋を後にする。

階段を下りる途中に聞こえた、父親と、親権を勝ち取った女の会話が聞こえ、少年の表情が苦悶に歪み、息を吸って、吐いて、吸って。笑顔を浮かべた。

「ユーノの事頼むぞ」

「わかってるって。アンタみたいなの所には置いとけないでしょ。というか何あの部屋、ゲーム塗れ過ぎるでしょ、どう考えてもやりすぎだし。勉強できる環境じゃないでしょ」

「うっ……でも、あいつ頭良いし。学校の成績なんていつも一番だったぞ」

「馬鹿でしょ。一番って、頭良いのはその通りだけでもっと上を目指せるのにアンタが邪魔してんのよ」

クドクドと文句を零す女と、尻に敷かれて首を疎める父親。その姿を見て苦笑した表情を浮かべた少年が声をかけた。

「もうやめようぜ。母さん、先行っててくれ」

「……はいはい、じゃあアタシは先に車で待ってるから」

ひらひらと手を振って去っていく女を見送り、父親と向かい合った

少年。父親は口ごもりながらも、笑った。

「あー、悪い。なんか、その……まあ、二気だな」

「大丈夫だって。親父こそ、ちゃんと飯は食えよ？　あと、洗濯とか洗い物とかもちやんとしないだし。部屋の掃除とかも」

「うっ……わかってるって、そこらへんは、頑張る……多分」

子供っぽく視線を逸らした父親に苦笑する少年。仕方ない人だと内心呟きながらも少年は父親の目を真っ直ぐ見て、口を開いた。

「じゃあ、俺は行くから」

「……おう」

誤魔化す事が出来ない程に、悲しそうな表情を浮かべたその顔を見て少年の顔が一瞬歪みかけ、表面を取り繕う笑顔浮かべなおした。

「そんな悲しそうな顔すんなよ。死んじまう訳じゃないんだし、また会いに来るって」

「ほんとか！　じゃあゲーム買って待ってるからな！」

はしやぐ声で念押しする父親の姿に苦笑の表情を浮かべ。少年は拳を突き出した。

「おう、約束だ。母さんの所で生活が安定したら会いに来る。絶対に」

「ああ、約束だ。破ったらお前から預かったゲームのセーブ全部消してやるからな」

互いに拳を打ち付けあい。父親の『セーブを消す』発言に顔を引き攣らせた少年が『マジか』と呟きながらも、心の中で『誓い』を立てた。『絶対に会いに来よう』と……。

「……それじゃ、またな」

「おう、待ってるからな」

笑顔を浮かべた父親が遠ざかっていく。背を向けて歩き出した少年が玄関を潜り、車に乗り込む所まで見送りにきた父親は、車が見えなくなるまでずっと手を振っていた。車に乗った俺も、あの人に手を振り返っていた。

——俺が『ユーノ・シラノ』としてあの人と交わした。最後の

約束。そして『誓い』。

『絶対に会いに行こう』

その約束は果たせなかった。果たされる事は無かった。少年はその日の夕方、母親が運転する車が山道の急カーブを曲がり損ねて崖下に車ごと転落し、死亡したからだ。

少年——あの人に嘘をついた最低な奴、『誓い』なんてモノを立てておきながら、約束の一つ守れやしない屑だ。

薄らと目を開き、ドツドツと恐ろしい爆音を響かせる心臓の音色に心臓が止まりそうな程驚きつつも、震える手を顔の前に持ってきて——左右で色合いの違う小さな手である事に安堵した。

見えた景色は見覚えのあるモノで、まだ駆け出しで怪物を甘く見ていたところにミノタウロスに半殺しにされて保護されたあの時に寝かされていたあの客室だろうと想定できる部屋だ。いつの間にかコーブから着替えさせられており、微かに開いた天蓋のカーテンの隙間からテーブルに置かれた俺のポーチが見て取れた。

「ああ、疲労で気絶。笑いも出ないですよ」

独り言のように呟き、身を起こす。頭に纏わりつく疲労感はずきつておらず。まだ寝ていたいと全身が訴えかけてくる。あまりにも鬱陶しい訴えに舌打ちを零し、天蓋付きベッドから這い出て立ち上がろうとするも、膝はがくがくと震え、立ち上がる事もままならない。キュルルとお腹が鳴り、空腹感を訴えてくる。

寝ていたいという欲求に加え、空腹感という食欲が交じり合っせめぎ合う。くらくらと揺れる視界に、そういえば結構な量の血を流していたし今の俺は貧血気味なんじゃないかなと考え、部屋を見回す。どれぐらい時間が経ったのかはわからない。日付が変わっているのか、それとも日付は変わっていないのか、外を見れば夕日が差し込み、部屋を赤く染めていた。

跳ねる心臓はそのままに、テーブルの方に手を伸ばす。当然、届くわけもない距離で——頭の中で『誓い』がグルグルと回り続けていた。

「は、はは……笑えますね」

笑える。本当に笑える、頬を伝う雫の感触を覚えつつ、口から飛び出すのは乾いた、乾ききった笑い声。自分の口から出ている笑い声が、カラカラに乾ききつていて、笑っているのに全然楽しそうじゃない。

そりや当然だ、楽しい気分になんてなれる状況じゃないんだから。頬を伝う雫——ボロボロと溢れ出てくる涙を拭う。

拭っても拭っても、とめどなく溢れてくる涙。疲労感に空腹感、眠気に吐き気。あと、『約束』と『誓い』。

——あの人との『約束』も守れなかった馬鹿野郎が、また『誓い』なんて立ててやがる。

へスティア様に誓ったんだ。必ず勝利を、と……

——本当に守れるのか？ あの人との『約束』は果たせなかった癖に？

勝たなきゃ。今度は、失敗は許されな……

——あの時だって、失敗は許されなかっただろ。

……………。

——無駄な抵抗は止せ。被害が広がるだけだ。

……………。

——本当に、お前は勝てるのか？ たった一週間鍛えた程度で、あの派閥に勝利を得られるのか？

出来る。

——そうだな。確かに勝てるだろうな。全てが終わった後でなら。

吐き気と眩暈が眠気と空腹を打ち消した。立ち上がるという気が削り取られ、『誓い』が頭の中に響く。

『ミリカン』の公式大会。あの人との再会の為に欲した『ミリカン最強』の称号。

俺は勝てた。決勝戦、何度も何度も何度も、響く重低音と共に撃ち抜かれて倒されたあの『最強の狙撃手』を下し、見事勝利を飾った。『最強の竜人』という称号を手にし、意気揚々と上がった表彰台。

あの人をやってきて、表彰状を手渡し。そして『願い』を聞かれる。

その場面を想像して期待を胸に、意気揚々と表彰台に上がった。上がって——あの人は違う人がやってきて、あの人がつい数週間前に亡くなっていた事を知らされた。

年に4回行われる公式大会。前回、後3%を削りきれなかった、あの戦い。

あれに勝利していれば、あの人に会えた。あれに敗北したから、あの人に会えなかった。

優勝はできたのに、『最強』の称号は手に入れたのに。なのに——俺は『約束』を守れず、『誓い』を叶える事叶わなかった。

そんな俺が、また『誓った』。勝利を——女神に勝利を。また失敗するんじゃないかって、誰かが囁きかけてくるんだ。

第一一二話

飛び散った血が鍛錬場の踏み固められた土に飛び散る。頭部を強打されたことで歪む視界の中、ベル・クラネルはぼんやりと飛び散った血を見つめていた。

脳裏に浮かぶのは石畳に飛び散る血と、倒れ伏したミアア。片腕を失い、とめどなく溢れる血がとくとくと石畳を染めていく。顔を上げた彼女の左目からも同じ様に夥しい量の血が溢れ出て、美しかった淡い金髪を赤黒く染め上げている光景。

拳を握り締め、少年は身を震わせて立ち上がろうとする。

——あの光景を繰り返してはいけない。

切れた唇から零れる血を拭い、ふらつきながらも身を起こして膝立ちになった。瞬間、背中に衝撃。

ドゴリツと金属靴メタルブーツが少年の背中に突き刺さり、盛大に吹き飛んで転がっていく。その背中を睨みつける狼人の青年、ベート・ローガは不機嫌さを隠しもせず倒れ伏したまま動かなくなった少年に声をかけた。

「おい『兎野郎』、なんだ？ わざわざ起き上がってくるまで待つてくれるとでも思ってたのか？」

「ちよつとベート、やり過ぎだつて」

怒声を浴びせかけるベートを横から諫めるティオナは心配そうに少年に駆け寄り、容体を確認する。咽込みながらもティオナに上体を支えられたベルとベートの視線が交差する。不機嫌そうな青年の瞳に射抜かれた少年が身を震わせた。圧倒的能力差から一方的に蹴られる恐怖に少年の瞳が揺れ、次の瞬間には目を見開いた。

少年を庇う様にベートの前に出た金糸の髪をたなびかせる少女。アイズ・ヴァレンシユタインがベートを軽く睨んだ。

「ベートさん、今のはやり過ぎだと思えます」

「ああ？ おいおい、こんなペースで『変態野郎』に勝てると思つてんのかよ」

戦争遊戯を行う事は既に街中で噂になっていたにも拘わらず、厚顔

無恥にもオラリオの二大派閥に数えられるロキファミアリアに顔を出した少年。彼らの派閥の小人族が持ち込んだ『再生薬』の効力を聞いたロキ、フィン、リヴェリア、ガレスが満場一致でヘスティアファミリアへの加担を決めたのはつい一刻程前だ。

それに準じロキファミリアが誇る第一級冒険者は徴集を受け、目の前のヒューマンの少年ベル・クラネルと、今は疲労で昏倒している小人族の少女ミア・ノースリスの二人の鍛錬を受け持つ事になった。

ミアは昏倒して客室に運び込まれているが、ベルはさっそく鍛錬場に足を運んで鍛錬を受けていた。

【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン

【凶狼】ベート・ローガ

【大切断】ティオナ・ヒリユテ

第一級冒険者三人という豪華な面子を相手に始めた鍛錬。監督役として【重傑】ガレス・ランドロックが鍛錬場の脇で腕組をして見守る中始まったそれは、酷く過酷なモノであった。

鋭い眼光でアイズ越しにベルを睨みつけるベート。少年の目に映るのは憧憬を浮かべた少女の背中。身を震わせた少年がティオナの手を押しつけ、震えながら立ち上がる。

「アルゴノウト君、無茶しちゃダメだって」

「いえ、ごめんなさい。僕は平気ですから」

痛むのは背中だけではない、体中の隅々に至るまで丁重に打撃を加えられ、すでに立ち上がる事などできようはずもないほどの痛みを伴っている。それでもベルは立ち上がった。

下がりきった両腕を上げ、ナイフを構える。普通なら休憩するなりする程であるが、狼人の言葉がベルの背中を押しした。

『敵が待つてくれるなんて思うな』

彼のその言葉がベルの背中を押しした。全くその通りだったからだ、ミアが傷つけられた時、相手が襲撃してきた時、神様と共に逃げている時、どの時も相手は待つてくれなかった。少年はそれを知った。

あの場面が、あの光景が、飛び散る血と倒れ伏す家族の姿が何度も脳裏に過る。痛みで呻き声を零しながらも、ベルは口を開いた。

「アイズさん、退いてください」

「……良いの？」

「僕は、強くならなきゃいけないんだ」

誰よりも何よりも、目指した理想と乖離しすぎている今の自分が許せない。家族を守る事も出来ない自分が許せない。苦しむ家族を救う事も出来ない自分が、許せない。

女神との約束。必ず強くなると、約束した。そして――――

【勇者】の言葉がベルの背中を押すのだ。

『彼女はこれから先、数多くの神に狙われるだろう』

ミリアの連れている飛竜からは『再生薬』という今までの常識を塗り替えてしまう道具の素材が入手できる。その飛竜はミリアの召喚魔法で召喚されており、他に類を見ない種類の飛竜だ。

彼女の価値は、塗り替わるだろう。これから先、彼女が歩む道には数多くの者達の思惑が、陰謀が渦巻く事になる。その過程で、何度も何度も、彼女は身を危険にさらされるだろう。ベル・クラネルはそれを防げるか？

『敵から彼女を守る事も出来ない。そんなベル・クラネルが彼女を守れるか？』

切れた唇から滴る血を拭い、ベルはベートを睨み返した。

「僕は、強くなるんだ」

弱いままで良いなんて事は無い。ただ、強く、もっと強く。憧れのあの人に追い付くだけじゃない、大事な人達を守る為にも、もっと、もっともつと、頂きのその先に至るまで強く。家族を守り抜く為にも――。

客室から出てすぐ、レフィーヤさんが驚きの表情で迎えてくれた。どうやら俺が気絶してからまだ三時間程しか経っていないらしい。朝一の襲撃、数時間の逃亡のち片腕と片目を奪われ、そこからアポロンファミア本拠に殴り込み。その後の治療、そしてロキファミアへ。ただ今の時刻はなんと驚く事なかれ、午後三時過ぎだ。つまり

おやつの時間——あまりにも濃密な出来事塗れだったが、実質半日も経っていないというのは驚きが隠し切れない。

「ミリアさん、その手と目は大丈夫なんですか？」

「ええ、ちゃんと動きますし見えますよ」

病的な白さになっている右手をひらひらと振りながらレフイーヤさんに答えつつ、目の前に置かれた『魔術書』を読み込んでいく。難解な内容で理解するのに時間はかかるものの、魔術師は知識がものというのだ。オラリオ最強の魔術師と言われるリヴェリア様が用意した代物、間違いはないだろうと読み進める。横に座るレフイーヤと、正面の黒板にも似た代物に様々なモノを書き記して俺に魔術とは何かを教えてくれているリヴェリア様。

彼女らが時折俺に質問を飛ばし、正しく理解できているかの確認を行っている。それを答え、魔術書を読み進めっていると、リヴェリア様が腕組をして唸り出した。

同時にレフイーヤも唸り出し、二人して顔を見合わせると溜息を零す。

「あの、どうかしましたか？」

「いや……ミリア、お前の魔術への理解の仕方は非常に興味深い。興味深い、いささか独自性が強過ぎるな」

「独自性？ 独学に近い状態というよりは、基礎を学んだ後は勝手な想像で補っていた結果、途中から色々とぶっ飛んだ魔術への理解をしていたらしい？ 確かに魔術書を読めば読むほど『意味がわからなく』なっていて頭がこんがらがってきていたのだ。」

「多分ですが、魔術書からミリアさんが学べる事は何もありません」

「……じゃあどうすべきですかね」

「とりあえず、鍛錬場に向かうか。ベル・クラネル同様に実戦形式で学んだほうが掴めるものがあるだろう」

魔術書に書かれているのは基礎の応用。それを使おうとすると『俺の独自性』が死んでしまう。もともと、俺の独自性あふれる魔法の行使というのはかなり効率がいらしく、下手にいじるよりはそのままの方が現状は良いらしい。

貸し与えられた魔術書をひよいと取り上げられ、一時間ほどの講習は無駄に終わった。早めに無駄だとわかったと喜ぶべきか、一時間を無駄にしたと嘆くべきか。嘆く暇があるならさっさと実戦形式の鍛錬に移るべきだろう。寝覚めが最悪だったとしても、今できる事に全力を注がねばならない——ベルだってズタボロになりながらも必死に鍛錬をしているのだから。

鍛錬場の踏み固められた土を跳ね上げながら小さな体躯の少女が跳ねる。彼女が魔法を行使している証たる魔法^{マジック・サークル}円は維持されたまま。時折囁く様な詠唱が零れ落ち、同時に放射状に広がる散弾がぶちまけられ、彼女を包囲し打ち倒そうとしていたロキファミアの上級冒険者が吹き飛ばされてはたばたと倒れ伏す。

その様子を見ていた第二級冒険者、レフィーヤ・ウイリデイスは言葉^{言葉}を失っていた。目を見開き、驚愕の表情を浮かべた彼女は、小さく唇を震わせて鍛錬場で五人の上級冒険者を弄ぶ小人族の少女、ミア・ノースリスを見ていた。

「うそ……うそ、だって……」

「魔術師、か……魔術師の概念が壊れそうだね」

レフィーヤの横で木箱に腰掛けたフィン・デイルムナがそう呟けば、腕組をして模擬戦の様子を見ていたリヴェリアが眉を顰めながらも口を開く。

「……『ショットガン・マジック』だったか。放射状に広がる無数の魔弾を放つ、か」

ミア本人が口にした魔法の情報。無論、全てではないだろうがその概要を聞いたリヴェリアとフィンはほぼ同じ結論に至っていた。

消費が少なく、威力が低めな代わりに同時に二丁持ちをして手数を稼げる『ピストル・マジック』

射程が短い代わりに零距离で絶大な威力を、中距離で回避の難しい攻撃範囲を持つ『ショットガン・マジック』

消費が大きい代わりに、威力と射程に優れる『ライフル・マジック』

オラリオでも珍しい『分岐詠唱魔法』と呼ばれる魔法を覚えた彼女の本質は『射出口銃口を生み出し、魔弾を放つ』その一点が共通している。炎や氷といった特殊な属性を持たない無属性の魔弾。

これらの魔法の扱いを見たいという事で上級冒険者一名とミリアの模擬戦を行う事となったのだが、結果はミリアの圧勝。少なくともランクアップしてから一か月も経っていない相手に対し、熟練のレベル2冒険者が手も足も出ない光景は、その冒険者の心を折るには十分過ぎた。

それに加え、今行われているミリア一人に対し五人の上級冒険者が戦うこの光景を見れば、殆どの者は驚きを隠せないだろう。実際、第一級冒険者に至るまで、そして至って以降、数多くの冒険者を目にしてきたフィンやリヴェリアの二人も、目の前の光景はにわかには信じがたい。

『ファイア』『ファイア』

「ぐあっ!?!」「ぐはっ!?!」

「くそっ!」「近づけないぞ!」

放射状に広がる散弾の一発によって二人同時に吹き飛ばされ、牽制射撃の様に放たれたもう一発によって残りの面々は近づく事すらできな

くない。下手に近づけば無数の魔弾を放つ『ショットガン・マジック』が全弾命中しかなりのダメージを負わされ、離れようとすれば放射状に広がる散弾の特性によって回避しきれずに小さなダメージを負わされる。

近づけば高威力の一撃必殺が、離れば回避不能の小さなダメージ。たとえ小さくとも、ダメージが積み重なれば動きは鈍り、いずれ彼女に仕留められる。かといって不用意な接近は高威力の一撃の餌食にしてくれと首を差し出すに等しい。

『ショットガン・マジック』の届かない距離まで離れば、今度は『ピストル・マジック』による正確無比な連射が叩き込まれ、更に距離をとっていると『ライフル・マジック』の脅威の一撃が見舞われる。

通常の魔術師、魔法使い相手であれば『近づけば勝ち』と言われて

いる。リヴェリアの様に白兵戦もある程度行える為問題ないと口にできる魔術師はごくわずかである。そうであるがゆえに、一般的には『近づけば勝ち』なのだ。その常識が通用しない。

「強い、というよりは……」

「上手い。とにかく上手いな」

相手を常に視界にいれ、どう動くのかを想定しながら背を極力見せない様に。たとえ背を見せたとしても即座に背後に散弾をばら撒けるように警戒を解かない。

同時に別方向から近づいて反撃を封じようとしてきたら片方は即座に牽制射撃で牽制し、もう片方を確実に仕留める為に懐まで潜り込ませての反撃で確実に戦闘不能に陥らせる。

それに加えての自動防御の効力を持っている『マジック・シールド』があるおかげもあって、基本的に不意打ちも通用しない。

汎用性の高さで弱点の無さ、そして本人の持ち合わせている判断の速さに場を見極める目、すべての要素が上手く噛みあい、最終的に『攻略可能な弱点が無い』という結論に至った。

最後の一人になったロキファミアの上級冒険者が魔法で吹き飛ばされて場外に飛び出したことで模擬戦は終了を迎え、倒れ伏した冒険者を治療すべく数人の治療士が彼らに駆け寄っていく。ミアは一番近くに倒れていたフィンが回復魔法をかけている。

それを見ていたフィンはリヴェリアに問いかけた。

「それで、ミアはどうすれば強くなれるだろうか」

「……無理だな。改良すべき点が見当たらん」

現状持ち得る能力や魔法・スキルの効力を最大限引き出す戦い方を行っており、本人の資質もそれに噛みあっている。そうである以上、純粋な基礎アビリティの強化以外の方法が思いつかない。

それも第一級冒険者が見た限りでも、生半可な付け焼刃の攻略法では攻略されない程度の堅牢さも持ち合わせている。

大きな弱点、と呼べる点を挙げるとするなら、『ガン・マジック』に『マジック・シールド』、ミアの戦闘を支えているのが魔法であるという点。魔力が尽きたらその時点で戦闘能力がガタ落ちする他無い

所だ。

あとは、単純なレベル差に弱い。

「まあ、レベルが上の相手と戦って勝てる方が稀だし、弱点と言うには違うけれどね」

「確かにな」

フィンの言葉に肯定したりヴェリアが眉間を押しさえつつ、模擬戦を見ていたロキファミアリアの魔術師達がレフィーヤ同様に言葉を失って半口を開けたまま硬直しているのを見て、口を開いた。

「魔術師達に良い勉強になるかもしれないと思っていたが」

「インパクトが強過ぎたかい？」

「いや、何の参考にもならん」

ミアリア・ノースリスだからこそ出来る動きと、魔法の扱い方。それが噛み合ってあの強さだ。

まさしく『魔法戦士』という名に相応しい動きを披露したのだ。彼女の戦闘方法は彼女以外に行えるモノではない。

「すいません、お二人とも……どうでしたか？ 何かアドバイスとかありましたか？」

治療を終え、とことこと歩いて近づいてきたミアリアが口を開けたまま硬直しているレフィーヤに驚きつつもリヴェリアとフィンに問いかける。二人は顔を見合わせて謝罪を口にした。

「すまない。単純に基礎アビリティを伸ばす以外に戦闘方法に関してのアドバイスはかけられない」

「すでに戦闘スタイルが確立されていて、私たちからかけられる言葉は無いな」

二人の言葉にミアリアが顔を引き攣らせ、深い溜息を零した。むしろ第一級冒険者から『改良すべき点はない』と言われるほどに完璧な戦闘スタイルを組み上げている事を喜ぶべき所であるのに、溜息を零したミアリアを見てレフィーヤが口を開いた。

「なんで溜息なんて……改良すべき点が無いんですよ！ ミリアさんの持ち得るスキルと魔法、どちらも最大効率で使われているのに！」

「レフィーヤさん、それってつまりこれ以上強くなるのは難しいって

言われてるのと同義なんですけど……」

彼女の突っ込みに気落ちした様子のミアにレフィーヤが気まずそうに視線を逸らす。その様を見ていたフィンが口を開こうとした所で、鍛錬場に団員が駆け込んでくる。

急ぎ駆け込んできたその団員が門兵として配備された一人だと気付いたフィンが何事かとその門兵の彼を見据えると、彼はフィンの前で敬礼し報告を上げた。

「団長、ベル・クラネルとミア・ノースリスとパーティを組んでいたという鍛冶師が訪ねてきてます。どうしましょう」

「……鍛冶師、って事はヴェルフですかね。赤髪で長身の」

「それであってるのかい？」

「はい、ノースリスさんの言う通りの容姿でした」

ミアの知り合いだとわかり、フィンは少し迷いながらもその鍛冶師を通す様に指示を出す。ミアが魔力回復の合間にその鍛冶師に頼みたいことがあると鍛錬場を抜けていくのを見送ったフィンとリエリアが溜息を零してそれを見送った。

「多分だけど、不意打ちと神という足手纏いを抱えていた、後は民間人が居て魔法を撃てなかったっていう状況によって負けたんだろうとは思うんだけど」

「私も同意見だな。多分だが、普通に正々堂々と真正面から戦闘になっていたらまず負けは無かっただろう」

ごく普通の戦闘であればまず負けなかったと二人が分析する。

魔力さえ事足りていけば、彼女とベル・クラネルが組んで戦えばまず負けは無いだろう。もう一つの鍛錬場で鍛錬に挑んでいるベル・クラネルの方もレベル2に上がりたとは思えない程の敏捷さを持っていた。

それらを十全に活かして戦う事でヘステイアミアミアにも十分な勝機はあるだろう。そう考えた二人が頷きあう。

「十分に勝機はあるね」

「最初はどうなる事かと思ったがな」

勝負内容が決まっていけない現状、勝てるとは口が裂けても言えない

が、勝負内容次第でヘステイアファミリアに十分な勝機があるだろう。

客室に案内されたヴェルフは質のいいソファ―に腰掛けたままじっと待ち人が来るのを待っていた。

神ヘステイアが神会デナトウスを何日か無視して時間を稼ぐと決め、姿をくらましてすぐ、ヴェルフは神ヘステイアに頼まれ事をした。

ミリアの様子を見てきて欲しい。彼女は腕と目を失う負傷をしていたのだ、治るとは聞いていてもどう治ったのかまではわからない。今のヘステイアは身動きが取れないと周囲に思わせるべくロキファミリアに顔を出せないのだ。それで白羽の矢が立ったのがヴェルフであった。

片腕と片目を失う負傷。酒場の乱闘騒ぎを発端としたアポロンファミリアの襲撃によって引き起こされたその負傷、その容体はヴェルフにとつても気になる事の一つだった。

扉の開く音がした瞬間に立ち上がったヴェルフ。そんな彼を見上げた金髪の小人族の少女、彼女の顔を見たヴェルフが息を詰まらせて身を震わせた。

「お前……その目……」

「ベルも驚いてましたけど、別に異常はないですよ。久しぶり……つてまだ半日も経ってないですけど」

肩を竦めたミリアの姿にヴェルフが表情を歪める。異常はないなんて口にはしているが、明らかに左目の色がおかしい。彼女の碧眼が、片方だけ赤色になっている。それに加え、ひらひらと平然と振るっている切り落とされたはずの右腕も、見るからにおかしい。

病的に白い肌、そんな色合いだったかと二度見し、やはり色合いがおかしいと気付いたヴェルフが表情を暗くする中、ミリアはヴェルフの前にとことこと歩いてきて彼を見上げた。

「ヴェルフ、貴方が気にすることではないですよ」

「……何言ってるんだよ、あの酒場で俺が手を出さなきゃ」

「無意味です。済んだ事ですし、あの一件が無くとも彼らは襲撃してきましたでしょうから」

ヴェルフが奥歯を強く噛み締める。神ヘスティアも、ベル・クラネルも、誰もがヴェルフを責めない。唯一、ヴェルフを責めるだろうリルカは攫われて居らず、心に積もる罪悪感がヴェルフを押し潰さんとしていた。

それに気づいているのか気付いていないのか——ミリアは申し訳なさそうな表情を浮かべ、その場に膝を着いた。

「おい、何して……」

「すいません。貴方にお願ひがあります」

驚き過ぎて何が起きているのかわからないヴェルフの目の前、ミアが額を床に押し付けていた。極東の者達が最上級の謝罪をする際に行われる『土下座』というモノ。神ヘスティアとベルがそう言っていたのを思い出し、それをミリアが行っている事に驚き、ヴェルフは慌てて口を開く。

「おいまって、そんな——」

「魔剣を打ってください」

ヴェルフが口を開くより先に、ミリアが言葉を遮って叫んだ。額を床に押し付け、小さな体をさらに小さく縮こませたミリアが、頭を下げていた。

「何を……」

『クロツゾの魔剣』、強力無比な力。それが必要なんです。どうか、ヘスティアファミリアの為に『クロツゾの魔剣』を打ってください」

驚愕の表情を浮かべたヴェルフ。土下座して頼み込んでくるミアを見て、ヴェルフは立ち尽くす。

「お願いします。今回の戦争遊戯の為に、貴方の魔剣が必要だ、だから一週間で打てるだけ、魔剣を打ってください」

「……………」

「お金なら後で払います」

「まって」

「だから……」

「待ってって言ってるだろ！」

ミリアの肩を掴み、強引に顔を上げさせ、言葉を失った。ボロボロと涙を零すミリアが、必死の表情でヴェルフを見上げていた。

「お願い、負けたらヘステイアファミリアが無くなっちゃうの……嫌いなのはわかる。けれど私には貴方の魔剣が必要だから」

今回の戦争遊戯。1%でも勝率を引き上げたい。負ければ全てを奪われる、それだけは回避したい。ヘステイア様を、ベルを失いたくない。だから、魔剣を嫌うヴェルフに、魔剣を打ちたがらないヴェルフに、魔剣を打てと頼み込んでいる。涙を吞んでも、ヴェルフに嫌われる事になっても、1%を稼ぎたい。

「ヴェルフ、わかってる。魔剣が嫌いだって、貴方にとって酷いお願いだってわかってる。それでも、必要なの……少しでも、勝てる確率を上げたいの。だから、お願いします」

「……………」

碧眼と紅眼、変わってしまった瞳の色合いの向こう側。敗北の恐怖に揺れる彼女の表情を見ていたヴェルフは拳を強く握り締めた。

「リリの事なら、フィンと相談して出せる戦力を確保する。貴方には『魔剣鍛冶師』として魔剣を打ってほしい。貴方の打てる最高の一振りを、どうか私の為に用意して欲しい」

お願いしますと、繰り返し呟く彼女の姿にヴェルフは身を震わせて彼女の肩から手を放した。

ミリアが頭を下げなおし、ヴェルフの前で土下座を披露する。ヴェルフは静かに拳を握り締め、背を向けた。

「ヴェルフ、私の事を嫌っても良い、それでも魔剣を……」

「なあ、ミリア……」

俺はそんなに冷たい奴に見えるか？ ミリアの負傷の原因は、殆ど俺の所為だろ。それなのにそんな風をお願いされて、断る奴に見えるか。そんな言葉を零そうとしたヴェルフは、手のひらに食い込んだ爪によって皮膚が裂け、血が零れ落ちるのも構わずに、更に力を込めて拳を握り締めた。

「任せろ」

鍛冶師が少女に返す言葉は、他に無かった。

第一一三話

鍛冶場に戻ったヴェルフが真つ先に向かったのは、最上級鍛冶師たる椿・コルブランドの元であった。

専用の鍛冶場、片隅に置かれた多種多様な精錬金属の鑄塊^{インゴット}。そして数多のモンスター^{モンスター}の素材。

腰掛けてヴェルフの話聞いていた椿が眼帯に覆われていない目を細め、ヴェルフを睨んだ。

「ほう、ヴェル吉。お前はつまり、手前がああ『結晶』を持って行ったから。代わりに魔剣の素材を寄越せと?」

「ああ、あれは元々『ミリア・ノースリス』のもんだ。完成品を渡すとは言ったが、まだ完成しないんだろう?」

普段の凜とした冷静沈着に物事を計る少女が、必死の形相で頼み込んで来た事。『魔剣を打ってほしい』という願い。それを叶えるにはヴェルフの工房に保管されているだけの素材では足りない。

元々、魔剣を打つ積り等微塵もなかったヴェルフは、当然の如く魔剣の素材の備蓄等ありはしない。それらの確保に頭を悩ませた彼がとった行動はシンプルだった。ミリアから預かった素材を興味本位で持って行った最上級鍛冶師に頼み込んで素材を分けてもらう事だ。

「はあ、あのパルウム^{パルウム}の娘の武器か。完成しているぞ? 今朝早くに届けに行こうと思ったが。本拠が取り囲まれておつてな」

アポロンファミリアとソーマファミリア、他『無所属の冒険者』と無数の技術者が何人か。大型弩^{バリスタ}を弄りまわしていて、近づけなかったと。

現に彼女が指差した台の上には布に包まれた武器らしきものが鎮座している。

「まあ、その代わりに得られるものはあつたがな」

にやりと笑みを浮かべ、椿は素材置き場に近づいて被せてあつた布に手をかける。素材置き場の一角に布を被せられた何かが鎮座している事に気付いたヴェルフはそれが何なのかわからずに訝し気な表情を浮かべる。椿は意気揚々とその布地を取り払った。

「鱗は何枚か奪われたが殆ど手前が確保したぞ」

「はあ……ツ!？」

そこにあつたのは深紅の翼、頭の半ばが砕けた飛竜の頭、千切れ落ちた尻尾。モンスターの残骸——素材だ。

それも、ヴェルフが見慣れた怪物の一部がそこに無造作に置かれている。その光景を目にしたヴェルフが驚愕の表情で凍り付く。

「それ……」

「そうほれ、あのミリア・ノースリスが連れていた飛竜の素材だ。」

空を飛翔するさ中に数個の炎輪の様なもの、魔法攻撃に晒され、最終的に爆発に巻き込まれて四散して死亡したキューイの素材がそこに置かれていた。未だに血が滴り落ちる程、新鮮な素材にヴェルフは言葉を失う中、椿は嬉しそうに素材をつかみ取った。

「いや、何度も何度も素材を売ってくれと打診したが、断られ続けていたからな。これは僥倖だった」

「おい、それはミリアの……」

「何を言っている。手前はいきなり頭の上から血の雨が降ってきてずぶ濡れにされたんだぞ」

いきなり頭の上から夥しい量の血が振ってきて何事かと思えば、竜の肉片やら鱗やら、拳句の果てに頭骨の一部に翼がまるまる降ってきた。それを見た椿は迷わず確保。アポロンファミリアの眷属共がぎやーぎやー喚いていたらしいが、レベル5で最高峰の鍛冶師たる椿は「人の頭の上に血生臭いものをぶちまけてくれた礼をすればいいか?」と笑いかけて脅し、素材の殆どを賠償として受け取った。

「まあ、血なんて洗い流せばそれまでだしな。素材が手に入ってたよかったよかった。なんならヴェル吉にもわけてやろうか?」

無造作に差し出されたのは、『火竜の延髄』。炎の属性を持つ魔剣に使用えば、より強力なモノを作れるだろう。そうでなくとも通常の武器に使用えば耐火性能を引き上げ、『火精霊の護布』無しで炎の中を歩き回れる様になる鎧や、熱で刃が鈍る事のない剣等が作り出せる希少素材だ。

少なくとも、ミリアと出会う以前のヴェルフだったら迷わずその素

材をもらう選択をしただろうが、今その素材を目の前に出されてこれっぽっちも嬉しくない。

「……いや、良い。とりあえず素材をくれ」

「ほう、いらんのか？ まあいい、それよりも『結晶』はどうする？」
ミアアの与えてくれた『結晶』。下層から深層にかけて採取できるレアクリスタル
希少結晶だ。

魔力に対する高い親和性を持ち、魔術師の使う魔法石の素材としても優秀であり、魔術師垂涎の代物と言われるこの『結晶』だが、ヴェルフはミアアに言わなかったが他にも使い道が存在する。

「魔剣の素材にしないのか？」

椿の言葉の通り。ミアアの結晶竜からとれるその『結晶』は魔剣の素材となる。正確には魔剣を作るのに必要な訳ではないが、魔剣を作る際にその『結晶』を素材として使うだけで魔剣を一段階強化できる。

ただし、欠点も存在するが。

「使わない。使う気は無い」

「なぜだ、お手軽に魔剣を強化できるのだぞ？」

「おい、その結晶を使った魔剣がどうなるか、お前も知ってるだろ」

嫌悪感を示すヴェルフに対し、椿はおかしなものを見る目でヴェルフを見た。

「知っておるとも、ああ、何度も試したからな」

「だったら——」

「それがどうした？」

『結晶』を使った魔剣が、どんなものかは知っている。そのうえで、なぜ『結晶』を使わない？ むしろ使わない理由なんてどこにもないだろう。椿はそう言って首を傾げた。

ヴェルフは溜息を零し、顔を上げて椿を見据える。

「使い手まで殺しちゃう様な呪われた魔剣なんて必要ない」

「……そうか、まあ素材は好きに持っていけ。ほれ、素材倉庫の鍵だ」

無造作に投げ渡された素材倉庫の鍵。受け取ったヴェルフが顔を上げたときには、椿は既に飛竜の素材の選別作業に入っていた。より良い素材を集め、よりよい武具を生み出す。職人気質で回りが見えて

いない椿の様子にヴェルフは視線を逸らして背を向けた。

きつと彼女に何を言っても無駄にしかならない。キューイの軀とも呼べる素材の数々、ミリアと出会う前のヴェルフ・クロツゾなら羨ましがっただろう。今は、彼女とキューイがどれほど仲が良かったのかや、迷宮で何度もその力を遺憾なく発揮してパーティに貢献してきたかを見てきた事から、素直に羨ましいとは口にできなかった。

「……『結晶』か」

使えば、どんな魔剣も一段階上の魔剣になる。下級の魔剣が中級に、中級の魔剣は上級に、上級の魔剣は最上級に。では、『クロツゾの魔剣』に『結晶』を使えばどうなるか？

——魔剣を振るった者も含め周辺一帯を灰塵に帰すだろう。

それはまさに魔剣の暴走だ。一本の魔剣を爆弾とし、使い手もろとも全てを破壊し、砕け逝く。『結晶』は魔剣の暴走を発生させる代物で、たった一振りで魔剣を砕き壊し、壮絶な破壊を齎す。

割合を減らして調整を試みようとして腕を吹っ飛ばす間抜けな魔剣鍛冶師が後を絶たない危険素材。

「……………」

使い手殺しの呪われた魔剣。威力は折り紙付き、『クロツゾの魔剣』と組み合わせたらどうなるのか。想像もつかない程だ、ただの中級魔剣ですら上級鍛冶師が片腕を失いかける程であり、上級魔剣に至っては椿が重傷を負う程の威力と化す。それが『クロツゾの魔剣』だったら？

たしかに、もしもの時用にあればとは考えた。しかし、その魔剣を振るうということは、自らを殺す事を意味する訳である。

「——ミリアに渡したら迷わず使いそうな危険なもんは作れねえな」

鍵を使って足を踏み入れた素材倉庫。棚に整理されてなお溢れ返って雑多な印象を受ける室内を見すえ、必要な素材を頭書き出したヴェルフは素早くその素材を棚から取り出した。

広々とした談話室に集まったロキファミアの幹部達はテーブルに置かれた資料を囲みながら会議を行っていた。本人達は鍛錬の疲れもあつて既に倒れる様に眠りに落ちていく。

資料にはベル・クラネルとミア・ノースリスの基礎ステータスが記載されていた。最初にそれを目にしたフィンとリヴェリアは目を見開き驚きを露わにした。

ベル・クラネル 力：C 耐久：D 器用：C 敏捷：B 魔力：

D

ミア・ノースリス 力：G 耐久：F 器用：A 敏捷：B 魔力：S

どちらも非凡どころか、とても《ランクアップ》してから二週間と少しとは思えない程のステータスだ。

その原因、というよりはその要因となっているスキルとして、ミアの『ファミリー家族／眷属』というものがロキファミアに伝えられている。

自らの家族、同じ派閥の者達に対して強い感情を抱いているからこそ発現したスキルであり、『改宗にて消失』という重要な要因がある事など、ミア本人が語っていた。ベル・クラネルの方も似た様なスキルが発現していたが、増長を懸念し本人には伝えられていない事。

そのほか、ミアが扱う魔法の特性、回復魔法についてが記載されている。神会でも話し合われた『竜を従える魔法』については未記載ではあるが。

「うわあ、めっちゃええ子やん」

「……家族の為、か」

酒場でミアの過去について聞いたフィンが目を細め、他の者達は一様にそのスキルを食い入る様に見ている。特にアイズ等はじつとそのスキルを見つめていた。

「ねえ、もしかしてもっと仲良くなれば私達も同じスキル出たりしないかな？」

「おつ、ええなあティオナ。ならなかようしようやあ」

「あ、そういうのはちよつと」

仲良くしようと手をわきわきさせてティオナに近づこうとしたロ

キに皆が呆れの視線を向け。ガレスがロキの首根っこを掴んで止める。

「今、必要な話し合いはそれではなからう。ヘステイアファミリアがどうすれば勝てるか、だ」

「そうだね。スキルについては今は置いておこう」

ロキが渋々といった様子で席に戻り、壁にもたれかかるベート以外が全員席についた所で話し合いは開始された。

ベルとミリアに鍛錬を付けた者がそれぞれの評価を下す。

「まずはベル・クラネルからかな。アイズ、ティオナ、ベート、どうだった？ 特にアイズ、君が面倒を見たんだろう？」

「え……あ、えつと……」

「癖出てたよね。なんかアイズっぽかったっていうか」

「ああ、いつ鍛えたのか知らねえが、アイズと同じ立ち回りしてやがった。見て覚えたってよりは本人が教えたみたいにな。アイズ、おまえあの兎野郎にわざわざ鍛錬つけてやがったのか」

フィンの一言にアイズが冷や汗を流して視線を逸らす。

アイズの戦闘技術はフィン、ガレス、リヴェリアに教わったモノだ。それを他派閥の者に勝手に教えていたともなれば……確実に怒られるだろう。

アイズの表情が青ざめる中、フィンがくすりと笑みをこぼした。

「その事について怒る積りは無いよ」

アイズがその一言に目を見開き驚きの表情を浮かべる。怒られずに済んだとフィンを見てほつと一息ついた瞬間、フィンが目を細めて呟く。

「今は、ね」

一瞬で顔色が変化していくアイズを目にしたベートが呆れ顔で肩を竦めた。

「自業自得だな」

「でもアイズが鍛えてなかったら厳しかったんじゃない？」

「ミノタウロス、ね」

「これ、話がまた逸れておる」

ガレスの一言に全員がガレスを見た。ロキがにやりと笑みを浮かべ、呟く。

「そういうガレスも気になつとるんやない？」

「いくらアイズが鍛えたとしても、レベル1であの動き、そして連携……」

この場に居る者達はガレスを除いてみながみていた。レベル3に届きうる危険性を孕んだ変異種たるミノタウロスと二人の冒険者の死闘を。それらを各々脳裏に浮かべ、同時に納得する。

「まあ、あのガキが本気でファミリアを大事に思ってるのはわかるが」
ベル・クラネルを死なせない。その一点のみに集中して彼の援護を行った小人の少女。彼女が何を思っただの場で戦っていたのかは彼女の持つスキルが物語っている。

「つまり、今回も彼女は凄く活躍するって事だね」

「……なあ、フィン、お主もしかして」

「あ、わかるかい？ 結構、期待しちやってるね」

またしてもそれゆく話題にリヴェリアが咳ばらいをし、アイズに顔を向けた。

「それで？ 彼に対する評価は？」

「……うん、私が教えた事を忠実に守って、すごい速度で強くなつていつてる」

「うーん、ちよつと指示に従い過ぎてる気はするけど、確かに半日鍛錬しただけですごく変わったね」

「良い足を持ってやがる。鍛えりや良い線行くだろうな。ただ——
——素直過ぎる」

ベートの言葉にガレスが大きくうなずいた。

ベル・クラネルは未熟な点が目立つ。目立つ、とはいえその成長速度からすれば未熟な点はすぐに消えてなくなるだろうが、根本の部分だけはどうしようもないだろう。彼は素直過ぎる、欠点という程ではないが戦闘中に素直過ぎる動きは見切られやすい。

実際、ヒュアキントスとの戦いのさ中で彼は焦りから考えが及ばず、下地である『素直さ』に準じた裏表のない突撃をしでかして返り

討ちに遭っている。

ステイタスの差もあるが、何より動きが単調過ぎたのが問題だろう。

「彼については鍛えれば鍛えるだけ強くなる。そんな感じかな」

「まあ、大体そんな感じだな」

「うん」

ベートとテイオナの返事を聞いて頷いたフィンは次にミリアのステイタスの書かれた資料を手に取る。

「ちなみに、アイズ。ベル・クラネルの鍛錬の時、彼女もいたんだよね？」

「……ミリアもいたけど」

「おいおい、お前は」

ベートが呆れすぎて言葉を失う中、フィンは鋭い眼光でアイズを見据えた。

「キミが彼女にあの戦闘方法を教えたのかい？」

鍛錬場で見せた完成された戦闘型。バトルスタイル

自身の持ち得る魔法の特性と、彼女自身の持つ平行詠唱技術。そして魔法を命中させるだけの集中力と、それを補助し完璧なモノに押し上げる目。まさに完成して変化の余地のない戦闘型バトルスタイルだった。

ただアイズが扱う型とは全くの別物。なおかつ彼女が冒険者になつてからわずか2ヶ月程度で完成しているという驚愕的な速度から誰もが不自然さを感じ取っていた。

それでも、アイズが教えてモノにしたのなら彼女が天才的な才能を持つというだけの話なのだが。

「ううん、ミリアは最初からあの戦闘型バトルスタイルだったよ」

「はあ？　おいおい、冗談だろ？」

アイズの否定の言葉にベートが声を上げ、他の者達は同様に驚きの表情でアイズを見た。

ミリア・ノースリスは誰に教えられるでもなくあの戦闘型バトルスタイルを完成させた。その信じられない情報にフィンは考え込み始めた所で、アイズが補足を口にする。

「でも、対怪物戦闘は全然だめだったみたい」

「は？」

「最初戦った感じ、対人戦闘を意識した戦い方だったと思う。ミリアに教えたのも対怪物戦闘に関する事だけだし」

ミリア・ノースリスの最初の戦闘型は対人戦闘用のモノバトルスタイルであり、対怪物戦闘を行うには様々なモノが不足していた。アイズが教えたのは対怪物戦闘における基礎、そしてダンジョン内で戦う際の注意点のみ。

「つまり、彼女は元から対人戦闘に長けていた訳か」

「……あのガキ、ナニモンだ？ おかしいだろ」

話によればベル・クラネルと近い年齢であるらしい彼女。経歴は不自然な点が多い中、その類い稀なる戦闘技能と、対人戦闘能力。人の嘘を見抜く観察眼、あきらかに不釣り合いな能力をあまた持ち合わせており、なおかつ本人の頭も非常に回る。

「兵士だったのではないか？」

ガレスの一言に全員の視線が集まった。

彼は静かに顔を上げ、ミリア・ノースリスの戦い方の評価を口にする。

「時間稼ぎ、敵が自分より強いとわかった時点で、こやつは遅延戦闘——
——時間稼ぎに徹する動きをしておった。自分より弱ければ倒し、強ければ他の仲間が到着するまで時間を稼ぎ、合流して倒す」

「なるほど……」

冒険者という職業上、通常ならば『助けを待つ』といった選択肢は出てこない。基本的にパーティ戦においてもそうだが、誰か他の冒険者が助けてくれることはほぼないと言っている。分断されて各個で戦う事になるにせよ、助けを待つよりはまず逃走を頭に浮かべるだろう。逃走し、合流して怪物と対峙する。それが冒険者の常識である。

しかし、ミリアの場合は敵が自らより強い場合敵を逃がさず、その場に食い止めて仲間の合流を待つといった形の戦術をとっていた。しかも、ほぼ無意識にであろうことは何となく察しが付く。

「どこぞの国の兵士だったのならあの戦い方も納得できる」

「確かに、他の仲間の到着まで場を持たせる。そう考えればあの戦い方も理解できるね」

軍属で学ぶべき戦い方を身に着けた、過去に人をだまして金を稼いでた小人族の少女。

彼女についての疑問が増えていくが、それよりもまずは解決すべき事があるとフィンは顔を上げた。

「とにかく、一週間後の予測について聞きたい。このまま一週間、彼らを鍛える訳だけど——鍛えたとして、彼らはアポロンファミリアとの戦闘遊戯に勝てるだろうか？」

フィンの言葉に真っ先に反応したのは、アイズであった。表情を引き締めたアイズが首を横に振る。

「無理」

彼女に続き、並んで座っていたティオネ、ティオナも頷いてアイズの言葉を肯定し、ベートも吐き捨てる様に呟いた。

「うん、無理」

「そうよね、無理だわ」

「無理に決まってるんだろ」

四人のいへもない否定にロキが眉を顰める中、リヴェリアが口を開いた。

「それはどうしてだ？」

「強い冒険者が二人いても、百人は相手にできない」

「多分、その半分でも厳しいよ」

「相手が二十人ぐらいなら余裕じゃないかしら」

「一人二人強いのが居た程度であの数相手に戦えねえ」

四人の言葉を聞き、ロキが頭を掻く。

彼らの言い分は何も間違っていないどころか、正鵠を射ている。

確かに、ベル・クラネルもミリア・ノースリスも強い。特にミリア・ノースリスは対人戦闘技能は非常に高く、同格が十人集まった程度では相手にもならないだろう。

だからといって、彼ら二人で百人を相手に戦い抜くのは不可能だ。相手方には治癒士ヒーラーも居るのだ、倒した端から回復されてしまう。

待ち受けるのはベル・クラネルのスタミナ切れか、ミリア・ノースの魔力切れか。どちらにせよ戦争遊戯での勝利は厳しい。

「フィンはどうおもう？」

「勝負形式次第かな」

ウォーゲーム
戦争遊戯の勝負形式。

互いの派閥構成員全てが平地で同時に戦い全員が戦闘不能になったら敗北する『掃滅戦』

大将頸を取った時点で勝利が確定する『大将戦』

互いの派閥の団長が対一で戦う『一騎打ち』

代表数名を選出し対一で戦い、負けた者から抜け落ちていき最後に残った方が勝つ『代表戦』

特定の物または人を一定時間防衛する側と、それを破壊ないし攫う側に別れて戦う『防衛戦』

そのほか、数え切れないぐらいの勝負形式は多岐に分かれる。それこそ『SUMOU』や『やきう』等、神々の遊びにもなっているモノすら戦争遊戯の形式の一つに挙げられるのだ。

特に『やきう』や『蹴球』は冒険者の身体能力を生かした『消える魔球』やら『燃える魔球』やらやりたい放題になり、神々が盛り上がった戦争遊戯としても名が知られている。

その中で今回の戦争遊戯、ヘステイアファミアが勝つ可能性が高い勝負形式はほとんどない。

「勝てる勝負形式は何やと思う？」

「まずは、代表者一名同士の『一騎打ち』。ベル・クラネルなら勝率を2割から3割ぐらいまで持っていていける」

「ほう……多くて3割か、きつついな」

互いに無傷の状態で向かい合い。戦闘開始した場合の勝率はほぼ2割から3割。

逆に互いにある程度損耗がある場合はベル・クラネルの勝率は上がるだろう。

「え？ 損耗しての方が勝率上がるの？」

「ああ、彼はきつと追い詰められたら強くなるタイプだからね」

「ほう、おもしろいなあ」

ロキが面白がっているのを見つつ、フィンは続ける。

「もう一つ、こっちは下手すると勝率100%なんだけど」

「はあ？ 勝率100%？ なんだそりゃ」

『代表戦』だね」

互いの派閥から代表を数名選出し、一対一での勝負を行っていく。勝負に負けた者は抜け落ち、互いに最後の一人が負けた時点で敗北となる勝負形式。

ヘステイアファミリア側は二名、ベル・クラネルとミリア・ノースリス。

対するアポロンファミリアが代表十名を選出したとすれば、彼ら二人で十人を連続して倒し切らないといけなくなるのだが。

「先鋒でミリア・ノースリス、多分これだけで同格の冒険者は九人抜きできるよ」

「そして、最終はヒュアキントス……ノースリスならばただではやられんだろ。勝てはせんでも相応の損耗を強いて負ける」

「最後はベル・クラネルが損耗したヒュアキントスを仕留める」

この勝負形式ならば勝率は100%に近くなるはずだ。フィンがそう呟けば、ロキが首を傾げつつも問いかけた。

「逆に絶対勝てない勝負形式ってなんや？」

『攻城戦』だね。攻撃側と防衛側に別れるんだけど……まず防衛側だと人数が足りなすぎる。竜種二匹が居ても焼け石に水過ぎてどうにもならない。攻撃側だったら……あの大型弩が大量配備されるだろうしね」

下層種の竜を屠る事が出来るだけの威力を持った大型弩。ロキファミリアの面々は口を揃えて『こんな重たいもんだンジョンに持っていけるか』とキレた代物ではあるが、威力は折り紙付き。

迷宮内で致命的欠点となる『重量』と『機動性の無さ』はそもそも設置型兵装として城の防備に使うのであれば気にならない部分である。そうなれば後に残るのはその『攻撃力』である。欠点が欠点として機能しない以上、あの大型弩が大量配置されればミリアの連れてい

る竜による襲撃は無力と化す。

それに加え、たった二人では城門を突破するまでもなく城壁に張り付く事すらできないだろう。

「だから、勝負形式を決めるとき、アポロンファミリアは必ず『攻城戦』を選ぶだろうね」

ミリアの連れている竜種を強く警戒するなら、防衛設備の整った城にこもるのが一番安全であるからだ。

第一一四話

朝食を食べてから鍛錬場に向かおうと腰を浮かした所でフィンとロキがやってきて話があると呼び止められた。

「すまない、少し話があるんだ」

「内容は？」

「それは此処では言えんなあ」

真面目な表情のフィンと若干ニヤついている神ロキの対比は少し不安を煽るんだが……。

同じく朝食を食べていたベルに先に鍛錬に行く様に伝えて俺は二人に同行して廊下を歩く。

「アポロンファミリアの情報でも手に入りました？」

「いや、そっちの方はもう少しかかりそうだね」

話がさっぱり見えない。一応、ヘステイアファミリアが負けたら損をするのはロキファミリアも一緒である為、俺の鍛錬やベルの鍛錬を邪魔するような真似はしないはずなんだが。

つまり、朝の鍛錬の時間を削ってでも話をする何かがある？ 無駄な事だったら少しイラつくんだが。

「不満そうやな」

客室の一室の扉の前に立ったロキが振り向いて此方を見下ろす。

ただでさえ時間が無いのだ。一分一秒が惜しいと思っている所でしようもない話されたらキレルぞ。

「ま、とりあえず入ってみ」

「……？ まあ、そういうなら」

ロキがドアを開いて中に入る様に促してくる。フィンも特に何か言うでもなく此方を見ており、肩を竦めている。

本当に何なのかわからずに首を傾げつつも部屋を覗き込むと、五人ほどの人物が中でくつろいでいる姿があった。顔を見てもピンとくるものはない。

そわそわと落ち着きのない赤い目に灰色の髪のアマゾネス。ソファーに深く腰掛けて目を瞑っているたつぷりと髭をこさえたド

ワーフの男性。壁にもたれ掛かって腕組をして神経質そうな雰囲気のエルフの少女。しきりに足踏みをしては嬉しそうに笑みをこぼす獣人の女性。手を握ったり開いたりを繰り返す黒髪に碧眼のアマゾネス……？

ふと、彼らの視線が此方をとらえた。誰なのかと彼らを見回しながらも部屋に入る。

アマゾネス、最後の一人、手を握ったり開いたりを繰り返す彼女。そのアマゾネスの手が、おかしな色合いだというのに気付いた。まるで死人の様な血色の悪い両腕だ——褐色の肌のはずなのに、両腕だけが異常に白い。

思わず自分の右腕と彼女の両腕を見比べてみれば、よく似た色合いだというのがわかる。『再生薬』を使ったのだろうか？

首を傾げていると落ち着きのなかった赤眼のアマゾネスがぱつと立ち上がって此方に向かってきた。

「えっと、貴女がミリア・ノースリスでいいの？」

「ええ、はい。私がミリア・ノースリスですが……どちら様ですか？」
喜色が浮かんでおり、敵意や害意は見取れない。なぜ彼女らと引き合わされたのかわからんのだが。というか女性比率高いな、男性一人に女性四人か、ロキファミリアの構成員か？

「待たせてすまないね」

「皆元氣そうやね」

「ロキ様、昨日ぶりです」

首を傾げつつも促されて彼らの対面のソファアに腰掛けると、彼らはソファアの周りに集まり、二人掛けの席に赤眼のアマゾネスとドワーフの男性が腰かけ、他の三人がその横に並んで立つ。目を引くのはしきりに手を動かすアマゾネスなんだが……もしかして『再生薬』のお礼とかか？ だとしたらそういうのはいらないんだが。

「神ロキ、もしかして再生薬のお礼とかですかね？」

「それもあるな」

それも？ 他に何かあるのか？ お礼だけだったら申し訳ないが邪魔にしかなくてないんだがね。

「ミリア、君のファミリアの現状ではどれだけ鍛えた所でアポロンファミリアに勝つのは難しいのはわかっているかい？」

フィンの言葉に思わず舌打ちが零れかけ、視線を逸らしつつも頷く。どれほど勝率が低いのかは既に理解してるつもりだ————特にアポロンファミリア側に専属の治癒士ヒーラーが居るっただけで此方の勝率がゼロに等しいのはわかる。

どれだけ火力特化で固めるかよりは、後方支援を行う回復役のドリード・サンクチュアリや、防衛設備を設置可能なアルラウネ・フォートレスが居る方が勝率が高い。それに地対空ミサイル特化の召喚師たるケットシー・パトリオットや、空対空戦闘を行うワイバーンを召喚するケットシー・サモナーなんかがいた方が勝率は高まるに決まっている。

というかそれ以前に人数差で圧倒されてんだよなあ。

「まあ、わかってますよ。ええ……現状、どれだけ楽観的に見ても勝てるとは思えませんね」

「いや、流星にそれは言い過ぎや。勝てる勝負形式もあるっちゃある。まあ、その勝負形式になるとは思えんけど」

アポロン側も数の優位的に考えて攻城戦を選択するのは間違いないだろう。平地戦では竜の被害を受ける可能性があるが、城塞に籠バリスタつて大型弩で迎撃するという選択肢なら被害も極小で済むだろうし。

ニヤけ顔のロキが両手を大きく広げて対面に座っていた者達を指し示す。

「そこで、や。この子らをヘステイアファミリアコンバージョンに改宗して戦力にしようと思つとる」

「は？」

はい？ 改宗？ いや、戦力強化は嬉しいよ？ でも、普通に考えてそれは無いだろ。自派閥の戦力を分け与えるとか無いだろ。それとも戦力外の奴らだったのか？

「嬉しくないんか？」

「嬉しいですけど。良いんですか？ ロキファミリアの派閥構成員ですよね？」

「ああ、それなんだけどね。彼らはロキのファルナは受けているけど——ロキファミリアの冒険者じゃないんだ」

「は？ ロキファミリアの冒険者じゃない？ いや、でもロキの神の恩恵を授かっているでしょ？」

「だったらロキファミリアの冒険者じゃねえの？」

「そもそも、私達はもう冒険者じゃないんだよ」

「そうだな、冒険者資格も無くなつとるしな」

赤眼のアマゾネスと髭を蓄えたドワーフの言葉に首を傾げる。冒険者資格はない？

「えっと、犯罪でも犯したんです？」

「ドアホツ！ ウチの子がんな事する訳あるかつ！」

「あつ、はい……。え？ じゃあなんで冒険者資格の剥奪なんてことになつてるんで……。あれ？ もう冒険者じゃない？」

……。一人のアマゾネスはどう見ても腕の色合いがおかしく、再生薬で両腕を治した形跡がある。

「とうか、よく見るとドワーフも右腕と右足が異常に白い。エルフの少女はわからんが、獣人の足も異常な白さ……。赤眼のアマゾネスもわからん。」

「もしかして、冒険者として死んだ人達か？」

「察しがついたかい？ 彼らは元ロキファミリアの冒険者で、今は無所属だよ。当然だけど、腕や足を欠損して冒険者として活動できなくなつて、派閥から抜けた者だ」

「腕や足の欠損によつて冒険者を続けられなくなつた者達。」

彼らの冒険者資格が無くなつたのは当然と言えば当然だ、彼らを冒険者としてロキファミリアの構成員に含めっているとギルドからの税金の徴収が多くなる。が、実際の所彼らは冒険者としての活動は絶望的に不可能な訳で……。つまり税金を浮かせる為に派閥から脱退させられた者達か。

「はあ……。あ？ えっと、つまり……」

「せや、無所属——それも元冒険者で役に立たん戦力外の一般人やね」

思わず彼らを見据える。

嘘だろ？ いや、冒険者つてのは過酷な職業だつてのは知ってた。ナアーザさんつていう前例もある、生きてはいても手足を欠損して冒険者が続けられなくなつて派閥を抜けた元冒険者達。彼らに対する世間の評価は厳しく、『死にぞこない』といった扱いで……。

「そう、俺達は死に損ねた」

「うん、地上に生きて帰ってきたけど、冒険者として死んじやつただ」

冒険者を続けられない。腕や足は義手や義足で補える。けれど、戦闘に耐えうる程の物ともなれば相応の値段がかかる。それこそヘファイストスファミリアの第一級武装と同等な金額がかかつてしまう。しかも新調費用だけにとどまらず、定期的な整備や修理を必要とする。それこそ第一級冒険者でもないと賄えない金額が常に要求され続ける。

それに、義手の性能は第一級冒険者が使うには貧弱過ぎる。つまり義手・義足を付けても元通りには戦えない場合が多い。せいぜいがレベル2、レベル3程度の性能しかないのだ。それなのに整備費は第一級冒険者が必死に稼いでようやくといった金額。つまり実用には程遠い。

ナアーザさんの様にトラウマを抱えてダンジョンに潜れなくなることもあるが、手足さえ治れば直ぐに迷宮に挑みたいと願う者の方が多い。しかし、今までは欠損は決して治らなかつた。

どれほど願えど、どれほど祈れど、その想いが叶う事はない。

そんな彼らは、日に日に腐っていくことしかできない。明日には治る薬が開発されるかもしれない、明後日には、一週間後には、一年後には……そうやって明日の希望に縋りつき、『治らない』という絶望から目を逸らす事しかできない——できなかつた。

同じ欠損を抱えた者同士、傷を舐め合い、腐っていくだけの毎日。嫌気がさして死にたくなる日々。

「私達は失ってから半年も経つてない。おかげで治つたけど……」

「まだ治つたらん子が何人もおる。一年以上前に冒険者引退してオラ

リオに燻つとる子がな、何人もおる」

いくら最強の派閥とはいえ、体の一部を欠損してしまう者がゼロという訳ではない。ここに居る彼らは体の一部を失ってからまだ半年も経っていない、だから治った。治せた。

けれど、まだ治っていない者が居る。

「昨日治してもらったんだけど、まだ夢を見てる気分だよ」

欠損の治療はディアンケヒトファミリアが掲げる悲願の一つ。そして、手足を欠損した冒険者が望む悲願でもある。今までは手足を失った冒険者は冒険者を引退し、場末の酒場で武勇伝を語って腐り落ちるだけの者達であった。

普通に働こうにも手足が無くて働けず、ファミリアに世話して貰わなくては生きていく事もできない。生きた恥晒しとまで罵られる事のある最悪。それを治す事ができる。

「先ほども言ったけど——まだ治ってない子達が残ってる」

「その子らの為にも、ヘステイアファミリアに負けて貰っちゃ困るんですよ」

彼らも全員納得している。

改宗コンバージョンしたら一年間、ヘステイアファミリアから他派閥へは行けない。
い。

不利な状況の戦争遊戯ウォーゲームへと参加しなくてはいけない。

明らかに、誰もが嫌がる条件だ。負ければ全てを失い、下手をすれば命すらとられかねない危険な状況。それでも彼らは頷いた。

「二度死んだ身だ、他の者の事もある」

一度は冒険者として死に、生き恥を晒し続ける事しかできなくなつた。けれど、それを挽回する機会を与えてくれた。そして、まだ生き恥を晒さざるを得ない者達が残っている。

かつてのロキファミリアの仲間が、まだ試作品では治せない欠損を抱えた者達が残されている。そんな彼らも治療できる、ディアンケヒトファミリアは宣言したのだ。

一年、これから一年以内に過去の欠損を全て治す『完全再生薬』を作ると、その為には俺が連れているキューイの血が必要不可欠で、へ

ステイアファミリアが敗北すればそれは完成しなくなる。

残された者達の希望である『完全再生薬』。その完成の為にも、ヘステイアファミリアが負けるのは困る。

「だから、命も賭けれるよ」

「ああ、ここに居る五名全員がヘステイアファミリアに改コンバージョン宗して戦力になっても良いと言っている」

「体裁についても問題ない——この子らは今は無所属や。それに戦力外の生き恥晒す元冒険者なんて罵られとる」

他の派閥から妙な勘繰りはされる可能性はあるが、彼らは戦力外として爪弾きにされた元冒険者。

ヘステイアファミリアが焦りの末、レベルだけは一丁前でありながら戦力外でしかない元冒険者を引き入れ始めたとしても風評を流せば、アポロンファミリアの警戒心を上げる事無く戦力増強が出来る。

「本当に良いんですか？」

確かに、彼らの言い分も十二分に理解できる。

欠損を抱えて冒険者を続けられなくなり、腐っていくだけの毎日。それから脱却できた喜びと、いまだ脱却できずにいる傷を舐め合った仲間が居る。彼らの為にも、この希望を潰えさせる訳にはいかない。

それに、一生欠損を抱えて腐りながら生きるか。一年間だけヘステイアファミリアの力になって欠損を治すか、どちらが良いかなんて迷う必要すらなく即答できる。

目を見ればわかる、彼らは本気だ。元ロキファミリアの元冒険者、五人も増員すれば勝率は天地の差だろう。

「それに加えてな、ガネーシャン所にも一応声かけてあるんよ」

他派閥に悟られぬ様にガネーシャン様の所にも『欠損を治せる薬』の存在と、それを完成させるのにヘステイアファミリアの存続が不可欠な事を伝え、なおかつ一年間だけ欠損を抱えて冒険者として活動できなくなった者をヘステイアファミリアに改コンバージョン宗させて戦力にする案も伝えたい。

「返事は既に受け取っているよ。あちらからは三人が改コンバージョン宗しても良いと。その代わり『再生薬』を三本用意して欲しいだそうだ」

マジか、信じがたい話だが、一気にヘステイアファミリアの人数が俺とベルを含めて十人にまで跳ね上がった。

勝率は、いまだに低いと言えれば低いが、けれども戦力が一気に増えるのだ。

対面に腰掛けている五人の元冒険者達。戦力として加わってくれ。確かに、鍛錬を差し置いてでも話し合うべき事だ。

「ソーマン所に連れ去られたっちゆうサポーターの事もこの子らに任せるつもりや」

ソーマファミリアにロキファミリアの構成員が喧嘩を吹っ掛ける訳にはいかない。けれど元冒険者で派閥から抜けた彼らがヘステイアファミリアに改宗した後であれば何の問題もない。

つまり、リリを救出するのも手を貸してくれるらしい。

「あともう一つ、ガネーシャの所から例の大型弩バリスタの見本をいくつか預かる予定だから、後で調べると良い」

「あの大型弩バリスタな、ダンジョンで使うんは不可能なポンコツやけど、地上の防衛には持つて来いなんよ、せやからガネーシャん所が何個か買い取って怪物の調教テイムに失敗したときように使つとるらしくてな」

下層の竜種にまで進化したヴァンを難なく屠るだけの威力を持つ大型弩バリスタ。それに関しても協力を申し出てくれたらしいガネーシャ様。本来なら主神自らが頭を下げに来たかつたらしいが、今はギルドと膠着状態なのと、一部の商業ファミリアの暴走で街中に被害が出たうえ、ヘステイアファミリアの風評被害を抑えんとしているらしい。

風評被害？

「あー、あの街中での抗争あつたやろ？」

「あれ、キミの竜種が暴走したのをアポロンファミリア以下複数の派閥が鎮圧しようとしたって事になってるらしいんだ」

あー……。つまり悪いのは全部ヘステイアファミリアって事ね？
んで本来なら街の住民が不平不満を抱く相手はアポロンファミリアの方である所を、竜種の暴走って理由付けしてヘステイアファミリアの方に押し付けてると。

オラリオでのヘステイアファミリアの評価ってどうなってるん？

「竜種を暴走させた挙句、街中で魔法を乱射していくつもの建造物を倒壊させた悪しき派閥」

「ええ……？」

何それキレそう。いくらなんでも酷過ぎるでしょう。

「気にしなくてええで、今ガネーシヤン所が必死に抑えとるしな」

竜種の暴走が原因だったとしてもガネーシヤファミアリアがそれを保証するし、もしアポロン側がでっち上げた嘘ならガネーシヤファミアリアが全力で潰すと宣言。対するアポロン側は『戦争遊戯ウォーゲームの準備がある』と言つてガネーシヤファミアリアからの質疑に答える積りは無いと宣言。

多分だが、アポロン側が勝った後、ヘステイア様にヘステイアファミリア側の非を認める様に命令して全ての罪をヘステイアファミリアに被せた上で、ヘステイア様を天界に追放する積りなのだろう。

これは、酷いな。

「ま、勝てばええ話や」

「そうだね、他にも戦力になりそうな欠損持ちの冒険者がいれば此方からこつそりと声をかけておくよ」

とりあえず、ロキファミアリアが全力で支援してくれているし、ディアンケヒトファミアリアも回復薬ポーションなんかをダース単位で鍛錬場まで運び込んでくれ、なおかつガネーシヤ様が風評被害を抑えつつギルドを牽制してくれている。

一応、戦力は今回の改宗コンバージョンである程度整い、後は勝負形式が決まる明後日の神会次第デナトウスか……………。

「あ、そういえばレベルについて聞いてなかったんですけど」

「おお、せやったせやった。ほれ、この子らのステイタスや」

五枚の羊皮紙を無造作に差し出されて思わず面食らった。いや、ステイタスをそのまま差し出すのはどうなんだ？ 一応、対面に並ぶ彼らに視線を向けると、皆して頷いた。

「問題ない。むしろ存分に活かしてくれ」

「一度冒険者やめちゃったしね、ただちよつと鈍ってるかもだからそこからへんは意識してくれるとありがたいかも」

主な返答をしてきたドワーフの男性と赤眼のアマゾネス。というか赤眼のアマゾネスは腕や足に異常はなさそうなんだが、彼女も欠損……あ、赤眼……もしかして、眼をやられてたのか。それも両目が赤い所を見るに、両目とも……。失明はきつかっただろうなあ。

下手に触れても仕方ないし、今は優先すべきことが別にあるのでとりあえずステイタスの紙を一枚一枚丁寧に見ていく。

スキルや魔法は……ふむ……アマゾネスの赤眼の方は『バーサク』か、アマゾネス特有の損傷や怒りで『力』が上がるスキルだったか？ドワーフが『フォートレス』？動きを止めると耐久が爆増するスキル？完全に前衛壁役だな。

他にもエルフの少女はちよつとしたステイタスを微増させる強化魔法を覚えていて、獣人は攻撃役なのか連続で攻撃を当てる度に力と敏捷が上がっていくスキルを持つてるっぽい？

全員レベル2……みんな？

「ええつと、すいません。レベル3？これって本当ですか？」

「ん？ そうだよ」

赤眼のアマゾネスが頷いている。彼女のステイタス。それともう一人、ドワーフの男性のステイタス。

この二人、レベル表記が『3』だぞ。他の三人が『2』である。

「第二級冒険者？」

「せやで、その二人は第二級冒険者や」

………。あれ？普通に勝てるよねこれ。だって第二級冒険者二人だよ？

一人は完全な前衛攻撃役で、もう一人は前衛壁役。他の二人だってステイタスは相応に高い、唯一、もう一人のアマゾネスだけが全体的な評価がEで低めだが、それでもレベル2に変わりない。

「……本当に良いんですか？レベル3ですよ？」

「あんなあ、この子らは残念な事に三ヶ月以上前に戦力外として派閥から抜けとるんやで？」

「彼らには申し訳ないけど、彼らが改宗しても僕らの戦力は痛まな
いんだ」

そりや数ヶ月前に戦力外として派閥から抜けたんだし、今の戦力とは全く無関係ではあるんだろう。すでに新体制が出来上がっていて、戻ってきて直ぐに前の様な活躍が出来る訳でもなし。ともなれば一年間他派閥に行っても……本人達が納得してるのなら良いのか？

とりあえず、レベル3が二人も戦力に組み込まれたんだ。これは……勝てるぞ。

レベルが高い冒険者が多い方が勝つ。相手にはヒュアキントスが一人。こっちは元ロキファミアの団員で、数ヶ月間は腐っていたとはいえレベル3の冒険者二人。普通に平地戦でも勝ち目がある。

しかも相手は此方が欠損を治せるとは考えないだろうし、『欠損を抱えた役立たず』としか思わないはずだ。

警戒されずに戦力増強できるとか、最高じゃないか。

第一一五話

ガネーシャファミリアからの三名の改宗、及びに例の大型弩パリスダの受け入れが完了し、今現在ロキファミリアの庭園に二機の大型弩パリスダが鎮座している。

周辺に集まったロキファミリアの冒険者と共にその大型弩パリスダについて調べているのだが、ガネーシャファミリアの団員曰く、これは改良型と装甲型らしい。

ロキファミリアがダンジョンで試験運用をしてくれと依頼された『試作型』

一つの弩のみで一射毎に装填する必要がある『旧式』プロトタイプ

三つの弩を縦に重ねた三連射を行う機構を取り付けたのが『改良型』

そしてその全てを装甲で覆い隠した『装甲型』

弾倉を取り付け連射可能に改良された『連弩型』

恐ろしい事に数種類の改良型が存在し、思った以上に厄介なのは間違いない。

……ロキファミリアがボロックソに貶した事が原因だと思っすけど、無駄に改良型が多いの。

「機構は単純……それぞれの弩が独立して射撃する半自動セミオートもできるし、引き金トリガーを引くと三射する三点射バーストもできる……しかも連弩タイプもあるんですかこれ……」

思った以上に質素な作りをしている。複雑な機構は一切使われていないため、仕組みは簡単に理解できた。

当然ながら、威力を確保する為に総金属製で弦も鋼線であり、弦を弾く為に滑車付きでコンパウンドボウの様に引きやすい様にはされているが、人の手で直接弦を引く場合はレベル3冒険者程の力が必要らしい。

そのためか、大型のバルブハンドルの様なモノで弦を引く機構が取り付けられており、そちらであればレベル2でもなんとか弦を引ける——つまりレベル2あれば再装填できるわけだ。

……レベル2無いと装填もできないってのはちよつとどうなんだろうか？

ともかく、この部分が非常にデリケートなのか怪物の攻撃で高確率で破損するらしい。

破壊しやすい部位があるのは良い事だ。この装填用機構を破壊すればヒュアキントス以外には再装填はできなくなるだろう。ただし装填済みの場合は射撃自体に問題は無いため、一射は確実に射つてくる。

装填機構だけなら『ライフル・マジック』でなんとかなるだろう。

^{フレーム}骨格全体的に金属で形作られており、仕組み自体はシンプルで簡素なものなのだが……問題は頑丈過ぎる事。それぞれが独立した一つの機構であり、弦を引く為のハンドル等はそれぞれ別々についている。

ロキファミアがポンコツ呼ばわりするのもわかる。第一級冒険者や第二級冒険者からすれば確かにポンコツだ。機構そのものが脆弱だというのもわかる——彼らの馬鹿力からすれば、なのだが。

当然、俺やベルの様な第三級冒険者では壊す事も出来ない。特に射出機構の部分だけは壊されて堪るか？と絶対の意思すら感じられる程に頑丈に作られている。機構も質素なくせに耐久だけはぴかー。

本体部分はクーシー・スナイパーの『スナイパーライフル・マジック』を使ってようやく破壊できる。さすがにニンフ型の『ライフル・マジック』では破壊にまでは至らない。

付け加えると、一発で破壊できるのは三連大型弩^{パリスタ}の内の一のみだつて事だ。つまり三連大型弩を完全に沈黙させるには『スナイパーライフル・マジック』三発分が必要なんだが……。

「破壊は出来そうかい？」

「破壊はできなくはないですが……全部はきついですね」

アポロンファミアが今回の戦争^{ウォーゲーム}遊戯の為に用意した大型弩^{パリスタ}の数は総合計44機。

『旧式』^{プロトタイプ}が12機

『改良型』が16機

『装甲型』が4機

『連弩型』が12機

気合入れすぎだろ……とはいえ、『連弩型』は脅威とは言えない。というのも連射性能の為に威力を犠牲にしているうえ、弾倉に装填可能な最大数はたったの5である。『改良型』の方がよほど脅威なうえ、再装填には3〜5秒かかる。要するにロキファミアアではなくとも『連弩型』がポンコツなのは理解できるはずだ。

まあ、そこらへんよりも問題は——俺の弾丸がマガジン全く足りてないってところだ。

一機破壊するのにマガジン1個。合計44個のマガジンが必要——ではない。改良型は一機で三発必要なのだ。それで合計は76マガジンが必要だ。

俺の最大保有マガジン数は現在の所24個。魔力から作り出す分も含めた所でせいぜいが50マガジンかそこら。それも『マジックシールド』が攻撃を受けていない無傷の状態での話だ、しかもその後俺の攻撃行動に使うマガジンまで用意できなくなる。つまり圧倒的に足りてない。

「それにですね、装甲型がどうしようもないんですけど何ですかこれ……」

見た目は完全に戦車か何かとしか言えない『装甲型』。

ちなみにロキファミアアの冒険者はこれを『棺桶』と呼ぶ。いや、わかるよ？ 装甲で固めれば怪物の攻撃で壊されないと装甲で覆い隠すのは良い。ただ、内部を覗き込んだ感想は……うん、戦車だこれ。

重量は『バカかよ』とベートさんが鼻で笑う程。レベル3冒険者が数人がかりで押してようやく少し動く程度。要するに馬鹿げた重さになっている。固定式ならまだしもダンジョンにこれを持ち込むなんてできる訳がない。

横幅はおおよそ4M、縦には3M、全長12Mに渡る長方形の箱型から大型弩の矢の穂先が突き出している形で、控えめに言って『バカじゃねえの？』と表現したくなる構造をしている。

まず、この箱の中に三人の冒険者が入ります。一人は装填。一人は発射、一人は縦軸操作。そして外に居る冒険者が五く六人がかりで横軸の操作。そう、この超巨大大型弩とかいう頭の悪そうな代物は一機で十人近くの人員を必要とするのだ。バカじゃねえの？

ただ、バカバカ言っではいるが、この『装甲』がかなり厄介な代物で、これ俺の魔法じゃ壊せねえでやんの。

5マガジン消費の『アンチマテリアル』なら余裕だろうが、一機壊すのに5マガジンとか……まあ機動性は皆無で狙いを付けるのも難しいっぽいので最悪無視で構わないのだが、無視した結果、思いもよらぬ所で不意打ち食らいそうで怖い。

「……まあ、鈍重そうなので最悪無視で良いとは思いますが」

「これは壊すのに時間がかかりそうだし、こんなの当たる方が珍しいと思うよ」

結論から言うと、全ての無力化は厳しい。

というか……どう考えてもアポロンファミリアの総人数と比べて大型弩の数バリスタが異常に多い。

予備として持ち込む？ にしても多すぎる。まだどういった勝負形式か決まっていけないのに……。

「調べられることは調べ終わりましたね」

「じゃあ片付けておく」

「お願いします」

ロキファミリアの団員が数人がかりで『改良型』を引っ張っていくのを見送りつつ、『装甲型』を見て溜息。これ、後でガネーシャファミリアの人たちが解体して部品を運んでいく形になるのか。

ガネーシャ様の所の団員、本当に大変そうだ……。他人事みたいに言ってるが俺達の為にやってくれてるんだよなあ。

鍛錬場が見下ろせる一室。テーブルに並べられた資料を手に取り眺めつつ、盤上を睨みつける。

精神力マインドがなくなるまで鍛錬した後、休憩がてら戦争遊戯ウォーゲーム、アポロン

ファミリア側との『掃滅戦』を想定した盤を用意した。それぞれの人物に見立てた駒を動かしつつ横から眺めるリヴェリア様が各々の駒の勝敗を定めていく。

あ、一人倒れた。削り殺される程ではないが、相手の数が数だ。正面突破は厳しい上に大型弩バリスタの事を警戒し過ぎてロキファミリアからの増援のアマゾネスを一人倒されてしまった。最後の一人が立っている方が勝ちなので勝敗には関係ないがダメだな。

「はあ……すいません。一人やられました」

「気にする事は無い。僕もキミの立場なら同じ選択をしたよ」

アマゾネス一人を犠牲に釣り上げた相手方のリツソス隊を撃破。その後に関手の戦力を細切れにしながら各個撃破をしていくも、途中で二人目に獣人がスタミナ切れで倒れ、三人目にエルフが回り込まれて倒されてしまった。後方警戒出来る程の人員がいなかったのが原因とはいえ、弓使いアーチャー兼補助要員バフが潰れたのは痛い。

フィンがアポロン側の駒を動かし、俺がヘステイアファミリア側の駒を動かす。

何とか勝ち筋を導き出していくものの、フィンの方は一切手加減なくこっちの駒を削り取っていく。レベル3とはいえ囲まれて連携でぶつ叩かれれば当然落ちる。ドワーフに最前線を支えて貰いつつも『クラスチェンジ』等の隠し手を使わずに対応に追われ——あ、俺が落ちた。

「あ、ああ……あの、ちょっと待ったを……」

「実際の戦争遊戯ウォーゲームでは待ったなしだけど、したいなら構わないよ」

「……………続けましょう」

あつあつ、俺が落ちた。落ちて……待つて待つて、ベルとヴェルフが囲まれてる。陽動部隊として動かしてたガネーシャ様の眷属達が罠にはめられて動けない。キューイとヴァンは俺の指示無しじゃ動けないから死んでるじゃんこれ……一応ベルの言葉に従わせて……あ、ダメだこれ。とりあえずヒュアキントスを引っ張り出せはしたのにそのあと囲まれて……相手の治癒士ヒーラーを一人落とし損ねただけでこれだ。

いくらレベル3とはいえアマゾネスとドワーフの二人を酷使すると体力もスタミナも限界に達して対応が遅れだす。対して相手方は治癒士ヒーラーが回復を続けて戦線を維持……レベル3突っ込ませた程度で崩れる連携じゃないのが痛すぎる。

とりあえず陽動隊が引き付けている間にか現状突破を、パリス大型弩の排除が全く終わっていないがキューイとヴァンを投下。これでなんとか時間稼ぎを——リヴェリア様が横から陽動隊の駒を指さして口を開いた。

「ノースリス、陽動隊が甚大な被害を受けている。このままでは壊滅するぞ」

「えっ……あつ！ 回り込みっ!? いや、人数的に……あれ、こっちの戦場で負傷者……減って? もしかして負傷者治療した端から陽動隊の方に……?」

「そうだよ」

おい待て、ガチで潰しに来てるぞ。容赦なさすぎるだろ……。あ、ヴァンが針鼠になって死んだ。キューイも負傷で墜落……次の一手でヴァン同様に針鼠だわこれ。陽動隊の方は、もうどうにもなんねえなこれ。

治癒士の場所が割り出せん。あと一人、あと一人の治癒士がどこに居るのかさっぱり予測できない。カサンドラ・イリオンを巧妙に隠されているせいでもできない……治癒士としてかなり優秀らしく、彼女一人を隠蔽されたうえ、魔法発動の際の魔力の放出も他の魔術師隊が隠蔽。キューイの索敵能力を使おうにも大型弩パリスがあるせいで戦場に投入不可能。大型弩パリスの破壊をしようにも戦線を組んで妨害してくる相手方を突破できない。

あー、あああああああああああああああつ……ベルが倒れた。ヴェルフも重症で戦闘不能。陽動隊が壊滅。残っている駒は……レベル3のアマゾネスとドワーフの二人のみ。対するアポロン側はおおよそ40人程。

ヒュアキントスと一騎打ちをするアマゾネスに、他の冒険者を足止めするドワーフ。ダメだ、ドワーフの殲滅力よりカサンドラ・イリオ

ンの治癒能力の方が勝っているらしく押されて————疲労が溜まって能力の低下。相手方もそろそろ精神力が尽きても良いころのはずなのに……。

「あの、相手方の治療魔法が途絶えないんですけど、そろそろ精神疲労しても良いんじゃないや……？」

「高位精神回復特効薬を大量に保持してるからね」

「……ああくなるほどおく……すいません、参りました」

は……ははは、笑えん。

豊富な物資、高密度な連携。リッソス隊を削り取った後は他の隊が穴埋めをしつつも、巧妙に隠された治癒士が合間合間に仲間を治療。完全に息の根を止めるならまだしも、負傷させたただけだと直ぐに復帰してくる。

高位回復薬に高位精神回復特効薬、そのほか様々な道具を潤沢に注ぎ込まれ、削り殺される。

道具類はこつちも用意はできるが、問題は物資の輸送役がリルカ一人しか居ない事。そのリルカも大量の物資を抱えたまま移動してるさ中に敵に捕捉されて潰される可能性が高く、キューイとヴァンに守らせても良いがあので二匹の場合は戦場に近づけないので一度離脱しないと物資補充が出来ず……かといってリルカを守りつつの防衛線なんて築こうものならアポロン側の魔剣の砲撃が降り注いでドワーフが沈む。

いくらレベル3で、相手が下級魔剣とはいえ何百発も耐えられる訳じゃない。

ヘステイアファミリアが持ち込める物資の数と、アポロン側が持ち込める物資の数が天地の差だ。馬車を使って運び込んでも良いが、それだと守り切れない。

詰まる所、『掃滅戦』だと人数差で削り殺される。

「やっぱり『掃滅戦』は厳しいね」

「……明日の形式で『掃滅戦』にならない事を祈りますよ」

『防衛戦』の場合は攻撃側なら勝てるのだが、防御側になると途端に不利だ。

『攻城戦』は……攻撃側だと相手の堅牢な防御を崩せずきつい。内部にリリを侵入させればワンチャンあるが、やはり物資量的に厳しい上、相当に有利な地形が無ければ辛い。全方位を囲まれたら終わりののだ。

防御側の場合は最悪である。『攻城戦』の勝敗の決め手の一つに『制圧勝利』というものがある。

城内に居る防御側の派閥の人数に対し、城内に攻撃側の派閥が倍の人数が侵入する事で『城は制圧された』と判定が出て勝敗が決まる訳だ。

ヘステイアファミリア側は、俺、ベル、それから救出すればリリルカ、後は増援の八人。合計で十一人しかいない。つまりアポロン側の冒険者二十二人が城壁を超えて侵入してきた時点で敗北してしまう訳だ。

ファクトリーで罫を仕掛けていたとしても、二十二人に侵入された時点で負けというのはさすがに……。

「はあ……戦力増強してもまだ厳しいですね」

「……指揮をとっているのがフィンでなければ勝っていたと思うがな」

リヴェリア様が紅茶を入れつつもそう言ってくれるが……でもなあ。

そんなただの言い訳だしなあ。『争奪戦』は勝てただけどなあ。『掃滅戦』はダメ。『防衛戦』も防御側だとボロ負け。攻撃側でギリギリの勝利。『攻城戦』はそもそも戦いにならない。

もう一度資料に手を伸ばして相手方の人員を確認していく。何度見ても治癒士の数は変わらない。

ロキファミリアからの増援にも、ガネーシャファミリアからの増援にも、治癒士はいない。当然ながら、治癒士は後方で守られている訳で、滅多に怪我をしない。

前衛が負傷率が高く、手足の欠損にまで至る負傷するのは基本前衛ばかり。むしろ後衛の治癒士が負傷する状況というのは大抵が全滅寸前な訳で……要するに増援として治癒士がやってくる事は無い。

アポロンファミリアに所属する治癒士ヒーラーの顔と名前を頭に叩き込み。こいつらだけは何よりも誰よりも優先して絶対に潰すと心に決めつつ、窓から鍛錬場を覗き込んだ。

アイズさんとテイオネさんの猛攻に対し必死に防御や回避を組み合わせようとするも、まるで間隙を縫う様にベートさんが蹴りを放ちベルを吹っ飛ばしていた。しかも起き上がろうとしてる所にも容赦なく蹴りが叩き込まれている。ズタボロになっても死んではないので加減はしてくれているのだろう。手加減はしていないっぽいが。

「気になる点はあったかい？」

深く溜息を零しつつ、ベルの痛ましい姿から視線を外してフィンを見た。

「気になる点、というとはやはり……資金力ですかね。あの大型弩バリスタつて一機で数十から数百万はしますよね？」

「それについては今調べてるけど、予測はついてるよ」

『旧式プロトタイプ』がおおよそ60万ヴアリス、『改良型』がおおよそ200万ヴアリス、『装甲型』に至っては800万ヴアリスはするらしい。

アポロンファミリアが『火精霊の護布サラマンダーウール』に加え、『下級魔剣』を大量に用意しているのを見るに、数千万ヴアリスどころか下手すると億にまで届きうる大金が動いている。

明らかにファミリアの規模に見合わない大金で……まあ、察しは着くが。

「商業ファミリアですかね」

「それもある。それに加えて商会のいくつかが協力してるみたいだね」

商業ファミリア。商売を司る主神が立ち上げた商売を中心に行っている派閥。

それとは別に地上の人間が立ち上げて運営している商人達の集まりである商会もいくつも存在する。そんな商会も今回の一件に関わっているらしい。

そんな『商会』の方でやつかない噂が流れていると聞いた。なんで

も『都市外』の冒険者を片っ端から『依頼』を出して掻き集めているらしい。

「……都市外から無所属の冒険者を掻き集めてるって噂は本当ですか？」

「ああ、本当だよ。今朝の時点で百とちよつとだったかな。都市外からオラリオにやってきたらしいよ」

都市の出入りを監視しているガネーシャファミリアからの情報。

都市外の冒険者が多数オラリオに入ってきているらしい。彼らが都市を訪れた理由は商会からの依頼なのだという。何をする気なのか、大量の冒険者を集めているのだ。

『都市外の冒険者』は『オラリオの冒険者』に比べて劣る。迷宮という名の経験値エクセリアの宝庫が存在するオラリオと比べ、都市外は偉業に相応しい怪物との闘いどころか、上質な経験値エクセリアを得られる難敵は数少ない。結果として『都市外の冒険者』と『オラリオの冒険者』を比べるとどうしても前者は劣ってしまう。

とはいえ、数が数だ。それに第三級冒険者を限定で掻き集めているらしく、その数おおよそ百二十人程……冒険者って結構数が居るらしい？ 恩恵を授かってはいても派閥に所属しない『無所属』の冒険者はかなりの数に上るらしい。

「というか、犯罪者まで混じってる感じですか？」

「あー……犯罪者って訳ではないけれど、派閥と反りが合わずにか派閥の定めた規則ルールを破って、みたいな者は多いね」

賭け事嫌いな主神に仕えていた眷属が賭け事に手を出して派閥を追放されたり。みたいな感じらしい？

他にも敵対派閥の構成員と恋人になって主神に見放されたりだとか。そういった少し事情がある無所属が結構な数いるらしい。

「神アポロンの気質的に彼らがアポロンファミリアに入る可能性は無いだろうね。あっても、数人かな？」

「オラリオの内部の冒険者の中にも勝ち馬に乗ろうとアポロンファミリアに自らを売り込む冒険者はいるみたいだがな」

勝ち馬に乗る、ねえ。

まあ、確かに現状を鑑みるにアポロン側が確実に勝つだろう。勝利の恩恵を自分も受けようと派閥に入りたがる無所属の冒険者がアポロンファミリアを訪ねているらしい。

とはいえ、アポロンは『気に入った者』以外を眷属にする気は無いらしく、全員が追い払われている様だが。

商業ファミリアや商会が用意した『傭兵』が派閥に参加する事はまずありえない。

「……ありえない、ね」

「気になるかい？」

都市外から入ってくる冒険者はステイタスの開示が強制される。

ガネーシャ様はこっそりと都市外からの冒険者のステイタスの記録なんかをこつちに回してくれたのだ。その資料に手を伸ばしてみれば……まあレベル2ばかりだわな。

ステイタスは、高くてもCが最高値。時々Bが混じる程度でAやSといった特別な者はいない。

「これが増員で入ったら最悪なんですけど」

「アポロンの気質的にありえないだろうけど、警戒はしておくべきかな」

警戒でどうにか出来るとは思えん。それに……アポロンは油断しても、商人が油断するとは思えんのだが……。

やめだ、やめつ。これ以上考えて不安を抱えても仕方ない。ただでさえ夢見が悪いつてのに真昼間からストレス溜めてどうする。とりあえず精神力も回復しきつたし魔法の練習にでも戻ろう。

積み上がった資料、都市外からやってくる冒険者の一覧。オラリオ内からもアポロンファミリアに改宗を望む者が始めている事。不安の種は消えないが、今はやれる事を着実に進めていこう。

「明日の神会デナトウスはどうなるだろうね」

「……ヘステイア様なら上手くやってくれますよ」

第一一六話

戦争遊戯ウォーゲームを行う。

その情報はアポロンファミア、ヘステイアファミアの両派閥が合意してから僅か半刻足らずで街中に広まった。

都市の動きは活発に、そして慌ただしい日々が続いている。

最も割りを食らったのは都市管理機関の役割を持つギルドであった。

派閥同士の総力戦——それも片や危険度の高い竜を調教した派閥。片やゴライアスを派閥単独構成員のみで討伐できる中堅——

——余りにも物騒過ぎる顔触れがぶつかり合うという事もあり、間違つてもオラリオに被害が及ばぬよう、物資や人員の手配。宣伝や戦争遊戯ウォーゲームの舞台となる戦場絞り込み。加えて周辺地域に対する呼びかけ等、様々な要因に対処すべく作業に追われる事となった。

付け加えるなら、そこに神々の身勝手わがままな要望も合わさってギルドは多忙に過ぎた。

本来ならば、神の出席を促すべき立場のギルドであるが、それすらままならない状態である。

故にか——オラリオ中央、摩天楼施設パベ三十階に設けられた神会デナトウスの席、神アポロンの対面の席が空席となっている事に対してま手が回っていない。

「——今日もヘステイアは居ないのか!？」

列柱が高い天井を支え、円卓が一つだけ中央に配置された大広間。中央の円卓に設けられたたった二つの席の一つに腰掛けるアポロンの叫び声が大広間に響き渡る。

大広間に集まった数多くの神々も若干の呆れと、落胆の色合いを見せていた。

戦争遊戯ウォーゲームの規則や形式については、争い合う派閥の主神同士の合意の元、無関係な観客である神様達の意見が混ぜ込まれる——最高の娯楽にするために——この神会デナトウスで決められるのだ。

そして、都市を騒がせたヘステイアファミア襲撃事件からすでに

三日が経とうとしている。

その間、ヘステイアは神会デナトウスに姿を現していなかった。

「全く往生際が悪い。こうなればギルドに不戦勝を認めて貰わねば」
『えー』

アポロンの一言に神々が不満そうな声を漏らす。せつかく楽しみにしていた戦争遊戯ウォーゲームという宴まつりを不戦勝等というつまらない結果にはしたくない。

そんな神々の中、恰幅のいい一人の男神が手を挙げて発言を行う。
「しかし、このまま夜逃げ、等という結果になればアポロンが不利益を被る。それは避けるべきであろう?」

周囲の神々の視線を受けた恰幅のいい男神。商売神として知られ、がめつく、金に成らない事は一切行ふ事のない無駄を徹底的に嫌う神として知られる彼——本来なら、こういった神会デナトウスには一切顔を出さない程に一分一秒を稼ぐことに注ぎ込む神物人である。

胡散臭さの滲み出た彼の発言に、ロキが呆れ顔を浮かべて呟いた。

「そんなつまらんことできんやろ。皆も期待しとるんやで?」

『そうだそうだ』『不戦勝なんて面白くない結末なんて期待してねえんだよ』

神々の囁し立てる声に、恰幅の良い男神が怯み、舌打ちを零して席に座る。

彼の神を流し見たロキは小さく溜息を零した。あの恰幅の良い男神こそ、アポロンファミリアと結託して色々と策を講じてきている相手だ。今回の『不戦勝』に対してやけに食いついてきたのもおそらくはその一環であろう。

とはいえ、彼の神の思うようにはいきはしない。神々は三日間待たされてなお、戦争遊戯ウォーゲームの開催を期待しているのだ。

「くっ……いつまで待たせるのだ、ヘステイアめ……」

一向に姿を見せない女神に、アポロンは苛立ちを隠しきれずにいる。「病に伏せた」の一点張りで神会デナトウスの欠席を繰り返しているのだ。本来ならば、ギルドが出席を促すなりの措置が取られるが、余りにも

急な戦争遊戯ウォーゲームの開催に対し対応に追われている彼らは当てにできない。あからさまな仮病で、あからさまな時間稼ぎだというのは見え透いているにも拘わらず、アポロンは何もできなかった。

——街中で多大な被害を出した襲撃を引き起こしたアポロンファミリアは、現在オラリオの街中での武装の所持を禁止、及びにガネーシャファミリア監視下におかれてヘステイアファミリアへの干渉を禁じられている。

半ば強引にでも引き摺デネトウスって神会への参加を強制したくとも、アポロンでは何もできないのだ。

苛立ちを示す様に舌打ちを繰り返し、幾度となく時計を眺め、自派閥の行動を妨害しているガネーシャを強く睨みつけ、本来ならヘステイアの出席を促す立場のギルドに対しても憤りを隠さない。落ち着きのないアポロンの態度に、ロキは内心溜息を零してぽつりとつぶやいた。

「ちゆうかな、苛立つとるんはわかるんやけど少しは落ち着いたらどうや、アポロン。全部、自業自得やろ？」

強引な都市内における襲撃事件。それも街に多大な被害まで及ぼしたのだ、ギルドから街中での行動を禁じられるのも当然。都市の秩序を守るガネーシャファミリアの監視が付くのも当然。己の考えなしとしか思えない行動によって、これまでの派閥の行動も相まってギルドから袖にされるのも当然であるし、他派閥の神も「まあ、アポロンだしなあ」と相手にしようともしなくなっている。

「……そういえば、ロキ。キミの派閥はヘステイアファミリアに与しているのだったな」

「はあ？ 与する？ ウチはただ面白くするために手を貸してやっているだけやで？」

襲撃事件の直後。ヘステイアファミリアの構成員二人を派閥本拠に招き入れ、鍛錬を行っているロキファミリアの主神、ロキを軽く流し見たアポロンの言葉にロキは笑いかける。

周囲の神々の胡乱げな視線がロキに突き刺さる中、集まった神々がぼそぼそとつぶやいた。

「絶対嘘だぞ」「何か企んでるに決まってるだろ」「竜の素材を報酬と
はいえ、第一級冒険者が出張るのはなあ」

神々の憶測に対し、ロキはにんまりとこれ見よがしな笑みを浮かべ
る。

「竜の素材なんて序や、つ・い・で。んなもんウチの子らやったらちよ
ちよいのちよいでダンジョンで狩ってくるわ」

「じゃあ何が目的だっ!」

アポロンが立ち上がって声を張り上げたのを見たロキは、表情を憎
らし気に歪めてドロドロとした黒い感情を一切隠しもせずにはく。

「リトル・ルーキー」がウチのアイズたん誑かしたんやぞ」

小さな、けれども確かに大広間全体に響き渡ったロキの言葉に、誰
しもが察した。

アポロンファミリアの開催した神の宴。眷属二人を引き連れてく
る様にとりて斬新なアイディアによって成功を収めたあの宴のさ中、
ヘステイアの眷属である「リトル・ルーキー」ベル・クラネルとロキ
の眷属である【剣姫】アイズ・ヴァレンシユティンがダンスを踊った
事は神々の記憶に新しい。あの百人切りを成した【剣姫】相手に、異
常な最速記録を叩き出したヘステイアの眷属がダンスへの誘いを行
い、そして成功させたのだ。

それを思い出した神々が次々に眩く。

「竜素材はついで……って事は」「これは、アレですね?」「合法的にベ
ルきゅんをボッコボコに出来るから受けたんですね」「うわあ……第
一級冒険者にボコられる姿が浮かぶわ……」「というか死なないよな
?」

神々の推測は的を射ていたのか、ロキはケタケタと楽し気に笑いな
がらも、ベル・クラネルがどのようなにして第一級冒険者にボッコボコに
されているかを高らかに語りだす。隙あらば【凶^{ヴァナルガンド}狼】によってポー
ルの様に蹴り飛ばされる白兎。土と泥に塗れても立ち上がろうとし、
そして容赦なく蹴倒される。余りにもやり過ぎにも思えるロキの陰
湿なやり口に神々が顔を引き攣らせる中、アポロンがロキを睨んだ。
「ロキ、ベル・クラネルをいじめるのをやめてもらいたいのだが」

「ああん？　なんでや、ウチはヘステイアん所の依頼通りにやっとるだけやで？　依頼を受けたからには全っ力でやらななあ？」

「絶対恨んでるだけだぞ」と神々が呟き、依頼を理由にベル・クラネルに合法的に暴行する【凶 狼】ヴァナルガンドを筆頭にした第一級冒険者達を脳裏に浮かべた。

「わかってているのか、ロキ。キミがやっている行動は我が派閥への敵対行為に等しいが」

「たかがレベル2に上がりたての子が、いくら第一級冒険者に鍛えられたからって数日でレベル3に勝てる訳ないやろ。むしろ、それで負けるって相当アホやで。少し粘るぐらいにはなるやろうけどな」

ロキの呆れ顔に周囲の神々が「たしかに」と納得の表情を浮かべる。

たとえ第一級冒険者に鍛えられたとしても、ランクアップしてから半年も経っていない冒険者が格上を相手に勝利を得る等、あるわけがない。むしろ、第一級冒険者に鍛えられただけで勝てるなら誰も苦労なんてしないのだ。

彼女の言葉にアポロンが苦渋の表情を浮かべ、大仰な仕草で嘆き悲しむ。

「ああ、私のベルきゅん……ロキの所の子にいじめられて泣いてはいないだろうか……」

周囲の神々がまた始まったと呆れる中、ロキを含めたヘステイアファミリアの内情を知る者達が眉を顰める。

どう考えた所で、ロキの眷属による死と隣り合わせにも等しい鍛錬よりも、アポロンによって与えられた苦痛の方が遥かに上回っているだろう。涙こそ、流した。苦痛に呻き声ももらした、それでも彼は立ち上がって武器を構え、第一級冒険者の鍛錬を受け続けている。

アポロンの身勝手な愛の形にロキが深い溜息を零した瞬間、大広間の扉が開け放たれた。

「遅くなった。待たせてしまって、悪かったね」

口にする言葉とは反して、悠々とした態度で神会デナトウスの会場に現れたヘステイア。傍にはミアハも一緒だ。

悪びれる様子もない彼女にアポロンは限界だったとでも言う様に

強く睨みを利かせる。

「遅いぞつ、ヘスティア。神会デナトウスをずるずると遅延させ、どう責任を取るつもりだ！」

「君の団員に追いかけてまわされてね、熱が出てね。いやあ、死の淵を彷徨つたよ」

「うむ、あれは危なかった」

アポロンより投げかけられる文句にヘスティアと自称看病していたミアハが抜け抜けと答える。小憎いと顔を歪めるアポロン。

「主役も揃ったのだ、言いたい事は山ほどあるが。それよりは建設的な話をするべきだろう？」

恰幅の良い男神が胡散臭さを纏った満面の笑みで言い放つ。その胡散臭さに誰しもが内心でお前何か企んでるよなと勘付きながらも、これ以上待たされたら首が伸びると言わんばかりに戦争遊戯ウォーゲームの打ち合わせは始まった。

「まず、我々が勝利したらベル・クラネルとミリア・ノースリスは貰う」
「……………」

「そこだけははつきりさせておく。後で聞き苦しい言い訳を並べられても煩わしいのでね。ヘスティアが勝者となった暁には、要求は何でも呑もう」

自身の勝利を微塵も疑わないアポロンは、ベルとミリアの所有権——円滑な派閥の移籍だけを強調した。ヘスティアは何も答える事なく沈黙する中、会議の記録を取る書記の神は『ほーい』と軽い返事を返しつつもしつかりと一字一句違わずに明文化していく。

「ヘスティア、ベルきゅんとミリアたんの改宗コンバージョン。アポロン、なんでもっと……………」

ヘスティア側は特に要求をするでもなく、直ぐに話は次の段階へと移っていく。

戦争遊戯ウォーゲームでの勝負形式の話題になった所で、押し黙っていたヘスティアは真つ先に口を開いた。

「勝負形式は『代表戦』、選出した代表者数名による一騎打ちで決着を付けようじゃないか」

円卓の一角に腰掛けたヘステイアが、対面に座すアポロンを見据えながら発言する。

「闘技場を使って、観衆のもと、決闘を行うんだ。これが一番盛り上がるやり方だろうか？」

「私も賛成だ。複数人で寄ってたかって二人を袋叩きにしても興奮ぎめであろう」

「俺も賛成する」

鋭い目付きでアポロンを射抜くヘステイアに続き、彼女に味方しているミアハやタケミカツチも肯定の意見を出す。それを見ていた恰幅の良い男神がにんまりと笑みを浮かべて、ロキに声をかけた。

「ロキ、オラリオ二大派閥を率いる神としてどう思いますかな？」

あくまでもロキは『戦争遊戯を面白くする』と『剣姫』を誑かした【リトル・ルーキー】を合法的にボコる』という建前のもと動いている。ここでヘステイアの意見に賛同すれば『ヘステイアファミリアに与している』と明言する様なモノ。商売神としてロキをどうしてもヘステイアファミリアから遠ざけたいらしい彼の発言に対し、ロキはバツと自信満々に立ち上がって手を挙げた。

「んなもん決まっとる——『争奪戦』や。無論、互いに全戦力を投じた、な？」

「それではヘステイアファミリアに不利過ぎる。人数は制限すべきではないか？」

ミアハがヘステイアに不利になりかねないと判断して意見を上げれば、ロキは鼻を鳴らして肩を竦める。

「ファミリアの人数が少ないっちゆうんはドチビの怠慢や。もつと勧誘しとけばもうちつと人数居ってもええしな」

ロキの言葉に商売神たる恰幅の良い男神はにんまりと笑みを浮かべてヘステイアをうかがう。ここでロキがヘステイアの味方をするなら、それを『与している』と理由付けしてロキファミリアを責め立てれば良い。

逆に味方をせずに盛り上げようとするだけなら、ヘステイアファミリアに不利な条件を出させるだけ。そうする事でどちらに転んでも

損をしない策を講じたと思ひ込んでいる商売神にロキがほくそ笑む。

フィンとミリアの机上戦の結果、勝負形式『争奪戦』の勝率はおおよそ8割。大型弩等パリスダという鈍重な兵器を扱うアポロンファミリアに対し、最速で目標物に辿り付いて奪取して逃走可能なヘステイアファミリアの飛竜が圧倒的に有利なのだ。

アポロンはロキをちらりと見てから肩を竦め、冷静な仮面を身に着けたまま発言する。

「ロキの言う通りだな。子の数が少ないというヘステイアの泣き言に、我々が合わせる道理はない」

派閥を率いる者として行っておくべき当然の行動。派閥の拡大を行わずにいたヘステイアに対する厳しい意見に、ぐぬぬっ、と彼女は呻く。

確かに、ベルが他の女性に靡く可能性であつたり、ミリアの家族に対する姿勢であつたりと、今までが勧誘に対して非積極的であつた経緯がある。前者はヘステイアのわがままで、後者はミリアの家族の為なら何でもする性格にあるとはいへ、言い訳の余地はない。

「ここは公平に、くじ引きで決めようじゃないか」

他に案を上げようにも策謀に長けている訳でもなく、話術も高くない、事前に悪神ロキに様々な助言を貰つたとはいへ、所詮ひきこもりであつたヘステイアにその助言を活かせる訳もない。

言い返す事が出来ないヘステイアが黙っていれば、必然的にアポロンの意見は通される。準備の良い神が、へい、とノリノリで取り出した箱が円卓に置かれる。

デナトウス 神会に出席した神々がそれぞれ自らが望む勝負形式を羊皮紙に書き、集められていく。ヘステイアやヘステイアに与する者達は当然、勝率が100%とまで言われた『代表戦』と書き込む。ロキだけは他の神々に怪しまれぬ様に表面上はヘステイアファミリアが不利で、実際には机上戦とはいへ勝率が8割を超える『争奪戦』と書き込む。

くじが完成し、では誰が引くかという段になってヘステイアとアポロンはそれぞれが引く神物の名を上げるも、互いに否定しあう。

「アポロンの息のかかったやつは信用できない」

「……それは此方も同じこと。ミアハヤタケミカツチ達には自重を願おう」

小さく舌打ちをするアポロンは、ヘステイアと同様の条件を出す。ならば……と神会デナトウスに集まった神々を眺める彼と彼女の視線がとある神に集まった瞬間、恰幅の良い男神が手を挙げて発言した。

「ならば、ロキに引いてもらうというのはどうでしょう？」

少なくともヘステイアに与する訳でもなく。アポロンを妨害するでもない、此度の戦争遊戯ウォーゲームを盛り上げる事と、序に「リトル・ルーキー」を痛めつける事しか頭に無いロキであるならば、面白い勝負形式にしてくれるのではないかと恰幅の良い腹を揺らして満面の笑みを浮かべる商売神。

アポロンが不服な顔をしつつも押し黙り、ヘステイアがあからさまに嫌そうな表情を浮かべる。

アポロンからすれば、脅威とはならずともヘステイアファミリアの強化を行っている派閥の主神。理由も納得できるとはいえもしもがありうる。

ヘステイアからすれば、裏では味方でもこの場では味方として動けない中立で楽しむ立場を崩せない味方。ロキ自身も彼女に口を酸っぱくして言い含めたが、神会デナトウスにおけるロキはヘステイアに不利な条件も容赦なく突き付ける。

どちらにとっても良いとは言い難い立場の神である。とはいえ勝負形式を決める上では『面白くする』という一点のみは神々の意見と合致しているため、神々は賛成に傾いている。

対する当事者たる彼と彼女は二人で見つめ合い、苦々し気にロキの方を向いて首を横に振った。

「ロキは信用できない」

「悪い、キミはちよつと……」

「………なんでウチが悪いみたいになつとるん？」

場を盛り上げたただけやんと拗ねた様に振る舞うロキ。その様子を見ていたアポロンとヘステイアは、二人同時に視線を向けた。その先に居た男神が目を見開き、驚きの表情を浮かべる。

「ヘルメス」

「えっ……本気？」

その流れでこっちに来る？ と割と本気で困惑の表情を浮かべているヘルメスに対し、アポロンとヘステイアは同時に声をかけた。

「我が友よ、キミに全てを委ねよう」

「頼んだぞ、ヘルメス」

天界からの付き合いのあるアポロンが厳かに頷き、ヘステイアもまた優男の神を強い眼差しで見据える。

その場その場で立場を変えて敵対したり味方になったりと安定しないロキと異なり、常に神々の中で中立を気取っていたのが仇となった形だ。

両主神から念を押されるヘルメスは観念した様子で立ち上がり、円卓の隅に置かれた箱の前に歩み出る。そんな彼にこの場に居る全ての神の視線が集まった。

「どうかお手柔らかに……」

眩きながら箱を漁るヘルメス。

固唾を飲むヘステイア達の前で彼は取り出した一枚の羊皮紙を確認し、首を傾げて広げた羊皮紙を神々へ公開した。

『複合戦』

公開されたその形式を目にした神々がそろって首を傾げる。ロキも目を点にしたまま固まり、ヘステイアとアポロンが同時に眉を顰め、口を開いた。

「なんだそれ？」

少なくともこれまでであった形式とは異なる代物なのは間違いない。神々の記憶の中にも存在しない未知の勝負形式。期待の眼差しがヘルメスに向けられる中、ヘルメスが困った様に苦笑いを浮かべる。

「あー、オレにはこれがどんな形式なのかわからない。書いた神は前に出て説明してくれ」

「あ、俺が書いた奴だ」

一人の男神が手を上げ、神々の注目が彼に集まる。

当たると思っていなかったのか頭を掻きながらその男神が前に出

てきて、説明を開始した。

「二つの勝負形式を混ぜ合わせた奴にしようかなって思ってた書いたんだ。もう二枚引いて、それを合体させた『複合戦』って感じだよ」

彼の説明を聞いた神々がざわめき、目を輝かせる。

今までにない、未知の勝負形式が適応される。それもくじ引きという公平な手段を以て、ヘステイアもアポロンも、どちらも文句を口にすることはできない。面白そうな事に目の無い、娯楽に飢えた神々に与えられた最高級の餌を前に、神々が囁し立てる。

「良いぞー！」「こういうのを待ってた！」「ヘルメスー、もう二回引けー」

「え？　もう二回……嘘だろ……」

深い溜息を零し、ヘルメスは円卓で対面して座る男神と女神を伺い、箱に手を伸ばす。

どんな勝負形式であろうと勝利は确实だと腰を据えるアポロンに対し、顔を引き攣らせながらも気丈に振る舞うヘステイア。

二つの勝負形式を混ぜ合わせた結果、どんな反応が起きるのかわからない。それを知りつつもヘルメスは心の中で合掌しながら、二枚目の羊皮紙を引いて確認し、あっ、と小さく呟きを零して固まり、羊皮紙を神々へと公開した。

『旗守戦』

示された勝負形式を目にした神々が何かを察した様に吐息を零す。

互いに防衛対象として『旗』を掲げ、破壊された方が敗北する勝負形式。相手の『旗』を破壊する『攻撃隊』と、自らの『旗』を守る『守衛隊』の二つに分かれて行動する必要がある、人数の多さがものを言う勝負形式。

ヘステイアファミリアはたったの二人。他派閥から何人か改宗コンバージョンをしたと噂は流れているが、その誰しもが欠損を抱えた役立たず。つまり、攻撃隊一人、防衛隊一人という最少人数での戦いになる。

当然、アポロン側は攻撃隊五十人、防衛隊五十人というバランスのいい編成が可能。つまりヘステイアファミリアにとって凄まじく不利な勝負形式であった。

「ヘステイア、顔色が悪いぞ？」

「……まだだね、まだ……チャンスはあるさ」

アポロンの挑発に気丈に振る舞うヘステイア。だが彼女の顔色は非常に悪い。

傍から見えていたロキは内心で舌打ちを零しながらも、ヘステイアの言う通り機会チャンスが無い訳ではないとヘルメスを見据える。

例えば、此処から『一騎打ち』または『代表戦』を引けば、人数を揃えての戦いになる。そうなれば勝負はわからないどころか、勝負形式次第ではヘステイア側が断然優位になる可能性は高い。

「じゃあ、最後の一枚を引こうかな……」

緊張した面持ちのヘルメスが箱に手をつ込み、ガサゴソと漁り始める。

一度目、二度目よりも更に慎重に、より時間をかけてヘルメスが箱を漁る。次の形式次第で勝負の行方が決まるも同然。固唾を飲む皆の前で、ヘルメスは三枚目の羊皮紙を箱の中から取り出し、ゆっくりとした動作でそれを確認し——完全に言葉を無くして固まった。

「どうした我が友よ、早く見せたまえ」

「ヘルメス、覚悟はできてる。ばつと公開してくれ」

二人に促されたヘルメスは真顔のまま、その羊皮紙を神々の前に公開した。

『攻城戦』

明かされた勝負形式。『旗守戦』と『攻城戦』を組み合わせた『複合戦』。

ヘステイアが完全に言葉を失い、アポロンが哄笑した。

「フハハハハハハハハッ!? 神聖かつ公平なくじの決定だ、異論は認められないぞ！」

よりにもよって、攻めるにしても守るにしても多大な兵力を要する大人数戦闘。しかも本来なら『攻め手』側ならば攻める事だけを考えれば良い所に『旗印』という守るべきモノまで存在する。

攻撃側が圧倒的に不利でありながら、ヘステイアミアミア側が『守衛側』を選ぶ事が出来ない勝負形式。もし『守衛側』を選んでしま

えば、制圧勝利されてしまう可能性がある。かといって『攻撃側』は守るべき物を守りながらの戦い。

全員が攻撃を行えない『攻城戦』。完全に人数がモノを言う勝負形式に決まり、ヘステイアが歯を噛み締める。

横から見ていたロキも流石に表情を引き攣らせ、内心で頭を抱えた。普通の『攻城戦』ならまだしも、守るべき『旗印』を抱えての『旗守戦』まで組み合わさり、不利を通り越して不条理ともとれる勝負形式にまで落ちた。

ヘルメスが申し訳なさそうにちぢこまり、ヘステイアが青褪めた表情で固まる中。上機嫌なアポロンが口を開く。

「いくらなんでも防衛側は不可能であろう。特別に攻め手を譲ってやる」

城を守り切るのは不可能。かといって攻め手はより不利。構成員の数が少ない方が不利になる形式。ここで防衛側を選んだとしても勝ち目はなく、攻撃側としても不条理な程に不利である。それでも『旗印』さえ守れば一瞬で負ける事のない攻め手側の方がまだ瞬殺される可能性は低い。不可能と無理な方、どちらがマシかといえば、無理な方だろう。

ロキやガネーシヤの所からの増員を含めても、『旗』を守りながら城を攻めるのも、『城』を守るのも難しいという言葉を通り越して不可能に近いのはヘステイアにも理解できる。

「わかった……ボクの方が攻め手だ」

「ふむ、賢明な判断だなヘステイア」

既に勝利を確信したアポロンの言葉に、ヘステイアは小さく呻く様にしか返す事ができない。

最悪を超えた展開に彼女が諦めかけたその時、ヘルメスが「すまない、いいかな」と口を挟んだ

「アポロン、これじゃあヘステイアが余りにも気の毒……アンフェア不平等だ。オレ達も出来勝負なんて見ていて萎える」

「……」

「そこでどうだろう、助っ人の制度を設けるのは」

人数を制限して他派閥から協力者を求める、というヘルメスの提案に、アポロンが目を細める。

「……………ヘルメス、知っているぞ。キミはいつも何てことのないように言つて、丸め込もうとする、その手に引つかかるものか」

天界から続く腐れ縁を語りながら、笑みを浮かべつつ不平を零すアポロン。受け入れがたいと、彼は主張した。

「第一、戦争遊戯ウォーゲームは神の代理戦争。派閥所属の眷属以外が戦士として参加しては代理戦争の名に瑕が付くだろう」

「ああ、そうかもしれないね」

「それに、極端な話、第一級冒険者に近い者がヘステイア側に加担すれば、我々の身が危うくなる。ヘファイストスの所など、ヘステイアと仲が良いようだしな」

円卓を見回しながら発言したアポロンの言葉を聞き、神々がうーんと唸り考え込む。

鍛冶の腕だけでなく、戦闘面においても優れている眷属を数多従えるヘファイストスが「そこまで肩入れしないわよ」と肩を竦める。

このままでは完全な出来勝負できレース。神々としても面白くないが半端な規則ルールでは逆につまらなくなる。どうすべきか考える中、商売神が手を挙げて口を開いた。

「では、こういうのはどうでしょう？」

オラリオに主神がいない、都市外の派閥の構成員のみを助つ人として許可する。人数については無制限。

ヘステイア側が敗北した場合ヘステイア側に助つ人として加担した者に対して、アポロン側が何らかの要求が出来る。

「これであるならば、相応に仲が良くない限り参加を見送る者が出てくるでしょう。そして、相応に仲がいいのであれば無理をしてでも彼女を救おうとする。美談としても美味しく、相応に公平かと…………」

恰幅の良い腹を揺らしつつ満面の笑みを浮かべる商売神をロキが鋭く睨み、思案する。

アポロンに協力している癖に、ヘステイア側に優位になりそうな提案を上げる彼。そして、アポロンは彼の発言を受けて苦々し気な表情

で考え込んでいるあたり、無視はできないのだろう。

静かに、アポロンが顔を上げて商売神と見つめ合い。しばらくして溜息を零したアポロンが宣言した。

「良いだろう。ヘステイアファミリアに助っ人制度を認める。ただし、都市外の派閥限定で、なおかつ参加した場合は敗北後になんらかの要求をさせてもらう。それでいいのならばな」

ただでさえ勝率の低いヘステイアファミリアに対し、都市外の冒険者が協力するのか。ましてや負けたらなんらかの要求を呑まねばならない、とまでくれば参加したがる者はほぼいない。そう確信してのアポロンの言葉にヘステイアは小さく拳を握り、ロキが眉を顰めて小さく呟く。

「何が狙いや……」

ヘステイア側に有利になる可能性を、アポロンに呑ませた。

少なくとも、アポロンはそれを呑まざるを得ない状態であるのは違いないが、なぜあのような条件を付けさせたのか、余りにも不気味な商売神の行動にロキは鋭い視線を恰幅の良い男神に向けた。

第一一七話

蒼然とした夜空に星が散らばる。

アポロンファミリアの本拠^{ホーム}、巨大な石造りの屋敷の正面玄関には数台の馬車が止められていた。

エンブレムは掲げられておらず、どこの所属かも不明な馬車を見据えたティオネが深い溜息を零し、眩きを漏らす。

「何、あれ……バレッツバレなんだけど」

現在、アポロンファミリアの本拠にはほんの僅かな非戦闘員のみが残るのみ。籠城する古城跡地に向けて出発済み。彼らは籠城に向けての大掛かりな準備があるのだろうか。

故に、このタイミングでアポロンファミリアを訪ねる者なんぞ片手で数える処か、たった一つの派閥しか存在しない。わざわざエンブレムを掲げずに訪ねてきても何の意味もないのだ。

「にしても、きな臭いわね。この時機^{タイミング}に……」

闇夜に身を隠す為の黒色の外套を身に纏ったティオネは小さく舌打ちを零し、巡回として巡ってきた商売神に雇われているらしい傭兵から身を隠すべく影に身を潜めた。

団長の頼みとはいえこそ身を隠す行為に苛立ちを覚えつつも、彼らに直接危害を加える処か、見つかつてしまえば派閥に多大な損失がある事を理解している。故に、慎重に彼らの話に耳を傾ける。

「どうやら愚痴を零しているらしい。」

「ああ、色狂いなんてあてにするもんじゃねえな」

「だよなあ。好色家とはいえ流石に考え無し過ぎるだろ」

彼らの会話の内容から、色狂いがアポロンファミリアの主神を指す事を察したティオネが目を細める。

「開催予定まで四日か、何人集まるんだかね」

「最低でも二百、できれば四百集めたいって神様は言ってたな」

「おいおい、相手方はたったの二人……それも片方は片目と片腕やられてんだろ？ そんなにいらなくね？」

「知らないのか？ あの派閥、ロキファミリアとガネーシャファミリ

アから数人改宗したぞ。後、ヘファイストスファミリア、タケミカツチファミリア、ソーマファミリアから一人ずつ」

ティオネは訝し気に眉を顰め、思考を巡らす。

アポロンは他派閥からの改宗による自派閥の増強は行わない方針のはずである。付け加えて言うのと派閥に所属していない者の増援が認められているのはヘステイアファミリア側であって、アポロン側ではない。故に人を集めても何の意味もないはずだと考え、二人の巡回兵が消えていくのを見て溜息一つ。

あまり情報が得られそうに無く、団長の役に立てない事に苛立ちつつも場所を変えようと身を起こした。

ギルドによって手配された戦争遊戯ウォーゲームを行う城塞の資料が乗せられたテーブルを挟み、対面に座る恰幅の良い男神、商売神が眉尻を下げて微笑みを浮かべながら手もみをしつつも口を開いた。

「いやはや、ヘステイアファミリアも強情ですなあ。アポロン様の仰った様にさつさと眷属を差し出せば良いものを……」

「ふむ、確かに少し予定とは違うが。戦争遊戯ウォーゲームに持ち込んだのだ、後は勝っただけだろう」

自信満々に豪奢な金細工の椅子に深々と腰掛けるアポロンが深い色合いの葡萄酒を口にする。

その様子を見ていた商売神の眉がひくりと痙攣し、一瞬だけ鋭い眼光でアポロンを睨むも、即座に表情を和らげて微笑みを浮かべて頷く。

「ええ、ええ、そうでしょうな。戦争遊戯ウォーゲームをやれば負けは無いでしょうなあ」

「ああ、竜に対する対策は万全。古城の修繕も完璧。我が眷属しゆらのやる気も十二分。負ける要素等何処にも有りはしないだろう。ああ……はやくベルきゅんと……絶対に逃がさないぞー」

アポロンが追憶に耽り、愉悦の極みにあるのを目にした商売神が憎らし気に彼を睨むも、遠くない未来の光景を想像して、歡喜に打ち震

える彼はそれに気付かない。

「我らの頼み事については考えていただけましたかな？」

表情を微笑みに戻し、媚びへつらう様にアポロンをうかがう商売神。でっぷりと肥えた頬が緩く笑みの形を浮かべているのを見たアポロンは、まるで嫌悪の対象を目にしたかのように表情を歪め、吐き捨てる様に呟く。

「まさか、あの件か——当然、断る」

断言したアポロンが葡萄酒を口にする。それを見ていた商売神は微笑みを崩さずに「それは残念……」と小さく呟く。

「そういえば一つ、面白い噂をお聞きになったのですが、お聞きになりますか？」

「いらん、情報料等と言って金をとる積りなのだろう？」

がめつい商売神のやり口を知り尽くしているアポロンが拒否すれば、商売神は腹を揺らして笑いながら口を開いた。

「あっはっは、ご安心をアポロン様。これはただの噂話です。金をとろうなんて考えちゃいけませんよ。無料ですよ、無料。アツシは商売に携わるモンです、たとえ口約束でも一度口にしたことは違えたりなんかしやしませんよ」

人好きする笑みを浮かべた商売神の言葉にアポロンが訝し気に眉を顰めるも、彼が『嘘』は口にしない事を知っているアポロンは肩を竦めて先を促した。

既に勝利を確信し、ベルきゅんとどんな熱い一晚を過ごすかを頭の片隅で考えながら聞いていたアポロンは、商売神の意図になんぞ気付く様子はない。商売神は頬を緩めながら粘っこい視線をアポロンに向け、明朗な声で噂話を口にした。

「なんでも、『ドラゴンテイマー』は下層種の竜を従えてるそうじゃありませんか」

ヘステイアファミリアの本拠、^{ホーム}廃教会を襲撃した際に見せつけられた彼の竜。

アポロンファミリアの構成員が放った無数の魔法、矢、爆発物の全てをその身で受け止めて無傷を誇った怪物。下層種の竜の中でもと

りわけ堅牢にて重厚な鱗によって守られ、生半可な攻撃では傷一つ付ける事叶わない、ギルド指標の潜在能力はレベル4相当。

階層主の潜在能力もレベル4相当、つまりはアポロン側にとっても厳しい相手なのは違いない。

アポロンは溜息を一つ零し、商売神を見下しながらグラスを揺らす。

「何を、そんな事既に知っている。確かにあの小人族の娘が下層種の重装竜を従えていたのは承知の上だ」

「ですが、良いのですか？ アポロン様の眷属は階層主の単独派閥による討伐は成功させているでしょうが……彼の派閥には他にも飛竜が居るのですよ？」

階層主の単独派閥による討伐。オラリオにおいてもそれを成せる派閥は数少ない。それを成せるだけでアポロンファミリアが優れた派閥である事は口にするまでもない。

しかし、階層主との闘いは基本的に対象一体に対して、数十人を超える人員を動員しての討伐となる。横合いから強力な怪物に襲われながら討伐するのは非常に厳しいのだ。その上、相手方は人に使役されておき、『闘牛殺し』の異名を持つベル・クラネルに加え、魔術師として高い才能を持つミリア・ノースリスの両名、加えて深紅の飛竜まで存在するのだ。下手をすれば『重装竜』を前衛に据えての突撃を決行してくる可能性は高い。

いくら城塞とはいえ、古城でしかなく、応急処置的な修復しかしてない城壁で下層種の竜を止められるのかは不明だ。

「ふん、そんなもの大型弩でどうとでもなる」
望んでいた言葉を引き出した商売神が深い笑みを浮かべる。

確かに、商売神が用意した大型弩を使えば、彼の竜等は余裕で討伐できるだろう。実際、襲撃の際には彼の竜を一瞬の内に屠り去ったのだから。

——だからこそ、アポロンは商売神を敵に回してはいけなかったのだ。

「ええ！ ええ、その通りですとも我が派閥の用意した大型弩さえあ

れば、彼の竜など恐るるに足らず。その通りでございましょうなあ」
手もみをしながら自慢の商品を褒め称える商売神。アポロンは訝し気な表情を浮かべ、溜息を零して呟く。

「わかつている。貴様らの用意した大型弩のおかげで作戦は上手くいっている。褒美も期待しておくがいい。あの小人族の小娘の一人程度なら好きにしろ」

ミリア・ノースリスの身柄については、彼の商売神のもとへ引き渡す事が契約上で決まっている。彼の商売神がその再確認の為にしっかりと言い寄ってきていると勘違いした太陽神の言葉に、商売神は表情を完全に消した。

「アポロン様あ、一つ、アツシから助言をさせて頂やしよう」

「……なんだ？」

急激に変化した商売神の態度にアポロンが身構え、彼の神は恰幅の良い腹を揺らしながら指を立ててアポロンを見据える。

「無料タダより高いモノは無い。聞いた事ありませんかねえ？」

いやらしくも粘っこい笑みを浮かべた商売神の言葉にアポロンが表情を歪める。

「まさか、金銭を要求する積りか？」

「いえいえ——言ったでしょう？ 嘘は吐きません」

嘘は吐いていない。嘘は。そういいながらも商売神はおもむろに懐から紙束を取り出してテーブルに乗せた。

その紙束を見たアポロンは眉を顰め、紙束を指さして吐き捨てた。

「前にも言っただろう。貴様の用意した人員は使わないと」

彼の商売神が用意したオラリオの外から掻き集められた都市外の冒険者集団。最低基準としてレベル2以上という条件付けで集まった人数は、なんと優に二百人程。今なお掻き集めるのをやめておらずに募集をかけ続けている。

彼らが雇われた理由は一つ、アポロンファミリアに改宗して戦争遊戯に参加する事であった。

しかし、これらについてアポロンは完全に拒否。気に入った眷属ならまだしも、ただの傭兵なんぞに恩恵を授ける等、愛の神たるアポロ

ンの矜持に反すると言つて受けなかつたのだ。

商売神は腹を揺らして笑い、アポロンを鋭く睨んだ。

「いいえ、貴方の眷属にしていただけです」

「……何を馬鹿な事を、前にも言つただろう。今はベル・クラネルの気分だと」

太陽神の瞳に映っているのはベル・クラネルただ一人。それ以外を眷属になど、資金繰りの関係でミリア・ノースリスに仕方なく恩恵を授けてやろう程度の気分なのだ。

商売神の言う事に従う義理は無い。

「それは困りますねえ……」

「戦争遊戯ウォーゲームの勝敗を気にしているのか？ 何を馬鹿な事を、我が派閥が負けると思つているのか？ 対竜用の大型弩パリスタのおかげで下層種の竜を気にする必要も無い。都市外の冒険者等、貴様が雇いに雇っているがゆえに、大金を積もうがヘステイアの元に冒険者がやってくるはずもない」

負ける要素等、どこにもないではないか。自信満々に言い放つアポロンに対し、商売神が額に手を当て、笑みを吹き飛ばして苛立たし気な表情を浮かべ、自信満々な神を睨みつけた。

「馬鹿ですかい」

「なに？」

「馬鹿ですかつて聞いてんですよ」

アポロンが商売神の豹変に驚きの表情を浮かべる中、商売神は指を一つ立てた。

「一つ、アッシとアンタの契約はミリア・ノースリスを手に入れて此方に引き渡すまでのモノ」

「あ、ああ」

「二つ、アンタはアッシらに決して損はさせない事」

「そうだ、ミリア・ノースリスは確実に手に入る。損はしな——」

「勘違いしてやすね」

商売神の眉間に青筋が浮かび、ブチリツと堪忍袋の緒が切れる音が響く。

震えながらアポロンを睨みつける商売神。すでに取り繕う事が出来る段階を超えた怒りを抱いた彼の神は、立ち上がり腹を揺らしながらアポロンを糾弾した。

「アンタの所為でウチは商売あがったりなんだよ！」

「は……？」

怒りのままにアポロンに吠えたてる商売神。

始まりは、ほんの些細な事からだった。

「ドラゴンテイマー」に対する素材の取引を許可する様に頼み込んだ。しかし、ガネーシャファミアリア管轄であるから其方に訪ねてくれとたらいまわしにされ、行きついたガネーシャファミアリアでは『え？無理』の一言で叩き斬られ、せつかくの金脈が死んでいる事に腹を立てた。

それを聞きつけたアポロンファミアリアが協力を申し出てきたのだ。彼の派閥を滅ぼしてほしいモノを手にするのを手伝って欲しいと。最初は拒否したが、よく話しを聞けば彼の太陽神が欲しているのはベル・クラネルただ一人。ミア・ノースリスはものついで、最悪の場合はベル一人を手に入れれば他はどうなるかが知った事ではないと。

つまりミア・ノースリスの身柄を快く譲ってくれるというのだ。商売神はその手を取った。彼の神の言った『ヘステイアなんぞ、少し脅せば簡単に眷属を差し出す』という台詞も彼の神の背を押した。「アンタは何か勘違いしてやす」

商売神としては、脅せば簡単に手に入るなら是非とも自派閥のみでそれを行いたい。けれど実際にそれを起こすには商売神の派閥は『清廉潔白』が過ぎた——正確にいうなれば多少後ろ暗い事はしていても、表面上は清廉潔白の派閥として振る舞っていたのだ。しかしガネーシャファミアリアやギルドからは目を付けられ、警戒対象に入っている。

この状態で新興派閥のヘステイアファミアリアを恐喝する真似なんぞ出来る訳がない。今度こそ痛い腹を探られて面倒な事になる。

だが、アポロンファミアリアが脅すなら話は別だ、何せ彼らは前科が

山ほどある。今更、前科が一つ二つ増えた所で痛くも痒くもない。故に、彼らを矢面に立たせて自分たちは美味しい所だけをかっさらおうとした。

とはいえ、それではアポロンも納得しない。だからこそ大量の資金を掻き集め、アポロンファミリアに物資や兵器を貸渡した。兵力も含め、ヘステイアファミリアが一瞬で戦意を失う程の大戦力を見せつける為に。

だが、問題が発生した。

アポロンは、商売神の用意した戦力を派閥に加える事を拒んだのだ。最初は何度も説得を試みたものの、頑ななアポロンの態度に折れ、商売神はこのまま作戦を進める事に決めた。

それが、間違いだった。

「アツシらはね、戦争遊戯ウオーゲームなんて望んじやいないんですあ」

アポロンの言う通りなら、彼の神の宴の会場ですでにファミリア・ノースリスの身柄を確保できていたはずなのだ。しかし、彼の派閥の主神である女神はそれを拒否。そしてアポロンは戦争遊戯ウオーゲームの宣言を行ってしまった。

商売神は慌てに慌てた、確かに物資や兵器を貸し与えた。だからといって実際に使って良い訳が無い。何せ、使えば損耗する。損耗とは損失だ、商売神からすれば用意された『魔剣』にせよ『火精霊サラマンダーの護布』にせよ『対竜用大型弩パリスタ』にせよ、全てが金の張りぼてだったのだ。

そう、使うのではなく、見せつける。戦う前に、戦っても無駄だと思わせて降伏させる。それこそが商売神の思惑。

何の損失も発生せず、戦力だけを見せつけて終わる。簡単な話に、なるはずだった。

「戦争遊戯ウオーゲームには金がかかるんです。わかりますよね？ アツシらにとつての大損害だ」

だが、神の宴で女神ヘステイアは一度、戦争遊戯を拒否した。商売神は諸手を上げて喜んだ、これで損失は少なく済むと。戦力差的に当然の判断で、後は圧力をかけるだけ。

かけるだけ、だったのに。

「アンタら、アツシらの派閥が用意した大型弩を街中でぶっぱなしや
がりましたね？」

あれの所為で、ギルドから嚴重注意が下ったのだ。アポロンファミ
リアと——彼らに大型弩を提供した、してしまった商売神の派閥
に対してである。

竜素材にて金を稼いでいるはずだったヘステイアファミリアから
罰金として筆れたのはほんの雀の涙程度の金額。それによってギル
ド長たるマルデールが他からどうにか金を得られないかと策略を
練っているさにアポロンがやらかした。

商売神の派閥に対して罰金を背負わせる絶好の機会をギルドに与
えてしまったのだ。それによりギルドからの嚴重注意兼罰則を食ら
わされた。

これなら、まだ取返しが付く。そう、女神ヘステイアが降参してミ
リア・ノースリスの身柄を手に入れる事さえ、できていれば。

しかし、アポロンは芳しくないどころか、最悪の結果を引き当てて
くれた。

「ですが、アンタはミリア・ノースリスに重傷を負わせた——結
果、彼の女神を怒らせた」

ミリア・ノースリスに重傷を負わせた。片目に片腕、欠損という冒
険者にとつての致命傷を与えてしまった。

それが引き金となり、女神ヘステイアは一度は断ったアポロンとの
戦争遊戯に乗った。

脅すだけで終わる、簡単な話を、莫大な金を必要とする戦争遊戯の
開催という最悪にまで落とし込んでくれた。

「アツシは感謝の極みです。ええ、アンタの所為でアツシの派閥の看
板に大きな傷っ！ ギルドの罰則で総資産の三割の罰金っ！ 挙句
の果てに戦争遊戯に向けて馬鹿高い物資の用意っ！」

どう考えても、大損である。ミリア・ノースリスの身柄を手にした
ところで、この損失を埋めるには数年かかるに決まっている。商売神
が想定した最高の結末から程遠い、最悪の結末に向かっている。

だからこそ、此処で一手打つ。その為に、アポロンを脅すのだ。

「わかりやすよね？ この傭兵を受け入れなきゃどうなるか」

「……まさか」

アポロンファミリアとヘステイアファミリアの戦争遊戯。ウォーゲーム

結果は言わずもがな、アポロン側が勝利するだろう。ただし、下層種の竜の存在を考慮しなければの話だ。

「大型弩の運び込み。中止しても良いんですよ？ なんなら、他の消費した魔剣に損耗した火精霊サラマンダーウールの護布の代金も請求しましょうか？」

「このタイミングで裏切るか……チツ、使えない奴だ。だが、良いだろう。金も払おう」

苛立たし気に、裏切られた事を知ったアポロンが商売神を睨み返す。

資金については問題ない。使用した分を支払う事ぐらいは可能だ。大型弩についても一機二機程度なら賄える資金がある。故に、アポロンは金にモノを言わせて商売神を黙らせようとした。黙らせようとしてしまった、すでに、そんな場所は過ぎ去っているにも拘わらず。「ああ〜そうですかあく。なるほどなるほど、金だせば黙ってくれどでも思ってたやすね？」

「……どうした？ 金なら払うが」

「お断りします」

「な!？」

驚愕の表情を浮かべたアポロンの正面に座る商売神は、腹を太鼓の様に叩きアポロンを嘲笑しながら、囁く様に告げる。

「それと、アツシらが集めた兵力についてなんですがね———今から彼らを連れてヘステイア様に頭を下げに行こうと考えてるんですよ」

「ま……まさか」

デイトゥス
神会での不自然な商売神の発言。

『オラリオに主神がいない、都市外の派閥の構成員のみを助っ人として許可する。人数については無制限』という規則ルールを追加してきた彼の神の意図。

商売神が集めていたのは都市外の冒険者だ。当然、現状の規則ルール上で

はヘステイアファミリアに助っ人として参加するのは、可能だ。むしろその為にアポロンに条件を呑ませたと言ってもいい。

「わかりやすか？ アンタの所為でアツシらは大損。もう一度言いやすが、戦争遊戯なんて真つ平御免なんですよ」

だから、圧倒的戦力差を見せつけての、無条件降伏を突き付けろ。その為に、商売神が用意した戦力を派閥に迎え入れる。そう脅しかけてきた商売神をアポロンは苦々し気に睨みつける。

「私の矜持を知っているの発言か……？」

「矜持？ アツシは色狂いの大馬鹿野郎の矜持なんて知ったこつちや無いですよ」

アポロンを見下した商売神は腹を揺らし、テーブルの上の資料を指さす。

「レベル3を五人も用意できやした。これが敵に回ったらどうなると思いやす？」

「……ぐっ」

資料に乗せられた都市外の冒険者の一覧^{リスト}。軽く目を通せば、都市外における強者と言われるレベル3をこれだけ集めた商売神の手腕にアポロンが冷や汗を流す。

たとえ都市内の冒険者の方が優れていようと、レベル3冒険者を五名もぶつけられれば一溜りもない。ましてや二百名を超える人員だ。彼の商売神が用意した戦力が、全てヘステイアファミリアに受け渡されればどうなるのか——ましてや、大型弩^{バリスタ}や魔剣等、攻城戦に持って来いな物資までも全て相手に持っていかれば——どうなるかは火を見るよりも明らかであろう。

「アポロン様よお、アンタが負けたらどうなるでしょうねえ？」

完全に脅しにきている商売神の様子にアポロンがたじろぎ、どうすべきか必死に考える。

現在の自派閥の戦力。商売神から借り受けている大型弩^{バリスタ}や魔剣、火精霊^{サラマンダーウィール}の護布。それらが全てと、商売神の用意したレベル3、五名を含む二百名の戦力。

ヘステイアファミリア側に全て持っていかれば——負ける。

何せ大型弩は攻城戦における攻城兵器として最高の能力を持っている。あれの威力についてはアポロンもよく知っている。なぜなら自分たちでそれを使ったからだ。アレの矛先が自分たちに向けられれば、間違いなく負ける。レベル3冒険者五名という戦力も合わさり、勝ち目が無くなる。

「負けるか、条件を呑むか、選んでいただきやしよう」

だから言ったんだ。タダより高いモノは無いと、商売神が嗤う。間抜けな太陽神を嘲笑し、勝利を確信した商売神。アポロンはただ睨み返す事しかできない。

「くっ、わかった、条件を呑もう」

「ああ、条件についてですが……もう一つ追加をお願いしやす」

「な!?! まだ何かあるのかっ!」

条件の追加を言い渡した商売神の顔を睨んだアポロン。次に放たれた商売神の言葉にアポロンは顔を引き攣らせた。

「アポロンファミリアに入団を希望する全ての者を受け入れてください。やらなきや、わかりますよね?」

ニンマリとあくどい笑みを浮かべた商売神の言葉。

今まで訪ねてきた入団を希望する者達を門前払いしていたアポロンに対し、これから訪ねてくる団員は、たとえ犯罪者であったとしても全てを受け入れる。彼の商売神はそう言っているのだ。

「待て、流石にそれは」

「でしたら、アツシはこの資料を手へスティア様の所を訪ねましよう」

見た目にそぐわない機敏な動きで傭兵の一覧^{リスト}を手を取った商売神は、見下した笑みを浮かべたまま立ち上がり、椅子に腰掛けるアポロンを見下ろし、宣言した。

「今のアンタに許される返事は『はい』か『Yes』だけだよ。いい加減気付け間抜け」

第一一八話

糞女が死んで、死んで。居ないはずなのに、声が聞こえる。

『あんたのやる事成す事、全部無駄だってわかんないわけ？』

仲間を掻き集めた。同じ境遇に立たされて部下として扱われている組織の者達を扇動して糞女を殺す為にと、元居たあの頃に帰る為にと、仲間を集めた。

作戦決行まで残り一週間。糞女の監視の目を掻い潜り掻き集めた志こころざし 同じくする者達。俺と同じように『才能』を理由に人質をとられて逆らえなくなっていた奴隷にも似た者達。裏切りの可能性は限りなく低く、役に立たなそうな下っ端連中を扇動して陽動代わりに組織下部を腐らせて足並みを乱す。その合間を縫って本隊としてあの糞女を殺す者達で足場を崩していく。

後少し、後少しと急ぐ気持ちを抑えて慎重にあの糞女を殺す手筈を整える。三日後にはあの糞女は海の藻屑と消える。あとすこし、だつたんだ。

『よくやるわねえ、まあ無駄だけど』

用意していた船が海上の沖で炎上している。本当なら、糞女もあの船に乗っていて、扇動して反旗を翻した下っ端共がやらかした強襲テロに巻き込まれて炎上する、船に乗っているはずだった。

灯台から双眼鏡で眺めていた。ようやく、あの女が死んで自由の身になったのだと、安堵の吐息を吐いて灯台の階段を下りていく。一段、一段を踏みしめる度に湧き上がる歓喜。これで終わりだと零れそうになる笑いを堪えて灯台の入口の扉を開けた。周辺に集まった同志達に作戦の成功を知らせる為に声を張り上げようとして——
開け放った扉の先であの糞女が不機嫌そうに立っていた。

『はいはい、久しぶりねえ……にしても、よくもまあこんな集めたものね。私も気付かなかつたし、というかよく裏切りを唆したわね。絶対に裏切らないって信じてた部下まで私を裏切ってたのには驚いたわ。やっぱ私が思った通り、アンタには才能がある』

パチパチと手を叩きながら歩み寄ってくる女。灯台の周辺に集

まった同志達が、全員倒れ伏していた。周囲を取り囲むあの糞女の部下達。片手に持っているのは、箱の様なものか——銃の機構が組み込まれた、一見ただの箱にしか見えない、暗殺用の武装だ。それは、その武器は、掻き集めた仲間を殺したその武器は、俺が使い捨ての下っ端に提供した、目の前の糞女を殺す為の武装だ。

『信じられない。後少して私が殺される所だった。でも——残念、アンタの作戦は無駄に終わった。さて……噛みついてきた躰のなっていない猟犬はどう始末したモノかしら』

醜態に笑うあの糞女が、優しく肩を抱いてくる。片手に黒い塊、バチバチと電撃の音を響かせるスタンガン。見様見真似の格闘術での抵抗を試みようとして——気が付けば俺は椅子に縛り付けられていた。

どこかの倉庫、じゃない。俺が集会に使っていた場所だ。糞女を殺す為に集めた人員に、作戦を伝えていた集会場。目の前には、糞女が立っていた。足元には、別の場所で待機していた仲間が縛られて倒れている。

『あつはつは、マジ怖いわアンタ。別動隊用意して確実に仕留めにくるとか、流石に冷や汗かいたわ。ああ、アンタの才能が恐ろしいわ。この子、お気に入りだったのに……私を裏切ったんですもの。何？抱いたの？ どんなふうには？ 絶対に裏切らないって思ってたのに、この子は私を裏切った。信じられる？ 私の為に死んでも良いとまで言ってくれた良い子だったのに』

倒れた仲間の一人。まだ年端も行かない少女だ。どつかの国の孤児院で違法な娼婦として売られていた所を、糞女が買い取った者だったと思う。心地良い言葉と、献身の姿を見せて裏切りを唆して、此方の味方に引き入れた彼女。手を、打った。出来得る限り、可能な事は全て。それでも届かなかった。

謝罪の言葉が響く。許してくださいと必死に懇願する少女の声。助けてと叫ぶ彼女に対し、糞女は無造作にスタンガンを押し当てた。違法改造された、致死性の電撃を放てる、殺人道具と化したそれ。

『アタシが集めた子達、半分ぐらい裏切っちゃった所為で組織が滅茶

苦茶なんだけど……立て直しまでかなりかかるじゃない。まったくぶつぶつと文句を零しながら足元の少女にスタンガンを押し当て続ける糞女。痙攣して悲鳴を上げる事も出来ずに縛られた体が陸に打ち上げられた魚の様に跳ねて、跳ねて……あの糞女が退くと、糞尿を垂れ流して白目を剥いた少女が微弱な痙攣をしたまま、多分、ほぼ間違いなく絶命していたと思う。少なくとも、その後姿を見てはいない。

『まあ、アンタが誠心誠意協力してくれれば一ヶ月で直せるんだけど。どうする訳？ あの男を事故死させた方がいい？ それとも、会社を潰す？』

言う事を聞くな。俺が半壊させた組織の復興を手伝うなら、今後一切裏切りを行わないなら、今まで通り使つてやる。あの糞女がそう囁く、少女を殺したモノとは別の、殺傷力の低いスタンガンを取り出して片手に持ちながら、あの糞女は嗤っていた。

『アンタの才能はね、最っ高。アタシですら気付けずに、滅茶苦茶な損害が出ちゃったし。だからね、惜しいのよ……アンタが惜しい。アタシの指示に従う、部下であつてくれれば……こんな事する必要も無いんだけどね』

押し当てられたスタンガン。弾ける火花^{スパーク}。自分の意思とは無関係に暴れ狂う体。縄が食い込むのも厭わずに縛られた体が跳ねまわろうとする。呼吸ができない、息苦しい。視界が暗くなっていく。電撃による痛み。呼吸困難による苦痛。

電撃が止んだ瞬間、求めていた空気を肺一杯に吸い込もうと口を開き——糞女に唇で塞がれた。熱烈な接吻^{キス}。情愛を示す様に、貪る様に、新鮮な酸素を求めていた俺を蹂躪していく。唇が離れ、再度電撃が弾けた。

電撃による苦痛。接吻^{キス}による蹂躪。視界はぐちゃぐちゃ、倒れ伏して絶命した仲間の軀。あと、すこしだった。あと……ぼだった。あと……。

あの女が嗤っている。

『だから、言ったでしょう？ アンタの行動は全て無駄に終わる。足

搔くのをやめなさい、私の為に生きて、私の為に死になさい。そうしてくるなら、アンタの大事なモノには手を出さないでおいであげる』

押し当てられたスタンガン。響く嘲笑が倉庫の内部で反響する。集めた仲間が倒れ伏し、立てた作戦は無駄に終わり、あの女が嗤うのだ。いつだって、なんどだって――

――上手くいくはずの作戦は、なぜか歯車がズレて上手くいかない。

気分を害する悪夢を見て魘されて目覚めた次の日の朝。ベッドから起き上がる事も出来ないぐらいの頭痛、そして暴れ狂う吐き気。昨日の出来事を思い返しつつ、深く深呼吸を繰り返す。

戦争遊戯ウォーゲームの勝負形式が決まった。

『旗守戦』と『攻城戦』の組み合わせ。

自らの派閥のエンブレムの刻まれた『旗印』を破壊された方の負け。『旗印』は魔法攻撃は一切通用しない。遠距離からの魔法攻撃で破壊されて一瞬で終わるのは、つまらないなんて糞みたいな理由で追加された、糞みたいな規則ルール。

アポロン陣営が『籠城』する城塞。城塞内のアポロン陣営の人数より、ヘスティア陣営の人数が倍の数になれば『制圧勝利』。アポロン陣営が三日間、城塞を守り通せば『防衛勝利』。

開示された勝負形式に則った机上戦闘。アポロン陣営の指揮を行ったのはフィン。ヘスティア陣営の指揮を行ったのは俺。結果は十戦中、アポロン陣営十勝、ヘスティア陣営十敗。

攻撃側でありながら、守らなければいけない『旗印』を抱え込まされたヘスティア陣営。全人員を攻撃に回せなくなるどころか、全人員を防衛側に回してもすり潰されて負ける事しかできなかった。

もっと、人員が必要だ。リユーさんが増員として入ったとしても、まだ足りない。

ベル、俺、リリ、ヴェルフ、ロキファミリアの五人、ガネーシャファ

ミリアの三人、リユーさん、ミコト。加えてキューイとヴァン。

ヘステイア陣営、総勢14名+2匹。『旗印』設置場所、平地。

対するアポロン陣営、総勢108名。『旗印』設置場所、城塞内部。

馬鹿げてる。どうしてこっちは防衛用の壁も何もない平地に『旗印』を置かされてるにも拘わらず、相手陣営は防壁に囲まれた城塞内部に『旗印』を置くのだろう。勝ち目が微塵もありやしない。

クリスさえ参加許可を得られれば、そう思いギルドに問い合わせを行った結果は……一度目に拒否されて以降、送った嘆願書は全てそっくりそのままロキファミリアに返還されてきた。呆れてモノも言えない、忙しいの一点張り。神ウラノスの考えはさっぱりわからないが、クリスの参加はできないし、最初の一通目の返答が『結晶竜の参加は許可できない。この通達を無視した場合、ヘステイアファミリアを殲滅対象派閥に指定する』である。簡単に言えば『闇派閥』^{イヴァイルス}同様に発見され次第、構成員も主神も殺害対象となる訳だ。意味わからん。「最悪な気分、あーああー……はあ」

ベッドから身を起こして溜息。時計を見ればすでに十時を回っている。寝坊だ、昨日は——何時に寝たんだったか。ベッドに入ってからもずつと勝つ為の作戦を考え続けていて、何も思い浮かばなかったんだ。

深い溜息が零れ落ちる。夢見は最悪で、散々魔された拳句の果てに寝坊。

早く起きて朝食を食べなければ。戦場はオラリオ南東部に存在する『シユリーム古城跡地』。

跡地とはいえ堅牢な城壁を兼ね備えた城塞だ。近隣の村や街から『盗賊団が住み着いている』との報告と、討伐の冒険者依頼^{クエスト}が発注されていた場所。

ガネーシャファミリアがギルドの要請で討伐に向かっており、地形情報等を記載した地図なんかを秘密裏に此方に用意してくれる手筈になっている。——露見しようモノなら間違いなく叩かれる危険な行為だが、ガネーシャ様は『俺に任せろっ。俺を誰だと思ってる、俺はガネーシャだぞ！』と自ら申し出てくれた、らしい。

ありがたい、話なのだが………現状ではその地図が役に立つとは思えない。そもそも城壁の突破前に『旗印』の防衛が上手くいかないのだから。

着替えを終え、扉を開け——バンツと扉が開かれた。目の前に立っているのは、ティオネ・ヒリュテだ。外から騒ぐ声が響いてくる。何事かと驚いていると彼女の腕が伸びてきて首根っこを掴まれた。

「ちよ!? 何事ですか!」

「緊急事態よ、今起きた所なのはわかってるけどすぐ来なさい」

来なさい。そう言いながらも首根っこを掴んだ状態で廊下を駆けていくティオネさん。駆け抜ける廊下には無数の団員が騒がしく駆け回っている。まるで火事でも起きた様な騒ぎだ。背筋が凍り付く感触と共に、糞女が耳元で囁く様な声が響いた。

『どうせ全部無駄なんだから、諦めなさいよ』

——無駄かどうかなんて、まだわかりやしないだろう。

リルルカ・アーデは街を駆けていた。つい昨日、ソーマファミリアを脱退してヘステイアファミリアに改^{コンバージョン}宗した彼女は今、西の大通りを全力で駆け抜けていた。

息せき切らし、大急ぎで向かうのはロキファミリアの本拠^{ホーム}である黄昏の館だ。

時刻は既に昼過ぎ。

彼女が急ぎ駆け抜ける理由は、ロキファミリアから護衛として待機していたアナキティ・オータムという猫人の少女がもたらした最悪の知らせにある。

ヘステイアファミリアが臨時拠点として利用していた場末の酒場兼宿。扉を蹴破る勢いで飛び込んで来た猫人は、激しく動揺した様子でその場に居た女神ヘステイアと、リルルカに叫んだ。

「アポロンファミリアが都市外の冒険者の改^{コンバージョン}宗を受け入れてる! もう百人は超えてるツ!!」

ヘステイアは目をひん剥いて『嘘だ、有り得ない! あの変態^{アポロン}が気

に入った人間以外を眷属にするなんて!』と叫び、リリは何が起きたのか理解できずに立ち尽くす事しかできなかった。

詳しい話を聞けば——あのアポロンファミリアが増員を決定した事。街中で商人達が騒ぎ立てているらしい事。アポロンファミリアの団員が多数の『入団証明書』を抱えてギルドに足を運んでいる事。

とうてい信じられない情報が数多飛び出し、夢か何かなのではないかと現実を疑う状況にまで至ってヘステイア様が苦悶の表情を浮かべて、リリルカに頼み事をした。

『ミリア君たちにこの事を知らせてくれ。ボクはまだ協力してくれそうな冒険者達を探すから』

欠損を抱えた冒険者。彼らを味方に引き込むという目的でヘステイア様が駆けずり回っているのは既に知っていた、そしてその結果が芳しくない事も知っている。

通常、欠損を抱えた冒険者は派閥を抜ける。抜けたその後は——
—どうなるか知っている者はいない。

ロキファミリアやガネーシャファミリア等、大きな派閥であれば欠損を抱えた元冒険者をなんらかの役職、新人の育成等に就けるか、職場を斡旋して生活環境を整えるかのどちらかを行う事ができる。しかし、小規模、中規模程度の派閥ではそこまで手が回らない。結果として、小・中規模派閥の欠損冒険者は派閥の脱退後は貧民街ダイタロス通りで浮浪者に堕ちるか、都市外へ出て行くか、もしくは無謀なダンジョンへの挑戦を行って未帰還になるか。どれも行方知れずになる事には違いない。

派閥の保護下にある欠損冒険者を勧誘する事はできない。『再生薬』の効力を知れば、余計な手出しをしてくる派閥が増えかねないのだ。だからこそ大規模派閥であれば信用できる派閥からしか受け入れられず、小・中規模派閥であれば無所属に堕ちた者は行方知れず。結果、勧誘対象を見つけるのも苦心している現状。

戦争遊戯の勝負形式の時点で神ロキ曰く『勝ち目が毛程も無い』と言わしめる程の状況だというのに、アポロンファミリアの増員という

最悪の知らせである。

駆け抜ける街並みの中、商人達が声を張り上げている姿がちらほらと目に映る。

「今ならあのアポロンファミリアに入団できるぞ！」彼の派閥であれば勝ちも確定、旨い汁を吸いたけりや今から神アポロンの所に行くべきだ」「戦争遊戯の活躍次第では、正規団員として認めてくれるぞ」

無所属の冒険者が足を止め、彼らの話を耳にしては囁き合う。

「あのアポロンの所だろ？ どうする？」「美形揃いの所じゃねえか。前訪ねた時は断られたが今ならいけるらしいな」「俺、今から行ってみようと思うんだが」「俺も行こう。あの派閥に入れば旨い汁が吸えるみたいだしな」

商人達の口車に乗せられ、その気になった冒険者達が駆けていく。上級冒険者も下級冒険者も関係なく、全ての団員を受け入れるという凶行はとても信じられない。すでに百人を超える入団者を迎え入れて戦力が跳ね上がった彼の派閥、それがヘステイアファミリアを潰そうとしているという現実がとてもではないが信じられない。

足早に駆け抜けるさ中、背中に聞こえた声にリリルカは目を見開く。

「アポロンファミリアの増員数、二百を超えたってよ」「三百いくんじゃね？」

今なら、彼の中堅派閥になんの審査もなく入れる。そんな噂を聞きつけた者達は我先にとアポロンファミリアに入団を申し込みにいつている。収集が付かない程に集まっていく人員。元の数を合わせれば、人数だけで言えばロキファミリアに匹敵するほどの数にまで膨れ上がっているだろう。

いくらなんでもおかしいと感じつつもリリルカ・アーデは大通りを抜けてロキファミリアの本拠前に辿り付く。

「む、お前は」

「あの！ リリはヘステイアファミリアの団員です！ ベル様とミリア様に会いにきました！」

「少し待て、確認をとる」

門兵の冒険者の片割れが駆けていくのをもどかし気に思いながらも仕方なく待つ事しかできない。

暫くして、確認がとれたのか案内役の冒険者に引き連れられ、他派閥の本拠の廊下を歩いていく。普段の日常では有り得ない、他派閥の本拠を案内されるといふ状況。早鐘を打つ心臓を落ちつけようと何度も深呼吸しながら案内役に着いて行った先、客室の一つらしい扉の前に立った案内役の冒険者が扉を開けようと手をかけた所で、ガシャーンと陶器の割れる音と共に甲高い悲鳴にも似た叫びが響き渡った。続くのはなだめるような声。

『そんなの嘘よ!』

『落ち着いてくれ』

『落ち着く!?! なんでアンタはそんなに落ち着いてられるのよ!!』

『今、慌てた所で事態は好転しない。だから落ち着いて話し合おう』

『五月蠅いわね!!』

暴れる様な音と、甲高い悲鳴にも似た叫び。それをなだめようとする誰かの声。

甲高い悲鳴にも似た叫びは、リリルカにとって聞きなれないモノだったが、同時にどこかで聞いた事のある声だった。まさか、という予感と共に案内してくれた冒険者を押しのけて扉を開く。

客室だつたと思われる部屋の中には資料が散乱していた。資料以外にも盤上遊具ボードゲームの駒等の机上戦用の道具もテーブルの上に置かれ、ソファファアが一式置かれた部屋。

淡い金髪の髪をガシガシと掻きむしりながらもブツブツと何かを呟く小柄な人物。それに相対しているのはロキファミリアの団長であり、世界最強の小人族と謳われるフィン・ディムナだ。なぜか紅茶塗れになっている彼は、冷静な声で対面の人物に語り掛けている。

「どうか落ち着いて話を聞いて——」

「黙ってなさいっ! アンタの話を聞いてもどうにもならないでしょ! 考えさせて……!」

異常な程に興奮した様子で叫ぶ人物。リリルカ・アーデはその人を見て言葉を失った。

長くのばされた淡い金髪の髪。小人族の中でもとりわけ小柄でリルカよりも更に小さい背丈。見開かれた目は虹彩異色オッドアイになつていて、仕切りにテーブルの駒を動かす右腕は病人の様に白い。前に会つた時に『治せる』とは聞いていたが、明らかに前とは異なる容姿になつた彼女の姿を、リルカは見間違える事は無い。

「ミリア様……」

「フィン、資料を……アイツらは何人に増えるの？」

「………少し待ってくれ、すぐに確認を——」

「ねえ、早く……時間が無いのよ!？」

唐突に叫びながら立ち上がり、髪を掻きむしりながら爪をガリガリと噛みながら呟きを零したかと思えば、ソファーに腰掛けて資料に手を伸ばして駒を動かし始める。明らかに正常な様子ではない彼女の姿に息を詰まらせ、リルカは震えながら部屋に入った。

足元に転がっていた陶器の破片を踏んでしまい、パキリツと音が響く。バツと顔を上げたミリアとリルカの視線が真つ向からぶつかり合い、ミリアが微笑みを浮かべた。

「リリ、ソーマファミリアから脱退おめでとう。少し待って頂戴——

———どうか勝てる案を考えるから」

背筋を凍り付かせる悪寒。正常じゃないのに、明らかにアポロンファミリアの増員という情報で恐慌状態パニックに陥っているはずなのに、目の前のフィン・デームナに悲鳴の様な叫びをぶつけていたというのに、リルカを見た瞬間に表情を取り繕う様に微笑みを浮かべた彼女の姿に———誰がどう見ても平常心とは程遠い状態でありながら、彼女はリルカを気遣い、微笑みかけた。

「フィン、その資料貸して」

「ああ、これかい」

「………治癒士ヒーラーの洗い出しを」

「もう終わってる。これが治癒士ヒーラーの一覧だ」

頭から紅茶をぶっかけられていながらも微笑みを絶やさず、ミリアを刺激しない様に彼女に従うフィンの姿。普段なら有り得ない光景だ。

あの冷静沈着で臆病な程に慎重に物事に当たるミリア・ノースリスが第一級冒険者を顎で使う真似をしている。現状がどれほど彼女の負担になっているのかわかなくて、考えるまでもなかった。

ただでさえ『勝ち目が無い』と言われるほどの状態。それをどうにかしようとしている。冷静さを欠いているはずなのに、冷静に戦力を分析して勝利への道筋を立てようとしている姿にリリルカは言葉を失う。

「ミリア、キミはまだ朝食を食べていなかっただろう？ そろそろお昼だ、一度休憩を——」

「煩いわね、そんな時間は無いわ」

「……キミが倒れでもしたら、もっと事態が深刻になる。休憩を——」

「煩いって言うてるのよ！」

彼女の手元にあったインク壺をフィン・ディムナに投げつけた。回避は容易なはずのそれを真正面から浴びて真っ黒になったフィンは静かに目を瞑ったまま黙り込む。荒い息を吐きながらも資料に手を伸ばしたミリアは舌打ちを零し、立ち上がった。

「精神力が回復したから鍛錬に戻るわ」

「……わかった。気を付けて」

「リリ、そこを退いて」

有無を言わさない態度に、扉の前で呆然としていたリリルカは思わず道を開けてしまう。

荒い息を零しながら、冷静さを明らかに欠いているミリアが立ち去った部屋。インクまみれのフィンは小さく溜息を零してタオルに手を伸ばした。

「水性インクで助かった。油性だったら落ちなかっただろうしね……つと、すまない。今ちよつと立て込んでいてね、キミは確か……リリルカ・アーデだったかな」

インクを拭き取ったフィン。オラリオが誇る第一級冒険者。そんな人物はミリアに当たり散らされてなお、冷静な振る舞いを崩さずに散らばった資料を掻き集め、テーブルの上に乗せなおし始めた。

「困ったね、一番冷静だった彼女が恐慌状態を起こすなんて……おかげで、今朝からあの調子さ」

そう呟いたフィンは資料の一つをテーブルに乗せ、残ったティーカップに紅茶を注いでリリルカに手渡した。

「あ、ありがとうございます……」

「どういたしまして」

「……どうして、怒らないのですか？」

「んー……彼女の気持ちは痛い程わかるからね」

家族を守る為に必死に足掻くさ中。負ける可能性の高い勝負形式に決まった次の日に、勝ち目のない程に戦力を増強されれば、誰だって冷静さを欠くに決まってる。

「むしろ彼女はあの状態でも冷静な方だよ」

泣き叫んで全てを投げ出してもおかしくない。そこまで追い詰められてなお、彼女は家族ファミリアを守るという行動そのものは歪むことなく、一貫している。

戦力を分析し、勝率の高い作戦の立案を行う。不足する情報の中、持ち得る手札から導き出される答え全てが『敗北』であったとしても、考える事を止めない。

「本当に申し訳ないけれど、ボク達ロキファミリアはこれ以上手を貸せない」

ベル・クラネルとミリア・ノースリスの鍛錬を請け負っている。敵の情報を掻き集めた。可能な限り人員も用意した。アポロンファミリアに対する直接的な攻撃を除けば、出来る事は全てやりつくした。それでもなお、アポロンの奇行によって勝率が限りなくゼロに近い状況に叩き落された。

「儘ならないね……」

深い溜息と共に零された言葉に、リリルカは表情を歪めた。

リリルカは鍛錬場で魔法を連射し、用意された的を片っ端から撃ち抜く背中を見つめていた。

別の鍛錬場ではベル・クラネルが第一級冒険者三人相手に必死な立ち回りを繰り返している。

二人とも、余裕は無い。あの戦力差相手にどうすれば良いのか必死になって考え続けてもなお、案は浮かばない。派閥を率いる団長であり、困難を何度も乗り越えてきたフィン・デイルムナですら『悪いけど、ボクも何も浮かばないんだ。情けない事にね』と暗い表情を浮かべる程の状況。素人でしかないリルカに妙案が浮かぶわけもない。

それでも、彼女は小さな胸に手を当て、ただ無心に的を射抜くミリア・ノースリスの背中を見つめていた。

どれほど恐慌状態パニックに陥ろうと、家族を守るという行動だけは一貫して貫き続ける彼女。

パタリと、唐突にミアアが倒れ伏す。精神疲労マインドダウンに至っても無理をし続けて魔法を使い続けた代償。精神枯渇マインドゼロにまでなっても、気絶にまで至らずに這いずってでも立ち上がろうとしている。魔法の光は途絶え、無数の凹みのある的となった鎧の前で口惜しそうな表情で、ミリア・ノースリスが泣いていた。

「どうして……どうして助けてって言ってくれないんですか。ミアア様……」

自分一人で何でもこなしてしまう。彼女はいつだってそうだった。本当に、小器用になんでもできてしまう。

ベルと違って、彼女には欠点と呼べるものは無かった。

簡単に口車に乗せられて騙されそうになるベルと違って、彼女は詐欺にあう事は無い。いつだって冷静で、場を見極めて場を治める。

彼女の助けになりたいと思った。彼女が救ってくれた、自分を救ってくれた。だから、自分も彼女を助けたいと思った。けれど——
彼女は何処にも欠点なんてなくて、いつだってリルカの遥か彼方前を歩き続けていた。

その彼女が、今まさに壁にぶち当たっている。遥か高い壁に阻まれ、それでも何とかしようと涙を零しながらも足掻いている。——
それでも、誰かに助けを求めるのではなく、自力でなんとかしようとしている。

彼女を助けたいと願った。余りにも器用な彼女は、なんでも自分で片付けてしまう事が多い。だから、助けなんて必要無さそうで、今回だってそうなんだと思っていた。

増強されていくヘスティアファミリア。片目と片腕を失っても治す手段を自力で用意していた。いくつもの大型派閥と取引してアポロンファミリアに対抗する手段を整えていた。

矮小な小人族でしかない自身なんかでは届き得ない程に数多の手を打ち続ける彼女の背中が、遠かった。だから、今回もきつと、自分には出番なんて何もなくて、彼女が解決手段を見つけてしまうのではないかとリリルカは思っていた。

「ミリア様、たすけてって言ってください。そうすれば——」

助けは必ず来る。そう呟き、リリルカは拳を握り締めた。

「今度は、リリの番です……必ず、かならず救ってみせますから」

第一一九話

テーブルに置かれた資料に手を伸ばし、血眼になっても粗を探している小人族の少女。

ロキファミアに用意された臨時の作戦室となっている客室の一つで一睡もせずに作戦を立てては舌打ちと共に破り捨てているのは、大群となったアポロンファミリアとの戦争遊戯ウォーゲームを控えたヘステイアファミリアの眷属の一人。

窓から差し込む光を忌々し気に見て舌打ち。空腹を訴える腹の音を聞き、荒れた部屋を見回してから、手元のノートに作戦概要を書き記す。鬼気迫る表情で書き記されたそれを見て、更に舌打ちを重ねた小人族、ミア・ノースリスは深い溜息と共に寝不足で充血した瞳を天井に向けた。

「……無理、こんなの無理だわ」

資料に記載された敵戦力。一人一人は大した事は無い。

フィン・デムナやリヴェリア・リヨス・アールヴ、ガレス・ランドロック等、名だたる第一級冒険者が口を揃えて『ベル・クラネルとミア・ノースリスの二人であれば、確実に第二級冒険者を倒せる』という保証すらある。他の第三級冒険者等は敵ですらない、しかし問題は数だ。

『クーシー・ファクトリー』を利用しての設置罠トラップによる防衛線形成。罠一つで無力化できるのはせいぜいが一人か二人。それも直接的な殺傷能力はほぼゼロであり、せいぜいが五十分程の足止め効力しかない。

ならば通常の罠——レッグホルドトラップ 虎 挟み等の狩猟にも使われる罠類を大量に設置して、という作戦も不可能。商売神が流通を絞っている今、その手の道具類を購入する事すらできない。

他には、ミア自身を持ち得る前世の知識より『銃』の作成を考えた。だがその『銃』はオラリオにこそ出回っていないモノの、存在しない訳ではなかった。主に使われているのは半自動セミオートマチックか回転式拳銃リボルバーかのどちらか。ライフル 長銃と拳銃。ハンドガン

オラリオに出回らなかった理由は、無数にある。運用費と収益が見合わない事。それから対怪物用の武装としては威力が低すぎる事。対冒険者用武装としても『駆け出し』ならまだしも『下級冒険者』と呼ばれる実力を手にした冒険者相手だと不足が目立つ。

『銃』が通用するのはせいぜいが上層。中層以降は威力不足により怪物に損傷すら与えられない。だからまだマシだろう、そもそも5階層以降の怪物相手に神の恩恵無しで弾丸を命中させる事は不可能とすら言われている。狙いをつけている間に殺されるのが関の山。

しかも銃声は迷宮内で大きく響き渡り怪物を盛大に呼び寄せてしまう。それに加えて硝煙、火薬の燃えた匂いは独特であり強烈である事から臭いで居場所が露呈して姿を隠す事ができない。

威力に関しては大型化をすれば……と、中層でも通じる威力を求めた結果、小型大砲の様なモノが出来上がり、一発の弾丸でミノタウロスを倒せる様な代物が出来上がったモノの、反動を考えると第二級冒険者でもなければ命中させる事もできない代物になってしまい。当然、レベル2の上位とはいえミノタウロス程度なら第二級冒険者なら素手で殴り殺した方が早いとまで言われてしまう程。

大型弩の時点ですうすう勘づいては居たモノの、冒険者の腕力で引く様な弓でもなければ威力を求める為に大型化するのは当たり前前だった訳である。

詰まる所、神の恩恵という代物によってミアの知る『銃の脅威』というモノはほぼ皆無にまで落ちている訳であり、一部物好きな銃技師が辺境の地域でひっそりと生産しているだけの代物に落ち込んでいた。

「軍用の銃と違って生産性やら運用費やら、後は耐久性とか互換性とか……後は最も効率的に人を殺せるって部分から軍用として採用される代物だし、化け物染みた冒険者相手に使う事想定してないものね……」

例えば、彼女の前世において有名な銃として知られる『M1911』通称『コルト・ガバメント』という大口径拳銃。敵兵を一撃で戦闘不能にできる拳銃として長らく米国に愛用された拳銃だ。それが百丁

あつたとしても第三級冒険者以上の相手からすればただの豆鉄砲、あつても意味が無いと断言できる訳だ。

彼女の持つ知識にある空想の世界、映画やゲームの中には、軍用武装で身を固めた軍人が化け物によって良いように壊滅されるというモノは無数に存在する。対人用武装で怪物は殺せないというのはあながち間違いではないのだろう。

「……いつの間にか、銃で撃たれても痛い[。]で済む体になってたのかあ」
ソファアに深く腰掛け、天井を見上げながらのほんの少しの現実逃避。『銃』の様に簡単に敵を制圧できる力の象徴があればなどという空想を浮かべ、それが冒険者に対して何の脅威にもなり得ないガラクタだと現実を突きつけられ、継るモノがなくなった状態での小さな眩き。何か意味がある訳でもなく、自身が化け物になったと落胆するでもない。ただ、ほんの少しだけ現実から目を背けたくなっただけである。

それでも直ぐに頬を叩いて気を取り直し、彼女は再度テーブルの資料に手を伸ばした。現実逃避する時間はもうなく、今日という日が過ぎ去れば、明日の朝早くにオラリオを出立して『シユリーム古城』から最も近い町へと足を運ばなくてはいけない。つまり猶予は今日一日、残された時間全てを使つても勝ち目のある作戦を立案しなくてはいけない。

敗北すれば先は無く、勝ち目が失われた戦争遊戯^{ウォーゲーム}を前に身を震わせ、彼女が作戦をノートに書き記そうと羽根ペンを手にした所で、インクが切れている事に気付いて溜息を零した。

冒険者の血をインクとして使える『血潮の筆』^{ブラッド・フェザー}は初期に血を使い過ぎてミリアが貧血になった事で使用禁止を言い渡されて通常のインクを使う羽根ペンを渡されていたのだ。大量に書き記された作戦書によつて無数の空となったインク壺が散らばるテーブル。未開封のモノを探そうとするも、どれもこれも空っぽの物ばかり。舌打ちを零してミリアは立ち上がった。

部屋には彼女一人。フィンが付きっ切りで作戦立案を手伝つてくれていたものの、どの作戦にもダメ出しばかりする彼に苛立ちを感じ

てリヴェリア諸共追い出したのだった。ダメ出し、とはいえ彼の言っている事が何も間違っていないのはミリアにもわかっていた。わかっていたからと言って、納得できるかは別だが。

「新しいインクを……」

激しい眩暈に頭痛。立ち上がった瞬間に襲い来る異常。膝を突いて倒れ込み、彼女は自分が一晩中一睡もせず籠っていた事を思い出す。震える手が、緊張によるものなのか、焦燥によるものなのか、それとも体調不良によるものなのか判別できない。

それでも立ち上がろうとした所で部屋に声が響き渡った。

「ミリア君っ」

「……ヘスティア様？」

駆け寄ってきた自らの主神の姿を見たミリアが震え、歯を食い縛る。

ヘスティアはミリアに肩を貸してソファアに座らせ、目の下にできた隈や飛び跳ねた髪等を見て悲し気に眉尻を下げた。

彼女の過去と、現在の状況から彼女がどれほどに追い詰められているのか、気付いていながらもここまで追い詰められるまで足を運べなかったヘスティアは真正面からミリアを見た。

「ごめん、新しい増員は出来なくなつたみたいなんだ」

「……どういう事でしようか」

アポロンファミリアの急な増員に対し、ギルドが待ったをかけた。これ以上増員されてもギルドの方で管理が行えない為、本当に神アポロンが恩恵を授けたのか、それとも部外者の参加をさせているのかが識別できないため、一時的に増員申請の受付停止を宣言した。これにより、アポロンファミリア——コンバージョン——だけでなくヘスティアファミリアについても同様に今後の派閥の改宗による申請を受け付けなくなった。ギルドの処理能力を大きく超える人員増大にギルドが音を上げたらしい。

最終的にアポロンファミリアの増員数は予定より多い三百人程、ウォーゲーム戦争遊戯に参加する人員は420人とオラリオ最大規模のガネーシヤファミリアには程遠いモノの、ロキファミリアやフレイヤファミ

リア等の名立たる派閥を超える人員数にまで跳ね上がった。

これ以上アポロン側の増員が無い、それは吉報である。同時にヘステイア側も増員を禁止されるという凶報でもあった。

肩を震わせたミリアが震える声で尋ねる。

「あの、仲間は……増えましたか？」

アポロン側の人数は420人、対するヘステイア側は変わっていないけれどたったの14人+2匹のみ。20倍を超える人数差。一人、二人増えた程度では焼け石に水ともいえる差にもと顔色の悪かったミリアが更に青褪める。

その様子を見ていたヘステイアが小さく『ごめん』と呟きを零した。「二人も、増えてないんだ。キミが集めてくれた子達も含め、ボク達は14人と2匹で戦い、勝たなくちやいけない」

言葉を失ったミリアが俯き、肩を震わせる。ヘステイアが申し訳なさそうに顔を伏せ、静かに目を瞑った。

ぼたりと、ミリアの膝に雫が零れ落ちる。ひとつ、ふたつ、みつつと増えていく雫。零れ落ちる涙は留まる事を知らず、次々に溢れ出していく。

どれだけ考えても、どんな方法を使っても、勝てない。戦う前から勝負の決まり切った戦争遊戯ウォーゲームを前に、涙を零し、ミリアは小さく呟いた。

「これ、アレですよね……私への罰って奴ですよね……」

「ミリア君……」

「あれだけ、酷い事、悪い事いっぱいしてきましたし」

前世において、彼女は悪事を数多積み上げてきた。人を騙し金を奪う。間接的に命すら奪っていた。加えて、仲間と呼んだ者達すらも皆殺してきた。彼女が手を下した訳ではない、けれど見捨てた事に違いは無い。

彼女が行ってきた数多の悪事。それに対する罰があるとするならば、彼女の言う通りこの現状こそが罰なのだろう。

大切なモノを守る為に、取り戻す為に悪と知りながら成し得た数多の事柄。それへの罰として大切なモノを奪われるというのは、きつと

適切な罰だと、涙を零し彼女は慟哭する。

「……ミリア君、それは違う。キミへの罰なんかじゃない」

「でもっ……」

顔を上げたミリアの瞳から零れ落ちる涙を拭い、ヘステイアはミリアを抱きしめた。

「ミリア君、少し休もう」

「でもっ、今日中に何か作戦を考えないとっ」

「そうでなくてはヘステイアファミリアは——ヘステイア様は、ベルは、皆はどうなるのか。彼女は払い除けるでもなく、ヘステイアの腕の中で慟哭を繰り返す。

「私が、なんとかしないと……」

ヘステイアが肩を震わせ、より強くミリアを抱きしめた。

能力が高い。戦闘技量も、頭の回転も、何もかもが優れている。ヘステイアがこの客室に案内されるまでに聞いたミリアへの評価。小柄故に近接戦が苦手という事を除けば、他の全ては優秀で……そのせいか、全てを自身で抱え込もうとする悪癖がある。とも言われた彼女の性格。

実際、彼女が成した事を考えれば間違いではない。ミリアの行動によつてロキファミリア、デアアンケヒトファミリア、ガネーシヤファミリアの三つから多大な協力を得る事ができた。他にも、至る所で彼女の手腕は輝き、ヘステイアファミリアを支えてきている。それだけの能力や技能を持つ彼女でも、今回の絶望的な戦いを覆すには至らない。

「ミリア君、もういい、もういいんだ」

「……っ！ 良くないっ!!」

ヘステイアの言葉に、ミリアが叫ぶ。抱きしめるヘステイアの両腕を振り払い、彼女は涙を零しながら叫んだ。

「まだっ、まだ一緒に居たいっ。恩を、返せてない……せつかく、一緒に……」

あの頃無くしてしまった、温かな居場所。嘘と欺瞞以外の何も存在しない虚構の空間ではない、本物の温かさに満ちた場所。無くしたく

ないと、失いたくないと、慟哭を響かせる彼女。

ヘステイアは優しく微笑み、ミリアを再度抱きしめた。今度は逃がさない様に、振り解かれぬ様に、しっかりと、力強く。

「ミリア君、君は一人じゃないんだ」

「でも……」

「ヴェルフ君にリルカ君、ミコト君に、他にも沢山の仲間が駆けつけてくれる。あの子達だって全力で勝つ方法を考えてくれる。だから——少しだけ休んだって誰も怒らないさ」

一睡もせず、碌な休憩も取らず、必死に勝つ為の方法を考えているミリア。だが、勝つための方法を考えているのはミリアだけではない、集った者達全員が同じ想いを抱き、同じ方向を向いて勝利を目指している。

だからこそ、無理をし過ぎて倒れては意味が無い。疲れているのなら、辛いのなら、ほんの少し休む事ぐらい皆なら許してくれる。そういって神は子を諭す。

「でも、もし誰も何も思い付かなかつたら」

自分が休んだせいで、勝つための作戦が浮かばなかつたら。きつと後悔するから、休むことはできない。そういって腕を振り解こうとするミリアを、神は決して離さない。

「ミリア君、キミは——皆を信用できないかい？」

「……してますよ」

「嘘だ。キミは、心のどこかで皆を信用してないね」

神の言葉にミリアが目を見開き、齒を噛み締めた。

彼女にとつて、その言葉は凶星だった。

前世においてもそうだった。仲間、そう仲間と呼んで信頼しあつた彼、彼女達の事を、ミリアは一切信用していなかった。何せ——嘘と虚構に塗れた世界だったから。

つい数時間前に『あの女を殺してやるっ』と声を揃えて叫び合った者達が、皆笑顔であの女に媚びを売り、擦り寄っていくのだ。喜んで協力を約束する姿と、殺すべき対象に傳いて媚びへつらう姿、どちらが本物なのかわからなくなる。わからないからこそ、信用なんて微塵

もできやしない。

其処にあるのは、薄っぺらい仲間という言葉。まるで紙切れの様にペラペラで、信用なんて置けやしない歪な関係。だからこそ、心のどこかでは疑いを持っている。

神の言葉で強引に表に引つ張り出されたその心の裏側。信用しているのに疑っている。歪で醜いその心。

「私は……」

「ミリア君、皆を信用してらって心の底から言うなら……休もう。今日一日、ゆつくりと休むんだ」

疑う事を止められないなら、行動で示そう。そう言ってヘステイアはミリアの頭を撫でた。

「キミは十分に頑張ったよ。これ以上は、頑張り過ぎだ……だから、今日はもう休もう。戦争遊戯ウォーゲームの事は一旦忘れてさ」

優しく、甘く、これ以上思い悩んで傷付かなくても良いとミリアを包み込む。

身を震わせ、彼女は小さく呟く。

「でも、勝つ方法が一つもないんですよ」

「そうだね、でも皆が考えてくれる」

「負けたらヘステイアファミリアが無くなっちゃうんですよ」

「だから皆でなんとかするのさ」

「私が……私が休んだせいで負けたら……」

「キミだけの責任じゃない。皆が何も思い付かなかったら、皆の責任さ。無論、ボクの責任でもある」

「……………」

「だからさ、一人で背負い込むのはやめるんだ」

重責に押し潰されかけている眷属を救うため、ヘステイアは今朝早くにロキファミリアを訪ねた。神ロキから『このままだとミリアが精神的に潰れる』と緊急の連絡を受けて、だ。

「ミリア君、だから休もう」

「……わかりました。少しだけ、少しだけです」

少し休んだら、また勝つための方法を考える。ミリアが休んでいる

その間に、集った仲間が何らかの打開策を打ち出す。だから少しだけ、そう言い訳を繰り返した彼女の体から力が抜ける。

ヘステイアに抱かれ、ほんの少しの眠りについたミリアを、神は優しく、強く抱きしめた。

「ごめん、遅くなって」

後少し遅ければ、きつと潰れていた。一度重荷を全て取り払って、忘れさせてあげなければ彼女は潰れていただろう。

ヘステイアファミリアが臨時拠点として利用していた酒場兼宿の一室。集まっているのは眷属の様子を見に行った主神ヘステイアとロキファミリアで鍛錬を受けている团长ベル、ロキファミリアで鍛錬を受けつつ作戦立案を行う副团长ミリア、それから到着の遅れたヴェルフを除くヘステイアファミリアのメンバー全員と、助っ人のリユー・リオンの計10名。

テーブルに置かれた資料を各々が眺めながら額を突き合わせて戦争遊戯ウォーゲームに向けた作戦会議を行っている彼らの元に遅れて鍛冶師の青年が入ってきた。

背負っていた魔剣を束ねたモノを置いた彼はさっそく尋ねる。

「それで、何か案は浮かんだのか？」

目の下に隈が出来たヴェルフ。魔剣を打つことを優先して睡眠時間すら削って生み出された魔剣の数は12本。一つ一つの威力は折り紙付きのそれらを運んできて疲れているであろう彼もテーブルに置かれた資料を見て、青ざめた表情を浮かべる皆の顔を見回した。

「その様子じゃあ、無理か」

「そうですね。申し訳ありませんが……私と彼、彼女の三人での防衛、残りを攻撃にという作戦が、マシといえばマシなのですが」

難しい表情を浮かべたリユーが示したのはロキファミリアから増員として送られてきた第二級冒険者二名とリユーによる旗印の防衛。残りを攻撃隊にという案。

「攻撃と防衛で半々と考えても攻撃隊210人、旗を守りきれますか？」

唇を噛み締め過ぎて血が零れ落ちているリリが防衛を担当すると
言った三人を見て呟けば、赤眼のアマゾネスがリユーとドワーフの二
人を流し見てから小さく呟く。

「ごめん、無理だと思う」

「すまん、いくら俺らがレベル3とはいえ、殲滅ならまだしも防衛は
……」

「……………」

ただの殲滅戦なら胸を張って『出来る』と断言できるであろう数だ。
だが、旗を守るという守衛戦となれば話は別。いくら強かろうと旗を
傷つけない為に近くで戦う訳にはいかず、かといって旗を疎かにすれ
ば隙を突かれて旗を壊されてしまう。守衛戦の痛い所は、とにかく動
けない所。防衛対象である旗は一定範囲から動かす事ができない上
に、最初から場所が指定されており隠す事も許されない。

レベル3二人、レベル4一人を以てしても、旗を守り切るのは難し
い。リユーもそれがわかっていいるからか口を閉ざす。

「防衛に全人員を回す。クロツゾの魔剣……ヴェルフ殿の魔剣なら攻
撃隊を壊滅させる事もできるでしょう……が」

「出来るだろうな」

代わりに城攻めの際に使う魔剣が不足する。そうなれば城を落と
すなんて夢のまた夢となる。

ガネーシャファミリアから来た増員の一人、獣人の男性が放った言
葉をヴェルフが否定し、話しは振り出しに戻った。

彼らが会議を初めてから何度も繰り返される話は、全てミアアが考
え付き、それを決行した末路が『敗北』になっているモノばかり。つ
い先ほど彼らの元に届いたミアアの作戦が書き記されたメモ代わり
のノートにほぼ考え付く全ての作戦が書き記されている。

ミアアのノートを見ていたエルフの少女がテーブルにそれを戻し
て呟いた。

「無理、ですね。団長でも考え付かなかったみたいですし」

「……………だからって諦められるか？」

腕組をした獣人の少女の言葉に彼女は首を横に振った。

「諦めるぐらいなら死にますよ」

重苦しい沈黙に包まれた部屋の中、ヴェルフがミアのノートを拾い上げ、頁を捲って呻き声を漏らした。

「おい、これアイツ一人で全部考えたのかよ……」

戦争遊戯ウォーゲームの会場となる『シユリーム古城』の内部情報と周辺地形。それからアポロン陣営の元から所属していた正規団員と、増員された一時団員の情報。そしてミアが知りうるヘステイア陣営の者達のステータスを元に考え付かれた数多の作戦の数々。一つ二つではなく、両手の指の数では足りない作戦。

全てが事細かに作戦実行から勝敗が付くまでの道筋が書き込まれている。行きつく先はどれも『敗北』ばかり。中には犠牲を前提とした作戦まで無数に存在し、魔剣を攻撃隊壊滅によって使い切った際にミア本人が全力で魔力暴発イグニスファトウスして城門を吹き飛ばして城攻めを行うといった荒唐無稽な代物まで、考え付くモノはほぼ網羅されていそうな代物。

ミアが精神的に潰れる寸前だと言われて納得がいくほどに、どれもこれもが数の暴力によってすり潰される末路ばかり。

ヴェルフが苦々しげな表情を浮かべ、誰しもが口を閉ざす。彼のプレイヤー【勇者】でもこの状況を覆すには第一級冒険者を増員として送り込むぐらいしか打つ手がないと言い切る程の状況。

ロキファミアから第一級冒険者を送り込むという事は彼らの立場的に難しく、ガネーシャファミアも同様で立場上、第一級冒険者を送る事など出来るはずもない。ディアンケヒトファミアはそもそも医療系派閥であり構成員で最高レベルが2である。

立場を度外視すれば、ロキファミアから第一級冒険者を増員として迎え入れる事は出来たかもしれないが、それすらも今朝の時点で封じられた。今日以降の増員した団員は戦争遊戯ウォーゲームに参加を許可しないとギルドが言い切った為だ。

一切の希望の光の途絶えた闇に取り残された様な状況にヴェルフが眉を顰め、拳を握り締めてノートをテーブルの上に戻し、顔を上げた。

「悪い、ちよつと忘れ物をした」

「ヴェルフ様？」

「今日中に戻る」

ヴェルフは短くそれだけを告げると、背を向けて扉を蹴破る勢いで開けて部屋を後にした。その背を見ていたリリが溜息を零し、もう一度資料に手を伸ばした。

「もう一度、何か作戦があれば皆さん上げてください。本当になんでも良いのです、ミリア様が思いつかなかった、何かを……」

ある訳が無い。そう考えつつもリリは必死に資料を見据える。

残った面々も腕を組み、額に手を当て、思い思いの姿勢で考え込み始めた。そんなさ中、今まで一言も言葉を発す事の無かったミコトが背筋を伸ばし、手を挙げた。

「自分に、一っだけ案があるのですが」

「どんな案ですか？ この際、どんな荒唐無稽な代物でも良いですから」

期待の眼差しとは違う、継る様な皆の視線を受けたミコトが身を震わせ、口を開く。

「旗の防衛を一人に任せ、残る全員を城攻めに回す、というのはどうでしょうか？」

明朗な声が部屋に響き渡る。彼女の発案に誰しもが思考停止し、少し考えてからミコト以外の全員がそろって溜息。

「ああ、うん、そうだね。出来たらそれが良いよね」

「ミコト様、少し休んでください」

生暖かい視線がミコトに注がれ、リリが優しく諭す様に部屋に備え付けられたベッドを指示した。

ミコトが目を見開き慌てたように立ち上がり、口を開く。

「待ってください、ふざけている訳ではないのです。自分なら、旗を守り切れます」

「は？ 待って、リユーさん一人で守るならまだしも、貴女が守るの？」

「はいっ」

守衛を最も強いリユーが担当する。その作戦は最初の方に上げられ、リユー本人が『不可能だ』と断言した事で否定された作戦だ。最も強い彼女ですら守り切れない旗を、たかだかレベル2に上がりたてのミコトが守り切れるのか。そんな胡乱げな視線を受けたミコトは胸に手を当て、宣言した。

「自分なら、守り切れます」

「……ミコト様、どうやって守り切るおつもりなのですか？」

リルルカの質問に対し、ミコトは明朗な声で答えを返す。

その返答を聞いた者達全員が目を見開き驚く中、ミコトは胸に手を当て、宣言した。

「もし、この方法で守り切れなかったその時は——切腹も辞さない覚悟です」

ヴェルフは街を駆け抜け、脱退して既に関係者ではなくなった元自分の鍛冶場に顔を出していた。

片付けの済んでいないその鍛冶場。煙突から煙が昇っている事にヴェルフは舌打ちを零し、まるでわかっていたかのように待ち構えていた最高鍛冶師マスターミスの顔を見て表情を歪めた。

「ようヴェル吉、これを使う魔剣を打つ気になったか？」

魔剣を暴走させる危険なそれ。火の入れられた炉の前に並べられた魔剣の材料を背に、椿・コルブランドが差し出す結晶。

まるで最初からこうなる事を予測していたかのような彼女の行動、それに気付きつつもヴェルフは彼女の手から結晶を受け取り、彼女が退いた其処に並べられた魔剣の素材を確認していく。

その動作を楽しし気に見つめていた椿がニヤリと笑い、ヴェルフの肩を叩く。

「ヴェル吉、この事はヘアフィストス様には黙っててやる」

「……ありがとよ」

構成員ではなくなったヴェルフが、元が自身の鍛冶場とはいえヘアフィストスファミリアの管轄の鍛冶場を使う事を黙認すると断言

した椿。彼女は期待を込めた眼差しでヴェルフの背を見据え、微笑みを浮かべて鍛冶場の片隅に腰掛けた。

ヴェルフが表情を歪めて椿を見る。

「もし失敗したらこの鍛冶場吹き飛ばすぞ。俺は間違いなく死ぬし、もしかしたらお前も」

「なあに、覚悟の上だ。クロツゾの魔剣にその結晶を合わせたらどうなるのか手前も気になるからな」

快活に笑った彼女を背に、ヴェルフは鉄材を炉に入れ、熱していく。

そんな彼の背に、椿はいたずらっぽく囁く。

「良い魔剣が出来たら、手前が褒美をくれてやろう」

「……なんだよその褒美って」

「まあ、期待している」

意味深な椿の言動にヴェルフは眉を顰めるも、直ぐに鍛冶に集中し、そんな椿の言葉は溶けて消える。

集中し、周囲の音が途絶え、熱せられる炉から放たれる微弱な炎の音と、鉄を打つ音だけが響く工房。ヴェルフは心の中で今から生み出す作品に謝罪を繰り返した。

たった一撃の為だけに生み出され、拳句の果てには持ち手すら巻き込んで破滅する事を運命付けられた魔剣。そんな哀れな魔剣を生み出さんとする自身に対し、もう二度と同じことはしないと誓い。たった一振りだけの、たった一撃で碎ける、儚く凶悪な魔剣の為に、彼は熱せられた鍛冶場で槌を振るった。

第一二〇話

激しく打ち鳴らされる金属の悲鳴。

打ち合わされる度に飛び散る火花、目にも止まらぬ銀閃を前にそれを真っ向から叩き落す鈍色の斬撃。

真後ろに迫る影が少年の頭部目掛けての刈り取る様な鋭い蹴りを放ち、それは空を切る。数本の白髪が飛び、身を捻って大剣の一撃を回避すると、今度は銀の一閃が回避した先を抉り切り取る様に振るわれる。

罅割れたナイフでその一閃を受け止め、続く蹴りに対応が遅れた少年の横っ腹をすくい上げる様に攻撃が炸裂し、少年の体が宙を舞う。錐揉み状に回転して鍛錬場の踏み固められた土の上に投げ出され、少年は痛む体に鞭打って即座に立ち上がった。

荒い息を吐きながらもなんとかナイフを構え——次の瞬間には顔面を穿つ正面蹴りが炸裂し、少年、ベル・クラネルは鼻血を噴きながら倒れ伏す。

不機嫌そうに鼻を鳴らしたベートが半眼でベルを睨みつけて口を開く。

「遅えぞ、兎野郎。何度言えばわかる、いちいちテメエが構えるまで待ってくれるとでも思ってたのか？ あア？」

「……ベートさん、やり過ぎだと思えます」

「今のは酷くない？ 結構良い反応だったと思うけど」

小休止と言う様に剣をおろすアイズ。肩に大剣を担ぐティオナ、頑なにポケットから手を出さずに蹴りだけで攻め立てるベート。第一級冒険者三人を相手にした過酷な鍛錬。

ベートの過激な追撃に苦言を漏らすアイズと、ベルの反応速度を褒めるティオナ。二人をちらりと見たベートは鼻を鳴らすとベルを見下し、呟く。

「テメエはそれで満足か？」

「……………いえ、僕は……………まだ」

鼻血を拭き取りながら震える膝を叩いて顔を上げたベル。過激な

追撃に晒され、その鎧はへしやげ、凹み、原型を留めていない。手にしていた鈍色のナイフも、罅割れて碎ける寸前。それでもベルは立ち上がり、構えをとって三人を見据えた。

何度も、何度も、何度も、ほんの少しだけ遅れた瞬間に捻じ込まれる蹴り。幾度となく打ち込まれたその蹴りをとつさの反応で回避を試み、回避しきれずに直撃の威力を下げる程度しかできなかったといえ、それでも立ち上がる事ができる。それを見たアイズが小さく頷いて構えをとり、ベートが無言で姿勢を落とす。ティオナが大剣を振るって重々しい風切り音を響かせ——今まさに鍛錬の再開を行うおうという場にフィンの声が響き渡った。

「ベル・クラネル、アイズ、ベート、ティオナ、四人とも少し待つてくれ」

肩に槍を担いだ小人族が微笑みを浮かべながら碎けた短剣の残骸と鎧の欠片、そして少くない量の血が飛び散った鍛錬場に足を踏み入れる。

急に現れたフィンの姿にベートが不愉快そうに眉を顰めるのを他所に、アイズとティオナは完全に武器を下してフィンを出迎えた。ベルは突然やってきたフィンの姿に驚きながらも休息を求めて荒い息をつく体をなだめようと深呼吸をしていた。

「すまないね、少しベル・クラネルと話をしたくてね」

片目を閉じて気さくそうに話しかけてくる姿を見ながら、ベルは姿勢を正して彼を真っ直ぐ見つめ——次の瞬間、喉元に突き付けられた槍を見て目を見開いた。

切っ先は微動だにせずに少年の喉元で静止しており、何が起きたのか理解するのが遅れた少年の理解が及び喉を鳴らす。それを見てフィンは気さくそうな雰囲気は一切崩さずにベルに頼み事を口にした。

「ベル・クラネル。キミに頼みがあるんだ」

「……頼みって」

「ミリア・ノースリスを説得して欲しい」

「説得……？」

「ああ、彼女はキミの言葉なら聞いてくれるだろう。だからキミに頼むんだ——彼女にロキファミアリアに改宗する様に説得してほしい」

「……え？」

槍を喉元に突き付けられた状態での彼の頼みに少年は目を白黒させて驚き、気さくそうな微笑みを浮かべたフィンを見て震える声で尋ねる。

「それは、その、どういう意味ですか」

「わかっているだろう？ ヘステイアファミアリアは勝てない」

その微笑みからは想像もつかない様な確信を突く言葉。

少年の目の前に立ち塞がる壁。戦争遊戯に際しての評価。無造作に放たれ、少年の心を抉る言葉にアイズ達が眉を顰める中、フィンは言葉を続ける。

「このままではダメなんだ。キミ達は勝てない。負けてしまえば、彼女は自害するだろう。それは、避けなければいけない。けれど、キミ達の戦力ではどう考えても勝てないんだ」

フィンが持つ槍の穂先はベルの喉元に突き付けられたまま微動だにせず、少年の体が震えた事で皮膚を裂き血雫が膨らみ始める。

「僕が考え付いた方法は二つ。一つ目は同盟を組んでロキファミアリアから第一級冒険者をヘステイアファミアリアに改宗する事。なんなら僕が君たちの戦力として加わっても良かった」

第一級冒険者【勇者】フィン・デイルムナがヘステイアファミアリアに改宗し、その手腕を振るっても良かった。そう言った彼は槍を引いて少年の目を真っ直ぐ見据えた。

「でも、それはもうできない」

今朝の時点で、派閥の改宗による戦力増強が禁止された。

都市外の冒険者であれば増援として加わる事が出来たが、ロキファミアリアはどう言い繕った所で都市内の派閥。それも二大派閥の片割れである。出来るはずもない。

「もう一つは……ミアリア・ノースリスとベル・クラネルの改宗」

女神ヘステイアを見捨てる事にはなるだろう。それでも最も被害

が少なく済むのはそれだ。

ヘステイアファミリア壊滅。ベル・クラネル一人がアポロンファミリアに奪われ、ヘステイアは天界へ送還、ミリアは自害。そうなるぐらいなら眷属二名を改^{コンバージョン}宗で他派閥に逃がせばいい。

無論、ロキファミリアは周囲の派閥から責められるだろうが、そのあたりはミリアの能力を示せば解決する。

「ミリア・ノースリスの価値はわかっていいるだろうか？」

ロキファミリアの団長が戦力として加わっても良い。そう思える程に彼女には価値がある。

竜種を従える能力。その竜種より得られる『再生薬』を含めた数多の資源。彼女自身が持つ魔法の才能。それだけにとどまらず、派閥の為に命すら賭けられる程の情愛。瞬く間に状況を理解して打開策を打ち出す頭脳。

ヘステイアファミリアという小さな枠組みでは収まらない程に多彩な彼女が、ロキファミリアという多方面に秀でた派閥に入れば、きつと彼女はもつと高く羽搏ける。

今のミリア・ノースリスにとつてヘステイアファミリアは枷にしかなっていない。弱小故に危険にさらされ、弱小故にその本質を隠さねばならない。ならば、彼女をロキファミリアに入団させるのが最も良いのではないか。

「そうは思わないかい？ ベル・クラネル」

気さくそうな微笑みは消え去り、冷酷な視線を向ける小人族。彼の目を見て拳を握り震えた少年は口惜し気に歯を食い縛る。

「無論、キミも非凡の才を持っている。それも踏まえての提案さ」

キミの言葉なら、きつと彼女は頷いてくれるだろう。このままいけば破滅しか待っていない、だからこそ、彼女を説得して破滅から救い上げてくれないか。そういつてフィン・ディムナはベル・クラネルを真っ直ぐ見据えた。

少年が握りしめる拳から血が滴るのを見たアイズが口を開こうとし、フィンがそれを制した。

「アイズ、少し黙っていてくれ。これはヘステイアファミリア団長で

ある彼と、ロキファミア団長である僕の会話だ」

派閥の長同士の会話であり、幹部如きが口出しするな。そう言い切ったフィンは再度、ベルの鼻先に槍を突き付ける。

「答えを聞こう」

彼女を説得し、ロキファミアに改宗する様に言ってくれるか。それとも拒むのか。

少年は、震える手でナイフを振るって槍を退けた。

軽い金属音を響かせて弾かれた槍。フィンは小さく笑い、少年を見据えて槍を構えた。

空気が一瞬で凍り付き、槍を払い除けた少年は一瞬で身を強張らせる。第一級冒険者の威圧の前に、目を見開き、足を震わせ、歯をガチガチと打ち合わせてしまう。

勝てないという本能的恐怖を味わい膝が折れそうになった瞬間、ベートが鼻を鳴らしてベルを見下した。

「この程度で折れるなら、ダメだな」

唐突に身を翻し、彼は肩越しにベルを睨んで呟く。

「さっさと領け。そうすりゃあ——守ってやる」

彼の告げた一言が、少年の心に火を着けた。

守りたい訳じゃない。守りたい。震える足を、打ち合わされる歯を食い縛って抑え込み、少年はナイフを構えた。いつ倒れてもおかしくない程の疲弊具合、壊れかけの武器、勝ち目のない強さの第一級冒険者の威圧の前に、少年は武器を構えて腰を落とした。

自らを鼓舞する為の雄叫びを上げ、少年が愚直な突撃を行う。真つ直ぐ、何の飾り気も無い、単調な突撃にフィンは目を細めて迎撃を行う。

目にも止まらぬ速さで放たれる槍。何度も、何度も繰り返された第一級冒険者三人との鍛錬の中で少年が掴み取ったほんの些細な勘が働き、ギリギリで反応した鈍色の一閃がそれを叩き落とす。

叩き落した次の瞬間、更に加速し槍の間合いからナイフの間合いへと身を捻じ込む。過去最速で放たれた少年の一閃、対するフィンは――

その一閃を無造作に掴み取った。

「……ッ!？」

ベルの腕を襲うのはまるで岩を殴りつけたかのような反動、対するフィンは微動だにしない。ナイフを握り込んだ小さな手には、見た目にそぐわない力が込められていて、ベルの力程度では抵抗すらできない。

目を見開いたまま驚愕するベルに対し、フィンが槍を振るい——
——ベルの側頭部に向かって放たれた蹴りを受け止めた。

「ベート、やり過ぎだ」

「チツ、おい兎野郎……テメエは何度言えばわかるんだ、動きが単調過ぎんだよ」

フィンに睨まれながらもベルを睨むベート。彼の言葉にはつとなく慌てて身を引けば、フィンはナイフを手放してベルを開放した。威圧はとうに消え去り、小さく肩を揺らすフィンがベルを見上げて笑った。

「いや、すまない、少し試させてもらったただけだ。ベル・クラネル」
試されただけ、そう聞かされてベルは目を見開き、すくと腰を落とした。

限界まで酷使された体に残った全てを駆使しての突撃。簡単に受け止められてしまった事に対する衝撃が押さえきれず、ベルは小さく表情を歪めてベートの言葉を反芻する。動きが単調過ぎると言う言葉。

腰を落としながらも口惜し気に歯を噛み締めるベルの前に、フィンは槍の石突をドンツと地に打ち付けてベルの視線を上げさせる。小人族ながら団長として派閥を率いる彼は口元に笑みを浮かべて少年を見下ろしていた。

「ベル・クラネル。この僕が保証しよう——キミは負けないだろう」

第一級冒険者の激励の言葉に少年は目を見開く。

夜明け前のオラリオの街、ひんやりとした空気が満ちている。

幾本もの短剣ナイフの残骸が散らばる鍛錬場、昼間の騒がしさが嘘の様にひっそりと静まり返っていた。高い市壁に囲まれた街並みは巨大な影に覆われていて薄暗い。

都市が朝の静寂を纏っている中、深紅の翼を広げた飛竜はか細く咆哮を響かせていた。

「キューイ……」

「もう少し緩めに、そんな感じで」

ロキファミアリアの本拠内にある庭園の一角。茶会が開けそうな広間となつている庭園の中心で、飛竜は居心地悪そうに何度も身動きを繰り返していた。

体長3M程の体躯の飛竜の背には鞍が取り付けられており、至る所に荷物を入れる鞆が吊り下げられている。飛竜の翼の動きを阻害せず、それでいて大量の荷物を輸送できるように考えつくされた鞍に不満そうな鳴き声を零すキューイの足元、紐の長さを調整していたミアアは小さく溜息を零してロキファミアリアの本拠を振り返った。

「はあ……へステイア様と会うのはこれで最後になるかもだなんて……」

嘘みたいだ。そんな呟きを零す彼女。へステイアに諭されて眠りについてから今朝に至るまで、泥の様に眠りについていて彼女は、目覚めと共に飛び起きて出立の準備をし始めていた。

ステイタスの更新も終え、ベルが準備をしているのを待っている間、ガネーシャファミアリアから提供されたキューイ用の鞍の取り付けを行う。

本来ならば、商隊キャラバンを利用して戦場近くの町であるアグリスへと送ってもらうはずだったのだが、要求を拒否されてしまったのだ。商売神が手をまわした結果だろう事は明白である。それが理由で出発は遅れ、緊急で飛竜による移動を行う事になった。

到着にかかる時間は半分以下だろう。本来の移動時間は丸一日かかるところを、空を行くことになっている。

既にギルドには飛竜を使った飛行で目的地に向かう事と、門を介さずに街を出る為の手続きも終わらせている。ガネーシャファミアリア

が率先して『飛竜モンスターを使った輸送便の試験運用』がどうのと理由付けして強引に押し通した形だった。

再度深々と溜息を零したミアアが立ち上がり、大きく伸びをしてからキューイを見上げて呟きを零す。

「勝てますかね」

リルル力達が考え付いたという作戦。彼女らが立てた作戦について、ミアアは何も知らない。現地、アグリスで合流した際に詳細を伝えると言われただけである。

連絡役として伝えにきた【貴猫アルシヤ】曰く『なんか勝ち目のある策が思いついたらしいけど詳細については漏れると不味いからって聞いてない』と、序に仲間たちは昨日の内にオラリオを出立して現地で何らかの工作を行うとも伝えられた。それを聞いてなお彼女の不安は晴れる事はない。

ほぼ一日、泥の様に眠って体調は万全になった彼女は何度も深い溜息を零しては後悔を繰り返す。

「やつぱり、ゆっくり寝てるんじゃないかな……」

「キューイキューイ……」

煩いなあ、と深紅の飛竜は主の苦悩など知った事かと軽く角で小突いて黙らせる。

「キューイキューイ、キューイ」

「嘆くのは終わった後でいくらでもできるって……その通りですけど」

余りにも無遠慮な飛竜の言葉にミアアが溜息を零したところで、彼女に駆け寄る二つの影があった。

ベルとヘスティアが駆けてくる。それに視線を向け、ミアアはなんとか微笑みを浮かべる。

「ミアア君、準備は出来てるかい？」

「ごめん、遅くなって」

「はい、出来ています。キューイの速度なら二、三時間で到着するので余裕があります」

地を駆ける者より、空を駆る者の方が速い。故にもう少し時間をお

いてから出立しても問題は無い。しかし、最近発生した小火騒ぎの關係もあり、飛竜が街の上空を飛ぶ事を街の住民は良い顔をしないでろうと告げられ、早朝に出立する事で人目を避ける為に早く出なければいけないようになってしまった。

少しでも長く共に有りたいと思っていた彼女は不満そうदैいて、不安そうな表情を浮かべている。

それを目にした女神は微笑みを浮かべ、彼女を抱きしめた。

「ミリア君、大丈夫。昨日、リリルカ君たちが勝てる策を思い付いてくれたんだ。だから、ボクは安心してキミたちを送り出せる」

「……でも」

「キミはリリルカ君達を疑うのかい？」

「……………」

疑っている訳ではないのだろう。ただ、不安がぬぐい切れないだけであつて、決して信じていない訳ではない。そう口にしようにしたミリアは身を震わせ、口を閉ざす。

不安が完全に無くなつていない時点で、信じていないと口にしていく様なモノだつた。

「ミリア、僕を信じてなんて言えない。けど、僕は勝つよ」

少年の力強い言葉にミリアが静かに頷く。ヘステイアの抱擁から抜け出したミリアが飛竜キューイの鞍に飛び乗り、ベルに手を差し出した。

「ごめん、私は……まだ不安に感じてる。どうしても、勝てる未来が見えないから」

「わかつてる。僕も同じで、全然勝てる気がしないんだ」

ベルがミリアの手を掴み、鞍の上に引つ張り上げられる。ベルが後ろに乗り、ミリアが前に乗る。落ちない様に鞍から伸びる紐をベルトに固定しながら交わされる会話。

二人の会話を聞いていたヘステイアが笑みを零し、飛竜の背に乗る二人を見上げた。

「二人とも心配性だなあ、なんてボクが言えた義理ではないね。ボクだつて不安さ」

見下ろす眷属達と、見上げる女神。

本来ならロキファミアの者達も見送りに来る予定であったが、ロキが気を利かせたのかこの場にはヘステイアファミリアの眷属しかない。

今生の別れになるかもしれないこの場において、なんと言葉をかければ良いのか。その場の皆が考え、真つ先に口を開いたのは女神であった。

「……ボクは誰よりも君達を信じてる。凱旋して帰ってくるのを待ってるよ」

ミアが表情を苦し気に歪めてヘステイアから目を逸らし。ベルは静かに頷く。

「……行つてきます」

言葉少なに答えたベル。残る一人の小さな少女は何を口にすべきか迷い、迷つて、白み始めた空を見上げてから、女神の方に視線を向ける。

「私は、誰よりも私自身を信用できません」

嘘を吐いてきたから。大事な人と交わした約束すら守れなかったから。彼女の言葉に含まれる重い意味に、ヘステイアは笑いかけた。

「言つただろ、ボクは誰よりも君達を信じてる」

今生の別れに飾る言葉には相応しくないだろう。何か付け加えなければとミアが口を開こうとし、口にしても良いのかと悩む。手綱を握る手が震え、息が詰まり、言葉にならない呟きを零そうとして――

――ベルが彼女の手を握った。

「ミア、一人じゃないから」

前世での約束は、彼女がたった一人で交わした約束だった。今は違う、そう言つてベルが笑う。

彼女は苦し気にその言葉を呟いた。今度は目を逸らさず、あの時と同じ様に、約束を口にする。

「必ず勝ちます。勝つて、帰ります。帰ってきます……」

負けたら死のう。けれど勝つて帰つて来よう。そう誓いを立て、ミアは手綱を引いてキューイに合図を出す。

深紅の翼が風を掴み、身体に固定された荷物をものともせず飛び

立つ。一瞬の加速を置いて、女神を残して飛竜は空を駆る。

「大丈夫、勝てるさ。やれる事は全部やったんだから……」

——だから自分を信じてくれ。

女神の眩きを置き去りにし、空を旋回していた飛竜は南東方向に向かつて飛び去っていった。

街の上空から都市を見下ろし、ベルは小さく感嘆の吐息を零していた。

ひんやりとした冷気に包まれた早朝のオラリオの街並み。高高度から見下ろすという、通常であれば塔にでも登らなければ見下ろす事の出来ない、空から見た光景を見たベルは、腕の中で手綱を握るミアに声をかけた。

「ねえミア、今度は神様も一緒に飛べたら良いね」

「……そうですね」

何処か沈んだ声を響かせるミアの姿に、ベルは小さく拳を握り、彼女の『約束』を嘘にしない為にも必ず勝とうと胸に誓うさ中、キューイが速度を緩めてキョロキョロと辺りを見回し始めた。

「キューイ？ どうしたの？」

「キューイキューイ？」

「え？ 呼んでる？ 誰が……シルさん？」

ミアが会話を交わし、豊穡の女主人の店員の一人であるシルが二人を呼んでいるらしい事を知り、ベルとミアが顔を見合わせ、小さく頷きあう。

「キューイ、シルさんの所に降りれそう？」

「キューイ」

面倒くさそうな雰囲気丸出しにしたキューイがだるそうに鳴き、ゆるりとした動作で東の大通りの上空を低空飛行しはじめる。街中という事もあって極力羽搏く音を控えめにしてくれというミアの無理難題に律義に答えて静かに滑空する形で大通りに降り立つ。

ガリガリイツと大通りに爪痕を残しながら降り立った所で、声が響

いた。

「——ベルさん！ ミリアさん！」

急いできたのか息を切らせながらシルが駆け寄ってくる。

何故彼女がベルとミリアの出立予定を知っていたのか、空を飛んでいるのを偶然見つけたのか。ミリアが怪訝そうな表情を浮かべる中、駆け寄ってきたシルは飛竜に怯える事なく近づいて二人に手を差し出した。

「これを受け取ってください」

「これは……」

差し出された金属の輝きを咄嗟にベルは受け取る。ミリアも困惑しつつも受け取り、それを眺める。

ベルに渡された物は首飾りであった。涙型の金属に美しい緑色の宝石が埋め込まれている。何らかの力を宿す冒険者用装具の類かとベルが首を傾げる。

ミリアが渡された物は腕輪だった。艶のある黒っぽい銀色の石の連なる装身具。ミリアが小さく吐息を零し、シルを見下ろした。

「これは？」

「私達の酒場を懇意にして頂いている冒険者様から譲ってもらって……お守りです」

お守り。その言葉にミリアが小さく嘆息し、右手にその腕輪を着した。

「……貴女が私達に害ある行為をするとは思いませんが。小人族用の腕輪を持った客が偶然いたと考えるのは……いえ、すいません。少し、気になっただけです」

余りにも都合がよすぎるのではないかとミリアが怪訝そうな表情を浮かべる中、シルはニコリと微笑んだ。

「私、こう見えて顔が広いんですよ」

「……そうですか。ありがとうございます。効果を聞いても？」

何らかの冒険者用装具だと判断したミリアの言葉に、シルは視線を泳がせ、舌を出しておどけた表情を浮かべた。

「やあ……」

「もしかして、知らないんですか？」

「ええっと、その……急いでいたので……」

おろおろとしている彼女を見下ろし、ミリアは小さく嘆息。手綱を握り直して呟く。

「ありがとうございます」

「頑張ってください。また、私達のお店に来てくださいね」

頭を下げて距離をとったシルを見てから、ミリアが手綱を引く。羽搏く音を響かせない様になっているせいか音はあまりなく、渦巻く風を残して飛竜は空へと飛び立つ。

「お、お弁当作って待ってますー！」

恥ずかしそうに頬を紅潮させる酒場の少女に、ベルは破顔した。

ぐるりと一周、彼女がいる広間を中心に旋回し、再度南東方面に向かつて飛び去っていく。

遠ざかっていく彼女に二人が手を振る。見送る様に胸に手を当てた彼女は、市壁に遮られて見えなくなるまで、その姿を見送っていた。

「……どういふ効果なんだろうね」

「冒険者用装具関連はほぼ調べてないわ……火精霊サラマンダーウールの護布の劣化版みたいな火避け効果みたいなのがあるとは聞いたけど、多分種類が違うし」

ベルが首飾りアミュレットを首から下げ、服の胸元に居れる。

羽搏く音が響く中、東から朝日が顔を出し始める。

山の稜線リょうせんから始まる日の出。

朝空を照らす太陽の光に、ベルとミリアは瞳を細めた。

「ベル、勝てますかね」

「勝てる……いや——勝とう。勝って、帰って来よう」

第一二一話

シユリーム古城跡地。

森や丘といった戦略上有効な天然防壁となるようなものが何一つない平原の真ん中に堂々と建つ砦は、『古代』に築き上げられた防衛拠点の一つだ。『蓋』に該当する巨塔パベルと巨大市壁が完成する以前の頃に迷宮より溢れ出てくる怪物を食い止めるため、または怪物の狙いを逸らす事で街や村を守る為にこういつた砦は迷宮都市近郊オラリオに数多く造られた。現代においてはその殆どが廃墟と化しているが、このシユリーム古城跡地に限っては、隆盛を極めていた頃のラキア王国が世紀以上前まで要衝として長く使用していた事もあり、寂れてはいるが城壁等の要所は未だに機能を残している。

戦争遊戯ウォーゲームの戦場としてこの場が選ばれた。

城壁には崩れた塔がいくつもあるが、その石造りの堅牢な城壁は十二分に城壁としての機能を残している。高さは10Mを超え、幅も十二分に兼ね備えられた外壁は突破するのは——少なくとも長文詠唱規模の魔法ほうげきでもない限りは——上級冒険者であつたとしても一筋縄ではいかない。攻められやすい平地にあつてなおこの城塞が原型を留めている事こそ、その城壁の堅牢さの裏付けに他ならない。

「引つ張り上げろー!」「糞、なんだよこの板金……何に使うんだ?」「雑に扱うなつ、歪みが出たら組み立てに困る」「装甲大型弩パリスダの固定具が足りないぞ」「糞、重いな畜生つ」「食料が足りないぞつ、盗んだ奴は誰だ!」「あそこの一団が勝手に持つていきましたよ」「お前たち何をしている!」「けつ、こんだけあるんだ。少しぐらい良いだろ」

月が高く浮かぶ深夜の時間帯。本来なら静寂が満ちていて然るべき時間帯に関わらず、戦争遊戯ウォーゲームを明日に控えたアポロンファミリアは古城の中で最後の前準備を行つていた。

三日前から現地入りしていた彼らの総数は百十名。それに加えて後から増員として追加された三百名ほどの人員も加え、総勢四百名を超える者達がひしめき合いながら怒声を響かせていた。

「この火薬樽は何処に運べば良い？」「あそこの城塞の中に運べ、間違っても落とすなよ」「気を付けますよ」「面倒くせえなあ」「まったく、正規団員だかなんだか知らねえがふんぞり返って指示出すばっかで手伝いやしねえ」「おい、お前たち聞こえているぞ」

アポロンファミリアの正規団員と、後から追加された増援。正規団員の隊長格の指示の元、増援の者達を動かそうとするも、規律のとれた正規団員とは異なり、連携のれの字もとれやしない烏合の衆にも等しい増援の者達は頭ごなしに怒声ばかり浴びせ掛ける正規団員と睨む者も居れば、大人しく指示に従う者もいる。

城壁の上に設営された大型兵装用の台座に大型弩バリスタを設置する者。物資を保管庫に運び込む者。密かに物資の一部を掠め取る者。スベア予備の武器や防具の整備を行う者。簡易的に崩れかけの城壁を修繕する者等、真夜中とは思えない程に騒がしさに満ちていた。

「な……なんという……アポロン様……」

城塞の中でも一際高く目立つ塔の最上階。砦には不釣り合いな玉座の間で団長である美青年のヒューマン、ヒュアキントスは窓から城内に犇めき合う品性の欠片も無さそうな無骨な増援の冒険者を見下ろしながら、片手に持っていた主神が書き記した手紙に目を通す。

『商売神の指示によりファミリアの増員を決定した。彼の神が用意した傭兵だけに飽き足らず、我が門を叩いた者全てに恩恵を授けなくてはならなくなってしまったのだ。』

ああ、彼らは余りにも我が派閥に不釣り合いな者ばかりだ。ヒュアキントス、キミが恋しいよ。

好ましくとも思えない者達の背にただ恩恵を授けるだけの日々、余りの苦行に私は気が狂いそうだった。』

手紙の内容に目を通したヒュアキントスの表情が悲し気に歪む。

アポロンの望まない品格の欠片も無さそうな醜男や醜女などの背に望まぬ恩恵を授ける日々。そんな苦行を味わわされたであろう己が主神の苦しみを想像し、ヒュアキントスは胸に手をあててアポロンを想った。

「ああ、アポロン様……もし叶うのであれば今すぐにでも駆けつけて

その汚れた手を清めて差し上げたい……」

城内を見下ろす窓から目を背け、階下で行われている醜い増援の冒険者達と正規団員達のやり取りを思考から除外する。現実逃避の様に手紙の続きを読み耽るヒュアキントス。

『この苦しみの先にあるであろうベル・クラネルとの甘美な日々の為の試練だと思えば、耐えられなくはない。』

出来得るならば可能な限り早く私の元へ、ベル・クラネルを連れてきてくれ。期待しているぞヒュアキントス』

ほんの一瞬でヒュアキントスの形相は鬼の様に歪む。

「アポロン様……なぜ、私では無いのですか」

主神の苦しみを取り払えるのは、その苦しみを拭いさつて差し上げられるのは、我が身を以て他に無い。そう呟いたヒュアキントスは手紙を握り潰し、憎悪の視線を平原の先に突き立てられたヘステイアファミリアの徽章が書き記された旗印に向ける。

「ベル・クラネル……よくも、よくもアポロン様の情愛を……許さんぞ！」

ウォーゲーム 戦争遊戯の形式が『複合戦』という特殊なモノであり、『攻城戦』と『旗守戦』の二つを組み合わせたモノであることから、交戦期間は三日と定められている。勝敗条件はアポロンファミリア側が城砦の深部、玉座の間に設営された旗印を三日間守り通すまたは平原に設営されたヘステイアファミリアの旗印を破壊する事。ヘステイアファミリア側は三日以内にアポロンファミリアの旗印の破壊もしくは城砦内に相手陣営の構成員の倍の人数で侵入し制圧する事。

城を守る立場であるがゆえに防衛戦の準備を進めてはいるが、徹底せずとも勝利するのは明確であった。土壇場で人員が増えたらしいが、それでも十人と少し。対してアポロン側は——悪辣な商売神によつて——総勢四百名を超える大規模派閥に成り果てている。

攻撃隊に二百名、防衛隊に二百名と半々に振り分ける事が決まっただけではいたが、たかが十数名如きでは——それも半数は手足の無い足手纏いである——旗印の防衛など出来るはずもない。

「くっ……ベル・クラネル、貴様は私の手で……だが……」

自らの手で少年を八つ裂きにして殺したい。けれどアポロンが示した作戦はヒュアキントス及びに親衛隊全員での旗印の守衛。アポロンファミリアの正規団員で城塞内部の防衛。城壁には外部の増援冒険者を百名。残る二百名の増援冒険者を攻撃隊として出撃させるというモノだった——これも商売神に指示された作戦である——これにより、ヒュアキントスはベル・クラネルと直接対峙する可能性はほぼゼロであると考えていた。

事実、たかが十数名、戦力を考えればたかが五、六名程度の人数での旗印の防衛は不可能。全員が防衛に回って圧倒的な数の暴力にすり潰されて決着が付くに決まっていた。玉座の間にて待つヒュアキントスではベル・クラネルを殺せないのだ。

不満を溜め込む彼は、周囲で動き回っている団員達を無視し、間の奥にある玉座に腰を下ろした。玉座の背後の壁には太陽の弓矢を刻んだファミリアの旗印^{エンブレム}。潔癖な彼が団員達に指示をし、部屋を掃除し相応に美しく飾れ、と命じたのだ。

王座の間で踏ん反りかえりながら、ヒュアキントスはもう一度鼻をならす。

「ベル・クラネル……私の下へ来い……殺してやる」

「規律が無さすぎる」

堅牢な城塞の射手が控え中庭に向けて弓を向ける為の張り出し櫓を上げながら眼下に広がる惨状から視線をそらしていた短^{ショートヘア}髪の女性幹部、ダフネはぼやいた。

彼女のぼやきを聞いた団員が眉尻を下げながらも再度同じ問いかけを投げかけた。

「それで、いかがでしたでしょうか……」

「はあ、わかった。物資の集積所を一か所に纏めましょう。それでウチの団員だけで警備、管理するの」

彼の報告からダフネが出した結論に表情を歪めたカサンドラが口を開こうとし、ダフネに睨まれて口をつぐんだ。

彼らの話し合いの内容、それは増援でやってきた三百人近い冒険者の行動にあった。彼らの中の一部の者達が物資の中にあつた食料や魔剣などをこっそりと盗んだりしていたのだ。それによつて魔剣が想定の本数よりも少なくなつたり、物資の数に不備が生じてギリギリまで確認作業に追われる事となつていた。

無論、盗みを行つた不届き者は全員叩きのめし、彼女が見下ろす城壁と城塞の間の中庭の中心に突き立てられた数本の柱に括り付けてさらし者に処した。それでも油断すればまた同じことをする者は出てくるだろう、規律だつたアポロンファミリアの正規団員ではなく、外部から数集めとしてやってきた増援の冒険者に規律などあるはずもない。

増援の冒険者に物資類の見張りなんて任せた日には、重要な回復薬などの物資を盗まれかねない。現に何人かが盗みを働いてさらし者にされているのだ。すでに彼らは仲間ではなく厄介な集団としてしか見れなくなつていた。

彼らを見張る為に団員が駆けずり回るのも無駄が多い。もういつそのこと、物資類は一か所に集めて正規団員のみで管理。増援の冒険者は決して集積所には近づかせない。そうしておけば規律の整つた正規団員の中に恥さらしな真似をする者がいない以上、物資関連でのゴタゴタは防げるだろう。

それ以外の事柄までは対応できないが。

「ですが、よろしいのですか？」

「何？」

「その……一か所に集めてしまうと、もし何か攻撃があつた場合に物資が一度に失われてしまうかもしれないませんが」

物資類を一か所に集めれば、その分防衛は楽になるだろう。しかし、その防衛隊が抜かれた時の被害は甚大になりがちだ。複数の場所に小分けにして保管した方が危険性は抑えられるだろう。

しかし、規律のとれていない増援の冒険者を抱え過ぎている現状、複数の場所に小分けにした結果、数か所で盗みが発生しかねない。それに加えて言うなれば――。

「確かに物資を一か所に集める危険性はわかっている。でも、そもそも城壁を突破して城塞内部の物資集積所まで彼らが攻撃を仕掛けられるかしらね」

「……確かに。わかりました、ではその様に指示を出してきます」

「盗みをやった奴がいたら、アイツらの所に同じ様に並べておいて。反省するかは知らないけど」

ダフネの言葉に納得がいったように男性団員は頷き、駆けていく。

ダフネは苛立たし気な視線で中庭で盗みを働いた結果、柱に縛られている外部冒険者を見つめて呟く。

「バカバカしい、こんなふざけた増員なんて……むしろ混乱の元にしかなってないじゃない」

「ダフネちゃん……」

「さつきから何なの、もつとはつきりと言って」

松明の代わりに魔石灯が灯る張り出し櫓の上、カサンドラが震えた声でダフネの名を呼んだ。

ぼうつとした明かりに照らされた彼女の顔は真っ青になっており、震える手で自らの体を掻き抱きながら口を開く。

「剣も矛も食べ物も、同じ場所に置いちゃダメ……竜に睨まれて腐って使えなくなっちゃうよ……」

抽象的な例えを呟く彼女に対し、ダフネはまたかと溜息を零した。

「何、それも夢？ あのミリア・ノースリスが連れてる飛竜は重装竜アーマードドラゴンと赤飛竜レッドフライヤーでしょう。あの二匹にはそういった腐敗化の力は無いでしょう」

「違うの……そうじゃなくて……」

うんうんと唸りだした彼女をしり目に、ダフネは中庭に視線を落とすとして先ほどよりも遥かに大きなため息を零した。

騒ぐ外部冒険者、数人の正規団員が棒などで滅多打ちにして柱に括り付けられてようやく大人しくなる。盗みを働いていたところを見つけた間抜けがもう一人見つかり、ダフネは天を仰いでぼやく。

「いい加減にしてよ……これで五人目なんだけど」

彼女が下に降りようと張り出し櫓から立ち去ろうとした所で、回り

込んだカサンドラが縋り付く様にダフネの腕を掴んだ

「駄目……ここから逃げよう」

「はあ?」

「城が、城が滅ぼされる……」

突拍子もない事を言い出した彼女に対し、ダフネはうんざりとした様子でカサンドラの手を振り払う。

「また夢? 今更そんな事出来る訳ないでしょう。いい加減にして」

「お願い、お願いだから信じて……」

全く当てにならない『予知夢』を吹くカサンドラはいつにも増して必死な様子でダフネに取り縋る。聞く耳を持たないダフネは眉を煩わしそうにまげた。余りにも必死な様子にどうすべきかとダフネが思案し始めた所で、カサンドラがピタリと動きを止めた。

ある一点を見つめ、その整った顔立ちは青褪めた表情から土気色の死体の様な色に変化する。

「駄目、受け入れては駄目、まだ間に合う、あれを入れてしまったら……」

彼女が見つめる先では、最寄りの街から取り寄せた最後の物資運搬の荷馬車が、列となつて城門をくぐつていく所だった。

「おーい、待てっ、待てったら!」

鈍い軋む音を響かせて閉じていく城門に対し、ルアンは悲鳴を上げた。

最後列に居た荷馬車を急がせ、ぎりぎりのところで城門をくぐり切る。分厚い鉄門扉は大きな音を響かせて、完全に閉じられた。

「何で閉めるんだよ。オイラがまだ居ただろ?」

「へへっ、居たのかルアン。小さくて見えなかつたぜ?」

情けない声を上げるルアンに、大柄な獣人はふざけた笑みを浮かべる。

まだ下級冒険者であるルアン・エスペルという男は、小人族特有の子供の様な体軀もあつてか、アポロンファミリアの中でもよく下っ端

扱めんどろいされていた。今回の物資運搬めんどろもその一環だ。

総じて小人族という種族は小さく頼りない外見から偏見をもたれやすい。ヘスティアファミリアに所属する「竜ドラゴンを従テイマーえる者」が上級冒険者でありながら警戒心を一切抱かれていないのもある。なんだよつ、といじけたような素振りりで、ルアンは小馬鹿にしてくる同僚に唇を尖らせた。

「まあまあ、それよりもこの荷物は何処どこに運べば良い？」

「あん……？」

ルアンの乗っていた荷馬車から降りてきた三人の冒険者を見て大柄な獣人は眉を顰める。

一人は灰色の外套を纏ったヒューマンの青年。一人は腰に半月刀を吊り下げた猫人。一人は笑みの似合うエルフの好青年。彼らを見た大柄な獣人は警戒心を抱きながら腰の剣に手を伸ばしつつもルアンに問いかけた。

「おいルアン、そいつら誰だ？」

少なくとも見た事が無い人員だと警戒心を抱いた彼に対し、ルアンは呆れかえった様に肩を竦める。

「はあ？ 誰って、増援でやってきた冒険者だろ。何言ってるんだよ……オイラでも覚えてたのに覚えてられなかったのかよ」

「あ……ああ、そうか。そうだったな……見覚えは無いが、数が多かったからな……おい、お前たち、余計な真似はするなよ」

物資の横領なんてしたらタダでは置かない。そう言って物資の運搬を始めた大柄な獣人に倣い、三人の冒険者も物資の運搬をし始める。その背を見ていたルアンがぼつりとつぶやいた。

「……随分運びこまれたなあ」

「三日分の武器と兵糧メシだ。それも四百人分のな、備えあればなんちゃらってやつだろ」

まああんな格下あいてには入念過ぎるぐらいだけだな、と笑う獣人の同僚の声を聞きながらルアンは周りを見回す。

城壁内には数え切れない程の大量の木箱と大袋が荷馬車から降ろされる所であった。

城壁の上に視線をやれば、崩れかけた四隅の側防塔を修繕して兵装用の台座を固定し、その上に組み立て途中の装甲大型弩の姿が見取れる。城壁の上に設けられた無数の張り出し櫓には通常型の大型弩が並べられており、櫓と見紛う大型弩用の矢が立て掛けられている。

城壁の上に設けられた滑車を使った釣り上げ機で矢束を城壁の上に持ち上げていたり、大型弩本体を城壁の上に引っ張り上げたりしている様子もあり、物々しいを通り越して、やり過ぎな程に要塞化している姿となっていた。

「ひでえ……」

「ま、確かにな。どれだけ金がかかってるんだか……」

商売神がもたらした物資と兵器。その代償として強引に増員させられて乱れた規律。不愉快そうに獣人の同僚が鼻を鳴らす中、ルアンは小さく唾をのみ込んだ。

「調子はどうだ？」

「万全よ」

「うん、問題ない」

「そうか、じゃあ、ほら、約束してた短剣だ。後、銃剣もな」

「ありがとう」

「ヴェルフ殿、忘れ物とは……一体、その木箱は？」

「ああ、これか……まあ、これはアレだ、椿の褒美って奴だ」

「椿……最上位鍛冶師の？」

「おう……と言つても、素材はキューイなんだがな」

「うわ、赤いわね……全身鎧？」

「私が着れば良いのですね」

「ああ、それと、先に言っておくがその鎧を着てても、大怪我で済めば御の字だ……本当に良いのか？」

「構いません。それよりもそっちは大丈夫なのですか？」

「え？ わたし？ 平気平気、さつきも言ったけど、わたしたちは死んでも恨まない。けれどミリアが死んだら恨むからね」

「……わかりました」

「それでは、リリ達の手筈通りに」

「おお。時間は全く無い、出来るなら——十分である城を落とすぞ」

「うん、勝とう」「ええ、負けられないわ」

闇の中で、複数の声が響き渡っていた。

V S . アポロンファミリア。戦闘形式^{カテゴリー}——『複合戦』。

勝利条件は、対象派閥の旗印の破壊。

長い夜が明けようとしていた。

第一二二話

都市は熱気に包まれている。

人々そして神々が待望していた戦争遊戯^{ウォーゲーム}当日。都市内は尋常ではない程の興奮が溜め込まれていた。

朝早くから全ての酒場が店を開き、街の至る所で出店が路上に展開している。通りには神々の悪乗りによって散々宣伝が行われた結果の絵羊皮紙^{ポスター}が街の至る所に張り出されていた。描かれているのはアポロンファミリアの太陽のエンブレムと、ヘステイアファミリアの代わりに兎と竜の寄り添い合う姿であった。

お祭り騒ぎともいえる都市の賑わいに冒険者達も今日は休業し、酒場に詰め寄せて観戦準備をしている。何とか休暇を挽ぎ取った労働者達、一般市民も大通りや中央広場^{セントラルパーク}に出て、今か今かと待ちきれない様子をうかがわせていた。

『あー、あー！ えーみなさん、おはようございますこんにちは。今回の戦争遊戯^{ウォーゲーム}実況を務めさせて頂きますガネーシヤファミリア所属、喋る火炎魔法ことイブリ・アチャーでございます。二つ名は『火炎爆炎火炎』以後お見知りおきを』

ギルド本部の前庭には仰々しい舞台^{ステージ}が勝手に設置され、実況を名乗る褐色肌の青年が魔石製品の拡声器を使い、声を響かせていた。周囲には大勢の人々が詰めかけている。

『解説は我らが主神、ガネーシヤ様！ ガネーシヤ様、それでは一言！』

『俺が、ガネーシヤだ!!』

『はいっありがとうございましたー!』

実況者イブリの横で巨大な像の仮面を被った男神、ガネーシヤが吠える。観衆の歓声が弾け、ガネーシヤが満足そうに頷く。

戦争遊戯^{ウォーゲーム}は一種の興行だ。この催しを見る為に他地域からやってくる者は数多く、そこで当然の様に入場料が発生する。一方でギルドは世界に対しオラリオの実力を示す示威行為にも利用し、また素質を秘めた有望な冒険者達をこの都市へと引き込もうとするのだ。

そして何より、神々の求める至高の娯楽。それが戦争遊戯ウォーゲームというものだ。

「おー盛り上がつとる盛り上がつとる……」

窓に顔を押し当てたロキが眼下の光景を見下ろす。

白亜の巨塔『バベル』三十階。戦争遊戯ウォーゲームを地上の誰よりも楽しみにしていた神々の多くは、『バベル』に足を運んでいた。代理戦争を行う両主神、ヘステイアとアポロンもこの場で待機している。

それ以外の少数の神々は酒場で冒険者達に交じる者や、本拠ホームで見守る者と様々いた。

「それで、女神ヘステイア……このまま戦争遊戯ウォーゲームなど行えば、きっと貴女の眷属こどもは大怪我をするでしょう。そうなるぐらいなら、初めから抵抗しない方が——」

「くどい、何度も言ったはずだ。ボクは降参はしない」

「ぐう……ですが、無事では済まないです。眷属こどもの事を考えるなら——

「これはボクとアポロンの問題だ、無関係な奴は黙っていてくれないか」

ぐぬぬつと唸り声を響かせて後ずさる男神。ヘステイアに戦争遊戯ウォーゲーム開始直前になってアポロンに服従する事を勧めていた商売神に対し、神々が野次る。

「しつこいぞー」今日の為に色々頑張ったんだから開始前に降参とかやめろよ」「中止になったらキレるわ」

次々に投げかけられる批判の声に商売神が怯み、忌々し気にヘステイアを一睨みするとその場を離れていった。

その後姿を見たロキが指差してケラケラと笑っていると、代理戦争を行う神の片割れたるアポロンが不機嫌そうな表情で大扉を開いて場に足を踏み入れた姿が皆の目に入る。

商売神が駆け寄り、ひそひそとやり取りをしはじめるとみるみるうちにアポロンの表情が歪んだ。一分ほどするとアポロンが無造作に商売神を突き飛ばす。

「断る。これ以上付き合いきれん」

「なっ……それは此方の台詞だっ！」

喧しく騒ぎ始めた二人を見た神々の呆れの表情が突き刺さる中、入り口で騒ぐ二人——アポロンに歩み寄る女神がいた。艶やかな黒髪をツインテールにした幼い女神、ヘステイアは鋭い視線をアポロンに向けて口を開く。

「やあ、アポロン。キミに少し話があるんだ」

「これはこれは……まさか服従を選んでくれるとは」

「……………ボクはアポロンに話しかけているんだ、邪魔だから失せてくれ」

手もみをしながら近づこうとした商売神を睨んで押しつけ、女神はアポロンの前に立った。

アポロンは鼻を鳴らして口を開く。

「ヘステイアか、眷属との別れは済ませたのか？」

「ああ、たっぷりとね」

「それは良かった。この戦争遊戯ウォーゲームが終わり、ベル・クラネルが私のものとなった時。キミにはオラリオから……いや、下界から去ってもらった事にしたんだ」

「そうか」

アポロンのこれ見よがしな挑発に動じる事なく、ヘステイアは彼を見上げて目を細める。

「降参するなら今のうちだぞ」

「……………は？」

女神の言葉にアポロンは半口を開け呆然とした表情を浮かべ、次の瞬間には失笑を零して顔を押しさえた。

「ふっふはははっ、いや失礼……まさかキミからそんな言葉が飛び出すとは思わなくてね」

「ボクは本気で言ってるんだ。キミの眷属が犠牲になる前に、降参してくれないか？」

「……………何を言っているんだキミは。私の眷属が犠牲に？ よもや、砦に詰める我が子らがキミの眷属に打ち倒されるとでも？」

戦力差を考えてくれたまえ、そう言ってアポロンは女神の横をすり

抜け、自らの座すべき場へを歩みを進めた。

その背中に向かい、ヘステイアは小さく言葉を投げかける。

「キミは、きつとこの選択を後悔する」

「それは此方の台詞だ、ヘステイア……私が負ける訳ないだろう？」

周囲の神々からも失笑を浴びた女神が小さく吐息を零し、彼女もまた座すべき場へを足を運ぶ。

神々の集まる場の中央に備え付けられた円卓。その両端に対面する様に腰掛けたヘステイアとアポロン、周囲を囲む神々の注目を浴びながら、彼らの円卓に一人の優男神が歩み寄り、懐から取り出した懐中時計を見ながら口を開いた。

「そろそろ時間だ」

ヘルメスが見ていた懐中時計の針は、正午を目前に控えている事を告げている。

彼は顔を上げ、宙に向かって話しかけた。

「それじゃあ、ウラノス、『力』の行使の許可を」

空間を震わせた優男神の声に、数秒の間を置いて応える声が響き渡った。

『許可する——』

瞬間、酒場や街角、ありとあらゆる場所に虚空から『鏡』が出現する。

都市の至る所に現れた円形の窓に、人々は途端に色めきだす。

下界でごく一部の宴イベントの際にのみ使用が許可されている神アルカナムの力——

——神の鏡。千里眼の能力を有し遠く離れた土地の光景を映し出す事で、企画された催しを神々が楽しむために認められた唯一の特例であった。

オラリオから遠く離れた戦場にて行われる戦争遊戯ウォーゲームという催しを、この鏡をもって子供たちとともに観戦するのだ。

『では鏡が置かれましたので、改めて説明をさせていただきます。今回の戦争遊戯ウォーゲームはヘステイアファミリア対アポロンファミリア。戦闘形式は『複合戦』。『旗守戦』と『攻城戦』を組み合わせた新たな遊戯形式ゲームスタイルつ。攻撃側にヘステイアファミリアが、守衛側にアポロン

ファミリアが振り分けられており、互いに旗印を破壊された方の負けとなる規則ルールとなっておりです！」

鏡に映し出された光景に人々がどよめきを零す。

『古城』と称するにはその映し出された城はいささか物騒に過ぎた。城壁各所に設置された大型弩バリスタに加え、側防塔には無骨な装甲版によって堅牢な守りを手にした装甲型の大型弩バリスタが設営されている。天高くそびえる尖塔の先にはためく太陽の旗エンブレム——破壊対象ではない、ただの飾りの旗だ。

詰める冒険者の数も膨大で、今まさに北川方面のわずかな緑と荒野の広がるヘステイアファミリアが旗を設営している方面。その北門の内側で200名からなる攻撃隊が無数の馬車を引き連れて今か今かとお撃の時を待っている。馬車には大型弩バリスタが取り付けられており、彼らが対竜警戒を怠っていない事がうかがえる。

それだけに留まらず、炎に氷、雷に風と色とりどりの多種多様な魔剣が彼らの腰に備え付けられていた。

あまりにも物々しく、弱小派閥たるヘステイアファミリアに向けるには不相応な装備の数々を目にした人々が溜息を零す。

「もう良いかアー！ 賭けを閉め切るぞオー！」

「賭けも糞もねえだろこれ」「あんなん無理無理、アポロン賭け一択だつての」「賭けになんなくね？」

酒場では盛り上がり欠けながらも商人と結託した冒険者主導の元、賭博が着々と進められていた。今回の戦争遊戯の勝者がどちらかを賭けるのだ。しかし、既に勝敗は決したも同然と言える程の状況に賭けの対象はアポロンファミリア一択であり、これでは賭けが成立しないのではと疑問を覚えた冒険者の声が響く。

「アポロン派とヘステイア派、四十対一つて所か……」

「ヘステイアファミリアの予想配当オッズが四十倍か、まあ賭けにならなくはないな。しかし誰がああファミリアに賭けてるんだか」

胴元の冒険者が金と賭券を集計しながら安堵の吐息を零す。勢力状況から言っても間違いなくアポロン派にのみ掛け金が集中するはずが、ヘステイア派も少なからずいる。

「どうせ神連中だろ……」

神の馬鹿共はいつでも大穴狙いだ、と呆れる胴元冒険者の視線の先では『うおーっ!』『来い来ーい!!』『幸運の兎と竜よーっ!!』と賭券を握り締め祈っている神々の姿があった。

数多の酒場でアポロン側にしか賭ける者が居らず、賭けにならないと嘆きの声を響かせる胴元冒険者が多くいる中、とある酒場でも同様の光景が繰り広げられていた。

「糞、アポロンに賭ける奴しか居ねえ……誰かヘステイアに賭ける奴はいないのかアー!」

酒場の面々を見回して叫びを響かせるも、帰ってくるのは嘲笑ばかり。鏡の光景を見てなお、ヘステイアに賭けようとする者など、大穴狙いの神々を除いて居る筈もない。

畜生と愚痴るドワーフの前に、ヒューマンの冒険者が歩み出て、金貨の詰まった袋をテーブルに叩き付けた。

「——兎に十万」

「おいおいおいっ!」「本気かよモルド」「頭おかしくなっちゃったんじゃないのか!」

「他にヘステイアに賭ける奴は居ねえのかアー!? 今ならその馬鹿と一緒に大損できるぞっ!」

名乗り出た強面の男に、わっ、と酒場が沸き立つ。周囲の客の嘲笑を浴びながらも——十八階層でベルを忌み嫌っていた——モルドは、両腕を組んでふんぞりかえる。

「はんっ……小人の恐ろしさも知らないで」

「竜? あんだけ対策されてたらどうしようもないだろ」「街中で撃ち抜かれて死んだんだぞ?」

強がり染みた言葉と捉えた周囲の客に笑われ、モルドは眉を顰めた。

『それでは、間もなく正午となります!』

実況者の声ははねあがる。

ざわめきがギルド本部の前庭から波のように広がった。

冒険者が、街の住民が、神々が、全ての者達の視線がこの時『鏡』に

集まった。

そして、

『戦争遊戯』——開幕です!!』

号令と共に打ち鳴らされた銅鑼の音と、爆発した様に弾ける歓声の音と共に、戦いの火蓋は切られた。

同時刻、古城跡地。

開幕を知らせる銅鑼の音が遠方の丘の上から響き渡る。

盛り上がるオラリオとは打って変って、戦場である古城の士気は最低に落ち込んでいた。

「出撃イーツー！」「門を開けるぞオーツー！」

鉄門扉が軋む音を立てて開かれていく。城壁の上に待機していた冒険者達が弓を構え、門が開き無防備になる瞬間の警戒を行っている——が、欠伸をする者もいれば、そも弓を構えていない者がいたりと統率を取れていない。

それでも僅かに残った従順な傭兵が律義に警戒を続け、城壁の向こう側に広がる平野へと視線を向けた。

平野にはほとんど物陰などありはしない。時折、思い出したかのように岩の塊が存在するが、人一人隠すので一杯であり、とうてい竜の姿など隠せる代物ではない。

北から東にかけて僅かな緑と荒野が続ぎ、南の遠方には川、西の方向には林が見える。北の先の方にはヘステイアファミリアの旗が置かれており、一人の冒険者がその前で座禅を組んでいる姿が見える。

距離は大型弩の射程のおおよそ三倍。防衛人数が一人しか居ないのを見た傭兵の一人が門をくぐって出撃していく冒険者達に声を張り上げた。

「気を付けろっ、奴ら姿が殆ど見えない！ 何らかの罠があるかもしれないん！」

「うるせえな」「それがどうしたよ」「数見てモノを言えっつてんだ」

「うるせえのはどっちだよ……」

ゲラゲラと下品に笑う攻撃隊の面々に交じり、馬車に乗り手綱を握っていたルアンの愚痴が響く。

城壁内にて待機を言い渡されるかと思えば、なぜか攻撃隊の馬車の一両に編成された彼は背後に乗った猫人の青年に励まされて舌打ちを零した。

「まあまあ、気楽に行こうぜ、な？」

「チツ」

半月刀を腰に吊り下げた彼は気さくそうに手を振って城門の上の外套を被ったヒューマンの男に応える。

「気を付けるわー」

「おうー」

攻撃隊が門をくぐったのを確認し、城門が閉じられていく。

攻撃隊200名。アポロンファミリアの正規団員の数は僅か5名を除き、その九割以上が外部冒険者によって形成された攻撃隊は、八機の大型弩をそれぞれ囲む様に移動しはじめる。

向かう先は北の先に見えるヘステイアファミリアの旗印。あれを破壊すれば勝負は着く。それなのに防衛に当たっている冒険者はたったの一人という不自然さを気にする事なく、彼らは出撃していった。

隊列後方に混じっている小人族のルアンはガタゴトと整地されていない荒地地に行く馬車の振動に嫌気がさした様に眉を顰め、周囲をしきりに見回しては不安そうな声を零した。

「おい、本当に大丈夫なんだろうな？」

「だいじょぶだいじょぶー」

「なんでお前はそんなに気楽そうなんだよっ」

「んー？　なんとなく？」

ケラケラと軽薄そうに笑みを浮かべる猫人の青年にルアンがぎゃーぎゃーと喚くさ中、先頭を進んでいたリツソスの声が響き渡った。

「これより砦に設置された大型弩の射程外に出る。総員、警戒態勢を維持しつつも前進せよ！　大型弩はいつでも撃てる様にしておけつ

！」

リツソスの言葉を聞いた外部冒険者達がのろのろと動き出し、大型弩を調整したりするさ中、猫人の青年もルアンが御者を務める馬車に備え付けられた大型弩の確認を行い、装填できていることを確認し始める。

その姿を見ながらもルアンが身を震わせ、近くに居た正規団員に声をかけた。

「なあ、やっぱオイラ戻っていいか？」

「駄目に決まってるだろ」

「でも、城の中と違って竜に襲われるかもしれないだろっ!？」

「いい加減にしろ、第一これだけ見晴らしが良いんだから近づいてくればわかるだろ」

怯えた様子で周囲を見回すルアンに呆れたように同僚は溜息を零し、リツソスの指示に従って前進し始めた。それに伴いルアンも手綱を操り馬車を前進させる。

「そんなに不安なら空に向けときますかあ。ほら、地上を走るアーマードドラゴン重装 竜より、空を飛んでくる赤レッドワイザーアーン飛 竜の方が脅威ですしい?」

「お、おう……」

猫人の青年が馬車でガチャガチャと大型弩を空に向けたのを肩越しに見ながら、ルアンが視線を前に向けた瞬間——— 隊列の前方で爆音が弾け、一台の馬車が空を舞った。

『——— ツ!?!』『さて、なにが——— ぎゃっ!?!』

轟音を立て、大型弩を運んでいた馬車が大地に叩き付けられて御者や装填手、砲撃手などが地面に投げ出される。唐突な出来事に呆然とした冒険者達だが、即座に武器を構えて敵の姿を探す。

「なんだっ」「何処からの攻撃だっ」「いきなり馬車が——— ぎゅがっ!?!」

隊列前方、右手側を進んでいた馬車がもう一台宙を舞い、別の馬車に叩き付けられて乗っていた数人が巻き込まれて血を巻き散らす。それだけに留まらず唐突に煙が舞い上がり、視界を塞いでいく。

よく見れば足元には大量の煙玉が撒き散らされている事に気が付

けただろ、彼らが冷静であれば、だが。

突発的強襲に対応しようと弓を手に取った者もいれば、呆然と立ち尽くす者もいる。剣を抜き放った途端に上半身が潰れた冒険者も居た。彼の体が宙を舞い、大量の鮮血を撒き散らした事で敵の姿がぼんやりとだが虚空に映し出される。

口元を大量の血で濡らし、煙幕を吹き飛ばしながら出現したのは――無色透明な竜。浴びた血が虚空にその形を映し出し、煙幕によつてぼんやりと輪郭が理解できるそれは、明らかに竜の形をしていた。

太く大きな尻尾が振るわれ、馬ごと馬車を弾き飛ばして宙を舞わせる。ルアンの乗る馬車のすぐそばに叩き付けられた馬車を見て、ルアンが一瞬で青ざめた。馬車の下敷きになった冒険者が呻き声を響かせて助けを求める最中、彼は悲鳴を上げて手綱を手放す。

「うわああああああつ!」

「チツ! 御者代われっ!」

猫人の青年がルアンを馬車の中に叩き込み、手綱を引いて馬車を反転させた。彼は近場に居た冒険者達に声を張り上げて叫ぶ。

「全員逃げろっ! 城の大型弩バリスタの射程まで下がれば追撃してこないぞっ! 一度撤退しろっ!」

良く通る猫人の叫び声に反応し、何人かの冒険者が彼の乗る馬車に飛び乗るさ中、混乱していた冒険者も慌てて指示の通りに動き出す。

「逃げろっ!」何処から竜がっ! 「助けてくれっ!」

「貴様らっ、隊列を整えろっ! 大型弩バリスタで迎撃をっ! くっ、言う事を聞けっ!」

リッソスが応戦を呼びかけるも混乱に陥って統率のとれていない彼らは反撃も儘ならない。

彼が舌打ちと共に剣を振り上げ、撤退を命じた所で、姿の見えない襲撃者は煙幕に紛れて草原を駆けて離れていく。全身に浴びた血と、煙幕によつて輪郭がはっきりとしていた無色透明な襲撃者。大地を駆ける度に振動を響かせ、遠く離れていくそれを見ていたリッソスは目を疑った。

「なっ……重装竜だどっ!?」

駆けていく無色透明な血塗れの竜。煙が晴れていくさ中、大地駆ける血まみれの何かが虚空に色着いていき徐々にその襲撃者の姿が露わになっていく。

赤黒く分厚い堅牢な鱗に身を守られた、鈍重でありながら機敏に動く恐ろしい耐久力を持った下層の竜。重装竜が虚空から姿を現しながらも全速力で撤退していく姿。

「あの竜にそんな能力は無かったはずだぞっ！」

『透明状態』の効力を使つての潜伏。煙幕による攪乱、攻撃隊二百名に対するヘステイアファミリアからの強襲攻撃が成功し、多大な被害を出した事で、彼らは一度撤退を余儀なくされた。

血塗れになった重装竜、

ヴァンの

背中から顔を出した狐耳の

ミリアが溜息を零し、小さく呟きを零す。

「潜入、成功すると良いけど……」

彼女が視線を向けた先には、多大な被害を出した事で撤退を余儀なくされた攻撃隊。そのうちの無事に走り続けている猫人の青年が駆る馬車があった。

「つと、ベル達と合流しなきや。ヴァン、西側の林に向かうわ。もう一度魔法で透明化させるから、出来る限り静かに、後草地は避けて……血を洗い流せればよかったんだけど」

彼女が詠唱を終えると、血塗れの竜が色そのものを失っていくかのように透明化していく。姿を消した竜が静かに歩みだし、わずかに生えた草が踏み潰される姿を見てミリアは眉を顰めた。

「勘が良い奴にはすぐバレそうね」

姿は消せても、足元に生えた草を踏み潰せば痕跡が残る。そういった弱点ばかりの透明状態に文句を零した彼女もまた、自らの姿を魔法で消して駆け出していく。

『これはすごい！ ドラゴンテイマーのミリア・ノースリスの強襲が決まったアーツ！ これはまさかの短期決戦でしょうか！ というかなんか狐人ルナルみたいな耳が生えてたというか、あの子魔法三つ覚えてたよね？ なんかな新しい魔法っぽいものを覚えてるっ!?』

オラリオでは驚愕が伝播していた。

宙に浮かぶ『鏡』には早くも攻撃隊が半壊する程の被害を受けて尻尾を巻いて逃げていくアポロンファミリアと、無数の冒険者を噛み殺して血塗れになった竜が幼い狐人の放つたらしい魔法で姿を消して潜伏する姿が映し出されていた。

ドラゴンテイマーとして知られている小人族のはずの彼女が獣人の様な姿になっていている事に驚きの声を上げる者もいれば、第一次攻撃隊が呆気なく撤退した事に舌打ちを零す者。姿を消す魔法という恐ろしい代物に目を見張る者など、さまざま居る中で幼い狐人の様な容姿となった彼女に声援を送る者もいた。

『しかしガネーシャ様、魔法を四つ以上覚えるなんてありえるんでしょうか!』

『うむ、ロキファミリアにも何人か所属しているが、分岐詠唱魔法というモノがある』

『つまり彼女はその分岐詠唱魔法をつ!?』

『いや、共通点が無すぎる。分岐詠唱魔法とは言えないな』

『じゃあアレはなんなのでしょうか!』

『アレは——ガネーシャかつ!』

『さつきまで解説できてましたよねエツ!?』

ギルド前の実況と解説の熱気ホルテッも一気に引き上げられ、拡声された声がオラリオ中に響き渡る中。

中央広場セントラルパークに立つ巨塔バベルでは、神々の多くが困惑の声を上げていた。

『あれって、【魔銃使い】か?』

『小人族バルウムだって話だっただろ? でも獣人だった……別人?』

『でも魂の形は似てた気がするが……』

広間の一角で男神達が一つの『鏡』に集まる一方、円卓に腰掛けたアポロンが立ち上がりヘスティアを糾弾していた。

「あれは誰だヘステイアツ！ まさか未申請の助っ人を……ッ！」

「……ミリア君だよ。ボクの眷属のね」

ヘステイアの言葉に会場がざわめく中。ロキは、ほう、と眩きを零して鏡を見据えた。

「なるほどなあ、アレがこうなつたんか……」

ミリア・ノースリスになる以前の姿を知っているロキは期待の眼差しを鏡に向けた。

「これは、盛大な番狂わせが起きるかもなあ」

第一二三話

シユリーム古城跡地。

アポロンファミリアによって改修の施された城塞の内部は大混乱に陥っていた。

「おいー あんなの聞いてないぞ!」「相手の派閥はあんな魔法を使えるのかよ」「姿を消す竜だつて!?!」

城塞北部にて発生したヘステイア側からの重装竜アーマードドラゴンによる強襲……それも透明状態インビジビリティを用いた奇襲であった。

その光景は遮る物が無かったが故、城壁や側防塔などから視認する事が出来ていた。

攻撃隊の編成は大型弩輸送用の馬車八台、攻撃隊二〇〇名程という大規模な代物であった。

しかし、這う這うの体で帰還したのは馬車二台と一七〇名のみ。たった一度の攻撃で三〇名近い被害が出てしまった上、唐突な奇襲によって混乱状態にあったアポロンファミリア攻撃隊の士気は完全に碎け散っていた。

「糞、仲間が……」「こんな事つて……」「敵はただの案山子じゃなかったのかよつ」

門を開け中に駆け込んできた攻撃隊の面々、馬車諸共空を舞い、叩き付けられて重傷を負った者。不意打ちの噛み付きで噛み碎かれた者。咄嗟に放った反撃の矢が仲間にあたった者。

竜に噛み碎かれて即死した者を除けば負傷者の数は五〇人を超えている。未帰還の三〇人の内、即死したと思われる者は八名。残りの者は負傷した状態で戦場に取り残されている。

隊長として攻撃隊を指揮していたリッソスが被害状況を聞きながら苦々し気な表情を浮かべるさ中、ギコギコと車軸の軋む音を響かせて最後の一台の馬車が門をくぐって入ってきた。

御者台で手綱を握っていたのは猫人の青年。本来ならルアンが御者を務めているはずのそれを見て、リッソスが鋭く猫人を睨みつけて声を上げた。

「貴様、ルアンは何処にやった」

もし見捨ててきたのなら許さない。そう言外に語る彼に対し、猫人の青年は肩の力を抜いて馬車の後部を指さして示す。

「あー、なんか恐慌状態になつてたんで後ろに放り込んだきました。生きてますって」

彼の言葉を聞いたリツソスが馬車の後部を覗き込めば、ルアンの他にも木乃伊の様に全身を包帯で巻かれた負傷者が5人程乗せられているのが目につき、エルフの青年は眉を顰めた。

「ルアン、無事か？」

放心しているのかルアンは返事もせずには呆然としていた。リツソスは額に手を当てて溜息を零す。

意識は微かにあるのかくぐもつた呼吸音が僅かに聞こえ、彼らの負傷状態が酷いのは察しがつく。

「くっ……負傷者か……」

彼らを見捨てるか否かを考えるリツソスの元に、一人のエルフが駆け寄ってくる。

笑みの似合うエルフの男が簡易な敬礼と共にリツソスの傍に立ち、声を上げた。

「負傷者の受け入れの許可をお願いしたく」

彼は傭兵の中でもとりわけ生真面目であり、アポロンファミリアからの覚えも良い。

他の傭兵連中が軒並み役立たずとすら罵られる中、彼や城壁上で未だに厳重な警戒を続ける灰色の外套を纏ったヒューマン、そして半笑いで半月刀を腰につるした猫人。彼ら三人は指示にしっかりと従う上、規則というモノを理解している。他の傭兵連中が酷過ぎるともいえるが、その中でも最低限は使える人員であった。

彼の申し出に対しリツソスは苦々し気な表情を浮かべながらも目を合わせ、小さく頷く。

「構わん。余ってる部屋に運び込んで治療を行え、おいお前、貯蔵庫から回復薬を出してこい」

「了解」「わかりました、では彼らを運びます」

エルフの青年が負傷者を担いで馬車から運び出すさ中、猫人の青年がリツソスに声をかけた。

「どうしますか？　出撃しろってんならしますけど……」

「……団長の指示を仰ぐ」

リツソスがそう呟けば、猫人の青年は半月刀をくるくると弄びながら城門を見上げ——びくりと耳を跳ねさせて背筋を伸ばした。

彼が身を震わせた瞬間、西方より飛来した一条の極光が城塞内部、天高く聳え立つ玉座の間の塔の中腹辺りに着弾した。

城塞西部にある林。

それより更に西方の小高い丘となった草原に金髪を揺らした狐人ルナールの幼い少女が立っていた。

着込んでいるのは淡い鈍色の戦闘衣バトルクロス。腰には紅と蒼の二対の剣、その手には特殊な形状をした槍の様にも見える銃剣ツェッペ。常日頃から肌身離さず身に着けている竜鱗の朱手甲。

放った砲撃による破壊の痕跡が大地に一直線に刻み込まれ、それは城砦に向かって真つすぐ伸びている。

手にしていた特注の銃剣ツェッペが過剰に送り込まれた魔力によって軋む音を立てていた。それを聞きながらも、彼女は舌打ちと共に城砦を睨みつけて呟く。

「外した」

狐人の幼い少女——クーシー・スナイパーにクラスチェンジしていた小人族のミリア・ノースリスは苦々しげな表情を浮かべて小瓶を取り出し、足元に竜の血を撒いていく。

「なんで対策を……でも一応は当たったし……でも……」

ぶつぶつと呟きながらも次の砲撃準備を進めるミリアに、白髪のヒューマン、ベルが近づいて声をかけた。

「ミリア、どうだった？」

「駄目、本命から外れたわ。でも塔には当たった」

「キューイ」

深紅の飛竜がミリアを見下ろし『下手くそ』と罵り、ミリアに睨まれる。

ヘスティアファミリアの最初の強襲から即座に林を超えた更に西方のベルとキューイの二人と合流したミリアの巨大砲撃。

十八階層で黒い階層主を即死させた彼の砲撃を放ったのは——
——城塞より二Kの距離を置いた丘の上であった。

狙撃主体の『クーシー・スナイパー』だからこそ叶った魔力の感知範囲を遥かに超えた距離からの砲撃。アポロンファミリアに更なる混乱を振り撒く事は間違いない。

しかし、元の標的は玉座の間に座すヒュアキントス・クリオであったのだが、玉座の間に狙いを定めたとこ何かの光が反射していたせいで集中力を乱され、結果として元の狙いから外れた場所に着弾する結果となった。

「なんなのよあの光は……」

「でも結果的にヒュアキントスと分断できたと思うんだけど」

ベルの言葉にミリアは眉を顰め、小さく溜息を零した。

「そうね……最上級はヒュアキントスの撃破。次点でヒュアキントスと団員の分断……玉座の間に通じる階段部分は吹き飛ばしたし、これで頭と胴体を切り離せたわ」

叶うなら、最上級の結果が良かった。そう呟いたミリアは再度詠唱を重ね始める。

『スナイパーライフル・マジック』……………『ひとつの魔弾だんがんに全てを束ねよ』『アンチ・マテリアル』

砲撃の準備を知らせる音色。対象までの距離は二Kキロル。

人々が知る魔法の射程より遥かに長い射程を持つ、超遠方砲撃魔法。

詠唱文の長さは威力・射程・範囲に比例する。通常の魔法使いであれば常識と言えるその法則に則るとするならば、彼女の魔法は範囲が狭い代わりに威力と射程を伸ばした魔法だ。

玉座の間に座したヒュアキントスは信じられないといった風に眼下に跪くダフネを見た。

「馬鹿な……先ほどの砲撃はいったい何なのだっ！」

「……わからない。でも、少なくとも魔力の感知範囲外からの遠距離……それも多分だけどー○○○M以上先からの——」

玉座の間に集まっているのは団長であるヒュアキントス・クリオ。他には治癒士としてカサンドラ・イリオン。攻撃隊の被害状況の報告に来ていたダフネ・ラウロス。そのほか親衛隊十二名の計十五名。

玉座の間に通じる塔の中腹部が巨大砲撃によつて撃ち抜かれた結果、彼らは塔の最上階に取り残される結果となったのだ。頑丈さが取りえだったからか、崩落して壊滅と言った事態にはならなかったものの、団長および副団長が分離させられて指揮を執る事が出来ない状態に陥っている。

「糞っ、こんな魔法が使えるなんて！」

親衛隊の一人が叫ぶ声を聞き、ほぼ全員が同じ思いを抱く。

魔法の威力、それから射程距離は詠唱の長さ按比例する。城塞ほどの場所においても石材で作られており、なおかつ分厚い事もあり生半可な短文詠唱級では貫く事などできやしない。

警戒すべきは散発される魔力が察知しやすい長文詠唱級のみ——

——だったはずだ。

迂闊に近づいてくれば矢の雨を降らせ、遠方で長文詠唱をしようモノなら狙撃で射殺せばいい。そう考えていた彼らの想定を遥かに上回る超々超遠距離からの砲撃。

「騒いでも仕方ない、崩落部の修復は可能か？」

なんとか冷静さを保とうと冷や汗を流しながらもヒュアキントスが尋ねれば、親衛隊の一人は——破壊された部分の確認に行っていた彼——震えながらも返答を返した。

「不可能です。基礎部分は頑丈に作られています、この玉座の間は増設された部分のため修復ができません。それに破壊された付近の階段は不安定になっており……下手に近づくと崩落に巻き込まれるかと」

彼の返答にヒュアキントスとダフネが眉を顰め、部屋には重苦しい空気が漂い出す。

このままではまずい、何かしなくてはと親衛隊の面々も含んだほぼ全員が思考を巡らすさ中、一人の少女は両手で鏡を持って西に向けてそれを向けて振っていた。

「見ないで、こっちを見ないで！」

必死の様子で鏡を振るう彼女を無視し、ヒュアキントスは額に青筋を浮かべながらもダフネを見下ろした。

「ダフネ、アレをなんとかしろ」

「……無理」

この玉座の間に到着して以降、カサンドラ・イリオンは狂ったように鏡を西に向けて振るい続けている。

何が彼女を駆り立てるのは誰にも理解できないが、彼女曰く『竜の目を逸らせる為』らしい。

誰にも理解できず、最初こそヒュアキントスがやめる様に口にしたものの、頑なにやめない彼女にしぶれを切らして鏡を取り上げようとしたさ中にダフネがやってきて——その直後に塔の中腹に砲撃が叩き込まれたのだ。

団長の指示が通らなくなったことで、城壁上の混乱を治める事ができない。とはいえ隊長格の者達が必死に各々動いているおかげか城塞内部は一応の所は目立った混乱はない。

城壁部の警備を任せていた外部冒険者と、攻撃隊に編成されていた傭兵たち。彼らの混乱を治める事が出来ておらず、城壁と中庭では混乱が続いている。

「これだから何の訓練も受けていない者達は……」

「中庭にはリッソスが居た筈、その辺りは混乱が少ないから、彼らが立て直してくれば……」

どかりと乱暴に玉座に腰掛けたヒュアキントス。彼は苛立ちを示す様に膝を揺すりながら二人の親衛隊に指示を出す。

「お前達、階段部の修復に向かえ。最低限降りれる様にするだけで構わん」

「え、ですが……」

「二度は言わんぞ」

崩落の危険がある階段部の修復。いくら冒険者とはいえ崩落に巻き込まれて転落すれば無事では済まない、とはいえこのまま座して待つ訳にもいかなないと苛立ち交じりのヒュアキントスは残された者達を見回し——爆音と共に南側の硝子が砕け散って玉座の間に降り注いだ。

砲撃が叩き込まれた直後、南側の城壁でも混乱は発生していた。

攻撃隊壊滅の知らせを受けた彼らにとつて、城砦の反対側で発生したその報せについて深く考える事をしなかった。直接目にしなかったことも大きいだろう。彼らにとつては対岸の火事であったのだ。

それが変わったのは砲撃によつて最上階に玉座の間がある塔の中心腹が撃ち抜かれてからであった。

城壁で大型弩バリスタについていた者達や、見張りとして歩き回っていた者達も全員が目にした脅威の一撃。発生距離は通常の魔法では考えられない超遠方からの魔法ほうげき。

混乱に陥り、戦争遊戯ウォーゲームを投げ出して逃げるべきかと思案し始める彼らの中で、一際目立つ大男が声を張り上げて叫んだ。

「おい不味いぞ」「こんなの聞いてねえ」「報酬が旨い上、相手はただの弱小だって聞いてたのによ」

「静まれいっ！」

大声が響き渡るさ中、大盾を片手に持った牛人の男が大戦斧の石突を城壁に叩き付けた。

「何を恐れる必要がある。あのような砲撃、一度放てばしばし放てま
い」

力強く叫ぶ彼の言葉に、徐々に落ち着きを取り戻す南側の防衛隊の
面々。

牛人————大盾に大战斧を持った身長2 Mメドルを超える巨軀を持つ、オラリオ外のレベル3、第二級冒険者の言葉に納得した彼らがなんとか持ち場に戻り始めた所で、一人の冒険者が声を張り上げた。

「敵だっ！」

一斉に弓を手にした冒険者達が城壁から顔を覗かせれば、そこには南方から静かに歩んでくる一人の人物の姿があった。

混乱にあるとはいえ数多の冒険者が詰める——各方面五十人ずつ、加えて城壁にはそれぞれレベル3の傭兵が一人配置されている。中央にも一人で計五名のレベル3が配置されている。

其処に対して無防備に歩み寄る全身にマントを纏った人物。

その背中には巨大な布の塊——形状からして剣らしきもの——を背負っていた。

「なんだありや……」「一人か?」「んだよ、驚かせんなつての……」

奇怪な姿をしている謎の人物。

頭部の形状もおかしい。多分だが、全身鎧を纏ったその上からマントで全身を覆い隠しているのだ。

まず間違いなく敵であろう。だが、たった一人で詠唱する訳でもなく、黙々と歩んでくる姿に皆の警戒が解けかける。

「油断するなっ、何をしでかすのかわからん者達だぞ!」

レベル3の放った警戒の声に反応し、彼らが気を引き締める。

弓を引き絞り狙いを定めて謎の人物を睨みつける。総勢三〇を超える鏃に狙われたその人物は、何の気負いもない様子で黙々と歩んでくる。

陽動かと訝しんだ牛人の男が大型弩をちらりと見てから、肩に大型弩を担いで城壁からその人物を見下ろした。

古びたマントが風に殴られる音のみが響き、歩む音はとても静かだという事に気付いた彼が、あの人物は只者ではないと判断して矢を射る様に命じた所で意味がないと判断して周囲を見回して叫んだ。

「俺が出るっ」

「は? いや、だが……」

他の者が止める間もなく、彼は近場に置いてあった縄を手に取って大型弩に引っ掛けてから壁面を飛び下りた。

高さ一〇Mはある城壁から縄を使って器用に降りた彼は、駆け足で謎の人物の前に向かい、五M程の距離をおいて対面した。

わざわざレベル3が出る程なのかとぎわめく城壁の上と異なり、向かい合った二人は一瞬だけ視線を向け合うのみ。城壁からの距離はおおよそ一〇〇M程。^{メートル}余りにも自然な歩みに毒牙を抜かれたがゆえの事に牛人の男は白髪混じりの頭を撫でて笑みを浮かべた。

「ふむ、まずは名乗らせてもらおう——」

「不必要です」

牛人の言葉を遮り、女性の声が響く。彼の謎の人物が女性だとわかった牛人が驚きさ中にも、彼女は背負っていた剣の柄に手をかけた。

「逃げるなら、今の内……と言いたかったです。不可能です、どうか恨まぬ様に」

「何を、言つて」

マントの隙間から覗くその姿は、全身深紅の鎧を身に着けていた。飛竜の鱗や皮で作られた全身鎧。美しい鮮やかな紅の色合いに目を奪われかけ、次の瞬間、背筋を凍り付かせる赤を目にした。

彼女が背負っていた布の塊、刀身を隠す様に巻かれた布が解けてその姿を余すところなく曝け出す。

深紅、彼女が身に着けている鮮やかな紅とは異なる、禍々しい程の紅。まるで溶けだした岩、溶岩を更に煮詰め続けたかのように、目を貫き焼く様な深紅の刀身。余りの色合いにまるで太陽を直視したかのような痛みに襲われ、牛人が勘に従って大盾を構えて防御姿勢をとる。

紅の竜鱗鎧を纏った彼女は、小さな眩きと共にその名を開放した。

——『火山』

瞬間、赤が弾ける。

南側の城壁、そして南東、南西にあった側防塔を一瞬で赤が呑み込んだ。

余波によって城塞内部の硝子が砕け散り、熱風が城塞南部から広がって半分程を飲み込む。

それは太陽を彷彿とさせる様な爆発であり、獄炎であり、呑み込まれた者は何が起きたかもわからずに消えゆく。

『鏡』に映し出されていた光景が一瞬で赤に染まり、目を焼く極光に近い深紅の光が街の各所に現れた『神の鏡』を通じてオラリオを照らした。

真昼の太陽にも勝る深紅の光。余りの光の強さに目にしていた全ての観客、神も人も無関係に一瞬だけ目を焼かれ、何が起きているのか判別不能に陥る。

『目があつ！ 一体何が起きたんだあ！』

『うむつ、あれはガネーシャだなっ！』

『それ言いたいだけでしようガネーシャ様はっ』

超々遠距離砲撃魔法によって沸き立ったオラリオは、次に砲撃を放とうと準備していた謎の狐人に沸き立った次の瞬間に発生した太陽の降臨に見紛う程の光に焼かれ、皆が目を抑えて悶える。

そのさなかにあつてなお、実況のイブリと解説役のガネーシャは平常運転を行っていた。

拡声器によつて拡散される声を聞きながらも、アポロンは目を抑えて信じられない光景を脳裏に思い浮かべ、同じく目を抑えていたヘステイアに叫びかけた。

「あれはなんだというのだ！ ミリア・ノースリスだと!?!」

アポロンの怒声と、神々の『目があゝ目があゝ!』という阿鼻叫喚の地獄絵図となつている会場にて、ヘステイアは目を抑えながらもアポロンに応える。

「そうだよ、ミリア君さ」

「彼女は腕と片目を失つて——」

「治したんだ」

ありえない。アポロンは更に重ねて叫ぶさ中、ヘステイアは何とか目を揉み、『鏡』^{えいぞう}に視線を向けた。

『鏡』に映し出された映像は、凄惨極まりない代物であつた。

南側部分全域が焼け焦げ、城壁に至つては原型を留めていない。城塞の一部も大きく溶けて歪み、南東と南西にあつた側防塔は半分程が

融解して崩れている。未だに灼熱が残っているのか大地は赤く煮え立ち、グラグラと音を立てる溶岩に変質していた。

爆心地らしき部分は円形に取り残されており、盾を構えた牛人が残され——訂正しよう。灰とかした牛人の像が残されている。芯まで灰になる程に焼き尽くされ、爆心地近くだったがゆえに形状を綺麗に残した像。

レベル3冒険者が即死——それどころか南側の城壁に配備された五〇人の冒険者も、側防塔に詰めていた者達も、消し飛んだ光景が目に入る。

火事が起きているのか西側、東側でも混乱が広がり、城砦内部からも無数の煙が噴き出し始める。

地獄絵図とも取れる光景にヘステイアが息を呑み、アポロンが口を開けたまま固まる。

「は……はは……嘘だろ。何が起きたっ！ あれはなんなんだっ！」

目を焼かれた神々も次々に信じられない光景を目にし——歎声を上げて次々の考察を始める。

「あれなんだよ」「すげえ威力、魔剣っぽかったけど」「まさかクロツゾの？ でもあんな威力か？」

「それよりミリア・ノースリスの方、あれ今から砲撃が——あつ、撃った」

火災すら発生し始めた城塞。

西方からの大砲撃の影響で指揮系統が崩れ、南側の城壁近くで起きた爆炎によって混乱が極まった城塞に対し、謎の狐人——クシー・スナイパーの二度目の大砲撃が突き刺さる。

城壁に阻まれたかに見えたその一撃は、城壁を貫き、城砦すら貫き、さらに東側の城壁を貫いて一直線に城砦を貫き通して東側の果てに消えてゆく。

大地に刻まれた二条の直線。一射目と異なり二射目は大地を綺麗に抉っていた。

「うわあ、やべえ城を撃ち抜きやがった」「なんだあの威力……すげえ」「つて、杖が粉々に砕け散ってるんだけど、どんだけ魔力込めたんだあ

りや」

空の果てに砲撃が消え切った直後——城の一部区画が爆発を起こして神々が更に沸き立った。

「おお、爆発したぞ」「爆発効果まであるなあ、たまげたなあ」「いや、あれ多分だけど保管場所の爆薬に引火した臭くね?」「やべえぞアポロン、物資貯蔵庫吹き飛んだっぽいぞ」

神々がアポロンを囃し立てようとして彼に視線を向けたところで、漸く気付く。

アポロンが青褪めた表情でブツブツと呟きを零していた。

「うそだ……私の眷属達が……」

「なあ、アポロンの様子が……」「今ので結構死んだっぽいしなあ」「マジ?」

呆けたアポロンに代わり、ロキが指を立てて解説をし始める。

「アポロンの所はどっかの馬鹿が沢山増援入れたやろ? どうせ統率もとれんで物資のちよろまかしが多かったんやろ。せやから物資を一か所に纏めとつたと……当然、部外者を警備に当てる訳にもいかん。つまり貯蔵庫周辺にはアポロン直々の眷属しか居らんかったと——其処が爆発したんやで?」

それも、対竜用に用意された威力の高い爆薬に引火しての起爆だ。かなりの量が貯蔵されたそれが起爆すれば、威力は説明するまでもない。

その周辺を警備していたのは、アポロンの眷属のみであった。

故に、彼の貯蔵庫爆発の被害は主にアポロンファミリアの眷属だけとなる。付け加えると、そこまで敵が侵入してくる事を予測していたかったアポロンファミリアは、周辺の警備を下級冒険者に任せていたのだろう。

結果、下級冒険者ではとてもではないが耐えられない爆発を至近距離でくらった者が多数出た事で即死した眷属も多いだろう事。

「しっかし……なんやあのヤバイ魔剣、ヘファイストスは何か知ってるん?」

ロキの問いかけに対しヘファイストスは眉を顰め、深い溜息と共に

応えた。

「結晶、魔剣に使うと威力強化できる結晶があつたのよ」

「ほう？ それで？」

「椿がなんかこそこそやってたのは知ってたけど……多分、椿に唆されたヴェルフがやったのね」

へファイストスが頭を抱え、鏡を見て呟く。

「使った子、多分死んではないけどあれ以上戦えないわよ」

鍛冶神の言う事は、間違っていないかつた。

全身を赤飛竜の鱗で作った鎧で防御し、なおかつ要所要所に^{サラマンダー・ウール}火精霊の護布を巻く事で更に耐火性能を上げ、炎の中を歩き回れるという程の耐火性の装備を身に着けた女性。

リユー・リオンは川に半身を付けながら、黒焦げになった手甲を慎重に外していた。

「まさか、ここまで威力とは……」

本気で死ぬかと思つた。そう呟きながらも右腕の手甲を外し、その内に収まっていた自らの腕が真っ黒い炭になっていたのを見て冷や汗を流して焦る。

ポーチから^{エリックサー}万能薬を取り出そうとし、ポーチが黒焦げになっているのを見て口を閉ざす。

身に着けていたマントは完全に焼け、ポーチ類も焼け落ちた。耐火性に優れた竜鱗鎧はなんとか原型を留めているものの、それでも黒焦げになっており、魔剣を振るつた右腕に関しては炭化していた。それも右腕に関しては^{サラマンダー・ウール}火精霊の護布を二重に巻いてあつたにも拘わらず、でありその威力がうかがえる。

溜息を零した彼女は残っている鎧の部位を外し、川に投げ落とす。ジユツと音を立てて熱せられた鎧が川に沈むのを見て、下手に動かすと折れそうな右腕を庇いながら川の傍に置かれた荷物に手を伸ばした。

「不味い、ですね」

使用者すら殺し尽くす、呪われた魔剣。『クロツゾの魔剣』と組み合わせられて使われた結晶によって威力を引き上げられた——引き上げ過ぎた彼の一撃。彼の城を、それこそたった一撃で破壊できるのではないかという程の破壊を撒き散らしたその一撃の代償としては、かなり少ない方だろう。

「右腕一本で、城を墮とせる……」

否、命一つで城を墮とせる。それほどの威力の代物。

ヴェルフが魔剣を打った際に褒美と称して椿からキューイの素材を用いた耐火性の全身鎧を渡されていなければ、レベル4のリユー・リオンとはいえ即死していたに違いない。

「他の人に任せなくて正解でしたね」

もしレベル3の誰か——アマゾネスの女性に任せていれば、彼女は間違いなく死んでいた。

それこそ、耐火性の鎧を身に着けた上で、焼け死んでいただろう。そうならばミリアの精神に多大な影響を齎す。そうならぬ為にもリユー自らがこの役目を買って出たのだから。

「……早く治療を済ませなくては」

第一二四話

轟々と燃え盛る城塞。

ウォーゲーム 戦争遊戯の舞台として選ばれた『シユリーム古城跡地』。

運び込まれていた無数の火薬樽が衝撃で起爆した事と、南側の城壁を融解させるほどの熱量を持つ強烈な魔剣の一撃によって発生した火災は、東側、西側に大きな混乱を巻き起こしていた。

「火事だー」「水をつ」「熱っ、大型弩が炎で熱せられて使えなくなつてやがるっ！」

傭兵として雇われた者。自ら売り込んで勝ち馬に乗ろうとした者。多種多様な冒険者が集まる東側では、杖を片手に老エルフの男が目を細めて周囲の喧騒を眺めていた。

「ふむ、騒がしいな」

レベル3、都市外の魔術師の中では相応の実力を持つ老エルフ。西側の城壁の守りを任された彼は小さく呆れの吐息を零すと、その老体に見合わぬ声量を以てして、周囲の冒険者を落ち着かせるべく声を上げた。

「皆落ち着け。氷の魔剣を持つ者は火を消せ、風の魔剣を使い熱を退けよ」

落ち着きのある、重厚な声に押されて周囲の者達が氷の魔剣を使い南側から迫る熱風を冷やし、足りぬ分は風の魔剣で押し返しはじめ。十二分な数の用意された魔剣によって東側が徐々に落ち着きを取り戻し始めているさ中、西側では収集の着かない混乱が発生していた。

「やばい、物資貯蔵庫が……」「おい、腕が飛んできて……うえっぶ」「嘘だろ……何が起きたっていうんだっ」

城塞内部の物資貯蔵庫は城砦西側の端に位置していた。結果、貯蔵庫起爆によって西側の中庭には吹き飛んだ瓦礫などが降り注ぎ、西側城壁の防衛隊に多大な被害を出している。数人は当たり所が悪く気絶したりし、貯蔵庫近くの壁に凭れ掛かっていた者等は爆風の直撃で重症。周囲を警戒していたアポロンファミリアの正規団員が爆散し

て飛び散る等、至近距離で凄惨な場面をも目撃した彼らの混乱は留める事が難しい。

加速する混乱の最中、西側城壁の上から負傷者が発生した中庭を見下ろしている青年は鉄製の手甲を打ち合わせて嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「いいねえっ、楽しくなってきたじゃねえかつ」

「おい、テメエなに言ってるんだよっ」「あんたレベル3だろ！　なんとかしてくれよっ」

西側の城壁の防衛を任せられたレベル3のヒューマンの青年。鈍い色合いの茶髪を揺らした年若い彼の周囲にはこの混乱のさ中、レベル3の肩書を持つ彼の周囲に集まってその強さに助けを乞うている。

鬱陶し気に群がる冒険者を一瞥して、彼は舌打ちと共に口角泡を飛ばす獣人の冒険者を一人、殴り飛ばす。吹き飛び城壁に叩き付けられた所で、周囲の冒険者が口を閉ざす。

「うるせえんだよ、まったく面白くなってきてんだろ？　雑魚を潰すより敵は強え方が良い」

「何を言ってるんだアンタ……」「おいやめとけ、そいつ喧嘩屋だぞ……」「糞、なんで西側にはまともな奴が配置されてねえんだよ」

指揮をとるでもなく、レベル3の彼はニヤニヤと周囲を見回して何かを探し始める。それを見ていた冒険者達は彼が当てにならないと判断して各々の判断で動こうとしはじめ——優男風のエルフが駆け上がってきて短剣片手に声を上げた。

「空を見ろっ、深紅の飛竜が近づいてくるぞっ」

「なっ！」「大型弩^{バリスタ}を使えっ」「早くしろっ」

優男風のエルフに指摘され、冒険者達が空を見上げれば赤い特徴的な飛竜——^{ドラゴンテイマー}竜を従える者が従える竜の一匹、^{レッドワイヴァーン}赤飛竜が城を伺う様に西側の端を旋回している姿があった。

慌てて西側城壁上に設営された大型弩^{バリスタ}で迎撃準備をしはじめ。

軽薄そうなエルフの指示に従い、全ての大型弩^{バリスタ}が空を飛ぶ赤飛竜^{レッドワイヴァーン}に向けられるさ中、レベル3の喧嘩屋の青年は目を細め、戦場を見回して舌打ちを零す。

「真正面から殴り合いは……出来なさそうだな」

空を駆る飛竜の背には、白髪のヒューマンらしき少年と金髪の小柄な少女——小人族の少女だろう人物、それに赤髪の青年。都市外でも噂になっていた世界最速兎のベル・クラネルと竜を従える者のミア・ノースリス。それともう一人は事前にアポロンファミリアからの情報の中にあつたレベル2の鍛冶師。

乗り込む積りなのかと青年が目を細めるさ中、その飛竜は徐々に旋回を交えながら城に近づこうとし——放たれた大型弩の大矢に怯んだのか直ぐに距離を取り直す。

幾本も連続して放たれる矢。一射する度に空気が震えるその矢は、大きな弧を描いて飛竜に届かず大地に着弾しだす。西側の森に着弾して大量の土埃を上げる矢を見つつ、彼らの狙いを見定めていた彼は——背後からの爆発に呑み込まれた。

『おおおおおと、これは、何が起きているんだあつ。内側から爆発が発生したぞおつ!』

実況者の声が盛大に響き渡り、オラリオから戦況を見ていた者達の頭には多数の疑問符が浮かんだ。

飛竜の登場と、背に乗るミア・ノースリスの右腕がある事に違和感を覚えた神々が『義手か?』『義手だろ』と話し合いを始めた直後、西側と東側の城壁が内側から爆破されたのだ。

城塞内部から飛び出し、西側に二人、東側に二人。合計四人による内側からの強襲……おかしな話である。

西側には両腕の白いアマゾネスの少女と若いドワーフの男。東側にはエルフの少女とアマゾネスの女性。各々の手に握られた二振り
の魔剣が振るわれる度、紫電や爆炎が弾け、多量の土煙が立ち上る。

外側に向けられた大型弩を内側から吹き飛ばし、操作していた者達
諸共城壁の外側へと吹き飛ばす。

指揮を執り行っていた東側の老エルフは察知したのか回避し内側からの奇襲に対応すべく短文詠唱魔法で応戦しはじめており、それに

呼応する様に散発的にはあるが東側では反撃が行われていく。

西側の指揮官だったヒューマンの青年は初撃を食らい行方不明。上空の赤飛竜の対応をしていた影響か彼らの反応は遅れており西側は内側から壁が粉碎寸前に至っている。

内側から出現した者達の顔を見た瞬間、アポロンが絶叫を上げた。「あれはっ！ ロキイツ！ あれは貴様の眷属ではないかっ」

アポロンの絶叫を聞いた神々の視線がロキに集まるさ中、ロキは感心した様に吐息を零して『なるほどなあ』と呟きを零す。

太陽神が憤る中、ロキは肩を竦めた。

「あれはヘステティアん所にやった眷属やぞ。もうウチの子やない」

「は？」コンバージョン「改 宗した子……あつ、欠損した子達じゃね？」「でも普通に戦ってね？」

都市内でも有名なロキファミリアに所属した冒険者。レベル2の者達の顔こそ、ごく一部の者しか覚えておらずともレベル3ともなれば誰しもが一度は目にしたことがある有名な者達だ。数ヶ月前に手足を欠損し、冒険者を引退したという情報は、一部の神々の中でも共有されている。

「あのアマゾネスの子、レベル3の【双拳乱舞】でしょ？ 確か盲目になつて冒険者やめたつて……赤眼だっけ？」

「なんか普通に戦つて……ていうかあの子らの使つてる魔剣、威力高すぎね？ パリスタ 大型弩半分以上吹き飛んでるんだけど」

「あのドワーフ、片腕と片足無くして引退した【不動城塞】じゃね？ 義手と義足……じゃないな、あの動き」

神々が考察を進めるまでもなく、西側城塞が粉碎されかかり——
—通常の魔剣では考えられない程の威力を以て、西側の城門が粉碎されて大穴が開いた。

城壁上に残された数少ない者達や、負傷を負いながらもなんとか反撃を行おうとする中庭の者達。西側のドワーフの男と両腕の白いアマゾネスは魔剣が壊れると同時に城塞内部に駆け戻る。

「なんで内側から出てきたん？」

「ガネーシャファミリアが穴掘つて城塞攻略したんじゃなかったか？

穴が残ってたとか？」

「それはないな。しつかり埋め立てただろうしアポロンファミリアも確認しただろ」

あまり奇策の数々。オラリオの観客にも何が起きているのかわからずに混乱が広がるさ中、アポロンは目を見開いて西側城壁の先——
——林を踏み倒しながら一直線に迫る重装竜アーマードドラゴンの姿を見て悲鳴を押し殺した。

西側城壁の上部。設置されていた大型弩の半数が破壊され、半数近くにまで減った防衛隊。

中庭に居たドワーフの男と両腕の白いアマゾネスが魔剣を放つだけ放って城塞内部に再度戻っていった直後、隅の方で隠れていた優男風のエルフがちらりと視線を向けた先、西側に広がる林から一匹の重厚な黒色の竜が真つ直ぐ突撃してくる姿があった。

「作戦通り……つと、そろそろ北西の塔を占拠しないとだな」

彼が背を向けて北東の側防塔の入口から内部に侵入した直後、轟音と共に重装竜アーマードドラゴンが西側の破壊された城門を更に粉碎し、城壁内部に侵入する。

北側で起きた攻撃隊壊滅。南側で起きた特大規模の魔剣の一撃。空を飛び注目を集めた赤飛竜レッドファイヴァーン。その直後の内側からの魔剣の砲火。混乱が極まりまともな統制もとれなくなった西側城壁は、想定していたはずの重装竜の突撃を防ぐこと叶わず、加速する混乱の中で竜によって蹂躪されていく。

東側城壁では、魔剣によって無数の大型弩バリスタに被害は出たものの、人数はまだ四〇人程が無傷で残っていた。

老エルフの魔術師の指揮によって混乱は落ち着き、中庭に現れた赤目のアマゾネスとエルフの少女に向かって矢を雨の様に降らした事で撤退に追いやる事に成功していたのだ。

「うむ、おかしいな……あれは、敵だろうな。話によると欠損した冒険者なのだろうが」

老エルフが唸るさ中、彼の周囲に集まった傭兵冒険者が慌てた様に空を指さす。

口々に叫ぶ言葉を聞き、老エルフは目を細めて感嘆の吐息を零した。

「なるほど、本命はあれか……いかなな、大型弩が殆ど使えん。手練れの策士でも居ったか……」

彼が鋭く睨む先、空を駆る赤飛竜が陸上の孤島と化した玉座の間に一直線に迫る姿があった。

「じよっ状況報告しろお!? 今何が起きているっ!?!」

——城塞北側の中庭では。

怯え切った一五〇人の攻撃隊と、五〇人の防衛隊。いつの間にか猫人の青年とヒューマンの青年が居なくなっている事にも気付けない程に、リッソスは当惑し判断に窮していた。

これがヘステイアファミリアの作戦だと考え付かない程に、混乱極まった城壁内部にて、唐突に城門が開きだす。

「何が起きたっ!?!」

「逃げろっ!」「こんな所で死にたくねえっ!」

混乱の最中、開く門を目にしたリッソスと少数のアポロンファミリアの正規団員が見たものは、恐怖に怯えた増援の冒険者達が勝手に門を開けて散り散りに逃げ出していく光景であった。

城壁上部の防衛に当てられた——大型弩の人員も我先にと逃げ出しているさ中、リッソスが統率をとろうにも混乱した彼らにエルフの叫びは届かない。

「糞っ、このままでは……」

「大変だ、南側城壁が壊滅して、西側から竜が侵入してきてるっ。東側の大型弩も殆ど使えなくなってるやがる!?!」

逃亡者が続出し、統率のとれなくなった北側の中庭に駆け込んできたのは、初回の強襲で放心していたルアン・エスペルであった。彼は駆け込んでくるなり他の城壁部がどうなっているかの状況を報告し始める。

話を聞いた団員が当惑する中、彼は開いた門を指さして叫んだ。

「今すぐ全員で出撃しろ!! 相手の旗をぶつ壊せば良いだろうっ!」
「ぜっ、全員だどっ!」

ただでさえ逃亡者が出て防衛隊人数が激減している今、守りを捨てるに等しい彼の台詞に驚く周囲だったが、次のルアンの言葉に反論を封じられた。

「この戦争遊戯ウォーゲームの規則ルールを忘れたのかよっ! 相手の旗を壊せば終わるんだぞ! 玉座の間には団ヒューキントス長と親衛隊がいるんだ、それに通じる道はアイツらが破壊しやがった! あいつらがオイラ達の旗を壊す前に相手の旗を壊せば良いんだよ!」

やられる前に、やれ。どのみち、既に防衛する意味は無いに等しい。ここから立て直して直して防衛に専念する事等、不可能なのだからさっさと旗を破壊してしまえばいい。むしろそうしなければこのまま城塞は粉碎されて終わりだ。

「考えてもみろっ、透明化は出来たとしても数は増やせないだろうっ! 赤飛竜は空を飛んでやがるし、重装竜は西側で暴れてる! 今ならあの座禅組んでる奴しか防衛してる奴がないんだから余裕だろうっ!」

彼の言葉にリッソスが目を細め、残された数少ない者達を見回す。残っているのは、僅か八〇人程しかない。半数以上が逃げたとはいえ、残っている者達は怯えながらも武器を片手に戦う意思を見せている。

相手の旗の防衛状況を考えれば十二分だろうと彼が判断し、声を張り上げた。

「これより出撃するっ! 身軽にする為に馬車は使わない、出られる者は私に続けえっ!」

小隊長リッソスを先頭に、既に開かれていた北門をくぐって八〇人が出撃していった。

彼らの出撃を見送ったルアンは目を細めて呟く。

「ニコト様、後は任せます……」

混乱の続く城塞に視線を向け、ルアンは顔を上げて城塞内へと走っていった。

融解する程の熱量によって完全に破壊された南側城壁は言うまでもない。

西側は指揮官が頭の良くない喧嘩屋染みたヒューマンと言う事で西側を積極的に攻撃させてもらったが、狙い通りであった。

空に注意を釘づけにしてからの、内側からの破壊工作——最初
の攻撃隊撃破時に煙幕と共に、最初から内部に侵入していたリルカ
とガネーシャファミリアからの増援の乗った馬車にロキファミリア
からの増援五名を乗せて侵入。

彼等にはあらかじめ砲撃位置を知らせておき、その位置から遠い場所
で待機してもらい、折を見て内側から持ち込んだ『クロッゾの魔剣』
を使って西側と東側の大型弩を破壊してもらう。北東と北西の側防
塔の装甲型だけはどうしようもないが、それはあらかじめ侵入してい
たガネーシャファミリアの団員が制圧してくれる手筈になっている。

実際、北東の装甲型大型弩は真つ赤に燃え上がり、まるで側防塔そ
のものが聖火台の様な有様になっているし、北西の側防塔の上では猫
人の青年が半月刀を片手に手を振っている姿があった。

内側では足の速い獣人の少女が『クロッゾの魔剣』を使って通路を
次々に爆破しているのか、城塞内部からは途絶えぬ爆音が響き続け
ている。

空を駆るキューイの背にしがみ付きながら、背後のベルとヴェルフ
に視線を向け、呟く。

「準備は良い?」

「良いよ」

「……………」

作戦も大詰め。後はあの玉座の間に乗り込んで、親衛隊諸共全員を
ぶっ飛ばしてから旗を切り裂いて終いだ。

空中廊下には人はいない。彼らも下の階層の混乱を止めるべく場
を離れたのだと思う。

城塞内部は今や火災と襲撃で大混乱。アポロンファミリアの正規

団員とはいえこの混乱は想定外なのか対応が完全に遅れている。消火に当たたる者、侵入者を撃退しようとする者、崩落した通路に翻弄される者。

狼人の少女が指示通りに城塞内部の通路を魔剣で吹き飛ばしたおかげで、一部区画の封鎖や通路の限定化などが発生し、アポロンファミリア側の団員は迷路の様に入り組んだ城塞内部で迷子状態に陥っている事だろう。

「ヴェルフ？」

ふと気づけば、ヴェルフが南側の焼土と化した区域を見て目を細めていた。やはり、あの魔剣には思うところがあるのだろう……申し訳ないがああ魔剣があったからこそ、最も厄介だったレベル3の冒険者——都市外のレベル3であり、冒険者とは異なる傭兵集団の統括を務めていた牛人を消し飛ばせたのだ。彼ら傭兵団は三〇人ほどの集団で、統率のとれた厄介な者達だった。本来なら魔剣数本使って吹き飛ばす予定が、ヴェルフの作った強烈な魔剣で吹き飛ばせた。それがないければ彼らによって敗北していた可能性すらあるのだ。

「はっ、大層な威力じゃねえか……あの人は無事なのか？」

「リユーさんなら大丈夫。きつと……」

彼の魔剣の一撃を放ち、撤退して以降音沙汰が無いリユーさんの事は心配だが、今は目の前の事を片付けなければ。

轟音と共に西側の城門を完全に粉碎してヴァンが城壁内部の中庭に侵入。装甲型の大型弩は完全に鎮圧。片や聖火台と見間違える程に燃え上がり、片方はガネーシヤファミリアの増援の二人が鎮圧。

南東と南西の側防塔は強烈な魔剣の一撃で倒壊。一台は塔諸共崩れ落ちて叩き付けられて沈黙し、もう一台は溶けて鉛細工の様に歪んでいる。

北側では恐怖に負けた逃亡者が現れ、その影響で城壁上部の大型弩が沈黙。

「うっし、ヴァンも突撃したみたいだな」

「うん……」

緩やかに大型弩の射程外を飛んでいたキューイが、急加速して高い

塔に迫る。

このまま接近し、玉座の間に突撃。ベル、俺、ヴェルフの三人で陸の孤島と化した玉座の間で、ヒュアキントスと親衛隊メンバーを相手取る。下ではロキファミアリアの増援五名が城塞内部を掻き回し、城壁内部に侵入したヴァンが暴れ回り攪乱。ガネーシヤファミアリアの増援の二名が鎮圧した側防塔の装甲型大型弩バリスタで待機中。

接近を開始した直後、北側の攻撃隊が動き出したのが見えた。叶うなら、全員が散り散りになって逃げてくれれば万々歳だったのだが、それでも八〇人程が残ったのか。

彼らが走るさ中——爆音と共に攻撃隊の中央部に大型弩バリスタの矢が突き刺さった。飛び散る血飛沫からするに、運悪く直撃した奴がいるらしい。

装甲型の大型弩バリスタで待機していたガネーシヤファミアリアからの増援の三人による、極少人数の装甲型の運用。まさか仲間から攻撃されるとは思っていなかった攻撃隊は何が起きたのかわからないのか——誤射だとも思ったのか——城に向かって何かを叫んでいる。二射目が放たれた時点で彼らも散り散りに逃げていく。

攻撃隊壊滅——じゃない、まだ二〇人程の小隊が駆けて行っている。

あの攻撃隊の残りを壊滅——させている時間は無い。早く玉座の間に突っ込まなくては。

「じゃあ——キューイ、突撃っ」

「キューイッ！」

準備万端。

邪魔する物はなにもない。城壁上部の大型弩バリスタは沈黙しており、魔法使いも城内の混乱に巻き込まれて機能しておらず、弓使いの射撃は障害になり得ない。

一気に玉座の間のある塔に近づいてガラス張りの窓から突撃を——出来なかった。

窓の内側に見えたのは、此方を向いた騎乗槍の穂先——旧型の大型弩バリスタが玉座の間に六機設置されていたのだ。

「なっ!? 回避いいっ!!」

「キュイツ!?!」

緊急回避とほぼ同時、放たれた大きな鉄の矢が片翼を抉り飛ばして墜落する。

リリの諜報では、玉座の間の情報は得られなかった。ルアンはあくまで下級団員。

下っ端扱いの彼や、外部冒険者として侵入したガネーシャファミリアの増援では貯蔵庫の場所はわかってても、玉座の間の様な幹部のみが立ち入りを許される場所の情報は得られなかったのだ。

何故、初撃を外したのか。何故、肝心な場所で読み違えるのか。何故、ここぞという場面で失敗するのか。

バカバカしい読み違いだ。あんな高い所なんだから、大型弩の一機や二機、設置してもおかしくはなかったというのに。

『ああっ、惜しいっ!』

『ふむ、玉座の間に設置されていた大型弩に気付けなかったか……』

墜落していく赤飛竜レッドフレイワースにオラリオでは歓声と落胆の音が響いていた。

アポロンに賭けている冒険者達は歓声を、ヘステイアに賭けているギャンブラー神々達は落胆の声を。

実況の音が弾む中、バベル三十階の広間では、ヘルメスが唸り声をあげていた。

「速過ぎる」

「確かに、ヘステイアファミリアは速いですが……速過ぎるとは?」

唐突に口を開いたヘルメスに問いかけるアスファイ。

優男神は『鏡』の中の戦況を見ながらも口を開いた。

「アポロンファミリアさ、随分とちぐはぐで、一部が異常に速い……襲撃されて守りが無意味になったと判断した瞬間に北側の攻撃隊が出撃してる。其処に内側からの大型弩の攻撃……誘導されてるね」

「その通りですね」

内側に見事に侵入を果たした作業員。その働きによってズタズタに引き裂かれ続けている指揮系統、それでありながら、アポロン側の一部はまるで誘われる様に反撃に移っている——その反撃すらヘステイア側によって予定調和の様に叩き潰されているのだ。

「戦争たたかいというか、これは……」

「騙し合いですかね」

相手が何を思い、どんな風に考え、どんな風に動くのか。読み解き、相手の求める餌かえをぶら下げ、食いついてきた所を叩き潰す。

性格の悪さが滲み出た一方的な殲滅戦。

「まあ、アポロン側はまだ人数が二百近く残ってるし」

「ですが、八十程逃げ出してますが……」

統率のとれない増援に振り回されているとはいえ、最後の大詰めともいえる赤飛竜レッドワイヴァーンの突撃を防いだ。ヘステイア側にとって手痛い失敗であり、アポロン側にとっては初めてといえる成果だ。

「ベルくん達が空中廊下に堕ちたねえ」

「あの飛竜、片翼を千切り飛ばされたのに空中廊下に狙って堕ちた様に見えましたが……」

崩落しかけの空中廊下。その天井を突き破ってポロボロの赤絨毯の上に瓦礫と共に叩き付けられた飛竜と、その背に乗っていたベル・クラネル、ミリア・ノースリス、ヴェルフ・クロツゾの三人。彼らは素早く身を起こすと周辺警戒をし始め、下の階に続く階段に視線を向ける。

彼らが視線を向ける先。小さな円形の『鏡』に映し出された其処に、箱を担いだルアンと獣人の少女が駆けていく姿が見えた。

アポロンが驚愕に目を見開き、驚くさ中にもルアンと獣人の少女が手薄になった空中廊下に堕ちた飛竜と、それに乗っていた三人に駆け寄り——敵対しているはずの彼らにルアン達が回復薬ポーションなどを渡し始めているではないか。

『裏切りだぁーっ!?!』

観戦していた市民も、冒険者も一瞬だけ理解が及ばずに棒立ちになる。

大通りも、ギルドの前庭も、セントラルパーク中央広場も、どこもかしこも悲鳴ともつかない叫びに包まれる。

『アポロンファミリアの団員が裏切ってるぞっ!?!』

『あれはそういう事だったのか！ 全部あの小人族バルウムが扇動してやがったんだ！』

『回復薬とか渡して……あの横に立ってる狼人の女、どつかで……』

『ロキファミリアからヘスティアファミリアに改宗した冒険者だ！』

まさかの寝返り。ルアンが城砦内で治療用と言う名目で受け取り、隠していた回復薬等の道具を空中廊下に墜落したベル達ヘスティアファミリアの者に手渡している光景に、誰しもが言葉を失う。

付け加えて言うなれば、彼と共に現れた獣人の少女がロキファミリアから改宗でヘスティアファミリアに移籍した冒険者——両足の欠損で冒険者を引退したはずの狼人——である事も場を騒然とさせる。

城塞内部にはアポロンファミリアの団員が詰めていたが、空中廊下に居た者達は別の場所に移動しており人気は無い。とはいえ、彼らが空中廊下に墜落したのは誰しもが目にしていただろう。直ぐにでも彼らは駆けつけてくるはずであった。通常ならば。

続いて階段を駆け上がったのは、赤眼のアマゾネス。続いてエルフの少女、ドワーフの男、両腕の白いアマゾネス。次々に現れたのは、城砦内部を攪乱し、通路の大半を崩落させる事で迷路の様に複雑化させたロキファミリアからの増援部隊。

全員が、元欠損冒険者で構築された者達。有り得ない者達の登場、嘘か真か、欠損を治した者達が勢揃いしたのだ。

北西の側防塔から内側に向けて装甲型パリスダの大型弩を放って混乱を加速させるガネーシャファミリアの増援三人。

中腹を破壊され、玉座の間への道が塞がれた塔。そこに続く空中廊下につのつたベル、ミリア、ヴェルフ、ロキファミリアの増援五名。そしてアポロンファミリアの裏切り者のルアン。片翼を潰された赤飛竜。

中庭で暴れて注目を集める重装竜。

ヘステイアファミリアの旗の前で未だに座禪を続けるミコト。
ヘステイアファミリア側の役者の殆どが表舞台に姿を現した。

第一二五話

空中廊下に集まったヘステイアファミリアの主戦力。

側防塔の一つを占拠して装甲型大型弩^{バリスタ}を奪取した陽動部隊。

無数の『鏡』に映し出される映像には、戦場の大半が燃え上がり、黒煙に塗れて冒険者や傭兵が右往左往している姿があった。

「何が……どうなっているっ」

商売神の瞳に映るのは、必死に集めて見せ札として用意したはずの物資が黒煙を上げて燃え上がっている光景。

城塞の修繕に掛かった費用。集めた物資の送金額。脳裏を埋め尽くす計算の上で、自身がとんでもない損害を出しており、なおかつその損害が加速的に増えている事を理解して白目を剥いていた。

物資は燃え、集めた傭兵は蹴散らされ、修繕した城塞は完膚なきまでに破壊されていく。

一応、商売神は残っていた派閥の総資産の殆どをアポロンファミリアに賭けている。それで損失が補えるかと言うと、有り得ない。万が一にでも負ければ派閥は消滅するだろうが。

青褪めて損得を計算していた商売神の視線の先、一つの『鏡』に映る幼い小人族の少女、ミリア・ノースリスの姿があった。彼女こそ、最も想定外な事態を引き起こした原因であり、能力も全て調べ上げ、街中であっけなくヒュアキントスの手によって戦闘力を削られた人員だったはずだ。

その人物を見て舌打ちを零し——商売神は目を見開いてもう一度彼女をまじまじと見つめる。

「目と腕が……見えてる？ まさか……いや、だが……」

目まぐるしく回転する商売神の思考。つい先ほどまでの絶望を掻き消す程の衝撃的な事実。

ミリア・ノースリスだけではない、空中廊下に集まったロキファミリアからの増援も、側防塔の一つを占拠して混乱を加速させているガネーシャファミリアからの増援も、その誰しもがとある欠陥を抱えていたはずである。

そう、身体部位の欠損。腕、足を無くし、冒険者を引退した者。五感の一つの視力や聴力を失った者。そういった者達だったはずだ。そんな彼らが、五体満足で動き回っている。

視力を失っていたはずのロキファミリアの第二級冒険者も、その目で油断なく周囲を見つめている。

「そうか！　そういう事かっ!!」

「おっ、遂に頭おかしくなったのか?」

「アポロンに協力したせいで大損して狂ったか?」

好き勝手呟く神々を無視し、商売神は『鏡』に映し出される惨状を見て青褪めて嘆くアポロンの背を見て舌打ちをし、立ちあがってヘスティアとロキを交互に見て口を開く。

「ヘスティアファミリアが欠損を治せる薬を作った……いんやあ?」

そうじゃあありやしない。あくまでもヘスティアファミリアは探索系……そうですかい、そういう事ですかあ」

粘性を感じさせるほどの声でにんまりと笑みを浮かべた商売神の視線がディアンケヒトファミリアのある方角に向けられ、直ぐにヘスティアに戻る。

「なあるほど、つまりディアンケヒトの旦那がアツシらと取引を断つたのは……アレがあつたから」

点と点を繋げ合わせ、商売神が出した結論。

「ミリア・ノースリスの連れてる飛竜、そのどちらかが部位欠損を治せる薬の素材になる。ディアンケヒトはそれを知っていて、黙っていた」

「そしてロキとガネーシャはその部位欠損を治せる薬または道具を交渉材料にヘスティアファミリアが取り入った訳ですかい」

唐突に立ち上がったブツブツと聞こえるか聞こえないか程度の声量で呟き始めた彼の姿に、神々はざまあみろと煽ったりしているが、彼の耳には届かない。

遂には『完全に壊れちゃったみたいだなあ』と若干同情めいた視線を向ける神まで現れる。

「部位欠損を治せる薬、それがいくらになるのかなんて……ふふっ、つ

まりアツシに運が回ってきてますな」

この戦争遊戯にアポロンファミリアが勝利さえすれば、損失全てを埋めて有り余る利益が得られる。看板に着いた傷の事も、集めた物資が消し飛んだ事も、傭兵達が数多く損耗した事も、全てを水に流してしまえる程の莫大な利益。

一本で、いくらになるだろう。そんな損得勘定をし始め、ニヤニヤと笑みを浮かべてヘステイアを見つめる商売神。

つい先ほどまで莫大な損失に青褪めて泡を吹きかけていた者とは、まるで別人と言える変わりように周囲の神々がドン引きしたように距離を置いた。

「まあ、もう勝ちも確定でしょう」

ミリア・ノースリスは杖無しであの強大な魔法は使えない。もし使えるのであればあのまま砲撃し続ければ良かったのだから、それをせずに突撃したという事は、あの魔法は使えないと公言してるも同然。彼女が玉座の間に通じる塔の中腹を破壊した事で、彼らは玉座の間に辿り付けない。

そして、もうすぐアポロンファミリアの一部の者達がヘステイアファミリアの旗印に辿り付く。開始直後から瞑想を続けるヒューマンの少女が居るが、タケミカツチファミリアからの増援でレベルは2、しかも上がってから一年も経っていないので大した能力もない。向かっている二十名程の集団をたった一人で止める事等不可能。つまりアポロンの勝利は揺らがない。

商売神はほくそ笑み、ロキやガネーシヤを鼻で嗤った。

「すごい、すごいね、アイズ!? 本当にあそこまで無傷でベルを送り届けたよ!」

「うん……」

都市北端。

遠く離れたロキファミリアの本拠でも。

『鏡』に映し出されているヘステイアファミリアの快進撃に、テイオ

ナが瞳を輝かせていた。

彼女の隣では金色の瞳でじつと何かを探る様にミリアを見据えている。

「確かに良くやりますけど……最初っからあの凄い威力の魔剣で城ごと吹っ飛ばせばよかつたんじゃないですか？」

アイズ達が鏡の真ん中に陣取っている中、背後でティオネが疑問を口にした。

「アマゾネスらしいのお、その考え方……」

「そんな事をしてしまったら、灼熱地獄の中でアポロンファミリアの旗印を探さないといけなくなってしまうだろう？」

城の南側。強烈な魔剣の一撃によって灼熱領土と化し、未だに真っ赤な溶岩の海になっている領域を指さしたフィン。

発動からそこまで時間が経ってはいないとはいえ、それでも赤々とした灼熱地獄と化したその領域は、生半可な対応策では真面目な活動もできないだろう。

「でも、旗印も一緒に……」

「旗印は魔法的な効力では破壊できない。物理的なモノでなければ、な」

炎に巻かれて焼ける事も、魔法の砲撃で破壊される事も無い。

最初からミリアの放った遠距離砲撃で旗印の破壊を狙えば、それだけで片が付く話であったが、そうはいかないのだ。

「それに、大まかに言えばここまでの作戦自体はミリアが考案したモノだ……まあ、遠距離砲撃や超威力の魔剣なんかは伏せられてたけどね」

問題は此処からだ、とフィンが呟いて鏡の一つを指さす。

「あそこの二十人の別動隊、統率は崩れかけてるとはいえ……彼らを止められなければヘステイアファミリアの敗北だ」

ヘステイアファミリアの旗印の前で瞑想を続けるヤマト・ミコトに迫るアポロンファミリアの攻撃隊。ほぼ壊滅気味とはいえそれでも二十人。たった一人で止めるには、彼女の實力では不足していると首脳陣が考えていると、

「おい、んな事よりもミリア・ノースリスの奴はどうなってやがるんだ」

ベートが口を開いた。

他の団員も集まっている本拠の応接間、ロキが設置した複数の『神の鏡』が展開されている中で、壁に凭れ掛かりながら『鏡』の一つを鋭く睨む狼人の青年。

「あのガキ、魔法は三つまでだったろ……あれも分岐詠唱魔法って奴か？」

彼の質問に対しリヴェリアが顎に手を当てて考え込み始め、ガレスが腕組をして唸る。フィンは片目を閉じてミリアを見つめ、溜息を零した。

「まあ、隠されてた彼女のスキルか、魔法の効果……竜を従える魔法ってのは本当だろし、『分岐詠唱魔法』の一つの側面じゃないのかな」
「無いな、それはありえない。全く別のモノだ……私と同じか、それとも異なる方法か、いずれにせよ彼女は四つ以上の魔法が使えるとみて間違いないな」

「ふうむ……しっかし、あの射程に威力は恐ろしいな」

フィン、リヴェリア、ガレスの三人の発言を聞き、固まっていたエルフの少女が涙目で鏡を指さす。

「あんな魔法、有り得ませんよ……」

「いや、有り得なくはない。あれは範囲が酷く狭い、代わりに威力と射程……いや、威力の一点特化だな。高い威力であるがゆえに、遠くまで届く。結果的に射程も長く見えているだけだ」

威力への極振り。魔力の全てを威力に注ぎ込み、遠くまでその威力が維持された状態で発射される。結果として射程にも優れた魔法であるともいえるのだ。

「とはいえ、杖の制御無しではあれだけの長距離砲撃は不可能だろうな」

「杖、粉々になってましたね……」

二度目の砲撃直後、ミリア・ノースリスの持っていた杖が砕け散って粉微塵になった。

それだけの過負荷が杖に掛かるといふ事は、あの最大威力を引き出すにはミリア本人の能力ステイタスが不足している事に他ならない。

「つまり、レベルが上がれば——」

「杖無しであの魔法が——」

「撃てないだろうな」

ばつさりとリヴェリアが切り捨てる。

鏡から視線を外したアイズとティオネが振り向き、リヴェリアを見れば彼女は肩を竦めて小声で囁く様に呟く。

「彼女の能力ステイタスの偏り具合からして、魔力は今後も伸びるだろう……制御能力を超えて、な」

異常に高い『魔力』に裏打ちされた威力特化魔法。逆に、魔力が高すぎるまである。そのせいか、彼女は杖無しであの魔法の最大威力は引き出せない。

「つか、結局あのガキはどういった原理で四つ以上の魔法を使ってやがるんだ？」

「実はハイエルフならぬ超ハ凄イい小人族パルウムだったとか？」「……わからん」
「思いつかん」

わたり空中廊下でその巨軀を横たえる赤飛竜。

腕がれた片翼の付け根から溢れ出した血が、ボロボロの赤絨毯を赤黒く染め上げていく。

「キューイ、まだ動ける？」

「キューイ！」

動けない！ と元気一杯に応えるキューイに呆れ顔を向け、ミリアは集まった皆の顔を見て頭を下げた。

「ごめんなさい」

本来なら玉座の間を撃ち抜くはずが外れた事、玉座の間に乗り込むのに失敗した事。既に二度も失敗を重ね、これ以上、何か起きれば勝利はより遠くなる事を理解しているがゆえの行動。

そんな彼女に対しベルとヴェルフが困ったような笑みを浮かべた。

「ううん、大丈夫だよ」

「むしろ、此処まで奴らを虚仮に出来たんだ。謝る必要はない」

重責を感じているであろう彼女に負担をかけぬ様にと言葉少なに答えた二人。リリが箱から矢束を取り出してエルフの少女に投げ渡しながらかも口を開く。

「嘆くのは全てが終わってからで良いです。今は——一刻も早く旗印を破壊しましょう」

腰の二本の曲剣を抜き放った赤眼のアマゾネスが獰猛に笑い、背負っていた大^{タワー}盾を腕に装備したドワーフが拳を振り上げる。

「此処まで来た——後少しだよ」

「空中廊下は任せろ。誰も通さん」

城砦内で巻き起こっている騒ぎが徐々に静まり、数回の爆音と共に空中廊下の先に数人の冒険者が顔を出した。

アポロンファミリアの正規団員である彼らの手には、下級魔剣。彼らは廊下で鎌首を擡げ口内に炎を貯める赤飛竜を見て怯むも、意を決した様に突っ込んでくる。

「ベル、ミリア……行ってこい」

「此処はリリ達に任せてください」

元から露払いの為に同行したヴェルフが大刀を抜き放ってアポロンの眷属を睨む。

運べるだけ運んだ大量の物資の入った木箱から矢束や回復薬。数本の下級魔剣を取り出して両手に持ったりりに背を押され、ベルとミリアが顔を合わせて駆け出していく。

後方で響く魔剣の砲火の音色と、続く応戦の音を背に向かうは玉座の塔。

予めガネーシャファミリアが横流ししてくれた地図の通り、玉座の塔は広々としていた。

石材の床に敷かれた古びた絨毯には無数の染み。通路の壁には埃の積もった絵画が残されており、まるで主亡き貴族の屋敷を思わせる雰囲気漂わせている。

「シィッ！」

「！」

「『ファイア』ッ！」

気配を殺し物陰に潜んでいた獣人の奇襲に対し、ベルが攻撃を撥ね退け、ミリアが足を撃ち抜いて行動不能に陥らせていく。

玉座の塔に控えているのはアポロンファミリアの精鋭連中。散発的に仕掛けてくるとはいえ、彼らの実力が高い事は刃交えた瞬間にベルにも理解できた。

けれど、彼らの攻撃はベルにもミリアにも届かない。

「そこっ」

「『ファイア』ッ」

徐々に減っていく襲撃。全てを返り討ちにしながら続けていく内に、古びた絨毯を踏みしめる足音は二人分だけになっていた。

——クラネルさん、貴方にはこう伝えるのは気が引けますが……加減は不要です。

続く道の先を見ていたベルは、昨夜の光景を思い出していた。

古城から離れた荒野に無造作に突き立てられたヘステイアファミリアの旗印の元での決戦前夜、一人一人が決意を語り、そして告げられた言葉の数々。

——殺さないで、なんて言わないで。そんな余裕は無いの。

——遠慮なくやれ、俺も全力の一本を持ってきた。

——どうか、自分を信じてください。必ず、旗印はお守りいたします。

——もし私達の誰かが死んでも、勝ってね。

ミリアが立てた作戦の殆どが意味を成さない程の戦力差。漸く埋める事が出来るかもしれない案が浮かび、全く見えなかった勝利へと続く道が薄らと、朧げにだけ見えた。

皆、一人一人が命懸けで挑んでいる。一瞬も油断できず、一度の失敗が取り返しのつかない事になりかねない。

ここで終わらせなくてはならない。決着を付けなくては——
家族の為にも。

屈辱を味わった事もそうだ。二度の敗北の事も、そうだ。

けれど、何よりも、家族を守れない悔しさに涙を流した。目の前で血の海に沈む誰かが、大切な人だった時の胸を掻きむしりたくなくなるような苦しさを。

——今度は、護りたい。

ただの意地、と言い換えてもいいかもしれない。

誰かに守ってもらうんじゃない。他ならないベルじぶんの手で護りたい。

一度目は酒場で、知らぬ間にミリアは倒されていた。気を取られた隙に。

二度目は街中で、焦りと焦燥で視界が狭まり突撃した自分を助ける為。

彼女を守る事が出来なかった。

三度目の今日の再戦。

古びた絨毯を踏みしめる音が止まった。目の前には崩落した瓦礫の山。

人の気配は既がない。あるのは微かに響く二人分の呼吸音。

「ベル、準備は良い？」

「うん……」

残る敵は塔の最上階、玉座の間。団長であるヒュアキントスと、彼を守る近衛兵。

全員が、精鋭中の精鋭。先ほどまでの道中の者達よりも、更に選りすぐりの者達。

ベルは短刀を全て鞘に納め、ミリアが魔法を解除して腰の剣を抜き放った。

深紅の刀身を持つ『紅炎』、蒼穹の刀身を持つ『蒼炎』。彼の最高鍛冶師が作り上げたミリア専用の武装は、彼女の瞳と同じ色合いを宿していた。

身を包む鈍色の戦闘衣バトルクロス、左腕に装備した『竜鱗の朱手甲』、そして左右の手に握られた蒼紅の剣。魔術師らしからぬ、近接戦を意識した装備に切り替えたミリア。

彼女の視線を浴びながら、ベルは手の平を見つめる。

ぎゅつと手を握り締め、正面の瓦礫を見据えたベルは——リ
ン、リン、という鐘チャイムの音を響かせた。

「敵が乗り込んできてます！」

瓦礫の撤去に従事していた近衛兵の一人が玉座の間に駆け込み、玉座の間は騒がしくなる。

瓦礫の先から感じた僅かな魔力の流れ、そして途中で撃ち落とした飛竜の事から彼の言い分が正しい事はこの場に居る誰も疑いもしない。

通路が塞がれ、逃げ場を失った彼らに取れる行動は待ち構える事のみ。

既に南側で起きた大規模な爆発によって玉座の間には数人の怪我人が出ていた。カサンドラの回復魔法で復帰した者もいるが、運悪く目に硝子片が入り失明した者はどうしようもない。『見えない、見えない』と呻きながら目を押さえて隅っこで蹲る近衛兵の存在が、場の空気を更に悪くしていた。

「ええい、何をやっているー！」

玉座の間、最奥に腰掛けるヒュアキントスは、肘掛けに拳を打ち付けた。

立ち上がって身に着けているマントを揺らし、怒り心頭で周囲に居る者達に当たり散らす。

「このような醜態を晒す等、栄えあるアポロン様の眷属として恥ずかしくないのか！」

良いように翻弄され、想定外の事態の連発。司令塔としての立場を真っ先に崩し壊され、挙句の果てに下の階層は止めようがない程の混乱に見舞われている。

もはや体裁を保つことも出来ない程に名声は崩れ去っただろう事は、この場に居る誰もが理解していた。

たった、たった十数人程度の弱小派閥。竜対策も万全に行つてなお、致命的な被害を出したのだ。アポロンファミリアの名声は地に落

ちたも同然。憤慨するヒュアキントスの美貌には眉間に屈辱が皺となつて刻まれている。

アポロンファミリア全体の足を引つ張つたも同然な商売神の派閥と、良い様に翻弄され此処まで侵入を許した団員達と、そして己自身にも苛立ちを隠しきれない。

「団長様っ、団長様!?! お願いです、早くここから逃げてください!?!」
「カサンドラ、しつこいぞ!」

玉座の間で凶行に走っていた少女の存在もまた、彼の憤慨を増大させる要因となっていた。

ロングスカート型の戦闘衣を纏う長髪の少女、カサンドラは戦闘が始まる前の早朝から、何度も何度も繰り返してヒュアキントスに玉座の間を離れる様に進言してきているのだ。必死に取り縋ってくる少女の姿が、何よりそんな弱腰な姿勢が彼の癪に障る。

「どうか、どうか、私の言葉を信じてください……!」

「黙れと言っている!?! 貴様は鏡でも振るっている!」

彼女から取り上げた鏡を押し付け、ヒュアキントスは激昂した。

主神に任せられた旗印の防衛を投げ出して無様に逃げ出す等あつていいはずもなく、そもそも負けるはずがないと彼女の主張を撥ね退ける。

「貴様にはわからないのか! もうすぐリツソス達が奴らの旗印まで辿り着く。それに下から感じた魔力の流れは今途絶え、奴らはあの崩落した階段で立ち往生している事だろう。このまま時が経てば我らの勝ち揺るがんだぞ!」

付け加えて言えば、この場に集められた近衛兵はアポロンファミリアの精鋭中の精鋭。ヒュアキントス自らが集めた彼らの実力は確かであり、さらに人数は十名は居る。

たとえ乗り込んできたとしても、近衛兵に加えてヒュアキントスマで合わされば、新人二人には間違いなく過剰戦力だ。

アイマードラゴン、レッドワイング、ルーキー、
装甲竜と赤飛竜が混じれば危うかったかもしれないが、片や城壁内部の中庭で暴れ狂い、片や片翼を折り戦闘不能。増援の冒険者等、全員が欠損しておりミリア・ノースリスも片目と片腕を失った役

立たず。

先の飛竜による襲撃未遂の際、ミア・ノースリスが五体満足だと誤認した近衛兵も居たが、彼は南側の爆発の際に片目を失って隻眼となっていたため、見間違いに違いないとヒュアキントスは判断している。

そんな彼の前で、カサンドラは泣きそうな表情を浮かべて足元に視線を向けていた。

床を見下ろす彼女は、まるで耐えきれないように自らの体を両手でだく。

顔を蒼白にさせ、いよいよ怯え始める長髪の少女。

「ダフネ、カサンドラを部屋の隅にやっておけ」

苛立ったヒュアキントスがダフネに命じ、カサンドラを隅っこに追いやろうとする。

ダフネが溜息と共にカサンドラの肩を掴んだ所で、彼女はこう、咳いた。

「雷が……」

「雷だど？」

カサンドラの呟きに、ヒュアキントスは窓の外に視線を向けて鼻を鳴らした。

砕けた窓の外には、忌々しい事に燃え盛る城塞から立ち上る黒煙が見えるが、その黒煙越しに見る空は雲一つなく清々しい程に晴れ渡っている。

「この青空のどこに雷雲がある？ 雷など落ちようがない」

憎々しい程に美しく晴れ渡る蒼穹に、ヒュアキントスはせせら笑う。

しかし、彼女は震えた声で続ける。

「違います……」

否定の言葉を呟き、頭を両手で抱えて蒼白になったまま、彼女は呟きを零した。

「雷が……昇る」

彼女の視線は、一切ぶれる事なく真下を見続けていた。

「なにっ?」

疑問を呈し、問いかけを行おうと、ヒュアキントスが口を開いた直後、

玉座の間の中央の床が罅割れ、純白の輝きが罅割れた隙間から零れだす。

ヒュアキントスが言葉を失った直後、天へと上る純白の雷光が玉座の間に炸裂する。

大爆発。

「何だ今のおおおおおおおおお——ツ!？」

バベルは絶叫に包まれていた。

「無詠唱!？」

「呪文唱えてないのにあの威力とかー!？」

「アポロンの眷属が警戒しなかつたって事は魔力の反応も無かつたって事だろ!？」

沸騰したように沸き立つ広間の神々。

詠唱を行わず、アポロン側に悟られずに放たれたベルの大砲撃に、ミアの放った大砲撃の際と同等の驚愕の声と歓声が入り乱れた。

「……、……っ!？」

はしやぎ回る神々を他所に、立ったまま固まり、開いた口がふさがらないアポロン。そして白目を剥いて『負けたら掛け金が……借金……』と零す商売神。

「………ッ!」

ヘステイアもまた、目を見開きながら『鏡』を見据えた。

投影される『鏡』の一つでは、崩落した城の瓦礫の中から現れるヒュアキントスの姿が映し出され、また別の『鏡』にはヘステイアミアリアの旗印の前で瞑想を続けるミコトの前に、アポロンファミリアの残党が辿り着く光景が映し出されている。

「あ、これヘステイアファミリア負けじゃね?」

「うわあ、此処まで来てこれかあ……」

「負けるんじゃないぞー！　ここでアポロンファミリアを止めれば勝てるんだからー！」

「くたばれー！」「負けちまえー！」

街の至る所で発生する声援と罵倒。割合は声援二割、罵倒八割と言ったところか。

三M程の距離を置いて背後で風に揺れるヘステイアファミリアの旗印。

大地揺るがす爆炎も、響き渡る絶叫も、遠くで巻き起こる騒音の全てを聞きながら、ただひたすらに瞑想を続けていた。

彼女の身の内で渦巻く魔力の流れを全て身の内で止め、外部に魔力の余波を一切零さずに、詠唱を終えて魔法を身の内に止めていた。限界まで研ぎ澄まされた集中力の中で、戦場となった古城から鳴り響く雑音は全て切り離され、彼女はただ自らの内に溢れ返りそうになる魔力を制御し、今か今かと発動の時を待っている。

そんな彼女の耳に届いたのは、エルフの青年の号令。

「よしっ、守衛は一人のみ！　今すぐ旗を破壊するぞー！」

初めて、ミコトは顔を上げた。

爆炎も、絶叫も、騒音の全てを無視し続けた彼女が、初めて視線を向けた先。

其処には煤けた襟巻を身に着けたエルフの青年と、彼に引き連れられた二十名程のアポロンファミリアの冒険者。

背後には、勝敗を決める旗印。目の前には一人では到底太刀打ちする事等出来る筈もない大人数の敵。

ミコトはただ目を細め、立ち上がった。

「っ、何か畏があるかもしれん、警戒しろ！」

ミコトを取り囲むように、彼らが散開するのを見ながらも、彼女は静かに腰の刀を抜き放った。

澄んだ音色を響かせて鞘を走り抜ける刃。切っ先をエルフの青年、

リッソスに向けたミコトは小さく頷いて自らの内にとどめた魔法を完成させる。

半径十五M^{メートル}、維持する事を重視した中範囲。

開戦からこの瞬間まで、ただひたすらに瞑想と魔力を練り上げる事だけが続けた、最高の最終防衛線を築き上げる。

自分の直上に一振りの剣が召喚され——魔法を激発させた。
「『フツノミタマ』ッ！」

大地に発生する複数の同心円。発動した魔法の中心部である深紫の光剣の切っ先は——ミコトの足元に突き立っていた。

範囲は抑えめ、けれども発生する重力は最大級。

魔法発動の中央地点に存在したミコトを、大地に叩き伏せる。

半球状^{ドーム}の深紫の檻に自らを——そしてヘステイアファミリア

の旗印を封じ込めた彼女の凶行に、リッソス達が一瞬動きを止めた。

「何をやって……まあいい、間抜けな剣士が魔法に失敗して自爆しただけだ。旗印を壊すぞ！」

リッソスの命に従い、数人が剣を、斧を、槍を手に半球^{ドーム}に近づき——範囲に入った瞬間に大地にねじ伏せられる。

頭上から感じたのは、押し潰す様な重力。立つことすらままならず、何人かが地面に倒れ伏し、ギリギリでのまれずに済んだ数人が範囲から這いずり出る事に成功する。

「なっ!? 重力魔法っ!?!」

「これじゃ近づけねえ!?!」

「どうするリッソス!?!」

驚愕の表情を浮かべた彼らを前に、重力の檻——最高峰の防衛性能を持つ絶対防衛域の内に居るミコトが、眩きを零した。

「この魔法が解けない限り、貴方達は旗に手出しできない……そして、自分はこの魔法を解く気はありません……っ!」

もし、これが障壁を発生させる魔法であったのなら。数度の攻撃で障壁は破壊できただろう。

しかし、これは攻撃魔法。それも術者が発動を止めるか、倒れない限り維持され続ける重力魔法だ。

ミコトが耐えきれずに倒れるか、魔力が尽きるか、自ら発動をやめるか。つまり、この重力の檻は外部からではどうあがいても解除できない。

「ば……ばかな……」

リッソスが重力の檻の中央、旗印の直下に跪いて剣突き立て耐える彼女を見据え呻きを零した。

彼女は自身すら巻き込んだ重力の檻を生み出す事で絶対防衛域を生み出して見せた。

「」

直後、玉座の塔が爆散して大量の瓦礫を撒き散らす。

衝撃波によって何人かが転倒する最中、一切集中力を切らす事ないミコトが呟く。

「旗印は、お任せください————護り抜きますから」

第一二六話

石材の碎片を押しつけたヒュアキントスが全身を発熱させながら立ち上がる。

周囲を覆い隠す大量の土埃。その合間から彼の目に飛び込んできた光景に、ヒュアキントスは戦慄し身を震わせる。

玉座の塔は上半分が消失していた。直下からの察知不能の砲撃により玉座の間を粉碎されたのだ。玉座の塔の上空には、純白光に縁取られた炎雷が無数の雲を蹴散らし、光り輝く太陽に向かっていく。

「な、何なのだ今のはアツ!？」

ボロ布になってしまったマントを揺らし、汚れた髪を振り乱しながらヒュアキントスは喚き散らす。

——玉座の間が白い光に塗り潰された時、彼はカサンドラの手によって砕けた窓から放り出された。

間を置かず大雷が彼の視界を焼き尽くし、弾け飛んだ無数の破片と共に地に墜落したのだ。周囲は立ち込める土埃で視界は効かず、散乱する瓦礫に埋め尽くされていた。

「カサンドラ!? アルト!? ラオン!？」

怒りとも混乱とも言い切る事の出来ない荒れ狂う感情のままに団員の名を叫ぶも、返ってくる声は無い。

次第に晴れていく視界の内、僅かに渦巻く土埃の向こう側に人影が映る。ヒュアキントスが誰何しようと口を開くより前に、土埃に映し出されていた人物はそれを突き破りながら彼の目の前に躍り出た。

——若干土埃を浴びて汚れた白い髪に、爛々と敵意を漲らせる赤玉ルペライトを思わせる赤目。

敵方総大将ベル・クラネル。隠し切れぬ敵意を全身から発散するその姿は、迷宮奥深くにひそむ殺人兎を彷彿させる。

ベルが驚愕に心揺さぶられ判断の遅れたヒュアキントスを強襲した。

「貴様はベル・クラネ——ぐうっ!？」

流石と言うべきか。ヒュアキントスは咄嗟の判断で波状剣フラムベルジュを鞘か

ら抜き放ち、真っ直ぐ愚直な突撃を慣行したベルのナイフを受け止めた。

火花が激しく散り——ヒュアキントスが押された。
「なっ!?!」

力負け。純粹なレベル差で言えばLv. 2のベル・クラネルよりも、Lv. 3のヒュアキントス・クリオの方が高い。当然、基礎アビリティの力が高からうがヒュアキントスがベルに押し負ける等あるはずもない。

それがたとえ、平静を保てぬ思考で、散乱する瓦礫で足場が乱れた状態で、強襲を受けたとしても変わるはずも無い。はずだったのだ、普通なら。

「馬鹿な……こんな、事があつ!?!」

ガギイイインツと激しく金属同士の打ち合う甲高い音を響かせ、ヒュアキントスの胴体がから空きになる。

つい一週間前の時は余裕をもって対処できたその攻撃が、彼の防御を貫いて届く。

瞬く間に振るわれた二振りのナイフが彼の胸に二条の傷を刻み込んだ。迸る血をその身に浴び、土埃に汚れた白髪が赤く染まる。先に彷彿させた殺人兎と言う印象をより深くヒュアキントスに刻み込んだ彼は、更なる追撃を行おうと刃の切っ先をヒュアキントスに向け——

咄嗟のヒュアキントスの反撃に阻まれ——なかった。

「(フアイア) ツ!」

Lv. 3と言うステイタスに任せた咄嗟の反撃。振るわれる波状剣の剣閃上に飛び込んだ魔弾によって、彼のささやかな反撃は失敗に終わる。

更に彼の腹を裂く二振りの刃。躊躇も戸惑いも微塵も存在しない、無遠慮な一撃によって彼の身に纏うアポロンファミリアの制服である戦闘衣バトル・クロスが引き裂かれる。

「ぐあっ!?! まてっ、きさっ——」

「(フアイア) ツ!」

次の瞬間、ヒュアキントスの片目が撃ち抜かれる。眼球を破壊し、

視界の片側を闇に沈め——その段に至って、漸くヒュアキントスはもう一人の敵の姿を捉えた。

大きな瓦礫の上に立った小人族。深紅と蒼穹の二つの異なる色彩の瞳がヒュアキントスを鋭く睨み、あるはずのない右腕に握られた深紅の剣の切っ先に魔法^銃円^口を作り出している少女。

——街中で左目と右腕を不能にし、無力化したはずのミリア・ノースリスがそこに居た。

ヒュアキントスの思考が真っ白に染まる。欠損した手足の再生は、他の都市と比べても非常に優れた治療道具、^{エリクサー}万能薬の量産が可能な現段階のオラリオの治療技術を以てしても不可能だ。少なくとも彼の知る限りでは。

では、瓦礫の上に立ち、鈍色の戦闘衣^{バトルクロス}に左腕に装着した竜鱗の朱手甲が特徴的な金髪で小柄な小人族が他に居るのか。そんな疑問を抱く間もなく——激痛がヒュアキントスを襲う。

失われたのは、左目。彼女から奪ったのも、左目であった。彼からすれば、余りにも些細な事である。現にヒュアキントスはそんな事にも気付けずに^{フラムベルジュ}波状剣を手放して左目を押さえて倒れ伏す。

「ぐアアアアアアッ!？」

脳髄を抉る様な激痛。視界の半分を奪われるという想像を絶する絶望——そして、そんな残された片方の視界に映る返り血で半身を染め上げた殺人兎の姿。

「ひいっ……」

ヒュアキントスの戦意が砕け散る。

オラリオでは、空気が凍り付いていた。

総大将同士の打ち合い。ミリア・ノースリスが割り込むまでもなく、ほんの一瞬でベル・クラネルがヒュアキントス・クリオを撃破する事は、最初の激突の時点で全ての者が理解できたのだ。

一切の反撃を許さずに第三級冒険者二人が第二級冒険者を撃破するという異例の事態に、オラリオの冒険者も、市民も、神々も反応すら遅れて啞然とする。

『これはアツ！ 大将同士のたたか——つてもう終わってるうっ!?』

『なるほど、ガネーシャと言う事だなっ!』

『意味わかんないですガネーシャ様ア!!』

余りにもあつけない決着に、野次を飛ばす事も忘れる観衆。

無様に倒れ伏したヒュアキントスは、目の前に立つベルと後ろの瓦礫の上に立つミリアの二人を残された片方の視界に映しながら絶句する。

自身がLv. 3で相手がたかがLv. 2二人だとか、街中で抵抗の上から叩き潰して無力化した事だとか、そんな事が些細な出来事に思える程に——絶対的な彼我の差を意識させられた。

片目を押さえ、無様に尻を引き摺って後退りするヒュアキントス。そんな彼を、ベルは驚きの瞳で見下ろした。

こんなにあつさりと、あつけなく勝利を得るとは微塵も考えていなかった。まるで、赤子の手を捻るかの様に倒してしまった事が、ベルの思考を埋め尽くし——ミリアの呼び掛けで現実に引き戻される。

「ベル、まだ終わってない」

そこで漸く、ベルはヒュアキントスから視線を外した。

もう、彼は敵とは呼べない。情けなく、残された片目に怯えの色を宿して涙する情けない姿は、いつそ哀れだった。

「不味い、旗が見当たらない」

ミリアは晴れゆく周囲を見回して舌打ちを零し、呟きを零した。

一刻の猶予すら許されない。早期に旗印を見つけ、破壊しなくてはならない。

少なくとも、先の砲撃で破壊されていないのは確実であり、この散乱する瓦礫の中からアポロンファミリアの旗印を探し出さなくてはいけない。

直ぐに行動を開始してミリアが大きな石材から飛び降りようとして——目を見開いて叫んだ。

「なっ!? ベルツ、敵がまだ残ってるっ!」

彼女の叫びにベルが耳を澄ませば——瓦礫片を蹴飛ばす複数の足音が僅かに聞こえた。

「チツ、気付かれたかつ!」

「団長っ、今助けますッ!」

「全員、かかれえっ!!」

瓦礫の影から飛び出してきたのは、アポロンファミリアの親衛隊の者達。あの砲撃を生き延びたのかとミリアが驚愕しながらも反撃の為に攻撃を開始し、ベルがナイフを構えて飛び出してきた一人の獣人の斧槍を弾き——気付く。

「ミリアッ、誰かが魔法を使ってるッ!」

「ッ!? 治癒士ッ!?」

彼らが視線を向けた先。瓦礫に埋もれた血塗れの半身を投げ出したダフネ・ラウロスの直ぐそばで詠唱をするカサンドラ・イリオンの姿があった。

彼女の役割は、治癒士。それも狂言ともいえる夢の事ばかり口にしては団員に煙たがられていながらにして、総大将であるヒュアキントスの傍に控える近衛隊の治癒士に抜擢されるほどに、優れた治癒魔法を持つ、アポロンファミリアの隠し玉。

ミリアが剣の切っ先を彼女に向け——瓦礫を押しつけて飛び出してきたドワーフの持つ大盾タワシールドによって射線を塞がれて舌打ちを零した。

「不味いつ、ベル、治癒士を優先し——邪魔ッ!」

ベルとミリア、二人を押さえようと数人の近衛兵が次々とびかか

る。反撃に放たれるミリアの魔法と、ベルの持つ二振りの紅緋色のナイフが閃く。

瞬く間に飛び掛かってきた近衛兵を片付け——雄叫びが響いた。

「よくも、よくもやってくれたなあベル・クラネルウ、ミリア・ノースリスウッ!!」

飛び散る瓦礫の破片。土埃が舞い上がり視界を塞ぎ——次の瞬間、舞い上がる土埃を蹴散らしながらヒュアキントスがベルに斬りかかった。

ミリアが援護しようとして瓦礫の上から狙いを定めようとし、足場の瓦礫に戦ウオーハンマー槌が叩き込まれて粉碎された事で失敗に終わる。

ヒュアキントスが初撃を叩き込む。続き二撃目を放つより前に、早く鋭い攻撃が咄嗟に顔を後ろに下げたヒュアキントスの眼前を抉る。一度回避し、二度目を防ぎ——ヒュアキントスは気付く。自身の体中に浅い傷が出来ている事に。

団員の決死の時間稼ぎの間にカサンドラの回復魔法により傷が癒えた事で余裕の生まれたヒュアキントスは考えたのだ。最初に一瞬で戦意を粉碎された理由等、ただ強襲された事や、自身が平静でいられなかったこと等が起因となって起こった、ただの偶然であったのだと。——しかし、

「誰だ貴様はアツ!？」

一度防げば、次には三度の剣閃が迫る。白髪を正面から捉えようとするたびに、懐へ、側面へ、死角へ、視界外へと潜り込まれ、怒涛の連撃が放たれた。

過去の交戦の際の記憶が霞み消え、つい先ほど感じた恐怖を再発させ、ヒュアキントスは必死に抗う。

自ら斬りかかったにも拘わらず、防戦一方で反撃もままならない。唯一の救いは、カサンドラが断続的にかけてくれている回復魔法により、傷が癒えていくこと。防戦一方で体中に傷が増えていくが、傷の増える速度よりもカサンドラの回復魔法が勝っている事だろう。

——能力も、技も、駆け引きも、目の前の彼は全てが一線を画している。

「馬鹿なつ、私はLv. 3だぞっ!」

強引な切り払いを放ち、目の前の少年を退けたヒュアキントスは喚く。

先とは違い、ミリアの援護は無い。壮絶な斬り合い——ベルの

一方的な猛攻だったが——をすする彼らを尻目に、ミリアは一人で数人の近衛兵を相手取り、無双していた。

踊る様に散らばる背の高い瓦礫片の足場を飛び移りながら、囁く様な詠唱を呟いては魔弾を降り注がせる。

劣勢を強いられるヒュアキントスを援護しようとするベルの背後に迫ろうとした者の背を撃ち抜き、自らを撃破せねば大将同士の決戦には手出しさせぬとミリアが余裕の笑みを零し——同時に挑発を放つ。

「私を押さえておかないと、もう一度ヒュアキントスを撃つわよ？」

カサンドラの回復魔法でなんとか立ち上がって戦う彼らに対し、彼女は挑発的に幾度もヒュアキントスにその剣先銃口を向けては視線を集める。

ヒュアキントスの劣勢に対し、団員達は死に物狂いでミリアを止める以上の事は出来ない。

ミリアもミリアで必死に団員の足止めをしている。いくらLv. 3を圧倒できるベルであっても、乱入等許した瞬間ベルが倒れる。強者相手の一騎打ちと言う条件下でヒュアキントスを圧倒する事が出来るだけであって、他を相手取る余裕は無いのだ。

そして、余裕そうな笑みを浮かべるミリアを最も焦燥させる原因。アポロンファミアの治癒士ヒーラー、カサンドラだ。

「なんで、こんなことに……」

ベルの砲撃を放った所までは良かった。だが、ダフネが身を挺してカサンドラを庇った事が原因で彼女が無傷で残っていたのだ。そのせいで戦闘不能にまで陥らせたはずの近衛兵が立ち上がってきている。

今も杖に縋りつく様に回復魔法を断続的にかけているカサンドラを見据え、ミリアが舌打ちを零す。

このままでは、ベルが倒れてしまう。

Lv. 3を圧倒している様に見えるが、ベルには余裕が無い。いくらステータスが伸びようと、ランクアップした訳ではないLv. 2のベルと、Lv. 3のヒュアキントスでは埋めきれない体力とスタ

ミナの差がある。ヒュアキントスは回復魔法によって傷が癒えるが、ベルにはそれが無い。

たった一撃でも喰らってしまえば、其処から押し負ける可能性すらありうる。故に、一刻も早く治癒士を倒すべきである。

——それよりも最善手があるとさえある。

「旗印……何処なのっ」

旗印さえ破壊してしまえば、その時点で決着が付く。

治癒士か旗印。優先すべきは間違いなく旗印だろう。けれど、視界のどこにも旗印が無い。どこかに埋もれているのか、それとも既にアポロンファミリアが確保してしまったのか。判別が付かず、近衛兵を抑え込むので手一杯。

ミリアに近づこうとする近衛兵はショットガンマジックで牽制し、小損傷を負わされ、彼女から距離を取ろうとすればこれ見よがしにピストルマジックを構えてヒュアキントスに向ける事で無理をしてもミリアを止めねばと近衛兵を引き付ける。

これも、長くは続けられない。このままいけば、すり潰されて負ける。

散弾での牽制射撃では大した負傷を与えられず、カサンドラの回復魔法を超える損傷が小さすぎて倒しきれない——かといって、これ以上の接近は危険だ。

ベルと異なり、付け焼刃に近い近接戦を行えばどうなるか等、火を見るよりも明らかなのだから。

「早く、早く旗を……くっ」

カサンドラを守る様に大盾を構えて動かないドワーフ。彼の盾に散弾を放てば——耐魔法の塗装が施されているのか、それとも盾そのものが耐魔法の素材から作られているのか貫くには至らない。せめて『ライフル』ならと考えるも集中して詠唱出来ない現状では『ピストル』か『ショットガン』が限界。

そして近衛兵に与えられた冒険者用装具の影響か、『ピストル』では威力の減衰によって損傷を与えられず、近距離での『ショットガン』なら倒せそうだが、一気に数人に押し込まれば負けかねない。

周囲に散らばる瓦礫を足場に、ミリアが治癒士ヒーラーに近づこうとすれば、彼らはそれを妨害する。
状況は、膠着していた。

側防塔の最上部。

設置された巨大な装甲型大型弩パリスタの駆動用のハンドルを一人で回す灰色の外套を纏ったヒューマンの青年。

本来なら一人で回す事など出来る筈もない代物であるはずのそれをたった一人で難なく駆動させる。

リリルカ・アーデの持つ『一定以上の重力負荷に対して補正』とほど近い性質ともいえる『牽引する際にかかる負荷に対する一定の補正』のスキルを持っているからこそその、単独での装甲型操作である。

「ぐぬぬおおおっ!!」

「がーんばれ、がーんばれ」

「お前も手伝ええええっ!」

装甲型の大型弩パリスタの搭乗口から顔を覗かせた猫人の青年の掛け声を聞きながらハンドルを回していた彼は、舌打ちと共に叫ぶ。

対する猫人はへらへら笑い、搭乗口から引っ込んで中に戻って無造作に発射用の引き金を引いた。塔そのものが揺れそうな程の反動と共に金属製の骨格フレームを軋ませ、馬上槍ランスを思わせる巨大な矢が放たれる。

適当に放ったそれは東側城壁から彼らの籠る北西の側防塔を狙っていた連射型の大型弩パリスタを粉碎し、操作していた冒険者達を吹き飛ばした。

「わりい、ちよつとそつちは手伝えねえ。だって俺、射手だし? 後、装填しなきゃ。あ、もう少し左に回してくれ」

「くそおおおっ!!」

へらへら笑いながらも、猫人の青年は射手席の搭乗口から飛び出して立てかけてあった馬上槍ランスを引っ掴んで装填席の搭乗口に飛び込み、再装填し始める。ガチャガチャとレバーを動かし、ハンドルを回して弦を引き、矢を番える。操作を完了するまでにかかった時間は、わず

か十秒足らず。最速で装填を終えた彼は慌ただしく射手席の搭乗口から飛び込み、ぼやいた。

「なんでこんな面倒臭え仕組みにしたんだよ……」

文句を零す彼が照準を覗こうとし、視界の端に僅かに映った巨大な黒い影に目を見開く。

「うおっ、アイマードドラゴン重装竜が北側まで来たか。こりや……また」

搭乗口から身を乗り出し、城壁と城塞の間の空間に視線を落とす。猫人の視線の先ではアイマードドラゴン重装竜が西側で暴れるのを止め、北側を通って東側に向かおうとしている姿があった。

立ち塞がろうと健気な抵抗をしたアポロンファミリアの団員らしき冒険者が紙くずの様に吹き飛んで叩き付けられる光景は、猫人の背筋を凍り付かせるのには十二分であった。

「っ！ 目があったぞ……」

一瞬、爬虫類を思わせる黄土色をした縦長の瞳孔が側防塔の最上階から見下ろしていた猫人を睨み、不愉快そうに鼻を鳴らして視線を背けた。

言葉にするなら『見下ろされる事が不愉快極まりない』であろうか、と一瞬思考が逸れた猫人に対し、塔から外を警戒していたエルフが声を張り上げた。

「不味いつ、外に逃げた奴らが戻ってきてるぞっ！」

「はあっ!？」

十数人の傭兵冒険者が軋む馬車を牽引して北門をくぐろうとしている光景があった。

「あの大型弩……間違いない、最初の攻撃隊が放置して逃げてきた奴だ」

「マジかよ……逃げたんじゃなくてアレ取りに行つてやがったのか!? 破壊しねえと不味いぞー!」

城壁内部で暴れるアイマードドラゴン重装竜に対し、城壁上に設置された大型弩では射角外であつて攻撃できない。だからこそ外に放置された大型弩を回収してきたらしい彼らの行動にヒューマンとエルフが驚く中、猫人の青年が舌打ちを零した。

「ありやビビッて逃げた先に反撃できそうな道具があったから戻ってきたただけだ」

少なくとも、北門の警備を任されていたLv. 3の冒険者は間違はなく尻尾を巻いて逃げていた。そう呟いたヒューマンは城壁の内側で暴れる重装^{アーマードドラゴン}竜に視線を向け、頭を掻いた。

「俺らの言う事聞いてくれるか、アレ？」

「逃げろって言っても、聞かんだろうなあ」

ミリアの配下ともいえる彼の竜に対し、命令権は無い。一応、ミリアが彼の竜に『彼らの言う事を聞く様に』と命令はしているモノの、常に見せる不服そうな色合いからして、言う事を聞くとは思えなかった。

「あー……なんつーか……そうだな。大層な夢を抱く事は良い事だ。でもよお……身の丈にあつた夢を見るべきだと、俺は思うぜ？」

自信満々に大型弩^{パリスタ}を牽引してきた冒険者達。そんな彼らに哀れみを含んだ視線を向けた猫人の青年は、二人の肩を掴んで装甲型大型弩^{パリスタ}を示す。

「無視で良い」

「はあ?」

「良いんだよ……身の丈に合わない夢見た奴がどうなるかなんて、言うまでもねえし」

開け放たれた門。

震える背筋を抑え込みながら大型弩^{パリスタ}を見る。

「これさえありゃあ……」

周囲に集まった傭兵達も震えながら頷く。

白髪が混じり始めた初老の男は、恐怖を噛み殺して顔を上げる。

「そうだ、これさえありゃあ、俺だって……」

胸の内に湧き上がる自信。

金属製の骨格^{フレーム}に絡繰り染みた機構。竜を殺すに足る威力を備えた巨大な矢。そのどれもが頼もしく彼の視界に映り込んでいた。

子供の頃から、『竜殺し』に憧れた。『竜殺し』、それは英雄譚の一つとしても語られる輝かしい偉業の一つだ。堅牢な鱗、強靱な肉体、鋭い牙に爪、そして知性を帯びた瞳。伝説にも語られる竜とはかくも美しく、そして恐ろしい。

一目見た瞬間——攻撃隊が蹴散らされる姿を見せられた瞬間——彼の心は折れていた。

『竜殺し』になりたい。そんな夢を見た幼い子供。親からは『バカな事言つてないで鉄でも握つてろ』と頭ごなしの否定を受け、それでも諦められずに神の恩恵を受けて力を付けた。ぐんぐん伸びるステイタス、華やかなランクアップを重ね、L.V. 3にまで至り——其処が彼の終点であった。

どれだけ努力を積み上げようと、どれだけ年月をかけようと、ステイタスが伸びなくなった。ランクアップの機会はやってこず、下層の竜を拝むことすらできなかつた哀れな男。余りにも情けない自身の姿に嫌気がさし、オラリオを離れてはや数年。都市外である噂が流れだした。小人族が竜を調教したという、噂。

信じられない、信じたくない。自身では相対する事すら叶わなかつた竜を、高が小人族が、しかも小娘如きが従えている事なんて。オラリオに赴いて噂を確かめようとは思わなかつた。

苛立ちを抱えたまま過ごしていたある日、都市外で傭兵を雇っている商人と出会った。彼は、言った。

——『竜殺しに興味は無いか』と

瞬間、忘れていた憧憬を思い出した。子供の頃から憧れ続け、そして敗れ去った夢を。

けれど、竜の強さを理解していたからこそ、最初は断ろうとした。けれど、商人は口が上手く、酒も入り過去の栄光を褒め称えられ気分が良くなった所で、大型弩を見せられた。竜すら一撃で屠る、竜殺しの兵器。

信じるにはいささか情報不足。けれども再燃し始めた竜殺しの夢は燻りだし止められない。

その上——仕留めるのは彼の小人族が従える竜だと言う。

男は、その手を取った。竜を従える生意気な小人族を打ちのめせ、その上で竜殺しの称号を得られる。

鬱憤を晴らせた上で、念願の称号が手に入る。まるで夢の様な話。実際、街中で竜を一度屠ったという話を聞き、もはや有頂天になっていた彼を押し折ったのは、やはり竜であった。

二百を超える攻撃隊。それが呆気なく蹴散らされる光景を見れば誰だって逃げ出すはずだ。

——Lv. 3で北門の防衛を任されていた彼は、恐怖に潰れて真っ先に逃げ出してしまった。それが原因で北門の守りが崩れ去った事も知っている。けれど、仕方が無かったのだと何度も言い訳をしながら逃げた。

訳も分からず、恐怖に負けて泣き叫びながら門を開けて逃げた。どっちに逃げるかなんて意識せずに走り抜けた彼は、幸か不幸か、攻撃隊が壊滅した地点に入り込んでしまった。悲鳴を上げる事も出来ず、固まった彼の視線に映ったのは——放たれる事なく放置された大型弩バリスタ。

蘇ったのは『竜だつて殺せる一撃を放てる代物よ』と言う商人のうたい文句。

攻撃隊は不意打ちを受けて反撃もままならず壊滅した。ならば、今度は此方が不意打ちを仕掛ければどうだろうか？ 過去最高に冴え渡った思考だと手を打って喜んだ男は、同じく逃げ惑っていた者達を片っ端から殴つて従え、大型弩バリスタを引き摺つて戻ってきた。

馬車の車軸を素早く取り換え、修理した大型弩バリスタを乗せた馬車を人力で牽引する。

漸く辿り着いた門の向こう側では、ちょうど重装アーモードドラゴン竜が暴れ狂っていた。

「は、はははっ」

目の前には、到底勝ち目のない怪物ドラゴン。

自身の手元には、そんな怪物を討ち果たせる兵器。

彼の怪物は此方に気付いていない。目の前で槍を振るって足止め

を行おうとしている雇い主の派閥の構成員。あつけなく蹴散らされている光景に気圧されかけ——男は拳を握り締め、息を吸う。周囲の傭兵仲間も、大型弩バリスタさえあれば竜が殺せると戦意漲らせ、早くしろと男に急かす。

震える手で引き金に手をかけ、男は竜を見据え——視線がかち合った。

「ひいっ」

喉が引き攣り、呼吸ができなくなる。たった一睨み——否、睨んですらいない。ただ見られただけだ。

交じり合い、蛇に睨まれた蛙の様に動けなくなった男と、その周囲の者達を竜は訝し気に見て——興味を無くして視線を逸らした。

彼の竜が視線を向けたのは、震えながら槍を竜の足に叩き付けた、アポロンファミリアの眷属らしき獣人の少女。まだかなり若く——

——Lv. 1の駆け出しだろう彼女に視線を向け、睨んだ。

それは、男にとって屈辱だった。彼の竜は言葉にせずとも、行動を以て示したのだ。Lv. 3に至り、竜殺しの兵器を手に行っている男なんて気にする事の無い路傍の石ころ——敵意を向けるまでもない、雑魚だと。

そして、ただの素槍を握り締めて恐怖で涙を零しながらへっぴり腰の突きを放ったLv. 1少女こそ、敵として認めた。

悔しい、なんてものではない。湧き上がる衝動のままに視線を向けすらしないその竜に向け、大型弩バリスタを放つ。

鈍く響き渡る肉を裂き骨抉り穿つ音色。目の前の黒い巨体の胴体に突き立つ、馬上槍ランス。

目を見開いた男の視界に広がる光景に、彼は信じられないと一瞬自分を疑い——口元がニヤけた。

「当たった……」

避けなかった。竜は回避する素振りすら見せなかった。

命中した、彼の重装アーマードドラゴン。竜の横っ腹に突き立つ、巨大な矢。

区分はLv 4、下層で出現する竜種の中では絶大な防御能力を持つ、強敵。それこそその堅牢な鱗は竜種の中ではLv 5にすら届きう

るのではないかと謳われるほどで——傷一つ無かった彼の竜の鱗をあつけなく穿ち抜いた。

その事実にも男が打ち震える。

「倒した、倒したっ！」

両手を上げて喜ぶ男に周囲の傭兵もつられて歓喜の声を上げる。

幼い頃からの夢である『竜殺し』を成したと喜び、男が竜を舐める様に見る。

傷一つない鱗。無数の冒険者や堅牢な石材を粉碎して尚、傷一つない尻尾。人一人なら余裕で踏み潰せる足、そしてそこらの鉄製鎧なら紙切れの如く引き裂ける爪。胴体に突き刺さる矢が、確かな損傷として竜に刻み込まれ、屠っている。

しなやかな首、そしてその上にある血濡れた牙。何人の冒険者を噛み殺したのか、口の端から肉片を零れ落ちさせながら、その竜は男を見下ろしていた。

「たお……して、ない？」

倒したはずだ。その胴体を貫いた一撃で死んだのではないのか。

都市内での抗争のさ中には、一撃で即死したと噂されていた。だから、大型弩バリスタの一撃で死ぬのではなかったのか。

脳裏を埋め尽くす疑問と——L v. 3の男が無視され、L v. 1少女が敵視された理由を理解した。

「あ……………」

彼の竜の瞳に映るのは、明確な敵意。そして——言葉にせずともわかる、『よくもやってくれたな』という憎悪。

L v. 1の少女は、へつぱり腰であったとしても、涙目であったとしても、彼の竜に槍を突き立てた。たとえ傷付けられずとも、敵わずとも、彼女は敵として竜の前に立ち塞がった。故に、竜は彼女を敵と見た。

L v. 3の男は、怯えて震え、目が合っただけで戦意を喪失した——敵ですら無かった。故に、竜は無視したのだ。敵意を向けるまでもないと、路傍の石ころの様に、無視した。

「あ、ああ……………」

胴体に突き立つ矢、巨大な馬上槍ランスに貫かれてなお、その竜の動きは揺らぎすらしない。

真つ直ぐ、真正面から、男を見据えた。『竜殺し』の夢を見た男を、彼の竜は敵と見た。

殺される。男はそう確信した、なぜなら、走馬灯が駆け抜け出したから。幼い頃から見えていた夢、『竜殺し』。周囲から馬鹿にされても諦めきれない。竜を殺すに足る才能が無かったことを嘆いた日々。巡り巡ってやってきた『竜殺し』の機会。そして——この城塞にやってきてから交わした傭兵の猫人との会話。

『あん？ 竜殺し？ やめとけやめとけ、んな大層な夢、叶いつこねえっての』

『あー、一つ、話をしてやる。竜を調教テイムしたいって夢をもった猫人の話だ。まあ、アンタと一緒に、やっぱ難しくって無理だって想いながらも、ずっと諦められなかったみたいでなあ』

『その夢見がちの馬鹿猫はさ、小人族に出来るなら俺にだって竜を調教テイムできるなんて言ってるだんじョンに潜ったんだよ』

『あ？ どうなったかなんて？ ははは、笑っちゃうよなあ。ソイツ、あつけなく腕を食い千切られて冒険者引退だとは……馬鹿らしいよな』

『ま、死んで無いから運が良かったんだろうな。ソイツは………あんな？ 俺の事かって？ おいおい、見ての通り俺は五体満足だぜ？ 他人の話さ』

『ま、大層な夢なんて叶う訳ねえんだから。身の丈にあった夢にしとけよ。Lv. 3なら引く手数多だろうしな』

男が最期に見た光景は——。

ドゴオンツと言う轟音。

北門が粉々に粉碎され、大量の石材の破片が飛び散る。

ゴングンと装甲の外側に叩き付けられた破片の雨の音が響く。

「だから、言ったんだ。不相応な夢なんて、見るもんじゃねえってさ」
真つ白い手で引き金を握り、猫人の青年は笑った。

第一二七話

大の男が十人並んでも塞げない程に広い幅を持つ空中廊下^{わたり}。長大な一本道の先から次々に現れるアポロンファミリアの冒険者達が放ってくる魔剣の砲火が視界を埋め尽くす。

色とりどりの魔剣の砲火は、ドワーフの持つ大^{タワーシールド}盾によって受け止められるも、数発は後ろの者達にまで届いた。

「ぐうっ、ふざけるっ、どんだけ魔剣を備蓄してやがんだっ」

「ヴェルフ様っ、下がってくださいいっ」

警告と共にリルカの放った雷の魔剣の一撃が廊下の壁や天井を粉碎し、空中廊下^{わたり}全体を振動させる。

次の瞬間、リルカの持っていた最後の『クロッゾの魔剣』が色を失い、砕けてしまう。

「なっ、クロッゾの魔剣は打ち止めですっ!」

吹き飛んだ冒険者が外に落とされる姿を見ながら、ヴェルフは通路の先に視線を向けて新たに現れる敵に舌打ちを零した。

「はっ、此処を守り切らなきゃいけねえつてのによおっ!」

ドワーフが大盾で魔剣を防ぎながら、彼の影に隠れたリルカとエルフの少女が魔剣や弓で反撃を行うも焼け石に水。赤目のアマゾネスが魔剣の砲撃を両手に持った曲剣で打ち払い、撥ね退け、砕き壊しながらも次々に敵を沈めては破壊された廊下の窓から冒険者を投げ落とす。

腕の白いアマゾネスと狼人の少女も懸命に魔剣で撃ち返すも、ヴェルフの作った即席のクロッゾの魔剣ですらない、敵から奪取した下級魔剣では抑えきれない。

「くっ、このままだと本当に押し切られそうだよっ」

「塔の方はどうなってるの!?!」

ベルとミリアが乗り込んだ玉座の塔。それが粉碎されてからそれなりの時間が経つが何の音沙汰も無い。

予定ではヒュアキントスを倒して旗印を探している所であろうが、それにしては様子がおかしい、とりりルカが目細める。

もし想定外の事が起きていたら、そんな考えが脳裏を過った。

「ごめん、矢束の予備を」

「はい、わかりました……これが最後の矢束です」

エルフの少女の求めに応えて矢束を彼女の腰の矢筒に突っ込み、注意を放てばエルフの少女が苦々しい表情を浮かべた。

この空中廊下を封鎖してまだ十分程しか経っていない。けれども、既に限界に近い状態であった。

これがただの近接戦であったのなら、まだ十二分な勝機はあった。しかし、アポロンファミリアは多量の魔剣を湯水の如く使い潰していく。対する此方は奪取した下級魔剣とヴェルフが応急で作った即席魔剣のみ。しかも即席魔剣は城壁攻略の際に殆ど使い切り、最後の一本もつい先ほど失われている。

唯一の救いは、ヴェルフの対魔力魔法アンチ・マジック・ファイアのおかげで相手がむやみやたらと魔法を撃ってこない事だ。もしそれが無ければ防ぎようのない長文詠唱魔法が撃ち込まれていた可能性がありえた。

「おい、このまま耐えるのは厳しいぞ」

「ん……ん？ あれ、この魔力は……っ!？」

赤眼のアマゾネスが視線を向けた先、通路の最奥に巫女シャーマンを思わせる民族衣装を身に纏った女性が胸に手を合わせて立っている姿があった。

彼女からひしひしと感じる、魔力の波長。そしてその女性の口から零れ落ちる眩く様な詠唱——長文詠唱魔法。

「鍛冶師くん！」

「任せろ！ 【燃え尽きろ、外法の業】」

放たれた陽炎が鉄砲水の如き勢いで無数の冒険者をすり抜け、魔術師であろう女性に届いて詠唱を乱し魔力暴発を引き起こ——さなかつた。

ぐつところらえる様に強く唇を引き結び、顔を上げた巫女姿の女性がその両手で包み込んでいた魔法触媒タリスマンを高らかに掲げ、魔法を完成させる。

「嘘だろ!? 対魔力魔法が効いてねえ!？」

掲げられた魔法触媒タリスマンに集うのは、星屑を思わせる光。一瞬で握り拳大から一抱えある程の大きさに変貌を遂げた其れは——次の瞬間、巨大な光る槍に変貌し、飛翔する。

真つ直ぐ、アポロンファミリアの前衛の背中目掛けて放たれた魔法。回避を呼びかける合図も無いそれを見て、赤眼のアマゾネスが敵の前衛を盾にすべく射線上になるように動き——すり抜ける様にアポロンファミリアの団員の体を通り抜けた槍が、赤眼のアマゾネスを直撃した。

「ぎっ、あああああああああああつ!？」

胸を穿たれ転げ、アマゾネスの体から紫電が弾ける。

視界を塞ぐ閃光に全ての者の動きが止まった。驚愕の表情でアポロンファミリアの団員も固まっている事から、彼らにとつても想定外の攻撃であつた事がうかがえる。

閃光が消え去つた後、焦げ臭い臭いが立ち込める廊下の中央、最前線でアポロンファミリアを食い止めていた赤眼のアマゾネスが倒れ伏して痙攣していた。

「嘘だろ、なんだ今のっ!？」

「っ！ あれはっ、皆さん気を付けてください！ あの魔法は同派閥ダメージ以外の者だけを穿つ魔法です！」

同一主神の恩恵を受けた者には一切損傷ダメージを与えない事なく、異なる主神を崇める眷属だけを穿ち殺す、異教殺しの槍。

外部から傭兵として雇われ、中央の城塞内に配置されていたLv.3の冒険者の持つ魔法。事前に情報があつた為、対策としてヴェルフを中央に直接連れ込んで封じようとした魔法だ。だが——ミリアの作戦は意味が無かつた。

最悪な事に巫女姿の冒険者には、対魔力魔法アンチマジックファイアが効かない。

「やった、一人倒したぞっ!」「残る奴らもやっちまえ!」

ヘステイア側の第二級冒険者が一人倒れた事で勢いを取り戻したアポロンファミリアの団員が隊列を組んで前進し始める。放たれる魔剣の勢いが増し、ドワーフが目を細め——エルフの少女が鋭く叫ぶ。

「連唱！ 次の魔法がきますよ！」
巫女姿の冒険者が手に持つ魔法触媒タリスマンには、既に魔力が充足している。

放たれた二射目の魔法が、アポロンファミリアの前衛を透過して迫る。ドワーフが大盾を構えてその雷矢を受け止め、紫電が弾けた。
「ぐっ……ふうふう、効くなあ」

焦げ付く臭いを漂わせながらも雷撃を受け切り、余裕そうな笑みを浮かべるドワーフ。彼が視線を向けた先では——既に巫女姿の冒険者は次の魔法を放たんとしていた。

目を見開き再度腰を落として大盾を構えるドワーフ。続く連撃が直撃し、紫電が弾け——更に重ねて雷撃が弾ける。

「おい、なんだあの詠唱速度!?!」
「発展アビリティの《連唱》ですよ！ 同一魔法の連続発動時に次の詠唱にかかる時間を半減させるものです！」

発展アビリティ《連唱》によって詠唱時間の軽減効果を受けて連発される雷槍。両手で掲げられた魔法触媒タリスマンは絶えず魔力が溢れ返り、連続する雷撃の槍を生み出していく。

大盾に雷槍が当たるときに紫電が撒き散らされ視界がふさがれ——更に追撃の下級魔剣による砲火がドワーフに降り注ぐ。

第二級冒険者の前衛攻役アタッカーと前衛壁役タンクを真っ先に潰さんとする彼らの猛攻に、第三級冒険者でしかないエルフが歯噛みしながらも矢を番え——狼人の少女と視線を交わした。

雷撃の槍がドワーフの持つ大盾に弾け紫電が飛び散った直後、狼人の少女が駆け出す。

無数の下級魔剣の砲火に愚直に突っ込む寸前、焦げ付いた床を蹴り抜き跳躍して回避する。天井すれすれにまで飛び、空中で無防備に体を晒す彼女に対して雷撃の槍が放たれ——彼女は空中で矢を蹴って回避した。

飛来した雷槍によって矢が一瞬で粉微塵に粉碎されて欠片が飛び散る。それを尻目に、狼人の少女が手にした槍で冒険者の肩や腕等を素早く突きながら彼らの頭の上を跳んで行く。

後方、弓を構えたエルフの少女が連続して放つ矢が狼人の少女の足場として機能し、連続して攻撃を当てた際に力と敏捷が増幅するスキルの効果も相まって、瞬く間に敵の頭の上を超え、最奥部で魔法触媒^{タリスマン}を掲げた魔術師の傍に降り立つ。

「ふむ」

「悪いが、死ねえつ」

鋭く速い突き。飾り気の無い槍で巫女の胸を突いた狼人に対し、巫女は魔法の連続詠唱を止めて迎え撃つ。

布製の魔法触媒^{タリスマン}に隠されて握り込まれていた儀礼用短剣で槍の一撃を受け、彼女は不愉快そうに鼻に皺を寄せて呟く。

「獣の亜人風情が……首輪にでも繋がれているのがお似合いです」

「っ、こいつっ」

獣人に対する侮辱を口にし、軽蔑の視線を向けた巫女^{シャーマン}。狼人の少女が素早く連続して突きを放ち、その衣装をズタズタに引き裂いていく。

所詮魔術師、大した近接戦能力は無いのか瞬く間に無力化しようとし——巫女が手放さなかった魔法触媒^{タリスマン}が淡く輝いた。

「獣は獣らしく、野山に帰るべきでしょう」

「何を——」

彼女が左手に持った魔法触媒^{タリスマン}を胸元に寄せ何かを発動しようとする。それを防ごうと狼人の少女が穿とうと魔法触媒^{タリスマン}へと突きを放った瞬間、激しい閃光と衝撃波が撒き散らされ、狼人は吹き飛ばされ——破壊された壁の向こうに消えていく。

「ちく、しょうっ！」

「さようなら」

予め詠唱しておくことで敵の特定行動時に発動する、反撃タイプ^{カウンター}の魔法。特殊な魔法^{加護}を使って戦う、戦闘巫女^{シャーマン}。元居た派閥から破門と言う形で追放された神に仕える者。

今や神を信仰し仕える者から身を墮として戦いに身を置く、異端の冒険者。

冷めきった瞳で、アポロンファミリアの前衛に守られた彼女は再

度、その魔法触媒タリスマンに魔力を充填する。

リリルカが冷や汗を流しながらハンドクロスボウを構え——
外から響き渡った咆哮に動きを止めた。

「え……う？」

リリルカが驚愕しながらも向けた視線の先。西側で暴れていた
重装竜アーマードドラゴンが全身から煙を吹いて痙攣している光景であった。

「マジか……Lv. 4クラスの怪物だったんだぞ!？」

生半可な魔法では倒せないはずであり、唯一警戒すべきだったのは
大型弩バリスタのみであったはずの彼の竜が、膝を突いていた。よろめく竜に
対し、無数の魔剣が弾ける。

西側の城壁の上で指揮を執る老エルフの指示に従い、重装竜アーマードドラゴンの

——胴体に突き立つ馬上槍ランスに似た矢に、雷の魔法が殺到した。

苦悶の咆哮を零した重装竜アーマードドラゴンの口から、大量の黒煙が漏れ出る。

「嘘……まさかっ」

「あ、はは、そっか、そんな殺し方があったんだ」

引き攣った表情で重装竜アーマードドラゴンを見下ろすヘステイアファミリア。

胴体に突き立った金属製の矢を通じ、電撃が直接竜の内臓を焼き尽
くしていく。彼の重装竜アーマードドラゴンの体表を覆い尽くす鱗は、殆どの物理魔法
問わずに高い耐久性を持っており、生半可な攻撃では傷一つ付けられない。
唯一、その耐久を射ち抜ける大型弩バリスタのみを警戒していたヘステイ
アファミリアは——副次効果まで意識していなかった。

金属製の矢を通じ、電撃が内臓を焼く。いくら竜とはいえ、内臓を
直接焼き尽くされれば、あっけなく膝を突き——倒れるだろう。

漆黒の巨体が、倒れ伏す。最後に抗おうとしたのか、城壁に全身を
叩き付けて揺らし、そこで力尽きて凭れ掛かる様にして竜が伏した。

——城壁に配備された冒険者を足止めしていた重装竜アーマードドラゴンが倒
れた。

それはイコールで、この空中廊下に冒険者が群がってくる事を意味
する。

「不味い、不味いですよ」

リリルカが震える声で呟きながら空中廊下の戦場に視線を戻そう

とした所で、肩を掴まれる。

「ごめん、もう抑えきれない……」

苦渋の表情を浮かべたエルフの少女は、手にしていた弓を手放して腰の剣を握りながら、リリルカに語り掛ける。

「あの鍛冶師と私、あとあの子の三人でどうにか頑張ってみるけど……無理っばい。貴女はここに居ても無駄だろうから、団長たちの所に行つて旗を探す手伝いしてあげて」

ヴェルフが連続して放つ対魔力魔法アンチ・マジック・ファイアによつて、魔力暴発こそしないものの、詠唱を止められて巫女の放つ魔法は一時的に止まっている。

だが、それももう長続きしないだろう。ヴェルフの額から流れる汗の量と顔色を見れば、もう魔力があまり残っていない事は明白だ。

足元に転がっていた赤眼のアマゾネスが震えながら立ち上がろうとし、腕を痙攣させながら眩きを零す。

「ごめ……ま、麻痺……あんま、うぐ……けな……」

必死に動こうとするも、先ほどの雷撃が直撃した影響で麻痺しているらしく、動きは酷く緩慢だった。

ここにきて、彼らは失敗を悟る。相手側の治癒士ヒーラーを発見しきれずに何人か逃していたのだ。もっと早く、早期に旗を発見し破壊する予定だったことから、治癒士の確実な排除よりも早期決着を優先してしまった。

リリルカが迷うさ中、ヴェルフが膝を突き——相手の魔法の発動を止められず、雷撃が迫る。

アマゾネスの少女が盾を構えて飛び出し、雷撃に打たれて吹き飛んだ。

ヴェルフは精神枯渇で魔法の打ち止め。エルフの少女は弓使いだが矢が尽きた。赤目のアマゾネスは麻痺で動けない。ドワーフは魔法を受け止めて昏倒。狼人の少女は通路から投げ出されて安否不明。アマゾネスの少女は雷撃を受け昏倒。

既に、空中廊下を止めるには、人数不足過ぎた。

「っ……貴女は……」

「平気、サポーターの貴女と違って、私はそこそこ戦えるし」

震える手に握られた剣。エルフの少女は通路を駆けてくる冒険者を見据えて目を細めた。

「行つて、早く」

「リリスケ、俺からも頼む」

一分でも、一秒でも時間を稼ぐ。そう呟いたヴェルフに背を向け、リリルカは駆け出した。

駆けていく小さな背を見送り、通路一杯に二十人以上が一気に駆けてくる光景を前にしたエルフの少女は不敵に笑みを零し、その奥で未だに魔法を放とうとする巫女シャーマンを見て顔を引き攣らせた。

「あ———これ無理なやつだ」

「おいおい、泣き言はやめてくれよ——俺も泣きたくなる」

たかが一介の弓使いアーチャー如きでは止められない。そんな泣き言を零すエルフに対しヴェルフが軽口を叩きながら大刀を構え、アポロンファミリアの冒険者と斬り結ぶ。

格好良く足止めすると宣言しておいての体たらくに悔し気に彼女が笑い、覚悟を決めて剣の切っ先を敵に向け——次の瞬間、空中廊下の最奥で構えていた巫女シャーマンの真横の壁が粉碎され、その姿が掻き消える。

「なんだ!?!」「何が起き———ごぶつ!?!」

「きやあつ……」

「うおっ……ぶねえな、何が起きた!?!」

石材を粉碎する轟音が連続して響き渡り、ヴェルフがよろめいた瞬間。彼の目の前を巨大な馬上槍ランスが通過し、アポロンファミリアの冒険者を吹き飛ばした。

「何が……あつ……」

粉碎された壁の穴から外を覗き見れば、城壁上に設置されていた大型弩バリスタが全て空中廊下にその矛先を向けていた。それらを一つ一つ発射して回っているのは、猫人の青年。

射手席に飛び込み、碌に照準を覗く事なく引き金を引く。放たれた矢は空中廊下の壁を粉碎し、渡ろうとしていたアポロンファミリアの

冒険者を的確に粉碎していった。Lv. 4に区分される竜を屠る威力をもつてすれば、たかが石材製の壁など紙切れの様に粉碎できるだろう。

「はっ、ナイスだな……」

「ええ、ですが……もう打ち止めみたいですよ」

元々城壁上に設置されていた大型弩バリスタの中で、半ば壊れて放置されていたモノの中から使えそうな物を無理矢理応急処置だけ行って放つたのだろう。猫人の青年が両手で大きくバツ印を作って駆けていく姿が見えた。

一時的な時間稼ぎにしかなくていい。けれど、十二分な時間稼ぎだった。序に言うなれば——十二分な空中廊下への損害ダメージだった。

軋む石材の音色。ガクンツと空中廊下全体が揺れる。

幾度もの魔剣の砲火。激発する魔法。そして力任せに暴れるアマゾネス。激戦の会場となった空中廊下には甚大な被害が出ていた。壁の殆どは粉碎され、床に敷かれたなげなしの赤絨毯は剥がれ、焦げ、焼け尽きている。

ヴェルフが頭を掻き、天井を見上げてからエルフと視線を交わした。

「あー、逃げるなら今の内だと思っぜ？」

「……仲間を置いて、逃げられませんし」

軋む音は通路全体に及び、城砦として建てられた堅牢な空中廊下に細かな亀裂が走っていく。

「貴女こそ、逃げるべきだと思いますが」

「あー……悪い、走れそうにない」

通路中腹、下から駆け上がってきた東側の門の防衛を任されていた老エルフの顔を見て、ヴェルフは手を振って口を開いた。

「おーい、崩落するから危ないぞ」

ニヤリと笑みを浮かべたヴェルフは、大刀の切っ先を床に走る亀裂に捻じ込んだ。それが止めであったかのよう

——空中廊下が轟音を立てて崩れ落ちた。

遠く響く崩落の音色。それを耳にしながら、ミリアは舌打ちを零す。

戦闘開始から、既に十分以上が経過している。ベルは——形勢逆転されていた。

ヒュアキントスの放つ波状剣フラムベルジュによる連撃を、右に左に、時にナイフで、時に掠らせながらもベルが懸命に回避を続けていく。既にその身には無数の切り傷が刻み込まれ、限界が近い事を知らせてきていた。懸念していた現実が、目の前に迫ってきている。

このままでは、ベルが押し負ける。そう認識しながらもミリアは近衛兵を押しとどめるので精一杯だった。

治癒士ヒーラーであるカサンドラを倒す事も、近衛兵を蹴散らしてベルを助けに行くことも出来ない。口惜しさと恐怖に叫びそうになるのを必死に押しとどめながらの戦闘。

精神的に追い詰められ、徐々に動きが鈍っていく。

このまま、負けてしまうのではないか？ 空中廊下の崩落の音が更に焦燥感を掻き立てる。

治癒士ヒーラーを倒せない。前衛壁役タンクを突破できない。前衛攻役アタッカーを削り切れない。

時間が過ぎれば過ぎる程、勝利は遠のいていく。けれど、焦れば焦る程動きが荒くなっていく。

「ファイア」

押され、既にベルが傷だらけ。対するヒュアキントスは回復魔法の恩恵によつて傷は無く、一方的にベルを捌っていた。

「気分は、どうだあ！ ベル・クラネルウツ!!」
「ぐうっ」

「よくも、よくも私の目を——貴様なぞ、捌り殺しにしてくれるわっ！」

激しく飛び散る火花。スタミナが底を尽き、猛攻が止まったベルに対する執拗な攻撃。あえて体を掠める様に振るわれる刃が、ベルの身に着けていた鎧に数え切れない傷を刻み込んでいく。

早く、早くしなくては。焦燥感に身を焦がし、周囲を見回して——

——カサンドラの背後に忍び寄る影を見つけた。

「——リリ」

回復魔法の発動に意識を集中していたカサンドラの背後、リリルカ・アーデが彼女の持つ杖目掛けて飛びついた。

「ミア様っ！」

「きゃっ!？」

不意打ちに近い一撃。ちょうど魔法を放とうと魔力が充足していた杖に対し、リリルカが掴みかかり——カサンドラから杖を奪うには至らず、引つ張り合いに転じた。

「は、放してー！」

「嫌です!!」

——いくらカサンドラが後衛の治癒士ヒーラーだったとしても、L.V. 1でサポーターのリリルカの力では、L.V. 2の彼女から杖を奪う事は出来なかった。

だが魔法の詠唱途中の妨害には一応、成功している。咄嗟に仲間がカサンドラを助けるべく動こうとし、ヒュアキントスもつられて視線を奪われる。

「何をしているカサンドラ！ 早くその小人族バルウムなんぞ引き剥が——

——ぐう!？」

「だああああああああああつ!!」

視線が外れた瞬間、爆発したようにベルの猛攻が再開される。攻撃を防ぎながら、スタミナをほんの少しずつ回復させ続けてきたベルの、猛反撃。

合わせる様に、ミアが魔弾をばら撒いて注意を逸らす。カサンドラがりリルカを引き剥がそうと何度も力任せに振り回し、瓦礫に叩き付けたりするが、彼女は死に物狂いで杖に縋りつく。

「放して、放してっつてー！」

「ぐっ、がはっ……嫌、ですっ!」

二度、三度と叩き付けられて血を流しながらも、必死にしがみ付いていたリリルカは、魔力の込められた杖を見つめ、意を決した様に眩きを零した。

「貴方の刻印きずは私のもの——」
「ッ?!?!」

唐突ともとれるリリルカの魔法詠唱。それに最も驚いたのは、カサンドラであった。

カサンドラが詠唱していた魔法の魔力がたつぷりと詰まった杖、それにしがみ付いて魔法の詠唱を始めるリリルカ。何をしようとしているのかは——火を見るよりも明らかであった。

「やめてっ、お願い、やめッ——」

「——私の刻印きずは私のもの」

リリルカは知っていた。杖には魔力の許容限界がある事を、そしてオーダーメイド専用武装の場合は本人に合わせて装備が作られる事を、それが杖であるならば、本人が持ち得る最大の運用魔力量に合わせて許容限界が設定されている事を——オーダーメイド過剰な魔力を受け入れる余裕のない、専用オーダーメイドの杖に、余計な魔力を捻じ込むとどうなるのか。

カサンドラが目を見開き、何かを堪える様に杖を握り——リリルカを再度地面に叩き付けた。

いくら後衛職で力が弱くとも、Lv. 1のサポーターを攻撃するのには過剰過ぎる力を以て、二度、三度と小さな体躯を引き剥がそうと、必死に叩き付け、叩き付け——リリルカが小さく笑いながら、咳く言葉を聞いた。

「べ、ル様……ミリ……様……どうか——」

——勝利を。

パンツと小さく杖が爆ぜ、魔法石に罅が入る。Lv. 1で、しかも変身魔法と言う杖を使わない魔法でありながら、無理矢理にカサンドラの杖に魔力を捻じ込み、イグニスファクトゥス魔力暴発させた。爆発の威力はまるで玩具を思わせる程に大したことのない、小さな爆発であった。

それが、カサンドラに致命的な損害を与える。

罅割れた魔法石。杖の中で最も重要な部位——そして、彼女の魔力が詰まった、爆弾。

ふらふらと、暴れ狂いそうになる魔力を必死に制御しながらカサンドラが杖をひったくる様に胸に抱く。魔法を発動させる余裕は無い

——今はただ、魔力暴発イグニスファトウスしそうな杖に込められた魔力の制御で
手一杯だった。

「カサンドラ！ 何をして———ぐっ!? 早く回復魔法———
ぐおっ!?」

ベルの猛反撃に切り刻まれ、後退を続けるヒュアキントスが叫びか
けた所で、カサンドラは小さな眩きを零す。

「———あっ」

杖に込められた魔力が渦巻く。彼女の制御能力を超え、魔力が荒れ
狂いだす。制御不能———魔術師として恥ずべき、魔力暴発イグニスファトウスとい
う現象を引き起こした。

爆発が巻き起こり、カサンドラを中心に周囲を薙ぎ払う様な爆炎が
溢れ返る。大盾を構えていたドワーフも庇っていたカサンドラ自身
の爆発に巻き込まれ姿勢を崩し———アポロンファミリア全体に
動揺が走る。

「ベルッ！ 旗を見つけた!!」

次の瞬間、ミリアの叫びが響き渡り、ヒュアキントスが目を見開く。
彼女が視線を向ける先、ちょうどカサンドラの魔力暴発イグニスファトウスによって
瓦礫が吹き飛んだ事で露わになった、アポロンファミリアの旗印が存
在した。

近衛兵の一人が旗の確保に向かおうとし———ミリアの魔弾に
穿たれる。

「ファイア！ ツ！」

「ぐっ!?」「旗を確保しろっ!」「ヘステイアファミリアの連中を近づけ
るな！」

近衛兵がミリアに一気に近づき———ミリアの剣の横に張り付
いていた結晶が砕け散るのを見た。

それは、彼女の残弾を示す代物。今までは『装填詠唱』を行う際に
は決して近づかれない様になっていたミリア・ノースリスの見せた、明
確な隙。

彼女を抑えようと囲んでいた近衛兵は三人。彼女が再装填を行う
より早く、近衛兵が届く距離だった。

「かかれえっ!!」

一斉に、ミリアに飛び掛かる近衛兵。

彼女は——装填詠唱を行う事なく、自ら、初めて前に出た。

迫る三人の内の一人、槍を持つ近衛兵に向かって突っ込み——
薄淡い青色の半球状ドームの障壁で攻撃を受け止めた。

「なっ!?!」「これはっ!?!」「何だっ!?!」

他の二人の攻撃も、障壁に阻まれミリアに届かない。

そんな中、ミリアはもう一步槍を持つ近衛兵に近づき——彼の持つ槍に剣を押し当てた。

弾くのもなく、押しつけるのもなく、槍の穂先にミリアが剣を優しく押し当て、詠唱する。

【リロード】

——装填詠唱。魔力の塊を装填し、一定回数魔法を速射可能にする『分岐詠唱魔法』特有の特殊詠唱。攻撃性は無く、ただの準備段階の詠唱でしかないそれを、至近距離でおこなった。

彼女が再度速射可能になったのに気付いた近衛兵が慌てて飛び退いて距離を取ろうとし——槍が爆発した。

「ぎゃああっ!?!」「何が起きた!?!」「大丈夫か!?!」

槍を握り締めた近衛兵の手にしてはいた槍。それが何の前触れもなく爆発し、彼の手を破壊した。理解不可能な出来事に近衛兵の動きが止まり——ミリアが懐に接近しているのに遅れて気付く。

剣を持った彼の懐に飛び込み、彼の胸フレストプレート 鎧を攻撃する。

不意を打たれ、反応の遅れた彼は衝撃に備えて身を固くし——
優しく刃を押し当てられた事に目を丸くした。

「——はっ。」

【リロード】

またしても、装填詠唱。攻撃らしい攻撃をするでもなく、ミリアは近衛兵の脇を潜って彼を置き去りにして走る。虚を突かれた彼が慌ててミリアを追うべく振り向こうとし——自らの胸鎧に違和感を覚えた。

魔力を感じる。それも、暴れ狂い今すぐにでも爆発してしまいそう

な魔力を。

「一体、なんだ」

自身の胴体を守っていた胴鎧に視線を落とし————気付いた。ミリア・ノースリスが剣に装着していた魔力の塊、『分岐詠唱魔法』で言うなれば『魔力の塊』が胴鎧に張り付いている事に。

「まさか!？」

既に、その魔力は制御下を離れている。それなりの量の魔力が、一瞬で鎧に込められた。何が起きるのかは、魔術師でない彼にも理解でききる————魔力暴発。

『装填詠唱』で相手の武装に直接魔力の塊を捻じ込み、制御を手放す事で爆発させる。常識で言えば考えられない————誰も思いつかない奇策だった。

近衛兵の一人が爆炎に吞まれる。それも、自らが身に纏っていた身を守る為の防具が、爆弾にすり替えられての、爆発である。威力が低くとも————致命傷には十二分に過ぎる攻撃。

「嘘だっ!」「ノースリスに近づくなっ!」

装備そのものを爆弾と化して攻撃してくる小人族。近づいて抑え込めば無力化できると必死に近づくと事ばかり意識していた近衛兵に對して、これ以上ない程の動揺を与える。

彼女から距離を取ろうと近衛兵全員が離れた瞬間————ミリアは目を細めて魔法を詠唱した。

「ライフル・マジック」

ゾツとする感覚。威力は先ほどの『ピストル』や『ショットガン』とはくらべものにならない。今すぐ近づいて無力化をしなくては————けれど、下手に近づけば装填詠唱を使つての装備の爆弾化をされてしまう。

距離を取るべきか、近づくべきか。判断に迷った彼らが動きを止めた瞬間————目にも止まらない程の早撃ちを以て、ミリアが近衛兵を沈める。

「リロード」「ファイア」「ファイア」「ファイア」「ファイア」

相手の方に一切視線を向けず、銃先だけを向けての盲目撃ち。それ

でいながら、しっかりと命中させ、周囲の近衛兵を一掃した。

倒れ伏した近衛兵を一瞥する事もなく、ミリアが銃口をヒュアキントスに向ける。

「ファイア」

防戦一方で必死にベルの猛攻を抑え込もうとしていたヒュアキントスの左足に、ミリアが放った魔弾が着弾する。

バランスを崩した彼が姿勢を立て直すより早く、ベルの持つ紅緋色の短刀が閃いた。

「ギアツ……!?!」

ヒュアキントスの視界に、くるくると回る物があった。

傷だらけで、冒険者用装具アックセサリーの指輪を無数に付けた、腕。

肘の辺りから切り取られた、己自身の腕が宙を舞っていた。その光景を目にしたヒュアキントスは、同じく宙をくるくると回っているフラムベルジュ波状剣フラムベルジュに視線を向け——魔弾によってそれが弾かれて遠くへ飛んでいくのを見た。

続く魔弾がヒュアキントスの肩を抉り、腹に着弾し、完全に姿勢を崩される。目の前に迫るのは——傷だらけの『兎』。

魔弾によって姿勢を完全に崩されたヒュアキントスに、その攻撃を往なす手段は無い。

——彼の姿を最初に見たときに感じた、恐怖。

戦意をその深紅ルベライトの瞳に漲らせ、返り血を半身に浴びながら迫る殺人兎の姿を幻視させる、その少年。

青年は、表情を恐怖と、絶叫に歪ませた。

「あ、あああああああああああああああッ!?!」

——死。

明確に感じ取ったその感覚のままに喉から叫び声が放たれ——
「ベル・クラネルが目の前の無防備な青年を無視し、駆け出した。」

「はっ。」
止めを刺す場面で、唐突にベル・クラネルが身を翻した。信じられない光景に一瞬思考が停止しかけ——ベルが駆けだした先に露出した、アポロンファミリアの旗印を見て、ヒュアキントスは目を見

開いた。

——ヒュアキントスに対する止めより、旗印の破壊を優先した。

気が付けば、ヘステイアファミリアの旗を守っている深紫の剣には無数の罅が入り、壊れかけている。あの魔法が解けるのは、時間の問題だったのだろう。

加速する思考の中、緩やかに流れていく光景にヒュアキントスは自問自答を繰り返す。ベル・クラネルの背に追い付けるか？ 否。ベル・クラネルは負傷で速度が落ちているとはいえ、自身の方が深く負傷している。走る事など出来まい。

この場面において逆転する手はあるか——魔法はある。彼を一撃で屠れる、最後の手段。

だが、魔法は無意味だ。旗の一定範囲に近づかれてしまえば、魔法は問答無用で無力化されてしまう。魔法その物は間に合うだろう、ベル・クラネルの動きは明らかに遅い。だが、旗印の一定範囲には入られてしまう。

そうなれば、ヒュアキントスの放つ魔法は無力化され、効果を失う。故に、打つ手無し——絶望がヒュアキントスの表情を染め上げる直前。彼の視界の端に片膝を突いて荒い息を零すミア・ノースリスの姿が映った。

——最後の機会^{チャンス}。逃す手は無い。

——【我が名は愛、光の寵児。我が太陽にこの身を捧ぐ！】
過去最速の、ヒュアキントスの記憶の中にある詠唱のどれよりも早く、限界を超える程の速度を以てして、詠唱が紡がれる。

ベル・クラネルが旗印に辿り付くまで、後一〇M。

【我が名は罪、風の悋気。一陣の突風をこの身に呼ぶ！】
魔力の波長に気付いたベルが更に加速しようとし——ヒュアキントスの呟きに止められた。

——「良いのか、ミア・ノースリスが死ぬぞ？」

——「え？」

ベルの速度が見るからに遅くなる。

ニヤリと、ヒュアキントスは醜悪に笑い、魔法の矛先を片膝を突く
ミア・ノースリスに向けた。

「放つ火輪の一投——」

彼の狙いに気付いたベルが瞬時に左手をヒュアキントスに向け、魔法を放つ。

「ファイアボルト！」

速射可能な速攻魔法が激発し、ヒュアキントスに直撃する。同時に、自身が狙われている事に気付いたミアが回避をしようと立ち上がり——足を掴まれてよろけた。

「きやつ……っ!? 放しなさい!!」

足を掴んだのは、ミアが行動不能にし意識を刈り取るに至らなかった、アポロンの眷属。近衛兵の一人。

「アポロン様に、勝利をつつ！」

「くっ、放せて、言ってるでしようが!!」

剣を振るい、二度、三度を切りつけるも死に物狂いでミアの足を掴む近衛兵を引き剥がしきれない。

集中し過ぎて気付いていなかったが、ミアのスタミナももうすでに限界に近い。剣を振るう手は力なく、僅かに血を滲ませる事しかできない。

ベルの放った炎雷が轟き、ヒュアキントスを爆炎が呑み込む。が——

詠唱は止まらなかった。

「——来たれ、西方の風!!」

瞠目し、即座に速攻魔法の利点を生かした連射で妨害を計ろうとする。

「ファイアボルト」ツ!!」

轟く炎雷がヒュアキントスに迫り——横から割り込んだカサンドラを守っていた前衛壁役のドワーフに直撃し、爆炎が弾けた。

ボロボロになったドワーフは、意地でも倒れまいと立ち塞がり、ヒュアキントスを守る。

「よくやった！」

褒める言葉と同時に、ヒュアキントスは魔法の発動姿勢に入る。ミ

リアは、抜け出せていない。

ベルの動きが、止まる。

「[アロ・ゼヒュロス]!!」

ヒュアキントスが放ったのは、太陽の如く輝く大円盤。狙いは当然

——ミリアだ。

「[ファイアアツボルトオオオ] ツツ!!」

横合いから殴りつける様にぶつかると、ベルの炎雷。

軌道を微塵も揺らがせる事なく、大円盤は炎雷を蹴散らし、足を掴まれて動けないミリア目掛けて直進する。

瞠目し、歯を食い縛り、ミリアが左腕の『竜鱗の朱手甲』を使った。

ミリアを守る薄青色の半球状の障壁が真つ赤に染まり——大円盤を弾いて碎け散る。

「ぐうっ！ ベルっ、旗をつ！」

「無駄だアツ!!」

弾かれた大円盤は、ヒュアキントスの叫びに呼応する様に再度ミリア目掛けて飛翔する。

驚愕に目を見開いたミリアとベルの視線が交差した。

背後に迫る円盤。足を掴まれて動けないミリア。

背後にたなびく旗印。即座に駆け寄って破壊すれば、派閥の勝利を得られるベル。

「——ベル、旗を」

今度は、防げない。彼女の持つ障壁は一度破壊されてしまうと、一定時間経たねば再生しない。

彼女を守るモノは、何も無かった。

「旗をつ！」

ミリアの叫びが響く。

直ぐ近く、後少し走れば無防備に瓦礫に引つかかるアポロンファミリアの旗印がある。それを切り裂けば、ヘステイアファミリアの勝利だ。

遠くに見える深紫の剣は、既に碎け散る寸前だ。後、数秒で碎けてしまう。そなれば——負けるのはヘステイアファミリアだ。

ミリアの背後に迫る大円盤。彼女は身を守る術がない。直撃すれば――街中で四散して即死したキューイの様に、ミリアも死ぬだろう。

一刻の猶予も無い。

「ベルッ！ 早く旗をッ！」

響くミリアの叫びに、ベルは歯を食い縛った。

――ミリアを見捨て、ヘスティアファミリアの勝利をとるのか。

――ミリアを助け、ヘスティアファミリアの敗北を受け入れるのか。

「……………」

「ベルッッ!!」

過去の光景が、ベルの脳裏に浮かび上がる。

ダンジョンの13階層――崩落した足場――闇に墮ちて

いく、家族の姿――。

あの時、彼女は言った『キューイっ！ ヴァンっ！ 私は良いから、ベル達をっ!!』と、

自らの命よりも、ベル達を優先した。そして――たった一人、暗闇に落ちていった。

なんの為に、この戦争遊戯ウォーゲームで勝利を目指したのか。

それは――家族の為だ。

『鏡』に映し出された光景に、ヘスティアは唇を噛み締めた。

ジワリと広がる血の味を感じ取りながら、ヘスティアは静かに頷き、拳を強く握りしめた。

――『鏡』の向こう側には、二人の眷属が大爆発に吞まれる光景があった。

第一二八話

荒れ地に無造作に突き立てられたポール。

緩やかに流れる風は重力に歪み、僅かに端を揺らすのみの
ヘステイアファミリア エンブレム
寄り添う兎と竜の仮徽章の描かれた旗。

旗印の前で重力の檻を維持するミコト。彼女を中心に旗を巻き込んだ重力魔法によって大地は若干陥没し、円形に凹んでいる。

その外周部で慌ただしく動き回っているのは、アポロンファミリアの眷属達であった。

煤けた襟巻を微風に揺らすリッソスが険しい表情で徐々に混乱の収まりつつある城塞と手出しできない旗印を見ていた。未だに決着を告げる銅鑼の音が聞こえない以上、敗北ではないがいち早く旗印を破壊しなくてはと使命感に燃える彼に、半ば損壊した馬車を数人がかりで運んできた団員が声をかけた。

「くっ……このままでは……」

「リッソス隊長！ 使用可能な大型弩を回収してきました！」

彼らが運んできたのは最初の攻撃隊に配備されていた大型弩。竜の奇襲によって車輪を破壊され放棄せざるをえなくなったものの一つだ。

彼の装 アーマードドラゴン 甲 竜の堅牢な鱗すら容易く貫く威力を持つその兵器なら、生半可な威力では重力魔法に囚われ大地に叩き付けられ術者に手出しできない現状を打破できるのではないかと、彼らが苦肉の策として用いる為に運んできたのだ。

リッソスが早速と言わんばかりに放てと指示を出す———団員は戸惑う様にリッソスと大型弩を見て眩く。

「ですが……」

「早くしろっ、このままではアポロン様に顔向けが出来んのだぞ！」

「……わかりました」

戸惑う団員の一人が大型弩の引き金に手をかける。べつとりとこびり付いた血に塗れたその引き金に触れた団員が嫌悪感を示す様に表情を歪め、照準を覗き———照準器にこびり付く肉片を見て表情

を引き攣らせた。

「おい、何をしている」

「その、照準器に……」

「何が……うっ……」

彼の竜の襲撃の際、粉碎された冒険者の一部が降り注いだ大型弩^{パリスタ}であろうそれ。運よく機構に異常がみられる程の破壊は成されなかったが——その骨格^{フレーム}には所々肉片や鎧の欠片がこびりついている。

リッソスが露骨に眉を顰め、それでも旗の撃破が優先だと引き金に手をかけていた団員を押しつけ、照準を覗き込んだリッソスが指示を出す。

「右にずれてるぞ」

「は、はい」

数人がかりで照準を合わせる為に細かく大型弩^{パリスタ}の載せられた馬車を動かす。

照準器の中央に旗印を捉え、重力魔法の影響を考えて僅かに上に照準をずらし、リッソスは目を細め、引き金を引いた。

放たれた大矢が真つ直ぐ直進し、重力魔法の影響を僅かに受けて弧を描きつつ旗印のすぐ横の空間を穿った。旗印には当たっていないが、矢の起こした風が旗印を揺らす。

L v . 4 の耐久に秀でた竜すら穿ち殺す威力。それに加え、魔法の維持に魔力を消費し過ぎて重力の威力が弱まっている事も相まって、落としきる事が出来なかった。

「なっ、外した!?!」

「くそ、照準器がイかれてやがる!」

「これだからあの商売神の用意したもんは信じられねえんだ!」

慌てて再装填と照準器を直そうとし始めるアポロンファミリア。

それを重力の檻の中から脂汗を垂らしながら見ていたミコトの表情に焦りが生まれ、僅かに魔法が綻び出す。既に限界に近い事もあり、容易に魔法は揺らぎ、深紫色の剣に罅が入りだす。

あの大型弩^{パリスタ}の一撃を防げなかった——僅かに軌道を曲げられたとしても、それでは意味が無い。

「ぐっ……この、ままでは……」

焦るミコトの正面で再装填を終えた大型弩の穂先が揺れる。

幾人かの団員が照準器の修理を行おうとするも、複雑とまではいかずとも知識を要する修理を行える者が居なかったのか中々放たれる事はない。けれど、時間の問題だとミコトが表情を歪め——アポロンファミリアの団員の一人が何かに気付いて荒野を振り向いた。

「——空を渡り荒野を駆け」

荒野を駆け抜けてくる一陣の風。そう見紛う程の速度を以て、包帯を全身に巻き付けた木乃伊染みた冒険者が魔力を滾らせながらアポロンファミリア目掛けて突撃してくる姿を見て、叫んだ。

「てっ敵襲うっ!!」

「何、あれは——」「な、詠唱しながら!?!」「平行詠唱だど!?!」

「何者よりも疾く走れ——」

驚愕するアポロンファミリアの構成員達が慌てて矢を射るも、右へ左へ、俊敏に動く魔法戦士に掠りもしない。

「——星屑の光を宿し敵を討て」

「速過ぎる——」間に合わな——」

迎撃準備を整える間もなく、魔法は完成し、撃鉄は振り下ろされた。

「【ルミノス・ウインド】!!」

駆け抜ける木乃伊の魔法戦士を中心に、緑風を纏う大光球は生まれ、放たれる。

一斉砲火された星屑の魔法が、大型弩の周囲で固まっていたアポロンファミリアの残党に次々に叩き込まれる。彼らが修理しようとしていた大型弩もろとも、夥しい閃光に呑まれた。

「ぐあっ……ぐ……くそ、一体、何が……」

砲火を浴びて吹き飛ばされ、運良く軽傷で済んだリッツスが顔を上げるとそこには打ち倒されたアポロンファミリアの団員達と、碎き壊された大型弩の残骸。そして虚空に溶けて消えゆく深紫色の剣。それらを背にリッツスを見下ろす、一人の冒険者。

全身を余すところなく覆い尽くす包帯。その隙間からは焦げ臭いにおいが立ち込め、僅かに見えた長い耳と、魔力の波長から目の前の

人物が同族だと確信する。

「貴、様は……」

「……寝ていてください」

振り下ろされた木刀の一撃に、リツソスが倒れ伏す。

包帯で全身を覆ったエルフの戦士——リユーは荒い息を零しながら膝を突き、後ろを振り返りミコトに微笑んだ。

「遅く、なりました……どうやら、間に合った様ですね」

「すみません、自分、一人では危うく——」

守り切れない所だった。と小さく呟きを零し、ミコトは意識を失った。

風が走り抜け、旗印が揺れる。描かれた寄り添う兎と竜の仮徽章エンブレムを見上げ、リユーは視線を城塞に戻した。

「後は、彼ら次第、ですか……」

叶うならば、彼らの元に馳せ参じたい所であるが——治療を終えてもなお、失われた体力が全快するには程遠く、旗印の元まで駆け抜けてきただけで限界の彼女は、これ以上の戦闘は行えない。

崩落した空中廊下わたり。

それを目にした老エルフは共に動く五十人の傭兵と共に城砦の内部を駆け抜けていた。

このままでは雇い主であるアポロンファミリアが負ける。どうにも優れた指揮官が敵方に居たらしく、舐めてかかった雇い主が悉く食い尽くされんとしているらしい事に老エルフは深い溜息を零した。

「全く、困ったもんじやのう」

「どうしましょう……」「このまま負けちゃったら……」

「これこれ、落ち着かんか。全く若いもんは……しかし負けそうじやのう。こうなれば儂等もヘスティアの旗印を破壊しに行くべきじやろうな……む？」

片っ端から崩落させられて複雑な迷路と化した城塞内部を駆け、北側の城壁前に飛び出した彼らは足を止めた。崩れ落ちた北門と、その

下敷きになった数人の傭兵、そして——その瓦礫の上に腰掛ける猫人の青年と老エルフの視線が交じり合った。

東門の防衛に当たっていた傭兵が彼に気付き、声をかける。

「あいつは攻撃隊に居た」「おい、お前も手伝え！」

「待て、あ奴は敵じゃ」

「え？」

老エルフの言葉に傭兵達がざわめきだす中、猫人の青年——

獅子身中の虫としてアポロンファミリアの壊滅に一役買った人物——

——はニヤリとこれ見よがしな笑みを浮かべて瓦礫から立ち上がって両手を大きく広げた。

「ああ、この惨状は全部俺がやった」

「なっ！」「テメエツ、雇い主を裏切りやがったな！」

傭兵から発せられる無数の罵倒を心地良さ気に聞いた彼は、杖を向けて鋭く睨みつけてくる老エルフを見て溜息を零した。

「やっべえ、勝てる気しねえ」

東門防衛隊は装アーマードドラゴン甲 竜が壊滅または足止めを行う手筈であった。

しかし、逃げ出した北門のLv. 3の外部冒険者が想定外にも大型弩バリスタを打ち込み、それを足掛かりに東門辺りで竜は倒れ、彼らが自由フリーになった。咄嗟わたりに空中廊下を仲間諸共崩す事でベルとミリアの妨害をさせない様に立ち回ったが、彼の老エルフは返す刃で旗印に向かおうとしている。

ここで止めなくては——空中廊下の崩落に巻き込んだ仲間仲間に顔向けできない。

「まあ、それでもやるけど」

半月刀を手に持ち、左手を大きく振り上げた猫人の青年は溜息と共に、腕を振り下ろした。

瞬間——無数の大型弩バリスタの矢が降り注ぐ。

「ぬっ!？」

「ぎゃああああっ!？」「なっ、城壁の上からっ!？」

猫人がこれ見よがしに注目を集め、その隙に上から連射型の装甲弩バリスタで撃ち下す。そんな簡単な策に引っかけた何人もの傭兵が呆気な

く穿たれ、地面に縫い留められる。馬上槍と見紛う其れは、連射性能を優先した結果竜を討つには威力不足となつていても、人を穿つには十二分な威力を伴う。

降り注いだ矢の数は、合計で二〇本。四機分の掃射で倒れたのは——
僅か十六人。

「結構残つたな」

「ふうむ、いかんのう。どうにも焦り過ぎておるようじゃ」

「しかも肝心のLv. 3は倒せてねえし……」

猫人の青年が半月刀を握り締め、構える。飄々とした態度は消え去り、雰囲気を変させた猫人の青年が瓦礫の山から飛び降り、集団に向けて突撃する。彼を援護する様に、城壁の上に現れた優男を思わせるエルフが矢を放ち援護しはじめ、灰色の外套を揺らすヒューマンが続けざまに城壁の上から飛び降りて突撃する。

最初の攻撃で浮足立った傭兵達を老エルフが纏め上げ、迎撃戦を開始する。

「こやつ等……ふむ、成る程。皆の者、聞けえ！ 既に奴らは手負いの獣、追い詰められ後が無い。此処を突破すれば旗印まではすぐじやろうて、より奮起せよ！ 数名は足止めを、残りは儂に続け！」

老エルフの激励の言葉に雄叫びを上げて応える傭兵達。未だに三〇名を超える大人数に対し妨害側はたったの三人。加えてLv. 3の老齢で思慮深いエルフまで交えては、とてもではないが抑え込めない。

猫人の青年が冷や汗を流しながら半月刀を握り交戦するも——
——多勢に無勢。数人に囲まれて防戦一方に陥り、城壁の上のエルフの方にも数人の傭兵が駆け、上からの援護が途絶える。

肝心の老エルフは詠唱するでもなく数人の盾持ちと共に彼らを見無視し、崩れた北門ではなく無事な東門に向けて駆け出していく姿がある。その背を止めようとするも——残った傭兵の足止めによつて追い付く事叶わず。

「ああ……畜生！」

悔し気にその背を見ていた猫人の青年は、駆け抜けようとする彼ら

の頭上を見て目を見開く。

老エルフを中心に円陣を組んで駆けていく傭兵達。その中心の老エルフの頭の上に——狼人の少女が槍を下に向け奇襲をかけた。

「くらええっ!!」

「むおっ!」

狼人の少女が放った奇襲の突きが老エルフの杖によって止められ、周囲の者達が素早く反応して剣や槍を彼女に向ける。奇襲失敗、わざわざ声を出して奇襲を知らせた彼女の悪手——に見せかけた、誘導。

彼女は背負っていた樽を放り捨て、向けられた槍や剣に身を刻まれながら頭の上を飛び越え——大爆発。

彼女が背負っていたのは火薬樽。吹き飛ばされた狼人の少女が地面を何度も転がる。壁に叩き付けられ、咽込み、無数の切り傷や刺し傷でボロボロの姿——爆風に巻き込まれたのか片足が千切れ飛んだ——彼女は震えながら拳を振り上げ、誇らしげに吠えた。

「オオオオッ!!」

「マジか……って、おいマジかッ!」

槍による奇襲はただの見せかけ。狙いは、火薬の詰まった樽を至近距離で起爆する事。

高威力の爆発によって重症の狼人の少女は戦闘不能。そして、それだけの損害を被ってなお、有り余る利を得た。

反射的に火薬樽を杖で殴った老エルフは魔術師であり耐久の低さから戦闘不能、周囲にいた護衛の傭兵も全員が爆風で倒れている。足一本失って第二級魔術師と第三級の冒険者数名を討ち果たした大戦果である。

「あと、少しだっ!」

残るは——アポロンファミリアの旗印を破壊する事のみ。

爆砕された玉座の塔。

大量の瓦礫と、アポロンファミリアの近衛兵が倒れ伏す戦場。

土煙立ち上る戦場の一角、ヒュアキントスは油断なくその土煙の向こう側を見据えていた。

「……今の一撃で、死んだはずだ」

たかが第二級冒険者が耐えうる一撃ではない。ヒュアキントスが誇る起死回生の切り札、魔法。

ドラゴンテイマー
竜を従える者の連れていた赤飛竜をレッドワイザアーン一撃の元に粉碎したその魔法。それを喰らってベルとミリアが生きているとは思えない。その、はずだった——

「うっ……ミリア、大丈夫？」

「ベル……その、腕……」

「馬鹿な、あの一撃を受けて生きているだど!？」

風が吹き抜け、土煙が晴れた其処には、五体満足の姿のベルとミリア——アポロンファミリアの喉元にまで刃を突き付けた宿敵の姿があった。

有り得ないとヒュアキントスが驚愕しながらも警戒するさ中、ベルがふらつきながら立ち上がる。

ミリアを庇い高威力の炸裂弾をその身に受けた彼は、右腕がだらりと垂れ下がり、その手に握られていた紅緋のナイフが零れ落ち、硬質な音を立てて転がる。

左手には何もなく、右腕は肩から先が動かない。肩鎧を失った右腕からは、夥しい量の血が零れ落ち、瓦礫に染みを生み出していく。そんなベルは、庇ったミリアを見下ろし、無事を確認して——微笑んだ。

「良かった、ミリアが無事で」

「……なんで、私なんかを……」

後少しで、勝利を得られたのに。ミリアがそう呟けば、ベルは首を横に振って、左手のみで拳を構えてヒュアキントスに向き直り、呟いた。

「僕は家族を守りたいんだ」

それに、約束した。皆で勝つんだ、と。

切り落とされた片腕に高位回復薬ハイ・ポーシジョンを振り掛けて傷を塞いだヒュア

キントスが、ベルの言葉を聞き、鼻で嗤う。

「馬鹿め、あのままミリア・ノースリスを見捨てていれば勝てたモノを……」

遠くに見える紫紺の剣が砕け散り虚空に消え、北門方面より大きな爆音が響く。

アポロンファミリアも壊滅的な被害を受けたが、ハステイアファミリアももう戦力は残されていない。

「どうせもう碌に動く事もできまい……貴様らを討ち果たし、この私が貴様らの旗印を引き裂いてくれるっ！」

ヒュアキントスが吠え、彼を庇ってベルの魔法を受けたドワーフの手から斧槍ハルバードを抜き取り、握り締める。

憎悪の色を燃やし、ヒュアキントスが一步前に出た瞬間——ミリアが魔法を放った。

「ファイア」っ

「おっと、危ない……まだ抵抗するのか」

瓦礫に倒れ伏し、立ち上がる事が出来ない程に疲弊したミリアのなけなしの魔法は、ヒュアキントスの斧槍ハルバードの一振りで掻き消された。しかし、続く射撃にヒュアキントスは後退させられる。

「ファイア」【ファイア】っ！

「んむ、気品が足りん、やはり貴様らはアポロン様に相応しくない」

ベルはミリアを庇った事で立ち上がっただけで精一杯。その手に武器もなく、片腕を負傷して頼りなく風にその身を揺らす事しかできていない。

ミリアは立ち上がりこそしないものの、その小さな身のどこにそんな魔力が秘められているのか、未だに魔法で抵抗を続けてきている。厄介だ、とヒュアキントスが眉を顰め——醜悪な笑みを浮かべた。

「ああ、そうだったそうだった……我が旗印がそこにあつたのだな」

ミリアの放つ無数の魔弾を斧槍ハルバードで凌ぎつつ、ヒュアキントスは自らの派閥——アポロンファミリアの徽章エンブレムの刻まれた旗印の傍に立った。無防備に斧槍ハルバードを突き立て、旗を仰ぐ。

その背を穿たんとミリアが魔弾を放ち——魔弾はヒュアキントスに届く事なく、虚空に消えた。

「——は？」

「ふ、ふははははっ、ミリア・ノースリス。残念だったな……旗印の周囲では魔法は無効化される」

魔法の無効化範囲に逃れたヒュアキントスが静かに振り返り、ミリアを見下した。魔法による抵抗は、旗印の効力によって無力化された。彼女が放つ魔弾は、旗印の効力——この戦争遊戯ウォーゲームの為だけに作りだされた、魔法を完全無効化する機能——によって、掻き消える。

彼女の瞳に、絶望が宿る。ヒュアキントスを倒せなくてはこの場を脱する事は出来ない。

ヘステイアファミリアを守っていた深紫の護り刀は消え失せ、いつヘステイアファミリアの旗印が破壊されてもおかしくはない。北門付近から響いていた戦闘音も途絶え、一刻の猶予も無い状況。

ベルは立っているが、もう限界に近く一步も動けない事は明白。唯一の抵抗手段であった彼女の魔法は封じられ、手の打ちようがない。「ふむ、そうだな……ではこうしようか」

ヒュアキントスはこれ見よがしにボロボロになったマントを脱ぎ棄て、アポロンファミリアの旗印をマント代わりに羽織る。風にたなびく太陽と弓矢の徽章を身に纏い、ニタリと醜悪な笑みを以てベルとミリアを見据えた。

「では、ベル・クラネル……貴様を殺すでしょう。安心しろ、貴様が身を挺して庇ったミリア・ノースリスは——我が派閥がしっかりと面倒を見てやろう」

鳥籠にでも入れて、な。見下したヒュアキントスが突き立てた斧ハルバード槍を手に一步踏み出し、ベルを殺すべく片腕で握りしめた獲物を突き付けた。

詰み、不可能、敗北。そんな否定の言葉ばかりが脳裏を過る。

頑張った、一杯、とてつもなく、凄く頑張った。がんばって、いろ

いろかんがえて、それでも——とどかない。

あと一步まで行った。惜しかった、なんて言葉じゃ軽すぎて表現として間違ってるんじゃないかって思う程に、あと一步だった。

魔法が効かない。ヒュアキントスがマント代わりに纏ったその旗印は、魔法を完全無効化してしまう特殊な神の力の宿った代物。たかが地上の人間如きでは、どうにもならない絶対の護り。

風に揺れるベルの背。瓦礫の向こうから歩み寄ってくるヒュアキントス。

もう、此処で、終わりなのか。

やっぱり、俺なんかじゃ、ダメなのか？

『あんたのやる事成す事、全部無駄だってわかんないわけ？』

あの女は、何度も、何度も、何度も、しつこく口にしてきた。

『無駄だって言ってるでしょ』

無駄な抵抗だと、お前のやる事は上手くいくはずが無い、と……確かに。その通りかもしれない。

おとうさんに会いたくて、でも会えなくて。謝りたくて、謝れなかった。

嘘を吐きたくなくて、でも嘘を吐くしかなくて。

ずっと、ずっと……いつも、いつだって、こんな風になるんだ。

——必ず、何処かで失敗する。

なんでだろうか。

——上手くいくはずがない。

後少しまではいけるのに。

——無駄に終わるんだ。

だって、今までがずっとそうだったから。

出会えた奇跡も、培った親愛も、刻んだ誓いも、何もかも全部が消えて無くなる。

約束したのに、せつかく、手に入れたのに。また——また、消えてなくなってしまう。

——まるで、最初から何も無かったみたいに。

嘘、嘘。そう、嘘だったんだ。

『信じてる』なんて口にして、それでも何処か疑って、だから、全部嘘になる。

瓦礫を踏み締め、ヒュアキントスが歩んでくる。

右手に宿した魔法は、放ったところで足止めにすらならない。

ベルは拳を握って構えているけれど、斧ハルバードの攻撃リ射程チからすれば話にもならない。ナイフも無い今のベルでは、攻撃を逸らす事も出来ない。

援護してあげたいのに、魔法は無力化されて何も出来ない。ヒュアキントスに、魔法が届かない。

立ち上がろうとしても身体は全く動かなくて、鈍い痛みと焼けた熱さのみしか感じられない。

「今殺してやるぞ。ベル・クラネル……」

ベルが、殺されてしまう。止めなきや——どうやって？

魔法は——通じない。

身体は——動かない。

奇跡は——起きる訳がない。

いつだって、世界は理不尽に回るんだ。だって——俺って嘘吐きだし。

詰み、詰んだ。此処でお終い。BAD END。来世では幸せになれるだろうか？ 前世から今世に転生したのなら、来世だってあるんじゃないだろうか？ だからここはもう諦めて、次の来世でまた頑張ろう——それで、良いのか？

——良くない。

せつかく、手に入れたんだ。この世界で、手に入れたんだ。

何とか、しなきや。守らなきや。俺は——。

「ミリア、僕が守るから」

ボロボロで、立っているだけでふらついたベルが、力強く笑っていた。輝く様に眩しい、背中だ。あの人みたいに、かつこよくて、いつだって、どれだけ疲れてても、どれだけ痛みを覚えても、それでも真っ直ぐ立って前を見据えるあの人みたいな。そんな背中だ。

——憧れの、あの人の背中が其処に有る。

違うんだ、そうじゃないんだ。ただ、その背中に憧れたんだ。家族として、その背を支えられたら、どれだけ素晴らしいかを知ったんだ。ただ、守らいたいんじゃない。ほんの少しでも良い、その格好良い背中を、支えたい。

——でも、今の俺は何も出来ない。

悔しくて、涙が溢れてきて、どうにかしたくて。

いつだって、どんなときだって、格好良い背中を見ている事しかできなくて、支えたいのに、何も出来なくて。

一人じゃ、何もできないんだ。

「ベル・クラネル、覚悟は良いな」

「……ヒュアキントスさん、僕は……僕たちはまだ負けてない」

ヒュアキントスが小さく啞い、斧槍ハルバードを大きく振りかぶった。ベルを攻撃範囲に捉え、回避も防御も弾く事もしようがない一撃がベルを襲おうとして——リリがヒュアキントスの纏う旗印にナイフを振るった。

飛び掛かりながら振るわれたリリのナイフが、旗印を——掠めた。ほんの隅の方に微かに刻まれる、切れ込み。

瞬時に反応したヒュアキントスが振るう斧槍ハルバードの柄がリリの胴体を捉え、吹き飛ばす。

瓦礫に叩き付けられ、額から血を流したりリリが鋭くヒュアキントスを睨む。

「ぎあつ……ま、まだ……負けて、ません！」

「き、貴様あつ!! よくも旗印に傷をつ！」

激昂したヒュアキントスが吹き飛んだリリに向け、斧槍の穂先を向け——ベルが眩く。

「ヒュアキントス、お前の相手は、僕だつ！」

最後の力を振り絞る様に、ベルが前に出る。一步踏み出した時点でバランスを崩す程に、体力をすり減らしたベルの、突撃。愚直ともとれる、直線的な動きにヒュアキントスが咄嗟に反撃の為に斧槍を振るう。

直撃する——ベルの頭を捉える軌道を描く斧槍が、迫り——

—リリの声が響いた。

「ミリア様っ！」

鋭い叫びと共に、リリが放ったのはハンドクロスボウ。中空を飛ぶ金属矢が緩やかにヒュアキントスの斧槍に迫り——威力不足で弾かれるその一撃——あ、そうか。

「[ファイア]ッ！」

瞬時の判断。リリの放ったクロスボウの矢。金属矢を魔弾が捉えた。

ミリア・ノースリスの詠唱を聞きながら、ヒュアキントスは攻撃を続行した。彼女の魔法は今やヒュアキントスに届かない。届くわけがない。

横槍を入れた小人族の小娘の放つクロスボウの矢も、大した威力は無い。旗印を穿つ事も出来ないちんけな威力のそれ等、視界に入れるまでもない。

振りかぶる一撃。ベル・クラネルの頭部を捉えて即死させる一撃。防御も回避も不可能な程に、愚直で、残された少ない体力を全て使つての、突撃。

馬鹿め、と内心嗤いながらヒュアキントスは吠えた。

「死ねえええええっ!!」

回避、出来ない。防御、出来ない。ベル・クラネルは死ぬ。無様に、足掻いた末に、死ぬ。その確信と共に放たれたその一撃は——ゴキツと言う妙な手応えと共に空振りした。

斧槍の穂先は、確かにベル・クラネルの頭部を捉えたはずだ。その、はずなのに——空振りしたのだ。

何故、と言う疑問を覚えるより前にヒュアキントスは攻撃を変更する。即座に左腕のみで斧槍を引き寄せ、愚直に進んでくるベルの顔面を穿つ突きを放とうとし——ベルはそれを斧槍の穂先で逸らした。

「なにいつ!?!」

ヒュアキントスが握る斧槍ハルバードの穂先。柄の先の方だけになったそれ

を使い、柄だけになっていた彼の斧槍を逸らす。僅かに軌道が逸れ、少年の頬に浅い傷を残すのみで顔の横を柄だけの斧槍が穿った。

少年の手にしていた斧槍の穂先は砕け散る。

何故、そんな疑問と共に身を引こうとし——魔法の詠唱が響いた。

「『ファイアアア』ツ!!」

無駄な事だ。聞こえる詠唱を無視し、ベル・クラネルのみに意識を集中させ——纏っていた旗印を引つ張られつんのめる。ヒュアキントスが驚愕と共に旗印を引くと——布地の裂ける音が響いた。

「な……なんだとおっ?!」

彼が視線を向けた先、自身が纏う旗印が歪んだ金属矢によって地面に縫い留められていた。

何が起きたのかわからずに動きを止め——迫る少年を見てヒュアキントスは目を見開く。

目の前には、左手の拳を握り締めた少年。

後ろに下がれば十二分な回避は可能——しかし、回避を敢行すれば旗印が裂ける。

サポーターの小人族が残した、小さな切れ込み。そこを起点に、ヒュアキントスが纏う旗印は裂け始めていた。小さな一撃が、破滅を齎す。

下手に攻撃を受けた瞬間、旗印は真つ二つに引き裂かれる。下がる事が出来ない以上、往なす他ないが——続く魔法の詠唱がやけにヒュアキントスの耳に強く響いた。

「『ファイア』」

ドシユツと鈍い音。届かないはずの魔法の詠唱、それがヒュアキントスの太腿を穿った。

飛来したのは魔弾ではない。彼の足に突き刺さっているのは、紅緋のナイフ。

——ミリアが魔弾で弾き飛ばしたそれが、ヒュアキントスの太腿に突き刺さっていた。

彼の拡声された声が観衆と建物の群れを飲み込む様に轟いた。

荒野に無造作に突き立てられたポール。
ヘステイアファアミリア エンブレム
寄り添う兎と竜の仮徽章が緩やかな風にたなびく。

第一二九話

仲間に支えられて瓦礫が散乱する玉座の間を後にする少年と小人族二人の姿、敗北に項垂れるアポロンファミリアの眷属達、引き裂かれた太陽と弓矢の徽章が、大通りの巨大な『鏡』に映し出され、都市は少し遅れてお祭り騒ぎに包まれた。

酒場では世紀に残る惨敗を喫したアポロンファミリアへの罵詈雑言が飛び交い、ヘステイアファミリアへの罵りが響き渡る。負けた腹いせに酒を呷る冒険者や、歓声を上げてヘステイアファミリアを褒め称える神々^{ギャンブラー}達。市民の殆どが浮かれる都市中心部。

中央に聳え立つバベルに集った神々もまた、喧騒は絶えない。銘々にヘステイアの子を褒め称え、批判し、好き勝手に戦争遊戯^{ウォーゲーム}の総評を始め出す。『一級フラグ建築師』の称号を与えよう等と言い出す神まで現れる始末。

「なあ……が、つ………？」

喧騒に包まれた会場の中、アポロンは、顔色を悪くして立ち尽くしていた。

己の子供達が瓦礫に埋もれた仲間を掘り起こそうとしていたり、戦争後の悲惨な後始末に心折れて膝を折っていたり。直視する事を戸惑う様な『鏡』の光景が、彼を現実から逃避させる事をよしとしない。その光景から逃げる様に二歩、三歩と後ずさるアポロンの頭から、彼の象徴たる月桂樹の冠が零れ落ちる。

「ひ、ひいっ!!」

かたり、と小さく響いた音を聞いてアポロンは悲鳴を上げて其方を見た。

真つ直ぐ、彼を見据える女神が其処に居る。静かな湖面を思わせる蒼い瞳——澄み渡ったその瞳の奥に隠し切れぬ激情を湛えた、対立相手。

彼女の瞳に怯え、表情を歪ませている男神が映る。静かにアポロンを見据えたヘステイアは、小さく溜息を零して目を細めた。

我が子に消えぬ傷を残され、眷属を虐げられ、本拠^{ホーム}を粉碎され、街

中で追い掛け回され、名声に傷を付けられ———ことごとく見下された。その怒りがどれほどのモノか、想像に難くない。

そんな女神を目の前にし、アポロンはがたがたと身を震わせ、さらにその目から涙を零した。

「ま、待ってくれヘステイアッ!? で、出来心だったんだっ、キミの子が余りにも可愛かったから悪戯を……たっ頼む! 慈悲を恵んでくれ、慈愛の女神よ!! 私達は求婚し合った仲では———」

「だ・ま・れ」

言葉を区切り、不快感を露わにしたヘステイアがアポロンの言葉を遮った。

『鏡』の一つに視線を向け、女神はもう一度アポロンを真正面から見据え、『鏡』を指さして口を開いた。

「キミは、悪戯の積りで、あの惨劇を作ったのかい?」

彼女が指差したその『鏡』には、地面に無造作に並べて寝かされているアポロンの眷属達の姿が映し出されていた。その誰もが、重症。良くて骨折、中には四肢を失った者も居れば、命を落としたのか呼吸すらしていない者の姿すらある。軀に縫り付いて慟哭する子を見たアポロンが目を見開き、ヘステイアを指さし叫んだ。

「ヘステイアッ! キミの子がこの惨劇を生み出したんじゃないか!

私は———」

「ボクは、最初に言ったはずだ。キミは後悔するとね」

「だがっ、殺す事はないだろうっ!」

私だつて殺す積りは無かった。確かに消えぬ傷は与えたが、命まで取る積りは無かった。そう叫ぶ彼を、女神は深い溜息と共に見下し、睨みつけた。

「ボクら神々にとって、戦争遊戯はただの遊戯だ、けれど———地上の子供達にとってこれは『戦争』に他ならない。命の奪い合いになるに決まってる……キミがその発端だ、ボクは……いや、ボクの眷属達は、みんな、抗っただけさ」

女神の言葉に息を詰まらせ、アポロンは『鏡』をみて滂沱の如く涙を零した。その端正な美貌は見る影もなくくしゃくしゃに歪み、情け

なく泣き続ける。

ただの蹂躪劇にしかならぬはずの戦争遊戯^{ウォーゲーム}。窮鼠猫を嚙むという言葉の通り、手痛いを通り越して致命的な反撃を受けたアポロンに、ヘステイアは静かに言い放った。

「確か、ボクが勝ったなら何でも要求を呑んでくれるんだっけ？」
「ま……待ってくれ、あれは……言葉の綾で……」

勝利を信じて疑う事の無かったアポロンが犯した失態。確かにその様に豪語してしまった事は、彼の記憶にしっかりと刻み込まれている。序に、戦争遊戯^{ウォーゲーム}に関する書面を手にした神々がヘステイアの横にしれつと並び、その羊皮紙に記載された一文——『アポロン：そこだけははっきりさせておく。後で聞き苦しい言い訳を並べられても煩わしいのでね。ヘステイアが勝者となった暁には、要求は何でも呑もう』と彼の台詞が一字一句違う事なく記載されていた。言い訳の余地等、一切ありはしない。

「キミへの要求はあの子達が帰ってから決める事にしようと思ってる。首を洗っておくんだね——」

それだけ言い放ち、女神はアポロンに背を向けた。

期待していた神々がお預けをくらった犬の様にしゅんつとしながらヘステイアを見つめるが、彼女はそれを意に介す事無く歩み去ろうとし——尻もちをついて涙を零すアポロンを肩越しに振り返った。

「——逃げるなよ、アポロン」

力なく項垂れたアポロンが、小さく頷く。

城塞としての体すら失い、完全な廃墟となった『シユリーム古城』。アポロンファミリアに与した冒険者が瓦礫に埋もれた仲間を救出せんと動き回る彼らを尻目に、片翼を失い、鱗の殆どが剥げ落ちて痛々しい姿を晒す飛竜が瓦礫を啜っては放り投げ、その下に埋まっていた男の肩を啜えて引つ張り出す。

「いてててっ……おい、もう少し優しくしてくれたって良いだろ……」

「キュイ？ キュイキュイ」

土埃に塗れた防具や着流しを払いながら立ち上がったヴェルフが文句を言うが、キュイは意に介す気はないのかまた無造作に瓦礫を啜えては放り投げ、その下のエルフの足を啜えて引つ張りだした。

べしやつと地面に投げ出されたエルフが無言で顔を上げ、赤くなつた鼻を抑えてヴェルフを見上げる。

「どうも、私は嫌われている様ですね」

「……あー、ありやキュイの平常運転だ。嫌われてる訳じゃないと思うぞ？」

魔剣の砲火を浴びて戦闘不能になっていたキュイが復帰したのか、鱗が剥げて痛々しい姿を晒しながらも次々に崩落した空中廊下の瓦礫の中からヘステイアファミリアの眷属達を掘り出していく。荒々しく瓦礫の山から放り出されていく彼らは、文句有り気に瀕死の傷を負っている様に見える飛竜を睨みながら言葉を交わす。

「勝ったんだよね？」

「ああ……アポロンの連中は皆項垂れてるみたいだしな」

「これでアポロンの勝ち、って事はないでしょ……ん？」

散らばる瓦礫を乗り越え、北門の方面からボロボロになった灰色の外套を纏ったヒューマンが顔を出し、仲間を掘り起こしている赤飛竜を見て眉を顰めた。

「おー……頭良いなあ……あ、おーい皆を見つけ……ありや？ 団長たちは何処だ？」

彼の横からひよつこりと顔を出した猫人が倒れたまま動かないヴェルフ達を見下ろし、呟く。彼の背には狼人の少女が背負われており、周囲を見回して鼻を鳴らし、上を見上げて呟いた。

「あー、上の方に残り残されてるみたいだ。ほら、空中廊下崩しちまつたし……どうやって降りるんだ？」

「……あ、マジだ手を振ってる。縄とかあつたっけか？」

戦争遊戯は終わったが、負傷した仲間の救出には今しばらくかかりそうだとヴェルフが溜息を零し、キュイの鳴き声の方に視線を向けた。

人を呼ぶ様に鳴き声を上げた彼女の足元に、半ば黒焦げのドワーフが転がっていた。困った様にヴェルフやエルフをちらちらと見る飛竜の姿に猫人が首を傾げ、狼人の少女を近場の瓦礫に放り捨てて駆け寄っていく。

「痛っ……おい、投げんなって!」

「わりい、なんかヤバそ……っておい、アンタ大丈夫かよっ!」

飛竜が身を退けたそこには、片腕が黒焦げになったドワーフの姿。彼は薄目をあけて眩しそうに眼を細めたのち、無造作に身を起こした――盾を握っていた左腕が肘の辺りで枯れ枝を折る音を響かせて折れる。

顔の前に折れた断面を持ってきた彼は、溜息と共に猫人を見上げて笑った。

「勝ったなら勝利の美酒だって言いたかったが……その前に再生薬が欲しいな」

「……なんだ、その、案外余裕そうだなアンタ」

心配して損した、そう眩いた彼は粉碎された玉座の塔を見上げ、溜息を付いて眩いた。

「団長たちをあそこから降ろさないとなあ……使えそうな大型弩バリスタの矢にでも縄を括り付けてぶっ放すか?」

「あれ以上崩れたらまずいんじゃないか?」

「……誰かが下で受け止めるか?」

「ギルドの調整員が……来ても無駄そうなんだけど」

崩れた玉座の塔を見上げた彼らは深い溜息を零した。

「戦争遊戯たかが終わった後の方が、なんか大変な気がしてきたぞ」

「……あつ、俺用事思い出した。団長たちの救出は任せる」

猫人の青年がぱつと片手をあげて背を向けて駆け出そうとするのをエルフの少女が非難の視線を向ける。

「最低です」

「……いや、その目はやめてくれ。功労者迎えに行ってくるだけだっ
ての」

ほぼ真上に太陽。

吹き飛んだ玉座の間から崩れた空中廊下の端つこに腰掛けて、ベルとリリと俺の三人は途方に暮れていた。

「どうやって降りましょう……」

「あ、はは……」

勝利の余韻に浸る事数分。皆と勝利を分かち合おうと急ぎ向かうとした先には、崩れて通れなくなった空中廊下。下を見下ろせば瀕死っぽい見た目のキューイが瓦礫の中からヴェルフやロキファミアからの増援の者達を掘り起こして並べていた。彼らがわちやわちや動いて此方に手を振ってくるのに応えつつ、三人で座り込んで雲の少ない晴れ渡る空を眺める。

暫くはこのままだろう。生憎と、自らの手で脱出路を潰しているので救助まで時間がかかりそうだ。

「……僕たち、勝ったんだよね」

「ええ、リリ達は勝ったんです」

勝った。勝利——まるで、夢みたいで、未だに信じ切れない。本当に勝ってたのだろうか？ 都合の良い夢でも見ているんじゃないだろうか？ そんな風に自分を疑ってしまうぐらいには、信じ難い勝利だ。

何せ、敵の人数は此方の三〇倍以上。無双ゲーの様な雑魚をなぎ倒す様な戦いなんてできない現実で、あの戦力差——それも、相手は城砦に籠り、此方は平地。全く勝利への道筋が見えなかったのだ。「二応、皆さま生きていますみたいですね。誰かが欠けた、なんてことにはなっていない様子です」

何人か、死んでしまうと思ってた。けれど、下では皆が困った表情で瓦礫に腰掛けて此方を見上げている。

傷だらけの着流しと防具姿のヴェルフ、片腕がなくなったドワーフ、蚯蚓腫れの様な雷撃の跡が腹に残る赤眼のアマゾネス、顔の半分が血塗れになったエルフの少女、両手を上げて喜びを示すアマゾネス。

片足が無くなつて全身傷だらけの狼人の少女、彼女の治療をしているエルフの青年。ボロボロになつた灰色の外套のヒューマンが近場に転がっていた大型弩の周囲でどこそこ何かやっている姿がある。

「あ、ミコト様にリユー様です」

「本当だ……リユーさん、生きてたんだ……よかつた」

猫人の青年に肩を貸されて歩くミコトと、此方を見上げて高々と旗を掲げて示してくれるリユーさん。体中包帯で巻かれて木乃伊みいらの様になつていてふらふらとしているが、それでも彼女は自力で歩いていた。

「ミリア、ミリア？」

「ん？ どうしたの、ベル？」

心配そうに声をかけられ、そちら見れば赤い瞳で此方を見るベルの姿があつた。

どうしたのかと首を傾げれば、リリも同じ様に此方を見て口を開いた。

「大丈夫ですか？ その、さつきから余りにも静かで……」

ああ、うん。黙つてたから心配されたのね。

そうだな……なんとというか。うん、夢みたいなんだ。

「夢、みたいで」

「夢？」

そう、夢。必死に抗つて、抗つて……不可能だつて何度も、繰り返して否定されたそれが、成就した事が未だに信じられない。ふとした瞬間に聞こえていた、あの女の声はもう聞こえない。脳髓にこびり付く様な、あの声は、もう……何処からも、響いてこない。

「なんか、奇跡的な勝利だったので……」

夢みたいで信じられない。そう呟けば——ぐに——と頬を引つ張られた。

無言で頬を引つ張るリリが、真っ直ぐに俺を見ながら、微笑んだ。

「どうですか、痛いですか？ ——夢じゃないんですよ」

「うん、夢じゃない。勝つたんだ」

ベルが立ち上がり、ボロボロになつた紅緋の短剣を左手に握り締

め、高々と掲げ——歓声が響いた。

数は多くない、けれども確かに響く歓声。下にいる仲間達が手に武器を持ち、振り上げて歓声を上げている。ヴェルフも、ミコトも、増援の者達も、響け轟けと言わんばかりに大声を上げていた。

「ほら、夢じゃありません。リリ達は勝ったんですよ」

リリに手を引かれ、立ち上がる。

不思議と、身体の痛みは無い。回復魔法をかけるだけかけて、応急手当はした。

それでも片腕が動かないベルと、土埃に汚れたリリは笑って武器を掲げる。

「ほら、勝鬨を上げましょうよ」

そう言われ、腰の剣に手を伸ばす。右手に深紅の剣を握って、天高く掲げた。

切っ先の先に眩い太陽。目が眩み、肩が鈍く痛む中——叫んだ。

喉が軽く痛むぐらいに、大きな声で上げる鬨。呼応する様に仲間の鬨が響いて——すんつ、と腰が抜けた。

「ミリア様、大丈夫ですか!？」

「ミリア!」

「え、ええ……平気、ただ——勝った、のよね?」

ようやく、と言えはいだろうか。勝ったという事実がじわりじわりと、勝鬨を引き金に実感を伴って全身に染み渡る。

疲弊しきった体なのに、不思議と力が湧いてくる様な、不愉快ではない感覚。

ふと、強張っていた顔が緩む。自然と、頬は緩み口角は上がる。

「うん、勝ったんだよ」

「ええ、勝ちました」

二人の言葉に、ようやく感覚が追いついてきた。

勝った、そう、俺達は勝った。あの絶望的な戦力差を、圧倒的に不利な状況を覆して勝利を掴んだ。

誰に憚る事もなく胸を張って言えるだろう。

「ヘステイアファミアの勝利ですね」
ああ、早くヘステイア様に会いたい。

ロキファミア本拠ホーム。

杯を小さく掲げ、口にする四人分の影。窓から差し込む月明かりと、燭台型の魔石灯にうつすらと照らされた室内。

杯を空にしたロキが真つ先に口を開いた。

「むつちや興奮したっ」

「ああ、柄にもなく歓声を上げてしまったよ」

「まあ、そうだな。あの状況からの逆転……まさか勝つとはな」

「なあ、やっぱりあのベル・クラネルとやらとSUMOUとやらをした
いんじやが」

フィン、リヴェリア、ガレスの言葉が続く。

アポロンファミアヘステイアファミアの太陽と弓矢と寄り添う兎と竜。二つの徽章が刻まれた戦争遊戯ウォーゲームの概要が書かれた羊皮紙を四人で囲んでの、ささやかな祝杯。

神々の想定を超えた——超える処か超越した、歴史に名を刻み
かねない程の激戦。

昼間に行われたその戦争遊戯の影響は、日も暮れた後もオラリオに
多大な影響を与えていた。

「未だに皆騒がしいね」

「だろうな、神々も酒宴の真つ最中だろう」

彼らが視線を向けた先、オラリオの街並みはいつも以上に賑わいを
見せている。

どこの酒場も今日の戦争遊戯の話で持ち切り。当然、ロキファミア
アの眷属達も彼の戦いの話題一色で染まっている。特にアイズヤ
テイオナの二人には団員達が群がり、ベル・クラネルにどんな鍛錬を
したのか等の質問攻めにあっている——ベートは事が終わって
すぐにダンジョンに潜り、未だ帰っていない。

「ああ、ヘステイアファミアが勝ってくれたおかげで、心配事が一つ
減った」

「再生薬、か。ありがたい事や」

ロキが歓喜を滲ませながら酒に手を伸ばそうとし、横から伸びたりヴェリアの手が酒瓶をとり、ロキに酌をしはじめる。上機嫌に酌を受けたロキは杯をテーブルに置いた。

ヘステイアファミリアの眷属、ミリア・ノースリスが従える飛竜の血から作り出される、欠損を治療できる道具。万金の価値在りのそれを最優先で——それも半額で——取引する権利。それを手にしたのだ。

「それにしても……彼らには悪いけど、勝てるとは思わなかった」

「あー、まあそうやろなあ」

最期の瞬間。ヒュアキントスがミリアを魔法で攻撃し、ベルがそれを庇った際、ロキファミリアのほぼ全員が失望の声を上げ、あの時点で負けを確信した。ベートが苛立ちのあまり柵を粉碎したりもしていたし、レフィーヤは手にしていた紅茶をぶちまけた。アイズとテイオネが固まり、フィンは額に手を当てて今回の損失を計上した上で報復措置としてアポロンファミリアへの襲撃計画を練り始めたのだ。

それは、良い意味で裏切られたのだが。

「しかし、あの土壇場である魔法の使い方。リヴェリア、同じことが——」

「何度も言わせるな。あんな馬鹿げた魔法の使い方なんか出来る訳がない」

ミリア・ノースリスが使った、魔力の塊を直接相手の武装に捻じ込んでの、爆殺。同じ真似ができる魔術師が居るかという質問にリヴェリアは深い溜息と共に否定の言葉を放つ。たとえ同じ魔法を覚えていたとして、彼女の様に魔力の塊を気楽には扱えない——それこそ一歩間違えば自爆しかねない危険な行為等、考え付いたとしても実行などしようとは思えないだろう。普通なら、だが。

「彼女は普通じゃなかった」

「まあ、そうやろ。あんなん普通やない」

ロキが酒を呷るのを止め、席を立てて月を見上げた。その背にフィンが視線を向け、小さく問いかける。

「ロキ、聞かせてくれ……彼女は何者……いや、何なんだ？」

あれは、人か？ そう問いかけられたロキは肩を竦め。席に着く三人を振り返った。

「神々ウチラ中にはな、阿呆な事考え付く奴がぎょうさん居ったんや」

自嘲気味に笑みを浮かべたロキが、小さく呟く。『最強の眷属計画』と

「概要は……まあ、胸糞悪くなる話やから省くわ」

碌でもない、神々が考え付いた行為。

神々の思い通りの眷属を生み出す為の、卑劣な計画。

「その完成形やろなあ」

一人一つしか、神の恩恵は授けられない。一度授けられれば、形を変える事は出来ない。

消去リセットは出来るが、あくまで経験値エクセリアを無かったことにする事ぐらいしかできない。Lv. 1に戻せはしても、傾向は変えられない。

ガレスが魔術師に成れない様に、リヴェリアが前衛壁役タタキに成れない様に、その本人の持ち得る資質そのものを変える事は、出来ない。

「普通なら、な」

魂そのものの形を変える。それは出来なくはない。

しかし、その過程において大半の人は壊れてしまう。罅割れた魂から感情という名の中身が零れ落ち、空っぽになってしまう。廃人に成り果ててしまうのだ。

「けどなあ……理論上の話なんやけどなあ？」

魂に罅を入れても、強い感情なら零れ落ちる事はない。壊れて果ても、それこそ魂という名の器が無くても維持できるぐらいに強い感情を持つてさえいれば、廃人にはならない。

「強い、感情……」

「想い、か」

「せや、ミリアにはそれがあつた」

家族への想い。強く抱かれたその想いだけは歪まず、消えず、壊れた魂でありながら、彼女を彼女として維持し続ける要因となっていた。

そのおかげで、本来なら廃人一直線の環境に置かれてなお、彼女は廃人にならずに自我を保っていた。

「歪な在り方やちゆうんは、最初に一目見たときにわかったわ」

ロキがミリアと出会ったのは、酒場が初めてだった。まじまじと彼女を見つめたとき——彼女の内側の魂を見たとき、酷い有様であった。

限界まで罅割れ、それを隠す様に泥の様なモノに覆われた、壊れかけ——壊れた魂。

泥は、彼女が自ら生み出して纏ったモノだろう。自分は、薄汚れた人間だと自己暗示に近い様な、魂すら汚す其れ。女神フレイヤが目にした瞬間、殺意を以て対応してしまう程に完璧な汚泥。

「あれは駄目やなって思った。絶対、壊れるちゆうんか……どうにもならんなあつて」

どうにか手を差し伸べようとも、彼女はその手を取らないだろう。汚泥で自らを穢して誰の手を取るでもなくただ自滅するだけの魂。よくもあそこまで壊れて尚、自我が残っていたモノだと思える程に、壊れていた。

破滅する事しかできない、そんな哀れな子だった。

「予想外やったんは、それはドチビ——ヘステイアが救った事や」
女神ヘステイアが、壊れたソレを救った。救い上げた、どんな手品を使ったのか——否、彼女を知るロキは断言できるが、ヘステイアはあるがままにミリアを受け入れたのだろう。結果的に、それがミリアを救った。

「壊れて汚れて、それでもその奥底にあったもんは何一つ変わらんかった」

「……家族への想いか」

「そう、それだけは、どれだけ汚れても、壊れても……消えなかった」

自身の全てよりも、家族への想いを優先する。酷く歪んだ考え方し
かできない、純粹な魂だ。

フレイヤが気に入る理由もわかる。そう呟いたロキは自嘲した。

「あれは、ウチやフレイヤではどうにもならん。腹になんか抱えたまま接したら、そのまま信頼される事なく壊れていくだけの子やったしな」

ミリア・ノースリスが、ミリア・ノースリスとして在れるのは、女神ヘステイアの元だけ。

そして、彼女があゝの歪な魔法・スキル構成になった理由も、説明が付く。

「簡単やろ、あれがミリアの在り方や」

壊れて形の無い彼女は、自らの意思で魂の形から変化をしていく。不定形な魂なのだから。

「……待ってくれ、だとするなら……彼女はなんにでも成れるのか？」
前線で敵の猛攻を止める壁役タンクにも、後方から魔術を放つ魔術師にも、どんな存在にだってなれるのか。そんな疑問にロキは苦笑しながら首を横に振った。

「ないない、そりゃないわ……言つたやろ、中身は変わらんって」

あくまで変化するのは、魂の形——スキルや魔法の構成のみ。その中身、内側を形成する能力アビリティまでは変化しない。

「せやな、スキルと魔法の構成は変わる……っちゆうてもアレには法則がある」

具体的に言えば、性質だろう。

彼女が持ち得る特質からして、本当になろうと思えばなんにでもなれる。けれど、それは有り得ない。

一定の法則の上に自らを置いているからこそ、彼女は破滅せずにその特質を生かしているのだから。

「アレは、せやな。多分やけど最もミリアが強い想いを抱いとるものの性質に寄つとる」

酒場の話に出た、父親が生み出した遊戯ゲーム。それに登場する架空の人物の性質をその身に写し取っている。よほど、その父親が生み出したソレに固執している事は、彼女と話せば察せられる程だ。

「せやから、いきなりリヴェリアとかレフィーヤの魔法を写し取ってきて使ってきたりはせえへん」

「……それだと、ベル・クラネル 速攻魔法やヴェルフ・クロツフ 対魔力魔法、ヤマト・ミコト 重力魔法を模して使ってくる、そう聞こえるが」

彼女が家族に強く依存しているのならば、家族の魔法をその身に写し取って使ってくるのではないか。そうガレスが懸念を示す。それにフィンが答えた。

「それはない。家族に成り替わろうなんて考えないだろうしね」

あくまでキャラクター架空の人物だったからこそ、彼女はそれを模したのだから。そう呟く。

「ともかく、あの性質変化は他にも何種類かあると考えた方が良くだろうね」

「長距離砲撃は、脅威だが他にも……厄介だな」

「おいおい、勘弁してほしいもんじゃが」

無限に魔法が使えるのなら厄介過ぎる。レフィーヤの様に自分の魔法の詠唱文に加えて発動したい魔法の詠唱文を唱えねば使えない、等と言う制約が無い。その厄介さにリヴェリアが小さく呟くと口キが肩を竦めた。

「一回に変化できるんは一種類やろ」

自らの意思のみで性質変化するのではなく、女神の力添えを受けての性質変化である。

無限の変質を可能とするわけではない。ミリアの性質上、制限が一切無いとは考えづらい。

「つまり……」

「基本の分岐ガン・マジック詠唱魔法に加え、性質変化後の一種類の魔法。って事かな」

基本に加えて、不明なもう一つの隠し玉を持つ。

敵対した際のリスクを考えるとあまりにも恐ろしい性質にフィンが困った様に頬を掻き、ガレスが唸る。

「どのみち、基礎の状態ですらありゃ手に負えんぞ」

空中を飛ぶ小さな金属矢を撃って、敵の攻撃を妨害する。

連続して放たれた金属矢を撃って、敵のマントを地面に縫い留める。

ベル・クラネルが落としたナイフを弾き、ヒュアキントスに命中させる。

あの一瞬の間に彼女が起こした行動は、アクションどれも魔法によって間接的に引き起こされたモノだ。

「——あんな絶技を持つてる上に、隠し玉まで……となるとね」

敵対だけは絶対に避けたい。フィンがそう呟く。

ロキ、リヴェリア、ガレスの三人も同意見なのか深く頷いた。

第一三〇話

小石を車輪が踏んだのかガタリと馬車が揺れた事で目を覚ます。

戦争遊戯終了後、苦勞して半壊した玉座の塔から地上に下りた所でやってきたギルドの調整員の案内の元、馬車へと乗せられた事をうっすらと思ひ出しつつ、幌馬車の中を見回した。

「……目が覚めましたか。オラリオまでは暫くかかりますのでもう少し寝ているべきかと」

包帯で覆い尽くされた顔に一瞬驚き、それが功勞者でもあるリユースさんと気付いて身を起こした。

馬車の中にはベル、俺、リリ、ヴェルフ、ミコト、そして包帯で全身を覆ったリユースさん。リユースさん以外は疲労の為か寝ている。まあ、俺もついさつきまで寝ていた訳だが。

外套を丸めて枕代わりに使って寝ているベル。乗せられた木箱に凭れて眠るヴェルフ、そのヴェルフの足を枕にしているリリ。ミコトは座ったまま刀を抱く様に寝ている。視線を巡らせて再度リユースンを見て笑いかけた。

「なんか、目が覚めちゃいました」

「そうですか」

寝ている他の皆を氣遣ってか小さな声で返事をした彼女は、小さく息を吐いて目を閉じた。

ガタリ、と大きく馬車が揺れる。現代のアスファルトで舗装された道ではない踏み固められただけの街道。当然の事ながら、揺れは酷い。行きはキューイの背に乗っていたので氣にならなかつたが——
——キューイの背もそれはそれで乗り心地はあまり良くはないが——
——時折小石を踏んでなのか揺れるのは仕方のない事だろう。

ふと、御者席の方から話声が聞こえてきたため、耳を澄ました。

「オラリオの市壁が見えてきたな」

「塔は結構前から見えてたけど、もうすぐか」

「んー、まだまだいけるだろ」

御者を務めているのはガネーシャファミアリアから改宗^{コンバージョン}してくれ

た増援の内の二人。猫人の青年、デインケ・レルカンとヒューマンの青年、ルシアン・テイリスの二人だったか。一人だつまらんと二人で肩を並べていたはずだ。

それよりも、オラリオの市壁が見えてきたのか。距離としては四Kぐらいか？ あれ、でもあれは地球の大ききさで言えばの話だし、この世界だともっと距離があるのか？ それとも近いのか？ いや、でもどうでもいいか。

馬車の中で寝ている皆を踏まない様に御者席の方へ近づき――
―遮っていた布がはらりと捲れ、猫人のデインケがおお、と声を漏らして此方を見ていた。

「目が覚めちまったか。悪いな、ウチのヒューマン、御者として未熟だよ」

「おい、俺が悪いみたいになよ。御者なんて誰がやっても一緒だろ」

またまたあとニヤリと笑って冗談を零した所で、ガツンツとしたから突き上げる様な衝撃を受けてよろめいた。腕を掴んでもらって転倒は免れるも、ルシアンの方は舌でも噛んだのか呻いている。腕を掴んでくれたデインケが呆れ顔で肩を竦め、彼の手から手綱を取って御者を交代した。

「ったく……って、今ので皆目が覚めちまったか」

馬車の中を覗き込んで彼がそう言ったので、俺も後ろを振り返ればむすつとした表情のリリがヴェルフの足をべしべしと無言で叩いていた。

「どうしてベル様ではないのですか」

「おい、叩くな叩くな……」

「二人ともどうしたの？」

確かに、皆が目を覚ました様子だ。ミコトは……舌を噛んだみたいで涙目で口を押えていた。

「ベル様の膝枕が良かったです」

「人の足を枕代わりにしといてその言い草はないだろう」

「あはは、そうだ、もうオラリオについたのかな」

ベルの言葉に視線を進行方向に戻せば、無言で猫耳を掴んで引つ張るルシアンと、それを平然と受け流すディンケの二人越しにオラリオの市壁が見えた。

思わず二人の横から御者席に乗り出してみれば、広がるのは草原地帯。なだらかな丘の上からオラリオを見下ろす光景がそこにあつて――
「思わず、ディンケの肩を掴んで更に身を乗り出した。」

「――あ」

オラリオの入口、東門の所に大勢の人が集まっている。その中に、見覚えのある女神の姿がある。

大勢の人に囲まれ、此方を見ている、黒髪をツインテールにした女神――ヘスティア様が門のすぐ前に仁王立ちしているじゃないか。ディンケが苦情を口にするのを聞いて申し訳ない気持ちになりつつも、後ろでリリとじゃれ合っているベルに声をかけた。

「ベル、ヘスティア様が居ます」

「え？ 神様が、ごめんリリ、ちよつと退いて」

慌てた様子で御者席に身を乗り出す。ルシアンが身を退け、ベルが御者席から身を乗り出し、目を輝かせた。

「神様――」

ぱつと御者席から飛び出し、馬車を引く馬の背を踏み付けて大きく飛んでベルが駆け出して行った。文句有り気になく馬を見つつも、後ろを振り返って一声かける。

「すいません、一足先に帰りますね」

「ちよ、ミリア様まで――」

「おう、行ってこい」

ぐつと親指を立てて見送ってくれるヴェルフと、口を押えながらも親指を立ててくれたミコト。リリが呆れ顔を浮かべているのを尻目に御者席を飛び出してベルの背を追った。

あれだけの激戦の後、即座にオラリオに向かうべく一晩の休憩を挟んだだけのベルは、全快と言える程ではないはずなのに速い。俺が遅い、と言う訳ではないと思う。俺も十分に速いが、それでもベルには敵わないか。

それでも追い付くのを諦めない様に足を動かし——首根っこを引つ張られ、身体が持ち上がった。

「うわっ!？」

「キューイ、キューイ?」

——遅いじゃん、何してんの? そうキューイに声をかけられる。

首根っこを啜え、放り投げられてキューイの背に着地。つい昨日、片翼を挽がれたというのに脅威の再生能力で回復したキューイが、俺を背に乗せて加速した。

いや、速いなキューイ。地上を駆けるベルも速いが、キューイも負けてない。ベルの背に追い付き、並走する様に飛び始める。

徐々に近づいてくるオラリオの東門。沢山の人々が集まっていた。市壁の上にも数え切れないぐらいの人と、神。よく見れば『寄り添う兎と竜』の描かれた旗を大きく振っている。出迎える様に門の前に仁王立ちしていたヘステイア様が、此方に気付いて大きく手を振っていた。

大した距離ではないというのに、それこそ十分もかからずに到着できる距離だというのに、徐々に近づいているのに、それがもどかしいぐらいに遅い。

ヘステイア様が門を飛び出して此方に来ようとするも、ギルド職員らしき者に止められている。オラリオの外への戦力流出禁止令を守る為か、上級冒険者を眷属に従える神はむやみやたらとオラリオの外に出られないというギルドの規則ルールによってだろう。

ベルが一段と加速し、俺もキューイの背を叩いて加速を指示する。人使用竜が荒いと文句を零しつつも微妙に加速してくれるキューイに感謝しながらも、先を見た。

市壁の上のみつちりと詰まっている人々も、神々も、浴びせられる罵声混じりの歓声も、どれもが遠い出来事に思える。

「神様っ—」

「ベル君っ—」

もう数秒で門へと辿り着くという直前、ギルド職員を振り払ったへ

スティア様が飛び出した。ベルが減速し、ヘスティア様を受け止める形で止まる。抱きしめ合う二人の横に、キューイが地面を削りながら減速して降り立つ。

急ぎ、キューイの背を飛び下り——キューイの頭を蹴り付ける形になり、文句を言われるが謝罪混じりに二人の近くに駆け寄り、跪いた。

「神へスティア、約束の勝利を——」

貴女に、そう呟く前に体を捕まえられ、抱きしめられた。

引つ張られるように、三人で連れ合い倒れる。ぎゅーつと力一杯抱きしめられ、ヘスティア様の声が響いた。

「二人とも良くやった！ アポロンに勝ったんだ！」

「はい神様！」

少し苦しいぐらいに、力強く抱きしめられ、遠くで大歓声が響いた。その、大きな歓声も気にならないぐらいに、胸の奥から熱いものが溢れ返る。鼻の奥がつんとし、気が付けば涙が溢れ出てきて、二人を抱きしめ返した。

小さな俺の腕では、とてもではないが二人の背中にまでは手が回らないけれど——そんな俺でも、守れたんだと、抱きしめる。

「——ただいま、帰りました」

「おかえり」

耳朵を打つその温かな一言が、何よりも嬉しかった。

オラリオの中心に聳え立つ巨塔『バベル』。

それを中心に広がる中央広場セントラルパークに数多くの人と神が集まっている。

昨晚から興奮冷めやらぬ都市に新たな興奮を齎す要因がやってきたことで、再燃した市民、冒険者、神々が周囲を取り囲み、今か今かとその時を待ちわびていた。

中央広場、取り巻く観客に囲まれているのはボロボロのアポロンファミリアの眷属達。その数、二四〇人程。

戦争遊戯前には四〇〇を超えていたはずの彼らは、その激戦——

—— 一方的な猛攻を浴び—— 数を減らしている為、数は少ない。死者一一三名、負傷者二〇八名、一部重傷者はそのまま治療院に運び込まれ今なお生死を彷徨っているらしいと聞く。

集められた残りの生存者——そして、戦争遊戯ウォーゲームの敗北者達は、裁きの時を待っているのだ。

「——で、アポロンファミリアへの要求はどうしようか」

オラリオへの帰還後、一晚経った今日はアポロンファミリアへの要求の発表の日だ。

と言つても、要求をどうするか晩の内に纏める事はできなかったんだがね、だつて寝てたし。三人で。

神々が勝手に用意した舞台ステージの上に集められたヘステイアファミリアの面々。リユーさんは当然この場に居ない。あの人出てきたら不味いしね？

それと、片足を無くした狼人の「蒼空裂砕」ファイア・クーガと、雷撃の槍を盾で受け続けて挽けてしまった「不動城塞」グラン・ラムラングの二名は治療の為居ない——ファイアさんは、その、あの『再生薬』の刺激臭で嘔吐と失禁して昏倒。再生するからと調子に乗つたのを激怒した神ディアンケヒトが、嗅覚を麻痺させずに治療した結果である。可愛そうに……獣人には刺激が強過ぎたんだろう。

残るメンバーは全員集められている。人々から処刑執行はまだかと言つた雰囲気が発せられており、どんな沙汰が下されるのかの賭けすら始まっているらしい。中央で身を寄せ合つて沙汰を待つアポロンファミリアの面々は死んだ目をしていたり、俺は悪くねえと騒いだりしてる。

最前列に立たされた幹部連中と、彼らの前で跪かされているアポロンを見下ろす舞台ステージの上、居心地悪そうにヴェルフとリリが呟いた。

「どう、と言われても」

「リリもその要求をしても良いのですか？」

困惑した様子の二人がそう呟くのを聞いてヘステイア様が大きく頷いた。

「ヴェルフ君もリリルカ君も要求する権利はあるさ。もちろん、キミ

達もね」

女神に視線を向けられた面々——増援で加わった者達が困った様に顔を見合わせた。

「え？ いや、でもさ？」

「俺、俺達は、なあ？」

「……………女神のご意向に任せる」

完全にキョドリ始めたルシアンに、猫耳をビクビクさせるディンケ、目を閉じて腕組をして逃げたエルフのエリウツド・ベルメス。ガネーシャファミアリアから来た三人は特に言いたい事はないらしい。

続いてロキファミアリアの面々、と言っても二人抜けてるが。

「えー、えーつと、特に、ないかなあ？ 目は治ったし？」

「すいません、てつきり既に決まっているモノかと……………特には思いつかないですね」

「んー、お腹減った！」

一番年長者の【双拳乱舞】イリス・ヴェレーナは本気で何も思いつかないのか肩を竦め、エルフの少女、【木漏れ日】メルヴィス・ハーヴェはペこりと頭を下げた。最後、両腕の白いアマゾネスの【幼豪】サイア・カルミさんは多分ダメみたいです。この子、本能で生きてる子っぽいし。

「あの、自分は特に……………」

残るミコトも要求の内容が思いつかないらしい。

要求、要求ねえ……………彼らに対し、ヘステイアおれファミリアちは何でも要求できる。

総資産全ての没収も、派閥の解体も、本当に何でも、だ。それこそ——死ね、と命じる事すら出来る。

「んー……………派閥の構成員一人残らず処刑、アポロンも天界に送還つてのが話が楽なんですが」

まあ、それはそれで不味いっちゃ不味い。特にあの戦争遊戯ウォーゲームの様子をオラリオ全土で放送していた為、ヘステイアファミリアへの警戒度が異常に高まっている今現在に置いて、慈悲の欠片も無いような行動をとれば他派閥からの印象が悪化する。

ただでさえ『超^{アンチ・マテリアル・スナイパーライフル}遠距離砲撃』なんて馬鹿げた攻撃を持つてる眷属が所属する派閥が敵対派閥の構成員を問答無用で虐^{ジェノサイド}殺なんてした日には、ねえ？

無用に警戒されて何するにしても足を引っ張られかねないしなあ。「当然、外部からの増援である傭兵とかも含めて、になりますかね」

無論だが、完全に恨まれているだろうししようもない逆恨みされる状態な訳だ。今後一切関わる事を禁ずるとした所で、他派閥^年への改宗^後後に報復をしようとする奴だって出てくる可能性高いしね。

『ま、待て！ 俺達は関係ないだろうっ！』『騙されたんだ！』『あの商売神が！』

話し合いの声はわざわざ拡声器で広場に響く様にされている為か、集められたアポロンファミリアの構成員……じゃないな、後から入団した勝ち馬に乘ろうとした冒険者や雇われ傭兵等が騒ぎ出す。

つつつても仕方ないだろ。こいつら正規団員の様に大人しく沙汰を待つ事もせずに『俺は悪くねえ！ 商売神が悪いんだ！』の一点張りだし、ヘステイアファミリアを逆恨みしてるだろうし。

「ううん、ミリア君の言う通りではあるんだけど……流石にね」

色々な観点から皆殺しは危うい。となれば後はもつと何らかの罰則を……となるんだがね。

「とりあえず、アポロンファミリアの本拠^{ホーム}と派閥資産、それから各構成員の個人資産と武装の没収ですかね」

無論、貸金庫の鍵も没収で。それからオラリオから退散してもらおうか……しかしなあ。

にしても、騒がしくて煩いな。自分は悪くないと本気で思ってる奴多すぎじゃないかね。そんな戦争遊戯に参加した時点で無関係とはいえないだろうし。

それに、ギルドが正式にアポロンファミリア構成員だと認めてる訳だから逃げるなんてできないんだがね。

「あ、ごめん僕から一つ良いかな」

「ベル君？ 良いよ、なんでも言ってくれ」

考え込んでいたベルが何かを思いついたらしい。ベルの要求、何か気になるな。

「アポロンファミリアには街の皆に謝って欲しいんだけど……」

「ベル様？ それはどういう意味で？」

「うん、僕らとの抗争で街の皆には迷惑かけたし、それを謝って欲しいなって」

ああ、俺達を戦争遊戯ウォーゲームに引っぱり出す為にアポロンファミリアが引き起こした街中での襲撃。その際の抗争で街の住民に多大な迷惑をかけたし、それを謝罪しろって事か。なるほど。

……言いたくないけど、それって逆にムカつきそうだけどなあ。どうせこいつら悪い事したなんて微塵も思っていないだろうし、上っ面だけの謝罪になりそうだな。

「でしたら、街の復興費を出して貰いましょうか。何件か家屋が倒壊したらしいですし」

とりあえず、金で解決だ。心が籠ってなくても金品を出せばある程度はなんとかなる。

ベルの放った速攻魔法ファイアボルトの所為とは言ってはいけない。あれは空き家だったし、多少はね？

しかし、アポロンファミリアの資金って今どうなってるんだ？

「えっと、神アポロンに質問です。……派閥資産、残ってます？」

あれだけ盛大に物資を用意して運用したんだ。しかも殆どを俺達が吹っ飛ばした訳で……彼らの治療費とか考えたくないな。

「残っていると思うか？」

無駄に胸を張って誇らしげな様子で逆に質問を返してくるアポロン。殴っていい？ ねえ、殴っていい？

残ってるなんて思う訳ないじゃん。まともな賠償金回収も出来なさそうで困ったなあ。

「アポロン、質問に答えろ」

「……借金まみれでまともに資金は残っていない。唯一残っているのは本拠ホームぐらいだ」

ああ……賠償金、さよなら、さよなら。序に復興資金とか出せる訳

ないね、こりや。

となると、だ。これどうすんの？ 困るんだよなあ……資産回収の前に借金まみれですって宣言されてどうしたらいいのよ。というか額は？

「借金の金額は？」

「——だ」

んむ？

「二億と三〇〇〇万ヴァリスだ」

わあお、すつごい金額う……ちなみにヘステイアファミリアは残り四億と七〇〇〇万の借金があります。アポロンの事笑えないね、あははは……はは……はあ。

いや、まあ、そうだな。とりあえず本拠^{ホーム}は没収だ。後は残った構成員に対する罰をどうするか。

「じゃあ第一要求として本拠^{ホーム}の引き渡し。それで良いかな」

ヘステイア様の問いかけに全員で頷く。取れるものは片っ端からとっておこう、とりあえず借金に塗れちゃつてるとはいえ、残ってるモノもあるしね？

「第二要求は……アポロンの眷属の個人資産と武装の没収かな」

それも同意し、羊皮紙へと記載する。傭兵や増員の冒険者なんかが『ふぎげんな！』と騒ぎ立てるが——ギルド職員が大声で黙る様に指示を出し始める。

彼らがどれだけ騒ごうが喚ごうが泣ごうがちびろうが関係ない。敗北者である以上、黙って沙汰を受ける以外に選択肢は無いのだから。とはいえ絶対に恨まれるよなあ……勝っても面倒臭いし、やつぱ争いなんて碌なもんじゃねえ。

「第三要求として、派閥の解散……は流石に不味いね」

「外部冒険者が何しでかすかわかんないですしね」

忠誠心の高い者達は良い。アポロンの顔に余計な傷を付けない様に敗北者の刻印の押された彼らは大人しく指示に従うだろう。負けてなお喚き散らす様な恥晒しな真似はしまい。

けれど、何度も言う様に外部の冒険者は話は別だ。忠誠心の欠片も

無い彼らは、アポロンの名に瑕が付こうが関係が無いのだ。故に、何をしでかすのか本当にわからん。報復を考える可能性が高いし。

「よし、ならこうしよう」

現在の派閥構成員の内、本当に派閥を抜きたいと申し出る者は脱退の許可を出す事。ただし、戦争遊戯ウォーゲームを受託した日以降に入団した団員は今後派閥の脱退を禁ずる。

これなら過去に俺達の様に強引な手段を以て望まずに入団させられた者達を脱退させつつ、何しでかすかわからん奴らはアポロンの所で縛っておける。

「第三要求は今ので良いでしょう。で、第四要求として今後一切のヘステイアファミリアに対する間接的、直接的問わずに害する行為の一切を禁ずる、と」

友好派閥や友好的に接していた市民なんかを攻撃して間接的に害してくる可能性も排除しないとだしね。

「第五要求、オラリオからの永久追放」

まあ、妥当か。派閥資産はゼロ、個人資産も完全没収。武装も没収なのでほぼ着の身着のままオラリオから放り出される事にはなるだろうが、なんとかなるでしょ？ 多分、神だし、恩恵受けてるし。

「あ、リリから一つ良いでしょうか」

「ん？ なんだい？」

真剣な表情でアポロンファミリアの団員達を見回し、リリは口を開いた。

「ルアン・エスベルに謝罪を要求します」

ルアン……ああ、あの小人族の男。何かあったんかね？

ざわりと静かだった彼らがざわめきだし、数人の団員が何かを引き摺って最前列から放り出した。べしやつと地面に叩き付けられたのは——小人族の男、らしい何か。

いや、本当に何があった？ 顔面の形が変形してるのか元の形が想像できないぐらいにボツコボコにされたルアンの姿があった。

「——えっと、何があったんです？」

いや、一晩でルアンに何が——あつ、待って、言わなくて良い

かも。

『裏切り者がっ』『くたばれ』『こいつさえ居なけりや』

……うん、すっかり忘れてたけどルアンは裏切り者扱いだったね。そりゃ敗北者として一纏めにして輸送されてりゃこうもなるか。まあ、なんとも言えないけど、利用したの俺達だしね？ タネ明かしするとリリの魔法がバレるし、リスク考えると擁護も出来ないんだよね。うん……アポロンは投げ出されたルアンを見ても無反応。愛してるとか言ってたのが嘘みたいにも虫けらでも見る様な視線を向ける。怖いね。

「リリ、彼に対する要求って何ですか？」

「……ミリア様に謝罪してもらおうかと」

はあ？ はい？ えっと、俺に、謝罪？ むしろこつちから謝罪するんじゃない？ あんだけズタボロにされたルアンに、何を謝らせるんです？

「ミリア様を怪物趣味呼ばわりした事を、ですが……」

あー、なるほど。この世界における最上級の侮蔑の言葉を放った事を謝罪させようとしたのね。うん、まあ——そんなのされても困るんだけど。というか殺意が沸き出てくるからやめて欲しいかもしれん。

「リリ、気遣いありがとうございます。ですが必要ありません」

どうせ謝罪する気ゼロだろうしね。上っ面だけの言葉で『ごめんなさい』なんて言われたら殴りたくなる。というか、殴る。気持ちの欠片も無い吹けば飛ぶ謝罪の言葉程、ムカつくモノは無い。

「上っ面だけ謝られても困りますしね」

「ミリア様がそれで良いのなら、リリは構いませんが」

気遣ってもらえるのは嬉しいけど、ルアンからすれば裏切り者扱いの原因になってる俺達への心証最悪だろうし、謝罪する気なんて微塵もわかないだろう。とすると俺も謝る気が失せた。口は災いの元と言うし、余計な事を言ったルアンが悪いって事でここはひとつ。

「他に要求はあるかい？」

んー、今の所思いつかな——あ。

「一つ、思い付いた要求があります」

「ミア君、何かあったかい？」

んむ、反省を示す為に頭を丸めてこいつていうじゃん？ いや、実際に丸坊主にしろって意味じゃないんだけどさ。あれは『猛省してこい』って意味であつて、実際に丸坊主にしてきたら意味理解してないだろって笑われ——いや、言った相手からキレられるだろうが。

どうせ『猛省しろ』って言ってもしないだろうし、丸坊主にしちゃおうぜ。脱退する子は、まあ大目に見てやるか。丸坊主になつてでもアポロンの恩恵を手放しませんっていう忠誠心の高いのだけにしよう。増援？ 全員丸坊主決定で。

「アポロンファミリアの構成員、脱退を望む者を除いて全員の髪を剃りましょう。当然、アポロンも同様で」

アポロンを含め全員がぎよつとした様子で此方を見上げる。やめと悲鳴を上げる巫女服姿の女性もいるが、知るかハゲ——まだ丸坊主^ゲじゃないけど——自業自得って奴だ。

それに、名は体を表すと言うし、派閥名も相應しいモノにしようか。「序に、派閥名もアポロンファミリアから『ハゲファミリア』にしましようか」

『ッ!?!』

逆だったか？ 逆だな、体は名を表すになつてるが、まあ細かい事は気にしないで良いだろう。

神を殺せないから、髪を剃^{殺そ}ろう。

これは上手いギャグだな、盛大な笑いが取れるに違いない。

第一三二話

舞い散る髪の毛。響く絶叫。助けを求める声が歓声に掻き消され、阿鼻叫喚の地獄絵図を楽しむ異質な空間。

オラリオ中央部、『バベル』の正面に設けられた特設舞台^{ステージ}から見下ろすその光景に、ヘステイア様が高笑いしていた。

「あーっはっはっはー！ ざまあみろアポロン、誰に手を出したのかその禿げ頭で考えると良いさー！」

調子に、乗ってますねえ。うん、まあ……この地獄絵図を作り出すきっかけの一言を放ったのが俺である事は違いないので何にも言えないんだがね。

……にしても、酷い。

やめてくれ、アポロン様に手を出さないでくれと号泣しながら懇願するヒュアキントスの目の前で、椅子に拘束されたアポロンの背後に数人の神が立つ。『まかせろーバリバリー』とわざわざ効果音まで口にしながら毛刈り機^{バリカン}を少しずつアポロンの頭部に近づけていき——
——バリバリつとアポロンの髪が刈り取られる。

絶叫を上げるアポロンの眷属達。一際大きな慟哭を響かせているヒュアキントスは、残った片目から滂沱の如く涙を零してアポロンの名を連呼していた。いや、うるせえよ。

「やめろっ、私が何でもするっ!! だからアポロン様だけはあつ!!」
アポロン本人は堪える様に口元を引き結んで目を閉じている。

アポロン以外にも眷属達が次々に椅子に縛り付けられては髪を剃られ、適当にぼいっと放り出されていた。俺はそれを尻目に没収した貸金庫の鍵の番号を確認していく。

んむー、いくら入ってるかは知らんが……まあ、そこそこ入ってる貸金庫もあるだろう。中には逃げ出そうとした奴もいたが……周囲の冒険者が半殺しにする勢いでボコって引き摺って戻ってくる羽目になってた。理由は、言わずもがな。彼らアポロンファミリアの者達はずさまじい恨みを買っているからね、賭博関連で大損した冒険者が血眼になって彼らを睨んでるのを見ればそれもわかるう。

つか、本当にヒュアキントスは酷いな。隻眼隻腕であそこまで暴れるとは……まあ、鎮圧されてハゲになったけど。

切り取られた腕が残っていたので繋げられるかと思えば、回復アイテムがその場に無かった為、治療が遅れた結果、治らなかつたらしい。目は……眼球粉碎で治療不可能。再生薬？ 渡す訳ねえじゃん。

「酷い、ですね」

「おい、流石に同情しそうだぞ……」

リリとヴェルフの若干責める様な視線を浴びつつ、ちらりとベルを見れば青褪めた表情で惨劇を見下ろしていた。

既に半数の者達が禿げ上がり、眩しく日光を反射して若干ギラギラしているアポロンの眷属達を見てから、周囲の皆を見回して質問を飛ばした。

「腕を斬り落として片目を抉るのと、髪の毛を剃るの、どっちが惨いですかね？」

「ミリア様、とつてもお優しいですね」

「……悪い、やっぱ同情する気失せた」

死んだ目をしたリリが視線を逸らして眩き、ヴェルフが複雑そうな表情で眉を顰める。いや、優しいでしょ？ 少なくとも日常生活に支障をきたしかねない罰じゃないし？ え？ 精神的な損傷？ 知らんがな。

とりあえず、後は本拠の受け渡し状に署名を貰えば完了か。没収した武器で使え無さそうなのは————売っても二束三文だろうし、^{インゴット}鑄塊に加工して別の武器にするかな、ヴェルフが。

……あ、ヴェルフの鍛冶場が無いじゃん。加工とか製造してもられないよこれ、どうするかなあ。

貸出とかやって、ないだろうし。仕方ないかあ。

「ヴェルフ、掻き集めた没収金で本拠に鍛冶場を作ろうかと思うんですが何か希望ってあります？」

「は？ いや、そこまでされると……」

「鍛冶場のない鍛冶師って何をするんですかね？」

「……その、なんか悪いな」

いや、嫌味って訳じゃないんだよ。ただ鍛冶場無くして鍛冶師とは言えないだろうし、とりあえず鍛冶場を……つと、アポロンの処刑が終わったみたいだな。

椅子から解放され、陽光に輝く禿げ頭を衆目にさらしたアポロンが静かに此方を振り向く。ヘステイア様と視線を交わし——ヘステイア様が目を庇う様に顔を隠し、叫んだ。

「眩しッ!? アポロンこつちを向くなっ、眩しいじゃないか!!」

『——ブフッ?!』

集まっていた人々と神々がヘステイア様の叫びに噴き出した。危うく俺も噴き出しかけ、アポロンに視線を向け——眩しッ!? 何あれ眩し過ぎ!!

アポロンの眷属達も眩しそうに目を細めてアポロンを見ているし、俺達はもろに反射してきた陽光を浴びて目を庇いながらもなんとかアポロンを見る。彼の神はふるふると身を震わせ、なんとか微笑っぽい表情の様なモノを浮かべ——顔が引き攣っていて目が笑っていないが——口を開いた。

「ヘステイア、こんな屈辱を味わうなんて、思いもしなかったよ」

「いや、普通にキミが悪いんじゃないか。と言うか眩しいんだからこつちを見ないでくれよ」

ヘステイア様のわかりやすい煽りに、アポロンの表情がギチイツと音を立てて崩れかけ——なんとか踏み止まる。敗者である彼が余計な事を口走れば、より凄惨な要求が出されるかもしれないのだし、仕方ないね。

何せ、喚いた結果。今後アポ——違った、ハゲファミリアは入団条件に『ハゲである事』が追加され、拳句の果てに今後一生、彼も含めアポロンの恩恵を受ける者はハゲ以外の髪型の禁止が言い渡された訳だし。

アポロンの眷属の逃げっぷりはやばかったね。ダフネとかサンドラが真っ先に脱退を宣言すると同時に、残った幹部の内半分が逃げ出し、平団員も殆ど消え失せたのだ。残ったのは増員を除いてたったの一四名。むしろそれだけ残ったって事はそれなりに忠誠を誓われて

いたって事だろう。

「とりあえず、此方の書類に署名を——あの、ちよつと頭隠して貰つて良いですか。冗談抜きで眩しくて顔が見えないです」

本当に眩しいな、何がどう作用したらそんなに眩しい頭になるんだよ。太陽神だからか？

『流石太陽神、眩しさが段違いだあ』『余りの眩しさに顔が見えない』『ハゲファミアリアの主神は一味違いますな』

いや、本当に神々のノリつて容赦ねえわ。

アポロンが茹蟄みたいに顔真っ赤になつてる。それでも顔立ちは整つてるおかげか醜いつて程じゃないのがまた——頭の眩しさが全部台無しだけどね。

「くつ、誰の所為でこんな——」

『お前の所為だ！』

慟哭を上げるハゲを見ない様にしつつ、アポロンの署名が記された本拠引き渡しの書類をギルド職員に手渡す。これで正式にアポ——ハゲファミアリアの本拠はヘステイアファミアリアの所有物になつた訳だ。

貸金庫の鍵の束を持ち、没収した武装の入った木箱を馬車に積む様にディンケ辺りに頼んで——もうハゲには用は無い。眩しいしさつさで行こう。

「では、要求は以上を以て終了と致しましょう。アポロンファミアリアは即刻オラリオから出て行つてください」

え？ 戦力流出禁止令？ 知らんがな。それに殆ど役立たずのハゲじゃないですかやだ、ギルドがわちゃわちゃ煩いけど知ったこつちやねえつて話ですがな。

とりあえず借金十億を抱えた爆弾派閥はオラリオの外に追い出しちやおうねえ。

「では、新しい本拠に向かいますようか」

馬車は、適当に頼む。思った以上に武装がたっぷり乗せられてて馬が大変そう。つて、乗り込む余地がねえし……しやあない、歩きか。

背の高い鉄柵に、広々とした植栽豊かな前庭。巨大な石造りの屋敷。門に飾られた太陽と弓の徽章エンブレムを見上げ——視線を下げると其処にはにんまりと満面の笑みを浮かべた商売神の姿があった。

訝し気に彼らを見据える俺達へステイアファミアの面々。誰しもが眉を顰める中、商売神とその眷属らしい数人の者達は堂々とした様子で俺達の物になった屋敷の入口を封鎖していた。

「これはこれは女神へステイア……それとその眷属の方々。本日はどのような要件でしょうか？」

「……どういふつもりだい？」

膨れた腹を揺らした商売神が、横の眷属に視線で何かを促す。すると一人の商人らしき者が何かの契約書を取り出して高々と掲げた。

アポロンファミアに対する借用書。記載された内容を流し見れば、戦争遊戯に掛かった費用の請求が書かれているらしいそれ……？ 彼らはなんで屋敷を封鎖しようとしてたんですかね？

正面に出たへステイア様がそこをどけーと喚いても『これは我々が差し押さえた物件です』と引く気は無いらしい。

ふうん、そうなんだ。

「我々も商売ですから。これは既に我々の所有物——申し訳ありませんが退く事はできないのですよ」

ちつとも申し訳なさそうな感じのしない、薄っぺらい言葉。殺意すら湧きそうなその発言にへステイア様が食って掛かろうとしたので服の裾を引つ張って止める。

「ミア君、止めてくれるなっ！ コイツは身勝手な事を言ってるんだ！」

「ほほう、話の分かる眷属の方がいますな。では、商談と——」

「——【ショットガン・マジック】【リロード】」

ひよつと驚いた表情を浮かべた商売神の頭の上——
アポロンファミアの徽章エンブレムに指先銃口を向け、ファイア。

ズガンツと刻まれていた浮彫レリーフが砕け、商売神の頭に砕けた石材の破片が降り注ぐ。そんなに大きなものはなく、せいぜいが小石程度。そ

れでも驚いて尻もちをついた商売神を見下ろし、指先^{銃口}をちらつかせる。

「ちよっ!? ミリア君いきなり何を——」

「いえ、別に? ただの警告射撃ですが」

——商売神が口角泡を飛ばす勢いで叫ぶ。

「な、なにをするっ! 此処は我々の派閥が差し押さえ——」

「できませんってば」

「できねえよハゲ——いや、こいつらはハゲてないけど——」

少し考えりやわかるだろ。

戦争遊戯期間中における派閥資産の扱いについては、規則^{ルール}がギルドによって定められている。正式に勝敗が決まるまで、人員を除く物的資産——金品や建造物なんかの引き渡しは禁じられているのだ。

過去に戦争遊戯の直前に派閥の資産を友好派閥に引き渡しておいて、敗北した時の損害を減らすという抜け道を利用した派閥が存在したらしい。以後、戦争遊戯は正式に開催が決定して以降、人員以外の資産はいかなる理由であろうと他派閥への受け渡しを禁じている。

当然、差し押さえする権利があるろうと、アポロンから本拠を差し押さえなんてできない。

その上で、だ……この本拠は今現在、ヘステイアファミリアの所有物である。それを差し押さえ——強奪しようとする不届き者に対してどういった手段に出ようが、罰せられることはないだろう。

「これは派閥同士の抗争です。ギルドやガネーシヤファミリアに訴えようが——彼らは取り合わないでしょうね」

ほらほら撃っちゃうぞー。顔見てるよムカつくし撃っちゃうぞー? いやマジで。せっかく本拠どんなかなって楽しみにしてたのに気分害されて最悪だよ。

「——し、しかし我々には正式な借用書がっ!」

「ではギルドに問い合わせますか? つい先ほど、神アポロン本人に署名^{サイン}してもらった契約書を提出し、受理して貰った私達に対し、その借用書がどれほどの効力を持つか楽しみですね」

むしろこれでギルドが商売神の言う事を肯定した場合、先ほど大々

的に行われたアポロンへの要求を否定する事になる。街の住民や神々も見えていたそれを、ギルドが否定する事は出来まい。

だって警告はしたし？ 本拠前を封鎖した者達に対する反応として警告射撃ぐらい可愛いもんでしょ。

「こ、この件についてはしつかり話し合う必要がありますな。女神へステイア」

「……いや、普通に話す事は無いですが。というか——早く逃げた方が良いですよ？」

俺の優しさ溢れる忠告に対し、商売神が眉を顰め——ズドンツと商売神の足元に矢が突き立った。

驚きで身を強張らせる彼に対し、エルフの青年、エリウッドが無言で弓で照準を定める。横から剣を鞘から抜き放ったルシアンが鬼の様な形相で彼を睨む。

「な、な——」

商売神の横に立つて借用書を掲げていた眷属の持つ其れを、半月刀が切り刻む。紙吹雪の様になった借用書に声を失う商売神と眷属達。彼らの前に激怒した様子の子のデインケが降り立ち、口を開いた。

「デメエら、ガネーシャ様の名声に瑕を付けたな？」

まあ、そうなるな。

考えてもみてくれ。街中で起きたボヤ騒ぎ————赤飛竜の所為って事になってたアレ。ガネーシャファミアリアが保証したその飛竜が問題を起こした。そんなでつち上げをされれば、ガネーシャ様の名声に瑕が付くに決まってる。

オラリオで最も住民に慕われている神の名声に瑕を付けた。それがどれほど罪深い事か————考えるまでも無いと思うんだがね。

「ま、待ってくれ、あれはアツシらは何も——」

「関係無い、ですか？ それは無いですよ」

だって、アポロンに全部洗いざらい話させたし。無論、嘘は絶対に吐くなって命令もしたし。嘘吐いたらおめくりぬいちゃうぞって脅したしね。

結果、一部の罪は認めた。と言うか街中で大型弩バリスタぶつ放したのは普

通に認めたけれど、いくらなんでもガネーシャの名声に瑕を付ける真似はしないと断言したのだ。というか普通にガネーシャファミアリアに喧嘩売ったらヤバい事知ってる訳だし、アポロンもその辺りにはブチギレてた。

商売神が『良い案があります』なんて言って任せっきりにしてたらガネーシャファミアリアに喧嘩売ってるんだもんね……そりゃキレル。アポロンを利用するだけ利用して、最後には全部の罪を擦り付けて潰す気満々とか害悪過ぎるでしょ。アポロンは最終的にヘステイアファミアリアに擦り付ける気満々だったみたいだし、マジで酷いと思う。

まあ、既に彼らは詰んでるんだけど。

「——あれは、アポロンが勝手にっ」

更に言い募ろうとする前にデインケが半月刀の柄で眷属を殴って気絶させ、ルシアンが縄を取り出して縛り上げ始める。エリウツドが弓で狙って牽制されている彼らは動けず——五分もかからずに神を除いて全員が拘束された。商売神が青褪めて愛想笑いをするのが、ダメだろうね。

自らが慕う神の名声に瑕を付けられたのだ。デインケ達の怒りは尤もで——彼らはそれでも理性的に拘束するにとどめている。

「デインケさん、馬車から武装を下ろしたら彼らをガネーシャ様の所に持って行って構いませんよ」

「……良いのか？」

「ええ……」

恐れ多くも最も慕われる神を敵に回し失敗した商売神。彼がどんな末路を辿るのか——名声に瑕を付けられたガネーシャ様がどういった沙汰を下すかはわからん。

というか、あの神も下手を打ち過ぎたな。オラリオの外に逃げるとハゲファミアリアにぶっ殺されるだろうし。オラリオの街の中ではガネーシャ様の眷属達に追い掛け回されるだろうし。どっちにしろ詰んでる。

素早く武器の詰まった箱を下ろしてるのを見つつ、門を越える。

「行きましょう。気分が悪い話は此処までですよ」

「あ、ああそうだね。うん……」

歯切れの悪いヘスティア様の返事を聞きつつ、門を封鎖していた鎖を撃ち抜いて壊して中に入る。

「ミリアを怒らせない方が良さそうだな」

「あんなに怒ってるミリア様、初めて見たかもしれません」

「うん、今度から気を付けようね……」

ヴェルフ、リリ、ベル。全部聞こえてるよ……ちよつと大人げ無かったかもしれな——いや、ン億年も生きてる神相手に大人げないも無いわ。ちよつと脅しただけじゃん、そんなに怯えられると申し訳ないよ。

「ま、まあ気を取り直して行こう！ 今日から此処がボク達の家さー」

ゾロゾロを皆を伴って前庭を抜ける。前に来た時には物々しくパリスダ大型弩が並べられていたが、今はそんな事は無い。美しい植栽に見惚れ——んん？

「ミリア君、どうしたんだい？」

「——え、いや……なんでもないです」

みま、ちがい？ 見間違いか？ いや、多分、気のせいだろ。うん、きつとそうだ。

何でもないと全力で誤魔化し、今しがた見つけてしまった異物をもう一度探し——見間違いじゃねえ！

「おかしなミリア君だな、まあいい——それじゃ、おじやま、じやないな。ただいまー」

ヘスティア様が正面玄関の扉をスパークと勢いよく開け——
—広がった光景を目にした全員が硬直した。

ああ、やつぱり見間違いじゃない。幻覚ではないみたいだ。

エントランスホール正面に向かって伸びる赤絨毯。高い天井と煌びやかな魔石灯が玄関広間を照らし出す。アポロンが借り受け、神の宴を開いた会場に見劣りしない程の豪華絢爛な見栄えだ。

異物を、除けばだが。

「——な、なあっ」

「こ、これは……」

「なんだこりゃ……」

「あ、アポロンが一杯……」

赤絨毯を挟む様に左右には台座が設置されており、それが片側二二個の左右合わせて二四個ある。その台座の上には優し気な微笑みを浮かべ、帰ってきた俺達を出迎える——神アポロンの彫像。それも全身像。

よく見ると一つ一つそれぞれ若干表情が異なり、衣類の皺まで精密に彫り込まれたそれらは一瞬本物のアポロンと見紛う出来だ。それが、二四体。余りにも想像を絶する光景に皆が言葉を失う。

仕方がないので代表して赤絨毯を踏み締め、玄関広間に入り——
—天井を支える柱を見て眩暈を覚えた。

「うわぁ……」

アポロンが居た。いや、違う……柱の彫刻細工として神アポロンが彫り込まれている。どれもこれも細部に至るまで拘り抜かれた、神アポロンの彫像。それに加え、壁にかけられた絵画は全て神アポロン。本拠が自身の像になつてゐる彼の派閥ですら、内装は割とまともだったというのに。これは酷い。

「酷過ぎるぞ、これは」

「うっ、リリ、少し吐き気がしてきました」

「これは、正気を失いそうだ」

「こ、ここので暮らすんですか……?」

意気揚々と踏み込んだ先は、アポロン一色に染まった異界であつた。

何とか気を取り直して残る面々が玄関広間から入り、扉を閉じ——
——イリス・ヴェレーナが小さく悲鳴を上げて扉から離れる。

「ひっ……」

「どうしました?」

「こ、ここのにもアポロンが……」

扉の取っ手部分、よく見れば精巧に彫り込まれたアポロンの顔があつた。他にも扉そのものの模様の中にもアポロンの微笑みが踊つ

ている。

全員が無言で青褪め、メルヴィスが口を開いた。

「すいません、その……サイアが気絶したみたいなので外に運び出しますね」

「え、あ……はい。イリスさんも外で待っていて良いですよ。ミコトは、どうします?」

ロキファミアリアの面々が早期脱落。扉の取っ手を掴もうとして戸惑い、此方をちらちら見てきたので代わりに開けてあげ——取っ手の凹凸の感触がやけに手に残った——彼らが外に行つたのを確認し、他の面々を見渡す。

「えっと、今から屋敷の見取り図片手に探索に行きますが、どうします?」

「ミア君、悪い、任せた」

「……………ごめん、僕待つてるから」

「あー、悪い。俺もパス……宿とるか」

「リリは……いえ、ミア様一人に逝かせる訳にはいきませんが、付き合いますよ」

「……………自分は遠慮しておきます」

リリ、いかせるの字が違う気がするんだが。いや、間違っていないが。

ヘスティア様が頭を抱えたまま外に出て行き、青ざめたベルと眉間を揉み続けているヴェルフがそれに続く。ミコトもそのあとを続こうとし——思わずつぶやいた。

「お風呂もあるみたいですよ、ミコト」

「……………お風呂、ですか」

悪い、本当に申し訳ないんだがミコトにも付き合ってもらおう。と言うかりりが震えながらも付き合ってくれるみたいだが、一人でも多い方が楽になりそうなんだ。

これから暮らす家に対する反応としては絶対におかしいってのはわかってるが——生贄は多い方が良い。

「ええ、見てください。かなり広いお風呂ですよ」

「……………では、自分もご一緒しましょう」

「ごめん、本当にごめんミコト。流石にリリと二人つきりでこんな恐怖の館は探索できないんだ。

ヘステイア様、ベル、ヴェルフ……………後他の皆。待っててくれ、三人でなんとか使えそうな部屋を探してくるよ。こんなに酷いのは流石に玄関広間だけだと信じていた。

——そう、思ってた時期が俺にもありました。

玄関広間を抜け、奥へと進む両扉を開いた瞬間。リリが呻き声と共に後退りした時点で察して欲しい。

綺麗に埃一つない廊下。屋敷の奥へと続くその廊下には、一定間隔を置いてアポロンの肩から上の彫像が飾られていた。

意を決して踏み込み——飾られている絵画にも、扉の取っ手にも、挙句の果てに照明器具にもアポロンの微笑みが彫り込まれているのを見て俺達の体力は廊下一つで尽きそうになっていた。

「ミリア様、宿は何処にとりましょうか。リリ、安くてそこそこの質の良い宿知ってるんですよ」

「自分、タケミカツチ様に頼んで部屋を借りれないか確認を取りましょうか」

「……………二人とも現実逃避はやめて。ここ、私達の家になるんですから」

二人が顔を見合わせ、同時に口を開いた。

『此処に住むぐらいなら廃教会に住みましょう』

うん、俺も思った。天井が無い？ 壁も無い？ 崩れた廃墟？ こんなアポロンに満ち満ちた場所に比べたら天国だよ。でも、いくらなんでも個人部屋までは酷くないと思うんだ。

——思ってたんだ。

「これ、個室ですか？」

「……………えつと、見取り図によると……………幹部用の部屋、ですか」

幹部用と銘打たれた個人の部屋。扉を開けてまず目に飛び込んできたのはアポロンの彫像。なんか慣れてきた気がする。

「あははー、見てくださいよりり、ミコト、こんなところにも隠れアポロンが居ますよー」

「ミリア様正気を取り戻してください、確かに隠れアポロン様が……つて、此処にもありませんし」

「うっ……探さずとも嫌でも神アポロンの顔が……」

アポロンに傾倒した眷属の部屋に相応しい——神アポロンの抱き枕すら存在するヤベエ部屋を後にし、別の所を目指す。途中、厨房があったがアポロン塗れなんだろうなと扉からちらりと中を伺えば、やはりというか言わずもがな。壁際で一際目立つアポロン像がデーンツと存在感を發揮していた。此処は地獄か何か？

「ミリア様、リリはどうやらもうダメな様です」

「お風呂、お風呂さえまともなら……」

「二人とも落ち着いて。後ミコト、さきに謝っておくわ————本当にごめん」

絶対に、お風呂もまともじゃないんだろうな。そんな思いを抱きながらアポロンの彫像の並べられた廊下を行き——見取り図上では風呂場となっている部屋の前に着いた。

男性用と女性用でしっかりと分けられた入口を潜り、脱衣所に——

——アポロンの彫像があった。

すっごいニヤけ顔で此方を見下ろすアポロンの像。いつでもどこでも見てるよとでも言いたげな、気持ち悪い彫像にリリが小さく息を吐き——ぱたんと倒れた。

「リリ殿？ リリ殿、自分を置いて行かないでください。気絶するときは一緒にと——」

若干錯乱してるミコトを置いて、浴室へ通じる扉に手をかける。もう、考えたくも無いしきつと縁でもない景色が広がっているのは間違いないんだが、恐いもの見たさって奴だ。うん、慣れてしまえばただの石材製の像なんだからそんな大したことはないだろう。リリ？ 良い子だったね。

扉を開け——全力で閉じた。

メシイツと取っ手のアポロンが軋みを上げる程に強く掴み、今見た光景を脳内でしっかりと認識していく。

認識するのを拒否しそうな頭を扉に打ち付け、先ほどの光景は現実

だったのだと自身に言い聞かせ——扉を開けた。

目につくのは水はけの良さそうなるりとしたタイル床。整然と並んでいる床は水垢一つない美しい輝きを保っている。わあーきれいだなあー。すっごいおつきなお風呂だよー。

次いで流し場。置かれた椅子におかしなところはない。大きな浴槽と、それに併設されているアポロンの像。

壁から腿の上の辺りから突き出たアポロンの像。その口には、穴あれだ、マライオンならぬマーアポロンだ、まあ想像してたからこれは良いんだな、これが。かわいらしいもんじゃないか。

問題はその股間だ——なんで雄々しくいきり立つ逸物まで再現しちゃった訳？

いや、待て。口からお湯が出るのは良い。素っ裸なもの、まあいいだろう。ギリシャ彫刻関係には全裸像なんて珍しくないし、陰茎に玉袋、挙句の果てに陰毛までしっかり彫り込まれた像もあるしね？

でもさ、なんで勃起させてんの？ まさか私の陰茎は芸術だーとでも言いたいの？ もしくはキミ達の美しい肢体で私はこんなにも興奮してるぞって言いたいの？ 馬鹿なの？ なんでアポロンはいきり立つ逸物をしっかり再現させちゃった訳？ 聞きたくないんだけど。

というか、こんな形で神の逸物を見せつけられるとは思わなかった。

ていうか何？ あれ彫刻師が作ったんだよね？ アポロンの全裸を見て？ うわ……考えたくねえ。

……………よし、帰ろう。

「ミリア殿、お風呂はどう——」

スパーンツと勢いよく扉を閉じ、ミコトに微笑みかけた。

此処まで巻き込んでおいてなんだけど、アレは見せられないよ！

「戻りましょう」

「あの、お風呂——」

「戻るんです」

「え、ですが——」

「お風呂なんて、無かった。良いですか？ 無かったんです」

お風呂なんて無かった。そう、そんなモノは無かった。

「いえ、違いますね。本拠ホームなんて無かった」

「え？ ですが——」

「此処ホームは本拠ではありません。アポロンの彫像を飾る美術館かなにかでしょう」

もしくは、恐怖の館。

「ミ、ミリア殿？ い、一体何を見たのですか？」

「……見たい？」

「いえ、遠慮しておきます！」

賢明な判断だ。さあ帰ろう——あ、此処が家なんだっけ？

眷属から没収した金品でなんとか改修しないと。

いや、マジで——こんな所に住む事になったら半日経たずに気が狂って死ぬわ。

第一三二話

植栽豊かな前庭。しっかりとした鉄柵に囲まれた石造りの屋敷。

前の本拠が崩れかけの廃教会にある隠し扉の奥、手狭な地下室だった頃の事を思えば、今のこの本拠ホームになったのはかなりの進歩だろう――

――内装に目を瞑ればの話だが。

「おのれアポロン……こんな置き土産をしていくだなんて」

「ちゃんと本拠の内装も確認しておけば良かったですね」

綺麗に並べられた石畳の上で座り込んで地面を眺めていた。

本来なら喜ぶべき所なのだが、余りの内装の酷さに深い溜息を零す。

ヴェルフが無言で噴水に向かって鑿と金槌を振るっているのから目を逸らし、青い芝生に寝っ転がって空を仰いでいるヘスティア様とベル、リリの三人を見つけ、同じように彼らの横に並んで寝ころんだ。デインケヤルシアンが戻ってきたらどうしようか。ロキファミリアからの増援組の三人が芝生に腰掛けて項垂れている。

「ねえ、改装費って足りそう……?」

「あー、今から貸金庫を片っ端から開けて確かめますか」

じゃらじゃらと音を立てる鍵束を見せれば、メルヴィスが手を伸ばしてガシツと掴んできた。

「私達が確かめに行つて来ましょう。安心してください、ラウル先輩みたいなちよろまかしたりはしませんので」

ラウル先輩……? ああ、ロキファミリアの【超凡夫】ハイ・ノービスラウル・ノールドさんか。あの人、確かLv. 4だったはずだが、ちよろまかしたりする人なのか? まあ、どうでもいいけど。

「ええ、お願いします」

「私達も行くね」

鍵束を渡すと、メルヴィスがアマゾネス二人を引き連れて足早に逃げる様に屋敷を去っていく。まあ、彼らはロキの眷属な訳だし、此処で持ち逃げはしないだろう。

視線を屋敷から噴水の傍に向ければ、ヴェルフが金槌と鑿を手にし

てしやがみこんでいるのが見えた。

「ヴェルフは何をしてるんですか？」

「あ？ ああ、アポロンを始末してる」

さらつと恐ろしい事言ってるな。いや、間違ってるやないんだけど。

噴水の装飾、よくよく見てみると確かにアポロンの微笑みが彫り込まれているのだ。最初に見つけた瞬間にベルが吹っ飛んで頭から芝生にダイブしたんだ。それに続いてリリとヘステイア様が噴水から飛び退いて——ヴェルフがアポロンだけを片っ端から削り落とすに至る。

「屋敷中のアポロン抹殺依頼を——」

「やめろ、あんな屋敷には一步も入りたくない」

ぐるんつと勢いよく振り返ったヴェルフが真顔で宣言する。俺だつて入りたくないよ。

くだらないやり取りを繰り返すさ中、視界を覆い隠す影が差す。目の前にぬつと顔を突き出してきたのはキューイ。何かと眉を顰めてると、誰か来たとかく。

誰か、と言われても特に思い当たる人物は無い。まだ片付け終わってないこの本拠に訪ねてくる相手がいるとは思えないのだが。

キューイの顔を押しつけて身を起こして門の方を見れば、閉じられた門の向こう側に数台の箱馬車が停まっていた。その箱馬車の徽章エンブレムは『笑う道化師』。ロキファミアの徽章エンブレムだ。

御者席にはヒューマンの男性と猫人の女性。前者はラウル・ノールド、後者はアナキティ・オータム。どちらも第二級冒険者だ。なぜか正装を身に纏っているのが気になるが。

「ヘステイア様、ロキファミアが訪ねてきたみたいですよ」

「何だつて？」

がばつと勢い良くヘステイア様が身を起こし、ベルやりりものそりと身を起こす。それを尻目に立ち上がって埃を叩き落としてから門に向かう。

仰々しい様子で箱馬車から降りてきたのは、ロキファミア団長、フィン・デイルナと副団長のリヴェリア・リヨス・アールヴ。彼らに

エスコートされた神ロキの左右に控えた彼らを門を開けつつ出迎える。

「今朝ぶりですね神ロキ、何か用でしょうか」

「なんだいロキ、何をしに来たんだ」

警戒する小動物の様な雰囲気に対応するヘステイア様。一応、世話になった相手だしもっと友好的に——無理か。犬猿の仲らしいし。

「何や、あのボロ教会からでつかくなつた本拠を見に来てやったんやで」

「ああそうかい。ボクらを笑いに来たんだろ。こんなぶつ飛んだ本拠を奪って良かったねって」

いや、まあ……神ロキの性格上、有り得なくはないのが何とも言えないのだが、いくら何でも斜に構えすぎでは。

不快感を与えてしまったかと神ロキを伺えば、眉を顰めていた。不快感を覚えたというよりは、疑問を覚えた感じではあるが。

「ん？ ぶつ飛んだ本拠？ 普通にええ屋敷やん。何が不満なんや」

「はあ？ この屋敷が良い屋敷だつて？ 冗談も大概にしてくれよ」

「あー、ヘステイア様。本拠が酷過ぎた事に腹を立ててるのはわかります。ですが神ロキに当たるのはやめましょう……」

普通にフィンとリヴェリア様も首を傾げているし、とりあえず此処は用件を伺おう。話はそれからだ。

「主神が失礼を、とりあえず用件を伺ってもよろしいでしょうか？」

「なんや他人行儀やな。もっと甘えてもええんやで？」

いや、ヘステイア様以外に甘えるのはちよつと遠慮しとくが。

距離を詰めようとしてきたロキから身を引くと、リヴェリア様が神ロキの首根っこを掴んで止める。代わりにフィンが前に出てきた。

「ロキ、話が進まない」

「すまないね、実は祝勝会についての話をしたくてね」

あー……本拠の後始末を考えると祝勝会に費用使う余裕は全くないんだが。

頬を掻きつつ遅れてやってきたリリとベルを振り返り、首を横に

振った。

「祝勝会については、まあ開催したくはありますが……その、屋敷の方で色々入り用でして……」

賠償金として貸金庫の鍵と武装を押収したが、武装は思った通り二束三文。せいぜいが十万を超えるか超えないか程度しかなく、貸金庫の方は現在確認中。その上で屋敷の後始末で金がいくらかかるかわからんから祝勝会を開く費用が捻出できそうにない。

暫くはダンジョン籠りで祝勝会と屋敷の改修費を溜めなくては……他にも、借金もあるしね。

「と言う訳でして、祝勝会を開く余裕は無くてですね」

「はあ？ あれだけの激戦を勝利したんやろ？ 祝勝会の一つぐらい開くやろ、普通」

うん、まあ。神ロキの言う通りだ。

本来なら世話になったロキファミリアやガネーシャファミリア、ディアンケヒトファミリア。タケミカツチ様の所もそうだし、ミアハ様とナアーザさんも招待した大規模な祝勝会を開くべきだろう。普通なら、そうだが。

「た、確かにその通りかもしれないけど……お金が……」

「何を抜かしたるんやドチビ、お前の為に眷属が頑張ったんやぞ、それを酒用意しといて出迎えんで何が主神やドアホ！」

「ぐぬぬ……」

祝勝会は派閥に余裕が出来てからと言う事にしたいが、協力してくれた他派閥の事を考えると……でも屋敷のあれこれとか、ヘファイストス様への借金とか……。

ヘステイア様と二人でぐぬぬと唸っていると、神ロキがこれ見よがしな溜息を零して馬車を示した。

「ま、そうやろなと思つとつたから会場とかは用意しといたつたわ」

「はい？ え？ 会場？」

「せや、祝勝会。やるんやろ？」

いや、やりたいけど費用が捻出できないって話で——え、ロキが出してくれるの？

驚愕と共に質問すれば、神ロキがやれやれと肩を竦め、代わりにフィンが答えてくれた。

「実は戦争遊戯が終わった後にアポロンの様子を見たロキが賠償金はとれそうにないから代わりに祝勝会の費用出そうかって話をしてね」「会場は既に借りている。開催は今晚だ……すまないな、急な話で」

リヴェリア様の補足を聞く限り、既に祝勝会の為の会場は用意されてるらしい。しかも開催は今晚——関係各派閥には既に招待状を送付済み。後は主役であるヘステイアファミリアの面々を残すのみ。

全くそんな話を聞いていなかった為、寝耳に水なのだが。

「というか、酷い酷いとは言うとするが、そんなに酷い屋敷なんか？ ガネーシヤンとこより酷い屋敷なん？」

興味深げに聞いてきたロキを見て、ヘステイア様が眉を顰める。ベルヤリリにも視線を巡らせ、ロキはニヤリと笑みを浮かべた。

「なんや逆に興味湧いてきたわ。ちよい中見せてー」

「見たいですか？ ——後悔しても知りませんよ？」

屋敷の見取り図に線を引いて順路を描き、神ロキに手渡す。

リリが驚愕の表情を浮かべているが、まあ一度興味を持ったら気が済むまで自由にしてあげないと色々と面倒だろうし、此処は逝つてもらおう。どうせヘステイアファミリアの本拠になったとはいえ、まだ重要な資料なんかが保管されてる訳でもないし。

「どうぞ」

「んじゃウチはちよいと探索いつてくるわ。フィン、リヴェリア後は任せるで」

受け取った神ロキがウキウキ気分で屋敷の玄関に歩いていく。その途中で噴水の彫刻を削り落とすヴェルフを見て首を傾げつつも、彼女は屋敷の扉を開け——閉じて全力疾走で戻ってきた。

「ちよい待ち、なんやあれ、めっちゃおもしろいやん！」

「——その見取り図の終点まで行ってからその台詞をお願いします」

終点はもちろん、お風呂である。爆笑気味の神ロキを追い払う様に

邪険に扱うと、ロキはもつと面白いモノがあるのかともう一度屋敷の
中に戻っていった。

「……」一応、僕も同行するよ。リヴェリア、後は任せる」

「ああ、少し興味はあるが。そんなに酷いのか？」

「……………見たいならどうぞ。責任は負いませんが」

フィンが眉を顰めつつも神ロキを追うのを見送る。

ようやくと言った様子でリヴェリア様がため息交じりに口を開い
た。

「すまないな。急な話で悪いが、今からこの馬車に乗ってもらおう。そ
れと衣装もロキが用意した、デザインは問題ないが、寸法に関しては
保証しかねる。とりあえず馬車に乗ってくれ」

「デザインケさん達は——」

「ガネーシャ組は問題ない。既に神ガネーシャに話は通してある。少
し遅れるとは言っていたが」

デザインケヒトファミリアの方で治療を受けていたグランとフィ
アの両名は既に回収済みだそうだ。道理で戻ってくるのが遅いと—
——貸金庫を確認に行った三人もさくつと第一級冒険者二名が拉
致しているらしい。何それ怖い。

余りにも計画的な犯行になすすべなくヘステイアファミリアの
面々は馬車に乗せられることになった。

「なんでぴったりなサイズなんでしょうか……」

「ロキが用意したドレスを着るなんて」

「デザインは良いじゃないですか」

会場として貸し出された煌びやかな豪邸。

嫌がらせかと勘繰ってしまいそうになるが、多分そう言った意図は
微塵も無いだろう。アポロンが神の宴の会場として利用したあの絢
爛豪華な宮殿を思わせる会場施設。

今回の宴の主目的は戦争遊戯ウォーゲームの戦勝者であるヘステイアファミリ
アへの祝賀。既にロキファミリアの眷属達が会場の設営を終え、協力

してくれた各派閥の関係者も会場入り済み。

残すは主賓である俺達へステイアファミリアを残すのみとなっている。

「リリ、こんなドレスを着るなんて初めてです……浮いてませんかね」
「うう……派手過ぎではないでしょうか」

リリもミコトも十二分に似合ってるから良いだろう。俺のドレスはいつぞやの黒い奴だ。

へステイア様も似合ってるし——って、それよりも既に皆を待たせてるから、早く行くべきだろう。

「行きましょうか」

化粧室として貸し与えられた部屋から出ると、ロキの眷属が恭しい仕草で先導してくれる。

途中、着慣れない正装に身を強張らせたベルとやけに張り切っているヴェルフの姿があった。

「ベル様！ どうですかリリのドレス、似合ってますか？」

「こらリリルカ君、ベル君にべたべたするんじゃない！」

「似合ってるよりリリ、へステイア様も」

いつも通りに騒ぎ出す三人に溜息を零していると、ヴェルフがはきはきとした様子で急かしてくる。

「早く行こうぜ。皆を待たせてるんだからな」

「ヴェルフ殿はだいぶ張り切っている様子ですが、何かあったのですか？」

張り切った様子ヴェルフにミコトが問いかければ、彼は若干照れ臭そうに答えてくれた。

「へフアイストス様も来てるからな」

あー、なるほど。まあ普段ドレス着るタイプの女神じゃないだろうしね。

気になる女性の着飾った姿が楽しみな訳か。なるほどなるほど……と、ベル達はいつまでいちゃついてる訳だろうね。

「ほら、三人とも行きますよ。ヴェルフも女神の着飾った姿が楽しみみたいですし」

「俺をだしに使うなよ」

両階段の踊り場に足を踏み入れると、会場を一望できた。

アポロン主催の宴に比べると、いささか参加者の数は少ないのは仕方ないだろう。今回の宴はヘステイアファミリアと協力してくれた派閥。それと関係派閥しか招待していないのだから。

人数は少なくとも、会場の騒がしきは前の比ではない——主にガネーシャ様の熱気によってだが。

「俺がガネーシャだ！」

「ガネーシャ、主賓の女神ヘステイアが会場入りした、少し押さえた方が良い」

「ふむ、この俺ガネーシャがヘステイアファミリアの勝利を祝つて——」

「やめてくれ、頼むから」

ガネーシャ様と眷属の女性——ガネーシャファミリアの団長【像神の杖】アンクーンシャシヤクテイ・ヴァルマ。第一級冒険者だ——がかなり場を盛り上げている。と言うか一色に染め上げようとする神を止めようとしている。すごく大変そうだ。

他には、相変わらずの面をした神ヘルメスとその眷属のアスファイ。神ロキと幹部連中。フィンヤリヴェリア様だけではなく、ガレス・ランドロツクも正装姿で参加している姿が見える。ベルの視線は既にアイズさんに釘付けになっているが、ティオナさんやティオネさんも十二分に美しい。レフィーヤは、アイズさんに見惚れてるみたいだ。と言うかベートさんが燕尾服着ると浮くなあ、あの人の目付き鋭すぎ——あ、睨まれた。目を合わせんとこ……。

タケミカツチ様とその眷属達。初々しい様子で桜花と千草が肩を並べ——他の子達は豪華な食事に目を奪われてる様子だ。まあ普段は節制を心掛けて仕送りをしてる派閥だし、こういった機会が無ければ豪華な食事にはありつけないだろうし仕方ないか。

ミアハ様とナーザさんは……ディアンケヒト様とアミツドさんのペアで睨み合い……。いや、ディアンケヒト様がミアハ様に突つか

かつていき、ナアーザさんが噛み付き返してミア様とアミッドさんが仲裁してるな。

ヘファイストス様と椿さんの二人も会場に居た。ヴェルフは既にヘファイストス様に釘付けだな。というか椿さんは普段通りの着流しじゃないか？ あの人、ドレス着てないぞ。

「やつと来たかドチビ、待ちくたびれたで」

「うるさいなあ、こんな急に宴だなんて、これでも急いだんだぞ」

さつきまでベル君にヘステイア様とリリのドレス、どっちがより似合ってるかを判断させようとしてた件については黙っておくべきだろう。

「ほれ、主賓がお出ましや。さつきと挨拶しいや」

神ロキに促され、ヘステイア様が此方を振り返った。

「それじゃあ、ベル君。挨拶をお願いできるかな？」

「え、ええ!? 僕がですか!？」

そりや、ヘステイアファミリアの団長な訳だしね。

ベルの腰の辺りを押して一歩前に出す。驚きの表情で振り返るベルに笑いかけると困惑した様子で周囲を見回した。

ヴェルフも、リリも、ミコトも。他の面々も全員がベルが団長である事を受け入れている。少なくとも、俺は団長の器ではない事は確かだ。ぶつちやけ精神的に脆い部分があるのは否定できないしね。副団長として派閥の方針にちよろつと口出しする程度がお似合いさ。

「ほら、胸を張りなよ。ボク達の派閥は中堅って呼べるぐらいに大きくなっただ」

ヘステイア様とベルと俺の三人だけの小さな、派閥と呼ぶには小さな規模だったヘステイアファミリア。

今回の戦争ウォーゲームを通し、ベル、俺、そして増援としてやってきたディンケとファイアの四名がランクアップしてLv. 3になった事で、派閥構成員の内Lv. 3が六名、Lv. 2が六名、残る一名がLv. 1と言う中堅と呼ぶには少し大きく、上位と呼ぶには小さい中途半端な規模の派閥に転じた。

今までの何処か締めりのない集まりではなく、一つの派閥になった

のだ。団長っぽい何かとか、副団長っぽいなにかとか、そういった曖昧なモノではなく、明確な線引きをしておくべきだろう。

「ベル、女神ヘステイアの最初の眷属は間違いなく貴方ですよ」

ベルが居なければ、俺はヘステイア様と出会う事すらなかった訳だしね。

団長として相応しい選択が出来るか否かは、関係無い。ヘステイアファミリアの団長はベル・クラネルで決定だ。

「と言う訳だ、団長くん、頼んだよ」

噛み締める様に再度皆を見回し、頷いたベルが両階段の踊り場から会場を見下ろした。

「ええっと……今回の戦争遊戯ウォーゲームに勝利できたのは、皆の協力があつてこそで——」

初々しい、と言うべきだろうか。

一言一言噛み締める様に放たれるベルの言葉は、言い方は悪いがやはり足りないモノは多い。もつと会場に響く話し方があるだろう。団長として立つならもつと胸を張って堂々とするべきだ。指摘する部分は数え切れないが——初めてだから仕方ない。誰だつてそうだろう。

この場所から、ベルは団長として歩み始めるのだ。

まずは第一歩、ヘステイアファミリア結成と同じ様に。

「——皆が居てくれたから。僕たちは勝てたんだって本当にそう思う」

まあ、問題は山積みだがね。

モンスターの調教資格テイムをヘステイアファミリアで所有する事になる訳だし、屋敷の問題もそうだ。ヘファイストス様への借金もあるし、一年後には構成員の半分以上が元の派閥へと帰属する事になる。

新しい眷属を増やすにしろ、まずは屋敷の問題の解決を——今は、そんな事は忘れて、勝利を祝うべきか。

「——ヘステイアファミリアの勝利を祝って」

『乾杯』

挨拶もそこそこに会場に降り立てば、其処では既に手遅れな具合で酔っ払っているドワーフが数人。ジョッキを打ち付け合っては並々と注がれたエールを一気に飲み干していく姿には圧倒される。既に何杯目かはわからない。

よく見ると数十樽単位で会場の片隅に酒が用意されており、中心ではグランとルシアンが肩を組み合って飲んでいる姿があった。つて、ルシアンはそっち側なのか、ドワーフに交じってヒューマンが酒をガバガバ飲んでる姿には若干驚いたぞ。

ガネーシャ様がヘステイア様と会話を交わしているのを横目に、会場をふらふらと移動していく。

ニヤけ面のヘルメスとアスフイさんに祝いの言葉を述べられ、デイアンケヒト様に感謝を伝え、タケミカツチ様やミアハ様にも既に礼を述べている。今回の宴の主催者の神ロキはイリスとメルヴィスの二人に囲まれて酒を呷っている。ロキと共に酒を呷って騒ぐイリスと、迷惑そうだが嫌そうではないメルヴィスが随分と対照的だ。

ベルはロキファミリアの第一級冒険者数名に囲まれてわいわいしており、リリはファイアとサイアに連れられて豚の丸焼きと格闘を繰り広げている。冒険者らしく大雑把に切り分けられた塊肉のそれに齧りつく三人。

ヴェルフはヘファイストス様の方へ向かおうとして椿に捕らえられて質問攻め。ヘファイストス様の近くに行きたいヴェルフと、魔剣について聞きたい椿のやり取りをヘファイストス様がため息交じりに眺めている。

デインケは一人で壁際でちびちびと酒を飲んでいるが、一応楽しんでるみたいだ。エリウツドはガネーシャ様の近くにいるシャクテイさんと話し込んでるらしい。

皆、宴を十二分に楽しんでるみたいだ。

アポロン主催の『神の宴』の時とは異なり、今日はゆったりとした気分で宴を楽しめそうだ。

「やあ、楽しんでるかい？」

「どうも、楽しませて貰ってますよ」

グラスを両手に持ったフィンに片方を差し出され、受け取りながらも答える。

「それは良かった。前の宴は楽しめなかったみたいだからね」

「まあ、楽しむ余裕は無かったですね」

地獄の真つ只中にしか思えなかったからね。とはいえ——少し羽目を外し過ぎではないだろうか。

「礼服、かなり汚れてますけど」

主にドワーフ連中。酒が飛び散ろうが無関係と言わんばかりにグラスを打ち付け合いながらの飲み比べだ。もう收拾がつかないようなんだがな。絶対染みになるぞ。

「ああ、構わないよ。その費用もロキファミリアが持つから」

「随分と、羽振りが良いですね」

拳句の果てに元ハゲファミリア本拠の改修費まで出してくれるらしいいな。羽振りが良すぎる気がする。

まあ、ロキ曰く『一年後に帰ってくる子らが死んだ目して帰ってくるとか冗談やないやろ』とのことだが、それでも改修費は安くはない。それもロキが紹介状を書いてくれた上でゴブニユファミリアに依頼を出してるのだ。羽振りが良すぎるし何か企んでるのではと訝しんでも仕方ないと思う。

「ああ、それについて少し話があつてね。向こうで話そうか。キミはそういうのに敏感だし、全部話しておかないと楽しむのに邪魔だろう？」

……楽しんではいるが、やはり警戒はしてしまふ。無駄に羽振りが良い奴とか警戒せざるをえないし。

開け放たれた大窓に近づき、そのままバルコニーへと足を運ぶ。

外に出た瞬間、澄んだ空気に包まれる。会場の熱気——主にガネーシヤ様やドワーフ連中の——との落差から感じられる温度差に少しだけ身震いし、フィンがバルコニーの一角に設置された長椅子を示したのでそこに腰掛ける。

「それで、何を話せば良いんですかね」

主に、ステイタス関連かね。他から見れば、明らかに異質なステイ

タスをしている俺に探りを入れたいのだろう。そう思つてフィンに質問を投げかけると、降参とでも言う様に肩を竦められた。

「確かに、それも気になる。けれどその前に羽振りの良さについて説明させてもらおうかな」

此方への質問の前に、此方の疑問に答えてくれる。そう言つてフィンは軽い調子で説明してくれた。

「どうやらそんなに難しい事ではないらしい。神々同士で賭けをしていたのだ——それもちよつと額が桁違いの——それで勝つた事で得た利益がこの宴の費用として使われているのだとか。序に、屋敷の改修費もそこから出す、と。」

「いくら賭けたんですかね」

賭けの内容は、戦争遊戯ウォーゲームの勝敗についてだろう。

ヘスティアが勝つ方に賭けて勝つたのだというのは予測が付く。問題はその金額と、勝ち金だ。

「ヘスティアファミリアの勝利に——五〇〇〇万ヴァリスかな」

「……………はい？ え？ 五〇〇〇万？ 馬鹿じゃねえの？」

「いや、負けてたらどうするんですか」

ヘスティアファミリアが敗北してたら大損だぞ。それも五人も眷属を失つた上で、である。しかも契約に関しても負けたら完全に無効になるし、損しかないじゃん。

「あはは、まあそうだね。負ければ大損間違いなしだ。だけど、大した金額ではないよ？」

あ、ああ、なるほど。ロキファミリアの規模や総資産額からすれば五〇〇〇万つて数字はそこまでではないのか。……………いや、結構な金額だろ。

「腕の治療費。再生薬一本当たり一〇〇〇万、合計でその額さ。まあ賭けというよりは、キミ達への信頼かな」

勝利を信じたからこそ、賭けに乗つたと。まあ結果的に勝つてるから良いのか。

勝手に賭けの対象にされた事に思うところが無いと言えば嘘になるが、こつちも美味しい思いが出来てるわけだし、言うだけ野暮つて

奴だな。

「なるほど、というか良くそんな大金を賭け合う相手が居ましたね」
「キミも良く知ってる神さ。派閥資産を全賭けしてみたいでね」

それって——商売神か？ だとすると納得できる。

アポロンの本拠を半ば強引に確保しようとしたのも、賭けに負けて無一文になったからではないだろうか。まあ、結果的にガネーシャ様に引き渡したのでどうなったのかは知らんが。

「で、勝ち金は——」

「良いです。聞きたくありません」

億単位の金額なのは間違いないだろう。倍でも一億だし。

「二〇億だよ」

「どうして言ったんですか、止めましたよね」

なにその金額、恐いんだけど……と言うか、何？ 商売神って億単位の賭けたの？ リスク管理……の必要無かったわ。傍から見たらヘステイアファミリアに勝ち目無いし、確実に勝てると思ってたんだろう。

「と言う訳で、今回の会場費も、キミ達の屋敷の改修費も全額出しても有り余るヴァリスを手に入れたからね」

「ご機嫌取りですか」

「それもあるし、今後とも友好的な関係を築いていきたいと思ってる」
なるほど、ヘステイアファミリアにそれだけの価値があると示したい訳か。

確かに『再生薬』だけを見てもヘステイアファミリアに友好的にする価値がある。とはいえ契約上、半額で卸す事にはなってるのでこれ以上親密になっても仕方ないと思うんだがね。

「そちらの事情は理解しました。その上で私の事について答えましょう。と言つても、全部は無理ですよ」

流石にね？ とはいえ、『狙撃型』と『汎用型』については話すが。

「じゃあお言葉に甘えて——キミは広域回復魔法が使えるね？」
薄く微笑みの表情を浮かべたフィンの質問に、ごく自然に首を傾げ

てとぼけた。

「はい？ 広域回復魔法？ 微妙な回復魔法は使えますけど、広域となると——」

「一八階層。黒い階層主。小さな金髪の小人族が広域回復魔法を使って支援を行った」

あ、これ、多分割れてる。雑多な情報に紛れた真実をしつかりと引き当ててきてる。確信を得た状態での質問だった訳か、とぼけなきやよかった。

「はあ、そうですね。使えますよ」

「ふむ、となると——キミは四つのステイタスを持つ訳か」

四つ？ 一つ目がニンフ、二つ目がスナイパー、三つ目でサンクチュアリ……あと一つ割れてる？ あれ、おかしい。初期のニンフはわかる。スナイパーは戦争遊戯中に全力で使った。サンクチュアリは十八階層の一件から、だとすると最後の一つは何処から漏れた？

「質問です。三つは特定される心当たりがあるんですが、四つ目がわからないんですが」

「ああ、酒場で大々的に話しているのを聞いたんだ。確か——モルド・ラトローだったかな？ 彼がミア・ノースリスが小人族なのシアンスローブに犬人みたいな耳を生やして無数の効果を持つ魔弾を撃つてきた、ってね」

モルド・ラトロー、ああー十八階層でベルを襲撃した奴だな。なるほど……あの糞野郎、情報をばら撒きやがった、今度見つけたら半殺しにしてやる。

まあ、まだ全てのクラスが明かされた訳じゃないからなんとかなるか。

「僕の予測では、少なくともあと一個はあると見てるんだけど……どうかな？」

両手を上げて降参を示す。この勇者、勘が鋭過ぎる。どうして錯綜する情報の中から、的確に正解を引っこ抜いてくるんだか。余りの恐ろしさに背筋が凍りそうだ。

正直、彼だけは敵に回したくない。こういった勘の鋭い奴って言う

のは、敵に回すとんでもなく厄介なのだから。

「ええ、正解ですよ。とはいえどんな性質を持つかは話せませんが」「構わないよ。となると、五つの変化か……恐ろしいね。敵にだけは回したくないよ」

俺もフィンは敵に回したくないね。

五つの変化があると割れてしまった訳だが、これからはクラス選択をしつかりと考えないといけないな。

どうするかなあ。新しく習得した二つのクラスの内、どっちかを晒すべきか。それとも今までの手札である『クローシー・アサルト』を晒すべきか。

んー、晒すなら『フェアリー・ドラゴニユート』よりは『ケットシー・ドールズ』の方がかなあ。あっちの方が悪目立ちしそうだし。

まあ、一度にクラスチェンジを二つまで設定できるから今までより多彩にはなるか……特殊ではあるが。

第一三三話

乏しい燐光に照らし出される岩窟内は、湿った空気に満たされている。

うつすらとした光によって映し出される影の主は、怪物だ。火炎を吐く犬型の怪物、黒ヘルハウンド犬が唸りながら鼻を研ぎ澄ませ、白い毛並みの一角兎アルミラーシの群れは愛くるしさを感じさせる仕草で周囲を見回し、時折耳を澄ませる。

彼の怪物達が探し求めている対象は、命知らずにもこの迷宮に足を踏み入れた酔狂な侵入者達だ。

無数に錯綜する洞窟を思わせる迷宮内を、獲物を求める怪物達が徘徊している。

ふと、一匹の一角兎アルミラーシが微かな異音を察知し、周囲の仲間伝える。にわかに殺気立った彼らは、音の出処目指して一丸となって駆け出していく。細い通路を抜け、彼らが飛び出した先には大きく広がった空間。冒険者の間では広間ルームと呼ばれるその空間の中央には——異質な小人が一人。

大きめのローブを身に纏い、銃を思わせる杖を手にした人。小人族と呼ばれる小さな体躯をした、金髪で容姿の整った——怪物にとっては容姿など関係なく、ただの侵入者である——少女。

彼女の背には、一对の翼。翼竜を思わせる、目に焼き付く程の深紅の色合いを持つ、竜翼。よく見れば、その足元には蜷局を巻く様に細くしなやかな尾が目に入った事だろう。

彼のモンスターは、それが人々にとって異質な姿であろうが関係ない。侵入者である以上、排除する対象にほかならず——殺意を向ける対象に他ならない。

唸り声を響かせ、威嚇の咆哮を上げる。その愛くるしい兎は、今や殺意漲らせる怪物の本性をその身に写し出して駆け出していく。手にした天然武装ネイチャーウェポンの石製の片手斧トマホークをある個体は手に、別の個体は口に啣え、獲物に殺到する。

その身を引き裂き、血を浴びて喰らい付く。怪物として植え付けら

れた憎悪のままに、憎らしい敵を屠る快樂に身を委ねようとし――
―兎は獲物から向けられた視線に凍り付いた。

「ようやく、来たわね――― 試し撃ちの相手が」

獲物が手にした銃杖には十二分な魔力が宿っている。銃口を思わせる魔法陣が、四つ。四本の銃身バレルを持つ多銃身機関銃ガトリング・ガンの効果魔法として落とし込んだ、特徴的であり、独創的な、冒険者が持つ、魔法。

詠唱を終えて即座に発動可能な状態のそれに対し、彼らの反応は速かった。即座に数匹が壁になる様に出、何匹かは後退して生存を重視する。群れを作り活動する一角兎アルミラージュの特性上、一匹でも獲物に辿り付ければいいという効率的な本能に任せられた、犠牲ありきの戦法。

両手に握る片手斧を交差させ、防御姿勢を取る前衛。防御した彼らが倒されたら直ぐに前に出れる様に突撃姿勢を保ち待つ後衛。数匹は片手斧を投擲する事で魔法そのものの妨害へと走り―――その全てが魔弾の雨に消えた。

「ファイア」

マズルフラッシュ
視界を埋め尽くす発火炎。瞬く間に閃光を超え――― 獲物を狩る側であると誤認した兎達を、瞬く間に引き裂き、挽肉へと変えていく。

鼓膜を引き裂く銃声。断続した音色は、激しく、そして休む間もなく耳朶を打ち聴覚を破壊する。閉鎖された空間で引き起こされた甲高くも断続したその音色は、遠く激しく響き渡り――― 僅か数秒間に百を超える弾丸を吐き出す。前衛の壁役、後衛の突撃役、数匹の妨害役、その役割の全てを無残に引き裂き、全てを無に帰す雨。

慈悲の欠片もない魔弾の雨は、十匹以上からなっていた一角兎アルミラージュの群れを、綺麗さっぱり灰に変えた。

「……………あー、効率悪過ぎ。しかも魔石も吹き飛んでるし。今のでマガジン三つ消費って割に合わないわね」

ぼやく様に灰の山と化した獲物を目にし、小人族の少女―――とあるゲームの職業クラスに変化し、試射を行っていた、ミリア・ノースリスは深い溜息と共に、今回の試射の総評を纏める。

結論。弱くはないが迷宮内で使うのに難有り。

身の丈と同等の大きさの竜翼を羽ばたかせると、身体が大きく揺れる。バランスを取り辛く、ゲーム時代とは異なり重心を保つ為に翼を微妙に広げておかないといけないのが面倒臭い。耐久実験はキューイに攻撃してもらって試したが、かなり耐久性は高い——が、所詮俺そのものの能力『力』が不足している影響もあってか、防御姿勢で耐えるなんてできずに吹っ飛ばされたのだ。

「キューイ、戻ってきて良いですよ」

「キューイ！」

のそりと、岩場の影に身を潜ませていたキューイがのそりのそりと現れる。

ランクアップの影響もあってか、その身が大きくなると思っていたのだが、特に大きくなるでもなくキューイは体長1M程で成長が止まった。成長？ かどうかは知らんが、どうにもこれ以上大きくなりほしくないらしい。同じくヴァンも1.5M程と同じままだ、まあ身体能力はかなり向上してるらしい。

今までは俺一人掴んで飛ぶのが精いっぱいだったのが、ベルとヴェルフを同時に掴んで飛行可能になっていたので間違いではないだろう。他にもなんか火球の威力があがったとかどうか。

クラスチェンジ『フェアリー・ドラゴニウト』を解いてニンフ型に戻りつつ、キューイの背にしがみつく。

「キューイキューイ？」

また壁にぶつからない？ だって。思い出させんな。

閉所空間での竜翼を使った回避行動の結果、壁に激突してしまったのだ。あれは久々過ぎてちょっと失敗しただけだから。本気でやれば密林地帯を颯爽と木々の間を抜けて高速でぶつちぎれるから。

まあ、正直なところ迷宮内で使うのならもう一つの『ドールズ』の方が最適だろうが。

『ガトリング・マジック』の方もかなり燃費が悪いし、あの一斉掃射で三マガジンである、スナイパーの砲撃の方が威力はあるが——
雑魚を薙ぎ払うのには使えるか。

「余計な口叩くとその口に唐辛子捻じ込みますよ」

「キューイ！」

横暴だ！　なんてキューイキューイ喚きだすキューイの首に手を回し、頭をペしペしと叩く。早くこの場を去るぞ——今日は俺とお前しか居ないんだ。Lv. 3になつてクラスチエンジで新しいのが増えたので試す為に中層まで足を運んだ訳だが。今日は他に仲間はいない。

屋敷の改装の方で皆が色々話し合いをするらしく、特に要求の無かつた俺は部屋場所は極力ヘステイア様の近くにと云つて、ドラゴニユートについての調査をしに来たのだ。

文句を零しつつもキューイが加速し、視界が一瞬歪む。ぐつと振り落とされかねない程の加速を得たキューイが一瞬で迷宮内を駆け抜けていく。

時折、翼を使って飛行しつつも中層から一瞬で上層に——途中で驚いた下級冒険者が尻もちをついていたのに気付きつつもスルー。見知らぬ下級冒険者よ、それぐらいで驚いてたら命がいくつあつても足りんぞ。

「キューイキューイ」

「あー、わかつてますつてば。この後はガネーシヤファミアリアに行つてクリスを回収ですよね。はあ、まだドールズの方の確認終わつてないんですけどねえ」

『フェアリー・ドラゴニユート』についての説明は、そうだな。

まず、空対空の飛行格闘戦と、空対地の機銃掃射——ちなみに、アニメ版の『ミリカン』ではミリア・ノースリスと言うキャラは巨大なグレイブ、薙刀の様なモノを使う近接格闘キャラになつている。なお漫画版では大剣も振り回す模様。

アニメ版も漫画版もそうだが、主人公のニンフ型の新兵の少女に対しミリアちゃんの当たりがだいぶ悪かった影響もあり、二次界限ではミリアちゃんアンチが多かつた訳だが、あれはアニメ版が悪い。尺の関係でミリアちゃんの背景に関して何もアニメ版で明かされなかつ

たのだから——漫画版だと印象ががらりと変わる。

上層部からの指示を忠実に実行する為、主人公の少女が所属する部隊が出していた救難信号を無視したり、遠距離通信で『川にでも飛び込んで祈りなさい。アンタらに構ってる時間は無い』とか言っちゃうしね。

無論、上層部の指示である。確かミリアちゃん本人は別の任務で物資輸送を請け負っていたけど、救難信号を察知して助けに行くべきと何度も上層部に通信で打診して——任務の優先を言い渡されて結果的に助けに行けなかっただけだ。んで、『川に飛び込め』っていうのは、上空で騒ぎ起こして敵兵の注意を上に向けさせるからその隙に川を下れって意味だったのだが。

わざと見つかる空路を飛ぶことで注意を逸らし、主人公の所属する部隊の撤退に一役買っている。

アニメ版では上層部に噛み付きまくるミリアちゃんの描写が一切なかったせいで、主人公を何度も見捨てたり、酷い事言ったりするだけのキャラとしての印象が付いたのだ。

漫画版だと上層部から厄介者扱いされてる優しい子なんだけどねえ。

その所為でミリアちゃんが最期に上層部に見捨てられた場面では『ざまあ』と言われていたが——ちなみに実際には命令無視にならない程度の範囲で、身勝手に他の部隊を助けたりしている事を疎まれた結果。部隊諸共処分する為にミリアちゃんが必死に出し続けた撤退要望を拒否し続けただけなんだがね。

上層部からの最後の通信は『撤退は許可できない。攻撃を続行せよ——以後撤退要望を行った場合、反逆の意図有りと判断する』である。

視界を埋め尽くす大量の戦闘機を前に、残り片手の数しか残っていない部下からの継る視線を受けながら、彼女は部隊の皆に突撃命令を出し——五〇近い戦闘機を薙刀でぶった切り、最期には自分以外の部隊員が全滅したのを見届けてから機銃の雨に撃たれて散った。

ミリアちゃんアンチするならせめて漫画版読めって話である。他

にも飛行部隊の隊長の話とか、アニメ版で尺の都合があつて色々省略された話が多いしね。

あと、原作のゲーム版だとただの狂人のファクトリー型が漫画版、アニメ版ではすこぶる善人になつて——つと、話が逸れたか。

今の俺が薙刀を使うのは、無理だ。銃剣風の杖で精いっぱいだし、そもそもこれは攻撃用ではない。あくまでも自衛用の短剣が付いた銃杖に過ぎないのだ。

じゃあ漫画版よろしく大剣で戦闘機を片っ端から真つ二つにしていく？ 無理だろ。

というか、ゲームの方で近接格闘型のドラゴニユートつて色物枠だったし、銃弾飛び交う中、わざわざ近接武装で戦う奴とか頭おかしいとしか言えないしね？ ……え？ 帝国兵？ あれは存在そのものが色物枠だから。

ゲームでも時々いたが、魔法少女に近接戦させんなよ。挙句の果てに帝国兵と近接戦挑むなよ、それで勝つなつて話だ。あの変態魔法少女筆頭とも呼べる頭のおかしい近接魔法少女は、今は元気にしてるだろうか……あ、なんか元氣一杯に帝国兵と近接戦してる姿が浮かんた。何の心配もいらんな。

と、考え事をしてる間に地上に続く大穴が見えてきて——その大穴の中央から、真上に向かつてキューイが飛ぶ。円形の穴の外周に設けられた階段を歩む冒険者が驚きの表情で此方を指さしているのを尻目に、一気にバベルの地下一階に到着。

周囲で起きるざわめきを無視し、キューイの背を下りて——駆け寄つてきたギルド職員に盛大に怒られた。

街中で飛竜を飛ばすの厳禁と言われたのでバベル内ではオツケーでしょ、なんて言い訳をしてなんとか今回はおとがめなしになったが、次やったら罰金を取るだそうだ。せつかく翼があつて移動が楽なのにどうして禁ずるのか……絶対嫌がらせだろ。

バベルの地下から出て、中央広場セントラルパークに顔を出せば——花束の群れがお出迎えしてくれた。

『ミリアちゃん俺の眷属になつてください！』『俺のファミリアなら三

食首輪付きだよ!』『むさ苦しい男神じゃなくて私の所とかどう?』
わちやわちやしてる神々を見て、嘆息。というか首輪付きとか言っ
たその男神、顔は覚えたからな。

あの戦争遊戯ウォーゲームの影響は、とてつもなく絶大であった。

このように、街中を歩むと何処からともなく神々が湧き出てきて勧
誘される様になってしまったのだ。最初はあまりの面倒臭さに
キューイを使って空を飛んでいたが——あの糞豚ギルド長、飛行
料金を取るとか訳の分からん事言い出しやがって。街中で空を飛ぶ
なんて言語道断? 街の住民が不安がる? その為に金を払えつて
おかしいだろ。しかも一ヶ月当り二〇〇万とか足元みやがって。

『狐っ娘になってくれー!』『犬耳とか無いのかあ?!』『猫、猫耳とか是
非!』

あの、この神様連中、実は俺のクラスチェンジの全貌わかってて
言ってますん? というか花束は返すしいらないから帰って。

面倒だから空を飛んで無視したいが、出来ないんだよなあ。本抛の
改装が終わるまでの仮住まいの宿の前にも神々が集まって迷惑に
なってたし——ベルも似たようなもんだけど。あっちよりも俺
の方が一段と酷い。

と言うか頭撫でようとすんな、キューイこいつら追い払って。

「他派閥に行く気は一切ありません。退いてください——キュー
イを暴れさせますよ」

ざつと神々で作られた壁が割れる。キューイはモーゼだった……
?

まあ、冗談はさておきガネーシャファミアの本抛に向かわなくて
は。

ガネーシャファミアミアの本抛、『アイアムガネーシャ』の前の門兵の
方に軽く会釈して——素通り。

良いのかそれだと思う突っ込みを入れそうになるが、ちゃんと素
通りさせる相手は選んでいるらしいので良いらしい。俺はそこそこ
信用されているらしく、素通りさせてもらえる。ちなみにこれがヘス

ティア様だと確認がとられる。意味がわからない。

流星にキューイは預ける事にはなるがね。

目の前に聳え立つ神ガネーシャ自身の形をした本拠、その入り口である股間に歩みを進めていると、しようもない考えが浮かんだ。

あの入口のガネーシャ様の股間に毎日出入りし続けるのと、毎日アポロンの顔に包まれたあの本拠。どっちがましかなんて考え——
—出来ればどっちも遠慮したいな、と溜息。

慣れないとはいえ、一度中に入ればあの本拠とは異なり上質な調度品が適度に置かれ、落ち着いた雰囲気の内装であるこの本拠は天国に等しいだろう。入口にさえ目を瞑れば良いのだ——あと絵画。廊下の絵画に躍動感あふれるガネーシャ様の筋肉が描かれている。雄々しい口元の微笑みと勇ましいその姿は、絵としてはなかなかの代物。

ただ、ちよつと数が多いかな。いや、アポロンに比べるとまだまだだ。

自身の本拠の惨状と比べつつも廊下を歩いていると、前方からシヤクテイさんが歩いてくるのが見えた。

「ノースリスか。すまないな、祝勝会でガネーシャが煩くて」

「いえ、むしろ盛り上げてくださって感謝していますよ」

顔を引き攣らせた彼女の笑みに、しっかりと返しておく。と、ふと疑問を覚えた。

「ところで、なんですが。ヴァルマさんは何を？ わざわざ私を出迎える、とは思えませんが」

彼女はこの超巨大派閥の団長。飛竜関連の話であろうが彼女がわざわざ出迎えを行うとは思えない。

「ああ、その話か……少し、な。娯楽都市サントリオ・ベガを知っているか？」

真剣な表情を浮かべて呟かれた言葉に、背筋を伸ばす。

サントリオ・ベガ
娯楽都市

過去、『世界の中心』とすら例えられる事があった迷宮都市オラリオには、致命的に欠けているモノがあった。

冒険者が集う。彼らが必要とする武装を作り出す鍛冶師が集まる。

治療を行うための治癒士が集まる。日用品を取り扱う商人が集まる。迷宮より生み出される魔石を加工する職人が集まる。最初は野蛮な冒険者が集っただけの街、それが神々が降り立った事で一気に発展していった迷宮を探索する都市。それが迷宮都市だ。

莫大な金の流れが生まれたその都市。其処に足りなかったモノは

—— 娯楽施設。

神々の要望に応えるべく、過去の管理機関は各国の大都市から融資を募り、繁華街に無数の娯楽施設を作り上げた。

有名どころで言えば大劇場、そして大賭博場。

この二大娯楽施設はギルドの本国、本都市の規模を上回ってしまう程に発展を遂げ、今や管理する側であったギルドですら口出しできない程になっている。運営を主導するのは、あくまで投資を行った他国——それもまた、ただの外向けの話。実際には各国ですら制御しきれない程に、大きくなり過ぎた施設だ。

都市管理を行うギルドも、国々も口を挟む事が難しい、超巨大施設。治外法権とすら比喩される、危険な場所だ。

他にも数か所、そういった治外法権は存在するが——イシユタルファミリアが取り仕切る歓楽街とか——其方と違い此方は人が管理している施設だという違いがあるぐらいか。

「一応、知識としては。行った事はありませんが」

「だろうな。お前が毛嫌いしそうな場所だ」

不愉快そうに眉を顰めた彼女の背を追い、一室に辿り付く。

客室らしいその部屋に入り、彼女がクリスを運んでくる様に団員に指示を出す。

「あの場所は、我々がガネーシャファミリアも手を焼いている。どうか尻尾を掴みたいのだがな」

他国から足を運んだ大富豪達に何かあれば、オラリオに威信に関わる。

ギルドからの勅令に等しいその命令に、ガネーシャファミリアは大きく関わっている。彼の場所で行われる非業な行いを、目にしながら手出しは出来ない。腸の煮えくりかえる思いをさせられている、そん

な場所。

「最近、街中で強引な手段を使った人攫いが発生している」

手口としては単純だ。賭博で大きく負けさせ、借金を背負わせる。その借金の形として、娘を攫っていく。……なんというか、阿呆らしいやり方だな。足が付きまくっている時点でこの方法を採用して、奴は頭の悪い馬鹿か——そんな馬鹿な手段をとっても大丈夫だと無駄に慢心してる阿呆だ。

「馬鹿か阿呆ですね。保身の一つも考えてない方法です」

「その保身をする必要が無いほどに、あの施設の人間は金と権力を握り締めているからな」

いや、馬鹿だ。間違はなく、そいつは馬鹿野郎だ。

例え金や権力を握り締めていたとしても、尻尾を掴まれる余地が残っているのならば不味い。相手が社会的立場を考えている普通の人ならまだしも——立場も、何もかも関係ないと自暴自棄に等しい狂人と化した奴が敵に回った時、その人物は金も権力も意味を成さない暴力の下に死ぬ。あの女のように。

「——と、私はクリスの引き渡しの為に訪ねてきたんですが。なんでその話を？」

「……はあ、ガネーシヤがノースリスがこの手の話に詳しいと女神へスティアから聞いたらしくてな。何か尻尾を掴む手段が無いかと思っただが」

あー、猫の手も借りたって感じか。いくらなんでも俺に話すのはおかしくないか？

うーん……金と権力を握り締めて慢心してる阿呆だと仮定するが。普通のやり方だと手が無いんだよなあ。

現行犯、が出来ないから困ってるんだろうし。身分を偽って潜入して内側で証拠を掴んで——多分、名の知れた第一級冒険者や第二級冒険者だと無理だろうな。

「手が無いって訳ではないですが、多分、というか間違いなく都市の威信をぶち壊しますね」

「そうか、それは駄目だな」

そう呟いて腕組をして唸るシャクテイさん。やはり、というか絶対に
おかしいな。

いくら猫の手を借りたい状況でも、他派閥で、なおかつ都市内で微
妙な立ち位置になったヘスティアファミリアに話すのはおかしい。

「あの、すいません。単刀直入に言いますが、私に何をしてほしいん
です?」

「実はな、お前には件の娯楽都市、『エルドラド・リゾート』に存在す
る最大賭博場への招聘状が届いている」

は? 招聘状? いや、なんでガネーシャファミリアに?

え、ていうか何処から? どっかの国からの推薦状でしょ? 意味

わかんないんだが。

「戦争遊戯の際にお前の調教していた竜については是非とも話がした
い、とな」

.....。ああ、金持ちの道楽ね。うん、なるほど——馬

鹿じゃねえの。

「つて、もしかしてギルドから?」

「ああ、他国の大都市からギルドを通して、な。ギルド長が今朝になっ
て大慌てでやってきて秘密裏に頼むと」

他国の大都市。その中枢に深く食い込んでいる大富豪の一人が、
どうも竜に高い関心を持っているらしい。ギルドも無視できないモ
ノだったらしい。

あの糞豚エルフ、普段邪魔ばっかりするんだからこういう時ぐらい
役に立てよ。

それで、是非とも調教の難しい竜種を二匹も従えている俺の話の間
きたいと——ヘスティアファミリアに直接、ではなく間接的にギ
ルドを通し——それも治外法権である娯楽都市で話したい、
と。

「.....罨以外ありえないんですがそれは」

「ああ、だからこうやって我々も動いている」

本来なら最大賭博場の経営者であるテリー・セバンティスの調査を
行いたい所を、今や俺関連の問題でガネーシャファミリアは頭を抱え

ているらしい。

「お前のファミリアに丸投げすると不味いだろうしな」

「ご、ご迷惑おかけします……」

戦争遊戯からまだ数日だというのに、勧誘しまくってくる神々問題もそうだし、まだギルドにランクアップ報告していないってのになれだけの大騒ぎだ。これに他国の大富豪が関わってくるとかちよつと冗談じゃない。

「団長、飛竜を連れてきました」

「ああ、テーブルに頼む」

入ってきた団員の手には、美しい煌めきを宿した神秘的な結晶で作られた飛竜が入った鳥籠の様な檻と、分厚い資料の束。

内側でスヤスヤ寝息を立てているそれは、結晶というとてもではないが生物とは思えない体の、生きた飛竜だ。今や寝入っている様子だが、ガネーシャファミリアの調査で分かった事は、この飛竜は非常に非交戦的な事。非生物だが食事を取らないと餓死する可能性がある事——この飛竜の体、結晶そのものがダンジョンの下層または深層域で極稀に見つかる希少結晶^{レアクリスタル}である事。

そして蒼い炎は、炎とは異なる代物である事。発展アビリティである《耐呪詛》があれば防げるが、逆に無い場合はほぼ確実に防げない事——冒険者としてのレベルが高ければ高い程、結晶化までの時間がかかる事。

……どうやって調べたのかは聞かないでおくか。

それよりも問題は、その招聘状についてだ。無視は流石に不味いだろうしなあ。

「それで、お前はどう動く」

「ロキファミリアに協力……は無理ですね。今は色々忙しいみたいです」

他国とはいえ、大富豪が関わっている以上、何が起きるかはわからん。アポロンとかいう糞を撃退した直後にこれだよ、俺関連で面倒事が次々に転がってくるのなんとかならないかな。

アマゾネスのでっかい方に命狙われてるってのにさあ……。

「一応、我々に協力してくれるのなら護衛も出せる。むしろそうしてくれるとありがたい」

最大賭博場の経営者である男の悪行を裁く為に協力するなら、此方の問題も解決を手伝ってくれる、と。なるほど、困ったときはお互い様って訳か。

「こちらこそ、ガネーシャファミアリアがバックについてくれるのならありがたいです」

「……あまり、期待はしてくれるな」

迷宮都市の威信を壊す訳にはいかない。ガネーシャファミアリアも深く関わっている以上、迷宮都市の威信が落ちるというのはガネーシャファミアリアの威信にも関わってくる。つまり何か事があった場合は非常に大変だと。

寝入っているクリスを鳥籠から取り出して転がして弄びつつ、深い溜息をついた。

「日時の指定っていつです？」

「四日後になってるな」

余裕なさすぎい!? 四日後オツ!? おかしくない? ねえおかしくない? なんてそんな急に予定捻じ込んでくるの? 馬鹿なの?

死ねよ。

賭博場とか嫌な思い出しかない所に、治外法権とかいうヤベ場所に、四日以内に対策して行けと。死ねって言われてるのかな?

もしも処刑場VIPルームにお呼ばれしたら全力で逃げよう……。

「どういった形で向かう事になるんでしょうかね」

「お前の護衛と言う形で一人付ける」

ガネーシャファミアリアの団員を護衛として付ける、と?

「そうなるな」

いや、それ無理。間違いなく護衛として意味を成さない。

治外法権であり、ガネーシャファミアリアの威信にも関わる場所だ――

――手足を封じやすい護衛なんて護衛の意味がない。

「だとすると、外部に頼む事になるが」

「普通に私が外部冒険者を雇うとか、もしくは――肩書だけ借り

て身分を偽る、とかですかね」

もつと言つてしまうと、権力も糞もない破落戸連中。もしくはそこそこの名知れた殺し屋、喧嘩屋、用心棒当りを雇つてしまう。もしくは彼らの名だけを借りて別の腕利きを護衛にするとかな。

ありふれた手段だが、かなり有効だぞ——バレなければ、の話だが。

「私が個人的に護衛として雇いましたーって形で連れていくんですよ。ガネーシャ様の眷属だと名声に傷がつきかねませんし」

「宛はあるのか？」

一応、なくはない、かなあ。

豊穰の女主人の店員に何人か、名前を借りれそうな人はいる。条件がどうなるかわかんなくて怖いけど……一応、頼み込んでみるか。

あ、護衛として付く予定の人員って誰だ。

「護衛として誰が付くんでしょうか」

「私だが？」

第一級冒険者様が付いてくださるんですか。

あれ、もしかしてかなり本気でテリーって人物を捕えたいのか？

団長自ら出るって時点でガネーシャファミアリアの本気具合が伺えるな。

「あー、了解です。一応、明日には結果を知らせますので……」

シャクティさん。顔を隠せばワンチャンあるか？

えっと、そうだな。頼むならルノアさん当りに土下座してみようか。本人が付いてきてくれるのが理想だけど、ミアさんの事もあるし絶対に無理だろうからね。

にしてもこれだけコロコロ転がしても起きないとか、クリスお前はどんだけ無防備なんだか。

第一三四話

調教した竜種テイムの取り扱いについて。

都市管理を行っているギルドからの命令各種を順守する限り、竜種の街中での行動については調教師または同派閥の一部許可者の同伴を限定とし許可するモノとする。

竜種が何らかの問題を起こした場合はギルドの定める法に従い、罰則を受ける事。

竜種から得られる利益に関しては派閥収入の一部として計上し、それに基づいて税を支払う事。

ギルドからヘスティアファミリアに出された書類をペラペラ捲つては内容を読み込みつつ、溜息。頭の上にしがみ付く結晶竜は静かなモノだ。というか静かにしてとお願いしたしね。

キューイを連れている事で起きる不具合各種について、ガネーシャファミリアからの補助は無くなった訳ではないが、矢面に立つのはヘスティアファミリアになった事で色々と面倒事は確実に増えるだろう。

書類を封筒に収めてバッグに放り込む。のしのしと整然とした石畳を踏み締めて這うキューイの背に乗ったまま、街中を行く。

目的地は『豊穰の女主人』と言う店。つい先ほど、ガネーシャファミリアを後にした俺は、件の店くたんに店員として雇われている女性に会うべく街を歩き——神々の生垣に阻まれて仕方なくキューイの背に乗ったのだ。

無論、空を飛ぶ真似はしない。馬よろしくキューイの背に跨って騎乗しているだけである。飛ぶとギルドが煩いしね。

周囲で此方を見て俺の眷属にーと騒ぐ神々。相変わらず、と言うかなんというか。彼らのノリには時々ついていけない。というか本当にしつこいから何処か消えてくれないかな。

呆れと鬱陶しさを感じながらも、ようやく目的地である『豊穰の女主人』に到着した。店先には『準備中』の掛札がされており、今は準備中だという事がわかる。

それを気にせず、キューイの背を下り、彼女の首に繋がっていた引き綱リードを店先の柱に適当に括り付け、キューイに動かずに待つ様子を伝えてから入口の両扉を開けて中に入る。

「あれ、ミリアじゃん。何しに来——」

「ミリアじゃニヤいか。戦争遊戯ウォーゲームは良くやったニヤ、おかげでぼろ儲けできたニヤ」

「こんにちは、此方、お土産のクッキーです。どうぞ」

準備中だったのか掃除をしていたらしいヒューマンの女性、ルノアさんと猫人の女性、クロエさんの二人。親し気に、と言うよりは嬉し気に話しかけてきたクロエさんに愛想笑いを浮かべつつ、駆け寄ってきたクロエさんにクッキーの箱を手渡す。そこそこ良いやつだ。

「少々用事がありまして顔を出したのです。ルノアさんに話があるんですが今よろしいですかね？」

クッキーの銘柄に喜んでいるクロエさんを他所に、率直にルノアさんに声をかける。リユーさん、シルさん、アーニヤさんの三人が見当たらないが、奥で皿洗いだろうか。それとも買い出し？ ルノアさんが居てくれて助かった。

「私に用……？。なに、もしかして面倒事？」

え、俺がいつも面倒事持ってくる奴みたいに見えるのそれ？

「いえ、別に面倒事では……あー……」

一応、面倒事ではあるのか。ガネーシヤファミリアによる調査の協力の為に名を借りたい、または護衛を頼みたいってのは。交渉してみるか。

「えつとですね、実は……【黒拳こっけん】に少し頼み事を——」

名を出した瞬間、雰囲気が変わった。と言うか肩を掴まれて店の隅っこに引き摺られる。

壁を背にさせられ、ドンツと頭の上に軽く拳が打ち付けられ、これぞまさに壁ドンと言う姿勢に持っていかれた。上から見下ろし、影が差した彼女の表情は読めない。不機嫌そうなのはわかるが。

「あ、あのですね」

「何処で、それを知った訳？」

え？ ああ、うん。彼女、この店『豊穰の女主人』で働いている店員の一人であるルノア・ファウストの過去。

『賞金稼ぎ』バウンティハンターとして都市外からオラリオにやってきて、一時期暴れ回った人物である。最後の依頼を受けた後に姿を消したという経歴を持つ人物だ——名を、二つ名ではないが異名として【黒拳】こっけんというモノを持っている。

【黒拳】こっけんのファウスト。と言えば知らぬ者はいないぐらいに有名な賞金稼ぎであった。……というか、特性が喧嘩屋に近いんだがね。「えつと……情報屋から仕入れましたね」

嘘じゃない。一応は、であるが。

酒場を転々としつつ情報屋の情報を適当に集め、使えそうな情報屋をいくつか見繕っておいた。

一人は軽薄そうな雰囲気の禿げた男であるダルトン。もう一人は猫人用のフード付きジャケットを身に着けた犬人の少女のマイヤーズ。前者は偽名、後者は本名らしい人物たち。

酒場に出没する情報屋に『良い情報屋を紹介して欲しい』とそれとなく声をかけ、自信満々に『良い情報屋？ そりゃ俺の事だ』なんて抜かす奴らに『では私の情報を教えてください』と質問を飛ばす。

それで本当に俺の情報を掴んでる奴だけを選別するなんて面倒な作業をして使えそうな奴を幾人かピックアップした上で、その二人に色々と情報を仕入れて貰ったのだ。無論、相応の金額ではあったが……まあ、こういった根回しは色々と得意だね。

「何処の情報屋？」

「守秘義務です。言えません……それよりも頼みをですね」
「無理」

きつぱりと断られてしまった。いや、まだ依頼内容すら口にしてないんだけど。

すつと身を引いた彼女は表情を不愉快そうに歪めて此方を睨む。

「戦争遊戯後の後始末でも頼みたい訳？ だとしたら悪いけど他を当たって」

「アポロン連中の始末ニヤ？ ニヤらミヤアが受けても良いニヤ。特

別価格で引き受けてやるニヤ」

音もなく近づいてきたクロエさんの発言に首を横に振る。

アポロンの始末とかわざわざ金出してまでやろうとは思わん。たださえ本拠関連で金が足りない足りないかと喚いた後だってのに、貸金庫から手に入った資金をわざわざ削ったりなんかしやしない。

「いえ、別件ですよ。実はとあるファミリアからの依頼で最大賭博場グラン・カジノに行くことになりました」

「……護衛として雇いたい？」

「ミャーに任せるニヤツ！」

えっと、クロエさんはちよつと……暗殺専門よりは真正面からガチンコで殴り合ってくれるルノアさんと組みたい。と言っても本人は来れないだろうし、名前だけ借りたいんだよ。

「依頼内容は詳しくは話せませんが、名前だけでもお借りできればな、と」

「……私が行かなくても良いって事？」

「そうです。【黒拳こっけん】のファウストと言う名前だけ借りれば良いんです。無論、報酬もしっかりと用意しますし……えっと、金額次第ですけど雇い主に請求できますんで」

うーんと顎に手を当てて考えるルノアさん。彼女の横でクロエさんがギャーギャーと喚きだした。

「どうしてミャーを無視するニヤ！」

「ええつと……どちらかと言うとルノアさんの方が適任ですし。暗殺者を前面に押し出すのは不味いでしょう？」

「……………それも情報屋？」

【黒猫】の口口。一時期にオラリオ内で数多くの冒険者を手にかけてた暗殺者であり、かなりの実力者。彼女も同じく最後の依頼を受けて以降、姿を消した名のある人物である。クロエ・口口……隠す気ゼロなんだから割れて当然というか、隠さずとも堂々としてられるからなあ。

この豊穡の女主人の後ろ盾がとてつもなく強大だし。無論、脅すなんて真似はしない。だって潰されてお終いだらうし？

「んー、別に名前を貸すぐらいならまあいいんじゃない？ 私自身が
いかないといけないとかだとミア母さんが怖いし」

「ニヤンでミャーじゃニヤいニヤ」

だからクロエさんは暗殺者。正面切って喧嘩売るタイプじゃない
でしょ。

「では、名前を貸して頂けると？ 報酬はいくらぐらいを希望します
か？」

「……そうねえ」

このままさくつと交渉を終わらせて帰りたい気分である。時間帯
的に迷宮探索を終えた冒険者が来るまであと一時間も無いだろうし。
もしミアさんに見つかるバイトさせられそうだ。

金額を悩み始めたルノアさんを他所に、クロエさんがむむむーと
唸っているが。何度も説明するが正面切って殴り合いになりそうに
なった場合、暗殺者の肩書よりは賞金稼ぎ、喧嘩屋に近いルノアさん
の名の方が力があるからクロエさんの方には申し訳ないがいらな
いんだが。

「にゅっふっふー」

唐突に聞こえた含みのある笑い声。ルノアさんとクロエさんが同
時に振り返ったのを見て、俺もルノアさんの脇の下から声の出処に視
線を向ければ、手にトランプの束を持ったアーニヤさんが含み笑いを
していた。

「あれ、アーニヤじゃん。何してんのよ」

「話は聞かせてもらったのニヤ。このアーニヤ様に妙案があるニヤ」
胸を張って宣言するアホ猫様。いや、なんでトランプを持つてるの
か予測もつかないし、彼女——アーニヤ・フローメルの言う、妙
案とやらについてできれば聞きたくはないんだが。

「此処にトランプがあるのニヤ——これで勝負すれば良いのニヤ
！」

ビシィツと突き出されたトランプ。何故に勝負なのか、これがわか
らない。

ルノアさんとクロエさんの呆れた様な表情がアーニヤさんに突き

刺さり——二人は視線をこちらに戻した。

「それでさ、金額なんだけど」

「ミャーの名前も貸してやるニャ。だから金寄越せニャ」

「おミャーら無視するんじゃないニャー！」

尻尾をピンツと立てて叫ぶアーニャさん。いや、なんか話がややこしくなるからアーニャさん黙っててくんないかな。と言うかクロエさんは諦めてくれ、頼むから。

「はいはい、わかったから。アーニャは黙ってて」

「そんニャー！ 酷い！」

「ミャーの名前も相当売れてるニャ。使えば其処らの雑魚は皆尻尾巻いて逃げてくよ」

女が三人よれば姦しいとは言うが、少し騒がし過ぎる。ルノアさんと二人つきりで話を進めたかったな……タイミングを考えるべきだったか。

「ニャから、トランプで賭けをすれば良いニャ——ミャー達が勝ったら、この後店を手伝ってもらうニャ。その代わり、ミリアが勝ったらルノアの名前もクロエの名前も好きにしていいいニャ」

「いや、それだと私が不利なんですけど」

負けたら名前使えなくなるとか困るんですがソレは。というかトランプで遊びたいだけなんじゃなからうか。

「……ってアホ猫は言ってるけど、ミリアはどうする？」

「ルノアさん的にはどうです？」

「んー、そうだね。お金は良いや、その代わりにお店の手伝いに入ってくれると楽かも」

ついでに俺目当ての神様連中が店に入ってくれてお金を落として行ってくれるし、だそうだ。

テーブルに用意されたのは普通のトランプである。

スピード、ハート、クラブ、ダイヤ四種各13枚で計52枚のカード、+αとしてジョーカーが1枚。用意されたのは何の変哲もない俺の知るトランプと同じモノだ。小細工などは見て取れない。

「では、確認しますが……この賭博ゲームに参加した時点で【黒拳こっけん】と……ついでに【黒猫】の名を使う許可を得られる、と」

「ついでって何ニヤ、ついでって」

別にクロエさんの通り名はいらないうですし。欲しかったのはルノアさんの方だしね。

「それで、私が勝った場合は何も無し。三人の内だれか一人でも私に勝った場合は……この後、お店の手伝いを行う、と」

「最も勝った奴の仕事の手伝い、ニヤ」

ああうん、其れで良いよ。

——と言うかき、ルール聞いた時点で分かってたよ。

この娘達、全員で俺を嵌めようとしてやがる。互いに目配せをしあつて今晚の仕事の手伝いをさせる気満々じゃねえか……まあ、乗るけど。

参加した時点で目的達成されるし、店の手伝いに関しても裏方の皿洗い限定であれば文句はない。

賭博ゲームの種類はドロロー・ポーカー。アーニヤさんがなんか喚いてたが知らん。手役ハンドの強弱は俺の知るモノと同様。ワイルドカードであるジョーカーが入ってるのが少し気になるが、まあいい。

「ワイルドカードは有り、ですか」

「ま、皆でやるときはいつもこのルールだよ」

賭札チップの代わりにクツキーを使用する。

特殊規則としては降りフォールドる際には参加費アンティの二倍の賭札チップを支払わなければならない。というモノがあるが、時間をかけないための変則的な代物だ。

何気に乗気乗気のルノアさんと、につしつしと黒い笑みを浮かべるクロエさん。そして何か絶望した様な表情を浮かべたアーニヤさんに、薄く微笑みを張り付けた俺。

まあ、別に負けても損は……無くはないが、問題はないので遊び感覚で良いや。どうせ負けるだろうし。

「進行役ディーラーは反時計回りで良いですね」

「オツケー、じゃあまずはニヤーから始めるニヤ」

初回の進行役はクロエさん。綺麗にカードを配っていく。元暗殺者と言うのは伊達ではない様子で、手先はかなり器用みたいだ。

ボケっと配られるカードを見てみると、彼女は慣れた手付きで——
——ボトムデールしやがった。

「あの、クロエさん」

「何ニヤ？」

「……今、ボトムデールしましたよね」

指摘した瞬間、クロエさんの滑らかな動きが若干乱れる。ルノアさんの眉間にしわが寄り、アーニヤさんが口を開いた。

「その、ボトムなんちゃらって何ニヤ？」

通常なら一番上のカードを配っていくのだが、自身の手札だけは山札の一番下のカードを配る。そうする事であらかじめ用意しておいた手役を自身の手元に持つてくる事が出来る訳だ。要するに、イカサマだ。

「クロエさんがイカサマしてたって事ですよ」

「イカサマニヤンてズルいニヤ！」

「ニヤんの事かニヤア？ ミヤーには良くわかんニヤ——」

「イカサマ上等の賭博なら、私もイカサマしますけど良いですよね？」
こつちも全力でイカサマしてくぞ。具体的には、結晶竜の力とか使つちやうぞ？ ええんか？

「……クロエ、イカサマは無しって話だよね？」

「はあ、わかったから睨まないでってば……ニヤア」

もう一度配られたカードを回収し、念入りに切り混ぜていく。——いや、ごく自然過ぎて気付きにくいのが、フォールスカットまで駆使してんじゃねえよ。もうイカサマする気しか感じられないぞ。

「クロエさん——進行役禁止で良いですかね」

「これはミリアを試しただけニヤ……チツ」

へらへら笑いながらも舌打ちするとか器用だな。もともと無かったクロエさんへの信頼が消し飛びそうだ。

「またイカサマかニヤ！」

「何？ 今度は何した訳？」

「フオールスカット、簡単に言うとかードを切り混ぜシャッフルしてる様に見せてその実、全く並びが変わらない技術テクニックですね。手品師が良くやる奴ですよ」

もうクロエさん手品師にでもなればいいんじゃないかな。

トランプを使った手品の技術テクニックはイカサマに 응용しやすいし、一目見ても初見じゃわからんしな。

「クロエー、おミャー、まさかニャーとの勝負の時、ずっとイカサマしてたんじゃないかニャー！ おかしいと思っただニャ。皆と賭博ゲームするといつもミャーが負けてたニャ。それもこれも全部クロエがイカサマしてたからに違いないニャツ!!」

椅子を蹴倒してビシツとクロエさんを指さすアーニャさん。アホそうだしイカサマし放題だった可能性はゼロじゃなさそうだが。

「いや、アーニャとやってるときはイカサマは使ってないけど——
——使わなくても余裕だし」

フギヤーツ、ミギヤーツとアーニャさんとクロエさんが騒ぎ出す。まるで発情期の猫みたいだな。

とりあえずクロエさんを進行役ディレクターにしてると話が進まないで別の人になしよう。俺は——あ、ダメだな。手が小さすぎてイカサマのしようがネエ。

クリスに協力して貰えば楽々勝利できるが……それは最後の手段だし、もともと負けても良い感じで行こうと思っただし流石にクリスは卑怯過ぎる。

「じゃあ進行役は私がやるね」

ルノアさんが進行役としてデッキを切っていく。一応、手慣れてはいるみたいだがフオールスカットしてる訳でも、ブレイクしてる風でも無さそうだ。そういつた小細工は行わないのは良い事だ。

開始からかなり経ってから、ようやく手元ハンドに手役のカードがそろった。

伏せられた其れを手にし、役を確認すると——ううん、微妙。ワンペアだな。

「にゅっふっふ……」

アーニヤさんの顔がニヤけてる。クロエさんは薄く微笑みを浮かべ、ルノアさんは無表情。

アーニヤさんが欺瞞^{ブラッフ}出来る感じの人ではないので、強い手役^{ハンド}になったのは確定か。いや、どうだ？ とりあえず初回は降りるか。賭札^{チップ}も数がある訳じゃない。

回数次第だが、せいぜいが十回かそこらが良い所だろう。接戦になる訳でも無いしな。

落ち着いた雰囲気を手札に目を通すミア・ノースリスと言う小人族^{バルウム}の中でも小柄な少女を見据え、クロエは小さく溜息を零した。シルが居る時には絶対に使えないであろう小手先程度に過ぎない不正^{イカサマ}を試みれば、まるで全てを見通す様に彼女が指摘してくる。

どのみち、ミアに皿洗いをさせる為に三人で彼女の所持賭札^{チップ}を削り取る作戦を即席で立ててはいた。が——上手くいっていない。と言うよりは、どこぞのアホ猫が足を引っ張っている。

「ニヤアアアッ!! また負けたニヤアッ!?!」

ルノアが顔に手を当てる深い溜息を零しているのを尻目に、ミアを伺えば半笑いでアーニヤの賭札^{チップ}であるクツキーを自らの皿に移していた。

既にアーニヤは次の賭博^{ゲーム}の時点で参加費^{アンティ}で賭札^{チップ}が底を尽きる。つまり次のアーニヤの手役^{ハンド}が強くない限り、確実にアーニヤの負けでこの勝負は終わる。

「……ミア、もしかしてアーニヤだけ狙い撃ちにしてない?」

「あ、わかります? なんかシンプルにわかりやすかったんで、一人狙い撃ちでさっさと沈めてしまおうかなと」

「ミアの性格が悪いニヤー! 性悪ニヤー!」

ミアが苦笑しつつも、進行役^{ディーラー}であるルノアに流し目を送る。

ルノアと視線を交わし合うも、打つ手なし。拳で解決する脳まで筋肉のルノアに自身と同じ様な技能を求めただけ無駄だ。自身が進行役^{ディーラー}であればアーニヤの手役^{ハンド}を操作できるが、無理だろう。

配られた手役^{ハンド}を目にし——アーニヤの目が死んだ。

「これで勝負あり、ですかね」

「ミアアの呟き。彼女の手元にはそこそこの量の賭札^{チップ}。当然、全賭札投入なんて馬鹿な真似はしてこない。堅実に小出しにして勝負してくるその姿勢、アーニヤと言う足手纏いさえなければ皿洗いをさせられたはずの彼女は、最初から最後まで違和感の無い自然体のまま賭博^{ゲーム}を終えた。

「最初に所持賭札^{チップ}が尽きたのはアーニヤさんですね」

「ニヤ……ニヤア……」

テーブルに伏せて涙を流すアーニヤさんを他所に、他二人が頭を抱えていた。

「アホ猫を仲間に引き込むんじゃなかった」

「こいつさえ居なけりゃ勝てたニヤ……」

いや、欺瞞^{ブラフ}も仮^{ポーカーフェイス} 面も出来ない人を味方に引きずり込むなよ。

こっちの欺瞞^{ブラフ}に頭から突っ込んできて破滅していくアーニヤさんは良い鴨過ぎたんだ。おかげで普通にやっても勝てた——アーニヤさん居なかつたら、確かにクロエさん辺りに競り負けてた可能性はある。

ルノアさん？ 彼女もそこそこわかりやすかった。

「と、言う訳で……約束通り名前はお借りしますね。それで皿洗いの件ですが」

「アーニヤがやるって事で」「言い出しっぺだし、負けたし」「酷過ぎるニヤア……」

ま、余裕過ぎって感じだな。

名前を借りる事も出来たし——ついでにクロエさんの名前も借りれたが、こっちは使う予定はない。

このまま手伝わされる前に、帰るかな。そう思って席を立とうとした所で、店の奥から端麗なエルフのリューさんと、町娘の様な雰囲気^{ヒューマン}の女性シルさんが出てきた。

「ミアアさん、来ていたのですか……二人は何を？」

「ミアアさん、こんにちは。皆さんで……賭博^{ゲーム}してたんですか？」

テーブルの上に置かれたトランプとクッキーを見て察したらしいシルさんが笑みを浮かべて質問を飛ばしてきた。まあ、俺は用事も済んだし帰るんだが。

「ミリアがミャーをイジメたニャー！」

「いや、アーニャがミリアの欺瞞ブラフに引っかけりまくっただけじゃん」

「そうニャそうニャー！　アーニャが居なけりやミリアに皿洗いさせれたニャー！」

騒ぐ三人を他所にシルさんが俺の対面の席に座る。

「ミリアさん、私とも勝負しませんか？」

透き通る様な、心の奥底まで覗き込んでくる様なその瞳に見据えられ——即座に肩を竦めた。

「いえ、もう要件も済みましたし、それにもう時間ですよ？」

時計を見れば、もうそろそろで夜だ。後少しすれば酒を求める冒険者がなだれ込んでくる事だろう。

そして何より、シルさんと勝負したら負ける気がする。目を見ただけで何でもかんでも見抜いてきそうな感じあるし。超怖い。

「そうですか、それは残念です……」

「また機会があれば——」

「では明日にしましょう」

はい？　いや、ちよつと待つてほしいななんて。

「明日、お昼前にお店に来てください。そこで勝負しましょう」

ニコニコ笑顔で宣言してくるシルさん。仲間外れにされて賭博ゲームされたのがそんなに気に食わなかったのだろうか。横でリユーさんが呆れた様な表情を浮かべつつも、補足してくれる。

「ミリアさん、シルがこう言ってますし——明日はお願いします」
リユーさんはシルさんの味方だしね。

しかし、彼女との勝負はしたくないんだが……まあ、リユーさんには世話になったし、明日は普通に勝負するか。

イカサマはー、無しで。シルさん相手に欺瞞ブラフとか仮ポーカーフェイス面とか通じる気が全くしないんだが……。

明日にはガネーシャファミリーの方へ連絡を入れて、そのあとに一応『豊穰の女主人』に顔を出してシルさんと勝負。他にも色々しなければならぬ事があるな。

考え事をしつつも、ヘステイアファミリーが臨時で泊っている宿に戻つてくると、宿の一階部分の食堂に皆が集まっている姿があった。

「ミリア様、おかえりなさい」

「おお、ミリア君。帰ったのかい」

とてとてーとヘステイア様に近づいて、そのまま腕の中にすぽっと納まる。ぎゅつと抱きしめて貰ってから周囲を見回せば、ベルやヴェルフはテーブルの上に集中していた。ミコトがテーブル上の羊皮紙を覗んでいる。

「ただいま帰りました、とベル達は何をしてるの?」

「ん? ああ、おかえりミリア。本拠の状態の報告書を読んだんだ」
『廃教会』の方の片づけはほぼ終了したのだが、移転先の元アポロンファミリー本拠は目も当てられない状態。それについての報告書らしい。

内容は屋敷内の一部の柱なんかの完全な取り換えの必要があるといった、大規模な改築が必要な個所についてと、アポロンの彫像の破壊方法。それから――ファミリー派閥の徽章について。

本拠の門に刻む徽章エンブレムが必要だが、ヘステイアファミリーにソレが無い。早めに決めといてくれ、だそうだ。

「そういえば、まだ僕たちのファミリーにはエンブレムが無かったんだよね」

「そう、ボクたちヘステイアファミリーを示すエンブレムも決めないといけないんだ!」

んで、エンブレムを決めるにあたって俺の事も待っていてくれた。と……ふうむ。

「エンブレムの案はあるのですか?」

念願ともいえるファミリーのエンブレムを掲げられるという事でベルがワクワクしている様子なのを見て微笑ましく思いつつも、ヘス

ティア様に尋ねる。

多分、というかヘスティア様の事だから既にエンブレムの案自体はあるんだろう。

「ふっふっふ、任せてくれよ。もう考えてあるんだ」

もったいぶるようにヘスティア様がごそごそと羊皮紙を取り出し、テーブルの上に置いた。丸められていて中身は見えない。全員が頭を突き合わせてテーブルを覗き込む。

留め紐を解き、丸められた其れを広げていく。

「鐘と、竜？」

「それを結ぶ、炎？」

大きな鐘と、翼を広げた飛竜。その二つと重なり合う、いや結び付ける炎。

ミコトとヴェルフ、リリの三人が何かに気付いた様に俺とベルを交互に見て、呟く。

「これは、炎……」

「ヘスティア様の象徴は護り火」

「鐘はベル様で、竜はミア様ですか」

テーブルの上に広げられ、魔石灯の光で照らし出された、その絵。鐘と竜を結び付ける様に広がる炎。

意味を語る必要はないだろう。

——皆が囲む羊皮紙には『ヘスティア・ファミア鐘と竜を結ぶ炎』のエンブレムが刻まれていた。

第一三五話

メインストリートから外れた裏通り。

目深に頭巾フードを被った小人族パルツムの少女が薄暗い魔石灯の明かりから外れた通りを歩む。肩から吊り下げた大きなバグを乱雑に揺らし、不機嫌そうに裏通りを睨んでいる。

真夜中と言っても差し支えない時間帯。薄闇を見据えて歩む彼女の蒼と紅、左右で異なる色合いの瞳が見据えたのは半ば朽ち果てた酒場のものらしき看板。その入り口に迷うことなく足を進め、軋む音を響かせて酒場に足を踏み入れた。

店内は薄暗く、薄汚れた吊り下げ式の魔石灯の明かりに照らされ、無数の人影がテーブルについている。軋む音を立てて開かれた扉の音につられて視線が入店した小柄な人物に向けられる。

入ってきたのが子供の様な背丈の者だと気付いた男達が鼻で嗤い、野次を飛ばす。

「ここはガキが来る所じゃねえぞ」「さっさと帰ってママに甘えてな」
下種な嘲笑が響く中、少女の歩みは止まる事無く一つのテーブルに歩み寄っていく。

四人掛けのテーブルについている一人の男が場に似つかわしくない鼻歌を響かせながらグラスに注がれた蒸留酒を口に使っていた。少女は迷う事無く彼の対面の席に腰掛け、口を開いた。

「蒸留酒ブランデー、それと赤色の摘まめる物を」

彼女の言葉に反応したのはカウンターから鋭い視線を向けていた店主ではなく、対面の席に腰掛けた男だった。

「ふむ、色は赤で良いのか？」

「やっぱ黄色で」

あらかじめ決められていた合言葉を口にした彼女に、男は笑いかけた。
「ほう、久しぶりだな」

周囲で沸いていた下種な嘲笑が一瞬で途絶え、幾人かの人物が立ち上がって店から出て行く。カウンターから歩み出てきた店主が無言

で彼女の前に酒の注がれたグラスを置いた。

視線を店主に向ける事無くそのグラスに注がれた酒を舐め、少女は溜息をつきながらバッグから小袋を取り出してテーブルに置いた。

「指定した情報。片っ端から出して」

「おいおい、もう少し遊びに付き合ってくれても良いんじゃないやねえか？」
禿げ上がった頭の男が軽い調子で口を開けば、少女は無言でテーブルを二度叩く。

「かあ、小人族はせっかちでいけねえ」

額に手を当ててこれ見よがしに呆れた表情を浮かべた男に対し、少女は再度テーブルを二度叩いた。

「はいはい、わかりましたよつと……これがお前さんの依頼した情報だ」

鋭い視線に射抜かれた男がようやく差し出した紙束を少女はひつたくる様に奪い取った。不機嫌さを微塵も隠しもしない彼女は紙束を捲って中を検めつつ口を開いた。

「次の依頼についてですが」

「おう、なんだ」

「ここらの裏通りの酒場、そこを仕切っている頭の一覧を、この場で出せるなら、五つだしましょう。一日毎に二つ下げます」

情報屋として活動している剥げた男——ダルトンと言う名を名乗っている彼は深い溜息を零すと、目の前の小人族の少女を見下ろして酒を呷り、口を開いた。

「嬢ちゃん、見た目に不釣り合いな交渉技術じゃねえか」

見るからに蝶よ花よと育てられていそうな雰囲気を持つ、気の強そうな小人族の少女。

淡い金髪に左右で異なる彩光異色。不気味な程に白い右手で紙束を捲り、視線を情報屋に向けていなかった彼女は、苛立ち交じりの雰囲気舌打ちを放った。

「それ以上余計な口を開くならこの取引は無かったことにしますが」

余計な言葉は交わさない。最低限の情報のやり取りのみを行い、自身の目的を一切悟らせない様に振る舞う彼女に対し、情報屋の男は肩

を疎めた。

「それで、依頼を受けるのか否か、返答を」

「ああはいはい、受けますよつと……ちよつと待つてろ。直ぐ用意させる」

ダルトンが手を振ると、数人の男が店の奥に駆け込んでいく。それを見届けてから、彼は目の前の取引相手を見て舌を巻いた。

交渉の余地が無い。情報を引き出そうと軽口を叩いてみても無反応。表情は鉄面皮かと思える程に微動だにせず、ただただ鋭い視線を向けてくる相手——アポロンファミリアとの戦争遊戯ウォーゲームで瞬く間に名を上げた偉才の小人族バルウム。女神フレイヤからも気に入られているらしい、話題沸騰中の人物。

【魔銃使い】ミリア・ノースリス。持ち得る異名は数知れず『ドラゴンテイマー』や『砲撃の魔術師』、『魔銃士』など、もはや一人が持つには不釣り合いなモノばかり。

彼のガネーシヤファミリアでも調教テイムの難しい竜種を二匹も従え、なおかつ自身だけではなく同派閥の者の言う事を聞くまでに明確に調教テイムしきつている調教師としての天才。

射程距離は既存の魔法を凌駕し、Kキョル単位での狙撃すらも可能な城塞すら穿ち貫く威力を持つ砲撃魔法を使える魔術師。

それだけに飽き足らず、魔術師でありながら近接戦を挑み、数倍の数の相手を軽く捻り倒す魔法戦士。

並べられた偉功の数々は、とてもではないが一人の人物に与えられた物とは思えない。——きつと、彼の戦争遊戯ウォーゲームをその目で見ていなければ、情報屋ダルトンもそれを信じはしなかつただろう。

十八階層で起きた異常事態イレギュラー。その際に活躍した冒険者の名の中に彼女の名も無数に出てきた——少なくとも、戦争遊戯以前にはただの噂話と切つて捨てたそれらに真実味を持たせるには十二分に過ぎた彼の戦争遊戯たか。

しかも信じられない事に、彼の戦争遊戯ウォーゲームの大逆転に至る作戦すらも【魔銃使い】が考案した物とも言われているのだ。

小人族バルウムであるか以前に、同じ人かどうかすら疑ってしまう程に多方

面に秀でている。

「そういや、なんでイシユタルファミリア関連には触るなんて言ったんだ？」

俺達なら上手く調べられる。娼婦の色仕掛けにも引つかかる事無く内部情報を調べられる。そう情報屋が呟くと、彼女は呆れの表情を浮かべて溜息を零した。

「確実に闇派閥に繋がってますし、調べるまでも無い」

身を隠して活動していた情報屋であるダルトンを発見し、そのまま交渉に持ち込む観察眼と交渉術。

情報屋とのやり取りを完璧に理解しきった態度。見た目にそぐわない危機管理能力。集めた情報を二つ三つ見ただけで何処の派閥が闇派閥との繋がりを持っているのかを見抜く頭脳。

戦争遊戯ウォーゲーム以前は神々が面白半分バルウムに背ヒレ尾ヒレを付けただけの愛玩用の小人族だと眼中に無かった彼女は、今や彼にとってのお得意様だ。

「ボス、用意できました」

「おう、ほらお前さんが望んだ情報だ」

周囲一帯の酒場と、その酒場を仕切る頭の一覧かしらを書き記した羊皮紙を手渡すと、彼女は紙束をダルトンに放り返してバッグからヴァリスの詰まった小袋を五つ取り出すと、無造作にテーブルに放る。

金貨の擦れる音を響かせて放り出されたそれを見て、部下が息を呑む。情報屋として酒場一つを貸し切つてのやり取りだが、目の前の少女は怯む様子は一切無い。むしろ堂々としており逆にダルトン側が圧倒される始末。

もつと怯えた様な態度をとるのならやりようがあるのにと舌打ちを零し、ダルトンは笑みを浮かべた。

「他には？」

「……………まあ、これで十分でしょう。足りない分は他を当たります」

羊皮紙を舐める様に見回し、彼女は無造作にそれを投げ返した。短時間しか見ていないにも拘わらず内容を全て暗記したらしい彼女は目を瞑って顎に手を当てて考え込み、顔を上げてバッグから小袋を二

つ取り出した。

「手切れ金です。よくやってくれました」

テーブルに無造作に放り出される小袋。締め方が甘かったのか一つは中身が零れだし、ヴァリス硬貨が羊皮紙を覆い隠す様に広がった。

「おいおい、俺達けっこう相性良かったじゃねえか。なんでまた——」

「貴方の事、そこそこ出来る方だと勘違いしてたんですよ」

まさかこんな無能だとは思わなかった。彼女がそう呟くと同時に——店の扉が蹴破られ、無数の冒険者がなだれ込んできた。

大通りを歩みながら溜息一つ。二つ……そして三つ。

情報屋ダルトン。キミは非常に優秀だった、と勘違いしていたが実際の所は人海戦術使いの間抜けであった。

彼の集めた情報の殆どが噂話に毛が生えたモノ。情報量こそ多いモノの、ぶつちやけ無駄な情報が溢れ返ってて使いづらい事この上ない。しかも調査した相手に気取られて襲撃されちまうし。

人海戦術は悪くはないのだ。数が多ければそれだけ情報は沢山集められる——問題は、部下の数が多ければ多いほど、相手に気取られやすくなる。当然だが、情報収集してる奴が居たら警戒するし、もし知られたくない情報を知られたら襲撃してでも消そうとする。

先ほどの襲撃。襲撃犯そのものは大したことも無く鎮圧できた。せいぜいがLv2程度のゴロツキかチンピラ程度。ぶつちやけ敵じゃなかった。

問題は……調べてた相手に気取られた事だ。あのダルトンと言う男、そこそこ頭は回る方なんだが部下の方がへまやらかしたらしい。情報屋のご利用はご計画的に。情報を買ったという情報も時として致命傷になるんだから、頼むから情報屋が情報を軽く扱わないで欲しいモノだ。まあ、彼らは再起不能だろう。

使える情報屋の一人……いや、情報屋集団『ダルトン』が潰れたの

は痛い、同時に相手の手の内もなんとなく理解できたので収穫がゼロではなかったのが救いか。

とはいえ、だ。こつちが得た情報から察するに大賭博場の経営者テリー・セルバンティスは——別人が成りすましている。本人は、既に殺されている可能性が高い。

理由は、いくつかある……：出国記録、人事記録、そして強引な手腕の誘拐の発生日時。

本来の帰還予定よりも一週間程遅れて迷宮都市オラリオに帰還したらしいセルバンティス氏は、帰国と同時に人事入れ替えを行っていた。

彼の右腕として知られていた執事や、親友とまで謳った事のある部下。そういつた親密な仲にあった者達が片っ端から退職または転属となつている。しかも——退職、転職後の行方は不明。多分、全員死亡済み。

そして、本来なら足を踏み入れる事を許可される事のないはずの、雇われ傭兵が幾人も出入りしている事。

おおよそ一ヶ月ぐらいだろうか。それらの出来事が収束して安定した頃から、人攫いが始まっている。

セルバンティス氏に忠誠を誓っていた者。親密な者は全て排除。残っている者は金にモノを言わせて賄賂で黙らせる。内部から侵略して乗っ取る常套手段ともいえるやり口だ。

立場を乗っ取るという行為自体は、俺も同じ様な手口でやった事がある。本人を暗殺部隊辺りに始末させ、自身は変装で成り済まし、親密な関係だった奴は片っ端からそれっぽい理由をでっち上げて周囲から飛ばし、組織の人間を役職に捻じ込む。会社そのものを乗っ取ってから後は組織の方で全てを吸い上げて、ぼいっと捨てる。

正直、乗っ取った後の維持の方が大変だし、吸えるもん全部吸い上げてさっさと捨てて身軽になつとかなないと足が付くはずなんだが、テリー・セルバンティスに成りすましてる誰かさんはよほどその金と権力の集まる立場に執着してしまっているらしい。

まあ、全部推測でしかないんだが。ここまで徹底して情報が揃つてしまっている時点で、怪しい。

むしろこれが欺瞞ブラフで実際にはセルバンティス氏本人が見染めた女性を囲おうとして周囲から反対され、激昂した挙句に排除。それを他人の所為にする為に——にしては、なんか杜撰な計画だな。

夜中に活動していたせいで眠気の残る頭を振るいながら目の前に置かれた手役ハンドを見て、溜息。

「ミリアさん、また私の勝ちですね」

「ええ……そうですね」

開店前の豊穡の女主人。リユースさんが店の裏庭で鍛錬してる音を聞きながら、シルさん相手にポーカーを行っていた。

俺の後ろ側には誰も居ない。他の店員がシルさんに手役ハンドを教える可能性があったので『私の後ろに立つな』と最初に宣言させてもらったのだ。その上で不正イカサマの発覚し次第、行った参加者の敗北とするルールルールも設けた。

当然、進行役プレイヤーの不正イカサマはシルさん側の敗北条件に含まれる。

だが、まず一つ言わせてくれ、欺瞞ブラフとか仮ポーカーフェイス面とか以前に引きが悪すぎてどうにもならん。一番強い手で『スリー・オブ・ア・カインド』とかなんだよ。

情報屋を一つ潰されて傷心だつてのにさあ。

「良い感じニヤー!」「このままミリアを潰すニヤー!」

其処の猫二匹。少し黙ってくれ。

進行役プレイヤーのルノアさんをジーンと睨んで不正イカサマをしていないかを確認してはいる。しかしそういった気配は一切感じない。シルさんが何かしているかと睨むも、其方も無し。

単純に今日は運が悪いみたいで手の打ちようがない。

配られた手役ハンドを確認すれば——げえっ!? 『ハイカード』じゃん……運無いなあ……あ。

「やった、同じカードが四枚もあります」

俺の手役ハンドは『ハイカード』……役無し。ノーペアである。

しかし、絵柄スイートが同じカードは四枚あった。後一枚あれば『フラツ

シユ』なんだが、それでも欺瞞プラフとして使わせてもらおうじゃないか。
ニコニコ笑顔で全力で仮面を被ってシルさんを見れば、彼女は
ジューツと此方の心の内を暴き立てる様に見据えてくる。ちなみに
嘘は吐いてないのでバレる事は無いだろう。

「……………」

「……………」

小首を傾げて反応を伺いつつ、シルさんを見据えると——若干
の動揺有り。少なくとも『フォー・オブ・ア・カインド』と同じ、ま
たは強い手ではないのだろう。というかそれより強い手なんて『スト
レートフラツシユ』しかないんだからまずないだろう。

「上乗せ」
レイズ

さあ、ベツテイニング・インターバルの時間だ。乗るか降りるか選ぶ
が良い。

俺の賭札チップは既に限界ギリギリ。乗ってくればお終いだが降りてく
れば首の皮一枚で繋がる。

「……………降りる」
フォールド

たつぷりと時間をかけて此方を読もうとしたが、嘘を言っていない
上に胸を張って笑みを浮かべてシルさんを見つめていた甲斐もあつ
てか彼女は迷いながらも降りた。

よし、シルさんが降りた。なんとか首の皮一枚で繋がったな。

「ふう、あ、私『ハイカード』です」

「え？ ああつ！ 同じカード四枚ってそういう!?!」

「ミリアが騙したニヤ！ 卑怯ニヤ！」

「いやそういう賭博ゲームだからこれ」

「これだからアーニヤはだめニヤ」

——なお、この後また『ハイカード』が出た挙句、一度使った
欺瞞プラフが通じるなんて都合の良い展開はなく、普通に負けた模様。

「……………いらつしやいませー!」

元氣一杯の声が響き渡り、客が来た事が店内に知らされる。

豊穰の女主人。メインストリート沿いに存在する酒場だ。

酒場とはいえ、カフェテラスも備えられており昼間は冒険者ではない一般人や、女性客が主な客層となっている、昼と夜で客層が変化する店である。

やってくる客は主に女性だが、この店のかわいらしい女性達を目的にやってくる神々も数多い。

「ミリアちゃんこっち見てー!」「きゃー可愛いー!」「首輪付けて飼いたい……」

おい其処の男神。前も首輪云々言つてた奴じゃねえか。生憎と飼育される願望なんて無いんだから他を当たれ。

いくらヘステイア様やベル相手でも首輪付けられての愛玩動物扱いは嫌だぞ。

「ミリア人気だね、つといらっしやいませー!」

シルさんに揶揄われながらも首輪云々言つてた神から注文をとろうと注文表片手にテーブルに向かおうとすると、横からリユーさんに止められた。

「彼の相手は私がしましょう」

「むしろよく近づこうと思つたわね」

ルノアさんに首根っこ掴まれ、子猫の様に別の場所に運ばれながら溜息。小人族用、というより既に俺専用ともいえる給仕服の裾を掴まんだ。

こんなかわいらしい服装だから妙な事を言われるんだ。客がしきりに頭を撫でようとしてくるわで面倒くさいし。

まあ、俺目当ての神々まで来てて普段よりも客入りは良いみたいではあるが、それでも夜に比べれば雲泥の差だ。その所為か店のカウンターで二匹の猫がだらけた雰囲気でごでつとしている姿が見受けられる。

「朝はまだましニヤンだけどニヤア〜」

「これが夜になると酒に飢えた冒険者どもがなだれ込んで……」

「はあく、憂鬱ニヤア」

ルノアさんの袖を引いて指さした先。豊穰の女主人に住み込みで

働く同僚の猫人二人がサボってだらだらしているのに気付いて俺を手放し、彼女たちの元へ向かう背中を見送ってから他のテーブルに注文を取りに向かう。

「いらっしやいませー、ご注文はお決まりですか？」

「うーん、迷っちゃうなあ……とりあえずキミで」

藍色の髪をした清楚そうな女神の言葉に溜息を零しかけ、なんとか笑みを浮かべて口を開く。ちよつと清楚そうな見た目して妙な事口走るのやめてくれ、本気で驚くわ。

見た目と中身が違う神多すぎる。

「私は売り物ではありませんので無理ですねえ。今日はグラタンとかおすすめですよー」

ミアさんの作る料理はどれも美味しいからね。特に今日のグラタンはエビたっぷりでチーズもたっぷり。賄いとして少し分けて貰ったけど本当に美味しかった。

だからグラタン頼め、『キミで』とか気持ち悪い事言っていないでグラタンを頼むのだ。

「じゃあミリアちゃんおすすめのグラタンで」

「オーダー入りまーす。グラタンをひとつー!」

これ以上この女神とは付き合いきれん。清楚な見た目とは裏腹にその目にはいたずらっ子の様な色合いが宿ってる。揶揄う積りなのか割とガチで俺を狙ってるのかわからないし。

ふわつと笑顔を浮かべて別のテーブルに向かおうとした所で、店内に似つかわしくない男女を見つけた。

くたびれた様子の男と、恰幅の良い女性。どちらもヒューマン。四人掛けのテーブルに二人で座っており、どちらも暗い表情を浮かべている。にぎやかな店内に似つかわしくない為余計目に着いた。

美味しく料理を食べる人はミアさんに歓迎されるが、あんな暗い表情を浮かべてる客はなあ。下手すると摘まみだされるし、とりあえず注文を聞くか。

足を向けて近づこうとした所で、女性の方が男性を睨んで口を開いた。

「——じゃあ何かい……あんたはアンナを売ったってのかい！」
にぎやかな店内に響き渡る女性の声。その内容に店内に居た客も、
店員も、誰しもが動きを止めた。

一瞬の静寂、それに気付いていないのかその二人のやり取りは続
く。

「売ったんじゃねえ……取られたんだ」

「同じことだよ!! だから賭博なんて止めろって言ったのに! この
駄目男!」

激昂し叫ぶ女性。不倫による痴話喧嘩かとも思ったが、だとすると
『アンナを売った』と言う言葉が若干引つかかる。それに『賭博』とい
う単語。

アンナ、アンナ………情報屋から買ったモノの中に似た名前が拳
がってたな。『アンナ・クレーズ』と言う女性。ヒューマン、神々に交
際を申し込まれる程に美しい人物。

交易所で取引予定として名が拳がっていた女性だ。確か、決行日
は、昨日。日時的に、多分そのアンナ・クレーズの両親だろうか。えつ
と、記憶違いじゃなけりや男性の方が『ヒューイ・クレーズ』、女性の
方が『カレン・グレース』と言う名だったはず………主要人物じゃない
からうる覚えだけど、確かそんな名前だったはず。

しかし、だとすると、なんとも………まあ………間が悪い。こ
の店で騒ぎを起こすとヤバいんだよなあ。

「実の娘を質に入れる親がどこに居るっていうのさあ!!」

女性の叫びが静まっていた店内に響き渡り、ざわめきが起こる。

穏やかな内容とは言えないそれに動揺した気配が広がり始め、その
男女に注目が集まる。ふと、男性の方と視線が合った。

「……何見てやがる」

鋭く睨みつけられたため、軽く肩を竦めて近づいて刺激しない様に
微笑む。

「いえ、何かご注文がおりかなあくと、グラタンとかおすすめですよ
?」

何処か抜けた、天然っぽい性格を装って宥めようとしたが。彼の額

に青筋が浮かび——ガラスを引つ掴んで怒声を上げた。

「見世物じゃねえぞー！」

ぱつと中身の水がぶちまけられる寸前、注文表を盾にして構えるも余計に飛び散るに終わる。直撃こそしなかったものの、手にしていた注文表はびしょ濡れ。序に飛び散った水が床を盛大に濡らし、俺の給仕服も少し濡れた。

下手に声かけなきゃよかったかもしれないなあ。若干後悔しつつも溜息を零す寸前、男は禁句を口にした。

「てめえらは不味い飯でも食つてろ！」

きつと、不幸な事でもあったんだろう。けれど、だからと言って、ミアさんの店で『不味い飯』なんて言っちゃ駄目なんだ。うん……まあ、なんだ……来世では強く生きろ。

「お客さあん……」

ガシッと力強く彼の手を掴んだのは、ルノアさん。店員としての微笑みが消え去った、怒りの表情で彼を睨んでいる。

「騒ぐ様だったらお金置いてさっさと帰ってくんないかなあ」

「いででででっ!？」

ミシミシツと骨の軋む音すら響く程の力強さで腕を握られ、男の手からグラスが滑り落ちたのでそれを受け止めてテーブルに置く。その間にも彼の両肩を左右から二人の猫人がガシツと掴んでいた。

『おうおう、この床誰が拭くと思ってるニヤア』

サボってる猫人二人ではないのは確かですね。と突っ込みを入れたらきつと流れ弾がこつちに飛んでくるのでとりあえず距離をとって避難。あ、シルさん？ 大丈夫大丈夫、ちよつと飛沫が当たっただけでほつとけば乾く程度だよ。

「人様んちの食べ物や水を粗末にする奴は——」

「神様に呪われて地獄に落ちれば良いニヤ」

肩を掴んだ二人が同時に彼の足を後ろから蹴っ飛ばし、そのまま床に転がした。きつと彼は何が起きたのかわからないだろう、少なくとも俺から見てもかなりの速度で動いてるし、恩恵を持つてない一般人らしい彼では状況の移り変わりが理解できないはずだ。

「な……なっ……あ!？」

いきなり床に転がされた彼が何が起きたのかわからずに驚愕の表情を浮かべる中、満を持って女将^{ボス}が登場した。

床に倒れた男の首根っこを掴んで持ち上げ、真正面から額を突き合わせて鬼の形相で睨む。

「へ……?」

「うちの飯を食ってもないのに不味いなんてケチつけるとは、いい度胸してるじゃないか」

「ひいっ?!」

ミアさんの威圧感に恐れ戦きガタガタと震えだす男性。しかし、気付くのが遅すぎた。既に逆鱗に触れた彼に出来る事は、歯を食い縛る事だけだ。

「他の客の迷惑なんだよ、この——アホンダラアツ!!」

一人の男が店の正面の大通りに投げ飛ばされる。ゴシヤツと盛大に叩き付けられ、勢いのままゴロゴロと転がって大通りの中央で動きを止める。

一瞬の驚愕に包まれた大通りは、ミアさんの姿を見て直ぐに収まった。この豊穰の女主人という店ではよくある光景だと受け入れられている証拠だろう。

「ミアア、怪我は?」

「いや、あの程度で怪我する程じゃないんですけど……」

一応、俺って冒険者だし? Lv. 3だし? なんの恩恵も受けてない一般人の攻撃なんて痛くも痒くも無いよ。

「流石ミア母さんニヤのだ」

「ざまあみろニヤのだ」

「お前達、さっさと片付けな」

『ちえっ』

猫人二人が片付けを命じられたので、俺は濡れた注文表^{メニュー}を日当たりの良い所に置いてから、女性の方に話を伺うべく足を向け——既にシルさんが彼女に話しかけている姿が目に入ってきた。

「あの、ちよつと物騒な話が聞こえてましたけど……何があつたんで

すか？」

「……………」

噂好き、というかなんというか。余計な事に首を突っ込みたがるのはどうかと思うんだがね。

まあ、好奇心旺盛なのは悪い事ではない。好奇心猫をも殺すというし、あんまり物騒な話に近づくべきではないんだがなあ……。

シルさん、妙に幅広い伝手があるし、変に関わってこられても面倒といえなさそうだが……うん。とりあえず話を聞いて、シルさんに釘差しておくかなあ。後リユースさん。

ガネーシャファミアの作戦については話せないせいで説明が難しいが、面倒事が起きませんように……。

第一三六話

『豊穰の女主人』の店内。

サボっていた猫人二人とルノアさんが頑張っているのを尻目に、俺とシルさん、リユースさんの三人で夫婦の話聞く。先の騒動によって起きた沈黙も即座に回復し、いつもと同じ賑やかさを取り戻したその片隅で暗い表情をした二人の夫婦が事情を話してくれた。

クレーズ夫婦。夫のヒューイ・クレーズに妻のカレン・クレーズ、そして娘のアンナ・クレーズの三人家族。

魔石製品製造業と商店の手伝いで生計を立てている、オラリオにおいては特に珍しい所の無い一般家庭であった。唯一、その娘アンナ・クレーズが神々にも見染められる程の美女だった、と言うのが他の一般家庭との差異と言えるだろうか。

しかし、夫であるヒューイ・クレーズには賭博癖があり。それが原因で娘と家を失ってしまったらしい。

いや、賭博癖とか爆笑モノの鴨ですわ。しかも娘が美人？ 鴨が葱背負ってますねこれは。序に鍋もついてて最高の鴨ですよ。俺だつて狙う、誰だつて狙う。

むしろどうして賭博癖なんてヤバい癖を殴つてでも直さなかったのか。どうにも危機感が全く感じられないんだが……まあ、詐欺に対する知識も無いだろうしそこらへんは運が悪かったんだろうよ。

「俺だつて好き好んで娘を賭けた訳じゃない……！」

絞り出す様にヒューイさんから呟かれた言葉に、思わず失笑してしまった。おかしなものを見る目でシルさんとクレーズ夫妻から見られ、リユースさんに責める様な視線を向けられる。

いや、ほんと笑うしかないぐらいに無責任で危機感の無い間抜けっぷりじゃん。と口にするのと殴られそうだし肩を竦めておく。

「失礼、ちよつと思ひ出し笑いを……」

「ミリアさん、時と場所を考えてください」

シルさんが鼻先に指を突き付けてきて可愛らしく怒つたの見つつ、愛想笑いを浮かべておく。

見知らぬ相手との賭博、それも間違いなく不正イカサマされてただろうに気付けない。娘がそこから知られる程に有名だというのに、その父の無警戒っぷり。これを笑わずして何を笑えと言うのか。バカバカしい話になりそうだな。

「大方、賭博の相手は冒険者だったのでしょうか？」

「あ、ああ。ファミリアならばらのチンピラの集まりだった」

はあ……、あー、そうだな。うん、これはアレだ。

「一応、恫喝等されたのならギルドに申し立てすれば注意喚起ぐらいはしてくれますが。まあ無意味でしょうね」

だって賭博で負けたんでしよう？ たとえそれが不正イカサマを行われた結果だったとはいえ、現場を押さええていない以上どうしようも無い。彼らは『賭博に勝つたのに金を払えないなんて言った』と口実を主張できる上、彼らの主神は間違いなく己が眷属は無実だと口を揃えるに決まってる。

要するにギルドはこの件に関して『冒険者相手に賭博で負けて被害者面した一般人』と判断して相手してくれない訳だ。

「どうせ、娘を担保にすれば機会チャンスを与えてやる、とでも言われたのでは？」

「……そうだよ」

はあ、警戒心の無い奴ってこれだからさあ。向こうに口実与えて追撃できなくしちゃってさあ。これで俺達はその冒険者たちの居る酒場に真正面から乗り込んで『娘を返せ』なんて言ったら、悪者はこっちになるに決まってる。せめてもう少し……いや、言っても遅すぎるんだけどさ。

「娘さん、アンナ・クレーズについてはそれなりに有名なので私も知ってますが。神々に求婚されるぐらいには見目麗しく、気立ても良い娘だそうですね。確か花屋で働いていて、配達のために花を手に良く街中を歩く姿が目撃されていた、と」

「えっと……」

困惑した様子のカレンさんに微笑みかけ、溜息を一つ。

「最初から娘を狙った犯行でしょう。というかそこに考えが行き付か

ないのはどうなんですかね」

ようやく理解が追いついたのか夫婦二人が顔を見合わせて青褪めているのを見てさらに溜息。面白いぐらいに間抜けというか、無知もここまでくると流石に呆れ返るな。

娘がそんなに自慢だったら、危ない橋を渡る真似はやめときやよかったって話だよ。ほんとにさ、なんでこう無自覚に娘の命を危険に曝す真似をするかね。見知らぬ相手との賭博なんて家族も自分の命もひつくるめて全部奪われる危険だってあるってのにさ。

まあ、そこらを知らない無知さが招いた事態だ。一応、秘密裏にガネーシヤファミリアが動いてるからその内解決はするだろうし、娘が戻ってくるまでは枕濡らしてて良いんじゃないかな。

「そういう事でしたらギルドかガネーシヤファミリアに助けを求めてみたらどうでしょう？」

「無駄だよ……こんな届けは都市には毎日の様に溢れているさ。すぐには取り合って貰えないよ」

シルさんが親切心から放った言葉に、カレンさんが暗い表情で答えた。

いや、いやいや。溢れ返ってるって知ってるならなんで警戒しなかったんだよ。ちよつと頭おかしいんじゃないか。いくら何でも……いや、うん、まあそうだな。間抜けな夫婦の間に生まれた娘さんには哀れだが、なんとというか連れ去られて当然の環境だわ。胸糞悪い話だ。

「……アストレアファミリアが居てくれたら」

継る様にカレンさんの口から呟かれた派閥名。

過去、オラリオに存在した派閥。女神アストレアが率いる、第二級冒険者が多数集った派閥であり、悪の蔓延る時代において絶大な支持を集めたファミリア。

強きを挫き弱きを助け、オラリオの秩序安寧に尽力し続け——
悪からの報復で滅んだ、正義の派閥。

「おいやめろよ、もうなくなつたファミリアの名を出すのは……」

「でも、アストレア様が居てくれたらきつとこんな私たちにも手を差

し伸べてくれていたはず！」

そして、俺の隣で表情を硬くしているエルフの女性、リユー・リオ
ンが所属していた派閥でもある。

リユーさんの顔をちらりと見てから、溜息一つ。

糞女の言葉を肯定するのは癩だが。

——善良な市民って奴はさ、口開けて待つてるだけの間抜け
じゃない。

——アタシらは自力で努力して奪ってる訳よ、奪われない様に
努力だつてしてるでしょ？

——雛鳥のふりしていつまで経っても成長しやしない奴らを
貶めて、何が悪い訳？

まあ、そうだな。うん、『誰かが救ってくれる』なんて都合の良い幻
想を抱いてるのは、醜いよな。

それを屑みたいな奴が口にしてるんだから、まあ——いや、や
めておこう。

「どうして優しいミアミアばかり居なくなっちゃうんだ……」

嘆いて涙を流すカレン・クレーズ。彼女を宥めようとしている
ヒューイ・クレーズ。

二人は、普通の一般的な市民だ。騙して貪る悪が居なけりや、幸せ
を謳歌する事が出来る、善良な夫婦。

悪いのは、騙して奪う悪だ。それは、絶対だ——でも、醜く見
える。

誰かが、助けてくれる。そんな考え方をしては生きていけない世
界。

助けて欲しければ、利を示せ。出来ないなら死ね。

正直、口を開けて待つてるだけで助けてもらえる奴らは、妬ましい
ね。死に物狂いで足掻いた末に得るものも無く死ぬ奴だつて居るつ
てのにさ。

——ヘステイア様主神は俺を救ってくれた。

「はあ、二人とも落ち着いてください。とりあえず、私の方で調べられ
る範囲で調べて、打てそうな手は打っておきますので」

「貴女みたいな子に何ができるっていうの！」

顔が引き攣りかけ、溜息。感情的に泣き喚く奴っていうのは面倒臭いなあ。

「貴方たちの娘を攫った相手に心当たりがあります。ただ、今日直ぐに帰るのは無理です。一週間は待つてください」

「あいつ等が娘を連れていったんだぞ？ 攫った？」

「……チンピラはただの手先です。むしろ人攫いなんて真似をするのはリスクが高すぎる。同一派閥の冒険者なら、その主神が見染めて強引な手段をとったとも考えられますが、複数の派閥からなるチンピラなら雇い主は神ではないでしょう」

交易所での取引記録にあるしな。

イシユタルファミリアの方も探りを入れてみたが、あつちは完全に無関係だったし……あの糞情報屋の所為でイシユタルファミリアから睨まれてしまったのは想定外だがな。まあ、顔が割れた訳ではなく情報を買ったかもしれない奴が居る程度で済んでいるのでまだマシだが。

「ミリアさん、心当たりっていうのは？」

「……リユーさんには教えませんよ？」

無表情で問いかけをしてきたリユーさんに肩を竦めておく。

いや、リユーさんは首突っ込んだじゃ駄目でしょ。戦争遊戯ウォーゲームで顔が売れかけている彼女が変に動けば面倒事が増えるし、これ以上この店に迷惑かけると睨まれそうだし？

「……………いくらでしょう」

「すみません。お金の問題でもないので」

「アンタらいつまで油売ってる積りだい、さっさと働きな！」

ミアさんの怒声が響いて、ようやくリユーさんから解放された。ちらりちらりと此方を見ってくるリユーさんに微笑みかけ、溜息一つ。

お願いだからリユーさんが首突っ込んでくるのはやめてくれないかね。

店の仕事に一区切りつけ、リユーさんから逃げる様に店を後にし

た。

これ以上、彼女に情報を漏らすと正義感燃やして動きかねないからだ。

「……リオンが、か」

「どうしましょうかね」

難しい表情を浮かべたシャクティさんにリユーさんの事を相談しておく。彼女は一応、都市ではお尋ね者の一人だ。無論、ギルドもガネーシャファミアリアも積極的に探し出して捕まえる気はないが、だからと言つてのこのこと目の前に出てこられれば、捕まえざるを得ない。

「動く、だろうな」

「……マジですか」

「まあ、グラン・カジノ大賭博場には限定された者しか入れない。お前みたいに招聘状が届きでもしなければな。心配は——多くあるが」

多少無茶してでも侵入してくる可能性はゼロではない。と？

過去アストレアファミアリアに所属していた頃の謎の覆面冒険者【疾風】であったころのリユーさんの行動から考えると、十二分に有り得る話らしい。

損得勘定を無視した正義の執行。正義に重きを置いていたからこそその彼らは、時としてやり過ぎな程に悪を裁く事がよくあつたらしい。その筆頭がリユーさん。

彼女は仲間からも度々『やりすぎだよ』と注意されていたらしく、今回の件でも強引に首を突っ込んでくる可能性はありうるらしい。

「……一応、警備を厳重にしてリオンの奴が近づけない様にはしておこう」

「下手に突撃されても面倒ですしね……あ、本題がまだでしたね」

『【黒拳こっけん】のファウスト』、ついでに『【黒猫】のロロ』。二つの名前を借りてこれたと伝えると、シャクティさんが妙な表情で此方を見下ろしてきた。

「お前は、なんというか妙な伝手を持っているな」

「あはは……で、どちらの名を使います？」

「当然、ファウストの名を借りよう。流石に猫人にはなれん」
でしようね。つと、別件で報告もあるしそつちも伝えておくか。

対面の席に腰掛けてティーカップを片手に落ち着いた雰囲気でする小人族バルウムの少女。何処か虚ろな目をした彼女が溜息と共に呟いた派閥名に、シャクティは目を細めた。

「イシユタルファミリアについてなんですが」

「……何かあったのか？」

都市オラリオの治外法権。『歓楽街』一帯がそう称されている事は、『オラリオの憲兵』とも謳われるガネーシャファミリアの団長としても知っていた。

その『歓楽街』一帯を支配する都市内有数の派閥イシユタルファミリア。その派閥についての事が彼女の口から出てきたのは、意外という程ではないにせよ不自然だった。

「いや、少し調べたんですよ」

女性の強引な誘拐。と聞いた時に真っ先に『娼婦として売られた可能性』を思い立ち、娼婦と関連深い処か真っ黒なイシユタルファミリアの方についていくつか独自調査を行ったらしい。

「不自然な取引が溢れ返ってまして……まあ、ギルドの方の事情もわかりますが、いくらなんでも放置し過ぎじゃないかとは思うんですよ」

イシユタルファミリアに運び込まれている品々についての調査を行った上、そのほか周囲の商会や商人が取り扱う品々の量、商会や商人が持つ資産推移。馬車の移動経路と日数。馬車の積載量の最大数や雇われている人員の数。調査の範囲は膨大であったが、人海戦術バルウムでそれなりの情報が手に入った。と虚ろな目をしながら小人族が呟く。
「私が調べた範囲では、まあ人身売買は普通にやってみましたね。交易所も通ってるのでギルドが黙認してる状態ですが……しかし、あくまで外部から奴隷を買ってるだけで都市内で奴隷を集める真似はしてないみたいなんですよね」

借金で首が回らなくなった女性を買い取る事はある。しかし強引に借金を背負わせる真似はしない。

ある意味で真つ黒、ある意味で清廉潔白。イシユタルファミリアについて調べれば調べる程、歪さを理解していった。

「身元不明な娼婦が沢山いるみたいですけど、ダイダロス通り出身みたいで連れ去られた女性は一人も居ませんでしたね」

どこか遠くを見つめながら、虚ろな目で溜息を零す。

「ダイダロス通り、えつとあの辺りの孤児院。あそこら辺りは上手く利用されてますね」

娼婦が妊娠してしまった赤子。育てる余裕もないそんな赤子は隣接しているダイダロス通りに捨てる。

捨てられた赤子は、ダイダロス通りの孤児院が回収して育てるのだ。女の子であれば、成長し客が取れるようになれば娼婦に。男の子であれば冒険者になる様に仕向ける。

冒険者になった男が迷宮で金を稼ぎ、稼いだ金の内のいくらかは孤児院へ送り、残りの金で娼婦を買う。元孤児の娼婦達は自身を育ててくれた孤児院に寄付し、身請けされる事を願って春を売り続ける。

上手く循環している場所だ。

「全員が幸せになれる、なんて夢物語みたいな場所ではありません。ですが、生まれてきた子供全てに等しく機会チャンスを与えている、という部分は、拍手喝采したくなりましたね」

娼婦が産み落とした赤子は、運よく誰かに拾われない限り死ぬ。それが餓死か凍死か、衰弱かのいずれにせよ自我を芽生えさせることも無く命を落とす。その死体は病原菌の温床にならぬ様に、処理される。そんな風にただ無為に命が消費されるわけではない。

運が良ければ、冒険者として大成できるかもしれない。運が良ければ、娼婦として身請けしてもらえるかもしれない。男の子も、女の子もどちらも等しく機会チャンスを与えている。

「胸糞悪いとか言う奴は出てきてますが。私個人としてはこのやり方、好きですよ」

机上の空論で、夢物語を語った所で空腹と寒さは癒えない。たとえ

無謀な冒険の果てに少年が命を落とそうが、少女たちが一生を娼婦で終える事になろうが。孤児でしかない少年少女全てに等しく機会^{チャンス}は与えられている。夢を見て、生きる事ができる。

冒険者として大成できるかもしれない。娼婦として身請けしてもらえるかもしれない。

それがたとえ偽りで、与えられた物だったとしても、自我も芽生える事無くただただ死んでいく赤子が減るのであれば最良のやり方だろう。

文句があるのなら、その全ての孤児の為に金を出してみせろ。出来ないのなら黙って指を啜えている。強引なやり口だが、上手く循環し、回っている以上文句のつけようがない。後は感情論を振り回すぐらいだが……。

「と、話が逸れましたね。本題はそつちじゃないですよ」

問題は此処から。

「多数の鉱石類、えつとたしか最硬金属^{オリハルコン}や超硬金属^{アダマンタイト}なんかが大量に運び込まれてるんですよ」

名目は『建造用資材』である。しかも、だいぶ前から一定量が常に供給され続けているのだ——非正規なルートで。

「複数の商人が冒険者なんかからそれらの金属類を大量購入してるんですよ」

購入するのには金が必要だ。購入した商品は売らなければ金にならない。

おかしなことに、購入した際の経歴は簡単に入手できたのに。販売した記録は何処にも残っていない。そう、商品を売った記録は見つからなかつた——なのに、彼らはもう一度商品を仕入れた。何処から金が出てきた？ 彼らの商品倉庫に積み上げられた筈の商品は？ どうして購入を続けられる？

そこで商品輸送を行う馬車関連を調べれば、大量の品物をイシュタルファミリアに運び込んでいる事が判明。序に、イシュタルファミリアからその商人や商会に莫大な資金が流れているのだ。つまり、秘密裏にそれらの商品を取引している。

が、ここで更なる疑問が芽生えた。

「運び込んでる量からして、イシユタルファミリアの管轄下にある建造物全てを最硬金属オリハルコン製にしても余るはずなんですよね」

有り余る通り越して山すら出来そうな最硬金属オリハルコンが消えている。

何処に？ という疑問を覚えて調べていくと、別の情報にぶち当たった。

「ちよつと話が飛びますけど、迷宮の中に放置された死体やらなんやらって消えますよね。なんでかは知らないですけど」

迷宮の中に放置された死体や道具は、いつの間にか消えてしまう。破損した壁も迷宮の力で修復されてしまう。

ある意味では恐怖を覚えるその性質は、ある意味、犯罪者にとっては喉から手が出るほど欲してしまう能力だ。

「ここから予測なんです。多分、地下に何か作ってると思うんですよ」

地下をくりぬいて、それを最硬金属オリハルコンで補強していく。どれほどの規模になるのかはともではないが計算できないが、運び込まれた量と、使用された量。そして闇に消えた量を計算していくと、地下に巨大な建造物を建てても有り余る程なのだ。

無論、通常なら切って捨てる様な荒唐無稽な話ではある。

「地下を掘れば土砂が出ます。それらの処理が問題なんです……その土砂は迷宮に捨てていたら？」

迷宮内に土砂を放置すれば、勝手に迷宮が処理してくれる。それを利用して採掘作業時に出てしまった土砂を処理していれば、地下空間を作っているという話が現実味を帯びてくる。

土砂の処理さえなんとかなるなら、地下の巨大建造物も不可能ではない。

「で、それとは別に一時期、ルナティック・ライト月嘆石という鉱石が多数運び込まれたそうです。序に建材とか色々」

ルナティック・ライト月嘆石。月の光を受ける事で色が変化し、魔力を帯びる特殊な鉱石だ。

鍛冶師が武装に使用したりするのだが——当然、月の光なんぞ

届きやしない迷宮内では無用の長物。価値の無い代物としてオラロオでは流通が少ない代物だ。それを、大量に購入している。

「それも地下の建造物に使ってるのかと思っただんですが、どうにも違うみたいでして」

同時期に大規模な建築を行っていたのだ。

丁度、闇に消えて無くなっていている分とは別に、建築資材が運び込まれた量から計算すると、ぴったり合うぐらいの大規模建築が行われている。

「えっと、それ以前に確か狐人ルナールの扱う妖術の効力を高める魔法道具マジックアイテムを購入したらしい、って噂もありまして」

後は少し前に強引な取引で極東から流れてきた狐人ルナールの幼い少女を買収取った、という情報もあった。

「まあ、正直なところ、真偽のほどは定かではないので断言できませんがね」

個人的な想像の域を出ない部分については申し訳ない。そう呟いてからミリアは虚ろな目でシャクティを見据えた。

「月 嘆 石の効果的に『満月の夜が最も効果を発揮する』みたいですから、多分いずれかの『満月の夜』になにか大ごとをしでかそうとしているのではないかな、と予測してます」

序に言うのと、それには狐人ルナールが大きく関わっている。というか過去の取引記録や納入記録。大量に動く不思議なお金。そこらへんを調べると余りの真つ黒さに眩暈すら覚えた。

「過去の情報も漁ったんですが、まあここら辺はいまいち信用ならないんですよね」

過去、歓楽街周辺でしのぎを削り合っていた他の女神たちを片っ端から潰して回った事がある。

その際にギルドから不正を疑われ、イシユタルは眷属達のステータスを開示する事になった。結果として不正は見つからず、イシユタルはその事でギルドから莫大な謝罪金を受け取った。以後、ギルドはイシユタルに強く発言する事が出来ずに、人身売買等に手を染める彼女を非難できなくなった。

「建築資材の運び込みなんかはここらあたりの時期からやってたっばいんですけど……」

話が飛び飛びで分かり辛いかもしれない。そう前置きしたミアは、ふとシャクティを真つ直ぐ見据え、死んだ目で呟いた。

「最硬金属オリハルコンや超硬金属アダマンタイトなんかを使って地下施設を作ってる上、時期は不明ですが満月の夜に何らかの計画を企てている可能性がありますね」

そう締めくくり、深い溜息を零して虚ろな目をしたままボソボソと愚痴を零しだす。

「商売記録を調べるまでは良かったんですよ。警戒網に引っかからない範囲だったんで、流石に内部の人員調査したら不味いと思つて手を引こうとしたんですよ？ でも情報屋の間抜けが勝手に人員調査しましたですね……」

現在のイシュタルファミリアの内部人員リスト一覧の情報そのものを買う事はせずに手を切った。完全に身バレはしていないだろうが、それでも警戒されているのか周囲にアマゾネスの娼婦らしい人員がうろついている。これから最大賭博場グラン・カジノの調査を行うというのに、余計な派閥に目を付けられた、と。

ミア・ノースリスが死んだ目でシャクティを見上げる。

「と、言う訳でもしかしたら、私が急に行方不明になつちやうかもしれないですねえ〜」

あはは、と乾いた笑みを浮かべたミアに、シャクティは大きく声を張り上げた。

「な、何をしてるんだお前は！ 勝手に調査した挙句に自分から巻き込まれて！ 少しは身の振り方ぐらい考えろ！」

そんな積りは無かった、とミアが深い溜息を零した。

第一三七話

オラリオ南方。

繁華街の一角に存在する賭博場カジノエリア区域の入口、メインストリート沿いに存在する巨大アーチをくぐる箱馬車の中。横に座るシヤクテイ・ヴアルマが変装した『黒拳』のファウストに今回の任務における行動について話し合いを行っていた。

「それで、貴賓室ビッブルームを調査したい、と？」

「ああ、あそこは我々がネーシャファミアでも立ち入りを禁止されているからな」

「やだやだ！　ぼくびつぷるーむになんて行きたくない！　と喚き散らしたい気分ではあるが、第一級冒険者が護衛についてくれているし、最悪の場合はなんとか外交問題に発展しない程度に暴れ散らしていいらしいので良いが。」

一応、室内戦を視野に入れてクラスは『クーシー・アサルト』と『ケツトシー・ドールズ』にしてきたが。果たしてどれほど意味があるのやら。

頭の上へのせた結晶のティアアラを突き、クリスに注意しておく。

「大人しく静かにしててくださいいね」

《人が一杯居るね！》

.....

頭の上から響いてくる結晶クリスの声に溜息を零し、シヤクテイさんにもう一度確認を行う。

「それで、例の酒場の方の犯人の方はどうなってますかね」

「一応、賭博場カジノに来れるとは思えないのだがな」

例の酒場。ヒューイ・クレーズが脅されて連れ込まれた、裏路地の酒場だ。

其処は、壊滅していた。少なくとも話を聞いたその日の晩に襲撃を受けたらしい事はわかっている。

犯人の特徴——エルフの女性で木刀を使う——からして、既に犯人に目星はついている。というか一発で発覚してる辺り、

リユーさんは隠蔽が下手くそというか、する気ゼロというか……。

「リオンの奴め、無駄に情報を残して……」

額を抑えて頭痛を堪える様に呻くシヤクテイさん。

あの人の無鉄砲な行動の所為で足並みが若干乱れた上、襲撃を受けたチンピラ共は怯えて証拠品となりそうな物を全て破棄してくれやがったのだ。もう少し考えて動いて欲しいのだが、流石に無理か。

組織だった動きというよりは、犯人探す為に無鉄砲に乗り込む辺り、正義を掲げてるだけはある。ただ秩序方面がちよろつとだけ疎かなと……。

「それで、ノースリス。お前の方はどうだ？」

「わかった事、は……」

まず、テリー・セルバンティスを名乗る偽物の正体。名前は『テツド』というドワーフの小悪党、複数の商会や伝手等を使って今の立場に転がり込んだ事。

その手引き等に協力して蜜を吸おうとしていた商人や商会連中を手酷く裏切つて身勝手な行動に出た事。

それに対し報復として商会や商人が彼に対して納入する品物や物資に小細工しまくつてる事。

「主な点としては、^{グラン・カヅノ}最大賭博場が誇る金庫ですかね」

金品を保管するための場所であり、強度抜群の^{アダマンタイト}超硬金属で作られた^{グラン・カヅノ}最大賭博場が誇る宝物庫。彼の入れ替わった偽物が商人に金を叩き付けて買い漁った素材で、建築系の技術者に作らせた堅牢な小城塞。

その中に納まる^{グラン・カヅノ}ヴァリスは、大国が持ち得る資産に匹敵する程であり、その賭博場が^{グラン・カヅノ}最大賭博場を名乗れる理由でもある。

其処が、余りにも酷過ぎた。というかなんというか。

「どういう事だ？」

「……まず、その金庫に使われたと思われる^{アダマンタイト}超固金属ですが。上層の低品質の代物です」

^{アダマンタイト}超硬金属の強度は純度に依存している。高純度のモノは、それこそ第一級冒険者が使用する武装にも使われ——有名どころで言えばロキファミアの第一級冒険者【^{アマゾン}大切断】が主武装に使っている

『大双刀』に馬鹿げた量が使用されている——その強度は並みの攻撃では傷一つ付けられない。

しかし、それも下層や深層で採掘される希少な超硬金属を、高位の鍛冶師が精錬して純度を高めたモノの話であって、上層や中層で採掘された低品質な代物を精錬した低純度のモノだと話が変わってくる。

高純度だと、それこそ第一級冒険者が放つ長文詠唱級の砲撃すらも弾く代物ではあるのだが、低純度ともなれば俺でも破壊できる程度に落ちる。

「あの金庫、私の砲撃なら風穴開かれる程度の代物ですね」

「……………なんというか、三重の意味で呆れるぞ」

三重？ どういう意味だろうかと小首を傾げていると、シャクテイさんが頭痛を堪える様に呟く。

「お前のその情報収集能力と、相手の間抜けっぷり、そして……………その間抜けにまんまと良い様にやられてるガネーシャファミアリアにな……………」

「ああ、それですか」

ガネーシャファミアリアが尻尾を掴めなかつた時期は周囲の商人や商会が全力で保護しまくってた時期だ。犯人が金と権力に溺れて調子に乗って彼らを切り捨てた結果、今まで上手く隠蔽されていた部分が全部曝け出されただけである。

簡単に言うるとテッド単体はただの間抜けで、問題はその周囲に居た商人や商会連中の手際の良さだ。彼らは既にテッドを見限って証拠隠滅を図った上『全部テッド君が悪いよう、僕たち脅されてたんだよう』と言い訳準備も万全とかなり手際が良い。こつちに手出しすると面倒事になるんだよなあ。

「あれらの商会とか商人は手出ししないのが吉ですね。多分、突くと大騒ぎになりますし」

「……………口惜しいが、今はそのテッドを捕まえるのを優先、か」

シャクテイさんの口から重苦しい溜息が零れるのと同時。箱馬車が動きを止めた。

御者席の小窓が開き、到着を知らせてきたのを見て互いに頷きあう。

「私は【魔銃使い】ミリア・ノースリス。招聘状を貰ってここに来た一介の冒険者」

「私は『黒拳』のファウスト。お前の護衛依頼を受けた賞金稼ぎ」

己の立場を確認し合い、シャクテイさんが白い面を付けて顔を隠す。俺はドレスの裾を確認してから、彼女にエスコートされて箱馬車を降りた。

目に飛び込んできたのは、日も暮れて夜がほど近いというのに煌々とした光に照らし出された豪華絢爛な賭博場が並ぶ光景。その合間に見えるのは美しく着飾った富豪達。そしてそれらを守る護衛らしき傭兵。

数M間隔で立っているのはガネーシャファミアの仮面をつけた冒険者達。そして合間を駆け回るギルドの職員。都市有数の金の動く場所であり、なおかつ問題が発生すれば外交問題に発展しかねない場所という事で嚴重な警戒態勢が敷かれている。

目に痛みを覚える程の輝かしい光景に眩暈を覚え、眉間を揉みながら目的の最大賭博場の方面を見て——見覚えのある豚野郎が見えて溜息を零した。

「げえ、ギルド長が居るんですけど……」

「ノースリス、あまりあからさまな態度はとるな。あんな豚でもギルドの長だ」

不愉快そうなシャクテイさんの言葉に頷きつつ、誰かを待っているらしいギルド長の元へ向かう。

はち切れんばかりのシャツにボタンをとめる事すら出来ていない礼服。ベルトがギチギチと悲鳴をあげていそうな見た目の、とてもではないがエルフと呼ぶのが憚られる、エルフの男性。

懐中時計を何度も取り出しては苛立たし気な様子で周囲を見回し

——こちらと目が合った。

「ようやく来たか！ どれほど待たせる積りだ！」

いや、予定時間の15分前なんですけど。と文句を言いたい所を我慢して一礼。

「失礼、こんなちんちくりんでも身なりには気を使わなくてはいけな

くて」

一応、女性だしね。

「ふん、たかが冒険者如きが身分不相応に着飾りおって……まあ、見てくれは悪くない。そのまま口を閉ざして黙っていれば、冒険者特有の荒々しさも隠せるだろう」

………シヤクテイさん。こいつ殴っていい？

思わず俺の左後ろに控えていた賞金稼ぎに成り済ます第一級冒険者を振り向けば、彼女は小さく首を横に振って小声で囁いてきた。

「やめろ、冒険者を見下して悦に浸る変態なんぞ相手にするだけ無駄だ」

ううん。超殴りたいよコイツ。いちやもんばつか付けてきやがってさあ……まあ笑って返すけど。

「ノースリス、ソイツは誰だ？」

ギルド長が俺とシヤクテイさんのやり取りに気付いたのか訝し気な表情で問いかけてくる。

「一応、私は魔術師ですし前衛の出来る傭兵を雇ってきたんですよ。紹介しますね、『黒拳』のファウストです」

「ふん、ファウストか。聞いた事があるぞ、任務に失敗して姿を消した賞金稼ぎじゃないか」

役に立つのか？ と鼻で笑うギルド長。本人が聞いたら顔面ドストレートに拳が飛ぶのだが。

まあ、別に良いか。とりあえずギルド長と合流はしたし後は例の富豪様と会ってお話してから貴賓室ビップルームに向かう、と……問題はその大富豪様なんだよなあ。

お腹痛くなってきた。

「さて、今から都市外の富豪に会う訳だが——ノースリス。貴様は一切喋るな」

あー、はいはい。クツソ真面目そうな表情のギルド長の話を右から左に流しつつ、賭博場カジノ区域エリアを歩いていく。歩幅的にギルド長の方が余裕があるはずなのに息切れしてんのはどうなのよ。

いや、恩恵も受けてない太った豚にはきつかったかな。

「貴様ら冒険者は時としてとんでもない事をしでかすからな。特に【劍姫】とか【猛者】とか……うう、胃が……とにかく、話は全て儂が付ける。貴様は黙って微笑んでいろ。見てくれは良いのだから黙って立っていれば問題はない」

……………ん？

「え、えつと、話し合いは全てギルド長が行うので？」

「そうだと言っているだろう！ 貴様は話を聞いていなかったのか!?」

え？ 本気？ ……おおおおおつ!!

「ギルド長」

「なんだノースリス」

「愛してます」

「はあ？」

いや、割と本気で。面倒な富豪との会談を率先して引き受けてくれるとか良い人かよ。これまでのいちやもん付けてきたのとか全部水に流しても良いレベルだぞ。愛してるぜギルド長、そのまま俺が一言も喋らなくても良い様に計らってくれたまえよ。

ちよんちよん、とシャクテイさんに肩を突かれた。

「おいノースリス、頭でも打ったか……？」

「ファウストさん。面倒で死にそうな富豪との会話を全て引き受けてくれるんですよ？ もう今までの事全て水に流しても良いぐらいには好きになりましたね」

貴賓室ビップルームに入る事だけ考えれば良いとか、最高やん？

……いや、そこにも色々入りたくない理由はあるけど、面倒事の片方を引き受けてくれるって言うんだし、ここは全力で押し付けておくべきだと思うんだよ。

正面方向、ようやく見えてきたその建造物は周辺一帯の賭博場の数倍の大きさを有していた。

『最大賭博場』の名に恥じる事の無い程の規模。まるで宮殿か何かと見間違える程に大きく豪華な建物。入口には数え切れない程の警備員が立ち並び、厳重な警戒網の敷かれた其処には検問を思わせる

様に紹介状や招聘状等を確認していた。

ギルド長が自信満々に進む中、近づいてきた賭博場の職員に予めシャクティさんに渡されていた招聘状を見せる。

「サークリッツ公爵家からの招聘状ですね。お伺いしております。確認させていただきますが【魔銃使い】ミリア・ノースリスと、その護衛の御二方でよろしいですか？」

鋭い視線を仮面をつけたシャクティさんに向ける職員。まあ、あからさまに怪しい恰好してれば睨まれるのも当然か。

「武装等の持ち込みは禁止されておりますので、もし所持しているのであればここで預かりします」

今の俺の恰好はドレスに頭の上のティアラのみ。ティアラは結晶竜が化けた姿だが、まあバレないだろう。少なくとも怪物特有モンスターの臭いは無いし。喋らなければただのティアラだ。

武装なんて持ち込みはしない。というか第二級冒険者でもあり、魔術を主力メインにしてる俺は武装は杖だが、無くても戦えるし。

そも第一級冒険者のシャクティさんに至っては、素手でここに居る衛兵を全員殴り殺せるし……。

後、内部で雇われている最高戦力であるLv. 3の傭兵、猫人とヒューマンの男性二人組。ぶっちゃけ第一級冒険者の前だと塵芥なので心配いらぬ。

流石にLv. 3上がりたての俺だときついだろうがね。

「確認がとれました。どうぞ、今宵は存分にお楽しみください」

優雅な一礼にて送り出してくれた職員に笑みを返しつつ、険しい表情を浮かべるギルド長に近づく。

「遅い、何をしているのだ」

「確認ですよ。私は一介の冒険者、彼女は傭兵も良い所。武装等を持ち込まれば面倒事になりかねないので念入りに調べられていたんです。というかギルド長ならそれぐらい言われずともわかるのでは？」

嫌味っぽく呟くとギルド長が不愉快そうに鼻に皺を寄せる。

よほど見下してる冒険者に噛み付かれるのがお嫌いらしい。こっ

ちは冒険者でもないくせに見下してくる彼が不愉快極まりないというのに。後、主^{ヘステイア様}神すら見下されてるのが腹立たしい。

「ふん、先も言ったが——」

「黙って微笑んでいろ。ですよね、それぐらい私にだってできますとも」

ドレスのスカートを揺らし、一礼。

微笑んで背景になるぐらい朝飯前って奴だ。昨晚はヘステイア様と一緒に寝て気力も十二分。今回の依頼もサクツと片付けて終わらせてしまおうじゃないか。

荘厳な入口を抜け、内部の広間^{フロア}に足を踏み入れれば、数え切れないぐらいにならぶカジノテーブル。傭兵が雇い主の傍で目を光らせる中、会場内にもガネーシヤファミアの団員の姿が見て取れる。

高い天井にはもはやテンプレ染みた豪華なシャンデリア型の魔石灯。……一瞬、アポロンの顔が脳裏を過ったが、此処に隠れアポロンなんか居る訳がない。

「こつちだ」

まるで勝手を知っているかのようにずんずんと進むギルド長の後を追う。

ポーカー、ブラックジャック、ルーレット……賭博の代名詞とも言えるモノが並んでいる広間を真っ直ぐ突っ切っていく豚エルフ。失礼、ギルド長の向かった先には一つのポーカーテーブル。

進行役^{ディーラー}の前に座っているのは女性というには幼い雰囲気を持つ人物。傍らには白髪混じりの壮年の男性。

ギルド長は迷うことなく護衛らしき男性に声をかけた。

「遅れて申し訳ありません。何分、冒険者という奴は時間を気にしないものでして……サークリッジ公爵殿の護衛の方でよろしいですか」

くるりと振り返ったその男性。白髪交じりの執事かと思えば、片目を完全に潰す様に顔に傷を負った、傭兵らしき男であった。傷を受けた片目は義眼となっており見えていない事は確定。その男性は眉を顰めるギルド長を見据えると、小さく溜息をついて重苦しい声で呟

く。

「変わらん豚だな」

「——なっ!？」

驚愕した様子のギルド長。彼の知り合いだから声をかけたと思っ
ていたが彼の驚き様から思い違いの人物であった事が伺える。

口をパクパクと開いたり閉じたりしているギルド長の背を見てい
ると、シャクティさんがポツリと眩きを零す。

「まさか【白い羽】か」

「お知り合いで？」

「知らないのか……いや、知らなくとも仕方がないか」

【白い羽】カルロス

元最強派閥の第一級冒険者。狙撃の腕という意味ではまさしく一
級品の技量を持っていた有名な冒険者だったらしい。

だった、と過去形の理由は……どうやらその片目に負った傷が原因
なのだそうだ。その傷が原因で、輝かしい狙撃の腕は鈍り腐り落ち、
彼はゼウスファミリアを抜けて都市オラリオを去ったのだという。

ゼウスファミリアと言えば下界セカイ三大依頼クエストの『海の覇者』『陸の王者』
を討伐し、『黒龍』へと挑み返り討ちにあつて壊滅したという話があ
る。しかし、どうやら彼はその三大依頼クエストに挑むより前に派閥を抜けた
事でその偉業には関わっていないとか。

「な、なあっ！ 貴様っ、いままで何処で油を売っていた！」

「……ふん、ギルドの豚が吠えるな」

ギルド長が口角泡を飛ばす勢いで喚きだしたので思わず距離をと
る。俺、その豚エルフさんとは何の関係もない第三者、見知らぬ他
人ですよー。ほんとほんと、だから視線を向けなくてくれると助かる
かなあ。

睨み合いに発展した彼らを他所に、ポーカーに励んでいた女性——
—— 白金を思わせる光沢のある髪を結った女性が振り返り、護衛の男
性、ギルド長と順繰りに視線を向けて眩く。

「騒がしいですね」

振り返った彼女は、多分だがかなりの童顔だ。身なりや立ち振る舞

いからして女性と呼べるほどなのだが、顔立ちがどうにも幼い。ともすれば、少女と呼んでも差し支えない程に幼く見える。

そんな彼女は訝し気にギルド長を見た後、こちらを見た。視線が交じり合い——ぼつと彼女が立ち上がったって笑顔を浮かべた。

「まあ、貴女がああドラゴンテイマーの【竜を従える者】の」

喜色満面の笑みを浮かべて近づいてくる彼女を見上げ、優雅に一礼。ヤバい、なんか妙な注目を浴びてる。

彼女が声を上げて俺の名を言った事で、周囲の視線が一気に集まってきた。

『あの小さな体躯で竜を従えるとは、いやはや見事なモノですな』

『戦争遊戯ウォーゲームでの功労者とも聞きましたぞ』

『まさか賭博場こんぼつにヘステイアファミリアの方が居るとは』

明らかに場違いな者としての視線と——舐め回す様な性的な視線が此方に集まった。

貴族や富豪連中つてのは、美女を一通り抱いてきている訳で……飽きて別の性癖開拓をし出す奴が多いのだ。少女性愛ロリコンなんかは一般的だし、美少年好きショタコンなんかも居る。極まった奴は食人主義カニバニズムや拷問趣味サディストになつたりするが……いや、やめておこう。

奴隷を引き渡したら解体バラバラにして食べる糞富豪様とか思い出しても良い事ねえし。

「お初にお目にかかります。ヘステイアファミリア所属、【魔銃使い】ミリア・ノースリスです」

優雅な一礼を交え、失礼のない様に頭を下げたまま様子を伺う。

一応、相手は目上の、はずだ。ただ、事前情報と違うのが気になるか。

サークリツジ公爵の現当主、ベデイヴィス・サークリツジが相手という話だったのだが。男性ではなく女性のみで……当主という訳ではないと思うんだがね。

「はい、此方こそ初めまして。わたくし私、クレイティア・サークリツジと申します。本日は急な予定で帰国しなくてはならなくなった父に代わりまして娘の私が代理を務めさせて頂きます」

上流階級の教育を十二分に受けている事が伝わる、綺麗な礼をされる。

代理、らしい。彼女はクレイティア・サークリツジ、現当主の父ベ DeVイス・サークリツジ公爵が急な予定で帰国しなくてはならなくなつた、と。

招いておきながら自身が帰国せざるを得ない状況になり、仕方なく代理で娘が出てきた。何があつたんかね……一応、色々調べてはみた。が特に後ろ暗い所が見当たらない富豪だつたし。奴隷取引とかはしてたけど犯罪者を奴隷として売つただけで非人道つて訳でもなかつたからノーカンつて事で。ギルド長が相手してくれるはずだつたんだがね……娘かあ。なんか雰囲気から相手し辛い感じるんだよなあ。

思わず顔が引き攣りかけ、目配せでギルド長にタッチ。はよ代われ豚あ！ 普段から妙に突っかかつてきて面倒な豚あ！ こういう時に役に立て！

「これはこれはクレイティア殿、いつも父君には大変世話になっております」

「……？ こちらの方はどなたですか？」

きよとーんつと擬音が付きそうなクレイティア嬢の発言にギルド長の顔が強張る。

いや、いくらなんでもギルド長の顔を知らないって……箱入りだつたりするんだらうか。

「申し遅れました。この都市の都市管理機構オラリオギルドの所長。ロイマン・マルディールです」

「まあ、ギルド長でしたの……？ ですが話と違いますね」

納得がいかないと言つた表情のクレイティア嬢がうんうんと唸り。ギルド長をまじまじと観察しだす。

流星にかなりの規模の公爵家の令嬢相手に失礼は出来ないのか、豚エルフが笑顔を浮かべたまま黙っている。すると、彼女は何かを思いついた様にぼんと手を当てて——ギルド長を指さして声を上げた。

「偽物ですね！」

「ハアツ！」

「貴方はギルド長ではありません！」

いや、待って。ごめん何が起きてるのかさっぱりわからない。

唐突に偽物判定を出した彼女の行動に周囲の貴族や富豪が困惑し、若干混じる神々が『良いぞー』『言ってやれー』と囁し立てる。おい神々、お前らどこでも変わらな過ぎるな。

「何を仰るかと思えば。私はギルド長で間違いありませんとも」

「いいえ、貴方はギルド長ではありません」

「……ど、どうしてか伺っても？」

まるで推理小説に登場する主人公の様に、仰々しい仕草でトリックを暴くかのようにクレイティア嬢が告げる。

「どうしてか、ですか——ギルド長はエルフですもの」

「は、はあ？ 私はエルフですが」

「いいえ、貴方はエルフではありませんわ！」

………あ、なんかオチが見えた気がする。

「その丸まる太ったお腹！ でっぷり肥え垂れる頬！ エルフであるのならそのような醜い豚の様な容姿にはなりません！ エルフらしい引き締まった体つきでないのが何よりの証拠ですわ！ 貴方はギルド長の名を騙る偽物！ 豚人ピッグマンですわ！」

わああ、これは。うん、世間知らずの箱入り確定ですわ。

いや、確かに世間知らずで箱入りなら今のギルド長を見て『こいつエルフじゃねえだろ』ってなっても仕方ないわ。でもこんな公おおやけの場でやらかすのは不味くないかな。

「くくく……言われているぞ豚。その肥え太った体故にな」

クレイティア嬢の護衛としてこの場に居るらしい、元ゼウスファミリアの第一級冒険者様に笑われる中、周囲の神々がお腹を抱えて爆笑しはじめる。つられてか貴族や富豪連中、彼らに連れられた傭兵や賭博場の職員までもがクスクスと笑いだす。

横の居たシャクテイさんがお腹を抱えて笑いを堪えているのを見てから、溜息を零した。

「どうすんですか、この空気……」

箱入り娘の暴走でギルド長が赤っ恥過ぎる。

このままだと八つ当たりされそうで面倒臭いんだけど……。

「何を笑っている貴様らっ！ ノースリスっ、貴様も今笑っただろー！」
いや笑ってねえよ。笑いもでねえって……ある意味ではスカツとしたけど、この箱入りお嬢様の相手しないといけないんでしょう？ ギルド長が全部やってくればいいけど、今の発言から全部投げそうな気がするんだよなあ。

世間知らずのお嬢様の相手とか、前世でさんざんやってきたけど勝手が違い過ぎるしギルド長だけでなんとかしてくれよ……。

《ミリア、あれ面白そうー！》

あー、クリス？ ちよつと黙っててくれないかなあ。ルーレットやりたいて？ 後で思う存分やるから今はほんと黙ってて。

第一三八話

広大な広間フロアに並ぶ無数の賭博卓カジノテーブル。

一つ一つの卓に専用の進行役ディーラー。各所を回る監視人。飲み物等を配り歩く給仕人ウェイター。そしてそれらを厳しい視線を以て警備員として配置されたガネーシャファミリアの団員。

『エルドラド・リゾート』娯楽都市サントリオ・ベガが投資し建設したオラリオ随一の賭博施設『最大賭博場』

その名に恥じぬ規模のこの賭博場に足を運んだ理由は二つ。

一つ目はガネーシャファミリアが追っている『強引な人攫い事件』の主犯がここの管理者オーナーであるテリー・セルバンティスに成り済ましたテッドという人物の逮捕。

二つ目は俺、ヘステイアファミリア所属の第二級冒険者【魔銃使い】ミリア・ノースリス宛に届いた招聘状の差出人であるサークリツジ公爵との会談。

そして、今まさに二つ目の目的を成している所であるのだが。大問題が発生した。

本来ならこの場に足を運ぶのはサークリツジ公爵家当主であるベデイヴィス・サークリツジという人物だったが、何らかの不都合があつてその娘であるクレイティア・サークリツジという童顔の女性が代役として現れたのだ。

付け加えると、元ゼウスファミリア所属の第一級冒険者らしい【白い羽】なる護衛付きで。

ここままであればまだ何とかあったのだが、問題はクレイティア氏がギルド長に喧嘩を売った事である。

進行役ディーラーによって配布された手役ハンドを見ながら、俺の横でニコニコ笑顔で賭博に興じるクレイティア嬢を伺う。

賭博ゲームの種別はファイブ・ポーカー。各々の参加者プレイヤーに5枚の札カードが配られ、それで手役ハンドを作り、強い方が勝つという規則そのものは質素なモノだ。

無論、それだけではなく欺瞞ブラフや仮面ポーカーフェイスを駆使しての駆け引きを行う

ものである。

何故それをクレイティア嬢としているのか、と言えば……ギルド長がキレて会話が成り立たなかったことで全部放り出して逃げ出してくれやがったからだ。あの豚許さねえ。

何が『お前は黙ってる』だ。もう知らんとか言って逃げやがって。

「あ、私の勝ちですね」

「おめでとうございます」

手役開示で出た手役は此方がストレート。相手がフルハウス。相手の方が強いいため負けで賭札がとられてしまう。

進行役に切札を返しながらか、次の参加費を置き場に寄せようとしているクレイティア嬢に話しかける。

「そろそろ、本題をお聞かせ願えますかね」

「……本題ですか。もう少し遊んでいたかったですね」

彼女の微笑みを見て、確信した。どうもきな臭い感じはしていたのだがなんか面倒事を持ってきてそうだ。

「賭札はお返ししますね」

「その必要はありません。どうぞお受け取りください」

彼女の言葉に曖昧に笑い返しつつも、なんとか返せないかと問答を繰り返すが受け取って貰えなかった。

俺の後ろで賭博卓から回収されて台車の箱に入れられている山ほどのソレは彼女から受け取ったモノである。話の前に賭博でもと誘われ、こっちの所持賭札が少ないのを見て気を使ってくれたらしいのだが、それで台車一杯の賭札を用意してくる辺り価値観がズレてる。

シャクテイさんが仮面越しでもげんなりしてる様子が確認できるが、声をかけずに目の前の貴族娘様の相手をしなくてはいけない。

「では、あちらのバーにでも」

主広間の一角に設けられたバーカウンター。各種酒類や軽くつまめるモノ等を用意してもらええる場所らしく、一応は飲み放題らしいが俺には関係ない。

隅の方の席に着けば、隣にクレイティア嬢。背後には各々の護衛として連れ歩いている『黒拳』に扮したシャクテイさんと、彼女の護衛

である【白い羽】。

注文を聞きに来た給仕の人に軽いお酒を頼みつつ、彼女を伺う。

「戦争遊戯ウォーゲームの勝利、おめでとうございます」

「はい、ありがとうございます」

彼女の目が此方を見つめているが特に探る気配はない。背後に立つ【白い羽】の方も違和感は無し。さつきギルド長に無駄に噛み付いて行っていたのもっと荒々しい性格だと思っていたがどうにも違うらしい。

場を弁えた言動が出来る人物、なのだろうか。だとするとギルド長に喧嘩を吹っ掛けて怒らせたのは意図的という事になるのだが。

「実は貴女にとってもお聞きしたい事がありましたの」

「私の応えられることならなんなりと」

能力ステータスとかは無理だけだね。当然、魔法やらスキルも無理だ。

「竜とお喋りできるとお聞きしましたが、本当ですか？」

質問の内容自体に際立って不自然な所はない。無いのだが……それを真っ先に聞くのは少しおかしい。

もつと『竜をどうやって従えたのか』といった方面の質問になるかと思っていたのだが……付け加えると、その質問を飛ばした彼女の視線が此方を見透かそうと観察する様な視線になつている所とか違和感が凄い。

何かを探ろうとしているのは確定。ギルド長、俺はお前を恨むぞ、あれだけ頼りにする気満々だったのに裏切りやがって。

「ええ、少し曖昧ですが意思疎通は可能ですよ」

フィンフィン・デイルムとかガネーガネーシャファシャファミアミアとか。時として意味のわからない単語が出てくる事はあるがね。なんとかならんもんだろうか。

「そうですか……」

彼女が【白い羽】と目配せし合ってから此方を真正面から見つめ、護衛のシャクティシャクティさんをちらりと見た。

「そちらの護衛は、信用に足る方でしょうか？」

「腕は確かですよ」

何せ現役のガネーシャファミアリア団長にして、派閥内で最強の第一級冒険者ですし。

「言い方を間違えましたね。口は堅い方でしょうか」

思わずクレイティア嬢を二度見した。こいつ本気で言ってるのか？

だとしたら不味いなこれ、絶対に秘密のお話じゃねえか。貴族様の口から放たれる秘密のお話とか気分悪くなる奴多すぎんだよ。奴隷をもつと寄越せーとか、出来れば幼い少女が良いーとか、活きの良い悲鳴を上げる奴を頼むとか。聞くに堪えない秘密のお話は勘弁してくれ。

とはいえ、ここで口が軽いだなんて言ってしまうとシャクテイさんを外して話をしようってなるだろうし、護衛が離れるのは困る。今の所何を考えているのかさっぱりわからない貴族と元第一級冒険者の前に取り残されるとか恐怖でちびりそう。

「そうですね。支払いさえしつかりしていれば顧客情報を無暗にばら撒いたりはいしないでしよう」

「……その言葉、信じさせていただきますね」

神妙な面持ちになったクレイティア嬢。すると【白い羽】が此方をじつと見つめ——目を細めている。

「では、少し耳を貸してくださいませ」

彼の反応に警戒しつつ、クレイティア嬢に耳を寄せると——彼女の口から信じられない名が飛び出す。

「リド、レイ、そしてグリス。後はグリユー、以上の名に聞き覚えはありませんか？」

彼女の口から飛び出した名の数々。それらに関して聞き覚えがあるか無いか、どちらと答えるべきか一瞬判断に迷い——【白い羽】の眩きで現実を引き戻される。

「知ってるだろ」

確信を得たという表情で此方を鋭く見つめる彼の視線に身を強張らせ、なんとか肩を竦める。

「聞き覚えはありません。が、サークリツジ様を知る者と同一人物かま

では断定しかねます」

「……では、リドは——リザードマン 蜥蜴人です」

続いて呟かれた言葉に喉が干上がる。目の前の女性、幼い童女にも見える顔立ちの女性から放たれたそれは、このオラリオの管理機構であるギルド、それを裏から取り仕切っているといわれる神ウラノスがひた隠しにしているオラリオ 迷宮都市の秘されたゼノス 異端児の事だ。

「レイはセイレーン 歌鳥人、グロスはガーゴイル 石竜、グリユーはグリーンドラゴン 緑竜」

「……………。何処で、知った？」

この情報を知る者はウラノスと、神ガネーシヤ、後はガネーシヤファミリアのごく一部の幹部。そしてウラノス直属の部下であるフェルズしか知らないはずだ。

迷宮内で『大樹の迷宮で綺麗な歌声が聞こえるから調査してくれ』という調査依頼はあったが、それ以外にゼノス 異端児に関わる情報は各種情報屋を巡っても引っかけかりもしなかったのだが。

「知ってるだろ」

【白い羽】がいつの間にか俺の腕を掴んでいた。残された片方の目がじつとこちらを見据え——横から伸びた拳が彼の側頭部にひたりと静かに押し当てられる。

「手を放せ」

「……………そう怒るな、傷付ける積りはない」

静かに拳を押し当てたのは、仮面の傭兵。『こっけん 黒拳』に扮するシヤクテイさんらしい行動で彼をとめていた。

掴まれていた腕を開放されると、その部分は赤くなっていた。何か、嫌な予感がするんだが。

「知っているのでしたら、ク 冒険者依頼を受けて頂きたいのです」

困った様に笑みを崩したクレイティア嬢が【白い羽】を一瞥すると、白髪交じりの男性である彼が無言で羊皮紙を俺の前に置いた。

「拝見いたします」

「どうぞ」

内容を読む許可を得てから、その羊皮紙を見ると————
ク 冒険者依頼が記載されていた。

依頼内容は、とある物品の輸送依頼。よく十八階層の冒険者の街に大量の物資を輸送してくれという依頼が張り出されるが、それと同じモノかと思えば——違った。

「怪物モンスターに届け物、ですか」

「いいえ、彼らは怪物ではありません。異端児ゼノスという者達です」

ああ、彼女は知っている人間だ。シャクテイさんも知っている人間だから良いが、この冒険者依頼は面倒事にしかならんぞ。

なんで知っている？ 何処でそれを知った？ 少なくとも面倒事の臭い以外がしない。神ウラノスに何とか連絡をとって知らせておるか。それよりも、だ……輸送？ 何を彼らに？

「すいませんが、そういった依頼は受けておりません」

怪物に届け物しますうーとかやったら今まで否定してきた『怪物趣味』が本当の事になっちゃう。それだけは回避せねばとお断りするが

——【白い羽】が鋭い視線を向けてくる。

「ここで断ると、どうなるかわかるよな？」

うわ、めつちや脅してくるんだけど。何コイツ、馬鹿なの？ とうかお前、普通に考えてくれよ、怪物に届け物する冒険者がどこに居るんですかね。

「もう少しだけ、話を聞いてくださいまし」

第一級冒険者、元とは言え名を馳せた人物。

レベルは一応、6らしい。つまりシャクテイさんより格上——
射手だったらしいので、近接格闘なら負けはないだろうが、それでも危険極まりないし此処でトラブル起こしたら追い出されて本題の方に支障を来す可能性が高い。故に穏便に済ませなくてはいけないので話を聞く姿勢にはなっておく。

「それで、どうしてこんな依頼を？」

普通だったら奇人として避けられるぞ。

「はい、実は——」

クレイティア嬢の血族。王族から派生したいわば分家の様な血筋らしい。

そんなサークリツジ家の現当主ベデイヴィス・サークリツジ。彼の

父親であるグリディア・サークリツジは屋敷の地下に怪物を連れ込んであれやこれやをしていたらしい。

——既に嫌な予感がするが話を続けよう。

グリディアの孫娘でもあるクレイティアは祖父が時折足を運ぶ地下室に興味を持ち、こっそり忍び込んだのだ。結果、地下に囚われていた怪物とご対面。既にボロボロの死にかけのモンスターの中に、一際目を引く固体が居た。それが、純白の歌鳥人。

クレイティアが足を踏み入れた地下牢の中で鎖に繋がれた彼女――

怪物でありながら会話が可能な異質な存在。

祖父に秘密裏に忍び込んで彼女との会話を進めていく内、彼女が迷宮の奥で密かにくらししていた異端児の一員であったことや、彼らに関して知っていくことになる。

地下牢の奥に囚われ、祖父であるグリディアの性癖に基づいてあれやこれやされている彼女を哀れに思ったクレイティアは、父親であるベデイヴィスに相談。

王族の血筋に怪物趣味が居るとわかると不味いと青褪めたベデイヴィスは即座にグリディアを糾弾。直ぐに怪物を処分しろと言い渡すも――グリディアはこれに反発。

美しい純白の歌鳥人を手放してなるものかと、対立してしまったのだ。

以後、父と祖父の間で幾度かのやり取りの末、ベデイヴィスは貴族の汚点となるグリディアの抹殺を決意。

殺し屋を雇って送り込むも彼の護衛に阻まれ幾度となく失敗。

そんな二人のやり取りを他所に、娘であるクレイティアは密かに鍵を入手して純白の歌鳥人を密かに連れ出す事にし、成功したかに見えるが……父であるベデイヴィスに見つかってしまう。

まさか娘までもが怪物に魅入られるとは思っていなかった彼は驚き、自らの部下に娘を魅了した怪物の討伐を命令。

そのベデイヴィスの部下、というのが迷宮都市を去ってからふらふらしていた【白い羽】だったらしい。

此処で話が変わるが、一人の男が迷宮の怪物に恋に堕ちたらしい。

男の名はカルロス。そう、背後から凄まじい圧で脅してくる男だ。端的に話そう、彼が恋に堕ちた相手は————純白の歌鳥人^{セイレーン}。そう、件の異端児^{ゼノス}だったらしい。そして、その異端児^{ゼノス}もまた、彼を愛していたらしい。どうして恋に堕ちたのかなんかの恋愛語り^{ラブロマンス}ははぶごう。興味ねえし。

異端児^{ゼノス}は最期に愛おしい人に出会え————その男の放った矢で命散らした訳だ。

彼曰く、気付いた時には手遅れだったらしい。片目をやられて視力も落ちた彼が放った矢は、クレイティア嬢が肩を貸して歩いていた純白の歌鳥人^{セイレーン}の胸を穿った。

彼女、純白の歌鳥人^{セイレーン}が願ったのは迷宮に残る仲間の元へ亡骸を届ける事。

魔石は砕けて消えたが、彼女の体の一部はしっかりと残^{ドロップした}った。それを、仲間の元へ届けて欲しいらしい。

「これだ」

【白い羽】^①が取り出したのは、宝石箱。それを開けると中には『純白の風切り羽』^②が入っている。

「頼む、これをアイツの仲間に届けてやってくれ」

涙あり、感動ありの悲劇の話とかされておいてなんだけどき、断りたいんだけど。

「ご自分で足を運べば良いのでは？」

腐っても第一級冒険者でしょ？ いけるいける。

「無理だな、俺はクレイティア嬢を守らなきゃいけないえ」

「お願いします。報酬は私が支払える範囲でしたらいくらでもご用意いたしますので」

どうして俺にこの依頼を持ってきたかね。ちよつと正気を疑うんだけど。

「竜と話が出来ると聞いて、もしかしたら怪物と仲が良いのかと」

頭の中お花畑かな？ というか、待ってくれ。

「この話、ベディヴィス様はご存じなのですか？」

「いいえ、知らせていませんので」

いや、不味いでしょそれは。というか彼女が支払える範囲って時点で色々とおかしいよ。

シヤクテイさんは【白い羽】と睨み合いの真っ最中だし。

「すいませんが、お断りします」

ギルドを通さない依頼を受ける事自体は違反ではないが、その依頼の内容と報酬が釣り合っているかや、違法な依頼ではないか等の精査がされていない事もある。基本的にギルドを通さない依頼は相当に仲が良い派閥に頼むとか、そうした方が良い。

「今回の件については口外いたしません」

無理無理、絶対に無理。確かにその純白の歌鳥人セイレーンの最期の願いつてのは叶えてあげたいが流石にこの依頼はきな臭い。というか、だ……ベデイヴィスさんが帰ったのって彼女らの所為じゃないの？

「……どうしても、でしょうか」

「ええ、私の実力では不足していると判断いたしました」

「実力は足りてるだろ。戦争遊戯ウォーゲームの動きを見るに大樹の迷宮ぐらいなら軽く踏破できるだろうしな」

……あのさ、普通に考えてくれないかな。

「それは派閥の構成員全員を入れて、という意味ではないでしょうか」
「ああ、あれだけ動ける面子なんだ、余裕だろ」

無理なんだよなあ、それが。

だって俺以外全員異端児ゼノスの事知らないし。むしろ知られたら困るし。

話を聞いて思った、このクレイティア嬢はまず箱入りの世間知らず。一応、怪物に届け物をするのが世間一般でおかしいという知識はあるみたいだが、断られたのが完全に予想外って表情をしている辺りちよつと箱入り。

そして【白い羽】カルロス君。キミさあ、ゼウスファミリアだって言ってたし、第一級冒険者って話なんですよ？ なのにちよつと頭固いというか、この人もしかしくなくても戦い以外の事でんで駄目なんじゃねえの？

「私一人じゃ無理ですよ」

「仲間は？」

ロキファミアリアの増援の五人、ガネーシャファミアリアの増援の三人は無理。知られたら面倒だし。

ベルも無し。リリは……微妙。ヴェルフは頭を下げて黙っておいてくれて言えば口は堅い方だが、心境がどうなるかわからん。ミコトも無しだな。

「無理ですね。私はこの事情について最低限知ってますし、理解もあります。ですが他の皆がそうとは言い切れません」

普通なら怪物に届け物するとか言い出したら狂人扱いされるだろうしね。

「……でしたら、どなたか届け物が出来そうな方にこの箱を渡していただけないでしょうか」

いや、そつちで探せよ。面倒事だって断ってんのに妙な頼み方すんな。

「すいません、それも無理ですね」

信用できるかどうか不明だろうに。むしろここで無理に受けさせても仕方ないと思うのだが。

むしろ時間をかけてゆっくり探した方が良いのではないか？ 紹介状ぐらいは……いや、面倒だし声をかけるだけにしとこう。

「知り合いに声をかけておきますのでそちらの方を訪ねていただけると」

「……それでは遅いのですよ」

困ったようなクレイティア嬢の表情。なんか、背筋が凍り付く様な感覚がする。

グラスを握る手が震えてきた、ああ、なんかこの感じ滅茶苦茶懐かしいぞお？ そう、あれは……アレだ、貴族の食事に招かれた時に『美味い肉だろう？ 何の肉だと思う？』と問いかけられた時みたいだあ。

あの糞女と並んで貴族に招かれた食卓。変な食感の肉だなあと
思ってた食べたその肉は——いや止そう。

ちなみに、その貴族の好物は幼い少女です。

「私はこの後直ぐに国に帰らなくてはならないのです」

ふうーん。ちなみにお肉は凄く妙な食感でねえ、ヤバかったんですよ？ 咄嗟に糞女が足を踏み締めてくれなければ迷わず吐いてましたねえ。あいつも同じもん食ったのに平然としてたし、やつぱ化物だったんじゃない？

「どうしてか何っても?」

「はい、実は今日、代理で私わたくしが来た理由なのですが——父が殺されてしまったのです」

………なっ、なんだってーっ!? いや、いやいやいや!? ちよ、ちよつと待って。えっ? 殺された?

「あ、あのどういうそれは?」

シャクテイさんを思わず振り返ると彼女も驚いた表情してた。【白い羽】さんはどこ吹く風って感じなんだが、待て何が起きてる、っておい待って待て!! ベデイヴィス・サークリツジ公爵死んでるって不味いだろ!!

クレイティア嬢曰く。

父と祖父の争いは未だ終わっておらず、祖父側から暗殺を何度も仕掛けられては撃退を繰り返していたものの、このままではいずれ死ぬかもしれないと判断したベデイヴィス殿は、オラリオの冒険者を雇おうと出張ってきたらしい。

現在彼の部下として活動している【白い羽】は元、という言葉の通り第一級冒険者といえどかなり老衰で弱くなっているらしく、レベル4程度の実力者が数人集まってくると流石に苦しくなってくるらしい。

んで、戦争遊戯で活躍しており、元第一級冒険者【白い羽】お墨付きとしておすすめされた【魔銃使い】に声をかける為にギルド長に賄賂払って会える様に調整してもらったと。

——おいギルド長、てめえ賄賂貰ってんじゃないやねえか。

が、俺と会う前にコロコロされてしまったらしい。残念ですなえ。ただ、殺された事おわやけが公になると今は不味いから隠してる、と。

でも、オラリオの冒険者を雇うって……無理なんだが。

オラリオの冒険者って言うのは強い。それこそ他の都市で強者と謳われているのがレベル2〜3程度である事や、都市外のレベル2と都市内のレベル2を比べればわかるが、ステイタスに歴然の差がある。

ダンジョンで得られる上質な経験値^{エクセリア}を得て育ったオラリオの冒険者と、ちんまい雑魚をちまちま倒してギリギリランクアップにこぎつけた程度の都市外の冒険者では差が酷いのだ。

んで、ここからが本題だが、この都市には管理機構『ギルド』が定めたとある規則^{ルール}が存在する。

『戦力流出禁止令』である。簡単に言うと都市内でも上級冒険者になった冒険者がオラリオの外に行くことに制限をかけている代物だ。

これを行う理由はいくつかあるが、大部分を占めるのは迷宮都市^{オラリオ}の戦力低下を避けるため。

そして何より、都市外の混乱を引き起こさない為だ。

迷宮都市でランクアップを重ね、強くなった第一級冒険者が都市外へと足を運べば———それこそ迷宮都市^{オラリオ}以外の国々が兵力を集めても敵わない化物である彼らは、好きに暴ればそれだけで国一つを滅ぼせる。

そして、その第一級冒険者の力を持つ国が現れれば———対抗する為に他の国々も次々に第一級冒険者を有そうとする。

都市外で第一級冒険者を有する国々の争いが起きれば、それこそ世界を滅ぼしかねない。

そういった世界の混乱を防ぐためにも、第一級冒険者の都市外への出向は厳密に管理されている訳だ。無論、派閥に第一級冒険者を有する神もまたしかり。

当然の事ながら、第二級冒険者である俺も都市外への出向、ましてや政治的な理由からの戦闘への参加なんでもってのほか。間違いないくギルドから賞金賭けられてブラックリスト入りである。

んで、気付いた。目の前の【白い羽】君、きみさあ……もしかしたくても違反してね？

元とはいえ第一級冒険者が貴族の部下になってあれやこれやして
たんでしょ？ ぶつちぎりで違反行為じゃね？

「あん？ 別に派手に暴れなきゃ良いだけだろ？」

あつ、なるほどおー。ちよつと関わっちゃいけないタイプの人達
だったかあ……つておいマテ。

これ、不味いよな。不味すぎるよな？ いや、ギリツギリで大丈夫
かこれ？ 祖父のグリディアさん次第かな？

「一つ、質問良いですか？」

「何でしょう？」

「……貴女に対して、その……暗殺計画とかあったりとか？」

無いよな？ あつたらアウトなんだけど。

「ありますよ。ついさつきもカルロスが撃退してくれたばかりです」

アウトオオオオオツ!?

彼女と密会した時点でアウトじゃねえか、何してんくれてんじゃボ
ケエツ！ つていうかギルド長はなんでコイツら入国許可出してん
だよオツ!?

あ、そつかあ、賄賂貰つてたんだねえ。

「ギ、ギルドにはなんと云つてオラリオに？」

「普通に戦争遊戯ウォーゲームの観戦に来た、と」

うんうん、そつかあ。ギルド長に嘘吐いてきちやつたのかあ。あは
は……はは……はは……

……あのさあ、暗殺対象が戦力過多な迷宮都市にきて冒険者と
密会なんてしてたらどう思うよ。しかも誰にも言えない秘密の依頼
なんかも頼んじやつてさあ。

普通に雇つたつて思われね？ しかも俺つて戦争遊戯ウォーゲームで『透明化』
とか使つてんじやん？ 暗殺向き過ぎて笑えるうー………。

自走式爆弾がいきなり突つ込んできたんだがどうすんだよこれ。
ガネーシャファミリアの依頼どころの話じゃねえんだけど。

ヘステイア様助けてえ……。

第一三九話

唐突だが、『精神疲労耐性』というモノをご存じだろうか。

これは『ミリカン』のアニメ版放送終了後に実装された一部遊戯種別で実装された数値である。

アニメ版の主人公であるニンフ型の少女の立場となり、プレイヤーはアニメ版での戦いに参加するモノだ。

各キャラクターの限界値を超えた状態で条件を満たすと『精神異常』を引き起こすという特殊な規則が追加されており、他のアニメ版登場の登場人物達の精神状態を維持しつつ戦わなくてはいけない面倒な種別であり、実装当初は不評だった代物だった記憶がある。

『精神疲労耐性』が一番低い『ドリアド・サンクチュアリ』型に至っては銃声を聞いただけで頭を抱えて涙目でプルプル震え出し、回復魔法を使ってくれなくなったりする。まあ、耐性が低い人物は簡単に精神異常を治せるのだが……最弱のサンクチュアリは話しかけるだけで治るし。

というかそこそこ耐性が高い登場人物も銃で撃たれば当然精神疲労値が上がるのでちゃんとケアしてあげないと、すぐに『精神異常』を起こして余計な事しかすのだ。

んで、精神疲労耐性がぶっ飛んで高い登場人物と言うのが、『クシー・アサルト』と『フェアリー・ドラゴニユート』の二人。

アサルトの方は、アレは黒幕側の娘で、司令部の秘密を知った魔法少女を排除する『抹殺屋』として働く傍ら、仲間が秘密を知らない様にそれとなく忠告して回ってたから耐性は高いだろう。

それにドラゴニユート、ミリアちゃんは元々精神的に滅茶苦茶強い。それこそ銃で撃たれようが手足が挽げようが精神疲労値が微動だにしないレベル。つまりミリアちゃんは精神疲労に強い。

———特定条件を満たさなければ、絶対に精神異常になつたりしないのだ。仲間の死亡さえ、満たさなければ……。そう、強いはずなんだが。

先ほどの会話の内容を思い出す度に胃が痛くなってくる。『ガトリ

ング・マジック』で敵部隊を薙ぎ払い。『近接武器』で戦闘機をぶった切り。手足が挽けても動揺せずに戦闘を続ける精神力を持つ、最強の竜^{ドラゴニユート}人が聞いて呆れる。

いや、今の俺は小人族^{バルウム}であって竜^{ドラゴニユート}人じゃないんだけど。それに原点^{オリジナ}じゃなくて劣化複製^{クローン}か人造模倣^{ホムンクルス}の方だろうしな。

「ノースリス、どうする……」

「とりあえずギルド長を問い詰めましょう」

賭博場^{カジノフロア}広間に並べられた賭博^{カジノテーブル}卓を見て回り、豚エルフことギルド長ロイマン・マルティールを探している所である。

クレイティア・サークリツジ殿と【白い羽】カルロス殿はヤバイ。神ウラノスのひた隠しにしていた異端児^{ゼノス}について知っていたり。もう色々^{色々}とヤバイ二人にはとりあえずバーカウンターの所で待っていてもらう様^様にお願いしている。

まずすべきことは一つ。豚エルフの抹殺、もとい彼との話し合いである。

「ノースリス、あそこにいるぞ」

シヤクテイさんに示された賭博^{カジノテーブル}卓の一つ。椅子^{スツール}に腰掛けてブラツクジャックとしゃれこんでいるらしい。

体重で軋んでいる椅子^{スツール}を蹴っ飛ばしてこけさせてやろうかと悪戯を思い付くも、話が拗れるのでやらずに近づき、声をかけた。

「ギルド長、少し話があるのですが」

「なんだ、もう話は終わったのか」

「いえ、実は——」

クレイティア嬢のしでかした色々なモノについて賭博^{ゲーム}に興じるギルド長に囁き伝える。

ベデイヴィス公爵が死んでいると伝えた瞬間、椅子^{スツール}を蹴倒してギルド長が立ち上がった。

「な、何いっ!？」

「声がデカいです」

それなりに話声等で騒がしい広間^{フロア}に椅子を蹴倒した音が響いて注目を集めてしまう。もつと落ち着いてくれよ……というかやっぱり

知らなかったのか。

ギルド長が慌てた様に愛想笑いしつつも賭博を中断して場を後にする。

隅の方に移動して更に詳しく説明していく、というかギルド長の話を聞く。

「で？ 賄賂受け取って私と会わせたって本当ですかねえ」

「おまえには関係ない、一介の冒険者がそんな事気にしてどうする」

うわあ、コイツ……言うに事を欠いて……いや、というかギルド長やい。アンタ本当に大丈夫なのか？

サークリツジ家がやらかそうとしてた政治的理由での迷宮都市の冒険者の雇用ってのはギルドが禁じている違法行為でしょうに。それを事もあろうにギルド長が助長するとか信じられんぞ。

「待て、何の話をしている」

はあ？ ギルド長がベディヴィス殿から賄賂貰ったんでしょ？

彼ら、親子喧嘩を国内で滅茶苦茶やって、そのの收拾付ける為に冒険者に依頼出そうとしてたんだし。それを助長するとか完全にギルドが定める法を無視してんじやん。

「馬鹿な、儂はただ竜を従える者に会いたいとしか聞いていないぞー」

じゃあ何か、賄賂貰ってただ会わせるだけで良いとか思ってたのか。というか都市外の出来事に対して無頓着過ぎひん……いや、サークリツジ家が上手く隠していたのか。

それはともかく、このままだとギルド長が都市外の政治抗争に迷宮都市の冒険者を向かわせようとしたとか言われるけど大丈夫？

普通に政治的介入って取られて周辺国家からいちゃもん付けられるぞこれ。

「不味い……まだクレイティア殿は大賭博場に居るんだな？」

青ざめたギルド長を引き連れ、一角にあるバーへと足を運ぶ。

このままだとヘステリアファミリアがサークリツジ家のベディヴィス陣営に加担したと取られ、グリディア陣営から攻撃されかねない。ギルド長に至っては国外の問題に対し都市の戦力を差し向け、政治的介入を行ったとして立場を失いかねないという危険な状態。と

「どうか【白い羽】はどうしてサークリツジ家に協力できてんだよ。普通に違反行為じゃん、取り締められよ。」

「もしかして、【白い羽】がサークリツジ家に雇われてるのってギルド長知って——」

「ノースリス、これはお前の様な一介の冒険者如きでは理解できない政治的な理由あつての事だ。それ以上口にする事は許さん」
「……………」

「賄賂ですねわかります。多分、賄賂受け取って黙ってたんだろかねえ。【白い羽】もそこらへん理解しててのあの発言か……いや、理解してたかどうかは怪しいな。なんか『狙撃手』の想像イメーシからかけ離れたバカ脳筋な人物って感じなんだが。」

「どうやって収拾を付けてくれるんですかねえ。」

「今からあの娘を拘束し、国に送り返す。それからサークリツジ家に対し今回の虚偽申請についてを追求する」

「……………」
「クレイティア嬢、処刑されね？ いや、割と高確率で処刑される流れだな。」

「というかむしろ彼女が死んでくれないと不味いんだよなあ。後味は悪そうだがそうする他ないし仕方ないと割り切るか。」

「それで、奴は何処に居る」

「……………」

「待つててとお願いしたはずの二人の姿がバーカウンターの周囲から綺麗さっぱり消えて無くなっていった。」

「……………」
「おおつと？ なんか胃が痛くなつてき——違う、背中に嫌な汗が——いや、これはなんだ、なんか妙なフラグでも立ちまつたか？ なんで二人が居ない？」

「ノースリス、本当に……………」

「あつてます、ええ……………」

「会場が広い事もあつて、バー自体は複数個所に存在すると言えばそうだ。しかしいくらなんでも場所を間違える事なんて無いはずなんだが……………」

「周囲を見回して二人の姿を探していると、二人組の黒服が近づいて

きた。片方が台車を押している。

「失礼、【魔銃使い】殿ですネ」

「はい、そうですが。何か？」

台車の上に置かれた箱には賭札チップが山ほど入っている。そして――
――宝石箱も乗ってる。

俺の見間違いでなければ、クレイティア嬢が持っていた物と全くうり二つの代物だ。

「サークリッジ様より言伝を預かっております」

こと、づて？　ことづて、言伝とはなんだ？　食べられるのか？

今はお腹が空いてる訳でも無いのでいらないのだが。それよりも二人は何処へ？

「ノースリス、落ち着け。その言伝とはなんだ？」

「はい、此方の賭札チップと荷物の方は差し上げます。と……」

いや、いやいや、本人達は何処に行ったんだよ。なんで賭札チップの山と宝石箱残してくんだよ。

「それが、人が多くて守り辛いから先に帰る。と」

……ああ、そう。そつかあ、人が多いもんねえ。暗殺者とか紛れても分かり辛いもんねえ。そうだよねえ、やっぱもつと人が少ない方が守りやすいよねえ……こつちの都合考えてくれないのね。

帰ったのね。帰った……言伝頼んだからオツケーとか思ってるさだね。馬鹿だね、死ね。

「では、此方の方はお渡ししておきますね」

わあい、賭札チップがいっぱい。金額で言うといくらぐらいなんだろ……どうでも良いけど、これってアレよね、傍から見ると報酬とか賄賂とかになりそうよね。

黒服の職員二人が持つてきた台車を受け取り、その一番上にちよこんと乗せられた宝石箱を開けて中を覗くと、案の定というか『純白の風切り羽』が入っていた。これは、あれじゃな？　奴ら依頼を強制的に押し付けてきやがったな？　あの話を聞いたうえでこれを捨てるのは忍びないと思わせてから、押し付けて逃げ帰るとか……最低下劣

な手段に出やがった。

「で、ギルド長どうすんですかこれ」

「な、馬鹿を言うな。お前がすっかりと引き留めておかないから！」

今から追いかければ間に合うか？ いや、一度最大賭博場グラン・カッソを出てしまおうと再入場できなくなってしまう。そうなるとガネーシヤファミリアからの依頼が……でもクレイティア嬢を捕まえなくては……。

「ええい、少し待っている」

ギルド長が壁際で立っていたギルド職員の制服を着た調整員らしき人物に話しかけている。数分もすれば、話しかけられた人物が慌ただしく駆けていき、ギルド長が汗をぬぐう仕草をしながら戻ってきた。

「これで良い。とりあえず彼女達には一度ギルドに来てもらう様にした」

「で、どうするんです？」

「今回の依頼について、別の物とすり替える」

当然、都市外の政治的な抗争に冒険者を介入させるなんて馬鹿な真似は許さん、と。代わりに迷宮ダンジョンで回収できる貴族好きな物品を集めて欲しいという依頼をしたとすり替えさせるのだという。

今回の件においてはギルド長も賄賂受け取り済みで、受け渡した対象が既に死んでいるらしい事から騒ぎ立てても余計な事にしかならないので、その娘が珍しい品を欲して「魔銃使い」に依頼を出した。という形に収めるらしい。

「……つまり、後はギルド長に任せれば良いと？」

「いや、お前には依頼を一つこなして貰う事になるだろうな」

はあ？ ギルド長が賄賂につられてサークリツジ家オラリオを迷宮都市に招いたのが原因じゃん。なんで俺が尻ぬぐいしなきやならんのだ。

「儂も騙されておったのだぞ」

いや知らんがな。というか貴族が興味もちそうな希少な品レアを持ってこいって、それって中層、大樹の迷宮以降の品だろ。無理ではないが長期間の探索になると負担がヤバいし無理なんだが。

「お前は結晶クリスタル・ドラゴンを調教しているだろう。その竜に『結晶花』でも作

らせれば良からう」

ダンジョン中層部中間地点、十八階層より先の『大樹の迷宮』内で極稀に見つかる、結晶で形作られた花というのがあらしい。
クリスタル・ドロップ『結晶 飴』と並んで貴族が好む品としては十二分らしい。

それをギルドに引き渡し、冒険者依頼完了手続きを行って本国に報告。クレイティア嬢には口を酸っぱくして注意しといて……うん。
「賄賂の何割かこっちに寄越してくださいよ」

迷惑料寄越せと要求したらギルド長が表情を歪めて俺の後ろを指さす。

「それだけあれば十分だろう」

「……………」

俺の後ろでシャクテイさんが押す台車に乗せられている賭札チップの山。少なくとも二〇〇〇枚はあるだろう。後、『純白の風切り羽』入りの宝石箱。これは完全に呪いの品状態。可能なら投げ返してやりたいのだが……。というかこれで我慢しろって事か？

「全く、今日はとんだ厄日だ……お前はガネーシャファミアの依頼があるのだろう。もう行って良いぞ」

「……貴方の所為なんですがねえ」

後はギルド長がなんとかしてくれるらしいので丸投げで良いか。これ以上噛み付いても仕方ないし……。

とりあえずクレイティア嬢から譲り受けた賭札チップだけだと貴賓室ビッパルムに入れるか微妙だ、そこで適当に稼ぐ……んむ。そうだな。

「ギルド長」

「なんだ、もうお前に用はないぞ」

「私と賭博ゲームしませんか？」

後ろでシャクテイさんが驚いているが、別に良いじやろ。

ちよろつと賭札チップを巻き上げるだけじゃないか。

カジノテーブル賭博卓に着く人々の背を見ながら、シャクテイ・ヴァルマはミリアに問いかけていた。

「本気なのか？」

「何がですか？」

「ギルド長と賭博だなんて」

ドレス姿でクスクスと小さく笑った少女。彼女が今から挑む賭博の種類は『クローズド・ポーカー』の『ファイブカード・ドロ』だ。追加規則で『ポーカー・トーナメント』となっている。

シャクティが懸念しているのは彼女が賭博出来ないと言った事ではなく、相手が悪い事についてであった。

ギルド長、ロイマン・マルティールという男は一世紀の間に渡ってギルドを支え続けたエルフである。まかり間違ってもそれは事実だ。たとえ豚と罵られる様な見た目をしていようが、彼は腹芸や策謀に秀でている。

それこそ、欺瞞や仮面等は当たり前に出来るだろうし。それこそ派閥を率いるシャクティですら何を考えているのか見抜けない程だ。

目の前の小人族がその辺りに長けているとは聞いているが、それでも一世紀にもわたってギルド長を務めた彼に敵う程なのかと疑問を覚えた。

「んー……そうですね。不正するんで余裕ですよ」

「……おい」

笑みを浮かべた彼女の返答に思わず引き、同時に秩序を守るべき派閥の長として一言注意すべきかと口を開くより前に、ミリアが続ける。

「今の貴女は『黒拳』のファウスト。ただの雇われです」

「だがな」

「では、こうしましょうか」

悪戯っぽい笑みを浮かべ、ミリアは条件を提示した。

この賭博中に自身の不正が他の参加者や進行役によって暴かれた時点で終了。その場合は誠意をもって謝罪する事。

それでも不正はやめるべきだと主張するシャクティに対し、彼女はむしろこうでもしないと効率的に賭札を集められず、ガネーシャファ

ミリアの調査の方にも影響を与えかねない等、最終的に言いくるめられてしまった。

「では、いきますかね」

「何をしているノースリス、早く席に着け」

ポーカー用の賭博卓^{カジノテーブル}

一人当たりの所持賭札^{チップ}は五〇〇枚。参加費^{アンティ}で一〇枚、上乗せ^{レイズ}で一〇枚、上限額^{ノーリミット}無し。

参加者はギルド長とミリアの他に周囲に居た貴族が一人、商人が一人、神が一柱。計五人での賭博^{ゲーム}となる。

「まず確認ですが。この賭博^{ゲーム}に敗北した人は所持している賭札^{チップ}を全て巻き上げる、この規則^{ルール}に間違いないですかね」

「代わりにミリアちゃんが負けたら三食首輪付きで！」

「私は『再生薬』の取引権利を」

彼らの言葉に笑みを浮かべて応えているミリアを見て、シャクティは背筋を震わせた。

ミリアが敗北した場合、貴族は『竜の剥製』を、商人は『再生薬の取引権』を、神は『ミリアの身柄』を、ギルド長は『再生薬の取引で生じた利益の三割』を……代わりに、ミリアが勝った場合は彼らが持つ賭札^{チップ}を全て巻き上げるといふ条件を付けたのだ。

よもやギルド長だけに限らず、商人や貴族まで巻き込むとは思ってもしなかったが、何より嘘が通じない神すら敵に回して不正^{イカサマ}で勝つ等と自信満々に答えるミリアを信じて良いものかシャクティが言葉を失うなか、賭博^{ゲーム}は開始する。

「まずは切札^{トランプ}の確認を、不正^{イカサマ}なんてされても困りますしね」

進行役^{ディーラー}が切り混ぜ^{シヤッフル}する前に切札^{トランプ}を客の前に見せる。綺麗に並べられたそれらが、同じ札が二種類無いかや、欠けた札が無いかな等、全員が目^目を皿にして確認する。

裏側の絵に細工がされていないかも確認したところで、ミリアが口を開いた。

「あ、開始前に一つ確認を——私、欺瞞^{ブラフ}とか仮面^{ポーカーフェイス}とかがつて苦手なんです。なので動作から皆さんの手役を予測しても良いですかね？」

彼女の質問に商人とギルド長が失笑を零し、神と貴族が小さく頷く。

「ええ、構いませんとも」

「別に良いよー!」

許可が取れた事を確認したミアアが、参加費を置き場に置く。他の皆も参加費を置いたのを確認した進行役が切り混ぜし始めた。

「では、札を配ります」

一人五枚。計二五枚の札が配布され、各々がそれらを捲り見ている。

シヤクテイの前に座るミアアの札は『カード◆2 ♡5 ♠A ◆J ♣7』役無しだ。

動作から予測すると言っていたからか、彼女は他の参加者を注意深く確認している。

「では、一度目のベツティングタイムです。右端の方からどうぞ」
順繰りに各々の参加者が賭けていく中、五人目の商人だけが上乗せを宣言し、残りが見送りを宣言し、各々が札を捨て、新たに配られた札を見て一喜一憂している。

ギルド長が不敵な笑みを浮かべて札を見る中、ミアアが札を捨てる番が回ってくる。

一切の迷い無く捨てる札を選択して場に出す。出したのは『◆2

♡5 ♣7』そして引いた札は『フォー・オブ・ア・カインド◆J ♡J ♣J ♠J ♠A』

ミアアの手役がいきなり『同一数字四枚』にまで引き上げられた。その引きの強さにシヤクテイが驚愕する前で、ミアアが小さく溜息を零す。

他の参加者全員が札の入れ替えを終え、二度目のベツティングタイムがやってくる。

「降りるだ。ちくせう……」

「では私も上乗せで」

「同賭け」

「降りるです」

「上乗せにしましょうか」

進行役ディラーから見て左端に座った商人と、ギルド長の二人が上乗せレイズを宣言し、貴族が同賭コールドけ、ミアと神が降りフォールドるする。

その宣言にシヤクテイが眉を顰めた。『フォー・オブ・ア・カインド』は上位の手が『連続スする数字トかつ同一トの絵柄ラック五枚』しかないにも拘わらず、ミアは考慮する事すらなく降りたのだ。ここは勝負に出るところではないのかとシヤクテイが困惑するさ中、進行役ディラーが全員がチェック見送りフォールドまたは降りフォールドるしたことを確認し、場を進める。

「では手役開示」

勝負に出ていた貴族の手役が『同一フ数字ル三枚ウの上位』、ギルド長が『ストリート・フラッシュ』、商人が『連続スする数字ト五枚』。

勝者はギルト長。悠々とした表情で彼が宣言する。

「いやあ、常日頃の行いのおかげですか。どうやら勝利の女神に微笑まれている様子ですな」

はっはっはと腹を揺らして笑う彼がミアに流し目を送るも、彼女は場に出された手役ハンドに視線を向けたまま無視している。

二度目、三度目と賭博ゲームが進行していくさ中、ミアは基本降りフォールドるばかりでちつとも勝負に出ようとしない。——不正イカサマする気満々だったはずなのに負けを重ねる彼女に違和感を覚え始めた五度目の賭ディールけ。

ミアの手役は『♠10 ♣10 ♥10 ♣J ♥J』の『フルハウス』だった。

十二分に強い手だが、また降りるのだろうかと彼女を見ていると、ミアは他の参加者プレイヤーをちらりと見てから、とんでもない事を呟いた。

「全賭札投入」

「はあ？」

「……ですから、全賭札投入です」

『フルハウス』は決して弱い手ではない。しかし不敵に笑うギルド長や、勝ち誇った表情の神等が居るさ中に今まで降りフォールドるしつづけた彼女が唐突に行った全賭札投入に全員が表情を強張らせた。

「ノ、ノースリス殿？ 正気ですか？」

「負けたらこの時点で勝負が着きますが……」

「何度も言わせないでください。全賭札投入です」

意見を変える積りは無いのか、彼女は再度宣言を行う。いくらなんでも勝負を捨て過ぎではないかとミリアの後ろ姿を見ていると、他の参加者が一人、また一人と降りるしていくさ中、商人が笑って口を開いた。

「確かに、賭博開始前に欺瞞が苦手と言っていただけはありますな。そんな下手な欺瞞では誰も欺けませんぞ。私も全賭札投入です」

商人がミリアの挑発に乗った。この時点でどちらかの脱落が確定した。参加時所持掛札すべてが失われた時点で敗北である。ミリアが負ければ、非常に大きな代償を支払う事になるだろう。

「では手役開示」

固唾を飲んで見守るシャクテイの前で、流石に冷や汗を流しながら手札を開示する商人とは異なり、今まで通りに雰囲気を変える事無くミリアは手札を明かした。

商人の手役は『♣7 ♥7 ♦7 ♠J』、『フルハウス』。
ミリアの手役は『♠10 ♣10 ♥10 ♣J ♥J』の『フルハウス』。

同じ種別の手役が揃った場合は上位の札を持つ物が勝つ。『7』より『10』の方が強い札であり——勝者はミリアと決まった。

「な……」

「勝負どころを間違えましたね。お疲れ様です、賭札はそちらの私の護衛に渡しておいてくださいいね」

薄く微笑みを張り付けたミリアが商人に宣言する。普通なら少しは不安を感じさせるはずなのに、微塵も揺らがない雰囲気、貴族が身を強張らせ、ギルド長が目を細める。神だけは楽し気にニヤニヤと笑みを浮かべていた。

続く賭博においても、ミリアは基本は降りるするが、時に全賭札投入を宣言しては確実に勝利を重ねて行っていた。

ミリアを除く全員が『彼女が全賭札投入したら降りる』という方式が出来上がるさ中、シャクテイは強い違和感を覚えていた。

ミリアの手札は『♠5 ♦5 ♥5 ♠9 ♥9』の『フルハウス』

だった。

また勝負に出るのかと彼女を伺うと、彼女はいつも通りに『見送り』^{チエック}をしてから、札の入れ替えに入る。そこまでは今まで通りだったが、其処から理解不可能な行動に出た。

彼女は『♦5 ♠5 ♣9』を捨てたのだ。せつかくそろっていた『フルハウス』を完全に破壊する入れ替えにいくらなんでもおかしいと勘づき始めたシャクテイの目の前で、ミリアが新しく配られた札を加える。

『♠5 ♠6 ♠7 ♠8 ♠9』

『フルハウス』を崩すという理解できない入れ替えを行った結果、ミリアの手役は『ストレート・フラッシュ』になっていた。

「馬鹿な……」

少なくとも、後ろから見ている限りでは彼女は不正^{イカサマ}をしている気配はない。

ミリアの小さな手では札隠しもできないだろうし、そのほかの不正^{イカサマ}は進行役^{ディーラー}でしか出来ないものばかり。入場時の身体検査でも札の不正持ち込みは確認できなかった。

しかし、彼女は『スリー・オブ・ア・カインド』^{オール・イン}で全賭札投入するという正気を疑う真似をして勝利したり、己の手役^{ハンド}を崩して上位の手役を引き当てたり、運だけでは説明が付かないナニかをしている。

そこまではわかるが、彼女がどうやって不正^{イカサマ}をしているのかまでが、シャクテイには見抜けなかった。

「降りるで」

また、確実に勝てそうな手役^{ハンド}だというのに、ミリアは迷う様な素振り^{フォールド}を一切見せずに降りたを宣言した。

手役開示^{ショー・ダウン}で開示されたギルド長の手役^{ハンド}が『♦7 ♦8 ♦9 ♦1

0 ♦J』で彼女よりも強い手であり、勝負に出れば負けていたと後から理解し、うつすらとだが彼女がどんなふうに勝負しているのかだけは理解する。

「……手役^{ハンド}を読んでいるのか」

どんなに弱い手であっても他の参加者^{プレイヤー}よりも強いモノなら

全賭札投入を宣言し、どれだけ強い手であっても他の参加者に敵わなければ降る。

どうやって他の参加者の手札を覗き見ているのかは不明だし、あからさまに引きが良い点等は説明が付かない。

さらに、不自然な全賭札投入を訝しんだ参加者から問い詰められた際、彼女は神を前にこう宣言した。

『私はこの卓において許可されている行為しか行っておらず、不正は一切行っていない』

『開始前に宣言した通り、皆さんの動作から手役を予測しているだけです』

『強いて言うなれば、皆さんが手札を入れ替える様子には注意を払っていますけどね』

『私が勝負に出る時は、私が予測した皆さんの手役より、私が強いと思つた時だけです』

『私の手役が良いのは、単に幸運に恵まれただけです』

神の前で、平然と嘘を吐いた。少なくともその時点で彼女の不正が暴かれるかと思えば、参加していた神は真剣な表情でミリアを見据え、『嘘は吐いてない』と言った。

それだけではなく、参加していなかった観客の神もまた同様に『嘘はない』と言い切つたのだ。これにより、余りにも不自然な『引き』と『賭け方』をしているにも拘わらず、彼女はそのまま賭博を進めている。

何より、シヤクテイが彼女を恐ろしいと感じたのは——緊張や怯えが見て取れない所だ。

全賭札投入を宣言するならば、多少なりとも損失を恐れるモノだろう。

しかしミリアの場合はそれが無い。怯えや緊張なんて微塵も感じさせない普段通りの表情でとんでもない損失を負う危険を含む全賭札投入を宣言するのだ。

とてもではないが、正気とは思えなかった。

第一四〇話

リユー・リオンは『豊穡の女主人』の同僚、シルが伝手を使って手に入れた通行証を使い『アリユード・マクシミリアン伯爵』という小国の貴族に扮して最大賭博場グラン・カジノに侵入していた。

同時に、シルは『シレーネ・マクシミリアン伯爵夫人』に扮して彼女と共に歩んでいる。

眼帯を付けたリユーが隻眼で会場を見回す。

「それでリユー？　これからどうするの？」

「まずは目立つ事です」

羽振りの良さを見せつける事で店側から上客だと思わせる事。そうする事で更に高額な賭博ゲームに誘われる。過去にリユーが正義の派閥に所属していた頃、何度か経験した潜入捜査のやり方をしようと目ぼしい鴨を探しているさ中、シルがリユーの腕を軽く引いた。

「ねえ、あそこで賭博ゲームしてるのって……ミリアさんじゃ」

シルが指示した煌びやかな広間フロアの一角。集まっている富豪や貴族などの観客に囲まれた賭博カジノテーブル卓に見覚えのある小柄で金髪の少女の姿が見て取れた。

傍らには仮面を着けた傭兵らしき女性。彼女のすぐ横には賭札チップが詰まった大箱が乗せられた台車があった。

「まさか……なぜミリアさんが……」

「リユー、いつてみよう」

二人が観客の一人に近づいて声をかける。

「すみません、これはどういう事でしょうか」

「おお？　今来た所ですか？　【魔銃使い】殿が賭けをしておられるのですよ」

背の高い商人らしい男性の説明を聞きながらも、卓につくミリアの背をちらりを見たりユーは眉を顰めた。

ミリアの口から呟かれた言葉は『全賭札投入オール・イン』、対しているのは神と、ギルドの長であるロイマン・マルデール。

嘘の通じない神相手ににこやかな笑顔で対峙するミリアに違和感

を覚えつつも商人に続きを促す。

「賭け、とは？」

「ええ、あの賭けに負けた場合、【魔銃使い】殿がなんでもしてくれそうだな」

「——なんでもって、なんでも？」

彼の言葉にいぶかしげな表情を浮かべるリユーと、驚いた表情を浮かべたシル。彼は一つ咳払いすると卓とは異なる方向を小さく指示して小声で言い放った。

「実はあそこで項垂れている二名は既に負けているのですよ」

彼の言葉に二人が項垂れている貴族と商人らしき二人の人物に視線をやった所で、歓声上がる。

観客の中央、自身の全てを賭した賭博ゲームに興じているミリアがまた一人——欺瞞ブラフの通じない神を——下したらしい。

「わアツツ!? 負けたアツ！」

「神を負かしたぞあの子」

「不正イカサマしてるんじゃないか？」「いや、神の前で不正はなかつたって発言してただろ」

ミリアの挑発染みオール・インた全賭札投入につられた神が負けたらしい。ミリアの方は今まで通りに微笑みを浮かべたまま神に宣言する。

「私の勝ちですので、賭札チップは全ておいて行ってくださいね」

「くそおおおっ、ミリアちゃんに首輪付けれるチャンスだったのにいいいいっ！」

全身で口惜しさを表現する様に慟哭を上げる神。そんな彼を無視して仮面の女性が神に近づいて賭札チップを巻き上げていく。巻き上げられた賭札チップは仮面の女性の傍に置いてあった台車に積み込まれる。

既に山になった其処に、神の持っていたなけなしの賭札チップが詰まれる。彼女がいかにしてその山を築き上げたのかを理解し、リユーは冷や汗を流した。

「まさか、本当になんでもする事を対価チップに、相手の賭札チップを……」

「ねえ、リユー……ミリアさんおかしくない？」

シルに囁かれ、リユーが視線をミリアに向ける。

彼女の手札は『♠4 ♣4 ♦4 ♥4

♣7』の『フォー・オブ・ア・カインド』だというのがリユーの目に入る。

おかしなところは何も無い、強いていかなければ最初のベッティングタイムに迷わず『見送り』^{チエック}している所は違和感を覚えるが。

「そうですか、まだ様子見しているだけでは……？」

「いや、絶対におかしいよ——ほら、クラブのカードを残して全部捨てちゃったよ」

シルの言葉にまさかとリユーが再度ミリアの手元に視線を向ける。

丁度ミリアの手で『♠4

♦4 ♥4』が場に捨てられている所だった。

「なっ……手役を崩した……？」

驚愕するリユーとシルの前で、ミリアが新たに配られた札^{カード}を手札に加える。

『♣3 ♣5 ♣6』の三枚。出来上がった手役^{ハンド}は『ストレート・フラッシュ』だ。

「そんなまさか」

「あれがああの子ちゃんの凄い所でなあ」

「すごいところ……ですか」

「ああ、あんな感じで今の手を崩して更に強い手にしちまうのさ。まるで引ける札をわかってるみたいにな」

観客達にもわかにはじめきだし、ギルド長がそれを見て歯噛みする。ミリアの方は小さく溜息を零して観客として集まってしまった商人や貴族を見回した。

「真剣勝負してるんですから、無粋な真似はやめてくれませんかね」

若干苛立たし気なのは、彼女が強い手を引いた事を周りの観客の反応で察したギルド長が降りた^{フォールド}した事が原因だろう。確かに勝負のさ中に周囲の客の所為で負けでもすれば腹立たしくもなるだろう。

彼女の不機嫌さに気付いた観客達が蜘蛛の子を散らす様に去っていくのを見送り、リユーはミリアの背中を見て眉を顰めた。

「不正、^{イカサマ}だと思うのですが」

神の前で『不正イカサマをしていない』と宣言し、嘘ウソではないと証言を得ている。故に皆が不正ではないと判断しているが、リユーにはそれが嘘ウソとしか思えなかったのだ。

「シルはどう思いますか」

「うーん……神様に『嘘ウソじゃない』って言われてるんでしよう？　じゃあ不正はしてないんじゃないかな」

考えていても始まらないかと彼女に声をかけるか迷い始めたところで、リユーは視線を感じ取る。弾かれた様に自らを観察する視線の方向を向くと、そこには仮面の女性。ミアアの傍に控える傭兵らしき人物が穴が開きそうな程の視線をリユーに向けている。

どこかで会った様な、懐かしい人物の雰囲気とよく似ている事に気付いて視線を互いに向け合い、後少して誰かわかりそうになったところで、ミアアがガタリと音を立てて椅子からずれ落ちかけていた。

彼女の視線はリユーに向けられており——即座に逸らして手元の札に視線を戻す。

間違はなくリユーとシルの存在に気付いたのだろう。若干汗を掻いている様子だ。

「どうしたノースリス」

「い、いえなんでもないでしょ？」

唐突に挙動不審になったミアアに対しギルド長が問いかければ、彼女は明らかに焦った表情で妙な事を口走る。

つい先ほど『全賭札投入オールイン』を宣言したミアアの態度が急変した事にギルド長が目を細め、ニヤリと笑う。

「なるほど、欺瞞ブラフの積りか」

「え？　いや、違うですよ？　割と本気マジで」

欺瞞ブラフではなく、いつの間にか会場に現れたリユーとシルの存在に仮面を吹っ飛ばされただけであつて賭博ゲームとは無関係と言い切るミアア。対するギルド長がニイツと笑みを深め——宣言した。

「全賭札投入オールインだ、ノースリス、貴様の快進撃も此処までだな」

ギルド長の宣言を聞いたミアアが呆けた表情を浮かべ、進行役ディーラーが二人を確認して口を開いた。

「では、互いに全賭札投入という事で、手役開示を」

勝利を確信したギルド長が自信満々に手役を卓に並べ晒すのに対し、ミリアの方が死んだ目で手役を卓に投げ出した。

ミリアの態度から勝者がギルド長であると考えていた進行役は二人の公開された手役を見て目を見開く。

ロイマン『♣8 ♠8 ♥8 ♦8 ♠3』

ミリア『♠J ♣J ♥J ♦J ♠Q』

互いに『フォー・オブ・ア・カインド』、数字の強弱ではJが強い。結果、勝者はミリア・ノースリスに決定した。

「なっ……」

「はあ、お疲れさまでしたギルド長、私の勝ちですので賭札を——

「不正だっ！ 貴様は不正していたに違いないっ！」

何を馬鹿などミリアが肩を竦め、投げやり気味に答えた。

「神の前でも宣言しましたが、私は不正を行っていませんよ。それに不正を防ぐために一ゲーム毎に山札を検め、互いに確認してたじやないですか」

不正なんてやりようがなかった。そう宣言したミリアが立ち上がり、口惜し気に睨みつけてくるギルド長に手を振った。

「では、賭札は約束通り頂いていきますね」

賭札を受け取る傭兵の女性を置き去りにし、ミリアが足早に向かったのはリユーとシルの二人の所である。

やったーギルド長から賭札を巻き上げたぞ。ギルド長以外の奴から巻き上げた賭札と、密かに行っていた不正——正確には不正だったけど、この卓ではそうではない方法のおかげで勝利は確実とまったり構えていたのだ。

しかし、唐突にシャクテイさんが『ヤバイ』とか呟いてどうしたのかと振り向くと——爆弾が居た。

足早にリユーさんの元へ向かうと、男装し眼帯を着けたリユーさん

が眉を顰めており、胸元が大胆に開いたドレス姿のシルさんが微笑みかけてきた。

「こんばんは」

「ええ、こんばんは……ミリアさんはどうしてこちらへ？」

それはこっちの台詞なんです。いや、シルさんが妙に広い伝手持ってるのは知ってたよ？

戦争遊戯ウォーゲームの直前に渡された腕輪、あれ『魔力暴発した際の被害の軽減』なんていう割と希少な効果の代物だったし。そんなモノを容易に手に入れられる伝手持ってるって時点でわかってたけど、わかってたけど！

まさか貴族に扮して突撃してくるなんて思わないじゃん？

「私は、まあ依頼ですよ」

「依頼、ですか」

シルさんが目を丸くしている横で、リユーさんが洗面を作っていた。こっちが洗面を浮かべたいんじゃないかね？

「ミリアさん、先の賭博ゲームについて聞きたいのですが」

ええ、出来れば答えたくないんだけど。だってやり方を開示バラされるの困るんだが。

別にリユーさん相手なら良いかもしれんが、シルさんはなあ。

「私も是非聞きたいがな」

コツコツと賭札チップが山積み積みの台車を押してきたシャクテイさんに聞かれ、思わず頬が引き攣る。

リユーさんとシャクテイさんが真正面から見つめ合い、リユーさんが口を開いた。

「何処かでお会いしましたか？」

「……私を口説いているのか？」

シャクテイさんの言葉にかなり棘が含まれているというか、敵視とまではいかずともかなり不機嫌さが滲み出ており、リユーさんも拒絶されている事を察したのか身を引いた。

「いえ、どうやら私の勘違いだったようだ。不愉快にさせたのなら謝罪を」

「必要ない。どうせ私はただの護衛だ。雇い主とどういった関係なのかは探らんよ」

それだけ言うとシャクティさんは腕組をして目を瞑る。これ以上会話してボロは出したくないらしい。

と、なるのだ……え？　これ俺がリユーさん説得しなきゃいけないの？　胃が死にそう。

「えっと、リユーさんは——」

さつさと家に帰ってくれないか。という直球な言葉を避けて迂遠に伝えようと言葉選びしつつも口を開きかけたところで、聞き覚えのある少年の声が聞こえて息が詰まった。

「僕やつぱりいいですっ、帰らせてくださいいいいっ！」

聞こえた声にリユーさんとシルさんも反応して四人全員が其方を向く。

視線の先には白髪の少年が着慣れない燕尾服を身に纏い、誰かから逃げる様に言い訳を重ねている様子が見て取れた。

「まだ新居の引っ越しが終わってないんです。というか、こんなところに居るのが神様や他の人達にバレたら、ぼ、僕は——」

………わあい、ベルだあ！

一気に駆け出し、ベルの背中に突進。ドンツとぶつかった所でベルが身を痙攣させて硬直した。

「うわっ!？」

「うわ、じゃないですが。なんで此処に居るんですかね、ベル」

「ミ、ミリアアっ！　待って違うんだこれは——」

言い訳を紡ごうとするベルが俺の後ろから近づいてきていたリユーさんとシルさんに気付いてさらに青褪める。

「リユ、リユーさ——」

「すいませんが、私たちの素性を大声で明かす様な真似は控えてください」

一瞬でベルとの距離を詰めたリユーさんがベルの口を指で塞ぐ。ベルの唇にリユーさんの指が触れているせいかベルが焦りながら首を上下に振って口を閉ざした。

つかさあ、なんでベルは此処に居る訳？ モルド達に誘われて賭博場に行くとは聞いてたけど……というか俺も誘われたけど断つたし。予定あつたからね。

しかしベルが最大賭博場に来るなんて……まさかモルド達か？

いや無いだろ、あいつら第三級冒険者だろうし、第一等級会員な訳……そのまさかか？

「ベル、モルド達と此処に来たの？」

「え、あ、うん、モルドさん達と——」

ベルが質問に答えようとした所で、場に似つかわしくない荒々しい足音を立てて三人の荒くれものが現れた。

いや、破落戸ではないが、傷のある顔で燕尾服を来たモルド、ガイル、スコットの三人である。

予想外にも程がある。こいつら大賭博場に入場できたんかい。場末の小さな賭博場に行くもんだと思ってたぞ。

「おい、【リトル・ルーキー】何やってるんだ。まだ話は終わってねえぞ」

「どうもモルドさん……随分とお楽しみな様で」

「なっ!? ノースリスうつ、どうしてここにっ!」

だからこっちの台詞なんだが。リユーさんといい、シルさんといい、モルドといい、なんでこっちの台詞を先読みしたかのような質問を飛ばしてくるんだか。

溜息を零していると、リユーさんが鋭い視線をモルド達に飛ばしながら小さく呟く。

「どういう事ですか？」

「ん、ああ……どうにも戦争遊戯の賭けでだいぶ稼いだみたいでして、それのお礼に良い所に連れて行ってやるとベルと私を誘ってきたんですよ。私は断つてたんですが……まさか最大賭博場に連れてくるとは予想外でしたね」

最初は歓楽街のエッチなお店か？ とも思ったがだとすると女まで誘うのはおかしいなと質問したら賭博場に行くとか言ってたのだ。だからてつきり場末の小さな賭博場でちよつと遊んでくるだけだと

思ってたんだがねえ。

「おお、なんだ俺らを馬鹿にしてんのかあ？」

「……そんな積りは無いですよ？」

第三級冒険者なのにこんな大賭博場に足を運んでるって相当アレだなとは思うけどね。うん、金を摩ってるなあ。もしかしなくてもそれが原因で第三級冒険者から先に進めてないんじゃないや？

「目を逸らすなよ、まったく……ああ？　なんですかいそつちの貴族様は、そんなにガンくれて文句でも………んん？」

眼帯付けた貴族然としたリユーさんに見られている事に気付いたモルドが絡んで行こうとし、途中で何かに気付いたのか動きを止める。残り二人のガイルとスコットもまじまじとリユーさんを見つめ

——瞬く間に青褪めた。

『げええ！　まさかこいつ『女主人』の——』

「黙ってください」

三人が驚愕して声を上げ切るより前に、リユーさんの足がぶれる。風を切る程の音を響かせ、振るわれたリユーさんの革靴の爪先が三人の脛を蹴り上げたらしい。

カカカカカカツとほぼ同時に六度の打撃音。

『い……いでええええええええええええ!!』

モルド達が脛を押さえて転がり回る。周囲の客も何事かと此方を見ているさ中、シルさんがリユーさんに近づいてぶんすかと可愛らしく怒っている様子が見えた。

いや、リユーさん手……いや足か、早すぎでしょ。

「もうっ、リユー！　直ぐに手を出しちやダメだよ？」

「すいません、やり過ぎました……」

モルド達の呻き声を背景に、ベルが愛想笑いしながらも問いかけを放った。

「そ、それでミリアとリユーさんは此処で何を？　というかその眼帯は？」

あー、なんか勘違いされてるかな。多分、俺とリユーさんが一緒にここに来たと思ってる。

違うんだなあ、リユーさんには来てほしくなかったんだなあこれが。

「私はリユーさんとは別件です。実は貴族から招聘状が届いて……まあ、貴族と面会してたんですよ」

思い出したら胃が痛くなってきた。あのお花畑貴族に脳筋狙撃手。リユーさんとシルさん、そしてベルとモルド……なんだこれ、胃痛の原因が多すぎるんだが。

「私たちはわけあって貴族になりすましてここに潜入しています。こうでもしなければ入り込めなかったのだから」

口軽過ぎでしょ。何処に耳があるかわからんのにペラペラ喋るのはアウトオツ！ リユーさんがポンコツなのはわかったからやめてくれえ！

「わけ、ですか？　じゃあそれでシルさんもドレスを着て——！」
シルさんのドレス姿を改めてみたベルが動きを止める。大胆に開いた胸元に視線が吸われ、ベルが赤らんだ。

下から見上げる形であつてもかなり際どい胸元だと思えるドレスなのだ。ベル視点だと相当に破壊力のある光景だろう。

「ベルさん、私のドレス姿に見惚れちゃいましたか？」

「え、あつ、ごめんなさいっ！」

なんでそこで謝罪するかな。見る事自体に罪はないだろうに。

リユーさんがベルにすつと近づき、ドスの利いた声で囁いた。

「クラネルさん、シルに不埒な視線を向けないように」

「す……す……すすすすすいませえんっ！」

……いや、今のは理不尽過ぎでしょ。流石にあんな際どい恰好で居るのを見ただけで怒られるのはどうなん？

そしてベル、キミは凄い身体能力してるね。一瞬で土下座するとかビックリだよ。

「ところで冒険者様？　どうして皆さまは都市随一の大賭博場オラリオにいらっしやるんです？」

シルさんが話題逸らしの為にかモルド達に声をかけた。

流石に痛みが引いたのかモルド達がすつと立ち上がる。まだふら

ついでに完全に回復した訳ではなさそうだが、ここで回復魔法使おうとすると流石に捕まりかねないしなあ。

「ふっふっ、よく聞いてくれた嬢ちゃん」

懐に手を入れたモルドがきつと素早く何かを取り出す。金色のカードだ。

「俺達はこのゴールドカードを持つてるのさー！」

「これ一枚あればどの大賭博場だつて入場できるんだぜー！」

凄まじくうざったいドヤ顔でゴールドカードを見せびらかすモルドと、それを囁し立てるガイルとスコット。

なんとなく想定はしてたが、なんというかバカバカしいな。第三級冒険者で足止めしてる理由が納得いったわ。実力に見合わない賭博場の第一等級ゴールド会員なんてなつてりやそりやあ冒険の方に金も回らんだろ。

「これを持つてる第三級冒険者なんて俺らぐらいしか居ないだろうなあー！」

そりやそうだろ。普通はもつと強くなつてから、金に余裕が出たところで目指す代物である。まあ、どれだけ金を貢いだのか知らんが、アホ極まりないな。賭博癖持ちか、こいつら。

「第三等級ブロンズから第二等級シルバー、そして第一等級ゴールドになるまでどれだけ金を落としてきたか……」

「その為に回復薬ポーションケチって死にかけたり……」

「武器の修理後回しにして探索中に壊れたり……」

……いや、こいつら本当に良く死ななかつたな。ある意味では運の良い奴らだ。

「貴方達が第三級で低迷している理由がはつきりとわかりました」

『う、うるせえ！』

リユーさんの直球の言葉がモルド達に突き刺さるが、俺としてはリユーさんのポンコツっぷりに最近納得がいくようになってきた。魔法の知識を教えてくれていた頃はもつと知的な人だと思っていたが、思った以上に脳筋に近い思考してるんじゃないかな。あと手が早い。

リユーさんをボケつと見ていると、彼女は視線を広間の奥の方にある両扉の方に向けた。

視線の先は、ビツブルーム貴賓室だ。俺とシヤクテイさんの目的地……ヤベエ、リユーさんがあそこに行こうとしているならなんとか止めるべきだと思う。ガネーシヤファミアリアの作戦もある訳だし、リユーさん居たら大変なことになるぞ。

ちらりとリユーさんと視線が交わるが、彼女はさつとモルドに近づいて囁きかけた。

「あのビツブルーム貴賓室について何か知っていますか？」

「ん？ あ———なんだ、あそこに入りてえのか？」

俺に聞いても答えて貰えないだろうと判断したのだろう。常連らしいモルドに聞く事にしたらしい。

うん、どうするかなあ。

「ミリア、ビツブルーム貴賓室って何？」

「え？ ああ、そうね……高額の賭けを行う別室って認識で良いわ。要するに金持ち専用の部屋」

もしくは、お仕置き部屋か、処刑部屋。賭博場で調子づいた奴を連れ込んで囲んで叩きのめす場所だ。

過去に叩きのめされた経験のある俺が言うんだ、間違いない。あの時は解体バラされかけたんだ……糞女が助けてくれなきや世界中に俺の一部がばら撒かれてたんだろ……。

「後は、オーナー管理者の趣味を見せびらかす所、かしらね」

囲った女の子を見せびらかしたり、ね？

ま、ベルには関係の無い所さ……女の子が助けを求めてたら突っ込みそうな所があるので怖いな。

「高額の賭博ゲームを楽しむのと、後は……好色のオーナー管理者が囲ってる美人の愛人どもを客に見せびらかすんだとよ」

モルドの言葉にリユーさんとシルさんが顔を見合わせている。これは、目を付けちゃったかあ。

「冒険者でもねえくせに良いご身分だぜ」

吐き捨てる様に呟かれるモルドの言葉に、思わず『第一級冒険者で

もねえ第三級冒険者が大賭博場に入り浸るなんて良いご身分ですね』と眩きかけて呑み込む。

溜まりに溜まっていくストレスで妙な事を口走りそうになってしまふな。

「一つ忠告だ、貴賓室あそこに初めて行く新参者は『洗礼』を受ける。つまり食い物にされるって話だ」

………あ、なるほど。ここの貴賓室ビップルームの特性は理解した。

『洗礼』を浴びせて洗脳するのさ。そっかあ……汚いやり口だな。そして、下手なやり方だ。もつと上手いやり方なんていくらでもあると思うのだが……傭兵のL.V. 3二人組が居るからか？ だいたい調子に乗っているらしい。

潜入してしまえば尻尾は簡単に掴めそうだな。

「あ、あのー……僕そろそろ帰っても良いですか？」

困った表情のベルの発言に首を傾げかけ、納得。ベルは賭博関連にあまり興味はないらしい。良い事ではあるのだが、少しは嗜んでおくべきだと思う。

「ベルさん、折角大賭博場カジに来たんですから少しくらい遊んでいかれたらどうですか？」

シルさんは純粹に楽しむ気満々というか、ドレス姿でベルにすすつとにじり寄ってアピールしてるっぽい？

ちよんちよんと肩を突かれ、誰かと思えばリユーさんが小声で話しかけてきた。

「ミリアさん、良いのですか？ 彼に夜遊びなんて教えてしまつて……」

ふむん？ いや別に俺が止めるべきはのめり込み過ぎた場合のみだしね。

酒にしろ賭博にしろ女にしろ、のめり込んで破滅しそうなら殴つても止めるさ。でも嗜む程度なら別に構やしない。俺だつて酒に逃げる事は多々あったし、賭博は……まあ、不正を基本イカサマにしてたからあまり興味はなかつたな。女？ あの糞女の所為で興味無し。

「別に、少し嗜む程度なら止める程じゃないですよ。のめり込んで破

滅しそうなら殴ってでも止めますし」

「……………そうですか」

若干不満そうというか、予想外とでも言う様に表情を曇らせたリユーさんに首を傾げる。何、俺って潔癖だとも思われてたん？別にやる分には良いんだよ、やる分には。破滅するのだけはやめて欲しいがね。

「ほら、ルーレットとかどうです？ 賭札を置くだけですし」

「え、でも…………」

シルさんが全力で押していき、ベルが徐々に押されていく。これは、いつもの流れだな。このまま賭博^{ゲーム}まで押し切られるだろうね。

「僕一人で遊ぶなんて…………神様やリリにも悪いし」

「少しくらいならベルさんの女神様やリリさんも怒りませんよ」

ニコニコ笑顔でぐいぐいと押していくシルさん。リユーさんが苦い表情でシルさんの背中を見つめており、モルドがシルさんの言葉に頷いている。ベルが俺の方をちらりと見てきたので肩を竦めておく。

「お金も無いですし…………」

「私が貸してあげます。負けてもかまいませんよ？」

なんとか断る理由を絞り出そうとするベルに対し、シルさんが先回りして逃げ道を封鎖していく。

これはやっぱりいつもの流れでシルさんに押し切られそうだね。援護射撃してあげれば断る事ぐらいはできるだろうが、別に断る程じゃないでしょ。

「けど…………」

「それに、もうこんな機会ないかもしれませんし。ほらミアさんからも何か」

え？ ああ、俺がシルさんの援護に回れって？ そこはリユーさんに頼むべきでは…………まあ、良いか。

「良いんじゃないですか。滅多に来れる場所ではないんですし、何事も経験って奴ですよ」

ついでにルーレットするなら頭の上でそわそわしてるクリスマスもやるだろうしね。

「……………わ、わかりました。じゃあ少しだけ」
喜ベクリス。ルーレットの時間だぞ。

《良いの!》

賭札^{チップ}はギルド長からたんまり貰ったし、ある程度負けても別に構やしない。

《やったー! クルクルしてるのー!》

……………あれ、クリスって賭博^{ゲーム}の規則^{ルール}理解してんのかなこれ。ただ回ってるのを見て面白そうとか言っていないか？

第一四一話

『ルーレット』とは簡単に言うと回転する円盤に球を投げ入れ、落ちる場所を当てるカジノゲームだ。

回転盤には均等に区切られた玉の落ちる落ち場があり、0と36の数字が記されている。交互に赤と黒の二色に分けられており、例外として0だけは緑色だ。

専用の回転盤と、ルーレット用の賭け場が用意された賭博卓に全員で囲む。進行役は、兎耳のお姉さん。

獣人の種族の一つ。兎人らしき女性がにこやかな笑顔と共に卓の下から踏み台を出してくれたため、その踏み台に立って卓を見下ろす。踏み台が無ければ賭け場がまともに見えないしね。

「それでは、どうぞお好きな所に賭けてください」

ニコニコと綺麗な笑顔を見せてくれる進行役の女性。兎という事で『バニーガール』をイメージするが別にそういう事はなく普通に燕尾服姿だ。体の線が出る様なレオタードとかではない。

とはいえ兎耳がどうにも大賭博場の想像にピッタリなのでそういう意図なのかと揺れる兎耳を見ているうちに、ベルがリユーさんから丁寧にルーレットの規則を聞いていた。

「なんだかんだ言いつつ、教えるのは丁重だなあ。」

「賭ける方法によって配当は変わります。赤か黒、色に賭けたなら二倍。数字単体に賭ければ最高の三十六倍です」

「さ、三十六倍……」

「奇数賭けや偶数賭け、数字一列なんかもあるな。制限はねえし複数賭けても良い」

モルドの補足を聞きつつ、頭の上にクリスに何処に賭けるのかを聞く。

《最初にしか賭けられないの?》

「ん? いや、まずは開幕賭けで各々が賭け場に賭札を置いてから、進行役が回転盤を回し、回転とは逆に玉を投入。」

「んでそこから一定時間の間に参加者は玉が転がるのを見て予測し、

追加で賭けするか賭けの変更を行い、賭け時間の終了を進行役が知らせて参加者は行動終了。

最後に玉が落ちた落ち場の数字と色を進行役が発表し、当選者に配当。無論、非当選の場合は賭札は没収。

《……………んん？》

どうした？ まだわからん所ある？ まあ、一回目が始まるし一度やってみると良い。

俺もやるかなあ。さっきのギルド長達との賭博がダメだったとしても、ここでガッツリ稼げば確実にここの経営者が声かけてくるでしよ。

ベルが恐る恐ると言った様子で賭け場に賭札を置く。枚数は、たったの三枚。遠慮し過ぎではなからうか。しかも配当二倍の色賭けか。「んだよ、結局色賭けかよ。一番低い配当じゃねえか」

「い……………いいじゃないですか。初めてなんですから」

「ふふ、ベルさん。もし勝てたら色を付けて賭札をくださいね？」

シルさんの駄洒落にベルがあいまいに笑う中、進行役が此方を見回して確認をとる。

「他の皆さまはよろしいですか？」

んむ、んでクリスは何処に賭ける？ 俺は、とりあえず十枚を単体数字賭けするが。

《10！》

まあ十枚賭け二か所で良いか。クリスが『10』、俺が『15』に十枚ずつ賭ける。

「おいおい【リトル・ルーキー】、ノースリスの方がよっぽど肝が据わってるじゃねえか」

「いきなり数字単体賭けですか……………」

モルドがベルの肩を叩いて笑う横で、リユースさんが目を細めて此方をつぶさに観察し始める。さっきのポーカー見てたみたいだし不正を疑われてるのかな？

断言するがルールレットで不正はしない。というか規則上問題無い方法だし。この卓の進行役の女性には申し訳ないが稼がせてもらう。

「では、始めます」

結局、賭けたのは俺とベル、あと密かにクリスの二人と一匹のみで他の人は非参加だった。冒険者の身体能力なら割と簡単だとは思うのだが、そうではないのかね。

回転盤ホイールの回転と、玉の転がる音。これは——『1 赤』かな。賭けを変更する為に口を開こうとした所で、クリスが呟く。

《1に落ちるよ!》

……おおっと、クリスも出来る感じか。まあいいや。

「賭け変更、全てを1の赤に」

「はい、変更ですね」

進行役ディーラーの女性が手早く賭札チップを動かしてくれる。俺だと手が届かないからね。

ほぼ勝ち確定だなどのほほんと構えていると、ベルが口を開いた。

「今から変更できるの?」

「玉を投入してから一定時間は賭け時間ベットイングタイムですので、変更または追加があればしても良いんですよ」

ベルが賭け場シートを見回して変更しようか悩み始めた所で、進行役ディーラーの女性が宣言しながら卓テーブルを撫でる。

「ノー・モア・ベット」

「え?」

「賭け時間終了です。後は運に任せるしかないですね」

もたもたしてる間に終了を告げられ、ベルが緊張気味にルーレットを見守り始める。

まあ、安心しても良い——ベルは当選当たしてるし。

のほほんとした雰囲気のまま、踏み台に立って卓テーブルを見下ろす小人族パルウムの少女。

左右で異なる彩光異色の瞳には、やはり緊張や祈りの様な感情は見取れない。リユーは目を細めつつ彼女を見据イカサマえていた。

ベルと合流した事で誤魔化されてしまったが、やはり不正イカサマをしてい

たのではないかという疑念は尽きない。もしかしたらルーレットでも不正イカサマをするのではと若干注目しているのだ。

どれほど慣れようと賭けベットしているさ中にはやはり緊張や、祈る様な感情が宿る。そのはずなのに彼女、ミアアにはそういったモノは一切ない。ただのほんとした雰囲気ホーカーフェイスを崩さない。仮面か、それとも素か。

「ミアアさん、賭けベットを変更してましたね」

「……………不正イカサマの雰囲気はありません」

シルの言葉に応えつつ、成り行きを見守る。

もう玉の勢いもだいぶ衰え、直ぐにでも落ち場ポケットに落ちそうになっていた。

皆が固唾を飲んで見守る中、ミアアだけは変わらずにそれを見ており、それに注目している間に結果が出たらしくモルド達が目を見開いて驚愕した。

「おおー」「当たった!」「三十六倍じゃねえか!」

「おめでとうございます。『Red 1』です」

色賭けで『赤』に賭けたベルと、単体数字『1』に賭けたミアア。両方が勝利し、ベルの前に六枚の賭札チップが、ミアアの前には二〇枚の三倍である七二〇枚の賭札チップが配当される。

「わあ……………」

「凄い、賭札チップの山が……………」

「一回目からの中とか持つてるなノースリス。それに比べて【リトルルーキー】お前ときたら……………情けないとは思わないのか」

「ええ?! でも僕当たってますよね?!」

「あはは、ベルおめでどう」

「ノースリスが言っても嫌味にしか聞こえないだろ」

ミアアがさも当然といった雰囲気チップで当選を喜ぶでもなく賭札チップの山を台車に乗せているのをモルド達が手伝っている。彼女はまたルーレットを続ける積りなのか既に賭け場シートに二〇枚の賭札チップを残している。

「ほら【リトルルーキー】、ノースリスを見習ってガンガン賭けちまえ!」

「そうだぞ、女の前で良い恰好できなくてどうする」
「みつともないだろ」

「うう……」

モルド達に促され、ベルが二度目に挑戦する為に賭け場に賭札を置いた。

今度は数字の縦一列。対するミリアの方は単体数字賭け、何故か二か所賭けをしている。

「ミリア、また単体数字賭け……？」

「ん？ 何か問題でも？」

流石に二度目は無いだろう、そう思いつつも進行役が玉を投入した所で——リユーは気付いた。

ミリアの目がじつと回転盤と玉を見据える。その瞬間に感じたのは、戦場で感じたモノと同じ雰囲気。

「変更で、全て赤の19に」

またしても、だ。単体数字賭け、二か所から突然一か所に変更。二枚全てを一点賭けした。

ベルの方は驚いており、モルド達も若干訝し気にミリアを見ている。ベルは特に変更も無くじつとルーレットを見つめていた。

進行役が賭け時間の終了を告げ——結果が発表される。

『Red 19』………お、おめでとうございます」

顔の引き攣った進行役の女性の宣言。

まただ、単体数字賭け、配当倍率三十六倍を二連続的中。ベルの方も当選しているが、そちらが霞む程の事だ。

白髪の少年やモルド達が口を開けて驚愕するさ中、ミリアの方はふんと得意げに笑みを浮かべていた。

「……ねえ、リユー」

「わかってます。不正ではありません……彼女だからこそ出来る方法で的中させているだけだ」

回転盤と玉。その二つの動きを見て、何処の落ち場に玉が落ちるのかを予測しているだけ。

ルーレットの規則上、『賭け時間』中に玉の動きから何処に落ちる

のか予測するのは認められている。だが、実際にそれを予測し的中させるのは困難だ。

——だが、それを可能だと言える者がいる。

リユートの脳裏に浮かんだのは、十八階層からの帰り道。中層の未調査領域での戦闘。

正式名称不明の、温泉の主らしき怪物モンスターとの戦闘のさ中に見せた、ミリアの射撃。

無秩序な軌道を描いてベル・クラネルに迫る無数の触手を、瞬く間に魔法で撃ち落とした光景。

「多分ですが、先ほどのポーカーも同じでしょうね」

「どういう事?」

ミリア・ノースリスにとって、無秩序に動く触手を見切つて魔弾を以て撃ち落とす事は不可能ではない。むしろ——彼女の得意分野である。

動きから予測し、魔弾を撃つ。人であろうが怪物であろうが、その動きから魔弾を的中させるだけの目と予測能力を持っている。ならば、トランプ切札を切り混ぜずる動きから山札デッキの並びを予測する事ぐらいできるだろう。

ルーレットなんでもっと簡単だ、ホイール回転盤と玉。二つの要素しか存在しない——彼女にとって予測は容易だったのだ。

無秩序な軌道を描く無数の触手を撃ち落とす事よりは、簡単なのは間違いない。Lv.4のリユートですらそんな予測が出来る筈もないが、彼女ならやつてもおかしくはない。

「戦争遊戯ウォーゲームのさ中もそうです。彼女は予測が上手い」

目の前で行われている行動や動作、それらの情報から結果を導く出す能力に優れている。

彼女の目の届く範囲で切札トランプを切り混ぜしても、全く意味がない。あのポーカーのさ中、わざわざ不正イカサマを疑われた際に、一回一回山札デッキを検め確認していたのは、覚えていたからだろう。

「え、じゃあ玉が転がってるのを見て予測したって事?」

「……だと思いません。彼女なら、不可能ではない」

二連続の的中に進行役がミリアに対し警戒心を見せて三度目の賭博を開始しようとするさ中——唐突にその進行は妨害された。

「失礼、【魔銃使い】ミリア・ノースリス様は此方に居られますでしょうか」

二連続的中。クリスは二回で飽きたらしく、『思ったより簡単』と投げってしまったので三度目は俺だけで参加しようと、進行役の警戒を無視して賭け場に一〇枚の賭札を乗せた所で外から声をかけられる。進行役の女性があからさまにほっと息をつくのを尻目に、やってきた人物を観察する。

白髪、ベルと違って地毛ではなく歳からであろう白髪の老人。燕尾服をすっかりと着こなし、片眼鏡を付けた、立ち振る舞いも完璧な大賭博場側の人間。それなりに立場もあるのだろう、進行役の女性があからさまに安堵した様子からの予測だが間違っていない。

「ノースリス、お前何かしでかしたのか？」

「まあ、色々」と

バレてはいないけど、切り混ぜの動作から切札の並びを予測してポーカーで勝率上げたり、ルーレットの予測したりはしたけど、不正じゃないし問題無しだろ。

まあ、それとは別件だ。さっきのポーカーでギルド長相手に馬鹿げた賭けを行ったのが耳に入ったんだろうなあ。

「私は此処にいますよ。どういった要件でしょうか」

「経営者のセルバンティスが、是非貴女とお会いしたいと」

………あ、うわ、酷いなこれ。金で言う事を聞かされてるタイプの人間だろう。

上を敬うと言った雰囲気は全く感じられない。ただ仕事上必要だからと従ってるだけと言った雰囲気を目の前の人物から感じた。

「ミリア、あの……」

「ベル達はそのまま賭博を楽しんでいってください」

ベルが声をかけてくるが、今はすまん無理だ。思った以上にギルド

長相手に無茶苦茶な賭博ゲームを挑んだ意味があった。

改めて踏み台を降りてその老紳士の前に立つ。

「私の様な無骨な冒険者に経営者オーナー自らそう言っ頂けるとは光栄です」

うつそピヨーン。とでも言いたい気分だが今は我慢。

『再生薬』なんかで莫大な資産を得る可能性もあり、戦争遊戯ウォーゲームでの活躍もある。後ついでに、無いとは思うが子供ガキみたいな身体だが見目は悪くないしそっち方面で童女趣味萝莉コン垂涎。

そんな奴が自身の全てを賭けた賭博なんてやってたら、食いついてくるだろうとは思ってた。テリー・セルバンティス……否、彼に化けたテッドという人物なら食いつく。

「それで、どちららに向かえば？」

「どうぞ、こちらに」

ベル達に小さく手を振り、シャクティさんを引き連れて老紳士に着いて行く。

ふと思つたが、俺は予測でルーレットを的中させていたが。開幕賭けのみで二連続中のベルの方が凄いのではないだろうか。まあ、流石に三回目以降はないだろう。

「ガツハツハツ」

随分と品の無い笑い声だ。

大賭博場側の人間らしい老紳士に連れられて行った先。

数人の招待客相手に談笑している一人のドワーフが居た。燕尾服が似合っていないタイプの、笑顔の仮面を着けた吐き気のする奴。ぶつちやけ、俺が嫌いなタイプにドストライクだ。

「どうぞ今日はゆつくり楽しんでいってください」

「経営者」

片眼鏡の老紳士が声をかけ、俺とシャクティさんを指し示す。

振り向いたテリー・セルバンティス、という事になっている彼、経営者を気取るテッドは笑みを深めて此方を見下ろしてきた。

「私はテリー・セルバンティス。この大賭博場の経営者を務めさせて頂おる者です。今宵はお越しくださりありがとうございます」

「此方こそ、私の様な無骨な冒険者を招待して頂き感謝しています。私は『魔銃使い』ミリア・ノースリス、此方は護衛として雇った『黒拳』のファウストです」

まあ、形だけは丁重にドレスの裾を僅かに持ち上げて一礼。シャクティさんは無言で会釈のみ。

顔を上げて経営者の顔を見ると、僅かに驚愕の色が見て取れた。まさか無骨極まりない冒険者が作法を学んでいるとは予想外だった……という雰囲気ではない。

仮面を着けて無言で佇むシャクティさんを見て驚いている。もしかしてさつそくバレた？ いや、絶対にはいはずだ。少なくともテッドと『黒拳』に接点はない。もし接点があったら一発でバレて不味いと思っしてしつかりと裏取りしたし、ここでバレて計画ご破算とかなったら泣くぞ。

「どうかしましたか？」

「いえ、よもや暗黒期に活躍した賞金稼ぎが護衛として雇われているとは思わなくてですな」

誤魔化す様に笑うセルバンティス氏。だが、何かに気付いているのか、それとも訝しんでいるのか此方を伺う様に見下ろしてくる。

「何処で雇ったのかお聞きしても？」

なんでいきなり警戒されてんだよ。糞、思った以上に頭が回るタイプだったか、不味いな。

「ええ、実は先の戦争遊戯の前に片っ端から傭兵に声をかけていたのですが」

作り話として、戦争遊戯中に雇えないかと元から声をかけていたが勝ち目が無さそうだからと断られ、終了後に改めて雇う事は無いかと尋ねられ、今回の大賭博場へと足を運ぶ用事が出来た事で雇う事になった。という事になっている。

まあ、当然全部嘘なんですけどね。

「ほほう、なるほど……しかし、本当に『黒拳』本人なのでしょうか」

……いや、ごめん。本当になんで疑われてるの？

もしかして本人に会った事あるの？　だとしたら本当に不味いんだけど……ていうかルノアさんに確認もとって会った事無いって明言して貰ってるんだが、もしかしてルノアさんが忘れてるだけで会った事ある？

うーん……どうするかな。適当に誤魔化すか。

「いえ、実は『黒拳』と名乗っている人物ではあるのですが、此処だけの話、私は信じてないですよ。それにかなり安価で雇われてくれましたし」

後ろでシャクテイさんが僅かに気を張ったのを確認しつつも、セルバンテイス氏から見えない様に問題ないとハンドサインで知らせつつ、笑みを浮かべた。

「実力が確かなので雇っただけで、本人確認できてませんしね」

しっかりと『黒拳』本人だと証明できる証拠は無いよ。けど強いし別にそこらへんが嘘でも実力があるならオツケーって感じで雇いましたー。って事にしておこう。あと序に安かったって事で。

これで偽物だったとしてもそこそこ実力のある傭兵程度に収まる、はず。既にシャクテイさんの変装だとバレてる場合は笑えないが。

「なるほど、そうでしたか」

………納得の表情を浮かべている辺り、シャクテイさんの変装だとバレている訳ではなさそう？

じゃあなんで警戒されたん？　いや、ヤバいな。不確定な部分で警戒されて滅茶苦茶怖くなってきたんだが。これで実は第一級冒険者を密かに雇ってましたとか言われても困るぞ。金を出せば動きそうな第一級冒険者……無いとは思うがイシユタルファミリアの【男殺し】とかはありえないと言い切れない。

うーん、でつかい釣り針に引つ掛けたのは良いけど、このままのこの着いて行ったら鴨にされそうなんだよなあ。

「失礼、実は『黒拳』とは顔見知りです、本人とは余りにも異なる体格と性別でしたので気になってしまいましたな」

は？　いや……え？　顔見知り？　嘘だろ？　え？　どうして？

ルノアさんは絶対知らないって……おい、脳筋過ぎて覚えてないとかじゃないだろうな。ルノアさんならありそ……いや、体格が違うのはわかる。しかし性別が違う？

「そうだったのですか。私としては本人とお会いした事ありませんし、何より実力があれば名については気にしていなかったモノです」

「なるほど、実力は確か、と……本物でなくとも気にしないとは容姿の可憐さとは異なつて冒険者らしい剛毅さですな」

愛想笑いしつつ、後ろを確認すればシャクティさんは無言で佇んでいた。本物かどうかより実力で選んだという辺りで頷いていたので自身も気にしていないって伝えたいのだろう。

それを見ていたセルバンティス氏は一つ咳払いをして話題を変えた。

「本来ならもう少し早く挨拶をしたかったのですが、なにぶん今宵も招待客が多かったもので……」

ちよつと、不味いなこれ。こつちの意図が見抜かれてる可能性が出てきた。少なくともガネーシャファミリーの情報統制は完璧だったはずだ。情報屋から仕入れた限りではガネーシャ様の無茶ぶりです。本拠地改造計画の為にごたごたしてる、ぐらいしか出てこなかったはずなんだが……。

どうする、このまま作戦続行する？ それとも引く？ 今引くと次が無いと思うんだが。

「あらためて、ようこそいらっしゃいました」

手を差し出してきたので此方もそれに合わせて握り返す。

おかしなことに、先ほどまでの警戒心が消え失せてる。さっきの警戒心の原因は何だ？ 何故いきなり警戒を解いた？ ただの間抜けな業突く張りではなく、しつかりとした頭を持った狡猾な奴かと思えば、それをひっくり返す様な仕草。演技っぽさは感じられず、本当に警戒心が消え失せたみたいだ。

……まずい、今まで情報屋から買ってきた情報の精度が高かっただけに甘く見過ぎていたかもしれない。

こいつ、本物の方かもしれん。だとすると、引くべきだ。

いままで握らされてきた情報が全て虚偽だったら？ 踊らされていたのだとすれば非常に危険な状況だ。こつちが予測して動く所まで予測されていたら……このまま進んだら死にそうな気がする。

「お聞きしたところ、ノースリス殿は高損失高収益な賭博に興じているとのこと」

「ええ、私自らの出来る事であればなんでもする代わりに、相手には全ての賭札を賭けて頂く賭博をしていました」

「理由を聞いても？」

警戒心は無いが、探りは入れてくる。どつちだ？ 無能か？ 狡猾か？ 無能を演じる狡猾な奴だとすると、本当に、不味い。

内心で嫌な汗を掻きつつ、表面上は完璧に取り繕って答える。

「実は……お恥ずかしながら戦争遊戯で勝利したのは良いものの、ともに賠償金を得られずに派閥の資産が底を尽きかけておりまして」「再生薬等があるのではないですか？」

「あちらはディアンケヒトファミリアが未完成な状態での販売は出来ない」と

手袋を外して手を見せ『再生薬』の効力で再生した右手と左目が色素異常を起こして異色な状態になってしまっていると示しつつ、相手の反応を伺う。

「まだ完成品ではないと、それでも欲しがる者は多いと思いますが」「作成の方はディアンケヒトファミリアが担っておりますので、此方の独断ではとても」

とりあえず資金難なのは事実なのでここらは気にしなくて良い。後ろのシャクテイさんに助けを求めたいが、今の彼女はあくまで護衛の傭兵。矢面に立つのはやっぱり俺だけだし。

「なるほど……そうですね。私から一つ提案なのですが」

目が、瞞っている。セルバンティス氏の瞳の奥に、強欲の色が宿る。

「あちらの貴賓室に来ませんか？」

「貴賓室ですか……」

戸惑う様な仕草でセルバンティス氏の指示した貴賓室を見る。ナ

ニソレって雰囲気で聞くのがポイントだぞ。

「ああ、そう警戒なさらずに。要は高額な賭博ゲームを行う専用の部屋ですよ」

「高額……申し訳ないのですがあまりお金も無いのですが。それに不法な冒険者が立ち入って良いモノなのでしょうか」

断ろうとする雰囲気だけを出してみると——セルバンティス氏の目が舐める様に俺の身体に向けられた。

あー、何？ 童女趣味も持ってるの？ すごい多趣味ですね。

「いえいえ、なんでもを賭けて少額を稼ぐぐらいでしたら、奥の部屋で高額の賭けをした方が、ノースリス殿にとっても良いモノだと思つての提案です」

嘘吐け。絶対に俺を狙ってるぞ……。

シヤクテイさんを伺うと、彼女は興味無さげに肩を竦めて呟く。

「雇い主の意向に従うさ。好きにしろ」

つまり、逝けって事でしょう？ もう嫌な予感で手汗が凄い事になつてるから個人的に引きたい。

不明瞭な部分があるのが何より怖い。底が見えたと調子に乗つた結果、痛い目を見るのは世の常って奴だし。

特に、『黒拳』って部分にやけに食いついてきたのが気になる。

「経営者オーナー自らがお気遣いしてくださっている事ですし、断るのもおかしな話。よろしければ是非に」

ああ、畜生。

何故『黒拳』に食いついてきたのか、さっぱりわからない状況で突っ込みたくない。

こつちからどでかい釣り針垂らして食いつかせたけど、今となつては後悔してる。

「でしたら、どうぞ此方に、私自ら案内しましょう」

獲物が掛かったとでも言いたげな色合いを宿したセルバンティス氏の目。選択を誤ったか？

既に賽は投げられた、結果を見通す事が出来ない不確定な賭けはしたくないが、進む以外に道が無い。

目の前に聳え立つ両開きの扉へと招くセルバンティス氏に続いて
貴賓室ビッブルームに足を踏み入れる直前、会場の一角が沸き立つ。

遠くから聞こえる歓声とざわめきに足を止めると、セルバンティス氏も其方を興味深げに見て首を傾げた。

「はて、盛り上がっている様子ですな」

「そうですね。誰かが大きく勝ったのでしょうか」

遠くから聞こえるざわめきに耳を傾け———なんか「リトル・ルーキー」が盛大に勝ったと聞こえた。

ふうん……ベルが勝ったのかあ……。待って、『三〇〇枚』『単体数字賭け』とか恐ろしい単語が聞こえるんだが。

いくらなんでも俺だって単体数字賭けで三〇〇枚は賭けんぞ。予測は出来るが、かといつて的中率なんて八割五分が良い所だし。確定勝利って程じゃないんだよなあ。

どんな博打打ちしてんだよベル……。

第一四二話

嚴重に警備された両扉の向こう側。

管理機関も都市最大派閥の守衛も入れない——否、入場を拒否される治外法権——ギルド貴賓室。

むしろ、ギルドやガネーシャファミリアを完全に拒否してる時点で『悪い事してますう〜』と主張しまくってる訳なんだが、そこら辺を上手く誤魔化してこそ……いや、別に悪行指導する気なんかさらさらないがね。

「……意外と静かだな」

仮面を着けたシャクテイさんが貴賓室内を見回して呟く。

彼女の言う通りだろう。一般客が数多出入りするメインフロアよりもかなり狭い室内ではある。それでもその部屋の大きさに対して設置されている賭博卓の数は少ない。卓と卓の間がかなり広めにとつてあり、メインフロアに比べてかなり広々とした印象を受ける。

そして、招待客一人ずつに女性が一人控えている。その内の何人かの特徴が、強引に攫われた女性の情報と一致する。彼女らの首に着けられている首飾りは、まるで奴隷に着けられた首輪の様な印象を受ける。多分、意図的なのだろう。この場にアンナ・クレーズが見当たらないのは、まだ見せるのが早いためか、他に理由があるのか。

そして、其処に居る客も表面上の雰囲気は楽し気で、談笑しているが——目は欲望の色に染まっている。

飴と鞭、上質な女性でもてなす飴と、賭博で敗北させて背負わせる借金という鞭。言う事を聞けば飴が、聞かねば鞭が振るわれる。言う事さえ聞いていれば甘い蜜が吸えるとあつてか、やはり染まってるか。

「さよ、どうぞこちらのテーブルへ」

案内された先にある賭博卓は一番奥まったテーブル。入口に近い席には招待客に扮した傭兵らしい者達が見える。そしてセルバンテイス氏が示すテーブルには既に客——否、テッドの協力者だろう者達——が数名。

「おや、経営者ではないですか」

「今宵も楽しませて貰っていますぞ。経営者」

「そちらの方は……もしや先日の戦争遊戯の？」

此方に気付いた贅沢太りした貴族がわざとらしく驚いた表情を浮かべる。既に打ち合わせ済みなのか反応が非常にわざとらしい。

「お初にお目にかかります。経営者のご厚意で此方に伺わせていただきました。不作法者の冒険者で申し訳ありませんが、よろしくおねがいします」

一礼しつつも卓に着く面子を確認。贅沢太りしたヒューマン、中東の民族衣装っぽい服装の小人族、背の高い角刈りのヒューマン、そして歳からくる白髪の獣人。

主犯のテッドを入れて合計5人。これは、厳しいかもしれんな。

「おお、あの【魔銃使い】殿ですか。此方に来たという事は、賭けを？」

既に賭博に参加させる気満々か。これは最終的にシャクテイさんに暴れて貰う他ないかな。多分、勝てないし。

「戦争遊戯に勝利したにも拘わらず賠償金が入ってこずに資金難になつていたそうでしたな。『なんでもする』という事を対価にして賭博を行っていると耳にしましたな」

「なるほど、普通の間ではあまりにも不憫だと」

「いやはや経営者はお優しいですな」

ふふふ、あははと珍妙な笑い声が響く。茶番劇なら他所でやってくれと言いたいが此方も合わせるしかないか。

「ええ、経営者には感謝しています」

「では此方の席へどうぞ」

宛がわれた席は、中央。左端に経営者。それから順に小人族、角刈り、俺、獣人、贅沢太りで計6人。

小人族用らしい背の高い椅子に座り、シャクテイさんが俺の後ろに控える。

「ところで、其方の仮面の方は【魔銃使い】殿の付き人ですか？」

「一応の護衛ですね。私は魔術師ゆえ前線は苦手です」

今回この大賭博場に足を運んだ理由はとある国の貴族から招聘状

を送られたから。その貴族との対談の後、いくらかの賭札を札に受け取ったので、それを元手にちよつと稼げないかと賭博に興じていた。ただ額が少なすぎて高額ゲームの賭博に参加できなかつたので『なんでもする』というのを条件に相手の所持賭札チップを全て賭けて貰う形で勝負したと。

さらさらとそれっぽく騙しておく。無論、嘘だし、本来ならそんな危険な方法なんて絶対にとらん。

「なるほどそういう事情でしたか」

「でしたらここでも同じ賭博ゲームを？」

「ええ、その積りですが」

一回勝てば富豪から巻れる。そんな餌にのこのこ釣られてやってきた間抜けな冒険者。そうみられてくれるとありがたいんだがね。舐めてくれてた方が良いし。

賭博ゲームを始める前に色々と質問を投げかけられていると、小さなグラスがそつと置かれた。

「どうぞ」

「つ……あ、ありがとうございます」

微笑みを浮かべたドレス姿の女性。目が全く笑ってないせいで一瞬ゾツとしたがなんとか微笑み返して礼を言えた。

「飲み物はサービスですので遠慮せず飲んで良いですよ」

経営者の言葉に微笑み返して出された飲み物を見る。毒物の類は入っていないと思うが、カクテル・グラスに入っているのがちよつと気になるか。

勧められたし一口——おおう、これはアレだな。レディーキラー系の混合酒カクテルだな。飲み口は非常に軽く、色合いも優しめで女性向けのカクテルだが、度数が高く飲み過ぎれば容易く泥酔するだろう。念の入れようが凄いな。少し酔った程度なら予測がズレる事はないが、飲み過ぎると多分ズレる。ましてや俺は体格が洒落にならんぐらいに小さい。一杯飲んだだけで潰れかねないし気を付けないといかん。

「それにしても、鏡越えいぞうしにも思っていましたか、【魔銃使い】殿はとて

も冒険者の様な荒事をやっている様には見えませんか」

「ええ、器量良い」

「怪物と戦っているよりは、此処に居る女性達に交じっている方が自然に思えますな」

「……………遠回しに此処で飼われろと言ってるのかね？ 流石に露骨過ぎて笑えんわ。」

「この様な格式高い場所では肩が凝ってしまいます。私の様な不作法者には冒険者の様な荒事に塗れた生活の方が性に合っています」

言外に『荒事慣れてますよ』と伝えてみるが、反応は無い。多分、見た目が華奢でチビだから舐められてる可能性があるな。特に魔術師って事で魔法詠唱さえ潰せば後は無力化できるとでも思っているのだろう。

どうしてか傭兵である『黒拳』を舐めている節があるのは不思議でならん。少しは警戒するかと思えば完全に無視してるし。

「経営者」

酒をそれとなく勧めてくるのをのらりくらりと回避して賭博開始までに酔わない様に注意していると、先ほどの忠誠心が欠片も感じられない片眼鏡の男性がセルバンティス氏に声をかけた。

何事かを伝えているのに耳を澄ませたいが、他の招待客に絡まれて上手く聞こえない。

「…………ノースリス、他に上客が見つかったらしいぞ」

シャクティさんの小さな呟き。この時機で上客を見つけた、と。つまり獲物が居ただけどうすんの？ って質問だろう。

セルバンティス氏が軽く此方を流し見てから、席を立った。

「失礼、どうやらもう一人招待しなくてはならない客がいらつしやつた様でしてな。【魔銃使い】殿には申し訳ないのですが賭博はもう暫し待っていただきたいのです」

「構いませんとも、経営者もお忙しい身。冒険者如きに気を使う必要はありません」

一体だれがここに来るのだろうか。巻き込まれるのは若干かわいそうではあるが、俺に出来る事なんか有りはしないので放置だな。こ

の後この場所シャクテイさんに滅茶苦茶にしてみらう予定だし。

セルバンティス氏が出て行った後、招待客ゲストの人々と談笑、というか酒を勧められて酔い潰そうとしてくるのを回避し続けていると、ようやくと言った様子でもう一人の得物ゲストが到着したらしい。

「どうぞこちらのテーブルへ」

「ありがとうございます経営者オーナー」

ふと振り向くと其処には大きな眼帯を付けた美麗なエルフの青年——に扮したりリユーさん——と、その奥様に扮したシルさんの姿があった。

絶叫を上げそうになる口を強引に閉じて愛想笑いを浮かべた。

なんで二人とも貴賓室ビッブルームに来てるんですかね？ 何故足を運べた？

あの二人の所持してた賭札チップの量からすると、此処に呼ばれる様な上客には程遠いはずだ。

って、もしかしてベルか？ 確か、そう『色を付けて』とかシルさんが言ってたが、当選した300枚の三六倍をリユーさん達に返したのだとすれば、資金は十二分に過ぎる。つまり戦犯はベルか……。

理由を考えていると、シャクテイさんに軽く背を突かれた。

「不味い事になったぞ」

小声で呟かれた言葉に思わず首を傾げる。何が不味い？

「ここで何か事トラブルを起こしてみろ、全員の身柄を一度保護する事になるんだぞ」

ガネーシャファミリアの立てた作戦では、何かしらの証拠を掴んでから事トラブルを起こす事で外に居る他団員に突入させ、この場に居る全員を一度保護という形で拘束。身分やなんかを確認して、強引な手段で攫われた女性を確保。それを証拠にテッドを糾弾して——あれ？

保護、身分を、かく……にん？ ……身分偽ってるエルフを拘束してしまつたら不味いよな？ しかも、それが指名手配犯でもある【疾風】リユー・リオンだとしたら？

……嘘だろ、暴れられないじゃん。暴れたらリユーさんを豚箱行きにする事になるし。

なんとか外の団員に連絡をとって作戦中止を伝え——無理

じゃん、現状既に賭博に参加する気満々なのにいきなり逃げるとか怪し過ぎる。既にここに足を踏み入れた時点で作戦変更はできない。

「ノースリス、勝てるか？」

「……無理」

いや、普通に無理なんですけど。

だって、俺は切札の順を予測して打てるっちゃ打てるよ？ でも、こういった貴賓室だと進行役が意図通りに切り分けしてくる事だつて多い。初手で『手役無し』にさせられ、拳句他の俺より手番が早い協力者が手札破壊、遅い協力者が役揃えなんて方針を取られたらどんな引きでもまともに手役が揃う事なく潰される。

というか前世で調子に乗って貴賓室で荒稼ぎしようとした結果、全員が切札の並びを予測して手役潰し役と手役揃え役という形で数人がかりで袋叩きにされて、『同一数字二枚一組』以外に手役揃えられずに潰された事がある。

当然、いくら馬鹿でも場末の酒場でやってるような協力者同士で手役教え合って強い奴だけが勝負して他が下りるなんて間抜けな戦法は使つてこないだろう。

つまり、数で押される可能性が高い。

「隣、失礼しますね」

「ええ、どうぞ」

俺の隣、角刈りのヒューマンとの間にリユーさんが腰掛け、シルさんの分も場所が空けられリユーさんと並んで腰かける。これで賭博参加者は七人、か？ 多分リユーさんとシルさんの二人は一組として扱うだろうし。

リユーさんにも混合酒が振る舞われる。獲物に出す酒は決まってレディーキラー系の混合酒みたいだな。何というか、酔わせて判断能力奪うのは常套手段とはいえここまであからさまなのはどうなんだ？ 他の招待客の酒が軒並み普通なのに、いきなり度数の高い混合酒を振る舞う時点であら。

「経営者、先ほどから見かけるこの麗しい方々は？」

「彼女達は、まあ聞こえは悪いかもかもしれませんが、私の愛人たちです」

リユーさんが自然に飛ばした質問に経営者が傲慢げに答える。愛人、収集品ね。

「自分で言うのもなんですが、多情な男である私めの求愛に真摯に応えてくれました」

多情？ 下半身が反応する美女を片っ端から攫ってるのでは？

それは愛情ではなく性欲だろうに。ましてや応えざるを得ない状況に陥れて強引に連れ去ってそれは無い。

「しかしそんな美姫達を独り占めしようものなら美の女神から小言が飛んでくることでしょう」

下種を見る目で見下されそうです。

「そこで僭越ながら皆様の目を潤す一役になって頂ければと、こうして酌に協力して貰っているというわけです」

作り物の笑みを浮かべている美女を見て何が楽しいんだか。純粹に人形を見ている様で気持ち悪くなってくる。

経営者の言葉にリユーさんが不愉快そうに表情を歪ませ、シルさんが口元を羽根つきの扇子で隠す。リユーさんの反応があらゆるさま過ぎるが、テッドは気付いていないみたいだ。

どうにもおかしいな。セルバンティスに扮するテッドという人物。調べた限りでは特に特徴らしい特徴の無い小悪党といった情報しか出てこない。にしてはだいぶ立場が高い、というか能力不相応な身分に収まっている。だからこそ能力隠してるかもと警戒してるのに、リユーさんの大根役者な演技すら見抜けない。もしかしてわざと？

「なるほど、そういう事でしたか」

「いやあ、本当にうらやましい！ せめて一日でも私の相手をして欲しいものだ」

贅沢太りの男の言葉にリユーさんが下種を見る目を向けてるのに、誰も気付いていない。むしろ気付かぬふりをしてるのか？ もしこれが演技だというのなら、俺ですら見抜けないぐらいに完璧な演技だ。

敵の数が多いし、此処は引きたい。むしろ入ってくるべきではなかった。

口々に経営者が困っている美女たちを褒め称える協力者たち。いつそ不自然過ぎる——まるで、褒めないといけないと脅迫されてるかのような反応だ。

「……そういえば、ここに来る途中、経営者は傾国の美女を手に入れたと耳にしました」

「おお！ 私も聞きましたぞ。なんでも遠い異国から娶ったと」

「どうか我々にも見せていただきたい！」

この時機での、新しい収集品、か。多分、というか十中八九、アナ・クレーズだろう。最近連れ込まれたのって彼女以外居ないし。

というかりューさんが視線で人が殺せそうなんだけど。アレ、本気で気付いてないの？ むしろあの視線を無視してんのってすごい肝が据わってると思うんだが。

「がっはっはっは、皆さんも耳が早い！ ええ、仰る通り新しい愛人として迎えたのです。せっかくですので紹介しましょう」

……むしろ、この時機での紹介。これは侵入している俺やガネーシヤフアミリアに対する宣戦布告か？ 招待客を招き入れての、宣戦布告。つまり、言外に『お前達を逃がさない』と言っている訳か。

経営者が一人の黒服に指示を出すと、彼が奥に設置された両扉の奥に向かう。しばしの沈黙の後、その両扉を黒服二人が恭しく開け——なるほど、神に婚姻を申し込まれる訳だ。

美しい女性が立っていた。ただ、眼が死んでる。物憂げな表情を浮かべた美女だが、両親の顔を思い浮かべると本当に血が繋がってるのか疑問を覚えるぐらいに美しい。まあ、稀にあるぐらいの感じだが。「初め……まして。アンナと申します」

視線を合わせる事もせず、床に視線を落としたまま彼女は囁くような小さな声で挨拶の言葉を落とす。どう見ても、不本意なのが見て取れるし、気分がすぐれないのがわかる。

「これはまた……器量良い」「ええ、美しい」「女神が地に賜った美とはまさにこのこと」

テッドの協力者共もその美には見惚れたのだろう素の言葉で褒め称えている。が、その次に飛び出した言葉に溜息を飲み込んだ。

「良く見つけてきましたね経営者」

ああ、やつぱりどういった経緯で彼女がここに連れてこられたのか知ってる。脅されているだけではない、秘密の共有者として甘い蜜を吸う事を目的にしているのが丸わかりだ。反吐が出る。

「がははっ、実は異国の地で偶然巡り合いましたな」

絶対嘘だぞ。だってコイツ、最近ここに籠って外に出てないし。

迷宮都市オラリオの出国記録にも国外に出て行ったって記録は何処にも残っていない。もし本当に都市外出で行っていたのだとすれば、関所である門を通らない不正入出国で犯罪だぞ。そこらの裏合わせぐらいしとけよ。

「きつと神のお導きだったのでしよう。この愛らしさと美しさに私も虜になってしまったのです」

下半身がビンビンに反応したんですね。なんでこう、権力を握ると性欲に忠実になっちゃうのかなあ。

経営者オーナーの傍で俯いて控えるアンナさんの表情は、どう見ても死んでいる。絶望してる様にも見える。だというのに協力者ゲストは彼女の美貌を褒め称えるのみ。

「魔銃使い」殿、彼女の顔に何か？」

アンナさんの表情を伺っていたら経営者オーナーに目を付けられてしまったらしい。まあ、こんだけあからさまに見てりやそうなるか。

「いえ、同じ女性として羨ましく思う程に綺麗だったもので」

まあ、その所為でこんな所に攫われてしまってる訳だし。あんま羨ましいとは思わんのだけどね。もつと、地味で目立たない方が色々やりやすいのだ。

「魔銃使い」殿の美貌も彼女には負けていないと思いますぞ」

「ええ、私もそう思いますぞ」

口々に俺の容姿を褒め始める協力者共。反吐が出そうな誉め言葉に微笑んで返す。正直、気持ち悪い褒められ方だ。

「マクシミリアン殿も随分と熱心に眺めておられますな」

獣人の貴族の言葉にマクシミリアン殿、リユーさんに視線があつまる。変な事言わないで欲しいのだが。

「いえ、ただ………彼女と似ている娘を知っています」

おい、変な事言わないでくれって祈ってるんだけど？ つていうか本気で此処で宣戦布告しちゃうの？ 冗談にしても酷いんだが。

テリー・セルバンティスに扮しているテッドの表情が固まり、協力が口を閉ざす。

テッド、知っているか？ 沈黙は是成りと言うんだぞ？ これ、演技か？ 演技だとするとこのテッドと言う男は食えないどころか最悪の敵なんだが。どっちかわからなくて怖い。

「……というど？」

「とある知人の話なのですが。彼は悪漢達の誘いに乗ってしまい、賭博に手を染めて財産を奪われた挙句は……」

まるで賭博に手を染めさせられたかのような言い方だが、そもそも賭博癖があつたんだよなあ。

「自慢の一人娘を攫われてしまったのです」

言外に『その娘がその一人娘です』と真正面から喧嘩吹っ掛けるリユーさん。ちよつと、ちよつとだけ考えれば今喧嘩吹っ掛けるのが不味いとわかるはずなんだが。

あからさまに反応したアンナさんはわかる。だがテリー・セルバンティスも目を見開いて驚いているのは演技か？ こいつ本当に演技か？ 演技なのかどうかわからん。

「賭博に応じてしまった父親が間違いなく愚かだったのでしようか……」

愚か過ぎて爆笑モノです。いや、本音を言うとりユーさんに殴られそうだし絶対に言わないけど。

「いざ詳しく調べてみると、どうやらその一件はとある者の差し金だったらしく」

おい、リユーさん本気か。宣戦布告だろそれ、もう取り返しがつかないぐらいに喧嘩売ってるぞ。糞、どうせこのあと賭博する事にはなるんだらうが……。

いや、俺一人で六人相手にするより、リユーさんと連携とつて六人を相手にする方がまだ簡単か？

「とある者は麗しき娘を手に入れる為、ならず者をけしかけ、全てが終わった後は悠々と彼女を懐に囲っているそうです」

『え……………?』

協力者が本気で? みたいな表情してる。どちらかと言うと、秘密がバレた事よりも、その秘密を知って喧嘩を吹っ掛けたマクシミリアン殿に『お前こいつに喧嘩売るとか本気か?』みたいな驚き方してる辺り、全員とは言わんが何人かは攫われた女性の為に喧嘩売って返り討ちに遭ったのだろう。

まあ、それが今となつては飴と鞭で言いなりになつてるので救えないが。

「心が痛む話でしょう?」

もう本心を隠す気が微塵も無いのか、下種を見る様な瞳で協力者を見回すリューさん。二人ほど気まずげに視線を逸らし、二人は逆に睨み返す。テリー・セルバンティスは視線を若干落とし、リューさんを鬼の形相で睨みつけていた。

完全に、敵対したな。もう手遅れだ、この後の賭博で勝つ以外に事を起こさずに切り抜ける事が出来なくなった。

とりあえずアンナ・クレーズの姿は確認したので後は脱出するだけなんだが、無理だろうなあ。

「私はその少女の身の上を案じ、今でも行方を追いかけています」

リューさんのその言葉は、言外に『アンナを取り返す』と言っているも同然。もう、頼むからやめてくれ。

「……………ノースリス、今のは宣戦布告ではない。牽制だ」

耳元でシャクテイさんに囁かれ、思わず言葉を失う。今のが宣戦布告ではなく牽制だと?

面白い冗談だ。アレを牽制と言い放つのなら、相手の顔面に右ストレートぶち込んで『軽い牽制だ』と言い放つレベルのアホだ。

「……………もう一度言うぞ、あれはリオン流の牽制だ」

あつはつは、笑えない冗談はやめてくれ。いくらリューさんがポンコツでも宣戦布告の台詞を牽制として使ったりはしないだろう。

「……………」

……………本気?

「本気だ」

おい、おいおい！ 本気かよ!? そんな牽制聞いた事ねえぞ!?

真正面から喧嘩吹っ掛けて牽制とか口が裂けても言えないぞ！

もうここから正面衝突不可避な案件だろ?!

リユーさんももう少し考えて発言してくれよ、ポンコツ過ぎるにも程がある!!

「興味深いですなあ。マクシミリアン殿?」

場を見回し、協力者、そして俺やリユーさんにも圧をかけてから口を開く。

やる事がいちいち小物臭いのが、演技なのか本性なのかわからん。

「ちなみに、今更ではありませんが。貴殿は彼のフェルナスの伯爵と聞いておりますが……」

「ええ、ただの田舎貴族です」

混合酒で舌を湿らせたリユーさんが饒舌に喧嘩を吹っ掛ける。

「融通が利かず、道を踏み外した行いを看過できない……頭の固いエルフです」

要するに『お前のやってる事は知ってるし、絶対に許さない』って事でしょ? リユーさんこわーい。

いや本当に怖いなこの人。危険を一切考慮せずに喧嘩売っていったぞ。なんというか正義馬鹿と言う言葉がこれ以上ない程に似合う人だ。だが、それに巻き込まれてる俺にもちよつとは配慮してくれ。

つか、此処まで喧嘩売ってるならもうどうしようもないな。

「……どこの何方と勘違いされているのか知りませんが」

「勘違い? 何を言うのかと思えば冗談は止して頂きたいですね。経営者」

リユーさんがここまで場を掻き乱した訳だし、今更喧嘩売つてもかわりやしない。片田舎の貴族と言う肩書を持つマクシミリアン伯爵より、迷宮都市に住まう俺が言った方が説得力あるだろ? 仕方ないから俺も宣戦布告しとくかあ。

「先ほどはつい誤魔化してしまいましたが、彼女の顔に何処か見覚え

があつたのです。花屋で日雇バイトしているアンナ・クレーズさんですよ。ね。その人」

俺の指摘にセルバンティス氏が固まる。その反応は、わざとらしいな。むしろわかかって招待したんじゃないのか？ だって迷宮都市オラリオに住んでる冒険者だぜ？ アンナさんの知り合いまたは彼女について知っている可能性はゼロじゃないつてのに、俺を招待した上で彼女を紹介した訳だし。最初からその辺り考慮して俺がアンナさんを顔を見ている時に突いてきたのだと思つていたんだが……反応がチグハグ過ぎる。

この驚き方も素に見えるし、此処で驚く必要性が一切感じられない。何か俺にはわからない高度なやり取りでもしてるのか？ とりあえず喧嘩吹っ掛ける以外に無いし、むしろ相手の足並み乱す意味でも荒立てておくか。

「誤魔化しも不要です。不愉快極まりない虚言の数々に反吐が出るつてモノですよ」

「……私が嘘を口にしてると？」

「其方の美女、帝国で知られる歌姫でしょう？ そちらの娘は隣国で知られる宿屋の看板娘」

お前の悪行全部知ってるぞ。ほらどうすんだ？ 此処で取り押さえるか？

「……………いやはや、可憐な容姿をしているかと思えば、随分と早合点をするご様子」

いくら何でもここで喧嘩は買わないか。

「ならば、賭博ゲームをしませんか？」

いや、しねえよ。ギルドとガネーシャファミリアに報告すれば終わる案件だし。つて言つても聞き入れられないんだろうなあ。周囲の黒服がそれとなくこの卓テーブルを囲む様に動いてるし。出来ればさつと認めて自首してくれたら話が簡単に済んだのになあ。

「勝者は敗者の願いを聞き入れてもらうのです。そう、「魔銃使い」殿が先ほどまで行つていた賭博ゲームの様に、ね」

……ああ、俺が『なんでもする』つてのを対価チップにしてたのを口実に

する気か。つまり、マクシミリアン、リユーさんを巻き込む気満々な訳か。

「更に、賭博ゲームに使用するのはすべて最高額の賭札チップ」

手際よく、と言うか既に用意されていた最高額の賭札チップ。倍率は、千。つまりあれ一枚で数百万ヴァリスの価値がある。

「お二人にお貸ししましょう。こうでなければ我々の求む賭博ゲームは成り立たない」

我々、の中に対立している俺とリユーさんが入っていない事は明白。一方的に叩き潰して命令を聞かせ、ついでに借金という名の首輪まで付ける気か。

「富や地位、名声をも勝ち得た私たちが真に欲するモノ……それは命懸けの緊張感。違いますか?」

違います。むしろ命懸けの緊張感ならいつも迷宮で味わってます。

何の変哲もない、山も谷も無い平穏な日常の中でヘステイア様やベル、リリ達とまったり日常を味わっていたいですが、なにか?」

「……いいでしょう。その賭博ゲーム受けます」

リユーさんの即答。迷いがまるで無い。これは、罨を見越した上でか? それとも罨に気付いてない? リユーさんと協力して相手を潰せばいいが、リユーさんが罨に気付いていない場合は洒落にならん。リユーさん庇いながら戦うとか不可能だぞ。

「【魔銃使い】殿はどうです?」

「……受けましょう」

むしろ受けなかったらタコ殴りでしょ? 既に周囲から殺気が向けられててヤバイ。魔術師とはいえ冒険者、それもアポロンの戦争遊戯ウォーゲームで名を馳せた強者。そんな奴に油断はしてくれないか。

「皆様もどうですかな! ここは最大賭博場グラン・カッソ私とマクシミリアン殿、そして【魔銃使い】殿の三人だけの勝負では味気ない。条件は皆一緒です。勝者の願いは私が叶えましょう」

死ね。

「流石にお前の命が欲しいなどと物騒な事は御免ですがな」

流石に死ねは駄目だったか。まるでこっちの内心を読んできた様

な発言しやがって。しかもこの流れだと協力者^{ゲスト}全員参加じゃん。リユーさんの方は特に気にしてる様子がな……待って、気にしてる様子無すぎなんだけど、もしかしてリユーさんってセルバンティス以外は敵として見てない？

不味い、リユーさんが相手の罠に気付いて無いっぽい。俺とリユーさん以外の全員が結託した敵だぞ、早めに気付いてくれないと元手の賭札^{チップ}が無くなる。

「お二人は何か希望はありますか？ 無ければポーカーを行おうと思いますすが」

「構いません」

「……ええ、まあ良いですよ」

リユーさんに熱い視線を送ってみるが、彼女の視線はセルバンティス氏に固定されていて気付いてくれない。

ヤバい、詰んだかもしれない。

「では、勝敗は賭札^{チップ}の有無。元手の賭札^{チップ}が全て無くなった時点で、その者は敗者です」

リユーさん気付いて、めっちゃ罠。これ凄く罠だから！ セルバンティスだけじゃなくて他参加者全員が協力者で叩き潰しに来てるから！

第一四三話

貴賓室ビツブルームの最奥の賭博卓カジノテーブルにて行う事となった賭博は『フロップポーカー』。

自分のみの手札を2枚、それと卓中央に置かれる参加者全員が使用できる共通札カード5枚の内の3枚を組み合わせて手役ハンドを作る。

参加者はセルバンティス、彼の共謀者4人、リユーさん、俺の計7人。

一人当たりの賭札枚数は500枚、卓上の合計3,500枚となる。全てを搔つ攫えば勝利、手元の賭札チップが無くなれば敗北。

開幕直後から不正していないかの睨み合いをしているリユーさんとセルバンティス側の黒服達に溜息を零しかけつつも賭博開始ゲームスタート。

「では、手始めに20枚から賭けるとしましょうか」

「私はその倍を」

進行役の切り混ぜデイレラーに違和感は無し。初期確認の時に切札トランプの欠けも無し。配られた札カードも予測通り。

ふむ、普通の進行役だ。特に操作してきてる感じもしない。

リユーさんの方は真剣な表情で相手の意図を読み取ろうとしているが、無意味だ。

「上乗せ」

初っ端から『駆け引き』で勝負を仕掛けていってるリユーさんに若干呆れざるを得ない。まだ相手の手の内も分かっていない状態で勝負に出るのは不味い。

卓をそれとなく見回していると、太っちょの奴が飲み物を注文オーダーした。

「アルテナワイン三〇年モノを」

………手役ハンドは『フルハウス』で『アルテナワイン三〇年モノ』。まあ、無いとは思いますが飲み物の注文オーダーで仲間内ハンドに手役を知らせてる可能性もあるし、記憶しとこい。

リユーさんの手役ハンドは『スリー・オブ・ア・カインド』だし負けだな。俺は『ワンペア』で勝負にすら出れない。当然『下りるフォールド』だ。

それにしても、やる気を感じられない欺瞞だ。セルバンティス側の全員が上っ面だけの欺瞞ブラフをしており、勝負する気が感じられない。

「では、手役開示を」

「フルハウス、私の勝ちですね」

予測通りの手役ハンドが出てきた。何と言うか、ズラされてるかもしれないと警戒はしてるんだが、どうにもそんな技術は無いみたいで二度目も予測通りの手役ハンドだ。

それでもって、二巡目でも別の一人が飲み物を注文オーダーしてる。

『フォー・オブ・ア・カインド』で『蜂蜜酒ミード』。

………そしてリユーさんやい、相手の上っ面だけの欺瞞ブラフを読んで駆け引きしても意味無いよ？

貴賓室ビップルームはテリー・セルバンティスの領域テリトリーだ。

彼に逆らうような愚か者には『洗礼』を行い、借金を課し、金と女を奪う。一度でも彼に頭こぶを垂れた恭順者には手厚い待遇を。

『洗礼』の旨味——貴賓室ビップルームに招かれる程の資産家であり、『洗礼』を浴びて苦境に立たされた新参者に恩を着せ、懐柔する事で自分たちの懐が潤う事を知った招待客ゲストは、彼に従順に従う共謀者へと成る。

何より最大賭博場グラン・カジノではギルドですら介入を許されない。

もし力で訴えかけてきたとしても、高い金を払って雇った『黒拳こっけん』ファウスト、『黒猫』口口の二人、上級冒険者ですらおの程の実力者が屠る。

これほどの力と地位を手にした彼は、自身を『賭博の楽園の絶対王者』と——否、『迷宮都市オラリオの王』とすら自負している。

そして、そんな彼の前で『洗礼』を浴びる二組の愚か者が居た。

「上乗せ」

片や真剣な表情を浮かべ、セルバンティスのみせかけだけの欺瞞ブラフを読み取ろうとするお高くとまったエルフの若造。王を自称する彼らアンナモを奪おう等とした、その身一つで悲劇の娘を助けに来た騎士ナイト気取りの愚か者。

そんなエルフの手元の賭札は既に半分を切っていた。
「同賭け」

片や小さく欠伸をしてやる気を感じさせない小人族の冒険者。戦争遊戯で名を上げ、その時の鏡越しに見てセルバンティスが興味を持った娘。

派閥に所属する冒険者、賭博場とは無縁そのような雰囲気を持つ娘でもあった彼女は歯がゆくも手が届かない所に居た。しかし何の因果か彼女はこうしてこの場に足を運んでいる。

彼の支配下に、招かれた。

「……私の勝ちですね」

「マクシミリアン殿はお強いですねえ」

騎士気取りのエルフは叩き潰し、目の前で伴侶を奪い去る。今まで彼に歯向かおうとした愚か者共と同じ末路を辿らせてやるつもりである。

小人族の方はまだ手を出していない娘と、これから奪う伴侶と共に食ってしまったおうとほくそ笑んでいた。——それが、三〇分前の出来事。

「ぐ……」

「また、やりやがった」

取り巻きの招待客の言葉に内心舌打ちをしながらも表面上は笑みを浮かべるテリー・セルバンティス。

「いやあ、本当に……お強いですね」

最初の所持賭札は一人500枚。
セルバンティスの現在の所持賭札は200枚しかない。それは彼の取り巻きも同様だった。

騎士気取りのエルフの所持賭札が300枚、そして——やる気の無さそうな小人族は2000枚を超える賭札を保有していた。

彼女、ミリア・ノースリスの勝率がおかしい。それに気付いたのはかなり早い段階であった。当然、セルバンティスは不正を疑い、彼の取り巻きや護衛の者達も全員でその不正のタネを明かそうとした。

しかし、結果は白。怪しくはあれど証拠がない。

彼女の手は小さすぎて札の入れ替え等出来る筈も無く。他の参加者の手札を盗み見る動作も無い。

彼女の背後に立ったまま微動だにしない傭兵が何かしている訳でもなかった。つまり不正は一切行われていないのだ。だというのに、ミリア・ノースリスという娘は次々に勝利を飾っていく。

——だが、例外があった。

「また、マクシミリアン様に負けてしまいましたか」

「……………その様ですね。それと、一人脱落ですか」

激しい上乗せ合戦。それに挑んでいた取り巻きの一人の所持賭札が底をついた。項垂れる一人を他所に、残念そうにマクシミリアンに渡される賭札を見送るミリア。

そう、例外だ。彼女はマクシミリアンにだけは負ける。

セルバンティスが周囲の招待客と目配せを行う。残っているのは彼を入れて四人。

「では、参加費を」

「10枚でいきましょう」

「わ、私も10枚で」

セルバンティスを皮切りに、全員が参加費として最低額を賭ける。当然、ミリアやマクシミリアンも参加してくる。

手札となる二枚の札が配られ、二度目の賭け時間が始まった。

「んー、上乗せ40枚」

「……………降りるで」

小人族が一気に釣り上げ、エルフが下りる。

この時点では共通札は場に出ておらず、手役がどうなるかわからない。

しかし、この時機でミリア・ノースリスが上乗せしてきた場合、必ず彼女が勝利する。

進行していく賭博、共通札が開示された所で、招待客の一人が手を上げた。

「アルテナワイン、三十年モノを頼むよ」

これが彼、テリー・セルバンティスと共謀者が定めた暗号。内容は

『フルハウス』。

自身の手役ハンドに応じて注文オーダーを行い、最も強い手役ハンドのみが勝負に出て、他は適当な欺瞞ブラフを用いて降りる。

単純に人数が多いセルバンティス側は手役ハンドが揃う確率が高い。それをを用いる事で今まで『洗礼』を浴びせてきていた。——しかし、今回は上手くいかない。

「上乗せレイズで」

「おや、【魔銃使い】殿と一騎打ちですか……どうします?」

彩光異色の瞳を言葉を投げかけた招待客ゲストに向け、にこりと微笑み、彼女は宣言する。

「当然、上乗せレイズ50枚で」

置き場ポットに追加される賭札チップの山。

招待客ゲストが怯んでいるのを見て、セルバンティスは表情を僅かに顰める。

「だ、だいぶ強気ですな……同賭コールけで」

「あら? 弱気ですね。最後まで上乗せレイズしますよ」

下りてくれ。内心そう叫びながらも四度目の賭ベッティングタイムけ時間を終了手役開示ショーダウン。

「フォー・オブ・ア・カインド、私の勝ちですね」

相手が乗ってきたら共謀者の中から最も強い手役ハンドの者が勝負に出る。そんな単純な仕掛けではあっても、欺瞞ブラフや仮ポーカーフェイス面を用いて馬鹿正直に戦いを挑んでくる間抜けは簡単に倒れていく。

だというのに、この小人族バルウムは何でもない様に『勝つ時だけ勝負に出てくる』。

「……少し、待っていただけますか?」

既に、我慢の限界であったテリー・セルバンティスが声を上げる。周囲の招待客ゲストも彼が何をしようとしているのか理解しているのか黙り、マクシミリアンとミリアを見た。

「何か?」

「……………ようやく、ですか」

すまし顔を続けるエルフに、呆れの表情を浮かべた小人族。

この二人は共謀者だ、とセルバンティスは睨んでいる。

マクシミリアンの所持賭札チップが減るたびにノースリスがわざと負けて賭札チップが無くならない様に配慮しているのだ。怪しくないはずがなかった。

「いやはや、【魔銃使い】殿も人が悪い……まさか不正イカサマをお使いになるとは」

「……っ」

「……………はい？」

ほんの僅かにマクシミリアンが目を見開き、ノースリスはきよとんと呆けた表情を浮かべる。

前者の反応から自身の考えが間違っていないと判断したセルバンティスが静かに立ち上がり、ノースリスを指さす。

「お前は不正イカサマをしている」

「……私が、不正？ ふむ、理由を聞いても？」

酷く落ち着いた態度で返答する彼女に対し、周囲の黒服が逃げ場を潰す様に囲む。

このまま糾弾して彼女を不正イカサマを使用したとして捕縛してしまおう。あわよくばそのまま首輪まで付けてしまえば良いとセルバンティスがほくそ笑み、他の招待客ゲストも彼女を捕まえる事で得られる利益に目を暗く輝かせる。

「随分と図太い態度ですな。流石冒険者と言ったところですね」

「御託はいりません。率直に、私が不正イカサマをしている証拠を提示してください」

椅子に腰掛けたままセルバンティスを見上げる小人族。生意気な態度だと彼が睨み返すが、彼女に動揺の気配は感じられない。酷く落胆したような、興味を失った様な視線がセルバンティスに向けられる。

「【魔銃使い】殿は勝負に出たとき、必ず勝利していますよね」

「ええ、明らかにおかしい」

「それに、マクシミリアン殿以外に負けていない」

「もしやマクシミリアン殿と共謀者ゲなのでは？」

招待客達^{ゲスト}が追撃する様に言葉を重ねれば、エルフが僅かに身を固くした。対し、小人族は呆れと軽蔑の表情を浮かべて肩を竦める。

「まさか、私が勝ち過ぎているから不正^{イカサマ}を疑っているのでしょうか？」

「ええ、その通りですとも。【魔銃使い】殿、貴女の勝ち方はおかしい」
「そうでしょうか？　そうセルバンティスが声をかけると、彼女は目を細めて彼を睨み返した。」

「私がどんな不正^{イカサマ}を行っているのか、説明できると？」

生意気な態度だ。明らかに不正^{イカサマ}をしている癖にとセルバンティスが内心吐き捨てると同時に、彼女の不正^{イカサマ}のタネがわかっていない彼はそれを悟らせぬ様に笑みを張り付けて口を開く。

「我々の手役^{ハンド}を読んでいる。そうでしょうか？　そして、マクシミリアン殿に賭札^{チップ}を分け与えている。つまり共謀者だと睨んでいるのです」
どのみち、不正^{イカサマ}を行った彼女をそのまま返す積りは無い。此処で大人しく負けていればそれなりの扱いをしたらだろうが、変に噛み付いてくる様な小娘は大人しくなるまで躰^{しっけ}をしなくてはいけないのだ。

セルバンティスの嗜虐的な視線で射抜かれた小人族は——盛大な溜息を零した。

「はあ、なるほど証拠^{イカサマ}は無いけど状況から不正^{イカサマ}だと疑われた訳ね——

——大正解。私は不正^{イカサマ}をしてるわ」

両手を上げて降参を示しながらの、唐突な暴露。これから不正^{イカサマ}を認めるまで黒服に取り押さえさせる積りであったセルバンティスもこれには啞然。マクシミリアンも驚愕の表情を浮かべて固まり、傍らに居たシレーネがその腕を掴んでいる。

「まさか、認めていただけるとは」

「まあ、否定できないし」

興味無さげにグラスを傾ける小人族。己の不正^{イカサマ}を暴露にしたにしては余裕の態度だ。

流石におかしいと違和感を感じていると、彼女が賭札^{チップ}を一枚手に取り弄びだす。

「まあ、流石にどうやって不正^{イカサマ}してたか説明はした方が良いわよね？」
ピンツと弾かれた賭札^{チップ}がクルクルと回転しながら宙を舞う。何か

する気かと黒服が身構え、仮面の傭兵と小人族の娘をいつでも拘束出来る様に気を張る。

「不正イカサマと言っても、大した事ではないのよ？　ただ——セルバンティス様達が使っていた暗号を読み解いただけ」

彼女の言葉に、場の空気が凍り付く。

暗号を読み解いた。彼女はそう口にしたのだ。暗号、そう言われて真つ先に反応したのは、セルバンティス本人。僅かに目を見開き、彼女が口にしようとしている内容に思い至る。

「手札が出揃う度に飲み物を頼む人が最低でも一人以上居て、なおかつその人物以外が勝負を降る。そしてその人だけが勝負に出てくる——飲み物の種類が暗号となっている」

この場に至って、テリー・セルバンティスは気付いた。

彼女はいつからか気付いていたのだ。セルバンティス達が使っていた暗号——不正イカサマに。

「アルテナワイン三〇年モノが『フルハウス』、蜂蜜酒ミードが『フォー・オブ・ア・カインド』、全部説明すると長くなるけど、必要ならするわよ？」

逆に、利用していたのだ。

何故、彼女はセルバンティス達との勝負に負ける事は無かったのか。

何故、彼女はマクシミリアン相手にだけ負ける事があったのか。

何故、彼女は自らの不正イカサマを認め、明かす真似をしたのか。

——暴かれても、痛くも痒くも無いからだ。

「で、どう？　貴方たちがやっていた不正イカサマってこんなモノでしょ？　わざわざ手役ハンドを伝えてくれる相手に、負ける事等無い。

そして、不正イカサマを疑われても問題ない。相手がしている暗号を利用しただけだから。

「正直呆れるわ。わざわざ手役ハンドを教えてくれるなんて。おかげでこんなに勝ってしまったもの。あ、マクシミリアン様とは共謀してないわ。だってあなた達と違って手役ハンドを教えてくれないし」

不正イカサマを疑い、暴いてやろうと糾弾したセルバンティス本人が、他の

招待客が共謀者だった事を暴露されたのだ。

ミアの不正を疑われた時、リユーは盛大に焦った。

嵌められたのに気付き、『駆け引き』や『欺瞞』で勝負に挑んでいた自身の勝ち目が無かった事に気付いた時には既に手遅れ。暴れようかと腰を上げかけるも、ミアを巻き込んでいる事に気付いて自制した。

このまま負ければ何をされるか——シルに向けられた下種な視線から想像は容易い。

焦燥しながらも勝負していたリユーに対して助け舟を出したのは、ミアだった。

全ての札の位置を記憶、予測して勝負している彼女は単純に強かった。そして、リユーが勝つ数少ない機会において彼女はあえて勝負に乗ってきて、大量の賭札をリユーに擦り渡す。

それがなっていたからこそ、勝負にならずに潰されるはずだったリユー・リオンは勝負を続けられた。

だが、やはりその不自然な行動はセルバンティスの目に留まり、不正を指摘される事になる。当然だ、あまりにもわかりやすすぎるやり方で荒稼ぎをしていたのだから。

暴れて有耶無耶にすべきかと身を強張らせるリユーに対し、ミアの方は驚く事に自らの不正を認めた——だけではない。

セルバンティス達に必ず勝利していた理由。暗号でのやり取りに気付いてそれで勝つ時だけ賭けた。

リユーにわざと負けて賭札を渡していた理由。わざとではなく普通に勝負していただけ。

己の不正を認めた理由。相手がしていた暗号のやり取りを利用したと糾弾するため。

「すげえ……」

傍らのシルが口元を扇子で隠して呟く。

リユーもまたシルと同様に感心し、納得していた。

「これが、彼女のやり方か……」

よほどの事が無ければ発覚しない記憶と予測と言う禁じ手に近い技能。それを使って荒々しく稼ぐ姿は若干らしくない。最初の方は大人しかつた彼女が途中で急変した様に荒い勝ち方で目立ちだしたので。

当然、指摘される事を予測しきっていたのだろう。

事を起こす前に、それに対して反撃の手札を用意しておく。事前に勝てるかわかっている状況以外では戦わない。それを徹底していたのだ。

「な、わ、我々が共謀者だど？」

「証拠はほら、貴方たちの暗号を読み解いて勝ち続けたこの賭札の山」
「ぐ、偶然ではないですかな？」

獣人の貴族の言葉にミリアの口角が歪む。ニイと擬音が着きそうな程に凶悪な笑みを浮かべた彼女は、ゆっくりとした仕草で卓を撫でる。

「偶然、そうですか偶然でしたか———でしたら私の不正は無かつた事になりますね」

「なっ———何を、言っつて！」

「だってそうでしょう？ 貴方たちの暗号がただの偶然だったって言うのなら、それを読み解いたと思ひ込んだ私の読みもまた偶然そうでしょう？」

上手い返しだ。リユースは内心舌を巻いた。

相手が共謀者だった事を認めれば、その時点で勝負の公平性が疑われて無効試合。

もし認めなければ、彼女が自身で語った不正はただの偶然。思い違いとなる。

どちらに転んだとしても、自身の利にしかかなり得ない。たとえ此処で彼女が大暴れして貴賓室を滅茶苦茶にしたとしても、正当性は彼女に有る。

ただ暴れてアンナを連れ戻す事しか考えていなかったリユースと違い、たとえギルドやガネーシャファミアミアに拘束されても何事も無い

ように手を打っているのだ。

「で？ セルバンティス様………コレは偶然？ それとも、必然？」
手元の山となった賭札チップを指し示し、ミリアが艶やかな笑みを浮かべる。

「いやー、参りましたな。不正イカサマを疑って申し訳ない。ただの偶然だったご様子」

そういつて、セルバンティスは静かに椅子に座り直した。うわ、この状況で偶然って言い張りやがったよコイツ。

下らない暗号なんて使って数で袋叩きとか、やり方が下手糞過ぎんだよ……つか、滅茶苦茶警戒してたのに出てくるのこれだけ？
ちよつとしよつぱすぎない？

他の共謀者ゲッも俺の返しにどう返答すれば良いのかわからずに黙っちゃもうし。ちよつと詰めが甘すぎるんだよなあ。

黒服共も下がり、シヤクテイさんが小さく『凄いな』とか呟いてる。確かにすごいわ。

「それで、賭博ゲームを再開しましょう。ああ、そうだ、「魔銃使い」殿に勘違いさせてしまった注文オーダーは今後無しにしましょうか」

「お、おお、そうですすな勘違いされても困りますしな」
「そうしましょう。それが良い」

セルバンティスの言葉に即座に反応する招待客共ゲスト。むしろこの空気でよく賭博ゲームを続けようと思ったな。

まあ、もう暗号は使つてこないだろうし、リユーさんが切り返していけるはずだ。彼女に目配せすると、小さく頷いてくれた。

今まで『駆け引き』とか欺瞞プロパフの掛け合いで勝負してきたリユーさんが割を食い、俺が卑怯な方法で敵から巻き上げた賭札チップをリユーさんに渡す形で拮抗させてきたのだ。

わざわざ相手から噛み付かせたのは警告兼様子見だったんだが、予想以上に嵌ったというか、勝手にはまってくれた。

「私は10枚賭けましょう。【魔銃使い】殿はどうします？」

「……………はあ、じゃあ10枚で」

いや、なんかもうやる気失せたわ。

一応、予測は続けていくが今まで通りにド派手な勝ち方はしない様にしよう。

二度、三度と賭博ゲームを続けていくが、暗号を使えなくなった相手は、なんとというか酷い。

基本、下フールドりるで様子見しているが、リユースさんの駆け引きが強いのだ。

まあそうだよな。暗号についてどつかれて動揺してる状態の欺瞞ブラフなんてあつてないようなもんだし。

やつちやえリユースさん。勝ってアンナさん引き取って帰ってくれ。

第一四四話

順調過ぎる程に何もなく賭博は進行していく。

セルバンティス側は既に打つ手無し、といった状況。それでもなんとかリユースさんから幾度かの勝利を得ては首の皮一枚で耐え凌ぐ彼らの涙ぐましい健気な抵抗をちよんつと突いて奈落に叩き落す。

「お疲れ様でした」

「そ、そんな……な……」

獣人一名ご案内、リユースさんの駆け引きに負けてトンだ。残りセルバンティス含め三人。

予想外な事に、セルバンティスの引きがなかなか捨てたモノではない。まあ、リユースさんの駆け引きに負けてるので結局はギリギリ拮抗状態にしかなくてないが。

んで、残り二人……小人族の方は既に死に体だな。あれはどうにもならん。

ヒューマンの方は中々に粘る、が……ダメ。アレももう詰んでる。

相手側三人の合計所有賭札はせいぜいが500枚に届くか否かしかないし、やるならさっさと不正してくんねえかな。もう止めも刺せそうだし。

「いやはや……参りましたな」

セルバンティスが汗を零しながらぼやく。

周囲の黒服が此方を強く睨み続けており、何処かに不正が無いかを見張り続けている。しかし、当然の事ながら俺の不正は易々と見抜けない。そしてリユースさんは……そも不正を行う性質でも無いし、当然の白。

残りの賭札の枚数も僅かな彼らが目配せをしているのを確認。進行役にも何やら指示だししてるっぽい。何かしてくるか？

進行役が切札を回収し、切り混ぜし始め——ゴンツと言う異音と共に給仕が盛大に躓いて進行役にぶつかり、彼が切り混ぜしていた札が卓上にぶちまけられた。

「何をしとるかー」

「す、すいません」

セルバンティスがこれ見よがしに給仕を叱り付け、申し訳なきように立ち上がった。

「いやはや、ウチの従業員がお見苦しい所をお見せしました」

「……いえ、構いません。失敗は誰しもありうる事ですから」

リユーさんが卓上にばら撒かれた札を集めながら返すのを見つつ、周囲を伺う。

目の前に散らばった内の一枚、『♥Q』を手に取り進行役に投げ返す。此方の予測の為にも一度切札トランプの欠けの有無を調べないと不味いな。

卓上にばら撒かれた札を集め終わった所で、覚え直す為に確認すべきだと俺が発言するより前に、セルバンティスが口を開いた。

「二応、札カードに欠けがあつてはいけませんな。皆さんに見える様に確認を」

こちらの予測に気付いてる訳ではないらしい？ 目配せをしてた辺りで確実に何か仕掛けてくるだろうとは思ったが、この行動の意図が読めない。

並べられた切札トランプを確認していくと、案の定というか一枚欠けが発生していた。『♥A』が無い。

「おや、一枚足りていませんな」
「何処かに落ちているのでは？」

小人族とセルバンティスの白々しいやり取り。何か意図があるみたいだが……とりあえず足りない札がどこかに落ちていないかと卓上を見回し——セルバンティスがポケットに手を入れているのに気付いた。余りの怪しさに口を開いてそれを指摘するより前に、リユーさんが声を上げた。

「ありました。どうやら卓の下に落ちていた様です」

彼女が差し出したのは『♥A』だ。意味深にポケットに手をつたんでいたの何かしていると決めつけてしまったが気のせいだったか？

リユーさんが札カードを差し出した瞬間、セルバンティスの笑みが深まった。

た。

「おや、おかしいですね——♥ Aは私が持っているのですが？」
彼の胸ポケットから一枚の札カードが出てくる。その絵柄スートはハート、数字はA、無かったはずのその札カードが彼の胸ポケットから出てきた。

そして、リユーさんが札を差し出したまま固まる。彼女の手にも同じ絵柄スートで同じ数字の札カードがある。

——何だこれ？ 嵌め、られ……え？ いや、何がしたいんだ？

「まさかマクシミリアン殿、すり替え等の不正イカサマを行っていたのでは？」

「……私は不正イカサマなんてしていない」

「では、なぜ貴方は同じ札カードを？」

いや、なんだこれ、凄い雑な言い掛かりの付け方というか。酷いゴリ押しだなおい。

「失礼、何がなんだかわからないのですが。どうしてセルバンティス殿はその札カードを懐に納めたのです？」

絶対におかしいだろ。少なくとも賭博場カジノで正式採用されてる切札トランプと同じモノを一般人が手に入れるのなんてかなり難しい。それに入場時にそういった切札カードを隠し持っていないかはしっかり調べられる。

卓毎の切札トランプもしっかり管理されているはずであって、どこかで盗んできたのならすぐわかる。

要するにリユーさんがどっかから持ってきたってのは無し。多分、普通に落ちて——落ちてた？ いや、違う。

少なくともばら撒かれた札は卓の下に落ちてはいない。だということにリユーさんは卓の下からソレを見つけた……？ あれ、これアレか？ 悪足掻きか？

「いやはや、もしやと思いましたが。マクシミリアン殿が不正イカサマを行っていないかを確認する為に密かに札を懐に納めたのですよ」

いや、苦し過ぎるんだけど。もっとマシな言い訳考えてよ……。

「言い掛かりだ。私は卓の下に落ちていた札を拾ったまでの事。不正などしていない」

「おや？ 確かに札はばら撒かれましたが、それは卓上での出来事。」

いくらなんでも卓の下にまで札がいくとは思えない」

「そうですね、いささかマクシミリアン殿の言う事は怪しいですな」
残ってる三人がねつとりとリユーさんを責め立てる。随分と、酷いやり取りだな。

まあ、確かに札が卓の下にあつたのは不自然だ。そこは認めてやろう。でもリユーさんが不正してた証拠にはならんよなあ？

グチグチとリユーさんの不正について文句を口にするセルバンティスの取り巻き二人。リユーさんの方が刺す様な視線を向けて彼らを睨むさ中、セルバンティスが両手を叩いて注目を集めた。

「まあ皆さん落ち着きましよう。マクシミリアン殿が実際に不正を行っていたかどうかは不明ですが」

「不正はしていないと言っている」

「……マクシミリアン殿も落ち着いて頂きたい。実際、卓の下にあるはずのない札を貴方が手にしていたのは事実でしょう？」

口が上手いって訳ではない。反論を潰そうとしてる節はある、か……正直かなり下手糞だな、酷過ぎて顔を覆い隠したくなる。

「……つまり、何が言いたいのでしょうか」

「ですから、マクシミリアン殿は信用ならないのです——代役として、奥さんが賭博ゲームに参加するという事で手打ちとしませんか？」

は？ はあ？ えつと、何？ リユーさんと真つ向勝負してたら勝ち目無さ過ぎだと。んでやけっぱちになってシルさんを代役で出させると要求する為にこんな下手糞な言い掛かりを？

……うわあ、見てるこつちが恥ずかしくなる。

リユーさんの方は何を企んでると言わんばかりにセルバンティスを真正面から睨みつけ、セルバンティスはにこやかな笑みで手もみをしつつリユーさんの伴侶役のシルさんを伺っている。

「いかがですか？」

「……それを私が受け入れるとでも？」

このままいけば潰せるというのに妙な言い掛かりをつけられてリユーさん激おこなう。いや、今すぐにも飛び出して暴れそうな雰囲気なんじゃが……頼むから押さえてくれ。というかシルさん相手

なら勝てるぞと踏んだセルバンティスに言いたい事がある。

——シルさん、リユーさんより厄介極まりない危険人物だぞ。

「リユー」

しおらしい様子シルさんがリユーさんの手に自らの手を重ね、目を見合わせて諭す様に彼女を抑える。今すぐにも暴れそうになっていたリユーさんがぴたりと停止し、シルさんと視線を交わして静かに俯いた。

それを見たシルさんが今度はセルバンティスに視線を向けて口を開く。

「経営者、一つお伺いしたい事があります」

「はあ、なんでしよう？」

「もし、貴方が勝利した場合。何を要求する積りか、聞かせていただけませんか？」

シルさんの質問の意図もわからん。ここで相手の要求内容を聞く？ どうせ一晩中好きにさせてくれとかじゃねえの？ 下半身で生きてそうな奴だし。

「私が勝った時の願い……？ そうですな、私が勝った暁には——

——「魔銃使い」殿とマクシミリアン夫人殿には晩酌に付き合ってくださいかと考えています」

わああ、欲張りだな。俺も付けるのかあ……とこの状況で性欲に塗れた発言をしたセルバンティスを冷めた目で見てたら背筋が凍り付く様な殺気が振り撒かれた。

黒服の殆どがその鋭い刃の様な殺気を浴びて動きを止め、唯一のL v. 3の用心棒二人が身構えていた。いや、別の賭博卓カジノテーブルについてる奴も一人立ち上がって構えてるな。誰だアイツ？

というか、その殺気の発信源は言わずもがな。己の知己に劣情を向ける下種を前にした潔癖症を患ったエルフ、リユー・リオンである。マジで殺す三秒前ぐらいの鋭い視線がセルバンティスに向けられるも、彼はニタリと笑みを浮かべてリユーさんを挑発しおる。死にたいんですかね？

「いやはや、お若い奥様をもらわれて羨ましい限りだと思っていたの

ですよ。私も是非そのお零れに預かりたいと思ひましてな。なあに、暇なときに晩酌に付き合つて頂くだけですよ——私と二人きりのね」

あんた死にたいのか。というか二人きりになったら俺の方が強い訳だし返り討ちにするぞ？

リユーさんが限界を迎えたのか拳を握つて椅子を蹴倒し——シルさんが彼女の腕を抱き込んで止めた。ナイス、止めなかつたら完全に戦闘^{ドシバチ}に発展してたわ。

「シル、止めないでください、この下種^{ゲス}は此処で——」

「リユー、落ち着いて」

一応、俺はマクシミリアン殿とは初対面つて事になつてるし、口出できないからシルさん頼むぜ。

周囲で完全に警戒姿勢となつている黒服達に対し、シヤクテイさんの動じなさはあるがたい。というか寝てない？ 腕組したまま微動だにしないせいで寝てる風に見えるよ？ クリスは寝てるけど。

「それで、どうしましょう？ 代役で奥さんが打つ、というのは」
それ言つたら不正^{イカサマ}してたセルバンティス達も総入れ替えじゃん。まあ面倒だし突つ込まないけど。

「わかりました。その勝負受けさせていただきます」
「シルツ！」

「リユー、大丈夫だから」

手綱を握つて暴れそうなエルフを抑えるシルさん。心の中で声援を送りつつも余裕の表情のセルバンティスに若干の同情心を向ける。

このままリユーさんと戦つて勝ち目が無さそうだから、弱そうなシルさんを引つ張り出す作戦なんだろうけど、実はシルさんの方がよっぽど強いとは考えてないだろうなあ。

「では、マクシミリアン殿の代役として奥さんが打つと——」
「経営者^{オーナー}、一つ我儘を聞いていただけませんか」

「……………はて、その我儘とはなんでしょう？」

シルさんの手が微かに震えている。それに気付いたセルバンティスがニタリと笑みを浮かべた。

言い掛かりをつけられて激昂しそうになった頭の固いエルフの夫を止め、自らが敗北した際の末路を知って恐怖に震える健気にも立ち上がろうとする妻、な雰囲気でも感じ取ったんですかね。

いや、多分、それシルさんの演技ツスよ、セルバンティスの旦那あ。あれは見事に騙されてる。

「私の命の恩人とお会いしたいのです。その為に、この部屋に呼んでいただければ、と」

はい？ シルさんの我儘の内容が意味不明過ぎるんですけど……他に協力者がいたのか？

「実は、私と主人の危機を救ってくださった『さる冒険者様』がいらっしゃって、今夜もお礼を兼ねて一緒に食事する予定だったので……けれど、もし……晩酌を務めさせて頂く場合は私は行けません」

声を震わせて不安そうな雰囲気を醸し出しながらも、それをどうにか封じ込めて気丈に振る舞おうとする姿で訴えかけるシルさん。流石というか、演技派だなあ……あんま好きじゃないけど。

「ですから……その、お別れを済ませたいのです」

言い掛かりをつけられての選手交代。手持ちの賭札チップの量からしてシルさんは優位のはずだが、彼女自身がそう思っていない事はその様子から見て取れる。まあ演技だけ。

要するに、優位な状況ですら自分が勝てるのか不安に感じているという演技をする事によって、自分はポーカーが苦手であるという印象付けをしているのだろう。

まあ、セルバンティスがいくら大馬鹿野郎でもここで外部から冒険者を迂闊に招き入れたりしないだろう。

「良いでしょう、特別にこの貴賓室ビッブルームに来る事を許可しましょう」

しないだろう。しないだ………ろう？　なんでしてんのっ!?

ニコリを笑顔を浮かべ、シルさんを舐め回す様に見ながら最期の健気な願いを叶えてやるかと言う雰囲気で許可を出した大馬鹿野郎セルバンティス。ちよつと、何を考えてんのかわかんないんだけど……監視下であれば接触オツケーだとも思ってたの？

暗号使って外部と連絡とられる可能性とか考えないのかよ、自分が暗号使ってたんだからそれぐらい予測しろよ。

シルさんが『さる冒険者』の特徴を黒服に伝え、会場内を探して貰う事数分。賭博が止まっていて暇な俺は適当に賭札を積み上げて山にして遊んでいた。

絶妙な均衡で縦に積まれた賭札、更にもう一枚てっぺんに追加しようとした所で、入り口の両扉が開かれる音と共に、両腕を掴まれた冒険者が引き摺られてくる。

真つ白い髪に、小動物を思わせるおどおどした雰囲気。何故こんな所に呼ばれているのか理解できておらずに挙動不審に陥っている少年。先日の戦争遊戯にて活躍し、格上を屠る偉業を成し得た『戦争遊戯の覇者』、そしてヘステイアファミリアの団長——ベル・クラネルが貴賓室に入ってきた。

「なっ……彼はもしかや戦争遊戯の……」

「間違いない、【リトル・ルーキー】だ……」

同時に、視線が俺に集中する。

俺の知り合いどころか、同一派閥に所属する冒険者だから当然。警戒心が強まり、余計な口を開けば間違いなく攻撃されるであろうチクチクとした空気にさらされる。

ベルが来たなら外部と連絡を、と考えるが無理か。いや、出来なくは無いけど……暗号だって用意はしてあるし。

シルさんがベルに駆け寄って行き、少年の手を取って微笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、クラネル様。この後付き合いが入ってしまって、お詫びのお食事は取り消しにさせて下さい」

「えっ、あ、あの……？」

何のことかさっぱり理解できていない。って事は事前打ち合わせも無しなのか。

戸惑って貴賓室を見回すベルと視線が合ったので小さく手を振って応える。即座に黒服が殺気を飛ばしてくる辺り、滅茶苦茶警戒されてるんだなあ。

「ミリ——」

「どうか今はシレーネとお呼びください」

ベルの言葉を遮った。シルさんがちらつとこつちを文句有り気に見てくるが、俺は悪くないじやろ。

「シレーネさん……今、何をしてるんですか？」

「……いけない、遊びですよ？」

シルさんの言葉にベルが何かを察し、俺を見た。いや、見られても応えられんよ、だって周囲からバリバリ殺気向けられてるし。余計な事言ったら潰すつて空気が満ちてる辺りで察してく……いや、何も察しないで鈍感っぷりを発揮してくれ。モテモテの主人公が女性からの好意に気付かないとかいう軽小説にありがちな不自然で気持ち悪いぐらいの鈍感っぷりを発揮してくれ！ モテモテなのは共通してんだから、後は鈍感属性を付与すれば完璧だ！

何か察して余計な動きしないで！ 本気マジで！

「いいですか、クラネル様。ここはガネーシャファミリアの皆さんも入られてはいけない場所。だから、誰も通つてはいけないのです。たとえ、もしここで何かあったとしても……誰も入つてはいけないのです」

念押しをする様にベルに伝えていくシルさん。勇敢な少年が無茶をしてこの会場に突撃してこない様にするために、釘を刺す様に。

「勇敢な、あなたもです」

俺が負ければ、彼らに玩具にされる訳だが、そうなればベルが突っ込んできてもおかしくはない。それを止めようとするかのようなシルさんの発言にセルバンティスが訝し気な表情を浮かべつつも成り行きを見守る。

余計な事——『助けて』等と言うのではなく、逆に『助けに来ないで』と釘を刺してはおかけか、彼らは動かない。

「貴方にお会いできて嬉しかった。……また縁があればお会いしましょう」

「シルさつ——シレーネさん」

「最後に、手を握つてもよろしいでしょうか？」

ベルが何かを言いかけ、それを遮ったシルさんがおずおずと手を差し出す。

戸惑った少年もまた、身を強張らせてからおずおずと彼女の手を握り締めた。

数秒程のやり取り。監視されて余計な事を言えないシルさんは小さく微笑みを浮かべ、ベルの手を振り払って目尻の涙をぬぐう仕草をしながら彼に背を向けた。

「ありがとう……さようなら」

ベルが何かを言い募ろうと口を開きかけた瞬間、彼の両サイドから黒服が腕を掴んで部屋の外へ引っ張りしていく。

「うわっ、ちよっ……っ！」

強引に引き摺られていく姿に若干苛立ちながらも表面上は普通に振る舞っていると、セルバンティスがそれを止めた。

「待て」

黒服二人が停止してセルバンティスを伺い、腕を掴まれたベルが目を瞬かせる。

何事かと彼を伺うと、セルバンティスは俺を見据えて微笑んできた。

「【魔銃使い】殿は同一派閥でしたな。貴女からも何か伝える事はありますかな?」

探る様な彼の台詞。要するに『助けに来るな』と言って欲しいのかね。

まあ、丁度良いし外部に暗号で連絡とるか。ベルなら多分上手く伝えてくれるはず。

「んー、ベル。ちよっとお願いがあるんだけど」

周囲の黒服から向けられる殺気が更に増す。余計な事言ったら今すぐ潰すと言いたげだ。

「ディンケに言伝をお願いします。キューイの明日の朝食は野菜で」

「え?」

ほかんと口を空けて呆けた表情を浮かべるベル。まあ、このタイミングでする会話としては不自然っちゃ不自然だが、同じ派閥の団員に

向けた伝言だし違和感は少ないはず。

まあ、警戒はされたみたいだが。

「ほら、ディンケが世話してくれる事になってるでしょ？ 明日の朝食を野菜にする様に伝えておいて。そうね、会場のガネーシャファミリアの団員に伝言を頼めばディンケに伝わるわ」

「えつと……？ それって、どういう？」

「今日も調教師テイマーとして手伝いに行ってるから、ガネーシャファミリアの誰かに伝えると早いわ。入口に居るヒューマンの女性、幹部なら確実に話を通るしその人に伝言頼んでおいてくれる？」

言う事は言った。暗号としては『キューイ』『ヴァン』のどちらかで状況の良悪を、『肉類』『野菜』『林檎』で作戦の決行か否か。

キューイは『状況良』、『野菜』で『作戦は決行、しかし突入は無し』だ。

ディンケ・レルカンは戦争遊戯ウォーゲームの際にヘスティアファミリアに入団してくれた人物。元ガネーシャファミリアであり、調教師テイマーとして何種類かの怪物を従えた事もある人物。

竜の世話を代役して貰ってるって事もあって違和感はあるけど自然ではない内容になってる。ついでに、ガネーシャファミリアとは友好派閥だし、シルさんがあれだけ念押しして『助けに来るな』って言った後で『竜の朝食についての伝言』を伝えてる訳だからなあ。

多分、若干天然なのでは？ ぐらいに思われるだろう。もしくは勝利を疑ってない奴。

「伝言は以上です」

「……………ふむ、もう良い」

セルバンティスが追い払う仕草をみると、ベルが両扉の向こう側にぽいっと投げ出され、扉が閉められる。扱いが雑過ぎる。

場の空気が弛緩する。と言うか俺に向けられていた殺気の類が消えた。

「どうやら今のやり取りを『怪しい』とは思わなかったみたいだ。

「いやはや……それにしてもマクシミリアン殿。どうやら奥様は恋多き女性の様ですなあ？」

リユーさんを煽りに行ってるな。

妻に不埒な視線を向けるセルバンテイスに激昂しかける程に妻を愛しているマクシミリアン殿。その妻が不倫しそうなぐらいに冒険者に入れ込んでいるのを見て、彼の誠実さに対し妻であるシレーネ殿が浮気しそうじゃん、って煽ってる積りなんだろうなあ。

まあ、そもそもリユーさんも女性でシルさんをそういった目で見てないから全く意味無いんだけど。

「それで、奥様はお別れは済みましたかな？」

「はい」

「『魔銃使い』殿は他に言う事はなかったの？」

「別に、ここにきて負けるなんて考えられませんし」

余裕ぶって笑みを浮かべると、明らかに目付きが鋭くなるセルバンテイス。キミはもう少し煽り耐性つけた方が良くない？ 大丈夫、ちよつと挑発しただけじゃん。

シルさんがリユーさんの代わりに席に着き。リユーさんが席を立ててその後ろに控える。これ以上、不正イカサマ云々と言いつけられたくはないのかしつかりと両手を後ろで組んで背筋を伸ばして立つリユーさん。まるで騎士道物語に出てきそうな、姫に仕える騎士を思わせる佇まいは様になってる。

対してシャクテイさんは腕組をして『傭兵ですよ』と全身から滲み出させてそれはそれで様になってるんだよなあ。というか本当に動じないなシャクテイさん。

「では、始めたいと思いますが……奥様はポーカーポーカーの規則ルールはご存じですか？」

「はい、お店の同僚——」

気を抜いてたのか早速失言を漏らしかけて咳払いして誤魔化すシルさん。大丈夫？

「やんちゃな使用人メイド達に誘われて、よく主人の目を盗んで興じておりました」

リユーさんが若干微妙そうな表情を浮かべてシルさんの横顔を見つめてる。

『主人』はミアさんで、やんちゃな使用人達……アーニヤさん達かな？ 本人達の前で言ったらギャーニヤ騒がしくなりそうだな。

「お恥ずかしいのですが、私はあまり難しい種類のモノはやっていなくて……ドローポーカーでもよろしいですか？」

『ドローポーカー』はポーカーの中では基礎のモノだろう。

五枚の札カードで役を作り、一度だけ札カードの変更が許される。質素シンプルな規則ルールだ。

「というかシルさん、自分の得意な種別ゲームを選ぶってちよつと……いや、良いけどさ。」

「ええ、問題ありません」

セルバンティスは既にシルさんがポーカーが不得意と思いついてるつぽくて即答しやがった。ああ……これはもうアカンじゃろ。

場の流れに沿って俺も種別変更ゲームに同意した所で、パンツと拍手する音が響いた。

音の出処は、シルさん。

「それと、勝負を降りる際には参加費アンティの二倍を払うというのはどうでしょう？」

シルさんの発言に明らかにセルバンティス達がたじろいで戸惑う。

ただでさえ所持賭札チップが少ない状況で、強制参加費アンティの負担が高まるのは嫌だろう。明らかに否定的な雰囲気纏う彼らに対してシルさんが微笑んだ。

「いつも使用人達メイドはこの規則ルールでやっていまして……勝つ時だけ勝負に出てくるっていう強い人に逆転できる規則ルールなんです」

は？ ……あ、おいこれ、俺も使用人メイドの一人に勘定カウントされてんじやねえか！

勝つときだけ勝負に出る。イコール、負ける時は確定で下りるので『下りる』フォールドする負担が増えるとかかなりきつくなるのだ。

シルさんの言葉にセルバンティス達の視線が一瞬俺に向けられる。要するに、俺対策としてこの規則ルールを適応する利点メリットと、自身が被る欠点デメリットを天秤にかけているのだろう。

数分ほど悩んでから、顔を上げた。

「ええ、構いませんよ」

あー……シルさん、本気で勝ちに来てるな。多分、俺もすり潰す積りだ……。

「【魔銃使い】殿も、他の方々もそれでよろしいですか？」

「……ええ、ええ、良いですよ」

これは、あれだな。

起死回生の一手としてリユーさんを場外へ飛ばしてシルさんを
参加者に捻じ込んだのは良いが、実はシルさんの方がリユーさんより
よっぽど強いって言うオチ。

頑張って起死回生しようとするのは良い。悪足掻きっぷりがかなり見苦しいが、滑稽で嗤える。

が、とりあえず喧嘩売る相手は本当に注意しないとあかんぜ？ シルさんとの賭博ゲームとか、地獄かな？

第一四五話

不正を疑われたリユーさんに代わり、シルさんが賭博ゲームに参加する事になったのだが、賭博卓カジノテーブルに着いて早々にシルさんの怯えた様な雰囲気は消え去った。

自信満々とまではいかないまでも、余裕を感じさせる雰囲気卓に着く残り少ない参加者を見回す姿は様になってる。

シルさんの態度の急変にセルバンテイスが眉を顰める。他の者達も訝し気な視線を彼女に向ける中、俺は何とか震えそうな手を抑え込んで参加費を支払う。

全員が最低限の参加費を置き場に置いた所で、手役を確認する。

セルバンテイスが『ワンペア』、獣人貴族が『フルハウス』、小人族が『ハイカード』、贅沢太りが『ツーペア』、俺が『ハイカード』、シルさんは——。

「見て貴方！」

予測した手役ハンドをまとめ直していると、シルさんがこれ見よがしにリユーさんに声をかけた。

周囲の黒服も含め、卓に着く者達の視線がシルさんに集中する。何をしでかす積りだ？

「同じ札カードが4枚！ これって『フォーカード』でしょう！」

—— は？ は、じゃない。

いや、確かにシルさんの手役は『フォー・オブ・ア・カインド』である。だが、それを早々に明かす理由は—— うわ、ヤバイ。シルさんの瞳プレイヤーが各参加者の目を流し見ている。

目が合ったのはたったの一瞬だというのに、心の奥底まで見通されたかの様な不可思議な感覚を覚える。

「ええ、その通りです……」

「やったあ！」

律義に応えるリユーさんに対し、自然体の様な雰囲気霧で喜ぶシルさん。これは、読まれたな。

つか、それ以前に俺の引きが腐りだしてる。なんでか知らんがシル

さん相手だと引きが極端に悪くなるし、できるならば勝負には極力出ない形にするか。

とうかセルバンティス達が潰れるまで俺がすり潰されなきや勝ちだし、もう勝負に出なくて良いよねこれ。

それで、セルバンティス側はシルさんの様子を見てどんな反応を――

「馬鹿にしやがって……」

「やれやれ……」

「子供騙しが通用すると思うなよ……」

――ダメみたいですね？ いや、初見だから仕方ないとは思いますが。あからさまな『子供騙しの欺瞞』っていう表面上の部分だけ読み取って、真意を見抜けてないのがなんとも……シルさんが恐ろしいのか、はたまた彼らが幼稚なのか。

セルバンティス、小人族、贅沢太り、そして俺の四人が速攻で下りるし、獣人貴族とシルさんの一騎打ちに至る。

ちなみに獣人貴族は『フルハウス』、シルさんは『フォー・オブ・ア・カインド』なので勝敗は既に決まってる。あ、いや俺は予測してるから分かるけど、彼らにはそうじゃないか。

「上乘せ」

「強気ですな……でしたら、私も上乘せしますぞ」

おいおい、賭札チップが限界ギリギリだったのによく勝負に乗ろうと思っただな獣人貴族。いや、内心を読み取った感じだと『子供騙しレベルの欺瞞には騙されん』とか考えてそうだけど。

シルさんの目を見ればおおよそ予測できると思うんだがなあ……いや、まあシルさんの目を見ると逆に読まれるから、目を合わせるのが悪手なんだが。

「上乘せ」

『……………ッ!?!』

獣人貴族の上乗せレイズに対して、シルさんは何の気負いも無く上乗せレイズを宣言し、場がどよめく。とうかシルさん、俺の目を見て勝てるか読むのやめてくんないかな。

確かに俺は手役予測して勝敗をわかってる。だからって目合図してないのに勝手に読み取ってくのなんなのかね。前世でかなり鍛えたはずのそれを容赦なく打ち抜いて読み取ってくるシルさんの『目を見る技能』はさ、神の魂を直接見てるアレに似てる。

「では御二方、手役開示を」

「私はフルハウスです」

恐る恐ると言った様子で手役を明かしてからシルさんを伺う獣人貴族。今更怯えても手遅れである。対するシルさんは躊躇なく場に札を晒した。

「フォーカード」

シルさんの宣言と共に進行役が置き場に置かれた賭札をシルさんに配当する。場の空気は凍り付き、子供騙し染みた欺瞞ではない事に驚いたセルバンテイス側に動揺が走った。

各々がこそそと視線を交わすセルバンテイス側を他所に、次の賭博が始まったが――。

「すごい！ 貴方また見て！ 今度は同じ絵柄！」

『……………!!』

あー……………はいはい、♣の『フラッシュ』ね。予測通りならあつてるね。

しっかし、俺の手役はまたしても『ハイカード』か……………なんか付けが回ってきたっぽい？ いや、まさかね？

シルさんの子供騙しの様な手役宣言にセルバンテイス側の者達が顔を見合わせ――様子見をしたいが残りの賭札の枚数を見て冷や汗を流しつつも勝負に出る。

「ああ、また私の勝ちですね！」

『……………』

嫌な沈黙が下りる。セルバンテイス側はただでさえ残り少ない賭札を見て様子見してる暇は無いと勝負に出ざるを得ず、シルさんの手役宣言に翻弄されながらもそれを欺瞞か否かを読み取れずに焦りで挑み――シルさんに狩り取られる。

焦りと動揺から子供ですら読み取れそうな程に仮面がスタボロ

に罅割れたセルバンティス側に成す術など無い。

三度目、シルさんの手役は『スリー・オブ・ア・カインド』

まあ、二度ある事はつて言うしね？ 多少はね？

四度目、シルさんの手役は——『ストレート』

………：獣人貴族が脱落しましたね。ちよつとシルさんの引きがおかしい気がするけど気のせいかな？

五度目、シルさんの手役は——『フラッシュ』

いや、いくらなんでもおかしいでしょ。なんなのその引き、俺だつて三回は『ハイカード』だつたよ？

他の面々は獣人貴族の脱落に気圧されて全員下り始めて首を絞めてるし。

六度目、シルさんの手役は——『フルハウス』

つ、強過ぎる。シルさんの引きがおかしい。でも不正は何一つしてない。

背景に徹していたシャクテイさんも背中を突いてくるけど、本気で不正じゃないんだコレが——運だけで引いてる。

案の定と言うべきか、セルバンティス側もおかしいと気付いて不正を疑いですが——これ、純粹に運が良いだけなんだ。信じられん事にな。

七度目の賭博……既にセルバンティス側は残り三人。残つてる者も賭札は五十枚も無い、詰んだな。

「あつ、いけない……」

シルさんが最初の手札を卓の上にばら撒く。表側で晒されてしまった札は『ハイカード』だ。

セルバンティス側の協力者が目を見開き、瞳に火が宿る。全員が下りたした時の手役宣言が誇張だつたとも思いこんだのだろう。

それ、シルさんの挑発だと思ふんだが。

「あ、フルハウスだわ！」

本気かよ……。

シルさんが札を三枚引き直した結果、彼女の手役は『ハイカード』から『フルハウス』に変化した。ちよつとなんなのあの引き、信じられ

んぐらい運が良すぎる。

「上乘せだ！」

「自分も上乘せ！」

七度目の勝負、残っていた小人族と贅沢太りの二人が先走って上乘せしはじめた。キミら手元の賭札の枚数見てる？　もうこの勝負で脱落確定してるけど？

熱くなって乗るべきではない勝負に乗りだした残りの二人を他所に、セルバンティス本人は焦りの表情で二人に視線を送るも届かず。むしろこの状況で落ち着いてる方だな、シルさんの挑発に乗らなかつたのは意外だ。

「あ……………」

「そんな、ばかな…………」

案の定、手役開示で絶望を突き付けられる小人族と贅沢太りの二人。

残るは、セルバンティスただ一人。だが、彼の賭札は最低枚数10枚ずつを賭けていたとしても、下りるする際に倍を支払う必要があつた事もあつて70枚しか残っていない。

もう勝ち目が無いな。シルさんの引きが圧倒的過ぎる…………この人、こんなに引き良かったつけ？

「皆さん、知っていますか？」

唐突に、シルさん——シレーネ・マクシミリアン夫人が語りだす。

「神様達の中には、『魂』の色を見抜いてしまう女神が居るそうですよ」ほんの少し俯いて、手にしたグラスをほんのりと揺らしながら、静かに、けれども響く声を放つ。

「…………なんでも、彼女の目は『魂』の揺らぎを見て、子供達の心までも暴いてしまうそうです」

神の持つ権能、と言うよりは『神の瞳』に映る『人の子の魂』に係する話か。

ヘステイア様曰く、神によっては何を考えているのかまでわかる者も居るらしい。ヘステイア様は大雑把に感じ取るだけしか出来ない

が、それでも出来る方だという。

そして、十全に人の子の心を読み取るまでに魂を見据えられる女神は——塔の最上階に座すあのお方だ。

「もちろん、私はそんな女神様の瞳は持っていませんが……好きなんです。人を見る事が」

彼女、シル・フローヴァの趣味は『人間観察』だったはずだ。

「沢山の人が居ると、沢山の発見があつて……目を輝かせてしまう」

本心なのだろう言葉。あの店で働いてるのにもそういった理由があると感じた。

「それで、『人間観察』って事を続けてる内に、なんとなくくわかるようになってたんです——その人が今、何を思っているのか」

普段から『豊穰の女主人』と言う店に出入りしている客を相手に、ずっと『人間観察』を続け、その技能を得た——否、彼女の持つその技能は天性の才だったに違いない。ただの人が出来るモンじゃない、相応の『天才』でなければ、不可能だ。

「本当か嘘か、怒っているのか、悲しんでいるのか、焦っているのか、苦しんでいるのか……白か、黒か」

——あるいは、本当に真実なのか。

正直に言おう、彼女の能力は恐ろしい。前世であの糞女が作り上げた組織に何人も似たような技能を持つ奴はいた。あの糞女もそうだった、だが……断言できる。前世で出会ってきた才ある者達——『天性の才』とまで呼んでいた彼ら彼女らなんか霞んで消える程に、シル・フローヴァと言う女性は恐ろしい才を持つてる。

「瞳は色んな事を教えてくれる」

ああ、この女性が敵でなくてよか——いや、現在進行形で敵じゃねえか。怖えよ。

いや、まあ負けても痛手にはならないはずだ。少なくとも、此処で俺が負けてもシルさんが勝つし、彼女が勝った場合はアンナさんを連れていくのだろう。

俺に対しなんか適当な要求でもしてくれば良いし、暴れないなら……セルバンティスが素直に返してくれるかだよなあ。二重の意味

で。

「で、では次の賭博を……」

鋭くシルさんを睨みつけるセルバンティスの眼光に怯みながらも進行役ディーラーが開始を告げる。

俺の手役ハンドが『ツーペア』……なんか、酷いな。ここまで運が無いとは。

シルさんの方は『ハイカード』。さつきまでの引きで運を使い果たしたのかここにきて初めての『ハイカード』だな、とはいえまだ交換ドロウしてないので機会チャンスはあるか。

セルバンティスが『♠K ♣K ♦K ♥K ♠A』。

うわ、ここにきて『フォー・オブ・ア・カインド』か。

表情が既に勝ち誇ってる。つて、コイツ此処で何する気だ？

「全賭札投入！」

ああ、ここで起死回生を狙ったか。と言うかももうそうするしか無いわ。

普通に上乗せレイズしただけだと、残り50枚の賭札チップでは巻き返せないだろう。

参加者プレイヤーが一人でも『全賭札投入オールイン』した場合、他の参加者プレイヤーは同じく『全賭札投入オールイン』するか『下りるフォールド』するしかない。

ここで怯えて下りるか、それとも苦肉の策と切り捨てて乗るか。前者なら首の皮が繋がりに、後者ならまさに一発逆転の手となる。

最後の最後で引きが良い。セルバンティスと言う男の本質がようやく理解できた。彼は、運だけでその玉座に上り詰めてしまった人なのだろう。だから、彼は何も理解してない。反感を買う危険性も、玉座の維持の仕方も、権力の振るい方も、悪事の隠蔽の仕方も……やり方が下手糞なものも当然だ。学ばずに座ってしまったのだから。

「下りる」

ここで焦っても仕方ない。どのみち俺が交換ドロウしてもまともに手役ハンドが揃わない以上、危険リスクを侵す必要は何処にもないのだから。首の皮一枚繋がった所で、次かその次……いずれ運が尽きる。

「交換」

シルさんが2枚の札カードを捨て、引き直す。配られた札はカード♠AとJOKERの2枚。彼女の手元に残された札カードと合わせ——嘘だろ？

「あははっ、ちよっとだけあやかれたら……なんて思ってただけなのに」

手役ハンドを確認したシルさんがおかしそうに笑い、セルバンティスを真正面から見据えてた。

セルバンティスが体を震わせ、直ぐにシルさんを真っ直ぐに睨み返す。

「私も全賭札投入で」

まあ、そうなるわな。

セルバンティスの悪運の強さには驚いたよ。最後の最後で『フォー・オブ・ア・カインド』だもんなあ、運が良いよアンタ……でも、運の尽きだ。

「では手役開示……！」

進行役ディーラーの宣言とほぼ同時、叩き付ける様に手役ハンドを開示するセルバンティス。

「フォーカード!!」

場に出された手役ハンドは俺の予測したモノと同一。それを目にしたシルさんはほっと胸をなでおろしながら、呟いた。

「今日の私は、どうやら『幸運の兎』さんに祝福されているみたいですよ」

『幸運の兎』？……ベルが発展アビリティで《幸運》を持ってたが、もしかしてアレか？

ルーレットで三十六倍を的中させたのってもしかして《幸運》のおかげ？ しかも人にまで分け与えられるのか？

まさかとは思うが、目の前でそれを見せつけられてしまえば、否定なんてできるはずもない。

シルさんが手にしている5枚カードの札。

『♠10 ♠J ♠Q JOKER ♠A』

ポーカーと言う賭博ゲームにおける最上位手役ハンド。出現確率は約0.00

0153%、約六五万分の一の確率——いや、JOKERワイルドカードが入っているから更に確率は下がるが。

「ロイヤルストレートフラッシュユ」

……ち、ちなみにだが『ロイヤルストレートフラッシュユ』と言うのは日本特有の言い方であり、英語だと『ロイヤルフラッシュユ』が正しかったりするらしいぞ？

一瞬固まっていたセルバンティスが椅子を蹴倒して立ち上がって背後の大男に叫びかけた。

「ファウストツッ!」

叫びに反応した大男が首を横に振る。不正を疑ったのだろうが、それはないんだ。というか俺も信じられないし——それより、その大男の名前って確か『ファウスト』ではないはずだが？

場に出された少量のセルバンティスが持っていた全ての賭札がシルさんに引き渡される。

残るは俺とシルさんの二人。だが、争う必要も無い。

「降参です」

「はい？」

「いや、だから降参ですよ……マクシミリアン夫人、貴女の運に勝てる気がしない。私の負けで良いですよ」

普通にやっても勝ち目が無い。と言うかどうやったら勝てるんだってぐらい引きがおかしい。

賭札を差し出して勝負を降りる。

「——と言う事は」

「シル、貴女の勝ちだ」

リユーさんと言う『騎士』の『女王』が、シルさんだっただって訳だ。

問題はここから、か。

「経営者、それでは約束通り、主人の願いを聞いて頂けますか？」

シルさんがセルバンティスに告げる。ここで、どう出るか……シヤクテイさんともども警戒して用心棒の動きに注目する。

ごねて敗北を認めずにもみ消しに来る様なら、実力行使も辞さない構えだ。

「………よろしい。彼女にはしばらく暇を出す事にしましょう。思えば異国から来たばかりで疲れているでしょうから」

必死に表情を取り繕いながら告げるセルバンティス。内心はふぎけんな、後で覚えてろとか考えてそうだが表面上は従おうとしてるみたいだ。

これは予想外だったな。激昂して用心棒を嗾けてくるかもしれんと思つたが、シルさんの挑発にも乗らなかつたし、実は結構冷静に考える事が出来る性質タイプの奴らしい。

まあ、後から報復する気満々なので小物臭さはとれちゃいないが。アンナさんがそそくさと逃げる様にリユーさんとシルさんの元へ向かうのを忌々し気に睨みつけているセルバンティス。他の協力者が気まずげにしているのを他所に、彼はリユーさんを見て口を開いた。

「それで、私への要求は以上として【魔銃使い】殿には何を願う積りですかな？」

あー、うん。負けを認めたしね？ 変な願いはされないでしょう。アンナさん連れ帰ってハッピーエンド。報復を考えてるセルバンティス君はこつちで処理するからリユーさんはもう良いよー。ほら、エロい事でもなんでも言つてもええぞ。薄い本展開でも構やしない、リユーさんに限つてそういった願いは無いだろうしね。

のほほんどリユーさんを見てたら、彼女は鋭い視線をセルバンティスに向けたまま呟く。

「いや、まだだ」

—— 待つて、ねえ待つて？ アンナさん取り返したじゃん。これ以上挑発しなくてもええんやで？

いや、確かにリユーさんつて『アンナさんを連れ帰る』と明言してない。そうである以上、もつと別の要求も出来る訳だ。しかし、考えみて欲しい。

このまま真っ直ぐお家に帰れる状態なのを無視してより喧嘩を吹っ掛ける真似をする必要があるだろうか、いや、無い。絶対に無い。ありえない！

「……………な、なんですかな。この娘アンナだけではご満足していただけないとっ。」

リユーさん見て、よく見て。セルバンティスの顔面がビキビキイツつてなってる！ 青筋が！

頼むから喧嘩売らないで！ 一応丸く収まりかけてんだからさ！
「……いやはや、マクシミリアン殿はエルフでありながら強欲でいらつしやる。私はどれほど愛する者達を手放せばよろしいでしょう？」

すつごく我慢してる。今ならまだ間に合うから、シルさんもリユーさんを止め——おい『やつちやえリユー』じゃねえよっ!? なんで此処で背中押しちやうかなあッ!?

「全員だ」

リユーさんの宣言が貴賓室ビップルームに響き渡る。

「貴方が金にものを言わせ奪い取った、全ての女性を解放してもらおう」
あつ、はい。そうですね、全員強引な手段で連れてこられた哀れな被害者ですね。全員救わないと気が済まないんですね——ちよつと、リユーさん、お願いだからもう少し穏便に事を片付けてくれえ……。

「ふふつ、主人はとつても欲張りなんです」

シルさんがくすりと可憐な笑みを浮かべてリユーさんの後ろで咳く。いや、シルさんも……もういいやみなまで言うまい。

案の定、我慢に我慢を重ねてリユーさんに対応していたセルバンティスが限界を超えてブチギれる。

「……何を勘違いしている？」

拳を握り締め、俯いたセルバンティスが顔を上げ、リユーを睨み——

——恩恵を持たぬ一般人には出せぬ圧を放った。

「たかが一度賭博ゲームに勝ったぐらいで！ 何様の積りだ貴様!!」

周囲の恩恵を持たぬ招待客や女性達が息を呑み、小さく悲鳴を零す。明らかに、神フェアルナの恩恵を授かっていなければ出せない、特有の圧だった。つまり、元冒険者。

本物のテリー・セルバンティスはどの派閥ファミリアにも所属していないどころか、神の恩恵を授かっていない一般人な訳で——今で聡い者は気付くだろう。

「この俺を敵に回して生きていけると思っているのかッ!？」

生きて行けますが？ セルバンティス、いやテッド君はむしろ自分の命の心配した方が良くない？

「ギルドが守ってくれるなんて考えているのなら大間違いだ!! なにせサントリオ・ベガ娯楽都市から出向している俺は——」

「違う」

リユーさんがセルバンティスの言葉を遮った。アレ、なんかこれ不味いんじゃない？

と言うかりユーさんってセルバンティスの正体に気付いてるの？

「貴方はサントリオ・ベガ娯楽都市の人間でも……そもそも、テリー・セルバンティスなんて名前ですらない」

あー、確かに調べれば出てくるしね。揉み消し方が甘々過ぎて情報屋が売り買いしてるぐらいだし、リユーさんの耳にも届いていたか。

……あれ、テッドって確か、そう記憶違いじゃなければ一度アストレアファミアリアにボコボコにされたって情報を買った気がするんだが。

「貴方の名前は、テッド」

リユーさんの核心を突く宣言に、セルバンティス——否、テッドが身を震わせた。

「……何を根拠にそんな戯言を」

「自身が潔白であると言うのなら、コレを使えばいい」

テッドの反論を潰す様に、リユーさんは懐から小さな小瓶を取り出した。それは、なんだ？

後ろからこっさりシャクティさんが教えてくれたが、その小瓶の正体、中身は『神の血』を材料にして作り出された道具。本来ならば錠ロツクされて視認できない神の恩恵によって授けられた『ステイタス』を暴く代物。『開錠薬』ステイタス・シロフ

……あの、それって違法品じゃなかったっけ？

「……………ふ、ふふ。これは、とんだ言い掛かりをつけられたものだ」

いや、絶対にお前が言っちゃいけない台詞だろ。妙な言い掛かりつけて人を不正使用者みたいに言ってきたし、リユーさんを強引に下げ

させたじゃん。んで結果自爆して負けたし。情けないと思わないの？

「くだらない出まかせに耳を貸すつもりなど毛頭ないが……」

テッドが片手を上げて何かの合図を出そうとしている。

結局、こうなる訳か……シヤクテイさん。戦闘準備——なんて言わなくてもわかるか。クリス、起きろ仕事の時間だ。

「この俺、ひいては店の沽券に関わる戯言を吹聴して回る輩を生かして返す訳にはいかん」

黒服がリユーさんの周囲を取り囲んで——おい、なんで俺とシヤクテイさんまで包囲されてんだよ！

「な、なんだー！」

「経営者!？」

あー、全員が共謀者だった訳じゃないのか。進行役の男性とか完全に引いてるし、他の賭博卓カジノテーブルについていた招待客ゲストも何事かと驚いてる。

彼が上げた手を振り下ろした瞬間に始まるであろう乱戦に備えて身構える俺とシヤクテイさんを他所に、テッドは何かを確かめる様にリユーさんを見据えて呟いた。

「……………一応、そう一応だ。殺す前に聞いてやる」

完全に殺す気満々かよ、恐えよ。

しかも俺とシヤクテイさんも巻き込まれてるし。いや、まあシヤクテイさん居るから良いけど。

「貴様、何者だ」

テッドの質問を受けたリユーさんが目を細め、シルさんに『借ります』と一言告げ、彼女が身に着けていた絹のストールをさつと抜き取り、自身の顔に巻き付けた。

薄く透けているストールを、まるで頭巾ドットの様に巻いてテッドを見据えるエルフ。その姿はごく最近みた戦闘衣姿の彼女を思わせる。

「私に、覚えは無いか?」

数秒、テッドはその姿を見据え——目を見開いた。心当たりがあつたらしい。

「ま、まさか——リオンツ!？」

ふあ？ え？ うーん……リユースさん。なんで正体開示バラしてんのおツ!?

「お……お前、生きていたのか!？」

『疾風』のリオン』。覆面で顔を隠し、当時から素性不明だった名の知れた第二級冒険者。

アストレアファミリアに所属し、数多くの悪を断罪してきた正義の執行者——そして、今となつてはギルドから賞金を懸けられている要注意人物ブラック・リスト一覧に名の載った犯罪者。

一度は死にかけていた所を、シルさんに救われた事で生き永らえている人物。

「テリー、いやテッド。名を偽つた貴方の所業は風の噂で聞いていた」
今となつては『豊穡の女主人』と言う店に匿まれ、店員として働いているのだが……当然、捕まればただでは済まない。それに数多くの恨みを買つてる彼女は生存している事が知られた時点で危うい、はずなのに。

「大賭博場区画カジノ・エリアに出没する悪党の特徴。灰色の手口、それは私の良く知っているものだったからだ」

あー、思い出した。ここにきて、思い出さたくない事を思い出してしまった。

テリー・セルバンティスを名乗る、テッドと言う男。この男は過去にアストレアファミリアに断罪され、牢獄に繋がれるはずだったのだが——女神アストレアが彼を許したのだ。正確には、彼は二度と悪事をしないと誓い、女神アストレアの慈悲を受けて牢獄に繋がれる事を逃れた。

「私は何故、お前の所業を見逃してきたのか……わかるか？」

既に、とつくの昔にテッドの所業を理解していたのだろう。

実際、テッドと言う男はセルバンティスに成り替わる以前に大賭博場区画カジノ・エリアで悪党として動いていた。それでも、リユース・リオンは動かなかつたのだ。

「理由は二つある。一つは私にはもう正義を語る資格が無い事」

リユース・リオンは罪を犯した。それ故に悪を断罪する正義の執行者

と言う立場ではあれない。自身がソレを認められないからこそ、彼女はテツドの所業を見て見ぬふりをした。

「そして、もう一つは……平伏^{ひれふ}して懺悔したお前を、アストレア様がお許しになる機会をお与えになったからだ」

ああ、理解した。理解できてしまった。これは、仕方ない。俺だつて同じ立場ならそうなる。

「アストレア様は慈悲をもつてお前の言葉を聞き入れた。あるいは信じたかったのかもしれない、子供達の改心と更生、不変ではない下界の住民が変わる事を」

リユー・リオンが我を忘れ、視野狭窄に陥り、単調な罫に引つかかつてしまった、その理由。

「しかし、お前はアストレア様の厚情を無下にした。私欲を止めず、貪り続けた」

——女神が与えた慈悲を、目の前の男は、踏み躪り、唾を吐きかけ、無下にしたのだ。

「だから——お前に免罪の余地は無い」

正義の派閥。その派閥を率いる主神。

ただ悪を断罪するのではなく、改心と更生の機会を与える慈悲深き女神。

そんな女神を敬愛する眷属の前で、女神の慈悲を踏み躪つたこの男がどうなるのかなんて、言うまでもない。

確かに、もしヘステイア様が与えた慈悲を無下にする愚か者が居たら。俺だつて冷静ではいられないだろう。

ありとあらゆる手段を以てして、その糞野郎を潰す。考え得る限り全ての苦痛を与えて、後悔させてから殺す。

——リユーさんを責める事が出来ない。多分、俺の方がもっと酷い事をしただろうから。

第一四六話

迷宮都市オラリオの繁華街の一角に存在する大賭博場カジノ・エリア区域。

治外法権とも称される程に力を持つていた最大賭博場『エルドラド・リゾート』。

その店の経営者であるテリー・セルバンティスに成り替わり、私欲を貪り続け、数多くの女性や貴族、富豪等に不幸を振り撒いた大罪人テッド。

【疾風】のリオンが放った台詞を耳にした彼は、怯えの感情をその瞳に宿すのとほぼ同時に号令を放った。振り上げた腕を振り下ろしながらの、号令。

「や……やれえお前達!?!」

黒服を纏ったゴロツキと変わらぬ用心棒達は、一斉にリユー・リオンに飛び掛かり——俺も命令を下した。

『黒拳』、やってください」

「了解」

貴賓室ビップルームの床を踏み締め、一陣の風——風なんて生易しいモノではない。嵐と見紛う暴風がリユー・リオンと、彼女の傍にいた二人の女性を拘束しようとした黒服を、突っ込んできた勢いの数倍の速度で、真反対の方向へ吹き飛ばした。それも、同時に。

黒服達、成人男性より体格に恵まれた威圧的な彼らが成す術も無くド派手に吹き飛び、周囲の客の頭を飛び越えて壁に叩き付けられて昏倒する。命を奪わず、手加減した上で、相手に反応すらさせない完璧な反撃。

マクシミリアンと言う貴族に成り済ましたリユーさんと、彼女が庇う二人の女性。その人達に背を向け、仮面を着けて顔を隠した傭兵がテッドと対峙する。

驚愕の表情を浮かべ、テッドが醜く叫んだ。

「な……何をしている!?! 【魔銃使い】貴様はソイツの味方をする積りか!!」

いや、先に敵対してきたのそっちじゃん。こちとら黒服に取り押さ

えられかけたんだぞ——つて、ああ要注意人物一覽入りしてる【疾風】を庇うのを咎められてるのか。

それも、まあ、考えりやわかる。

「んー、まあそうですね。だって負けましたし。それで、マクシミリアン殿は私に何をお望みでしょうか？ 露払いでもしましょうか？」

先ほどの賭博で敗北した。なんでも言う事を聞くというのを対価にした訳だしね。

「ミ——【魔銃使い】殿には露払いをお願いします」

了解。シャクテイさんには不満かもしれないけど、目配せをする
と何も言わずに頷いてくれた。

主神の慈悲と厚意を無下にされる怒りは、シャクテイさんにも理解は出来るのだろう。とはいえリユーさんにはテッドを一発ぶん殴らせたら引つ叩いてでも帰ってもらわなきゃならん。

「命令承りました。それでは【黒拳】、やりましょうか」

クラスチェンジ発動——クラスは『クーシー・アサルト』。

狼耳と尻尾が生えてきたことに皆が驚愕している。この獣耳が生えてくるタイプはどうにも見た目で能力が割れそうで怖い、この場で俺の能力を知る者はいない訳だし問題はない。

「な………」

「大奮発します。篤と御覽あれ」

気障っぽく薄ら笑みを張り付けてシャクテイさんの後ろに立ってリユーさんを庇う。まずは露払いで黒服と、L.V. 3の用心棒二人を倒しますかね。

警戒心を宿したテッドの瞳がシャクテイさんを捉え——唐突に爆笑しだした。

「ぐわっはっはっはー」

壊れたか？ 思わず眉を顰めると、テッドは大きく声を上げる。

『黒拳』のファウスト、か……偽物風情がやってくれたな」

………？ いや、確かに偽物だけだね？ 偽物、なんだけど……

本人より遥かに強いよ？

というかなんで偽物ってバレてんのかね。少なくとも本人の顔を

知ってる奴はこの場に居ないと思う。だって『黒拳』のルノア・ファウストって、撃破対象以外に目撃者出さないように細心の注意払ってたみたいだし、一般人であれば見逃すけど、同業者は容赦なくぶっ潰してたしね。同業者で顔知ってるのは『黒猫』ぐらいだよ？

「ファウスト……ロロ……来い」

床を踏み締め、二人の男がテッドの左右に出てきて構えた。

片や大柄なヒューマン。肩幅が広く格闘が得意そうな雰囲気、両手には黒い拳顎——ファウストと言う呼び名に反応している。

片や黒髪の猫人。細身で目付きの鋭い彼の両手には湾曲した短剣

——ロロと言う呼び名に反応した。

——おや？ これは、もしかして……いや、無い無い。だって経歴調べりやすぐにわかるし？

「くふふふ、【魔銃使い】殿は人を見る目が無い様だ。そいつは『黒拳』ではない——何故なら『黒拳』は俺が雇っているからな！ 序に

『黒猫』もなあ!!」

クロエさん『ついで』呼ばわりされてますよ？ あいつ死んだわ……と言うか、そっかあ。

『黒拳』に扮したシャクテイさんに一発で気付いた理由って、『黒拳』に扮した別人を本物だと思い込んで雇ってたからかあ……アホかな？ その二人、全然別人なんですがねえ。

「この俺に逆らった事、後悔すると良い！ 殺せえ！」

床を踏み締め、『黒拳』の偽物と『黒猫』の偽物が突っ込んでくる。それを前に、シャクテイさんの後ろで適当に指図すると、シャクテイさんから苦言を呈された。

「はあ、えっと……まあ適当にどうぞ」

「……少しはやる気を出せ」

彼らの表情には焦りがある。多分、と言うか間違いなく過剰戦力になるだろうけど、人形も展開しときますか。

シャクテイさんが二人の攻撃の様子見がてら受け流し、跳ね返すのを見つつ、クリスに命令を出した。

「クリス、武器を」

《はぁーい》

俺の前に棒状の蒼い炎が形成される。周囲の黒服がじりじりと距離を詰めようとしていたが、それを見て明らかに怯んでいる。目の前の炎に手を突っ込み、結晶で形作られた『銃剣』を取り出した。クリスが誇る結晶による形状作成。いつでもどこでも結晶製武装を生み出せる技術……問題があるとすれば、素材が結晶そのままなので耐久性がほぼ無いという事。これで殴ると簡単に折れる——まあ、魔法の触媒としては十二分な性能なので魔術師の俺には嬉しい代物だね。

人形展開の詠唱を行おうと、これ見よがしに銃剣型の杖を構え——
——シヤクテイさんが二人を叩き伏せて鎮圧を終えていた。

「ぐぎやっ!?」「ゴブアツ!?」

「……他愛無いな」

床に広がる放射状の罅。中央には『黒猫（偽）』がめり込んでおり、『黒拳（偽）』の胸倉を掴んでいる。どちらも顔面に一発貫つたのか顔に大きな打痕があった。いや、まあ……Lv. 3がLv. 5に挑めばそうなるわ。

「な……な………っ!?」

「一瞬で鎮圧されて驚いている所悪いですけど、その二人、偽物ですよ？」

「何っ!?」

驚き過ぎでしょ。と言うか素性を洗ったりしなかつたんですかね？ 普通洗うよね？ 裏の住人じゃん？ 嘘吐いて無いかとか調べるでしょ普通。しないという選択肢とかありえないんだけど……してないんだろなあ。

「特徴は確かに似ていますが。あの二人は依頼においては個人主義者ですし、共闘するなんてありえないですよ」

これ以上の情報開示は必要ないだろう。わざわざ能力はLv. 4である事や、『ファウスト』と『ロロ』が暗号名コードネームではなく本名だとか教える必要性皆無である。

あ、これだけは言っておいた方が良くもしれない。

「本人が居なくて良かったですね。特に『黒猫』の方——ネチネチ拷問された挙句に名を騙った代金を請求されてたと思いますよ」

まあ、本人は床にめり込んで聞こえちゃいないだろうけど。完全に黒服も警戒姿勢のまま動けなくなったみたいだし。後はリユーさんがテッドを一発殴って、逃がして終わりかな。

手出しする必要、無かったかと杖を下ろしかけ——床を踏み込む音が聞こえ、咄嗟に身を翻す。

メギイツとマジックシールドが軋む音を立て、何かが目の前を横切った。

「チイツ、外したっ！」

何事かと目の前を横切った人物を見据え——眩しさに目を細める。

綺麗に禿げ上がった頭頂部、似合っていない礼服を身に纏った喧嘩屋の青年。彼は——彼を知ってる。というか、割と最近に知った人物だ。

「え？ アポロンファミリアの喧嘩屋？」

アポロンファミリアが戦争遊戯ウォーゲームの際に外部から引き入れ、入団させたLv.3の都市外の冒険者。彼ら諸共都市外へと追放されたはずの彼が何故ここに——魔力の迸る感覚。咄嗟に振り返ると、ドレス姿の女性が胸元で迸る魔力を撃ち出す瞬間であった。

リユーさんが賭博卓カジノテーブルを蹴り上げ、射線を塞いだ瞬間。雷鳴轟くと共に賭博卓の残骸が激しく飛び散り、黒煙が吹きあがった。

客たちが一斉に距離を置き、黒服達も明らかに圧の違う二人を見て下がっていった。

「な、何いっ!?!」「なんだ!?!」

「【魔銃使い】お久しぶりですね……よくも、よくも髪を……ここで会ったが百年目。死んで貰います」

彼女も、知っている。というか青年同様にアポロンファミリアに雇われた、巫女の冒険者。《連唱》という希少な発展アビリティを持つ人物。そして、彼女の横でへたり込む富豪。

あー……うわ。本気か。テッドの悪運強過ぎるだろ。招待客の中

に都市外で傭兵感覚で冒険者を雇った富豪が居たらしい。都市内への侵入を制限されるはずのだが、禿げを隠しての侵入だったのだから、富豪の護衛って事で軽い検査しかなかった可能性はある。

『黒拳』、アレの鎮圧を——』

「動くなアツ!!」

唐突に乱入してきた予想外の人物二名に驚きつつも対処してもらおうと口を開こうとすると、テッドが大声で叫んだ。視線をテッドに向けると、彼の左右に黒服が控えている。

彼らの腕の中には女性、都市内外から強引に連れ去られた被害者が捕まっておおり、首元に短剣を突き付けられていた。

「もし動けばこの女どもの命は無いぞー!」

………うわ、本気か。人質作戦………ひいつ!?

「テッド、今すぐ彼女達を開放しろ」

威圧感なんて軽いモノではない。本気の殺気が振り撒かれ、リユースさんがテッドを刺殺さんばかりの視線を向けて呟く。それを見ながら、テッドは引き攣りつつも強気な笑みを浮かべ、呟く。

「魔銃使い」、そしてその傭兵。動くな、リオンお前もだ」

リユースさんの殺気に満ちた場ではあるが、シャクティさんも俺も、そして殺気振り撒くりユースさんも全員が動きを止めた。流石に人質が取られた状態で動けはしない。

横合いからいきなり飛び掛かってきたアポロンへの増援だった都市外の奴らに驚いた隙についての、人質確保。中々にやるなと身構える。

「給仕ども! アンナとその女を捕えろ! 【魔銃使い】もだ!」

残り少なくなつた黒服が懐から取り出した短剣片手にじりじりと近づいてくる。無抵抗で殺されないと人質に被害が出るって奴か。しまったな、人質なんて下策をとる程だとは思わなかった。

おどおどしながらも近づいてくる給仕達。多分、後ろ暗い事について何も知らなかった無知な者達であろう。戸惑いが隠しきれておらず———ていうか俺も拘束しようとしてるみたいだけど、Lv. 3の俺をどうやって拘束するん?

「ノースリス、どうする?」

「どうって、人質を解放してぶん殴る?」

「もう少し考えて話せ」

第一級冒険者なら余裕じゃない? とはいえ、別に良いかなと目配せをし、腰を僅かに落として囁くように呟いて、跳ぶ。

『黒拳』は右を」

俺は、左の人質を。

意図を酌んでくれたシヤクテイさんが、俺が短距離転移で距離を詰めるのとほぼ同時に右側の黒服の握っていた短剣を上から握り、殴り飛ばす。

ほぼ同時、クーシー・アサルトの固有能力である短距離転移で距離を詰め、背後に回り込んで抵抗される前に腕をへし折って女性を解放する。若干手荒だったため、放り出された女性が倒れてしまうが勘弁してくれ。流星に第一級冒険者と同じ動きは無理。

——と言うか距離がそこそこ近かったとはいえ、短距離転移で一瞬で近づいた俺と同じかそれ以上の速度で距離詰めて鎮圧する第一級冒険者怖すぎでしょ。

「これで、全員鎮圧ですかね」

シヤクテイさんの第一級冒険者としての実力を以てしての鎮圧。それも、残っていた数人の黒服と——偶然居合わせたLv. 3の禿げも含め、全員が倒れ伏した。あ、ドレス姿の巫女の人、カツラが吹っ飛んで……視線を逸らして見ないようにする。というか、こいつら出てきて驚愕はしたが、特に苦戦も無かったというか……アポロンはちゃんと手綱握ってってくれよ……危うく殴られる所だったぞ。

「ぐっ……役立たず共めっ!」

「非戦闘員は下がってください。さて、時間がかかってしまいました
が、マクシミリアン殿、どうぞ」

露払いは終わり。『黒拳』に扮したシヤクテイさんと共に残りの給仕や富豪、彼らの護衛を威圧して動きを止めさせ、リユーさんが歩む道を確認する。

「……ありがとうございます。ミリアさん、シヤクテイ」

小声で呟かれるリユーさんの言葉を聞きつつ、溜息。流石にリユーさんにはバレたか。

死屍累々とも言うべき貴賓室ビップルームの中、リユーさんが静かに俺とシヤクテイさんが露払いを終えた道を歩みながら手袋を取り出し、身に着けながらテッドを真正面から睨んだ。

「歯を食い縛るだけの時間はやろう」

その宣言にテッドが身を強張らせ——懐から何かを引き抜くのと同時。発砲音が響き渡った。

火薬の爆ぜる音が貴賓室ビップルームに轟き、美姫達が身を強張らせ、富者達が頭を抱えて蹲る。

リユーさんの身体が僅かに揺れ、目を見開いて停止した。

「リユーー！」

「あつ……」

発砲音と共に僅かに体が揺れて停止したリユーさんを見て、シルさんとアンナさんの二人が心配そうな表情を浮かべた。シヤクテイさんの方は肩を竦めているので問題はないのだろう。

テッドの手に握られているのは——リボルバーピストル 裝飾過多な回転式拳銃。

あー……：そういうええばそういうのもあつたつけ？ あつたな、骨董品アンティーク扱いの代物だけど。

「ふははは、冒険者と言えどこの銃の前には——」

「少し驚きましたが、この程度ですか。ミリアさんの銃撃に比べたら豆鉄砲も良い所ですね」

「——は？」

リユーさんがいつの間にか握り締めていた拳をゆっくりと開き、その手に握られていた鉛玉を落とす。

火薬の力で鉛玉を撃ち出す機構の武器。銃と言うそれは、冒険者の前ではあまりにも無力だった。確かに弓に比べて派手な音は出るが、それだけ。こけおどしも良い所。駆け出しならまだしも、第三級冒険者相手でも既に威力不足。第二級冒険者に至ってはそもそも見ても回避か、普通に掴み取られるのがオチ。

隠し持っていた最後の手札が無意味に終わったテッドが、必死の形

相で拳銃の引き金を引いた。

「くるなあああああああ!!」

連続で轟く発砲音。リユーさんの両腕が僅かにぶれ、飛翔する鉛玉を全て指先で掴み取る。俺の目にも僅かに鉛玉が飛翔する様子が見えるので、リユーさんからすればあの鉛玉は止まってるも同然だろうなあ。

カチンカチンと弾切れになって空撃ちを繰り返すテツドの目の前で、リユーさんは左右の手で摘まみとった鉛玉をテツドに見せつける様に床に投げ捨てる。

「そんな玩具では私は倒せないぞ、テツド」

いや、あの……恩恵持っていない一般人は普通に殺せる武器なんですけど……確かに冒険者からすれば玩具も良い所だけだね？

リユーさんが更に一步距離を詰めた瞬間、テツドは銃をリユーさんに投げつけ、同時に拳を握り締めて突っ込んでいく。

「くそ、くそおおおおおっ!!」

投げられた銃をリユーさんが片手で弾いて落とし、拳を握り締めて真正面から突っ込んでくるテツドを待ち構える。動きからして上級冒険者とは思えないテツドは——リユーさんの放った綺麗な反撃をその頬に受けて宙を舞った。

「ぐべえっ!!」

カジノテーブル賭博卓の一つに叩き付けられ、潰れた蛙の様な声を零してぴくぴく痙攣しているテツド。

リユーさんはテツドを殴る為に身につけた手袋を外して彼の顔に投げつける。

不相応な立場にまで上り詰め、調子に乗りまくっていた愚か者の末路としては、割と質素だとは感じる。むしろ、命を取らない辺りにリユーさんが抱く正義が本物だというのが伝わってきた。

周囲で身を縮こまらせている富者達を尻目に、リユーさんがアンナさんに近づいて尋ねる。

「怪我は無いですか？」

「え……あつ、はい……」

「よかった」

柔らかに微笑みを浮かべ、アンナさんが怪我一つ無く済んだ事を喜ぶ麗人。

自身にそんな表情を向けられたアンナさんが頬を染めて視線を逸らし、リユーさんが不思議そうに首を傾げた。それを見て周囲の美姫達にわかにかに色めき立ち、シャクテイさんが呆れた様に溜息を零した。

「またか」

「またつて？」

「……はあ、顔を隠して活動していた覆面冒険者。性別も不明でな……奴に助けられた女性の中には、まあ言わなくてもわかるだろう？」

あー……なるほど。リユーさん、カッコイイしね？ 覆面で顔を隠した性別不明の冒険者。それも輝かんばかりの正義を胸に抱いた高貴な人物。そりゃ惚れるわ。

「リユー、かつこよかったよ！」

「……そうですか。それよりも——ミリアさん」

こちらを振り返り、リユーさんが頭を下げようとし——それを遮る無粋な声が響き渡った。

「リオンツ!!」

震える足で立ち上がろうとし、失敗して膝を突くドワーフの男。口を切ったのか血を吐き捨てながらも、テッドはリユーさんを見据えて叫んだ。

「ただで身を墮とすものか……お前も共に破滅に導いてやる!!」

最期の足掻き。自らの避けられえぬ破滅を前に、死なば諸共と言わんばかりのテッドの台詞。

「捕まるまでの間、手下を使って噂をばら撒いてやる！ お前がこの都市に居ると！」

ふらつきながらも、殴られて歪んだ頬で嘲笑を浮かべた男。彼の悪足掻きは、確かに刺さるだろう。

「は、はははは、恨みを持つ者がこぞってお前を探すぞ！ 安寧は無

いものと思え!!」

確かに要注意人物^{ブラックリスト}一覧に名を連ねるだけでなく、正義の派閥に属する眷属とし、数多くの悪を断罪してきた「疾風」という人物は悪に属する者達から数え切れないぐらいの恨みを買っている。全部、逆恨みだったとしても、無視できるモノではない。普通なら、だけど。

テッドの悪足掻き宣言に対し、シルさんが歩み出て行く。リユーさんが何をやる気かと見守る中、シャクテイさんと共にこの後どうするかこそと話し合う。

「それで、どうします?」

「派手に暴れ過ぎだが、この程度ならなんとかかなりそうだな」

「では、リユーさん達を逃がす形で?」

「ああ、この後直ぐにこの場を鎮圧する」

「……テッドの悪足掻きについては?」

シャクテイさんに確認をとれば、彼女も同様の答えに達していたのか肩を竦め、呟く。

「まさか、あんな小物がフレイヤファミリアに喧嘩を売るとは思えん」

シルさんがテッドに何かを囁いた瞬間。テッドの顔色が一瞬で真っ赤に染まり、瞬く間に青くなり、最期には土気色の死体の様な色合いになってガタガタと震えながら俯いた。

余りの変貌にリユーさんが冷や汗を流し、アンナさんが怯えた表情を浮かべているさ中、恐る恐るリユーさんが尋ねる。

「シル、何を言ったのですか……?」

「私達の面倒を見てくれているミア母さんの派閥^{ファミリア}の名前」

リユーさんとシルさんが面倒を見て貰っている『豊穡の女主人』と言う店の店主ミア・グランド。

半脱退しつつも未だに籍を置いている派閥^{ファミリア}は都市最大派閥に含まれており、都市最強のLv. 7を有するフレイヤ・ファミリアだ。

たかが最大賭博場の主に収まった程度では、到底太刀打ちできない相手であり、道連れになんてしようモノなら——行き先は牢獄ではなく、あの世へと早変わりする事だろう。

同情なんてちつともしないが、まあ罪人の末路としちや十分か。色

めき立つ美姫達がリユーさん達を遠巻きに見ているのを見つつ、隅っこで固まって震えている富者連中に微笑みかけておく。

「貴方達、言わなくてもわかるとおもいますけど——賭博ゲームに負けた人も、そうでない人も、余計な事は言わない方が良いですよ?」

こくこくと壊れた人形みたいに首を縦に振っているのを確認してから、改めてリユーさんを見ると、シャクテイさんにリユーさんが歩み寄っていた。

若干バツが悪そうな雰囲気彼女の言葉に、シャクテイさんは溜息で返す。

「久しぶり、ですねシャクテイ……」

「大賭博場側の蛮行を検挙する為に練っていた我々の苦労が水の泡だな」

まあ、確かにその通りである。割と慎重に練っていた計画を、水の泡にされた。でも、それで良かった気もする。

「その——」

「私は『黒拳』の名を騙る傭兵だ。多くの者が探しているお尋ね者も、攫われた娘を救う義賊も、知った事ではない。雇い主の意向に従うまでだ」

「マクシミリアン様、今なら裏口から行けるはずですのでどうぞ」

言い募ろうとするリユーさんに、遠回しに見逃すと告げたシャクテイさん。それに俺も一言添える。

リユーさん達を逃がそうとした所で——両扉の向こう側が騒がしくなる。流石に、あれだけドンパチやっつてれば音で騒ぎになってしまうか。ガンガンと扉を叩く音が響き渡り、叫び声が聞こえた。

「ここを開ける! 中で何があった!」

「様子が変だ、これ以上返答が無ければこじ開けるぞ!!」

ガネーシャファミアリアの団員だ。これ以上異変を無視できないと言ったところか、早く脱出しなくては不味い。

シャクテイさんが素早く扉に駆け寄り、僅かに開いて団員とやり取りをして時間を稼ぎ始めたのを見て、リユーさんを急かす。

「マクシミリアン様、早く」

「……ありがとうございます」

シルさんとアンナさんの二人を連れて裏口の方へ向かおうとする彼女を見送ろうとし——シャクテイさんが肩を掴んできた。

「ノースリス、お前も行け」

「はい？ 何かあったので？」

「メインフロアで問題トラブルが起きたらしい。警備が嚴重化してる、例の警備体制に変えるからリオンを案内してやれ」

誰かがメインフロアで問題トラブルを起こした所為でガネーシャファアミアリアが警備を嚴重化させないといけなくなったらしい。

ギルド長のロイマンがなんか喚いたつぽい？ 要するに、あの糞エルフ様は余計な事をしてくださったわけか。いや、問題起トラブルこした奴が悪いんだけどさあ。

「はあ、まあ良いですけど」

「ここは任せろ」

頼もしいシャクテイさんにこの場を任せ、リユースン達の後を追う。警備体制の形式を思い出しつつ、逃走経路を頭に叩き込む。

第一四七話

最大賭博場グラン・カジノで起きた騒ぎによって喧騒に満ちた大賭博場区画カザジノエリアを抜ける道を進む。警備の為に駆り出されたガネーシャファミアの団員を避ける道順ルートを選び取りながらリユーさん達を先導して進んでいると、アンナさんが小さな悲鳴を上げた。

「きや……」

「大丈夫ですか？」

曲がり角の先に誰も居ないのを確認してから後ろを確認するとアンナさんがリユーさんに支えられている光景があった。

「どうかしましたか？」

「あの、すみません……靴が……」

リユーさんに支えられた彼女の靴を確認すれば、ハイヒールの踵部分が折れているのが確認できた。

移動に適さない靴で駆け足で移動していた影響だろう、踵部分が折れた際に足を痛めたのか痛みを堪える様に表情を曇らせるアンナさんを見て、リユーさんが此方を見た。

「ミリアさん、回復魔法を頼めますか」

「あー……すみません、今ここでは、ちよつと……もう少し進んでからでない」と

周囲にガネーシャファミアの警邏が見当たらないとはいえ、魔法を使うと魔力の余波で勘づかれる。今ここで見つかると不味いのでもう少し我慢して貰わないといけないのだ。

不幸は重なるものなのか、大通りから外れた裏道である此処に足音が響く。話声タイミングと時機から警邏中のガネーシャファミアで間違いない。

「貴賓室ビップルームを荒らした連中は貴族に扮しているらしい」

「エルフとヒューマンの二人組だったか、絶対に逃がす訳にはいかん」

流石ガネーシャファミア、騒ぎの発覚からわずか数分で包囲網の完成に至る程の連携を誇っている。それが今回は裏目に出ている訳だが。

「どうしよう、リユー、見つかったらやうよ」

「……仕方ありません。アンナさん、少し失礼します」

「あつ……」

ヒョイツと軽い調子でリユーさんがアンナさんを抱き上げる。横抱き、俗に言う『お姫様抱っこ』で抱えられたアンナさんが一瞬で真っ赤になり、リユーさんはそんな彼女の様子に気付く事無く此方を伺う。

「行きましよう」

彼女の身体能力からして問題は無いだろう。急ぎ路地を抜けるべく走り出す。

アンナさんと同じく走るのに適さないハイヒールを履いているはずのシルさんは割と平然としているが、履きなれているのだろうか？ 疑問を覚えて後ろをちらりと確認すると、スカートを僅かに持ち上げてスタスタと着いてくるシルさんの姿があつた。なんか様になる。

「あの……重くないですか？」

「……？ いえ、別に重く無いですよ。むしろ軽いくらいです。しっかり食事はとれて……なかつた様子ですね」

お姫様抱っこで抱えられて羞恥から真っ赤になつているアンナさんの言葉に返事を返すリユーさん。攫われてから不安で食事を取れていなかったらしい彼女を見てリユーさんが心配そうな表情を浮かべているが、それよりもアンナさんの表情が、アレなんです。恋する乙女というか……まあ、別に良いけど。

大賭博場^{カジノ}区画^{エリア}を抜け、リユーさんが馬車を止めていそうな地点に向かおうと足を向ける。

「リユーさん、位置的にこの辺りですかね」

「……ミリアさんって私達の行動を知つてたんですか？」

シルさんの驚愕の表情を見て肩を竦める。そんな訳ない、単なる予測だ。

そしてアンナさんを確保した場合の逃走経路がどうなるか。多分というか十中八九箱馬車だろうかと予測は着く。後はその箱馬車を

どこに停めておくか、目撃されにくい場所は何処か。そういった逃走経路確保の基礎の知識さえあれば、馬車をどこに停めてあるかは予測できる。というか場所が限られ過ぎてるので逆に張り込まれてたら危険だとは思いますが、そういった逆手にとった予測をする奴が敵に居なくてよかったです。

停車している馬車の御者はしつかりと口止めがされた人員だろう。その辺りは抜かりない……はずだ。

「ここなら治療が出来そうですね。アンナさん、足を見せて貰っても？ ついでにハイヒールも直しますか」

リユーさんがアンナさんを横抱きにしたまましゃがみ、支えたまま膝立ちの姿勢になる。何気に人を抱えたまま膝立ちするって相当負担になると思うんだが、まあ恩恵を受けた第二級冒険者だしなあ。

「癒しの光よ——」

かなり強めに捻ったのか青黒く変色していた足首の辺りに回復魔法をかければ、ほんのりと赤みが残る程度にまでは癒せた。まだ違和感はあるだろうが痛みはないだろう。後はハイヒールの修理か。

「靴を直せるのですか？」

「ん？ まあ、魔法でちよちよいと……あ、笑わないでくださいね？」

クラスをケットシー・ドールズへ変更。

このクラスの説明は——いらんだろ。名前から察せられるとは思いますが『人形』を召喚して戦うクラスだ。

原点^{オリジナル}自身もまた人形であり、ドリアード・サンクチュアリが扱う回復魔法の恩恵を受けられない等、欠点^{デメリット}は多数あるが、基本性能は高い。

というか召喚型^{ケットシー}においては珍しく、使用可能な『ガン・マジック』に『サブマシンガン・マジック』があり、本体の戦闘能力も結構高いクラスだったりする。まあ、あくまで他の召喚型^{ケットシー}に比べて、の話であって戦闘型^{クイシー}と比べると……まあ、そんな感じだ。

……アニメ版ではキチガイ畜生猫扱いだったがね。アレはフアクトリーが綺麗になったのが悪い。

【再起せよ、眠るには早過ぎる】

無機物専用の回復魔法。正確に言うなれば修繕魔法、だろうか。

人形の修繕から、物の修繕まで、非生物であればなんでも直せる魔法ではある。無論、弱点というか修繕といっても限度はあるが、今回の踵が折れたハイヒール程度なら完全に直せる。

「よし、これで直りましたね」

「……二つ目のステイタスを使い分けられるようになったのですね」

リユーさんの察しが良い。まあ誰にも言わないで欲しいがね。

「誰にも言わないでくださいね？」

アンナさんが靴の調子を確かめているのを見てから、深く溜息。なんとか見つからずに抜け出せたけど、俺はこの後戻らないといけないんだよなあ。

戻る時の道順を思い描きつつ、リユーさんがアンナさんを馬車に乗せようとするのをシルさんと並んでみると、アンナさんが何か戸惑っていた。

「さあ、この馬車へ」

「えっ……で、でも……」

男装の麗人姿のリユーさんに促され、戸惑うアンナさん。

何事かと首を傾げていると、シルさんが補足する。

「母親達カレンさんたちがいる場所へ行くようお願いします。後の事は大丈夫ですから」

この馬車に乗って家族の元へ帰り、ドレスを脱ぎ去ればただの町娘に戻る。此度の出来事もちよつとした悪い体験だったという事で、父親の悪癖改善にも繋がる……と良いね。

彼女を攫った冒険者達は……うん、まあ、死んではいけないけど、二度と悪さはしないでらう。いや、出来ないというべきかな？ 綺麗に半殺しにされててビックリだね。

リユーさんが箱馬車の扉を開け、アンナさんを促す。

「さあ、どうぞ」

馬車の中を一度見て、迷う様にリユーさんの顔とシルさんの顔を交互に見てから、小さく拳を握り締め、勇気を振り絞る様にアンナさん

がりユーさんに一歩詰め寄り、声を上げた。

「……あ、貴方に愛する奥様がいらっしやるのは重々わかっています！」

愛する、奥様？ シレーネ・マクシミリアン婦人に変装しているシルさんの方を見ると驚いた表情を浮かべて二人のやり取りを見ていた。あー……まあ、そっか、勇気を振り絞る訳か。恋、しちゃったのね。

リユーさんはどううまく切り抜けるのだろうか。

「これから言う事が貴方を困らせる事も！ でもっ、それでも私はっ」突然放たれた彼女の発言にリユーさんは完全に硬直して思考停止状態に陥っている。無表情でアンナさんを見つめるリユーさんに、彼女は必死に振り絞る様にその想いを伝えようとしている。「身を挺して守ってくれた貴方の事が……」

そこで漸く再起動したのか、それとも察しがついたのか唾然としていたリユーさんが彼女の瞳をまじまじと見つめ、慌てて彼女の言葉を遮った。

「私は貴方に恋を——」

「待ってください」

「——えっ？」

ほんの一時の間、刹那と言うべき出会いと別れの間を抱いた女性の恋心。それを遮られたアンナさんが凍り付く。それを目にしたリユーさんが慌てた様に付け加えた。

「——貴女は勘違いしている」

着けていた眼帯を取り払い、^{ヘアワックス}整髪料で固められていた髪を掻き乱して男性的な雰囲気崩す。服装こそ男装しているが、眼帯を取り払って整髪料で固められていた髪を乱せば、其処には男装した女性エルフだとわかる程度には変装が乱れたエルフの姿があった。

——リユーさん、ちよつと最低過ぎやしませんかね。

「私は、貴女と同じ女性です」

リユーさんのその発言に、アンナさんは言葉を失い——数秒して悲鳴を上げた。

「……………え、ええええええええっ!」

ひとしきり悲鳴を上げたアンナさんがリユーさんから視線を外し、箱馬車に乗り込む。足元はおぼつかず、ふらふらと幽鬼の様な足取りで馬車に乗り込み、席へと着いた彼女の目元には涙が滲んでいた。

「あ……………あの、大丈夫ですか?」

精神的な衝撃を受けて瞳は何処か遠くを見つめたままぐったりと席に着く彼女に、リユーさんが心配そうに声をかけるが、反応は無い。どう声をかけるべきかりユーさんが考え込み、静かに扉を閉めた。

扉が閉まると同時に、馬が嘶きを上げて馬車は走り出す。

白馬の王子様に救ってもらい、恋に堕ちた少女の恋心を粉微塵に粉砕したリユーさんが所在なさげにその馬車を見送り、その後ろでシルさんがお腹を抱えて震えていた。

「ふふっ……………!」

「……………」

リユーさんが文句有り気にシルさんを睨むのを見て、深く溜息を零す。

今のは無いわ。本当に無いわ。もつと気を遣うべき所だったと思う。

「リユーさん、今のは無いですよ。本当に、酷いです」

「……………男装を提案したのはシルです。私は——」

いや、いやいや。アンナさんの気持ち考えると暴露^{アラレ}は無いでしょ。

「はあ、私だったらとりあえず『気持ちはありませんが。今宵の出来事は全て悪い夢の出来事。忘れてください』とでも言って誤魔化しますよ」

「……………そんな歯が浮く台詞なんて言えませんよ。それに、勘違いしたままでは申し訳ない」

真面目なのは良い事なんじゃが……………アンナさんの視点で考えるとなあ。

「恋した王子様が実は男装した女性だったとか、呆然自失するのも仕方ないと思いますけどね」

「た、確かに少し悪い事をしてしまったかもしれませ……………」

若干反省の色を見せるリユーさんが小さく溜息を零したのを見て、シルさんが口を開いた。

「リユーは格好いいからね。女の人にもてるのも仕方ないよ」

支援^{フォロ}になってるのかなってないのかわからないんですが。

案の定、リユーさんはシルさんの言葉に若干機嫌を損ねたのかむつとした表情でそつぽを向いた。

「……私がシルの様に魅力的でない事ははじめからわかっています」

「そんな事ないよ。リユーにだって魅力はあるよ」

拗ねてそつぽを向いたリユーさんを慰める様にシルさんがニコニコと話しかける。

「……………例えば？」

「——あ！ 私預けてある着替え取ってくるからリユーは此処で待ってて！」

リユーさんの問いかけが聞こえなかったのか、それとも無視したのか。シルさんは身を翻すとそのまま駆けて行った。対するリユーさんは所在なさげに立ち尽くし、深い溜息と共に項垂れた。

流石にリユーさんも『女性的魅力の無さ』には落ち込んでいる様子らしい。何か支援^{フォロ}しておくべきかとどう声をかけるべきか台詞を選ぼうとした所で、リユーさんが此方を見た。

「ミリアさん、今回は、その……足を引つ張ってしまってますいませんでした」

頭を下げる姿を見て、溜息を零しかけるも全力でそれを飲み込む。

「気にしなくて良いですよ。私だって主神の厚意を無下にされれば怒りますし」

微笑みを浮かべる小人族^{バルウム}の姿に申し訳なさを感じつつも、リユーは感心していた。

彼女がガネーシャファミリアと協力体制を敷いてテッドを追い詰めるべく暗躍していた事を知ったのは、彼女と共に居る雇われの護衛がシャクティ・ヴァルマだったことに気付いた時だ。

かつて悪行に身を染めていたと自称していたミリア・ノースリスの事を、何処か甘く見ていた節はある。

彼女の語った悪行の数々、それらは迷宮都市オラリオの何処を調べても微塵も出ては来ない。他国で行った事かと思いはすれど、大都市でそこまでの犯行を行ったのなら噂の一つぐらいいはこの都市で耳にしないのもおかしい。神々はそういった噂話に目が無いからだ。

故に、嘘とまではいかずとも誇張されているのではと薄らと感じていたが、今回の彼女の話術や技能を目にすれば、それらが嘘ではないのは彼女にも理解できた。

「それも含めありがとうございます」

彼女がわざわざお膳立てをしてくれた。そのことを理解しているからこそそのリユーの礼に対し、ミリアは曖昧に笑うのみで言葉を濁す。

「むしろリユーさんにお礼を言いたいですよ。私とシャクテイさんだけだったら、多分引いてましたし」

「引いていた、とは？」

テッドを上手く誘導して相手の不正イカサマを封じつつ、自らの不正イカサマを隠し抜いていたミリアが、あの場で引く理由等考え付かないリユーが僅かに眉を顰める。

それを見たミリアは肩を竦めた。

「無駄に自信満々でしたからね。あのドワーフ……何か隠し玉でもあるのかと警戒して引き気味だったんですよ。リユーさんがガンガン突っ込んでいったからこそ、あの場であの手を打っただけで」

元来、ミリア・ノースリスと言う少女——前世で悪行を重ねていた頃からそうだったが、彼女は臆病だ。

全てを予測できる範囲に納めて事を成す。始まったその時には『勝つ』と言う確信が無ければ引く。未知が、予測不能な事柄があれば即座に身を引ける様に退路だけは確保しておく。

失敗を恐れ、成功する場ではしか勝負に出れない。失敗はイコールで大切な人を脅かす事に繋がるからこそ、必要以上に失敗を恐れ——結果、足を掬われる事が多かった。

今回、リユーが失敗を怯える事も警戒する事もなく真つ直ぐ進んでいったからこそ、不確定要素を飲み込んで前進を選び取っただけであり、それが成功へとつながった。

普段の彼女なら間違いないと引いていた。彼女はそれを自覚しているからこそ、謙遜でもなんでもなく大したことはしていないと口にする。

「アンナさんが必要以上に傷付かなかったのはリユーさんのおかげですわね」

「盛大に傷つけてしまった気がしますが」

先の出来事を思い浮かべてリユーが眉を顰めるのを他所に、ミリアは微笑む。

最悪の場合、ここでリユーが来ず、ミリアも引いていた場合。アンナ・クレーズは今晩にでもテッドに手籠めにされていた事だろう。清い身のまま救い出されたのはある意味幸運な事だった。

ミリアの口から語られた最悪の事態を思い浮かべ、不愉快そうに表情を歪める潔癖症のリユー。

大通りから響く喧騒から離れた路地。再度切り出したのはリユーだった。

「貴女が居てくれて良かった」

リユーが抱いた本心。ミリアが居て、リユーの失敗の補助に回ってくれたからこそだったと彼女は感じている。対するミリアの反応はやはりと言うべきか自己評価の低さから否定的なモノだった。

「私なんて居なくても割となんとかあったと思いますよ」

その言葉にリユーが表情を歪める。十八階層でリユーは彼女に自己否定が過ぎると強く諫めた積りだったが、彼女のその考え方は全く変わっていないかった。その事に若干の呆れを浮かべる。

「はあ、貴女は本当に変わらない。自己否定が過ぎる、自分を貶める様な発言は控えるべきだ」

「……………まあ、そうですね。でも、無理ですよ」

リユーを真つ直ぐ見つめ——眩しいモノを見る様に目を細めたミリアは、眩く様に続ける。

「すぐく、きれいなんですよ」

「……綺麗？」

「すつごく綺麗なんです。皆、素敵なお人達なんですよ」

唐突に何処かズレた応えを返すミアの様子にリユーが眉を顰めているさ中にも彼女は続ける。

「ベルはすつごく良い子なんです。真っ白で、誰に対しても助けの手を差し伸べようとするぐらい。ヘステイア様も素敵なお方です。こんな私なんかでも抱きしめてくれますしね？」

恋焦がれる様に、憧憬した対象に向ける様に、空に瞬く星々を見上げる様に、手の届かない何かを見る様に、遠く離れた美しいモノに見惚れる彼女は続ける。

「リユーさんも綺麗ですよ。あれだけ非道な行いをしたテッドを拳一つで裁いてお終いだなんて……本物の正義を抱く人は違います」

彼女の言葉にリユーは表情を歪めた。

己が『正義』を名乗るには既に手遅れだと思っているからこそ、彼女の言葉をリユーは肯定できない。

「私には『正義』など……」

「リユーさん、正義っていうのは名乗るモノじゃないと思うんですよ」
本物の正義とは何か。ミアが定義するそれは、とても難しいモノであり。そしてとても簡単なモノだ。

「義憤を抱き、己を鑑みる事無く成されるソレこそが正義なんです」
リユー・リオンはテッドの非道な行いに、モノの様に扱われる女性達に、義憤を抱いた。

自らを鑑みる事も無く、ただ抱かれた義憤のままに突き進む。それを人は『愚か』と貶すだろう。しかし、その『愚かな正義』こそがミア・ノースリスにとつての『本物の正義』なのだ。

「それこそ、自らを正義と称する奴らなんて碌でもない」
己を正義と名乗る者は、ろくでなしだ。彼女は語る。

たいいていの場合、『正義』を騙る者達は——自らの行いを正当化する為の免罪符としてソレを扱う。

『悪』を叩く際、己を『正義』と定義付けます。でも、本当にソレは

『正義』なんですかね？」

『悪』と対成すモノ、それが『正義』である。本当にそうだろうか。あの糞女は言いました。『悪』は良いモノだと……だって、『悪』はいくら踏み躪つても胸が痛みませんもの」

『悪』を討ち果たす、それは正義の行いだ。だが、正義を名乗る奴は碌でもない。

行いそのものは正義であれど、その心まで正義とは限らない。

「一般人を騙して金を巻き上げるのは、罪悪感を伴います。けれど、悪人を騙して海に沈めても特に何も感じないですよね」

むしろ、『悪』を滅した事に悦びすら感じる。

「私は色んな正義を見てきました」

義憤に駆られて『悪』を討たんと愚かにも策も弄さずに真正面から突撃してくる正義感に満ちた男。

『悪』を裁く悦びに溺れ、己を『正義』と定義付けた偽物。

『悪』は良い。叩いても貶しても……なんなら殺したって罪悪感を抱かなくて済む」

悪を裁く事に罪悪感を抱かない。むしろ、自らが正しい事をしたのだと悦びに溺れた。

己も同じ『悪』だというのに、『悪』を潰して殺して、己の行いに酔いしれる。その行為の悍ましさに気付いたのは、同じく偽物の正義を騙る者達と対峙した時だ。

「正義を成す事に喜びを感じ、正義を名乗る者ほど悍ましい者は無いですよ」

自らを正義だと思い込んだ精神異常者。世界にはそんな精神異常者で満ちている。

「悪い事をしている人を糾弾する者達。彼らは正義感からではなく、悪を叩く悦びでその行為を成すんです。なんて醜く、気持ち悪い正義なんでしょうか？」

悪を叩く。それは正義の行いで違いない。けれど、その心は醜く歪んだ愉悦に満ちたモノに落ちぶれていた。

そんな者達と比べ、義憤のままに行動し、愚かと笑われる愚直な正

義は、なんと美しい事か。

「ほら、リユーさんは本物の正義だ。とつても綺麗で美しい、輝かしい正義ですよ」

そこで民草が酔いしれる正義なんかが薄汚れて見えるぐらいに美しいモノだ。彼女は陶酔した様に語り——小さく溜息を零して肩を竦めた。

「テッドが殴り飛ばされた時、私は『ざまあみろ』と思いました。そんな風に考える奴は気持ち悪くないですか？」

「ミリアさん、貴女は——」

自分の事が嫌いなのか、そんな質問を飛ばすより前にミリアは答えた。まるで質問の内容を先読みした様に。

「嫌いですよ。嫌で嫌で堪らない、ベルがあんなに真つ白で綺麗なのに、ヘステイア様があんなに優しく素晴らしいのに、リユーさんが輝かしく美しいのに、私は……」

卑しい考えが抜けきらず、愉悦に浸る事がある。

周りの人々が滅多に居ない希少な人間性を持つ綺麗な人々だからこそ、自分のそんな部分が嫌いだ、と。

「皆が綺麗過ぎて、どんどん自分が嫌いになりますね」

自嘲気味に笑い——ミリアは突然、背を向けた。

「すいません、話過ぎましたね。忘れてください」

「待ってください、まだ話は——」

「終わりました。それでは」

呼び止めようとするリユーの言葉を遮り、小人族の少女は路地を曲がっていった。

慌てて追いかる為に走りだし、曲がり角を曲がった所でリユーは足を止めた。

隠れる場所の無い一本道。古びた街灯に照らされた其処には、小人族の姿は影も形も無かった。

ジクジクと痛む胸を抑えて最大賭博場前グラン・カジノで指揮を執っているシヤ

クテイさんに近づく。

「テリー・セルバンティスの身柄は確保したな？ 女性達は丁重に馬車へ案内しろ。っと、ノースリス戻ったか。どうだった？」

「……ええ、上手く外まで誘導できましたよ。途中問題はありましたけど」

「何かあったのか？」

前々から感じてはいたけれど、やっぱりリユーさんも、皆……すごく綺麗なんだよな。

「ええ、アンナさんのハイヒールが折れて……リユーさんがお姫様抱っこしてましたねえ」

「……そんな事か」

呆れた表情を浮かべたシャクテイさんに曖昧に笑いかけておき、縄で縛られてギルド職員数人に囲まれて連れていかれる経営者オーナーに扮したテッドを見て、溜息一つ。

「どうした？」

「いつそのこと……」

あんだだけ好き放題悪行三昧だったのだから、ぶっ殺されていれば良かったのに。なんて考えてしまう辺りが何とも、自分の汚さを浮き彫りにしている様で気持ち悪い。

「いや、単に白い羽の件をどうしようかなって考えてたんですよ」

第一四八話

最大賭博場グラン・カジノの一件については既に片が付いている。

テリー・セルバンティスの名を騙っていたテッドは己の罪を全て認め、自ら進んで牢獄に飛び込んだ——都市最強派閥であるフレイヤファミリアに喧嘩を売ったと思い込んでいる以上、彼にとって最も安全な場所はギルド管理の監獄の中だったのだろう。

そして、あの一件の後、リユーさんと顔を合わせるのが何となく気まずくて『豊穣の女主人』を避けている。

ベルはリユーさんとの鍛錬の為か、朝一で出て行つてはボロツボロになって帰ってくるのだが、そのたびに『リユーさんがミリアを探してたよ?』とベルに言われるのだ。あんなことを思わず言つてしまつた後に顔を合わせるのは気まずすぎるでしょうに。

娯楽都市サントリオ・ベガは経営者オーナーの首を挿げ替えて、今まで通りに経営を続ける事にしたらしい。面の皮の厚い事で……ただ、今回の一件でギルドが内部に食い込んだとは聞いた。

今後同じような事があつては困るという事でギルド職員の一部が内部に配属され、監視組織として動くらしい。ついでに収益の一部をギルドが回収する、と……ギルド長の手腕が光り輝いてるなあ。

まあ、そつち方面は正直どうでも良い。問題は——サークリツジ家のお嬢様が此方に押し付けた依頼だ。

後、グリディア・サークリツジとかベデイヴィス・サークリツジとか……。

結論から言おう。何か勝手に自滅してくれた。

いや、順を追つて説明しよう。

まず、グリディアがクレイティア嬢の暗殺しようとして色々と画策していたら、王様がそれに気づいたらしい。

王家の血を引く分家ともいえるサークリツジ家のごたごたに気付いて王が呼びつけて何をしているのか尋ねた所、グリディアは『我が息子と孫娘が怪物趣味に目覚めてしまい、始末をつけるべく云々』と嘘を並べ立てたらしい。

——結果、グリディアさんは八つ裂きにされて処刑されました。

あー、話が跳んだと思うじゃん。

なんでもサークリツジ家が仕える国の王は過去に第一王子と第二王子の二人が怪物によって殺されていて大の怪物嫌いだったのだから、自らと同じ血を引くサークリツジ家から『怪物趣味』が出たと聞いてブチギレたと。

一族郎党皆殺しを決定。自ら始末を付けると言い訳を並べ立てようとしたグリディアさんは……まあ、話を聞き入れて貰えずに処刑台行き。彼の血筋は……クレイティア嬢の兄弟も含め全員処刑台行き。

なんでも二ヶ月前に生まれた赤ん坊も八つ裂きにしたらしい、王様怖すぎい。

当然、主犯と思われるベデイヴィス殿とクレイティア嬢も処刑対象。騎士団を派遣してオラリオに居る彼らを捕えんとし、テツドの事件の日の晩にクレイティア嬢とそのお付きのカルロスの二人は拘束。

その日の晩にオラリオを出立していた、と……ただ、どうやらカルロス君が騎士団の面々をぶっ殺して逃亡しちゃったらしいぞ？ クレイティア嬢を連れてな！

しかも、この際に王様が妙な事を言い出してなあ……『怪物は迷宮から連れてこられたモノだった、オラリオのギルドは何をしているのか！』とギルドに抗議文を叩き付けた挙句。『ヘステイアファミリアとガネーシャファミリア、怪物を従える等狂気の沙汰だ』と糾弾してきたらしい。

というかベデイヴィス殿とクレイティア嬢が怪物趣味に目覚めたのは戦争遊戯ウォーゲームの際に「魔銃使い」が竜なんて従えてるから、となんかぶっ飛んだ事言い始めた……。

いや、なんというかね。ベデイヴィス殿が父親のグリディアぶっ殺して怪物趣味だった事を秘そうとした理由って、多分王様の怪物絶対許さないって部分を知ってたからだと思うんだ。バレた結果、一族郎党皆殺しを決行するってわかってたんだらうね。結果的にそうなっ

てて救いは無いけど。

王様大激怒の騎士団総員派兵してクレイティア嬢ぶつころ作戦展開——ついでにギルドに猛抗議とヘスティア、ガネーシャの二つの派閥への糾弾。国を挙げてのお祭り騒ぎを開始しようとしたら……えつと、その、隙を伺っていたラキア王国が戦争吹っ掛けたらしい。

防衛の要ともいえる騎士団の殆どが出払った王城にラキアの騎士団が強襲をしかけ、国王を血祭りに挙げて国を制圧。今やサークリツジ家も、そのサークリツジ家が仕えた王家は途絶え、ラキア王国領地へと名を変えたそうな……。

つまり、俺の知らぬ間に問題は全て解決。逃亡したクレイティア嬢とその護衛の【白い羽】カルロス君は行方知れずだけど、良いよね、もう知らんわ。

残されたのは宝石箱に収まった『形見の白い羽』のみ。

ちなみに、賭札は最後の最後でリユーさんにあえて負けた事で全部とられているので、本当に残るモノが何もない、なんというか骨折り損のくたびれ儲けなのは変わらんのよなあ……。

まあ、その残された『形見の白い羽』もギルド長経由で呼びつけたフェルズに投げ付けておいたので、俺の手元には何にも残っていない。

ガネーシャファミアリアから協力金貰っただろって？ ははは……あれ、あれさあ……ベルが最大賭博場で暴れたらしくてさあ、ギルドから罰金の支払い請求きたんだよね。

それだけなら半分ぐらい残ったよ？ でも、追加で最大賭博場から破損した賭博卓や賭札、切札なんかの損害賠償をね……？

つまり、なんだ、本当に何も残るモノが無かった。

お金も、何も、得るモノは無かったんだ……。

乏しい燐光が揺らめき怪物の姿を幻視させる影法師を生み出す岩窟内。

湿った空気に満たされた迷宮ダンジョンを闊歩する怪物達モンスターをうつすらとした光が照らし影を落とす。

鋭い嗅覚や聴覚を以てして彼らが血眼になって探しているのは、この迷宮に足を踏み入れる酔狂で命知らずな侵入者ぼうけんしゃの姿だ。

無数の通路が錯綜する迷宮内を、獲物を求める怪物が徘徊している。

そんな迷宮の一角。奥まった通路の奥にて————ガツツ、ガツツ、と。岩に小型鶴嘴マトツクを突き立てる音が響いていた。

「おい、本当にここで採掘できるのか……？」

「あつ、リリを疑うんですか？ 下調べはしてきました、上級冒険者達は、この地帯エリアから例の鉱石を沢山持ち帰っていますっ」

小人族の少女が手にした小型魔石灯に照らし出された壁面へ、ヒューマンの青年が小型鶴嘴マトツクを振り下ろす。

ヴェルフが壁面を穿つ度に岩片が足元に転がり落ち、その中に目的の物が無いのを見て小さく舌打ちを繰り返している。

「ヴェルフ殿つ、リリ殿つ、……まだですか？」

「モ、モンスターが出てきそうでドキドキする……」

小声で言い合いをするヴェルフとリリを他所に、姿勢低く周辺警戒を行っているベルとミコトは囁きかける。

俺も同時に展開しているキューイ達を伺えば、彼らは呑気に欠伸をして尻尾を軽くゆすっていた。

「まだ怪物は遠いみたいよ、でも時間の問題かもね」

現在位置は細い一本道を進んだ袋小路だ。広間フロアと言うには小さい半円形の空間で、五人十三匹のパーティで採掘作業を行っていた。一つしかない通路から怪物が押し寄せる、または周囲の壁面が罅割れて怪物が生まれ落ちたなら逃げ場はない。

不安がるのも仕方ない事だと溜息を零しつつ、一向に目的の鉱石が出ないヴェルフとリリのやり取りを見てからベルに声をかけた。

「ベル、ちよつと採掘してみてくださいない？」

「え？ 僕が？」

「良いから、はい予備スベアの小型鶴嘴マトツク」

ヴェルフの足元に転がっていた予備^{スベア}をベルに投げ渡す。冒険者の武装と同じ金属で作られた、少々というか結構お高い採掘道具。

ベルが小首を傾げつつもそれを二度、三度と壁面に打ち付け――
「ぼろぼろっ、とこれ見よがしに鉱石が転がり出てきた。」

「あ」

「はあ、やっぱりというかなんというか」

大賭博場^{カジノ}でもそうだったが、ベルの発展アビリティ《幸運》はこういった場合にも変わらず効果が適応されるらしい。

ベルが崩した壁面より光沢のある鉱石が零れ出て、地面に転がり落ちた。

「や、やりました『^{ブラッド・オニキス}紅縞瑪瑙』です!？」

「でかしたベル!」

「流石です!!」

皆が歓喜し、即座にその三つの鉱石を袋に投げ入れ、他の荷物もぱっぱつと纏め上げてヴァンの背負う棺桶にも似た大きな箱の側面に取り付けられた鞆に捻じ込んでその場を後にする。

大急ぎで移動し、狭苦しい袋小路から正規経路^{ルート}まで帰還したところで、ようやく一息ついた。

「キューイの警戒があるとはいえ、あの逃げ場の無い場所は足を運びたくないわね」

「ですね……ですがこれで冒険者依頼^{クエスト}完了ですよ。依頼されたのは2つ以上の『^{ブラッド・オニキス}紅縞瑪瑙』ですからね」

歩みながら、リリが依頼の品を小袋から取り出して眺め、うっとりしている。

血の色に似た赤と黒の縞状模様の玉髄、俺の知る八月の誕生石である『サードニクス』と似ている様で若干異なる。

「もう一つの依頼の『アルミラーズの毛皮』も先の戦闘で入手済みですし」

「受託した依頼は全て完了ね。ベルが居るおかげよねえ」

「確かに、ベルと一緒に居るとドロップアイテムといい鉱石といい、なんだってポンポンでてくるな、ベル？ 運が良いのか？」

ヴェルフの質問に曖昧に笑うベル。リリが賭博がどうか呟いてるけど、それももう無理なんだよなあ。

「リリ、ベルの運を使つての賭博は諦めなさい」

「賭博関連では発揮されないのでですか？」

「——全大賭博場^{カカジノ}で出禁になつてるから」

つい先日^{グラン・カジン}の最大賭博場での女性の強引な手段を使った誘拐事件解決の為にリユーさんが潜入してきたあの一件。その際にベルは貴賓室^{ビブルーム}へガネーシャファミアリアを入れない為に一芝居打つてモルド達と共に暴れたのだ——結果、ベル・クラネルとモルド一味は仲良く全ての大賭博場^{カカジノ}から出禁をくらつた訳である。

「ま、依頼期限が迫つてた冒険者依頼も片付いたし、本抛の引越しの方に戻らないといけないわね」

「……本抛^{ホーム}の引越しの手伝い投げ出してきて良かったのかな？」

「いつだって先立つものは必要です。派閥が大きくなつてもそれは変わりませんよ」

依然として上機嫌なリリの言葉に苦笑しつつも、補足をするならば受託^クしていた冒険者依頼^{クエスト}が期限内に達成できなかった場合、

派閥の評判が下がる。更に依頼によつては失敗時に罰則金の規定もあるのだ。

ヘステイアファミリアの評判が悪くならない為にも、受けた依頼は達成率十割を維持していきたい。

「それに、ベルもミアリアも戦争遊戯^{ウォーゲーム}が終わつて、今の能力^{ちから}を試したかつたんじやないのか？」

ヴェルフの指摘にベルが言葉に詰まり、恥ずかし気に頷いた。

俺の方は、確かに新しい『ケットシー・ドールズ』の試しがしたかつたが……こつそりと一人で『フェアリー・ドラゴニウト』を確かめちやつたとは口が裂けても言えんな。

「——キューー！」

キューーの鳴き声、怪物が来るという報せを告げるそれに皆が一瞬で反応して構える。

「何匹？」

「リリスケは下がってる」

「十三匹、ヴァンも下がってる」

今回は荷物持ちとして巨大な飛竜用の鞆等を装着しており戦闘に非参加となっているヴァンを下げた。リリを後ろに庇いつつ後衛魔術師として全体を見回してキューイと並んで構える。

交戦陣形を整えた所で、暗がりに無数の赤い光点が浮かび上がった。――鋭く此方を睨む赤い眼光。怪物達の瞳が此方を捉え、一気に駆け出してくる。

迫りくる無数の怪物を前に、ヴェルフが叫ぶ。

「正面は任せるぞー」

「うんー」

ベルが隊列から飛び出し、十を超える怪物の群れに斬りかかった。

ヘルハウンド

火炎放射を放とうとする黒犬をいの一撃に狙う二振りのナイフと

大刀。瞬く間に重ねられる剣閃の前に怪物が賽の目状に解体され、鉄槌の如き勢いで振るわれた大斬撃が大柄な固体を木っ端微塵にした。

「リリ殿、槍をー」

戦端を開いたベル達の後にミコトが続く。

彼女の呼び掛けに素早く反応したりリリが、先端に刃が取り付けられた短剣程の金属棒ステイツクを取り出し、投げ渡す。受け取ると同時にミコトが素早くその棒を振るうと、瞬く間に伸長し、2Mを超える長柄武器へ早変わり。

伸縮性の銀槍シルバーランス。槍スピアではなく騎乗槍ランスという呼び名なのは少し引つ

かかるが、まあそういうものだろう。

いつでも援護出来る様にと構えるモノの、Lv. 3に至り突出した力を持つ攻伐特化スコアラーのベル。そしてベルと共に連携をより磨き上げつつあるヴェルフ、そして前衛の攻守支援サポートに回る中衛のミコト。

後衛として俺やりリリが控えているし、キューイもいつでも援護に入れる様に身構えている。

バランス

パーティの力量は以前の比ではない程に膨れ上がっている。上級冒険者と上級鍛冶師で編成された前衛と中衛は非常に強力であり、この編成ならば中層で敵無しを謳っても良いかもしれない。

最速で殲滅を終えたのを目にしたりリリが『13階層では敵なしです！』と嬉しそうに怪物の死体に近づき、鼻歌混じりにサポーターの本業である戦利品の回収を行おうとする。

構えていた俺の援護も無く討伐し終えた事もあり、パーティには余力が満ちている。もしも行こうと思えば、中層下部の『大樹の迷宮』も探索可能であろう——とある事情もあつてあまり行きたくはないのだが。

「……キュイキュイ」

討伐も終え、リリが戦利品回収するのを眺めようというところで、キュイが怪物の接近を知らせる。

ヴァンが不愉快そうに唸り、クリスが俺の頭の上でキョロキョロと周囲を見回し始める。ベル達も何事かと身構えた所で、野太い叫び声と怪物の咆哮が遠くから響いてきた。

「リリ、戦利品回収は諦めなさい」

「え？ ですがまだ魔石を回収……この音は」

「これって、悲鳴？」

「こちらに近づいてきます……まさか？」

徐々に大きくなってくる音と振動にリリが顔を引き攣らせ、ベルとミコトは硬直する。

そして、嫌な予測というモノは的中するモノであり——予測の通り、通路の奥から冒険者の一団と数え切れない怪物が姿を現した。

「……リリ達の元へ向かってきますよっ!？」

「ベル、今回は助けるなんて言わないよなっ!？」

「流石に今回は無いでしょ、無いわよね？」

血走った目、真っ赤な顔、武装の殆どを投げ出してきたのか全員が武器を携帯していない状態で数え切れないぐらいの怪物を背に必死に走る冒険者達。彼らは此方と目が合った瞬間にその表情に歓喜の色をにじませた。

ヴェルフが前の出来事を思い出して尋ね、ベルが首を全力で横に振る。流石に器ランクアップの昇格をして戦力的にはかなり増強された現在においても、不用意に他のパーティを助けるといふ選択は選べない。

——が、怪物に追いかけている彼らはそんなもん知った事かと言った雰囲気だった。

『てめえ等、ヘスティアファミリアだな!? 喜べ、俺達の獲物をくれてやるぞおお!!』

「ふざけろ!?! 要るか!?!」

「に、逃げよう!!」

モンスターの擦り付け——パス・パレード怪物進呈に、ヴェルフとベルの悲鳴が重なる。

三十を優に超える数の怪物に追われた同業者達に背を向け、全員で走り出した。

「誰だこの階層で敵なしって言ったやつ!?!」

「時と場合によります!! ああ、まだ魔石も拾えて無かったのに……」

「リリ殿、早く荷物バックバックを此方に!!」

「で、出口ってどっち!?!」

大刀を担いで悪態をつくヴェルフ、慌ててリリから荷物を預かり背負うミコト、そして嘆く非戦闘員リリルカを抱え駆けるベル。咄嗟にキューイの背にしがみ付いて背後を伺う俺。ヴァンも疾駆してパーティに追従してきている。

後方の一団は既に限界に近かったのか徐々に怪物に追い付かれつつある。あのままだと死ぬだろうなあ。

後ろを振り返る余裕の無いベル達をちらりと見てから、溜息一つ。

「まあ、試験運用として、でいいかしらねえ」

キューイの背にしがみ付いたまま、クラスチェンジ。第二クラスの『ケットシー・ドールズ』に変化して、詠唱を呟く。

「全員、そのまま走り続けて。【我は奏者、奏でる者成りて——】」

「ミリア殿何を!?!」

ミコトが焦っているが、まあ平気だ。走るのはキューイに任せつつ、片手を後方に向けて突き出す。

「【我は操者、操る者成りて——】」

「おい本気か!?!」

あのままだとマジで死にかねないし、目の前で死なれるのは寝覚め

が悪い。

「汝は傀儡、五指奏でる調べに踊れ」

ヴァンが背負う棺桶を思わせる箱の蓋が蹴破られ、中から一体の人形が飛び出して冒険者達の頭を飛び越えて怪物達の前に立ち塞がった。

俺が操っているのは中身が空っぽの板金鎧。右手にショートソード、左手に帆カイト・シールド盾を携えた騎士人形だ。

『青銅の騎士人形』と言う、ドールズ型の固有スキルにて形作られた人形。中身は無く、俺の魔法の補助を以てして駆動する騎士だ。本来ならもつと数を揃えての運用が基本だが、生憎と持ち運び関連で四苦八苦した結果、ヴァンの背負う棺桶を思わせる木箱に突っ込んで運ぶしか無かったのだ。

「おお！ あの木箱にあんなものが！」

「なんか変なもん持ってきてるとは思ったがあんな秘策が!!」

……………あー、ごめん。一言いうと多分焼け石に水だ。

飛び出して行った騎士人形は力強く棘付きの靴で大地を踏み締め、剣を両手で構えて怪物の群れに突撃する。

最前列に居た一角兎アルミラージュを切り伏せ、返す刃で二匹目を切り捨て、三匹目の突進を盾で受け止め、四匹目が人形の足を穿つ。片足の部品パーツが弾け飛んで姿勢を崩し——瞬間に勢いに飲まれて粉碎された。人形の部品パーツが飛び散り、怪物に踏み潰されて粉々になる。

「……………」

「いやあ、焼け石に水ねえ」

一応、ぶつ壊れた人形の部品に足を取られて怪物の一部が転倒し、結果的に玉突き事故の様に怪物達は止まった。抜けて追いかけてくるのはわずか数匹なので適当に「サブマシンガン・マジック」で着いてくる数匹を処理。

知ってはいいたが、やっぱり最下級人形の『青銅の騎士人形』は運用するのに向かないなあ。

まあ、一応あの冒険者達も逃げきれそうだし構わないか。中層で活動してると事は少なくとも上級冒険者。上層のモンスター程度な

らば素手でもなんとかなるだろ。

——ちなみに、先ほどの『青銅ブロンズの騎士ナイト人形』は『アポロンの彫像』三体を生贄に作成したモノである。

第一四九話

アポロ——ハゲファミリアから強奪した本拠の改装も完了し、荷物の運び込みの為に停車した馬車から木箱を下ろしていると、唐突にベルが大きなくしゃみをした。

「くしゅんっ!？」

ベルの手から木箱が零れ落ちそうになるもなんとか支え——
続けて「へっくしゅっ!？」と二度目のくしゃみが続く。

「なんだいベル君、風邪かい?」

「いや、そんな筈は……」

同じく木箱を抱えたヘステイア様が振り返りながらベルに問いかければ、ベルは小さく首を傾げた。

「都市内で噂でもされてるんでしょ。今頃、ベルと私のLv. 3への昇格の知らせがギルドから発表されている頃合いだし」

間違いなく都市内で最も強烈な話題として神々に噂されていてもおかしくはない。そう思って馬車の上から肩を竦めるとベルは「まさか」と肩を竦める。

御者席に座っていた猫人の青年が眉を顰め「嫌味か?」と呟くのを聞き流しつつ、私物の入った荷箱を奥から引っ張り出した。

「それよりも二人とも、はやく来なよ!」

引っ越し用の荷物を手に駆け出したヘステイア様を追ってベルが駆け出し、俺も遅れて荷箱を引っ掴んで馬車から飛び降りて二人を追う。

門の前に立ち、うららかな日差しに照らされた前庭を眺める二人に並ぶ。アポロンファミリアの本拠を強奪し、改装して出来上がった石造りの屋敷。新生ヘステイアファミリアの本拠である建物を見て目を細めた。

「わぁ……!」

「どうだい、今日からここにボク達が住むんだぜ?」

「……維持管理が面倒そうですね」

一部ヘステイア様の趣味に合わない部分等をガッツリと改装した

結果、元の外観から質素に、けれど品の良く、そして新品同然の邸宅となっていた。三階建てで奥行きもしっかりしており、全員が一人一部屋与えられたとしても十部屋以上の余りが出るだけでなく、地下室に屋根裏とともではないが現在の人員だと管理不届きな部分が出かねない豪邸だ。

前世だと一部屋に機能を纏め上げたこじんまりとした部屋に籠っていた事も多く、広い屋敷には余りいい思い出が無い——自分以外だれも信用できないというのに、同じ屋根の下に多数の人間が集まるなんて精神的疲労の原因でしかなかった訳だし。

しかし、今回の建物に関して言えばそういったストレスを感じる要素は無い。なんとたつて家族で住む家だしな。

正面の玄関口に飾られた鐘と竜を結ぶ炎の徽章エンブレムを見て目を細める。

「ヘファイストス神 友にボロい地下室を押し付けられてから、よくぞここまで……………」

ヘステイア様が男泣き……女神泣き？ しているが、ヘファイストス様が働き口と住む場所をくれただけでかなり温情なのではないだろうか。まあ口にしないけど。

ボロい地下室、あの廃教会は瓦礫の撤去を終え、一応は地下室が残っているのみで誰も立ち入らないような場所になってしまった。あの廃教会に改装を重ね、いずれ立派な……というささやかな願いが潰えた事に悲しみを覚えるが、それはそれだ。

新たな家族を迎え、皆と一緒に生活できる邸宅を手に入れた。ささやかでいて温かな地下室も良かったが、この屋敷ではもっと温かな出来事に出会えることだろう。

ヘステイア様とベル、そして荷物を抱えて運び込む他の面々を見て自然と口元が緩んだ。

「さてみんな、まずは乾杯といこうじゃないかっ」

『竈火の館』の食堂。

引越し作業も程ほどに、最低限の荷物の運び込みを終えた全員が集まり顔を並べる長卓。昼食の時間というのもあり、真つ先に片づけを済ませた厨房で作り上げられた鶏肉のソテー等の軽い食事が並んでいた。

食事を終えたらまた片付けがあるが、今はそれよりもテンション高めなヘステイア様の音頭の元集まった全員がグラスを手に取る。

「えっと、何に乾杯するんでしょうか？」

「戦争遊戯ウォーゲームの勝利でしょう」

「リリ殿の移籍の祝いでは」

「新しい本拠ホームの完成祝いか」

「増援組の歓迎とか」

ベルの質問にリリ、ミコト、ヴェルフ、俺がそれぞれ思い当たる要件を上げていくも、ヘステイア様は意味深に笑うのみ。

「確かにそれも目出度い、でも——新しい近況ニュースもあるだろう？」

ヘステイア様の言葉に皆が考え込み、ほぼ同時に視線が俺とベルに集中した。

正式にギルドからも発表された訳だし、まあ確かにそれもあるな。だとするとファイアとディンケの二人も含まれるが。

「ベル君、ミリア君、ランクアップおめでとう！」

「ファイアさんとディンケさんもランクアップしてますけどね」

拍手に包まれる食卓。ベルが照れたように頭を掻く中、下座に座っている面々を確認すると——サイアが舟をこいでいた。横に座ったメルヴィスが何度か肩を揺するも中々目が覚めないのかしきりに頭が揺れている。戦争遊戯後、迷宮解禁直後から夜も入り浸るぐらいに潜ってたらしいし仕方ないか。一部の依頼クエストを片付けるのも協力してもらったしなあ。

「流石というかなんというか、此処まで凄いと嫉妬もできないな」

「うんうん、凄いよねえ」

ディンケとイリスの二人がしみじみと呟く中、ヘステイア様がいたずらっぽく微笑みながらベルに音頭を促す。

「ほら団長君、乾杯の音頭を頼めるかな」

「はい、それじゃあ……ヘステイアミアリアに乾杯！」

相変わらずと言うか、未だに慣れないのか若干固いベルの音頭を聞きつつ、グラスを小さく掲げる。

「しかし、まともになったもんだなあ」

卓上の食事も殆ど完食し、グラスを片手にしみじみと呟きを零したのはヴェルフだった。

「来た時は酷かったですからねえ……アポロン様の趣味全開で」

「……アレはまさに『異界』そのものでした」

例の光景を思い出したのかりりが表情を曇らせ、ミコトが神妙な面持ちで呟く。

「うひっ……」

小さな悲鳴が下座から響き、皆の視線が悲鳴を零した人物に集まる。サイアが小さく震えながら頭を抱えているのを見て、全員の同情混じりの視線が注がれる。あの屋敷の入口で気絶するほどの衝撃を受けた彼女は、どうやらあの恐怖の館が心的外傷トラウマになってしまったらしい。

「も、もうアレは無いよね？」

「大丈夫だって、全部排除したから」

安心させるようにフィアが微笑むのを見て、思わず視線を逸らしてしまった。実は人形に加工する為に地下室の一角に纏めて保管してあるって言ったらサイアが発狂しそうだなあ。

アポロン像の運び込みを手伝ってくれたディンケとルシアン、リルカの三人の視線がブスブスと突き刺さる中、話題を変えるべく拍手をして注目を集めてから口を開く。

「いやあ、それにしても派閥としても一気に立派になりましたよね」

「ミアア様白々しいですよ」

リリ、話題変えるから蒸し返さしてくれ。

「まあ、確かに……Lv. 3が六人だろ？ Lv. 2だって五人。一時的とはいえかなりのもんだぞ」

「うっ、リリだけがLv. 1ですか……」

ヴェルフの眩きの通り、派閥規模としてはヘステイアファミリアは中堅をほんのり超えたぐらいの実力はある。

ただ、派閥規模は小さい。本来ならもつと新規団員を次々に受け入れる場面だしね。

主神 女神ヘステイア

L v. 3 【未完の少年】リトル・ルーキーベル・クラネル

L v. 3 【魔銃使い】ミリア・ノースリス

L v. 1 サポーター リリルカ・アーデ

L v. 2 未決定 ヴェルフ・クロツヅ

L v. 2 【絶・影】ヤマト・ミコト

L v. 3 【双拳乱舞】イリス・ヴェレーナ

L v. 3 【不動城塞】グラン・ラムランガ

L v. 3 【蒼空裂砕】フィア・クーガ

L v. 2 【木漏れ日】メルヴィス・ハーヴェ

L v. 2 【幼豪】サイア・カルミ

L v. 3 【揺天秤】ディンケ・レルカン

L v. 2 【濡鼠】ルシアン・テイリス

L v. 2 【無色妖精】エリウツド・ベルメス

人員を並べ立ててみればなんともまあ、少なくとも一か月前にたった二人しかいなかった零細派閥とは思えないだろう。とはいえ、イリス以下8名の面子は一年後には元の派閥に帰属する事にはなっていないので、このままという訳にもいかないが。

「二年後には帰属する方もいますし、増員が急がれますね」

新規団員募集用の羊皮紙チラシはヘステイア様がこつそり作成してるのは知ってるし、そこら辺はこれからは言えなあ……時期が悪い。多分、まともに人が集まらないと思うんだよなあ。

前途多難だなあ。

「んー……私、このままヘステイアファミリアでも良いかなあって思ってるんだけど」

「え？ ロキファミリアに戻らなくて良いんですか？」

ふと、眩きを零したのはファイア・クーガだ。

ベルが驚きながらも言葉を投げかけると、彼女は悩まし気に腕を組んでうんうんと唸りだす。

「だつてさ、一人部屋だぜ？　ロキの所だと一人部屋は幹部にならねえと貰えないしなあ」

「確かに、一人部屋つてのは良いよなあ」

ファイアの言葉にルシアンが深く頷く。

ロキファミリアの規模的にも幹部以外は基本的に相部屋なのだろう。今のヘステイアファミリアは部屋が余りに余っているので一人部屋だが、普通の派閥はそれこそ四人部屋とか、最悪の場合はベッドが並んだ宿舍状態というのもあり得る。

ガネーシャファミリアとかもう考えたくも無いぐらいに規模が大きいし、一人部屋に何人詰め込まれてたんだ？

「ガネーシャファミリアは駆け出したと一部屋で十人。自分用の空間スペースも無くてなあ」

「上級冒険者になつても六人部屋とかだったぞ。と言うか団長と一部の最上位幹部以外は相部屋だしな」

自分専用の部屋が与えられるのはごく一部の幹部のみ。最悪の場合には部屋すら与えられずに外部の宿に泊まる事になるというのもあり得るのか。

「うわ、十人部屋か……きつついな」

「二応、種族や性別で部屋割りは変わるが……エルフとドワーフが同じ部屋に居るとなあ」

やれ芋臭いだの、やれ癩に障るだの、種族同士の相性が悪い者同士が同じ部屋に詰め込まれるとトラブルが多発する。特にガネーシャファミリアは来る者拒まずと言わんばかりに団員が増えていつていいらしいしな。

「そう考えると……俺もヘステイアファミリアのままでも良いかもしれんなあ」

ルシアンのしみじみとした眩きに同情はするが、流石にどうなのかとヘステイア様を伺う。

一応、彼らの意思は尊重されるだろうから、もし本当にヘステイアファミリアに帰属するというのなら各々の主神に一声かければ大丈夫だとは思うんだがね。

「一応、聞きますけど現時点で迷ってる人ってどれぐらい居ます？」
質問を飛ばすと同時、デインケとエリウッドが即答する。

「悪いが俺はガネーシャ様の所に帰る」

「私もだ、女神ヘステイアも尊敬できる部分はあれど、やはり私が崇めているのはガネーシャ様だからな」

迷う事無く即答している事についてヘステイア様が軽んじられている様で若干面白くはないが、彼らのガネーシャ様への忠誠心の強さ故にの即答であって、ヘステイア様に含むところがある訳ではないのでこれは逆恨みにも近いモノだ。

「俺は……うーん、今はちよつと迷ってる。帰ってガネーシャ様の役にも立ちたいし、この派閥も良いなって思ってるな」

二人に対しルシアンは深く悩みながらの返答だった。ガネーシャ様への忠誠心とで揺れている辺り、少し忠誠が足りないのではと思うが口にはしない。それだけヘステイアファミリアを魅力的に思っているという事だろうし。

「んー、一人部屋は魅力的だけどなあ……でもやっぱロキの所が良いな」

「今の所は帰る積りですね」

フィアはなんだかんだ言いつつも、やはりロキの所が良いらしい。メルヴィスも同様。

対し、意外な事にイリスが腕組をして迷っていた。

「イリス様も迷っているのですか？」

「んー、ん、うん。すごく迷ってる」

「わたしもわたしもー」

アマゾネスの二人の視線はベルの方に向けられていた。視線を向けられたベルが首を傾げ、イリスが代表して口を開く。

「団長が魅力的でさあ、このままこの派閥に残って団長の子供産もうかなって。ロキの所だと団長に手を出したら死にかねないし」

「うんうん、フィンはもう先約がいて、てをだそうとすると腕をへし折られるからね！」

いや、まあ、うん。この人達アマゾネスだったわ。

要するに派閥に、というよりはベル個人を魅力的に感じているという事だろう。獰猛な肉食獣を思わせる瞳を向けられたベルが身を震わせ、ヘステイア様とリリが吠えた。

「ベル君に手を出すんじゃない！ ロキファミアに帰れっ！」

「そうです！ ベル様に手を出すなんてリリが許しませんっ！」

いや、まあベルが望んだハーレムに近づきそうだし、戦力的にもアマゾネス二人は良い感じなのでええんちゃう？ 兎が肉食獣に食い荒らされる可能性はあるけど、合意無しで強引にやろうとするなら俺も止めるしね。

「合意無しで押し倒すのはやめてくださいね。ベルが合意したら別に良いですけど」

「ミリアツ!?」「ミリア君っ!?」「ミリア様ツ!?」

いや、合意したなら良いじゃん。あー、まあ廊下でとか人目の着く場所で盛ったりしたら蹴り飛ばすけど。目障りだし。

「おー、副団長公認かあ……ねえ団長、どう？ 今晚」

「よばいしていい？」

アマゾネスとしての発育の良さを遺憾なく発揮し、魅力的な身体つきをしたイリス。

若干精神面が幼くはあれど発育も良く、抱き心地もよさそうなサイア。

二人の視線を受けたベルが「ごめんなさいっ」と即答したのを見て、釘を刺す。

「拒否されたみたいなので今晚は諦めてください」

「……って事は明日以降も機会チャンスはあるって事ね」

「まいにちこえかけるからねー」

「うひいっ……」

むしろ少しは女性慣れする為にも一晩ぐらいいは良いのではないだろうか。

「モテモテだな団長、男として羨ましいぜ」

「畜生、俺もモテてえなあ」

「……ルシアン、もう少し落ち着きがあればお前もモテると思うが」
ガネーシャ組ががやがやと騒ぎ出し、ヘステイア様とリリが絶対にベルに手を出させないとイリスとサイアを睨む。火に油を注ぐだけ注いで炎上するベルを眺めながら、グラスを傾けた。

アマゾネス二人の色目をリリとヘステイア様が遮り、ベルが疲労困憊とでもいうようにぐったりとし始めた頃合いになって、ふと思いつ出したのでポケットから鍵を取り出してヴェルフに声をかけた。

「あ、そうそう。ヴェルフ、鍛冶場の鍵を渡しておくわ」

「お、おう」

投げ渡すと戸惑いがちに鍵を受け取り、ヴェルフはしみじみとそれを見つめる。

「ゴブニュファミアが完璧に仕上げてくれた、らしいので後で確認の方だけお願いします」

俺は鍛冶場について詳しくはないから全部ゴブニュファミアに任せたのだ。

鍛冶と建築を司る主神様ゴブニュが率いる派閥であるため、一応問題は無いはずだ。

「ゴブニュが建築をしたんだ。此方の注文通りに完璧に仕上げてくださいに決まってるだろ」

ヘステイア様が意味深に呟き、リリとミコトが顔を見合わせて目を見開いた。

「と言う事はミコト様のあの注文も？」

「私のあの注文も、完璧に？」

ミコトが待望したのは、極東式の檜風呂。

三階に作られたその風呂は、ミコトが望んだとおりの仕上がりになっていないはずだ。まあ、まだ俺も見に行っていないだけどね？

とはいえ、外装、そして食堂、後は談話室や自室、廊下、倉庫なんかの既に目についた部分においても非の打ち所がないぐらいに完璧だった訳だし、風呂だけが地獄めいた環境になっているなんてありえ

ないだろう。

……ありえないよな？

食事を終えた所で、サイアを除くロキファミア組は迷宮へ。サイアは割り当てられた部屋で寝ている。ガネーシャ組は引越しの荷物の運び込みとキューイ、ヴァン用の竜舎の方での作業。デインケが竜舎でのキューイとヴァンの世話を熱望したために任せる事となったのだ。

んで、ヴェルフは自らの城ともいえる鍛冶場へ。ミコトは待望の風呂へカツ飛んで行った。

ヘステイア様、リリ、ベル、俺の四人は屋敷の中の点検中。見取り図を覗き込むベルを他所にヘステイア様が上機嫌に口を開いた。

「二人ともすごく喜んでくれていたね。ボクも嬉しいよ」

最初は驚いていたヴェルフも隠し切れない歓喜の表情で鍛冶場に向かったし、ミコトは狂喜乱舞しそうなぐらいに激しかった。他の増援組も何か要望があれば聞いたのだが、彼らは遠慮してたしなあ。

あー、竜の世話役を熱望したデインケは除く。むしろ面倒事を自ら背負い込みたがったのはどうなんだろうか？ いや、本人が熱望したので良いかもしれないなあ。

「ロキファミアが改修費を出してくださいさったとはいえ、少々やり過ぎではないでしょうか？」

「ふふん、ロキが出すって言ったんだ。目ん玉飛び出るぐらいの金額を請求してやるぐらいでちょうどいいんだよ」

なお金額的に鼻で笑われた模様。1,000万ヴァリスを少し超えるぐらいだったので、普通なら笑える額じゃないはずなんだがなあ……ロキファミアの資金事情を知ったらヘステイア様が憤死しそうだ。

「それに、ヴェルフ君もミコト君も、せっかくボクの派閥ファミリアを選んでくれたんだぜ？ 来て良かったと思って欲しいじゃないか」

「その気持ちはわかりますが……」

「私的には増援として来てくれたイリスさんやディンケさん達にはもう少し何かあっても良かったと思うんですけどねえ」

リリがぎよつとした表情で此方を見た。

「まだ何か作るおつもりなのですか!？」

「いや、だって命懸けで私達の為に戦争遊戯に参加してくれたわけだし、報いたいじゃない？ それに、リリも何か欲しい設備があれば言ってみよう」

「むう……ミリア様は……はあ」

なんで溜息吐かれるんですかね。いや、だって命懸けで助けてくれたんだよ？ 命を賭した行為に報いるのならどれほど金を積み上げても足りないと思うし、リリだって危険な橋を渡ってくれたのだから、何か恩返しがあったらいいと思うじゃない？

「リリは今までの恩を返す積りでですね……」

恩と言われてもねえ。そこまで大したことはした覚えは無いんだがね。

「……はああああ」

「ミリア君らしいねえ」

そんな深い溜息吐かなくても良いじゃん。それと、俺らしいってのはどういう意味ですかねえ……まあ、何となく察しは着くけど。人から感謝されて恩返しされるっていうのは、むず痒いというか……まあ、なんだ。嫌だ。

まるで恩返ししてくる様に意図的に仕向けた様な感覚になってしまつて気持ち悪くなるし。

「あはは、それにしてもこの屋敷広いですね。ヘステイア様」

話題を変える為かベルが見取り図を見ながら呟く。

「管理するだけでも骨が折れそうです」

「前庭と裏庭もありますからねえ。専属の庭師雇わないといけませんね、管理できる人が居ませんし」

「いつそ住み込みの家政婦でも雇っちゃおうか」

家政婦か。

元々が百人以上もの団員が生活していた屋敷であるため、主神含め

十四人しかいないヘスティアファミリアには大きすぎるんだよなあ。庭師も雇うとなるとかなりの出費になりそうだし、きついんだよなあ。

お金はあまり使いたく無いが、管理不届きで荒れ放題になれば派閥の名声落ちるし。

とはいえ竜種が屋敷内の竜舎に居る事を考えると、雇われてくれる人が居なさそうだし、逆に雇われて良いって言いだす人はとてもではないが信用できない。難しい問題だよなあ。

「家政婦さんですかっ、良いですねっ」

食い気味のベルの声にヘスティア様とりり、俺の三人が同時に振り返った。

後ろを歩いていたベルは締まりのない笑みを浮かべていた。何を想像しているのかが丸わかりというか、隠し切れていない。

「いや、やっぱ無しで」

「そうですね」

「ベル、家政婦はそういった仕事はしないですよ？」

普通に屋敷の管理維持を手伝ってもらうだけであり、『ご奉仕します』なんてエロ漫画じゃないんだから……。

いや、現実で『ご奉仕』してくれるという家政婦が居たら、そりやただの色仕掛けだろ。ベルは引っかけかりそうで怖いなあ……いつそ、イリスとサイアに色仕掛けしてもらって耐性つけるか？

「これ以上ベル君が目移りする対象を増やしてたまるもんか」

「今後はリリが厳しくチェックしていかないと」

いや、流石にチェックはやり過ぎでしょ。ベルが誰に目移りしたとしてもそりやベルの勝手だし、自らが目に留まる様に努力してだね……まあ、本当にやり過ぎだなって思った時はやんわりと止めるけど。

「ちなみにキミの部屋は主神権限でベル君から一番遠だからね」

「ナアッ!? そんなの横暴です!!」

あー、ヘスティア様。流石にそれはやり過ぎ……いや、まあ男女の部屋が近いとトラブルの原因だし、男女で階層分けぐらいはした方が

良いけどもがね。

きやぴきやぴ騒ぎ出した二人を見て肩を竦めていると、ベルが何かに気付いたのか首を傾げだした。

「どうしました？」

「いや、なんか聞き覚えのある声が……こつちからかな」

言い争うヘスティア様とリリを他所にベルが歩み出す。まあ二人は放っておいて大丈夫か。

屋敷の外周を回って裏庭に向かう途中、ベルの指摘通りに聞き覚えのある女性の声が僅かに響いていた。

『このっ……いい加減にっ……』

『いゝやゝっ……いっ！』

この声は、元アポロンの眷属だった二人か？

敷地の外、沿道で言い争い……いや、なんか一人が鉄柵に抱き着き、もう一人が引き剥がそうとしている光景があった。

元アポロンの眷属、カサンドラ・イリオンとダフネ・ラウロスの二人だ。お前ら何してんの？

前者は駄々をこねる子供の様に半分泣き散らし、後者は苛立ちを隠せない様に怒っている。

「はあ……【ピストル・マジック】【リロード】」

「ま、待ってミリアっ、いきなりは不味いよっ」

魔法を詠唱して指先銃口を彼女らに向けようとしたらベルが割り込んだ。序に俺の放った攻撃性の魔力の余波に気付いたのか鉄柵の向こう側で騒いでいた二人が動きを止めた。

「【リトル・ルーキー】に【魔銃使い】っ」

「ま、待ってこれには事情がっ」

事情？ 既にヘスティアファミリアの所有物になった屋敷の鉄柵にへばりついて泣き散らすのと、それを引っぱがそうとする奴。何がしたいのかわからんけど元敵だし追っ払ってええんちゃう？

「何をしていたんですか？」

「はあ、見ればわかるでしょ？」

深い溜息を吐きながら肩を竦めるダフネ。先ほどまでの光景を思

い出しつつ、カサンドラを見て頷く。

「カサンドラさんが殴り込みを計画して、ダフネさんがそれを止めてるとか？」

「ちっ、違うよう」

「……………いや、流石にそんな命知らずな事はしないよ」

必死に両手を振って否定するカサンドラと、冷や汗を流しながら両手を上げるダフネ。何がしたいのかさっぱりですわ。

「【リトル・ルーキー】はわかるだろう？」

「……………いえ、全然」

ベルが困惑した様に答えると、ダフネがまたしても溜息を零した。

「ほら、帰るよカサンドラ」

「でもお…………」

涙目で粘るカサンドラにそれを窘めるダフネ。両極端な性格なのに良く付き合ってもらえるなあ、むしろ両極端だからこそ付き合ってもらえるのか。

何がしたいのかわからずにこっちが溜息を吐きたくなる。

「あの…………その…………」

ベルが戸惑い声をかけようとし、結局何も言えずに黙り込んだ。

屋敷を奪った事を負い目に感じているのかもしれないが、最初に戦争遊戯吹っ掛けてきたのは相手なんだし気にしなくていいと思うんだがね。まあ、ベルは優しいし仕方ないか。

「ベル、勝ったのは私達ですし、最初に仕掛けてきたのは向こうですよ。そんな気に負う必要ありません。むしろ何してんださつさと失せろって言っても無問題ですし」

「…………まあ、【魔銃使い】の言う通り。勝ったのは君達なんだし、後ろめたく思う必要はないよ」

むしろ『失せろ』とこの子に言ってくれないかな。とダフネが若干疲れた様にカサンドラを指し示す。

そこまで言われても負い目を捨てきれないのかベルが迷っていると、ダフネが続ける。

「むしろ感謝してるって。私もカサンドラも強引に入団させられたよ

うなものだったから。むしろこうなつて良かったと思つてるよ……
まあ、流石に死にかけたのは怖かつたけどね」

ちらりと視線を向けられるが無視。死にかけた云々言われても困るんだわ。

こちらとら片目と片腕を奪われてた訳だし、容赦なく街中で襲撃してきた奴らに気を遣う余裕なんて無かつたし。

柔らかく笑いながらダフネが冗談を零し、ようやくベルも踏ん切りがついたのか口を開いた。

「それで、えーと、今は何を……？」

ようやく本題を問えば、ダフネがカサンドラに呆れの視線を向けて説明しはじめた。

「この子がね、今まで使っていた枕を無くしたらしいのよ」

「枕？」

はい？ 枕？ たかが枕一つの為に死にかけられるぐらいの猛攻撃しかけてきた派閥に奪われた屋敷まで出張ってきて騒いでた訳？ なんとというか、見た目的に気弱そうなのにやつてる事、肝が座り過ぎじゃない？

「新しいの買えば良いのでは？」

「私もそう言ったんだけどね」

「あ、あの枕じゃないとダメなおく。あれがないと、私、寝付けなくて……」

涙目と涙声で訴えてくる彼女の様子にベルが同情した様に眉を下げた。

いや、言っちゃ悪いけどこの子相当アホな事してない？

「屋敷に忘れ物……全部運び出したはずなんですけど」

武装と資金は取り上げたけど、衣類とかは返却したんだったかな。と言うか馬車に全部乗つけて外へ運び出したはずだし……枕、枕ねえ……寝具の類も一度全部破棄……じゃない、馬車に乗せて運び出したはずなんだが。

ベルの問いかけにカサンドラは鉄柵越しに顔を赤らめ、しりごみしながらも口を開いた。

「その、覚えてはいないんですけど……『予知夢』でここにあるってお告げを……」

……………はい？

「だからあ！ そんな馬鹿げた話を言うのを、止めなさいってば!!」

「お願いだから信じてよう〜〜!」

馬鹿らし過ぎて話になんねえや。

「っていうか夢が見れるなら寝れてるじゃないですか。はあ……対応はベルに任せますね」

くっだらね。女の子が困ってるからベルが何とかするだろ。もうなんかどうでもいいや。

第一五〇話

二階の広間、窓際でヘステイア様から差し出された紙を見ながら零れ落ちそうになる溜息を飲み込んだ。

目の前で胸を張って自信満々なヘステイア様には非常に申し上げにくい事を口にしようにとし、けれどどう伝えてもきつと良い事はないんだろうなと紙面に記されている内容に目を落とす。

『ヘステイア・ファミリア』入団希望者募集！ 来たれ、子供達！』
共通語コイネーで記されている内容を目にし、もう一度ヘステイア様の顔を見上げる。

内容としては入団希望者を一斉に募る会合の開催についてだ。鐘と竜を結ぶ炎のエンブレムが刻まれた紙面には、開催場所や日時が載せられていた。

ちなみに日付は今日。

「これと同じ広告紙をギルド本部の掲示板や、バイト先に張り出してもらったんだ……ってどうしたんだい浮かれない顔して」

会心の笑みを見せていたヘステイア様が、微妙そうな表情だったせいか途中で言葉を止め、小首を傾げながら問いかけてきた。

いや、そのお……すつごく口にくくいんですけどお……多分、碌な人集まらないツスよ？

心の中でそう呟くも口には出てこずにモゴモゴと口を動かす事しかできない。更に大きく首を傾げるヘステイア様を前にどう伝えるか迷っていると、ヘステイア様の瞳が輝きだす。

「あっ、ベル君。それが終わったら、一旦作業を切り上げてくれー！」
「え？ いいんですか？」

丁度広間の前を通りかかったベルに声をかけて自信満々な笑みを浮かべたヘステイア様が続ける。

「ほら浮かない顔しない。家族が増えるかもしれないんだぜ？」

……でもさあ、碌な奴来ないと思うんだよ。『ディアンケヒト・ファミリア』との契約の兼ね合いもあるしさあ。後、借金の借用書が見当たらないんだけど、何処やったんですかね。

「うっ、借用書は……っつと、その話は後だ。ベル君こっちこっち！」
ベルが戻ってきて話が途中で遮られてしまう。溜息を飲み込みながらベルを出迎えると、ヘステイア様が紙を突き出してベルに見せつけた。

「これは……入団希望者募集！ これって、もしかして」

「そう、日時は今日！ もう集まり始めてる頃合いだね！」

ヘステイア様の言葉にベルが窓際から屋敷の正面門を見て目を輝かせた。背丈の関係で見えない俺は淵に手をかけ窓の外を覗く。

鉄柵の向こう側には様々な種族のデミヒューマン人デミヒューマンが集まり始めているのが見えた。

——— どの人もこいつも、都合の良い希望に縋りつこうとしている奴らばかりじゃないか。

正面門が開かれ、集まっていたデミヒューマン人達デミヒューマンが屋敷前の庭に溢れ返る。館の玄関前からその人垣を見下ろしながらベルが嬉しそうに、けれど何処か困惑しながら呟く。

「あの、殆どの人が……その……」

「欠損を抱えていますね」

遠目に見えた人垣。ベルは気付くのが遅れたみたいだが、俺は普段から遠距離射撃してた関係で気付いていた。

集まった者達の大半が、手足または目等、体の一部が欠損している。

義手義足は当たり前、中には眼帯を付けてる者も居る始末。

「こ……これは……いや、でも僕たちの「ファミリア」を選んでくれた子供達だ」

ヘステイア様が若干震える声を上げながら集まった百近い元冒険者達を指し示す。此処に集まった者達は皆、入団希望者———否、入団する事で『再生薬』を貰えると勝手な思い違いをして集まった、身勝手な奴らだ。

「戦争遊戯で一躍有名になったとはいえ……おかしいですね。普通の人の姿が少ないです」

すぐ横に立っていたりリリが困った様に人垣を見据えて呟く。もつと新人冒険者が集まるものだと思っていた、と。

「いやあ、普通の人は来ないでしょうね」

「なんでですか？」

溜息交じりにソレを否定すると、リリから声がかかる。いや、まあ当然だよなあ。

戦争遊戯中、アポロン陣営に集まったあの三百を超える増員は何処からやってきたのか？

都市内外の新米または改宗^{コンバージョン}希望者だったのだ。そいつらはアポロン諸共オラリオの外へ追放。一部勝手に戻ってきて依頼^{クエスト}を受けたりしていたが、あのハゲ喧嘩屋もハゲ巫女もどっちも盛大に都市外へとほっぽりだされたし。

結果、都市内外問わずに普通の入団希望者はかなり少ないという結果になった訳だ。

んで、付け加えると……あの戦争遊戯のさ中に失ったはずの手足を再生させたロキとガネーシャの眷属一同を目にし、自分もと都合よく考えた欠損冒険者が集うのは必然。

「な、なるほど……ミリア君知ってたのかい？」

「……いえ、予測はしてましたが。まあそうなりますよね」

玄関前から見下ろした義手義足が目立つ集団を見下ろして溜息。こいつらは、普通に希望に縋りついてきただけなんだろう。でも、なんて身勝手な奴らなんだろうか……気持ち悪くて、吐き気がする。

「それでも、入団希望者が沢山つて事ですよ。神様！」

「う、うん。そうだねベル君！」

「まあ、考えようによつては元冒険者として活躍した人達も居るでしょうし。経験者が増えるのは歓迎ですよね！」

ベル、ヘステイア様、リリ、三人が前向きに考えているが……難しい。と言うか、これは……契約内容の一部を忘れている可能性があるな。それに、全員が治せる訳じゃない。

「欠損したのが半年以内ならまだしも、それ以前の欠損は現状治せませんよ。そういう人達は申し訳ないですがお断りするしかないで

す」

欠損冒険者を抱えて養う余裕は無い。そういう意味ではやはりこの百人近い冒険者の内、入団させられるのはほんの少数になるだろう。——その少数も、もしかしたら無理だ。

とはいえ、少しは普通の人もいる。欠損を抱えていない、普通の——うげっ、なんでカサンドラ・イリオンとダフネ・ラウロスも居るんだよ。

それに、あの包帯まみれのちっこい奴……ルアン・エスペルじゃないか？ まあ、良いか。非採用だし。

一応、ダフネとカサンドラは熟練の第三級冒険者。戦争遊戯中に煮え湯を飲まされてるしぶっちやけ気に食わない奴らではあるが……それを差し引いたうえであのカサンドラの回復能力と、治癒士ヒーラーを咄嗟に庇って戦局を覆しかけたダフネの判断能力は惜しい。

一応、恨みを持ってないかだけは確認してからじゃないと、背中を刺されそうで怖いしそこは注意しないとな。

「随分集まって……あー、その、なんだ。集まっちゃいるが……」

「あ、ヴェルフ」

館から出てきたヴェルフが人垣を見て表情を歪ませる。

やっぱ欠損冒険者ばかり山ほど集まってもとといった感じだろう。実際、こいつらから何人か採用して『再生薬』を与えて……ううん、やっぱ一部契約が足を引っ張るな。

「まあ、一応団員は増えるって事になるだろうが……」

「うん、これで『ファミリア』も賑やかになるだろうし！ みんなで家族みたいに——」

——この欠損冒険者共を家族に？ 冗談ではない。変な希望を勝手に抱いて集まった小蠅みたいなやつらじゃないか。

思わずベルの言葉を否定しそうになり、両手で口を塞いで呑み込んだ。一応、喜んでいるみたいだし、もしかしたらイリスさんやディンケさんみたいに、本当に家族として付き合っていける様な者も混じっているかもしれない。

「人が多くても良い事ばかりじゃないぞ。柵しがらみも増えるしな」

組織としてもな。そう続けたヴェルフの言葉に浮かれかけていたベルが冷静になる。

まあ、組織としてもそうだが……人間関係がなあ。絶対トラブルの元だし、人が増えれば諍いさかいも増える。ストレスも溜るし、相性次第だと……まあ、なんだ。俺は普通の人らと相性が悪すぎる。俺が我慢すれば良いだけではあるんだが、此処に集まった欠損冒険者に対して良い感情を抱いていない時点だな。

「なに、安心してくれ。これからボクが一人一人面接して、適性を見る！」

「えっ………み、みんな入団させるんじゃないんですか？」

ヘステイア様の言葉にベルが息を詰まらせていた。いや、流石にベルの言葉はじようだ——んじやない？ ちよ、ちよつと流石に全員はやめろ死ぬ。俺が死ぬ！ 胃が死ぬからっ!?! 見てるだけで吐き気する奴だつて居るしっ!?!

「神にも好みや司るものがある様に、それぞれの「ファミリア」には独自の規律、特色つてものがある。反りが合わない子を迎え入れても、逆に苦痛になるだけだぜ？ ベル君」

諭す様に笑いかけるヘステイア様の言葉にベルが悲し気に、同時に納得した様に吐息を零した。

「それに、ボクは神だ。向き合えば子供がどういふ人物なのかほぼ一目で見抜ける。神には嘘は吐けないし、ね。悪い子はもとより「ファミリア」の風紀を乱す子にはお帰り願おう」

極端な話だが、人に乱暴する様な輩や、犯罪歴を持つ者、人格に難ありな者等、派閥の沽券こせんに関わるモノから、既存の眷属へ危害を加える者。更に「ヘステイア・ファミリア」に恨みを持っている者なんかを入団させれば、名声に関わる以前にヘステイア様を殺害され、派閥消滅の憂き目に遭いかねない。

………まあ、ヘステイア様は前歴ではなく、人柄で判断………する、だろう。きつと、多分………なんで、俺って、ヘステイア様を選んで貰えたんだろうか。

「そうだよね、うん。その通り、なんだけど………」

集まった入団希望者を前に、ベルが同情した様に俯いた。

過去、オラリオに來た当初、少年は数多の派閥で門前払いをくらって所属先が見つからずに途方に暮れていた事がある。そのためか、全員を入団させてあげたい、とそう思ってしまったのだろう。

だが、こればかりは譲れない。此処でベルの抱いた慈悲を与えてしまえば、「ヘステイア・ファミリア」存続すら危うくなる可能性があるからだ。

「……それに、これ以上サポーター君みたいな泥棒猫を増やす訳にはいかないんだ……ッ！」

えっと、うーん。ヘステイア様のソレはちよつと、どうかと思うんだけど。まあ最終的な採用非採用はヘステイア様に任せられる訳だし、其処は良いや。

「さてと、待たせて悪かったね。希望者諸君！ これから入団試験を始めるぞ！」

騒めきだす希望者を見回し、その中から既に不採用者を決めておく。

目付きから此方を探る様な奴。既に利用する気満々な奴。それから……希望を見出した様な奴。

「さて、一人ずつ前に出てきてくれ。まずはその義足のヒューマン君！」

「お、俺か」

一人の男が木の棒で作った安っぽい義足を片足に着け、杖を突きながら人垣から前に出てきて愛想笑いを浮かべた。

その目には、もう一度再起を夢見て宿る希望の光が見て取れる。

「俺は、二年前には冒険者をやつて、レベルだつて2なんだ！」

「ほうほう、第三級冒険者ですか」

自分が二年前に冒険者をやつていた事。冒険者歴は八年である事——不採用。現時点では採用できない。

「ヘステイア様、彼は不採用で」

「……すまないね。二年前となると、キミのその足は治せない」

「——へ？」

自らの経歴を必死に語り、入団を許されて『再生薬』を手にし、今一度の再起を夢見た男。彼は呆けた表情を浮かべ、継る様に大声を上げる。

「治せない、どういう事なんですかつ、ガネーシャやロキの所の冒険者じゃないからか!?!」

「違います。現時点で『再生薬』は半年以内の欠損しか治せないのです。つまり、今は無理って事です……他の皆さんも同様です。半年以上前に欠損した部位は治せません」

「無理なモノは無理だ。」

「それに——」

「へ、へスティア様アアツ!!」

続けて彼に現時点での『ディアンケヒト・ファミリア』との契約事項を説明しようとした所で、大声が響いてきた。

五人全員で後ろを振り返ると、ボタンツと音を立てて扉が開かれ、大慌てな様子でミコトが飛び出してきた。

「ど、どうしたんだいミコト君?」

「に、に、荷物の中からっ………!!」

血相を変えた彼女の様子に、へスティア様が小首を傾げて問いかける。

冷静さを失って全身を震わせる彼女は俺達と——その背後で成り行きを見守っていた入団希望者の前で手にしていた用紙を突き出した。

………ああ、これ、何処に行ったのかと思ってたが。ミコトの荷物に交じってたのか。

「借金五億ヴァリスの契約書があ——ツ!!」

瞬間、空気が凍り付く。

「ふうっ!?!」

目の前のソレにへスティア様が嘖き出した。いや、ちゃんと管理しなきゃダメじゃないですかあ………あー、はあ、まあ良いか。ベルにはまだ知られたくなかったが、この時期タイミングでかあ。

「ほー。」

「ハ、おんぐ。」

「……………うそ、ですよね?」

リリが硬直し、ヴェルフが立ち尽くす。入団希望者達も例外なく目を点にし、ベルが青褪め始める。

ミコトが突き出す借用書を横から掠め取り、しっかりと不備が無いかや偽の代物じゃないかと確認する。

紙質、高級品。正規の代物で違いない。

金額、五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇——五億ヴァリス。確かに、一ヴァリスの差異も無い。

署名、共通語と【神聖文字】サイン コイネー【ヒエログリフ神聖文字】の両方で綴られた女神ヘステイア、女神ヘファイストスの名。

用紙の片隅に書き記された【ヘファイストス・ファミリア】のエンブレム。

契約内容《神様のナイフ》およびに《竜鱗の朱手甲》の代金として……………ふうむ。本物で間違いないな。

「良くやりましたミコト。無くなつて心臓に悪かったですが、見つかって良かったです」

「良くねえよッ!」「なんですかコレエツ!」

『五億?』今、五億って言ったか?』『本気かよ……………』『ひでえ……………』『まともじゃない……………』

大事な借用書を丸めてミコトが反対の手に持っていた保管用の箱を抜き取り、中に戻して安堵しているとヴェルフとリリの突っ込みが炸裂し、背後の入団希望者がざわめきだす。

ヘステイア様が慌てて背を向けて帰ろうとする彼らに弁解を述べようとするのを制して彼らの前に出た。

「さて、割と重要な事ですが。【ヘステイア・ファミリア】は現在借金を背負っています」

『んだと!?』『なんつー派閥だよ』『信じられない!』

一段と騒がしくなる彼らに対し、溜息を零しつつ一応持ってきていた保管箱から羊皮紙を数枚取り出し、見える様に掲げた。

「これが何かわかりますか?」

「……なんですかそれ?」「……返済証明書?」

横からリリとヴェルフが掲げるそれを覗き込んで呟く。ヘステイア様は固唾を飲んで見守り、ベルは思考停止——いや違う、立つたまま気絶してる。ミコトは唾然としており動きを止めていて……。ううん、なんか想定と違うが。まあ良い。

「現時点での返済額は三〇〇〇万です」
「は?」

現時点での借金五億に対しての返済額は三〇〇〇万。つまり残り四億と七〇〇〇万である。

俺の説明を聞いて入団希望者からは軽蔑の視線が。仲間内からは驚愕の視線が注がれる。

「ミ、ミリア君、いつの間に三〇〇〇万もつ……!!」

「え? ヘステイア様知らなかったのですか?!」

「おいちよつとまで……これは……確かにちゃんとした返済証明書だな。ヘファイストス様の署名サインもある」

ベルを部屋に運びたいが、それ以前に入団希望者が暴動起こしかねないからこつちから対処せねば。

「ちなみに、この借金五億を背負ったのは約三ヶ月前です。そして、その返済金はその三ヶ月で集めたモノです」

入団希望者の内、何人かが俺の言いたい事に気付いたのか驚愕し、そして納得の表情を浮かべる。それでも余り良い印象は持たれていないのか眉を顰めたままだ。

そして、未だに気付いていない能無しは……まあ、そうだな。うん、少し考えてどうぞ。

「簡単に言います。現在の我々の派閥は、一ヶ月で一〇〇〇万ヴアリス以上稼ぎ、返済に充てられます」

この意味を理解できるだろう?

「確かに、あと数年は返済の為に資金を費やすでしょう……ですが、数年後にはどうでしょう? あ、アポロンの所からの賠償金については皆さんもご存じの通り、まともに入らなかった事も伝えてきますね」

現時点では確かに爆弾を抱えていると言っても過言ではない。し

かし、その爆弾も順調に解体予定であるのだ。

「『ディアンケヒト・ファミリア』との契約もある。『再生薬』が完成すれば今以上の資金が流れ込んでくるだろう。つまり、この借金は既に返済予定も立っていて問題はない。」

「現時点で入団する者達に、この借金返済への協力要請はしません。当然、派閥からの補助は他の派閥に比べて小さなモノになるでしょうが」

逆に借金返済後はどうだろう。現時点で派閥に所属していれば、おおよそ二年から三年後には一ヶ月に一〇〇〇万以上の収入のある安定した派閥になる事は確定と言っていい。

まあ、俺が死ななければ、なんだけど……死ぬ気なんてさらさら無いしね？

「以上の説明を聞いた上で、もう一度問いましよう。「ヘステイア・ファミリア」への入団希望取り消しの意思はありますか？」

背を向けて去ろうとしていた者達がもう一度人垣となって整列する。現金な奴らだ事……。

内心で軽蔑の視線を向けつつ、返済証明書を箱に戻して吐息一つ。ぶつちやけ此処で帰ろうとする様な考える頭の無い能無しはいらな一と思うんだがね。現状を考えれば借金五億って「ヘステイア・ファミリア」だと割と返せない額ではないし、そこら辺まで思考が回らないのはどうなのかって話だが……一般人には酷な話か。

気を取り直して入団試験の続きを行おうとヘステイア様が次の人を呼ぶ前に、もう一つ追加で話す事がある。

「それじゃあ——」
「すいません、ヘステイア様。もう一つだけ彼らに伝える事があります」

これは重要な事項だ。と言うか、派閥同士の契約に関する話となる訳で……俺の独断で結んだ代物である。だが、言い訳をするならば、条件を呑まなくては「ディアンケヒト・ファミリア」の援助を受けられなかったのだ。

アレのおかげで潤沢な医療品、ハイ・ポーション高位回復薬だけではなくエリクサー万能薬すら

湯水の如く使えたのであって……まあ、簡単に言えばアポロンの派閥に勝つために必要な契約だったのだ。

「貴方達の中には、欠損を治せる薬目的で入団を希望する者も居るでしょう」

むしろ欠損冒険者が入団希望者としてやってきた時点でそれしかありえない。

「まず、半年以上前の欠損は治せない。これは既に説明した事ですが、更にもう一つ、貴方達に伝えなければいけない事があります」

欠損冒険者の内半数以上が項垂れ、舌打ちし——恨みの籠った視線を向けてくる。

……ああ、気持ちわかるさ。治るかもしれないという希望の元に募った彼らが、逆恨みしたくなる気持ちも、わかる。だが——身勝手過ぎる。気持ち悪い。お前らが勝手に希望を抱き、勝手に裏切られただけだろうに。

そして、きつと残りの半数もまた、逆恨みをするのだろう。

「今後派閥に加わる団員が『再生薬』を使用して欠損を治す場合——治療費を請求します」

『は?』

空気がピンツと張りつめ、希望を抱いていた者達が目を見開き、一人の男が前に出てきた。

「おい、何の冗談だ? 治療費を請求するツ!」

「無料で治してくれるんじゃないのかツ!」

「払える訳ないだろうツ!!」

次々に喚きだす愚かな者達に、吐き気が止まらない。

なんで無料で治してもらえるなんて都合の良い考え方してるんだ。なんで、なんでこんなに醜い奴らばかりが集まるんだ。誘蛾灯に誘われた、気色悪い蛾みたいなやつらが——唾と共に罵倒の言葉を飲み込む。

「我々【ヘステイア・ファミリア】は、『再生薬』作成を担当する【デイアンケヒト・ファミリア】と契約関係にあります。彼らの要求はいくつかありますが、その中に一つだけ……戦争遊戯後に適応されるモノ

があります」

もし、もしも戦争遊戯で勝利した場合。今日の前で起きている様に、入団希望者を募れば欠損冒険者が「ファミリア」に殺到する。その中で採用する者達が居たとして——無料で『再生薬』を使えばどうなるのか。

まあ、なんだ……彼らから得られるはずの代金が得られなくなる。がめつい性格の神ディアンケヒトがそれを許すと思うか？ あの契約書に署名したのは俺で、その条件を呑んだのも俺だ。

だが、勝利の為に必要な欠片ピースでもあった。

契約内容、【ディアンケヒト・ファミリア】から、無料で提供された『再生薬』は……今現在いる面子メンバー、戦争遊戯のさ中または以前に入団した者達しか使えない。

それ以外の者が使用する場合。正規の金額を支払う事を条件付けられている。

「つまり、貴方達が入団後、「ヘスティア・ファミリア」で無料で治療を受けられる訳ではありません。当然、貴方達が自ら返済すべき借金となります……」

派閥からの支援？ 無理だろ、人数を考えろ。一人当たりの治療費にいくらかかると思ってる。

それに、先に説明した通りに五億の借金返済の為に全力を尽くす訳で……支援なんてできない。少なくとも現時点では。

現状を分かりやすく、噛み砕いて説明していけば——予想通り、と言うか。顔を真っ赤にして激昂する者が出てくる。

「ふざけんな！ 何のためにわざわざここまで来たと思ってる！」

一部、前に飛び出してきたドワーフやヒューマン、獣人等の気の強い種族が喚き散らす。

拳を強く握り、彼らの喚き声を聞かない様にしながら、なんとか微笑みを浮かべる。我慢すればいい、ほんの一握りの身勝手な奴らなんて——なんで、お前らそんなに身勝手に振る舞えるんだ。

冗談じゃない、お前らが勝手に都合の良い幻想を抱いただけじゃない

いか。

悪いのは俺でも、ヘステイア様でもない、勝手に都合の良い幻想を自分に抱かせた、自分自身だ。

お前らはいつもそうだ、勝手に希望を抱き、勝手に失望したのは他ならないお前達で――

『騙しやがったな!』

――それは、それだけは聞き捨てならない。

突然、弾かれた様に小人族バルウムが玄関前から飛び出し、喚く冒険者の内の一人に躍りかかる。

彼女の革靴ブーツが男の側頭部を捕え、人垣を割って吹き飛んだ。義足で動きが鈍った人垣の一部をなぎ倒して吹き飛んだ彼は、頭を抑えながら起き上がり――額に押し当てられた指先銃口に身を震わせた。

「誰が、誰を騙したと?」

息を呑み、震えあがる彼は『神の鏡』を通じ、彼女のその魔法の威力を目にしている。

一応、恩恵は授かったままであり、第三級冒険者としての能力も持つてはいても、彼女の動きを全く見切れなかった。

「ヘステイア・ファミリア」が、貴方を騙したと?」

小人族は静かに問いかける。

指先銃口を向けられた彼は、それでも反論を口にした。

「だってそうだろうっ! 治るって思ってた来てみりやあ、実は治らないなんて!」

彼が抱いたのは希望だ。長年続けた冒険者としての活動が断たれ、絶望と共に底辺を彷徨い歩き、ようやく見つけた、微かな希望。縋り付こうとしたソレは、莫大な借金を背負わされる罠だった。

それを知って怒り狂う彼に対し、小人族の少女は無造作に指先銃口をズラし――男が身に着けていた義足を破壊する。

「やめるんだミリア君っ!」

周囲の者達が慌てて距離をとる中、女神が声を張り上げて静止す

る。

その言葉に動きを止め、直ぐに彼女は指先銃口を男に眉間に向けて眩く様に言葉を落とした。

「取り消してください」

その言葉に男が眉を顰め、ミアはさらに繰り返す。

「我々は貴方を騙していない。先の台詞を取り消してください」

声は震え、怒りを堪える様に指先が揺れ、漏れ出す魔力に空気がざわめき、魔法陣がパチパチと火花を散らす。

「——私は、ヘスティア様は、『ヘスティア・ファミリア』は騙してなんていない」

震える指先銃口。魔法陣が揺らめき、彼女の詠唱つぶやき一つで命を断たれる寸前。それでも睨み返す男に、ミアは告げる。

「——貴方が勝手に希望を抱いて、勝手に失望しただけ」

男が怒り狂う様に、少女もまた怒り狂っていた。

「——貴方を騙したのは、他ならない貴方自身。だから、取り消せ」

身勝手に希望を抱いて、身勝手に期待して、そして裏切られたと、騙されたと喚き散らす。

無知蒙昧な者達の叫び声程、不愉快なモノは無いと。

騙す気も無いのに、勝手に騙されたと、人を詐欺師扱いする奴が、殺したい位憎いと。

「——取り消す気が無い、そう言うのでしたら」

「フアイア死ね」と少女の口から詠唱つぶやきが零れ落ちると同時、発砲音が響き渡った。

第一五一話

静寂が満ちた「ヘステイア・ファミリア」の入団試験会場。

屋敷前の庭に倒れた欠損冒険者を見下ろしていた俺は、静かに魔法を解除してその男から視線を外した。

反発心に満ちたその表情が恐怖に歪み、恨みがましい表情と交じり合っただけ醜いソレ。気絶して動かなくなったコイツに興味はない。本当なら、殺してやりたかったが、しなかった。

男の頭部があつた場所、そのすぐ横を魔弾が穿った。それだけ、それだけで男は気絶した。

「先んじて言いますが、「ヘステイア・ファミリア」は貴方達を騙す意図は微塵もありません。そもそも、無料で治療する等と誰が言ったのでしょうか？」

ほら答えるよ。お前らが勝手に都合よくそう思い込んでただけだろ。

黙り込んで顔を見合わせ始める者達を無視し、玄関前から見下ろすヘステイア様の元へ戻る。

妙な空気になってしまった会場を見下ろし、溜息を零してから置いてあつた保管用の箱を全て回収して気絶しているベルを見てから、ヴェルフに声をかけた。

「ヴェルフ、ベルをお願いします。私は部屋に戻ってますので……後は、ヘステイア様とリリでお願いします」

今回の入団試験での入団者は、何人残るか。いや、もう考えたくも無いな……コイツら、嫌いだ。

本拠一階の奥にある広い居室^{リビング}。長椅子に寝転がりながら壁に取り付けられた燭台を見て溜息を零す。視線を暖炉の方に向けて、もう一度溜息。

入団試験は団長と副団長^{おれ}抜きで行われている事だろう。ヘステイア様のお眼鏡にかなう希望者が居ると良いが……。

時計を確認すれば、あれから数時間経っている。もう何人か選ばれた者が居てもいい頃合いだが——噂をすればなんとやら。ヴェルフの呆れた様な声と、リリの甲高い声、そしてヘスティア様の落ち込んだような声が聞こえてきた。

長椅子に座り直した所で、居室の扉が開かれ、ぞろぞろと三人と……あと序にミコトとサイアが入ってきた。

「倒れたベル様の寝込みを襲うなんて信じられませんっ！」

「ええー、添い寝してただけだよー。性的な事は一切してないしー」

……何？ 倒れたベルの部屋に行つてたのをリリが見つけて騒いでると？

まあいいや。それより新規団員は何人ぐらいなんだろうね。

「お疲れ様ですヘスティア様、お眼鏡に適う人はいましたか」

「ミリア君……あー、そのだね、まあ居なかつた訳ではない、んだけどねえ？」

言葉を濁すヘスティア様に首を傾げつつ、横でやれやれと力なく首を振るヴェルフの方を見る。

「二応、ヘスティア様が入団させても良いかもしれないって奴はいたな。ダフネ・ラウロスだ、お前も知ってるだろ？」

【アポロン・ファミリア】の幹部の一人。熟練の第三級冒険者であるダフネ・ラウロス。もちろん知ってるに決まつてる。もう一人、カサンドラ・イリオンの方はどうだったのだろうか？

というか、させてもいいのかもされない？ させた訳じゃないのか？

「あー……実はな、もう一人一緒にいた奴が居たんだが……」

「ベル様を狙う泥棒猫なんて入団させるなんて冗談ではありませんっ！」

「そうだそうだ、ベル君に気のある娘は御免だねっ！」

「見ての通り、リリ殿とヘスティア様がカサンドラ殿の入団を拒否しました……ダフネ殿はカサンドラ殿が入団できないなら入る意味が無いと……」

ヴェルフの呆れ顔と、リリの甲高い宣言。そしてヘスティア様の胸を張った発言。そしてミコトの補足。

カサンドラ・イリオンはベルに気があって、それを見咎めたりりとヘステイア様が入団を拒否。んで一緒にいたダフネ・ラウロスもそのまま彼女と共に去って行ったと……。

「あのお、身勝手に入団希望者に暴行加えた私が言うのもなんですが……カサンドラ・イリオんとダフネ・ラウロスは入団させても良かったと思いますよ?」

「はあっ!? ミリア様正気ですかっ、あれだけ煮え湯を飲ませてきた相手なのですよっ!!」

「あー、ミリア、アレは気にしなくて良いと思うぞ。と言うかお前がやってなかったら俺がやってただろうしな」

リリが顔を赤くしてまくしたてる内容は、まあ確かにその通りではある。だが、それを踏まえた上で回復能力と判断能力に優れた二人は欲しかった。まあ、ヘステイア様が最終的に決める事だしもう言わないが。

それとヴェルフ、アレは……ヘステイア様が止めなかったらそのまま……その、殺してたぞ? 流石にヴェルフは命を奪いはしないだろうし、いや良い。これ以上なんか言うの後でお小言を貰いそうだし。

「で、入団者は……?」

「居ると思うか?」

あー……まあ、新規団員はゼロね。

欠損冒険者の大半は俺が一人を気絶させた後にそそくさと逃げる様に去って行ったと。んで、残った人員はカサンドラやダフネの二人。彼女らついついさっきの説明の通り、カサンドラの入団を拒否した結果、ダフネもそれに続いたと。

というかそもそもカサンドラが「ヘステイア・ファミリア」入団を希望し、ダフネがそれに賛同していただけであって、ダフネ主導ではなかったことからそのままカサンドラと共に他に流れて行ってしまったとのこと。

「はあ、まあ良いです。暫くは今の人員で派閥運営していきましょっか……」

「おいおいミリア、少しはヘステイア様を諫めたらどうだ? 流石に

ベルに気があるってだけで拒否するのはなあ」

それなりに優秀な人材だったぞ、とヴェルフが呆れた表情をヘスティア様に向ける。

それは確かにその通りではあるが、此処はヘスティア様の築き上げた派閥だ。最終的な決定権はヘスティア様にあるし、俺は『神の意思通りに、仰せのままに』って奴だよ。

………はあ、そっか入団者ゼロか、悲しい様な、嬉しい様な、寂しい様な。深い溜息を零した所で、リリがふと此方を見て呟く。

「そういえば、あの借金についてリリ達に説明すべきことがあるのではないですか？」

リリの声が響き渡ると同時、ヴェルフが眉を下げ腕組をし、ミコトは申し訳なさそうに身を縮こまらせた。

サイアは何のことかわからずに小首を傾げ、ヘスティア様が頭を抱えた。

「その話なんですけど、皆が帰ってきてからで良いですかね」

イリスさんやディンケさん、彼ら全員がそろってから説明した方が一度で済むし。

秒針の奏でる音色響かせる時計の針が指し示す時間は日没。

話す事があると集まってもらったディンケさんが壁に凭れ掛かって欠伸をしているのをながら、輪になってヘスティア様と俺を囲んで輪になる皆を眺める。

帰宅したロキ組の面々は表情険しく此方を見ており、サイアだけが頭に疑問符を何個も浮かべて状況を理解していない様子。

未だに魘リヒンクされているベルを除く派閥構成員全員が一堂に会した居室。

時計の秒針が刻む音色だけが響く中、口を開いたのはロキ組を取りまとめているアマゾネス、イリス・ヴェレーナであった。

「で？ 借金五億ってどういう事？」

赤い目で交互に俺とヘスティア様を見ては眉を吊り上げ、不機嫌さを隠しもしない彼女の様子を見つつ、説明を始める事とする。

「街中で噂をお聞きしたのでしよう。おおよそその通りですよ……一部は否定させていただきますが」

ダンジョン探索から帰還し、換金を済ませていざ本拠へと足を踏み出したロキ組の面々。そんな彼女らに向けられる同情の視線と、ひそひそ話。何事かと疑問を覚えた彼女らの耳に飛び込む『ヘステイア・ファミリア』が五億の借金を抱えている』と言う噂。それに加えて『欠損冒険者を追い払った』と言う非道極まりないと非難される噂の二つだ。

それを聞いて大急ぎで帰宅した彼女らは、真つ先にそれを問いただそうとしているのである。

「まず、借金については事実です。ですが、既に三〇〇〇万ヴァリスを返済済みで、一ヶ月辺り一〇〇〇万ヴァリスは確定、今後『ディアンケヒト・ファミリア』が『完全再生薬』を完成させればさらに収入は増えるでしょう。この借金については増援組の手を借りる必要はないのです」

「……つまり、俺らは最低限、ギルドへ納める税の分だけヴァリスを派閥に納めれば良いと？」

ディンケの言葉に大きく頷く。

イリスや他の面々も成る程と頷いて納得してくれた様子ではあるのだが、ヴェルフ、リリ、ミコトの三人は未だに眉を顰めてヘステイア様を見ていた。

「いや、それは別に構やしないんだが……ヘステイア様、どういう事が説明してくれませんかね」

「そうですよ、ソレがベル様の『神様のナイフ』とミリア様の『竜鱗の朱手甲』の借金なのはわかります。ですが、何故それをミリア様が返済しようとしているのですか？」

リリの棘のある言葉にヘステイア様が息を詰まらせ、若干困った様に頬を掻き、俺をちらちらと見ながら弁解を述べ始めた。

「実は借金についてベル君には秘密にしてただけ……その、ミリア君には気付かれてしまっただけね」

「……それは、まあミリア殿に隠し事は出来ないでしょう」

納得の表情でミコトが領けば、他の面々も同じ様に領いて肯定した。俺って何、そんな風に思われてるん？

いや、事実、皆にそれぞれ隠し事やらなんやらあるのは知ってるし、暴こうと思えば暴けるとは思うけど、親しい中にも礼儀あり。流石に無遠慮に暴いたりはいしない。

「それで、その……ミリア君が返済してたのはボクも知らなかったんだ」

「はい？　ヘステイア様の個人的な借金なのにミリア様が返済して、それを本人が知らなかったと？」

「うっ……その、通りさ」

申し訳なきように俯くヘステイア様だが、黙って返済してたのは俺だ。

どっちかって言うとなんも報告を入れて無かった俺にも問題があるとは思うんだが……。

「はあ、ヘステイア様。ミリア様がこういった借金を見たらどういう行動をとるかぐらい予測できるでしょうに」

「ミリアなら黙って一人で片付けようとするだろうなあ」

「まあ、ミリア殿ですし……」

皆の厚い信頼に涙を禁じ得ない。ある意味、褒められる性質タイプでは無いのに自覚はあるがね。

「うっ……すまない。というかミリア君、ボクは前に君に言ったと思うけれど、これはボク個人の借金だ。派閥に迷惑はかけないから気にしないで良いよ」

「ミリア様の補フォローいが無ければ間違いなく入団希望者はゼロになってましたけどね」

鋭く突き刺さるリリの棘のある言葉にヘステイア様が胸を抑えて仰け反る。そこら辺の踏まえてのフォローだったのでそんなに気にしなくても……それに、適材適所って言うじゃん？　稼ぎに関しては非合法にならない範囲でも十二分に補えそうだし任せて貰えるところりがたいんだけど。

と言うか、入団希望者ゼロは回避できたのに、入団者ゼロだったの

はりりにも原因があるのでは……？

「それに、五億だなんて法外な金額請求だなんておかしいです。眷属の契りを交わしたりりり達に説明するのが主神様の義務ではないでしょうか」

刺々しいりりの言葉にヘステイア様がうぐつ、と息を詰まらせ、イリスさんやディンケさん等にも視線を向けてから、観念した様に口を開いた。

「実は……最初の眷属でもある二人にどうしても贈り物がしたくて……ベル君にナイフを、ミリア君にはヘファイストスに相談に乗って貰って作るモノを決めたんだけど……色々あってね」

冒険者として、強くなろうと決意したベルと、それを支えたいと願う俺。そんな己の眷属達に心打たれ主神として出来る事は無いかと模索し、考え付いたのが武装を贈る事。

女神ヘファイストスに無理を言って作成をお願いしたこと。

世界に一振り、一つしか存在しないベルの《神様のナイフ》と俺の《竜鱗の朱手甲》は鍛冶神様にしか作れないこと。

そして、神が自ら槌を振るい御業を披露する代価として法外な金額を請求された事。

「文字列が入ってるのは知ってたが、まさかあの方直々の作品だったとは……」

もともと鍛冶派閥に所属していたヴェルフが片手で目頭を押さえて呻くようにこぼす。

ミコトは億単位の借金に踏み切った事に息を呑み。下級冒険者の頃から不相応な装備を身に着けていたベルと俺の事を知っているりは、察しはついていたのか嘆息と共に納得の言葉を零した。

「……先ほどイリス様からも言われましたが、今や神様達の手で都市中に噂として広まっていますよ……【ヘステイア・ファミリア】は借金漬けの爆弾【ファミリア】だと」

「一応、借金返済は余裕ではあるけど……返済完了まではどうしようもないですね」

神々が背びれ尾びれを付けて面白おかしく語る噂の所為で今の【ヘ

ステイア・ファミリア」に新規団員は寄り付かないだろう。

とうるか、神々の意図も何となく察しが付く。出る杭は打たれると言うだろう？ つまり、目障りだから嘘にならない範囲で悪い噂を流しまくって足を掬って来てる。面倒極まりない。

そして、俺が追っ払った欠損冒険者達は逆恨みして悪い噂を流してる。此方は大袈裟に『欠損冒険者を無慈悲に追い払う血も涙もない派閥』だと言いつらして……やっぱ、殺しておけばよかった。

「はあ、とりあえず……残り四億七千万は、やばいしろ」

「非常に、やばいですね」

いや、それは既に解決済みと言っている。返済計画も立ててあって

「ミリア、お前正気か？」

「ミリア様、お一人で返すと？」

「……流石にそれはどうかと思いますが」

「そ、そもそもボクの借金な訳で……ミリア君が返してしまつたらボクの立つ瀬がないんだけど……」

いや、でも、ほら？ 返せるよ？ 計画だつて立ててあって順調にいけば普通に返済可能な範囲だし。

どうしてそんな呆れた様な顔するんですかね。出来るよ、問題ないよ？

「適材適所って言葉があつてですね」

「ミリア、それでお前ひとりでもかんでも抱え込む積りか？ 流石に怒るぞ」

ヴェルフが語気を強めて見下ろしてくる。思わず視線を逸らした先でミコトから強く見つめられ、反対に視線を向ければディンケさんが肩を竦めていた。何処を向いても誰かと視線がかち合い、終いには床を見つめる羽目になった。

「そもそも、今の【ヘステイア・ファミリア】は4名もの昇格者ランクアップが出た影響で派閥の等級ランクが一気に上がっています。加えて竜種関連でギルドからの税の徴収額は数百万を超えますし」

「そ、その辺りはほら、各々が出す形で……」

「ミリア殿も自分の分は出す、と?」

「当然ですよ。派閥への納金は眷属の義務ですし」

ヴェルフの眉が吊り上がり、リリがむすつとした表情を浮かべ、ミコトが天を仰ぐ。壁際に並んだディンケさんですら半眼で此方を見下ろし、イリスさんが『そうじゃない』と首を横に振る。

皆して何か間違ってるみたいな反応はおかしい。

「それは、借金の返済をしながらって事か?」

「当然、その為にあらかじめ返済計画を立てたんですから」

「お前一人でか?」

五億の返済計画。その殆どが俺主導、更に加えて俺しか動いていない。他の面々——借金の主であるヘステイア様ですら——関わりの無い計画にヴェルフ達は非常に怒っている様子だ。

ヘステイア様も若干怒っている様子で……でも、だって、ほら、返せるよ? そういうの得意だし? 是非任せてくれれば、良い感じに、その……収まるよ?」

「稼ぎに、問題は無くて……ですね?」

「ミリア様一人に負担をかけるなんて言語道断です。今までもそうだったでしょう、ミリア様一人であれやこれややって……戦争遊戯ウォーゲームで少しは頼る事を覚えて頂けたかと思えば……はあ」

そんなこれ見よがしな溜息吐かなくても良いじゃん。本当に困つたら頼むし、今は本当に困ってないよ。だって計画も順調だよ? 俺が死なない限りは全然平気だし! だからほら、気にしなくても、良いんだけどなあ。

なんとか説得しようと言葉を重ねていると、リリが手を叩いて俺の発言を強制的に止めた。

「……ミリア様の戯言は置いといて、今後は【ファミリア】一団となつて稼がないといけませんね」

「だな、ダンジョンに潜る回数を増やすか」

「冒険者依頼クエストも積極的にこなしていけないと」

「戯言ッ!? 酷くね? そこまで邪険に扱わなくて良くない? 何がいけないの?」

この額の返済は流石に全員協力しても大変だし、そういうのは得意な奴に任せちゃえば……いいと、おもう、ただけどなあ………。

「ま、待つんだ！　そもそもこれはボクの借金さ、ボクが自分で返す！　いや、返さなきゃいけないんだ!!」

「……でも、それだと間違いなく数百年は俺とベルの為に時間を費やす事になる。」

いくらなんでも、それは無い。既に両手で抱えきれないぐらいに色んなものを貰ったのだから、更に数百年と言う時間を俺の為に使うだなんて、それは、やり過ぎだ。

「むしろこの契約書はボクが二人に向ける愛の結晶！　誰にも渡してなるものかッ！」

「借金の塊が愛の結晶であつてたまるものですか！」

「愛の結晶と仰るのであればもつとしっかりと管理して頂きたかったです」

「自分の荷物に紛れていましたからね……」

リリ、ヴェルフ、ミコトが白い目をして強烈な棘を含む突っ込みを入れる。ヘステイア様が呻き、それでも結わえた髪と共に顔をぶんと振って立ち上がった。

「ともかく、キミ達が借金を請け負う必要はないんだ。ミアア君が返済してしまつた分は、ちゃんとミアア君に返す！　ボクがバイトしているのは知っているだろう？　あれの対価は殆ど借金に当ててるんだ。何百年かかろうと返しきってみせるさ」

納得がいかないので反論しようと口を開こうとすると、ヴェルフ達に鋭く睨まれてしまう。

言外に黙っていると言われ、大人しく座り直していると、ヘステイア様が続ける。

「とにかく、これは決定だから。眷属キミ達は何にも気にしなくて良いから。以上ッ」

「どちらに？」

「部屋に戻るんだよ」

早口に捲し立ててそのまま部屋を出て行くこうとするヘステイア様

にミコトが問いかければ、ぴしやりと言い切つり、居室リビングから出ていってしまう。

取り残された返済証明書を丸めて箱に仕舞おうとすると、横から伸びた手がソレをひよいと奪っていった。

「ヴェルフ、返してくださいそれは——」

「なあ、前にも言ったが。俺達が頼りないのか？」

違う。それは絶対に違う。

ただ、俺が得意な場面だから、俺の手腕を存分に振るえる場面だから、全力を尽くすだけだ。

Lv. 2のヴェルフから木箱を奪い返し、しっかりと抱えてその場を後にする。

足早に居室リビングを後にする少女の背を見ながら、ヴェルフが重苦しい溜息を零した。

「はあ……リリ、どう思う？」

「似た者同士と言いますか……変な所で頑固なんですよねえ。ヘスティア様もミリア様も」

「あの二人があそこまで必死になるのは、やはり【ファミリア】の為なのでしょうが……」

リリとミコトも同じ様に溜息を零し、成り行きを見守っていたディンケが肩を竦める。

「あの手の頭の固い奴は何言っても無駄だな。勝手に手伝うぐらいで良いと思うぜ？」

「うーん、凄く頑張ってるのは伝わってくるって言うか、なんというか……やり過ぎな感じするよね」

イリスがうんうんと唸り、小さく溜息を吐いて顔を上げる。

「一応、私達もダンジョンに潜る頻度上げて少しでも稼ぐよ」

「いや、アンタらは関係無いだろ。一年後には元の派閥に戻るんだろっ？」

ヴェルフの言葉にイリスが眉を顰め、デインケが頭痛を堪える様に眉間を揉んだ。

「いや、今の見せられて『わかった。全部任せる』とはならんだろうに」「一年とはいえ仲間だしね。まあ、副団長のアレはちよつとどうにもならないと思うけど……」

一年という長い様で短い期間、「ヘステイア・ファミリア」の団員として、女神ヘステイアの眷属として活動する彼らにも考えはある。

確かにミリアの言う通り任せておけば自分たちは非常に好待遇で過ごせるだろう。しかし、事あるごとに『何か必要なモノは無いか』と問いかけてくる副団長に思うところが無い訳ではない。

冗談で欲しい物を言うのと、本気でソレを揃えようとしてくる辺りで彼らにもおおよそ察しはついてる。

「過剰なんだよな。返し方が」

「だよねえ。こっちはもう十分だつて思ってるのに、まだ足りないって思つてそうつていうか……ちよつとおかしくない？ 副団長つて」

デインケとイリスの二人の迷う様な言葉に対し、ヴェルフとミコトが納得の吐息を零し、リリが頭を抱えてぼやいた。

「……親と子は似るとは言います。しかし人を頼らない部分なんて似なくても良いのですが」

一人で部屋に籠っていると、モヤモヤとした陰鬱な考えばかりが浮かんでしまい気分が沈み続けてしまう。

流石にこのまま部屋に籠つていてもモヤモヤするだけだと、気分転換に例の風呂に足を運ぶことにした。

十人は余裕で入れそうな大浴槽。新品の木材ひのきの良い香りに満ちる浴場を眺め、溜息一つ。

天井付近を見上げれば、湿気対策に隙間が作られており——決して覗き用のモノではない——男湯から聞こえるやり取りが耳に入った。

『良い木材使つてんな』

『おおー、ほぼ貸し切りか』

『広いな、というか広すぎる気がするが』

『……四人で使うにはちと広いか』

デインケ、ルシアン、エリウツド、そしてグラン。ガネーシヤ組三人と、ロキ組の黒一点が壁越しの男性用の風呂に入っているらしい。

そのやり取りに耳を傾けつつ、髪を丁寧に洗っていると、女性風呂の入口が開かれヘステイア様が入ってきたのが見て取れた。

「……………ヘステイア様」

「やあ、ミリア君……えつと、あはは」

気まずい空気に満ち、ヘステイア様が俺とは真反対の洗い場で体を洗い始めたのを見て、溜息を飲み込んだ。

こんな風に、気まずい雰囲気は嫌だが、声をかけ辛い。更に重苦しい溜息を溜め込みながら髪を洗い終わると、同時にヘステイア様も髪を洗い終えたのか目が合った。

思わず視線を逸らし、そのまま湯に足を付けて一気に全身を沈めた。肩まで浸かりながら体を弛緩させる。

全身に感じる熱い湯の感覚に吐息を零し、天井を見上げる。同じようにヘステイア様も天井を見上げているのを視界の端に捉えていると、ガラガラと戸の開く音が響いた。こちらではなく、男性の方らしい。

入ってくる時期的に、ヴェルフかベル。もしくは両方だろうか。

『おつ、団長じゃないか。先に風呂貰っちゃったぞ』

『デインケさんに、ルシアンさん、皆さん入ってたんですね』

デインケの冗談交じりの言葉にベルが戸惑いがちに応える声が聞こえた。

『思ってた以上に豪華だな、見ろベル』

『本当だ、ミコトさんの拘りのおかげだね』

『まあ、ちょっとやり過ぎだけどな』

『あははは……』

ヴェルフとベルのやり取り。ベルの声は若干固く、気落ちしている様子がうかがえる。

ぼんやりとそのやり取りを聞いていると、ヘステイア様が音も無く壁際に近づいてぺたつと張り付いたのが見えた。盗み、聞き? …… まあ、良いか。

『……ん? えっと、どうしたのヴェルフ?』

『いや? 冒険者らしい体付きになったもんだと』

『ええっ』

『前よりも筋肉もついたんじゃないのか? ほら立派なもんだ』

『あ、あの……そうかなあ』

二人が男同士でじゃれ合う声が聞こえ、ヘステイア様が壁にさらに強くへばりついて良く声を聞こうとしていると、今度は女性用の浴場の戸が開かれ、ミコトとリリが顔を出した。

「ミリア殿と、ヘステイア様?」

「ヘステイア様は何を……?」

「しーっ、静かに」

人差し指を口の前に立て、静かにする様に言いながら、ヘステイア様は腰に手を当てて力強く宣言した。

「覗きは女の浪漫だぜっ」

性別間違えてますよヘステイア様。

第一五二話

極東式の檜風呂。迷宮の天然温泉とは全く違うその湯に浸りながら、ベルは静かに天井を見上げていた。

入団希望者を募る会合であった衝撃的な事実で意識を飛ばしており、その後新しい団員が一人も居ないと聞いて気落ちしていたベルはようやく肩の力を抜いて、吐息を零した。

「少しは、元気になったみたいだな」

「えっ……」

「急に倒れたから心配したんだぞ。あんまり考えすぎるなよ、らしくない」

すぐ横で同じく湯に浸かるヴェルフが笑いかけてきたのに気付いたベルは小さく頷く。

自分が凄く心配をかけてしまった事に気付くと、ごく自然に少年の口から言葉が零れ落ちていた。

「うん………ヴェルフ、ありがとう【ヘステイア・ファミリア】に入ってくれて」

「ん、どうしたんだ急に」

「いや、ちゃんとお礼を言っておかなきゃって思ってたんだ。リリヤミコト、助けてくれたデインケさん達にも」

眩く様に口にしたその言葉に、デインケ達が小さく肩を竦めていた。

その様子を見てベルが小さく笑みを浮かべ、独白を続ける。

「僕、本当に嬉しいんだ。皆と一緒に同じ本拠ホームで暮らせる事が……なんか不思議だね。出会った時はこんな風になるなんて思っていなかった」

「そりゃあそうだ。俺だって思っちゃいなかった」

ヴェルフの相槌に応える様に、今の沈んだ気分を晴らす様に、少年は想いを口にした。

「ミコトさんは、ダンジョン内で咄嗟に僕が助けよう、なんて無茶言つて助けた事がきっかけで……あの時はまだまだ未熟で……今も未熟

「だけど」

「あの時の事は今でも思い出せるな。だが、お前は間違ってたなかつた」
「あの時助けた事がきつかけだけど、まさか大切な自分の派閥ファミリアから移籍までしてくれて、戦争遊戯ウォーゲームの助っ人に駆けつけてくれた。……いくら感謝しても足りないくらい」

「……ああ」

若干歯切れが悪くなったヴェルフの相槌にベルが彼を見上げれば、ヴェルフは困った様に笑い、天井を見上げて呟く。

「感謝しても足りない、か」

「ヴェルフ？」

「なあベル、ミリアの事はどう思ってるんだ？」

「ミリアの事……？ そうだなあ」

少年が迷宮都市オラリオにやってきて。初めて出会い、救った少女。胸を張ってそう言つて良いのか若干自信は無いけれど、それでも出会いはそんな形であつた事に違いはない。

「最初は、僕が手を引いてあげなきゃつてそう思った。ヘスティア様と引き合わせて、同じ眷属になつて……ふふつ、僕つてき、凄く情けなくてさ……いつもミリアに助けられちゃうんだ」

「そうか」

「怪物 祭の時、シルバーバック……あの時には敵わないかもしれない怪物から逃げ惑つていた時、ミリアが駆けつけてくれて、時間を稼いでくれたんだ」

「ああ、噂で聞いた。駆け出しのヒューマンと小人族、二人で倒したんだつてな」

「うん、他にも、いっぱい。あのミノタウロスとの闘いもそうだった。ミリアが後ろで援護してくれるつて確信があつたから、僕は恐れずに怪物の前に立てたんだ」

「なるほどな」

「本当に、数え切れないくらい。決死行の時も、十八階層でも、戦争遊戯ウォーゲームでも……」

少年が連想する今までの日々。傍らには常に余裕そうな表情を浮

かべた少女の姿があつて。心の奥底から、少年は断言出来た。

「……本当に、あの時、ミアアの手を取って良かったって思ってる」

「そうか……」

「それに、神様もそうだよな」

目を瞑り、今までの出来事を思い浮かべながら、これまでの日々の中で欠かせない主神かみの事を話題に挙げた。

「神様、こんな僕を見つけてくれたんだ……僕に居場所をくれた。僕がオラリオに来てからの日々は、全部神様がくれたんだよ。ミアアの手を取ったのも、それが理由だったし」

「どういう事だ」

「ははは、笑っちゃうよね。僕が救って貰えたから、神様ならミアアも救ってくれるんじゃないかって……あの時の僕は神様に頼ってたんだ。ミアアと家族になれたのも、神様のおかげで……」

少年はそこで言葉を止める。息を吸って、吐いて、戸惑う様に慕う青年の名を呼んだ。

「ねえ、ヴェルフ」

「どうした？」

少年が静かに湯に浸かる皆を見回して呟いた。

「僕ってさ、皆に貰ってばかりだね。これで良いのかな」

「良いに決まってる」

「えっ」

ヴェルフの間髪入れずに呟きに応えた。しみじみと、波紋が交じり合う水面を見下ろしながら、ヴェルフは力強く断言する。

「お前が俺達に助けられたと思ってる様に、俺達もお前に助けられる。そうやって支え合ってるのが【ファミリア】ってものだろ？」

「うん、そうだったね……そうだよな、僕たち、同じ【ヘスティア・ファミリア】なんだから」

男湯に募った者達をベルが見回せば、思い思いの仕草で少年の視線に応える姿があつた。

「まあ、当然だ。困った事があれば言ってくれ、力になるさ」

「猫の手も借りたいなら言ってくれよ」

「俺らも仲間だ、エリウッドさんもそう思うだろ？」

「触るなルシアン。まったく……我々も共に進む仲間なのは否定しない」

「盾が必要ならいくらでも貸すが、頭脳労働は任せてくれるなよ？」

壁の向こうから聞こえたやり取り。

温かな笑い声や冗談が響く男湯からの声。ベル、ヴェルフ、そして他の皆のやり取りに思うところが無いとは言えない。

ぼんやりと天井を見上げていると、ふとすぐ隣に誰かが肩を並べて湯に浸っていたのに気付いた。

「ミコト？」

「……………」

小さく会釈してきたミコトを見て、距離を取ろうと反対へ身を流そうとして——誰かと肩が触れ合う。

「あつ、ごめ……えつと」

「……………」

反対側で静かに湯に浸っていたのは、リリだった。左右を挟まれていた事に気付いて、前に逃げようとして、目の前で湯に浸かるヘステイア様と真正面から向かい合った。

「……………ミリア君、大丈夫かい？」

問いかけに対し反射的に『大丈夫』とありきたりな答えを返そうとし、口を塞いだ。

——さっきまで男湯の話声に聞き耳を立てていたのではなかったのか。

「え、まあ、はい。えつと……盗み聞きはもう良いので？」

俺の質問に対し、リリとミコトが肩を竦め、ヘステイア様が視線を逸らした。

もしかして、嵌められた？ いや、悪意は微塵も感じられない。なんとするか、逃げ場を無くされただけな気がする。

どうすれば良いのかわからずに見回していると、ヘステイア様が真つ直ぐ此方を見据え、呟く。

「……………この後居室リビングで話したい事がある」

そう言つて、ヘステイア様は眉を下げて困つたような表情を浮かべた。

短く、それだけを告げたヘステイア様はそのまま去つていく。リリと、ミコトもヘステイア様に続いて出て行き、気が付けば男湯の方から聞こえていたベルやヴェルフ、デインケ等の和気あいあいとしたやり取りも途絶え、湯口から湯船に注がれる湯が立てる僅かな音色だけが残されていた。

ふと、のぼせ気味になつている体を湯船から引つ張り上げて淵に腰掛け、揺らぐ水面に映つた己の顔を見た。

過去、悪行を重ねた男のモノではない。白い肌は赤く火照り、濡れた黄金色の髪の毛の隙間から、赤と蒼の二色の瞳が覗いていた。

戸惑いと、困惑と、それから色々な感情がごちゃ混ぜになり言葉では説明できない混沌とした感情の色合いを宿した瞳。俺の、目。

答えが其処にある。その目の奥底に——暴き立て、白日の下に晒すべき、俺の醜い感情。

頭の中でグルグルと回っているのは、ヴェルフの台詞だ。

『お前が俺達に助けられたと思つてる様に、俺達もお前に助けられる。そうやって支え合つていくのが【ファミリア】ってものだろ？』
わかつてる。理解してる、一方的に助けて、力添えして、そんなモノは【ファミリア】とは言い難い、自分勝手な代物だつてのは、わかつてるんだ。それでも、他の皆に苦勞をかけたくはない。

身勝手な想いで皆を振り回して、結局は独り善がりでしかない、そんな代物。

日も暮れて月明かりが差し込む居室リビング。

一番最後にその入り口の扉に手をかけたのは、俺だつたらしい。

ほのかに立ち上る湯気、湿り気を帯びた髪、全員が風呂上りなのが

伺える。

部屋の中央、暖炉を背にして仁王立ちをするヘステイア様の前に、「ファミリア」の皆が集まっていた。静かに顔を上げて此方を見たヘステイア様に促され、空いた一角に腰を下ろす。

「さて、集まって貰ったのは他でもない。ついさつき、ボクはキミ達に迷惑はかけない、そう言ったね」

厳かな雰囲気に含まれている理由は、月明かりに照らされているからだけではない。

申し訳なさそうに、ヘステイア様は続ける。

「主神であるボクが、真っ先に改めるべきだった。ごめん、皆」
深々と頭を下げて顔を上げたヘステイア様は、微笑んでいた。

己の血を授けた眷属達を見回し、最後に俺とベルを交互に見てから、口を開く。

「ボクは情けない主神さ。それでも格好つけたくて、無茶苦茶な事を言っつて、キミ達に迷惑をかけた」

自分の行動で周囲の皆に迷惑をかけたたくない。なにより——
眷属に嫌われたくない。

「でも、格好つけるのはもうやめた」

吹っ切れた様に、微笑みを浮かべたヘステイア様が静かに吸って、吐いて、深呼吸をして息を整えている。

ズキリと胸が痛む。それでも、視線を逸らす事無くヘステイア様を見上げて、言葉を待った。

「お金は何年かかってもボクが必ず返す。だから………皆にはこんなボクを支えて欲しい」

先の発言を取り消すのではない。ただ、頼り方を変えた。

借金を直接返すのではない、神様を支える。それは、温かな食事であったり、家族の団欒であったり、この本拠であったり——ヘステイア様一人では手の届かない、一人ではどうしようもない、笑顔になれる場所を守って欲しい。そう言っているのだ。

「借金まみれで情けない主神で悪いけど………こんなボクで良いかな？」

少し情けない笑みを浮かべたヘステイア様。

それに対し、ベルが身を乗り出して頷く。他の面々も、若干呆れながらも頷いていた。

はじめだけは自分で付ける。けれど他の部分では皆を頼りたい、そんな風に不器用にでも頼ろうとする様子を見せつけたヘステイア様を、場に集まった皆が支え、一緒に力を合わせていこう。そんな意思に纏まりゆく皆を見て、意思を同じくしきれずに床に視線を落としかけ——目の前に手を差し出された。

「ミリア君、恐いなら手を繋いでてあげよう」

目の前に差し出された手の意味が分からない程、俺は馬鹿ではなかった。

主神^{おや}として、手本を見せてくれたのだろう。

ヘステイア様の様子に、ベル達が静まり返る。差し出された手には握もうかと迷い、ぎゅつと小さく拳を握り締め——ぽんつと軽く肩を叩かれた。

「ミリア様」

「俺達が付いてるさ」

リリに、ヴェルフ。月明かりに照らされた二人の様子を見て、さらにその奥、ベルが優しく笑いかけてくれていた。

「ミリア、大丈夫。大丈夫だから」

目の前に差し出された女神の手に、自らの手を重ねる。

力強くその手を引かれ、皆の前に立った。

月明かりに照らされた居室^{リビング}には、皆が集まっている。

優しく見守る様に微笑むベルに、口元に笑みを浮かべたりり、ニツと力強い笑みを見せてくれるヴェルフ、拳を握って頑張れと小さく声援を送ってくれるミコト。その後ろに集まっている者達も、誰もが優しい笑みを浮かべ、励ます様に笑いかけてくる。

握られたままのヘステイア様の手の温かさに浸り、視線を落とす。

——話しておくべきだ。かつてのあの日々の事を。そして、俺が考えてしまった最低な返済計画を。

いつか、話すと、話せる様になるまで待つてくれるとヘステイア様

は言った。

それは、きつと今この場だ。

「私は、【ヘステイア・ファミリア】に入団する以前は……………」
かつての行いの数々が脳裏に蘇る。

思い出せば思い出す程に、自分がどれだけ下劣な人間であつたかを
浮き彫りにする、最悪な記憶。

悪行三昧、その中で俺は直接的な殺人こそしていない。だが、間接
的には数多の人間を殺している。魔されていた時期もあつたが、気が
付けば気にならなくなつていた様に思う。

「最低な、人間でした」

ああ、そうだ。そうだった、俺は人の命を数でしか見れない様になつて
いた。あの頃は、部下が減つたら補充すればいいとしか考えて無くて、
顔を見せる事もしない。画面越しに指示を出すだけ。

こっちはこっちで動くから、お前らは指示通りに動け。出来ないなら
処分して別の奴を用意する。

「酷く、人間味の無い、怪物よりも怪物してるような、そんな、最低な
人間でした」

使えない——— 処分

足手纏い——— 処分

裏切つた——— 処分

自分と同じように、あの女に囚われて逃げられなくなった者達。

同情していた頃もあつたが、そんなモノ早々に捨てた。ソコで生き
残るのに、同情心はいらない。

毎度毎度、同情を誘つて他の奴を蹴落として嘲笑う、糞を煮詰めた
性格の奴が居て、逆に殺してやった。あれが俺の転機だつたのだろ
う。騙されて、死にかけて、咄嗟の判断で相手の計画の穴を打ち抜い
た。相手は死んだ。

「稼いだ金額が全て。人なんて、値札次第では使い捨て同然にも使い
潰して……………」

過去、愛した者は居た。いた、いないなんて、言えない。情を抱い
てしまった。

その娘に名前は無く、食材どれいになりかけだった娘。技術を教え込んで、娘の様に可愛がって、情を抱かせて俺の言いなりになる様に仕込んだ、最高傑作。

ああ、人に着ける評価ではないのはわかかってるとも——俺が教えられる事全てを仕込んだ、完璧な部下。

愛していたかって？ ああ愛していたとも。でも、死んだ。

否、俺が殺した。

依頼主クライアントからの無茶振り。その行動を起こせば死ぬ事が確定していて、別の部下を其処に配属してたら——その部下が裏切った。

始末を付ける為にも、誰かがその代役をしなくてはいけない。俺は会場で動けなくて、通信機越しに指示を出した。あの時、俺は『やれ』そう一言その娘に告げた。

任務は完遂し、莫大な報酬金が支払われる。最後、邪魔になった依頼主クライアントもすっかり事故死して貰って、完璧な仕事だった。俺が育て、愛情を抱いた娘もまた、事故死と言う形で死亡。

「あの頃から、ですかね。お金を稼ぐ際には、人の命を金額で計ってしまっ様になったのは」

娘の死。血も繋がっていない、ただ愛情を注いで、言う事を聞く人形に仕立て上げた積りになっていた、でも俺は、その死に、涙を流した。必要も無いのに、泣いた。

その娘が負傷した時、俺は大袈裟に泣いて彼女の無事を喜んだ——効率的に俺に好意を抱かせる為に。

その娘が任務に成功した時、微笑みを浮かべ彼女を抱きしめた——効率的に俺を愛する様に仕向ける為に。

その、娘が、死んだ時、涙を流す必要なんて、微塵も無かったのに。一円にもなりやしない、無駄な行為。

「駄目なんです。お金稼ぎに関しては、ダメなんですよ」

あの一件以降、人を人として見れなくなる。否、見ない様にした。もし、もう一度、情を抱いてしまえば、取返しのつかない失敗をする可能性がある、そう判断したから。

金を稼ぐ必要がある。それも数千万単位で——あの人人質の安全の

為にも。だから余計な者は捨てる。捨てた、捨て続けた。

求めるのは効率と利益。他に必要ない。

「さ、最初は……………最初の借金返済計画は、皆の手も借りようと……………違う、皆も利用しようとしてました」

ヴェルフ・クロッツ……………『クロッツの魔剣』、売ればどれだけ儲けが出るだろうか？

リリルカ・アーデ……………彼女の変身魔法を使って、情報収集。集めて、売って、利益はどれほど？

ヤマト・ミコト、ディンケ・レルカン、イリス・ヴェレーナ……………皆、みんなだ、みんなの能力を十全に発揮して、どれだけの収益を上げられるのか。

「私の予測が正しければ全員の能力を十全に発揮すれば。五億なんて半年かからずに返済できますよ」

ただし意思や感情は度外視して、だ。

最高効率と最高利益だけを追求した、血も涙もない、そんな計画。「最低でしょう？ 気持ち悪いでしょう？」

家族になったと、笑いかけた相手。そんな人達を、利用しようとした。

——だから、だからこそ、皆に知られたくなかった。

「私は、そんな人間なんですよ」

ふと、我に返った時。自分が考えていた計画の一端を目にした瞬間、吐いた。

大切に思ってるはずなのに、何処は歯車が狂ってる様に、ふとした瞬間に利用法を考えてしまう。

「だから、私は……………」

一気に、吐き出す様に、ぶちまけて——限界だった。

息が詰まる。皆の顔を緑に見る事が出来ない。

「……………」

違うのだと、それだけは違ったのだと、思いたかった。

誰の手を借りるでもなく、自分だけで返す。他の誰も利用せずに、俺の手だけで、返す事でソレを否定したかった。

昼間、入団希望者として集まった、あの屑共の同類だなんて、認め
たくなかった。

それに、こんな事を知られたら、笑い合った仲間が、そんな風に利
用しようとしていたなんて、知ってしまったら。

——今まで通りに笑い合う事なんてできない。

月明かりだけが差し込み、街の喧騒が遠くに聞こえる室内。

あるのは過呼吸気味の荒い息遣い。跳ね狂う心臓の音色。ガンガ
ンと耳鳴りが響き、溢れ出した涙が毛の長い絨毯に滴り落ちる。

どうして、こんなに汚いんだろうか。せつかく、せつかくヘステイ
ア様が拾い上げてくれたのに。

夕暮れに染まる街並。ベルが、俺の手を引いてくれた。ヘステイア
様と引き合わせてくれた。

月明かりが差し込む市壁の下、ヘステイア様が名を与えてくれた。
今まで無くして、ずっと渴望していたモノを、与えてくれた。

居場所も、温かさも、優しさも、どれも両手で抱えきれないぐらい
大切なモノを、一杯貰った。

なのに——そのはず、なのに。

醜すぎる。酷過ぎる、なんなんだコレは、家族だって笑い合った相
手を、利用しようだなんて考える、そんな下種だったなんて、嫌だっ
た。知りたくなかった、知られたく……：……なかった。

「ごめん、なさい……」

戦争遊戯ウォーゲームのさ中、ヴェルフが意地を曲げて魔剣を打ってくれた。

そのきっかけは、俺の涙にあつて——あの、涙は、本当に、俺
が流したモノか？

ヴェルフをその気にさせる為に、必要に応じて流した涙ではなかつ
たか？

リリを助けようとしたのは、一人でも多くの戦力を確保しようとし
たからじゃないのか？

ミコトが助つ人来た時、心のどこかで桜花や千草も来れば良かつ
たのにと悪態をつかなかったか？

増援組に与えたのは最低限の任務。グランが片腕を失い、ファイアが

片足を失う程に奮闘してくれるだなんて、考えていなかった。意思や感情を無視して、最低限の利用法だけを考えていたのではないか？

———どれもこれも、利用していただいただけではないか？

「私は、みんなを……………利用して……………」

助け合い、支え合う。そうやって過ごすべき【ファミリア】の中で、自分だけが、利用法を考えてる。

場違いで、汚らしい、そんな奴。

静寂に包まれた部屋に響く、嗚咽。

小さな少女は、己が犯した悪行の数々、その一部を晒した。

突き落とされた地獄で抗い続け、ようやく手に入れた今という平穩の中で、過去の経験から知らぬ間にあの頃感覚で進めようとしてしまうソレ。

利用され続けてきた日々。利用される事を嫌い、人を利用する事も同時に嫌悪している。

利用しようとしてしまった事を自ら戒め、そうならぬ様に己の手のみで解決しようとした。

———だからこそ、話を聞いた者達は納得したのだ。

「そっか……………」

「ミリア様はそれで誰にも頼りたがらない、と」

「それでか……………」

「成る程……………」

頼り方を知らないのではない。人を頼る事はイコールで利用する事だと認識している。

俯き、神へステイアの手を握ったまま視線を床に落とす彼女に対し、ベルは意を決して口を開いた。

「ミリア、僕はもつとキミに頼って欲しいんだ」

「……………でも、それは」

俯いたまま、視線を合わせる事も出来ずに震えて涙を零す彼女が否定の言葉を重ねようとし、遮られる。

「違いますよミリア様、利用しようとかそんな風に難しく考える必要なんてないのです」

「ああ、そうだな。難しく考え過ぎだ。もっと気軽に相談しろよ」
「相談して頂ければ自分たちは力に成れます」

リルルカ、ヴェルフ、ミコトの順に発言してミリアに笑いかける。

彼女は俯いたまま、視線と涙を床に落としている。

「ミリア君、顔を上げなよ」

女神に促され、少女が身を震わせる。

呼吸は乱れ、涙が零れ落ち、震える手でヘステイアの手を握ったままきゅつと目を瞑る。

「大丈夫さ、ミリア君。キミの好きな皆は、そんな事を気にする子達じゃないさ」

女神に促され、少しずつ顔を上げていく。

涙でぐしゃぐしゃになったまま見上げた光景は――

――今まで通りに笑いかけてくる仲間の姿だった。

第一五三話

軽蔑の視線を受けるでもなく受け入れられた事に喜びに浸ったのも昨晚の事だ。

俺一人での返済計画はダメ出しされて変更を余儀なくされ、皆で話し合った末に出たのは、より一層力を合わせてこの一件を乗り越えていくという結論だった。

朝早くからバイトに出て行つたへステイア様を見送つてから、残りの仕事を片付けるべく皆で手分けして屋敷の中を駆けずり回る。

イリスさん達やディンケさん達も今まで通り、変わらぬ表情で接してくれ——てい、る、と思う。若干、生暖かい視線を受けるのは、仕方なしと割り切るほかないだろう。むず痒いからなんとかしたいが……。

「明日から忙しくなるし、今まで以上に……いや、頑張り過ぎるなつて言われたばっかだっけ」

意気込もうとして、皆に言われた事を思い出して肩から力を抜く。それでも、今日中に片付けそのものを終わらせて明日から迷宮探索を再開するのだ。

……リリがスキルを活かして大荷物を運んでいるのを見て顔が引き攣る。なあ、信じられるか？ リリって俺よりレベル二つ下なんだけ？ アレ、俺だと運べないのじゃが。

「ミリア、こういう時こそ適材適所って言うんだぜ、これ頼む」

「むう、リリだけが大量荷物を運ばされてる気がします！」

「あはは、リリのスキルって便利だよな」

ヴェルフに頼まれたのは両手で抱えられる程度の木箱。リリの方は自身の背丈より大きな大箱。この差は……。

まあ、こういう時こそ適材適所。Lv. 3になつても非力な俺はなあ……素質と言えばいいのか、基礎アビリティの力と耐久の伸びはかなり悪い。素のレベル分だけで言えばリリ以上に力があるが、荷物の運搬性能はなあ。

「おーい、客が訪ねてきてるぞー」

一階部屋の一つでミコトとベル、ヴェルフ、そして俺の四人で木箱の中身を引つ張りだしていると、部屋の扉から覗き込む様に顔を出したルシアンさんが声をかけてきた。

「客？ 誰かわかりますか？」

「んと、【タケミカヅチ・ファミア】の千草つて奴だ。ミコトちゃんに用があるみたいだぜ？」

「千草殿が？」

失礼と断りを入れてミコトが整理を止め、立ち上がって部屋から出て行く。その背を見送っていると、ルシアンさんが入れ替わりにミコトが途中で止めた作業を再開した。

棚に荷物を納めつつ、室内でも相変わらず頭巾フードを被っているヒューマンの青年が首を傾げた。

「なあ、千草ちゃんってどんな娘なんだ？」

「えっと、千草さんはミコトさんと同じ極東出身の幼馴染でタケミカヅチ様の眷属ですね」

ベルが答えながらも気になるのか窓からミコトたちの様子を見ている。

手早く整理を終えたルシアンが腰を叩きながら立ち上がり、それじゃと手を振って去っていくのを見送りつつも、俺も手元の木箱の中身を棚に納める。

「……何かあったのかな？」

「さあ、わからないな」

ベルとヴェルフの言葉に思わず顔を上げる。どうかしたのだろうか？

「ん、ああミコトさんが何か驚いてたみたいで……何かあったのかなって」

「何か……タケミカヅチ様の所で問題でもあったんですかね」

俺も窓から前庭にいるらしい二人の様子を伺おうとすると、丁度千草が足早に去っていく背中が見えただけだった。ミコトの方はしばらくすると戻ってきた。

「ミコトさん、何かあったんですか？」

「い、いえっ。別に、何も……っ」

ベルの問いかけに対し、目を逸らして素早く会話を切った。

何かあったのは確定だが、語りたくないのかそのまま空箱を抱え「は、早く作業をっ」と動揺しながら部屋から出て行った。

俺とベル、ヴェルフがそんなミコトの様子に首を傾げていると、廊下からリリがひよこりと顔を出した。

「何やらミコト様の様子が変でしたが、何かあったのですか？」

リリの疑問に対し、俺達三人は曖昧に答える事しかできなかった。

「きよ、今日は早めに就寝させていただきまーす」

荷物整理もほぼ完了し、夕食を終えたころになってミコトが空々しくもそう宣言した。

主神であるヘステイア様は借金返済の為にもと、バイトの残業に勤しんでおり姿は無い。

イリスやデインケ等、付き合いの短い者達も違和感を覚えたのか彼女の発言に首を傾げつつも返事を返す。

俺やベル、ヴェルフやリリ等それなりに付き合いのある者達は自然「お休みなさい」と彼女を見送った。時刻は夜の八時前、少し早すぎる時間に就寝宣言をした彼女の様子にファイアが口を開いた。

「何かあったのか？　様子、少し変だったし。妙な汗もかいてたぞ」

「……ねえファイア、その自然に匂いで判断するのやめない？　確かに様子が変だったけど」

獣人らしく鼻が利くファイアが様子を変だった極東の忍少女に言及すれば、メルヴィスが眉間に皺を寄せて苦言を呈した。獣人的には臭いで相手の体調や気分なんかを探るのは普通なのだろうが、それ以外の種からすると……その、匂い云々言われるのは気になるよなあ。

まあ、それはさておき、だ。

「すみません、留守を任せても良いですかね」

デインケ達に留守を任せ、キューイ曰く今屋敷をこっさり出て行くこととしているらしいミコトを追うべく、俺とベル、ヴェルフにリリの

四人が立ち上がった。

「この所、様子が変でしたからね」

「あいつも誰かと一緒に分かりやすいからな」

「うっ……」

「そこはベルの良い所だと思いますけど」

仲間に黙って夜の街に繰り出した嘘がつけない真面目な性格のミコトを追う四人。

普段なら気付かれそうなのだが、今日の彼女は注意力散漫になっているのか全く気付かない。物陰に隠れては移動を重ね、ミコトの後を尾行する。

キューイが使えればもつと確実な尾行が出来たのだが、流石に目立ちすぎるといふ事で今回は非参加。代わりに頭の上には結晶竜が化けている髪飾りを付けてきた。

付かず離れずの距離を保って追跡を続ける内、ミコトは南のメインストリート——繁華街に到着する。

周囲の喧騒は最高潮に達しようとしており、大劇場や賭博場、高級酒場等の大型施設が軒を連ね、身形の良い商人や冒険者、更には神々が溢れていた。

そんな喧騒の中を歩んでいたミコトは、唐突に大通りから道を折れ、路地裏の店頭に佇んでいた少女と合流した。

「あれは千草様？ ミコト様とお二人だけでしょうか？」

「ア・ウ・イ・エ・オ・オ、最後は殿どの、人名？ もう一つは……ア・ン・ア・ウ・ア・イ……んん？」

ミコトと千草の会話を遠くから目を凝らし、口の動きから母音を予測で当てて口に乗せていると、何処かで聞いた様な母音の連なりにぶち当たった。

アウイエ殿……ハルヒメ殿か？ 後者は歡樂街……だと思ふ。もしかして『歡樂街』が目的地か？

「読唇術も出来るのか、本当になんでもできるな、ミリアは」

「どくしんじゅつ?」

「唇の動きから言葉を読み取る技能ですよベル様、それで何かわかりました?」

感心した様なヴェルフには悪いが、普通に周囲の状況と母音だけで予測しただけだからぶつちやけわからん。

とはいえ、彼女らが何処に向かおうとしているのかわからん。あの性格のミコトが歓楽街に行くとは思えんしなあ。

「あつ、何処かに移動するみたいですよ」

「ミリア、追いながらでいいから教えてくれ」

「……あー、『夜の街』が目的地かもしれないですね」

極東出身の少女たちが足を向けている先、都市南東部の方角を見てそう眩くとヴェルフとリリが同時に『それはない』と否定した。

俺も同感ではある。

二人の尾行を続けていると、繁華街がみるみるうちに遠のく。身を寄せ合っている二人が薄暗い小路を進んで行った。

「おい、まさか……ミリアの予測通りなのか?」

暫く尾行を続けていると、ヴェルフが唐突に顔を上げた。

ヴェルフの固い声に反応してリリが体を揺らし、ベルだけが「えっ?」と何もわかっていない表情を浮かべた。

俺は眉間を揉んで溜息を零す。一応、何かしらの問題トラブルを起こさなきゃいけないとは思いますが……逆に起こしたら、ヤバい。

「ベルツ、お前はここで帰れっ」

「ベル様ツ、帰ってくださいっ」

「えっ、えっ? なんで、なんでっ?」

ベルを挟み込み、左右から同じ命令を放つヴェルフとリリ。

混乱して顔を左右に振り、狼狽えるベルに対して二人は更に語気を強めた。

「いいから聞けっ。お前にはまだ早い」

「むしろベル様が来て良い場所ではありませんっ」

「そんな今更なんで……ミリアはっ」

「あー……そうね、ベルも避けた方が良くかも、とは思っわね……」

アマゾネスの習性ぐらゐは知っているだろう。男を攫つては、精も魂も尽き果てるまでしゃぶりつくされちゃうんだけど……。

更に付け加えると、強い男とか、有名な男とか、そういつた男には目が無い。ほら、今都市内で滅茶苦茶熱狂ホットな話題の中心人物とか、絶対に群がると思う。

まあ、【イシユタル・ファミアリア】直属の『戦闘娼婦』パーベラに捕まらなきや平気だろう。ベルの《幸運》に賭けるかなあ。

「えっ……でっ、でもほらっ、ミコトさん達行っちゃうよっ!？」

除け者扱いされる事をごねるベルを、リリが説得しようとするも失敗。

道の奥に消えていくミコト達の背を見て二人が眉を顰めた。

「あー、くそ。リリスケ諦めろ、追うぞ」

「う~~~~ツ!! ミコト様、よりにもよってどうしてあんな場所に……っ!？」

諭すのを断念したヴェルフが壁の影から飛び出し二人の後を追う。それに続くリリが苦虫を噛み潰した様な表情で恨み言を呟き続ける。面食らったベルも慌てた様に続いて飛び出したのを見て、ベルに追従しながら、最低限、これだけは伝えておく。

「ベル、死にたく無ければ『戦闘娼婦』パーベラには気を付けてください。【ファミアリア】の本拠に連れ込まれたら……生きて帰れないかもしれないかもしれません」

「ええっ、ミコトさんたちどんな恐ろしい所につ!？」

いや、女であるミコト達にとつては、少し貞操の危機があるだけ……あー、どつちも同じか。

都市第四区画、その南東のメインストリート。

東方や砂漠地帯を始めとした、迷宮都市近辺オラリオではまず目にしない様な建築様式の建物が密集している。その殆どに掲げられた看板は、艶めかしい紅い唇やみずみずしい果実を横ったモノばかり。

そんな店舗の前には背中や腰を丸出しにしたドレスで着飾った、蠱惑的な女性達。

アマゾネスの数も勿論多いが、ヒューマンや獣人も目に付くし、中には小人族パルウムや、こういつた場所を毛嫌いするエルフまで、揃っている。彼女達は皆、道行く男性を呼び止めては蠱惑的に、あるいは挑発的に微笑みを浮かべる。鼻をだらしなくのぼした男性と一言二言交わすと、手を取って——あるいは腰を抱き寄せられながら——それぞれのお店に消えていく。

豊富な胸や、薄い肩、腿が視線をどこに向けても入り込んできて、漂う淫靡な香りと店から僅かに聞こえる嬌声が交じり合い咽返る様な空気。

「あ、あ、あの人達って……」

震える指を向けながら、口を開閉し続けるベルが情けない声を零した。

色気たつぷりな女性の正体に行き当たり、この場所がどういった場所なのかを理解したのか、少年は真っ赤になって狼狽えていた。

「娼婦ですね。いやあ……胸も大きいし、腰つきもまた、色っぽいですねえ」

「ミリア様は何を普通に観察しているのですかっ、はあ……ベル様には一生来てほしくありませんでした」

「この匂いは、どうにも慣れないな」

いや、一生に一度は足を運んでおくべきだとは思うがね。こういった場も経験の一つだし……美人局には気を付けないと不味いがね。

あと、此処の本拠ホームを根城にしてる、第一級ヒキガエル冒険者。

「お兄さん、遊んでいかなあい？」

「他を当たってくれ」

精悍な顔つきのヴェルフに対し、蜜に群がる虫の様に娼婦達が甘い笑みを浮かべて群がるが、億劫そうに押し返す。

ベルに近づこうとする娼婦に威嚇して追い返すリリが「リリも幸いここに堕ちませんでした」と呟いた。

俺は、そもそも前世は男だったし、そういつた関係は……無くは無かったが。

「ミリア様は、経験があるの？」

「ん、まあ、ほどほどかしらね。騙す為の一環で寝た事が無い訳じゃないわ」

女とは何度も寝たが、男とは一切経験が無い。

性別が変わった弊害でベル達に妙な勘違いをされかけるが、どう説明したモノかと悩みながらも、ミコト達の追跡を続けていると、南東のメインストリートに出た。

南東のメインストリートの第三、第四区画の辺り一帯が歓楽街である。今までいた第四区画から大通りを渡って第三区画へと姿を消そうとしているミコト達の背が見えた。

「不味い、いくぞ」

「う、うん」

間合いをとり、隠れながらの追跡していた事もあって大通りという見通しの良い場所では見つかりかねないと距離を取り過ぎた。角を曲がる後ろ姿が僅かに見えたのみで、このままでは見失ってしまう。

メインストリートには多くの娼婦と、それに誘われた男性で込み合っており、ヴェルフが先頭に立って彼女らの人垣をかきわけ進む。なんとかリリの服の裾を掴む事で逸れるのを逃れながら、第三区画へ足を踏み入れる。

第四区画よりも明るさの増した区画を進むと、ミコト達を見つける事に成功した。しかし、安堵の吐息を零すには早い様子だ。

「こんな場所でミコトたん、いや【絶影】^{ぜつえい} たんに会えるなんて！」「やっぱり黒髪は良いな」「極東っ娘萌えっ」

「あ、あのっ、じっ、自分たちには重要な使命が……っ！」

ニヤニヤと揶揄いの笑みを浮かべた美丈夫、男神達に絡まれている姿を見つけてしまった。

壁際で半円に包囲し、遊ばないかと誘いかけている神々。

取り乱している千草と、彼女を背に庇いながらも気圧されているミコト。神相手に強く出る事が出来ずにあたふたしている二人。

そして、そんな二人の様子を理解しておきながら反応を楽しむ様に、ちよっかいをかける神々。

神々が愉快犯と言われる所以を目にした気分であり、ヴェルフ、俺

の三人が溜息を吐いた。

「男神様、悪ふざけは勘弁してやってください」

近づいて声をかけたヴェルフに対し、神たちが『ん?』と振り返り、ミコト達が驚愕の表情を浮かべた。

ヴェルフの後ろから顔を覗かせたりりもまた、男神達を追い払うべく口を開く。

「こんな所で油を売っていて良いのですか? 夜は短いですよ?」

「おっとそうだった! ジェシカちゃんのお店のサービスタイムが終わってしまっ!」

「眷属達の目を盗んでやって来たんだ、今日は羽目を外すぞー!」

「大事な派閥の資金おかねちよろまかしてきましたー!」
「あ、俺も」「俺も俺も」「俺も」

揃いも揃って高笑いしながら去っていく男神達。

快楽主義者たる神々が歓楽街に足を運ぶのは日常風景であり、派閥によつては暴走して資金を食い潰されんが為に神を拘束せんと、団員が怒り泣きながら手段を尽くそうとする事すらある。

嵐の様に過ぎ去っていく男神達を何とも言えない表情で見送り、ようやくミコト達と向かい合った。

「こんばんは、お二人とも……どうです、今からしつとりお話でも?」
からかい気味に声をかけると、二人は狼狽えながらも声を絞り出した。

「ど、どうして皆さん此処に……」

嘆息混じりにリリがミコトをジトツとした目で見上げる。

「ミコト様の様子がおかしかったので、失礼ですが付けてきました」
「一蓮托生の「ファミリア」になったんだ、隠し事はするな」

リリ、ヴェルフの言葉にミコトが息を詰まらせ、俺を見て申し訳なさそうに肩をすぼめた。

「あ、あの、ミコトを責めないでください……。元はと言えば、私のせい……」

ミコトを庇う様に前髪を揺らして千草が歩み出る。

か細い声で「ごめんなさい」と謝罪する彼女に対し、赤い髪をかき

上げながらヴェルフが経緯を聞いたです。

「説明してくれ」

その問いかけに、千草がたどどしく説明をはじめ、少々口下手な彼女に代わり途中からミコトが説明を引き継いだ。

千草曰く、故郷である極東の知り合いと似た人を歡樂街で見た事。

ミコト曰く、つい先日、千草の知り合いの冒険者達からその噂を聞いた事。

同郷のその人物は、数年前から行方不明になってる事。

真偽を確かめる為に二人で足を運んだ事。

同郷の者同士の問題であり、派閥の皆を巻き込むのは申し訳ないと思った事。

付け加えると、場所が場所だけに相談も出来なかった、と……。

「はあ、派閥を巻き込みたくないのであれば、そもそもこの場所に足を運ぶべきではないと思いますね」

此処、「イシユタル・ファミリア」の支配区域だぞ。

一応、あの女神の特徴的に美の女神に分類されないヘステイア様を潰そうとは動かないだろうし、その眷属達も……あー、ベルの事を男として狙うだろうが、派閥同士のぶつかり合いになる様な事にはならないはずだ。

とはいえ、探りを入れるなら話は別だ。

「それに、こういういった場所なら桜花さんに頼むべきかと。適任でしょう？」

「うっ……お、桜花は、歡樂街に、連れてきたくなって……」

「あの、千草殿は桜花殿の事を幼馴染としてではなく、その……異性として」

あー……真っ赤になって俯いた千草と、釣られて赤くなるミコトの二人。

彼女らの反応にヴェルフが納得した様に吐息を零し、リリが同調した様に頷く。

「しかし、人づての話だけで判断がつくものなのですか？ 他人の空似という事も……」

「そのお方の種族は珍しく……特徴も聞く限り、無視できない点も多かったようでして」

リリの疑問にミコトが答えた。

俯いて地面を見つめるミコトは、信じられないと言った風に呟く。「彼女は、自分たちと違って高貴な身分です。そんなお方がこの歓楽街ばしよに居るなど、とてもではないですが信じられず……この目で確かめずには、いられなくなって……」

居ても立っても居られずに、と動機を語ったミコト。思わず、どでかい溜息が零れ落ちた。

嫌な予感が的中しそうで気持ち悪くなってきたのを隠しつつ、地面を見つめる彼女に問いかける。

「その、珍しい種族、極東の友人……狐人ルナールだつたりしない？」

「はい、そうです。どうしてわかつたんですか？」

「流石ミリア殿ですね」

不思議そうに首を傾げる千草と、流石と感心したミコト。二人の様子に空を仰いだ。

ああ畜生、そいつ見つけてどうするつもりなんだ。連れ出す？ 無理だろ。何か秘密の計画を進めている中心人物らしい狐人ルナールだぞ？ 他に該当する奴なんて調べても出てこなかったし。

「見つけて、どうするつもりですか？」

「そ、それは……」

千草がミコトの袖を掴み、戸惑う様に視線を彷徨わせる。

「極東で、こんな噂を耳にしました……そのお方は、心無い者に騙され、人買いに買われた、と」

……………。

「もし、もしそのお方が苦しんでいるようなら、助けない」

ああ、そうか。助けるべきだ、そんな理由なら、助けないなんて選択肢は出てこない……でも、無理だ。

「貴女の気持ちは理解しました。その上で、言います。諦めてください」

「——なっ!？」

「どっ、どうしてですかっ」

驚愕の表情と共に俺を真っ直ぐ見つめたミコトと、震える声で問いかけてくる千草。

確かに、ミコトには昨日あんな最低な話を聞かせておきながら、此処で見捨ててくれと口にするだなんて、酷いと思う。けれど、ダメだ。狐人^{ルナール}だけは駄目だ。

「もし、その人物が娼婦であるのなら。身請けが出来るでしょう」
だが、無理だ。

「しかし、その人物が派閥にとって代替えの利かない、そんな人材なら不可能です」

「それは……」

「狐人^{ルナール}は希少種族。エルフ以上に珍しいと聞きます」

アマゾネスの娼婦の身請けは基本ないので除外しよう。

一般的なヒューマンの娼婦ならば、おおよそ二〇〇万ヴァリス。

獣人の娼婦は二〇〇から二五〇万ヴァリス。

娼婦として数少なく、性癖の偏りが大きい小人族^{バルウム}がおおよそ三〇〇万ヴァリス。

そして、種族柄娼婦を毛嫌いしがちで適性の低いエルフが、四〇〇から五〇〇万ヴァリス。

——エルフ以上に希少な狐人^{ルナール}に、いくら^{ルナール}の値がつくだろう？

「ましてや身分も高貴、そして見目麗しいとくれば……」

「価値は跳ね上がる、か……」

………嘘。本当は、「イシユタル・ファミリア」が進めている秘密の計画に深く関わっている重要人物だから、決して手放さないだろう。

「とにかく、ベルもこの件には触れない様に——」

「は？ ベル殿も来ているのですか？」

後ろに居るであろうベルにも釘を刺そうとすると、ミコトが素っ頓狂な声を上げて驚く。

「え？」

「いつ、いえ……てつきりベル殿はこういった場には連れてこないも

のかと……ベル殿は何処に？」

ずっと黙って成り行きを見守っていたものだと思っていた。しかし、後ろを振り返っても白髪の少年の姿は見えなかった。

「ミコト、私達、ベルと一緒に合流、した、わよね？」

「え？ いえ、三人のお姿しか見ていなかったのですが」

「う、うん」

ミコトの言葉を肯定する様に千草が頷く。

二人と合流した時には、既に姿が無かった。その意味するところはつまり——はぐれたっ!？」

「べ、ベルの身体能力なら普通について来れましたよねっ!？」

「あっ、いや待てよ……あの初心なベルが女を押し退けて大通りを進めるか……?？」

「うっ、ベル様が女性慣れしていない部分がこんな所で……」

ヴェルフの呟きと、リリの呻く様な声が歓楽街の喧騒の中でもはつきりと聞こえた。

不味い、不味いつ。はぐれるのは想定外だった。もっとベルを女性慣れさせとけば良かったっ!

「ここで喚いても仕方ありません。ミコト、千草はすぐにここを出なさい。ヴェルフ、リリ、ベルを探すわよ」

「仕方ないか、急いで探すぞ」

「ベル様が妙な女性に誘惑される前に見つけなくてはッ!」

頼むから妙な問題起^{トラブル}こしてないでくれよ。

第一五四話

錯綜する網目状の路地を駆けながら、白髪の少年の姿を探す。

ヴェルフ、リリと別れての搜索。もし何か問題トラブルの雰囲気を感じ取つたら即座に撤退する事を約束して別れてから数分。頭の上のクリスはスヤスヤと眠りこけており役に立たず、ベルの気配も感じ取れない。

薄暗い店舗脇に入り込んだのかと覗き込めば、薄闇で絡み合う男女の姿。せめてどこか部屋でもとれと言いたかったが、アマゾネスに絡みとられて助けを求める様に手を伸ばした男を見て察した——捕食されてる。

よもやベルも同様にどこかで捕食されているのでは、とその男の救いを求める手を無視して路地に戻る。

道行く娼婦や、男どもを無視して進んでいると、意外な顔を見つけた。

「あらあ？ 【魔銃使い】ちゃんじゃない」

藍色の髪の清楚な見た目の女神。いつぞやに『豊穡の女主人』で『とりあえずキミで』と揶揄う様に妙な注文をしてきた神だ。

見た目だけならばこんな娼婦がうるつく場には相応しくない女神だが、鼻の下を伸ばして左右に娼婦侍らせ、今から店に行きますというそこの男と同じことをしているのに呆れる。というか、女神なのに娼婦を買うのか……。

まあ、今は無視だ、無視。

「ねえ、一晩どう？」

「そういう目的でここに居る訳ではないので、其方の娼婦と楽しんでください」

「いけず……っと、そうだったそうだった、もし私のお願いを聞いてくれたら、良い事教えてあげるわ」

彼女の言う『良い事』というのに余り良い予感を感じない。なにせ神だ、碌な事にならなそうだ。

無視して駆け抜けようとする、女神は余裕そうに呟く。

「リトル・ルーキー」きゅんの居場所、知りたくない？」

思わず足を止めてしまい、しまったと後悔した時には遅い。いや、重要な情報ではあるのだが、この女神に弱みを握られたみたいで気持ち悪いしできれば相手したくなかったのだが。

いや、一応鎌をかけておくか。ベル一人では絶対に来ないので興味を引く内容でこっちを意図通りに動く様に仕向けてきてるかもしれないし。

「ベルがこんな場所に来るとでも？」

「そうね、あの子一人じゃ来なさそうよねえ？」

意味深にニヤニヤと笑いながら一歩近づいてきて、彼女は耳打ちしてきた。

「ヘルメスと一緒にだったわよ？」

は？ ヘルメスと一緒に？ どういう事だ？もしかしてばったり出会った……？

目の前の女神は余裕そうな表情を浮かべており、その情報に自信を持っていて事が伺える。つまり、向こうからの鎌かけではない。

「何をお求めですか？」

「ふふっ、そうねえ……一晩、相手をしてくれたらいいわよ？」

遅えよ。直ぐにベルを見つけなきゃいけないのに一晩も相手してられるか。

「と、思ったけれど、経験人数を教えてくださいたら考えてあげる」

……経験人数？ ああ、性的な関係を持った人数？ 覚えてないわ。

いや、この女神に教えたら神々の間で尾びれ背びれついて大変な事になるだろ。絶対に教えんぞ。

「他の事でしたら」

「えーっ、じゃあ経験有り？ 無し？」

むう、此処で無駄な交渉に時間使ってる間にもベルが手遅れになる可能性もあるし、仕方無いか。

「経験は有りです。それで、ベルは何処に？」

「えっ……け、経験あるのっ!？」

「神なら嘘かどうか見抜けるでしょう。それよりベルは何処に居ました？」

あとで大騒ぎになりそうだが、それより優先すべきはベルだ。
【男殺し】に捕まっていたら……：廃人にされちまう。

「はあ……さつき向こうの遊郭街でヘルメスから最高級精力剤を受け取って別れたのは見たわ」

遊郭。極東の方の——うわっ、多分、というかほぼ確定で春姫が居る場所だろ。

しかし、ヘルメスから最高級精力剤を受け取って……いや、多分何かからずいぶん受け取ったのだろう。

「あつ、そうだ。一つ伝えておくことがあるわ」

彼女に別れを告げるより前に、藍色の髪を揺らして女神が神妙な面持ちを浮かべる。

「次の満月の夜、大きなお祭りがあるわ。貴女は絶対に歓楽街に近づいちゃダメよ？」

「……はい？」

満月の夜、お祭り……『新月祭』か？

確か、神が地上に下りたつ以前から行われていた祝祭の日で、月に神に見立てて怪物の魔の手から無事を祈るモノだが、全く関係ないだろう。それに歓楽街に近づくな……？

「んー、もひとつだけ暗示あげちゃう。ヘルメスが輸送したのは『殺生石』よ、しかも二個」

——は？ いや、輸送してたって……うん？ 輸送してた？

殺生石、えつと……ん？ これは、前に買った情報にあったな。
狐人専用の魔道具だろうか、魔法の威力を上げる……なんで？ 前に仕入れたらうし、なぜ更に追加で二個も？

数を揃えて使用する道具か？ いや、でも名称が分かった訳だし後で情報仕入れるか。

「んふふ、つとこれ以上話し込んでると時間が無くなっちゃうわ。それじゃあね」

「ちよつと待ってください。何故その情報を私に？」

流石に、不気味過ぎる。何が目的だ？

立ち去ろうとする女神に声をかけると、彼女は眉尻を下げて申し訳なきように呟いた。

「私の眷属眷属が迷惑かけたみたいだしね？」

目の前の女神の眷属に迷惑をかけられた？ 記憶にない。そもそも彼女の眷属を目にした事などな……あつ。

「ダルトンの、主神？」

「そうそう、ダルトンの主神です。当たり前だけど、情報の取り扱いには気を付けた方が良いでしょう？」

過去に何度か利用し、妙な嗅ぎ回り方をしたせいで「イシユタル・ファミリア」に感づかれて潰されかけた情報屋、ダルトン一味の主神だったのか。

あー、やらかしたかもしれん。よりによって情報屋を眷属にしてる主神に妙な情報を蒔いてしまった……いや、良い。むしろそこら辺はある意味信用できそうな感じだし……。

「とりあえず、記憶には留めておきます。それでは失礼」

「うんうん、気を付けてね？」

何処か茶目つ気混じりでありながら、芯の通った固い声色。単に楽しむというよりは、何処か焦っている様な声色である女神の言葉に引つかかる部分はあった。しかし、その女神は即座に身を翻すと、待たせていた娼婦の肩に手をまわしてにやけ顔を浮かべて二人を連れて近くの店に消えていった。

入る直前辺りから服に手を突っ込んで胸を揉んでいたのが見えたが、ううん、女性でも娼婦を利用するのか。それともあの女神が特別なのか……気になるが、ベルを連れ帰らないと不味い訳だしさつさと行くか。

形ばかりの朱色で塗られた門を潜った先に、かの女神からベルが居たという情報を受け取った目的地はあった。

赤柱と赤壁で構築された木造家屋。華々しい赤緋の色合いの三階建てからなる建物が立ち並んでいる。

煉瓦造りの迷宮都市オラリオでは珍しい、瓦屋根の建造物は異国情緒あふれ

ている。元日本人としては瓦屋根は見慣れたモノだが、一軒家で高くとも二階建てが基本だった一般的な家屋と比べ、一つ一つの規模が大きく、張見世はりみせがある事で懐かしさは一切感じ無かった。

魔石灯だけでなく提灯等も見取れ、娼婦は艶やかな着物を身に纏っている。そんな中でローブ姿の小人族が悪目立ちしてるが、そんな事はどうでも良い。ベルの姿は何処かと探しながら歩いていると、路地の一角から女性の声で話し込んでるのが聞こえた。

「ねえねえ、聞いた？ アイシャの今晚の獲物、「リトル・ルーキー」なんだってー」

「嘘、あの戦争遊戯で出てた子でしょ？ 初心そうだったしこういうところには来ないかと思ってた」

アイシャ、アイシャ……聞き覚えのある名前に冷や汗が出てくる。

アンティエイネイラ

【麗 傑】アイシャ・ベルカ。『戦闘娼婦』の中でも名の知れた人物。

ステイタス

それに加え能力は一応Lv. 3だが、既にLv. 4に至っていてもおかしくは無いと言われる程の熟練の第二級冒険者。そして、気に入った男を強引に攫い手籠めにする、女傑。

ホーム

完全に、本拠ホームに連れ込まれた。……【男殺し】に捕まるよりはマシ

アンドロククトノス

だが、彼女らに捕まった結果、ヒキガエルに奪われてそのままという形で廃人になる者は多い。つまり、急がなくてはいけないが……問題起こすのは……しかし……いや、団長攫われた訳だし言い訳は、出来なくはない。

もう仕方がないので問題覚悟で行くしかねえ。トラプル

——と、意気込んだモノの、いざ【イシユタル・ファミリア】の本拠を目の前にしてドンパチ始める事なんかできやしない。

警備らしい者は立っていない門を見つめ、溜息一つ。

周囲の娼館はどれも砂漠地帯を思わせる建築様式ばかり。日干し煉瓦を使用しているモノもあれば、切りだされた岩を使っているもの、かと思えば雪花石膏アラバスターが使用された他とは一線を画す高級娼館等。

そして、その高級娼館が霞んで見える様な巨大建造物。広大な砂漠に聳え立っていても違和感の無い、宮殿。金に輝く外装は金箔を使っているモノだとは思いますが、建造物全てに施されている量の最低額でも

億は飛ぶであろう豪華絢爛にして威圧感すら漂わせる本拠
『女主の神娼殿』
ペーレト・バビリ

警備らしい姿は円形の前庭には見えず、強いて言うなれば隅っこで
男が女に組み敷かれているぐらいか。うわあ……。

「あれ？　迷子かなあ〜？」

ふと後ろから聞こえた声に思わず身構えながら振り返ると、踊り子
を思わせる娼婦服に身を包んだ女性が俺を覗き込んでいた。全く、気
配に気付けなかった。多分、というか間違はなく『戦闘娼婦』の一人
だろう女性。どうするかと冷や汗を流した瞬間、凄まじい怒声が宮殿
から響き渡った。

「待ちなアツ!!」 「逃がすんじゃないよっ！」

ドタンボタン等という擬音が生易しく聞こえる様な、爆音すら響く
大騒音が弾け、俺に声をかけたアマゾネスが「あちやー」と声を出す。
「キミい、危ないから帰った方が良いよ？　フリユネが暴れてるみた
いだしねえ〜……あゝあ、折角【リトル・ルーキー】君が美味しく食
べれるって聞いて皆が急いで戻ってきてみたいなのに、フリユネが
横取りしようとしたんだろうねえ」

お喋りなアマゾネスの言葉に背筋が凍った。なんて、事を、しや
がったっ!?

とりあえず、ベルと合流しなくてはとアマゾネスから距離をとって
走りだそうとした所で、今まさに大騒ぎを起こしている犯人が、丁度
窓を突き破って高階から姿を晒した。

降り注ぐ硝子片を纏いながら地面に向かって一直線なベルの背後、
無数のアマゾネスが同様に窓から飛び出し———その中に異質な
存在が混じっていた。

「げえっ!？」
【男殺し】
アンドロクトノス

「あ、知ってた？　あの子もかわいそ……あれ、そういえばキミ、あの
子と一緒に戦争遊戯に———」

ダンッ！　とベルが着地すると同時に地面を蹴って加速。降り注
ぐ硝子片がパリンパリンと盛大に音を立て、それに続いてアマゾネス
の集団も———こちらは完全に音も無く———着地。それらす

べてを打ち消さんばかりの轟音を立て、石畳に放射状の罅をいれて降り立つ巨体。

二Mを超える巨体。狩猟着にも似た赤黒の衣装を身に纏う巨女。比喩抜きでその短い手足は筋肉の塊。何より目を引くのは背丈だけではない、その横幅はベルを四人——下手したら五人——並べて漸くと言った具合。

なにより、見れば一生忘れないであろう強烈な衝撃インパクトを持つ顔。

黒髪のおかっぱ、爬虫類の様にギョロギョロ動く目玉、極めつけに横に裂けた口。情報屋が口を揃えて『ヒキガエル』と称するのも納得してしまう程の異形のアマゾネス。

今まで見てきた女性の中で、あそこまで『ヒキガエル』という蔑称が似合う女性は、会った事が無い。

余りの衝撃に立ち尽くしかけ、今まさにベルが宮殿の壁を飛び越えて歓楽街へ飛び出したのを見て舌打ちしてから近場の娼館の壁を蹴って一気に屋根の上に飛び出す。下に居たアマゾネスが『逃げた方が良いよー』と呑気に手を振っているが、無視。ベルが捕まったら不味いっ！

背の高い屋根の上を駆け抜けながら、ベル達を追うと——丁度、歓楽街の大通りのド真ん中で爆発が起きた。

いや、爆発ではない。第一級冒険者が拳を振るい、叩き付ける度に通りの娼館の壁、置いてあった樽、歓楽街を彩る魔石灯、娼館の看板。ありとあらゆるものが紙くずの様になり砕かれ、ベルを捕まえ——
—いや、当たったら重症待たなしろあれっ!?

「ピストル・マジック」【リロード】

詠唱すると同時、数人のアマゾネスが此方を見た。魔力の流れに疎いはずのアマゾネスの中でも、特に勘に秀でた奴らしい者達が此方を指さして何か喚くが、無視。

今まさにベルの服の襟首を掴み投げ飛ばそうとするフリユネの腕、ではなく指を撃ち抜く。

「ファイア」ッ！」

パンツと指先に魔弾が命中し、ベルが彼女の手から離れて屋根の上

に吹っ飛び、即座に姿勢を正して駆け出す。

ひとまず逃げられたかと、安堵の吐息を零そうとした瞬間。首根っこを掴まれて引っ張られた。

「なっ!?!」

「いや危ないって言ったじゃん」

目の前を褐色の何かが吹っ飛んでいき、ドチャツと妙な音を立てて屋根の淵に引っかかる。

アマゾネスだった、頭から夥しい血を流した、女性。ふらりと起き上がったその女性は瞳をぎらつかせ此方を一瞥すると、血を吐き捨てて俺を無視して大通りを見下ろした。

「フリユネエエエエツ!!」

怒声を上げて飛び下り、そのまま数人のアマゾネスがフリユネに躍りかかる。

腕の一振りで数人のアマゾネスが吹っ飛び、無造作に掴んだアマゾネスを投げ飛ばす。と、気が付けばベルが一人のアマゾネスと格闘戦をしあっていた。

というか、一方的に追撃を喰らって、足払いされて倒れ伏した。不味いと思うより前にフリユネが投げ飛ばしたアマゾネスがベルを捕えかけた人物に当たりかけ、彼女が回避した事でベルが逃亡を再開する。

フリユネを止めるべく十を超えるアマゾネスが躍りかかり、残る少数がベルを追う。フリユネは邪魔されてようやくベルと同じ速度な様で、距離が遠くならない。というか街が滅茶苦茶になってるが。

「あーあ、またイシュタル様に怒られちゃうよー」

「……あの、放して貰っていいですかね」

ふと思いつく。地面に足が付いておらず、首根っこ掴まれたまま子猫の様に宙ぶらりんになっている事に。

首根っこを掴んでいるアマゾネスはニッコリと笑みを浮かべると、そのまま俺を手放した。

捕まえる気は無い様子で、なおかつベルを追うでもフリユネの邪魔をするでもなく、静観を決め込む彼女。ちらりと振り返るも彼女は繰

り返す様に呟く。

「逃げた方が、良いよ?」

女神同様、逃げる事を勧めてくるが、ベルの救出がまだだ。

急いで屋根の上を伝ってベルを追う——全く追いつける気がしない。いや、方法が無くはない。

空を見上げると蒼然とした夜空には上弦の月。効力は半分程度だろうが、無いよりマシの能力お披露目か。

——今朝早く、ステイタスの更新の際に新たに発現したスキル。

昨日の出来事後、新たなスキルが発現してないかと更新した結果、出た代物だ。なんというか、狙っていたモノとは全く違う、それとあるクラス専用のスキルが発現した事もあって、気落ちしなかったと言えは嘘になる。

加えてぶっちゃけ使い道無すぎな代物だったのも大きい。しかし、^{タイミング}時期的には最高の代物だった。

屋根の上を駆け抜けながら、クラスを変更する。変更後のクラスは^{クイシー・アサルト}強襲系狼。

遠くに見える喧騒、必死に逃げるベルと、それを追うアマゾネスと指揮しているらしい女傑——アイシャ・ベルカ。そして、アマゾネスの妨害をものともせず全てを薙ぎ払いながら突き進むフリユネ。彼女らを見据え、意識を集中させる。大きく屋根の淵から飛び、視線を遮るモノのない空中で月明かりを浴びる。

——【ウールヴヘジン】

^{ウエアウルフ}狼 人ならば誰しもが発現する獣化スキル。全アビリティに超高補正がかかり、状態異常も無効化するという強力無比な代物。欠点とし、発動するには月下である事が条件である事から、発動時期が限られており、月明かりの届かない迷宮内では使い物にならない代物である。

俺も、これ似たスキルを発現した。

効力は若干異なるが、ミリカンの漫画版、クイシー・アサルトが最期の夜に発揮した能力。

本来ならば、アサルト・ステップ短距離転移には転移酔いという使用制限がある。しかし、獣化中にはその制限がおおよそ解消される——正確には、月明かりの強さによって制限が緩和される。

更に付け加えると、月光を浴び続ける限り魔力が急速回復する《月光吸収》の効果まである便利なスキル、だが……当然ダンジョンじや役に立たん。回復量も不明だし……。

とはいえ、屋外。それも満月には程遠くとも月明かりに照らされているこの場において、このスキルの利点が大いに活用される場だ。わさわさと嘶く様に全身が震え、ぽつかりと空いた穴に何かが滑り込んでくるかの様な感覚に満たされる。

遠く離れているはずのベルの息遣いすら聞こえる程に研ぎ澄まされた感覚。重力に引かれて体が落ち始めるのと同時、普段なら捕捉^{ロック}出来ないはずの距離を超え——繋げた。

「アサルト・ステップッ！」

ギョんツと視界が狭まり、一瞬でベルの背後に転移。

「——っ!?」「どこから出てき——」

「ミリアッ!?!」

背後に迫るフリユネを無視し、ベルの身体を掴む。即座に周囲を見回した。

アマゾンネス戦争員だけではない、ここいら一帯の全てが【イシユタル・ファミリア】の領域^{テリトリー}。故に、逃げ場が——無い。無さすぎる。

背後に迫る短い手足の筋肉の化物、帝国の『筋肉兵』が脳裏にちらつき、背筋が凍った。

——厚い胸板とぶつとい筋肉質の腕に挟まれ、プレス圧殺された記憶^{トラウマ}が……。

い、今そんな事を思い出してる暇はないっ!

「ベル走ってっ!」

「うんっ!」

「逃がしやあしないよおっ!!」

咄嗟に散弾をぶちまけようとして、非戦闘員の娼婦が混じっているのに気付いて青褪める。撃てねえ!?

ベルの背中にしがみ付きながら、後方を確認すれば——矢に鎖、拳句の果てに投棍フイメランすら飛んでくる始末。流星に地上から飛んでくるモノは無理だが、弧を描いて空から降ってくる矢は散弾をぶちまける事で撃ち落とせる。

「ファイア」「ファイア」ツ！」

凄まじい発砲音を響かせて魔弾の雨をぶちまけるが、戦闘アマゾンネス狂共は怯むでも無くより狂暴な表情で此方に迫ってくる。

「女連れとは良い度胸だねえ！」「目の前で搾り取ってやるよ！」「ゲゲゲゲエ！アタイの美しさの虜にしてやるよお！」

ひいっとベルが悲鳴を上げて更に加速するが、包囲を抜け出すのは不可能に等しい。何処かに姿を隠すしかない。

隠れられそうな場所は見当たらない。そんな風に周囲を見ながらも後ろから飛び掛かってくるアマゾネスを撃ち落とし続けていると、周囲の景色が一瞬で変わった。否、別の区画へと足を踏み入れたのだ。

「あいつら遊郭へ行ったよ！」

極東の異国情緒あふれる色街。

赤と朱の色合いに交じり、幻想的な蒼い桜が彩る小区画。ふと、一際大きな遊郭の小窓から見える男の顔を見て、彼を対象に捕捉ロックした。

「ベル、跳ぶわよっ！」

「えっ——」

ベルの身体を掴んだまま、共に跳ぶ——短距離転移アサルト・ステップする直前、

背後に迫った投棍フイメランが空を裂く音を置き去りにし、跳躍。

「ぎゅがっ!？」

二階の窓の内側に跳躍すると同時。姿勢を崩したベルが捕捉対象の男性を撒き浴いにして障子をぶち破って部屋の一つに飛び込んだ。

外で起きる喧騒、『消えた!』『何処行きやがった!』という叫びを他所に、ベルが巻き込んでしまった男性は完全に意識を失っており、丁度障子をぶち破って入り込んだ部屋でちょうど真っ盛りだった男が此方を凝視していた。

「……………ひょっ!」「きゃ、きゃあああああああああああああ

あつ」

男の上に跨っていた女性の甲高い悲鳴が弾け、ベルの腕を引いて立ち上がらせる。

「ベル、逃げるわよー!」

「えっ、あつ、そのごめんささいいいいっ!」

巻き込んで気絶させた男性への謝罪か、それとも丁度半裸で男性に跨っていた女性に対してか、お楽しみの真っ最中だった男に対してか、誰に対しての謝罪かわからない言葉を叫びながらも立ち上がったベルに続いて廊下を駆ける途中、壁を打ち抜いて狩猟者^{アマゾンネス}がわらわらと娼館に入り込んでくる。

冗談じゃ、無い!

「え、偉いことに……!」

「気にしてる余裕は無いですよっ!」

咄嗟に建物内に転移して一度目を晦ましたが、騒ぎを起こした所為で一瞬で見つかった。もう一度誰かを捕捉^{ロック}して——あつ……建物内に入った事で、月明かりに照らされているという条件が満たされなくなり、獣化スキルが解除されて眩暈がぶり返す。

「ミ、ミリア、何処に行けばっ!?!」

「つ……と、とりあえず走って!」

俺とベルが飛び込んだのは高さの異なる無数の建物からなる、複雑な地形をした建造物だったらしい。

ベルが上に下にと駆ける中、頭の中で地図を作製するも徐々に追い詰められていく。

「ベルっ、その階段を上がって右につ!」

「う、うんっ!」

後ろを振り返れば、追跡してくるアマゾネスの人数は格段に減っていた。しかし、追い詰められている事実には変わりはない。

「ベル、その階段は上がったら……!」

「でも前から声がっ!」

遂に別館の最上階、五階まで追い詰められ、下の階層から『待てー!!』という声が響く。

進退窮まった状態だ、此処から外に飛び出しても直ぐに捕捉されるだろう。ベルも肩で息をしており、とてもではないが逃走劇デス・リリースの再開などできない。

「とりあえず奥に進みましょう。人が居たら……鎮圧します」

「えっ、でも……」

「このまま捕まって食われても良いですか？」

「……………うん。なんでもない」

一際大きく、それでいて他の娼婦の姿を見ない別館。なんとなく、嫌な予感を感じながらも廊下に並ぶ部屋の一つに飛び込む。

音を立てずに扉を閉め、外で起きる喧騒から少しでも離れようと薄暗い部屋を見回し、閉ざされた襖の隙間から薄明りが零れ落ちる光を見て、顔を見合わせる。

「とりあえず、少しでも奥に……」

「そうね」

警戒しながらも互いに護身用として持っていたナイフを握り締め、扉に手をかけ、一気に開いて中を見た。

「お待ちしておりました、旦那様」

開いた襖の向こう側。奥ゆかしく三つ指をつけて深々と頭を下げる獣人の少女が其処に居た。

きらやかな金の長髪が小窓から部屋に落ちる月明かりに照らされ、同色の獣耳と尻尾が幻想的に照らし出される。紅の着物を纏うその人物——ミコトの話に出てきた狐人ルナール。

「今宵、夜伽をさせていただきます、春姫と……あれ？」

顔を上げ、俺達を見た彼女は小さく首を傾げた。

娼館に女連れでやってきた少年の様子に疑問を覚えたのか頭の上に無数の疑問符を連ねて状況の理解を計ろうとしているらしい彼女。ベルが啞然とする中、俺は一足飛びに彼女に近づいて眼前にナイフを突きつけた。

「静かにしなさい、叫んだら……あんたのその緑色の目が大変な事になるわ」

「ミ、ミリアっ」

驚いて俺を止めようとするベルだが、状況を思い出して欲しい。すぐ下の階から『ここに逃げ込んだのを見たよ！』と声が響いている。どうにかして隠れないといけない。目の前の少女にここには誰も来なかったと発言してもらうのが手っ取り早いが……いや、どうだろうか。

ボタンボタンと他の部屋の襖が開かれる音が響き、状況を理解したベルが青褪める。

「ど、どうしようっ!？」

「……っ、ベルそっちの布団に寝転がって、仰向け、早く」

「えっ!？」

驚愕するベルを急かして仰向けに寝転がらせ、春姫と名乗った娼婦の腕を引いてベルの上に跨らせる。

「な、なにをっ——」

「ベル、そのまま動かないでね」

「あ、あの、こんな事せずとも私わたくしは——」

「あんたは黙って、とりあえず着物脱いで、早く」

状況を理解してるのかしていないのか、どこか天然ボケな発言をした獣人の着物を素早く脱がせる。短い襦袢、下着姿になった彼女をそのままベルを押し倒す様に押し付けた。

春姫の長い金髪がベルの頭を覆い隠し、胸元に顔を埋める形となる。入口から見たとき、見知らぬ男が半裸の娼婦にのしかかられている図、に見えるると良いな。

「ベル、そしてアンタ、動かないでそのままでいなさい」

「ミ、ミリアでもこれっ」

「良いから、アンタも動いたら殺すから」

「は、はいっ」

返事を確認すると同時、「春姫、いるかつ!」という大声と同時、部屋を蹴破る音が響き渡る。

慌てて入口から死角になる位置に飛び込み、息を殺すのと同時。襖が開かれ二人のアマゾネスが部屋に飛び込んできた。

「春姫ッ、此処にヒューマンのガキがっ……………」

飛び込んできた二人は丁度入口から春姫とベルの様子を確認した瞬間、動きを止めた。

妙な沈黙が満ちる中、春姫が震える声を上げる。

「あ、あの……」

こ、この娼婦、妙な事言ったら顔ズタズタにして殺してやるっ！

漏れ出そうな殺気を必死に隠していると、恐る恐るといった様子で春姫が続けた。

「い、いま、その……よいところ、でして……」

——は？ いや、よいところ、良い所……いや、良い。そのまま誤魔化せっ！

「あ、すいません」

「どうぞ続けてください」

アマゾネス二人はそのまま後ろに後退り、開け放った襖を音も無く閉じた。

その後、部屋を出て行くアマゾネスが「あの春姫もようやく男を押し倒せる様になったかー」と嬉しそうな声が遠く離れていく。

静かに死角から出て、襖をほんの少し開いて部屋を確認するも、アマゾネスの気配はない。

「……なんとか、なりましたかね」

「ミ、ミリア、たすけ……」

情けないベルの声を聞いて後ろを振り返ると、真っ赤になった春姫が「きゆう〜」と妙な声を上げて昏倒しており、ベルがその娼婦の胸に埋もれたまま情けない声を上げて助けを求めている。

第一五五話

「もつ、申し訳ありません!」

真つ赤な顔の狐人ルナルの少女がこれまた綺麗な土下座を披露していた。

逃走劇デス・レースからなんとか逃げ切る事に成功したのは良いモノの、外には未だに此方を捜索している戦闘員アマソネスの姿が見えた事もあり、気絶した彼女を布団に放り込んでどうするかベルと相談していたら、目覚めて早々に彼女、春姫は頭を深く下げて謝罪の言葉を放ったのだ。

悪いのはどちらかというところ……あー、どうだろ? そもそも「イシユタル・ファミア」の『戦闘娼婦』が暴走してるのに、主神が止めなかったのが原因だし、こっちは悪く無くね? いや、彼女は被害者で確定であるので、目の前でそんな事言うのはどうかとも思うのだがね。

「あー、謝る必要は、無いのだけれど」

「あのような醜態を晒してしまったのですから……」

いや、天然過ぎでしょ。まあいいけど……とりあえず、この後どうするかが問題なんだよなあ。

この狐人と仲良くなるのは避けたいが、無理だろうなあ。

というか、客をとって待っていたはずなのに、その肝心の客が来ないって話らしいが……。

「はい、この一室で待っていたのですが、一向に客が来ず……」

「客の特徴ってわかる?」

「えっと、犬人の方でした。腕に緑色のスカーフを巻いていたと記憶しております」

彼女の語った特徴の男性。どこかで見た記憶が——ああ、あの時捕捉ロックして跳躍したらそのまま昏倒させてしまった男だ。序に、遊郭内部で盛大な追いかけてこしたせいで娼婦の間で騒動が広がって、結果的にここに足を運ぶ人が居なくなつた、と……。

「ねえ、僕たちのせいじゃない?」

「そもそも、『イシユタル・ファミア』の眷属がしでかした事が原因でしょうから、気にしなくて良いでしょう」

さて、現状ここから無暗に動くともまた逃走劇開幕となつてしまふ訳なのだが……。

「貴女、私達がここに居る事は誰にも話さないって約束できる?」

「はい、構いません」

少なくとも、此方を売る真似もしなければ、人を呼ぶ気配も無い。むしろ庇つてくれようとしてるが、何を考へての事なのかわからぬ。警戒はしておくかと、丸窓から外を見れば、魔石灯片手に走り回るアマゾネスが見て取れた。しつこい奴らだな。

舌打ちしたくなるのを堪えて部屋に視線を戻すと、興味深そうにベルと俺を交互に見る春姫の姿があつた。

「あの、わたくし私は春姫と申します。お二人は……」

「あ……僕はベル・クラネルって言います。そつちはミリア」

不用意に情報を与えるべきではない、と思つたが。ヒューマンで白髪の少年、小人族バルウムで金髪に彩光異色。この特徴だけで俺達に行き付くだろうし良いか。

「ミリア・ノースリスよ」

「でしたら、クラネル様、ノースリス様と呼ばせていただきますね」

いや、この子、なんというか……清浄な雰囲気を漂わせているが、何処か抜けてる気がするんだよな。普通ならもつと警戒しない?

「お二人に質問よろしいでしょうか?」

「……まあ、応えられる事なら」

色々と気になるのか顔を上げて俺とベルをまじまじと見ながら、彼女は問いかけてくる。

「お二人はどうしてこんなところに?」

「さつきも言つたけど、アンタの所のアマゾネスに追われて、よ。拒否してるのに強引に連れ去る真似してたから、救出にきて……まあ、大ごとになつた訳」

俺らは悪くねえ! 最初に強引な手法使つたアマゾネスが悪い!

「アマゾネス、と言いますとアイシヤさんの事ですよね」

特に驚くでもなく、普通に女戦士族アマゾネスの男狩りを受け入れてる辺り、だいぶ毒されてる娘だな。

まあ、変に無知で騒がれても面倒なので別に構やしないが。

「アイシャさんとお知り合いなんですか？」

「はい。私はアイシャさんによく世話を見て貰っています」

はあ、『戦闘娼婦』の中でも特に有名なLv. 4に近いアマゾネスの戦士。そんな人物が目をかけている、という時点で彼女がこの派閥でどういった立ち位置なのか察しはつく。単に世話焼きなアマゾネスの可能性も無くはないが……。

「それでしたら、時間になりましたらお二人を抜け道までご案内しましょう」

……いや、なんだ、やけに親切だな。抜け道にアマゾネスの集団が待ち構えてるとかそんなオチじゃないだろうな。

「何が目的？」

「ミ、ミリア……その、疑うのはわかるんだけど、春姫さんは大丈夫だと思ふよ。たぶん」

ベルの言葉に思わず半眼を向けてしまった。人の悪意に鈍感過ぎるくらいがあるベルの言葉をそのまま鵜呑みにするのは無理があるぜ？

まあ、確かに俺から見ても今の彼女に悪意らしきものは見て取れないのだが。

「一夜限りの出会いでございましょうが……春姫はお二人の力になりとうございます」

詫びも兼ねて、と優しい気な微笑みを浮かべて口にする彼女から、悪意はやはり見て取れない。ベルと同じ、純粹な善意と、献身が混ざり合ったモノが、其処にあった。

……ああ、ダメだ。彼女と関わり合いになると、多分後戻りできなくなる。

「それに、その……はしたない打算もあるのでございます」

「打算？」

「約束の時間が来るまで……私とお話しませんか？」

勇気を振り絞った様に、いじらしく尋ねてくる春姫の様子を見たベルが此方を見て「良いよね？」と小さく確認をとってきたのを見て、深

い溜息と共にベルの行動を容認した。

客ではなく、普通の人としてやってきた来訪者。彼女の立ち位置を考えるに、下手に接触させる事を許されなかった………にしては変だな。客をとらせる理由が、全く………あー………神イシユタルか。神聖娼婦か、それとも愛の女神の一面か。どっちにせよ、神の価値観を理解するのは人には難しいだろう。

「少しぐらいなら良いわ」

「うん、良いよ」

「ありがとうございますっ」

嬉しそうに尻尾を揺らす彼女を見て、申し訳なさが込み上げてくるのを堪え、視線を逸らした。

小さく開けられた窓辺の障子の隙間から、蒼然とした夜空と、上弦の月が雲の合間に姿を見せる。

「クラネル様とミリア様、お二人の出身は、どちらなのですか？」

「僕は大陸の、えっと、このオラリオの北の方にある遠い山奥で……」

早速、春姫から質問が飛び出し、ベルがそれに答えた。

『クラネル様』と呼ばれるのが気恥ずかしいのか少し顔を赤くしながら春姫の問いに答えるベルを見つつ、どう答えるかなと頭を悩ませる。

素直に、わからないと答えるか。言いたくないと答えるか……。

「ミリア様はどちらなのですか？」

「……さあ？ 私にもわからないわ」

出身地、人格形成に大きく影響を与えた時期の事ならば、父親の元だと言うべきだが、それ以降に捻じ曲がる様な出来事もあったし、そっちだと言えなくもない。正直、俺にも何処と答えるべきかわからないのだ。

窓の隙間から夜空を見上げて応えようと、春姫が申し訳なさそうにしゅんとして耳を伏せた。答え方を間違えたかと若干後悔しつつも、今度は此方から問いかける。

「貴女は何処の出身なの？」

「私の生まれは、極東にわたくしございます」

知ってた。そう答えるのは流石にしないが、ベルもおおよそ察しはついていたのだろう。

狐人^{ルナール}という種族の分布地域、そして特徴的な名前。そして先ほど見せた『土下座』や『正座』といった仕草、言動から察しはつくだろうし。

「海に囲まれた島国で、このオラリオより四季がはつきりをしておりました」

懐かしそうに、哀愁を漂わせる様に、故郷を想い彼女は語る。

春に咲き乱れる桜の美しさを、夏に響き渡る蝉の音を、秋に色付く鮮やかな紅葉を、冬を染め上げる純白の雪を……。天井を見上げながら語らう彼女の視線は、自然と小さく開いた障子の外、月夜に向けられる。

浮世離れた彼女の美しさに見惚れてか、ベルがふと問いかけを零す。

「春姫さんのご実家は、貴族なんですか？」

「何故おわかりになったのですか？」

逆に、どうしてわからないと思つたのか。余りにも浮世離れた、世間知らずの箱入り娘。そんな雰囲気の彼女を見て、貴族だと察しが付かない者は……。少なくとも今まで彼女の前に現れなかったのか。同じ派閥の者は事情を知つててあえて聞かないだろうし、派閥外の者は春をひきぐ以外に会話らしい会話も無かつたか……。

「クラネル様の仰る通り、私は何代も続く高貴な家系でした。母はおらず、父は国のお役人で……。幼い私^{わたくし}は、沢山のお手伝いの方々にお世話になっていました」

広い屋敷以外の世界を殆ど知らず、高貴な身分としての立ち振る舞いを学ぶばかりの日々。蝶よ花よと育てられる生活に寂しさはあれど、数少ない友人も居て、不自由な生活だった、と懐かしむ様に語る春姫。

その、数少ない友人は……。タケミカヅチ様の孤児院で生活していたミコトや桜花、千草だったのだろう。

懐かしさに頬を綻ばせていた彼女は、ふと表情を曇らせて続きを語

りだす。

「ですが、五年前……十一の時、私は家を勘当わたくしされました」

彼女が奴隷商に引き取られた理由。

春姫が十一になった年、とある小人族バルウムのお役人が頻繁に家を訪ねてくるようになったらしい。

そしてある日、屋敷に泊まっていた客人の神饌アマテラス——極東に君臨している大神様に捧げる供物を、春姫が寝惚けて食べてしまったのだと……いや、うん、まあ……詐欺だわ。

春姫自身に身に覚えは無かったが、彼女の口元にはべつとりと証拠が残っており……それを理由に彼女の父は激怒。彼女に厳しい罰を与えようとして、それを役人の小人族バルウムが諫め、彼女が何も言わないのを良い事にそのまま身を引き取られたのだという。

問題はその後だ、その小人族バルウムの役人に引き取られ、馬車に乗せられて移動するさ中、怪物モンスターの襲撃に遭い、その役人は殺されてしまった。春姫もあわやと思った時に偶然通りかかった盗賊に助けられ、その盗賊の手で商人に売り払われた。と……で、どこぞの商人の玩具になりかけたところを神イシユタルが購入。

結果、流れに流され続けてオラリオの歓楽街に辿り付いたのだという。

「大勢の冒険者様がいらつしやる迷宮都市オラリオにとって、この歓楽街は非常に寛容なのです」

まあ、当然の事だろう。

どこの都市であれ、男という生き物は悲しいかな、性欲に振り回される事が多い。三大欲求と言われるだけあって、性関連の商売は何処でも重要だ。

汚らわしいと眉を顰められる職業でありながら、無ければ獣欲の赴くままに暴れる荒くれ者が蔓延りかねない、そんな重要な場所。故に、都市管理機構であるギルドも、お目こぼししている部分はあった。

——ただし、「イシユタル・ファミリア」は別だ。

この派閥は後ろが真つ暗であり、過去にギルドに対し強気になれる理由がある。間違いなく『闇派閥』との繋がりがありながら、ギルド

ですら口出しできない『治外法権』、それが此処なのだから。

彼女の話聞いたベルが呆然自失していた。まさかギルドが人身売買を黙認しているとはとショックを受けているのか、春姫の境遇に思うところがあつたのか……どちらにせよ、今の俺達には彼女の、彼女と同じ境遇の娼婦に口出しは出来ない。

最も、救いが無いのは……他の娼婦ならば金にモノを言わせればなんとかならなくはない、って所。春姫、目の前の希少種族である狐人ルナールの少女だけは話が変わる。彼女だけは、金をいくら積もうが意味が無い。

「あつ、でもつ、島育ちの私わたくしは大陸に興味がございました。叶うなら、是非来てみたかったです」

呆然自失したベルを見て、春姫が慌てて取り繕う。

しかし、逆効果で明るく喋るその姿は痛々しく、ベルの気を晴らす効果は一切無い。それでもなんとかしたいのか彼女は色々と言葉を重ね、健気に振る舞う。

対するベルは、口を閉ざした。

春姫はなんとか会話を続けようと、変わらぬ様子で話し続ける。

「それに……極東にも沢山の物語が伝わっている、このオラリオには憧れていました」

『迷宮神聖譚』、ですか？」

物語、という部分に無意識に反応したのだろう。

ベルの祖父が、彼に何度も読み聞かせた有名な物語。生憎と、俺はこの世界の物語に詳しくはないのでわからないが、彼の愛読書ともいえるそれに反応し、暗い表情を浮かべていたベルの目が輝く。

対する春姫の方も、嬉しそうにベルに微笑み返した。

「迷宮神聖譚ダンジョン・オラトリアも好きですが……私わたくしは異国の騎士様が、聖杯を求めて迷宮を探索するお話もよく覚えています」

「それって、『ガロードの冒険』ですか？ 不治の王女を癒すため、聖杯を探しに行く？」

「ご存じなのですか!! では、ランプに封じられた精霊を助けに迷宮に向かう、魔導士様のお話は——」

「えーと……『魔法使いアラデイン』？」

「わあー！」

嬉しそうに尻尾をぱたぱたと振るい、興奮した様な声を漏らす春姫と、何処か嬉しそうに彼女が次々と上げる物語のあらましから、題名タイトルを当てていくベル。

同好の士を見つけたと言わんばかりに、先の暗い空気を吹き飛ばして盛り上がる二人。置いてけぼりになってしまっただけはいるが、まあ別に構やしない。

「もしかして、春姫さんも御伽噺や童話が……？」

「大好きです！　お屋敷に居た頃、外の世界は本でしか知る事ができなかったもので……」

共通の話題を見つけて盛り上がるのは良い事だ。

『迷えるディラルド』『わがエノーの歌』『ジェルジオ聖伝説』……興奮気味に語る二人の話題に上がる題名タイトルは、正直どれもわからない。

一部、なんとなく前世の世界にあった物語の題名に似ているモノはあったし、内容もなんとなくそんな感じだっけ？　と言ったモノはあったが、うろ覚え過ぎてわからず、会話に参加できない。いや、まあ無理に参加する気も無いけど。

現実から目を背ける様に、綺麗に形作られた物語を語り合う二人を生暖かく見守っていると、ふと春姫がピンツと耳を立てて此方を見た。

「も、申し訳ごぎいませぬ。ノースリス様を無視する形になってしまっ……」

「あつ、ごめんミリア……」

二人が同時に申し訳なきように此方を見てしゅんと項垂れる。別に気にしてなかったのだがね。

「別に良いわよ。私が知ってる物語って……ちよつと毛色が違うし」

アニメとかゲームとか、創作の代物だしね。

「ミリアの知ってる物語ってどんなのがあるの？」

「私わたくしも気になります！」

あちやー……物語に目の無い二人の前で、毛色が違う等と言ったせ

いか興味津々といった興奮気味の二対の瞳で射抜かれてしまう。

しかし、なんと説明すべきか……。うんうんと迷っていると、春姫が口を開いた。

「雪白姫のお話はご存じですか？」

「……私知ってる物語と同一かはわかりませんが、題名ぐらいは」「え、えつと……僕は英雄譚以外は、あまり……」

ぶつちやけ雪白姫、日本語だと『白雪姫』にあたる作品の原作はなあ……好きじゃない。というかエグいし。

だって、美しさに嫉妬した王妃が白雪姫ぶつ殺して肺臓か肝臓とつてこいつて命じた後、狩人が哀れに思つてイノシシの肝臓を代わりに持つていったら、その肝臓を喜々として塩ゆでにして食べるとかつて話でしょ？

何というか、時代背景的に普通の事……普通か？ 食人指向的な内容が含まれてるし、正直なあ。しかも、王子つて確か『死体でも良いから』とかいう死体愛好な感じだったし。

最終的に王妃は真つ赤に焼けた鉄の靴を履かされて死ぬまで踊らされるんでしょう？

とてもじゃないがエグ過ぎて原作は読めたもんじゃない。

この話題を出すのは流石にアレだ。絶対に彼女が好む話じゃないし。

「そ、そうね……貴方達の一番のおすすめと違ってあるかしら？」

若干苦しいが、誤魔化す様に二人に話題を振る。

グリム童話はえてしてその時代背景的には自然でも、現代的価値観からすると狂つてる描写も混じつていて語るのには不向きだ。最終的に悪い魔女として悪役が拷問されて死ぬ奴とかね。

「一番かあ……僕はやっぱり迷宮神聖譚かな」

「二番、と決めるのは難しいですが……鬼に攫われる娘を、小さき身でありながら助けた武士様のお話……極東に古くから伝わる物語が、今でも心に残っています」

極東、鬼に攫われる娘、小さき身……一寸法師？ いや、でも……一寸法師つて確か……。

騙して娘を奪った小人、鬼を恐れさせ奪った『打ち出の小槌』、んー……昔話って、やっぱり原本はなあ、どれもこれも当時の価値観で書かれてるせいかな、とてもじゃないが現代的価値観からするとおかしいんだよなあ。

いや、それはともかく、春姫の置かれてる状況って、『一寸法師』の内容と似てるなあ。

「私も本の世界の様に、英雄様に手を引かれ、憧れた世界に連れ出されてみたい……そう思っていた時もありました」

自分の意思で、出て行きたい。ではなく、誰かに連れ出されたい、か……。

彼女に足りないのは、自分の意思ではないだろうか。

「……なんて、ただのはしたない夢物語でございます。連れ出して貰える資格は、私にはございません」

悟った様に、というには彼女の雰囲気は暗く。自嘲する様に呟かれるその台詞は、諦めが混じっている。

否、自身が救われる等、考えていない発言だ。

「そつ、そんなことっ!?!」

諦めきつた雰囲気ですらう彼女の言葉に、咄嗟に反論したのはベルだった。

「英雄は、春姫さんみたいな人を見捨てない！ 資格がないなんて、あの訳が無い!!」

きつと、それはベルが憧れる英雄の背を見据えて放たれた言葉なのだろう。実際、春姫の様な、自分が救われる気の無い人間すらも、救ってしまえる。ベルはそんな最高の英雄を夢見てるのだ。

けれど、春姫本人は、そうは思っていない様だ。

「きつと、物語の英雄様も、クラネル様のようにお優しいのでしょうか……けれど私は、可憐な王女でもなければ、怪物の生贄に捧げられた聖女でもありません」

彼女は事実を述べる様に、笑った。

「私は、娼婦です」

その単語の意味するところを理解し、ベルが目を見開いて止まる。

そんなベルに対し、春姫は突き放す様に言葉をつづけた。

「未熟ではありますが、私は多くの殿方に体を委ね、床を共にしています」

ベルが息を呑み、完全に声を失う。対する俺は、別に軽蔑するでもない、普通の事だと感じていた。

「意思をもって貞操を守るわけでもなく。お金をいただくために春をひさいできました」

金のため。生きる為に、必要だから、金を集めるのだ。それを、汚らわしい等とは思わない。

必要以上に金を集め、強欲に溺れているのならまだしも、生きるための最低限のお金を手にする為に身を売る事を、卑しい等と吐き捨てる奴らは一度その底辺にまで落ちてみれば良い。

綺麗ごとだけで、世界は回っていないのだ。

「そんな卑しい私を……どうして、英雄かれらが救い出してくれるのでしょうか？」

卑しい、そう口にした彼女は、それを事実として受け入れている。もう二度と、日差しを浴びる元に戻る事等無いのだと、諦めきつていた。

——彼女の方が、俺なんかよりはるかにマシだと言うのに。

「英雄にとつて、娼婦は破滅の象徴です」

………大淫婦バビロンの事を指しているのだろうか。

姦淫を汚らわしいモノとし、遊女や取り持ち女を戒める。無ければ無いで荒れるだろう事がわかっていながら、それを禁ずるといっている。どうにも理解できないが、世の中はそういう風にできている。

「汚れていると自覚したあの日から、私に美しい物語を読む資格はございません。憧れを抱く事は、許されません」

思わず、眉を顰めた。

彼女の言うそれは、ある意味で俺にも当てはまる代物だからだ。だからこそ、ベルに反論して欲しい、と心のどこかで思ってしまう。本来なら、彼女に深入りして欲しくはないはずなのに。

——しかし、ベルは口を閉ざし、言葉を紡げずにいた。

「私は、ただの娼婦なのです」
わたくし

悲しみに暮れるでもなく、たんとその事実を受け入れ笑う春姫。

反論して欲しい。彼女の言う事が俺にも当てはまる部分があったから、それを否定して欲しい。

何も口にしないで欲しい。彼女に深入りすれば面倒事になるから。ままたらない自分の心の中をぎゅっと封じ込め、表面上は無表情に取り繕う。どちらに転んでも、嬉しく無い。

「……もう、時刻ですね」

気が付けば、歓楽街から人の気配が少なくなっており、明かりの数も減っていた。騒がしかった遊郭も静寂が満ちており、少ない帰りの客と、娼婦のやり取りが遠くに聞こえるのみ。

「とても、楽しい時間ごございました……ありがとうございます」

時間切れ。ベルは何も言う事が出来なかった。悲しくて、同時に問題が離れていく様で、嬉しさもある。

寢室に備わっている荷物——客が顔を隠す為の厚手の頭巾を被り、春姫の道案内を頼りに部屋を出る。彼女に続いて歩いていくと、思ったよりあっさりと娼館を抜け出す事が出来た。

裏口から外に出て、遊郭を後にし、ともすれば忘れ去られたかのような寂しげな雰囲気の裏路地に出る。

春姫の持つ行灯型の魔石灯が、薄暗い裏路地で朧気に揺れた。

「この道を抜ければ、ダイダロス通りに出られます。ここならアイシャさんにも見つからないはずですよ」

「……………」

「ん、春姫、悪かったわね。ありがとう」

いきなり武器を突き付け、脅す様な真似をしたにも拘わらず。ここまで親切に送ってくれた彼女に対し、深々と頭を下げておく。

こんな、親切な少女であるのに……彼女は救われようと手を伸ばす事はしない。ただ、受け入れていた。

「いえ、気にしていません。それよりも、さあ、早く」

「重ねて礼を言うわ。本当にありがとう……ほら、ベル」

「……その、ありがとうございました」

ベルが小さく礼の言葉を述べ、彼女をその場に残して歩き出す。少し歩いてから、ベルがふと振り返った。釣られて振り返ると、春姫は行灯を片手に微笑み、頭を下げた。

——歯を食い縛る音が微かに聞こえ、ベルが小さく吐息を零し、走り出す。

俺はもう一度だけ、首輪で縛られて逃げ出す事を諦めてしまった狐人の少女を見てから、目を背けてベルの後を追った。

「イシユタル・ファミリア」本拠『女王の神娼殿』の高階。

月夜が見えるその一室には豪華な絵画風織物に大輪を彷彿とさせる絨毯。卓を挟んで天鷲絨張りの長椅子が二脚用意されており、一見すれば応接室にも見えるが、隅には天蓋付きの寝台が備えられており、焚かれた麝香の香りで満たされていた。

長椅子に腰掛ける女神が、煙管を燻らせている。

「やあ、イシユタル。来たよ」

優男の笑みを浮かべ部屋の扉を開けて入室してきたのは神、ヘルメスだ。

イシユタルは口角を上げ、己の青年従者に連れられてきた男神に視線を向けた。

「随分と待たせてくれたじゃないか」

「ちよつと外で面白いことがあってね、ニヤけて眺めていたら遅れてしまった、悪かったよ」

女神の嫌味に対し、飄々とした態度で答える男神。

イシユタルは笑みのまま、まあいい、と神らしい奔放なヘルメスの言動を流した。

呼び寄せた客人がイシユタルの対面に座る、手元に小鞆を置く。それを見計らったかのように青年従者が部屋の扉を施錠する。

イシユタルの私室の一つで、神々の密会が始まった。

「まだ雑談を楽しむ気分は残っているかい？」

「待たせるな、と私は言ったんだ。早く要件を済ませろ」

「怖い怖い。それじゃあ、契約通り、届けたよ」

密封された黒檀の箱を小鞆ポーチから取り出し、卓の上に差し出す。

それを満悦な様子でイシユタルが受け取った。

「わかつているとは思うが、この件は一言も漏らすな」

「依頼を引き受けたからには分別は弁えてる。信用は裏切らないよ」

イシユタルからヘルメスへと出された依頼。それは『運び屋』だった。

中立の立場と、都市外にも及ぶ機敏性フットワークの軽さから、こういつた類の依頼は「ヘルメス・ファミリア」に舞い込んでくる事が多い。

信用性と、依頼主が『極秘』だと厳しく指定したため。娼館の客を装ってヘルメス自らが赴いたのだ。

「けど、これで何をするつもりだい？」

「……中身を見たのかい？」

「たまたま見えてしまっただけさ」

中身を見た事を否定せずふてぶてしく答えるヘルメスに、イシユタルは軽蔑の視線を送った。

やがて男神は弓なりになっていた目を解き、細める。

「で、何をするつもりだい」

イシユタルは不敵な笑みを浮かべた。

「遠くない内に、面白いものを見せてやる」

紫水晶アメジストの様な瞳の奥に暗い炎を宿し、女神はとある『美神』を示唆した。

「王を気取るあの女が、地を這い蹲る所をなア」

ヘルメスは肩を竦め、女神おんなの嫉妬は怖いなあ、と茶化す。

そんな男神の前、誰よりも美しいと称される女神を絶望のどん底に叩き落とし、都落ちさせる事を画策する女神は、打ちひしがれ惨めな醜態を晒すフレイヤを見下し、高笑いする自分の姿を夢想し、眩いた。

「ああ、あの女のお気に入りの小娘を使っちゃったら、どんな表情をするだろうな」

「お気に入りに、小娘？」

「ああ、デナトウス神会でわざわざ二つ名を付けてやっていたんだ、お気に入りのだろうか？」

女神が指し示す、『フレイヤのお気に入り』が誰なのか見当が付いたヘルメスが尋ねる。

「その子を、どうする積りだい？」

「この箱の中身は知っているだろうか？ わざわざ二つも用意したんだ

——あの女の前で封じた魂を砕いてやるのさ」

今度こそヘルメスは顔を引き攣らせ、自らが彼女に手渡した『荷物』を見て停止する。

「それは、止めた方が良い」

「私に指図する積りか、ヘルメス」

「いや、これは善意からの忠告さ。彼女——ミリア・ノースリスはフレイヤだけじゃない、『ガネーシャ・ファミリア』『ロキ・ファミリア』『ディアンケヒト・ファミリア』と、都市有数の派閥が協力関係にある。手を出したらただじゃ済まないと思うけれどね」

ヘルメスの忠告に対し、イシユタルは毅然と煙管を啜えた。

「あの娘の魔法の威力は知っているだろうか？」

「……ああ、心躍る戦争遊戯ウォーゲームだったからね」

ならば話は早い、とイシユタルは猛獣めいた笑みを浮かべる。

「——あの魔法、攻撃も、補助も、どちらか一つでも得られれば。ガネーシャも、ロキも怖くないだろうか？」

城塞を穿ち抜き破壊する程の威力を持ちながら、二Kキロルを超える射程を持つ超遠距離砲撃魔法。

『透明状態』インビジビリティを付与する魔法。

「イシユタル・ファミリア」が誇る精鋭に持たせれば、どれほどの効果を発揮するか。

フレイヤ、ロキ、ガネーシャ、名立たる強豪派閥全てを敵に回して尚、揺るぎない勝利を得られると確信を持てるモノだ。

「そ、それにその魔法具マジック・アイテムは狐人専用の代物だ、ミリアちゃんに効果があるとは——」

「ふん、お前の目は節穴だったのか、ヘルメス」

見下した視線をヘルメスに向け、イシユタルは紫煙を燻らせた。

「まあいい、これだけでも十分に効果はあると思うが。私は計算高い女だからな」

「……何の話だい？」

「ヘルメス、私が喜びそうな情報は持っていないか。ミリア・ノースリス以外にも、あの女の弱味になりそうな、情報を」

イシユタルは、情報通な男神から更なる有益な情報を引き摺りだそうとする。

『美の神』の前では嘘は吐けないよ、デレデレしちゃってね。口が滑るのならとつくに滑ってるさ」

だらしなく鼻を伸ばして——『道化』を演じて有耶無耶にして誤魔化そうとする——優男を目の前にし、イシユタルは笑みの形に目を細める。

唐突に美神^{イシユタル}は立ち上がり、脱衣した。

「……はっ？」

目が点となったヘルメスの前で、有無を言わずに次々と服飾を取り払い、濃艶な褐色の裸体を晒していくイシユタル。

「喜べ。その腹の内に溜めているものを全て絞りつくすまで——
貪り食^{サービスして}つてやる」

今までなんとか余裕を見せていたヘルメスから、完全に余裕の色が消える。

笑みを引き攣らせる男神の前に立った美神が、獲物を前に紅い唇を湿らせた。

「イ、イシユタルツ、ちょっと待ってくれえ——ッ！」

男神の懇願を無視し、イシユタルはヘルメスに覆いかぶさっていく。

第一五六話

「で？ 説明してもらおうか」

まるで紙屑にでもなった気分になりながら、見下ろしてくるヘステイア様の前でベルと並んで正座していた。

「ヘステイア・ファミリア」の新本拠『リベンク竈火の館』。その一階にある広い居室。

春姫によつて逃がされた『迷宮街』にて道標アリアドネを見失うという致命的な失態ミスを犯した結果、ものの見事に朝帰りとなつてしまったのだ。

こつそりと屋敷に忍び込もうとした俺とベルはあつけなくキューイに発見されて捕縛され、尋問されているのである。

「歓楽街に行つて、朝帰りいく？ ほら、二人とも、申し開きはあるのか？」

娼館に入ったのには事情があるのだが、女神の怒りを鎮めるには至らなそうだ。

夜遅くまで働いて帰つてきてみれば、本拠ホームにはデインケ達しか残つておらず、俺やベルなどは外出したと知る。ヴェルフ達が帰還してみれば俺とベルは行方不明。心配で夜も眠れない状態で待つていたヘステイア様。そこにこのこと朝帰りを果たす俺とベル……そりやあ怒る。しかも娼館に行つていたともなれば、怒つて当然。

ヘステイア様の横で般若の様な形相で立つリリ。あたふたして役に立たなそうなミコト。離れた所で嘆息しているヴェルフ。部屋リベンクの入口を少しだけ開いて居室を覗き込んでいるアマゾネス二人。窓の外から聞こえるデインケ達ガネーシャ組がキューイやヴァンの世話をする音。

「へ、ヘステイア様!? 全て自分の私用が招いた事で、お二人に非は……!?!」

「ミコト君は黙ってるんだ」

庇おうと口を開いたミコトだが、ヘステイア様にべもなく斬り捨てられて口を閉ざす。

歓楽街へ赴いた事情を知っている側のリリですら激怒しているが

——おおよそ、ベルが娼婦を抱いてきたのではないかと疑念を抱いているのだろう。

別に、娼婦を抱くぐらい良いと思うんだがなあ。

「それでえ……娼婦と寝たつていうのかい？ それとも、ミリア君とかい？」

「い、いえっつ?!」

詰問を受けるベルが即答し、ヘスティア様とリリの視線が俺の方に集中した。

「弁解させて頂きませんが、そういった事は一切行っておりません」

「ではどうして歓楽街から朝早く帰ってきたのですか？」

冤罪を主張するだけで事情の説明を省いている事もあって、ベルの主張は撥ね退けられていた。正直、全部吐いてしまった方が遥かに楽だと思うのだが。

「はあ、ベルが男狩りにあつて捕まりかけていたのでそのまま交戦。なんとか身を隠す事には成功したのですが身動き取れず……歓楽街が静まるまで動けなかつたんです」

「ほう？」

ヘスティア様が目を細めると、阿吽の呼吸でリリが小瓶を手渡した。

「じゃあ、これはなんだい？」

盤棋チェスの駒に似た容器。中で揺れる深紅の液体。男の力を増幅させる代物。これ一本で一晩頑張れる。女性も満足な一品——最高級精力剤。一本でかなりのお値段の代物。

清々しい笑みを浮かべた神ヘルメスがぐつと親指サムズアップを立てる仕事草をしている姿が脳裏に浮かび、溜息が零れ落ちた。

ベルはどうやら、神ヘルメスから歓楽街で会った事を内密にしてほしいとお願いされたらしい。それに同意した以上、神との契約をってしまったと考えているらしく——口約束とはいえ破る訳にはいかない口を閉ざしているのだ。

結果的に言えば、ベルの立場が悪くなる一方であるので無視しても良いと思うのだが、ベル自身はそうは思っていない様子だ。なんだか

んだ言っても、神様達は崇めなければならぬ存在だとか……信仰深い事だ。

まあ、それはベルの話であって、俺は関係ない。最も崇めるべきはヘステイア様。ガネーシャ様やミアハ様の様に尊敬できる神もまた崇めている。しかし、軽蔑対象のヘルメス、テメエは駄目だ。

「神ヘルメスからの口止め料として渡された代物らしいですよ。運び屋として物品を「イシユタル・ファミリア」に運び込んでいたみたいですね」

「ミ、ミリア!？」

「ヘルメスう〜?」

眉を顰めて不快感を露わにしたヘステイア様が腕組をし、リリが眉間を揉んで「まあ、ヘルメス様ですか」と呆れ、勝手に秘密を明かした俺に対しベルが何とも言えない視線を向けてくる。

「ヘステイア様……」

「……………神の前では嘘はつけない。二人とも、嘘はついていない」
ミコトが懇願する様にヘステイア様の名を呼ぶと、女神は深い溜息を零してそう口にした。

ベルが安堵した様な表情を浮かべると、ヘステイア様が再度怒りの形相を浮かべるのは同時だった。

「ただし、歓楽街に行った事は許さない!　　というか歓楽街なんかに興味を持った事が許せない!」

「別に興味を持つ事ぐらいいは——」

「駄目です!」

良いのではないか。と口にしようとしたらリリに遮られた。ぷりぷりと怒りながら彼女は此方を鋭く見下ろしてくる。

「ミリア様は甘すぎますっ!」

甘い、とは思わないのだが。男という生き物はそういった事に興味を持つのは不自然な事では無いし、むしろ自然な事だ。変な風に溜め込んで爆発するぐらいなら、発散させる為にそういった所に行くのも目を瞑るべきでは……あー、ヘステイア様は処女神だし、リリも処女だっけ。男に夢見るのは……まあいいか。

「ベル君には今日一日、罰を与える。ミリア君も同様だ」

「はい……」

「わかりました」

今回の件は俺も反省しなくてはいけない部分が多い。

派閥拡張直後に歓楽街で騒ぎを起こす。それも団長、副団長が揃いも揃ってそんな事をしでかしたのだ。気を引き締める意味も込めて罰を与える格好をとるのが正解だ。

ベルに下された罰は『奉仕活動』。

簡単に言うと新居移転の挨拶がてら、街の住民の困り事を片付けたら、労働を手伝ったりするのだ。

そして、俺に下された罰は『配達物処理』。

簡単に言うと……【ヘステイア・ファミリア】に届いた依頼書や招待状等の処理である。

本拠二階、執務室として用意された一室は戦場と化していた。

「これはどうする？」

「こっちは商会からだな、依頼は……『大樹の迷宮』での採取品か」

執務机に座るのは俺。目の前に届いたファミリアへの書状や手紙、依頼書を片っ端から対処していく。

本来ならば他派閥へと帰還予定の者は書類整理等、派閥の中枢に関わる事には関わらせざるべきではないのだが、量が量だったのだ。

戦争遊戯ウォーゲームでの活躍もそうだが、【ヘステイア・ファミリア】は竜種を従えており素材がいくらでもとれるという情報が出回ったのだ。加えて『再生薬』という今までの医療事情をひっくり返す代物の取引を行っている。

当然、都市有数の大商会は片っ端から接触を持つてくる。その関係で昨日までで既に山ほどの郵送物が届いているのだ。

「また何通か来たけど……大丈夫？」

扉を開けて入ってきたのは書状等が詰まった木箱を運んできたサイアだった。

席に着いて作業を行っているのはエリウッド、フィア、メルヴィスの三人。他の雑用担当でサイアが届いた書状の山を執務室に運び込んでくる。

運び込まれたそれらを山とし、一つ一つ丁寧に開いては内容を確認。冒険者依頼クエストであれば対応可能かどうかの判別と、受けるか断るかの返信を。

ごく普通に挨拶状であるのであれば、此方からの返信を書かなくてはいけない。

無視してしまうのが楽ではあるのだが、相手は大商会や、一部権力を握る貴族連中。下手な対応をして機嫌を損ねると面倒事に発展しかねない。

「副団長、この依頼はどうする？ 実入りは良いが」

「この依頼は中層の『大樹の迷宮』関連、そっちの籠に入れといてください」

今の「ヘスティア・ファミリア」陣営で、この手の処理が出来る者が全くいない。

ヘスティア様——利益がらみの煩雑な手続きと対応を苦手としており、出来なくはないと言った程度。

ベル——田舎から出てきたばかりで冒険者志望の少年は論外過ぎる。

リリ——肩肘張った丁重な書状の書き方を知らない。

ヴェルフ——『魔剣鍛冶師』関連で依頼書は受け取っていたが、全て燃やしており返信した事が無い。

ミコト——正式な書状のやり取りを知らない。

頭を抱えたくなくなるとはまさにこのこと。下手な対応で機嫌を損ねるなんて言語道断でありながら、派閥内でこういった処理が行える者が俺しか居なかった。死にそう。

そこで手を上げてくれたのが、エリウッド、フィア、メルヴィスの三人だ。

「本当に、三人が居てくれて助かります……」

「いや、流石にこの量を一人で片付けるのは無理だろ」

意外な事にこういった事務処理が苦手そんな印象があったファイアが三人の中で最も手が早く、正確だった。

理由は、まあ察しがつくだろう。

両足欠損で冒険者を続けられなくなった彼女は、「ロキ・ファミリア」から支援を受けて生活していた。そんな中でただ食わせてもらうだけでは示しも付かないと、書状関連の処理を請け負ったらしい。

一日での収益や、武装の破損、修理金額を纏めたり。どこぞの酒場で飲み食いした請求書。そういったモノを処理してくれる者は少ない。

冒険者志望でやってくる者達の大半が、こういった事務処理を嫌い、手を付けなかったりサボったりするわけで……彼女の様に、代理でやってくれるのであれば是非にと任せる者は多かつたとのこと。

結果としてファイアはこの手の事務処理能力が鍛えられている訳である。本人は不本意らしいが。

「あと少しか、10時前には終わらせられそうだな」

「流石、迷宮都市で話題の派閥だ。書状の数がとんでもないな」

多分、というか一人で処理したら日が暮れてたなこれ。そう思っってしまう程に多かつた書状の山もほぼ片付け、残るは冒険者依頼の期限と内容、目的階層の仕分けだ。

殆どが中層下部、『大樹の迷宮』での採取物や、怪物の宝の収集依頼ドロップアイテムであり、報酬金に色が付いているものが大半を占めている。

『これから御鼻屑にしてください』という真意が丸見えなものから、とりあえず睡つけておこうというものまで、中には「ディアンケヒト・ファミリア」との契約内容を探るものまで。

下手な対応をすれば後で面倒事になるのが確実な書状もが溢れており面倒臭い。

「んー、なあ副団長。この冒険者依頼の束どうする？」

ファイアが片手に持っている依頼書を受け取り、中身を確認する。

依頼主の素性がはっきりとしており、非公式ではないものだけで仕訳クライアントけられた束。怪しい依頼は全て弾いてもなお、束となっている。

この依頼を全て完了すれば……おおう、これだけで二千万ヴァリス

に届くな。しかし、まとめて片付けるには少し手間がかかるし、期限がギリギリなものもちらほら。

「私やベルは『大樹の迷宮』まで行った事無いんですよねえ……」

「私達がまとめて受けましようか？ 大樹の迷宮であれば足を運んだ事もありませんし」

メルヴィス曰く。

第一軍、ベル、俺、リリ、ヴェルフ、ミコト+竜種三匹。

第二軍、イリス、グラン、フィア、サイア、メルヴィス。

第三軍、デインケ、ルシアン、エリウッド。

このうちの第二軍、第三軍は元派閥で大樹の迷宮までは足を運んだ経験がある者達だ。

第一軍の経験がてら行くのは今の時期だと不味い。主に本拠を空けるのが不味く、主力として知られる俺やベルは長期間はなれるべきではないとのこと。

それらを踏まえた上で、第二軍、第三軍の面子を纏めて遠征という形で今回の依頼の品を片っ端から集めてくるという方法が効率的だとのこと。

「いや、確かに……ですが、依頼の品の量はかなり多いですよ？」

薬草類にしろ、ドロップアイテムにしろ、鉱石にしろ、全てを集めると洒落にならん量になるだろう。

大型の荷車カーゴを使わないといけなくなると思うんだがね。

「んむ、それならガネーシャ様に相談すれば借り受けられると思うが」「いや、人員的に不味くないです？」

第二軍、第三軍の合計が八名。Lv. 3到達者が四人、半数を超えているので実力的には問題ないだろうが、荷車カーゴ使うとなるともう数人欲しくなるはずだが。

「それならルシアン一人が良い。あいつは牽引時に補正がかかるスキル持ちだからな。二つ名は【濡鼠】だが、異名として『馬車馬』とも呼ばれているくらいだ」

【濡鼠】ルシアン・テイリスの異名が『馬車馬』だっていうのは初耳だ。それに牽引時に補正、リリの荷重に対する補正みたいなスキル

か。

「……………一人で荷車引かされるルシアンの姿を想像したら、なんか哀れみを覚えるのだが。」

しかし、この依頼群を片付けてくれるというのであれば非常に嬉しい。此方の手が回らないし、つい先日にも『もつと頼れ』と言われたばかりだ。此処は彼らに任せてしまってもいいかもしれない。

「それじゃあ……………お願いしてもいいですかね？」

「任せてくれ、今日の昼には出れる様にしとくよ」

「え？ いや、今日の昼？ 後二時間しかないけど」

二時間で準備して遠征？ いや、行き先は下層じゃなくて中層とはいえ、二時間で準備して行くの？

んと、半日かけて十八階層。そこから下に進んで……………きつくね？

「三日後の朝までには帰るさ」

「デインケ達に声をかけてくる」

「ダンジョン？ いくいくー！」

親指を立てて牙を剥く様な笑みを浮かべるファイア、素早く残りの書を纏めると立ち上がるエリウッド、嬉しそうに拳を振り上げるサイア。足早に執務室を出て行った彼女らを見送り、手元に残った書状に封蝋を施して最後に残ったメルヴィスに視線を向けた。

「えつと、きつくねいですかね？」

「……………実は昨日の晩から遠征の準備だけはしてあったんですよ」

既に今日の依頼等の予測はしており、中層中間部である十八階層。そこから先の『大樹の迷宮』へと向かうための遠征準備は既に昨日の内から手配しており、後は団長または副団長の承認待ちだったらしい。

……………なに、その、優秀過ぎじゃない？

「いえ、単にダンジョンに潜りたい一心で用意していただけでして……………」

「あー、打算もある、と？」

「そういう事です」

なるほど、ダンジョンに潜りたかったのね。

奉仕活動を言い渡されたベルは、ルシアンと共に街中を駆けずり回っていた。

「団長、次はあつちの通りの魔石街灯の補填。それが終わったら荷物運びだな」

「は、はい……」

手際良く問題を解決しては笑みを振り撒き、手を振っては返すルシアンを横目に、ベルは深く息を吸って呼吸を整える。

「ヘステイア・ファミリア」をよろしくな」

「おう、覚えとくぜ！」「リトル・ルーキー」、助かったぜ！」

「は、はい！」

路地の清掃から始まり、魔石街灯の補填、荷物運びに破損した家屋の修理。街の住民の困り事を片っ端から片付けながら駆けずり回る二人。元はベル一人でやる予定であったが、一人より効率が良いとルシアンが勝手に付き合っている形となっていた。

「ルシアンさん、手伝ってくれてありがとうございます」

「気にすんな、どのみちディンケは竜に首ったけ、エリウツドは副団長の手伝い。俺は暇だったしな」

灰色の頭巾を目深にかぶり、何処か暗い印象を抱かせる青年という風を感じていたベルだったが、話してみれば意外と気さくに笑いかけってくる様な好青年であり、なおかつ街の市民に顔を——どちらかと言えばその特徴的な頭巾付き外套を——覚えられているらしく、声をかけてくる市民は多い。

「ルシアンか、久々だな、腕が治ったのか！」

「この前はありがとな」

「見ての通りさ、これからは「ヘステイア・ファミリア」の団員としてやってくから。それと困った事があれば教えてくれ」

声をかけてくる親父さんやおばさんに手を振り返し、困り事が無いかを聞いて回る。

そんな様子を見ていたベルがふと気になり、一息ついたところで

シアンに声をかけた。

「ルシアンさんって、実は結構凄い人だったりとか……？」

「何言ってるんだ？ 団長程じゃねえって……ガネーシャ様の所に居た頃は暇があればこうやって手伝ってたのさ」

都市の治安維持を行う「ガネーシャ・ファミリア」の主神ガネーシャは、時折慰安の様に街中を歩き回っては困り事等を聞いて解決の為に動いたり等していた。

市民の為に動く、という神ガネーシャの行動指針に感銘を受けた団員の中には、ルシアンの様に暇な時には市民の困り事解決の為に動き回ったりしていた事もあり、なんだかんだ彼も一部では有名である。下界の者達に隣人愛を以て接する神という意味では、神ガネーシャだけではなく神ヘステイアもまた、当て嵌まるだろう。故に今回のベルに対してくださった罰を、ルシアンは勝手に手伝っている。

「凄いですね」

「ははは……はあ、団長に言われてもなあ。モテモテで羨ましい限りだしなあ」

目深にかぶった頭巾フードから覗く口をへの字に曲げて呟くルシアン。ベルは『モテる』と言われて微妙な表情を浮かべて苦笑いを零す。

冒険者クエスト依頼を出さずとも冒険者の力を借りれるとあって、引っぱりだことなっていた二人は、気が付けば本拠近隣である西のメインストリート境界まで範囲を広げていた。

「白髪頭、ミャー達の為に頑張るニャー！」

「ごめんねー、冒険者くーん！」

西の大通り沿いに軒を連ねる酒場『豊穡の女主人』もまた、彼らに困り事を依頼した。

お店の離れの上、雨漏りしている屋根の修繕を依頼されベルが屋根に上っており、そんな少年に猫人のアーニャと、ヒューマンのルノアが声をかけていた。

何故か外壁に空いた穴に板を当てて釘を打っていたルシアンは首を傾げつつも仕事をしている。

「何でこんな所に穴が……そんな簡単に穴空くとは思えんがなあ」

まるで拳で打ち抜いた穴みたいだ、そう眩きながら彼が後ろを振り返ると、猫人とヒューマンが口笛を吹いて何かを誤魔化そうとしている姿が目に入る。

「ルシアンさん、なんか便利屋染みてませんか？」

「あー……まあそんなときもあるだろ？」

屋根の上から放たれたベルの言葉にルシアンが肩を竦め、二人の疑問を誤魔化す様に店員が声を上げた。

「いやあ、冒険者君が居てくれて助かった！」

「しようねーんっ、それが終わったらミャーの下着あげるニャー！」

「要りませんよ!？」

「貰つとけ貰つとけ、こんな可愛い子の下着パンツなんて滅多に手に入るもんじゃねえんだから」

「ルシアンさん!？」

アーニヤの横でニマニマと笑いながら猫人のクロエが声を上げ、ベルが真っ赤になって叫べば、下でルシアンが同様にからかう様な笑みを浮かべる。

地上からベルを見上げていた店員三人、その背後にエルフのリユーが現れ、盆で後頭部を問答無用で叩かれて「ニぐあ!?」と悲鳴が響く。ルシアンがリユーの姿を見てから引き攣った笑みを浮かべつつ降参を示す様に両手を上げた。

「ルシアンさん、上終わりましたー」

「ん、こっちも終わったから降りてこいよー」

ウォーゲーム 戦争遊戯で共に戦った、というには接点がないルシアンとリユーが見つめ合い、リユーが小さく頭を下げる。

「お疲れ様です」

「いや、まあ好きでやってる事だし」

ルシアンも気まずげに頭を下げ返した所で、ベルが梯子を降りてきた為、手早く修理工具を纏め始めた。

ベルも手伝おうとするも、ルシアンが手でそれを制してリユーと、店の中から顔を覗かせたシルを示す。

「彼女らの相手してやれよ、片付けはやつとくから」

「え、でも」

「女を待たせるのは男として恥ずかしい事だぜ？」

ニヤリと笑って工具や梯子を片付け始めるルシアン。そんな彼の背を見て申し訳なさそうにしながらも、リユーやシルを無視する事も出来ずにベルは二人と話し込み始めた。

工具箱を片手にしたルシアンが立ち上がった所で、目の前にエルフの青年が立つ。

「ようエリウッド、なんだ？」

「実は女と普通に話す事すらできない初心なルシアン、遠征の許可が出たぞ」

「……………」

恨みがましい目でルシアンはエリウッドを睨みつけた。

本拠である『竈火の館』一階の食堂に集まった面々。

「ヘスティア・ファミリア」の団員が全員集合していた。

「それで、ルシアンさん達が遠征に……………」

「おう、冒険者依頼まとめで一氣に片付けちまおうって話さ」

代表者として今回の第二軍、第三軍の混成部隊八名を率いるのは、意外な事にレベルの高い経験者のグランでも、イリスでも無く、元【ガネーシャ・ファミリア】所属、Lv. 3に至った猫人の青年であった。イリス曰く、頭に血が上ると指揮とか放り投げる自分や、最前線で見回す余裕のないグランよりは彼の方が適任だとか。何より、ディンケ・レルカンという人物は意外と名の知れた人物らしい。

規模が大きく、遠征も頻繁に行う【ガネーシャ・ファミリア】に所属していた事もあり、経験も豊富。なにより欠損を抱えたのが本当に最近の出来事であり、腕の衰えも少ない。そして見る目があり、ルシアンやエリウッド等の仲間に指示を出しながら戦うだけの頭もある…………とべた褒めしていたのだ。

「なんか期待が重いなあ」

「まあまあ、ガネーシャからキミが努力家だって聞いてるし。期待してるぜ？」

ヘスティア様の声かけに苦笑しつつも、全員の顔を見回したディンケがベルを真っ直ぐ見据えた。

「団長、さっき説明した通りで俺達は大樹の迷宮で依頼品の採取、収集を行ってくる」

「うん」

「本来ならば団長も来たいだろうが、今回は俺達だけって話だ。まあ、本拠の方は任せるぜ？ 娼婦なんかに現を抜かすなよ？」

「うっ……そ、それは、勘違いで……」

からかう様なディンケの言葉にベルが息を詰まらせた。

時刻はもうすぐ昼食時。既に早めに昼食を終えた彼らはこの後直ぐにダンジョンに潜り、明日までは帰還しない。

俺とベルには経験のない、ダンジョン内で一夜明かすという遠征。規模は小さくとも、いずれ俺達も経験するそれら。今は時期も悪く俺とベル、ヴェルフやリリ、ミコトは参加できない。

正直、心配ではある。

前までは朝早くに潜り、夜には帰還するという探索時間だったが、今回は一晩を迷宮で過ごすのだ。昼間は冒険者の行き来がそれなりにある事もあって、迷宮内の怪物が狩られ比較的安全だが……夜は別だ。

夜の迷宮は危険だ。そこに向かう……無論、ちゃんと理由もある。依頼の品の一部が特殊な植物の種子であり、地上が夜間の時しか採取できないらしく、その為にも夜間に探索をするというのが。

「ミリア様、心配ですか？」

「ん、そうね。すっごく心配だわ」

リリの言葉に頷く。心配じゃないわけがない。

今回の依頼、全てこなせば一気に二〇〇〇万ヴァリスの収入だ。無論、全額をこちらに渡す訳では無いし、派閥に納める金額は各々で決めて貰う事にはなるが……。

「中層ですし、何があるか……」

「心配性な副団長の為に」

心配で胸が張り裂けそうだと、思っているともったいぶる様にグラ
ンが長卓テーブルの上に何かを置いた。

力強く置かれたそれは、琥珀色の液体の詰まった瓶——端的に
言って酒だった。

「お酒、ですか？」

「……結構な上物だろ、それ」

「酒で解決って、ドワーフらしいですねえ」

ベルが首を傾げ、ヴェルフがまじまじと酒瓶を観察して呟き、リリ
が呆れた様に眉を顰める。

ヘステイア様も小さく首を傾げつつも、酒を取り出したドワーフに
尋ねる。

「それで、飲むのかい？ 今から？」

「おう、全員でな」

集まった面々を見回して胸を張るグラン。なぜかルシアンとエリ
ウッドが頷いてグラスを用意し始め、イリスが納得した様に呟く。

「あく、ソレかあ。グランも好きだよねえ」

「ただお酒を飲むだけなんですか？」

ベルが疑問を口にする、デザインケが肩を竦めた。

「『黄金こがねの穴蔵亭』って知ってるか？」

「えっと……知りません」

「ん？ 何処かで聞いた酒場だな……」

「リリも聞いた事がありますが、一八階層の酒場でしたっけ？」

「一八階層の酒場？」

素直に言えば、知らない。一八階層と言えば『リヴィラの街』があ
るが、その酒場の一つだろうか？

ベルとミコトは知らないにしろ、ヴェルフとリリは知っているらし
い。とはいえずぐには出てこないの顎に手を当てて思い出そうとす
るヴェルフと、名前だけしか知らないとリリが肩を竦める。

で、その『黄金の穴蔵亭』の酒がどうしたというのだろうか。

「その酒場の酒ですか？ 有名なんですか？」

『焰蜂亭』の『真つ赤な蜂蜜酒』みたいなものだろうか。にしても聞いた事が無い。

「違つよ副団長、その酒場の酒じゃなくて、その酒場でよくやってる験担げんかっぎの方だよ」

験担げんかっぎとな？ ふむ、じゃあさっぱりわからんわ。

「まず、全員分のグラスに酒を注ぐ」

ルシアンとエリウツドが用意したグラスに酒が注がれる。琥珀色の液体から溢れる芳醇な香りは、なるほどヴェルフが上物だと言うだけはあある。

皆で酒瓶を空けて験担げんかっぎするののかと思えば、皆のグラスに注ぎ終わった瓶には半分酒が残っていた。

「あつ、聞いた事あるぞ」

「ヴェルフ、知ってるの？」

「ああ、冒険者グクエスト依頼の前に瓶の半分の酒を皆で飲むんだ。それで――」

「残りの半分は帰ってきてから」

ヴェルフの台詞を奪い、ディンケがグラスを手に取る。

成る程、冒険者らしい験担げんかっぎだ。無事に帰ってきてまた酒を酌み交わそうって奴だな。

気が付けば遠征に参加する全員が各々グラスを片手に持ち、俺達がグラスを手にするのを待っていた。

「グランは毎回やってたのよね」

「俺は一回だけだなあ」

イリスが肩を竦め、ルシアンが懐かしそうに目を細める。

グランは、ドワーフらしく酒好きらしく。こういった遠征前、ともすれば普通にダンジョンに潜る前にも毎回こつこつした験担げんかっぎを繰り返していたらしい。本人曰く『片腕片足が無くなっても帰ってこれたのもこれのおかげ』だとか。

「冒険者流儀の、験担げんかっぎ……」

「へえ、そんな験担げんかっぎがあったのかあ。全く知らなかったなあ」

ベルが瞳を輝かせ、冒険者流儀の験担げんかっぎに感銘を受けており、ヘス

ティア様もまた感心した様にグラスをしげしげと眺める。

「おう、皆グラス持て、飲めない奴はいないよな？」

「リリはお酒はあんまり好きではないのですが、今回は特別です」

デインケに促され、全員がグラスを手にする。

テーブル長卓を皆で囲みながら、デインケが笑みを浮かべてグラスを掲げた。

「今回の遠征の隊長リーダーを務める俺、デインケ・レルカンが音頭を務める」

「堅苦しいのは良いからさっさと乾杯しようぜ？」

「ルシアン、空気を読め」

普段から仲が良かったのか、気兼ねないガネーシャ組。

「冒険の前にはこの一杯！ 帰ってから残りの一杯！」

「グランも好きよねえ。まあ嫌いじゃないけど」

「じゃあいいよね！ ファイアは？」

「験担ぎしといて悪い事はないだろうしな、メルヴィス、眉間に皺寄ってるぞ」

「お酒はあまり……少しは飲みますけど」

各々が苦笑しながらもグランの調子に合わせるロキ組。

「うん、冒険者らしくて良い験担ぎじゃないか！」

「なんか、良いですねこういうの！」

「ああ、なんか胸が熱くなるな」

「……リリも、こういうのは嫌いではないです」

「自分も、冒険者らしくて良いと思います」

初めての験担ぎにテンション高めへのスティア組。

確かに、冒険者らしい験担ぎに気分が高揚しないとえば嘘になる。

「んじゃ、面倒な前置きは無しで——全員で生きてこの酒を！」

『生きてこの酒を！』

軽くグラスを掲げ、全員が一気にグラスを空ける。

芳醇な香りと、喉を焼く酒精。各々が浮かべる笑顔を目に焼き付け

——酒精が一気に回る。かなり強い酒だったらしく、ベルとリリ、ミコトの三人が皆の真似をして一気に飲みした結果盛大に咽び、

ヴェルフがくらりと揺れ、ヘステイア様が「あゝ」と声を上げる。他の面々も同様であり、平然としているのはルシアンとグラン、そしてサイアぐらいである。

「ごほっ、これ強過ぎんだろ!？」

「ドワーフ殺しじゃねえか!？」

「がっはっはっはっは、効くだろ!？」

騒がしくなる食堂の音が一気に遠ざかっていく。

—— たった一杯飲んだだけでここまでくる酒とか、度数どんだけあるんだ。

なんとか朦朧とする意識の中、グラスを長卓テーブルの上に戻した所で、俺の記憶は途絶えた。

第一五七話

大振りに振り抜かれるミノタウロス鬪牛の一撃に対し、真正面から無骨な大剣が衝突して火花を散らす。

上級冒険者に上がりたての者ですら恐れるその怪力を以てして、目の前に相對した冒険者を討ち果たさんと力を籠める怪物。対するは踏ん張ってなお押される怪力を前に必死に対抗するアマゾネスの少女。

ついに限界を迎えて少女——サイアが弾き飛ばされる。

追撃を放たんとミノタウロスが一步踏み込んだ瞬間、目の前には拳。褐色肌を際どく晒して獰猛な笑みを浮かべるもう一人のアマゾネス。彼女の拳が怪物の鼻つ面を、穿ち抜いた。

ごしやりと鼻先が潰れるだけにとどまらず、そのままその拳は怪物の顔を穿ち、中身をかき混ぜて後頭部から突き抜ける。肩の辺りまでしっかりと捻じ込んで止めを刺し、アマゾネスの女性、イリスは腕を引っこ抜く。

「サイア、無事?」

「う〜ん……私の獲物お〜」

汚れた腕を振るって血と肉片を払い落としながらイリスが尋ねれば、後ろで弾き飛ばされてうめくサイアが身を起こしながら不貞腐れた様にそっぽを向いた。

「はあ、あのままでと死んでたじゃん。ミノタウロス相手だと一騎打ちにはサイアにはまだ早い」

「同感だな。もう少しステイタスを上げてから挑むべきだと思うがなあ」

大盾で突進し、ミノタウロスを壁と大盾で挟み込んで圧殺しながらグランがイリスの言葉に同意する。

探索面子内の最高戦力二人に否定されたサイアがふくれっ面を浮かべ、取り落としかけた大剣担ぐ。

そんなやり取りをしている前線組を眺めつつ、荷車カーゴの荷台に腰掛けた猫人、デインケは呆れた様な溜息を零した。

「いや、普通はLv. 2でミノタウロスの攻撃を真正面から止められねえよ。俺でも無理だし……サイアってどんな怪力してんだよ」

「サイアのLv. 1の時の基礎アビリティ、力と耐久が最高評価^sでしたからね」

「ああ、アイツ入団直後からステイタスの伸びが早くてな。器用と魔力は死んでるみたいだが」

弓を片手に警戒を続けていたエルフの射手メルヴィスが口を開けば、荷台の奥で寝込んでいたファイアが這いずりながら顔を覗かせて捕捉した。

「魔力はわかるが、器用？」

「力と耐久がS、器用は……Hでしたから」

「なんだそりゃ」

力任せに武器を振り回す事にこそ特化した幼い言動のアマゾネスを見てデインケがなんとも言えない表情を浮かべている間にも、周辺の怪物を掃討した面々が荷車の元へ戻ってくる。既に魔石やドロップアイテムの回収も終えている辺り、優秀な者が多い「ロキ・ファミリア」に所属していただけはある。

耳を澄ませて他に怪物の姿は無いかと確認してから、デインケは馬車馬に指示を出す。

「よし、ルシアン、いけ」

「いけじゃねえよ……」

三人から四人で運用する大型荷車をたった一人で引く灰色の頭巾^{フード}が目^{トレードマーク}印のルシアンがぼやきつつも一步踏み出し、そのまま前進し始めた。

荷車の周囲を繞りて歩きながら怪物を警戒するイリス、グラン、サイアの三人。

新しくなった「ヘステイア・ファミリア」の第二軍、第三軍である彼らは、つい数時間前に験担ぎを行ってから早くも十五階層を超えて十六階層に足を踏み入っていた。

「ふうー、暫くは大丈夫そうだな」

「に、してもだ……ルシアンの奴凄いな。ウチ……ロキの所に居る奴

でもこんなでつかいの一人で動かせるのなんて第二級ぐらいだ」

安堵の吐息を零して荷台でくつろぐ猫人。その後ろで酒に酔い潰れて荷物として運ばれていたフィアが感心した様にルシアンの後ろ姿に視線を送った。

視線を向けられた側のルシアンは無言で肩を竦め、荷車の速度を少し早める。その様子にメルヴィスと共に弓を手に警戒していたエリウッドがくつくつと肩を揺らして笑いだす。

十六階層を駆け抜け、十七階層に足を踏み入れた所で、ふとサイアが口を開く。

「そういえばー、デインケ君達ってなんで手足無くしたの？」

ちよつとした疑問だったのだろう。何でもない様に問いかけた彼女が荷車を引くルシアン、荷台で尻尾を揺らすデインケ、弓を片手に警戒を続けるルシアンに向けられる。元の所属派閥が違うからその質問といえるだろう。

本来ならば、欠損に関する質問は禁句と言っても良い。二度と冒険者として活動できなくなった原因ともいえるそれ、大半は怪物にやられたと答える事が推測できるがゆえに、触られる事のない部分。

「あー、まあ普通は聞かないよなあ」

しかし、彼らは不治の欠損は癒えている。彼らからすれば奇跡的に、その治療薬を与えてくれた側に尽くす事を誓う程の奇跡だ。故に今回の大樹の迷宮に関する束となった収集品依頼を片っ端から受けているのだ。

答えに窮するという程ではないにせよ、デインケが頭を掻いてどう答えようか迷いだす。彼の欠損原因は、言ってしまうえば嫉妬と、自尊心の暴走によるものだ。あまり吹聴したいものではないのだろう。

「まずはそっちから教えてくれよ。俺らから話すのは平等フェアじゃねえし」

「わたしがなくしたのはねー、フィアが死にそうだったから！」

「……いや悪い、聞いたいてなんだが、何があつたんだ？」

デインケが視線を向けた先、唐突に話題に出されたフィアが「あゝ」と声を零していた。

冒険者として恩恵を授かっていたからか既に酔いが覚めて復帰しはじめていたファイアが何うようにメルヴィスに視線を向けると、彼女が溜息と共に語りだす。

「実は、私とファイア、サイアの三人は同時期にやられたのです」

「聞いて良い話なのか？」

「構いません」

気遣うエリウツドの言葉にメルヴィスは苦笑と共に答えた。

「その日は、『ロキ・ファミリア』の上級冒険者六人でパーティを組んで、中層を探索していたのですよ。ランクアップしたてのサイアが『迷宮の楽園』に行きたいと言って。その道中に私が怪物の不意打ちで腕を食われてしまって……そこから隊列が崩れた所に怪物の宴が起きたんです」

「時期ぴったりだったよなあ。メルヴィスがヤバい状況で危なかったから、アタシが囷を買って出たんだよ」

数えきれない怪物に追われるさ中、パーティの中で最も敏捷の高いファイアが怪物の群れを引き剥がす為に囷を買って出て——結果、ファイアが単独行動中に怪物に両足を食われてしまった。

「それで、サイアはどうしたんだ？」

「んー？ ファイアがあぶないきがしたから、ファイアの居そうなところにいったら足からたべられてるファイアがいた！」

ほぼ直感のみで行動し、見事ファイアの危機的状況を助け——両足は失われたが——命は救ったサイアだったが、彼女がファイアを救う際に相対したミノタウロスの攻撃によって片腕を欠損。

「片腕でファイアを担いで私達と合流したのは良いんですけど……」

「怪物まで付いてきちゃったのか」

「そういう事です。十八階層までは辿り着いたんですけど、近場に冒険者が居なくて……『リヴィラ』から応援が駆けつけるまでに、サイアは」

騒ぎを聞きつけて慌ててやってきたリヴィラの街の住民に助けられるまでに、他の面々も死にかける程の目にあつた、そう語るとファイアがカラカラと笑って口を開く。

「んで、結局サイアは十八階層の観光が出来ずに地上に戻っちまったから不貞腐れてたんだよなあ」

「もしかして、サイアって『迷宮の楽園』^{アンダーリゾート}って初めてなのか？」

「いや、はじめてじゃないよ？ でも、すつごく綺麗な泉があるって聞いていきたいなーって」

ふうんと頭を掻きながらディンケが答え、溜息と共に口を開く。

「そっちが教えてくれたんだし、俺も教えなきゃ平等^{フェア}じゃねえよなあ」
「無理に語らなくてもよいのですが……」

明確に嫌そうな表情のディンケに対し、メルヴィスが気遣う様に声をかけるも、猫人はカラカラと笑うと自らの恥を語りだした。

竜を従えたいと迷宮都市にやってきて、調教師^{テイマー}として有名な「ガネーシヤ・ファミア」に入団。その後、上級調教師ですら手古摺る竜種の調教に失敗し続け、一度は夢を諦めかけるもとある噂を聞いて奮起——否、ただの嫉妬で先走り——腕を食い千切られる間抜けな猫人の話だ。

「……話してなんてなんだけどさ、副団長には黙っててくんねえかな」
嫉妬した相手から治療されて複雑な想いを抱えるだけにとどまらず、竜の世話役を買って出る事で少しでも「竜を従える者」^{ドラゴン・テイマー}になる夢を見続けている。口にしてしまえば恥ずかしいそんな内心を零してディンケはカラカラと笑った。

「あー……なるほど。確かに副団長には言い辛いわ」
「ま、此処だけの話って事で頼むぜ？」

納得の表情を浮かべたグランが、大きく頷くと力強い笑みを浮かべた。

「なら今度は俺だな。と言っても大したことではないがな、盾役^{タンク}として怪物の突撃を受け止めてるさ中に齧られたただだ。がっはっは、我ながら情けないやられ方をしたもんだ」

「……豪快に笑ってるけど、グランは元第二軍だし。グランの腕と足は『ブラッドサウルス』にやられてるからね？ しかも一人で十匹ぐらいの群れの足止めしてたし」

三十階層に出没する体長5Mはある紅色の肉食恐竜。いくらLv.

3でもそんな怪物の群れを相手に足止めを行えばどうなるのかは目の前のドワーフの欠損部位を見れば明らかであった。

「おいおい、笑いごとじゃねえだろ!」

「ブラッドサウルス?! 三十階層の怪物じゃねえか!」

「なんでそんな無茶を……」

「仕方ないだろ。仲間が治療中で動けない所に突っ込んできやがったんだ。魔術師隊が詠唱完了するまで時間稼ぎも必要だったしな」

豪快に笑うドワーフの姿に改めてデインケが感心の吐息を零す。

「ロキ・ファミア」の面々は他の仲間を庇つての負傷。対するデインケは嫉妬と自尊心による愚かな行為による代償。比べるまでもないなど苦い表情を浮かべたデインケが溜息を零した。

そんな猫人の様子を横目で見ていたエリウツドが口を開く。

「ふむ、後は私とルシアンだな。私は大した事ではない、調教中に齧られたただけだな」

「確か『サーベルフアング』だったか」

「そっか、【ガネーシャ・ファミア】だもんねえ。三人とも調教師だったの?」

エルフの青年が気負う事無く答え、デインケが原因となった怪物の名を口にする、イリスが納得した様に呟き問いかける。

同一派閥に所属する事になったうえ、欠損冒険者と言う共通点もあった彼らだが、今までは元派閥が違う事もあって会話する機会は少なかった。今回の遠征においてはL.V. 3が四名も参加している事もあり、中層部の探索には余裕があるという事で雑談に花を咲かせていた。

「ああ、俺もこいつも、その馬車馬も調教師テイマーだな」

「おい馬車馬言うな」

「ふうん、ちなみに私は怪物との鬪いのさ中にいきなり顔に毒液かけられて、見えなくなったんだよねえ」

イリスはさらりと視力を失った事を語りケラケラと笑う。

「んじや最後はルシアンだな」

「どうでもいいだろ」

最後に残ったルシアンに標的を定めたディンケが促すも、嫌そうに表情を歪めるルシアンは速度を一段早めて十八階層に到着させて有耶無耶にしようとするも、エリウツドが口元を楽し気に歪めて呟く。「皆が語った、ならば語るべきだと思うがな」

「いや、そこまでしなくても良いだろ。言いたくなけりや言わなかつたって良いし」

ディンケが流石にやり過ぎたと諫めるも、エリウツドは止めずに口を開いた。

「なに、悪い話じゃないんだ。むしろ美談なのだから話しておくべきだ」

「おい、おいエリウツド、おまえまさか裏切る気じゃねえだろうな!」
からかうような、それでいて嗜虐的な笑みを浮かべたエリウツドがニヤリと笑みを深め、それを肩越しに振り返って視認したルシアンが青褪め始める。

何事かと皆が注目する中、エリウツドは楽し気に語りだす。

「大した事ではないのだがな。この男、〔ガネーシャ・ファミリア〕への入団理由は『仮面が恰好良かったから』だそうだ」

「それは知ってる。同期だし」

「ディンケはルシアンと同期だったのか。ちなみにアタシはメルヴィスと同期だったなあ」

入団試験の時にメルヴィスが緊張のし過ぎで吐いた事を突然暴露したフィアの目の前に矢が突き立つ。無言のエルフの少女は矢束からもう一本の矢を無言で取り出して手で弄ぶ事で狼人の口を塞いだ。

いくらなんでもここで矢を射つのはどうなのかとディンケが注意しつつも、話を戻す。

「あんま矢を無駄にすんなよー。んで、ルシアンの入団理由と欠損になんか関係あんのか」

「エリウツド、言ったら殺す!」

「別に良いだろ。んで欠損の原因だがなー」

「おいつ、やめろっ!」

あからさまにその話をされたくないルシアンの様子にディンケが

眉を顰めるも、アマゾネス二人が興味津々といった風体でルシアンを左右に詰め寄る。

「ロキ・ファミリア」の特徴として、眷属の女性は皆、美女、美少女ばかりである。当然、神ロキに見出されたイリス、サイアもまた美女である。

女性に不慣れな彼が美女に囲まれば当然、緊張で口を開く事などできるはずもない。黙り込んでフードを深くかぶり直すのを見たエリウッドが肩を竦めた。

「さて、本人も黙った事だしさつと話してしまおうか」

軽い口調でルシアンが欠損に至った原因を語りだすエリウッド。

彼が普段から街の住民の手伝い等に精を出している事はよく知られている。彼はよく派閥の仲間もしているからと口にはしているが、彼が其処まで住民の為に働くのはそんなに大層な理由はない。

ただ、恥ずかしかつたからだ。何せ、他の入団者の殆どが「ガネーシャ・ファミリア」と言う派閥の名を背負うのに相応しい者達ばかりだったから。眩く輝く夢や想いで入団する者達。

『調教師に憧れて』『住民の為に何かしたい』

自分が入団した理由は『仮面が格好良かったから』と、他の者と比べて見劣りするような、陳腐なモノ。それが無性に恥ずかしくて——だから他の団員の行動を真似ていただけだった。

そんなルシアンが周りに劣等感を感じている頃。とある怪物を調教したがつている同期の話聞いた。同期とは言え、別の班に配属されていた彼はその無謀ともいえる夢を掲げたその——。

「あああああああああつ!!」

「うわあつ」「おつと……」

「嫌いぞルシアン」

顔を真っ赤にしながら喚き散らし、エリウッドの話の遮ったルシアンが声を張り上げる。

「もうすぐ『嘆きの大壁』だぞつ、気を抜くんじゃねえつ!」

「いや、ゴライアスは出ないだろ、少し前に片付けられたし」

「他の怪物も基本近づかないしねえ」

「つづききになるー!」

サイアに促されてエリウツドが口を開こうとするより前に、ルシアンが更に声を張り上げて喚き——その大声に釣られて数匹の怪物が彼らを捕捉して突っ込んでくる。

「うわ、ルシアンお前なあ」

「うるせえつ、人の小っ恥ずかしい話を吹聴すんじゃねえ!」

「あー、グラン、イリス頼めるか?」

「おうよ」「はいはい」

第二級冒険者二人にかかれればミノタウロスすらも敵ではない。突撃してくる巨体を容赦なく殴り飛ばすイリスと、大盾を構えながら突進してミノタウロスを轢き殺すグラン。ドワーフの腰で揺れる槌矛メイスが悲し気に揺れていた。

「流石Lv. 3だわ。すっげえ」

「お前もLv. 3だろ、働け糞猫」

「……エリウツド、ルシアンの話、続き一気に頼むわ」

「おいっ!」

「口には気を付けるルシアン」

樂し気に口元を歪ませて詩人の様に語りだすエリウツド。ルシアンが再度喚こうとすると、サイアが彼に抱き着いてそれを妨害する。一瞬で顔を真っ赤にして黙り込むルシアンを他所に、エルフの口から彼の過去が語られる。

『嘆きの大壁』を抜け、十八階層に降り立った頃にはルシアンが顔を真っ赤にしたままカーゴを無言で引つ張っている光景があつた。その後ろの荷台でディンケが何とも言えない表情を浮かべており、気まぐげに頬を搔いていた。

「なんか悪かつたな」

「……………」

「おーい、はあ……まあ、なんだ、ルシアン。帰ったら酒奢るわ」

「テメエの財布が空になるまで飲むからな」

「おう、了解。大目に用意しとくわ」

「エリウッド、テメエもだぞ」

羞恥心で真っ赤になった顔を隠す様にフードを目深にかぶり、ルシアンが吠える。

そんな彼らを微笑まし気に見ていたファイアが、ふと呟く。

「そういえば、副団長の事で情報誌が埋まってたよな。詳しくは読んでないけど何が書いてあったんだ？」

「昨晚の歓楽街へ足を運んだ件でしたが……確か『魔銃使い』が娼婦へ!?』みたいな見出しだったかと」

迷宮に潜る直前、大騒ぎになっていた神々が手にしていた情報誌。そこに書かれた見出しを思い出したメルヴィスがエルフ特有の潔癖さから嫌悪感を露わに履き捨てる。

「副団長がそんな汚れた事するはずありません。何かの間違いでしょう」

「あー、確かに、と言いたいんだが」

デインケが気まずげに視線を逸らすと、エリウッドが眉を顰めた。

「何かあるのか？」

「……ほら、副団長って、その、複雑な過去があるだろ？」

『『あっ』』

空気に徹していたとはいえ、「ヘステイア・ファミリア」副団長、ミアリア・ノースリスの過去について聞いてしまった彼らが動きを止める。

過去、人を騙す事、人を貶める事、人を利用する事、数多の悪事もよべるそれらを成してきたという彼女。それを負い目に感じながらも、派閥を愛してやまない彼女なら、もしかしたら娼婦として働こうとしても不思議ではない。

だからこそ、彼らは早急にお金を稼ごうとしているのだ。

「だからこそ、っていうか……今俺らが頑張って迷宮に潜ってる訳だしよ」

「……あの話を聞いて、あの戦争遊戯の事を思い出せば当然だな」

グランが唸る。

「戦争遊戯準備期間の団長と副団長、二人とも見てられなかったし

……」

「俺は見えてないが、そんなに酷かったのか？」

痛まし気に眉を顰めたイリスの言葉を聞き、どれほど酷かったのかとルシアンが尋ねると、ロキの元で邂逅した者達が顔を見合わせて眉を顰めた。

彼女らは戦争遊戯準備期間中の二人の様子を知っている。若干抜けたところもあり、団長としてやっていけるのか不安を抱きそうなべルと、しつかり者でクールな印象を受ける小人族のミリア。

今でこそ落ち着いた様子ではあるが、準備期間中の二人は——
「なんていうか、死んでも成し遂げる。って感じだったかも」

——鬼気迫る二人を知っているからこそ、ここに居る者達は力に成ろうと一致団結したのだ。

それは、治療してもらった礼だけではない。彼らの想いの強さに魅入られたからこそ、団長、副団長の立場に二人が居る事に一切異を唱える事をしなかったのだ。

午後の日差しが降り注ぐ迷宮都市^{オラリオ}。

多くの冒険者が迷宮探索、富や名誉の為に命を賭けた行為に励むさ中も、都市は都市の住民達によって賑わいに満ちていた。

普段ならそんな市民達に交じり、神々は暇をつぶす為に活発に活動している頃合いである。しかし、都市内の神々の殆どがとある情報誌を片手に駆け回り、その紙面に踊る情報を伝えては連れ立って駆け出していく。

彼らが向かう先、西と南西の大通りに挟まれた第六区画。そこにあるとある派閥の本拠であった。

ざわめきを起こす神々は一同に会し、最近一気に知名度を増した派閥——【ヘステティア・ファミリア】本拠『竈火の館^{かまど}』の門前を埋め尽くしていた。

——真昼間から『ドワーフ殺し』の名で知られる高い度数の酒

を一気飲みしてぶっ倒れた。

まあ、冒険者流儀の験担ぎの事なので怒ったりはしない。が、本拠前を神々が占拠している件については物申したい気分である。

「で、リリ、アレは何？」

本拠二階の広間。その窓からちらりと本拠前門を伺い見れば、神々が集まって騒いでいるのが見える。

後ついでに、リリが抱えた箱から溢れ返っている山の様な手紙はなんだ。今日の午前中に全部片づけたはずだろ。

よっこいしょ、とリリが木箱を広間に置く。置かれた木箱の数は四つ目。

「……………これが原因ではないでしょうか」

リリが無造作に手紙の山に埋もれた一枚の情報紙を突き出してくる。えつと、何々……………？

『【魔銃使い】が娼婦へ!』

昨晚、筆者がふと柔らかな女性の温もりを求め歓楽街へ足を運んだ際の出来事である。

驚くべき事に【魔銃使い】ミリア・ノースリスが一人で歓楽街を歩いている姿があるではないか!?

声をかけようとするも今日求めているのは柔らかな温もりであり、ミリアさんにそれを求めるのは酷というもの。

彼女の所属する派閥の主人、女神ヘステイアは借金五億ヴァリスを抱えており、主人を敬愛してやまない眷属として知られるクール幼女ミリアさんは、その借金を返す為にその体を売っていたのではないだろうか。

今晚もまた私は眷属の血と汗の結晶たる派閥資金をちよろまかし、ミリアさんを買に行く予定である!

……………いつの間に俺は娼婦になったのですかねえ? いや、確かに昨日『歓楽街』を彷徨い歩いたのは本当の事だが、この記事はまるで俺が娼婦として働いているみたいな書き方してやがる。

つか、なんだ『柔らかな温もり』って、胸か? 胸なのか? どのつもこいつもむね、むね、むね。そんなに脂肪の塊が良いのか。

これ噂特集紙だろ、誰がこんなもん信じ——あつ、そっかあ、信じる神々が門の前に集まっているのかあ。

「ベル達は？」

「ヘステイア様はバイトに戻りましたし、ベル様とミコト様の二人はボランテイアの方へ行っていますよ。ヴェルフ様は鍛冶場に籠って武具の作成ですね。リリはミリア様が目覚めるまでこの通り手紙の運び込みです」

ふうん、そっか。どうしよっかなあ……。

窓から眺めていると、何人かの神がこつちを指さし始め、次第に全員が大声で何かを叫び始める。

『ミリアちゃんが非処女って本気!?』

『今晚は歓楽街で客とるのー!?』

『娼婦堕ちと聞いてっ!!』

いや、ほんと、何? うるせえ神々だな。

全く、手紙の処理で時間潰そう。外には出たくねえや。

リリが運び込んだ箱、山積みの手紙の一つを手に取り封を切って便箋を取り出す。

「えっと、何々……『ミリアちゃんが処女じゃないなんて嘘ですよねッ!? イシユタル様のファンやめます』……」

なんでや、イシユタル関係無いやろ。とでも突っ込みを入れればいいのだろうか?

意味わからん。破棄。

「次のてが……」

手に取った瞬間にその手紙を破り捨てる。宛名に『クローリ娼婦へ』とかなってたからな。

なんだクローリ娼婦って、クールでロリな娼婦か? 誰の事だか……。

次々に手紙を手にしては中身を検めるまでもなく破り捨て、屑籠に放り込んでいるとリリが半眼で情報紙を手近づいてきた。

「ミリア様、藍色の髪の女神様をぐ存じですか？」

「ん? 知ってるけど……何、その?」

「はあああああ……良いですか、ミリア様。この迷宮都市オラリオで余計な事を言つてはいけない神は何人もいます。その中でもとびつきりなのが、藍色の髪をした女神様です」

あの女神って何？ 有名なの？ 全く知らんのだけど。

「はあ、名前を知っている者は誰も居ません。神々も、です。ただ、顔は広いみたいでして、今回の情報紙関係の仕事を束ねていて……情報屋『ダルトン』はご存じです？」

「ええ、利用した事もあるけど」

「………いえ、ミリア様が既に情報屋と接触していた事に驚きはありませんが、ともかく彼らの主神である女神様には要注意ですよ」

「はあ……？」

そんなにヤバイ女神なのか？ ……いや、情報屋関連を回つてるときに情報が出回つて——違う、規制してんのか。

自分の情報を売り買いする奴が居たら見つけて先手を打つ。そうやって姿を隠す巧妙な女神だったのか!?

やられた、複数の情報屋を雇用する事で出来る限り精度を高める序に、そういった警戒対象を抜けようとしていたが、甘かったか——

「その女神に秘密を知られたら最後——面白ろ可笑しく尾びれに背びれを付けられ、オラリオ中に振り撒かれます」

「……それだけ？」

「それだけ!?! ミリア様その女神様に妙な事教えてましたよねっ!?!」

でなければこんなに神々が集まるはずがない。そう叫んだりりが木箱の一つから情報誌を引っ張り出して突き付ける。

『【魔銃使い】ミリア・ノースリス、経験済み!?!』

書かれている内容にさらりと目を通すと、歓楽街で出会った時のやり取りが書かれている。

しかも、この情報紙は常に真実しか流さない糞真面目な奴だ。あの藍色の髪の女神が書いてたのか、知らなかった。

「あの集まった神々どーするんですか！」

「私に聞かれても困りますよ。そもそも私の処女非処女なんてどうでもいいでしょうに」

適当に追い払うしかないだろ。面倒くさい。

第一五八話

「ヘスティア・ファミリア」本拠ホーム『竈火かまどの館』。

閉じられた正面門前に集う神々がざわめく音が響く中、正面玄関を抜けて俺が姿を現す。

俺が処女か非処女か、娼婦に堕ちたか否かで騒がしくなっていた神々が一瞬黙り込み、熱狂した様に喚きだすのを見て一気に体力を持っていかれ、思わず逃げ出したくなるも後ろの玄関は固く閉じられており開きそうにない。

リリに正面玄関からほっぽり出されて本拠前に集まった神々をなんとかしろと言われたのだ。仕方がないので渋々と閉じられた門を少し開いて神々の前に出る。

「ミリアちゃん今晚はどうするのー!」「いくらぐらい!?!」「三食首輪付きで!」

……首輪付きに拘ってる男神もしれっと混じってるなあ。

意外な事にこういった事に目が無いと思っていた神ロキの姿は見えないが、それでも面倒な神々が集まっている事に変わりはない。

はあ、面倒臭いなあ。

「えー、まあ、そうですね。情報紙をみた神々が集まっているとは思いますが……質問があれば、三つだけお答えします。三つだけです、一人三つじゃなく、この場で三つだけお答えしましょう。返答後もこの場にとどまる様なら、焼きます。キューイに焼いてもらいます」

ざっくりと条件付ける。後、居続けられても困るので留まって喚く場合は焼く。キューイが。

脅し混じりに条件を付けると神々が一瞬で黙り込み、瞬時に輪陣形を作ってひそひそとやり取りを行い、代表して一人の男神が手を上げて口を開く。

手を上げるとか律義だなあ。

「ミリアちゃんが非処女ってマジッ!」

「私は処女です」

この体になってから男性とそういった性交等を一切行っていない。

少なくとも俺の記憶の限りでは……気絶してる間に手を出されて
いる可能性は否定できないが、そんなもん知るか。記憶にねえんだから
この体は処女だ。

『処女……だとっ！』『嘘、じゃないッ!』『えっ、でも経験済みって』
驚愕の表情の神々が騒ぎ出す。経験済みの処女ってなんや、自分で
も今までの発言振り返ると突っ込みどころに塗れているが、知らん。
そもそも自分の貞操云々を気にして生きてきてないし。

貞操？ ナニソレ美味しいの？ そんなもん気にするよりもっと気
にする事あるじゃん。お金とか、お金とか……。

『も、もしかして……後ろの方でのプレイ専門?』『な……なん、だと
……っ!!』『つまり、前は処女っ!』

……あー、経験済みで処女。つまり後ろの方……肛門性交しか
してないって発想になるのか？ 前世的にそれは洒落にならんのだ
が。

「初めての男は誰？ そいつ吊るし上げるわ。ベルきゅん？」

まあ、確かに俺の付近に居る男で可能性が高そうなのはベルぐらい
か。一つ屋根の下って条件だし……当然、違う訳だが。

「男性との経験は有りません」

男を抱いた事も、男に抱かれた事もない。どっちも未経験に決まっ
てんだろ……いつそ転生の事を暴露^{バラ}してしまうか？ いや、それはそ
れで面倒事になりそうでなあ。

俺の回答と同時に空気が凍り付き、神々が静まり返る。その静寂も
神々の絶叫によって引き裂かれて直ぐに先の喧騒を取り戻した。

『男性経験無しいっ!』『えっ……ええっ!』『つまり、同性専門の娼婦
……っ?』

うわ、なんかすごく面倒な方向にすっ飛んでいった気がする。つ
か、そもそも娼婦になつてないっての。

『しよ、娼婦堕ちって——』『今晚は何人客とる予定——』『ミ
リアたん俺だー結婚してくれー!』

一気に喋るな聞き分けるの面倒だやめろ。というか質問は最期の
一つだったの。

爆発した様に騒ぐ神々を前に眉間を揉んでいると、男神達の間を抜けて数人の女神が姿を現す。見目麗しい女神たちだが、その目付きは周囲の男神と同じ様に揶揄う様な色が多分に含まれており、目が合っただけで体力を持つていかれた気分になる。

『男がダメ、ならば私とどう？』『今晚、暇なのよねえ』

鉛の様に重たい溜息が肺から飛び出し、目の前の女神たちを見上げる羽目になる。彼女らの後ろの男神達が野次を飛ばし始め、女神たちと睨み合いに発展しはじめる。

お前らさあ、ほんとに、暇なんだなあ。暇してるんだろ？ だからこんな面倒な……死ぬほど面倒な事に……。

「質問は最後の一つです。それに答えたら帰って貰いますので、さっさと質問をどうぞ」

語気を強めて神々を睨むと、『ミリアさんの睨み付け！』『ご褒美ですっ』等と一部の神々が興奮気味に騒ぎだした。逆効果じゃねえか。

俺の睨み付け如きでご褒美とか、面倒くせえ。

『ミリアさんの目から光が消えっ』『良いぞもつとやれー！』

………。どんな反応しても神々が喜ぶだけじゃないか。面倒過ぎる、さっさと最後の質問しろよ。

眉間を揉みながら質問を待つ。一部の神々が額突き合わせて何を質問しようかと相談しているし、そこから質問が飛んでくる事だろう。特に身構えるでもなく神々の出方を待っていると、一人の女神が神々の中から歩み出てきた。

「昨日ぶり〜。元気だった？ 後、読んでくれたかしら」

「……ああ、あの記事ですか。どうも、おかげ様でこんな有様ですよ」
藍色の髪、清楚そうな服装。全体的に見れば清楚な雰囲気『純潔の女神』と言われても納得しそうな容姿をしていながら、その目には悪戯つ子の様な色合いが宿っており、加えて口元はニヤニヤという擬音がぴったりな笑みが浮かべられていて全体像がやけに歪に歪んだ女神——真名不明の女神。『ダルトン』の主神である女神が其処に居た。

この惨状を生み出した噂ゴシップ特集紙と、情報紙等、いくつもの紙面を独

占している情報の女神。要するに全ての元凶ともいえる女神だ。関わり合いに成りたくない性質の。

「喜んでもらえたようで何より」

「これが喜んでる様に見えるならば、今すぐ人々の感情を学ぶ為に天界に帰って千年間は地上を指くわえてみてた方が良いのでは？」

「あら、辛辣」

クスクスと見た目通りの控えめの微笑みを零すも、表情は挪揄いの色合いが強い。その容姿に対して浮かべられる笑みや仕草、そして口から飛び出す軽口の全てが不協和音の様に歪に交じり合って不快感がより一層増す。

狙ってやっているのか、それとも素なのか。清楚な女神なのか、挪揄い好きの女神なのか、とにかく尖った性格なのは間違いない。

「最後の質問は貴女ですか」

「うん、最後の質問ねー……」

真っ直ぐに此方を見下ろし、清楚な笑みを浮かべて藍色の髪の毛の先を指で巻く仕草をしながら、その女神は他の神々を伺う様に流し見る。神々が黙り込み、促す様に目の前の女神を見つめ返し、ようやくその女神は質問を飛ばしてきた。

「男の子と女の子、どっちが好き？」

「……………？ 意味のわからん質問だな。好きか嫌いか、それは性的嗜好の話か？」

「それはどういう意味で？」

「どういう、って言うこと？」

「恋愛対象としてか、性的嗜好か、それとも純粋な好意を抱く相手としてか」

「ふうん、じゃあ恋愛対象は男の子か女の子、どっちかしら？」

恋愛、対象……ねえ。全く興味がない。

男……ベルの事は好きだが、恋愛対象かと言われると首を傾げる。ヴェルフも好きだし、桜花も嫌いじゃない。ガネーシャ様は好きな方だし、ミアハ様やタケミカツ子様も好意的な感情を抱いている。無論、フィンだつて好意的な感情を抱いてはいるが、それは恋愛対象に

向けるものと同一かと言われると首を傾げる代物だ。

ベルは家族としての好意、ガネーシヤ様は尊敬を、ミアハ様やタケミカヅチ様は純粋にその在り方が好ましい。フィンに対しては、尊敬や好ましさが交じり合ったモノ。

女、ヘステイア様は敬愛すべき相手。リリは、嫌いではない。ミコトは生真面目で好ましい性格。千草は知り合い、他の女性達もほぼ似たり寄ったり。

特定の感情を抱く相手、というのは思い浮かばないし、今のところはどっちにも興味無し。

「興味がないですね」

「……それは、男の子にも女の子にも興味がないって事？」

「今のところは、好意を抱く相手はいても、それが恋愛感情とは言えませんが」

恋愛、と言われても……人を騙す小道具の一つとして利用した事はあれど、よく恋愛小説等に描かれる様な情熱的な恋などとは無縁の生活を送っていたので、知らないし、わからない。

「そっかあ……そっか、ふうん。オツケー！」

「……何がオツケーなのかわかりませんが。直ぐに立ち退いてもらえるとありがたいですね」

「うんうん、良いよー」

呑気そうに手をひらひらと振って藍色の髪の女神が踵を返すと、神々が蜘蛛の子を散らす様に散開して、瞬く間に本拠の前に居た神々の姿が消える。

まるで最初からそうであったかのように、立ち尽くす俺の周囲は静寂に満たされ、先ほどの問答が無かったかのような錯覚に陥りかける。しかし、耳を澄ますと、遠くの方で神々が『最新の特大情報！』と騒ぎ立てる声が微かに聞こえた。

「まあ、神々が散ったので、よしっ」

「何が『よしっ』ですかっ!!」

ベシツと後頭部に衝撃。後ろを振り返るとリリが顔を真っ赤にして怒っている姿があった。

「あの女神に余計な事を言うとうどうなるか既に経験済みだというのに、どうしてそんなに無防備に答えたのですか？」

「……どうもこうも、嘘は吐けないし、吐いても碌な事にならないのは一緒でしょう？」

どつちにしろ面白おかしく捻じ曲げた噂特集を書くのであれば、嘘も真も無意味に等しい。

何せ、噂特集に必要なのは『真実』でも『虚偽』でもなく、『面白さ』なのだから。

「もういいわ、流石にしつこいようならその時は対処するわよ」

「対処って、何を——」

「そりゃあ、面白そうな話題提供よ」

「……………」

まあ、常套手段というか、噂特集とかは非常にうざったい事この上なく、前世でも煮え湯を飲まされた事は多々ある。

密かに作っておいた偽装企業とかを一面に掲載されたせいで使い物にならなくなつて計画変更せざるを得なくなつた時とか、アレはあの糞女が直々にブチギレて出版社ぶつ潰す計画立てる羽目になつたし。

やり方はいたつて質素。そこらにある裏取引してる企業のいくつかの情報をこつそりとその出版社に流してやり、噂特集を発行させる。

発行したのを確認したら、暴かれて焦つてる企業に『仕事人』の伝手を貸し与える訳だ。

こつち風に言うなら、商会の黒い部分の噂を出版社に情報漏洩して一面に掲載させて、後は情報屋通じて『仕事人』の情報をその商會に伝えれば良い。

裏で密かに闇派閥と取引してた商會なんかは慌ててその噂を揉み消そうとするだろう。何なら『同じように闇派閥と取引してたけど、このまま情報流れると問題になるから、金は用意してやるからそつちで潰してくれ』と商會に潰させればいい。

んで、最後に利用した商會の黒い部分をギルドに全部情報漏洩して

商会も潰せば完了。

俺の手が入ってる事を悟らせなければ『商会が後ろ暗い事を暴かれて慌てて証拠隠滅して出版社を潰したけど、隠滅しきれずにギルドに尻尾掴まれて壊滅しちゃいました』という脚本シナリオの出来上がり。

「無論、信用できて口の堅い情報屋の伝手があれば……リリが協力してくれば確実なのよねえ。ほら、変身魔法で化ければ露呈バする事は無いし?」

「……………」

んむ? どうしたりり、なんか苦虫を噛み潰した様な表情なんか浮かべて。

「いえ、ミリア様がとんでもなく真つ黒な性格だったのをようやくリリも理解できましたよ」

「……………実行なんてしないわよ?」

お金勿体無いし?

「お金に余裕があったらするんですね」

「相手がやり過ぎた時だけよ」

噂ゴシップ集なんて書く奴はロクデナシの屑だろ。『面白さ』ばかり追求し、『真実』も『虚実』も無い、無駄の極みの癖に……………妙なところで購読者を煽り立て、騒ぎを起こし、足を引っ張りやがる。

そもそも噂ゴシップ集になりそうな場面を避ければいい話だが、あいつらは面白さ優先で妙な揚げ足取りするので警戒するだけ体力の無駄。やり過ぎる様ならその時に潰せる手段だけ用意しとくぐらいの感覚で良い。

……………あの女神の手の届かない範囲の情報屋を探すべきか。

『ダルトン』は確実にアウト。マイヤーズの方は、単独の情報屋のはずだが裏で繋がってるか? 一応、マイヤーズについてももう一度洗うか。他の情報屋も動きに注意しておかないと不味いだろうな。面倒極まりないが、やっておかないと後で後悔しそうだ。

西の空が茜色に染まる夕焼け時。

俺はリリとヴェルフを伴い集合場所に向かった。場所は、言い方は悪いがだいぶみすばらしい書店だ。

店舗前には既にヘステイア様やベル、ミコトが集まっていた。皆で合流し、その店に入る。

「やあ、おじいさん！ 約束通り、手伝いに来たよ！」

「ああ、ヘステイアちゃん。本当に来てくれたんだね」

ヘステイア様は元々、今日はこの店の手伝いに来る約束をしていたらしい。

朝の内に言いつけられており、皆で集合してくる段取りになっていたのだ。

「すっかり有名になっちゃって、俺は驚いとるよ。口だけじゃなかったんだなあ」

「フン、まあね。ボクの勧誘を断つたことを後悔しても遅いんだぜ？」

「はっはっはっ、こりや確かに惜しい事をしたかな！」

ヘステイア様と親し気に会話しているのは、この店の店主。老齢で短い白髭が特徴的なヒューマンの男性。

ベルが眷属ファミリアの契りを交わした店でもあるらしく、ベルに対しても店主は「ベル君も久しいの」と声をかけ、ベルは「どうも」と返していた。

続く様に俺の方に視線を向け、目尻を下げて優しい笑みを浮かべると「初めまして」と声をかけてくる。

「お初にお目にかかります。ヘステイア様の眷属、ミリア・ノースリスです」

「可愛らしいお嬢さんだ」

快活に笑う彼に丁重に頭を下げる。

他の面々も軽く挨拶を交わす中、ヘステイア様は「今は居ないけど他にもボクの眷属が居るんだぞー」と自慢げに胸を張り店主に主張しては談笑を繰り返す。

「よし、じゃあみんな、朝説明した通り、このお店の蔵書整理を手伝ってくれ。これも奉仕の一環だと思ってさ、頼むよ」

ヘステイア様の頼みとあらば、どんなお願いでも聞きましよう。そんな気分で返事を返し、蔵書整理を始めた。

団員総掛かりで本棚の移動や蔵書の片づけを行っていく。

一冊一冊の重量はさほどなくとも、数が集えばシャレにならない重さになる。加えて一部の本棚は劣化によつて棚板が僅かに歪んでいるモノもあり、そういった棚板を新しいモノに取り換えたり等も平行して行う。

そんなさ中、ベルが上の空のまま作業を進めているのをみつけた。顔を赤くしては顔を振つて、何かを思い悩んでいる事が伺える。

多分、春姫の事を考えているのだろう。悶々とした気持ちになるのはわかるし、悩んでいる事自体、嬉しくないと言えは嘘になるが、嬉しいと言つても嘘になる。出来るならば春姫の事は考える事も無く忘れて欲しいが……我が心ながら、ままならないモノだな。

多分、傍から見たら俺もベル同様に思い悩んでる様に見えるのだろう。

溜息を飲み込んで一階の書庫に足を踏み入れると、ヴェルフ、リリ、ミコトが木箱に本を詰めたり、本棚の蔵書を並び替えたりしている姿があった。

ヘステイア様は店主と別の部屋で作業を行っているのだろう。後が続いてベルが入ってきて蔵書を置いた所でベルがミコトの背に声をかけた。

「……あの、ミコトさん」

「どうかしましたか、ベル殿？」

ヴェルフやリリ、俺も気になつて作業の手を止めて二人のやり取りに聞き耳を立てる。

「春姫さんって狐人ルドルを知ってますか？」

「どっ——どこでその名前をつ!？」

身を乗り出して大きな反応を返すミコトに視線を向けながら、やはりかと内心溜息を零す。

リリとヴェルフが俺に視線を向け、事情を聞きただけにしているが、そうしている間にもベルが春姫の事をミコトに伝えていく。ベルの

話が進めば進む程、どうしてもつと早くに言わなかったとリリとヴェルフが眉間を皺に寄せてこつちに視線を向けてくるが、俺は何ともいえない。

関わるべきじゃない。それを知っているから、黙っていたのだ。

ミコトが表情を歪めて胸の前で拳をぎゅつと握り締め、呟く様に問いかけてくる。

「ミリア殿も、知っていたのですか……」

「知ってたし、黙ってた」

「なんの、はなし？」

僅かに視線を此方に向けたミコトが、なんとも言えない表情を浮かべて呟く。

猜疑心に満ちているのだろう。けれど、俺はこの件に関して口を開く事はしたくない。

ミコトは裏切られたとを感じるだろうか。春姫という名の狐人ルナールを探している事を知っていながら、噂に該当する人物と出会った事を話す素振りすら無かった俺の事を、どう思っているのか。

不思議そうにベルが俺とミコトを交互に見る中、ミコトが悔し気に表情を歪めると俯いた。

「ミコト、私は謝罪できない。それだけは言っておくわ」

派閥の事を思えば、関わるべきではない。けれど、個人的には助けてあげたい。

柵しがらみ 故に、何もできないし。言わない。それだけは伝えておく。

「私、ヘスティア様の手伝いにいってきますね」
嫌われただろうか。それは、少し嫌だな。

書庫の扉が軋み、閉じる音が響いた。

これ以上の会話を拒絶する様に小人族の少女が書庫を出て行き、空気が重くなる。

ヴェルフが眉間を揉み、リリが溜息を零す。ミコトは困った様に笑っている様な、複雑な表情を浮かべて黙り込む。

「……もしか、して……ミリアは知ってたんですか？」

つい昨日、歓楽街で問題を起こした際、ベルと合流する事に成功したのはミリア一人。

その後ベルと行動を共にしていた彼女は、それ以前にミコトから春姫に関する話を聞いていた。だからこそ、春姫と出会ったあの場でその話を出さなかった事、一切触れなかった事に僅かながらにベルが驚く。

「ベル殿、勘違いしてはいけません。ミリア殿は悪く無い」

「でも、知ってたのなら……教えてくれても」

良かったんじゃないか。そう口にしかけて少年は口を閉ざした。

ミリアと言う少女について少し考えれば、すぐにでも理解できる。話さないのは嫌がらせでもなんでもなく、話す事そのものが危険性を侵す行為だったのだろう。だからこそ、ベルは何も言えなくなる。

「その、もしよかったら……春姫さんについて、教えてくれませんか？」

話題を逸らす様にベルが問いを投げかけ、ミコトがゆつくりと語りだす。

「タケミカツチ・ファミリア」の眷属達。桜花や千草、所属する者達全員が孤児である事。それは戦争遊戯の際に説明を受けており、ベル達はそれを知っていた。

様々な理由で社、神々の元へ引き取られて世話をされていた彼女らが、迷宮都市に渡った理由は一つ——財政難。

日に日に増える孤児に対し、収入は微々たるもの。そんな決壊寸前の生活は、やはりというべきか限界を迎えてしまう。

子供達の家を支えていた善良な神々と話し合い。年長者で戦える者達を連れて武、神、先導の元、迷宮都市に渡る事を決め、ミコト達は海を渡った。

莫大な富が眠るこの迷宮都市で金を稼ぎ、世話になった神社に仕送りをする為。

そんなミコト達が春姫と出会ったのは迷宮都市に渡るよりはるか前。

彼女達が暮らす社があつた山の麓、そこに春姫が暮らす屋敷はあつた。

高貴な身分故に屋敷の中で蝶よ花よと愛でられ育てられている春姫を見て、武神タケミカツチは見かねてミコト達にこう告げた——お前等、あの子を連れ出してこい。と

とてもあくどい顔で、子供のような笑みで告げられたミコト達は、その神託ことばに従つた。嫌々ではなく、自ら進んで。

武神によつて幼い頃から鍛えられていたミコト達は、屋敷の警邏をものともせず忍び込み、密かに春姫を連れ出しては裏山で遊んでいた。

当然、子供のやる詰め甘い潜入は露呈する事もあり、春姫の父は烈火の如く怒る事もあつたが、そのたびにタケミカツチが土下座をしてでも許しをえていた為、問題にはならなかつた。

幾度となく交流を重ね、友愛を育むそんな生活も——唐突に終わりを告げた。

社の貧困やしうが無視できなくなり、社のみなで日銭を稼ぐ為働きに出る様になる。当然、春姫に会いに行く頻度は減り、暫くの間は会えない日々が続いたある日、久しく春姫の元を訪れたミコトが知つたのは、春姫が勘当されて家を追い出された事のみ。

その後、あらゆる手を尽くし——孤兒で貧困の彼女らにできる事はほぼ無いに等しかつたが——結局、春姫は行方知れずとなつた。

「桜花達と比べれば、あの方と過ごした時間は短いものです……ですが、確かに自分たちは、友と、知己と呼べる間柄でした」

言葉の端々に春姫への想いと、悔悟を滲ませ、ミコトは語り終える。話を聞き終え、書庫に静寂が満ちた。

「わかっていると思いますが」

広い書庫に満ちた静寂を破つたのは、リリル力であつた。

腕を組み本棚に凭れ掛かるヴェルフの隣で、前置きをしてから言葉を続ける。

「その狐人ルナールの方を助けにこういうなどは、考えないでくださいね」

弾かれた様に顔を上げるベルと、強く拳を握り締めつつむいたミコト。二人とは対照的にリリは冷静な表情で淡々と告げた。

「当然です。戦争遊戯を終えたばかりだというのに、また抗争をするおつもりですか？」

リリが放った手痛い正論にベルが面食らう。

「戦争遊戯で〔ヘスティア・ファミリア〕は丸裸にされたも同然です。観戦していた者達にはベル様の魔法、攻撃、武装や道具、全ての手の内を握られています」

ミリアの『クラスチェンジ』と言う例外はあるが、それを除いても〔ヘスティア・ファミリア〕が持ち得る戦力、能力は戦争遊戯で出し切ったと言える。

名声を得た彼らは、その分他の派閥に詮索される事になっていた。街の人からちやほやされ少なからず浮かれていたベルは、面食らうて言葉を失う。

「更に、今の〔ヘスティア・ファミリア〕は非常に危うい立場に居るのです。ベル様はそれを理解していますか？」

「あや、うい？」

「そうです。ミリア様が〔竜を従える者〕として名を知られ、なおかつ『再生薬』と言う無二の価値を持っています。〔アポロン・ファミリア〕の時こそベル様が主目的でしたが——そこに協力していた商売神の派閥は、ミリア様を狙っていました」

迷宮都市において、何度も素材入手の機会を持つ隷属魔法。そう呼べる竜を呼び出す魔法を習得しているミリアの価値は元から高かった。そこに加えて『再生薬』を生み出せる無二の価値を付加されれば、今のミリアの価値は計り知れない。

全ての派閥がミリアの、ひいては〔ヘスティア・ファミリア〕の動向を伺っていると言っている。

もし隙を見せれば、そこに付け込まれて妙な契約を結ばされかねない。

「そもそも、〔イシユタル・ファミリア〕と〔アポロン・ファミリア〕は次元が異なる相手。団員を誘拐して対立するなどもっての他です」

「で、でも【ロキ・ファミリア】とか【ガネーシャ・ファミリア】は助けてくれるんじゃない」

「無理です」

ベルが必死に考えて咄嗟に放った反論は、リリの一括で封じられる。

「ベル様、都市有数の派閥が補助してくれるのは、あくまで【ヘステイア・ファミリア】が被害者の時だけです。加害者となれば話は変わります」

都市有数の派閥である【ロキ・ファミリア】は数多の神々から疎まれており、妙な隙を見せれば袋叩きにされる事間違いない。突飛な理由——他派閥の眷属を誘拐し、攻勢に出て殲滅する等と言う真似は出来ない。

【ガネーシャ・ファミリア】は都市の秩序と安寧を守る派閥と言つていい。そんな彼らもまた、自ら秩序、安寧を乱す抗争の片棒を担ぐ等出来る筈もない。

故に、彼らの協力は仰げない。全く以て正論であるリリの言葉にベルが凍り付く。

「他派閥の助力を得る事は出来ません。むしろ【イシュタル・ファミリア】側に付いて【ヘステイア・ファミリア】の殲滅を行い、利益を得ようとするでしょう」

加害者、仕掛ける側となれば【ヘステイア・ファミリア】が悪となる。そうなれば絶好の機会と言わんばかりに利益を求める派閥が次々に攻めてくるだろう。そうなれば、勝ち目云々の話ではなくなる。

リリが放つ至極真つ当な意見。反論の余地のない彼女の言葉に、ベルが口の開閉を繰り返し、ミコトが完全に黙り込む。

「主神様に膨大な負担をかける事にも繋がります。能天気過ぎて気付いていないかもしれませんが、都市の勢力図に大きく食い込んだあなたのお方は、少なくとも神に疎まれているはずですから」

リリルカは底冷えする程に容赦無く、反論を一切許さない真つ当な正論を以てベルを黙らせた。

完全に凍り付いた空気を砕き壊す様に、ヴェルフが口を開く。

「おい、一人で悪者にならなくてもいいぞ」

手にした本の背表紙で、凍り付く様な空気を生み出していたリリの頭を小突く。

一瞬呆気にとられていたりりは、すぐに頭を小突いてくる本を払い除けた。

「わ、悪者なんてっ！」

顔を真っ赤にして声を荒げるリリに、緊張が解けたベルは遅れて気付いた。

小柄の少女は「ファミリア」の為、ヘステイア主神の為、そして皆の為に、あえて悪者——『嫌われ者』を演じていた事に。

赤らめた顔を背けるリリの隣で、ヴェルフはみんなをまとめる長兄の様に笑った。

「ファミリア」の一員としては、俺もリリスケの言い分に賛成だ。派閥を危険に晒せない。それにミアも同じだろうな、だから黙ってたんだろうしな」

皆の顔を見回し、ヴェルフは言葉を続ける。

「だが、お前達が何かしたいって言うなら、俺は手伝ってやる。最後まで付き合ってやるさ」

ベルやミコトの意思を汲む。そう宣言して笑みを浮かべるヴェルフに対し、二人は何も言えずに口を閉ざす。

「こらあー!? サボるなあーっ！ 終わらせないと今日中に帰れないぞー！」

様子を見に来た主神に怒鳴られ、彼らは慌ただしく作業を再開していく。

手分けして作業する様に主神から指示を受けたベルは、一人古い木と、紙の香りが漂う二階に足を運んだ。

ベルが入団の儀を行った、始まりの部屋。

四方を埋める本棚だけでなく、床に積まれた書物の山。窓から暮れなずむ空の赤色が部屋を染めている。

僅かながらの感慨深さを覚えながらも作業を開始したベルは、ふと

一冊の本を手に取り、開いた。

古び、黄ばんだ頁を捲る音が響き、その英雄譚にある挿絵の一つに辿り付き、手を止めた。

——主人公である英雄が、娼婦の女性の求愛、懇願を切って捨てる場面。^{シーン}

『娼婦は破滅の象徴です』

春姫が放った言葉、それらを肯定するかのようには、容赦のない糾弾がその英雄譚に綴られている。

ベルが抱いたのは、無力感とやるせなさ。自問自答を繰り返す中、少年は絞り出す様に「でも」と繰り返す。

——出会わなければよかった。そんな風に思いたくない。出会いはきつと、特別なものだから。

過去の記憶の中に居る祖父の言葉。先ほどのヴェルフ達とのやり取りを思い浮かべ、ベルは口を引き結ぶ。

真っ先に、逃げる様に書庫を後にした少女が、春姫の件を黙っていた理由。派閥、組織、立場、抱いた願望、そして責任。様々な柵しがらみに縛られて動けなかった事。そして、少年もまた、同じ理由で思い悩んだ。

答えを見つけ出せずにいるベルは、おもむろに黄昏に染まる窓の外を見つめる。

少年が向けた視線の先には、真っ赤に染まる夕陽が浮かんでいた。

第一五九話

通りに面した張見世の格子から夜空に浮かぶ月を見つめていた。

蒼い宵闇と煌めく星々、そして悠然と有る望月に近づく月。一頻り眺めた後に視線を下ろせば、昨日に負けない人通りの遊郭前の通り。

沢山の男、そしてヒューマンや獣人を中心とした着物姿の女達。

美しく着飾り化粧を施した娼婦達を視界に、正座している春姫は雑踏を右に左に注視していた。

いないかな、いないかな——と、昨日の夜に出会った不思議な二人の姿を探してしまう。

臀部から伸びる太い狐の尾も、彼女の視線の動きにつられ、ぱたり、ぱたり、と揺れる。

遠く離れたこの地にやってきて、初めて『楽しかった』と思える夢の様な一時だった。

在りし日の日々を思い起こさせる様な、温かな気持ちと優しい一時を春姫に分けてくれた。

深紅ルベライトの瞳は綺麗だったし、蒼と紅の瞳は不思議な色合いを宿していた。

白髪の少年は今まで見た事が無いほどに澄んでいて、純粹だった。金髪の少女は軽蔑するでもなく娼婦の身の春姫をおもんぱかる様子だった。

二人と交わした様々な話、物語や昔日の日々の事を思い浮かべる度、唇には笑みが、胸には温もりが宿る。

「旦那！」

想い耽る春姫の斜め前、格子窓の傍に居る遊女が、通りかかる男性客に愛想良く笑いかけている。

以前、とある客に熱を上げていた先輩遊女に不思議そうな視線を送っていた春姫。

その時は「アンタにはわかるまい」としたり顔で笑い、恋をすればわかる。とも言っていた。

今、春姫が抱くこの気持ちも、あるいはそれに近いものなのかも

しれない。

幼い頃、彼女が読み耽った物語の英雄に焦がれた様に、色褪せた日々へ突然現れた外の世界の住人に胸をときめかせているのだ。

幼少の頃より培われた想像力が、春姫にありもしない妄想を働かせる。

少ない例ではあるが、冒険者に『身請け』されてこの歓楽街を後にする娼婦もいるらしい。

大抵はその後、冒険者は迷宮で命を落とし、残された女は不幸になるらしいが………中にはこの都市を後にして伴侶として付き添った者もいる。

加えて、世話役のアマゾネスが持つてきた情報紙に書かれたモノも春姫の妄想に拍車をかける。

【魔銃使い】ミリア・ノースリスが娼婦だった。と

彼女が過去を語り辛そうにしていた理由、それらが過去娼婦であった事に由来するのなら。彼女は娼婦の身から脱してあの白髪の少年の元へたどり着いたという事に他ならない。

もしかしたら彼女の様に自分も———そこまで考えた瞬間、春姫は自嘲した。

妄想とはいえ、くだらない想像に二人を巻き込んだ事を心の中で謝罪する。

いくら計略を張り巡らせる事が得意で、春姫に同情を向ける優しきがあっても、春姫の想像の様に手を差し伸べる事はないと断言できる。

加えて、彼女の様に何かできる訳でもない、戦争遊戯での活躍を聞けばあの小人族の少女と春姫では差があり過ぎる。娼婦で居るよりほかの事で役立てるからこそ、彼女は自分の身分から脱した。何もできない自分に助け出される程の価値はない。

何より、イシユタル達が自分を逃がしはしない。

「……………」

はめられた黒い首輪に触れ、諦観を抱きながら俯く。

賑やかな遊郭、笑みを浮かべる娼婦達、華やかな雰囲気にもまれた

この場所で、世界でひとりぼっちになったかのような寂寥感に支配される。

オラリオにおいて娼婦の需要は高い。

そして『世界の中心』とも謳われるこの街には、娼婦らが自然と集まってくる。

この都市において、手っ取り早く金を稼ぐ手段は冒険者になる事と、歓楽街で体売る事だ。同時に歓楽街で富と地位を得る事は――

――著名な冒険者や「ファミリア」の幹部と関係を持つ事で――
一定の権力にも結び付く。

後ろ盾を得た勝ち組の娼婦は、さながら小国の王女になった気分浸れると聞く。

したたかな娼婦達は、成り上がりを夢見てこの地にやってくるのである。

冒険者と同じく、この迷宮都市で名を上げるといふことは力を得る事と同義だ。故に多くの娼婦が野望を持ちオラリオに来る。だからこそ春姫の様な境遇の娘は思う程多くはない筈だ。

それでも人身売買といった行為が絶えないのは、狐人ルナールのような希少な種族を求める客が居るからだ。

(……私わたくしは)

どうして自分がこんな目に、と叫べれば楽なのかもしれない。

勘当される原因を作った小人族の客人を恨めば、救われるのかもしれない。

だが弱虫な春姫には、声を上げる事も、他人を恨む事も出来ない。

彼女にはそれがわかっていた。

「またそんな顔して、シャンとしなさい」

隣に座っていた先輩娼婦が、顔を暗くしていた春姫を小声で叱る。

反射的に背筋を伸ばし、自分を閉じ込めている牢獄の外に向かつて顔を向けると、張見世に向かつて足を止める男がちらほらと現れ始めた。

珍しい種族の春姫は目立つ。多くの男性が彼女の事に気付き、視線を注ぐのだ。

今日もまた、同じ様に。

夢うつつの様に瘦身の犬人が春姫を見つめている。

叩き込まれた『好みの相手でなくとも視線を逸らすな』という娼婦の教えが、うつむくことさえ許さない。目を奪われている相手に対し、春姫が行えるのは人形のように微笑む事。

見る見る内に鼻の下を長くした犬人は、他の客にとられまいと張見世と繋がる妓楼へと駆け込んでいく。

ふと思ひ浮かべるのは、今と同じ様に格子窓越しに見つめられ、今と違う反応をした白髪の少年の事。

今日もまた体を売る事になりそうだ、と人形の笑みのまま客を目で追う。

声がかかるだろう事は予想できるが、声をかけられるまで動く気も無かった春姫がぼんやりしていると、娼婦達がざわついた。

「あら、色男!？」

「兄サン、あたいを呼んでおくれよー」

通り側、格子窓の前に立つ端正な顔立ちのヒューマンに、黄色い声
が飛ぶ。

春姫が視線を向けると、張見世の中から何かを探し出そうとするその人物と、視線が交わる。

驚愕の色を浮かべ、そのヒューマンは格子窓を掴み、声を上げた。

「春姫殿！ 自分ですっ——ミコトです！」

瞬間、春姫の呼吸が止まった。

放たれた声、そしてその顔に、その人物の正体を察する。

遠く離れた春姫の故郷、その地に居た幼馴染——男装したミコトだ。

遊郭に閉じ込められ、戦争遊戯を直接目にする事が無かった春姫は、同郷の者がこの地に居るとは露知らず、混乱の淵に突き落とされる。

春姫が抱いたのは再会の喜びではなく——絶望する程の嘆き
だった。

過去の美しい思い出の中で、手を取り合って笑い合った幼馴染が、

娼婦に身を墮とした自分を見つめている。

僅かに残っていた春姫の羞恥心が全身を焼き焦がす。見ないでと叫び散らしたい。己の汚れた肌を、刃物を以て切り裂き、破り捨てたい。暴れ狂う羞恥心の中、春姫は嘆く。

どうして、今なのか。あとほんの少し経っていれば、永遠に再会する事無く、美しい思い出のままであいられたのに。

ミコトの視線に晒され、静かになった娼婦達に見守られながら、春姫は震えを抑え込んで口を開いた。

「……他人の、空似でしょう。私は、わたくし貴方の様な、方を、存じません……」

拒絶の言葉にミコトが絶句し、泣きそうな表情を浮かべる。そんな時を見計らったかのように、妓楼の奥から春姫に声がかかった。

「春姫、お呼びだ」

「はい……」

春姫は動揺を押し殺しながら立ち上がり、ミコトの視線から逃げる様に去ろうとする。

格子窓に縋りつくミコトが、必死に春姫を呼び止める。

「待ってっ、待ってください、春姫殿!」

同郷の知己から目を背け、春姫は張見世を後にした。

「今日のみつともない姿を晒すんじゃないよ」

呼びに来た褐色のアマゾネスは何も聞かず、事務的に告げる。

いつも以上に心を暗く染め上げながら、返事を口にした春姫は、男が待っているだろう部屋へ静かに向かった。

【イシユタル・ファミア】本拠、その二十階に存在する大部屋。光り輝く妓楼を見下ろす事が出来る窓から遙か下方に見える極東の娼婦街を眺めていたアイシャは、開いた扉から入ってきた神物しんぶつを認めるなり、部屋の中央に向かった。

乱雑に寄せ集められた椅子と長椅子ソファには、派閥幹部や指折りの戦闘員等、【ファミア】が誇る戦闘娼婦バトルが勢揃いしている。特注の巨大な

長椅子ソファを軋ませながら占領するフリユネの姿もあった。

空席となっていた長椅子ソファにアイシャが乱暴に腰掛けると、今しがた入室してきたイシユタルが団員達の元へたどり着く。

「揃っているな」

ともに入室してきた青年タナムズ従者が引いた椅子に腰を落とし、イシユタルは煙管を啜える。

「ファミリア」の幹部や戦闘員が集ったのは、主神からの急な招集を受けてのことだった。

「いきなり呼び出して、何かあったの、イシユタル様？」

「オレ、今日こそ男とつてくる予定だったんだけどな」

アマゾネス達の喋り声を無視し、イシユタルは口を開いた。

「お前達、フレイヤに感づかれない様にミリア・ノースリスと、ついでにベル・クラネルを攫ってこい」

主人じきじきの命令に、広間は静まる。

すぐに「結局イシユタル様を取って食われる」とぶーたれ始めるアマゾネス達。嫉妬と抗議の声を上げる眷属らにイシユタルは、そう言うな、と一笑した。

「フレイヤ・ファミリア」に感づかれない様になってのは？ それに、男を攫うならまだしも、ミリア・ノースリスまで攫う理由は？」

背凭れに寄りかかるアイシャの質問に、イシユタルは紫煙を燻らせ答えた。

「あの女神が何故か手を出さないまま、ベル・クラネルに執着しているらしくてなあ。あの女のお気に入りの男をこの私が搔つ攫おうという訳だ」

誰もが見惚れる美貌の上に、禍々しい笑みが浮かぶ。

「ベル・クラネルについてはわかった。じゃあミリア・ノースリスは？」

「お前達もあの戦争ウォーゲーム遊戯を見ただろう？ あの魔法が手に入るとしたら？」

意味深に笑みを深め、女神が眷属達を見回す。

何のことかと考え込んでいた彼女らの内、アイシャがふと眩きを零

した。

『殺生石』……』

「それって春姫に使うんじゃないかったっけ？」

「ミリア・ノースリスにも使えるのか？ ……あ、そーいやあ狐人キツネになつてたか」

騒めきだした少女達が察してイシユタルに視線を送ると、女神は悠然とした態度で答えを口にした。

『殺生石』は二つ用意できた。もうわかるだろう——あの砲撃魔法、透明化魔法、どちらを手に入れたとしても十二分に使い道がある」アマゾネス達が顔を見合わせ、笑みを浮かべる。

戦争遊戯ウォーゲームで見せたあの魔法。どちらか片方であったとしても喉から手が出るほどに欲しいと言えるそれ。

「それって、使えるのか？」

「ああ、間違いなく使えるだろう。この私が保証しよう」

女神の保証の言葉にアマゾネス達も色めき立つ。

「お気に入りの小僧ガキは私の虜、二つ名まで付けて目をかけた小娘ガキは魂を砕かれ利用されていると知ったら………あの女はどんな顔をするだろうねえ」

その時の光景を思い描いているのか、美神は唇を釣り上げたまま愉悦に浸る。

悪趣味ー、と周りに居る少女たちがニヤニヤと笑う中、イシユタルは眷属らの顔を見回した。

「お前達は食うんじゃないよ——特にフリユネ」

「……ゲゲゲ、心外だよお、イシユタル様。アタイがアンタを出し抜くって？」

黙り込んでいた巨女、アンドロクトノス【男殺し】の二つ名を持つ団長に嚴重注意するイシユタル。取り繕おうとするフリユネの内心を見透かした様に、女神は目を細め侮蔑の視線を送る。

「つまみ食いも駄目だ。お前が手を出したらあの男が使い物にならないくなる。最初は私……用が済んだらお前達にくれてやる、その時に好きなように貪れ」

これ見よがしにフリユネの顔に煙管の紫煙を吹きかける。

煙を浴びて盛大に顔をしかめるフリユネ。不満の色をありありと浮かべてたが主神の命とあつて逆らう事無く、不承不承に領いた。

ざまあみろ、と他のアマゾネス達と共にアイシヤも舌を出す。

「けどさ、イシユタル様」

「何だ、サミラ」

「ミリア・ノースリスを攫う理由はわかったけど、どうやって【ロキ・ファミリア】と【ガネーシャ・ファミリア】に対処するんだ？」

彼女らの話題にあがった小人族の少女。戦争遊戯ウォーゲームで類い稀なる魔法やスキルを見せつけるだけにとどまらず、『再生薬』という医療を覆す代物の中心人物。

戦争遊戯中の司令塔としての活躍の噂もあり。それを肯定する様に【ヘステイア・ファミリア】は都市有数の強豪派閥との繋がりを持つ。

全ての派閥の主神がどんな手段を用いても欲し、それでも手を出さない理由。それが【ロキ・ファミリア】であり【ガネーシャ・ファミリア】。更に【ディアンケヒト・ファミリア】まで加わり、まさに難攻不落の城塞の様に権力的にも守りを固めている。

噂によれば戦争遊戯中の策略も彼女の発案によるものらしい事から、司令塔としての能力も最高級トップクラス。

問題は、他派閥の横槍。彼女に手を出せば間違いなく邪魔が入る事。

「魔法さえ手に入れられれば、あの派閥も敵ではない……が、確かに儀式前に襲われれば一溜りもないな」

「だったら、どうするの？」

「ああ、あの派閥にはロキとガネーシャの所から何人か年契約で改宗コンバージョンした者がいる———そいつらを人質にでもして、伝達を遅らせれば良い」

一度に攻め込まれれば間違いなく【イシユタル・ファミリア】は滅ぶ。

だが、儀式さえ終えてしまえばこちらのもの、そう嗤いイシユタル

は告げる。

「その眷属共は丁度迷宮で遠征中らしい。襲撃して攫え、全員はいらん、メッセンジャー伝言役として一人か二人は逃がしていい。人質も一人か二人いれば十分だろう——残りも殺して構わん。どうせ後で戦う羽目になるのだからな、先に始末すれば手間が省ける」

「ひゅうー、イシユタル様こわあい」

茶化す様にアマゾネス達が笑いを零す。

『殺生石』の準備が出来次第、フレイヤ達と戦争だ。ロキも、ガネーシヤも、私を邪魔する奴は全て天界に送り返す。……………お前達、心しておけよ」

この一件を期に全て逆らうの派閥を敵に回す。と語る主神に——

——女戦士達アマゾネスは臆する事無く、獰猛な笑みを浮かべた。フリユネも、その大きな口を蛙の様に裂く。

そんな中、アイシャだけが表情を変えず口を噤む。

「ゲゲゲゲツ。で、肝心の兎はどうするんだよお。仕掛ける場所はあ？」

「主目的はあくまでミアア・ノースリスだ。間違えるなフリユネ」

「ゲゲゲツ、悪かったよお。ちよつと度忘れしただけじゃないかあ」

悪びれる様子もないフリユネの声を他所に、アマゾネス達は誘拐、そして襲撃の為の手筈を相談し始める。

「地上は駄目だ。避ける、ことを表立たせるな」

眷属の話し合いに主神が口を挟んだ。

ウォーゲーム戦争遊戯に再生薬、類い稀なる魔法やスキル持ち、話題をさらう「ヘステイア・ファミア」に世間は注目している。彼らに何かあれば必ず動く藍色噂話の女神が居るのだ。下手な事をすれば一瞬で都市内に情報噂話が広がりかねない。ギルドやフレイヤ、ロキやガネーシヤの耳に入るだろう。

オラリオが「ヘステイア・ファミア」の情報に敏感になっている。というイシユタルの弁に、

「なら……やつぱりダンジョンか」

アイシャが皆の総意を口にした。

冒険者の共通見解とし『犯罪するなら迷宮の中』というものがある。『中層』からならば限られた上級冒険者しかおらず、人目に付きにくい上、たとえ迷宮に行つた眷属が死のうと主神はそれが人の手にかつたのか、怪物の手にかつたのか等判別が付かない事も相まって、犯罪に適しているのだ。

「ガキ共をおびき出す方法は？」

「イシユタル様の名前を出せば何だつて使えるだろ。都合の良いものを使えば良い」

傲岸不遜なフリユネに代わり、アイシャが中核となり団員達の受け答えを行う。

その様子にフリユネははんつと面白く無さそうに鼻を鳴らす。あんだよ、とアイシャが睨み返した。

「ゲゲゲツ。団長のアタイを差し置いて出しゃばるんじゃないよ」

「アンタがまともに団長らしい事が出来ないからアタシが代わつてやってるんだろ。文句があるならアンタも考えな、ほらどうやって誘い出すつもりだい、団長様あ？」

「そういう頭脳労働はアタイには似合わないよお」

だったら黙つてろ、とアマゾネス達が野次を飛ばす。不機嫌そうなフリユネが眉間に青筋を立て始めた頃になって、女神が見咎めた。

「フリユネ、お前は頭が使えないのだから黙つて見ている。アイシャ、続ける」

先の光景を繰り返す様にフリユネに紫煙を吹きかけるイシユタル。主神の言葉には逆らえないのかフリユネは堪える様に拳を握り、黙り込んだ。

「ベル・クラネルとミアア・ノースリスはパーティ一隊を組んでる。依頼を出しておびき出せばいいか」

「竜はどうすんだ？ 殺して素材奪つても良いのか？ 竜素材の武器とか欲しいよな」

「あ、それはオレも欲しいな。どうなんだ、イシユタル様？」

「好きにすればいい。だが、間違つてもミアア・ノースリスは殺すなよ」

アイシヤを中核とした話し合いが進む中、ふと灰色の短髪を揺らしたサミラが問いを発する。

「なあ、春姫は連れて行ってもいいの？」

己に向けられた問いに、イシユタルは面白そうに尋ねる。

「好きにすればいいが……なんだ、あの二人はそんなに手強いのか？」

「リトル・ルーキー」の方は間違いなくアタシらより足が速えーよ」

フリユネと争いながら追い回した形だったが、とうとう捕獲できなかった昨夜の出来事を口々に説明するアマゾネス達。狩りに参加した彼女らは殆どがL v. 3である。

「第二級冒険者との戦いを見てても思ったけどよお……まだL v. 3になったばかりなのはどういう『敏捷』してやがるんだ」

「それにミリア・ノースリスの方は魔法も厄介じゃない？ 数で囲め

ばなんとかかなりそうだけどさあ」

戦争ゲームを見て感じた事を呟き主張する姿を見て、イシユタルは紫煙を煙らす。

L v. 3 到達記録を塗り替えた世界最速兎と世界最速竜は今や誇張でも偽者でもなく、本物である。

更に加えて、サミラがぼつりと呟いた。

「それに、狩りの時なんかわけわかんない協力者もいたよな」

「あー……一瞬でベル・クラネルが消えた時だよ。なんなんだろうね」

「……何の話だ？」

説明中に話題が逸れた事に特に注意を飛ばすでもなく、イシユタルはアマゾネス達の語る謎の人物について問う。

「金髪のちっこい獣人、ウエアウルフ 狼人だと思うけど、ソイツが逃げてたベル・

クラネルの後ろにいきなり現れるなり、そのままベル・クラネル諸共消えたのさ。その後、遊郭の中に居たらしいが見失っちゃってね」

「ウエアウルフ 狼人？ 金髪、か……他に特徴は？」

「さっぱり、ほんとに一瞬しか見えなかったし、顔も見えない」

「でもなんか……ミリア・ノースリスっぽかったよう？」

小首を傾げながら呟かれたレナの言葉にアマゾネス達が眉を顰め

る。

「何言ってるんだ、ミリア・ノースリスは狐人ルナールじゃないのか？」

「別人じゃない？」

「でも、明らかに知り合いつぽかったというか。ベル・クラネルも『ミリア』って呼んでたよね」

不思議そうに首を傾げながらもその時の事を思い浮かべて呟くアマゾネス達。アイシャもまた唐突に現れたベル・クラネルの協力者――

――彼が『ミリア』と呼んだ狼ウエアウルフ人が――何者なのか気になっていた。

「役立たずどものお前達は、春姫でもなんでも使って兎を追い詰めればいいさあ、後はアタイがやってやる」

嘲笑するフリユネに、サミラを始めとしたアマゾネス達の憎たらし気な視線が集まる。

ただ一人、ベル・クラネルの『敏捷あし』をもものもしないLv.5の物言いに顔をしかめながら、アイシャはおもむろに広間の窓に目をやった。

彼女の位置からは見えないが、視線の方角には遊郭が存在する。

「……春姫もへボなりに『ファミリア』につくしてる。最後ぐらい外に出して、羽を伸ばしてやってもいいんじゃないか」

唐突かつ場違いな提案に、アマゾネス達は口を閉ざした後、顔を見合わせる。

間を置かず、フリユネの嘲りを含んだ声が響いた。

「馬鹿抜かしてるんじゃないよお。もし逃げられたらどうする。それとも、お前が逃がす気かあ、アイシャ？」

「……………」

「他の派閥にも、アレを知られるわけにはいかないだろうお」

嘲弄に交じり殺意を滲ませるフリユネに、アイシャは何も言えない。

そして、この時ばかりは誰もアイシャを擁護せず、サミラも肩を竦めた。

「何でアイシャがウジウジしているあんなやつに気をかけるのか、わ

かんねーな。オレは春姫、きらーい」

サミラが笑い飛ばしたところで、黙っていたイシユタルが紫煙を宙に吐く。

紫煙が漂う中、紫水晶アメジストの如き瞳にじっと見据えられたアイシヤの手が、意識を離れて震えかけた。

アイシヤが気取られない様に奥歯を噛み、震えを押し殺している
と、イシユタルは目を細める。

「ダメだな」

それで終わりだった。

アイシヤの提案は無かったことにされ、竜ミリアと兎ベルの捕獲方法が話し合われる。

鼻を鳴らす様に吐息をついたアイシヤが、窓の外、歓楽街に広がる蒼い夜空と、満ちつつある月影に視線を向けた。

「所でさ、その増援組の襲撃ってどうすんだ？」

「それなら、アイツら大型の荷車カーゴ使ってるみたいだし、道順ルートは確実に割り出せるからそこで待ち伏せで良くない？」

迷宮の地図を持ち出して待ち伏せ地点を決めるアマゾネス達が、ふと気づいた様に声を上げる。

「そういえば結構良い感じの男居なかったっけ？ 猫人とかアタシ好みー」

「あ、オレはドワーフの奴が良さげだな。そっちは食って良いのか？」

ここ最近獲物にありつけていなかったアマゾネス達が、主神の顔色を窺いながら問いかける。

「好きにしろ」

イシユタルは興味なさげに応えた。

夜の闇が深まる時間帯。

オラリオ中央、白亜の巨塔の最上階で、クスクスと含む様な笑い声が響いていた。

僅かに灯された光源に白皙の肌を浮かび上がらせる女神が、足を組

み替えて目の前で笑う藍色の女神に刺々しい視線を向ける。

「どういう事か、もう一度説明してもらえるかしら？」

「ふふーん、私の原則は平等。だからイシユタルが貴女の情報を買ったら、貴女にイシユタルの情報を売る。知ってるでしょう？」

「そういう事ではないわ。私は、何故、イシユタルに情報を売ったのか聞いてるのよ」

月明かりが差し込む摩天楼施設最上階の部屋の中、フレイヤは不愉快そうに目の前の藍色の髪を睨む。

腰の辺りまで伸ばした長髪、身を包むのは意匠の凝ったドレス。清楚な容姿で、純潔の女神と言われても疑問を覚えない藍色の髪の女神。誰も名を知らぬ——と言うよりは本人が所々で偽名ばかり名乗っているせいで真の名がわからない——名称不明の女神。

へらへらと綿雲の様な軽い笑みを浮かべて媚びるでもなく、跪くでも無く、謝罪する気のない様子にフレイヤが眉間を揉む。

「んー、だって『知りたい』って言われたら教えてあげなきゃいけないでしょう？ 情報は抱え持つモノではなく、発信し、皆が知るべきものだもの」

「……貴女のその緩い頭は、どうすれば引き締まってくれるのかしら？」

「あはははー、私を縛って連れてこなくても、ちゃんと私の足で来る積りだったのに。フレイヤちゃんひどーい」

椅子に腰掛け、華奢な背凭れに身を預けるフレイヤの前。縄で無造作に縛られた藍色の女神はちつとも反省の色を見せずに不快感に染まるフレイヤを見上げていた。

「だってえ、私が情報流さなくてもヘルメスが流すし」

「……………確かに、貴女の言う通りね」

ヘルメス
男神から提供された情報、ミアを通じてフレイヤに届けられたのは、同じ『美の神』であるフレイヤが、自身の気になっているベル・クラネルの情報を掴んだ事。

だが、それだけではない。

「それで、ミリア・ノースリスについて、貴女は何を教えたの？」

見る者全てを魅了する笑み、その中に隠し切れない怒りを抱いた様子の子のフレイヤの問いかけ。ともすれば、ただの人間が前にすれば失神してしまう程の圧が放たれる。

「なあ〜ん〜にい〜もお〜?」

その圧を前に、藍色の女神は欠伸をしそうな程に緊張感の欠片も無く答える。

フレイヤの眉間に皺が寄り、口を開こうとする前に藍色の女神がぱっと切り替えたようにキリツと表情を決めた。

「怒られる前に言うね。ミリア・ノースリスの情報、さっぱりなんだ!」

「……………どういう、事かしら?」

「だあくかあくらあく、売れる程情報持ってないって事。せいぜい、性別と年齢、スリーサイズ、後は性格関係のをちよろつとだけ。当然、スキルとか魔法、ステータス能力についてはさっぱり」

目の前の緊張感のない女神の様子にフレイヤは顔をしかめた。

彼女、縛られ転がっている女神は非常に優秀で、どんな手段を講じてでもとにかく情報を集める。それもかなりの精度を誇る情報を集めてくる。

なんなら都市内の全ての「ファミリア」の眷属の経歴、ステータス能力、居場所、好み、性格を全て把握しているとも噂されるぐらいには、優秀である。利用するのに最大限注意しないと大火傷する羽目になる事を除けば、この女神に問えば確実に情報こたえが得られる。

フレイヤもそこは認めている。その女神がわからない、と口にするのはよほどの事だ。

「本当に知らないの? その内、私も貴女からミリアの情報を買おうと思っただけだ」

「あー、今調査中。だってあの子、秘密主義なのか全然隙が無いし……本音を言うと、経歴が不明過ぎてなんともー、逆に聞いて良い? あの子何処から来たの?」

「……………はあ、真面目に貴女について悩んだ私がバカみたいね」

へらへらくと、浮かび上がって空に舞いそうな軽い笑みを見て頭痛

を堪えるフレイヤ。雲の様に掴み処が無い、というよりは捕まえても中身が無い。

今すぐにも命を奪える状況になっても、その女神は危機感の無さそうな軽い笑いを浮かべるのみ。無表情ポーカーフェイスでも無く、本気で死んでも気にしない様な女神であり、脅す意味がないと判断したフレイヤは今までずっと黙って傍に控えていた従者に声をかけた。

「彼女を解放してあげて」

「畏まりました」

巖の様な巨軀を誇る猪人ポアズの従者がおもむろに女神を束縛していた縄を引きちぎる。

手首をさすって「フレイヤの束縛プレイきつすぎいく」と相変わらずのへらへらした笑みを浮かべた藍色の女神は、従者のオツタルに片手を上げて挨拶すると同時。そのままふらふらと部屋を出て行った。

主人の手を煩わせるその女神の行動に、オツタルは眉間に力を入れ、押し黙った。

「よろしかったのですか」

「アレを叩いても何も出てこないもの。それより、イシユタル達の動向を探ってちょうだい」

猛牛ミノタウロスも裸足で逃げ出すぐらいに引き締まった表情の従者に気付かないまま、フレイヤは嘆息する。

オラリオの最も高い位置から遮るもの無く見張らせる夜空を見る事暫く。フレイヤは流し目でオツタルの顔を見上げた。

「私も、しばらくホームに移るわ」

「畏まりました」

慇懃な応答を肩で聞きながら、フレイヤは先の情報を反芻していた。

第一六〇話

朝日が差し込むホームの食堂。

「ごちそうさまでした」

ミコトが悄然とした声で食事を終える。

食卓に並ぶ野菜にもスープにも手を付けず、パン一切れだけを口にし、じやが丸君はどうぞ自分の分も皆で食べてくださいと言わんばかりに大皿に乗ったままだ。

打ちひしがれた様子で、食事が喉を通らないらしいミコトの事を、リリやヴェルフ、ベル、ヘスティア様が心配そうに見つめていた。

「なあ、ミコト君、何かあったのかい？」

「昨夜、夜遅くまで出かけていたようですが……」

顔を寄せてくるヘスティア様にリリが見聞きした事だけを答える。全てを話すにはいささか問題が多い。

考え事をしている間にも席を立ったミコトは皿を洗い終え、食堂を出て行ってしまふ。

ベルとヴェルフが視線を交わし、頷き合うと、ベルが行儀悪く朝食をかき込んで席を立つ。そのままベルがミコトを追っていき、後片付けをヴェルフが代わりに行うのを見ながら、窓の外へ視線を向けた。

憎らしい程の青空が広がっている。

キューイとヴァンにも朝食を持っていかないとなあ。

竜専用を立てられた厩舎。

金属製の仕切りと檻の様な構造の、怪物を逃がさない為の監獄。とは名ばかり、キューイは自ら器用に檻を開いて日向ぼっこしてるし、ヴァンに至っては窓から覗く朝日を浴びて欠伸をかましてる。

藁が敷かれた寝床から胡乱げな視線を向けてくるヴァンの前に屑野菜の山をドンツと置く。

「今日の朝食です」

《……あの小僧は居らんのか》

「小僧？ ああ、デインケさんですか。今日中には帰ってくると思

ますけど、どうしました?」

何気にディンケの事を覚えていたのか。てっきり興味ないものだと思っていたから意外だな。

《別に、主が奴の言う事を聞けと命じたのでな》

「……………」

視線を逸らし、格子窓から覗く日差しを見つめる姿に首を傾げつつ、キューイ用の屑野菜の入った桶を持って移動する。

キューイの方は此方の厩舎生活に文句はないのか、勝手に敷地内で日向ぼっこに興じている。野菜入りの桶をキューイの前に置くと、キューイが何か言いたげに目を細めた。

「何かありました?」

「キューイ」

見られてる。そう一言呟いた赤飛竜は顎で遠くに見える鐘楼を示した。監視されてる事そのものは別に不思議な事ではない。一応召喚竜とはいえ、怪物が割と自由に動き回ってるのを警戒するのは当然だろうし。

問題は、誰が此方を見ているのかだ。鐘楼の方に視線を向けるが、距離が遠すぎてわからない。

「ライフル・マジック」と「スナイプ」の組み合わせなら確認できるんだろうが、下手に魔法なんか使えば色々問題になるだろうしなあ。

「誰が見てるかわかります?」

キューイは面倒臭そうに首を横に振った。現時点でキューイが会った事が無い人間らしい——当てにならない。

溜息を零し、キューイに食べ終わったら桶を片付けておくように告げる。洗ってどうのこうのは出来ずとも、元の場所に戻すぐらいはできるだろう。

敷地内に入り込んできた場合は問答無用で発砲、撃退しても良いので敷地外から監視してくる分の不穏分子は放置する他あるまい。

屋敷を大回りして歩いていると、ベルとミコトが前庭の隅、木箱や樽が置かれた一角で腰を据えて話し込んでいるのが見えた。

「——苦しんでいるのなら、助けてあげたい……いえ、あの頃のような関係に、もう一度戻りたい」

近づく内に聞こえた、心情を吐露するミコトの声。

ミコトは自身の肩に手を回し、背に刻まれている『神の恩恵』^{ファールナ}に触れる。

「勝手ながら……自分はきつと、また春姫殿の笑顔が見たいだけなのです」

彼女の語る言葉が、ささくれの様に俺の心に刺さり、鈍い痛みを訴えてくる。その痛みと共に湧き上がってくるミコトの背を押してあげたいという想い、それを無視しながら二人の元へと足を運ぶ。

涙ぐんだ瞳を拭ったミコトと視線がかち合った。

「おはよう、その様子だと春姫とは会えたけど反応は芳しくなかった様ね」

「ミリア殿……」

「ちゃんと男装するなりで身分は誤魔化したのよね？」

一応の確認としてミコトに問いかけると、ベルが何とも言えない表情を此方に向けてくる。

明らかに落ち込んでいるミコトを励ますでもなく、第一に聞く事がそれなのか、とそんな風に言いたげだ。しかし、俺はミコトを励ます事は出来ないし、しない。本当はしてあげたいが、無理なのだ。

「はい、男装していききました……」

「なら良し。それで、どうするの？ 諦める？ 方法を探す？」

「………まだ、何かできる事が無いか探す積りです」

たとえ徒労に終わるとしても、何か打開策を探したい。そう言ったミコトはギルドに向かうらしい。ベルもそれに同行すると聞き、二人を見送る。

正門を抜けて沿道を歩いていく無言の二人。見るからに辛気臭い雰囲気を漂わせて会話を交わす事無く歩いていく姿に罪悪感を覚えつつも、深呼吸を行ってから俺も正門を抜けて反対方面へ走る。

向かった先は、人通りの無い裏通りに佇む寂れた看板の酒場だ。

「——で、俺達に会いに来たど？」

情報屋『ダルトン』、件の藍色の女神の眷属達。彼らの能力ステイタス関連の情報は何もわかりやしないが、実力はそこそこ。「イシユタル・ファミリア」からの襲撃を受けてなお平然としている様子から察するに、多分情報のいくつかを提供する事で彼の派閥からお目こぼしを貰ったはずだ。

そんな情報屋『ダルトン』の元へ訪れた理由はそんなに多くは無い。彼らの主神の女神と会ったから、少し気になったのもある。

場所は前と同じ酒場、店内に居る客を装う団員数は激減しているところを見るに情報収集に出ているのだろう。

「貴方達の主神についていくつか教えて欲しいのですが、無理なら構いません」

「あー、主神に会っちゃったのか……」

同情心を含んだダルトンの視線を向けられる。何か不味い事でもあったのかと真っ直ぐ見つめ返すと肩を竦められた。

「まあいい、ウチの主神の情報だな？ ……その前にアンタに主神様から言伝を預かってんだ」

「言伝？」

「私は平等の女神。私は情報の女神。貴女の知りたい事を教える代わり、貴方の事を教えてちょうだい？」だそうだ」

気だるげに、下手糞な声真似をしたダルトンが溜息を零し、真剣な表情で此方を見つめてきた。

「ウチの主神は今日の午前中にお前さんが来る事を予測してた。理由は知らんがね」

害意は一切含まれていないとはいえ、行動を予測された事に思わず眉を顰める。あの女神が何を考えているのかさっぱりわからない。正直、恐いし近づきたくないが、知らないからこそ怖い訳で、知る必要がある。

「んでウチの主神についてだろ。といってもお前さんが気に入られてるってぐらいしか言えんがね」

「……気に入られてる？ 藍色の女神に？」

「ああ、相当気に入られてるぜ？ わざわざ自分で足を運んで調べに

行くぐらいにはな」

かの女神の特徴とし、気に入った人物の人物像プロフィールは自分の手で調べないと気が済まないらしい。

どうして気に入られたのか、そう問いかけると半笑いで彼は答えてくれた。

藍色の女神、その眷属達にはある規則が課せられている。情報屋として情報を扱う彼らは、最低限の条件に満たない顧客にはまともに情報を売らない。その条件を満たす客であれば、どんな希少な情報でも掻き集めてくるのだという。

その条件というのが——『己で調べ、知る事』だそうだ。

どういう事かと言うと、情報屋『ダルトン』の事を自分で調べ、見つけ出す事が条件らしい。

女神曰く、最近の顧客は全員『紹介』でやってくる奴ばかり。人に情報を聞く事はすれど、自分で調べようだなんて一切考えやしない。『知識欲』を持たない腑抜けばかりでつまらない。だそうだ。

「つまり、紹介といった形で俺達の元を訪れず、自分の足で調べて辿り着いたお前さんに敬意を払ってんだとよ」

「はあ……？」

思わず生返事が飛び出してしまった。

まあ、何となく言いたい事はわかる。派閥全員で情報屋を営んでいる彼らの形態から予測するに、藍色の女神は知識欲に基づいて自ら調べるといった行動をとる人間こどもを眷属として求めているのだろう。

自身で調べて知ろうともせず、誰かに教えてもらうだけの者には興味が無い、らしい？

「主神様は『可能ならばミリアちゃんは派閥ウチに引き込みたい』とは言ったが……まあ、お前さんは興味無いだろ？」

情報屋に転職？ 笑えない冗談だな。

使う側ならまだしも、使われる側とか冗談じゃない。ましてや『情報』なんて超ド級の火薬樽だろ。下手な扱いすれば爆発四散、それだけならまだしも身分も何もかも全部隠しておかなきゃ何されるかわからんだろうに。

「嫌ですよ、情報屋なんて死んでもなりません」

「その情報屋の前でよくそんな風に言えるなあ」

呆れ顔を浮かべるダルトンだが、それより情報を寄越せと言いたい。あまり時間もとれないし。

「あー、でウチの主神についてだな。つってもお前さんは……知らないのか?」

「特に注視して調べてませんからね。最低限上澄みを少々」

隠す事無く「嘘吐け」と眩かれるが、本当の事なのだから仕方ない。

まさか神が情報屋紛いな事をしているだなんて思っていなかったから、神の情報屋について調べなかったのだ。そのせいで藍色の女神は眼中になかった。

「最大の特徴は、なんでも知ってるって事だな。んで聞けば答えてくれる」

彼曰く、藍色の女神は本当に何でも知っているらしい。

それこそ、どんな些細な事でも、どんな嚴重に管理された情報でも軽々と答えてくれる軽い口を持つ女神。

重要情報までペラペラ喋ってしまふとか、質が悪すぎる。それに、それが本当なら真っ先に抹殺される性質だタイプと思うのだが。

「まあ、ウチの主神は何でも答えてくれるが、質問するのはやめとけ」
真剣な表情でダルトンはそう告げる。

情報の女神を自称するだけあって情報量は迷宮都市オラリオ処か、下界せかいで一番を誇り、代価を要求しない。代わりに、かの女神の原則は、平等。

例えば、俺が「イシユタル・ファミリア」の情報をその女神に質問したとしよう。

派閥の構成員の能力ステイタス、魔法、スキル等の情報を得た場合——藍色の女神は喜々として女神イシユタルの元を訪れ、俺の所属する「ヘステイア・ファミリア」の情報を全てイシユタルに伝える。

平等、そう平等だ。

片方に情報を渡したら、もう片方に同質の情報を渡す。

俺がフリユネの能力ステイタスの情報を女神から受け取れば、フリユネの元に俺の能力の情報を渡す。

イシユタルが『【魔銃使い】の情報』を買えば、同質の『イシユタルの情報』を俺に与えてくる。

そう、平等にどちらにも同じ質と価値の情報を与えてくるのだ。

「つまり、ウチの主神様が接触し、なんらかの情報を与えたって事はア
ンタは誰かに情報を買われてる」

——あの藍色の女神は、俺に【イシユタル・ファミリア】の情
報を与えてきた。

裏を返せば、『イシユタル・ファミリア』は『俺の情報』を藍色の女
神から受け取った事を意味する。

「安心しろ、質と価値は同じだ……お前さんが貰った情報はどんな価
値があった？ それが相手さんに渡った情報の価値さ」

情報その一、満月の夜にお祭りが行われる。

情報その二、『魔銃^お使い』はそこに近づくべきではない。

^{ヒント}暗示、ヘルメスが運び込んだのは『殺生石』二つ。

藍色の女神が歓楽街で俺に渡した情報は、非常に曖昧な代物だっ
た。これが意味するところはつまり——まともな情報は渡され
ていない？

「だろうな、まあお前さんからウチの女神に接触するのはやめておい
た方が良い。知られたくない事まで相手に筒抜けになるぞ」

ああ、なるほど、そうかそうか。情報収集能力が桁外れに高く、な
んでも知ってる癖に口が軽いなんて情報屋として致命的な欠陥を
持っているながら誰からも排除されない理由がわかった。

この藍色の女神、情報屋として利用する事自体が危険^{リスク}だ。何せこつ
ちが知りたい情報を知った時、相手に同質、同価値の情報が手渡され
る事になるってわかってたら誰も利用しない。

——この条件で利用を考える場合、相手を速攻で黙らせる必要
がある。

「これ、情報料です」

「あいよ、また機会があれば是非利用してくれ」

知りたい事は知れた。もうここに居る必要はない。他にも知るべ
き情報は多岐にわたるが、金が無い。

それに、現時点では「イシュタル・ファミリア」が仕掛けてくるとは思えない。「ロキ・ファミリア」と「ガネーシャ・ファミリア」を敵に回せる様な戦力も無いはずだし、いくらなんでも今の俺達に手出しする間抜けではないだろう。

『殺生石』の効果。魔法の効力を引き上げるといった代物だったが、数を増やすとその分強くなるのか？

いや、過去に一度同じ様な効力の魔法道具マジックアイテムを輸入してる。その時に「イシュタル・ファミリア」内部で問題があったらしいが、詳細まではわからなかった。

【麗 傑】アンティアーネイラが罰を受けたとは聞いたが……その頃には春姫が既にいたはずで、一つでは足りなかった？ だから二つ用意した？

わからない、情報が足りない。もう少し、情報屋を利用するための資金が欲しいが、今の俺の懐ポケットマネーの金ではこれが限界。これ以上の捻出は不可能。

不穏な空気が漂っているのが気になるが——さっさと本拠に帰るか。

細道を抜け、広々とした街路に出た所でベルとミコトが肩を並べて歩いている姿とぼったり出くわした。

「奇遇ね、二人とも。ギルドの用事はもう終わったの？」

片手を上げて挨拶をする。

不思議なことに、あれだけ陰鬱な雰囲気を出て行った二人は、先ほどより明るい表情をしていた。

「あつ、ミリア」

「いえ、ギルドにはいかずにヘルメス様と話していました」

ミコトの言葉に思わず眉を顰めてしまった。よりにもよってヘルメスカよ……。

「何か拭き込まれた訳？」

「実は、ヘルメス様が口添えしてくれると」

「口添え？」

ミコト曰く、ヘルメス様が春姫の身請けに際し神イシュタルに口添えしてくれる、との事。

曲がりなりにも愛を司る女神、身請けしようとする男に娼婦が着いて行きたいと望むなら、許してくれる。

そして、春姫は非戦闘員、末端の構成員。希少種族故に金額は嵩むが、稼げない額ではない。だから――

「だから、頑張ってお金を溜めようって!」

「はいっ、自分も全力を尽くしますので、ミリア殿にも協力を願えないかと」

――そう、くるのか。

ああ、そうか、そうだ、その通りだ。春姫は下っ端の、末端の構成員だ。表向きは。

彼女の立ち位置を理解していない。そう叫び返すのは簡単だが、彼らの決意と希望に満ちたその気持ちを碎き壊す様な真似は、出来なかった。

「そ、そう。まあ、私に出来る事なら……お金、そうお金ね……少し、今回の遠征で得られた利益から、出しても良いかも……もちろん、デインケ達に相談しないと、だけどね?」

無性にヘルメスを殴りたい。余計な希望を抱かせて、より大きな絶望を味わわせる原因となった、ヘルメスを殴りたい。

いや、もしかしたらヘルメスも知らなかったのかもしれない。ベルとミコトが求める相手が、イシユタルの元で重要な人物だって、知らなかった。故に、安易に口添えするなどと言ったのか。その場に居なかった俺には何も言えない。

どうやって稼ごうかと話し合いながら本拠へ向かう二人の後ろをとぼとぼと着いて行きながら、溜息を飲み込む。足元を見ながら、どう二人を絶望させずにこの件から手を引かせようか考えていると、二人の怪訝そうな声が響いた。

「……………」

「……………あれは」

どうしたのかと顔を上げると、「ヘスティア・ファミリア」本拠前の正門に停められていた一台の馬車が走り出していく光景があった。

豪華そうな箱馬車が、馬の嘶きと共に去っていく。それを見てベル

とミコトが動揺しながら駆け足で正門に向かう。

其処にはリリとヴェルフ、そして一枚の羊皮紙を持つヘステイア様の姿があった。

「ヴェルフ、リリ、神様！」

「あ、ベル君、ミコト君にミリア君、帰ってきたんだね」

「今の馬車は何だったのですか？」

ベルの声に振り向いた三人にミコトが問いかける。その質問にリリがヘステイア様の持つ羊皮紙を見やりながら答えた。

「商会からの冒険者依頼です」

ベルがオウム返しに「商会？」と尋ね返すのを尻目に、溜息一つ。

「ああ、わざわざ出向いてきたんですか。貸してくださいヘステイア様」

ベルがヴェルフから説明を受けている間にも、ヘステイア様の手の内にあつた羊皮紙を受け取り、内容に目を通す。

依頼主は『アルベラ商会』……都市経済の一端を支える巨大商会だ。

……ああ、まあ、まあそうだよな。関わりたくない商会五本指に入る所じやん。

面倒臭いなあ、しかも無視できないし。

「投資、とはまた違うが……オラリオではよくある事だな」

「ギルドを通さずに直接指名してきたので、公式とはありませんが、相手ははつきりしています」

リリが俺の持つ羊皮紙の商会の刻印を指さし、ヴェルフからされた説明内容を反芻するベルに示す。

「しかも依頼主は商会。非公式の冒険者依頼より遥かに信用があります」

嘘だあ、だってこの商会、闇派閥が跋扈していた暗黒期に色々と闇派閥と取引して競争相手の商会片っ端から潰して生き残つてきた真つ黒な所だぞ？ 信用？ なんもん何処にもねえよ。金の匂いに誘われた強欲で薄汚い奴らの集まりじゃないですかやだー……なんて、口が裂けても言えないけど。

ギルドもこの事は掴んでるけど、既に都市経済の一端に食い込んで

いる関係で下手な手出しが出来ないから黙ってるだけなんだよなあ。
はあ、やりたくねえ。

「えっと、依頼の内容は？」

「14階層の食糧庫で、英石を採掘してきて欲しいそうですよ」

なあんでまた、こんな中途半端な依頼な訳？

18階層の安全階層で採掘できる英石ならまだしも、14階層の食糧庫を指定してくるのは不自然だ。ぶっちゃけ、意味がわからない。

質は18階層の英石の方が間違いなく上で、なおかつ16、17階層を抜けられるかの実力確認も兼ねられるので、依頼を出すなら18階層の方にすべき……あー、食糧庫に集まる怪物を蹴散らせるかって方面で実力を確かめようとしているのか？ しかも食糧庫の場所まで指定してきてる。場所まで？ 同じ階層だし品質に違いは無いと思うんだが。

それに、実力を確かめる意味なら、もう一段階下の階層の食糧庫を指定するだろ。滅茶苦茶な内容の依頼だな。

俺の手元の羊皮紙を読み込もうと覗き込んできたヴェルフが呆れた様に呟く。

「報酬がおかしなぐらい依頼内容と釣り合っていないな」

「これから鼻屑にしてください、という真意が見え見えですね」

冒険者依頼の報酬を見ていたヴェルフとリリの言葉に、ベルとミコトがはっとなり、二人が前のめり気味に質問を飛ばしてくる。

「二ほ、報酬はっ！」

「二〇〇万ヴァリス」

「二ひゃ、一〇〇万ヴァリス……!!」

二人の反応に思わずため息が零れかけ、何とか呑み込んで咳払いで誤魔化す。

『身請け』目標金額確保の足掛かりと感じたのだろう。正直、きな臭い気がするのだが……二人の希望に満ちた目を見てみると、否定し辛い。

「どうする、ミリア君」

「ヘステイア様は、どうしたいですか？」

こういつた関連を任せられているからか、ヘステイア様に質問される。しかし、個人的にはこの商会は避けたい。暗黒期に色々やらかして黒い商会だし。いや、今この迷宮都市に生き残ってる商会の大多数が大なり小なり暗黒期に後ろ暗い事をしていたのは確定なのが。

だって、清廉潔白でやってた商会はほぼ暗黒期の中に潰れてるし。

「んー、あんまり商人や商会との繋がりを持ちたくないなあ」

同感である。激しく同感である。

しかし、だからと言って断ると色々面倒な事になるので、一応は受けて完了。その後はなあなあな感じで誤魔化すぐらいしかかないだよなあ。面倒臭え。

「先方には悪いけど、この依頼は断って——」

「やりましょう!?!」

「どわあ!?!」

ヘステイア様の言葉を、ベルとミコトが同時に遮った。

赤い顔で迫る二人にヘステイア様が大きく仰け反る。

「借りを作るという訳ではありませんが、もらっておくものももらっておくとかいえ浅ましいことは重々承知なのですがとにかく自分たちには一刻も早くお金が必要ですつ!!」

「ぼ、僕もそう思います!?!」

畳みかける様にヘステイア様へ言い募るミコトとベル。

大袈裟な身振り手振りでなんとか説得しようとする二人を見てみると、胸がズキズキと痛みだす。必死に方法を模索し、それに縋り付いてなんとか解決しようとしている。それが、それが徒労に終わると既に知っていて、その必死な様子が無駄に終わり絶望に浸る事になるのを知っているが、何も言えない事が苦しい。

「うう〜ん……まあボクも勝手に借金を作って迷惑をかけたし……あくまで冒険者依頼の見返りとして受け取る、って事だったらいいかな」

二人の必死な形相にヘステイア様が汗を流しながら、依頼書に目を

落とし、先の発言を取り消した。

「ありがとうございます！」

二人が同時に頭を下げ礼を言った後、高く上げた手を互いに叩き合う。

「何なんですか、一体……」

「やる事が見つかったみたいだな」

水を得た魚の様に活き活きをする二人の様子にリリは呆れ、ヴェルフは朝の辛気臭い表情から一転した様子に安心した様に笑った。

ベルとミコトがはにかみながら笑い返すのを見て、胸の痛みが更に増していく。

皆が前を向いて手に手を取り合って頑張っていく。そんな素晴らしい光景だというのに、俺はちつとも笑えない。それでも空気を壊すべきではないから、表面上は笑顔を浮かべておく。

言うべきだ、今すぐにでも、その方法では春姫は救えないと、残酷な現実を伝えるべきだ。なのに、俺は何も言えない。最低な奴だ。

「何だかベル君とミコト君がかなり仲良くなってるのが気になるけれど……一度ホームに戻ろう」

冒険者依頼クエストの件について話し合いたいというヘステイア様に四人が着いて行く。俺は手にした羊皮紙に書かれた金額を見ながら、溜息を零し、遅れて歩き出した。

どうして、今この時期タイミングでこの依頼がきたんだ。来るにしても少し遅いし、わざわざ馬車を動員してまでつてなると不思議でならない。あえて遅らせたにしても不自然だし。

朝と比べて弾んだ足取りのベルとミコトの姿に胸の痛みが増す中、ふとベルがあ、そうだと口を開いた。

「神様、『殺生石』って知ってますか？」

「『殺生石』？ うーん、聞いた事がないなあ」

ベルの口から飛び出した質問に、思わず喉が引き攣った。

ヘステイア様はそれについて知らないらしい。ベルの視線がヴェルフやリリの方にも流される。

「知ってるか？」

「いえ、リリも聞いた事がありません」

ヘステイア様と同じ様に知らないという反応を返す二人。そして、ベルの視線は自然と俺の方にも向けられた。

ベルだけではない、ヘステイア様やヴェルフ、リリにミコト、その場に居る全員の視線が俺に集まる。

「ミリアは知ってる？」

どう誤魔化すべきか。『殺生石』について「知らない」と答える事は出来ない。何故なら聞きかじった程度とはいえ知っているから。

しかし、答える事も出来ない。何故ならその『殺生石』は『狐人の魔法の効果を上げる』という代物だから。

もし、もしも……もしもベルが察してしまったら。わざわざ、希少な魔法道具マジックアイテムを買い与えられる程の立場に、春姫が居るのだと知ってしまったたら……。

今やっているこの行動が、全部無駄に終わるのだと知られてしまったら。

「……………ごめん、知らない」

——俺は、嘘を吐いた。

「知らないのか……何なんだろう」

「ミリアなら知ってても不思議じゃなかったが、知らないのか」

「ヴェルフ様、ミリア様に期待し過ぎですよ」

「確かに気になります、今はそんな事より冒険者依頼クエストです！」

不思議そうに首を傾げるベル、冗談を言っ肩を竦めるヴェルフ、冗談に突っ込みを入れるリリ、そして前向きに冒険者依頼の事で頭が一杯なミコト。

ヘステイア様は、こっちを見ていた。真っ直ぐな、瞳で、俺を見ていた。

「……………そっか、ミリア君も知らないか。なら仕方が無いね」

責める訳でも無く、追及するでもなく。ヘステイア様は優しく笑いかけてきた。

俺は、笑顔の仮面を着けてそれに答えた。

第一六一話

真剣な表情のミコトとベルの二人と対照的に、渋い表情を浮かべたヘステイア様が唸る。

食堂に集まり行われた話し合い。此度の依頼を受ける理由——
—春姫という娼婦を『身請け』したいというもの——を聞いてヘステイア様は唸り、リリが怪訝そうな表情を浮かべ、ヴェルフは腕組をしている。そんな中で俺は笑顔を貼り付けて無言を貫き通していた。

最終決定権を持つヘステイア様が唸り、ふと顔を上げた。

「キミ達の気持ちは分かった。ボクとしては複雑な気持ちだけど、今回はミコト君の意思を尊重したいと思う」

「それでは……い」

「ただし、タケに、タケミカツチにはちゃんと報告するんだ。それが最低条件とさせて貰うよ」

最終的に条件付きで許可された事にミコトの表情がみるみるうちに喜色満面に変化していく。威勢の良い返事と共にミコトが駆け出していき、食堂の扉を蹴破る勢いで出て行ってしまった。

それを見送った後、ベルがヘステイア様にお礼を口にして探索準備の為に部屋を出て行く。冒険者依頼受託を先方に伝える為に腰を上げようとした所で、ヘステイア様から声をかけられた。

「ミリア君、この後少し良いかな、受託する際の話し合いがしたいんだ」

「俺はベルとミコトの武器の整備があるから鍛冶場に行ってるよ」

「リリはベル様と持ち物の相談をしてきます」

気を利かせたかのようにヴェルフとリリが即座に立ち上がって食堂を出て行く。

広々とした食堂に残された俺とヘステイア様の二人。ミコトは今頃タケミカツチ様の元へ報告に行っているだろうし、ベルとリリは他の部屋で相談中。ヴェルフは鍛冶場に行ってるし、デインケ達はダンジョンで遠征中。

他に聞き耳を立てる者といえはキューイやヴァン、後は俺の頭の上ののつているクリスぐらいだが、彼らに聞かれた所で別に何かある訳ではない。

二人きりになったところで、俺はずっと張り付けていた笑顔の仮面を外す事が出来た。僅かに残る吐き気を飲み込み、真っ直ぐ、逸らす事が出来ない透き通った、此方の心中を見透かした色の瞳を見つめ返す。

「それで、話してくれるかい？」

何を、と問いかける必要はない。ヘステイア様が言いたい事は理解できる。

——話し合いのさ中、ずっと喉に詰まっていた此度の依頼についての事や、ミコトとベルが抱いている勘違いに対する訂正の言葉について、そして何より、嘘を吐いた理由。

「ヘステイア様、私は嘘を吐きました」

「知ってる。でも理由があるんだろう？」

優しく、此方が語りやすい様に微笑みを浮かべたヘステイア様。思わず、衝動的に自らが抱え込んでしまった面倒な事柄全てを吐き出してしまいたくなるが、出来る限り慎重に言葉を選びながら告げていく。

『殺生石』の効果については。本当は知っています」

つい先ほど吐いた嘘についての訂正。

俺は『殺生石』の効果を知っている。それは、『とある種族の専用魔法を強化する魔道具』である事。

「とある種族？」

「狐人の妖術です」

俺が調べた限りでは、その様な効力だった。

極東で古き時代に作り上げられた極一部の狐人ルナールしか作成方法が伝わっていない代物。その希少性故に入手は難しく、効果を調べるだけでもかなりの手間を要したと情報屋は口にしていた。

——まるで秘匿するかのように『殺生石』の情報は扱われていたのだ。

そして、これが先ほど嘘を吐いた理由でもある。

「なるほど、狐人専用の道具、か」

「はい、だから——あの時、嘘を吐きました」

全てを察したかのようにヘステイア様が眉間を押さえて唸る。

狐人はとても希少な種族だ。迷宮都市に居る個体は他の種族に比べて数える程——「イシユタル・ファミリア」に所属している狐人等、たった一人しか居ない。

そして、その一人の狐人の為に、それは用意された。

「ファミリア」唯一である狐人の眷属、『春姫』の為に、そんな希少な道具を用意しているんです。——平団員などというのは、あくまで表向きの代物、彼女はきつと「イシユタル・ファミリア」の切札です」

故に、ミコトやベルが言う様に『身請け』させて貰えるとは思えない。そう告げるとヘステイア様は静かに此方を見据え、どうやってそれを知ったのか問うて来る。

「少し前、私が「ガネーシャ・ファミリア」からの依頼で『最大賭博場』の調査に赴いた際、事前調査として攫われた女性に関して調べていました。その時に調査対象として「イシユタル・ファミリア」も含まれていた為、個人的に情報屋を通じて取引記録の方を買ったんです」

あの時とは状況が全く違う。無論、あの時だって相当慎重に調査していた、『ダルトン』が妙な失態をして襲撃を受けていたせいで、藍色の女神が俺の情報をイシユタル側に漏らした様子だが……あの時はあくまで「ガネーシャ・ファミリア」の依頼の延長であった事もあり、何かあってもガネーシャ様が何とかしてくれただろう。

しかし、今回は「ヘステイア・ファミリア」主導での調査になってしまう。そのため、再度の情報収集には危険が伴う、加えて俺の個人的な所持金が底を尽きて調査に支障をきたしているのもあって、身を引いているのが現状だ。

黙って聞いていたヘステイア様が静かに吐息を零す。

「それと、今回の依頼についてどう思う？」

ヘステイア様が卓に置かれた羊皮紙を指し示して問う。

それに対する答えに關しては、既に決まっている。

「嫌らしい時期で来た依頼です——断るに断れません」

「……どういう事だい？」

『アルベラ商会』と言う商会はここ迷宮都市の都市経済に大きく食い込んでいる一角である。

そして、他の商会とのぎを削り合っている商会でもあり——問題が其処にあった。

「商会同士の派閥争いがあつて、下手な断り方をすれば問題になつてしまふんですよ」

例えば、今回の『アルベラ商会』の依頼を単に『断ります』と断つたでしょう。

すると『アルベラ商会』と対立關係にある派閥は喜々として「ヘステイア・ファミリア」は『アルデラ商会』を依頼主として認めなかつた」などと吹聴するだろう。その結果は、まあ正直こつちには關係ない話なのだが、商会同士の繋がりに波紋を生むことになる。

既に俺達は別の商会からの冒険者依頼を複数受けている事。それらについても慎重に商会同士の覇権争いに関係する部分を吟味した上で「ヘステイア・ファミリア」は商会に対して中立である」と宣言する様に拒否か受託を決めたのだ。

それなのに、今更一つの商会を最肩にします、もしくは一部の商会を不当に扱います。なんて噂を流されたらたまつたモノではない。

一度中立を宣言した後に『実は最肩にしてる商会があります』なんてなつたら非難を浴びるだろう。

既に「デインケさん達に受託して貰つた各種依頼は中層、『大樹の迷宮』関連です。そこから報酬額と内容のつり合いと、達成可能かという明確な判断基準を持って依頼の受託を決めたんですが……」

彼らが出立した直後のこの依頼だ。難易度としては微妙に難しいといえは難しいが、実力を試したいと言われればギリギリ納得できなくもなく、報酬に關しては破格の依頼。

他の依頼について明確に断る理由があつたが、この依頼は妙に断り辛い内容なのだ。

難易度が高すぎる——達成不可能と言う理由で断る事は出来ない。そんなに無理と言える程じゃないから。

報酬と難度のつり合いが取れない——この破格の報酬で断る方が不自然。

他にも色々断る理由を考え抜けば出てこなくはないが、どれも不自然な断り方になる。一応、穏便に断る手段は無くはないが——例えばロキやガネーシャ、ディアンケヒト等、既に契約を結んだ「ファミリア」から依頼を受託済みで、其方を優先する為に期限内に達成できないから断る。とすればまだなんとか……だが、その為にロキ、ガネーシャ、ディアンケヒトのいずれかに頼んで口裏合わせしないといけなくなる。

「うっ、やっぱりそういう事になるんだよな。はあ、だから商会や商人とは関わりたくないんだ」

迷宮都市内における商会、商人の繋がり。対立や利益争いは毎日の様に行われており、その争いの手段の一つとして、探索系派閥が利用されている。

例えば、「ロキ・ファミリア」と友好的に取引をしている商会なんかはわかりやすいだろう。他の商会に比べて発言権が強くなるし、彼の派閥に信用されていると評判だつてあがる。

ロキの所の場合、派閥そのものが強豪として知られており、取引相手が攻撃された結果、ロキの派閥に損失が発生すれば間違いなく商会同士の争いに口出しする——『お前等が何しようがお前らの勝手やけどな、ウチに損させんなボケ』と堂々と言い放つ事が出来る。それはつまり、ロキと取引する商会は他の商会から手出しされにくくなるわけだ。

これは「フレイヤ・ファミリア」の方が顕著だろうか。あそこは少し特殊だが、取引しているだけで箔が付く——ただし、フレイヤ様に献上するに値しない品質の代物なんか差し出した日にはフレイヤを敬愛する眷属に袋叩きにされるだろうが——それでもその箔には万金の価値があるだろう。気に入られてる内はしっかりと庇護してくれるだろうし。

「ガネーシャ・ファミリア」の場合は、清廉潔白な取引をしている商
会が契約を結びたがる。後ろ暗い事を一切していないのであればガ
ネーシャの元へ行くのが主流だ。他の商会から手出しされた場合、手
厚く護衛を申し出てくれるだろう事から人気は割と高いし、信用でき
る商会が集まっている事が多い。

もし何か依頼を受けるなら、「ガネーシャ・ファミリア」と取引して
る商会を選ぶのが吉だ。

各々、「ファミリア」と商会の関係性はわかりやすいものが多いと言
えるだろう。要するに、有名な「ファミリア」との取引があれば商会
の箔となり、庇護下に置かれると言っても過言ではない。

此度の依頼は「ヘステイア・ファミリア」との繋がりを作りたくて
出してきたものだ。

「それじゃあ、アルデラ商会は「ヘステイア・ファミリア」の庇護下に
入りたいって事かい？」

「いえ、もつと複雑なんですよ」

アルデラ商会が現在どこと一番深く繋がりを持っているかと言
うと、「イシュタル・ファミリア」だ。

主に人身売買や不法取引。要するに違法な関係で繋がりが合った
真つ黒い商会である事が挙げられる。

そこが「ヘステイア・ファミリア」と繋がりをもちたがる理由なん
ぞ、一つだ。

「竜素材または『再生薬』でしようね」

「罨の可能性は？」

「無いでしょうね。喧嘩を売ってくる理由がありませんし」

依頼内容的に不自然な内容ではある。しかし、現在の「ヘステイア・
ファミリア」と敵対する理由は無いに等しい。

『再生薬』欲しさに手を出すにしても、「ロキ・ファミリア」「ガネー
シャ・ファミリア」の二つの派閥を相手取って抗争なんかしかけられ
る派閥は「フレイヤ・ファミリア」ぐらいだし。

当然、商会も同様であり、喧嘩を売ってくる理由はなく、「イシュタ
ル・ファミリア」の手引きにしても今の俺達に手を出してただで済む

はずがない事ぐらいわかるはずだ。

現時点で、「ヘステイア・ファミリア」は安全だ。少なくとも、此方から何か手出ししない限り。

「そっか……それで、ミリア君……キミはどうしたい？」

どうしたい。そう問いかけられて思わず俯いた。

俺は、今回の件についてどうしたいのだろうか。

一つは、春姫を見捨てるべきだと思う。

『身請け』という正当な手段が使えないとわかっている以上、後は抗争を起す以外に手段が残されていない。

相手から仕掛けてくるならロキやガネーシヤの支援を受けられるが、そもそも仕掛けてくる理由が無いだろう。

だから、諦めるべきだと思う。

もう一つは――。

「ヘステイア様、私は……私は、ずっと見捨ててきました」

過去、死ぬ以前の、前世ともいえる俺は一つのモノに拘り、それ以外の全てを捨ててきた。

不幸にもあの女の策略に嵌って地獄に堕とされていく者達。そんな彼、彼女らを一人残らず見捨ててきた。彼らの不運に同情しながらも、義父でもあったあの人を人質に取られていた俺は手を伸ばす事をしなかった。

大事なものは、今も表の世界で暮らす義父ただ一人。あの人が守れるのであれば、どれだけ汚れても、どれだけ堕ちても構わない。心が磨り減るのも構わず、見捨てる。

――情を抱く程に至った、部下でさえ切り捨ててきた。

「そして、今回も私は見捨てるべきだと思います」

一番大事なのは、「ヘステイア・ファミリア」である。

ヘステイア様を、ベルを、皆を守れるのであれば――春姫と言う不幸な少女を見捨てるのが最善策だ。

彼女に関しては、不幸だと思う。同情だっでしょう、けれど……手段が無さすぎる。

「今、私達が何か行動を起こせば、それはどんな事であれ大ごとになる

でしょう」

もし「ヘステイア・ファミリア」が抗争を起こす様な真似をすれば、喜々として俺達を潰す為にいくつもの派閥が動き出す。

ロキやガネーシヤは、それを守る訳にはいなくなる。抗争を起こし、都市に混乱を巻き起こした悪名高い派閥となつた俺達に手を貸すという事は、自らの名声に泥を塗る行為に他ならない。それは、都市有数の派閥にして、勢力図を大きく占める派閥として容認できない。

同時にそれは、「ヘステイア・ファミリア」が守られている要因でもある。今の俺達に手出しする奴が居れば、喜々としてその派閥を皆が攻撃しだすだろう。俺達に恩を売って、繋がりを持つ為に……。

「柵しがらみの所為で動けない。でも柵しがらみのおかげで安全でもあるんです」

面倒事ばかりが積み上がっている。

柵しがらみに拘束され、動けない。前世の様に名を捨て、身分を捨て、顔を捨てて別人になるなんて事は今の俺には出来ない。出来る訳がない、もう捨てられないし、捨てたくない。

「今回も、見捨てるべきだと私は思っているんです」

動かない事こそ最善手に違いない、そう断言できる状況になり、俺は動かないでいる。

「ベルやミコトは嘘が苦手です。だから何も教えない方が良い、私はそう考えて、黙っているんです」

嘘が苦手ですぐに顔に出してしまうベルや、真面目過ぎて謀り事が出来ないミコト。あの二人には下手な情報を渡せない。

——贖罪の様に、本心を吐露していく。

目の前の女神ヒトは、言葉に詰まる度に優しく続きを促してくる。一つ一つの言葉に頷いては優しい微笑みを浮かべていた。

「私は、間違っていない。そう思っています」

何も間違えてなんていない。

襲撃される心配はない。此方が全く身動きできない程に柵しがらみに囚われていて、それが同時に俺達の身を守っている。

ベルやミコトの行動は、最悪の事態——抗争を避ける様に動いているから問題はない。

あの二人に真実を伝えた時に何が起きるのか、どんな行動を起こすのか想像が付かないから、真実は黙っておくべきだと思う。

この行動は正しい。誰がどう見たって、そう肯定するだろう。そう思わなければやっていけない。

「私は、最善手を打っている積りです」

そう——最善手を打っている。

なのに、そのはずなのに、苦しい。

「苦しい、苦しいんですよ」

選ぶ度に「これは間違っていない。最も良い手である」と自分に言い聞かせても、息苦しきは止まない。

最適解のほずで、最善手で、一番良い手段で——それで間違いは無いのではないか？

違うのか？　これが最適解なんじゃないのか？　最も優れた手段を講じているんじゃないのか？

「——ミリア君」

ヘステイア様の声が響いた。

顔を上げると其処には、優しい気な笑みを浮かべたヘステイア様が、神託を告げるかのように、厳かな雰囲気をつくり立ち上がっていた。

長卓を大回りしながら静かに歩んでくる女神は、ゆつくりと言葉を選ぶように告げる。

「キミのそれは正解だし、同時に不正解だ」

それは肯定の言葉であり、同時に否定の言葉であった。

「ううん、そもそも世界に正解や外れ、間違いなんてモノはないさ」

目の前に立つ女神、その前で椅子に座り込んで動けない俺は、断罪を待つ様に俯いた。

わからない。どうすれば良いのか、わからないのだ。

「キミは、他の子よりずっと広い視野を持つてる。だから、きつと色んなものが見えてるんだと思う。なんなら、ボクなんかより世間について知ってるんじゃないかな」

冗談を呟き、女神は静かに俺の肩を掴んで、優しく抱きしめてきた。温もりに包まれながら、神託を待つ。

「良いかい、もう一度聞くよ——キミはどうしたい?」

「私、は……」

どうしたい? そんなもの、とつくの昔に答えなんて出ていた。

どうしてベルやミコトの行動を即座に止めなかった? 真実を伝えずに二人を止める方法ぐらい、口が回る俺なら簡単にとれたじゃないか。なのに、俺はその選択をしなかった。

「見捨てたくない。もう、誰も見捨てたくないって無いっ」

俺は——もう、見捨てたくなんてない。

間違っていないかった。過去の、あの選択の数々、数え切れない程に見捨て続けてきたあの時の回答は間違っていない。けれども同時に、あれは間違っていた。

既に知っていたじゃないか、あの満月の夜に命を落としたあの瞬間に、俺は思っていたじゃないか。

「死ぬ間際に後悔するってわかりきってる選択肢なんて、選びたく無い」

だってそうだろう? 間違っていないと言いついて聞かせて、ずっと見捨ててきたのに、未だに後悔しているんだから。

ベルやミコトにだって、死ぬ間際になつて後悔するような選択をしてほしくない。誰だってそうだろう、体から力が抜け落ちて、もうすぐ死ぬんだと察した瞬間に胸の内に湧き上がる後悔の数々に押し潰されるなんて、そんな最期の瞬間なんて嫌に決まってる。

「そっか」

より強く抱き締められ、ヘステイア様は告げた。

「ミリア君、キミはもう少し本心を吐露しても良いと思う」

聞き分けの無い子供に言い聞かせる様に、優しい声色に厳しさを混ぜ込み、ヘステイア様は口を開く。

「ボクにも出来る事が無いか探してみる。だから、ミリア君も諦めないでくれ」

——今出来る事は無い。けれど、何か方法を探そう。

話し合いから二日後、「ヘスティア・ファミア」はアルベラ商会の冒険者依頼を受託して迷宮に足を踏み入れていた。

探索準備、依頼の受託連絡等、所要の手続きや準備に一日を要し、その間に春姫に関して身請け以外の方法が無いかの模索をヘスティア様と共に行った、と言いたかったがまともできなかった。

未だにベルやミコトには真実は伝えていない。代わりにヴェルフとリリには密かにこの件について伝えてある。

嘘が着けない二人にこの件を伝えるのは危険だとリリが賛同したが、ヴェルフは盛大に眉を顰めて苦言を呈してきたが、最終的には渋々同意してくれた。

申し訳ない事をしている自覚はある。けれど、手の打ちようが無い現状において二人に伝えるのは気が引けたのだ。

「さあみなさん、早く行きましょう！」

パーティの先頭に立ってぶんぶんぶんっ！と刀を上下に振るう子供の様なミコトの声が、岩窟上の長い通路に反響していた。

現在位置はダンジョン14階層。

乏しい燐光に照らされた灰色の岩石、湿った空気に満たされた階層。岩盤で構築された洞窟然とした迷宮には、過去の悪夢を彷彿させる縦穴が見受けられた。

上層を速やかに突破した俺達は、順調に問題無く14階層にまで足を運んでいる。

パーティ構成はベル、俺、ミコト、リリ、ヴェルフの五人、そして追加でキューイとヴァンの二匹。クリスは地上で主神の護衛として装飾品としてヘスティア様に付きっ切りになっている。

「食糧庫に乗り込むので、あまり迂闊な真似はしないでほしいのです
が……」

顔を輝かせ子供の様にはしゃいでいるミコトに対し、ベルが苦笑を零し、ヴェルフが表情を消し、リリが苦言を呟く。

「ミリア殿の『透明状態』の魔法さえあれば楽勝でしょう！」

ミコトの弾む返答に対し、リリが溜息を堪えている。荷物に詰め込んだ隠蔽布等の道具を確認しはじめた。

「ミコト、あんまり私の魔法に期待し過ぎちゃダメよ。確かに姿消しはそれなりに使えるけど、効果時間もそこまで長くないわ。せいぜいが5分かそこらなんだし」

空腹状態になった怪物が多数足を運ぶ食糧庫パントリーの英石クオーツの採掘である事から、『透明状態』と『消音効果』が付与できる『クーシー・スナイパー』と、人形操作で囷を作り出せる『ケットシー・ドールズ』を選んできた。

作戦としては食糧庫直前で魔法をかけ、小型鶴嘴マトツクを持って突撃。ベルとミコト、ヴェルフの三人で英石クオーツの採掘、回収をし魔法の効果が切れる前に待機している俺達の元へ運ぶ。というのを何度か繰り返す。

その間、俺とリリ、キューイとヴァンの二人と二匹は少し離れた場所カムフラージュで待機。待ってる間はリリが持つ隠蔽布カムフラージュで姿を隠しておく。

依頼に準じた量が集まり次第撤退。安全を最優先にした方法だが、油断は出来ない。

「にしても……『身請け』か……」

隊列の中衛位置、ベルの隣を歩くヴェルフが大刀を担ぎながら呟く。

上手くいくのか、と疑問を抱いた様な表情を浮かべていた。

ベルとミコトの二人に真実を伝えない、それに賛同したりリリとヘステイア様と違って不満を抱いていたらしいヴェルフがそれとなく二人に気付かせようとしているのだろう。リリがヴェルフの背中を軽く睨んでいるが、先頭を歩くミコトも、ヴェルフの横で入念ストックに持ち物を確認しているベルも、どちらも気付く様子はない。

「うん、お金を集めるのはかなり大変かもしれないけど……これであの人を……」

ミコトに対し苦笑していながらも、ベルの方も十二分にやる気に満ちている様子だった。

「しかし身請けの目安はいくらぐらいなんだ？」

「エルフで五百万、さらに希少種族なのでもっと上……値段傾向的に六百万か……余裕を見て一千万ヴァリスは用意した方が良いでしょうね」

「ディンケ様達の稼ぎを当てにするのも良くありませんし、リリ達は最低でも半分以上は稼がないといけません」

白々しくも、もしたただの希少種族だけだったらという予想金額を伝え、視線を逸らす。

後衛のリリも含め、四人で話す。

「うっ……気が遠くなりそう」

「なら、到着階層を増やす事も視野にいれないとな」

周辺の迷宮に異常が無いかを確認しつつ、キューイからの定期的に怪物が接近していないかを確認しがてら、最後尾のヴァンを盗み見る。今まで以上に重装というか、人形を入れた箱を四つも背中に乗せているせいでまるで誘導弾搭載型の飛竜にも見える。

「ベルとミリアがLv. 3になつたんだ、20階層まで行こうと思えば行けるんだらう？」

ヴェルフがより深くに潜れるならそちらで稼ぐ方が良いのではないかと提案し、俺とリリに振り向きながらニヤリと笑いかけてくる。

一応ギルドの定める基準において、Lv. 2の到着基準は13階層から24階層まで。Lv. 3であれば25階層以下の到着基準を一応は満たしている事にはなるが……。

ヴェルフの20階層進出案に対し、パーティの参謀役としてリリが首を横に振る。

「いくらLv. 3と言っても、やられる時はあっさりやられます。【ロキ・ファミア】のグラン様やイリス様の例を忘れないでください」

18階層への決死行に加え、コンバージョン改宗してきた者達の事情を知っているリリは慎重な意見を崩そうとはしない。

それに関しては俺も同意見だ。たとえば24階層までの到着基準を超えていて、なおかつ普段から潜り慣れた熟練のパーティだったとしても、迷宮ではあっさりと、死ぬ事がある。

それが初見階層ならなおさら——『情報』と『経験』の違いはあれど、『経験』ですら容易に覆されるのだから。

リユーさんも、中層以降では個の力よりもパーティの力量バランスが大事だと説いていたし。

ベルもリリの言葉に納得したのか、気を引き締める様に頬を軽く叩く。

ふと、後ろからキューイの声が響いた。

「キューイ」

「――敵感知。回避不能、全員戦闘準備を」

敵の接近を感知、相手の動きから此方に向かつて来ており回避は不可能。キューイの短い言葉からその意を読み取って皆に告げた瞬間、意気揚々と先頭を歩いていたミコトが、一瞬で意識を切り替えて刀を構える。

「キューイキューイ」

「前方、右側面横穴から、数三匹、四足歩行の獣型」

「四足歩行？ ハードアーマードか？」

「いえ、『ライガーファング』です」

ミコトの訂正に思わず眉を顰めるが、同時に全員が意識を切り替える。

キューイの場合は位置は確定でわかるが、怪物の種類がわかり辛い部分がある。それを補う様にミコトの探知系スキルが怪物の種別まで把握してくれるのだ。常時発動は消費的に厳しいが、キューイが察知、ミコトが種別探知でかなりの精度で敵の構成が把握できるようになったのは大きい。

身構え、いつでも戦闘準備に入った俺達の前方、右側の横道からぬう、と。巨躯を揺らす虎のモンスターが現れた。

「本当にライガーファングだ……」

「どうやら下の階層から上がってきたようですね」

『ライガー・ファング』といえれば15階層から出現する怪物であり、14階層での遭遇は異常事態だ。イレギュラー驚くベルに対し、冷静なりりが眉を顰める。

他のモンスターか、あるいは冒険者か……あまり想像したくはないが、その怪物の牙と爪は真っ赤に血染めされている。乾いていないのを見るに……やめ、想像するだけ無駄だ。

生半可な刃ではまともに損傷を与える事は難しい剛毛を逆立てて、

巨大な虎は威嚇の積りか此方に唸り声を上げている。

階層移動してきた猛牛ミンタウロスにも劣らない強敵——それも三匹も——

——を見つめつつ、ヴェルフが感心した様な声を零す。

「キューイの察知能力と、ミコトの探知系の『スキル』が合わさって敵なしだな」

「いえ、自分の場合は一度遭遇しなければ探知できませんし……：自分の心身の状態に左右されます。キューイ殿には敵いませんよ」

仲間となった時点で、ミコトとは『魔法』や『スキル』の情報共有している。とはいえ、俺の場合は全てではなく『初期型』と戦争遊戯ウォーゲームで使用した『狙撃型』スナイパー、後は常用する事の多い『特殊型』ファクトリーは伝えてあるが、他は秘匿している。

これに関してはディンケ達も同様。裏切りは考えていないが、元の派閥に戻る事がわかっている以上、全ては教えられない事については納得してもらっている。

「猛牛ミンタウロスより速い！ 注意を！」

「はい！」

放たれた矢の様な速度で駆け出したミコトと、それに続くベルとヴェルフ。後方で全体を見回しながら咆哮を上げるライガーファング三体の内、飛び出そうとした一体を『ライフル』で撃ち抜き即死させる。

ベルが一匹、ミコトとヴェルフ二人がかりで一匹を相手どる間にも、戦闘音につられて接近してくるモンスターの群れと交戦を開始した。

第一六二話

「——戦闘終了。キューイ、周辺索敵」
「キューイ」

幾度目かのモンスターの群れとの交戦を終え、鞘に刃を納めた時だった。

キューイの放った一言に思わず眉を顰める。

「キューイ、もう一度お願いします」

「キューイキューイ」

——また怪物連れてきてる。

キューイはそう呟いて嫌そうに鼻を鳴らした。

また、怪物を連れてきてる？ どういう意味なのか彼女に問いかけるより前に、響き渡る異変の音にベルが顔を上げた。

「モンスターの叫び声に……足音？」

「おいおい、またか？」

ミコトの呟きにヴェルフが億劫そうに声を上げる。

モンスターの群れらしき啼き声、そして複数人の足音。皆が『怪物進呈』の前兆かと身構える中、キューイだけが気だるげに『また連れてきたし』と呟く。

「キューイ、どういう事、またって何？」

「キューイキューイ？ キューイ」

道中、俺達を襲撃する怪物はどいつもこいつも牙や爪が血に濡れていた。他の怪物を襲ったにしては頻度が高いと思っていたが——
——まさか、ありえない。

他の冒険者や派閥が俺達にモンスターをぶつけ続けていた？ いくらなんでも、今の「ヘスティア・ファミリア」にそんな喧嘩を売る真似をする奴はいない、はずなのに。

襲撃を受けているかもしれない。それは確かな事であるのだが、今の派閥関係から有り得ないと何度も否定を繰り返す。そんな風に行動を起こせずにいると、通路の先、『食糧庫』の方角から、顔を隠した冒険者達が姿を現した。

無数の怪物を引き連れた外、フーデットローフ套で身を隠した、数人の同業者。

「前方から……パントリー食糧庫からやってきたのですか？」

進行方向からやってくる集団に、リリが疑問を呈しつつもバックパックを担ぎ直す。

この段に至って、俺は漸く声を上げる事ができた。

「総員、撤退準備！ 他派閥の襲撃よ！」

「襲撃？ ただの怪物進呈バス・パレードじゃないのか？」

ヴェルフが訝し気に此方に視線を向けてくるが、それどころではない。キューイの言が正しければ、既にこちらは取り囲まれている。複数の冒険者が俺達に怪物を差し向けているらしいのだ。

現在地は一本道。どのみち戻る他無い為か、皆の動きも当然速い。

——そして、敵の動きも速かった。

「キューイツ！」

「——ツ!? 後方分かれ道つ、右側、およびに前方から怪物進呈バス・パレード

!!」

「えっ」

「冗談ですよね！」

キューイレイダーに感有り。

前方の分かれ道は四方向に別れた十字路。その内の前方と右側——そして、更に左側からも若干遅れてこつちに怪物を引き連れた冒険者が接近中。

まさか、ありえない。俺達を襲撃する理由が無い。「ロキ・ファミリア」に「ガネーシャ・ファミリア」、どちらか一方でも敵に回すなんて、馬鹿な真似は有り得ないはずだ。なのに、襲撃を受けている。

——現状を鑑みるに、これは襲撃で確定している。

徐々に距離が詰められる後方に視線を向け、十字路の方へを駆けていく。このまま十字路に飛び込めば奴らの思う壺だ。しかし、現状においてとれる手段は少ない。

「接敵まで残り、二十秒」

「おい、ミアアの言う事が本当なら不味いぞ」

「此方から攻撃しては駄目です！ 向こうから攻撃されるまでは絶対

に攻撃してはいけませんよ！」

「でもこのままでは乱戦に」

接敵まで二十秒。ヴェルフがどうすると視線で訴えかけてきて、リリが警告の声を放つ。ミコトが動揺しながらも刀に手をかける。

ベルはどうすべきか迷っているのか、動揺する瞳が此方を見た。

「どうしよう、どうすべきかな」

「……………」

襲撃されている。そして、既に逃走不可能な状況に陥っている。どうすべき、なんて俺にもわからない。

しかし、このままぶつかり合えば勝算は皆無。俺達に出来るのは――

――残り十秒。

「リリ、バックパック破棄。ベル、正面突破する。ミコトとヴェルフ、リリはヴァンとキューイの背中にしがみついて」

「ミリア様ツ、こちらから攻撃してはいけませんっ」

「四の五の言つてられる状況じゃないわ、とにかくもう時間が――

――ああもう、【我は奏者、奏でる者成りて】

説明する間もなく、広い十字路にパーティは侵入した――そして、予定調和の様に正面方向と右方向から怪物を引き連れた外フーデットロー套姿の冒険者が姿を現す。

行動が遅すぎた。慌ててクラスを変更して詠唱を行う。

「【我は操者、操る者成りて――――なんじ汝は傀儡くぐつ、五指奏でる調べに踊れエツ！】

ヴァンの背中に背負われていた木箱の蓋が弾け飛ぶ。突っ込んできた集団に木箱の蓋が当たりかけるも普通に回避され、曲剣で切り払われ、意味が無い。無論、これは攻撃ではないが。

ギリギリ、パーティが大波に飲まれる前に詠唱を終える事ができた。しかし、それは焼け石に水だ。

「う、おおおおおおおおおおおおおッ!!」

「み、みなさんッー!」

「全員密集を」

衝突地点の中心であつた俺達を起点に、大乱戦が巻き起こる。

勢いよく追走速度のままぶつかりあつた怪物達、黒犬や一角兎が吠え狂いながら同士討ちを始める中、皆が衝撃を回避せんとバラバラに動き——ヴァンの首が飛んだ。

「ヴァンッ!」

襲撃者の一人が振るう巨大な曲剣——いや、朴刀か。たつた一閃でヴァンの首が飛び、その勢いのままヴェルフに迫る。

「ヴェルフッ!」

「ぬっ、おおおおおっ!」

ゴシヤツという鈍い音。ヴェルフの持つ大刀と似た、巨大な朴刀がぶつかり合い、大男のヴェルフが呆気なく吹っ飛んで視界から消える。

攻撃された。向こうからの攻撃、認識して意識を切り替える。

人形展開。ヴァンの背負っていた木箱から飛び出した『青銅の騎士人形』三体と、一体だけ奮発して作成した溝付甲冑を身につけた、『鋼鉄の騎士人形』。

急ぎ操り飛び出させた人形が帆盾を構えつつ飛び出し——三つ目、背後から迫っていた怪物進呈が後方から乱戦に突き刺さる。

一瞬だ、一瞬で『青銅の騎士人形』二体が呑み込まれ、魔法の効力外、破壊されて屑鉄と化した。

「ミリアッ!」

『鋼鉄の騎士人形』に身を守らせつつ、キューイを探す。酷い乱戦、既に收拾を付ける事は出来ない。ミコトが必死に応戦しヴェルフを庇っている様子が微かに確認できる。リリはベルが抱えながら戦っている様子だ。

色違いの外套の冒険者達。派閥不明の集団は怪物を押し付けた端から反転、此方への攻撃を開始している。

四方八方を取り囲む怪物、そしてその怪物を飛び越え舞う様に襲い来る集団。人形操作を行いながら、ズタボロになった最後の『青銅の騎士人形』で迎え討とうとするも、蹴りの一撃で粉碎。唯一残った『鋼鉄の騎士人形』も無数の凹みをその身に刻みながらも長剣で敵を切り払い、帆盾で殴りつける。

「変なモン使うんだね、あなた」

「ッ!?!」

腕に何かが絡み付く。視線を向けた先には鞭を手にした外フレットロープ套の冒険者。

声質からして女——どこかで聞いた様な覚えのある声に動揺して反応が遅れる。致命的な隙を晒した俺は、瞬時に腕に絡み付いた鞭によって引っこ抜かれる様に人形から引き剥がされた。

「ミリア様ッ!」

天井スレスレまで勢いよく吹っ飛ばされ、放物線を描いて怪物の頭上を飛び越え、一瞬だけ聞こえたりりの声が遠ざかる。

皆と分断された。地面に叩き付けられる寸前、赤い影が俺を受け止める。

「キューイ、何処に行つて——」

何処に行つていたのか。文句を零しかけ、キューイの身体に無数に突き刺さる槍を見て言葉を失った。

多分、投げ槍ジャベリンの類、にしてはおかしい。その槍には縄が結ばれており——キューイが声を上げるより前に、縄が引かれたのか、苦悶の悲鳴を零したキューイが一瞬で引つ張られて飛んでいく。

赤い飛竜が飛んでいく先には数人の冒険者。片手には縄、キューイの身体に突き刺さる槍とつながったそれを使い、引き寄せると同時に——反対の手に持った無骨な刃でキューイを解体した。

一瞬でバラバラだ、首が落ち、翼が切り分けられ、胴体から内臓が零れ落ちる。瞬く間の出来事に言葉を失うさ中、数人の冒険者はフードを外して此方を見た。

褐色の肌をした、女冒険者達。アマゾネス、そして彼女らの特徴的な姿から襲撃者の派閥に気が付いた。

「イシユタル・ファミア」ッ!?! どうしてこんな事をつ」

「あー、一瞬で気付いちやうんだ。やっぱキミ凄いやねえー」

怪物の怒号、ヴェルフやミコトの悲鳴染みた雄叫び。リリがベルの名を呼んでいる。最後の人形が抵抗虚しく碎き壊されて操作魔法の効果が切れる。

酷い乱戦の外側、いつの間にか鞭を持ったアマゾネス—— 歓楽街で声をかけてきた、名称不明の戦闘娼婦が場違いにも程がある能天気な声で話しかけてきた。

「サブマシンガン・マジック」【リロード】

「ひゅー、かつこいー。良いなあ、私普通の魔法使えないし羨ましいよ」

まるで挑発するかのようにつこりと笑顔を浮かべていた彼女は、無造作にフードトローブを脱ぎ捨てる。その体は相変わらずの踊り子を思わせる派手な衣装。そして、無数の帯革ベルトに固定された各種武器。

「そういうえばー、自己紹介がまだだったかなあ。私ね、【戦役の女王】っていつてねえ、まあ、どうでもいつか」

可愛らしい笑みを浮かべ、無骨で鋭利な刃が無造作に取り付けられた手甲を装着するその人物。

二つ名を聞いて背筋が凍る。Lv. 3、そして「イシユタル・ファミリア」において滅多に姿を現さない気紛れな女戦士アマゾネス。

「というわけでー、【高らかな宣言を、神託を聞け】」

彼女の扱う魔法—— 呪詛カースは有名過ぎた。効果が二種類存在する代物。

詠唱はそれなりに長い。一度の発動でかなりの代価を支払う代わりに、発動する効力次第で最悪の事態を引き起こす。

「【気紛れな女神の告げる音を】」

悠長に両手を広げて詠唱するアマゾネス。彼女に銃口を向けようとし—— キューイを解体したアマゾネス達が一斉に躍りかかってくる。

剣が、槍が、斧が、棍が、古今東西、ありとあらゆる武器が襲い来る。鈍器の奏でる鈍い音色、刃物が奏でる鋭い音色、女戦士達が挙げる雄叫び染みた鬨の音。聴覚全てを支配する音色の中で、その凶兆を告げる詠唱がやけに耳に残る。

「【戦場に吉兆を、戦場に凶兆を】」

必死に攻撃を掻い潜りながら反撃に魔法じゅうを放とうとするも、相手は

数で囲んで詠唱すらさせない様にと武器を振るってくる。マジックシールドが一瞬で罅割れ、時折それらを貫く一撃が肌を掠っていく。

「音は告げられた——与えられた神託は——」
詠唱を止めねばと何度も銃口を向け、連携によって一発も発砲できないままに、相手の呪詛の詠唱が完了する。

「——汝の定めと知れ」
此方に向けられた視線。怪しく光るその眼に睨まれた瞬間、体の動きが鈍る。

まるで俺だけ世界から切り離されたかのよう、俺だけが時間から取り残されたかのように、周囲の動きが加速したのかと勘違いしそうな程に、速度差が生まれる。

呪詛^{カース}。効果は——短時間のステイタスの封印、またはステイタス譲渡。

効果が無作為^{ランダム}で発動するモノだ。自らが溜めていた経験値^{エクセリア}を一定量相手に与えるか、自らのステイタスを永続低下させて相手のステイタスを強制封印して無力化する。

効果を選べず、敵に使って強化してしまう事もあれば、味方に使ってステイタス封印をしてしまう事もあって使い辛い呪詛。しかも発動する度にステイタスダウンという過剰な代価^{ペナルティ}を支払う必要のあるモノ。

その代価^{ペナルティ}さえなければ、「イシュタル・ファミア」で最強だったかもしれないと謳われた事もある、堕ちた女戦士^{アマゾネス}。

「やったあー成功だねえ。おやすみ」
最悪の効果を引き当てた。ここぞというタイミングで発動した、ステイタス封印。

気楽そうな声。周囲のアマゾネスの動きを追う事も出来なくなり、神の恩恵が封じられて魔法も使えない。

当然、マジックシールドの効果も消え失せ、無防備を晒す事になる。元から低かった力も、耐久も意味が無い。ただの一般人にまで落ちた身体能力で抵抗なんぞ出来る筈もなかった。

——鈍い音と共に意識が飛ぶ。

「くそっつ!?!」

最期の一匹であった黒^{ヘルハウンド}犬をヴェルフが切り捨てる。

彼の周囲には数え切れない程のモンスター^の死骸と、灰がうずたかく積もっていた。

ヴェルフは大刀を杖代わりに突きさして体を支え、目元を歪めながら周囲を見回す。

「どこの派閥だ、あいつ等は!?!」

「わかりません!?! ベル様もミコト様も戻ってきませんし、ミリア様だって……!?!」

苛立ち交じりのヴェルフの絶叫に、リリが取り乱した悲鳴を返す。

いたぶる様にヴェルフとリリを殺さない程度に攻撃し、好き勝手怪物を虐殺していった外^{フーデットロップ}、套の集団は嵐の様に姿を消した。彼らの仲間、三人を道連れにし、とある言葉を残して。

「……『仲間を殺されたくないや騒ぎにするな』って言ってやがったな」

「…………ベル様、ミリア様、ミコト様の三人が連れていかれました」

突然の襲撃、最初の衝突直後にキューイに突き刺さる無数の槍、そしてそれに取り付けられた縄によって乱戦から引つ張り出されていった飛竜を見ていたヴェルフが舌打ちを零す。

「狙ってやがったな、真っ先にキューイを潰しにきてやがった」

「ミリア様もです。リリ達から真っ先に切り離しにかかってました……」

残された二人が襲撃者の行動から考察を行いながらも、ボロボロの体に鞭打って仲間の捜索を行おうとする。

そんな彼らを、通りかかった上級冒険者が見つけた事で大騒ぎとなった。

「——うそ」

大騒ぎとなった被害者達の叫び声が遠くから響く、迷宮の一角。

隠す様に置かれたカーゴのすぐ横で、春姫は青褪めた顔で足元を見

つめていた。

今にも崩れ落ちそうな程に憔悴した彼女の視線の先、ぼろぼろになって意識を失った白髪の少年と、黒髪の少女が横たわっている。

「クラネル様……ミコト様」

呆然と立ち尽くす彼女の周囲では、襲撃成功を喜ぶ声を上げながらアマゾネス達が撤収準備に入っていた。

「よいしょっと、はい【魔銃使い】の縛り上げ一丁上がりー」

無造作に、三人目が倒れていた少年と少女の傍に追加される。

金髪で小柄な少女。一際小さなその体には、無造作に鎖が巻き付けられていた。

『精錬金属』製の、彼女専用を持ち込まれた鎖だ。

魔力伝導率が非常に高く、下手に魔法を使おうとすれば巻き付いた鎖が吹き飛ぶ。当然、彼女も無事ではすまないだろう。魔法使いを封じるのにつかわれる常套手段である。

「そん、な……ミリア様まで」

絶句し言葉を失う春姫。

「何であんな不細工な小娘まで拾ってきたア、持ち帰るのは兎と竜だけの筈だろう」

「……アンタ話を聞いてなかったみたいだね。人質だよ、ひ・と・じ・ち。こいつを殺されたくなけりや大ごとにするなって残った奴らに言っただろうに」

巨女のフリユネとアイシャが言い争う中。

春姫は、か細く震える声で尋ねる。

「アイシャさん……私達の標的は、この方たちだったのですか？」

「……そうさ、イシユタル様の命令でね」

嘆きに満ちる春姫の前で、無造作に標的とされてしまった者達がカーゴに詰め込まれる。

遂に耐えきれなくなった春姫が、崩れ落ちた。

「さっさと帰るよオ、役立たず共はさっさと働きなア」

「はあ？ 帰るウ？ 馬鹿かアンタは、まだ仕事が残ってんだろうが」
意気揚々と帰ろうと宣言するフリユネに、アイシャが食って掛か

る。

まだ、仕事が残っている。その言葉に青白い顔をした春姫が顔を上げた。

「ま、まだ、誰かを……」

襲うのか。そう問いかけるよりも前に、一人のアマゾネスが駆け込んできて声を上げた。

「予定通り奴らが18階層を出発したよ」

「アア、そういえばそっちもあつたねエ。そうだ、アタイがそのカーゴを地上に運んでおいてやるよオ、代わりにお前達は残りを始末してきなア」

フリユネが億劫そうに表情を歪め、カーゴに視線を向けていけしやあしやあと言い放つ。

「はあ？ 馬鹿じゃねえの？」

「フリユネになんて任せられないし」

「イシユタル様も『フリユネにだけは任せるな』って言われてるしねー」

アマゾネス達が口を揃えて巨女の言い分を切り捨て、アイシヤが溜息交じりに呟く。

「良いから、襲撃地点に向かうよ。ほら、春姫もはやく立ちな」

言葉を失った狐人の少女は、アマゾネス達に連れられて移動を開始した。

「なあ、なんかつけられてないか？」

灰色のフードから覗く気だるげな眼が声を放った猫人の青年に向けられる。

「ヘステイア・ファミリア」遠征隊のリーダー、猫人のディンケがぼつりと呟くと、後方で警戒に当たっていた狼人の少女が穂先が欠けた槍を見ながら応えた。

「確かに、なんかずっとこっち見てるな。何処の派閥だ？ 横取りでもしようつてのによ」

大型のカーゴを引く遠征隊。

そのカーゴには依頼の品として目一杯、迷宮で採取できる植物、採掘できる鉱石、そして怪物がドロップする体の一部が詰め込まれていた。

「リヴィラでボールスに売ってくれんのかって声かけられたしねー」
彼らが18階層にある冒険者の街『リヴィラ』に立ち寄った際、カーゴ一杯に積まれた物を見て数多くの住民が目を輝かせて声をかけてきたのだ。

大荷物を持って迷宮を移動する危険性を考えれば、あの場で換金していく者も数多い。そしてこれだけの荷物を持って地上に帰るのも一苦労と言う事で、彼らは自分の所で換金しないかと声をかけてきたのだ。

無論、これは依頼の品であってただの採取品ではないので換金なんてできる筈もない。

そして、そんな沢山の品を抱えた彼らを狙って横取りしようとする冒険者も居るかもしれない。そう考えたデインケは即座に首を横に振って否定した。

「今の俺達を襲撃したらガネーシャ様も黙ってないだろうし。ロキの所もそうだろう？」

「だな、ロキも黙ってないだろうしな」

大盾を背負ったドワーフ、グランが呆れ混じりに呟く。

今の自分たちを格好の獲物と襲撃してくる馬鹿は居ないだろう。と呟いて俯いて歩くアマゾネスの少女に視線を向けた。

「それより、サイアはいつまで凹んでるんだ」

「うう……剣があ……」

ぼろぼろと涙を零しながら彼女が手にしていた大剣———だったモノをグランに見せる。

溜息を零し、エルフの少女、メルヴィスが肩を竦めた。

「それは貴女の自己責任でしょう。私はちゃんと『壊れそうだからもう使わない方が良さ』って言ったわ」

「確かに、あれはサイアが悪い」

メルヴィスの言葉にもう一人のアマゾネス、イリスが大きく頷いた。

無茶苦茶な軌道、力任せな攻撃で怪物を片っ端からぶった切り続けた結果。サイアが持っていた大剣は砕け散った。久々の迷宮、それも遠征で気分良く怪物をぶった切り続けた結果である。

「しっかし、持ち込んだ予備含め全部砕くとかどんな馬鹿力だよ」

「剣が悪いよう」

「……それ、鍛冶師の前で言うなよ？ 泣くぞ」

デインケが半眼で砕けた剣の柄を持って泣いているサイアに指摘するが、彼女は一切聞いておらず、涙を拭って柄を掲げた。

「今回の報酬でテイオナさんみたいに超固金属製の^{アダマント}大剣作ってもらおう！」

「……あー、あの人も武器よく壊してたっけ」

「ロキ・ファミリア」が誇る第一級冒険者、同族の彼女が使う武器もまたよく壊れており、鍛冶師から破壊者と呼^{クラッシュヤー}ばれている事を思い出したファイアが呆れ声を上げた。

迷宮中層とはいえLv. 3が四人も居る事で危険度的に大したことも無く、荷物は全てカゴに放り込んでいる為皆が身軽。故に皆が談笑しながら進むさ中、灰色のフードを微かに持ち上げたヒューマン、ルシアンが死んだ目で呟く。

「なあ、誰か馬車馬の如く使い潰されかけてる俺にかける言葉はないのか」

「あとすこしだががんばれー」

酷い棒読みで応援の言葉を放った猫人に、ルシアンが鋭い睨み付けを行う。

その様子を見ていたエルフの青年、エリウッドが口を開いた。

「地上に戻れば好きだけ酒が飲めるだろう。デインケの奢りで」

「確かにそうなんだが……はあ」

肺の中の空気全てを吐き出す様に溜息を零し、ルシアンがカゴを引く。

その様子を見ていたファイアが呆れと感心を混ぜ込んだ表情でぼつ

りつつぶやいた。

「正直、化物染みてると思う」

三日間、遠征中ずっとカーゴを一人で引いていたルシアンの姿を見ていたから出た言葉である。

それも、荷物が増えて重量が増したソレを平然と引いているのだ。化物染みているという言葉もあながち間違いではない。

「それは私も思った。だってLv. 3で一番力が強い私でもびくともしないのに、Lv. 2で平然と引けるの凄いやね」

パーティの中で力が強いイリスですら引く事も押す事も出来ない荷物満載のカーゴ。それを平然と坂道だろうがなんだろうが引つ張っていく灰色フードの青年に思うところがあつたのか、彼女はふと悪戯っぽく笑うとそつとルシアンに近づいた。

「ねえ、帰つたらどう？」

「……悪いがそういうのは遠慮する」

唐突に背筋を伸ばして真顔になり、ぶつきらぼうに返すルシアンの姿に、デインケとエリウツドが目を弓なりに曲げてニヤニヤと眺め、グランが呆れ顔を浮かべる。

「女が苦手なの全然克服できてねえな」

「……三日、ずっと一緒に居ても駄目なのか」

「うるせえー！」

がやがやと楽し気に談笑を行いながら、15階層への坂を登ろうとした瞬間——デインケ達は一斉に武器を抜いた。

彼らの視線の先、進行方向に立つ一人の巨女。その背後にはカーゴと、無数のアマゾネス達。

【イシユタル・ファミリア】の【男殺し】アンドロクトノスフリユネ・ジャミールと、バトルベラ戦闘娼婦達だった。

「……オタクらも遠征か？」

臨戦態勢で半月刀を構えたデインケの問いかけ。

後をつけてくる不可思議な冒険者。そして、立ち塞がる【イシユタル・ファミリア】の戦闘員。異常事態に気付いたデインケ達が警戒する中、フリユネは無造作に髪をかき上げ口を開いた。

「アンタ達、運が良いよオ。アタイみたいな美しい女に——殺して貰えるんだからねエ!!」

宣言と同時に、到底目で追う事も出来ない第一級冒険者の一撃がカーゴを爆砕した。

飛び散る荷物、カーゴを囲んで警戒していたディンケ達が四方に吹き飛ぶ。

「糞っ、仕掛けてきやがった!? 皆無事かっ!」

煙幕の様に舞い上がる土煙に視界を奪われながらもディンケが声を上げた瞬間、視界を覆っていた土煙が吹き飛んで戦斧の一撃が彼に迫った。

目を見開き、半月刀で防御しようとし——首を掴まれて引っ張られる。

目の前の空間が軋む程の轟音を立てて振り抜かれた戦斧。握っているのは第一級冒険者だ。当然、ディンケの持つ貧相な半月刀では受け止めきれなかったことだろう。ルシアンがディンケを引つ張り離脱させなければそのまま死んでいた。

「馬鹿何してんだお前、死にてえのか!」

「助かったっ」

罵声混じりの言葉に礼を言いつつ、剣を構えた瞬間——二撃目が地面を爆砕する。

抵抗等無駄と言わんばかりに衝撃だけで吹き飛ばされたディンケが慌てて身を起こし、土煙の向こう側を見て舌打ち。

「ルシアンっ、くそっ」

「ちよこまか逃げるんじゃないよオ、早く『兎』を可愛がらなきゃいけないんだからねエ」

気色悪いとろける様な野太い声。土煙の向こう側から、ドスドスと足音を立ててフリユネが姿を現した——片手に何かを持ちながら。

「——ッッ!!」

「これで二人目、次はアンタだよオ」

無造作にディンケの前に持っていたそれを投げ出した。

一瞬で地面を真つ赤に染め上げていく、半身を失ったルシアンは姿に、ティンケが言葉を失った。

フリユネの方は、まるで愉しむかのように嘲笑の笑みを浮かべ、戦斧をティンケに向けた。

「て、テメエ、や——やりやがったなアツ!!」

第一級冒険者だとか、敵う筈の無い相手だとか、そう言った些末事が頭から抜け落ち、猫人が半月刀を強く握りしめ、身を沈めこませ——

ティンケが突撃するより前に、灰髪を揺らすアマゾネスがフリユネに殴りかかった。

「——くも」

「遅いねエ、不細工が調子に、乗るんじゃないよっ!」

殴りかかった拳は受け止められ、フリユネが無造作に左手で殴りかかってきたイリスを殴り返す。

弩砲の如き拳弾が、イリスの腹に叩き込まれた。

「がつつつ!」

体がくの字に折れ曲がる程の一撃、ティンケの真横を吹き飛んでいき壁に叩き付けられ止まる。

「イリスっ」

「……………くも……………くも」

壁にめり込んだ体を強引に引つ張り出し、血反吐を吐きながらも、死に体に鞭打つ様にふらつきながら踏み出したイリスが、憎悪に燃える瞳でフリユネを睨む。

「よくも、よくもサイアをつ!!」

彼女の血反吐混じりの叫びにティンケが悟る。フリユネは『二人目』と言ったのだ、一人がルシアンだとして、もう一人はサイアだったのだろう。

二歩、三歩進んで拳を握り締めて、今の損傷ダメージを感じさせない程の勢いと速度をもってイリスが突撃する。

「煩い不細工だねえ。小娘一人死んだぐらいでぎやあぎやあ喚くんじやアないよオ」

「俺も忘れて貰っちゃ困るんだよなあっ!」

「サイアの敵だあああああつ!!」

イリスに続き、デインケも突撃。肉薄して半月刀を振るおうとするより先に、呆気なくフリユネの拳弾が突き刺さり、デインケの意識が飛ぶ。

二撃目が叩き込まれたイリスもまた、耐えきれずに倒れ伏すも、それでも意識は失われていないのか血反吐混じりに憎悪の言葉を呟き続けている。

「して、やる……ころして、やる」

「煩いねえ、全く——死ぬのはアンタだよオ！」

フリユネは拳ではなく、戦斧を振り上げて止めの一撃を放とうとする。

——瞬間、フリユネの顔面に槌メイス矛が叩き込まれた。

「やらせんっ！」

グランの一撃を受けても微動だにしない巨女。攻撃を放ったグラ
ンが表情を歪める中、フリユネは動きを止めた。

顔面中央を綺麗にとらえた一撃。それでも損傷ダメージにならなかつた
らうとグランが大盾を構える中、戦闘娼婦バレーベラの一人が叫ぶ。

「フリユネを止めろおおおおおおおおおおおつ!!」

「——何？」

つい先ほどまで苛烈な攻撃でグランを攻めてきていたアマゾネス
達が、一斉にフリユネに掴みかかり、止めようとする。理解不可能な
状況にグランが眉を顰めた瞬間——フリユネの目がぎよろりと
グランを捉えた。

「な——」

「アタイの美しい顔に、傷を付けたねエ」

「馬鹿、そいつは殺すなっ！」「フリユネが暴走するぞっ!!」

全身を震わせたフリユネが、無造作に自身を止めようとした仲間を
殴り飛ばす。

呆気なく吹き飛んだ様子にグランが冷や汗を流し——叫ぶ。

「フィアッ、メルヴィスッ！ お前達だけでも逃げろおおおおお

おおっ!!」

大盾を構え、衝撃に備え——【不動城塞】の二つ名を賜ったド
ワーフは、盾諸共粉碎された。

「何してんだフリユネツ?!」

「ドワーフまで殺しちや意味無いじゃんっ?!」

「それどころかアンタが暴れた所為で狼^{ウエアウルフ}人の女に逃げられちまった
だろっ?!」

罵声を浴びせるアマゾネス達に対し、鏡を見て自身の顔に傷が無い
かを確認していたフリユネは溜息を零して大袈裟に呆れ返る。

「なんだいなんだい、アタイに文句ばっか言っつて。アンタ達がしっか
り捕まえてればこんな事にはならなかつたんだろオ? それに、アタ
イの顔に傷がつきかけたんだ、むしろどう責任をとってくれるだ
い?」

「ああ? テメエの顔に傷がついても変わんねえだろ」

「ゲゲゲッ、いくらアタイの顔が美しくても、流石に傷までは許容でき
ないよオ」

そうじゃない。とアマゾネス達が口を揃えて文句を零す中、二度目
の襲撃を終えて捕獲した者達を確認しながらアイシヤは軽く溜息を
零した。

15階層の片隅、襲撃した結果8人中3人が死亡、4人を捕獲、1
人に逃げられてしまった。

特に逃げられた一人、狼人の少女は投げ槍^{ジャベリン}を三本も刺されてなお、
一切の機動低下を起こさずに一目散に地上目指して走って行った—
——それも、縦穴を直接。

「はあ、縦穴を駆け上がるなんて予想外だったね。まあ、あの傷じゃあ
……」

途中で怪物に食われるか。とアイシヤが呟く。

「それにしても……フリユネの奴、殺す相手ぐらい選べないかねえ」
人質にしやすいLv. 2から真っ先に殺しやがって。そう呟いて

足元に転がる者達に視線を向けた。

憎悪に染まった瞳でじつとアイシヤを睨みつけている猫人の青年に、アイシヤは肩を竦める。

「運が悪かったね。アンタらは女神様の気紛れに巻き込まれちゃったのさ」

第一六三話

がたん、がたがた、と。

大きく揺さぶられる感覚を覚え、昏睡状態から覚醒する。

「……………、こは？」

重たい瞼を持ち上げて身を起こそうとして、気付いた。

頑丈そうな鎖が体に巻き付いていて身動きが出来ない。そして薄闇の中に見えたのは、縄で無造作に縛られた白髪の少年と黒髪の少女。どちらも俺の知る人物。

ベルとミコトの二人。目を見開いて最後の記憶を辿ろうとした所で——周囲の喧騒に気が付いた。

『フリユネが兎を攫おうとしてるよっ！』

『フリユネを止め——ぐあっ！』

『ゲゲゲゲツ、邪魔するんじや無いよオ!!』

ガゴンツ、と地面が揺れる。否、地面ではなく、カーゴだ。

カーゴに放り込まれて運ばれていたと察すると同時、カーゴの側面部分がへしゃげ貫かれ、大木を思わせる筋肉質で短い腕が——ベルを掴んだ。

「ゲゲゲツ、ベル・クラネルは貰っていくよオ」

「この馬鹿フリユネツ!」「イシユタル様の命令を忘れたのっ!」

「知ったこっちゃないねエ!! 邪魔だよツ!!」

フリユネの怒声と同時に、へしゃげていたカーゴの側面部分が打ち抜かれ、アマゾネスが一人飛び込んでくる。一撃で昏倒したのかピクリとも動かない。仲間相手に容赦無さすぎだろ。

壊れたカーゴの中から見えた景色に息を呑んだ。

「…………」

破損した壁から見えたのは歓楽街の中心部分、「イシユタル・ファミリア」の本拠だ。その本拠から別方向に向かってフリユネがベルを抱えてすさまじい速度で駆けていく後ろ姿があった。

——追わなくてはいけない。

【男殺し】の二つ名の由来通り、ベルが殺されてしまう。それだけ

は避けねばと魔法を詠唱しようとして——鎖が発熱した。

詠唱と共に練り上げる筈の魔力がそのまま鎖に吸われる。

『ミスリル』製の拘束具。上級冒険者でも何重にも巻かれれば破壊する事は難しく、更に『魔法』を使おうとすれば魔力伝導率の高い性質を持つ精錬金属ミスリルが反応して爆ぜる。

全身に巻き付いている今、もし万が一にでも爆ぜる事があれば——それも密着している為マジックシールドの効果も期待できない。良くて重傷、悪くて即死だろう。

ベルを担いだまま追跡を行おうとするアマゾネス達を殴り倒して逃げていくフリユネ・ジャミール。

鎖に巻かれて身動きが出来ない、このままベルを連れ攫われて良いのか？

——否。

たとえ重傷を負おうとも、ベルを連れていかせるなんてさせない。身を起こし、クラスを『クーシー・スナイパー』に変更。巻き付く鎖の間から窮屈そうに尻尾が飛び出すが構うものか。どのみち首回りには巻かれておらず、威力次第で重傷止まりで済む。

「狐キツネは化かし、鴉カラスは鳴いた」

『ミスリル』が魔力に反応して発熱しだす。最初は生温く、徐々に熱くなっていく。

「不味い、ミリア・ノースリスが目を覚ましてる！」「何っ、って『魔法』を使おうとしてる!？」「馬鹿やめろ自爆したいのかっ!？」

フリユネの方に注目が集まっていた影響だろう、俺が魔法を強引に使おうとしているのに気付いたアマゾネスが慌てて俺の方に手を伸ばす。咄嗟にアマゾネスの手を回避しながらカーゴの外に飛び出した。

足まで巻かれていたせいでまともに着地も出来ずに転がりながら、詠唱を続ける。

「灯せよ狐火、燃えろよ蓑笠」

鎖が真っ赤に熱せられ、身に着けるローブを、触れた肌を焦がしていく。焦げつく臭気と、人体が焼ける異臭。

周囲に居たアマゾネス達は戦闘娼婦ではなく下級団員か、もしくは上級でもLv. 2の戦闘娼婦候補だろう。明らかに異常な行動を起こす俺に驚いて皆が距離をとっている。

「一匙の灰、その身に塗せ——」

全身を襲う熱さが痛みに変わる寸前、力を込めて鎖を引き千切る。

魔力を吸い上げ爆発する寸前、耐久の落ちていた鎖を強引に引き千切った事を皮切りに爆発の連鎖が巻き起こる。周囲のアマゾネス達が悲鳴を上げて顔を庇う中、身を拘束していた鎖が爆竹の様に爆ぜ暴れ回るのを尻目に駆け抜け、いくつかの小爆発に全身を打たれ激痛を覚えながらも魔法を発動した。

「隠れ身ノ灰」

効果は劇的。焦げ付いたローブも、火傷を負った体も、全てが空気に溶ける様に消えていく。

既にフリユネの姿は見えないが、どの方角に行ったのかは記憶している。

焦げつく臭いで居場所がバレそうだと舌打ちした所で、更なる喧騒が弾けた。

「アマゾネスが拘束をぶち壊しやがった!」

「ヤバいつ、はやくアイシャさんを——ぎゃん!」

「よくも皆をつ!!」

後ろを振り返るまでも無い。別のカーゴから飛び出した人物が大暴れし、残された構成員を薙ぎ倒していく。それが誰なのか確認できないが、それでも重畳。

何処の誰だか知らんが、暴れに暴れて引き付けてくれるなら万々歳だ。今の内にフリユネを追わなくては。

「——絶対に逃がさない」

慌てて駆け戻って暴れる誰かを拘束しようとする戦闘娼婦達にぶつからない様にすり抜け、フリユネを追う者達の背を追った。

「あのヒキガエルを探せッ?!」

「イシユタル・ファミリア」の本拠、女主の神娼殿は大喧騒に包まれていた。

主神の命により、アイシャ率いる『戦闘娼婦』達がダンジョンでベル達、そしてデインケ達を奇襲した後の事。

一人、唯一傷が浅かった猫人の青年を伝言役として帰した後、人質として攫った4人の冒険者、そして肝心のベルとミリアをカーゴに押し込んでホームまで運び込む所までは順調だった。

しかし、団長である巨女が突如として見張りのアマゾネス達を殴り飛ばし、ベルを連れ去って姿を晦ましたのだ——それだけなら、まだマシだった。

「ミリア・ノースリスは絶対に逃がすな!？」

巨女が起こした命令無視の、独断行動は最悪の事態を引き起こした。

目を覚ましていた【魔銃使い】ミリア・ノースリスの逃亡を許してしまったのだ。

もし、彼女が派閥の敷地外へ助けを求める真似をすれば——たちまち「ヘステティア・ファミリア」と友好関係にある都市強豪派閥や都市最大派閥が攻めてくる事になるだろう。

まさに天地が引つ繰り返った様な騒ぎに発展し、アイシャが放つ大声の指示の元、獣人やエルフを含めた高級娼婦すらも搜索に駆り出されている。

「あんのデカブツウ……!？」

「主神様に言い付けられてるのに『食う』つもりだ!？」

非戦闘員すらも駆り出され、総動員で搜索が進められる中、女戦士達は激怒していた。

「目を付けてたドワーフぶつ殺しやがって!？」

「猫人も伝言役になって『食う』事が出来なかったのに!？」

「優先搜索対象はミリア・ノースリスだ! 間違えるな!!」

一部がフリユネ搜索に血眼になる中、イシユタルもまた、不満げに目を細める。

宮殿の中でも神かい高階に位置する広間。赤絨毯が敷き詰められ

玉座を思わせるその室内では、巨大なソファア―に寝そべる女神と、その前に跪く一人のアマゾネスの姿があった。

「ミリア・ノースリスに逃げられたそうだな」

「うん、やっちゃった」

跪いていたアマゾネス、【戦場の女主】レーネ・キュリオは顔を上げると、いつそ図々しきを感じる程に平然と、それも煽るかのよう舌を出して頭を搔く。

女神を打羽うちわで仰いでいた上半身裸の従者達、美男、美少年達が鋭くレーネを睨む。

「イシュタル様の命を実行できなかった癖に、ふてぶてしい女だ」

「えー、それは酷くなーい？ だってステイタス犠牲にしてもサクツと封じて捕まえたのは私だよ？ そもそもフリユネの手綱を握り切れないイシュタル様の責任だと思いまゝす」

従者達の非難の声に対し、けろりとした様子で反論まで口にするレーネ。しかも悪いのは主神イシュタルだと明確に口にし、顔に泥まで塗る始末。

女神イシュタルの眉間に皺が寄り、レーネを鋭く睨みつけて口を開いた。

「誰に向かって口をきいている」

「怖い怖あゝい、私の主神様あゝ」

へらへらと、悪びれる様子も無いアマゾネスに従者達がみるみるうちに赤くなっていく。主神を敬う様子を見せないどころか、平然と泥を塗る姿に不快感を示した青年従者タムズが無言で護身用の剣の柄に手をかける。

「ふん、ミリア・ノースリスの拘束が不完全だったのではないか？」

「無い無い、つていうか見張りの子に聞いたんだけどさあ——半分自分爆じみた方法で拘束ぶつ壊したみたいなんだよねえ」

魔法使い封じとして知られる精錬金属ミスリルを用いた拘束具。鎖という形ではあったが、レーネに言わせれば拘束は完璧。魔法が封じられていて、なおかつ基礎アビリティの力・耐久が低い小人族バルサム。

その程度なら見張りのLv. 2でも暴れられても鎮圧できると思っていたが——ミリアはその予想を遥かに超えた。

あえて、あえて魔力を精錬金属ミスリルに吸わせ、本来なら魔力暴発イグニスファトウスしないとおかしい様な状態で魔法詠唱を完結させ、更に赤熱した鎖をなげなしの力で壊すと同時——爆竹の様に爆発を起こした鎖を周囲に撒き散らして見張りの隙をついて透明化。

その時、人質のアマゾネス、イリス・ヴェレーナが暴れ出して混乱が加速。結果としてミリアにはおめおめと逃げられる羽目となる。

「これで私が悪いって言われるのは心外だなあ」

肩を竦めてへらへら笑うレーネ。目の前のアマゾネスが一切反省する気が無い——そもそも反省点が無い——事に女神は深い溜息を零し、睨み付けて命じた。

「ミリア・ノースリスをもう一度捕えろ。絶対に歓楽街から逃がすな、出来なければ——」

「あーはいはい。わかりましたあゝ……全く、私悪く無いじゃん。そもそもヒギガエルの手綱をちゃんと握ってくればさあゝ」

命令の途中、女神の言葉を遮ると同時にレーネは立ち上がり、適当な返事を返しながらか手を振って女神に背を向ける。これ見よがしな溜息や、肩を竦める動作、そしてしまいには肩越しに女神を見て舌打ちまで行い、部屋を出て行った。

女神イシュタルが制していなければ、従者達は護身用の剣でレーネを滅多刺しにしていただろう。

それほどまでに怒り心頭な従者達を抑えつつ、イシュタルは目を細めて青年従者タムズに告げた。

「一人を残し、他の人質は全てホームの外の歓楽街に移せ。全員バラバラの位置にしろ」

「畏かしこまりました」

主神の指示に恭しく一礼し、青年従者は広間を後にする。

巨女の行動を発端とした混乱によって、宮殿の隅々まで広がっていた騒動は、次第に外にまで波及していった。

「……………(こ)は」

ホーム一帯が喧騒に包まれる中。

春姫は自室として用意された部屋の寝台の上で目を覚ましていた。

外から聞こえる喧騒と、自身の最後の記憶を辿り、何が起きているのかわからずに首を傾げる。

二度目の襲撃を行う。そう聞かされて歩き出した後の記憶が綺麗さっぱり抜け落ちていく。既に迷宮から帰還している事から、襲撃を終えたのだらうと予測を立てて部屋の扉を開けようとし、駆け回る娼婦の声を聞いて目を見開いた。

「ベル・クラネルとフリユネは見つかったか？」

「こつちには居ないよ」

「あつちの通路の行き止まりにミリア・ノースリスの痕跡はあつただ」

「何処だそれっ」

「二階の南の方、フリユネが逃げていったのと同じ方角だよ。でも姿は見えなかった」

騒々しく春姫の部屋の前を後にするアマゾネス達。

彼女たちの会話を聞いた春姫が目を見開き、状況を大まかに理解する。

このまま普段の様に何もせずにいれば、どうなるのか。それを想像した狐人は一人表情を引き締め、決意を抱く。

廊下を駆け、一つの倉庫に辿り付いた。扉の格子窓から見えるヒューマンの少女を見て息を詰まらせる。

ベル達を探す為に見張りすらも駆り出されている中、春姫は呼吸を落ち着けつつ廊下が無人である事を確認し、背伸びして格子窓から鍵を投げ入れた。

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい」

未だに意識を失う知己に向かって、春姫は呟く。

顔を上げ、獣の耳をピンと立てた彼女は、急かされる様にしてその場を後にした。

床も壁も天井も、剥き出しの石材で作られた窓の無い部屋。

ひんやりとした地下特有の冷えた空気に満ちた部屋に響く肉を打

つ音。鞭が空気を切り裂き、ローブを裂き、肉を抉る。

口から飛び出しかけた悲鳴を噛み殺し、口元に笑みを浮かべて目の前の化物を見上げた。

「ゲゲゲゲッ、どうやってこの場所を知ったんだあい？」

目の前の巨女の手が、俺の頭を掴む。

力を込められれば瞬時に俺の頭は握りつぶされるだろう。抵抗しようにも天井から伸びる鎖で吊るされていて何も出来ない。ご親切に、俺の首には魔法封じの鎖が何重にも縛られている——カーゴの中でやった様に、無理矢理破壊する真似なんてしようものなら俺の首が飛ぶだろう。

流石に二度目ですらかなりの傷で、今回は急所の首回り。力業での開錠は不可能だった。

「偶然気付いただけですよ」

嘘だ。

本当は他のアマゾネスが『こっちの方に行つたはずなのに』と首を傾げながらフリユネを探し回っているのを見て、この辺りで姿を晦ましたと予測し、重点的に探した結果だ。

「とぼけるんじゃないよお」

薄暗い通路、行き止まりとなっていた先にある剥き出しの床。他の場所の様に敷物がしてある訳でもない一角、そのあつた一枚岩から削りだされた床材の一つ、それがまるで何度も何度も持ち上げて戻してを繰り返したかのように、石材の床板が磨り減っていた。

後は簡単だ、元々地下に建造物を作っていたかもしれないと予測は出来ていた。だから迷わずその床材を引っぺがした——正確には床材としか見えない様に細工された隠し扉を開けた。

耳を澄ませば微かに聞こえるフリユネの上機嫌そうな鼻歌。確信と同時に飛び込んで通路を進み——フリユネの前に姿を出してしまつた。

透明状態インビジビリティの効果が切れた状態で、目の前に飛び出したのだ。間抜けにも程がある。

焦りから自身の魔法が解けているのに気付かずに突っ込み、見事に

捕縛された。そして、今や拷問部屋に閉じ込められている。

ちなみにこの地下通路や部屋は全て「イシユタル・ファミリア」が作り上げたモノではないらしい。ペラペラとこの場所について自慢げに話すフリユネ曰く『ダイダロス通り』を作り上げた変人が好き勝手にやった名残の代物だそうだ。

気に入った男をここに連れ込んで廃人にしていた——そして、今回はベルが連れ込まれた。

「全く、不細工で生意気な小人だよ。アンタがただの不細工だったらすぐに口封じで殺してやったつてのに」

目の前でごちゃごちゃ言いながら、拷問器具をがちやがちやと弄繰り回す姿に舌打ち。

俺の右手の爪は、床に転がっていた。無造作に爪と爪の間に針を差し込むといった拷問から始まり、爪を剥がされ、鞭打ちまでやられてしまい、今や背中を見るも無残な事になっている事だろう。

手慣れた様に爪を剥いでは問いかけを行ってくる巨女、全く似ても居なくせに糞女を思い出させる妙に甘ったるい口調。それに加え——魔石を使用した電撃装置まで用意してあるとは、恐れ入った。

過去、あの糞女から受けた忌々しい拷問を彷彿とさせる代物だった事は幸いだ。電撃ぐらいで音を上げる程、落ちぶれちやいない。フリユネ曰く『最新式のを試してやる』との事だったが、俺にとって電撃は慣れ親しんだ代物ではない。

むしろ爪を剥いだり、鞭打ちされた方が遥かに効く。

「全く、ベル・クラネルが目覚めるまでのお遊びの積りだったけど、強情で生意気、見ているだけで殺したくなる顔だねえ」

電撃を放つ魔石道具を木製の台に戻し、おもむろにフリユネが視線を投げ出した先。

壁に取り付けられた魔石灯の下、腰を付けて足を投げ出し、両腕を上にした姿勢で壁に凭れ掛かるベルの姿があった。両腕は銀色の鎖で何重にも縛られていて、拘束されている。

意識の無いベルに手を出すより、俺の相手でもしりと挑発した甲斐

は、少しはあっただろうか。
……………最悪な事に情報らしい情報はまともに入手できなかったが。

どうして「イシユタル・ファミリア」が攻めてきたのか聞こうにも、拷問する側のフリユネに無暗に問いかけなんぞ飛ばした結果、ベルにとぼつちりがいってしまえば取り返しがつかない。

とはいえ、時間稼ぎは続ける積りだ。ベルが目覚まらずにこのまま時間経過でロキかガネーシャが動いてくれれば……………。大丈夫、後何時間でも拷問に耐えてやろう。

痛い、程度で家族が救えるのならいつまででも耐え凌ごうじゃないか。

「……………う」

決意新たにフリユネが新しい拷問器具のトゲトゲ付きの棒を手にとったのを見て喉が干上がった瞬間、室内に呻き声が響いた。

無意識に俺の口から出た物かと一瞬だけ考え、否定せざるをえない光景に息が詰まった。

フリユネが、ベルに、視線を向けていたから。

「ゲゲゲゲゲゲッ！ 目を覚ました様だねえ」

未だに朦朧としているのか、僅かに動いた瞼が微かに開いてぼんやりと石室の中を眺めはじめるベル。

——最悪だ。

目覚めたベルと目が合う。

咄嗟に拷問されていた跡を隠す様に手を握り、爪を剥がされた手を隠す。向きからして背中への鞭打ちの痕も見えない。

何が起きているのかわからずに目を白黒させだした少年を落ち着かせようと口を開くより前に、フリユネが大声で叫んだ。

「ここはアタイだけの愛の部屋でねえ。まあ今日は特別招待客も居るけど、気にする事無いよ。この不細工な小人と、アタイの美しさを比べながら楽しむのさあ」

心底愉快そうにしゃがれた声でとんでもない事を喚くヒキガエル。まさか、まさかとは思うが——俺の目の前でベルを拷問にかける

積りか。

太い指で鍵束を揺らしてベルに見せつけるフリユネ。

『ダイダロス通り』が隣接している影響さあ。宮殿ホームの地下にはこんな秘密の部屋とか通路がある」

先ほど俺にしたのと同じ解説を懇切丁寧に、とても愉快そうに気色悪いへしやがれた声で行いはじめる。

「アタイは気に入った男をいつもここに運んでるのさあ。ここはあの不細工共も、イシユタル様だつて知りはしないよお」

誰も助けには来ない。主神も、同派閥の仲間も、誰もこの場所の存在を知らない。だから助けなんて期待するだけ無駄。そう言い切つて絶望する様を愉しんでいるらしい。

——最初から存在を疑い、注視して調べればわかる程度には磨り減り等で摩擦しているから、フィン辺りは気付くだろう。と言うのは黙っておく。

それよりも、ベルに覆いかぶさる様にフリユネが近づいていくのを見て、血の気が引く。

「誰かの食残わしぼれなんてまっぴらゴメンさあ。食うんなら最初、旨いところを全部一人占めえ、そうだろお？」

俺から見えるのはフリユネの後ろ姿だけ。その表情は想像するしかないが——醜悪な笑みなのは間違いない。

更に一步、フリユネがベルに近づいて覆いかぶさり——パニック恐慌を起こしたベルが悲鳴を上げた。

「ひっ、ひいいいいいいいいいいいいいいいつ!？」

激しく鎖が揺れる音、情けない悲鳴がフリユネ越しに響いてくる。

先ほどまでの拷問は耐えれた。どんな痛みも屈辱も、耐えて見せよう。だが、ベルに対し手を出す事だけは、ダメだ。

「やめなさい、フリユネ・ジャミール」

「……誰に命令してるんだあい?」

「アンタよ、ヒキガエル」

やめろ、ベルには手を出させない。

肩越しに振り返るフリユネは、無造作に近くにあつたバチバチと音

を立てる魔石道具を手を取った。

「アンタはこれが好きなんだろう？ 反応で分かるよ、身を小さく縮こまらせて、期待してるんだらうお〜？」

バチバチ、バチバチ、と。

これ見よがしに電撃を飛ばす道具を此方に向ける。そのまま近づいてくるフリユネの後ろから、ベルが喚く声が響き——懐かしい電撃の感触。

身体を走り抜ける電撃が、神経を滅茶苦茶に犯して体が勝手に跳ね回る。口からは悲鳴にもなり切れない絶叫が飛び出しかけ、歯を食い縛る事も出来ずに意識は一瞬で発火スパークを起こしたかのように飛び飛びになる。

ゲゲゲツ、と。

特徴的に嗤うフリユネの嘲笑が聴覚を奪い去られ——忌々しい台詞が一瞬だけ脳裏を過る。

前世、何か大きな失敗をして拷問を受けている時に放たれた、糞女の台詞。

『詰めが甘い。何度言われてもアンタは学習しないわね——別にそっちの方が御しやすいから良いけど』

何故、この時期で、あの時の事を思い出したんだろうか。

弾ける電撃が一際大きくなると同時——意識が飛ぶ。

——僕は言葉を失っていた。

声が聞こえていた。誰かの苦悶を押し殺した様な、声が聞こえていた。

僕が目を覚ますと其処は窓のない石室、微かに見える奥には黒々とした鉄格子。部屋に置かれた数多くの口にするのはばかられる拷問器具の数々。そして、張り付けにされたミリアの姿。

状況が理解できない僕が最後の記憶を掘り返すさ中、フリユネさんに迫られ——パニック恐慌を起こした。

情けない悲鳴を上げながら、ガシャガシャガシャ!! と、鎖を何度も揺すって、覆いかぶさる巨女から逃げたい一心で暴れる僕を他所に、ふとフリユネを制する声が聞こえたんだ。

ミリアが、声を上げていた。

そういえば、ミリアも居たんだと胸をなでおろすと同時、フリユネさんが何かを木卓から手に取った。

カチリと、何かの駆動音。それと同時に響くバリバリイツと言う耳を劈く電撃の音。

フリユネさんの巨体で隠れて見えない、その向こう側で何が行われているのか想像して———手首が擦り切れ血が滲むのも厭わずに死に物狂いで鎖を引き千切らんと暴れる。

「———めろ！ やめろおおおっ!!」

「煩いねえ、アンタもこの後たつぷりと楽しめるんだから焦るんじゃないよお」

フリユネさんが片手に持つ魔石道具をミリアに突き付けたまま此方を見た。その向こう側、巨女の影になって見えない向こう側で激しく火花が散っている。

悲鳴すら聞こえない。鉄錆の匂いと、焦げ臭い匂い、そしてミリアの匂いが交じり合い咽返った。

「おやあ？」

ふと、電撃が止んだ。

ようやく止めてくれたのかと安堵しかけ、フリユネさんの言葉に啞然とした。

「魔石切れかあ、全く……魔法無しで電撃で拷問できるとはいえ、三回使っただけで魔石切れしちゃうなんてねえ」

———魔石切れを起こしていなければ、続けるつもりだったんだ。

フリユネさんの巨体で隠れ、見えない向こう側。

僅かな白煙が天井に昇るのが見え、何の声も聞こえない事に心臓が凍り付いた。

「気絶しちまったみたいだねえ、おやおや失禁までしちまって、子供

はこれだからあ嫌いなんだよお〜」

無造作に魔石道具を卓に投げ、フリユネさんはそのまま近づいてくる。

「さて、お楽しみの時間といこうじゃないかあ〜。本当ならあの子供にアンタがアタイにメロメロになっていく様子を見せつけてやる所だったが、気絶してるんじゃないよお〜」

ミリアの安否に対する心配と、自身がこれからどうなるのかを予想した恐怖が交じり合う中、ガチガチと青くなつて震える僕に——
フリユネさんは顔を近づけた。

「ああ、美味そうだなあ」

蛙のモンスター、『フロッグ・シューター』に舐められたかのような錯覚を覚えた。

大きな舌で、べろり、と舐められたのだと理解した瞬間。

永眠しそうになった。比喩抜きで、天に召されると思った。

白目を剥いて天井を仰ぎかけ——フリユネの肩越しに僅かに見えたミリアの様子に正気を取り戻した。

焦げ付く匂い、失禁の跡、電撃の影響か揺らめく金髪、そして震える唇が『やめろ』と言葉にならない悲鳴を零し、半場意識の無い筈の濁った瞳でフリユネを睨みつけていた。

「寝台へ行くか、道具を使うか……………」

僕が、ミリアを守らないと。僅かに沸き上がったその気持ちを絶やさぬ様に心の中で叫び、火を着け、フリユネさんを強く睨みつける。

——守る、なんて言っておきながら。出来るのは睨み付ける事だけ。

なんて情けないんだろう。そんな風に心が折れかけながらも、歯を食い縛って耐える。

「暴れなよお〜。張り合いが無くちや詰まらないじゃないかあ」

「……………」

ぎよろぎよろと動く目と視線が合っただけで心が折れそうになる。でも、僕がここで恐慌を起こしたら、誰がミリアを助けてくれるのだ

ろうか。そう自身に言い聞かせ、必死に睨み付ける行為を続ける。

「全く——まあいい、最初は無理矢理だねえ」

覆いかぶさる巨軀が、右手で僕の口を掴み、服を破こうと左手で胸倉を掴む。

睨み付けながらも、僕の歯はカチカチと音を立てていて、目尻には涙が浮かんできて、体の震えは止まらない。

それでもみつもみつもなくしゃくり上げる事だけはしまいと、ともすれば奥歯を噛み砕かんばかりに強く歯を食い縛る。

そんな僕のなけなしの抵抗ですら、そそるといわんばかりに嗜虐的な笑みを浮かべたフリユネさんは、そのままのしかかろうとして——

「あアん？」

僕の足を——正確には、恐怖で縮み上がる……僕の股を——
——見た。

「ちツ………これだからガキは。しょうがない、精力くすり剤を持ってくるかア」

胸倉から手を放したフリユネさんが、興奮きょうげんめだといわんばかりに立ち上がった。

解放されたのもつかの間、立ち上がった彼女は僕に笑みを落としました。

「待ってな、すぐに盛った兎みたいにしてやる。可愛がってやるからなア」

恐怖に歯の音が合わなくなるのを誤魔化す様に歯を食い縛ってフリユネさんを睨むも、彼女を喜ばせるだけだったのか投げキツスすら行つて部屋を出て行く。

鉄格子の開閉音が響き、ズシ、ズシと言う特徴的な足音が遠ざかった所で——遂に僕は限界を迎えた。

「——すけて、誰か、ヴェルフツ！ リリツ！ 神様ツ!! 誰か」
僅かに余命が伸びただけ。この鎖を破壊できなければ、僕はフリユネさんに『捕食』され、ミリアは——。

其処まで考えた所で、僕は踏み止まった。

「……ッッ!!」

ギチリッ、と。

再度歯を食い縛る。

僕が、助けなきや。

薄暗い部屋を中心、鎖で吊るされて意識の無いミリアを見て、再度僕は拘束の破壊を試みた。

ガシヤンガシヤンガシヤンガシヤン!! と。

壊れる、壊れると、心の方が悲鳴を上げそうになるぐらい頑丈な拘束具を破壊せんと暴れ、暴れ、暴れ尽くす。きつと、動きを止めたら心が折れてしまう。それがわかっていているから、休憩一つ挟まず、息が乱れても、血が滲み頭に零れ落ちてきても、鎖の音を響かせ——
再び鉄格子の開く音が響いた。

第一六四話

激しい足音と喧騒によって、覚醒を促される。

呻き声を漏らしながらミコトは重たい瞼を持ち上げた。

「うつ……………ここは……………」

硬い床に寝かされている事実を理解しながらも、身を起こそうとして動かぬ手足に気付く。

視線を体に向けると、銀の輝きを放つ手枷、足枷等の拘束具で手足を封じられていた。

「自分は、ダンジョンで……………まさか、捕えられた？」

正体不明の外フーデットローブ 套の冒険者達に襲撃され、分断されたベルを追う様にとりに背を押されて向かった先で、長身の女戦士アマゾンネスに振り返りに――

――全身を苛む疼痛によって鮮明に蘇る記憶。ミコトは現状を予測する。

「ベル殿は……………っ！」

強襲者たちの正体には想像が付かないが、狙われていたのはベル、そしてミリア。その強襲の方法と手口を思い返すミコトは、自らの仲間が無事なのかと心配し、危惧を抱く。

暗い部屋の中、碌に立ち上がる事が出来ない状態ながら拘束を破壊しようともがき、すぐに諦めて耳を澄ました。

(現状、この拘束を解く事は不可能……………ベル殿とミリア殿は……………)

能力ステイタスによって強化された聴覚を研ぎ澄まし、部屋の外から聞こえてくる喧騒に耳を傾ける。

(……………『兎』とフリユネ……………不可視の『竜』……………見つからない……………イシユタル様の命令……………レーネが酒蔵から酒を盗んだ……………)

拾い上げた断片的な言葉。

『兎』がベル、『竜』はミリア。そしてここが【イシユタル・ファミリア】の本拠ホームである事、自身以外に捕らわれた二人は既に脱走した可能性が高い、とそこまで推測を行う。

とても気を抜ける状況ではないが、ひとまずベルとミリアが生存している事にミコトは安堵した。

若干の冷静さを取り戻したミコトは、自身の四肢の動きを封じる枷を見つめ、呟く。

「何にしても……まずはこの枷をどうにかしなくては」

枷の強度から自力での取り外しを諦め、透明状態インビジビリティの魔法を持つミアアの救出を待つべきか考えつつも、何かないかと部屋を見回し——
—鍵束を見つけた。

「……鍵？」

固く閉ざされた鉄扉の前、部屋の内側、這いずれば手が届く場所に鍵束が落ちている。

畏ではないかと疑いながらも這いずって進み、鍵を掴む。掴もうとした瞬間に何かあるかと身構えるも何も起きない。

不自然さを感じつつも、一縷の望みを賭けて枷の鍵穴に鍵を差し込んでみると、カチリ、と音が響いた。

鍵をとった瞬間ではなく、枷を外した瞬間に罠が発動するのではと周囲に注意を払いながらも落ちた枷に注視しつつ距離を置き——

—本当に何も起きない事に拍子抜けしたミコトが、ふと呟きを零す。

「春姫殿……？」

「イシユタル・ファミア」に所属させられている狐人ルナールの少女。根拠など全く無いが、ミコトは確信したと断言できる。

「恩に着ます……春姫殿」

自然と口元が綻び、笑みを浮かべたミコトは自由となった体で立ち上がった。

即座に行動を起こすのではなく、行動指針を定める。

(最優先はベル殿、ミアア殿との合流、そしてここからの脱出……もしくは、自分一人でも脱出し、皆に危機を伝える事……副目標は武装および道具の確保)

外に脱出し、ファミアアの仲間に襲撃された情報を伝える事さえできれば、協力関係にある派閥の助力も得られる。

聡明な副団長ミリアならそう考えて脱出に動くだろうと予測したミコト

は、自身の体を——董色の戦闘衣バトルクロスを見下ろした。

「そ、その前に最低限の衣類を確保しなくては」

檻褻雑巾の様相を呈している服からは血が固まった掠り傷や、瑞々しい肌が露出しており、というよりは下着すら隠しきれておらず、痴女一步手前の恰好であった。

誰の視線も無い室内で自身の体を隠す様に抱いて周囲を確認し始めるミコト。

魔石灯の明かりすらない暗い大部屋は倉庫然としていた。武装は流石に見当たらないが、姿見等の娼婦が良く使う道具や衣類等が数多く保管されている事が伺えた。

心の中で謝罪しつつも、ミコトは棚に置かれた道具箱の中から衣装箱を探し出し、中身を拝借しはじめる。女戦士^{アマゾンネス}が好む下着同然の衣類を無視し、極東の装束を取り出して袖を通す。

「こんなところでしようか……」

痴女の様相を呈した格好から遥かにマシになった事を確認し、ミコトは静かに鉄扉に近づいて内側についていた鍵穴に例の鍵を差し込み、静かに扉を開けた。

「ベル殿とミリア殿を探さなくては……」

ミコトは喧騒止まぬ広大な宮殿内部へと足を踏み出そうとし——足を止めた。

「おっと……これは……？」

足を止めたミコトの視線の先、通路一杯にぶちまけられた硝子片があった。

魔石灯の光を受けてキラキラと輝く硝子片、そして麝香に交じって漂う、酒精の香り。飲み終わった酒瓶を無造作に砕いてばら撒いた様な光景にミコトは小さく吐息を零し、それらを避ける様に動き出した。

「女が逃げた……？」

顔を蒼くした団員から耳打ちされた情報に、フリユネとベル、ミリアの捜索を行っていたアイシヤは眉間の皺を深くする。

「どういうことだ、見張りは何をやっていたんだい？」

「そ、その……持ち場を離れてフリユネ達を探してて……」

見張りを仰せつかっていた一人、長い髪を結わえたアマゾネスの少女は項垂れる。

喧騒収まらぬ本拠の中、戦闘娼婦が騒がしく駆け回る中、アイシヤは溜息をついた。

『インビジビリティ透明状態』を持つミリア・ノースリスが逃げてるんだ、見張りを外せばこうなるのは予測できただろうに」

「で、でも……その、レーネが……」

呆れながらも髪を掻き上げるアイシヤに、レナが申し訳なさそうに縮こまりながら呟く。

「あん？　レーネ？　あいつがどうしたって……まさか」

「うん、レーネが『アレ^{インビジビリティ}にしたいからどつか行つてて』って……」

イシユタル透明状態で不可視の存在と化している恐ろしい小人。その搜索を主神直々に命じられた自由奔放なアマゾネス。

フリユネの身勝手さもさることながら、彼のアマゾネスの自由奔放さ——イシユタル気紛れな性格——に振り回される事の多いアイシヤ

が天井を仰ぐさ中、件のアマゾネスがひよっこりと顔を出した。

「んー、呼んだ〜？」

彼女は片手に持った酒瓶から、浴びる様に酒を呷りながらアイシヤの元へふらふらと歩み寄る。

明らかに酔った様な赤ら顔にアイシヤが盛大に眉を顰めた。

「呼んで無いが、アンタに用ならある」

「なにになに〜？　もしかして【絶影】に逃げられた事？」

へらへらと雲のように軽い調子の笑みを浮かべるレーネの姿に、アイシヤの眉間に青筋が浮かぶ。

目の前の女傑の怒り心頭な様子も意に介す事はなく、気紛れの化身染みたアマゾネスの少女がへらりと笑い、酒瓶の中身を一気に煽って空にすると背負っていた籠に放り込む。

背負われた籠の中には数え切れない程の空瓶がひしめき合っており、ガチャガチャと騒がしい。その音を不愉快に感じたのかレーネが

笑みを消して表情を歪める。

「アレも私悪く無い」

「何言ってるんだい、アンタが命じたんだろ。その所為で『竜』が人質の一人を解放して——」

「違うって、だって鍵が無くなったのは私がその子に何処か行くように指示出す前だし。っていうか私が指示出す以前から見張りの子いなかったんだけど?」

珍しく苛立った様に舌打ちを零し、レーネが吐き捨てる。

「それに加えて、内側から開錠されてたし誰かが手引きしたのは間違いない。でも、『竜』じゃない。だって罠に引つかからなかった。他の奴は全員拘束されてるのを確認してる……私だって今ふざける程、狂っちゃいないよ」

「……レナ、もう一度聞くけど、あの小娘に着けた拘束具はミスリル製で、【絶影】じゃあ絶対に破壊できない。そうだね」

「そ、そうなの!? 自力じゃ絶対に抜け出せない筈よ!」

アイシャの質問に威勢よく答えた少女は、再び勢いを失った。

「で、綺麗に解錠されて……案の定、枷とか倉庫の鍵が束ごと無くなってたんだけど」

透明状態を持つ『竜』が持つて、女を助けたのかも。と歯切れ悪く続ける少女に、レーネが舌打ちを零して少女を睨んだ。

「それで私が悪いって言いたいのか?」

「ち、違うけど……」

「あつそう、じゃあ良いけど」

睨み付けていた少女に興味を失ったのか、レーネはくるりと身を翻すとそのまま立ち去ろうとし、ふと振り返ってアイシャを見た。

「所でさ、春姫って何処で何してんの? アイシャ、貴女がお目付け役じゃなかったっけ?」

アイシャが質問に答えるより前に、そもそも返答を聞く気も無かったレーネがその場を後にする。

気紛れなアマゾネスが立ち去る姿を見ながら……アイシャは迷宮で一度目の襲撃を終えて顔面蒼白になり、二度目の襲撃前に意識を

失った春姫の事を思い出す。

「……春姫は、何処に居る？」

僅かに震える声押し留めたアイシャの質問に少女は、あれ、そういえば、とアマゾネスの少女が首を傾げる。

「目を覚ましてて、何処か行くこうとしてたから何処行くのか聞いたたら儀式のために身を清めに行くって言つてたよ……あつ、でもさつき見たら部屋には居なかつたけど」

其処まで伝えられ、アイシャは何かを感じた様に目を細めた。

照明の落とされた薄暗い室内。

部屋中に置かれたサーバの稼働音がひしめく中、目の前の机デスクに置かれた大型の大型映像装置マイクモニタに映された映像の向こう側の人物に問いかける。

「それで、お前の要求は？」

『決まってる、妻と娘に会わせろ!!』

しつこいな。何度言われても今は無理だとしか言いようが無いつてのに。

「契約を覚えていないのか。お前の任務が完了し次第、お前を妻と娘に再会させるというモノだったはずだが」

『知るかつ!! 起爆コードはこつちにある——俺の要求を呑まな
いなら、俺はこの起爆コードを抹消してやるっ!』

それは困る。爆薬の設置だって死ぬほど大変だったんだぞ——
俺の部下が苦勞して仕掛けたんだ。

今回の計画の主軸を担う起爆装置管理を、コイツに任せたのは間違
いだつたか。

裏切り者の対処法を考えていると、別の回線を通じて通信が入る。
『抹殺対象を始末した。爆薬の設置も完了。これより帰投する』

別の任務を任せていた部下の声がヘッドセットを通じて耳朵を打
つ。

彼女を向かわせれば、今回の問題トラブルの対処が可能だろう。しかし、それを命じた場合……。

『主様？………、問題？』マスター トラブル

「ああ、少し問題が発生した。起爆装置の設置役が裏切った。コードを書き換えられて妻と娘に会わせると喚びてる」

『位置は……了解。此方で始末できる』

命じるまでも無く、彼女は動き出した。起爆装置の中核となつてい
る監視室目掛けて素早く移動する光点を見ながら、先の男の回線に通
信を繋げる。

『……てんのかっ!? テメエの計画はこの起爆コードが無け
りやあどうなるのかを……』

「お前の要求を呑もう」

『俺はいつだって——何?』

「もう一度告げる。お前の要求を呑んでやる、と言ったんだ」

「ほ、本当か？ 妻と娘に会わせてくれるのかっ!」

だからそうだって言ってるだろ。どうして話を聞かないんだ、たく
……面倒臭え事しやがって。

「ああ、会わせてやる。其方の監視室の前に向かわせた。合図はノッ
ク二回、三回、二回だ、開けたら直ぐにコードをその女に渡せ。直ぐ
に会わせる様に命じてある」

無数の映像装置モニターに囲まれた室内で、深い溜息を零した。

この男の経歴書を見て——舌打ち。

会社の倒産と同時に妻と娘を質に入れて裏へと転がり落ちてきた
間抜け。借金を返す為に犯罪の片棒を担いである程度の地位を手
入れ、今回の計画に食い込んできた奴だ。

——俺との契約内容はいたって質素。今回の計画成功と当時
に彼の妻と娘の再会を約束した。

ちなみに、珍しく嘘は吐いていない。会わせるといふのは、本気で
実行する積りだ。それを、少し早めるだけだ。

『まだか、なあまだなのかっ』

「もうすぐだ」

『ああ、この時を十年以上待つてたんだ……ようやく、ようやく会えるっ!!』

歓喜に打ち震える声が通信機越しに響く中、遂に男の通信機が部屋をノックする音を捉える。とんとん、とんとん、とんとん。二回、三回、二回の調子で響いた音に通信機越しに男が呟く。

『本当に、本当なんだな?』

「嘘は吐かない。本当だ、扉を開けてコードをその女に渡せ」

嘘は吐いていないさ。嘘は、吐いて、いない。

——俺は、本気で、この男と、家族を、再会させてあげる、つもりだ。

無数のモニターに映し出される監視カメラの映像を管理する、監視室。その扉を男が空け、部下の少女がするりと侵入して扉の鍵を閉める。

『コードを教えたら妻と娘に——』

『どうでも良い。コードを教えて』

『会わせてくれるんだろっ、約束しろよっ!!』

『……わかった、会わせてあげる。だからコードを、早く』

平坦な声色の少女の声。部下として俺が育ててきた少女が男と問答を繰り返す。

会わせろ、コードが先、こっちが先だ、とくだらない問答を繰り返すのを見続ける気も無い。

「今すぐコードを渡せ。それとも、会えなくても良いのか?」

『っ、わかったよ、起爆コードは娘の誕生日だ。お前ならそれぐらいわかるだろ』

『……確認の為に一度入力する。会わせるのはそのあと』

少女が監視室に置かれたサーバの一つ、に見立てられた起爆装置の入力画面にコードを入力し、それが間違いない事を確認した。

『マスター、コードが本物だと確認できました。この男を家族に会わせますか?』

『は、早く会わせてくれっ!!』

まあ、最初からそういう契約だったし、会わせる事もやぶさかじや

あない。

「ああ、すぐに会わせてやってくれ」

『了解』

監視室に仕掛けられた監視カメラに映し出されているのは、少女が一人と、男が一人。

家族に会えると歓喜の涙を零し礼を言う男の背後、少女が無言で懐から何かを取り出し——男の脳天に風穴があいた。

消音装置サブレッツサーで小さくなったプシュツという音と同時に、男が崩れ落ちて動かなくなる。

「家族に会えると良いな」

その男の家族は、とつくの昔に奴隷として売り払われて、何処とも知れぬ場所で死んでいた。むしろ、なぜ売り飛ばされた後も生きてるなんて希望を持てたんだ。裏に堕ちて、その世界の闇を見たなら、其処に堕ちた家族がどうなったかなんて想像できるだろうに。

当然、その男の『会いたい』と言う願いは叶う筈が無い。だが、俺は『会わせてやる』と言って男を利用した——最後には起爆装置諸共、爆弾で吹き飛んで貰う予定だったのだから。

爆弾テロを起こした犯人は闇の中、どこぞの過激派組織がやらかした事にして国を動かし、裏で軍備品を横流しして貰い、過激派組織には横流しされた武器や、適当に買い集めた奴隷を兵士として売り払う。無論、そういった組織は金が無い事が多いので……戦場で女を奴隷として攫って貰って物々交換だ。

女の奴隷の需要は高いからなあ……飛ぶように売れる。一部の金持ちが買い占める……世界って本当に腐り切ってるな。

『主様マスター、問題解決しました。起爆装置の再設置を行います』

人を殺したというのに特に気にする様子も無い少女が、邪魔になった男の体を蹴り退けて起爆装置の設定を行う為、サーバに張り付いて手を動かし始める。

それを監視カメラ越しに確認しながら、俺は自嘲する様に笑った。

「死んだら地獄行きだな。間違いない」

『何処までもお伴します』

通信機越しに、相も変わらぬ平坦な少女の返答が返ってくる。
彼女が死ぬ、10分前の出来事だった。

通路に木霊する足音二つ。

懐かしい、と言うよりは忌々しい過去の記憶。目が覚めると同時に襲い来る全身の疼痛に眉を顰め、誰かに背負われている事に気付いた。

薄暗い通路の先には、金色で太い尻尾が揺れていた。目を細めてその正体を探り——春姫の尻尾だと気が付いた。

「は、るひめ？」

「ミリア、目が覚めたっ！」

「ノースリス様、良かった……お目覚めになられたのですね」

俺を背負っていたベルが俺を見て喜び、先頭を歩いていた春姫がぱつと振り返って泣きそうな表情を浮かべた。

最期の記憶を辿ろうとして、起爆装置のコードが娘の誕生日だった事を思い出して頭を振る。思い出すべき事柄はそこではない、彼女が最期に俺に俺に遺した遺言は——自らの頬を思いきり叩く。

「み、ミリア、何を……」

「ノースリス様……？」

心配そうなベルと春姫の言葉を聞きながら、もう一度記憶を見る前の最後の光景を思い出し、顔を上げた。

そうだ、俺はフリユネの拷問を受けて意識を失ったんだ。そのあと、そのあとどうなった？

「フリユネは？　というか、ここはどこ？」

周囲を見回すと、等間隔で灯りが灯った通路だ。窓はなく、冷え切った空気に満ちた、地下通路らしき場所。

「落ち着いてミリア、春姫さんが助けてくれたんだよ」

ベルに話を聞けば、どうやら俺が気絶した直後、フリユネはベルを強姦しようとしたが、恐怖の余り縮こまったベルを見て、精力剤を持ってくると言って出て行ったらしい。

その直後、春姫が部屋にやってきて、拘束されていた俺とベルを解放。その時に俺の首に着けられていた首輪も取り払ってくれたそうだ。

「ミリア、その……手は大丈夫、背中も……」

手に、背中？

質問の意味が分からずに自らの右手を見て、思い出した。

そうだ、フリユネに右手の爪を全部剥がされたんだっけか。今は包帯が巻かれていて見えないが、多分爪はない。疼痛はあるが……それに、背中、そう背中だ。

「私の背中、どうなってます?」

「……………」

春姫が泣きそうな表情を浮かべ、ベルが何かを堪える様に目を伏せ、もごもごと口籠る。

「その、あの……」

言い辛そうにしている様子から、おおよそ想像は付いた——口に出来ない程、酷いのだろう。

まあ、俺の傷についてはどうでも良い。それよりも、ベルの方は大丈夫か？

「ベルは、拷問とかされませんでしたか?」

「え、いや、僕は何も……それより、ミリアは」

「私は平気、回復魔法も使えるし」

小回復魔法を使えば癒せ……癒せるだろうか? 無くなった爪まで回復したりするのだろうか? まあ、最悪『再生薬』あるし、爪ぐらいは、まあ。

それよりも……その……。

「それより、ベル……その、ごめん。色々……」

「え?」

えっと、股間の辺りがですねえ。ぐっしより濡れてるんですよ。これは、これはアレですかね。粗相しでかしてますね? その状態でベルに背負われてる訳で——いや、本当に申し訳ない。

小首を傾げるベルと、何かに気付いてカアツと顔を赤くする春姫。

いや、何というか、別にマーキングしてる積りはないんだよ。本気で……その、電撃で失神すると、緩くなるんだよ。うん、不可抗力って奴さ。

「とにかく、いったん下ろしてくれない」

「でも、ミアアその、怪我が酷くて……」

俺の背中、そんなに酷い事になってる？ 正直、ベルに傷が無けりや良いと思うんだが……っていうか、この話題やめよう。いつまで経っても終わらないし。

「それで、今は何処に向かっているの？ 地下道つてのはなんとなくわかるんだけど」

後、出来れば俺達が襲撃受けた理由とかわかれば、嬉しいんだけどなあ。

このままここでグダグダしても仕方が無いという事で、歩きながら話す事になり、春姫先導の元歩き出す。

ベル曰く、フリユネの元を脱出してから20分程経過しており、その間はずっと地下道を歩き続けているのだという。

この地下道はフリユネが語った通り、『ダイダロス通り』の設計者、奇人の異名を持つ職人ダイダロスの手によって作り出された隠し通路だとか。……てつきり「イシユタル・ファミリア」か闇派閥イザイルズが作っていたモノだと思っていたが、千年前から作られたモノらしい。

……だとすると、未だに建材等を運び込んでいる辺り、未だに建造は続けられている？ ダイダロス本人はどうあがいても寿命で死んでるだろうし、子孫辺りが思想を汲んで地下迷宮の建造を続けている？ ……この辺りは今は気にする必要は無いか。

ベルが時々俺の方を振り返っては容体を確認してくるのを、平気だからと定型文で返しながら春姫の太い尻尾を視線で追う。……ベルの背中がべつとりと体液で濡れてるのがね、正直申し訳ない。着替えとかあればよかったんだがなあ。

「襲撃した、理由……ですか」

「ええ、今の【ヘスティア・ファミリア】を襲撃した理由が知りたいんだけど、何か知らないかしら」

「申し訳ありません、私にはわかりません。ただ……主神様の命だとしか」

まあ、知らんだろうな。そもそも襲撃に加担させる理由が……いや、でもおかしいな。

そもそも襲撃を行う事そのものを知らない方が自然だと思う。しかし、春姫は襲撃を行う事は知っていたらしい……襲撃対象が俺達だとは知らなかったみたいだ。

やっぱり、少し不自然だ。

それと、ミコトの安否も気になるが……戻ってフリユネが見つかる可能性を考えると危険度が高い。俺一人なら魔法【隠レ身ノ灰】で姿を消して探せるのだが、ベルが猛反対したし。

……透明状態だと仲間内でも居場所が分からなくなつてはぐれる可能性があるから、多人数では行動し辛い。だからこそその単独でミコトの救出を申し出たが、ベルが過保護だ。

いや、まあ拷問受けてボロボロの俺を見て過保護になるのはわからなくはないが、効率的ではないんだよなあ。

「あの、春姫さん」

「何でしょうか、クラネル様」

ふと、同じく太い尻尾を視線で追いながら春姫を追従していたベルが声を上げ、春姫が振り返った。

「本当に、良かったんですか？ 僕達を逃がして」

ベルの言いたい事はわかる。

主神の神意が関わっている命令、つまり派閥の総意に対し、一団員でしかない春姫が逆らう。それを行った彼女に降りかかる責任はいかほどのものになってしまうのか。

——それでも尚、春姫は俺達を救う選択を選び取ってくれたのだ。

「お気になさらないください。クラネル様」

ベルの心配を他所に、春姫は儂い笑みを返す。

振り返った彼女は、今にも消えてしまいそうな、散り逝く花を思わせる綺麗な笑みを、浮かべていた。

「私の最後の我儘です。アイシヤさん達も、大目に見てくれます」

—— 待て。

子供を安心させるような、温かな笑み。だというのに、心臓を握られた様な不安感が俺を襲った。

背筋を凍り付かせる様な恐怖感、何か重要な事を見落としたかのような焦燥感、そして、全てを埋め尽くさんばかりの不安感。

待って、待ってくれ、『最後の我儘』って、なんだ？ 『最後の』って……いや、まさかそんな……だって、だって主神の眷属だぞ？ 有り得ない、有り得て良い筈が無い。

ベルも何か不穏な感覚を覚えたのか、ほんの少し口籠ってからそれを振り払う様に明るい声を上げた。

「あ、あのっ、春姫さん！ 実は僕達、貴女を『身請け』しようと思ってるんです！」

もう娼婦の仕事はしなくていいのだと、ミコトやヘスティア様、仲間ファミリアで話し合った事を明るく伝えていくベル。そんな彼に対する春姫の反応は……

「えっ……」

翠の瞳を見開いた春姫の驚愕の表情。

呆然とした彼女にベルが畳みかける様に続ける。

「ミコトさんが、僕達の神様を説得してくれたんです！ えっと、お金を貯めるのはまだもう少し時間がかかるかもしれないんですけど……」

白髪の少年が、純粋な善意で、儂げな笑みを浮かべた彼女の、翳りある笑みを浮かべる彼女のその笑みを、本物の、心の底から浮かべられた。本当に心の底から喜び、浮かべられる笑みに変えようと必死に言葉を紡ぐ。

「神様も、派閥みんなも春姫さんを身請けしてくれることを許してくださいました！ ミリアだって！」

「え、ええ……私は、ほら、お金の問題ならなんとか……するわ。出来る、出来るのよ、ええ、お金で解決できるなら」

まるで、杭を打ち込まれた様な気分だった。

ベルが必死に、儂く翳りある笑みではなく、本物の笑みを浮かべさせようとしている。

——だというのに、俺は既に悟ってしまっていた。

「ミコトさんも……その、僕もっ、貴女の事を助けてあげたいって！」
紡げる言葉は全て紡ぎきった。

伝えたい想いは全て伝えきった。

その上で、春姫は……自らの身を鑑みずに俺達を救う選択を選んだ、心優しき狐人の少女は——

「うそ……」

歓喜と絶望が交じり合った涙を零した。

翠色の瞳を見開いたまま、色々な色が、数え切れない程の複雑怪奇な感情が交じり合ったその色が、その雫が、春姫の頬を伝い零れ落ちた。

「……春姫、さん？」

ベルを見たまま立ち尽くす春姫の姿に、少年は言葉を失って口を閉じた。

「ああ……」

歓喜の声と、絶望の声と、失望と、羨望と………其処に宿った感情は、数え切れない。読み切れない。

両の手で胸を押さえて、飛び出しそうになる言葉を飲み込んで、春姫は言葉を紡いだ。

美しい、涙をはらはらと零しながら。

「私は……春姫は、幸せです」

涙を流しながらも、唇に笑みを浮かべて、此方を安心させるように、彼女は言葉を紡ぐ。

「ミコト様に……貴方様に、そこまで思っ頂けるなんて」

掠れるような、ともすれば聞き逃してしまいそうな程小さな声で溶けてしまいそう、と呟いた彼女は、

「そのお言葉を聞けて……もう思い残す事はありません」

ああ、そんな、馬鹿な事があつてたまるか。

主神は眷属を愛しているのではないのか？ 主神は、眷属を

………そんな、はずは、無い。

まさか、死ぬのか？ 彼女が？ 春姫が？ 身を挺して庇ってくれるほどに心優しいこの少女が？

「ありがとうございます。クラネル様、ノースリス様、行きましよう」
ああ、最悪だ。彼女は死ぬのか、今夜行われる何かで、命を落とすのだろう。そして、そして……。

死を前にした彼女は、とつくの昔に——救われる事を諦めてしまっているんだ。

第一六五話

「ヘスティア・ファミリア」本拠、居室は重苦しい雰囲気リレングに満ちていた。

部屋の片隅に半壊した大刀に、ボロボロになっているバックパック、血濡れの外フレットローフ套等、襲撃によって破損した装備品の数々が無造作に転がっている。

疲弊した眷属に寄り添って治療を手伝っていたヘスティアは、酷く憔悴した様子の狼人の少女に問いかけた。

「何が、あつたのか話してくれるかい？」

「……………」

俯いて微動だにしない彼女の横で、胴の辺りから下が失われた血塗れの灰色の外フレットローフ套を手に神妙な面持ちでデインケが代わりに答えを返した。

「他派閥に襲撃されたんだよ。んで……ルシアンとグランが死んだ。サイアは致命傷だったがファイアが『ディアンケヒト・ファミリア』に運び込んだおかげで一命を取り留めたみたいだが……意識は戻ってないみたいで、なおかつ治療中。暫くは帰ってこないだろうなあ」

肩を竦め、平然と言い放たれた言葉にヘスティアが瞠目し、俯く。冒険者依頼クエストの為に『大樹の迷宮』に遠征に向かっていたデインケ達が襲撃を受け、二人の眷属の命が失われた。

「リリ達も、襲撃を受けました。ベル様、ミリア様、そしてミコト様の三人が行方不明です……キューイ様、ヴァン様は撃破されています」
ヴェルフの治療を手伝っていたリリが呟く。

同じく、ベル、ミリア、リリ、ヴェルフ、ミコトの五人＋αのパートイも冒険者集団に襲撃を仕掛けられ、五人中三人が行方不明になっている。

「んで、なんとか無事なのは五人だけか、つつつてもサイアは治療中で動けない、と……ギルドは頼りにならねえし、ロキやガネーシャ様の所には……なあ？」

デインケが室内を見回して肩を竦める。

襲撃後、通りかかった上級冒険者のパーティに助けられたヴェルフとリリ。

瀕死の重傷を負ったサイアを抱えて逃走に成功したファイア。そして、伝言役として逃がされたデインケ。サイアは治療中で意識不明。「ヴェルフ君、デインケ君、襲撃してきた相手は誰かわかるかい？」

「……アマゾネスが複数、間違いなく『戦闘娼婦』だった、【イシユタル・ファミリア】で間違いないと思う」

「こっちは【男殺し】に襲撃された。【イシユタル・ファミリア】で確定だろうな。【麗傑】に【戦場の女主】も居たしな」

苦々し気に呟くヴェルフに、片目を閉じて口元に笑みを浮かべるデインケ。

彼らの返答を聞いたヘスティアが口を開こうとした所で、居室の扉が勢い良く開かれた。

「ミコトが攫われたって本当かッ!？」

大きな音を立て、タケミカツチが室内に飛び込んでくる。

動揺を浮かべた男神に続いて入室した桜花や千草が、ボロボロになった面々を見回して息を呑んだ。

「ああ、本当だよ。ダンジョンでベル君とミリア君も一緒に……それに、デインケ君達も襲われて……」

治療を手伝っていたヘスティアが振り向き、答える。

ホームにやってきたタケミカツチ達も迎え、現在の状況を整理する為に居室の中央で事情を話し始めた。

「まず、ヴェルフ君達が怪物進呈されてベル君、ミリア君を分断して連れ去ろうとした。ミコト君がそれを止めようとして……そのまま行方不明だ」

「死んでるのか?」

「恩恵はまだ生きてる」

長椅子に深く腰掛けたタケミカツチが安堵の吐息を零し、すぐに表情を引き締める。

桜花と千草も生存を確認出来て安心した様に肩の力を抜いて、それでも行方知れずの知己の安否を憂いた。

「それと……多分、その後だ……デインケ君達、遠征に行っていた子達が襲撃された」

「全員無事なのか？」

「……………一人、死んでしまったみたいだ」

タケミカツチの質問にヘステイアがくしやりと表情を歪め、絞り出す様な声を放った。

その言葉を聞いた男神が表情を曇らせ、桜花と千草が瞠目する。

仲間を失ったという驚愕の事実という言葉を失う面々を他所に、猫人の青年は鼻を鳴らしてヘステイアの言葉を否定した。

「死んだじゃねえよ。殺されたんだよ」

「どういう事だ」

一足先に平静さを取り戻したタケミカツチの質問に、デインケは飄々とした笑みを浮かべて口を開く。

「第一級冒険者様に襲撃されて、ルシアンとグランが殺された。呆気なく、虫けらみてえに殺されたよ。なあんにもできなかつた、出来る事なんて無かつた……はっ、ひつでえな話だろ？」

嘯く様に放たれた言葉にタケミカツチが痛ましい視線をデインケに向ける。

この話題を続けても良い事はないだろう、と桜花が頭を振って話題を逸らす。

「襲ってきた冒険者の派閥はわからないのか？」

「ローブで姿を隠していましたが……リリ達を襲った者達の種族は、全員アマゾネスでした」

「連中に情けない程に手玉に取られた、クソつたれ。あの強さ間違いない、戦闘娼婦バレーベラだ」

「【イシユタル・ファミア】……」

桜花の質問にリリとヴェルフが答え、最後に千草が戦慄した眩きを零す。

名の知れた大派閥が起こした騒動、それも眷属殺しという最悪の開戦の狼煙を上げた今回の件に、誰もが動揺を露わにする。

「ロキやガネーシャの所にすぐに伝え——」

「出来ねえんだよ」

桜花の言葉を遮り、ディンケが吐き捨てる。

「麗傑」から『ロキやガネーシャの所に助けを求めたら、人質を殺す』って脅されてんだ。だからお前等みてえな極小派閥にしか声かけてねえ」

「ディアンケヒト・ファミリア」に瀕死の重傷を負ったサイアを運び込んだ際、彼らにロキの元へ連絡を入れない様に頼み込んだ、とディンケが呟きながらも黙り込んでいるフィアに視線を向ける。

俯いたまま微動だにせず、片耳が大きく欠け、包帯を至る所に巻かれて木乃伊染みた格好の獣人の姿に、猫人は溜息を零した。

「ま、そういうことだよ」

「……だが、いずれロキやガネーシャは気付くはずだ。街中でも騒動になってたぞ……その、【蒼空裂砕】が半分だけの【幼豪】を抱えてダンジョンから出てきたと」

桜花の言葉にディンケが眉を顰めた。

彼の言う通りだ、既に血塗れで半身を潰され瀕死だったサイアを抱え、ダンジョンから飛び出したフィアがそのまま【ディアンケヒト・ファミリア】の本拠に飛び込んだ姿は、数多くの冒険者や住民に目撃されている。

街中は既に噂で持ち切り。注目の的だった「ヘスティア・ファミリア」の眷属が瀕死の重傷を負って——それもフィアの方は背中に槍が刺さったまま——ダンジョンから飛び出してきたのだから。

他派閥の襲撃を受けたと勘繰る者は多いだろう。

「実際、ガネーシャの所から何かあったのかって眷属が何人か尋ねてきてるし……」

「事情は話せないが、今はそつとしいてくれってこつちから頼み込んだ。ロキの所はまだ動く気配はないみたいだ、あつちはあつちでなにかあったみたいだし」

人質の事もあり、大派閥からの襲撃に対してロキやガネーシャと言った心強い友好派閥に助けを求められないと憔悴しきつたヘスティアの言葉に、タケミカツチが険しい表情を浮かべる。

「だが、どうしてイシュタルは攻撃してきた。ましてや眷属殺し……ロキとガネーシャの所から一人ずつだ。戦争遊戯を見ていたのならヘステイアの所に出したらどうなるかわかるだろうに」

「そこだ、ボクもそこがわからない。ロキもガネーシャも……眷属が殺されたなんて知れば黙っていない。それにこのまま隠蔽できるはずもない」

都市最強派閥として名が上がる程の「ロキ・ファミリア」や、都市最大派閥として知られる「ガネーシャ・ファミリア」。その他にも「ディアンケヒト・ファミリア」等とも繋がりを持つヘステイア派閥を襲撃する理由は不明。

「勢力図の一角に食い込んだ事を妬まれた可能性は……無いな。どう考えてもロキとガネーシャを敵に回すなんてしないはずだ」

ヴェルフの呟きに皆が頷く。

「イシュタル・ファミリア」は大派閥として名が知られる。

歓楽街、こと「イシュタル・ファミリア」に関しては、ギルドは大きな権力を振るう事が出来ない。

故に美神の軍勢は大胆を通り越して凶行すらも実行できる——
——訳が無い。

いかなる大派閥と言えど、ロキやガネーシャの派閥を敵に回す事は出来ない。それも同時に二つも。ヘステイア派閥の影響力を考えれば、他派閥全てを敵に回す様な凶行等行う事は出来ないはずだった。しかし、現に眷属は襲撃を受け、死者すらも出ている。

「何か心当たりはないのか？」

「最近、歓楽街に関して色々あったけど……どれもこんな凶行に出る様な事じゃないはずだ」

歓楽街でのアマゾネス達による男性誘拐の被害等、日常茶飯事の出来事であり。獲物となった男性冒険者が抵抗した結果、歓楽街の一角で火事が起きたり、建造物等が破壊されたり等はよくある事だ。

その件でイシュタルが腰を上げるかと言えば、有り得ない。それも眷属殺しに踏み切る等は無い。

「もしそれが原因なら、まず書状か何かを送り付けてくるはずだ」

「ええ、リリ達は『再生薬』や『竜の素材』等、他派閥が欲しがるモノをいくつも得ていますが、同時に大派閥の庇護下にあるともいえる状況です。正当性のある主張であればこちらも無下に扱う事は出来ないのですが……」

しかとした手順を踏み、正当性を主張しつつヘスティア派閥に『再生薬』等を強請る。と言った行動であれば納得できる。

しかし、今回の件はまさに凶行に他ならない。

「えっと、あの、その……【アポロン・ファミリア】の時みたいに、クラネルさんとノースリスさんを狙って、と言うのは……」

「ベル・クラネルだけならまだしも、ミリア・ノースリスまで狙うならそれは考え辛い。それにミリア・ノースリスの方を狙うなら先の歓楽街での騒動^{トランプル}を理由に強請る方が確実だろうしなあ」

「それに、ベル君はイシユタルの好みじゃないような……」

ベルとミリアを孤立させるといった襲撃方法を聞いた千草が、顔を赤くしながらおぼおぼと意見を口にすると、二人の神が腕組をして唸りだす。

もしそうだとしても、眷属殺し、派閥抗争を回避できない凶行に至る程の事ではない上に、腑に落ちない点もあると両主神が首を傾げ、眷属達もまた顔を見合わせた。

「……春姫にまつわる事、というのは？」

感情を殺した声で、桜花が呟く様にその言葉を放った。

ミコトの報告により、故郷の友人が娼婦に身を墮としている事、その少女をベル達が『身請け』しようとしていることを知る「タケミカヅチ・ファミリア」の面々が黙り込んだ。

悲しそうに俯く千草、他三人も狐人^{ルナール}の少女と関わりがあるのか顔を暗くする。

「——なあ、その春姫って誰だ？」

タケミカヅチと眷属達が表情を暗くする中、片手を上げた猫人が質問を放った。

春姫の『身請け』を決めたのはデインケ達が遠征に向かった後の出来事。当然、迷宮内で冒険者依頼^{クエスト}達成の為に奔走していた彼らはそれ

を知らない。

代表してヘステイアが事情を説明し始める。

「春姫君と言うのは、彼らの故郷の友人だったらしく、紆余曲折あつて今は「イシユタル・ファミア」で娼婦をやっているんだ。ベル君達はその子の『身請け』をしようとして——」

「何だそれ？」

女神の言葉を遮り、デインケが眉を顰める。

彼らが迷宮で遠征に赴いている間にあつた出来事、やり取りを聞いたデインケが呆れの表情を浮かべて口を開こうとした瞬間、しわがれた声が響いた。

「——か」

声を放った者に皆の視線が集まる。

ついさつきまで無言を貫き、微動だにしなかつた片耳の欠けた狼人の少女——ファイアが顔を上げた。

激み切り、それでいてギラギラと怪しく輝く獣人の瞳が、千草を真つ直ぐ捉える。

次の瞬間、椅子を蹴倒す音が響き渡り、卓を踏み越えてファイアが千草に躍り掛かった。

「がふっ!?!」

「——の所為か」

蹴倒された椅子が倒れ切るより前に、ファイアが千草を押し倒して馬乗りになる。

この場において最も敏捷に優れたファイアの唐突な行動に、全員の反応が遅れた。

鈍い音を立てて組み伏せられた千草の首を、ファイアが両手を使って締め上げる。くぐもった苦し気な悲鳴が喉で震え、千草が一瞬で青褪めて窒息し始める。そんな少女に馬乗りになったファイアが絶叫する様に吠えたてた。

「オマエの所為か！ アタシ等が襲われたのは！」

「やめろっ、千草をはな——ぶっ!?!」

突然の出来事に主神二人が瞠目する中、一番傍にいた桜花がファイア

を引き剥がそうと腕を掴む。瞬間、即座に反撃として放たれた裏拳が桜花の鼻を押し折り吹き飛ばす。

ヴェルフも立ち上がり、慌ててファイアを抑えようとするもLv. 3に対し、Lv. 2でしかないヴェルフでは引き剥がす事も出来ない。

「やめろ、落ち着け！」

「るせえっ！ コイツが余計な事しなけりやっ!!」

ギリギリギリツと首の骨が軋む音が響き、千草の顔色が悪くなっていく。鼻血を零しながらも桜花がもう一度引き剥がそうとファイアに組み付く。

ヴェルフと桜花、大柄な男二人で引き剥がそうとするも、体格で勝るはずの二人の力を以てしてもLv. 3のファイアを引き剥がすに至らない。千草が苦し気に震え、主神二人が神威を放ってファイアを止めようと立ち上がり——猫人の蹴りが狼人の側頭部を掠める、力が抜けた瞬間に男二人が彼女を引き剥がした。

「——なせよっ！ 放せよっつってんだろっ!!」

「落ち着け、クソっ、暴れるなっ!!」

「ぐっ、力が……レベル差がっ!!」

脳を揺さぶられて力が入らない筈のファイアだが、それでも桜花とヴェルフ、二人がかりの拘束を逃れようと暴れ狂い、憎悪に濁った瞳で千草を睨んだ。

「オマエが、オマエが余計な事を、春姫なんつうアタシらに關係の無い女の話を持ってこなけりやっ!!」

今回の襲撃、死者が出た原因が千草にあると言い放ち吠え狂う狼人の様子に、息も絶え絶えな千草が更に青褪める。

そのさ中、飄々とした態度のディンケが暴れるファイアと、睨まれて動けない千草の間を遮る様に立った。

「落ち着け、ファイア・クーガ」

「ディンケッ！ お前だってルシアンが殺されたんだろ！ テメエが庇うんじゃねえ!!」

同じく仲間の命を奪われた筈のディンケが立ち塞がった事で、ファイアが激昂した。

抑えていたヴェルフと桜花を引き剥がし、デインケに向かって躍り掛かろうとし——デインケはファイアの腕を掴み、足を掬って押し倒して組み伏せた。

「あー、暴徒鎮圧はガネーシヤ様ん所で嫌って程やらされたからな。悪いがこれ以上暴れられると困るんだよ」

「放せよ！ 放せて言っただろ！！ お前だつて親友ダチが殺されてんだろっ！！ なんでお前がっ！！」

ヴェルフと桜花、L.V. 2二人で抑えきれなかったファイアを、同格のデインケが抑え込む中、驚愕故に停止していたヘスティアが遅れて神威を放った。

「やめるんだ、やめてくれファイア君」

「ぐうっ……」

神威の前にファイアが黙り込む。暴れるのを止めて組み伏せられたまま、それでも憎悪の視線を千草に向ける。

その様子にデインケが溜息を零す。

「おーい、そっちの鼻が潰れた大男、無事か？」

「あ、ああ……千草は大丈夫か」

「……………」

デインケが乾いた笑みを浮かべて鼻血を流す大男に問いかけ、桜花が鼻血を拭いながら答え千草に駆け寄る。桜花の問いかけに千草が青褪めたまま小さく頷いた。

暫くして、ファイアが完全に落ち着いたのを確認したデインケがゆっくりと警戒しながらもファイアを解放する。

桜花やタケミカヅチが警戒の視線を向ける中、解放された後も床に伏せたままのファイアが絨毯に爪を立てながら震える声で問いかけた。

「どういう、つもりだよデインケ……お前だつて、オマエだつてわかるだろ」

「……気持ちはわかるぜ？ 俺だつて、今すぐその厚顔無恥な女の顔面の皮引っぱがしてやりてえって思うわ」

軽い調子で恐ろしい事を述べるデインケに、桜花が警戒の視線を向ける中、彼は飄々とした笑みを浮かべて眩く。

「安心しろ。手は出さなねえよ——今は」

少しも安心できない、と桜花が千草を庇い。ヴェルフとリリが恐る恐るフィアに手を貸そうとし、フィアが首を横に振って拒絶した。

「良い、触るな……次は本気で殺しちまう」

絨毯に爪を立ててズタズタにしながら、堪える様に呟かれた言葉にタケミカツチが目を瞑った。

「フィア君、千草君の行動が今回の襲撃の原因になったとは言いい切れない。キミの気持ちもわからなくもないが、千草君を襲うのは間違ってる」

「……あー、それ俺から一言良いか？」

フィアの行動を諫める様にヘスティアが言葉を選びながら声をかけ、デインケが不満そうに片手を上げた。

「悪いが、その千草の行動は正直褒められるモノじゃねえどころか……最悪な行動だ」

「どういう事だ」

デインケが責める様に青褪める千草に言葉を放ち、桜花が答えられない千草に変わって問う。

「はあ……少なくとも、ミコトに相談したのが間違いだ。ミコトの所属は何処だ？」「タケミカツチ・ファミリア」か？ 違えだろ、今は「ヘスティア・ファミリア」の眷属だ。そのミコトにお前は自分の派閥で解決すべき事を相談した」

「待て、それは」

「黙ってる木偶男。良いか？ 俺はガネーシャ様の眷属だ、だが今はヘスティア様の眷属となってる。一年後に元の派閥に戻るが、今は女神ヘスティアの眷属だぞ」

今回の件において、『春姫の一件』は襲撃の理由足り得ない。

いくらなんでも『眷属殺し』等と言う凶行に及ぶ理由にはならない。だが、それは置いておくとしても千草が行った行動は責められるべき点が多い。デインケは一切の躊躇なくそう言い切った。

一年後には元の派閥に戻る。例えそうだったとしても一年の間は改宗先の派閥の眷属である事に違いはない。

故郷の友人の事だったとしても、主神に相談も無く、一眷属でしかないミコトが動くべきでは無かった。

ましてや、今の「ヘステイア・ファミリア」は勢力図に大きく食い込んだばかり、副団長が慎重に派閥の力関係に気を配って冒険者依頼の餞別を行う程の状態で、地盤固めを行っているさ中だった。

そんな時に、派閥の中で身勝手な行動をとればどうなるのか。ましてやそれが他派閥に関わる事であれば、どんな事態に陥るのか。

「お前は考えたのか？ 身内だから、友達だから、そんな軽い考えで他派閥に関わればどうなるのか」

真っ先に相談すべきは主神のタケミカツチ。次点で団長の桜花。そして相談対象として選んではならなかったのは、ミコト。

「ミコトの主神は女神ヘステイアだ。当たり前だが、ミコトの行動はヘステイア派閥の行動ととられるだろうな」

派閥に所属する以上、身の振り方には細心の注意を払わなくてはならない。

神ガネーシヤの眷属であるのなら、都市の住民に対し危害を加える事は厳禁。

神ロキの眷属であるのなら、他派閥とのトラブルは厳禁。

眷属の行動が派閥の名声や評判に関わる以上、他派閥と身勝手に喧嘩なんかできない。都市の住民に高圧的な態度はとれない。そういった制約がかかってくるに決まっている。

「例え身内だったとしても、お前は別の派閥だ。せめて先にウチの団長か副団長に話を通してからミコトに相談すべきだったんだよ」
「でも、ヘステイア派閥は俺達と友好的で」

桜花が反論を口にする、デインケは呆れの表情を浮かべて吐き捨てる。

「友好的だから大丈夫、じゃねえよ。だったらまず派閥の団長か副団長に声かけろよ、一団員如きが調子に乗るなって話だろ」

千草や桜花の言い分に対し、理解できないという程ではない。しかしそれは小派閥だからこそ通用する主張であり——勢力図にお

いて力を持ち過ぎたヘステイア派閥には当てはまらない。

大派閥には数多くの柵しがらみがある。当然、今の「ヘステイア・ファミリア」もまた同様。

「いかなる理由があれ、他派閥に関わるべき時期じゃない。なのに眷属が勝手に飛び出していきやあ……はあ」

千草の行動を攻めようとし、デインケは溜息と共に眉間を揉んで咳く。

「まあ、ウチの副団長様はなあ……身内にダダ甘過ぎたしな」

大派閥に所属していた眷属であるデインケ達からすれば、ミコトや千草の行動は底う余地が無い。

力関係を意識して行動していたのは副団長ミリアのみ。その状況で基本的には許可を得ない限りデインケ達は余計な行動は控えていた。

対してミコトは身勝手に行動した。正直言えば軽蔑すべき行動だが、副団長がそれを許した。実際、彼女の行動が襲撃に繋がる可能性が無いのはデインケにも理解できる。

「まあ、俺はお前らの行動を——」

「デインケ君、その辺りにして貰えるかな」

デインケが畳みかける様に止めを刺そうとした所で、女神の静止が入る。

尻尾を揺らして肩越しに女神に振り返り、デインケは肩を竦めた。

「二団員如きが口にすべき内容じゃなかったか。悪かった」

真っ先に注意するべき立場に居るのは主神や団長、副団長だ。

しかし団長は集団や派閥を率いるのに経験不足。まだ年若くして一気に上り詰めてしまった事が原因ではある。主神も経験不足、こんな唐突に勢力図に食い込むのは主神にとっても予想外だろう。ましてや神らしい一面はあれど、親しみやすさを優先していて率いるのに向いていない。

唯一、今回の件で注意出来るだろう立場の副団長は、今は攫われて行方知れず。これで一団員でしかないデインケがくどくどと責めた所で意味が無い。

デインケが大人しく引き、未だに伏せたまま敷物に爪を立てて気を

紛らわせているファイアの首根つこを掴んで引き摺って元の席に戻っていく。

「話を変えよう、襲撃された原因探さなきゃ始まらない」

「あ、ああ……すまない」

ヘステイアの話題転換に俯いていたタケミカツチが、デインケの背に小さく謝罪を口にした。

デインケは肩越しに振り返り、肩を竦める。

「別にタケミカツチ様は悪く無いでしょう。規模の小さな派閥と、大きな派閥じゃ見えるモノも違う。ある意味じゃ副団長の所為だしな」

派閥が勢力図に食い込んだ原因は団長の最速記録更新もあるが、それ以上に副団長の竜素材、そして再生薬の影響が大きい。そう考えればある意味では副団長の所為ともいえると冗談めかして口にし、デインケは口元を歪めて部屋の隅にファイアを転がして、自身も壁に背を預けて座り込む。

「はは、は……はあ」

「……………」

二人が黙って隅に行つたのを見て、ヘステイアが申し訳なさそうに目を伏せ、タケミカツチに向き直つた。

「それで、春姫君が原因、と言う話だつたね」

「ヘステイア様、それは考え辛いと思います。あの規模の派閥が、末端の構成員でしかない春姫様を庇うとは思えません」

「ああ、いくら狐人^{ルナル}が珍しい種族とはいえ考え辛い」

ヘステイアの言葉を、リリが否定し、ヴェルフが補足する。

彼らの言葉を聞いたタケミカツチが考え込んでいる所で、ヘステイアが口を開いた。

「いや、実は皆に秘密にしていた事があるんだ」

「ヘステイア様、秘密とは」

女神の言葉にリリが問いかけ、皆の視線がヘステイアに集まる。

申し訳なさそうに、ヘステイアがミリアから聞いた予測を語りだした。

「それでは、春姫様は末端の構成員ではなく……」

「重要な立場に居る、と」

「ああ、ミリア君はそう予測していた」

「イシユタル・ファミリア」が狐人専用ルナールの道具。彼の種族が扱う『妖術』とも呼ばれる魔法の効力を跳ね上げるモノを秘密裏に手にしていた事。

加えて大量の月ルナティックライト 嘆石を輸入してなんらかの施設を建造した事。

彼の派閥に所属する狐人ルナールが春姫を除いて存在しない事。

ミリアが情報屋を通じて仕入れた情報の数々を口にして推測を述べるヘスティア。

「だからこそ、春姫君は重要な立ち位置に居て、末端の構成員ではない、と予測してるんだけど……タケ、どうしたんだい、顔色が悪いぞ」
「あ……まさか……いや、だが……」

顎に手を当てながら、思い出す様に目を伏せて語っていたヘスティアが顔を上げると、先の千草より酷い顔色となったタケミカツチがぶつぶつと呟きを零していた。

憔悴しきった神友しんゆうの様子にヘスティアが目を剥く。

「ヘスティア、一つ聞きたい……その、狐人専用ルナールの道具の名は、わかるか？」

「え？ そうだなあ、確か……『殺生石せつしょうせき』だったと思うけど——」

震える声で尋ねられた言葉に答えると同時、タケミカツチの表情から色が消えた。

居室リビングの片隅、神々の話し合いを他所に壁に凭れ掛かっていたディンケは、血濡れの外フーデットローブ 套を広げて、千切れた断面と血に染まった部位を見て溜息を零していた。

「これの修繕いくらかかるかねえ」

虫けらの様に呆気なく殺されてしまった親友が身に着けていた遺品。胴の辺りから引き千切られたそれを見ているさ中、ふと裾を引か

れている事に気付いた。

「んだよ、どうした？」

「……………」

服の裾を引っ張っていたのは、伏せたままのファイアだ。デインケの問いに答えるでもなく黙り込んだ彼女の様子に首を傾げる。

片耳が大きく欠け、暴れた所為か傷が開いて血が滲み出した彼女の背を見て溜息を零した所で、小さく問いかけが投げかけられた。

「なんで、お前はそんなに平然としてんだよ」

「ん？ 平然？」

「…………ルシアンが殺されたんだろ」

「ああ、確かに。虫けらみてえに殺されちまったなあ」

真つ赤な血で汚れた、灰色だった外フーデットローブ套を手にデインケが苦笑する。

そんな彼の様子にファイアが抑えきれない殺意を向け、呟く。

「仲間が、殺されたのに笑えんのかよ」

「……………」

目を瞑り、デインケが過去を回想しながらも呟く。

「俺に足りなかったのは、冷静さだ」

「……………」

「お前は下半身を叩き潰されたサイアを抱えて地上まで逃げ切った。んで、見事サイアを救ってみせた…………だってのによ」

「アタシは…………」

「俺はどうだよ、ただ頭ン中が真つ赤になって、キレて突っ込んで…………呆気なく叩き伏せられて、伝言役として逃がされた。メッセンジャーあの時、まだルシアンは生きてたんだぜ？ 下半身千切れたまま、まだ息があった…………」

もし、怒りに囚われなければ。

もし、もっと冷静であつたなら。

もし、ルシアンがやられた直後、彼を抱えて地上まで駆け抜けていれば。

——サイアのように、ルシアンも救えていたかもしれない。

「俺は、ルシアンに助けられちゃった……あの馬鹿、俺を見捨ててりやあ、自分は助かったかもしんねえのにさ」

アイツは馬鹿野郎だった。と呟いて外套を強く握る。乾いた血の欠片がパラパラと零れ落ちた。

「俺も馬鹿野郎だ」

パーティを率いるリーダーに抜擢されておきながら、怒りに身を任せる愚かな行動をとった。

「だから、冷静になろうとしてんだよ……でも、ダメみたいだ」

千草にフィアが飛び掛からなかったら、自分が千草を殺していた。そう呟いて、デインケは舌打ちを零した。

第一六六話

タケミカツチが言葉を失って蒼白になるのを目の当たりにした面々が顔を見合わせる。

顔を覆って、嘘だろ、と呟く男神の様子にヘスティアは恐る恐る声をかけた。

「タケ、その『殺生石』って言うのは狐人専用の道具だとは聞いたよ。えっと、確か妖術の効果を引き上げるモノだってミリア君は言っていたけど」

「間違っていない。だが『玉藻の石』の効力で合っている……」

奥歯を噛みながらタケミカツチが答え、ミリアが得た情報の間違いを指摘した。

「『殺生石』とは、『玉藻の石』と『鳥羽の石』を素材にして生成される禁忌の魔道具だ」

「『玉藻の石』は本来、狐人の扱う魔法、『妖術』の効果を跳ね上げる効果を持つ。」

通常の杖等の魔法の威力を引き上げる代物等目ではない程の増強率を誇る道具。適切な扱いさえすれば絶大な効果を持つそれは、生成方法故に非合法な代物であった。

素材は、狐人の遺骨。死者の墓を暴き、生成される非合法の宝珠。「ヘスティア様、ミリア様は『妖術の効果を上げる』と仰っていたのですよね」

「う、うん……でもそれは素材の方の効果だった……」

「いや、間違っていない。普通に使えば『殺生石』も素材となった『玉藻の石』の効果を得られる」

『玉藻の石』の正体、その内容を耳にした桜花や千草が言葉を失う中、一人冷静なリリが口を開き、ヘスティアが眉を顰めタケミカツチを伺えば、男神は眉間に皺を寄せた。

「多分だが、ミリアは混同してしまったのだらうな。いや、アレは極東で禁忌。迷宮都市の情報屋が間違えるのも仕方が無いか……むしろイシユタルはどうやって殺生石の事を……」

「……『鳥羽の石』とは、もしかして『月嘆石』ルナティックライトの事でしょうか」
ぶつぶつと呟き考え込み始めるタケミカツチを他所に、リリは冷静さを保ちつつ問うた。

その問いかけに男神が、ああ、と肯定を返す。

「『月嘆石』は……えつと、確か月の光を浴びると魔力を帯びる特殊な鉱石だっけ？ 迷宮で役に立たない代物だから、都市だと珍しいとは聞いたけど」

「ええ、それであつてますへステイア様。月の光を浴びる事で色を変え、光を放ち、魔力を帯びる鉱石。鍛冶師の間では武器の素材としても利用されますが……確かに都市では滅多に見ない」

へステイアがミリアから聞いた事を思い返しながら呟けば、ヴェルフがそれを補足した。

「『月嘆石』は元の色が濡れ羽色の様に黒い事から、別名『鳥羽の石』ルナティックライトとも呼ばれる。」

月光を浴びて様々な光を放つ鉱石を片手に、吟遊詩人が恋を嘆く詩を歌って広めた事により、人々に認知されるようになった鉱石。

ヴェルフの言葉を頷いて肯定し、タケミカツチが説明を引き継いだ。

「武器や道具の素材として使うと、月の光に応じて硬度や威力、効果を変える。地下に潜るダンジョンには縁が無く、月嘆石は本来迷宮都市に出回っていないはずだが……」

それよりも、とタケミカツチがへステイアを真正面から見つめて口を開く。

「『鳥羽の石』の効果が最大限に発揮されるのは満月の夜。その時、『鳥羽の石』と融合した『殺生石』は悪魔の石に変わる」

「あ、悪魔の石？」

嫌な沈黙に包まれる室内、壁掛け時計の秒針が立てる音が響く中、タケミカツチが拳を強く握りながら答える。

「石の使用者、その魔力を……いや、『魂』を石に封じ込める。……ただ使う分には、一時的な封印になるだろうが、相応の設備を使えば完全に封じ込められるだろうな」

「石に、『魂』を封じる……?」

「そうだ、相応の設備を用意し、儀式を行う事で封印は完全なモノになるだろう」

「完全に封じられた場合、どうなるのですか?」

その内容から嫌な想像が浮かんだ面々が身を震わせる中、リリが静かに問いかけた。

僅かに俯いたタケミカツチが、僅かに震える声で答える。

「魔力を完全に封じ込めた『殺生石』は、『狐人』の持つ『妖術』の力を第三者に与える。『魔剣』にも劣らない魔道具となる……」

ただし、と呟いたタケミカツチが顔を上げた。

「生贄となった狐人は、魂の抜け殻となってしまおう」

『魔剣』に劣らぬ、『妖術』の種類によっては絶大な効果を秘めた魔道具。それを得るが為に、生きたまま魂を引き剥がす。

それが禁忌と称される所以。

他者が狐人の『妖術』の行使を可能とする、人類の先人が生み出した負の魔道具だ。

「魂を奪われた人はどうなるんですか!」

立ち上がった千草が悲鳴の様な声を上げた。

共に暮らす「タケミカツチ・ファミリア」の面々ですら見た事がないような、大きな声で、泣きそうな表情で、『殺生石』の生贄になった者のその後を問う。

『殺生石』を体内に注入すれば、魂を奪われた狐人は目を覚ます。肉体さえ無事ならば、何事も無く生きていけるだろう」

タケミカツチの返答に皆が安堵する。しかし、タケミカツチは険しい表情を崩す事はなく、その様子に皆が再度不安の表情を浮かべた。

「だが、『殺生石』は砕ける。いや、むしろ砕けてから本領を発揮する」

続く言葉に一同が表情を強張らせる。

「砕けた『殺生石』はその欠片一つ一つが『妖術』を行使できる発動装置だ。効果は正式魔法と変わらず、詠唱も必要としない」

砕かれた破片を手にした全ての者に狐人の魔法を分け与える事が出来る。

石の恩恵を受け『妖術』と呼ばれる稀有な魔法を行使する軍団。封じ込められた『妖術』次第で、それは絶大無比となるのは間違いない。

その説明を聞いた女神が蒼白となり、震える手で口を覆った。

「……破片が紛失したり、万が一壊れたりした場合、その生贄となった方はどうなるのでしょうか？」

絶句する一同の中、真っ先に冷静さを取り戻したりリリが問う。

タケミカツチが答えるのをためらい、視線を彷徨わせて不安そうな眷属を見て、重い口を開いた。

「少なくとも、元通りとはいかん。残った破片を掻き集めて魂を戻したとしても、赤子同然になるか……あるいは廃人か」

立っていた千草が崩れ落ちかけ、桜花が咄嗟にそれを支える。

皆が絶句しているさ中、不意に一人の猫人が陽気そうな声を上げた。

「んで、ソレってウチが襲撃された原因になんか関係あんの？ その春姫だっけ、確かに可哀そうだなとは思っぜ？ でも今は関係無くなええか？」

部屋の隅で話を聞いていたディンケが不愉快そうに眉を顰めながら、声色だけは陽気そうに問うた。

極東の知己の危機、それを関係無いと叩き斬られた事に「タケミカツチ・ファミア」の面々が怒りの表情を浮かべてディンケを睨む。

睨まれたディンケは肩を竦め、睨み返した。

「テメエ等の事情はテメエ等で片付けてくんねえかな。俺ら関係無いだろ。んな事より、襲撃された原因だよ」

「ヘスティア・ファミア」を襲撃した美神の目論見。彼女の手中にある『春姫という狐人』と『殺生石』。

『殺生石』は春姫の魔法を封じる為に用意された代物。そこまでは容易に想像がつく——それで、襲撃された原因は何なのだ、と言う話だ。

「その春姫って奴が生贄にされんのは今夜だろ。『鳥羽の石』の性質的に満月の夜に儀式を行うんだらうしな」

何気なく言い放たれたデインケの言葉。その言葉に桜花や千草、タケミカツチの眷属達が一齐に立ち上がりデインケを責める様な目を向け、タケミカツチがそれを遮った。

「やめろ。彼を責めるな」

「ですが、こいつは春姫の事を——」

「それでも、だ。桜花、やめるんだ」

臆病な千草ですら、前髪に隠れた美しい瞳でデインケを睨む。

一触即発、もはや我慢の限界とでも言う様に猫人が片隅に転がっていた大刀の柄に手を伸ばした所で、リリが声を張り上げた。

「やめてください！今は身内で争っている場合ではありません、デインケ様もどうか落ち着いてください」

最も冷静な意見を上げられ、デインケが大刀に伸ばした手を引つ込め、静かに腕を組んで不愉快そうにタケミカツチの眷属達を睨む。

襲撃の原因がわからない。自分たちは襲撃を受け、仲間から犠牲者すら出てしまった。だというのに話し合いの内容は春姫と見ず知らずの狐人ルナールについて。

彼らの怒りもわからなくもない、とタケミカツチが桜花達を宥めようとしているさ中、話の途中から沈黙していたヘステイアが震える声を上げた。

「タ、タケ……」

「どうしたヘステイア」

先のタケミカツチに劣らぬ程に顔面蒼白となっているヘステイアの異常に気付いた皆の視線が女神に集まる。

「ひ、一つだけ聞いても良いかな」

「あ、ああ、どうした」

『殺生石』って、一人につき一つという認識で良いのかい？」

女神の問いかけに男神は微かに眉を寄せた。

質問の意図がわからないままに、タケミカツチは答える。

「生贄一人につき、殺生石は一つで十分だ。完全に封印する以上、一人の狐人ルナールからは一つの『殺生石』しか生成できないが——ヘステイア？」

「そっか……そうか、そういう事だったのか!？」

震え、顔を覆っていたヘステイアが立ち上がり、喉が張り裂けんばかりに叫んだ。

その絶叫に皆が固まる中、女神はタケミカツチの服を掴み、叫ぶ様に声を張り上げた。

『殺生石』は二つある!! ミリア君は『数を集めて使う物かも』だなんて言っていたけれど、今のを聞いて確信したっ、
「ヘステイア・ファミリア」が襲撃されたのは、狙われていたのはミリア君だ!!」

「お、落ち着いてくださいヘステイア様。『殺生石』が二つあるのはわかりましたが、ミリア様が狙いだというのがわかりません」

突然取り乱したヘステイアを、リりとヴェルフが引き剥がす。

女神の突然の言葉に面食らっていたタケミカツチが顎に手を当てて考え込み始め、訳も分からない桜花達が目を見張る。デインケは一人、腕組をして片目を閉じて呟く。

「まさか、ウチの副団長様が狐人だと勘違いされて、魔法を奪おうとしたなんてそんな馬鹿な話が——」

「それだ!？」

女神が思い至ったであろう結論をデインケが切り捨てようとし、それを遮る様にタケミカツチが大声を張り上げた。

「そういう事だったのか、だからお前達は襲われて……美神は何てことを——」

千草達は慕っている主神の激変振りに驚愕し、呆然としている。

「ああもうっ、ヘステイア様っ、タケミカツチ様っ、リリ達にわかる様に説明してください!？」

神々の持つ視点ゆえに理解した二人の神の狼狽にリリが声を張り上げる。

冷静さを取り戻した二人の神が長椅子に腰掛け直し、眷属達も自らの席に着く。

デインケは壁を背に凭れ掛かり、フィアは隅で倒れたまま微動だにしない。

「それで、ミリアが狙われたってどういう事ですが、ヘステイア様」
嫌な沈黙に満たされ、時計の秒針の音が響く中、ヴェルフが代表して口を開く。

その問いに二人の神が視線だけのやり取りを行い、女神が答えた。
「まず、大前提としての話になるんだけど……ミリア君は新しいスキルを発現していた」

「スキル？」

唐突なステイタスの暴露にヴェルフが眉を顰め、リリが何かを思い出した用に呟く。

「もしかして、ですが……【月下狂唱】^{ウールヴヘジン}の事ですか？」

「それって、ファイアも持ってたよな？」

冷静さを失いかけて再度暴れかけたディンケが、自らの内の怒りから視線を逸らすべく冗談めいた口調で横に転がる狼人の少女に問う。

「……アタシのは【月下天駆】^{ウールヴヘジン}だ。狼^{ウエアウルフ}人なら誰もが持つてる獣化スキル」

本来の【ウールヴヘジン】は、狼^{ウエアウルフ}人なら誰もが持ち得る獣化スキル。

基本効果は、月の光を浴びることで獣性と力が発揮され、全アビリティ能力に超高補正がかかり、状態異常も無効化するというものだ。

発現した狼人が持つ一部スキルや魔法も強化される事もあり、基本的に非常に強力なスキルとして知られるが、月の下でないと発動不能のためダンジョンでは発動しない。

「アタシの場合、月の光を浴びていれば、文字通り『空を跳べる』がダンジョンじゃ役立たず」

ぼそり、と呟かれた言葉にディンケが肩を竦め女神を伺う。

「ミリア君のモノは魔法の威力増強や、月の光による高位の発展アビリティ《精癒》の効果を得られる。後は一部スキルのダメリット無効だ」

「そのスキルが狙われた原因……さて、狼^{ウエアウルフ}人のスキル、狼^{ウエアウルフ}人？」

何かに気付いた様にヴェルフがリリに視線を向け、リリもまた思い当たった事を口にした。

「ミリア様のスキル、『クラスチェンジ』でしたか。アレは確か、ヘステイア様が指定した性質クラスに自らを変更するモノ。その中に狼ウエアウルフ人の『強襲型』と言うものがありましたか、まさか……」

ミリア・ノースリスが持つ、他に類を見ない、自らの魂の形状や性質そのものから別のモノに変化するという超希少レアスキル。

一人一人違うはずの魂の形を、女神が予め指定しておくことでその形状へと変化させるといふ異質極まりない代物。

持ち得る性質クラスの全貌を知るのは女神と、ベルやりり、ヴェルフ等の親しい仲間のみ。

『通常型』、小人族。

『強襲型』、狼人。

『特殊型』、犬人。

『回復型』、種族不明。

『飛行型』、竜人。

『召喚型』、猫人。

そして、都市の全ての者達が目にしたであろう戦争遊戯ウォーゲームのさ中に使
用した、一つの性質クラス。

「魂の形質からの変化……狼人もある……戦争遊戯でミリアが使っ
てたのは……」

『狙撃型』、狐人の性質……」

ヴェルフとりりは、今置かれている現状を少しずつ理解し始め、表
情を歪める。

「まさか、ノースリスさんは小人族バルウムですよね。なのに、狐人専用ルナールの儀式
の生贄になんて」

「出来るだろうな」

信じられない、と声を震わせる千草の言葉を、固い表情のタケミカ
ツチが否定した。

「地上の人間ことにはわからないだろうが。あの時、ミリア・ノースリスの
『魂の変質』は俺達神々にとってみればあまりにも異常だった。何せ、
一人一つしか得られないであろう神の恩恵ファルナを複数持つに等しいモノ
だったからな」

「複数の恩恵を、持つ？」

「詳しくは話せないが、『最強の眷属計画』の一つにあつたが……今は関係無いな」

神々がかつて行つた不正行為。

人間こどもが持つ想いを歪め、思い通りの魔法やスキルの発現を狙う、人の尊厳すら奪い去つた非道な行い。その果てに生まれるだろうと、机上の空論の上になにか存在しなかつた、希少レアスキル。

「ガネーシヤ様から聞いた事あるな」

魔法やスキルの発現条件。

その身に宿る才能と言う名の下地。その上に自身が集め溜めた経験値エクセリアと言う材料が乗せられ、人間こどもが持つ想いによって形が整えられて、初めて魔法やスキルと言つた形に至る。

神フルナの恩恵リセットの消去と共に消えた経験値エクセリアを集め直したとしても、似たような魔法しか出ないのは、人の子が持つ想いはそうそう変わる事が無いから。

その想いを歪める様な出来事があれば、話は別。

それを、想いも何もかもが歪み壊れる程の経験を、ミリア・ノースはしてきた。

「じゃあ、もしかして……あの魔法の砲撃や透明状態インビジビリティが使える時の副団長は、狐耳が生えたなんちゃって狐人ルナルじゃなくて……」

「魂の形状や性質は、狐人ルナルのモノと全く同じだ」

ミリア・ノースリスが自らの性質クラスを『狙撃型クワシ・スナイパー』にしている時であれば『殺生石』に魂を封じ込める事が可能だ。とタケミカツチが呟いた。

「ああ、そんな……あの戦争遊戯ウォーゲームの時に目を付けられて……」

「ふざけろっ、ミリアを生贄にするだど!？」

美神インシュタルの目論見——襲撃の原因。

戦争遊戯ウォーゲームの時に都市の全てのものに晒した、性質クラスを変更するスキル。それによって『魂そのものからの変質』を行った。狐人ルナルと同質の魂となつた事。

そして、その際に見せつけた遠距離砲撃魔法、そして透明状態インビジビリティの魔

法。

それを知った美神イシユタルは彼女を、ミリア・ノースリスを、その『魂』を奪い、その魔法を行使できる『殺生石』の生成。

「は、ははは……なんだ、そういう事か。そうだよな、あの魔法が手に入るなら、イシユタルの持つ私兵、戦闘娼婦バベラが全員、砲撃魔法を使ってくる？ もしくは姿を消しての襲撃？」

乾いた笑いを零したデインケが納得の表情で呟く。

「そりや、そりやあ、【ガネーシャ・ファミリア】も【ロキ・ファミリア】も関係ねえよな。だって、遠距離から一方的に砲撃されりやあ、第一級冒険者でもきついんだからよ」

城塞を穿ち抜く威力を持つ砲撃を、2Kキロルも先から一方的に撃たれば成す術等無い。

透明状態インビシビリテイの効力もまた、偵察、逃走、強襲、ありとあらゆる場所で活用できるであろうことは想像に易い。

此度の襲撃の原因。それに辿り付いたデインケがへらへらと笑い

——卓を拳で砕き割った。

「つぎけんなっ!!」

人質は明日には返すという【麗傑アンテイアネイラ】の言葉。

人質を返せば、次の日には【ロキ・ファミリア】と【ガネーシャ・ファミリア】が徒党を組んで報復を行う事が確定しているというのに、『明日には返す』と言った。

——今晚さえ凌げば、後は手にした『殺生石』を使えばどうとでもなる。

その意味を理解し、デインケが吠える。

「そりやあそうだろうよつ、あの魔法が手にはいりや、ロキもガネーシャ様も怖くねえよなあ!!」

吠え、暴れ、砕けた卓を踏み締め、一通り暴れたデインケが動きを止めて歯を食い縛る中、ヘスティアは静かに皆を見回した。

「聞いてくれ。今からミリア君達を取り戻しに行く」

「それは……【イシユタル・ファミリア】と戦争すると……？」

人質も取られていて動けない、とヴェルフが声を上げると、リリが

顎に手を当てて、デインケとファイアの二人に視線を流して呟いた。

「いえ、人質はリリ達には使えない筈です」

「どういう事だ」

「人質は、あくまでロキとガネーシャの派閥を封じる為のモノでしょう。リリ達が暴れても、命を奪われはしない」

人質は、生きているからこそ意味がある。

その人質をとった理由は、「ロキ・ファミア」と「ガネーシャ・ファミリア」に救援を求めない様にする為。

もしも人質を失ってしまったら、二大派閥が攻めてくる事は確定している。

「つまり、今晚の儀式を終えるまで、人質は殺される可能性が低いと思います。それに、手をこまねいてはミア様が……」

「くっ、他に方法はねえか」

このまま時が過ぎるのを待てば、ミア・ノースリスは儀式の生贄にされて死ぬ。

人質も、返すとは言っていたが保証はどこにもない。むしろ、開戦の狼煙代わりに見せしめとして殺害される可能性の方が高い。

どのみち、既に二人も命を奪ってしまっており、戦争を回避できない以上、増えても変わらないと——むしろ戦力を削れると殺されるのは目に見えている。

「……タケ、協力してくれ」

「ああ、此方も春姫は救いたい」

人質として攫われた仲間の救出、そして生贄にされるであろうミアの救出。

儀式の生贄にされる春姫を救う。

ロキやガネーシャと言った強力な派閥に助けを求められない以上、手を組むべきだと判断した主神二人が領き合う。

「第一優先は人質の救出。ベル君、ミコト君、エリウッド君、イリス君、メルヴィス君の五人を最優先」

「人質さえ取り戻せば、ロキやガネーシャに救援を求められる」

人質を救出し、ロキやガネーシャの助力を得て儀式の妨害を試み

る。

作戦とも呼べない作戦を聞いたタケミカツチが立ち上がった。

「桜花、千草、いったん本拠ホームに帰って準備するぞ」

慌ただしく去っていく「タケミカツチ・ファミリア」の面々を見送りながら、女神が力強く宣言した。

「準備が出来たら正面門に集まってくれ。ボクも直ぐに行く！」

女神の言葉を聞いた皆が駆け出していく中、狼ウエアウルフ人の少女もふらりと立ち上がり、自身の部屋に向かい歩き出した。

「ファイアはまだか……？」

「ヘステイア・ファミリア」正面門。

茜色に染まった噴水の淵に腰掛けたヴェルフの言葉に、ヘステイアが心配そうに館に視線を向ける。

負傷を治療したばかりで包帯等が見て取れるヴェルフやリリを見たデインケが頭を掻き、溜息を零してから女神に声をかけた。

「先に行つてくんねえかな。俺は後からファイアと行くわ」

「でも……いや、わかった。ボク達は先に行くよ」

彼の眼を見たヘステイアは何かを悟り、ヴェルフとリリと共に駆け出していく。

「遅れるなよ」

「リリ達は先に行つてますから」

ヴェルフとリリの言葉を聞いた猫人は半笑いを浮かべ、館を見上げる。

準備の為にと部屋に戻り、その後、正面門で集合と言われたにも関わらず一向に現れない狼人の少女。

面倒くさそうに頭を掻きながら玄関を潜り、デインケはファイアに与えられた部屋を目指す。

「……か……」

扉にかけられた看板プレートに刻まれた『ファイア・クーガ』の文字を流し見

てから、扉を軽く叩き、可能な限り陽気そうな声を張り上げた。

「おーい、居るかー?」

一度目は返答無し。嫌な静寂が満ちる中、そういえば先ほど傷が開いて血が出ていたなと思ひ出したデインケは、無いとは思いつつも扉を強く叩く。

「おい、倒れてたりしないよな、おーい」

ドンドンドン、と強めに扉を叩いて中の音を伺う。

微かに聞こえたのは、すすり泣く様な声。

「……開けるぞ」

取っ手に手をかけ、扉を開こうとし——ガチンツと言う抵抗音を聞いたデインケは眉を顰めた。

「あー……なるほど」

ファイア・クーガは自室に閉じ籠っていた。

今から「イシュタル・ファミア」に戦争を仕掛ける。その話は彼女も聞いていたはずだ。

だというのに部屋に籠る——その意味が分からない程、デインケは馬鹿では無かった。

「ファイア、ファイア、聞こえてるんだろ」

中から微かに聞こえるすすり泣く声。時折聞こえるしゃくり上げる音。

よくよく聞いてみれば、その音は扉の直ぐ向こう側からの音だと察する事が出来る。扉に背を預けて泣いている姿を想像したデインケが、同じように扉に背を預けて肩を竦めた。

「今から人質救出に行かなきゃだぜ? ほら、イリスとメルヴィスが捕まっちゃってるんだ」

行くだろ、とデインケが口を開くより前に、扉越しで聞き取り辛い声が耳に届く。

「……なあ、お前、どうしたんだ? 行かないのか?」

「……か」

か細い声、扉越しと言う事もあってか、獣人特有の鋭い聴覚を以て

しても聞き取れない。

頭を搔き、デインケは静かに、優しく問いかけた。

「悪い、聞こえなかった。何て言ったんだ？」

『お前は、恐く無いのか』

絞り出された声を聞き届け、デインケは目を閉じて考え込む。

人質の数、協力する事となった「タケミカヅチ・ファミリア」。

現在の戦力、Lv. 3の第二級冒険者は立った二人、残りは第三級冒険者。対して敵はLv. 3が基本の戦闘娼婦との戦闘は厳しいモノとなる。人数差に至っては想像すらしたくない程だ。

ここで、Lv. 3の一人が抜けるのは痛すぎる。そう判断したデインケが元気づける様に明るい声をかけた。

「ファイア・クーガ、お前は凄い奴だよ。サイアを救ってみせたんだ」

『——がう』

「サイアみたいにさ、他の奴も助けちまおうぜ？」

『違うんだ』

「なあ、行こうぜ？」

『——ッ!!』

小さな、悲鳴が扉越しに響く。

背を預けたまま、デインケは静かに目を開き、扉に向き直る。

「なあ、どうしたんだよ。話してくれねえとわかんねえんだわ」

『アタシは、逃げたんだ』

微かに響いた声に、デインケは目を細める。

彼女は逃げたと言った。しかし、ファイアは確かにサイアを救っている。

半身を潰されて瀕死だった彼女を、見事地上に送り届けた。「デインケヒト・ファミリア」に運び込まれた以上、彼女は確実に助かる。だからこそ、デインケは彼女の様に冷静に場を判断すればよかったと嘆いたのだ。

——冷静に、判断したのを。

「ああ、そうだよな。怖いんだろ」

ガタン、と扉に何かがぶつかる音。

その音を聞きながら、ディンケはゆつくりと問うた。

「逃げたって、どういう事だ」

扉越しに聞こえる身動きの音が聞こえ、暫くしてファイアが語りだす。

『アタシは、逃げたんだ』

突然の襲撃。最初の一撃でサイアが半身を潰された。

余りにも唐突過ぎて、最初は何が起きたのかわからなかった。

飛び散った血と、肉片と、色々なモノの匂いがサイアの匂いと交じり合って咽返りながら、襲撃者の姿を見た。

半身を血に染め、楽し気にゲゲッと気色の悪い笑みを浮かべた、第一級冒険者の姿を見てしまった。

『死んだ、と思ったよ』

仲間が、一瞬で瀕死に陥った。

グランが大盾を手に飛び出していく、イリスも同じ様に飛び掛かるうとして、戦闘娼婦達が立ち塞がった。

フリユネは最初の一撃を加えた後、戦闘娼婦達から批難されて眉を顰めて後ろに下がったのだ。

グランとイリスが戦闘娼婦と乱戦を繰り広げる中、メルヴィスが半身の潰れたサイアの治療を行おうとしていた。エリウッドと共に、傷口を火で焼いて止血代わりにし、吹き飛んだカーゴから綺麗な布を引っ張りだしてサイアを包んでいく。

その間、ずっと槍を握ったまま、ファイア・クーガは震えていただけだ。

『何も、出来なかった。体が動かなかった』

敵に対抗すべく武器を手にとり戦うグランにイリス。

瀕死に陥ったサイアに応急処置を施すメルヴィスにエリウッド。

姿が見えないディンケにルシアン。

突っ立ったままガタガタ震えている自身。

『メルヴィスが、アタシの槍を奪ったんだ……』

震えているだけだった自分の手から、槍が奪い去られた。そう思った時には何かを押し付けられた。

『サイア、だったんだ……』

まだ生きていた。半身が潰れて瀕死に陥りながらも、まだ息をしていた。

恐怖で固まっていたファイアに、メルヴィスは応急処置を済ませたサイアを押し付け、言った。

——逃げて。と

皆が戦っているさ中、自分だけ逃げるなんてできないと、ありもしない勇気を振り絞って言葉を絞り出そうとした。その時、デインケの声が響いた。

皆無事かと問いかける声、瞬間、フリユネがデインケの声目掛けて突撃していき、轟音が響き、よろめく程の衝撃が場を支配し、二度目の轟音で——土煙の向こう側から、血を撒き散らしながら何かか飛んできた。

『足だよ、足……ルシアンが履いてた足具付きの、足が』

ファイアの顔の横をすさまじい勢いで横切った、誰かの一部が。べつとりと、全身に血を浴びた、誰かの血を。

一瞬で匂いが塗り替えられ、イリスが飛び出していき、グランがそれを止めるべく戦闘娼婦を蹴散らして追っていく。

いつの間にか倒れ、捕まっているエリウツドが視界の端に見える。目の前のメルヴィスは震える手で槍を構え、ファイアを背に庇って言った。

——貴女しか出来ない。と

仲間が決死の覚悟で足止めをしようとしている。本来なら後衛とし、前衛になんて出てこないエルフが、前衛向きのファイアを庇っている。

理屈はわかる。それなりの敏捷を持つ自分なら、壁を駆けるスキルを持つ自分なら、サイアが完全に死ぬ前に地上まで連れて行ける。

逆では無理だ。メルヴィスの敏捷では足りない。だからサイアを抱えて地上を目指すのはファイアでなくてはならない。

『……グランがさ、叫んだんだ』

グラン・ラムランガの叫び声が響いた。

パーティで最も耐久に優れ、大盾を持つて怪物の突撃を受け止め続けた強者。ファイアも頼りにしていた、パーティの前衛壁役^{ウォール}。

——彼が、一撃で粉碎された。

喉が干上がり、全身から嫌な汗が溢れ返り、股からは垂れ流し状態。心が、完全に折れた。

サイアの半身は一撃で潰された。最も強いグランですら、一撃で粉碎された。

ならば、自分ならばどうなっていただろうか。そんな想像をしてしまった。

『メルヴィスが、言ったんだ』

——行って。サイアをお願い。と

それは、甘い誘惑だ。

目の前で、自身より耐久の高いグランが一撃で粉碎されたのを見てしまった。完全に、勝てないと心が折れてしまった。そんな時だ、誰にも責められる事無く、逃げる事が出来る選択肢を握らされた。

ファイア・クーガは、逃げたのではない。サイア・カルミを救う為に動いたのだ、と。

『ああ、逃げたよ。逃げた……アタシは逃げたんだ』

その後の事はよく覚えていない。記憶にあるのは、【ディアンケヒト・ファミリア】で手当てを受けている所だ。

背中に槍が刺さっていたと言われて、ようやく痛みを自覚する程に呆然自失に陥っていた。

『アタシは、逃げたんだ』

目の前で仲間がやられたのを見て、怯え震え、失禁して逃げ出した臆病者だ。

サイアを助けたのだって、それが体のいい言い訳だったからで、自分が逃げる事しか考えていなかった。

千草に躍り掛かったのは、ただの八つ当たり。こうやって部屋に籠っているのは……。

『怖いんだよ、あの化物がっ』

第一級冒険者【男殺し^{アンドロクトノス}】フリユネ・ジャミール。

あの化物を相手に、もう一度戦えなどと言われても、臆病者のフィアには不可能だ。

否、【イシユタル・ファミリア】に抵抗しようとする意志すら挫かれていた。

『なんで、お前は……怖く無いのかよ』

恐怖に震え、心折れた少女の問い。

『アタシは、無理だ……』

部屋から出られない。

仲間が人質に取られているのに。他の仲間が助けに行こうとしているのに、自分は心折れて閉じ籠っている。

情けなく、みつともない、臆病者の狼^{ウエアウルフ}人。

「そっか、そうだよなあ」

扉越しの慟哭を聞き終え、デインケは頭を掻いた。

あの第一級冒険者の顔を思い出し、眉を顰める。

歯牙にもかけなかった。路傍の石ころを蹴っ飛ばす様な気軽さで命を奪っていった。敵とすら見られていなかった。

それでもその恐ろしさは身に染みる程に理解できていた。

ヴェルフも、リルルカも、タケミカヅチの眷属達もきつと理解していない。あの恐ろしさを、恐怖を。

「……………まあ、そうだな、恐くないって言えば嘘になる」

デインケが己の手を見れば、情けないぐらいに震えている。怒りと言う感情を燃やして、ようやく吠える事が出来る程度に、恐怖が体に染みついていく。

自身の事を誰よりも理解しているからこそ、彼は鼻で笑い、扉越しに告げた。

「怖い。怖いさ……もしかしたら、死んじゃうかもしれないねえ」

『だったら、お前も、一緒にさ……』

「だが、俺にはやらなくちゃいけない事がある」

』

「助けに、行かなきゃいけない。副団長も、エリウッドも……皆を、な」
軽く扉に拳を打ち付けたデインケは、震える拳を強く握り締める。

「怖いなら待ってろよ、俺は行く」

茜色に染まる『竈火の館』を見上げ、猫人の青年は一人で武器の柄を強く握りしめていた。

「あくあ、俺って説得に向いてねえなあ……」

第一六七話

石材の軋る音色と共に、ベルが地下通路の石造りの扉を押し開ける。

隙間から差し込む赤い光に目を細め、久々に感じる屋外の空気の気配に重苦しい気分がほんのわずかにだが回復した、気がする。

「やっと出れた……」

ベルが呟きながらも周囲を見回して、人影が無い事を確認すると上から手を差し出してきた。

「ミリア、春姫さんも」

ベルの手を掴み、地上に引き上げてもらう。

場所は裏路地の一角。見上げた空は建物の形に切り取られ、茜色に染まっていた。

時刻は既に夕方。ヴェルフやリリが無事であるのなら、既に「ガネーシャ・ファミリア」や「ロキ・ファミリア」が動いていても良い筈なのだが、抗争ドシバチの気配は無い。

周囲の娼館は使用されていないのか、外壁が僅かに剥がれ落ち、劣化しているのが見て取れた。……この場所は女神イシユタルが滅ぼした他の美の女神達が仕切っていた一帯だろう。

半分廃墟化した娼館に囲まれながら、ベルが声を出した。

「本当にありがとうございます、春姫さん。ここまで連れてきてくれて……」

「私からも感謝するわ。本当にありがとう」

あのままフリユネに弄ばれていたら、と考えるだけで背筋がぞつとずる。物理的に背中がじくじくと痛むが……。

石畳に溶け込んでいる扉を閉めつつ、耳を澄ましてみるが見事に静寂に包まれていた。ガネーシャ様やロキは動いていない？ ヘステイア様はどうしているのだろうか。もしかして、俺が他派閥に伝えるのを控える様にお願ひしたから、黙っている可能性……いや、なんで襲撃を受けたんだ？ ……今、考える事ではないか。

「私わたくしがやりたかっただけでございます。お気になさる必要はございま

せん。それよりも、早くここからお逃げになってください」
「でも……」

「ミコト様の事も、必ず私わたくしがなんとかかしてみせますので」

ベルが春姫を見て迷う様な言動を繰り返している。もしかして、ベルも違和感は抱いているのだろうか。

ミコトの事もそうだが、まずは此処から脱出しないといけない。

ガネーシャ様が動いていないのはギルドに足止め喰らってる可能性があるが、ロキの方は動いていてもおかしくはない……もしかして、ヴェルフ達が無事では無かったか？ それとも、襲撃者が誰か判別できていなかったか。

どちらにせよ、今すぐこの娼館街から抜け出して連絡を取らなくては。今の戦力で春姫を救うのは難しい。だが、ガネーシャ派閥やロキ派閥の助力を得れば——今ならイシユタル派が仕掛けてきたという理由で大手を振って動ける。

「春姫さんっ、やっぱりこのままじゃあ、貴方が……」

真っ直ぐな瞳で、その奥に困惑と焦燥を混ぜ込んだ色を宿し、少年が説得する様に言葉を続けようとして、上手く言葉が出てこずに尻すぼみとなって途切れた。

ベルが訴えかけてくるように此方に視線を向けてくる。なんとか春姫さんを連れて行きたいという意思を感じるが——無理だろう。春姫の首に付いているのが、ただの装飾品アクセサリだとは思えない。

「……クラネル様、これを見てください」

何となく、察してはいた。春姫が自らの首に付けられた黒い首輪チヨウカを示して申し訳なさそうに言葉を紡ぐのを見て、確信に至る。

「これは私の居場所わたくしを伝える、魔道具マジックアイテム……見えない鎖に繋がれた『首輪』にございます」

「えっ……？」

「私の行き先は常にイシユタル様達に筒抜けなのです。歓楽街から一歩でも外に出れば音を立てて鳴り響き、首を焼いて身動きを封じ、追手の方々が駆けつけてくるでしょう」

——想像以上だった。

首を、焼く？ 一定範囲から出た場合に警報が鳴る。までは想像していたが、まさか身動きを封じる為だけに首を焼く機構まで取り付けられているなんて、惨い。

それほどまでに、春姫に逃げられるのを、奪われるのを警戒しているのか、イシユタルは。

「気付かれてしまえば、ここにもきつと、すぐに誰かが追ってきます」

だから早く逃げて、と。気丈な微笑みを浮かべた彼女は言った。

「私わたくしはここまでです」

「そん、な……」

呆然としたベルの眩き。そして、気丈に微笑む春姫の表情。

胸がギチギチと音を立てる程に締め付けられ、息が出来なくなる。もつと、もつと早くに気付いて、もつと強引な手段でも何でもいいから春姫をここから連れ出させていれば——いや、まだだ。

まだ終わってない。春姫は絶望に暮れてはいても、命までは失っていない。直ぐに脱出し、ロキやガネーシャ様の派閥の協力を得れば、彼女を救う事が出来る。

「ベル、行きましよう。今は引くしか無いです」

「でもっ」

ベルの手を引いてこの場をいち早く立ち去ろうとするが、恐ろしい想像に行き付いたのかベルはぎゅつと拳を握ってその場から動こうとしない。否、動けなくなっていた。

「っ……クラネル様、さあ早くっ」

春姫も急ぎ立てようとして、カタンツと、半分廃墟化していた娼館の外壁の一部が崩れ落ちて音を立てた。その音の出処に視線を向け、顔を上げると人影が一つ。

「ベル殿ツ、ミリア殿ツ!!」

切迫した声を放ちながら娼館の屋根から飛び降りてくるミコトの姿があった。

すわ敵かと警戒していた俺は思わず息を吐き、険しい表情を浮かべたミコトの様子に嫌な予感を感じた。むしろ、合流できたことを喜ぶべき場面だと言うのに、舌の根が痺れるような、重たい嫌な予感。

「ミコトさん!?!」

服装が随分と変わり、何故か膝上丈しか無い若干卑猥な着物に身を包んでいる事に意識を向けて嫌な予感を見据える。

そんな俺を他所に、まるで春姫が俺達と共に居る事を確信していた様に、彼女は同郷の幼馴染を見据えた。

「ミコト様……」

「春姫殿、聞きたい事があります」

「……何でしょうか」

喜びの再会、等と言う雰囲気ではない。

余裕が微塵も無い絞り出す様なミコトの問いに、春姫が表情を、感情を消した無機質な声で応える。

「……『殺生石』」

「ッ!!」

春姫の変化は、余りにも劇的だった。

肩を震わせ、目を見開き、俯いて黙り込んでしまう。

『殺生石』、その単語に聞き覚えがあった。『狐人の妖術の効果を上げる』と言う代物だったはずで……本当にそうだろうか？ 何か見落としていないだろうか。

ふと湧き上がる疑問は、先ほど感じた嫌な予感と交じり合って思考をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

春姫の様子を見たミコトは、今にも泣きだしそうな表情を浮かべ、何のことかわからず置き去りになっているベルが交互に春姫とミコトを見た。

「馬鹿なっ、嘘だと言ってください！ 貴女が犠牲になるなんて!?!」

ミコトの悲痛な問いかけに、春姫は俯いたまま沈黙して何も否定しようとしなない。

名を呼び、詰め寄ろうとして——聞き覚えの無い声が響いた。
「——やっぱり、そういう事かい」

弾かれた様に魔法の詠唱を行おうとして、突然目の前に現れた黒髪をなびかせる女戦士に瞠目するのと同時。

「【シヨットガンマ——ごひゅっ!?!】」

喉に向けて放たれた手刀による突き。的確極まりない詠唱妨害に魔法は発動すら許されずに咽込み、詠唱を封じられた。

そうしている間にも、呆然としていたベルと、突然の出来事に反応出来ないミコトの目の前から、女戦士は春姫を搔つ攫つて娼館の屋根の上に飛び上がった。

「全く、いつから面識があったんだか……」

現れたのは、左手に大朴刀を持った【麗アンティアーネイラ傑】、Lv. 4に届きうる
と噂されるLv. 3のアマゾネス。

愚痴を口にしながらも、彼女は春姫の頭を胸に抱き寄せている。

「アイシャさん……っ！」

抵抗されぬ様にと鍛える事を禁じられていても不思議ではない、故に春姫はLv. 1だろう事は想像に易い。故に、格上のアイシャ・ベルカに抱き込まれた彼女は動きを封じられて逃げられない。

逃がさない様に春姫を抑え込んでいる——だが、彼女はまるで春姫を守っているかのようにも見えた。

「知つちまつたようだね、私達の計画を」

「っ……それじゃあ」

詳細については不明だが、春姫を犠牲にして何かを成そうとしているのはわかった。

屋根の上、茜色に染まる空を背景に女戦士は見下す様に見下ろしてくる。まるで、奪えるものなら奪ってみろとでも言いたげに大朴刀の切っ先を此方に向けながら——待て、なんで彼女は初撃で俺を仕留めなかった？

喉の痛みから詠唱どころか、問いかける事も出来ずに彼女を見上げていると、ベルが声を張り上げた。

「どういふことなんですかつ、春姫さんが犠牲になるって……一体!？」

「……全て主神様イシユタルの御心のままに、つてことさ。この春姫と——」

神のまにまに、仰せのままに。そう言いながらもどこか不満を抱いているかのような雰囲気イシユタルの女戦士の視線が此方を捉えた。真つ直ぐ、俺を見て、彼女は目を細めて哀れむ様に呟く。

「その【魔銃使い】を使って、敵対派閥を滅ぼす」

——は……？

あまりにも意味不明な彼女の発言に、ベルもミコトも、抜け出そうともがいていた春姫ですらも動きを止めた。

俺を、使つて？ 使つて？

困惑が全てを覆い隠して硬直する中、アイシヤは計画を話し始めた。

——俺と、春姫の魂を『殺生石』という魔道具マジックアイテムに封じ込め。

——『妖術』とまで謳われる狐人の魔法ルナールを行使できる破片を量産して。

——その力をもって、美神様イシュタルが目の敵にしている「フレイヤ・ファミリア」を壊滅させる。

都市の頂点に君臨する女神フレイヤを目の敵にしているのは知識としては知っていた。けれど、それを成せる程のモノは……いや、春姫の魔法だけじゃない。

俺の、魔法も？ ……戦争、遊戯、あの時か、あの時、美神イシュタルは俺に目を付けて——待て、だがどうして？ 『殺生石』とは何だっ

!?

俺の知る効果と違う。否、俺の知る効果が間違っていたのかっ!?

「ファミリアを、使う……？」

馬鹿じゃねえの。俺に手を出すって事は「フレイヤ・ファミリア」以前に、「ロキ・ファミリア」や「ガネーシャ・ファミリア」を敵に回す事になるんだぞ。

いくらなんでも大言壮語が過ぎる。

春姫の持つ『力』がどんなものかはわからないが、俺の魔法に関しても使用法次第で使い道はあるがそれは決定打としては……十分か。遠距離砲撃を連発されたらキツイ、とフィンも冗談交じりに語っていたぐらいだ。

「全てだ、敵対した派閥は全て……滅ぼす。それが美神様イシュタルの神託さ」

——ぶっ飛んでる。

とても、とてもではないが正気とは思えない。もしか、それほどま

でに春姫の『力』は凄いモノなのか？

「で、でもっ、春姫さんの『力』ってのは、その人は……!？」

「ただの無能な娼婦とでも言う積りかい？ ダンジョンで返り討ちに
あったのをもう忘れたのか。あんたを打ちのめしたあの『力』こそ春
姫の『妖術』だ」

返り討ちにした？ 誰が、誰を？ アイシャ・ベルカが、ベル・ク
ラネルを？

ベルとミコトが喉を震わせて硬直し、ぼそりと呟きを零す。

「あの、光が……」

「付与魔法っ」

「けほっ、その、付与魔法って、何」

喉の痛みが僅かに引いて何とか呟いた俺の言葉を拾い上げたのは、
ベルでもミコトでも無く、敵対者だった。

「『階位昇華』、それが春姫の『妖術』さ」

その解答に思わず眉を顰める。

どれほどの効果があるのかわからない。レベルを一階位上げる程
度なら、足りない。

「【男殺し】フリユネ・ジャミールの能力はLv. 5。一階位上げて
もLv. 6だ、とてもではないが都市最強のLv. 7には届かない。

他のLv. 3の戦闘娼婦がほぼLv. 3ばかり、唯一【麗傑】が
Lv. 3の最上位ではあるが、それでもLv. 4の集団にしかかなり得
ない。

第一級冒険者の人数だけで、片手の指では足りない【フレイヤ・ファ
ミア】を下すのは出来ないはずだが。

「アンタの『力』もあるだろう？」

———それか、それも含めてか。

透明状態での奇襲。

超遠距離砲撃による巨塔の砲撃。

そのどちらか一つでも手に入られれば、勝利は揺るがない。そう
言ってアイシャは鼻で笑う。

狙われた原因が、俺にある。思わず齒噛みした。

『殺生石』の効果を誤認していなければ、この事に気付く事ができたかもしれない。

極東の代物だから、もしかしたら神タケミカヅチ辺りは知っていたかもしれない。ヘスティア様に相談した時に、「タケミカヅチ・ファミリア」にこっそり伝える事を控える様をお願いしなければよかったかもしれない。

——神タケミカヅチの生真面目な性格上、もし春姫を救う手立てが無い状態を知れば……。

ああ、神タケミカヅチなら動く。彼の神はその優しさと勇猛さゆえに、イシユタルに直接交渉に行きかねない。そうなれば、秘密を知っている極小派閥の主神に対して大派閥の主神はどう出るのか。

必ず、情報の出処を探ろうとする。そしてあの武神は絶対に口を割らない。そうなれば美神は拘束するだろう。拷問してでも聞き出すとすると決まっている。

そうなれば桜花達は救出に向かう。例え敵う事が無いと知りつつも、主神の救出に向かう。そして、「タケミカヅチ・ファミリア」が危機的状况に陥りかねない。

ミコトは、絶対にソレを見捨てられない。だからミコトは動くだろう——そんな事になれば、「イシユタル・ファミリア」はヘスティア側から攻撃されたと大々的に声を上げ、此方を批難して猛攻を開始する。

ロキやガネーシャは動けない。ヘスティア側から攻撃したと大々的に言われてしまえば、彼の大派閥は己が派閥の名声故に動けない。

——俺の想像しうる最悪が、タケミカヅチへの連絡を洩る要因であり、それが原因で……。

「アイシャさん、お願いします!? わたくし 私はどうなっても良いっ、ですがクラネル様、ミコト様、ノースリス様は見逃してあげてくださいい!」
響いた春姫の叫びに現実に引き戻される。

この場においても、春姫は己が命よりも、俺達を優先した。彼女のその言葉が響き、俺の胸に炎が灯った。彼女だけは、春姫だけは救わなくてはいけない。

ああそうだ、今は原因の追究よりも成すべき事がある。此処からの脱出、そしてロキやガネーシャの助力を得ての抗争。春姫の奪取と、計画の粉碎だ。

「無理さ。もう既に手遅れだよ、私達は手を出しちまったのさ、後戻りなんてできやしない。……イシユタル様が、生かして帰す気がない」
既に「ハスティア・ファミリア」を襲撃してしまった。

この状態で俺達を逃がしてしまえばどうなるのか、そんな事誰にだって理解できるだろう。だから、春姫の懇願をアイシヤは一蹴した。

大朴刀の切っ先は、ずっと此方を向いたままで——ふと、疑問を覚えた。

初撃、完璧な奇襲を仕掛けたアイシヤは、何故饒舌に語る？ 『生き
て帰す気は無い』と言う宣言の積り、にしてはおかしい。

嘘の情報か？ それにしては整合性が取れている。イシユタルの行動に対して辻褃の合った計画だ。それに、彼女は俺達に何かを求めている。何だ、何を求めている？

「眷属をつ……家族を見殺しにするんですか!？」
「……………」

「戦いの道具にして、使い捨てにして!？」

ベルが放った糾弾に、アイシヤさんが仮面を被った。本心を隠す様に、冷徹な表情で、凍り付く様な瞳で、此方を見下ろしてくる。

「敵対派閥とケリがつけば、『殺生石』の中身は春姫に返すとイシユタル様は約束している」

「そのような口約束、叶う筈がないではないですか!! それにミリア殿はどうなるのです!？」

アイシヤの、慰めの様な反論にミコトが盛大に噛み付いた。

『殺生石』の中には魂が収まっていて、それが無くなったり、粉碎されたりしたらどうなるのか。想像に易い、きっと元には戻らない。

そして、「フレイヤ・ファミリア」だけではない、都市の派閥全てに喧嘩を売る様な真似をしようとしているのだ、その抗争は、想像も絶する程に酷いモノになるだろう。欠片全てが無事で済むとは思えない

い。

「貴女はっ!! ……それで良いんですか?」

勢い衰え、最後には震える声でベルが問いかける。

対するアイシヤの顔から、仮面が崩れ落ちた。

「……………お前達は、何もわかっていない」

春姫がやめたと、お願いしますと継り付くのを抑え込み、アイシヤは困窮した様に呟く。

「女神の嫉妬ほど、面倒で厄介なものはない」

知ってる。

神話で語られる神々の逸話、その中でもとりわけ多いのが『女神の嫉妬』、そして『神の怒り』か。

理不尽で、不条理な、天災にも等しい、神々の感情。

「その嫉妬だけで、下界の有り様を歪めちまう。人の運命だつて狂わせるし、戦争だつて起こす、私達の主神が抱えてるのはそーいうものだ」

美神が抱える、黒々とした業火。全てを焼き尽くすまで——
否、焼き尽くして尚永遠に燃え尽きる事の無い歪な炎。

ぞんざいな口調ながら、まるでその業火に焼かれた事があるかの様な……ああ、そういえば。

過去、一度『殺生石』は「イシユタル・ファミリア」に運び込まれている。だが、儀式は行われなかった。そして、とある戦闘娼婦が罰を受けた。

「説得なんて無駄さ、私達はイシユタル様に逆らえない」

彼女の眼を見て、何処か懐かしさと恐怖と、そして焼け付く様な怒りを覚えた。

——鏡に映るその色合いの瞳を、幾度となく目にした記憶がある。

その瞳を以てして、アイシヤは此方を睨みつける。

「馬鹿な娼婦の話をしてやる。いつも辛気臭い狐人の小娘が、そいつは反吐が出るほど気に食わなかった。いくら世話してやっても全てを諦めた様に笑いやがる」

まるで、他人事の様に、その時の苛立ちを吐き出す。

「嫌気が差したその馬鹿な娼婦は、過去に運び込まれたとある『殺生石』を八つ当たりして、ブチ壊した」

うそ、と腕の中で懇願していた春姫が言葉を失ってアイシヤを見上げる。

そうか、そういう事だったのか……彼女は、アンテイアネイラ【麗傑】はかつて、過去に……。

全てを吐き出す様に、アイシヤ・ベルカの慟哭を思わせる言葉は止まらない。その『馬鹿な娼婦』の至らない行動を心底罵倒にする様に、怒りを滲ませながら空気を震わせた。

「すぐにその娼婦のやった事はバレた。クソツタレなヒキガエルに散々ボロクソにされた後、主神の手で頭がおかしくなるほど……『魅了』された」

ああ、そうだ、その目を俺は知っている。

いつもいつも、鏡に自身の姿を映す度、俺はその目を見てきた。

怒りを燃やしながら、その奥に隠しきる事の出来ない恐怖を抱いた、洗脳されきった瞳。

「主神の命に背けば手足が勝手に震えるぐらい。殺生石を壊そうとすれば立てなくなるぐらい、擦り込まれるぐらいドロッドロされてね。……その娼婦は、もうイシユタル様の命令に逆らえない」

—— かつ、と大朴刀の切っ先が揺れる。

春姫を抱く右腕は、アイシヤの意思に反する様に狐人の少女を抱き込んで離さない。

ああ、彼女もまた、被害者なのか。春姫を救おうとして、失敗して墮とされた女傑。

尊厳を穢され、洗脳の限りを尽くされ、抗う意思をすり潰された、過去の俺を思わせる女性だった。

「あの事件があってもう戦闘娼婦は一枚岩だ。戦いを最初から望んでる奴もいれば、イシユタル様を恐れている奴も居る。もう戦いは止められない」

徹底的な蹂躪は見せしめでもあったのだろう。

他の者達に見せつけ、恐怖を埋め込み、お前達もこうなりたくないのなら恭順しろ、と。

それ以降、春姫を犠牲にして成り立つ戦いに異議を唱える者は居なくなつた。

「そこに、ミリア・ノースリス、お前も組み込まれた。運が、悪かつたね」

全て、イシユタル様が思うがままに。恨むなら、美神を恨んでくれ、と。

彼女の口から放たれた言葉が、衝撃的で、そして——蹂躪され尽くして尚、女傑は春姫を救わんとしているのを理解した。

「お前達は、あの女神の恐ろしさをわかっちゃいない」

そう断言し、此方を見下ろす。

屋根の上、何かに怯える様に震えだした春姫が、それでもか細く懇願している。

「お願い、します。どうか——」

「春姫、やめな」

優しく、愛しむ様に春姫を胸に抱いて目を細め、そのままアイシヤは此方に視線を向けてくる。

彼女の優し気な双眸は、此方に向けられた途端に刃の様に鋭い光を宿した。

「この春姫の身に何が起こるかわかつただろう。何故奪いに来ない、何を迷ってるんだ？」

彼女の指摘に、ベルとミコトが身を震わせる。

彼女が、アイシヤが求めるものは、きっと春姫を救ってくれる人だ。自分では無理だったから、今はもう従順に従う手駒でしかないから、他の誰かに求めている。

だから、だろうか、春姫だけではない。あの女傑も、あの狂う程の場から救い出してあげたい、だなんて高慢な考えを抱いてしまったのは——だが、方法は無くはない。

イシユタルを、彼の美神を、滅ぼせば良い。そうすれば、皆が解放される。

その為にも、今は逃げるしかない。

「それ、は……」

ベルとミコトの視線が此方に向いた。

俺の返答は一つだ。

「私達は、『イシュタル・ファミリア』に襲撃を受けました。故に、反撃を行います」

ベルが、ミコトが、その場で構え——アイシヤが鼻で嗤った。

「……やっぱり駄目だね。お前達に、お前にはこの子を渡せない。ベル・クラネル」

目の前の女戦士は春姫を抱きながら、ベルを名指しした。

「ただの同情ならやめときな。虫唾が走るよ」

「違う、僕は同情してるんじゃない——」

「なら、あんたにこの子を救えるって？ 私にはそうは見えない。あんたじゃ任せられない」

ベルの反論は、アイシヤの放つ眼光の前に遮られ、潰える。

容赦のない視線であり、同時に春姫を確実に救えるだけの「何か」があるかどうか試す様な、視線。

「単純な力の事を言ってるんじゃない。あんたには覚悟が足りない」
「っ……!?!」

ふと、横から見上げたベルの瞳には、未だに迷いがあった。

ちらりと此方を見て、ベルは悔やむ様に歯を食い縛る。ミコトも同じ様に俺を見て、歯噛みしていた。

「この春姫と駆け落ちして、心中でもしてやれるなんていう覚悟がね」
何を迷っている。救わなくてはいけない人が居る。

目の前の二人は、救わなくちやいけない。なのに、ベルは、ミコトは何を迷っているんだ。

「お前は、雄の顔をしていない」

何故、迷う必要があるのかわからない。何を迷う、此方が攻撃を受けた、反撃の機会だ。

絶好のチャンスだと言うのに、ベルは歯を食い縛って動かない。

「やっぱり、お前達には任せられない」

落胆と軽蔑の交じり合った女傑の声が落ちてくる。

そして、彼女の視線は此方に向けられた。

「ミリア・ノースリス、お前は頭が回るが……それだけだ、それじゃあ、そんなんじやあ駄目なんだよ」

「何を、此処から逃走してロキやガネーシヤの助力を受ければ、儀式前の貴女達ならなんとでもなるわ」

儀式を終えた後は手が付けられない。それに、俺が逃げさえすれば、どうとでもなる。

既に手を出してしまったのだ。手遅れだ、イシユタル派はロキ派、ガネーシヤ派を敵に回したも同然。もう戦いは止められない。

「ああ、お前の言う通りさ。もう戦いは止められない」

呆れた様な、そんな視線が降り注ぐ。

何か、見落としているのか。彼女の落胆と、諦めの色に思わず眉を顰める。

広い裏路地に差し込む茜色の中、抱いた違和感の正体を突き止めるべく感覚を研ぎ澄ませた。

『——いたぞ、こっちだ!!』

静寂を破るアマゾネスの大声が響く。

目を向いてベルとミコトを見て腕を掴む。

「今は逃げましょう」

全力で二人の手を引くのと同時、春姫の声が響き渡った。

「——ミコト様、ノースリス様、逃げてッ!？」

ああ、今この瞬間に置いても、貴女は此方の心配をするのか。どれだけ優しいのか、自らの命が失われるかもしれないこの時に置いて尚、彼女は逃がす為に時間を稼ごうとしている。

そして、Lv. 1の春姫の力なんて即座に振り解けるはずのアイシヤは、むしろ動き出そうとする自身を制し、春姫を傷付けない様に、俺達を逃がす様に堪えている。

「ベル殿ッ!？」

立ち尽くすベルの腕を、ミコトも掴んで三人で走り出す。

戦闘娼婦の一団が姿を現す中、酷い汗を掻きながら堪えるアイシヤ

と目が合った。

申し訳なさそうに、何かを謝罪する様に、彼女の瞳は酷く憔悴した色を宿していた。

「……………」

逃がすな、追え！ と騒がしく駆け抜けていく戦闘娼婦達。

路地裏の横道へと消えた三人を追う仲間の姿を見送り、アイシヤは体の力を抜いた。

「……………いい加減にしな、このアンポンタン」

うろうろと左腕にしがみ付いていた春姫の頭を、アイシヤは片手で叩く。

小さく悲鳴を零した春姫を軽く引き剥がし、ベル達が去って行った方向を見つめる。

夕暮れの光に目を細めながら、彼女は落胆と絶望を込めて呟いた。

「もう、戦いは止められないよ」

崩れかけた屋根の上、慌ただしく逃げ出した三人を追う者達を見下ろし、酒瓶の中身を煽った女戦士は静かに立ち上がる。

腰に吊り下げた鞭を手に取り、茜色に染まる娼館街を見回して、へらりと笑った。

「ねえ、女神様。私は今日も自由に生きるよ。だからね、もう少しだけ、もう少しだけ、待っててね」

手にした空になった酒瓶を放り投げ、鞭を振るう。

甲高い音色と共に砕けた破片が降り注ぎ、彼女の周囲をキラキラと舞い散る。

「皆も、もう少しだけでいいから、待っててよ。もうすぐ気が乗るからさ」

レーネは空を見上げて両腕を大きく広げた。

「大丈夫。今度は上手く行く」

気紛れに、気ままに、風に流される雲の様に、自由に生きよう。
自らが崇めた美神様が告げた、神託の通りに。

「さあて、武装の準備しなきゃ。ヒキガエルの顔面の皮剥いでやるく
……………あつ、そうだったそうだった、ミアア・ノースリスを捕まえ
なきゃいけないだったっけ？ うん、大丈夫、忘れてないよ」

かつてイシユタルに滅ぼされた派閥の娼館の屋根の上、レーネは雲
の様に軽い笑みを零した。

第一六八話

『この近くに居るはずだ、探し出せ！』

悍婦達の荒々しい声が大通りから響いてくる。

非戦闘員の娼婦にも指示が出たのか、煽情的な姿の娼婦達も駆け巡る姿を小径の入口に置かれた木箱の影から伺う。

咄嗟にクラスチェンジでクーシー・スナイパーに変化し、インビシビリティ透明状態で追手を撒く事は出来た。

しかし、ベルとミコトが呆然自失しておりそのままの逃走は不可能と判断し、日差しも入らない薄暗い建物の隙間に逃げ込んだのだ。

通りを隠れて伺う俺の後ろ、通りから見えない影の位置で息を荒げていた。

「自分は……自分達は」

絞り出した様なミコトの声。

ベルの方は灰色の壁に両手について項垂れていた。

共に、先のアイシャとのやり取りの後から様子が変わった。何を懊悩しているのかわからない。

「ベル、ミコト、二人ともどうしたの。春姫さんを救うんでしよう？」

疑問を投げかけた瞬間、「ぐう……っ！」と噛み締めた歯の隙間から零れるベルの呻き声。

ミコトの方は涙を零しそうな程に表情を歪めて、此方を見ている。

「ちよつと、二人とも本当にどうしたの。ねえ、黙ってちやあわからないわ」

何を迷う。何を懊悩する。何をしている。

今直ぐに動くべきだ。時間が無い。俺達はあの優しい狐人ルナルの少女を、堕ちて尚も救うに値する者を待つ女傑を、助け出す為に動くべきだ。

「ミリア、殿っ」

「仲間と春姫さんを天秤にかけて……っ」

ぼつり、と眩かれたベルの言葉に思わず眉を顰め———ようやく、俺はベルが抱えてしまった懊悩を知った。

今回の襲撃の原因はミリア・ノースリスが持つ魔法を奪う為。ならば、真っ先に保護し、守るべき対象は家族である事に疑いは無い。

だから、ベルとミコトは、俺と春姫さんを天秤にかけた。

どちらを優先すべきか。何を優先すべきか。その結果、即座に春姫を救うと叫び返せなかった。

——— なんていうか、そんな事で懊悩していたのか。

嬉しくはあるが、同時にどうでも良いとも思う。

「はあ、ベル、ミコト、悩むまでも無いでしょう。——— 春姫を優先すべきよ」

何を迷う。俺なんかより、春姫を、アイシヤを、彼女らをこの忌まわしい【イシユタル・ファミリア】から解放すべきではないか。

——— 目の前の小人の言葉に、少年は自らの抱えた不安が的中した事を知った。

「ベル、ミコト、今からロキやガネーシヤに救援を求めて———」
「どうしてっ!？」

ベルがミリアの両肩を掴み、小柄な少女に真正面から言葉を投げかけ様として、言葉に詰まる。

驚きつつも、冷静さを失わない左右で異なる瞳の色を見続ける間にも、目の前の少女は優しい声色で語り掛けた。

「落ち着いて、何が言いたいの?」

柔らかに微笑むその表情が。

その左右で異なる瞳の色が。

優しく腕を掴む異様な白さに右腕が。

真新しく刻まれた傷を覆う包帯の後が。

少年と少女の心を深く抉る。

「どうして、ミリアは……っ」

元は美しい蒼い瞳だった、けれど【アポロン・ファミリア】の襲撃の際に片目は矢で射抜かれ、失われた。今は赤い瞳となり、ちゃんと視力も元に戻った。むしろ前より良く見えるとすら笑いながら語っ

た。

その右腕もまた、襲撃の際にヒュアキントスの手によって斬り落とされた。今は色素異常症を発症した様な白色に染まっていた右腕。

そのどちらもが、少年の心に大きな反響を生む。

「ほら、どうしたの？ 大丈夫、作戦ならあるから」

落ち着かせようと真っ直ぐ目を合わせ、優しく語る姿。彼女の瞳に映るのは、大事な家族だ。彼女が『美しい』と称したモノ。

大賭博場^ノで出禁を喰らった後、攫われた女性を救うべく侵入していたリユー・リオンと語らう場面があった。

その際、ミアリアについて、リユーは言った。

『——彼女の瞳には、自分の姿が映っていない』

ミアリア・ノースリスと言う少女が誰かを、何かを『救う』や『守る』と決めた時。彼女の瞳から、その思考から『自分』^{ミアリア}が消え去る。

「どう、して……っ」

何故、其処まで『自分』の事を軽んじる事が出来るのか。

『家族』を、『救う対象』を、それらを定めた時。ミアリア・ノースリスは『自分』を軽視する。

きつと、今回もそうなる。そうなってしまふ。

「ミアリアは、自分の事をどうでも良いって思ってるよね」

少年が問いかけたその言葉に、肩を掴まれた少女はきよとん、と一瞬呆けた後、首を傾げた。

「いや、どうでも良くはないけど……」

言ってる意味がわからない。そんな風に困惑しながらの返事に少年がなんと声をかけるべきか悩み出し、助けを求める様に横で成り行きを見守っていたミコトに視線を向ける。

黒髪の少女は迷い様に視線を彷徨させた後、ミアリアを真っ直ぐ見据えた。

「自分は、ベル殿程付き合いが長くはありません。しかし……」

何をやるにしても、家族を——自分以外の誰かを優先する姿ばかり見ている。

ほんの些細な事であっても、仲間を、家族を、皆を、と小人の少女

は身を削る様な真似すらして他の誰かばかりを優先する。
そんな事をしている時の小人の眼には、自分以外の誰かしか映って
いない。

「ベル殿は、いえ自分も、それが怖いのです」

春姫は救いたい。けれど、救う為に自分を軽視して行動するミリア
の姿が怖くて堪らない。

それこそ、下手をすれば『自分が死んでも助ける』等という行動に
出そうだから。

「それは……」

その紅い目は、その白い腕は、その献身的な姿勢は、どれもが不安
を駆り立てる要因となっている。

そんな風に思われていたのか。と目を瞑って考え込む。

「ミリア、約束して欲しいんだ」

俺自身を蔑ろにして、誰かばかりを優先している。

家族、仲間、救いたいと思つた対象。

俺の献身的とも言える行動の数々が、二人を不安にさせていた。

「——自分を蔑ろにしないって」

このまま春姫を救う為に行動を起こした結果、俺が無茶をして死ぬ
んじゃないか。

二人の心配の内容は、とても嬉しくあり、同時に………どうでも
良かった。

「わかった。約束する」

「本当？」

「ええ、嘘は吐かない」

どうでも良い。それは、どうしようもない程に俺の本心だ。

俺の身より、春姫という心優しい少女の方が救われるべきだと思つ
た。アイシャと言う、墮とされてなおも救う意思を貫かんとする女傑
の方を優先すべきだと思つている。

——でも、家族がそれを望むなら、努力はしよう。

「春姫を救う。その為に動くのは確定で良いのよね？」

「うん」「はいっ！」

本音を言うならば、ベルやミコトだって自分よりも誰かを優先する事だってあると思っっている。

けれど、俺の場合はそれが病的だからこそ、そんな心配をされてしまったのだろう。

「作戦を伝えるわ」

頷く二人に、安心させる様に笑いかけてから語りだす。

春姫の奪取をする者。包囲網からの脱出、ロキとガネーシヤに救援を求める者。囷として陽動を行う者。

三人でそれぞれの役割を果たす。

「ミコトは春姫の身柄を確保して、ベルは私が陽動してる間に——」

同時に、ベルとミコトが放った手刀が俺の脳天に振り下ろされた。

二人の責める視線を浴びながら、痛む頭を撫でつつ問いかける。

「いや、何が不満なの」

「陽動はベル殿がやるべきです。ミア殿が脱出すべきかと」

「ボクもそれが良いと思う」

二人の固い決意に満ちた意見に思わず眉を顰めてしまう。

正直、一番狙われているであろう俺が囷を買って出るべきだと思うんだが。一番、重要度が高いのは間違いなく俺であり、「イシユタル・ファミリア」は血眼になって俺を確保しようとするだろう。

ベルが派手に動くよりは陽動成功率が遥かに高く、それにベルの敏捷あしならば救援を求めやすい。

「以上の事から、ベルが脱出、私が陽動の方が効率が……」

良いんだけどなあ。

もう一度振り上げられた二人の手刀を見て溜息。

効率重視の何がいけないんですかねえ——あ痛っ。

「それでおめおめ、『兎』どもを逃がしたっていうのかア!？」

フリユネの口から放たれる爆音に近い大声に、狐人の少女が女戦士の背に隠れて震える。

数多の戦闘娼婦が慌ただしく駆け巡る宮殿のとある広間。春姫を背に庇うアイシヤは泰然とした態度で目の前の第一級冒険者に反論を返していた。

「もとはと言えばそつちが神命に逆らったのが始まりさ。落ち度は自分にもある筈だろ」

「馬鹿言ってんじやないよおおくツ!? 其処の不細工がアタイの獲物を逃がさなかつたら、こんな面倒な事にならなかつたんだア!」

蛙を思わせる大きな両眼が、アイシヤに庇われる春姫を睨め付ける。

巨女に睨まれてガタガタと震える狐人と、それを庇うアイシヤの三人を戦闘娼婦達は黙って見守る。

血走った目をしたフリユネが、春姫からアイシヤに睨む対象を変える。

「リトル・ルーキー」は『殺生石』の事を知っちゃまったんだア、絶対に逃がす訳にはいかないよオ」

「このヒキガエルが……重要なのは【魔銃使い】の方だろ。あいつを逃がしちまえば『儀式』は行えない。魔法が手に入らなければ、【イシユタル・ファミリア】は終わりだろ」

この後に及んでもなお、ベル・クラネルに対し執着心を見せるフリユネに対し、呆れ混じりの嘲笑を返すアイシヤ。

「あんたがおめおめと逃がした所為だア! アタイは悪くないだろオ!」

「もとはと言えばそつちが神命に逆らったのが始まりだって言うてるんだろウガ」

幾度目かのやりとり。何度も繰り返されるフリユネの『自分は悪く無い』と言う意見にアイシヤもいい加減うんざりし始めた所で、部屋の扉が勢い良く開かれ、一人の女戦士が入室してきた。

「やつほー。ミリア・ノースリス捕獲作戦の為に人を借りに来た……んだけどおく? 何この空気?」

普段通りの空気を読まない発言は途中で途切れ、三人を遠巻きに見ていた戦闘娼婦達バトルベラに問いかけるレーネ。

彼女は小首を傾げつつ、ぼん、と手を打つと睨み合う三人の間に割り入った。

「わかったあ。責任の押し付け合いだね？」

「五月蠅いよオ。無関係な奴は黙ってなア！」

殺伐とした空気を見無視し、雲のようにふわりとフリユネの前に姿を晒したレーネ。彼女は巨女フリユネを見無視してアイシャの前に立つと、へらりと笑った。

「ねえねえ、人貸してえ〜」

「邪魔するんじゃ無いって言ってるだろオツ!？」

無視された事に腹を立てたフリユネに対し、レーネはくるりと振り返ると両手を広げた。

「何？ 私を殴る？ 別に良いけど？ —— 代わりに、インビシビリティ透明状態

を持つミリア・ノースリスの捕獲してくれるならね」

女神に命令された事を忠実に実行すべく行動しているだけであり、恥ずべき事も、遠慮する事も無いと胸を張って宣言するレーネ。

ただ責任を押し付け合う様な真似をしているヒキガエルとは違うのだ。と胸を張って言い放つと同時に、彼女はフリユネを見上げて口元を隠してくすくすと笑う。

「別にいい？ 不毛な争いしてる暇があるならあ、さっさと捕まえに行って来ればいいのにい、なんて思っていないよお〜？ ほんとほんと」と

今まさに置かれている状況は、【イシユタル・ファミリア】が滅ぶかどうかの瀬戸際。

だと言うのに不毛な争いを率先して起こす団長フリユネの姿にレーネがケラケラと笑い、挑発を繰り返す。

「レーネ、何人必要だ」

ただでさえ、儀式の準備と、【ロキ・ファミリア】や【ガネーシャ・ファミリア】に対する警戒の為に人員の殆どを裂く中、人員を寄越せとせびりにきたレーネに淡々と問いかけるアイシャ。

レーネは顎に手を当てると、口元に笑みを浮かべて手を上げた。

「人質とく、後は私の所の戦闘娼婦を……五人かな？」

「人質を連れていくウ!? 馬鹿言つてんじやあないよオ!」

即座に罵倒を返すフリユネ。面倒そうに耳を塞いでやり過ぎしたレーネはアイシヤに向かつて両手をすり合わせて頼み込み始めた。

「お願い。絶対にミリア・ノースリスを確保して見せるからさあ？」

「駄目に決まってるだろオ!」

人質をレーネに任せる事に反対するフリユネ。彼女が吠えたてる中、アイシヤは眉間を揉むと頷いた。

「好きにしな。ただし——」

「——人質を逃がすな。でしょ? わかってるよ」

許可を得た。そう勝手に解釈したレーネが嬉しそうに笑顔を浮かべると、ぴよんつと軽く飛び上がり、大部屋の窓の方へ歩いていく。

「アイシヤ、あの裏切り者に人質を任せるのかア。正気とは思えないよオ」

「……じゃあ、アンタが【魔銃使い】の捕獲に行くかい? アタシは遠慮するよ」

透明状態インビジビリティの魔法を使える小人族。小柄で何処へでも身を隠せる上で姿まで消せるという冗談にも程がある人物。確実に捕獲できなくては派閥は滅びる事は確定。

責任重大とも言えるその役目を押し付けられたレーネと変わるか、と問われたフリユネが表情を歪ませる。

ヒキガエルが騒ぎ、女傑がやり過ぎす間に、レーネは窓を大きく開いて娼館街を見回す。

「よし、じゃあ人質はこっちで使うね?」

確認する様に呟きつつも、返事を待つより前に彼女は窓から身を投げた。

最上階付近とも言える大部屋の窓から飛び降りた事に何人かの戦闘娼婦バトルベラがざわめく中、ドスドスと足音を響かせてフリユネが窓に近づき、下を覗き込んだ。

宮殿の外壁、其処に施されたほんの小さな突起に鞭を巻き付けて勢

いを殺しながら地面に一直線に向かう姿に巨女フリユネは大きな舌打ちを零す。

「アイシャ、あの裏切り者の不細工に任せるだなんてなア」

「……………はあ、別に、レーネは裏切っちゃいないだろ」

「自分の派閥の仲間を皆殺しにして入団してきた裏切り者だよオ？」

「よくもまあ信じる事が出来るもんだねえ？」

厭味つたらしい巨女フリユネの言葉に、アイシャは「はいはい」と適当に返すと春姫の手を掴んで部屋を出て行くこうとする。

「何処に行くんだア」

「春姫を部屋に連れて行く。もちろん、逃げられない様に見張りも付けるさ」

泰然と言い返し扉に手をかけた所で、アイシャは肩越しに振り返って淡々と告げた。

「ああ、言い忘れてたけど」

「ああん？」

「来るよ。あの坊やと小娘、どっちも」

「何を根拠に…………」

訝しむフリユネから視線を外し、窓から一望できる空を見据えてアイシャは告げた。

「リトル・ルーキー」は雄の顔はしていなかったが、目は違った…………あれは、諦めの悪い冒険者の目さ」

空に広がっていく蒼い闇、はつきりと姿を現し始める真ん丸な黄金の月。

「【魔銃使い】は真実を知らない。だが、いずれ知る所になるだろう。もし、そうなれば…………」

————きつと【イシユタル・ファミリア】に明日は来ない。

側に立っていた春姫だけが聞き取れたその言葉。目を細めるアイシャの横顔に、彼女は一人、様々に交じり合う感情に表情を揺らした。

静寂に包まれる室内。

閉め切られたカーテンの隙間から覗いていた茜色が、青白い光に変わりゆくさまを見続けていた少女は、部屋の扉に背を預けたまま膝を強く抱え、縮こまった。

「ヘスティア・ファミリア」ホーム 本拠に与えられた一室。

エルフの少女との相部屋である室内には、二つのベッドと、机、衣装棚等が置かれている。

部屋の明かりはつけられておらず、薄暗い部屋の中でボロボロの姿のまま、狼人の少女は静かに嗚咽を零した。

「イシユタル・ファミリア」の強襲、それから命からがら生還した狼^{ウエアウルフ}人、フィアは零れる涙をぬぐう事もせず膝を抱えていた。

「……………」

仲間の命を奪った敵に対する憎悪。

連れ去られた仲間の安否への心配。

頭の中を駆け巡る様々な感情、その全てを塗り潰す第一級冒険者への恐怖。

身体は硬直し、呼吸する事すら忘れてしまいそうな恐怖。寄り添う者もおらず、一人膝を抱えて震える。

「あんなの、知らない」

彼女が所属していた「ロキ・ファミリア」にも、第一級冒険者は居た。

皆が尊敬する団長フレイバー「勇者」フィン・ディムナを筆頭に、魔術師の中では最高峰のナインヘル「九魔姫」、都市最強の力と耐久を誇るエルガラムとも謳われる【重傑】。

その元、幹部でもある【剣姫】、ヴァナルガンド【凶狼】、ヨルムガンド【怒蛇】、アマゾン【大切断】の四人。

所属する派閥であるがゆえに、そんな彼らの強さは目に焼き付く程に覚えている。

——覚えていた、積みだった。

殺気すら向けられる事無く、路傍の石ころを蹴飛ばす様に致命傷を負わされたあの瞬間までは。

彼女の知る『第一級冒険者』と言う虚像が弾け飛び、敵対した際に与えられる恐怖を真正面から受け、心が折れた。

第一級冒険者に鍛錬して貰った事すらある。

その際に感じた、第一級冒険者の強さ。ファイアが圧倒されたその強さですら、第一級冒険者からすればきつと加減に加減を重ねたモノでしかなかったのだ。

本気で戦う第一級冒険者の姿を見る者は、例え同じ派閥の仲間ですらも珍しい。

相応の敵がいなければ、本気を出すまでも無く倒す事が出来る。そして、L.V. 2でしかなかったファイアは第一級冒険者が本気を出す様な場面に出会った事は一度も無い。

——だから、知らなかった。

第一級冒険者が持つ上限が、どれほど果てしないぐらいに高いのかを。

「……………」

ふと、静けさの中に何かが混じる。

静寂を引き裂く様な足音と、声。

ファイアは静かに顔を上げ、聞き覚えのある声に目を見開いた。

扉の外側、廊下をドタドタと騒がしく駆ける音と、扉を力強く開ける音、そして皆を呼ぶ声。

「おーい、おーい誰か居ないのー!？」

扉の向こう側から響いてきたのは、致命傷を負って「ディアンケヒト・ファミア」に担ぎ込まれた女戦士アマソネスの少女の声。

聞き耳を立てるまでも無い、階下から響く音に反応しかけ——
合わせる顔が無いとファイアは再度膝を抱えた。

他の仲間が本拠に居ない理由は連れ去られた仲間の救出。

あろうことか、ファイアは敵の第一級冒険者に怯え、震え、部屋に閉じ籠ってしまった。

仲間を見捨てたと後ろ指を指されても否定できない、最低な行爲をしている。そんな自分が、彼女に合わせる顔が無いと、扉に背を預けて黙り込む中、扉を開け放つ音が近づいてくる。

間も無く、鍵を閉め切り閉じ籠るファイアとメルヴィスの相部屋の扉に、サイアの手がかかった。

ガチャガチャガチャガチャ、と無遠慮に取っ手を捻ろうとし、鍵がかかっている事に気付いたのか、サイアは扉の向こう側でドンドンと扉を叩きはじめる。

「おーい、誰か居るの？ ねえ開けてよー！」

ガチャガチャガチャ、ドンドンドン、何度も何度も繰り返される音にファイアは耐えきれずに声を上げた。

「いるよ」

「んー、その声はファイア？」

聞こえる声は元氣そのもの。いつも通りの能天気そうな声にファイアの口元がほんのわずかに緩む。

死んだかと思っていた。死んでもおかしくない重傷だった。そんな彼女が元氣一杯に話しかけてきている事に喜び、同時に仲間を見捨てて閉じ籠っている後ろめたさを感じて身を強張らせる。

「ねえ開けてよー。どうしたの？ 皆は何処行つたの？」

ドンドンドン、と扉を叩きはじめるサイアの行動。彼女は現状を理解していない可能性もあり得る。

真っ先に、反応も出来ずに致命傷を負わされ気絶していたのだ。治療院で目覚めて即座に此処に足を運んだのなら、きっと状況もわかっていない。

「ねえー、ファイアー、ファイアッ！ 開けてっつてー！」

繰り返す扉を叩き続けるサイアの行動に対し、ファイアは沈黙で応える。

合わす顔も無い、合わす言葉も、無い。

逃げ出した臆病者の自分が言える事は何もないと膝を抱え蹲る中、サイアは扉を叩くのを止めた。

「……えっと、ねえ、皆何処行つたの？」

「……………」

「じゃ、じゃあさ、えっと……何があつたの？」

困惑混じりのサイアの声に、口を開きかけたファイアは奥歯を噛み締

めた。

仲間を見捨てた臆病者に語る資格なんて無い。そう言い聞かせ、彼女は強く膝を抱きかかえる。

「目が覚めたらさ、なんか『ディアンケヒト・ファミリア』に居てね。絶対安静にしてろって言われたんだけど、何があったのか聞いてもこたえてくれないんだよ！」

だから抜け出してきた。と軽い調子で言い放たれたサイアの言葉に、ファイアは静かに呟く。

「安静にしてろって言われたんだろ。だったら直ぐに戻った方が良い」

「えー？ でも皆居なくなってるんだよ？ それに、なんか襲われた気がするし。えっと、同族がいつぱいいいた気がするよ」

記憶の混濁か、サイアは襲撃直後の状況を理解していないのだから。う。

だからこそ、部屋に閉じ籠るファイアの行動が理解できず。同時に、彼女を責め立てる事もしない。

「気のせいだろ。今すぐ治療院に戻って、治療士の指示に従えばいいさ」

「……………」

誤魔化す様に、扉越しにファイアが語り掛ける。

すると、先ほどまで騒がしかったサイアが突然沈黙した。

何が起きたのかと一瞬間を上げ、もしかして倒れたのかと耳を澄ませる。彼女は止み上がりも良い所のはずであり、何かあったら一大事だと青褪め始めるさ中、泣きそうな声が扉越しに響いた。

「……………ねえ、ファイア」

「な、なんだよ」

「皆は、何処に行っちゃったの？」

治療院で目覚めると同時、皆に心配かけたかもと不安になりながら治療士に訪ねれば、『今は安静にしてください』の一点張り。

どういう状況で負傷したのか、記憶も曖昧で分からない。最後の記憶は、無数の同族が道を塞ぎ、皆が武器を構えている光景が朧げに浮

かび上がるのみ。

不安を覚え、治療院を抜け出して本拠に帰ってみれば、明かりはついて居なかった。加えて、声を張り上げても誰も返事をしない。

唯一見つけたファイアも、扉越しにしか対応してくれず様子がおかしい。

「どうしたの？　ねえ、何があったの？」

「サイア、お前は……死にかけたんだ」

「何で？」

「………今は、治療院に戻れ」

「むう……」

徐々に溜まっていく苛立ち。

どうして顔を見て話してくれないのか。

どうして皆が何処に行ったのか答えてくれないのか。

どうして戻れと繰り返し続けるのか。

明らかに様子がおかしいのに、何も教えてくれない事に腹を立てたサイアは扉を軽く蹴り、駆け出した。

「……もう良いよー」

何が起きたのか自分で調べる。

その為にサイアが駆け出したのを音で感じ取り、ファイアは静かに膝を抱え直した。

「むう………確か、18階層でえ………えつとー」

眉間を揉みながら廊下を歩いていたサイアは、最後の記憶に繋がる臙げな欠片を引っ張り出しては唸るといふ動作を繰り返していた。

「何があったんだっけ？」

武器を構えた所までは記憶にある。そこから先がぶつとりと不自然に途切れている。

うんうんと唸りながら、サイアは居室リビングに入り、魔石照明を入れた。「なんか、ファイアが泣いてた気がする様な？　で、メルヴィスが『死な

ないで』って……」

死にかけた。そう言われても実感が無さすぎてわからない。

彼女は自身の体を見下ろして首を傾げた。

「確かに、なんか腰からが腕みたいに白くなってるけど……うーん、半分無くなったのかなあ?」

臍の辺りから下、下半身がまるまる白くなっている。

その特徴は自らの両腕にも該当しており、サイアはそれが『再生薬』の『ふくさよー』と言うものだど知ってはいた。だからこそ、治療されたのは理解している。

しかし、其処に至る経緯がさっぱりわからない。

「むむうー！ むむむむうっ!! むあっ!」

酷く唸りながら長椅子ソファに腰掛けるべく足を運ぼうとし、彼女は足を引っかけて盛大に転倒した。

「痛あつ、何、なんで……あれ、これって鍛冶師君の大刀? こっちはサポーターちゃんの……ううん?」

部屋に無造作に置かれていた破損した大刀、敗れたバックパック。明らかに状態が悪いそれらに首を傾げ、サイアが身を起こして中央の卓を見て気付く。

「んむ? あー、私の予備の大剣! それにファイアの槍も置いてあるし……なんでこんな所に?」

卓の上には、新品同然のサイアの大剣、そしてファイアの槍が置いてある。

倉庫にしまつてあつたはずのそれらが何故ここに置いてあるのか首を傾げつつも大剣に手を伸ばし、紙切れに気付いた。

「……………置手紙?」

書かれた文字を見て、サイアはうーんと小首を傾げる。共通語コイネーで書かれた、置手紙。

その内容を読み取ると同時、彼女は紙切れを投げ捨て、大剣を背負ってファイアの槍を手に持つ。

「よし、ファイアを叩きのめそう!」

行動を決めるのと同様、彼女はファイア・クーガが引きこもる部屋目

掛けて一直線に駆け出した。

第一六九話

「此処に「ヘステイア・ファミリア」に預けた俺の眷属こどもが連れ去られたと聞いた。今すぐ此処を通してくれ」

夜の帳が下り始めた頃、一人の男神が眷属を従え歓楽街を訪れていた。

第三区画前、「イシユタル・ファミリア」の支配領域テリトリイ、その境界線上で褐色肌の女戦士達アマゾンネスによって足止めされている。

「男神様あ、証拠はあるんですかあ？」

「変な言い掛かりをつけるんなら、こっちも相応の処置つてもものを取らせてもらいますよあ」

これ見よがしに戦斧や双剣をちらつかせ、門番として男神を遮る女戦士の姿にタケミカツチが眉を顰める。

南東の大通りに現れ始めた娼婦や男性客の視線を浴びながらも、毅然とした態度で門番に食って掛かるタケミカツチと三人の眷属。

ベル達の救出に訪れているヘステイアは、タケミカツチとその眷属が入口で足止めを喰らっているのを少し離れた脇道から覗き見していた。

「……デインケ君は上手く通れるだろうか」

「難しそうですね。桜花も戻ってきたか、どうだった？」

ヘステイアの護衛として付き添うヴェルフは、桜花と千草が駆け寄ってくるのを迎えた。

「イシユタル派の領域テリトリイは完全に封鎖されてるな。侵入は難しい」

「ガネーシャ派とロキ派の本拠回りホームに女戦士アマゾンネスが何人か……見張りが居て下手に動くとも直ぐに露呈バしそう」

偵察に出ていた二人の報告にヘステイアとヴェルフが眉を顰める。

イシユタル派の領域テリトリイは鼠一匹通さない程の厳重な警戒網が敷かれており、下手な侵入は出来ないかと桜花が呟く。

当然の様に、ガネーシャ派やロキ派の主要戦力が詰める本拠等は監視されており、下手に動けばその瞬間に人質の命が危ぶまれる状況だという。

「それにしても、ボク達の警戒は無いみたいだけど」

「多分ですが、歯牙にもかけられてないかと」

ヘステイアの疑問にリリが悔し気に答える。

あくまでもガネーシャ派、ロキ派に対して嚴重な警戒をしているだけであつて、ヘステイア派はどう動こうが知つた事ではないともとれるイシュタルの行動。

無視されてはいるが、目に付く行動をとれば流石に対処してくる事は間違いない。何処まで警戒されずに済むのかヘステイアが考えていると、タケミカヅチが眷属を連れて戻つてきた。

「タケ、どうだった？」

「駄目だな、最終的に人質をちらつかされた。だがわかつた事もある」
「多分ですが、ミコト、クラネルさん、ノースリスさんの三人は現在逃走中かと」

タケミカヅチが連れられた三人の眷属が遮る門番越しに聞き耳を立てて得た情報によれば、白髪でヒューマンの少年、金髪で小人族パルウムの少女、黒髪でヒューマンの女、以上の三人が搜索されているさ中らしい。

更に付け加えると、搜索の為に【戦場の女主】が中心人物として動くから気を付ける様にとも。

「えっと、その【戦場の女主】ってのは……誰だい？」

「襲撃者の中にも居たな、たしかレーネ・キュリオつていうLv. 3の女戦士アマソネスだったはずだが」

ヘステイアの疑問にヴェルフが答え、桜花達が補足する為に口を開こうとした所で、陽気な声が薄暗い路地に響いた。

「レーネちゃんは【ウエヌス・ファミリア】、女神ウエヌスの眷属こどもだった娘だねえ」

全員同時に声の放たれた方向に向き直る。

薄暗い路地に置かれた木箱の直ぐそば、四つん這いになった禿げ頭の男の背に腰掛ける藍色の髪を揺らす女神の姿にヘステイアとタケミカヅチが表情を歪めた。

「うげえっ……」

「おう……」

嫌なモノを見てしまったと言わんばかりの神々の反応に各々の眷属達が反応に困った様に顔を見合わせ、最終的に椅子にされている男性、ダルトンに視線を向けた。

「あー、女神様やい。そろそろ許しちゃあくれないかね」

「嫌、貴方が余計な事した所為でイシユタルがカンカンに怒ってたんだもの。その所為で面倒事に巻き込まれちゃうし、暫くは椅子になつてなさい」

ペレペしと禿げ頭を叩いて黙らせると、藍色の女神はふわりと笑みを浮かべてヘスティア達を見据えた。

「さて、それでレーネちゃんについてね」

「待ってくれ、何をしにきたんだ」

目の前の女神に警戒心を剥き出しにしてヘスティアが対応すれば、タケミカツチもまた同様に警戒し伺う様に目を細めた。

その対応に藍色の髪を揺らし、女神は楽し気に笑う。

「私の主義は知ってるでしょう？——レーネ・キュリオが貴女達の情報を買った。だから貴方達にレーネ・キュリオの情報を渡す。オツケー？」

「イシユタル・ファミア」所属、Lv. 3 「戦場の女主」レーネ・キュリオ。『戦闘娼婦』の中でも特殊な立ち位置の娘達を従える彼の人物が、ヘスティアと眷属、タケミカツチとその眷属達の情報を購入した。

故に、自らの主義を貫く為にも両主神とその眷属達には情報を渡す。

そう身勝手に告げた藍色の女神は、警戒心を解かない二人の神と困惑する眷属達に、レーネの素性、そして企みについて語りだした。

ベルに与えられた任務は一つ。可能な限り戦闘娼婦の気を引く事。危険度は最も高く、確実にあの化けガエルが出てくるのは間違いない。

そしてミコトの役目は春姫の身柄をなんとしてでも確保する事。

その後は春姫と共に逃走。儀式の時間を過ぎるか、ロキやガネーシヤの増援が到着するまでなんとしてでも春姫の身柄を抑えておくこと。儀式の開始時刻は夜八時頃。場所は宮殿の別館、空中庭園にて行われる。春姫の待機部屋は不明。

ミコトが春姫と接触した場合、状況がどうあれ閃光弾を上げる事。緑が成功、赤が失敗。

俺の役目は、この厳重な警戒網からの脱出。そしてロキかガネーシヤに接触して救援を求める事。

もし、ミコトが春姫の確保に失敗してしまった場合。ベルとミコトは協力して『殺生石』の破壊を試みる事になっている。

「キューイは、まだ呼べない……ヴァンも同様。クリスは……駄目ね、寝てるか」

自らに課された使命を意識しつつ、キューイ達の状態を確認してみると最悪も最悪。

キューイ、ヴァンは通常撃破されて半日待機。ダンジョンに早朝から潜りはじめて、襲撃を受けたのはおおよそ八時半か少し前……儀式前の呼び出しは不可能。

クリスの方は撃破されてはいないが、ステイタスを封印された際に召喚解除。一日の待機時間クールタイムを挟む必要があり、今日中は召喚不可能。

もし召喚可能であれば、ベルの方に付けるか、囮役として娼館街を焼き払って貰ったモノを……。

南東の大通りの脇道を駆け抜ける娼婦達を脇目に見つつ足を進めていると、ドンツという爆音が響いた。

「……ベルが始めた、か」

間違いなく、ベルの「ファイアボルト」だろう。

付近を搜索していた娼婦達は頭を抱えて近場の建物に避難しだし、戦闘員らしい女戦士達がこぞって黒煙立ち昇る現場に駆け出していく。

周囲の警戒網が緩んだ隙に、と細道に足を踏み入れて進んで行く。現在位置は外周部に近いが、娼館街は市壁によって遮られており、特定地点からでなければ出入りが出来ない。そして、市壁をよじ登る

のは流石に不可能。

屋根の上を駆けていく女戦士アマゾンネスの手には、身の丈を超える大弓が握られているのが見えた。

——Lv. 3の戦闘員が持つ大弓。その威力は想像もしたくない。

マジックシールドで防げなくはない、とは思うがそれも二、三発が限度だろう。市壁の上から鷹の様に鋭く歓楽街を見下ろす戦闘員を見れば、壁を乗り越えよう等とは考えられない。

「音消しと姿消しが効いてるからなんとかなってるとけど……ちよつと、これは……」

出入口である門近くに向かい早足で駆ける。

『姿消し』の欠点が此処にきて響く。余りにも高速で動くとき空気が揺らぐ様に姿が微かに見える事があるのだ。相当目が良く無ければ見えないはずだが、嚴重な警戒網の中で目が悪い奴しか居ない等とは思えない。

仕方なく空気が揺らがない程度の早足で歩むさ中、ふと靴底で何かを踏み締めた。

パリパリツという硝子を踏み締める感触に思わず飛び退いて、気付いた。

「なにこれ……」

進もうと思っていた路地一杯に広がる、街灯の光を受けて煌めく硝子片の数々。

警戒すべく一度壁際でしゃがみ込んで息を殺す。『音消し』が効いているおかげで、今の硝子片を踏み締めた音は響いては居ないはず。遠くから聞こえるベルの陽動音が遠く遠ざかっていく音以外に、この細道には何も音は無い。

足止めを喰らうのも不味いかと足を踏み出そうとし、屋根の上から響いた大声に身を強張らせた。

『あつ、異常発見！ レーネ、此処の硝子が少し踏まれてるよ！』

『んー、ようやく引つ掛かったかな？ どこどこ？』

上を見上げると、屋根の上には数人の女戦士アマゾンネスと、一人だけ籠を背

負った女が一人。

能力封じの魔法を持った、超危険人物。レーネ・キュリオとその仲間らしい戦闘娼婦達だ。

ベルの陽動を完全無視して俺を探してるのか——厄介だ。

まだ魔法が解けていないのを確認し、すぐに反転しようとした所で、頭上から響く無数の硝子を砕く音が細道を反響した。

「えーい、えーいつ、これでもかー！」

「レーネさん、ちよつと……後で片付けるの大変なんですけど」

「んー？ 捕まえられなかったら貴女が『やめて』ってお願いしてきたからってイシユタル様に言うけど、大丈夫々？」

「……いえ、どんどんやりましょう！」

「しつかり見ててよ〜？」

軽いやり取りが頭上から響くさ中にも、細道一杯に硝子片が降り注ぎだす。

右手で籠一杯に入っていたらしい硝子瓶を放り投げ、左手の鞭で碎き割る。そんな動作を繰り返し、屋根の上から細道一杯に硝子片を撒き散らすレーネ。そしてそんな彼女を他所に他の戦闘娼婦は細道を目を凝らして見てくる。

駆け出せば確実に捕捉されてしまうだろう。仕方なく壁際の隅に身を張り付け、硝子の雨が止むのを待つ。

——クソツ、透明状態の弱点が割れてやがる。

『姿消し』の欠点、ではなく弱点。

あくまで姿が消えているだけであって、存在そのものは消えていないので、物理的な影響から逃れる事は出来ない。

この硝子の雨の中、無暗に動けば煌めく硝子片の中に俺の姿が浮かび上がる事だろう。当然、足元の硝子片を踏めば砕けてしまう。音消しで音は消えても、砕ける硝子片まではどうにもならない。

少なくとも、頭の上で硝子の雨を降らしている奴らが消えない限りは足止め確定だ。

こんな透明状態に対する的確な対処をしてくる様な頭の回る奴が居るなんて……。

「よし、この辺で良いかなあ。皆、何か居た？」

「いえ、まったたく……」

魔石灯を手にした戦闘娼婦バベラの一人が下りてきて、パリパリと硝子片を厚底のブーツで踏み締めて歩き回り始める。三人の内、一人ずつが細道の両端を塞ぎ、レーネが頭上から此方を見下ろす。

完全に此処に居ると予測しきっている様な行動に心臓が跳ねるが、まだ魔法は切れて居ない。だから大丈夫なはずだが、何故居場所が割れてる？

「レーネさん、やっぱり居ませんよ」

「え〜？ 居るよお〜？ 絶対に居るつてえ〜」

目の前を横切っていく女戦士アマソネスに冷や汗を流しつつ、効果が切れる前にと魔法の詠唱を始める。

『音消し』の良い所は、魔力の流れも消し去ってくれる事だ。つまり、この魔法が切れさえしなければ魔法を使ってもバレない事だ。まあ、流石に大威力の『アンチマテリアル』までは消しきれないが、『姿消し』と『音消し』ならバレる事なく発動できる。

「狐キツネは化かし、鴉カラスは鳴いた——」

【隠れ身ノ灰】の詠唱を始めた直後、屋根の上から聞こえた増援の声に息を詰まらせた。

「——レーネさん、人質を連れてきました！」

「お〜、ご苦労様あ〜」

ひと、じちゅ？

ヴェルフとリリが帰還したのなら、即座に動くはずだろう。だと言うのに動いた形跡が無かった。

今まで感じていた違和感——他の事に気を取られて無視していた、それらの違和感が今になって嫌な予感プレッシャーというモノに繋がる。

「うん、よし！ ミリア・ノースリス。此処に居るのはあ、なんとなくなわかってる。あ、一度魔法かけた相手の気配ってなんとなくわかるんだよねえ。此処に居るでしょ？ 出てきてくれないかなあ」

——魔法を一度かけた相手の気配を察知できる、だなんて聞いてない。

知りもしなかった情報に舌打ちを零しつつも、屋根の上を何うが『人質』の姿は俺の位置からでは死角になっていて見えない。だが、今の位置から動けば間違いなくバレる。

誰だ、誰が人質になってる。ヴェルフか、リリか？ あの時、馬車の中には俺とベル、ミコトの三人しか居なかったはずで——待て、もう一台、カーゴがあったような？ それに、其処で誰かが暴れてて。

臆気な記憶の中にあるその人物を思い出そうとするが、顔すら見てもおらず思い出せない。

「十数える間に出てこなかったら、この人質を殺しまーす！」

考えている間にも、屋根の上からは刃を擦り合わせる様な音が響く。

虚偽か？ いや、もし本当に人質が居るとしたら。リリかヴェルフが……だが、あの二人を、人質に？ 何故わざわざカーゴを分けて……？

「じゅー、きゆうー、はあーち、ななあー」

………糞、どうあれ一度姿を見せないと本当に殺しそうだ。

迷ってる暇はない、か。

「ろおーく、ごおー——おっ？」

パリパリと足元の硝子片を踏み締めて細道の中央までゆつくりと歩み始めた瞬間、レーネが秒読みを止めた。

「おおー、居た居たあー。其処に居るんでしよう？ 姿を見せてくれないかなあ？」

空気が張り詰め、近場に居た戦闘娼婦が抜刀する。他の面々も戦斧や棍棒を構える中、レーネ・キュリオは傍で押さえつけられているエルフの青年の首に剣を向けたまま微笑んでいた。

やつれた様にぐったりとした状態で二人の女戦士に支えられている、エルフの青年——エリウツドの姿に思わず息を呑んだ。

その瞬間、『姿消し』と『音消し』の効果が消えて俺の姿が現れる。

「見いつけたあー！ これ、もう要らないやー！」

「ほ、本当に居やがった……」

「流石レーネ」

得意げに胸を張って宣言するレーネは、背負っていた籠を放り捨てる。

驚愕する者や感心した様に頷く者、様々な者が居る中、支えられているエリウツドを見て、レーネを睨みつけた。

「どういう事、なんでエリウツドが……」

「んー？ お話は歩きながらでも出来るよ。ほら、行こう？」

唐突に、レーネはエリウツドを横抱きにして軽い調子で飛び降りてくる。

口元に笑みを浮かべて俺に近づいてきた彼女に魔法を突き付けた。

「ライフル・マジック」……エリウツドさんを解放してください」

「んん？ 解放？ ちょっとそれは出来ないかもお？」

銃先を突き付けると、レーネはふわふわとした笑みを浮かべると、他の戦闘娼婦に視線を向けると、信じられない指示を出した。

「皆は持ち場に戻って。後は私一人でなんとでもなるから」

「で、でも」

「大丈夫だってえ」

ふわふわした雰囲気を纏ったレーネは、両手が塞がったまま、銃口を突き付けられて尚、余裕そうに俺を無視している。

「無視しないで、エリウツドを解放して」

「ちよつと、待ってね。言う事聞かないあの子達が悪い訳だし」

「レーネ、流石にそれは見過ごせない。ミアア・ノースリスを逃がす積りだろ！」

俺の問いかけにふわりとした柔らかな笑みで対応すると、斧槍を持った女戦士がレーネを鋭く睨みつけた。

——逃がす、積り？

少なくとも「イシユタル・ファミリア」の内部の者は全てイシユタルの威光、恐怖政治で押さえつけられているはずだが、レーネは違うのか？ いや、それよりもエリウツドだ。

……他にも、人質が居るのか？ だからこのレーネは余裕そうなのか？

糞、このレーネ・キュリオは本当にわかり辛い。何か隠してそんな不気味さがあるのに、ふわふわした雰囲気で警戒心が削ぎ落される。『イシユタル』
「糞女神様に命令されてるから、逆らえないよ。」

『……………』

「逃がす事なんてできないし、ちゃんとイシユタル様の所に連れて行く。それは絶対だつて」

エリウツドを横抱きにしており、敵対者である俺に銃まほうを突き付けられながら、仲間である戦闘娼婦バーベラに睨まれるレーネ。

「それに、ほら、外で男神様が騒いでるっぽいじゃん？ 早く追っ払わないと面倒事になっちゃうかも？」

「チツ…………レーネ、裏切りは許さないからね」

行動が全く読めない。余裕そうな態度が不安を駆り立てる中、悍婦達は舌打ちを零すと、本当にレーネを除いて全員がその場を去って行った。

——コイツ、本当に何がしたいんだ。

「さて、歩きながら話すよ。と、人質の解放だつたつけ？ 本当に申し訳ないんだけど絶対に無理」

急に真剣な表情を浮かべた彼女は、エリウツドを横抱きにしたままぺこりと頭を下げた。

……………本当に、何を考えて行動しているのか読めない、不気味な女だ。へらりと笑うと、目の前の女は急に背を向けた。

「行くよー？」

『……………』

一人、歩き出そうとしたレーネの後頭部に指先銃口を向けたまましていると、彼女は困った様に肩越しに振り返り、呟く。

「歩きながら話そうよ。魔法それはそのままでも良いからさ」

「この場で貴女を殺して、人質を奪還しても良いんですが」
「……………あー、別に私を殺すのは良いよ？」

——は？ 殺すのは、良い？

何を考えているのか、本当にわからない。

人質を横抱きにして抱えて武装を手にしていないのも、目の前で無

防備な姿を晒すのも、他の戦闘員を引かせたのも、全く考えが理解できない。

「ただし、他の人質が殺されても私は知らないからね？」

—— だろうな。

人質が一人な訳ないだろうとは薄々感づいては居た。リリとヴェルフだと思っていたのだが、よりにもよってエリウッド達だとは思わなかったが。

魔法を解く序に、クラスも狙撃型スナイパーから汎用型汎用型に変える。

「おー、本当に変わるんだねえ」

「……人質は何人居るの？」

答える、何てことはないだろうな。

「んと、この子と、今逃げてる黒髪の……ヤマト・ミコトだっけ？ その子を除いて二人」

……：……：ぺらぺらと軽い調子で話される情報は、とてもではないが信じられない。

そもそも、この女の雰囲気といい、言い方といい、雲のように軽くて重さを感じられない。その所為もあってか警戒心が音を立てて崩されていく。

この手のタイプは腹に大きなものを抱え持つてる可能性が高い。

始末したいが、下手な手を打つと人質に被害が出そうだ。

「種族と特徴は？」

「エルフの女の子と、アマゾネスの女。エルフの子は大人しいかな、アマゾネスの子の方は……えっと、凄く暴れて大変だから鎖でグルグル巻きにしてるね」

エルフの女の子はメルヴェイスで、アマゾネスの女はサイアか。

大通りに出る事無く、レーネは裏路地を進んで行く。途中、戦闘娼婦パルベラが顔を見せるが、レーネを見た瞬間に顔を歪ませると舌打ちして去っていく。

他のイシユタル派の構成員の反応があまりにもあからさまで、おかしい。

違和感を感じつつも、最も気になっていた点を聞く。

「リリとヴェルフは、どうしたの」

「ん？ ああ、貴女と一緒に居た小人とヒューマン？ あの子達は逃がしたよ」

ふわふわとした口調故に、話半分に適当な事を言ってる様にしか聞こえない。

行動に一貫性が感じられず、考えが理解できない。本当にコイツは何がしたいんだ。

他の構成員からはだいたい嫌われているみたいだが、だからと言って味方って訳ではない。立ち位置がわからん。

「どうして、ヴェルフ達は逃がしてエリウツド達を人質にしてるの」
「ロキとガネーシャに喧嘩売るから。関係ない子を人質にしても効果薄いでしょ？」

—— ああ、それは納得できた。

ロキとガネーシャの眷属、期間限定でヘステイア派に席を置いているが、実際にはロキやガネーシャの眷属なのは間違いない。俺達に喧嘩を売るにあたって、人質の選択肢としては筋が通っている。

最悪だ、人質の存在なんかまったく意識してなかった……常套手段だろうに。

「皆、無事なんでしょうね」

「んー、捕まってる子達？ アマゾネスの子が暴れ過ぎて怪我してるのと……この子が少し絞られたぐらいで、エルフの子はぴんぴんしてるね」

レーネがへらへらと笑うと、やっと大通りに出た—— かと思えば、すぐに細道に足を踏み入れる。

大人しく後を付いていくが、道順は滅茶苦茶だ。宮殿ホームに連れて行くと思っただが、別の場所かと勘繰るも、ぐるっと一周して元来た道に戻りだしたりと、意味不明過ぎる。

「人質以外の子は……何人か死んじやったけど」

唐突に放たれたレーネの言葉に、思わず足を止めた。

「死んだ？」

「ん？ あ、ごめん今の間違い。死んだじゃなくて、フリユネが殺しちゃ

「やったんだよね」

——なんだって？

いや、まさか……抗争、を起こす。

ああ、嘘だろ。嘘だ、抗争を起こすのなら、予め戦力を削る事を想定していてもおかしくない。

なんで今まで想像もしなかったんだ。こいつら闇派閥ともつるむぐらいに性根の腐った派閥じゃないか。人殺しだって平然とやつてのけるぐらいの——。

「落ち着いて聞いて欲しいんだけど」

「誰が殺されたの」

……………。

「んと、私の知る限りだと……頭巾のヒューマン、それからドワーフの前衛壁役の二人」

ルシアン・テイリスとグラン・ラムランガ……ッ！

「どっちもフリユネが殺しちゃったんだよねえ。後、Lv. 2のアマゾネスの子……えっと、サイア・カルミって子だっけ？ あの子は一応一命は取り留めたっばいよ？」

他人事のように語る目の前の人物。無防備に背中を晒しながら、裏路地を歩いていた彼女の後ろに付いて歩いていた俺は、ふと足を止めた。

レーネはそれに合わせるように俺に背を向けたまま立ち止まり、俯いて石畳を睨みつけて拳を強く握りしめる。そうしないと——目の前の女を殺してしまいたい。

「……勘違い、される前に言っとくね？ 私と、アイシャは少なくとも『殺しは無し』って方針だったよ？」

言い訳する様に、ふわふわとした柔らかな雰囲気消したレーネ。キュリオはくるりと此方を振り返ったのを感じた。

黙れ、と叫びたい。

居るかもわからない人質の存在によって、今のこの場で身動きが出来ない事に腹を立て。

今までの楽観的な行動の数々を責め立てる。余りにも、お粗末な選

扱の数々。

過去に研鑽あぐぎょうを積み重ねて磨き上げてきた悍ましい技能の数々。へスティア様の眷属となつて、その技能が錆び付き、鈍つていくその事に酷く喜んでいた己を恨んだ。

「信じられないよね。わかるよ。だって仲間が死んでるんだもん。今すぐ私を八つ裂きにして殺したいよね？ すっごくわかる。私だつてそうだよ、仲間の仇かたきが目の前でゲゲツて笑つてるのに、手出しできないの。苦しいよね、辛いよね。でも今は我慢して欲しいな、私だつていっぱい、いっぱい我慢してきたんだから……うん、わかつてる。貴女が我慢する理由なんか無いよね、でも我慢してよ。人質が後二人、こつちの手の内にあるんだからさ。だから、今は、我慢して」言い聞かせる様に、優し気な声で語り掛けてくる目の前の人物の考えが理解できない。

今すぐ、目の前の女を蜂の巣にし、目につく娼婦を片っ端から射殺していききたい。

フリユネを、この世で味わう事の出来るありとあらゆる苦痛を与えてから、殺してやりたい。

そして、自分の技能や勘が鈍り、錆び付く事を喜んでいた過去の自分を八つ裂きにしてやりたい。

「……ん、わかった。じゃあこうしようか」

ふと、腕を掴まれ、固く握り締めていた手に強引に何かを握らされる。

——俺の手には、鈍く輝く短剣の柄が握らされていた。

顔を上げると、レーネ・キュリオはへらへらと笑いながら、地面に寝かせたエリウツドの傍に立っていた。

「先に言っておくね？ もし貴女が私を殺そうとしたら。私は貴女を滅多打ちホコホコにして、襪褌雑巾イシユタルになつた貴方を引き摺つてでも糞女神の所へ連れて行く。それは絶対」

握らされた凶器に腹の中が煮えくり返り、目の前の女戦士アマゾネスを鋭く睨んだ。

「まず、話を聞いて欲しいかな。さつきも言った通り、貴女の仲間を殺

したのはフリユネ。それと、もう一つ……私の仲間ファミリアは、大事な主神かみさまは、「イシユタル・ファミリア」に殺された」
「……………」

どうせそんなの嘘だろ、と吐き捨てようとして歯を食い縛る。

口を開くのと同時に、彼女に飛び掛かってしまいそうで、必死に人質が居る事を思い浮かべて飛び出しかける体を制御する。

ベルとミコトにもこの事を伝えないといけませんが、そんな事すら頭から溶けて消えそうな程に、湧き上がる殺意に手が震え出した。

「元々、敵対はしてただけだね。でも、私だけ生かされたんだ……フレイヤへの決定打になりそうな、魔法を持つてたから。だから洗脳みりょうされちゃった。アイシャより酷いかもね、だつてイシユタルの命令に逆らえないもん。仲間を殺したフリユネの命令にも、逆らえないし」

凶器を握らせておいて、殺しても良いよ等と口にし、殺しにきたら返り討ちにして引き摺ってでも連れて行くと言い放つ。

意味不明過ぎる目の前の女の言動に、顔を上げて息を吐く。

おち、つけ。人質の確保が先決。春姫の件は……人質は、ベルとミコトを、ロキ派とガネーシャ派への連絡は——。

「……今は無理そうかな。まあいいや、これだけは伝えておくね？ 私は貴女に協力したいと思ってる」

——心配そうなレーネの表情に殺意がほんの少し揺らいだ。

「でも、それはちよつと難しいかな。人質の三人は私が保護するよ。これ以上、他の娘達に酷い事されない様に、ちゃんと治療して、武装や魔剣を持たせて、いつでも逃げられる様にしてあげてあげる。——

——でも、イシユタルが『殺せ』つて命じたら、私は人質を殺しちゃう。それに逃げようとしたら滅多ホコボコ打ちにしても捕まえようとしちゃう」

命令に逆らえない。何度もそう繰り返し、レーネ・キュリオは、涙を零し始めた。

「私の派閥が滅ぼされた時、真つ先に主神が殺されたよ。仲間の一人がね、洗脳みりょうされて裏切ったんだ。だから、恩恵を失った私達は……私はね、必死に皆を逃がしたよ」

己の身を鑑みる事無く、仲間の為に身を張って逃げるだけの時間を

稼いだ。

「けど、私は捕まっちゃって……フリユネに拷問されて、イシユタルに魅了せんろうされて、嫌だって、思ったんだけどね？」

—— 仇敵イシユタルは命じた。

「生き残って、再起し、復讐しようとしてる皆をね……」

魅了せんろうがしっかりと効いているのか確認する為に、『元仲間ファミリアを一人残らず始末しろ』と命じた。命じられた。

「私だって、必死に止めようと思ったよ？ でもさ、無理だった」

せつかく、身を張って逃がした他の仲間を、一人、一人と炙り出しては自身の手で屠っていく。

しっかりと、骨の髄まで染み込んだ魅了せんろうによって、逆らう事が出来なくなってしまうた。

その後は、イシユタルの命の元、イシユタル派の眷属達に一切手出しできない様に命じられ、呪詛カースを何度も使わされ、弱体化された。

L v . 3 にも関わらず、L v . 5 にすら届きうるとまで言われる程の強者だったレーネ・キュリオは呪詛の代償とし、幾度とない能力ステイタス減少を味わった。

「私は——『イシユタル・ファミリア』を滅ぼしたいよ」

今まで生かされていた理由は、フレイヤに対抗できるかもしれない予備札スベアだったから。

確実にステイタスを封じる事が出来ない以上、あくまで予備スベアでしかない。けれど、それも今日まで。

「私は貴女に協力してあげたいと思ってる。なんなら、本当は貴女を逃がしてあげたいよ？」

でも、出来ない。

イシユタルは命じた、『逃がすな』と。

イシユタルは命じた、『捕まえろ』と。

イシユタルは命じた、『儀式を成功させろ』と。

イシユタルは命じた——『儀式の成功を確認したら、命を断て』と。

第一七〇話

爆炎の華が第三区画中心部にて咲き乱れた。門を封鎖していた女戦士達が動揺し、集まっていた市民が騒然とし始める。

「あらあら、始まってしまったわね……丁度、情報も渡し終えたし私はこの辺りでお暇するわ」

これ以上、巻き込まれるのは御免だ、と藍色の女神が微笑んだ瞬間。リリが声を上げた。

「いくつか情報を買わせてください」

「……………良いわよ。本当は嫌だけど、聞かれたら答えなきやいけない。それが私の性分だしね」

若干面倒そうな雰囲気を出しながらも、ヘスティア達の前で質問を待つ女神。

「おい、リリスケ、今すぐイシユタル派に問い詰めるのが先だろ。【戦場の女主】の事はもうわかっただし」

ヴェルフが大刀に手を添えて今すぐに行動を起こすべきだと主張する。

【戦場の女主】レーネ・キュリオ。

元【ウエヌス・ファミリア】の幹部。

イシユタル派が引き起こした敵対派閥掃滅作戦の一環で滅ぼされた際、呪詛カースの効果に目を付けられてフレイヤ派への対抗策の一つとして魅了せんろうされた女戦士アマソネス。

現在の目的は【ヘスティア・ファミリア】の眷属を逃がし、内部で攪乱を行って【イシユタル・ファミリア】を滅ぼす事。

ただし、イシユタルの神命には逆らえず、やむを得ず『ミリア・ノースリス捕獲作戦』に従事している。

命令内容によってはヘスティア派に対し攻撃する可能性は十二分に有り得るが、内心では非常に協力的。人質全員を保護し、武装させて待機させている。ただし、人質奪還の際にはイシユタルの命令通り『逃がさない事』を優先し、抵抗する事。

その為、人質奪還の際には『レーネ・キュリオとの交戦』を踏まえ

る必要がある事。

藍色の女神はレーネ・キュリオの能力、魔法、スキルに至るまで、ステイタス全てをヘステイア派に話したのだ。

ヴェルフの意見も最もだと頷きつつも、リリは一つ指を立ててニヤリと笑みを浮かべた。

「確かに、でしたらヴェルフ様達は先にイシユタル派への攻撃を始めていてください。リリは直ぐに追いつきます」

「何する気だ？」

「直ぐにわかると思いますよ」

何を行うのか想像が付かない面々が首を傾げるさ中、藍色の女神が目を細めてリリルカを見下ろした。

「リリルカ・アーデ……元【ソーマ・ファミリア】の下つ端で搾取されたた奴隷染みた構成員の一人」

「……………ヘステイア様、先に行っていてください」

「わかった」

平坦な小人族の声を聞いたヘステイアが一つ頷いてリリを一人、藍色の女神とダルトンの前に残して駆け出していく。

裏路地から飛び出すや否や、騒ぎになる市民を落ち着かせようとしているイシユタル派の眷属目掛けて桜花とヴェルフが同時に目の前に躍り出た。

「おい、今の爆発は何だ！」

第三区画中央部から上がる黒煙を指し、ヴェルフが吠える。

断続して響く小爆発の音に表情を顰めた女戦士が口を開くより前に、桜花が食ってかかる。

「あれは、ベル・クラネルの魔法だ!! もう言い逃れは出来んぞ!!」

「そこを通せ!!」

遠方からの魔法の音のみで種類の判別までは出来る筈もないが、それでもかまうものかと責め立てる。

肉体が優れており、魔法の習得の見込みが少ない事から魔法に関する知識の薄い女戦士アマソネスと言う種族の欠点を突くその言い掛かりに、一瞬だけ唾然とした二名。

一瞬だけ顔を見合わせた二人は、直ぐに武器に手をかけた。

「だったらどうした、抗争でもおっぱじめる気か!？」

「オレ達は【イシユタル・ファミリア】だぞ！」

啖呵を切る二名に対し、ヴェルフと桜花が視線を交わして頷き合う。

「人質取ったぐらいで調子に乗るな。仲間を返して貰う」

「どけ」

脅しの積りで手をかけていた敵団員と、端から交戦する気であったヴェルフ達では心構えが違う。

人質がある故に、脅しに応じるだろうと踏んでいた彼女らは、虚を突かれて二人の攻撃がもろに直撃した。

吹き飛び、石畳の上を転がっていく二人。異変に気付いた他の面々が来る前にと【タケミカツチ・ファミリア】の面々が武器を構える。

其処に遅れて到着したりりが、ハンドボウガンを手へステイアに声をかけた。

「遅くなりました。このまま人質の保護されている場所まで行きましょう。人質の保護が出来次第、青色の信号弾を三発打ち上げてください」

「リリ君、それはどういう……」

遅れてきて、突然信号銃フレアガンを渡されたヘステイアが訝しむ中、リリは毅然と言い放った。

「ロキ・ファミリア」と【ガネーシャ・ファミリア】に対しての連絡手段です。人質確保が完了したという、ね」

「……?」

Lv. 2のヴェルフと桜花、そして中央で起きた騒ぎの所為で集まらない敵団員に対し数の利で押していく眷属達を見て、ヘステイアは疑問を投げ捨てた。

二人が強行突破した門を潜り、娼館街へと足を踏み入れる。

「んー、ねえ、なんか爆発したよ」

「……だな」

歓楽街を区切る市壁沿いに立てられた最も高い建造物。鐘楼の屋根の上から爆炎の華を見ていた幼さの残る女戦士アマゾンネスの言葉に、フレットローフ外套の少女が溜息交じりに答えた。

蒼然とした闇を照らす満月を見上げ、内から溢れ出す衝動を堪えていた外套の少女は、静かに立ち上がって槍の調子を確かめる。

「あつ、門番が一人しかのこってないよ？ どこいつちやっただらう？」

「【タケミカツチ・ファミリア】と【ヘスティア・ファミリア】が封鎖していた門を突破したらしいぜ？ そっちの応援だろ」

「そっかあ、じゃあわたしたちもはじめよっか！」

頬に刻まれた青痣を撫で、痛みに眉を顰めた狼ウエアウルフ人が被っていたフードを取り払い、蒼然とした夜空に薄らと顔を出し始めた満月を見上げ、目を細め、鐘楼の屋根の淵を踏み締めて中空に身を投げた。

「あ、置いてかないでよっ！」

後ろから聞こえる声も置き去りに、三階建ての屋根を踏み、門番をしている敵団員の頭上から強襲を仕掛けた。

「死ぬ」

一言呟くと同時、自身にかかる影に気付いたイシユタル派の構成員は顔を上げた瞬間に、顔面中央を槍で穿たれ、僅かに仰け反った姿勢のまま地面に叩き付けられる。

周囲で歓楽街の突然の封鎖に文句を言っていた男性客たちが発火した様に悲鳴を上げて逃げ出す中、フィアは死んだ敵団員の胸を踏み、槍を無造作に引き抜いて歓楽街中央部を強く睨んだ。

「さて、まずは一人……まだまだ沢山居そうだな」

「ちよつと！ わたしが『いちばんやり』やりたかった！」

遅れて大剣を担いだまま飛び下りてきたサイアに対し、フィアは肩を竦める。

「お前の武器は『大剣』だから一番『槍』は無理だろ。アタシの役目だ」

「おー、たしかに！」

頬に刻まれた青痣を撫でながら門を潜り歓楽街へ足を踏み入れた直後、二人を阻む様に二名の敵団員が現れた。

後方、門の外側で血と脳漿を撒き散らして死んでいる仲間を見て、血に濡れた槍、そして外套姿のフィアを見た彼女らは、一瞬で顔を真っ赤にして武器を抜いた。

「よくもダリアをつ!!」「ぶっ殺してやる!」

躍り掛かってくる悍婦を見上げ、フィアは口元を不愉快そうに歪め――槍で一人を穿つ。

ズドンツと力強い一撃が一人の敵団員の胸を穿ち、瞬時に槍を引き戻した彼女は続く二突き目でもう一人を狙おうとし、大剣の一撃を回避した。

「えいやあつ!」

「ぐぎやつ!」

血濡れた外套に槍、それに目を取られてもう一人の存在が頭から抜け落ちた間抜けに對し、無防備な足への大剣一振り。

大半のLv. 3の上位戦闘員である戦闘娼婦パルベラが宮殿に配置されている以上、外周部に居るのは下っ端のLv. 2、もしくは下級団員。そんな彼女らであればサイアでも十二分な活躍は見込めるだろう。

振り抜かれた大剣に両足を切り飛ばされた女戦士アマソネスが地面に激突し、足を失った事に動揺して喚きだす。

「あ、足がっ!」

「えっと、回復薬はく……あ、フィアちよつと!」

血が噴き出す足を抑えて喚いていた敵団員に對し、無造作に槍で止めを刺したフィアは肩を竦めた。

「アタシをその気にさせたなら、敵を生け捕りだとかそんな生易しい考えは捨てるよ」

フィアが青痣の刻まれた頬を撫で、サイアの抗議に鼻を鳴らすと、騒ぎを聞きつけた近場の敵団員がちらほらと姿を見せる。

「んで、サイアはどうすんだよ」

「むう、人質にするつもりだったのに!」

サイアの反論に、フィアが瞠目する。

「その手があったか」

「フィアのバーカッ！」

——始まりが何だったか、と問われれば。

それは一方的な敵視だった。

初めて顔を合わせたその瞬間から、同じ『美の神』であるイシユタルはフレイヤを憎んだ。

それが同族嫌悪なのか、はたまた自身に無いものを見出したが故の嫉妬なのかはわからない。だが、事実とし彼女はフレイヤを憎み、幾度となく蹴落とさんと策略の限りを尽くした。

対照的に、フレイヤはイシユタルに頓着しなかった。

彼女が事あるごとに仕掛けてくる『ちよつかい』は笑って済ますし。それどころか退屈凌ぎには丁度良いと面白がる事すらあった。彼女への認識はその程度で、嫌いではない処か暇潰しの相手としてはそれなりに好んでいたとも言える。

そんな余裕こそが、地位を、名声を、勢力の差を分けた——のかはわからない。

しかし、事実としてフレイヤは都市の頂点に登り詰め、片やイシユタルは淫都の王にとどまっている。

フレイヤの名声は加速し、眷属達には畏怖され、彼の女神の美しさや世界で一番——天界や下界をひつくるめ最上級であると、噴飯ものの賛美すら与えられた。

フレイヤが他の女神達から嫉妬を買いそうだと笑っていた頃。イシユタルの一方的な敵視には、黒い炎が混じり始めていた。

その黒い炎が混じり始めたその時点から、あるいは、初めて出会ったあの瞬間から、こうなる事は運命付けられていたのかもしれない。

「フレイヤ様」

葡萄酒ワインの注がれたグラスに映る自身の顔を見つめていたフレイヤは、従者の声を聞いて思考の海から浮かび上がる。

手に持っていたグラスを円卓に置くと、静かに歩み寄ってきたオツ

タルが口を開く。

「アレン達から報告がありました。【イシユタル・ファミリア】はベル・クラネルとミリア・ノースリスを捕え、更に怪しい動きを見せている、と。……加えて、先ほど歓楽街で爆発がありました。……それともう一つ、先ほど女神ヒストリア……『藍色の女神』が【ロキ・ファミリア】、【ガネーシャ・ファミリア】等、各派閥へ足を運んでいる事が確認できた、と」

「……ヒストリアが、ね」

眷属の返答を待つことなく、フレイヤは椅子から立ち上がった。

「藍色の女神ヒストリアについてはどうでも良いわ。あの子はただの『知りたがり』だもの」

もしくは収集家、そう吐き捨てたフレイヤは従者を一瞥した。

「【ファミリア】の子は、全員揃ってるわね？」

「はっ」

「号令をかけなさい」

「それでは」

「ええ。イシユタルは線を越えた」

双眸を細め、フレイヤは凍り付く程の冷たい声を放った。

「今までの悪戯なら笑って許してあげたけど……駄目よ、それだけは許さない」

まず冒険者が行わない完璧かつ洗練された不意打ち。

その犠牲者となったのは、ホーム宮殿の中を単独行動しふらふらしていたアマゾネスだった。

「——人質は皆、レーネが連れていきやがった！」

単独行動していた敵派閥の戦闘員の隙を突いて首に腕を回し、褐色の首筋に奪った短剣を突き付ける。

春姫の居場所を聞こうと、ミコトが口を開くより先に慌てた様にそのアマゾネスは動揺を誘う情報を放った。

「人質？」

「アンタ知らないのか……レーネの話と違う。いや、良い、とにかく人質は全員レーネが連れて行った。だから宮殿には居ない！」

人質、と言う単語にミコトが眉を顰める。

「アンタの派閥から、エルフの男女とアマゾネスの女を一人ずつで合計三人、人質にとってるんだよ」

「なにつ、それはっ!？」

自分が人質扱いされていたのは想像がつくが、それ以外の人質が居た事にミコトが動揺する。

タイミング悪く、通路の奥から聞こえる悍婦達の声に舌打ちし、ミコトが気絶させるために腕に力を込めようとした瞬間、アマゾネスは彼女の足を絡めとり、首元に突き付けられた短剣を奪い返すや否や、ミコトをすぐそばの扉の向こうに押し込んだ。

「じつとしてろ！」

「なっ!？」

扉を静かに閉じ、自身に背を向けて扉の向こうを伺うアマゾネスの姿に理解が及ばずに立ち上がって刀を抜くに留まるミコト。

そんな彼女を無視し、扉の向こうを伺っていたアマゾネスは、廊下を仲間が駆け抜けていったのを確認すると、刀を突き付けてくるミコトに振り返った。

「アンタの目的は春姫の救出か。悪い事は言わない、春姫は諦めた方が良い」

「戯れ言を」

「……信じる信じないはアンタの勝手だけどね。【イシユタル・フアマリア】は一枚岩じゃない」

両手を上げ、抵抗する気は無いと示すアマゾネスの行動にミコトが訝しみながらも静かに間合いを詰める。騒がれる前に鎮圧せねばと焦る彼女に対し、そのアマゾネスは溜息を零して早口で手短に語った。

「アタシら戦闘娼婦の中には、元は他派閥に居た奴も居る。どいつもこいつも脅されて、魅了されて従ってんのさ。その筆頭がレーネ・キュリオだよ」

「……その言葉こそ、洗脳されて言わされているだけやもしれません」
「だろうね。だから信じるかはアンタに任せるよ」

隙を伺いながらも、彼女が騒ぎ立ててミコトを追い詰める真似をしていない事から、信じるとまではいかずとも話を聞く価値はあると判断し、続きを促す。

「手短に言うけど、一部の戦闘娼婦^{パルベラ}、レーネの班に割り当てられてる奴らは2割はこの騒ぎに乗じて「イシュタル・ファミリア」を滅ぼす積りだ。つつつても10人も居ないけど」

「……それで、自分に何を要求する積りですか」

「ロキやガネーシャの所に連絡が行くように優先して欲しいだけさ」

「それならミリア殿が——」

「ノースリスならレーネがもう捕まえたよ」

肩を竦めながら放たれた言葉に、ミコトが息を呑んだ。

透明状態で逃走を図ったミリアが捕まった。信じられない、と表情を険しくするのを他所に、アマゾネスは続けた。

「春姫を諦めて、アンタはこつそり抜け出してロキかガネーシャの派閥に連絡入れてくれよ。アンタの隠密技術ならいけるだろ？ 人質の心配はいらない、レーネが何とかする」

目の前の敵意を感じられないアマゾネスの言葉を信じるべきか、判断に窮したミコトは、遠くに響くベルの陽動音を聞いて首を横に振った。

「申し訳ありませんが。貴女の話は信じられない」

「はっ、好きにすれば良いさ。期待はしてなかった……春姫は四十階層、空中庭園の近くの待機所に居る。護衛の人数は7人、フリユネとアイシャも一緒に居る。まあ、フリユネとアイシャは『兔狩り』で出てるかもしれないけどね」

無造作に情報を零すと同時、アマゾネスは短剣をミコトに向けて構えた。

「やはり、敵……いや、敵意が無い？」

「当たり前だろ、アンタに恨みなんか無いし、敵対する気も無い。でも、命令されてんだよ——アンタの腕なら、アタシなんかサクツ

と殺せるだろ？ さつさとアタシを殺していきな」

アマゾネスは自分を殺して進めと吐き捨てると同時に、無防備に短剣を振り上げて一直線にミコトに躍り掛かる。

あまりにも無防備なその攻撃に対し、罨を警戒しながらもミコトが峰打ちで意識を狩り取る。非常に呆気なく、何の抵抗も見せずにその攻撃を受け入れ、アマゾネスが倒れ伏した。

「……いや、まさか……ですが」

昏倒し、倒れたアマゾネスを見ながらミコトはほんの僅かに思案する。

ミリアが捕まったのであれば、誰かが代わりに外部に連絡しなければいけない。しかし、時間が限られる今、自身の目的である春姫の奪還を無下には出来ない。

「どうすれば……いや、きつとこれは此方を惑わす戯れ言に違いない」

真に受けるなど自身に言い聞かせ、ミコトは窓から外に出て、外壁を伝って登り始めた。

信じるか否かは、春姫の居る部屋を見つけてからで良い、と。

四十階層、待機室とされている一室にて、春姫は動揺していた。

突然宮殿が騒がしくなったかと思えば「リトル・ルーキー」――

―ベル・クラネルがたった一人、この宮殿に殴りこんできたと報告があったのだ。

報告を聞くや否や立ち上がり、部屋を駆け出そうとした春姫は同室で待機していた戦闘娼婦に制止された。今や逃走は許さぬと両脇にアマゾネスが張り付き、睨みを利かされている。

極東の赤い装束を身に纏い、椅子に腰掛ける春姫の尾が、雄弁に彼女の心境を語っていた。

「あの子、が……」

誰にも聞かれる事のない呟きが、彼女の唇から零れ落ちる。

何で、どうして、止めて、懇願する様に宮殿に満ちた喧騒に掻き消える声の欠片。

定まらない視線を床に向け、春姫は恐れる様に自らの身を掻き抱いた。

「人質を使えば早いだろう？ あア？」

「そ、それは……その……」

部屋の一角で春姫がうつむく中、フリユネが報告に来ていた団員を睨みつけていた。

宮殿内部への侵入を許し、あさつまえ未だに捕まらない『兎』に対し対応策を講じろと喚くフリユネ。

そのヒキガエルの喚き声を聞きながらも、アイシヤは卓に広げられた宮殿の地図を睨みつけながらベルを追い詰める算段を付けている。

「チツ、人手が足りない……仕方ない。お前達は増援に行きな、この部屋には私が残る。理想は三十……いや、三十二か、三か」

どの階層で追い詰めるかと模索していたアイシヤは、他の戦闘娼婦アマソネスに指示を出した。

自分も春姫の護衛に付く、と発言する彼女だったが、ベルが捕まらない事に業を煮やしていた巨女が異議を唱える。

「勝手に抜かしてるんじゃないよ、アイシヤ。お前も、アタイと一緒に兎狩りに行くんだよお」

「……ああ？」

「前に『殺生石』を壊して、アタイ達の手を煩わせた事を忘れたとは言わせないよお」

ヒキガエルを連想させる巨大な顔をアイシヤの眼前に寄せ、フリユネは彼女を見下ろした。

「この混乱に乗じて、春姫を逃がす積りじゃないかあ？ お前は信用ならない。アタイの目の届くところに置いておくう」

団長の言葉に他の戦闘娼婦パーベラがうろたえる。

主神の『魅了』イシユタルによって反旗など翻す事が出来ないアイシヤは、馬鹿が、と吐き捨てた。

「リトル・ルーキー」は明らかに囧だろ。本命は春姫を狙う【絶影】、それに此処から逃走してロキとガネーシヤに連絡を入れようとする【魔銃使い】だ」

「たかがLv. 2の第三級ごとき、アタイとお前が居なくても問題ないだろうがあ」

同室に居る戦闘娼婦はアイシャとフリユネを除いて全員がLv. 2。

Lv. 3に到達している戦闘娼婦は殆どが宮殿内で暴れ回るベル・クラネルの捕獲に回され、残る数人もミリア・ノースリス捕獲の為に——付け加えるとレーネの見張りに回されている。

ミコト程度、ここに居る戦闘員だけでどうとでもなる、と鼻息荒くフリユネが指摘する。

「レーネの方が捕獲に失敗すればその瞬間、私達はお陀仏だろ。港町メレンで【凶狼】に一蹴されたのを覚えて無いのか？」

【イシュタル・ファミア】は過去、港街メレンで【ロキ・ファミア】と事を構えている。

その際、フリユネは【劍姫】を相手に、春姫の魔法を使用する事で優位に立つ事が出来た——しかし、その際に月の光によって強化された【凶狼】に、文字通り一蹴されて撤退している。

「あれは途中で魔法が切れて——」

「魔法があれば、【勇者】フレイバー【重傑】エルガラム【九魔姫】ナインヘル【劍姫】アマゾン【大切断】ヨルムガンド【怒蛇】

……加えて、満月で最高潮の【凶狼】ヴァナルガンドを相手取れるってか、馬鹿も休み休み言え」

加えて【ガネーシャ・ファミア】から【像神の杖】アングローシャまで出張ってくる。そうなれば間違いなく手に負えない。

「ミリア・ノースリスに対して人質として使う為にも、あの時一人も殺さずに全員捕まえてありや……」

——ディンケ・レルカン達襲撃の際、フリユネは幾人かを殺害した。

アイシャはレーネと共に『殺さず全員生け捕り』を提案した。珍しく、あの何を考えているのかわからないレーネと同意見と言う事もあって、気持ち悪さはあったものの、後の事を考えれば『殺す』より『人質』の方が良いとの判断だった。

しかし、フリユネはアイシャの作戦を拒んだ。理由は——従う

のが気に食わないから。

そんな馬鹿な理由で、と吐き捨てるアイシャとレーネの二人を、フリユネは一笑して馬鹿にした。

「兎狩りに人質が使えない理由。アンタにもわかるだろ？」

ミリア・ノースリス捕獲の為に人質を使用しているから。

もし人質がもう少し人数が居れば、もっと状況はマシだっただろう。加えて言うなれば、『殺し』さえしていなければ「ロキ・ファミリア」も「ガネーシャ・ファミリア」も手心を加えてくれた可能性だつてある。

しかし——命を奪った敵、仲間を殺した者に対して、どんな行動に出るか考えるまでもない。

「それに、レーネの部下共が勝手に動いてる。私達の知らない所で何やらかしてるんだか……」

「うるさいんだよオ!!」

フリユネが引き起こした数多くの失態、そしてもつと疑うべき者に対する忠告。どれもが「イシュタル・ファミリア」と言う派閥の為に放たれた苦言であるそれらを、本人は大喝で遮った。

部屋に居た全ての者を怯ませる大咆哮、戦慄する者達を他所に、フリユネは血走った眼球で、毅然とした態度を揺らがせないアイシャを睨んだ。

「お前はアタイの言う事を聞いていればいいんだよオ。また、その顔を潰されたいかいかア？」

体格に見合った巨大な口から強い口臭を吐き散らす巨女を、今度はアイシャが睨み返した。

「アンタの作戦を実行してたら、とつくの昔に「イシュタル・ファミリア」は更地だったろうね」

過去、『殺生石』を破壊し、イシュタルに引き渡されるまでフリユネの手で徹底的に痛めつけられた過去があらうと、アイシャは「イシュタル・ファミリア」を存続させる為に尽力し続けてきている。

其処だけは、義理を通してしていると毅然とした態度を崩さない。

「黙りなア!! ……お前がよく構っている不細工共も、同じ目に遭わ

せてやろうかア？」

アイシヤの顔が、ここにきて初めて歪んだ。

部屋に居る戦闘娼婦パルベラの一部が、怯えながら二人のやり取りを見守っていた。

团长フリユネより信頼の厚いアイシヤは多くのアマゾネスに慕われている。

それも、年若い少女達が多く、そんな彼女達をアイシヤは妹の様に――

――春姫と同じぐらい――面倒を見ていた。

「忘れたか、アイシヤア？　また妙な事をすれば今度はお前だけじゃあない、他の奴も巻き添えを喰らう……イシユタル様にも忠告されたらろうオ？」

アイシヤ・ベルガと言う女傑は、女神イシユタルに忠誠を試されている――玩具にされている、と言いつ換えても良いかもしれない。

完璧に『魅了』されて女神の傀儡にされるでもなく、恐怖を植え付けられたまま春姫と妹達を天秤にかけさせられている。常に苦惱し、葛藤を抱えさせる為に。

それが『殺生石』を破壊したアイシヤに、女神が科した罰だ。

押し黙るアイシヤに、返事をしな、としゃがれた声がつつけられる。

「……わかったよ」

フリユネの哄笑が響く中、アイシヤは小さく溜息を零した。

「本当に、今日が最期の日になつちまうだろうが……」

武器を手に取り、最低限の戦闘娼婦パルベラを残してアイシヤを従えたフリユネが部屋を出る直前、命令を放った。

「時間になったら、祭壇に移動しな。儀式の準備をしてるサミラ達に春姫を引き渡せえ」

アイシヤと、彼女を慕う少女達を連れ、巨女は部屋を出て行った。

「それで、私を信じる？　この場で殺す？　私はどちらでも良い、けど、急いでね？」

仲間を殺した、とその口から放った仇敵の言葉。

それを信じるか、否か。

「今すぐ、決めた方が良い。もうすぐ、ベル・クラネルが捕まっちゃう」
向けられた短剣をそのままに微笑み、懇願するその女戦士^{アマゾンネス}。

空は青い闇に覆われ、黄金の真ん丸が顔を見せていた。星々は未だ顔を出していないが、気の早い一番星は既に輝きを放っている。

迷い、苦悩し、葛藤する時間はない。目の前に出された選択肢の中で、最も良いモノを選ばなければいけない。

目の前のアマゾンネス、レーネ・キュリオの言葉を信じるか、それともこの場で殺すか。

「信じなくても良い。私を殺しても良い、でも——」
「イシユタル・ファミリア」は滅ぼして欲しい」

——ああ、そうか、そうだな。

「どちらにせよ、貴女の最終目標が【イシユタル・ファミリア】の壊滅ならば……私に選択肢なんて無いでしょうね」

決めた——こいつは殺そう。

「貴女は殺します」

「うん、良いけど、殺れる?」

——ああ、必ず。

「ですが、今じゃない」

今じゃない、今この時、この瞬間に殺すのではない。

「この一件が終わったら、殺しにいきます」

【イシユタル・ファミリア】を滅ぼしたら、殺してやる。

「良いよ。って言いたいけどちよつと難しいかなあ……だって途中で死にそうだし?」

作戦が露呈したり、何らかの不都合があったり、とにかく不確定要素が多い。だから、途中で死ぬ可能性は高いだろう。

それでも、だ。

「死ぬ気で生き残ってください。私が貴女を殺すんで」

「……オツケエー! じゃあ頑張って生き残るよ。逆に死なないですよ? それだと困るし」

雲のようにふわふわとした笑みを浮かべる彼女に、短剣を返す。

エリウッドを抱え直したレーネが、楽しそうに言った。
「私は貴女に殺されるまで絶対に死なないよ。だから、頑張つて『イ
シユタル・ファミリア』を滅ぼそうねえ」

第一七一話

三十階層を走破しようとして、大階段を駆け抜けるさ中、ベルを捕獲せんと迫る戦闘娼婦の動きが変化した。

ベルが駆け抜けようとした廊下の先に無数の悍婦達が立ち塞がる。そして、横道には僅か二人だけが配置されている。

自然と人数の少ない、突破が容易な方を選択し、速攻魔法の爆風を以てして強行突破を図った。

それが、誘導されていると気付いた彼は、咄嗟の判断で壁を魔法で破壊し、誘導から逃れる。壁の向こうに非戦闘員の娼婦が居たら、と戸惑いながら放たれた魔法。

ベルが抱いた戸惑いはただの杞憂と終わり、宮殿中央の吹き抜け沿いの廊下に足を踏み入れた瞬間、大声が響き渡る。

「見つけたよオー！」

音の衝撃と共に、大銀塊が迫る。

凄まじい質量にて空気を切り裂きながら迫る大刃——戦斧をベルは咄嗟に回避した。

着弾と同時にベルがつい数舜前に居た空間、廊下を構築する壁や床、手摺を悉く破壊し尽くし、更に階下の四階層までもを貫き止まった。

最も恐れていた対象が遂に顔を見せたと、恐ろしい攻撃に寒気を感じながら確信する。

「フリユネさん……」

遙か上階の廊下の手摺を踏み締めて立つ巨女。

【男殺し】の二つ名を与えられた、第一級冒険者は分厚い唇を吊り上げる。

そのすぐ傍に控える長髪の女傑、アイシヤの姿も見える。

「アタイが恋しくて、戻ってきたのかあいッ。感激じゃないかア〜!？」
他の団員に用意させた大戦斧を受け取りながら、フリユネはベルを見下ろした。

彼女を相手に時間稼ぎをしなくてはいけない。脳裏に浮かぶミリ

ア、ミコト、そして春姫の顔を思い浮かべたベルが構えるのと同時。巨女は手摺をへしやげ蹴り抜き、上階からベルの階層へと跳躍した。

「——っ！」

「いま行くよおおおっ!!」

圧倒的な格上との戦闘。否、戦闘ではない。

防戦一方、一撃一撃が致命傷を超えて即死と呼んでも差し支えない一撃必殺の嵐。

近距離から放たれた速攻魔法ファイアボルトですら、見てから回避する能力差ステイタス。

決死の覚悟を以て挑んだソレは、余りにも呆気なく終わりを告げた。

フリユネの攻撃を防御して吹き飛ばされて二転、三転する視界。

通路の先の大広間の扉に激突し、粉碎しながら中央に投げ出されながらも立ち上がったベルは、視界に映った光景に絶句した。

「よくやったよ、あんたは……」

鉢型装飾の成された荘厳な柱と窓が並ぶ広間。

抜き身の大朴刀を担いだ女傑が、大階段の上から淡々と告げる。

四方を埋め尽くす戦闘娼婦達パルベラが、警戒する様にベルに武器を向けていた。

「アイシャさん……っ」

しまった、と焦燥を抱き呼吸を乱したベルは、綺麗に自身の思考を導き誘導を完遂して見せた女傑への恐れと、同時に感心を抱きながらも打開の思考を巡らす。

間も無く、砕き壊れた扉の残骸を踏み締めてフリユネが広間に足を踏み入れる。

「ゲゲゲッ、ようやく楽しめるってモノだよお。今度は逃がさないからねえ〜」

巨女から向けられる粘着く様な貪欲な視線に、ベルが過去の記憶トラウマが蘇りかけた、その時。

「下がれ、お前達」

圧を感じさせる女性の声が、頭上よりアマゾネス達に投じられた。場に居る全ての者が驚愕しながら視線を向けた先、大階段の奥から絶世の美貌を持つ女神が煙管を片手に下りてくる。人を破滅に追いやる毒華を彷彿させる甘い香りを身に纏った、その肢体に深紅ルベライトの瞳は釘付けになる。

見る者を惑わせる、『美の神』イシユタルは愉快そうに紫煙を吐きながらベルを見下ろした。

「ど、どういう事だあい、イシユタル様あ!?! いきなりしやしやり出てきてえ!?!」

背後に二人の従者を連れて唐突に現れた主神に、フリユネが怒声を響かせた。

憤怒で顔を真っ赤に染め上げるアマゾネスの長の姿に、イシユタルは一瞥する。

「聞こえなかったか、フリユネ、下がれと私は言った」

『逆らうな』と言う神意の含まれた言葉を放ちながらも、紫水晶アメジストを思わせる瞳には何の感慨も浮かんでいない。

フリユネの避けた唇が引き攣り、真っ赤だった顔色が元に戻っていく。

他では目にする事のない、巨女の怯んだ表情にベルが視線を奪われていると、突然、荘厳な窓の一つが砕け散り、広間に誰かが飛び込んできた。

「くるくるーっすちやつ! レーネちゃん登お場おく!!」

自らの口から効果音を放ちつつ、人を二人担いだアマゾネスが割れた硝子を踏み締めて皆の注目を集めた。

「……レーネかあ! 身勝手に人質を連れて行ってアタイらに迷惑をかけた役立たずがあ、どんな顔で此処に来やがったあ!」

主神の言葉に怯んでいたとは思えない程の変わり身で、フリユネが顔を先より赤く染め上げて怒声を響かせた。

その声にアマゾネス達は眉を顰め、女神は不愉快そうに瞳を細める。そのさ中、ベルは突然現れたレーネが担ぐ二人の人物を見て凍り付いていた。

「はいはく、イシユタル様にお届けモノですう。捕獲に成功したので報告うに上がりましたあ」

素っ頓狂な調子で担いでいた一人の小人族を下ろし、背中を押した。

拘束らしい拘束は何一つされていないにも関わらず、俯きがちに一步前に出たその人物は、ベルが最もよく知る人物でもあった。

淡い金髪は血に汚れ、ボロボロになったローブ姿の小人族。

「嘘だ……ミリア、なんでっ」

——ベルが囚になる事で逃走するはずだった、ミリア・ノースリスが其処に居た。

「ほう、流石だなレーネ」

「どこぞの役立たずなヒキガエルとは違いますから」

「誰の事を言ってるんだい、アンタが人質を連れていかなきゃ、アタイ等だってこんな苦労は——」

黙れ、と言う主神の一喝にフリユネが口を閉ざす。しかし先とは違い真っ赤な顔はそのまま、レーネを鋭く睨みつけている。

睨まれているレーネと言えば、ふわりと柔らかな笑みを浮かべ、ベルを見た。

その優しさを含む笑みを前に、少年はただ立ち尽くす。

人質という単語の意味、そしてレーネが担いでいるもう一人の人物。【ヘスティア・ファミリア】に改^{コンバージョン}宗し、助力してくれたエルフの青年、エリウツドの姿を見て嫌な想像が駆け抜ける。

何故、ミリアがこんなにあつさり^と捕まってしまったのか。その疑問の答えが目の前にあつた。

「ミリア・ノースリス、此方へ来い」

女神が告げるがままに、ミリアが広間の中央に歩み出す。

悔し気に引き結ばれた口元のまま、彼女は顔を上げてフリユネを憎悪の瞳で射抜く。

アマゾネス達が静かに道を空け、導かれる様にして抵抗らしい抵抗を見せないミリアがベルの横に立ち、呟く。

「ごめん、失敗した。人質を取られてる」

残り二人も何処かで捕まってる、と小さく呟かれ、ベルは一瞬で大量の冷や汗をかいて硬直した。

「レーネ、本当に良くやった。来い」

ミリアに続き、エリウツドを担いだままのレーネが主神の元へ足を運ぼうとし、アマゾネス達の雰囲気が変わる。

先の様にただ静かに道を空けるのではなく、あからさまな舌打ちや、道を完全に開けずに肩をぶつける等の嫌がらせをし始めたのだ。

その様子にベルが違和感を覚えるも、主神はアマゾネス達からのレーネに対する扱いに何も言わず、レーネ自身は気にした様子もなく鼻歌混じりに人垣を通り抜けてきた。

僅かに刻まれた無数の切り傷が、アマゾネス達が意図的にレーネに刃先を掠らせた事を察しさせる。

「リトル・ルーキー」も「魔銃使い」も確保できたし。後は儀式するだけだねえ」

「……………」

イシユタルの立つ大階段の一段目の前でレーネが笑みを浮かべる。対する美の神は、レーネを鋭く睨みつけて口を開いた。

「人質を勝手に持って行ったそうだな」

「勝手にじゃないよう、ちゃんと許可は貰ったって」

何処か浮ついた様な、張り詰める空気を弛緩させるようなふわふわとしたレーネの口調に、ベルが調子を乱される。ミリアの方は表情を消し、イシユタルを睨んでいた。

「それにさあ、ちゃんと【魔銃使い】を捕まえてきたんだからあ。文句言われる筋合いは無いよね？ どこぞのヒキガエルみたいに宮殿ホームぶっ壊しまくった訳でも無いしい？」

煽る様にフリユネに長し目を向け、それに反応した巨女が口を開くより先に主神に睨まれ口を閉ざす。

イシユタルは面倒そうに髪をかき上げ、獣人の従者に指示を出した。

「人質を受け取れ」

「はっ」

大階段の上から素早く駆け下りてきた獣人の従者が、レーネが担いでいたエリウツドを受け取り、彼女から離れて距離を取った。

この隙に逃げるべきかとベルが思索し、人質が後二人居るといっ情報に動けずにいた時だ。

「やれ」

たった一言、女神が何の感慨も無く放った言葉の意味を、ベルやミリアが理解するより前に、レーネの頭をフリユネが掴んだ。

間合いを一瞬で詰め、笑みを浮かべた褐色少女の頭を掴んだ巨女は、無造作に彼女の頭部を大階段に叩き付ける。鈍い強打の音が響いた。

仲間の筈の少女に暴行を加えるという信じられない行為に、ベルが驚愕の表情を浮かべる間にも、二度目には床に、三度目には頭を引っ掴んだまま全身を床に叩き付けると言った凄惨な暴行が続けられる。

「な、何をしてるんですか!？」

「何をしてるか、か……フリユネ、やめろ」

耐えきれずに放たれたベルの言葉に、イシユタルが目を細めて指示を出すと、巨女は無造作にレーネの頭を放した。

「下がれ」

「チツ、物足りないったらありやあしないよ」

去り際にレーネの腹を踏みつけ、潰れた蛙を思わせる声が彼女の口から響くのを聞いたフリユネは、機嫌を良くしたのかほんのりと愉悦の表情を浮かべて列に戻っていく。

「な、大丈夫ですか!」

大階段前、ベル達とイシユタルの間に投げ出されたままのレーネに駆け寄り、ベルが容態を確認すると、レーネが彼の手を払い除けて立ち上がった。

切れた額からどくどくと血を流し、折れた鼻があらぬ方向を剥き、折れた歯を吐き捨てたレーネは、顔の半分を血に染め上げながらもイシユタルを見上げた。

女神はその姿を一瞥すると、レーネの傍に駆け寄ったベルに視線を向けて口を開いた。

「ベル・クラネル。お前は『何をしている』と口にしたな」

「……………っ、そうです！ どうしてこんな事をするんですか！」

ミリアの逃走を妨害し捕獲し、更には人質を連れ歩いているベルにとっては敵側の人間だ。

しかし、「イシユタル・ファミリア」の戦闘員であるはずのレーネと
言う少女に対し行われた暴行行為は、見過ごせるものではなかった。
「私が、自身の眷属に罰を与えるのに文句でもあるのか？」

少年の放つ異議主張に対し、女神はただ当たり前前のことを述べる様
に告げた。

何様の積りだ、とイシユタルはベルの言葉を一蹴すると、レーネに
視線を向ける。

「さて、貴様の所に預けた戦闘娼婦が、幾人か裏切り我が派閥に損害を
齎した。何か知っているなら答えろ」

「知らないけどお？」

主神から放たれた圧を含む質問に、レーネは口の中に溜まった血を
吐き捨てて、感情を雲に隠す様にふわふわとした言動で煙に巻こうと
する。

イシユタルが目を細めた。

「レーネ、もう一度黜らりたいか」

「……………いや、本当に知らない」

『虚偽は許さない』と言う神意の込められた圧ある言葉に、今度は真
面目な表情で答えを返し——イシユタルは「やれ」と呟いた。

止める間もなく、フリユネの握り拳がレーネの背中を打ち、床に叩
き伏せられると同時にその背を巨女の足が踏み付ける。床が捲れ上
がり、冗談な程に飛び散る破片にベルが目を見開いた。

二度の踏みつけを喰らい、完全に半身が床にめり込んだレーネは、
それでも震えながら立ち上がってイシユタルを見上げた。

「私は、『答えろ』と言ったんだ」

「知ら……………ない事は……………答え、られない……………」

檻糞雑巾の様になっているレーネを、イシユタルは大階段の上から
見下す。

耐えきれずに、ベルがイシュタルの視線を遮る様にレーネとの間に身を割り込ませた。

「……どういう積りだ？」

「や、やり過ぎですよ。こんなの……この人が、死んでしまう。仲間でしょう!？」

目の前で無抵抗のまま暴行を加えられる姿に、いくら『罰』でもやり過ぎだと主張する少年。

対する女神は、その言葉を鼻で嗤った。

「勘違いをするな、ソレは私の眷属だ。だがソイツはそうは思っていない」

「——えっ?」

「私は私成りに、私に尽くす眷属には相応の褒美を与えている。アイシャヤ……気に食わんがフリユネもそうだ」

しかし、と女神は眼光鋭くベルを、ベルの背後でふらふらと揺れるレーネを睨んだ。

「私を敬わない処か、邪魔する事しか考えていない者に温情等与えんよ」

「それは、どういう……」

「レーネ」

美の神は、目の前の少年を無視して揺れる体でなんとか立っている女戦士に声をかける。

身を震わせるのと同様、レーネはベルの腕を掴んで押しつけると、女神の前に立った。

「お前は何処の派閥に所属している?」

「【イシュタル・ファミアリア】」

「お前は誰の世話になっている?」

「女神イシュタル」

「では——敬愛する神の名を言ってみろ」

忌々しいものを見る様に、僅かながらに黒い炎をその紫水晶アメジストの瞳に揺らした女神が、レーネに問う。

その質問に対し、レーネ・キュリオと言う少女は、檻褻雑巾の様な

怪我をしているとは思えない様な、美しい笑みを浮かべて声を張り上げた。

「——ウエヌス様！」

知らぬ神の名がその口から飛び出した事にベルが驚愕するさ中、イシュタルが怒声を響かせる。

「未だにウエヌスの名を口にするか！」

「私が、この世界で唯一敬愛しているのは、女神ウエヌス。ウエヌス様だけ」

怒髪天を突く、そう言わんばかりに一瞬で表情を怒りに染め上げたイシュタルが、煙管をレーネに向けた。

「もう良い。儀式が終わったら死ぬと命じていたが、気が変わった、今すぐ死ぬ」

いくら主神とはいえ、眷属に死を命じるという信じられない言葉にベルが動けずにいる間に、レーネは自らの両手で己の首を締め上げ始める。

「えっ!? や、やめてくださいっ、何をして!？」

最も傍に居たベルが、自らの首を絞め上げ、己を殺そうとしはじめたレーネを止めようとするも、とてもではないがその力に適いそうにない。

血で染まった褐色の肌が、徐々に青褪めていく。それ以前に、凄まじい力で締め上げられた首が折れるのではないかと言う恐ろしい想像にベルがどうかしないかと、と止めようとし——アイシャの声が響いた。

「イシュタル様、どうか止めてくれませんか」

「どうした、アイシャ。私に逆らうか？」

鋭い眼光で睨みつけられ、アイシャの手が震え出す。女神に逆らう様な発言をしながらも、アイシャはそうではないと首を横に振って、今まさに自らの首を押し折り自害しようとしているレーネを一瞥して口を開いた。

「ソイツは確かに信用ならない。だが、外の警備に人が足りない。儀式が終わるまでは生かしておくべきだと思う」

此処で殺すのは無駄が過ぎる。そう告げると、女神はほんの少し考えこむ。

その間にも、限界を迎えようとしているレーネが膝を突き、僅かな痙攣と共に意識を失いかけ——イシユタルが告げた。

「止まれ」

「げっ、げほっ……」

ぜえぜえと、乱れた呼吸を繰り返しながら震えていたレーネが、近くに居たベルに青い表情のまま笑いかけ、ミリアの横を指さした。

戻れ、と言外に告げるとレーネは頬を叩いて立ち上がる。

「ごほっ、げほっ……ぜえ、死ぬかと思った」

自らの手で締め上げた事で首に付いた痛々しい跡の痕跡がありながら、ついさつき本当に死にかけてたというのに即座に普段通りとも呼べる態度に戻るレーネの姿に、アマゾネス達が恐ろしいものを見た様に引いた。

「……レーネ、お前は歓楽街の警戒に当たれ」

「はあ〜い」

痛めつけられた本人が気にした様子も無い事に、ベルも信じられないといった視線を向け、ミリアは目を細めてレーネの首に付いた跡を見ていた。

同情とも、畏怖ともつかない視線に晒されていたレーネは、片手をぴよんつと可愛らしく上げるとイシユタルを見上げて笑みを浮かべた。

「【魔銃使い】を捕まえてきたご褒美が欲しいなあ〜」

瞬間、イシユタルが絶対零度の如き空気を纏い、レーネを睨んだ。

「何?..」

陽気な声で、場の空気を凍り付かせるような台詞を放ったレーネに対し、アマゾネス達は今度こそ死んだな、と化け物を見る目を向ける。

フリユネですら『恐ろしいもの』を見る様な視線を向ける中、アイシャだけが目を細めてレーネの考えを見透かさんとし——理解できない、と首を横に振った。

「褒美だど?..」

「うんうん、そのエルフの男の子、私の頂戴？」

レーネが指差したのは、獣人の従者が抱えている意識の無いエリウッド。

人質として確保されている彼を寄越せと、そう言った瞬間、フリユネの大喝が放たれる。

「ふざけるんじゃないよー！」

「ふざけてないよおー、ぶーぶー」

ふざけている様な態度で巨女の大喝を受け流し、イシユタルに視線を向けると、レーネは笑って口を開く。

「他の子が勝手にそのエルフ君を摘まみ食いしてたけど、私は摘まみ食いしなかったよ？ で、最近はいシユタル様の命令で忙しくてからつきだし、我慢の限界なんだよねえ」

それに、死ぬなら満足して死にたい。そう告げてレーネが強請る。

イシユタルは不愉快そうに眉を顰め、渋々といった様子で頷いた。

「良いだろう。そのエルフはくれてやる」

「やったぜー！」

その場で跳ねて喜びを表現し、レーネは獣人の従者からエリウッドを受け取る。

即座に身を翻して割れた窓から外に飛び出して行こうとする彼女を、イシユタルが引き留めた。

「待て」

「……えっと、私これから帰ってこの子に葉飲ませなきゃなんだよ？

ちゃんと警戒はするから、元気になったこの子と色々したいんだけどなあ」

エリウッドが何をされるのか想像し、ベルが僅かに青褪める。ミリアはレーネの頭の回転が想像以上に早かった事に感心した様に小さく吐息を零す。

アイシヤは何か企んでいるなと感じつつも、それを指摘する事無く黙り込み。フリユネはそんなひよろいエルフでは楽しめないだろうが、レーネにはお似合いだと嘲笑する。

イシユタルはほんの少し考え込むと、徐にレーネの腰のポーチを指

さした。

「それは何が入っている」

「んー？ 青い閃光弾だけど？」

渋る事も無く、腰のポーチから取り出した三つの閃光弾を指し示すレーネ。イシユタルはそれを見ると目を細め、口元に笑みを浮かべた。

「アイシヤ、フリユネ、レーネの閃光弾を受け取れ」

「えっ？」

困惑気味にレーネが顔を引き攣らせる中、命令通りにアイシヤとフリユネがレーネの手から奪い去っていく。何を命じる気だと身構える中、イシユタルは告げた。

「その青い閃光弾が打ち上げられた場合、一つ毎に人質を一人殺せ」

「えっ!？」

驚愕して言葉を失うレーネ、ベルも目を見開き、ミリアが舌打ちを零した。

成り行きを見守る様にしていたミリアは、ここにきて作戦の雲行きが怪しくなったことに気付く。

青い閃光弾が打ち上げられたら殺せ、とレーネが命じられた以上。彼女は『青い閃光弾』を合図として人質を確実に殺そうとするだろう。

レーネ・キュリオはイシユタルの命令を拒めない。それが例え『自害しろ』という命令であったとしても、彼女は拒む様な動作を挟む事無く己の首を絞め上げ自殺を凶った。

目の前で行われたそれを見る限り、嘘ではない。

だが、それには一つ欠点があった。欠点、それはイシユタルが直接命じる必要がある事だ。

レーネ曰く、イシユタルは絶対に自分を儀式場には近づかせない。腹に色々抱え持つレーネを、重要な場所には近づかせないのは想像に易い。だからこそ、重要ではあっても、時間切れになれば不要になる人質の傍に配置されるだろう。

当然、イシユタルの傍に居る訳がない。だからこそ、絶好の機会となりえる筈だった。

直接の命令は、逆らえない。だが、直接命令されなければ抵抗は出来る。

人質を逃がすな、と命じられている以上、逃がす事は出来ない。だが、人質が逃げない限りはレーネは人質に一切手を出す気は無い。故に、レーネの元に人質が居る間は安全だ。

イシユタルの命令が無い限り——その前提が覆る。

誰かが青い閃光弾を上げた瞬間、レーネは命令を実行してしまう。命令伝達速度が遅い事を利用して、レーネとミリアの作戦が瓦解した。

「ううー、わかったよ。はあ……やだなあ」

不承不承といった様子で頷き、先までの元気を失って撃沈した様子のレーネが窓の淵に足をかけ、広間の中央で呆然としている二人に微笑んだ。

「じゃあね」

元気で、と呟くと同時に、レーネ・キュリオは三十階の高さから身を投げた。

「お前達全員、『ミリア・ノースリス』を連れて『殺生石』の儀式に向かえ。今度こそ必ず成功させろ。失敗は許さん。それと、ミリア・ノースリスが暴れた場合は青の閃光弾を上げろ」

刃向かう事を許さない神意を含む命令に、戦闘娼婦達^{バーベラ}は怯んだ様に一斉に動き出す。

流れに沿い、アイシャが数人のアマゾネスにミリアを連れさせて歩み出すのをベルが止めようとし、イシユタルの言葉に身を強張らせる。

「ベル・クラネル。当たり前だが、逆らうならば青の閃光弾を打ち上げるぞ？」

一つ打ち上げられるたびに、人質が一人殺される。

レーネは『死ぬ』と命じられたとしても即座に実行しようとした。故に、『殺せ』と言う命令も必ず実行する事が想像に易い。

それはつまり、ベルもミリアも、どちらも抵抗する事を完全に封じられた事を意味する。

「ミリアっ」

「……ベル、チャンスはあるはずよ」

腕を掴まれ、連れて行かれるミリアを、ベルはただ歯を食い縛って見送る事しか出来ない。

フリユネがこれ見よがしに大きな舌打ちをして去るのを最後に、アマゾネス達の完全撤退が完了する。

ただ黙ってそれを見ていたベルは、静かにイシユタルに向き直った。

青年従者を傍に控えさせ、獣人従者がベルを逃がさぬ様に入口側に立つ。

三対一、神は戦力に数えられない為、実際には二対一。しかし、ベルは前後に立つ従者の戦闘力がどれほどのものか知らない。加えて、下手に抵抗すれば閃光弾による合図で人質の命が危ぶまれる。

危機的状况に立たされ、ベルは拳を強く握り締めた。

「よく来たな、女神の眷属よ。囹とはいえ単身で乗り込むとは、思った以上に気概がある——だが、判断を誤ったな。全員で逃げていれば、まだ勝ちの目はあったモノを」

ベルの蛮勇に評価を下し、全てを見透かす様な瞳を細めてイシユタルは問う。

「ここに未練を引き摺る娼婦でも居たか？」

行き過ぎた『美』を持つ女神を前にし、ベルは静かに床に視線を落として歯を食い縛る。

『古代』の遺跡、聖塔に酷似している別館。

『女主の神娼殿』の宮殿の裏手に隣接する様に建てられた別館と、宮殿を繋ぐ空中廊下を歩く春姫は、夜空に浮かぶ星々と、遠目には既に満ちている様に見える黄金の月を見ていた。

「急げっ、春姫！」

「はいっ」

護衛として付けられていた三人の戦闘娼婦に急かされ、春姫は歩み

出す。

地上四十階層に設けられた空中廊下は、屋根は無く、胸壁があるのみで強い風が吹き付けている。

春姫が空中廊下の繋がる先に視線を向ければ、別館屋上に広がる荘厳な空中庭園が見えた。中心部に設けられた月ルナティックライト石によって作り上げられた儀式場は、既に青白い光を放ち、まるで春姫を手招きしているかのような錯覚に陥らせる。

表情を消し、俯いた春姫は黙って進む。

自らが早く其処に辿り付けば、誰かが救われるとでも言う様に足を早める。

「おかしなやつ……」

少女を急かしていた戦闘娼婦バーベラ達は、彼女を不気味そうに見ていた。破滅を前にしても何も言いださない。ともすれば全てを諦めている少女の姿に、彼女達はあるアマゾネスの姿を重ね、首を横に振った。

「流石にレーネ程じゃないか」

「だね」

女神に『死ね』と命じられても動じない、理解不可能な精神性を持つ元別派閥に所属していた女戦士。

イシユタルの魅了でぐちゃぐちゃにされてもなお、『ウエヌス様を敬愛してる』と凝りもせず主神に告げて『罰』を受ける彼女に比べれば、目の前の全てを諦めた少女は苛立ちの対象でしかない。

春姫を先頭に歩む彼女達は、警戒心も無く雑談に興じる。

「レーネの奴、何を考えてるんだか」
「まだ復讐でもする気なんじゃない？ 確か母親をフリユネに殺されてたし」

「あー、イシユタル様の傍に居る獣人の従者、レーネの派閥裏切ってイシユタル様にすり寄ってたよね。ソイツも復讐対象じゃない？」

一本道で見晴らしも良く、潜む場所なんて存在しない空中廊下。故に、警戒心は緩く、橋の下に張り付き潜んでいた少女の存在に気付く事は無かった。

「この儀式終わったたらあの気持ち悪い奴も死ぬんだろ？」

「みただね、春姫ともども、見てると苛々するからさつきと——
なっ!？」

まず一人。橋の下から伸びた鎖分銅が絡み付き、一人が空中廊下から引き落とされる。

瞬時に残る二人が橋の下を覗き込んで警戒した時だった。静かにその背後に降り立ったミコトが、片腕を掴んで華麗な投げ技を披露し、反対側に投げ落とした。

「お、お前っ!？」

残る一人が長剣を構えると同時、ミコトは対応すべく紅刀を抜こうとし——風の流れに気付いて身を伏せる。

横殴りの激しい強風が吹き抜ける。ようやく異変に気付いた春姫がよろめく程の、目の前のミコトに気を取られていた戦闘娼婦が胸壁に寄りかかってしまう程の。

先んじてその強風に対処していたミコトが、即座に立ち上がった残る一人の顎を蹴り抜く。対応が遅れた最後の一人が空中廊下から落ちていくのを見送り、ミコトは春姫に駆け寄り、腕を掴んだ。

「春姫殿、ようやく見つけました!」

「どうして、此処に……」

「貴女を連れ出す為に」

啞然とする少女の問いに、間髪入れずに答え、春姫の腕を引いて連れて行くこうとするミコト。

「ここから逃げましょう。春姫殿、さあ早く」

下の階より響いていたベルの抵抗の音が途絶え、更に加えて外壁に張り付いている間に一人の女戦士アマゾンネスが金髪の小人族と、エルフの男を抱えて三十階の広間に入っていったのを見ていたミコトは、既に時間が無い事を理解していた。

故に、早く彼女を此処から連れ出さねばと手を引き——春姫がその場に踏みとどまった事でつんのめって止まった。

「春姫殿?」

「ミコト様……私わたくしのことはいいですから、早く一人でお逃げください」

今度は、ミコトが啞然とする番だった。春姫はミコトの手を優しく振り払う。

「何故きってしまったのですか、ミコト様……クラネル様も。私が貴女方を脅かすと、わかったのではなかったのですか？」

「それは違う！」

数時間前、路地裏で春姫の前から逃げた理由は、決してそのような理由ではない。

仲間の一人が、ミリア・ノースリスと言う少女が、己の身を鑑みる事無く行動を起こす事を想つての躊躇い。決して春姫を重荷に感じた訳ではない、とミコトが告げようとし——弾丸に射抜かれた。

「——えっ」

「ぐっ!？」

側頭部を僅かに弾丸が掠め、遅れてミコトにとって聞き覚えのある甲高い銃声の音が響く。

その魔法は、彼女の良く知る人物が習得していたソレであり、それが自身を害する等、ミコトにはとてもではないが想像できなかった。

続く銃声が、ミコトの肩を掠める。僅かに掠った事で着物の肩を血せ染めながら、ミコトは慌てて胸壁に身を隠す。

呆然としていた春姫が、身を屈めたミコトに駆け寄ろうとし、胸壁に弾丸が着弾した音に怯んで下がってしまう。

『——居たぞっ! 捕まえろお!!』

一本道を駆けてくる戦闘娼婦達。

ミコトが驚愕しながらも銃弾が飛来する方向に視線を向け——
—宮殿の窓から、空中廊下に狙いを定めている小人族の姿に、信じられないと絶句する。

瞬間、小人族の指先に灯る魔法円が輝き、ミコトの傍の胸壁に魔弾が着弾し、破片を散らす。

まさかの裏切りにミコトがどうするか迷い、春姫の手を掴もうとし——
伸ばされた手をミリアが放つ魔弾が撃ち抜く。

「ぐっ!?! ミリア殿、どうしてっ!?!」

「ミコト様っ」

明らかな異常事態。最も信頼できるであろう仲間からの狙撃を喰らい、ミコトは咄嗟に空中廊下から身を投げ、撤退せざるを得ない状況に追い込まれた。

落ちていくミコトに対し、ミアが無数の魔弾を放つも、どれも掠れもせずミコトの傍を空気を引き裂く音を響かせ飛んでいくのみ。

「——っ！」

本気でミコトを殺す気なら、既に眉間を撃ち抜かれ死んでいる事を知っていた彼女は、落ちるさ中にミアの傍に「男殺し」アンドロクトノスが控えているのを見て目を見開く。

「何が起きているのかわかりませんが——これはっ!？」

ミアの裏切り。しかし、何か事情があるのだらうと歯を食い縛り、ミコトは途中で鎖分銅を使う事でミアの射線から逃れ、建物の影から儀式場を見上げ、悔し気に袋から一発の閃光弾を取り出す。

「ベル殿……っ!!」

——赤い光玉がひゆるひゆると上空に昇って行った。

「で、これで満足?」

赤い閃光弾が昇っていくのを見て、ミアは魔法を解いて後ろの巨女に問いかけた。

「ちゃんと殺しなよお? それとも、この閃光弾を上げて欲しいのかあ?」

青の閃光弾を手に、ミアに脅しをかけてミコトを撃退させたフリユネは、嘲笑を浮かべながら煽る様に顔を近づける。

「やめろ。春姫はその通り確保できたんだ。それにこれ以上煽るな」

「うるさいんだよお。アイシャはレーネの奴も庇った上に、この小娘まで庇うつもりかあ? やはり裏切る積りじゃあないだらうねえ?」

「はあ?」

眉間に青筋を浮かべたアイシャが、舌打ちを零してミアの背を見た。

丁度窓の外で春姫の護衛につけた戦闘娼婦パーベラを見つけ、空中廊下を見

てみれば、其処には鼠の一匹が春姫を相手に詰め寄っているのが丁度見えたのだ。

『魔剣』で撃退しようにも、距離が遠すぎて春姫に当たりかねない。故に『魔剣』を持つアマゾネスが何人か駆け上がっていきさ中、フリユネが良い事を思いついた、と発言した。

此処からミリアに『狙撃』させれば良い、とフリユネが言い出し、ミリアが反抗するも人質を盾にされ、彼女は直ぐに折れた。

「お前なら一発で殺せただろお、なんで殺さなかつたア？」

「……………」

「だんまりかあ」

狙撃で殺せ、と命じられたにも関わらず。何発撃つても当たる気配が無く、落ちていく鼠を撃たせても一発も命中が無い。それに怒りを覚えたフリユネが閃光弾を上げようとするのを、アイシヤは止めていた。

「【魔銃使い】に不必要な拷問しやがったフリユネの所為だろ、確かに最初の一発は良い線いってたんだ。いい加減にしろ」

アイシヤは憎悪で濁り切ったミリアの目を見て、僅かに目を細めて空中廊下で確保されて連れて行かれる春姫に視線を向けた。

「…………ほら、さっさと【魔銃使い】を連れていくよ」

もし、人質という盾を失った時。この小人がどんな暴れ方をするのかを想像し、赤い閃光弾を見たアイシヤは更に深い溜息を零した。

「アイシヤ、どうしたの？」

「いや…………赤の閃光弾はレーネの呼び戻しの合図だったはずだ」

妹分のアマゾネスの問いに答え、アイシヤは静かにレーネに同情した。

きつとあの赤い閃光弾を見て、レーネはすつ飛ぶ様にイシユタルの元へ訪れるのだろうか。ご機嫌斜めの女神の前にもう一度姿を現した結果、彼女がどうなるのかを想像し、天を仰ぐ。

一応は貴重な戦力。しかし、とてつもなく機嫌の悪い主神の前はこのこと出て行ったレーネがどうなるのか。想像は安い。

「ああ、くそ…………せつかく助けてやったのに。レーネの奴、死んだな」

先の苦勞が水の泡になった事を知って愚痴を零し、直ぐに自嘲を零した。

「ま、あそこで死ぬか、そのあと死ぬかの違いか」

どうあれ、「イシユタル・ファミリア」に明日は来ないのだから。

第一七二話

金銀が使われた冠^{サークル}、耳飾り、首飾り等、装飾品と僅かな布地が褐色の肌を隠してはいるが、胸や臍、腰や腿など大部分が露出している。編み込まれた黒髪は深い色合いから紫にも見え、妖艶な雰囲気を作り出している。

身体の何処か一部でも見てしまえば『魅了』されてしまうのではないかと、理性が警鐘を鳴らし続ける程の美貌を前に、ベルは頬を熱くしながらも齒を食い縛り身構える。

「さて、こうして会うのは二度目になるか。最初に目にした時はあの女神^{おんな}の趣味を疑ったものだが……なるほど、撤回しよう。いい面構えをしている」

思考を蝕む程の美貌を前にベルは無意識に喉が鳴る。その様子を女神は面白そうに眺め、笑った。

自らの意思に反して激しく脈動を繰り返す心臓の鼓動を感じながら、ベルは声を絞り出した。

「……何で、ダンジョンで僕たちを襲ったんですか」

その答えは既に知っている。しかし時間稼ぎの意味も兼ねて問いかけると、ベルの思うよりあっさり女神は答えた。

「ベル・クラネル。戦争遊戯^{ウォーゲーム}で名の知れたお前には、私もそれなりに興味を抱いていた……後は気に食わない女神^{おんな}への当てつけさ」

まるで唾を付ける様に、ベルに紫煙を吐き掛けた彼女は続ける。

「ミリア・ノースリスの方はずっと前からだ。あの女神^{おんな}がわざわざ二つ名を付けてやるほどに気に入っているらしい小人。それだけなら手を出す気なんぞなかったさ——だが、戦争遊戯^{ウォーゲーム}で見せた『魂の変質』と『強力無比な魔法』。あれを見て、気が変わった」

残忍さと嗜虐心を混ぜ込んだ様な表情がその美貌を歪め、酷く歪でいて恐怖を駆り立てる程の美しさがベルの動揺を誘う。

「その魂を封じ強大無比な魔法の発動装置として道具にする。当然、使うならば砕く必要があるわけだが————気に食わない女神^{おんな}の目の前で殺生石^{たましい}を砕いてやったら、どんな反応が見られるだろうなあ

？」

お気に入りの魂を砕かれた挙句、その持つ魔法がフレイヤの派閥を喰い散らかす。想像するだけで体の芯が熱くなると、女神は体を震わせた。

言葉の意味を噛み砕き、理解するより前に女神は不敵な笑みを浮かべて告げる。

「喜べ。お前を『魅了』して、私のモノにしてやる」

凄む事で更に増した色香に加え、その宣言に動揺したベルが一步分後ずさる。

女神の宣言に恐怖と困惑を感じながらも、今が交渉の機会チャンスだと自身に言い聞かせる。

二人の従者に見張られながら、間合いを残して『美の神』との正対を続ける。

「……聞かせて、ください」

「ん？」

「どうして、春姫さんを犠牲にするんですか？」

家族を犠牲にしようとしている事、それは到底許せる行為ではない。しかし同時にイシユタルは自身の眷属である春姫を犠牲にしようとしている。それはベルには到底理解できない行為だった。

腹を括つての質問に、女神は大声で笑った。

「ははははっ!! この私を前にして他の女の話が出るのか、貴様!」

「こっつ、答えてください!」

煙管を咥えて笑うイシユタルに、ベルは声を荒げた。

肩を揺らす女神は益々気に入ったと、機嫌良く話始める。

歓楽街に売り払われた、春姫はそう語った。しかし女神が言うには、物好きの豪商達の慰み者になりかけていた所を、自分が無理矢理買い取ったのだという。

その事実にも、ベルがうろたえる。

そんな彼の様子を楽し気に見やりながら、旨そうに煙管を吸った女神はベルに答えを告げた。

「私が拾った命だ……親のために子は尽くすものだろう?」

「そんな……!?!」

「それになあ、ベル・クラネル？ 私は春姫を殺そう等と思っただけだ。あの女神を倒せば、あいつの魂は返してやる。少しの間借りるだけだ」

ミリアはどうなるんだ!?! とベルは心の中で叫んだ。

目の前の女神の語りから、きつとミリアの魂は返す事無く碎き壊すのだと臆げに理解して身を震わせながら必死に堪える。

ミリアだけではない、春姫の魂を封じた『殺生石』の欠片が、「フレイヤ・ファミア」と言う最強の派閥との戦闘のさ中に失われぬ保証など、どこにもない。

全てが終わった後、複雑な事情を抱えながらも優しいベルの家族も、優しい微笑みを浮かべた春姫も、どちらもきつともう帰ってこない。

湧き上がる激情を押し留め、ベルはただイシュタルを睨み付けた。

「言っておくが……春姫は私が手を下さずとも、他の誰かの手によって同じ運命を辿る。ミリア・ノースリスの方も同様だろう……あれら秘める『力』はそういうモノだ」

「……!」

『恩恵』を与え、あの娘の「ステイタス」を拝んだ時の私の気持ち……わかるか?」

女神の言葉に僅かな熱が帯びる。その瞳の奥に燦る何かを感じながらも、ベルはただ歯を食い縛っていた。

「震えたぞ、この『力』をもつてすればあの気に食わない女神おんなを引きずり下ろすのも可能だ!?!」

イシュタルが執拗に口にする『気に食わない女神』——都市最強派閥の美神の事だ。

春姫の『力』は彼の派閥を倒せる程に強力で、万人を引き付けてしまふ代物だともいうのか。それは、ミリアも同様の『力』を持つ事を意味している。

あの春姫は神の予想を裏切る『可能性』を持っていたと、女神は燦る炎を燃やし語る。

「春姫は私の切札だ！ フレイヤを奈落に突き落としてやる!!」

奥底に燻る炎の正体が、嫉妬と憎悪に基づく真つ黒な代物だと遅れて気付いたベルが、声を飛ばす。

「どうしてそこまで『フレイヤ・ファミリア』を……!?!」

「どうして、だど?! 全てが気に食わんからだ!?!」

眦を裂き、怒りの形相を浮かべた女神イシユタルが吠える様に、嫉妬を爆発させる。

「私を差し置いて男どもはあの女を最も美しいと称えやがる、ふざけるな!?! あのメス豚のどこが私の美貌を上回る!?! 男どもの目は節穴か!?!」

『下界の人間』では理解しきれぬ超越存在デウスエアの激情。それを目の当たりにしたベルが仰け反る。二人の従者すらもたじろぐ程のそれ。

「……で、でもっ!?! それに春姫さんを利用していいわけが……ミリアなんか少しも関係無いじゃないですか……!?!」

意思に反して屈しそうになる膝をとどめながら、ベルは訴える。

それは余りにも身勝手だという少年に、女神は激情を納めて微笑みを浮かべて応えた。

「失敬な。私が血も涙も無い神だったら、春姫を『魅了』しつくしてとうに人形にしているさ。私の命令だけを聞く、忠実な女狐にね」

「それは……」

「私は私なりの慈悲で、あの哀れな娘を可愛がってきてやったぞ?」
掌の上で煙管を回すその姿に、ベルは問いを続ける。

「じゃあミリアは、ミリアはどうして!?!」

「……はあ——あの女神おんなに気に入られている。それ以外に理由が必要か?」

そも、私の前に立つお前もそうだろう。と女神イシユタルは首を傾げた。

その尊厳を無視した発言に、相手が神であるという事を忘れ、ベルは感情を爆発させた。

「そんなの、そんなのおかしい……!?! ただ気に入られただけで、殺されなくちゃいけないだなんて!?!」

「何をそんなに荒ぶる——そも、地上の人間こどもは神に目を付けられ

ない事を祈りながら過ごすものだろうか？　ただ運が悪かっただけでは無いかな」

津波、洪水、地震——天災に遭い命を落とすのと変わりない。神が関わる『神災』に巻き込まれた不幸を嘆くならまだしも、神に盾突くなど愚かだ。と女神は無知な子供の癩癩と切り捨てる。

神と人の価値観の相違。

『下界の人間』の意思も尊厳も、命すらも軽視した　超越存在である女神の思考に、ベルは途方もない衝撃を受けた。

『下界の人間』であるベルと、目の前の超越存在であるイシユタルには埋められない差がある。それが思考の差に繋がっている。

——目の前の女神とは理解し合えない。

「……っ!!　だったらー！　だったらなんでレーネさんにあんな事をツ!?」

家族が犠牲となる理由は、『神災』に巻き込まれたもの。

春姫が犠牲となる理由は、女神の『神意』によるもの。

——では、レーネ・キュリオと言う女戦士への行き過ぎた罰は何なのか。

死すら命じられ、女神の傀儡に堕とされている理由。

時間を稼ぐといった思考から外れ、ただ理由を問うたベルに、女神はせせら笑った。

「言っただろう。アレは私の眷属だが、アレはそう思っていない。未だにウエヌスを崇拜する異端者だ。異端の者には相応の扱いというものがある。ベル・クラネル。お前とてそれぐらいは理解しているだろう?」

交渉にすらならない。神の思考を微塵も揺らす事が出来ない。

呆然とする少年に対し、イシユタルは唇に添えていた煙管を離した。

「子供の我儘と、神の真理ではいつまで経っても平行線だ。もとよりに、付き合う気は無い」

目を細めたイシユタルは、まるで蛇を思わせる様な瞳でベルを真正面から捕え——身に着けていた衣類を脱ぎ始めた。

「ほああっ!?!」

それまでの張り詰めた空気が途切れ、艶めかしい布が擦れる音が響く。

一瞬で茹で上がった様に顔を赤くしたベルが奇声を上げる。

「えっ、えっ、ええええっ!?!」

「うぶなやつめ。主神は何も教えていないのか……って、ああ、あいつは処女神だったな」

「なななななっ、なんで服をつ!?!」

イシユタル 女神を直視しない様にベルが咄嗟に目を閉じて顔を伏せる。

「目を開ける。私を見る」

「ででででっ、出来ませんんっ!?!」

「人質がどうなっても良いのだな?」

「——ツツツ!?!」

イシユタル 女神の問いかけにベルが顔を上げると、僅かな衣料を脱ぎ捨てて全裸となった女神の姿が飛び込んでくる。そのすぐ傍では、青年従者が無言で『青の閃光弾』を手にしていた。

意図に反する事をするとうなるのか、それを察したベルは顔を赤くし、青くし、著しく取り乱す。

「言っただろう。私のモノにしてやると」

『美の神』である美しき、『性の神』としての色香。『下界の人間』には過ぎた刺激が、瑞々しい褐色の肌から放たれる。

全身という全身が燃え上がる様に赤く染まるベルに、イシユタルは艶然と微笑む。

「骨の髄が溶けるまで——『魅了』してやる」

そして、身も心も全てを奪い尽くしてやると嗜虐的な色をその瞳に宿した。

真っ赤から真っ青になったベルに、女神は緩やかに手招きをした。

「——ハッ」

どれほど厳しい修行を積み、悟りを開いた者であったとしても、この女神の誘いは拒絶できないだろう。

脳髓を溶かし、理性を蒸発させ、雄を獣に変貌させる『魅了』が込

められたこの誘い。現にベルの背後に居た獣人従者は鼻息荒く目を充血させて女神を見つめている。

イシユタルの傍に立つタンムズですら僅かに身動きする程の、壮絶な『魅了』。

それを前にしたベルは、ほんの少し躊躇う。しかし、タンムズが手にしている『青い閃光弾』を見て諦めた様にイシユタルへと歩み寄った。

一步、また一步と近づく度に咽返る程の色香が漂う事にベルが奥歯を噛み締める。

手を伸ばせば届く距離にまでベルが辿り着く頃には、ベルの顔は赤く染まっていた。

「……………どうした、来ないのか？ 胸でも尻でも、今なら好きにできるぞ」

自ら貪るのではなく、ベルの方から貪らせる事で女神フレイヤに対して優越感を抱こうとしていたイシユタルは己の豊満な胸をベルに差し向け、その瞳を覗き込んで——動きを止めた。

「待て」

今まさに理性が蒸発し、目の前の子供が獣欲のままに自らを貪る雄になると確信していたイシユタルは、けれども少年の瞳に宿る葛藤が自身の想像するものと違う事に気付いてしまった。

理性を繋ぎ止めようとしているのではない。獣欲を抑え込もうとしているのでもない。咽返る色香に脳髓まで溶かされている者の反応ではない。

目の前の少年は、ベル・クラネルの視線はタンムズが持つ『青い閃光弾』に注がれていた。

「————」

女神の思考が完全に停止する。

普通であれば、どんな者もイシユタルが魅惑した時点で既に『魅了』されているはずなのだ。

『美の神』の前では、美貌が、香りが、吐息が、その全てが五感を刺激してあつという間に万人を虜にしてしまう。本来ならば体を重ね

るまでも無く、イシュタルがその気になった時点で終わりだ。

美神を前にしてただの『下界の人間』風情が抵抗出来る筈無い。

しかし、目の前の少年は女神ではなく、その脳裏に人質の姿を思い浮かべる程の余裕がある。獣欲のままに美神を貪る雄に堕ちていない。

「何故コイツは『魅了』されない!?!」

ベルからすれば突然の女神の憤激。タンムズと獣人従者は女神の怒気に当てられ怯む。

美神の『魅了』はモンスターアベリリテイの『毒』や『麻痺』といった状態異常とは一線を画す。『耐異常』を持っていたとて防げる代物ではない。

美の神としての矜持を深く傷つける出来事に、イシュタルは目の前の少年をキツと睨み付けた。

「服を脱げ」

「ええっ」

「服を脱いで背中を見せろ!!」

ぎよつとした表情を浮かべたベルは、目の前の美神ではなく見張りとして立っているタンムズの持つ『青い閃光弾』を見やっつてから身を強張らせながら服を脱ぎ始める。

ベルが行ったその一連の動作こそ、美神ではなく人質を気にするその仕草こそが女神の怒りを買う行為だと理解していない。

イシュタルに背を向けたベルが、目の前から裸体が消えた事に安堵した様に吐息を零し——イシュタルの表情が憤怒に染まる。もはや美神ではなく鬼神と言っても差し支えない程の表情となった女神は、けれどもそれらを堪えてタンムズに命じた。

『開錠薬』ステイタスシーフを寄越せー!

「はっ」

素早くベルの背中に『鍵』ロックにて隠されている「ステイタス」を暴く為の非合法の道具を使用し、手順を踏んで開錠ピッキングを行う。

何をされているのかわからずとも、何か良からぬ事をされているとベルは察するが、抵抗した際に払う代償の事を考え、大人しく拳を握り耐える。

まだかまだかと、待ちきれない様子で開錠ピッキングを待つイシユタルは、過去にあった似た出来事を思い出していた。

——美の神だけが集まってお茶会しましょう。

そんな招待状を送ってきたのは天界でも有名な美を司る神、ウエヌス。

下界に下りてきて暫く、フレイヤの急成長に僅かながらの嫉妬心を抱き始めていた頃の話だ。

集まったのは『美神』だけ。近い未来、イシユタルが滅ぼし天界へと送還した女神達が一同に会していた。

「——でねえ、レーネちゃんが可愛くてねえ。手をぎゅって、ぎゅーってしてくれてね」

「あら、ウエヌスの所の団長に出来た子だったかしら」

「そうそう、凄く可愛いんだよお」

庭園に設けられた会場。

その中央で主催者であるウエヌスが理性を溶かした様に『レーネちゃんが可愛い』と、団長だった女戦士アマソネスが産み落とした子供の話を繰り返していた。

生まれたばかりの赤ん坊に違い等無いだろうに、とイシユタルは内心で吐き捨て、ウエヌスの話を聞いている女神を見ていた。

ウエヌスの傍で話し込んでいるのは、銀色の髪を揺らす美神フレイヤ。彼女はウエヌスの話を聞いては相槌を打ち、時折質問を投げかけて、この茶会を楽しんでいる様子が伺える。

「やっぱ一番可愛いのはレーネちゃんだよね！」

「あら、私の所のミアも負けてないわ」

「わたちの眷属こともの方が可愛いに決まっておろう？」

美神達が自身の眷属自慢を始めた頃、フレイヤの様子の確認を目的に参加していたイシユタルにもその矛先が向けられる。

「イシユタルの所はどう？ 確かフリユネって子がいなかったっけ？

もしくはアイシャちゃん？」

「……何を馬鹿な事を——私が一番美しいに決まっているだろう」

すり寄ってきたウエヌスに、『下界の人間』如きが己の美貌に敵う筈もないと吐き捨て、拒絶する様に追い払う。

ウエヌスやフレイヤ、他の美神達がほんの僅かに表情を険しくしてイシユタルから距離をとり、再度誰の眷属ことどもが可愛いかと言う話題に華を咲かせる。

——次に開かれた茶会に、イシユタルは呼ばれなかった。

「何故、私を呼ばなかった!？」

「ええ、だって美神が集まる中で『私が一番美しい』なんて言ったら喧嘩になってしまうのよ?」

イシユタルって空気読めないでしょう? だから呼ばなかったのと、ウエヌスは隠す事無く告げた。

それはもう包み隠す事もせず、率直に、ド直球に、もはや取り繕うとかそんなモノではない程にあつさり、女神イシユタルの言動を批難した。

彼女はその言葉に大いに苛立たせ、「ウエヌス・ファミリア」との敵対を確定的なモノへとかえた。

ウエヌスが溺愛する眷属達。その内の一人の獣人の少年を魅了した。

それはイシユタル派と他の女神達の対立が激化し始めた頃の話だ。

「それで、どんな気分だ? なあ、ウエヌス?」

「ウエヌス・ファミリア」の本拠。その女神の寝所にて、イシユタルはウエヌスを押し倒していた。

首に手をかけ、馬乗りになり締めあげる。苦し気に藻掻く彼女の表情を見ながら、イシユタルは自らに尻尾を振るウエヌスの眷属だった獣人の少年に長し目を送る。

その横でまだ終わらないのか、と詰まらなそうにフリユネが歯ぎしりをしている。外ではアイシャが戦闘娼婦バレーベラを率いて包囲網を敷いている事だろう。

「ほら見た事か、貴様が溺愛したその眷属ことどもは私に尻尾を振るう。お前

が今まさに殺されそうになっているというのに、獣の様に私だけを見ている——お前の『魅了』が私に劣る証拠だ」

今まさに死にゆくウエヌスを嘲笑う。

自らが他の『美神』に勝っている証明を見せつけながら、イシユタルは体重をかけ彼女の首を折った。

致命傷を与えられた女神の肉体が死ぬまいと『神の力』^{アルカナム}を発動させる。

この下界で何より美しい光の輝きを放つ女神の屍を見下ろし、イシユタルは指を鳴らした。

下界の規則^{ルール}に抵触し、『下界』という名の遊戯盤^{ゲーム}に敗北した女神は、轟音と共に逆流する大瀑布の様な光の柱を生み出し、天界へと『送還』された。

己の勝利を噛み締め、無様な敗北を喫したウエヌスに対し哄笑を送っていると——寝所の扉が開かれる。

「ウエヌス様っ!？」

「なっ——イシユタルっ、フリユネまでっ!？」

【ウエヌス・ファミリア】を代表する親子。団長である母親と、その娘は恩恵の効果を失った体で、主神を殺したイシユタルを見つけた。

それを遮る様に、フリユネが前に出る。

「今までの借りを返す時が来たねえ」

「っ!？ レーネエツ、皆を逃がしなさいっ!？」

「お母さんっ、でもっ!？」

フリユネの姿を見た途端、母親の方はフリユネに飛び掛かり、娘に命令を下す。

恩恵が消え、ただの一般人程度の身体能力にまで落ちた彼女の抵抗等、あつてないようなものだ。即座にフリユネに捕まり——嗜虐的な笑みを浮かべたフリユネの手によって、拷問の様に手足を潰されていく。

呆然としていた娘の方は、歯を食い縛ると即座に部屋を出て行く。

下の階から、主神の死に動揺したウエヌスの眷属達が次々に戦闘娼婦^{パイベラ}の手にかかる悲鳴と怒号が広がる。

元ウエヌスの眷属達の鎮圧には十分も掛からなかった。

「殺してやるっ!! おまえ、絶対にイイイツ!!」

両腕と両足を押し折られ、芋虫の様に無様に転がるレーネ・キュリオを見下ろしていた。

フリユネが彼女の母親だった軀を人形の様に彼女の前に放り投げ、序にアイシヤを睨み付ける。

「なあにしてるんだア、アイシヤアツ!!」

「フリユネが別館を倒壊させた所為だ。あの所為で何人も戦闘員が巻き込まれて手数が足りなかったんだだろうが」

「巻き込まれた不細工共が悪いんじゃないかあ」

「仲間が何処に居るかぐらい把握しとけよヒキガエル!」

言い訳じゃない、事実だ、とイシュタルの背後で言い争いを続ける眷属達を一睨みして黙らせ、目の前に転がるレーネを見下ろし、イシュタルはゆっくりと彼女に歩み寄った。

「レーネ・キュリオだな。ウエヌスのお気に入りだったか」

「死ねツツ!! 死ねええっつ!!」

這いずってでも殺してやる。憎悪に染まり、あらん限りの絶叫を上げ続けるレーネに、イシュタルは呆れと感心を混ぜ込んだ表情を浮かべた。

天界へと送還した女神のお気に入り——己の『魅了』でコイツも奪ってやろう。天界からその様子を見たウエヌスがどんな表情を浮かべるのかを想像し、優越感に浸ったイシュタルは彼女を『魅了』しようとする行動を起こす。

行動を起こした、そう、『魅了』しようとした。

その日、イシュタルはその娘を『魅了』出来なかった。

ただ憎悪の限り叫び続ける彼女を『魅了』出来なかった。

感情が憎悪一色に染まっているから、目を改めれば完全に『魅了』出来る。そう自分に言い聞かせ、イシュタルはレーネ・キュリオを捕獲して連れ帰った。

一週間後、レーネ・キュリオは未だに『殺してやる』と叫び続けて

いた。

一ヶ月後、レーネ・キュリオは未だに『死ね』と叫び続けていた。三ヶ月後、レーネ・キュリオはようやく口を閉ざした。

半年間、フリユネの『拷問』とイシユタルの『魅了』を続けて、ようやくレーネは命令に逆らわなくなった。

一年かけて『魅了』し、生き残り復讐を誓う元ウエヌスの眷属達を殺す様に命令した。レーネは見事全員、一人残らず仕留めてきた。

あれから数年——未だに彼女は女神ウエヌスを崇拝している。

一分も掛からずに少年の背には、隠匿されているはずの【神聖文字】ヒエログリフが姿を現した。

同時に、タンムズを押し退けたイシユタルがベルの【ステイタス】に目を走らせる。

そして、言葉を失った。

「なっ——」

幸運や速攻魔法等、気になる点はいくつも散見される。

だが、その中で女神の視線を奪い、脳裏の全てを埋め尽くしたのは一つの情報。スキル

【憧憬一途】リアリス・フレゼ

成長速度に影響を与える未確認の『レアスキル』。

だが、それ以上にそのスキルから読み取れる少年の本質——正体。

【憧憬一途】リアリス・フレゼの副次効果——ベル・クラネルには『魅了』が効かない。

美の女神として、それだけは認められない。

それだけは許せない。それだけは駄目だ。

長い時間をかけ調教すれば、ベル・クラネルもまた、レーネ・キュリオの様に屈服するだろう。しかし、奪えない。その心を奪う事が出来ない。

その魂まで影響を与える美神の圧倒的支配力の効果を齎す筈の『魅

了』が通じない。

——イシュタルは美の女神として、己の『魅了』が通用しない存在が許せない。

「タンムズ、こいつを——」

殺せ、そう命じかけた所でイシュタルは踏み止まる。

この『想い』を向けられている対象は誰だ、と。

「……そうか、そういう事か——ミリア・ノースリスか」

「ひいひいひいっ!?!」

何が起きているのか理解できていないベルが、ゾクリとした悪寒と共に思わず振り返り、悲鳴を上げて腰を抜かす。傍にいたタンムズや、獣人従者は完全に凍り付き、目の前の美神を畏れる。

「おい、お前」

「はっ」

「今すぐミリア・ノースリスを使って儀式を実行しろ」

獣人従者に素早く指示を出すと、一瞬呆けて獣人が聞き返す。

「は……まだ時間ではありませんが」

「黙れっ、私は今すぐ実行しろと言ったんだ!!」

「っ!?! わっ、わかりました。即座に儀式の実行をサミラに命じてきますっ!!」

神がその全身全霊を向けて放つ嫉妬と憎悪。神の権能を『下界の人間』に踏み躪られたと感情の激発を起こしたイシュタルの大喝に、獣人従者が尻尾を丸めて逃げる様に儀式場に向かっていく。

それに驚いたベルがイシュタルに向き直り口を開こうとし——
—その目に射抜かれて体を強張らせた。

「ベル・クラネル。褒めてやる……お前で二人目だよ、私の『魅了』が効かない人間は……」

もはや人に向けるものではない圧を伴う視線。それだけで押し潰されそうな神威にベルの膝が折れる。

このままでは不味い、と抗おうにも両手両膝を突いて床に伏せない様に抵抗するので精一杯。

横に居るタンムズですら完全に硬直して動けない中、イシュタルは

壮絶な笑みを浮かべ、神の権能を、美の女神の矜持を踏み躪り穢した異端者に告げた。

「貴様の愛おしい女の魂を、貴様の前で砕いてくやる」

全身から血の気が引き、震えあがったベルがなんとか顔を上げて女神を見やる。

嫉妬、憎悪、更に憤怒、これでもかと壮絶で醜い感情の色を宿したイシュタルの表情は、吐き気を覚える程に美しかった。

打つ手無しか、このまま不完全な状態でミリアの儀式が実行されてしまうのか。そんな焦燥ですら女神の威圧の前に露と消え、意識が薄れ始める。

息をする事が出来ない。呼吸を忘れ、視界の端が黒ずんでいく。このまま、窒息死してしまうのではないかとベルが危惧し始めた所で――カランツと広間に何か投げ込まれた。

「何だ――」

耳を劈く甲高い爆発音。視界を埋め尽くす白色。

投げ込まれた閃光弾がイシュタルとタンムズ、そしてベルの視界を白く焼き尽くした。

ベルはイシュタルの威圧が消えて突然瞳の奥に釘を刺しこまれた様な激痛を覚えて目を押さえて蹲る。キーンと甲高い耳鳴りによつて聴覚も失つて何が起きているのかわからない。

「――ツツ!!」

「――ツ!!」

視覚と聴覚が失われているベルは、ふと腕を掴まれたのに気付いて慌てて振り払おうとするも、強引に抱き上げられてしまう。

担がれる様に運ばれる中、何が起きているのかわからずに恐慌パニックを起こして手足を振り乱す中、徐々に戻る視界に廊下の風景を捕える。

「な、何が起きて……」

「――ツ! ―――ツ!!」

「――ツ!!」

そこでベルは気付いた。

自身を担いで走る女戦士アマゾンネスの存在に。

そんな彼女の周りを囲んで走っているのは、戦闘娼婦らしき女達。下手に暴れると人質に危害が及ぶかもしれないと、暴れるのを止め成り行きに身を任せる他無いとベルが歯を食い縛る。

廊下を駆け抜ける彼女たちの前に、戦闘娼婦が現れる。剣や槍、武装をベルに向けて何かを叫んでいた。

このまま殺されるのかとベルが担がれたまま歯噛みしていると――突然、仲間割れが起きた。

「えっ!?!」

ベルを担ぐアマゾネスの戦闘娼婦が狙い、戦闘娼婦が斬りかかってくるのを、周囲の戦闘娼婦が防ぎ、斬り返す。

瞬く間に乱戦になった戦闘娼婦達に呆気に取られる中、担いでいた女は近くの部屋の扉を蹴破って侵入し、ベルの体を放り投げた。

「――え――? ――ネル、聞こえてるっ!?!」

「つて、え? あ、貴方たちはっ!?!」

「儀式を妨害してっ! 今すぐっ!?!」

少年の目の前に居るのは、間違いなく「イシユタル・ファミリア」の眷属である戦闘娼婦だ。しかし、突然の仲間割れに加え、目の前の女性は『儀式を妨害して』と叫んでくる。

状況を理解できないベルに対し、短髪のアマゾネスは少年に素早く上着を着せた。言い分を聞く事も無く一方的にベルの腰のベルトにポーチや魔剣等を括り付けていく。

目を白黒させて驚愕していたベルに対し、アマゾネスは無造作に窓を指さす。

「外壁よじ登って行って。早くっ!?!」

「えっ、あつ、でも人質がっ」

彼女達が何者なのか、何故仲間割れを起こしているのか。理解するには時間が足りない。

「人質は貴方の仲間が回収したっ、胸の大きな子供みたいな女神と、武術に通じた男神、それからその眷属達にねっ」

「えっ、貴女達は何者なんですかつ!?!」

ベルが問いかけるのと同じ、廊下から血塗れのアマゾネスが吹き飛

んできて部屋に転がる。

夥しい量の出血をしており、今すぐ治療しなくては命が危うい。そう感じる程の負傷をした悍婦は即座に起き上がると、部屋に飛び込んできた別の戦闘娼婦に掴みかかり、もみ合いになる。

「た、助けなきやつ」

「馬鹿言つてんじやない！ 貴方が助けるべきは貴方の仲間でしょうっ!？」

ベルが動こうとするより前に、アマゾネスに腕を掴まれ、強引に窓際に立たされた。

「こっちは良い、さっさといけえっ!!」

「行かせないよっ、クソ放せっ!？」

もみ合いになりながらも叫ぶ女戦士と、ベルを捕まえようとする戦闘娼婦。

飛び散る血を見て青褪めたベルは、けれども強引に窓の外に追いやられる。

「ああもう、私達は【イシユタル・ファミリア】を裏切った裏切り者だよっ。レーネの部下！ ほらさっさと行って!!」

簡単な説明と共にベルを窓の外に追いやり、窓を閉める。

外壁の突起にしがみ付いて驚愕していたベルは、彼女の立場を薄らと理解した。

イシユタルが『裏切り者が出た』と言っていたが、彼女たちの事だったのかと——次の瞬間、胸を剣で貫かれたアマゾネスが窓を突き破って落ちていった。

「——っ!？」

「捕まえたあっ!!」

手を伸ばそうとしたベルの横をすり抜け、落ちていくアマゾネスに気を取られた所で、戦闘娼婦が身を乗り出してベルの腕を掴んだ。

驚愕したベルが振り解こうとした所で、戦闘娼婦が苦し気に呻き、力が抜ける。何が起きたのかと驚くベルを他所に、その悍婦は部屋に引きずり込まれ、先のもつれ合っていたアマゾネスが顔を出してベルを見つけて舌打ちを零す。

「行けって……言ってるだろ……」

口の端から血を零した彼女は、宮殿の別館——儀式場を指さしてベルを睨み付けた。

第一七三話

喧騒激しい歓楽街を見下ろす黄金の月。

一部区域で上がる黒煙と、裏切り者を始末する為に駆けずり回る悍婦達。その姿を横目にレーネは本抛の門を無視し、壁を跳躍で飛び越えて外周の沿路の一角から背後の宮殿を見上げ、溜息を零す。

少し考え事をしたのち、頭を振ると彼女は宮殿の沿路沿いに立つ一つの建物へと足を踏み入れた。

レーネと、その部隊に振り分けられた戦闘娼婦が寝泊まりする宿舎だ。

レーネの率いる戦闘娼婦は、「イシユタル・ファミリア」と敵対的であつた女神達の眷属達である。女神イシユタルが、天界へ送還した女神達のお気に入りをして己の『魅了』で我が物として優越感に浸るのを目的に奪われた者達。『魅了』に囚われて抵抗出来ない者も勿論いるが、時間を置いて『魅了』の効果が切れて今宵を皮切りとし裏切りの道に走つた者が大半を占める。

宮殿内部に裏切る可能性のある者を置きたがらず、かといって外周部だと問題発生時に他派閥が介入してきかねないとの事から、宮殿の直近に宿舎が立てられる事となつたのだ。

照明が落ち、闇に塗り潰された廊下。ギシギシと軋む床板の音色を聞きながら、二階への階段を上って自室の前に立つと、レーネは吐息を零して笑顔を浮かべた。

「うん、皆頑張つてる証拠だね〜」

室内から感じられる複数の人の気配。自らの足音に反応して警戒心を剥き出しに扉を睨んでいる事を予測しながら、レーネは担いでいたエルフの青年を担ぎ直し、躊躇なく扉を開けた。

廊下同様、照明が灯されていない室内は広々としており、一面を埋め尽くす武器ラックには大量の刀剣や鈍器等、多種多様な武装が置かれている。

衣装棚に大きなベッド。一通りの家具が揃っている室内を見回した彼女は、目の前に突き付けられた半月刀を見て笑顔のまま口を開

く。

「ハジメマシテ、で良いかな」

「……エリウツドを返せ」

照明は灯されていない無い無い室内だが、月明かりが十二分に内部を照らし出している。そのおかげか、目の前に居る人物も、室内でじつとレーネを見つめる侵入者達の姿もしつかりと認識できていた。

半月刀を鼻先に突き付け、鋭い視線をレーネに向ける猫人の青年デインケの言葉に、彼女は肩を竦めると部屋の奥を指さして呟く。

「とりあえず、この子は返すけど部屋に入れて。他の子に見られると面倒だし」

へらへらと気の抜けたような笑みを浮かべるアマゾネスの姿に、デインケは舌打ちを零すと同時に彼女を招き入れる。当然、武器は突き付けたまま。

室内に居る面子を見回してから、担いでいたエリウツドをその場を下ろして両手を上げる。

背丈の低い幼い女神。角髪の武神。そしてその眷属達と、部屋に待機させていた人質二名を見ると、レーネは笑顔を浮かべた。

「あの子達は上手くここに貴方達を誘導できたみたいだね」

「……ああ、キミがレーネ・キュリオで良いんだね？」

「うんうん、そっちは女神へステイアで良いのかな？ そっちの男神様はタケミカツチ？」

宮殿直ぐそばの宿舎。その内部に侵入者であるへステイア達が居る事に対し驚くでもなく、さも当然と言わんばかりに落ち着いた雰囲気に対応しはじめのレーネ。

彼女の落ち着きっぷりにへステイアが眉を顰めつつも、質問を飛ばした。

「キミが僕たちを誘導する様に、あの子達に命令したのかい？」

あの子達——攫われた眷属の救出の為に歓楽街に殴り込みをかけた女神達の前に唐突に現れ、女神達を攻撃しようとしたイシユタルの眷属を撃破してこの宿舎に密かに連れ込んだ戦闘娼婦らしき女性達。

突然の出来事に驚きながらも、予め『裏切り者』が内部に潜んでい
る事を藍色の女神に知らされていたヘスティア達は、その者達に従っ
て此処に足を踏み入れた。

その直後、彼女達は『レーネが残り一人を連れてくるまで大人しく
してて』とだけ伝えると、そのまま宮殿へと駆けていったのだ。

「うん？ ……あー、うん、えつとね？ 誤解しないで貰いたいんだけ
ど、私はその子達にそんな命令は出してないよ？」
「え？」

「私が命令してたら、イシユタル様に露呈するし。今晚は私達は外周
警備に駆り出されるだけだから、皆好きに動いて良いよとしか言っ
てない」

部下の一部が外部から救助に来るであろう女神達の行動を予測し、
レーネが裏切る作戦を隠しめせずに廊下の掲示板に張り出す真似を
したことで、その一部の戦闘娼婦が自身で考え、行動を起こしたのだ
と、軽い調子でレーネは笑う。

会話を続ける女神と裏切り者の少女だったが、ふとレーネはディン
ケの容態を確認していたメルヴィスとヴェルフに声をかけた。

「その棚に気付け薬があるから、使って良いよ。高位回復薬も必要
なら持つて行ってね。後、そっちの倉庫の鍵もあげるね。使えるかは
わかんないけど、色んな武器が放り込んであるよ。魔剣も何本か入っ
てるし役に立つと思う」

無造作に投げられた鍵は、警戒しながらハンドクロスボウを構えて
いたりりの前に落ちる。

警戒しながらも、リリが鍵を拾い上げて千草に投げ渡す。部屋に併
設された倉庫の扉に鍵を使い、千草が奥を確認しに行った。

「あの、その子の言う通り、武器が沢山と…魔剣も五本ぐらい。後は
回復薬とか医療品が多数ありました」

千草の報告を聞いたタケミカツチとヘスティアが領き合う。藍色
の女神の言葉の通り、敵対心は一切無く、むしろ協力的な姿勢を見せ
るレーネの姿にヘスティアは静かに胸をなでおろした。

「ディンケ君、この子は大丈夫だ。あの子達と一緒に、敵対する気は無

「いみたいだ」

「……まあいい、変な事したら殺してやるからな」

刺々しい視線をレーネに向けたまま、ディンケが半月刀を鞘に納める。しかし、柄には手をかけたまま、いつでも抜ける様に身構えている。

「本当に、敵じゃ無いんだな」

「みたいです。正直、半信半疑でしたが」

ほんのりと驚きの表情を浮かべたヴェルフとリリの言葉に、レーネはくすりと笑い、女神を真っ直ぐ見据えた。

「状況を説明するね」

「ああ、頼むよ」

現在「イシユタル・ファミア」内部で暴れてる『裏切り者』の戦闘娼婦はおおよそ40名。その内の半数が既に拘束されて行動不能、もしくは死亡済み。未だに動いていない人員は潜伏中ではあるが、儀式場となっている別館には一切居ない。

宮殿内部ではベル・クラネルの逃走を手伝おうとしている子達が何人か居るが、警備が厳しくすぐ鎮圧される可能性が高い。

ミア・ノースリスの方は儀式場に連れて行かれ、どうなったかは不明。儀式場には100を超えるLv. 3の戦闘娼婦と、指揮を行うアイシャ・ベルガ。

更に第一級冒険者の団長、フリユネ・ジャミールも待機中。

ミアについては『人質』の件もあって一切の行動は不可能。ベルの方は『裏切り者』が手を出して逃がした可能性大。

更に『青い閃光弾』を合図とし、レーネが人質の殺害を行う事。ペラペラと隠す事も無く自らの知る現状を語っていくレーネ。そんな彼女を女神と男神が見据え、嘘を吐いていないかを識別している。

「青い閃光弾が上がっていたら、人質を殺す、と？」

「うん、キミ達も持ってきてるんじゃない？ それ打ち上げるのやめてね？ 万が一にでも私が反応したら取返しが付かないだろうしね」

その説明のさ中、千草が震える声で知己の事を訪ねた。

「ミコトちゃんは、ミコトちゃんはみませんでしたか?」

「ミコトちゃん? えっと、黒い髪の高ーマンだよ。その子についてはおわかないなあ、見て無いし」

桜花が眉を顰め、千草が動揺して身を震わせる。

「状況はおおよそ理解できました。今すぐに動くべきでしょう。【イシユタル・ファミア】の内部での裏切りのおかげで殆ど時間をかけずに、なおかつ気付かれずに足元まで来れました。此処にある回復薬等^{ポーション}で体力も全快。魔剣も少しはあります」

儀式までの時間も四半刻を切っている事もある。

すぐに動くべきだとリリが主張し、同意する様にヴェルフや桜花が頷く。その様子が千草が声を上げた。

「で、でも人質の子達は……その、疲弊してるし、逃がした方が……」
人質として捕まっていたイリスは暴れ過ぎて昏倒中。更に怒りで制御不能。エリウッドは昏倒から回復したものの、万全とは言い難い。

唯一、メルヴィスは無傷に近いが、他に比べてマシ程度であり疲弊している事には変わりない。回復薬^{ポーション}での体力回復も行ったとはいえ、全力で動けるとは言えない状況だ。

「人質の三名は逃がしましょう。護衛として何人か付けた方が良いでしょうね」

「だったら、俺の子に行かせよう」

タケミカツチが三人の眷属に指示を出そうとした所で、レーネが待ったをかける。

「悪いんだけど、人質を逃がす前に聞いて欲しい事があるんだよ」

「なんだい?」

にへらと緩み切った笑みを浮かべたレーネ。

既に彼女が敵ではないと確信を得ているヘステイアやタケミカツチは特に警戒も身構えもせずに返事を返した。

何を頼む気なのか、そんな軽い疑問と共に返された返事に対し、レーネは笑顔で告げた。

「——私を殺してくれないかな」

「はっ。」

ヘステイアが怪訝そうな表情を浮かべ、タケミカヅチが眉間に皺を寄せる。

他の面々も一様に驚いた表情を浮かべて、突然理解不能な発言を行ったアマゾネスを見据えた。

「いや、殺してって、それは……本気なのかい？」

神に嘘は通じない——つまり、女神と男神には、今のレーネの言葉が嘘や冗談の類ではないのは即座に理解できた。彼女は本気で『殺してくれ』とお願いしているのだ。

それでも、信じられないと再度問いかけを投げかけた女神に、レーネは苦笑と共に答えを返す。

「私はイシユタル様に『歓楽街の警戒』を命じられてる。今は準備中だから大丈夫なんだけど、宿舎を出たら、私はあなた達を攻撃するよ。だって侵入者だし」

「——なんだって？」

明日の天気でも語るかのように軽い調子で返された返答にヘステイアが表情を曇らせる。

確かに、藍色の女神が与えた情報の中には『レーネ・キュリオは女神イシユタルの命令に逆らえない』というモノがあるのは女神達も知っていた。しかし、彼女の口からさも当然の様に『殺して』等と頼まれた事に面食らった。

「止められないのか？」

「無理、仲間を殺した時もそうだったけど、私の意思じゃ止まらない」桜花の質問に笑顔で答えるアマゾネス。短い髪の毛を指先で弄びながら、レーネは告げた。

「ここを出たら、私はあなた達の敵。でも、今は味方だから抵抗しないよ？」

自殺するのは禁じられていて出来ない。部隊の戦闘娼婦にもそんな命令を出せない。

だが、完全に部外者であるヘステイア達ならそれが可能だ。

「ミリアちゃんに殺して貰う積りだったけど、あの時は人質の件もあつたしね」

流石に裏切り者となつた下っ端が死んでもイシユタルは警戒しないだろう。しかし、幹部の一人であるレーネが死ねばいくらなんでも美神は動く。そうならない為にも、ミリアとの接触時に殺されそうになつたのをそれなりに頑張つて説得したのだから、とレーネが笑う。「それに、私を生かしておいても良い事なんて一つも無いよ?」

命令には逆らえない上、レーネはそれなりに強い。歓楽街内部で戦うのなら、ここに居る面子全員を軽く伸せるぐらいに自分は強い。

唯一の懸念事項は『人質の安全』であつたが、それもヘスティア達が合流した時点で解決済み。

「人質が逃げる。つまりこの宿舎から出て行くなら私はその子達を攻撃するよ。最悪の場合は殺害する様に命令されてる」

人質であつたイリス、メルヴィス、エリウツドの三名。その内の誰か一人でも宿舎から出て行った場合、問答無用で攻撃し連れ戻そうとするし、抵抗されればそのまま殺害も視野に入れて行動する。

つまり、自分が生きていて良い事は何もない。今までは『人質の安全確保』の観点で生きている意味はあつたが、それが無い以上自分の存在は害にしかない。

「だから殺してよ。別に恨まないし」

怯えも恐怖も、何も感じさせない笑顔で告げるレーネの姿にヘスティアの背筋が震える。

彼女の言う事には一理有る。このまま彼女を野放しにすれば確実に敵対する羽目になるし、共に行動するのは不可能。

「キミは……まさか……いや、キミを殺すのは流石に駄目だ。手足を縛つて拘束を……」

「それは、止めて欲しいかなあ。拘束が壊れるか私の体が壊れるまで暴れるだろうし」

苦笑と共にレーネが窓際から夜空を一瞥してから、室内に居る面々を見回す。

「時間はもう無いよ。早く決めた方が良い」

このまま、儀式を実行されればタケミカツチ派の目的である『春姫の救出』は叶わない。

更に『ミリアの救出』や『ベルの救出』も時間経過と共に達成困難になるか、失敗してしまう。

即座の決定を求める、と。

自らの死を求める姿に、ヴェルフが口元を歪め、リリが僅かに身を引く。

透き通ったレーネの瞳には、何も映っていない。無機質な訳ではないが、其処にあるべきはずの『恐怖』や『怯え』と言った感情が抜け落ちていなのだ。

協力的な存在を殺さないといけない、そんな選択を迫られたヘスティア達が戸惑う中、ふとレーネは窓の外、夜空を飛翔する赤い光弾を見つけて目を見開いた。

「あー、えーつと……そっか、うん、ごめんなさい女神様」

「な、なんだい？」

「今すぐ私を殺すか、殺せないなら人質だけは歓楽街から逃がしてね？」

突然、レーネが焦った様に早口で述べる。

その姿にヘスティア達が驚愕するさ中、彼女はとびつきりの笑顔を浮かべて窓の錠を外した。

「今から、イシユタル様の所に行く。高確率で殺されると思うけど——もし生きてたら、次に貴方達と会う時はもう、敵だから」

「おい、待て、そりやあどういう——」

「だから、次はちゃんと殺してね？」

デインケが半月刀を抜き放ちレーネに突き付けるのと同様、彼女は窓を開けてその身を投げた。

「なっ、逃げやがった!？」

逃げていったレーネを追うべく、デインケが窓から身を乗り出してその姿を追えば、既に宮殿外周部をすさまじい速度で鞭を使い駆け上がっていく後ろ姿が見えていた。

デインケが室内に振り返り、ヘスティア達を見据える。

「どうすりゃいい。副団長が不味いんだろ、急ぐべきじゃないか？」
「……人質の子達だけは先に逃がそう」

「なら、俺の眷属に先行させて安全確保してからだな。時間も無い、人質を救助できたんだ、後はベルとミリア、ミコトに春姫だ」

頷き合った彼らは、蒼い夜空を見上げて行動を開始した。

宮殿外周部、煌びやかな外壁を鞭を使いひたすらに駆け上がっていたレーネは、先の女神達の事を思い浮かべて苦笑を浮かべていた。

「優しいねえ。サクツと殺せば簡単に済むのに」

命が惜しくないのか、と問われたらレーネはこう答えるだろう。
『生きてる方が辛いよね』と。

仲間殺しの罪を背負ったあの日から——否、それより前、主神を守れなかったその日から、彼女にとってこの世界は地獄に変わった。

だから、命を惜しむ感情はとつくの昔に消え、唯一残っているのは復讐心。それもまた、度重なる『魅了^{せんろう}』によって擦り切れて消えそうになっているというのに。

「……でも、いつか。もうすぐ皆の所に行けるし」

この作戦が成功するしないに関わらず、どのみち、今夜命を落とす事にならない。だからこそ、死の恐怖よりは、死後に主神や先に逝った仲間との再会への想いの方が強い。

けれども、小人の少女も、白髪の少年も、幼女神も、誰しもがレーネの境遇に同情した様な表情を見せる。それがほんの僅かに申し訳ないと口元を歪め、レーネは二十階の窓枠に取り付けられた格子に鞭を絡み付かせ——ふと、視線を感じて歓楽街の方へ意識を向けた。

外壁を鞭で登る姿は悪目立ちする。故に、普段から視線はそれとなく感じてはいたが、今回のそれは奇怪なものを見る様なそれではない

——溢れ返る殺意に満ちた視線だった。

「——あつ」

歓楽街の外周部。第三区画を取り囲む様に、旗が立っていた。加えて、数え切れない程の者達が剣に槍、斧に槌、武装を手にし今か今かと号令を待っている姿も見える。

レーネの表情が凍り付くのと同時——銀の一線が彼女目掛けて飛翔していた。

「ひあああつ!?!」

似合わぬ甲高い悲鳴を上げながら、鞭を巧みに操りその攻撃を回避する。

動きを止めずにレーネが振り返った先、先ほど自身が居た空間を貫いたソレは宮殿の外壁に突き刺さっていた。

通常の矢の倍近い大きさを持つ投げ槍。貫かれていれば命は無かったであろうその攻撃、それも歓楽街外周部から、中央に存在する宮殿を駆け上がるレーネを狙って放たれたもの。恐ろしい遠距離からの攻撃に彼女が背筋を震わせ、歓楽街を取り囲む旗印エンブレムを見て、納得の表情を浮かべた。

「あく、うわあく……動いたんだ。今までこんな事無かったのになあ」
歓楽街外周部を隙間無く取り囲む者達が掲げる旗印エンブレムそれは『戦乙女の側面像』——「フレイヤ・ファミリア」を示すモノだ。

別館屋上、空中庭園。

広大な平面状の庭園には隙間なく石板が敷き詰められている。その外周はまるで守るかのように無数の石柱が立てられている。

多分、この石板には……いや、この石造りの庭園は全てに特殊鉱石『黒闇石ダダ』や『月嘆石ルナティックフライト』が使われているのだろう。密かに運び込まれた特殊鉱石の殆どはこの庭園の為のモノだろう。僅かに足りない分は地下にでも送ったのだろうか。

その庭園は今や上空に浮かぶ月明かりを受けて幻想的な光の絨毯を生み出している。——俺が死ぬ場所としては、随分とまあ豪勢で幻想的な事で。

「サミラ、準備は終わっているのかア？」

「終わってるよ。見りやあわかんذار？ 後は月が完璧に満ちて魔力が満たされるのを待つだけだ」

終わってんじやねえよ。なんかへまして準備が伸びてりやよかつたのにさ……ごねた所で何かが変わる訳ではないが。

広大な庭園には、嫌と言う程、戦闘娼婦バーベラが集まっていた。おおよそ……百を超えるぐらいだろうか。更に派閥幹部数名、团长フリユネまで……レーネも幹部ではあっただろうが、彼女は裏切りの可能性を考慮して此処には居ない。

全員かは不明だが、半分以上が確実にLv. 3の第二級だろう。ギルドの一覧リストで覚えている分だけでもそれほどの人だ。

領域テクトリの警戒。更にロキ派閥、ガネーシヤ派閥の監視。加えて宮殿の警護、そして庭園に集まった戦闘娼婦バーベラ。どっだけ居るんだと呆れそうになる。

「行くよオ」

素足でドスドスと鈍い足音を響かせてあるく怪物に先導され、中央に向かつていく。

戦闘娼婦バーベラも集まりだした中央部には、荘厳で幻想的な祭壇が築かれていた。

淡い青色の光に包まれた庭園の中で最も強く光を放つ石壇。三本の石柱から光が剥がれ、青白い光粉が浮かんでは、風の影響を受ける事無く月の光に導かれる様に霧散していく。

この庭園に築かれた祭壇は、『殺生石』の効果を高める為の増幅装置ブースターといった所か。

ニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべて目を細めるフリユネを他所に、春姫の姿を探す。しかし、アマゾネスの群れに遮られているせいが見つけられない。

「春姫エ!? 何をぐずぐずしないで祭壇に入りなア！」

祭壇から振り向いて大声を放つヒキガエル。五月蠅えな。

自然とアマゾネスの人垣が割れると、その奥に居た。

装束を身に纏い、緑の瞳を赤く腫らしながらも表情を消してしずし

ずと歩んでくる、少女の姿が見えた。

俯いたその視線は足元の発光する石板に向けられており、人形のように言葉を放つ事無く祭壇に歩もうとしていた。

「フリユネ・ジャミール」

「あア？」

「……先に、私の儀式をした方が良いと思うけれど」

思わず、口に出していた。

『人質』と言う最悪の札を相手が持っている以上、俺に出来る事は何もない。

ましてや、フリユネやアイシヤ、更に第二級の戦闘娼婦が両手両足の指の数で足りない程に居るこの場において、暴れた所で焼け石に水。人質が無くとも何も出来ない。

とはいえ、だ……従順な春姫より、反抗的な俺を優先した方がやりやすいだろうというのは本音だ。

後か先かの話なら、俺が先でも良いだろう。無論、死にたい訳じゃないが、ちよつとでも春姫の生存率が上がるならそれでいい。

「何を企んでるんだあ？」

「……………ベルかミコトが春姫の救助に来る時間を稼ごうと思っただけよ？」

顔を近づけて酷い口臭をぶつけてくるフリユネに、包み隠さずに答える。

「ゲゲゲツ、おかしなことを言うねえ？ そんなに死にたいのかあ？」

優先度を考慮したら、俺が先の方が良いってだけの話なんだがね。

——自分を蔑ろにしないって

……………約束、したんだけどなあ。ああでも、仕方ないじゃないか。

だって、俺より春姫の方が優先されるべきだというのは、誰がどう見ても明らかだろうしね。

フリユネの口臭攻撃に耐えていると、息を呑む音が響いた。

「うそ……………どうして、ノースリス様が…………」

春姫が被っていた人形の様な無表情の仮面が罅割れ、驚愕の表情を

浮かべて俺を見ていた。

巨女が傍にいたのもそうだし、小柄だから気付かれていなかったの
だろう。春姫は今まさに気付いたらしい。

「こんばんは、死ぬには良い夜ね」

満月の夜に死んだ経験のある俺が言うんだ。間違いない。

そんな冗談めかした挨拶に、春姫は直ぐに唇を引き締め、表情を消
そうとした。一瞬だけ潤んだ瞳は、即座に春姫が瞳を閉じた事で見え
なくなる。

「どうして、ノースリス様が此方に？」

平坦に、感情を感じさせない様にと心を押し殺して放たれる春姫の
言葉。それにどう返事をしようかとほんの一拍だけ口を閉じた瞬間、
フリユネが割り込む。

『人質』が居て逃げられないよオ。この『青い閃光弾』を上げたら即
座に『人質』が殺されちまうからねエ？」

巨大な手に握られたちっぽけな青い閃光弾を見せびらかすフリユ
ネ。

ソレの所為で下手な動きが出来ず、こっちは何ひとつ抵抗が出来な
いのを良い事に威張り散らす巨女。ああぶっ殺してえなあ、クソが。
「……………」

「ま、春姫は気にしなくて良いわ。それより——先に私の儀式を
優先したらどう？」

「何を企んでいるのか知らないけどお、アンタの言う通りにすると思
うかア？」

まあ、そう言うだろうなあ、と言うのは予想通り。

しかし、事実として今現在俺を優先する理由はあると思うがね。

「貴方達の中から、裏切り者が何人も出てる」と聞いたわ。春姫と違っ
て、私は隙が出来たら即座に逃げるわよ？」

「人質を見捨ててかあ？」

「その人質、裏切り者が取っていくかもよ」

言葉で時間を稼ごうと巨女の大きな口を前に余裕そうな笑みを浮
かべて屁理屈をこねる。流石のフリユネも俺の言葉に思うところが

あるのか少し考え込み『あの不細工の奴が……』とぶつぶつと呟き始める。

どうにかして、春姫の儀式だけでも遅らせておこう。他に出来る事が何も無いから、せめてこのぐらいは……。

そう考えて更に畳み掛けようとした所で、小さな叫びに遮られた。

「駄目ですっ!」

春姫が小さく拳を握り締め、俺を真っ直ぐ見つめて口を開く。

「儀式は、わたくし私が先に行います。ノースリス様は………」

何かを堪える様に唇を引き締め、春姫は俺が口を開くより前に自ら祭壇の中央に足を運んでいく。

彼女が何を言いたいのか、なんとなく理解はできた。きつと、俺を助けたいと思っているんだろう。

この後に及んで、彼女は自身ではなく誰かを救おうとしている。けれども、俺は何もできない。ベルも、人質が居ては思う様に動けない。ミコトもまた、同様。

誰かが人質の解放をしてくれない限り、動けない。そして、今の春姫では人質を逃がせない……だから、彼女に出来る事は先に儀式の生贄になって、俺が生贄になるまでの時間を引き延ばす事のみ。

———どうして、其処で俺と同じ結論が出てくるんだか。

「……変な奴だな」

「自分から死にたがるなんて」

「ルナル狐人ってどいつもこいつもこんな感じなのか?」

ひそひそと戦闘娼婦達パルベラが小声で囁く。そんな中、春姫がアイシヤの前を通る際、ほんの刹那だけ立ち止まり、小さく会釈するとそのまま祭壇を登り始めた。

アイシヤの手が痙攣し、彼女が強く唇を噛み締めたのが見えた。

「アイシヤア、変な事を考えるんじゃないよオ?」

「わかってる。わかってるさ……ああ、わかってる」

フリユネの脅し混じりの揶揄いの言葉に、アイシヤが自分に言い聞かせる様に幾度なく言葉を繰り返す。

ああ、何か行動を起こしたいが、何もできない。

逃げるだけなら可能性はゼロじゃないと思う。だが、逃げれば人質の命はないだろう。

——何かを犠牲に、自分だけ助かるなんて、前世で行ってきた行動だ。

また、もう一度繰り返すのか？ 否、そんな事は出来ない。出来る筈が無い。

どの行動が正解で、不正解なのか。未来を見通す事が出来ない、未知を暴ききれない人の身で自問自答を繰り返す。

祭壇の中央で跪いた春姫が、三本の石柱から伸びる鎖に繋がれていく様子を眺める。儀式まではまだそれなりに時間がある。

この儀式場に満ちる青白い光が、赤色になった時がその刻限。ならば、まだ時間はある……きつと、気休め程度でしかないだろうが、それでも……。

「——お前達、其処を通せ!!」

ふと、後方の戦闘娼婦バベラの人垣の奥が騒がしくなる。

アマゾネス達が道を開ける中、何事かと振り返ったフリユネとアイシャの前に獣人の青年が飛び出してきた。

確か、イシュタルの側近の一人だっただろうか。レーネ曰く女神ウエヌスの死の原因となった裏切り者で、レーネの幼馴染だったらしい人物。

何かあったのかと騒がしくなる中、その獣人の青年がフリユネを見上げて口を開いた。

「今すぐミリア・ノースリスを使用して儀式を執り行え」

「はア？ 何様の積りだあ」

「イシュタル様からの命令だ、今すぐ、ミリア・ノースリスを使用して儀式を執り行え！」

高圧的に、团长であるフリユネを前にしても怯む事無く言い捨てる獣人従者。そいつが何者なのか、と言う情報が頭から吹き飛んだ。

——今すぐ実行？ 俺を、使つて？

「まだ儀式には早いだろう」

「関係無い。即座に実行しろ。イシュタル様の命令に逆らう積りか

！」

どよめく戦闘娼婦達と、苛立たし気なフリユネ、僅かに驚愕の色を浮かべたアイシヤの視線が俺を射抜く。

振り返って祭壇を伺うと、鎖を手動きを止めた儀式準備中のアマゾネス二人と、それに挟まれて表情を強張らせて泣きそうな春姫と目が合った。

「……日頃の行い、かしらねえ」

それとも、前世の行いだろうか。

心を殺して、我儘を全てのみ込んで、誰かに犠牲を強いて、大事な誰かを犠牲にして、自分の命と、最も大事な『人質』を守る事だけに執着して生き続けた怪物は、満月の夜に死んだ。

心の赴くままに、妙な我儘を押し通して、誰も犠牲にしないようにして、大切な誰かを守ろうとして、自分の命を軽視した大馬鹿野郎は、またしても満月の夜に死ぬらしい。

………金色まんまるお月様、どうやらアンタは俺の死神らしい。
綺麗だし、嫌いじゃないんだがなあ。

第一七四話

祭壇に上り、指示されるがままに両膝をついた。

石板から伸びる無数の鎖が手、足、そして胴に首と嚴重に巻き付けられていく。

『殺生石』に魂を移し替える為、からだ器から魂を引き剥がされる想像を絶する苦痛を伴うらしい。故に、こうして嚴重に鎖で『生贄』を固定して暴れ狂うのを防ぐのだという。

「お願いします、どうか……どうか、ノースリス様だけは……」
「黙りなアー！」

懇願する狐人の少女とその懇願を一喝して黙らせる巨女。祭壇の上からその様子を眺めていると、春姫と目が合った。直ぐに俯いて逸らされてしまったが。

全ての鎖での固定が完了し、準備を行っていたアマゾネス達が祭壇から下りていく。

所々に焼けた跡や血の跡等が残るローブ、擦り切れた革靴、左手に装着した『竜鱗の朱手甲』以外はボロボロな装いで、長い髪も乾いた血が所々にこびり付いている。貧相な体軀といい、ともすれば今の俺は貧民街から選出された孤児の生贄にも見える事だろう。

もしくは、散々拷問の限りを尽くされた後に処刑台に上った罪人。むしろそちらの方が合っている気もする。

『殺生石』を用意しな」

派閥幹部サミミの一声に反応して、複数の戦闘娼婦バミベラが嚴重に守っていた箱から一本の剣と、一つの宝珠が取り出されるのが見えた。

より一層、悲壮感の増した春姫に微笑みかけ、その宝珠に視線を向ける。

随分と、綺麗で禍々しい代物だ。血の様に紅く、拳大の大きさのそれは、まるで何かを求める様に脈動しているかのような紅光を揺らす。

その宝珠を長剣、儀式剣の柄に取り付けると、俺を殺すであろう刃が月の光で鋭い光をちらつかせていた。

準備が整ったと言わんばかりに、儀式剣を手にしたサミラが祭壇に

上る。迫る死の恐怖が背筋を焼く感覚に、自然と俺は笑っていた。

「は、ははは……」

「……気でも狂ったか」

おかしなモノを見る様な目で此方を見下ろし、目の前で儀式剣の切っ先を此方に向けるサミラ。

「おい、さっさと狐人ルナルになれ」

声をかけられ、気付いた。そういえば儀式を行うには狐人ルナルでなければならぬ。

狙撃手がそれに該当し、丁度そのクラスが俺の背に刻まれている。ここで拒絶すれば時間稼ぎが出来るだろうか、一瞬だけ脳裏に過るもフリユネがこれ見よがしに手にしている青の閃光弾を目にすれば、抵抗する気力は即座に塗り取られて消え失せる。

指示に従い、クラスを入れ替える。

無垢で、いくつもの可能性を秘めた無垢な少女ニンから、命を計る天秤と言う名の引き金に指を掛け続ける無慈悲な狙撃手クイシーに。

「まあ一応聞いてやる。最後に、言い残す事はあるか？」

慈悲の積りだろうか。サミラと呼ばれていた派閥幹部の女の問いかけに笑顔を返す。

遺言、になるのだろうか。この女にソレを教えて何か意味があるのかわからないが。

そうだな、もし言い残すならば……よくも、大事な仲間を殺しやがって。という恨み節だろうか？ それとも、ヘステイア様やベル、家族に残す遺言か。いや、春姫に対する謝罪の方が良いだろうか？ 考え出せば際限無く湧き上がってくる言葉の数々。どれも伝えるのに遅すぎる気もする。

「何も無いのか。だったら——」

「何をしているサミラ、早くしろっ！」

「るせえな……」

獣人従者の急かす声にサミラが不愉快そうに眉を顰め、儀式剣の切っ先をこちらに向けた。

——月光が刃金ひかりを通して俺の瞳を射抜く。

恐ろしい程に研ぎ澄まされた刃。

鏡の様に黄金の月が刀身に映る。

美しくも悍ましい紅光を放つ宝珠。

ベルは、ミコトは、救援はまだ来ない。

あ、言い残す事あったわ。

「春姫——泣かないで」

俺の為に涙を流す必要はない。

嬉しいけれど、申し訳ないから。

——救援は、間に合わない。

割とあっさりど、俺の想像するより簡単にその刃は胸に突き立てられる。

宝珠の光が増し、儀式場を幻想的に彩っていた青色の光は染まる様に一瞬だけ紅に染まった。

——ああ、死んだな。

全身の皮を引き剥がされる激痛に襲われる。

がなり立てる鎖の音と、遠くに聞こえる耳障りな誰かの絶叫……いや、俺の絶叫か。

まるで実感が無さすぎて、五月蠅いなあ、と他人事のように感じる。

——春姫は強く目を瞑り、耳を塞いで時が過ぎ去るのを待つ事しかできなかった。

耳を塞いでなお、鼓膜を揺らす程にがなり立てる鎖の音色。その音を掻き消す程の絶叫。

人の体からこの様な音が出るのかと、背筋に氷柱が突き立てられたのかと勘違いする程に悍ましい、激痛か苦痛か、少なくとも想像出来る範囲の痛みではないのは確かだろう。

数秒か、数分か……はたまた数時間経っただろうか。

いつの間にか場には静寂が満ちていた。

「——終わったか？」

「……サミラ、どうだア？」

「あ、ああ、終わったと思う」

目を開ければ、先と同じ様に微笑む彼女の姿が見えるのではないかと、有り得ぬ想像に縋りながら目を開けた春姫は、祭壇の上で儀式剣から宝珠を外している派閥幹部と、その傍で鎖の所為で倒れる事も出来ずに力無く揺れている小人族の少女の姿を見てしまった。

「あ……ああ、そんな……」

鎖に繋がれた両腕からは血が滴っていて、激痛に暴れ狂った結果であろう事は誰しも簡単に想像がつく。しかし、不可思議な事に彼女の――ミアアの胸元には傷が無い。

突き立てられたであろう儀式剣にも血や油の汚れは一切無く、綺麗な鋭い刃が月明かりを切り裂いていた。

もしかして、と春姫が僅かな希望をその胸に灯して俯くミアアの表情を見ようとして――喉を引き攣らせる。

「早くその『殺生石』を寄越せー」

「五月蠅いねエ。アタイがまず試すよお。サミラア、アタイに寄越しなあ」

少女がまさに絶望に声を失っている傍で、ミアアの魂を封じたであろう『殺生石』を獣人従者が即座に主神へと届けようと声を荒げ、主神を軽視する巨女がその効果を早速試そうとサミラに催促する。

「黙れフリユネ。それはイシユタル様に献上する代物だ。貴様如きが触れて良いモノではない」

「ああ？ アタイに文句でもあるのかいい？ レーネと同じ裏切り者の癖にデカイ口叩くんじゃあないよお」

「やめろフリユネ。……たく、サミラ、さっさとこいつに渡してやれ」儀式が終わるまでただ黙っていたアイシャは舌打ちを零し、呟く。

【リトル・ルーキー】も【絶+影】も間に合わなかった、か……】

主神を最優先に考える獣人従者と、己の事ばかり優先する巨女。平行線を辿るかに思えたそのやり取りは、サミラが『殺生石』を獣人従者に手渡した事で終わりを告げた。

受け取るのと同時に獣人従者は脇目も振らずに主神の元へと駆け出す。彼の頭にあるのは主神からのお褒めの言葉の事だけだろう。

「サミリアア！ 何でソイツに渡したアツツ!!」

「仕方無いだろ。イシユタル様の命令なんだ、オレ達【イシユタル・ファミリア】だろ?」

主神軽視が過ぎる団長に釘を刺す様に告げられた幹部の言葉にフリユネが顔を赤くして拳を強く握り——パンツと軽い火薬の弾ける音が響いた。

場に居たアマゾネスが呆然と見上げた空。蒼い闇に浮かぶ黄金の満月と、青い光弾がゆるゆると空を駆けていた。

ぎよつとした表情でアイシャが巨女を見た。

「おま、フリユネエツ!? 何してんだアンタ!」

「ば、馬鹿じゃねえのか!? 青の閃光弾上げたら人質が!」

「ちよつと、不味いんじゃないの、これ……」

フリユネが手にしていた青の閃光弾を握り潰した結果、運悪く空へと打ち上がってしまったらしい事を悟ったアマゾネス達が騒ぎ出す。

人質は【魔銃使い】への牽制用で、既に儀式が成功した今は【ロキ・ファミリア】と【ガネーシャ・ファミリア】への牽制に使用されるものだ。

たつた三人しか居ない人質の一人を、間抜けなミスで殺す羽目になった。その事にアマゾネス達は動揺しだし——フリユネが一喝した。

「黙りなア!!」

身を強張らせて動きを止めた戦闘娼婦達を睨み付け、フリユネは鼻を鳴らす。

「人質は三人も居るんだあ、一人ぐらい誤差だろお」

——お前が言うな、と殆どのアマゾネス達が内心で呟く。

舌打ちを零しつつも、サミラが口を開いた。

「一度目は成功。早い所、春姫の儀式も終えちまおうぜ」

「……あの不細工な小人の『殺生石』が外れだったって可能性もありうるう」

フリユネの傲岸不遜な言い方に眉を顰めつつも、数人のアマゾネスが祭壇に上り、ミリアの体から鎖を外していく。

ふと、一人のアマゾネスがミリアの首に触れ、驚いた様に声を上げた。

「ねえ、まだこの子生きてるよ」

「え？ 本当？」

「うん、まだ温かいってどうか、呼吸もしてるし、心臓も動いてるみたい」

完全に力が抜けた状態でアマゾネス達にぺたぺたと無遠慮に触られる小人族。その様子を見ていた春姫がはっとなりミリアの体を見つめた。

——空虚で無機質なガラス玉を思わせる生気の無い瞳。

それを見て絶望していた春姫は、遅れて気付く。魂を封じた『殺生石』を彼女の肉体に返却すれば、ミリアはもう一度蘇る事が出来る事実に。

「まだ、終わってない……」

——
どうかかして、彼女の魂を取り返せないかと春姫が顔を上げ——
腕を掴まれる。

「祭壇に上がりな。次はアンタだよ」

告げられた言葉に、春姫は身を震わせた。

目の前で見せられた儀式、その結果、魂を引き剥がされる激痛に暴れ狂う小人の少女の姿を見せつけられたのだ。あの冷静そうで表情を隠すのが上手い少女が、暴れ狂う程の苦痛。

それがどれほどのモノなのかを想像し、春姫が背筋を凍らせて頬を強張らせていると、見かねたアマゾネス達が春姫の腕を掴んで祭壇の上に引っ張り上げられる。

「もたもたしてるんじゃないよオ!!」

巨女の怒声に背を叩かれ、春姫は今の自身に出来る事が何一つ存在しない事に気付き、顔を俯かせた。

小突かれるがままに中央に跪き、鎖での拘束を受け入れる。

その途中、春姫はぬめる感触に身を震わせ、自身の腕を拘束する鎖に視線を向けて息を呑んだ。鼻孔を擦る水っぽい鉄錆の香り。そして、先の生贄が暴れた事で付着した血に汚れた鎖。

祭壇から降ろされ、無造作にアマゾネス達の足元に転がされているミリアの体を見た春姫は、その血の匂いを感じ取り強く手を握り締めた。

——自分はどうなっても良いから、ミリアの魂を取り戻して欲しい。

ミリアが居るのであれば、ベル・クラネルと言う少年も、ヤマト・ミコトと言う少女も、どちらもここを目指している。ならば、自身の儀式が終わるより前に来て欲しい——そうしないと、伝えられないから。

「……………」

全ての鎖に繋がれ、生贄の少女か、はたまた神事の巫女を思わせる跪いた姿勢で祈る。

月の光を浴びる悲壮なまでに美しい少女の姿に、見守っているアマゾネス達が息を呑み、アイシャが眉を顰めた。

「これでやっと『フレイヤ・ファミリア』の連中と戦えるのかと思ったけど……クソ、【魔銃使い】の儀式を先にやっちゃったから、魔力が再度溜まるまでおあずけかよ」

他方で好戦的な悍婦達が愚痴を零していると、もう一つの殺生石が運び込まれる。

その剣と石に隠し切れぬ恐怖を見せた春姫の姿に、アイシャが拳を更に強く握り締めた。

ここ数日で出会ってしまったヒューマンの少年少女、そして小人の少女。最後に与えられたのが温かな記憶だけであれば、きつと心の中ですすり泣くだけで、それをおくびにも出さずに逝けた。

目の前で自身より先に生贄にされるといふ想像すらしていなかった出来事に、春姫はただ瞳を閉じた。

「——敵襲だ!？」

響き渡る悍婦の絶叫。

待ち侘びた人物の到着に春姫が顔を上げると、庭園の奥、空中廊下に繋がる入口から無数の剣戟の音が響き渡る。

ほんの僅かな間を置いて、見張りのアマゾネス達を強行突破して現

れたのは、待ち人の一人である黒髪の少女——ヤマト・ミコトが其処に居た。

「春姫殿おほ——!!」

宮殿から空中廊下を駆け抜けてきたミコトは、庭園に飛び込んだ。見張りに気取られた時点で隠れる意味は無いと、儀式場に響き渡る様に、目的の少女に己の存在を知らしめるように、ミコトは腹の底から叫ぶ。

「来やがったか」

祭壇に一直線に向かおうとするミコトを遮る様に、祭壇から30M程の距離をとって壁を作る。それに遮られるように傷だらけのミコトも足を止めた。

ミコトの背後には一度は突破した見張り達が追いついてきたことで、彼女は完全に包囲される形となる。

「おいおいっ、一人で来たのかよ」

黒髪の少女の命知らずの勇猛さ——無謀極まりない蛮勇に——サミラは心底気に入つた様に笑みを浮かべる。

彼女と同じく好戦的な戦闘娼婦達が、余興とばかりに動きを止めた。

「春姫え〜!! お前の英雄が来たぞお〜! それとも、【魔銃使い】の方かあ〜!!」

背後を振り返り愉快そうにサミラは、足元に転がっていた小人族の少女の首根っこを掴んで持ち上げる。

「ほら、なんか言っちゃれよ〜。仲間が助けに来てくれたぜえ〜!」

足を止め、紅刀を構えていたミコトは目をまじまじと見開いて驚愕の表情を浮かべ、叫ぶ。

「ミ、ミリア殿っ!!」

「ああ? 気付いて無かったのかよお〜」

首根っこを掴まれ、手足は力なく揺れる。反応らしい反応を返さない仲間の姿にミコトが大量の脂汗を零す。背中に氷の塊を放り込まれた様な悪寒。

儀式場に満ちていなければならぬ魔力が、ミコトの想像より少な

い事に彼女は喉を震わせ——頭を振った。

「まだ、まだ儀式の時間ではないはずですよ!!」

——儀式を行うまで、まだあと十分程の時間があつたはずだ。そう言い放ったミコトに対し、悲痛そうな表情を浮かべた春姫が叫んだ。

「今すぐ、ノースリス様の魂を取り戻して！ 今なら、まだ間に合います!!」

幾重もの鎖の音を響かせながら、春姫は泣く様に叫ぶ。

自分よりも、今すぐミリアの魂を封じた『殺生石』を取り戻せ、と。

「まだ、儀式まで時間はあつたはずでは……」

「ゲゲゲゲツ、イシユタル様が急かすから仕方なくヤっちゃまったよお」
フリユネが哄笑混じりに返答を返した瞬間。ミコトの顔から血の気が引いた。

何かの冗談ではないかと、サミラが掴んでいるミリアを見るが、生気が抜け落ちた少女の瞳は無機質なガラスを思わせる程に何も無かった。

魂を抜かれた、抜け殻。

言われずともソレを理解したミコトが身を震わせ、紅刀の切っ先を目の前の戦闘娼婦パベラの壁に向けた。

「……ミリア殿の魂も取り返します。そして、春姫殿も助けます」

「どうしてっ……どうして!? ノースリス様を優先してください、ミコト様!?!」

自身はどうなつてもいいから、仲間を優先すべきだと春姫が泣き叫ぶ。

一度は拒絶し、二度目は自身より仲間を優先しろと頼み込む少女の姿に、ミコトはただ柄を強く握り締める。

「ミリア殿を優先する為に、春姫殿を見捨ててしまえば、自分は胸を張って彼女の前に立てなくなる」

だから、春姫を救い、ミリアも救う。

自身で無茶苦茶な事を言っているのを理解しつつも、ミコトは力強く宣言した。

「だから、春姫殿も救います」

「恰好良いなあ、お前」

自分達を超えて祭壇の春姫とやり取りをするミコトに、サミラは嬉しそうな笑みを浮かべ灰髪を揺らした。

「なあ、フリユネ、アイシヤ!? オレ一人でコイツと戦らせてくれよ!?」

派閥の団長と、戦闘娼婦^{バーベラ}を率いる実質的な副団長に問いかける。

周囲の好戦的なアマゾネスから上がる不平不満に、サミラは言葉をつづけた。

「お前等はさつきまで暴れてたんだろ!? オレにも少しはやらせろつて!」

「……ゲゲゲゲツ、好きにおしよお。二度目まで時間もあるだろうしねえ」

先の儀式で魔力を使い切り、再度月光を受けて魔力を見たそうと青白い光に包まれる儀式場を見やったフリユネが下品な笑みを浮かべる。

アイシヤは無言を貫き、止めるでもなくその場でたたずみ続けている。

「待って、待ってください!? フリユネさん、アイシヤさん!? ミコト様、早くノースリス様の『殺生石』を!」

春姫の懇願が虚しく響き渡る中、サミラは手にしていた抜け殻を他のアマゾネスに渡して味方の輪から一人抜け出し、ミコトと対峙した。

「そーいう訳だ、付き合えよ。オレに勝てば……もしかしたら何か聞いてもらえるかもしれないぜ? 【魔銃使い】の魂だつて返してもらえるかもなあ〜!」

「……………」

周囲は既に包囲され、逃げ場の無い現状を見やったミコトは、灰短髪^{バーベラ}の女戦士と対峙した。

不敵な笑みを浮かべるサミラに、ミコトは乗る以外の選択肢が無いと腹を括る。

どのみち、強行突破で突入してしまった彼女は退路も封じられミリアの魂を封じた『殺生石』を探しに行くことも難しい。

せめて時間を稼ぐ——ベルが現状突破の方法を探し出してくれる事を祈るほかない。

ミコトは言葉を放つ事無く武器を構える。

一騎打ちの申し出を無言で受けた事を確認したサミラが好戦的に口を吊り上げ、一切の武器を持つ事無く拳を構えた。

庭園の端、好戦的な戦闘娼婦バーベラが主だつて取り囲み、即席の決戦場リングを構築する。イシユタル派にとってはただの前座に等しい、戦闘が始まった。

アマゾネスの一人が真上に放り投げた短剣が地に落ちた瞬間、サミラが真正面から突撃する。

黒髪のヒューマン。彼女の懸命な足掻きを前座として楽しむ戦闘娼婦バーベラ達。

少女が懸命に『煙玉』を使った攪乱、身代わりの術『空蟬』を利用した奇襲、そして止めと言わんばかりにサミラに仕掛けられた『円月投』。

自派閥の戦闘員、幹部の一人が轟音と共に頭部を地面に埋められたのを見ていたフリユネは、嘲笑混じりに褒めた。

「……ゲゲゲゲツ、やるじゃないか」

一人を沈め、次は誰だと周囲を見やるミコト。

そんな彼女を見て、巨女フリユネは膨れ上がった肩を揺らして笑う。

「だが、かわいそうになア〜」

「……？」

しゃがれた声で嘲笑混じりの声を放ったアマゾネス団長に、ミコトは訝し気な視線を向ける。

怪訝そうな表情の彼女に、沈黙を保っていたアイシャが初めて口を開く。

「まだ、終わりじゃないよ」

直後、ミコトの背後で音が響いた。

表情を強張らせたミコトが咄嗟に振り返った先、つい先ほど頭部が地面に埋まるほどの衝撃で叩き付けられた筈のサミラが、何事も無かったかのように頭部を地面から引っこ抜いて立ち上がる姿があった。

「効いたぜえ……やるなあ」

首を鳴らしながら、サミラが目を細めて笑う。

ミコトが持ち得る己の全てを賭した猛攻の末、まるで消耗した気配を感じさせない女戦士の様子に、ミコトは愕然とし、絶望した。

磨き上げられた技術は——Lv差と言う無慈悲な力の隔絶に遮られ、届かない。

「ほら、続きだー」

「あつっ!?!」

瞬く間に接近されミコトは頬に拳を受ける。

損害を与えていない訳ではないが目に見えた損耗が感じられないサミラに、既に満身創痍であるミコトは手も足も出ない。

「ああ……!?!」

涙を流し春姫が俯く間にも、先の攻撃のお返しと言わんばかりにサミラの攻撃がミコトを穿つ。

殴打の音と共にいたぶられる少女。その光景に巨女が愉悦の表情を浮かべていると……宮殿側から駆けてきた構成員がある一報を彼女に届けた。

「ああン……『兎』が逃げたあ?」

「あ、ああ」

「ゲゲゲゲゲツ、なんだい、イシユタル様も大したこと無いねえ〜」裏切りによってイシユタルの元からベルが逃げたという連絡に、フリユネが嘲笑を零す。

己の主神を馬鹿にしながら、その大きな口を一杯に開いた。

「——『リトル・ルーキー』、どうせ見ているんだろう!?! 助けに来なきや、大事な仲間がくたばっちゃうよお!?!」

周囲の戦闘娼婦が耳を塞がざるを得ない程の大声で、周りにある塔

や庭園の隅に呼びかける。

美神イシユタルから逃げた彼が、ミリアを助けるべく此処に足を運ぶのは確定的に明らか。

「……………」

——当然の事だった。

裏切った戦闘娼婦バーベラが暴れていたとはいえ、直ぐに鎮圧されてしまう程に嚴重警戒されている本館内から空中廊下を辿る道筋ルートは早々に諦め、聖塔ジグザットの構造を持つこの別館の外壁を、跳躍交じりに駆け上がったきた。

その上で、ミコトの到着から五分も遅れ、今まさにこの場に到着したばかりであった。

庭園を囲む塔の一つに身を隠していた彼は、一切身動きせず人形のように抱えられたミリアの姿に悪寒を感じながら、『殺生石』の破壊の機会を伺おうとしていた。

——して、いたのだ。

「……………うそだ」

力無く人形のように抱えられたミリア・ノースリスの姿。

祭壇の片隅に放り捨てられた、石を失った儀式剣。

戦闘娼婦バーベラが手にしている、石が取り付けられた儀式剣。

少年が、自然と最悪の想像に行き付くのは当然の事だっただろう。

仲間の少女が今まさに甦られている姿。更に大切な家族が抜け殻にされている事実。

今すぐにも飛び出しそうな気持ちを抑え、何をすべきかベルが思考を巡らし——歯を食い縛る。

——魂を封じた『殺生石』を肉体に戻せば、元通り。

まだ間に合う、だからこそ儀式を妨害して春姫を救い、更にミリアの魂を封じた『殺生石』を取り返さなくてはいけない。

そう決めて歯を食い縛り——フリユネの哄笑にベルの背筋が凍り付く。

「——肉体に魂を戻せば元通りとでも考えてるのならあ、この抜け殻が必要だろお？」

ベルが顔を覗かせるのと、ミコトが目を見開くのはほぼ同時。

フリーユネ
巨女は『兎』を炙り出す為に、魂を失ったミリアの肉体を片手で掴み、投擲姿勢を取った。

「ほら、取ってきなあああ!!」

無造作に小人族バルウムの少女の肉体が投げ飛ばされる。

庭園中央部から、外周部の塔すら超えて、100M以上の高さから

——放り捨てられる。

『あつ——あああああああああああああああああああああ
あつ?!』

ベルとミコトが、同時にその器からだを追うべく足を踏み出した。

魂を取り返したとしても、器が無ければ意味が無い。

器だけでも、魂だけでも意味が無い。

だからこそ、その器を失う訳にはいかない。

神の恩恵があつたとしても、100M以上の高さから無防備に落下すれば、きつと命は無い。

そして、魂の抜かれた抜け殻がこの高さから転落して、無事で済むはずもない。

故に、二人に選択肢は無かった——当然、イシユタル派の者達にもそれには気付く。

「出てきたねエエ!!」

一直線に、放物線を描いて今まさに庭園の外に放り出されたミリアの器目掛けて駆け抜けるベルの前には巨女フリーユネが。

目の前の女戦士を無視し、決戦場リングを構築する好戦的なアマゾネスを叩き伏せて駆け出したミコトの前にはサミラが。

塔の影から飛び出したベルは、全身全霊の力で疾駆する。

純白の弾丸となったベルの姿に、アマゾネス達の反応が遅れた。

自らへの接近を知覚した頃には少年はそのそばを過ぎ去り、アマゾネス達の間を駆け抜けていく。

追従を許さない程の超速の疾走。投げ飛ばされたミリアの器目掛けて駆ける。戦闘娼婦バベラは目で追う事もできず、アイシャですら振り向

くので精一杯。

渾身の疾駆に追い付けるのは、ただ一人を除いて居ない。

「ゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲツ!!」

そう、第一級冒険者を除いて。

「捕まえてやるよおおおおおおお!!」

「——ツツ!」

ベルを遙かに上回る速度を以てして進路上に躍り出た蛙の王女に、ベルは双眸を細めた。

全身全霊を賭して尚、立ち塞がる圧倒的強者。口を裂いて哄笑を上げる高過ぎる壁。

「終わりさあああああああつ!!」

背に溜められた右剛腕。腰を捻り真横に引き絞られる大振りの一撃。

進路を塞ぐ蛙の王女との衝突までほんの瞬きの間に、ベルは選択を迫られた。

右、ミリアまで間に合わない。

左、同様、間に合わない。

停止、論外。

上、死ぬ未来しか見えない。

進路を阻む巨女の遙か奥、蒼い闇夜に投げ出された人形のような小さな体軀が見えていた。

煩く鳴り響く鼓動の音色に耳を傾けながら、ベルは目を吊り上げた。

答えなど、選択肢など、初めから一つしかなかったのだから。

前傾姿勢の体を、更に前に倒し——前進。

「ツ!」

フリユネの驚愕を他所に、ベルは更に加速する。

愚直な前進に、巨女はほんの僅かに動揺した。してしまった、それが攻撃を鈍らせる。

繰り出された剛腕の一撃がぶれる。大振りの一撃の為に開かれた脇に、ベルが飛び込み——駆け抜けた直後、フリユネの剛腕の一

撃が石板群を抉り飛ばす。

その一撃をくしくも回避したベルが、そのまま人形の様に投げ出されたミリアの体に手を伸ばそうとして——ミコトの絶叫に振り返る。

「ベル殿おおおっ!?!」

其処にあつたのは大刃。フリユネが咄嗟に投擲した大戦斧だ。

その大刃はベルを断ち切り、更にその奥、落ちていくミリアを直撃する軌道コースを描いている。

一瞬で背中が泡立ち、ベルが咄嗟に《ヘスティア・ナイフ》を振るう。

フリユネが投擲した大戦斧とベルのナイフが火花を散らしてぶつかり合い——大刃を上に弾いた。代償として、ベルは殺しきれぬ反動のままに床に叩き付けられる。

「ぐはっ!?!」

「ぐうっ!?!」

ベルが叩き付けられるのと同様、ミコトの体がベルのすぐ横に叩き付けられる。

少年が即座に起き上がって振り返り、少女は即座に起き上がれずに身を震わせる。

視線を向けた先、蒼い宵闇に星々が瞬く風景が見え——ミリアの姿は消えていた。

「まだっ!」

今ならまだ間に合うと、再度駆け出そうとし——それを遮る様に数人のアマゾネスがベルの進路を塞ぐ。

「どけえっ!?!」

「はははっ、後ろに気を付けた方が良いぜえ?」

立ち塞がる数人のアマゾネスの言葉、そして背中に感じる圧に振り返った瞬間、剛腕の一撃がベルを捉えた。轟音と共に、ベルの体が儀式場に埋まる。

静寂が場に満ちる。

L v . 1 の春姫には何が起きたのか理解する事も出来ない程の刹

那の間に、状況は決した。

投げ落とされた器は、大地に叩き付けられて潰れたトマトのようになっていた事だろう。

「ゲゲゲゲゲツ?! 無駄だったねエツ?!」

愉悦から大哄笑を響かせるフリユネに、ベルが震えながら自身の体を地面から引っこ抜き、震える瞳でミリアが落ちていった先を見た。積み重なる殴打で動けないミコトも同様に、歯を食い縛ってそちらを見ていた。

「ゲゲゲゲゲゲツ?! おいお前達い、落ちちまった抜け殻がどうなったか教えてやりなあ?!」

「ああ? しかたねえな」

一人のアマゾネスが庭園の隅から下を覗き込むべく足を向ける。

それなりに戦慄的な前座だったと、既に終わった積りのアマゾネスが警戒心を薄れさせて行動不能に陥ったベルとミコトを取り囲む。

「ゲゲゲゲツ、頑張ったみたいだけどお、駄目だったねえ?」

心も折れただろう、とフリユネが二人を見下ろす。

祭壇の上で鎖に繋がれ動けない春姫はただ涙を零し続けた。

ベルとミコトが血が滴る程に拳を握り締め、手遅れの現状を嘆く。

もったいぶる様にアマゾネスの一人が庭園の端に辿り付き、真下を覗き込もうとし——ゴシヤツという鈍い音を立てて、そのアマゾネスの頭部に槍が突き刺さった。

「——シエリイッ!」

「何が起きて——」

瞬間。

庭園の外側、足場も何もないであろう場所から一人の狼^{ウエアウルフ}人の少女が飛び出してくる。

背中にアマゾネスの少女を乗せ、左手でミリアの首根っこを掴んだ彼女は、庭園端で頭部に槍を受けて即死したアマゾネスのすぐ横に降り立ち、不機嫌そうな表情で呟く。

「ウチの副団長を投げ落とした馬鹿はどいつだ」

口元から飛び出す程に鋭さを増した犬歯、研ぎ澄まされた様な爪、

月明かりを受け、獯猛にギラつく瞳。

獣化スキル『ウールフヘジン』の効果を受けているらしい狼人。

———ファイア・クーガと、その背に捕まるサイアの登場にベルとミコトは奥歯を噛み締めた。

槍を引っこ抜き、サイアにミリアの体を預けた彼女は眉を顰めつつもフリユネを真っ直ぐ捉え、獯猛な笑みを零す。

「フリユネ・ジャミール……見つけたア！」

第一七五話

第三区画。

「イシュタル・ファミリア」の領域内の玄関口にて、男性客たちが恐怖に表情を強張らせながら集まっていた。彼らの視線の先、歓楽街への出入り口の一つである門にはとある派閥のエンブレムを掲げた完全武装した冒険者が立ち塞がっている。

「おい、出られないってどういう事だよ」「中でなんか抗争もあるみたいだし、本拠に帰らないと主神が……」

「黙れ、貴様らの事情など知った事か。誰一人此処を通すなど女神が告げた以上、此処は通さん」

戦女神の側面像プロフィール——「フレイヤ・ファミリア」を示すエンブレムを掲げた冒険者の威圧的言動に、誰しもが言葉を失い、ほんの僅かに恐怖心で身を強張らせて黙り込む。

突然、「フレイヤ・ファミリア」の冒険者達が、「イシュタル・ファミリア」の領域である第三区画を包囲し始めた事に気付いた男性客たちは、抗争の気配に気づいて大慌てで歓楽街を出ようとした。しかし、彼らが去るより前に包囲は完成し、何人たりとも出入りを禁じられてしまったのだ。

抗争の始まりは確定付けられ、「イシュタル・ファミリア」側の眷属達が慌ただしく動き回る姿も見える。

そんな玄関口で行われているやり取りを隠し見ていたメルヴィスは僅かに身を震わせて物陰に隠れ、後ろに続いていた仲間視線を向けた。

「——「フレイヤ・ファミリア」が封鎖してる」

「本当か？」

人質として捕まっていたところを仲間救助され、自らの足で脱出を試みようとしていた彼女達。

タケミカツチの眷属三名と共に外周部まで密かに辿り着く事には成功したのだが——「フレイヤ・ファミリア」が包囲網を敷いており、なおかつ外部へと脱出不可能だと知った。

現在この歓楽街はフレイヤ派閥の冒険者が外周部を完全封鎖し、出入りを禁止している。それが何を意味するのか——都市最強派閥が何を考え、そのような行動に出ているのか想像もつかない。しかし、一つだけメルヴィス達もわかる事がある。

「外に出れない、このまま此処で待機するのは危険過ぎるでしょう。戻ってヘスティア様達と合流しましょう」

此処に来るまでに相応の時間を使った事を気にしつつも、彼女達は物々しい雰囲気で歓楽街側から外を睨んでいる戦闘娼婦達の死角を掻い潜り、宮殿方面へと足を向け——顔を引き攣らせた。

——宮殿の後方、空へと打ち上がる青の光弾。

それは、レーネ・キュリオという強敵が『人質』であるメルヴィス達の『殺害命令』を意味する光弾だ。

「不味い、急いで合流しましょう！」

その場に居るLv. 3は暴走状態に等しいイリスのみ。他は全員がLv. 2であり、とてもではないがああ鞭を振るう女戦士と刃交えるのは難しい。かといって、外周部を封鎖する「フレイヤ・ファミリア」と事を構えるのは得策とは言い難い。

メルヴィス達は仲間との合流を目指して駆け出した。

空中庭園。

集まっていた戦闘娼婦達が油断なく、そして殺意に満ちた瞳で乱入者を出迎える。

血に濡れた槍の穂先が床を擦り、姿勢低く前傾姿勢をとり、好戦的かつ獰猛な笑みを浮かべたフィアは仇を討つ機会だとフリユネを鋭く睨み、その足元で倒れているベルとミコトを見て舌打ちを零した。

その様子を見たフリユネが肩を震わせて笑う。

「なんだい、死んだと思ってたけど生きてるなんてしごとい不細工だねえ〜」

まるで油虫の様にしごといねえ、不細工だからだろおねえ？ と挑発する様にフリユネがサイアを嘲笑する。その挑発に対しサイアは

特に反応せずにミリアの頬を叩いて目を覚まさせようとしていた。

僅かにフリユネが舌打ちを零し、標的をもう一人の狼人に向けた。

「まあた犬ところだなんてねえ。今度は尻尾巻いて逃げ出さなくて良いのかあ？」

仲間が死に掛けているさ中に心折れ逃げ出した狼人に対する挑発。

ファイアの眉間に深い皺が刻まれ、青筋立てて震える唇を噛み締め、ファイアが口を開く。

「るせえな、黙って殺されてろよヒキガエルが」

「自分の立場がわかってないんじゃないかあ？ 人質がどうなつても良いんだねえ？」

自分達の優位性を示す様に、フリユネがそう呟けば傍にいたアマゾネスが青い閃光弾を見せつける。

「これが上がったら人質をぶつ殺す事になってるんだよお。わかったら武器を捨てなあ！」

『獣化』——それも満月によって最上の超々高補正を受けた狼人。その姿にフリユネは警戒心を剥き出しにして無力化を図るべく口を開く。

港町での出来事がアマゾネスの長にほんの僅かな警戒心を抱かせていた。

蛙女の言葉にファイアが不機嫌そうに鼻を鳴らし、槍の穂先を揺らし、て動揺しはじめる。

人質を盾に取られてしまえば何も出来ない——それを示す様に揺れるファイアの様子に仲間を一人殺されたアマゾネス達が殺気を零して待ちきれぬと言わんばかりに一歩足を進める。

「ファイアさん、人質は神様達が解放してます！ 人質の心配はいらないです!!」

加減されていたとはいえ第一級冒険者の一撃を受けて立ち上がれなくなっていたベルが叫ぶ。

ミコトがほんの僅かに目を見開き、ファイアの口が裂ける様に吊り上がる。

「へえ、良い事聞いちゃったなあ」

人質が居ないのなら、枷は無い。その事実にはファイアが穂先をアマゾネスの一人に向け——フリユネが哄笑を響かせた。

「ゲゲゲゲッ、馬鹿言ってるんじゃないよお。ベル・クラネルウ、アンタも今は人質だろお？」

フリユネの足元で倒れ伏すベルとミコト。

ファイアと少年少女を遮る様にアマゾネス達が壁となり障害として立ち塞がる。

更に付け加えるならば、ファイアの背後には逃げ場はなく、庇う対象としてLv. 2の、この場では足手纏いにしかならないサイアに、意識の無いミリアの二人が居る。

状況が悪い。それでももう逃げないと覚悟を決めたファイアが。目の前の戦闘娼婦の壁を越えて倒れる二人の救助をどうするかを迷い

それは、突然の事だった。

「人質はもう居ない。それは本当に良い事ね」

第一級冒険者の動体視力を以てしても、彼女の姿は忽然と虚空から姿を現したかの様にしか見えなかった。フリユネの目の前、倒れ伏すベルとミコトの体に手を伸ばし服を掴んでいる小柄な少女。つい先ほどまで影も形も無かった筈の———それどころか抜け殻と化していた筈の、小人族。

月明かりを受けて煌びやかに輝く金髪、ボロボロのローブ、摺り切れた革靴。左手の竜鱗の朱手甲が淡く輝いている———それ以上に、その少女の頭部と尻尾に視線が集まる。

「———な、あつ!？」

「二人は返して貰うわね」

フリユネが即座に掴みかかろうと手を伸ばし———三人の姿が掻き消えた。

「何いいっ!？」

反応できたのは第一級冒険者のみ。その蛙女ですら、その動きを見切れなかった。

フリユネの目には、三人が忽然と姿を消した様にしか見えない。

戦闘娼婦パルベラの人垣はファイアの方を見ていたからこそ、殆どのアマゾネスは何が起きたのかと後ろを振り向き、倒れていたはずのベルとミコトの姿が消えている事に目を見開く。

全てを見ていたファイアですら何が起きたのかわからず、目を擦り瞬きを繰り返し、自らの後ろに庇っていたサイアと、意識を失っているはずのミリアを見た。

「ベル、ミコト、二人とも生きてるわね」

フリユネの一撃を受けて倒れていたベルも、サミラの猛攻でボロボロになっていたミコトも、突然ファイアの背後、サイアの傍に投げ出されている。

その二人を庇う様に、一人の小人族の——否、ウエアウルフ狼人の幼い少女が立っていた。

「……………【魔銃使い】!?!」「何で生きてやがる!?!」「儀式に失敗したのか!?!」

頭部の獣耳は狼人のソレであり、ボロボロのローブから覗く尻尾もまた狼人のそれだ。その姿にファイアが僅かに驚き、サイアが目を真ん丸にして驚愕する。ベルとミコトは手遅れだったはずのミリアが平然としている様子に驚愕した。

戦闘娼婦達が驚愕からざわめくその奥、春姫は啞然としたまま鎖に繋がれる。

「……………何故生きてるウ!!」

まるで瞬間移動の様な事をしでかした人物。先の狐人ルナールに変化した様に狼人ウエアウルフに変化しているミリアの姿にフリユネの青筋がありありと浮かぶ。

対する儀式の生贄に捧げられ魂を抜かれたはずのミリアは口元に笑みを浮かべ、肩を竦めた。

「……………さあ? 私にもわかんないわ」

——何故、生きているのか。

そう問われても困る。

全身の皮を引き剥がされるような激痛を味わったかと思えば、自身の体が全く動かない金縛り状態に陥ったのだ。

意思に反して動かない身体。何故だと疑問を自身にぶつけつづけて一分程、サイアに頬を叩かれている内にベルが既に人質が救助されたと叫んだのが聞こえ——クラスを変えたらあつさりと動ける様になった。

「とぼけるんじゃないよオ!？」

響いた怒声に眉を顰める。

本当に、本当にわからんのだからとぼける他ない。

実際、全く意味が分からない状況に陥っているのだから。

俺のクラスは『狙撃手』と『人形師』ドールズだったはずだ、しかしクラス

チェンジした結果———なんでか『強襲型』アサルトになった。

本当に、自分でも意味が分からない。

それに、初めて『満月』での『獣化スキル』で心がざわめく。自身の内側で何かが暴れ狂ってる感覚がする。それが何かはわからないが、魔力が満ちる感覚は悪く無い。

「チイツ……イシユタル様が急かした所為で失敗したじゃあないかあ!？」

儀式に失敗したから、俺が生きている？ そうとは思えないが———さて、状況の再確認だな。

まず、敵対者達。

L v. 5 アンドロクトノス【男殺し】フリユネ・ジャミール

L v. 3 アンティアーネイラ【麗 傑】アイシヤ・ベルガ

幹部級のサミラ以下五名。

L v. 3 の上位戦闘員百名ほど。

L v. 2 の下位戦闘員十名ほど。

後は戦力外のL v. 1、春姫。

対し此方の戦力。

L v. 3 リトル・ルキー【未完の少年】ベル・クラネル

L v. 2 ヤマト・ミコト【絶†影】ヤマト・ミコト

L v. 3 ファイア・クーガ【蒼空裂砕】ファイア・クーガ

L v. 2 【幼豪】サイア・カルミ

L v. 3 【魔銃使い】ミリア・ノースリス

……………。

フィアは『獣化』でL v. 4に喰らい付く程度には強くなってるだろうが……ベルとミコトは満身創痍。

次にサイアも再生したてだろうし戦力になるか不明。

最後に俺、自身の状態が完全に不明。生贄に捧げられたけど無事でした、だけならまだしもクラスが設定されたモノと違う——むしろそのおかげであっさりベルとミコトを救助できたので悪い事ではないが。

それに、『クーシー・アサルト』になったおかげで、『ウールフヘジン』もどきの月光を浴びる間、発展アビリティ《精癒》が発現してるのと同程度ぐらいに魔力が回復していくのもあつて、やりやすそう
だ。

それでも、戦力比は圧倒的に相手が上。まともなぶつかりあつて勝てる訳も無し。

「ミリア、無事、だったんだ……」

「……まあ、多分ね」

ベルの言葉に曖昧に笑みを浮かべ、フィアの後ろに付く。

「サイアさん、ベルとミコトをお願いします」

「え、ああ、うん……えっと、副団長、大丈夫？」

大丈夫、かどうかはさっぱりわからん。それでも、反撃の機会だ、逃す訳にはいかない。

この機会を活かさんと武器を構えた所で、春姫の声が響いた。

「今すぐ、今すぐ『殺生石』を取り返してください！」

悲痛そうに、未だに祭壇で生贄に捧げられる寸前にも拘わらず、他者を慮る事を口にする。心優しい、他者を想う事が出来る、少女だ。

——人質と言う名の柵しがらみが消えた今、すべきことはそう多くない。

春姫を救って、それから序に『殺生石』も取り返せたら取り返すぐらいの感じで良いと思う。少なくとも今の所、命に関わりそうな不快

感は無^レいし。

【散^{ショットガン・マジック}弾魔法】の【二^{デュ}丁^ア持^ルち】で両手の指先に大き目の魔法^銃円^口を生み出し、フリユネを真正面から睨み付ける。

「状況がわかんねえけど、副団長は無事^ツって事で良いのか？」

「ええ、そう思^ツって構^ワわないわ」

「……違います！ ノースリス様は魂の一部^ヲを奪^ハわれているのです！

早く取り返^シしてください!」

ベルとミコトが僅かに動揺し、ファイアが尻尾を揺らす。

後ろでサイアが持ち込んだらしい万^{エリクサー}能^ヲ薬^ヲをぶっかけているのを見て、溜息一つ。

春姫の願^ヒいは、自身を見捨^テてて俺の『殺生石』を優先^シして欲しいというもの。

対し、俺達の願^ヒいは春姫を救^フう事……後、フリユネをぶつ殺^スす事だ。

「シエリイを殺^シしやがったんだぞ」「犬^ノつころ、てめえは此^ノ処^ヲで殺^スす」

「逃^ガがさない」

殺^シ気^ヲ立^ツつ戦^バ闘^ベ娼^ラ婦^ヲ達。そんな彼女ら^ニ対^シしてファイアが鼻で嗤^ツつた。

ファイアの足元に転^ガる頭^ヲ部^ヲを粉^チ砕^カされたアマゾネスの軀^ヲ――

シエリイという名^ヲだ^ツたらしい軀^ヲを、怒^リり心^ノ頭^ノの狼^ノ人は蹴^リとばし、戦^バ闘^ベ娼^ラ婦^ノ人^ノ垣^ノと俺^ノ達^ノの間に転^ガがす。

既に体^ノの血^ガがあらかた^ニ抜^ケ落^チた後^ヲだ^ツたのか、僅^カかに血^ヲを零^シ止^メま^ツったその軀^ヲを見て、戦^バ闘^ベ娼^ラ婦^ノの部^ヲが吠^エえた。

「フリユネ、アイシャ!」 仲間^ヲを殺^サれたんだ、こいつ^ヲらを殺^サせろよ!
!」

「ああ、我^ノ慢^ナらねえ!? 殺^シして良いよなあ!」

―― 先^ニ、手^ヲを出^シてきたのはお前^ノ達^ノら^ノうに。

「……ミリア・ノースリスは生^キけ捕^メりにして、他^ハは好^キにしなア」

この期^ニに及^ンで^ナお、俺^ヲを生^キけ捕^メり。成^ル程、舐^メめ^ラれて^る。

だが、それ^ノほど^ノま^デに戦^力比^ガある^ノだから、仕^方ない^ノだが。

「ベル、もう大^ニ丈^フ夫[?]？ 戦^エえる?」

「うん、ご^メん……」

「……自分^ノも、戦^イいます」

「わたしも戦うよー」

サイアが持っていた万能薬で完全回復したベルとミコト、そしてサイアがファイアと肩を並べ武器を構える。

春姫の懇願が響く中、仲間を殺されて殺気立つ戦闘娼婦が武器をこちらに向けて——此方を完全に見下して嘲笑するフリユネが、腕を振り下ろした。

「……………殺っちまいなア!？」

巨女の大号令。

圧倒的戦力比を以てして、此方をただ蹂躪する為だけに、一斉に残る四十が祭壇周囲を警戒している。四十が壁として立ち塞がり、フリユネはその場から動かずに高見の見物だろうか。否、俺の動きをつぶさに観察してきている、最初の『短距離転移』で警戒されたか。

アイシヤは祭壇の傍でL.V. 2の者達を引き連れて警戒しているのみ。彼女は祭壇の防衛が目的だろう。

一足早く、最も敏捷の早いベルが戦闘娼婦の群れに突っ込み、二振りの短剣にてその隊列を刻み抉じ開ける。続くファイアは——空を駆けた。

文字通りだ、跳躍したと思った瞬間、彼女は何も無い空間を蹴って更に上昇。そこから虚空を踏み締め、上空から凄まじい速度で突きを放ち、瞬く間に数人のアマゾネスの頭部に風穴を抉じ開ける。

「おおおおおおおおおおおっ!？」

「るああああああああああっ!？」

二人に続いて、ミコトがアマゾネスの足を払い姿勢を崩させた所に、サイアの大剣が無遠慮に振り下ろされる。囲まれれば危ないと理解しているであろう二人の連携。というよりはミコトがサイアの為に合わせてる戦い方だ。

その様子を——祭壇の上から見下ろす

「【魔銃使い】が消えたよオ!? 何処に行ったア!？」

フリユネが真っ先に反応する。即座に周囲を見回して、祭壇の上、

春姫の後ろに立つ俺を見て目をひん剥いた。

アサルト・ステップ
『短距離転移』

ミリカンと言うゲームで猛威を振るい、数多くのプレイヤーに消えぬ心の傷を刻み続けた強襲戦法の主要魔法。視界に捉えた対象の傍に一瞬で移動する事が出来る、特殊スキル。

鎖で動けぬ春姫がフリユネの血走った目を向けられて震えるのを見つつ、彼女に謝る。

「五月蠅かったらごめんなさいね……【ファイア】」

春姫の傍、儀式用の剣を手にしていたアマゾネスに至近距離から散弾をぶち込む。

「シャレイツ、後ろだああああああああああつ!!」

異変に気付いたフリユネの怒声が響くが、しかし遅い。振り向いたシャレイツと言う名らしいアマゾネスの胸目掛けて撃ち込まれた散弾は、一切の威力軽減なくそのアマゾネスを吹き飛ばした。

その手から零れ落ちた儀式剣を奪い取り、祭壇の下に居る皆を見下ろして、叫ぶ。

「全員、戦闘を止めなさい」

「ああ? 何を——つ!! 全員、今すぐ止まれエ!!」

アイシヤの大号令に戦闘娼婦パーベラが動きを止め、ベル達が息を整える様にアマゾネス達から距離をとって停止する。

さて、此処で問題。俺の手の中には、儀式用の剣、そして『殺生石』があります。

んで、現在の【イシユタル・ファミリア】の状況を鑑みて、コレがもし今破壊された場合。どうなるでしょうか?

「アイシヤアツ!! 何勝手な事してるんだあああ!!」

「馬鹿か!! あの『殺生石』を今壊されたらどうなると思ってるんだ!!」

怒気を孕ませ喚く蛙女と、冷静に現在の状況を理解して即座に命令を下す女傑。戦闘娼婦パーベラ達も何が起きたのかわからないのか目を白黒させ、俺の姿を見て瞠目する。

「い、いつの間につ!!」「なんなんだあのガキイツ!!」

「ノ、ノースリス様……?」

鎖で繋がれ、耳を塞ぐことができない状態で至近距離で散弾ぶつぱの音を聞かされた春姫が朦朧としながらも俺を見て、はらりと涙を零した。

手にした儀式剣から『殺生石』を外して弄びつつ、フリユネ達を見下ろす。

「クソオ、どんな手品使ったのか知らないけどねエ。「リトル・ルーキー」達を挽肉ミンチにされなくなかったら、今すぐソレを返しなア!」

「あら、お断りよ。それより、全員武器を捨てなさい」
どちらが優位にあるのか、察して欲しいモノだがね。

此処まで派手に暴れておいて、ロキ派、ガネーシャ派が感づいていないとでもいう積りか？ 仲間を、殺されたんだぞ？ 既に俺を『生贄』に捧げたんだろ？

その上で、春姫の儀式に失敗した場合……どうなっちゃうんだろうなあ？

「ガキイ……調子に乗るんじゃないよオ!」

頭に血が上ってるのか、話を聞く気が無いのか。どつちにせよ、巨女じゃ話にならない。

此処から交渉の場に引きずり込みたかったが、無理か。

——と、なると、だ。

「じゃあ、こうするしか無いわけか」

これ見よがしに『殺生石』を手に、大きく振りかぶる。

投手ピッチャー、大きく振りかぶってえー。

「な、何を——」

「私にも同じことしてくれたでしょう？ お返しにね？」

だから、お前も取ってこい。

全力で『殺生石』を投げる。

フリユネ達が居る方向とは違う方向へ『殺生石』が飛んでいき——
フリユネが動いた。

巨体が想像以上の速度で石を追って動き出す。それに続いて戦闘娼婦達も遅れて石ころを追っていくのを尻目に、春姫の腕を掴んで転移バリエーション。

自身と、自身の掴んだ人物や物質も含め転移を行う。普段だったら転移酔いで倒れるだろうが、『ウールフヘジン』の効果で転移酔いは起きない。

一か所に全員を集め、庇護対象の春姫を背にししながら、クラスを『ニンフ』に戻そ——ぐにやりと視界が歪む。

転移酔いは起きないのではないかと不快感を抑えつつクラスチェンジを終え、違和感を感じた。

——シアンスローブ 犬の様な耳と尻尾が生えてる。

……『クーシー・ファクトリー』？ 先ほど『クーシー・アサルト』になっていて、『ニンフ』に戻ろうとしたら『ファクトリー型』になった。

明らかに俺はおかしくなっている。

いや、それよりも早く『殺生石』を破壊しなくてはいけない。

「【ピストル・マジック】【高速弾】——」

詠唱と共に照準を定める。

巨大な蛙女が両手を伸ばし、今まさに捕まんとしていた『殺生石』。その石ころを、撃つ。

「……………【ファイア】」

銃声一つ。

音を置き去りにする高速の魔弾が、フリユネの手に収まりかけた『殺生石』を穿ち抜く。

ガギインツと言う、石の碎ける音。

「——」

手を伸ばし、今まさに捕まんとした姿勢のままフリユネが石材の床を踏み締めて着地した。

祭壇に背を向けた巨女は、その姿勢のまま動きを止め、他の戦闘娼婦バーベラも表情を強張らせて固まる。

嫌な静寂が満ちる。

先までの喧騒が嘘の様に、全員が息を吞んで状況を見守り始め——

——地の底から響く様な悍ましいしゃがれた声が響いた。

「やってくれたよオ……!?!」

一步、一步と踏み締める度に地響きが響いているのではと誤認しそうな程の圧を放ち、巨女が此方を向き、迫ってくる。

フィアが槍を、ベルが二刀を、サイアが大剣を構える。ミコトに春姫を預け、フリユネを見やる。

七十近い悍婦達が怒気を孕ませてフリユネに追従して此方を半包围してくる。背後には何もなく、逃げ場はない。

『アサルト・ステップ短距離転移』で逃げるのも、無理だ。あくまで対象の近くに転移するのであつて、誰も居ない所には転移出来ない。

「ガキイ……よくもお……！」

フリユネの大きな手に残された『殺生石』の破片。溢れ出ていた不気味な赤い輝きの残滓が、霧散し消えていく。

その残滓が巨女の手で握り潰され、フリユネは血走った両目をギラギラと輝かせ、此方を睨む。

「どう落とし前をつけてくれるんだッ、『殺生石』を壊しやがってエ!？」

「逆よ、私を『生贄』にした落とし前を付けただけなんだけど？」

腹の底に響く様な大音声に、ベルがほんの僅かに仰け反りかける。

俺の反論に巨女の顔が真っ赤に染まる。また怒声でも上げるのかと身構えていると、フリユネは別の方向に視線を向けて空気を震わせる大喝を響かせた。

「アイシヤアアアアッ?! 何してるう、早くこのガキ共を八つ裂きにするのを手伝いなア!」

半数近いアマゾネス達も剣呑な輝きを瞳に宿して此方を睨む中、アイシヤは溜息を零して肩の力を抜いていた。

周囲の若いアマゾネスの少女達は絶望した様に表情を青褪めさせ、俺達の包围を行っていない他の戦闘娼婦バトーベラに至っては武器を取り落として頭を抱えて蹲る者すら居る。

「アイシヤ、早く手伝いなア!？」

「……フリユネ、止めにしないか？」

「あア!？」

アイシヤの口から零れ落ちた台詞は、妙に落ち着いていた。

「もう、詰みだよ」

「何を言ってるウ？ たかが『殺生石』を壊されたただけだろオ？ もう一度用意すればいい事さア。それはそれとして、その生意気なガキは皮を剥いで殺してやるよオ！」

「ああ、確かにな……まだ儀式場も壊れてない。『殺生石』があれば、な……」

何処か諦めきったような言い方に、フリユネの額に青筋が浮かぶ。「何が言いたい？」

この期に及んで、まだフリユネは気付いていないのか。

もう、「イシユタル・ファミリア」は詰んでる。

「次の『殺生石』がすぐ手に入ったとしても……次の満月まで一ヶ月だ。その間、春姫の『殺生石』無しで、「ロキ・ファミリア」と「ガネーシャ・ファミリア」を抑えておくって？ 冗談じゃない」

人質は、奪還済み。

ベルがそう言ったのだ、ベルの言う事に間違いは無いだろう。

人質も奪還され、ロキ派、ガネーシャ派の猛攻に一ヶ月も晒される事が確定した。

あるのは、成功したかどうかもわからない俺の『殺生石』のみ。

「詰んでるのさ、もう「イシユタル・ファミリア」に明日は来ない」

絶望して武器を取り落とし、戦意を喪失した戦闘娼婦達は、それに気付いてしまったのだろう。

「フリユネ、お前が無駄に眷属殺しなんてしたせいで……どっちも加減無しで襲ってくるだろうね。港町メレンみたいにな、生きて帰れるとは思わない方が良く」

当然、「イシユタル・ファミリア」に所属する全ての戦闘娼婦も対象だろう。

その説明を聞いたフリユネが身を震わせる。他の戦意を失わなかった女戦士達は武器を手にしたまま固まる。

交渉するなら、今だろうか。折を見て口を開こうとし——先んじてベルが一步踏み出して口を開いた。

「春姫さんを解放してください」

ベルが言葉を放つと同時に、七十近い戦闘娼婦の怒気が復活する。

アイシヤが目を細める中、フリユネが笑声を上げた。

「ゲゲゲゲゲッ!? 面白い事言うじゃないかあ、〔リトル・ルーキー〕!」

心底面白いとでも言いたげに笑い、一拍後にその表情を豹変させる。

巨大な目玉で、今にも射殺さんばかりの眼光でベルを睨み付けた。

「調子に乗るんじゃないよツ、糞ガキがア!? お前は何様のつもりだアア!」

目玉が飛び出るのではないかという程に血走った目を見開き、より一層、蛙の様に見える醜悪な顔でフリユネが吠える。

「それはアタイ達の道具だ!? フレイヤの連中を潰す為のねえ!? 他派閥のもんが口を挟むんじゃない!」

鬪争に飢え、迷宮都市の玉座を目指さんと外法すら手に染めんとする者達に、言葉は届かない。

目の前の武器を手にし続ける戦闘娼婦達パーベラは、むしろ今から起こる口キ派、ガネーシヤ派からの猛攻を耐え凌いでも、春姫を使った儀式の再開を狙っている。

「だったら、他派閥の私に手出しするべきでは無かったわね。語るに落ちてるわよ」

「黙りなアアツ!」

揚げ足をとった瞬間、凄まじい大声量で喚かれる。

凶星を突かれたら即座に大声を上げるのは、妙な自尊心プライドに溺れた奴にありがちな特徴だ。

「そもそも娼婦としても役立たずのその不細工を、穀潰しを養ってやったのは誰だと思ってるんだア……そいつには、アタイ達に体を張って尽くす義務があるのさア」

「それ、私には無かったわよね」

「るさいねえ、ガキは黙ってなア!」

一々、大声量を上げねば気が済まぬのか。

いや、俺もわざわざ見え透いた地雷に足をかけてるから悪いっちゃ悪いが、突っ込みどころが多すぎるのが、悪い。

聞いてて反吐が出る理論だ。身勝手に、誰かを食い物にして、貶める……ああ、こんな奴に、グランもルシアンも殺されてしまったのか。「春姫え？ お前も言ってるやいなア」

本人は猫なで声の積りなのだろうが、聞いてる側からすれば反吐が出そうなしやがれた声に、春姫が息を呑んだ。

「春姫殿」

「春姫さん」

ベルとミコトが、彼女の名を呼ぶ。

春姫は微かに身を震わせると、ミコトの手を押し退けて立ち上がり、自らの身をぎゅつとかき抱いて震える。

「クラネル……様、ミコト様……ノー、スリス様……」

怯える様に、彼女は顔を上げて俺達に視線を向ける。

フリユネの手から離れ、それでも彼女の恐怖から逃れ切れていない春姫は、震える声で告げた。

「帰って、くださいませ……春姫は、大丈夫です」

「そんな、春姫殿!？」

ミコトが春姫の肩を掴み、必死に説得しようとするが春姫は隠し切れない恐怖に揺れる双眸で彼女を見つめ、告げる。

「わたくし私の事は………お願いですから、もうお気になさらないでください」

「どうしてっ!？」

一際大きく、ミコトが叫びかけるのと同時——春姫がミコトを突き飛ばした。

レベル差を考えれば、痛くも痒くもない突き飛ばしに、ミコトが呆然とした表情で春姫から離れる。

俯き、涙を零していた春姫は、顔を上げると慟哭を響かせる。

「ミコトちゃんにはわからないよ!？」

今まで抑え込んでいた感情が決壊した様に、瞳から涙を零して叫ぶ。

「好きでもない人に体を捧げて、売って、お金を貰って!? ミコトちゃんはその自分を許せる!？」

何処か大人びた少女が、童女のように泣き叫ぶ。

「私は、娼婦だよっ!？」

叩き付けられた現実には、春姫が思い悩んでいた事に、その事実には気が付いたミコトが言葉を失って硬直する。

俺は男だから、正直毛ほども気にしない。その手の需要がある以上、売り手が一定数は居る訳だし。だが、春姫には受け入れられなかった。それだけの話といえそうだが……。

駄目だな、俺には説得できそうにない。同情を誘う様に、俺も娼婦だったと嘘を吐いて説得すればなんとかはなるだろうが——俺が嘘を吐く必要は無い。

「英雄譚」

「……え？」

「春姫さん、貴方が語ってくれた英雄の話思い出して、決めたんです……貴方を助けてみせるって」

突然のベルの言葉に、春姫が涙を零しながら顔を上げる。少年は、その年に見合わない程に芯の通った、真っ直ぐでいて、決して揺らがない言葉を放つ。

「なに、を……」

「助け出して、貴方の言葉は間違ってるって……そう言ってやるって決めました」

「っ！ 英雄にとって娼婦は——」

なおも言い募ろうとする春姫に、ベルは微笑んだ。

「知ってます……破滅の象徴なんですよね」

「だったら、どうして……っ」

遮られ、先んじて言いたい事を言い当てられた春姫がうろたえる。

「僕と貴方が憧れた英雄は——そんなんじゃない!」

フリユネ達が鼻で嗤う声が響く。

肩を揺らし、少年が語る青臭い理想像を嘲笑する。

そんな理想を語る事を嗤う醜女どもが、腸が煮えくり返りそうな程にムカつく。

「たとえば娼婦でも、破滅が待っていても、『英雄』は見捨てない!」

少女が息を呑む。

「恐ろしい敵が待ち受けていたって、『英雄』は戦いにいく！」

少女の瞳が揺れる。

「そんな『英雄』に憧れた僕がつ、僕達が貴方を守ってみせる!!」

真つ直ぐ、ただ真つ直ぐ。

怯えも、恐怖も、迷いも、不安も、全てをかなぐり捨ててぶつけられる大言。

人によつては大言壮語だと嘲笑するだろう。けれども、少年の言葉には、不思議な程に説得力に満ちているのだ。少し足りない所も多い、実力だつて不足してる——それでも、成し遂げてしまうのではないかという、何かが少年の言葉にはあるのだ。

「ゲゲゲゲゲゲゲゲゲツ、ガキの英雄気取りかあ!?!」

遂に堪え切れなくなつたとしてもいうように、フリユネ巨女が、アマゾンネス狂戦士共が、哄笑を響かせる。

そして、言葉をぶつけられた春姫は、怯える様に顔を左右に振り、自分を掻き抱いて膝を突く。

「わたくし私はっ……わたくし私は娼婦です!?!」

己に課せられた消えぬ呪縛の言葉。

——俺は、人を騙した犯罪者だ。

「貴方達の重しになりたくない!?! 汚れている私に、そんな価値はない!!」

少女が響かせる哀哭。

俺も、同じように考えている。けれど違う、違うんだよ、その程度の事でベルは止まらない。

「自分に価値が無いとか決めつけるなよ!?!」

少年がぶつけたのは、怒声だ。想いを、その心に抱いたそれを、真つ直ぐ揺らがずにぶつけていく。その衝撃はいかなるものか——
春姫が言葉を失う。

「馬鹿にされても指をさされても、汚れていたって、それは恥ずかしい事じゃない!」

恥ずかしい、とは少し違う。

第一七六話

蒼い夜空に抱かれた金色の望月。

少年の想いを乗せた言葉をぶつけられ、一人の少女が瞳を閉じた。
「春姫、よく考えて答えを出して」

僅かに迷いを残す春姫にそう声をかけ、俺は声を張り上げ、
戦闘娼婦達に宣言する。

「【イシユタル・ファミア】に宣言しましょう。この場で投降するの
なら、助命嘆願をしてあげても良いです」

「はあ?」

「へえ〜?」

訳が分からないとでも言う様にフリユネが眉を顰め、サミラが興味
深そうに口元を吊り上げる。

「未だにわからないですか? 春姫がどんな答えを出したとしても、
この後貴方達は【ロキ・ファミア】、【ガネーシャ・ファミア】の
報復を受けます」

「それがどおしたってんだ?」

「命の保障は一切ありません。ですが、此処で私達を襲わずに逃がし
てくれるのなら、助命嘆願しても良いです」

既に戦意喪失しているアマゾネスが二十人近く居る。加えて、
戦闘娼婦を束ねるアイシャが既に武器を下している現状、残る八十近
い女戦士を交渉で引かせられるかもしれない。

「当然、フリユネ、貴女も対象に含みますよ? どうします? 春姫が
答えを出すまでが期限です」

彼女が答えを出した時、此方に付いていれば助命嘆願してやる。

敵対を続けているのなら、知らん、死ぬ。

次の瞬間、フリユネとサミラ、そして戦闘娼婦達が大爆笑した。

「ゲゲゲゲゲゲゲゲッ!? 本気で言ってるのかア!」

「あっはっはっはっはっはっ! 傑作だなあ、オレ、そんな面白い冗談
聞いたのは初めてだぞお〜?」

肩を揺らして笑う好戦的姿勢を崩さないアマゾネス達。そんな彼

女達とは別に、既に戦意喪失していたアマゾネス達が僅かに顔を上げて此方を見ている。

——想定と違うな。

此処で戦意喪失してくれれば良かったんだが、まだ七十近い戦闘娼婦バーベラが戦闘続行の意思を見せている。加えて、フリユネは自信満々の様子だ。

いくらフリユネでもロキ派とガネーシャ派が同時にかかってくれば一溜りも無いと思うのだが。

「はっ、おいお前達いっ、裏切りたい奴はさっさとあつちに付いちまえよおっ」

思わず、発言者の顔を見つめてしまう。

他ならない幹部が、寝返りを推奨する様な発言をしたのだから。

ミコトやファイア、ベルも含め、全員の視線がその女戦士サミラに集まる。

「ほら、恐いんだろ？ 死にたくないんだろおっ？ 今なら素通ししてやるよおっ」

「何を、考えている訳……」

「あ？ 後ろからいきなり斬りかかれても嫌だろ？ それに——

臆病風に吹かれる様な奴はウチにはいらねえよ」

サミラの発言を聞いた数人のアマゾネスが、恐る恐る此方側に近づいてくる。

それを楽し気に見つめる幹部の姿に、思わず背筋が震えた。

あのサミラと言うアマゾネス、更に彼女に肩を並べる女戦士達。瞳には燃え滾る戦意が漲っていた。

「ほ、本当に助命してくれるの？」

「やったのはフリユネなんだ！ 私達は関係無い！」

ロキ派、ガネーシャ派の報復を恐れ、絶望した幾人かが、地獄に垂らされた蜘蛛の糸に縋りつく。

そんな彼女らに、出来る限り優しい笑みを浮かべて対応する。

「ええ、貴方達が此方に付くのなら、ロキやガネーシャに助命嘆願してあげます」

「イシユタル・ファミリア」は一枚岩ではない。

好戦的に、抗争を求める者達も居れば。非好戦的で娼婦をやっている事だけで満足している者も居る。

主神イシユタルの神意いしによって強制的に最大派閥フレイヤ・ファミリアを滅ぼす方向に向かっているが、その途中でロキ派ガネーシャ派を敵に回す行動フリユネを団長が起した。

その結果、必要以上に敵が増えている現状。更に儀式の失敗によって勝利の目が消えたのだ。

後が無い。勝利の目が消え、迫る報復に怯える者達が出るのも必然。

「どうしますか？ 此方に付くか、彼方に付いたまま滅ぼされるか？」
このままイシユタル派として俺達を襲うのなら、その先に待つのはロキ派、ガネーシャ派からの報復。同胞の命を奪われたも同然の彼らは、ほぼ手加減無しの報復がなされる。その結果、派閥が滅びた後も、彼女らは元「イシユタル・ファミリア」の眷属であったとして二つの派閥から狙われ続ける事になるだろう。

その際、ヘステイア此方側に寝返り助力したという事実は大きい。少なくとも、助命嘆願をすれば命は確実に助かるだろうし、直接手を下したフリユネを除けば罰を無くせる可能性も有り得る。

——地獄に垂らされた蜘蛛の糸に縋る様に、数人の戦闘娼婦パーベラが此方に付いた。

「おいおい、本当に裏切り者が出るとはなあ。まあ、覚悟はしとけよお前等？ オレは裏切り者に優しくしたりなんかしないからなあ？」

幹部サミラの言葉に裏切ったアマゾネス達が身を震わせ、それでも武器を元の仲間に向ける。

裏切りを唆された彼女らの行動を、幹部サミラが面白そうに見つめ、祭壇の傍で十人程の若いアマゾネス達と共に武器を下しているアイシヤに視線を向けた。

「アイシヤ、オマエも裏切りたいなら「リトル・ルーキー」に付いちまえよ。可愛い可愛い妹分達も、もしかしたら助けてくれるかもしれないぜえ？」

「……………」

「アイシヤさん……」

ベルの小さな呼び掛けに、アイシヤは一切の反応をしない。周囲に集まる若いアマゾネス達は、きつとアイシヤを慕う妹分達なのだろう。彼女らは不安そうに身を寄せ合い、アイシヤを伺っている。

彼女の腕は震えていた。大朴刀の切っ先が震え、地面と触れ合いガチガチと音を立てている。堪える様に、耐える様に、女傑はただ動きを止めていた。

そんな様を見て、フリユネが哄笑を響かせる。

「ゲゲゲゲッ!? どいつもこいつも不細工は大変だねえ!」

「フリユネ、貴女も助命を乞うなら今ですよ」

実行犯であるお前が処刑されない理由は何処にもないがな。

それでも、このまま戦闘を開始するよりは、回避する方向でいきたい。少なくとも、今は、本当に戦闘を回避したい。

儀式を終えて、己の状態を再確認しているが——クラスが上手く切り替わらないのだ。

どうにか出来ないかと悩みながらも、それを悟らせぬ様に笑みを張り付ける。

「馬鹿だねエ? アタイの美貌にかかれば、フレイバー【勇者】も エルガルド【重傑】も、

おうじや【猛者】ですらも一ころだよお」

——はあ?

自信満々に胸を張って言い放たれた言葉に、思わず啞然としてしまう。

フィアやサイア、ミコトに、ベルも、皆が顔を引き攣らせて沈黙する。対する戦闘娼婦達は僅かな嘲笑を零してやれやれと肩を竦めるのみ。慣れきっている彼女らの反応から察するに、常にこんな態度なのだろう。

本気で言っているからこそ、余計に性質が悪い。

「イシユタル様の無茶振りの所為で儀式にも失敗しちまったし、もうこの派閥は駄目だねえ」

「おい、フリユネ、そりやあどういう意味だ？」

「そのままの意味だよお？ やっぱりあんな不細工な女神は駄目だねえ」

自らの主神に対する侮辱を繰り返すフリユネの姿に、思わず眉を顰めた。

「え……イシユタル様は貴方の主神じゃあ」

「ゲゲゲゲツ、なんであんな不細工な女神を敬わなきやいけないのさあ？ アタイの方が美しいっていうのに偉そうにしやがってえ、ずううつと前から気に食わなかつたんだよお」

ベルの眩きに、フリユネは哄笑と共に答えた。

自意識過剰。自尊心の塊。そして、本気で自分が美しいのだと思いつ込む精神異常者。むしろ、その精神性こそが彼女が第一級冒険者にまで至った要因とも言えるのだろうが、それでも侮蔑に値する。

「本気で言ってるのなら、随分とまあ……狂氣的ですね。派閥が滅びるんですよ？ 少なくとも、派閥解体は免れないでしょうに」

その顔で、その醜悪な容姿で、よくもまあそこまで……。

派閥解体か、そうでなくとも弱体化するのは確実。勢力として最低限を残して手足を挽がれるも同然だ。返り咲こうなんて考える事も出来ないぐらい、派閥として弱体化するのは確実だろうに。

その過程で、下手な抵抗なんかした日には……命の保障は何処にも無いと思うのだがね。

「こんな派閥が滅びようが知ったこっちゃ無いよお？ むしろ、アタイを見下すあの醜女が零落れるなんて良い事じゃあないかあ」

——は？

『はあ!?!』『何言ってるんだフリユネ!?!』『どういう積りだあつ!!』

団長の発言に、戦意を漲らせていた戦闘娼婦達が吠え狂う。

「不細工なアンタ達と違ってえ？ アタイ程の美貌だと引く手数多あ。わかるだろお？」

いや、さっぱりわからん。

割と本気で、この巨女が何を言っているのか理解が出来ない。こいつは何を言っているんだ？

「不細工なうえ、馬鹿で愚図だなんて救い様が無いガキだねえ？」

酷い言い様だが、本当に彼女の考えは理解できない。

少なくとも、同じ次元に居るとは思えない。何処をどう考えれば『こんな派閥が減びても知らない』などと言う発言が出てくるのか。

「ゲゲゲッ、アタイにかかれれば不細工で平たい女神から【勇者】を寝取るなんて一瞬だよお。なら後は簡単だろお？」

絶対に無理だ。

もしフリユネが美少女だったとしても、フィンの傍に控える女戦士テイオネが絶対に許さないだろうし。

「乗っ取れば良いのさア！」

……………えつと？

思わずベル達の様子を伺ってしまふ。春姫ですら啞然とした表情でフリユネを見つめる中、その巨女は自信満々に己が計画を語る。

「アタイの美貌でガネーシヤを墮としてこの都市を支配するのも良いねえ？ 春姫も【魔銃使い】も、どっちもアタイが頂くう、それでアタイが仕切る派閥でもう一度『儀式』を行うのさあ〜？」

不細工なアンタ達では絶対に達成不可能だろお〜。と大哄笑を響かせる巨女の姿に、俺達は完全に言葉を失っていた。

精神性からして、もはや人ではなく化物のソレではないか。本当に、本気で、理解できない思考回路をしている。

派閥ファミリア一丸となって都市の、民衆の平穏を守る事を考える象神様ガネーシヤが、たかが誘惑で墮ちる訳が無い。

一族の悲願を掲げ、歩み続ける小人族の希望が魅惑程度で思想を変えらる訳が無い。

最上級の侮辱ともとれる発言を繰り返す巨大な醜女に、最も慕う女神ロキを侮辱されたフィアとサイアの目付きが一変する。肉の一欠けらすら残さずこの世から消す、と憎悪滾らせる二人。

——だが、それ以上に激昂している一団が居た。

「なあ、フリユネ……………」

「なんだいサミラあ？」

「お前の考えはよお〜〜〜分かった」

いつの間にか、フリユネの周囲に居たアマゾネス達が距離を取っている。

ぽつかりと空いた空間の中央。アマゾネスの人垣がフリユネを取り囲んでいた。

ベルが僅かに身動きし、悍婦達が纏う怒気に思わず俺達も怯む。春姫が答えを出すまでのほんの僅かな時間稼ぎの積りが、巨女はとんでもない地雷を自ら踏み抜いてくれやがった。

「今から、オマエも、テキだ」

『殺す』『イシユタル様への恩も忘れやがって』『死ねヒキガエル』

「はあく、アタイの美しさに嫉妬する不細工共は本当に面倒だねえ――」

ほ、本当にフリユネの思考回路が理解できない。

今まさに【イシユタル・ファミリア】を『捨てる』発言をした。その結果、どうなるのかを考えなかったのだろうか。そこまで考え無しだとは思えない。何か策があつて言つてるのだろうか？

「今からイシユタルなんて捨てて、アタイに協力するつて言うならあゝ。仕方ないから不細工で弱つちいお前達も連れてつてやるよお。どうするう？ サミラアゝ？」

本気で、本気で言つてるのかこいつ。

自分に付いてくれば何の問題も無い。そう言っているのだ。本気で……狂つてる。

「悪いが、イシユタル様には恩があるんでな。そつちの裏切り者共と違つて、オレは最後までイシユタル様に尽くす」

成る程。と思わず納得してしまった。納得、出来てしまった。

サミラ達は、イシユタル様への恩を忘れていないのだ。己の生存より、其方を優先している、ともいえるか。少なくとも、傍から見れば嫉妬に狂う迷惑極まりない恐ろしい美神であつたとしても、彼女らからすれば従うに値する女神だつたという訳か。

「ああ、そうかいなら――アタイに従わない奴は全員殺す！」

ズガンツとフリユネが石板を踏み抜いて衝撃波を散らし、俺達の後ろに庇われている春姫を睨んだ。

「春姫え」

他者と比べ異常に大きな頭部、横に裂けた分厚い唇、ギョロギョロ蠢く血走った眼玉。ヒキガエルを思わせる容姿をした、元派閥団長。「イシユタル・ファミリア」と決別し、己が道を行くと宣言した愚かで醜い巨女。わかっているだろうな、と少年越しに春姫の名を呼ぶ怪物。

全身を震わせた春姫が静かに詠唱を開始した。

「——大きくなれ」

堪える様にミコトが震え、ベルが僅かに拳を強く握る。

フリユネだけは僅かに口元を歪め、自らの思惑通りにいくと疑う事もせずにベルを嘲笑していた。

今、この場において、春姫が魔法をかける対象が誰なのか——それが彼女の答えになる。

「ゲゲゲゲッ！ 春姫え、アタイに魔法をかけるんだよオ。オマエみたいな役立たずの不細工でも、アタイの糧になれるんだよお、嬉しいだろオ？」

交渉の積りなのだろうか。

その台詞を聞いて、フリユネに付く者が居るなら見てみたいものだ。

「其の力に其の器。数多の財に数多の願い。鐘の音が告げるその時まで、^{えい}栄華と^{げんそう}幻想を」

祈る様に、差し出す様に、春姫がその両手を前に突き出し、詠唱を響かせる。

春姫の歌声が響く中、フリユネが一人の戦闘娼婦から新しい大戦斧を受け取った。

呼応する様に、戦意漲らせたアマゾネス達が各々の武器を構え出す。

春姫がどんな答えを出したところで、俺達を殺す積りだろう。仲間の仇討の積りだろうか、だとしたら、身勝手が過ぎる。

「——大きくなれ」

獲物を打ち鳴らす女戦士の軍団に、ベルやファイア、ミコトがより一

層警戒を深める。

武器を構えもせず、ただ成り行きを見守っていたアイシャが気付いたのか、目を見開いていた。

「神饌かみを喰らいしこの体。神に賜たまいしこの金光こんこう。槌へと至り土へと返り、どうか貴方へ祝福を」

——春姫の『魔力』が向けられた対象が、同胞ファミリアではなく一人の少年である事に。

アイシャはその事を仲間にも伝えるでもなく、僅かに口元に笑みを浮かべてベルと俺に視線を向けてくる。

その目に宿るのは覚悟か諦めか、何を思っているのかはわからないが、何事かを呟いて周囲のアマゾネス達が僅かに目を見開くのが見えた。

「春姫、遠慮はいらないわ。全部ベルに賭けて」

ベルの直上、魔法マジックサークル円と見紛う紋様の渦が作り出される。

フリユネが驚愕の表情を浮かべる中、少年はより強く《へステイア・ナイフ》を握り締める。

形作られた円柱——柄の無い槌。それが照らし出すのは一人の少年だ。

「——大きくなあれ」

詠唱の最終段階。

温かな光が少年に降り注ぎ、少女は僅かな微笑みを少年の背に向ける。

遅れて事態に気付いたサミラ達が飛び掛かろうとし——一人の女傑が立ち塞がった。

まるで春姫と悍婦達の間を切り裂く様に、大朴刀を振り抜いて一条の線を引いたアイシャ。

アマゾネス達が驚愕に染まる中、少女の唇から魔法名が紡がれる。

「ウチデノコツチ」

燦然と輝く光の槌が落ち、ベルの全身を包み込んだ。

光の本流が齎すそれは、『ランクアップ』。

制限時間内に限り対象のLv.を一段階上昇させる。最大派閥フレイヤ・ファミリア

打倒に届きうると女神イシユタルが判断し、ひた隠しにされ続けた魔法——
『階位昇華』。

フリユネはただ硬直していた。他のアマゾネス達はアイシャが立ち塞がった事実に見開き止まっている。

「へえ、まあアイシャならそうするよなあ〜?」

幹部サミラの言葉に、アイシャは震える腕を抑え込みながら、肩越しに此方を振り向く。

「春姫……聞かせてくれ」

イシユタルに、フリユネに深く刻まれた傷トラウマを抑え込みながらの問いかけに、春姫が僅かに目を見開き——その答えを、その想いを、言葉として紡ぐ。

「もう、体を売りたいくない……! もう、誰も傷つけない……!」

紡がれる度、女傑の腕の震えが収まっていく。

「死にたくない……!」

震えが——完全に止まる。

「助けてっ……!」

少年に、女傑に、知己に、一人の少女が助けを求めた。

ファイアが僅かに鼻を鳴らし、サイアが首を傾げつつも頷く。

その光景に愕然としていたフリユネが怒号を響かせる。

「は、春姫えええええええ!」

激昂した彼女が、アマゾネスの集団から一步前に出ると、俺達の最奥に庇われる春姫を睨み付けた。

「アタイ達を裏切るのかア!? 出来損ないの娼婦の癖にイ!」

響き渡る化物の怒声に、春姫は僅かに怯えを滲ませながらも毅然とフリユネを見返し——崩れ落ちる。

「春姫殿ッ!」

「マインドダウンしただけだ、暫くしたら目を覚ます」

ミコトが春姫を抱え、アイシャが心配ないと断じ、フリユネと向き合う。

真っ赤に染まった顔中に青筋が浮かび上がり、今にも飛び掛からんとする化物を前にし、アイシャが口元を吊り上げた笑みを浮かべて、

声を張り上げた。

「リトル・ルーキー」、【魔銃使い】、虫の良い事を言ってる自覚はある。だが話を聞いてくれ」

「何ですか、アイシャ・ベルガ」

「アンタ達に加勢してやる。だから——妹分^{レナ}達は許してやってくれないか」

此方から交渉した内容。積んでしまった【イシユタル・ファミリア】と言う沈みゆく船から逃げ道を作り、裏切りを唆^そした積り^かだったが、内容は少し予想外だった。

「貴女自身は？」

「——この戦いが終わったら、好きにしな。煮るも焼くも……生かすも殺すもな」

その代わり、妹分^{レナ}達は必ず助けて欲しい。

【イシユタル・ファミリア】が犯した取り返しのない罪。妹分達にも等しく分け与えられたその罪を自身が背負うから、彼女らは許して欲しいと。

自らを慕う妹分の若いアマゾネス達を庇う姿。虫の良い話だ——
——だが、良い。

「良いでしょう」

ベルが付与光を纏いながら、アイシャと肩を並べる。其処に不機嫌そうなファイアも加わり、此方に寝返った数少ないアマゾネス達もまた、武器を構えて抗戦の意思を示す。

「アイシャさん……」

「後にしな【リトル・ルーキー】、今はこの場を切り抜ける事だけ考えるんだよ」

「アイシャだったか、テメエは後で半殺しにしてやる」

「サイアさんとミコトは下がって春姫を守ってください。他のアマゾネスの皆さんは防衛優先で、フリユネはベルと私、ファイアさんとアイシャさんでいきます」

対するは【イシユタル・ファミリア】に忠義を尽くす女戦士達。

「裏切り者も含めて全員この場で始末してやる。そのあとはロキ派、ガネーシャ派との抗争だ！ 楽しみだなあ〜!？」

『ああつ!!』『イシユタル様の為にツ!!』『抗争だあ〜つ!!』

—— あ、こいつら狂信者じゃない。狂戦士だ。

血で血を洗う抗争を求め、イシユタルに従っている、生粋の狂戦士達。

俺達を倒したとしても【ロキ・ファミリア】と【ガネーシャ・ファミリア】が報復を仕掛けてくる。それから生き残る為に【イシユタル・ファミリア】を裏切るのではなく、その報復抗争すらも楽しもうとこのまま俺達の殲滅を実行する気だ。狂ってる—— いや、だからこそその『狂戦士』なのか。

「アタイを裏切る奴らは皆殺してやるおおおおおっ!!」

自尊心の塊で、自意識過剰な発言を繰り返して誰からも見限られた巨女が吠える。

ヘステイア勢力、イシユタル勢力、フリユネの三つ巴だ。

全員が武器を構え、今まさに開戦の火蓋が切られ—— その時だ。

「お〜〜い！ 皆あ〜、大変だよお〜？」

素っ頓狂な調子で、雰囲気をぶち壊す陽気な声が響き渡った。

宮殿側から吹っ飛んできたのは、一人のアマゾネス。悠々自適でのんびり屋。鞭を上手く使い宙を吹っ飛ばす少女。レーネ・キュリオだ。

「皆あ〜、どうしたの？ 儀式は？」

「レーネか、どうした」

代表して幹部が反応した。

開戦の空気をぶち壊した彼女は、空中庭園の惨状を目の当たりにして首を傾げつつも—— 超特大級の爆弾を投下した。

「いやあ、【フレイヤ・ファミリア】が襲撃仕掛けてきてるんだけど」

『!?!』

思わず、目を見開いた。

【ロキ・ファミリア】でも【ガネーシャ・ファミリア】でもない。

此処で絶対に名前が上がるとは思っていなかった【フレイヤ・ファミリア】が出てきたことに思わずアイシヤを見る。

アイシヤは僅かに目を見開き、舌打ち。

「レーネは馬鹿な嘘を吐かない……って事は、^{マジ}本当だ」

「どうして、【フレイヤ・ファミリア】が」

「あの女神の考えを理解する方が難しいぜ。それより早くなんとかしねえと——横取りされちまう」

都市最強派閥の乱入の知らせにアイシヤとベルが動揺し、ファイアが舌打ちを零す。

意図を理解できずに困惑する俺達を他所に、サミラ達は眉を顰めて真偽を疑っていた。

「本当かよ、信じらんないぜ」

「いや、嘘じゃないって——ほら」

まるで予期していた様に、ニヘラとレーネが笑みを浮かべた瞬間——

——爆音が響いた。

「……お前の部下がやらかしたんじゃないのか？ オレ知ってるぜ？

お前が裏切る積りでいるのを」

余りにもあからさまなレーネの態度に、まるで予期していた様なその言動は余りにも信憑性を欠くものだった。故に、サミラ達が疑わし気にレーネを睨み——止まらぬ爆音に全員が身を硬直させる。

『——ッッ!?!』

フリユネですらも目をひん剥いて驚愕する中、ドンツドンツドンツと断続的に爆発音が響き続ける。

誰しもが空中庭園から歓楽街を見下ろす。

火の海だった。歓楽街、第三区画の外周部から徹底的に焼き尽くす様な業火が内側目掛け繰り返し放たれ続けている。魔法、魔剣、その他ありとあらゆる攻撃方法を以てして、徹底的な殲滅を行っている派閥が居る。

高々と掲げられたその派閥の徽章は^{エンブレム}——『戦乙女の側面像』^{プロフィール}。

「イシユタル様からの命令でね、今すぐ【フレイヤ・ファミリア】の迎撃に当たれって命令を伝えにきたんだよねえ」

にこやかな笑顔を浮かべ、レーネが宣言すると同時。サミラが大声を上げて剣を掲げる。

「い、今すぐ【フレイヤ・ファミリア】を迎え撃つぞっ!」

「フリユネは!」

「構つてる暇はねえよ!!」

【イシユタル・ファミリア】に尽くすと決めていた戦闘娼婦達が一斉に駆け出していく。

そんな中フリユネとアイシャ、少数のアマゾネスが動かずに居るのを見てレーネが首を傾げる。

気が付けば、イシユタルに忠義を尽くす狂戦士達が消え、場に残ったのはフリユネと、ヘスティア側に与したアマゾネスと俺達。そして、敵か味方が不明のレーネのみ。

「フリユネ、アイシャもだけど、イシユタル様からの命令だよ? ……

なんで【リトル・ルーキー】が春姫の魔法をかけられてるのか知らないけど、儀式失敗したなら早く報告に行かないとおく」

「五月蠅いねエ!」

「レーネさんツ!」

無防備に近づいたレーネの首を掴み、巨女は吠えた。

「あの傲慢な女神の事なんか知りやあしないよお!! それよアタイの命令を聞きなアツ!!」

「……? えつと? 何? イシユタル様の命令に従わないの?」

場違いにも思えるぐらいに、能天気でおっとりしたレーネの問いかけ。

春姫の魔法の効果時間を考えるに、今すぐ仕掛けるべき場面ではあるのだが——動けない。

圧だ、何か悍ましい圧力がレーネから放たれている。

「アアツ? 愚図なレーネにもわかる様に説明してやるよお。【イシユタル・ファミリア】はもう終わりさア〜!! アタイに付いてくるなら愚図で不細工なアンタも使ってやるよお!」

だから、自分に従えと叫んだ彼女は、レーネをこちら側に付きだしてきた。

「あの『リトル・ルーキー』に呪詛カースをかけなア！」

「んー？ んー……？」

二度、三度と小首を傾げてベルと見つめ合ったレーネは、徐にアイシヤに視線を向けた。

「アイシヤ、裏切った？」

「……………ああ、そうだとしたら？」

びっしりと、恐ろしい量の汗を掻いたアイシヤが僅かに身を震わせ、大朴刀の切っ先をレーネに向ける。

「ふうん……私ね？ イシユタル様に裏切り者は殺せって言われてるんだ」

「知ってるよ……」

「皆さ、いつも、いつもだよ？ 私が裏切ったとかなんだとか言ってるんだよね」

——裏切ってるなんていない。

【ウエヌス・ファミリア】の仲間を殺したけど、裏切った積りは無い。今でもウエヌスを敬愛し、仲間だった者達を愛している。

イシユタルの行動を邪魔して『裏切りだ』と罵られるけれど、そもそもお前達を仲間と思った事は一瞬たりとも無い。

「だからさあ、皆が『裏切り者』って言う度にすっごくムカついてたんだよねえ」

ドロドロと粘つくく、一度絡み付いたら二度と剥がれないぐらいに粘着質な、耳に張り付く様な言葉。きつと感情を抑え込み、煮詰め続けたらこうなるのだ。

「何をくつつちやべってるんだ、早く『リトル・ルーキー』に呪詛カースをかけなあ!？」

喧しく大喝するフリユネに、レーネはにこやかな笑顔で振り向き――

——フリユネの顔面に鞭を叩き込んだ。

「フリユネも裏切り者。アイシヤも裏切り者。裏切り者は殺さなきゃね、でも殺す順番までは指定されてないし——まずはフリユネ、お前から殺してあげるっ！」

楽しそうに、嬉しそうに、それでいてねっとり絡みつく様な不快

感を伴うレーネの言葉。

『イシユタル派の仲間には一切手を出すな』と命令され、フリユネの暴行に一切の反抗できなかつたレーネが、今——その枷から解き放たれたのだ。

「あつはつは、フリユネいつも言つてたよねエツ!? 私の事、裏切り者だつてえ——」

完全に虚を突かれ、顔面に一撃を受けたフリユネに対し、レーネは此方を一切気にする事無く背を向けたまま、フリユネを睨む。

「今はお前が裏切り者だねええええッ!?!」

—— 歓喜と狂気の交じり合つたレーネの言葉が響き渡る。

第一七七話

高階のバルコニー。

今まさに爆華を咲かせ業火に包まれる歓楽街を目にした淫都の王であるイシユタルは叫んでいた。

「早く防衛線を構築しろ！ フリユネは何をしている!？」

「フリユネは未だに到着しておりません。今いる人員のみで防衛線の構築は済ませていますが、何分裏切り者のせいで混乱が——」

「私は早くしろと言っているのだぞ!？」

男性団員の報告に感情的に叫び返しつつも、女神はこの状況を知った瞬間を思い浮かべて目を釣り上げた。

——呼んでも居ないのにレーネが戻ってきた。

赤の閃光弾が上がった場合、即座にイシユタルの元へ足を運ぶ様に命令を受けていた彼女は、自派閥が上げたものではない信号を目にして女神の元へ馳せ参じた。

命じても居ないのに足を運んだレーネに対し、イシユタルは激怒する。時悪くベル・クラネルに逃走されて不機嫌な状態であった事もあり、彼女を処分しようかと本気で悩んでいた時だ。

『——「フレイヤ・ファミリア」が歓楽街を包囲してるけど、ヤバくない?』

彼女の放った一言。

その言葉に嘘が無い事に戦慄したイシユタルは、即座に歓楽街を一望できる高階のバルコニーに足を運んで、今の状況を知る事となる。

L v. 3の戦闘娼婦^{パイベラ}は大半が儀式場の警戒に当たっており、本拠内^{パイベラ}部も含め殆どがL v. 2の戦闘娼婦^{パイベラ}か、L v. 1の獣人を中心とした戦闘員を配置していた。

「フレイヤ・ファミリア」が誇る戦闘員、更に幹部である第一級冒険者等の足止め等出来る筈もない。それに気付いてレーネに警戒態勢の変更を行う命令を儀式場に居る主力面子に伝える様に命じて数分。

「間に合わなかったか……!？」

警戒態勢の変更もままならぬままに始まった襲撃に、女神は表情を

歪めた。

爆炎が弾け火の粉の混じる爆風が熱気を伴って高階にいるイシュタルの褐色肌を撫でる。

歓楽街第三区画に侵入する人影——足止めとして飛び出したイシュタル派の眷属達の妨害をもともせず速度を落とす事なく街路を直進し女主の神娼殿ペーレト・パピリを指す冒険者の集団。

それも一か所ではなく全方位から。

都市屈指の大派閥に、宣告も無しに、暴虐的に、理不尽に襲撃を仕掛ける事の出来る派閥。

体面など些事だと切つて捨てる事の出来る派閥。

もし、仮に、そんな派閥が居たのなら、イシュタルはその派閥を『馬鹿な相手』と断じるだろう。

しかし、そんな派閥が存在する。ありとあらゆる派閥の対面を些事だと切つて捨てて、宣告もせずに襲撃を仕掛けるそんな集団——美の女神を知っている。

「フレイヤアアアツ!?!」

月が見下ろす『夜の街』。

至る所で発生する爆発、閃光、悲鳴、怒号にかき消され、淫都の王の絶叫が響いた。

「しゅ、襲撃だ——ツ!?!」

「きゃあああああああああ!?!」

絶叫と悲鳴が錯綜する歓楽街。

月の光の元、魔石灯の明かりとそれを掻き消す爆炎に照らされる派閥の徽章。

黄金の首飾りで縁取られた戦乙女の側面像プロフィール。

「ファミリア」のエンブレムが刻まれた鎧に身を包み、武具を振るう者達が進行を妨害せんと立ち塞がる戦闘員を次々に切り伏せていく。

銀閃、刺突、殴打、爆発。

ヒューマンの剣が、エルフの槍が、ドワーフの戦槌が、獣人の魔法

が、その道を阻まんとした戦闘娼婦を再起不能にし、地に沈めていく。一斉に巻き起こった一方的な蹂躪に、非戦闘員の娼婦達が金切り声を響かせ逃げ惑う。

娼館から飛び出して我先にと逃げようとする彼女達を、彼らは見向きもしない。

魔法の爆炎に煽られて怪我をして呻く娼婦の助けを求める声すらも無視し、目の前に飛び出してきた娼婦を反射的に切り伏せて地に沈めようとも、彼等は止まる事は無い。

武装した彼らは、非戦闘員が巻き込まれようとも微塵も気をかける事無く羽虫を払う感覚でそれらを排し、抵抗する邪魔者は確実に駆除していく。

「此処を通して貰おう」

歓楽街外周部。

「フレイヤ・ファミリア」が敷いた包囲網。

その包囲を指揮していた幹部に一人の小人族が話しかけていた。

「……………勇者」、更に神ロキまで、何の用だ」

「同盟派閥である『ヘスティア・ファミリア』が襲撃を受けて『イシュタル・ファミリア』に囚われているという情報を得た。今からその調査を行う」

「ロキ・ファミリア」団長、第一級冒険者「勇者」フィン・ディムナ。

彼の背後には完全武装した派閥の戦闘員、更に幹部までもが勢揃いしているた。

【重傑】【九魔姫】【剣姫】【大切断】【怒蛇】【凶狼】。

彼らの目的は『イシュタル・ファミリア』の襲撃を受け攫われた「ヘスティア・ファミリア」眷属の奪還』。

突然、傷を癒していたフィン達の元へ現れた藍色の女神が伝えてきた情報。それを聞き即座に動ける戦闘員を纏め、『青の閃光弾』の合図を待ち続けていた。

彼等はその光弾が宮殿より上がったのを確認した瞬間、本拠を飛び出して監視していた戦闘娼婦を潰して即座に歓楽街外周部にまで辿

り着き——「フレイヤ・ファミリア」の包囲網によって足止めされている。

「フレイヤの奴、よっぽど今回の件でブチギレとるらしいくなあ〜」
武装した集団からゆったりとした仕草で歩み出てきたロキは、ほんのりと口元に笑みを浮かべながら「フレイヤ・ファミリア」幹部の青年を見上げた。

美の女神のお眼鏡に適う程の美貌と才能を持つその青年は、他派閥の主神を前にしても毅然とした態度を崩さずに告げる。

「女神の命により、此処は通せない」

此処を通さない。

女神フレイヤが他の神の手が入る事を嫌い、完全封鎖して他派閥の介入を妨害するような真似をしている。

イシユタルが起こした行動がフレイヤの逆鱗に触れたのだろう。だからこそ、派閥としての体裁も何もなく、非戦闘員すらも盛大に巻き込んでの殲滅戦を行っている。

今まさに歓楽街にて立ち昇る黒煙と、未だに続く爆発音からもそれは察する事が出来た。

「はあ〜、フレイヤの気分もわかるで？ めっちゃわかるわあ〜」

「……帰れ。女神の命により此処は通さない。何度頼まれようが知った事ではない」

暖簾に腕押し。一切聞く耳を持たないその青年に、ロキはにんまりと笑みを浮かべ——表情を一変させる。

「フレイヤア……ようやつてくれおったなあ……」

つい三日ほど前、『人造迷宮攻略作戦』の失敗によって痛手を負い、眷属を幾人も失った。

それに加えて、此度の「イシユタル・ファミリア」の襲撃でヘスティアの元へ送り出した眷属の命が失われた。

フレイヤがどれほどの怒りを覚えたのか、どんな逆鱗に触れられたのか等、ロキには関係無い。

——ロキもまた、愛した眷属を殺害されるという、他に無い逆鱗を逆なでされているのだ。

「ロキ、どうする?」

「……」ここでフレイヤと抗争は避けたいんやけどな」

立ち塞がる「フレイヤ・ファミリア」の眷属達。

外周部を固めているのは第三級冒険者や第二級冒険者。内部に対し殲滅戦を行っている主戦力と比べれば劣る者達だ。

「ロキ・ファミリア」の第一級冒険者をぶつけければ、文字通り蹴散らす事が出来るだろう。しかし、それを行えば都市最大派閥である「フレイヤ・ファミリア」と、「ロキ・ファミリア」の抗争の火蓋が切られる事となる。

しかし、それを踏まえた上で、イシユタルには借りが出来た。何が何としてでも取り押さえ、闇派閥イッイルスの情報、人造迷宮クノッソスの情報、そして命を落とした眷属の雪辱を晴らさなければと考える。

「……抗争か」

「ロキ・ファミリア」からすれば、「フレイヤ・ファミリア」が勝手に横槍を入れてきたも同然。しかし、断然行動が早かったのはフレイヤの方だった。

ロキの方は眷属を人質に取られ、内部に侵入した「ヘスティア・ファミリア」が人質の救出を行い『青の閃光弾』にて合図を送ってくるのを待つしか無かったのに対し、フレイヤの方はそんなもの些事である。

「ガネーシャも来とるようなやな」

歓楽街から響く爆音にすら勝りそうな程の大声。

別の場所から聞こえる『俺がガネーシャだっ!』と言う叫びを聞いたロキは頭を掻いた。

「ガネーシャ・ファミリア」と連携して事に当たる方が良いかな——
——イシユタルが天界に送還される前に」

周囲の目を一切気にしない、ド派手な行動で「イシユタル・ファミリア」と事を構えたフレイヤ。

ロキは彼女が確実にイシユタルを天界に送還すると考えていた。

故に、此処で最大派閥同士の抗争を引き起こしてでも突入するか、それとも目の前で情報を握った復讐対象が殺されるのを眺めている

か。

「……ガネーシャン所に伝令を出してや。五分後、仕掛けるで」

「良いのかい？」

「責任はウチがとつたる」

途切れぬ悲鳴と爆音の中、優雅な足取りを崩す事なく歩む異質な女神が居た。

歓楽街の街道。誰に阻まれるでも無く進む足取りは軽く、微笑を携えたその顔は爆炎に照らされ妖艶な彩りを映し出す。

彼女を守る戦士達が彼女に訪れる危険の全てを捻じ伏せ、障害を一つ残らず取り除いていく。

「オツタル様は既に敵本拠に」

「ロキ・ファミア」と「ガネーシャ・ファミア」が動き始めました」

男女二名の眷属を連れて街路を北上する女神、フレイヤは短く「そう」とだけ返した。

周囲にて巻き起こる蹂躪、非戦闘員すら巻き込む惨劇の引金を引いた彼女は微塵も悪びれた様子も無く、不遜に、一切を試みもしない絶対の神意を掲げ、蹂躪劇のさ中を優雅に歩んでいく。

「貴方達も向かいなさい。あの子達は、あそこにいる」

前方、金に輝く外装の大宮殿を銀の瞳が見据える。

空中庭園にて行われた儀式。その様子は図らずとも彼女の瞳に映っていた。その儀式の結果、興味を持っていた魂が引き裂かれる様を捉えていた。

「邪魔する子は全て蹴散らしなさい」

そして何としてでも少年を見つけ、少女を止めろと命じる。

「あの子を戦わせてはいけない。オツタルにも伝えてちょうだい」

一礼した団員達が散っていく中、フレイヤはただ歩みを重ねていった。

戦場の風がふわりと銀の長髪をあおる、絶える事のない剣戟の音、

充満していく血と炎の匂い、それらに包まれながら女神は悠然と大通りの真ん中を進み行き、やがて女主ペーレト・パベリの神娼殿の正面に辿り付く。

開けた前庭の中で、『魔法』で爆破された痕跡が残る正面玄関を認めた彼女は、確信を持って頭上を仰ぐ。

その銀の双眸と、高階のバルコニーから見下ろす紫の双眸と絡み合う。

標的を見つけた鷹の目を思わせるフレイヤの瞳が艶然と細められ

——絶対零度の微笑みを浮かべた。

対し、高階から見下ろす同じ美神は顔を真っ青にして震える。

失われていく魔石灯の明かりに変わる様に、赤々とした炎が歓楽街を照らしていく。

包囲網によって退路が塞がれ逃げ場の無い娼婦達が奏でる甲高い金切り声と、時折響く剣戟の音、未だに響く爆音が奏でる異彩な交響楽団オーケストラが、未だに終わらぬ戦闘を物語る。

広大な迷宮都市オラリオの中で、欲望と姦淫の街が月夜の光を掻き消す程の紅に染まっていた。

「こんなことになってしまふなんて……」

都市を囲む巨大市壁。その南東部から歓楽街を見下ろしていた優男の神が悲鳴めいた声を零す。

背後に従者アスフイを連れ、羽根付き帽子を被ったヘルメスは、市壁の上から血と炎に彩られる歓楽街を眺望していた。

「ベル君の存在をイシユタルに知らせてしまったのは他でもない、オレだ……」

刻一刻と変化を続けていく歓楽街に向かって、ヘルメスは呟く。

「殺生石を二つも運び込んでしまったのも、オレだ……」

胸壁の前に立ち、橙黄色とうおうしよくの髪と瞳を炎で赤く照らされながらその胸を震わせた。

「オレが原因の一端を担ってしまうなんて……ああ、なんてことだ、胸が痛む……」

演劇を思わせる様な大仰な身振り手振りをした後、ヘルメスは胸を

押さえて蹲った。

そんな主神の奇行をアスファイは冷めきった瞳で見つめている。

一際大きな爆発音によって空気が震えるさ中、彼女はおもむろに口を開く。

「で、どこまで計算通りなのですか？」

眷属の問いかけに、顔を伏せていた男神は唇を吊り上げる。

雰囲気を変えてそれまでの芝居がかった仕草を止めると、くるりと振り返りアスファイと向き合う。

「断つておくと、最初からこんなことを望んでいた訳じゃない。ただ、面白そうな事が起こりそうだから、俺は火種を持ち込み、各所に放った……それだけさ」

いけしやあしやあと言い放たれた言葉に、アスファイは眼鏡の奥の瞳を鋭くする。

ヘルメスは種を持ち込み、蒔いた。

あくまで、中身を知らない荷物を依頼通りにイシユタルに届けただけ。

あくまで、不本意なイシユタルの尋問に口を滑らせただけ。

あくまで、身の保身の為にフレイヤにお気に入りの子供が狙われている情報を流しただけ。

あくまでそれだけだ。その中でヘルメスが責められるべき所は無い処か、依頼主を裏切り中身の情報をベルやミコトに提供してあげる善意があった。

ヘルメスは悪びれる事もなく正面を向き直り、抗争という炎に紅く染まる歓楽街を見下ろした。

「神の掌オレの上で踊れ、なんて言うつもりはないぜ。そうさ、全てが予想外だ。ただイシユタルの嫉妬がオレの予想を裏切って遥かに大きく、凄まじく。フレイヤの愛がオレの予想を裏切って遥かに少年かれと少女かのじよに向けられていた」

全て自身の予想を上回っていた結果、早くにことが起きてしまった。

言葉と裏腹に嬉しそうに笑みを浮かべ、ヘルメスは続ける。

「いやあ、ままならない。女神おんなの嫉妬は怖いなあ、アスファイ？」
「……………ミリア・ノースリスに殺されますよ」

心底おかしそうなその声に、アスファイは振り向きもしない男神の背中を見つめて警鐘を告げた。

「ああ、可哀想に。女神の嫉妬に巻き込まれて不幸に陥る彼女を想うと、オレの胸が痛む……………だが、これも必要な事だったんだ。どうかわかって欲しい」

「……………本当に、殺されますよ」

本当に、本気で「ヘステイア・ファミリア」を助ける積りだったのなら。

情報屋を脅してミリアに届く情報に制限を掛ける必要は無かった。

『殺生石』の情報、そこから付随する『儀式』の情報。それを制限していたのは……………」

「……………アスファイ」

不意に放たれた真面目な声色。

固く決意に満ちたその音に、アスファイは口を閉ざし、続きを待った。

「彼女は、ミリア・ノースリスは歪み切ってる。希少な魂レア、そんな言葉ですら陳腐な言葉に成り果ててしまう」

だからこそ、今回の儀式は必要な事だった。とヘルメスは一切アスファイの方を振り向く事無く言い切った。

「彼女には自覚が足りない、意思が足りない、覚悟が足りない」

「恩恵にすら刻まれる家族ファミリアへの愛では足りぬ、と？」

「ああ、足りない」

明確な助言すら与えず、『殺生石』の情報を伝えたのみ。以降は全て少年の意思に委ねた。

ベルが逃走しロキの元へ助けを求めにいつていけば、ミリアが上手く逃げおおせていれば、フレイヤは動く事は無かった。

ベルとミリアの行動次第で……………本人達の知らぬ所で、状況は二転、三転した。

少年は一度決めた事をやり遂げんと行動し続けた。一人の狐人ルナールを救う為に。

少女は動きを鈍らせ、覚悟が揺れ、思考が乱れ、行動は精彩を欠いた。ほんの少し、揺らしただけでソレだ。

足りない。足りない。足りない。

少年の傍を歩み行くには、少女には足りないモノが多すぎる。

ヘルメスの語りに耳を傾けていたアスファイは、ほんの少し間をおいて問いかけた。

「不^{イシユタル・フアマリア}穩分子の壊滅が目的でしたか？ それとも娯楽？ あるいは……試練ですか？」

投じた石の目的を問うたアスファイは、主神の考えを全ては理解できない。しかし、それでも此度の一件によって複数の目的を同時に達成しようとしたのではないかと、おぼろげながらに読み取る。

その眷属の問いかけに答える事無く、ヘルメスは一笑した。

「人も、神々も……あんな一人の女の子だって求めてる。みんなそうさ」

市壁の眼下。

歓楽街で巻き起こる抗争の気配につられて繁華街から通りに出てくるヒューマン、^{デミヒューマン}亜人。

随所で歓楽街の動向を見守る神々。

そして、空中庭園で気を失っている狐人の少女。

それらの光景を目に焼き付けた後——最後に宮殿屋上に戦場を映して巨女と凄まじい戦闘を続けている少年と少女、それらと肩を並べる仲間や元敵を見据えながら、ヘルメスは核心に迫った。

「世界は『英雄』を欲している」

『三大冒険者^{クエスタ}依頼』の最後の一つ、隻眼の黒竜。

都市に蠢く闇^{イヴァイルス}派閥を筆頭とした闇。

そして、全ての元凶——迷宮^{ダンジョン}。

平和な日々の裏側、誰もが目を逸らし見ようとしない、災厄と破滅への爆弾。

世界が切望し続けている『英雄』の誕生は急務である、とヘルメスは断言した。

「世界が望む悲願のため……オレはベル君を選ぶ」

「フレイヤ・ファミリア」でも「ロキ・ファミリア」でもなく？」

「そうさ」

「……ミリア・ノースリスは何のために」

『英雄』を更に昇華させるための増幅装置ブースターかな」

月夜の闇を身に纏いながら、ヘルメスは眷属の問いに即答している。

問いかけが止まり、しばらくしてヘルメスは独白する様に言葉を紡ぎ出した。

「大神、貴方が成し遂げられなかった使命はこのヘルメスが、いやこの地オラリオが成し遂げよう」

口角に笑みを刻み込み、男神は高らかに告げる。

「オレ達が、彼を最後の英雄へと押し上げてみせる」

ふいに、ヘルメスは帽子の鍔を片手で上げ、眼下に広がる血と炎に彩られる歓楽街の光景を見下ろしながら、目を細める。

「そのために……女神イシュタルとその眷属達よ、礎いしずえとなってくれ。なあに、キミ達の死は無駄にはならないさ」

英雄の為ならば。多少の犠牲は容認しよう。

世界の為ならば。ほんの少し人間の命ことどもが散る事も致し方なし。

『英雄』の誕生を為さなければ、『災厄』を止めなければ、世界は破壊する。

今この場で失われた命は無価値ではない。礎を築くためのものだ。

世界を救った後に、本当の平和を成したその時代に生まれ直してくれれば良い。

ヘルメスは、美の神の嫉妬と確執さえ利用してみせよう。その過程で失われる命に弔いを。そして、その過程で生まれおちた憎悪と悲嘆は最後に受け止めよう。

少年と少女の魂を巡り、争乱の場となっている歓楽街を見つめながら、彼は酷薄な笑みを宿した。

「おつと……やはり彼女にはお見通しのようだ。本格的な怒りを買う前に、おさらばしよう」

遙か遠方、宮殿正面に立っていた銀髪の女神が振り返る。

普通ならば気付かれないであろうはずの距離すら無視して、確実に男神の姿を捉えた美神の銀の瞳に、ヘルメスは帽子を深く被る事で視線を切った。

怖い怖いと眩きながら笑みを浮かべ、一步、その場から退いた。

「……ゼウス、オレはあの白い光に全てを賭けるぞ」

階層主を倒して見せた純白の極光。少年の魂の輝き。

それを更に昇華させる寄り添う竜。少女の魂の歪み。

ヘルメスに予兆を感じさせた、二人の【眷属の物語】。

去り際に一言眩き、男神は戦場に背を向けた。

都市の空を焦がす戦の炎は、未だ高く燃え盛る。

「ま、まさか……ありえん」

しばしの間バルコニーで自失呆然していた女神は、焦った足取りで宮殿に戻る。

動揺する周囲の団員達に向かって叫び声を響かせた。

「フリユネ達はまだなのか!? 『殺生石』はどうなった!」

「そ、それが裏切り者の対処に手を焼いていて、レーネが伝令として向かったはずですが……」

側の団員の声に舌打ちを零し、イシユタルは苛立ちと動揺に犯されながらも思考を働かせる。

そもそもフレイヤは何故、今攻めてきた?

運び屋が『殺生石』の存在をフレイヤに漏らしたとしても、春姫の

『妖術』——階位昇華の効果と正体は露呈していない。身の危険

を察知して先手を打って攻め入る理由には足りない。

では、ミリア・ノースリスか? そちらの可能性は十分にあるだろう。

「ミリア・ノースリス……」

否、それにしたとしても宣戦布告も無しでの強襲という常識を逸した行動には繋がるとは考えにくい。

では、ベル・クラネルだとしても言うのだろうか。もしや、その二つが合わさった結果なのかもしれない。

少年をイシユタルに奪われる事を、少女の魂を砕かれる事を、絶対に許さない戦争を仕掛けてくるほどに。

「たかが地上の子供^{ガキ}如きの為に、あの女は……!?!」

——常識を逸している。冗談じゃない。

激しい動悸を抱えながら、イシユタルは心の中で叫んだ。いつの間にか増えている人間^{ヒト}の一人や二人を壊した所で、普通の神なら怒りなど抱くまい。次の子が何処からともなくやってくる。

だというのに、ちよつとお気に入りになつた程度のどこにでも居そうな青臭い少年と、少し凄^{ヒド}い魔法を使う程度の少女を、一人は奪い、一人は壊す。

そんなちよつとした意趣返しでしかなかった自身の行為が、女神の逆鱗に触れたのだと、イシユタルは遅まきながらに気付く。

これからどうするのか、ミリアの『儀式』は終わっている筈だからその『殺生石』の確保をして人質代わりにするのか。更に春姫を回収する為に儀式場に向かうべきか。あるいは攻め込まれている本拠^{ホキョ}から、いやこの都市^{オラリオ}からもはや脱出してしまうのか——とその場で立ち尽くし判断に迷っていたイシユタルは。

いつの間にか自分の周囲から喧騒が途絶えている事に気付いた。

「お、おいつ、どうした!?!」

この状況に浮足立っていた団員達の声が、階下で今まさに防衛線を築こうと怒号を張り上げていた戦闘娼婦^{バトルベラ}の声すらも聞こえない。

三一階、大階段前。奇しくもベルと二度目の邂逅を果たした三十階広間を眼下に置くイシユタルは、手摺から身を乗り出して階下に呼びかける。

イシユタルの叫びが反響し、消え去る。薄気味悪い程の沈黙が満ちる鉢型装飾の大柱が並ぶ広間に。

やがて、こつ、こつ、と。

通路の奥から細い靴音が響く。イシユタルが表情を強張らせて通路の奥を睨み付けていると、一柱の女神が通路より姿を現した。

「なっ……!?!」

紫水晶アメジストの瞳を限界まで見開いたイシユタルの視線の先、女神フレイヤは微笑んだ。

階上より見下ろすイシユタルを真っ直ぐ見上げながら、フレイヤは艶やかに銀の長髪を耳にかけ、気さくそうに声をかけた。

「神会デナトウス以来ね、イシユタル？ 元気にしていた？」

「フ、フレツ……!?!」

今まさに歓楽街を踏み躪り、血と炎で彩る凄惨な戦場へと塗り替え、あさつまえ本拠ホームに殴り込みに来たとは思えぬほどに、気さくそうに声をかけるフレイヤ。しかしその目は絶対零度の色を宿している。その双眸に射止められたイシユタルが喉につかえるさ中も、フレイヤは続ける。

「早速だけれど、話があるの。いえ——お別れの挨拶かしら？」

凄然と笑みのままのフレイヤに告げられた言葉の意味を理解し、イシユタルの血の気が引いていく。

しかし、その場に居るのがフレイヤ一人で——護衛を付けずに単身で乗り込んできたことに気付くと同時に、イシユタルは髪を振り乱して叫んだ。

「そ、その女神おんなを取り押さえろおッ、お前達!?!」

側に居た男女の団員に命令を下す。

それまでただうろたえる事しかできなかった彼らは、反射的に命令に従って大階段を飛び下りた。

広間の中央でイシユタルを見上げるフレイヤに突撃し——近づく寸前に急激に減速した。

「!?!」

銀の瞳に見つめられただけで、男の団員が痙攣し、膝を突いた。

薄く浮かべられた微笑みを向けられた女性団員が、まるで酩酊感に襲われた様にふらつく。歩み寄ってくる女神から後退ろうとしてよろめき、無防備に接近された彼女は、耳元で何かを囁かれたと思うとその場にへたり込む。

必死に立ち上がるうとしていた男性団員は、通り過ぎざまに頬を撫

でられただけで、崩れ落ちる。

「わ、私の子を……!!」

—— 『魅了』しやがった。とイシユタルが呻く。

今までの喧騒が嘘の様に沈黙に包まれた理由がイシユタルにもおおよそ理解できた。此処に来るまで、全く同じ方法で立ち塞がる団員全てを『魅了』してきたであろう光景が、彼女の脳裏にありありと浮かんだ。

あまりにも鮮やかな手並みで、フレイヤは男女関係無く団員達の心を溶かした。

「可愛い子達ね、イシユタル?」

「ひっ……!!?」

再起不能に陥った二人の団員をその場に残し、階段を上がってくる銀髪の美神。

もはや隠す事の出来ない恐れを抱いた女神は、イシユタル細い悲鳴を上げ、一人宮殿の上階へと逃げ出した。

第一七八話

蒼い夜天を彩る星々に囲まれた金色の望月。

響く闘争の音は高らかに響き、その音を聞き届ける彼の月は何を思う。

そんな場違いな考えが脳裏に過るさ中、仰け反ったフリユネが震えながらレーネを見て、その眼球を一気に血走らせる。無数の青筋が顔中に浮かび上がり——ブチイツと何かが切れる音を響かせる。

「レエエエエツ!!? 裏切ったねええ!!!」

「裏切り者はお前だフリユネエエツ!!」

怒鳴り散らすフリユネに、負けじと怒声響かせるレーネ。

二人のやり取りに呆気にとられている間にも、フリユネが大戦斧を振り下ろす。瞬間、爆発した様に石材の床が弾け、無数の瓦礫片が辺りに飛び散る。

近距離に居たレーネが平然と鞭を石柱に巻き付けて自身の体を強制離脱させ事なきを得るも、俺達はそうはいかない。飛来する石片をアイシャとベルが迎撃し、ファイアが飛び上がって宙に逃げる。

「おい、どうする。レーネの奴はこつちと事を構える気は無いみたいだが」

俺達が流れ弾に対応している間にも、レーネが石柱を押し折ると同時に鞭で巨大な石柱を噴進弾ロケットの様に巨女目掛けて投げ飛ばした。

フリユネは難無くそれを迎撃するどころか、大戦斧でソレを打ち返し、大量の破片の散弾にてレーネを撃破せんとはじめる。

既に冷静さを欠いた巨女の目に映っているのは、自らの顔を傷付けたレーネの姿だけだろう。故に、今から逃走すれば第一級冒険者との闘争を回避できる。

「ベル、選択を……このままあの戦闘に乱入するか。それとも逃げるか……」

「フレイヤ・ファミリア」がイシユタル派の戦闘娼婦バーベラと事を構えている内に逃げ出せれば。とも思うが、しかしフリユネは此処で息の根を止めておきたい。

ファイアは既に交戦する気でしか無く、アイシャ達はどうするのか決めかねて此方を伺っている。

ベルはほんの僅かな戸惑いがあったのか、一瞬だけ動きを止めるが直ぐに足を踏み出し、叫ぶ。

「戦いますー！」

「あいわかった、任せろー！」

光に包まれたベルが純白の光弾と化し突撃するのと同じ、それを追ってファイアが空を駆ける。

ほんの僅かに戸惑ったアイシャが眉を顰めつつも年若いアマゾネス達に声をかけ、突撃していく。

肝心のフリユネは入口方面でレーネ目掛けて瓦礫を打ち出し、鞭を使った立体軌道で攪乱しながら交戦する少女を潰さんとしている。丁度此方に背を向け、宮殿に続く空中廊下の傍をカツ飛んでいくレーネを睨む巨大な背中に、ベルのナイフが閃き、二条の傷を刻み込んだ。「ぎっ!?」アタイの体に傷を付けたのはお前かあああああああ!?!」

「(ファイア)ッ！」

振り向きざまに振るわれる大銀閃。ベルが身を屈めて回避すると同時に、俺が放った【高速弾】がフリユネの頬に命中。狙っていたのは目だったのだが、だいぶ逸れた。それに加えて、まともな損害を与えられていない。

しかし、損害が無くとも顔に攻撃を与えた事で巨女の怒りが一瞬で俺に向けられるが、即座に発条の様にベルが突貫して脇腹を浅く抉る一閃と共に彼女の脇下をすり抜けていく。

「あああああああああああああッ!!」

怒りの矛先が切り替わったフリユネがベルを追って振り向こうとする寸前、遅れて突っ込んでいったアイシャの大朴刀の一撃が巨女の真正面から放たれ、フリユネは大戦斧でそれを防ぐ。

「悪いな、私の相手もしてくれよヒキガエルウツ!」

火花と轟音が弾け、巨女と女傑の鏖迫り合いの拮抗は崩れ、アイシャが大きく吹き飛ばされる。大戦斧を振り抜いたフリユネの背目

掛けて中空掛ける狼が鋭い牙を持つての強襲を仕掛けた。

鋭い刺突が背中**にぶち当たり**——ファイアが舌打ち混じりに身を振って跳ね退く。

「小賢しいんだよおおおっ!?」

「んだよこの筋肉の化物が!? 刃が立たねえ!?」

ファイアの手にしてた槍の切っ先が大きくへしやげて変形している。元は鋭く研ぎ澄まされていたはずの刃が見るも無残な有様だ。

俺も魔弾を撃ち込んでいくも、この『クーシー・ファクトリー』の

【特殊弾】ではまともに**ダメージ**を与えられない。【貫通弾】ですらも貫け

ず、【猛毒弾】や【麻痺弾】【睡眠弾】なんかの**アンチステータス**の異常魔法系の弾丸は《対

異常》で撥ね退けられる。【爆発弾】なんかは連携中のベルやファイア、

アイシヤやレーネの動きの障害に繋がりがねない。

別のクラスを使用したいが、上手く変化出来ない。

「フリユネエエエ、私を無視しちゃ嫌だよおおおっおっおっおっおっおっおっおっおっおっ!」

跳ね飛ぶ様に戻ってきたレーネが鞭を振るう。

元々、鞭は武器というよりは道具の分類に入る代物だろう。戦闘用を使うには扱いが難しいが、その一撃の威力は侮れない。鞭を振るった時に発生する大きな音は音速を超えた鞭が空気を叩く音なのだ。

当然、それを扱うのが神の恩恵を受けた冒険者ならば、更に威力は加算されるだろう。直**クリンヒット**撃でもした日には、一撃で肉を断つ事すら可能な一撃に成り果てる。

フリユネが初撃として食らった鞭は、近距離だった事や、空間の関係で最大威力では無かったのだろう。ほんの少し鼻が赤くなる程度の**ダメージ**の損害しか与えていなかった。そして、今振るわれた一撃は最高威力の一撃だったに違いない。

命中箇所は腕。大戦斧を握る左腕に空気をぶつ叩く甲高い音色と共にレーネの鞭が叩き込まれ——皮膚を裂き、肉を抉り、最も大きな**ダメージ**を叩き出す。

「ぎっ、あああああああああああああああつ!?」

「あはははっ!? フリユネは鞭で叩くのが好きなんだよねえ!? でも

叩かれるのは嫌いなあああアツ!」

絶叫を上げながら更に追撃の鞭を振るわんとするレーネに対し、フリユネが即座にレーネ目掛けて前進した。鞭と言う武器の特性上、最も損害を与えられる距離は中距離であり、遠距離では当たらず、近距離では目も当てられない威力に落ちる。故に、巨女が取った行動は最善手だろう。

他に、彼女の相手が居なければ、の話だが。

「るあああああああああああああアツ!」

「うおおおおおおおおおおおアツ!」

空中を跳ねまわるフィアがへしゃげた槍では無く落ちていた棍棒で殴りかかり、背後に回り込んでいたベルが巨女の背中に更に傷を増やす。

間髪入れずに魔弾で意識を逸らさせ、其処にアイシヤが追撃を仕掛ける。其処にレーネの鞭の一撃が叩き込まれ——フリユネが絶叫を上げる。

「ぎあああああああああああああアツ!」

恐ろしい一撃だ。

フリユネに拷問がてら鞭を使われ、俺が受けたあの傷よりも更に酷い。第一級冒険者の肌を易々と引き裂き、肉を抉る。鞭という扱いの難しい技量武装を易々と使いこなして猛攻を繰り返すレーネ・キュリオと言う冒険者がいかに優れているのかを見せ付けられ、アイシヤが脂汗を流して焦った理由を知った。

——【呪詛】^{カリス}ステイタス減少の代償^{ペナルティ}を受けておらず、更に恩恵^{ファミリア}有りの状態で、仲間の援護があれば間違いなく、彼女は「イシユタル・ファミリア」から「ウエヌス・ファミリア」を守り切れた事だろう。

だからこそ、真つ先に神を殺されて無力化されたのだろうか。

「っ、強い!?!」

「まだ倒れないのか!?!」

「化物より化物しやがって!?!」

「あはははははは、まだまだぶつ叩いても平気そうだねエエエエ!?! 皮を裂いて、肉削いで、骨まで砕けちゃうよオツ!?!」

猛攻を加え、確かな損傷^{ダメージ}を積み重ねているにも関わらず、フリユネが倒れる気配が無い。更に付け加えると、彼女の反撃の一つ一つが一撃で此方を沈めかねない程の威力を持つている為、深入りが出来ない。

春姫がベルに与えた『階位昇華』^{レベルブースト}という恩恵。それによつてなんとか食らい付くベルだが、小さなナイフで与える損傷^{ダメージ}では弱すぎる。

想定以上の実力を持つていたレーネと言う伏兵。彼女の鞭の一撃が想定以上の損傷^{ダメージ}を与えるが、見た目は重傷に見えてもその実、致命傷から程遠い見せかけの傷ばかり。

こちら側が与えている損傷^{ダメージ}は、あまりにも小さすぎた。

それでも、毎回暴れ回るフリユネを抑えてきたアイシヤと言う女傑。そして武装の所為でまともな損傷^{ダメージ}が出せないと分かった瞬間に攪乱に徹したファイア。序に、敵の目を引く様に妨害を加えた俺。

三人が全力でフリユネの気を逸らす事で場を凌ぐ。

そう、凌いでいるだけ——第一級冒険者を倒すには余りにも威力面が不足していた。

「付け上がるんじやあないよオ!!」

皮膚を裂き、肉を抉る一撃は激痛は与えられても、その内側の筋肉によつて骨や内臓にまで傷が届かない。故に、その鞭の一撃を体で受け止めた瞬間に、鞭を掴んでレーネを引き寄せようとする。

咄嗟にレーネが鞭を手放し、生まれた隙を埋めんと魔弾を撃つが無視される。

徐々に命中精度が落ちていったためか、それともただ回避されたのか頬を掠めて魔弾が明後日の方向に消えていく。それでもファイアが頭上から鉄棍を叩き込もうとし、アイシヤが次弾として詰め寄り、ベルが追撃姿勢を見せ——その攻撃全てを身に受けながら、フリユネが反撃を放った。

「ぬらあッ!?!」

無数の傷を受けながらも巨女が放ったのは、自らの足元への踏みつけ^{ストンブ}。

だが、第一級冒険者が放ったその一撃は、凄まじい衝撃波を生み出

し至近距離に居たベルとアイシャの三人を吹き飛ばし——レ
ネから奪った鞭を無造作に、それでいて全力で振り回す。中空に居た
ファイア目掛けて。

「ぬぐああっ!?!」

「堕ちなああああ!!」

鞭自体の威力は大したことが無かったのだろう。しかし、回避しそ
こねたファイアの足に鞭か絡み付き、叩き付けようと全力で振り回し始
める。

「「ファ——」ぐう……」

狙いを定め、鞭を撃ち抜く事でファイアの救出を行おうとした矢先。
凄まじい眩暈と共に視界が揺らぎ、詠唱中だった魔法が強制中断させ
られる。魔力暴発には至らなかつたが、失敗した。

次の瞬間、轟音と共にファイアの体が床に叩き付けられる。パラパラ
と飛び散った石材片が散らばり、僅かに舞い上がった土煙の向こう
側、背中から叩き付けられたファイアが喀血しながらも、ナイフで未だ
に足に絡む鞭を切断しようとするが、追撃と言わんばかりにフリユネ
が再度ファイアの絡んだままの鞭を引っ張り寄せる。

「ぐそああああ!?!」

「死にぞこないがア、次で殺してやるよオ!!」

眩暈が収まると同時に詠唱しようとして、気付いた。クラスが変化
している。

咄嗟に頭に触れて耳の確認。その間にもファイアが引き摺られてい
く。ベルとアイシャが気付いてファイアを救わんと再度突撃しようと
するが、一度盛大に吹き飛ばされた彼等では間に合わない。

自身の頭に生えているのが、多分『猫耳』。つまりクラスは『ケツト
シー・ドールズ』。使用魔法は——。

「「サブマシンガン・マジック」ッ」

急げ、早くしろ。このままだとファイアが死ぬ。焦燥感に埋め尽くさ
れながらも詠唱し——不発。

魔法円すら展開されない。異常事態。

ボロボロのローブの隙間からぬるりと出ている尻尾も、猫のモノと

酷似している。しかし、人形師型の扱う銃魔法が発動しない。詠唱間
違いではないはずだ。

勢いよく、ファイアの体が宙に舞う。抵抗出来ずに引き摺られていた
彼女が、遠心力に任せてぶん回され、彼女の血が周囲に撒き散らされ
る。

離れた位置に居た俺の所にまで届く程に、血の雫が雨の様に撒き散
らされる。その鮮血の赤色が徐々に色褪せていく。まるで取り残さ
れる様に意識だけが加速し、振り回されるファイアが意識を失っている
事実すら、視認できた。

次の一撃で、間違いなくファイア・クーガが死ぬ。だが、詠唱が上手
くないかない。魔法詠唱そのものを間違えた？ 否、前に使用した時は
それであっていた。他に召喚型ケットシーのクラスを習得していない以上、【サ
ブマシンガン・マジック】で合っているはずなのに。

サーツ、と血の気の引く感覚に襲われる。ベルが、アイシャが、ど
ちらも間に合わない。既に勢い良く振り回される彼女を受け止めよ
うとすれば、彼女らのどちらかも戦闘不能に陥りかねない。そも、あ
の速度で叩き付けられれば既に一撃貫っているファイアで耐えられるか
どうか。

「……ッ！」

これ以上、仲間を失う訳にはいかないのに。自身の状態がおかしな
所為で——ただの言い訳だ。

咄嗟に、走り出す。せめて、その身を受け止めて自らを緩衝材クッションにで
もすればもしかしたら、と一縷の望みに賭けんとした所で、フリユネ
の目掛けて何かが振るわれる。

「フリユネの顔面の皮をおおおく、ベリベリイッ!」

ふざけた掛け声。

ファイアを殺そうとしていたフリユネの顔面に、レーネの持つ鞭——
鞭の様なモノが張り付いたと思った瞬間、夥しい量の血が撒き散
らされ、フリユネの顔が抉れた。

「ぎっ——あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああッ!」

振り回していた鞭がフリユネの手を離れ、力を失ったファイアの体が宙に投げ出され——ベルがそれを受け止めた。

ファイアを抱きとめたベルが容態を見て青褪める中、サイアが駆け寄ってファイアの体を掴むと即座に反転。後方で怯えて動けずにいる数人のアマゾネスと、春姫を守る為に腰の刀に手をかけるミコトの元へ。

後方撤退。ファイアが戦闘不能。それを確認しながらも、フリユネの様子を伺う。

その顔は左耳から右の顎にかけて、抉れていた。大きく唇が欠けている処か、ただでさえ大きかった口は大きく引き裂かれて奥歯すら視認でき、口裂け女状態になっている。

「ア、アタイの顔があああああア!？」

一体、どんな武器を使ったのかとレーネの方を横目で見て——後悔した。

それは、きつと拷問用鞭キヤットオフナインテイルよりも更に残酷でいて、非道な代物だろう。

材質は金属。艶やかな金属の光沢を持つ無数の鋼糸が複雑に絡み合い、彼女の足元に垂れている。問題は、その絡み合う鋼糸の隙間にびつちりと、金属片が飛び出している事だ。

一見すると、それは有刺鉄線にも見えるが、アレの比ではない程に棘が付いている。否、棘と言うには不揃いだ。それでいて一つ一つはギリギリと凶悪な光沢を放っている。その一部分、先端の方が真っ赤に染まり、髪の毛や皮膚、肉片等が絡み付いている様子が見える。

茨鞭、ではない。有刺鉄線より遥かに酷い。傷口はきつと簡単に治せず、より残酷に、より非道に、ただひたすらに対象を痛めつけ、消えぬ傷を与える為の残酷武装。デッドリー・ウェポン

「レ、レエエエツ!!」

「ふうん、もつと抉られたいの？ 良いよ！ みんなももつと血を欲してるだろうしね!」

レーネが抱く、フリユネに対する憎悪を形にした様なその武装に背筋が震える。だが、同時に羨ましいとも思えた。クラスが滅茶苦茶に

なつて思つた様に戦えず、憎悪だけが空回りする俺と違い、確実にフリユネに傷を刻んでいく彼女が羨ましい。

集中力が乱れ、戦闘中だというのに余計な方向に思考が流れていく。状態が変だ、今のクラスが不明。もしかしたら魔法そのものが使えない状態に陥っている可能性すら有り得る。

焦りながらも、フリユネが猛攻を加える対象がレーネになっている間になんとしてもクラスを変更せんと意識を集中させる。

「待ちなあああああああああア!!」

逃げ回るレーネに対し、フリユネがそれを追う。

ズガンズガンと、振り上げては振り下ろされる大戦斧の一撃で床材が碎かれ、碎かれ——次第に視界が揺れ始める。

クラスが変わる前兆かと身構えていた、その時だ。

「これ以上あのデカブツが暴れると別館が倒壊するぞ!?!」

グラリ、グラリと地面が揺れる。そして、下の階層から響くバキバキツと言う石材に罅が入る音。

石造りの聖塔ジグザグが大きく揺れている。それは、屋上である空中庭園で巨女がその場の耐久性なんぞ考えずに暴れ狂っているからなのは確定的に明らかである。

当然、このまま此処を戦場にしていたら、いずれ別館そのものが倒壊して全滅しかねない。

「[リトル・ルーキー]、なんとしてもフリユネを宮殿の方に誘導するよ!?!」

「わかりました、僕が気を引きます!」

ベルが駆け出し、レーネを追うフリユネの背に【ファイアポルト速攻魔法】を連発しだす。

一発目でよろけ、二発目で振り返った巨女は、怒声と共にベルに突貫する。

「邪魔するなあああああああああああア!!」

ベルが背を向けて空中廊下へ駆けていき、フリユネがそれを追おうとして大戦斧を投擲した。

左右の胸壁を砕きながらベルに迫る一撃。狭い空中廊下が災いし

て、ベルには回避する手段が無かった。

思わず目を見開く。

逃げ場の少ない一本道である空中廊下へ足を踏み入れたのは失策だったと気付いてナイフで迎撃しようとして振り向きかけ、結局振り向かずに歯噛みしたベルは更に速度を上げる。

迎撃するには、フリユネが放った高速回転する大刃は地面を這う様に低位置を飛来している。ナイフでの迎撃は姿勢が悪く、跳躍による回避の場合は。

「待ちなあああああああああああア!!」

後方より爆走する巨女の追撃が回避できない。

故に、空中廊下を逃げ切る為に速度を上げるが、高速回転する大刃は胸壁をまるで紙切れの様に刻み壊しながら一切速度が緩む事なくベルを刻み散らさんと迫る。

このままではベルが——魔法を使わんと手を銃の形にして大刃に向けるが、魔法が使えなければ意味が無い。

猫耳、尻尾——人形師型ドールズでなければ、なんだ。

他の召喚型ケットシーか？ 猫耳、尻尾、召喚。

視界に映る景色が徐々に色褪せていく。ベルの背後に迫る超速回転する大戦斧がゆっくりとした速度で紙切れの様に胸壁を砕き壊す光景が見えた。

空中でぶつかり合う破片が見えた。フリユネの頬から飛び散る血の雫が見えた。慌てた様子のアイシャが大朴刀を担いで追おうとしている姿が見えた。レーネが鞭を使って空中を行く姿が見え——
——見える？

ほんの一瞬の戸惑い。けれど、同時に今の自分が何のクラスなのか確信が持てた。

「早撃ちクイックドロウ」

ズドンツ、と非常に重い発砲音。

事前詠唱の必要も無い。

分岐詠唱特有の、詠唱を重ねる必要も無い。ただ、魔力が一定量失われ、指先に現れた魔法円マジックサークルが銃口としての機能を果たし、魔弾だんがんが放た

れる。

動体視力と思考速度が超加速した特別な世界で一人。焦る表情の皆をしかと目に焼き付けながら、魔弾の行く末を見守る。

ベルの背後に迫る大刃。超速回転する大銀塊とかしたその大戦斧。その柄の部分に魔弾が直撃し——軌道を逸らした。

横回転は縦回転に、地面を盛大に抉りながら進む大刃に、更に追撃を叩き込む。

「クイツクドロウ」

元来、魔法に必要な『詠唱』と言う動作を省き、ただひたすらに早く撃つ。それを極めた特殊な射撃魔法。この効果は、ベルの持つ速攻魔法とよく似ている。否、まさに速攻魔法と同じ、速攻魔法。

放たれた魔弾が大銀塊の軌道を逸らす。

ベルの命を断たんとしたその大刃が軌道を外れていき、ベルがそのまま宮殿に直進。空中廊下を二人が抜けると同時に大銀塊は本拠に着弾。勢いを殺さずに一気に数階層分を打ち抜いて地上にまで届かんばかりの大きな傷を本拠に刻み込んだ。

「——っ！」

一瞬、気を抜きかけて慌てて駆け出す。

先に動き出していたアイシャとレーネの背中を追い、空中廊下に入りながら後ろに居るであろうミコトに叫んだ。

「ミコトッ！ 私の殺生石を回収出来たらしといて!!」

二人の速度に追い付くべく、足を動かしながらも思わず笑みを浮かべてしまう。

銃使い型。本来ならば銃特化型に分類されるクラスだが、この型は召喚型にも同様の名称のクラスが存在する。

意識の外にあった。そもそも今の俺が習得しているクラスではないはずであり疑問は残るが、このクラスは強い。

「副団長、悪い、さっきは足を引っ張った！」

後ろから一気に追いついてきたのは、応急処置したのか包帯を頭に巻いたフィアの姿。血が滲んではいるが、まだ戦えると獰猛に笑って追従してくる。

第二回戦だラウンドと意気込み——ぐらりと視界が揺らぐ。

「ぐっ……」

「どうした、おい大丈夫か!？」

空中廊下の途中で膝を突き、眉間を抑える。

視界が揺らぎ、眩暈でぐるぐると世界が回る。

まるで水の中で聞く声の様に、ファイアの声がぼやけて聞こえる。クラスが切り替わる感覚。

それも数秒の出来事だった。直ぐに顔を上げてファイアに笑いかける。

「大丈夫です。ちょっと、調子が悪いだけですから」

その声をかけながら、今のクラスを確認する為に耳に触れようとして——心臓が早鐘を打ち始める。

くらくらと視界が揺れ、訝し気な表情のファイアの顔が驚愕に染まる。

「おい、おい副団長、落ち着け、良いか? 落ち着け!」

落ち着け。そう繰り返す彼女の言葉を聞きながら、吸い寄せられる様に俺は空を見上げていた。

ファイアが頭を掴んで見るなど叫ぶのが聞こえるが——駄目だ、これは。

空に浮かぶ金色の丸。ぞわぞわと背筋が増える。

喉の奥、腹の底から噴き出す様に何かが増え始める。

静まれ、見るな、落ち着けとせわしなく告げてくる狼人の少女。

その表情に僅かな焦りを見出しながらも、宮殿屋上から響く抗争の音色に呼応する様に、心臓が跳ねまわる。

今すぐにと、早く行けと——獲物を奪われるぞと。

宵闇に浮かぶ望月が告げた気がした。

「副団長、おい!?! 聞こえてるか!?!」

「……ファイアさん」

「大丈夫か!? 一度、小人族バルウムに戻った方が——」

「大丈夫ですよ。ええ、大丈夫です」

なんとって、こんなに気分が良いのは久しぶりだ。

屋根を、外壁を、足場を次々に粉碎しながら追撃を繰り返す巨女を相手に、少年が回避と反撃を試みる。

そのどれもが軽く、フリユネに一步届かない。せめて得物が違えば、と少年が内心焦りながらもフリユネの顔を直視し、表情を強張らせる。

顔を斜めに、左耳から右の顎にかけて肉が抉られ、もともと醜かった顔が更に醜悪になっており、其処に憤怒の表情を混ぜ込んだせいで、とてもではないが見れたものではない。

「ぐうッ!？」

「ぬらあッ!？」

フリユネが破壊した建材をベル目掛けて投げ飛ばし、ベルが回避した先に回り込んで蹴りを見舞う。

防御姿勢で受けたにも関わらず凄まじい衝撃が少年の体を突き抜け、一気に打ち上げる。

女主の神娼殿最上階、歓楽街で最も大地から遠い宮殿の屋上で、ベルとフリユネは交戦していた。

半壊する以前であれば、神の庭と言っても過言ではない程に整えられた植栽に人口の湖だった場所。

闘技場コロシウムに匹敵する程の広い空間を、中央に聳え立つ監視塔の様なイシユタルの住居の周囲を回る様にベルとフリユネは交差し続ける。

得物を失ってなお、巨女が振るう拳は凶悪な威力を持ってベルを狙う。両手に握るナイフがなんと心もとない物かと擦り切れる戦意を維持せんとベルが息を呑みながらも歯を食い縛る。

「ゲゲゲッ！ やるじゃないかア!？」

左耳から右顎にかけて走る抉れた傷ごと表情を歪めながら、血走った双眸をぎよろぎよろと蠢かし迫るフリユネ。

限界を振り切れた憤激に染まる瞳は、震えるような殺意と悍ましい愉悦の色を滲ませながらベルを捉えて離さない。

「どうだア、素晴らしいだろおおオウウ!! その春姫の妖術ちからは!？」

春姫の魔法によって授かった階位昇華レベル・ブーストの効果は凄まじい。 magari なりに第一級冒険者と一対一で渡り合い、仲間の援護を受けた状態であればフリユネを押しすらいのだ。

しかし、それでも第一級冒険者という高い壁に届きうるかと言えば、否。

力は遠く及ばず、限りなく肉薄した速度ですら一段上。

反則級の恩恵を以てしても、その高みの足元に手をかけるので精一杯。超える事等、夢のまた夢。

激増した能力を御しながらも、都市の一線級の力を振るうフリユネに食らい付く。

「その力さえあれば、Lv. 6 だろおと関係ないツ!! 【剣姫】と言
う小娘もねエツ!!」

「……!!」

ベルに対して猛攻を続けながら、フリユネが感情高ぶるままにこの場に居ない少女に怨嗟の声をぶつけた。

「あんな人形女が最強で、美しいだつてエ!? 冗談じゃないよオ!!」

「……ッ!」

「つくづく腹が立つよオ、オマエの戦い方はア!? あの女の顔が
ちらついて見えやがるウ!?」

イシユタル フレイヤ
主神が美神に嫉妬していた様に、眷属である团长フリユネもまた特定の人
物に敵愾心を抱いていた。

女神の如き金髪金瞳の美貌、そしてフリユネを追い抜きLv. 6 へ
至った実力。その事実には憎悪の炎を燃やしている。そのアイズに師
事した事のあるベルから、その面影を見出したのか、更に激昂して攻
撃が加速していく。

「その力さえあれば、あの不細工どうってことないんだよおおお
おオ!」

ベルの中に見えるアイズの幻影を叩き潰さんと、フリユネが両腕を
頭上高く振り上げ、握り締めた両拳を振り下ろす。

屋上の一部を粉碎して有り余る威力を見せ付けたその一撃を、横っ
飛びで回避したベルは眦を吊り上げる。

家族に対し行われた残酷な仕打ち、仲間の命を断った怨敵、其処に憧憬の存在を貶めるといふ行為まで加わり、少年の心を完全に掻き乱す。

「うわあああああああああああああああああああッ!!」

「ぬっっ!!?」

怒涛の猛攻。

一方的に責め立てられるだけだったベルの反撃に、一対一にもつれ込んでから初めて、フリユネが防御した。

付与された夥しい光粒を引き連れ放たれる連続斬り。フリユネの腕に刻まれる無数の傷。

無数に閃く紫紺と紅緋の斬閃にフリユネが僅かに怯んだ。

先のお返しと言わんばかりに振るわれたベルの一閃が、フリユネの腕に一際大きな傷を刻む。元々レーネに与えられていたその傷を、更に抉る一撃。

「——つけ上がるんじゃないよオ!!」

「っ!?!」

回避に専念していた少年が突然、感情に任せて攻勢に出た事で生まれれた綻び。

その一瞬の隙を突き、少年の体にフリユネの前蹴りが突き刺さる。咄嗟に膝で防御するも、ベルの体は呆気なく吹き飛ばされ、屋上の鉄柵にぶち当たる寸前で鞭に絡みとられて動きを止めた。

「はあ……はあ……追い、追い付いた!」

荒い息を零しながら、移動用の鞭を片方失って不便な想いをして到着したレーネが吹き飛んで落ちかけたベルを救うと同時に、フリユネの方に視線を向けて笑う。

「裏切り者のフリユネえ、イシユタル様のお膝元で殺されたいなんて殊勝な心掛けだねえ」

軽口を叩きながら、レーネが残酷武装デッドリーウェポンをズタボロになった庭園の地面に垂らす。

ベルも痛みを堪えながら立ち上がり、ナイフを構えた。瞬間。

「月が綺麗ですね」

フリユネの目の前に、忽然と少女が姿を現した。

「ミリアツ!」

「うん? ……うん? 何処から……いや、ほんと何処から現れたの?」

ベルが瞠目して少女の名を呼び、レーネが目を白黒させる。

そんな反応を他所に、小人族バルウムの中でもとりわけ小柄な少女は狼を思わせる耳と尻尾を揺らしながら、両手に輝く魔法円をフリユネに差し向ける。

「ゲゲゲツ、残念だったねエ。お前の攻撃なんか痛くも痒くも——」

「(ファイア)」

「——ぐぶアツ!」

ズガンツ、と轟音にも等しい音と共に、真正面で余裕ぶっていたフリユネが吹き飛んだ。

巨体の中を滑り——フリユネの傍に金髪の少女が現れる。そして、追撃。

「(ファイア)」

吹き飛ぶフリユネに対し、その場から一步踏み出し——フリユネの傍に転移。更なる追撃を放つ。

吹き飛ばし、転移して接近、追撃して更に吹き飛ばす。

あつという間にフリユネの体を宮殿屋上から突き出し、突き落とすた。

「うわああ、あの威力最初っから使えるなら使えばよかったのに……」
唾然とするベルと、ほんの僅かに不機嫌そうに声を漏らしたレーネ。その二人の眼の前から、ミリアが消えた。

重心を前に傾ける様に身を投げ出した瞬間、その場から忽然と姿を消したのだ。そして——更に轟音が響く。

ズガンツ、ズガンツ、と徐々に離れていく音色にレーネが溜息交じりにその音を追うべく鞭を使い離れていき、ベルもまた追うべく足を踏み出そうとして、気配に振り返る。

咄嗟に振り返った先には、丁度着地したファイアの姿。その背にしが

みつくサイアの姿もあった。

「フィアさん、サイアさんも……ミリアの様子が何か変でした、何が……」

「知ってる。糞、追いつけねえ……」

「んー、団長君は春姫ちゃんだっけ、そっちの方に行つてあげた方が良いと思う」

焦りの表情を浮かべたフィアが舌打ち混じりに答え、背負われていたサイアが呟く。

「春姫さんが……でも、ミリアが、フリユネさんと」

「そっちはアタシらで行く。それに、今から飛び降りておいかけんのは流石の団長でも無理だろ。アタシは行くからな」

「団長は春姫ちゃん連れてきてねー」

返事を聞くより前に、フィアが駆け出していく、フリユネが破壊した鉄柵の向こう側へ躊躇なく飛び出していく。その背を追おうと足を踏み出しかけ、壊れた柵の傍から下を見下ろして息を呑んだ。

宮殿正面広場。其処にフリユネが着弾したらしい土煙が上がっているのが見える。

その高さは、四十階以上。当然、対策なしで飛び降りれば一溜りも無い。

「……春姫さんと合流して、急いで向かわなきや」

ベルはフリユネによって破壊された痕跡を頼りに空中庭園に向かうべく足を踏み出した。

第一七九話

第一級冒険者が暴れ回り、見る影もない程に荒れ果て空中庭園。

ミコトは春姫を抱えて周囲の女戦士達アマゾネスを見回していた。

ベルがフリユネをこの場から引き剥がすべく行動して、残された者達が焦った様子で眩き、ミコトを伺う。

「フリユネが居なくなっただぞ」

「このまま此処に居たら『フレイヤ・ファミア』に殲滅されちゃうよ……」

「なあ、もう逃げて良いよな?！」

焦燥に満ちた表情でミコトに詰め寄るアマゾネス。

その表情を見たミコトはほんの少し迷いながらも、言葉を返した。

「……確かに、此処に残るのは危険でしょう。残る意味もありませんし、逃げましょう」

アイシャの妹分達らしき年少の者達も含め、数十人の集団で本拠へと続く空中廊下へと足を踏み入れる。

その間、ミコトは最後にミリアに頼まれた事を思い浮かべながらも、自らが抱える意識の無い春姫を見ては葛藤していた。

此処で春姫を預けるには、アマゾネス達に対する信用は足りない。彼女らが「ヘステイア・ファミア」に寝返ったとはいえ、今度は自分達を裏切らないとも限らない為だ。

かといって、春姫を抱えたままミリアの『殺生石』を探しに行く事は出来ない。

春姫を優先すべきか、ミリアの頼みを優先すべきか。

自分達が此処に訪れた理由は、春姫を救うため。しかし、ミリアの方は儀式を執り行われ、異常が出ていると思わしき状態。どちらを優先するべきか、そんな葛藤を繰り返しながらも宮殿内に足を踏み入れたミコトは、足を止めた。

「……アイシャ殿、此処で何を……?！」

「ああ、あのヒキガエルが上へ続く階段をぶち壊してくれたせいで立ち往生だ」

フリユネが放った大刃の一撃は、丁度上階へと続く階段を粉碎する位置に着弾していたらしい。

アイシャが指示した先は大きく崩壊しており、とてもではないが上の階には進めない。他の面々は各々の能力や魔法、スキルを十全に駆使して登って行ったのに対し、アイシャは足止めを喰らっていたのだ。

「クソ……上の階での戦闘が静かになりやがった。下では大騒ぎか……」

顎に手を当てて考え込み始めるアイシャを見て、ミコトは静かに彼女の横顔を見つめる。

「イシユタル・ファミア」の幹部。戦闘娼婦バーベラを率いる実質的な副团长にして、Lv. 3の第二級冒険者。二つ名は「麗アンティアーネイラ 傑」。

——春姫の為に主神を裏切る行動に走った人物。

「アイシャ殿」

「なんだい【絶†影】」

「春姫殿を頼んでも良いでしょうか」

ミコトの言葉にアイシャの眉間に皺が寄る。

助けに来たと豪語しておきながら、よもや自身に春姫の身を任せる積りかと、アイシャはほんの僅かに殺気を放ちながら腕を組んだ。

「へえ、春姫を捨てる気がい」

「いえ、違います。自分はミリア殿の『殺生石』を探しに行きたい。しかし、信用できる相手がおらず春姫殿を預けられない……ですが、貴方なら信用できると判断しました」

「……私を、信用ねえ」

ほんの少し口元を緩めると、アイシャは溜息を零して口を開く。

「預かってやる。ただし、レナ達はもう逃がす。それが条件だ」

「私達は、って……アイシャはどうするの!？」

結わえた長髪を揺らして詰め寄るレナと呼ばれた少女。彼女から視線を外したアイシャは、ミコトに抱えられた意識の無い春姫を見る。

「私には、まだやる事が残ってる」

「……春姫殿をお願いします。残りの皆さんは、逃げてください。自分分は『殺生石』を探しに行きます」

宮殿内を支配する斬撃音と飛び散る血飛沫。

決死の表情を浮かべ侵入者へと斬りかかる女戦士達を無造作に切り捨てていく「フレイヤ・ファミリア」の冒険者。

破碎された壁材が散乱する廊下を覚束ない足取りで進んでいた青年は、青ざめた表情で階段を見上げた。

「イシュタル、様……いま……」

階段の手摺に凭れ掛かり動かなくなっている戦闘娼婦には見向きもせず、青年はただ女神の命に従うべく足を動かしている。

彼が抱える荷物は、女神が求めた代物——【魔銃使い】の魂を封じた『殺生石』だ。

三十一階にて待機しているイシュタルへと運ぶはずだったソレは、彼がその場に足を踏み入れた時には既に鎮圧された女神の護衛達が倒れているだけの光景が広がっていた。

同じくその場に駆けつけた戦闘娼婦達と驚愕し、身を強張らせていたその時だった。丁度「フレイヤ・ファミリア」の戦闘員と邂逅し、運悪く発見されてしまった。

彼のレベルは2だった。対する相手はLv. 5の化物。勝てる筈が無いと頭を抱えて怯えていると——無視されたのだ。

彼らは戦闘員の排除を命じられている。非戦闘員に関しては無視していた。

故に、運よく非戦闘員の愛玩用の眷属だと思われた事により命拾いした彼は、けれども殲滅の為に放たれた魔法の余波で吹き飛ばされ、ほんの数分間意識を失っていた。

目を覚ますと、荒れ果てた大部屋の中に倒れ伏す無数の戦闘娼婦。敵の姿は消えていた。

その後、彼は必死に主神の姿を求め、階段を上がっていつているのだ。

「……役立たず共が！」

主神の姿を探しながら、倒れ伏すイシュタルの眷属達の姿に、彼は不快感を露わにして彼等彼女らを蹴りどかす。

「レーネが居れば……レーネが味方になってくれていれば」

元【ウエヌス・ファミア】の冒険者。

女神ウエヌスに見出され、彼女の派閥に加わった獣人。

彼を表す言葉は、そう——『裏切り者』だ。

「どうして、レーネはわかってくれないんだ！」

激情のままに叫び、倒れ伏す眷属の側頭部を蹴り抜く。

【ウエヌス・ファミア】に居た頃、幼い頃に入団した彼の派閥の团长。その一人娘である少女とは友好的な付き合いをしてきていた。

将来、自分は彼女の伴侶になるのだろうと、幼いながらに臆げな未来を描く程には慕っていた少女。

そんな彼女との決別のきっかけは、少年が女神イシュタルに魅了された事が原因だろう。

「ウエヌスなんかより、イシュタル様の方が美しいのに……どうして」ある日の事、少年は真の美に出会った。

女神の集まりとして茶会を開こうとウエヌスが主催し、本拠内に女神達を招いた日。招待状を送る事を取りやめた美の女神が本拠を訪ねてきた。

ウエヌス曰く『空気が読めない神』『せっかくの地上を楽しめない無粋な女神』『話してて楽しくない奴トップ』等、散々な言われようで今度から茶会に誘わないと断言されたその女神の名は、イシュタル。

玄関口で彼の女神を出迎えた少年は、一瞬でその女神の虜になった。

一目で堕ちた彼は、共に出迎えた少女とその美しさを共有すべく口を開き——驚愕したのだ。

『ああ、なんて美しい女神様なんだ……』

『そうかなあ？　なんていうか、くさそう？』

『は？　キミは一体何を言ってるんだ!?!』

『うーん、ウエヌス様が高嶺の花、フレイヤ様が棘のある花だとする

と、あの女神様は臭い花みたいなの？」

触れるのも躊躇われる美しさを持つ女神ウエヌス。

美しさに惚れて不用意に触れようとする棘に撃退される女神フレイヤ。

その独特の香りから毛嫌いする者も居れば、好む者も居るであろう女神イシユタル。

各々の美の女神の特徴を語ったレーネは『どの女神も綺麗だし美しいよね』と優劣は無いと言い切った。そんな彼女の言葉に少年は信じられないと頭を振った。

『最も美しいのは、間違いなくあの女神イシユタルだよ』

『キミがそう思うならそうなんじゃない？』

『レーネはどう思うんだい？』

『私の一番はウエヌス様。それは絶対だよ』

あの時、もつとすっかりとレーネを説得できていれば。

そうであれば、今この時、イシユタル様の為に共に立ち上がる事が出来たのではないか、そんな考えを浮かべた青年は大きく頭を振ってその考えを吹き飛ばす。

「いや、レーネは裏切ったんだ……せつかく、ウエヌスから解放してあげたのに」

コンバージョン
改 宗 したい。

普通ならそんな簡単に派閥を抜けたり等出来る筈が無い。しかし、ウエヌスは違う。

彼女は地上の人類こどもを愛しており、自身の勝手な都合で縛りたくないと真に思っていた。故に、眷属コンバージョンが改 宗を願うと、あっさり眷属を送り出す。

その割には、自らの元を離れる眷属が居ると、次の日には丸一日部屋に閉じこもって自分の何が悪かったのかを考えて塞ぎ込む程には繊細であったが。

だからこそ、だろう。

—— 女神ウエヌスは、何処か警戒心が薄い女神だった。

コンバージョン
改 宗を願い出てみれば、とんとん拍子でイシユタルを本拠に招

き、自室にまで迎え入れ——結果、ウエヌスはイシユタルの手で殺された。

コンバージョン
その改宗を言い出したのが、彼だ。

コンバージョン
改宗——裏切りの前日。

少年は、自身と共にイシユタルの元へ行こうとレーネに持ち掛け、断られた。

『レーネも、イシユタル様の所に行かない?』

『うーん、私はいいかな。ウエヌス様が泣いちゃうし』

『でも、あんな女神よりイシユタル様の方が——ガフツ!?』

『ウエヌス様の元を離れて泣かせるだけじゃなくて、侮辱までするの?』

結局、レーネ・キュリオという少女は少年の説得に聞く耳を持たなかった。

「僕が、イシユタル様をお願いしたんだぞ……」

廊下を染める無数の血溜まり。それらに沈む無数の戦闘娼婦。

あの日【ウエヌス・ファミリア】で少年が目にした光景と同じ光景。鋭敏な嗅覚に突き刺さる血と臓物の臭いに、青年の脳裏に過去の光景が一瞬だけ浮かび上がる。

本来なら【ウエヌス・ファミリア】の中で生存を許されたのは自分だけ。

裏切りの手引きを行い、イシユタルへと勝利の美酒を注ぎ従者へと至った獣人の青年だけだった。

だが、どうしてもレーネだけは生かして欲しいと懇願し、イシユタルは自身の手駒に堕ちるのならば良しと認めた。認めて、頂けたのだ。

「なのに……」

レーネ・キュリオは未だにウエヌスを信仰している。

その信仰を捨てさり、イシユタルへと帰順すれば良いものを、頑なに拒み続け、痛めつけられ続けている。

「クソツ、どうしてなんだよ……!!」

最も美しいイシユタルという美神に仕えられる幸福を分け与えて

あげたというのに、と獣人従者が舌打ちを零して階段の一段目に足をかけて顔を上げ——たなびく銀髪を目にして硬直した。

「——ッ!?!」

直ぐに視界から消えていった銀の長髪。

見紛う筈も無い。常にこの都市の頂点<sup>オラリオ
トツブ</sup>として持て囃されている女神の後ろ姿だった。

その姿も、獣人従者が硬直している間に上階へと消えていく。焦っている訳でも無く、ただゆったりと優雅に、けれどもどこか背筋が凍える様な寒さを伴って、その女神^{フレイヤ}は彼の視界から消えた。

そして、次に響いた声を見開く。

「どこまで行くの、イシユタル?」

「ひっ……!?!」

フレイヤの問いかけと、それに怯えた様な声。

聞き間違えるはずもない。鋭敏な獣人の聴覚でなくとも、その声を聞き逃すなどありえない。有り得てはいけない。

自らが恋慕う美神^{イシユタル}の声を、その眷属である彼が聞き間違うはずがない。

「イシユタル様、いま……!?!」

『石』を抱え直し、獣人従者は痛む体を引き摺って階段を上り始めた。

「——んだよこれ、また階段が破壊されてやがる!?!」

「仕方無い、別の道を探すぞ」

抜き身の半月刀を片手に舌打ちを零すデインケと、大刀を担ぐヴェルフ、大斧を担ぐ桜花。

襲撃されて大炎上し始めた歓楽街の様子を見てベル達の身を危ぶんだ彼らは、女神達から先行して通路を駆けていた。

戦闘娼婦^{バーベラ}達——女神^{イシユタル}が精鋭達を瞬く間に制圧していく襲撃者

たちはデインケ達に見向きもしない事が幸いし、殆ど交戦も無く二十階まで駆け上がる事が出来た。

しかし、上階へと続く階段の悉くが破壊されており、通行不可能に陥っていたため、この階層で足止めを喰らっていたのだ。

「不味い、戦闘娼婦だ!」

「見つかったか!」

敵を避けて進んでいたデインケ達の目の前に、数名の悍婦達が立ち塞がる。

先頭の悍婦は既に血塗れで、脇を抑えながらも反対の手で棍棒を担いでいる。その背後の者達は何人かが負傷しているアマゾネスを担いでいるのが目に入った。明らかに襲撃を受け、撤退中であろう戦闘娼婦の集団。

交戦を回避できるかもしれないとデインケが口を開くより前に、侵入者の区別が付けられない悍婦達が半狂乱気味に叫びながら突っ込んでくる。

「うっ、うああああああああああああっ!」

恐慌状態に陥っているらしい血走った瞳を見て、デインケ達が即座に迎え撃つべく構える。

振るわれる棍棒の一撃を受け止めんと桜花が前に出て———その一撃で桜花の体が浮き上がった。

「———ッ!」

「大男!」

「下がれっ、Lv. 3だ!」

続く他の悍婦の攻撃をデインケが受け流し、ヴェルフが吹き飛んだ桜花の元へ慌てて下がっていく。

手負いの相手であるにも関わらず押される有様に、ヴェルフが、くそつたれ、ふざけろ、とLv. 差に対し悪態をぶちまける間にも、デインケが一人で手負いのLv. 3達を足止めする。

「ぐっ、この、こいつら『狂化状態』入ってやがる!」

アマゾネスと言う種族特有のスキル。

効果は単純明快、『基礎アビリティ力に対する補正』怒りといった感情の丈や、自身の負傷が大きくなれば効果が大きくなり、同時に理性や知性を失う事もある狂化スキル。

大きく跳ねあがった力で負傷していながらも、無傷のデインケを大きく押していく様子にヴェルフ達が焦り、大刀や斧を構えていざ突撃しようとした、その時。

突如、通路側面の壁が吹き飛んだ。

「ぐえっ!?!」

「!?!」

瓦礫が直撃したデインケが反対側の壁を打ち抜いて吹き飛び、巻き込まれた二人の悍婦が廊下に転がって倒れ伏す。

残った悍婦達とヴェルフに桜花は、今まさにぶち明けられた穴を見て硬直していた。

無数の瓦礫に交じり、廊下に投げ出されたのは瀕死の重傷を負ったアマゾネス。

「手間かけさせんじゃねえ、娼婦が」

瀕死とかした少女に続いて大穴から姿を見せたのは、一人の猫キャットピール人の青年。

血に濡れた長槍を持つ小柄な冒険者は、手負いの戦闘娼婦達に冷酷な色を宿した瞳を向けた。

「ひっ、ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい!?!」

棍棒を持っていた悍婦が一瞬で戦意喪失して棍棒を投げ出し、逃走を図る。他の残った面々の内、一人が剣を手に飛び掛かかっていく。

ヴェルフ達が知覚できない程の速度を以てして、斬りかかった悍婦がすれ違いざまに切り伏せられ、逃げようとした悍婦達の肩に、次々と長槍の柄を叩き込んでいく。真横から殴打された悍婦達は左右の壁に激突し、先ほどの光景を繰り返すかのように次々の左右の壁に大穴を刻み込んでいく。

自分達が苦戦していた相手を、まさに鎧袖一触で片付けていった彼の様子に、ヴェルフと桜花が立ち尽くしている。

猫人の青年が二人を一瞥した。

「なんだ、てめえらは」

圧倒的強者からの鋭い視線に対し口を開けない中、青年はヴェルフの纏う気配が冒険者のモノではない事に気付いたのか、唾棄した。

「鍛冶師如きが……大人しく鉄遊びでもしてろ、三下」

「なっ……て、てめえっ!？」

鍛冶師としての矜持を傷付けられたヴェルフが吠えるが、青年は見向きもせずに移動し始める。

軽い足音と共に大穴の向こう側へと消えていったその姿に、慄いていた桜花が息を吐く。

「くそ、二人とも無事か！」

真っ先に瓦礫諸共吹き飛ばされ壁に大穴をこさえたデインケが、穴の淵を掴んで這い出てくる。

即座に半月刀を構えて周囲を警戒し、無数の大穴が開いた通路を見て目を見開いた。

「何があっただんだ……?！」

「Lv. 6、【女神の戦車】……アレン・フロームルだ」

「あん……って事は、さっきのは流れ弾かよ」

先の攻撃は、デインケを狙ったモノではなく、別の悍婦を狙ったモノだったのだろう。

故に、デインケ自身の損傷は想定程酷くはない。それでも瓦礫片塗れになったデインケは悪態混じりに欠片を払い落とす。

「クソ、ひでえめにあっただぜ……急ごうぜ、本当に流れ弾で殺されかねん」

デインケの言葉に二人が頷き、先に進もうと足を動かした。ふと、魔力の流れを感じ取った桜花とヴェルフが足を止めた。

「この魔力の感じは……」

「どうした?」

「間違いない、ミリアだ! 場所は」

僅かに感じた魔力の余波。魔法発動時にほんの少し漏れ出る魔力の波長。

鋭敏な感覚で桜花が気付き、長く付き合いのあったヴェルフがそれを感じ取り、誰のものをかを断定する。

ミリアの扱う魔法の余波はそこまで大きくない。大規模な砲撃魔法であるならまだしも、通常の射撃魔法であればそこまでの遠距離で

は感じ取るのも難しい。

逆説的に、ミリアが傍に居るといふ事になるのだが。

「もう感じねえ、でも確かにミリアの魔力だったぞ」

「どっちに行つたかわかるか？」

「いや、いきなり現れていきなり消えた」

「なんだそりや……クソ、とりあえず方向だけ教えろ」

悪態混じりにヴェルフと桜花が示す方向、先ほど大穴を開けて飛び込んだ部屋にディンケが駆け戻り、窓を開けて上を見て、下を見て。

立ち昇る土煙と、それを見やる金の長髪を揺らす小さな獣人の姿を見て、口を半開きにして呟く。

「おい、あれ副団長か？」

「何!？」

二十階から見下ろした正面の庭園。

その中央部から立ち上る土煙と、それを眺める様に立っている獣人。

獣人にしては小さい、小さすぎるその体軀。そして魔法円を展開しながらもゆらゆらとゆらめくその姿。

既視感のある姿を見たヴェルフが目を凝らし、その姿が掻き消えた。

「消えた!？」

「いや、あれは……短距離転移だったか」

「なんだそりや!？」

驚愕を露わにディンケが叫ぶ間にも、轟音と共に土煙が吹き飛び、中から巨影が飛び出す。

「——フリユネだ」

遠目に見ても血塗れ、どころか体の一部が不自然に抉れた様子が確認できる【イシユタル・ファミリア】の団長。Lv. 5の第一級冒険者、二つ名は【男殺し】。

数多くの男を再起不能にしてきた、醜悪な容姿をした、下劣な品性を持つ冒険者。

そして——仲間の仇である人物。

「……ヴェルフ、桜花、お前らはベルとミコトを探しにいけ」

「デインケ、お前はどのような気だ」

「勿論、副団長ミリアを助けに行く。んで、ついでに——復讐だ」

言うや否や、デインケは窓枠に足を掛けるとそのまま身を乗り出して下の足場を確認しようとして。

瞬間、傍の壁に少女が叩き付けられた。

「ぐぺっ!」

「っ……!」

「い、いたあ……ちよつと、外壁壊され過ぎて普段通りにいかないし……って、アレ?」

窓のすぐ横の壁、鞭でぶら下がったまま壁に激突したレーネと、窓枠から身を乗り出していたデインケの視線が交わる。

数秒の間において、前庭で巻き起こる轟音にレーネが視線を向けた瞬間。デインケが彼女の腕を引っ掴んだ。

「おい薄汚ねえ売女!」

「……何?」

「俺を下まで運べ!」

デインケの叫びにレーネが眉を顰めるも、直後に地上から響いた轟音に彼女は溜息を零すとデインケの腕を引き寄せる。

「さっきの見てわかると思うけど、落ちて死んでも恨まないでね」

襲撃の所為で普段外壁の移動に使っていたでっぱり等が粉碎されており、思った通りに上下移動が出来ないとぼやきつつも、レーネはデインケにしがみ付く様に言ってから、身を投げる。

唾然としていたヴェルフと桜花が慌てて窓から下を覗き込めば、はるか下の階の窓を打ち抜いて室内へと消えていくデインケとレーネの姿が微かに見えた。

「大丈夫なのかあいつら……」

「待て、あそこ……間違いはない! 仲間ファミリアがいるぞ!」

「何?」

同時に、円形の前庭を粉碎しながら戦うフリユネと、その巨女の傍に現れては消える小柄な獣人の姿。

そんな二人の戦闘から視線を外した先、桜花が指示した其処には、瓦礫と化した前庭の柱の陰に数人の人影が確認できる。

人質として捕らわれていたところを救出され、タケミカヅチの眷属達と共に先に離脱する為に離れたメルヴィス達が、前庭の瓦礫に隠れてやり過ごしている姿があった。

「何で逃げなかったんだあいつら!？」

「『フレイヤ・ファミア』が外周部を包囲していて逃げられなかったのか……」

今まさにミアとフリユネの激戦繰り広げられる前庭。

加勢すべく向かったディンケと、敵か味方が不明なレーネ。

其処に取り残されているメルヴィス達。

そして、二人の目の前を落下していくファイアとサイアの二人。

「ファイア!？」

「あの二人は!？」

二人の驚愕の反応も置き去りに、ファイアが空を蹴り更に加速して地上を目指す。

その様子を見ていたヴェルフと桜花が視線を交わし、即座に頷く。

「直ぐにベルとミコトを探すぞ!？」

「ああ、あのままだと不味い!」

自分達が行っても足手纏いだと判断し、彼等はベルとミコトを探すべく上の階への階段を探し始めた。

砂漠に聳え立つ宮殿を思わせる威容は打ち砕かれ、金に輝く外装も剥がれ落ち、燃え上がる歓楽街の炎の赤に染まった『イシユタル・ファミリア』本拠。

荘厳な宮殿に見合う程の、荘厳だった前庭。

正面門は魔法によって粉碎され、その後の『フレイヤ・ファミア』の襲撃で血に染め上げられたその場所を、更に滅茶苦茶にする巨大な影があった。

「うぬらあああああつ!!」

「大振り、醜い、当たらないわよ。その攻撃」

衝撃波と轟音、瓦礫を大量に生み出す巨女の一撃。それをすり抜け様に、『アサルトステップ短距離転移』で回避し、直後に『ショットガン・マジック散弾魔法』での反撃を叩き込み。

バルウム小人族らしく小柄な体躯のせいで直ぐに吹き飛ばされるも、即座に至近距離に転移してくる。それを鬱陶しく思いながらも、対応出来ずにいるフリユネの怒りが更に跳ね上がっていく。

対してミリアの方も飄々とした雰囲気を作りながらも、内心で酷く焦っていた。

四十階、高さにしておおよそ200M近い高所から地面めがけて叩き付けたのだ。それも、『ショットガン・マジック散弾魔法』を利用して加速させた上での話だ。

激情の暴れ狂うままに最高効率でダメージ損傷を与えられる方法を駆使したにも関わらず、フリユネは立ち上がってきた。

「本当に、見た目だけじゃなくて中身までスペック化物じゃない」

悪態をつきながら、ミリアは再度空間を跳躍して攻撃を回避する。完全に凶化状態が入ったフリユネに対し、有効な攻撃手段を失ったミリアは、けれども撤退しようとは思わなかった。否、思えなかった。頭上高く、夜天に抱かれる望月がそれを許さない。

月光がその身を焦がす様な憎悪へと誘い、目の前の獲物を仕留めろと囁き叫ぶ。

一度月夜を見上げれば、狂おしい金色の月より降り注ぐ青白い光が瞳を焼き尽くす。

意図せずとも吊り上がっていく口角に、精神が引き摺られて唸り声を響かせる。

「五月蠅いガキだよおおおおおおお!?」

「アンタは喧しいわね」

振り向きざまの大きく薙ぎ払う攻撃。

回避、同時に魔法での反撃。

相手を吹き飛ばす、または姿勢を崩させるほどの威力はあれど、ダメージ損傷にまでは至らず。

最初の高さ四十階からの叩き付け攻撃が効かなかった時点で引くべきだというのに、月光がそれを許さない。

「喧しいと言え、あの月も本当に喧しい」

「五月蠅いんだよこの気狂いがあああああああああつ!!」

轟音と爆音が理性を呼び起こす。

ほんの束の間の空白。

暴れ狂うフリユネから離れた位置に転移。

装飾として飾られていた崩れ壊れた巨大な石像の掌の上に着地し、

ミリアは僅かに息を吐いた。

完全に横倒しになった石像は、丁度手の平を月に向けて突き出す様な形で倒れている。

相も変わらぬ狂おしくも喧しい月光に照らされるも、先の猛攻で頭が冷え理性を取り戻した彼女は、遠く離れた位置で未だに暴れ狂うフリユネの様子に舌打ちを零す。

両腕をやたら目ついたら我武者羅に、まるで痲癩を起した子供の様に振り回す様は、駄々を捏ねる子供そのもの。しかし、その両拳が当たったものは材質の硬度等意に介さずに全てを瓦礫に作り替えている。

戦術や技量を全て投げ捨て、力と耐久に極振りしている。其処に技や駆け引きは存在せず、ただただ本能に基づいて暴れ狂う化物そのものの戦い方。

「厄介ね……さて、後はどうやって殺そうかし……ん？」

視線を感じたミリアが足元の倒れた巨大な石造の影に視線を向ける。

其処には、唾然とした表情を浮かべたメルヴィスと、その傍で膝を突いていたエリウツドの姿がある。

それだけではない、鎖で雁字搦めになっているイリスの姿に、タケミカヅチの眷属達の姿まであった。

「……そこで何してんの？」

「えつと……に、逃げ損ねて……」

引き攣った表情で答えたメルヴィスの姿にミリアが眉間を揉み、暴

れ狂っていたフリユネが動きを止め石造の掌の上に立っているミリアを見据えている。

どう行動を起こすべきか一瞬迷った所で、ズガンツと轟音と共にミリアとフリユネの間に着弾した誰かが咳込む音が響く。

「げほっげほっ……ああ、死ぬかと思つたじゃん！」

「そりゃこつちの台詞だ糞売女！　だが、良い所に来れたじゃねえか、其処だけは褒めてやる」

次の瞬間、振るわれた鞭によって土煙が吹き飛んだ。

半月刀を手にしたデインケと、デッドリーウエポン残虐武装を手にしたレーネの二人の姿が露わになる。

遅れて、空よりミリアが足場としている女神像の頭を踏み締め、ファイアが降り立った。背中にしがみ付いていたサイアを放り出し、ファイアが槍を構える。

「副団長、少しは理性を取り戻してくれたか？」

「……ごめん、少し跳んでたわ。けど今は平気」

「おう、なら良い」

——鎖の千切れる音が響き渡る。

イリスを拘束していた鎖が引き千切られ、彼女は石像の影から姿を現し、暗く澱んだ瞳で巨女を捉える。

「……見つけた。見つけた、見つけた！」

メルヴィスとエリウツドが冷や汗を流し、視線を交わして同時に動き出す。

レーネの隠れ家で手にした武装を手に飛び出す。

「フリユネ・ジャミール……グランさんの仇は討ちます」

「我が友、ルシアン・テイリスの仇」

迷宮内で呆気なく撃破された者達。加えて、過去に奪われた復讐者。

揃った面々を見たフリユネは憤怒のままに血の滴る頬を引き攣らせ、吠える。

「五月蠅いんだよ、アタイは今機嫌が悪いんだあ」

その言葉を聞きいたデインケとファイアが嘲笑を零し、半月刀と槍を

構える。

「そりゃこつちの台詞だ、ヒキガエル」

「お前の機嫌なんて知ったこつちやねえよ」

巨女が身を震わせ、憎悪と憤怒を緋い交ぜにした双眸でデインケとファイアを睨んだ。

「アタイの顔を見なア!? 酷い傷だらう、レーネと其処のガキが付けたのさア!!」

美しかったはずの美貌が傷付けられた。お前達のお遊びには付き合ってられない。そう吐き捨てる巨女に、メルヴィスとエリウツドが失笑して、弓を構えた。

「いえ、とても良い顔になったと思いますよ」

「お似合いな顔だ。むしろまだ足りないな」

フリユネから放たれる圧が更に強くなる。既に、この場に居る全員を逃がす気は無いとその双眸が雄弁に語っていた。

「醜い不細工共が……アタイの強さと美しさに嫉妬しやがって!？」

自意識過剰が過ぎる巨女。

何処までいっても、何を言われても自身に向けられる感情は全て『自分の強さや美しさへの嫉妬』だと思えない異常性。それを目の当たりにしたイリス、サイアが溜息を零して、拳を握り、大剣を構える。

「怒る気も無くなりそう。でもとりあえずぶつ殺す」

「えー、アレ本気でいってるのかな。ちよつと、恐いかも」

全身から蒸気を散らし、フリユネが拳を握り締めた。

「お前等全員、皆殺しだよおおおおおおお!？」

怪物の咆哮。

まるで階層主を思わせる様なその咆哮に、レーネとミリアがが叫び返す。

「まだ足りない? もっと皆血を欲しがってるから———殺すね?」

「私達が、貴女を殺すのよ」

レーネが残酷武装を手にし、ミリアが【射撃魔法】の銃口をフリユ

ネに向けた。

第一八〇話

ベルが辿り着いた空中庭園には、すっかり人氣が無くなっていた。数多くの破壊の痕跡が残る其処は、今や遠方より響く抗争の音以外に響く音は無い。

殆ど破壊され尽くした月ルナティックライトの石板は淡い輝きを宿すのみ。天に上っていた月が欠け始めたか、それとも単純に破壊されたが故にか、その光は淡くうつすらとしていた。

既に皆が避難した後かとベルが視線を巡らせると、庭園の中央、祭壇に、彼女は居た。

「来たね」

長髪の女傑、アイシヤが腰掛けていた石板から立ち上がる。

彼女の直ぐそばには春姫が居た。氣絶した彼女は石板に寝かされており、他の人の姿は消えていた。

自身を待っていたであろう言葉を聞きながらも、ベルは彼女の前に駆けよる。

「アイシヤさん、他の人は……?」

「逃がした。【絶影】は『石』探しだよ」

地面に突き立てた大朴刀に手をかけ、女傑が鋭く少年を見据える。その眼光にベルが僅かに怯んだ瞬間、アイシヤが大朴刀を地面から引き抜きざまに振るう。

当てる氣の無い、大氣を引き裂く一撃。間合いの中に居たベルが大きく飛び退いて驚愕の声を響かせた。

「な、なにを?」

「何を、ね……逆に聞いてやる。何しに来た?」

鋭く、ベルの瞳を真っ直ぐ穿つアイシヤの目には、ほんの僅かな敵意が見て取れる。

「イシユタル・ファミリア」を裏切り、「ヘスティア・ファミリア」に寝返った女傑が、再度寝返りイシユタルの元へ返り咲いたのかとベルが危惧し、ナイフを構えるさ中だった。

アイシヤが呆れた様な、酷く落胆した様な声を響かせる。

「アンタ、良い顔になったよ。本当に……だから残念だったよ」
その言葉にベルが訝し気な表情を浮かべる。

「どうして、何が残念って」

「リトル・ルーキー」……あなた、「魔銃使い」を救えて無いだろ」
女傑の放った言葉の刃が、少年の胸を穿ち抜く。

表情を強張らせた彼は、けれども言葉を返すべく口を開いた。

「今から救うんです。力を貸してください！」

ベルの言葉を聞いたアイシャは、静かに大朴刀の切っ先でベルの横を指示した。

「武器は其処にあるよ。好きな得物を持っていきな」

ベルの横、綺麗に並べられた各種得物の数々。

大剣、大斧、長槍、曲剣、長剣、短剣、短槍、手斧、大棍棒、棍棒、槌矛。

一部の戦闘娼婦パルベラが使っていた得物が並べられている光景が広がっていた。

「……アイシャさんは手伝ってくれないんですか」

「リトル・ルーキー」、良い事を教えてやる」

鋭く、敵意を孕んだ双眸と、大朴刀の切っ先をベルに向けた悍婦が、この世の真理とでも言う様に囁きかける。

「守れるのは一人だけだ」

「どういう意味ですか」

「わからないかい？ 一人の人間に守れるのは、たった一人だけって事だよ」

唐突な言葉に理解が及ばない少年は、けれども手持ちのナイフでは威力不足だと理解しており、即座に大剣へと手を伸ばして調子を確かめだす。

刻一刻と過ぎ去る時間に焦りを感じながら応答する少年の姿に、女傑が顎で空中庭園の入口を示した。

「行きな、リトル・ルーキー」

「アイシャさんも来てください」

ベルが大剣を手に声をかけた瞬間、アイシャが大朴刀で儀式場の床

を切りつけた。

少年と悍婦の間に、越えられぬ一線とでも言う様に敷かれた切り傷。ベルが硬直する間に、アイシヤが鋭い視線を向けて、宣言する。

「私は行かない。そして、春姫も行かせない」

突き付けられた言葉に、少年が瞠目し、叫ぶ。

「どうして!？」

「決まってるんだろ。アンタは春姫も、【魔銃使い】も救おうとしてる」
たった一人の人間の癖に、欲張りにも何人も人間を同時に救おうとしている。

「何度も言わせるな。——あんたは【魔銃使い】を救えてない」

言わなければわからないか、指摘しなければ理解も出来ないか。

女傑から放たれる苛立ちと圧が交じり合った言葉に、少年が意図せずして大剣の切っ先をその女に向けた。

「アンタは春姫を救いに来た。ああ、良い顔になった。自分の信念を貫こうとする決然とした英雄おますの顔になった」

だが、足りない。

一人の人間に救えるのは一人だけ。

「おまえは【魔銃使い】を救えていない。一人を守ってる間に、他の奴が傷付き、命を落とす」

一人の少女が居た。他の者に比べて上手く鞭を振るう事が出来て、雲の様に捉えどころの無い女戦士。

恩恵を失って尚、彼女は気高く最前線に立って仲間を庇おうとした。幾人もの戦闘能力を失った仲間を庇い、戦おうとした彼女は、けれども守る者の多さに四苦八苦してその大半を失った。

負傷した二人の仲間を一人で庇おうとして、二人ともを失った戦闘娼婦バーベラが居た。

何度でも繰り返し返そう。一人の人間に救えるのは一人だけ。

「……春姫は、イシユタル様ファミリアの派閥から抜け出しても、その『力』を聞きつけた誰かがまた同じことを繰り返す。よりクソツタレな連中に囲われるかもしれない」

「だから、僕達が春姫さんを救って——」

「なあ、何度も言わせるなよ。それとも、ちやんと言わないとわからないからな
いかい【リトル・ルーキー】」

完全な敵意に満ちた眼光を宿した双眸が少年を射抜く。

「春姫と【魔銃使い】、どっちを選ぶって聞いてんのさ」

——少年が瞠目し、その言葉の意味を知った。

一人の人間に救えるのは、一人だけ。

二兎追うものは一兎も得ず。

此度の騒動。春姫の為に【イシユタル・ファミリア】に喧嘩を売ろうと心に決めて挑んだベルとミコト。

そんな彼らの決意を他所に狙われたミリアが儀式の贄にされてしまった。

だから、途中で目的が変わった。春姫の救出から、ミリアを助ける事に。

「悪いが、二兎を追おうとしてるアンタに力を貸す気にはなれない」
貫くなら最後まで、今後狙われるであろう春姫を救う所までやり切れ。

ミコトは、それを捨てた。途中、春姫をアイシャに任せてミリアの為に動いた。

春姫を任せた。

「私が、信用できる、ね。馬鹿馬鹿しい……」

妹分達の罪を背負って処断される自身に、交渉材料にしかならないであろう春姫の身柄を預けた。

簡単に信用し、簡単に任せた。それほどまでに春姫と言う少女は軽いのか。

今後何かあった時、春姫を切り捨ててミリアをとるのではないか。

一人の人間が救えるのは一人だけ。その一人が春姫ではない誰かになるのではないか。

「はっ……本当に馬鹿馬鹿しいだろう？」

春姫を本当に救ってくれるのか、今更になって疑問を覚えてしまった。

女傑は、一人の少女を救うために【ファミリア】に、血の掟に背い

た。

その鋭い眼光は——お前は春姫を救う気はあるか、と問いかけていた。

「……その気があるなら、構えな。男が女を連れ去っていくときは、力ずくだって、相場が決まってるのさ」

自身の未来は無い。その覚悟の前に少年が抱いた決意を試される。背負った罪の元に断罪され尽き果てる命運を前に、女傑は最期に救いたい一人を託すに値する英雄おすを求めた。

敵意と共に笑みを浮かべたアイシャの表情に、ベルはやるしかない
と決意を固める。

その意志に応える様に、大剣の切っ先を彼女に向けた。

「時間が無いんだろ、さっさと終わらせて……どっちも救いに行ってみな」

「いきますー！」

響き渡る破砕音が木霊し、宮殿全体に振動を響かせる。

【イシユタル・ファミリア】本拠『女ベレト主の神娼バベリ殿』前庭。

元団長であった巨女、フリユネが放つ拳の連撃が辺りに転がる瓦礫を次々に打ち出し、近づこうとしていた者達に散弾の様に打ち出される。

「ふるああああああああああああああ!!」

口裂け女のように左耳から右顎まで醜く抉れた醜悪なヒキガエル顔。

レーネが振るう残虐武装デッドドリーウエポンの鞭の一撃で背中や腹、腕や足にも惨たらしく抉れた傷がいくつも残る化けガエル。

そんなフリユネを取り囲んで撃滅せんとしているディンケ達は、舌打ちと共に彼女の猛反撃から隠れるべく大柄な瓦礫に身を隠す様に走り回っていた。

最も注意を引いているのは、空を駆けるファイアだ。普段注意のいきにくい上空からの奇襲突撃を行う厄介さゆえに、フリユネが真っ先に潰そうと猛攻を仕掛けた対象。

「るああああああつ?!」

「邪魔臭いんだよおおおおつ!!」

機敏に空を駆けているのに加えて、空を駆ける等という奇怪な相手と戦った経験がフリユネに無い事が幸いしているのだろう。

横合いからレーネが掻き集めていた魔剣の炎球や風の刃、氷の槍等がぶつけられて集中力を乱されているのもあり、更にはフリユネの動きがほんの僅かに鈍っているのも大きい。

今まで蓄積された損傷が無駄ではない事の証明で——そして、絶望的な耐久を誇る事の証明でもあった。

「クソっ、副団長は復帰できそうか!」

残りの使用回数が少なくなり罅が入り始めた赤い魔剣を手にしたデインケが叫び、吹き飛んだ宮殿の入口部分の陰でフリユネから隠れて頭を押さえているミリアを伺う。

強襲型から飛翔型に変化して竜の翼と尾を手にした彼女は戦線離脱していた。連続転移の反動なのか、それとも別の原因か彼女は頭痛と吐き気で戦えなくなっている。

暴れ狂うフリユネを見たメルヴィスが冷や汗を拭いながら、レーネとフィアを中心にして時間稼ぎを行っている戦場中心に視線を向ける。

「……階層主戦みたいですね。本当に」

エルフの呟きに、傍で倒れていたアマゾネスの指が震える。

イリスは途切れかけた意識を繋ぐ様に歯を食い縛り、身を起こす。

「イリスさん、直ぐには動けません。もう少し待って……」

「待てない、待てるわけが……フィアが、戦ってるのよ」

フリユネの放った瓦礫の散弾を浴びて負傷した彼女は、回復薬での治療が終わってはいっても全快した訳ではない。そもそも、数時間にわたって鎖で拘束されていた彼女は戦闘開始以前から本調子とは言えない。

「……アタシに、もっと力があれば」

「イリスさん、場所を移動します」

メルヴィスに抱えられ、痛む体を引き摺られて移動するさ中。

爆音が響き、ファイアが真上に吹き飛んでいく姿がイリスの視界に映った。

——歯を食い縛る。

エリウツドが放つ矢が、呆気なく振るわれた拳の風圧で吹き飛ぶ。デインケが放った魔剣による魔法が、その肌をほんの少し温めて掻き消える。

必死の表情のサイアが近づけずに魔剣を握ったまま物陰に隠れている。

吹き飛んだファイアが戻ってきて攻勢を仕掛けようとし、反撃を浴びかけて離脱していた。

ミリアは復帰したのか、竜人から獣人の姿に変化して銃撃を放っている。効果は無い。

唯一、元敵対者であったレーネが放つ攻撃が、フリユネの肉を抉り血を流させている。

レーネの姿を捉えたイリスの脳裏に、ほんの数時間前に語り掛けられた言葉が蘇った。

『アマゾネス女戦士が強い所以って知ってる？』

鎖で縛られたまま、ベッドに寝かされた状態で語られたレーネの言葉。

怨敵の仲間であり、怒りを向けるべき対象からかけられていた言葉にイリスは耳を貸す気は無かったが、彼女のゆるりとした雰囲気と語り口に自然と耳を傾けていた。

『んー、と……フリユネって第一級冒険者なんだけど、アイツって弱いんだよね。ほら、貴女も知ってるアマゾネスより弱いでしょう？』

例えば【ヨルムガンド怒蛇】、例えば【アマゾン大切断】。

あの二人に比べ、同じアマゾネスと言う種族でありながら【アンドロクトノス男殺し】ってそこまで強く無いんだよね。

でも、フリユネは力と耐久は実はあの二人とそう大した違いはない。

『なのになんか違うのかっていうと、【アマゾン大切断】はスキル構成が違うから

一概には言えないけど、【怒蛇】ヨルムガンドとは割と似てるんだよね」

アマゾネスの固有スキルとして『バーサク』と言うものが存在する。同名であったとしても、個々でスキルの詳細は変化するもの、大きく分類すると三種類程に分けられる。

一つ目が『怒り』という感情の丈に応じて基礎アビリティの『力』に補正がかかるもの。

二つ目が『負傷』ダメージに応じて基礎アビリティの『力』に補正がかかるもの。

三つ目は上記の『怒り』と『損傷』ダメージの双方に応じて『力』に補正がかかるもの。

一つ目は【怒蛇】ヨルムガンド、二つ目が【大切断】アマゾン。

フリユネは一つ目、『怒り』の丈に応じて『力』に補正がかかる。

『同じスキルだから、差はそれなりにあるけど同レベルの場合は差が少ないはずなんだよね……でも、【怒蛇】ヨルムガンドとフリユネが殴り合ったら、一度目はフリユネが勝つ。そして、二度目以降は何度やってもフリユネが負ける」

理由、わかるかな？

ああ、暴れないで。教えてあげるからさ……『我慢』してるか、してないかだよ。

どういう意味かって？ 文字通り、『我慢』してる【怒蛇】ヨルムガンドの方が強い。

『そもそも、怒りって感情は燃やすモノでしよう？』

フリユネは短気だ。直ぐに怒るし、直ぐに怒鳴るし、我慢出来る様な人物じゃない。

ティオネは短気ではあるし、直ぐに怒りそうになるし、直ぐに怒鳴りそうにもなる。けれども好きな団長ひとの前ではおしとやかにしようと我慢出来る。

『短気は悪い事ではないんだけどねえ。少なくとも、直ぐに『バーサク』の恩恵を受けられるので初っ端から全力で行けるって事だし』

だからこそ、【怒蛇】ヨルムガンドとフリユネが戦うと、一発目の力はフリユネが勝つ。

でも、二回目以降は違う。

一回目に我慢して『怒り』を溜め込んだ【怒蛇】ヨルムガンドと、一回目から我慢を知らずに怒りを発散し続けるフリユネじゃ勝負にならない。

『だから、その『怒り』、ちよつと我慢してみようよ』

今この瞬間、無駄に『怒り』を燃やし続けるんじゃないで、少し貯めておこう。

必要な時に、必要な場所で、全て一気に燃やしてしまおう。

必要じゃないときに無駄遣いしても勿体無い。その怒りは霧散させていいものじゃない、溜めて、我慢して、耐えて——ぶつけるべき相手に対しての一撃に込めた方が良い。

『辛くても、苦しくても、気が狂いそうでも、我慢して、耐えて、堪えて……ムカつく奴を一発殴ったらきつと凄く気持ち良いに決まっているからさ』

目の前で行われる戦闘。暴れ狂うフリユネと言う、仲間の仇である人物。

奥歯が砕けかける程に歯を食い縛り、イリスは拳を握り締める。

一度『バーサク』が発動すれば、理性が消失して何が何でも敵を殲滅せんと暴れ狂ってしまう欠点を持つ。だからこそ、有利不利、戦術的行動が苦手だった。

パーティで戦う時も、いついかなる時だって、怒りで我を忘れて突撃を繰り返す。

それが原因で、仲間を失った。

「ああ、あの時……」

グラン・ラムランガと言う男が死んだあの時。

イリスが我武者羅にフリユネに突撃するのではなく、もつと考えて動けていれば、もしかしたら結末は違ったのかもしれない。それがわかるがゆえに、彼女は『怒り』を覚える。

ぐつぐつと煮え立つ灼熱の溶岩の様な、憤怒。

「イリスさん？」

側に立つメルヴィスの怪訝そうな声を聞き、イリスは息を殺し、怒

りを押しさえつける。

「メルヴィス、合図をお願い」

「それは、どういう」

驚愕の表情を浮かべたメルヴィスに、イリスは引き攣った表情で応える。

「合図してくれたら、あのヒキガエルに一撃入れるから」

酷い頭痛と吐き気に襲われながら、翼で扉の片割れを引っ掻く。

金属製の両扉の片割れを引っ掻く爪から伝わる不愉快な音、普段なら耳を塞ぎたくなる様な音色を聞いて心を落ち着けながら、喉の奥から溢れてきた酸味を伴う液体を吐き——ほふつと自身の口から火の粉が吐き出された。

「げほつ……ちよつと、ナニコレ……」

胸の奥が熱い。

いざ最終決戦と決め込んで戦い始めて数分、いきなりクラスが変化してフェアリー・ドラゴニウト型に変化したかと思えば、吐き気と頭痛で戦線離脱せざる負えなくなった。

気分が悪く、吐き気に伴って喉の奥から酸味の強い液体が飛び出し

——口から火を噴いた。

未だに響く戦闘音と、魔剣から放たれる魔法の音が仲間の無事を伝えてくれる。

二度、三度と口から火を噴くと吐き気が綺麗に消えていく。頭痛の方は自らの口から放たれた炎を目にする度に、焼け付く様に消えていく。

戦闘離脱から五分ほど、吐き気と頭痛が消え去り、胸の奥に宿る熱さだけがそのままにようやく動ける程にまで回復した。今までドラゴニウト竜人形態において『火を噴く』事をした事が無かったため、実は元から付いていた隠し機能だった可能性も否定できないが、それでもいきなりの事で困惑は隠せない。

しかし、これ以上、戦線から離れる訳にはいかない。多少の違和感

は覚えるが、フリユネの撃滅に加わるべく扉の影から顔を出そうとし
—— 眼の前に迫ったメルヴィスさんの胸に頭突きをかました。

「ぐっふっ!」

「いっ………すみません!」

胸を押さえて咳込むメルヴィスさんが正面玄関の影に入り込んで
きて、此方を伺った。

「副団長、無事でしたか。体調は?」

「なんとか、回復したけど他の皆は?」

一際大きな轟音が響き、無数の瓦礫片がエントランスに飛び込んで
くる。

咄嗟に玄関脇の瓦礫から前庭を覗くと、フリユネが柱を引っ搦んで
振り回している様子があった。レーネが器用に回避して挑発を繰り返
し、デインケとエリウツドが様子を伺う様に瓦礫の影に隠れてい
る。

サイアが何かを運んでおり—— イリスさんがフリユネの傍の
瓦礫の影で隠れていた。

「……イリスさんが、隠れてる?」

『怒り』で我を忘れて突撃してしまう悪癖を持つ彼女が?

戦争遊戯中はその悪癖を必死に耐えたと聞いていたが、それ以降の
探索ではどうしても突撃癖が出てしまうと愚痴を零しており、更に怒
りで我を忘れて手が付けられなくなる彼女が?

「イリスさんは負傷してますか?」

「いえ、今は全快とまではいきませんが、ほぼ好調です」

イリス・ヴェレーナの人物像的に不自然な行動をとっているが
……。

「副団長、一つ作戦がありました……」

「作戦?」

要点を掻い摘んで語られた作戦は、なんとも即席的な代物ではあつ
た。

しかし、現状の攻撃能力を鑑みても、それしかフリユネを殺す方法
が無い。ただ……。

「イリスさんは大丈夫なんですか？ 後、レーネさんの言う『武器』って……」

「大丈夫、だと……思います」

イリスがフリユネに真正面から殴り勝つと言うのは信じがたい。

更に、今のフリユネを殺せるだけの武器が無い。魔剣は中級や下級ばかりで、損傷ダメージとしては小さすぎるし、レーネの用意したらしい武器はどれも量産品も良い所。

せめて一級品が欲しいのだが……それを用意できているとは考え辛い。

しかし、敵対派閥に所属していたレーネに対し、イリスが話を聞く程度には信じているので、平気だと彼女が語る。

不確定要素と言うか、此方の知らない情報がちらほら混じっていて若干心配ではあるが、フリユネを殺したいという気持ちは共有している状態だ。此方を裏切る真似は、しない……はずだ。

「では、私は作戦位置に付きます。副団長もお気を付けて」

低い姿勢のまま素早くその場を後にし、持ち場に向かった彼女の背中を見送りながら、俺もフリユネの気を引く為に移動を開始する。

怒り狂って暴れ回るフリユネは、周囲がどんな状態になっているのかまでを見る余裕は一切無いらしい。

目の前で鞭を振るって注意を引くレーネ以外の俺達がこそこそしても気付く様子が無い。

「レエエエエエエエエエエエエツ!!」

「わはあ、私ってばモテモテエ〜。でもヒキガエルはNGでー」

口裂け女のような状態のフリユネの顔ばかり注目していたから気付かなかったが、いつの間にか右足の肉がかなり抉れている。かなりの量の血を流したのか、フリユネの足元は血塗れになっている。

対して此方はイリスが一発良いのを貰ったのを、ファイアが一撃掠つた程度で済んでいるのか。

「……なんというか、本当に周りが見えてないなアレ」

完全にふらふらフラフラな状態キな俺を無視して、挑発しながら逃げてるレーネを狙う辺り駄目過ぎるな……。

サイアが戦場の各所に放り出した木箱の一つに辿り付き、中身を覗き込む。

魔剣が二本と、回復薬、ポーション後は予備の武器が数本。杖は無いが、使えるようなショートソード型の魔剣だけでも持っていくか。

魔剣を取った瞬間、デインケの叫びが響く。

「副団長、そっちに行つたぞ！」

慌てて木箱からもう一本の魔剣だけでも引っこ抜いて飛び退いた瞬間、瓦礫が砕け壊れてフリユネの拳が木箱を砕き潰した。

「逃がさないよオオオオオオオオオオオッ!!」

俺を捕捉したのかと警戒して翼で飛ぼうとした所で、フリユネの目に俺は映っていなかったのか直ぐに別の方向を向いて拳を突き出した。

その先にはエリウツドの姿。フリユネが殴り飛ばした瓦礫片が散弾の様に彼に迫り、慌てた様子で回避して逃げていく。

「貴女の相手は、わ・た・た・しい〜」

楽し気な声を張り上げたレーネの残酷武装がデッドリーウェポンフリユネに迫る。

瞬間、振り向きざまに巨女が右腕でその一撃を受けた。瞬時に皮膚がずたずたに引き裂かれ、肉を抉っていく一閃。その攻撃を受けたフリユネは微塵も揺らがずにレーネ目掛けて一直線に駆けていく。

両拳を我武者羅に、駄々を捏ねる子供みたいに振り回しながら彼女目掛けて一直線。その間に、パチンツと硬質な音が響く。

作戦決行の合図。

手にしたのは黄色に彩られた装飾過多な魔剣と、緑色に彩られた簡素な魔剣。

前者は黄色の中級魔剣、後者は風属性の下級魔剣。

魔法効果を即時に発動させる希少かつ強力な武器。ただし、ある程度損耗しているとはいえ、第一級冒険者相手に使用するには、せめて上級、もっと欲張るならば最上級の魔剣が欲しかったが……。

作戦が上手くいけば黄色の魔剣ならば効くはずだ。

【多銃身式機関銃】ガトリング・マジック【弾带式】ベルト・リング【リロード】リロード【リロード】リロード【リロード】

「ファイア」ツ!!」

フリユネが振り上げた腕——では無く、幾度となく肉を抉られた足に射撃を叩き込む。

L v. 3に至り、マガジン辺りの弾薬数は80発、四つで320発……の効率が下がっているので五分の一。つまり64発の高威力の魔弾が一瞬でフリユネの軸足である右足に命中し、ほんの少しだけ拳の軌道が逸れる。

大幅に威力を落とした第一級冒険者の拳と、表情を殺したイリスの拳が真正面から激突する軌道を描き、振るわれ始めた。

「ツツツ!!」

「小賢しい真似をツ!？」

次の射撃再開は不可能。装填する余裕は無い為、即座に魔法解除して黄色の魔剣を握り締める。

メルヴィスとエリウッド、俺の三人が同色の魔剣を構えて完全に待ちの姿勢。俺に出来るのは祈る事のみだった。

「ふッ……!!」

イリスの身長は170はあるはずだが、2Mを超える巨軀を誇るフリユネの前ではまるで子供の様だ。

相手は第一級冒険者、対してイリスは第二級冒険者。

腐つても、負傷し損耗していても、それでも勝ち目が見えないその拳の交差は。

「ぐっっ、おおおおおおおおおおお!!」

ほんの一瞬の拮抗、小さな拳と巨大な拳がぶつかり合い、凄まじい衝撃波が撒き散らされ——巨女が押し負けた。

思わず息を呑む光景が広がっていた。

内側から弾ける様に白い欠片を飛び散らせながら腕をへしやげさせながらも、イリスの一撃は巨女の、第一級冒険者の拳を押し返し、そのまま大きく弾く。

「ぐ、ぐっ……ぎっ……!!」

驚愕に染まるフリユネの表情。よもや力負けする等と思っていないなかつたのであろう彼女の想定外。

弾かれた反動によって泳ぐフリユネの右腕は空を泳ぎ、軸足であった右足は今までの微細な損傷ダメージの蓄積と、大地を染める赤い血で滑る。だが、腐つても第一級冒険者。即座に姿勢を立て直さんとして——
——デザインケが振るった鎖と、レーネが振るう鞭が大地を踏み締めた左足に絡み付き、綱引きの要領で引つ張られる。

「いつせえーのっ、せえええええっ!!」

「くっ、おおおおおおおおおっ!!」

左足が外れ、フリユネの体が完全に宙に浮いた。

左腕を大きく掻いて即座に地面を捉えようと身を振る巨女。

そして——『銀の装飾の成された槍』を突き出して流星の如く落下してきたファイアの一撃がフリユネに突き刺さった。

轟音と共に土煙が弾け、視界を塞ぐ。

落下の速度と加えてファイアの『空を蹴る』行為で加速し、出処不明の一級武装の槍の切っ先への一点集中する事でフリユネの耐久を抜いて穿つ作戦。これに失敗した場合は、考えたくは無いです。

「ぐ、ぎっ……お、惜しかったねえ?」

土煙の中から声が響き、ファイアの唸り声が響く。

誰かが振るった風の魔剣によって風が吹き抜け、土煙が吹き飛んだ先。背中から地面に叩き付けられた巨女は、ファイアが全身全霊を賭けて突き出した銀槍の穂先を掴んでいた。

穂先が僅かにフリユネの胸筋に刺さってはいるが、浅すぎる。

よもや失敗か、と背筋が泡立った瞬間——イリスが声を張り上げた。

「死ねッッ!!」

槍を押し込もうと力を加えていたファイアの背後、イリスが壊れた右腕に変わって振り上げた左腕を、全力で石突に叩き込む。

まるで手動式杭打ち機パイロンパンカーを思わせる様な連携攻撃を前に、フリユネが身を振るのが見え——二度目の轟音。

「ぎっ——ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!」

耳朶を震わせるしゃがれた絶叫が響き渡ったと同時に、肉を打つ鈍い音が響く。

土煙を突き破り、ファイアとイリスが吹き飛んで外壁を突き破っていった。

至近距離で巨女の一撃を受けたであろう二人が心配だが、即座に黄色の魔剣を構えていつでも振るえる様にして土煙の向こう側を睨んだ。

「ぎひいい……!? ア、アタイの肩にい……ッッ!!」

——心臓一突きで死んでくれれば良かったんだが。

土煙が晴れた其処には、左肩に銀槍が突き刺さったフリユネの姿があつた。

槍は完全に貫通しており、折れてもいない。生半可な武装だったら絶対に折れていたであろうあの杭打ち機バイルバンカー方式でも傷一つない一級品の武装。何処から手に入れたのか若干気にはなるが、最高の機会チャンスをくれた。

「今だよっ！」

喜々とした表情で獲物を指し示し、黄色に染まった槌型の下級魔剣を手にしたレーネが叫ぶ。

下級、中級の黄色に染まる魔剣を手にしたレーネ、俺、メルヴィス、エリウツドが同時に魔剣を振るう。

対するフリユネは貫かれた槍を抜こうとするのを止めて防御姿勢をとる。

「中級魔剣程度でアタイが傷付く訳が——ッ!?」

確かに、普通なら下級、中級の魔剣程度では第一級冒険者に損傷ダメージは与えられない。

その体表、筋肉に阻まれ内臓や神経といった重要器官にまで魔剣の一撃が届く事は無く、上級の魔剣でもなければ全くの無意味。今まで放った氷も、風も、炎も、その全てが弾かれてきた。

だが、今回は別。

黄色の魔剣は、例外的だ。

何せ………。

「~~~~~ッッ!!」

声にならない絶叫が巨女の喉を震わせる。

喉だけではない、その全身を酷く痙攣させたヒキガエル。

『ガルヴァーニの発見』もこのような形で見つかったのだろうか。痙攣するヒキガエルは、体内に銀槍電極をぶち込まれ、其処に下級や中級とはいえ電撃と言う防御力無視、防御不可能な猛攻を受けて行動を停止した。

そう、電撃。

戦争遊戯ウォーゲームのさ中、絶対的な防御性能を誇ったはずの重装アーモードドラゴン竜が倒れ伏す原因となった攻撃。あの場で用意された中級魔剣十本以上の砲火とは異なり、完全に命を断つには足りないが、それでも動きを止める事には成功した。

高位の《対異常》があろうが、直接神経に電撃を喰らえば数秒から数十秒の硬直は確実。

「よし、巻けっ！」

デインケとメルヴィス、サイアが駆け出していきフリユネに鎖を巻き付けていく。

口を不気味に痙攣させているフリユネは、それでも余裕そうな表情は崩さない。

鎖で拘束したとしても、即座に逃げ出せるとも考えているのだろう。雷属性の魔剣による行動阻害もせいぜい数十秒が限界。その後は全員纏めてぶち殺せるとでも……思ってるのだろうか？

「巻き終わった！」

「離れろ！」

「副団長、頼みます」

口裂け女のように裂けた口に、ぎよろぎよると蠢く目玉、頭皮も半分近く抉り削られて化物としか形容できない容姿。体中にズタズタに抉られた凄惨な傷、その下には剥き出しの筋肉。

左肩に突き刺さる銀槍。雷属性の魔剣に穿たれ痙攣する姿はまるでパニックホラー系のゲームに登場する敵役の様だ。

そんな彼女は今や全身に精錬金属ミスリルの鎖が巻き付けられている。

「よし、ほいっとうー！」

陽気な掛け声と共に、レーネの持つ残酷武装デッドリーウェポンの先がフリユネの体

に巻き付く。肉を抉り取る為に引き戻すのではなく、そのまま巻き付けたままレーネが動きを止めた。

しゃがれてくぐもった悲鳴を零すフリユネに視線を向けつつ、レーネに近づいて彼女から鞭の柄を受け取った。

「じゃあ、止めをよろしく」

「ええ……」

受け取った瞬間に立ち眩みの様な感覚を覚えると同時、足が縛られた様に動かなくなる。

考えるまでも無く、今の自身のクラスは治療型サンクチュアリだろう。なら、詠唱は一つのみ。

「サブマシンガン・マジック」

低品質ロウクオリティで使い物にならない、攻撃性能ゴミ屑の攻撃魔法。

こんなもので止めだなんて、笑える所だろう。

「フリユネ、遺言は？ まあ、聞く気なんてさらさらないけど」

痺れが収まり始めたのだろう、拳を握って鎖を引き千切らんと徐々に力を込めているのが見える。

その瞳に映るのは……自身をここまで痛めつけた憤怒、そして憎悪。

「……【リロード】」

憎悪を向けられるべきはお前だろう。憤怒を抱くべきは俺達だろう。

弾倉マガジンを装填。残虐武装デッドリーウェポンを通じて、銀の槍銀の槍に魔力塊魔力塊を捻じ込む。

「【リロード】、【リロード】」

完全に痺れが取れていないのである、フリユネが驚愕の表情で自身を拘束する鎖を見て——痙攣痙攣しだす。

「~~~~~ツッ!?!」

巨大な化物を拘束する鎖が、赤熱していた。

ジュウジュウと肉を焼く音が響き、今にも爆ぜそうな魔力の塊が巨女の肩に刺さる槍に蓄積されていく。

「【リロード】、【リロード】、【リロード】」

魔力を込める度、精錬金属ミスマルが反応して熱を放つ。

魔力伝導率の良い金属であるがゆえに、その全身を拘束するそれらは導火線であり、同時に感知器だ。

もし鎖素子の一つでも破損した瞬間、込められた魔力塊が一瞬で魔力暴発イグニスファトウスと言う現象を引き起こすだろう。

「リロード」リロード……」

8つ目の魔力塊を装填したところで、限界を迎えた。

これ以上込めようとすると、俺も巻き添えを喰らうだろう。だが、十二分だ。

考えてもみろ、体の内側に捻じ込まれた銀槍は魔力塊が満ち満ちているのだ。それが起爆したらどうなるだろうか？ ……汚い花火が見れそうだな。

そういえば、もう一度、あの台詞を伝えておくべきか。

「フリユネ」

恋愛映画を共に見ていた部下だった少女と交わした会話。

『月が綺麗ですね』という台詞への返しとして、有名な返しが存在する。『死んでもいいわ』と言う台詞だ。『月が綺麗ですね』と言う台詞は相手に『死んでもいいわ』と返して欲しくする言葉であろう。と解説したのが懐かしい。

言葉を曲解した彼女は、こう言ったのだった。

——このやり取り、情熱的な愛の告白というより、狂気的な殺害宣言だと思おうのですが？

文学表現とは、正しく理解できる知識が無ければ狂気的なやり取りにも聞こえるのだと、その時初めて学んだ。

「私が綺麗でください」

魔力の制御を手放し、近くに居たレーネの腕を掴んで緊急離脱。

直後、巨女を全身に巻き付き魔力に反応して赤熱していた鎖と、レーネの残虐武装アッドドリーウェポン、そして肩に突き刺さっていた銀槍が込められた魔力の暴走によって魔力暴発を引き起こした。

第一八一話

月が欠けゆきつつある夜空の下、巻き起こったのは大爆炎。

見る者全ての瞳を焼く魔力の輝き。耳を弄する大爆音と共に周囲に散らばる瓦礫片が吹き飛ばされる。中心部分のフリユネは元より、即座に離脱した俺とレーネ、それなりの距離を置いていたメルヴィスやデインケなども含め、全ての者が爆風に呑み込まれる。

本来ならば回避すべき事故現象である魔力暴発を攻撃用に利用した異端な攻撃法。前々から危険過ぎると注意は受けては居たが、他に方法を見出せずに利用した爆破攻撃。

「がっ——」

レーネに抱えられた状態で吹き飛ばされ、門前にまで盛大に吹き飛ばされた所で地面を二、三度転がり、止まる。

「流石に死んだよねえ……いたたた……」

「ふう、今で流石に死んだでしょう」

爆発の中心地天からは魔力の残滓が残る熱風がほんの僅かに立ち上っている。

銀槍を突き立て、其処に魔力を充填してからの暴走。体の内に突き刺さった銀槍が爆発したのだ、その損傷は間違いなくフリユネに届いたはずだ。

中心地は煙で目視できない。代わりに周囲に視線を向けるとエリウッドとメルヴィス、サイア、デインケの姿が見えた。

油断なく爆心地を見つめる彼等を見て、フィアとイリスの事を思い出した。早く彼女らを治療しないと、と意識がほんの僅かに逸れた。瞬間。

轟音と共に瓦礫塊が未だに煙立ち昇る爆心地よりエリウッド目掛けて打ち出された。

「エリウッド、避け——！」

瓦礫塊の着弾音がデインケの絶叫を掻き消し、ついぞと言わんばかりにその瓦礫塊はエリウッドの姿も俺達の視界から完全に消した。

「ッ、まだ生きてます！」

メルヴィスが壊れかけの風属性の魔剣を振るって土煙と魔力の残滓を帯びた空気を吹き飛ばす。

「——ッッ!!」

顔の左側半分の皮膚の表層は完全に炭化し、その下の皮下組織にすら重度の火傷を負った状態であろう事は一目瞭然。左目は急激な圧の変化に耐えきれずに破裂したのか眼孔からゼリー状の液体が零れ落ちて引き裂けた頬を濡らす。右目はギラギラと理性が消し飛び、憤怒一色に染め上げられた状態で此方を射止めている。

爆破箇所である左腕は完全に千切れ取れており、左肩の部分はごっそり消えて無くなっている。その上、体の左側の大半がⅢ度熱傷、良くてもⅡ度熱傷に犯されており、通常ならば動く事等不可能に等しい状態である。

もはや生きている方が不思議な程の重傷であるはずのフリユネ・ジャミールは、ミチミチと顔の右半分に無数の青筋を立て———ブチイツと言う生々しい音と共に、しゃがれた声を上げた。

「アタイの、美しい顔が……アタイの、美しい肢体が……」

文字通りのゼリー状のドロドロしたモノを眼孔より零しながら、フリユネが一步、また一步と窪んだ爆心地より這い出てくる。

「嘘でしょ、流石に……流石に死んでくれてもいいでしょ」

「あははー……なんとというか、流石第一級冒険者さまだあゝ」

僅かに震える声で現実逃避染みた事を言い出すレーネの尻を引つ叩き、即座に再度攻撃の為の計画を練る。

戦闘続行可能戦力は俺、レーネ、デインケ、メルヴィス、サイアの五人のみ。せめてフィアとイリスが復帰すればなんとかなる。即座に回復魔法を使用する為に詠唱を始めねば。

「回復魔法を使います、詠唱の時間を稼いでください」

「うへえ……まあ、やってみるけど」

苦々しい表情でレーネが普通の革製の鞭を取り出し、デインケが半月刀を握り、サイアが大剣を担ぎ、一メルヴィスが弓を構え、直線に俺に向かって来ようとするフリユネを足止めせんと行動を開始した。

真っ先にフリユネと接敵したのは、最も距離が近かったデインケ。

彼が半月刀を振るった瞬間。

フリユネが無造作に振るった拳弾が刃諸共、振るった彼を吹き飛ばす。

「聖域を守護する者達よ、非力な我が身が捧げる献身を受け取り賜え」

サンクチュアリ
治療型が使用する回復魔法は長文詠唱だ。

詠唱にかかる時間はおおよそ1分程度。高速詠唱を得意とする俺でもそれなりにかかる魔法だ。効力は折り紙付きとはいえ、詠唱に時間がかかり過ぎる。

二人目はサイア。彼女の持つ重量級の大剣による振り下ろしは、迎え撃つ下方向からのフリユネの拳と正面衝突。まるで玩具の様に大剣はへしやげ、勢いのままにサイアが真上へ打ち上げられる。

「——聖域に降り注ぐ雫よ、癒しとなれ」

三人目、メルヴィスが放つ矢は無視されており無意味。

四人目のレーネが立ち塞がらんと鞭でフリユネを穿とうとし——鞭を掴まれた。少女が慌ててそれを手放した瞬間。反撃と言わんばかりに怪物がその鞭を振るう。ただの編み込まれた革紐の束が、持ち手側の部分が回避する間も無く少女の脇腹を穿つ。

鈍い打撃音。鞭で人を打つ音というよりは、鈍器で穿った様な鈍い音を立ててレーネが吹き飛んでいく。その先には狙いすましたかのようにメルヴィスの姿があり——鈍い音と共に二人が激突。

「——流るる涙の代わりに、我が血を捧げよう——」
後一文節。

残る詠唱を終えれば広域回復魔法が発動する——のだが。
ミシツと俺の足元に広がる魔法円マジックサークルの端を踏み締める革靴。月を遮る様に目の前に現れる巨軀。

詠唱が間に合わない。後、一文節。その詠唱が終わるより前に、目の前の巨女、死に際に立ってなお恐ろしい怪力を以てして立ち塞がろうとした者達を玩具の様に蹴散らした化物、フリユネ・ジャミールの攻撃が先に届く。

「——くも、アタイの顔を、肢体を……殺すッ!!」

「——聖域に——」

拳が握られ、筋肉の脈動すら感じられる程の距離。凄まじい圧を放つ拳弾が迫る様子を目を見開きながら捉える。

回避不可能。治療サンクチュアリ型は圧倒的回復能力と引き換えに移動不能の欠点を持つ。

防御不可能。なけなしの強化魔力障壁マジックシールドは飴細工の様に砕け散る事だろう。

迎撃不可能。回復魔法詠唱中に他の攻撃魔法は使えまい。使えたとて圧倒的威力不足なのは確定。

迫る拳を前に、出来る行動は詠唱を続ける事のみ。

「——響く——」

とてもではないが、間に合う筈が無い。

既に眼前に拳は迫っており、救援に来そうな存在はゼロ。

もはやこれまでか、即座に身を翻して撤退していれば反撃で命を落とす事等なかっただろうに。

手負いの獣の反撃で命を落とすのか——あまりにも、悔しい。

最後の詠唱の一言が口から出るより前に、フリユネの拳が俺を捉え

——轟音と共に衝撃が全身を打ち付けた。

「——」

思わず目を閉じ、身構えた俺の全身を走り抜ける衝撃は、思った以上に小さかった。

フリユネの拳が弱かったとか、そんな話以前に、その衝撃は横からやってきた。

思わずそちらに視線を向けようとし——目の前のフリユネの拳が、横から伸びた手に掴まれている事に気付いた。

「ッ!？」

受けた衝撃の原因は、その人物にあったのだろう。

俺とフリユネのすぐ真横に着弾した彼は、そのまま巨女の拳を横から掴んだのだ。

横から、掴んだ？——横から掴んで、あの一撃を止めた？

しかも、着弾の衝撃はあれど、フリユネの拳弾の衝撃は完全に殺され

ている。

とんでもない芸当だった。化物と罵り続けていたフリユネより、よほど化物染みているうえで技量すらも想像に及ばない程に天井知らずの人物。

「フリユネ・ジャミール……見つけたぞ」

厳然たる声音と共に威圧感に満ちる。

間違いない。この光景を見せ付けられたら誰もが認めざるを得ない。

「イシユタル・ファミリア」が最終目標とした派閥の撃滅に至る際に最も入念な対策がなされる人物。

『殺生石』でのフリユネの強化。それだけに留まらず異常魔法、呪詛アンチステイタス、呪詛カースによって徹底的な弱体化を図って、漸く攻略の糸口が掴めるだろうと予測された強者。

「随分と手酷くやられた様だな」

「っ——！」

【剣姫】を目の仇にして、強気な態度を微塵も揺らがす事のなかった巨女が、初めて動揺する相手。

防具どころか、武器すら装備していないにも関わらず、放たれるのは武人の重圧。

【フレイヤ・ファミリア】の首領。

都市最強の冒険者。

『頂点』とも謳われる、オラリオにおいてただ一人——唯一のL

v. 7。

【おうじゃ猛者】オツタル。

「オ——オ、オオ、オツタルツ!？」

2Mを超えるはずの巨女のフリユネよりも更に背の高い猪人。ポアズ

フリユネですら子供と思える程の身長差を持つてして、その武人は巨女の攻撃を完全に無力化していた。

「ぎっつ——ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

劈く様なしやがれた絶叫に停止しかけていた意識が再起動する。

オツタルが掴んでいるフリユネの腕がまるで溶けた飴細工の様に

ぐにやりと形を変える。否、オツタルが巨女の腕を握り潰していた。骨の碎ける音と共に、巨女の右手首から先がぐちゃぐちゃな状態になる。

あらん限りに仰け反るフリユネを他所に、オツタルが此方を見ていた。

「下がって居ろ」

「え——」

いや、下がれない。そんな返答が口から飛び出すより前に、オツタルが掴んだままのフリユネの腕をそのまま回転。巨女が迫ってきた為に慌ててその場でしゃがみ込んだ瞬間、頭上を巨塊が駆け抜けていった。

啞然としている間にも、前方数十Mの位置に投げ飛ばされたフリユネが石畳を滑空してすぐにごろごろと音を立てて転がり、先の爆心地の窪みの中に転げ落ちていった。

「ミリア・ノースリス、貴様は下がっていると云ったはずだが」

「……えっと、動けません」

自力で動けない為、なんとか両手を上げて降参を示す。

時間切れ、か……フリユネの息の根を止めるより先に「フレイヤ・ファミリア」が到着してしまった以上、諦める他無い——口惜しい話だが。

訝し気な武人の視線に圧を感じながら、せめて動けるクラスにと意識した途端に頭痛と眩暈で視界が揺れる。踏み止まってなんとか視線を上げた所で、オツタルは既に俺では無く爆心地の窪みでのた打ち回るヒキガエルの方へ歩んでいた。

僅かに見える窪地のフリユネが逃げようともぞもぞと藻掻いている様子が見え——複数の足音が近づいてくる事に気付いた。

「ディ……ンケ、さんじゃない」

皆が戻ってきたのかと視線を巡らせた瞬間、背筋が凍り付いた。

小柄な体躯をした猫キャットピール人の青年。

白妖精エルフと黒妖精ダークエルフの二人組。

そして四人の区別不能な小人族バルウム。

そんな彼らは爆心地を中心に着地し、窪地に転がるフリユネを包囲した。

「う、うひい!？」

キヤットビークル

猫 人が【女神の戦車】アレン・フローメル

エルフ 白妖精が【白妖の魔杖】ヘディン・セルランド

ダークエルフ 黒妖精が【黒妖の魔杖】ヘグニ・ラグナール

バルウム 小人族が四人で【炎金の四騎士】ガリバー兄弟

フレイヤ 美神の派閥に所属する幹部達。

【フレイヤ・ファミリア】が誇る最高戦力。

其処に加えて都市最強の猪人の【猛者】

——— 本気で【イシュタル・ファミリア】を潰す積りなのか。

完全包囲された窪地の底、包囲に加わるオツタルを見て、ついにフリユネの精神が限界を迎えたのだろう。

「ヒッ、ヒイイイイイイイイイイイイイイイッ!？」

醜い絶叫が撒き散らされる。

あれほどまでに苦戦させられたあの怪物が、醜い半顔を隠す様に腕で覆っている。その事に殺意すら沸いた。

思わず歯軋りしかけ——— オツタルが此方を振り返った。

否、オツタルだけではない、全員だ。その場に現れた【フレイヤ・ファミリア】が誇る最高戦力の全員が此方を向いた。

思わず息が詰まり、一步後ずさった瞬間。

目の前に小人族が現れた。

「やあ、オツタル——— こんな所で、奇遇だね」

場違い感すら感じられる程の気さくそうな挨拶。

都市最強派閥に対しそんな軽口を叩ける人物がいるとすれば、それはこの迷宮都市においても数える程しか居ないだろう。

例えば、そう———

【勇者】か、何の用だ」

【ロキ・ファミリア】の首領とか。

「フィン、さん……」

「すまない、遅くなったね」

黄金色の髪を揺らし、短槍を肩に担ぐ小人族バルウムの男性。待ち侘びたとも言える救援の姿に思わず腰が抜ける。

それだけに留まらない。

軽い着地音が次々に響き、気が付けば周囲には無数の冒険者の姿があつた。

【剣姫】、【怒蛇】ヨルムガンド、【大切断】アマゾン、【凶狼】ヴァナルガンド。

【ロキ・ファミリア】が誇る第一級冒険者達が集っている。

「皆、無事？」

「酷くやられたわね」

「でも、フリユネもなんかボツロボロじゃない？」

「けっ、臭え場所だな」

彼等は各々が負傷した仲間を抱えている。

アイズさんがフィアとイリスを。

ティオネさんがメルヴィスとサイアを。

ティオナさんがデインケとエリウツドを。

ベートさんだけはポケットに手をつ突っ込んだまま鋭い視線をオツタル達に向けている。

「……【ロキ・ファミリア】か。外周は包囲していたはずだが」

「ああ、外周の包囲網ならば【ガネーシャ・ファミリア】が引き受けてくれているよ」

戦闘に夢中になっている間に、外周部では更に大きな抗争が起きているらしい。

耳を澄まさずとも聞こえてくるのは、激しい剣戟のやり取り。外周部を包囲している【フレイヤ・ファミリア】の団員と、その包囲を崩さんとする【ロキ・ファミリア】と【ガネーシャ・ファミリア】の連合による乱戦。

「我々と戦争をする気か」

「いや、そんな積りは無い。あくまで僕達は同盟派閥である【ヘステイア・ファミリア】救援に訪れただけさ」

それを妨害したから、仕方なく退けただけだ。そう、詭弁ともとれる言葉をフィンが告げると、武人の眉間に僅かな皺が寄り、即座に返

事を返してきた。

「そうか。ならば【ヘスティア・ファミリア】の眷属達を連れて、直ぐに去れ」

「悪いけど、それはできない」

「そう言い切るとフィンには手にした得物をオツタルに——オツタルの奥に居るフリユネに差し向けて口を開いた。

「僕達の同胞が殺されたんだ。殺した実行犯であるフリユネ・ジャミールも僕達が回収したい」

フィンがそう口にした瞬間、ゾツとするほどの圧がロキ派閥の面々から漏れ出す。思わずチビる程の圧に視線を巡らせると、ベート・ローガは元より、アイズさんやテイオネさんまでもが鋭くオツタル、その向こう側で縮こまっているであろうフリユネに殺気混じりの視線を向けていた。

「ああ？ 後からしやしやり出てきて何言っただお前ら」

既に臨戦態勢である猫人の青年、ベート・ローガとある意味仲が良さそうな狂猫、アレン・フロームルが敵意剥き出しで吠えてくる。

「そもそもフリユネ・ジャミールは僕達の同盟派閥の【魔銃使い】以下数名と戦闘を行っていた所にキミ達が乱入した、と僕は認識している」

つまり、後からしやしやり出てるのは君達の方ではないか。と挑発混じりにフィンが返す。

瞬間、アレンが踏み出そうとし、オツタルが止めた。

「待て……フィンの言い分にも一理ある」

「おい、オツタルがもたもたしてるからこんなことになったんだろうが」

アレンは殺意混じりの眼光をオツタルに向けながらも、此方から意識を外す事は無い。

他の面々、特に四人の小人族なんかは特に大きな敵意をフィンに向けながらも黙っている。

確かに、フィンの言い分も一理ある。

最初にフリユネと戦闘をしていたのは俺達【ヘスティア・ファミリ

ア」である。

抗争に関しても同様、「フレイヤ・ファミリア」が仕掛けるより以前に、「イシュタル・ファミリア」が俺達に仕掛けてきていた。

詭弁と切り捨てられかねないが、フリユネの処遇に関しては此方に寄越せと言える状態では、ある。

それを彼らが飲むかどうかは別にして、だが。

一触即発の状態で睨み合うオツタルとフィン。

「フレイヤ・ファミリア」側は「イシュタル・ファミリア」との抗争を邪魔されているという事。

「ロキ・ファミリア」側は「ヘスティア・ファミリア」救援の妨害に加え、雪辱を果たす対象を横取りされかけている事。

互いに主張している内容自体は最もだが、譲れるか否かの問題が残っている。

どうするか、とピンと空気が張り詰める中、空気の読めないしゃがれた声が響いた。

「ゲゲゲツ、ゲツ……どうやら運はアタイに向いてきたみたい、だねえ」

——何を、何を言っている。

いきなり喋り出した死に掛けのヒキガエルの言葉に全員が無条件に視線を向けた。

オツタルやフィンですらも不愉快そうに表情を歪める中、視線を集めた醜女のフリユネが声高らかに叫び出す。

「【おうじゃ猛者】も【フレイバー勇者】もアタイの為に争わないでおくれよお！」

……何、言ってるんだあのヒキガエル。

話をちゃんと聞いていなかったのか？ それとも、頭がぶっ壊れてお花畑にでもなってしまったのだろうか。

「アタイの美しさったら罪だねえ、こんな風に【おうじゃ猛者】と【フレイバー勇者】を争わせちゃうんだからあ」

顔の半分が重度の火傷で見れた状態ではないし、肢体も左肩から先が吹き飛んでるじゃねえか。元々の顔も体も、醜悪が過ぎるというのに。

「アタイのこの美貌にこの肢体……いまは滅茶苦茶になっではいるが治療すれば元通りさ！」

誰が治療を施すというのでしょうかね。

と言うか、オツタルもフィンも、誰しもが余りの出来事に完全に表情強張らせて硬直する程だぞ。

「その【魔銃使い】を八つ裂きにするんだよオ！　そして『再生薬』をアタイの為に持ってきておくれよお」

誰に向かって言っているのか。

もしかして、オツタルとフィンに向けての言葉だろうか。信じられん。

「そのガキを八つ裂きにしてアタイを助けてくれたら、アタイを抱かせてやるよお！」

——ギリイツ、と恐ろしい音と共にオツタルの拳が握り締められ、槍を持つフィンの眉間に青筋が浮かび、視覚を揺らがせる程の殺気が第一級冒険者達から漏れ出る。

アイズさんが何を言っているのかと不愉快そうに口元を歪め、テイオネさんは般若の表情を浮かべる。テイオナさんだけが『誰が喜ぶのそれ』と至極真つ当な突っ込みを入れていた。

「そもそもアタイが何をしたって言うんだい!!　こんな事される謂れなんて無いはずだよオ!!　アタイの為に来たって言うなら早くアタイを助けなア!!」

醜悪な叫びに耳を貸す者は居らず、アレンが『てめーの息が続いてるのが害悪だ』と毒舌をぶちまけてもフリユネは反応しない。

——というか、今コイツなんつった。

こんな事される謂れなんて無いはずだ？　お前が、お前が身勝手に俺達の仲間を殺したんだろう。なのに、自分は悪く無い、と？　本気で言ってるのかこいつ。

やっぱ殺すべきだろ。

全ての者から向けられる殺気に対し、フリユネは気付いていないらしい。既に精神は別世界へと旅立ってしまったのか、彼女に言葉は一切届かなかった。

「アタイ以外に素晴らしい女なんて居ないよオ!! 治った暁には女神も逃げ出すこの体にこの美貌、そんなアタイを好き勝手できるんだ、ほおら、そそるだろお?!」

あそこまで痛めつけられて尚、そこまで喚き散らすだけの元気が残っている事に驚愕はすれど、全く持つてそそらない誘いである。

いや、ある意味ではそそられる誘いなのかもしれない。もっと、ずっと、これ以上に激しく痛めつけても元氣一杯だとか——もつともつと、死ぬまで甚振りたいこつちからすれば嬉しいかもしれない。

「あんた達の貧相な主神めがみ共なんて目じやないさア!!」

——瞬間。

殺気が消えた。

否、消えてなんていない。

人の視覚や聴覚には感知できる範囲が存在する。

例えば人間の視覚器官では捉える事が出来ない赤外線や紫外線しかり。

人間の聴覚器官の可聴域を超えた周波数である超音波しかり。

俺の感覚器官で感知できる範囲を超える程の鋭すぎる殺氣。感じ取れずとも、其処にあると認識は出来る程に練り込まれたソレを放つのは、美神フレイヤに使える戦士達。

超要約してしまうと、「フレイヤ・ファミリア」の眷属達が、きれた。

「ウオオ!!」

比喩抜きで両目から真っ赤な眼光を撒き散らし、怒りの大咆哮を響かせる猪人ポアズ。

彼の雄叫びに「ロキ・ファミリア」の第一級冒険者達ですら面くらって硬直する中、オツタルは此方を振り返り、告げた。

「失せろ。今、俺は機嫌が悪い」

他の美神を慕う眷属達の方は完全に此方の事を認識していない。

既に彼らの視線はフリユネに釘付けだ。濃密を通り越して鋭く研ぎ澄まされたその刃は俺の感覚では捉える事は出来ないが、それでも

背中から夥しい量の冷や汗がとめどなく流れ続けているあたり、俺の体は五感を超えた第六感辺りで感知はしているみたいだ。

「……皆、此処は引こう」

フィンですらも僅かな冷や汗を流す様な憤激。

今、部外者である俺達が居るからこそ、彼等は爆発を抑えているのだ。直ぐに立ち去らなければ、その憤激の爆発に俺達まで巻き込まれかねない。

——フリユネが余計な地雷を踏まなければ。

「……はあ」

溜息と言うよりは、喉に詰まった重苦しい空気を吐き出し、フィンに抱えられて離脱。

凄まじい断末魔の声を背後に、全力で離脱していくさ中にふと思つた事は一つ。

あのヒキガエル、人の地雷を踏む事に関しては天才的過ぎだろうに。

第一八二話

1柱の女神が息を切らしながら宮殿の最上階を駆け上がる。

この宮殿の主たる女神の火照る身体を包み込む夜気は月夜に濡れていた。

激しい戦闘の跡が刻み込まれた屋上には、赤く染まる歓楽街の光景が広がっている。

「どこまで行くの、イシユタル?」

「フ、フレイヤア!」

自身の後に続いて階段から現れたフレイヤの姿に、イシユタルの表情は怖気の一色に染まる。

迫りくる超然とした微笑みを浮かべながら自身を追い詰める銀髪の女神の姿は、いつそ暴君の様な圧すら伴っている。その姿にイシユタルは敵愾心を打ち碎かれ、恐怖に囚われていた。

己が領域を踏み壊し、眷属を蹴散らして、美神が持つ全てを蹂躪しながら迫りくる並ならぬ神意を放つフレイヤから、まだ逃げ惑う。拳弾と踏み込みにより見る影も無いほどに破壊され尽くした神の庭を横断し、櫓のように立つ自室へと駆け込もうとした。

「な……!?!」

その目論見は、しかし脆くも崩れ去る。

林と泉を迂回して自室へと回り込む道、その宮殿の一角はまるで抉り取られたかの様に断崖へと姿を変えていた。その崩落の原因が、眷属による一撃だとは女神には知る由も無い。

退路を突然断たれ、呆然と立ち尽くすイシユタルのもとへ、こつ、こつ、と優雅さすら、いつそ無慈悲さを感じさせる歩みの音を響かせたフレイヤがとうとう追い付く。

「追いかけてっことは終わりね。私、もう疲れちゃったわ」

「ひっ!?!」

イシユタルが悲鳴を押し殺して慌て振り返った先。

微笑むフレイヤの後方には無数の抉れた地面が広がっている。ベルの踏み込みによって幾度となく抉られた跡だった。当然、二柱の女

神は知る由もない。

十歩分の距離も無い程の間合いにて、美神イシュタルと美神フレイヤが対峙した。「で……出来心だったんだ、フレイヤ？ アンタがあ坊やと娘にそこまでこだわっていたなんて知らなくて……も、もうしないよ。許してくれ」

宮殿内の殆どの眷属は鎮圧された。例え残っていたとしても目の前の美神フレイヤの『魅了』を前に膝を屈する事だろう。故に、駒は完全に失われたと言っても過言ではない。

打つ手を失ったイシュタルは引き攣った笑みをうかべつつ、許しを請う。

美しい銀髪を夜風に揺らされるフレイヤは、微笑みを浮かべた。

「イシュタル？ 貴方のする悪戯は今まで笑って許してあげたけど……今夜だけは、駄目。許さないわ」

浮かべられる表情とは異なり、揺らがぬ絶対零度を宿した瞳がイシュタルを射抜く。

「あの子達は絶対に、私のモノにする」

瞳に宿る絶対零度の色が揺らぐ。しかしそれはイシュタルが期待していた温情や慈悲のそれではなく、美神フレイヤが秘めたる激情の片鱗だった。

「私のモノに手を出す女神おんなは、絶対に許してはおけない」

横暴なまでの独占欲とあの二人の人間こどもに対する執着心を晒したフレイヤに、イシュタルは言葉を失った。

フレイヤに対して嫉妬していたイシュタルが瞳に黒い炎を宿していた様に、フレイヤの銀の瞳には執着心という名の黒い炎が宿っていた。まるで二人のそれは鏡合わせの様であった。

静かな怒りを放つフレイヤは、瞳を細めると。

「貴女——潰すわ」

女神の死刑宣告を告げられ、イシュタルは青褪めた。

屋上に続く大階段。息せき切らせて駆け抜ける獣人の青年を、一人

の人間の少女が追う。

駆け抜ける獣人の体には無数の打撲痕。その後ろを追う少女は体中に刀傷を負いながらも瞳に決意を抱いていた。

「待てえええええええ!!」

「ぐうっ……!」

一步、階段を踏み締める度に体中の打撲痕から響く鈍い痛みが全身を駆け抜ける。それでも彼は速度を緩める事無く階段を数段飛ばして己が主の下へと『石』を届けんとしていた。

対し、少女はその『石』を取り戻さんと青年を追う。

彼らの追いかけてこに、乱入者が現れる。

『行かせんっ!』『早く行け!』

「フレイヤ・ファミア」の襲撃に怯え、部屋に隠れていた愛玩用の眷属である男達。彼らが決死の表情を浮かべ、少女、ミコトの行く手を阻まんとする。

目的の物を抱え持ち逃げる青年の背を前にし、ミコトは歯噛みをすると同時に踏み込み、刀身閃かせた。

刃が敵対した男に届く寸前、ミコトは刃を翻してその横を駆け抜ける。愛玩用であり、そのレベルも下級冒険者でしかない彼等からすれば、その一撃は当たる事無くとも斬られたと誤認するのも必然。

刃を血の一滴すら汚す事無く、次々にミコトは男たちを無力化していく。

絶技を繰り広げる彼女は、けれども確実にその歩みを遅らせられる。その間にも、『石』を抱える青年が階段の奥に消えていく。

「く、このままでは……!」

追い続ける事すら出来なくなるといふ焦燥感が、ミコトの絶技を鈍らせた。

ほんの僅かに、その刃が男の一人に届く。Lv. 2の少女が放った刃が、斬る積りの無かった男の首筋を僅かに裂き——噴水のように血が噴き出し、視界を奪う。

「しまった——っ!?!」

「いっばっ——」

階段を駆けながら、斬る寸前に刃を返す事で相手に斬られたと誤認させて意識を奪うという絶技を放つ。それを大切な物を持ち逃げる相手を追いかけるながらと言う状況で行っていた彼女の、一つの失態^{ミス}。返り血を浴び、声にならぬ絶叫を上げて首を抑える男に気を取られた瞬間。

『るああああああああ!!』『イシユタル様の下へは行かせない!!』『死ねええええええっ!』

数少ない生き残りであろう女戦士^{アマソネス}がミコトの頭上より躍り出る。

動揺の瞬間を突かれた強襲に、けれども彼女は身を振り回避する。大きく裂けた右袖が宙を舞い、追撃とし放たれた鉄棍に薙ぎ払われ檻樓と化す。

「まだ生き残りが居ましたか……」

「悪いが、行かせないよ」「ああ、此处は通さない」「『石』があればまだフレイヤ派を蹴散らせる!」

立ち塞がる三人の悍婦。その全員が血塗れでぼろぼろに傷付いている。一人は腕が折れてぷらぷらと揺れている鉄棍を持った女、一人は腹にくつきりと打撲痕が刻まれ体が揺れ重心の安定しない女、一人は片目が潰れて足に矢が刺さった女。

その全員が重傷を負っている。しかし、彼女らの放つ風格はLv. 3のそれだ。

既に『石』を抱えた青年の姿はミコトの視界から消えている。追い付く事に失敗しながらも、彼女は血に濡れた刀を構えた。

「申し訳ありません。貴方達を相手に加減する余裕はありません」

Lv. 1の格下相手ならまだしも、手負いとはいえLv. 3の格上。ただでさえ集中力が切れかかった状況で、更に人数も相手の方が上。あの絶技で切り抜けられる状況ではなかった。

ミコトは覚悟を固め悍婦達を睨んだ。

「故に——切り捨てましょう」

「はっ、吠えるなヒューマン!!」「加減なんてふざけた事言ってるじゃねえ」「挽肉^{ミンチ}にしてやるよ!!」

「ま、待ってくれ！」

フレイヤの正面に立ち尽くしていたイシュタルは、起死回生の一手を見つけ叫んでいた。

その一手は女神の背後、無数の抉れた跡の残る道を褐色の美青年がふらつきながらも歩んでくる。

タンムズだ。血反吐を付着させ、いくつもの打撲痕を刻まれぼろぼろの彼は、オツタル達にやられてもなお主神の危機に駆け付けてきたのだ。

表情に出す事無く、内心で歓喜したイシュタルが必死に時間稼ぎの為に言葉を続ける。

「フレイヤ、面白い事を教えてやる!!」

幾つもの抉れた跡の刻まれた地面にタンムズが足をとられ転倒する。その音を掻き消さんとイシュタルは声を張り上げた。

「あの子供には、ベル・クラネルには美神の『魅了』が効かない！秘密を知りたくないか！」

ぴくり、とフレイヤが細い片眉を動かす中、タンムズが音を立てまといと慎重に立ち上がろうとする。

「あら？ 貴女、地上に下りてそれなりに経つって言うのに——
まだ気付いていなかったの？」

ほとほと呆れたと言いたげなフレイヤは、僅かに肩を竦めた。

「私の可愛い眷属達もそう。ウエヌスの眷属、レーネ・キュリオだってそうだった。そして、ヘスティアの所のベル・クラネルに……ミリア・ノースリス。貴女はまだ気付かないの？ 貴女の所にもそういう子がいるでしょうに」

呆れ果て、かける言葉も見つからないとでも言う様にフレイヤは微笑みを消した。

その背後、タンムズが慎重に距離を詰めていく。

「地上には、美神の『魅了』なんて効かない人間が数多、居るわ」

さも当然とでも言う様に、美神は自身が持つ神の権能、『魅了』の絶対性を否定した。

その事に、その事実にも、イシユタル美神は完全に言葉を失う。

「な、何を……何を言っている!？」

私達神は、デウスデア超越存在は、生まれたその瞬間に、この世に存在し始めたその瞬間にその『絶対性』が定められている。故に、たかが下界の人間程度が犯せる領域ではない。

『魅了』を始めとし、『予知』や『武技』、『學術』に『知識』、神が持つ権能であるそれらは、まさに神の御業と謳われる程の技能。

武神であるタケミカツチの持つ神技と謳われる武術。医神であるディアンケヒトやミアハが持つ医学の知識。それらは人の子が辿り付けない高みにあると言っている。それらを、人の子如きが超えて良いモノではない。

そう、イシユタルは信じ込んでいる。たかが人の子が、神である、デウスデア超越存在が、地上に下り全知零能に堕ちて尚、越えられ、犯される事の無い領域。

イシユタル美神の——レゾンデートル存在理由。

「馬鹿な、そんな事があっていいはずが——」

「だから、貴女は駄目なのよ」

己の美貌がもつ『魅了』と言う権能。生まれ落ちた瞬間から、この世に存在し始めた瞬間から、体の一部として当たり前前に存在するソレ。その『魅了』に真つ先にウエヌスは絶望していた。

呼吸し、鼓動し、腕が動き、足が動き、瞳で景色を捉える。そんな当たり前前の動作の一つに『魅了』があった。ひとたび一度それを使えば、全ての人間が跪く。そんな、当たり前前の代物。

だからこそ、その『魅了』に絶望した女神も居た。

本当の意味で、下界の人間と向き合う事すら出来ない女神が居た。

女神と人間の間には、常に『魅了』という権能かべが立ち塞がり、真の意味で、何の気兼ねも無く触れ合う事が出来ない。

「ウエヌスは、美神の中でも変わった娘だったけど……貴女はあの子の有り方から理解出来なかったのね」

自身の『魅了』を存在理由にしたレゾンデートルイシユタル。

自身の『魅了』を忌むべきモノとして否定したウエヌス。

フレイヤからすれば、どちらもくだらないと切り捨てるが、どちらがましかと言われれば、ウエヌスの方を選ぶだろう。

「あの子が真つ先に気付いたのよ」

真つ先に地上に下り、己の『魅了』に絶望しきつたウエヌスが、下界の人間に可能性を見出した。自身の『魅了』すらものともせず、真の意味で全知零能として向き合える眷属ファミリアを得た。

人間に絆こどもされ、眷属を溺愛し始めたウエヌスと言う美の神。彼女の有り方は、ある意味、神としては歪み切っていたが、けれども人間の可能性を最も尊んだ有り方だった。

ウエヌスを囲む眷属こども達は全て彼女の『魅了』を超えて彼女を理解した者達だけだ。故に、その子達全員をフレイヤは欲した事もある——
——当然、ウエヌスがブチギレて派閥抗争にすら発展しかけた事すらあった。

「だからこそ、良いのよ」

——下界の人間こどもは、神の権能すら、もしかしたら神そのものすら超える可能性を秘めている。

そんな当たり前な、地上に降りた神々が真つ先に気付くべき、地上を愉しむ為の前提条件。己が持つ『魅了』という、高い壁を越えて女神の下へ辿り着けるほんの一部の人間こども達。

ウエヌスは、『魅了』の壁を越えて自身の下へ辿り着いた事だけで満足していたが、フレイヤはそこに英雄の輝きすら求めた。その差はあれど、どちらも『魅了』に左右されずに己が意志を持てる人間こどもを愛した。

そしてイシユタルは『魅了』を踏み越えて自身の下へ辿り着く人間こどもを許さなかった。その事実を再認識したフレイヤは、呆れ果てながら眩く。

その背後に、タンムズが息を殺して忍び寄る。

「だから、貴女の『魅了』はその程度なのよ」

そう言って、フレイヤは振り返った。まるで、端から背後に忍び寄る青年従者に気付いていたかの様に。

長々と既に脱落した女神の事を語る間抜けな美神の姿に、馬鹿がつ

！ と禍々しい嘲笑を送り付けていたイシユタルが凍り付く。
今まさに飛び掛からんと背後に忍び寄っていたタンムズは、眼前に現れた女神の美貌に瞠目し、ぴたりと完全に動きを止めた。

イシユタルが言葉の意味に辿り付くより前に、フレイヤはタンムズに歩み寄り、その頬を撫で、微笑んだ。

「あ、ああ……い！」

瞬間、タンムズの腰が砕ける。

恍惚に彩られる瞳、上気した頬、そして半開きの口。

イシユタルの寵愛を受け続けてきた青年従者は、瞬く間にフレイヤに『魅了』された。

「あっちへ行つていて？」

女神の言葉に何度も頷くと、彼は砕けた腰を引き摺つてこの場を去っていく。

その光景に、イシユタルは時を止めていた。

自身の男を奪われた事实に、立ち尽くしていた。

女神の『美』に惹かれて忠誠を誓う青年従者は、その寵愛を一身に受けイシユタルに陶醉していた。既に彼女が『魅了』し完璧な『僕』しもべとなっていた。外部から『魅了』を受け付ける余地など無い。

そのはずだったにも関わらず、フレイヤは彼を従えた。

『魅了』の上書きに他ならない。それすなわち——フレイヤの

『美』がイシユタルの『美』を上回る事と同義。

イシユタルの中から矜持が砕け散る音が響く。

「……………して、だ」

眩き、わなわなと震え出す。

歯が砕けんばかりに噛み締め、両手は爪が食い込み血が零れる程に握り締められる。

その褐色の肌も、豊満な体も、美貌も怒りに染め上げる。

「どうしてだ!!」

イシユタルは、全身を真っ赤にして叫んだ。

周囲の名声、『美』を称える男の数、どちらもフレイヤの方が上。

己が寵児すらも『魅了』を上書きされ、彼女に奪われた。

同じ『美の神』であるはずなのに、何故ここまで違う。

目の前で超然とたたずむフレイヤの姿に、イシユタルは怒鳴り散らそうとした。

「イシユタル様っ!!」

瞬間、息せき切らせた獣人従者が胸に小包を抱えて二人の間に割り込んだ。

フレイヤを正面に捉え、イシユタルに背を向ける獣人従者。

ウエヌスを裏切り、イシユタルの下へやってきた男。ウエヌスの『美』より己が『美』が上回っている事の証明とし、傍に置き続けた、戦利品トロフィーでしかない眷属。

彼の登場にフレイヤが微笑み、イシユタルは絶望した。ウエヌスより自身が上回る証明が、またしても奪われるのかと、防ぐ為^に彼の肩を掴もうと手を伸ばし——既にフレイヤに微笑まれている事実
に硬直した。

直ぐにその体が震え出す。

「……たか、また、私から」

奪うのか。そう呟きかけたイシユタルは、フレイヤを睨もうとし——

獣人従者に差し出された小包を見て、震えが止まった。

「イシユタル様、どうぞお納めください」

「——あら？」

フレイヤの微笑み、『魅了』を真正面から受けたはずの彼は、けれども『魅了』をもものともせず^にイシユタルにその小包を差し出した。

その瞳は、イシユタルだけを見て、イシユタルだけにその忠誠を向け続けている。

「な、なにを……」

『殺生石』です！ 【魔銃使い】の儀式を早め、成功した代物です！
尻尾を大きく振ってイシユタルの前に跪くその姿はまるで大型犬の様だった。

啞然としながらその青年を見下ろしていたイシユタルは、口を半開きにしたままフレイヤを見据えた。

微笑みが消え去り、表情すら絶対零度の色を宿したフレイヤが、イ

シユタルを見据えて呟く。

「貴女にも居るじゃない。貴女だけを見て、貴女だけを信じて、貴女だけに忠誠を向ける。本物が」

元は他の美神ウエヌスの下に居ようと、真の意味で自身が忠誠を誓う者を見つければ、ウエヌスの『美』を振り切り、イシユタルの下へと参じる程に、『魅了』に左右されずに女神に忠誠を誓える。そんな、本物の眷属がイシユタルにも居た。

「ま、さか……これが？」

ただの己がウエヌスに勝利した証明である戦利品トロフィーでしかない獣人従者が。

天界で齒噛みしているであろうウエヌスへの当てつけとし、時折寵愛していた程度の人物。能力は低く、戦いの才能は無い。ともすれば、戦利品トロフィー以外の価値すらない、そんな青年が。

他の『魅了』すら撥ね退けてイシユタルに忠義を誓う程の魂を持っていた。

その事実には、イシユタルは。

「ふ、ふはは、ははは、はっはっはっはっ！ よくやった！」

「……はあ」

獣人従者を抱き寄せ哄笑を響かせるイシユタルに、フレイヤは溜息を零した。

「形勢逆転だなフレイヤア!!」

例えば獣人従者のレベルが1で、その能力ステータスがランクアップに必要な最低値のDにすら届かず、戦闘の才能が欠片程も無い愛玩用でしかない眷属ファミリアだったとしても、神ファールナの恩恵を授かっている以上、ただの人間と同じ身体能力しか持たないフレイヤでは対抗できまい。

頼みの綱である『魅了』が効かない。ただそれだけの理由で、フレイヤはイシユタルに敗北するのだ。

「お前が信じる地上の人間ことどもの可能性に、お前は敗北したんだ！」

「……ええ、そうね」

フレイヤは、一步、二歩と後退していく。その表情に焦りの色は一切無く、どんな行動を起こすのかをただ見据えている。

「さて、貴方は何をを見せてくれるのかしら」

銀髪の女神が視線を向けたのは、イシュタルではなく獣人従者。その魂は控えめに言っても、酷い。

まともにも磨かれておらず、ただただイシュタルの寵愛を受けて腐り果てている。もし、イシュタルがもう少しまともにもその獣人従者を鍛える事に専念していれば、オツタルとまではいかずともミリア程にまで成長できる『可能性』はあっただろう。だが遅きに失する。

「さあ、フレイヤ。お前の最期だ、気に入っていたんだろう？ ミリア・ノースリスという小娘^{ガキ}を！ その魂を封じ込めた『殺生石』で、屠ってくれるわ!!」

抱き寄せていた獣人従者を放し、銀髪の女神へとそれを使う様に指示を出すイシュタル。

指示された直後、何の迷いも無く青年は小包から『石』を取り出して主神の指示通りに向けた。

「……それ、止めた方が良いわ」

焦るでもなく、怯えるでもなく、銀髪を夜風に揺らすフレイヤはほんのりと忠告を告げる。

それを見柄を張った余裕だと切り捨てたイシュタルは死刑執行を告げた。

「やれえつ!!」

「御意」

獣人従者がその『石』を、『殺生石』を使うべく意識を込める。

瞬間、彼の足元に魔法^{マジックサークル}円が浮かび上がり、手にした『殺生石』からフレイヤの方に向けて、連なる五つの魔法円が現れる。

その光景を見て、イシュタルは勝利を確信した。

発動したその『魔法』は、見間違う事などありはしない。戦争^{ウォーゲーム}遊戯のさ中、『魔銃使い』ミリア・ノースリスが放った超遠距離砲撃魔法だ。

「どうした、フレイヤ——負け惜しみは言わないのか？」

「必要無いわ」

その砲口の直前にて、向けられた魔法^{マジックサークル}円^{の光}によって銀髪を艶めかしく輝かせるフレイヤは、ただ獣人従者を見て瞳を細めた。

「今すぐ、止めさせた方が良いわ」

「馬鹿め、止める理由が何処にある!!」

一つ目の魔法円が輝く。僅かに空気が揺らぎ、青年を中心に渦巻き出す。

既に女神を射抜くには十二分に過ぎる程の威力であろう事は想像に容易い。しかし、やるなら徹底的に、全力の、最高の威力にてこの下界から消し飛ばしてくれ、とイシユタルが更に続ける様に指示を出した。

「もつと、もつとだ」

「……イシユタル、本当に、止めなさい」

二つ目の魔法円が輝く。空気の揺らぎは確かなモノとなり、庭園そのものが振動し出す。

絶体絶命の危機的状况に陥りながらも逃げる事をしないフレイヤを、イシユタルは嘲笑した。

「助けに来る眷属は居らず、か……フレイヤ、眷属に見限られたか」
「あの子達なら来ないわよ?」

平然と、焦りも恐怖も一切見せず、変わらぬ超然とした立ち振る舞いを続ける銀髪の女神を前に、イシユタルは僅かな違和感を抱く。

何故逃げないのか、何故焦らないのか、何故恐怖しないのか。そんな小さな違和感は、強がって隠しているだけだと取り合わずに無視した。

三つ目の魔法円が輝き出し、振動はなおをも大きくなりはじめ――

――フレイヤが鋭く声を上げた。

「今すぐ止めさせなさい」

「何を――」

「その子、死ぬわ」

フレイヤの指摘に、イシユタルが眉を顰めた瞬間。

びしゃびしゃつ、と液体の零れ落ちる音が響き渡る。音の出处に視線を向けたイシユタルは、表情を強張らせた。

「な……なにが!?!」

両手で『殺生石』を持ち、今まさにその効力を駆使して魔法を行使

している獣人従者。その目、鼻、口、耳、体中の穴と言う穴から鮮血が零れ落ち、瞬く間に彼の踏み締める地面を真っ赤に染め上げていく。

「何が起きている!?!」

「貴女、あの子の使う魔法の性質すら理解していなかったのね」

硬直したイシユタルを他所に、フレイヤは未だに魔法の発動状態を維持している獣人従者に視線を向ける。

「止めなさい」

「――」

『魅了』を駆使し、その眷属の蛮行を止めんとしたフレイヤは、けれども『魅了』を弾く程の忠誠を向けたイシユタルの指示にのみ従わんと使用を止めようとはしない。

イシユタルに止める様に忠告を繰り返したにも関わらず、彼女は啞然としたまま立ち尽くすのみ。

「……イシユタル、貴女、最低ね」

次第に砲身である魔法^{マジックサークル}円に灯っていた光が消えていく。三つの輝きは二つに、一つに、そして終いには足元に広がるソレすらも掻き消え―― 獣人従者が血の泉に沈んだ。

『殺生石』が青年の手から転げ落ち、フレイヤの爪先で止まった。

「馬鹿、な……私の、私が……」

逆転勝利を確信していただけに、突然の出来事に思考を埋め尽くされ立ち尽くす事しかできないイシユタルを前に、血に汚れた『殺生石』をフレイヤが拾い上げ、丁寧に服の袖で血を拭っていく。

「磨けば輝けたのに……勿体無いわね」

フレイヤは僅かな呆れと、同時に磨かれておらずとも確かな輝きをイシユタルに向け続けていた獣人従者にほんの僅かな欲を見せ、直ぐに掻き消した。

手にした『殺生石』を懐に納め、イシユタルを見据える。

「そういうえば、さつき何か言いかけていたけれど何かしら?」

普通に獣人従者を睨けていれば、そのままイシユタルの逆転勝利に終わっていたであろう。

しかし、勝利の方法に拘ったがばかりに、その逆転の一手すら無駄にした。その事実にはシユタルの表情が蒼くなり、赤くなり、コロコロと顔色を変えていく。

「言う事が無いなら、さっさと潰されてくれないかしわ。貴女が存在そのものが不愉快だわ」

磨けば輝く魂すら無駄に擦り減らし、潰した。その事にフレイヤが瞳を細め、すぐに天界へと送還されると横暴に告げる。

イシユタルは蒼くしていた顔色を真つ赤に染め、吠え散らした。

「黙れ！ 私とお前、何が違うというんだ!?!」

「品性」

銀髪の女神が断言した瞬間——イシユタルの足場が崩れる。

「——ッ!?!」

先の『殺生石』による魔法発動。その余波として発生していた振動は、魔法の性質を理解もせずに使用した獣人従者の引き起こした代物に他ならない。

本来ならば、ミリアが扱う『砲撃魔法』は分岐詠唱魔法という特殊な代物だ。

一つの魔法では完結せず、複数の魔法やスキルが複雑に絡み合い完成した、歪でいて美しい。芸術とも言える程にまで昇華された、絡み合う複雑な魂を構成しているミリアに相応しい魔法。

だからこそ、彼女のそれは一つの魔法しか抽出できない『殺生石』では扱い切れない。

「落ちたかしら?」

ミリアの魔法は全てにおいて『間接消費型』だ。一度『魔力塊』^{マガジン}として形成した特殊な魔力を用いる事によって、威力に対し詠唱がそこまで長くない特徴を持つ。

故に——『魔力塊』を作り出すスキルを持たない眷属には扱えない代物だ。

『殺生石』の使用者から強制的に『魔力塊』^{マガジン}を吸い出そうとして、スキルが無いがゆえにそのままの『魔力』を吸い出された。そして、対応していないが故にその吸い出された魔力はそのまま余波として周

団に撒き散らされ、旋風や振動といった異常を引き起こしていた。

「あら……っ！」

激しい戦闘によって既に酷い損傷を受けていた神の庭は、ほんの僅かな振動によって崩落を起こしたのだ。

イシユタルの足元が崩落し、転落する様子を見ていたフレイヤは足場に気を付けながら、崖の際から下を見下ろす。

「あら、しづとい」

「——ッ！」

断崖の際にしがみ付く褐色の両手。見下ろした其処には必死の表情でしがみ付くイシユタルの姿があった。

「フ、フレイヤア、た、頼む、助けてくれ」

落ちれば地上まで真つ逆さま。第一級冒険者のフリユネは耐えたが、たかが人の子と同程度の身体能力と身体強度しか持たない神の身がこの高さから落ちれば、確実な死が待っている事だろう。

必死の表情で懇願するイシユタルに、フレイヤは美しい微笑みを浮かべ——爪先でしがみ付くイシユタルの右手を踏み付けた。

「ぐっ、ああああああっ?!」

踏み付けられた痛みから、イシユタルは右手を放してしまう。

片手で崖つぶちにしがみ付く彼女は、自然と下を見てしまい、その余りの高さに眩暈すら覚え涙を浮かべながら、フレイヤを見上げた。

銀髪の女神は変わらぬ微笑みを浮かべ、冷たい瞳でイシユタルを見下ろしていた。彼女は確実に、何があるうがイシユタルを天界に送還する気だと、確信する程の瞳に射抜かれ、イシユタルは完全に言葉を失った。

「私、しづとい女神おんなは嫌いなもの」

だから早く落ちてくれないかしら。そう呟き、残る左手を踏み締めんとフレイヤが足を上げた。

「フレイヤアアアアアアアアアアッ!」

瞬間。

女神の絶叫と共に、庭園の噴水を飛び越えて一人の女神を背にしがみ付かせたドワーフが姿を現した。

フレイヤが上げていた足を一度下ろし、振り向いた其処には朱色の髪を滅茶苦茶にした女神と、その女神を背負うドワーフの姿。

【ロキ・ファミリア】の主神である女神ロキと、その眷属であるエルガラム【重傑】ガレス・ランドロックの二人だった。

「ま、間に合ったか!？」

「ふむ、イシユタルの姿が見えんのう。何処かに居るのか、はたまた……既に始末されたか」

焦った様子のロキと、周囲の戦闘の痕跡から何があつたかを読み取るうとするガレス。

二人の様子を見たフレイヤは微笑みを浮かべて彼女らを出迎えた。

「あら、ロキじゃない。どうしてこんな所へ？」

「フレイヤ、アンタ男にちよつかいかけられてキレてイシユタル潰しにきたんやろ」

それ、一旦止めてえな、とロキが笑いかけると、フレイヤは微笑みを消して肩を竦めた。

「嫌よ」

「んな事言わずにい。ほんのちよびつと、先っぽだけやからあゝ」

少し話を聞いたら、後はフレイヤの好きにしていから。とロキが交渉に持ち込もうとするのを、フレイヤは冷めた目で見据えていた。

「怒るんはわかるで……ウチも怒つとるしな。んでも、その前に話も聞かなあかんのや」

「あら、そう。でも嫌よ。あんなのが未だに下界で息をしてるのは我慢ならないわ」

すげなく主張を切り捨てたフレイヤの様子に、珍しくロキが焦る。かなりご機嫌斜めだと察し、すぐにイシユタルを確保しなければ、

とロキが思考を切り替えた。

「んで、イシユタルは何処や?もしかしてあそこに引き籠つとるんか?」

櫓のようになっていた最も目立つ高階の一室。間違いなくイシユタルの私室だと目撃くロキが指摘したのを見て、フレイヤは肩を竦め、自身の足元、崖つぶちを指さした。

「イシユタルならここに——あら？」

フレイヤが視線を向けた先。

しがみ付いていたはずの褐色の手が完全に消えていた。

銀髪の女神が下を覗き込むと、今まさに地面に叩き付けられる寸前の褐色の女神の姿があった。呆然とこちらを見ているイシユタルに、フレイヤは微笑んだ。

「ロキ、イシユタルが落ちたわ」

「——は？」

ロキが呆気にとられた表情を浮かべた瞬間——ドンツ!! と轟音が響き渡った。

更に大瀑布の様に地上から天に向けてな光柱が立ち上る。

神が『天界』に送還される際に発生する、光の柱だった。

第一八三話

天上を焦がさんと燃ゆる歓楽街の中心より、夜空目掛けて立ち昇る光の柱。

都市中の全ての神々、そして人々が今宵の乱闘騒ぎの決着を察するには十二分に過ぎる合図であるソレ。

「下界という名の遊戯盤ゲームムに、一柱の女神が敗北して天界へと『送還』された事を知らせる光柱。

敗北し送還された神々は二度と下界と言う名の遊戯盤ゲームムに参加を許されない。つまり、今宵の敗北者たる淫都の王たるイシユタルが握っていたであろう情報の数々は二度と下界において手にする事は叶わない事を意味する。

それ即ち、【ロキ・ファミリア】が立てた作戦の一つが失敗に終わった事を意味していた。

「う……」

「ロキ？」

目に焼き付く美しさと荘厳さを感じる光の柱が立ち消え、余韻をすら消え去った庭園。ようやく対峙していた女神達が顔を突き合わせる。

引き攣った笑みを浮かべる神ロキと、それに微笑を湛えて向き合うフレイヤ。ロキの傍に控えるガレスは無言で腕組をして美神の『魅了』を受けまいと目を閉じていた。

「フ、フレイヤア……」

「どうかしたかしら？」

いけしやあしやあと、さも動じた様子の様子の無いフレイヤが表情を変えずにロキを見やる。

その対応にロキがわなわなと震え、暫くして抱いた激情を飲み込み、笑みを浮かべてフレイヤと視線を絡め合う。

「……………」

「……………」

ほんの束の間の睨み合いを繰り広げ、ロキが口を開く。

「なあ、なんでイシユタルを送還したんや」

問うまでも無い問いかけだった。

目の前の美神フレイヤとは旧知の仲。天界では共に策謀を立てたり、時に敵対したりとやりたい放題していた悪友の間柄とも言える。故に、美神が起こした此度の抗争の原因が『男』にある事ぐらい察しがつく。

ある程度予測をしていたとはいえ、あまりの時機タイミングの悪さだった。

「別に、最初は送還する気なんてなかったわ」

「何？」

銀髪をたなびかせて微笑む女神の答えに、ロキは糸目を更に細めた。

何を考えているのか、その言葉の先を予測せんとしていた女神は、返答を受けて瞠目する。

「ただ、あの子を儀式に使うだけなら良かったのよ」

余りにも予想外の台詞。

詳細は情報屋を営む藍色の女神より引き出してあった。

今宵のイシユタルの暴走、数多の派閥と懇意にしており替えの利かない重要人物であったミアアに手を出す等と言う蛮行に及んだ理由。『殺生石』という魂を道具に利用する禁忌の代物を生み出す為ということとはロキも知っている。

そして、目の前の女神もまたその儀式について知っていたと宣う。

「待つんや。それは、どういう意味や？」

「それって、もしかしてミアアを『殺生石』の儀式に使う事かしら？」

今度こそ、ロキは言葉を失った。

本当にフレイヤはイシユタルの企みを知っていたのだ。その上で、泳がしていたという事に他ならない。

「ミアアの事、気に入っとったんちゃうんか!？」

お気に入りの人間こどもとし、二つ名すら授けるに値すると判断された小人族の少女。

魂の変質等と言う異質極まりない特異な能力を使いこなす人物。その魂の中心に据えられた家族への想い。フレイヤが気に入るに値するだろう、とロキですら判断しうるその人間こども。

そのミリアが儀式に使われるだけならば、イシユタル送還する気は無かった。とフレイヤは言ったのだ。

「ええ、お気に入り一人よ。ベルをより一層輝かせてくれるし。あの子自身も綺麗なもの」

「ならなんでや。魂を引き摺りだすつちゆう行為がどんな苦痛を伴うか、それで魂ぶつ壊れてもしやあなしなんやぞ?!」

普通の人間ことが魂を強引に肉体うつつわから引き摺りだされなんぞすれば魂は壊れる。

もし『殺生石』に封じられた魂を元の肉体に戻したとしても、それは元通りとまではいかない。必ずどこかに異変が起こる。性格が捻じれ曲がるか、はたまた記憶障害か。なににせよまともな末路にはなり得ない。

フレイヤはそれを容認するとすら言い切ったのだ。

「ロキ、貴女は何を見てきたのかしら?」

「なんやと?」

不快感を露わにして言い募っていたロキに対し、フレイヤは動じずに問いかけを返す。

僅かに抱いた困惑を見せまいとロキがさかさ返答すれば、銀髪の女神は双眸を細めて懐から『石』を取り出した。

「あの子を最初に見つけた時。もう——?」

吹き抜ける風が長い銀髪を攫い、その口から放たれた言葉を掻き消しロキの元まで届かせない。しかし、フレイヤが取り出した『石』を目にしたロキはさかさそれが何であるかを察した。

儀式の時刻まで余裕は無かつたとはいえ、儀式に入る前に騒ぎが起きていた事から失敗に終わったであろうと判断していた彼女を驚愕させるに値する代物。

「それ——ミリアの『殺生石』か」

「ええ、そうね」

美神の手に乗せられたそれは、僅かに光を帯びた幻想的な、見る者次第で不気味さすら感じられる石であり。今宵の騒動の末に生み出された、禁忌の道具。

「ッ——！」

その石を一目見てロキの表情が強張った。

石の内側、鎖に繋がれた魂の一部を神の瞳が確かに捉えた。注視せねば見落としかねない様な、小さく千切り取られた魂の一部。

「……た、魂が千切れて……な、何しとんのやお前!？」

「私じゃないわ。イシユタルよ」

自分がやった訳ではない、と言い放った美神フレイヤは愛しむ様にその『殺生石』を撫でる。

ロキはただただ天を仰いで震えていた。その事態にガレスが囁くように主神に問いかける。

「魂が千切れとる、とは不穏な話が聞こえたがどういう意味だ」

「……そのままの意味や。ミリアの魂の一部、欠片があのだ石つころの中に入つとる」

顔を手で覆い、イシユタルがしかした事にロキが震え、悪鬼の如き表情でフレイヤの手の内に収まる『石』を見て呟いた。

「もう、元には戻らん」

天界においては地上で負った数多の傷や汚れを落としてもう一度、下界に産み落とされる様にと輪廻転生の中にある物であり、そう珍しい物ではない。

世界によつて生み出され、常に循環しているものであり、人の精神を宿す器そのもの。

下界に神々が降り立って以降、悪戯に魂を壊す神も居た。その壊れた魂に共通する事は一つ。

「廃人確定」

魂とは非常に繊細であり、ちよつとした事で傷を負ってしまふ。

下界で過ごす内にその魂は汚れを溜め、黒く染まり、死後になつて天界に送られる。

その天界で汚れを落とす事は出来る。小さな傷ならば自然と癒えていく。しかし、完全に壊れた魂は別。一度壊れた器は元には戻らない様に、一度死んだ人間が蘇らない様に、一度壊れた魂は、元には戻らない。

「……フレイヤ、どういう積りやおまえ」

ましてや一部を強引に引き剥がすなんて真似をされた魂が、元に戻る事なんてありえない。

お気に入りであったはずのミリアを壊される事を容認したとでも言うのか。

「どうって……貴女、まだ気付いてなかったのかしら？」

ことども
人間一人の魂を破壊した。

それは命を奪う事よりもよほど重い罪であろう。例え重罪人であつたとしても魂を破壊する程の咎を負わされる事は無い。だといふのに、フレイヤは僅かに首を傾げてロキを見据えるのみ。

「気付く？ 何をや？ お前が気に入った魂をぶっ壊して喜ぶ加虐趣味やつたって事か？」

「……はあ」

侮蔑の視線を送り付けていたロキに対し、フレイヤが心底呆れたと肩を竦めて『殺生石』をロキに差し出した。

「ロキ、貴女は不思議に思わなかったのかしら？」

「何をや？ 腐れビッチやってのは知つとつたけど他にも何か隠しとつたんか？」

「私の事ではなくて、ミリアの事よ。いや、正確に言うなら……ミリアとキューイ」

僅かな呆れと軽蔑の混じつた視線を返されながら、同時に伝えられた名にロキは眉を顰めた。

ミリアは言わずもがな。フレイヤが【魔銃使い】と言う二つ名を与える程に気に入っている小人族の少女。迷宮都市オラリオに現れてまだ半年かそこらで複数の偉業を成し遂げ、同派閥に所属する少年ともども世界記録レコードホルダーを書き換えて話題沸騰中の人物。

そしてキューイ。此方は有名な少女と共に知られてはいるが、その名を口にされても首を傾げる者が多いだろう。

ミリアが連れている赤飛竜レッドワイバーンの愛称であり。ミリアに従う竜種の一匹。其処まで言えばおおよその者がなるほどと頷く。

「ミリアはわかる、せやけどキューイやとっ」

キューイ。

レッドワイバーン
赤飛竜と言う種族らしき赤い飛竜。

「ロキ・ファミア」とミアアが初めて出会った日に、彼女が隠し連れていた怪物。

「ねえ、ロキ——ミアアは何処でキューイと出会ったのかしら？」

いや、契約を交わした、と言うべきかしら」

ミアア・ノースリス。

彼女が有名な理由として、調教難易度が非常に高い竜種を従えている事が上げられる。

しかしそれには仕掛けがあつた。彼女が神の恩恵を授かった際に手にした特異なスキルによるもの。

自身の周囲で死した竜種の魂の篡奪。自らのレベルと同数の竜種を強制的に自らの知配下に置く能力。それを使い、彼女は「竜使い」の異名を持つ。

そんな彼女が、「ロキ・ファミア」と出会う以前に調教した飛竜——それがキューイだ。

「いや、待て……何処で……？」

「ロキ・ファミア」とミアア・ノースリスの関係の始まりは決して好ましいものではなかった。

とある派閥が深層遠征の期間途中。中層のミノタウロスの群れを逃がして上層にまで侵入を許した事によって、死に掛けた冒険者。それがミアアであり、とある派閥というのがロキの派閥だった。

そして、あの頃のミアアは冒険者になつて一ヶ月も経っていない駆け出しも駆け出し。

——そんな少女が、一匹の飛竜を連れていた？

「……フレイヤ、アンタは何か知つとるんか」

「予測でしかないけれど、でも確信してるわ」

確信を得ているというフレイヤの返答に、ロキは眉間に皺を寄せた。

確かに、ミアアが連れてきているキューイという名の飛竜、その出処には不鮮明な点がある。だがそれを口にするならばまずミアアの経歴

も不鮮明が過ぎる。

年齢は13か14歳ごろの小人族バルウムの少女。年齢に対して未成熟が過ぎる肉体、反して精神は成熟しきり、ともすれば擦り切れた様な様すから見せる。

冒険者になる以前から完成していたであろう戦闘形式バトルシステムに加え、軍属であつたであろう戦闘思考。加えて、騙し騙されの裏側で生き、魂が壊れる寸前にまで至つた人物。

もはや生きている事が奇跡とも思える様な経歴の数々。魂に刻み込まれる程の壮絶な彼女の人生は、けれども迷宮都市オラリオから伸ばした調査の手が何処にも付かない程に不明。いつ、どこで、どのようにしてこの都市を訪れたのかすらわからない。

「いや、待て。そもそも今回の件と何の関係があるんや」

ミリアの過去に対する詮索は、彼女の状態を考えると無粋に過ぎる。が、それ以前に此度の『魂の破壊』に関して言えば全くの無関係に感じられるだろう。

故にロキが問いかければ、フレイヤは僅かに溜息を零した。

「イシユタルもロキも、そしてヘステティアも……どうして誰も気付かないのかしら。それとも、ミリアがよほど隠すのが上手いのか」

「何の話やねん」

薄淡い輝きを宿した石をロキに見せる様に差し出し、フレイヤは呟く。

「キューイは何処から来たの？　そもそも、あれは本当に飛竜なのかしら？」

「——はあ？」

銀髪の女神の呟きにロキは盛大に呆れの表情を浮かべた。

「飛竜なのか否かつて……そりや飛竜やろ。むしろそれ以外の何やねん」

何処からどう見ても。神々が見て『これは飛竜だ』と言える魂を持つ存在。それがキューイだ。

肉体がミリアの魔力によって構築されており、ミリアが死ぬかステイタスを封じられれば即座に消滅する魂だけの飛竜。

ロキの認識ではそうだ。そして神々もそう認識した。神会デナトウスで全ての神々が同意し、街中でも連れ歩ける特例的な存在としてソレを認めただけだから。

「ロキ、貴女はいままで何をみてきたのかしら……ミリアは魂を模倣出来るのよ？」

フレイヤが放ったその一言は、余りにも強烈な代物だった。

「何を言うて……まで」

ミリアは魂を模倣出来る。その言葉を否定しようとして、即座にその否定を飲み込んだ。

彼女が持つ魂の模倣、すなわち【魂の模倣】クラスチェンジその事に他ならない。

誰がどう見ても小人族バルウムの少女であると言い切るであろう少女。その人物がそのスキルを使用する事で全く別の種族へ——魂そのものからの変質を起こす。

戦争遊戯中に見せた狐人ルナールという種に変質した事は都市全ての神々の記憶に新しい。

「……まさか、せやったら……でも、んなことが」

「気付いたかしら？」

「いや、それでも、魂の一部やろ？ それやったら、ずっと……ミリアは……」

フレイヤの言葉に導かれ、ロキもまたその予想に辿り付いた。

ミリアが持ち得る魂の変質。そして、キューイと言う出処不明の魂。

ロキとミリアが初めて顔を合わせたのは行きつけの酒場での一件。ただでさえ好ましい関係から始まった訳ではないそれに止めを刺す様に、壊れかけの魂だった少女との出会い。

だが、それでは、その予測が正解だとすれば、この半年間、ミリア・ノースリスという人物は——。

「貴女が何処でミリアと出会ったのか知らないけれど、あの子いままですと欠けたままだったでしょう？」

フレイヤの瞳は魂についてを他の神に比べてより詳細に知る事が

出来る。

そんな女神が見た、ミリア・ノースリスの魂は、欠けていた。それも、ずっと、最初から。

「大賭博場の一件で気付いたのよね」

「なんやそれ」

「あら、ロキには報告が言ってないかしら」

『殺生石』を愛しむ様に撫でながら、フレイヤは告げた。

「この『殺生石』の中に入っているのはキューイという名の、ミリアの魂の一部」

赤飛竜、キューイと言う愛称を付けられた怪物。ミリアによって肉体を与えられなければ存在出来ない魂だけがミリアに紐付けられた存在。

その正体は、ミリア・ノースリスの魂の一部。

「あの子は、自分の魂の一部を切り分けた。多分、ヘステイアの所に転がり込んで恩恵を授かり、その魔法を使用したその瞬間に」

「切り分けられた魂の欠片は、与えられた役割である『飛竜』としてその魂の形を変えた」

「あの子は自分で作ったのよ」

自由奔放に振る舞いながらも、決して自分を裏切らない。

口論に発展したとしても、決して自分を騙さない。

自分だけの、自分にとって都合の良い存在を、無自覚に、無意識に自分の魂の一部を使って作り出した。

「それがキューイ、あの子が可愛がっていた存在」

「……………」

魂の変質。普通なら有り得ないであろうそれが成立するがゆえに、ミリア・ノースリスは魂そのものを『飛竜のもの』に変質させて、従えていた。

キューイとは、どれだけ口では生意気を言おうが、何をされようが、決してミリアの事だけは裏切らず、ミリアの指示に従い、ミリアを命を賭して守り抜く守護竜——その様に作られただけの存在だった。

本来ならば有り得ない、けれども特殊な状況下で生まれた、生み出された飛竜^{人格}。

「けれど、それに不具合が生じた」

フレイヤは眦を下げ、悲し気な表情を浮かべ。静かに『殺生石』をロキに差し出した。

「ロキは知っているでしょう。あの子、最初は壊れてた」

「そうやな」

出会ったその日、酒場で見た彼女の魂を忘れる事は難しいだろう。

どれほど言葉をかけても、どれだけ愛しんでも、どれだけ慈悲を与えてもあの魂は救えない。そう思ってしまう程に、壊れた魂。

「それを、ヘステイアが癒し、治した」

壊れていたそれを治した。奇跡的に、歪に歪み切った彼女そのものを女神^{ヘステイア}は受け入れた。故に、彼女は、本来ならば治る筈も無い、不可逆を踏み越えてその魂は蘇った。

——その時に、不具合が生じたのだ。

「あの子は、ミリアはその時にはもう、キューイと言う存在を生み出していた」

「ああ、フィンも言っとったわ。ミリアの服の中に幼竜が居ったってな」

ミリアの魂が蘇り、元に戻る以前。キューイという存在はこの世界に産み落とされていた。

本来ならば、その肉体が破壊される度にミリアの魂へと還元されるべき、魂の欠片。それが、元に戻らなくなった。

あるべき形から外れ、飛竜と言う小さな器の中に閉じ込められた、魂の欠片。

「ミリアの魂は、ずっと不完全のままだったわ」

「普通なら、そんなん成立せん」

キューイという飛竜を、自身の魂の欠片を切り離したその瞬間から。ミリアがミリアとして、女神^{ヘステイア}に救い上げられたその傍で、別の存在として切り離された『魂の欠片』はずっと、救われずにそのままだった。

魂の変質。ミリアが持つ特異な能力。

己が魂を狐人ルナールに近づけた。故に、彼女は此度の狐人専用ルナールの儀式すら適応した。それ以外にも狼ウエアウルフ人や犬シアンスロップ人等、複数の種族の魂に適応できている。

神々ですら、その変質の瞬間を見ていなければ気付けない程に完璧に、他の存在へと成り果てる。それが可能であったが故に、ミリアが無意識に切り離したその欠片は、飛竜の魂に成り代わり活動していた。

そして、魂が欠けているはずのミリア自身も、その欠片でしかないキューイも、どちらもそんな事実を神々に悟らせない程、完璧に——
——演じていた。否、ミリア自身ですら騙されていた。

「フレイヤ、まさかアンタ……」

その演技を、未だに続く、無自覚のソレを終わらせる為。

此度の儀式、魂を引き摺りだすそれを駆使すれば必ず。必ず、キューイというミリアの絶対守護を目的として生み出された存在は動く。動き、ミリアに替わって『殺生石』に封じられる事を選ぶ。

そして、ミリア自身はようやく自覚するのだ。無意識に、魂レベルで行われていたその行為に。

その段に至って漸く、彼女は自身の魂を元に戻そうと動き出す。少なくとも、欠けた一部を取り戻そうと無意識に魂は求めだすだろう。「ようやく気付いてくれたかしら。私は別にあの子の魂を壊す気なんてないわ」

フレイヤは、イシユタルを送還する気は無かった。

ミリアを儀式に使う事自体は、別に気にしていない。むしろ、その行いの末にミリアが自身の欠けを自覚し、自ら元に戻ろうとしてくれれば良いと思っていた。

しかし、誤算があつた。よもやイシユタルがベルに目を付けるとは思っていなかった。

自身の思惑の上で動くだけなら、ちよつとお仕置きだけしてミリアの魂の一部を封じた『殺生石』を取り戻すだけ取り戻して、お終いで済んだ。だが、男ベルにまで手を出されては黙っていられない。

「それに、この程度の事であの子の魂が砕けて壊れるなんてありえない」

繰り返される地獄の日々を乗り越え、女神の下へ辿り着いたあの魂が。家族を手にし、より硬い決意と結末に縛られたミリア・ノースリスの魂は、この程度では壊れない。

例え、殺生石が砕かれた所で問題はない。普通なら砕け散れば廃人確定であったとしても、ミリア・ノースリスだけは別。魂が砕け散っても精神が死ななかつた彼女なら、欠けた状態ですつと過ごしてきた彼女なら、絶対に大丈夫だと信じられる。

「そういう訳だから、この『殺生石』をあの子に返してあげてちょうだい」

フレイヤから『石』が手渡されたロキは、僅かに表情を引き攣らせた。

イシュタルが企んだ悪戯は、そもそもフレイヤに筒抜け。それすらも楽しむ処か利用して意図した通りに事を運ぼうとしていた——
——つまり、それは。

「なあ、フレイヤ」

俯き、表情を隠したロキが問いかける。

「何かしら？」

「アンタ、もしかして——ウチの眷属が巻き込まれて死ぬんも想定通りって事か」

此度の一件に於いて、不幸にも巻き込まれ命を落とした神ロキの眷属。ヘステイア派への改宗コンバージョンを行い、力添えをしていた一人のドワーフ。大盾と槌矛を駆使する前衛壁役の男。

大の酒好きで事あるごとに酒を口にしていた陽気な人物。こつそり主神とも酒を酌み交わし、共にリヴェリアに雷を落とされる事もあつた、そんな男。

そんな、グラン・ラムランガが命を落とす事すら、フレイヤの想定通りだったというのなら。

「ウチ、このまま本気で事を構えるで？」

このまま、この都市が滅茶苦茶になっても構わない。

「フレイヤ・ファミリア」と言う、眷属こどもの仇を打ち滅ぼす。

顔を上げたロキは、悪鬼羅刹の如き表情でフレイヤを睨んだ。傍に控えていたガレスが無言で武器を手にし、構える。

一触即発の状況。不用意な発言をすれば即座にこのまま終結に向けて進み行くはずの「イシュタル・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」の抗争は、次の瞬間にはグランへの吊い合戦と化すだろう。「……それについては、ごめんなさい。私にも想定外だった」

フレイヤは、素直に頭を下げた。

事、この一件の中で出た死者、「ヘステイア・ファミリア」に改宗コンバージョンしていたロキ派のグランと、ガネーシャ派のルシアンルシアンの二人については彼女にも想定できなかつた。

そも——。

「まさかイシュタルが、眷属フリユネの手綱すらまともに握れないなんて、思つてなかつたもの」

「——」
自らの眷属、【男殺し】アンドロクトノスフリユネ・ジャミールの手綱すらまともに握れず、暴走させてしまうなんて予測できなかつた。

フレイヤやロキの様な忠誠や忠義に満ちた派閥ならその様な事起こり得ない。だが、イシュタルはまともに手綱を握っていなかつた。それが想定できなかつた、と宣うフレイヤ。

対し、ロキは静かに拳を握り締めた。嘘だと断じる事も出来る。

だが、眷属こどもの死そのものは本当に想定外の事だったのだと察する事も出来てしまったのだ。

「さよか……」

「ええ、本当にロキの眷属に被害が出るのは想定していなかつた、それだけは断言出来るわ」

ロキが静かに俯き、手にした『殺生石』を見て僅かに表情を歪める。

「……フレイヤ、これからどうする気や」

「どうもしないわ」

さも当たり前前の様に、未だに小火が残る歓楽街を見下ろしたフレイヤは告げる。

「ロキ、直ぐに此処から立ち去りなさい」

「そら出来ん相談やな」

イシユタル本人を捕まえる事は叶わずとも、その周辺は探る。

破壊され尽くして尚、残るこの宮殿内部には必ず、自分達の求める物がある、とロキが引き下がる事を拒否すると、フレイヤは肩を竦めた。

「此処に残っていると、都市管理機構ドが五月蠅いわよ」

「……何が言いたいんや」

フレイヤは振り返ると同時、ロキの持つ『殺生石』を指し示して告げる。

「直ぐに、それをあの子の下へ送り届けて頂戴」

「なんでウチが使えばしりなんかせなあかんのや!？」

歓楽街を支配していた「イシユタル・ファミリア」の消滅は、間違いなくあらゆる者に多大な影響を与える事だろう。

当然、都市に大損害が出る事も間違いなく、そうなれば都市管理機構ドは関わった全ての派閥を追求するだろう。この場に居るといふ理由だけで、多額の罰金と罰則ペナルティを掛けられる事は間違いない。

そうなれば「ロキ・ファミリア」や「ガネーシャ・ファミリア」も罰金や罰則等ペナルティが課せられる。

フレイヤはこう言っているのだ。

「代わりに、此処で起きた騒動は全て私の派閥で責任を取る」

ロキ派、ガネーシャ派はあくまで襲撃を受けたヘスティア派の救出の為に関わっただけ。

大派閥イシユタル・ファミリア 完全消滅およびに女神イシユタルの送還の責は全て「フレイヤ・ファミリア」にある、と。

「どうする? 私としてはその『石』を一刻も早くあの子に届けてほしいのだけれど」

「……………」

無言の睨み合いの末、ロキは舌打ちを零して呟く。

「そもそも、この『殺生石』の中身、どうやってミリアに返すんや。ま

た儀式でもやれっちゆうんか」

「必要無いわ。あの子が触ればそんな脆い封印、勝手に壊れるもの」

本来ならば器と魂の間にある繋がりを全て断ち切った状態のモノが封じられるが故に、石から魂を取り出す事は不可能。だが 人の魂がまるまる封じられている訳でも無い為、魂が引き合う力に任せてしまえばおのずと封印等解ける。

魂を分割して封じてしまえば、元の魂が壊れてしまいがゆえに今までの実行例が何一つ存在しないだけで、封印そのものは緩い代物ではない。解く手順も無く、ミリアが触れば元通りだと。

「魂が欠けた状態を自覚した以上、あの子の魂はその欠けた魂を求めろ。触れれば問題無いわ」

それに加えて、イシユタルが事を急いで不完全な状態で儀式を強行させたがゆえに、封印そのものも弱い。

「……一つ聞かせえや」

「何かしら？」

「キューイはどうなるん？」

ミリアが無自覚に生み出したとはいえ、その存在は彼女の助けになっっていた事は間違いない。

だが、それ以上にあの飛竜が生み出す『再生薬』の存在もまた大きい。それがどうなるのか、というロキの問いかけに、フレイヤは静かに肩を竦めた。

「さあ、私にもどうなるか予測もつかないわ」

第一八四話

未だに煙立ち昇る歓楽街。外周部を包囲していた「フレイヤ・ファミリア」の兵が引き、朝日に照らされた其処は大きく変わり果てていた。

一部区画は原型を留めていたり、火災が小さかった所はあれど、その大部分が此度の強襲にて倒壊、または半壊している。

激戦区であった本拠ホームの片隅。

瓦礫の隙間から褐色の少女が這い出てくる姿があった。

「……あゝ……死ぬ、死ぬかと、思ったんだけどなあゝ」

フリユネとの戦闘の際、「ヘスティア・ファミリア」の眷属と激突して意識を失っていたレーネは変わり果てた本拠の前門を見て頭を掻き、自らの掌を見つめた。

「……恩恵、無くなってる」

神ファルナの恩恵が封じられている。その感覚を味わうのは、彼女にとって二度目の事である。

一度目は、敬愛した主神を失った日に。

そして二度目である今回は、自らを拘束していた仇が消えた事を意味していた。

「そつか、そつかあゝ……くくくくく!!」

ふるふると身を震わせ、口角が吊り上がる。一杯に息を吸い、歓喜の咆哮を上げようとした所で体中の鈍痛を認識し、レーネはその場で蹲り悶える。

「い、いったあゝ……あー、でも、これでようやく、終わりかあ」

長く苦しい時が終わった事をしみじみと噛み締め、彼女は上り始めた朝日に眩む歓楽街に視線を向ける。

背後から近づいてくる足音に気付きながらも視線はそちらにやる事無く、レーネは問う。

「アイシヤ、あなたはこれからどうするの?」

「……てつきり死んでもんだと思っただけだね。どうするもこうするもないさ、私はケジメを付けにいくだけさ」

黒の長髪をたなびかせた女傑はレーネの前に回り込んで、蹲る彼女を見下ろした。

「で、逆にアンタはどうする気だい」

「んー、復讐の続き。今からアイシヤを殺すとか、どう？」

視線をアイシヤに向ける事無く、僅かな殺気だけを差し向けるレーネ。そんな彼女の様子にアイシヤは肩を竦めた。

元【ウエヌス・ファミリア】の眷属であるレーネから見れば、「イシユタル・ファミリア」の『戦闘娼婦』の指揮を行い、実質的な副団長の立場にあつたアイシヤは復讐対象の一人であつても不思議ではない。しかし。

「悪いな、先約があるんだ」

「先約？」

「【ヘスティア・ファミリア】……レナ達の方まで罪を背負わなきゃいけないしな」

そっか、と嘆息したレーネが、くすくすと肩を揺らして笑う。

「ねえ、アイシヤって優しいよね」

「何を言ってるんだか」

「……だって、割と私の事庇ってくれてたじゃん？」

事ある毎に主神イシユタルや団長フリユネのストレスの捌け口として理不尽な命令や暴力を振るわれていたレーネに対し、なんやかんやと口添えをしたり、手助けをしたりと世話を焼いていた事もある。それ故に、レーネはアイシヤに恨みをぶつける気にはなれなかった。

「……アンタの派閥を滅ぼした時、戦闘娼婦の指揮をしてたのは私なんだけどね」

「だよね、知ってる」

「だったら、恨まれて当然だろうに」

「……アイシヤってさ、あの時……なんか予想外って顔してたよね」
「……………」

【ウエヌス・ファミリア】本拠にて、コンバージョン改 宗を望んだ獣人の少年を改 宗させる為の神々の手続きを行うとみせかけ、そのまま奇襲を行い相手派閥を殲滅する作戦。

その計画を聞いたアイシヤやサミラ、派閥幹部の者達は喜々として武器を取り、血で血を洗う抗争に沸き立ちその時を今か今かと待っていた。

結果として、戦闘娼婦達^{パーベラ}が求めていた戦場は其処には無かった。

「ああ、私も、サミラも……皆そうだった」

第一級冒険者も混じり、精強な派閥として知名度もあつた「ウエヌス・ファミリア」という派閥。

一人一人の忠誠心が高く、相応にステイタスも高い冒険者が揃っているがゆえに、苦戦する事を想定されていた。

合図があるのと同様、本拠を取り囲んでいた戦闘娼婦^{パーベラ}は一斉に窓を、扉を、壁を蹴り破つて室内へ侵入。目に付く精鋭へと斬りかかり

—— 呆気なく血の海に沈んだ敵の姿に困惑した。

「聞いてなかった。……恩恵を封じる事で相手の戦力をゼロにするなんてね」

血が沸き立つ様な闘いは無く。ただただ齒応えの無い者を潰すだけの行為。

強豪派閥との抗争。その期待は瞬く間に消え失せ、せめて、本気の相手とやり合いたかつたという、燻る想いが残つた。そして、一人の冒険者が捕らえられ、洗脳をされたのを見て。

「贖罪、だつたのかね」

「へえ……意外、アイシヤつてその辺り気にしない奴だつて思つたのに」

ようやく顔を上げたレーネに対し、アイシヤが手を差し伸べる。

その手を掴み、レーネが立ち上がった所で、二人の耳に呻き声が届いた。

「……………アイシヤ、なんか聞き覚えのある声が聞こえる気がするんだけどお」

「……………ああ、私にも聞こえるな。死んだんじゃないのか？」

二人が振り返つた先、激しい戦闘の痕跡が刻まれた前門。爆発によつて皿状に抉れた中心部。

恐る恐る二人が近づき、端から覗き込んだ先に、その人物は居た。

【イシユタル・ファミリア】の策略によって嵌められ、激しい抗争に至った今回の出来事。

【ロキ・ファミリア】と【ガネーシャ・ファミリア】の救援の到着によって俺達と、ヘステイア様達、別行動していたベルやミコト等、全員が無事に救助される事となった。

被害としては、ミコトが半死半生状態。第二級冒険者数名相手に奮闘するも、辛くも敵わず。救援が間に合ったからよかったものの、後少し遅れていたら危なかったとの事。

ベルが全身打撲。春姫を救う事には成功したものの、最後の最後でアイシャさんと決闘紛いな事をしていたらしい。詳細は知らん。ベルはだんまりだし。

イリスは両腕の粉碎。文字通り、自身の耐久を超える力を発揮して無茶を通した結果、彼女の両腕は文字通り『粉碎』してしまい、再生薬による治療を行う事に。

他は重軽症。一番軽いのがエリウッドで、足場からの転落による昏倒で済んだらしい。

例外として、レーネについてはそもそも回収すらされず、状態不明。死んでるかもしらん。

派閥を裏切り此方に協力姿勢を見せていたとはいえ、彼女はイシユタル派閥の団員。事情を知らないフィン達からすれば敵なので構う事すらしなかったのだろう。

そして、俺の場合は……まず、フリユネによる拷問行為によって負った傷。此方は完治するらしいが、触覚に不具合が生じたらしく痛覚がだいぶ鈍った。痛みに強くなつたと前向きに捉えるか、負傷に気付きにくくなつたと後ろ向きに捉えるかはこの際置いておくとして。

一番の問題、あの儀式を受けた事であったのだが……こちらについては解決の目途が立ったので放置。

【フレイヤ・ファミリア】が俺の魂の一部を封じた『殺生石』を神口キに引き渡してくれたらしく、俺の元へ帰ってきたのだ。

「……………なるほど」

「なるほど、じゃないわあ!? 妙に落ち着いとるな!？」

「いや、割とびっくり。ですよ?」

俺が今まで相棒として過ごしてきたキューイ。彼女は……………どうやら俺が生んだらしい。

あの我儘でポンコツで人の話を聞かない事もあるあのキューイは、なんとなんと驚くべきことに俺が自己防衛の為に生み出した二重人格の様な存在だったのだ。それも、俺の魂の一部を使用して生み出された存在だったらしい。

——あのキューイが、俺の一部だった、らしいのだ。

あの、あのキューイが? いきなり雌になつたりするんやぞアイツ、あれ、俺の一部だったん?

「あんの腐れ商会もふざけおつて……」

「もう既にギルドが庇う姿勢をとってるからね。僕達も手出しが出来ない」

「ハスティア・ファミリア」本拠『竈火の館』客室。時刻はお昼を少し過ぎたぐらい。

卓の上に置かれた『殺生石』を挟んだ対面に座る神ロキが怒髪天を突く勢いで喚きのを聞き流しつつ、概要をフィンがまとめて教えてくれた。

まず、此度の一件において俺達を嵌める為に出された冒険者依頼について。

依頼してきた商会は担当していた人物が既に他界しており、自分たちは知らないと此度の一件の一切を知らぬ存ぜぬと言い切った。質が悪いのは、神であるロキやガネーシャ様が『嘘は無い』と言った事だ。

とはいえ、此度の一件、脅されていたにしろ利用されていたにしろ、はじめはつけるという事で依頼未達成の状態ながら依頼料の全額支払いをしてくれた。一方的に、この金額を支払うからもう関わってくるな、と締め出されたのだ。ぶっ殺してえ。

デインケ達が受けていた本来の依頼額と、俺達が受けてしまった罨

の依頼。それに色を付けて二五〇〇〇〇〇〇ヴァリスが本拠に届けられたが……仲間二人の命と引き換えに、と考えるととてもではないが割りに合わない。

何より最悪なのは、既にギルドに被害届を出してやがる事だ。「イシユタル・ファミリア」に脅されて利用されていたと、被害者面してやがる。その所為でギルドが動いていてこつちから手出しや口出しが出来ん。いつか滅ぼしてやる。

「……それで、ミリア君の魂は元に戻るのかい？」

「戻る、らしいで？ フレイヤ曰くやけどな」

「それは、どうにも困るね」

その、らしい、なんて曖昧な表現をされると割と怖いのだがね。

「それで、どうやって戻せば良いんだい!？」

疲れているであろうヘスティア様が神口キに詰め寄り、元に戻す方法を尋ねる。

「その『殺生石』をミリアが触れば一発らしいで？」

「は？ そんなに簡単なのかい？」

「ま、触ればわかるやろ。ほれ、さっさと元に戻しい。自分も辛いやろ」

辛い、と言えば辛い。否定はしないが……。

元に戻して良いモノだろうか。俺の使う魔法が他の人にも気楽に使える状態の道具なのだとすれば、割と役に立つ代物ではあると思う。

いや、でもこの『殺生石』を戻さないとキューイが呼び出せない訳で。既にヴァンとクリスは召喚して確認したのだが、キューイだけは何度呼びかけても答えが返ってこない。本当にキューイがこの殺生石に封じられているのは間違いない。

キューイが居ないのは割と致命的ではあるのだが、でも……。

「あの、キューイってどうなるんです？」

「……わからん。予測も付かんわ」

「じゃあ、キューイ君は……」

キューイが消える。それは、非常に困るな。

『再生薬』の事を考えると勿論そうなんだが、キューイはなんだかんだで俺を守ってくれた守護竜としては最高の存在だった訳で……でも、斯くあるべしと定めたのは俺な訳で。

アレも俺の一部で、演じる様に強要していたのも俺で………今までのキューイに対する接し方を思うに、最低な事をしていた気がする。

そんなキューイが、消えるかもしれない。

「……ミリア君、大丈夫さ。あのキューイ君だぜ？　なんだかんだ言って戻ってくるに決まってるだろう？」

励ましてくれるヘスティア様の言葉に頷きつつ、卓に置かれた殺生石に手を伸ばす。

うすぼんやりとした光が宿るその石。指先を近づけると、ほんの僅かに振動し始めた。

触れるか触れないか、その瀬戸際に至り——ピシリツ、と石に亀裂が走る。

「……………」

ロキもフィンも、ヘスティア様でさえ黙り込んで成り行きを見守る。

亀裂をなぞる様に指を滑らせ、今度こそその石に触れた。ぼんやりとした光の煙が殺生石から漏れ出し、俺の手に纏わりついて、消えていく。

するすると、負傷とは別に残っていた違和感の様なモノ。まるで開いていた穴が塞がる様に、その違和感が消えていく。静かに、思ったよりもあつさり、確かに俺の中にキューイは、帰ってきた。

卓に置かれた殺生石からは輝きが消え去り、ただの割れた石ころになりはてている。

キューイ、其処に居るのか？

。

返事は返ってこない。

「ミリア君、どうだい？」

「眠ってるんですかね。返事が無いです」

これで、ルシアン、グランと続いてキューイまでもが居なくなつた事になるのか。

いや、キューイが居なくなるのはある意味で仕方のない事だったのかもしれない。そうでなくては俺は壊れたままだったらしいのだから。だから、きつと、別の時期が来た時に消える定めという奴だったのかもしれない。

「召喚魔法を試してからでも判断は遅くないんじゃないかな」

「それも、そうですね」

フィンに指摘され、確かにその通りだと思った。

もしかしたら寝こけていて呼び掛けに気付いていないだけかもしれないのだ。

そうと決まれば話は早い。早速召喚する為に広い場所に向か――

「団長、ロキ、すいません。急用です」

「何があつた？」

部屋に飛び込んできたのは現在、竈火の館の周囲を警戒してくれていたロキの眷属の一人。

「【イシユタル・ファミア】の残党が訪ねてきています」

「……戦闘の意志は？」

「無い様子です。ですが、『約束を果たしに来た』と言っています……」

約束。ああ、約束か。

「律義な事で……アイシャさんですよ。フィンさん、さつき話したと思うんですが」

「わかっている。その辺りも考慮して対応をするよ」

フィンにあの時アイシャさんとした約束の話は伝えてある。

抗争途中、派閥を裏切り此方に着いた少数のアマゾネスについて。加えて【イシユタル・ファミア】の犯した行為、「ヘステイア・ファミリア」に対する強襲、そして団員の殺害等の罪は全て【麗傑】アンティアーネイラアイシャ・ベルガが背負う事。

その対価として妹分達は許して欲しい事等、これを飲むかどうかは

ロキ派閥、ガネーシャ派閥次第ではあるが。

「あの、実はですね……」

言い淀む様に伝えに来ていたその男性は口元を強張らせ、信じられない名前を上げた。

「フ、フリユネ・ジャミールも、居ました」

一瞬、視界にパチツと火花が散った様な感覚に囚われる。

瞬間的に沸騰したかのように体が熱くなり、居ても立ってもいられずに長椅子から立ち上がり、男を押し退けて屋敷正面門に駆けていく。

玄関門を押し開けて飛び出してすぐ目につく、憎たらしい程に晴れ渡った爽快な澄清。

その蒼穹の元、「ヘスティア・ファミリア」本拠の前庭。噴水の前で周囲を取り囲まれた見知った顔を見つけ、一瞬だけ冷静さを取り戻した。

「あ、ミリアだ。やつほ〜」

「……約束通り、罪を償いに来たよ」

簡易な手当てだけをしただけの姿のレーネとアイシャの二人。

そして、その二人の間に転がされた人物。全身に包帯が巻かれて木乃伊みいの様な巨女の姿があった。顔は見えないが、その包帯の隙間から漏れ出るしやがれた声には聞き覚えがある。

「ひい、ア、アイシャ、アタイをどこに連れてきたんだい!？」

目が見えないのか、もそもそと蠢いていた。

目が見えないだけじゃない。左肩は俺達で爆破して吹き飛ばしたのはある。片足も大きく挟ってやった、それでもまだある程度原型は残っていた覚えはあったのだが。

「ああ、これ? 正門前に落ちてたから拾ってきたんだよね〜」

レーネが爪先で突いたその人物。

第一級冒険者【男殺し】アンドロクトノスフリユネ・ジャミールだ。

だが、その両足は膝から先が無かった。胴体もかなり細くなっているし、両腕も無い。顔の形も大きく変わっており、もはや別人と言っても差し支えない状態であった。まるで、達磨だ。

とはいえ、生きていたのかこいつ。あの時、絶対に殺されるもんだと思っていたのだが、再起不能にされただけで済んだ、と……。

「……むしろ、死んでた方が幸せだったと思うんですけどねえ」

追いかけてきたヘステイア様が転がるフリユネの様子を見て表情を曇らせる。フィンとロキは冷めた目でフリユネを見下ろし、俺は自然と吊り上がる口角を下げようとして、引き攣った笑みを浮かべていたと思う。

どんな方法で殺してやろうかな。

その後の動きは非常に迅速だった。

とりわけ、此方に協力する姿勢を見せたアイシャ、共闘したレーネは元より、最初から最後まで身勝手に行動し、仲間の命を奪ったフリユネについては即死刑でも良いとは思ったが、それでも簡易裁判はすべきとガネーシャ様が止めたのだ。

あのヒキガエルが未だに呼吸をしている事が不愉快極まりない。ロキやフィン、ロキ派閥の者達も即死罪で十分だと主張していたが、それでも罪を公平に裁く場を設けるべきという主張は通った。

噴水を背にし中央に並ぶ三人のアマゾネス。一人は腕を後ろにし胸を張った女傑、一人はへらへらと締まりのない笑みを浮かべた小娘、一人は自力で立つ事も出来ない死にぞこない。

集まったのはヘステイア様、ガネーシャ様、シャクテイさん、神ロキ、フィン、俺、それから見張りの数人を除けば他に人は居ない。

「さて、まずは……言い分を聞く所からだな！」

ガネーシャ様の一言を聞き、さっそく口を開いて喚いたのは既に死に体のヒキガエルだった。

「ア、アタイが悪かったよお。許しておくれよう」

反省している。今後同じことはしない。だから許してくれ、と喚きだすヒキガエル。両手両足に視覚すらを失つてもぞもぞ動く達磨状

態という惨めな姿で許しを請うその光景に、慈悲の類は一切わかかなかった。今すぐその口を閉じろ、呼吸を止めろ、鼓動を止めろ、死ぬ。と言う感想しか出てこない。

「……わかった。もう良い、他の二人は何か言い分はあるかい？」

フリユネの言葉を遮り、ヘステイア様が問いかける。

一瞬、レーネとアイシャが視線を交わしてどちらが先に答えるかを確認し合い、先に口を開いたのはアイシャだった。

「私の言いたい事は一つ。レナ達の事は許してやってくれ。私はどうなろうが知った事じゃない」

毅然と言い放った彼女は、これ以上口を開く気は無いと示す様に背筋を伸ばしたまま口を閉ざした。

自然と、最後の一人であるレーネの方に視線が向く。場に居る者達の視線を浴びた彼女は、にへらと締めりのない笑顔をより破顔させて口を開いた。

「うん、言いたい事は無いかな。仰せのままにーってね」

死ぬと命じられたら、喜んで死ぬ。そんな雰囲気すら感じられる彼女の様子にフィンが眉を顰め、ロキが口を引き結んだ。神ガネーシャとシャクテイさんは真剣な表情で三人を見回している。

ヘステイア様はどこか悲し気に三人のそれぞれに視線を向け、一歩前に出た。

「ガネーシャ、此処はボクに任せてくれないだろうか」

「……うむ、本来ならばヘステイアがすべき事だからな。俺、ガネーシャは一歩引いた所で見よう！」

場を譲る様にガネーシャ様は下がり腕組をして成り行きを見守り始める。ヘステイア様は他の面々も見回してから、三人に視線を向けた。

「さて、今からボクが三つ、質問をさせてもらう。嘘偽りなく答えてくれ——その答え次第で、キミ達の裁きを決める」

「わ、わかったよお。だから許しておくれよう」

奥歯を噛み締め、喚くヒキガエルの言葉を聞き流す。直ぐにでも殺してやりたい。この期に及んで、未だに許してもらおうなんて考えて

いるのは不愉快極まりない。

前に出たヘステイア様は、ゆっくりと左に立つレーネに顔を向け、口を開いた。

「キミは、自分の犯した罪を反省しているかい？」

「……してるよ。してる、ずっと、反省してる。後悔も、反省も、一杯した」

破顔していた笑みが、壊れる。ゆるい笑みが引き攣り、なんとか笑おうとしながらも、笑顔になり切れない、そんな壊れた表情。レーネが自らの頬を揉んで、表情を取り繕う中、ヘステイア様はアイシャさんに視線を向けた。

「キミはどうだい？」

「反省してる。ただ……いや、良い。何を言っても言い訳にしかないからね」

口に出そうとした言葉を取り消し、アイシャは静かに瞼を閉じた。

最後、声を聞くのも不愉快極まりないヒキガエルは、反省している、許してくれと連呼し続けるのみ。まるで壊れた受信機ラジオの様だ。

「二つ目の質問だ、キミ達は罪を償う気は——」

「あるう、あるよおっ!」

ヘステイア様が問うより前に、ヒキガエルがしやがれた声で喚きたてる。その言葉に不愉快そうにフィンやシャクテイさんが眉を顰め、ロキとガネーシャ様は眉間に皺を寄せた。

ヘステイア様は特に反応するでもなく、他の二人に視線を向ける。

「キミ達は？」

「ある。どんな方法でもね」

「うん、どんな償いでもするよ」

真つ直ぐ芯の通った言葉を返すアイシャと、表情は何処か緩いが言葉の中に確かな芯を感じさせるレーネ。二人の返答を聞くと、ヘステイア様は静かに深呼吸をして、三つ目の質問を投げかけた。

「これが、最後の問いだ。キミ達は——許して欲しいかい？」

なんとという、問いかけをしているのだろう。

許して欲しいか否か等、答えは一つだ。

「ゆ、許して欲しいよお!! 見ておくれよ今のアタイを、人前に出る事も出来ないぐらい痛めつけられたこのアタイの体を! ここまでされたのに許されないなんておかしいよお!」

——— ああ、聞いているだけで虫唾が走る。

なんなんだこのヒキガエルは、どうしてそこまで喚ける。大人しく、静かに、息をせずに死を待て。見ているだけで、聞いているだけで、存在しているだけで不愉快だ。

思わず魔法を詠唱しようとした所で、フリユネの鼻先数セルチの所に槍が突き立った。

「ひっ、ひいいいいいいいいっ!」

「不愉快だ、頼むから僕が我慢の限界を迎える前に黙ってくれないか」
フィンが突き立てた槍を回収し、無言で元の場所に戻っていく。
フィンがやらなかったら、きっと俺がやっていた。同時に、多分だがシャクティさんもやっていたと思う。目付きがもはや人に向けるそれではない。

「……二人はどうだい?」

ヘスティア様が残る二人に問いかける。彼女らはフリユネに向けていた冷めた目を上げ、ヘスティア様を真っ直ぐ見据えて応えた。

「許されたいなんて考えた事無いね」

「有り得ないよ。許されるなんて」

真っ直ぐ、嘘偽りの一切無い、心底そう思っているであろうその言葉に思わず目を見開いた。

最期の最後まで諦めずに喚き散らすいつそ醜いフリユネの様な奴が居る横で、自らが定めた一本芯を通し続ける二人の姿に感嘆すら感じられる。だが———

「許されて良い筈無いじゃん」

——— 何処か、レーネの姿に既視感を感じた。

何故、そんな事を感じたのか。その原因に想い馳せかけて、頭を振って意識を戻す。

三つの問いは終わった。先の問いは神の問い、嘘など吐けるはずがない。例え嘘を吐いても看破されるのだ。

彼女らには問いの結果を踏まえ、ヘステイア様が沙汰を下すのだから。

祈る様にヒキガエルが許しておくれ、許しておくれと不愉快な言葉を呟き続けるのを聞きながら、ヘステイア様の後ろ姿を見ていると、女神はゆつくりと顔を上げた。

「まず、アイシャ・ベルガ……ボクはキミを許さない」

「……だろうね」

至極当然の判断だと、アイシャは頷いて目を伏せた。この後どうなるろうと、彼女は真つ直ぐ背筋を伸ばして曲がる事は無いのだろう。

「次に、レーネ・キュリオ……キミもだ、僕はキミを許さない」

「あはは、知ってた！」

此方は打って変って、締めりのない笑顔のままその言葉を受け入れた。

そして、最後の一人。いや一匹、不愉快な二酸化炭素製造機。

「最後に……フリユネ・ジャミール。ボクはキミを——許すよ」

——は？

今、いまヘステイア様はなんて言った？ ゆるす？ ゆる、す？

嘘だろ？

「へ、ヘステイア様!? 冗談ですよね！」

「冗談じゃないよ。ボクは彼女を許す事にした。そうする事しか、出来ないからね」

何処か悲しそうに、悔しそうに、ヘステイア様が告げる。

信じられない、こいつは、そのヒキガエルは、仲間を、グランを、ルシアンを、殺した奴なんだぞ。

言葉を失い立ち尽くす間に、しゃがれた歓喜の音が響く。

「ゲゲゲゲエツ、許された、アタイは許されたよお!!」

こいつを、許す？ 俺には出来ない。

魔法の詠唱をしようと魔力を練りはじめた所で、ヘステイア様がヒキガエルに向き直り、告げた。

「キミは、嘘を吐いた。反省なんてしていない、キミは嘘を吐いた、罪を償う気になんてない」

——この場で、神の問いかけに嘘で答えたのか、あのヒキガエルは。

だったら、尚の事、そのヒキガエルを許す理由がわからない。

「そして、キミは本気で、心の底から『許して欲しい』と願っている」

「そうだよお、許して欲しいんだよお！」

女神は、悲し気に目を伏せて、小さく呟いた。

「だから、ボクは……キミを——許こらそう」

即座に魔法を撃てる様にとしていた詠唱準備を思わず止めてしまった。

「——はあ!? ゆ、許してくれんじやあないのかい!?!」

「ああ、ボクはキミを許そう。キミに反省しろなんて命じない。キミに罪を償えなんて命じない。ボクはキミを許す」

反省を命じない。償いを命じない。キミを許そう。

キミに反省を命じた所で意味が無い。そも、反省は命じられてするものではない。

キミに償いを命じた所で意味が無い。そも、償いは命じられてするものではない。

キミを許そう。

「ボクはキミを許そう」

反省は、生きていなければできない。

償いは、生きていなければできない。

そして、反省も償いもしない者は一生許されない。

一生許せない。だから、この場で殺し、この場で許す。

「だから、ボクはキミを殺ゆるそう」

死後、キミの魂は浄化され、罪は消える。

本来なら、キミに反省と償いを求める所だろう。けれど、命じられて行われるその行為に意味なんてない。

だから反省も、償いも、命じたりなんてしない。安心して殺ゆるされてくれば良い。

「死後、キミの罪は漂白され、新たな生を受ける時にはきれいさっぱり

無くなる。キミは許されるんだ、キミが望んだ通りに」

女神に告げられた言葉を、ヒキガエルは包帯越しにでもわかる程に
哑然とした表情で聞き届け——次の瞬間、放たれた矢の如き勢いで
フィンが槍でフリユネの眉間を貫く。

元、第一級冒険者。

今まで幾人もの男を再起不能に追いやり続けた醜女。

派閥の団長とし横暴に振る舞い続け、終いには主神すら裏切り己が
道を歩まんとした高慢にて傲慢、そして不遜な巨女。

そんな化けガエルの末路としては、あまりにもそっけないモノだっ
た。

第一八五話

「ヘスティア・ファミリア」前庭。

残されたアイシャは静かに息を呑み、ヘスティア様を見つめており。もう一人のレーネはフリユネが死んだ直後こそ喜色満面の笑みを浮かべていたものの、暫くすると怯えた様に俺達に視線を向けていた。

特に苦しむ事も無く、ただただ平凡に命を散らした死にぞこないのヒキガエルの死体は共同墓地に葬られる事になるらしく、【ガネーシャ・ファミリア】が遺体を回収していく。

遺体と共にガネーシャ様とシャクテイさんが居なくなり、ほんの少しの間を置いてアイシャが口を開いた。

「フリユネには死を、それで私達にはどんな罰がくだるんだい。勿体ぶらずに教えてくれないか」

「あ、あはは、わ……私も、気になるなあ〜？」

堂々とした様子のアイシャと異なり、レーネの方は完全に青褪め始めている。今更、罰の内容に怯えているとは考え辛い。しかし、彼女の様子を見ていると胸の奥がざわつく感じがするのだ。

「キミ達への罰か……」

ヘスティア様が腕組をしてうーん、と唸ると、ロキをちらりと見やった。

「ロキ、キミだったらどうする？」

「せやなく、フィンならどうするんや？」

「僕だったら、色々と聞きたい事もあるし、暫くの間は雑務でもやってもらうかな」

聞きたい事、と言うのは多分だがイサイルス闇派閥についてだろうか。記憶が正しければ【イシユタル・ファミリア】はそっちと繋がりがあつたはずだし。

今はこの場に居ないガネーシャ様の意見も気になるな、と居なくなったガネーシャ派の二人が居た所に視線を向けているとヘスティア様が此方に視線を向けてきた。

「ミリア君はどうだい？」

「……彼女らの意志次第、ですかね。神イシユタルを屠ったのはフレイヤ様とはいえ、私達に逆恨みして後から報復なんてされたら堪ったものではありませんし」

アイシヤの方は堂々としているからそういった陰湿な真似はしないだろうし、レーネの方もそういった真似をするとは思えないが、確認はしておくべきだとは思う。

「ふうむ、キミ達二人はボク達を憎んでいるかい？」

「疑い深いね。全く、これっぽっちも……なんて言ったら嘘になっちゃうけれどね、報復しようなんて考えちゃいないよ」

「……憎んでないよ。感謝してる」

まあ、だろいなあ。という反応に肩の力を抜こうとした所でロキとヘスティア様が目付きを険しくしてレーネを見据えている事に気付いた。

何事か、とレーネとヘスティア様に交互に視線を向けると、女神は信じられない事を口にした。

「感謝してるっていうのは嘘じゃないみたいだけど……憎んでないっていうのは嘘だね」

思わず目を見開きレーネの方に視線を向ける。

「イシユタル・ファミリア」によつて派閥を滅ぼされ隷属させられていた彼女は、彼の派閥が滅びた事を喜びこそすれ、惜しむとは考え辛い。もしや己が手で滅ぼしたかった………フリユネが処刑された時に喜色満面だった事を思えばそれも考え辛い。

少なくとも彼女から俺達に対し恨みや憎しみを抱く理由がさっぱりわからない。

「なんや、自分の手でウエヌスの仇でもとりたかつたんか？」

「違うよ」

レーネはロキの質問に対し間髪入れずに即答した。

では何が理由で憎しみを抱いているのか。さっぱりわからずに彼女の変化した時を思い浮かべながら、問いかけを放った。

「でしたら、私達を憎む理由はなんですか？」

問うた瞬間、レーネは悲しそうに眉尻を下げ、泣きそうな表情を浮かべて此方を見た。まるで捨て犬の様にしゅんとした仕草の中には、隠し切れない怯えと恐怖も見て取れる。

怯えており、恐怖しており、そして絶望している。その中に微妙に、ほんの微妙にだが、此方に対する恨めし気な様子も読み取れた。

「今日、ここで————つて————たんだよ」

「なんだつて?」

「レーネ、アンタ……」

小さく、掠れた様な返事。風にかき消されてしまいかねないようなその返事は冒険者の俺ですら聞き取れなかった。だが、第一級冒険者のフィンと傍にいたアイシャは聞き取れたのか、二人は目を見開いて彼女を見つめた。

「もう一度言ってくれ。よく聞こえなかった」

「今日、ここで殺してくれるって思ってたんだよ」

微妙に聞こえたその言葉に思わず息を呑み、泣きそうな表情のレーネを見つめた。

「……ごめん、もう一度だけ、言ってくれ。なにを、してくれるって思ってたんだい?」

聞き間違えかとヘステイア様が恐る恐る問いかける。その問いに、レーネの瞳が潤んでいく。

「だ、だからね? 今日、此処で、殺されるって思ってたんだ」

余りにも理解不能なその言葉に、ヘステイア様は目を見開いて静止し、アイシャは口を開きかけるもすぐに閉じた。ロキは腕組して溜息を零し、フィンは何かに気付いたのか俺の方を一瞥した。

今日、この場に足を運べば『殺される』と考えていた。だとするなら、命を奪う俺達に恨みや憎しみを抱いていた? 否、もしそうならわざわざ足を運ぶ必要は無い。フリユネを連れてくる理由も無い訳だし、それでは説明が付かない。

では、彼女が此方にいなく憎しみの理由とはなんだ?

「言っている意味がわかりません。殺される事に対して恨みや憎しみでも抱いていましたか?」

「違うんだよねえ〜」

口調こそ軽いものの、その瞳には今にも零れ落ちそうな涙が溜まっている。ほんの少し小突けば、滂沱の如く号泣しだしそうな、危うい均衡の上に立つ楼閣の様な不安定な精神を思わせた。

「じゃあ……いや、まさか……キミは——殺されたかったのか」

何か気付いたかのようにへスティア様がまじまじとレーネを真正面から見つめ、呟く。

その言葉を聞いたレーネは必死に堪えていた何か弾けた様に、堰堤が決壊したかのように、瞳から大粒の涙を零し始めた。

ぼたぼたと顔を上げたままの彼女の頬を、顎を伝い彼女の胸元にとめない涙が滴っていく。目は絶望に濁り、その中に微かな憎しみの色を宿しながら、褐色の少女は笑った。

「だって、だってさ？　なんで私ってまだ生きてるんだと思う？」

大粒の涙を零しながら、それを拭うこともせずには俺達を見回した彼女の瞳と真っ直ぐ視線が交じり合った。その瞬間に気付いた、気付いてしまった。

いや、違う。気付いたんじゃない。彼女が何を考えているのか理解できてしまった。

「ああ、それは……」

死にたい。死んでしまいたい。

何も残っていない。いや違う、一杯、抱えきれないぐらいに背負わされているのだ。

何も残っていない。なのに、背中にかかる重圧に押し潰されているのだ。

何も残っていない。大事なモノは、何も無いのに。

その背には自らを押し潰す罪だけが残っている。

「ねえ、殺してよ。大罪人フリユネみたいにさ」

糞女に背負わされた罪が、数多押し掛かってくる。

潰れそうだと、苦しいと、誰か助けてくれと、心が悲鳴を上げていく。けれど、誰にもそれを零す事が出来ない。

前世で、父親が死んだと知った後、残されたのは背負いきれない罪

の数々。

「ねえ、殺してよ。皆を守れなかった愚図わたしをさ」

ああ、そうか。彼女も同じなのだ。

共感だろう。いつの間にか、彼女と同じ様に俺の瞳からも大粒の涙が零れ落ちていた。彼女と同じ様に、その零れる涙を拭う気にもなれない。

「ねえ、殺ゆるしてよ。もう疲れたよ」

レーネ・キュリオは何も守れなかったのだ。もう何も残っていないのだ。

これ以上、生きる意味なんて何処にも存在しない——前世の俺と同じ様に。

「なんで私だけ生きてるの？」

とめどなく溢れる涙が彼女の頬を伝い零れ落ちる。拭う為に腕を上げる気力すら無いとでも言う様に、もう生きる気力も何も残っていない彼女は、すとん、とその場に崩れ落ちて泣きじゃくる。

死にたいと、終わらせて欲しいと、誰でも良いからこの息の根を止めて欲しかったと。

——ああ、彼女の言葉を聞いた時に感じた既視感はコレだったのか。

同じだった。彼女の置かれている状況は、俺とよく似ていた。俺の、前世と、全く一緒だった。

「もう、疲れたから」

ぐちゃぐちゃだ。全部、何もかもが、ぐちゃぐちゃで、訳がわからなくて。でも、苦しくて、辛くて、解放される事を望んでしまう。

ああ、そうだ、あの満月の夜。俺は、生きる苦しみから逃げたんだ。目の前で力無く崩れ落ちて泣きじゃくる彼女のように、生きる気力を全て失って、残る罪を背負いきれなくて、変な理由を騙って自殺したんだ。

自殺した。そう、自殺してしまった。

「殺ゆるされたかったよ」

【ウエヌス・ファミリア】を守る事が出来ずに幸せな生活を滅茶苦茶

にされた。必死に逃がした仲間も自らの手で屠る事になり、憎悪を燻らせる事しか出来ない日々。残されたのは復讐の二文字だけ。それを成した今、彼女に継るものは、この世の何処にも存在しない。

俺も糞女によって幸せな生活を奪われた。引きずり込まれた欺瞞に満ちた世界で出来た信頼できる部下や仲間も直ぐに失い、憎悪を燻らせる日々。あの糞女に復讐を誓うも思う通りにいかず、あさつまえ勝手に死んだ所為で、ぽっかりと空虚な穴が空いた感覚に陥った。

だが、俺の場合は父親がまだ生きていた。彼に会いたいと、嘘偽りの無い名乗る事の出来る名を欲して、抗った。ほんの少しの間だけ、最後には結局失敗してしまうとはいえ、俺には生きる理由があった。

彼女の場合は——何も無い。継る人も、神も、彼女には残されていない。

本当の意味で、彼女には何も無い。いや、ちがう……少なくとも、さつきまでは無かったのだ。

「死にたかった、ずっと、今までずっと、死にたかったのに……貴女の所為で死ねなくなった!」

ぼたぼたと拭う事もせずに涙を零し続けるレーネは、その瞳の奥に憎悪を滾らせながらヘステイア様を睨み付けた。

「それは……」

「私はもう死ねない! 殺される訳にもいかない!」

「どういう意味だい?」

フィンの間いかけに、レーネは涙を零しながら視線だけを彼に向けた。

「だって、私が赦されて良い筈が無いもん」

——ああ、最悪だ。

ヘステイア様が目を見開き、ロキが察した様に舌打ちして、二柱が同時に俺を見た。

「死にたきや、勝手に死ねばいいだろう」

アイシヤがそんな呟きを零した。

ああ、普通ならそうだろう。きつと、普通に辛くて苦しいのなら、自殺という形で逃げる。だが、それが出来ない人もいる。それが、レー

ネだ。

俺と同じ、なんて口が裂けても言えない。

何せ俺は——一度、自殺^{逃七}してしまったから。

「死ねないってば……」

俺は、俺の事が赦せない。否、俺が背負ってきた罪を、赦す事は出来ない。今でもそう思ってる。だからこそ、他の皆が羨ましい。

レーネ・キュリオも同じなんだ。自分の行いが、自分の背負った罪が赦せない。だから、ヘスティア様の言葉を聞いて死ねなくなった。

「ああ、そうだよ、私への罰なんだよ。罪には罰を……死よりも苦しい咎を与えなきゃ」

ぶつ壊れた様に涙を零していた彼女は、静かに俯いてぼそぼそと呟きだす。

「死んだら、罪が消えるって？ そんなの駄目だよ」

死後、その魂は浄化される。罪もなにもかも綺麗さっぱり消え去り、新たな来る来世を送る事になる。

それで良いのか？

「駄目だよ、皆を守れなかった愚^{わたし}図^なんかが、そんな風に忘れちゃ駄目なんだよ」

ヘスティア様がフリユネに告げた、魂の循環による罪の浄化。その話を聞いて、彼女は死ねなくなった。

死が赦しだと言うのなら、彼女は死ねない。何故なら——。

「私は、この罪を一生背負わなきゃいけないんだから」

死によって罪から逃げようとしていた事実を突き付けられ、レーネは壊れたのだろう。

己が無力だった事によって、己が迂闊だった事によって失われた派閥に、仲間達にそして何より主神に顔向けができない。

俺は罪の重さに耐えきれずに逃げた。彼女は向き合い生きようとしている。

「フリユネみたいに殺してくれれば、あんな話を聞かなければ……私だって、死ねたのに」

死とは赦しだ。ならば、罪を背負った者は安易に逃げてはならな

い。

罪を一生背負わなくてはいけない。フリユネの様に背負う事から逃げるならば死を与えるべきであり、背負うならば生きなければいけない。

「どれだけ辛くても、どれだけ苦しくても、一度背負った罪は二度と消えないのだから。」

「死にたいよ、でももう死ねないよ」

寿命以外の方法では死ねない。自ら命を断つなんてもつてのほか。そうなってしまったのは、そんな風に考えが変わってしまったのは、ヘステイア様がフリユネに『死は赦し』だと告げたからだ。

要するに、レーネ・キュリオは逆恨みをしたのだ。ヘステイア様に對し、ただの逆恨みの感情を向けている。

何も言わずに、ただ命を断つてくれていれば、この地獄の様な世界から抜け出せたのにと。

「……キミが死にたいのなら、ボクは止める気は無いよ」

「罪を赦すのは神様の仕事？ 違うよ、罪を赦すか赦さないかを決めるのは、本人だよ」

顔を上げたレーネの瞳はドロドロに濁っていた。

澱み切った瞳で、彼女は俺に視線を向けて眩く。

「ねえ、貴女は自分の所為で仲間が死んだことを赦せる？ 私には、無理。絶対に赦さない」

一生、その生涯の中、ずっと罪を背負え。

呪われる、呪縛の中で藻掻き苦しんで生きろ。

耳にこびり付いて離れない呪詛を聞き続ける。

そうやって苦しみ抜け、死に果てるまで。

「……だから、私は……もう、死ねないよ」

他の誰の赦しがあるが、他ならない自分自身が自身の罪を赦す事は無いのだから。

ケタケタと、涙を零しながらレーネが俯いて動きを止めた。その様子をみていたロキが肩を竦め、俺を見て眩く。

「ミリアと同じやな。手の付けようがないで、この子」

「……罪を、赦さない、か」

ヘステイア様が此方を見て、悲し気に眉尻を下げる。

ああ、俺は彼女の苦しみがわかる。どれだけ絶望しているのかを理解してしまった。

自分自身が赦せない。自分の過ちが、自分の犯した罪が、一生残り続ける。逃げたいと、死にたいと願って死んだ俺と違って、彼女は死ねない。自分を殺せない。自分を誰にも殺させない。

大事なものが何一つない、ただ消えない罪だけが残るこの世で最期の時まで生きなければいけない。それが己に与えられた咎だとレーネが受け入れた。

「ヘステイア様」

「なんだい、ミリア君」

見てもらえない。

大事なものも、継るものも何もない世界で一人。罪だけを背負って生きるなんて不可能だ。壊れる、壊れてしまうに決まってる。

何とか出来ないだろうか。俺を救ってくれたように、彼女も救ってほしい。そんな風にヘステイア様に継る様に視線を向けると、女神は静かに目を閉じた。

「……難しいだろうね。ミリア君、キミがキミ自身の罪を赦せない様に、それ故に自分を信用できない様に、あの子も罪を赦さないだろうから」

ヘステイア様の口から出た言葉は、俺自身の事であるからこそ深く理解できた。レーネは自分の罪を赦さないだろう。俺と同じ様に、絶対に赦せない。赦す事なんて考えられないはずだ。

ならば、何か手は無いのか、と神ロキに視線を向ける。しかし、彼の女神は肩を竦めると背を向けた。

「可哀想やと思うけど、ウチはもう知らんわ。フィン、いくで」

「……すまないね。ロキがこう言っているから。アイシャ・ベルガ、キミにはまた後日、話をしたい。時間を空けておいてくれ」

神ロキは見捨てた、と言うよりも自分出来る事は何もないといっ

た風に見えた。

残されたのはアイシャと、俺、ヘステイア様……そして、絶望に打ちひしがれたレーネのみ。

どうにか、レーネを立ち直らせる方法は無いか。そんなものがあつたのなら、俺はとつくの昔に自分の罪を赦す事が出来ているだろうに。

静かに腕組をするアイシャと視線が合うが、彼女は直ぐに視線を逸らした。ヘステイア様はうんうんと唸っていてどうにもならない。

どうにか、彼女を救う手立てはないのか。俺の言葉も、ヘステイア様の言葉でさえも今の彼女には届かない。唯一、彼女が話を聞く相手は、この下界せかいには居ない。

「……よし」

もはや手の打ちようが無い、ならばせめて殺してあげる事が彼女に対する救いなのではないか、と無意識に手を銃の形に変えて彼女に向けようとしていると、ヘステイア様が一步踏み出した。

「ヘステイア様？」

こつり、こつり、と歩みを進める女神がふらりと揺れた。重心がぶれたのか大きく一步を踏み外しかけ、転倒を免れ、彼女は大きく息を吐いた。

「ふう、泣かないで、レーネちゃん」

次の瞬間、ヘステイア様の声色が変わった。

「――」

アイシャさんが瞠目し、ヘステイア様をまじまじと見つめる。

俯いて涙を零していたレーネは、ぼつ、と顔を上げて目を見開いていた。

俺は、背筋が凍り付く様な感覚に見舞われていた。

ヘステイア様のものではない口調だった。言葉も、雰囲気も、そして神威の感じも、全てが違う。この世界に来て俺を抱き締めてくれた女神のモノではない、別の誰かが乗り移ったかのような感覚。

「ウエ、ヌスさまっ！」

澱み切った瞳に光が宿る。ただただ絶望していたレーネという少

女の前に、ヘステイア様が——ヘステイア様の姿をした別の女神が膝を突いて、彼女の頬に流れる涙を拭った。

「ごめんね。そしてありがとう」

「わ、私、ウエヌスさまを……みんなを守れなくて……」

とめどなく溢れる涙を拭いもせず、レーネはただただ謝り続けている。

その様子を見ていた俺は、酷い寒気に襲われていた。

なんとなく、本当になんとなくだが、ヘステイア様がしている事が理解できた。それは、きつととんでもなく不味い事だ。

「レーネちゃん、死にたかったら、死んでも良いんだよ？」

「え……で、でも私は、みんなを守れなくて、むしろ私が、私の手で……」

「うん、知ってる。ずっと貴女を見てたから」

神々にとって、この下界せかいは遊戯げいむの様なモノだと、女神は語った。

「だから、私は、赦されちゃいけないんだって……」

「そうかなあ？ 私はそう思わないけどね」

この下界で敗北した神は、二度とこの下界に降りてくる事は出来ない。それは、何処かオンラインゲームと似ている。

「だって、みんな、お母さんだって怒るよ」

「ううん、怒らないよ。あ、ごめん嘘、めそめそ泣いてる事には怒るかもね」

一度、ゲームオーバーになれば戻ってこれない、一度っきりの遊戯ゲーム。

遊ぶ為に必要なのは、下界で過ごす為の仮初の器からだ。それは、オンラインゲームにおける外装アバターで、身分証ユーザIDの様な役割を持っている。そう考えると其処に定められた規則ルールの内容もおおよそ想像が付くだろう。

「レーネちゃん、苦しかったら逃げて良いよ。辛いなら、死んだってかまわない」

「ウエヌス様……わたし、わたし……」

基本的に一人に対してIDは一つまでが原則だ。それは神々が定めた規則ルールもまた同様。

オンラインゲームにおいてIDが停止されたりした場合、再度のI

Dの取得は禁止されている。当然、他のユーザーのIDを借りる事も禁止されているに決まっている。

神々が定めた規則^{ルール}だって、そうだろう。そして、ヘステイア様が今行っている行為は、きつと良くない事だ。

「でも、私はレーネちゃんには死んで欲しくはないなあ〜」

「……え？」

女神に告げられた言葉にレーネが硬直し、動きを止めた。涙もぴたりと止まり、彼女は震えながら呟く。

「ど、どうして？」

先ほどまで死んでも良いと、逃げてても良いと肯定してくれた女神が唐突に反対意見を出してきて困惑する少女。彼女を他所に、女神はヘステイア様の微笑みとは似ても似つかない笑みを浮かべると、レーネの頭を撫でた。

「だって、私は私のせいで人間^{ことも}が歪んだり変わったたりしちゃうのって、好きじゃないしね」

「……！それでも私は……」

何かを察した様にレーネが目を見開き、唇を噛み締めて言葉を放つ。

「会いたい、ずっと一緒に居たいよう」

涙を零し、縋る様に女神に告げるレーネ。

女神は慈愛の眼差しを彼女に向けると、優しく抱き締めた。

「私もずっと一緒に居たいよ、でもそれじゃあ駄目だよね」

「……離れたくない」

「うん、私も、でももう行かなきゃ」

残酷な言葉だと思う。俺だって、ずっと再会を願っていたヘステイア様と再度別れなければならぬと言ふのなら、自ら命を断つてでも着いて行こうとするに決まってる。

「じゃあ、私も逝く」

「ううん、レーネちゃんはもう少し下界^{こく}に居て欲しい」

「どうして」

縋るレーネに対し、女神は微笑を湛えた。

「貴女が生きる姿を見ていたい。どんな風に生きて、どんな事を成して、どんな未来を切り開くのか」

「ウエヌス様が居なきや無理だよ」

「レーネちゃん。私はね、皆に自慢したいの。私が愛した眷属は凄いい子だったんだって」

力強くぎゅつと女神が抱擁し、笑いかけた。

「レーネ・キュリオ。貴女は私の眷属。他の女神の恩恵を受けても、何があっても、貴女は私の眷属」

「ウエヌス様？」

「安心して、貴女が死んだら天界で迎えてあげる」

女神の抱擁の中、レーネが僅かに身動きしていた。

「貴女がいつぱい頑張つて、凄い事を成して、それで死んでこつちに来たら。抱きしめてあげる」

「ウエヌスさま、わたし……」

「レーネちゃんは悪く無いよ。それでも罪が重くて逃げたいなら、良いよ、おいで」

死後、必ず貴女の魂を迎えに行く。他の神がごちやごちや抜かしても、私の『魅了』で障害を全部溶かして、貴女を迎え入れる。ぎゅつと抱きしめて離さない。ずっと、ずっと一緒に居られる様にする。

女神が耳元で囁く間に、レーネの瞼が少しずつ、少しずつ落ちていく。女神の抱擁に抱かれ、泣き疲れた彼女は微睡みの中に堕ちていく。

「貴女は貴女の生きたい様に生きれば良い。気ままに、風に流される雲の様に、貴女は自由に生きる権利がある」

その言葉を聞き届けたのかは不明だが、レーネは完全に目を閉じた。

静寂が満ち、なんと声をかけて良いのかわからずに、不安を覚えながらも女神の背を見つめる。もしこのまま中身が入れ替わったままだったらどうしよう、と不安で胸が潰れるかと思った、その時。

「むがー!! ウエヌスの奴、ボクの器に文句ばつか言いやがってー!」
「へ、へスティア様？」

「ああミリア君、聞いてくれよ。ウエヌスの奴、胸がデカすぎて肩が凝るだとか、姿勢が崩れるとか文句ばっか言ってきたんだ。せつかく彼女と話せる場を用意してやったってのに！」

——予想外に女神ウエヌスに文句を零しまくるヘステイア様に若干、面食らった。

「えつと、ヘステイア様？　大丈夫なんですか？」

「え？　ああ、大丈夫さ。この世にはこんな格言があるだろう——
「バレなければ犯罪じゃないって」

「いや、バレなくても犯罪は犯罪ですよ。罪として裁かれるかどうかの違いかと」

とはいえ、問題無いなら本当に良いのだが……レーネはこれで救われただろうか。

深い眠りについたレーネの元に歩み寄ると、ヘステイア様の膝の上で険のとれた寝顔を浮かべていた。

「……あ、忘れてましたがアイシャさん。今見た光景は他言無用で」「わかつてるよ。それよりも、罰はどうするんだい？」

罰、と言われて気付いた。未だにアイシャとレーネに対する罰が言い渡されていない。

ヘステイア様を伺うと、彼女は今まで通りの、ヘステイア様の笑みを浮かべて告げた。

「しっかりと罪を背負って、反省して生きてくれるだけでいい」

それ以上の罰を与える気は無い。罪を背負い、生きてくれ。そう呟くと、愛しむ様にレーネの髪を撫でた。

「そいつはどうする、邪魔なら私が持つていくが」

「いや、ボクが預かるよ」

ウエヌスに言われたんだ、と頭を搔いた女神が呟く。

彼女を客室に連れていかなきゃいけないな。暫く、レーネがこれから先どんな選択をするのかはわからないが、目が覚めるまでぐらいい面倒みてやってもいい。

「そうかい……それじゃあ私の気が済まないんだが」

「じゃあ、何か困り事が出来たら手を貸してもらいましょうか」

「……………はあ、お人好しだね」

肩を竦めると、アイシヤは背を向けて去っていく。去り際に、『春姫を泣かせたらただじゃおかない』とベルに伝えておけ、という置き土産を置いて。

正直言ってしまうと、レーネが少し羨ましいかもしれない。

フリユネの処刑。そして絶望のどん底にあつたレーネを、主神自らが慰めに来てくれた事で持ち直した、と思う。実際の所は彼女が目を覚まさなければどんな精神状態にあるのかは不明だが。

レーネを客室に運び終わった所で、中断していたキューイについての調査の再会を行うべく竜舎に足を運んでいた。

広々とした舎内には藁が敷かれており、ヴァンが天窓から差し込む日光を浴びながら寝ている光景が広がっていた。クリスも隅っこの水桶に浸かりながら寝こけている。竜は寝るのが好きなのだろうか。「よく寝てますね」

竜種は寝るのが好き。だとすると、キューイもまた寝ているのではないだろう……それは楽天的過ぎるだろうか。

竜舎の空き空間を前にし、再度キューイに声をかけてみるも反応無し。召喚魔法を唱える前にもう一度深呼吸を繰り返す。

もし、キューイが本当に居なくなったのだとしたら——それは呼び出しに失敗してから考えれば良いか。

「……………よし、【呼び声に答えて——】」

詠唱を開始すると同時に複雑怪奇な魔法陣が生み出される。それでも反応が無いが——答える気が無いなら、こっちから引っ掴んでも引っ張り出してやる。

多量の魔力を一気に流し込み、向こう側に手を伸ばす感覚で探りを入れる。何か掴めるモノは無いかと探り、もっと奥へ、奥へ、最奥の向こう側にその手を伸ばして。

「っ————掴まえた！」

何かを掴んだ。嫌がる様な素振りで振り払おうとしてくるその何

かを強引に引つ張り上げる。

魔法陣が揺らめき、その向こう側からキュイキュイと聞きなれた声が僅かに響く。いやだ、眠いとほざいているのを聞きながら、口元に浮かぶ笑みをそのままに一気に引つ張りだす。

「何を、文句を——起きろつて、言ってるでしよ!？」

無反応貫きやがって。普通に心配したんだぞ、と一気に手繰り寄せると、遂にその体の一端が魔法陣から現れる。

淡紅銀鉱を職人が手塩をかけて精密に削り出したのではないかと
言う鉱石の光沢を持つ鱗。まるで溶けた岩がそのまま膜質となつた
ような翼が大きく広がり、逆立つて震え、その振動が空気を揺らす。

キュイの翼だと察して嬉しさが込み上げ——————
続いて出てきたモノに硬直した。

「はっ。」

淡い金の長髪、不機嫌そうに眉間に寄つた皺にへの字に曲がつた口。小さな肩にその背から伸びる両翼。慎ましやかな胸に、ほっそりとした腰回り、毛の一本も生えていない領域、そして小ぶりの臀部から伸びる竜尾。白い肌と深紅の鱗の対比が目眩しい。

キュイを召喚したら何故か————素っ裸なミア・ノースリスが出てきた。

「……………はあ?」

「……………キュイ」

凄まじい重低音。不機嫌さをこれ以上ない程に表した様なキュイの声が、魔法陣から現れた素っ裸の竜人幼女から放たれる。

よくよく見てみると細部が異なる。というよりも俺よりも背丈が高い。

なんとなくその目線の高さに心当たりがある。というか、『ミリカ
ン』で素体キャラをドラゴニート型にした状態で、最高身長に設定すると
丁度今の目の前の少女ぐらいの背丈になった気がする。確か120
Cぐらいだっただろうか。

後、両手の爪がやけに鋭かったり、口元から鋭利な牙が覗いていた
りと、差異は多岐にわたる。

「キュイキュイ！」

「え？ いや、だつて……キューイ？ 冗談でしょ？」

「キュイ!? キュイキュイ、キュ……イ？」

何が冗談だ、気持ちよく寝てたのに。一体なんの権限が……あれ？と目を見開いたキューイが凄まじい剣幕で俺を見下ろしてくる。

自身の異変に気付いたのか、キューイが両手を自分の前に持つてき
てにぎにぎしはじめ、徐々に顔色が青褪めていく。

真ん丸に見開かれた瞳は、キューイと同じ瞳の色をしていた。

「キュ!? キュイキュイ!!」

ナニコレ、何したの、と喚き始めるキューイを他所に俺は頭を抱えた。ナニコレ、と喚きたいのはこっちの台詞である。

翼を揺らして混乱している彼女に俺も問いかけたいが、多分何もわからないのだろう。ぶわあつと目尻に涙をめいっぱい溜めたキューイらしき人物が、キュイキュイと助けを求めてくる。

言いたい事はいっぱい、もうお腹一杯で吐きそうぐらいある。例えば、俺より胸でかくね？ とか、なんで俺より背え高いん？ とか、もう数えればキリがない。

だが、これだけは言わせて欲しい。

「キューイ、見た目が人になったのにキュイキュイ言わないでくれませんか？」

見た目が人型なのに声が竜の時と全く一緒なのはなんでなん？

第一八六話

フリユネの処刑からはや三日が経とうとしている。

淫都の崩壊は数多くの影響を都市に与え、冒険者、派閥、商人、ギルド、神々と例を挙げると枚挙に暇がない程だ。

『『『何やってんですかフレイヤ様あああああああつ……!?!』』』

その中でもとりわけ悪目立ちしていたのは歓楽街の常連だった男神連中だろう。彼らは揃いも揃って半壊または全壊した第三区画の歓楽街廃墟にて四つん這いになり、痛哭の悲鳴を上げていた。

地面を叩き続ける彼らと、そんな主神を羞恥と怒りで顔を真っ赤にしながら引き摺って行く眷属達の姿は市民の記憶にしかと焼き付いた事だろう。

大多数の死者を出した此度の一件は迅速な対応で非戦闘員の娼婦を「ガネーシャ・ファミリア」が救助した事によって大幅な死者の軽減が出来たとのこと、序に大火事になりかねなかった炎も即座に鎮火されたことによって被害は大幅な軽減が見込めたらしい。

しかし被害は被害、一度破壊され尽くしたと言っても過言ではない第三区画の一带の復旧にはかなりの時間を要する事だろう。

当然、此度の一件において深くかわった処か主犯格でもある「フレイヤ・ファミリア」の主神は、いくら都市最強派閥とは言えギルドに召集され、多額の罰金と膨大な罰則ペナルティが課せられる事となつたらしい。

ちなみに、件の銀髪の女神はただ一言。

「そう」

とだけ返して終わりだったそうなの。

大派閥の主神を送還し、罰金と罰則ペナルティを受けておきながら堪えた様子の無い女神の姿に数多くの畏怖が集まる事だろう。

全く動じない彼の女神は今や白亜の巨塔の最上階へと戻り、今日もまた迷宮都市の頂点に君臨していた。

——主犯格の女神フレイヤがそんな様というのに「ヘステイ

ア・ファミリア」は日常に戻るにはいささか問題が多発し過ぎていた。救出された春姫の今後の身の振り方。ヘステイア様が拾ったレーネの扱い。そして此度の一件で発生したキューイの変態について。

もはや抱えきれない程の大きさ故に俺は即日ガネーシャ様の下へ泣き込んだ。助けてガネーシャ様、と。

「ふむ、なるほど。全くわからん！」

威勢は良いのにガネーシャ様の冷たい返事に崩れ落ちかけた俺だが、彼の象神様はしかと手を打ってくれた。シャクテイさんが頭を抱えて震えていたが。

まず行われたのはキューイの身体検査。参加したのはディアンケヒト様とアミツドさん、それからヘステイア様とガネーシャ様。

容姿がまんま少し大きなドラゴニユート型の俺という事もあり色々問題はあったものの、素材の質には変化が無いらしい。もつと言ってしまうと、キューイは人型にはなっているが、完全な人間ではないらしい。

そも、キューイがどうして人型に近づいたのかという疑問から説明しなければならぬだろう。

まず大前提として、キューイは『飛竜』だった。正確には飛竜になり切って居たらその性質を完全に再現した飛竜モドキだった訳だが、これは俺の記憶に基づいた『飛竜の在り方』を再現した影響らしい。強靱な再生能力もその一つな訳だが。ともかく、キューイは『飛竜』になっていた訳だ。ただ、今回の一件に於いて、キューイは俺を庇う為に一度『飛竜』ではなく『クラーシー・スナイパー』という存在クラーに自身を置き換えた。

その結果、キューイが持っていた存在クラーである『ワイバーン』が俺の中に残され、キューイは一度『人』の性質を一気に受けたのだ。その際に元は一つだった俺の魂との共通性が出来た事によって、キューイは俺と性質を共有した。いや、共有と言うのは少し違うか。

一方的にキューイが俺の性質を複製した訳だ。結果としてキューイは俺の姿を模倣した様な形へと至った訳だが、飛竜としての性質が完全に消滅していない為、中途半端に半人半竜という状態で固まった

らしい。

結果として、血や鱗、牙や爪といった竜の性質部分は元のまま、姿形だけが人に近づいた、と。

——ただ、俺と似た容姿の少女が自分の指を食い千切って空き瓶に血を満たす光景は「ディアンケヒト・ファミリア」の面々も含めて、全員がドン引きしていたのが難点っちゃ難点か。

「はあ……血が採取できるだけ、マシかあ」

「キューイ？」

応急処置としてキューイは俺の部屋に監禁している。

質素なベッドとデスクが置いてある俺の部屋の一角、床にズドンと置かれた木箱に腰掛けて両手に持った林檎をもしやもしやと頬張るキューイを見ていると、何処か気が抜けそうだ。

実はベル達にはまだ説明が出来ていない。知っているのは俺とヘステイア様、後はガネーシャ様と神ディアンケヒト、そしてアミッドさんと数人の団員。加えて神ロキとフィン。

見に来たロキは一見したのちに大慌てでキューイの血の検査を行う様に指示を出した後、『竜の血』には何の問題も無いと知るや否や他人事だと大笑いして転げ回っていた。

派閥の仲間達は此度の抗争でかなりの重傷を負った者もいて、完治した訳では無いのだ。そのため、ここ三日は皆休息している——その皆が休息している間中、俺はキューイ問題で死ぬほど駆けずり回っている訳なんだがね。

軽く欠伸しつつも「ガネーシャ・ファミリア」と「ロキ・ファミリア」から送られてきた返信の手紙に手を伸ばそうとした所で、ノックの音が響いた。

「はいはい、どちら様ですか」

「ボクだよ、ミリア君。開けてくれないかい？」

ヘステイア様か。

扉の鍵を開けてヘステイア様を招き入れる。

艶やかなツインテールをたなびかせながら入ってきたヘステイア様は入室一番に目に入ったキューイを見て額に手を当てた。

「やっぱり、元には戻ってないかい」

「ですね……ガネーシャ様曰く、もう元に戻る事は期待しない方が良いらしいです」

「だよねえ」

ヘステイア様の深い溜息。それを聞きながらも手紙の一つを開封し中身を閲覧する。

「……どうだい？　なんとかなりそうかい？」

にじり寄ってきたヘステイア様の胸に押されながら、中身を斜め読みした結果を端的に告げる。

「ガネーシャ様に妙案があるみたいですね」

「……その手紙からそんな事が読み取れたのかい？」

手紙の表面にでかかど刻まれたガネーシャ様の派閥の刻印。本文にも所々『俺がガネーシャである』や『俺がガネーシャだ』等と神ガネーシャが書いた手紙である事がこれでもかと強調された暑苦しい手紙ではあるが、内容は割とまともである。

まとも、どころか多分だが現状取れる手の中で最も良案なのは間違いない。

「此度の一件、〔ヘステイア・ファミリア〕が関わっていた事は都市の中でもまことしやかに囁かれてますよね」

「イシユタル・ファミリア」崩壊の原因の一端として〔ヘステイア・ファミリア〕の関りが云々。情報をいくつか探る為に動いていたのが仇となったのか、ほんのりと囁かれる程度だが噂にはなっている。

まあ、深く関わりの有る〔ガネーシャ・ファミリア〕と〔ロキ・ファミリア〕が大きく動いた為、その噂の信憑性が増している訳だが——
——これを利用する形でいこうと思う訳だ。

「どうするんだい？」

「まあ、そりゃあ……女神イシユタルの悪事を白日の下へ晒しつつちよこちよこくつと都合の良い嘘を混ぜる形で……」

もしこの作戦が成功すれば、春姫という超特大級の爆弾から注目を逸らす事だって可能だろう。

「うーん、それしか方法は無いなあ。それで、具体的にはどうするんだ

い？」

「まず、『イシユタル・ファミリア』が『儀式』を執り行おうとしたことを暴露します」

「え？ それは不味くないかい？」

春姫と俺を生贄にした儀式の実行を行おうとし、フレイヤ様が突然激怒して強襲をしかけてきた此度の一件。事実をそのまま広めてしまえば春姫の身が危うくなる。

ならば、春姫の事を隠してしまうのはどうだろうか？

「生贄にされそうになっていたのは私一人、それを知った「ヘステイア・ファミリア」がロキ派閥、ガネーシャ派閥への救援を頼んだところ、横槍として「フレイヤ・ファミリア」が「イシユタル・ファミリア」を襲撃……といった形ですね」

「それとキューイ君をどう絡めるんだい？」

「簡単ですよ。此度の『儀式』の悪影響でキューイの姿が人になってしまった、と噂を流すんです。序でにギルドに頭を下げにいかないといけません」

あの糞ギルド長、今回の一件で大赤字になってる都市経済の立て直しで大忙しだろうし蹴られそうなんだがね。フレイヤ様から支払われた罰金ではとてもではないが賄いきれなさそうだし。

歓楽街の崩壊の影響は計り知れない処か、多分だが暫くの間は都市経済が傾く被害が出る事だろう。どう考えても都市の収入の一角が一瞬で消えたんだから影響が出ない筈が無い。

「なるほど」

ほん、と手を打ったヘステイア様が納得した様に頷く姿を横目で見つつ、手紙に返信する為に便箋を取り出したところで、ノックの音が響いた。

「ミリア、タケミカヅ様が来てるんだけど」

「――、ヘステイア様」

「わかってるー！」

部屋を訪ねて来たのはベルだったらしい。まだキューイの事を隠しているし、今ここで会わせるとややこしい事になりかねない。

即座に俺は林檎にかぶり付くキューイの腕を掴んで衣装棚クローゼットに押し込み、小声で注意をしておく。

「キューイ、暫く大人しくしててください。お願いですから」
「キューイキューイ」

林檎をもつしやもつしや食べ続けており話を聞いているのかわからん。つか、俺の顔ってこんなにムカつく顔だっただろうか？ 何処か間の抜けたような表情をしている鏡映しの顔に若干イラツとしながらも戸を閉じ、急いで扉を開けた。

「おはよう、ベル。早いわね……それで、タケミカツチ様が来てる、ですか？」

「あ、うん。春姫に会いたいわって言うて……えっと、林檎食べてたの？」

すん、と部屋の匂いを嗅いで充満していた林檎の匂いに気付いたのかベルが首を傾げる。後ろを振り返るとキューイが腰掛けていた木箱が目に入った。林檎がたっぷり詰まった木箱である。そりや部屋に匂いも充満するわ。

「え、ええ、そうなるわね」

「ベル君じゃないか。もう起きて大丈夫なのかい？」

曖昧に笑って誤魔化すさ中、さも今気づいたと言わんばかりにヘステイア様がベルを見上げた。

「ヘステイア様も居たんですか？」

「まあ、そうなるね」

「そうなんですか。……何か隠してませんか？」

二人で視線を僅かに絡めると、後ろで衣装棚クローゼットがガタリと音を立てた。瞬間、ヘステイア様と二人がかりでベルを部屋の外に押し出した。

「わわっ、どうしたんですか二人とも」

「ベル君、親しき中にも礼儀ありき。ボクの部屋ならともかくミリア君の部屋をあまりじろじろ観察するんじゃない」

「ヘステイア様の部屋もどうかと思いますが、部屋の匂いを嗅がないでください」

部屋が閉じる瞬間、ガタリと衣装棚クローゼットの中から這い出てきたキューイの姿が確認できたが、ベルは気付かなかったのか首を傾げている。

「ううん……う？」

やっぱ気付いているのかもしれない。閉じられた俺の部屋を見て首を傾げているベルに笑いかけてから、部屋に戻る。

「ベルは先に春姫をタケミカツチ様の所に連れて行ってあげて。私は、えっと……着替えてから行くわ」

「そっかあ、じゃあボクはベル君と先に行ってるよ」

ラフな部屋着のシャツと短パンから、いつものローブに着替えてから行く。そう言い訳してベルとヘステイア様を送り出す。

腕を組んだヘステイア様がベルを連れて行くのを見送り、部屋に戻るとキューイが何食わぬ顔で林檎を頬張っていた。

「……キューイ、それ、何個目ですか」

「キューイ？」

まだ十五個？ こいつとんだけ喰うんだよ。体格的にそんなに食べる訳ないと思うんだが。やはり見た目こそ人の姿に近づいたが、中身は竜のままという事だろうか？

……食費的に中身も人になった方が……いや、そうになると『竜の鮮血』が採取できなくなる。それにしても朝からキューイが横で林檎を貪り続けている所為で食欲が失せるだろうか。

うららかな日差しが目突き刺さり、泣きそうな程に強い日差しを浴びながら正面玄関から外に出る。

見回したそこにはヴェルフやリリ、ミコト、「ファミア」のほぼ全員が揃っていた。少し離れた個所でタケミカツチ様と春姫が二人で話しており、その傍では桜花と千草が待っていた。

肝心のベルは何処かと視線を巡らせると、前庭でアイシャさんに絡まれているのが見えた。

「ベル・クラネル、それじゃあしつかりやんなよ。あんだだけ見柄を切ったんだ。あのヘツポコにもしもの事があつたら、ただじゃあおかない

からね」

「は、はいっ……!」

「どうも、アイシャさん数日ぶりですね」

「ミア・ノースリスか。久しぶりだね、レーネの様子はどうだい?」
「あの人なら、まあ元気ですよ」

レーネ・キュリオは泥の様に眠った後は起きてすぐにヘステイア様に頭を下げ、感謝を伝えてきた。その上で、彼女は改めて『恩恵』を欲した。ただし、それは「ファミリア」への参加を希望するものではない。

自身が、女神ウエヌスが望んだ『偉業』を成し遂げるのに必要だから。『神の恩恵』が欲しい。そんな邪まな考えの元に恩恵を欲する訳だから「ファミリア」として扱わなくても良い、と彼女は言った。

——ヘステイア様は快く彼女に恩恵を授けた。

更新の度に本拠ホームに顔を出すだろうし、一応、納金はすると宣言していたが、それ以外は基本自由にやらせる積りだ。彼女には彼女の生き方がある。

それでも、ヘステイア様は彼女にこう告げた。

『もし寂しくなったらいつでも帰ってきてきなよ。キミがウエヌスを崇拝しているも、ボクが恩恵を授けた以上はボクの家族でもあるんだからね』

対し、レーネは涙を溢れさせながら笑っていた。

「……そうかい。なら良いよ、安心した」

「それなりに気に掛けてましたか?」

「まあね、いつか決着を着けたい相手ではあった」

アイシャさんが肩を竦めていると、話が終わったのか春姫がとてとと此方に駆けてくる姿が見えた。

「もう、いいのかい?」

「アイシャさん」

笑いかけるアイシャさん、春姫を見て頬を綻ばせるベル、他の面々も何処か嬉しそうだ。俺も一応は笑顔を浮かべて彼女を迎え入れる。それを見た春姫も微笑みを返してくれた。

彼女が悪い訳では決してないが、それでも失ったグランヤルシアン等が脳裏を過る。

「はいタケミカツチ様とのお話は済みました。……あのアイシャさん、今まで本当に」

「辛気臭い話は止めな。そういうのは嫌いなんだ。それに私はやりた
い様にやっただけさ、お前に感謝される謂れは無いよ」

礼を言おうとする春姫を遮り、アイシャは鼻で笑い飛ばした。

アイシャは春姫の為に、そして生き残った年若い妹分のアマゾネス達の為にその身を差し出す事を選んだ。彼女に与えられた罰は、反省し生きる事。

春姫のあずかり知らぬ所で罰を与えられた彼女は、そんな事をおく
びにも出さずに、おろおろする春姫の前に真剣な表情を浮かべた。

「幹部や戦闘娼婦^{バーベラ}の連中には口止めしたし、【勇者】^{ブレイバー}にも黙っておいた。私達しか知らないし、お前の魔法^{こと}は簡単には明るみにならないはずさ。もし使う事があっても……必ず人目を忍ぶんだよ」

「アイシャさん……」

何処までも妹分の為に動く姿に感嘆を抱きつつも、アイシャさんの手をちよいちよいと引く。

「どうしたんだい。ノースリス」

「ミリア、でも構いませんよ。それより一つお願いがですね」

「何をすれば良いんだい？」

即座にしゃがんで耳を傾けてくれるアイシャさん。気が利くとい
うか、本当に出来た人だと思う。若干、男漁りの悪癖を持っている
たいだが、それが気にならないぐらいに素敵な人だと思う。

「春姫の一件について、それを伏せて私が狙われて『儀式』が執り行わ
れたと噂を流して貰えませんか？」

「……なるほど、嘘じゃないけど全部は流さない。確かに春姫の魔法^{こと}
を隠すのにはうってつけだが、ミリア、アンタは良いのかい？」

「私はもう手遅れな程に悪目立ちしてますので。それで春姫の平穩が
守れるなら良いかと」

「ふうん、任せな。しっかりとやっとか、他の幹部や戦闘娼婦^{バーベラ}連中にも

口裏合わせさせとく。数日後にはその噂で持ち切りだろうね」

「お願いします」

持つべきものは理解力と行動力に満ちた同じ目的を持つ者だろう。春姫の平穏を守る序に、キューイに起きた異常事態を大騒ぎを起こさずに軟着陸させるためだ。

問題のいくつかが解消されたことに安堵していると、ベルが恐る恐る口を開いた。

「あ、あのー？ ……結局、フリユネさんって、どうなったんですか ……？」

ベルの一言にヴェルフやりり、ミコトが表情を陰しくしてアイシヤを伺った。短期間とはいえ、濃密な戦争遊戯で仲間になったグランやルシアンを命を奪った張本人。フリユネに対し思うところがあるに決まっている。

ベル達にフリユネの処刑の話はしていない。ヘステイア様が僅かに身を強張らせているのを見て、誤魔化すべきかと思いついたアイシヤさんに視線を向ける。彼女は僅かに頷くと立ち上がった。

「ああ、あのヒキガエルなら前庭でボコボコになってね。より一層酷い面になってたよ」

フレイヤの連中に酷くやられたみたいだ、とアイシヤがけられから笑って誤魔化する。

「もう二度とあの面を拝む事は無いだろうね。少なくとも人前に出れないぐらいになっちゃったんだから」

姿を見なくとも違和感を感じない様に、とアイシヤがどんな酷い有様になっていたかを語ってくれる。それは嘘ではないのだろう。アイシヤとレーネが初めてフリユネを見つけた時の状態の事を軽い調子で語っていく。

その時の有様を聞いたヴェルフ達の溜飲が下がったのか、表情から陰しさが取れるのが見えた。このまま誤魔化しきろうかとした、その時。

「フリユネ・ジャミール君はボクが処刑したよ」

『『『え？』』』』

後ろで口を閉ざしていたヘステイア様が、暴露した。

その言葉を聞いた全員が啞然とした表情で女神を見やる。

「か、神様？ それって、どういう……」

「あの子は、反省もせずに赦しを請うた。ボクに出来る事は彼女を赦してやる事だけだったんだ」

だから、殺した。神にとつて、死とは魂の循環に他ならない。

故に、フリユネに死を与え、魂を浄化して『赦す』事にした。女神は静かにそう告げて頭を下げた。

「ごめん。皆の意見を聞くべき所を、ボクが勝手に裁定を下した。謝るよ」

真摯に頭を下げる姿に、真っ先に動いたのはベルだった。

「神様、ありがとうございます」

「ベル君……」

「僕は、きつとフリユネさんの事を赦せなかったと思います」

ベルだけではない。ヴェルフも、リリも、ミコトも、当然俺だって同じだ。たとえフリユネの哀れな末路を聞いて溜飲が下がったとしても、グランやルシ안의事を思い出せばすぐに憎悪の炎は再燃し始める事だろう。

たとえどんな苦行をフリユネに味わわせたとしても、失われた仲間には帰ってこない。一生、憎しみと恨みをフリユネに向け続ける事になるのだろう。だからこそ、女神の裁定が下されたのであれば、自分達もそれに従える。

「だから、ありがとうございます。僕達に代わって、フリユネさんを処してくれて」

「ああ、俺もそうおもう。ベルの言う通りだ」

「リリは相談して欲しかったです。ですが、ヘステイア様が下した裁定に文句はありません」

「自分も、女神が下した裁定ならば納得がいきます」

皆が快く受け入れたのを見て、ヘステイア様が困った様に笑う。

春姫が僅かに顔を俯かせていたが、アイシヤがぼんぼんと頭を撫でている。

「さて、私もとつと仲間に入れてくれそうな【ファミリア】を探すよ。能力を封印されたままじゃ、誰に襲われるかわかったものじゃないからね」

女神イシユタルが天界に送還された事で、『魅了』の呪縛が消えたアイシャさんはレーネ同様にどこか清々しい表情を浮かべて晴天を見上げた。

彼女は、最後の最後、ごたごたしていた土壇場という場面ではあるが自身が今まで仕えていた主神を裏切る選択をした。それは、今後の【ファミリア】探しで大きく足を引っ張る要因になる事だろう。

主神に対して裏切りを働く眷属を受け入れる主神は、ほぼいない。【アポロン・ファミリア】に所属していたルアン・エスペルが未だに場末の酒場で日雇いに勤しむ羽目になっているのも、リリが【シンダー・エラ】で姿と偽って裏切り者に仕立て上げてしまったからだ。まあ、彼に同情する気にはなれないが。

アイシャはそういった色々と不利な条件を背負ってしまったている。それでも、その背中を見れば真つ直ぐと歩いていくのだろう事は容易に想像できた。

アイシャと並んで春姫が空を仰いでいた。

「……まあ、何かあったらおいで。相談くらいには乗ってあげるよ」
アイシャに告げられた言葉を反芻しているのか、ほんの少し考え込む春姫。

彼女も、今まではイシユタルによって築き上げられた堅牢な檻に閉じ込められていた不幸な少女であった。しかし、同時に外界の悪意や危険に晒される事なく、春姫を守っていたのもまた、イシユタルという恐ろしい檻だった訳だ。

鳥籠の鳥にとって、鳥籠に囚われている事は不幸だろうか。そこから飛び立てば過酷な現実が待っていると知りながら、飛び立たせるのは果たして正解なのか。ただ一つ、言える事はある。

彼女は檻を飛び出し、悪意と危険に満ちた世界に降り立った。身の振り方一つで富にも破滅にも続く、無数に交差するこの世界へ。今後どうなるかは彼女次第。もちろん、家族として迎え入れる俺達次第で

もある。

「……ありがとうございます。アイシャさん！　今までありがとうございますございました」

春姫の上げた礼の言葉を背中中で受け止めながらアイシャは歩いていく。振り返る事なく片手を上げて歩く彼女は館の敷地から出る直前に背中越しに語り掛けてきた。

「ベル・クラネル、ミリア・ノースリス……私の手が必要ならいつでも声をかけな。春姫を頼んだよ」

僅かに潤んだ瞳でアイシャの後ろ姿が消えるまで見つめ続けている春姫は、ゆつくりと俺達へと振り返った。

「そ、それでは……私^{わたくし}、サンジヨウノ・春姫と申します。こつ、この度はヘステイア様の「ファミリア」に入団させて頂いて……」

「あー、堅苦しいことはいい。俺もまだ入団して浅いが、よろしくたのむ。ヴェルフ・クロツゾだ。下の家名では呼ばないでくれ」

「こちらこそよろしくお願いします、春姫様。リルルカ・アーデです」「ふふつ、自分も改めまして、若輩者ですが、ヤマト・ミコトです。これからはしっかりと貴女を守りますので、よろしく願います、春姫殿」

「此方こそよろしく。ミリア・ノースリスよ。一応、副団長つて事になつてるわね」

見知らぬ顔もあれば、見知った顔もある。そんな人たちとのちよつとした名前交換と挨拶にも嬉しそうに「はい！」と元氣良く返事を返す春姫。

「他にも何人が居るけど、その子達はまだ休んでるから別の機会にね。おっほん……それじゃあ改めて。昨日色々あったし知ってると思うけど、ボクがヘステイアさ。君を眷属として歓迎するよ」

言葉通り、春姫は「ヘステイア・ファミリア」に所属する事を望んだ。

それは、ベルが助けた事もあるだろうし、彼女が恩を返したかった事もある。ただ何より、彼女がこの「ファミリア」に入りたいと願ったからこそだ。

春姫がぺこぺこ頭を下げているのを微笑まし気に見ていると、ヘステイア様がずいずい、と迫っていった。

「それで、春姫君。キミはどうやらベル君に危険な感情を抱いている様だが……ベル君はボクが育てた。決して血迷った行為はしてはダメだぜ！」

「は、はえ？」

——ヘステイア様はヘステイア様だわ。良い意味でも、悪い意味でも。

神らしくどこか俯瞰した視点で俺達に接するのではなく、傍に寄り添って生きてくれている今の方が、俺は好きだな。

そのやり取りに自然と頬が綻んだ。フリユネに裁定を下した、神ではなく、俺達に寄り添い生きる素敵な女神。それがヘステイア様だ。「馬鹿なことと言わないでください、誰が育てたんですか!?!」ヘステイア様なんて借金だらけでベル様とミリア様に養ってもらっただけじゃないですか!!」

「こ、こらー!?! 新入団員の前で神の威厳を損なうことを言うんじゃない!!」

「大丈夫ですよヘステイア様、威厳が無い方が私は好きですよ」

「ミ、ミリア君……」

「いや、別に擁護してませんよね。むしろ暗にヘステイア様に威厳なんかないって言われてますよ」

「ミリア君!?!」

ヘステイア様とリリがぎゃーぎゃーと喚き合うのを眺めていると、ミコトが春姫と笑い合っていた。

「春姫殿、この「ファミリア」はとても良い所です」

「うん、とてもいい所だと思う」

何処か近い距離で、二人の少女は子供の様に笑顔を浮かべていた。「……ベル様、本当にありがとうございます」

言い争うヘステイア様とリリを他所に、春姫は改めてベルと向かい合うと頭を下げた。

くすぐったそうに、何処か照れたように、けれども何処か影を含ん

だベルが笑みを浮かべた。

「今日から、僕達は家族ファミリアです。よろしくお願いします」

一瞬、破顔しかけた春姫は僅かに微笑みながら再度頭を下げた。

「こちらこそ……ベル様、どうか末永くよろしくお願いいたします」

深々と下げた頭を上げた春姫の表情は、まるで桜の花の様な満面の笑みを浮かべていた。

「ちよつと待つんだ春姫君っ、いま変な言い回しをしなかったかい!？」

「そうです、今何かがおかしかったです!!」

「それは、私も思ったわ。嫁入りじゃないんだから」

「そ、そうでございますか?」

「ま、まあまあ、ヘステイア様、リリ殿、ミリア殿」

「そんな事よりも……新しい入団者だ、今日は羽目を外しても良いんじゃないか?」

「おっ! 話が分かるじゃないかヴェルフ君、よしっ、今日は春姫君の歓迎パーティーだ!」

「や・め・て・く・だ・さ・い!? ただでさえ散財癖があるっていうのにこれ以上酷くなったらどうするんですか!？」

「まあまあ、リリ、今日ぐらいは良いでしょう。家族が増えた日なんだし、嫌な事を忘れるって意味も兼ねて」

「ミリア様は新入団員にどれだけ甘いんですか!？」

「ほら、ミリア君だって言ってるだろう? 固い事言うなって! ベル君もパーティーを開くべきだと思うだろ!？」

「そう、ですね。春姫さんのために、やっぱり」

「ベル様あー!？」

「よ、よろしいのでしょうか?」

「いいのです、春姫殿! こうなったらタケミカツチ様達もお呼びしましょう!」

迎え入れた新たな家族ファミリアを中心に喧騒と笑い声が響き渡る。

パーティーを行って気分転換でもしなければ、やっていけない。

デインケさん達も誘って、嫌な事全部忘れて騒ごう。

真つ先に本拠に戻ろうとするヘステイア様と、それを引き留めようとするリリ。ノリノリで笑みを浮かべたヴェルフと、釣られて笑うベル。春姫の手を引いて歩くミコトの背を見て、俺も続く為に足を踏み出そうとし——ドパンツ、と盛大な音を立てて本拠の玄関扉が開かれた。

「キュイキュイ!!」

林檎無くなつた、と仁王立ちする貫頭衣姿の俺に似た少女。それも竜の尾と翼を生やした異常な人物の登場に、知っていたヘステイア様や俺も含めて全員が硬直する。

ヘステイア様と俺だけは完全に硬直して冷や汗を流し、キュイの異常を知らぬ皆は何度も俺とキュイを見比べ始める。

「は……は？ ミ、ミアが二人？」

「ミ、ミア様とそっくり……？」

「いや待て、あっちのミアの方が背が高いぞ」

「あ、え……ミア殿、双子の姉がいらつしやったのですか？」

「あの翼と尾は……ええ？」

「ミ、ミア君どうしよう」

「ミア君？ ミリア君!」

ああ、胃が痛くなってきた。吐きそう。

第一八七話

——真昼。

頭上高くに上った太陽が強い日差しで都市を照らし出す。

居室リビングに集まった「ファミリア」の皆を見回した女神は厳かな態度で話を締めくくる。

「——と言う訳で、キューイ君が人と竜の相の子状態になったんだ」

あんぐりと口を開けたまま呆ける眷属達。

つい先日の「イシユタル・ファミリア」による襲撃事件、およびに派閥の副団長であったミア・ノースリスが儀式の生贄にされかけた一件。それによって齎された異常としてキューイが竜から人の姿に転じたという話を聞かされた皆は言葉を失って女神の横に座り込んで林檎を啜えている少女に視線を向けた。

「キューイ？」

背丈はおおよそ120センチ程。淡い金髪を足首の辺りまで伸ばした華奢な身体つきをした幼い少女である。顔立ちも整っており、黙っていれば儂げな令嬢を思わせる容姿をしていた。

その姿は背丈や瞳の色の違いはあれど、よく見知った人物と瓜二つである。

しかし、異質なモノとして、彼女の背には深紅の竜翼が生えており、時折わさわささと蠢いている。そして腰の辺りから伸びる鱗に覆われた細くしなやかな竜の尾。人にあるまじき姿であるが、ベルやヴェルフなど一部の眷属には見覚えのある姿だ。

正確に言ってしまうえば、彼女の異質なスキルである『魂クラスチェンジの変質』によって変化する姿の一つである、機関銃型の姿に類似している。

「つ、つまり……ミアは大丈夫なんですか？」

真つ青に青褪めたベルが長椅子ソファに寝かされている顔色の悪いミアに視線を向ける。

彼女は疲れ切った様子でベルを見やり、手を振って応えた。

「問題無し。キューイのこれからを考えると胃が痛い以外には別に問

題は無いのよ。ええ、キューイの今後がね……」

「キューイキューイ！」

どすどす、と体格にしては重たい足音を響かせたキューイが長椅子ソファに寝かされているミリアに近づいて林檎をミリアの頭の上に置いた。

「……何？」

「キューイ」

「……………ああ、うん、まあ、ありがとう。でもこの林檎はいらないから」

額に乗せられた林檎をキューイに返し、身を起こしたミリアが全員を見回す。

「事情を理解できたら、この件について表沙汰にするのは暫く待つて頂戴」

「あー……………うん。その、体調に異常がないなら……………」

酷く思い悩んだ様子トラブルのベルがもごもごと呟く横で、額を覆ったりりが天井を仰いで嘆く。

「どうしてこうも問題ばかり起きるんですか」

「まあまあ、素材の方は大丈夫なのか？ 『再生薬』とかの方は」

「そっちは問題無し。ただ素材の量はそれなりに減るのと……………えつと、まあ、素材収集の見栄えがね」

ヴェルフの心配事に対し、ミリアが肩を竦める。

自身の尾を引き千切って差し出したり。

自身の指を食い千切って採血をしたり。

翼を腕いで素材として提供したり。

元の竜の頃と遜色の無い再生能力によって元に戻るからと滅茶苦茶な素材提供を行うキューイの姿の衝撃インパクトにさえ目を瞑れば今まで通りで問題はない。

「……………いや、大問題だと思っただけです」

ミコトが恐る恐ると言った様子で手を上げて発言をした。

「他の派閥から何を言われるか……………それに、人型のモンスターともなると……………その……………」

「『怪物趣味』って罵られるだろうなあ」

言い辛そうに誤魔化したミコトの言葉を尻尾を揺らしたデインケが濁す事も無く言い切る。

ただでさえ元から【竜を従える者】^{ドラゴンテイマー}としての異名に対しやつかみを受けており、『怪物趣味』として罵られる事もあったミリアに対し、此度の一件で起きたキューイの人化事件は間違いなく致命的な事態^{クリティカル}を引き起こすと言えるだろう。

その反応に対してミリアは軽く肩を竦めるのみ。

「まあ、それに関しては別に。ほら、私はあんまり気にしないし」

「……副団長が気にしなくても、私達は気にしますよ」

眉を顰めたメルヴィスの言葉にミリアが申し訳なきように身を縮こまらせた。

「それは……貴方達に風評被害が出ない様に手を尽くすわ」

「勘違いしてますよね？」

少女の物言いにメルヴィスが額に手を当てて嘆く。

別に自分達への風評被害に対して思うところがある訳ではない。ただ、酷く苦労を重ね続けている彼女が悪しき様に罵られているのが不愉快だという意味で言ったのに、全く通じていないのは何の皮肉だろうか。

団員達で頭を悩ませている中、ふとサイアが手を上げて呟いた。

「んー……副団長が二人になつたって事？」

その言葉を聞いた女神が首を大きく横に振る。

「正確には二重人格。つまりは別人と言っても過言では無くてだね……」

僅かに呆れた様な視線をキューイに向ける。部屋の片隅で返された林檎にかぶり付いている彼女は、体格こそミリアよりも大きい。しかし行動は何処か幼さばかりが目につく様に見える。

——元々の仕事をそのまま行っている為、正確に言えば動物的な行動が目につくと言えるだろうか。

「それで、皆に聞きたい。キューイ君は、今まで通りと思って貰って良い。キミ達を傷付けたりしないし、ミリア君の言う事はおおよそ聞く。だから、姿形が変わってしまったけれど、今まで通りに接してく

れないかな?」

「私からも頼むわ。ちよつと行動が突飛過ぎて私一人じゃ制御しきれない時もあるし、出来れば皆で面倒見て欲しいわ……」

申し訳なきように頭を下げる女神と少女の姿に皆は思い思いに顔を見合わせ、肩を竦めた。

「僕は別に……容姿がミリアみたいになっただけで、中身はキューイのまんまだし」

「リリも構いませんよ。今まで何度も助けられてきましたから」

「俺も別に構わん。ただ……素材採取はちよつと控える」

「自分は特に。中身がキューイ殿のままであれば異論はありません」

ベル、リリルカ、ヴェルフ、ミコトの四人の返答を聞いたミリアが肩の荷が下りた様に吐息を零し、残る面々に視線を向けた。

春姫はそもそもキューイと邂逅するのはこれが初めて。完全初対面の飛竜が人型になったと聞かされても事情がよく呑み込めていない。しかも元はモンスターと言う話を聞いてミコトの後ろに隠れている。

デインケとエリウツドの二人は元々調教師^{テイマー}としてモンスターと接触する事も多く、怯えてこそいけないが、人型になったキューイを見て神妙な表情を浮かべていた。

残るロキ組の四人は困った様に顔を見合わせて頷き合う。

「アタシ等は、まあ気にしないよ。元があのカューイなら……」

人を襲わない稀有なモンスター。それが人型となっただけ、となんとか呑み込もうとはしている様子だ。

そんな彼らを他所に、ミリアは小さく吐息を零すと告げた。

「今日、この後直ぐにギルドで話し合いしないといけないから、できれば暫くキューイの面倒を任せて良いかしら」

「えつと、うん。良いけど……」

「ありがとう。それと……えつと、そつちは、どう?」

話を変えるべく、ミリアは言い辛そうにほぼ無言を貫く【ガネーシャ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】の者達に視線を向ける。「ごめん、アタシ少しやる事がある。グランの墓に酒手向けてこない

「といけないんだ」

「あー……そうだな、悪い副団長、俺らもルシアン墓に行つてこなきやいかん」

増援組の者達全員が申し訳なさそうに言った言葉に、ベル達の方は何とも言えない表情を浮かべる。

むしろ自分たちの所為で大事な仲間を失つたとも言えるのだ。彼らが申し訳なさそうにする理由は何処にも無い。

「気にしないでください。むしろ……僕たちの方こそ、ごめんなさい」「いや、団長は気にすんな。俺達は仲間が死ぬのは初めてじゃないしな」

デインケが肩を竦めて呟く。その言葉にベルとミコト、春姫が目を見開き驚愕する横で、リリとヴェルフが僅かに目を伏せる。ヘスティアとミリアは何処か納得した様子で口を噤んだ。

「それって……」

「団長らには言つてなかったしな。俺とエリウッド、あとルシアン三人はほぼ同期なんだが……他にも何人が居たよ。同期の奴らが」

同期の者全員が未だに無事に冒険者を続けている訳ではない。途中で挫折して去る者も居れば、当然の様に怪物に殺されて命を落とす者も居る。

L v. 1の駆け出しの時に命を落とす者が大半。神ガネーシヤは特に言いふらしたりはしないが、数多くの人が彼の派閥に入団し、上級冒険者に至る前に命を落とす。

無論、L v. 2に至つた上級冒険者ですらも迷宮では簡単に命を落とす。下手をすれば上級冒険者で構築されたパーティが一人も迷宮から帰らなかつたという事もある。

故に、デインケとエリウッドの二人は仲間を失う経験は初めてではない。

「ま、俺達【ガネーシヤ・ファミリア】は【アストレア・ファミリア】と同じぐらい恨まれてるからな」

都市の規律を守り、民衆の安寧を維持する為に東奔西走する彼らは妙な逆恨みを抱かれる事は多い。今でこそ滅多にない話だが、『闇派

閥』の残党が憂さ晴らしに下級団員を襲撃する事件も過去には数多存在した。

此度の死も、その内の一つに過ぎない。当然、親友の死に思うところはあがるが、それで立ち止まって良い理由にはならない。とディンケはニヒルな笑みを浮かべると席を立つ。

「悪い。と言う訳だから今日一日はちよつと出かける」

「……私もディンケに付き合おう。すまないな」

二人が居室から出て行くのを皆が見守る中、フィアが立ち上がる。つられてイリス、サイア、メルヴィスも立ち上がった。

「アタシ等も行く。言っちゃ悪いけど、仲間が死んだ事でめそめしてたら冒険者なんてやってられない」

【ロキ・ファミリア】は『閥派閥』の掃討に深く貢献している。

当然多くの恨みを買っているし、他派閥との軋轢で襲われる事も多々ある。その中で命を落とした者が過去一人もいなかった訳ではない。

「まあ、もし一人でも死者が出たらロキが血眼になって首謀者を見つけ出して血祭りに上げるけど」

今回の一件に於いては既に首謀者であるフリユネはとっ捕まり、裁きを下された。

神ロキや神ガネーシャなど、自らの崇める神々がそれを認めたのであれば自分達はこれ以上口出しはしない。

「だから、まあ……アンタ達は気にすんなよ。もし気になるなら、グランの墓に山ほど酒を買いでやってくれ」

どちらも、自分達は気にしていないと言い切ると彼らは揃って席を立った。

しばしの沈黙の後、残された面々の中でリリが口を開いた。

「ベル様、ミリア様、そしてヘスティア様」

神妙な面持ちで口を開いた彼女は、残る面々の視線が自身に集まるのを確認してから語りだす。

「良いですか。リリ達は凄く幸運でした。今まで、幾度も死に掛ける様な目に遭いながらも、誰一人欠ける事が無かったのはとんでもない

幸運です」

迷宮決死行。黒い階層主との死闘。そして戦争遊戯。

それ以前にしてもそうだろう。Lv. 1の新米冒険者がLv. 2の上位に区分されるミノタウロスに襲われて生きている事もそうだし。駆け出しが相手取るには不利なシルバークを相手に大立ち回りを演じたのも、変異種と化してLv. 3相当にまで至ったミノタウロスを撃破したのも、今までベルが歩んできた道の殆どが幸運に満ちていた。

「辛いのはわかります。ベル様、リリ達は凄く幸運だったのです……犠牲者が一人も出なかったのは、運が良かっただけ」

「……うん」

俯き、悔し気に目を伏せたベルが拳を震わせる。

ヴェルフは腕を組み、静かに呟いた。

「ダンジョンでは毎日死者が出てる。当たり前の話なんだよな」

「自分も、死に掛けた事は何度もあります。ですが……」

「タケミカヅチ・ファミリア」との関係は、死に掛けた彼らを「ヘステイア・ファミリア」が無茶をして救援した事から始まっている。

——今まで、仲間内から死者が出ていないのはただの幸運。

一般的な冒険者は、ダンジョン探索で命を落とす事は珍しくない。そして、これから迷宮探索を続けるにしろ、この派閥を維持するにせよ、何にするにせよ名を売りまくっている「ヘステイア・ファミリア」という派閥はこれからも数多の問題が押し寄せてくる。

嫉妬、妬み、やつかみ、何にせよ名が売れている以上、神イシュタルの様に強引な手段を講じる可能性はゼロではないと此度の一件で判明した。

「ですから——」

「まあ待て」

更に言い募ろうとしたリリをヴェルフが遮る。

「ヴェルフ様、ですが」

「とりあえず昼飯にしようぜ。腹減っただろ」

暗い話を払拭する様に豪快に笑い、ヴェルフはベルの肩を叩いて立

たせる。

それに便乗した女神が大きく手を叩いて立ち上がった。

「そうだねヴェルフ君。お腹が減っていたら余計に暗くなってしま
う。皆でパァーツと昼食といこうじゃないかア！」

陽気そうな声を上げた女神を見て、ミコトと春姫が慌てて立ち上
がる。

「きよ、今日は自分達がお昼を作りましょう」

「わたくし
「私も手伝います！」

皆が明るく振る舞う中、ベルはほんの僅かに表情を陰らせて拳を握
り締めていた。

「キューイ？」

「あ、キューイ……なんか、ごめんね」

いつの間にか近づいてきていたキューイに見上げられ、ベルは小さ
く笑いかける。

此度の一件で姿が変わってしまった彼女に申し訳なさを感じなが
ら、少年は部屋を見回す。

「……もつと、もつと強くならなきゃ」

——屋上庭園にて、アイシャ・ベルカに告げられた忠告が脳裏
を過る。

今のままでは、足りない。春姫を守るだけじゃない、全てを守ろう
なんて大言壮語を吐くには今のベル・クラネルでは全く足りていな
い。

アイシャ・ベルカ
自分程度にてこずる様じゃあ、まだまだだ、と。

より一層、強く願う。強くなりたい、と。

「キューイキューイ」

想い馳せるベルの腕を掴み、キューイがぐいぐいと引っ張る。

「えつと、何、キューイ………」

名を呼ぼうとしたベルが再度キューイを見下ろして、完全に硬直し
た。

貫頭衣の様な簡素な布地のみの彼女の衣類は、近くで見下ろすと
かなり際どい。元は飛竜でモンスターとはいえ、見慣れた少女と瓜二つ

の姿にベルが怯む。

思い悩んでいた事が一瞬だけ吹き飛んだ所で、ミアがキューイを呼んだ。

「キューイ、どうしたのよ」

「キューイ、キューイキューイ」

パタパタと駆けていくキューイを見て、ベルが安堵していると、ジトリとした二人の視線がベルの背中に突き刺さった。

振り返ると半眼でベルを見つめるヘステイアとリリの姿がある。

「あ、あの……神様、リリ?」

「ベル君、キミは女の子なら誰でも構わないのかい?」

「ベル様、見損ないました」

「ちよつ、待つて、違うんだ!」

「それで、ギルドでの話し合いはどうだったんだ?」

夕刻。

紅い光が窓から差し込む居室リビングの中、ヴェルフがベルから視線を逸らしつつも問いかけを放った。

「ギルド長が顔真つ赤でしたね。ブチギレられましたよ。色々」と

救援組は全員揃って墓参り。ヴェルフは武装の新調に忙しく、ミコトは春姫と共に神タケミカツチの下へ。結果として今日半日程、俺とヘステイア様がギルドに足を運んでいる間にベルとリリにキューイの世話を任せた訳だが……。

リリが完全にダウン。昼の俺と同じ様に長椅子ソファで目を回しており、ベルは部屋の片隅でキューイにしがみ付かれたまま動けなくなっている。

抱き枕の様にベルを抱いて寝るキューイは、盛大によだれを垂らしてアホ面晒していた。ギルドに足を運んでごちやごちややっていた俺とヘステイア様の苦労も知らないで……このポンコツ糞竜が。

「大丈夫だったのでしょうか?」

「んー、と……実は冒険者依頼クエストを受託させられましたね」

「冒険者依頼、と言いますと」

首を傾げたミコトに答える様にヘスティア様が羊皮紙を卓の上に置いた。

「何々……無人島『ユージン島』での薬草採取依頼？」

「はあ？ 無人島で有人島？」

内容を読み上げたミコトの台詞を聞いたヴェルフが盛大に眉を顰め、横から依頼書を覗き込んで中身を見る。

「……マジだ、無人島『ユージン島』って書いてあるな」

「何ですか、その変な名前の島。リリは聞いた事ありませんよ」
ぐったりとしたままりりが呟く。

俺も何かのギャグかと思っただぐらいだが、実際にこの依頼書の目的地はギルドの正式名称である。ギャグでも何でもなく、人が住んでいない島としての『無人島』に対して、呼び名が『ユージン島』となっているのだ。きつと神々が名付けたに違いない。

「待て、島って事は……都市オラリオを出るのか!？」

「そうなりますね」

「大丈夫なのか？ 戦力流出禁止令があんだろ？」

デインケの質問は尤もだ。

迷宮都市オラリオにはギルドが定める法があり。その内の一つに『戦力流出禁止令』と言うものがある。一度都市で恩恵を受け、上級冒険者以上に成長した冒険者の都市外への流出を禁止するものだ。

隻腕になって冒険者を続けられなくなった者でも上級冒険者だと引き止めを喰らうらしい。まあ、再起不能の冒険者の場合は形だけの場合が多いみたいだが。

「まあ、ギルドからは既に許可状が出てますから」

今回の依頼については色々事情があるのだ。具体的に言うと、都市内での問題発生派閥筆頭状態の「ヘスティア・ファミリア」を一時的に都市外へ追いやって、その間に人化したキューイ関連の事を神々に知らせて大騒ぎになるのを防ぐ為云々。

「これは……ん？ まあ、この冒険者依頼、依頼主が「ミアハ・ファミリア」になつてるぞ？」

「ああ、それはですね。元々の行き先が別の所になる予定だったんですが、ミア様が丁度依頼を持って来まして、其処で良いという話になりましたね」

元々はオラリオから遠く離れた大陸の果て、大樹海の秘境に存在する『エルソスの遺跡』への調査の方へと派遣する予定だったらしい。その場合、飛竜による遠距離人員輸送も兼ねた実験的な行いも序に行われる予定だったらしい。飛竜と会話できる俺の能力を利用した計画だったのだが。

「詳細は知りませんが、既に『アルテミス・ファミリア』が調査に入ったらしくてですね、こちらへの依頼としては不適切だと言う事になりましたね」

「はあ？」

「私も詳しくは知りませんが、遺跡調査という名目で都市外へ追い出したかったのが、調査先の遺跡に先に他の派閥が入ってしまったため話が流れた、と。其処に丁度ミア様が都市外での依頼書関連でギルドに相談に来てたんで、丁度良いとこの依頼を受けさせられた形ですね」

何処か要領を得ない話にヴェルフが首を傾げ、リリが眉間を揉む。ベルは抱き着いているキューイを引き剥がそうとするが、力のあるキューイを引き剥がせない。力づくで抜け出そうとして彼女が下着を着ていない事に気付いたのか顔を真っ赤にして動きを止めた。

悪いなベル……キューイは翼と尻尾が邪魔で下着を着れないんだわ。俺の魔法と違って、実体があるし、消せないから専用の下着が出るまではノーパン状態だな。

助けを求める様に此方を見るベルから視線を逸らしつつ、話を進める。

「で、結局この依頼を受ける事になりましたね」

「と言うか、この島は何なんですか？　リリ、一度も聞いた事が無いんですけど」

「あー……島全体が貴重な薬草の宝庫であるギルド管轄の島ですね。」

一部の医療系派閥が申請を出して通れば、薬草採取の為に足を踏み入れる許可が出るんですが」

島全体が貴重な薬草の宝庫。当然、密猟者が現れる可能性を危惧して一定基準を満たした医療系派閥以外には情報統制が図られており、一般的な派閥は存在すら知らないのが当たり前、らしい。

そして、ミアハ様の派閥は一応基準は満たしているので『ユージン島』への入島許可は持っていたが、それを他の派閥に依頼という形で譲渡する件についてギルドに相談に来ていた所を丁度良く捕まった、と。

「なるほど、でしたらこの依頼を受けると」

「受けるというか、ほぼ強制依頼みたいなものなのよねえ」

「断れない。と言うか断るとギルドが困る。」

ただでさえ「イシユタル・ファミリア」の消滅問題を抱えながら、戦争遊戯ウォーゲームで一気に有名になった『再生薬』に関係するキューイが人型になった件を処理なんか出来ん。

今バレたら困るから、暫く都市外の僻地へ飛竜ともども行つてこい。つてというのが事の顛末。

「なので、今回の依頼は「ファミリア」総員で向かう事になりますね」

「はえー……ん、レーネ様はどうするのですか？ 確か、ヘステイア様が恩恵を授けていたと思いますが」

「彼女も連れて行く、予定だよ」

自由奔放で何処に居るかもわからない彼女を捕まえる事が出来れば、の話だが。

「期間は？」

「およそ三日か四日ですね」

身を起こしたりリが用紙を覗き込んで溜息を吐く。

「何と言いますか。問題トランプルが絶えませんね」

「別に好きで問題を起こしている訳じゃないんだけどなあ」

項垂れるヘステイア様の言葉はまさにその通りだ。別に起こしたくて問題を起こしている訳ではない。平穩無事にいられるならそれが良いに決まっている。

「つて事は、俺達も暫く都市を離れる事になるのか」

「デインケさんたちは大丈夫ですか？」

「大丈夫だが、『ユージン島』なんて聞いた事が無いぞ。それってちゃんと正規の奴なんだよな？」

【ガネーシャ・ファミリア】の平団員ですら知らない島。

ぶつちやけ凄く不自然極まりない島だと思う。一応、ミアハ様のお墨付きがあるので問題は無いと思うが。

「ああ、手強いモンスターが出てきても大丈夫だぜ！ 助っ人を呼んでるんだ！」

「助っ人？」

自信満々な様子で告げたヘステイア様の言葉に思わず首を傾げた。

助っ人？ ナアーザさんか？ でもあの人、確かモンスターが近くに居るだけでまとも動けなくなるぐらい酷いトラウマがあつて戦力としては期待できないって話だが。

「ほら、戦争遊戯ウォーゲームでも世話になったあのエルフ君さ」

「リユーさんも呼ぶんですか？」

リユーさん呼ぶの？ あの人、店が忙しいから来れないんじゃないかな。

と言うかいつの間に……ああ、そういえば帰りにヘステイア様一人で何処か行つてたな。その時か。

「もう許可はとつてある。用意もしてくるつてさ」

「はあ、全くヘステイア様は勝手に話を決めて」

「仕方ないだろ。明日直ぐに出発しなきゃいけないんだから」

『『『はあ？』』』』

—— 待つて？

異口同音が響き渡る。その中に俺も混じりつつも、思わず羊皮紙をガン見した。

「待つてください。明日直ぐ？ その話、私聞いてないんですけど」

「ああ、ミア君がキューイ君の関連でガネーシャと話している間にミアハから聞いたんだ」

『『『』』』』

いや、いやいやいや。

朝一の行商馬車に乗って港街メレンに行つて、そこから「ニョルズ・ファミリア」が管理している船で目的の島まで航海する予定になっているんだけど。

明日の朝一？ 正気じゃねエぞ!?

「ヘステイア様、それもつと早くに言つてくださいよ!?! つていうかりューさんにも伝えましたか!?!」

「大丈夫さ。エルフ君には序にレーネ君を捕まえてくるようお願いしてあるから。明日の朝には集合場所に来るさ!」

リューさんにレーネの捕獲を依頼したんか!?! 滅茶苦茶良い様に使つてんじゃん!?!むしろリューさんはなんでそれで承諾したんだよ!?!

「いや、待つてくださいいよヘステイア様、今から準備して明日の朝一とか時間が足りませんつて!?!」

「うおおつ、おい今すぐ準備するぞ!?!」

「春姫殿、今すぐ自室に行つて荷物を纏めましょう」

「は、はいっ」

どたんばたんとは慌てて荷物を纏める為に皆が駆け出していく中、慌てるでもなく何処か遠い目をしたディンケさん達の姿が目に入つた。

「あー、ガネーシャ様も同じことやらかした事あるなあ」

「アレは祭りの前日になって『もつと目立ちたいから』って滅茶苦茶な事をやろうとしたのが原因だが」

——主神の無茶振りが割と良くあるのか、二人は落ち着いた様子だった。

「ミ、ミリア、僕も準備するからキューイをなんとかしてくれない!?!」

抜け出そうと暴れると際どいキューイの恰好がヤバくなる所為で動けないベルが助けを求めているのに気付いた。あのまま放置は流石に可哀そうだし、寝惚けたキューイを叩き起こして準備しないといかん。

というかキューイを隠蔽したまま島までいかないといけないんだ

が？ ヴァンとクリスは「ガネーシャ・ファミリア」に預けておくしかないんだが？ つか今から行かないといけないのか。

「ああもう、キューイ寝惚けてないでさっさと起きてくださいよ!？」

寝惚けてベルのシャツに盛大によだれを垂らすキューイの尻尾を引つ掴んで引つ張るが、離れる気配が無い。とろんと寝惚け眼で周囲を見回し、欠伸を零して再度ベルをギュツと抱き締め――

「グエツ……」

ベルが締め落とされる音が響いた。

「キューイ、直ぐにベルを放しなさいっ!!」

寝惚けてベルを絞め殺しかねんぞコイツ!?

第一八八話

眩しい日差しが降り注ぐ砂浜。真っ白な砂地は日の光を照り返して輝いて見える。押し寄せては引いていく細波の音色は心地よく、青く透き通った海は何処までも続いていき、視線を上げていけば果てに空と海の境界が見て取れる。

この風景に関しての感想としては、想像以上。だろうか。

ナーザさん曰く美しい景色が楽しめる、とのことだったが俺が過去に訪れた景観よりも更に数段上の景色と言えるだろう。何より、人が居ない。

いくら美しい海とはいえ、無数の人で溢れ返ればただの雑踏。そういった余計な要素が何一つ存在しないこの景色には万金の価値がある。

「眩しい太陽！」「青い海！」「白い砂浜！」

『『来たぞ、ユージン島！』』

『『イエーイ！』』

砂浜に並んで海を見渡し、テンション上げているヘスティア様、ヴェルフ、春姫、リリ、ミコトの五人の背中を見ながら、簡易天幕の中でベルとリユースさん、俺の三人で並んでくたびれた様子で眩く。

「本当に来ちゃいましたね。無人島の『ユージン島』」

「ええ、最初聞いた時は何の冗談かと思いました」

「意味のわかんない島の名前については、神々が考えたそうですよ」

むしろ神々のセンスで名付けるでもない限り、こんな妙な島の名称にはしないだろう。

「なあ、天幕の数が足りないぞ。三つしかない」

「やはり大急ぎで準備してきたからいくつか足りない物が出てきているな」

別の個所、地盤のしっかりした所で野営用の天幕を張っていたディンケとエリウツドの言葉に小さく頭を抱える。

こうなる事は予測出来ていたとはいえ、昨日の今日でこの無人島に訪れたのは無理があった。

——更に悪い事は重なるモノで。

「うえ……し、死ぬ……」

「フィア、大丈夫ですか？」

もう一つの天蓋の元、体調を酷く崩したフィアがメルヴィスに膝枕されていた。まあ、此方はただの船酔いだから良いのだが。

「それで、リユーさん……事情を説明していただけますか？」

「……………レーネさんの事ですね」

「はい」

首を回して視線を向けた先、リユーさんに文句有り気な視線を送るレーネの姿があった。頭や足に包帯を巻き、腕を吊った重傷人の姿になった彼女の姿に思わず眉間を揉む。

ヘステイア様がレーネの捕獲をリユーさんに頼んだらしいのだが、彼女は集合場所に半殺し状態のレーネを担いで連れてきた。

「数日前に【ヘステイア・ファミリア】が【イシユタル・ファミリア】の抗争に巻き込まれたと聞きました……その上、死者まで出た、とも」「それで？」

「…………【イシユタル・ファミリア】の幹部であるレーネ・キュリオを捕まえてほしいと言われたので」

——ヘステイア様が『大至急、明日の朝までに頼むよ』等と安易な事を宣ったらしい。

それを聞いたリユーさんは、彼女が仲間の命を奪った復讐対象であると認識。結果として、リユーさんは本気で行動を開始し、居所の宿屋を特定した半刻後、丁度レーネが寝静まった所に強襲をしかけた。

ただ、レーネ側も元【イシユタル・ファミリア】と言う事で最低限警戒しており、強襲に勘付くと同時に逃走しようとした——が、L v. 3の彼女ではL v. 4のリユーさんの追跡を振り切れず、最終的に逃走や反撃が出来ぬ様に片腕片足を押し折られて、拘束と。

「…………ヘステイア様、申し開きはありますか？」

「えっと…………その、ごめん。説明不足だったよ」

「レーネさん、どうですか？」

流石に今回の件において彼女は完全な被害者である。

リユーさんの勘違いについては、事情を知らぬ者が聞けばそう勘違いしても仕方が無い状態だったのが致命的で、根本的な意味でヘスティア様の説明不足が招いた悲劇な訳だ。

腕を吊った重傷人状態のレーネは半眼でリユーさんとヘスティア様を見やり、呟く。

「今まで悪い事一杯してきたし、これぐらい仕方ないかなあつて思うよ。でも……うーん」

「すいませんでした」

時間に余裕を持って行動しないと碌な事にならない。現にレーネが被害者として半殺しにされた事もあるし、天幕の数が足りないものもある。せつかくの長期休暇バカンスの出だしから気分最悪という事態になっってしまう訳だ。少なくともレーネはキレて良いと思う。

「はあ、私はしばらく寝てるね。まだ腕の骨くっついてないみたいだし」

三つの内の一つ为天幕に足を引き摺ってレーネが入っていく。かなりぐったりした様子にリユーさんが申し訳なさそうな表情をしている。

「彼女にも色々事情があつたのですね。聞いた話では自らの主神を裏切つて……」

街中に流れる彼女の噂については俺も聞いた。情報屋を通じて調べても同じ様な内容なのでリユーさんも完全に勘違いしていたんだろう。

女神イシユタルがレーネの心を折る為にか、周囲からの彼女の噂に色々色々と小細工をしていたみたいで、彼女の境遇は殆ど知られていない。

その所為でもある訳だが……。

「あんま気にしないで良いよ。私の自業自得だし」

ちらりと、天幕から顔を出した彼女がそう呟いて中に引込込む。

冒険者であるし、治療用の道具類もいくつかあるので完治するまでに半日程度もあれば良いだろう。

「ま、まあレーネ君もまあ言ってる訳だし。せつかく海に来たんだ！

エルフ君も楽しんでいけばいいさ」

「ヘステイア様がそれを言いますか……？」

流石にレーネの状況に同情したりリが半眼でヘステイア様を見やっていると、海の方から雄叫びが響いた。

「大物ああああああ！」

「夕食うううううう！」

岩場から海に飛び込む二人の褐色娘。アマゾネスのイリスとサイアの二人組が銚を手には海へと飛び込む光景が目に入ってきた。

「……ま、まあ夕食の確保はあの子達に任せようか」

「はあ……大急ぎで出てきた所為で食料を忘れるだなんて……」

ああもう、滅茶苦茶だよ。昨日の今日で大急ぎで準備したせいで忘れ物やらやらかしが目立つ。

足りない天幕、忘れた食糧。拳句の果てには勘違いで半殺しにされたレーネ。もう擁護できないよ。

「と、とにかく気分を変えようじゃないか！」

「ああ、こんな雰囲気じゃせつかくのこの景色も楽しめないしな」

前向きにヴェルフが笑い海を見やる。丁度、イリスらしき人影が一突きにした魚を掲げて手を振っているのが見えた。

アマゾネスという種族の中には海辺で集落を形成する場合もあるらしく、その場合は海で漁をして糧を得る事が多いらしい。ちなみに森に住まう場合でも、男に関してはどちらも街から攫ってくるのだという。

そしてあの二人は海の経験は一応あるらしい。

島に上陸する直前に「ニヨルズ・ファミリア」の主神、ニヨルズ様が銚や竿なんかを貸してくれたので彼女らに任せておけば問題は無し。後は食べれそうな木の実でも探しておけばこの島で過ごす数日間は何とかなるはずだ。

「しかし、凄いなんだな。この島全体が希少な薬草の宝庫なんだろう？」

「そうらしいわね」

しみじみと呟くヴェルフの言葉に頷く。

本当に不思議な事だ、ギルドが管理を申し出るのもわかる気がする。砂浜と森の境目の部分から既に目につく所に薬草として知られる植物が繁茂しているのだ。

奥に進めばもっと希少な種類の薬草が数多入手できるというのであれば、この島の希少性にも頷ける。

「入島できる期間がシーズン決まっています、それ以外の時期に入島した場合は重い罰則を課せられるみたいよ」

「へえ、凄い島なんだね」

「幻とされる究極の薬草『ナンニデーモ菊』もあるとの噂です」
補足する様に呟かれたリユーさんの言葉に皆の視線が集まる。

——『ナンニデーモ菊』？

思わず手荷物を探って薬草の図鑑をパラパラと捲ってみる。しかし、そのような名称の薬草は図鑑には載っていないかった。

「なんだい、それは？」

「名前の通り、とにかく何にでも効く薬草だそうです」

『『ダジャレかよ!?!』』

ヘステイア様、リリ、ミコトの三人の強烈な突っ込みが入る中、もう一度図鑑を調べてみるが、本当に見当たらない。

『ナンニデーモ菊』は俗称で、正式名称でもあるのだろうか？ だとしたら、菊または菊とよく似た見た目の植物だろうか……？

「持っているだけで恋人ができた。とか、持っているだけで金貨でいっぱい風呂に入れた。とか」

「へえ、すごい！」

リユーさんの言葉にベルが目を輝かせ始めた。主に『恋人ができた』当たりで。

そんな話を聞いたベルを除いた全員の表情が呆れに染まる。

「嘘臭いですね」

「怪しきしかありません」

ただの噂話だろう。図鑑には『どんな難病にも効く薬草』というの
は無くはない。だが産地はダンジョンの深層の奥深くにあるとされている
とか言う、要するに誰も見た事が無い架空の薬草として書かれ

ているのだ。

——つていうか、図鑑に架空の薬草なんか載せんよ。

「とにかく、せっかくの依頼ですし。沢山薬草を集めましょう」

「一部薬草は採取制限がかかってるんで注意してくださいね。取り過ぎると罰金とられます」

まあ、とにかくにも、いくつもトラブルが起きてごたごたしてる強制依頼ミッシェンとはいえ、依頼は依頼だ。

罰金対象の過剰採取禁止植物と繁茂区域進入禁止の薬草類など、採取し尽くしてしまわない様に色々規則があるので注意はしないとイケない。

「うん、まずは手分けして行動しましょう。僕とヴェルフは森の中を、リユーさん達は海岸線の方を探してください。デインケさん達には野営地の準備を任せても良いですか？」

「任せてもっていうか、もう準備してる。暗くなってからじゃ遅いな」

ベルが頷いて早速依頼を片付ける為に人員の振り分けをするが、入島直後に振り分けはした。したというか、適材適所でガネーシャ組が野営地準備、アマゾネス二人が食糧調達、フィアとレーネは行動不能でメルヴィスが看病している。

こういった集団行動に慣れていない俺達は殆ど何かをする前に彼等が自主的に動いてくれてる訳だ。何と云うか、経験者が居ると心強い事この上ないな。

「はい、ありがとうございます。デインケさん。それじゃあヴェルフ。僕達も行こうか」

「おいおいベル、お前何言ってるんだ？」

腰を上げようとしたベルに、ヴェルフが呆れた様な声を上げた。

そのやり取りを見ると、ふと何かを忘れてる気がした。が、忘れ物は一杯したし今更か。

「せっかくユージン島に来たんだ。依頼の前にひと泳ぎじゃないかー！」

ヘステイア様が号令を上げると、野営準備で三つ目の天幕の設営を

しているディンケとエリウッドがちらりと此方を見てきた。

「……手伝いしましょうか？」

「いや、手伝わんでいい。というか、慣れてない奴らに手伝わせるぐらいなら慣れてる俺達だけでやつとくから、遊んでてくれ」

——遠回しに邪魔だから遊んでろって言われたんじゃないが？

ま、まあ彼らがそれで良いなら良いか。本当は彼らのアレコレが終わってからのの方が良い気がするが、彼等が進んでやってくれる上、遊んでていいとお墨付きまで貰ってヘステイア様はじつとしていられないだろう。

「と言う訳だ、ベル君。海にいこうぜ！」

「えっ、でも僕、水着とか持ってきてないですけど」

『『ええっ!?!』』

ちなみに俺も水着は持ってきてない。

準備が昨日の今日だったので忘れてきた。そういえば何か忘れてると思っていたが、水着の事だったのか……水着の、事か？ ……まだ何か忘れてる気がするが。

「何を考えているんだい、ベル君！」

「見損ないましたよ、ベル様！」

ヘステイア様とリリが声を上げ、ミコトや春姫があからさまに落胆した表情を浮かべる。なんだかんだ言いつつも皆楽しみにしていたらしい。

俺個人としてはどうでも良いんじゃないが。

「ご、ごめんなさい！　なんかよくわかんないけどごめんなさいっ！」

「そうだぞベル、とにかく謝っとけ」

ヴェルフが呆れた様に肩を竦めている。ヴェルフも楽しみにしてたのかよ……。

「だったら僕、ディンケさん達の手伝いを——」

「団長、遊んでてくれ」

「あっ、はい」

テキパキと野営地の準備を進めているディンケとエリウッドの二人から戦力外通告されたベルがしよんぼりした。あの二人、何か拘り

でもあるのだろうか？

いや、まあ、野営地の経験の無い俺達だと指示貰わなきゃ動けんしなあ。

「う〜ん……よし、じゃあこうしよう！」

妙案を思い付いた、とヘステイア様が満面の笑みを浮かべてリユースさんとベルの間に入り込み、ベルに寄り添って皆を見上げた。

「皆は泳いできてくれ。ボクはベル君と仲良く留守番をしようじゃないか」

やけに『仲良く』と強調したヘステイア様の台詞を聞き、リリがカチンときたのか頭から二人の間に突っ込み、強引に間に割り込もうとしはじめた。

「ヘステイア様こそ泳ぎたがっていたでじゃないですか！ ベル様のお世話はお任せください！」

「キミだつて潮干狩りしたがっていたじゃないか！」

別に、リリに世話されなくてもベルは平気じゃないかな。とか言ったらリリが激怒しそうなので黙っておこう。

それと、この砂浜つて潮干狩りできるのか？ 薬草の宝庫とは聞いたが、貝類がとれるとは聞いた覚えが無い。

二人の姦しいやり取りの横から、ちよこんと小さく控えめに手を上げた春姫が呟く。

「あの、ベル様のお世話でしたら私わたくしが——」

『抜け駆け禁止イッ!!』

「は、はい……」

控えめな春姫の発言はヘステイア様とリリの二人に叩き斬られる。あの、その禁止されてる抜け駆けを堂々と行おうとしてる二人が言っている台詞じゃないよな？

ベルを巡ってヘステイア様とリリが額をぶつけ合い、視線で火花を散らしまくっている。その様子を遠くから見ていたティンケとエリウッドが呟くのが聞こえた。

「あ〜あ、ああなるってわかってたから手伝いは断ったんだよ」

「酷いな。だが男の甲斐性を見せる所だ。団長、密かに応援だけはし

よう。だが腕げろ」

若干、呪詛混じりの声を上げているのが気になるが。まあ、確かに。ベルが手伝いに行っていたらヘスティア様やリリ、春姫なんかが名乗り出て滅茶苦茶になるのは想像に易い。あの二人はその辺りを見越して断ったのだろう。

……………じゃあ、俺が手伝っても良くない？

「……………副団長、お前はさあ、働き過ぎんだよ。少し休んでろよ」

「見てるこつちが心配になるからなあ」

——生暖かい呆れの視線が降り注ぐ。

居心地の悪い視線から逃れんとリリとヘスティア様の方へ視線を向けると、四つん這いになって雌豹の様な恰好の二人が睨み合っている光景が目に入ってきた。

二人とも何やってんのやら……………

「こうなったらベル君を選んで貰おうじゃないか!」

「えっ?」

「そうですね。リリもそれで構いません」

「えっ、えっ?」

「水着コンテストだ!」

すぐ真横で戸惑うベルを置き去りにし、額を押し付け合ったヘスティア様とリリが意気投合する。

しかし、水着コンテストか。なんとという企画を……………ヘスティア様も神だった、と言う事か。神はお祭り騒ぎが好きだからね……………

「ヴェルフ、どうしよう……………」

「ベル、黙ってる。良い流れなんだからな」

「ええ?」

ベルが兄貴分に助けを求めるも、期待に胸を膨らましているらしいヴェルフに切り捨てられて捨てられた兎の様にしゅんつとなる。横に居たりユーさんはその様子を見て、ヘスティア様に視線を向け、すうつと視線を逸らしていった。

「優勝したら今日一日ベル君と二人きりで遊べる。ってどうだい?」

「望む所です!」

「わ、私も参加してもよろしいでしょうか……」

完全に対抗意識が燃え上がった二人はベルを置き去りにして事を進めていく。それに控えめに離れた位置にいた春姫が小さく手を上げて参加表明をしていた。

せめてベルの意見を聞いてからにするべき、だとは思ったがお人好しのベルの事だ、押し切られるのだろう。

「はあ、ベル、やりたくないなら私が止めますが」

「ミリア、お前は何を言っているんだ。せつかく水着姿が見れるのにそれを止めようだなんて。男心がわかってないなあ。なあ、ベル」

「えっ、ああ、うん。まあ……」

がつしりとヴェルフに肩を組まれて肯定させられるベル。嫌々というよりは、ほんのりと恥ずかしそうに頷くあたり、一応水着姿には淡い期待を抱いているのか。

本気で嫌がっていないのなら良いか。

「よーし、じゃあ三十分後！ 待っていてくれよベル君。ボクが一番だって君に証明してみせるよ！」

「ふんっ、いくら神だからって調子に乗り過ぎです。きっとベル様はリリを選ぶに違いありません！」

「わ、私も、その……がんばります」

ふんすつ、とバチバチ火花を散らしたヘスティア様とリリがずんずんと天幕に入ろうとして——ぬっと中から顔を出したレーネが二人を睨み、親指で近くの木陰を指差して一言。

「五月蠅い。あっちで着替えて」

「あ、うん」

「すみません」

「ご、ごめんなさい……」

まあ、レーネは怪我人。むしろ強引に連れてこられて機嫌が悪そうなので仕方なし。

迷宮の温泉の時同様に岩陰で着替えるしかないだろう。一つ目は怪我人のレーネが使用中でもう一つの天幕は男用、最後の一つは現在設営中。

「おーい、皆なにしてんのー?」

「大漁大漁」

「うおっ!」

元氣一杯の声が砂浜に響く。

海の方から魚を編み籠一杯に入れて背負ったサイアと、大きな鮫を担いだイリスが戻ってくる姿が見えた。

待って、鮫、サメじゃん。それ、すごい扱いが難しくって滅茶苦茶調理が大変だぞ。食う気か?

「そのサメどうしたんですか……?」

「ん? ああ、なんかじゃれついてきたからシメ」

「……食べる気ですか?」

「ん? まあ食べるけど?」

食べるのか……。

高濃度の尿素が蓄積してて、独特のアンモニア臭がしてとてもではないが食えたものではない。一応、レモン汁や酢なんかでマリネすればマシにはなるが……そんな調味料無いぞ?

「普通に焼いて食べるのよ。調味料なんて無いし」

せ、せめて香草焼きにしようぜ。食えないから、マジで食えないから。

食事の時間になったらそれとなくサメ肉は回避しようと思う。もう料理と言いながら丸焼き出してきそうなイリスさんのサメ肉は本当に遠慮させてもらおう。

「それより、ヘステイア様とか何処いったの?」

「ああ、今から水着コンテストをやるんだ。サイア達もやらないか?」

「水着コンテスト?」

ヴェルフが鼻息荒く二人に声をかける。そんなに水着姿見たいんかい。

「面白そうだねー! 私も参加したいー! ファイアとメルヴィスも誘おうとー」

「今あつちで着替えてるから、水着を持っていくと良い」

……ヴェルフが鞆を手渡すと、サイアが笑顔でパタパタと女性用の

天幕に飛び込んだ。

サイアが入って数秒すると、若干顔色の良くなったファイアの腕を掴んでサイアが岩陰に駆けて行く。

一人、メルヴィスが苦笑しながらも手を振って見送っている所を見るに、ファイアはサイアと共に参加し、メルヴィスはレーネの看病をしてくれるのだろう。

「イリスさんもどうですか？」

ヴェルフが若干鼻の下を伸ばしながらイリスに声をかける。

「いや、私、サメの下処理しないといけないし無理」

「……そうですか」

きつぱりと断られて残念そうなヴェルフが俯いて落ち込み始めた。

「ミリアもどうだ？」

いや訂正、落ち込んでも居ないし懲りでもない。

そもそも俺は水着なんてもってきてないぞ。

「そもそも水着を持ってきてないので無理ですってば」

「いや、水着ならここにある」

「はあ？」

自信満々にヴェルフが差し出してきた小さめの鞆。中を覗き込むとあの迷宮の温泉で溶けたものと同じ水着が入っているのが確認できた。

思わず胡乱げな視線でヴェルフを見上げる。

「これ、どうしたんですか……？」

頭の片隅に爽やかな笑顔を浮かべたヘルメスの顔が過る。まさかな……だって昨日の今日だぞ？　ありえん。

「ああ、ヘルメス神が『これを持っていくと良い。きつと良い思いが出る』っていつて渡してくれたんだ」

あの糞ヘルメスウウウウウウウウウウウウツ!!

ズバンツと鞆を地面に叩き付けると、中から水着が飛び出した。踏み潰してやろうと足を振り上げた所で、リユースさんが待ったをかける。

「待ってください。水着が二着入っている様ですが……」

「はあ？　なんですか……」

リユーさんが摘まみ上げたのは黄色の水着。

しげしげとその水着を観察していたリユーさんの視線が俺の胸元と水着をいつたりきたりしはじめた。

「これは、しかし……」

「なんですかりユーさん。胸が小さいとでも言いたいんですか。リユーさんもぺちゃんこの癖に」

「私の胸は平らではありません。ですが、ミアさんの胸が小さいのは事実です」

——表情も変えずにしれつと言いつつたよこのエルフ。

恩人ではあるが超えてはならない一線というものがあるんじゃないかろうか。時々ポンコツと化すのは知っていたが、それは許されない。赦されてはいけない。

「リユーさん、私、今滅茶苦茶ムカついたんですけど」

「いえ、勘違いさせてすいません。この水着が大きいのだと思います」

「ああ？」

「待てミア、落ち着けて。ほら、小さくても需要は——げぶえっ!!」

余計な口を言うヴェルフの口は閉じましようねー。口は災いの元つて言うんですよー？

横っ腹に肘打ちを叩き込み、悶絶した所で頭を抱きかかえる。そのままギリギリと締め上げる。

「女を捨ててる事は否定しませんが。それでも小さいとか言われると腹が立つんですよ……?」

「いででででっ、あっ、小さいながらも少しやわら——ま、待て、ミアが魔術師とはいえLv. 3の力は洒落にならんっ!!」

ぐぐぐーつと力を加えていく。なあ、ヴェル吉やい。Lv. 2のお前さんと、Lv. 3の俺。たとえ力が弱かろうが俺の方が強いのは自明の理だよなあ？　言っただろ、口は災いの元だつて。

横のベルは口を塞いで何も言わない様にしてるだろう？　余計な事を言う口はこの口か？

「ぐあああああつ、ギブツ、ギブツ！」

「……やはり、この水着、ミリアさんにはサイズが大きすぎる」
タツプして降参するヴェルフを他所に、リユースさんが黄色の水着をしげしげと観察して呟く。

俺の胸が小さすぎると言いたいのか？ ヴェルフを解放して砂浜にポイ捨てしつつ

「いえ、ですから、こちらの赤い水着は前回と同じ大きさかと。つまりミリアさんにピッタリです」

……前回から胸囲が一切成長していないと？ キレそう。

「もしや、この水着はミリアさんではない別の人の水着なのでは？」

「はあ？ そもそもそのサイズだと私以外の誰が使うって言うんですか」

「ミリアさんはもつと小さいでしょう」

——リユースさんって時々本当に喧嘩売ってるんじゃないかって思う時があるんだけど。これ天然で言ってるんだよね。

とはいえ、リユースさんの言う黄色い水着がいったい誰のモノなのか、という問題については少し気にはなる。

サイズ的には小人族用、または子供用程度の大きさ。この場に居る面子でその黄色い水着を装着できる胸囲の女性はいない。

俺は、残念ながらその大きさとスカスカである。パッドか何かあれば……水着でパッドは目立つ。無し。リリは……口惜しいが俺よりはるかにサイズがある。収まらない。

ヘステイア様、春姫、ミコト、イリス、サイアは論外。あの巨乳共めが……。

フィア、レーネの二人は標準的。装着不可能。

リユースさんとメルヴィルの二人はスレンダーだが、そもそも子供用が着れる訳も無い。

「……？ 本当に誰の水着なんですか、これ？」

着れる奴、居なくね？

砂に塗れた鞆を拾い上げ、中身をもう一度確認していく。

俺用らしい深紅の水着と、黄色い水着——の下を取り出した所で

顔が引き攣った。

俺が鞄から引つ張り出したソレを見て、ヴェルフやベルが息を呑み、リユーさんが信じられないといった風に半口を開けて硬直する。

「これ、は……」

「ひ、紐？」

「は、破廉恥な……」

紐だった。前側は逆三角形だが、それ以外が全部紐。後ろ側も紐。もう尻丸出しじゃねっていうぐらい紐。

なんだこれ、どんな痴女が身に着ける水着だよ。アマゾネスだつてここまで酷くねえ。

これは水着では無くアダルトグッズの穴空きパンティの様な代物なのではないか。こんな物を水着として入れてきたヘルメスとかいう神にはオラリオ帰還後に痛い目を見て貰う必要があるらしい。

サメ肉を焼いているイリスさんの所の簡易炉の中に放り込もうと一歩踏み出した所で——気付いた。

「あつ、キューイ」

キューイ。そう、キューイである。

あの人型になった飛竜、キューイ用だ。

俺の胸のサイズより若干大きいのは、キューイの方が若干大きいから。この前面部分だけが逆三角形で他の部分が紐になった設計。これ、尻尾があつても着用出来る様にしてあるのではないか？

もう一度広げて確認してみると、構造がだいたい変態的に見えるが、尻尾に干渉しない様に工夫が凝らしてあるのが確認できた。材質もしっかりしており、竜鱗で破れる心配も無さそうである。

——糞ヘルメスがどうしてキューイの事を知っているのか、と言う疑問はあるものの、あのヘルメスならやりかねない。

「わかりました。キューイ用ですねこれ」

「何？ ……いやでも、確かに。その水着、キューイ用なら納得がいくな」

「……二人とも、頭でも打ちましたか？」

リユーさんが表情を顰めて呟くのを聞きつつ、ふと気づいた。

キューイ、何処だ？

「……………ヴェルフ、ベル、キューイ見ませんでしたか？」

「あん？ 見てないが……………そういや、居ないな」

「あれ、オラリオから出る時に木箱に入って貰ってなかったっけ……………？ 船から下りてから見てないきがするけど……………」

オラリオから出る際、そのまま馬車に乗せるのも船に乗せるのも無理だったから、ギルドが用意した専用の木箱に入って貰って——

「ヤバいですね。忘れてました」

ヤベエ、木箱に入れたキューイの事ずっと忘れてたわ。

視線を野営地の方に向けると、一人人をすっぽり入れる事が出来る木箱が荷物の片隅に鎮座しているのが見える。動きは全く、無い。……………絶対、怒ってるだろうなあ。

「あの、大丈夫ですか皆さん……………その破廉恥な水着をあの飛竜用だなんて。変な空気に当てられましたか？」

「いや、キューイは今——あつ」

心配そうなりキューイさんの言葉にベルが返事をしようとして表情が固まった。

あつ、俺も気付いた。リユーさんにキューイが人型になってる事、何の説明もしてないんだけど。

「……………どうしよう、ミリア」

「おい、不味いんじゃないか？」

待って、リユーさんにキューイの事説明しないといけないじゃないの？ ヘステイア様、説明不足だったし絶対リユーさんにこの事話してないよね？

……………うわあん、胃が痛いよう。

第一八九話

「えー、わたくし私、ヴェルフが解説実況を担当させていただきます。ユージン島へステイア・ファミリア水着大会！　どんな水着が出てくるのか今からどきどきとわくわくが止まりません」

どきどき、わくわく、ユージン島水着大会く……の前のお着換えタイム。

砂浜と森の境に鎮座する巨大な岩塊を隔てた向こう側で一人ずつ着替える、という事で覗き等をしてはいけない様に俺とリユースさんで見張り、ベルは荷物番、ヴェルフは……何処から引つ張り出してきたのは真っ赤な燕尾服を着て、其処らに生えてた天然のバナナを收音器マイクの様に握って自称『解説実況役』に徹している。

……ヴェルフ曰く、ヘルメス様から頂いた荷物の中にあつたそう
な。

あのさ、ヘルメスは何がしたいんですかね？

「ぬっふっふ……水着大会、勝つのはこのボクさ！」

自信ありげな様子のヘステイア様がいの一番に岩の向こう側へと消えていく。

「おっと、一番手、ヘステイア選手。個室へ移動です……少し覗いてみましょう——」

「ヴェルフ、それをしたら貴方の両目を抉り取ります」

「……冗談だよな？」

何のために見張り立ててると思ってるのよ。流石に抉りはしないが目潰しはする。

腕組をして覗こう等と考える不屈きなヴェルフに威嚇しつつ、リユースさんの様子を伺う。

キユースイについては木箱から救出済み。窮屈な木箱の中で不機嫌さが爆発仕掛けていたが、オラリオに帰ったら林檎を山ほど供えるところという約束で機嫌を取る事に成功したのだ。しかし、リユースさんには告げて無いし、姿を見せても居ない。

……癪ではあるが、ヘルメスが渡してきた水着を着させて大会にし

れつと参加させる事でリユーさんには受け入れて貰おうと思う。それまでは奥の方で静かにしててくれる様に頼み込んでおいたのだ。

「……どうかしましたか？」

「いいえ、なんでも。リユーさんも水着、どうです？」

「いえ、私はあまりああいったモノは……ん、これは……？」

首を横に振って否定するリユーさんの頭にひらひらと布切れが飛来した。

「……水着、ですか。これはヘステイア様のものだと思われませんが」

「……みたいですな」

群青色をした三角刑の布地が二つ合わさり、残りは紐で構成されると岩の向こう側からヘステイア様の独り言が小さく響いてくる。

『ふんっ、あんなぬるい水着で勝てると思うなあ、サポーター君たち。ボクとベル君はあの子達とは比べものにならないぐらいの時間を共有しているんだ。今日一日ベル君と遊んだら……最後にはきつと……！』

以下、岩の向こう側から聞こえたヘステイア様の妄想が口から零れ落ちた内容だ。

沈む夕日に照らされた海、細波さいなみの音が響く砂浜。朱く染め上げられたボクはベル君と共に遊び疲れて岩場の影で一休み……。ふと、ベル君は急に立ち上がってボクを壁に押し付けてこう言うんだ――

「神様、僕、一緒に居たいです」

そしてボクは言い返すのさ。

「ボクもだよ、ベル君……」

良い雰囲気になるけど、ベル君は真剣な眼差しでボクを真っ直ぐ見て、口にする。

「違うんです神様、僕、今夜一晩一緒に居たいんです。二人つきりで」
きゅんっ、と高鳴る心臓。そのまま、夕日を背景にボクとベル君の唇が迫って――。

「なあーなんてことになったりして！ なったりして！ なったりして——！！」

ぶんぶん、と何かを振り回す音が岩越に聞こえる。いや、本当に何をしているんだろう、とリユーさんと二人で顔を見合わせた。

「ミリアさん、今のは聞かなかった事にしましょう。そうするのが最善だ」

「そうですね」

ほんと、もう何を考えてるんだか。そのまま夜戦に突入って、ベルの貞操の固さは知ってるだろうに。

呆れつつも耳を塞いでヘスティア様の着替えが終わるのを待っていると、ふわりと頭の上に生暖かい布地が降ってきた。

今度は何なんだよ。

降ってきたそれを手に取ると、妙な生暖かさを残した手触りの良い三角形の——女性用下着だった。というか、ヘスティア様の脱ぎたてだった。

「……………主神の脱ぎたてパンツを頭に乗せられた私は、どんな顔をすれば良いんでしょうか」

「申し訳ありませんが、私にもそんな経験が無いのでわかりません……………」

気まぎげにリユーさんが視線を逸らしたので、無くさない様にそつとその下着はローブのポケットに捻じ込んでおく。遠くの方でサメを焼くイリスさんがヴェルフにサメ肉の毒見をさせているのを尻目に、溜息を零した。

「ヘスティア様、着替えたのなら早くしてください。次はリリが着替ええます！」

「ああ、こちら！ 待ちたまえ。まだ完全に着替え終わってないんだ！」「早くしてくださいよ！ いままで待たせるおつもりですか！」

急かす様にリリが膨れ上がった袋を持って岩の向こうに押しかけていき、しばし姦しい問答が繰り返されると、タオルで体を隠したヘスティア様が小荷物抱えて小走りで森の方へととてとてと駆けつけてるのが見えた。

今度はリリの着替えか……。

「リューさん、ちよつと席を外しますね」

「わかりました」

ヘステイア様に下着返して来なきやいかん。つか、興奮し過ぎて自身のパンツを投げ飛ばすつて流石にテンション上げすぎでしょうに。

それとなくヘステイア様の荷物にポケットに捻じ込んであった下着を捻じ込み、そそくさと帰還。

ヴェルフとベルがサメ肉をもそもそと食べているのを尻目に、リューさんの横に並んだ。

「どうですか」

「……………また、ですな」

若干疲れた様な表情で眉間を揉むリューさんの台詞が終わるより前に、岩の向こうから甲高いリリの声が響いてきた。

「ヘステイア様は過こした時間如きで優位性マウントをとりを自慢し過ぎです！ このまま『神様』つてだけで好きにされてたまるもんですか！ ……それに、きつとベル様はリリを選んでくれます」

ぶつぶつと文句を零しているかと思えば、ベルに対する信頼を語りだす。

ちよつと、無人島に来て皆気分が高揚してるのか考えが口から零れ過ぎてる気がするんだよなあ。

「そしたらきつと——」

もはやぐったりした様子のリューさんと互いに視線を合わせ、岩の向こうから聞こえるリリの妄想劇を聞く。

以下、岩の向こう側から聞こえる耳年増系サポーターの口から零れる妄想劇。

沈む夕日に照らされた海、細波さいなみの音が響く砂浜。朱く染め上げられたリリはベル様に壁ドンで迫られて、けれども恥ずかしさから口にするんです。

「リリはちんちくりんで、トラウマを隠す様に強気で接して、信頼している人にしか涙を見せない様な一面のある美少女ですが！ それで

も良いんですか！」

ベル様はリリに言うのです。具体的にはカツコよさ割り増しな感じで！

「勿論、そのままのリリが大好きさ」

きゅんっ、と高鳴る心臓。夕日を背景にリリとベル様の唇は徐々に距離を詰め――

「はう、これです！　これこれ！！」

大興奮した様に荒い鼻息すら聞こえてきそうなりりのテンションに、リユースさんと視線を交わすと、互いに無言で耳を塞いだ。

もう突っ込みどころがいくつあつて、気分は最悪だ。というか、自分で『美少女ですが！』と言い切る当たりがね、事実だけど、事実だけど自分で強調して言ったらあかんでしょ。

離れた位置でサメの頭に齧りつくイリスと、それを見てドン引きしてるベルとヴェルフの様子を、リユースさんと二人で眺めてる内にリリが大きく膨れ上がった荷物を持って岩場から出てきた。

そのままヘステイア様同様に森に隠れるのを見送った後、今度は若干頬を朱に染めた春姫がちよこちよこと小走りで岩場に駆け入る。その後から半眼のミコトが続いて岩場に入ってしまった。

二人同時に着替えるらしい。

まあ、流石にあの二人で耳を塞ぐような事にはならないだろう。……ならないよな？

リユースさんに視線を送ると、首を傾げられた。いや、まあリユースさんは春姫と接点が無いし仕方ないか。

「つい参加してしまいました……」

若干気落ちした様な春姫の声が岩の向こうから微かに聞こえてくる。羞恥が勝っている分、ヘステイア様やリリよりマシだろう、とサメを丸まる平らげて骨だけにしたイリスが腹をさすっているのを見つめて溜息。

ちよつと、あの人マジでサメを喰いきったんだけど。

「私等ではベル様の寵愛をいただく事は……ですが！　せめてお情わたくし

けの一絞りでも……!!」

——固い決意に満ちた春姫の言葉が聞こえた途端、リユーさんは何も言わずに耳を塞いで口笛を吹きだした。

ぴーぴー、と何処か調子のズレた口笛を聞きながら、眉間を揉む。

「春姫殿、その言動が天然ド淫乱と言われてしまうのです」

あ、やったあ、常識人が居た。

そうだよ、引き留め役のミコトがいるじゃん。他の面子と違って止める役が居る分、春姫ははるかにマシになるだろう。なると良いな……。

「ベル殿が欲しいなら、堂々とそう言えばいいではありませんか」

「はうつ……ほ、欲しいだなんて……ミコトちゃん、何を言ってる……」

「あ、ああ……え？」

春姫らしき声が響く。またしても妄想劇が始まり、止めるに止められなかったミコトの呆れた様な溜息が響いてきた。ちゃんと止めてよ、その脳内シヨツキングピンクの淫乱狐。

沈む夕日に照らされた海、細波さざなみの音が響く砂浜。朱く染め上げられた春姫はベル様に壁際に追い詰められながらも、こう問いかけるのです。

「あの、ベル様……どうして水着を持ってこなかったのです……？」

ベル様はその問いかけにほんの少し驚くと、こう返します。

「ごめん春姫さん。でもいららないんだ」

次の瞬間、ベル様はベルトを外し、上着を脱ぎ捨て、肌着も脱ぎ去って生まれたままの姿で……。

「どうせ全部脱ぐんだから」

きゅんっ、と高鳴る心臓。ベル様の手は自然と春姫の体を抱き寄せ、そのまま夕日を背景に二人の体は重なって——

「きゅう……」

「うえ？ は、春姫殿ッ!? 春姫殿、春姫殿しっかりしてください!!」
トサツ、と誰かが倒れる音が響いた後、驚愕した様子のミコトの叫

びが岩の向こう側から響いてくる。何事かとこちらを見やるベルとヴェルフに何でも無い、と手を振りつつ横に居たりユーさんに視線を向ける。

一瞬だけ此方を見返した彼女は、小さく呟いた。

「随分と、その、逞しい娘ですね」

「はあ……」

溜息を吐きながらも、しつかりと二人が着替え終わるのを待ち、次の人が岩向こうに行つたのを確認する。

今度はきやつきやと楽し気なサイアと、頭をバリバリと搔いて欠伸してるフィアの二人だ。ある意味安心できる組み合わせである。

少なくとも妄想劇を繰り広げたり、唐突に未成年者視聴禁止な内容にカツ飛ぶことは無いだろう。

「水着大会かあ、ロキも同じことやりたがつてたよね」

「あく、確かに。ロキは団員全員分の水着用意したけど着させる時期が来ないーって嘆いてたなあ」

——何だろう、本当に安心できるやり取りをしている二人にほっこりするわ。

あく、癒されるんじやあく。

とはいえ、その癒しの時間は短時間で終わってしまった。というのも、妄想劇を繰り広げて着替えの手を止めるでもなく、談話しつつもさくつと着替えた為、時間が全くかからなかったのだ。

「次はミリアさんですね」

「あー、じゃあ、着替えてきますね……」

「そちらは森の方ですが……」

「あ、ちよつと、その荷物とつてきます」

リユーさんに言い訳しつつも、森の方へ小走りで駆けていく。

荷物をとつてくるのもそうだが、それよりもキューイを回収して水着に着替えさせなくてはいけない。

木々に隠れる様にキューイが漫画表現染みた鼻提灯作って寝ているのを見つけてしまった為、適当に叩き起こして頭からタオルをかけて岩場へと手を引いていく。

「キュイ?」

「着替えますよ」

「キュイキュイ?」

「……着るのは手伝いますから」

なんで着替えるの? とか、着るの面倒臭い。とか、そもそも着なくても良くない? とか適当な事言いまくるキュイを言い包めつつ、鱗で水着が破れない様に注意しながら彼女に水着を着せていく。

……なんつーか、肌綺麗だな。俺の右腕の病的な白い肌を省いても、俺に比べて健康的な肌色をしている。というか俺が白過ぎるのだろうか。紅い竜鱗との対比のおかげで白く見えていた肌も、俺と並べれば一目瞭然だ。

それに、俺よりも身長は高いわ、胸も大きいわで……。

「キュイ?」

……なあ、お前の胸、ちよつと抉つといた方が良いんじゃないか? 邪魔だろ?

「キュイツ!」

「さあ、始めました!」
「へステイア・ファミリア」、水着大会イイイイツ!!」

華々しく咲き乱れる花畑を背景にした岩の前。

直径が7 M程メトルだろうか、周囲の砂地から一段高くなっているその岩の上面は多少の凹凸が見て取れるが、ほぼ平らに整えられており、あたかも演目を披露する高座ステージを思わせる。

左右にはまるで脇幕の様に縦に伸びる大岩。内側から見ると粗削りながらも階段状に削られているのが見て取れた。どう考えても人の手の加えられた痕跡がある即席舞台である。

以前この島を訪れた「ファミリア」がわざわざ作っただろうなあ。

正面にいくつかの流木と岩で作られた観客席が見て取れる為、この場所はこういった目的に作られているのは確定だろう。

いつの間にか水着に着替えたヴェルフが、またしてもノリノリで司

会者を気取っているのを見やりつつ、後ろに並ぶ面々を見やる。

審査対象外、ミコト、サイア、フィアと、後ついでに俺

その後控えるヘスティア様、リリ、春姫……そして隠し玉のキユーイ。合計八人の参加者が舞台裏とも言える場所に募っている。

「えー、司会のヴェルフです！ 解説として、今回はな・な・なんとお、【疾風】のリユー・リオンさんにも参加していただきます。リユーさん、一言どうぞ」

「レベル4として恥ずかしくない解説をさせていただきます」

「あの、解説にレベル4つて関係あるんですか……？」

——いつの間にかリユーさんの頭のネジが外れてるじゃん。

ちらりと高座前ステージの様子を伺うと、リユーさんが真剣な表情で席に着き、直ぐそばに木切れに『解説 リユー』とナイフで刻まれたモノが立ててあるのが見える。

「さらに、解説役としてこの方、【戦場の女主】レーネ・キュリオさんにも参加して頂きます」

「私、もう少し寝てたかったんだけど……？」

リユーさんの横には仏頂面のレーネが座っていた。此方も同じく木切れに『解説 レーネ』と刻んだ木切れが置かれていた。

「更シヤーク・スレイヤーにこの方々、観客のデインケとエリウツド、メルヴィスそして【鮫を狩る者】イリス・ヴェレーナさんもお迎えしております！」

「あー、まあ、目の保養になるから良いか」

「……ふむ、少し楽しみではあるな」

「あの、【シヤーク・スレイヤー】って何ですか……？」

「けっぷ、中々食べ応えのある鮫だったわ」

若干一名、妙な異名を獲得してる人が居るんですが、それは？

いや、もうテンション爆上げ状態で若干空回りしてるんじゃないかっていうヴェルフの解説にベルが目を白黒させて戸惑っている姿が見えた。

もう、なんかこの高座ステージに出たくねえな。

「そして、超重要人物。此度の大会の審査を務める、ベル・クラネルウウウウツ!!」

「ね、ねえヴェルフ、なんかやり過ぎじゃないかな……」

「お前はちゃんと順位をつけるんだぞ」

「順位なんてそんな——」

「さあー、練習代わりに審査対象外のこの方からどうぞ！」

言いかけたベルの言葉を遮り、ヴェルフがノリノリで高座中央から退いた。それを合図と言わんばかりに、気合を入れたミコトが脇幕の岩から中央に堂々とした仕草で歩んでいく。

下半身は紺と白の縦縞模様の木綿のハーフパンツ。上半身には濃紺色の木綿上着。そして腰に磯ナカネの様な布帯を巻き、頭部はこれまた木綿の布で髪を纏めている。

「おお……」

「……………」

審査員であるベルが僅かに反応して声を漏らすのに対し、リユーさんは真剣な表情で高座の奥から堂々とした仕草で歩み出てくるミコトをつぶさに観察していた。

上着はおおきさがあつていないのかぴっちりとしており、腹巻のおかげで大きな胸がより強調されて、端的に言って超ダサイ水着なのにそれなりに着こなしていた。

——水着っていうか、海女の恰好な気はする。確かに海に入るなら間違いではないけど、なんか違うくないか？

「なんとおおおおおっ！ 勝負に関係無いからとこの、ダサダサ水着！ おばあちゃんの筆筒の奥から引っ張り出してきた、これがあ、極東の神秘なのかアア!!」

「おお、なんか変な格好だが極東の民族衣装か」

「そう言われれば確かに、神秘的なモノを感じる……」

解説のヴェルフも熱狂して適当に盛り上げ、ディンケとエリウツドの二人がなるほど、と納得した様に頷いている。

そんな極東の神秘で良いのか……？

「という訳で、解説のリユーさん、レーネさん一言お願いします！」

「ダサイからこそサイズの小さいもので体の線を見せる。男性心理を突いた高等技術と言えます」

——リユースさんがクツソ真面目に解説してるんですが。あの人大丈夫か？ さっきの見張りの際にヘスティア様、リリ、春姫の三連劇喰らって頭のネジ外れちまつてるだろ。誰か叩いて直せ。

「リユースさん詳しいっ！」

「レベル4ですから」

凄く真剣そうな表情で解説を下したリユースさんの真面目な返事にベルが「レベル4って凄い……！」と間違った知識を蓄えるのを見やりつつ、残る解説のレーネに視線を向けた。

ちよつと、ほんのちよびつとだけ常識人枠に居る彼女の解説は気になる。

「んー……それってアレでしょ？ 素体が可愛ければ何着ても似合うって奴だと思うよ。ほら、ドエロい水着をフリユネが着てたら吐き気するじゃん？ 逆に可愛い女神とか女の子がダサイ恰好しても似合うって奴。要するにミコトちゃんが可愛いだけなんじゃない？」

——うわ、一切容赦なくマジレスしやがった。

いや、確かにレーネの言う事は尤もだ。あの恰好をフリユネがしてたら爆笑モノだが、アイズさんがしてたら、美少女がダサイ服を着ているギャップで可愛く見える事だろう。

要するにミコトが可愛いから似合ってるだけ、っていう評価になる訳か。

「これはマジレスだアツ、読めてない、空気を読めてないマジレスッ！ やる気はあるのかレーネ・キュリオ！」

「いや、なんかいきなり叩き起こして解説やれとか言ったそつちが悪いじゃん。なんで私責められてるの？」

「さて、次の審査対象外はこの方アア!!」

レーネの文句をヴェルフがぶった切りやがった。若干目付きが悪くなったレーネが無事な方の手で立ててあつた木切れをゴシヤツと握り潰しているのが見えた。ちよつと、怪我人叩き起こすのはかわいそう過ぎるでしょ、寝かせといてやれよ。機嫌悪すぎて性格変わってるって。

審査が終わったミコトが高座ステージを降りて観客席の方に回ったのを陰

から見てみると、とんつと背中を押された。

「次、副団長行つたら？」

「……サイアさんとファイアさんは？」

「ファイアが尻尾の毛が気になるって、私はファイアと一緒に出たいし」

「ああ、そう言う事ですか」

キューイと一緒に、出るのは良いや。俺一人で行こう。

キューイに合図があるまで待機する様に指示を出してから高座ステージの中央に歩み出る。

こういつた大会の場合コンテストは綺麗な歩き方や見せ方や、仕草というのがあるのは知ってるし。知識として覚えているのでやれなくはない。しかし面倒なので普通に歩み出る。

歩み出た所で、遅れて気付いた。キューイの事で頭がいつぱいだつたが、よくよく考えると俺の右腕うでって結構目立つよな。まあ、もう遅いが。

「あつ……………」

歩み出ると、僅かな沈黙が場に満ちる。

ベルとヴェルフの視線が俺の右腕に集まった。「アポロン・ファミリア」の強襲によって一度は失われ、未完成の『再生薬』で再生した片腕。

赤い水着と白い肌の対比、その中でも右腕の異常な白さは陽光に照らされてさらに強調されてしまう。気にするな、と腕を振って合図をしようとした所で、ヴェルフが声を張り上げた。

「これはア！ 気高く、力強く、それでいて可憐ツ！ 普段の彼女を知っているからこそ、このギャップには抗えないイイツ!! 普段のダボダボダサダサローブ姿からは想像もできない華奢な体躯、小さな背丈も合わさり、抱きしめたいツ！ 抱き締めてあげたい冒険者ランキング堂々の一位イイツ!!」

いつの間にそんなランキングが出来てたんですかね。いや、まあ暗くなりかけた雰囲気を一気に熱狂させようとする努力は認めるし、その辺りに関してはヴェルフの事を好きになれそうだ。

——それはそれとして、普段のローブはダサいつて言い切りや

がったぞアイツ。

「さて、解説のリューさん。どうぞー！」

「普段の恰好があのださいローブである事に加え、活躍やそのサバサバした性格も合わさって気高く、そして力強く、無茶をしがちな印象が強いです。それ故に忘れがちかもしれないかもしれませんが、ミアさんは十二分に美少女と言える人物。小柄な体軀も合わさって『守ってあげたい』という普段からは考えられない程に庇護欲を誘っています。これはレベルが高いですね」

いや、リューさんの頭のぶつ飛び具合に比べたら全然ですよ。

本当、糞真面目な解説してくれちゃってまあ……若干疲れるわ。

「なるほどなるほど、それではお次に、解説のレーネさん！」

「えー……そうだね。何て言うか、今までのミアの印象って頼りになりそうな雰囲気あったけど、この格好見ると華奢過ぎて『頼って大丈夫？』って心配になるかなあ」

「ああ、確かに。それは俺も思った」

レーネの率直で真剣な返答にヴェルフが腕組をして頷きだす。

というか観客席に座っているベルやディンケ達も全員が大いに同意だと言わんばかりに首を縦に振ってるんじゃないか。そんなに俺が頼りないか！

……いや、まあ、原作のミアちゃんって確か、部下から密かに性格面で頼りになる隊長だけど小っちゃくて可愛いから色んな衣装を着せ替えさせてみたい。って言われてたしなあ。

……俺も着せ替え人形にしたい。とか思われてんのだろうか？
嫌なんだが。

「はあ……まあ良いでしょう」

暗い雰囲気になるのを華麗に回避し、場を盛り上げてみせたヴェルフとリューさんに感謝はしてやる。だがな、普段着のローブをダサイと言った事だけは忘れんからな。

壇上から下りつつ、ベルから少し離れた席に腰掛ける。ベルがちらりと此方を見ていたので軽く手を振っていると、ヴェルフが声を張り上げた。

「さあーで、お次はこの方、どうぞ！」

ヴェルフの合図と共に、胸を張つてすらりと長い足を見せ付けながらファイアが高座^{ステージ}へと姿を現す。それに続いて、きやつきやと楽し気なサイアも出てきてファイアの腕を抱き寄せて二人で前へと出てきた。

ファイアは群青色のビキニを身に着けており、欠けた片耳や異常に白い両足を恥じるでもなく堂々と晒している。サイアの方は異常な白さの両腕に視線がいくが……なんというか、それ以外に変わりがない。

いや、水着は着ているのだが、普段から布面積が少ないアマゾネスなのでビキニを着てもなんか変わった気がしないのだ。

「これは、ファイア選手、サイア選手、同時入場だ！」

ヴェルフが若干戸惑いつつも即座に声を張り上げて場を取り繕う。

「荒々しくも力強い狼^{ウエアウルフ}、人の野性味^{ワイルド}さを前面に押し出しつつも、腰の曲線は美しく女性らしさも伴う。そしてサイアは……えっと、普段と変わらなくないか？」

駄目みたいですな。

流石のヴェルフもサイアの恰好が普段のアマゾネスの恰好とそう違いが無い事に気付いたのだろう。一応、腰巻やアクセサリー等の装飾品が少ないことが挙げられるが、それぐらいだしなあ。

「まずは解説のリューさん、お願いします」

「ふむ、なるほど。ファイアさんは獣人らしい荒々しき、それでいて女性らしい肢体の曲線美。獣人でありながら男を獣に変える才能の持ち主でしょう。そしてサイアさんはその恥ずべき所が無いと言わんばかりの普段通りの態度。種族故の性格ではありませんが、その普段通りの態度と水着が組み合わさり相乗効果が出ていますね」

「リューさん、ちよつと無理してませんか？」

「全然問題ありません。レベル4なので」

リューさんの頭が湯だつてる気がします。大丈夫？

「さあて、続いては解説のレーネさん、どうぞ！」

「んー、そうだね。まずファイア・クーガの方はなるほど、引き締まったお尻とか腰回りは確かに脚力に優れる狼^{ウエアウルフ}、人らしい引き締まり方をし

てると思う。一時期は両足欠損で冒険者人生を閉じたって言われてたからもつと崩れてるかと思っただけ、足が無くなってる間も欠かさずに鍛錬を続けてきた証拠だと思うよ。その引き締まり方は数週間で取り戻せる訳ないだろうし」

——どうしよう、レーネのマジレスが本当にマジレス過ぎて皆が黙り込んでしまった。

言われた本人のファイアも一瞬だけぼかんとした後、ほんのりと頬を染めて照れた様に尻尾を丸めてサイアの後ろに隠れてしまった。

「それでサイア・カルミの方は逆かな。上半身は少し衰えが見えるね。だけど腰回りの引き締まり方が尋常じゃない。腕が無いなら足でっ感じだと思っただけ、両腕を無くしてから足技を主軸メインに切り替えてでも冒険者続けようと鍛錬してたんじゃないかな？」

「わあ、凄い。わかるんだね！ どっちも正解！」

ぱちんつ、と手を叩いて喜ぶサイアが背後に隠れて照れるファイアを引っ張って壇上から下りてくる。どうやらレーネの見立ては正解らしい。ファイアの方は足が無くても足に拘り、サイアの方は腕が無いなら足で、と自身の目標を持ってはいた様子だ。

ある意味、彼女の観察眼はかなり頼りになりそうだ。

「レーネさん凄いですね！」

「え？ あ、うん。ありがと」

称賛の言葉をベルに送られ、ぽりぽりと頬を掻いて答えるレーネを見て、リユースさんがほんのりと拳を握り締めて呟く。

「レベル4の私が負けた……？ ……やりますね、レーネ・キュリオ」

何を張り合ってるんですか、リユースさん。

第一九〇話

晴れ渡った爽快な青空に鳶の鳴き声が響く。

きやつきやとはしやぐサイアを他所に、解説席に座ったりユーさんが横に座るレーネに対抗心を燃やしているのを、レーネ本人は困った様に頬を掻いて視線を逸らしていた。

そんなやり取りを他所に、司会者のヴェルフがはりきった様子で声高らかに宣言する。

「さあ、ここからはいよいよ、審査の対象です」

順番はヘステイア様、リリ、春姫の順か。最後の一人、というか一匹は忘れたい気もするが……。

若干、この後の問題に頭を悩ませていたら、ふと気づいた。ヘステイア様って水着投げ捨ててなかったか？ ……何着てくる気なんだろうか。

「最初はこの方、張り切ってどうぞ！」

バナナをマイクの様を持ったヴェルフがすつと横に逸れる。

それを合図とし、高座中央ステージに女神が躍り出る。

「ふっ……」

「……え？」

「水着じゃない……」

自信満々に胸を張り、顎を引いて不敵な笑みを浮かべたヘステイア様を見たベルが驚愕し、リユーさんがあたかも今知ったかのように驚く。

「……痴女じゃない？」

「出ましたーッッ！ これぞ神っ！ まさに神っ！！ 地上の楽園ユージン島に実ったたわわな我儘果実だあーッ！！」

その横、レーネが無遠慮に指摘の言葉を零す。が、その言葉はヴェルフによって掻き消された。

ヴェルフの声を皮切りに、ヘステイア様が真っ直ぐ高座ステージを進んでくる。陽光を浴びて白い肌が目に眩しく、その肌を際どく隠すのはなんら

かの植物の葉と蔓を絡めて作成されたらしい、天然素材の水着、の様なモノ……。

腰回りに巻かれた大きな葉っぱのスカートには元の水着の腰巻を利用しているみたいだが、上半身の胸を隠すのは天然素材の葉っぱと蔓のみ。いつもの胸の下を通す紐代わりの蔓。こういう言い方はよくないが、際ど過ぎる気はする。

「どうだいどうだい、ベル君」

ステージ 高座前方ギリギリに立ったヘステイア様はおもむろに腰巻の紐を緩め始める。

まさか、と顔を引き攣らせていると、女神は臆する事なく腰巻として巻いていた布地を取り払った。

「遠慮なく感想を言ってくれていいんだよ」

腰巻を外した下には、小さくギリギリまで面積を減らした攻め過ぎな紐ビキニが……葉っぱで作られている様だが、ふとした拍子に外れそうなんだけど。

感想を聞かれたベルの方に視線をやると、頬を赤らめながらもしつかりと見やつて呟きを零した。

「す、素敵だと、思います……」

「おおっと、これは初っ端で決まりかアーツ！ 解説のお二方、どうでしょう！」

司会進行のヴェルフの言葉にリユーさんの目が一瞬だけレーネを捉えてきらりと光り、レーネの方は半眼で深い溜息を零した。いや、レーネの感想はさっきの『痴女じゃない？』で終わってるし聞かないでやってやれよ。

「体と胸のそぐわなさが暴力的ですね。水着代わりの葉っぱも派手過ぎず、下品過ぎず。私も着てみたいと思わせる完成度ですね」

「え？」

——リユーさん、今最後になんて言った？

『私も着てみたいと思わせる完成度』って、あの人本当に大丈夫か？

クールな印象が今消し飛んだ気がするんだが。いや、実際、体の起伏が激し過ぎるヘステイア様よりはリユーさんの様なスレンダーな

方が似合いそうな水着……水着？ ではあるが。エルフ的にそれはアウトでは？

「ねえ、これ私も何か言わなきゃだめ？」

「当然、何のために解説席に座ってるんだ」

「いや、座らされたんだけど……はあ、まあそうだね。うーん……まあ女神様だし。プロボーション体付きとか顔立ちとかはよほどの神じゃない限りは綺麗なものは当然として、水着の着こなしは……正直、痴女じゃないの？」

とは思うよ。ただ、神が着る分には良いと思う。普通の娘が着たらただの痴女水着でも、神が着れば立派な着ファッションこなしになるしね」

うわあ、凄いマジレスで辛辣な意見が飛び出してちよつとびつくり。いや、ヘステイア様だからこそ似合う、と言えば褒めてるんだろうけど……。

「……痴女？ 私が？」

横に居たりユースさんが驚愕の表情でレーネを見ていた。うん、横で『着てみたいと思わせる』とか言ってる解説者エルフが居る横で、普段着が痴女っぽいアマゾネスのレーネが『痴女水着』と断言すればね？

もうリユースさんの表情が凍り付いて硬直してんだけど、あの人大丈夫か？ マジで。

「ふっふっふー、これでボクが一番なのは确实だな！ さあ、次の子にいつてくれ、ヴェルフ君」

「お任せくださいヘステイア様。っと、席はそちらにありますので、どうぞ」

ヘステイア様が高座ステージからひよいつと飛び降りると、とてとてーと駆けてきてミコトの横に座った。飛び下りる時、駆ける時、そして座った時。その胸にぶら下がる脂肪が凄まじい存在感を放ち、ベルの視線を完全に奪っていた。

確かに、吸引力だけは一番だとは思うが……。

呆れの視線をヘステイア様に向けている間にも、ヴェルフが次のリを呼ぶ。

「さあて、続いてはこの方、どうぞっ」

掛け声と共に岩陰から橙色のワンピース水着を着こなしたりりが、

ピンク色の大きな目のバランスボールを抱えて飛び出して来る。そのままヘステイア様のような余裕のある仕草をとるでもなく、一気にしてしと高座ステージ前方まで駆けてくると、ボールを置いた。

「おお……？」

そのボールに背を寄せ、上体を大きく逸らす。何処かグラビアアイドルのイメージ映像等でありがちな姿勢をとった。

ボールの上で器用にバランスをとるその姿勢は、上体を大きく反らす事で胸が強調され、より鮮明にその胸の柔らかさなどを視覚的に伝える事が出来る技法だ。

多分だが、着替えの時に持っていた大荷物の中に入っていたのだろう。

——— いったい、リリがいつ、どこでこんな技法を覚えたのかはもう突っ込む気にもなれん。

「な、なんとおっツ！ これは水着大会定番のアレだあ！！ わざとらしい小道具まで持ち込み、流石は策士、用意周到ツ！！ 解説のお二方！」

「なんとという一定数の需要でしょう。ツルペタ路線なのに、ペタでない所は倒錯の妙と言えます」

「小人族パルウムっていう利点アドバンテージにも欠点ハンデにもなりそうな部分だけど、それを主にするのは賭けが強い気がするよねえ。まあ、団長くんは反応してるっぽいから良いんじゃない？」

リユースさんが若干壊れ気味な気がしていたが、死んだ目でそれっぽい事をそれっぽく言って、それっぽく振る舞い始めたレーネの方も諦めたのだろう。もう少し粘って欲しかった気もするが。

「ベル様」

ボールを横に転がしたりリリが高座ステージを飛び下り、わざわざ審査席のベルの前にまで歩み寄ると、どこからか取り出したペロペロキャンディキャンディを取り出し、舌先で舐め回し始めた。

艶めかしく、何処か卑猥さを感じさせる舌先の動きで飴を舐める姿を直前で見せつけられたベルが一気に茹茹で上がった様に真っ赤になる。

何処か荒い息遣いになったベルを他所に、リリは流し目でベルを見

やるとチロリと舌を見せてからヘステイア様の隣までとことこと駆けっていく。

皆の視線が若干興奮した様子のベルに集まるが、一人レーネだけは呆れた様子で肩を竦めていた。

「ふふん」

「いつの間にそんなものを……」

「そなえあればなんとやら、です」

何事も無かったかのようにヘステイア様の横に座ったりりが、そのまま飽を舐め続けているのをヘステイア様が半眼で見下ろす。

「さあ、いよいよ、最後の出場者です」

今までと打って変わって、神妙な面持ちのヴェルフが高座ステージの奥へ声をかけた。怖がらせない様にといい気遣いの積りだろうか。

自信満々のヘステイア様、小細工を弄したりりに続いて出てくるのは春姫だ。

「……………」

何を言うでもなく、両手で胸を隠し、尻尾で股を隠した春姫がおずとおずと出てくる。

着ているのはなんの変哲もない白い無地の水着。だが着た本人は恥ずかしそうに身を縮こまらせながら恥ずかしそうに高座ステージを進んでくる。

特に何かするでもなく、ただ歩んでくるだけではあるが……なんとどうか春姫が持つ雰囲気雰囲気の所為だろうか。どことなく艶っぽく見える気がする。

「おお……」

その姿にはベルも僅かに身を乗り出すぐらいの反応を見せた。今までの恥ずかしがるだけの様子よりはよほど積極的に見える当たり、ベルの好みは清楚系なのだろう。

痴女系ヘステイア様、策士系リリ……そして清楚系……清楚系？

いや、春姫って妄想系では？

「おおっとお!? これは却って新鮮!」

ヴェルフが一瞬驚いた後に反応を見せるが、これは新鮮、というよ

りは……ただ他の面々が濃すぎただけな気もするが。

「何の変哲もない水着で、ごく普通に登場だあ〜ツ!!」

「清楚ですつ、清楚の塊ですつ。友達が勝手に応募しちゃったやつです!」

「恥ずかしいなら無理しなきゃいいのに」

思わず、と言った様子でリユーさんが声を上げる横で、レーネは若干冷めた様子で春姫を見ていた。

おずおずと高座ステージの前方にまで歩み出てきた春姫は、それでも体を見せようとはせずに腕と尻尾で隠す様に縮こまったまま動きを止めた。

なんらかの行動アクションや強調アピールをするでもない。清楚というか、恥ずかしがりやの反応だ。

「隠されれば隠される程、エロが強調されています。これにはベルも驚き……」

「目が釘付けでーすつ! まさかのこれで決まりかアーツ!?」

ヴェルフの言葉を聞いて、皆の視線がベルに集まった。

真つ赤な顔で春姫に視線を釘付けにされたベルの姿が其処にあった。

『異議有り!!』

次の瞬間、ヘステイア様とリリが同時にベルの視界を塞ぐ様に前に飛び出して騒ぎ出した。

「あざと過ぎますーツ!!」「狙い過ぎだよ春姫君ーツ!!」

今日の『お前が言うな』は何度目ですか……? ちよつと自分の事を棚に上げすぎだと思えます。特にリリ、キミもあざとい事していませんか。

まあ、口にはしないけど。巻き込まれたく無いし。

騒ぎ立てた二人はそのまま高座ステージの端にしがみ付いて春姫を見上げて文句を零し始めた。

「ど、何処がいけなかったのでしょうか……」

「その態度が既にあざといですーツ!」

「そ、そんなつもりは……」

困った様におろおろしだす春姫に二人がかりでケチつけていくへステイア様&リリ。ちよつとイジメみたいになってるからやめてあげた方が良いと思うんだが……。

「ち、違います！ 春姫殿はそこまで天然ド淫乱ではありませんッ!!」
「何処がですかっ！」 「存在そのものが淫乱じゃないかっ！」

「そ、そんなあ……」

ミコトの援護射撃が春姫の背中を貫いた気がするんですが……はあ。

暫くは騒ぎは収まらんだろうなあ、と溜息を零しているとレーネの呆れた様な呟きが響く。

「処女の癖に無理し過ぎだつての……はあ〜」

「……んあ？ あの子つてしよう……あー、【イシユタル・ファミリア】だったんだろ？ それなのに、その、経験無しなのか？」

後ろで聞いていたデインケが言葉を濁してレーネに問いかけると、リユーさんも気になったのか彼女の話に耳を傾け始めた。

「というか俺も少し気にはなるんだが。娼婦やってた春姫が処女つてのはどうなん？」

「ん、確かに春姫は娼婦だったけど、あの子はいわゆる高級娼館の中でもとびつきりの高額の娼婦だったんだよね。本当にごく一部、お金を奮発できる人しか入れない高級な所の子ね」

「はあ……?」

「当たり前だけど、娼婦つて商品だから傷付けたりされたら【イシユタル・ファミリア】が動く訳よ。まあ、春姫の場合はアイシヤが主に動いてたかな」

男性客を部屋に招き入れ、服を脱がせている途中で鎖骨を見て気絶する生娘。

そのまま気絶した春姫を相手に事に及ぼうとする者も居ただろうに、と思ったが少し考えてみるとそれは無いな、と思う。

「というか、いきなり娼婦が気絶しましたーってなったらビビるだろ。ましてや【イシユタル・ファミリア】は都市有数の大派閥。下手に問題起トラブルこした日には報復がどうなるやら……。」

「まあ、基本的に高級娼婦相手に下手な事するとヒキガエルの餌にされてたしねー」

「……待つてください。それはどういう意味ですか」

「え？　だから、娼婦相手に乱暴な事したりした客は、縛り上げてフリユネの所に連れて行くんだよ」

「……………」

え？　娼婦に乱暴した男性客ってフリユネの餌にされてたん？

それは……客も下手な事出来ないわなあ。というか、それとは別に気になったんだが。

「春姫自身は自分が処女だと思っていけないみたいですけど、どうしてですか？」

「ん？　ああ、客がお金置いて行つてたからじゃない？」

気絶した春姫を見た客は、大変な事を起こしたと焦り慌てて金だけ置いて逃げ帰る事が多かったらしい。まあ、客側からすれば金は置いてくからヒキガエルの餌はやめてくれ、って感じではあるんだろうが……。

「春姫は楽で良いよねえ。男の子連れ込んで気絶すればお金貰えるし。私なんか「ファミリア」の納金でヒイヒイ言ってたのに」

半ば死んだ目をしたレーネの言葉に、デインケやイリス、リユースさんが首を傾げた。

「いくらあの派閥とはいえ、そこまで厳しい金額じゃないだろ？　それにL.V.3ならダンジョンで稼げるだろうし」

「無理だよ。私達、えっと他派閥から強制的に改宗させられた子達っていうのは、下手に能力を上げられて反抗されても面倒だからって事でダンジョンに行くの禁止されてたんだよね」

「あ……………」

下手に力を付けて反抗されても面倒。つて、まあ納得は出来る。

加えて、汚れ仕事を引き受けさせられている影響もあつて、常に監視下におかれており下手な行動も出来ない。と……つまりダンジョンで稼ぐのは無理だった訳か。

「じゃあ、男と寝ればよかつたんじゃない？　稼げるんでしょ？」

「私も最初はそうやって稼ごうと思ったんだけどねえ？ 私達が捕まえた客って必ずフリユネの所に連れて行かなきゃいけないくて、摘まみ食いされて壊れちゃうんだよねえ」

「……………」

娼婦として真つ当に稼ごうにも、他派閥から引き入れられた娘達と言う事でフリユネの嫌がらせ対象として命令がいくつか下されていた、と。

一つ、男を捕まえたら、必ずフリユネの元へ連れて行くこと。

二つ、フリユネが味見をした客しかとってはいけないこと。

……もうこの二つの時点で察したわ。客なんかとれねえよ。

「え？ じゃあどうしてたんだよ」

冒険者としてダンジョンで稼ぐ事も出来ない。娼婦として男性客もとれない。他に稼ぐ方法はいくらでもあるだろうが、基本的に「ファミリア」の領域テリトリーからも出れない、と。

それなのに納金ノルマが定められており、常々苦勞していたらしい。酷いな。

「うん、だから専用の娼婦として客をとってたよ」

「……………」客は【男殺しアンドロクトノス】が味見しちゃうから駄目って言ってなかった？」

「ああ、男はね、流石に女の子は味見しないし」

——はあ？

「意外と皆知らないかもだけど、結構女の子も娼婦を買いに来てんだよね。そういった子達を対象ターゲットにすれば、一つ目の命令の穴を突けるんだよね」

つまり…………レーネってもしかしてなんだが…………？

「女性専門で客をとる娼婦だった、と？」

「うん」

恐る恐る質問したディンケが気まずげに視線を逸らし、レーネの隣に座っていたリユーさんがすすーっと彼女から距離をとった。

その様子を見たレーネが溜息交じりに弁明を述べる。

「はあ…………別に女の子が好きって訳じゃないよ」

あ、ああ……あくまで『客』としてとってただけで、同性愛者^{レズビアン}って訳ではないのか。うん、ほんのりと彼女から離れた分だけ元の距離に戻しておく。

………というか、ふと気づいたんだが、俺って初めて歓楽街に行った時、彼女に声かけられてるよな？

「……あの、レーネさん」

「どしたの、そんなに改まって」

「いや、一つ気になった、というか……レーネさん、歓楽街で私に声をかけてきたのって」

「ん？ あー、あの時かあ」

少し考え込んだ後、ぽんと手の平を打った彼女は何処か懐かし気に目を細めて呟いた。

「いやあ、あの日は情報屋の女神様が客として来てるって聞いて慌てて行ったんだけど他の娘にとられちゃってね。他に客いないかなあ〜って探してたら「リトル・ルーキー」を目当てに他の娼婦がどんどんいなくなつてて、フリユネの目もないからいけるかなあとか思ってたんだけどね」

でも、命令には背けないから結局男の子じゃなくて女の子を客としてとらなくてはいけない。と考えながらうろついていると、慌てた様子で駆けていく小さく幼い少女の姿。

歓楽街に子供なんか来るはずもなし。それで小人族だろうな、と当たりをつけ――。

「客としてどうかな〜って近づいたのはあるよね」

ああ、予想通りだったよ。あの日、あのまま俺を助ける序に客として何処かの部屋に連れ込んで色々サービスしようとしていたらしい。

「興味あったら声かけてくれれば相手してあげるけど」

「遠慮しときます」

止めてくれ。娼婦抱くのも、娼婦に抱かれるのも御免被る。

きつぱりと断ると、レーネは気にした様子もなく肩を竦めた。

「しかし、歓楽街で、ですか……ミリアさん、欲求不満なのですか？」

「リユーさん、誤解を生む発言は止めてくれませんかね」

欲求不満どころか、欲求不明だよ。自分でもその辺りよくわかんな
いから放置してるとてのに。

リユーさんの惚けた様な発言を捌いていると、ヘステイア様達の話
し合いが一通り終わったのか、声がかかった。

「よしベル君、そろそろ決めたらどうだい？」

「え、あ……あの……」

ベルの前にヘステイア様、リリ、春姫の三人が並び立って選択を迫
りだす。

「羨ましいが、あの場に立ちたくないなあ」

「誰か一人を選べば角が立ち、三人全員選べば地獄が待っている」

「どっちも地獄じゃないですか、それ……？」

デインケ、エリウッド、メルヴィスの三人の呆れた様な傍観者の声
が響く中、ヘステイア様達はすいすい、とベルに迫っていく。

「優勝はこのボクなんだろう？」

「リリですよ。ベル様」

「もしよければ私を」

「いいや、ボクだ！」

「あ、私でも良いよー！」

「サイア、止めとけ火傷すんぞ」

燃え滾る溶岩に飛び込む様にサイアが手を上げるのをファイアがそ
れとなく止めるさ中も、ヘステイア様達がじりじりとベルに距離を詰
めていく。

「ほおらベル君、ボクが一番だろ」

「リリを選んでいただければあーんな事やこーんな事だつて」

「わ、私わたくしも、せ、先輩方に教えて頂いたご奉仕を……」

どんどん過激化エスカレートしていく強調アピールにベルが完全に引き気味となってい
るのだが。

「あー、えっと、じゃあ、皆素敵でしたから——」

「こんな時、皆が一番です。なんて優柔不断な事を言うとしらけます
よ」

「うぐっ……」

優柔不断な回答で誤魔化そうとしたベルにリュースさんがしれつと耳打ちをかます。

至極真つ当な事を言っではいるのだが、優柔不断な少年の背中をぶつ刺す真似は止めた方が良いと思うんだがね。もしもベルが返答に困るなら俺とかファイアとかサイアでも良いんだぞ。——俺は無いな。

「さあ、いよいよ運命の瞬間です。今日一日、ベルを独占できるのは一体誰なのかあ〜ツ!!」

追い詰められたベルを更に崖っぷちから突き落とさんとヴェルフが場を盛り上げ始めた所で、悲鳴が響いた。

「キュツ、キュイイイイイイイイイイイイイイイイツ!!」

甲高く響くキュイイの悲鳴に場が凍り付く。

響いた場所は高座の脇幕ステーツの奥。大会参加者の待機場所から聞こえた。

「今のはっ」

「誰の声？ 全員この場に居るよね」

一瞬の内に立ち上がったリュースさんが木刀を構え、レーネが何処から取り出した鞭を揺らす。

遅れて立ち上がるうとした所で、岩陰からキュイイが飛び出してくる。

乱れた、というか上半身の水着が外れかけた状態のまま、涙目で助けを求める姿に警戒していたリュースさんとレーネの二人が目を真ん丸に見開いて硬直する。

他の面々も痴態を晒しながら現れたキュイイの姿に唾然として反応は遅れた。

「キュ、キュイキュイキュ——キュギユツ!!」

飛び出し、此方に助けを求める様に手を差し出していたキュイイの体が砲弾の様に吹き飛ぶ。というか俺達の頭を飛び越えてぶっ飛んでいった。

何事だよ。いや、本当に何があったし。

ズンツ、ゴロゴロ、と砂浜に着弾して砂埃が立ち昇った。

「な、今の……」

「待って、今の変な翼とか尻尾とか、いやそれより……でも、なんで？」
困惑して目を白黒させる面々。ついでに俺も状況が理解できない。
意味がわからない。

もしかや高座ステージの方から敵が近づいてきているのか、と森の奥を見やる
が何も来ない。リユースさんやレーネも警戒しながら森の奥を見据え
ていると——背後の砂浜から「そごそ」と音が響く。

キューイが起き上がった音かと思えば、キューイの鳴き声が響く。
「キュイツ！ キュツ、キュイキュイツ！」

はなせ！ た、助けてえ!? という情けない叫びに思わず振り返
る。

立ち昇っていた砂煙が徐々に晴れていくさ中、砂煙の向こう側から
声が響く。

「かわいいデース！ この翼はねはどう動いてるですカー！」

「キュツ、キュイイイツ！」

——いや、声には聞き覚えがあるような無いような。

イントネーション
語 調に違和感を覚えるが、声そのものは聞いた事がある様なモノ
だ。というか、俺の耳がおかしくなっていなければ、アイズ・ヴァレ
ンシユタインの声の様な……？

「あれ、この声……」

「うん？ 聞いた事ある声だが……？」

ベルとファイアが眉を顰める中、砂煙が晴れた先に居たのは……。

「キュイツ！」

「オーウ、暴れないでくだサーイ！」

金髪竜人幼女を砂浜に押し倒している【剣姫】アイズ・ヴァレンシユ
タインの姿があつた。

上半身はチェストプレートのみ。下半身は一応水着のようだが
……頭に不自然な丸い半球状のモノが乗せてある。そんな恰好のアイ
ズさんが素つ頓狂な語イントネーション 調と、似合わない笑顔でキューイの体をペ
たペたと触って弄繰り回している光景はとてもではないが信じられ

ない。

「アイズさん？」

「な・な・なんとオ〜ツ!! 優勝は伏兵、【剣姫】イイイイイツ!!」
『『『エエツ!』』』

ベルがアイズさんの名を呟くと同時、思考停止していたヴェルフが即座に反応して叫び出した。

それにつられてヘスティア様達が驚愕して活動を再開する。というか、あまりにも唐突な出来事過ぎて頭が回ってないだろ、全員。

「意外な人物の名が飛び出したアー!!」

「こんなの無効だよ! アレ水着じゃないしー!」

「でも、ベルが決めてますし」

駄目だ、ヘスティア様達が役に立たない。俺もどう動くべきか迷っている、ベルが駆け足でアイズさんとキューイの元へ近こうとして

――動きを止めた。

暴れ過ぎて上半身の水着が吹っ飛んだキューイと、暴れるキューイを抑え込もうとして上半身を守っていたチエストプレートが吹き飛んで、二人とも上半身裸でいちやこらしているのだ。其処にベルが足を踏み入れるのは厳しいだろう。

というが大慌てで二人に背を向けて鼻を抑えていた。

「……えつと、リユーさん、レーネさん。あの竜の娘については後で一杯説明しますんで、少し待ってくださいませんか」

「……………え、ええ構いません。というかコレは夢ではないのでしゅうか?」

「うーうー……ほっぺ抓ったら凄く痛いんだけど。最近の夢って痛覚じゃ判断できないんだね」

ああ、戦力になりそうなりユーさんはもうだめだし、常識人枠だったレーネも完全に駄目だこれ。

仕方が無いので代表して二人の下へ近づいていく。その途中、落ちていたキューイの上半身用の水着を拾いつつ、ベルの横を通り過ぎて二人の間近に近づいた。

「えつと、こんにははく……っ!」

「……………」

「キュイツ!!」

ぴたりと動きを止めてこちらを真ん丸な瞳で此方を見上げた。その下で抑え込まれているキューイが助けて、と呟くのを聞き流している——。

「ハーイツ、私の名前はアイズ・ヴァレンシユタイン、デースツ！ テヘツ」

にへらとアイズさんが破顔して似合わない満面の笑みを浮かべ、どこかズレた語^{イントネーション}調で挨拶をかましてきた。

なんといいいますか、此処まで似合わない笑顔というのも珍しいというかなんというか……。

「あー、えつと、ハーイ、ミリア・ノースリス……デス」

「ミリアって言うのデスカ！ この子と似ていますネー！」

「キュツ、キュツ！」

無遠慮にベタバタとキューイの体を触っていき、キューイが身を振って逃げようとするが第一級冒険者パワーの前に無力。抜け出す事も出来ずに藻掻く事しかできない。

「あー、まあ、その……………」

ナニコレ、ねえナニコレ？

アイズさんだよね？ 少なくとも容姿はアイズさんなんだけど。

というか胸が丸出しなんだけど。キューイもアイズさんも、どっちも丸出しポロリなんだけど。何？ 水着大会の『くポロリもあるよ

く』ってコレの事？

……頭痛い。お腹も痛くなってきた。ナニコレ、バカンスじゃねえの？ 何が起きてんの？

「……………アイズさん、とりあえず上、隠してください。後、その子放してやってくれませんか」

後、キューイの事をリユーさんとレーネにどう話そうかずっと模擬訓練^{シミュレーション}してた俺の苦勞返して！

第一九一話

眩しい日差しが降り注ぐ砂浜。真っ白な砂地は日の光を照り返して輝いて見える。押し寄せては引いていく細波の音色は心地よく、青く透き通った海は何処までも続いていき、視線を上げていけば果てに空と海の境界が見て取れる。

その風景に混じる異物の存在さえなければ、いつまでも見ていられるその光景を見やる。

浅瀬となっっている砂地に居たナマコを木の棒で突きまわしているアイズ・ヴァレンシユタインと、その後ろを付いて回るベルの姿があった。

「——簡単な検査をしましたが、【剣姫】は自分の名前以外、一切の記憶を失っている様子です」

「記憶喪失って事か……」

「あの見るからに似合わない笑顔もその所為で……」

野営地として設営した簡易天幕の元に集まって額を突き合わせて全員で此度の異常事態についての話し合いを行っていた。

「きつと何かの最中に頭を打ったのでしょうか。あの瘤が証拠です」

「今時、あんなたん瘤って出来るんだな」

「流石はユージン島ですね」

リユーさんが指差したのはアイズさんの頭の上にある白い瘤の様なモノ。ヴェルフが真顔で突っ込みを入れているが、そもそもあれは『たん瘤』と称しているのだろうか？　そして春姫は何が『流石はユージン島』なのかね。

普通に頭が痛い状況だ。明確な原因が不明なのだ。

ふとベルとアイズさんの方に視線を向けると、アイズさんがベルに木の枝に突き刺したナマコを差し出していた。

「見てくだサイ。ナマコー」

「うげっ……」

「あははー、キモイデース！」

ぽいつ、とナマコを放り出したアイズさんがおもむろに立ち上がる

と、ベルの手を取って引つ張っていく。

「キミも一緒にやりましょー！」

「えっ、あの、アイズさん生き物で遊ぶのは……」

ふと、アイズさんの上半身を守っていたチェストプレートがポロリと落ちる。ぱしゃんと水飛沫を立てて落ちたそれをボケつと見るアイズさんと、完全に表情を強張らせて目の前で揺れる無防備な胸を見たベルが無言で落ちたソレを拾い上げてアイズさんを見ない様にながら差し出していた。

「エルフ君、なんとかならないのかい？」

「早く【剣姫】様の記憶を取り戻さないと【ファミリア】の力関係にも影響してくるでしょう」

「治す方法はただ一つ。例の幻の薬草『ナンニデーモ菊』しかありません。あれさえあればなんでも治るはずですよ」

真顔のリューさんの言葉にヴェルフとりりが若干疑わし気な表情を浮かべる。

ヘステイア様は考え込み始め、レーネが大きく首を傾げていた。

「んー？ 『ナンニデーモ菊』……？ どこかで聞いた気が……なんだっけなあ」

「とりあえず、【剣姫】がこの島に居るという事は【ロキ・ファミリア】の本隊もこの島に居ると判断しても良いと思います」

「確かに、いくら第一級冒険者でも単独で無人島に来るのは考え辛いです」

島の地図を取り出して皆に見せる。

それなりの大きさのこの島には、複数の上陸地点が存在していた。

一つは俺達【ヘステイア・ファミリア】が上陸した砂浜。もう一つは島の反対側、森を抜けた先にある場所。他の個所は切り立った崖や岩場等で上陸には適さない。

「二応、可能性としてはこのもう一つの上陸地点に【ロキ・ファミリア】が居る可能性はゼロじゃないかと」

「ふうむ、確かに。でしたら班をいくつかに分けるのはどうでしょう？」

一つはこの野営地にて待機。

一つは『ナンニデーモ菊』の搜索。

一つは島の反対側の調査。

「ふうむ、ならL.V. 1の非戦闘員はこの場待機が良いだろうな」

「リリと春姫様、それにヘスティア様ですか。後はレーネ様も待機で
すかね」

「搜索隊はエルフ君を筆頭にベル君とヴェルフ君、ミコト君、サイア君
で」

「じゃあ調査の方には私と、デインケさん、エリウッドさん、メルヴィ
スさん、フィアさん、イリスさんの六人で」

キューイは待機組に編成。異常発生時には即座に声をかけてくれ。
アイズさんの餌食にならない様に隠れてるのは別に構わんから。

「キューイ……」

草臥れてしなびた様子の子のキューイがどんよりとした空気を纏って
簡易天幕の隅っこで膝を抱えながら返事を返す。

リユースさんとレーネの二人には一応、納得はして貰ったので大丈夫
だろう。

「では、各自単独行動は絶対に避けて二人一組で行動する事を念頭に
置く事」

こういった場合の単独行動はただのフラグだからな。

水着のまま森に入るのは流石に危ないのでいつものローブに着替
え直してからの出発。

此度の目的は島の反対側の上陸地点の確認。少なくとも、「ロキ・
ファミリア」か、彼の派閥に依頼を出して「剣姫」が派遣される程度
に親しい派閥が居るはずだ。

先頭には鉈を持ったデインケ。その後ろにメルヴィス、俺、フィア、
エリウッド、イリスと続いている。

デインケが草木に埋もれかけた獣道を鉈で切り開き、それに続いて
いた。

「それにしてもそこらに生えてる草木の殆どが薬草とはな」

「これも、これも、こつちのこれもそうですね。まさに『薬草の宝庫』という言葉に偽り無しです」

「ふうん、どれも同じ雑草にしか見えないけどねえ」

感心した様なエリウッドとメルヴィスの言葉に、イリスさんが肩を竦めて最後尾で呟く。

まあ、知識の無い者からすれば薬草も雑草も同じモノだろう。物の価値というのは総じてその物への知識と理解が無ければ生じない代物だから仕方が無いだろう。

「んで、後どれぐらいかかりそうだ？」

「島の中央部の山の麓を大回りしてるので、そうですね……後四半刻程でしょうか」

地図上では島の反対側まで冒険者の足であればほぼ半刻程度で着くぐらいの距離なのだが、島の中央部に山があるのでそのまま突っ切るのは流石に不可能。そのため、山の麓に沿って進んでいるが、今の所は順調だ。

「そういえば、さつきから変に曲がりくねった道を進んでないか？」

何かあるのか？」

「あー、なんかギルド指定の進入禁止区がいくつかあるんですよ。要するに採取禁止期間区域ですね」

常に同じところの薬草ばかりとっていけば、そこだけ植生が変わってしまう。だからこそ、一定期間毎に区域別に分けて採取許可を出す事でこの島全体の植生に悪影響が出ない様にかなり気を使っているらしい。

そのためか、島の中央部には数多くの進入禁止区が存在する。

ぶつちやけ、地図をしっかりと確認しておかないと知らぬうちに迷い込みそうなのが困りどころだ。

「緊急時なんだし突っ切っちゃ不味いのか？」

「今【ヘスティア・ファミリア】はギルドから睨まれてますからね。理由があつたとしても文句を言われる可能性はゼロじゃないんで極力、違反になりかねない行為は避けたいんですよ」

本当に面倒な事だ。ギルドが口うるさくさえなければ、禁止区を突っ切っても真つ直ぐ進んでやるのに。

とはいえ、文句を言っても始まらない。禁止区を避ける程度ならば遅れは多く見積もっても二、三十分で済むだろうし。

鉋で枝草を切り払う音を聞きながら、時折方向指示だけをして進んで行く。

空気は澄み渡っているとは言い難く、分厚い木々の天上から僅かに差し込む木漏れ日だけが光源となっている鬱蒼と生い茂る森林は、昼間だというのに何処か薄暗い。それに加えて濃密な草木と湿り気を帯びた土の香りが混ざり合って、不愉快ではないがなんとも言い難い空気に満ちている。

自然と口数が少なくなる中、ふとメルヴィスが声を上げた。

「……あの」

「どうした？」

「何か、この森、変じゃないですか」

どこか変だ、と曖昧な言葉を放ったエルフの言葉を聞いた皆が足を止める。

枝草を切り払う音や足音等が途絶え、僅かに駆け抜ける風によって揺れる草木の音のみが場を包み込んだ。自身の息遣いすら聞こえそうな程の森の静寂に包まれ、イリスが肩を竦めた。

「気のせいじゃない？」

「いえ、ですが……何かおかしい気がします」

「……同感だ。この森は何かおかしい」

言い知れぬ違和感を感じたらしいメルヴィスに同意する様に、エリウッドが声を上げた。

俺も耳を澄ましてみるが、聞こえるのは木々の擦れ合う音と自分たちの呼吸音ぐらいで————待て。

「待ってください。一つ聞きたいんですが、此処に来るまでに野鳥や野生生物の類ってみました？」

「っ、それです！ この森、生物が居なさすぎなんです」

「確かに、虫一匹見てないぞ」

気付いてしまえば途端に森の静寂が恐ろしいモノに聞こえてくる。本来あるべき森の生命たちの息遣いが存在しない。野鳥の鳴き声も、野生動物が息を殺す静寂も、何も無い。この森には生命感が感じられなかった。

ダンジョンですらモンスター達の息遣いに満ちているというのに、この森は不自然だ。視線を彷徨わせれば何処かしこに薬草として知られる植物が生い茂る島。だが、生き物がさっぱりいない。

「……戻るか？」

「いえ、進みましょう。後十分もすれば目的地ですから」

より一層、警戒を深めながら、俺達は更に進んで行く。

それから数分もすると、木々の間隔が徐々に広がっていくのが確認できた。

昼間だというのに薄暗かった森を抜け、十分な木漏れ日が差し込む明るい森に出た当たりで、フィアさんが何かに気付いた様子で鼻を鳴らした。

「ん……この匂いは、肉か？」

「肉？ 獣か？」

野生動物が仕留めた獲物の匂いか、とエリウッドが問うと、同じく鼻を鳴らしたデインケが肩を竦めた。

「いや、肉を焼く臭いだな。後、火の匂いもする」

先ほどまでホラーゲームにありがちな薄暗い森を進んできたからか、『肉を焼く臭い』と言われて思わず恐ろしい想像を巡らせてしまう。まさか、まさかな？

「それはホラー的な匂いですか？」

「んだよ、ホラー的な匂いって……普通にバーベキューの匂いだな。しっかりと血抜きした普通の肉の焼ける匂いだ」

「もしかしてあれですかね」

フィアの言葉を聞いてメルヴィスが風上方面に目を凝らし、見つけたのは立ち昇る煙。

火を扱っていれば必ず出るその煙が複数確認できた。方角は丁度目的地の方向だ。

「ああ、よかった。人はいるみたいだな」

「どの派閥かまでは不明ですがね。行きましようか」

ああ、安心した。人が居るのであれば一安心だ。

この状況について話し合いを行って、解決策を見つけ出すか何かしなくては。

先までの沈んでいた空気が嘘の様に張り切り、皆して駆け足気味にその煙が立ち上る野営地らしき地点に向かっていく。

視界が開けた先には複数の天幕。

海岸から少し離れた岩場、丁度切り立った岩が天然の防壁として機能しそうな間に無数の天幕が設営されていた。

「おい、あのエンブレム」

「間違いないですね。『笑う道化師』、『ロキ・ファミリア』です」

一際大きな天幕に掲げられた徽章。揺れる旗印に描かれていたのは『笑う道化師』のエンブレム。

間違いない【ロキ・ファミリア】の野営地だ。

中心部からバーベキューの煙が立ち上っているらしく、姦しい喧騒が聞こえてくる。

「楽しそう、だな」

「おいおい、【剣姫】が大変な事になってんのに、呑気なことだ」

野営地入り口にまで近づいた所で、眉間に皺を寄せたファイアが立ち止まる。

「待て、変だ」

「どうしました?」

「いくらなんでも見張りを一人も立てずに騒ぐのはおかしい」

ファイア言葉を聞いたイリスの目付きが鋭くなり、全員が足を止めた。

ファイアの言う通りだ、彼の【ロキ・ファミリア】が見張りを一人も立てないのは不自然と言えば不自然だ。無人島だから、と理由は考えられなくはない。しかし元【ロキ・ファミリア】のファイアやイリス、メルヴィスがそう感じるのならば間違いない不自然だ。

「どういう事でしょう」

「……なあ、これ」

「おい、その槍は」

入り口横の岩の所に転がっていたらしい槍を拾い上げたディンケの言葉に、違和感は更に増した。

いくらなんでも武器を其処らに転がしておくような真似はしないだろうし、フィンや幹部達はそれを許さないはずだ。

未だに野営地中心部は視認できないが、嫌な予感がしてきている。

「……行きましょう」

息を呑んでから、足音を抑えめにして野営地の中へと侵入していく。

入り口付近の天幕はもぬけの殻となっており、奥の方にある数個の天幕からは寢息が聞こえてくる。そして、野営地の奥まった所に人が集まっていた。

中心部には島の反対側、俺達が利用していたのと同じ岩で構築された高座らしきものがあり、その周囲には砂岩煉瓦で組まれた複数の炉。炉それぞれに5〜6人が座れるこれまた砂岩煉瓦で組まれた椅子。

炉には火が焚かれており、金属串で貫かれた肉や野菜が並べられて焼かれている。

『バーベキュー♪ バーベキュー♪』

『大きい肉入りマース！』

『大きい肉焼きマース！』

『大きい肉食ベマース！』

全員がノリノリで同じ言葉を呟きながら肉を焼き、食らい付く。というか、あそこで肉に食らい付いているのは【凶狼】ヴァナルガンドでは？

『大きい肉美味しいデース！』

——誰だあれ？

離れた位置からその様子を見ていた俺達は完全に凍り付いていた。

まるで酔っ払っているかのように全員が素っ頓狂な語イントネーション調でデー

スマースと口になっている。

「酔って……る？ いや、酒の匂いがしねえ」

「嘘ですよ。あれって団長ですか……？」

騒ぎ立てる者達に囲まれた高座ステージの上に居た。

【ロキ・ファミリア】団長【勇者】フレイバーフィン・デイルムナが。

『ナマールコー！』

『WOW！ ナマールコー！』

高座ステージ上で海パンにシャツを着たフィンが長めの木の棒の先端にナマコらしきものをぶっ刺したモノを神々しく掲げ、高らかに叫ぶ。すると観客となっていた者達が一斉に叫び出す。

その観客の最前列には【怒蛇】ヨルムガンドの姿がある。

そして、よくよく見てみるとバーベキューの一角には【大切断】アマゾンが両手に串を持って肉をカツ喰らっていた。

「……なんですかこれ、新手の宗教か何かですか？」

「副団長、気を確かにもて」

オーウ、ワーオ、アタマオカシイデース。

……俺は何か思い違いをしていたのかもしれない。

【劍姫】がおかしくなった、のではない。【ロキ・ファミリア】がおかしくなっていたのだ。

何よりもそれを決定づける証拠として、彼等の頭には共通して白い瘤の様なモノが生えているのだから。

「どうします、一旦戻りますか」

「この状態の皆を放っておくのは……正直、気が引けます」

「とはいえ、治療法がわからない事には……」

困惑して顔を見合わせる俺達だったが、ふいに背後から小声で囁きかけられる。

「あのー」

「ん？ ……ラウルさん？」

「あ、もしかして話を通じたりします？」

岩と同じ柄の布地で体を覆い、頭だけちよこんとだして此方を伺う

【超凡夫】ハイ・ノービスラウル・ノールドの姿が其処にああった。

ラウルさんに連れられてきたのは【ロキ・ファミリア】の野営地から少し離れた地点にある洞穴だった。

「いやあ、よかったっす。皆おかしくなっちゃって困ってたんすよー！」
泣きそうな表情でそうぼやく彼が案内した洞窟には数人の冒険者の姿がある。

「ちよつとラウル、泣かないでよ」

「泣いてないっすよ」

肩を竦めるのは【貴猫】^{アルシヤ}アナキティ・オータムだ。

よくよく見てみればこの場に居るのは第二軍の面々だった。

「お久しぶりです。アキさん」

「久しぶり。ファイアもイリスも、元気そうで何よりだわ」

気さくに挨拶を交わす彼女らを他所に、項垂れた様子のラウルさんに問いかける。

「あの、何があったんですか？ こっちはアイズさんを発見して……」

えっと、発見した時にはあの状態といえますか」

「あ、アイズさんもあの状態なんすか……そんなあ……」

アイズさんの話を聞いた途端、ラウルさんは更に項垂れてしまう。かなり消耗しているのがぐったりしている。他の面々も同様に疲労がたまっている様子であり、唯一アナキティさんだけは背筋を伸ばして腕組をしていた。

「えっと、アナキティさん。話を聞いても？」

「ええ、そうね。アイズさんはそっちで保護してくれているって事で良いのよね？ それで、団長達と同じ症状である。」と

「そうなりますね」

此方からの簡易な事情説明。

砂浜ではしゃいでいたら様子のおかしい【剣姫】が現れたため、島の反対側に位置するこの場所の調査に訪れた事を告げると、アキさんは困った様に眉根を寄せて事情を説明してくれた。

「まず、あの症状が出たのはベートさんだったわ」

「……ベートさんが？」

【ロキ・ファミリア】は【ディアンケヒト・ファミリア】の依頼でこ

の島を訪れており、薬草採取の前に神ロキが『水着大会やー!』とテンションアゲアゲで女性陣に水着を着る様に強要。

男性陣もノリノリで準備を進めていくさ中、ベートさんは興味なさに振る舞いながら森を見てくる、と一人で探索に出かけたらしい。んで、戻ってきたらあの状態だった、と。リヴェリア様の診断曰く『寄生状態』であり、あの頭の上にある瘤の正体はキノコなのだという。

ただ、問題はその状態を治療する方法が全くの不明であったらしい。

「それでロキが『ナンニデーモ菊』なら治せるはずや! って言って全員で搜索することにしたんだけど……」

搜索途中で幾人かが行方不明になったらしい。その一人がアイズさんであった、と。

事を重く見たフィンが流石に自分も動こう、と搜索隊を結成して四人一組で動く様に指示を出し、自らも搜索に加わった。

その後、ラウルさん、アナキティイさん達は一つの班として海岸線を搜索していたが何も見つけられずじまい。搜索を一時中断して野営地に戻ってみればあの様だった、と。

「私達が野営地を離れている間に、あんなふうになつてて」

「……他の生存者は?」

「見ての通り、二つの班だけ。貴方達が来るまで他には誰も……」

この場に居る八人だけが感染を免れた、と。もしかしたら感染する系統なのかもしれない、との事で少し離れた地点で救援を待っていたらしい。

へスティア様達にも感染している可能性があるのか? だとするならばすぐに戻らなくては。

「ロキ・ファミリア」の迎えはいつに?」

「二日後よ」

俺達と同じか……。

「……第一級冒険者にすら寄生するキノコってなんだよ」

「というか、神ロキは?」

「……………ロキも、感染済み」

——神にすら感染するののか。

おい、この島なんなんだ？ 葉草の宝庫、だけじゃ説明が付かないだろ。

「……………とりあえず、私達は一度自分達の野営地に戻りますが、貴方達はどうしますか？」

「団長達を放置は出来ない。でも……………」

「でしたら、自分達が。ラウルさん達は「ヘステイア・ファミリア」に同行して貰っても構いません」

「でも、うーん」

この場に残り寄生された「ロキ・ファミリア」の面々を監視する約目に六名。俺達に同行して「ヘステイア・ファミリア」の野営地に行くのはラウルさんとアナキティさんの二人のみ。

「団長、皆……………俺、皆を元に戻してみせるっす」

「……………行きましょう、ラウル」

固い決意を抱いた二人を加え、俺達は来た道に戻り始めた。

それは、「ロキ・ファミリア」の野営地を後にしてから数分後の出来事だったと思う。

来た時と変わらぬ鬱蒼とした森林を歩んでいるさ中の事だった。ガサガサ、と木の葉が擦れる音が不気味に響き渡った。

「待て、なんか居る」

「何すか」

真っ先に反応したのはLv. 4の二人。即座に剣を抜いて警戒姿勢をとった二人が左右に展開し、遅れて他の面々が反応して各々の武器を構える。

薄暗く視界の悪い森の中、各自が警戒をしている中——ガサリツ、と頭上の天幕が大きく揺れた。

「……………上！」

「危ないっす！」

ラウルさんの叫びに反応して急ぎその場を離れようとするが、遅い。

頭上の枝葉を押し退けながら落ちてきたのは巨大な白い影。真ん丸に不気味に開いた穴が、俺の頭上から丸呑みにせんと襲い掛かってきた。

回避が間に合わないか、と魔法を向けるにも遅い。そんな絶妙な奇襲を前に、突然腕を掴まれる。

掴んだのはラウル・ノールド。ギリギリの所で俺を攻撃範囲外へと引つ張り出した彼は剣を構えて距離をとった。

「大丈夫ですか!」

「助かりました」

「おい、なんだこいつ!」

「……でつかい、キノコ?」

礼を言う間にも、隊列中央に堕ちてきたそれは短く小さな手足でゆっくりと起き上がる。

巨大な笠に太い柄、まるで絵に書いた様にデフォルメされた様な見た目のキノコの怪物だった。ただ、不気味な事にそのキノコには目や鼻は無い。口のような真ん丸な穴が大きくなったり小さくなったり、とまるで嚙下する様に脈動しているだけだ。

「もしかして、団長達がおかしくなったのはこいつらの所為?」

「俺達、全員海岸線の調査をしていたから森に入ってた。だからこいつと出会わなかったのか!」

「来た時にはこんなやつ見てないぞ!」

行きと同じ道を辿っていたはずだが、行きにはこの化け物を見なかった。何か理由があるのか……それに、こんなモンスターが居るなんてギルドの情報にも無かった。

いや、そういつたもろもろは後だ、まずはこの怪物を撃退するなりしなくてはいけない。

「全員気を付けて、どんな方法で寄生させてくるかわからないわ!」

「俺が行くっす」

真っ先に斬りかかったのはラウルさんだった。

短い手足で鈍重に動くキノコのモンスターに一気に斬りかかる。大きく振りかぶられた剣はその身に直撃し——ぽよんっ、と柔軟な体に跳ね返された。

「ぬあっ!? 斬れないっす」

「ラウル! 斬撃が効かない? 打撃も効き目が薄そうね……」

「でしたら私が、【ピストル・マジック】【リロード】【ファイア】!」

素早く詠唱し、放たれた魔弾がそのキノコの柄の部分に直撃——貫通どころか、ぽよんっ、と体表を波立たせただけで魔弾は防がれた。

「魔法も効かない!? っていうか何なのあのキノコっ!?」

「動きは鈍そうだぞ、逃げちまうのがいんじゃないのか?」

ファイアの提案の通り、この場は逃げるのが良さそうだ——同意できる。出来るのだが。

「フィンさんも同じ考えに至るはず。なのに、全員が寄生されてた……」

第一級冒険者ですら敵わなかった。その時点で察する事も出来るのだが、このキノコのモンスターは俺達の手には負えない。

だが、逃げるだけならその鈍重な動きから簡単そうに感じるというのは不自然だ。何せ、第一級冒険者ですら逃げられた前例が無いのだから。

違和感がぬぐいきれない。かといってこのまま手をこまねくのも違うか。

「全員、撤退しましょう」

「そうね、いまは【魔銃使い】のいう通りにするべきだわ。ラウル!」
「わかってる! デインケさんとエリウッドさん、ついてきてくださいます!」

ラウルさんが瞬時にキノコの怪物を打つ。斬るのではなく、打ち上げて転がす形で。

短い手足も相まって、見事に転げた怪物を見やりつつも全員で前進。先頭のデインケが鉈で道を作るさ中、追い抜いたアナキティさんが剣を振るって倍以上の速度で道を抉じ開けていく。

「こつち、遅れないでね」

「——アキッ！」

先頭を行っていたアナキティさんの頭上の木々が揺れ、先の怪物が降ってくる。

ラウルさんの放った言葉に反応した彼女は即座に頭上から落ちてくるキノコの怪物を打ち払った。瞬間。

ボフンツ、とそのキノコが爆ぜる。

「なっ!? ゲホゲホツ、これは……」

降り注いだのは大量の煙——いや、胞子かッ!?

その粉塵は丁度真下にいたアナキティさんを包み込み、一瞬だけ俺達の視界から彼女の姿を消す。

だが、不思議なことにその粉塵は数秒もすればきれいさっぱり消えてしまう。まるでモンスターの灰の様だが、それとは別物に見えた。

「アキ、大丈夫っすか!」

「……………」

「アキ? アキ、どうしたっすか!」

ふらふら、とアナキティさんがよろめいて膝を突いた。

後ろを振り返ると、転倒させていたキノコの怪物がゆっくりと起き上がっている光景が目映る。いや、それだけじゃない、無数のキノコの怪物が森の木々の間に揺らめいているのが見えた。

「不味いですよ副団長、囲まれます」

「アキさんを連れて行きますよ」

「アキさんが早くアナキティさんに肩を貸し、

デインケとエリ

ウッドが先導して進もうとするが。

ああ、嫌な予感的中していそうな気がする。

イリスに肩を貸されたアナキティさんの頭ににゅつと白い瘤が出てきた。それを見て、全員が表情を強張らせる。

「ア、アキ? 嘘っすよね? アキ、その……頭の上の……」

イリスさんがそつとアナキティさんから離れる。ペたんとして座り込んだ彼女を前にし、ラウルが震える声で問いかけた。すると、彼女はぱつと顔を上げた。

満面の笑みを浮かべた、アナキティ・オータムがラウルさんの顔を見て、言い放つ。

「私の名前はアナキティ・オータムデース！」

「う、うわああああああつ!? アキまでおかしくなっちゃったつす!?!」

ラウルさんが悲鳴を上げる間にも、無数のキノコの怪物がじりじりと距離を詰めてくる。このままだと囲まれてしまう。

「っ、全員、アキさんを担いででも行きますよ！」

「……いや、皆そのまま走るつす」

「ラウルさん」

何処か諦めた表情をしたラウル・ノールドが剣を握り締め、足を震わせながら呟く。

「俺が道を切り開くつす」

「でも」

「もう囲まれてるつすよ」

彼に言われて周囲を見回し、気付いた。木の上からぼとつ、ぼとつ、とキノコの怪物が落ちてきている。

周囲一帯には大小様々なキノコの怪物が蠢いていた。小さいモノは俺の腰ほどの大きさ、大きいモノは成人男性すら丸呑みにしそうな程に大きい。

この怪物のどれもが同じ性質——撒き散らされた胞子を吸っただけで寄生される。という特性を持っていたのなら、不味い。

「足手纏いを連れて行く余裕はないつす。アキは俺がなんとかするか、皆は行つて欲しいつす」

「ラウルさん……」

「こう見えても、俺、第二級冒険者つすから」

「ラウル、キモイデース！」

横でニコニコ笑顔でアナキティさんが呟く。その言葉にラウルさんは僅かに涙を零し、それでも剣を構えた。

「切り開くから、皆は行くつす」

「……わかりました」

ここで全滅するよりはマシか。

少なくとも、フィン達を見る限り、寄生された後即座に殺されるわけではないはずだ。

だから、彼等を置いて行っても問題は、無いと思いたい。

「武運を」

第一九二話

木々の分厚い天蓋に阻まれ十分な光量を得られない湿った森林地帯。

光が届かぬがゆえに足元の草は成長しきれずにしおれている。そんな草花を踏み分けながら駆けていた猫人の青年とエルフの少女は警戒心を解かぬままに足を止め、周囲を伺った。

「クソ、副団長達と逸れちまった!」

「……さきのキノコの怪物はこの辺りには居ないみたい、ですが」

デインケとメルヴィスの二人は薄暗い森の中、突然襲撃してきた正体不明のキノコの怪物によって「ロキ・ファミリア」の第二級冒険者を殿として撤退した。

しかし、その後も幾度かの襲撃を受ける内に殆どか散開してしまったのだ。

「……ふう、少し休むか。駆けずり回り過ぎて足が痛えぞ」

「ですね……」

デインケがほとほと疲れたと木の根に腰を下ろした横でメルヴィスは眉を顰めて周囲を伺っていた。

「おかしいですね」

「何がだ?」

「いえ、あれだけ走り回ったのに森の外に出ていないのは不自然です」

幾度かの逃走劇を繰り返した彼らだったが、森の深い所から脱出出来てはいない。

この場所が広大な土地に広がる大森林ならまだしも、たかが島程度の大きさの森ならば何処かの浜辺か海岸線に出てもおかしくはない。

「ましてや、私はエルフ。森歩きならばそれなりに慣れているのですが……」

「森の出方がわからん、と?」

「はい」

エルフという種族柄、森に対しては強みを発揮できるはずが、今のメルヴィスは道に迷ったまま方向がわからなくなっている。

加えて、五感に優れているはずの獣人のデインケの鼻もうまく利かない。

「駄目だな。潮風も感じられねえ、方位磁石の類は持ってねえからなあ」

「とりあえず、森の外に出るのを優先しましょう」

少なくとも海岸線にまで出る事が出来れば島の外周を回って野営地にまで戻れる。と方針を定めた二人が歩き出そうとした、その時、デインケが違和感に気付いた。

「待て、なんか……灯りが見えないか？」

「はい？ ……いえ、光源らしきものは見えませんが」

目を凝らした先、森の奥に僅かながらの灯りを確認したデインケの言葉にメルヴィスは首を傾げる。

「獣人、だからでしょうか。私には確認できませんね」

「そうか？ それなりに明るい灯りだと思っただが」

互いに首を傾げつつ、デインケが示した方向へ歩き出す。

鉦を振るって先導する猫人の背をちらりと見やりつつ、メルヴィスは周囲を、特に頭上を厳重に警戒し続けていた。

「ほら、やっぱり灯りだ」

「……？ いえ、何も見えませんよ？」

徐々に近づく光源にデインケが反応してその方向を指し示すも、メルヴィスには薄暗いただの森にしか見えない。

流石におかしい、とメルヴィスがデインケの様子を伺おうとした所で、彼は足を止めた。

「デインケさん、どうしましたか？」

「………はあ？」

「デインケさん？」

「………酒場だ」

「はあ………？」

呆然と眼前に広がる光景を見やったデインケの呟きに、メルヴィスはおかしなモノを見る目を向ける。

「何でこんな森の深くに酒場なんか……」

「あの、酒場なんかありませんよ。ただの森の……あれ？」
デインケが呆然と見やる方向に視線を向けたメルヴィス。
彼女の言葉が聞こえないのか、彼は一步、また一步と歩み出して
いく。

「デインケさん？ デインケさん、止まってくだ——」

彼を止めんと肩を掴もうとしたメルヴィスの肩を、誰かが掴んだ。

「——ッ！」

瞬く間に肩を掴んできた手を叩きながら腰の短剣を引き抜いて構えたメルヴィスだったが、直ぐに言葉を失って立ち尽くす。

「おお、いきなり触ったのは悪い。だが武器を向ける事はないだろ」
どうどう、と動物をいなす様に両手で示しながら二歩、三歩と後ず
さるドワーフの姿が其処にあった。

見覚えのある顎髭、節くれだった指に深く思慮深い色をした鳶色の
瞳。両腕に頑丈な手甲を着け、背中に大盾を背負ったドワーフの男
だ。

「グ、グランさん？」

「おう、グランだが……どうした？ いきなり、他の者も驚くだろう
に」

両手を上げて降参の姿勢をとって小首を傾げるグランの姿に、メル
ヴィスは一步後ずさった。

第二級冒険者【不動城塞】グラン・ラムランガ。【イシユタル・ファ
ミリア】によって引き起こされた強襲の際、仲間を守る為に【男殺し】
の注意を引いた事によって命を落としたはずの故人。

この場に居る筈の無い人物が唐突に現れたことにメルヴィスが混
乱するさ中、背後から驚愕の声が響く。

「——はあ!? なんて、おま……死んだんじゃ！」

「はあああああ？ 死んだ？ 誰が？ 俺がか!？」

メルヴィスが慌てて振り返った先、デインケが真ん丸に目を見開い
て眼前の人物の両肩を掴んでいる。

灰色の野暮ったい頭巾フードに身を包んだ、何処か懐かしさを覚える
ヒューマンの青年。

「ル、ルシアンさんまで……何が、どうなつて……」

【濡鼠】ルシアン・テイリス。グラン同様に「イシユタル・ファミリア」の襲撃時に【男殺し】アンドロクトノスの手によって命を落としたはずのヒューマンの青年。

混乱する猫人とエルフを置き去りに、気が付けば二人の周囲には見慣れた仲間の姿までぞろぞろと近づいてくる。

「ようグラン、今日は飲み比べすんのか?」

「おう、ファイアか。サイアにイリスもご苦労さん。飲み比べならどんどこい。負けんぞ」

「おい、エリウツド、聞いてくれよ。この猫人が『お前死んだんじゃ!』なんて言うんだぜ?」

「はあ、デインケ。奢る約束を反故にしたいからと相手を故人扱いにするのは感心しないな」

故人であるはずの二人に気安く話しかけていく皆の姿にデインケとメルヴィスは言葉を失う。

「エリウツド! ルシアンは死んだんだぞ?! 今は『ユージン島』つて島に来てて……副団長は何処に行ったんだよ! 何が起きてんだ!」

「……ユージン島? なんだその島は、聞いた事ないが」
「なあ、こいつもう飲んでんじゃね?」

眉を顰めるエリウツドと、訝し気にデインケを伺うルシアン。まるで今まで通りの様な振る舞いに息を詰まらせるデインケの横で、メルヴィスが半口を開けたまま周囲を見回して彼の袖を引いた。

「デインケ、さん……ここ、ここは……」

「あ……ああ、なんだこれ」

袖を引かれて注意が目の前の仲間からそれた二人が周囲を見やれば、深く薄暗い森から一変していた。

何処からともなく響く吟遊詩人の詩。囃し立てる観客の声に、客引きの女達の姿まである。石畳で整えられた大通りの左右に立ち並ぶ幾種類もの酒場。見覚えのあるその光景は、間違いなく迷宮都市の西のメインストリートその場所だった。

「あ……なんで、森に居たはずじゃ」

「森イ？　おいおい、数日間『大樹の迷宮』に籠った所為で記憶がおかしくなってネエか？」

ぼしばし、と灰色フードに背中を叩かれたデインケが唾然とした表情を浮かべる中、エリウッドが彼を覗き込んで心配そうに問いかける。

「どうした、体調が優れないのか？」

「ああ、エリウッド、おかしいだろ。だって、俺達は「イシュタル・ファミリア」に襲われたんだぞ……」

自身の抱いた違和感を吐露すると、エリウッドとルシアンが顔を見合わせて肩を竦めた。

「おいおい、俺らは昨日遠征終わらせて帰ってきたところだろ。なんだ、変な夢でも見たんじゃないのか？」

「十分に休めてないなら宴は明日に持ち越すか？　副団長から数日間は何もしなくて良いと言われているしな」

「いや……」

気を使った二人の態度にデインケは懐かしさが込み上げる。そして、「イシュタル・ファミリア」との抗争を終えた後、幾度も夢想していた光景に涙腺が僅かに緩み始めた。

襲撃さえなければ、「イシュタル・ファミリア」が事に及ばなければ、自分達は予定通りに遠征を終えてその次の日にでも皆で酒場へと繰り出していた事だろう。

副団長の事だ、きつと報酬の何割かをたつぷり渡してくれるはずだ。

彼が胸に抱いていたはずの違和感が気泡に消えていく。脳裏を過る惨劇が薄れて消えゆく中、デインケはふとメルヴィスに視線を向ける。

二人して首を傾げた。先まで抱いていたはずの違和感が消え去り、周囲の喧騒に混じり仲間達が騒いでいる。

「おい、本当に大丈夫か？」

ほん、と肩を叩かれたデインケは、ほんの少しの間、過去を回想した。

無事遠征を終えたのは昨日の事。主神と団長からねぎらいの言葉を受け、副団長がぱつぱと報酬を手渡して数日間の休暇を言い渡した事。その後、泥の様に眠り疲れがとれたからと、皆して酒場に集まって宴を開く事にしたこと。

少し、違和感があったような気のする記憶を辿り終えたデインケは、頭を振ってフードを被った親友に応えた。

「——あー、悪い。少しぼーっとしてただけだ」

「本当に大丈夫かデインケ？ 無理してないだろうな？」

「してねえよ。約束したろ？」

——約束したはずだ。

迷宮の中で、日の光の届かぬあの場所。

「帰ったら、俺が好きだけ奢ってやるって」

薄暗い森の中、木の根に幾度も足をとられながら駆け抜けた先、変わらぬ暗さと湿り気を帯びた空気の気持ち悪さに大粒の汗を零し、俺は木に凭れながら荒い息を吐いていた。

「ぜえ、ぜえ……み、皆さん、無事ですか……」

「な、なんとか……デインケとメルヴィス、イリスにサイアが居ねえけどな……」

キノコの怪物の奇襲に対し、ラウルさんが道を切り開いてくれたのはいいのだが、その後も幾度も奇襲を受けた。

そのさ中、エリウッドが落伍してイリスが救援に向かったのは確認できた。しかしデインケとメルヴィスの二人は途中で逸れてしまったのだ。

今残っているのは俺とファイアさんの二人のみ。途中、首根っこ掴んで駆けてくれた彼女には感謝しかないが……

「はあ、二人きり、ですか」

「……はあ、だなあ」

顔を上げて汗を拭ったファイアが周囲を見回して鼻をならし、舌打ちを零す。

「この湿気じや鼻が利かねえ。つか、この森、こんな密林みたいにジメジメしてたか？」

「ああ、言われてみれば……行きよりも湿度が高く感じますね」
ファイアに指摘されて気付く。

行きに比べて湿度が異常に高く感じる。相も変わらない森の天蓋からは不十分な光量しか得られず、足首の辺りにまでしか雑草が繁茂していない。

そして空気は濃密な湿り気を帯びた土の香りと、樹木の匂いが交じり合っており不快指数は非常に高かった。その湿度故にかファイアさんも鼻が利かないと仕切りに鼻をこすっている。

「とりあえず、森を出ようぜ。一人でも浜辺に出て情報を伝えるべきだろ」

森に侵入するのは非常に危険性が高い。故に『ナンニデーモ菊』の搜索隊も撤退させるべきだし、何より野営地に残した皆が心配だ。

「現在位置はわからなくなってますが、方角さえわかれば密林と言う訳でもないし海岸線に出られるでしょう。そうすれば……」

ポーチを漁って方位磁針コンパスを取り出して覗き込んだ所で、思わず悲鳴が零れかけた。

くるくるくるー、と脳内でクリスが楽し気に回っている姿が一瞬だけ浮かんでしまった。それぐらいに信じられない光景だった。

「おい、副団長、どうしたんだ？」

「……方位磁針コンパスが壊れました」

「はっ！」

俺の手の中にある手に余る大きさのそれは、赤く塗られた針の先が安定する事なくぐるんぐるんと回転し続けており、方角を指し示してくれる事はなかった。

俺の手元を覗き込んだファイアさんが渋い表情を浮かべて、呟いた。
「……………なあ、副団長って『人間コンパス』だったりしないのか？」
「しませんよ。私を何だと思ってるんですか」

「いや、何でもできるし、コンパス代わりにもなるかな、って……」
なんと失礼な。そんな『人間コンパス』なんて特技何ぞ持つてる訳

がない。最低限、太陽の位置から時刻と方角を読み取れるぐらいだ。それも、分厚い天蓋に覆われた鬱蒼と生い茂る森林の中では役に立たん。

日差しの向きすらもわからんのだから。

「……キューイとの連絡は、つかないですね」

遠距離に居ても声が届くはずのキューイだが、何故か反応が無い。

もしやキューイまで駄目になってる可能性が……？ いずれにせよ早く合流しなくては。

「……とりあえず、真つ直ぐ進めばいずれ海岸線に出られるんじゃないか？」

「まあ、そうですね。警戒しつつ、進みましょうか」

くるくるくるー、と回り続ける方位磁針をポーチに捻じ込んで顔を上げる。

島の広さ的に其処まで深い森ではない。故に、進み続ければ何処かには出られるはずだ。

フィアさんと手を伸ばし合えばすぐに触れられる距離を保ちつつ、二人で森を進み始めた。時折、フィアが木に切れ込みを入れて目印にしている。

一つ目の木に横線を一本、二つ目の木に横線一本に縦線一本、三つ目の木には横線一本に縦線二本……とこれを縦線四本までで一組とする遭難した人が日付を記録する為に付ける記号に似ているモノを刻んでいた。

「……………」

「……………」

暫くの間、互いに無言で警戒しながら進み、立ち止まって木に目印を刻んでいる時の事だった。

フィアの耳がぴくりと反応して震え、直ぐに耳を澄まし始める。

「待て、なんか……聞こえるぞ」

「どんな音ですか？」

同じように耳を澄ましてみるが、聞こえるのは木々の擦れ合うざわめきの音ぐらいだ。生命を感じさせる虫の音も無い薄暗く湿った森

に不気味さを改めて感じていると、ファイアは僅かに眉間に皺を寄せながら呟く。

「なんていうか、魔石製品の拡声器の音？　みたいなの？」

「……………」

その音が何なのか特定できないのか濁した言い方をするファイア。とはいえ、俺には全く聞こえないので拡声器の音、と言われてもピンとこない。

何か怪しさは感じるが、丁度進行方向から聞こえるらしいので確認がてら進んでみる事にする。とはいえ、怪しさに満ちているので暫く進んで俺にも聞こえてこない状態の場合は避ける方針だ。

幻聴の可能性も捨てきれないからな。

「あ、これ……………」

「副団長にも聞こえるだろう？」

「ええ、雑音ノイズが聞こえますね」

暫く進むと、微かにだがジーザザー、と雑音ノイズ混じりの音が俺の耳にも届いた。ファイアさんと視線を交わして頷き合い、慎重に薄暗い森の中を進んで行く。

聞いてファイアの言う『拡声器みたいな音』という表現に納得がいった。確かに、そんな音なんだが…………。

森の中で拡声器の雑音ノイズ？　不自然極まりないな。

警戒を解かず静かに身を潜めながら進んでいると、その雑音ノイズに誰かの声らしきモノが混じりだす。

———ジーザザー———　だ——ザツ———　攻撃———　ジーツ

「…………ファイアさん、今の聞こえました？」

「人の声、だよな？　誰か居るのか？」

攻撃、という単語だけははつきりと聞こえた。しかし他の音は木々の音と雑音ノイズにかき消されて聞こえなかった。もう少し近づいてみない事には始まらないか。

注意しながら進んでいると、少しずつその雑音ノイズに調整音チューニングが混じりだす。まるで通信機チャンネルで電波帯を合わせている様な感じだ。

——チュイイツ——ジーツ——ザザザツ——こちらαチーム、
HQ、HQ、応答願う——

「はつきり聞こえたな。アルファチームがどうか……エイチ
キューってなんだ？」

『司令部』って意味ですね。何処かの部隊が落とし……？ 森の中に
？」

一瞬で違和感が膨れ上がる。

この世界に通信機のような技術はあっただろうか？ 魔石製品には
『拡声器』や『照明器具』、『冷蔵庫』等はあるのだが、『映像機器』や
『通信機器』の類は未だに見た事が無い。いや、発明しようといくつも
の魔石製品製造を行ってる工場が研究に励んでいるのは知っている
が、実用化まではされていなかったはずだ。

それに、この無人島に通信機を持ち込む？ 正直信じられんのだ
が。

「あ、おいあの切株の上。なんかでかい機械が置いてあるぞ」

「……いや、不自然過ぎるでしょうに」

ファイアさんが木々の間から指差して示した先、天蓋がぽっかりと空
いて光が照^{スポットライト}明の様^スに当たっている猫の額ほどの大きさの広間。そ
の中央に大きな切株があり、その切株の上に不自然な通信機器がどか
ん、とのつていた。

……あのさ、通信局にでもありそうな大型装置が鬱蒼と生い茂る森
林の中に突然現れたら不自然だろ。

しかも、送受信機^{アンテナ}も発電機^{でんげん}も無いのに各種計器^{ランプ}が点滅しているの
だ。正直、近づきたくない。

——こちらαチーム、HQ、HQ、HQ、応答願う。現在、我が部隊
は攻撃を受けている。応答願う、HQ、HQ、HQ——

繰り返し流れる通信機の音には微かに爆発音や発砲音が入り混
じっており、通信手の焦った様な声が確かに響いてきていた。

「……なあ、アレなんだ？ 声が聞こえるが。人が入ってるのか？」

「いえ、遠く離れた人と会話する道具ですが……電源も無しに動いて
ますし不自然ですから近づかないでおきましょう」

——繰り返す、我が部隊は攻撃を受けている！ 至急、救援部隊を要求する！ HQ、HQ、応答せよ！——

「……なあ、なんか爆発音とかも聞こえるが、大丈夫なのかアレ」

通信機から響く切羽詰まった声に引かれる様に、ファイアさんが踏み出そうとするのを腕を掴んで止めた。

明らかにおかしい。少なくとも俺にはそれがわかるし、ファイアさんも違和感を抱いても良さそうだが……彼女は何度もその通信装置の方に視線を向けている。

「行きますよ。不自然過ぎますし、直ぐにこの場を離れましょう、一度戻るべきです」

「あ、ああ……」

後ろ髪を引かれるかのようにファイアが幾度も振り返り通信機器を見やる中、後方に刻まれた目印を頼りに少しずつ距離をとろうとして、気付いた。

真っ直ぐ進んでいたはずなのに木々にある目印が滅茶苦茶なところ刻まれている。

「ファイアさん、目印、真っ直ぐ付けてきましたよね」

「あ？ ああ、その積りだが……って、なんだこれ？」

すぐ右手に刻んだ記憶の無い目印が刻まれていた。横線一本に縦線二本の三番目の記号のすぐ横に同じ三番目の記号が刻まれている。

迷ってる？ 幻覚か、方向を狂わせる何かが俺達を完全に遭難させている。

「ああ、駄目だこりゃ……アタシ等、方向感覚も五感も狂わされてんじゃないかねのかコレ」

「……真っ直ぐ進む事も出来ない、ですか。不味いですね」

先から響く通信の音が近い。というか、近すぎる。

——HQ！ HQ！ こちらαチーム、攻撃を——グアツ！——

——通信手がやられ——本部は何を——隊長が死んだ——手榴弾だっ!?!——

振り返ると、離れようとしていた通信機器の乗った切株との距離は先よりも近づいていた。

「ファイアさん、ちよつとアレ」

「……なあ、アタシらそんなに動いてないよな？」

遠くに見えた通信機の置かれた広間は今や木々を一本挟んだぐら
いの距離しかない。

頭を振って幻覚を振り払おうとするが、覚める気配は無い上、通信
機の向こう側は阿鼻叫喚なのは変わりない。爆発音を最後に雑音ノイズが
全てを覆い尽くした当たり、全滅したか……？

——こち——ザザツ——生存者——支援を——

あ、一応生存者はいるのか。撤退の支援を要求しているみたいだ。
だが、俺は何もしてやれんのだがなあ。

思わず半眼で距離が近くなって細部まで見えるようになった通信
機器を眺めてしまう。何処かで、というかあの通信機器の規格は連合
国側のモノじゃないか？

……ミリカンにおける連合国の通信装置じゃねえか。実際に軍用
で使われていたモノを模倣してあるが、完全に模倣すると利権がどう
の騒ぐので一部改変された並びもあるので間違いない。ミリカンに
登場した機器だ。

って事は、通信機の向こう側はミリカンプレイヤーの悲鳴か？ い
や、汎用台詞ばっかだしNPCの部隊っぽいな。

「なあ」

「なんですか」

「いっそ、アレに触ってみるってのどうだ？」

「あー……」

ファイアの言う通りか。既にあのキノコの術中に嵌っている状態の
俺達がこれ以上何かをしても意味はない。

もしや、フィン達も俺達と同じ様にこんな幻覚に囚われてしまった
のだろうか？ それとも、俺達は既にあのキノコに寄生されて『デー
ス』『マース』とハイテンションに駆けずり回っているのだろうか……
？

ヤバい、死にたくなってきた。

「願わくば、既に現実の私達がアイズさん達みたいになってない事を

祈りますよ」

「……やめろ。もしアタシがあんなことしてたら喉搔っ切って死ぬ」

半ば諦め気味にその通信装置に二人で近づいていく。

相変わらず、通信機の向こう側では銃声と爆発音が響いてる——

「あ、また誰か死んだっぽい。悲鳴と呻き声が聞こえてきてるから相当酷そう。」

切株の傍に不自然なぐらい丁度良く置かれた通信手用の椅子に腰掛け、装置に掛けられたヘッドセットを装着する。若干大きく不格好になりながらも、いくつかの計器ランプとスイッチを確認して、回線オープンを開通状態にしようとする。

「……なんか、手慣れてんな」

「え？ ああ、何度か触った事がありますんで」

基本的にNPCの通信手任せにしていたが、時折必要に応じて指揮官が直接通信手として動いた方がやりやすかったしなあ。各種部隊に命令出して敵軍の基地攻略とかはよくやった。

まあ、前線プレイヤーの兵士からは『人使いが荒過ぎる』と文句は言われたが。成人男性用のヘッドセットは大きすぎてズレる為、片耳だけ当ててマイクの位置を調整し、回線オンを開通させる。

「あー……αチーム、αチーム、こちらHQ。状況を報告せよ。オーバー」

——HQ！　こちらαチーム！　作戦地域22—3σにて敵機甲旅団エンゲージと接敵！　戦死者一五名！　負傷者多数！　支援部隊を要求する！　オーバー！——

「……何て言ってるんだよ。きこー、しだん？　支援部隊ってのは、パーティを送れってことか？　つか……作戦地域にーにーのさん、シグマ？　って何処だよ。ダンジョン、じゃないよな？　何と戦ってるだ？」

早口で通信機の向こう側から告げられた情報の羅列にフィアが首を傾げる。まあ、通信手は慣れてる奴がやる技能職だしなあ。

いかに素早く、正確に情報をやり取りするかが肝心だから、通信手は凄まじい早口で情報をぶん投げてくる。それをいかに正確に理解

して関係部署に送るかが通信手のお仕事だ。

それに、そもそも対人戦闘で重火器や兵器使って戦う戦場の話なんか冒険者にわかるわきゃない。

まあ、今回、俺は何をすればいいのかさっぱりわからんのでアレなんだが。

「……えつと、そうだなあ〜」

これ、幻覚？ 意味わからな過ぎて頭おかしくなりそうデース……。

まあいいや、適当に定石通りテンプレの行動で良いか。

「αチーム、こちらHQ。支援部隊了解。詳細な敵味方双方の部隊の情報を報告せよ。オーバー」

——敵機甲旅団、戦車タンク、二四！ 砲兵カノン、一二！ 対空砲、六！
歩兵二〇〇〇！ 味方砲兵中隊、歩兵、八三！ 砲兵カノン八！ 塹壕にて応戦中！ オーバーッ！ ——

荒い男の返答を聞く限りじゃあ……これ、全滅確定じゃな？

というか、支援部隊送つても意味なさそうなんだが。そもそも作戦地域の地図も無しに判断できんぞこれえ。

と考えた所ではさりつ、と通信機器の装置の傍、何故か半分残っているコーヒーのカップと、それを重しとして地図やら作戦情報の書かれた紙やらが落ちてきた。

………無視だな。

「何か降ってきたぞ!？」

「……気にしなくて良いです。もうこれ以上考えると頭が破裂しそうですし」

そもそもこれも全部幻覚な訳でしょ？ なんでこんな意味のわからん幻覚見せられてんのか知らんが、もう知るか。

地図の上にコーヒーぶちまけて黒く染めつつ、回線を切り替えて別の部隊に繋ぐ。なんか『出撃待機中』の計器ランプに灯り付いてるしその部隊でいいやあ。

テキトーに支援部隊としてしゅちゅげきさせちやえ〜。もう知らんし。

「第101空挺師団、こちらHQ。オーバー」

——HQ、こちら第101空挺師団通信手。オーバー。——

応答はっや。絶対にこの通信手NPCだろ。

もう、なんかすぐく怠くなってきたわ。ファイアさんは何がなんだかわからずに首を傾げるだけになってきてるし。もう、俺なにやってんだっけ……？

「はあ……第101空挺師団、こちらHQ。作戦地域22—30にて味方砲兵中隊が敵機甲旅団より攻撃を受けている。直ちに出撃して支援せよ。オーバー」

——こちら第101空挺師団、支援作戦了解！ オーバー！

えつと、これで……ああ、aチーム、とやらの通信を戻すのか。だつる。

まあ、現実の通信手とかだったらこんな風にはならんやろ。通常なら指揮官に指示を仰いで、作戦投入する部隊の選択を話し合つて……下手すると数日かかるだろうしなあ。

前線からすりゃ『話し合つてねえでさっさと支援よこせ鉛玉ぶち込むぞ』なんだが。まあ現実的とはいえミリカンはあるまで実銃や兵器の取り回し面の話であつて、指揮系統の複雑さとは無縁やし。

カチカチ、と計器をいじつて回線を戻して——ガシィツ、と首根っこを掴まれた。

「ぐえつ——」

瞬間、凄まじい速度で後ろに引つ張られ、潰れたカエルの様な悲鳴を零しながら通信手席から引つpegがされる。

ほんの一瞬だけ視界が暗くなつたと思うと、凄まじい速度で森の景色が流れていく。首根っこを掴まれて息が詰まつた状態のまま十数秒間、視界の端が闇に包まれ出した所で、ぽいつ、と投げ出された。

「ぐぐあつ……」

「がふっ!？」

「ぐろぐろー、と砂地に放り出された俺とファイアの二人が砂まみれに

なりながら転がり、止まる。

照りつける太陽の日差しを浴びながら、顔を上げると其処には青い海が広がっていた。

というか、「ヘスティア・ファミリア」が上陸し野営地にした地点の直ぐ近くの砂浜だった。

「ここ、は……海？」

「アタシ等、なんか変な装置いじって……？」

「はあく……ミリアにフィア、危ない所を助けた私にお礼は？」

背後から聞こえた声に振り返ると、不機嫌そうなレーネが腰に手を当ててふんぞり返っていた。

ふと、自分の行動を振り返ってサーツと頭から血の気が引いていく。

怪しい機器に触れてる内になんかすべてがどうでも良くなっていった。あのままだったら、多分……というか確実にあの「ロキ・ファミリア」の二の舞になっていた事だろう。

「あ、ありがとうございます……」

「助かった」

フィアと二人で胸をなでおろしながらレーネを見上げると、彼女は肩を竦めて浜辺を指差した。

「ちなみに、無事なのは私と、あの岩陰で震えてる飛竜モドキ、それと団長と副団長、フィアの四人と一匹だけだから」

指し示された浜辺、ごうごうと燃える炉に並べられた串に刺した肉を焼いて楽し気に騒ぎ合う皆の姿と、それを前に魂が抜けた様に呆然と膝を抱えているベルの姿があった。

ヘスティア様、リリ、ヴェルフ、春姫、ミコト、デインケ、エリウツド、メルヴィス、イリス、サイア、リユーさん……ほぼ、全滅だった。「……嘘でしょ」

「残念ながら、とりあえずあそこで魂が抜けてる団長君も引つ張ってきて話し合っとうするか決めようよ」

——ああ、ああ……。

というか、いつそ俺もヘスティア様達に混じっていた方が頭を痛め

ずに済んだのではないだろうか？

第一九三話

—— どうしてこうなった。

俺達はただミアハ様からの依頼で『ユージン島』に訪れていただけだというのに……何故。

何故、キノコに寄生された皆が別人の様に変貌を遂げた様を見せ付けられているのだろうか？細波の音に混じり響き渡る姦しい声。肉を焼く音と香ばしい匂いも漂わせ、楽し気に肉に食らい付く姿から視線を外す。

頭を突き合わせて天幕の前に集まった俺達は絶望的な表情を浮かべながら沈黙していた。

「それで、『ロキ・ファミア』の所には行けたの？」

浜辺から響く姦しい声にかき消されそうな程に小さなレーネの問いかけ。

ベルは膝を抱えたまま俯いて動かず、キューイは体を丸めて震えて動かない。フィアは目を覆ったまま口を閉ざしている為、代わりに俺が答える。

「はい、一応……ですが、ほぼ全滅ですね。生存者、という言い方はおかしいですが、正常な人が数人」

同行してくれたラウルさんとアナキティさんの二人も、森の中で奇襲されて……。

ロキ派閥の野営地の方に残った数人ももしかしたら既に全滅している可能性も高い。

【超凡夫】^{ハイノレビス}に【貴猫】^{アルシャ}って言えばLv. 4かあ。まあ、【疾風】でも対処できなかつたみたいだしね」

「というか、こつちの方では何があつたんですか？」
「あの女神様が余計な事した、っていうか……」

呆れた様な表情のレーネが指差したのはヘステイア様だった。

頭にキノコが生え、別人の様にズレた語^{イントネーション}調で姦しく騒いでいる姿に思わず視線を逸らしてしまう。黒歴史確定の光景じゃないか……。

「ヘステイア様が何を？」

「記憶喪失中の【剣姫】に『キミには好きな人が居たんだ。それはヴェルフ君さ!』って嘘吹き込んだよねえ」

……何してんですかヘステイア様。

強大な恋敵ライバルを脱落させようとしたのか知らんけど、緊急時にほんとなにやっていますか。

「で、鵜呑みにした【剣姫】がああ鍛冶師に『おかえりダーリン♪』とか言ってる、前で三つ指ついて『お風呂にスル? ご飯にスル? それとも、ア・タ・シ?』とかベツタベタなネタぶちかましてねえ」

「うう……ぐすつ……いつの間にヴェルフと……」

「……………まあ、その団長君がギャン泣きしながら逃げようとして、あっちの岩場から滑り落ちて昏倒。その後は皆でガヤガヤしてたけど」

『ナンニデーモ菊』の探索に出かけたままミコトとリユーさんが戻ってこない事に気づき、ヴェルフとリリが組んで搜索に向かい――

――森から戻ってきた時にはあんなだった、と。

「で、森からデインケ君達が戻ってきたんだけど、まあアレだよ。うん」

「……………その時既に、って事ですか」

「うん」

それを見たヘステイア様と春姫が慌てて探しに行くべきだ、と提案し始めたらしい。

レーネは止めるべきだ、と引き留めたが二人は頑なに聞かずにレーネを野営地に残したまま森の入口を見にいつて……僅か数分での調子となって帰ってきた。と……。

「……………酷えな」

「それより、あのキノコが原因なら引っこ抜いちやえば……」

ベルが思い切った様に立ち上がってバーベキューをしている皆に視線を向けて決意を抱いた表情を浮かべている。それを見たファイアが眉を顰めつつもベルの腕を掴んで止めた。

「いや、止めた方が良いだろ。引っこ抜いた結果どうなるかわかんねえし」

「でも、だったらどうやって皆を治せば……やっぱ、ナンニデーモ菊しか……」

ベルが森の方に視線を向けるのを見て、慌てて止める。

「森は危険ですよ。キノコの怪物も出ますし、何より幻覚や幻聴で惑わされてしまいます」

「だな、アタシと副団長も危なかったし。ディンケ達も皆それでやられてんだぞ」

必死の制止の言葉にベルは困った様に眉尻を下げ、泣きそうな表情を浮かべた。

「だったら……どうしたら……」

「あつ、思い出した」

突然、レーネがポンと手を叩いて呟く。

「どうしたのかと彼女に視線を向けると、彼女は満面の笑みを浮かべて森を指差す。

「別に探しに行つて良いと思うよ」

「いや、さつきまで『幻覚』で危ないって話してたばかりだろうに。なんで行つていい、なんて言うんだか。

「気でも狂ったか？」

「いやいや、この島についてウエヌス様から聞いた事あつてさ」

「え？ この『ユージン島』について？」

「うん」

この無人島『ユージン島』の由来、そしてこの島が作られた理由がちゃんとあるのだ、とレーネは笑いながら呟いた。

「三人には会いたい人は居る？」

「……はあ、それはどういう意味で？」

「私は居るよ。だから行つてくる」

「ちよつと待つてください。なんですかそれ」

「ふらり、と彼女は森の方へ足を運んでいく。それを見て、ファイアと共に彼女の腕を掴んで止めた。

ベルも慌てた様に立ち上がり、レーネを伺う。

「レーネさん、いきなりどうしたんですか？」

「ん〜……森に入る時は一人ずつ。二人、三人で入ると滅茶苦茶になっちやうしね」

「おい、何の話だよ」

「会いたい人と会うための方法」

何を言っているのか。会いたい人と会うための方法？

「どういう事ですか？」

「う〜ん、自分で実際に感じた方が早いと思うけど……この島には人は住んで無いんだよね。だから無人島」

「は、はあ……？」

「でも、会いたいと思った人が必ず居るから『ユージン島』」

「……………」

何処か摩訶不思議な言い方で煙に巻こうとしているのか、レーネはクスクスと可愛らしく笑うと俺とベルの手を掴み、森の方へと引つ張り出した。

「きつと、二人ならば見つけれられると思うよ。『ナンニデーモ菊』」

「え？」

「レーネさん、意味がわからないんですけど」

訝し気なフィアを他所に、レーネはゆったりとした仕草で森の奥を指差す。

「とりあえず、行ってみればわかるよ〜？」

「……………」

ベルと視線を交わし、溜息を零してこの島について思い出したらしいレーネを見上げる。

「本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。他の皆も、大丈夫。危ない事は無いよ」

本当に意味がわからない。わからないのだが、レーネに説明する気が無いのはわかった。

癪に障るが、このまま『ナンニデーモ菊』を探さないといけないのか……はあ、意味わからん。

森の深くに入るとまたキノコの怪物に襲われる可能性がある為、ベルと共に完全武装をして森に足を踏み入れる。

木漏れ日が落ちる森の中、生命の息吹を感じられない不気味な森を進んで行く。

「ねえ、ミリア。レーネさん、何か知ってるみたいだったけど……」

「さあ、本人が答える気が無いみたいだしなんとも言えないわね」

「……神様達、大丈夫かな？」

「……大丈夫よ」

しっかりと敵性生物らしき存在が居る事はベルにも伝えてある。互いに頭上にも警戒を払いながら進んでいきながら、言葉を交わす。

どこからが現実で、どこからが幻覚なのか判別が出来ない現状、何でも良いから言葉を交わし続けていないと気が狂いそう。

「ねえ、オラリオに帰ったらさ……また皆でダンジョンに行こうよ」

「そうね。今度はちゃんと中層制覇を目指しましょうか」

他愛無い言葉のキャッチボールを繰り返しながら、徐々に森の深部へと進んで行く。

直ぐ確認できるように手元に握った方位磁針はしかと北を示しているし、今は北を意識して進んでいるので方位磁針が狂ってもなんとか……なったらいいなあ。

ヘステイア様達は無事だろうか。レーネは何に気付いたのだろうか。この島は何なんだろうか。様々な疑問が尽きない。

相も変わらず、不十分な光しか届かない薄暗い森にまで足を踏み入れた所で、方位磁針がクルクルと狂いだす。俺の脳内地図が間違っていないければ、それは丁度、ギルドが進入禁止区として設定していた区域に入っただけの位置からだと思う。

「……ベル、方位磁針が狂った」

「ミリア、こっちも駄目みたい」

同じ様に自分の方位磁針を見ていたベルも首を横に振った。彼が手にする方位磁針もクルクルと回っており、北を示す事はない。

「まるで、ダンジョンみたいだね」

「そうね……流石に一度引き返しましょうか」

方位磁針は狂ってしまったが、俺自身の方向感覚までは狂っていない。このまま真っ直ぐ引き返せば……引き返す事が出来れば、戻る事は出来るだろう。

砂浜で待機すると言っていたレーネとフィアの下へ戻るべきか、とベルと共に薄暗い森を引き返そうとして——舌打ち。

「ミリア？」

「霧が出てきた……いや、幻覚かしらね」

薄暗さに加えて徐々にだが視界が白く染まって行く。

霧、にしては湿度を感じない。不自然なその現象は間違はなく幻覚だろう。

「ベル、離れないでね」

「うん、わかってる」

互いにすぐ手の届く距離を保ちながら、方向感覚が狂う前に砂浜の方へと足を進めていく。

レーネが『大丈夫』と太鼓判を押していたが、やはりだめか。

「ベル、近くに居るわよね？」

「うん、傍にいるよ」

声を掛け合いながら着実に進んで行くが、一気に霧が濃くなり、五分もしない内に伸ばした手の先すらも見えない程の濃霧に包まれてしまった。

「ミリア、何も見えない」

「大丈夫よ、こっち、もう少し近くに」

微かに見えたベルの服の裾を掴んで引きながら進んで行く。

足元すら緑に見えない程の濃霧で、深い森の中。光量が足りないのも合わさってまともに何も見えなくなってきた。

方向感覚だけを頼りに進む途中、二度、三度と木の根に足をとられながら進んでいると、ふとベルがこけた。

「うわっ！」

「おっと、ベル、大丈夫？」

ずしやつ、と木の根に足を滑らせたのかこけた拍子に袖を放してしまった。

声のした方に耳を澄ましながら、慎重にベルの姿を探そうとして――

「ベル？　ベル、聞こえる？　ベル……おーい」

すぐ傍で転倒したはずだというのに、ベルの姿が消えた。

その場にしゃがみ込み、地面に残った足跡を探る。俺のすぐ後ろにしっかりとベルのブーツの足跡が残っているし、踏み損ねた木の根には滑った痕跡が残されている。

だというのに、転倒したはずの少年の姿は何処にも無い。

「……はあ、レーネの言う事を当てにするんじゃないか」

彼女から悪意が感じられなかったとはいえ、信じたのは早計だったか。

狂っていない事を信じたい方向感覚を頼りに、時折濃霧の所為で目の前にいきなり現れる木々を避けながら進んで行く。

「ベル、ベール、ベールー！　聞こえてたら返事なさい」

一応、呼びかけながら進んで行くが、声は濃霧に吸い込まれる様に掻き消され、返事が返ってくる事は無い。

しばし、声を上げながら歩いていると、踏み締めた土の感触が変わった。しっかりと踏み締められた獣道の様な感触だ。

ああ、幻覚だな。この土の感触は通った記憶が無い。

「はあ、結局こうなる訳か……」

濃霧の所為で真面に視界も利かず、音もまるで吸い込まれる様に消えてしまう白に染まった世界。

正直言つてさつさと抜けてしまいたいのだが、そうもいかないか。

方向感覚は正直頼りにならないが、それでもその方向感覚しか信用できるものがない。故に、また真っ直ぐ歩きはじめる。

幻覚だとわかっていながら、何も出来ないというのは非常にもどかしいものがあるのだが。

「鬼が出るか蛇が出るか」

鬼も蛇も勘弁してくれ。出来れば猫みたいな可愛らしい奴がいいなあ。キチ猫は勘弁だがね。

半ば投げ槍気味に足を進めていると、ふと足裏の感触が固くなった

のを感じた。迷宮都市^{オラリオ}で踏み慣れた石畳ではない。その感触は何処か懐かしさを覚えるモノだった。

思わず濃霧の中、しゃがんで足元を確認してしまう。

黒い地面だ。何処か覚えのあるそれは、アスファルト舗装のされた道路のそれだった。

「わああ、近代的い……」

濃霧の中で独り言をつぶやくと、それは何事も無かったかのように霧に吸い込まれて消える。

ここで立ち止まっていても何も進まないだろう、というのは何となくわかる。わかるのだが……進んだら何があるのかわからなくてほんの少し怖い。

後ろを振り返ってもあるのは濃霧にそまった白ばかり。頭上を覆っていたはずの木々の天蓋すらも確認出来ず、僅かながらの不安が募るばかりだ。

「ベルー？ ヘスティア様ー、ヴェルフー、リリー」

片っ端から名前を呼びかけながら、前に前にと足を動かしていく。叫び声は濃霧に吸い込まれ、誰かに届いた気がしない。暖簾に腕押しならぬ、濃霧に腕押しか。全く持って進展が無いこの状況に僅かながらの苛立ちすら感じる。

このまま帰れなかつたらどうしよう、とか頭の片隅でむくむくと不安が膨れ上がり始めた頃。

真正面から突風が吹き荒れた。

「――！」

凄まじい突風だった。吹き飛ばされる、という程ではないにせよともではないが目を開けていられない程の風であり、思わず両手で顔を庇って目を瞑った。

ほんの一瞬の間に吹き抜けた風が収まったころになって、微かに目を開けて―――思わず、本当に思わず言葉を失った。

「あ……………」

遠くに見えるのは天にまで届きそうな程のコンクリート製の摩天楼が無数に立ち並ぶ都市部。

空を見上げれば、晴れ渡った青空を捕える様に無数の電線が駆け回り、まるで網か、または檻を連想させる窮屈な空が見て取れる。気が付けば、俺は都市部から離れた閑静な住宅街の一角に立っていた。

まるで鉛の様に重い体を捻り、すぐ横にあった古めかしい真っ赤な郵便ポストを見上げ、その横にある町内看板に乗せられた紙面の日付に視線が吸い寄せられる。

日付は、丁度——ユーノと言う人物が死んでから、十年後の日付だった。

「……はは、まさか、ね」

冗談だろう。こんなものただの幻覚だ。わかっているのだ、幻覚だと、わかっている。

だが、自然と足が動いていた。草臥れたおばちゃんが営む煙草屋の前を右に、鼻の欠けた御地蔵さんの前を左に、錆び付いたブランコが残る公園の前を駆けていく。

幻覚、だ。間違いない。

だって、煙草屋にはちゃんと店名があったはずなのに、ぼやけて見えない。他にも、記憶の中で曖昧にぼやけた部分が下手糞な水彩画の様にぼやけて見えているのだから、これが幻覚と言わずして何を幻覚と言うのか。

再現するなら、もっときれいにやってくれ。

そう、ただの幻覚。幻覚だから、それがわかっているのに……足が止まらない。

「……、を……曲がれば……」

迷子の犬を探しています。なんて張り紙が勝手に貼られた電柱のすぐ次の交差点を右に曲がって——あった。

俺の記憶の中にあるソレと遜色の無い建物が、其処にあった。

周囲の家々はぼやけてどこか曖昧だというのに、その家だけはしっかりと細部に至るまで再現されている。過去に車を擦って着けた塀の傷も、ペンキの塗り替えに失敗して残った手の跡も、窓の修理の時に踏み抜いた車庫の屋根の痕跡も……記憶のまんまだった。

懐かしさが込み上げてきて、同時に悲しさが胸を満たした。

ただいま、つて帰るんだとずっと願っていたこの家が、知らぬ間に取り壊されていたこの家が、目の前にある。たったそれだけで、幻覚だとわかっているても手を伸ばさずにはいられなかった。

「ああ、ただ………た、だ………」

ただいま、帰ったよ。つて言えば良かったのに。

「はあ、今更過ぎるだろう」

もうあの時の自分では無い。そもそも、俺はもうミリア・ノースリスだ。

まかり間違っても、この家は俺の帰る所ではないのだから『ただいま』はおかしい。だから、この幻覚は、まぼろし遅すぎたんだ。もつと早くにこの光景を見ていたらきつと、俺は帰れなかったと思う。

深呼吸を繰り返して、心を落ち着けて、もう一度その家を見上げた。

あの人と暮らしていた、あの日々を過ごした家だ。ずっと帰りたいたい願っていて、帰る事が出来なかった、我が家。

「………はあ、行かないと」

今はもう、帰る場所が別にあるから。

この場所に用はない。直ぐに立ち去って、『ナンニデーモ菊』を探さなくてはいけない。

そのはずなのに……。

「………」

居る筈無い。そんな都合良く、でも、もし居るのだとしたら。

そう考えると居ても立ってもいられず、思わず、そう本当に思わなかった。俺は高い位置にあった呼び鈴ドアチャイムに手を伸ばしていた。

ピンポン、とありきたりな音が響き渡った所で正気に戻った。自分は何をしているんだ、と跳ね回る心臓を抑えて一歩後ずさる。

「………」

たつぷり、一分程待っただろうか。跳ね回っていた心臓も落ち着いてきた頃になっても尚、誰かが出てくる気配は無かった。

「やっぱ、そう都合良くはいかないわ」

だから、さっさとこの場を離れ——ガチャリ、と鍵の開く音が

響いた。

思わず、体が跳ねる。まさか、という思いのまま開いていく玄関扉に視線を奪われ——ガギツ、とチェーンロックに阻まれて扉が途中で止まった。

「あいたつ……あれ、開かない？ ああ、こつちもあれか……」

気の抜けた様な、男性の声が僅かに開いた扉の向こうで響き、ガチャガチャともたもたした様な音を立ててチェーンロックを外し、ようやく扉が開いた。

「はいはい、どちらさま……？」

全体的に線は細く、無精ひげが生えており、髪には多くの白髪が目立っている。何処か頼りなさそうなジャージ姿の男性が目の下に僅かな隈を作りながら眠たそうに眼を擦り、出てきた。

記憶の中にあるどの姿にも当てはまらない。だが、見間違えることはない。まるで、あの日から十年という歳月を経たであろう姿を完璧に再現した、あの人だった。

「あー、えつと？ ……こ、こんにちは？」

その人が、俺を見ていた。

あの人、俺に声をかけてきていた。

啞然としたまま、見上げてしまう。なんと声を返すべきか、そもそも出てくるなんて思っていなかったせいで頭の中は真っ白だ。

何処か戸惑った様な、困った様な表情を浮かべたあの方は、少し唸ると玄関扉を開け、サンダルを履いて出てきて、俺の前でしゃがんだ。視線を合わせて、怯えさせない様に柔らかな笑みを浮かべた彼が、ゆっくりと話しかけてくる。

「キミのコスプレ、ミアア・ノースリスだね。良く似合ってるよ？」

——はあ？

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

俺の記憶にあったところと違って整理整頓されたリビングダイニン

グ。まあ記憶にあるより、というだけで片隅にはゲーム機やカセット等が詰め込まれているケースが山の様に置いてあり、よく見ればそこら中にゲーム関連のモノが置かれているのが見て取れる。

見る人次第ではあるが、少なくとも俺の基準では『マシな方』だ。染み一つない綺麗なテーブルクロスの上にコーヒーカーップが置かれている。それは丁度、漫画版の方でミリアが愛用していたモノと同じデザインの代物だった。なんというか……はあ。

なみなみ注がれたトス黒い液体を覗き込み、対面の席に腰掛けた男性に少し視線を向ける。

「すみません、急にお邪魔してしまつて」

「ん、ああ、気にしなくても良いよ。ゲームのファンが訪ねてきたのはこれが初めてじゃないからね」

ニコニコと人当たりの良い笑顔を浮かべているその人に、申し訳なさを感じてしまう。

幻覚だと、わかっているのだが。それでも突き放すことが出来なかつたし、逃げる事も出来なかつた。だから、咄嗟に『ミリカンの大ファンです』なんて素っ頓狂な発言が口から飛び出してしまったのだ。

自分でも何を言っているんだ、と後から盛大に突っ込んだし。今の俺の見た目は金髪に紅眼蒼眼、よく見れば右手が異常に白いという中二要素満載の幼女である。

推定年齢が1桁であろう少女が一人、ゲームの大ファンだからと訪ねてきたら普通、家に上げるか？ コーヒートを振る舞うか？ そもそもミリカンは17歳未満のプレイが一応禁止されてただろ。

もう突っ込み処がいっぱい、溢れ返る程あるのに……これがあの人の性格だったな、と納得してしまう自分も居る。

「あ、ごめん。砂糖とミルク、欲しかったよね」

「いえ、お気遣いなく」

ぼうつとしていたら、勘違いしたのか砂糖とミルクを差し出してくるあの人に、変わらないなあ。と懐かしさと、悲しさが込み上げてくる。

幻覚だとわかっていながら、勧められたコーヒーに口を付ける。記憶に刻まれた、濃すぎて泥水かと思う程の不味いコーヒーの味が鮮明に舌から脳へと突き抜けていった。まっず。

「それで、僕に何か聞きたい事があつてきたのかな？」

「え……あー、そうですね。いっぱい、聞きたい事は一杯あつたんですけど、実際に顔を見たら何を聞いて良いか、わからなくなりましたね」
本心だ、聞きたい事は一杯ある。でも、幻覚だから意味が無い。でも聞きたい。

……が死んだ、とそんな風に聞いてからずっと何を思つて過ごしていたのか。約束を破った奴の事をどう思っているのか。

——何をしたら、償いになるのか。

「ああ〜そつかあ。うんうん、わかるよ。好きなゲームの事で聞きたい事が一杯あり過ぎて頭がいっぱいになっちゃうよね。わかる〜」

「あ、はは……ですよね」

ゲームの事で頭が一杯になって、か。聞きたい事はそう言う事じゃないんだけどな。

「じゃあ、僕から質問しようかな。キミが好きなキャラクターはやっぱり『ミリア・ノースリス』？」

「え、つと、はい。そうですね。プレイ時間も一番長いですし」

今の俺の恰好は、草臥れたローブではなく、迷宮都市に迷い込んだあの日の衣装だった。ゲーム版に登場する初期衣装。デフォルトそのくせ、片目は紅いわ、右腕は白いわ。せめて其処もあの頃に戻しておいてくれよ。なんて……馬鹿だなあ。

「そつか、嬉しいね。そのキャラ、僕が考案したキャラクターだから愛着もあつてねえ」

「そうなんですか。私も何だか嬉しいですね」

何も知らないふりをしながらの返事に、あの人は笑顔でコーヒーを啜り、無言で砂糖を追加し始めた。

何をしているんだろうか、俺は。まぼろし幻覚相手にお茶しててどうすんだか。

「他のクラスはどう？ ファクトリーとか、アサルトとか？」

「そうですね、やっぱりニンプの単純強化で使い勝手の良いソルジャーとかもそれなりに使いますね」

ただのファン。俺はただのファン。

『ミリカン』が好き過ぎて製作者の家に押しかけるちよつと頭のおかしいファン。そう言う事にしておこう。そういう役柄キャラでいこう。もう、それでいい。

ただ笑ってゲームの話をしているだけで、それがどれだけ好きかが伝わってくる。この人は本当に、一途だ。自分の夢に向かって一直線に駆けていく、一途な人だ。

思わず頬が綻び、胸の内側から引き裂かれそうな痛みを感じた。溢れ出しそうな涙を押し込み、抑え込み、呑み込んで耐えながら視線を巡らせ——ふと、リビングの一角に写真立てが置かれているのが見えた。見えてしまった。

「あ、それは……」

「ん？ ああ、これかい？」

俺の向けていた視線に気づいたのか、彼は立ち上がるとその写真立てをとって戻ってきて、しっかりと見える様に俺にその写真を差し出してきた。

二人の人物が写っている。

一人は目の前の男性。線は細いままだが今より若々しい。もう一人は、顔立ちの整った少年だった。二人とも手には新作……その当時は新作だったゲーム機が握られていた。

「俺の息子だ」

違う。それは、違う。

「自慢の子だったんだけどな……」

「何か、あったんですか？」

消えて無くなった。そんな痕跡も、無くなっていれば良かったのに。

「……交通、事故だったそうだ」

悲しそうにしないで良いのに。そんな風に、悲しまなくて良いのに。なんで？　なんで、どうして？　貴方が悲しむ必要があるのか。

そんなクズの為に、悲しそうな表情をしないで。

「そう、ですか……」

「……約束してただけだね。また、一緒にゲームをやろうって」

悲しそうに、懐かしそうに写真に写る少年に視線を落とした彼は、ふと視線を上げた。

向けられた先には山積みになっているゲーム機やカセット各種が置いてあるのが見えた。

「実は、あいつは死んでなくて、何処かで生きてて。ある日、いきなり帰ってくるかもしれない。なんて思ってるんだ。おかしな話なんだけどね」

苦笑交じりに、あの人は語りだす。

「何て言うか、出来が良かったんだ。僕って実は世間が持て囃す程の人物じゃあないんだよ。ミリカンで一躍有名になったけど、それ以外はからつきしっていうか」

「いえ、素晴らしい人だと思いますよ。少なくとも、私は貴方の事を尊敬していますし」

「そう言ってくれるとありがたいんだけどね」
もう一度、写真に視線を落とすと、彼は写真をこちらに向け、呟いた。

「この写真を見て、何か思うところはないかい？」

「何か、ですか？」

「そう、なにか」

探る様に、というよりはまるで確認をとるかのような言い草に言葉が詰まった。

端的に言えば、そう誰が見ても思うだろう。親子の写真、とはとても思えない。顔立ちが似ても似つかないから、親子写真というよりそれは……歳の離れたゲーム仲間、だろうか。

「似てない、そう思わないかい？」

「……………そう、ですね。失礼だとは思いますが、親子写真には見えませんね」

「だろっ？」

くすくすと笑いながら写真を眺め、彼は懐かしそうに眼を細めた。
「血は、繋がって無いしね」

「——え？」

危うく落としかけたカップがソーサーに当たり音を立てた。

これは、幻覚だよな。全てが都合がよく出来た、心地良い気分ゆめに浸らせてくれるだけの、泥沼ぬじまの様な、幻覚ゆめじゃないのか？

何故、知っている。何故、それを口にする。何故、貴方がそれを
……………。

「この子を引き取ってから暫くは本当に我が子だと思っていたよ。でも、成長していくとわかるんだ。ほら、顔立ちなんてちつとも似てない」

「……………誰か別の人の子供だったんでしようね」

「そうだね。かもしれない、僕はあんまり頭が良くなかったけど、この子は凄く頭が良かったし。学校では友達も多かったみたいだしね。僕とは似ても似つかないよ。正直、成長すればするほどに僕とかけ離れていく様を見るのは、辛かったかな」

「酷い言い方かもしれませんが、育てるのが苦痛だったのなら孤児院にでも預ければ良かったと思いますが」

苦痛、だったのか。俺は楽しくて、幸せだと感じていたあの日々は、この人にとつての苦痛だったのか。

——ああ、出来の悪い悪夢じゃないか。酷い悪夢だ。なんだこの幻覚まぼろしは、見せてる奴の腸ぶちまけてぶっ殺してやりたいよ。

「僕の趣味がゲームでさ、子供相手には思ってたけど大人げなくゲームでコテンパンにしてやったのさ。今でも思うよ、本当に大人げなかったって」

「それは……………」

「でも、同じゲームを一週間ぐらいやっただけで……………僕より上手くなるんだ。子供だから、っていうより、もう才能なんだろうね。僕とは段違いに、才能に溢れていたよ」

成績も良い。友達も多い、先生からの評判も良い。外観も悪く無い。ゲームだって上手いし、何処にも非の打ち所のない、完璧な子供。

自分と比べると余りにも惨めで、自分の子供だなんて、とてもではないが思えなくて。

「酷い子供ですね」

「はっはっは、でもね。僕にとってこの子は、僕の子供だったんだよ」
「……それはまた、どうして？ 育てているのも、苦痛だったのではありませんか？」

「笑顔だよ」

「……………笑顔、ですか」

「そう、ゲームをクリアした時とか、勝った時とか、そんな時に見せる笑顔は僕と変わらなかった」

本気でゲームが好きだ。と共感できる笑顔を浮かべていたから。

一緒に肩を並べてゲームをやっている内に、血の繋がりとか、嫉妬とか、全部どうでも良くなった。

親子、という形すらも本当はどうでも良かった。

ただ、一緒に、ゲームが出来れば。

「それだけで、良かったんだけどね」

——ああ、うん。俺も、そう思うよ、一緒に、ただ一緒にゲームが出来れば、それだけで良かったのに。

「そう、ですか。色々とお話を聞かせてくれてありがとうございます
た」

「ああ、無駄な話を聞かせてしまって申し訳ない」

「いえ、ためになる話でした。もうそろそろ、帰らないといけないので失礼しますね」

「そうですか。機会があれば今度はゆっくりと、ゲームでもしながら」

「……………そうですね、機会があれば、是非」

第一九四話

膝を抱えながら、砂浜で遊び回る「ファミリア」の皆の姿を見て、溜息一つ。

同じく、横で膝を抱えたレーネ・キュリオも溜息を零した。

「で、副団長はどうだった？ 団長とファイアは、まあ、あの通りだけどね〜」

顎で指し示された砂浜にて、頭にキノコが生えたベルやファイアが他の面々に混じってナマコを突きまわしていた。

森の中に入っても安全だとレーネが断言し、それを信じた訳ではないが足を踏み入れた俺に待っていたのは、なんとも言い難い過去の幻想だった。

もし、もつと早い時期にあの幻想に囚われていたら抜け出せなかったと断言できる程の代物であって。そして、今となっては僅かに感傷に浸る程度の代物ではない。

……嘘、実は結構、胸が痛い。

「別に、見ての通りよ」

青々としていたはずの砂浜は、今や夕日の赤一色に染め上げられている。

俺と同じ様に、キノコの寄生を免れたらしいレーネと共に二人並んで、海を赤く染める夕日を見て黄昏ていた。

「まあ、副団長はそうなると思ってたよ。他の子、特にファイアは無理だなんて思ってたし。団長は……あはっ、私、団長の事あんまりよく知らないからねえ」

他の人が見ている幻覚とは違う物を見てるのかもね、とレーネが言葉濁した。

「で、答えは教えてくれるんでしょう？」

あのキノコの正体。森の中で襲撃してきた怪物もそうだし、この島が何のために作られたモノなのか。少なくとも、彼女が知る限りの全てを教えてほしい。

もつと言ってしまうと、あのキノコがどのような方法で俺の想像の

斜め上を超える幻覚を生み出したのか。知りたい。

「んー、まず……昔、とある神様が眷属達と仲良く都市でくらししていました」

一息ついたレーネは、夕日に目を細めながら昔話を語る様に囁き出す。思い出す様に、懐かしむ様に彼女の口から零れる音に、耳を傾けた。

「しかし、その神様の派閥は、事件に巻き込まれて壊滅してしまいました」

事件とは言ったが、その神がちよつとふざけたことが原因で起きた事件である。

数多くいた眷属の殆どを失い、残った少数を連れて都市を去ったその神様は、酷く反省しました。

残された眷属達の多くは心に深い傷を負い、中には自害してしまう程に精神を病む者すらいて、神様は自分の行いを酷く反省しました。

「……なんとなく、なんとなくですよ？ 先読みするのは良くないとは思うんだけど、この島ってその神様が作った島？」

「らしいね。ウエヌス様が言ってた事が正しければ、だけど」

自らの眷属を病ませてしまった事を悔いた神は、その眷属達を連れて人里離れた海の孤島に引き籠る様になりました。

その島にいくつもの薬効のある植物を持ち込み、栽培し、精神を病んだ眷属達を治そうとしました。

何年かかろうと、眷属の精神を復活させようと頑張りましたが。医療を司る権能を持つ神を以てしても、人の子の精神を復活させる事は出来ませんでした。

「器からだは治せても、魂こころは治せない、ですか」

「うん。だから、その神様は地上で禁じられた行為に手を染めました」
地上で使う事を禁じられた神アルカナムの力を用いる事で、精神が病んだ眷属達を治そうとして、いくつかの裏技を利用しようとした、らしい。

「普通なら、神が地上で『神アルカナムの力』を使ったら、瞬時に天界へと送還されてしまうだけだね」

だが、いくつか裏技がある。

例えば、自分の肉体、器を地上に縛り付けて力を行使したり、どうか。

「……ピンときませんね」

「うーん、私も良くわかんないんだけど、モンスターに自分を取り込ませる、らしいよ?」

「……………は?」

モンスターに、アルカナム神の力を取り込ませる?

可能なのか? いや、もしかしたら可能なのかもしれないが、実際にそれを行ったとして、神や人に殺意全開で襲い掛かるモンスターにそんなもの与えたら危ないと思うんだが。

「えっと、キューイ、みたいな感じじゃないかな」

「……それは、どういう?」

思わず砂浜の片隅で流木を積んで火を入れ、一人焚火で素潜りで得た魚を串焼きにしているキューイを見てしまった。というか、アイツ器用過ぎんだろ。

とはいえ、レーネの言いたい事がおおよそ、わかった。異端児か。ゼノス

「アルカナム神の力を協力的なモンスターに与え、振るわせる。そうする事で強制的に地上に縛られる事になる」

神々の規則ルールに抵触した事による強制的な天界への送還に対し、地上に縛られる事で対抗する。

つまり、地上で神の力アルカナムを好き勝手に使う事の出来る裏技。

「……で、その神は何をしたんですか?」

「うーんとね……簡単に言うと、その人が会いたいと思つた人に会える様にしてあげたんだよ」

死した者との再会は決して叶わない。同じ魂を持つ者と会う事は出来ても、それは全くの別人。

精神を病んだ眷属達に対し、死んでしまった者達を再会させる事によつて精神の復活を試みた。アルカナム神の力を使ってまで……。

「この島の中だけ、あのキノコの怪物に寄生される事で、少しの間だけ会いたい人と会える様にしてあげたんだよ」

「……神の力アルカナムで、ですか」

「うん。ぶつちぎりの規則違反。当然、神々には瞬間でバレちゃった
んだけどね」

当然、神の力を取り込んだモンスターなんて危険極まりない化け物を放っておくようなオラリオではない。即座に討伐隊が組まれ、速やかに排除しようとした。

「そう、した。らしいね」

しかし、神の力を自由自在に振るう化物を相手に、力の片鱗を与えられただけの人の子では敵わない。

神の力に対処するには神の力を用いねばならぬ。

「で、結局どうなったんですか？」

「うーんと、封印して放置」

……はあ？

「いや、地上を害する気が一切ないみたいだったから、島ごと封印して放置らしいよ？」

そのモンスター、キノコの怪物は島にやってきた人々に幸せな夢、会いたい人との再会の幻覚を見せて、島の外に送り返す。という行動以外をとらなかつた。

そのモンスターが何を考え、どういう理論で動いているのかは不明ではあるが、神の力を破壊等に使わない内は放置で良いんじゃないか、とその時集まった神々は決めた、らしい。

「いや、とんだ爆弾仕込んでますね」

害が無いから放置でいいや、って………というか、なら何故この島にギルドが冒険者派遣したりしてんだよ。

「この件は一部、本当に一部の神様しか知らないんだって。ウエヌス様は面白そうだからって当時関わってた男神を何人か誑かして聞き出したって言ってたよ」

……ああ、そうか。そくだよな、レーネの主神って美の神だもんな。食えない性格してて当然か。

つまり、ほんの一部の神しか知らない、神の力を持ったモンスターの居る島、と？

「ギルドは何してんですか……」

「んー、多分、島の外に出たら忘れちゃうんだと思うよ」

この島に訪れた者達は総じて、普通に薬草採取を行って帰ってきた。と口にする。

「ギルド職員も皆知らないんだと思う」

「……あ、あー、なるほど」

もしかしたら、とは思うんだが。

その神様、っていうのから神アルカナムの力を与えられたモンスターは、異端児ゼノスだったのではないだろうか。

そして、神ウラノスは、それを知っていて何も言わない、と。

しかし、正直言えばこの島に巢食うそのキノコの異端児ゼノスの考えが理解できないし、何を思っているのかもわからない辺りは非常に不気味で気持ちが悪い。

「それに、この島を封鎖するとオラリオも混乱しちゃうだろうし」

「それは……あー、医療品の流通ですか」

この島は神が古今東西の薬効を持つ植物を集め、一つの生態系として完成させた島。

生態系さえ崩さなければ、最高峰の薬草がいくらでも手に入る良質な素材採取場だろう。

そして、悲しいかな、この島には定期的に冒険者等が派遣されて多量の薬草類の採取が行われている。それがいきなり途絶えたら、回復薬類ポーションの値段が上がってしまう。

要するに、害はない処か、島そのものは利益を齎してるから放置、と？

「ウエヌス様はそう言ってたねー。神ウラノスもそんな形で他の神を納得させてたみたいだしね」

もしこの島に巢食うキノコの怪物に対処するのであれば、島そのものを地上から消し去る他ない。しかし、この島の植生はただ消し飛ばすには惜し過ぎる、と……。

「はあ、で？ キノコが安全と言い張った理由は？」

「いくつもあるけど、ウエヌス様曰く、この島をつくった神様は自分と同じぐらい眷属こども好きだった、って言ってたし」

「……はあ、まあ、実際、危険な感じはしませんでしたしね」

第一級冒険者どころか、神アルカナムにすら効果を齎す理由はわかった。神アルカナムの力を封じた神に対し、神アルカナムの力を使っているのだろう。

地上の規則ルルに抵触しながらも、天界に送還されないのは、モンスターに力を奪わせたから。

「なるほど、色々と理解はしました。したんですが……もう一つだけ、重要な事を聞かせてください」

「えっと、答えられる事なら？」

夕日に照らされ赤く染まった砂浜、バーベキューをする皆から少し離れた位置。

ベルとアイズさんの二人が木の枝でナマコを突きまわして、串刺しにし、掲げた。

『ナマコー、アハハハ、キモイデース！』

「アレはなんですかね。神の趣味かなんかですかね？」

レーネの語った『神が眷属アルカナムの為に神の力をモンスターに与えてでも作った楽園『ユージン島』だ』というのなら、キノコに寄生されて幻覚を見ている者達が、

『ナマコー』とか『キモイデース』とか『バーベキュー』とか言ってる頭おかしくなったみたいになるのは、一体なぜだ？ 神の趣味か？

「それはー、神のみぞ知る、的な……？ ウエヌス様もその辺り説明してくれなかったし」

……で、もう一つ。

「私やレーネは平気みたいですが、これの理由は？」

「さあ、心の強さ、というよりは………」

—— 傷が深すぎたんだと思うよ？

そんな風に乾いた笑みを零すレーネを見てから、砂浜ではしやぎ回るハステイア様達を見やる。

「……レーネさん。あれってどれぐらいで戻りますかね」

「多分、二日、三日もあれば」

「じゃあ、あのアツパラパーな皆に囲まれて、後二日は過ぎさないといけない訳ですか」

「だねえー……」

会いたい人に会える楽園『ユージン島』。何処が？ 地獄じゃないか。

「……レーネさん、今日はもう、寝ましようか。明日は、薬草採取行きましよう」

「うん、と言いたいけど、私、昼間寝てるから眠くないなあ〜」

「あー、じゃあ私寝るんで、番をお願いします」

「わかった〜」

そうか、この地獄で、正気を保っているのは俺とレーネの二人つきりか。

……逆に、俺の方が狂ってるんじゃないだろうか？

「ねえ、ミリア」

「なんですか？」

「この島を作った神様の眷属って、ちゃんと会いたい人に会えたのかな？」

……さあ、会えたかどうかはわからない。

何せ、ン百年前の出来事の話らしいからな。……でも、もしその話が本当ならば、会えたと思いたい。

見慣れた通りを袋を背負ってえっちらおっちら。

迷宮都市オラリオに帰ってきた俺達を出迎えた神々の祝福——主に人

化したキューイを一目見たい、と集まった野次馬共を退けて、本拠の留守を任せていたタケミカツチ様達に一言二言交わした俺達は、『ユージン島』で採取した薬草類がたっぷり詰まった袋を背負って「ミアハ・ファミリア」本拠『青の薬舗』を目指していた。

「ねえ、ミリア。なんかすぐく疲れてない？ 大丈夫？」

「……え？ いや、遊び疲れただけじゃないかしら？」

隣を歩くベルに二度、三度と心配されながら歩きつつ、あの島での出来事を思い返してみる。

普通に採取して、遊んで、はしゃいで……だけだったはずなのだ。

少なくとも、そうであったはずなのに、違和感がしこりの様に頭の片隅に残っている。

加えて、なんかすつごい精神的に疲れた気がするのだ。慰安旅行に行っただけなのに。

「キューイ関連で都市がにぎわってる所為ですよ。たぶん」

「ふうん……あ、ここを曲がった所だったよね」

「ええ」

俺の他に、あの『ユージン島』に行つて疲れ切っていたのはレーネぐらいだ。彼女の場合はリュウさんに半殺しにされて殆ど寝ていたのが原因、にしてはなんか変な感じはするのだが。

結局、違和感の正体に辿り付けない内に目的地に到着。

扉を開けると、ドアベルがカランカランと涼やかな音を奏で、カウンターで談笑する女性たちの後ろ姿が見えた。

「それで、カサンドラだったらまあ『予知夢』がどうとかって」

「今度こそ本当だよ、信じてよう……」

「あー、はいはい。つと、おかえり、ベル、ミリア」

元【アポロン・ファミリア】幹部、ダフネ・ラウロスとカサンドラ・イリオンの二人の姿があった。

彼女らは【ヘステイア・ファミリア】の入団ではなく、代わりに【ミア・ファミリア】へと入団して、今やなくてはならない存在になっている。

まあ、主神のミア様様の『ゴマすり』で借金がなかなか減らない事に気付いてからは乾いた笑みを浮かべる事が多い二人ではあるが。

「ただいま帰りました。ダフネさん、カサンドラさんもお久しぶりで
す」

「ただいま。薬草類の採取したモノ、持ってきたわ。冒険者依頼達成
証明書を貰える？」

「わかった。薬草は……悪いんだけど、ダフネ、倉庫にお願い」

慣れた様に薬草の詰まった袋を受け取ったダフネさんが倉庫に仕舞いに行くのを見送りながら、ナーザーさんが手早く達成証明書を書き連ねていく。

その横で、カサンドラはベルの腕に縋りついて涙目で訴えはじめる。

「ベルウ〜」

「あ、あの、カサンドラさん？ ど、どうしたんですか？」

「今朝、予知夢をみたんだけど、誰も信じてくれなくて……」

「えっと、どんな夢なんですか？」

涙目の女の子に縋られて無下にも出来ずに話を聞き始めるベルを他所に、店の奥ですり鉢で薬草をすり潰すミアハ様の背中を見やっ

た。
「ミアハ様、集中している所悪いんですけど、「ヘステイア・ファミリア」がきてますよ」

「ん？ おお、すまない。調合に集中し過ぎていたな。おかえり、ミリア。『ユージン島』は楽しめたかな」

「ええ、綺麗な島でしたよ」

本当に綺麗、な……島、だった、と………と思う。思ってる、はずだ。

なんかあの島の事を考えるとやけに頭が痛くなるが、綺麗な島だったはずなのだ。少なくとも俺の記憶には『綺麗な島だった』と残っている。

「………どうした？ 頭痛か？ 丁度、頭痛薬を調合していた所だ。試しに」

「ミアハ様、それは店で商品として売る用で……」

「はっはっは、良いではないかナーザ。それに、薬草採取をしてきてくれた功労者だぞ」

「………もう報酬は十二分に払ってますよ」

変わらないミアハ様とナーザさんのやり取りに苦笑しつつ、ベルとカサンドラの話に耳を傾ける。

「それで、『異端茸』を庇って貴方が【勇者】フレイバーや他の冒険者に敵対しちゃって……っ！」

「え、えっと……い、いたん、きのこっ？」

「それで、何も無い『島』で朽ちるのは寂しいからって、日の当たるオ

ラリオに連れて行つてつて！」

「え……ええ？」

……あの、カサンドラさんはいったい、何の話をしているの？

「それで、【勇者】が『どんな理由があれ、キノコはキノコ。殲滅するまでさ』つて」

「は、はあ……フィンさんが、そんな事……言う、かなあ？」

「貴方はそれに『これは僕の獲物だつ！ だから、手を出すな……』

!!』つて！」

「ええ!? キノコが僕の獲物オツ!？」

「それで、真つ黒で巨大な火山が噴火して……オラリオが滅茶苦茶に！」

「えつ……火山？ え、ええつ？」

………キノコ、ユージン島……うつ、頭が……。

真剣な表情で荒唐無稽な話をするカサンドラさんに対し、ベルが僅かに表情を引き攣らせている。倉庫から帰ってきたダフネさんがカサンドラさんの後頭部に手刀を落として黙らせた。

「あんまこの子の言う事は気にしなくていいよ。ただの妄言だし」

「も、妄言じゃないのにい〜」

「あ、はは……」

ナアーザさんとそのやり取りを見届けてから、本題に入る。

「それで、ナアーザさん、都市の方はどうです？ キューイ関連の話とか、なんか変化ありました？」

いや、まあ……帰還時に都市入口に『美少女化した竜を見たい!』とか『ノーパンミアちゃんは何処だあああッ!!』とか喚き散らす神々が居たから察しはつく、というか……考えたく無いんだけど。

「はあ、ミアも知つての通り。否定派は少ないよ」

「肯定派も少ないがな。つと、頭痛薬と水だ」

しれつと出された頭痛薬を飲みつつ、ミアハ様を見上げる。

「……ミア、後で代金は払ってもらおうから」

「これこれナアーザ、これは必要経費というやつだ」

「はあ……」

もう恒例過ぎるやり取りに苦笑しつつ、ミアハ様に問いかけた。

「それで、肯定派も否定派も少ない、というと？」

「ああ、キューイ、そなたが連れてくる飛竜が人化した件について、肯定的な意見の神はおおよそ一割、否定的なのは五分と言ったところだ」

肯定派一割、否定派五分。じゃあ残りの八割五分は？

「七割が『面白ければ何でもいいや！』派であり、残る一割五分が様子見、と言ったところだな」

おいおい、神々の七割が面白ければオツケーって……。

いや、まあ、娯楽に飢えた神々にとつて、キューイの人化事件は娯楽の一環でしかなかったのだろう。それは、それで……。

「ああ、そうそう。ミリア・ノースリス、アンタに言いたい事があったんだわ」

「なんですか、ダフネさん」

「いやね、アンタが連れてきた飛竜、あれが人化したって聞いたけど本当？」

後ろから割と真剣そうな表情で質問を飛ばしてきたダフネさんに肩を竦めて、本当だと伝えると彼女はまじまじと目を見開いて、カサンドラさんを見やった。

「嘘、じゃあカサンドラが言ってた妄言って本当の事だったの……！」

「だから言っちゃってば、本当に本当なんだって！」

「え、何の話ですか？」

困惑気味にベルが問いかけると、カサンドラさんは、ぱあつ、と表情を明るくしてベルに告げた。

「予知夢でね、ミリアが二人が増えるのを見たの！ 一人はミリアで、もう一人はキューイキューイ鳴いてて」

「はあ、たまにはそういう事もあるでしょ。たまによ、た・ま・に」「違うよお〜！ 予知夢だったのお〜！」

どうして信じてくれないの〜、と嘆くカサンドラの言葉に、ダフネさんやナアーザさんは慣れた様に肩を竦めた。

正直、信じがたいが、本当に予知夢だとしたら、彼女の言う【勇者】

を含む都市の冒険者との敵対化、というのは事実には……？

「……………いや、何がどう転んだら都市の冒険者すべてと敵対する事になるんだよ。」

「あ、そういえば、近々、ラキア王国が攻めてくるらしいよ」

「あー、恒例のアレね」

ナアーザさんの言葉にダフネさんが頷き、嘆いていたカサンドラさんもあれかあ、と納得した様に呟く。

『ラキア王国が攻めてくる』か、話には聞いていたが随分と気楽だな。いや、まあラキア王国の兵力とオラリオの戦力では戦いにならないのだから仕方ないが。

「あの、恒例のアレって、なんですか？」

「戦争よ、せ・ん・そ・う」

「ええっ!？」

酷く驚いた様子でベルがきよろきよろと室内を見回す。

「戦争って、大変じゃないですか！ 早く何処かに避難しないと……」

「……何言ってるの、ベル？ 避難なんかしなくても平気だけど？」

「でも、戦争ですよ！」

狼狽した様子のベルを見て、ナアーザさんやダフネさんは首を傾げ、カサンドラさんがベルの腕をぽんぽんと叩いて落ち着かせ始める。

「あの、大丈夫ですよ……？ ラキアの兵隊さん達よりオラリオの冒険者の方が強いですから」

「あー、最近都市に来たばかりなんだっけ。オラリオではね、ギルドが上位派閥を招集してラキアの襲撃を撃退するのよ。当然、【ロキ・ファミリア】の第一級冒険者も出るし」

なんなら、【アポロン・ファミリア】だって迎撃戦に参加する事だった。とダフネさんが肩を竦めるのを見て、ベルも此度の『戦争』はそこまで慌てる必要の無いものだど気付いたのか、恥ずかし気に頬を掻いた。

「あ、はは……そういえばそうですね。第一級冒険者が出るなら、心配なんかしなくても平気ですよね」

「まあ、ダンジョンでモンスター相手にするより面倒臭いけどね」
「そうなんですか？」

隊列組んでようが、策を弄そうが、第一級冒険者なら都市外で恩恵を受けた者程度ならば蹴散らせる気がするんだが。

「ああ、殺しちや駄目、つて言われるんですよ」

「あと、再起不能にもしちゃだめつて」

手足を欠損させるほどの攻撃すらも禁止つて……要するに全力を出せば簡単に蹴散らせる雑魚相手に加減に加減を重ねて戦わないといけないから、ダンジョンのモンスターを潰すよりも大変、と。

いや、まあ……わかるっちゃわかるが、それは面倒だな。

「特に魔法使いなんかは加減できないから、後方支援に回されるし」

「なんなら私はラキアの兵隊さんに回復魔法かける事の方が多かったです」

縦横無尽に駆けてはラキアの兵隊を蹴散らすヒュアキントス。そんな彼が半殺しにしてしまった兵達をカサンドラの範囲回復魔法で最低限死なない程度に回復させては、他の団員が回収。

捕虜としてオラリオに運び込んで、ラキア王国の神、アレスに対して降伏勧告を言い渡し、渋々とアレスがそれを飲む。というのが通例らしい。

「そ、それつて面倒ですね」

「でしょう？ ま、今の私達は借金地獄の底辺派閥。招集なんてかかるはずがないから楽だけどね」

「……あれ？ でも【ヘステイア・ファミリア】の規模だとギルドから招集がかかりそうですけど」

カサンドラさんがふと呟く。

そう、カサンドラさんの言う通りだ。一応、俺達も対ラキア王国の戦力としてギルドに招集される基準ラインは満たしてしまっているのだ。だが、これに関しては一応、問題無い。

「問題無いですよ。というか、私とか特にですけど、招集はされないうでしょうね」

「そうなんですか？」

「……アンタが出て行ったら、ラキア王国が可哀そうになるわ」
僅かに青褪めたダフネが頬を引き攣らせて俺を見下ろす。

城塞撃ち抜く一撃を連発出来る魔術師、とか過剰戦力過ぎるし、あんな一撃をラキア王国相手に振り回したら骨すら残さず消し飛ぶからなあ。

当然、死者が出る可能性が高すぎるから招集はされない。と……。

「飛竜で強襲……も無いわね」

「あー……確かに、というかミリアが出て行ったらラキア王国、尻尾巻いて逃げるんじゃない？」

ナアーザさんが眠そうな目で此方を見下ろして——違う、眠そうな目、じゃなくて呆れた目だコレ。

「ああ……確かに……ミリアさんって、モンスターを相手取るより、人と戦争してた方が似合ってそうですもんね」

「ああ、カサンドラもそう思う？ 私もそう思うわ」

彼の戦争遊戯での活躍を思い出したらしいカサンドラとダフネの二人に畏怖の視線を向けられてしまった。

いや、まあ……確かに、というかその通りではあるんだがね。

元々の性質スベックが対人戦闘向き、というか戦争向けなのは否定しない。ゲーム時代では条件さえ揃えば無双できる強さはあった、が。

「流石に全てを撃退は出来ませんって。魔力が足りなくなりますし」

「……それ、『魔力があればできます』って言ってない？」

「実際に出来そうなのが凄いと思うんですけど……」

「ミリア、精神回復特効薬、ダース単位で、どう？」

完全にドン引きして表情を引き攣らせたダフネさんと、感心した様に彼女の背に隠れるカサンドラさん。いや、まあ……戦争遊戯ウォーゲームの事もあるから二人に関しては仕方ないんだがね。

それと、ナアーザさんは隙を見て商品売りつけようとしなくてくれませんかねえ。

「いや、もしミリアが行くなら僕は止めますよ」

ベルが真剣な表情を浮かべて呟く。

「あんな、想いはもうしたくないし。ミリアにもさせたくありません

から」

真つ直ぐ決意に満ちた瞳を浮かべたベルを見て、ダフネさんは肩を
竦め、カサンドラさんは小さく頭を下げた。ナアーザさんは……ド
ンツ、と精神力回復特効薬を一ダース、カウンターのの上に置いた。

「ベル、安心してください。此度の一件で私達「ヘステイア・ファミリ
ア」が招集される事は無いですよ」

「……そうなの？」

「ええ、ギルドには既に掛け合ってます。というか……」

ギルド長が目を血走らせて『お前は絶対に前に出るな！ 都市内で
大人しくしているオツ!!』と吠え狂ったのだ。

なんか、問題児トラブルメーカーとでも思われているのだろう。心外に過ぎるが。

「ま、ともかく。キューイ関連の問題も『ラキア王国の進撃』がある間
は静かになるでしょうし。暫くは休養がとれるでしょう」

「……………？ 『ユージン島』に慰安旅行に行ってたんじゃないの？」
首を傾げるカサンドラさんに、笑顔を向けておく。

あの島から帰ってきて、しごりの様に残っていた父親への想いは
すつきりした様な気はするが、休養がとれた、とは微塵も思えないの
だ。

キノコ、ユージン島、二つの単語が耳に入るだけで頭痛がしはじめ
るし。なんかおかしい病気でも貰ってないだろうか……？

第一九五話

今頃、都市の外部、オラリオから真東に三〇K程キロルいった平原にてラキア王国——【アレス・ファミリア】——と、オラリオの【ファミリア】群との戦争、と言う名の茶番劇が繰り広げられている事だろう。

そんな都市外のゴタゴタした茶番劇に巻き込まれる事を免れた、というよりは絶対に関わるな、と念を押された俺達【ヘステイア・ファミリア】は今までに無い程にまったりとした時間を過ごしていた。

「キュウ〜」

「はいはい、ミコトと春姫が朝食作ってるから少し待ちなさいな」

【ヘステイア・ファミリア】の厨房でテキパキと朝食を作っている二人の所へ「お腹空いた」と突っ込もうとするキューイの尻尾を掴んで引き留める。

食卓にキューイを座らせた所で、ぱたぱたと慌ただしく春姫が食事を運んできた。

黒の仕事着ワンピースと白の前掛エプロン、そしてホワイトブリム。とメイド服に身を包んだ彼女が懸命に働く姿を見やり、卓に置かれた焼き魚に手を伸ばそうとしたキューイを引き留める。

「皆が揃うまで待ちなさい」

「キューイツー」

お腹空いたつ、と大きく叫ぶキューイに軽く溜息を零す。

姿こそ俺をほんの少し成長させただけの姿に竜の翼と尾というだけの姿なのだが、中身が元の竜のまま。人の姿になったからには最低限、人としてのマナーぐらいは覚えさせなければと食卓を共に囲もうとするのだが、我儘っぷりは変わらない。

「おはよう、ミアア君」

「おはようミアア。良い匂いだね」

溜息を零していると、食堂にヘステイア様やベルも姿を見せた。

「おはようございます。ヘステイア様。それと、おはよう、ベル。今日の当番はミコトと春姫よ」

「なるほど、今日はミコト君が当番か。通りでね」

「ヘスティア・ファミリア」は基本的に一日事の交代制で食事当番を行っている。よほどの事が無い限りは、ヘスティア様も含めた二人から三人で食事の準備を行っている。

まあ、俺は例外的にギルドへの提出書類を纏めたりで余り手伝う事は少ないが、やっていない訳ではない。

例えば、ヴェルフ、イリス、フィアの場合は火を通しただけの俗にいう男料理。リリ、デインケならば材料をギリギリまで抑えた節約料理。エリウッド、メルヴィスならば野菜がふんだんに使われた健康料理。ヘスティア様の場合は手を抜ける所は抜いた手抜き料理。ベルならば普通の家庭料理。と、調理人の性格や腕によってバリエーションは様々。

ちなみに、俺が料理人になった場合は『凄く美味しいが申し訳なくなる』と言うコメントを頂いた。前日から書類仕事で夜遅くまで起きてた状態から、朝早めに起きて食事の準備して普通に美味しい食事を提供しただけなのだがね……。

「ああ、みなさんおはようございます。直ぐに準備いたしますので座って待っていてください」

「ミコトちゃん、お茶碗はこれでいい?」

「はい、春姫殿」

ぱたぱたと準備していたミコトが忙しそうに調理場を行き来するさ中に漂ってきた匂いに懐かしさを覚えた。オラリオに来てからはソース系かトマトで煮込む系が多かったからか、味噌の匂いは非常に懐かしい。

「へえ、今日は味噌汁ですか」

「味噌汁? なんだいそれは」

「出汗汁に味噌を溶かした料理ですよ」

少なくともオラリオでは見た事が無い。時折、極稀にだが極東の食材を取り扱う行商人は居なくはない。ないのだが、どれもこれも輸送費やら何やらでかなり値が吊り上げられており非常に高い。

高い、のだが……本当に稀に、間抜けな行商人が『味噌』の価値が

わからずに捨て値同然で売っている事があつたりするので、稀に格安で手に入りはするのだが。

「極東の伝統料理もよくご存じですね」

「流石ミリア様ですね」

ミコトと春姫が準備を進めながらも感心した様に呟くのを聞いて、思わず頬を掻いた。

極東の人間ではないと思われている俺が極東の伝統料理を知っている事について感心されてもなあ、という感じはするのだが。実際にはオラリオの人間でも無い訳だし。

「それで、その味噌汁というのはどんな味なんだい？」

「少々お待ちを」

食事の準備をしながら、手早く小皿に一口分の味噌汁を用意して二人に渡すミコト。その横で春姫がせつせと料理を運んでいた。

「ミリア殿もいかがですか？」

「ん、いや、この後十分に味わうから遠慮しとくわ」

横のキューイがジューツと春姫が運んできた小皿を見つめているのを引き留めてる。その間にも味見をした二人が頬を綻ばせていた。

「何だか、ほっとしますね」

「うん、美味しいよ。これがミコト君達の郷土料理ソウル・フードって訳だ」

ちよつと心配ではあつたが、味噌汁の味が二人の口に合つて良かったよ。それよりキューイ、お前『待て』も出来んのか！ 焼き魚を丸かじりしようとすんな！ 頼むから!?

朝からキューイの暴走を止める騒動を終え、朝食後。

ヘステイア様はバイトへと出かけ、ディンケ改宗予定組は一足早くダンジョンへと行き、残った「ヘステイア・ファミリア」の面々は一階の居室リビングに集まっていた。

「ど、どうぞ……」と恐る恐る皆にお茶を配っている春姫はキューイにもお茶を出し、熱々のお茶を戸惑いなく一気飲みしたキューイに小さく悲鳴を零す。そんな様子にベルがキューイは大丈夫なのか心配したり、その後も平然そうなキューイに皆して呆れたりしていた。

そんな一幕もありつつ、俺達はテーブルを囲んで会議を開始した。
「では、春姫様と人化してしまったキューイ様に迷宮探索に参加して
いただくか否かですが……」

司会進行役としてリリが口を開く中、皆の視線は春姫とキューイに
向けられる。

視線を向けられた二人は、片や太い狐の尾を若干緊張させ、片や欠
伸混じりに尻尾を揺らす。

「正直に言いますと、リリは何が何でもお二人には着いてきて欲しい
と思っています。春姫様の『魔法』は説明不要なほど、強力ですし。
キューイ様の『索敵能力』には今までずっと助けられています」

「前提として、キューイの方は皆に抵抗感が無いのならば問題無いと
思うわ。ただ、武器を持たせて、となるとある程度の習熟期間が必要
だから暫くは素手で、つてなるし……今までのキューイの戦い方が出
来る、と言う訳ではないはずよ」

火炎球はできなくはないが、顎で噛み潰すといった行動は流石に不
可能。加えて、耐久面は今まで通りだとしても、その容姿から負傷時
に俺達への精神ダメージが洒落にならない可能性は高い。

「故に、キューイは今まで通り索敵は任せるけど、戦闘面では戦力低下
は免れないと考えて頂戴」

「ギルドの方はどうなんだ？」

ギルドの方、つまり人化したキューイの扱いに関してであろうが。
そちらについては既に解決済みだ。神々の了承も一応得ている為、
何の問題も無い。

「キューイに関しては既に解決済みですので、連れ歩いて問題は無
……あー、無くはないですが、世間体の方は問題ありませんよ」

ノーパンで駆け回る俺とよく似た姿の竜、と言う意味で俺への風評
被害以外は何も問題無い。

「……………キューイ専用の下着の開発が急がれるな。」

「了解だ」

「うん、仕方ないよね」

ヴェルフとベルが頷き、他の面々も頷いてキューイに関しての話し

合いは終了。残るは春姫について、なのだが。その件についてはやはりミコトは良い顔をしない。

「春姫殿については、『魔法』の効果の間違っても知られる訳には……」「勿論です。ですがやはり、春姫様の存在はパーティにとって限りない武器となります。ベル様達の危険もぐつと減るでしょう。使用場面や頻度、隠蔽方法を入念に検討した上で、リリは同行を希望します」
整然と自分の意見を述べたりりは進行を見守るべく一歩引いた。

春姫が扱う魔法【ウチデノコツチ】、効果は『レベルブースト階位昇華』。

他者のLv.を一段階【ランクアップ】させる^{レア・マジック}超越魔法だ。この法外の『妖術』を利用しようとした【イシユタル・ファミリア】によって命を脅かされた様に、春姫の『魔法』が明るみになれば、彼女を誘拐して悪用しようとする者は必ず出る。

同時に、その魔法を使わないのは宝の持ち腐れとしてしまうのは惜しいどころの話ではない。というリリの意見にも同意できる部分はある。

Lv.が一つ違うだけで、本当に次元が変わる。のだが……。

「春姫の【ステイタス】的に……言い辛いけど、必要時以外はカーゴに押し込めておいて秘匿して常に守ってたんでしょね。専門の護衛付きで」

「はい、ミリア様の仰る通りです。モンスターとは、一度も戦った事はありません……」

『魔力』の^{アベリテイ}能力値を除けば、全てがサポーターであるリリすら下回る。専属護衛すらつけられて守られるだけだった彼女に最低限の自衛を求めるのすら酷だ。

かといって、彼女専門の護衛役を用意する余裕はウチの派閥には残念ながら、存在しない。あれは大派閥である【イシユタル・ファミリア】だからこそできた事である。

皆して難しい表情を浮かべて唸る。

「……どうする？ ホームに留守番させるか？」

本来のメイドの仕事通りに本拠に残ってもらおうか、とヴェルフが声を上げた。

そんなさ中、ミコトがベルの表情を伺う。一応この派閥の団長であり、春姫を助け出そうと奔走したベルの意見を聞きたいのだろう。

「……アイシャさんと、約束しました。何が一番いいのかわからないですけど、でも、ダンジョンでもどこでも、僕は春姫さんを……その、ま、守ります」

後半は尻すぼみになっており、締まらなかったがベルの放ったそれは誓いの言葉だ。

リリが面白く無さそうな表情を浮かべ、春姫が頬を赤く染め始めた所で、ベルは首を横に振って顔を上げた。

「……春姫さんだけじゃない、皆を、僕が守ります」

何処か苦し気に、それでも、その誓いを貫かんとする決意はしかと感じられる程に力強く。そんな宣言をしたベルの腰を、ヴェルフが叩いた。

「守り守られ、だろ。守られるだけじゃあ、恰好が付かないだろ」

「うん、ありがとうヴェルフ」

「まあ、ミアアはもう少し守られてくれるとありがたいのだがなあ」

冗談交じりにそう肩を竦めるヴェルフに肩を竦めて応えながら、春姫の方を伺った。

「で、春姫はどう思うの。私達がどれだけ話し合っただとしても、最終的には貴女が決める事よ」

もしここで、本拠で留守番をしていたい、というのなら本拠に春姫の護衛としてクリス当たりを残していくだろう。

冒険を共にする、と決意するのなら……その場合も彼女の護衛はクリスに任せる事になるのだろうか。キューイが前衛張れなくなっている現状、ヴァンを春姫の護衛に付けるのは無理があるし。

「……………付いて行きます。春姫は、皆様のお力になりとうございませす」

たつぷりと時間をかけて悩んだ彼女は、か細い声でしかと答えた。ミコトやベル、皆の顔を見回して、春姫はその翠の瞳に覚悟を滲ませる。

「わ、私^{わたくし}達は……^{ファミリア}家族ですから」

最後には俯いて赤面しながらも、か細い声で告げた。

羞恥に悶えて顔を真っ赤にし、耳と尻尾をもじもじと揺らす「ファミリア」の仲間の姿に、俺達は自然と頬を綻ばせていた。微笑むミコトも、異論を唱える事はしない。

パーティメンバー
隊員はこれで八名＋α。

サポーター兼妖術師として新たなメンバーを加える事となった。

怪物の咆哮が轟き叫ぶ、暗闇に支配された地中深く。

剥き出しになった灰色の岩盤が目につく岩窟内。頭上を飛び交う複数の蝙蝠、穿孔する壁の穴から飛び出してくる捕食者^{ワーム}、強力な遠吠えをぶつけてくる大虎^{ライガーファンク}——様々なモンスターの混声がかくの中、負けじと声を張り上げる。

「右方向、ライガーファンク、三。ミコト、左壁面からワームよ！ 加えて頭上バッドバット！」

「ヴェルフ！」

「わかってる、右は任せる!!」

「自分の方は問題、ありませんっ！」

返事代わりにワームを切り捨てたミコトが更に前進し、続くベルが純白の金属光沢を薄闇の中で煌めかせながら跳躍し、ミコト目掛けて頭上から迫ったライガーファンクと交差、一撃で仕留めた。

その間にも俺は空を飛び交う蝙蝠のモンスターを撃ち抜き続ける。

ダンジョン15階層。

ミーティング
会議を終えた俺達はさっそく、迷宮探索へと訪れていた。

第二級冒険者となったベルと俺の能力^{ステータス}、それに加えてヴェルフが作成した新武装の力をもって堅実、かつ破竹の勢いで進み、未到達階層であったこの階層にまで足を進めた。

ハンドボウガンで後方から援護射撃をするリリの真横、俺の後ろであわわわっ、と圧倒されている春姫を他所に、ベルやミコトは押し寄せるモンスターの群れと激しい交戦を続けている。

「前方、『ミノタウロス』二匹接近！ 左通路、ライガーファンクのお

「キュイキュイ」

「……ああもう、後何匹居るのよ」

「ミリア様、『魔剣』行きますー！」

『咆哮』の余韻から回復したりリが叫ぶ。大型のバックパック側面から緋色の短剣を見て、俺はキューイの腕を引つ掴んで道を開ける。

「ヴァン、回避よー！」

ミコト、ヴェルフ、ベル、そして最前線でモンスターの足止めをしていたヴァンが飛び退いて全員が左右に別れた。

すかさず、リリが振り下ろした短剣が、業火の砲火を放った。

『ツ!!』

瞬く間に大炎塊が放たれ、進路上のモンスターを分け隔てなく灰へと変えていく。

体皮の力によって炎に耐性を持つ筈のミノタウロスも例外ではない。進路上全てのモンスターを一掃し、岩窟の表層を焦がし、モンスターの姿は焼失した。

「リリスケ、易々と使うな?! 『魔剣』はあくまで非常用だ、ぽんぽん使ってたら俺達の為にならない!」

「今のは十分非常時でした! ミリア様の射撃が遅れてミノタウロスが『咆哮』を使う余裕があったのですよ!?! あのままでしたら、綻びが出て瓦解していました、何かがあつてからでは遅いのですから!!」
「ま、まあまあ、ヴェルフ、リリ……ミリアは大丈夫? 反応遅れてたって」

「お、お二人とも、ここで大声を出されては、またモンスターが……はうっ」

「春姫殿の言う通りです。ここは落ち着きましょう。それとミリア殿、無理などはなさっていませんよね?」

あー、タイミングが悪かっただけ、なんだが……。

次々に現れるモンスターに対応していたら、装弾数が合わなくなつて装填とかぶってしまっただけで、体調には何の問題も無い。しかし、ベルもミコトも心配そうに此方を伺ってくるのだ。

なんか申し訳ない……。

「まったく、次はもつと慎重に使えよ」

「リリはいつだって慎重に使うべき場を選んでいきます」

ふんっ、と言いつ争っていた二人がようやく落ち着く。

リリが使用したのは短剣型の『魔剣』——『クロツゾの魔剣』だ。リリと春姫、後衛達を護衛しながら中衛と前衛指示にまで回ると俺の負担が大きすぎるといふ事で自衛及びに緊急時のため、ヴェルフは『クロツゾの魔剣』を製作し譲渡してくれた。俺も一応、一本もらった。

18階層で使用されたものや、戦争遊戯で使用されたものに比べれば——禁忌の一本を除いても——威力は格段に落ちているが、それでも上級魔導士の砲撃と同等の威力を持っていた。

ヴェルフの言い分はこうだ、『クロツゾの魔剣』に頼るな、ソレはパーティの意識や力を腐らせる。今の戦闘はそのままでもなんとかなった。

対するリリの言い分は、窮地に陥る前に安全第一でいくべき、という自分の意見は決して曲げない。何が起ころかわからないダンジョンでは出し惜しみせず、常に石橋を叩いて渡らなければならない。

どちらも言ってる事は正しく、間違っていない。

ヴェルフにリリ、どちらもパーティの、ひいては家族ファミリアを想って言うてくれているのだから、嬉しい……嬉しいんだが、その言い争いきっかけとなってしまった事は申し訳ない。

もう少し慎重に、残弾数にも意識を回しておけば……。

「……はあ、俺が悪かった。だから気にすんな」

「……リリも、少し熱くなり過ぎました。すいません」

すつと二人が矛を収める。

その様子を見ていた春姫がほっと胸をなでおろし、ベルとミコトは溜息を零していた。

「そんな事より、春姫様、此方に来てください」

「はいっ」

リリが手早く灰となったモンスターの下へ春姫を呼びつけ、サポーターとしての指示をし始める。

「これが『ドロップアイテム』でこれが『魔石』……」

「そうです。『ドロップアイテム』はリリのバックパックに詰めますので、『魔石』は春姫様が持つていてください。——決して落してはいけませんよ?」

「は、はいっ!?!」

おっかなびつくり、春姫が灰の中から戦利品を拾い上げていく。

春姫の装備は「イシユタル・フアミア」の時にも使用していたらしい巫女装束に似た極東式の長い戦闘衣バトル・クロス——アイシャが押し付けてきた品である——に筒形のバックパック。そして俺達が纏っているのと同様の火精霊サラマンダーウールの護布だ。

正真正銘、非戦闘員としてパーティに組み込まれている彼女に対し、リリは「これからサポーターとしてビシバシ鍛えていきます!」と宣言し、春姫はぺこぺこ頭を下げて「どうかよろしくお願いします!」と畏まっていた。その所為か、妙な師弟関係が発生している。

苦笑しながらも、このままこの場にどどまっても良い事は無いので進行を再開する。

「この15階層まで探索をこなせていますし、非常に順調ですね」

「ベル様とミリア様のLv.とパーティの力量バランスを考えると、余裕はありますからね」

「エイナさん………アドバイザーの人も一足飛びじゃなきや18階層まで行ってもいいって許可をくれましたし」

通路を歩きながら放たれたミコトの声に、リリとヴェルフが同意する。

曰く前衛は完璧である、とリリが続ける。

「このパーティの弱点は、リリ達後衛が力不足という点ですね」

「……そうかしら? そこまで力不足な感じはしないけど?」

「ミリア様、本日のクラスは何ですか?」

「汎用性が高いフアクトリーだけど……」

リリの指摘に首を傾げる。

汎用性もあるし後衛としてはそれなりだという自負はあるのだが、何か足りないものもあるのだろうか?

「……ソコ、なのですが。はあ、良いですかミリア様。力不足、というのは継戦力の方です。戦い続けるとボロが出る、と言うと聞こえは悪いかもしれませんが。ミリア様はいくつもの役割を一人でこなす影響か、疲労しやすいのです」

後衛の能力、という一点だけを見るなら最高峰の能力を持っている。それは間違いないのだが。

問題は何でもできる後衛が一人しか居ない事である。

「本来ならば正式な治癒士ヒーラーが欲しい所ですが……ミリア様が出来ますね」

「魔術師もな……ミリアが出来るな」

『魔剣』の使用を忌避するヴェルフが釘を刺そうとして、俺を呆れた様に見やった。

そうか、それが問題な訳か。

やろうと思えば、魔術師としての攻撃支援も、治癒士ヒーラーとしての補助支援も出来てしまう。だからこそ、やれる範囲全てに手を伸ばそうとする俺の悪癖が——待って。

「ちよつと、その悪癖って何?」

「何? って自覚無い訳ありませんよね。ミリア様は自分が出来る事ならば自分がやろうとする悪癖があります」

「魔術師、治癒士ヒーラー、加えて調教師テイマー、と一人何役やってるんだって話だしな」

ぐぬぬうう、と唸りながらキューイとヴァンの様子を伺う。

ヴァンの背に乗ったキューイがキューイキューイ言いながら前進を続けている。少し前過ぎるから、下がって、どうぞ。

「はあく、全く。酒場のリユウ様は、確か回復魔法もお使いになられるんですよね? 18階層で見た攻撃魔法も凄かったですし、……ああ、パーティに加わってくれないでしょうか?」

「私が居るでしょ?」

「ミリア様の負担を減らす為に、ですよ」

呆れた、とでも言わんばかりに肩を竦めたりりの視線に射抜かれ、思わず視線を逸らした。

「で、どうなんですかベル様？」

「いやあ、それは流石に……ミ、ミアさんも怖いし」

リリの希望にベルが表情を強張らせた。酒場『豊穰の女主人』の元冒険者であるリユー・リオン。彼女を冒険者としてパーティーに加えるのは無理があるし、何より店主のミアを怒らせると非常に恐ろしい。

終いにはベルは『無理デス』と絞り出す様に答えた。多分、怒ったミアさんを想像してしまったに違いない。

「暫く探索を続けたら、一度14階層へ戻りましょう。打ち合わせ通り、人気のない十分な安全地帯で春姫様の『魔法』をパーティー一人一人に試しておかなくては」

「ですね。いきなり使用されてもきつと混乱してしまいますし」

「序に、キューイやヴァンに使ってみて効果があるかも知りたいわね」

可能性としては、キューイは適応しそうな気はしなくもない。元が俺の魂の欠片っぽいし？ ヴァンの方は……難しいだろうか？

想像ではあるんだが、俺が春姫の『魔法』の効果を受けて「ランクアップ」中に召喚魔法を唱えれば強化された状態になるのではないだろうか？ もしくは、竜に対する階位昇華を行うとか？

「と言う訳ですので、春姫殿、よろしいですか？」

「はい」

「ベル、お前は一度かけられたんだろう？ どんな感じだった？」

ヴェルフに問いかけられたベルは、あの時の状況を思い出すかのようになんうんうん唸りだす。

「えつと……ぱーって光って、力が強くなって、早く動ける様になって……」

「曖昧だな」

「う、上手く説明できないんだけど、力が溢れてくるって感じがして……」

「………？ あー、わかった。よし、春姫、この後楽しみにしてるからな」

「あつ、はい。よろしくお願いします」

「私も、少し気になるわね」

春姫の「ウチデノコツチ」を受けた感触はどんな感じなのだろうか。
割と楽しみだ。

第一九六話

大量の魔石やドロップアイテムを掻き集めて地上へと戻ってみれば、地上は夕焼けの赤い色に染まっていた。

摩天楼施設の換金所で戦利品を金貨へと換えてから、多くの同業者はギルド本部や酒場へと足を運んでいるのを横目に、本拠を目指す。道中、数多くの人々が俺の後ろでヴァンに跨って上機嫌にキューイキューイ鳴いてるキューイを見やってひそひそと小声で話しているのを見やり、溜息。

「ミリア、大丈夫？」

「ん？ あー、大丈夫よ。注目され過ぎてちよつと疲れただけ」

心配そうに此方を伺うベルに返事を返すと、ヴェルフとミコトが視線を遮る様に壁となってくれた。

正直、ダンジョン内でいつモンスターに襲われるか警戒している時より、地上で人々が織りなす無意識の悪意に晒される方がきつい。

……正直、この世界に来た当初は此処まで目立つ積りなんか微塵も無かったんだがなあ。

自然とヴァンとキューイの姿を見て避けていく人混みを潜り抜け、俺達は本拠へと帰った。

「おつ、帰ってきたな」

「タケミカツチ様！」

鉄柵の正門、前庭を抜けて玄関をくぐって館に入ると、角髪の男神が出迎えてくれた。

おかえり、と笑いかけてくるタケミカツチ様に、破顔したミコトが駆け寄っていく。

「すいません、タケミカツチ様……本拠の留守番をして頂いて」

「気にするな、ベル・クラネル。今日は桜花達も迷宮ダンジョンに行かず休息日に当たっていたからな」

つい数日前から、ヘステイア様を通じて「タケミカツチ・ファミリア」には本拠ホームの留守番を頼んでいる。

前までの教会の隠し部屋や、タケミカツチ様が暮らす寂れた集合住

宅とは異なり、立派な新居を手に入れた「ヘステイア・ファミリア」は、増えた団員の能力からしても立派な中堅「ファミリア」だ。

主神や眷属が全員出払って無人となってしまうえば、泥棒や他勢力の者に侵入されて資産や情報などを漁られてしまう。目立たない下級派閥だった頃とは違うのだ。

特に今日は俺達のダンジョン探索に加えて、ディンケ達は別件の依頼を受けて動いている。ヘステイア様はバイトに出かけて、と無人になりかけていたところを懇意派閥として「タケミカヅチ・ファミリア」が館の門番や警備を務めてくれたのだ。

今後も彼等や「ミアハ・ファミリア」の手も借りる事になるだろう。とはいえ、無償で、となるとベルが恐縮してしまうのは仕方が無い。

過去の俺であれば、何らかの疑念を抱く所ではあるが。タケミカヅチ様やミアハ様に限ってそういった悪意や裏切りの意志が無いのははつきりしている。いるのだが……。

「ミリア・ノースリス。見返りにすっかり風呂には入らせてもらったからな」

爽やかな笑みで、使った後はちゃんと洗ったぞ。と付け足す男神。警戒する事すら無礼だというのに、気にした様子のないタケミカヅチ様に深く頭を下げた。気が抜けないというより、癖として調べてしまふのはどうしても抜けない。

失礼な事をしてしまったなあ……。

「この後の夕餉も楽しみにしておくといい」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、部屋に戻って装備外してくるか」

ヴェルフの宣言を皮切りに、皆が自室へと戻っていく。そんな中、俺は一度外へ出て竜舎にヴァンを連れて行く。

背負っていたキューイを下ろして——あのさ、本当に下着を着用させるべきだわこいつ。

貫頭衣の裾がぺらり、でちらりどころか丸見えになっても気にしねえんだもん。俺と瓜二つの姿でソレは本当に止めてくんないかな。

「キューイ？」

「はあ……ヴァンも、今日はお疲れ様でした。夕餉は、何か希望はありますか？」

《……主よ》

縄や鎖などの拘束は無いものの、堅牢に作られた竜舎の中に入った所でヴァンに夕食の希望を問いかけると、真剣な声色でヴァンが振り返った。

知性を宿した深く底を見通せない鈍色の瞳が俺を真っ直ぐ捉える。

何か不満でもあるだろうか、と竜舎を見回すが、広めに作られた竜舎は牢獄の様な狭苦しさを感じさせない様に広々としており、寝床や水場なども作られている。何だろうか？

「どうしました？」

《……夢、を見るのだ》

「夢？」

夢を見る？ 思わず首を傾げつつ、桶を水で満たしてヴァンの前に置く。

僅かに揺れる水面を覗き込んだ灰色の飛竜は、キューイを見やり、俺を見て、それから天井を見上げた。

《主よ、俺様は……夢を見るのだ》

「夢、っていうのは……えっと、寝ている時に見る？」

《ああ、その夢で相違ない》

真剣に、何かを思い出す様に目を細めて水面を見やっていたヴァンは、小さく呟く様に唸り声を零した。

《俺様、は……竜では無かった》

「……はい？」

《夢の中の、俺様は、竜ではない》

今度のはつきりと、明瞭に答えた。言葉を区切り、自身の言葉を噛み締める様に届いたその言葉に思わず首を傾げる。

竜では無かった。竜ではない。夢の中では。

……竜が見る『夢』とは何だろうか？

「えっと、すみません。何が言いたいんでしょうかね。雑談、なら出来れば明日にしてほしいんですけど」

この後の夕餉の事を考えると、あんまり悠長に会話している時間はない。とはいえ、珍しく自分から語ってくれているヴァンを蔑ろにするのもあまり気が進まない。

明日にしてくれるなら、日がな一日付き合っても良いのだが。

《主よ、俺様は地上を知っている。誰か……人の子が居たのだ。雄、だったと思う》

「……えつと?」

《主よ、あれは、誰だ?》

「はい? いや、私はその夢を見ていないですし誰と問われてもわからないですが」

常識こそ人ではなく竜の方で会話するが、論理的である程度話しやすいヴァンが珍しく頓珍漢な事を言い出した。本当に珍しいな。

《そうか。当然だな》

要領を得ない呟きに首を傾げているとキューイがヴァンの頭に手をのせて首を傾げた。

「キューイキューイ?」

会いたいの? と問いかけられたヴァンが、僅かに目を見開くと、静かに首を横に振った。

《否。会いたい、とは違う。ただ……思い出せずに歯痒いだけ》

迷いを振り切る様に呟かれたその言葉は、けれども完全に振り切れたとは言えないみたいだ。静かに寢床に戻った彼は身を横たえ、丸まってしまった。

《主よ、時を無駄に過ごさせた。謝罪する》

「え、ああ、別に構いません。続きは、明日にしましょう。貴方の『夢』は少し気になりますし」

「キューイキューイ♪」

「ご飯ご飯♪、と興味を失ったのかキューイはパタパタと駆けていってしまふ。それを見やっつてから、もう一度寢床で蜷局を巻くヴァンを見やっつた。

「それで、夕食の希望は」

《必要無い》

間髪入れずに答えられたその声は何処か、沈んでいた様に聞こえた。

「モンスターが見る、『夢』か」

「はい」

夕餉の際にキューイが沸騰寸前の熱々スープをがぶ飲みして「タケミカツチ・ファミリア」をドン引きさせてから二日後、ミコトが何やら今日は休息日にしてほしいと懇願してきたために急遽休息日となった本日。

俺は早朝から執務室で依頼書と郵送物の整理を行いながら、手伝いを申し出てくれたファイア相手にヴァンの『夢』の話を零していた。

「へえ、モンスターも夢なんて見るんだあ。あ、このお菓子貰うねえ〜」

執務卓に用意されていた焼き菓子を無遠慮にぱくぱくと食べていく褐色肌の少女。そんな気ままに振る舞うレーネに対し、メルヴィスが苦言を呈した。

「あの、レーネさん。それは副団長の為に用意したもののなのですが」

時折、本拠に顔を出しては「ステイタス」の更新を行ってふらふら〜と何処かへ行くレーネが珍しく執務室に入り込んできていた。彼女は部外者、と言う程ではないにせよ余り重要書類を取り扱う執務室に入入りして欲しくはないのだが。

しれつと窓から入ってきてしまうんだよなあ。まあ、彼女は【イシユタル・ファミリア】時代には玄関口から出入りするより窓から出入りした方が他の団員とトラブルにならない、と言う理由で窓での出入りばかりしていた癖が残っているだけなのだろうが。

「コイツ追い出さなくて良いのか？　っておい、それアタシの！」

「まあ〜まあ、あ、これ美味しい〜♪」

「なあ、副団長、コイツ追い出そうぜー！」

ファイアの為に用意されていた焼き菓子にも手を伸ばし、ふわふわとした軽そうな笑みを浮かべたレーネに対し、狼人の少女が不機嫌そう

にレーネを指差す。

確かに、あんまり入って欲しくない人物ではあるんだがなあ。

「いえ、彼女にはいくつかお願い事をしています」

「お願い事お？」

「うんうん、と言う訳でコレとコレねえ」

レーネが胸元からすつと折りたたまれた紙切れを取り出し、差し出してくる。

僅かに舌を出して唇を湿らせ、色っぽく微笑んだレーネを見上げ、思わず飛び出す溜息を吐きながら受け取った。数枚のソレを受け取って中身を検め——ははあん。ほおく……。

「副団長、それは？」

「ヘスティア・ファミリア」の本拠^{ホーム}を監視してる派閥や商会の一覧ですわね」

立派な中堅派閥、というよりは中堅上位に至っている「ヘスティア・ファミリア」を疎ましく思っている派閥もあれば、利益を吸えないかとお近づきになろうとする商会もある。

加えて、隙を見て本拠に侵入しようとする不屈き者まで増えている現状、神出鬼没気味にふわふわと動き回るレーネは情報収集に便利な訳だ。

「団長……フィンさんもしつかりと警戒していると思うんですけど」

未だにフィンのを『団長』と呼ぶ癖が抜けないメルヴィスに苦笑しつつも、彼女の疑問に答える。

「まあ、確かに。「ロキ・ファミリア」の方も情報収集は欠かさずにやっているみたいなんですけどね」

ただ、派閥の規模からして動きが少し鈍い。慎重な立ち回りで動くものもあるが、彼等は彼等で目的や派閥方針の事もあって俺達にだけ構っている余裕はない訳だ。

無論、彼らなりに全力で補助してくれはするが、だからと言って無警戒に彼等にまかせっきりというのは流石に不味い。

だからこそ、俺は俺でいくつかの方法で情報は集め続けている。その一つがレーネだ。

「それでえ、今度は何を調べる？ あ、そうそう、マイヤーズちゃんの方の調査がいくつか纏まったみたいで、報酬と引き換え〜って言うてたよお〜？ 今日中だと嬉しいって〜」

「ああ、いくらでしたっけ？」

「にひやく〜」

「……まあ、そんなモンですか」

情報の取り扱いに関して非常に頼りになる情報屋マイヤーズだが、彼女は単独で下調べから情報の確認までやっているの、仕事に少々時間がかかり気味なのが玉に瑕だ。

とはいえ、情報の精度と正確性については信頼できるので、時間をかけてでも調査して欲しい事を依頼しておくのと非常に助かるので、いつも依頼は出してはいるが。

「でしたら、後で引き渡しますので……そうですね。本日の正午、『豊穰の女主人』で待ち合わせをお願いしても良いですかね」

「りようかあ〜い」
気の抜ける様な返事を返したレーネは、緩い笑みを浮かべて開け放たれた窓から出て行った。

その様子を見ていたフィアとメルヴィスが眉を顰めながら、俺の方を見てくる。

「なあ、副団長。言っちゃあ悪いが……なんか悪い奴に見えんぞ」

「ですね。空想小説の悪役みたいです」

失敬な、と言いたいが、やっている事自体は割と悪役がやっているような事ではある。

いや、あくまでも物語などで悪役がやっていそうな事であって、現実ならば悪役でなくともやるべき行動なのだが。

情報を集め、警戒し、対策を行う。凄く普通の行動であるはずなのに、なんでもか悪役が情報を集めて裏で糸を引く印象が強く、情報収集しているだけで悪っぽい、となるのだ。

「ま、アイツについてはどうでもいいや。っと、なんだこの依頼書……何々？ 飛竜の取引依頼？」

「それ、こつちにください」

ファイアが封を切って中身を検めた依頼書を受け取り、内容に軽く目を通すと……まあ。

噂が広まるのは早いモノで、人化したキューイを『買い取りたい』という依頼書が舞い込んでくる様になった。

金額は目ん玉飛び出る程に高く。下手すれば両手の指の数程の屋敷を新築できそうな額が提示される事もある。あるのだが……。

「モンスターの取引とか都市内外問わずにギルドが完全禁止してんに良くもまあ……」

「ですよ。それに、この依頼者って怪物しゅ……あ、すいません」

呆れと軽蔑が交じり合った表情で郵送物を仕分けしていくファイアの言葉の通り。モンスターの取引は都市内外厳禁だ。特に都市外へモンスターを売り渡す行為に関してはね。

まあ、一部から未だに流れてるみたいなんだがね。【イシユタル・ファミリア】が関与していたであろう地下建造物がダンジョンと地上を繋いでいる可能性は高いと思う。

どれほどの規模になるのかは想像が付かんが、【ロキ・ファミリア】が調査してるっぽいので大丈夫だろ。

いくつか気になる情報があった訳だが……主に【ディオニユロス・ファミリア】の主神が不審な動きをしている。というのと【ヘルメス・ファミリア】の動きが不審だ。というものだ。

………本音を言うと、どっちも怪しいし潰しとけば良くね？
って感じはする。

まあ、しないけど。

「怪物趣味、良い趣味してますよねえ」

「あの、副団長。そういうつもりで言った訳では……」

恐縮した様に小さく謝罪するメルヴィスを見て、気付いた。

ああ、俺が『怪物趣味』って言われてる事に関してか。

「ああ、別に気にしてないんで良いですよ。興奮、はしませんが、私はモンスターなんかより人間の方が怖いです。むしろ……」

裏で自身の目的を達成しようとしてとごそと動き回ろうとする神々の方が面倒臭いし怖い。ほんと、人の尺度では決して測り知れない様

な目的の神も居る事だしね。

「やつぱ、副団長って変わってるよなあ」

「嫌いになりました?」

「いや、別に。アタシは気にしないが」

最後の郵送物を確認して仕分け箱に放り込むと、フィアは大きく伸びをしてソファーに寝転んだ。

「あー、んで、その依頼書出した商会はどうすんだ?」

「え? ああ、勿論ですが、ギルドに提出ですよ」

都市外のお貴族様や富豪様が大金出してでも『キューイを買いたい』と宣うのが凄いな。だって隠す気が全くない依頼書とか時々来るし。

本当に面倒だからこういうのは全部ギルド通してくんないかなあ。

「派閥当てに突然来る依頼なんて全て後ろ暗い事があつてギルド経由できません。って言ってる様なモノじゃないですか」

なんでそんな依頼を受けなきゃいけないんですかね。

俺も最後のひとつとなっていた依頼書にお断りするという返事を書き終えた紙を封筒に納め、「ヘスティア・ファミリア」のエンブレムである『鐘と竜を結ぶ炎』の蠟印を施す。

前世だとパソコンでちやちやつとできたそれを、手書きでやると流石に疲れるなあ。しかもほぼ毎日。

「まあ……流石にソレは言い過ぎかと思いますが。間違ってもいませんからねえ。お茶、どうぞ」

「ありがとうございます」

「さんきゅー」

寝ころんだまま紅茶を口にするフィアに対し、メルヴィスが青筋を浮かべて『行儀が悪い』と彼女の尻尾を掴むのを見やりつつ、一息入れる。

今度、全ての依頼書はギルドを通さないと引き受けませんと言いついてやるのかしら?」

でも、それをやった場合も面倒なんだよなあ。俺だったらそんな手段に出た派閥に対してギルドを通さずに依頼を受けて貰うならば、懇

意にしている派閥を利用して自身も懇意な立場に滑り込むし。

そうなれば今現在懇意にしている派閥、留守を任せる程に懇意な【タケミカツチ・ファミリア】や【ミアハ・ファミリア】辺りに迷惑をかけかねない。

彼らも単純な悪意なら気付けるだろうがなあ。巧妙に隠す奴とか居るとだるいし。

「はあ……私、やっぱりモンスターより人間が怖いですよ」

俺の足元で丸くなつてうたた寝しているキューイの頭を撫でつつ呟くと、それを聞いたメルヴィスとフィアが困った様に顔を見合わせた。

「私達も、恐いですか？」

「いや、無条件で人間が怖いんじゃないんですよ？ ただ……」

悪意を隠して笑顔を浮かべる人間が多すぎて恐い。というよりは、気持ちが悪い。

可能ならば、目立たず、静かに、ちよつとした幸せにだけ包まれて平穏な生活がしたい。

「ちよつとした幸せって？」

「そりゃあ、ヘステイア様とベルが居て、ヴェルフやリリ、ミコトやデインケさん達も居て……」

そうだなあ、例えば……。

「孤児院、とか。ですかねえ〜」

ヘステイア様の神としての側面を見るなら、孤児院でも開いて子供達の面倒を見ながら静かに暮らしたい。

悪意に染まらぬ様に子供達を導いて上げて……。

「はあ、無理ですね。夢のまた夢ですし」

無理無理、絶対に無理。

目立ち過ぎたし、今から雲隠れなんて出来ない。

【ロキ・ファミリア】や【ディアンケヒト・ファミリア】、【ガネーシャ・ファミリア】にギルドもそうだ。

色んな派閥や組織と関係を持ち、しがらみが増え過ぎた。動きは鈍り、選択肢は減る。

「キューイは良いですよねえ。私も、キューイみたいに気楽になりたいですよ」

本当に、足元で寝こけるキューイが羨ましいよ。俺だって、何も考えずに届いた郵送物を全て灰に変えて寝こけたい。どうしてこんなしがらみばつか増えるんだか。だるい、うざい、手紙なんて届くな面倒臭い。

返事を書かずに無視したら無視したで色々面倒事に発展しやがる。面倒だ、本当に、面倒だよ。まったく。

まあ、流石にキューイみたく下着も穿かずに寝るのは無いがね。

正午頃、西のメインストリートに足を運んだ俺は喫茶店になっている『豊穡の女主人』に足を運んでいた。

目的は勿論、マイヤーズとの情報のやり取りだ。

店員が興味深そうに此方を観察するのを尻目にやり取りを行う。まあ、目の前の情報屋は非常に警戒しているみたいだが、やり取りする情報は危険な物では無いし問題はない。

「これで全部だよ」

「……確かに、情報感謝します」

必要金額の入った袋を手渡すと、事前に依頼しておいた情報を纏めた紙切れを差し出してくる。

黄色の猫耳っぽいフードを目深にかぶり、顔を隠す様に首元に襟巻を巻いた大人の少女は、袋を受け取ると満足げに頷いた。

「金払いの良い客は好きだよ」

「精度の高い情報をくれる情報屋は好きですよ」

少し多めに情報料を支払ったからかすこぶる上機嫌そうな彼女は、ふと何かを思い出した様に此方を見やった。

「そういうえば、レーネ・キュリオだったか。あんたが寄越した遣いの奴」

「……ええ、そうですが。お気に召しませんでしたか？」

「いや、あのレーネ・キュリオって奴……記憶違いじゃないや、女専門

の、アレだろ？」

言いたい事はなんとなくわかった。

「彼女が私の愛人、とでも思ってますか？」

「違うのか？」

「勿論、違いますよ」

そっか、なら良いんだ。と手帳にメモを取り出すのを見て、何となく察した。

「誰かが調査依頼でも出しましたか？」

「……ま、そんなところ。特に隠す必要も無いから言うけど、ミリア・ノースリスの情報は跳ぶように売れるんだよ」

どんな些細な情報でも売れる。だからこそ俺の情報を調べているのだろう。

とはいえ、あまりにも軽々しく情報を売られても困るし、売った相手次第では『情報屋マイヤーズ』も閉業して貰わなくてはいけなくなるんだがね。

「わかつてる。売る相手はしつかり吟味するよ」

「それは重畳」

肩を竦めた所で、情報屋の少女は立ち上がって代金をテーブルに置いた。

「また、必要があれば頼ってくれ。勿論、その分のヴァリスは弾んでもらうけどね」

「ええ、頼る時があれば是非に」

上機嫌な様子で店を出て行った彼女を見送っていると、すすすーつと音も無く猫人の店員が忍び寄って来て、俺の手にある紙切れを掏ろうとしてきた。

咄嗟に紙切れを仕舞いつつ、掏ろうとした犯人を見やった。

「クロエさん、手癖が悪いのは店員としてはどうなんでしょうかね」
「……気付かれた？」

驚いた様子の彼女に笑顔を向けておく。

暗殺者として隠密に長ける彼女に気付けたのは偶然ではない。と
いっても本当に曖昧ではあるが、一定距離に近づかれるとなんとなく

わかるのだ。

理由は、多分『マジックシールド』のスキルだろう。というのも、このスキルは無意識に攻撃などに反応して発動するモノなのだが、これは厳密に言うとは無意識にでも近づくモノに反応している。と言う事になるらしい。

簡単に言うと、近づいてきた対象が『攻撃』なのか『生物』なのかを薄らと感じ取っている訳だ。要するに、なんか近くに来た、というのを薄らと感じ取れる様になっている訳であるのだが……。

これなあ、痛覚に異常が出てから暫くしてわかる様になつてる辺り、第六感というか、狂った痛覚がスキルと噛みあつたんじゃないかな。とは思う。

まあ、不便ではないし別に構わんのだが。

「何の情報のやり取りニヤ？」

「いくつかの商會が取り扱つてる商品についてですよ」

興味津々と言つた様子で問いかけてきたクロエさんに紙切れを渡す。

中身は、言つた通り。俺達に依頼書を出してきた所も含めて二〇近くの商會が取り扱つている商品をリストアップしてくれたモノだ。

「……こんなの買つてどうする訳？」

「どうする、つて……ちよつと洗つてるんですよ」

何を探っているのか、と興味を持つクロエさんから紙切れを返してもらった所で、ふと見知つた声が入口から響いてきた。

「こんにちは、ニヤ。今日はシルは居ないニヤ」

「あ、はい。こんにちは。それと、今日はシルさんに用事があつた訳ではなくてですね」

アーニヤさんに対応されているのは、我らが団長殿。ベルだった。後ろにはヴェルフと、どうしても今日は休みたいと懇願していたミコトの姿もある。

一言二言、ベルとアーニヤさんが問答すると、後ろに居たミコトが緊張した面持ちで前に出て説明をし始める。

どうやら、彼女が元居た社^{やしろ}では神々が地上に降臨した日に祝い事を

行っていたらしい。そして、戦闘遊戯や「イシユタル・ファミリア」とのごたごたで忘れていたが、昨日が祝いの日だったらしい。

少し遅れてしまったが、タケミカツ子様にも贈り物がしたく。その贈り物として『ケーキ』を用意したいが、調理法がわからない、と。

『豊穰の女主人』ならば教えてくれるかもしれないから、頼みにきた。らしい。

「クロエさん、ミアさんっていますよね」

「ニヤ？ 居るけど、何？」

「いや、ミコトさんの頼みを聞いてあげて欲しいな、と思っただけですよ」

ちよつと交渉するかね。

真剣に懇願して暇を貰った理由は特に聞かなかつたが。内容を知ったからには手を貸さない訳にはいかない。

日頃から感謝している神に対して、何らかの礼がしたい。その気持ちには非常によくわかる。

俺もヘスティア様に何か贈り物……そうだなあ、髪飾りはベルが贈ったモノがあるし。時計とか、装飾品は少し重いか？ 食べ物、かなあ。

俺がヘスティア様に何を贈るのかは後々決めるとして、今はミアさんに交渉しなきゃなあ。

まあ、ミアさんもそこまで厳しくはないだろうし。昼食食べていけば目を瞑ってくれるんじゃないだろうか。それで無理なら体で払いますとも。

第一九七話

「しつかり土産まで渡されたが……これで何とかかなりそうか？」

「はい。ありがとうございます。ヴェルフ殿、ベル殿、ミリア殿」
「力に成れてよかったです」

「別に気にしなくて良いわ」

無事ケーキの調理法レシペを手にしたミコトと共に本拠ホームに帰る道すがら。

彼女の手に抱えられた容器に納められたホールケーキは土産としてミアさんに買わされたものだ。序に俺もヘステイア様にケーキを買って帰ろうか迷ったがやめておいた。

「というか、ケーキを作りたいのであれば声をかけて貰えば調理法レシペぐらいは知ってましたけど」

端から俺に声をかけてくれれば割と早急に解決したと思うんだがね。

ヴェルフとベルを連れ回している理由が男性視点で欲しい物を教えてほしい。だった訳だし。俺も……あ、今は女か。

「……つくづく思うが、ミリア、お前って何でもできるんだな」

「いえ、ミリア殿は今日は忙しそうでしたので……」

忙しくとも、家族の為ならば時間を作るのはやぶさかではない。

そんな事を口にするると三人とも溜息を零してくれた。

「無茶すんなよ?」

「無理しないでくださいね?」

「ミリア、ちゃんと休んでね?」

何、そこまで言われなきや駄目なん?

家族が困ってたら全力で手助けするのは普通の事ですよ。たとえばどれだけ忙しくても、家族が助けを必要としていたら手を貸す。皆だってそうでしょうに、なんで俺となると無茶しちやダメとか言われるんだか。

「いやあ、ミリアのはちよつと度が過ぎるからな」

「僕もそうおも……あつ」

ベルまで肯定するのか、と肩を落とした所でベルが何かに気付いた

のか声を上げた。

「どうしました?」

「あれって、タケミカツ子様?」

どうしたのかと問いかけるとベルが其方を指差した。

前方の道で見慣れた角髪の男神の姿があった。ミコトが喜色満面になって一步踏み出し、手元のケーキの容器を思い出して足を止めた。

タケミカツ子様は声をかけたい。けどこのケーキを持ったまま駆け寄ると中身が危うい。とミコトが葛藤するのをベルやヴェルフと微笑まし気に見ていると、遠くに居たタケミカツ様が誰かを呼び止めていた。

蜂蜜色の長髪の女神だ。

「おい、デメテル。顔色が悪いぞ」

「……あら、体調が悪いのかしら。気が付かなかったわ」

「何呑気な事を言っている。ほら、顔をかせ」

——神タケミカツ子は前触れもなく女神の体を引き寄せ、自身と相手の額をくつつけた。

よく子供相手に熱を測る時にやるあれだ。だが……いくらなんでも唐突過ぎやしないか。

「熱は……無いな」

「あ、あらあらっ……だ、駄目よ、タケミカツ子? こんなこと誰かれ構わずやっては」

「馬鹿、お前だからやっているんだ」

ひえっ……タケミカツ様あの言動、狙ってやってる訳じゃないんだよね。俺も女性を相手に虜にする為と同じ様な事をやっていた時期もあるが……無意識には無理だろうなあ。

天然ジゴロの名は伊達ではない、と言う事だ。

「飢えていたところに野菜を恵んでもらった恩を、俺は忘れてないぞ」
「……もうっ、貴方とミアハは女の子に声をかけちゃ駄目っ」

この距離でも彼の二人のやり取りが聞こえるのは冒険者の聴力様々なのだが……甘酸っぱいラブコメの様なやり取りを聞かされる

のはあんまりなあ。

頬を赤らめた女神と数言やり取りをし、女神の方はまんざらでもなさそうな表情で離れていった。

なんともまあ、と甘酸っぱいやり取りに苦笑いしながらミコトの方を伺うと、口を真一文字に引き締め、表情を消したミコトが容器を手にしたまま固まっていた。

「ミ、ミコトさん?」

「お、おい?」

「……あく、なんかこの流れ知ってますねえ」

大丈夫だろうか。漫画とかでありがちな行動をとったりしないだろうか。

「タ、タケミカツ子様——っ！ 先日は変態達かみさまから助けて頂いてありがとうございました。すごかったです!」

「おいおい、あんなことくらいで大袈裟だぞ」

デメテルと別れてほぼ間を置かず、二人のヒューマンの少女が武神に駆け寄っていった。

無所属フッリらしき一般人の少女二人は、頬を赤らめながら焼き菓子を渡し、タケミカツ子様を笑顔を向けるともじもじとわかりやすく体を揺する。誰が見てもほの字ですわ。

止めにタケミカツ様は二人の少女の頭を撫で、顔を真っ赤にさせた。

狙ってやってる訳じゃないのに、行動一つ一つが的確過ぎて本当にもう。天然って本当に怖いわあ。

ミシリツ、と音が響く。何の音かと出処の方に視線をやると、ミコトが手にしていたケーキの容器がミシミシツと悲鳴を上げていた。

「ひっ!?!」

「お、おいっ!?!」

「……あー、これは、ヤバいですね」

指がめり込んで変形している容器を見たベルとヴェルフが怯え始めるが、ミコトはそれに気付いていない様子だ。

爆発しそうだなあ、と身構える此方の気も知らないで、タケミカツ

手様は女性達との触れ合いを繰り返していく。

時には相手からもあるが、大半は自分からいつている。老若種族女神関係無く声を交わしては、ほぼ確実に過剰な接触スキンシップを行う。赤くさせられている女性達は初々しい表情を浮かべているが、始末に悪いのはタケミカツチ様本人がその好意もとい行為に気付く事が無い事だった。

声をかけようにもかけられずに影から見守るミコトに見せつける様に、次々と女性達との接触を続けていく武神。

「……………」

「ミコトさんっ、ミコトさあんっ！」

「何とか言えー！」

たたずんだまま俯き、前髪で目元を覆うミコトに、ベルとヴェルフが懸命に声をかけるが、届かない。

肩に黒い瘴気すら纏い始めた彼女に、ベルとヴェルフが悲鳴を零した。

まるで重力結界の様な不穏な威圧感オーラが撒き散らされていく。

「タケミカツチ様っ」

「おお、春姫」

自分を陰から見守る不穏な気配に——ついでに女性からの好意にも——気づきもしない鈍感系主人公さながらのタケミカツチ様に駆け寄っていったのは春姫だった。

「私わたくし 上手くできましたっ！ 召し上がってみてくださいー！」

「餡団子か、どれどれ……ん？」

喜色満面の春姫から差し出された餡団子を受け取ろうとしたタケミカツチ様は何かに気付いた。無駄に良い視力のおかげでわかったが春姫の口元に付いている餡に気付いたんだと思う。

もうこの黄金パターンは幾種類ものラブコメ系で見た事がある。この後の展開は割と簡単に予測できた。

戸惑うことなくタケミカツチ様は春姫の顔に手を伸ばす。

「春姫、お前、つまみ食いしただろ？」

「は、はえっ?！」

「口元に餡が付いているぞ、まったく……ほら、動くな」

少女の唇に付いた餡をとり、あろうことか神タケミカツチは――
―そのまま食べた。

正直、本気で背筋が凍った。あそこまで完璧にこなすなんて思わなかったんだ。

「うむ、甘い」

「タ、タケミカツチ様あく……そ、そのようなことをされてはあく」

顔を真っ赤にした春姫が、あわあわ、としているのを他所に、タケミカツチ様は満足げに頷く。

「美味いぞ、春姫。あいつも喜ぶはずだ。……しかし、何だ、お前は良い嫁になれるな」

「えっ……ほ、本当でございますか!？」

いや、最後の一言完全に余計なんですけど。というか、『あいつも喜ぶはずだ』っていう事は、誰かの為に練習でもしているのだろうか。春姫の行動、ミコトの対応……千草や桜花の……ああ、『タケミカツチ・ファミリア』でなんか画策してんのかね。

ま、悪い事じゃなさそうだし放置かな。変に介入しても良くないだろうし。

それはそれとして、横から漂う不穏な威圧感オーラがそろそろ許容限界を超えそうだからこれ以上余計な事言わないで欲しいんだけどなあ。

「ああ、気立ては良いし、何より健気だ。神なんてものじゃなければ、俺がもらってやりたいくらいだ。はっはっはっ」

爽やかな笑みを浮かべたタケミカツチ様の放ったドストレートに春姫が頬を真っ赤に染めて照れる。

いやあく、良い風景ですなあ……横からぶちりつ、とかなんかキレる音がしてなければいつまでも眺めてられる微笑ましい光景だよ、ほんど。

うつむいたままのミコトの足が踏み出された。そのまま止まる事なくザツザツと勢いよくタケミカツチ様と春姫の二人に近づいていく。

「ま、待ってくださいいミコトさあんっ!」

「お、おい待て！ 何する気だ!？」

「あく……こうなりますかあ」

二人が叫んで止めようとするも時すでに遅し。もっと早くに彼女を連れて撤退しているべきだったか。

半ば諦めながらも彼女の歩みを見守る。

「ミコト?」

「ミコト様?」

不穏な威圧感オーラを纏いながら接近するミコトに気付いた二人が声を上げ、ミコトが二人の前で停止した。

声を返さないミコトに首を傾げるタケミカツ子様と、不穏な威圧感オーラに気付いた春姫が尻尾を丸めて、ぴいつ、と鳴くのが聞こえる。

どうしたんだと武神が声をかけると、ミコトは無言のままに変形してしまった容器の蓋をぱかりつ、と開けた。

「ん、それは……?」

ミコトの放つ威圧感オーラが感じ取れないのか、不穏な気配に気づく事のないタケミカツ様はミコトの持つ容器の中を覗き込んだ。横に居た春姫があわ、あわあわあわあわ、と声を上げられずに涙目で縮こまっている。

すう、とミコトが息を吸って、口を開いた。

「——タケミカツ様の」

次の瞬間。ミコトは顔を振り上げ、手にした容器も振り上げ、咆哮を上げた。

「タケミカツ様のつ、天然ジゴロオーツ!？」

「ブボアツ!？」

ミコトが手にしていたホールケーキがタケミカツ様の顔面に叩き付けられる。

予測も出来ていなかったであろう武神はそれをもろに受け大きく仰け反り、春姫が悲鳴を上げた。

「タ、タケミカツ様あーっ!？」

悲鳴に気付いた周囲の者達が一斉に春姫とタケミカツの方へ振り返る頃には、ミコトは全力疾走で離脱していた。

一瞬だけ仰け反って耐えていたタケミカツ子様も、ついにはどしやりつ、と無残な音を立てて崩れ落ちる。

何が起きたのかわからない一般市民達は困惑する中、何処からともなく歓声が響く。

『ミコトちゃん、良くやった!!』『でかしたア!』『オレ【絶^{ぜつ}影^{えい}】ちゃんの応援者になる!!』

周辺の物陰に潜んでいた神々が喝采を上げるが、ミコトは気にも留めずに走り去ってしまう。

瀕死と化したタケミカツ子様を背に、ミコトは逃げ出した。

……いやあ、現実で見ると酷いなあ。いや、まあ……刃物でブスリよりははるかにマシなんだけど。

ベルとヴェルフがミコトを追うのを他所に、瀕死となったタケミカツ子様に寄り添ってすすり泣く春姫の下へ向かう。

「ううっ、^{わたくし}私が、^{わたくし}私をもっとしっかりしていれば……」

「春姫、しっかりしなさい。それと、タケミカツ子様、大丈夫ですか?」「うっ……ミ、ミアハ・ノースリスか……な、何が、起きた……?」

顔面クリーム塗れのタケミカツ様が弱々しく声を上げる。その様子を見た神々が『ざまあ』と笑うが、数人の女性達が駆け寄ってきて手拭やハンカチ等で甲斐甲斐しく顔のクリームを拭き取っていく。

「ああ、ありがとう。その手拭は洗って返そう」

「い、いえ……」

甘い匂いを漂わせながらお礼を言う武神の手を掴み、その場を離れる。

一番近いのは、【ミアハ・ファミリア】の所か。

西日が山脈の奥で霞む夕暮れ時。

都市中央ではダンジョンから続々と冒険者が帰還してくる頃、俺は

【ミアハ・ファミリア】の本拠^{ホーム}でお茶を飲んでいた。

この店の目玉商品である『二属性回復薬』や道具類を買っていったパーティをナーザさんの横で見送っていると、入れ替わる様に二人

の冒険者が店内に入ってくるのが見えた。

「ただいま。帰ったわよ」

「か、帰りました……」

短髪に長髪、吊り目に垂れ目。二人並ぶと非常に対照的な人物達。

元【アポロン・ファミリア】第三級冒険者のダフネ・ラウロスにカサンドラ・イリオンだった。

「おかえり」

「こんばんは。お邪魔してます」

ナアーザさんに気を取られていて俺の存在に気付いていなかったのか、声をかけた途端に二人が驚愕の表情を浮かべた。

「うわ、ミアアだ。居たんだ」

「あ、こんばんは……」

はつきりと喋るダフネと、ぼそぼそと喋るカサンドラ。何かから何まで対照的な二人は、かつて【ヘスティア・ファミリア】の入団試験に足を運び、ヘスティア様とリリに理不尽な理由で拒否された二人組だ。

ただ、ヘスティア様は追い払うのではなく別の派閥、【ミアハ・ファミリア】の方に入団する事を勧めたらしい。

そのおかげかは不明だが、二人はミアハ様の人柄も認め、ナアーザさんの義手の為の借金についても納得してこの派閥へと入団したのだ。

「はい、これ今日のダンジョンの稼ぎ。整備代とかはもう抜いてあるから」

「いつも悪いね。ありがとう……」

「い、いえ、もう同じ【ファミリア】ですし……」

ダフネからお金の詰まった袋を受け取ったナアーザさんがお礼を口にする、カサンドラが控えめに告げた。

【「ディアンケヒト・ファミリア」に『再生薬』の件でお客を奪われかけたけど、なんとか『デュアルポーション二属性回復薬』のおかげで客足は増えてるけど、二人が居てくれてすごーく助かる」

ニヤリと笑みを浮かべたナアーザさんはフラスコ空き容器に入れられた

果汁をねぎらう様に二人に差し出す。

「ミリアにも感謝しないと、二人をこっちに紹介してくれたし」

「あー……入団試験は、まあ、私はね?」

あの時の事を思い出して気ままずくなり、視線を泳がせる。

その様子にダフネが苦笑し、カサンドラはアレは仕方ないですよ、と呟いた。

「それより、なんでミリアがここに? 買い物?」

「あー……一応、知り合いの神様を助けてここに連れてきたんですよ」
後ろを指し示す。

長台の奥、俺とナーザさんの背後の開けっ放しの扉の向こうには、客間でテーブルを挟んで座る二柱の男神の姿があった。

片方は群青色の長髪を束ねた美青年、この派閥の主神であるミアハ様。くたびれた灰色のローブを身に纏う身形こそ貧相なもの、端正な顔立ちは貴公子と称されても通じる。

そしてもう片方は黒髪を角髪にした凜然とした男神、顔面ホールケーキ事件の被害者タケミカツチ様である。

「……何やってるの?」

「実はですね」

掻い摘んで状況を説明すると、二人は呆れた様に眉を顰めた。

そんな二人の様子に苦笑していると、背後では相談事としてミアハ様にタケミカツチ様が昼間のヤマト・ミコトによる顔面ホールケーキ事件について相談していた。

「——という事があったんだ」

タケミカツチ様なりの言葉と、理解し得た状況を説明して知り合いの男神に相談を持ち掛けている。

曰く、どうしてミコトが怒っているのかわからない、と。

簡単な嫉妬なんだがなあ。と答えを教えるのは簡単なのだが、それはするべきではない、とナーザさんに止められたのだ。

「……………」

黙って話に耳を傾けていたミアハ様が白湯で唇を湿らせると、ふう、と息を吐いた。

瞳を見開いた男神は、少女の怒りの理由を問うた親友を見つめ、言い放つ。

「——さっぱりわからん」
「だろ？」

ゴンツ!! と盗み聞きしていたダフネとカサンドラが柱に頭を打ち付けた。

鈍い物音に首を傾げる男神二人を他所に、余りにも鈍感過ぎる男神に頭を痛めるダフネとカサンドラ。付け加えると常日頃から頭を痛めるナーザさんも合わさって割と気まずい。

「はあ……まあ、タケミカツ子様も怪我が無かった様子ですし。私はこの辺で退散しましょうかね」

決して、超鈍感系主人公並の鈍感さを持つ男神二人に呆れたとかそういうモノではない。

「ああ、ダフネさん、カサンドラさん、また機会があれば探索に同行してもらえると助かりますね」

「え？ ああ、それは別に構わないよ。むしろこつちから頼みたいぐらいだわ」

「気の良い返事を返すダフネさんに礼を言いつつ、ナーザさんにお茶代として少しヴァリスを渡して、俺はその場を後にした。」

タケミカツ子様の祝事会当日。

館の調理場には朝早くからミコトが立て籠もっていた。

昨日の撃砕事件から試作を繰り返していたらしいのだが、らしくもない失敗を繰り返し発生させ、試食を担当していたベルとヴェルフの胃に絶大なダメージを与えていたらしい。

残飯処理として最終的にキューイに食らせたが、途中でキューイも泣くぐらい酷いモノに当たってミコトが何度も頭を下げていたのは記憶に新しい。

両手で頬を叩いたミコトが調理に集中せんとくわと目を見開いていた。

そんな彼女の下へところごと春姫が駆け寄っていく。

「あの、ミコト様……昨日のタケミカツ子様との密会は、その……」

「大丈夫です、春姫殿。自分は気にしていません」

「そうではなくて……ミコトちゃん、あれは」

「気にしていませんっ」

調理場に訪れて彼女に何事かを告げようとしていた春姫にもおぎなりの対応をするほどに調理に集中するミコトを見やり、お腹を押さえたいベルとヴェルフに視線を向ける。

「で、どんな失敗を？」

「……塩辛かった」

「……黒い炭になってたな」

砂糖と塩を間違えたり、黒焦げにしたりか。まあ、ありがち、と言っているのだろうか。

「ふうん……まあ、次は上手くいくでしょう」

調理場を覗き込み、彼女の動きを目で追ってみるが、工程に不自然な点は見当たらないし、分量は適切。混ぜ方にも問題は無いし、焼き加減にも気を使っている様子。

既に昼を回って結構時間が経っているが、祝事にはしつかりと間に合うだろう。

「あれ、ベル君にミリア君、ヴェルフ君じゃないか。どうしたんだい？」

「お腹でも減ったのかい？　ボクが何か作ってあげようか」

「ヘスティア様を調理場に立たせる訳にはいきません。どれだけ無駄遣いされるか……」

「いや、流石にその物言いは失礼では……っ？」

廊下から調理場を覗いて居ると、ヘスティア様とリリ、そしてメルヴィスさんが歩いてくる姿があった。

ヘスティア様の手料理？　是非お願いしたい所ではあるが。今は調理場はミコトが独占しているので、もし何か食べたいのならば外食になるだろう。ベルとヴェルフはお腹一杯みたいだが。

それにしてもヘスティア様とリリはわかるが、そこにメルヴィスさんが加わるとは珍しい組み合わせだな、と思っていると、お腹を抑え

ていたヴェルフとベルが事情を説明しだす。

「実は昨日、タケミカツ子様が——」

タケミカツ子様の祝事を開く事。

その為にミコトが西洋風のケーキを作ろうとした事。

その帰り、タケミカツ子様がいつもの過剰な接触スキシンツクをしていたのを

ミコトが目撃してしまった事。

それに嫉妬したのか、ミコトはその場で持っていたホールケーキを
タケミカツ子様の顔面に叩き付けてしまった事。

それを気にしているのか、上の空の状態で調理を続け、いくつもの
試作を作るも失敗を繰り返している事。

言葉にしてみると割と酷い状況ではあるな。

「あゝ、なるほど。タケがね」

「それは、ミコト様に同情しますね」

「……タケミカツ子様ってそういう神様だったのですね」

良い神様ではあると思うんですが、とメルヴィスが頬に手を添えて
苦笑を浮かべた。

「あれ、メルヴィス君はタケの事知ってるのかい？」

「ええ、覚えていらっしやるかはわかりませんが。腕が無くて困って
た時にお世話になりましたね」

片腕を欠損して直ぐの頃、自暴自棄気味に街中でふらふら歩いてい
たメルヴィスに声をかけて相談に乗ってくれたのが件のタケミカツ
子様だったらしい。

「惚れたかい？」

「いえ、惚れてはいませんよ。勿論、励まして頂いたことについては非
常に感謝していますけどね」

メルヴィス以外にも、サイアもタケミカツ子様に声をかけられて励
まされた事があるらしい。

本当に色んな女性に声かけてるなあ。しかも下心が完全にゼロの
善意で声をかけるんだからタケミカツ子様は凄い。モテるのも理解
は出来るんだが……。

「はあ、タケは鈍感だからなあ」

「た、確かに……なんで気付かないんでしょうか？」

「ミアハもそうだけど、あの二人は真^ト直^{スト}ぐな言葉で言わないとわからないんだよ」

ただ、そのド直球な言葉を告げるのが難しい訳なんだがね。

「はあ……あつ、こんにちは、ヘステイア様に皆さま」

溜息交じりで調理場から出てきた春姫がちよこんと頭を下げる。

「春姫君かい、どうしたんだい？」

「それが……実はですね」

困った様に耳を垂らす彼女曰く。

今回開く主神への祝事は、実は表向きの理由であり、本当は一年間だけとはいえ「ヘステイア・ファミリア」へと移籍するミコトへの歓送会をかねてから計画していたらしい。

昨日の『あいつも喜ぶはずだ』というのはミコトの事であり——
—ミコトに内緒で驚かせようと皆で画策していたというのに、肝心のミコトがあんな調子になってしまって、春姫は不安になっている様子だ。

「うーん、大丈夫だと思うけどなあ」

「ま、見守ってやろうぜ」

ヘステイア様とヴェルフが肩を竦めるのを他所に、もう一度調理場の様子を覗き込むと——キユーイがミコトが作った試作品の前で机に倒れ伏し、か細くキュイキュイ鳴いていた。

甘い、きつい、つらい、とボソボソと呟かれる言葉から……試食し過ぎで限界を迎えたらしい。

いくらキユーイでも甘いケーキの試食を何度も繰り返せばグロツキーになるのか。知らなかった。

「あの、誰かいるのでしょうか」

「はえ？」

パタンツ、と大きく開かれた調理場の向こうから甘い匂いを漂わせたミコトが姿を現す。

「申し訳ないのですが、試食の方をお願いしたいのですが」

「え？ ああ、うん。ボクに任せてくれよ！」

「リリもぐ」一緒しますね。ミリア様はどうです？」

リリに誘われたが、遠慮しておこう。

というか、館内がケーキの甘い匂いで包まれていて胸焼けしそう
だ。甘いモノは嫌いではないんだが、匂いに包まれ続けるのはきつ
い。

コーヒーだけ貰って行こう。

序に、レーネに頼んでおいた情報もそろそろ集まるだろうし。俺は
執務室で待機かなあ。

「じゃあ、私は執務室に居るんで。何かあれば声をかけてください」

「あ、うん。僕は……ちよつと体を動かしてくるよ」

「ベル、俺も付き合おうぜ」

中庭で軽く鍛錬をするらしいベルとヴェルフと別れる。

春姫は早めに「タケミカツチ・ファミリア」の元へと行くらしい。

次の日。

どうやら一応ミコトへの歓送会は上手くいったらしい。

中庭にはニヤけた顔付きで新品の剣で素振りをするミコトの姿が
あった。

「雌雄一对の剣で、片方をミコトに、片方がタケミカツチ様に、ねえ」

幸せそう、というかかなり張り切って素振りをするミコトの姿を二
階の窓からヘステイア様と並んで見下ろす。

「雌雄一对の剣を眷属と神である自分に別ける」

雌の剣を女性の手には、雄の剣を男性の手には。

それじゃあまるで……

「エンゲージリング婚約指輪ですね。まるでプロポーズですよ」

「良いじゃないか。ミコト君が幸せそうで」

良い事、なのだろうか。

それはそれとして、だ。

「ヘステイア様、これ良ければどうぞ」

「ん？ お、ミリア君からボクに贈り物かい？」

「ええ、まあただの懐中時計ですけど、良ければ使ってください」

別にアレを見て買った訳ではないが、ヘステイア様にそれなりの値段の懐中時計を贈る事にした。

身に着ける、というよりは持ち運びできる代物として。

「へえ……おお、この懐中時計、「ファミリア」のエンブレムが刻んであるじゃないか」

鐘と竜を結ぶ炎のエンブレム。「ヘステイア・ファミリア」の徽章の刻まれたそれを見て頬を綻ばせる女神を見やり、良かったと胸をなでおろした。

「……ちなみにだけど、これいくらしたんだい？」

「ざっと、こんなもんですかね？」

指を立てて金額を示すと、ヘステイア様の表情が凍り付いた。

「……………ミリア君」

「何ですか？」

「次は、もっと安いモノで良いからね？」

第一九八話

日が暮れ夕暮れの差し込むホーム。

日がな一日を鍛冶に費やしていた「ヘステイア・ファミリア」の鍛冶師、ヴェルフは汗まみれの着流し姿のまま仲間を呼んでいた。

武器製作の為に呼び出されたりり、春姫、ミコト、サイアの四人が「おおう」と揃って口を開ける。

「お前が前に使っていた刀に寸法は合わせておいた。材料は『ライガーファングの牙』に27階層で取れた『黒銀鋼』ノステイルを混ぜた複合金属。派手に使おうが折れないはずだ」

「ありがとうございます、ヴェルフ殿！ 素晴らしいです……！」

虎の刻印が施された黒塗りの鞘に収まる刃長90Cセルチの黒と銀の色の刀身。

金属属性と武器素材と『下層』の採取物で作られた一振りの刀を受け取ったミコトが興奮と感嘆に身を震わせる。

「わたしのは？」

「これだよ……つと、やっぱ重いな」

ミコトに渡された刀を見て羨ましそうに指を咥えていたサイアに、ヴェルフから一本の大剣が渡される。

「うわ……でっかい」

「とても、大きいですね……」

その大きさに目を丸くするりりと春姫の前で、軽々と刃を保護する鞘から抜き放った大剣を持ち上げて見せるサイア。

刃長はおおよそ150Cセルチ、刃幅もサイアの腰より広い。薄らと光沢を残した鈍色の刀身に自身の姿を映したアマゾネスの少女が満足げに頷きながら鞘に納めた。

「ありがとうございます、お金は……次のダンジョンで稼いでくるね！」

「あ……いや、まあ、壊すなよ？」

高頻度で武器を破壊しているサイア向けに耐久重視でくみ上げられた一本だ。その刀身の重量とサイアの怪力から繰り出される一撃は、よほどの事が無ければ同格のモンスターなら一刀両断する事だろ

う。

「よし、それじゃあ名前を付けるか……そつちの刀は………虎鉄
………いや、寅二郎」

「お待ちくださいヴェルフ殿おおおおおおおおおおおお!?」

顎に手を添えてニヤリと渾身の笑みを浮かべたヴェルフに、ミコトが全力で吠えかかる。

血相を変え、自らの愛刀となる刀の銘を『寅二郎』にされるのを防がんと必死な様子だ。

「よ、良いお名前ではございませんか、寅二郎様？ 私は可愛いかと……」

「おつ、分かってくれるか、お前！」

「後生ですから黙っていてくださいっ、春姫殿オツ!?!」

箱入りっぷりを発揮して武具に付けるには珍妙な名を褒める春姫と、初めての賛同者に喜ぶヴェルフ。そして涙目で懇願するミコト。

げんなりとするリリを他所に、サイアが自身の武器に既に刻まれている銘を見て真顔になっていた。

「サイア様、どうかしましたか？」

「……この武器、地久我って名前なんだね」
「………」

既に銘が刻まれており変更不可能になっている武器を前にサイアが崩れ落ちる。

横で今ならまだ銘も刻まれておらず間に合う、とミコトが泣きながら土下座して懇願し、どうにか新武装の名を『虎鉄』にすることに成功していた。

「サイア様の方の武器は……」

「ん？ ああ、先に作って良い名前が浮かんだからそのまま使わせてもらった。良い名前だろ？」

「次は相談させてほしいなあ、って」

引き攣った笑みで地久我を抱えたサイアの言葉を聞き、どうにも不評な自身の名付けにヴェルフは不満げな表情を浮かべた。

「まあ、良い。後はミリアの銃杖だが、こつちは形だけ整えたただけだか

「前までと同じだな」

「名前は？」

「……俺が付けると不満らしいからな、後でミリアと相談しとくよ」

「今日も一日忙しそうにあっちこっち駆け回っていた副団長の装備がおかしな名でなくて良かった、とサイアが胸をなでおろす。

「……で、後はお前達の防具になるが、これだ」

「マント、でございますか？」

「ヴェルフ様、まさか、これは……」

春姫とリリに渡されたのは、漆黒の外フーデットローブ 套だった。

驚愕するリリとミコトを見て、事情を知らぬ春姫とサイアが小首を傾げる。

「ああ、春姫とサイアは知らなかったな。前に漆黒の階層主ゴライアスと戦つてな、その時の『ドロップアイテム』で作ったんだよ。勿論、ヘステイア様やベル、ミリアには許可をとつてあるぞ」

18階層での異常事態イレギュラー、漆黒の階層主ゴライアス&結晶竜との決闘。

その際に活躍したベルに優先的に渡された『ゴライアスの硬皮』の半分を、リリと春姫用の防具の素材として使用したのだ。

数百を超える上級冒険者の集中砲撃を受けても耐えきる程の凄まじい耐久性を誇る巨人の硬皮。ヴェルフなりに皮を鞣し、形を整え一級品の防具に仕立て上げた逸品だ。

「随分重いですね……」

「まあ、重さには目を瞑ってくれ。あの階層主が出鱈目ならその皮も出鱈目だ、武器だろうが魔法だろうがびくともしない」

『ゴライアスのローブ』を身に着けたリリがその防具の重さに眩きを零した。

【縁下力持スキル】の効果によって行動に支障のないリリと違い、非力な春姫は非常に重たそうに微かな呻き声を響かせる。

「う、う〜っ」

「は、春姫殿、大丈夫ですか？」

「重くはありますが、これならば『中層』や『下層』のモンスターからの一撃必殺は防げますね」

18階層での出鱈目な強さを目の当たりにしていたリリが感嘆の息をついた。

「ただし、攻撃は防いでも衝撃までは殺せない。とんでもない力で殴られればおしまいだ、気を付けろよ。あ、後、ミアアの砲撃も無理だ」
「副団長の砲撃って第一級冒険者じゃないと即死するんじゃない？」
「戦争遊戯のさ中に城塞を穿ち貫いた一撃を想像したサイアが小首を傾げる。」

「それは、確かにリリも同感ですね」

結晶竜の乱入による蘇生が無ければ、あの強襲型の階層主も一撃で仕留める事が出来る程の威力の砲撃を思い浮かべたりりは半ば呆れ混じりの溜息を零した。

ヴェルフ達が半笑いを浮かべていると猫人が廊下の奥から急いだ様子で駆けてくるのが見え、皆が何事かと彼を伺う。

「よう、談笑してる所悪い。副団長が鍛冶師を探してたぞ」

「何かあったのでしょうか？」

「いんや、詳しい話は知らんが、すぐにヴェルフを呼んできてくれて」

「……何かあったんだろうな。わかった、直ぐ行く」

ミアアが急な呼びつけを行う。ともなれば派閥内では重要な事に違い無いと皆が確信し、慌てた様子で駆け出した。

執務室で確認作業しているさ中、いくつか気になった点があったので確認の為にヴェルフを呼んだら大事になってしまいました。ミアア・ノースリスです、過保護な家族が居て嬉しいやら悲しいやら。

「それで、何かあったんだ？」

「ミアア様、何事ですか？」

「あー……えっと、そのー……まだ確証が得られていない、と言いますか」

「まあまあ、落ち着きなよ」

執務室の扉を蹴破る勢いで入ってきたヴェルフとリリに詰め寄ら

れ、ヘステイア様がそれを押し留めてくれる。そんな中、入り口からぞろぞろとミコト、春姫、サイアなんかも入ってくるのが見えた。いやね、ほんとうに申し訳ないんだけど大事にはしたくなかったんだけどなあ。

「はあ……えつとですね、説明しますんで少し離れてください」

「ああ」

詰め寄ってきていたヴェルフとリリが離れ、ヘステイア様がふう、と一息ついた。そのさ中、バンツ、と扉が開け放たれ、ベルが飛び込んできた。

「ミリア！ 何かあったって聞いたけど!？」

「……あー、春姫、皆にお茶をお願い」

ちよつと落ち着いてくれ。本当に大した用事じゃないんだよ。デインケは皆にどんな伝え方したんですか。

春姫にお茶を用意して貰う序に、執務室では部屋が狭くて全員は入れないという事で居室で再集合リベンジしてから、皆して会議ミーティングの時間である。

「で、ミリア、俺に用があるって聞いたが」

「あ、はい。いくつか聞きたい事があったんですよ」

「聞きたい事?」

まずその前に状況の説明をさせて貰おうかな。

つい昨日、藍色の女神の所の『ダルトン情報屋』の方からいくつか情報提供があった。その裏取りの為に『情報屋マイヤーズ』からいくつか情報を購入した事。

その結果として、期間が余りにも短すぎて確定情報とは言えないものの、ヴェルフを中心として【ヘステイア・ファミリア】の情報収集を行っている集団がある事が判明したのだ。

「で、ヴェルフは誰かから恨みを買ったりとかした覚えは無いですよね?」

「恨み、か……特に思い付かないんだが」

ふうむ、何が不思議かって、収集してる奴らが都市外から来た旅人である事なんだよなあ。

しかも、都市各所に散らばってるし。地図上の分布を見た感じだ

と、ギルドや商会、大派閥のホーム近くなんかに散ってるし。

なにより【ヘスティア・ファミリア】の本拠^{ホーム}となっている『窯火の館』の周囲に常に四人態勢で此方を観察してんだからさあ、笑えんのよ。

「はあ？　大事じゃねえか!？」

「……ミリア様、相手は誰か特定できてますか？」

「いや、それはまだわかってないわ。ただ、真っ先に情報を買って漁られてるのがヴェルフだし、ヴェルフの知り合いまたは怨恨……もしくは、『クロツゾの魔剣』が目的なのかなあ、とは考えてるけどね」

一番可能性が高いのは『クロツゾの魔剣』を目的としてヴェルフを狙っている、という線だろうか。

正直、今の【ヘスティア・ファミリア】は狙われる要素が多すぎて洗い出すのが本当に面倒臭い。大半が俺を中心に情報収集している中、珍しくヴェルフを中心に情報集めてる集団があるっぽかったので少し警戒をしているだけなのだ。

「それ、黙ってる積りだったんですか!？」

リリが責める様に立ち上がって吠える。当然だろうなあ、と頬を掻いてヴェルフに視線を流す。

「いや、ね。正直、ヴェルフと相談してから決めようとは思ってたのよ」

「……………」

「ほら、自分が原因だったら、気に病むでしょ？」

少なくとも、俺が狙われる原因になっているであろう事については俺は気に病んでる。自分でその辺りの案件は全部片づけて無かった事にしておきたいぐらいには、気に病むに決まってる。

だから、まずヴェルフとヘスティア様にだけ話しておいてから今後の行動について決めようかと思ってきました。はい……。

「はあ、悪いなミリア。俺、お前の事責められなくなったわ」

ばりばりと頭を掻いたヴェルフが眉を顰めて広げた地図を見つめます。

「そうか、自分が原因で狙われてるってわかつちまったら、そりゃあ、

な……」

何処か思い詰めた様な表情で黙り込んだヴェルフを見て、リリが眉を顰めて呟いた。

「リリ達に黙って解決しようとするのであれば、リリは怒りますよ」

「あー、えつと……」

「ミ・リ・ア・さ・まっ」

「ごめん、癖になつてて、今度から気を付けるから」

リリが割とマジギレ寸前なのを宥めていると、ベルが口を開いた。

「その、僕達はどうすれば良いのかな？」

「えつとですね、既に「ロキ・ファミリア」の方には情報は流しておきましたので」

「流した？」

あー、誤解を生まない様に説明をするとだね。

現在「ヘステイア・ファミリア」周辺を嗅ぎ回つてる怪しい派閥や商会なんかを一覧表リストアップにして同盟派閥に情報として流しているのだ。

その中で最近、都市外からやってきたらしい者達が揃って情報を買つてて怪しいし、隠れる様にこそこそしてるから潜伏場所を探っておいたよ。と知らせておいたのだ。

「はえー、珍しく行動が早いですね、ミリア様」

「で、【ロキ・ファミリア】の方は何て？」

「確認が取れ次第拘束する、との事ですね」

それまでは暫く気付いて無いふりして欲しい、との要望が来ている。

正直なあ、【ロキ・ファミリア】の主力部隊が都市内へととんぼ返りしてきてるし、時期的にフィンは何かしらに気付いて居そうではあつたんだよなあ。

うーん、俺個人の想像の域を出ないんだけど。

「ヴェルフの魔剣目的にラキア王国がなんかしてるんじゃないかなあ、とは思ってますね」

都市外の戦況についての情報が無いのでなんとも言えんものだけだね。

だって、勝ち確の戦争（笑）の情報なんて誰も欲しがったりしないでしょ？ だからか、情報屋の殆どが『戦争の戦況？ んなもん知ってどうすんだよ』と取り合ってくれないんだよ。ほんと、使えない情報屋ばかりでうんざりするね。

「ラキア王国が……？ 内部工作でしょうか？」

「うん？ あのラキア王国がねえ……」

「と、言う訳ですね」

ま、とりあえずヴェルフの身の振り方については少し考えて貰って、今後の方針だけ告げておきますか。

「まず、ヘスティア様の近辺警護で常に二人は欲しいですね。後、ヴェルフは必ず誰かと一緒に行動する事。できれば春姫以外で自衛出来る人が良いわね」

「おう、俺の方は了解だが、ヘスティア様の護衛か」

「……それについてなんだけど、ミリア君は警護から除外で頼むよ」

何やら怪しい動きがあるので、狙われたら不味い主神を守る為に重点的に警護を着けよう、という話なのに、主神自らが『キミが警護するのは駄目だ』と言い放つんですよ。正直信じられないですわ。

「いや、ミリア様は既に忙しいではありませんか。なのに仕事を増やすおつもりですか？」

「……ぐうの音も出ないわ」

ぐぬぬ……と言いたいが、実際に忙しくて目が回りそうなのは否定しない。

否定、しないが……ヘスティア様の護衛は俺の手でやりたいんだけどなあ。

「じゃあ、ミリア様は除外確定で」

「あゝ、でしたら私も護衛わたしには向かないので……」

まず、前提として現状、忙しい俺と、護衛として力不足なりり、春姫を除外。

そこから、狙われている可能性の高いヴェルフも外して、残った面々と加えて【ミアハ・ファミリア】のナーザーザさんや【タケミカツチ・ファミリア】の人達にも協力してもらう事になるので、その

中から時間を決めて護衛して貰う事にしようと思う訳だ。

「ほう、夜はどうする？」

「屋敷内についてはキューイとクリスが居れば問題はありませんが、基本的に昼間ですね」

一応、クリスの方は常にヘステイア様に付きっ切りになってもらう積りではあるが、俺に何かあると問題になる可能性もゼロではないので、常に護衛を着ける。

それと、昼間といっても「ヘファイストス・ファミリア」の店舗でバイトする時間帯は無しでも一応問題はない。ヘファイストス様の方にも話を通すし、そもそもあの派閥は窃盗対策として店舗に自前の警備員として屈強な団員が配属されてるので問題はないだろう。

そうなってくると、じゃが丸くんのバイトの時が問題となってくる訳だが。

ヘステイア様の行動予定の書かれた紙をテーブルに広げ、その横に護衛の予定を書き込む枠線のみの紙を広げる。

「勿論、どうしても時間が埋まらなければ私が動きま………すいません、何でもないです」

ヘステイア様の護衛は任せろー、と言おうとしたら凄まじい圧をかけられたんですが。

いや、だって、ヘステイア様の護衛だよ？ 俺がやんなくて誰がやるんだよ。なんなら24時間体制でヘステイア様の近辺警護だってやるよ。喜んでやるよ！

「じゃあ僕はこの日の昼間かな」

「団長がそこいくなら、俺はこの日だな。一日いけるぞ」

「ディンケがそこかく、じゃああたしはここにしようかな」

「私はこの日に護衛に付きましよう。サイアもどうです？」

サクサクと日程が決められていき、余った枠は今後「タケミカツチ・ファミリア」や「ミアハ・ファミリア」を交えて相談するという事で話し合いは終了。

ヴェルフの方を伺うと顎に手を当てて考え込んでいる様子だった。「ヴェルフ、何か気付く事はあった？」

「……ん、ああ……そうだな、自分の所為で仲間に迷惑がかかるつてのは、^{プレッシャー}案外重荷になるんだな」

「大丈夫だよ、ヴェルフ」

ベルが気落ちした様子のヴェルフの肩を叩く。

「僕達、家族じゃないか。そんな事気にしなくていいから」

「ベル様の言う通りです。ミリア様みたいにこそこそされても困りませんし」

ちくりと棘をこちらに刺してくるリリに苦笑しつつも、予定表の紙を纏めてハスティア様に託しておく。

「おーい、夕飯が出来たから皆食堂に集合してくれ」

丁度夕食の準備をしていたエリウッドとイリスの二人が呼びに来たため、会議はお開きだ。

「そういえば、明日は『タケミカツチ・ファミリア』と17階層に行きますが、それは予定通りに?」

「あ、その件は忘れてたわ。うん、予定通りに17階層まで行く予定だから、皆準備は忘れないでね」

そうだそうだ、昨日から桜花達と相談で決めていた『小遠征』の準備の方も確認しておかないとなあ。

ぼんやりと、準備の為に食後倉庫に行かないとなあと考えていると後頭部を強打された。

「いたっ……なんですか」

「準備の方はリリ達の方でやっておきますので。ミリア様今日は直ぐに寝てください」

「はい、^{わたくし}私もお手伝いいたします!」

気合十分、と張り切る春姫は微笑ましいのだが、ダンジョン探索の準備に手は抜けないし。リリには悪いが少しだけ、と視線を逸らそうとしたら頭をガシツとファイアに掴まれた。

「副団長、昨日から今朝にかけて夜中出かけてたよな」

「……あー、えー……全然大丈夫ですよ! 元気一杯ですって!」

情報屋の方をこそつと回ってたから夜中こっそり出かけてただけです。でも大丈夫なんで放してくださいお願いします。何でもしま

すんで。

ぐいつ、とりりが顔を覗き込んできて目を細め、じいーつと見つめてくる。

やだ、照れちゃう。

「ミリア様、眼の下に隈がありますね」

ははーん、カマかけてるな？ そんなんに引っかけたりなんかしないぞ。念入りに化粧で誤魔化したからバレたりするわけないんだよなあ。

「副団長、化粧してるなんて珍しいな」

「……あの、フィアさん、匂い嗅ぐのはやめてください」

フィアがすんすん、と鼻を鳴らして匂いを嗅いでくる。匂いフェチかな、と冗談を零したい所ではあるが、獣人の鼻に化粧が引っかけたららしい。

素早くリリが俺の目元を拭って化粧を剥がし、その下に隠されたほんの薄らとよく観察しなければわからないはずの隈を見つけたのか、リリの目が徐々に吊り上がっていく。

「ミリア様、この後夕食を食べたらすぐにお風呂に入って歯を磨いたら寝て下さい」

「……お、おかあさんですか？」

俺は冒険者【魔銃使い】ミリア・ノースリスだぞ、第二級冒険者だぞ、下級冒険者の庄なんかには絶対負けられない！

「寝て下さい。良いですね？」

「あつ、はい」

……………リリの庄には勝てなかったよ。

「副団長は相変わらずだな。倒れる事だけはしてくれるなよ」

「ミリア、無茶は駄目だって毎回言われてるのに……」

「あれは死んでも直らんだろ」

「それよりも、明日は地^ち久^く我^わの試し切りだー！」

待って、サイア、ちくわの試し切りって何？

ヘステイア・ファミリア タケミカツチ・ファミリア
自派 閥と懇意派 閥による『小遠征』。

参加人数はヘステイア派閥から11名+ α 、タケミカツチ派閥から5名の合計16名+ α の規模の遠征隊となる。

今後、より深い階層、20階層以上の層域にまで足を運ぶとなれば、日帰りでは到達時間が足りない。行つて戻つてくるだけで時間がカツカツで碌な探索処か、下手すると途中でトラブルに見舞われれば日帰りすら難しい。

故に、迷宮内での野営には慣れておくべきと言う事で、「ヘステイア・ファミリア」と「タケミカツチ・ファミリア」で互いに見張り等を出し合つてダンジョンの一角で一晩過ごそう、という計画だ。

『小遠征』等と銘打つてはいるものの、実際は長期間のダンジョン探索に向けた迷宮滞在のお試しである。

しかも今回は遠征慣れした【ロキ・ファミリア】や【ガネーシャ・ファミリア】等の大派閥の知識を持つフィアやディンケといった経験者もいる。彼等から『深層遠征』に関しての知識なんかも得られる事もあつて、桜花等は非常に張り切つていた。ベルも、アイズさんの活躍なんかを聞けるかも、と思つていたらしいし。

留守に関しては【ヘステイア・ファミリア】のホームに、タケミカツチ様も泊まりで、護衛として【ミアハ・ファミリア】のナーザーさんや、ダフネ、カサンドラなんかも来てくれる事になっている。

後、【ロキ・ファミリア】の方からこつそりと護衛としてホーム周辺に団員を派遣してくれているらしいので、問題は皆無、安心して『小遠征』に挑む事が出来る訳だ。

目的地は17階層。半日一杯を探索に費やし、一晩過ごしてから明日の昼に帰還する予定となつていた。

——— 筈だったのだが。

第一九九話

「撃てえっ！ 【魔銃使い】 いいいいいいっ!!」

「早く詠唱しろおおおっ!?」

響き渡る怒声に続く、巨人の咆哮と爆音染みた衝突音。

現在階層は17階層、場所は最奥部、嘆きの大壁のある広大な広間。
安全階層進出前に立ち塞がる、18階層直前の最難関地帯である。

そんな場所で、俺達は大規模戦闘に巻き込まれていた。

「前衛壁役のクソツタレどもおおおっ!? その汚ねえ尻ケツにもっと力あだめて守りやがれええええ!!」

味方を鼓舞する様な怒号やまとまりのない詠唱が響き渡る中、俺は数人の冒険者に詰め寄られている。

「あの砲撃まほうで何とかしてくれ!」

「分け前も出す、さっさとしてくれ!」

本来ならば17階層の外れ辺りで野営キャンピングする予定だったのだが、想定外の事が発生して予定変更する事となる。

事の始まりは17階層に降り立った直後に聞こえた鬨の声、加えて巨人と思しき凄まじい大咆哮。「ヘスティア・ファミリア」団長のベルと「タケミカツチ・ファミリア」団長の桜花は阿吽の呼吸で頷き合い、即座に予定を投げ捨てて正規ルートを駆け抜けた。

その先に広がっていたのがこの光景。そう、階層主ゴライアスと交戦していた徒党を組んだ冒険者達だ。

「いや、ですからですね……!」

「早くしてくれ!」

「あの砲撃まほうで一撃だろ!」

衝撃音が響き渡り、大盾を隙間なく並べた壁が大きく歪む。前線を張る冒険者達から期待と焦燥の感情が向けられるのがひしひしと感じられた。

ベルは黒犬や大虎を切り伏せ、リリがハンドボウガンで応戦している姿も見られる。ヴェルフや桜花も前線に参加して完全に巻き込まれている状態の中、俺は冒険者達から喝采混じりに歓迎されたの

だ。

さて、ここで俺が直面している問題について少し話そう。

というかそんなに難しい事ではない。簡単に言ってしまうと、冒険者一団から俺はとある魔法を期待されている。

……そう、戦争遊戯ウォーゲームで都市中に知れ渡ったあの『超遠距離砲撃魔法』アンチマテリアル・スナイパーである。

「いや、ですから無理なんですってば!」

「何言ってるんだ! 出し惜しみなんてしてんじゃねえ!」

断じて、出し惜しみとかではない。今は使えないのだ。

幅と奥行き何百Mメートルもある広大な広間の中央部、モンスターの雄叫びと冒険者の怒号が錯綜する中、交戦中の戦場のど真ん中で最も存在感を放つ、総身七Mメートルにも届く灰褐色の巨人。

『オオオ!!』

17階層の迷宮モンスターレックスの孤王『ゴライアス』が、両拳を振り下ろしながら冒険者達を威嚇する大咆哮を響かせる。地面を粉砕する拳の馬鹿げた威力と大音量に、前線に駆り出されていたヴェルフやミコト、桜花が大きく怯む。

『小遠征』を行うのに関して、事前にしつかりと情報収集は行っていた。行っていたのだ……『地上の』情報はしつかりと。つまり、地上ではない、地下の情報には引っかけがなかった。

非常に間の悪い事に、18階層の『リヴィラの街』の住民達による階層主討伐の決行日と、俺達の『小遠征』の決行日が綺麗に重なってしまったのだ。

およそ二週間の出産期間インターバルを要し何度も出現する階層主は18階層以下が目的地である上級冒険者達からすれば通行の妨げ以外の何物でもない。それに伴って18階層の通行量が減る事は、同業者から金を巻き上げる事をしている街リヴィラの住民の稼ぎに多大な影響を与える。故に、迷宮内で宿場町を営む彼らは徒党を組んで定期的に階層主ゴライアスの討伐に乗り出るのは必然である。

俺達が直面したのもその討伐作戦に違いがない。

そしてそれが厄介で面倒事に繋がっているのが、過去に18階層で発生した異常事態である黒い階層主ゴライアスに一撃で即死級の損傷ダメージを与えた冒険者が居た事。

それに付随して戦争遊戯中に城塞を打ち抜く一撃をみまつた冒険者が居た事。

もう察しが良い者は察するだろうが、その冒険者が【魔銃使い】ミリア・ノースリスであり、俺の事であるというのは街の住民たちの周知となっているのだ。

「早くしてくれ!?!」

「何してんだ、詠唱する時間稼いでやってんだろ!?!」

階層主討伐作戦中、対象を一撃で撃破できる可能性のある魔法使いが偶然通りかかり、助力を申し出たとしたら。皆が何を望むかなんてわかりきっている。

そう超遠距離砲撃魔法でいち早く打倒してくれ、である。

ただ、それができない事情が俺にはあるのだ。

「だから、ちよつと今はその魔法が使えない、といえますか……」

「なあに言つてやがる!?!」

ぎゃんぎゃん吠えたてる冒険者に詰め寄られているさ中にも、前線で戦う冒険者達の悲鳴が響いてくる。

なんとも言い難いのだが、俺は性質変化クラスチェンジによつて性質クラスを変更する事で幾種類もの魔法やスキルを使い分ける事が出来るという、他の冒険者にはない希少な【ステイタス】であるのだが。

当然ながら【ステイタス】は秘匿している訳で、一般的な冒険者の知る【魔銃使い】という冒険者は、『超遠距離砲撃魔法を扱う冒険者』である。戦争遊戯ウォーゲームを見ていた彼等からすれば、何故ここでその魔法を使つてさつさと砲撃をぶち込んでくれないのか、とキレるのも仕方ない。仕方ないんだけど、今は本当に無理なのだ。

「戦争遊戯での活躍は何だったんだよ!?!」

「あれは奥の手でして、気軽に撃てないんですって!?!」

実際には撃てなくはない。いや、この言い方では非常に語弊が強い。

性質が狙撃手であれば余裕で撃てる。使用中の銃杖が消し炭になつてぶつ壊れるのに目を瞑れば撃つ事自体は問題無い。

だが、今回の『小遠征』の目的を考えて、俺の今の性質は魔弾罫師と人形師なのだ。

性質を変更するには主神、ヘステイア様の力を借りる必要がある、前回、黒い階層主との戦闘時と違って今はコロコロと気軽に変更が出来る。

「ンだよそれっ、使えねえ!？」

最初こそ期待して縋り付いてきた名も知らぬ冒険者は、俺が魔法を撃たないと分かつた途端に唾を吐きかけて戦線へと駆け出していく。

ローブにべつとりと着いた唾を見やり、溜息を零しながら外套を被つて魔法の詠唱を始める。

【ピストル・マジック】【強装弾】【強装弾】

性質は『クーシー・ファクトリー』型。

汎用性の高さに罫類の利便性から迷宮内での野営目的で設定したクラス。当然、対巨人能力は低めと言わざるを得ない。

仕方ないだろ、と言いつつ訳を言いたいが【ステイタス】に関して秘匿している現状だと言いつつ訳のしようがない。おかげ様で、この一件で街の住民からの評価はガタ落ちも良い所だろう。

お人好しのベルにつられて助力する事になったが、正直無視して隠れていればよかった。

【強装弾】【強装弾】

後方で荷物満載状態で戦闘に参加できないヴァンと、その傍で頭からすっぽりと外套を纏つて周囲に混乱を撒き散らさない様に待機してるキューイをみやってから、前線へと視線を向ける。

過去に見た黒い階層主と比較すると、格段に能力が低い事は即座に理解できる。だが、それでも『ゴライアス』の公式推定Lv. 4の怪物だ。前衛壁役の護りが危うく崩されそうになる場面も見られる。

加えて、18階層の時とは異なりLv. 4の冒険者がこの場に居ない。居るのは街でも有名なLv. 3が数名に加えて、【ヘステイア・ファミリア】の5名と少ない。

【強装弾】【強装弾】

一応、屈強な前衛壁役は崩れかけながらもしつかりと巨人の進撃を抑え込んではいるのであるが、その後の攻撃が続かない。俺がスナイパーではないから、ではなく前衛攻役が雑兵の駆除に追われて巨人への攻撃へと手が回っていない。それは魔導士達も同様。

詠唱を妨害される者、『完成』した魔法を仕方なく雑兵へと放つ者。魔法の火球や光の雨がそこら中に飛び交っている。

お世辞にも連携が取れているとは言えない。もとより街の住民は同派閥に所属している訳ではないので仕方が無いが。

【ファイア】【ファイア】！

かくいう俺も、接近してきた黒犬に二発ぶち込んで無駄に使用してしまった。いや、そもそも他の冒険者があからさまに俺を守る気を無くした様に散った事もあって俺の方に雑兵が流れて来てるな。

【強装弾】【ファイア】【ファイア】【強装弾】

装填、発砲、装填、装填、発砲、発砲、装填、装填、発砲。

きりが無い。というかゴライアス狙う余裕すらない。

離れた位置でLv. 2に登り詰めた千草とミコトが阿吽の呼吸の連携を見せ付けて、モンスターを切り刻んでいく。それと比較して上級冒険者達はばらっばらのぐっだぐだ。もう滅茶苦茶だ。

「——この階層主、いつものよりやるぞ!？」

前衛の冒険者の一人が大声を張り上げる。

迷宮を徘徊しているモンスターも個体によって能力にバラつきがある様に、『迷宮の孤王』にも個体差は存在する。今回の個体は『当たり』らしいが——強化個体よりマシだと思いがね。

まあ、あの時より戦力が足りないし、雑兵も無尽蔵に補充され続けている。あの時は18階層に居ただけの雑兵で済んだが、今は無尽蔵に生まれ続けていると考えれば状況が悪いのは明白だ。

こう考えると、結構酷い時に合流してしまったな。それに、この救援のおかげで俺はいらぬ逆恨みを買う訳だし。

「チッ、数が足りなかったか……【魔銃使い】も役に立ちやしねえ……おいつ、街へいつて援軍を連れてこい!? 十分でだ!!」

「無茶言わないでくれえ、ボールス!!」

街の纏め役らしい巨漢の大頭の指示がなされ、命じられたヒューマンが悲鳴を上げた。

あの糞頭かしらの奴、戦力の逐次投入なんて馬鹿な真似しやがったのか。いや、今回はある意味では仕方ないのか。

『ラキア王国』の進軍に対応すべくほとんどの派閥が地上で活動しており、今のこの戦場にLv. 4が一人も存在しないのも上げられる……いや、だったら最初からLv. 3をもっと投入しとけよアホか。

俺達「ヘステイア・ファミリア」の増援を含めても五十にも満たないパーティ。

第二級冒険者が奮闘しなければならず、兎の様に縦横無尽に駆け抜けるベルは蓄力チャージする暇なんかない。ミコトの重力魔法も閉鎖空間に加えて天井の低さから使用できない。

俺の魔法はいわずもがな。今回の目的は巨人討伐ではないがゆえに性質構成クラスがどうしようもない。

街からの増援は距離や準備時間を考慮しても、一刻はかかってしまえうだろうし、当てに出来ない。

【強装弾リロード】【ファイア】

まともに魔導士の砲撃まほうが打ち込まれていない状況。足に損傷ダメージが蓄積してはいても、そろそろ前線が限界か……。

「ミリア様!」

「リリ、状況が悪いわね」

「はい。ですので——」

駆け足で近づいてきたリリの言葉に耳を傾けつつ、前線を伺う。

ヴェルフや桜花、ディンケやファイア等が前線に立っているが、前衛壁役ウォールが崩れて前線を押されたら彼らまで不味い事になりかねない。

秘匿して置くべきなのは違いないが、このままだと仲間の命に関わってくる。

「かける対象は……ミコトが良いわね」

「はい、直ぐにミコト様に声をかけます。ミリア様は」

「私はここで派手なのを決めるわ。見かけだけは派手な奴をね」

春姫の「ウチデノコヅチ」による『階位昇華』^{レベルブースト}を使う為にも、万が一にでも彼女に注目が集まってはいけない。

ただでさえ逆恨み^{ヘイト}を買っている俺がこれ以上変な行動を起こすと、後でしつぺ返しが怖いが春姫の魔法が露呈するのよりははるかにマシだ。

リリがミコトに声をかけて共に下がっていくのを見送っていると、遂にその時が訪れた。

『ぎゃあああああああああああああああつ?!』

「くそっ……!?!」

ひしやげ壊れた大盾と共に宙を舞う前衛壁役^{ウォー}。

性質^{クラス}を人形師^{ドールズ}に変更。広間の片隅、冒険者やモンスターの視界から外れる位置で詠唱を開始する春姫に重ねる様に俺も詠唱を紡ぐ。

「深紅の外套——巨大な大斧——濁った瞳」

原作『ミリカン』におけるケットシー・ドールズ型は使用する人形次第で戦術がガラリと変わるのが面白い所。強力な単騎人形で蹂躪するか、多数の人形で圧殺するのかわで非常に個性が出てくる。

人形にも等級^{ランク}がいくつも存在し、下級は性能が低く数を揃えるのが前提。

「鋭い牙——疾駆する身体——獣の吐息」

上級にまで至ると、整備費用でゲーム内通貨が消し飛んでいくが、それに見合った性能は持つ。

そして、最上位等級の人形に至っては同一サーバー上で一体までしか存在せず、一人のプレイヤーが所有すると他のプレイヤーが所有できない特殊人形。

原点^{オリジナル}のNPCとの友好度を最高値に上げた上で、特殊依頼^{クエスト}を達成すると二〇体の内の一体を貸し与えてくれる唯一無二^{オンリーワン}。

「奏でる銃声——燦る硝煙——虚ろな心」

春姫の詠唱が終盤に入るより前に、詠唱を完了した。体から一気に魔力が引き抜かれる感覚に陥る。キューイやヴァン、クリスの召喚、追加詠唱なんか目ではない。それを数倍凶悪にした消費量だ。

正面位置に展開される魔法円から、獣を思わせる唸り声が響き渡る。周囲の冒険者がぎよつとした表情で俺を見やり、魔法円に視線を落とした。

雑兵達も姿勢を落として震え、怯えた様に後退り始める。

ミリカン内において一つのサーバー上で一人のプレイヤーしか所有を許されない唯一無二。その余りにも凶悪な性能から、他勢力から恐れられた赤い獣。

「赤頭巾の狼狩人」

魔法円から深紅の影が飛び出す。

ずしん、と重々しい音色と共に降り立った人形は、二足歩行ではあるが、人ではない。

おおよそ二M半はあるだろう巨軀を持つ狼男。鼻先まですっぽりと顔を覆い隠す深紅の外套。腰の辺りから生えた尻尾には棘付きの鉄線が巻き付けられて痛々しく真つ赤な血を滴らせる。

その両手には特徴的な得物、旧式散弾銃と戦斧を合成した様な歪な武器。その巨軀に見合った大きさのその銃は、もはや小型大砲と言っても過言ではない。

獣の様な唸り声を響かせるその人形に、周囲の冒険者が啞然としていた。

「我は操者、操る者成りて——汝は傀儡、五指奏でる調べに踊れ」

操糸を接続。

瞬間、僅かに俯いていた人形が顔を上げた。鼻先もすっぽり覆われ、目元が確認できないルー・ガルは、両手に持った戦斧散弾銃を構え、前進。

後方で春姫の魔法が完成し、フードで全身を隠したミコトも淡い燐光を纏いながら前進。

「その冒険者、合わせなさい！」

「ツツ!!」

大声でミコトに声をかける。僅かに頷いたのを見やりながら、人形を真つ直ぐ前進させる。

深紅の砲弾が黒き矢を従えて戦場を横断する。
進路上に存在する全ての敵対者は戦斧散弾銃の斧の前に上半身を千切り飛ばされ、深紅の外套を彩る塗料として消費されていく。
街の住民や、混じっていたモルド達が咄嗟に知覚できないさ中、深紅の獣人形とミコトが最前線へと躍り出た。
崩れた前衛壁役に代わって緊急対応する前衛攻役の頭上を飛び越えて獣人形が巨人の拳を真正面から戦斧散弾銃を交差させて受け止める。

ズドンツ、と人形から重い衝撃が操者の俺にまで伝わってくるが、止めた。真つ直ぐ、真正面から血塗れの獣人形に受け止められた巨人に、ミコトが光粒の力を両手に集め、黒銀に輝く長刀を引き抜いた。「はあああああああああああああああああつ!!」

鯉口から遠く離れた位置にまで響き渡る抜刀音が響き渡る。肉薄したゴライアスの足元で光の斬撃が瞬いた。

目の前に現れた人形に視線を奪われていた階層主に、ミコトの渾身の一撃が直撃した。

『!?!』

太く短い巨人の左足から鮮血が噴き出した。

見間違い様が無い、痛打の一撃。灰褐色の硬皮を斬り、その奥の深くの血肉を断った。

片足を大きく負傷した階層主が平衡を崩す。大きな隙だ。

「ただの戦斧じゃなくて、散弾銃なのよね!」

獣人形にかかっていた階層主の拳の重さが消えるのと同時、人形が両手に持っていた戦斧散弾銃のラッパの様に広がった銃口を巨人の右足に向け――発砲。

響くのは轟音。込められていた弾薬の種類は高威力焼夷弾。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!』

ほぼ密着距離から撃ち込まれた小型大砲による一撃によって、階層主の右足の硬皮が吹き飛び、肉が大きく抉れて自重を支えられなくなり、遂には完全に倒れ伏した。

「すげえ!?!」「どこの所属だ!?!」「あの人型のモンスターは!?!」「魔銃使

「なっ……」

階層主の傍に余裕綽々といった様子で着地したのは、見覚えのある人物だった。

太刀を装備し、深紅の袴を揺らす、褐色肌に結えられた黒の長髪の女性。

防具は手甲を始めとした僅かな軽装のみ。その特徴的な衣装、そして得物から江戸時代以前の日本における剣客を彷彿させる。

そして、何より目を引く特徴は、左目を隠す眼帯。

「ヘファイストス・ファミリア」団長【単眼の巨師】椿・コルブランド。

鍛冶師にして第一級冒険者の実力を持つ、鍛冶大派閥の首領だ。

「も、もらったぞっ、てめえらああああああああああああ!!」

耳を劈く程の冒険者達の大歓声が戦場を支配する。

戦力不足気味だった所に現れた強大な増援に、落ちかけていた集団の戦意が一気に回復する。

果敢に攻めていく冒険者達の雄叫びを聞きながら、人形の操作を手放す。

既に半身が消滅しかけていた『赤頭巾の狼狩人』は操作を手放した瞬間、瞬く間に消滅してしまった。

「あー、なんか損した気分」

一応、隠し札ではあったが使い辛い。

消費は大きいし、術者の俺が割と無防備になるし。威力、人形性能は高いんだけどなあ。

『血みどろ人形団』とか『増殖人形』とか単一ではなく複数の人形を一気に召喚するタイプは戦争ならまだしも、モンスター相手には使い辛いし。

かといって他の人形は癖が強いし、術者搭乗型の人形は消滅したら放り出されるだろうから使いたくないんだよなあ。

冒険者達が群がり階層主を仕留めるのを尻目に、適当に雑兵を片付けつつ、リリ達と合流する為にその場を離れた。

階層主は間もなく、特に問題らしい問題も起きずに討伐が完了した。むしろ、問題は討伐し終えた後に発生した、と言った方が良かったろうか。

『迷宮の孤王』の巨大な『魔石』は勿論の事、武器素材の『ゴライアスの歯牙』を巡って誰もが分け前を主張したのだ。そう、醜い戦利品争いである。思った以上に出現していた雑兵からの『魔石』や武器素材もその争奪の勢いに拍車をかける。

そして、俺達「ファミリア」連合は臨時の助っ人という事を理由に分配への参加を禁じられていた。正直、キレそう。あれ、多分だが俺が砲撃ぶちこんでも分配とかして貰えなかったんだろうな。

というか、未だに出現している雑兵を下っ端に押し付けて競売までやり始める始末。こいつら本当に凶太い性格してるわ。

そして、ちやつかり戦利品を確保してきたモルド達は「冒険者なんてこんなもんだ」と笑っていたが、笑えないんだよなあ。

「戦利品の奪い合いなんて見ても仕方ありません。18階層に行きましょうか」

「うん、そうだね」

豊かな大自然と水晶群が広がる、モンスターの発生しない安全階層。

階層天上に広がる白と青の水晶群によって疑似的な空が作り出されている『迷宮の楽園』に足を運び、ぐったりと疲れ切った体を弛緩させた。

「図らずとも18階層まで来てしまいましたね」

眩しそうに太陽代わりに輝く白水晶を見上げたりリがポツリと咳く。

本来の予定から大きく外れてしまったが、俺は魔力の消費が割と洒落にならないし、他の面々も突発的な大規模戦闘で疲弊している事もあり、予定を強行するのは危険が大きい。

「ま、とりあえず今日はこの階層で野営しましょうか」

「うん。デインケさん達もそれで良いですかね」

「ああ、問題無い」

約一ヶ月半ぶりの『迷宮の楽園』^{アンダーリゾート}だが、余り良い思い出が無いんだよなあ。

階層南部に広がる森の小川へと向かいつつ、この後どうなるかを考えて眉間を抑えた。

「ミリア、どうしたの、大丈夫？」

「んー……ああ、ちよつとトラブルですね」

心配そうに声をかけてきたベルに事情を軽く説明する。

あの場において俺が『砲撃』^{まほう}を使わなかった事で街からの印象が悪化している可能性がある事。

俺の「ステイタス」に関して説明すれば納得はして貰えるだろうが、そもそも秘匿すべきそれを開示してまで彼らからの評価を回復させるべきかどうかっていうところ。

一応、あの場で出来得る限りの最高戦力である『人形』で対応してはみたが……。

「はあ……こんな事になるなら、スナイパーにして来ればよかったわ」
「流石に今日が丁度大規模戦闘をしている日だったなんて知りようが有りませんでしたし仕方が無いですよ」

「文句なんて言いたい奴には言わせとけば良いだろ」

肩を竦めるディンケの言葉に桜花やリリがうんうんと頷いているが……。

今後、18階層より奥へと進む時に街からの印象が悪いと面倒な事になりそうだから困ってるんだけどね……？

第二〇〇話

18階層の草原地帯で急な階層主討伐戦の疲労を癒しつつも森の方へエリウッドとメルヴィスが先行して野営地確保の準備を行っている、ようやく競売や戦利品分配を終えた街の住民達が降りてくる姿が見えた。

外套ですっぽりと全身を覆ったキューイの影に隠れつつ、近づいてくる一団を見やる。

「よお、【リトル・ルーキー】、さっきは援軍に来てくれてありがとな」

「はい、どういたしまして」

「ところで、【魔銃使い】は一緒じゃないのか？」

代表して話を聞きに行ったベルから、後方で草原に座って背負った木箱を鬱陶し気に睨んでいるヴァンに視線を移す街の住民。

ベルはほんの少し戸惑った様に視線をこちらに向け、答えた。

「ミリアは居ますけど……」

「そうか……なら、一つ聞きたいんだが、どうしてあの砲撃を撃たなかったんだ？」

「え？」

「やっぱりそれか。」

戦争遊戯で使っていたあの砲撃ならばもつと簡単に仕留められた事だろう。しかし、その詠唱する素振りすら無かったのは何故か、と疑問をベルに投げかけていた。

答えに窮した様にベルが視線を彷徨わせっていると、ヴェルフとディンケが冒険者の下へ歩んでいった。

「悪いな、少し事情があつてあの時、魔法は撃てなかったんだ」

「事情？ 事情つてなんだ？」

「おいおい、他派閥の奴が【ステイタス】、ましてや『魔法』に関しての質問は禁忌だろ？」

「うっ……まあ、確かにそうなんだが」

上手い事、声をかけてきた冒険者をはぐらかす様子を見ると、リリが声をかけてきた。

「ミリア様、気にする必要はありません。確かに、悪印象を持った冒険者の方も居るでしょうが、『ステイタス』に関する事だから、と誤魔化してしまえばいいのですよ」

リリの言う通りではあるんだが、逆恨みされるのがやっかいなんだよな。まあ、逆恨みはどうしようもない事ではあるんだが、あの時、唾を吐きかけてきた冒険者は事情を理解しようとしなかったし。

「ま、その通りではあるんだけどね。どうしても……まあ、気にはなるのよ」

「……ミリア様って変なところで繊細ですよね」

リリの言葉に肩を竦めていると、ベル達が戻ってくるのが見えた。「どうだった?」

質問を飛ばすと、ベルは困った様に頬を掻き、その横のヴェルフは眉間に深い皺をよせ、誰が見てもご機嫌斜めな雰囲気撒き散らしていた。そしてデインケは苦笑しながら肩を竦めている。

「うん、分け前のわの字も与えなかった手前、調子の良い話だけお詫びに食料や酒を無償で譲るって」

「後、ミリア、お前に唾吐き掛けた冒険者が居たそうじゃないか」

「え? ああ、居たわね」

デインケの言葉に頷くとベルが俺をまじまじと見てから、溜息をついた。

……その、溜息は、何なんですかね? なんか呆れられた様な気がするが。

「ミ・リ・ア・さ・ま?」

「あ、後で説明するから先にデインケの話を、ね?」

目尻を釣り上げたリリが言葉を区切って呼びかけてくる。別にやましい事があった訳ではなくて、説明するまでもない事だと思っただけで、黙っていた訳ではないから。本当だから。

「リリ、もう仕方ないよ。ミリアだし」

ベルですら呆れた様に苦笑を零す。俺の説明不足は筋金入りと言った所か。割と周囲の反応から洒落になってない様な気がするが。

それはともかく、デインケの話だ。唾を吐きかけた奴がどうしたっ

て？

「ああ、あのアホ、ボールスにぶん殴られてたぞ」

「……ボールス、という^{リヴィラ}と街を取り締まってる？」

話を聞くに、あの無礼な事をした冒険者を^メといたから、出来れば街に顔を出して欲しいとの事。

あの荒くれ者の街を取り仕切る大頭が俺のご機嫌取りなんかをとる様な事を言っていたらしい。そういえばボールスは眼帯付けていたっけか。大方、『再生薬』の重要関係者の俺の機嫌を損ねると不味い^とでも考えたのかね。

……あの冒険者が^変に逆恨みしてこなきや良いんだが。まあ、それはともかく街との^{リヴィラ}関係が悪化していない様子なのは一安心、だろうか。

「という訳だ、リヴィラに行くか？ 行かないか？」

「……行きますよ。ええ、あの町の大頭が胡麻擦つて来てるのに無下に断つたら不味いでしょ」

^{リヴィラ}飛竜を何処に待機させとくか考えないと不味いし。そう考えると街に行きたくないんだが、ここで断ると大頭との^{リヴィラ}関係が悪化しかねない。

本当に人間関係っていうのは面倒臭い。全く見知らぬ他人がやらかした事で街の^{リヴィラ}大頭が^ご機嫌取りをしてきて、それに俺が^気を遣わなきやならん。本当に、怠いしや^つてらんない。

もつと気楽に、キューイみたいに能^能天氣に生きていたいよ。

「キューイ？」

^{フード}外套の僅かな隙間から覗く口元に^啞えられた干し肉を見て、溜息一つ。

人型になった事で器用な手先を手に入れたキューイは、時折荷物の中から勝手に干し肉なんかを引^つ張り出して齧^つたりしている。本拠に居る時も、いつの間にやら食糧庫の食材なんかを勝手に摘^みみ食いしたりと、お騒^がせな存在に成り果^てていた。

「キューイ、あんまり勝手に食^べないで^つて言^つてるでしょうに」

何処から奪^つたのかはおおよそ察^しがつく。春姫が涙目で円柱形

のバッグを抱えてキューイを見ているのだ。間違いなく、春姫が運んでいた食料の一部だろう。ヴァンの背にある木箱からではなく、自身に怯えて口を開けない春姫のバッグから奪うのは流石に性質が悪すぎる。

「キューイ？」

ああもう、こいつは……。

本当に、キューイみたいは何も気にせず気ままに生きてみたいもんだ。

それはそれとして、あの、リリ……リリルカ様？ これは、そのですわね……はい、監督不行届きでした。誠に申し訳ございません……。

階層西部に浮かぶ湖畔の巨岩、その断崖の上に気付かれた『リヴィラの街』の門を潜る。

木小屋や簡易天幕が立ち並び、簡易な商店も居を構えている。そのどれもが地上ならば法外である様な値札を付けているのを見て、リリが表情を険しくしていた。

「わあ……ここが『リヴィラの街』でございますか」

少しみすぼらしい、ともすれば直ぐに荷物を纏めて移動出来る様に飾り気のない街を見た春姫が感嘆の声を漏らす。雰囲気は、まあ『冒険者の街』というだけはあって、それらしくはあるのだが、春姫の様な感嘆の声を零す程の街だろうか。

「えっと、春姫さんは街に入るのは初めてなんですか？」

「はい。美神様イシユタルの元では『遠征』とおでに伴われる事は何度かあって、この18階層を通りかかる事はありませんが……街には入らせていただけませんでした」

春姫の感嘆の声に反応したベルと春姫の談笑、というには少し重い会話を流し聞きつつも、背後に着いてきているヴァンが荷物を引っ掻けない様に注意しつつも街の中を進んでいく。

周囲に居た住民達もヴァンを見て目を見開いて数人がぱたぱたと駆けていく様子が見て取れた。

「やっぱ、街の外で待機の方が良かったですかね」

「どうだろうか」

街の中に調教済み^{タイム}とはいえ飛竜を連れ込むのに良い顔はしないだろうか、と眉を顰めながらも、街の中央にある青と白の巨大な双子水晶が立つ広場まで足を運ぶと、調子のいい大声が響き渡った。

「おおつ、【リトル・ルーキー】に【魔銃使い】！ よく来たなあ！」
筋骨隆々で逞しく、桜花をも超える巨軀を持つ大男。悪人面、と
いっては悪いが、いかにもな強面の人物。

リヴィラを取り仕切る大頭、ボールス・エルダーその人だった。

「あ、えつと……エルダーさん」

「んな他人行な呼び方なんか無くても良い。気軽にボールスと呼んでくれ」

「は、はあ……」

どしどしと近づいてくると、親し気にベルの肩を叩いて大笑いする大頭。妙に親し気な様子にベルが気おされていると、ボールスは俺を見てにんまりと笑みを浮かべた。

「よお、【魔銃使い】。今回も世話になったな」

「どうも……」

やけに親し気に話しかけてくるのが何とも不気味だ。そんな風に警戒していると、ボールスは俺の後ろ、ヴァンを一瞥してから俺を見下ろした。

「あの時は助かったぜ」

「いえ、こちらこそ」

「その飛竜はこの広場で待たせといってくれ、泊まれる場所を準備してる」

「……はあ」

思わず生返事を返してしまう。そんな俺を見やったボールスはクツクツと肩で笑うと、奥を指差した。

「安心しろ、この街じゃあお前相手になめた態度とる奴は居ねえよ。俺が許さねえからな」

「……やけに、好意的ですね」

いつそ不気味なぐらいに好意的な態度にちよつと気色悪さを感じるんだが。

何故か好意的な態度をとる大頭に怯んでいると、彼は笑いながら事情を説明してくれた。

黒い階層主ゴライアスの一件の際に活躍した冒険者として「リトル・ルーキー」が街の住民に認められていたそうだが、俺の方はそうでも無かった事。

それが戦争遊戯ウォーゲームで披露したあの砲撃まほうで、18階層で初手階層主ゴライアスを即死させる一撃を放ったのが俺であったと知れ渡ったとの事。

それ以降は街の住民リヴィラは一応、「魔銃使い」に対して一目置いているらしい。

「……で、今回応援に駆け付けたのに砲撃まほうを使わなかった事に関しては？」

「別に気にしてねえよ。むしろ気にする奴が居たら俺に報告しろ」

直ぐにめてやる。とドンと胸を叩いて強面で笑みを浮かべる大頭の姿に思わずベルと視線を交わした。

「でも、ミリアに唾を吐きかけた冒険者が居たって……」

「ああ、アレか。悪かったな、バカが勝手に噛み付いちまって」

こつちでめて街から追い出しといたから安心してくれ、と……。

どうやら黒い階層主ゴライアスの一件の時に街リヴィラに居らず、あの戦闘を見ていない冒険者だったらしい。加えて、戦争遊戯ウォーゲームでの俺の砲撃まほうについても勘違いしてたとの事。

ボールスから見た俺の砲撃まほうは杖無しでは使えず、杖に過大な負荷をかける魔法であり、気軽に使って良いものではない。ましてやあの乱戦の中で詠唱なんてされたら魔力暴発イグニスファトウスした時の被害が洒落にならない。

「あの場で詠唱なんて出来なかつたら？」

「え……ええ、そうね」

あれだけ杖に負荷がかかる魔法という事は、詠唱中に妨害されたら間違いなく魔力暴発イグニスファトウスを引き起こす。そんな危険な魔法をあの乱戦の中で使わせる判断なんか、普段から魔術師とパーティを組む奴なら間

違いなく避ける。

今回俺に唾を吐きかけてきた冒険者はどうやらそれなりの実力者ではあつたらしいが、魔法を一つも使えず、知識も全く無かつたとの事。

「だから気にすんな。まあ、それはそれとして、だ」

いや、気にすんなど言われても困る。その冒険者をめて街から追い出したつて、何処の派閥の誰なのかもわからなきや非常に不味い。
街との関係悪化が無くとも、その冒険者から妙な逆恨みされんのは御免なんだが。

既に話を変えた気で居るのか、俺の返事なんか聞いちやいない大頭は言葉が続けた。

「ヘステイア・ファミリア」は勿論『下層』の攻略もしていくんだらう?」

「は、はい」

「ようし、『下層』の進行時はこの街に寄つていつてくれよ、同業者ア!! お安くしとくぜ!」

調子良く「これからはどしどし利用していけよお!!」と笑声を上げ、ベルの方に腕を回す大頭。

リリが氷点下の視線を向けているのを横目に、溜息を吐く。

——頼むから、俺を恨むなよ。件の冒険者さんよ。

強面の男に肩を組まれて怯えたベルが助けを求めてくるが、諦めてくれと内心考えていると、ポールスはベルに顔を寄せた。

「お前んとこに例の魔剣鍛冶師が居るだろう? 紹介してくれ!!」

——こいつ、強欲過ぎんだろ。

思わず眉を顰めていると、後ろで住民に詰め寄られているヴェルフが大声を上げた。

「——うるせえ、散れ!! 俺は『魔剣』を絶対に売らねえし渡さねえ、他の奴にも伝えとけ!!」

怒声を以て『魔剣』を求めて群がる冒険者達を追い払うヴェルフ。直ぐに悲願や響聲の声が響き、ヴェルフが再度怒声を響かせようとして——ヴェルフと冒険者達の間で灰色の尾が振り下ろされた。

「二——ツ!?」

「はいはい、ストップストップ。うちの派閥の鍛冶師に用があるなら団長を通してちょうだい」

眉を顰めたボールスト、肩を組まれて動けないベルを置いてヴェルフと冒険者の間に尾を振り下ろして強制的に止めてくれたヴァンを撫でつつ、割り込んだ。

戦争遊戯後、少なからずこういった事はあったが今日は輪をかけて酷い。
ウォーゲーム

リヴィラ 街の住民達の噂の広まり方が尋常ではない。まあ、モンスター襲撃の情報なんか素早く行き届く事の証明でもあるので、何とも言いようがないのだが。

「なんだよ、『魔剣』の取引まで仕切る積りかよ!」「『再生薬』だって売っちゃあいないってのに!」

非難の声上がるが、『再生薬』を引き合いに出すな。それは「ディアンケヒト・ファミリア」の管轄なんだから、「ヘスティア・ファミリア」が仕切ってる訳じゃない。

と、反論を返すと火に油なので笑顔で対応していると、後ろのヴェルフが俺の肩を掴んだ。

「ヴェルフ、ちよつと」

「——何度だって言ってる。お前等みたいな奴に『魔剣』は売らない。失せろ!」

腹の底から響くヴェルフの怒声に冒険者達が僅かに怯み、すぐに立ち去っていく。唾と文句を吐きながら。

身勝手な奴らだ、ほんとに、断られたからってあんな態度を………ああ、俺も酷いか……いや、あれより酷いかもしれん。泣き落としとか、最悪じゃね?

「ミリア、お前は気にすんな。それと……悪い、少し一人にしてくれ」「あ、ヴェルフ」

何処か影を落とした表情のヴェルフが、俺の手を払って一人輪を外れていってしまう。

追いかけてようか躊躇した所で、ベルが声を上げた。

「ミリア、僕が行くよ」

「あ、うん。お願い」

一人立ち去ってしまったヴェルフを追って、ベルが駆けていく。その背を見送り、残る面々を見回した。

「はあ、とりあえず食糧と酒だけ受け取りましょうか」

「あの、ヴェルフ様は大丈夫でございませうか」

「春姫殿、ヴェルフ殿はベル殿が行きました。大丈夫でしょう」

心配そうな春姫にミコトが大丈夫だと断言し、街の住民が約束通りに渡してくれた食糧をバッグに詰めていく。

他の面々も多少悪くなった空気を引き摺っているのか、黙々と作業を進めていく。そんな俺達に対して刺さる住民達からの視線は、どこかよそよそしい。

なんて身勝手な奴らだよ。好意的に振る舞ってきたのが、先的一件でまたよそよそしい。身勝手に、期待に応えなかっただけで……ああ、だとすると俺も最低か。

「はあ……」

「ミリア様、どうかしましたか？」

「え、ああ……何でも無いわ。ちよつと疲れただけよ」

知らぬ内に零れた溜息を聞いたリリが問いかけてくるのを誤魔化そうとするが、リリはジーツ、と俺を見やり、呟いた。

「悩みがあるならリリが聞きます。というか少しは話してくださいよ」

何処か懇願する様なその言い方は、胸に刺さった。

「キューイ……キューイキューイ？」

これ、腐ってない？ と箱の一つを持ち上げたキューイがぼつりと呟く。

腐ってる？

「どうしました？」

「え、いや……えつと、春姫、この食料から変な匂いとかしない？」

「匂い、でございませうか？」

キューイが腐ってるんじゃ、と発言した箱の匂いを獣人の春姫に嗅

いでもらう。すると、春姫は少し首を傾げた。

「酸っぱい匂いがしますね」

「……………」

食料が収められているはずの木箱から漂う酸っぱい匂い。そういう酸味のある食べ物だったらよいのだが、と木箱を少し抉じ開け――

――僅かに漂う酸味っぽい匂いに眉を顰めた。

「うげっ…………ちよつと、これ……………」

箱の中を覗き込むと、見た目こそ腐ってはいないものの、かなりギリギリ…………いわゆる腐りかけの固パンやらが入っていた。

「…………ちよつと、ボールス？」

「ん？ どうした？」

「これ、腐ってない？ 食糧わけてくれるのは嬉しいけど、腐ったもの渡されるなんて聞いて無いわ」

どんな嫌がらせだよ。

近くに居たボールスに詰め寄ると、彼はああ、と呟くと呆れた様に肩を竦めた。

「冒険者ならその程度じゃ腹壊さんだろ。それに、別に嫌がらせって訳じゃねえぜ？」

冒険者なら腐りかけ程度の状態の食べ物なんかで腹は壊さないし、加熱すればまだ全然食える。勿体無いし地上に持っていくのも怠しいし、其処らで捨ててモンスターが群がっても面倒だ、と。

「飛竜にでも食わせちまえばいいだろ？ ほら、凶体でかいし、飯も沢山いるだろ？」

――こいつ、ヴァンを残飯処理に使おうとしてやがる。

《…………主よ、普段主が俺様あるじにしている事と同じ事ではないのか？》

ヴァンの冷め切った視線を受け流しつつ、腐りかけの食糧の入った木箱をヴァンの背に括り付けた。

天井の太陽代わりに輝いていた白い水晶クリスタルから輝きが失われ、18階層に『夜』が訪れた。

結局、俺達は『リヴィラの街』で宿泊する事にした。

理由はいくつもあるが、階層主との闘いで想定以上に道具を損耗している上、俺は『人形複製』に魔力の殆どを持っていかれており、他の面々も疲労困憊。元氣一杯なのはサイアとファイアぐらいで、むしろあの二人はどうしてあそこまで元氣なのだろうか？

兎にも角にも、森での野営は避ける事となったのだ。ヴァンについてはボールスが用意してくれた専用の寢床まで与えられている。

正直、暗殺されそうな気もするが、疑っていても埒があかない。そもそも俺が考え無しに人形複製で魔力損耗し過ぎたのも原因の一つなので大人しく従っておくことにしたわけだ。

野営の準備が無駄になった、と元氣の有り余ったサイアやファイアなんかが零す中、リリと共にいくつかの宿屋を巡って決めた宿は、洞窟に構えられた一件の宿だ。

冒険者を足元に見て、地上に比べて非常に物価が高いこのリヴィラの街においてその宿は破格と言っていい程に安値だったのだ。中を確認した所、何の問題も無い処か、間違いなく街の中でも上質な部類だというのが伺える。

何せ大ライガーファンングドロップアイテム虎の毛皮を使った絨毯や燭台型の魔石灯、そして極めつけには一人一つのベッドまで用意されているのだ。そんな街の中でも上質だろう事は一目瞭然のその宿が、不思議なぐらいの安値で提供されており。

更に付け加えると俺達以外の客が一人も居ないという不思議っぷり。

まあ、当然の事ながらそれにはしつかりと理由があるんだが。

「以前にここに宿泊した冒険者が無残な姿で殺害された事のある、曰く付きの宿みたいね」

過去殺人が起きた曰く付きの物件、という事でかなり格安で提供されているのだが、他の冒険者は怖がって近づかなくなってしまったらしい。

店主も今回宿泊する旨を伝えると、泣きながら『久しぶりの客だあゝ！』と大喜びしていた。

「だつ、大丈夫なのでございますか？」

「り、りり殿つ、別の宿に変えた方が……」

「いえ、駄目です。他の宿は高すぎます。曰く付きだろうが何だろうが、安さに勝る物はありません。ええそうですとも、殺された冒険者の亡霊や呪いなんてものは存在しません……!」

怯える春姫、ミコト、千草が猛反対するのだが、りりルカによつてばつさり切られる。

「こ、こつという時はアレです。多数決ですよ!」

「そ、そつだよ。わ、私は反対!」

「わ、わたくし私もこの宿は……」

徹底抗戦の構えを見せる三人を一睨みすると、りりが全員を見回した。

「他の宿に泊まった場合、この宿の五倍はかかるんですよ!? ありえませんか!」

りりの迫力に押されたベル、デインケ、エリウッド、桜花は完全に沈黙。ヴェルフは何処か上の空で聞いていないが、男連中は小さき守銭奴によつて轟沈させられていた。

「でしたら、他の宿に行く分の費用は自分が出しましょう!」

ミコト達はこの宿が本当に嫌なのか抗議の構えを解こうとしない。店主の方はようやく来てくれた宿泊客を逃がすまいと必死にアピールしている。

「なら、ほら食事と酒を無償タダで提供してもいい! な、他より安いだろう?」

「……腐つてたりしません?」

「はあ? いや、腐つてなんていねえよ!! 今朝届いたばかりの新品だつて、ほら瑞々しい野菜だろ!」

店主が慌てた様子で取り出してきたのは、瑞々しさの残る野菜だ。本当に上質な宿だったんだろうが、惨殺死体が見つかってしまったばつかりに客をうしなっているのだろう。店主の獣人が必死過ぎて可哀想に見えてきた。

「ごめん、遅くなつたー。今日はここに泊まるの?」

「へえ、この宿だったんですか。一度は泊まってみたくはありましたが、大丈夫なんですか？」

遅れてやってきたサイア達も合流した所で、ミコト達が彼女達に声をかけた。

「サイア殿、メルヴィス殿！ やはりお二人もこの宿は嫌ですよね？」

「え？ 良い宿じゃん。なにがだめなの？」

『『ヴェリーの宿』といえばそれなりに良い宿とお聞きしますが。資金の方は大丈夫なので？』

メルヴィスの問いかけにリリが力説をかました。

「大丈夫です。他の宿の五分の一ですので」

「はあ……？ なんか企んでんじやねえだろうな？」

「いや、ち、違うって。何も企んでなんかいないよ」

店主の獣人にファイアが睨みを利かせる中、春姫が声を上げた。

「あ、あの、この宿で宿泊した冒険者様が……その……」

「む、無残な亡骸となって発見されたって……」

「ふうん」「へえく」「ああ、なるほど」「なんだ、そんな事」

怯えた千草が口にした話を聞いたファイア達の反応は冷め切っていた。

怖がるどころか、何だそんな事かと呆れた様に肩を竦める始末。

「あの、ファイア殿？ メルヴィス殿も、この宿はやめておきませんか……？」

「安いなら此処で良いだろ。飯と酒も出してくれんだろ？」

「あ、ああ！ 出す、出してやる、だから泊まってっくれ」

「ええ、私は別に構いませんが」

一切動揺せずに返事を返すメルヴィスの姿にミコト達が裏切られた様に硬直し、目を真ん丸に見開いた。

「ど、どうして？」

「ん？ どうしても何も……たかが人が死んだ場所ぐらいでぐだぐだ言っても仕方ないだろ」

「宿の中にモンスターが沸いた、とかでは無いんですよ？」

「ああ、モンスターが湧く訳じゃない。安全だ、保障する」

むしろモンスターに殺された訳ではない場合、この宿に宿泊した冒険者は誰に殺されたんだ？

街中で聞いた噂では第二級冒険者、それもLv. 4の奴が殺されるヤバイ店だつて話だが、地上ではそんな話聞かなかつたんだがなあ。

Lv. 4で、時期的に言えば……数ヶ月前……その時期に死んだLv. 4つて誰か居たか——あ。

「だったら問題無いだろ」

「あ、ありますよー！」

「ば、化けて出たりしたら……」

「あん？ 化けて、つて……はあ」

馬鹿じゃねえのか？ とファイアが鼻で笑った。

「そもそも、^{オラリオ}迷宮都市が何処にあると思つてんだよ」

迷宮の上、そして迷宮には毎日冒険者が降りていき、全員が帰つてくる訳ではない。

迷宮の中には『死』が満ち溢れているのだから当然。それこそ上級冒険者でも死ぬときは呆気なく死ぬ。モンスターか、派閥同士のいざこざか。

「どつちにせよ、アタシ等の足元にやあ数え切れないぐらいの屍が埋まつてんだよ。つうか、ダンジョンつてそういうところだろ」

それこそ、今まで普通に探索してきた階層で、今までどれだけの冒険者が命を落としたのか。それを考えればおのずと答えは出る。

「化けて出るなんてありえねえよ。むしろ、化けて出てくれんだったら直ぐにでも会いたいもんだね」

過去に失つた仲間が、亡霊や呪いという形でも残つていて、会う事が出来るなら会いたいもんだ。とファイアが笑った。

「この宿アタシ等で貸し切りなんだろう？ 好きな部屋使わせてもらうわ」

「ファイア、わたしもいくー！」

「はあ、ま、そういう事だから。おやすみ、団長、副団長」

「……えっと、なんかすいません」

最後にメルヴィスが小さく頭を下げ、店主に代金代わりの証文を差

し出した。既にこの宿で宿泊する気満々らしい。実際、安いし。

俺はそもそも亡霊だとか呪いだとかは信じちゃいないんだが……
春姫、ミコト、千草の三人は完全に青褪めて震えている。

今まで意識してこなかった事を突き付けられて完全に腰が抜けて
しまったらしい。三人で抱き合ってプルプル震えていた。

逆に、デインケは「ああ、確かに」と納得した様に頷き。ベルは神
妙な面持ちを浮かべている。

過去から現在まで、この迷宮で命を落とした数多の冒険者が居た筈
で、そんな彼らの亡霊が出ない以上、居るはずが無い、というのは確
かに言う通りだな、と思う。

ただ、居ない事を証明する事は悪魔の証明でしかないのでそれ以上
突っ込む気はないが。

「じゃあ、とりあえずこの宿に泊まるという事で、部屋は男女別れて後
は自由に——」

「ミリア様、一緒の部屋にしましょう！」

「そ、そうですよ。一緒の部屋が良いです！」

「ミ、ミリア殿、自分も一緒に！」

「わ、わたくし私も……」

……え？ 何、そんなに怖い？ うーん、正直別に良いんだけど、そ
の前に。

少しだけ皆から離れて、食事の準備をしようとしている店主に声を
かけた。

「ヴィリーさん、質問良いですか？」

「なんだ？」

「ここで死んだのって、もしかして『ガネーシャ・ファミリア』の方で
すか？」

「……………何で知ってた？」

ああ、なるほど。そっか……そっかあ……。

……………モンスターに殺されたんじゃないかなければ、誰に殺されたんだ
ろうか。

ほんの少しの時間しか接することは無かったとはいえ、知り合いが

殺されたと思えば思うところが無いわけじゃない。

「どの部屋ですか」

「は？」

「どの部屋で、死んでいたのか教えて貰えませんか？」

「……はあ、奥から三番目だよ。もう綺麗にしてあるから何も残っていない。本当だ」

あまり、供養のやり方なんて勉強していないのだがなあ。

空砲、は五月蠅いか。線香、は持ってないし。お経を唱えるのは、なんか違う。

「ありがとうございます」

「あ、ああ……」

そういえば、^{ブラックリスト}要注意人物一覧に『リヴィラの街で殺人を犯した人物』として特徴が記載されてたっけ。

……そいつに、殺されたのだろうか。だとすると、絞り込むのには特徴が足りないな。

第二〇一話

『小遠征』二日目。

ヴァンは街中の広い所を専用の寢床として用意され、俺達人間組とキューイは曰く付きとなってしまった『ヴィリーの宿』を格安で利用させてもらった。

ただ、格安というのは『リヴィラの街』の相場からしたららの格安であり、地上の宿ならば品質相応の値段、という評価だろう。説明するまでもないだろうが、ヴィリーの宿はリヴィラでもかなり上質な宿である。

要するに、安価で上質な宿には泊まれたが、実質的な出費は割と洒落になっていないのだ。

とはいえ、リヴィラの街での想定外の出費は「ヘスティア・ファミリア」からすると、実はそこまで痛くはない。

しかし、「タケミカツチ・ファミリア」の方はそうはいかない。そして、流石に俺達から金銭的支援を行うのは違う。違う、というかそれをしてしまうと関係が拗れるし、余計な嫉妬を生むだろう。

相場通り、もしくは少し色を付けて正規の冒険者依頼クエストの報酬としてヴァリスを受け渡すならまだしも、ただ恵んでしまえば関係が対等とは言えなくなってしまう。

ともすれば「ヘスティア・ファミリア」と懇意になれば資金援助が受けれる、と勘違いする派閥も出て来て面倒事に発展しかねない。それに、そもそも神タケミカツチは無心する様な真似はしない。加えて、団長の桜花も派閥同士プライドの関係や自分達の矜持もある為、金銭の受け取りはしないだろう。

その状態で高級宿に泊まって失った損失を埋めるべく、俺達は『小遠征』の行動の中に『中層』の探索を追加して探索を行った。

本来の予定であれば昼過ぎ頃には帰還予定であったが、リヴィラで提供された食糧もあったおかげ、地上に帰還したのは予定から半日ほど遅れての事となった。

地上に帰還した俺達を出迎えたのは真昼の明るい陽射しではなく、

沈みゆく赤い夕陽。

「では、各々やる事があるでしょうから此処でいったん解散という事で。今日はしっかりと休んで、明日に報酬の振り分けと反省会をするという事で」

「えっと、皆、お疲れ様。桜花さん達もありがとうございます」

「いや、良い経験になった。それと、俺達の為にわざわざ探索の時間を作ってくれて助かった」

頭を下げて感謝を示す桜花達に苦笑しつつも、背後で項垂れるサイアを見やった。

「それで、サイアさんはまだまだそうです」

「うう、わ、私の……地久我があ……」

しよんぼりと項垂れて涙を零すサイアの手にはほんの少しひしやげで曲がった大剣が抱えられていた。

中層探索中、転がってきた『ハードアーマード』を真正面から力任せに叩き潰す、なんて滅茶苦茶な使い方を繰り返していた影響か、彼女が新調した得物は当然の様に破損した。どうもサイアには調子テンションが上がると暴走気味になる悪癖があるらしい。その代わり、その『力』は凄まじい。凄まじいのだが、武器を壊されてヴェルフが酷く凹んでいるからやめて欲しいんだがな。

「鍛冶師、このバカゾネスにはちゃんと言い聞かせとく。本当に悪かったな」

「……いや、俺が鍛冶師として未熟だったただけだ」

普段、というか今までのヴェルフならば『武器をもっと大事に扱え！』とサイアに吠えたてるぐらいはする印象があったのだが、今のヴェルフは自身を卑下する言い方をするのだ。何かあったとしか思えないんだが。

「じゃあ、換金は任せるぞ。タケミカツチ様に帰還報告しなくてはな」
「ああ、任せろ。それじゃあアタシらはギルドに行ってくる」

ヴァンの背負った木箱を数人で分けて担いだファイア達が戦利品を換金する為にギルドの方へ歩き出す。

いつまでも中央広場セントラルパークで飛竜のヴァンをうろろさせていくのは邪

魔だろうし、デインケにヴァン達を竜舎に返してもらおうか。

「この後の事を考えていると、リリに声をかけられる。」

「ミリア様、わかっているとは思いますが」

「わかっているって、帰ったらすぐに休むわ」

「本当ですかあ？」

「疑り深いわね。そう何度も怒られるような事しないわよ」

「まあ、別に良いですが」

「そんなに信用無い？」

「その件に関しては、これっぽっちもありませんね」

まるで俺が学習しない奴みたいな言い方は止めて貰おう。流石に此処まで怒られておいて懲りる事なくやらかす真似はしないよ。

「ま、良いです」

俺は一刻も早く後、ヘスティア様にも会いたい。とはいえ、ヴェルフの事情も気になるし。

各々が換金や主神への報告等で解散し別行動をとり始める中、ベルに声をかけた。

「……ベル、ちよつといい？」

「何？」

「ヴェルフに何かあった？ ……それと、短剣、どうしたの？」

探索前にヴェルフにヘファイストス様が作成したナイフよりも射程リーチが長い短剣を作って貰っていた。『リヴィラ』に行くまではそれも駆使して戦っていたはずなのだが、帰りには無くなっていた。

もしかして、あの街で盗まれたか？

「あー、えつと……実は——」

18階層でベルがヴェルフを追って行った後、「ヘファイストス・ファミリア」の団長である椿・コルブランドがヴェルフを訪ねてきたらしい。

その際、ベルが手にしていたヴェルフの作品であった短剣を破壊——折ったのだという。

ヴェルフの事をこき下ろしたそう。それを気にしているのだろう、との事。

都市処か世界最高峰の最上級鍛冶師マスタースミスに自分の信念を貶された。その想いは応援したいが、何より椿・コルブランドの言っている事は正しい、と思えてしまうのがな。

「……そういう事、ですか」

「うん」

困ったな。励ましの言葉が何一つ思い付かない。何を言ったとしても慰めにもならないだろうし。

どうしようか、とベルと悩んでいると、ふとベルが顔を上げた。

「あれ、ヴェルフは？」

「ん？ 誰かと帰ったのかしら……？」

周囲を見回すと、いつの間にもやらヴェルフの姿が消えていた。

「まあ良いわ。とりあえず帰りましょう」

変に干渉するより、ヴェルフの中で折り合いをつけるのを待つ方が良い。

「ヴェルフ、どういうつもりなの？」

「ミ、ミリア、落ち着いて」

ホームに戻った所で、思わずヴェルフに詰め寄ってしまった。

中央広場セントラルパークで解散した後、デインケ、エリウツドの二人はヴァン連れられてホームに戻り。

フィア、サイア、メルヴィス、イリスの四人は換金の為にギルドへ。

春姫はリリに連れられて探索後に行う道具の点検の為に引き連れられ、ミコトがそれと同行。

桜花達はタケミカツチ様への報告の為に自分達のホームへ帰還。

残る俺、ベル、キューイの三人でホームに向かった訳だが。

あろうことか、ヴェルフが単独で行動していたのだ。といつても帰ってきたし大事には至らなかったが、それでも何かあったら困る。

「注意して欲しいってお願いした積りなだけだ」

「……ああ、悪い。気が付かなかった」

言い辛そうに頭を掻いたヴェルフの様子を見るに、最上級鍛冶師マスタースミスか

らの言葉はかなり堪えているらしい。それでも、怪しい動きが多いこの時期に単独行動は避けてほしい。

「……………すまん、少し『工房』に籠らせてくれ」

「うん、行つて良いよヴェルフ」

「悪いな」

どう見ても平静とは言い難い様子のヴェルフが裏庭の『工房』に籠ると、直ぐに炉に火を入れたのか煙突から煙が立ち上るのが確認できた。

「ヴェルフ、大丈夫かな？」

「どうかしら」

誰よりも固い意志は持っていると思うが、一度押し折れると立ち直るのには非常に長い時間がかかるだろう。もしかしたら、二度と立ち直る事が出来ない可能性も無くはない。

それでも、ヴェルフなら多分、大丈夫だ。と思いたい。

「それもそうだけど、「ヘファイストス・ファミリア」に文句言つとかなきや」

「え？」

「いくら懇意派閥でも、他派閥の団長相手に武器を向け、あまつさえ武装破壊したとかちよつと問題過ぎるわ」

たとえ元自派閥の団員が作成した武器だったとしても、現在ヴェルフ・クロツツという鍛冶師は「ヘステイア・ファミリア」所属なのだ。加えて団長であるベル・クラネルに対し武器を向けた。なんてちよつと洒落にならない派閥間のいざこざの原因にしかないだろ。

壊した武器の代金は後日払おう、じゃねえよ。いくら大派閥だからってそんな横暴はやり過ぎだ。何か思惑があつての事だとは思うが、それじゃあ済まないし、済まさせない。

「ま、流石に抗争にはならないと思うわ」

「そう、なら良いんだけど」

心配そうなベルの言葉に肩を竦めていると、エントランスにヘステイア様が顔を出した。

「あ、二人ともおかえり」

「ただいま、神様」

「ただいま帰りました。ヘステイア様の方はお変わりなく」

「うん、ミアハと一緒に居てくれたからね。でも、二人が居なくて寂しかったよ」

嬉しそうに駆け寄ってきたヘステイア様に抱き締められ、ベルが恥ずかしそうに頬を掻く。

俺もヘステイア様にギュツと抱き締めて貰ってから、ヘステイア様が口を開いた。

「それで、怪我とかは無かったんだね？」

「ええ、大きなものは特に。ただ、ヴェルフが思い悩む事があるみたいなので工房に籠ってるみたいですね」

「思うところかい？ 手助けはいるかな」

「いえ、ヴェルフの事はそっとしておいてほしいんです」

珍しくベルがはつきりと告げた。同じ様な想いをした経験があるからか、ヴェルフの事を見守って欲しい、と頼むベルのお願いにヘステイア様は頷いた。

「わかった。じゃあ暫くそっとしておこうか。それより、ミア君とベル君、二人はしっかりと休むんだぜ？」

「はい、部屋に戻りますね」

「私はちよつと書き物があるので執務室の方に……」

「それはどうしても今日やらないといけない事かい？」

「あー……可能ならば、直ぐにでも、って感じですね」

早ければ早い方が良い。少なくともこういうのは時間が経つてからだと拗れる可能性があるし、相手に言い訳を考える時間を与える前に畳み掛けておく方が楽できるし。

「うーん……でも、ミア君は頑張り過ぎるからなあ」

「ちゃんと休みますって」

「だったらその書状だけ認めるだけで、他の事は駄目って事にするのは？」

ベルの示した妥協点を聞いたヘステイア様がうーん、と唸り。片目でちらりと俺を見た。

「じゃあ、その直ぐやらなきゃいけない書状を認めるだけだよ。それが終わったらすぐに休む事、良いね？」

「わかりました」

へステイア様の許可を得てから執務室に向かう。

執務卓の横に置かれた郵送物が箱に纏められて置かれており、重要度の高そうなものがいくつか執務卓の専用空間に置かれていた。

……正直、今すぐにも手を付けたい所ではあるんだが、今日は直ぐ休む様にリリに口を酸っぱくして言われているので、最低限、書状を認めたらすぐに執務室を離れなくてはいけない。

「へファイストス・ファミリア」宛てに、当方に所属する団員に対する先方の派閥団長による暴力行為について。とベルから聞いた状況を詳細に書きつつ、此方の所見を記載し、賠償と謝罪の要求を正式に行う旨を記す。

先方からの遺憾の訴えがあるのであれば正式な話し合いの場を設けていきたい。と……。

「はあ……なんか、怠いわ」

第一級冒険者である程度自由に振る舞えるとはいえ、団長として派閥を率いる責任感を以て活動してる冒険者なんてほぼいないだろうなあ。

派閥同士のいざこざなんてしよつちゅうで、おおよそは高位の冒険者を有する派閥の横暴が罷り通っているのが迷宮都市オラリオの常識、みたいな所はある。

ある、が……抗議文だけは送り付けておかないと、黙って被害を受けるだけの場合は足元を見られ後から後から変な要求ぶつけてくる頭のおかしい奴が湧き出てくるだろうし、組織運営において抗議しない、なんて選択肢はない。

「ああ、それと……うん？」

「へファイストス・ファミリア」への謝罪と賠償を要求する手紙を認め、インク壺の蓋を閉じようとした所で、重要そうな郵送物の中に「ディアンケヒト・ファミリア」からのものが混じっているのに気が付いた。……正直、今すぐ封を切って中身を検めたい。

しかし、もし今それを行うとリリが激怒するだろう。いや、リリだけではない。ディンケやファイアなんかもキレルだろうし、ヘスティア様も怒る。今日一日は休むべきだったのは理解している。

理解しているのと、実行するのはまた別の事ではないだろうか？

そもそも重要そうな手紙を今日送ってきたのが悪い。

でも、見つかるかと洒落にならないんだよなあ。

「……………」

室内をきよろきよろと見回し、耳を立てて廊下の音を聞く。序に、キューイに皆が何処に居るのか尋ねるのも忘れない。

キューイの居場所は……食糧庫。うん、お前後でシバく。

ベルとリリはミアハ様と一緒にヘスティア様の所で、春姫とミコトは自室。ディンケとエリウッドは童舎でヴァンと一緒に。ファイア、イリス、メルヴィス、サイアは丁度今帰ってきたらしく、エントランスホール玄関広間に居る。ヴェルフは工房に籠り切り、と。

つまり執務室周辺には誰も居ない。

そう、悪人共は言いました。『どんな罪も露呈バレしなければ犯罪とはならない』と。

「まあ、こんな手紙が置きっぱなしじゃあ気になっておちおち休めないしね？」

誰にともなく言い訳がましい事を口にしつつ、執務卓の引き出しからペーパーナイフを取り出して重要度の高そうなものから開封していく。

まず「ディアンケヒト・ファミア」から。

キューイの血液から『再生薬』の作成に成功。量を増やしたいがキューイの現在の状態から採取可能な量の再制定を行いたいとの事。加えて、試作型の効果確認の為に幾人かの欠損冒険者に使用し、効果がみられた模様。

今回の試作四号に至って、半年ではなくおおよそ一年以内の欠損ならば再生可能なまでに期間を延ばす事に成功。今後は更に過去の欠損に至るまでの再生を目指す。と……。

是非とも彼の派閥には更なる改良品の作成を頑張って欲しいもの

だ。

「次は、商会からの書状かしら」

商会からの手紙に、いくつかの珍しい品が手に入ったので興味があれば是非見て欲しい。と……。

都市外、それも遠方から仕入れた珍しい品々を取り揃えている。なんて言われてもなあ。調度品の類にはあんまり興味無いんだが……いや、でもある程度ヘステイア様の評価にも関わってくるだろうし、調度品を用意しておくべきだろうか？ 今の派閥の内装で満足しているんだが、やはり絵画等の調度品で飾り付けておくべきか。

流石に「アポロン・ファミリア」時代の様な地獄めいた本拠にする気はさらさらないのだが。

「次は、げつ……最大賭博場から」

内容としては過去に迷惑をかけた謝罪について。もしよければお使いください、とVIPルームへの入場券としても使える会員証カードの発行通知と、同封された会員証。

正直、頭を挿げ替えただけで中身があんまり変わって無さそうな最大賭博場グラン・カッソに足を運ぶ気になんぞなれん。

それに、今更過ぎるんだよなあ。なんか狙いでもあんのかよ、気色悪いな。

「んで、次のは——」

書状等の郵送物をその日の内に処理しないのはやはり落ち着かない。

重要度の高そうなものをテキパキと処理し、返信が必要なものや、謝礼状をしたための必要があるらしいものは片っ端から処理していく。

こんな事をしている所をリリに見られたら今度こそヤバイ、というのはわかる。わかるが、一日二日置いておくのは嫌だ。それで過去に痛い目見た事あるし。

書状で連絡事項は伝えてやったのに、それを見てないお前が悪い。で殺されかけるってのは中々に味わえない経験だろう。いや、まあ俺もあの時は不用心が過ぎたんだが。

ともかく、その日に届いた書状はその日の内に処理しないと落ち着かないんだ。だって死んでからじゃ遅いし。

「後は……ん？ あれ、もうこんな時間？」

ふと顔を上げ、窓の外に視線を向けると星空が瞬いているのが見えた。気が付けばそこそこ山になっていた郵送物の山が切り崩され、送付用の書状が小山になっており、それなりの時間が経過しているのを実感する。

ほんの少し、の積りが結構な時間が経っているのに気付いて思わず手を止め、慌てて耳を立てた。

書状を認めるのに少し集中し過ぎた。リリやヘスティア様が違和感を抱いて俺の事を探していないと良いのだが。

「誰も、居ないわね」

ふう、と一息ついて最後に残る三通の書状に視線を送った。

もうここまで片付いているのなら、三通なんて誤差みたいなものだろう。ぶつちやけ、三通なんて半端な数を残す理由もない訳だし、サクツと片付けて何食わぬ顔で夕食の席に顔出せば良いや。

まず一つ目は、つと……冒険者依頼クエストについて。階層は中層域で……まあ、難度や採取物、報酬なんかには違和感はない。加えて依頼者の信用度もそれなりにある。

引き受けても問題はない、とは思うが一応皆と確認してからだな。借金の事もあるし皆積極的に動くだろうからほぼ受託一択ではあるんだが。

さて、次の書状は、つと。

「ほれ、これが欲しいんだろ？」

「ああ、ありがとうございますファイアさ——」

差し出された書状を受け取ろうとし、掴んだ所で聞こえるはずの無い声が聞こえている事に気付いて思わず顔が引き攣った。

執務卓に腰掛け、椅子に座る俺を見下ろす不機嫌そうに吊り上がった目。ゆらゆらと揺れる尻尾の先端が俺の鼻先を撫で、凜猛に吊り上がった口元からは鋭い犬歯が覗いていた。

もはやこれ以上の説明が不要な程にご機嫌斜めのファイア・クーガの

姿がそこにあった。

「あの、これは、ですね……」

咄嗟に言い訳を口にしようとして閉じる。

どんな言い訳をしようが既に手遅れなのを察してしまったからだ。いつの間にか開け放たれたドアの向こうから、リリが此方を見ている。目尻は吊り上がり、肩がわなわなと震えている。その後ろでは呆れ顔で肩を竦めるミコトと、ミコトの後ろに隠れて震えている春姫の姿もあった。

そして、林檎を頬張ったキューイの姿まであった。

「……う、あの、リリ」

「何ですかミリア様？」

思わず声をかけると、肩がわなわなと震え、額に青筋を浮かべながらもこやかな笑顔でリリが返事を返してきた。

もはや腸が煮えくり返る程の怒りを抱いている事は疑う余地はない。

「ミリア様？ リリは何と言いましたっけ？」

「いや、ですね。覚えているに決まっているじゃないですか」

「ほほう、それは意外ですね。リリはてっきり忘れていたのかと思いましたよ」

部屋の入口を潜り、リリが執務室に足を踏み入れた。

瞬間、ぞつとするほどの圧を感じた。思わず頭を下げ、平伏したくなる様な、ミコトがいつのまにか重力魔法でも使ったのかとでも言いたくなるほどに頭が重くなる。

なんとか抜けかけた腰を上げ、執務卓を回り込んで部屋の中央で腕組をして立つリリの前に立った。

「リリは言いましたよね。帰ったらすぐに休んでください、と」

「はい」

思わず膝を突き、正座の姿勢をとった。

「ミリア様は言いましたね？ そう何度も怒られるような事はしない、って」

「はい。確かに言いました、私が、この口で」

全身から冷や汗を流しつつも背筋を伸ばしてリリを見上げた。

「後、ヘスティア様から聞いたのですが最低限だけ執務室でやる事をやったらすぐに休む、と言ったそうですね？」

「はい。仰る通りです」

言い訳なんか口から出てこなかった。

「あれあれ、おかしいですね。此処に処理が終わった書状がありますね。『小遠征』の間は手を付けずに置いてあったはずの書状が処理されています。これは一体どういう事なんでしょうかね？」

「……わ、私が処理しました」

「それは、今日直ぐにやらなければならぬ書状でしたか？」

「いいえ、違います」

遂にはリリの顔を見る事ができなくなり、視線をリリの足元に落としました。

淡々と、確認をとる様に一つ一つ質問を投げかけてくるリリ。本音を言ってしまうと、フリユネにやられた拷問なんかよりはるかに効く。

膝の上に乗せた握り締めた手は手汗でべっとべと、背中も冷や汗でぐっしより濡れている。そんな不快感ですら、目の前のリリから放たれる圧に比べたらはるかにマシだった。

「それで？ ミリア様は執務室で何をしていらしたんですってつけ？」

「さ、最低限、ダンジョン内で問題行動を起こした「ヘファイストス・ファミリア」への抗議文の作成を……」

「それだけ、ですか？」

「……………あの、重要度高そうな書状の、処理も」

「それだけですか？」

頭の中がぐるぐるし始める。気持ち悪さが込み上げてきて色々とゲロってしまいそうになるのを堪えながら、必死に答える。悪いのは俺だ、ちよつと気が緩んで、約束すっぱかして色々とやらかしたんだから。

「その、気になっちゃったんで、届いた書状全部に目を通そうかなあゝ、なんて……………あはっ」

「ふふっ、そうですか。気になっちゃったんですか」

「え、ええそう、気になっちゃったのよ」

「そうですかあ、気になっちゃいましたかあ」

くすくすと鈴の鳴る様な軽やかな笑声が聞こえたため、勇気をもつて顔を上げて酷く後悔した。

養豚場の豚を見る目より更に冷ややかな瞳が俺を見下ろしていた。リリの背後、ミコトは呆れた様に肩を竦めるのみで、フィアに至ってはリリと同じ様な冷ややかな視線を向けてきている。唯一、執務室の入口から怯えた様に顔を出す春姫が呆れながらも僅かに同情的な視線を向けてきているのが救いだろうか。

針の筵に座らされている気分のまま、愛想笑いを零す。

「あ、あははっ、ね？ 仕方ないでしょう？」

「ふふふっ、そうですね。ミリア様——」

軽やかな笑声がリリの小さな口から転がり落ちるが、目が笑っていない。微塵も、笑っていない。

「——だなんて、言うと思いませんか？」

「知ってた」

思っていた事が思わず口に出てしまった。慌てて両手で口を塞ぐも後の祭り。

ブチイツ、と何かがブチギレる音が執務室内に響き渡り、ミコトが額に手を当てて天井を仰ぎ、春姫が両手を合わせて無事を祈り始め、フィアが地獄のどん底にも響き渡りそうな深い溜息を零し——
リリの目が酷く吊り上がった。

今のリリを形容するならば、鬼の形相、という言う程適切な言葉はないだろう。

「ミリア様、リリからミリア様への信頼は今この瞬間、ゼロになりました」

「まって、違うのよ、これは、出来心だったのよ……」

ちよつとならバレへんやろ、なんて軽く考えてしまったのだ。

なんとか絞り出す様にひりだされた俺の無様な言葉に対し、リリは鬼の形相の笑顔を浮かべたまま呟いた。

「ヘステイア様、ミリア様に相応しい罰は何が良いでしょうかね？」
「へ、ヘステイア様……」

開けっ放しの扉の向こう側、ひよっこりと顔を出したヘステイア様は呆れた様な視線を俺に向け、溜息を零して執務室に入ってきた。

「うくん、ミリア君の悪癖はもう死んでも直らない気はするけどね」

「ヘステイア様、だからといって放置はできません！ ミリア様が過労死してからでは遅いんですよ！」

あ、この世界にも『過労死』って概念はあるんだ。

「ううん、それはボクも困る……はあ、ミリア君」

ヘステイア様がりりに代わり俺の前に立った。

「ちよつと、というかかなり、というか……うん、キミは頑張り過ぎだ。とつても、滅茶苦茶、すつごく頑張り過ぎてる。少しは休んで欲しい」「えつと……その、つい、興が乗ったといいますか、そんな積りは無くてですね……」

仕事ややらなければならぬ事を前にするとどうしても片付けなくては、という思考が働いてしまう。

置いておいたとしても仕事が減る訳でも無いし、やらなければならぬ事が無くなる訳でもない。そう考えると、今の内に片付けて置けば後から楽できるんじゃないか、つてなってしまうんだ。

随分と毒された思考ではあると思う。

「……あんまり、これはやりたくなかったんだけど、仕方が無い」

余り気乗りしなさそうなヘステイア様の言葉に嫌な予感を感じた。ぞくつ、と背筋が震える様な悪寒だ。

ヘステイア様の事だから余り厳しい事はしないとは思いますが、俺のやらかした事から鑑みるにそれなりに重い罰が下ると思う。

一体どんな罰になるのか、と戦々恐々としていると、ヘステイア様は意を決した様に口を開いた。

「ミリア君、これから一週間、「ステイタス」の更新を除いてボクとの接触を禁ずる！」

「はっ。」

「接触厳禁だ！」

接触を禁ずる？ 接触厳禁？

「あの、それは、どういう意味で……？」

「おかえりの抱擁は無しだ」

「……マジで？」

え？ 無し？

「一緒に、お風呂」

「禁止だ」

「そ、添い寝は」

「当然禁止！」

「あ……」

おかえりの抱擁も、添い寝も、一緒にお風呂も、全て禁止。それも、一週間も？

「あの、ミリア様、大丈夫でございましょうか……動かなくなってしまういましたが……」

「さ、さあ……ですが、効いている事には効いていのではないでしょうか？」

「副団長には良い薬だろ」

「ヘファイストスに相談したら、暫く無視するのが良いとは言われたけれど……ちよつと、可哀想な気が……」

「ヘステイア様、甘やかしてはいけません！ ミリア様があんな風に頑張り過ぎるのは半分はヘステイア様が不甲斐なくも甘やかし続けているからですよ！」

「ぐう……た、確かに言い返せない」

「わかつたら一週間はミリア様には事務的に対応してください」

「うう……」

「……ミ、ミリア様が一週間経つ前に倒れそうな気がいたしますが」

「……春姫殿もそう思いますか。奇遇ですね、自分も同じ事を想いました」

第二〇二話

夕暮れのギルド本部。

西日の光が差し込む大理石のロビーには、迷宮探索を終えて帰還した冒険者達で賑わっていた。

そんな中、最近になって一躍有名になった派閥の集団がロビーへと足を踏み入れてくる。

何処か小動物を思わせる雰囲気を持った白髪のヒューマン。レコードホルダー世界最速兎であり、派閥を率いる団長。「リトル・ルーキー」ベル・クラネル。

そんな彼と談笑しているのは城を焼き尽くす業火を放つ魔剣を生み出す魔剣鍛冶師。ヴェルフ・クロツゾ。

小人族のサポーター、ヒューマンの剣士、獣人のサポーター。そして、小人族の魔術師。

「じゃあ、僕はエイナさんの所に……ミリアも行く？」

「……うん」

「わかりました。リリ達は換金を済ませてきます」

「俺は適当にぶらついてるぞ」

専属アドバイザーであり「ヘステイア・ファミリア」の担当職員であるエイナの元へ小人族の少女を連れて離れていく少年。それを皮切りとし、サポーターの二人と剣士の少女が換金所の方へと向かい、残る鍛冶師は投げかけられる視線を無視して暇を潰す様に掲示板の方へを歩んで行った。

普段は摩天楼施設の換金所を利用する所ではあるが、本日はギルドに納める税金の関係もあって此方を利用する事にした「ヘステイア・ファミリア」のパーティはギルドの方に顔を出しているのだ。

「あー、今日は混んでるね」

「……税金、支払日、だしね」

カウンターの前にずらりと並んだ冒険者達の長蛇の列を目にしたベルが困った様に頬を掻き、その横で虚ろな目をしてやつれた様子のミリアが今にも息絶えそうな声で応える。

長蛇の列の最後尾に並び、しばしの時間を待たされた後。ようやく自分達の番がやってきたベルとミリアの二人はカウンター越しにエイナと顔を合わせた。

「こんにちは、エイナさん」

「……こんにちは」

「こんにちは、ベル君、ミリアちゃん……って、ミリアちゃん、どうしたの？ 凄くやつれてるけど……疲れてるんじゃない？」

ここ数日、顔を見せていなかったパルウムの少女が珍しく顔を出したかと思えば、異常にやつれた様子であったのだ。多大な借金を背負っている事で有名な派閥でもある為、眷属が精力的にダンジョンに潜っている事を知っているエイナは彼女が無理していかないかを心配する。

「ミリアは……えっと、気にしないでください」

「気にしないでって、明らかにおかしいよね？ ミリアちゃん？」

「ヘステイア様成分が、足りないです」

ベルの横でぼんやりと虚空を見つめ、虚ろな目をした少女にハーフエルフの少女が声をかけるも、彼女の口から零れ落ちたのはうわごとの様な言葉のみ。明らかに異常な状態にエイナがベルに視線を向ける。

「何かあったの？」

「えっと、実はです……」

後ろから列をなす冒険者達から向けられる視線に急かされながらも簡素に状況を説明しながらも、税金の手続きを進めていく。

「へえ、頑張り過ぎるミリアちゃんに罰ねえ……逆効果になってない？」

「あはは、僕も、そう思います……」

数日前、女神やりりりといった仲間内から休む様に言われていたにも拘わらず、約束を破ってこつそりと仕事を片付けるといった行為に手を染めた。

悪い事ではないが、ただでさえ過労気味のミリアが加減を知らないかのように働き続けるのを咎めたヘステイアやりりルカ、ベル等と

いった仲間内で話し合った結果。ちよつとした罰、というよりはお仕置きを執行する事に決めたのだ。

内容は、女神との接触制限。「ステイタス」の更新や事務的な会話以外で女神との触れ合いを完全に禁止するといった内容だった。

最初の一日目から、朝から挨拶を無視されて涙目であり、二日目には無視されたのが相当に堪えたのか口数が大きく減り。三日目の今日にいたっては、ダンジョン内でこそ普通ではあったが地上に居る間は朝からほとんど虚ろな目で遠くを見つめている。

時折、ベルやヴェルフの声かけには反応するのだが、それもだいぶ間が空くのだ。

「ダンジョンでは普通なんですけど、帰ってくるとこんな状態でして……」

「ミリアちゃん、大丈夫？」

「……………だ、大丈夫よ。後、あと、四日我慢するだけだし」

エイナが心配そうに声をかけると、今度はやや遅れてミリアが笑顔を浮かべ、震えた声で対応した。

「ほ、本当に大丈夫？」

平気平気、と手を振ってミリアが答えるも、数秒もすればまた虚ろな目で何処か遠くを見つめ始める。心ここにあらずの状態にエイナが困惑していると、後ろに並んでいた冒険者の野次が飛ぶ。

「まだか？」

「あ、直ぐ退きます。エイナさん、また今度」

「え、ええ……………えつと、ミリアちゃん。頑張つてね？」

未だに多くの冒険者が並んでいるのを見て、流石にこれ以上話し込むのは迷惑かな、とベルがミリアを連れてカウンターを離れる。

ベルはちらりと後ろについてくるミリアを伺った。

ここ数日は一切仕事に手を付けておらず、最低限の迷宮探索のみでそれ以外は休息の時間をとらされているミリアだが、仕事をし続けて過労気味になっていた頃よりもやつれた様にしか見えない。

ともすれば、以前の方がマシだったのではないかと思える程だ。食事も喉を通らないのか朝食を抜く事も多くなっている様子も見受け

られた。

このままだと倒れそうで怖いな、とベルが頭を搔いていると、ミアの視線が虚空ではなくロビーの掲示板の方に向いているのに気が付いた。

「ミア、どうしたの?」

「冒険者依頼クエストに気になるのは無いし。新商品告知は……あつ、いや、何でも無いわ」

「僕も気になるし、見て行こうか。暇潰しにもなるし」

ギルドにはダンジョンを含め、冒険者にとって有益な情報が集まる。アドバイザーからの話もそうだし、掲示板に掲示された様々な情報というのは馬鹿に出来ない。

ミアが思わず確認してしまった冒険者依頼クエストの羊皮紙や、各商業系派閥の新商品告知の報せ等、掲示板に張り出される情報は確認必須とも言える。

ほぼ無意識に見ている、また仕事をしていると怒られて罰が長引くのではと怯えているミアに笑いかけ、ベルも多くの同業者が人垣を作る掲示板を見やった。

「王国ラキアが攻めてきているっていつても、いつもと変わらなく見えるなあ」
「それは当然ね。一部の上位派閥以外には関係ないもの」

魔石産業で利益を得ているギルドからすれば、一般の冒険者を狩りだして戦争に対応してしまえば魔石の産出量が減って利益が大きく減ってしまう。

故に上位派閥の少数で簡単に撃退してしまう事で損失を最小限に抑えようとしているのだ。

深層域から得られる魔石も重要ではあるのだが、中小派閥が集める上層・中層の魔石の収益の方が割合は多いのだから。

「おいおい、またかよ」

「胡散臭ラキアえなあ〜」

ベルが王国進行ラキアと対応している上位派閥について考えていると、最前列からざわめきが広がっているのに気付いた。

何だろう、と気になったベルが背伸びをして人垣の向こう側に張ら

れた羊皮紙を確認しようとし、ミリアは耳を澄ましてざわめきの中から情報を拾おうとし始める。

「冒険者の装備を奪うモンスターが、出没しているらしいな」

「あ、ヴェルフ」

「冒険者の装備を、奪う……？」

背伸びをしているベルと耳を澄ましているミリアの間にヴェルフが立った。

三人の中で最も背の高い彼には、掲示板に張り出されている羊皮紙の内容が読み取れる。

「つて、奪う……？」

「ああ。死体から鎧を奪うモンスターも居れば、打ち負かした冒険者の装備を持っていく奴も居るらしいぞ」

「ふうん……へえ……」

ヴェルフの言葉にベルが純粹に驚き、ミリアが白々しさを感じさせる相槌を放つ。

モンスターとて『迷宮の武器庫』、天然武装ネイチャーウエポンを扱えることから武装を扱う事自体に不思議な点はない。しかし、天然武装ネイチャーウエポンに比べると、冒険者が扱う装備品はどれも非常に強力な業物だ。

それに、武器や盾ならまだしも、『鎧』を奪っていく、といった点は違和感を覚えるのはおかしくはない。

「汗水垂らして揃えた装備品を奪われるつて考えたら……」

「鍛冶師の俺からしたら、鍛えた武器がモンスターに使われるのはな」

「あ、そっか……怖いね」

複雑な恐怖を覚える二人の横、背の低さから注目されておらずに苦い表情を浮かべているのに気付かれていない彼女は溜息を飲み込んでいた。

(出現したモンスターの種類が蜥蜴人リザードマンに歌鳥人セイレーン……)

もしかして、と心当たりを思い浮かべたミリアが密かに二人を伺い、頭を抱える。

「も、目撃情報は何処から？」

『下層』が主らしいな。少なくとも20階層より上の階層では確認さ

れていないみたいだ」

全ての情報提供者が第二級以上だという情報群。

人がほんの少し減ってミリアやベルも羊皮紙が見える様になった事でその情報提供者の名が確認出来る様になり、ベルは首を傾げ、ミリアは表情をこわばらせた。

少年には二つ名持ちで有名な人だろうか、と知識不足で理解できず。情報収集を欠かさなかったミリアは彼らの活動範囲が『大樹の迷宮』だというのを知っている。

真反対の二人の反応を他所に、ヴェルフは面白半分二人に羊皮紙の内容を伝えていく。眉唾物だという周囲の冒険者同様、ヴェルフもその話をあまり信用していないのは明白だった。

「他にも、面白い情報があるぞ?」

「情報?」

「あー、ミリアはほどほどにな?」

ニヤリと口を吊り上げた笑みを浮かべて追加の話題を出そうとした所で、『情報』と聞いたミリアが即座に反応したのを見て諫める。

ただでさえ女神の罰で堪えているであろう少女に、万が一にでも追加の罰が与えられると目も当てられない。特にリルカがかなり厳しめに彼女の行動を監視している。ミリアが執務室に近づこうものなら番犬もかくやと言った具合に吠え追いかおうとするのだ。

ミリアが密かに情報収集に勤しむ、なんて真似をしているのが見られたら口煩くなる事は間違いない。当然、ベルやヴェルフも対象に、だ。

あくまでも好機程度で冗談半分の情報だ、と前置きをしてから語りだす。

「これは随分前に出回った話だけどな。鎧を纏った『黒いミノタウロス』が現れるらしい」

「黒い、ミノタウロス……?」

「真つ赤な奴は知ってるけど、黒……?」

「そういや、お前等は赤い奴とやりあったんだっただか」

ミノタウロスの体色は通常、赤銅色だ。そして、かつてベルとミリ

アが二人がかりで討伐せしめたミノタウロスの色は真っ赤だった。
「ま、一時期流れて直ぐに聞かなくなった、噂程度のものだったけど
な」

「もしかして、『亜種』？」

稀に観測されるモンスターの突然変異体。

ベルとミリアがLv. 1の時に二人掛かりで討伐せしめた『深紅の
ミノタウロス』も同様の『亜種』個体であり、『強化個体』であった。
とはいえ、突然変異体は通常個体とは違う個体であり。個体毎に個
性が異なる。ただ一つ確実に言える事は、通常個体とは比べ物になら
ない程に強い。という事のみ。

もし実在するのであれば、その強さがいかほどのモノになるのか。
かつて経験したあの『強化個体』との戦闘。それを経験したベルが
背筋を震わせる。

「さあな。全く出処も知れないし、こっちこそ偽情報かもしれない」

対し、ヴェルフの方は真に受けない方が良い、と肩を竦めた。

ミノタウロス 猛牛と聞いてどうしても気になったベルは質問を重ねてしまう。

「ヴェルフがその話を聞いたのは、いつ？」

「確か、丁度二ヶ月前だったかな」

二ヶ月前、といえばベルが「ランクアップ」した日だ。

お前達とパーティーを組み始めた頃だからよく覚えている、とヴェ
ルフが笑う。

二人が談笑を続ける横、ミリアは顎に手を当てて考え込んでいた。
(黒い、ミノタウロス……鎧を着てた？ って事は、異端児ゼノスの一匹……
でも、クリスは知らないみたいだし。じゃあ、二ヶ月前に生まれた個
体?)

「ヴェルフ、その噂を聞いたのって此処よね？」

「え？ ああ、そうだな。ギルドのロビーで聞いたが」

ミリアの問いかけにヴェルフが答え、直ぐに思い止まって彼女の頭
に手を置いた。

「ミリア、調べようとか考えるなよ？ 少なくとも、後五日は我慢し
ろ」

「……趣味だから仕方ないでしょう、って言い訳じゃ駄目かしら？」
「リリスケにその言い訳が通じると思うなら、やってみろ」

半ば呆れ混じりのヴェルフの言葉を聞いたミアアが両手を上げて降参を示した。

「まっさか、リリ相手にそんな自殺紛いな事はしないわよ」

「それは良かったです。リリも怒鳴らずに済んで一安心ですね」

「ツツ———!?!」

唐突に背後から聞こえたサポーターの声に、ミアアは声にならない悲鳴を上げた。

ギルドに税金を納める手続きを行った次の日、俺は迷宮街『ダイダロス通り』へ足を運んでいた。

奇人とまで言われた設計者の手で何度も区画整理が行われた結果、秩序という言葉が忘れ去られた広域住宅街。石造りの建物と階段、路地が縦横関係無く錯綜する重層的な威容は、地上に存在する迷宮という表現もあながち間違いではないと感じさせる。

迷宮街の入口を潜る際、しっかりと武装を確認し、フーデットローブ外フーデットローブ套をしつかりとかぶって顔を隠す。序に襟巻も巻いて、傍目からは誰かわからない様にしっかりと身分を隠す。

「皆に見つかったら洒落にならないしね」

後四日経てばヘスティア様との触れ合い許可が下りる。それまでは大人しくしていようと思っっているのだ。

それとは別に、今日は少しレーネに用事があつて此処に足を運んでいる。

レーネ・キュリオ。「ウエヌス・ファミリア」に所属していたが派閥抗争の結果、「ファミリア」が壊滅させられ、仇であったはずのイシユタルの元で奴隷の様にこき使われていたアマゾネスの少女。

一部界限では『女性専門の娼婦』として有名であり、最近俺と懇意にしている姿を見られている事から俺が同性愛者ではないか、という噂が広がる原因にもなってしまった人物。

一応、彼女は地上に居ない女神ウエヌスに代わり、ヘステイア様が恩恵を授けて「ヘステイア・ファミリア」に所属しているのだが、普段は本拠である『竈火の館』とは違う所で生活している。

というよりはいくつかの隠し拠点を街の各所に持っているらしい。『歓楽街』から外に出るのを禁じられていた割には、外部に隠れ家セーフハウスを持つてゐるのは意外に思える。

だが、実際には彼女が独自に持つルートを通じていくつか入手したとの事。

彼女の友好関係についてはいまいちよくわからない、というか調べてみると意外とまともじゃない連中であるのはわかる。わかるが、彼女の持つ関係は割とまともだ。

まともじゃないのにまとも、と言うと疑問を覚えるかもしれないが。まとも、というのは無法者に比べて、という意味だ。

彼らなりの規則で回っており、「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」、「ガネーシャ・ファミリア」等の大派閥との関係悪化を避ける方向で活動する者達であり、時折そんな大派閥と協力関係を持つ事も多いらしい。特に、フィン辺りがよく情報購入等をしている様子だ。

購入した情報は小人族バルウムの犯罪について。特に一時期、界限を騒がせた小人族バルウムのサポーターによる窃盗事件についてを重点的に調べていた事もあるらしい。まあ、流石に何故それを調べるのかまでは調査する気はない。

ともかく、最低限の規則をもつてして動く者達というのは、此方が対応を間違えなければ大人しいのでやりやすい訳だ……こ、今回は彼等との顔つなぎ目的ではないがね。リリにはちゃんと『レーネに会いに行くだけ』と説得もしてきたし。

「しっかし……こ、ほんとに複雑怪奇な設計してるわね」

階段が上に伸びたかと思えば突き出た建物の部屋がそれを塞ぎ、日の光が届かない真っ暗な隘路には古びた魔石灯の弱々しい光が灯っている。そんな猥雑な道の所々にあまり身なりが綺麗とは言い難い貧民等が居る。

座り込んで盤棋^{チェス}をしていたり、井戸の傍で洗濯物をしていたり。多少小汚くはあれど普通の生活をしている姿が見える。

とはいえ、貧民街なのは変わりないし治安はあまりよくない。無法者に属する冒険者もよく見かけるし、そんな彼らが無体を働くのを『ダイダロス通り』の住民は見て見ぬふりをするのが当たり前だからな。

「やつほお〜」

「……はあ、びつくりさせないでくださいよ」

僅かに警戒しながら捻じ曲がった階段を上っているさ中、すぐ横の建物の窓が開いて褐色肌に黒髪の少女が顔を見せた。

相変わらず間延びした声色で、表情はへらへらしており締まりがない。ともすればやる気の無さそうな雰囲気ではあるが、やる時はちゃんとやるし。仕事に関しては手を抜かない真面目な少女だ。

「ほい」

「……？ 窓から入れ、と？」

「ん？ ああ、この部屋さ、窓以外に出入口ないんだよねえ〜」

窓枠越しに手を伸ばしてくるレーネに質問すると、どうやら今レーネが居る部屋は顔を出している窓以外に出入口が存在しないらしい。どんな隠れ家だよ。

彼女の手を掴み、窓から室内へと迎え入れられる。

部屋の広さこそそれなりに広くはあり、窓は一つ。奥に扉が付いているのが見えるが、台所や水場らしきものはこの部屋には無かった。

室内に置かれているのは毛羽だった毛布が敷かれた木組みのベッド。寝具等という高価な物は置かれておらず、木材の板に毛布を被せただけの様子で、お世辞にも寝心地が良いとは言えない安物だ。

そして、四つ足の椅子にテーブル。どちらも足の長さが揃っていないのかガタガタしており、不安定極まりない。そして、部屋に置かれた収納具^{チェスト}は金具が振り壊された痕跡が残っている。

「……これ、レーネさんの隠れ家の一つ、ですか？」

「そうだよ。安かったんだよねえ〜」

日当りニヴァリスの部屋。と15日でじゃが丸くん一つ分という

格安の部屋だとへらへら笑いながら告げられるが、俺はちよつとこの部屋は無理だ。

備え付けらしい椅子に俺が座ると、ガタガタと不安定に揺れる。レーネの方は板張りに毛布をかけた申し訳程度のベッドに腰掛けた。埃っぽくはなく、しつかりと清掃は行き届いてはいるのだが、配置された家具がガラクタも同然。椅子はささくれだつていて座るとチクチクするし、収納具チェストに至つては施錠不可能だし。

そもそも出入りが窓のみつてどんな立地してんだよ。

「その扉はなんですか？」

というか、よく見てみるとその扉、取っ手のすぐ横に削つて空けたみたいな穴があるじゃん。何の扉だよ。

「あ、其処はねえ〜」

部屋に唯一存在する扉をレーネが内側に開け放つと、その向こう側には壁があつた。

……………え？ 壁？

「何ですかそれ」

「んーとね、ここに元々出入口があつたらしいんだけどお〜」

ホラーゲームや騙し絵なんかで出てきそうな、扉を開けたら部屋ではなく壁があるという仕掛けギミック。現実で見るとは思わなかつたが、改めてみるとかなり非現実的シュールな光景である。

「後から改築して、入り口塞いじやつたんだつてえ〜」

「ああ……………なるほど」

どうやらこの『ダイダロス通り』には、この部屋と同じ様に出入口が塞がってしまった建物というのは中々に多いらしい。この一室もまたそんな複雑怪奇な迷宮街の被害部屋の一つらしい。

この迷宮街を作り上げた人物が『奇人』と謳われるのも納得である。とはいえ、どう見ても防犯の観点から役に立ちそうにない壊れた扉の先がただの壁というのは、悪いだけではないのか…………？ いや、普通に考えておかしいだろ。

「で、改まつてどうしたの？」

「いえ、様子を見に来たのと、序にお願いをしにきたんですよ」

「お願い？　良いよ、何したらいい？」

扉を閉じて此方を伺うレーネに真つ直ぐ視線を向け、此度の目的を達成すべくお願いを口にした。

「いや、ちよつと抱き締めて欲しいんですよね」

「……………」

俺がお願いを口にすると、レーネは大きく首を傾げた。いや、首どころか体が大きく斜めに傾ぐ。

お願いの内容を反芻しているのか一分ほど時間をかけて姿勢を戻したレーネは、ほにやほにやしていた表情を引き締めた。

「えつと、ごめん。何？　抱いて欲しいの？　いや、別に良いけど、もしそうだったらもつと良い部屋に行かない？　この部屋はあくまで隠れ家だし、汚いじゃん？　そもそもシャワーもないし、汗かいたら不味いじゃん。匂いだつて残つてたら困るでしょう？　ファイア・クーガとかデインケ・レルカンとかに気付かれちゃいそうじゃん？　あ、イリス・ヴェレーナとかサイア・カルミも気付きそうだし。っていうか女の子に興味無かつたんじゃないの？　いきなりどうしたの？　悩みがあつたら聞くけど。ほら、興味ないのにいきなり私みたいな専属娼婦に抱いて欲しいって言いにくる子つて大体が彼氏に振られて自棄になつて、みたいなのが多いし？　あ、団長君に振られちゃつた？　つていうかそもそも付き合つてたの？　もしかして団長君が他の子とデキちやつて傷付いちやつた感じ？　私は別に良いし、お金とる気なんてさらさらないけど、やるならしつかり気持ちよくしてあげるけどね？　体は大事にした方が良いつて言うか、いやアマゾネスでおおかつ娼婦なんてやつてる私が貞操観念に関して注意するのはおかしな話かもしれないけれど、やっぱり女の子同士つてのは自然の摂理に反するつていうか、赤ちゃん出来ないし生産性の無い行爲つていうか、愛し合い女の子同士か、お金で繋がったギブアンドテイクなやりとりならまだしも、自棄になつて抱かれにくるのは違うつていうか

———
凄まじい勢いでマシンガントークに思わず怯んでみると、レーネはくどくどと、いかに女の子同士の性行爲が不自然な行爲かを語つて

いく。

いや、別にそういった目的ではないんだが。

「ストップ、ストップです。レーネさん」

「ミリア、処女だよね？」

「いや、処女ですけど」

「私も処女だと言えた義理じゃないんだけど、やっぱ初体験は普通に男の子とやった方が良いよ。うん」

「……私の話、聞いてくれませんか？」

思わず半眼で睨むと、レーネは深呼吸を繰り返してからベッドに腰掛けようとして止まり、テーブルを挟んだ対面の椅子に腰掛けた。

「うん、ごめん。ちよつとびっくりし過ぎた」

「はあ、そこまで慌てるのは想定外でしたね」

もつと落ち着いて話が出来るタイプだと思っていたのだが。

「まあ、ともかく……抱いて欲しいだけ？」

「違います、抱き締めて欲しいです」

「……………えつと、なんで？ ああ、いや、勘違いしないでね？ 嫌って訳でもないし、頼まれたのなら抱き締めてあげるぐらいいつでもやってあげるけど、理由が気になっただけだよ？」

本当に何かあったの？ と純粹に心配してくれている雰囲気の流れに思わず頭痛を覚えた。

周囲の人達から俺はいったいどんな風な人物として覚えられているのだろうか。

「いや、実はですね……」

ここ最近、俺の自業自得とはいえ接触禁止令が出てからヘステイア様から抱擁やなでなでをして貰えず。加えて挨拶も無視される徹底っぷりで心が折れそうなのだ。

んで、最初の一日二日は我慢しようと思ったのだが、無理だった。滅茶苦茶キツイ。死にたい。ヘステイア様に抱きしめて欲しい。苦しくて死にそう。と、自分が以外にも我慢弱かった事を知った訳だ。「うう、神様に抱擁して貰えないとか、地獄じゃん！ あのサポーターちゃん、とんだド畜生だね！」

俺の苦痛に共感してくれたのか、レーネはうんうんと大きく頷いてくれた。

同じ様にウエヌス様が健在の時には抱擁^{ハグ}なんかもしてもらっていい彼女からすれば、俺の置かれた境遇はいくらなんでもやり過ぎだと。

「それで？」

「それで、余りにも我慢出来なかったのでちよつと他の人に抱擁^{ハグ}して貰ったりとかして我慢しようとはしたんですよ」

で、このままだと色々な意味で餓死しそうなので、代用として春姫に抱き締めて貰ったりしていたのだが……。

「リリルカにお願ひしたら何があつても駄目だ、と怒られました」

ミコトや春姫、イリスは仕方ないなあ、とお願ひを聞いてくれたのだ。しかし、ヴェルフやベル、デインケやエリウッド等の男性組は流石に恥ずかしいから無理、と断られ。

最後にリリにお願ひしてみたら駄目出しされた。

「私が抱擁^{ハグ}して欲しい、とお願ひされてもしない様に、なんて派閥内でルールが作られました」

「なにそれ酷い」

「誰かが代わりに優しくしてたら罰にならない。だそです」

いや、もう本当にきつついからヘスティア様以外なら抱擁^{ハグ}してくれてもいいじゃん。

……いや、まあ、俺が何度も『休め』と言われたのを無視し続けたのが悪いんだが、流石にね？

「で、派閥内で私と過剰接触禁止令が出てまして」

「ああ、なるほど。人肌恋しさに私の所にきたんだねえ」

人肌恋しさに、間違つてはいない。いないのだが、元娼婦のレーネが言うのと卑猥な意味に聞こえるんだが。

まあいい、この際、元娼婦、それも女性専門の娼婦だったとしても関係無い。

「抱き締めて欲しいです」

「うん、オツケー！」

快く引き受けてくれた彼女の胸に飛び込み、ぎゅっと抱きしめて貰う。

そこまで胸は大きく無いし、腕は何処かほっそりとしている。それでも冒険者であるからかそれなりに力は強い。ただ、抱き締められる安心感は余りない。

どういふべきなのかわからないが、レーネの抱擁はヘステイア様の抱擁に比べて劣ってる。

「……………」

「どう？」

「…………ヘステイア様の方が良いですね」

「まあ、それはそうだよ。私だって一番慕^{ウエ}つて^ヌる人^様の代わりなんて見つかると思っ^テて無いし」

後四日、四日経てばヘステイア様との接触禁止令が終わる。それまで、我慢。我慢だ…………。

第二〇三話

人肌恋しさを感じる。と言うと多少の語弊が生まれそうな気はするが、実際に言葉にすると他の上手い表現が見つからない。

狭く、粗悪な家具が申し訳程度に置かれた一室でレーネにしつかりと抱擁してもらい、一応は満足、という少し違うが、ほんの少しは満たされた気分になった所で俺は切り出した。

「それで、最近はどうです?」

「どう、って言うത്?」

「おかしな情報とかは無いですか……例えば、冒険者の装備品を奪うモンスターとかの噂とか」

俺の予測では異端児達の仕業ではないのだろうか、と言った所だが、実際の所は不明だ。

異端児達はギルドがひた隠しにしている事ではあるのだが、彼等も完全に冒険者と遭遇しない様に動く事は難しいだろう。実際に噂としてギルドの掲示板に出る事もある訳だし。

まあ、噂が出た瞬間に圧力をかけて揉み消す、なんて真似をしないのは賢明な判断と言えるだろう。

ここでギルドなんかの大組織が下手に圧力なんて掛けて揉み消す真似をすれば、それは即ち後ろ暗い事がある事の証明になりかねない。加えて、ギルドが噂の火消しをするまでもなく、人々の間では『胡散臭い』という評価で終わる訳だしな。

「んー……それって時々出回ってる噂だよね?」

「ええ、他にも何か、ダンジョン内で変わった噂等あれば聞きたいですね」

「んと、そうだなあ」

レーネは顎に手を当ててうんうんと唸り、暫くしてから指を立てると口を開いた。

「まず、一つ目。ダンジョン内、特に『大樹の迷宮』の辺りで綺麗な歌声が聞こえるんだって」

「……歌、ですか」

「ただ、歌の発生源まで向かってても人影一つ見当たらないし、歌を歌っている本人の姿を見た者は誰一人居ないって……で、一時期、物好きの冒険者が依頼まで出してたみたいだね」

結局、見つかってないみたいだけど。とレーネは呆れ混じりに肩を竦めた。

「二つ目、18階層の中央樹の真東、一本水晶の周辺で人が消える。つて噂」

人が消える？ 少し、というかかなり気になるな。

「その噂は？」

「んくとね、^{リヴィラ}街で食料や酒なんかを纏めて結構な量を買っていく冒険者が居るらしくてね。その冒険者が毎回中央樹の真東の辺りにある一本水晶の方に荷物を運んでいくんだって」

一本水晶、と言えばヘステイア様を攫つてベルをおびき出そうとしたモルド達が目印にしてたやつだったか。

単純にその辺りで野営していた……という話ではなさそうだな。

野営に適した場所は他にも多くあるだろうし、わざわざあんな辺鄙な所を野营地として選ぶ理由は何処にも無い筈なんだが。

「普段からアイツら変だよなって噂してた冒険者達が、リヴィラから大荷物抱えて一本水晶の方に向かって行ったのを見たみたいで、こっそりその後をつけたらしいんだけど」

「それで？」

「居なかったんだって」

「……？」

「それが、あの辺りの水晶が沢山生えてる壁際の所に行ったのは確かに見ただけど、その辺りには野营地の跡もなければ、人っ子一人居なかつたって」

普通に撒かれただけな気もするのだが。

「それが、後をつけてたのってLv・4も居たらしいよ。それで、相手のLv・3で」

「うん？」

「所属派閥は【イケロス・ファミリア】だったらしいよ」

「イケロス・ファミリア」？ えっと、ギルドの等級ランクがBだったかな。闇派閥イヴィルスとの関りが噂されてる派閥だったよな。確か、十数年前の階層攻略の記録が提出されて以降、音沙汰が無くなって……【疾風】による殲滅作戦の犠牲になったと言われてたんだっただか。

……『歓楽街』の地下に建造されていたらしい、古い地下道。そして、ダンジョン内と別口で通じてる秘密の通路。加えて、18階層に出没し、跡形もなく消える「イケロス・ファミリア」団員。

「レーネさん、どう思いますか？」

「イシュタル・ファミリア」の汚れ仕事をさせられていた彼女ならおおよそ想像が付いているのではないだろうか。彼女の立ち位置からして、直接接触こそしてないだろうが、関係のある仕事をさせられていた可能性は高い。

「うん。イシュタル様と繋がりがあつたと思う」

なるほど、二つ目についてはほぼ確定。ただ、『リヴィラの街』がどれだけ彼等に加担しているのかわからない以上、変に踏み込んで調べるのは避けるべきだな。

加えて、この件はギルドに……いや、フェルズ経由で神ウラノスに伝えておくべきか。

「他には？」

「後は、二ヶ月前に流れてた『鎧を纏った黒いミノタウロス』とか、モンスターを捕獲して回ってる密猟者ハンターとかだね」

「……前者は私も聞きました。情報は無さそうですが、モンスターを捕獲している密猟者ハンター？」

モンスターをダンジョンから生きのまま連れ出すのはギルドが厳重に禁止している。

それこそ例外的に「ガネーシャ・ファミリア」が調教テイムしたり、調査する目的で連れ出される事はあれど、それ以外の目的————生きてままのモンスターの売買等————は厳重に取り締まっていたはずだ。

そして、その密猟者ハンターというのが……。

「イケロス・ファミリア」ですか？」

「あー、ぐめん。そこは確定情報じゃないんだ」

「……と、言うこと？」

「うん、密猟してる奴らが居るって噂はあるんだ。でも、誰なのかは確定した情報が無いんだよね」

「そもそも情報の出処となった人物は探索中に死亡済みとなっているらしい。」

「口封じされましたかね」

「ううん、激戦の末に、だったらしいよ」

「怪物贈呈とかじゃなくて？」

「いや、自分でグリーンドラゴンに挑んでいったみたい」

「死亡時の状態。というか目撃した冒険者の話では。」

異常な雄叫びを上げてモンスターと交戦するその冒険者の姿を見つけた際、付近に宝石樹があったそうなのだが、その宝石樹の守護竜であった『グリーンドラゴン』に対していきなり突撃して死闘を繰り広げた後、その戦闘で負った傷が致命傷となって命を落とした、と。

その冒険者達は残された宝石樹から得た宝石に加え、その冒険者の亡骸を地上へと持ち帰り、所属派閥の主神へと献上したらしい。

「神様もその子達は嘔吐いてないって言ってたらしいんだよね」

「神が断じるって事は、本当にグリーンドラゴンに挑んで死んだ、と……？」

密猟者を見た、という噂を流した冒険者の情報を聞く度に違和感が増していく。

地上に残した子供も居たし、派閥の中でもそれなりに上位の冒険者だった事に加えて、死ぬ半年前に「ランクアップ」してLv. 3に至っていたと……。

無理して【偉業】を成そうとして死んだ、というには最期の行動が不自然過ぎる。

加えて、その冒険者の人物像。性格は、そんな無茶は絶対にしない人物、との事。

「目撃した冒険者に直接話を聞いたんだけど、目が赤かったって聞いたかな？」

「目が、赤い？」

「見間違いかもしれないけど、目が真っ赤になって、狂戦士バーサーカーみたいになつてたつて」「……その人のスキルでしょうかね？」

「さあ？ すっごく不自然な死に方ではあるんだけど、目撃者は嘘を吐いてないっていうね」

その冒険者の人物像からすれば有り得ない死に方をした。しかし、目撃者は一切嘘を吐いておらず、加えて亡骸だけでなく、守護者グリーンドラゴンが守っていた宝石樹の戦利品も全て相手の派閥へと献上している。

賄賂で黙らせたともとれるが、その冒険者は主神のお気に入りの人だったらしく。これまでに他の神がちよつかいをかけた際に抗争おっぴじめて相手の派閥を半壊状態にまで陥らせるぐらいだったとの事。

そのことを考えるに、眷属の死に宝石を献上された程度で赦すのは考えにくい……。

「エラく不自然な話ですね」

「だねえ……一応、根も葉もない噂なんだけど、精神を操られていたのではないか。なんてのもあったね」

これまでの経歴や性格等から有り得ない死に方をした彼は、精神を操られてそんな行動をさせられて謀殺された。と……？

魔法でそんな事が……いや、呪詛カースなら出来るのか？ 呪詛対策を考えていた方が良さだろうか。

「後は似たり寄ったりかな。でも傾向としては「イケロス・ファミリア」関連はそれなりにあるね」

「……わかりました。情報感謝します。他に何かあれば……あー、五日後以降にお願いしますね」

大変興味深い噂話を聞く事が出来た。

おおよその推測にはなるが、数年前に「疾風」が暴れた際、騒ぎに乗じて「イケロス・ファミリア」は姿を晦ましたのではないだろうか。傍から見れば「疾風」に壊滅させられた風を装って……。

「イシユタル・ファミリア」と関係を持っていたのも彼等……だろうか？

窓を開けて外に出る準備をしているさ中、ふと気になってレーネに問いかける。

「レーネさん」

「なあに？」

「歓楽街にあったあの地下通路、何の為に作られたモノなのかご存じですか？」

フリユネが主神に黙って使っていた秘密の隠し通路。

アレは存在理由が意味不明過ぎる。未だに地下に建材を多く持ち込んでいるというのも不自然だ。

もし、あの古い時代に作られた通路を更に拡張する為に多くの建材を地下に運び込み続けていたのだとしたら、おおよその推定した規模だけでも頭が痛くなりそうな程になりかねない。

「うーん、ごめんね。私も良く知らないんだよね」

小首を傾げながら、窓枠から先に外に出るレーネを追って窓枠に手をかけた。

下から手を伸ばして降りるのを補助してくれながら、彼女は続けた。

「ウェヌス様曰く、だけど……奇人『ダイダロス』が作ったんだけど、目的は……ダンジョンの模倣じゃないのって？」

「……えっと、ダンジョンの模倣ですか？」

窓枠から外に出てみれば、視界に広がるのは無数に錯綜した階段、脇道、扉、建物。規則性なんて微塵も感じられない複雑怪奇な街並みが見て取れた。

「詳細な地図なんか作ってないからわかんないけど、あの地下通路の雰囲気って何処か此処と似てるねって……いや、違うかなあ？」

「どういう事です？」

「……うーん、上手く言い表せないんだけどねえ？ この通りってダンジョン歩いてるみたいじゃない？ あ、モンスターは出ないけどね？」

ダンジョンみたい。というのはその通りだ。というか、そうでなければ『迷宮街』なんて異名はつかないだろうし。

「それで、あの地下通路……えっと、フリユネが使ってたの以外にもいくつかもあるんだけど」

「……あるんですか?」

「うん、ここの『ダイダロス通り』とかも含めてね?」

そのどれもが規則性、という言葉を何処かに投げ捨てた建築様式。それは何処か未完成な、模倣された『迷宮』^{ダンジョン}を思わせる。

故に、『ダンジョンを模倣しようとした』か。

「それに……この迷宮街。三か所だけ開かない扉があるらしいんだよ」

「……開かない扉?」

「うん。しかも材質もヤバいらしいよ?」

————不壊武装^{デュランダル}の材料にもなる、超硬金属^{アダマンタイト}を超えた最硬精錬金属^{マスタールインゴット}。

『オリハルコン』製の扉が、この迷宮街に隠されているらしい。

「……ね? 怪しいでしょ?」

「怪しい処か、ドンピシャでしょ。で、場所は?」

「えへへ……ごめん、場所は知らない。というか……」

「……なんですか?」

「あー、酔っ払いの戯れ言?」

「は?」

「それがね——」

余りにも怪しい、というかほぼドンピシャなその情報の出処は、泥酔した爺さん。らしい。

普段から酒ばかり飲んだくれて家から追い出され、ここ『ダイダロス通り』に住む浮浪者の一人。そんな彼が深酒しながらダイダロス通りを歩いていたら見つけた、と法螺を吹いていたらしい。

「はあ……期待して損したんですけど」

「まあ、怪しいっちゃ怪しいから、私はその『オリハルコンの扉』っていうのを探してみようかなあって」

今まで誰にも見つかる事の無かった迷宮街の秘密の扉。もしそれを一番乗りで見つける事が出来たのなら、少しはウエヌス様への土産

にはなるんじゃないか、と。

「ふうん……何かわかったら私も教えてくれるとありがたいですね」

「うんうん、良いよー」

階段に降り立ち、興味深かったり、ふわふわとした真っ黒な噂話をしてくれた彼女は軽く手を振ると、そのまま腰の鞭を振るって高い位置にあった柱のでっぱりに絡め、いつぞやの時の様にすっ飛んでいく。

狭く猥雑で複雑に入り組んだ地形であるのに、鞭をでっぱりや魔石灯に絡めて立体軌道のままに速度を落とす事無く動く彼女に呆気にとられた。

多分だが、迷宮街みたいな閉所空間でレーネ相手に奇襲されたら成す術無く叩き潰されそうな気がする。特に、周囲にある木箱や塵なんかを投擲してきて攪乱された拳句の高速奇襲なんて想像したくもない。

俺の得意な戦場はやはり見晴らしの良い平原だな。キューイが居ても反応出来なさそうだし、こんな所はさっさと出ていくに限る。

「それにしても、『オリハルコンの扉』ねえ」

酔っ払った爺さんが偶然見つけたと騒ぎ立て、その後探したが結局見つからなくて、酔っ払いが勘違いしただけ、という法螺話としてまことしやかに囁かれる噂。

少し気になるのだが、この迷宮街を調査するとなると骨が折れそうだ。まあ、今は謹慎中に等しいししないけど。

真っ赤な矢印で記された道標アリアドネを見やり、出口であろう方面に向かって歩みを進めていく。

その途中だった。

「……？ ベル？」

何処か見覚えのある白髪の少年がこそごとと隠れる様にして歩いているのが見えた。

思わず目を擦り、確認すると、確かにベルがそこに居た。距離はこそこ離れており此方に気付いた様子はない。というか誰かの後を追っているみたいだった。

曲がり角の先を覗き込み、ふと慌てた様子でその角を曲がって
く。

こんな所で何を？　　というか、追跡者ストーカー染みた行動をするとは、少し
不自然だ。

俺も少し足を早めてベルの後を追った。

「ちよつと、ベル。こんな所で何をしてるの？」

「うわ!?　ミ、ミリア!　ま、待って、違うんだ。これは、その、アー
ニヤさんの依頼で!」

こそこそと誰かの後をつけているベルに小声で声をかけると、びく
りと大きく跳ねて振り返り、即座に言い訳をし始めた。

どうやらそれなりに後ろめたい事をしていた様子ではあるのだが。
アーニヤさんの依頼?

ベルが誰を追っていたのか気になって、壁の影からベルが尾行して
いたらしい人物の背を伺う。

「……シルさん?」

「あー、ミリア、その、アーニヤさん達がね。シルさんを尾行して秘密
を持って帰って来いって……」

「……はあ?」

白い清楚なワンピースに麦わら帽子。そして大き目のバスケット
を抱えながら歩いている様子があ。

ベルのしどろもどろな言い訳を聞くに、アーニヤさん達からの頼み
でこんな事をしていた、と……。

「いや、原因は聞きませんが、声かけた方が良いと思うんですけど」
ただの街娘であるシル・フローヴァという少女が歩くには、この迷
宮街は物騒過ぎる。

「えーつと……」

戸惑う様に頬を搔くベルを軽く睨んでみる。

というか、シルさんを尾行していたのか。いくら知り合いでも尾行
するのは流石にどうかと思うんだが。それに、何処から尾行してきた
のやら。

「あー、えつと、ほら、シルさんが行っちゃうし……」

「……はあ、まだ続けるんですか？」

「いや、その、ほら、シルさんが襲われたりしたら……」

シルさんが暴漢に襲われる瞬間に颯爽と駆け付けて、とやりたい訳？ ちよつとどうかと思うんだけど。

「いや、違うよ……いや、違わないのかな」

自信なさげにうろたえる姿に溜息を吐きつつ、シルさんの通った道の先を見やると、大きな建物の前で彼女は立ち止まっていた。

迷宮街の奥地に建っていたそれは、寂れた教会だった。

思わず見入ってしまう。かつて「ヘステイア・ファミリア」が本拠としていた廃教会と似た雰囲気を持つその建物からは、懐かしさすら感じられた。

そんな風に懐かしさと寂寥感に苛まれている間に、シルさんはその教会の中へと入って行ってしまう。

「ミリア、あの教会。シルさん、入っていったよね」

「……追います？」

「うん」

自然と足を動かし、小径の終わりである広間に出た。

水の出ない壊れた噴水が広間の中央にあり、教会自体は他の建物にめり込む様に建っている。

「ヘステイア・ファミリア」の元本拠とは異なり、木造りで大きい教会だ。だが、高階の窓硝子の大半が割れており、雰囲気は廃教会と言っても良いぐらいではある。

いや、周囲の建物も似たり寄つたりな雰囲気なので、この辺りではこれが一般的なのだろうとは思うのだが。

ベルと共に歩みはじめ、扉の前に立った。

「で、ベル。どうします？ 行きます？」

ベルはただのストーカーではなく、シルさんの身の安全を陰から守っていた、という事にしておいて、これ以上深入りするのかわ、と問うとベルは戸惑いがちに頬を掻いた。

「……ここまで来たら、出来ればシルさんに声をかけておきたいかなって」「……まあ、良いですけど」

ベルが先頭で「おじやまします」と言つて、古い木扉を開けて中に入っていく。

その後ろに続いていると、ベルが驚愕の声を漏らした。

「つて、広っ!？」

正面から見た印象は他の建物にめり込んでいた事もあつて想像が出来なかつたが、内装は外観の奇抜さに反してかなり広い様に見受けられる。

幅が数十M^{メートル}ありそうな壁には部屋に通ずるいくつもの扉があり、正面のずつと奥には祭壇が見えた。天井は凄く高い。ただ、床のタイルは割れて雑草が生え放題なのが少し気になるか。

少なくとも「ヘステイア・ファミリア」の元本拠であつた『廃教会』よりもはるかに大きい。

そんな内部には長椅子が積み木の様に積み上がっているのが見えた。どことなく^{バリケード}阻塞の様な印象を受けるんだが。

「何だか……子供の秘密基地みたいだ」

ベルと俺とで若干感性が異なるらしい。俺には来る何かから身を^{バリケード}守る阻塞に見え、ベルには秘密基地に見える。と……。

その違いは色々な所からくるのだろうか。ベルの場合は純粋な部分から、俺の場合は……映画とかか？ 椅子や家具なんかでバリケードを作る様な場面があるし。

それにしても、シルさんの姿は見えない。何処かの小部屋に行っているのだろうか、と首を傾げていると心配がした。

ベルの方が先に気付いていたのか既にそちらを向いている。

祭壇奥に向かつて進んでいた俺とベルの右手側の扉の一つから、金髪の子供が顔を出していた。

「……だれ？」

ぼーっとした表情を浮かべる、金髪のエルフの子供だ。どことなくレーネを思い起こさせる。

「あ……え、えっと、僕は怪しい者じゃなくてっ、ひ、人を探しに来ただけど……」

「人……う？」

子供相手に何を緊張しているのか、と呆れてしまう。

そんな弁明を告げるベルを見ていたその子は、首を傾げながらも扉から出てきた。

少しくすんだ色合いの金髪に、ちよこんと尖った耳。純潔のエルフの尖った耳とは異なる様子から、半巫人だハーフというのが伺える。

じーっとベルの顔を見つめた後、今度は視線を下げて俺の方に視線を向け、同じ様にじーっと見つめてくる。数秒間そうしていたが、次には警戒心を抱く様子もなくトコトコと無警戒に近づいてきた。

「警戒心が無いわね」

「あなたたちは、大丈夫な人だから」

思わず眩くと、抽象的な言葉をもって返された。

レーネの様に頭の中ではしつかりと考えているタイプなのか、それとも彼女なりに最初の接触で警戒すべき相手なのか見定めたのか。

どうあれ、彼女から見て俺とベルは警戒を抱く相手ではない、と判断されたらしい。

「ベル、子供相手に緊張してどうするのよ。それより、この教会に――

――

「おいっ、ルウ、出てったらシル姉ちゃんに見つかって――誰だっ、アンタら!？」

「ライ、どうしたの?」

警戒心の無さそうな子供の名前は多分だが、ルウというのだろうか。というのを察した。

彼女が出てきた扉から別の子供の声が響き、直ぐに駆けてきてハーフェルフの子を抱き寄せる様にしてベルと俺から引き剥がした。と
いうか、彼の視線に映っているのはベルだけだな。

茶髪のヒューマンの男の子に、尻尾を縮める犬シアンスロープ人の女の子。どちらも敵意を宿し、それ以上に緊張した様子が見える。

突然現れた人物に警戒しているのだろう。むしろこちらの反応が一般的だと思うんだが。

「ごめんっ、僕達は変な事をする積りは無くてっ、人を探しに来たんだけどっ……っつて、今シルさんって言わなかった!？」

「……言った、けど」

「その人を探しているんだ！ どこにいるか、知ってる？」

慌てながらも少年の言葉にシルさんの名があつたのに気付いていたのか、ベルが問いかけると二人は顔を見合わせて困った表情を浮かべる。

裏表が余り無さそうで、すぐ感情が出るのが子供らしくて愛らしい事だ。

少しほっこりした気分になっているさ中、二人に庇われていたハーフェルフの子供、ルウが自身を抱き寄せる手をぽんぽんと叩いて呟いた。

「ライ、フィナ……この人達、大丈夫」

子供特有の、時折見せる大人の汚い部分を見抜く鋭い観察眼、だろうか。それとも単に警戒心が薄いだけか。どちらにせよ、彼女の言葉はライとフィナと呼ばれた二人の子供が信じるに値するものらしい。

おずおずとした様子ではあるが、警戒心を緩める二人を前にベルが安堵の息を零していた。ちよつと、情けない。

「……シルお姉ちゃんの、知り合いなの？」

「あ、うん。ごめんね、驚かせて。それで、キミ達は？ あと、この教会って……」

屈んで視線を合わせてその子供達に優しく問いかけるベル。

未だに緊張が完全に解けないのか、肩に力が入ったままの二人に比べ、ルウという子は緊張が見られない。凶太い、というかマイペースというか。

そんな彼、彼女らの奥、三人が出てきた扉の奥からは他にも数多くの子供が顔を出してちらちらと此方を伺っているのが見えた。

小さく手を振ってあげると、何人かの子供が応える様に手を振り返してくる。無邪気で良い事だ。

まあ、ここがどういった施設なのかは、おおよそ察しが付いた。血の繋がりが無さそうな多種多様な種族の子供が数多集まった、迷宮街の建物。奴隷売買を目的とした場所か、孤児院かのどちらかだろう。

この施設の雰囲気から後者以外ありえないが。

「ライ、ファイナ、ルウ……ここはボク達とマリアお母さんの家」

ベルの質問に答えたのはハーフエルフの子だった。

男の子、女の子、自身と順々に指差し答える。茶髪でヒューマンの男の子がライ、犬人の女の子がファイナ、ハーフエルフの子がルウだろう。

ベルの方はこの『家』が何なのかまだ察しがついていないのか首を傾げている。

「えーっと、何をやっていったの？」

「……シルお姉ちゃんのお弁当から逃げてたの」

あー、なるほど。周囲で阻塞バリケードの様に積み上げられた長椅子ってシルさんを防ぐものだった訳か。

………シルさんのお弁当、どれだけ恐れられてんだよ。

「それよりベル、相手が自己紹介したのに名乗らないのはどうなの」

「え？ あっ、ごめん。僕、ベル・クラネルって言うんだ」

「私はミリア・ノースリスよ。……あなた達より背は低いけど、子供じゃないからね」

彼女らと比べると、非常に悲しい事ではあるが俺の方が背が低い。ちよっと蛇足っぽい説明ではあるが、子供ではないアピールは大事だ。

贅沢言わないから150Cセルチぐらいは欲しかったなあ。

「ベル・クラネルとミリア・ノースリス……白い髪に赤い目、ちっちゃい背丈に金髪、赤と青の目——第二級冒険者だ!」

「[リトル・ルーキー]！」

「[魔銃使い]だ！」

「戦争遊戯の!」

ちっちゃい背丈ってなんだ、と思わず突っ込みを入れるより前。

男の子の叫び声を聞いた奥に居た子供達が一斉に飛び出してきた。ぎよっと眼を見開いて驚くベルは反応が遅れ子供達の波にのまれてしまう。俺は咄嗟に近くに積み上がったいた長椅子の上に跳んで避難して難を逃れた。

「すげーっ、本物!」

「兎人じゃないのに兎みたい!!」
ヒュームバニー

「ねえ、武器見せてーっ!?!」

いくら軽いとはいえ、連続しての子供の体当たりにはベルが姿勢を崩し、そこに良い一撃が入ったのかベルが「ぐふう!?!」と苦悶の声を響かせ、体がくの字に曲がった。

長椅子の阻塞バリケードの上から見物していると、下に群がった子供達が俺を見上げて目を輝かせる。

「すげーっ、瞬間移動したみたいだ!?!」

「どうやったの!」

「ドラゴンをげぼくにしてるって本当!?!」

興奮気味に長椅子の阻塞バリケードをよじ登ろうとする子も居るらしい。危ないからやめなされ。本当に危ないからやめなされ。

「ほら、危ないから登らないの」

「——ミリアツ!」

「ん? つと、はいはい」

ライと呼ばれた少年を筆頭にした包囲網を敷かれて囲まれて体によじ登られているベルが此方に鞘に入ったままの刃物えものを投げてきた。

子供達に刃物なんか触らせられないという配慮に加えて、子供を相手に振り払えないという優しさが混じっているのだろう。

無理な姿勢から投げたにしては的確に俺の方にとんできたそれを受け取った、その直後。

「ちよっつ——わあああああああああああああああああああ
あっ!?!」

ベルが背中から地面に倒れて子供たちの下敷きになった。

大丈夫だろうか、と長椅子の上からベルを見ると、他の子供は「すごーい!」と曲芸でも見た様にはしゃいでいる。

「ほら、あんまりはしゃがないの。怪我したら危ないでしょう」

「えー」

落ち着かせようと言葉をかけるも、子供達からの批難の声がかかる。

「な、なにっ、なんですか!?!」

「みんな!？」

案の定というべきか。騒ぎ出した子供たちの声とベルの悲鳴を聞き付けたのか祭壇の奥の扉から二人の女性が飛び出してきた。

年配のヒューマンの女性。多分マリア母さんという人物と、シルさんだ。

床に仰向けに転がり、子供達に群がられて髪やら頬やら引つ張られる情けない恰好をしたベル、長椅子の阻塞バリケードの上に乗った俺、と順に視線を送ったシルさんが驚いた顔を浮かべた。

「あの、何を……しているんですか？」

「あ、はは……僕にもさっぱり、何がなにやら」

「今まさに、有名税を払っている所ですよ。この子達相手にね」

空笑いを返すベルと、冗談を零す俺。そんな俺達を見て、シルさんは目を瞬しばたかせた。

第二〇四話

「もうっ、それじゃあ私の後をつけてきたんですか？」

「ぐ、ごめんなさい……」

子供達による城攻めを思わせる猛攻にベルが陥落してシルさんと孤児院の責任者らしき女性に見つかった後、教会の奥にある食堂へと俺とベルは案内された。

大きな円卓についたベルがシルさんに怒られ、俺は出された白湯で唇を湿らせていた。

塗装が剥がれ年季の入っている様子が見え隠れしているこの教会ではあるが、かなり使い込まれているであろう魔石灯や燭台が生活感を感じさせる。

シルに叱られるベルと、その横で素知らぬ顔をして白湯を口にする俺を、二十人は居る子供達が興味津々といった様子で見つめていた。

「えーと、それで、つまりこの教会は……」

「はい、クラネルさん。ここは孤児院になります」

円卓の対面に腰掛けている女性、この孤児院の責任者であるマリア・マーテルさんは微笑みを浮かべた。そんな彼女の両隣には先のハーフエルフの子供と、別の子が腕に抱き着いている。

微笑ましい光景に自然と頬が緩みそうになるが、この孤児院が癒着してる方だったら流石に俺も黙ってはいられない。そんな風に思いつながりも彼女から語られる話に耳を傾ける。

この教会は元々は捨てられた空き家であり。マリアという女性と食堂に揃う子供達はそれなりに長い間この教会に住み着いているとの事。経営、と呼べるような事はしておらず、ただ毎日子供達と賑やかに、慎ましく生活していると語ってくれた。

語り口に不自然な部分は無く、彼女が身に着けている衣類も質素極まりない。頭の上で纏められた黒髪に、少し痩せ気味で温和そうな表情。身寄りの無い子供達から「お母さん」と呼ばれ慕われている。

不自然な部分はそう無いし、ごく普通に慈悲や母性から子供達を保護しているだけの人物ではないか。

それに、マリアという女性が子供達に向ける視線は、疑いの余地が無い。子供達が大好きだというのが視線一つで十二分に伝わってきた。

「でも、その……孤児院って」

「ベル、『ダイダロス通り』にはこういった孤児院は少ないわ」「そうですね」

そんな数少ない孤児院の中で、この様に子供が大好きだからという理由で保護している本来の孤児院として正常に機能しているものはそう多くはない。

最初はこのこと同じ様に子供達への慈悲や母性から創められた孤児院だったものも多い。しかし、経営難から非合法な事に出し、それで稼げると味を知ってしまった者が堕ちて————人身売買の為に子供を集める様な孤児院も無くはない。

無論、端から子供達を商品として回収する下種もまた、それなりだ。ましてや、こういった正常に機能している孤児院の子供を攫って売る外道も、言いたくはないがそれなりに居る。

子供達が見知らぬ人の来訪を警戒するのは、当然だ。

当然だが、わざわざそんな真つ黒な話を子供達の前ではしない。する訳がない。……それでも、一部の子は既にその事を知っているのだろうな。

「迷宮都市ではどうしても孤児の数が多くなってしまいます」

「それは、どうして……？」

ベルが住んでいたのはきつと人の数が少なく、それでいて生活に余裕のあった村か町だったのだろう。

こういった大都市になってくれば、失敗から転落して子供を育てられなくなった親が子供を捨てるのは珍しい事ではない。

そして、避妊等といった知識の無い男女が快樂に身を任せて子を成す事なんてそこら中にありふれた事だ。更に、この『ダイダロス通り』のすぐ横には『歓楽街』。数多くの娼婦が産まれた子を捨てる為にここに足を運ぶのは常識となっている。

それに加えて、ここ迷宮都市オラリオの主要産業は魔石製品、引いては魔石

の採取——危険極まりない、冒険者という職が主要となつてゐる。他の要因と異なり、冒険者と街娘が将来を約束して子供を産み落としたとしても、冒険者の男が命を落として女と子だけが残される、なんて事も往々にして良くある事だ。

その中でも冒険者が所属していた「ファミリア」が養う事を拒否する、という事は、胸糞悪い話だが少なくない。というか、7割近くが拒否されている。女の手一つで育てようとする者は多いが、その内の何割かは親の責任を放棄し、子を貧民街である此処に置き去りにする訳だ。

「最初は同情心でした。ですが、親に置いて行かれた子供達を放っておけず……この教会を無断で借り、名ばかりの孤児院を開く事にしました」

「……無断で、ですか？」

「はい。持ち主は疾うの昔にここを放棄した、と聞き及んでいます」

………。あー、この女性は凄く良い人だ。

優しい気な眼差しを子供達に向け、子供達から慕われる素晴らしい人格者。なのだが、ちよつと怖いな。この人が、ではない。この人の周囲の環境が、怖すぎる。

もし、もしもこの教会の『持ち主』を騙る奴が現れて、勝手に使用していた代金の取り立てと称して……ああ、胸糞悪い考えは止めよう。

「お一人ですつと、ですか」

「はい。将来を誓った男性は居ましたが、彼は冒険者で」

先立たれ一人置いて行かれてしまった、と。

そんな彼女と相手の冒険者の間には子をもうけられなかったそうだが、この貧民街で闇夜の雨露に濡れる赤ん坊を見つけ、他人事とは思えず見捨てる事が出来なかつたらしい。

そして捨てられている子を見つけるたびに保護して回っている内に、今の大所帯になったそうなの。

「……………」

一通りの話を聞いたベルが子供達の顔を見て表情を曇らせた。

「何だよ、【リトル・ルーキー】。俺達は母さんと一緒に暮らしていて幸せなんだ。そんな目で見るなよっ」

「ご、ごめんっ」

この都市の暗い一面を知ってしまい、思うところはあるのだろう。だが、ここはまだまだ表層も表層。子供達は凄く幸せそうだし、この女性も、この人なりに幸せを謳歌している。

実際、ここは凄く穏やかな時間が流れているはずだ。そして、今後もそれが続いて欲しい。

酷い所は、もつと暗く澱んでいる。きっと、今のベルでは想像も出れない。けれど、それでいい。少なくとも、今はこの孤児院に胸を痛めるぐらいで丁度いい。

この孤児院の子供達からすれば、不本意極まりないのだろうかね。

ライ、というヒューマンの男の子に吠えられたベルが慌てて謝罪の言葉を口にするのを聞きつつ、ライ君に、こらっ、と嗜めるのをやりわりと止める。

「今のはベルが悪いですから」

「うん、そうだよ。本当にごめん」

「……わかればいいんだよ、わかれば」

反省する様に頭を下げるベルに、ライ君の方が言い詰まる。少し言い過ぎただろうか、と困っている様子に苦笑を零すと、彼に睨まれてしまった。

「ええつと、でも、お金の方は大丈夫なんですか……?」

話題を変えようとベルが質問を飛ばすが、その話題運びはどうなんだろうか。

実際、先立つ物がなければこんな大勢の子供は養えないだろうし、気にはなるだろうが、資金繰りの質問は余り印象が良くないと思う。無論、ベルにそんな意図はないだろうが。

「はい、何とかなっています。慈悲深い女神様達が、援助してくださっているのです」

少なくとも女神が援助を断ち切らない限り、彼女が墮ちる事は無い

だろう。いや、もしかしたら援助が断ち切られても彼女は子供達の為に身を張ろうとするのかもしれないが……その末路は……。

なんだか悪い方向にばかり考えが向いて仕方が無い。今の彼らが幸せならそれで良いだろう。

「ここ、一応名前もあって【マリア孤児院】というのですが、ここ以外にも孤児院はいくつもありまして」

『ダイダロス通り』に点在するいくつかの孤児院に対して、極一部の【ファミリア】の主神達はそういった施設に資金援助をしてくれているのだという。無論、余裕のある金額ではないだろうが。

それでも、女手一つでは子供達の世話で手一杯であり、なんとか食いつないでいられるのはその援助のおかげではあるらしいが。

「ねえ、ミリア……」

「ベル、言われなくてもわかるけど、ヘステイア様やリリに相談してからお願い」

後、俺がこの話題を持っていくと間違い無くリリが怒るのでベルから切り出してくれ。今の俺は仕事を増やす真似をすると自分の首を二重の意味で絞めかねない。

純粋に仕事が増えてきついのと、仕事を増やした事でブチギレるであろりり達の相手だ。控えめに言って死ねる。というか、この孤児院以外にも援助したい、等と言われると資金繰りがヤバイ。借金あつて余裕が無いのに……でも、援助してあげたいと思う。でも資金が……借金が……仕事が……リリが……。

ベルと小声でやり取りしていると、くすくすとシルさんが肩を揺らしていた。

「シルさんとはお会いして以来、よく遊びに来てもらっているんです。子供達の面倒も見せて頂いて、大変助かっています」

「あ、そういう事だったんですか……」

「これでシルさんの謎の一つを解明しましたね。気分はどうです、ベル?」

「謎が解明されちゃいましたね。探偵のベルさん?」

「は、はい……」

揶揄う様にくすくすと笑うシルさんと共に肩を揺らす。

何でも、暇さえあればシルさんはこの孤児院に顔を出しているらしい。というより、酒場の仕事が無い日はもっぱらこの孤児院に足を運んで子供達の相手をするのだとか。

「シルお姉ちゃん、お店のお料理もつてきてくれたりしてるんだー」

「最近、毎日来てくれる……」

シアンスロープ
犬 人の、フィナが元気よく。ハーフエルフの子供がぼつりと補足する様に答えた。

楽し気な子供達の様子を見るに、シルさんも慕われているのだと思う。思うのだが、シルさんから隠れる為にバリケードモドキを用意していたのは何故だろうか？

ベルの方は最近『豊穰の女主人を休みがちだった』理由が氷解したのか納得した様に頷いてる。

事情を知ったベルと俺に、「リユー達には内緒ですよ?」とシルさんが口元に指を当てた。

お店をサボって子供達と遊んでいると知られたら怒られる、この事だ。

「ちゃんと事情を説明したらわかってもらえると思いますか……?」

「あー、えつとね……ミリア、耳貸して?」

「うん?」

ちらり、とライ君の方を見やったシルさんが小声で事情を説明してくれた。

名誉の為にその人物の名は伏せるが、どうにも店員の一人がシヨタコン少年性愛の気があるらしい。

「リユーは腹芸が出来ないし、アーニヤはポロリと零しそうだし。ルノアは面白がって止めなそうだから……」

「待ってくださいシルさん、それ誰がシヨタコンなのか言ってるも同然なんですけど」

確かにリユーさんは腹芸が出来ない。アーニヤさんはふとした瞬間に零しそう。ルノアさんなら面白半分に話してしまいそう。

じゃあ、シヨタコンなのは誰かって話だが。もう接客でフロアに出

てるので残ってるの一人しか居ないだろ。

「実は、ベルさんのお尻に、その……」

「……………?」

「れ、劣情を催した、なんて暴露した事があって……」

クロエさん、アンタって人は……。

若干気まずげに耳打ちしてくれたシルさんを一瞥した後、ベルをちらりと見やる。

「ど、どうしたの?」

「……ベル、クロエさんに気を付けてくださいね?」

「え? クロエさんに? なんで?」

「なんでも、です。特に身の危険を感じたら本気で殴っても許されるでしょう」

「どうかあの人が強い訳だし、本気で襲ってきたら何も出来ん。」

不思議そうに首を傾げるベルを見て、どう伝えるべきか考えていると、ガタリと椅子を揺らしてライ君が身を乗り出して声をあげた。

「なあなあ、それよりダンジョンであったこと、聞かせてくれよ!」

うきうきとした、何処か興奮気味に身を乗り出す彼以外にも、他の子供達もまた同様に興奮と期待を緋い交ぜにした視線を俺達に送ってくる。

ベルが面食らっていると、シルさんは「してあげてください」と微笑んだ。

頼まれ、せがまれ、期待の眼差しを向けられたベルが俺の方を伺ってくる。

「ベル、話してあげれば良いと思いますよ」

「え、でも僕話すの上手くないし、ミリアの方が……」

「私より、ベルの話の方が面白いですって」

確かに相手に理解させる説明をするならば俺の方が適任だろう。しかし、子供達が期待しているのは冒険者とその目で見てきたお話である。流石に適性が違う。

それに、俺が話す場合はまず危険性を訴えるだろう。

「うっ……」

「はあ、しようがないわね。じゃあ初めてダンジョンに潜った時の事でも話しましょうか」

「ミリア？」

「そうね、初めてゴブリンと戦った新米冒険者は、勝利した事を凄く喜んで——」

「ミリア!? 待って、それは待って!」

微に入り細に至るまでを懇切丁寧に解説しようかと思ったらベルが全力で止めに入ってきた。嫌なら自分で話してみると良い。それに、ベルの話なら子供達も満足するだろう。

苦笑しつつも、シルさんと共にベルのたどたどしく、照れながら語られる今日に至るまでの冒険を聞いていく。

流星に恥部になりかねない部分は省かれているが、おおよその冒険の流れが語られていく。少し、新鮮な気分になれた。

俺もベルと共にその冒険を駆け抜けてはきた。だが、俺はベルじゃないし、ベルは俺じゃない。互いに同じ冒険をしてきた、という共感があったが。やはり感じてきた事は違うのだ。

話に聞き入る子供達が顔を輝かせ話をせがみ、それに応える様にベルが少しずつ饒舌になっていき、ふと口を閉ざした。

彼が視線を向けている先を見やると、浮かない表情をしたマリアさんが居た。視線を向けられているのに気付くと「ごめんなさい」と慌てて謝罪を口にする。

「育っていった子供達も皆、冒険者になっていったので……」

彼女は眉を下げ、何処か悲し気に言う。

「子供達の多くが『ファミリア』に入団し、ダンジョンへ行って、この教会を支えようとお金を寄付してくれました……そして、誰も帰ってこなかった」

「あっ……」

「この子達は、冒険者になって欲しくない……そう、思っていて」

冒険者という職業は、ハイリスク・ハイリターン高収益率高危険率な命懸けの仕事だ。

お金を手っ取り早く稼ぐのに——詐欺や犯罪等の非合法な手

段を除けば——これ以上ない程に適している職と言える。だが、その対価として冒険者は常にその命を懸ける事になる。

これまでも、彼女が育てた子供達は、彼女に与えられた無償の愛情に応えようとして彼女の制止を振り切つて冒険者になり、他の者達同様に帰つて来なかつた冒険者の一人に数えられてしまった、と。

そんな彼女を想えば、子供達にせがまれたからと面白可笑しく冒険者業を語るべきではなかったのではないか、とベルが申し訳なさそうな表情をする。

ただ、俺からすると……残されたマリアさんの想いは痛い程にわかる。だが、同時に彼女に報いたいと無茶をしてしまった子供達の想いも十二分に理解できてしまう。だから、強く止める事も出来ない。

気まずい空気になつてしまったのに気付いたのか、ライ君が立ち上がった。

「大丈夫だよ、母さん！俺、『学区』へ行くよ！」

この場に居る子供達の中で最も年長である彼は、自らを育ててくれた母親代わりの彼女の嘆きを理解し、その必要は無いと笑つた。

「あそこで沢山勉強して、頭も体も強くなつて、お金を稼げるようになってやるー！」

「うーん……『学区』なら私は勿論、止めないけれど……」

「おかね学費だつて平気だよ、『しょーがくきん』つてもものがあるんだろ!？」

今年、学区はオラリオに帰つてくるし、ちょうどいいじゃんか！」

「ライの年でも入学できるのかしら……」

『学区』か。学費の問題『奨学金』の方に関しては、正直かなり厳しい基準を満たさなければならぬから難しいのではないか、と思う。

有名派閥から推薦状を出されるか、本人自身に相応の才能と資質がある事が認められない限り、奨学金制度を利用できないだろう。彼にそこまでの才能や資質が備わっているかは未知数だが、可能性は高くない。いや、ゼロではない、と言つた方が良いか。

他の子供達も彼につられて口々に「私もいくー!」「僕もー!」と気まずい空気を吹き飛ばす様に騒がしくなる。

『学区』……?」

「お兄ちゃん、知らないのー?」

「何だよ、【リトル・ルーキー】、それでも冒険者かよー!」

フィナちゃんやライ君等、ベルが知らないとみるや得意気になり、
擲揄いはじめた。羞恥を覚えたのかベルが空笑いを零していと、子供
達の擲揄いの矛先は俺の方にまで向けられた。

「もしかして【魔銃使い】も知らないのか?」

「私は一応知ってるわ」

肩を竦めると、シルさんがぱつと立ち上がった子供達を戒めた。

「こら、年上をからかっちゃ駄目! それに、二つ名じゃなくてちゃん
とベルお兄さん、ミアお姉さん、でしょう?」

「えー、でもミアってお姉さんって感じじゃないし」

「ライ君?」

「はあい」

彼女に注意されてバツが悪そうにする子供達の中で、ライ君だけは
ボソリと反論を零す。

確かに、背丈的な意味では子供達の中に混じっても違和感がない処
か、最年少の子より低かったりするが、それでも肉体年齢も精神年齢
も俺の方が上だ。……背丈以外全部勝ってるんだぞ?

子供相手に大人げない勝負を内心繰り広げていると、カラアンカ
ラアン、と。

都市の東の方角にある鐘楼から響く、正午を告げる鐘の音が聞こえ
てきた。

「あ、お昼ですね。それじゃあ、昼食にしましょう」

伴って、シルさんは円卓の上にバスケットを置いた。大きなそれに
入れられていた物が次々に取り出され、円卓の上に並べられていく。

中身は容器タッパに入れられた大量の料理だ。お肉やサンドイッチ、色と
りどりの野菜に……なんか色合いが少し変な気もするが、色々な物が
沢山ある。

困窮しがちな子供達への差し入れだろう。ちよつと、なんか、子供
達が苦渋の表情を浮かべているのが気になるが。

「あ、あれ、どうしたの?」

「シルお姉ちゃんの、お弁当……」

疑問を覚えたのかベルが近くに居たフィナちゃんに問いかけるが、彼女も含め殆どの子供が苦渋の表情を浮かべている。のほほんとしてそうなルウという子供まで無言で口を引き結んでいるのだ、相当だと思ふ。

初めて彼らと出会った際、彼等は『シルお姉ちゃんのお弁当から逃げています』と言っていた。その意味がこの容器の中に入っている料理の数々なのだろう。色合いがちよっと変なのは気のせいじゃないみたいだ。

そんな子供達の様子にマリアさんが苦笑しており、普段からこの様子なのが伺える。

「それじゃあ食べましよう！」

まるで女神の様な微笑みをもってシルさんが食卓に号令をかける。

子供達は酷く葛藤した後、背に腹は変えられないと諦めたのか食糧に手を伸ばし始めた。

「う、うう……」

「今日は、また、すごい……」

「食べなきゃ、食べなきゃ勿体無い……!」

料理に口をつけた子供達の苦鳴くめいが食卓に響き始める。

真つ先に手を伸ばしたフィナちゃんは必死に口を動かし、ハーフエルフの子は口元を引き結びながら、ライ君は自らを鼓舞する様に。その彩りがちよっとおかしな料理に手をつけていく。

自らを育ててくれた母親マリアさんの事を想う子供達は、出された料理は残さない様さまにしているらしい。

「……ねえ、シルさんから貰ランチう昼食ランチって微妙な味わいだけど、そこまで酷くはないよね？」

「ベル、シルさんにそれ言ったら駄目だからね？」

小声でベルに問われ、思わず本気でベルの頬を引っ叩きかけた。

シルさんの微妙な料理、いや確かに微妙な味わい、言い得て妙ではあるんだが。

そも、ここ最近「ファミリー」が大きくなってシルさんに昼食ランチを貰

う必要がなくなつた、とベルが『豊穰の女主人』を訪ねた数日後、顔色が悪くなつたアーニヤさん達が本拠ホームにまでやってきて『頼むから弁当を受け取ってくれ』と懇願してきたのは記憶に新しいだろうに。加えて、その時のリユーさんはお腹を押さえてふらついていたし。

ここに置かれている料理がシルさんの手作り、誰の為に作ろうとしているのかなんてすぐ察しが付くはずなんだが……ベル、ちよつと鈍感過ぎない？

思わず顔を引き攣らせていると、子供達の余りの苦しみつぷりに疑問を覚えたのがベルがサンドイッチに手を伸ばし——ひよい、とシルさんにお弁当ごと取り上げられた。

「ベルさんは駄目です」

「えっ、でも……」

「ダメです」

「あ、はい」

満面の笑顔でベルを威圧して引き下がらせるシルさん。

両手でお弁当を持った彼女は「この子達の為に作つたんですから、ベルさんが食べたらいけませんっ」と頬を染めて恥じらう。そして、お茶を入れてくる、とバスケットをもって食堂の奥へ引っ込んでしまった。

「シルお姉ちゃん、女の人の顔してた……」

「きつと、お弁当を美味しいって言つて貰いたい人がいるんだ……」

子供達は察したのかベルに恨めし気な視線を送り始める。

「シル姉ちゃんが弁当作ってくる様になつたのは、兄ちゃんの所為だつたんだな……」

「前まで美味しいお店の料理だつたのに……」

「ボク達、実験台……」

流石のベルも子供達から向けられる怨嗟の視線から、この惨状の原因が自分にあると気付いたのか冷や汗を流し始める。もつと早くに気付けよ、とツツコミを入れるのを放棄して、俺は試しにミートパイに手を伸ばす。

まあ、いくらなんでも食べられない程じゃないだろう、と口に入れ

「ミリア？」

動きを止めた俺を見たベルが心配そうに声をかけてくるが、俺は今口の中にある物質の処理で忙しい。咀嚼？ 無理。このまま飲み込むしかない。

「お、おい、無理すんなって……」

小生意気なライ君ですら心配そうな表情を浮かべる程に俺は酷い表情をしているのだろうか。

「これ、どうぞ」

フィナちゃんが入った水を差し出してくれたため、それを使つて強引に飲み込んだ。

「シルさん、味見、してんでしょうかね、これ？」

「してたら……こんな味に、ならない……」

ルウ君が至極当然の事を呟く。子供ですらそんな当たり前の事がわかるというのに、シルさんときたら……料理を舐め腐ってんじやないだろうか。味見もせずに作ったモノを他人に提供するとかちよつとどうなの。

「というか、この料理を子供達に食べさせるのはどうなんだ？ とマリアさんを伺うと、彼女は俺とベルから視線をそつと逸らした。

「食べられなくはないですし、とても、非常に、ありがたいですよ？」
決して視線を合わそうとはせずに、言い訳を零すマリアさんを見たベルが表情を強張らせ、俺は額に手を当てて天井を仰いだ。

「……ベル、私ちよつとひとつ走り行ってくるわ」

「え？ どこに？」

「流石にコレだけ食べさせてお終い、っていうのは可愛そうでしょう」
うん、ミートパイであれだったんだから、他の料理がどんな味だったのかはおおよそ想像がつく。

余りにも子供達が哀れなので、ちよつと同情したのだ。というか、本当に酷いな。いつもベルに渡してるアレがはるかにマシだと感じ

る程に酷いとは思わなかったよ。

「あの、そう気遣いして頂かなくても……」

「大丈夫。私、それなりにお小遣いはあるのよ」

「これまで自分のお小遣いで色々と『ファミリア』助けてた事もあつて、リリから自分の為に使う以外禁止と言ひ渡されて強引に渡されたお金がいくらもある。」

それに、味はともかく量はそれなりのお昼を食べてお腹も一杯だろう。三時のおやつにでもちよつとしたつまめる物でも買って来よう。

「でもミリア、戻つてくれる?」

「大丈夫よ。本拠^{ホーム}でゴロゴロしてるキューイ蹴り起こして案内させるわ」

どうせキューイは暇してるだろうし。アイツ、最近はダンジョンに潜る以外の時は部屋でゴロゴロしながら林檎齧つてるだけだしな。

あんまり腹に溜まるものだと食べられないだろうし、軽めの焼き菓子か……ドライフルーツ辺りだろうか。保存の効くドライフルーツをそれなりに買ってくるのが良さそうだな。

第二〇五話

一度ベルと別れて本拠に戻り、室内でゴロゴロしていたキューイを叩き起こしたのは良いのだが、外に出るのは億劫で嫌だ、とあのポンコツはほぎきやがる。

拳句の果てには全力で抵抗し始めたため、キューイの同行を諦めてクリスを連れて行くことに。キューイ程ではないにせよ、クリスも索敵能力はそこそこあるし、何より小さいために隠しておけるのも大きい。

『冒険者通り』に軒を連ねていたいくつかの店を回り、ドライフルーツや焼き菓子等をいくつか購入し、加えて冒険者向けの保存食である固パンや塩漬けの干し肉等も少量購入して再度、『ダイダロス通り』にある孤児院に向かった。

キューイがごねた所為で多少時間がかかってしまったが、それでも一時間と少し程度で戻ってきてみると、教会の割れた窓から微かに子供達のはしゃぐ声が響いているのが聞こえてくる。

「ベル、シルさん。戻りましたよ」

「あ、ミリア」

「ミリアさん、わざわざありがとうございます」

ベルは男の子達に囲まれて冒険者ごっこに興じており、シルさんは女の子達で集まって童謡ナーサリーライムを歌いながら、いわゆる閑所遊びをしている様子であった。

「ミリアお姉……ちゃん、何を買ってきたのー？」

「それ、運んでやるよ」

孤児院では最年長らしいヒューマンの少年、ライ君が手を差し出してきたのを見て思わず目を丸くしてしまう。

俺が持ってきた荷物を運ぼうとしてくれる様子だ。どうにも、俺の方が背丈が低い事もあって頼りない風にも見えているのだろうか。

「大丈夫よ、貴方達は遊んでなさいな」

「本当に大丈夫なのか？ そんなにちっこいのに」

孤児院では最年長とはいえ、彼は11歳になったばかりの子供。そ

んな子供相手にむきになつても仕方が無いのだが、背丈の話題は止めて欲しい。【ファミリア】内で最小なのは若干気にしてんだから。

「こら、ミリアさんは確かに小さいけど、こう見えても凄い魔術師なんですからね」

「……シルさん、フォローどうも」

正直、シルさんのフォローはフォローになっている気がしない。こう見えても、ってシルさんも同じ様に思ってるって事だろうし。

僅かに溜息を零しつつ、奥で内職に勤んでいるミリアさんの元に購入してきた食品をいくつか渡しておく。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。と言つても、不法侵入してしまった事に対する謝罪の意味もありますから」

「私も勝手に使わせて貰っている立場ですので、そこまで気を遣わなくても」

恐縮した様子で食料品を納めた袋を受け取るミリアさんの様子に肩を竦める。

別に害意や他意はない。子供達の様子を見て哀れんだ、という失礼だが、俺が崇め奉る主神かみの事もある訳だし。

「この孤児院の存在を知りつつも何もしない、というのはヘステイア様……【ファミリア】の主神かみが知ればきつとお怒りになるでしょうから」

身寄りの無い子供を放っておくのは女神の存在意義に関わる。

一応、ここにはマリアさんという庇護者は居るが、子供達が親の居ない孤児である事に変わりはない。ヘステイア様はそれを見過ごす何てことは有り得ない。

バイトに勤んでおり話は出来なかつたが、ヘステイア様ならば必ずこの孤児院に手助けを申し出るだろう。

「そうですか。本当にありがとうございます」

「いえ、他に困り事等あれば相談していただければ……あー、一週間後には、対応できるかと」

何度も頭を下げて感謝を告げてくるミリアさんに手を振り、広い教

会内へと戻る。

扉を開けた瞬間、小さな悲鳴が響いた。

「きやあつ!？」

何事かと急ぎ広い教会内へと飛び込むと、シルさんがスカートを抑えて頬を赤らめており、そんな彼女に視線を向けているベルが顔を真っ赤にして目を見開いて硬直していた。

シルさんのすぐ横には、呆気にとられた様子のライ少年も居る。

何事かと眉を顰めていると、犬シアンスロップの少女、フィナがちよこちよこと近づいてきた。そんな彼女と共にハーフェルフのルウも寄ってくる。

「いつもライがシルお姉ちゃんのスカートを捲ろうと狙ってたんだけど」

「……一度も成功した事無かった」

見た目相応に悪戯小僧らしいライ少年は、シルさんがこの孤児院に顔を出す度にスカート捲りをしようとしては失敗していたそうだが、今日初めて成功して啞然としているらしい。

側に寄って来てひそひそと子供達が事情を説明してくれる間にも、シルさんはベルに詰め寄っている。

「男の人に下着を見られてしまうなんて……ベルさんっ、こうなったら罰として私のお願いを一つ聞いてもらいます!」

「ええええええっ!？」

「聞いてくれないなら……リユードに下着を盗み見されたって、言っちゃいますよ?」

「卑怯ですよ!？」

揶揄い半分ではあるものの、もし実際にシルさんの口からそんな言葉がリユードさん達に伝えられたとしたら、冗談抜きで半殺しにされそうではある。

「初めて、成功した……」

「ああ、やっぱりわざとなんだ……」

「技と、駆け引き……」

俺の下に集まって来てシルさんに畏怖の視線を向ける子供達を見

て、思わず彼らに言い聞かせる様に呟く。

「良いですか、ああいう女性を悪女、と言うんですよ。ライ君は将来、ああいった女性に弄ばれない様に気を付けてください。フィナさんはああいった女性にならない様に……ルウ君には少し早いですね」

俺の言葉を聞いていた子供達がこくこくと頷き——突然、視線をシルさんの方に向けて顔をひきつらせた。彼らにつられて俺もシルさんに視線を投げかけると、にっこりと笑顔をこちらに返してくれた。

笑顔ではあつたのだが、言外に『余計な事を子供達に教えないでください』と伝えてきたように思う。

序に、横に居たベルが助けを求める様に縋る視線を向けてきていたが、シルさんの圧の籠った笑顔を向けられ、俺は静かに子供達に声をかけた。

「シルお姉さんとベルお兄さんは忙しそうなので、こちらで私と遊びましょうか」

「ミリア姉ちゃん、冒険者の癖にシル姉ちゃんが怖いのか……？」

「シルお姉ちゃん、冒険者より強いんだ……」

「あの目には、逆らえない……」

情けない、等と言わないでくれ。馬の後ろ脚に蹴られたくはないのでね。

シルさんとベルから距離をとって離れた位置から二人を観察しつつ、興味津々といった様子で質問を飛ばしてくる子供達に対応していく。

「ミリア姉ちゃんとベル兄ちゃん、どっちが強いんだ？」

「魔術師だからお姉ちゃんじゃない？」

「でも、【リトル・ルーキー】は速いよー！」

質問を飛ばしてくれたライ少年も含め、子供達はやれこうだからこつちが強い、と私論……というか、僕が思う強い要素、を姦しく並べ立ててくる。

実際に俺とベルが戦闘になった場合、単純にベルの方が強い。とは言い切れない。

「時と場合、状況によりますね」

「……………」

一斉に首を傾げる子供達の様子は少し可愛らしくはある。

とはいえ、小難しい議論を彼らに説明するのも無粋なので本当に簡単にさらっとだけ。

「私の場合、ほら、『ドラゴンテイマー』でもある訳ですし。キューイ
やヴァン……竜種と共に袋叩きにするならベルなんてけちよんけ
ちよんに出来ますが。私自身はあんまり強くないですから」

「えー、でもすつごい魔法が使えるんじゃないの?」

「そうそう、お城がどつかーんってなる魔法!」

両手を大きく広げてその魔法の威力の凄さを全身で伝えようとしてくる子に微笑ましさを感じるが、多分その子が言いたいソレはヴェ
ルフの『魔剣』であって、俺の魔法とはまた違う物だと思っただが。

「魔法には『詠唱』が必要ですからね。発動に時間がかかるんですよ」

「知ってる! 『詠唱』が長い程、強い魔法なんだよね!」

「でも、短いと発動が早い」

得意げに胸を張ったフィナ少女が語るのを、ルウが補足する様に呟く。

魔法の話題になると、子供達はどんな魔法が使えるのか、と興味津々に問いかけてきた。本来ならば教えたりするのは良くないんだが。

「まあ、戦争ウォーゲームで知れ渡っているでしょうし、少しぐらいは良いですかね」

「銃撃魔法なんですよ!」

「ボク、見てみたい!」

「私も見たーい!」

わいのわいの、と子供達が魔法を見たいとせがんでくるが、それは少し難しい。

「攻撃魔法は危ないから無理よ。回復魔法とか……後は、そうね、人形術とかなら、良いかしら?」

人形ドールズ師型の魔法、人形操作ならば特に問題はないだろうか。丁度、

第二クラスを人形師にできていますし。

「少しだけ、魔法を見せてあげても良いわ。まあ、条件はあるけれど」
「条件？」

「誰にも言わない事。約束できる？」

顔を見合わせ、一斉に頷く子供達に微笑みかけつつ、シルさんとベルの方を伺うと、何故かベルがシルさんに膝枕している光景が目に入ってきた。

最初はシルさんが膝枕させて欲しい、等と言っていた様に思えたが、話がどう拗れたらあなるんだろうか？

「さて、危ないから少し下がってちょうだい」

「皆、【魔銃使い】が魔法を見せてくれるって！」

ライ少年が率先して子供達に安全な距離をとらせているのを見やりつつ、クラスの切り替えを行う。

頭の上に生えてきた猫耳を撫で、腰の辺りにある邪魔臭い尻尾を揺らす。

急激な変化に子供達が「おお」と感嘆の声を上げるが、まだ序の口どころか、魔法のまの字すら使っていないんだが。

「ミリアさん、何をするんですか？」

「シルさん、今からちよこつとだけ魔法を見せてあげるんですよ。あ、シルさんも誰にも言わずに秘密にしといてくださいね」

人差し指を口元に当てて微笑むと、シルさんはベルの膝の上でこくりと頷いた。

ベルの方は膝の上でシルさんが動いたのが擦ったかったのか、それとも気恥ずかしさを感じたのかベルが耳まで赤らめて未だに助けを求めてくる。

残念だったなベル、流石の俺も今の幸せそうなシルさんの邪魔は出れない。そう、眠れる獅子を蹴り起こす真似なんかするはずがないのだから。

「で、どんな魔法を見せてくれるんだ！」

率先して子供達を先導してくれていたとはいえ、彼自身も気になるのか急かしてくるライ少年に苦笑しつつ、周囲を見回す。

「では、不肖ながらボクが人形劇を披露させて頂きたく思います」

あえて大仰な仕草で気取った一札を披露すると、子供達の頭の上に疑問符が浮かんだ。

魔法を見せてくれるのではなかったのか、と首を傾げる子供達と、つられて不思議そうな表情を浮かべるベルとシルさんの様子を見やり、手で顔を隠して仮面を装着する様に表情を固定する。

ケツトシー・ドールズ型。人形師として育ち、その優れた技術を見出されて複製クローンを作成され、戦闘用の人形量産に従事させられた猫人の少女。

オリジナル 原点の少女が目指していた人形達が繰り広げる人形劇を、このうらぶれていながらも子供達の笑い声に満ちた場に披露しようじゃないか。

僕の膝を枕代わりにしているシルさんが身動きする度、くすぐったさや羞恥が湧き上がってくるが、それ以上に眼前に広がる劇に、僕は視線を奪われていた。

始まりは、子供達に魔法を見せてあげる、とミリアが言った事であり。期待に胸を膨らませる子供達の前で、たしか、ドールズ型、というクラスに変貌したミリアが雰囲気を一変させた。

普段のミリアを知っていれば、違和感を感じる様な気取った態度で、まるで演技の様に……否、実際に演技なのだろう、大仰な仕草で始まった。

「では、出演者達に集まって貰いましょうか」

最初に、ミリアは「人形複製」というスキルで魔力から人形を生み出した。

何も無い空間に淡い光の粒子が人形を形作り、光が弾けると其処には銀の鎧に蒼穹の外套を纏った騎士が居た。それだけで子供達が感嘆の声を響かせ、次々に生み出されていく人形を目にしては歓声を響かせる。

割れた窓から差し込む朝日に照らされた、罅割れたタイルから雑草

が繁茂する舞台には相応しくない。場違いに思えるぐらいに気取った態度で生み出された人形数体。

豪華な服を着飾り、髭を蓄え王冠クラウンを頭に乘せた老人人形。

細部に至るまで精巧な飾り細工の施されたドレスを着て、冠飾りティアラを乗せた女性の人形。

他にも何体も、中には怪物の人形の姿もある。まるで本物の様に精巧で、まるで本物の様にも見えるそれらに子供達が息を飲む。

「我は奏者、奏でる者成りて——」

次に、詠唱と共にミリアの足元に魔法円マジックサークルが生み出される。その瞬間に子供達が身を乗り出すぐらいに目を輝かせるのを、僕は何処か微笑まし気に見ていた。

こんな距離で魔法円マジックサークルを見るのは初めてなのだろう。街中で魔法を使う人なんている訳が無いし、もしいたとしても、直ぐにその場を離れるべき非常時だから。

しかし、よく考えてみると僕自身も魔法円マジックサークルをまじまじと観察するのはこれが初めての事なのかもしれない。話によれば人それぞれ、魔法円の絵柄は異なるらしい。

「我は操者、操る者成りて——」

外周円に踊る文字は共通語コイネーでも、多分神聖文字ヒエログリフでもない。見たこともない文字で、内縁部には複雑に入り組んだ線と円で構築された図形が描かれている。見た所で何かがわかる訳ではないけれど、まじまじと観察してみると思わず引き込まれそうになる。

「ベルさん、私、魔法円マジックサークルをこんな近くで見たの、初めてかもしれない」

「僕も、こんな風にじっくり見た事はあんまりないかも」

ダンジョンの中ではもつと早くに詠唱を終えていた様に思えるが、あえてそうしているのか、ミリアは魔法円マジックサークルに目を奪われている子供達の為に、ゆっくりと詠唱を進めていた。

「汝は傀儡、五指奏でる調べに踊れ」

強い輝きを放つと、魔法円マジックサークルが霧散して消える。

唾を飲む音が聞こえるぐらいの静寂が場に満ち、一見何も起きてい

ない様に見える事から子供達がきよろきよると周囲を見回し始めた所で、ミリアが口を開いた。

「これより、遠い異国での出来事をお話を致しましょう」

左手を胸に当て、右手を僅かに上げて大仰で恭しい一礼をする金髪の少女。それを見た子供達が目を真ん丸に見開いて動きを止めた。

それは、僕やシルさんも同様だった。

騎士の人形が片膝を突いて跪き、王様の人形は小さく頷き、姫様の人形は微笑みと共に一礼を披露する。

ミリアの周囲に生み出された数多くの人形達が、各々の役職に合った様な仕草や動作で一礼している。まるで生きた人間の様に、違和感のない仕草をもって。

それこそ、まるで命を吹き込まれた、と言われても違和感を感じない様な出来だった。

「あくる日、王が愛を込めて育てていた一人娘の姫が、怪物に攫われてしまいました」

其処から、ミリア自身が語り部として何処かに国の童話を元にした物語を語りながら人形を動かしてく。

舞台は古びた教会の広い室内。長椅子は全て取り払われ、子供達の遊び場としても使われていた空間だ。それが、ミリアの魔法で一級の劇場へと姿を変えた。

場面に登場しない人形は外周に散り、中央には王が一人残される。嘆く様に、草臥れた様子でよろよろと歩みを進めながら、割れたステンドグラスを見上げて祈る老人。まるで攫われた姫の身を案じているかのような仕草だ。

其処に、着込んだ甲冑の音を響かせた騎士が登場する。

「攫われた姫の身を案じる王の下へ、一人の騎士が訪れました。騎士は謳う、我こそが姫を怪物の魔の手から救い出して見せましょう、と」

内容は、言ってしまうえばありふれていて地味な、シンプル 姫を救う騎士の物語。色んな物語を嗜んできた僕からすると、ほんのちよっぴり物足りなく感じる様な、内容。

けれど、そんな物足りなさも直ぐに消えてなくなった。

場面が切り替わる度に人形達が入れ替わり、その場に応じた人形が出て来ては活き活きとした動きでその場面を、その光景を形作っている。

「獣の息遣いが響く森の中、騎士は木々の影から自身を狩ろうとする存在に気付き、その剣を鞘から抜き放つ！」

「ごくり、と思わず唾を呑み込む。」

甲冑姿の騎士が剣を抜き放ち、周囲を警戒する様に一歩、また一歩と歩み——次の瞬間、僕達の頭を飛び越える様に狼の人形が躍り掛かる。

いきなり頭上を飛び越えた影に子供達やシルさんが悲鳴を零した。その際、シルさんがぎゅつと抱き着いてきたため、僕は違う意味で悲鳴を上げた。

怪物は、人が近寄らなくなった古城に姫を幽閉して閉じ込め、騎士を待っていた。

恐ろしい四足の獣が徘徊する深い森林。巨大な大蛇が住まう湿地帯。人の血を啜る吸血蝙蝠が蔓延る洞窟。その全てを超え、騎士が怪物に挑まんとする頃には僕もシルさんもその人形劇に引き込まれ、手に汗を握って騎士に心の中で声援を送っていた。

「騎士の放った一閃は見事怪物に止めを刺した。その証拠とし、怪物は塵と消えました」

満身創痍。

美しい輝きを放っていたはずの銀の甲冑は薄汚れ、凹み。真っ蒼だったはずの外套サイコットは火に炙られ、刻まれ、襷褌サウコトに成り果てている。その手に握られていた剣も、半ばから折れてしまっていた。

怪物の元へ至るまで、そして怪物を屠りきるまでの間に騎士は数多くのモンスターと戦い、傷を負い、それでも一度も止まる事無く、歩み続けていた。

「尖塔の一つ、そこに捕えられた姫の下へ、その足を引き摺り、騎士は歩みを止める事はありません」

教会の奥、壇上の前で鎖に繋がれて跪いて祈る仕草をしている姫の

人形の元へ、騎士が歩み寄る。

騎士が姫を縛る鎖に触れると、鎖は呆気なく塵と化し、姫を呪縛から解き放った。

「騎士は見事に姫を救いだしたのです」

ボロボロで情けない姿ではあるが、それでも姫を救う為に数多の冒険を潜り抜けてきた騎士、英雄の姿に子供達が目を輝かせる。そんな子供達に混じって、僕も同じ様に目を輝かせていたけれど、ふと気付くとその熱がほんのちよっぴり、過去に比べて褪せているのに気付いた。

「ミリアさんの人形劇、思わず引き込まれてしまいましたね」

「……………」

「ベルさん？」

「え？ ああ、うん、僕も思わず引き込まれちゃった」

劇が終わり、人形達が次々に時間切れで霧散していく中、最後まで残っていたお姫様の人形が微笑みながら手を振って消えていく。

「シルさん、ベル、どうでした？」

「最高でしたよ！ 普通にお金とれるレベルでした！」

「うん、僕も、思わず引き込まれちゃった」

少しはしゃぎ過ぎただろうか。興奮した様子の子の孤児達に囲まれながらも聞いてみると、シルさんは絶賛してくれ、ベルも楽しめた様子だった。

孤児院の中で表現するには少し無理があった場面もいくつかあって省いてしまったが、それでもおおよその流れは出来たし、満足ではある。

戦闘用ではなく演劇用の人形とはいえ、一日に何十体も作成、運用するのはきついな。

「お金とるのは難しいですね。一日に一回講演出来れば良い方ですし。それするぐらいならダンジョンに潜りますって」

あれだけの演劇に割とシャレにならない量の魔力をつぎ込んでい

るのだ。特に、大型の怪物系人形が割と消費が大きい。それと、四足獣型の人形操作が中々に癖が強い。操るだけで集中力も必要だし、今後は四足獣型の人形は避ける事にしよう。

今日の人形劇は、孤児院の子供達を喜ばせる序に、俺自身の人形操作技能の向上にも役立ったから無駄ではなかったと思おう……休みの日に何してんだ、とりりに怒られそうなので黙っていないとなのだがね。

「ミリアさん、大丈夫ですか。疲れてないですか？」

「ん、大丈夫。と言いたいけど少し魔力を使い過ぎたわね。休憩したいわ」

魔力以外にも、語り部として声を張り上げていたのもかなりきつい。

肩を竦めていると、視界の端で孤児の中でも幼い子達が欠伸をしているのが見えた。

「シルさん、欠伸してる子が何人か居るのでお昼寝させてあげた方が良いんじゃないですかね」

「あ、そうですね。じゃあ二階に行きましようか」

眠たげに目を擦りながら、ふらふらと頭を振っている子供の手を握って二階へと連れて行ってあげると、寝かしつける必要もなく幼い子達は夢の世界へと旅立っていった。

そんな風に眠った子達につられてか、他の子達も次々に眠たげな様子を見せ、最年長のライ少年も欠伸を零していた為、苦笑しつつも彼等を寝室へと連れて行った。

「ぐっすり、眠っちゃいましたね……」

「そうですね……」

「良い寝付きねえ……」

この孤児院の寝室は一階の食堂と同じぐらいの広さで、床には無数の毛布が敷かれていた。

部屋の隅には擦り切れた絵本や、欠けた積み木等も転がっており、一見して子供部屋とわかる風景が広がっている。

そんな部屋の中で、小さな体を寄せ合い、雑魚寝をする子供達の様

子は非常に微笑ましい。

そんな中、シルさんは眠りこけるルウの頭を優し気に撫でていた。その様子に俺も思わず欠伸が零れる。

「ふああ……眠いわ」

「ミリアさんも、寝かしつけて欲しいですか？」

「んー、そうね。少し魔力を使い過ぎたし、私も少しだけ昼寝しましよ
うかね」

子供達が奏でるさまざまな寝息を聞いて居たら、消費した魔力も相
まって眠気が襲ってくる。

その様子を見たシルさんが揶揄う様に告げてくるが、俺自身として
は昼寝したい気分でもある。とはいえ、ここで昼寝するのは少し心配
ではあるんだが。

「ベルさんもどうですか？」

「遠慮しますっ」

俺を揶揄えないと判断したのか即座にベルを標的にするシルさん
だったが、膝枕の件を未だに引き摺っている様子でへそを曲げたベル
は、すげなく断った。

その様子にシルさんはクスクスと笑みを零した。

「クラネルさん、ノースリスさん、シルさん、お疲れ様です。子供達の
お相手をして頂いてありがとうございます。お疲れになられたで
しょう？ 私に任せて休んでください」

音を立てない様に静かに扉を開けて入ってきたマリアさんの言葉
に、ベルとシルさんは頷いている。

俺も休むか、と欠伸混じりに寝室を出ようとする、マリアさんに
引き留められた。

「ノースリスさんも、ここで昼寝などいかがでしょう。日当りも良
いですし」

「んー……魅力的なお誘いね」

人当たりが良く、ヘスティア様と似た雰囲気のマリアさんに誘われ
ると思わず頷いてしまいそうになる。が、一応俺は冒険者で、尚且つ
目立たないとはいえ武装もしている。

万が一にでも子供達が怪我なんかしても困るし、眠るならば武装をどこかに保管して欲しいが……。

「ベル、私の武器と道具をお願い」

「ミリア、昼寝するの？」

「ええ、少し、ね」

帯革ごとベルに短剣や回復薬ポーションの入ったポーチを渡しておく。んで、何かあったらクリスに叩き起こして貰うか。

「ミリアさん、おやすみなさい」

「おやすみ、シルさん」

小さく手を振って二人を見送り、寝ている子供達の子守りをしているミリアさんから離れた壁際に背を預けて座った。

くあ、と欠伸を零していざ一眠り、といこうとした所で、ミリアさんが声をかけてきた。

「こちらへどうぞ」

「ここで大丈夫よ」

「そうですか」

子供達に混じって昼寝しても、きつと違和感なんかないのだろうが、少し気恥ずかしい。

温かに差し込む日差しに照らされて健やかに眠る子供達をぼんやり見つめながら、思わず呟きが零れた。

「この子供達が羨ましいわね」

「……そうでしょうか？」

子供達に向けられる愛しみに溢れた表情で、此方を見る事なく呟くミリアさん。

そんな彼女に愛を注がれて健やかに眠る子供達。彼、彼女らは皆、親に捨てられた孤児達だ。そんな子供達を羨ましい、だなんて言うのは少しおかしいのかもしれない。

けれど、実際に羨ましいと思ったのだから仕方ない。

「貴女みたいに、素敵な母親と出会えたんですもの。思わず嫉妬してしまいそうだよ」

ミリア・マーテルという女性が母親代わりとなって愛情を注いでく

れているのだ。母親、というものに良い思い出のない俺からすると、
凄く羨ましい。

こちらを振り返ったマリアさんは、少しだけ嬉しそうに、それでい
て困った様な微笑みを浮かべている。

「そう言って貰えると、嬉しいですね」

「本心よ、割とね」

徐々に重たくなる瞼に反して、口はどんどん軽くなっていく気がする。
る。

「私の母親なんてとんだロクデナシだったから……代わりに、ヘス
ティア様とか、貴女みたいな人が……」

母親だったとしたら、どれほど良かった事か。

重たくなった瞼を下ろし、徐々に意識が遠のいていく。揺蕩う様な
感覚の中、背中に感じていた壁の感触が離れ、温かな誰かに抱き寄せ
られた気がした。

第二〇六話

カタカタ、と小さな物音を認識して目を開ける。

壁に凭れて寝ていた積りが、いつの間にもやら子供達の傍に寝かされていたのに気付いて身を起こす。

「あ、ミリア姉ちゃんが起きた」

「おはよー」

すると、既に目覚めていたらしいライ少年やフィナ少女が小声で声をかけてきた。

「ええ、おはよう」

まだ数人は夢の中に居るらしいため、起こさない様に立ち上がり、子供達から距離をとる。

いつも寝ているベッドに比べ、木製の床に毛布を敷いただけだった為か体の節々が若干痛むが、それを除いても久々に倦怠感の伴わない爽快な目覚めだ。

理由は、この孤児院の雰囲気だろうか。等と益体も無い事を考えていると子供達は次々に目を覚ましては直ぐに元気一杯に動き回り始めた。

「子供は元気ねえ」

「ミリア姉ちゃんの方が子供みたいじゃなか」

背丈が自身より低いのもあってか、完全に舐めてる。というよりは此方の実力がわからない様子のライ少年の言葉に肩を竦めていると、下の階に向かった子供達の沸き立つ声が響いてくるのが聞こえてきた。

二階を降りると、教会入口でベルとシルさんの二人が子供達に囲まれているのが見える。

筆頭は犬人のフィナであり、しきりに「二人でどこ行ってたのー!？」と詰め寄っていた。詰め寄せられた二人の内、シルさんは恥ずかし気に頬に手を添えてちらちらとベルを伺い、ベルは若干焦った様子で誤魔化そうとしているのが伺えた。

いくら子供相手とは言え、いやむしろ子供相手だからこそ誤魔化する

のは悪手にも程がある。誤魔化そうとするのを見透かした子供達
より強く追及しはじめ、ベルはたじたじになっていた。

一瞬だけ視線をこちらに向けて助けを求めてくるが、肩を竦めてお
いた。流石に助け舟を出すのはどうかと思うしね。

そんな風に苦笑していると、奥からマリアさんが出てきた。

「おかえりなさい。クラネルさん、シルさん。ノースリスさんはおは
ようございます。よく眠れましたか」

「ええ、とても良く眠れたわ。ありがとう」

本当に久々によく眠れた気がする。

休日に孤児院を訪れて子供達と目一杯遊んで、昼寝をして帰る。な
んとも贅沢な休日の使い方だったじゃないか。魔力も十分に回復し
てるし、そろそろ帰ろうか、とベルに視線をやると、マリアさんが微
笑みながら提案を口にした。

「よければ、今日は晩御飯も召し上がっていきませんか」

「え……でも……」

急な提案にベルが困った様に頬を掻く。

俺としては居心地は良いしもう少し居てもいいかな、と思ってい
る。ローブの内ポケットの中に入れておけばなしかったクリスの方は未
だに眠りこけている様子で反応が無い。というか、クリスは本当に良
く眠るな。

ベルがどうするか次第ではあるが、子供達の方を見やればベルが迷
うのもわかる。

「もう帰っちゃうのかよ」

「晩御飯一緒に食べようよ」

「……まだ、一緒にいい」

子供達からの熱望にベルが悩みはじめ、そこに止めを刺す様にシル
さんが手を掴んだ。

「私からもお願いします……」

ベルの手を両手で包み込み、顔を近づけて「駄目ですか？」と可愛
らしく小首をかしげる。全てが完璧に計算し尽くされたシルさんの
一撃に、ベルは遂に陥落した。

ただし、これ以上遅くなるとヘステイア様達を心配させる可能性もあるので、少し早めに頂かせて貰って、ホームに急いで帰らせてもらう事にする。

ベルの承諾を聞いた子供達がわっ、と歓声を上げて喜び始める。そんな子供達の様子に苦笑しつつも、夕食が出来上がるまで少し待っていて欲しいと言われてベルと共に待つ事になった。

マリアさんと女の子達が中心となって調理場に向かい、残された男の子達が掃除をしている。そして俺とベルはお客さんという事で、手持無沙汰にそんな彼らの様子を眺めている事となった。

「ねえ……」

「ん？」

「ベル、どうしたの？」

何かに気付いた様に振り返ったベルにつられて後ろを見やると、ハーフエルフのルウがぼーっとした表情でベルの服の裾を引っ張っていた。

「どうしたの？」

「これ……」

屈んで視線を合わせたあげたベルに対し、ルウは握っていた物を差し出した。

金色の円形の金属。若干擦り減った様子の見られる金属の塊——
——金貨だった。

「お、おいっ。ルウ……」

「本当にお願ひするのっ？」

「二人も気になるって言ってた」

ルウとベルのやり取りを見ていたらしいライ少年とフィナ少女が慌てた様に駆け寄ってきた。

平坦な声色でヒューマンの男の子と犬人の女の子を閉口させている様子を見つつも、俺は肩を竦めた。

「小さな依頼者様ね、報酬は小金貨三枚……三ヴアリスね」

「え？」

「受けてくれますか？」

小さな金貨三枚、三ヴァリスを差し出して俺とベルを見やるルウの姿に、ベルが驚きの声を上げた。

そんなベルに苦笑しつつも、俺は真面目腐った態度をあえて作って子供達に告げる。

「依頼内容を聞かせて貰っても良いかしら。内容も聞かずに安請け合いはできないもの」

小さな小さな依頼者達クライアントは僅かに驚いた後、思い思いの言葉で依頼の内容を話してくれた。

依頼書として正式に手配されたものではない、個人間の契約の下に交わされた冒険者依頼クエストの内容は、『謎の声』の調査。

報酬は達成報酬として小金貨三枚。

達成条件は特定の場所で聞こえてくる『謎の声』の正体を解き明かす事。

備考として、依頼者クライアント三名が同行する事。

小さな依頼者クエストを危険から守りつつ、正体を解き明かすのがこの依頼の条件だった。

至極真面目に依頼として取り扱ってあげて、子供達のごっこ遊びに付き合っただけの積りで受けた『お願い』を達成すべく、俺とベルは小さな依頼者三人に案内されて夕暮れの色に染まる外を歩いていた。「それで、場所はどのあたりかしら？」

「もうすぐそこ」

先導してずんずんと進んでいくルウと、僅かに警戒しながら歩みを進めているライ少年とフィナ少女。

進んだ先は教会の裏手。

孤児院で世話しているらしい小規模の畑と井戸の傍を抜け、そのまま迷宮街の幅広の通りに入る。

相も変わらずに猥雑さは健在の道を迷わず進む子供の背中を追って行く。途中、廃墟然とした崩れた建物の横も通り抜け、更に先へ。暫く進んだ後、ルウは足を止めた。

「えつと、ここ？」

「うん……この辺り」

「この辺りで、うっつ、うっつ、って唸り声が聞こえてくるの!？」

「最初は犬かと思ったんだけどさ……どこにも居ないし」

最近、肝試しに夜な夜なこの通りを歩んでいたら聞こえてきたのだとライ少年とフィナ少女が告げる。夜に出歩くのは危ないんだが。

そして、その肝試し以降にここを通りかかる度にその唸り声が聞こえてくるのだという。

その気味の悪さに気になって今回の依頼を出してきたとの事。

彼らの話を聞き終えると、茜色に染まった廃墟をベルと共に見回してみる。見渡す限り続く瓦礫や木材の周辺からは、動物の姿はない。更に言えば気配すらも無い。

特におかしなところは無い様に見えるが、とそれでも真面目に耳を澄ましてみると――。

『……………ウ……………ウ』

――聞こえた。

思わずベルと顔を見合わせると、ベルがナイフを引き抜き、俺も子供達を庇う様に護身用の短剣を鞘から抜き放った。

「ベル、場所はわかる？」

「……調べてみる」

「全員、私から離れないでね」

ベルが先行して廃墟の海に登り、「ステイタス」で強化された聴覚を頼りに音の出処を探し始める。

崩れかけの廃墟を子供達を引き連れたまま通る事は出来ないの、俺は三人を連れて遠回りしつつもベルを追おうとすると、ローブの中でもぞと何かが動き始めた。

「つと、どうしたのよクリス」

連れてきていたクリスが珍しく起きてきたらしい。案内を終えてからは死んだように眠っていた様子だったのだが、今のクリスはローブの首元から強引に顔を出してきてきよろきよろと周囲を頻りに見回している。

「わっ、なんだそれ!？」

「綺麗なドラゴン!」

「……見た事も、聞いた事もないドラゴンだ」

いきなり俺の服の中から顔を出したクリスに子供達が驚愕しているのを宥めつつ、クリスに声をかける。

「この子は私の……えっと、秘蔵の竜よ。皆には内緒でね? で、クリス、どうしたの?」

《——痛いって、言ってる》

何処かぼんやりとした声色でクリスが答えた。

痛いと言っている。と彼女は言った。誰がだ?

「痛い? 誰が言ってるの?」

《——同胞。仲間、痛い、助けてって言ってる!!》

ぼんやりと、寝惚けた様子から一変し、クリスは頻りに周囲を見回しはじめた。

同胞、仲間……助けを求めている? この周辺にクリスの同胞が居る? ドラゴン、じゃない?

「ミリアー、こっちだよ!」

ベルが俺を呼ぶ声が聞こえる。

クリスが言う『助けを求める同胞』が誰なのかわからない。だが、今離脱するのは得策じゃないし、ベルに不審がられる。クリスの言う同胞とは異端児ゼノスの事だろう。

今まで気にもしてこなかった。というよりは想定していなかった事態に頭の中が真っ白になった。

異端児ゼノスが居るのは19階層より更に先、『大樹の迷宮』以降のはずだ。だから現在の到達階層が18階層で、その先に進むのはまだ先と言う事で後回しにしてきたわけで……。

まさか、地上で、子供達から受けた『依頼お願』で、異端児ゼノス関連の問題に直面するだなんて想像できないわけがない。

「ミリア姉ちゃん?」

「どうしたの、震えてるけど……」

「顔色、悪いよ……」

急に足を止めたまま動かなくなった俺を見てライ少年は訝し気な表情を浮かべ、フィナ少女は俺の手が震えているのに気付いたらしく、ルウはぼんやりとした顔で俺の顔色の悪さに気付いたらしい。

茜色に染まっている今、顔色にまで目が行くルウはかなり洞察力に優れているとは思いますが、今はそれどころではない。

「何でも無いわ。少し、少しだけこの『謎の声』に警戒してるのよ」

「でも、ベル兄ちゃんもミリア姉ちゃんも冒険者だろ？」

「モンスターだったらやつつけちゃえばいいんだよ！」

「うん」

子供達三人の至極真つ当な意見に表情を引き締め、直ぐにベルの居る所へと向かう。

三人の言っている事は間違いではない。むしろ当然の事だ。

俺もベルも冒険者で、モンスターが居れば倒すのは当たり前前だ。誰だってそうするし、むしろモンスターが居るのに討伐しようとしなきゃなんてありえないし、有り得てはいけない。

——たとえ、そのモンスターが人と同じだけの知性と心を持ってしまった異端児ゼノスだったとしても、それを庇う様な真似なんか、出来ない。

少なくとも、子供達とベルが居る時点で出来ない。

だからクリス、この『謎の声』を調べ終わるまで、『助けを求める声』の事はにおいておいてくれ。

「行きましょう」

助けなきや、助けてあげてよ、と騒ぐクリスを服の中に押し込んで子供達と共にベルの下へ向かう。

ベルが立っていたのは瓦礫の密集地帯だった。一見すればただの倒壊跡にしか見えないが、確かに聞こえる。

この倒壊跡の下から、唸り声は響いていた。まるで泣き声にも、苦しむ呻き声にも聞こえる、唸り声が、聞こえてくる。

「ちよつと下がってて」

声をかけると同時に、ベルが両手で瓦礫をどかし始める。

ライ少年達が瓦礫を軽々どかしていくベルをみて驚きの声を上げ

ているのが聞こえる。次々に瓦礫をどかしてくベルに子供達が頑張れ、と気楽そうな声援を送る横で、俺はサアーツ、と血の気が引く感覚に襲われていた。

待ってくれよ、子供達から依頼を受けた。確かに受けた、ちよつとしたごっこ遊びに付き合う感覚で、ちよつとした簡単なお願いを聞いてあげるだけのはずだった。その筈なのに——何でこうなってる。

「……クリス、助けを求めているのって、この下から？」

《そう！ 助けてあげて！ お願い、私の時みたいに！》

自分を助けてくれた俺だから、きつと今助けを求めている同胞も助けてくれる。そんな風に一切疑いも無く俺を信じ切っているクリスの言葉に、嫌になる程味わった気持ち悪さがぶり返してきた。

ベルが瓦礫を掘り返す数分間、俺はひたすらにベル達をこの場から離れさせるための言い訳を考える事に費やし——結局、良い言い訳なんか思い付かない。

今までの、前世の俺だったらベル達を煙に巻いてここから強制的に離れさせることだってできただろうに、それができない。

そんな風に頭の中でぐるぐると思考が回っている間にも、ベルは瓦礫を退けきつてその下にある通りと同じ石造りの石畳を露出させてしまった。

ああ、一目見た瞬間に察した。地下道がある。

周囲の石畳と同化する様に隠された『石板』。それはフリユネや春姫が密かに利用していた地下道に通じる隠し扉だ。しかも、下から強引に抉じ開けようとしたのかほんの少しだけズレて浮いている。

その隙間から、例の唸り声——クリス曰く『同胞の助けを求める声』が響いていた。

ベルはほんの少し迷った後、その石板を強引に抉じ開けてしまった。

「うわあ、すっげえ……!?!」

「こ、これ、地下通路？」

「お兄ちゃん、すごい……」

俺の後ろに居た筈の子供達が、舞い上がる土埃とその奥に見えた地下通路を見て駆け出していく。

興奮と動揺と感嘆、三つの言葉を聞きながら良い言い訳を探し続ける。

最良の一手は俺一人でこの地下通路に入り、異端児ゼノスの存在を確認してギルド、フェルズに連絡をとって保護してもらおう事。

次点として俺もベルもこの地下通路には入らずに帰還する事。だが、どちらも不可能だろう。

俺一人で行くには、理由が足りない。この先にモンスターが居る可能性があると説明した上で、子供達を帰す事は出来るだろう。だが、ベルを帰す理由には足りない。そもそも魔術師である俺一人で行くより、前衛であるベルが一人で行く方がまだ説得力はある。

そして後者も無い。既に子供達は好奇心に火をつけられ、俺達が帰った後にこっそりこの地下通路の探索を行ってしまう可能性がある。地下に居る助けを求めるモンスターが彼等に見つかった時、どんな反応をするかわからない以上、それはできない。

どうすればいいのかわからずにベルの表情を伺うと、既に表情は冒険者のモノに切り替わっていた。既に、引くといった選択肢はベルの中から失われている。

「みんなっ、それにベルさんとミリアさん！ もう、こんな所まで来て、何をしているんですか？」

運良く、いや運悪くか。シルさんが俺達が居ない事に気付いて孤児院の方から駆け足で追ってきた。

茜色から蒼然とした闇に移り変わりつつある空の下、シルさんの手には携行用の魔石灯が握られている。

裏手から何も告げずに出て行った俺達を怒るシルさんは、俺達が見下ろしていた地下通路へ続く穴の存在に気付いて、目を丸くした。

「あの、これって……」

「地下への、入り口みたいです。シルさん、すいません、僕ちよっと行ってきます」

ここを訪れた経緯をベルが説明している間、俺はクリスを密かに穴

の中に放った。

この先で助けを求める異端児を、可能なら隠れさせろ。と命じておく。

そうしていると、後ろで懇願する声が響いていた。

「俺も行くー」「ボクも……」「わ、私もっ、恐いけどっ」

どうやら子供達が同行を申し出てきている様子だった。思わず額に手を当ててしまう。

ベルが困った様な表情でシルさんに助けを求めてしまった――

―求める相手を間違え過ぎてるだろうに。

「こんなもの見せられて待つているなんて、難しいですよ？ 私も行きます」

笑顔でそう言い切ったシルさんの姿に、思わず舌打ちを零してしまふ。

「ミ、ミリア？」

「シルさん、それから貴方達三人。同行は認めないわ」

「えー!?」「どうして……」「な、なんで？」

「ミリアさん、ベルさんを独り占めする気ですか？」

子供達からの非難ブレイジングの声と、シルさんの軽い嫉妬した様な声に、苛立ちを感じた。怒鳴り返しかけそうになって、その罵倒の言葉を飲み込んで穴の奥を見据える。

「駄目、モンスターが居る」

「モンスターなら兄ちゃん姉ちゃんの二人で倒せばいいじゃんか！」

「モンスター……」「ね、ねえ、ライ止めようよ」

断言してもなお、ライ少年は行く気満々らしい。ルウはぼーっとした平坦な声ながらも僅かに戸惑った様子を見せ、フィナに関しては俺の言葉を聞いて完全に怯えた様子で引き留めようとし始める。

シルさんの方は真っ直ぐ俺を見て何かを探ろうとしてきていた。

「……モンスターが居る、というのは本当ですか？」

「嘘じゃないわ。クリスを先行させてるけれど、相手の強さがわからない以上、非戦闘員……それも恩恵も何も無いシルさんも、ましてや

子供なんて連れて行けない」

少なくとも今の俺が言っている言葉に嘘は混じっていない。そして正論だ。

恩恵も何も無い非戦闘員のシルさん、そして子供を連れて行くなんて冗談では済まない。彼等には悪いが、ここで引いてもらう。

「そう、ですか……でも、モンスターが居るなら行かない方が良いでしょう……」

「いえ、それは出来ません」

シルさんがベルを引き留めようとし始めるが、ベルはきつぱりと断った。

「モンスターが居るのがわかってるのに、何もせずに帰る事なんてできませんよ。ましてや、孤児院のすぐ裏手です。何かあってからでは遅いですし」

——ド正論過ぎて反論の余地がない。

シルさんもベルの言葉を聞くと確かにその通りだ、と納得して表情を引き締めた。

「では、私達はここでベルさん達の帰りを待ちます」

「……わかりました。僕とミリアの二人で調べてきます」

拒否する理由がない。ベルを同行させない理由がない。調べない理由がない。詰んでる。

どうする事も出来ず、ベルがシルさんから魔石灯を受け取るのを見て、思わず天を仰いだ。憎らしい事に、今夜は爽快な晴れらしい。気分はこんなにどんより沈んでるのに、夜空に瞬く星々は美しかった。

地下通路に揺蕩う暗闇を、ベルが手にしているランプ型の魔石灯から放たれる光が切り裂いていく。

石材の階段、石材の壁、石材の床……整然とした設計の下に作られた通路は、フリユネが密かに使っていた通路とよく似ていた。というよりはほぼ同じものとみて間違いないだろう。

「ミリア、モンスターの種類、わかる？」

「……ごめん、クリスが言うにはそれなりの大きさとしか」

既に相手の異端児と接触したクリス曰く、捻じれ曲がった二本の犬角、黒い体皮、赤の体毛、そして巨大な体躯。との事。

その特徴からして、『深層』のモンスターである『バーバリアン』の可能性が高い。

そして、その相手の状態は相当に酷いらしい。全身に裂傷を負っており、会話する事もままならないぐらいに意識が朦朧としているとの事。ただうわごとの様に助けて、と呻き声を零すので精一杯の状態な様子でクリスの事を上手く認識できていないらしい。その所為で隠れる様に指示する事も出来ず、広間の中央で座り込んでいるらしい。「ベル、多分、相手は大型種よ。一度引いて装備を整えてくるってのは……」

「それをしている間に孤児院に被害が出たら、僕は僕を許せなくなると思う」

「……わかったわ」

やはり、引き留める事は出来ないか。

「ミリア、なんでこんなところにモンスターが居るんだろうね」

「え？ ああ……さ、さあ？」

慎重に階段を下りているとベルに声をかけら、思わず声がどもってしまう。

俺の様子にベルは小さく首を傾げつつも足を踏み出そうとして、止まった。

「ベル？」

「……何か、ある」

ベルが見つけたのは壁に埋め込まれた何らかの装置だった。

一瞬だけ視線を交わし、ベルが慎重に装置に触れる。すると、ヒーン、と細い音を鳴らして装置が軌道した。等間隔で設置されていた魔石灯が光を放ち始め、完全な暗闇から、視界の利く薄闇に変化した。なんて中途半端な明るさだろうか。通路を煌々と照らすのではなく、薄らと視界を確保する程度にしか放たれない光に眉を顰める。

これじゃあまるつきりダンジョンの中じゃないか。

「やっぱり、春姫さんと通ったあの地下通路と同じだ……だとすると、

なんでモンスターが？」

「怪物祭の生き残りかしらね」

空々しくも惚けると、ベルはうーんと悩まし気に声を漏らし――
―通路の奥から聞こえた唸り声に警戒心を高めた。

そして、クリスから悲鳴の様な声が届く。

装置を起動させた事で件のモンスターは興奮状態に陥ったらしい。
来るな、止めろ、死にたくない、とぼやきながら酷く怯えた様子で警戒し始めてしまったらしい。ズンズン、と動き回る音が通路の先から聞こえてくる。

なんとか宥めようとしている様子だが、話を通じる状態ではないのか、クリスの声に反応してくれないらしい。

「ミリア……」

「わかってる……」

クリスは助けてあげて、お願い。と何度も懇願してきている。だが、ベルと共に居る状況でそれは難しい。

このまま進めば戦闘は避けられない可能性が高く。それでいてここで引く理由が一切ない。モンスターが居るのが分かっている撤退し、市民から被害が出たら洒落にならないからだ。

「行くぞ」

「……ええ」

慎重に足を進めるベルの後ろ姿に思わず歯噛みした。

戦闘になった場合、クリスの不評を覚悟の上で……件の『バーバリアン』には死んでもらうしかない。端から、選択肢なんてあるわけがない。

当たり前だ、ベルか、見知らぬ異端児^{ゼノス}か、どちらか選べって言われたら。俺はベルを選ぶ。悪いなクリス。ソイツ、助けられそうになり。

心の中で助けてあげると懇願するクリスに謝罪しつつ、件の怪物が錯乱状態で待ち構えているらしい広間の入口に辿り着く。

魔石灯の明かりが余りにも弱々しいせいで、未だに暗闇が揺蕩っている広間が見えた。

『ウウ……ウウ……ウウウ』

《大丈夫だよ！ 助けが来たからもう大丈夫だから!?》

警戒心を露わにし、見えない敵を探して唸り声を響かせるモンスターと、それを宥めようとするクリスの声が奥から響いてきていた。

「ピストル・マジック」【リロード】

「ミリア」

「いつでも良いわ」

俺の言葉を聞くと同時に、体の影に隠していた魔石灯をベルが掲げる。

恐怖に怯え震え、狂乱している声の主の姿を、暗闇の中から浮き彫りにした。

「——ミリアッ！」

「わかってるわ！」

全身の至る所に傷を負ったモンスターだ。足元にはしたたり落ちた血が乾き、黒ずんでいる様子が伺える。

どんな理由で此処にいたのかはわからない。嘆き、悲しみ、助けを求めていた事を理解しつつも、俺は指先^{銃口}を向けた。

「クリス、命令よ、下がちなさい！「ファイア」ッ！」

《ミリアッ、どうして!?!》

悲鳴の様な悲痛な絶叫を上げるクリスを命令にて下がらせるのと同時、此方を視認して『咆哮^{ハウル}』を放とうとしていたバーバリアンの肩を撃って動きを止める。

瞬間、ベルが駆け出し、魔石灯を投げ出しながら魔法を詠唱。

「ファイアボルト」!!」

初っ端の咆哮^{ハウル}を防がれ、炎雷に穿たれたバーバリアンは大きく怯む。だが、ギルド推定Lv. 3から4の、二M^{モデル}を超える大型級モンスターであるのは伊達ではないらしい。

直ぐに反撃する様に剛腕を振るってベルを狙い、ベルは大きく回避した。流石のベルでも第二級冒険者に匹敵、または超える様な膂力をもって暴れるモンスターには容易に近づけない。

そして、俺はバーバリアンの妨害する様に発砲を繰り返す。

「ファイア」「ファイア」!!」

《止めて、死んじゃう!?!》

クリスの悲痛な叫びが地下の広間に木霊する中、俺が放った魔弾だんがんがバーバリアンの膝に直撃。ほんの一瞬だけ鈍った動きに隙を見出したベルがナイフを振るい、バーバリアンの腰を掠めた。

『——ッ!!』

血飛沫と共にモンスターの絶叫が弾ける。クリスの悲鳴染みた懇願はその絶叫に掻き消されて消えない。

「良い調子よベル、そのまま——ベル!?!」

攻撃を放ち、バーバリアンに傷を負わせたベルは、何故か啞然と立ち尽くしていた。

其処に、かつと眼を見開いたバーバリアンの反撃が放たれる。その大顎から長い舌が射出され、ベルに直撃しかけ——。

「ファイア」!!」

「ぐっつ!?!」

俺が放った魔弾だんがんが僅かに舌の軌道を逸らすも、回避が遅れたベルの肩を穿った。

衝撃に吹き飛ぶベルに視線を奪われている間に、連続した舌撃が俺の『マジックシールド』をへしやげさせ、砕いた。

危うく顔面を穿たれ掛けて慌てて身を投げ出す様に回避し——
——聞こえてはいけない声が響いた。

「このっ、止める——!」

勝手についてきてしまっていたのか、入り口からライ少年が飛び出して石ころをモンスターに投げつけたのだ。

倒れた俺とベルを案じての行動なのかもしれないが、ただの蛮勇だ。

背中に命中した石片に、バーバリアンは俺とベルから視線を外して少年を見た。怪物の眼光に身を強張らせる、愚かなヒューマンの少年に——敵意に反応したバーバリアンは、ライ少年を睨み付け、突撃する。

「待っ——!!」

「ライフル・マジック」

ベルが驚愕と共に追うが間に合わない。

俺が途切れていた魔法を再度発動させようとするが、間に合わない。

怯えるライ少年が動けずについて、そのままでは死体は原型も留めないだろう。と頭の片隅で理性的な部分が囁く。それでも止めようと詠唱を重ね——ライ少年を庇う様に飛び出してきたシルさんの姿を見てベルと共に息を呑んだ。

勝手についてきてしまったライ少年を追ってきたのだろうか。どちらにせよ、恩恵も持たないただの少女であるシル・フローヴァがその身を挺して庇おうとした所で結果は変わらない。

犠牲者が一人増えるだけ。

ベルの速度も、俺の詠唱も間に合うはずがない。だから足手纏いになりかねない非戦闘員を置いてきたというのに。

最悪の想像が現実の物になる、その寸前。

『ガッ?!』

右手を突き出した姿勢のベルと、装填詠唱を唱えようとしていた俺が啞然とする目の前。

彗星の様に放たれた一本の投擲槍ジャベリンがバーリアンの体軀中央、魔石の位置を綺麗に穿ち抜いた。

『ア』

断末魔の悲鳴すら上げる事叶わず、胸部の中に納まっていた魔石を綺麗に穿ち抜かれたモンスターは、瞬時に灰の山と化した。

つい先ほどまでの戦闘が嘘の様に、灰塊が崩れる音を残して全ての音が消え去った。静寂に満ちる広間の中で、発生したドロップアイテムである『バーリアンの体毛』が未だに燃えていた。

ライ少年を庇う様に抱き締めていたシルさんが恐る恐るといった様子で顔を上げる中、俺とベルは彗星の一撃を放った人物を見ていた。

黒と灰の毛並みを持つ、猫人の男性。

「フレイヤ・ファミリア」所属の第一級冒険者。

【女神の戦車】アレン・フロームル。

「あ、あのっ……」

シルさん達の頭上を飛び越え、灰山に突き刺さったままだった投擲槍を回収する彼にベルが声をかけようとするが。

「女子供も碌に守れねえのか、クソ兔」

「ごっつ、ごめんなさい……」

鋭すぎる瞳と、静かな罵倒の言葉に遮られて止められていた。

何故ここに【フレイヤ・ファミア】の冒険者が居るのかはわからない。それに、身勝手にも俺達の後を追って死に掛けたライ少年には言いたい事が山ほどある。

だが、それ以上に俺は謝らなければならない相手がいた。

↑↓
同胞の成れの果て、灰山の傍らで結晶の置物オブジェクトと化し、動きを止めているクリスに。

第二〇七話

「ヘスティア・ファミリア」本拠の一室。

女神と一部の眷属達は居室リビングに集まっていた。

ヴェルフ、リルルカ、ディンケ、フィア、そして女神ヘスティア。

他の面々、団長であるベルは迷宮に潜り過ぎという事で息抜きを命じられ街の散策。副団長のミリアは仕事禁止令を受けベル同様に街に繰り出している。

「——それで、ここ五日ほどミリア無しで回してきた訳だが」
「ぎつい、ですね」

代表する様にヴェルフが口を開くと、酷使した手首に氷嚢を当てて冷やしていたリルルカが唸る様に呟いた。

働き過ぎでいつ倒れてもおかしくない、とまで想われていた小人族バルウムの少女が約束を破って仕事を行った罰として、女神との接触禁止令が発令されて五日。

ミリアの代わりとなって彼女がこなしてきた数々の仕事を片付けていた面々は、その仕事量の多さに辟易し、同時にそれを一人で難無く片付けていた彼女の有能さに改めて感心していた。

「リルルカは仕事の殆どを覚えたか？」

「覚えはしましたよ。ただ、考える事が多すぎて頭が回りませんよ。派閥が大きくなるのは良い事だけではないと言いますが、悪い事だらけではないですか」

元は道具の補充や「ファミリア」金銭管理の一部を任されていたリルルカは、それに加えて他派閥や商会から届く郵送物の処理の業務を行う様になっている。

冒険者同士の暗黙の了解や規則等には相応の知識を持ち、冒険者依頼クエスト、さらに商人達とのやり取り関連にも強いと自負していたリルルカが唯一知識不足だったのは、海千山千の商人が集まる出来た集団、商会とのやり取りだった。

常々派閥同士、または派閥と商会の取引における諸問題トラブルについては幾度も噂として耳にしたことはある。それらに注意すれば良い、と意

気込んだりリルカだったが、認識が甘かった。

個人同士ならばある程度は話し合いで解決するが、組織同士となるとそうはいかない。加えて、間に誰か人を挟めば認識の齟齬が大なり小なり発生する。それは間に多くの人が居ればそれだけ大きく、致命的な物になっていく。

改めて組織間における取引の難しさを再認識したりリルカは、ミアがその辺りを下手に誰かに任せようとしなかった理由を正しく認識し、その上でその仕事を受け持ったのだ。

気苦労は絶えず、更に文面内に散らされた落とし穴や組織間の関係性、下手に取引をして別の組織から恨みを買わない為の方法の模索。もはや頭の中は如何にこれらを処理するかでいっぱいだった。

「ロキ・ファミリア」みたいにある程度形が出来てて、立ち位置が決まってるなら対応も決めやすいだろうが」

都市大派閥として名が知られる「ロキ・ファミリア」は立場を明確にしている。

友好派閥と敵対派閥を完全に振り分け、敵か味方かを判別し、敵なら都市の住民から批判を受けにくい理論武装をしてから殴りかかる。それが出来る下地が出来上がっている。

派閥同士の繋がりも強固であり、なによりも明確に『ロキ派』として大一派として君臨し、立場を明確にしているのだ。

対し、今の「ヘステイア・ファミリア」はいきなり大きくなった新興派閥状態。友好派閥はいくつもあれど、明確に親密な仲間となっている派閥はどれも中小派閥。

関係を持つ大派閥はあれど、立場は宙ぶらりんであり。ヘステイア派という勢力が何処に入るのかが注目されている状況と言える。例えばロキ派に入れば、対立しているフレイヤ派との抗争に巻き込まれるし、かといってフレイヤ派に入れば、ロキ派に与する派閥から反感を買う。

「で、立場を明確にっつってもな」

「うーん、困ったな。ボクとしてはあんまり勢力争いには関わりたく

ないんだけど」

勢力争いにおいて中立の立場を示す派閥も居る。

「ヘファイストス・ファミリア」や「ゴブニユ・ファミリア」、「ディアンケヒト・ファミリア」等だろう。

何処の派閥も彼等との関係を悪化させる事を避けなければならぬ事情がある。故に、彼等は中立としての立場が明確であり、何より周囲も彼の派閥が中立である事を認めている。

だが「ヘステイア・ファミリア」は戦力を持った探索派閥。特殊な事情はいくつかあれど、女神が率いる派閥がいくら中立を謡おうが、周囲がそれを認めない。

「まあ、無理だろうなあ。勢力争いに食い込んでいて、『中立です』なんて通る訳ないしな」

「それ、副団長も言ってたな」

キャットヒール 猫 人が肩を竦めると、ウエアウルフ 狼 人の少女が眉間を揉みながら呟く。

ミリアが過去にぼやいていた言葉の意味。今までは代筆として言われた通りの文面を書き出していただけのファイアだったが、この組織同士で軋轢を発生させない為の高度で緻密な行動計画を見て溜息を零した。

誰だつて投げ出したくなる。が、ミリア本人は其れを決して投げ出さない。

「派閥を想つての行動だもんなあ」

「だからといって、過労死直行なミリア様を止めない、等という事は有り得ません」

ミリアの行動を擁護するファイアの言葉に、リルルカがぴしやりと言いつつ切った。

「話が逸れてるぞ。ヘステイア様、もう一度確認しますが、「ヘステイア・ファミリア」は今後も中立を維持、で良いんですよね？」

「うん。ボクの派閥は何処の勢力にも属さないし、加担もしない。中立の立場で居続けるよ」

勢力争いを嫌う女神の姿にディンケは肩を竦め、ファイアはうーんと唸る。

ヴェルフとリリは女神が言った事を聞いて大きく頷き——腹の底からでかい溜息を吐き出した。

「中立、つてのが一番難しいんだよなあ」

「何処の勢力も、ヘスティア様の派閥を自勢力に引き込みたいみたいですよし」

「暫くは続くだろうな」

派閥同士の関係。商会との関係。更に都市の勢力図。

天性の才を以て捌いていたミリアをして、『逃げたい』と言わしめる柵の数々は、女神や他の面々にどこかの勢力への所属を考えさせるのに十二分だった。

「よし、この話はここで終わろうぜ！ これ以上続けると神経症ノイローゼになりそうだ」

話を切り上げる様にディンケが声を上げ、テーブルの上に置かれていた焼き菓子を頬張る。それを見ていたフィアも、肩を竦めて大きく伸びをした。

ヴェルフやりりも顔を見合わせ、テーブルに広げられていた資料を片し始める。

その様子を見ていたヘスティアも大きく頷いて声を上げた。

「そうだね。この話はここでお終い！ それで、皆に折り入って相談があるんだけどいいかな？」

女神の相談事、そう言われてヴェルフ達は迷う事無く頷き、聞く姿勢をとった。

「それで、相談って何ですかヘスティア様」

「うん。相談したい事というのはだね……ミリア君に一週間の接触禁止を出しただろうか？」

「効果覲面でしたね。あれ以来、ミリア様は非常に大人しいですし」

女神との接触禁止令を出されてから、ミリアが大人しくなったのは皆も知っている。

加えて、女神恋しさに誰かれ構わず仲間ハグに抱擁を求めたりしているのも皆が知っていた。

「後二日で解除なんだけど、今まで我慢させちゃった分、ミリア君に何

かしてあげたいな、って思ったんだよ」

「何か、って……副団長なら女神様に添い寝して貰えば飛び跳ねて喜びそうだが」

ディンケが思わず呟く程に、ミリアが女神にべっとり甘えているのは周知の事実だった。

隠すでもなく、ミリアはヘスティア一筋である。団長であるベルもとある冒険者に一筋であったりと、ヴェルフやミコトも想う人物神が居たり。リルルカや春姫もそうだろう。レーネですらそうだ。

この派閥に所属する者の殆どが一途に誰かを想ってる。

「いや、確かにそうなんだけど。ボクとしてはもう少し、ミリア君の為に何かしてあげたい訳なんだけど」

「まあた借金を増やすおつもりですか」

リルルカのちくりとした皮肉に、借金を背負ってでも二人の為に武器を用意した女神が唸る。

「さ、流石にそんな事はしないさ。それより、ミリア君がして欲しい事とか、欲しい物とか知ってる子は居ないかい？」

「……さつきもディンケが言ってたが、ヘスティア様がしてくれる事なら何でも喜ぶ気がするぞ？」

ヴェルフの呟きにリリとフィアが大きく頷いた。

ミリアが喜ぶ行動、そう言われて思い浮かぶのはそう多くない。ただ明確に言える事は、ヘスティアやベル、「ファミリア」の仲間が彼女の為に何か、どんな些細な行動であれ起こせば喜んでくれる。

言い方は悪いが、彼女は良くも悪くもチョロい。

「いや、その通りなんだけど……できればもっとこう、凝った何かをしてあげたいんだよ」

「お金のからない方法が良いですね」

添い寝や傍に居るだけで喜んでくれる少女に、もっと何かしてあげたいと口にする女神に対し、リルルカは金銭面を真っ先に心配した。

ミリアに何かしてあげたいのは彼女も同様だが、もし金銭的に何かかかるような事があれば「ファミリア」の負担になるし、その負担は巡り巡ってミリアの元に還元されかねない。そういう意味でのリリ

の言葉にデインケやファイアも唸りだした。

「普通なら贈り物を用意するのが一番なんだろうが……」

「副団長、物欲無えみたいだしなあ」

「何しても喜ぶ奴を喜ばせたいって、何気に難しいだろ」

ヴェルフとファイア、デインケの言葉にヘスティア達は頭を抱え始める。

本気でミリアの事を想って何かしてあげたいと考えている。考えてはいるのだが、ではその方法はと問われると思いつかない。

普通ならば本人の好みに合わせた贈り物でもすればいいのだろう。だが、周囲が知る限りで彼女が好物とする物は無いし、物欲らしきものは無い。彼女が真に欲しているのは愛情だろう。

それこそ愛情が込められた贈り物ならなんでも喜ぶ程に。

「改めて考えると、難しいな」

「ミリア様、欲しい物は大抵自分で手に入れますからね」

ついこの間、神々ケミカツチがミコトに剣を贈った事に触発されたのか、ミリアからヘスティアに頑丈で長持ちするだろう懐中時計が贈られたばかりだ。その値段も相当なものだった。

この派閥内で最もお金を持って余しているのはミリアだろう。

ヘスティアは借金返済に殆どを費やし、ベルは装備にお金の殆どを回しているし、ヴェルフは鍛冶の練習費、ミコトと春姫は孤児院の仕送りに、デインケ達は装備や娯楽費としてそれなりに使っている。

唯一リルカが節制して溜めているが、ミリアが受け取る金額が最も多い事も相まって、この派閥で最も金銭的に余裕があるのがミリアなのだ。

一応、女神達に黙って情報屋の支払い等でかなり使い込んではあるものの、それでもかなり余裕がある。

「金目の物には興味がないどころか、副団長ってそういうの嫌いだよな」

金目の物に興味がない、ならまだしも、そういった装飾品等をあまり好まない。

ヘスティア達からの贈り物なら、それが貴金属を使った首飾りで

も、野花の冠でも同じ反応をするのは想像に易かった。

「うくん、困ったなあ。じゃあ何をしてあげればいいんだろうか」

ミリア・ノースリスが真に欲しているのは愛情であり、逆にそれ以外の物的贈り物にはあまり興味を示さない。唯一、日用品等を贈れば喜んでくれそうではあるが、それは喜びの意味が変わってきてしまう。

皆して悩んでいると、そこに。

「皆さんお疲れ様です。よければお茶を用意しましたので」

「焼き菓子も作ってみました。よければどうぞ」

お盆にティーセットを乗せた春姫と、焼き菓子を持ったミコトが居室リビングに入ってきた。

テキパキと皆に紅茶を用意していく春姫とミコトを他所に、悩んでいたヘスティアは二人の少女に問いかけた。

「二人にも意見を聞かせて欲しいんだけど」

「はい、なんででしょうか」

「私わたくしでよければ」

「うん、実はね——」

今まで我慢させてた分、ミリアになにかしてあげたい。けれど何をしても喜ぶ上に、贈り物をしようにも何を贈れば良いのかまるで分らない。どうしたら良いか、と問われた二人の少女は考え込む。

「ミリア様に、贈り物でしょうか。何を渡しても喜ぶと思いますが……」

「それが問題なんだよな」

「そうです。何を渡しても喜ぶので、逆に何を渡せば良いのかわからないんですよ」

加入してそう日が経っていない春姫にすら認識されているミリアの好み。それが逆に問題だとヴェルフとリリが溜息を零した。

その反応に春姫が改めて何を贈ればいいかと考え始めた所で、ミコトが口を開いた。

「参考になるかはわかりませんが。極東に居た頃は皆で一日過ごす、といったような事をしていましたね」

「一日過ぐす？」

「はい。日頃忙しいのでたまには、と……言っても金銭的余裕はなかったので贅沢は出来ませんでしたから。例えば、日がな一日、幼い子達と遊んだりなどでしょうか」

ある程度大きくなって働ける様になると、少しでも稼ぐ為に働きだしたミコト達が、時折休みを貰って幼少の子供達と遊ぶ時間を設けていた。

タケミカツチ様や他の神々も同様に、一日だけは時間を作って遊びに費やすのだ。

「後はピクニック、等ですかね」

「なるほど……」

ミコトが極東で暮らしていた頃にしていた事を聞いたヘステイア達はなるほど、と呟いて頷いた。

一日時間を作り、遊ぶなりピクニックに出かけるなりで時間を過ごす。話に聞いてみればそんなに金銭的にかかる訳でもなく、気分転換にもなる。

「ずっとダンジョンに潜ってるベル様にも良いですし」

「ミリア君なら喜んでくれるだろうね！」

各々の日程を調整して、ミリアの禁止令が終わる日に丁度行える様に、と決めた彼らは、さっそく調整する為に各々が動き始めた。

薄暗い裏路地。

対面している影を象ったかのような黒衣に紋様が刻まれた漆黒の手袋^{グローブ}。フェルズに俺は情報と、それから遺灰を手渡していた。

つい昨日、迷宮街で『異端児らしきモンスター』と遭遇、そしてそれを殺害。その件でクリスは完全に塞ぎ込んで、今は口を閉ざしてしまっている。

あの後、こっそりと後をつけてきたライ少年は、懲りた様子もなく調子に乗り、探しにきていたシルさんにこっぴどく雷を落された。シルさん自身もライ少年を止められ無かった事を幾度も謝罪していた

のを覚えてる。

ベルが対応しているさ中、俺はこつそりと空瓶に灰を詰め、クリスを懐に収めてから合流した。

あの場所の出入り口は二か所。一か所は崩れて開かなくなっていた地上からの一口、俺達が侵入した箇所だ。

もう一つは奥、崩落して通行不可能になった道。

「なるほど……」

「先に言つとくわ。彼を守ろうとしなかった事、謝る気はないわ」

——クリスに謝罪したら、こう返されたのだ。

《——謝らないで、謝らないでよ。ミリアはそれが正しいと思ったんだよね。なら、謝らないで》

悲痛そうな声で、か細く、彼女はそう言つて塞ぎ込んでしまった。

少なくとも、あの場において、俺の行動は間違つては居ない。家族であるベルと、見知らぬ異端児のモンスター、どちらを選ぶかなんて決まり切っていた。

だから、謝らないで、とクリスは何度も口にしたのだ。

「いや、気にする事はない。むしろ、遺灰を持ってきてくれただけで十分だ」

黒衣に身を隠したフェルズの言葉に思わず眉を顰めた。

彼等異端児達^{ゼノス}からすれば、わざわざ『遺灰』を提供してくれただけでも御の字だと。

普通ならば、そんな事はしない。モンスターが死んだことに心を痛める事はしない。だが、俺は心を痛め、想い、そして行動を起こした。それが、隠れて出来る精一杯の行動だったとしても、きっと彼らは喜ぶ、と彼または彼女は語る。

「……なら、良いわ。場所と詳細はこの紙に書いてある。同行してた孤児院の子供、孤児院の情報、それから『豊穰の女主人』の店員についても最低限記載しておいたわ。後、一応ベルの事もね」
「わかっている」

秘密裏にやり取りしている俺とフェルズの関係は、正直言つて良好とは言い辛い。

ギルドに所属する一派閥の団員である俺と、都市を掌握しているギルドの頂点^{トッポ}に君臨している者の私兵。正直、関わりたくはないが、彼等が本気を出せば俺の派閥もヤバイ。

それに、彼等はなんだかんだ言いつつも色々と手回しをしてきているのだ。キューイ関連なんて特に。

「二応、周囲の不安を煽らない為につて事で、今回の一件は黙っている様に釘は刺しておいたけど」

「ああ、助かる。ミリア・ノースリス、お前の行動は的確で非常にありがたい」

本当に感謝しているらしい事は伝わってくる。

「それは、良かった、と言いたいけれど」

「何かあるか」

「……………」

フェルズの質問に、視線を逸らして光に溢れた表通りを見やる。

薄暗い裏路地から見た其処は、煌々とした太陽の光に照らされてとても美しい。だが同時に、日陰と日向を明確に分けているのがわかる。

光に照らされた綺麗な世界に生きる者達が居る。日の当たらない薄暗い世界で汚く生きる者達が居る。

「今回、あのバーバリアンと戦闘したとき、私は妨害に徹したわ」

直接命を奪うでもなく、人形で取り囲んでタコ殴りにするでもない。

ただの射撃魔法で、牽制射撃を繰り返しただけ。

「自分で命を奪う事が、出来なかった」

クリスから聞いてしまった。助けを求めていると、恐怖に狂っていると。

その話を聞いた上で、モンスターだから、と無慈悲に命を奪えるぐらいに、冷徹であれたなら良かった。いつそのこと、苦しめる事無く殺してあげるぐらいが良い、と開き直れるならよかった。

「でも、私には無理だったわ」

だから、自ら止めを刺そうとするのではなく、あくまでも牽制射撃

にとどめた。

ベルがあのもンスターと交戦して何を感じたのかはわからない。けれど、もしかしたらベルも何か感じる事があったのかもしれない。その所為か、戦闘中にも関わらずベルは動きを止めていた。

「でね、自分でも最低だと思ってるのだけれど……【女神の戦車】^{ヴァナ・フレイヤ}が止めを刺した時、私は酷く安心したわ」

ベルが止めを刺さなかった事。更に俺が止めを刺さずに済んだ事。どちらも酷く安心した。

「ねえ、貴方って確か昔は『賢者』って呼ばれてたそうじゃない」「……そうだが」

「記憶を消す魔法、みたいなものはないの？」

異端児^{ゼノス}に関する記憶を全て消して欲しい。

クリスの事もそうだ。彼女は酷く傷つき、悲しみ、それでも俺を責める様な真似はしなかった。

彼女は幼い。言動が、幼い、なのに、聡明だった。俺があんな行動をとる理由を察し、理解し、その上で納得できていない。俺を責める様な言葉は一切口にしない、だが嘆く事はやめない。

「すまないが、そういった都合の良い魔法や道具は無い」

「……そうよね」

「異端児^{ゼノス}について知ってしまった事、後悔しているか？」

「勿論、知らなければ気兼ねなくあのもンスターを討滅してたわ」

迷わず、ベルを前線に出すまでもなく、息の根を止める行動をとった。

最良の一手を以てして、息の根を止めた。あの何も知らない孤児院の子供達を脅かしかねない危険を排除するというただ一つの正当な目的の元、あのもンスターを討滅できた。

「本当に、損な性格だわ」

未知は恐怖でしかない。知らないままでは居ても立っても居られない。

だが、知るべきではない事、知っても全く得しない事、知る事で不利益を被る情報すら知ってしまう。知りたがってしまう。

未知は恐怖だが、既知は損失だ。

知らなければ、良い事は世の中に数多く存在する。

その上で、知らなければ恐怖に狂いそうだ。

「悪いわね、最近、あんまり気分が良く無くて。変な愚痴を聞かせたわ」

「構わない。それで気が晴れるのならばな」

気を利かせたのか肩を竦めるフェルズに、俺も同じく肩を竦めた。

孤児院の裏手、迷宮街の隠し通路に現れた異端児^{ゼノス}。彼が何処から来たのかの調査も含め、残りは全部フェルズに丸投げだ。上手い事調べてくれる事だろう。

「其方から用事はあるかしら。無いのなら、私はもう帰るけど」

「一つ、ミリア・ノースリスにしか頼めない事がある」

一応、といった積りで問いかけると、用件があると告げられた。

今回は俺の方から接触を図った為、俺の用事が終わったら帰る積りだったのだが、そうはいかないらしい。

できれば聞きたくはないが、一応聞いておくか。

「それで、何かしら」

「近々、強制任務^{ミッション}を課す事になる」

「……何ですって?」

表情の伺えない黒衣の人物から放たれた言葉に盛大に眉を顰める。

強制任務^{ミッション}。拒否不可能なギルドからの依頼だ。正確には拒否できないが、その場合は多大な罰則^{ペナルティ}を課される事になる。

内容次第ではあるが、その殆どが都市の為、または派閥の成長を促す為のものだ。だが、今この場でフェルズが言った強制任務^{ミッション}はそんな類いのモノではない事ぐらいわかる。

「内容は?」

「指定冒険者はミリア・ノースリスのみ。他に飛竜三匹を同行させ、結晶竜の住処の調査だ。私が同行する」

フェルズが告げたのは、未知の飛竜である結晶竜^{クリリス}の調査の為の依頼^頼。

ただ、あくまで表面上の依頼であって、中身については教える気は

無いらしい。というか、下手に知ってしまうと神に黙っていられないだろう、と氣遣つての事だそうだ。

「なるほど、了解。氣遣いが素晴らしいわね」

「そう言ってくれるな。報酬はしかとした金額が支払われる」

むしろそうでなくては困る。と冗談めかして言うと、フェルズは現金な奴だ、と肩を竦めた。

「ただいま。帰ったわ」

「お帰りなさい、ミリア殿！」

玄関扉を開け、玄関広間に顔を出すと、威勢のいいミコトの返事が返ってきた。

片手を上げて挨拶をし、一度部屋に戻って探索の準備だけしておく。杖や剣、防具等の武装の点検に、道具類の確認。それを終えてから食堂に向かうと、既に皆揃っていた。

一言、軽く謝罪してから皆揃つての夕食となる。

献立はトマトソースを使ったパスタだ。リリが格安で大量のパスタを手に入れられたと自慢げに語り、げっそりした様子のフィアが数日はパスタが続くぞ、と嘆いている。

何があつたのかは聞かない事にしよう。

和氣藹々としながらも、何処か違和感のある。というかヘステイア様達がちらりちらりと視線を交わし合い、何か言おうとしているのは察する事は出来た。

食事を終え、春姫とメルヴィスが食器を洗いに行くといつて席を外してから、残った面々を見回す。

いつもなら直ぐにお風呂入るなり自室に戻るなりするところではあるが、食事中から何か言いたげにしていたのは察していたし、それに俺も皆に強制依頼について教えておかなくてはいけない。

「それで、皆は何か言いたい事でもあるんじゃない？」

「うん、実はミリア君に折り入って相談があるんだ」

珍しくヘステイア様が口を開いた。ここ数日は突き放してきてい

だが、珍しい。

一つ頷いて続きを待つっていると、ベルが口を開いた。

「実は、二日後に皆で一日何か出来ないかなって」

「何か、と言いますと……？」

「えっと、遊んだり、とか？」

何処か曖昧な言葉を告げるベルの姿に、思わず首を傾げた。

「いや、最近忙しかったし、たまには皆で一日過ごせないかなって」

時間を合わせて、一日皆でゆっくりとした時間を過ごしてもいいんじゃないかな、とベルに告げられて思わず眉を顰めてしまった。

俺の反応を見たヘステイア様が困った様に呟く。

「えっと、嫌だったかい？」

「いえ、嫌ではないです。むしろ嬉しいですよ？」

嬉しい、というかここ数日冷たくあしらわれて相当堪えていたの
で、嬉しい提案ではある。あるのだが、二日後、という丁度強制依頼
と時期が被っているのだ。

これならこつちから先に切り出しておけば良かった。

「実はですね、二日後というと私は予定が入ってしまったまして」

「え？」

「ギルドに立ち寄ったら強制任務が入ってたんですよ」

フェルズから予め話は聞いていたが、改めてギルドに立ち寄り、ウ
ラノスからギルド長、エイナさんと経由して届いた強制任務の入った
封筒を取り出した。

既に開封済みであるそれをテーブルに乗せ、ヘステイア様に見せ
る。

「え？ 任務……何かあったの？」

「おいおい、この時期でかよ……」

ベルの困惑した声に、ヴェルフの呆れ声が重なった。

ダンジョンでの異常事態処理や強力なモンスター討伐、更に都市外
での緊急の対応等の為に管理機関から発せられる指令。

普通なら、急成長を遂げているとはいえ「ヘステイア・ファミリア」
の様な中小派閥にこういった任務が言い渡される事はないのだろう。

だが、今回は事情が事情だ。

「……結晶竜の生息域の調査、及びに別個体の存在確認任務。調査隊へ同行し、詳細を確認する為、「ヘスティア・ファミリア」より調教師テイマーであるミリア・ノースリスが同行を命ずる」

「調査先は20階層より下、大樹の迷宮のちよつと奥ぐらいですかね。出発はすぐなんですよ」

気を使ってくれたのか、何かしようとしてくれたのはありがたいし、嬉しい。

ただ、強制任務を断る理由には弱いし。なにより、これの真意は異端児との接触だと思う。

今は意気消沈してしまっているクリスを元気づける為にも、一度彼らの元へクリスを連れていってあげるべきだと思ったのだ。

第二〇八話

薄らと空が白み始めた早朝。

ギルドから指定の冒険者と共に18階層の先、『大樹の迷宮』内に存在する未調査領域の調査の為、俺は早朝に準備を終え、しかと休息をとった後にこうして皆の見送りを受ける事となっていた。

「ミリア、気を付けてね？」

「大丈夫よ。キューイとヴァンも居るし。クリスだつて居るから。ベルの方も気を付けなさいよ？」

心配そうに声をかけてくるベルに微笑みかける。

まだ空が白み始めたばかりで、僅かに冷えた空気に朝靄がかかる程の時刻だというのに、『ファミリア』の皆はわざわざ起きて送り出してくれる。

こんなに嬉しい事はない。

「ギルド指定の冒険者が誰なのかわからないのは気になるが……」

「仕方ありません。特に結晶竜の領域でどれほどの危険性と利益があるのかわかりませんから、下手な冒険者を同行させない上、誰が調査に赴くのかを秘匿するのも納得がいきますし」

ギルドの突発的な強制任務ミッションに不審感を抱くヴェルフに、筋は通っていると自身を納得させているリリ。他の面々も殆ど疑うか納得かのどちらかの反応を示している。

ヴェルフと同じ様に疑っているのはファイア、メルヴィス、ミコト、イリス。

リリと同じ様に納得しているのは春姫、サイア、デインケ、エリウッドだ。

前者のファイアとメルヴィスなんかは特に疑っている様子ではあるが、彼女たちの場合、ギルドが密かにその領域で得られる希少な素材を独占しようとしてるんじゃないか、とギルド長のがめつきさを疑っている様子だ。

後者のデインケ、エリウッドの二人は、『ガネーシャ・ファミリア』に居た頃に似た様な秘匿性の高い強制任務ミッションを受ける先輩がいたら

く、それ故に納得しているらしい。

そして、ベルは僅かな疑問を覚えている様子で、ヘステイア様は顎に手を当てて考え込んでいる。

「……………」

道具類を入れた箱をヴァンの背に装着し、フードを目深に被り折りたたんだ翼をバックパック風に見せた布で包んだキューイ、そして懐で沈黙し続けるクリス。

最後に自身のクラスと体調を確認してから、大きく頷く。

「準備完了です。ヘステイア様——」

「ミリア君、おいで」

挨拶の言葉を残して出立しようとする、ヘステイア様が真剣な表情で手招きをしてくる。

一週間、我慢を強いられていた分、出来るならば抱き締めて欲しいと思っていた。だが、今はどうにもそういう気分にはなれそうにない。異端児ゼノスの事、ギルドの事、神ウラノスの事、「ファミリア」の事、ベルとヘステイア様の事、色々な思惑が交差する中で自身が決めた行動にどうにも自信を持ってない。

迷いながらもヘステイア様の元へ行くと、女神は優しい微笑みを浮かべて両手を広げ、受け入れる体勢を作ってくれた。

「ミリア君、何も言わなくて良い。抱きしめさせてくれないかな？」
「……………」

心を読まれている訳ではない。それでも、魂の揺らぎから俺の状態を推測した女神は優しく微笑みを浮かべて、ただ受け入れようとしてくれた。

そんな女神様の姿を見て、思わず彼女の胸に飛び込んで、知ってしまつた全てを洗いざらい全てぶちまけてしまいたい気持ちが溢れそうになり——抑え込む。

ほんの数秒か、数分か、溢れそうになった気持ちにしつかりと蓋をしてから、頭を下げた。

「ヘステイア様、まだ、私は気持ちの整理が出来ていません」

「……………そっか」

自分の行いは間違っていない。「ファミリア」を優先し、異端児を見捨てる。今後も同じ状況に陥った場合、俺は家族を優先し、その他を排する。

前世ではそんな余裕が無かったから、俺は、俺と父親の命を守る事以外の全てを切り捨ててきた。だが、今は違う。ヘステイア様とベル、そして「ファミリア」の皆と出会い、余裕が生まれた。

自分にこんな評価をするのは良くはないが、きつと俺の性根の部分は善性に満ちた人格だったのだろう。糞みたいな母親の下に生まれるに於ては、俺の根っこは優しさに満ちている。その上で、俺は最も守りたい者だけを守ろうとする。

だから、異端児の話聞いた時、守りたい家族を危険に晒す選択肢を選べない。だというのに、見捨てた彼らを哀れみ、罪悪感を感じている。

そして、その事を秘匿し、皆に黙っている事に更なる呵責を覚えている。

昨晚、今日の強制任務の為の準備に一日奔走しているさ中、ずっと考えていた。

「ただ一つ、約束させてください」

女神に全てを打ち明けるか否かを。

「……約束とは何だい？」

秘密を隠しているのを知りつつ、女神はただ微笑んで優しく問いかけてくれる。

きつと、黙っていても女神は何も言わない。俺が自ら語るまで無理に聞き出そうだなんてしないだろう。だから、甘えてしまいそうになる。

その胸に飛び込み、口を閉ざして甘く溶かされてしまいたく思う。だが、それは止めよう。

「この強制任務が終わったら、私は貴女に、私の知る全てを話します」

「……………」

「それを聞いた上で、ベルや、皆に話すかどうかを、貴女に決めて欲しい。私には、選べそうにない」

周囲の皆が呆れた様に肩を竦めるのを見て、頭を下げる。

「ごめん。私は、皆に話せないわ」

「信用できませんか？」

「信用してる。でも、私が話すには、重た過ぎるの」

リリルカの問いに、俺は真っ直ぐ答える。

守りたいと思ってる皆の心を惑わせてしまうかもしれない。不和の原因になってしまふかもしれない。そんな事を自らの口から語る事は出来ない。

「約束します。私は、帰ったら全てを話します」

「……わかった。帰ったら、全てを聞こう」

頷いた女神を見て、不満げな皆を見回し、最後に真っ直ぐベルを見た。

心配そうに、何か聞きたそうに口を開きかけ、そして閉じる。しばしの間視線を交わした後、ベルは真っ直ぐ俺を見て、口を開いた。

「気を付けてね」

「ええ、十分に気を付ける。必ず、帰ってくるわ」

約束した。

帰ったら、ヘステイア様に全てを話す、と。

朝靄が薄れ始めた街中を、キューイと共にヴァンの背に乗って駆ける。目的地はダンジョン、中層の『大樹の迷宮』。

話には聞いていた異端児達との初邂逅になるだろう。どうなるのか全く想像もつかないが、必ず生きて帰ろう。

死ぬ事だけは絶対にはいけない。

固い決意を抱いた少女が竜を駆り、朝靄が晴れ行く街並みに消えて行ったのを見送った女神は、静かに一つ頷いた。

一週間、我慢を強いた為、強制任務に赴く今だけは甘えさせてあげようとしてみたが、彼女自身がそれを拒んだ。

今までずっと隠し事をしていたのには気付いていたし、女神は彼女が話してくれるまで待ち続ける積りではあったが。今日、その約束を

されるとは思っていなかった。

成長というよりは、踏ん切りをつける為の行動なのは明らかではあるが、彼女が語りたと言ったのなら、神おやとして受け入れない訳にはいかない。

しかと眷属の決意を見送った女神は、静かに頷いた。

「なあ、良かったのか?」

そんな時、僅かに非難する色を宿した瞳でファイアが女神の背に声をかけた。

「何がだい?」

「何が、って、副団長の奴、ダンジョンに行くんだぜ?」

迷宮から帰ったら、そんな風に約束して帰らなかった冒険者がどれほどいるのか。

ましてやギルドが嚴重機密指定までする強制任務ミッシェンに赴くのだ。内容も、未調査領域の調査。

それこそ第一級冒険者ですら命を落としてもおかしくは無いような高難度任務。それに赴く者が『帰ったら』等と口にするのを信じるのか。

「それだけアイツの事、信じてるってなら別に良いけどよ」

冒険者である以上、地上でやるべき事は全て終えてから向かうべきだ、とファイアは呟く。

わざわざ心残りを作る様な事をして、誰も得しない。

そんな風に『迷宮から帰ったら』という約束をして、帰らなかった冒険者を数多く知っている。仲間であったヒューマンの男も、そうして命を落としたのだから。

「うん。わかってるさ、それでもボクは強制はしない」

あの子がそうしたい、と言ったのなら、神おやであるボクは、見守って待つだけさ。と女神は微笑みを浮かべた。

本音を言えば、今すぐ全てを打ち明けて欲しい。けれども、彼女が抱える秘密がそんな簡単に明かせる様なものではないのは察しが付いていたのだ。

女神とディンケ達が声を掛け合う中、ベルは静かに足元のタイルに

視線を落としていた。

ミリアは信用してくれている。けれども、まだ自身が頼りにされていない、そんな風を感じている。

「ベル、あんまり気にすんな。ミリアは、ああいう性格だ、帰ったら言つてやりやあいいのさ」

「そうですよ、ベル様。帰ったらガツンと言つてやるのです」

肩を叩いて呆れた様に肩を竦めるヴェルフに、次はガツンと言いたい事を言わせてもらうと告げるリルカの姿を見た少年は、困った様に頬を緩め、直ぐに引き締めた。

家族の事を誰よりも愛している少女が秘密を持つ理由は、間違いない家族を守る為である。それはわかるが、同時にベルやヴェルフ、リルカ等も彼女が自身達を想うのと同じぐらい想っているのだ。

「うん。帰ったら、ちゃんとミリアに言わなきゃね」

もっと、家族である自分達を頼って欲しい、と。

天井を覆う白水晶が煌々と輝く。階層は光に溢れる中、俺の気分は沈みに沈んでいた。

18階層『迷宮の楽園』。

俺達が足を踏み入れた時、安全階層は『昼』の時間帯であつた。

ヴァンを駆りながら、殆どのモンスターを急所射撃、魔石を撃ち抜く事で即死させたうえでドロップアイテムをガン無視して駆け抜けてきた事で、過去最速で18階層に到着した。

階層南方にある17階層からの寄り道を一切せずに連絡路から真っ直ぐ北上し、中央樹が存在する大草原へ。

視界左手の西部の湖畔に浮かぶ巨島の断崖絶壁沿いに僅かに建物が見えているのを無視する。宿場町リヴィラに立ち寄る理由は全くない。真っ直ぐフェルズとの合流地点へと向かう。

モンスターの小集団を殲滅したり、足の遅い集団であれば駆け抜けて無視したりしつつ、19階層へと続く巨大樹の根本へと辿り着いた。

「合流場所は……あっちね」

ヴァンの背に乗りながら、欠伸をするキューイに体を支えて貰いつつ、地図を広げて目的地を探す。

中央樹の根が馬蹄型に広がる平原、丁度19階層へと続く洞から死角となつている位置が指定の場所となつていた。

とはいえ、少し早めに到着したのか、目的地には待ち合わせ相手の姿は無い。

「……まだ、居ないみたいね」

「キューイ？」

「そうね」

少し休む、とキューイに問われたために同意し、ヴァンの背負った荷物からいくつかの食料品を取り出し、警戒を任せつつも休息をとる事にした。

昼間とはいえ、地下であるためか涼しい風が吹き抜ける草原でヴァンが伏せ、その尾に凭れ掛かる様に体を休める。

消費した精神力の量からして、大したことはないとは思うが、一念のために精神力回復特効薬を四分の一、ほんの少しだけ口にしておく。

暫くは階層を駆け抜ける涼し気な風を浴びながら、休息をとつていたが、暫くしても件の黒ずくめは姿を現さない。流星に早すぎたか。「あら、思った以上に早く到着したわね」

女神へと贈った懐中時計と同じ意匠の懐中時計で時刻を確認すると、予定していた時刻よりも四半刻程早く到着している事に気付いた。

明確な時刻指定があつた訳ではないが、到着予定時刻はそれなりに早めに設定しており、それよりも早く到着してしまったという事は、相手が来るまでまだまだ当分先と言う事になる。

仕方が無いので今回の探索の為にわざわざ皆が用意してくれた各種道具や装備を確認していく。

リリルカからは『強匂袋』をいくつか受け取っている。結晶竜に効果があるのかは不明だが、他のモンスターによって危機的狀況に

陥った場合、躊躇なく使用して逃げろ、と仰せつかった。

更に、ヴェルフからは『クロツゾの魔剣』を受け取った。小剣型であり、かなり小さく懐に収めておけるものだ。緊急時に迷わず使え、と彼が渡してくれた。

他にも、デインケ達から便利な小道具を受け取ったり、ファイアから保存食を受け取ったり、荷物の多くは皆が用意してくれた物だったりする。

自分で用意した分はまた別の機会に使用するか、と仲間から受け取った物を確認していると、漫画なんかで見る様な鼻提灯を作って寝かけていたキューイが跳ね起きた。

遅れて、俺とヴァンが立ち上がって警戒姿勢をとる。クリスだけは俺の懐に入ったまま沈黙を保っているが、ほぼ全員が警戒姿勢をとった辺りで、草原に一人の人物が姿を現した。

「随分と早く到着した様子だな」

「ええ、少し遅れたと思って急ぎ過ぎたみたい。逆に早く着いてしまったわ」

相も変わらない影を象った様な黒衣に、紋様の刻まれた黒の手袋^{グローブ}。

神ウラノスと異端児達の伝言役^{メッセンジャー}。後は雑用を行っている人物。フェルズだ。

「数日ぶりだな。息災だったか？」

「心情以外はね」

当り障りない挨拶を交わしていると、次第に周囲が暗くなっていく。

ここに来た時には煌々とした輝きを放っていた白水晶から輝きが失われていき、ほんの数分間に18階層は『夜』の時間帯へと切り替わった。

森のあちこちや、湖の湖畔、草原に生えている青水晶がうつすらと発光し、視界不良とまではいかない蒼然とした闇に階層全体が包まれる。

そうなってしまうと、ただでさえ黒々とした影の様な意匠のフェルズの姿がぼんやりとしか見えなくなる。遠目に見れば人がいるとは

思えないぐらいだろう。

「ああ、なるほど、そっちの指定した時間帯は『夜』だったのね。悪い事をしたわ」

「気にするな。ミリア・ノースリス。お前が到着したらすぐに姿を現す積りだった。まあ、其方が先に着きすぎて待たせてしまった様子だが」

軽く冗談を交わしつつ、俺は広げていた荷物を手早く片付けていく。

一応、魔石灯等で灯りを付けたりはしない。18階層が『夜』の時間帯とはいえ、地上では丁度真昼も良い所。19階層へと降りていく数組のパーティの姿も確認できるのだ。

「それで、今日は何処まで？ 道案内は任せて良いのよね？」

「ああ、その前に少し明かしておくことがあるがな」

「……………何かしら？」

いまいち信用ならない闇で塞がれたフードの奥を覗き込みその身を伺おうとしながら問うと、その人物はフードの奥で声を上げた。「出会って暫く、ミリア・ノースリスには姿を見せていなかった。だが、今なら良いだろう」

黒衣の人物は、被っていたフードを手袋を装備した手でつかみ取り、剥ぎ取った。

蒼然とした夜の闇に包まれた中、俺は彼の素顔を目にする事になった。

「……………はっ！」

思わず間拔けな声が口から零れ落ちる。

そこにあるべきはずの瞳が無い。真っ黒な空洞、がらんどうな眼孔が空いていた。

そこにあるべきはずの皮は無い。綺麗に生えそろった歯が、骨格もろとも剥き出しになっていた。

そこにあるべきはずの部品が存在しなかった。

否、それは人としてあるべき部品ではあった。だが、普通なら人の目に晒される事のないものであり、本来それを目にするのはその人物

の死後であろうはずのものだ。

俺の視界に映る、その人物の素顔は、顔ですらない、白骨の髑髏だった。

『スパルトイ』、だったとは……」

よもや、神ウラノスと異端児^{ゼノス}を結んでいた伝言役^{メッセンジャー}が、『深層』に出現する白骨のモンスター、『スパルトイ』だったとは。

思わず目を擦り、何度もその素顔を確認していると、その人物は肩を揺らして笑い始めた。

「生憎とモンスターではない。元人間だ」

「……元、人間？」

元人間？　と思わず彼、または彼女の表情を伺うが。顔の表情筋の細かな動きから、相手の感情や考えを読み取るのを得意とする俺でも、いくらなんでも白骨の髑髏から読み取る事は出来ない。

目の前の人物、と称して良いのかわからないソレが、何を考えているのか全く想像がつかなかった。

「私は『賢者』だ、今は『愚者』^{フエルズ}を名乗っているがね
『賢者』。」

その人物に聞き覚えがあった。だが、ほんの少しの間、俺はその情報をどこで聞いたのか思い出せなかった。

だが、ほんの数秒記憶を漁り、気付く。情報屋に収集させていた冒険者の情報ではなく、ベルやヘスティア様との会話の中で出てきた人物の名だという事に。

「彼の『魔法大国』で賢者の石……永遠の命の生成にただ一人成功した、あの？」

永遠の命を発現させる魔法具^{マジックアイテム}『賢者の石』を作り出すのに成功した唯一の人間。

前世においての『賢者の石』とは卑金属を金に変える触媒とされた霊薬であり、後付けで人間に永遠の命を与えるエリクサーの能力があるとされた代物。

この世界においてそれは作り上げられ、その後の話は聞かない。確か、主神に完成の報告に行ったその先で、目の前で床に叩き付け

られ破壊された、という逸話が残っているぐらい。

だが、それ以上に気になったのは、有史以来、最も『神秘』のアビリティを極めたとされる魔術師メイガスだという事だろう。

要するに、ベルが憧れる御伽噺の登場人物と肩を並べる程の伝説の人物である。

「正確には、その成れの果てだがな」

否定する訳でもなく、かといって進んで肯定する訳でもない。何処か後悔混じりのその返事に、思わず言葉を失った。

この世界に来ていくつかの逸話を耳にしているが、この目の前の人物の語り口に『嘘』が混じっていないのを大いに理解してしまい、困惑が隠し切れない。

もし、それが本当だというのなら、目の前の人物は、少なくとも本来人間が生きているべきはずの時間を大いに超越した時間、生きていく事になる。

「後世……現代に伝えられている通り、あの『石』を憎き主神に砕かれた私は、妄執に取り付かれた。無数の知識を求めるあまり永遠の命に執着し、不死の技法を編み出したものの、この有様さまだ」

あれは私の汚点トラウマだ、等と語る骸骨の言葉に嘘は見られない。というかそもそも嘘かどうかが判別つかない。

「秘儀の反動で全身の肉と皮は腐り落ち、今ではモンスターより醜悪な存在となった。腹の餓えや喉の渇きを感じる事も出来ない。生きた亡霊だよ、私は」

まるで自身が編み出した秘儀が『呪い』であったかの様に語るフェルズの様子に、納得できる部分も多分あった。

前世において嗜んだアニメやゲーム、その中で永遠の命に妄執に取り付かれ、結果として死ねなくなつて永遠の時を生きている変わり者のキャラクターというのは居た。というか、ミリカンの中にも居た筈だ。

とはいえ、俺の抱いたそれはあくまでも想像上のキャラクターの心情のソレであるため、眼前の人物が抱いた考えとは全く異なるかもしれない。

「先も言ったが、今は『愚者』と名乗っている」
愚者。

『賢者』が身を墮とした成れの果て。

もはや表情筋の動きから感情も考えも、何より嘘か真かも読み取れなくなっている賢者は、何処か達観した様子でそう語った。

「どうだ？」

「ど、どう、とは？」

「驚いているか。と聞きたかったのだ」

「お、驚いてるわ。少なくとも、かなり動揺させられたのは事実ね」

余りにも度肝を抜く情報に、思わず眉間を揉む。

キューイやヴァンはそういった事に興味が無いのか、それとも全く理解していないのか今まで通りの警戒を向けている。ある意味、こいつらが羨ましいかもしれない。

「それで、なんでそれを今になって明かした訳？」

少なくとも、今この場で明かす理由があるだろう、といつもの癖で目の前の人物の表情を伺うが、残念な事に俺は骸骨の表情を伺う様な技能は微塵もない為、考えどころか感情の一片も読み取れなかった。「そう警戒するな。異端児と会ってもらうに当たって、少しでも信用して貰いたくてこれを明かしたのだから」

声色だけで判断するならば、言っている事に嘘はない。嘘はない筈だが、それでも声色だけで判断するのは少し無理がある気がする。

とはいえ、声色だけで判断するならば、彼は本気で此方に信用して欲しいと思っただけの様子だ。

「……キューイ、ヴァン、どう思う？」

「キューイ？」

《俺様に聞くな》

俺の二重人格らしいキューイは「さあ？」と適当な反応を返し、ヴァンは不愉快そうに鼻を鳴らすのみ。

正直、こんな重大な情報をいきなり渡されても大いに困る。ただ異端児と会って少し話をして、帰ってヘステイア様に洗いざらい全てを話す、と覚悟を決めている所に、特大級のボディーブローをぶちこ

まれた気分ではある。

目の前で動いている白骨化した髑髏は、魔法か何かで俺が幻覚を見せられているのではないだろうか？

そうでなくとも、魔法で操られた人形なのでは？

「……正直、怪し過ぎて、今この瞬間に私からあなたへの信用度がゼロを突き抜けて落ちそうなんですが」

「……思い切って秘密を話した積りだが、逆に信用を失うとは思ってもみなかったのだが」

声色だけで判断するならば、本気で困惑しているのが伝わってくるのだが、白骨の髑髏からは表情は伺えるはずもなかった。

第二〇九話

19階層。

天井や壁面、地面が木皮を思わせる材質の代物で形成された階層域。通路中に繁茂する苔が青や緑に発光し、神秘的な雰囲気を彷彿させる光景を生み出していた。

様々な形の葉が遠く轟くモンスターの咆哮に揺れ、銀の雫を垂らす幻想的な花が咲き乱れている。

上層とは様変わりした大樹の迷宮の光景に、思わず感嘆の息が零れた。

「モンスターが居なければ、とても幻想的で素晴らしい所ね」
つくづく思う。このダンジョン、という場所は美しい。

上層、それも入り口付近はそうでもないが、18階層や未調査領域の地底の温泉なんかは、モンスターの存在さえなければ本当に美しく、心ひかれる光景が広がっている。

「ああ、我々を襲う存在が居なければ、の話だがな」

先頭を進む黒衣に身を包んだフェルズが俺の呟きに応えた。

異端児達ゼノスが隠れ住む安全地帯、隠れ里に向かうべく足を進める彼の後ろ。荷物が入った木箱を背負ったヴァンの背に乗りながら眺める景色はそう悪くない。

隊列後方に居るのは両手に爪を思わせる刃を取り付けた手甲を身につけたキューイだ。ダンジョンの中という事で特に翼や尾を隠す事なく軽装姿の彼女は欠伸混じりについてきていた。

幾度かのモンスターとの遭エンカウント遇はあったものの、キューイの索敵による早期発見からの迎撃準備万全で迎え撃つ事で特に問題も無く進めてきてはいる。ただ、精神力回復特効薬の消費が少し大目には感じるが。

「キューイ、キューイキューイ」

「ん、フェルズ。熊獣バグベアー二匹、大甲虫マッドビートル四匹が接近中。三時の方向から接近中。こつちには気付いてないみたい」

「……つくづく思うが、その赤飛竜レッドワイバーンは随分と優れた感知能力を持つて

いる様だな」

一言二言、未だに人語を話そうともしないキューイの言葉を聞いてフェルズに警戒を促すと、黒衣の人物は呆れた様な、感心した様な声を上げると、接近中のモンスターを避ける様に進路を僅かに変更した。

「この飛竜、キューイは少し生い立ちが特殊なんですよ」

「それについてはウラノスからも聞いている。魂を割いた片割れなのだろう？」

「そうよ。だから、私を裏切らないし、私を守ろうとしてくれる」

キューイについて語っていると、どうしても思ってしまう事がある。

まあ、無意識にやっていた事で俺の自覚は全くなかった訳ではあるんだが。キューイが俺の片割れというのなら、キューイとの会話は自分同士で話している様な状態になっているのではないだろうか。

ともすればそれは、空想上の友人に話しかけている様なものだろうか。いや、擬人化された存在であるならばそれはペルソニファイドオブジェクト人格を与えられたものに分類できるだろうか。

そうやって自己分析していけば、おの自ずと答えが見えてくる。

本当に、あの頃の自身は精神的に危険な状態であり、キューイに救って貰ったのだということがわかる。

わかる、のだが。

「キューイ？」

ヴァンに騎乗したまま後ろを歩くキューイを見やると、彼女はちらりと俺に視線を投げかけて肩を竦めた。

俺が何を考えているのか理解しているのかいないのか。いや、どちらかというとなんかの考えを読み取った上で、俺の行動に変な口出しはしない様になっているのだろうか。

自身の魂の片割れ、と言われても既に別人と言っている程に変貌した彼女の思考回路は残念な事に今の俺では読み取る事は出来ない。

「はあ、それで目的地まで後どれぐらいかかるのかしらっ？」

「まだ暫くかかるな。20階層までは下りる」

「そう」

「密猟者ハンターに対する警戒の為か、今回の探索に於いて、俺は目的地を示される事無く、ただフェルズの案内に任せての行動となっていた。

都市外部ではラキア王国との戦争ごっこで忙しい中、この時期にこそ闇派閥イヴァイルズの残党である密猟者ハンターが活発に動くだろう、というフェルズの予測は間違っていないと思う。

だが、結局のところは彼らの隠れ家アジトを突き留めなくては意味が無い。

「ノースリス、一応聞くが、追跡等は無いか？」

「キューイ、クリス、どう？」

「キューイ」

《人は居ないよ》

居ない、と一言告げるキューイと、何処か上の空のクリスの声を聞き、フェルズにも同様に伝える。

「居ないみたいよ」

「……なら良い」

何処か警戒した様子のフェルズの姿に、軽く溜息を零してしまう。ある意味で仕方なくはある。というのも、俺は既に都市内ではかなりの有名人であり、神々の注目を集めている。加えて、俺の生み出す利益を狙う者も多く……言い方はアレだが、ほぼ監視が付いている状態を言っている。

俺だって、傍から俺の姿を見ていたとすれば間違いなく監視と警戒、情報収集は欠かさないであろう立ち位置であるから自覚はしている。

そんな奴がこっそりダンジョンに潜り、正体不明の人物と大樹の迷宮に探索に赴く、となれば、密猟者ハンター以外に俺を追跡する者が出てもおかしくはない。警戒し過ぎ、等という積りは微塵もない。が、だってらもう少し考えて強制任務ミッションを課して欲しかった。

いや、考えた末にこの時期に強制任務ミッションを発令したのか。

ほとんどの大派閥がラキア王国の対応に動いている間、俺の動向をつぶさに観察するのは、この隙に俺と交流を持つとうと考える中小派閥

や勢力の弱い商会なんか……もしくは、闇派閥イザイルスの様に表に出られない裏の住民ぐらい。

大派閥の監視が緩くなり、動きやすいのはこの時期ぐらいか。密猟者ハンターと接触した場合は問答無用で殺害すれば証拠も残らないし。

「キューイキューイ」

「フェルズ、先方に敵集団が居るみたいよ。動きは見えないみたい。隠れて奇襲を狙ってるみたいね」

「ふむ、それは困ったな」

キューイからの報せによれば、隠れて自分達を狙っている集団が今まさに進んでいる通路の先で待ち構えているらしい。

といつても、距離はそれなりに遠いみたいだが。と、フェルズに伝えると困った様な声を上げて進行を遅めた。

「困った？ どういう事？」

巨大な樹木の内側を進んでいると錯覚してしまいそうになるこの階層は、一様に天井が高い。壁面には小さな樹洞うらが点在し、モンスタ―が身を潜める場所はいくらでもある。通路の幅も広く、辺りに群生する階層特有の植物が数多見える。

赤と青の色をした斑模様茸。金色の綿毛を四散させる多年草らしき植物。樹皮の皮から多量に滴り落ちる樹液。すぐ左手の通路の奥にある行き止まりの空間ルームには一面銀色の花畑が広がっている。

どこもかしこも目を奪う様な色彩に溢れ、そしてそこら中にモンスタ―の潜める樹洞うらが点在する——通常のパーティならば警戒を微塵も解けない状況ではあるが、俺の場合はキューイの索敵能力がある。後、クリスも索敵に関しては負けていない。

総じて、フェルズの言う『困った』等という事にはなりえないはずである。

「索敵出来てる訳だし、回避して進むのは？」

「いや、ここは進むしかないな。何処に潜んでいるかだけしつかりと指示してくれ」

「ん？ まあ、了解よ」

他の回り道を選ぶと流石に遅れすぎる、とここの直進路だけは避け

て通れないと言いつつ進み始める。

遠回りはそれなりに許容できるが、この通路の遠回りをすると大幅に、それこそ数十分どころか数時間遅れてしまう、と言われたために地図を開いてみると、フェルズの言う通りだった。

ここで回避して通ろうとすると時間がかかり過ぎる。

地上に帰還するまでの帰還に制限リミットが設けられている以上、遅れすぎると異端児ゼノスと会って交流する時間が削れてしまう。俺としては別にそれでもいいし、安全を優先して欲しいのだが。

「安心しろ。私がついている」

軽く胸を叩いて言葉を紡ぐフェルズの姿に、肩を竦めておいた。

信用していない訳ではないが、安全よりも時間を優先するのは流石にどうかと思う。

そう言いつつも、あくまでも俺は『ギルドに指定された冒険者の指示に従って動く』のが仕事なので文句は言わずに従うが。

どうやってか異質な存在を感知しているキューイと異なり、自身の日と、ちよつとした勘でしかモンスターの索敵を行えない俺は、頭上の樹洞うらや枝分かれする横道、植物が作り出す陰影等に視線を巡らせて警戒を続ける。のだが、はるか前にキューイがそこに、あそこに、とモンスターの存在を知らせてくれるのであまり意味はないのかもしれない。とはいえ、何もせずに頼りきりというのも不味いので続けるが。

進行速度を僅かに早めてずんずんと進んでいると、フェルズが足を止めて「ふむ」と呟きを漏らした。

俺もモンスターの存在を知らされていた為に前方を警戒はしていたが、目の前に広がったのは随分と不思議な光景だった。

「道が無いわね」

手元の地図に視線を落として幾度も確認する。

脳内に描いた地図と、今まで通った道から推測するにこの先には道が続いているはずなのだが、それが無い。

道幅や高さが他と比べて極端に狭まった道の先は、巨大茸の群生地コロニーと化している。

『『ダーク・ファンガス』だろうな』

「……ああ、なるほど、擬態して冒険者を襲うってそういう事」

隠れて奇襲する積りだ、とキューイに言われていた為に頭上の樹洞^{うろ}や、植物が生み出す陰影、枝分かれする横道なんかを警戒していたが、よもやここまで堂々と道を塞ぐ様な形で擬態して襲撃を企むとは。

モンスターの知恵、とでも言えばいいのか。

「どうします。撃ちます?」

「ああ、近づくと毒胞子を撒き散らす。遠距離から仕留めるのが良いだろう。動きも鈍いからな」

『『ダーク・ファンガス』』。

大樹の迷宮に出現する巨大茸のモンスター。

主な特徴は、周囲に生える巨大茸に擬態して迂闊に近づいた冒険者を奇襲する事。加えて、フェルズの言う通りに『毒胞子』を撒き散らす事。

この『毒胞子』は上層に出現する『紫蛾^{パープルモス}』の毒とは比べ物にならない猛毒であり、その異常攻撃は直撃すれば大型モンスターですら一撃で行動不能に陥る代物だ。特に、この『猛毒』の異常攻撃は上級冒険者でも一溜りもなく、運が悪ければ即死する事もある程。発展アビリティの対異常があっても、評価が低ければそれを貫いて猛毒は体力を蝕む。厄介極まりない性質のモンスターである。

ただ、生憎と動きは鈍く、先に擬態に気付ければ遠距離から弓や矢、投擲武器や魔法で一方的に仕留める事が出来るモンスターであるため、注意していればそこまで脅威ではない。ましてや、擬態に気付く程の感知能力を持つキューイの前では形無しだろう。

「キューイは後ろに居て、フェルズと私で仕留めるわ」

「ふむ、どれが擬態でどれがモンスターでないのかわからないな」

「わからないなら、私一人でやるわ」

全て撃てばいいか、とフェルズが手甲を構えたのを止め、ヴァンから下りた。

「【ライフル・マジック】【リロード】、キューイ、^{スポッター}観測手お願い」

「キューイ」

わかった、と軽く返事をしたキューイが俺の横に立って目を凝らす中、俺は狙いを定める。

フェルズとヴァンは周囲の警戒に回ったのを尻目に、照準を茸の内一つに合わせた。

「キューイ」

「ファイア」

モンスター、とキューイが呟くのと同時に発砲。

青と赤の斑模様の茸に命中すると、その茸はびくりと痙攣して身を振り、黒い色へと変色しはじめ——瞬間に灰になって消滅した。

次の獲物はどれかと照準を合わせると、キューイは狙いを定めた対象がモンスターか否かを即座に知らせてくれる。阿吽の呼吸での連携にフェルズが感心した様な声を上げるのを尻目に、二匹、三匹と次々に毒茸^{ダーク・ファンガス}を仕留めていく。

八匹目を仕留めた所で、他のダーク・ファンガスはしびれを切らしたのか、それともこのままでは全滅すると判断したのか擬態を解いてのしのと鈍重な動きで俺達の方へと進撃しようとし始めた。

「遅いわよ」

「これなら私でも撃てそうだ」

だが、彼等の動きは余りにも遅すぎる。

奇襲作戦そのものは良かったが、それを察知されている事に気付かないのは落第点だ。

鈍重な動きでしかない彼の茸の怪物達は次々に仕留められ、通路を埋め尽くしていた巨大茸の群生地^{コロニー}は瞬く間に殲滅された。

「流石だな、今後もし非同行してもらいたいものだ」

「それは御免よ」

存外疲れるのだから、とフェルズの言葉に肩を竦めつつも殲滅したモンスターの魔石とドロップアイテムを回収してヴァンの背負う荷袋に放り込んでいく。

茸の怪物がドロップした魔石を手に取り、灰の小山に視線を落とす。何かを、忘れていた様な感じがして、思わず眉間を揉んだ。

「……フェルズ、一つ聞いて良いかしら」

「どうした？」

「茸のモンスターって、ここより上で出たかしら？」

「いや、茸型のモンスターはこの階層から出現し始めるはずだが。何か気になる事でもあったのか？」

訝し気な声を上げるフェルズに何でもないと誤魔化しつつ、脳髓の片隅に僅かに感じるズキズキとした痛みの原因を探る。

本来なら違和感を感じたのならすぐに知らせるべきだとは思いうのだが、この疼痛は、まるで『教えるな』『思い出すな』とでも言う様に、違和感を口にしようとしたり、何か忘れている事を思い出そうとすると強い痛みになっていく。

何なんだ、とは思うが、なんとなく勘ではあるが、この頭痛は無視した方が良いものだと感じる。

俺の勘を信じて良いものなのかはわからないが、ともかくこの頭痛は無視する事にしよう。

無人島……キノコ……うつ……頭が……。

20階層。

迷宮の構造は19階層と変わらない様子ながら、出現するモンスターは一段より強くなっているのを感じさせる。

キューイの索敵回避がより難しくなったのか、交戦回数が増え、道具の消耗が一気に増えて負担も大きくなってきていた。

フェルズの道案内の元、21階層への最短路を外れた道を行くさ中、つい数時間前に感じた頭痛の原因をほんのりと思考の端にひっかける形で考えつつも警戒は解かない。

キノコ、無人島……キノコ、無人島。なぜかこの二つの言葉について考えようとするとう頭痛が酷くなる。理由がさっぱりわからない。というか、本能が告げてくる、考えるな、と。

狙撃蜻蛉ガン・リベルラが放ってきた金属質の射撃弾を真向から撃ち抜き、返す射撃でそのまま頭部を撃ち抜き撃墜。

「はあ、ちょっと戦闘回避が難しくなってきたわね。もう少しかかるの?」

「もう少しだけ我慢して欲しい」

一般的なパーティと比較しても非常に優れた索敵能力を誇る飛竜が居るおかげで楽ではあるだろうが、それでも疲労が溜まらない訳ではない。

異端児ゼノスの隠れ里はもう少しかかる、とは言うが先に限界が来ないかを心配し始めた矢先の出来事だった。

《ミリア》

「どうしたの?」

クリスに名を呼ばれて警戒を引き上げる。モンスターが何処から接近中だろう、と。

《——》

「クリス?」

必要最低限、最速で敵の有無を告げるだけだった彼女が俺の懐から顔を出して俺を真っ直ぐ見つめてきた。先までと違う様子に思わず彼女と見つめ合っていると、彼女は絞り出す様に呟く。

《助けて、って泣いてる子が居る》

「——え?」

思わず妙な声が零れ落ちた。

必要最低限の情報を呟く様に告げてきていた彼女が初めて、他の事を口にしたのだ。

彼女の告げた内容を吟味しようとして、直ぐにフェルズの方を見やった。

「どうした、モンスターか?」

「……詳細はわからないけど、助けを求めている子が居るみたい」

「助け、か」

話を聞いたフェルズの方はふむ、と困った様に呟くと視線を前に向けた。

「すまないが、その対応をさせる訳にはいかない」

「でしようね」

今は極秘任務の真つ最中。そんなさ中に助けを求め、冒険者が居たとしても、対応は難しいし出来ない。その為、今回の任務について周囲に知られれば面倒な事になりかねないし。その冒険者には申し訳ないが、見捨てる他あるまい。

フェルズがそう言うのなら、仕方のない事だ。

《助けて、くれないの……?》

「その冒険者には悪いけどね。ダンジョンに潜る以上、自己責任って奴よ」

ダンジョンに挑む以上、死ぬ可能性はゼロじゃない。むしろ普通に生きるよりはるかに死ぬ確率が高い。それでも自ら挑むと決めたのだから、仕方が無いと思う。

クリスを落ち着かせようとそう告げると、彼女はフルフルと震えながら、掠れるような眩きを零した。

《——同胞が、また死ぬんだ》

「……待って」

同胞、同胞と言ったのか彼女は。

思わず、服の中に潜り込もうとするクリスを掴んで引つ張り出す。

「クリス、助けを求めているのは誰なの?」

《わかんない、でも同胞なかも。痛いって、苦しいって、助けてって……》

今にも泣き出しそうなぐらいに落ち込んだクリスの言葉を聞き、俺は声を上げた。

「フェルズ、ストップ!」

「何だ。まさか助けに行くだけでも? 極秘任務のさ中だと自覚して欲しいのだが」

「相手が異端児セノスだったとしても、助けに行かないって?」

「——何?」

踏み出そうとしていた足を止めたフェルズが一瞬で振り返り、俺をまじまじと見つめた。

「何処だ」

「クリス、キューイ、場所は何処?」

「キューイ? キュ……キューイキューイ」

クリスの方はだんまりで動きを止めており反応無し。キューイの方は少し集中しているのか姿勢をやや落して通路先を睨む様に見つめると、直ぐに場所を特定したらしい。

距離は相当先、死に掛けの何かが居る、と告げられた。

「キューイ、直ぐに案内して。フェルズ」

「ああ、構わない。案内を頼む」

キューイに指示を出し、彼女が駆け出すのと同時にヴァンを走らせようとして、遅れて確認をとるとフェルズは影の様に俺の後ろに追走しながら頷いた。

道中、すれ違いかけたモンスターを魔石を穿って射殺しつつヴァンの背にしがみ付いていると、クリスが声を上げた。

《助けてくれるの?》

「ええ、助けるわ。可能な限りね」

前回、隠し通路に迷い込んでいた異端児^{ゼノス}と出会った時とは訳が違う。

事情を知るフェルズと同行している以上、見捨てる選択をあえてする必要がないからだ。

あの時、俺が彼を救う選択をしなかった事で傷付いてしまったクリスの為にも、今回は必ず救わなくてはいけない。安心させるようにクリスに告げると、彼女は俺の懐から飛び出して淡い青い炎を灯して先導する様に前に出た。

《こっち、こっちから聞こえる!》

「キューイ、先導をクリスに。ヴァン、クリスに続いて。フェルズ」

「言われずとも!」

興奮気味の声色を上げたクリスは一気に加速し、俺達の視界から消えてしまうが、彼女が残した青白い炎の残滓と、通った道に残された結晶が生え茂ったモンスターの亡骸を追えば見失う事はない。

枝分かれする横道へと入り、右へ左へ、意識していないと一瞬で迷いそうになるほどに複雑な道を行き、最短路から外れた道から更に外れ、ギルドが記録していた地図にすら記されていない一角へと足を踏み入れ——そこに、その異端児^{ゼノス}は居た。

「……これは……」

「……すぐに、応急処置だ！」

大樹の迷宮の中に一本の木が生えていた。

樹齢百年はくだらなそうな、立派な木だ。種類は、わからない。俺の知る植物の特徴と一致しない、この迷宮独自の樹木なのだろうとしか言えない。

そんな樹木の根本の所に、そのモンスターは居た。居た、というのは間違いかもしれない。

あつた、というべきだろうか。

慌てた様子で駆け寄るフェルズに続いて、ヴァンの背を飛び下りてポーチから高位回復薬ハイポーションを引っ張り出してそのモンスターの傍に寄つた。

《ミリア、死んじやう。死んじやう！》

「大丈夫よクリス、約束する。必ず助けるわ。ヴァン、キューイ、周辺警戒お願い」

頭上に錯綜する枝葉の隙間から、舞台照明スポットライトの様に淡い光が差し込む空間ルームの中心。

樹齢百年はくだらなそうな立派な木の根元。無数の羽と、夥しい量の赤がぶちまけられていた。

モンスターの種類は、ハーピーだろうか。

酷い有様だ。

まるで拷問された、というか拷問そのものだろう。

両翼と両足は太い杭の様なもので地面に縫い留められており、一見すると標本にされた昆虫の様だ。それだけならまだいい、酷いのは胸から腹にかけての傷——いや、切り開かれ、中身が外にぶちまけられている。傷じゃない、拷問の跡だ。

恐ろしい事に、未だに脈動する心臓が外気に晒されているのが見えた。

「まだ生きてる、だがこれでは……」

《ダメだよ、助けられない……》

「つべこべ言わずに治療を、出来る限りはするわよ！」

恐ろしい事に、ぶちまけられた赤の量や、腸を引き摺りだされて尚、このハーピーは生きていた。

生命活動に致命的な異常を発生させる傷をとことん避け、激痛と苦痛による責め苦をする為に考え抜かれた様なやり方。それでも、普通の人間なら疾うの昔に死んでいてもおかしくない状態でありながら、この異端児ゼノスが生きているのは、モンスター故の生命力からか。だが、どちらにせよこのまま放置すれば十割死ぬ。

フェルズの方は慎重にモンスターの容態を確認しつつ、傷口を観察している。

「駄目だ、これは……この場での治療は不可能だ……」

致命傷に至る傷は無い、だが飛び出た腸を中に戻すのは難しい。それに出血量が多すぎて治療が間に合わない。丁重に綺麗な水で洗い、泥汚れを落として詰め込むのも、モンスターの生命力ならばそこから回復できやしないだろうか。

地面に深々と食い込んだ杭は、翼を貫通しており易々と抜く事が出来ない。時間との勝負ではあるが——無理だな。

現代医学について詳細はわからないが、いくらモンスターの生命力があつたとて、心臓が外気に晒される程に胸を切り開かれ、腸をぶちまけられた状態で両翼両足を貫通する杭。どんなフィクションでもここからの回復は難しそうだ。

「貴女、聞こえる？」

ガクガクと震える彼女の顔を覗き込み——思わず舌打ちを零しかけた。

瞼の隙間から血が零れ落ちている。血涙が出る程、なんて考えは直ぐに否定した。何せ、跪いていた直ぐそばの地面に、美しい空色をした眼球が二つほど、転がっているのを見ればおのずと答えが見えてくる。

眼球だけではない。半開きで異常な呼吸音が零れ落ちる口内も血が溢れ返っている。咽込む力も無いのか、ゴポゴポと血泡を吹いている。舌を引っこ抜かれたのか、喉までやられているのか。耳も駄目なのか、心臓が動いてるだけでとつくの昔に死んでいるのか。判断が付

かない。

このモンスターに何のうらみがあればここまで出来るのか。
クリスと約束した手前、なんとしても救わなくては。

「……仕方ないわね」

「どうした……待て、その薬は何だ？」

『再生薬』よ、一応持ってきてた奴ね。眼球すら再生する優れたものよ
モンスターにこの再生薬が効くかは不明だが、このまま手の打ちよ
うが無いまま放置よりはるかにマシだろう。

「フェルズ、彼女の体を抑えて頂戴」

「……無駄だと思うが」

「やってみなきゃわかんないわ」

蓋を開けた瞬間に鼻に突き刺さる激臭。ともすればその臭気は痛
みを訴えかねない程の酷い匂いだ。

液薬にしてはやけに粘度の高いそれを、痙攣し今にも絶命しそうな
ハーピーの胴に垂らす。ビクンツ、と大きく痙攣する体をフェルズが
抑えつつ、大きな傷に少しずつ、少しずつ『再生薬』を垂らしてい
くと、効果は余りにも劇的だった。

大きく切り開かれていた腹の傷がじゅくじゅくと巻き戻す様に修
復されていき、飛び出していた腸もずるずると啜られる様に納まってい
く。

ぽっかり穴の開いていた眼孔の奥からゼリー状の物質が溢れて来
て眼球を再生していく。喉の奥に詰まっていた血塊が、ゴボリツ、と
大きく痙攣して咽たハーピーの口からあふれ出て、幾度も咽ている。

——この薬の使用者を始めてこの目で見たが、劇的どころかむ
しろ怖いぐらいに治っていく様子に正直ドン引きである。

「す、凄まじい効果だな……」

「これは、想定外だけど……後は体力が持つかどうか……か……？」

傷が治り、治り、治って——治り、きらない。

「なお、らない？」

「……ノースリス、彼女はもうだめだ」

《——死んじゃう》

抉り取られたらしい眼球も、引き千切られたらしき舌も、切り開かれた腹も元通り。多少色素異常を起こして色白だったり赤眼だったりはするだろうが、治り切る、はずだった。

だが、何故か胸の傷の部分だけはまったく変化がない。相変わらず、赤黒い心臓が弱々しく脈動しているのが肉眼で確認できてしまう。

「……モンスターには、効かないのかしら。他の万能薬なら！」
「ノースリス、無駄だ」

フェルズが止めようとするが、無視だ。

『再生薬』は試作品の何号目かの代物であり、不完全だった。万能薬なら傷も治るだろう。

「キューイ、杭を抜いてあげて」
指示を出しつつ、万能薬を大きく開かれた傷に垂らす、変化がない。効果が、無い？

キューイが杭を抜き、穴の開いたままの翼や足に万能薬を振りかければ、瞬く間に治っていくというのに、胸の傷だけは元に戻らない。
「呪詛？」

《——違う。この子はもう死んじゃう》

呪詛によって回復が阻害されている、という訳ではないとクリスが悲し気な声を上げた。

どういう意味かと問うより先に、フェルズが俺の肩を掴んだ。

「ノースリス、彼女の傷をよく見てみる」

「傷、って……」

弱々しい脈動を続ける心臓、剥き出しにされたその臓器の、すぐ傍。そこに、紫紺の石があるのが視認できた。モンスターにとっての、核であり、第二の心臓ともいえる重要器官。

魔石だ。

それに、罅が入っている。

「魔石に、罅……？」

「モンスターにとって、魔石は重要なものだ。身体がどれほど傷付こうと、ある程度は回復してしまうすさまじい生命力を持つモンスター

だが……魔石が傷付けば、もうどうにもならない」

魔石が失われればモンスターは灰になる。

先ほどまでの傷はこのモンスターの命を奪うのに十二分な重傷だった。それを治療する事は出来た。だが、魔石にまで届いた傷は、もはや手の打ちようが無い。そして、クリスは最初からそれに気付いていた様子だった。

「う、あ……」

ほんの僅かに響いた呻き声を聞き、フェルズ、俺、クリスは彼女の顔を覗き込んだ。

ふるりと瞼が震え、僅かに瞳が開かれる。元は美しい青玉サファイアだったのであろう瞳は赤くなってしまうているが、確かに俺とフェルズの姿を映した。

そして、その瞳に怯えの色を宿し、弱々しい力で振り解こうとした。再生したてでまともに動かない手足をばたつかせようとするのを抑え、胸に空いたままの傷からの出血を少しでも抑えようとするが、彼女は錯乱状態パニックなのか止まる気配がない。

「落ち着いてくれ、頼むから」

「動かないで、血が、傷が」

小さな鼓動を刻む心臓が今にも止まりそうで、余りにも儂い姿に血の気が引く。

《大丈夫、大丈夫だから……傷付けない。大丈夫だよ》

┌──────────┐

瞬間、ハーピーは動きを止めた。

ふわりと彼女の眼前に顔を出したクリスは、鼻先を近づけて優しく、言い聞かせる様に囁く。

《大丈夫。この人達はキミを傷付けたりなんかしない》

強張っていた体が弛緩し、身を預けてくる。

それはクリスの言葉を信じたのか、それとも暴れるだけの力を失ったのか。

彼女の体をゆっくりと地面に寝かせると、ハーピーの少女は俺とフェルズの姿を交互に見て、若干聞き取り辛い声を上げた。

「……だれ？」

「私はフェルズという。君の様な存在を探している者だ」

「……ミリア・ノースリスよ」

「——にん、ゲン？」

「そうね。私は人間だわ。そつちは骨だけど」

聞き取り辛い上に、か細すぎて、ともすれば聞き逃してしまいそうな程だ。それでも、一言たりとも聞き逃さない様に耳を傾ける。

「誰にやられたか、わかる？」

「ワカラナイ」

犯人を特定できれば、仇討ちぐらいはしてあげれたが、彼女自身もよくわからないのか、反応は芳しくない。加えて、最初はしっかりと俺とフェルズの姿を捉えていたはずの瞳は、徐々にだがズレた所に視線を向ける様になっていつている。

どうすれば良い、と視線でフェルズを訪ねるが、首を横に振るのみ。手立てがないのか、と視線を巡らせようとして、気付いた。

「嘘……足が」

地面に投げ出されていたハーピーの足先が、色を失っていた。それどころか、爪の先からはらはらと灰になって崩れていく。その症状は爪先からじよじよに広がっている。瞬く間に、下半身の鳥の部分は色を失い、上半身の人の部分にまで到達していつている。

ぞつとする光景に言葉を失っていると、か細く呟く声が聞こえた。

「にんゲンと、おシャベリ、してる？」

「……え、ええ、そうね」

「ユめ」

「ゆめ？ 夢じゃないわ」

彼女の眼はとつくの昔に俺を見ていない。どこかズレた所に投げ出された視線の先には何も居らず、ただぼんやりと口の間隙から、夢現の様な声が零れ落ちるのみ。

「ワたし、に……ゲン、と……シャベ、るの……ユめ、だった」

「……そう、夢が叶って良かったわね」

両翼も先の方から一気に色が失われ、灰となってさらさらと崩れて

いつている。

「ヒと、り、……シぬ、コわ……て……」

「大丈夫。傍に居るわ。私で良ければ、最期まで」

首元から頬、淡い緋色の髪からも色が失われていく。

「……………ガ、ト」

最期、罅割れ始めた唇から、微かに感謝の気持ち^セが籠った吐息が零れ落ち、俺やフェルズが看取る中で名も知らぬ異端児^{セス}のハーピーは灰の山となった。

第二一〇話

頭上に錯綜する枝葉の隙間から、まるで舞台照明スポットライトの様に淡い光が差し込む一本樹の根本、飛び散った血と、残った灰山が残されていた。場所は20階層。

凄惨な拷問の末に命を落としたハーピィの少女に黙祷を捧げつつ、立ち上がった。

ローブにはべつとりと血と灰がこびり付き、臍物の匂いが染み付いてしまっている。

いくらモンスターであるとはいえ、ここまで凄惨な拷問を行い、見せしめの様に磔にするなんて、この世界では常識的行動だったとしても、俺には到底受け入れられるはずもない。

「フェルズ」

「……わかっている」

命を落とした異端児ゼノスの亡骸、遺灰を小瓶に収める。ドロップアイテムは何一つない。

迷宮街でのあの時とは事情が全く違う。理解者であるフェルズと共に行動していたが故に即座に救助活動を行った、だが、既に致命的な損傷を受けていた彼女を救う事は叶わなかった。

その件に関してクリスは無言のままに遺灰を見つめ、悲しそうな音色を響かせる。歌う様に、慟哭する様に、耳に残る悲し気な澄んだ音色に耳を傾けつつ、フェルズを一瞥してからルーム内を見回す。

「……誰か居るな」

「ヴァン、キューイ」

《人間が5人居るな》

「キューイキューイ」

少し落ち着いて考えればすぐにわかる事だ。

あの凄惨な拷問を受けたハーピィが、普通なら冒険者が足を踏み入れる事のない最短ルートから大きく外れたルームに置かれていた理由。

クリスが助けを求める声に反応した様に、きつと他の異端児ゼノスもその助けを求める声に引き寄せられてしまうのだろう。そして、そうやっ

て餌に釣られた異端児を狙う者が居る訳だ。

そう、異端児を狙って捕獲し、都市外へと売り飛ばす外道、密獵者達だ。

人間が5人。強さがどれほどなのかわからないが、数が多いのは厳しい。

「フェルズ、わかってるとは思うけれど」

「……捕まえて話を聞くべきだろうな」

「違う、生かして帰す訳にはいかないって話よ」

目の前で命を落としてしまったハーピイの仇でもあるし、彼女の為にも情報は必要ではある。だが、今ここで彼等を一人でも逃がしてしまえば、致命的な事になりかねない。

俺の場合は、都市内において怪物趣味と陰口を叩かれている俺が、実際に迷宮内でモンスターを救助する真似をしていた、なんて噂が——それも否定できない事実が広まれば、洒落にならない。

フェルズの場合も、下手に情報を持ち帰らせるのは非常に不味いだろう。

「……優先すべきは情報だ」

「わかってる、けれど捕獲が無理そうなら、殺すわ」

ルームに繋がる道の先を見やる。

巧妙に隠れているのか、俺の感知能力では全くわからないが、ヴァン曰く5人居るらしい密獵者。

目を凝らしてフェルズと共に仕掛ける時期を計っていると——

—ガサリ、と茂みが揺れた。

「ピストル・マジック」「リロード」

咄嗟に魔法を詠唱し、照準を定める。

こちらの詠唱に気付いているのかいないのか、この部屋をつぶさに観察していたらしい人物が顔を見せた。

「おいおい、落ち着け冒険者だ」

両手を上げて茂みから出てきたのは柔和な笑みを浮かべた軽装姿の男だった。他の茂みからも、続いて人が現れる。人数は、四人。

リーダーらしき男は軽装を身に纏い、腰には宝珠のついた曲剣が鞘

に収まっているのが見えた。他の面々も同様の曲剣を身に着けては居るが、そちらに宝珠は無い。そして、曲剣以外の防具は統一感が全く感じられない装備だ。

中層、それも『大樹の迷宮』に居る冒険者。ならば最低でも上級冒険者であり、二つ名持ちのはずだが。全く記憶にない。少なくとも最近ギルドに登録されている冒険者ではなさそうだ。

「……貴方はここで何をしていたのかしら？」

「あー、いや。その木に、不自然にモンスターが、その、酷い有様だったろ？ だから、なんかの罠なんじゃねえのかって警戒して見てたんだよ。そしたら、お前達が来たんだ」

へらへらと笑いながら、さも自分達はこの現場を偶然発見して見てただけです、と嘯く。

「君達は、本当にこの一件に関わっていない。そう言うのだな？」

何処か憤怒を含んだ声色を上げるフェルズを横目に、ヴァンに声をかける。

「ヴァン、残りの一人は？」

《距離をとって見ているが》

フェルズが矢面にたって対話するさ中、相手のメンバーの残る一人は距離をとって此方を伺っているらしい。

逃げる素振りはないが、此方を攻撃する素振りも無い。要するに観察しているだけの様子だ。

なんとというか、異端児^{ゼノス}を痛めつけて餌にしたりや、一人は距離を置いていつでも逃げられる様にするなど、少しは頭が回るらしい。いや、狡賢いと表現すべきか。

「それで、アンタ等はその、なんでそのモンスターを助けようとしたんだ？」

心底不思議そうに問いかけてくるその男に、フェルズが答える。

「もし、彼等に心があつたとしたら。キミ達も助ける気にはならないだろうか」

「……はあ？」

黒衣の人物の問いに対し、柔和そうな表情を浮かべていた男は大き

く首を傾げた。他の面々も同様に首を傾げ、中には嘔き出すような者まで居る始末。

「おいおい、モンスターだぜ？ 助けるなんて正気とは思えないな」

「【魔銃使い】の方はマジモンの怪物趣味だったのかよ」

「やめろ」

クスクスと肩を震わせて笑う仲間を制したのは、リーダー格の男だった。

「私の仲間が失礼した。モンスターに心があつたら、という質問だったね。答えはNOだ。心があるとなかろうと、モンスターはモンスター、違うかな？」

他の面々が隠し切れない嘲笑を見せる中、柔和な笑みを微塵も揺らがせないリーダー格の男を伺う。

どうにもリーダー格の男はかなりのやり手に思える。他の面々はぶっちゃけそうでもない。いや、能力ステータスで言えばLv. 2、高い者はLv. 3に届いていそうだが、多分、リーダー格の男はLv. 4相当の実力を持つているだろう。

フェルズもそれなりに戦えるとは思うが、真正面から馬鹿正直に拘束するのは骨が折れる。

「そうか、それは残念だな」

「逆に聞くが、キミらは、心があればモンスターを助ける、とでも？」
「……………」

まさか助ける訳ないだろう？ モンスターだよ？ と、柔和な笑みを浮かべながら、問いかけてくるリーダー格の男。そんな彼の目を見て、吐き気を覚えた。

目が笑ってない。どころか、嗜虐的な色を宿し、どんな風に此方を痛めつけようかと考えているのが丸わかりだ。

「まあいい、妙な光景も見てしまった事だし。ギルドに報告をあげなくてはいけないね。私達はこの辺りで失礼させてもらおうよ」

「……………そういう訳にはいかないな」

「はっはっは、おかしな事を言う……………まさか、モンスターを助けていたのを見られたからには、生きては帰さない、とでも？」

表情こそ柔和な笑みではあるが、目に映る色は嗜虐的であり、口から出る言葉は挑発が含まれる。

表情と、感情と、行動がどれも一致しない、チグハグ過ぎる人物だ。気持ち悪すぎる。

「ほら、どうぞ、キミ達が先に行くといい。私達はまだこの階層でやる事があってね」

道を開ける様にルームの入口を明け渡した彼らを見やれば、リーダー格の男以外はニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべており、あからさまに此方を攻撃する気満々の様子が見て取れる。

そのくせ、リーダー格の男だけは柔和な笑みを崩さない。そして、隠れてる残り一人は距離をとって警戒している、と。

「ノースリス、鎮圧するぞ」

「……はあ、クリス、一番遠いのを頼むわ」

殺さな程度に逃がさない様にしてくれ、とクリスに頼みつつ指先を銃口リーダー格の男に向け、発砲。

「ファイア」

「——いやはや、好戦的ですねえ。よほど、この事を知られるのが怖いようで」

剣の一振りで魔弾は弾かれる。実力はやはりLv. 4級なのは間違いない。

同時にキューイが密猟者ハンターの1人に飛び掛かり、フェルズが残る2人に小手から射撃攻撃を放って牽制しながら相手取っている。

それを尻目に、余裕綽々と言った様子で此方の攻撃を防いだ後は他の面々が交戦するのを眺めているリーダー格の男と対峙する。

「【魔銃使い】、いやあ、貴方は私と同類に思っていました。違うのですかね？」

「同類？ アンタと？ 冗談も大概にしなさい【ファイア】」

柔和な笑みが突如として軽薄そうな笑みに変化し、曲剣サイベルを弄ぶ様に振るい、呆気なく魔弾を切り伏せる。その目には嗜虐的な色が宿っている。

実力は確か。というか、一定の実力を持つ相手に単発の低威力魔弾

を放った所で簡単に防がれるのがオチだ。とはいえ、牽制にはもってこいだし、そもそも俺がやるべきは牽制と足止めであり、フェルズかキューイの戦闘が終わって合流してきてから叩けば良い。それに、最終手段のクリスも既に動いている。

悪いが、勝ち目なんざ端から与える気は無いんだ。

「そう冷たくあしらわないで、今からでも遅くはない。キミも此方へ来てはどうです?」

欲しい物は何でも手に入りますよ。貴女ほどの実力と考察力があれば、此方でも上手くやっていける——否、表なんぞで燻るぐらいならば、こつちに来て好き勝手振る舞う方が幸せでしょう。貴女はそういう人間だ、一目見てわかりましたとも。等とぺらぺら良く回る口だこと。

聞いてて不愉快な話を一方的にされながら、数度の発砲を繰り返した所で、クリスの声が響いた。

《——できたよ》

澄み渡った音色が響くと同時に、喉が張り裂けんばかりの絶叫が弾ける。

「ぎっ、あああああああああああああああああああああつ!?」

「っ……っ!」

「ファイア」

絶叫の発声地点はルームの外、茂みに隠れていつでも逃走可能な状態で待機していたらしい残る一人の密猟者ハンターの口からだ。

転がる様に茂みから出てきたのは、エルフの男だった。

他の者達同様に、統一規格らしい曲剣が腰の鞘に収まってはいるが、防具は統一感が感じられない。コートのような物を身に纏ったその人物は、眼を血走らせて絶叫を上げてリーダー格の男に乞う。

「た、助けてくれっ!?! あ、足がっ、俺の足があああああつ!?!」

「殺さない程度に逃がさないでくれ、という俺の頼みを忠実に実行したのだろう。」

そのエルフの両足は、膝から下が結晶に侵され、内側から肉や骨が

弾け飛んで歩ける状態ではない。

「あーらら、何してんの」

「……動かないでちょうだいな」

「動かない方が良い」

「キューイ」

呆れた様に肩を竦めるリーダー格の男は、指先銃口を向ける俺、手甲を向けるフェルズ、へしゃげた曲剣を向けるキューイとそれぞれを見やっした後、自らの手に視線を落とす。

「わあお、油断してた積りは無かったのだけれど」

彼が手にしていたはずの曲剣は、先の絶叫が上がった時に出来た僅かな隙の間に弾かせてもらった。Lv. 4で余裕ぶっこいていたからこそできたが、二度目は無いと思う。

既に武器を失い、他の面々は鎮圧済み。

フェルズが相手にしていた二人は魔法か道具かで眠らされており、起きる気配は無い。

キューイが相手にしていた一人は……頭から地面に埋まってる。何をしたのか知らんが、起きてくる気配は無い。多分、殺していないと思う。というかそのへしゃげた曲剣は奪ったのかキューイ。

そして、一人離れた所で待機させていた緊急時の逃走および情報伝達役はクリスによつて両足をぐちゃぐちゃにされて逃走不能。

最期のリーダー格の男は武器を失って囲まれている。詰み、のはずだが。

「これは、困った。まさかこんな事になるとは」

油断なく、怪しい動きをしたら即座に殺せる様に構える俺やキューイを他所に、男の余裕そうな態度は揺らがない。

「モンスターにあんな拷問をしたのは、お前か？」

「ふむ？ ああ、私だが。それがどうかしたかね？」

フェルズの問いに、男はへらりと軽薄そうな笑みで答えた。

何処か小ばかにした様に、フードに隠されたフェルズの素顔を覗こうとする様に小首を傾げる様を見て、発砲。

「ファイア」 「ファイア」 「ファイア」

「ぐっ……いい、痛いじゃないか……」

両腕と片膝を撃ち抜き、反撃の手を潰す。

流石に両腕と片膝を奪われれば少しは余裕が崩れるかと思えば、全くそんな事は無い。相変わらず、表情は作り物っぽく、瞳の奥には嗜虐的な色が映っている。

正直、不気味過ぎるのでさっさと殺してしまいたい気もするが、フェルズはこのまま話を聞く気らしいので、荷物を抱えたヴァンはモンスターの警戒に当て、膝を突いてフェルズを見上げる男の後ろに回り込む。

「モンスターを捕獲し、地上で売り捌いている密猟者ハンターだろうか？」

「何だいそれは、聞いた事が無いね」

「背後には誰が居る。どうやって迷宮からモンスターを運び出している」

「さあ？　そういうのはデイツクスがやっている事だから。私はただ気ままにやりたい様になっているだけさ」

引き渡された一匹の獲物をひたすらに苛め抜いて、磔にする。そんな餌に寄せられたモンスターを捕獲し、デイツクスに引き渡す。それ以上の事は知らない、と。

彼の話聞くうちにフェルズの語気がほんの少し荒くなるが、彼の態度は揺らがない。

命の危機にあると言ってもいい状況なのに、それを危機として認識していない様な異常な精神構造をしているのか、それともこの期に及んでまだ手があるのか。

「キューイ、ヴァン、クリス。他に人は居ないのよね」

「キューイキューイ」

《ああ、全て鎮圧している》

《居ない、居ない、居ない》

三匹の反応から、間違いないと思う。だとすると、コイツの余裕な態度の理由がさっぱり見当もつかない。

とはいえ、コイツから話を聞きだすのは不可能だろう。それに、こんなキチガイ染みた奴から話を聞くよりは、もっと口が軽そうな奴か

ら聞いた方が建設的だ。

「フェルズさん、その人の拘束お願いします。キューイ、ヴァン、クリス、怪しい動きをしたら殺して構いません」

フェルズが相手してた奴らは昏倒。キューイが相手してた奴は……虫の息。クリスが両足ミンチにした奴は痛みで錯乱してるのか両足を抑えたまま震えて痙攣中。

まあ、両足ミンチの奴が唯一話せそうだな。

ゆつくりと慎重に距離をとってから、ルームの外の通路に転がっている冒険者の元へ向かう。

エルフの男は未だに呻き声を上げており、助けてくれ、とぼやいてるのが聞こえた。通路で話を聞くのはほかのモンスターのもあつて危険なので、ルームの中にご招待。首根っこ掴んで引つ張っていく。

「さて、話を聞かせて貰いましょうか」

「ううあ……あ、足、お、俺の、足が……」

腰の鞘ごと、曲剣を奪って顔を覗き込むが、反応が悪い。それでも、俺を見て助けを乞う様な色を瞳に宿しているので、知っている事なら聞き出せそうだな。

「では質問の一つ目です。貴方の所属する【ファミリア】を教えてください」

「あ、ぐ……お、俺が、所属してるのは、【イケケ——】」

エルフの男が質問に答えているさ中だった。

ズブリッ、と男の側頭部に曲剣が突き刺さった。

刀身が完全に貫通し、眼の前で痛みを堪えながら話そうとしていたエルフの男の眼球が、グルンツ、と白目を剥く。それを最後まで見届ける事無く、大きく飛び退いて声を上げる。

「警戒してー！」

剣が飛んできた方向に視線を巡らせ——誰も居ない。

隠れたのか、と視線を巡らせるが、隠れられそうな茂みや洞はいくつもあるが、エルフの側頭部に突き刺さった角度から逆算し、投擲位置を割り出して集中してみても、人影ひとつない。気配も全くない。

「ノースリス、どうした」

「新手かもしれない。キューイ、ヴァン、他に人は？」

「キューイキューイ」

《居ないはずだ。俺様には感じられんぞ》

幾度も視線を巡らせるが、やはり気配は微塵もない。

鎮圧済みの者達が意識を取り戻していたのかと視線を向け——
目を疑った。

残る三人、フェルズが魔道具で眠らせた二人に、頭から地面に埋もれたキューイが鎮圧した相手。彼らの頭部または胸部から、曲剣が生えていた。

それはどれも彼等が腰に差していたモノである。

「は？ 何コレ、ちよつと、どうなって——フェルズ！」

この事をフェルズに伝えようと振り返った先、リーダー格の男を拘束していたフェルズの背後に、曲剣が浮いていた。リーダー格の男が持っていた剣だ。

キューイやヴァンも唾然とする中、その曲剣の柄に取り付けられた宝玉が瞬き、次の瞬間にはその切っ先をフェルズ目掛けてすさまじい速度で飛翔する。

俺が上げた叫びに反応したフェルズが素早く身を振るが、回避しきれずにローブの一部が大きく裂ける。

「フェルズ、大丈夫!？」

「ああ、心配するな」

横つ腹部分が大きく裂けたローブからは、がらんどうの腹部が見て取れた。本来なら内臓が詰まっているべき腹部で、抉られれば重傷に至りかねない傷になっていたはずだが、骨であったために傷一つ負わずに済んだらしい。

思わずほつと一息つきかけ、直ぐに気を取り直す。

突然の曲剣の飛翔、それも敵意ある行動に視線を飛んでいった剣の方向に向けて——男が死んでいた。

「……は？」

「これは、やられたな」

フェルズが困った様に声を上げる横で、俺は思わず額に手を当てた。

フェルズの腹部を大きく抉る軌道を飛翔した曲剣の切っ先は、リダ格の男の脳天を捉えていた。突き刺さった剣は頭骨を貫き、後頭部から赤く塗れた刀身を覗かせている。

暫しの間、その剣が更なる動きを見せないか警戒していたが、数分待っても動く気配は無い。

柔らかな笑みのまま白目を剥いて絶命している男を覗き込み、フェルズと顔を見合わせる。

「これ、どういう事かしらね」

「……多分だが、魔法だろうな」

俺やフェルズに勘付かれる事なく魔法を行使し、挙句の果てに自害。情報を吐きそうになった奴を殺し、意識の無い者達を殺し、最後に自分を殺す。徹底した情報隠蔽に脱帽だ。もしそれが本当なら、だが。

「遠隔操作とかじゃなくて？」

「わからない。この剣自体は特別なモノではない。ただ、微弱な魔力を感じ取れる事から推測しただけだ」

詳細は持ち帰って調べないと分からない、とフェルズは言う。

キューイヤクリス、ヴァンに今一度、この現場に他の人間が居なかったか確認するが、居ないの一点張り。

その上で容疑者全員死亡。情報らしい情報はちっとも得られなかった。

一応、彼等の持ち物を調べはしたが、決定的な証拠とよべるものはない。特に「ファミリア」に関するエンブレム徽章は何処にも無く、所属経歴も不明。

唯一回収できたのは、数本の曲剣のみ。

正直、謎しか残らない集団だった。最後に自殺したのは、忠誠心故にか、何なのか……………。

偶然に出会った密獵者ハンターの謎の死、ともいえる現象に立ち止まる訳にも行かず、本来の目的を達成すべく足を進める。

足場に張り巡らされた木の根を踏み越え、鬱蒼とした植物を掻き分け、ようやく目的地に到着した。

「ここが、目的地ですか」

視界に広がるのは長方形のルーム。幅は十Mメートル以上あり、天上も同様に高い。壁や天井は発光青光苔アカリゴケに覆われていた。床面には、全面とまではいかないまでも、随所に小輪の白からなる花畑が広がっている。ここ大樹の迷宮では珍しくない光景に、珍しいものが散見出来る。

緑玉石エメラルドを連想させる濃緑の石英クォーツが広間の至る所から生えているのだ。その中でも何より目を引くのは、広間奥の壁際に見える石英クォーツの塊

—— 群晶クラスターが氷山の様に形成されている光景だろう。

見た所幻想的な光景ではあるが、異端児ゼノスの姿は見えない。僅かに首を傾げていると、懐からクリスが顔を出し、結晶の一つを尻尾の先で示した。

《あそこ、入り口があるよ》

クリスが指示したのは目を引いた群晶クラスターの一角。

フェルズがそこに近づいていくのを見やり、俺も続いて近づいていく。

壮麗な石英クォーツの塊の前で足を止めたフェルズは、クリスが示していた場所と同じ場所を指示した。

「ここが、隠れ里の入口だ」

示された部分をまじまじと観察して、気付いた。

一見すると何の変哲もない石英畑クォーツに見えるが、一か所だけ発光が僅かに弱い水晶がある。キューイに頼んでその結晶を殴りつけて貰うと、ガシヤンツ、と硝子の塊が砕ける様な甲高い音を響かせ、石英クォーツが粉々に砕け散る。

その奥、隠されていた穴がそこにあった。

「なるほど、これは見つからない訳だわ」

自己修復するダンジョンの中でも、たつた今砕いた石英クォーツは目に見える

て復元が始まっている。見る見る内に元に戻っていくのだ、これは知らぬ者が見つけるのは難しいだろう。

ヴァンにとって若干狭い入口が、復元の早さから更に窮屈そうに通る抜け確認してから、奥を見据える。

「行くぞ」

傾斜状になった樹洞の奥に先導する様にフェルズが歩いていく。それに続いて俺も足を動かした。

樹洞の中は狭く、暗い。だが、モンスターが産まれる気配は全くない。光らない苔が繁茂する壁や天井には、所々に小さな石英クォーツが所々に生え、樹洞内を頼りなく照らしている。

そんな坂道を降り切った先には、清冽な蒼い泉があった。

大きさは奥行き、深さ共に五Mメートルといった程度で、池といっても差し支えない程の大きさだ。

石英クォーツの光源が乏しい中、携帯型の魔石灯を掲げて見回してみるが、誰も居ない。

それに加えて、道は此処で終わっている。

「……？ フェルズ、道が無いけれど」

「ああ、この水の中を通るのだ」

本気で言ってるのか、と思わず眉を顰めてしまう。

魔石灯で水面を照らしてみると、透明度の高い透き通った水は底まではっきり確認できる。そして、水面上では行き止まりとなっている壁の奥に続く、水中の横穴の存在も見て取れた。

「……泳ぐ？ この水の中を？」

持ち込んだ道具類、特にヴァンの背に取り付けた物資類は全てここで置いていく事になるだろう。

加えて、いくつかの持ち物も置いて行かなくてはいけない。くわえて、軽く指先をつければわかる。この水は冷たい。それも、日の光の当たらない地下だからこそその冷たさだ。

氷点下、凍り付かない程度ではあるが、水温は一桁が良い所だろう。

正直、辛い。

「距離はそうない。泳ぎは苦手か？」

「いや、平気よ……ええ……」

もう一度水面を見下ろし、透き通った水の底を見やる。

ゾツ、とする感覚と共に背筋が震え、思わず身を引きたくなる。

「どうした、ノースリス？」

「……………深い水は苦手なのよ」

透き通っていいようがいまいが、水深が2Mメートルを超えると恐怖を覚える。

海洋恐怖症、といっても種別は様々だが、深い泉に対してどうしても苦手意識があるのだ。こればかりは、前世でもどうにも慣れなかったし、極力、海には近づかない様にしていた。

「キューイキューイ」

やれやれ、と肩を竦めるキューイだが、お前も俺の魂を分けた存在なら怖いはずだろうに。

と思ったが、彼女は外套を放り投げ、衣類を脱ぎ捨てて全裸になると躊躇なく頭から泉に飛び込んだ。翼や尻尾等が邪魔で泳げない等という事もなく、器用に水面下を駆け抜けていく、横道の奥へと姿を消した。

暫くして、魔石灯で水面を照らしていると、キューイは戻ってきた。

「キューイ」

怖く無いよ、と言って水面から手を伸ばしてくるキューイ。

本当に俺の魂の一部なのか、と疑いたくなるぐらいに怖がらないな
コイツ。

彼女を見て、暫し躊躇する。どうしても、水中に恐怖を覚える。原因は自分自身よくわからない。幼少の頃はそれなりに平気だったはずなのだが。

道中で血で汚れたりなんかしてるし、水の中を行く序に綺麗に落とす選択もある、あるし戸惑うのはどうかと思う。

「キューイー！」

「……………わかったわよ。行く、行くから足を掴まないで」

キューイに促され、ゆつくりと足先から水に沈めていく。

冷たい泉水の感覚に包まれ、水中独特の抵抗感を味わいながら、首

元まで沈み、ヴァンを見やる。

「先に行くから、ヴァンは後からついてきなさい」

《わかった》

キューイに手を引かれ、勢いよく潜水する。

繋がれた手の温かさと、水中を引かれる感覚。魔石灯の明かりが失われた真つ暗闇の中、先導されていく。

呼吸が出来ず息苦しい。

水中では先を見通す事が出来ない。

水の抵抗の所為で自由に動けない。

水底に何が潜んでいるのかわからない。

多分、水の中というのは俺が今まで味わってきた苦悩を思い起こさせる場所なのだろう。だから、こんなにも苦手なのだ。

第二一話

携帯型の魔石灯の明かりが無い中、暗い水中にはまるで誘導灯の様にぼんやりとした輝きを放つ石英クォーツを辿り、進んでいく。

恩恵ステイタスによって常人より遙かに息が続くおかげで溺死せずに済んでいるが、恩恵を持たない一般人は確実に溺死しているであろう距離を、キューイに引かれて進んだ先。

柔らかい緑色の光が差し込む真上を仰ぐと、キューイがぎゅつと俺の体を抱き寄せてから、水底を蹴り浮上した。

「————ふはっー」

「キューイ？」

「だ、大丈夫よ」

常人よりも息が続くとはいえ、長時間息を止めていれば苦しくもなる。ましてや、自由の利きにくい水中ともなれば、閉所空間による閉塞感から緊張し、鼓動が早まり息切れは速くなる。

水面に出るのが後少し遅ければ、意識がとんでいたかもしれない。続いて、ヴァンが、ザバンツ、と水面を大きく波打たせて飛び出し、その後すぐに沈んでいった。どうもヴァンは泳げないらしい。水中を泳いできた訳ではなく、水底を歩いてきたみたいだ。その所為か、水底を蹴って浮上し、直ぐに沈むというのを何度も繰り返している。「キューイ、水から上がりましょう」

「キューイ」

僅かに震える体を抱き込みながら、水上に広がる光景を見やった。樹洞から様変わりした鍾乳洞にいた洞窟だ。黒い岩盤で構成されているが、天上や壁面に生える石英クォーツの光だけは樹洞の頃と変わっていない。

広さは入口だった泉の部屋と同等か、ほんの少し広いぐらい。いくつか誤算があるとすれば、燃料になりそうな草葉が生えていない事だろうか。

泉から上がると、肌に突き刺さる冷気に自然と体が震えた。

ただでさえ日の射さない地下、その地下水は氷結していないとはい

え冷たい。そんな冷水に身を浸したのだ、体温の低下が著しい。ましてや、俺は小柄でそれらの影響が大きい。

「大丈夫か」

泉からヴァンが這い上がってきて周囲を警戒するのを他所に、黒衣のフェルズはさぶ濡れのまま声をかけてきた。

「寒いわ。すつぐく」

「ふむ、暖をとれるものを用意しておくべきだったか」

骨であるフェルズには寒暖が気にならないのか、濡れたまま平然そうにしている。

ヴァンも平然そうだ。キューイは、姿形こそ俺と似ている部分はあるけど、中身は飛竜であり、この程度へっちゃらなのだろう。クリスはそもそも無機物だし平気そうだ。

そうになると、この冷水潜りは俺が一番堪えている。

泉から上がり、ひんやりしているクリスをローブの中から出し、震える両腕で体を抱いた。寒い、冗談抜きで寒い。そこまで距離は無い、とは言っていたが、冷水の中を進んで体温が低下し、控えめに言つて寒い。

「キューイ、キューイキューイ」

ボウツ、とキューイが火を吹いて温めてくれるのに感謝したいが、長時間火を吹くのは厳しいのか、息継ぎしては火を吹いてというのを繰り返してくれる。同様にクリスも青白い炎を灯して温めようとはしてくれるが、クリスの出す炎は熱を持たず、温かくは無い。

それでも気持ちはありがたく受け取りつつ、濡れていたローブが僅かに湿り気を帯びている程度にまで乾いた所で、小休止を終える。帰りもここを通るのは正直億劫だ。

ローブに付いていた血は先の水の中である程度流れたとはいえ、こびり付いた血はそう易々と落ちてはくれないらしく、所々に染みになって残っていた。

「で、ここは『未開拓領域』な訳ね」

薄闇蔓延る進路、岩盤の通路を見やり眩くと、フェルズは肯定する様に頷いた。

『未開拓領域』。

ギルドに蓄えられ続けているダンジョンの地図情報。マップデータ

条件を満たす事で冒険者に公開され、階層攻略の手助けとなつていく。それらは、『古代』の——神の恩恵を受けずに迷宮に潜つた——探索者を含めた過去の先人たちの足跡であり功績。いや『偉業』と言つた方がいいだろう。何の情報もないまま命を賭して正規ルートを含めた各階層を開拓し、地図作成マップレニングをしてきたのだ。

だが、そんな先人達の手が及んでいない地帯が存在する。

人類如きでは計り知る事の出来ない深く広過ぎるダンジョンの全貌。

到達階層を徐々に増やしていく一方で、横方向への調査はそこまで進んでいない。正規ルートを開拓した階層の横の広がりについて調査に赴く冒険者が少ないからだ。故に、調査が終わっていない区画。

もしくは、今日に至るまで誰にも見つかる事の無かつた領域。

存在自体は噂に聞く、クリスが守護していた『結晶の領域』。

そして自分の目で存在を確認した『迷宮の秘湯』。

そこにはその階層とはまた異なる形態が構成されている、秘匿された領域。多分だが、ここもそれらと似た様なタイプだと思われる。

「さて、進みますか」

「キューイ」

キューイを先頭に、俺、クリス、フェルズ、ヴァンの一列で隊列を組む。

携行用、中でも冒険者仕様でかなり値の張つた魔石灯を先頭のキューイに持たせ、進ませる。まるで鉞山のカナリアの様な扱いで申し訳ないが、感知能力の高さ、生命力の高さ、判断の早さを鑑みてもキューイを先頭で進ませるのが最も安定しているのだ。

通路には石英クォーツの光源がところどころに見て取れ、通路はうつすらとではあるが視認できる。ただ、魔石灯無しで歩くのは少し恐怖を覚える。

通路内に響くのはキューイが履いたブーツが床を踏み締める音や、尻尾の先が地面に触れる音。そして何より大きく感じるのは自らの

鼓動だ。

ここは異端児の隠れ里であり、安全である。フェルズという同行者がいる。そうとはわかっていても、嵌められていない保証が何処にも無く、信じられる仲間はキューイとヴァン、クリスのみ。

言葉は通じてても、俺の不安を受け止めてはくれない三匹と共に進まなくてはいけないのは、非常に緊張する。自然と、腰の得物を握る手に力が籠る。

背負った銃杖はこの細い通路では取り回しにくく、戦争遊戯の時に椿さんがくれた紅と蒼の二刀がとても頼もしい。

「キューイ」

細い通路を進む事数分、キューイが細い通路の先に光を見つけて声を上げた。

「……フェルズ、奥に異端児が居る。それであってますよね？」

「ああ、その通りだ」

後ろを歩くフェルズは落ち着きを払っており、特に緊張した様子は確認できない。

魔石灯を消す様に指示を出し、気配を隠す様に進んでいく。細い通路の奥に確認できるのは、広大なルームだ。そのルームから明かりが漏れ、細い通路に光が差し込んでいる。

そして、耳を澄ますと微かにだが声が聞こえた。何処か聞き取り辛い、人の言葉だ。だが、人の喉から発せられた言葉にしては違和感が残る。多分、異端児の声だろう。

入口に差し掛かった所で、ごくりと唾を呑み込み、意を決して前進する様に指示を出す。

「キューイ」

「……歓迎してくれる、雰囲気では無さそうね」

「……その様だな」

鍾乳洞に似たルームの各所には大きい目の石英クォーツ。それらが放つ濃緑の光によって包まれた広間の中には数多くのモンスターが存在した。

両手に曲剣シミアと長剣を持ち、鎧を身にまとった『蜥蜴人』リザードマン。

先が青みがかつたくすんだ金の長髪を持つ見目麗しい容姿をした

女性。その両腕にあたる前肢は美しい金翼で、同色の羽毛に埋もれる下半身は長い両足の先端に爪を有している『歌鳥人』。

赤い帽子を『ゴブリン』もいれば、冒険者のモノらしい片手斧を手にした『オーク』の姿も見える。なにより目を引くのは、特大のルームの奥、石英クォーツの柱のもとに寝そべる竜。

全長10Mメートル以上はあるだろう全身には、無数の古い傷跡が散見され、老君の様な静かな瞳が此方をつぶさに観察していたのだ。

数多の種類のモンスターがいる大部屋の中、その全てに共通しているのは、警戒。

そう、武器を持ち、腰を上げ、警戒を示している。

キューイやヴァンも警戒し、懐に居たクリスがきよろきよろと視線を巡らせる中、フェルズが俺を追い越して前に出る。すると、モンスター側も合わせた様に代表らしきモンスターが出てきた。

鎧を身にまとった蜥蜴人リザードマンとフェルズが対面すると、そのモンスターは僅かに聞き取り辛い声で問いかけた。

「久しぶりだな、フェルズ」

「ああ、リド、久しぶりだ」

「あそこに居るのが、ミリア・ノースリスか？」

「その通りだ」

殺意とまではいかないが、警戒した様な雰囲気で見かけるそのモンスターの姿に唾を呑み込む。

理由はわからないが、彼等から凄まじく警戒されているのはわかった。よく来てくれた、と歓迎してくれる雰囲気ではないらしい。

「で、一つ聞かせてくれ——何で同胞の血の匂いがしてるんだ？」
絞り出す様に放たれた蜥蜴人リザードマン、リドの質問。

それを聞いておおよそ推測はできた。

あの時救えなかった半人半鳥ハイビィの異端児ゼノス、同胞の血の匂いを鋭敏に感じ取って警戒しているのだろう。ローブには未だに染みとして残る血の跡があるのだから。

「道中にキミ達の同胞を見つけた。だが、その時には既に致命傷を負っていてな。出来る限りの事はした、が」

リエルトマン
リエルトマンが懐から灰の入った小瓶を取り出し、リエルトマンと呼ばれた
蜥蜴人に手渡す。

彼は無言でそれを受け取ると、小瓶をじっと見つめてから、そうかと
と呟いた。

「密猟者か」

「ああ」

「そいつらは、どうなった。捕まえたのか？」

「……全員死んだ。情報を吐かせる事も出来ずにな」

リエルトマンの言葉を聞くと、リエルトマンは静かに目を伏せ、小瓶を胸に抱く。

「そうか。そいつは……同胞は、何て言ってた？」

「人と話すのが夢だった、と言っていたな。最後に、夢が叶った、とも」
凄惨な拷問の末、致命傷を負わされたハーピイは、最後の最後に、小
さな夢が叶い、そして死んだ。

そう告げられると、リエルトマンは暫く小瓶を見つめ、牙を剥き、破顔した。

「そうか。それは、良かった」

「ああ、そういう訳だ。彼女は敵じゃない」

「……わかった」

リエルトマンがリエルトマンの前を退き、距離を置いてリエルトマンの視線が俺の方に向
けられた。

流石にキューイの影に隠れたままなのはまずいだろう、とキューイ
の影から姿を出して真っ直ぐにリエルトマンを見つめる。

雄黄の両瞳をこちらに向けていた彼は、ふと曲剣シメタと長剣を鞘に納め
ると、声を張り上げた。

「皆、警戒を解いてくれ」

彼の一声が響き渡ると、他のモンスター達が手にしていた得物を鞘
に、懐に収め始める。

臨戦態勢、警戒状態だった彼らの様子は、どこか此方を観察するも
のへと変化したのを肌で感じ取り、俺も剣の鞘をゆっくりと手放し、
警戒姿勢のキューイとヴァンに警戒を解く様に指示を出す。

真っ直ぐ見つめ合う中、リエルトマンは一步、二歩をこちらに歩み寄って来
て、少し距離をとった状態で俺を見下ろした。

「オレっちはリド。見ての通り^{リザードマン}蜥蜴人だ。初めまして、ミリア・ノースリス」

「初めまして、リド。私はミリア・ノースリス。見ての通り、^{バルウム}小人族よ」俺の名前を知っているのは、きつとフェルズから話を聞いていたからだろう。

何処か気さくそうな雰囲気です挨拶してきた彼に挨拶を返すと、何処か驚いた様に雄黄色の瞳を瞬かせる。

『怪物』を象徴する威容を持つてはいるが、声色や雰囲気はそこまで恐ろしくは無い。正直、張り付けた笑顔を浮かべる人間なんかより、強面でも中身がまともそうな眼前のモンスターの方が遥かにマシに思えてしまう。

「まず礼を言わせてくれ。同胞の亡骸を届けてくれてありがとう」

「いえ、むしろ救えなくて申し訳なく思うわ」

そう言うと、リドは何処か困った様に頬を掻き、後ろを振り返ってフェルズを伺いだした。そして、フェルズの方はといえば、肩を揺らして笑っている。

何がおかしいのだろうか、と首を傾げていると、リドは再度俺の方を見ると、口を開いた。

「あー、そうか。そうだな、えっと、ミリアっちって呼んでも良いか？」

「ええ、別に良いわよ。好きに呼んで」

俺の返事を聞くと、^{リザードマン}蜥蜴人は^{ゆうおう}雄黄の双眸を細めた。

獣の眼を弓なりに細めた蜥蜴の形相は、まるで格好の獲物を見つけ舌なめずりしている様にも見える。が、瞳に映る色合いには何処か喜色が混じっているのが十二分にわかるし、感情を隠す様な真似をしていない分、わかりやすく、好感が持てる。

感情を隠して接するのが当たり前の人間に比べたら、なんとわかりやすく、なんと素晴らしい事か。多少見た目がいかつかろうが、この様子なら特に気にもならない。むしろ、下手な人間なんかより仲良くできそうな気すらしてくる。

「ミリアっち」

「何でしようっ？」

「握手」

赤緋の鱗と鋼鉄の手甲に包まれた無骨すぎる右手が差し出された。背丈の低い俺に合わせる為か、背を曲げて屈んでまで、差し出してくる姿は何処か滑稽さが混じっているが、笑うような真似はしない。

差し出された右手を握ると、リドは僅かに驚いた様子を覗き、破顔した。

「ミリアっちは、全く戸惑わないんだな」

「まあ、人間相手よりは楽で良いですから」

僅かに、壊れ物を扱う様にほんのりと握り返してくるリドに笑いかける。

次の瞬間、わっ!! と。

後ろに居たキューイが跳ね退く程の大音響がルームに広がった。

いつの間にか俺とリドの様子を固唾を飲んで見守っていた異端児達^{ゼノス}が歓声を上げる。

拍手したり、諸手を上げたり、小躍りしたり、飛び跳ねたり、各々の異端児達^{ゼノス}がそれぞれの方法で歓喜を表現している。その光景は、見た目こそいかつかつたり、人外染みていたりするが、子供が喜びを表現している風にも見え、不思議と恐ろしさを感じる事は無かった。

「地上のお方、挨拶させてください!」『ウウ……』『ワタシモ!』

歓喜を現していたのも束の間、次には自分も自分もと彼等、彼女等が此方に群がってくる。

赤帽子の小怪物^{レッドキャップ}を始め、代わる代わる挨拶を求めてくる。後ろに居るキューイは興味無さげに欠伸をし、ヴァンは奥に居る木^{グリーンドラゴン}と視線を交わしたまま動かない。懐のクリスは、服の中に隠れて出てこなくなってしまうが。

「初めまして。レイと言います。歌鳥人^{セイレーン}です」

「初めまして」

「貴女二ハお礼を言いたかったのです」

暫くモンスター達の握手の要望に応えていると、最初に目立っていた歌鳥人^{セイレーン}が声をかけてきた。

何の事だろうか、と彼女を見上げていて、気付いた。

ふくらみのある胸の上には女戦士アマゾンネスが好む様な戦闘衣バトルクロスを身にまとう、その胸元。首から紐で下げられた、真っ白い風切羽が揺れていた。

「その風切り羽は」

「ハい。仲の良かった同胞のもんです。貴女が届けてくれたとお聞きしましたかウ」

グラン・カジン 大賭博場でサークリツジ嬢から受け取り、フェルズへと引き渡した『純白の風切り羽』。それはどうやら彼女、レイの仲の良い同族の亡骸だったらしい。

同じ歌鳥人セイレーンでも、件の彼女は密猟者ハンターに捕まり行方知れずとなり、レイはずっと心配していたが、帰ってきたのは亡骸のみ。それがどれほど悲しい出来事なのかは想像に易い。

「いえ、礼を言われるべきは私ではないですよ。真に言われるべきは……」

クレイティア・サークリツジ嬢が礼を言われるべき人物……？

………人に超絶面倒事押し付けた頭の中がお花畑のお嬢様にお礼を？

それとも、「白い羽」カルロスにお礼を言うべき？ ……あの糞

脳筋脅し馬鹿野郎にお礼を言うの？

——キレそう。

「アの、どうかしましたか？」

「いえ、何でも」

脳裏に浮かぶはイイ笑顔でグツと親指を立てる「白い羽」と、ほやほや笑した顔を浮かべるクレイティア嬢の二人の姿。そして、キリキリとした痛みを思い出したかのように訴えだす胃。

「ともかく、貴方の元へ届けられて良かったです」

「本当に、感謝しています。ありがとウ」

あの時の事に関しては今でも思うところは多々ある。あるが、今日の前に居るレイの心の底からの感謝の言葉を聞いて少し和らいだ気がする。

深々と頭を下げてお礼を口にするレイは、今度は頭を上げると右手、というか翼の先端を差し出してきた。

「私とも、握手して頂けませんか？」

「構いませんよ」

伝わってくる羽毛の感触は心地良く、優雅な笑みを浮かべる彼女に笑みで返す。

話に聞く歌鳥人^{セイレーン}は、恐ろしい怪音波を発し、冒険者を束縛する醜悪なモンスター、との事だが、目の前の歌鳥人^{セイレーン}はとてもそうは見えない。

「それで、そっちの……人？ と飛竜は紹介してくれないのか？」

それなりにモンスターとの交流を終えた所で、リドが後ろで控えているキューイとヴァンを指して声をかけてきた。

人？ と疑問形になっているのは、多分キューイの事だろう。

異端児^{ゼノス}である彼等から見て、キューイは一体どんな風に見えているのか少し気にはなる。

「え、ああ、そうね。あっちの私に似た子はキューイ。私の……」

いろいろな出来事が重なり重なった結果、生まれ落ちた俺の魂の一部を持った存在。今では別の肉体を持つ別人の様な状態になっています。と説明して通じるだろうか。

「えつと、私の……一部？」

「……一部？」

リドとレイ、他のモンスターも一斉に小首を傾げた。

どう説明すべきか迷いつつも、先に説明しやすいヴァンの方を紹介しておくか。

「あっちの飛竜はヴァン。元は『小^{インファントドラゴン}竜』よ」

説明しようとして気付いた。

異端児側^{ゼノス}から見て、ヴァンやクリスの状態はどう見えているのだろうか。

同じモンスターがスキルや魔法で強制的に使役させられる風に見られると、悪印象が強くなってしまいうだろう。とはいえ、事実そうになっているので否定は出来ないし。

そんな風に言葉を選ぼうとしていると、離れた位置から声が上がった。

「リド、ソイツハ信用ナラナイ」

俺とリドの握手を見て歓声を上げ、歓迎する雰囲気のものスターばかりではない。

中には離れた位置で俺達のやり取りをずっと見つめているモンスターも居た。

石竜ガーゴイル、人蜘蛛アラクネ、一角獣などがそれに該当する。その中の石竜は、多分だが『グロス』だろう。

「グロス、ミリアっちは確かに変わってるが、悪い奴じゃない。フェルズだって言ってる？ 同胞の亡骸を俺達の元へ届けてくれたんだ。ましてや、同胞を助ける為に手を尽くしてくれた。何が信じられないんだ」

「人間ダカラダ」

取り付く島もない、といった様子ではつきりと拒絶するグロスの言葉に、リドは肩を竦めた。

「悪いな、あいつ等も……オレっち達も、色々あつてな」

「わかってます。密猟者ハンターでしょう。いきなり私を信じろだなんて言う気はありませんよ。それに……」

言いかけた言葉を飲み込んだ。

俺が優先するのは、俺の家族「ヘスティア・ファミリア」だ。

もし、家族に危険が及ぶような事になる場合、おれは此処に入る異端児ゼノスを見捨てるだろう。彼らの目を見て、触れ合つて、感じたのは人なんかよりもずっと付き合易いという感想ではある。

「ヘスティア・ファミリア」が無ければ、彼等と共に歩む事を選びたくなるぐらいには、魅力的な者達だ。だが、俺は一つしか選べない。「まあ、わかってると思います。私は私の大切な物を優先します。時と場合によっては、貴方達と敵対する事もあると思います」そう言った時、俺は自分が守るべき者の為に動き、その為に貴方達を倒す必要があるならば、躊躇なく貴方達に銃口を向け、引金を引く。そう告げるとリドは雄黄の双眸を細めて、笑みを浮かべた。

「だろいな。でも、今は違うだろ？」

「そうね。少なくとも、今は敵対する何てことはしない」

家族を守る為、という理由があれば彼らと敵対する。逆に言えば、

理由が無い限り彼等と敵対する必要も、そんな気も無い。

何処か強面ながら、人懐っこい雰囲気のリドに答えつつ、懐を漁る。そろそろ、黙ってないでクリスも出てくるべきだ。

「それと、最後に紹介するけど、クリスよ」

「クリス、よろしく……って、こいつは」

懐から取り出したクリスをリドに差し出すと、手の中に居たクリスは恐る恐ると言った様子でリドを見上げる。

それを見つめ返して声をかけようとしたリドの方は目を真ん丸に見開き、クリスと見つめ合った。

「……………同胞、なのか？」

《——リドだ。リド、初めまして》

驚いたようなリドの呟きに、確認する様なクリスの挨拶。

横で見えていたレイが、クリスを見て声を上げた。

「初めまして、新たな同胞」

《——！》

まるで迎え入れられる様に声をかけられたクリスは、澄み渡った音色を響かせて喜びを表現し始めた。言葉にならないぐらいの喜びよう、と言えば良いのか。

普段なら読み取れる言葉は無く、ただ嬉しいといった感情が垂れ流しになっている。

それを見つつ、クリスを手放すと彼女はふわふわと青白い炎を纏って他の異端児達の元へ寄っていく。彼らはクリスを見て一様に驚き、そして笑みと共に迎え入れた。

「…………まさか、同胞を連れ歩いていたとは」

「フェルズから聞いていないんですか？」

「何にも、聞いてない。おい、フェルズ！」

少し離れた所から様子を見守っていたらしい彼は、リドに呼び付けられると此方へとやってきた。

「どうした、リド」

「どうしたじゃない。ミリアっちが同胞を連れ歩いてたなんて聞かないぞー！」

「ああ、ちょっとしたサプライズだ」

クツクツと肩を揺すつて笑うフェルズに、思わず半眼を向けた。

「秘密にしてたんですか……」

「ああ、それに思うところもあつたからな」

「……？　思うところ？」

思うところ、について話す気は無いのか、フェルズは手を振って口を閉ざしてしまう。気になる為、少し探りを入れようかとした所で、レイが声を上げた。

「あの蒼イ炎、何度か見た事があります」

「そうなのか？」

リドが首を傾げる様子を見ると、彼は知らないらしい。逆に、レイは見た事があるのだという。

隠れて彼らを観察していたのを知っていたのだろうか。と思つたが、彼女の説明を聞く限りどうやら違うらしい。

「ハイ、かなり昔にモンスターに襲われて危なくなつた事がありました」

『隠れ里』から別の『隠れ里』に移動する為に少数で動いていた時に、モンスターに襲われて危うく同胞が死にかけた時、何処からともなく蒼白い炎が溢れ返り、同胞に手を掛けようとしたモンスターが瞬く間に結晶化して死に絶えたのだという。

その時の青い炎が、まさに今のクリスが喜び過ぎて周囲に漂わせているモノに似ていたらしい。

多分、クリスなんだろうなあ。

「クリスについてですけど、だいぶ昔から貴方達の事を知っていたみたいですよ」

「そうなのか？」

「はい。結晶の中に潜り込む能力を持つているみたいで」

リドやレイ、話を聞いていた赤帽子レッドキャップの視線が自然と特大のルームを照らす石英クォーツに向けられる。

「ほとんどの隠れ里にああいった石英クォーツがあるのですかね？」

「あ、ああ。もしかして、ずっと見ててくれたのか？」

「らしいですよ」

「もつと早くに姿を見せてくれればよかったのに」

モンスターと共ににはしゃいでいる様子のクリスを見てリドがぼやく。

ここは彼女を虐げる者はおらず、歓迎してくれる場所だ。だが、初めて見た光景を信じられず、ずっと見ているばかりだった、と。

「そうか……」

「彼女にもお礼ヲ言わなければいけませんね」

神妙な表情の二人、というか二匹を見つつも、俺は部屋の奥で座り込んだまま動かない木グリーンドラゴン 竜に視線を向けた。

落ち着きを払った、老君を思わせる瞳を細めて此方を見ている彼、または彼女は言葉を発さない。

竜の言葉を理解できるはずだが、彼は黙して語らず。それでいて、ヴァンが彼または彼女を睨んでいるのも気になる。

「ヴァン、あの竜がどうかしましたか？」

《別に、俺様より強い竜が居たから、睨んでいたただけだが》

自身より強い存在が居た。だから睨んでた、とは……それに対する相手の対応は、どこか優し気な雰囲気で見守っている、と。

黙して語らない木竜の考えは良くわからないが、他の異端児達ゼノスが騒がしくあの竜と話す余裕が無い。ましてや、あの竜の傍には非友好的なグロスを始めとした異端児ゼノスが居る。

正直、話してみたい気もするし、竜という性質がどうあるのかわからないから話したくない気もする。

それ以外にも、彼等と話して思うところはいくつもある。

正直、もし本当に「ヘスティア・ファミリア」と彼等を天秤にかける事になったら、ほんの少し迷うだろう。勿論、選ぶのは「ファミリア」だ。だが、彼等を見捨てる事に罪悪感を抱く事は間違いないと思う。

第二一二話

これまでと違い、『ラキア王国』との戦闘が長引いているらしく、今日もまた都市外では戦争とは名ばかりのラキア側が一方的に追い返されているさ中であつても、市壁の中は変わらぬ平和が続いていた。朝の陽射しが差し込む執務室。

フィアは窓の外に響く小鳥の囀りの声を聴きながら、最後の一枚となつた書類の入つた封筒に封蝋を施していた。

火で熱して溶けた蝋を手紙に垂らし、完全に固まり切るより前に「ファミリア」の徽章エンブレムの印璽を押し付ける。

鐘と竜を結ぶ炎の徽章エンブレムがくつきりと、綺麗に刻まれたのを確認したフィアは緊張を解いて肩の力を抜いた。

「封蝋作業が一番緊張すんだよな……」

「ロキ・ファミリア」時代にフィアは幾度か手伝いとして封蝋をした事はある。

その際に失敗した経験は数知れないし、フィア自身、失敗の回数なんて覚えていなかった。

封蝋を施した封筒を執務機の端に置き、席を立った所で、少女は微かに漂う食欲をそそる香ばしい匂いに気付いてピンと耳を立てた。

時刻は朝食前。

ダンジョンに赴く前にいくつかの商会から来ていた依頼に対しての拒否の返事を拵えていたフィアは、同じく執務室の机に向かって集中していた小人族バルウムの少女に声をかけた。

「リルルカ、終わってないなら手を貸すが?」

「ありがとうございます。ですがこれで最後ですので、フィア様は先に食堂に行つて貰つて構いませんよ」

大きな執務机に広げられた書状を見ながら、依頼を拒否する旨の返信を書いているリルルカの手元を見やり、フィアはふむ、と頷く。

つい数日前、ギルドの強制任務ミッションで指定冒険者と共に『結晶の領域』への調査に副団長、ミリア・ノースリスが向かい。そのさ中に送られてきた間の悪い依頼書クエスト関連の処理に関して、リルルカとフィア、時折メ

ルヴィスも手伝いには処理をしていた。

数はそれほどでもないが、中にはギルドの依頼で動いているミリアについて探りを入れる様な形の依頼も混じっており、対応していたリルカは非常に頭を悩ませていた。

「うう、ミリア様が注目されているのは知っていました。こんな面倒な対応をしなくてはいけないとは……」

「グラムス商会からか。ここ、確か要注意の所だったよな」

依頼内容は至って簡単で、中層で採取できる鉱物資源の納品依頼だ。ただし、依頼を受けるに当たっていくつかの条件が記載されており、更には無理な場合でも返事は欲しい。と書かれている。

相手の商会について、ミリアが作成した要注意商会・商人一覧には、商会そのものは黒い部分が見当たらず、清廉潔白ではある。しかし、後ろ暗い事をしている一団が背後に居り、余り信用ならないとされていた。

フィア個人としてはミリアの度の過ぎた様な警戒姿勢には思うところは無くはない。ただ、書き添えられた裏付け情報に一度目を通して以降は彼女の警戒心にも理解を示した。

「とりあえず、当たり障りのない形で返信をしておきます」

「それが無難だわな」

大商会や信用のある商会の依頼だったとしても、そんな彼らが例えば闇派閥と取引をしていたとしたら。

本人達は知らずに取引していただけかもしれない。だが、それが欺瞞でない証拠は何処にも無い。故に、後ろ暗い者達と取引してしまった商会や商人にも警戒しておかないといけない。その理由、そしてもしもの時の損失について。

ミリアのやり方を真似て警戒する様になってから、フィア自身もだいぶ疑り深い性格になったと自覚できるぐらいには変化してしまった。今まで気にも留めなかった事柄にも、何か裏があるのではないかと無意識に警戒する癖が身に付いたのだ。

「あゝ、アタシもだいぶ疑り深くなっちゃったもんだ……ここに来てまだ半年も経ってないのになあ」

今回の商会からの依頼も、何か裏があるのではないかと疑いを抱いてしまう。徐々に思考が染められていくのにファイアが眉間を揉んで執務室の窓を開け、モノ鬱気な表情で朝の陽射しに明るく照らされた青空を仰いだ。

「ま、悪い事じゃないから別に良いが」

今まで知らな過ぎただけ。見ようともしなかった裏側では人と人、組織と組織の思惑が複雑怪奇に交差し、中には人を貶めんとする罠がいくつも隠されている。それを知らずに過ごしてきた今までが異常で、本来ならそれを警戒すべきだったのだと学び直した、と言えばいいか。

ファイア自身も、人間の薄汚さはそれなりに知っている積りではあったが、腐敗しきった組織の汚さは個人のそれの何十倍も質が悪いというのは知らなかった。それを知れたのだ。今度からは警戒して物事に当たる事が出来る。

「んで、終わったか？」

「終わりました。はあ……これでまだ序の口、なんですすよね」

リリルカの深々とした溜息に、ファイアは同調する様に溜息を吐く。

「らしいな。正直、想像もつかないが」

今、リリルカやファイアが立っているのは入り口だ。

複雑怪奇に絡み合う思惑の中に潜む罠。目に見えるそれらを知覚して初めて、人と人の関りの難しさを理解する。

パーティという最小単位ですら人は分かり合えない事すらある中、それが組織同士だったり、下手をすれば組織内部ですら不和を起しているのだ。

「副団長^{ミリア}、言ってたよな。何があろうが信じられる誰かが居ないなら見ない方が良いつて」

「言っていましたね」

もし、より深く潜る積りなら、絶対の信頼を向けられる相手が居ないならやめておけ、と。

人の薄汚い裏側を見続けていると、いずれ人を心の底から信用できなくなる。笑顔を浮かべる人を見た時、それを素直に受け入れられな

くなる。

過去、ミアが絶対の信頼、信用、愛情を向け続けたのは彼女の父親で、それが無くなつて以降は女神ヘステイアやベルを其処に据えている。そして「ファミリア」の皆だ。

「重いよなあ。でも、その重さも納得だ」

「リリとしては、重過ぎますが、同時に嬉しくもありますよ」

過去、人間の汚さを見続けてきて人間不信になった経験もあるミアは、リルカ・アーデを信用してくれている。

それは非常に重い意味を持ち、リルカはそれを重すぎると感じ、同時に嬉しさも感じている。

対し、ミアの方はうーんと唸る。ミアの気持ちは理解できるし、信用の重さも納得はできている。あの汚い一面を見つけていけば人を信用できなくもなるし、その上で信用できる人だ、と誉めちぎられれば嬉しくない訳がない。しかし、だ、ミア自身は自分が綺麗だなんて思っていない。

「アタシは、言っちゃ悪いが利己的だろ」

両足の欠損が治る。そんな対価につられて参加し、命懸けで助けた。

それを見て、信用して貰えたのは嬉しいが、あそこまで闇を見続けた彼女に信用される程、自分は出来た人間か、という疑問は残った。言い換えるなら、劣等感だろうか。

ミアの優しさを、向けられて良い程の人間だろうか。

「何を言っているのですか。ミア様は戦争遊戯^{ウォーゲーム}で命懸けで戦ってくれたじゃないですか」

それだけでなく、こうして朝早くからダンジョン探索前に手伝いを申し出てくれたりもしている。ミアでなくとも、女神も、ヴェルフも、誰しもが彼女を拒みはしないと断言できる。

真つ直ぐ告げられた言葉に対し、ミアは僅かに照れた様に耳を掻き、テーブルの上のインク壺を閉じる。

「そこまでして貰える人間じゃねえ、って言っても聞いてもらえないんだらうなあ」

自分の両足の為に協力を申し出た。残る欠損した仲間の為に力も死力を尽くした。目的が一緒だっただけで、ミリアに気を遣わせる様な事は何一つしていない。最初からWin-Winの関係だということに、ミリアは過剰なまでに尽くそうとしてくれる。

ファイアが本音を言うなれば。

「逆に申し訳ないからやめて欲しいんだよなあ」

向けられる信頼も、優しさも、過剰過ぎて申し訳ない。

そんな風にファイアが言うと、リルルカは数度瞬きしてから呟いた。

「ファイア様って、意外と繊細ですよね」

「意外とって何だよ……否定はしねえけど」

男勝りな口調をしているし、気が強そうと言われるのも良くある。けれども、実際には気を強く見せているだけで繊細なのは彼女自身自覚している。打たれ強くもなく、恐怖で動けなくなる事の方が多い。冒険者として致命的ともとれる弱点だが、今更どうしようもない。

自覚してる、と肩を竦めるファイア。

「逆に、リルルカは随分と凶太くなつてないか？」

最初こそ人の汚さに反吐が出る、とでも言いたげな表情だったリルルカだが、最近は面倒臭い、といった色が強く出ている。そういう意味では随分と凶太い神経してる、とファイアが揶揄い混じりに告げた。「そうですね。ミリア様も時々仰っていました、死ぬ程面倒臭いですね」

人間関係、組織同士の関係、自分達と関係を持った組織が交流している他組織について。警戒すべき事が一つ処か雪崩方式が増えていく。最初は小さな事なのに、気にすべき範囲は異常に広い。それに面倒さを感じるのは事実だし。なにより――。

「リリは絶対の信頼を向けられる相手が居ますから」

どれだけ薄汚い人間性を見せ付けられても、リルルカ・アーデは人間不信にはならない。

ベル・クラネルや女神ヘスティア、ミリア・ノースリス。他にも「ファミリア」の仲間には絶対の信頼を向けられる。彼らは何があるうが、どんな事があるうが自分を裏切らないし、自分も彼等を裏切り

たいなんて思わない。

「勿論、リリはファイア様の事も信用していますよ」

その信用こそ、リリが凶太い神経でいられる理由だ。そう告げたりリルカから視線を逸らしたファイアは、恥ずかしそうに頬を掻き、誤魔化す様に咳払いをした。

その時だった。

『——なあって言うと思ったかアあああああああああああ
!!』

窓の外から聞こえる女神の怒声に、ファイアとリルカは動きを止め、視線を交わし合った。

『春姫君つつ、言い忘れていたがボクの「ファミリア」は不純異性交遊は勿論、男の子と女の子が手を握るのも禁止だ!?!』

『ええっ!?!』

窓の外から聞こえる女神の憤怒の声に驚愕の声が混じった。

ファイアは獣人特有の優れた聴覚でそれが狐人ルナールの少女のものであると気付き、大きく首を傾げてリルカの方を伺った。

「なあ、この「ファミリア」にそんな規則ルールがあるなんて聞いてないぞ」

「有りませんよそんなもの。はああ……あの女神は本当に……」

狼ウエアウルフ人の少女に返答を返すや否や、疲れ切った溜息を放つ小人族バルウムの少女。

疲労と呆れに苛まれるリルカの様子を一瞥すると、ファイアは窓から件の現場を見下ろした。

窓から顔を出して確認した所、ファイア達の居る執務室から見下ろせる位置にいくつもの洗濯物が干されているのが目に付く。

その洗濯物の直ぐそば、空っぽの籠の横で耳を抑えて縮こまる春姫と、困惑した様な様子の少年、そしてそんな二人に憤怒した様子の黒髪ツインテールの女神。

『ボクはこれでも天界の三大処女神スリートップと言われているね。風紀には五月蠅いんだ!』

『申し訳ありません、ヘステイア様……以後、気を付けます』

『うん、わかってくれたらいいんだ』

反省した様にしゅんと俯く狐人の少女に対し、女神は厳かに頷く。そんな様子を半眼で見下ろしていたファイアは、横から窓枠にしがみ付く様に身を乗り出したリリルカに場所を譲りつつ呟く。

「女神の嫉妬って怖えなあ」

「全く、見苦しいったらありやしない……」

リリルカとファイアが呆れた様に三人を見下ろすさ中、唐突に生成された派閥の規則に従う様に春姫は背を向けた——かと思えば。

彼女の腰から伸びる太い尻尾がゆらりと揺れ、次の瞬間には、しゅるっ、と少年の左手首に巻き付いた。

「……………うわ、あの狐おまえより凶太い神経してんなアレ」

「……………何処が気弱な箱入りですが。滅茶苦茶凶太いじゃないですか」

二人が呆れとも感心ともつかない呟きを零す中、朝日を存分に浴びる洗濯物のすぐ横で、女神の手刀が少女の尻尾を打ち払う。

「ていッ」

「こんっ!？」

女神はより大きく大爆発し、狐人の少女はぺこぺこと頭を下げる。

眩しいぐらいの朝日に照らされた光景を見ていたファイアとリリルカは、無言で窓を閉めて食堂へと向かった。

「いいかい、みんな？ 恋愛するなどは言わないが、風紀を乱すのは駄目だ」

朝食を終えてすぐ、皆を呼び集めて女神が切り出した言葉を聞いた瞬間。ファイアは、この神も神だったか、という呟きを飲み込んだ。

館一階の居室。ダンジョン探索前に召集され、「ファミリア」のメンバーは、現在強制任務で本拠を空けている副団長を除いた全員が集まっていた。

久々のバイトの休みらしい女神は、集まった皆の顔を見回す。

「というわけで、ボクの【ファミリア】の中では男の子と女の子の接触は厳禁だ。手を繋ぐのも駄目」

「そんなの横暴です!!」

「うわあ……」

「何でこんな事になってんだよ……」

「団長、何をしたんだ。今すぐ謝れば赦して貰えるかもしれないぞ」

「あの、エリウッドさん。僕何もしてないです」

目を瞑りながら宣言する女神に、即座にリリが食って掛かった。それを見ていたメルヴィスが困惑した様な声を上げ、デインケがぼやく。エリウッドは即座に女関係で色々複雑になっているベルに視線を向けて注意を促した。当然、ベルは否定する。

こんな滅茶苦茶な話がる原因となつてしまった狐人^{ルナール}の少女、春姫は本当に申し訳なさそうに小さく縮こまっている。

「ファミリア」とは主神の特色が色濃く出るモノだ。

例えば「アポロン・ファミリア」であれば主神の趣味が高じて美少年美少女のみが入団を赦されたり等。

「ヘステイア・ファミリア」の主神である女神ヘステイアは、天界でも有名な三大処女神の一人。残る二人の内、女神アルテミスに至つては極まった恋愛アンチまでしていたらしい。

故に、「ヘステイア・ファミリア」の規則はヘステイアの特色や性質にあつたものが適応される。だが、『接触禁止』というのはいくらなんでもやり過ぎだと言えるだろう。

「それならヘステイア様も例に漏れないという事ですね!? ベル様やヴェルフ様、デインケ様やエリウッド様に一切触れてはいけませんよ!?」

「ボ、ボクは主神だぞお!?」

「関係ありません! むしろ神様が規律示さずして眷属が従うとお思いですか!?!」

「そんな事言つたら「ステイタス」の更新が!」

「だったら最初から変な規則^{ルール}を作らないでください!」

テーブルを挟んで激しい言い争いを繰り広げる女神と小人族^{バルウム}の姿に、ベルとミコトは汗を流し、ヴェルフは溜息を吐く。そんな彼らを他所に、メルヴィスとエリウッドが眩きを零した。

「副団長様が居れば、こうはならなかったのでしょうか……」

「どうだろうか、どちらにせよ、この場に居たら胃を痛めるのは間違いないと思うが……」

フィアは呆れた様に顔を覆って天井を仰いだ。そんなフィアの横で大人しく座っていたサイアは、近くに居たイリスの腕を引っ張る。

「ねえねえ、不純いせーこーゆーって何？」

「邪まな気持ちで付き合う事よ」

「邪まな気持ち？」

「そうね、娼婦みたいにお金貰う代わりに、みたいなのがアウトだと思うわ」

「へえ、じゃあ普通にする分にはオツケー？」

「オツケーね！」

「違うよ!？」

「違います!？」

不純な気持ちではなく、本気で孕みたいから行く分にはオツケー、と独自解釈でいこうとしていた女戦士アマソネスに女神と小人族バルウムから渾身のツツコミが贈呈される。

二人は納得がいかない、とぶーたれ、リリルカも畳み込む様に女神に言葉を重ねる。

「と、ともかくつ、過度な触れ合いは駄目だ。他派閥の子との恋愛なんて絶対に赦さない!」

「えっ!？」

眷属達からの猛反発を受けた女神は、それでもこれだけはと声を上げて規則ルールの制定を押し通そうとする中、少年が酷く衝撃を受けた様に声を上げた。

そんな彼の様子に皆が動きを止める中、女神がキツ、とベルを睨み付ける。

「何だいベル君。当然だろう？ それともキミは、お近付きになりたい他派閥その子供がいるっていうのかい？ まさかお付き合いたい、なんて言うんじゃないだろうね？」

「いや、それは……そういう訳じゃ……」

やけに刺々しい態度で少年を責め立てる女神。対する少年は何も言い返せない様子で口を噤んだ。

助けを求める様にベルが室内に居る面々を見回すと、あれだけ騒いでいたリルカは目を瞑ってすまし顔を浮かべており、春姫はちらちらと心配そうに少年と女神を交互に見つめ、ヴェルフも「こればかりは」と首に手を回している。

そして、デインケはううむ、と腕組をして考え込み、エリウツドは「至言だな」と女神の意見を肯定した。メルヴィスもほぼ同意なのか小さく頷いてすらいる。

他派閥の人間との交流。ひいては禁断の恋なんて【ファミリア】にとって百害あって一利なし。女神の言葉は至極当然の事であり、【ファミリア】に所属している者の常識と言えた。

「あの、今回の決まり事は神様相手にも……その、思慕を抱いてはいけないのでしょうか？」

おずおずと手を上げたミコトが、頬を赤らめながら質問を飛ばす。その意味がわからないデインケは首を傾げ、察したメルヴィスや、事情を知るヘスティア等は成る程、と眩きを零した。

「ああ、そうか。ミコト君はタケの事が……」

「い、いえつ、タケミカツチ様に限った話ではなくつ、じ、自分は……!?」

「そーいうことならボクは邪魔しないぜ！ いや———そうだった!?」

今まさに何か思いついたと言わんばかりに女神のツインテールが跳ねる。

それを見ていたフィアの表情がげんなりとし、デインケとエリウツドが顔を覆って、突拍子も無い事を思いついたガネーシャ様の事を思いついた。

「むしろボクは好ましいと思うぜ、神々と子供の番は！ 変な神には間違っても騙されてはいけないけど、タケみたいな神格者だったら全然問題ないさー！」

俄然声高に、一足飛びに跳躍した話を展開した女神にベル達が呆気

にとられ、デインケとエリウツドの目が死んだ。神の突拍子もない発言について、二人には良い思い出は余り無い。主に本拠魔改造計画関連で。

「まるでボク達が降臨する前に流行った、『精霊』と子供の恋歌ロマンスみたいじゃないか！　なあ、ベル君!!　キミも夢があつていいと思うだろ!!」
「えっ、は、はあ……」

唐突に話を振られたベルが曖昧な返事を返した。

女神の言う『精霊』と人間、または亜人との恋歌ロマンスは古くから伝わる物語の題材の一つとして有名なものだ。ただ、ベルの知っている御伽噺、とりわけ英雄譚では悲恋に終わる事が多い。

うろたえる少年を他所に、何かに気付いたりリルカが慌てた様に声を上げる。

「いけませんよ、ベル様!!　神様をお相手に恋愛だなんて騙されてはっ!　ご年齢が定かでもない神様達の愛は重くっ、きつと粘着質ですっ、取り付かれたら最後死ぬまで養わなくてはなりません!!」

「こらーっ!!　ボク達を何だと思ってるんだー!!」

女神は超越存在デウスデアたる神々との恋愛なんて言語道断だ、と否定するリルカに怒鳴ると、ヴェルフに視線を向けた。

「ヴェルフ君はどう思う!!」

「俺は……ヘスティア様の言っている事が正しいと思います」

「正気ですか、ヴェルフ様!」

「禁断の愛だの決めつける必要は無いだろ?　寵愛を受けて可愛がられる奴なんていくらでもいるんだ。神々が望むなら対等な関係になったっておかしい話じゃない。少なくとも、俺はそんな関係になりたい」

芯の通ったヴェルフの返事に、リルカが絶叫を上げ、ベルが目を見開く。

「えっ、ヴェルフって、女神様の事が……?」

「俺はヘファイストス様一筋だ」

ヒュウ、と茶化す様にデインケが口笛を吹き、エリウツドが彼の後

頭部を殴打する。

「おーっ!? うむ、こんな真っ直ぐな子は今頃居ないよ！ ヴェルフ君、ボクはキミを応援するぜ！」

「は、はあ……」

バシバシ、と女神に背中を叩かれ激励されたヴェルフが困惑気味に返事を返す。

「デインケ君達はどう思うー！」

「はあ、神様と恋愛ねえ」

だいぶテンションが上がっているらしい女神の問いかけに、デインケは顎に手を当てて考え込んだ。

本音を言えば、興味が無い。叶えたい夢があるし、尊敬し敬愛しているのは神ガネーシヤだ。彼の神を尊敬もしてるし敬愛もしているが、恋愛云々は想像も出来ないし、したくもない。そして、他の女神から求愛されたとしたらどうなのかと言われれば。

「無し、だな。オレ個人的には」

「ええ!? どうしてだい？」

「どうもこうも、ガネーシヤ様一筋ではあるが、恋愛云々は微塵もないからな」

自派閥の主神が男神であり、恋愛は有り得ない。その上で他派閥の女神から求愛されたとしても断るに決まっている。主神の鞍替えは、よほどの理由が無い限りしないから。

それはエリウッドも同様なのか大きく首を縦に振って肯定を示した。

「じゃ、じゃあフィア君やメルヴィス君は？」

若干焦った様子の女神の問いかけに、フィアは面倒そうに耳を掻き、メルヴィスは困った様に眉根を寄せる。

「アタシは、別に良いと思うが」

「だろう！ メルヴィス君は？」

「本人同士が納得しあうのであれば、良いと思います。ただ――」

「だよね！ ほらベル君、聞いたかい？ 恋愛に種族や神の壁なんて関係ないんだぜ!!」

何処か言い淀んだメルヴィスの言葉を最後まで聞かずして有頂天になった女神。

いつの間にやら神との恋愛関係についての話になっている中で、ヴェルフとミコト、ファイアは肯定派。

騒ぎ立てるリルルカは無論の否定派で、イリスとサイアも否定派だった。理由は、子供が出来ないから好きになれない、と種族の性から。

デインケやエリウッドは興味無しの中立。おろおろしている春姫は否定よりの中立。

意見の是非が二つに分かれる中、女神は期待の眼差しをベルに向ける。

「ベル君はどう思う!?」

「どう、って……」

「そ、そうだなあ……もしボクが別派閥の主神としたら……っていやいやいやっ!?!」

真つ赤に茹で上がった女神がブンブンと顔を振り、咳払いをしてから改めて問いかける。

「もし、他の女神から求愛されたとしたら……キミはどうする?」

女神の質問が放たれると、自然と皆が口を閉ざして居室リビングに静寂が満ちた。

皆が少年の返答を聞こうとしている。皆の注目を浴びた少年は、場の空気にうろたえながらも、答えた。

「いや、断りますけど……」

特に迷った様子もない。葛藤した様子なんて微塵もない。

端から答えが決まっていたとでも言う様に返された返事に女神が凍り付く。ヴェルフとミコトは驚いたような表情を浮かべ、リリと春姫は呆気にとられた表情を浮かべる。ファイアはふうん、と興味無さげで、デインケとエリウッドは肩を竦めるのみ。サイアは欠伸をしており、イリスは腕組をして頷く。そんな中、メルヴィスだけは何処か悲し気に目を伏せていた。

「女神様相手にそんな……嬉しいですけど、滅相もないですよ。恐れ

多いです」

皆の様子に驚いていたベルが、自分の考えを付け足す様に口を開いた。

相手は超越存在^{デウスデア}。自分達とは次元の異なる『神様』である事。

神様達は尊び、崇めて、敬う存在である。

^{ファミリア}

眷属として、子供として、家族として、迎えて頂けるけれど……一線の先に踏み出してはいけないと思う。

そう告げ、自分の意見を言い切った少年を前に、女神は酷く衝撃を受けた様子でふらつく。

「……………べ、ベル君の」

うつむき、震えていた女神は勢いよく椅子から立ち上がる。

「ベル君の、あほお——っ!!」

「か、神様あーっ!!」

全力疾走して居室の扉まで駆けると、そのまま扉を開けて女神は出て行ってしまう。

そこから何と正面玄関まで走り抜けて出ていく女神の姿に立ち上がりかけた少年の驚愕の声が虚しく響く。

そんな様子を他所に、フィアとメルヴィスは慌てた様に立ち上がった。

「おい、単独行動すんなって!?!」

「すいません。私達は行きますね」

今日はバイトが休みとはいえ、女神を単独行動させるのは不味いという事で、護衛としてフィアとメルヴィスが付く事になっている。

故に、いきなり本拠^{ホーム}を飛び出していった女神を追うべく二人は駆け出して行った。

第二一三話

「くそう、ベル君のやつら〜」

涙目を吊り上げながら、てくてくと歩みを進める女神の後ろをついて歩いてきたファイアとメルヴィスの二人は、互いに視線を交わして肩を竦め合った。

セントラルパーク
中央広場から真北に伸びる北のメインストリート。ダンジョンを目指す鎧姿の間をすり抜けながら、館を飛び出した女神は当ても無く都市を彷徨い、護衛の二人はそんな彼女の後ろについて回っている。「そもそもベル君はボクを敬い過ぎなんだよつ。いや、敬ってくれる事は嬉しいんだけど……」

背後に付き従う二人どころか、すれ違う他者にまで聞こえる声量で、周囲から向けられる視線を気にした様子もない女神が団長への不満を言葉にして吐き出していく。

他人の様に振る舞う訳にもいかなないファイアとメルヴィスは溜息を飲み込みながらも、時折相槌を打っては女神の溜飲を下げようとしていた。

「ボク達なんてそんな大したものじゃないぜっ!? 隙を見ればグータラするしっ、部屋に引き籠ってじゃが丸くんを食べあさるしっ、子供達の前で背伸びし過ぎて疲れる事もあるし!!」

「そりゃヘスティア様だけだろ……」

「ちよつとファイア」

ファイアの言葉に通り過ぎていく^{デミ・ヒューマン}人達が肯定する様に頷き、メルヴィスが咎める様に狼人の少女の尻尾を叩く。そんな周囲のやり取りを気にも留めない女神は続ける。

「他の神に至っては馬鹿な事でゲラゲラ笑うしかないじゃないか!! 崇拜なんて必要ないだよつ、なあ、ファイア君もそう思うだろう!？」

「お、おう……」

突然振り返るや否や吠え立てる様に質問を繰り返す女神に、ファイアは頬を引き皺らせながらも返事を返した。

副団長^{ミリア}という特大級の地雷を抱えた子供を導く、優しく知的で慈悲

深い女神だという印象がファイアとメルヴィスの中で軋む様な音色を響かせる。

そんな眷属の評価が徐々に落ちていく事に気付きもしない幼女神は、瞑目して頷く。そんな彼女らのやり取りを周囲の住民達は慣れた様に綺麗に無視した。

「もつと気さくで良いんだよ、畏まらないでくれよ!!? ……:…:ベル君の根性無しい」

勢いよく叫び、最後にはほつりとつぶやきを零す。

吐露された女神の言葉は、雑踏に掻き消されて消える。それを聞き届けたファイアとメルヴィスは困った様に顔を見合わせた。

神々の奇行によって評価が下がるのは往々にしてあることだ。それこそ数多くの市民に慕われ、多くの眷属を従える神ガネーシヤは本拠の魔改造関連で白い目を向けられる事はあるし、ファイアとメルヴィスが所属していた【ロキ・ファミリア】の主神もセクハラ関連で評価を下げる事はある。

「まあ、団長の奴も悪気があつた訳じゃないだろうし良いだろ」

「それに、彼はどちらかと言えば恐れている様子ですし」

「恐れてる?」

メルヴィスは小さく吐息を零し、先ほどは口に出れなかつた話を語りだす。

「私はエルフです。当然、長寿種な訳ですが……私からすれば、ヒューマンや他の亜^{デミヒューマン}人に恋慕を抱くのは難しいです」

「……それは、彼等がキミより先に逝つてしまふからかい?」

察した女神の言葉に、メルヴィスは申し訳なさそうに肯定した。

長寿種であるエルフト、他のヒューマンや亜^{デミヒューマン}人の恋路。それらは程度の差は有れど寿命の差によって必ず引き裂かれる運命にある。故に、メルヴィスは他の種族の者に恋慕を向けられないし、向けられないとは思っていない。

そして、それは長寿種と他の種族ですら起こり得る事であり。神と人、無限と有限という明確な差が存在する異種族同士での恋路ともなれば。

「団長は、女神様の事をとでも大事に思っているのだと思います。だからこそ、おいて逝かれる悲しみを味わわせたくないのだと」
「……………」

メルヴィスの言葉に、ヘステイアは言葉を反さず、ゆっくりとした足取りで大通りを進んでいく。

二人の会話を聞いていたフィアは、小さく吐息を零して黙った。彼女自身、メルヴィスと親友だと謳う事もあるが、寿命の差を気にした事は微塵もない。それでも、見知った仲間が抱え持つ長寿種故の悩みを解決する言葉を持ち合わせてはいない。

「失礼かと思いますが……女神様は、^{ヘステイア}おいて逝かれる覚悟がある上で、その……彼をお慕いしているのでしょうか？ それとも……」

神によつてその愛の形は様々。

子供が死んでもその事をずつと覚えている神も居れば、すんなりと忘れてしまう神も居る。

目の前に居る慈愛に満ちた幼女神は、後者とはとても考えられない。もしそうであるのだとすれば、いずれくる別れの時を思えば、深い関係を築く事に戸惑いを覚えた団長の考えも理解できる、とメルヴィスが呟くと、女神は振り返った。

先の荒々しく突発的に振り返つて喚くのは真逆。

非常に落ち着いた、それでいて何処か悲しそうで、それでも笑顔を浮かべた女神は、告げる。

「忘れないよ」

ただ一言、万感の思いの詰まったその言葉を聞いたメルヴィスは、静かに頭を下げた。

「ご無礼をお許してください」

「いや、だから良いって。ほら、ボクになんて恭しい態度をとる必要なんかないさ」

先の真剣な様子から一変して、わたわたと子供っぽく振る舞う女神の姿に、フィアは僅かに肩を竦めた。

「んで、これからどうすんだ？ 帰るか？」

「うっ……いや、帰るのはちよつと……悪いんだけど、時間潰しに付き

合ってくれよ」

飛び出してきた手前、直ぐにホームに戻るのは思うところがある、と言った女神に二人は頷くと、大通りを歩いていく。

気を取り直して買い食いでもしようか、と女神が提案すれば、フィアは良いなと肯定し、メルヴィスは朝食を食べたばかりでしょう。と苦言を呈する。空気を入れ替える様に和気藹々としたやり取りをしているところに。

「あつ、ヘスティアちゃん!? いいところに!」

「ん……? おばちゃん?」

「バイト先の同僚の人だったか?」

ヘスティアの名を呼ぶ声に気付いた三人が足を止める。

彼女らの視線の先、大通りの脇道の前に恰幅の良い獣人の女性が手を振っていた。

女神が働くじやが丸くんの露店、その同僚だった。

「おはよう、おばちゃん」

「おはよう」

「おはようございます。いつも主神がお世話になっております」

「フィアちゃんにメルヴィスちゃんも。おはよう」

護衛としてヘスティアの周囲に居る間、時折露店の手伝いもししており顔を覚えられていたフィアとメルヴィスにも挨拶を返す彼女は、本題を切り出した。

「それがねえ、さつき店長からお達しがあって、今すぐじやが丸くんの材料に使う香草ハーブを都市の外にとりに行かなくちゃいけなくなっちゃって……」

「香草? 交易所にでも行って買えばいいじゃないか」

「費用削減だつてさ。それで人手が足りなくて……」

申し訳なさそうにする獣人の女性に、女神と二人は顔を見合わせた。

今日はバイトの休みの日ではある。それはフィアとメルヴィスも知っていたが、女神の表情を見て小さく頷いた。どうせ今直ぐに帰れない上、どこぞで買い食い何ぞしてがめつい小人族バルウムのお小言を貰うぐ

らいなら、バイト先の為に骨を折ってお礼の言葉を貰う方が良い。

女神が手伝う事を告げ、ついでにファイアやメルヴィスも同行する事を伝えると、同僚の彼女は謝りながらも感謝を告げた。

「でもさ、おばちゃん。ボク一応【ファミリア】の主神だから、都市の外には出れないんだ」

「あ、そうだったねえ」

「そっぴいやそうだったな」

「ちよつとファイア……」

同僚と会った場所から更に真北、巨大市壁に備わった北門に台車や籠等の道具を運びながら、女神が懸念を口にする。

オラリオに所属する冒険者、ましてや派閥とその主神が都市の外に出るのは難しい。

『世界の中心』と呼ばれる最大の理由。世界最高峰の戦力を有するオラリオは、守りを失い都市を脅かす敵が増える事を懸念しているのだ。故に、都市外へ出ようとする【ファミリア】、特に上級派閥にはギルドの厳しい審査と煩雑な手続きが必要となっている。そして、主神はそう易々と外出の許可は下りない。

たとえ団員達が都市外に出たとしても、主神さえ確保できていれば牽制役、神質ひしじちになるからだ。【ヘルメス・ファミリア】等の特例を除けば、都市を自由に出入りできる存在は無いと言っている。

中に入るのは容易く、外に出るのは困難を極める。

迷宮都市に住まう者達の共通認識であり、オラリオの暗黙の了解であつた。

「都市を出る前までだったら、手伝う事も出来るんだけどさあ」

「正式な依頼として受理されないからなあ」

躍進を続ける【ヘステイア・ファミリア】は、今や都市の中堅派閥だ。更に加えて竜種を従え、管理している特殊な特例の派閥ともなっている。その派閥の主神でもある女神は少なくとも今すぐ都市を出る事は叶わない。

それこそギルド側から一時的に都市から出て行ってくれ、と依頼があれば話は別だが、あれは事情が事情であるが故の処置だ。ただの

香草採取で外に出るのは非常に難しい。

「相変わらず玄関口は混んでるな」

大きな北門の前ではギルド職員と、彼等に協力している武装した武闘派の派閥団員、そして二名の門番が都市外に出る商人や馬車を事細かに検問している光景があった。

通行許可証と、許可された人員数。更には馬車の積み荷に至るまでしっかりと検査している為かそれなりに列が出来ている。通行許可証がなければ即座に拘束されるし、許可内容の不備や、許可証とは異なる人員・荷物が確認されれば即刻取り押さえられる事だろう。実際、一日に数件は取り押さえられる者が出るとも聞く。

ギルドから発行された許可証を持つ五人しかいないバイト仲間と合流した獣人の女性は、困ったと手を頬に当てる。

今からでもギルドに駆け込んで許可証の取り付けでもしてみるか、と女神ではなく眷属のフィアやメルヴィスならなんとかならないかと話し合っていると、周囲の門前広間が不意に賑やかになった。

何事かと皆が視線を向けようとして、気付いた。

「俺が、ガネーシャだ!!」

「あ、ガネーシャ」

視線を向けずともわかる程の肉声と存在感を振り撒く男神。それが今まさに門を潜り門前広場に姿を現す所だった。

引き締まり鍛え上げられた浅黒い長身の体、黒い髪。その中でもとりわけ目立つ顔に装着された象の仮面。

都市最大団員数を誇り、多くの上級冒険者を保有し、ディンケやエリウツドが所属していたオラリオの大派閥「ガネーシャ・ファミリア」の主神の登場に、周囲に居た市民や商人達、同僚の獣人やバイト仲間、フィアやメルヴィスも拍手と笑顔を送る。

「むっ、そこに居るのは——ヘスティアか!?!」

「いちいち声を張らなくて良いよ、ガネーシャ。でも、どうしてここに？ 戦場に駆り出されていたんじゃないか?」

謎の姿勢を決め、非常に暑苦しいガネーシャにヘスティアが歩み寄る。

門前広場に入り、二名の団員を引き連れ馬に乗っていたガネーシャが「とうっ！」という掛け声とともに馬上から石畳に飛び降りた。

「話せば長くなるが、もう戦争が終わりそうだから帰ってきた」

「短いよ」

「後は捕まえた王国ラキアの兵士達を都市に運び込みにな。滅茶苦茶多すぎて戦線では抱えきれん」

殺傷禁止で不殺。負傷させて投降を促し、捕虜にして捕まえる。なんて方法を繰り返していれば当然と言えば当然。

毎度毎度、ラキア王国との戦争時に捕まえた捕虜の後方への輸送は問題になる事が多い事を知るフィアとメルヴィスはなるほど、と頷く。

「ふうーん。でもキミ達が戦場から抜けて大丈夫なのか？ ガネーシャの所は人も多いし、戦力の中枢だろう？」

「なに、戦場の心配は要らん！ 超・優秀な俺の団員達が残って今も戦っている!! と言うか五月蠅いから先に都市に戻ってると追い出された！」

包み隠さず告げられた内容にヘスティアが眉を顰め、フィアとメルヴィスが苦笑を零す。

ガネーシャの後ろに居た団員も、いちいち無駄に熱い振る舞いに頭を痛めている様子だった。

「キミ、「ファミリア」の中でもそんな扱いなのか」

「俺はガネーシャだからな！」

何を以ってそこまで自信満々に主張できるのか。暑苦しい程の存在感にヘスティアが僅かに疲れた様に身を引くと、今度はガネーシャが問うた。

「で、ヘスティアは何をしている？ デインケ達は元気にやっているか？」

「デインケ君達は元気さ。いつもキミの元に戻ってまた頑張りたいって言ってるさ」

「ふむ、デインケもエリウッドも良い子だ。だが少し気負い過ぎなきらいがある。気を使ってやってくれると助かる」

「それは別に構わないさ。それで、今はちよつと事情があつてね。実は——」

女神が簡単に事情を説明すると、ガネーシヤは光る白い歯を見せ付ける様に、笑った。

「そういう事なら俺が許そう！　ヘステイア、出て行つて良し！」

「ちよ、ガネーシヤ様!？」

「おいおい、本気かよ……」

「相変わらず、暑苦しいだけでなく思いきりも良い神様ですね……」

驚愕するヘステイアを他所に、呆れた様な表情を浮かべるフィアに、ほんの僅かに尊敬した様子を見せるメルヴィス。そんな中、ガネーシヤの護衛二人は主神に食つて掛かった。

「何を言つてるんですか、ギルドを通さずにそんな勝手な真似を……!？」

「俺は【群衆ガネーシヤの神】だ！　じゃが丸くんは都市を潤す元気の塊、それが食べられないとなれば今日も誰かが泣くだろう！　その様な事、俺が許さん！」

「あんた何言つてんだ!？」

悲鳴のような叫びを団員達が上げるが、ガネーシヤは決定を翻そうとしない。

言動からして——その本拠も含め——神々の中でも群を抜いて奇異な神物しんぶつであるが、周囲から響く喝采からも察せられる様に、都市の住民達からの彼に対する信頼と信仰は厚い。

常々【群衆の主】を公言してはばからない通り、彼は下界の住民達が好きだ。彼が率いる【ファミリア】は率先して管理ギ機構ルと結託し、催しの開催や治安維持にも努めている。

それこそ都市内で竜種を従える少女が自由に動き回れているのも、彼が住民達への説得を引き受けたからに他ならない。

発言力の高い彼の口から放たれた言葉に、聞こえていた二名の門衛もぎよつとした表情を浮かべる。

「ギルドに知られたらお咎め程度じゃ済みませんよ!？」

「バレなきや良いのだ、団員Aよ！」

「モロバレですよ!? 今どれだけ衆目を集めていると思ってるんですか!? あと自分はモダーカです!?!」

しばし姦しく騒ぐ主神と眷属達であったが、結局団員達が折れた。一度言い出したなら止まらないのを大いに理解している彼らに対し、ファイアとメルヴィスは僅かに同情の視線を送る。

そんな眷属達のやり取りを他所に、ガネーシヤはヘステイアに向かって親指を上げた。

「本当に良いのかい、ガネーシヤ?」

「うむ。お前は規律を乱す神ではない、子に笑みを与えてやれる女神だ! さあ行け!」

仮面の下で笑う男神に対し、女神は笑みを返すと親指を上げた。

苦笑するガネーシヤの眷属と、渋面を浮かべたギルド職員に見送られ、女神達は門を潜る。

「ガネーシヤ様、かなりおかしいけど、良い神様だねえー」

「まあねー。ちよつとやかましいけど、いいやつさ」

「……良いのか? いや、アイツら苦笑してるから良いのか?」

「半分諦めてますよね。まあ、素早く香草ハーブを集めて戻れば良いのですから。余り気負っても仕方が有りません。何か事があれば神ガネーシヤが責任を取るとも仰られていましたし」

何度も門を振り返っては心配そうにするファイアに、メルヴィスが苦笑を漏らす。

含みが何一つ存在しない——いや、都市の住民の為という含みはあれどそれも含めて——純粋な善意十割の振る舞いにファイアがバリバリと頭を搔く。

「副団長ミリアがああアの神様の事好きなの、何となくわかるわ」

所属人数が都市最大になるのもわかる程の良い神いいやつっぷりを見せ付けられた二人は苦笑を零した。

珍妙ユニークな神物像じんぶつで子供に愛されている男神について語り合いながらも、ヘステイア達は門を潜った。

整備された街道に緑の草原という光景が広がっていた。視界の奥には雄大な山脈が聳え、その麓には森林が見える。

北の空に積もる灰色の雲を見たメルヴィスが、一雨きそうだから早めに採取を終わらせなくては、と意気込んでいると。

「本当に来てしまつて、バレたらどうするんですか……!?!」

「神威は極限まで抑えている。私が神だとはすぐにはバレん!」

「声がでかい!? そもそも無策の正面突破つて、貴方どこまでアホなのかと……」

何事かを言い争う声が都市内へと入ろうとする長蛇の列から響いていた。

自然と視線が奪われた先、列の一角で身を寄せ合う二名の男性の姿があつた。どちらも長身で、旅装のフードを深く被つて顔を隠している。そんな彼らの後ろにも同じ意匠デザインの旅装をした者達が続いており、こちらは緊張した面持ちで口を堅く閉ざしている。

周囲に居る商人達は傍迷惑そうにその口論に眉を顰め、獣人の同僚は「あーいう変な人つてどこかに居るもんよねえ」と呟く中、ヘステイアは怪訝そうな表情を浮かべる。

フィアとメルヴィスは静かに武器に手を伸ばしつつ警戒し、女神とその集団の間に身を割り込ませた。

「まさか、こんな所に居るはずないよな……?」

「普通、こんな所に居ませんよ……」

怪し過ぎる集団に対し、フィアとメルヴィスが警戒しつつも、相手を刺激しない様にゆっくりと横を通り過ぎようとする。

ここは都市の門前である。そこに今まさに戦争中の者達がこのことやってくるはずが無い、という彼女らの判断は間違っていないだろう。

普通はそんな事はしない。常識的に考えてそんな馬鹿な真似は有り得ない。

だが、彼女らが思う程、ラクシア王国を率いる神アレスは、頭が良くなかつた。

「キューイ!」

「ああ、久々の地上……三日ぶりですか」

時刻はおおよそ九時頃。

異端児セノスと別れてから、18階層でフェルズとも解散してキューイ、ヴァン、クリスの三匹と共に地上へ帰還した俺を出迎えたのは、麗らかな日差しと、訝しむ様な冒険者達の視線の雨だった。

異端児セノスから向けられる好奇の視線よりも、薄汚い思想が読み取れるねちっこい視線に、思わず吐き気すら覚える。やはりというべきか、純粋な想いを抱いた彼等と比べて、人の様々な感情の交じり合った視線の何と気持ち悪い事か。

足早に『バベル』の地下一階から出て、中央広場セントラルパークに出て、家路を急ぐ。

地上に帰ったら俺の知る全てを女神に話すと約束した。今まで黙っていた事、今回の件もそうだし、全てを話そう。ただ、どこからどう話を切り出せば良いのかはいまいちまとまりが付かない。

正直言つて、余りにも複雑に事情が絡み合い過ぎて、話の切り出しがしづらい。

考え事をしつつも、都市西部の街路に足を踏み入れた所で、名を呼ばれた。

「ミリア？」

「……ん？ ベル、ベルじゃない。久しぶりね」

白髪の少年の姿に、思わず頬が綻ぶ。

僅かに驚いた表情を浮かべたベルに笑いかけるさ中、彼の周囲に居る者に思わずげんなりした。

二人の男神の姿がある。

回復薬等の商品を積んだ四輪の手押し車を持つミアハ様。もう一人は羽根付きの鍔広帽子を被った神ヘルメスだ。

珍しい組み合わせの三人が歩んでいる光景に首を傾げつつ、彼等に近づく。

「ミアハ様もお久しぶりです。それと、ついでに神ヘルメスも」

「ああ、久しいな。強制任務ミッションと聞いていたが、無事帰ってきた様で何よりだ、怪我は無いか？ 疲れているのであればこれをやろう」

「いえ、大丈夫です。それに、ナアーザさんにまた怒られますよ？」
柔らかな笑みを浮かべて商品の回復薬ポーションを差し出してくるミア様が
をよんわりと嗜めると、橙黄色の髪を揺らした男神が続ける。

「いやあ、「魔銃使い」にギルドが秘密裏に強制任務ミッションを任せるだなんて、
内容が気になっちゃうね。どうだい、こつそりオレに教えてくれない
か？」

「駄目ですよ。罰則ペナルティを受ける事態になったら全額支払ってくれるん
ですか？」

「はっはっは、そんな事になったらオレ、アスフィに刺されちゃうかも
な」

何がおかしいのかヘラヘラ笑う神ヘルメスの姿に思わず眉に皺が
寄る。

正直、ベルと出会っただけなら良かった、と思える。ミア様でも
別に悪い気はしない。しかし、神ヘルメスもセットだと正直げんなり
だ。まあ、ヘルメス単体と出会ったら気分最悪だったことを思えばま
だマシだが。

「あ、そうだミリア。神様見てない？」

「ヘステイア様、ですか。見てないですが、何かあつたんですか？」

ヘステイア様を探しているというベルの言葉を聞いて、思わず心臓
が跳ねたが、俺が危惧する事態ではなく、あくまでもベルの言葉が原
因で女神が飛び出して行ってしまっただけらしい。

護衛としてフィアさんとメルヴィスさんの二人が付いているそう
なので、早々危ない目に遭う事はないだろう。

ヘステイア様を探すというのなら、丁度キューイも居るし手伝え
る、と言おうとした所でヘルメスに声がかかった。

「どこへ行っていたのですか、ヘルメス様！」

アクアブルー
水色の髪の美女、アスフィさんが神ヘルメスに向かって怒鳴る。

ヘステイア様を探すベルと偶然出会い、その後ヘステイア様搜索を
手伝う為にか行動と共にしていたらしいヘルメスが怒られている様
子にベルが申し訳なさそうにする。

「付いてこいと言っておきながら勝手にいなくなつて……!？」

「いや、だって、耳に触る小言が多くてさあ」

「はあっ!？」

「あ、うそそうそゴメンツ」

火に油を注いで大炎上させた結果、憤怒する派閥の団長に詰め寄られ、汗を掻いて平謝り。

暫くして、主神をぐったりさせたアスフィさんが肩で息をしながら、ようやく俺達の存在に気付いた。「見苦しい姿を……」と項垂れる彼女に対し、ベルとミアハが苦笑を浮かべる。俺としてはもう少し神ヘルメスを絞つても良い気はするのだが。

気を取り直す様に眼鏡の位置を直したアスフィさんが口を開く。

「それで、この傍迷惑な主神と一緒に何をしておられたの?」

「私は今合流した所だから詳細は知らないけど、ヘステイア様を探していたみたいね」

主神にたいしてあんまりな物言いでは、とベルが冷や汗を流しているのを尻目に事情をさらりと説明する。

納得の表情を浮かべたアスフィさんを見終えてから、俺はキューイに視線を向けた。

ヘステイア様は何処にいるのか、と問いかける。彼女の探知能力ならば都市内に居れば間違いなく居場所がわかる。そう言い切れるだけの感知能力がある為、耳を澄ます様に集中し始めたキューイをのんびり待つ。

ほんの数秒すると、キューイは口を開いた。

「キューイ?」

「……は?」

キューイの返答は、俺の想像とは全く異なるものだった。

端的に言えば『居ない』だそうだ。

「キューイ、そんなはずはないですよ」

「キューイ、キューイキューイ」

でも居ないものは居ない、と此方を睨むキューイに思わず眉間を揉んだ。

「ベル、一つ聞きたいんだけど、今日ヘステイア様が都市外に出ていく

用事とか予定ってあったかしら？」

俺の記憶が正しければ、そんな予定は無かったはずだ。

それに、もし都市外への外出予定があったとしたら一週間以上前から都市外外出許可を得るための煩雑な手続きと、無駄に厳しい審査を行っているはずだ。その記憶がない以上、ヘステイア様が都市外に出ている理由はない。

ならば死んだ、なんて縁起でもない。そもそも恩恵がまだ生きている時点でヘステイア様の無事は保障されている。

ならば、ヘステイア様は何処へ？ そんな疑問を覚えた直後の事だった。

慌ただしい複数の足音が背後から響いてきた。

「——えっ？」

自然と、その場に居た全員がその足音の方へと視線を向けた。

デミヒューマン

亜人の一団が武器と防具の擦過音を鳴らしながら街路を突き進んでいる。その中には、金髪金瞳の女剣士の姿もあった。

「ア、アイズさん!？」

「君は……」

ベルの上げた驚きの声に、帯剣したアイズ・ヴァレンシュタインも反応した。

銀の胸当てに手甲、肩鎧を始めとした防具を纏い、完全武装状態だ。そして、彼女の周囲の者達も同様に完全武装。これから戦いに出ると言わんばかりの恰好に思わず眉を顰める。

全員が「ロキ・ファミリア」の徽章エンブレムを付けている事上、見知った顔も混じっている事から「ロキ・ファミリア」の団員だというのはわかる。

迷宮に数日間籠っていた為、地上でのラキア王国との戦争の推移を知らないが、慌ただしさが感じられる彼女らの様子から、何事かがあったのは間違いないだろう。

彼女はこちらをじっと見つめると、口を開いた。

「キミも一緒に来て。ミリアも、今すぐに」

何処か真剣な響きを含んだアイズさんの言葉に、先のキューイの言

葉が脳裏を反響する。

都市内には居ない、ヘステイア様。

そして、慌ただしく完全武装で急ぐ「ロキ・ファミア」の戦闘員。
まさか、という当たって欲しくない予感ほど、良く当たるものはな
い。

第二一四話

迷宮都市北の玄関口。

巨大市壁に設けられた都市北門前広場にて、神口キは頭を抱えていた。

頭を抱えて呻く彼女の周囲には、眷属である小人族のフィンや、他の神々や眷属達が集まっている。

「ドチビが攫われたあゝ!?!」

「そうなんです!?! ヘスティアちゃんつ、変な神様に無理矢理捕まえられちゃって!?! 守ろうとしてくれた冒険者の方も大怪我をして

……!?!」

「王国の兵士らしき一団は、その後散り散りになって周囲へ逃亡しました!?!」

獣人の女性と、ギルド職員の門衛が冷静さを欠いた状況説明を繰り返す。

事の始まりは数十分前。

とある派閥の主神が北門を出てすぐの所で、現在オラリオと戦争状態にあった『ラキア王国』の主神アレスト、彼が率いる精鋭部隊の奇襲を受けた。その際、女神の護衛に付いていた眷属二名と、【ガネーシャ・ファミア】が派遣していた門兵二名が対処しようとしたものの、想定外の奇襲の上、『ラキア王国』が誇る精鋭中の精鋭、騎士団長級の兵が二〇名も居た為、迷宮の恩恵で上質な経験値を得ていた都市の冒険者も太刀打ちできずに撃破され、女神が一柱、攫われてしまった。

その際、門前で順番待ちをしていた一般人からも数人の被害が出た上、直接戦闘をした護衛二名に門兵二名の四名が重傷を負ってしまった。

事態を受けたギルド本部は勿論の事、各種有力派閥の主神や構成員に片っ端から報告を届けている。

騒ぎ発生から時間がそう経っていない為、この場に集まった主要神物と冒険者は神口キとフィンぐらいしか居ない。

周囲では未だに騒めく旅人や商人の姿が散見される。

「不幸中の幸いなんは、ミアアが強制任務でダンジョンに潜つとる事や。すぐにでも片つけんと不味いで」

「すまない、神の動きまでは読めなかった……すぐに部隊を編成しよう。アイズはまだか……」

件の攫われた女神。

それが率いる派閥の眷属には『魔剣のクロツゾ』。此度、水面下で密かにラキア王国が狙っていた魔剣鍛冶師が居る事に加え、現在の都市内において重要人物として名が知れ渡っている【竜を従える者】ドラゴン・テイマーまで居る。

彼女が引き連れた飛竜から生み出される『再生薬』の取引関連で繋がりを持っており、尚且つ個人的にも知り合いである【ロキ・ファミア】の主神と団長は強い疲労と安堵を浮かべつつも、焦った様子で周囲を伺っていた。

件の【竜を従える者】ドラゴン・テイマーまたは【魔銃使い】で知られるミアア・ノースリスという人物。彼女がいかに女神に依存しているのかを知る一柱と一人は、この事が本人に知られる前に何としてでも解決すべきだと判断していた。

その為にも、呼び出しのかかった眷属達の到着を待っている間、ロキは恨めし気な視線をとある男神に向けた。

「そもそも……どないしてドチビは検問スルーする事が出来たんやろうなあ、おお、ガネーシャア？」

酷く恨めし気な視線を向けられた男神、褐色肌のガネーシャはいつもの勇ましくも暑苦しい雰囲気とは異なり、どこかへっぴり腰になりながら微妙なポーズをとっていた。

「お、俺がガネーシャだが……？」

「オイ、いつもの元気はどうした？」

ロキに険悪な視線を向けられたガネーシャは、普段からは考えられない程にしおらしい態度で、ぼそぼそと聞き取り辛い声量で己が所業を語った。

「で、つまり自分が馬鹿な事抜かして許可したと」

「あ、はい」

「この変態仮面が！ 冗談は顔だけにしとけ、大ボケツ!!」

「……俺はガネーシャだからな!!」

「開きなおんなや！」

責め立てられていた男神が、胸を張って応えた瞬間。ロキの罵声が響き渡る。

流星に自分の仕出かした事の大きさに反省した様子を見せるガネーシャに、ロキは容赦なく『ギルドに絞られる！』と死刑宣告を告げる。そんな彼女の言葉にガネーシャ『ノオー!?!』と頭を抱えるのを、ロキは鋭い目付きで睨む。

そんな男神の姿を、眷属であった護衛や門衛が言わんこつちやない、と呆れの視線を向けた。

「あんのじゃが丸おっぱい、要らん面倒増やしおって……」

空を睨み付けながらロキが愚痴を呟く、その時だった。

「動かないでください！」

広場に寝かされた負傷者と、それを治療していた者達が声を上げる。

ロキとフィンが視線を向けた先、そこには彼女と彼が良く知る人物が身を起こそうとしている光景があった。

「アタシが、行かなきゃ……」

「だから、その怪我で動くのは無謀ですってばっ」

女神を守ろうと全力を尽くした上で、重傷を負って倒れていた冒険者。

【ロキ・ファミア】から訳あって一時的に「ヘスティア・ファミア」に改宗していた狼コンバージュン人の少女ウエアウルフ。

無数の打撲と切り傷を負い、包帯で固定された腕は強引に動かした所為か血が滲んでいる。

【蒼空裂砕】ファイア・クーガ。

Lv. 3に至った第二級冒険者であり、通常なら都市外の冒険者に後れを取る事なんてありえない実力者。迷宮にて得られた潤沢な

経験値エクセリアによって相応に強さを手にした彼女。

奇襲を仕掛けてきた騎士団長級のラキア王国の兵のレベルは3。普通ならば遅れをとる事は無いはずだが——相手は二〇を超える数が動員されていた。ましてや、彼女と行動を共にしていた護衛はLv・2。

仲間を庇いつつ女神を守ろうと死闘を繰り広げ、一〇人を超える騎士に袋叩きにされて無力化されたのだ。

そんな彼女が護衛を買って出ておきながら主神を守護しきれなかった事を嘆き、直ぐにでも取り戻さんと立ち上がろうとする様子を見ていたロキは、フィンの傍を離れて彼女の下へ歩んだ。

「フィア」

「……ロキ、アタシは」

「落ち着きい、今のアンタが動いてもどうにもならん。すぐにフィンが何とかしてくれるわ」

口惜し気に歯を食い縛るフィアを寝かせたロキは、同じく負傷者として治療を受けているもう一人のエルフへと視線を向ける。

フィアと共に女神の護衛として最善を尽くし、昏倒しているメルヴィスを見て、ロキは不愉快そうに口元を引き締めた。

「アレスのアホ、ようやくってくれたわ」

ヘステイアの下に預けた眷属の痛々しい姿にロキが呟きを零す。

「とりあえず、王国ラキアの狙いは『魔剣のクロツゾ』だろうね。……加えてドラゴン・ティマー【竜を従える者】かな」

「やろうなあ。主神を神質ひとじちにヴェルフ・クロツゾ本人か『魔剣』……もしくは、ミリア・ノースリスを要求……ギルドが応じないにしても、間違いなく内輪揉めは避けれんやろ」

迷宮都市オラリオは一枚岩ではない。例えギルドや多くの勢力、そして半数以上の【ファミリア】が王国ラキアの申し出を撥ね退けたとしても、女神ヘステイアと親しい神や【ファミリア】——都市屈指の鍛冶大派閥ヘファイストス・ファミリアは確実に——が異議を唱え、仲間割れが起きる。最悪の場合には、王国ラキア以外の他国、他都市、他勢力の付け入る隙になりかねない。

それだけでも厄介だというのに、女神ヘステイアの眷属にも問題が大きい。

特筆すべきは、単身で都市の複数の大勢力と繋がりを持ち、なおかつ竜種を従える能力を持ち、戦争遊戯でも未恐ろしい活躍を納めた小人族パルウムの少女。更には本人自身も相応の戦闘能力を持ち、戦術立案にも優れた冒険者が居る事だった。

しかも、本人は女神ヘステイアに忠誠を誓い、依存と言い換えても過言ではない程に彼女を慕っている。決して女神を見捨てないであろう事は想像に易い。

端的に言えば、ミアアが動く状況が最も不味い。

「敵が本国に帰還する前に、神ヘステイアを取り返さないと不味い」
「序に、ミアアがこの事に気付いて動く前が望ましいわな」

瞳を細め淡々と語るフィンに、ロキは補足として付け加える。

運の良い事に、動かれると騒ぎが大きくなりかねないミアア・ノースリスは、従えている竜種と共にギルドが課した強制任務ミッションで迷宮探索を行っている。

一応、予定としては本日の昼頃に帰還する事になっていた。現在時刻は八時を過ぎた頃合い。

想定外にミアアが帰還するのが早くなっていなければ問題は無い。故に、彼女が帰還するより以前に事の收拾を図る。最低でも、女神ヘステイアの身柄だけでも確保しておく必要がある。

その意見に同意した皆が頷いた所で、羽搏く音色が響いた。

「ああ、なんて間の悪い」

「ガネーシャ、お前責任もって止めろや」

周囲に居た商人や市民達も次々に気付いた様に天を仰ぐ。

フィンとロキが半ば諦めた様子で呟く中、男神は僅かに喉を震わせて空を仰いだ。

広がる晴天、都市中央に聳え立つ白亜の摩天楼から一直線に北門広場に向かってくる、飛翔物。

深紅の両翼を羽搏かせ、服の裾を風に揺らす少女の姿をした異形。ミアア・ノースリスの魂の片割れにして、従う竜種の一匹。

最近人型化して都市を騒がせている赤飛竜レッドワイヴァーンと、そんな彼女に抱かれた小人族パルウムの少女。

凄まじい速度で接近してきたその存在は、丁度話し合いを行っていた者達の中央に、降り立った。

「———どうもお久しぶりです。女神様ヘステイアが攫われたとお聞きしましたが。状況を伺ってもよろしいでしょうか？」

丁寧に、物腰穏やかに告げたその姿にフィンが頬を引き攣らせ、ロキは天を仰いだ。

ギルドが告げた予定では、後少し猶予があったはずである。しかし、予定よりも帰還までの時刻が早まった———加えて、此度の事件について知ってしまった———竜の姿がそこにあつた。

張り付けた様な笑みに、微塵も笑っていない瞳。

ヒューマンの子供程しかない背丈からは想像も付かない圧力プレッシャーを振り撒きながら告げられた言葉に、周囲で起きていたざわめきが風いだ。

一瞬で静まり返る場の中、落ち着いた様子でフィンが口を開く。

「久しぶりだね。状況は既にキミの知つての通りだと思う。神ヘステイア、キミの主神が攫われた。十分ほど前の出来事だ。今は大急ぎで招集をかけて、奪還作戦に向けた人員を集めている所さ」

導火線に火が付き、いつ爆発してもおかしくない状態の金髪の少女を刺激しない様に言葉を選んでフィンが対応する横で、ロキはガネーシヤを小突いた。

「直ぐに地図を用意しろや。それと、逃げた方向は」

「あ、ああ」

最悪な状況だと察したロキが冷や汗を流し、ガネーシヤが慌てた様子で都市周辺地図や逃げた方向を記す紙などを用意させる。そんなやり取りをしている二人を差し置いて、他の神々は黙り込んでいたり、中にはニヤニヤとこの状況を愉しんでいる神すらも見受けられる。

「ヘステイア様の居る場所は？」

「わからない」

「逃走経路もわからないんですか？」

「厄介な事に、敵は北、西、東の三方向に部隊をいくつもわけた。数は

かなりの数になっていて、追跡隊どころか調査も出来ていない状況だ」

フィンの説明を聞くミリアは、背後に従えたキューイに視線を投げかける。

人型に転じた竜種のキューイは、少女から向けられた視線に対し、僅かに首を横に振った。

「部隊の進軍速度がかなり速いみたいですね。キューイの索敵範囲外に逃げた様子です」

直ぐに追わないといけない。しかしいくつもの小隊に分かれて逃走する部隊の中、どこに女神を連れた本隊が居るかは不明。

飛行能力を有する飛竜を従えたミリアならば即座に発見も出来るかもしれないが、大雑把な位置すらもわからずに飛行し探すのは難度が高い。加えて、ミリアが従える竜種三匹の内、機動性に富んでいる上で索敵能力が高いのは赤飛竜のみ。

結晶竜は迷宮内の石英を通じた異常な索敵能力を有してはいても、石英が全く存在しない地上では目視が限度。灰飛竜に至ってはそもそも飛行能力が無い。

それでも主神の危機ならば、とミリアが直ぐにでも飛び立とうとキューイに指示を出そうとした所で、ギルドの門衛が声を上げた。

「ミリア・ノースリスが直接探しに、そんなの駄目に決まっている!」
都市で重要ともいえる『再生薬』の作成に関わっている。だけならまだしも、

モンスターが都市外へ——それも強力な竜種が——出る、何てことになれば都市の威信に関わる。たとえ冒険者が調教し、絶対に逆らう事が無い程に従えていたとしても、周辺国家はその件についてオラリオを責め立てる。

明確に迷宮都市にとつての隙になりかねない、と猛反対するギルド職員の声が響く。

そのさ中。

「フィン、ロキ」

「おおアイズ、来たか。リヴェリアやテイオナ達は？」

「私しか来てない。後は、『リトル・ルーキー』と……」

本拠^{ホーム}を出払っていた他の第一級冒険者より一足先に到着したアイズ。彼女の後ろには件の女神の率いる「ファミリア」の団長である少年と、男神が二人いた。

彼らはギルド職員に殺気立った視線を向けるミリアを見て、各々の表情を浮かべている。

「ミリア、あの、神様が攫われたって。状況は……」

そんな空気の中、道中に主神が攫われた事を知らされ、先行したミリアに追い付いた少年が問いかける。

「二度目になるが、神ヘステイアが攫われた。現在、神の居場所は不明。敵は北、西、東それぞれに部隊を分け逃走中。どれが本隊かは判別できていないどころか、追跡隊も出せていない」

フィンが手早く説明するさ中、ミリアはギルド職員を鋭く睨み付けていた。

「今、何と？」

「だから、『魔銃使い』が竜種を使って索敵を行う事は禁じられている！ 都市内ならまだしも、都市外へと出るのは不味い！」

「——で、それが何か問題でしょうか？」

必死に引き留めようとするギルド職員に対し、ミリアは仮面の様な微笑みを持って対応する。

他国や他都市、他勢力の付け入る隙が出来ない様にと必死に口を回すギルド職員に、ミリアは耳を貸す気配は無い。どころか——。

「^{ペナルティ}罰則ならどうぞご自由に。どうあれ、私はヘステイア様を救出する為に動きます」

何があるうが、女神の救出作戦の為に動くのは決定事項。

もしこれを邪魔しようとするのなら、ギルドだろうが何だろうが関係ない。そう言い切った少女は、酷く暗い瞳でギルド職員を真正面から捉えた。

「たとえ世界が敵になろうが、私はヘステイア様を救出します」

邪魔をするのなら、息の根を止める。そう断言した姿に息を詰まらせたギルド職員が黙り込む。

これ以上問答を繰り返そうものならば、本気で事に及ぶ。彼女の右手は既に銃の形をとっており、詠唱すればすぐにでも魔弾を放てる事を意味していた。

フィンは僅かに眉を顰めつつも、口を開いた。

「魔銃使い」が従える飛竜が使えれば、より迅速に神へスティアを捕捉できるだろう。確かに他国から文句は言われるかもしれないが、今は置いておこう」

【勇者】!? しかし……ッ!」

「今回の責任は全部ガネーシヤが取る。せやろ?」

なおも言い募ろうとするギルド職員にフィンは首を横に振り、ロキは鋭くガネーシヤの方に矛先を向けた。

今回の一件の発端は神ガネーシヤが仕出かした事。故に、ミアアが仕出かす竜種を使った都市外への索敵行為に關しての罰則の全てはガネーシヤが受け持て、とロキに睨まれた男神はぶんぶん首を縦に振った。

「任せろ、なんとたつて俺はガネーシヤだからな!」

「お前が原因やろがい!」

自信満々に答えた男神の側頭部を引っ叩いたロキを他所に、フィンは口を開いた。

「先に言っておくけれど、情けない事にオラリオの派閥は滅多に都市の外に出れない制約を受けていて、都市周辺の地理は六度の侵略の中で情報を蓄えた王国ラキアに劣っている可能性が高い」

それ処か、常日頃から都市周辺オラリオの地理を秘密裏に調査している可能性も有り得る為、情報不足の都市側オラリオに比べて、王国側ラキアの方が情報的優位がある。

都市への経路、山脈の山間、あるいは王国ラキアへと最速で帰還できる抜け道。脱出経路を知り尽くす王国ラキアの複数の部隊から正確に本命を補足するのは至難の業。

加えて、神質ひとじちを確保した彼らは強行軍をしてでも逃走を凶ろうとするのは目に見えている。故に、時間をかける訳にもいかない。

「見ての通り、地図はこれだけだ」

フィンが持つてきた地図を広げると、全員がそれを覗き込む。

大雑把に描かれた周辺地図は、ともすれば精度はお世辞にも高いとは言えない。更に調査不足が祟って、一部は想像で書かれたものまで混じっている始末。あくまでも参考程度に、と告げられたミリアが眉間に皺を寄せ、直ぐに頭を振った。

「当てにならないなら見る意味もない。私はすぐにキューイと一緒に東から回っていくわ。見つけ次第、無力化して居場所を吐かせる。問題無いかしら？」

「いや、王国の結末はそこまで甘くはない。そう簡単に情報を吐く事は無いだろう。それどころか、本隊と一部以外は情報を知らない可能性が高い」

ミリアが全力で向かったとして、捕捉できたのが情報を持たない部隊だったとすれば無駄足。

索敵能力に優れるとはいえ、全力で逃亡する相手に対して、囷部隊を片っ端から潰しては間に合う筈もない。

「ロキ、フィン。私も追う」

突然の事態に混乱し、話し合いに参加できていないベルを横目に伺っていたアイズが、一歩前に出て口を開いた。

寡黙である【剣姫】の申し出に、主神と団長が僅かに驚き。他の面々は驚愕の余りに目を見開いている。

「確かに、片側をミリアの飛竜を風潰しにして、反対側からアイズたんも風潰しなら……」

「アイズの敏捷なら追い付けるか」

彼女の申し出にロキとフィンが一考の余地有り判断する。

ここで【ヘスティア・ファミリア】、ひいてはミリア・ノースリスに貸しを作るのは悪い選択ではない。そう判断した主神と団長の様子を見た他の派閥も、自分達も、と声を上げ始める。

貸しを作れば御の字、と言った様子の彼らに対し不愉快そうにミリアが眉を顰めていると、

「ほ、僕も行きます!? 神様をつ、追いかけます!!」

【剣姫】の横から身を乗り出してベルが叫んだ。

その姿にロキが眉を顰める。

「なあ少年、話、聞いたとつたか？　アイズが行くと言ってやってるんや、足引つ張る気か？」

「でも——」

「自分、レベルいくつや？　力の差わかつとるやろ？　ミリアみたいに飛竜つちゆう強力な手札も無しにしやしやり出てこん方がええ。大人しくしとけ」

片やL v. 3、片やL v. 6。

ミリアは飛竜という他にない手札を持ち、必ず役に立つ処か今回の索敵の要になる。

対してベルはそういった特技は何一つ存在しない。

足を引つ張るだけならば行かない方が良い、と噂の新人^{ルーキー}を見定める様に見定める様に、女神は薄らと朱色の瞳を開く。

付き放つ様な女神の言葉を聞いた少年は声に詰まり———すぐに両手を握り込んだ。

「僕は！　神様の———ヘステイア様の眷属^{ファミリア}です！」
眉を逆立て、神にさえ逆らう様に大声を張り上げる。

「僕も、神様を助きたい！　だから、行かせてください！」

他人に任せてばかりで待つてなど居られない。深紅^{ルベライト}の瞳に固い決意の色を宿した少年の、喉が張り裂ける程の願望の叫び。

それを聞いたロキは、僅かに吐息を零し、認めなかった。———同時に、止めもしない。

「———勝手にせえ。どうせ足を引つ張る事もできんやろうしな。アイズ、へばつたら置いてつてええで。ミリア、アンタは何を優先するかわかつとるやろ」

「………わかった」

「わかつてます。ベル、今は一刻を争うから、ごめん」

主神の確認に間を置いて答えたアイズと、先に謝罪をと軽く頭を下げるミリア。

言外に主神搜索を認められたベルは、女神に深々と頭を下げ「ありがとうございますっ！」と礼を述べた。

都市無断出発を行おうとする面々に、ギルド職員は良い顔をしない。そんな彼らを他の冒険者が説得しようとははじめた。少年の固い決意に魅せられた者も居れば、未だにごたごた規則云々を持ち出そうとする職員に鋭い殺気を向ける小人族バルウムの少女に怯えた者もいる。

「じゃあ、ミリアはこつちの方から片っ端に搜索や。見つけ次第閃光弾フレアを焚いてしらせてや」

「天候が崩れる可能性が高い。空からの搜索が難しくなる可能性もありえるか……そうなるか、やはり人手がもつと欲しい。とはいえ、ベート達を待つ時間も無い」

ばらけた連中をミリアが上空から索敵したとしても、範囲が範囲。

ましてや天候が崩れていき、索敵能力が大幅に下がってしまう可能性も否定しきれない。そうなるともつと人手が欲しい。風潰しするにしても限度があるか、と既に出立準備を進めるミリアとベル、アイズの背中に視線を向けたロキが呟く。

そこに、

「なら、ウチのアスファイが役に立つと思う」

羽根付き旅行帽をずらし、橙黄色の神の男神が笑みを浮かべて自身の眷属の肩を押した。

「神ヘルメス……」

「ウチのアスファイなら、ミリアちゃんと同じぐらいの速度でヘステイアを探せる」

「——はあ!？」

示された眷属自身が仰天するさ中、男神はにこやかな笑顔をうかべている。

「ああん？ 優男、何を根拠に……」

「おいおい、ロキ。アスファイはあの【万能者】ベルセウスだぜ？ 飛竜に勝る索敵方法の一つや二つ、持ち合わせているさ」

胡乱な表情を浮かべたロキに対し、ヘルメスは【万能者】ベルセウスの二つ名を強調した。

加えて、半ば疑わし気な視線を向けるミリアにウィンクまでする始末。

「……期待はしないでおきます」

何処か苦虫を噛み潰した様な表情のミアの言葉を聞き、ロキとフィンも頷いた。

ベルが周囲の冒険者から戦闘用の防具などを借り受けて装備しているさ中、大きな羽搏きが広場に響く。

「ベル、先に行つてます。ヘスティア様を見つけたら合図をお願いします。私も見つけたら合図しますので」

「うん、直ぐに僕も出発するから！」

少年の返事を聞き届けるまでもなく、少女は飛竜に指示を出して高く舞う。

徐々に薄暗い雲が増えていく空を切り裂く様に、翼を広げた飛竜が駆ける。

第二一五話

ラキア王国。

大陸西部に位置する君主国家。被治者の人口は六十万を超えとも言われ、王都には壮大な王城と城下町が存在する。緑豊かで肥沃な大地を有するこの国は、『軍事国家』という野蛮な面を持っていた。その一面は、君主であるはずの王の上に君臨する、一柱の神の神意しんいによるものだ。

『軍神アレス』。

事実上の頂点に君臨しているのは男神だ。

ようするに、『ラキア王国』とは多岐に渡る派閥の属性の中でも、最大の規模と最大の煩雑さを持つ『国家系』【ファミリア】である。

そんな国家が戦火の矛先として選んだのは大陸西部から更に西に進んだ先、大陸の片隅。

三万という軍勢を率いて狙うは、世界で一つしか存在しない壮大なダンジョンを有し、今日では『世界の中心』と言われる程に発展した迷宮都市、オラリオだ。

遠方からも目立つ、天突く白亜の塔と、それを囲む巨大な市壁。

重厚な甲冑を纏う兵士、専用の鎧を装着された数百数千の軍馬。更に鈍い輝きを放つ何万もの長槍。万全を期して挑んだ侵略戦争は――
――これまで通りに呆気なく蹴散らされ、撤退を余儀なくされていた。

オラリオから真東に三〇キロル程進んだ大平原にて迷宮都市が誇る冒険者と、王国が誇る兵団がぶつかり合い、呆気なく蹴散らされては幾度も突撃を繰り返す。馬鹿の一つ覚えの様な作戦は、けれども主神が定める神意故しんいに末端の兵達に拒否権等ありはしない。

愚直な突撃を繰り返し、撃退される事数度。ようやく伝令による全軍撤退の指示が出された事に安堵し、ボロボロになった鎧と、折れた騎乗槍ランスを担いだ騎馬隊が反転した。

重厚な鎧に身を包んだ豪傑の徽章エンブレムが描かれた深紅の旗をはためかせ、歩兵隊、騎馬隊共に一目散に逃げ出していく。

元々敵う筈もないオラリオの冒険者に、幾度も突撃を繰り返してはその度に軽々と撃退される。その苦行から解き放たれるのだという安堵と、帰還後に主神になんと申し上げれば良いのかという葛藤を抱きつつも、帰路につく騎兵隊。その後ろには数が半分ほどに減ってしまった歩兵隊が付き従っていた。

兵の大半がLv. 1、中にはLv. 2も混じってはいるものの、相対する都市の冒険者はLv. 3は当たり前前、Lv. 4やLv. 5——
——第一級冒険者まで混じっているのだ。そんな強大な敵に突撃しては捕虜としてとらえられ、戦争後に莫大な費用の支払いによって捕虜の解放を行って、いつもの対応が行われるのだろう、騎兵を率いる隊長が思っている、撤退の指示を伝えてきた伝令の兵は続ける。「アレス様は既に撤退済み。なんと、オラリオを出し抜き、女神を神質ひとしちに取る事に成功したとの事。追撃される恐れがある為注意しつつ、部隊を分散させ敵の目を欺く様に、との事です」

「……負傷兵が多い中で部隊を散開させる、か」

半数近くがオラリオの捕虜として捕らえられており、残る半数は命からがら負傷した状態で撤退してきた者達ばかり。戦闘とも呼べない蹂躪に巻き込まれた彼等を早く撤退させたい気持ちはあるが、主神が成した功績——それも憎きオラリオを出し抜いたのだ——

——それを無駄にしない為にも、負傷兵達にも頑張ってもらわねばならぬ、と隊長は大きく頷く。

「聞けっ、我らがアレス様が憎きオラリオを出し抜き、見事単身オラリオの女神の石柱を神質ひとしちとし捕らえる事に成功した！」

声高らかに彼が主神の功績を叫ぶ。それを聞いた兵達がどよめき、そして歓声を上げた。

オラリオに居る神々、どころか大半の神々が口を揃えて『脳筋だ』等と言われる事の多いアレスだが、彼は自らが自治する王国内ラキアでは絶大な人気を誇っている。

自ら兵役に志願する者の大半は、闘神アレスに対する忠誠を誓い、彼の神の為に戦場に赴こうとする者が数多い。そんな彼らが主神の功績——それも長年にわたって苦渋を飲まされ続けていた因縁

の迷宮都市相手の——を自らが立てたと聞けば、歓喜するのも当然だった。

「我々は敵の目を欺く為に部隊を分けるつ、我々騎兵隊は五つに分かれて王国へと帰還を急げ！ 残る負傷兵も可能な限り少数となって移動せよ！ 我らがアレス様の為に!!」

『——アレス様の為に!!』

オラリオにて化物派閥——フレイヤ・ファミリア最強派閥やロキ・ファミリア最大派閥——に蹂躪され、弄した策も全て看破された上での潰走かいそう。

本来ならば士気を保つ事なんて出来る筈の無い撤退状況ながら、この一軍はその気配がない。

戦場の華である騎馬隊を任せられるだけの精鋭中の精鋭。並みの兵士ならば士気が下がるのもやむなしのこの状況においても、彼等は変わらぬ士気を保っているのだ。

高い士気を持つ彼らの動きは非常に早かった。

騎馬隊の中で数組の隊を作り上げると、オラリオの冒険者に発見された際、女神を攫った隊だと誤認させるための小細工として各隊の一人の騎馬に袋詰めの大荷物を運ばせる。

もし見つかった場合には、可能な限り敵を引き付けて主神が率いる隊が確実に逃走出来る様にする為の行動だった。

伝令による報告を受けてから一〇分も掛からずに仕掛けを施した隊が各々バラバラな方角へと駆け出していく。女神が攫われてから、まだ半刻程しか経っていない。いくらオラリオの冒険者の足が軍馬に勝るとはいえ、これだけ距離もあつて行動開始したのであれば陽動は上手くいくだろう。

本来ならば、それなりに陽動は上手くいくはずだった。

そんな彼らの動きを、どんよりとした曇天の中から鋭く睨み付ける紅蒼の瞳が見つめていなければ。

「——なるほど、つまりアレは全部陽動な訳か」

徐々に天候が崩れていったおかげか、曇天の雲間に隠れて飛行するキューイの存在に彼等は気付く気配は無い。

迷宮都市^{オラリオ}を離れてすぐ、行動開始した俺は一五分程度で負傷兵を多く抱えた撤退中の前線部隊をキューイが感知し、高高度より彼らの様子をうかがっていた。

キューイ曰く、あの場所にヘステイア様は居ないらしいが、念には念をと高高度から様子を伺っていると、彼等の下に早馬が駆け込み、部隊を小分けにして負傷兵をおいて撤退していく部隊が出始めたんじゃないか。確かに、上空から一方的な情報収集が出来る今みたいな状況でなければ、あの別れた部隊を一つ一つ丁寧に潰していかなければいけないところだろうが——悪いな、全部見てたんだ。

高高度、肌寒く湿り気を帯びた雲間の間を飛行するキューイに手を引かれ、地上を見ていた俺は、負傷者を抱えて撤退速度の遅い大隊を無視し、別行動を開始した五つの部隊をつぶさに観察する。

「ヘステイア様が『ラキア王国』に誘拐された。

せっかく決意を決め、自らが秘匿した事を話そうと心に決めて地上へと帰還してみれば、なんとというタイミングの事件か。まるで狙い済まされたかのようなこの時期の悪さには、作為的なものを感じざるを得ない。とはいえ、天運の悪さには自覚もある為、文句ばかり言っても仕方が無いが。

今やるべき事はただ一つ、ヘステイア様の救助。当然——邪魔する奴らは全員叩きのめす。

もしヘステイア様の身に何かあれば……いや、そんな想像すらしたくない。何が何でも、ヘステイア様を助け出す。

失敗なんて絶対にしない。その為にも、躊躇はしない。

「キューイ?」

「高度このまま、微速追従」

どうする、というキューイの問いかけ。

迷う事無く、あの大隊を指揮していた指揮官、それもかなり高階級であろう騎士を狙う。ご丁寧に、他の騎兵に比べて装飾が多く、一目で判別できる。

その部隊が進んでいる方向に追従する様に指示を出し、銃口を向け

る。距離からして魔力感知される心配はないし、視認される可能性も低い。これがミリカンならリーダーに引つかかかって一瞬で蜂の巣にされる所だが、今回はその心配は無くていい。

雲間であるためかローブは露に濡れ、髪も湿り気を帯びている。そこに突き刺さる高高度の冷え切った空気。吐く息は白く、指先がかじかみそうな程だが、攫われたヘステイア様の事を思えば何のことはない。

キューイに片手で吊り下げられながら、照準を地上を駆ける騎馬隊に定める。

距離一四〇〇、風向き北北西、風速三。目標、騎兵隊指揮官――

「ファイア」

囁く様に、撃鉄を振り下ろす文言を告げる。

指先から放たれた魔弾は、全力で駆け抜ける騎馬の進行上、交差予測位置へと寸分の狂いなく飛翔し――綺麗に隊列を組んで駆けていた騎馬隊の内、指揮官らしき騎士がいきなり落伍した。

「――ッ!?!」

整然と隊列を組み、全力で撤退していた騎馬隊の中心部。

指揮官であった騎士団長が駆る馬が突然足をもつらせ転倒――

――高速で駆ける馬から投げ出された騎士団長は、それでもLv. 3である身体能力を活かして軍馬から飛び降り、負傷なく着地。

他の騎馬はいきなり落伍した彼を綺麗に避けつつ、少し先で反転して合流を計ろうとする。

「大丈夫ですか!?!」

「ああ、いきなり馬が……オラリオの冒険者による攻撃?」

全力で駆けているさ中にいきなり全身を弛緩させ、勢いのままに地面に倒れ込み、転がった軍馬の姿に指揮官は大いに警戒して周囲を見回す。

軍馬の方は鎧を纏っていたとはいえ、走行中にいきなり意識を失ったかのようなげだされ、馬の脚はあらぬ方向に折れ曲がっているの

が見えるし、なにより首が折れているのが容易に判断がつく。

周囲を見回した指揮官の視界に映るのは壮大な大草原の風景。

遮蔽物の無い大草原を駆けるさ中、オラリオの冒険者による狙撃を受けたのかと警戒する彼だが、馬には『矢』が見当たらない上、弓の射程から考えうる範囲には冒険者どころか野生動物の姿すらない。

「警戒しろ！」

「ど、どこから……」

「いくらなんでも早すぎる！」

突然の出来事にうろたえた様な騎士の言葉に、指揮官は表情を険しくした。

周囲には遮蔽物のない大草原が広がっており、人が隠れられそうな場所は殆ど見当たらない。なにより、いくらなんでもオラリオの冒険者とは言え追いついてくるのが早すぎる。

違和感を感じた彼が必死に大草原の隅々まで見回していく。

周囲の騎士たちも同様に警戒し、どんな小さな動きも見逃さないと言わんばかりに目を皿にして見回す。けれども、大草原に異常は見当たらない。

「どうなって——っあ!？」

突然。

一人の騎士が駆る軍馬がその場に崩れ落ちる。

「どうした!？」

「大丈夫か!？」

片足が馬と地面の間に挟まれてもがく彼を助けようと、二人の騎士が馬から下りようとして——その内の片方の馬が同様に突然、何の前触れもなく崩れ落ちた。

「うわあっ!？」

「何だ、何が起きてる!？」

「こ、攻撃されてるっ！」

攻撃を受けた、そう叫んだ騎士が指差す先。

倒れ伏した馬の頭部から血が滴っているのに指揮官は気付いた。

よくよく見れば倒れ伏した馬が被った馬用の鉄兜に人差し指程度

の大ききの穴が空いているのが確認できる。そして、そこから血がとくとくと滴り草原を赤く染めていた。

原因不明の攻撃。

「魔法かつ!？」

「だが魔力は感じられないぞ」

「じゃあオラリオは何か新しい兵器を開発したのか!？」

精鋭中の精鋭である彼らとて、正体不明の攻撃に晒されれば混乱の一つぐらいはする。

それでも、冷静さを保っていた指揮官は即座に状況から相手の狙いを鑑みた。

「狼狽えるな！　相手は我々を殺傷する気は無い！」

馬用とはいえ、その鎧兜は騎士達が装備しているものと同様の金属が使われている。

その金属兜を易々と貫き、恩恵を与えられていない馬の頭蓋を一撃で穿ち抜き殺害する威力の攻撃。それが魔法なのか弓矢による狙撃なのか判別も付かない状況ではあるが、もしこの攻撃が自分達の命を脅かすためのものであるなら、真つ先に指揮官が狙撃されているだろう。だがそれが無い以上、攻撃をしてきている側は命を奪う目的ではないと判断が出来る。

故に、慌てる必要は無い、と皆を落ち着かせようとして——軍馬に跨っていた騎士の一人がよろめき、落馬した。

ガシャンツ、と騎士鎧に身を包んだ大柄な男が軍馬から落馬し、草原に倒れ伏す。

うつ伏せに倒れた彼に、彼が跨っていた馬がすり寄り、悲し気な嘶きを上げる。

突然の出来事に硬直していた指揮官は、傍に居た騎士に確認する様に促した。戸惑った様子ながらも指示を受けた騎士が倒れた男の傍に近づき、様子を伺い、悲鳴を上げた。

「なっ——ああ——っ!？」

「どうした」

「し、死んでる?!　殺されてる!!」

倒れた騎士が被った兜の側頭部。馬のものと同様の指先程度の小さな穴が空き、そこからとくとくと真つ赤な血を滴らせているのが確認できた。その姿に、指揮官は言葉を失い、冷静さを欠いた騎士が口を開くより前に——パスツ、と軽い音色と共に、今まさに騒いでいた騎士の眉間に穴が空いた。

驚愕する騎士達を他所に、その男は仰向けに倒れ——絶命した。

「——ッ!?!」

「こ、殺されるっ?!」

「な、ど、どこからっ?!」

余りにあつさりとした仲間の死に動揺が広がる。彼らは戦場の華である騎馬隊に選び抜かれる程の精鋭中の精鋭。神への忠誠心は十二分であり、ちよつとやそつとの事では動揺などはしない。

たとえ自身が逆立ちしても敵わないであろう相手に正面から突撃していくだけの気概も持ち合わせている——だが、これらにはしつかりとした訳がある。

昨今の時代に於いて、人と人が争う戦争は数を圧倒する時代は過去のものとなっている。

『神時代』と俗に言われる現代においては、『量より質』の時代だ。

たった一人の豪傑が——神に与えられた『恩恵』を昇華させた戦士が——いとも容易く戦況をひっくり返す。現に昇格した十名の小隊であるならば、百の敵軍、あるいは千の敵軍すらも真つ向から抑え込むと言われているのだ。

そんな状況を理解しながらも、潤沢な経験値によって幾度も器を昇華させた冒険者に蹴散らされるのは必然。御伽噺の展開をなぞるかの如く蹴散らされるのも致し方が無し。

それでありながら彼らが無謀極まりない突撃を繰り返せたわけはたった一つ——オラリオの冒険者は決して自分達の命までとらないと知っているからだ。

幾度も繰り返し返された戦争の中で、ラキア王国の騎士達の中で常識ともなっている事実。

迷宮都市^{オラリオ}を相手にした戦争では、決して殺される事はない。それは過去幾度も侵略戦争を起こし、その中で命を奪われた騎士が居ない事が起因となっている常識だ。

故に、彼等はどれほど無茶で無謀な突撃をする事も厭わない——
—なぜなら死なないと知っているから。

だが、そんな彼らが唐突に訪れた死に、冷静でいられるかといえば。

「あ、ああああああああああ—— ツツ!？」

「お、置いていかないでくれえ!？」

「やめろ、放せ!？」

悲鳴を上げ、馬が無事な騎士が必死に手綱を引いて馬を走らせる。馬を失った騎士は最も近くに居た騎兵に縋りついて助けを求めだす。

ほんの一瞬で、舞台は蜂の巣を突いたかのような騒ぎに発展する。

冷静であろうとした指揮官ですら、この事態は想定外であったのか完全に思考停止に陥り、動きを止めていた。

馬が無事な騎士の悉くが散り散り、思い思いの方向に逃げ惑い、馬を失った数人が重たい鎧を脱ぎ捨てて駆け出していく。その後姿を見送り、遅れて逃げなくてはと足を踏み出そうとした指揮官は——
—頭上から響く羽搏きの音を聞いて、その場に釘付けにされた。

聞こえる羽搏きの音。

羽毛に包まれた鳥の羽が奏でる羽搏きよりも固く、力強く、空気を掴みひれ伏させるかのような威圧感の伴った羽搏きの音色。そこらの野生動物が巻き起こす可愛らしいものとは比べ物にならないソレ。

顔を上げる事すら出来ない彼は、頭上で羽搏くソレが何なのか、気付いてしまっていた。

此度のラキア王国による迷宮都市^{オラリオ}侵略の前に行われた騎士団長級の者達による会議。そのさ中に注意すべき点として挙げられた、オラリオの隠し玉。

派閥と派閥が争い合う戦争^{ウォーゲーム}遊戯にて登場し、その猛威を振るったとある冒険者と、その冒険者が従えるとあるモンスター。

堅牢であったはずの城塞を容易く陥落させ、桁違いの規模を誇る派閥を壊滅させるに至った恐ろしいその人物。

——とある小人族と、それが駆る竜種。

戦争開始直後、嚴重な警戒をしていたその存在は、けれども想定外な事に戦場に出てくる事は無かった。アレス曰く、オラリオは戦力の逐次投入が云々で愚かしい戦術をとっているに違いない、との事らしかったが、結局戦場に現れずに存在そのものを忘れていた。

それが、今になって出現した。

その事実指揮官の彼は、自分以外の全員が逃げ去り、残された大草原——身を隠す遮蔽物の無い場所——で、遭遇してしまっただ。

古今東西、ありとあらゆる『英雄譚』、ひいては御伽噺に於いて、『ドラゴン』を討ち果たせるのはごく僅か、限られた『英雄』のみだ。

そして、今まさにドラゴンの前に放り出された彼は、血の滲む努力の末、迷宮都市外では傑物とまで謳われる事もあるLv. 3にまで上り詰め、ラキア王国では数千人の騎士を——それも、戦場の華である騎馬隊を——任される程に至った男だ。

だが、彼は、『英雄』ではない。

彼は、『英雄』ではないのだ。

「一つ、お聞きしたい事があります」

古今東西、ありとあらゆる御伽噺において、『英雄』ではないただの騎士がドラゴンにするとどうなるのか。その答えは、あえて語る必要もない。

「ヘスティア様を攫った部隊は、今、何処に居ますか？」

言葉自体は優しく、柔らかなものではあった。しかし、彼は全身の穴という穴から大量の脂汗が噴き出すのを感じていた。

つい先ほどまで全く、微塵も気が付かなかった魔力の矛先。それが、自身に向けられていると知覚してしまっていたから。

「答えていただけませんか？」

優しく問いかけてくるのは、年端も行かない少女の声。

しかし、羽搏きの音色と、差し向けられる魔力の矛先が、彼の体を酷く硬直させる。

答えなければ殺される。

神アレスによって荣誉ある騎士団長に選ばれる以前から、騎兵として選抜されたその日からずっと苦楽を共にした愛馬の様に。ともにオラリオの第一級冒険者、古のドラゴンの様に恐ろしい第一級冒険者のドワーフに突撃した騎士達の様に。

ほんの一瞬で、自身が死んだのだと自覚できないままに殺される。

余りの恐怖に、彼は——意識を手放した。

「……はあ？」

思わず、眼の前で地面に倒れ伏した男を見下ろしたまま啞然としてしまった。

飾り付けられた鎧の隙間から地面に染み渡る液体。それが僅かな傾斜に流れており——指揮官であったはずの男が、自らが作り出した小川に顔面から倒れ伏したのだ。

「キューイ？」

「……はあ、マジで？」

何人が仕留めて恐怖を植え付け、反抗の意思を潰してから情報を聞き出そうとしたのだが、結果として——勝手に気絶しやがった。

思った以上に精神面メンタルが打たれ弱かった事に思わず天を仰ぐ。

「キューイ、直ぐに行きましょう。まともな情報は聞けそうにないし……クリス側はどうなったかしら？」

目の前で気絶して失禁の小川に倒れ伏した指揮官は放置したまま、クリスの向かった方角に意識を向ける。

今回、ヘステイア様が誘拐された後に敵軍がいくつかの部隊に分かれたと報告があったため、それぞれの方向に俺&キューイ、クリス、アスファイ・アンドロメダの三チームでそれぞれを追う事になった。

アスファイと連絡を取り合う手段はないが、クリスの方はなんとか離れていても言葉を交わせる。

現在わかっているのは、俺の追っていった側にヘステイア様が居な

い事。不明なのはクリスが追っていった側と、アスファイが追っていった側。

クリスの方に意識を向けつつ、キューイに再度高高度へと上がってもらおう。

徐々に天候が崩れ、荒れ始める空模様の中、冷え切った空気を感じながらも聞こえたクリスの声に耳を傾ける。

《——見つけてない！》

「……そっか、搜索を続けて頂戴。私は、アスファイが追っていった方向かうわ」

《人が一杯！ どうする？》

「足を止めさせて、後ろから「ガネーシャ・ファミリア」が戦力を送るらしいから。方法は任せるわ」

《わかった！》

言葉少なめではあるが、クリスはヘステイア様は見つけられていない様子だが、敵部隊を見つけた様子だった。

ヘステイア様を確認し次第最優先での保護。そうでなければ敵部隊は適当に足止めて急いで進軍してきている「ガネーシャ・ファミリア」に残党は任せればいい。足止めの方法はクリスに任せる。

迷宮都市^{オラリオ}からみて西部の森林地帯。

数少なくなってしまう軍馬に跨った騎士は伝令の指示通りに部隊をいくつもの少数に別けて撤退しているさ中であつた。

徐々に天候が崩れてきているのか、日差しが途絶え、ただでさえ木々の天蓋によって陽射しが遮られて薄暗い森林は、より暗く、眼を凝らさなければ緑に見通せない程の状態に陥っていた。

「急げ、オラリオの冒険者に追い付かれてしまうぞ！」

後ろを歩く仲間を激励しつつも、自身は鍛え上げられた軍馬に跨る。

そんな彼の後ろにはオラリオの冒険者による奇襲で馬を失った騎兵たちがぞろぞろと歩いている。

疲労感を漂わせる彼らを見て、指揮官は表情を歪ませた。

本来ならば彼らの役目は都市東の大草原で主戦力が足止めするオラリオの冒険者の背後から強襲を仕掛け、蹴散らす事であった。しかし、オラリオ側は有ろうことかまるで予知していたかのように背後に回り込もうとしていた彼らの部隊を蹴散らした。

辛くも逃げ出した彼らが態勢を整えようとしている間に、伝令から伝えられたのは撤退命令。

それも、殆どの兵を失った彼らに対して、少数に分かれて撤退せよとの命令付き。

ただでさえ負傷した者や馬を失った者の多いこの部隊にその命令は酷と言えた。しかし、上からの命令は絶対。

彼は余裕のある者を先に撤退させ、馬を失った者達と共に撤退する事を選んだのだ。

都市からの追手は居ないかと警戒しつつも、後ろについてく騎士たちの様子を伺うのを忘れない。そんな真面目な指揮官は、馬の手綱を引いて一度足を止めた。

手酷くオラリオの冒険者に蹴散らされて負傷した者が多い彼等の撤退速度は、お世辞にも早いとは言えない。けれども指揮官の彼は急かし過ぎず、激励を飛ばしつつも更に進軍速度自体は落としていた。

背後から迫る都市の冒険者に対する怯えが無いとは言わないが、仲間を置いていくのも憚られる。故に、遅れる仲間に合わせた進軍速度を維持し、撤退速度は遅い。

それでも彼らは確実にオラリオの冒険者から距離を離す事に成功していた。

オラリオの冒険者は滅多な事では都市の外に出られず、更には都市外の地形情報等を全く知りもしない。対して、ラキア側は幾度も侵略戦争を繰り返す内に集めた情報がある。

彼が数多の負傷兵を抱えながら、遅々とした撤退をしていながらも追い付かれないのは、彼等が知らない抜け道を利用しているからに他ならない。

「もうすぐだ、この森を抜ければ――」

ゆつくりと、けれども確実に都市の冒険者を引き離して撤退していた彼は、次の瞬間、自らが跨る馬が足を止めた事で表情を険しくした。「おい、どうしたんだ？」

突然、馬が足を止めた。

止まる指示も出していないのに足を止めた事を不審に感じた彼が走る様に指示を出すのが、馬は一向に進もうとしない。それどころか、怯えた様子で体を震わせながら落ち着きなく嘶きを零していた。

「何だ……？ 怯えてる？ 一体、何に……？」

彼が駆る馬も、それ以外の馬もそうだが、軍馬は特殊な調教を受けている。

普通の馬ならば槍衾を前に怯んでしまうだろう所を、軍馬は怯まずに突撃する事ができる。それ以外にも、オラリオの冒険者に威圧されても怯まない様に、念入りに調教されている上、モンスター討伐にも同行する事もある為、生半可なモンスター相手にも怯んだりしない。そのはずだが——馬は、酷く怯え、狼狽えた様子で足を止めた。

「一体、どうなって……」

「あ、た、隊長！」

「どうした」

騎乗槍^{ランス}を担いだ騎士の一人が薄暗い森の木々の奥を指差す。それにつられて視線を向けた彼は、不思議な光景を目にした。

「——蒼白い、炎？」

森の中を、風に漂うように蒼白い炎が舞っている。

あれは何だ、と首を傾げていると——蒼白い炎が徐々に近づいてきているのに気が付いた。

「オラリオの冒険者の攻撃か？ ……いや、違うな、魔力は感じられない」

蒼白い炎の正体がわからないまま、足を止めた彼等の下に、徐々にそれらが近づいてくる。

不意に、馬が酷く狼狽えた様に嘶きを上げ——背に跨っていた指揮官の男を振り落として駆け出した。

「ぬあつ!？」

並大抵の事では怯えない軍馬が、いきなり錯乱した事に驚いた指揮官の男は、見事に馬上から投げ出され、柔らかな土に背中から叩き落される。

騎士の一人が慌てて駆け寄り、助け起こすさ中——鈍い音と共に、馬の悲鳴が轟いた。

誰しもが目を見開いてその光景を目にする。

馬は酷く怯えた様子で男を振り下ろして駆け出して行った。まるで蒼白い炎から逃げる様に。しかし、青白い炎は急速に動きを変化させ、逃げようとした馬に纏わりついたのだ。

次の瞬間だった。

幽鬼の如く蒼白い炎に照らされた軍馬の纏う鎧の隙間から、赤黒い血に濡れた何かが飛び出した。

一つ、二つ、三つ——数え切れないほどの何かが、馬の体の内側から、皮膚を突き破り、肉を引き裂き、骨を砕いて飛び出していく。

驚愕に目を見開く彼らの眼前で、屈強な体軀の軍馬は瞬く間に奇怪な芸術作品へと姿を変えたのだ。

突然の出来事に彼等は身を強張らせる。

何よりも察してしまった。あの蒼白い炎に触れたらどうなるのかを。

「——あああ……」

「お、おい……困まれて……」

慌ててその物理法則を無視したかのように漂う蒼白い炎から逃げようとした彼らは、けれども逃げる事は出来ない。

気が付けば、彼等を囲う様に、森の中には夥しい量の蒼白い炎が漂っていたのだから。

「——」

第二一六話

「フハハハハハッ！ 今度こそオラリオに吠え面をかかせてやったぞ！」

ベオル山地奥部。

神アレスの哄笑が、谷間の傍にある険しい山道の一つに響き渡っていた。

旅装姿の兵士が三十名程固まった部隊。主神を有するラキア王国本隊に当たる彼等は過去の侵略の中で見つけ出した山中の抜け道を駆使し、既にオラリオから大きく遠ざかろうとしていた。時折、モンスターが岩陰や崖下から飛び出してきて奇襲を受けるものの、主神を守る為に編成された精鋭揃いの彼等は難無くそれらを処理していく。

一人馬に跨った自分を守る兵士達を尻目に、神アレスは非常に上機嫌な様子であった。

「こらっ、アレス!? どういうことだ、早く下ろせ!! 天界馴染みだからっていいことと悪いことがあるぞ!」

「黙っている、能無しのチビチビ神め! 貴様はクロツゾの倅と【魔銃使い】の二人と交換する神質だ、利用してやるのだから光榮に思え!」
「ミリア君を利用するだつてっ、絶対に許さないからなああああああああああああああッ!」

神アレスの背中、鎧の上に強引に綱で縛られていたロリ神——ヘステイアがか細い手足を振り回す。

偶然にも彼の作戦が的中し、運悪く捕らえられてしまった幼い女神もまた無理矢理連れてこられていた。きつく縛られている縄を解こうにも、非力な彼女では解けず。ならばせめてもの報いでと暴れるも、「大人しくしろ!」とアレスの膝鉄で脇腹を頂戴し苦悶する羽目となった。

「ボクを神質だなんて……」

捕獲された際、半気絶させられていた女神が意識を取り戻し、状況を理解した時、脳裏をよぎったのは過去の壮絶な精神的外傷を抱えた自身の眷属の事だった。

「ヘステイア・ファミリア」、ひいてはヘステイアが救いの手を差し伸べるはるか以前。母親の手によって大切な人を人質に取られ、思うがままに操られ続けて終いには心を壊してしまった少女。

最悪な事に、女神はその子が自身を大切な人として扱っている事を知っている。そんな自分が神質ひとしちにされ、指示に従わされる……もしくは、『ラキア王国』——「アレス・ファミリア」に下ってしまったらどうなるのか。

絶対に耐える事は出来ない。間違いなく、その少女は壊れる。必死に心に負った消えない傷を少しずつ癒していて、更には此度のギルドからの強制任務ミッシンを終えた暁には、彼女が背負った何かを分け与えて貰えるはずだったのだ。そんな約束をしてしまった自身が、有ろうことか神質ひとしち。

何としてでも抜け出さなくては、とヘステイアは痛みを訴える脇腹を無視して声を張り上げた。

「こんなこととして、今に見ている!! ベル君達がつ、オラリオの冒険者達が直ぐに追いかけてくるぞ!」

「ふん、部隊を分けて散らばった我々の中から、正確にお前を探し出せるものか」

「ミリア君なら、飛竜を使って空からボクを見つけ出すに決まってる!」

「フハハハハッ! これだから能無しのチビ神は……そんなものわかり切っている。対策しているに決まっているだろう!」

追手攪乱の為に部隊を散開させて陽動もしている。くわえて天然の要害を短時間で突破し、なおかつ広大な山地から捕捉の難易度は遥かに上がる。

更に、山地の特定地点には対竜用兵器を忍ばせている、とアレスは豪語した。

「た、対竜用兵器だって……!?!」

「ふっはっはっは、そうだ! この時の為に俺はこの山中に対竜用兵器を隠したのだ!」

豪快な高笑いを響かせるアレスの様子に、ヘステイアは齒噛みし

た。

アレスは脳筋で愚直、策謀をするタイプではない。しかし、見事へスティアを攫った上で更に山中に対竜用兵器を忍ばせていた——
—余りにも高度な策謀にへスティアは思わず彼は本当にアレスか、と二度見した。

「キミ、何か悪いものでも食べたのかい……?」

「失礼だな!」

喧しく品のない争いを繰り返す神々に、彼のそばを歩いていた副官、マリウスは深く溜息を吐いた。

内心、ここまで上手くいくとは、と呟いた彼は、主神を守る為に展開している兵達を見回し、声を上げた。

「空に異常は」

「ありません!」

「鳥が一匹飛んでいますが、飛竜の姿はありません!」

飛竜の姿が見えたら即座に報告する様に言い付けられた彼らは、周囲のモンスターの気配を見逃さぬ様に細心の注意を払いつつも、空に飛竜の姿が無いかを厳重に警戒していた。

「そう……か、上手く行き過ぎている様な気もするが……」

自身の知るアレス像とかけ離れた策謀を計る彼の姿に戦慄する女神の様子に、彼は僅かに眉を顰めて小声で呟く。

「大型弩を秘密裏に輸送しようとして、失敗して大幅に遅れてただけでしょうに……」

「何か言ったか、マリウス!」

「なんでもありませんよ……」

女神の誘拐から流れる様に部隊を散開させ攪乱しつつも、本隊は抜け道を駆使し最速の離脱。更にその抜け道には対竜用兵器が設置されている。

これがもし本当に脳筋^{アレス}が仕掛けた計略であったのなら、マリウスは今頃頭を地に擦り付けて今までの無礼を謝罪していただろう。

だが、実際の所は全く異なる。

【へスティア・ファミリア】と旧【アポロン・ファミリア】——

現【ハゲ・ファミア】の戦争遊戯の際、商人達がアポロンへと提供した大型弩。

その威力は間違いなく折り紙付きだ。あの重装アーマード・ドラゴン竜の甲殻を砕き穿つ程の威力を見せ付けたのだ。

当然の事ながら、迷宮都市に戦争を仕掛けるにあたって、『ラキア王国』としてはそういった兵器は揃えていた。

威力は十分なそれらは、しかし都市への侵略の際には非常に扱い辛い代物だったのだ。

端的に言つて、大きさも重量も移動に向かない。そも、防衛用に設置する大型弩を輸送するというのが無茶なのだ。彼の兵器を有する部隊は進軍速度が致命的に遅くなる。それは移動に適した平地を通つたうえでの話だ。

その上、その兵器の脅威を都市側も理解している。あからさまに戦場に大型弩部隊を出せば、真つ先に潰されるに決まっている——
事実、過去幾度かの侵略戦争の中で、大型弩部隊は真つ先に標的にされ潰されていた。

今回も無作為に大型弩部隊を戦場に配置すれば都市の冒険者に呆気なく殲滅されるだろう事は想像に易い。故に、『ラキア王国』は一計を投じた。

普段であれば最も輸送に適した街路を選んで大型弩を輸送する所を、密かに抜け道を通じて輸送する事にしたのだ。

今までであれば、その重量等からどうしても平地を輸送しなければならず。なおかつ進軍速度の致命的低下によってラキアが兵器を輸送しているのが傍から見ても筒抜け状態。当然、都市の冒険者は兵器輸送を確認したら真つ先に狙う。

ならば、兵器輸送を秘密裏に行えば良い。アレスの上げた案はそれなりに理解できる範疇ではあった。

都市側が今回の戦争において大型弩を動員しなかったのだ、と思わせておいて、密かに戦場に運び込んだ大型弩で強襲を仕掛ける。

なるほど妙案だ。マリウスもその作戦には大いに賛同できた、はずだった。

問題は、どう輸送路を隠すのか。

最も輸送に適した街路を使えば一発で露呈する。当然、平地を輸送しても同様。どうやって隠匿しつつあの馬鹿でかい代物を運ぶのかといった問題があった。それを、アレスは易々と言いつつ切った。

『抜け道を使えば良い！』

都市の警戒網から外れた抜け道を使えば、都市に勘付かれる事なく大型弩^{パリスタ}を戦場に運び込める。画期的な案だ、とアレスが自画自賛するのを、副官のマリウスは溜息を吐いて見守っていた。

抜け道は、言ってしまうえば少数部隊が移動する事ができ、都市の警戒網に入っていない道を指す。当然、大型弩^{パリスタ}の様な大型の兵器を輸送する道順^{ルート}としての使用は計算外だ。

それでも主神であるアレスの鶴の一声によって、その作戦は決行された。

結果、大型弩^{パリスタ}部隊は想定よりも数倍以上かけて道程の三割ほど進んだ所で立ち往生。大型弩^{パリスタ}という秘密兵器を欠いたラキア王国軍は当然の様に蹴散らされる、と散々な状態だったのだ。

——それが、女神一柱の身柄を確保した事によって状況が一変した。

都市側は女神奪還の為に間違いなく飛竜を動かすだろう。

何より、攫った女神は飛竜を使役する冒険者の主神だったのだ。付け加えると、その飛竜を使役する冒険者は主神に対し並々ならぬ親愛を抱いている事も噂で聞き及んでいる。だからこそ、必ず飛竜は動く。

マリウスが空に厳重な警戒を向けるのも当然だろう。

「……雨、か」

警戒の為に空を見上げていた彼は、己が鼻梁に当たった水滴に表情を曇めた。

空を覆う灰雲からとうとう雨が降り出す。瞬く間に大雨と言って差し支えない程の勢いとなり、旅装の兵士達やアレスをずぶ濡れにしていく。

一瞬で水浸しになったアレスとヘステイアが盛大にくしやみを零

す。

「マリウス様、一度部隊を止め、どこかで雨を凌いだ方が……アレス様のお身体が」

「いや、伝令の話では既に一応射程圏内らしいが、万が一が有り得る。この雨で飛竜が止まればいいが、そう樂觀視もできない。せめて北の国境まで進んでおきたい。それと、あの馬鹿神^{かみ}は風邪を引かないから心配しなくていい」

主神の身を案ずる部下に杞憂だと伝えた彼は、飛竜の脅威から一刻も早く逃れんと強行軍に努めようとする。

一応、彼等が居る位置は山中で立ち往生した大型弩部隊^{バリスタ}の射程圏内。しかし、射角の関係上、射撃可能なのは二五機の内、わずか三機のみ。叶うならば半数は射れる様にしておきたいのが彼の本音だった。

気を取り直した様に空への警戒を続けようと視線を上げ、ふと、マリウスは違和感を覚えた。

雨風が強くなり行くある、曇天の空。先ほど同様に自分達の部隊の頭上を旋回する様に飛行する影が見えたのだ。

「……あれは、おい。あの鳥はいつからいた!」

「え? ああ、だいぶ前からずっと頭上を飛んでましたが」

自分達がくたばるのを待っているのでしょうか、と軽口を叩いた兵士の一人にマリウスは眉間を揉んだ。

先ほどまで竜の姿を探すばかりで他の警戒が疎かになっていた。

故に、その違和感から不味い、とマリウスが表情を顰めた、その瞬間。

「けっ、【剣姫】だあああああああああああッ!」

この世の終わりの様な絶叫が響き渡った。

「なっ——!?!」

自身の耳を疑う程、有り得ないはずの報告にマリウスは振り返る。現在進行中の崖際の山路。上り坂でもある道を凄まじい速度で駆けあがってくる高速の人影。

雨に打たれず濡れになりながらも褪せる事のない輝きを放つ金髪金瞳の容姿に、彼も思わず叫び声を上げた。

総崩れになりかけた士気を引き上げる様に、手甲に包まれた右手を突き出した。

「狼狽えるな兵士達よ!! 追撃してきたのはたかが小娘一人、そして我々には王国最強の将軍が居る!! 行けガリユーよ、あのような小娘捻り潰せ!!」

「ガリユー将軍がやられましたあ!?!」

「なにイ!?!」

文字通り瞬殺であった。

瞬く間も無く、髭を生やした屈強な男達が倒れ伏して金髪金眼の少女の前に倒れ伏した。

抵抗らしい抵抗どころか、まともに攻撃すらさせてもらえず、さらには複数人まとめて切り伏せられた将兵の姿に、アレスはぎぎぎつ、と歯を食い縛った。

「お、おのれっ……こうなったら……」

「うぐうっ!?!」

自身とヘステイアを縛り付けていた縄を解き、男神は馬上から飛び降りた。

ヘステイアが泥だらけの地面に投げ出される中、荷物を捨てて身軽になったアレスは馬上に取り付けてあった長剣を装備する。

「我が名はラキア王国主神アレス!! 行くぞ【剣姫】イ!?! 軍神の剣捌き、とくと見よ!!」

「……………」

「うおおおおおおおおおっ!!」

勇ましい雄叫びを響かせ襲い掛かるアレス。対するアイズは無言で剣を振るった。

バキンツ、という甲高い音が響き渡り、一瞬呆然としたアレスは、自身の手にする長剣が根本から押し折られているのに気付いて慌てて一歩後ずさる。瞬間、アレスの目の前に折れた剣身が突き刺さった。

「うおあッ!?! やっ、やるなー【剣姫】イツ!?!」

「何やってんだアンタアッ!?!」

あつさりと武器を失いビビるアレスに、マリウスの悲鳴が飛ぶ。

神の癖に第一級冒険者に一騎打ちを仕掛けた主神の姿に、マリウスを含め立っている事の出来た兵士達が殺到する。自らの主神を守る為、激しい剣戟が繰り広げられ、場が混乱に包み込まれる

「——神様ツ!!」

「あ……………ベル君っ!」

混戦となる山道に、白髪の少年が飛び込んだ。

【剣姫】が切り開いた道を、彼女が気を引いてる間に、遅れて突き進んでいく。

駆けつけてくる眷属の少年の姿に笑顔を浮かべ、ヘスティアが立ち上がろうとした、その瞬間。

「射てえっ!!」

ラキア王国の将兵の叫び声が放たれると同時に、轟音と共に巨大な矢が乱戦となった彼らの元へ飛来した。

崖を挟んだ反対側から放たれたらしき槍と見紛う大矢^{ボルト}。着弾の轟音とともに兵士の悲鳴と、【剣姫】の驚愕の声が僅かに混じった。

密かに向けられていた『ラキア王国』秘蔵の大型弩^{バリスタ}は三機。内、一本が【剣姫】を直撃——しかけるも、呆気なく切り払い落された。

残る二本は山肌を穿ち、地鳴りにも似た轟音を弾けさせ、ぬかるんだ山道の一部を崩落させる。

丁度、立ち上がろうとしていた女神の足元に亀裂が走り——女神の体は土砂とともに山道の片側に広がる谷底に引きずり込まれていく。

突然の事態に硬直したベルの眼前で、女神の小さな体は激流と化した川が走り狂う深い溪谷へと落下する。

「神様ア——ツツ!!」

少年が飛んだ。

落ちるヘスティア目掛け、地面を踏み切り、雨に打たれながら眼下の溪流に飛び込む。

一切の迷いなく、女神の腕を掴み抱き寄せた少年は、暴れ狂う様な濁流に歯を食い縛ると、消して離すまいと女神の体を強く抱き寄せ——

——着水した。

「——!!」

兵士達を蹴散らしていたアイズも、遙か眼下で起きた水飛沫を捉えた。

瞬間、躊躇なく彼女は戦闘を放棄し、少年と女神が転落した溪谷に身を躍らせる。

深い谷間の壁面を蹴り付け疾走し、難無く岸に着地すると同時に駆け出していく。

「ベル・クラネル、【劍姫】……!?!」

その一連の流れを上空より見ていたアスフィは、大いに動揺していた。

ミリア・ノースリスに対する借りを返す意味も兼ねての女神救出作戦が、まさかの展開に陥ったのだ。『飛翔靴』^{タラリア}を駆使して宙を舞い、王国軍の姿を補足していた彼女は、救援の判断を一瞬躊躇してしまっ

た。

「——っ!?!」

中途半端に溪谷に近づいてしまった彼女の腕に、鎖が巻き付く。

「女神達は捨て置け! 今はあの空の密偵を討つのだ!」
ほんの一瞬の隙を突かれた彼女は、締め付ける肉の痛みに眉目を歪め、下方——鎖を握るマリウスを見下ろした。

「精錬金属の鎖……!」

「【魔銃使い】対策に持ってきた物だが、役に立ったか……。奴さえ討てばオラリオは暫く追跡できまい! あの女だけは逃がすな!」

アイズの斬撃をかううじで避け、動く事の出来る兵士達に、マリウスは疾呼を飛ばす。

もしここで彼女を逃がせば、改めて飛竜が襲撃に来る。最悪の場合、神質^{ひとじち}を失った彼等に【魔銃使い】が誇る超遠距離砲撃魔法^{ヤバすぎる砲撃}が飛来する。

神質^{ひとじち}が居たからこそ、超遠距離砲撃魔法を警戒せずに済んでいたのだ。もしアスフィを逃がし、報告が上がれば——山道諸共消し飛ばされて全滅する。

故に、決して逃がさぬ、とアスフィに巻き付けた強固な銀鎖を己の

腕に巻き付け、マリウスは決して逃がすまいとした。
その瞬間。

「なっ——!?!」

「これ、は……ッ!?!」

バギンツ、という破砕音と共に鎖が引き千切れる。

マリウスがたたたらを踏み、アスファイが崩れかけた姿勢を戻した所で、甲高い発砲音が溪谷に反響した。

「——早かった……いや、遅かったですね」

聞き覚えのあるその発砲音にアスファイは眉を顰めた。

他の部隊を追跡したにしては、非常に早い。だが、女神の救出という意味では遅い到着だ。

「あ、ああ……そんな、ばかな……」

『ひっ、飛竜だあああああああああああああああッ!?!』

破壊された鎖と、響きわたった甲高い銃声に驚愕していたマリウスは、兵の上げた絶叫を聞いて目を見開き、空を仰いだ。

ざあざあ、と降り注ぐ雨の中。遠くからでも視認出来る程の大きさの魔法円が視認できる。

空を飛翔する竜翼を持った、幼い少女の姿をした異形。そして、そんな彼女に片腕を掴まれて飛翔する、最も警戒していた冒険者の姿に、マリウスは此度の作戦の失敗を悟った。

第二一七話

バケツをひっくり返した様な土砂降りの雨。どんよりとした灰色の雲の間に轟く雷鳴を抜け、深紅の翼を翻して竜人が駆け抜ける。

頬に張り付く金髪が鬱陶しく、払い除けながらも地上に目を凝らした。

「へステイア様は間違いなくこっちの山岳を通ってる本隊が確保してるはずよ」

飛竜の飛行速度にものを言わせた最速での部隊撃破およびに情報奪取。

クリスからの報告によれば、彼女が追った方角に居る部隊の中にへステイア様の姿は確認できなかったとの事。

俺とクリスが追跡していった方角の部隊も大半を潰しはしたがへステイア様の存在は確認できず。部隊長を半殺しにした結果、山岳地帯——アスファイさんが追っていった方角の退路を利用して神アレスが撤退しているという情報を吐き出させる事には成功した。

間違いなくベオル山脈方面へと撤退していった部隊がへステイア様を確保している。故に、全力で空を駆け始めた所で降り出したのは土砂降りの雨。

急激に降りしきる豪雨に視界は制限され、吹き荒ぶ上空の冷氣混じりの風に一気に体温を奪われていく。奥歯を噛み締め、下がりつつある体温から意識を逸らしてキューイに掴まって飛行している。

通常の冒険者では考えられない程の超高速で残る神を有する本隊を追っていた。

「キューイ……キューイ……」

「何……？」

ベオル山脈に近づき、上空を『飛翔靴』^{タラリア}で飛行しつつも手持ち式の魔石灯で居場所を発し続けていたアスファイさんの放つ光を肉眼で捉えた時だった。

キューイが唐突に飛行速度を低下させ、怯えた——否、若干の錯乱染みた様子を見せた。

「キュイキュイツ!？」

ヤバい、近づかない方が良い。そんな叫びと共に急に速度を緩めるキュイ。

上空の冷えた空気と、降りしきる雨の中でも平然としていたはずの彼女は酷く狼狽し、半ば錯乱染みた様子で喚き散らす。

曰く、危ない。危険な気配が残ってる。近づかない方が良い。絶対に勝てない。だの――。

事前情報で得たベオル山脈の情報によれば、生息しているモンスターは地上に居るモンスターの中ではそれなりに上位に君臨出来る程の強さを持っていると聞く。

それは古代の時代にダンジョンから進出したモンスターの一部がこの山脈を根城にし、脈々と子を成してきたからこそ。それこそ古代の時代のモンスターが相応に残っている、と言われる事もある危険地帯。

それでもダンジョンのモンスターに比べたら雲泥の差で、Lv. 3に至った冒険者ならば難無く撃破できる程度の個体ぐらいしかいはいはずの山脈だ。

だというのに、キュイの怯えようは異常だった。

「キュイ、良いから行くわ」

「キュイツ!？」

死にたいのっ!? という悲痛な叫びに思わず眉を顰める。

この世界に来て、キュイと出会って以後。時折こうしてキュイが異常な怯えを見せる事は多々あった。そして、そういう場合は本当に碌な目に遭わない。

今回もまたキュイが異常に怯えた様子を見せるという事は、本当にこのベオル山脈内には危険なモンスターが潜んでいる可能性がある。

ギルドもこの山脈の正確な調査に訪れている訳ではない。故に、可能性は高く感じられる。

だが、だとすると余計に此処で引き下がる訳にはいかない。

「キュイ、アスフィさんの所へ直進。警戒したまま進むわよ、速度は

「最速！」

「……キューイ」

より強まっていく雨と、山脈に当てられ複雑な気流に踊らされながらも怯える竜を説得し、ようやく重い腰を上げた様にキューイが徐々に目的地へと近づいていく。

上空で魔石灯を掲げ、敵の位置を地上から追っている【剣姫】とベルに伝えているアスフィさんの様子が確認できた時点で、キューイの顔色は真っ蒼になっていた。

体温が下がり、僅かに身体が震える俺よりも酷く疲労し、衰弱した様子すらも見せるキューイには申し訳なく思うし、それだけキューイが錯乱しかける程に怯える何かがこの山にあるのは理解した。

その上で、ヘステイア様がそんな場所に連れて行かれているのだとしたら、絶対に引く事なんかできない。

上空から目的の空を駆る靴を履き、駆ける冒険者の姿を捉え——
—声を上げた。

「キューイ、安定させて！」

か細く弱々しい返事を返し、乱気流の中で飛行姿勢を安定させてくれる彼女を待つまでもなく、背負っていた銃杖を片手で取り出し、構える。

「ライフル・マジック」【リロード】

地上を見下ろし、ランタンを手に位置を知らせる観測手スポッターの役割をしていたアスフィさんが不自然な動きをしたのだ。

地上から手出し不可能な高度を取っていたはずの彼女は、突然地上に近づこうとして思い直したかのように動きを止める。そんな不自然極まりない動きに対し、ラキア王国側の兵も黙ってはいない。彼女の足に絡み付く見覚えのある鎖——精錬金属製ミスリルのソレが絡み付き、彼女を捕らえたのだ。

山岳地帯特有の乱気流の中、更には雨が降りしきり、俺を支えてくれているキューイが衰弱して安定飛行が出来ない状況。ゲーム時代ですら飛行系の魔法を使うフェアリー型による狙撃なんて

超高難度通り越して達成不能とすら言われた上に揃いに揃った悪条件。

18階層で神ヘルメスの帽子を撃ち抜くのは訳が違う。だが、外す気なんて微塵もない。

「スナイプ」

狙撃の詠唱と同時に息を止める。

降り注ぐ雨と、吹き荒れる風、そして羽搏きの音色が急激に色褪せ、動きを遅くしていく。

意識だけが超加速したかのように視界から色が消え失せ、雨粒の一つ一つの形状すらつぶさに観察出来るほどの集中力を発揮した。

雨雲の下で尚輝き目立つ魔法円を展開しているが、敵方は未だに此方に気付いた様子はない。敵方から此方を狙われる要素はないので狙撃にのみ集中できる。

片目を瞑り、脳髓に描かれる魔弾の軌跡をアスフィさんの足に絡み付く鎖の上に重ね——発砲。

「ファイア」

杖先の魔法円から飛び出した魔弾は乱気流に軌道を乱され、どこか歪んだ軌跡を描きながらも、吸い込まれる様に鎖に直撃し、アスフィさんの拘束を解いた。

瞬間、地上に居た兵達から向けられる驚愕と畏怖の感情。

流星の彼等も上空で煌々と輝き、魔力を放つ魔法円に気付いた様子だ。遠く離れていても彼等が自身の存在に気付いた事を感じ取り、寒気とは違った震えが身体に纏わりつく。

そんなさ中、雨に濡れてなお光り輝く様に目立つ金髪の人物——鎧を着た兵士に混じりながら、たった一人馬に乗り撤退しようとしている、あからさまに目立つ存在を見つけた。

「スナイプ」

直ぐに杖先を差し向ける照準を映す。

流れる様に、魔弾の描く軌跡をその神に重ねる。二度目の詠唱と共に周囲は再度色を失い、ゆつくりと地上に落ちていく雨粒の弾幕越しに憎き敵を捉えた。その時だ、違和感を覚えたのは。

神アレスらしき男。遠く離れていても神だとわかる整った容姿をした彼の腰には縄が揺れていた。本来ならば何かを固定していたであろう縄。

脳髓を焼き焦がす様な気付き。

地上に居る兵達はまるで神アレスを逃がそうとするように誰かに立ち塞がり、進路を妨害しようとしていた事が伺える。既に部隊は半壊気味なのか、半数以上の兵は地面に倒れ伏している様子が見える。

上空から観測手スポッターとして彼らを追跡し、二人の冒険者に居場所を知らせていた【万能者】ベルセウスが空を駆っている。

だが、本来ならば居るべきはずの者達が居ない。

まず、【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。

最速で追撃隊として自ら志願してくれた同盟派閥の第一級冒険者。倒れ伏した兵達は彼女が倒したに違いない。その筈なのに、彼女の姿が無い。

そして【リトル・ルーキー】ベル・クラネル。此度の追撃隊への参加を熱望し、参加を赦された少年。彼の姿が無い。

そして、なにより——ヘステイア様の姿が何処にも無い。

「——【ファイア】」

ドグンツ、と爆発した様に跳ねた心臓の音。ほんの瞬く間に得た情報に脳髓が焼き切れ、極限まで高まつていた集中力が乱され、指先から放たれた魔弾は、男神が跨る馬の横っ腹を穿った。

馬鎧の板金を何の抵抗もなく穿った魔弾が、軍馬の柔らかな皮膚や筋肉を貫き、内臓を掻き乱し、反対側の板金を貫いて地面に突き刺さる。驚いた様子の馬が大きく身を起こし、背に乗せていた男神を振り落とすのが見え——そこで更なる情報を得てしまった。

ゆっくりと地面に落ちてゆく男神。その彼の落ちたぬかるんだ地面の直ぐ傍。

泥濘ぬかるみの中に泥まみれの麻布と——いつか女神に贈った懐中時計が落ちていた。

「——キューイ、突撃！」

喉が張り裂けんばかりの絶叫を以てして、強襲命令アサルトを下す。

距離をとって安全に、とか。人質の保護最優先に、とか、そういった細々とした考えが脳裏から全て弾け消え、真っ赤に染まった思考の中で出した命令。

酷く狼狽し、衰弱した様子すら見せたキューイは即座に命令を実行した。瞬間的な加速は、乱気流によって乱れた軌道を描きながらも一直線に男神の下へと俺を運んでいく。

彼我の距離はかなりある。視認できるとはいえ直線距離では500M^{メートル}近い距離だ。

突撃し始めた俺を見た彼らの反応は劇的だった。軌道を塞ぐ様に盾を持った兵が立ち塞がり、複数の兵が弓を引き絞り、矢をこちらに向けてくる。

「ファイア」 「ファイア」 「ファイア」

貫通性能の高い魔弾を放つ「ライフル・マジック」の前に、たかだか小盾程度の金属板を構えた所で意味はない。

構えた盾も、着込んでいた重厚な鎧も、恩恵を与えられ鍛えられた肉体も、その全てを難無く魔弾は穿つ。

神を守らんとした兵達の肉壁は一瞬で力を失い倒れ始める。

彼我の距離は半分。

盾が穿たれつつあるさ中も、幾本もの矢が此方に飛翔してきた——が、『魔力障壁』^{マジック・シールド}を穿つ様な威力は無い。淡い泡の様な膜に弾かれ、鏃が潰れた矢が谷底に落ちていく。

手にした銃杖をキューイに握らせ俺は中空に身を躍らせ、腰の双剣を引き抜く。

キューイとクリス、二匹の飛竜の素材を使い。魔力の伝導率を高め、威力を増強させる効果を持ちつつも耐久を高めた最高鍛冶師^{マスター・スミス}の作品。

紅炎と蒼炎を両手に握り締め、勢いをそのままに兵達の下へ落ちていく。

切っ先を差し向け、詠唱を奏でた。

「ピストル・マジック」 「デュアル」 「リロード」

勢いのままに、魔弾によって穿たれて倒れつつあった兵の胸に両足

を揃えて着地。ゴスンツ、と板金鎧プレートメイルの胸部が無残に凹み、中身がへしやげる音色を足から感じながらも、左右に剣先銃口を向ける。

「ファイア」「ファイア」「ファイア」「ファイア」

ダダンツ、ダダンツ、と奏でられるのは普段よりも威力の乗った魔弾。

接近戦を仕掛けてきた俺に対し、慌てて弓を捨てて剣に持ち替えた兵達に対して容赦なく魔弾を浴びせる。

残っていた十数人の兵を蹴散らし、雨によってぬかるんだ地面を蹴り、落馬して呆然としている男神の下へ一直線に駆け——ようと
して横合いから美顔の指揮官らしき男が飛び出してきた。

「悪いが止めさせて——」

「ファイア」

飛び出してくると同時に投げつけられた精錬金属ミスリルの鎖を右の銃で弾き、左の銃で彼の足を撃って姿勢を崩させる。

邪魔極まりない。一分一秒どころか、コンマ単位ですら時間を無駄にしたくないというのに、しやしやり出てくるな。

姿勢を崩した美青年の膝を蹴り付け、足を砕いて蹴りどけ、驚愕に目を見開いた男神の前に躍り出る。

「……な、な……あ……」

呆然と目を見開き、声にならぬ声を上げる男神の前で左手に握った蒼炎を鞘に納め、彼の足元、泥濘ぬかるみに半ば程埋もれた懐中時計を拾い上げつつ、右手にした紅炎の切っ先を鼻先に突き付けた。

「ヘスティア様は何処ですか？」

酷く冷たい声が出た。

自分自身ですら、こんな声が出せるのかと思えるぐらいに冷め切った——否、冷え切り、氷の刃を思わせる程に冷たく、鋭い声だ。

脳髓を焼き尽くさんばかりの怒りが気を狂わせそうにする。だどいうのに脳を中心部分には冷え切った金属の棒が突き刺さっているかの様に冷え切り、思考が焼け溶けるのを防いでいる。

「——」

「答えてください。ヘスティア様は何処ですか？」

完全に青褪めた様子で震える男神の胸鎧に一閃。中の肉を断つ事無く、鎧の表面を切りつける。

ギンツ、と甲高く鈍い音色が響くのと同時。男神が身に着けていた鎧の胸の部分に綺麗な切れ込みが入った。

「私が、冷静な判断が出来る内に、早急に返答をお願いします」

目の前に居る男神。近づいた事で感じられる様になった神威からして間違いなく『ラキア王国』の主神、神アレスである事に間違いは無いだろう。

だが、だとするとおかしい。

間違いなく、ヘステイア様は彼が攫ったはずだ。何せ、ヘステイア様に贈った懐中時計がこんな所に落ちていたのだから。

左手で懐中時計についた泥汚れを拭い、蓋を開いて——硝子が罅割れ、文字盤に泥が染みているのが見えた。かなり頑丈に作られていたはずの懐中時計が、破損してしまう様な状況。

贈って以降、肌身離さず持つていてくれた懐中時計だ。ヘステイア様がこれを落とす直前、どの様な目にあっただのか想像しただけで、冷静さを保つ脳髓の氷柱が凄まじい勢いで溶けていく。

もう数秒もしない内に、自身が冷静さを欠いて目の前の男神を八つ裂きにしてしまうだろう。

速く返答を、と急かしても男神は口元を震わせるばかりで声を上げる事は無い。

「早急に、返答を……ヘステイア様は、何処ですか？」

声が震える。

眼前の男神が、どうしようもなくくだらない自己顕示欲の為に、大事な人を攫っていた。

冷静さを保とうと、思考を巡らせる程に怒りが加速していく。止まらない。

一度スイッチが入ってしまった憤怒の感情を抑える方法を、俺は知らない。

ギリリツ、と奥歯を噛み締め——。

「ミリア・ノースリス」

響いた女性の声に振り返る。

足元に転がる死屍累々の兵達の下へふわりと降り立ったのは、青髪の女性。観測手スポッターを務めていたアスファイだ。

「……ヘステイア様は何処へ？」

彼女の顔を見た瞬間、自身が冷静の積りだったにも拘わらず、完全に冷静さを欠いていた事に気付いた。

端から敵方の大将を捕えて口を割らせるより、味方である彼女に問うた方が早いに決まっている。脳裏を埋め尽くしていた怒りの感情を鎮める様に息を吸い、震える手で懐中時計を握り締める。

「女神とベル・クラネルは谷底の濁流に落下しました。【剣姫】は其れを追って……申し訳ありません。私が戸惑ったばかりに、お二人を助けることができ——」

落ちた。

谷底の濁流に。

ヘステイア様とベルが。

その情報を聞いた時点で、俺は弾かれた様に駆け出した。

「キューイツ!!」

普段の様子など知りもしないが、明らかに水量が増えて轟々と音を立てて流れる濁流を見て、それに流されたと知って、冷静でいられるだろうか？

少なくとも、俺には無理だった。

慌てた様に呼び止めようとしたであろうアスファイの声を置き去りにし、杖を手に飛んできたキューイに再度掴まり、溪谷へと身を躍らせる。

吹き荒れる風に揺られ、土砂降りの雨の中、轟々と音を立てて流れる濁流をつぶさに観察する。

ベルが一緒に落ちた。

ランクアップ

【ステイタス】と昇格によって心身が強化されているベルはまだしも、ヘステイア様がこの濁流にのまれて無事で済むかは怪しい。怪しいが、未だに俺の恩恵が無くなっていない事がヘステイア様が無事である事の証明だった。

一匹だけでなく、何匹も、何十匹もわらわらとそこら中から湧き出てくるのを見て、思わず眉間に皺が寄った。

運悪くハーピイの住処に突撃してしまっただけ。だが、ある意味運が良い。ヘステイア様を連れたベルが何とか岸に上がった所を、このモンスター達が襲撃したら、と考えると俺を狙ってくれる方がありがたい。

とはいえ、無事を確認できていない状況で此方を襲撃してきたこのモンスターは、とにかく邪魔だ。

「ファイア」「ファイア」「ファイア」

キューイが怯え切って普段通りの索敵能力を失っていた為に起きた奇襲。

だが、羽毛の生えた大きな翼を持つハーピイではあるが、鱗に覆われた強靱な被膜を持つキューイの翼と競い合うのは無理がある。

人型に転じているとはいえ、身体の一部、翼や尾等は竜のまま——
——生物としての格が違う。

消耗しきった様子の子のキューイが羽搏き一つで周囲のハーピイを蹴散らし、俺が魔弾で仕留めていく。

数はそこそこ、倒せない量ではないがヘステイア様とベルの事を考えると時間なんてかけていられない。

無茶を繰り返して疲労感が溜まり、体温が下がって震えが止まらない。いくら恩恵を受けているとはいえ数日間のダンジョン探索直後の土砂降りの雨の中の強行軍は堪える——だが、「ステイタス」や昇格^{ランクアップ}によって心身が強化されていないヘステイア様は濁流に落ち、大雨に濡れただけで危うい。

多少の無茶なら押し通してやる、と飛び掛かろうとしてきたハーピイに狙いを定めた瞬間。

鋭い風切音と共に飛翔した矢が照準を定めた個体の側頭部を穿った。

「——ッ!?!」

慌てて矢が飛んできた方向を注視すると、離れた位置に魔石灯の明かりが揺れ、その傍に外^{フーデットコート}套を纏った射手が大弓を携えているのが目

に入った。

「おおーい！ こつちだー!!」

声を張り上げる男は、瞬く間に矢を天高く放ったかと思えば、俺に飛び掛かろうとしていたハーピーが次々に撃墜されていく。

ほんの数秒もしない内に、俺を取り囲んでいた数十匹近いハーピーは墮とされた。

こんな所に居る人に驚愕しつつも、もしかしたらヘスティア様とベル、後ついでにアイズさんの事を知っているのでは、と思った所でキューイが地面に降り立った。

疲弊しきった様子で青褪める彼女の背を撫でつつ、慌てて立ち上がったキューイを背に庇って声を張り上げる。

「こつちに敵意は無いわ！ この子は安全な子だから攻撃は控えてちようだい！」

事情を知らぬ者からすればキューイは半人半竜のモンスター。警戒されているだろうと声を張り上げ——返ってきた返答に思わず顔が引きつった。

「あー？ お前【魔銃使い】か！」

「……………は？」

どこかで聞いた事のある男の声だった。

というか、良い思い出の無い声だ。

「よお、【魔銃使い】。あの遺品は異端児ゼノスに届けてくれたか？」

雨に濡れてぬかるんでいる森の中をひよいひよいと軽い足取りで越え、俺の前に姿を現した外フーデットコート 套姿の男性。

フードを取っ払った彼の顔に、盛大に見覚えがあった。

グラン・カッソ 大賭博場でとんでもない依頼をぶちかましてきたご令嬢の護衛として付き従っていた元第一級冒険者。百発百中の射手、【白い羽】カルロスだ。

「な……………なんで貴方がここに……………」

「何かは知らないが、【リトル・ルーキー】と女神、それと【剣姫】を保護したんだよ。んで、少ししたらまたハーピー共が騒がしくなりやがったから様子を見に来たらお前さんが居たんだが？」

「……ベルとヘステイア様を知ってるの？」

「知ってるも何も、さつき助けを求めてきたから村の方に連れて行つたが……お前さんも行くか？ そっちの嬢ちゃん……竜は、まあ俺が誤魔化してやるから一緒に連れてこいよ」

義眼の嵌った強面の男は、ニヤリと笑みを浮かべると顎で森の奥を示した。